

オンライン・メモリーズ ～VRMMOの世界に閉じ込められた。内気な小学生の女の子が頑張るダークファンタジー～

北条氏也

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

黒髪ロングに紫色の瞳で個性もなく自己主張の少ない。本来ならば物語で取り上げられることもないモブキャラのような女の子。

学校でもいじめを受けてぼっち状態だった内気な小学4年生『夜空星』は、街で不思議な男性からゲームのハードであるブレスレットを渡され、世界的に人気のVRMMORPG『フリーダム』を始める事になる。しかし、ゲーム開始したその日に謎の組織『シルバーウルフ』の陰謀によって、星はゲームの世界に閉じ込められてしまう。

だが、ゲーム内で出会った武闘大会で優勝経験のある凄腕の女性プレイヤー『エミル』に助けてもらいお世話になる事に……様々な事件に巻き込まれ徐々に明かされていく生まれる前に亡くなった父親との関係性に困惑していく。

※交通事故やコロナの関係で仕事が忙しくなり。定期的な更新が難しくなってしまうました。これからは不定期更新に切り替えゆつくりと完結まで書いていくつもりですので、読者の皆様には御迷惑をお掛けしますが今後とも応援の程、よろしく願います。※

なろうの方では読者の皆様のおかげで140万PVを突破しました!!

ストーリーを考える時間が欲しい為、少しの間土曜日の夜のみ更新になります。申し訳ありません。

目次

序章	1
第1章	
初めてのVRMMO	12
初めてのVRMMO 2	21
初めてのVRMMO 3	29
ログアウト不可	38
ログアウト不可 2	45
ログアウト不可 3	53
ダークブレット	59
ダークブレット 2	67
ダークブレット 3	75
家出	84
家出 2	93
家出 3	103
家出 4	111
再会	117
再会 2	124
再会 3	131
再会 4	138
富士の遺産	144
富士の遺産 2	150
富士の遺産 3	157
富士の遺産 4	164

富士の遺産 5	171
ダンジョン最深部へ	177
ダンジョン最深部へ2	184
ダンジョン最深部へ3	190
ダンジョン最深部へ4	196
血路を開け!	203
血路を開け! 2	210
血路を開け! 3	217
理想と現実	222
理想と現実 2	230
理想と現実 3	237
理想と現実 4	243
理想と現実 5	249
決戦	258
決戦 2	266
決戦 3	272
決戦 4	278
決戦 5	284
決戦 6	291
決戦 7	297
決戦 8	305
決戦 9	314
決戦 10	323
決戦 11	331
一難去ってまた一難	337

ファンタジー11	518
ファンタジー10	508
ファンタジー9	500
ファンタジー8	492
ファンタジー7	483
ファンタジー6	476
ファンタジー5	470
ファンタジー4	463
ファンタジー3	455
ファンタジー2	449
ファンタジー1	442

第2章

マスターの真意4	437
マスターの真意3	432
マスターの真意2	423
マスターの真意	415
お風呂5	408
お風呂4	400
お風呂3	391
お風呂2	382
お風呂	373
一難去ってまた一難5	367
一難去ってまた一難4	357
一難去ってまた一難3	350
一難去ってまた一難2	344

2人で外出	715
名御屋までの道中5	708
名御屋までの道中4	701
名御屋までの道中3	691
名御屋までの道中2	684
名御屋までの道中	675
名御屋までの道中	668
疑惑のデイナー5	658
疑惑のデイナー4	648
疑惑のデイナー3	640
疑惑のデイナー2	631
疑惑のデイナー	623
襲来者5	616
襲来者4	609
襲来者3	604
襲来者2	597
襲来者	587
マスターの目的4	580
マスターの目的3	573
マスターの目的2	565
マスターの目的	557
激昂した刃4	553
激昂した刃3	544
激昂した刃2	532
激昂した刃	525

鉤爪武器の男 2	895
鉤爪武器の男	889
ウォーレスト山脈 3	884
ウォーレスト山脈 2	878
ウォーレスト山脈	872
父親の影	864
第3章	
紅蓮の宝物 9	858
紅蓮の宝物 8	850
紅蓮の宝物 7	839
紅蓮の宝物 6	831
紅蓮の宝物 5	823
紅蓮の宝物 4	817
紅蓮の宝物 3	808
紅蓮の宝物 2	799
紅蓮の宝物	791
名御屋へ . . . 4	786
名御屋へ . . . 3	778
名御屋へ . . . 2	770
名御屋へ . . .	763
2人で外出 6	754
2人で外出 5	747
2人で外出 4	738
2人で外出 3	730
2人で外出 2	722

敵城の主4	1075
敵城の主3	1068
敵城の主2	1062
敵城の主	1056
デーノの思惑	1048
もう一人のドラゴン使い4	1039
もう一人のドラゴン使い3	1033
もう一人のドラゴン使い2	1025
もう一人のドラゴン使い	1017
エミルの夢3	1101
エミルの夢2	1100
エミルの夢	997
アジトへの潜入7	989
アジトへの潜入6	983
アジトへの潜入5	976
アジトへの潜入4	969
アジトへの潜入3	960
アジトへの潜入2	953
アジトへの潜入	945
侍の魂4	937
侍の魂3	930
侍の魂2	922
侍の魂	915
鉤爪武器の男4	908
鉤爪武器の男3	902

敵城の主5

ダークブレット日本支部崩壊

ダークブレット日本支部崩壊2

ダークブレット日本支部崩壊3

ダークブレット日本支部崩壊4

ライラの正体

ライラの正体2

ライラの正体3

ライラの正体4

ライラの正体5

ライラの正体6

記憶の帰還

記憶の帰還2

記憶の帰還3

次なるステージへ・・・

次なるステージへ・・・2

次なるステージへ・・・3

次なるステージへ・・・4

次なるステージへ・・・5

次なるステージへ・・・6

次なるステージへ・・・7

次なるステージへ・・・8

次なるステージへ・・・9

次なるステージへ・・・10

次なるステージへ・・・11

第4章

次なるステージへ・・・12

ドタバタな日々

ドタバタな日々2

ドタバタな日々3

ドタバタな日々4

ドタバタな日々5

ドタバタな日々6

内気な影

内気な影2

2人の時間

2人の時間2

2人の時間3

2人の時間4

2人の時間5

2人の時間6

ゴーレム狩り

ゴーレム狩り2

ゴーレム狩り3

ゴーレム狩り4

ゴーレム狩り5

ゴーレム狩り6

ゴーレム狩り7

湖の主

ライラの企み

ライラの企み2	
ライラの企み3	
ライラの企み4	
ライラの企み5	
ライラの企み6	
黒い刀と黒い思惑	
黒い刀と黒い思惑2	
黒い刀と黒い思惑3	
黒い刀と黒い思惑4	
黒い刀と黒い思惑5	
黒い刀と黒い思惑6	
未知なる力の解放	
未知なる力の解放2	
未知なる力の解放3	
未知なる力の解放4	
決戦に備えて	
決戦に備えて	
決戦に備えて2	
決戦に備えて3	
星とミレイニの真剣勝負	
星とミレイニの真剣勝負2	
星とミレイニの真剣勝負3	
エルフの男と触手の大樹	
エルフの男と触手の大樹2	
エルフの男と触手の大樹3	

エルフの男と触手の大樹 4

エルフの男と触手の大樹 5

奇襲前夜

奇襲前夜 2

奇襲前夜 3

奇襲前夜 4

奇襲前夜 5

奇襲当日

奇襲当日 2

奇襲当日 3

奇襲当日 4

奇襲当日 5

白獅子

白獅子 2

白獅子 3

作戦決行

作戦決行 2

作戦決行 3

作戦決行 4

覆面の下の企み

覆面の下の企み 2

覆面の下の企み 3

覆面の下の企み 4

覆面の下の企み 5

覆面の下の企み 6

1674166816611655165016451641163616301625161816131607160015921586158115761572156715631558155315451541

第5章

獅子としての意地

獅子としての意地 2

獅子としての意地 2

獅子としての意地 3

獅子としての意地 4

獅子としての意地 5

拠点を千代へ

拠点を千代へ 2

拠点を千代へ 3

拠点を千代へ 4

消えたマスター

消えたマスター 3

消えたマスター 4

護衛ギルド選抜戦

護衛ギルド選抜戦 2

護衛ギルド選抜戦 3

護衛ギルド選抜戦 4

護衛ギルド選抜戦 5

護衛ギルド選抜戦 6

護衛ギルド選抜戦 7

護衛ギルド選抜戦 8

護衛ギルド選抜戦 9

エキシビジョンマッチ

エキシビジョンマッチ 2

エキシビションマッチ3

エキシビションマッチ4

鍛冶場で・・・

鍛冶場で・・・2

混浴

混浴2

メルデイウスからの呼び出し

メルデイウスからの呼び出し2

エミルの嘘

エミルの嘘2

リントヴルム強襲

リントヴルム強襲3

リントヴルム強襲4

リントヴルム強襲5

憩いの時間

憩いの時間2

木の伐採任務

木の伐採任務2

木の伐採任務3

木の伐採任務4

木の伐採任務5

サラザBAR

敵の本当の狙い

敵の本当の狙い2

敵の本当の狙い3

敵の本当の狙い 4

敵の本当の狙い 5

敵の本当の狙い 6

敵の本当の狙い 7

第6章

予想外の再会

マスターの最大の敵

マスターの最大の敵 2

マスターの最大の敵 3

フィリスの覚悟

フィリスの覚悟 2

フィリスの覚悟 3

フィリスの覚悟 4

防衛戦の秘密兵器

防衛戦の秘密兵器 2

赤黒い炎

赤黒い炎 2

赤黒い炎 2

赤黒い炎 3

赤黒い炎 4

赤黒い炎 5

赤黒い炎 6

勝利の余韻

勝利の余韻 2

二度目の攻勢

二度目の攻勢 2

限界

限界 2

限界 3

反撃の意志

反撃の意志 2

反撃の奇襲

反撃の奇襲 2

反撃の奇襲 3

反撃の奇襲 4

かけがえのない思い出

かけがえのない思い出 2

かけがえのない思い出 3

かけがえのない思い出 4

最後の抱擁

最後の抱擁 2

姉妹

姉妹 2

姉としての意地

姉としての意地 2

姉としての意地 3

決意の決戦

決意の決戦

太陽を司る巨竜

太陽を司る巨竜 2

第7章

別れの宴会 6	228
別れの宴会 5	283
別れの宴会 4	227
別れの宴会 3	272
別れの宴会 2	226
別れの宴会	722
太陽を司る巨竜 20	263
太陽を司る巨竜 19	225
太陽を司る巨竜 18	922
太陽を司る巨竜 17	250
太陽を司る巨竜 16	224
太陽を司る巨竜 15	522
太陽を司る巨竜 14	382
太陽を司る巨竜 13	223
太陽を司る巨竜 12	422
太陽を司る巨竜 11	229
太陽を司る巨竜 10	225
太陽を司る巨竜 9	220
太陽を司る巨竜 8	221
太陽を司る巨竜 7	162
太陽を司る巨竜 6	221
太陽を司る巨竜 5	122
太陽を司る巨竜 4	082
太陽を司る巨竜 3	204
太陽を司る巨竜 2	219
太陽を司る巨竜 1	921
太陽を司る巨竜 0	521
太陽を司る巨竜	902
太陽を司る巨竜	185

現実世界への帰還

現実世界への帰還 2

揺れる動く心

揺れる動く心 2

我が家への帰還

我が家への帰還 2

九條の想い

九條の想い 2

九條の想い 3

九條の想い 4

九條の想い 5

母として

母として 2

母として 3

母として 4

母として 5

テディベア

テディベア 2

テディベア 3

学校

学校 2

学校 3

学校 4

運命とは・・・

運命とは・・・ 2

運命とは・・・	3
運命とは・・・	4
運命とは・・・	5
夢の国へ	
夢の国へ2	
夢の国へ3	
夢の国へ4	
夢の国へ5	
謎の英国紳士	
謎の英国紳士2	
謎の英国紳士3	
新しい父親	
新居での生活	
新居での生活2	
新居での生活3	
新しい学校生活	
新しい学校生活2	
新しい学校生活3	
新しい学校生活4	
新しい学校生活5	
新しい学校生活6	
友達	
友達2	
友達3	
友達4	

お泊まり 3	お泊まり 2	お泊まり	友達 8	友達 7	友達 6	友達 5
2551254625402537253325282524						

序章

『夜空 星』は小学生4年生である。

赤いランドセルを背負って伏し目がちに廊下を歩いている黒くて長い艶やかな髪、整った顔立ちに紫色の透き通った瞳の女の子。

ただ、周りを行き交う女の子達よりも明らかに秀でている容姿なのに、着ている服は黒く茶色い地味なズボンを履いている。

その足取りは重く、教室の前に来て扉に手を掛けた彼女は大きくため息を漏らす。

彼女には深刻な悩みがあった。

それは……。

「うわっ、ノーパン女が来たぞー！」

「今日もどうせパンツ履いてないんだろ？ お前確認してこいよ！」

「嫌だよ気持ちわりいじゃん。それにあいつ、ズボンしか履かないからめくれねえし。確認すようないじゃん」

「警戒してんだろ？ バカじゃねえの？ お前のなんかきたねーから、誰も触らねえって！」

学校で自分のクラスに入るなり、男子達がゲラゲラ笑いながら私を見ている。

(はあく、まただ……もう嫌だなあ……)

星は心の中で不満を漏らしながら、自分の机にランドセルを下ろした。

もうこんな状態が1年近くも続いている。初めは軽い罵声くらいだったのに、どんどんエスカレートしてきて、今では物を隠されたり、仲間外れにされることが多くなっていった。

今ではこうして、クラスメイトに罵られるのが日常の一部になっていた。

こういう話をすると大人に相談すればいいだろうという人もいるが、その頼みの大人達もいじめに関しては見えて見ぬふりだ。

それどころか「そのうちなくなる」「お前が何かしたからじゃないのか？」「今は忙しいから後にしてくれ」などと言って、問題を先延ばし

にするだけだった。

どうしてこんな事態になってしまったのか、本人も分からない。だが、1つ言えることは『真実はいじめの当事者にしか分からない』ということに尽きるだろう。

子供同士のいじめの特徴として、いじめる時は大人にバレないようにするのが基本であり。現実として、その現場を第三者が抑えるのは非常に困難なのだ。いや、状況証拠だけを出しても見て見ぬふりをしていると言った方が正しい。

星が『ノーパン女』なんて不名誉なアダ名を付けられたのは、去年、3年生の水泳の授業の時のパンツ紛失事件からだった。

水泳の授業が終わり、教室に戻った星は自分の目を疑った。

(授業の前に履いていたはずのパンツがどこにもない!!)

その事に気がついた星は、慌てて畳んで置いていた服をひっくり返して探した。だが、やっぱりどこにもパンツがない。

しかし、そういう時に限ってスカートを履いてきてしまっているもので——仕方なく、保健室までスカートを手で抑えながらゆつくりと歩いていた。

だが、ふとした時に同じクラスの男子にスカートを思いきりめくれ、その後。パンツを履いてなかった事がクラス中に知られてしまった——つというわけだ。

そこから星の悪夢のような毎日が始まったのである。

今では……。

「おーい。授業始めるから席に着けー」

授業を始める前に教室に入って来るその先生の声が聞こえた時が、唯一の救いになっていた。

この時だけは近くに大人がいる。それに授業中は誰にも見られないし、悪口を言われることもない。まあ、授業で先生の話や黒板に集中してるから当たり前なのだが……。

全ての授業が終わり、下校の時間に事件は起こった。

星が階段の前に差し掛かった時。誰かに背中を勢い良く押され、階段では受け身も取ることができずにそのまま勢い良く階段から転が

り落ちた。

その時に頭を打つたらしく、衝撃で星はそのまま気を失ってしま
う。

次に気が付いた時には、星は病院のベッドの上に横たわっていた。
真っ白な病院の天井の一点を見つめてそう呟くと、何とも言えない
罪悪感に苛まれた。

「——そっか……私。気を失っちゃったんだ……」

星の母親は大企業に務めていて、職場では良い役職に付いている。
毎月のお給料もそれなりに貰っていた。しかし、だからと言ってと
ても恵まれた環境ではない。

何故なら星の父親は、彼女が生まれる前に亡くなってしまい。母親
が女手一つで星をここまで育ててくれていたからだ。

それがこんな病院に運ばれるような大事になってしまったという
自己嫌悪に陥って、星は額を手の平で覆いながら大きくため息をつい
た。

(それなのに、こんな事になって、学校でいじめにあっているのがバレ
たら……お母さんがどんなに悲しむだろう……)

そんなことを考えながら、掛かっている布団の中に顔を隠す。

その時の星の頭の中には、母親になんて説明するべきなのかいいの
か、分からなくなっていた。ただ、願うは……いじめにあっているこ
とを先生達が黙っていてくれることだけだ。しかし、星のその心
配は直ぐに、無駄な心配だったのだと痛感する。

病室に入ってきた母親の第一声は「どうして階段なんかで遊んでた
の！」だったからだ——。

おそらく。事故が起きたことで、教師達が問題の隠蔽の為に架空の
ストーリーを作り上げ、星の母親に伝えたのだろう。

それを聞いた星はほっとしながらも、少し残念な気持ちになる。
『もし大人の人に知ってもらえれば、もしかしたら状況が良くなるか
もしれない』と一瞬でもそんなふうに考えてしまったからだ。

だが、今は母親に迷惑を掛けないことが一番だと感じて、星は教師

達が描いた架空のストーリーに乗るしかなかった。

心配そうな表情で、星の顔を見つめている母親に笑顔を見せると。「えへへ、ちよつと失敗しちゃって……でも、そんなにケガしなかったし。大丈夫だよ……お母さん」

呆れ気味なため息をつくと母親が星に向けて告げる。

「はあく。女の子なんだから、気を付けないと駄目でしょ？ ……全く。本当にしようがない子ねえ」

「……ご、ごめんなさい」

星はしよんぼりしたまま、搔き消えそうな小さな声で謝った。

心のどこかには『本当は誰かに押されて落ちた』と、真実を言いたい気持ちもある。だが、内向的な性格の星が、親を前にしてそんな事を言えるわけもなく……。

「そういえば……お母さん。お仕事は……？」

「少し抜けてきただけだから、本当は休もうと思ったんだけど——この様子なら、大丈夫そうね。お母さんは会社に戻るけど、もう大丈夫？」

「……うん。大丈夫」

星はその言葉に小さく頷くと、軽く笑みを浮かべた。

（もし、ここでお母さんに、私がいじめられてるって言ったらどうなるだろう……）

頭にふとそんな考えが浮かび、星はすぐに我に返ってその考えを振り払うように首を左右に振った。

確かに親に言えば、何かは変わるかもしれない。だが、もしいい方向に変わらずに、もつと酷いことをされるかもしれないと思うと、もうそれ以上の言葉が出なかった。

翌日。普段通り学校に登校すると、廊下で同じクラスの皆がくすくすと笑って星を見ていることに気が付く。

星はなんだろうと思って教室に入ると、自分の机の上に花瓶が置かれていた。

（……なにこれ？）

それを見た星は衝撃を受ける。

本来机の上に花を置くという行為は、亡くなった生徒を弔う時に行う行為であり。それは間接的に、星に死ねと言われていたことと同じなのだ。

星はその心無い行為にクラスの生徒達の真意を悟ると、目頭が熱くなり高まる気持ちを抑えきれずに学校を飛び出してしまった。

結果としてこの日、星は初めて学校を無断で休んだ――。

今までどんなことがあっても、風邪以外で学校を休むことのなかった星には、学校を休んだ後に行くところなど見当もつかない。

だが、家に帰れば学校から電話が来るということも分かりきっていたし、気のおもむくままに歩いた。

「はあく。ついにやつちやった……」

自己嫌悪に苛まれながら、とぼとぼとあてもなくさまよっていた途中。橋の上でふと、今朝の出来事を思い出し足が止まる。

今居る橋の上から川を見下ろし「ここから飛び降りたら死ぬるのかな？」などと、つまらいことを考えてしまう。

しかし、勢いだけで飛べるわけもなく。更に憂鬱な気分になりながら、繁華街を歩いていると、ふと大きなゲームショップの前のチラシに目が止まった。

『今、世界的に有名なオンラインゲーム「フリーダム」でゲームを現実にしよう!』

普段は何も感じないそんな平凡なうたい文句が、今の星には凄く魅力的に感じてしまうから不思議である。

「――ゲームを現実に……そうできたらいいんだけどね……」

チラシのうたい文句を見た星はそう小さく呟く。

星には幼いながらも分かっていた。どんなに否定しても、結局は現実に戻らなければ生きていけないということ……父親も星が生まれる前に亡くなり。普通の子供よりも、大人の顔色を窺うスキルだけが発達して、それと比例するように徐々に子供らしさを掻き消していることに――でも、それは間違いなく自分の為ではない。

テレビから流れる連日の様々な非人道的で酷い事件などの放送を

見る度に、母親に迷惑を掛けないように自分はいい子でいなければならぬという社会性が、星にいい子を演じさせているだけだ。

しかし、星も年相応の普通の子供——本当はもつとわがまを言いたいし、もつと自分に構ってほしい。母親に優しく抱きしめてほしいという欲求がないわけではない。

だが、そんなことが素直に言えないほどに、今の彼女の心は荒んでしまっていたのだ。

「はあー。私のなにいけないうらやう……」

大きなため息をつく、目の前のゲームショップのガラスに映る自分の姿が実際よりとても小さく弱々しく見えて仕方ない。

そして次の瞬間には、夢が覚めた様な現実が星の頭を過る。

(普通なら学校にいる時間なのに……こんなところで何してるんだらう私は……)

そう考えると、やるせない気持ちが溢れてきて、星はまた大きなため息をつく。

「お嬢ちゃん。どうしたんだい？ そんな大きなため息をついて……」

その声に星が後ろを振り向くと、そこには20代くらいのダメージの入ったジーンズにTシャツというラフな格好に、黒い短髪の男がにっこりと微笑みながら立っていた。

人と話すのに慣れていない星は、少し戸惑いがちに一瞬視線を逸らして返事をする。

「えつと……な、なにか私に……ようですか……？」

緊張した様子で星は怪訝そうな目でその男性を見た。

彼女のその問い掛けに、男は笑顔で応える。どうやら悪い人ではなさそう、星はほつと胸を撫で下ろす。

「実は、僕はねー。このゲームの宣伝をしている者なんだ」

そう言った男は、ゲームショップのガラスに張られているポスターを指差す。

星ももう一度ポスターを見ると、男の方を向き返し。

「そうなんですか」

つと返すと、男は星の顔を見てにっこりと微笑む。

「そうだ！ 君には特別に、これをあげよう！」

すると、徐に上着のポケットから茶色い四角い箱を取り出し。強引に星に手渡して、その箱を見下ろした星は男に向かって箱を突き出す。

「……こんな物受け取れません。私、お金とかないですし。それに、お母さんに知られたら怒られますし……」

「——大丈夫大丈夫。これはね、試作品だから商品じゃないんだ！ 売り物にならなくて、余ったまま帰ると会社に怒られちゃうしさ。僕もどうしようか困ってたんだよ。だから、貰ってほしいんだ。それはもう君の物だよ！」

星は自分の手の中にある箱を見下ろした。

「でも……やっぱり私……」

「もしも申し訳ないと思ってるなら、是非遊んでみてね！ 君が遊んでくれるだけで、他の人の為になるんだから」

「他の人の……ため？」

「——そう。だから、必ず遊んでね！」

不思議そうな顔をして首を傾げた星に、そう言つて男は去つていってしまう。

まるで嵐の様な不思議な男性に、断る暇もなく強引に渡された箱を星はじつと見つめて大きなため息をつく。

「これってやっぱりだめだよね……明日、あの人に返そう」

そんな独り言を呟きながら、星はとりあえず家へと帰った。

その夜。寝室で寝ていた星は、遅くに帰ってきた母親にひどく怒られた。

まあ、無断で学校を休んだことが教師から母親に知らされたのだから。珍しく早く帰ってきた母親に、星はこつ酷く絞られた。

だが、星は「体が痛かったから」と言い訳をして、何とかその場を収めることができた。

長いお説教から開放され、自室に戻ってきた星は疲れきった表情で

自分のベッドの上に身を投げ出した。

そんな時。ふと自分の机を見つめると、そこには今日貰った四角い箱が置いてある。

『もし申し訳ないと思うんなら遊んでね』男性の言葉が頭の中で何度も繰り返される。

「――遊んでね……か」

星は無造作に机の上に置かれた箱を手にとり、とりあえず箱を覆う包み紙の封を切った。

包装紙がぐちゃぐちゃになりながらも慣れない手付きで包み紙を開き箱を開く。

すると、その箱の中にはシルバーのブレスレットと説明書が入っていた。

「えつと……この器具を装着して、外側の緑の電源ボタンを押すと、ゲームが起動されます。あなたに神の加護がありますように？」

星はそれを読み終えると、不可解な文章に不思議そうに首を傾げる。

それは説明書というには短く。また起動の方法は書いてあるものの、終了の仕方は書いていなかった。

しかし、不審な点はあるものの、恐る恐るそれを手に取った。「ちよつと怖いかな……」

星はそう言いながらも、腕にはめて説明書通りにリング中央の起動ボタンを押した。

ここで止めないのが恐怖より好奇心が強い子供独特の行動なのだろう。すると、突然左手首に巻いたブレスレットが強く光り出す。

つと同時に体が熱くなり、全身が光に包まれていく。「ん、んんは……？」

気が付くと、星は見慣れない家のベッドの上に仰向けに倒れていた。

辺りを見渡すと、ベッドの横の花瓶にバラの花が刺さっている。(もし、ここがゲームの中ならケガをしないはず……)

星はゆつくりと花瓶の花を抜き取った。

しかし……。

「……いたっ！」

指に走った鋭い痛みに驚き、慌てて花から手を放す。その後、指を見た星は不思議そうに首を傾げた。

それもそのはずだ。不思議なことに、星の指には何かで刺されたような傷はあるものの、血は全く出てこないのだ。

普通なら針の穴程度でも、先端からじんわりと血が出るはずなのだが。

「うーん。とりあえず外に出てみないと……」

星が部屋の扉を開けると、突然目の前に緑色のコマンド入力画面が現れた。そこには「生年月日、氏名、電話番号、性別、同意証明」と表示されている。

星は指示通り順番に入力していくと、その次に「Name」と表示された。

突然現れた英語に少し戸惑いながらも。

「名前を入れた後にまた名前を入れるの？」

つと疑問を持ちながらも、星はもう一度『星』と目の前の画面に、今度は名字を抜かして自分の名前だけを入力し、下に表示された「ENTER」を押した。

その直後。表示されていたコマンド画面が消える。

「ふう〜。やっと終わった……」

緊張していた星は安堵したのか、大きく息を吐く。

そして、もう一度小屋の中を見渡すがそこには人影はない。徐々に星の心に不安が込み上げてきた。

それもそうだ。殆ど好奇心に任せて行動していたが、今いるのは自分の部屋ではなくおそらくゲーム世界——痛みがあるということはどうしても頭から離れない星は、現状を把握する為に、もう一度体を動かして状況を整理する。

体は至って正常そのものだ。物を持てばその感覚がしっかりと感じ取れるし、しっかりと地面を蹴って歩いている感覚もある。

外傷を負えば肉体に痛みもある。ないものといえば、手に持った物

の重さくらい——。

ここがとてもゲームの中の世界だなんて、言われなければ、おそろく、絶対に分からないだろう。

今まで生きてきて、星はゲームというものには触れたことはなく。この後、どのような行動をすれば良いのか全く見当がつかない。

「あつ、そうだ！ とりあえず、外に出てみるんだった！」

星は思い出したようにトコトコと廊下を走り出すと、木材で出来た床の突起に足を取られた。

「——ふにゅッ!!」

地面に顔面を強打し、思わず変な声が出てしまった……。

「ううう……いい、痛い……」

星は打った顔を抑えながら、出そうな涙をぐつと堪えた。

その後、ゆつくりと立ち上がり、再び外に出ようと今度は慎重に歩いて玄関の扉を開けると、光に包まれ再度目の前にコマンド画面が現れた。

しかし、今度のは打ち込むわけではなく。どうやら、選択するタイプのようだ。

「えつと……種族？」

そこには【ヒューマン】【エルフ】【ボディービルダー】の3種類が画像付きで表示されている。

まあ、明らかに種族とは呼べないであろう最後の1つは、ここではあえて触れないでおこう……。

【そのボディービルダーは防御力、攻撃力にボーナスがある。しかし、スピードのパラメーターが最初から低めに設定されている。

エルフは防御力が低い代わりにスピードと弓装備時は攻撃力1.5倍のボーナスがある。また、複数個の矢を同時に放てるようだ。

ヒューマンは全てが平均的でバランス型といった感じで可もなく不可もなく言ったところだろう。】

このことから見て、このゲームではこの3種類の種族で構成され。しかも、それぞれ違う特徴があるのは間違いないだろう。

そして最初の種族選択は、今後のゲームを左右すると言っても過言

ではない。

しかしながら、そんなことをゲーム初心者の星が知っているわけもなく。彼女は迷わず自分の容姿に一番近いヒューマンを選択してしまう。すると、次に表示される画面に彼女は戸惑う……。

何故なら視界に表示される赤と青の文字の『タフネス』『スイフト』という選択肢の意味が全く分からなかったからだ――。

教えてくれる人は居らず、これも自分で決定する他ない。考えた末に、星は遂に決断する。

「うくん。スイフトの方が響きがいいから、これにしよー！」

時間を掛けた割に随分と安易な考えで、星はスイフトを指で押して選択した。すると、光が徐々に収まり。次の瞬間、目の前に広がる光景に星は息を呑んだ。

それもそうだろう。彼女は今、区画整理された広大な森に囲まれた家の前に立っていた。

第1章

初めてのVRMMO

目の前の光景が信じられないと言った感じに、星は目を丸くしている。

「ここが……フリーダム？」

そこには、まるで地球と同じ様な……でも全然違う、もう一つの世界が広がっていたのだ。

天に向かって真っ直ぐと伸びる立派な針葉樹の木々が生い茂る森の中を切り開かれ、数多くの家が立ち並んでいる。空はどこまでも青く、真っ白な雲がゆっくりとその中を進んでいた。

それはとてもゲーム世界の中とは思えない。まるで現実と大差ないほどのクオリティーの光景だった――。

「うわあ〜。すごい〜！」

星は嬉しさのあまり、思わず外に向かって駆け出す。

広くどこまでも広がる空を見上げ。駆けていた星は突然、何か硬いものとぶつかって勢い良く弾かれ地面に倒れた。

「……いたっ！」

尻もちをついた星の前には、銀色の鎧を着た目付きの鋭い男性が立っていた。

「なんだ！ 誰だ？ この俺様に喧嘩を売ったバカは!!」

片手には弓を持ち、背中には矢筒を背負い。さらには男性の耳は異様に長く異質な存在感を放っていた……おそらく。その容姿から見るに、この男性の種族はエルフなのだろう。

その男の怒りの籠った視線は、尻もちをついていた星へと向く。

星は敵意を向けられていることに気付き、恐る恐るその男の顔を見上げる。

「ご、ごめんなさい……」

震えた声で謝ると、星は慌てて合った視線を断つように頭を下げた。

男はそんな星を見下しながら、不機嫌そうな顔をしている。

「ふん！ 初心者？ しかもガキか……？」

次の瞬間。男は徐ろに背中中の矢筒から矢を抜いたかと思うと、目にも留まらぬ早さで地面に座っている星を目掛けて矢を放った。

「……ひっ!?!」

高速で放たれた矢が足元の地面突き刺さり、少し遅れて星が小さく悲鳴を上げる。

恐怖からか、体の震えが止まらず。星は男の顔を直視することができない。

「——このゲームがPK禁止で良かったな……もし【PK】ができるゲームなら、お前の頭を射抜いているところだったぞ？ クソガキ！」

男は苛立ちを抑えながら、そう吐き捨てるとさらに鋭く睨んだ。

彼の言った【PK】とは『プレイヤーキル』の略で、プレイヤーを攻撃して金品を奪う行為を行うことができるシステムの略称だ。

このゲームで財産は、出来る限り本人の意思なく他人に奪われない仕様になっている。

「……ぐ、ぐめんなさい」

星は掠れた声でもう一度謝ると、男は不機嫌そうに立ち去っていった。

男が去って、今まで緊迫した雰囲気硬直していた体がやっと動くようになると、ドキドキと脈打つ胸に手を当てていた星の頬を涙が伝う。

「うう……ぐすつ……」

エルフの男に絡まれたことが余程怖かったのか、星は泣きながら当てもなく街の中を歩いていった。

街はRPGで良く目にする石畳の地面に西洋風のレンガ造りの建物が多く立ち並び、軒先にはテントが貼られた小じんまりとした店が点在している。

中世ヨーロッパを思わせる街並みの中を数多くの人が忙しなく動き回っているが、泣いている星に目を止める者はほとんど皆無だっ

た。

そんな中、後ろから優しそうな女性の声が聞こえてきた。

「ちよつとあなた。どうしたの？ 泣きながら歩いて……なにかあったの？」

振り返ると、透き通った青い瞳に同じく長い青い髪をなびかせながら少女が、心配そうに泣きべそを掻いている星に向かって駆け寄ってくるのが目に入った。

彼女は全身を白銀の鎧を身に纏い、腰には少し長めの剣を差している。

「い、いえ……なんでも、ないんです……」

さっきの出来事で萎縮してしまったのか、星は腕で涙を拭くと、駆け寄ってきた彼女と目を合わせないように俯き加減に答えた。

「なんでもなくて、そんな顔してるわけないでしょ？ モンスターにやられた？ それとも誰かにいじめられた……とか？」

その優しい彼女の声に、星の潤んだ瞳から溢れ出した涙が止めどなく流れ出す。

「うわああああああああん！」

「えっ!? ど、どうしてまた泣くの!？」

少女はわけも分からず、また大声で泣き出した星を見てあたふたしている。

2人は街の噴水近くのベンチに腰を下ろしながら、しばらくの間少女に慰められ、やっと星は落ち着きを取り戻した。

そして、星がどうして泣いていたのか、その理由を聞いた途端。今まで優しい笑顔を浮かべていた少女が、急に顔を真っ赤にして怒り出す。

「——なにそれ！ それは間違いなく向こうが悪いわ！」

「いえ、でも……私からぶつかつちやつたので……」

腕で涙を拭う星を覗き込む様に、少女が顔を近付ける。

その美しい青い瞳を細め、小首を傾げた彼女は視線を逸らす星に尋ねた。

「あなた。ほんとにそう思ってる?」

「えっ？ は、はい……」

「はあ……そうね。初めてじゃ、そう思うのも無理もないか……」

少女はため息をついてそう呟くと、自分の膝の上に手を置いてゆっくりと話し始める。

「——いい？ このゲームでエルフは、3種族内で最もスピードが速い種族なの。多分向こうからは、レベル差もあるからあなたの動きなんて、きつと止まって見えていたはずよ？」

「……えっ？ でもぶつかって……」

彼女は呆れ顔でため息を漏らすと、こめかみの辺りを押さえた。

「はあ……だから、向こうはわざとあなたにぶつからせたの！ よく居るのよね。初心者プレイヤーを虐めて喜んでるやからが……」

その話を聞いた星は、しょんぼりと肩を落としたただただ地面を見つめる。

落ち込んだ様子の星を見て、少女が声を上げた。

「——そうだ！ 今から私が戦い方を教えてあげる！」

「……えっ？」

「もちろん。あなたが良ければの話だけど、どうかしら？」

「は、はい！ よろしくお願いします！」

星は嬉しそうに頷くと、彼女のその申し出を快く受け入れた。

正直。ゲーム事態初心者で右も左も分からない星にとって、彼女の申し出は願ってもないものだった。しかし、VRMMOという現実世界と類似して肉体を動かすこのゲームでは、ゲーム自体が初心者の星には優しいとはとても言えない。だが、戦闘を覚えておくのは、今後の為にも有意義なものになるだろう。

街を出た2人は【始まりの草原】という見渡す限り、木なども全くない大草原へとやってきた。

草原には多数のLv1と表示されたこの世界最弱モンスターのラットが、草原を我が物顔で歩き回っている。

その中には初心者のプレイヤーも複数居るようだが、間隔も十分に空いているので邪魔にはならなそうだ——。

隣に立っていた少女が、ゆっくりと星の方を向く。

「そういえば、あなたVRMMO系の戦闘は初めて？」

「は、はい……」

悠々と歩くラットを見て肩を強張らせながら、緊張した様子で返事を
する星の姿を見るなり少女は「ぷっ」と息を漏らした。

「あんなラットくらいで緊張してたら、先が思いやられるわよ？ ほか、肩の力を抜いて……同じレベルなんだし。油断しなければやられないから、安心していいわよ？」

「……は、はい」

何度か深呼吸をしたものの。それでも緊張した様子で頷く星に、少女は軽く咳払いをしてゲームの説明を始める。

「このゲームの特徴は武器や攻撃なんかのスキルがないところなの。あつ、ないと言うか……まあ、あるにはあるんだけど、今は使わないから。まずはHPバーの説明だけ……多分、目に見えるところに青い円の中に数字が書いてあるでしょ？」

「はい。15つ出てます」

「うん。それがヒットポイントね！ でも、無くなっても近くの街の教会に送られるだけで、本当に死ぬわけじゃないから安心して」

「そうなんですネ。良かったあ……」

それを聞いた星はほつと胸を撫で下ろすと、息を大きく吐いた。

安心しきって完全に緊張を解いた顔になっている星の目の前に、少女の人差し指が突き出され。

「でも、死ぬと実際に死ぬほどではないにしても、凄く痛いから覚悟して戦うように！」

少女は真面目な顔で注意する。

一度は全身から抜けた力が緊張と恐怖から全身に再び力が入り、星は強張った全身を小刻みに震わせている。

その時、この世界にきて始めて起きた出来事が星の頭の中を駆け巡る。

(やっぱり痛いんだ……)

ゲーム世界にきてからバラの花を持った時、転んだ時、どちらも痛

みがあった。

そうなのだろうとは予想をしていたものの。あらためて痛みがあると聞くと、やはり物怖じしてしまう……。

意識すればするほど心拍数が上がり目の前のウサギ程度の大きさのラットでさえ、まるで凶暴な野獣のように星の目には映っていた。完全に血の気が引いて顔面蒼白の星を気にかけるように、少女が話し掛ける。

「ねえー。大丈夫？ 顔色が悪いけど……」

「も、もし……攻撃されたら？」

星は不安そうにそう呟いて、少女を見上げた。

「大丈夫！ 私があなたを殺させないわ。こう見えても私、結構強いんですよ。」

少女は力強く告げると、怯えた様子の星に向かってにつこりと微笑んだ。その後、少女は思い出したように指でコマンドを操作する。

すると、星の目の前に――。

『エミル様より星様へのパーティー申し込みが行われました。了承しますか？ 【YES】【NO】』

っというメッセージが表示された。

ゲーム自体これが始めてのプレイとなる星には、その内容がさっぱり読み取れずただただ首を傾げている。

「これは？」

「PTのコマンドよ？ 今のままだとあなたのHPバーが私には見えないから、もしもの時にどうしようもないでしょ？」

「……そうなんですか？」

星はその言葉を聞いても、意味が分からないのかきよんとしている。

それもそのはずだ。星は生まれて初めてゲームをプレイしている。それも最近やっと普及してきたばかりのVRMMOシリーズのゲームだ。

この【VR】とは、実際にゲーム内に入った感覚でプレイできるといいう画期的で最近流行り始めたゲームジャンルのだが、ハードも頭

に被るのではなく手首に巻くリング状という奇妙なもので、その理論も多くが謎に包まれていたことから、科学的に人体に影響がないのか？という大衆の不安の声もあり。日本ではそれほど大きく浸透していなかった。

だが、ある国際的な医療機関が人体への影響はないと表明してから、日本国内でも爆発的にヒットし始めたのはまだ記憶に新しい。

星はVRどころか、子機などのゲーム自体したことがないという事実を少女に告げた。

さすがにそれには、少女も小学生でゲームをしたことがないということに少し驚きを隠せない表情をいていたが、すぐに冷静になって。

「……なるほどね。ゲーム自体が初めてということは、オンラインゲームも初めてなのね」

「はい。ごめんなさい……」

星が俯き加減に謝罪をすると、少女は少し困った顔で聞き返した。「いや、別に謝ることじゃないんだけど。なら、どうしてこのゲームをしようと思ったの？ 正直。初心者の子には少し……というか、かなり難しいジャンルのゲームだと思うんだけどVRって……」

「いや、それは……その……」

星は彼女のその質問に思わず口を噤んだ。

それもそのはずだ。まだ出会ってそこまで経っていない人に『母親に怒られた勢いで、見知らぬ人から貰ったゲームをプレイした……』なんて、とてもじゃないが言えない。

下を向く星を少女は不思議そうにただ見つめている。が、すぐにパッと手を叩くと。

「まあ、いいわ。人にはそれぞれ事情があるもの。無理に喋らなくても——ねっ?」

「は、はいー」

表情をパーッと明るくする星に、少女も安堵した様子でほっと胸を撫で下ろす。

「それより問題なのは……」

「——も、問題なのは……?」

少女はそう言っただけ身を乗り出すようにして星の顔を覗き込むと「あなたのレベルとキャラ名でしょ?」と、彼女は今までで一番の笑顔でにっこりと微笑んだ。

ゲームの仕様で、パーティーを結成しないとキャラクターの名前とレベルは表示されないようになっていた。

それはプレイヤー同士での些細ないざこざを起こらなくすることと、ゲームシステム上の処理速度の面でも、名前などの細かい情報を表示しない方が効率がいいという両方の利点があるからだ。

星は「はあ……」と間が抜けたように返事をする。

理解が追い付かず、完全に置いてけぼり状態の星に微笑み掛けた。

「とりあえずPT組みましょう。そうすれば、レベルと名前が分かるしね!」

「へえ〜」

「ほら、分かったなら早く【YES】を押して」

「は、はい!」

彼女に急かされるように言われ、星が慌ててコマンドの【YES】の方の画面を指で突いた。

すると、自分の右上側に小さく彼女の名前とレベルが表示される。

「えっ? エミルLv100?」

「へえ〜。星ちゃんね。ほんとにLv1なんだ」

「ほ、ほしじゃなくて、せいです……」

星は不機嫌そうに少し頬を膨らませながら、彼女の言葉を訂正する。

まあ、名前を間違われれば当然と言えば当然だが、星が自分の名前を気に入っていることも原因だったかもしれない。

「ご、ごめん。星ちゃんね! 覚えた。うん! すっごく可愛い名前ね!」

エミルはそう言って誤魔化すように、にっこりと微笑んで見せた。

星は不機嫌そうな顔をしながら、そっぽを向くと「お世辞なんていいんです。どうせ変な名前ですから」と小さく頬を膨らませて憎まれ

口を叩くと、完全にふてくされてしまった。

「そ、そうだ！ 星ちゃん。武器は何がいいかな？」

「……武器？」

「ご機嫌斜めになった星を見て、エミルはなんとかこの状況を打開しようとして咄嗟に話を切り替える。

「普通のMMORPGでは魔法とかがあるんだけど、このゲームはちよつと特殊で、プレイヤーの最初から覚えているスキルで決まると言ってもいいわ」

「スキル……？」

ゲーム初心者の星に専門用語を使っても分かるわけもなく。星は難しい顔をしながら、ただただ首を傾げている。

しかし、困っているのは星だけではなく、ゲーム用語が通用しない相手にエミル本人もたじたじの様子で――。

「そっか……えっと、スキルというか技術や身体能力で強さが決まるって言ったら分かる？」

「技術？ テクニク……ですか？」

「そう！ それ！」

エミルは手をパンツと叩くと、笑顔で説明を続ける。

「このゲームではリアルに少しでも戦闘を近付ける為に、あえて魔法や銃などの高火力な遠距離系の攻撃をキャンセルしてるの。基本はスキルというものは、武器強化か肉体強化の2種類しかないわ。そこで重要なのが、武器の選択『剣』『弓』『体術』の3種類。他にも色々あるけど既存のショップで買えるのはこれくらいね。まあ、まずは見てもらった方が早いかな？」

説明を聞いて難しい顔をしている星に、エミルは微笑みを浮かべると、腰に差している長めの剣を引き抜いた。

初めてのVRMMO2

エミルが剣を抜いたのを見て、このゲームに初めて来た時のことを思い出した星は少し身構えた。

「大丈夫。別にこの剣で星ちゃんを攻撃しようなんて思っていないわ。ただ、ちよつと見ててもらいたいのに」

「……は、はい」

星が返事をして頷いたのを確認すると、優しかった彼女の目付きが鋭いものに変わり、近くを歩いてきたラットの前に出て剣を構える。

近くにきた星にラットが気付いて姿勢を低くすると、警戒体制に入った。

「スイフト！」

エミルが叫ぶと一瞬だけ体が青く光る。

すると、彼女が風のように星の前を横切ったかと思うと、次の瞬間には彼女はもうラットの前にいた。

「はあああああつ!!」

即座に目の前のラットに向かって剣を振り下ろす。その直後、攻撃を受けたラットのHPは一瞬で『0』になった。

しかし、彼女の攻撃の手が止むことはなく。一瞬の刹那に、素早く数太刀をラットの体に叩き込む。次から次へと攻撃を繰り返すその姿は、まるで舞でも踊っているかのようだ――。

エミルの激しい攻撃が終わり、ラットの体には無数の切り傷を受けた状態で横たわった上に【OVER KILL】と表示され。直後、ラットの体はキラキラとした光りを残してその姿を消した。

残された光りは吸い込まれるように上空へ舞い上がっていく。

「ふうー。8連撃か……私も鈍ったなあー」

エミルはそう小さく呟くと、持っていた剣を鞘に収めた。

無言の星はラットのいた場所にゆっくりと近付いていくと、俯いたまま小さな声で「あんなに攻撃する事ないのに……」と呟き、眉間にしわを寄せながら怒った表情でエミルの方を向いた。

「エミルさんひどいです！ あんなに攻撃しなくてもいいじゃないで

すか!!」

星はそう叫ぶと、瞳を潤ませながらエミルの顔をじつと見つめた。だが、その言葉を聞いたエミルは驚いて目を丸くしている。

それもそのはずだ。長年ゲームをしてきたが、今まで一度もモンスターがかわいそうなどと言われたことなどない。

敵を攻撃するということは、ゲームをやる上に当たり前のことであり、それがRPGの醍醐味でもあるのだから無理もないだろう。

しかし、目の前の少女はラットがかわいそうだと瞳に涙を溜めて怒っている。星が至って真剣にそう感じているのはエミルにも感じ取れる。だが、エミルはどうして自分が、怒られるのかがいまいち理解できないでいた。

「——いや、ほら星ちゃん。倒したラットは、また復活するから大丈夫なのよ?」

エミルは星のその反応に動揺しながらも、慌てた様子で辺りを見渡し何かを見つけたのか、エミルはほっとして遠くの方を指差す。

そこにはさつき倒したはずのラットが光りとともに再び現れ、何事もなかったかのように歩いている。だが、それを見てもまだ、星の表情は暗いままだ——その理由は……。

「でも……あの子も痛かったんじゃないんですか?」

「ううん。大丈夫、その心配は要らないわ。モンスターは痛みなんて感じないから! それに、モンスターはデータの集合体。だから痛みもなければ、何度でも蘇るの。そういう仕様なのよ」

もちろん。エミルの言ったことはなんの根拠もなく、取って付けたようなでまかせでしかない。

痛みを感じているかという点は謎だが、モンスターでもダメージを受ければ怯んだり。攻撃パターンが変わったりする仕様になっているのは事実。それは裏を返せば痛みを受けているようにも見えるということである。

しかし、初心者星はそれを知る由もない。エミルの言葉を鵜呑みにした星は、ほっと胸を撫で下ろして「なるほど」と相槌を打つ。

まあ、エミルの説明が難しかったということも、それ以上追求でき

ない原因の一つではあるだろう。

だとしても。先程目の前に倒されたはずのラットが蘇ったところを見ると、この世界では敵は再び蘇るということは、子供の星にも理解できた。

「とりあえず。私は剣士が長いから、今更、他の武器はしつくりこないのだけど……剣の他にも弓、ガントレット、後ボディービルダー専用装備でダンベルやバーベルなんていう変わり種もあるわね〜」
「なるほど〜」

彼女の発言に合わせて、再び星が相槌を打つ。

「どれを選ぶかは星ちゃん次第だけど……星ちゃんは背も小さいし、まだ初心者でステータスも低くて筋力がそれほど高くないから、比較的軽い弓か剣がいいかな〜」

「そうなんですか？ でも、物を持ってそんなに重くないというか、重さを感じないというか……」

星はそう小さな声で呟くと、不思議そうに首を傾げた。

その問いに、エミルは迷うことなく即座に返答をした。

「ああ、それはゲームの筋力補正機能が働いてるからよ。でも、それを超える重さの物を持つと、一気に重量がくるから気を付けるのよ？」
「なるほど〜」

またも星がそう相槌を打つと、エミルが突然くすくすと笑い出した。

急に笑い出すエミルに、星は不思議そうに小首を傾げる。

「ふふっ、ごめんなさい。さつきから、なるほど〜。ばっかりだと思つて」

「あつ……ごめんなさい」

それを聞いた途端にしゅんとする星の姿に、エミルが慌てて手を振った。

「別に謝ることじゃないけど……あ、そうだ！」

エミルは何かを思い出したようにぱちんと手を合わせると、徐ろに自分のコマンドを操作し始めた。空中で指を動かしている彼女の姿を、星は興味津々な様子で見つめていると、不意にエミルがにっこり

と微笑んだ。

「——友達になった記念に、これを貴女にプレゼントするわ！」
にこにここと微笑んでいる彼女の手には、柄に竜のエンブレムが入った古そうなロングソードが握られていた。

「ありがとうございます。……でも、これ大きい……です」

不安そうな表情で、エミルの手の中の剣を困惑した表情で星が見つめている。

星がそう思うのも無理はない。何故なら、その剣は星の身長のお半分以上の大きさで、とても小柄な彼女に扱える代物とは到底考えられない。

「そう思うでしょ？　でも、筋力補正があるから、今のままでも振るだけならできると思うわ。とりあえず、この剣を持って振ってみて」

「は、はい」

星は剣を受け取ると、言われた通りにぶんぶんと振ってみた。

「あれ？」

剣を振っている星は不思議な違和感を感じ、思わず首を傾げる。

「ふふっ。分かった？　その長さだと、頑張っても素早く振れないでしょうっ。」

「は、はい」

エミルは悪戯に笑うと、不思議そうな顔をしている星に話し掛ける。

「そう。この世界には重さは存在しない。でも一部の例外はある。それが戦闘における個の優位性よ」

「……この、ゆういせい？」

急に難しい言葉が入ってきて、少し困惑した星が途端に難しい顔をする。

それも無理はない。普通は個の優位性などという言葉を、小学生である彼女が耳にすることはないとと言っても過言ではないのだから。

エミルはそんな星の様子を楽しんでいる様に、にこにここと微笑んでいた。

「簡単に説明すると……そうねえ。星ちゃんはお団子は好き？」

「えっ？ は、はい」

「そのお団子を、私は箸。星ちゃんは爪楊枝で食べるとするでしょ？
その時に、私と星ちゃんが同時に動いて、同じ場所にあるお団子を
取ろうとする。っとお団子はどうなるかしら？」

「えっと……箸より爪楊枝の方が短くて……だから。エミルさんに、
取られる？」

難しい顔をして考え込んでいた星がその質問に自信なさそうに答
えると、エミルの顔色を窺うように見上げる。

「うん。正解！ 星ちゃんは賢い子ねえ〜」

「えへへ」

エミルに褒められて頭を撫でられ、嬉しそうに微笑む星に向かって
再びエミルが説明を始めた。

「基本的に武器というものは、長ければ長いほどリーチと重さがある
分。攻撃範囲と振り下ろした時の勢いが増して、必然的に攻撃力は高
くなるわ。それが優位性——もし。それをそのまま放置したら、日
本人より身長の高い外国人が最強の無法地帯になるでしょ？」

「はい」

「それを阻止するために、このゲームにはバランス調整機能が付いて
るの。さっきの筋力補正もそう、レベルによって持てる上限数値が上
昇するけど最大値は皆同じ。ちよつとコマンドを開いてもらえる？」

星はエミルに言われた通りに、覚束ない手付きでコマンドを開く。

エミルは、星の指が止まったのを確認してから次の言葉を発する。

「——開いたら、オプションのバランス調節を押してみて」

星は静かに頷き、バランス調節の項目を指で押した。

その直後、手に持っていたロングソードが短くなり、星の体に合う
丁度いい長さに変わった。

それを確認したエミルにもう一度剣を振ってみるようになわれ、そ
の通りに握っていた剣を3回ほど振ってみた。

「……あつ、使いやすい」

さっきまでの剣に振り回される様な違和感が完全に消え、スムーズ
に切り返しができるようになっていた。

「でも短くなった分、それがハンデになる。でも、その代わりに、武器攻撃力と攻撃速度に若干のボーナスポイントが付くから、あとは星ちゃん自身の腕でどうとでもなるわ」

「そう、なるかなあ……」

一抹の不安を残し、星は自信なさげに苦笑いした。

元々自分に自信がある性格ではない星にとつて、その反応は普通のことだった。しかし、理由はそれだけではない。

一番はゲーム初心者の小学生が大人に混じって、しかもVRと言う最近流行り出したばかりのゲームジャンルをプレイするには若干の無理があるということだろう。

彼女自身、そのことに不安を感じているのは言うまでなかった。

「武器や防具のバランス調整はオートで働くようにした方がいいから、下の項目の四角い場所を指で押してチェックを入れておくといいわね」

「あつ、はい」

上下に剣をブンブンと振っては首を傾げていた星がエミルの言葉に頷くと、オート調整と書かれたところを指で押した。

エミルは星の様子からオートへの切り替えを終えたのを確認するなり、ラットを横目で見た。

「こういうのは習うより慣れろつて言うからね……ほら、次は星ちゃんの番よ」

「えっ？　ちよつと、まだ気持ちの整理が……」

強引にエミルに「いいからいいから」と背中を押され、敵の前に出た星を捉えた一匹のラットが警戒体制に入る。

横を見ていたラットはピヨンと一跳ねして向きを変えると、微動だにせずに低い姿勢を保って近付いてきた星を食い入るように見つめている。

(うう……急に戦えつて言われても……)

星はそう思いながら、ちらつとエミルの顔を見ると、彼女は満面の笑みで親指を立てていた。

『この人を頼ったら駄目だ。自分でなんとかしないと……』そう考え、

星は大きく息を吸うとゆっくりと吐き出した。

星は剣をラットに向かつて構えた。だが、戦闘経験のない星にとって、目の前のラットとどう戦えばいいのか分からずに、お互いに睨み合った状態で止まっている。

つと、ラットの方から星目掛けて飛びかかってきた。

ゲーム内のモンスターにはそれぞれ独自のAIが組み込まれており、プレイヤーの動きに合わせてるように設定されている。

今、目の前にいるラットも例外ではなく、そのAIで判断し行動しているのだ。

おそらく。相手プレイヤーが動きを止めると様子を見るように設定されていて、一定時間が経つとラット側からアクションを起こすようにプログラムされているのだろう。

まあ、そんな事をゲーム初心者の星が知る由もなく――。

「ぎゃあああああッ！」

急に襲いかかってきたラットに驚き叫び声を上げると、震える手で剣を構えたまま、恐怖から星は思わず目を瞑ってしまった。

その瞬間、星の前にエミルが割って入り、素早く抜いた剣でラットの体を真っ二つに切り裂く。

エミルは剣を再び鞘に戻し、星の方を振り返る。

「ふう〜。最初からうまくいくとは思ってなかったけど……びっくりしても目を瞑っちゃダメでしょ？」

「ご、ごめんなさい……」

怒られたと感じた星は、がっくりと肩を落として謝ると、体を小さくしてしよげ返ってうつむいてしまう。

エミルはそれを見てため息をつく、星の目線に合わせてるように膝を折って優しい声で話す。

「まあ、剣を持ったのも初めての子に、急に戦えって言った私が悪かったわね。ごめんなさい星ちゃん」

「エミルさん……」

そう言っただけでこりと微笑むエミルに、ほっとしたのも束の間。次の彼女の一言に星は言葉を失った。

「とりあえず。今日は一匹倒せるようになるまで頑張ってみましょうか！」

「……えっ?」

彼女のまさかの発言に天国から地獄とはまさにこのことだと星は思った――。

いくら相手がLv1のラットと言えども、攻撃してきた瞬間のその勢いは初心者星にはまるで猪のように感じるほどだ。

これはゲームだが、画面の中だけを動き回っているようなそんな生易しいものじゃない。

例え最弱モンスターというラットといえども、大きなウサギほどの大きさの生き物が、突然自分に襲い掛かってくるのだ。まだ小学生の女の子からしてみれば、ただただ恐怖でしかないだろう。

か弱い少女に向かって、目の前で微笑んでいる高校生くらいの青い髪の少女は、とりあえず一匹は倒そうと言うのだ――。

だが、星には目の前を闊歩しているラットを倒せる気が微塵も起きてこない。

「――無理……絶対に無理です!」

星は両手をぶんぶん振りながらその提案を拒否すると、その場にならずくまってしまう。

「無理って言われても……これは、そういうゲームだし……」

エミルもまた、地面に小さくうずくまってしまっている星の様子に困り果てている。

そんな状況がしばらく続き――。

考え込んだ末に、エミルが何かを思いついたように手を叩く。

「そうだ! あの方法があったじゃない!!」

「……えっ?」

そういうとエミルは星の顔を覗き込んでにっこりと微笑んだ。

星はそんな彼女の顔を見て、不安そうに眉をひそめた。

初めてのVRMMO3

会話の後、2人は草原から少し離れた場所に移動した。

上機嫌で先を歩くエミルとは対照的に、後ろを歩く星の表情は暗い。

それもそうだろう。さつきから行き先を聞いても、全く教えてもらえないまま着いた場所は……。

(私、どうなるんだろう……)

星はそんなことを思いながら周りの風景から目を背けるように俯いていた。

彼女がそう思うのも無理はない。何の説明もなく連れて来られたその場所には、あちらこちらに十字に象られた石が所狭しと並べられていて、カラスの様な不気味な鳴き声も頻繁に聞こえてくる。

(ここってまさか……お墓じゃないよね?)

そんなことを考えながら、星はできるだけ周りは見ないように心掛けていた。すると、前を歩いていたエミルの足が止まり突如その場に立ち止まる。

先程までとはまるで別人のような不気味な笑みを浮かべ、エミルがボソボソ呟くように言った。

「——さあ、ここなら邪魔は入らないわね……」

「あの……邪魔って……なにの?」

星は震えた声で恐る恐るその言葉の意味を聞き返す。

不気味な笑みを浮かべる彼女の背中からは、危険な香りが漂い。本能的な勘が星の危機感知センサーにビリビリと信号を送ってくる。

「それは、このレベル差で戦ってるのを誰かに見られたらまずいからに決まってるでしょ? レベルは分からなくても、付けている装備であなたが初心者だって分かってしまうものね……」

小さな声でそう呟いたエミルは、振り返り徐に腰に差した剣を抜いて、ニヤリと不気味な笑みを浮かべている。

先程までのエミルとは明らかに違う雰囲気を漂わせている彼女に、身の危険を感じた星が後退りする。

「……エ、エミルさん？ 何かの冗談ですよね？」

「フフツ……でも、冗談でこんな所に連れてこないわよね？」

「……でも、さつきまでは優しくしてくれたのは……？」

恐怖に立ちすくみながら、掻き消えそうなほどのか細い声で星はエミルに尋ねると。

「それも全て演技よ？ 星ちゃんは素直で助かったわ。もう少し警戒されると思ってたから……」

「……そ、そんな」

今までのことが全て演技だったと聞かされた星は、シヨツクのあまり瞳に涙を浮かべ、力無くその場にぺたんと座り込み諦めたように項垂れる。

そんな星を見下ろすようにして、手に剣を持ったエミルが低い声で告げた。

「さて、分かったなら有り金全部、置いていってもらおうかしら？」

「——は、はい……」

星は言われた通りに震える手でコマンドから財布を出すと、それをエミルの方にそつと差し出したその時——。

「ぷっ……あははははっ！」

「……えっ？」

急にお腹を抱えて笑い出すエミル。

何が起きたのか分からずに、地面に両手を付いてきよんとしながら星はエミルを見上げる。

すると、エミルは笑って出た目尻の涙を拭つてすぐに言葉を返す。

「いや、ごめんなさいね。星ちゃんをちよつと試してみたんだけど、でもまさか——こんなにあっさりお金を出すなんてね……ぷっ、星ちゃん。あなたたちよろすぎよ。あはははっ！」

まだ笑い足りないのか、なおもお腹を抱えて笑う彼女に、顔が真っ赤に染まった星が頬を膨らませながら、エミルの顔を鋭く睨んだ。

さすがに星が激怒しているのを察したのか、エミルの顔も自然と引き攣る。

「うっ……すっ……睨まれてる。ちよつといじめ過ぎたかな……？」

エミルはそんな星に向かって、慌てて弁解した。

「いや、ほら！ このゲームって【RMT】を公式で認めててね。こういうふうに対手を油断させて騙すやからが多いのよ！」

「むう……………」

説明を始めたエミルの顔を、不信感いっぱい瞳で見つめる星が「騙すなんてひどいです」とぷいっと顔を背けた。

彼女の言った【RMT】とは『リアルマネートレード』の頭文字を取ったもので、その名の通り現実の通過を取り引きすることを意味している。

「いや、ほら悪い人に付いて行っちゃだめですよ！ 学校でも言われてるでしょ？」

「そうですけど……………ここはゲームの中ですし。それに、だから嘘をつくなんて……………ひどいです」

完全にくてくされる星に、苦笑いを浮かべていたエミルが今度は真面目な表情で説明を始めた。

「VRMMOはゲームだけど、ただのゲームじゃないの。この世界はもう一つの現実だと考えた方がいいかな？」

それを聞いた星は彼女の言葉の意味が分からないのか、首を傾げながら聞き返す。

「——もう一つの現実？」

「そう。でも、リアルの世界よりもっと危険な……………ねっ！」

エミルは星の顔を覗き込んで人差し指を立てる。だが、星にはその言葉の意味が理解できずにただただ首を傾げている。

すると、そこで何かを思い付いたように星は言葉を発した。

「——あつ、分かりました！ モンスターがいるからですか？」

さつきまでふてくされていたのが嘘のように、星は褒めてもらいたくてまるで子犬の様に瞳をキラキラさせながら、エミルの顔を見上げている。

それを見たエミルは、小さく息を吐き「そうね。色々なモンスターがいるからねえ」と星の頭を撫でてやる。

頭を撫でられた星は嬉しそうに微笑んだ。

「でも、【PVP】とかには気をつけてね。あれは、PKのできないこの世界で唯一相手に危害を加えられる手段になるから」

「PVP?」

聞き慣れないその言葉に、星は思わず眉間にしわを寄せて首を傾げている。

そんな彼女に、エミルは顎の下に指を当て少し考える素振りを見せ話し出す。

「簡単に言うと、プレイヤー同士で戦う事かな？ これはHPが必ず『1』は残るんだけど、それが問題なのよねえ……」

彼女の顔が急に険しい表情に変わり、大きなため息を漏らす。

多人数が一度にログインするMMORPGであるがゆえに存在するのが、この【PVP】という『プレイヤーVSプレイヤー』のシステムと言えるだろう。いや、VRというシステムだからこそと言った方がいいかもしれない。

ゲーム内にリアルと変わらないアバターがあり、痛覚があるゲームだからこそモンスターだけで戦っているだけでは、技術の向上する場所がモンスターの出現する狩り場しなくなる。そうになると、実践でしか戦闘技術を学ぶチャンスはなくなってしまう。

痛覚のあるゲームでこれは相当なリスクになる。それを対人戦を行える様にすれば、実践の前に装備を試したり痛覚に慣れるということができるわけだ。だからこそそのHPの最低値である『1』を残すという手段を取ったのだ――。

普通に考えれば、HPが確実に残る戦闘が危険とは考え難い。HP残量が尽きて撃破されるPKと異なり、PVPはそれと比べてもとても安全に感じるはずだ。

その様子を見ていた星は急に不安になる。

「あの……どうかしたんですか?」

「ううん。なんでもないわ……とにかく知らない人からPVPの申し出がきたら、間違いなく断ること！ いいわね?」

「えっ? あっ、は、はい」

彼女の威圧感に圧倒され、その場は首を縦に振ったものの、星の頭

の中では大きな『?』が浮かんでいた。

だが、何故か分からないが、それ以上に『この事を深くエミルに聞いてもいけない』という確信もどこかにあった。

もちろん。彼女がこれほどまでに【PVP】を問題視するのには、それなりの理由がある。

ここ【FREEDOM】は仮想現実の世界とはいえ、多くの人間が自分の思うままに活動している。

このゲームの総人口数は約250万人。それだけ多くのプレイヤーがいれば、その中で揉め事がないわけがない。

これだけ人口の多いゲームだと、プレイヤー全てが良心的なプレイヤーということはずありえない。

中には現実世界の鬱憤を晴らしたくて、ゲームをしているプレイヤーもいるだろう。

そして何よりも、この世界では武器がそこら中に溢れており。プレイヤーは全てと言っていいほど、武器を携帯しているのだ。

運営側でRMT——利益を目的としたアイテムなどの取り引きを承認しているVRMMOもそう多くなく。このゲームで得た利益だけで、生計を立てているプレイヤーも数多くいる。

その中でもグレーゾーンギリギリで荒稼ぎしているプレイヤーを、ここでは『ブラックプレイヤー』と呼んでいる。

彼らはPVPを悪用して、初心者を見つけては優しく話しかけ、人影におびき寄せては言葉巧みにPVPを仕掛ける。

しかし、さつきもエミルが言った通り、PVPでの戦闘ではHPは必ず『1』は残る。

そして、HPが『1』になったと同時に自動的にバトルは終了になり、HPが全回復する仕様になっているのだが……そこにこそ落とし穴がある。

このゲームでは『オーバーキル』すなわち、相手のHPを超えてダメージを与えることができる仕様になっている。

モンスター相手に使えば、報酬に追加ボーナスを受けることもできる。

更にオーバーキル中はバトル継続と判断される為、自動的にバトルは終了しないのだ。

それはつまり、剣や矢が体のどこかに刺さった状態であれば、HPが『1』でも【OVER KILL】と表示され、戦闘が継続してしまふということだ――。

痛覚がある以上。戦闘ダメージと同等の激痛が永遠にプレイヤーの体を襲う。その痛みから逃れる為に、装備や金銭を相手に渡すのは誰しも当然のことだろう。この世に痛みによる恐怖以上に、恐ろしいものはないのだから……。

(まあ、この子にはまだ早いかもしれないわね。とりあえず、私が近くにいれば危険はないだろうし……)

エミルはそう心の中で呟くと、目の前で頭を撫でられ、嬉しそうにしている星を見て優しく微笑んだ。

「さて。それじゃ、攻撃の基本からしつかりと教えてあげようかな」

「えっ？ ああ、また戦うんですか？」

エミルのその言葉に、星は不安そうに聞き返した。

「それはそうよ。私は早く星ちゃんと狩りに行きたいからね！」

「――私は話してるだけでいいんですけど……」

不服そうにそう言って俯く星を見て、エミルが少し考える素振りを見せるとにつこりと微笑んだ。

正直。ゲームの概要も知らずにプレイし始めた星は、モンスターと戦う様な怖い思いや痛い思いをしてまでアイテムなどのドロップ品が欲しいとは思っていない。

非現実のこの世界で友達ができれば、少しはリアルの生活にも楽しみが生まれるのではないか。という単純な考えしかなかった。

「確かに話してるだけでも楽しいんだけどね。でも、せっかくゲームの世界に来たんだし、もつと色々な所に行ってみたいでしょ？ 物語に出てくるユニコーンとか、ペガサスみたいなのもこの世界にはいるのよ？」

「――ペガサスがいるんですか!？」

ペガサスという言葉に、突然星の目がキラキラと輝き出す。

まあ、基本いじめられっ子で鍵っ子なんて、家に帰れば学校での出来事を思い返して一人で泣くか、本を読むか、寝るか、勉強するなど一人でできることしかすることがないわけで……。

幼い頃から、一人でいることの多かった星には不思議と親が居ないことが寂しいという感情はほとんどなかった。ただ、無駄に流れていく多くの時間を、星は本を読んで過ごしていることが多かったのだ。いくら幼い頃とはいえ、子供ながらに母親の苦労は分かっていたし、迷惑を掛けて母親を困らせてもいけないとも感じていた。

そんな中、ファンタジー小説に決まって出てくるのがペガサスで、馬が居るのだからペガサスくらいは現実に存在しているのではないかと、思い探しにいったこともあるくらい好きな幻獣の一つだ。

だからこそ『ペガサス』という言葉には、なんとも言えない魅力を感じていた。

「まあ、そのペガサスに会うの為に頑張って練習しよう！」

「はい！ 私、頑張ります!!」

両手を胸の前でぎゅっと握って力強く頷く星に、エミルも大きく頷き返す。

「とりあえず。剣を抜いて、私からPVPを申し込むから、受けたら好きなタイミングで打ち込んできていいわよ」

星の目の前にコマンド画面が現れ。

『プレイヤー エミルがPVPを申し込んできました。受けますか？』

【YES】【NO】

つと、システムメッセージが表示されている。

今度は躊躇した先程とは違い迷うことなく星は【YES】を指で押した。

数歩下がって剣を構えたエミルが、星向かって叫ぶ。

「スイフト！ さあ、バトルスタートよ。どこからでもかかってきなさいー！」

「質問が……」

そう言っつて剣を構えたエミルに、水を差すように星が徐に手を挙げた。

気合いを入れていた彼女は、肩透かしを食らったように全身から力が抜け、星の方へと歩み寄る。

「どうしたの?」

「エミルさん。その『スイフト』て何ですか?」

さつきから気になっていた疑問を口にして、首を傾げている星にエミルが尋ねる。

「最初に2種類から選ばなかった? 『タフネス』『スイフト』のどちらかかって」

「えっと、私は確か……スイフトだったと思います」

星は最初の時のことを思い出し、選んだ選択肢をエミルに告げる。

だが、とても『響きがいいからと適当に決めた……』などとは言えるわけもない。しかし、予想以上にエミルは好感触な反応を見せた。「ほおー、それはいい選択をしたわね。この2種類のスキルだけど、『タフネス』は攻撃力と防御力に一定値上げてくれるの。『スイフト』はスピードと攻撃速度を上げるのよ。星ちゃんは腕力に自身があるわけじゃないし、スイフトを選択して正解ね」

「そうなんですね!」

星は納得した様子で微笑むと、説明を終えたエミルは気を取り直して再び剣を構えた。

「私はスイフトを使うから、星ちゃんは安心してどンドン打ち込んできていいわよ!」

「でも……」

しかし、星は俯き加減でその場に立ち尽くしたまま、一向に剣を構えようとしなない。その時、星の心の中ではエミルが怪我をするのではないか、という不安が湧き上がっていた。

それを見たエミルが少し考え込み、何か思いついたような笑みを浮かべ、ある条件を躊躇している星に提示する。

「なら、もし星ちゃんが私に参ったって言わせる事が出来たら、何か美味しいものをごちそうしてあげる!」

エミルの申し出に星の顔がパーッと明るくなる。

星は瞳をキラキラさせ、エミルの顔を見上げると「それは甘いもの

ですか!？」と飛び付くような勢いで尋ねた。

こくとエミルが頷くと、星は徐に剣を抜いて気合い充分にぶんぶんと素振りを始めた。

(ふふっ、甘い物に釣られるなんて、まだまだ子供ねえ。でも、こつちもそう簡単には参ったって言っただけないわよ)

エミルはそんな星の様子を見ながら、心の中でそう呟きながら悪戯な笑みを浮かべた。

ログアウト不可

それから1時間近く2人は剣を交えていたが、途中でエミルが熱が入ってしまった。

結局は星の方が「参った」というはめになってしまった為、ご褒美を期待していた星にとっては残念な結果になってしまった。

地面に座り込んで肩で息をしている星に、エミルが声を掛ける。

「さて、それじゃ。そろそろ街に戻りましょうか」

「うう……お菓子……」

今にも泣きそうな表情のまま、星は剣をぎゅっと握り締めがっくりと肩を落としている。

そんな星を見かねて、エミルは背中側から覆い被さるように星の肩に腕を回すと、そっと耳元でささやいた。

「——大丈夫。星ちゃんの頑張りには伝わったから。約束通り、ご褒美に何かごちそうしてあげるわ!」

「……ッ!?!」

星の頭を撫でながら「本当ですか!?!」と、嬉しそうに振り向く星に、エミルは小さく笑みを返す。

2人は手を繋いで街へと帰ると、何だか街中が騒がしいことに気付く。

不思議に思ったエミルは、近くにいた剣士とエルフの剣士の男達の話に耳を澄ました。

すると……。

「おい!・ どうなってるんだ? ログアウトを押してもエラーが出るだけで落ちれないぞ!?!」

「これってやばいんじゃないのか? このままログアウトできなかつたら、俺達どうなるんだよ!?!」

「いや、まさか……そんな事はないだろう。すぐに運営の方から連絡メールが来るさ!」

「もしこなかったらどうなるんだ? 俺達」

「お前。縁起でもないこと言うんじゃないよ!」

その会話の内容から、事の重大性と緊迫した現状が伝わって来る。何かの冗談という気持ちが大きかったが、徐々に不安の方が大きくなってきて……。

(ログアウトできない? そんなバカな……)

エミルはそう思いながらも、一度自分のコマンドを開きログアウトを試みた。しかし、彼等の言っていた通り、目の前に「ERR」と表示されるだけで何も起こる様子がない。

動揺を隠しながら隣にいる星を見ると、星は不思議そうにエミルの顔を見上げて首を傾げている。

「……星ちゃん。ちよつといい?」

「えっ? どうしたんですか? 顔色があまり良くないですけど……」

「そう? ちよつと疲れちゃったのかもしれない……かな? それよ。コマンドを開いて、一番下にあるログアウトっていうところを押してみてくださいもらえるかしら」

「——ログアウトですか?」

星はコマンドを開くと左下のログアウトと表示されているところを押した。

すると、星の目の前にも「ERR」と表示されるだけで、自分が間違っているのかと思いつつ何度か押したが特に何も起こらない。謎の項目を何回か押した後、星は不思議そうに首を傾げた。

それもそのはずだ。今日がゲーム初日の星にとって、ログアウトがどういう意味なのかさえ彼女には理解できていなかったのだ。

「押しましたがERRって出ますよ?」

「そう。やっぱり……」

エミルは顎の下に手を当て、深刻な顔で考え始めて黙り込んでしまった。

それを見た星もタダ事ではない雰囲気を感じ取ったのか、あえて何があったのか聞き返そうとはせずに、ただただエミルを見つめていた。

そうこうしている間にも、時間は刻々と過ぎていき。気が付くと、

すでにリアル時間の夜10時半を回っていた。

さすがにこの時間になると、本能的に小学生の星はうとうとし始める。

「あの、エミルさん。私そろそろ寝ないといけないので、このゲームを止めたんですけど……」

「えっ!? あ、うん。そ、そうね……でも、もう少し待っててもらえるかな?」

「えっ? あ、はい……」

エミルは眠い目を擦る星の方を振り向きぎこちなく笑うと、再び深刻な顔で考え込んだ。

その時、2人に運営からのメッセージボックスにメールが届く。

星はそれを開ける方法を知らないなので、エミルがそのメッセージに目を通す。

その内容は……。

『本日より。今回のログアウトできない問題について、緊急の会見を開きます。皆様、近くの街の大型モニター前に集合して下さい。』

っというものだった。

各街には、広場の時計台に大きなモニターが備わっている。

普段はオリンピックの中継やワールドカップなど、運営によるスポーツ観戦イベントや年末のミレニアムイベントなどしか使われない。

それ以外では、企業の広告などが淡々と流れるつまらないものではない。

「さすがにログアウトできないのは重大な不具合だものね。運営も会見を開くしかないでしょう。とりあえず、モニター前に行きましょうか!」

「……は、はい?」

エミルはそう言って、全く状況を読み込めていない様子 of 星の手を引くと、街の中心にあるモニターが埋め込まれている時計台へと向かって歩き出した。

2人がしばらく街の中を歩いていると、道のあちらこちらで聞こえる「ログアウトできない」という悲痛な声が、星の耳に嫌というほど入ってくる。

「あの。さっきから、街のあちこちで言ってるログアウトっていったい……」

星は足を止めると、エミルの顔を不思議そうな顔で見げながら尋ねた。

その星の問いに、エミルは険しい表情で言いにくそうに口を開いた。

「えっと……ね。ゲームを起動するのをログインって言うんだけど、その反対にゲームを止める事をログアウトって言うの……」

「……えっ？ それじゃ、ログアウトできないって事は……」

「そうなの。星ちゃんももう分かってると思うけど、ゲームを止める事ができないって事なのよ……」

星はそれを聞いて、事の重大さをやっと理解できたのか瞳に涙を浮かべると、まるで捨てられた子猫のような瞳でエミルの顔を見上げる。

「だ、大丈夫！ さっき運営からのメールを見たら何か対策されるって書いてあったし。すぐに現実世界に戻れるから、泣かないで……ねっ？」

「……は、はい」

星は必死に涙を堪えると、不安そうな表情でエミルの腕を掴む。

だが、星が不安になるのも無理はない。ゲームを起動した初日に、こんな大事件に巻き込まれたのだ。

しかも周りには、自分よりも年上の人達が泣き喚いたり怒号を上げたりしている中で、不安にならない方がおかしい。

しかし、不思議と星は何とかなりそうな気もしていた。それは横にいるエミルの存在が大きかったのかもしれない。

今まで家では、母親もフルタイムで働き、帰りが遅くなることがほとんどで、学校では理不尽なアダムを付けられて罵られ、煙たがられる日々を送っていた。

大人は助けに入るところか『見て見ぬふりをする。』というのが普通で、そういうものだという認識が彼女の中で固まりつつあった。

しかし、この世界では1人ではない。例え、いつかはこの世界でも1人になるかもしれない……。

でも、今は隣にエミルという頼りになる大人がいる。それが今の彼女にとって、とても心強く感じていた。

星達がモニターのある時計台に着いた頃には、もう多くのプレイヤー達が集まっていて、運営からの放送を今か今かと待っていた。

2人は時計台から少し離れた場所に置かれた木製のベンチに腰を下ろし、その時がくるのをずっと待った。

「くそっ！ ログアウトしたら絶対に運営を訴えてやる！」

「もう。早く自分のベッドで寝たいのに……」

「あーあ、このゲームのせいで学校に行かなくて良くなると思って楽しみにしてたのに、もう終わりかよ……」

など周りからは様々な声が上がっている。

そんな時、時計台の鐘が鳴り響き11時を知らせる。

つと同時に、目の前の巨大モニターに【Freedom】と大きく映し出され、このゲームのPVが流れる。

それが終わると、画面が急に切り替わり黒マント姿の人物が写し出された。

その瞬間周りのプレイヤー達から「ふざけんじゃねえー」などと怒号が飛び交う。

だが、そんな声が上がるのも当然だ。その画面の人物の顔には白い犬？狼？らしき覆面を被っていたからだ。

「こんばんは、皆様。私達の厚意を気に入って頂けたかな？」

男の口から出たのは謝罪の言葉ではなく、人を馬鹿にするような『厚意』などという言葉だった。

もちろん。それを聞いていた周りの反応も激しくなるのは当たり前のことだ――。

「ふざけんじゃねえー!!」

「変な覆面取って謝罪しろ！ 謝罪!!」

「上の人間に代われよ！ 犬!!」

暴言が激しく飛び交う中、誰かがダンベルを勢い良く画面に向かって投げつけた。

真つ直ぐに飛んでいったダンベルは、画面の直ぐ下の時計台の外壁に突き刺さって止まる。

それが見えているのか見えていないのかは分からないが、モニターの覆面の男が言葉を返す。

「ほお。私の最高のもてなしはお気に召さないようだ。だが、おかしな話だ——君達はゲームという幻想の世界を思う存分堪能しているはずなのに。どうして、それに怒りという感情が生まれるのか、私には理解できない。まあ、分かりたくもないがね……君達はこのVR世界に染まり過ぎて現実とゲームを混同している節がある。それが原因で昨今では、ネットでの犯罪の横行、イジメや、殺人。全てゲームが悪いとは言わないが。しかし、ネットがそれらに深く関わってきているのは事実——君達のようにゲームに依存する脆く弱い存在は、もう、我々人類には必要ない存在なのだよ……」

その男の話を聞いて、周りは静まり返った。

それもそのはずだ。その男の言動は常軌を逸してるものだったからだ——その言葉はまさに、身勝手としか言いようのない理不尽なものだった。

困惑している者達を置き去りにするように、男が再び話し始める。

「それに君達が何を叫ぼうが、このゲームは今から、我々『シルバーウルフ』の管理下に置かれる。それは即ち、君達の命は我が手の中にあると言っても過言ではない。もし、私がここで即刻このゲームのデータを破壊すれば、今現在データとして存在する君達は完全に消える。つまり【Delete】だ——魂は肉体に宿って意味を成すが、もしここで魂を消してしまうという事は、それすなわち……君達の現実での死を意味するわけだ。そしてもう一つ。私達は重要な事実を君達に伝えなければならぬ。我々『シルバーウルフ』は今日、全世界にゲームとネット世界の排斥を要求する！」

広場に集まった皆が生唾を呑み込んだ。

モニターの向こうの彼の言葉の全てが無茶苦茶だった……しかも、男の話はあくまでも推測に過ぎない。

言っても『たかがゲームに魂を取り込まれる?』そんなことあるはずがないし、あつていいはずもない。だが、ここに居る誰もが分かっていながらも、それを否定することができなかった。

ログアウトできない今の状況からして、画面の中の男が全て嘘を言っているようには決して思えなかったからだ。

それは何者かが意図的にシステムを操作しているということ、それが彼が言うシルバーウルフという組織ならば納得が付くからに他ならない。

少しの沈黙の後、男はまた言葉を続ける。

「しかし、一方的にゲーム内に閉じ込めるだけで、脱出する手段が無いというのも不公平だろう。それは私の美学にも反している——なので、君達にチャンスを上げよう。このゲームのフィールドのどこかに存在する隠しダンジョン【現世界元の洞窟】がある。その最深部にある【現世の扉】を潜れば現実世界へと戻れる。しかし、参加プレイヤーのメンバーのみだ。せいぜい足掻いて見せてくれたまえ……それでは、健闘を祈る。ゲームの諸君……」

その言葉を最後にモニターは真っ黒になり、辺りは静まり返っていた。

状況が整理できないのか、その場に居たプレイヤーは何が起きたのか分からず、皆途方に暮れるしかなかった。

ログアウト不可2

衝撃の会見の後。星はただただ呆然と暗くなった画面を見つめていた。

心中にはもしかしたら、もう一度なにか新しい情報が流れるのではないか……という淡い期待があったのは事実だ――。

しかし、無常にも時は流れるだけで、あの会見以降モニターが再び映ることはなかった。

「もう夜中の2時よ……星ちゃん。これ以上ここに居ても仕方ないわ。行きましょう……ねっ?」

心配したエミルが肩に手を置くと、星の頬を涙が止めどなく流れ落ちた。

「――うっ……でも……ひぐっ……また……なにか、映るかも……しれませんし……」

おそらく、星はもう二度と母親には会えないかもしれないという行き場のない思いが、涙という形になって溢れているのだろう。

星は今更ながらに、自分の軽率な行動を悔いていた。
今日、学校を休まなければ……。

あの時、街でこのブレスレットを貰わなければ……。
好奇心で、このゲームを起動さえしなければ……。

母親と喧嘩をしていなければ……。
そんなすでに意味のない後悔だけが脳裏を過る。

もう悔いても仕方ない――そんなことは分かっている、考えてしまうのが人の悪いところかもしれない。

後悔と自責の念から、自己嫌悪に陥っている星。
「星ちゃん。気持ち分かるけど……とりあえず状況を整理しないと

いけないし。一度帰りましょう?」

エミルが声を掛けると、星は我に返った様に潤んだ瞳で彼女を見上げた。

「――ぐすっ……でも、どこへ……?」

「そうねえ。星ちゃんはこっちに来たばかりだから、マイハウスに

も生活に必要な物。何もないだろうし……よし！ 私の家へいらつしやい。少なくとも生活するには困らないわ！」

すすり泣いている星の手を握ると、エミルは自分の家のある方向へと歩き始めた。

夜になってライトアップされ、昼とは異なり綺羅びやかになった街の繁華街をしばらく2人で歩いていると、星はある重要なことに気が付く。

「エミルさんの家って、私の家と真逆の方向なんですね……」

だが、その質問も最もだ。この世界に来た時に用意された星の家の近くには、他にも多くの家が立ち並んでいた。

この世界では限られた空間を有効に利用する為、接続した時に取得するマイホームを複数プレイヤーが使用できる様になっている。

もちろん。それでは他のプレイヤーが家に自由に出入りしてしまうことになってしまう。

だからこそ、ここでいう他のプレイヤーが利用するのは家ではなく家が立っている番地の方だ——簡単にいうと、立体駐車場をイメージしてもらえれば分かりやすいだろう。プレイヤー全員に個々に設定されているシリアルナンバーを検知して、そのプレイヤーのマイハウスを呼び起こすというシステムだ。

そのシステムがあるからこそ、プレイヤーがゲームを始めたと同時にマイハウスを与えることができる。なら、普通に考えてエミルの家もその一角にあると考える方が自然だろう。

しかし、今は明らかに街の出口に向かって歩いているように感じる。

その質問に答えるようにエミルが口を開いた。

「いや、なんていうか……私の家は特別な場所にあるからね。でも、星ちゃんみたいなファンタジー好きな子はきつと気に入ると思うわよ？」

嬉しそうにそう話す彼女の顔を見上げ、星は小首を傾げた。

だが、彼女の『ファンタジーが好きな子は』という言葉の意味が、星にはいまいちピンとこない。

しかし、にこにここと微笑んでいるエミルを見てみると、だんだん自分まで楽しい気分になってくるから不思議だ。

「良かった。テレポートは無事みたいね」

「テレポート？」

星の目の前には、魔法陣の書いてある祭壇のような建造物が建っていた。

2人がその上に乗ると魔法陣は青く光輝き出し、その光りが一気に空へと向かって立ち上がる。

星はその眩い光りに驚いて目を閉じる——次に目を開いた時には、2人は森の中の祭壇の上に立っていた。

「……………は？」

辺りをキョロキョロと見渡したが、漆黒の闇と森の木々に阻まれて遠くまでは見ることができない。

エミルは辺りを興味津々で見ている星を尻目に、すたすたと歩き始めた。

(はあく。また歩くのか……)

星は心の中で愚痴をこぼしながらも、エミルの後を追って歩く。

森の中をただひたすら歩き続けていると、星は疲れからか強い睡魔に襲われる。

それもそのはずだ。この頃には現実時間で深夜3時を回っていた。いつもの星ならとつくに夢の中に落ちている時間だ——。

しかし、現実世界に戻れないこの状況では、そう贅沢も言ってもらえるわけもない。

星はどこどころ飛びそうな意識の中、ふらふらと体を揺らしながらも懸命に歩みを進めた。すると、ふと前を歩いていたエミルが足を止めて徐に振り返り。

「——星ちゃん。もう眠いんでしょ？ ごめんなさいね。もう少しだから……」

エミルの申し訳そうな表情からみて、彼女はだいぶ前から星の様子に気が付いていたのだろう。

「あっ！ ちょっと待っててね」

何かを思い出した様に彼女はコマンドを操作しながら、アイテム欄にある何かを探し始める。

エミルが「あつ、あった!」と嬉しそうな声を上げたかと思うと、今度はエミルの目の前に古い巻物の様な物が現れた。

星は眠い目を擦りながら、不思議そうにエミルの手に握られたその古びた巻物を見つめている。

「ちよつと危ないから離れててね?」

「は、はい……」

エミルはそういうと、地面にその巻物を開いて置きその場を離れた。

「さあ、いらつしゃい。デザートドラゴン!」

エミルがそう叫ぶと、巻物を巻いていた紐の先に付いていた笛を吹いた。

すると、巻物から煙がもくもくと立ち昇り。次の瞬間、1匹の地竜が2人の目の前に現れた。

その体は赤く背中にはごつごつとした角が4本生えていて、赤く分厚い表皮はとても硬く分厚い鉄版の様だ。

「星ちゃん。この子に乗って移動しましょう。見た目はあれだけど、乗り心地は意外といいわよ?」

「えっ?。これに乗るんですか?」

星は不思議そうに口から白い息を吐く赤い竜を見た。強がってはいるものの、その鋭い瞳をしたドラゴンに星の足は小刻みに震えている。

エミルは「ええ、そうよ」と言うと、星の体を持ち上げ地竜の背に乗せた。星はおっかなびっくりしながらも、覚束ない足取りで地竜の背中をよじ登る。

その地竜には下からは見えなかったが背中中央には少し窪みがあり、そこに白いもこもこのクッションが置かれていた。

おそらく、硬い表皮の上で乗り心地を良くする為にエミルが置いたものなのだろう。

「どう?。意外といい感じでしょ?」

「えっ？ は、はい」

エミルはまだ少し体を強張らせている星の隣に座ると、緊張を解そうとしてくれたのかにつこりと微笑む。

「さあ、レッツゴー!!」

手綱を持ったエミルがバシッ!と勢い良く手綱をしならせると、地竜は猛スピードで走り出した。

それからしばらく地竜の背中に揺られていると、星はまた何とも言えない不安に襲われた。

「あ、あの……これから、どうなるんでしょう……?」

星はその不安を率直にエミルにぶつけてみる。

その質問に、難しい顔で唸るように考え込むエミル。

「——うくん。私にも分からないけど、とりあえず。あの覆面男の言っていた現世の扉っていうのを探しにいかないのかな? あいつの話の全て鵜呑みにするわけじゃないけど……でも、このまま閉じ込められてるのに、何もしないわけにもいかないしね〜」

「そうですね……なら、私はお留守番……ですね」

それを聞いた星は少し残念そうに俯き加減に小さく呟く。

だが、それも仕方ないと言えるだろう。エミルは最高のLv100。星とのレベル差は99——Lv1の星と一緒にいけないということは分かりきっていた。そしてあの覆面の男の話が本当に事実なら、この世界での死は現実世界での死にも繋がる。

星としてもせっかく仲良くなったエミルと本当は一緒に行きたい。だが、HP15の星がエミルに付いていけばすぐに敵にやられてしまうだろう。足手まといになるのは、火を見るより明らかだった……。

「星ちゃん……」

唇を噛み締め、悲しそうな顔で俯いている星に向かってエミルが優しく話し掛けた。

「星ちゃんは、早く帰りたくないの?」

「帰りたいです。でも、あの人の話だと、帰れるのは同じパーティーの人だけで、私は邪魔になるから……仕方ないですよね……」

それを聞いて、エミルは呆れたように大きなため息をついた。

「はあく。星ちゃんってさ……今までわがままとか言った事ないでしょ?」

「……えっ?」

エミルのその真に迫る発言に、星は困惑しながらも少し考え込んだ。

確かに今までの人生の中で、わがままといえるわがままを言った記憶がない。それどころか、いつも人の顔色だけを窺って生きてきた気もする。だが、星にはそれが日常的になり過ぎて、しない方が不自然に感じるほどだ――。

星はエミルのその言葉に静かに頷く。

「……はい。その通りかもしれません……」

その返答を聞いて、エミルは「やっぱりね」と再び大きなため息をつく。

隣に座っている星の方を向いたエミルが告げた。

「星ちゃんがまだ幼いのは、身長を見たら一目で分かるわ。この世界ではシステム上。身長と性別は変更できないからね。ゲームと現実の肉体に違いがあると、ゲーム内ではよくても、現実での日常生活に支障が出る可能性があるからね……だから、街で泣いていたあなたを見かけた時に声を掛けたのよ?」

「なるほど……」

相槌を打つ星の顔をじっと見つめ、エミルが落ち着いた声音で告げる。

「でも、あなたは私が思っていたよりも大人びてるから、私はそれが心配なのよ……」

星はその言葉に不思議そうな顔で「どうしてですか?」と首を傾げた。

神妙な面持ちで隣りに座っている星の肩を掴むと、エミルの青い瞳が真っ直ぐに星の紫色の瞳を見つめた。そのエミルの瞳はどこか悲しそうに見えた。

「――さっきも言ったけど、ゲームをしてる人の中には悪い人も多い。それに、ここではレベルが全てなの。装備もそれなりには重要だけ

ど、それは、個人の技量でどうにでもできる——この世界では、あなたみたいな子供のプレイヤーは珍しいから、興味本位で近付いてくる人間もいるだろうし。あなたは善悪関係なく、そういう人にもきちんと接してしまうでしょ？」

「いえ、それは……」

「……ないと言えるの？」

言葉を遮られ、エミルにそう言われた星は、すぐに否定しようとした口を噤んだ。

それは本心では、エミルの言っていることが正しいと感じていたからに他ならなかった。

もしも、自分に悪意を持って近付いてくる人間がいるとして、星はそれを拒むことはできないだろう。

現に、この世界にも見知らぬ男性に渡されたブレスレット型のハードを使用してきたのだから。

言い返す言葉もなく。無言のまま口籠る星に、エミルは言葉を続けた。

「別に画面の中だけの世界ならいいの……でも、このゲームはゲーム世界にも体があるでしょ？　って事は、誘拐される事だってある。もし、そこで体を縛られたら？」

「それはゲームを止めれば……」

「まあ、普通はそうね。でも、コマンド入力是指を使わないとできないから武器も取り出せない。そして今はログアウトできないのよ？」

そんな状態でどうやって逃げるって言うの？」

「ううう……」

星はエミルに言い負かされ、ただただ俯いたまま口を閉ざすしかなかった。

だが、エミルの言うことは最もだ。この世界には警察もいなければ親もない。

助けが来ないこの世界で、もしも星が誘拐されればひとたまりもないだろう。

「とにかく。もうログアウトも出来ないんだから、星ちゃんが一緒に

行動できるレベルになるまでは、私が付きつきりで指導してあげる。でも、ダンジョン探しもあるからレベルも一気に上げるわよ?」

「はい……」

エミルにそう言われ星は表情を曇らせる。

それを見ていたエミルが小さく息を漏らし、星に微笑む。

「大丈夫よ。言うほど難しいことはしないから。それにこの世界にいる間は私が守ってあげるから、星ちゃんはなにも心配なんてすることはないの。私の事は本当の姉だと思って甘えてくれていいからね?」

「でも……それじゃ、エミルさんに迷惑がかかりますし……」

「何言ってるの。今の状態でも十分迷惑かけてるじゃない」

エミルに笑いながら言われ、星は「ううう……」と唸りながら、申し訳なさそうに俯く。

「私は戦い方を教えるだけ、後は星ちゃんが思ったように行動すればいい。もし1人でできないことがあったら私に遠慮しないで言いなさいね?」

「はい!」

星はにつこりと微笑んで、嬉しそうにこくんと深く頷いた。

ログアウト不可3

しばらく土煙を上げながら森の中を進む地竜の背に揺られていると、目の前に大きな西洋風の城が見えてきた。

白い外観に周りをいくつもの塔が立ち、それを繋ぐように石造りの外壁が城全体を覆うように囲んでいる。

近くには大きな湖があり、いかにもファンタジー世界で出てきそうな、そんな幻想的な風貌をしていた。

それを見つけた瞬間。星は目をキラキラ輝かせながら、その城を食い入るよう見つめ。

「エミルさん。あれってお城ですよ？ 行ってみましょう！」

星は城を見て眠気も吹き飛んだのか、興奮気味にぶんぶんと腕を下に動かしている。

今までにないほどの嬉しそうな星の反応に、エミルも思わず笑みをこぼす。

「ふふっ。そんなに急がなくても……それに、あのお城が私の家だから、慌てなくても大丈夫よ？」

「……………」

エミルの口から飛び出した突拍子もない言葉に、星の頭の中は一瞬真っ白になった。

いくらゲームの世界とはいえ、城を家として持っている人間なんているはずがない。『きつとこれもエミルの冗談なのだろう……』そう思っただけで疑わなかった星の考えは、すぐに崩壊することになる。

星達を乗せた地竜が城の城門の前に行くと、主人の帰りを迎える様に鉄でできた大きな門が音を立てて開く。

その光景を見た星は呆気にとられ、まるで魂が抜かれたかのようにその場に固まって動かない。

隣で微動だにしない星の肩を、心配したエミルが軽く揺らす。

「ちよつと、星ちゃん大丈夫？」

「——えっ？ あ、はい。それで……エミルさんはお姫様なんですか？」

星がそう尋ねるとエミルは「私がお姫様なわけないでしょ」ところえ切れずに息を吐き出し大きな笑い声を上げた。

そこまで笑われると思っていなかった星は、なんだか急に恥ずかしくなり。顔を真っ赤にし染めて両手で顔を隠した。

エミルは顔を真っ赤に染めている星に向かって徐ろに口を開く。

「これはずっと前に、このゲームの大会で一位になった景品として貰ったのよ。でもねえ……大きいだけで、特にいいことないわよ？ お城って」

「は、はあ……」

苦笑いを浮かべるエミルの顔を、星は唾然とした表情で見つめた。

まあ、無理もない。目の前の少女がまさか城を所持していたなんて事実を知って困惑しない者などいない。

大きく左右に開いた門を潜り、城の中に入った星は驚きのあまり声を上げる。

「うわあ〜」

その廊下はとてつもなく長く、星の通っている学校の廊下が2つ繋がったくらいの長さがあった。

壁際には窓がいくつものにもあり、圧迫感のない開放的な雰囲気を作り出している。

「裝飾が施された壁が廊下高級そうなカーペットが敷かれ、そこを豪華なシャンデリアが廊下全体を柔らかい光りで照らしている。」

星は我慢しきれずに思わず走り出す。

「あつー！ ちょっと、転んだりしたら危ないわよっ！」

エミルが心配して声を上げた直後、星は廊下に敷かれたカーペットに足を取られ、星の体が前に大きく傾く。

数秒間、星の体が宙を舞ったかと思うと――。

「――ふにゅッ!!」

星は顔面から勢い良く転ぶと、両手を投げ出した状態でその場に倒れ込んだままピクリとも動かない。

それを見ていたエミルが慌てて星のところへ駆け寄ると、急いで星の体を抱き起こした。

「もう。言ってるそばから……大丈夫？」

「ううう……痛いです……」

顔を上げた星は、手で鼻を抑えながら涙目になっている。

それを見たエミルが、大きくため息を漏らし「だから言ったのに」と少し呆れたように呟く。

「——ゲームの中の体は現実の体より軽い感じで、少し勝手が違うんだから……」

今エミルが言ったように、ゲーム内の体は現実世界よりも筋肉補正が付いている分。軽快に動けるのだが、慣れていないとその違いに星のように転んでしまうこともある。

大広間にある階段を上がると、また長い廊下をしばらく歩き、ある扉の前でエミルの足が止まる。

「着いたわ。ここが私の部屋よ」

エミルが扉を開けると、そこには2LDKほどの大きさの部屋に、ピンクと白を貴重とした室内になっていて、部屋のあちこちに可愛い小物が置かれている。

そこにはキッチンやお風呂まであり、ちよつとしたマンションの一室ようになっていて、ここだけで十分に生活ができそうな造りだった。

幻想的な城の風景とミスマッチなその空間に、星は苦笑いを浮かべつつエミルに尋ねた。

「あの、エミルさん？　もしかして。この部屋しか使ってないとか……？」

エミルは顔を真っ赤にしながら、少し恥ずかしそうに言葉を返した。

「——しようがないでしょ。リアルじゃ、このくらいの部屋が一番居心地がいいのよ……」

「そ、そうなんです……」

星も相槌を打ったものの、苦笑いをしている。

だが、やはりこれを見るとやるせない気持ちになってしまう。

(せっかく広いお城なのに。少しもつたないなあ……)

そう心の中で呟くと、星は窓の方へと向かった。
しかし、部屋の窓から見える景色を見て星は思わず声を上げる。

「うわあ〜」

その窓からは、さつきまでいたテレポートできる祭壇から、遠く
の山々まで全てが一望できた。

更に夜空には星々がキラキラと輝きそれが地上の風景と相まって、
まるでファンタジー世界の幻想的な雰囲気醸し出している。

少し興奮気味に窓の外を眺めていた星の頬に、突如として温かい何
かが触れた。

「——ひゃっ！ なっ、なんですかっ!？」

星が驚いて変な声を上げ振り返ると、そこには両手にカップを持っ
たエミルが、笑みを浮かべながら立っていた。

「ほら。さつきまで外にいたから、体冷えてるでしょ？ ホットミル
ク飲む？」

「……あつ、いただきます」

星は両手でエミルの持つてきたカップを受け取ると、息を吹きかけ
てゆっくりと口に運んだ。

そのコップの中の白い液体はしっかりとミルクの味がする。だが、
湯気がかもくもくと上がっている割にはそれほど熱くはない。

そこでふと、ある疑問が彼女の頭の中に浮かんだ——。

「あの、エミルさん。これってゲームですよね？」

「うん。そうよ」

「料理って作れるんですか？」

不思議そうに首を傾げながら、自分の手の中にあるカップを見つめ
ている。すると、エミルは得意げに人差し指を立てて言葉を続けた。

「もちろん！ 道具と具材があれば、何でも作れるわよ？ 見ててね」

自信満々に言い放ったエミルがキッチンへと向う。

星はキッチンでガチャガチャと音を立て、忙しなく動いているエミ
ルの姿を興味深く見守っていた。

準備を終えたのか、キッチンに立つエミルがオーブンの前でコマン
ドを操作し始めた。

(エミルさんは料理が得意なんだろうなあ)

そう思いながら、再びコップに口を付けてホットミルクを飲み始めようとしたその時……。

——ドツカーン!!

突如としてエミルが使っていたオーブンが大爆発し、部屋の中が黒い煙に包まれた。

星がモクモクと黒い煙を上げているキッチンの方を見つめ、不安そうな表情をしていると、薄れる煙の中に人影が……。

「ゴホツゴホツ……」

「もう、どうしてクッキー焼こうとして爆発するのよ! きつとこのオーブンが悪いのね!」

煙の中からエミルが激昂しながら姿を表す。しかし、彼女の体には火傷の痕もなく、被害は服が少し焦げているくらいだった。

エミルのレベルはこの世界の上限の100。それが爆発でも無傷という驚異的な形で現れているのだろう。

「……………」

椅子に座っていた星は目の前に真っ黒く焦げたクッキーを置かれ、星はそれを見つめ、どうしたらいいのか分からずに眉をひそめてエミルの顔を見上げた。

困った様子で自分を見上げている星に、エミルは苦笑いしながら頭を掻いて誤魔化する。

「……さすがにこれは食べれないわよね」

「——えっ? あ、そうですね……」

星はそう言っただけで苦笑いしていると、急に眠気が襲ってきて無意識に大きなあくびが出た。

大きく開けた口を両手で覆うと、少し恥ずかしそうに「すみません」と小声で星が謝る。

そんな星にエミルは微笑みを浮かべ、首を横に振る。そして、思い出した様に言った。

「そういえば、星ちゃん。もう眠いでしょ? 早く寝た方がいいわね」

エミルはそう言って指で窓を差した。

星が眠そうに擦った目を窓に向けると、もう遠くの方から朝日が差し始めている。

だが、見ただけで星は一向に席を立とうとしない。

見兼ねたエミルがそんな星の体を軽々と持ち上げると、エミルは隣の部屋のベッドに向かって歩き出した。

「ちよ、ちよつと。エミルさん!？」

星はその突然の行動に驚き、下ろして欲しいと言わんばかりに身をよじっている。

エミルは落ちそうになる星の体を抱え直すと。

「ん？ だって、もう自分の足でベッドまでいくの大変でしょ？」

自分の腕の中でもがいている星に視線を落としたエミルが、首を傾げながら尋ねた。

星は少し口を尖らせながら反論する。

「そ、そんなことないですけど……」

だが、正直。もう椅子の上で夢の中に落ちそうだったので、内心は少しほっとしている自分もいた。

エミルに抱えられた星は、隣の部屋のベッドの上に腰を下ろした。

「ふかふかだあ……」

星はうつ伏せになり小さな声で呟くと、思わず布団に顔を埋める。

すると、急に安堵感からか星の瞼は重くなりそのまま意識を失ってしまった。

そんな星を見てエミルが「ふふっ」と笑みを溢す。

「もう、結構前から限界だったくせに……無理しちゃって……おやすみなさい」

エミルはそう耳元でささやくと、星の黒くて長い髪を撫でながら優しく微笑んだ。

ダークブレット

翌日。星が目を覚ますと、同じベッドで寝ているはずのエミルの姿はどこにもなかった。

さすがに『夢でも見ていたのではないか……』そんな不安が頭を過り。彼女の姿を探しにリビングまでくると、テーブルの上に一枚の手紙が置いてあった。

それを手にとった星が声を出して手紙を読む。

『昔の友だちに会ってきました。本当は星ちゃんも連れて行こうと思っただけ、あまりに気持ち良さそうに寝ていたので、私一人で行ってきます。夕方までには帰れると思うので、それまでテーブルの上に食べ物と置いてあるお金でお腹が空いたら何か食べてね。』

調理方法

一度食材をコマンドのアイテムに入れてそれから、オーブンを開け。食材をその中にドロップすると分量調整っていうのが出るから、それで分量を調整したらOK押しして完了です。』

手紙を読み終わった星は、テーブルの上に置かれた茶色い小袋と食料に目を向けた。

「とりあえず。作ってみようかな?」

星は決意に満ちた瞳で、目の前に置いてある食材の中から食パンとチーズを手を取った。

(トーストくらいなら作れるかな……?)

そう思い。手紙に書いてある通りにトーストとチーズをアイテム内に入れると、オーブンの前に向かった。

星はオーブンを開け中にトーストとチーズを移動させるとコマンドを開く。

その時、星の指の動きがピタツと止まった。星の脳裏には、昨日の爆発の光景が鮮明に浮かんでいた。

(……ううん。大丈夫! きつとできる!)

そう自分に言い聞かせ、首を左右に振ると指を動かす。トーストとチーズの分量を調整し、震える指でOKを押した。すると、アイテム

欄から素材アイテムが消え、オーブンが赤く発熱し始める。

しばらく経ってオーブンが止まると、中からチーズとトーストの焦げる香ばしい香りが漂ってきた。

その匂いを嗅いだ瞬間、ぐうぐうと星のお腹の虫が鳴った。

お腹を押さえて頬を赤らめさせた星が、オーブンの小窓から中を覗き込む。

「——うまくできた……のかな？」

トーストの上にとろけたチーズが食欲を掻き立てる。

注意してオーブンの中からトーストを出した星は皿の上に乗せて、テーブルに運ぶと椅子に座って丁寧に両手を合わせた。

「いただきます」

体の前で手を合わせ小さい声でそういうと、星はチーズの乗ったトーストにぱくつと噛み付いた。

余程美味しかったのか、無言のまま黙々と食べ進め、あつという間に食べ終えてしまった。

食事を終え、食器を洗って元あつた場所へと戻す。その後、椅子に座ると星は大きなため息をついた。

「そういうえば、この感じ……普段通りだなあ……」

小さくそう呟いた星は、少し寂しそうに窓の外を見た。

窓から見える外の風景は現実とは明らかに違う。

空には雲に混じってドラゴンが飛び回り、地上には地球上にはいなような大きな生き物が闊歩している。しかし、星の心中は寂しいという気持ちは、いつもと変わらない。

そのちぐはぐした感覚だけが、星の寂しさを増幅させ、その心を困惑させる。

星はその心の痛みから逃れるかのように、勢い良く部屋から飛び出した。城の外に出ると程よい晴れ間が星の体を照らし、そよ風が頬を優しく撫でる。

だが、天気すらもシステムでコントロールされている為、嵐になったり急激な天候の変化などは特定されている場所では起こらない。

まあ、そんなことなど初心者の星は知る由もなく。気持ち良さそう

に伸びをすると、大きく深呼吸をする。

(——きつとエミルさんはこの世界から出る方法を探す為に行ったはず……なら私も役に立たなきや!)

その思いを胸に、一目散に街に向かって走り始めた。

しかし、その場の勢いだけで飛び出した星には、街までの道のりはあまりにも長く、すぐに弱音を吐き始める。

「——子供の私が行っても。何か情報を集められるのかな……」

ふと星の頭に不安が通り、思わず星が歩みを止めた。

自分の足元を見つめ、不安を振り解く様に首を横に振ると、星は再び歩き始める。

* * *

その頃。エミル湖近くのベンチに座っていた。早春の様な柔らかい風と、草の匂いが鼻孔を刺激する。

エミルは木製のベンチに腰を下ろし、真っ直ぐに太陽の光りを反射させて煌めく水面を見つめていた。その長く透き通る様な青い髪がよそ風に合わせて左右に流れる姿は、まるで水を司る女神の様にも見えるほどだ——。

すると、エミルが、後ろからの声に振り返る。

「久しぶりだな! エミル!」

そこには、身の丈2mはあろうかと思われる金色の短髪に青い瞳の男が。近くの木に凭れ掛かったまま、口には何故か葉の付いた草を啜え、彼はニヤリと微笑んだ。

腰には刀を差し、全身に纏った東洋の甲冑を身に纏ったその風貌から、日本の侍を連想させる。

「ええ、久しぶりね……ガイア——いや、デイビッド」

「おう……って! おい、どうして言い直した……俺はラストサムライ。ガイアだ! それに実名で呼ぶのはやめてくれ、気分が壊れるじゃないか!」

デイビッドは顔を真っ赤にしながら怒鳴っている。

だが、それと比べてエミルの反応は冷ややかなものだった。目を細め、軽蔑するような目で彼を見つめている。

このフリーダムには言語統一機能があり。これによって自動的に普段会話している言語に変換される為、全世界のプレイヤーとの会話が可能なのだ。

目の前にいる男の容姿とデイビッドという名前から分かるように、日本人ではないことが推測できる。

エミルはそんな彼の話を聞き流すと、何事もなかったかのように本題に入った。

「……それより、重要な話ってなに？」

その瞬間、エミルの瞳が急に鋭いものへと変わる。

場の空気が変わったのを察したのか、デイビッドも神妙な面持ちで徐ろに口を開く。

「実は、いつからか分からないが、PVPの承認機能がスキップされているようなのだ。その事は知ってたか？」

「それはどういうこと?! それじゃ……」

話を聞いた瞬間、エミルの顔から血の気が引いていく。その表情から明らかに彼女が動揺していることが窺い知れた。

それもそのはずだ。今までPVPは申し込まれても、それを拒むことができたのだ。だからこそ、これまでRMT狙いのブラックギルドは、それほどの脅威にはならなかったのだが……。

ブラックギルドとはRMT——リアルマネートレードの為に相手の武器を奪い。それを現実世界で転売する集団のことをいう。

それは現実世界のマフィア、ヤクザ、テロリストなどの収入源としても使われていると言われるほど、その存在が如何わしいものとされていた。

噂が真実かは分からないものの。デイビッドの情報が正しいとすると、運営の介入がない今の状況では、多大な被害が出ることは間違いないだろう。言うならば、ブラックギルド以外にも火事場泥棒をするプレイヤーが増えるということだ——。

「それで、そのPVPの不具合は確認できたの？」

「ああ、それは確認済みさ、もし信用できないなら、俺とお前で試しにやってみるか？」

彼は微笑むと、左手を刀の柄に乗せ親指を立てている。その申し出に、エミルは少し躊躇した表情をみせた。

デイビッドはそれを察して柄から手を放すと、遠い目をして湖の方を向く。

「だが、これは俺達もギルドの再結成を考えた方がいいかもしれないな。このまま、外の人間の助けを待っていても始まらない。そうは思わないか？」

「そ、そうね……」

「ん？ どうした？ あまり気が進まないようだが」

急に表情を曇らせたエミルに、心配そうに声を掛けるデイビッド。

「ガイ……デイビッド。ギルドを再結成するのはいいけど、それはやっぱり……」

不安そうに言ったエミルに対して、デイビッドはニヤリと不敵な笑みを浮かべ「もちろん。現実世界に戻る為に決まってるじゃないか！」と胸を張って答えた。

それを聞いたエミルは「そうよね……」と呟いて、複雑そうな表情を浮かべている。

その時のエミルの頭の中には、城に一人で残してきた星の姿が浮かんでいた

(——あの子の事もあるのに、今ギルドなんて……そういうえば、星ちゃんは大丈夫かしら……剣も結構いいものだから、家で大人しくしてればいいんだけど……)

エミルはそんなことを考え、城がある方向の空を見上げた。

そんなエミルを見て、デイビッドが急に腰に差している刀を引き抜いた。

「どうだ？ エミル。久しぶりに手合わせ願えないか？ 俺も体が鈍ってて、できれば頼みたい。それにお前も少したるんでいるようだしな……」

「——たるんでる？ ふふっ。ええ、いいわよ。相手になってあげる

！でも、私の剣に勝てるかしら？」

エミルはデイビッドの『たるんでる』という言葉に反応したらしく。さつきまでの否定的な様子とは異なり、ギロリと彼を鋭い瞳で睨みつけと剣の柄に手をかけた。

* * *

始まりの街の入り口の門を潜った星は、膝に手を突いてその場に立ち尽くしている。

「はあ……はあ……や、やっと着いた〜」

星は息を切らせながらも、無事街に辿り着くことができた。

道中何度も休憩し、敵が現れたわけではないのだが。やはり星の歩幅だと、大人の約2倍は掛かってしまうのは仕方がないと言えるだろう。

街は昨日の夜ほど混乱はしていないものの、人気が少ない為か街に活気がない。とりあえず、星は近くにいたNPCの武器屋の店主に話し掛けることにした。

NPC——NPCとはゲーム内に、元から存在しているノンプレイヤーキャラクターの略だ。基本的には設定された単語以外は喋らない。

「あの……この世界の事を、教えてくれませんか！」

人見知りの星が、決意に満ちた眼差しで叫んだのだが。

「やあ、いらっしやい。どんな武器をお探しかな？」

返ってきた言葉は、とてもRPGのNPCにありがちな返答だった。

だが、ゲーム経験の薄い星はそうとは気付かずもう一度、武器屋のオジサンに会話を試みる。

「えっ？ あ、武器じゃなくてこの世界のことを……」

「やあ、いらっしやい。どんな武器をお探しかな？」

武器屋の店主からは先程と全く同じ返答が返ってきて、星は不思議そうに首を傾げた。

そんなことを数回重ね。星はNPCとの接触を諦め、武器屋の店主から視線を外しその場を離れる。

とりあえず、この行動の結果。NPCと接触して情報を仕入れようとしても無駄。ということは分かった……。

次に目の前からたまたま歩いてきたエルフの女性に話し掛けた。

「あの、この世界から抜ける方法を知りませんか？」

そう尋ねると、その女性は烈火の如く怒り出し声を荒げた。

「——そんなの私が聞きたいわよ!!」

「ひっ！ は、はい。そうですね……ご、ごめんなさい」

星が頭を下げると、女性はそっぽを向いてそのまま走り去ってしまった。

先程の女性プレイヤーの激昂ぶりに、完全に勢いを失ってしまった星はとぼとぼと広場に向かって歩き出す。

時計台のモニターの前で大きなため息をついた星は、どうしたらいいのかわからず、一人途方に暮れていた。

「はあく。どうしよう。帰り方を聞きたくても人がいないし……怒られるし……」

そんな時、目の前に1人のエルフの男が現れ、俯く星の顔を覗き込んでにっこりと微笑んできた。

「どうしたの？ お嬢ちゃん。こんな場所に1人で」

「……えっ？ あなたは誰ですか？」

背後から男性のプレイヤーが、星に向かって突然話し掛けてくる。立ち上がって男性の方を振り向いて星は小首を傾げる。

「いや、お嬢ちゃんもこのゲームの止め方が分からなくて困ってるんでしょ？ 僕も困っててね。だから、君に声をかけたんだ……ほら。今、ここらへん誰もいないでしょ？」

「ああ……」

星は男のその言葉で辺りを見渡してから小さく頷いた。

昨日の事件以降、多くのプレイヤーが失意の底にあった。

街も昨日までの賑わいをなくし、人通りはまばらになっていたのは事実だが、たしかに星のいる広場には星を除いて周りには3人しかい

ない。

男はにこつと微笑むと、星の腰に差している剣を見る。

「随分といい剣だけど、それに比べて防具の方は随分とお粗末だね……そんな装備で大丈夫？」

「——何がですか？」

星は腰に差している剣を隠すように両手で覆うと、目を細めて男を見た。

「そうだ！　ここで出会えたのも何かの縁だ。君に僕から防具をプレゼントしよう。さあ行こう！」

「えっ!?!　ちよつと……」

男は強引に星の手を引くと、防具屋がある方向へ足早で歩き出した。

ダークブレット2

大きな盾と鎧が店の看板に掲げられている防具屋に入るなり、男は店内に並べられている色々な物を星に勧めてきた。しかし、星はそれの全てに首を横に振って必死に拒んだ。

始めて会った人から何かを貰ったりするのは学校で禁止されているし、自分でも良くないことだと思っていたのもあるが、それ以上に彼の笑顔がどうも胡散臭く感じたのが要因として大きかったかもしれない。

「やっぱり私。そういう物は受け取れません。すみません。し、失礼します！」

「あつ！ ちょっと待つてよ！」

星が男に丁寧にお辞儀して、勢い良く防具屋の扉に向かって走り出す。だが、男の方も簡単には引き下がるつもりもないらしい。

急に走り出した星の耳に男の声が飛び込んできた。

「このゲームから出るための唯一の方法を知りたくないかい？」

彼のその言葉に反応して、星の足がピタッと止まる。

星にとって、いや……今は誰にとってもその情報は有益なものだろう。誰も、ゲームの世界で一生暮らしたいと感じる者はいない。

男はにこつこりと微笑みながら歩み寄り、星の耳元でささやくように言った。

「……君はこのゲームから出る方法を探しているんだろう？ 実は、僕は唯一ここからログアウトできるんだ……」

その場に棒立ちになった星は驚き目を丸くすると、男の顔を見つめた。

まさか探していた答えが、こんなに早く見つかるなんて誰が予想していただろう――。

嬉しさのあまり、星は男の大きな手を両手で挟み込むようにして握る。

星は男に言われるがままに、街の端に位置する寂れた建物が立ち並ぶ場所へと連れて来られた。彼に連れて来られた場所は人通りも全

くなくNPCの姿もなかった。

街の繁華街から離れたこんな辺境な場所に見知らぬ男に連れて来られ、少し不安になったのか星は前を歩く男に声を掛ける。

「あの……本当にこんな所に元に戻る装置があるんですか？」

だが、不安そうに眉をひそめる星に、男はにつこりと微笑み返すだけで一向に口を開こうとしない。

明らかに様子のおかしい男に不信感を抱いた星が、ゆっくりと後退りをして逃げようと全力で後ろに向かって走ろうとしたその時、星の踏み出した右足の太ももに鋭い痛みが走った。

「——きゃあああああアツ!!」

叫び声を上げた星は何が起きたのかも分からず。急に襲ってきた激痛に耐えかねて、その場に倒れ込んだ。

まるで足を切り落とされたかのような、その激しい痛みを意識が遠退いていく。

『いったい何が起きたのだろう……』そう思って、自分の右足を見た星はあまりのことに言葉を失った。

「な……に……これ……」

それもそのはずだ。その視線の先には、一本の矢が自分の右足の太股部分を貫いた状態で刺さっていたのだ。

この矢がどこから飛んできたのかは分からないが、前を歩いていた男ではないことだけは、今の混乱している頭でも分かる。

(助けを呼ばないと……)

そう考えた星は、歩みを止め無言で星に背中を向けて立ち尽くしている男に向かって助けを求めた。

「……あの……たすけ……て……」

今出せる最大限の声を出したつもりだった。しかしその声は弱々しく、とても声になっていたかは分からない。

そんな星に男が振り向き、ニヤリと不気味な笑みを浮かべる。

すると、近くの木の上から茶色いローブを身を隠し、マスクをかけたエルフの男が飛び降りてきた。

「おい。剣に当たったらどうすんだよ！」

「俺を誰だと思ってる。狙った獲物は逃さないさ。武器も女もな……」

エルフの男は星を連れて来た男と、親しそうに話をしている。それを見て初めて、星は自分が騙されたことに気が付く。

自分が騙されたことが分かると、星は悔しそうに唇を噛み締めた。それは、上手くいって喜んでいる彼等に対してせめてもの抵抗なのだろう。

だが、そんな彼女を差し置いて、男達は話しを続けている。

「でも今回は大物だぞ、あの剣は魔王の剣だ。一点物で取引すりや少なくとも20万はいくだろうな」

「現物を拝むのは始めてだが、期間限定の高難度クエストの始めてクリアした一人だけに与えられる産物だ。50はいくな」

彼等の会話を聞いた星は土を握り締め、痛みと怒りで震える声を振り絞った。

「うそ……だつ……たんで……すね……」

星は瞳に涙を浮かべながら男を鋭く睨みつけた。

地面にうつ伏せになった彼女に、男は微塵も悪びれる素振りも見せずに答える。

「ああ、学校で知らない人についていっちゃいけませんって教わらなかったの？ 全く、そんなにいい装備をどこで手に入れたかは知らないけどさ。それじゃカモがネギじゃなく、宝石持って歩いてるようなものだよ？ お嬢ちゃん」

「——くっ……ゆ、ゆるさ……ない！」

悔しきで瞳から涙が流れ落ち、自分の不甲斐なさに胸の辺りが焼ける様に熱くなる。

星が体に力を入れて立ち上がろうとしたのだが、思うように体が動かない。

慌てて表示されているものを確認すると、輪の様になっていたHPバーが青から赤に変わり、その中に通常時は15と表示されていた数値も1になっている。しかも、その横には小さく人型が震えたような表示が出ていた。

(なんだろうこのマーク。でも、なんだか体がびりびりして……これって。もしかして!?)

そのマークの意味が分かった瞬間、星の顔から血の気が引いた。

星が気付いた通り、このマークは麻痺状態などの異常状態時に発生する表示で、人形がその時の体の状況を表してくれる。

PVPのシステム上【OVER KILL】状態なら勝敗は付かない。それは今の星は足に刺さっている矢を抜かなければ、ダメージを受け続け一時的な不死身の状態となるということなのだ――。

ここで何とかして男を倒せれば星の勝利となり、男達も退散する可能性もあるだろうと星は考えていた。だが、それは現実的に不可能に近い。

何故なら、足にはエルフの男の放った矢が刺さり。しかも、刺さっている箇所はまるで焼けるような激痛を伴っている。

その状態で、更に2対1の状況だけではなく。しかも、男達とは体格差もかなりある。これだけでも星に勝ち目が薄いのに、そこに麻痺まで加わっているとすると、勝機は絶望的と言わざるを得ない。

この絶望的な状況で星に取れる唯一の方法は、ただ逃げることのみ。

「はあ……はあ……に、逃げな……きや……」

この男達の狙いが剣だということは、これを渡せば助かるかもしれない。しかし、それは絶対にできない。

渡しても逃してもらえないか分からないし。これは元々はエミルの物だ、こんな卑劣な人達に奪われるわけにはいかないと思ったからだ。

男達は何やら指でコマンドを操作し、誰かと連絡を取っているようだ。

(……逃げ出すなら、今しかない!)

星は薄れゆく意識の中で、必死に腕を伸ばし少しでも離れようと思ひたその時、右足に再び鋭い痛みが走った。

その痛みの原因は逃げようと這っていた星に対して、エルフの男は、矢の刺さったままになっていたその右足を強く踏みつけていたの

だ。

「——いつ！ いやあああああああッ!!」

星は悲鳴を上げると、そのあまりの痛みに地面を引つ掻き、苦痛で額から汗を流し顔を歪ませている。

しかし、エルフの男は苦しむ星を見ても表情一つ変えない。まるで、感情など元より持ち合わせていないかのよう……。

その時、耳元から星を嘲り笑う男の声が聞こえてきた。

「どうだお嬢ちゃん。痛いだろう？ 助かるのは簡単だ……君自ら、その剣を装備欄から外して、俺に渡してくれればいい」

「……い、いや……ですー!」

彼の要求を拒むと微笑みを浮かべながら、星の足に刺さっている矢を握り抉るように動かす。

「うあああああああッ!!」

叫び声を上げた星に向かって男が、再度優しい口調で話し掛けてくる。

「ほら……意地張ったって仕方ないんだから、早く楽になれよ。このゲームでは、プレイヤーから直接武器を奪えないんだ。だから、君に渡してもらうしか方法がないんだよ。分かるだろう?」

「いや……絶対に……」

「チツ！ なら仕方ない……エイジ抑えておけ。渡したくなるように、こいつの足を切り落としてるッ!!」

男は苛立ちながら告げると、ズボンの裾に隠していたサバイバルナイフを抜いた。彼の支持に従う様にエルフの男が星の左足に手を掛け、動かない様に固定する。

もうダメだと覚悟した瞬間、男達に何かが高速でぶつかり、星の上から彼等突き飛ばした。

星の視界の前に、突如現れた白銀の甲冑を纏った長く青い髪の女性。

「——星ちゃん。まだ大丈夫ね?」

聞き覚えのあるその声に、星は涙を流しながらもすぐに腕で涙を拭く。

そこには心配そうに星の方を見つめるエミルの姿があった。エミルの姿を見て安堵した様に、星は体の力を抜いてほっと胸を撫で下ろす。

「……は、はい」

「そう。良かった……星ちゃん。ちよつとの間だけ、目を閉じて耳を塞いでてもらえる？」

エミルはにっこりと微笑んでそう告げると、腰に差した長い剣の柄に手を掛ける。

星はそのエミルの声音にどこか底知れぬ恐怖を感じ、頷くと言われた通りに瞼を強く閉じる。

星が目と耳を閉じたのを確認すると、男達を鋭い眼光で睨んだ。彼女の体から滲み出る殺気が、オーラとなって目に見える気がする。

「——よくもこの子に手を出してくれたわね……絶対に許さない！ 覚悟しなさい!!」

「何だ？ お前。せつかくの獲物を逃すわけにはいかないんだよ！」
剣を持った男が勢い良くエミルに襲い掛かってきた。

男は手に持った剣を振り上げ、怒号と共に勢い良く振り下ろす。しかし、エミルはその一撃を軽々と剣で受け止めると、ニヤリと口元に不敵な笑みを浮かべている。

「なんだこの女。2対1で本気で勝てると思ってるのか？ お前のレベルは分からないが、連れが激弱なら、お前もそこそこに決まってるよなっ！」

「——ふん。それはどうかしら……ねっ！」

競り合っていた男を力任せに押し退けると、エミルが体制を崩した男に切り込もうとした直後、透かさずエルフの男が弓で攻撃してきた。

死角から放たれた矢が視界に入り、既の所で咄嗟に素早く後方に跳んだ。

エミルは鎧の布の部分を切らせる程度で、その矢を紙一重でかわす。

「ナイスだ！ エイジ！」

矢を避けたことで一瞬体制を崩したエミルに、今度は男の剣が襲い掛かる。

剣を構えて受け止めたエミルの剣と男の剣が火花を散らしながらぶつかり合う。

「おらー！ どうだ女！」

「……くっ！」

男の剣を顔ギリギリの所で受け止めたエミルが、険しい表情を見せる。

（このままじゃ厳しいわね……この剣の男が壁になり、あの弓の奴が私の死角から正確に射撃してくる。認めたくないけど、いいコンビネーションだわ。でも……）

エミルは力で彼の剣を押し返すと、距離を取ろうとそのまま後方に跳ぶ。その瞬間、男の影からエルフの男が弓を射った。

数本の矢が真っ直ぐにエミルの着地点に向かって飛んできて、空中で体を捻って着地点を少しずらしてなんとか回避する。

つと、エミルはニヤツと余裕の笑みを浮かべると、その手には、昨日のドラゴンを呼び出した巻物が握られていた。

おそらく。あの一瞬の間に、コマンドを開いてアイテム欄から巻物を取り出したのだろう。

「コンビネーションが良すぎるのも考えものね……次の攻撃パターンが読みやすくて助かるわ」

エミルはほくそ笑んで空中で素早く巻物を開くと、その紐に付いている笛を鳴らした。

すると、煙が立ち昇り彼女の姿を覆い隠した。

「なに!? なんだあのスキルは……」

「煙幕なんてスキルがあるなんて聞いてないぞ!」

突然の事に驚きを隠せない様子の男達はその煙を見て、目を丸くしながら身動きが取れなかった。

しばらくして煙が消えると、そこには岩が鱗のように体中にびっしりと張り付いたドラゴンがエミルを守っていた。

「——これはストーンドラゴン。地底ダンジョンの最深部にしかないな

い鋼鉄より硬い岩の鱗を持った鉄壁のドラゴンよ……さて、ここからは本気で行くから覚悟なさい。星ちゃんをいじめた罪は重いわよ?」
エミルは悪魔的な笑みを浮かべ牽制しつつ、ストーンドラゴンに星を守るように命令すると、エミル自身は剣を持っている男の方へと向かって走り出した。

ダークブレット3

エミルは男との距離を素早く詰めると、男との戦闘の中で彼の右足を軽く傷つけ、素早く距離を取った。

彼女としては、星の右足を傷付けたことへの軽い仕返し……つと言ったところなのだろう。

男は一瞬体制を崩したが、すぐに立て直し悔しそうに歯を噛み締めエミルを睨む。

「くっ！ やりやがったな。このくそ女！」

そう叫んだ男を余所に、エミルは巻物を手に持つと次のドラゴンを召喚する。

「特別に私のおきを見せてあげる！ いらっしやい。リントヴルム!!」

エミルがそう言って笛を吹くと煙と共にとても巨大なドラゴンが現れた。

その体長は軽く40m以上あり、太陽をも覆い隠すほどの大きさで、体全体を白くキラキラと光り輝く鱗に覆われていた。

ドラゴンの全身から漂わせる威風堂々たる姿には、どこか神々しいものを感じ取れるほどだ――。

天に向かってリントヴルムが咆哮を上げると、辺りの廃墟と化した建物と大気を大きく震わせた。

「そ、そんな……バカな……嘘だろ!」

その姿に恐れ慄き、剣を持っている男の顔から血の気が引いていき、完全に戦意を失った男は剣を投げ捨てた。

そんな相棒の姿に、エルフの男が「どうした？」と不思議そうに尋ねた。

男は震える体を必死に抑え、困惑した表情を浮かべる仲間とその重い口を開く。

「あの女は……ドラゴン使いのエミルだ!」

「ドラゴン使いのエミル?」

恐れ慄いている男とは対照的に、エルフの男はなぜ相方が怯えてい

るのが分からないのか、不思議そうに首を傾げている。

「お前は知らないかもしれないが、あいつは——いや、あいつらは……フリーダムの中のダンジョンでもクリア不可能と言われた。【悪魔の山——デーモンズマウンテン】をクリアした伝説のギルドのメンバーの1人。しかも、大会連続優勝記録を更新し続けている。その通り名は『白い閃光』だ!!」

「なに!? 『白い閃光』だと!!」

それを聞いたエルフの男は慌てて、その場を立ち去ろうと走り出す。

直ぐ様その後を追い掛けて走り出す男、無防備にも背中を見せつつ彼等は全力疾走する。

しかし、そんな2人をエミルが逃すわけもなく——。

「——リントヴルム!」

エミルの指示によって、白いドラゴンが男達の行く手を阻む。

そうエミルが『白い閃光』と呼ばれている理由は、白いドラゴンを使っているからだけではない。

「逃げようたってそうはいかないわよ! PVPの利点——あなた達は嫌というほど知ってるわよね?」

竜の背中に乗ったエミルがそう言っただけで悪意に満ちた表情でにっこりと微笑むのを見て、男達はガクガクと震え出した。

そう。その理由は彼女がリントヴルムを出して戦う時は、決まっただけ出す技があるのだ——。

「——放て! リントヴルム全てを灰に変えよ! ノヴァフレア!!」

エミルの掛け声と共に、白いドラゴンが大きな口を開けた次の瞬間、白い炎が勢い良く逃げる2人に容赦なく噴射された。

——ぎゃあああああああああああああッ!!

炎に包まれた2人の男はけたたましい叫び声を上げたかと思うと、男達は真っ黒に焦げてその場に崩れ落ちた。

彼女が『白い閃光』と呼ばれる由縁は、この技の要因が大きいと言えるだろう。

エミルは慌てて竜の背中から飛び降りると、星の元へ駆け寄って行

く。

「星ちゃん。大丈夫——そうじゃないわね……」

エミルは星を抱き起こしたが、星は苦しそうに肩で息をしていて顔色も悪く、ぐったりしている。

エミルが矢の刺さっている右足を見ると、傷口からの出血などはないものの。星の表情がその苦痛の強烈さを物語っていた。

(とりあえず。この矢を抜かないと……)

エミルはちらつと刺さっている矢に目をやり。星の体を自分に凭れ掛からせる様に抱くと、徐ろに手を伸ばし刺さっている矢を手で握る。

次に何をするかを感じ取ったのか、星は不安そうな瞳でエミルの顔を見た。

「星ちゃん。凄く痛いと思うけど、ちよつとだけ我慢してね……」

「はあ……はあ……はあ……はい」

エミルが星の耳元で小さな声で告げると、星は返事をして無理に笑って見せた。強がってはいるが、星の表情からはその矢が起こす激痛が垣間見えている。

剣で鏃を素早く切り落とすと、星の足から矢をゆっくりと抜きにかかった。

「——ううツ!! ああああああああああああツ!!」

その瞬間、激痛のあまりに星が大声で悲鳴を上げた。悲鳴を聞いたエミルは、慌てて矢から手を放す。

そして、眉をひそめながら星の顔を見つめる。

「ご、ごめんなさい! ……痛かった?」

「はあ……はあ……いえ……ひと思いに……ぬいて……ください……」

「で、でも……」

額に大粒の汗を掻き、顔を青白くしながら告げた星の申し出に、エミルが困惑した様子で渋い顔をする。

星は「大丈夫ですから」と微笑むと覚悟を決めたようにエミルの体にしっかりとしがみつく。

自分の体にすっかりとしがみついで、強く瞼を閉じている星の姿に
エミルも覚悟を決めたのか、星の太股に刺さっている矢を掴んだ。

その瞬間、星の顔が苦痛に歪む。

「うあッ！ あうううう……」

歯を食いしばり、必死に痛みを耐えている星。

エミルが辛そうにな星に声を掛けようと口を開くと「大丈夫ですか
ら……」と呟き、星はにこつとぎこちなく笑う。

しかし、その言葉とは裏腹に、星の体は小刻みに震え、エミルの体
を痛いくらい締め付けてくる。

その様子からは、とても大丈夫そうには見えないのだが、おそらく
エミルを心配させないようにという彼女なりの配慮なのだろうが、そ
れが余計に痛々しく感じる。

時間をかけてゆつくりと矢を抜き取ると、ほっとしたのか強張って
いた星の体は脱力し、エミルの胸に完全に身を任せる。

星は額から大量の汗を流しながら、肩で小刻みに呼吸をしている。

「はあ……はあ……はあ……エミルさん……ごめんなさい」

その弱々しい星の言葉に、エミルの瞳から涙が溢れ出した。

「ううん。謝らなくていいのよ？ 痛かったのに……よく頑張ったわ
ね……」

エミルはそう言つて星の頭を優しく撫でると、星をストーンドラゴ
ンの側に残し、ゆつくりと立ち上がった。

それと同時に、底知れない怒りが込み上げてきて、エミルの精神を
支配していく。

どうしても星をこんな目に合わせたあの2人組が許せない。

だが、星から矢を抜き取った時にもうバトルは終了しており、その
戦闘の疲労は残るもののHPは全回復する。

それはドラゴンの一撃を受けて黒焦げになった男達も元に戻ると
いうことだ——エミルが戦闘に参加したことによって勝負が決した
【OVERKILL】状態になっていた所に、2対2に更新されシステ
ムがバグを起こしていた。

しかし、バグを起こしていた要因の矢が星の足から抜き取られ、シ

システムが正常に戻ったのだ。

システムが勝負を正常に終わらせた直後……。

「全く、死ぬかと思った……」

「いや、早くずらからないと、本当に殺されかねんぞ？」

「そ、そうだな！ 逃げよう!!」

元の姿に戻りこそこそと話している男達の背後からドンツ！という大きな音が聞こえた。

2人が恐る恐る振り返ると、そこにはリントヴルムの首に乗ったエミルが、鬼の様な形相で男達を睨んでいた。

「……あなた達だけは絶対に許さない……許さないわ!! リント焼き尽くしなさい。骨も残らないくらいに！ ノヴァフレア!!」

エミルがそう命じると、再びリントヴルムの口から白い炎が噴射され、2人は断末魔の叫びとともにその場に倒れた。

だが、バトル解決後。すぐに男達のHPは復活し、黒焦げになった男達の体も元に戻る。

その男達を感情のない瞳で見たエミルが、右手を振り上げてもう一度攻撃命令を出そうとする。

それを見て、慌てて男が口を開く。

「お、おい。ちょっと待ってくれよ……もう良いだろ？ 謝るから、許してくれよ……なっ？」

男がその場に土下座して、必死に命乞いを始めた。だが、頭の中が沸騰するほど激怒している今のエミルに、そんな言葉が通じるはずもない。

エミルは地面に降りて、土下座する男達を見下すように冷たい目で睨むと、吐き捨てるように言った。

「——謝るといふなら、時間を戻して。この子に手を出す前の自分達に言うことね！」

彼等にエミルの怒りは収まらず、怯えている男達に容赦なく攻撃を繰り返す。

そんな光景が5回ほど繰り返されると、もう男達ももう諦めたのか、抵抗する素振りすら見せなくなつた。

戦意を完全に喪失した彼等に再び攻撃する為、リントヴルムに命令をしようと腕を振り上げると、エミルの腕を星が引っ張って止める。

エミルは星のその行動に驚いたように目を丸くしている。

「……………えっ？ 星ちゃん!？」

「もう……………いいんです……………やめて、あげて下さい……………」

「でも……………こいつらはあなたに酷い事をしたのよ？ これくらいじゃ、私の気がすまないわ!」

そう言っつて男達を鋭く睨んだ。男達は怯えきった表情で抱き合っている。

すると、その間を遮る様に星が両手を広げて立ちはだかった。

エミルは困惑した様子でそんな彼女の顔を見つめている。だが、すぐにその視線は星の足へと向けられた。

足に受けた傷口はくつきりと残り。星もその痛めた足を軽く上げる様にして立っている。

少し体を押せば倒れてしまいそうなほど、青ざめた彼女の額からは大粒の汗が流れ落ち、地面には丸く水滴の後が残っている。

その姿に負けたエミルが「分かったわ」とため息を漏らした。

怒りを抑えられずに、蔑んだ瞳で彼等を睨みつけているエミルとは対照的に、星は優しく微笑みを浮かべた。

「それでも……………悪気が……………あつたわけじゃ、ないかも……………しれないですし……………」

「星ちゃん。あなた……………」

星はふらふらと体を揺らしながら、ゆつくりと2人の男の前に歩いていく。

そして、男達の前で優しい声で告げる。

「もう……………こんな事したらだめですよ?」

星のその言葉に、ほっとした男達は立ち上がり。何度も頭を下げながら、バツが悪そうに去っていった。

星はにっこりと微笑みながら、そんな2人の後ろ姿を見送っている。

そんな星の姿を見て、エミルが少し不満そうに口を開く。

「星ちゃん。少し甘すぎるわよ……本当にこれで良かったの？」

「……はい。人が傷付くのは見たくないから……」

星はそう言つてエミルの顔を見上げ、にっこりと微笑んだ。

エミルは少し呆れたように「そう……」と呟くと、星を抱きかかえリントヴルムの背に飛び乗った。

2人を乗せたリントヴルムは翼を広げ空に飛び上がると、そのままワープゾーンを利用せずにエミルの城へと向かつて飛んだ。

* * *

廃墟とかした建物の窓から白いドラゴンが飛び立つのを見上げ、笑みを浮かべる女性の姿があった。

「……ふふつ、困った子ね。敵の増援が来るのを見抜けないなんて……エミルだったら随分と勘が鈍ったようねえ」

その女は先のカールした茶髪のセミロングで茶色い瞳をしていた。その時、怒号が彼女の耳に飛び込んできた。

「調子にのんなよ！ このアマ!!」

「……ん？」

女が振り返ると、背後から彼女の倍はあると思われる男が、彼女の身長ほどの大剣を振り上げ、今まさに襲いかかろうとしていた。

だが、それに動じることなく、彼女はその攻撃を軽々とかわすと、男に向かつて素早く矢を放つ。

「——ぐわッ!!」

男は声を上げ、そのまま前屈みに倒れて動かなくなる。

「へえ。矢が刺さったままでも動けるなんて、なかなか根性があるじゃない。惚れちやいそう♪」

女は悪戯な笑みを浮かべると、その男の腕に彫られた刺青を見た。そこには頭を撃ち抜かれた骸骨の模様が刻まれている。

「なるほどね。額に銃弾で穴の開いたドクロのマーク——貴方達。ダークブレットね……」

「お、俺達を知ってるのか？」

「ええ、あなた達は有名だもの。PVPによるアイテムの強奪に、狩場の占領……私も良く手合わせしたものよ?」

そう言つて微笑んだ女の顔を見て、男は何かを思い出した様に目を見開いた。

「お、お前は!!…あの時の悪魔……」

そう口走つた男の頭を、持っていた弓で思いつき叩いた。

「——天使よ!…全く。失礼しちゃうわっ!」

その一撃が決め手になったのか、男は完全に意識を失う。

薄暗い建物の中をよく見ると、周りには矢の刺さつた男達が10人以上転がっている。

おそらく、男達に刺さっているのは麻酔矢だろう。大の男が1人の女に身動き1つ取ることもできずに、ただ彼女を恨めしそうな顔で横たわっていた。

「さて、こつちも片付いたし。情報収集に行かないとねえ♪」

上機嫌で通路に転がっている男達を放置したまま、女はスキップをしてその場を去つて行く。

* * *

ドラゴンの乗り心地が良かったのか疲れたからなのか、気が付くと星はエミルに抱かれながらやすやすと寝息を立てていた。

自分に凭れ掛かつて眠る星を、エミルは優しい眼差しで見下ろしている。

「全く……あんな事があつた後に、よく眠れるわね。この子は……」
エミルは少し呆れたようにため息を漏らすと、優しく星の頭を撫でた。

透き通つた空を進みながら、エミルはふとさつき星が言っていた言葉を思い出す。

「悪気があつたわけじゃないかも……つか、はあ。どこまでお人好しなのかしらね。この子だったら……」

ため息混じりにそう呟くと、ゆっくりと風を感じながら城へと向

かつて進んでいく。

家出

次に目が覚めた時には、星はベッドの上にいた。

ぼんやりと薄暗い天井を見上げ、意識がはつきりしてくるのと同時に、男達に襲われた時の記憶も鮮明になっていく。

「そうか……私……」

城を出る前までは、必ず何らかの情報を集めてみせると息巻いていた星だったが、結果としてこのような形になってしまったことで、星の心はエミルへの後ろめたい気持ちでいっぱいだった。

(エミルさんにまた迷惑かけちゃったな……)

心の中でエミルに申し訳ないという罪悪感から、星の瞳からは涙が溢れてくる。

役に立とうとした行動が結果として裏目に出ってしまったのが、星にとって相当悔しかったのだろう。

しかも、知らない男の口車に乗せられ、まんまと誘い出された自分の考えの甘さや、何もできなかった無力さが堪らなく許せなかった。

「——うっ……ひぐっ……私って、ほんとにだめだめ……」

エミルにどうしていいのか分からず、自己嫌悪に陥っていた。

『足を引つ張るばかりの自分に嫌気が差しているのではないか?』そう考えると、ただただ自分の無力さが悔しくて涙が止まらなかった。

星は布団に顔を隠して泣いていると、ドアをノックする音が聞こえてきた。

「星ちゃん。もう起きてる?」

ドア越しから聞こえるいつもと変わらない優しい声も、今の星には重く感じる。

(あ、いけない。こんなところを見られたら……また迷惑かけちゃう!)

星はそう思い。咄嗟にあふれ出す涙を袖で拭うと、あたふたと慌てて布団の中に潜り込んだ。

エミルは扉をそーっと開け、部屋の中に入ってくる。

「あら? 布団が……」

さつきまでと布団の様子が違うことに気が付いたエミルが、ゆつくりとベッドの方に歩いてくる。

(こっちにくるよ……ど、どうしよう……)

星の心臓の鼓動がドクンドクンと大きくなるに連れて、消えてなくなりたいたいという思いが強くなる。だが、総都合よく消えることなどできはしない。

とりあえず、瞳を閉じると狸寝入りを試みる。しかし、そんな子供の考えたその場しのぎの作戦が通じるはずもない。

エミルが布団をめくると、星は驚きビクツと少しだけ動いてしまった。

その瞬間、星が『しまった!』と思った時にはもう遅く、エミルは丸まりながらしつかりと瞳を閉じている星の顔を覗き込んで、不思議そうに首を傾げた。

「星ちゃん。起きてる?」

「……………」

星は無言のまま息を止めて、エミルが立ち去ってくれるのを祈っていた。

すると、それを見たエミルは立ち去るところか、寝たふりをしている星の耳元でそつとささやく。

「息まで止めて寝たら死んじゃうわよ? 寝たフリするなら、ちゃんと息はしないとね……」

「——ッ!?!」

慌てて息をし始める星。

すると、耳元でエミルのくすくすと笑ってい声が聞えた。

星は何故笑われているのか分からないが、とりあえずこれ以外にこの状況を切り抜ける手段が思いつかず寝たフリを続けた。

直後。首筋に細く長く冷たい何かが触れたかと思うと、円を描くように動いている。

「——ねえ……星ちゃん。本当はもう起きてるんでしょ? 美味しいお菓子があるんだけどなあ。一緒に食べない?」

完全に星が起きていることに気が付いているエミルは、つんつんと

星の頬を突く。

星は不快そうに眉をひそめる。

その間も星は、中々離れてくれない彼女を頭の中でどうやって遠ざけるか、出来る限り可能性を思案していた。

そこで星が取った作戦はただひとつ。それは——何をされてもただ耐える事だけ!!

しばらくの間。耳に息を吹きかけたり、脇に指を滑り込ませてくすぐってみたりとあらゆる方法で寝ている星にちよつかいを出していたが、必死に堪えるのみでそれ以外の反応を示さない星に痺れを切らし「それじゃ、起きたくなったらリビングに来てね」と言い残り部屋を出ていった。

星はほつと胸を撫で下ろし息を吐く。

「はあく。なんとかやり過ごした……」

正直、脇をくすぐられた時は星ももうダメだと感じたのだが、意外と我慢強い自分に感謝しつつ星は徐ろに起き上がると、ぼーつと天井を見上げた。

それからどのくらい経っただろう——。

ただぼーつとしながら、今後のことを考えていた。今の星にはこのまま迷惑を掛けるのを分かっているエミルの城に留まることに、若干の躊躇があった。

星は何かを決心した様に力強く頷くと、コマンドを開きエミルから貰った竜王の剣をベッドの上に置き、コマンドのメッセージの項目を出したところで突然、星の指が止まった。

星はふと今朝の出来事を思い出した。

メッセージでメモを残すと、即座に相手にそのメッセージが通知されてしまう。

星は今朝エミルがメモを残したのと同じように、手紙を残すのが最善の手段だと即座に判断し実行に移す。

「……できた」

星は書いた手紙を竜王の剣に貼り付けると、寝室にある小窓から外の様子を窺う。すると、部屋に設けられた小窓から少し離れた場所に

小さな塔が見えた。

しかも、その小窓から頭を出して外を覗くと城の外壁を伝っていけば大人では無理だが、子供の星ならばギリギリ渡れそうだ。

星は少し高い位置にある小窓にジャンプして指を掛けると、器用に鍵を開けて外へと抜け出した

普段の自分なら落ちてしまいそうなものだが、システムの筋力補正が上手く効いているのだろう。

星は外壁の窪みに足をかけると、慎重に進んで塔を目指す。身軽で高い所が得意な星にとってこの程度のことはどうということもない。

現実世界では急な強風に見舞われることもあるだろうが、この世界ではそのような心配もどうやらいらぬようで、時折頬を撫でるようなそよ風が吹く程度で体を揺らすほどではない。

そして何より、現実世界よりも体が圧倒的に軽い。それは筋肉量が数値で決まっているからに他ならない。数値はステータス内に表示されていて、男女共に変化はない。

つまり、現実世界では筋肉量に大きな差がある男性も女性もこの世界では同等の力があり、それは子供であっても変わらないのである。

筋力の最大数値はレベルによって上がる。

レベル的にプレイヤーの中ではそれほど大きくない筋肉量の数値だが、それでも子供の星にとっては通常の4倍以上のパワーが出ているのだ。

星は何事もなく無事塔に辿り着くと、そこから城の入り口に向かって走り出した。

それから長い道のりを経て、星はやつとの思いで街に辿り着く。

乱れた息を整え改めて辺りを見たが、やはり街は人通りは少なく殺伐としている。

とりあえず。街に居るとエミルに見つかる危険性があるので、星は考えた末にフィールドに出るといふ決断を下した。

何より、今日襲われた街に長居したくないという思いが強かったのもあるだろう……。

フィールドに出ると、そこにはすでに数多くのプレイヤーが狩りを

していた。

「皆頑張ってるんだなく。私も頑張らなくちゃ！」

星はこの世界で生きようと頑張っている人達を見て、自分に気合を入れると他のプレイヤーの邪魔にならない様に端っこの方へと移動した。

このゲームを初めて最初にエミルと狩りをした場所とは別の場所だったが、出現するモンスターのレベルは同じで、以前の場所にはラットがいたが、この場所にはラビットがいるらしい。

その大きさは『ラビット』うさぎと呼ぶには少し無理がある大きさだ。ラット同様、イノシシくらいの大きさはある。

まあ、モンスターの頭上にレベルと名前が表示されているから、十中八九そうなのだが――。

とりあえず、エミルからもらった武器は返してしまったので、アイテムの中にある初期装備のショートソードを装備し、意気揚々とLv1のラビットを狩りにいった。

ゆつくりとショートソードを握り締め、目標に近付いて行く。

――キイク！

直後。甲高い鳴き声を上げた1匹のラビットが星の接近に気付いて戦闘体制に入る。

星は慌てて手に持ったショートソードを構えた。

エミルと戦闘の練習をしたとはいえ、エミルのように敵は加減してくれない。

(大丈夫。エミルさんに教えてもらったようにやれば、必ずできる！)

星は恐怖に折れそうになる心をもう一度奮い立たせ、敵を睨んだ。つと、ラビットがピョンピョンと飛びながら星に一直線に向かってくる。

見た目は大きくなっただけのウサギといった感じなのだが、その外見に似合わず意外と動きが素早い。

「えっと……スイフト！」

星が叫ぶと、一瞬体が青く光りさつきより体が軽くなった。まるで、水中の中にいる時の様だ――。

基本スキルのスイフト、タフネスは慣れてくれば、頭でイメージするだけでできるようになる。

だが、戦闘素人の星にはまだそれは難しい。今は音声認識機能で発動させるしかない。

(体が凄く軽い……うん。これならいけるかも！)

星は剣を握る手に力を込めると、ラビットに斬り掛かった。

「はあああああッ！」

向かって来る敵に星は渾身の力で思い切り剣を振り抜いた。

攻撃はラビットの体を掠めただけで、ラビットのHPは左程減少していない。

星は勢いだけで飛び掛かったため、僅かにずれたのだ。

だが、一度出来たことは自信が付いて何度でも出来るようになる。

星はさっきの一撃に確かな手応えを感じたのか、そこから畳み掛けるように攻撃を繰り返した。

そこからは攻撃が面白いように当たる。

おそらく、エミルとの練習を体が覚えているのだろう。

間髪入れずに打ち出される度重なる星の剣撃に、殆ど応戦できずラビットのHPバーが残りわずかとなった。

星が『勝てる！』と確信したその時。星の戦っていたら、どこからともなく飛んできた矢が交戦していたラビットの脇腹に刺さった。

——キィィィ!!

ラビットが耳に響くほどの甲高い断末魔の叫びを上げ、きらきらと光りの粒子になって消えていく。

「な、なに!?!」

星が驚いて矢の飛んできた方を見ると、鎧を身にまとったエルフの男が立っていた。

それを見て『きつと近くに居たから誤って矢が当たったんだろう……』とそう思った星はその場を離れ、別の場所でまたラビットと戦闘を始める。

先程の戦いでコツを掴んだのか、今度はラビットのHPを早く削れた。そして、最後の一撃を打ち込もうと地面を蹴ったその時。再び矢

が飛んできて、交戦していた目の前の敵に的確に直撃した。

「ううう……また……」

弓の飛んできた方向を向くと、やはり先程と同じ男が弓を構えた状態で立っていた。

少し不服だったが、ぐつと堪えた星は再び獲物を探し始める。

だが、それから2回戦いその両方の【Finish】が鎧を着た男に取られ、さすがに頭にきた星が抗議する。

「どうして私の狙ってるのを攻撃するんですか!? 他にもたくさんいるじゃないですか!!」

すると、男の口から飛び出したのは星が求めていたものとは程遠いものだった。

男は悪びれる様子もなく、小馬鹿にしたようなしゃべり方で言った。

「おいおい。言い掛かりはやめろよ。なら、このフィールドにいるモンスター全てに、お前の名前でも書いてあるって言うのか?」

「そ、それは……」

男にそう言われ、星は思わず口をつぐんだ。

その男の言葉は理不尽極まりないものだが、ゲームを運営している場所に報告しようにも、内部の機関は使えず、ログアウトできなければ通報するという手段は取れない。

仕方なく狩りを諦め、星はぼとぼと狩場を後にするしかなかった。

ログアウトができなくなって2日。レベルの低い狩場はどこもこんな状態だ――。

だが、それも無理はないだろう。HPバーが『0』になれば現実世界での死に繋がると噂が流れ、プレイヤーの殆どがそれを事実と考えていたのだから仕方がない。

だが、ここまで治安の悪化が進んでいるのは、外部との交信が途絶えたのが最も大きい要因と言えるだろう。

本来ならルールというものの、管理された自由の範囲内で楽しむのが当然なのだが、ルールも法もなくなれば、人は自由という名目で自分の思い通りに動物的な欲求を満たす為に動くということなのだ

ろう。

フリーダムの中ではある程度のお金があれば、当面は安全な街の中で生活はできる。

街には宿屋もあるし、食べ物専門の屋台も数多くある。また、ゲーム初心者でもマイハウスがあるのだから元より家には困らない。

後は、食料を買うだけのお金があれば生活することができる。あくまで『この世界で生活することだけ』だが……。

しかし、マイハウスではHPと疲労は回復できるが傷が癒せないのが欠点だ——宿屋に泊まれば、負傷した傷やHPも回復できる。狩りをするなら、お金を払ってでも宿屋に泊まるのが『リスク回避』という点では正しい選択と言えるだろう。

負傷があっても日常生活には支障はない。少し体に傷ができる程度だし、それが歴戦の勇者の様でかつこいとまで思える。

だが、負傷した状態だと受けた戦闘ダメージが大きくなってしまうのだ——ゲームの状態ならまだしも。今の現状では、とてもリスクの大きい行為なのである。

星は近くに立っていた木にも凭れ掛かるように座ると、コマンドで所持金を確認する。

「はあ〜」

所持金を確認した星は大きなため息をついた。

それもそのはずだ。星の現在の所持金は『0』だ。ゲーム開始時には500ユーロのお金が財布に入っていたのだが、今朝エミルに貰ったお金と一緒に城を出てくる時にその全て置いてきてしまっていた。

戦闘をしたせいとか所持金を見て落胆したせいとか、星のお腹が『ぐううう〜』と音を立てて鳴った。

星が空を見ると、さつきまで天高く昇っていたはずの太陽も、すでに沈みかけてきている。

考えてみれば、この世界に着てまだトーストとホットミルクしか口にしていない。

「お腹すいたなあ……」

星はぼそつと呟くと、暗い表情のまま膝を抱えた。今更ながらに、自分の無力さを痛感する。

普段なら冷蔵庫に母親の作ってくれた料理が入っていて、それを温めれば良かった。だが、ここではモンスタを倒し少量のお金を稼ぐか、食材を採集するかしか食料を手に入れる方法はない。

そう。自立しなければ、この世界では生きていけない。例えそれが子供であっても初心者で基礎能力が同じであれば、それは大人のプレイヤーとなんら変わらない存在なのだ。

加えてこの状況下では、手を差し伸べてくれるのは物好きか、利用しようとしてくる者しかない。

プレイした時点で何が起きても自己責任、それが子供であっても例外ではない。基礎能力が一緒に境遇が同じなら人は皆、保身的な意見を持つている者ばかりだ——昼間にあつた男達の様子に星に利用価値かあれが近付いてくることもあるが、彼等の狙っていた『竜王の剣』はすでにエミルに返している。

なら、残るのは足手まといにしかならない初心者プレイヤーというレッテルしか残っていない。

しかもそれが子供なら、なおさら受け入れられ難いだろう……。

だが、幸い空腹時限度を超えても、パラメーター低下と視野がぼやけるなどの症状が現れるだけでHP減少が起こるわけではない。

現に今の星にも、若干視界にもやかかったようになっていた。

しばらく途方に暮れていた星だったが「よし」と何か決心したかのよう立ち上がり、近くの森に入ってしまった。

家出2

食べ物を探しに森に入ったのは良いが、もう大分経つのに木の实さえ見つけることができないでいた。

始めのうちは直ぐに何か食べ物が見つかるだろうと、簡単に考えていた星だったが、森の中をいくら探しても食べ物どころかモンスターすら見当たらない。

そうこうしている間に。完全に日が落ちて夜になってしまった。

「はあ、はあ……こんなに探してるのに、何も無いなんて……。こんなことなら、川に行つて魚にすれば良かったかな？」

星は後悔しながら、そんなことを口にしてしていると、どこからともなくモンスターの雄叫びが聞こえてきた。

体の芯に響くその鳴き声は、まるで心臓を驚掴みにされるような威圧感を帯びていた。

驚いて近くにあつた木の穴に逃げ込むと、星は体を丸くして、その鳴き声が止むのを待った。

それからしばらくして、辺りに響いていた雄叫びが止んだ。

星はほっと胸を撫で下ろした。それと同時に今度は張り詰めていた緊張が解け、また『ぐううう』とお腹が大きな音を立てる。

「ううう」

星は鳴り止まないお腹を必死に押さえて丸くなる。

(そういえば……こんなことが、前にもあつたっけ……)

その時、ふと現実世界の学校での出来事を思い出す。

* * *

それは学年が進級してすぐくらいの時期だった。

教室で帰る準備をしていた星の元に突然男子生徒がきて。

「体育倉庫の中から猫の鳴き声がするから見てきてくれ」

星は可哀想だと、疑うこともなく男の子に言われるまま倉庫の中に飛び込んだ。

中に入ると、確かに倉庫の奥の方から猫の鳴き声が聞こえる——。
「待っててね。今助けてあげるから！」

星がその鳴き声のする方を必死に探していると、用具棚の奥からちらつと猫のしつぽが見えた。

そのしつぽはぴくりとも動いておらず、それを見た星は猫が怪我をしていると思ひ込み、急いで周りの用具を移動させやつの思いで猫がいる場所が見えるまでになった。

「なに？　これ……」

星はそれを見て言葉を失う。

それもそのはずだ。そこには電池式のスピーカーに猫の尻尾の玩具が付いているだけというお粗末な作りだった。

本当なら騙されたことに怒ってもいいはずの星だったが、それを見た彼女は『嘘で良かった』と、ほっと胸を撫で下ろした。

その後、外に出ようと扉に手を掛けると——。

「——あれ？　開かない……どうして!？」

さつきまで鍵の掛かっていなかったはずの体育倉庫には、何故かしっかりと鍵が掛かっていた。

間違はなくさつききの男子生徒の仕業だ——星は必死で開かないドアを叩いて助けを呼んだ。

だが、周囲に誰も居ないのか、いくら叫んでも誰もくる気配すらない。

それから数時間——さすがに叫び疲れたのか、星はどうしようもない状況に途方に暮れていた。

星が体育倉庫の窓を見た。だが、そこから出ることは不可能だろう。

何故ならその窓は内側が防犯用の鉄格子で覆われていて、とても子供の力では外れそうにない。

「これは……私の力じゃ……無理」

父親もいなく、母親は仕事で夜遅くにしか帰って来ない。

そんな状況では、星が居ないことに気付く人間がいるはずもない……それは星自身が最も分かっていた。

だから、自分が助かるには明日学校が始まるまで待つしかないという絶望的な事実もすぐに理解出来た。

「とりあえず、ここは体力を無駄に使わないようにしないと……」

そう呟くように言うと、その場に座り込み小さくうずくまる。

それから何時間が経っただろう……星が窓から外を見たら満月が顔を覗かせている。

暗い場所が苦手な星にとって、満月の光りが窓から差し込むことで、微かに安らぎを感じていた。

「——月綺麗だなあ……はあく。お腹すいた……」

星は若干の現実逃避をしつつ。空腹で鳴り止まないお腹を押さえしていると、いつの間にか眠ってしまった。……

結局それから星が助け出されたのは、深夜12時を過ぎてからだつた。

その時もおくれんぼをしていた星に生徒が気付かずに、鍵を閉めてしまったということにケリが付いたのだが……。

* * *

木の窪みの部分に入り込んだ星は、空に浮かぶ月を見上げていた。

「でも、あの時はお母さんが気付いてくれたから助かったけど……今は……」

星はそう呟くと、自分の置かれた状況に絶望し表情を曇らせた。

そんな時、星の近くを男が通っていった。

それを見た星は気付かれないように隠れながら、その男の様子を見つめている。

「おっかしいなあ。反応はこの辺りのはずなのになあ」

星が怪しいと感じた要因は、彼の格好とは不釣り合いな髪と瞳の色だった。

キョロキョロと何かを探すように辺りを見渡す男は、金髪で青い瞳をしているのに腰には日本刀を差し日本伝統の甲冑を身に纏っている。その出で立ちはまるで、日本の侍の姿そのものだった。

しばらく物陰から男の様子を窺っていると、男は何かを探しているらしく辺りを頻りに見渡しながら歩いている。

(……絶対に怪しい！)

何にせよ。夜に森の中を一人で歩き回っているなんて絶対におかしい。あの男はきつと襲う為に、他のプレイヤーを探していると星は直感でそう判断した。

星は木の穴に隠れながら身を小さくしてその男の動きを見張っていたが、男は諦めたのか、頭を掻いて他の場所に向かって歩いていく。男が去りほつとしたからか、どつと疲れが出てきて不意に星の口からあくびが出た。

「ふわあく。ちよつと眠い……」

それもそのはずだ。昼間に男達に襲撃され、今度は城の外壁を伝つての大脱出劇。そしてフィールドでの初戦闘。一日に色々なことが起きたのだから無理もない。

さらに空腹で体に力も入らず、いつまで続くか分からない終わりの見えないサバイバル生活が待っていると思うと、気が滅入りそうだった。

それは子供の星にとって過酷すぎる状況だろう。睡魔に襲われた星はそれに抗えず、うたた寝を始める。

しばらくすると、星のもとに何やら肉が焼けるような香ばしいかおりが漂ってきて目を覚ます。

「なんだろう……この美味しそうな匂い」

星は鼻をくんくんと動かし、その匂いの方へと引き寄せられるように歩き出した。

その匂いのする方へと歩を進めると、目の前に焚き火で炙られた串に刺さった肉が見える。

お腹の空いていた星はそれに一目散に駆け寄っていくと、物欲しそうにその肉を見つめた。

空腹で倒れそうになっていた直後に見たせいかわ、その肉の表面を滴る油がキラキラと輝きとても魅力的に感じる。

「——あの〜。食べる?」

突然に耳に飛び込んだ声に気付いて横を振り向くと、少女は串を掴んで星に差し出した。

彼女は腰に白いレイピアを差し、ピンク色の長い髪を後ろで結んでいる。フリルの付いたドレスの様な服装に、瞳はまるで空の様に青く透き通っていた。

星はそれを指を咥えて見つめると、ぶんぶんと首を横に振った。

「ふくん。いらないんだ」

少女は首を傾げ持っていた串を自分の口に運ぶと、美味しそうにほっぺたに手を当てて幸せそうな笑顔を見せている。

星は口を開けたまま、羨ましそうにその様子を見つめた。

「なに? やっぱり食べたいでしょ?」

「えっ? あ、いえ……」

そう言っつて俯くと『ぐううう』と、今までにないほどに大きくお腹が鳴った。

星は顔を真っ赤にさせ、慌ててお腹を抱える。

それを見た少女は笑い声を上げ「体は正直だね〜」と、地面に刺していた一本の串を手にとって、それを星の顔の前に突き出す。

「はい。食べていいよ? ここで会ったのも何かの縁だし」

「本当にいいんですか?」

「うん!」

そう言っつて少女の顔を見上げた星に、彼女は頷くと優しく微笑み掛けた。

彼女の言葉に甘えた星はその肉にかぷつと噛み付くと、噛み締めるようにもぐもぐと口を動かす。

少女はそれを見て徐ろにコマンド画面を操作すると、串に刺さった肉を取り出して次々に焚き火の近くに刺していく。

星は食べるのを止め、その様子を興味深く見ていると、ふと彼女と目が合った。すると、少女は手に持った串を星に見えるように前に出す。

「ああ、これ? 気にせずどんどん食べてね! 私こう見えて意外と

食べる方だから、今のうちに焼いておかないと……ね！」

一瞬微笑んだと思ったら少女は、次の瞬間には止めた手を再び串を地面に刺して並べていく。

見事なまでの早業で次から次へと地面に刺された串が大きな円を作る。

星は彼女に遠慮しつつも。相当お腹が空いていたのか、次々と肉を平らげていく。

「おお。あなたも意外と食べるんだね！ もう一ついかが？」

焼き上がった肉を持って、上機嫌の少女はにつこりと微笑んだ。

星は「いただきます」と遠慮しがちに、それを受け取ると口に運ぶ。少女も星のその食べっぷりに気を良くしたのか、次々に串を手渡してくる。

星は渡される度に食べていたが、さすがに6本目に突入した時にこれ以上はまずいと感じたのか、次の串を持ってにこにこしている少女に、口を抑えてもう無理だという意思を伝えた。

だが、少女は不思議そうに首を傾げている。

「もう良いの？ 遠慮しなくていいのに〜」

「い、いえ。もう本当にお腹いっぱいなので……」

「そう。私はまだまだ食べれるけど……本当にもういいの？」

星はそう言っつて首を傾げている彼女に、こくこくと何度も頷くと、少女は「そう」と残念そうに、持っていた肉にぱくつと噛み付いた。それから1時間近く食事をしていた。少女の周りには30本近く肉が刺さっていた串が並んでいる。

「はあく。食べた食べた〜」

「そ、そうですね……」

満足そうに寝転がる彼女を見て、星は『この人のどこにあんなに入ってるんだろう』と思いつつながら苦笑いを浮かべている。

2人は焚き火の炎を見ながらしばらくぼーっとしてっていると、徐ろに少女が口を開いた。

「あつ！ そういえば、あなたはどこでこんなところに来たの？」

「えっ？ そ、それは……」

彼女の核心に迫る質問に、星は思わず口をつぐむ。

急に表情が暗くなった星を見て、少女が「まあ、人には色々あるから、話したくないならいいけど」と言った。

すると、彼女は徐ろにコマンド画面を開いて何かを始める。

彼女が何かを取り出したかと思うと、それを星に差し出した。

「はい。これあげる！」

「これって……」

星は少女が出した物を見て、驚きのあまり目を丸くさせて言葉を失う。

それもそのはずだ。彼女の手には30cmほどの長さのチュロスが握られていたのだ。

「いっぱい食べていっぱい寝れば、どんな嫌な事もすぐに忘れられるよ！」

「あ、ありがとうございます……」

につこりと微笑んでいる少女から、チュロスを受け取りとりあえず口に運んでみる。

「あ……おいしい」

「でしょ！ 私の自信作なの！」

星のその言葉を聞いて嬉しそうに微笑むと、彼女もチュロスを食べ始めた。

2人はチュロスを食べ終わると、2人の間に長い沈黙が流れる。

「とりあえず、自己紹介でもする……？」

そういうと彼女は徐ろに立ち上がり、胸に手を当てて自己紹介を始めた。

「私の名前はエリエよ、趣味はお菓子作り。ヒューマンで片手剣——てかフェンシングって競技が得意だから、武器もレイピアを愛用してるんだ。よろしくね！」

エリエはそういうと、自慢げに腰に差したレイピアを見せた。

少し言葉を詰まらせながらも、星もエリエに自己紹介を始める。

「えっ、えっ……私の名前は星です。このゲームは始めたばかりで、まだ戦い方は分からないですけど……あつ、趣味は読書です。よろし

くお願いします」

星は自己紹介を終えると、深く頭を下げた。

お互いに名前を知ると、不思議と会話が弾み色々と世間話をした後。星はエリエに今日あったことを話し始めた。

PVPを利用した窃盗団のこと。それが原因でエミルと喧嘩したこと、初戦闘で獲物を横取りされたこと。エリエはそれを嫌な顔一つせずに『うんうん』と相槌を打ちながら、熱心に聞いてくれた。

引っ込み思案な星が、エリエには不思議と色々相談できたことに、自分でも驚いていた。

普段は誰にも相談なんてすることがなかった星にとって、その感覚は新鮮そのものだった。

エリエは星の話を一通り聞くと、神妙な面持ちで徐に口を開いた。

「そう、大変だったんだね。でもエミルっていう人は、きつと突然居なくなつたあなたの事を心配していると私は思うよ?」

「そうかもしれないですけど……でも、迷惑かけちゃって……もう、なんておわびしたらいいのか……」

しょんぼりとしている星を見て、エリエはまるで自分のことのように深刻そうな面持ちで考え込んだ。

真剣に考えてくれていているエリエの姿を見て少し嬉しくなり、星の顔からは自然と笑みが溢れる。

エリエは笑顔を見せる星に不思議そうに首を傾げながら「どうして笑っているの?」と尋ねてきた。

「いえ、人に相談したのって初めてで、なんか嬉しくなつちやつて……」

「そうなの? まあ、人に相談するのって勇気いるしね。なんとなく分かるかな。誰でも愚痴を言いたくなる時もあるから……」

「愚痴ですか?」

自分の言葉が愚痴なのか分からず、星は首を傾げている。

エリエは「そう!」と人差し指を立て笑みを浮かべた。

「とりあえず、星の悩みを解決しないとね!」

「は、はい。おねがします」

真剣な目で見る星に、エリエは顎の下に手を置きまた考え始める。それからしばらく考えたエリエは「そうだ!」と、何かを思い付いた様にポンと手の平を叩く。

星はそんなエリエの様子を、不思議そうに首を傾げながら彼女を見上げている。

「明日、私も一緒に行ってその人に話してあげる!」

そうやってエリエはにっこりと微笑んだ。

だが、正直な所。何も言わずに城を飛び出した星はエミルに会いたくない。

案の定、星はエリエの出した提案に表情を曇らせている。

人と揉めるのも初めてだった星にとって、その反応は自然だったのだろう……おそらく。彼女にとってこの問題は、犯罪を犯したくらい的大事になっているのだ――。

「えっ? でも……」

「でもじゃない。星はその人にお世話になったんでしょ? なら、お礼を言わなきゃ! そうでしょう?」

「そ、そうですけど……」

そうやって微笑むエリエに、星は俯き加減で答えた。

確かに星はエミルに断りもなく城を飛び出してきたのだから、エリエの言う通り謝罪もお礼も言っていない。

しかし、内気で口下手な星にとって、エミルに会ってお礼を言うというのはとても困難なことなのだ。

星は瞳に涙を浮かべ俯きながら、口をつぐんだまま微動だにしないかった。

エリエはそんな星の肩をぽんぽんと叩くと、星の耳元で優しく声でささやく。

「――大丈夫。お姉さんに任せなさい? もし怒られたら、私が星に代わって謝ってあげるから、安心しなさい!」

「本当ですか? 一緒に謝ってくれますか……?」

心配そうに呟き、上目遣いで、すがるようにエリエの顔を見上げる星。

その頭をエリエは優しくぽんぽんと叩くと『任せろ』と言わんばかりに親指を立てて微笑んだ。

家出3

「さてと、もう遅いし寝ましようか。ちょっとテントを出すから、星は危ないから少し離れててもらえる？」

「は、はい」

エリエはコマンドを操作したかと思うと、彼女は現れた座布団程の大きさの青い布の塊を抱え、辺りをうろろると動き回っている。

「うん。ここが良さそうね！」

エリエはそう独り言の様に呟くと、草の生えていない地面がくつきりと出ている場所に持っていた布の塊を置いた。

すると、次の瞬間その布の塊は大きくなり2人の目の前には立派なテントが現れる。

「よし。もう中に布団とかも敷いてあるから、すぐに寝られるよ！」

「そうなんですか!？」

星が驚いた様子でエリエに尋ねると、エリエは「うん。もうばつちりだよ！」と自信満々に胸を叩く。

星は半信半疑でテントの中を覗いてみると、彼女の言う通り布団が敷かれていて、目覚まし時計やぬいぐるみなどの小物も数多く置かれていた。

上半身だけをテントの入り口に突っ込んで中を覗いていたのだが、突然そのお尻を押され中に押し込まれた。

「——きゃっ!？」

小さな悲鳴を上げると、星の体は布団の上に投げ出され。驚いた様子でテントの入り口を見ると、そこには笑みを浮かべているエリエの姿があった。

突然背中を押され怒ったのか頬を微かに膨らませて、星は不満そうにエリエに告げる。

「なっ、なにするんですか!？」

「えっ? 何っていつまでも中に入らないんだもん。もう眠いし……明日やることも決まったし。ゆっくり休んでおかないとね!」

エリエはにやりと悪戯な笑みを浮かべると、近くにあったうさぎの

ぬいぐるみを掴み「それ！」と星に向かって投げた。

星はそれを胸でがっしりと受け止めると、どうして急にぬいぐるみを投げられたのか分からず、動揺した様子でエリエとうさぎとを交互に見てきよとんとしてている。

「あ、あの……これ……」

「ああ、なにもないと寝れないでしょ？ 私、ぬいぐるみないと眠れなくて」

そう言っただの本人も、テントの端に置いてあつたくまのぬいぐるみにダイブした。

それから2人は布団に寝転がりながらテントの天井を見上げてみるとエリエが、お腹を押さえながらぼそつと呟く。

「ううう。なんだか、お腹空いてきた……」

「……えっ!?!」

その言葉に星は驚き思わず体を起こした。

それもそのはずだ。先程まで串に刺さった肉を30本近く頬張り。さらには、食後のデザートと称し30cmもあるチュロスまで平らげたこの少女は、まだ食べ足りないと言うのだ。

それを見た星は、驚きを隠せない表情で「まだ食べるんですか!?!」と彼女に尋ねた。

すると、不思議そうな顔をして呆気なく「だって横になるとお腹空かない?」とエリエは反論しつつ、飛び起きてコマンド画面を開いて何か探し始めた。

星は半分呆れたように溜め息を吐くと、横になり手に持っていたぬいぐるみをぎゅつと抱きしめてゆっくりと瞼を閉じた。

そんな星の体を揺り起こすと、エリエが声を掛けてきた。

「ねえ。もう食べないの? 今度のも美味しいよ」

「ううう……もう、お腹いっぱいじゃありませんよ。寝かせてください……」

星にそう言われ、エリエは子供のように頬を膨らましてふてくされながら呟く。

「つれないなあ。いいもん一人で食べるから! 後で欲しいって

言っても、あげないんだからね！」

星が目を閉じていると、横からむしやむしやと口を動かす音が聞こえてきて、それが気になってなかなか寝付けない。

(うう……眠れない。何を食べてるかも気になるし……)

そう思い彼女の方に目をやると、円柱型の茶色い何かを口一杯に頬張っている。

口に入れているということは、食べ物であることは間違いないのだが、暗くてそれが何なのかまでははっきりと確認することはできない。

星は気になり思わずそれが何なのか聞いてしまった。

「——なんですか？ その食べ物……」

「うあう……こえ……こへあねえ〜」

「……………食べてからでいいです」

まるでリスの様に頬を膨らませて喋っているエリエに、星は呆れ顔でそう告げると彼女は口を手で押さえながら頷く。

ようやく口の中の物を食べ終わり。エリエは嬉しそうに、満面の笑顔浮かべながら話し始める。

余程、星が自分のお菓子の興味を持ってくれたことが嬉しかったのだろう。彼女はにこにこしながら、食べていたお菓子を星に自慢げに見せた。

「これはカヌレ。フランスのお菓子よ。味は……そうだなあー。食べた方が分かるかな？ はい。あーん」

エリエはマフィンの様なお菓子を手に持つと、につこりと笑みを浮かべながら星の方に突き出している。

手でそれを受け取ろうとしたら、お菓子を持っていた手を引つ込められた為、恥ずかしさから頬を軽く赤らめながら仕方なく口を開く。

星が口を開けると同時に、エリエは「えい！」と星の口の中にカヌレを思いきり押し込んだ。

「……………あ〜んんッ!？」

星は突然お菓子を口の中に押し込まれ、驚き目を丸くさせている。それもそのはずだ。お菓子とはいえ、突然まるまる一個を無理やり

口の中に押し込まれれば誰だって驚く。

とりあえず。このままだと息ができずに窒息の恐れがあると、身の危険を感じた星は懸命にもごもごと口を動かし、どうにか口の中のそれを飲み込んだ。

「はあ……はあ……はあ……。こ、殺す気ですかッ!？」

星は涙目になりながら、怒りに満ちた表情で笑っている彼女の顔を睨む。

しかし、彼女は全く悪びれた様子もなく、にこにここと微笑みながら「おいしかった?」と星に尋ねてくる。

「——飲み込むのに必死で、美味しいかなんてわかりません!!」

星はそんな彼女に大きな声で言い返すと、エリエは驚きながら目を丸くして「必死に食べるくらいおいしかったんだね。もつとたくさんあるから、たと召し上がれ」と、嬉しそうににつこりと微笑んでいる。

どうやら、星の意思は彼女には伝わっていないらしい……。

エリエは半強制的に星にカヌレを手渡すと、自分もまたもぐもぐと食べ始めた。星も、もう一度パクつと噛み付くと、今度はしつかり味わうように口を動かした。

その味は、外はカリカリで中はもっちりとした生地で甘く。でも、どこか苦味もある深い味わい。

——しいて例えるならば、プリンを濃くしたような味だった。

数えきれない程のカヌレを食べたエリエは満足したのか、そのまますぐに寝入ってしまった。

星もさすがに疲れたのか、うさぎのぬいぐるみを抱きながら枕に頭を沈めた。

普段何も持たないで寝る時よりも、ぬいぐるみを抱いている方が不思議と安心感がある。

しばらく経って、そのまま星もすやすやと寝息を立てた。

その翌日。星が目を覚ますと、隣に寝ていたはずのエリエが居ないことに気が付く。

彼女を探し星がテントの外に出ると、焚き火の上に鍋を乗せて何かを調理しているエリエの姿を見つけて声を掛けた。

「エリエさん。早いですね……」

「あ、星。おはよう！ ちょっと待っててね朝食作るから、そうだ。向こうに行つたところに川があるから、そこで顔洗つてきな」

「はい」

エリエは遠くの方を指を差して、再び鍋の中を見つめている。

(きつとお菓子作りが上手いから、お料理も得意なんだろうなあ)

星は朝食を期待してうきうきしながら、エリエの言う通りに川へと向かって歩き出した。

川で顔を洗つてエリエのところに戻つた時には、もう朝食の用意ができていた。

「はい。どうぞー！」

「うわ。おいしそうですね！」

星は目の前に出された朝食に目をキラキラと輝かせている。

そこにはオムレツに、いちごジャムをたっぷり塗られたトースト、それとコーンポタージュスープが御膳に置かれていた。

星は手を合わせ「いただきます」と嬉しそうにオムレツを口に運んだその瞬間。星の動きが止まる。

(……甘い。凄く甘い……)

そのオムレツは星が想像していたよりも数倍は甘かった。これではまるでデザートだ……。

手を止めた星が横に座っているエリエに目をやると、彼女はそれを美味しそうにぱくぱくと食べ進めている。

星は自分がおかしいのかと首を傾げ、今度はスープをスプーンですくい口に運んでみる。

しかし、結果は同じで想像以上に甘い……つというか。それはまるで、砂糖を溶かしてそのまま飲んでいるかのような錯覚を覚えるほどだった。

「……あの。このスープ少し甘すぎませんか？」

星が勇気を出してエリエに尋ねると、彼女は「そう？ 調度いいよ

？」と言いながら、また美味しそうに食べ始める。

その返答を聞いて「あ、そうですか」と諦めたように呟くと、スープの入った器を見つめる。だが、せっかく彼女が作ってくれたものだ。残すのも悪いと思いい仕方なく、甘いスープを少しずつ口に運んだ。

「うう。きもちわるい……」

星は聞こえないように小さく呟いた。

何度も心が折れそうになりながら、やっとの思いで朝食を終えた星は、テントの中でぐったりとしている。

朝から甘い物を食べて気持ちが悪くなったのか、顔色が非常に悪い。

そんな星を心配してか、エリエが水を持ってテントの中へ入ってきた。

「大丈夫？ 凄く顔色が悪いけど……」

「ありがとうございます。ちよつと、気分が優れなくて……でも、少し休めばよくなると思うんですけど……」

星はそういうと体を起こしてエリエが持ってきた水を飲んで、また横になる。

「気持ち悪いって言っても。私、回復系のアイテムとか持ってないし……あ、そうだ！」

そういうと、エリエはコマンドの中から茶色い紙袋を取り出す。それを見た星は、またお菓子でも取り出すのではないかと心配になる。

エリエは「ちよつと待ってて」と言い残し、その紙袋を持って鍋の方へと駆けていく。数分後、エリエが水筒を持って戻ってきた。

「効くかは分からないけど、これを飲んでみて」

手に持っていた水筒の中から、エミルは茶色いお茶のようなものをティーカップに注ぎ入れて星に手渡した。

星はカップに鼻を近づけ匂いを嗅いでみると、カップの中の液体からはほのかにレモンのような香りが漂う。

「……………これは？」

「レモンティーだよ。気持ちが悪い時には、こういうのが効果あるってある人から聞いた事があるんだ。まあ、ゲームだからどうかは分からないけど、気休め程度にはなるんじゃないかな？」

「へえ〜」

星はそれを聞いて、安心した様にカップに口を付けて飲んでみる。

レモンの香りと酸味で口の中がさっぱりする。心なしか胃のむかつきも抑えられた気がする。

「エリエさん。ありがとうございます。少し気分が楽になった気がします……」

少し顔色が良くなった星の様子に、エリエもにっこりと微笑みを浮かべ。

「そう。なら良かった！ でも、あまり飲み過ぎると逆効果だからね。ゲームの中で食べた物は先に入った物から遅い順で3種類の味が大小違って変化するの。お水を飲めばリセットするんだけどね！ まあ、一度気持ち悪くなると水を飲んだくらいじゃ効果はないけど……今は効果があつたくらいで止めておいた方がいいよ？」

「はいー」

星は返事をする。「もう少し横になっていた方がいいよ」というエリエの言葉に甘え少し横になった。

このゲームでは味覚は敏感に調整されている。それは様々な物をゲーム内で楽しめるといふ観光要素も強めに押しているからだ。

その中でも「ゲーム内の味覚再現システム」と呼ばれる味覚を再現するシステムは、精巧に作り込まれていることでも有名だ。

人は本来。情報の殆どを視覚に頼っている為、見た目と味が少しでも異なる違和感を感じてしまう。

例えるならば、見た目はステーキなのに味が明らかに豆腐だった場合。最初からステーキを食べようと思っていた者は必ず不満を感じるだろう。

しかし、何の情報もなく目隠しをしてそれ食べさせられれば、全く不満を感じることはない。

それが、視覚情報と味覚の関係性だ——その誤認識を少しでも少な

くしようとして、開発当初から試行錯誤を進め。やっとの思いで「FREEDOM」の運営はこの味覚再現システムを構築させた。

だが、勿論。人が作り出したシステムである以上、自然に生み出された人と同様とまではいかない。

その結果が今の星の症状とも言っている。

再現されたシステムは個々を忠実に再現したことで、複数の食べ物を一緒に摂取することを想定していなかった。

それが食べ合わせというかたちで、皮肉にも互いの味を主張しすぎて違和感を増幅させてしまうのだ。

慣れれば、水でリセットして次の食べ物を食べるということが習慣化するが、星はまとめていっぺんに様々な食べ物を口にしたため、脳が不快感を露わにしたということだ――。

家出4

いつの間にか寝てしまっていた星が目を覚ますと、すっかり吐き気も治まり、普段通りに戻っていた。

ゆつくりと布団から起き上がった星は、エリエの姿を探してテントの外へ出る。すると、エリエの横に昨日見た侍の格好をした怪しい男が隣りに座っていて、エリエと楽しそうに話をしている。

星は恐る恐る近寄って行くと、エリエに声を掛ける。

「……エリエさん。ありがとうございます。おかげで治ったみたいです」

「それは良かった！ でも、あまり無理しないでね？」

「はい。それで……あの、そちらの方は……？」

星はエリエの耳元で小さな声で尋ねる。

すると、エリエはにこっと笑いながら、侍の格好をした男を星に紹介した。

「こちらは私が昔所属してたギルドの先輩でデビッドだよ。別名サムライもどきだけどね……」

「誰が侍もどきだ！ そして俺の名前はデビッドだ！ っというかフリーダムではガイアと呼んでくれ！ 後、サムライはな。男のロマンなんだよ！」

デビッドは顔を真っ赤にしながら大声で叫ぶ。

そんな彼を見て、エリエは少し馬鹿にしたようにくすつと笑うと、小馬鹿にしたように両手の平を上に向けて呆れ顔でため息を漏らす。

「——細かい事を気にすると、女の子にモテないよ？ せ・ん・ぱい。ぶ・ぶっ……」

エリエは怒っている彼にさらに日に油を注ぐ様に発言をして、悪戯な笑みを浮かべている。彼の次の反応を楽しんでいるか、次にどんな行動に出るのか楽しみで子供のように瞳を輝かせるエリエ。

デビッドはそんな彼女の様子を見て諦めたのか「もう好きにしてくれ」と大きなため息をつき、呆れ顔で頭を押さえた。

星はデビッドの側まで行くと、彼の顔を見上げる。

「星です。あの……よろしくお願いします……」

星は丁寧に頭を下げると、デイビッドは微笑みながら言った。

「——君が星ちゃんだね。話はエミルから聞いているよ？ 君が居なくなつて、彼女も凄く心配してたぞ？」

「えっ？ そ、そうですか……」

星はそれを聞いて、急に表情を曇らせた。

それもそうだろう。この人がエミルを知っているということは、エリエもエミルの知人という可能性が高くなる。そうになると、星は最初からエリエに騙されていたことになる。

結局、星は初めからエミルの思い通りになっていた。つと、そういうことになるのだ。星の今までのエリエに対する信頼が一気に揺らぐ。

「そういうえば、どうしてエリエが星ちゃんと一緒に居るんだ？」

「うくん。……成り行きで？ 丁度、こんな状態だからお金稼ごうと思つて、始まりの森にきたらフィールドボスに出会ったんですよ。そしたら、ボーナスで思つてたよりも多く高級霜降り肉が出ちゃつて、その場で調理してたらばつたりと——」

「——ばつたりつて……しかも。ここのフィールドボスつてモディールバイソンだろ？ あれを一人で倒したのか!？」

エリエが何食わぬ顔で頷くと、デイビッドはエリエの話を聞いて、身を仰け反らせるほどに衝撃を受けている。

それもそのはずだ。モディールバイソンと言ったら体長が5m近く体重も2トン以上はある。簡単に説明するなら、それはワゴン車と喧嘩するようなものだ。

普通なら、そのクラスのモンスターと戦闘する時はパーティーを組んで討伐するのがセオリーとなっているのだが。しかし、この少女はその強敵をたった1人で倒したというのだから、彼が驚くのも無理はない。

「別に死ねば教会で復活するんだし、それに私が敵の攻撃に当たらないのはデビッド先輩が一番よく知ってるでしょ？」

少女は涼しい顔でそう言い放つと、デイビッドはまた大きなため息

をついて頭を押さえながら口を開く。

「どうやら、エリエは今のこの状況が運営によるパフォーマンスかなにかだと思っっているようで、まったく言っつていいほど危機感を覚えおらず、それどころか楽観的に考えているようだった。」

「はあく。俺はデビッドじゃなくてデイビッドだ……それに今は、口グアウトできないという話でフリーダム中が大騒ぎになっている。しかも、俺の掴んだ情報によると、死んで教会でいつも通り復活できないらしい……」

「へえ。あつ！ 大丈夫。きつと死んでみれば分かりますつて！」

「試しにデビッド先輩が死んでみてくださいよ」

「誰が死ぬか！ 誰が!!」

「デイビッドはエリエのその楽観的な提案を全力で否定すると、エリエはつまらなそうに口を尖らせた。」

(まさか、昨日の雄叫びは……)

星はモディールバイソンの話を聞いていて、昨日の夜の雄叫びを思い出す。

「デイビッドが怒りながら小言を言っつていて姿を見て、怒られている当の本人は「あははは」と指を差して怒っつている彼のその顔を笑っつている。」

「そんな彼女に、星は昨日のことを聞いてみることにした。」

「あの……昨日の夜に雄叫びを聞いたんですけど、それっつてももしかして……」

「雄叫び？ 星。それはどんな鳴き声だった？」

「エリエはまだぶつぶつと小言を言っつているデイビッドを無視して、星の方を振り返っつて尋ねた。」

「えつと……ブロオオオつて感じの鳴き声でした……」

「ああ、それはモディールバイソンだね。でも、もう食べちゃつたし……大丈夫だよ！」

「ええつ!？」

「それを聞いた星は慌っつて自分のお腹を押さえると、不安そうな表情で眉をひそめる。」

エリエは悪戯な笑みを浮かべると、星の耳元で「もしかすると明日
辺り。星のお腹を破って出てくるかもよ」と小さな声で脅かす。

星はそれを聞いて急に青ざめさせ、怯えたようお腹に手を当てて
「ごめんなさい」と何度も念仏のように唱えながらその場に蹲る。

『やばっ……ちよつと脅かし過ぎたかも……』と思ったエリエは慌て
て、涙目で真剣に謝る星に「冗談だよ。そんな事ないから大丈夫!」と
言ってその頭を撫でた。

「本当ですか?」

星は涙で潤んだ瞳をエリエに向けると「うん。大丈夫!」とエリエ
はにっこりと微笑んで見せる。

そこに突然、神妙な面持ちでデイビッドが声を掛けてきた。

「——星ちゃん。エミルが会って話がしたいって言うんだけど……ど
うする?」

デイビッドのその言葉に、星はまるで人形のように固まってしまう。

星の頭の中ではエミルに会って何を話せばいいか、どう謝れば許し
てもらえるのか、そして何よりも会って本当に話ができるのか?など
というマイナスな考えだけが堂々巡りしていた。

そんな星のことなどお構いなしに、隣に立っていたエリエが徐ろに
口を開く。

「ああ、星は今日。エミル姉の所に行く気でいたからって伝えとい
てよ!」

「そうか、分かった。ならエミルにはそう伝えておく」

「えっ!? あっ……あの……」

「うん! お願いね〜!」

デイビッドは頷くと、メッセージを送ろうとコマンドを開いてメッ
セージを書き込んでいる。だが、星はその一瞬の隙きを見逃さなかつ
た。

(今ならまだ間に合う!)

そう思った星は、慌ててデイビッドの手を掴んだ。

「ちよ、ちよつと待って下さい!」

星が声を上げてその腕を引っ張ると、デイビッドは申し訳なさそう

に口を開いた。

「いや、待つて上げたいのはやまやまんだけど……今ので、送信ボタンを押しちゃったから……」

「……え？」

見逃さなかったものの、間に合ってたが運がなかったようで……。

その言葉を聞いて星の頭が一瞬で真っ白になる。

「そ、そんなぁ……」

星は力なくその場に座り込んだ。『もう後には引き返せない』という事実だけが、星に重くのしかかってくる。

結局その場の雰囲気の流れされる形で、エミルの所に向かうことになってしまった。

「大丈夫。私がついてるし！」

「は、はい……」

星はエリエに「大丈夫だよ」と励まされながら、とぼとぼとエミルの城へと向かって歩く。

それからしばらく経って、エミルの城が見えると星の足はまるで鉛が付いているかのように重くなり、それ以上歩くことができなくなってしまう。

顔を青ざめさせたまま重い足取りで歩いてきた足が止まったのを見て、星を心配してかエリエが星の顔を覗き込む。

「星。大丈夫？ 顔色も悪いし。少し休憩する？」

「はい……」

星が頷いて近くの草の上に座ると、大きくため息をついた。

成り行きでエミルの城の近くまでくることになったが、星はそれでも、未だに心の整理がつかないでいた。

その時、デバイスがメッセージ画面を開いているのが見えた。おそらく、エミルに連絡を入れているのだろう。

「はぁ……エリエさん。やっぱり私エミルさんに会うのは……無理かもしれない」

「どうして？ ここまで来たんだし頑張ろうよ！ もう目の前なんだよ。」

「そうですけど……」

暗い表情で俯いたままの星に、エリエが優しい声で言った。

「確かに怖いかもしれない。私も星の気持ちは分かるよ？ でも、逃げたってその時は楽になるだけで、後で絶対後悔する……」

「――後悔……ですか？」

星はエリエの言ったその意味が分からずに首を傾げている。

だが、エリエのその表情には謎の説得力がある。彼女も以前どこかでそういう経験があるのだろう。

「うん。嫌な事から逃げてよね。必ず後で自分に返ってくるようになって神様が決めてるんだよ？ だから、嫌な事にも逃げずに立ち向かわないと……それに星は一人じゃない。私もいるでしょ？」

「……エリエさんも？」

「うん！」

星は不安そうな顔でエリエを見つめると、彼女は自信満々に首を縦に振った。

（一人じゃない……それに謝って帰ってくるだけなんだから、頑張らないと！）

エリエの『一人じゃない』その言葉に勇気づけられ、心の中で決意を新たに立ち上がり、再び城に向かって歩き出した。

再会

城に着いた星が城の中に入ると、さつきまでの決意がだいぶ昔のことのように感じてくる。

体が震え出し、まるで別の人の体かと思うくらいに、まったく言うことを聞いてくれない。星が廊下を一步踏み出す度に、体が鉛のように重くなり、呼吸も荒くなっていく。

その時、部屋を飛び出し、城の長い廊下を全速力でエミルが走ってくるのが見えた。

徐々に迫ってくるエミルに、星は思わず視線を逸らしてしまう。最初は、これ以上エミルに迷惑をかけたくない一心で部屋を飛び出したはずだった。

迷惑をかけたくないという強い思いが、自分が居なければという結果に行き着いたのだった。しかし、それはエミルに二度と会わなければの話だ――。

だが、星の思惑は外れ。またこうして、ここに戻ってきてしまった。それが今の星の中で、エミルに会うことへの恐怖心へと変わっていたのだ。

(どうしよう……きつとすぐく怒られる……)

怯えながら、俯き加減にその場に立ち尽くしている星の前でエミルが立ち止まった。

そのエミルの足が怯えて俯いている星の瞳にはしつかりと映っていた。

「……星ちゃん。急に居なくなっって心配したのよ?」

「す、すみません……」

気まずい雰囲気のまま、2人の間には沈黙が流れた。

「どうやって部屋から出たの?」

「そ、それは……」

星は表情を曇らせ、口を閉ざしてしまう。

それもそうだ。とても小窓から出て、近くの塔まで渡ったなんて言えるはずもない。もし、そのことがエミルに知れば、もつと怒られ

ると思ったからだ。

(嫌われる……怒られる……叩かれる……)

そんな考えが、ぐるぐると星の頭の中を駆け巡る。

その極度の緊張から全身が震え出し、心臓は壊れるほどに脈動して
いて、全身から血の気が引いていくのが分かった。

無言のまま立ち尽くしているエミルを前にして、星は強く瞼を閉じ
て、次にくるであろう衝撃に備えている。

「あつ……あの……ぐめんなき——」

星が謝ろうとした次の瞬間。星の考えとは逆に、星の体を包み込む
温かく柔らかい感触にゆっくりと瞼を開く。すると、星の体はエミル
の腕によつてしっかりと抱き締められていた。

星はびくつと体を震わせ、何が起きたのか状況が読み込めずに目を
大きく見開いて呆然とその場に立ち尽くす。

そんな星の耳元でエミルが優しい声でささやく。

「——無事に帰ってきてくれて良かった……また襲われてなくて、本
当に良かったわ……」

「……えっ?」

星はエミルの口から出た言葉に驚き、目を丸くさせている。

てつきり有無を言わず殴られると思っていた星にとって、エミル
の取った行動は意外なものだったからだ。

「……どうして? どうして、怒らないんですか?」

「えっ? どうして怒るの必要があるの?」

不思議そうにエミルの言葉に、星は瞳を潤ませながら彼女の顔を見
上げた。

その後、震える声で首を傾げているエミルに尋ねた。

「だって……わ、わたしは……いけない事を……したんですよ?」

「……そうね。そうかもしれないわね……」

エミルは星の体を抱きしめたまま頷き、星の頭を優しく撫でた。
だが、そのエミルの優しさが星の心を罪悪感でいっぱいにする。

「……おこつて……ください……」

「ううん。私にはあなたを怒る資格はないもの……」

「……やさしく……されると……わたし……どうしたらいいのかわからない……です」

エミルは体を震わせながら泣き続ける星を「大丈夫よ」と耳元でささやき、怒ることなどなくただ優しく抱きしめる。

そんなエミルに星はどうしたらいいのか分からずに、嗚咽を漏らしながら泣き続けている。

「——全部分かっている……分かっているわ。星ちゃんが迷惑をかけたことなく、私から離れたことは分かっているから……もう泣かなくていいのよ。」

「でも……でも……わたしは——」

「——ううん。星ちゃんは人を思いやれる優しい子だもの……そんな子を叱る事なんてできないわよ……」

その言葉を聞いた星の瞳からは、再び大粒の涙が止めどなく溢れ出す。

「あつー そうだ……」

ぼろぼろと涙を流し続けている星を見て、何かを思い出したようにエミルはコマンドを操作した。

エミルは徐に剣とカバンを取り出すと、それを星の目の前に差し出した。

「——これって……」

「そう。あなたが部屋に置いていった物よ……これはあなたの物でしょ？」

「……えっ？」

星はそれを見た途端。不思議そうな顔で首を傾げ、エミルを見上げる。

エミルが今自分に差し出している剣は、元々エミルの物で、襲ってきた男達も高い物だと言っていたから返したのだ。その荷物に關しても、お世話になったお礼にと、わざと置いていったものだった。

エミルは星に向かってにっこりと微笑んで、優しい声音で告げた。

「……星ちゃん。これはもうあなたの武器よ？ 襲われた時。凄く辛くても……あなたはこの剣を手放さなかったでしょ？」

「でも、それは——」

困惑した表情で星が口を開いた直後、エミルが割り込むよう口を開いた。

「——いいの……私ならきつとあの状況でこの剣を手放してでも逃げたと思う。でも、星ちゃんは最後まで逃げなかつたでしょ？　だから、この剣はあなたに感謝してると思うの」

「感謝……ですか？」

エミルはきよんとした顔で首を傾げている星に優しく微笑んでゆつくと頷く。

だが、星は複雑な気持ちだった。物が感謝しているなんて、今までに誰にも言われたことがない。

それに星は剣を守ったのではなく、エミルとの関係が壊れるのが嫌だったから、襲われた時も必死に手放さなかつただけなのだ。

エミルは星の手に剣をしっかりと握らせると、にっこりと微笑んで星の頭を撫でた。

星は自分の手に握られたその剣をじつと見つめていた。

「そういえば、エリーが星ちゃんと一緒に居てくれたのね。ありがとう。助かったわ！」

「うん！　会うのも久しぶりだよね！　エミル姉と会うのは、ギルド解散して以来だよ」

エミルがエリエにお礼を言うと、エリエは待つてましたと言わんばかりにエミルに抱き付く。

嬉しそうにエミルの胸に頬ずりしているエリエに、エミルも慣れた様子で微笑みを浮かべ、彼女の頭を撫でている。

その時、頭を掻きながらバツが悪そうに、デイビッドが2人に声を掛ける。

「いや、お取り込み中悪いんだけど……こうして昔の仲間が3人揃つたんだし、どうだろう。今後の事をじっくりと話し合わないか？」

デイビッドのその提案に、2人は真剣な面持ちで首を縦に振った。

4人はエミルの部屋に集まり、神妙な面持ちでテーブルを囲んでいる。もちろん、星もその中に混じって話を聞くことになったのだが

……。

「まず。俺が集めた情報によると、死亡したら復活できないというのは、結構確かな情報らしい……俺も聞いた話だから実際に目で見たわけじゃない。だから、断言はできないが、ログアウトできなくなった直後、パーティーを編成しての戦闘中に、死亡したプレイヤーがいた。その仲間の話によると、不思議な事に死亡したプレイヤーの名前が、パーティーのメンバー内から消えていたという話だ……おそらくは死亡したと同時に、ゲーム内からもそのプレイヤー情報も【Delete】されたと考えるのが普通だろうな……」

重苦しい雰囲気の中、深刻そうな表情で話をするデイビッド。

「ちよつと待って！ それは少し性急過ぎる解釈だと思うわ。そのプレイヤーがただ死んでしまったのを申し訳ないと思っ、パーティーから抜けただけという可能性も捨てきれないかしら？」

デイビッドの話を聞いてたエミルが透かさず、言葉を返した。

2人は真剣な面持ちで互いの目を見合うとしばらくして、きちんと椅子に座っていたデイビッドが脱力する。

その言葉に反論するわけでもなくデイビッドは「そうなんだよなあー」と顎の下に手を当て一瞬考え込んだが。

「まあ、結局のところ。全て憶測でしかない。実際に目の前で誰かが死亡したわけじゃないし。俺も正しい事は分からないわけだしな。でも、だからといって事実を確認する方法がない以上はどうしようも——」

デイビッドが話をしている最中に、今まで黙っていたエリエが口を挟んだ。

「——だから、デビッド先輩が体を張ればいいってさつきから言ってるのに」

笑いながら今の状況を楽観視しているエリエを、むつとした様子のエミルがたしなめる。

「ごらー。エリーもそんな簡単に判断していい事じゃないのくらい分かっているでしょ？ そういう事は言うものじゃありません！」

エミルに叱られ、エリエはしよんぼりしながら「はい」と返事を

してつまらなそうに口を尖らせている。

3人のやり取りを見ていた星が突然手を上げ、搔き消えそうな声で言った。

「あの……それじゃー、私が試みましょうか？」

その場にいた全員が同時に星の顔を見た。

星は何か間違った事を言ったのではないかと、きよろきよろと3人の顔色を窺う。すると、エミルは呆れた様子で大きくため息をつく。

「……あのね、星ちゃん。そんなのダメに決まってるでしょ？ 本当に死ぬかもしれないのに……誰が試すかとかじゃないのよ？」

「で、でも……試してみないと、本当かどうか分からないですし……」

エミルに怒られても納得できない星は、小さな声でそう反論して静かに俯いてしまう。

それを見ていたデイビッドが、この空気を変えようと口を開く。

「とりあえず、まだ死んだ後に関する情報も少ない。ここは、皆死なないう様に気をつける事にすればいいじゃないのか？ それよりも、どうやってログアウトするを考えようじゃないか！」

デイビッドのその言葉に、エミルとエリエが顎に手を当てながら真剣な面持ちで考え始める。

そんな姿を見て、周りに合わせるように星も慌てて考える素振りを見せる。

その時、ふとモニターの中で話していた狼の覆面を被った男の言葉を思い出す。

『このゲームのフィールドのどこかに隠しダンジョン【現世界元の洞窟】がある。そこの【現世の扉】を潜れば現実世界へと戻れる。』

あの男の言葉が真実ならば、ダンジョンのどこかに現世の扉があるはずだ。そう考えた星が立ち上がり、自信満々に叫ぶ。

「このゲームの中のダンジョンのどこかにある。現世の扉から出ればいいんじゃないですか!？」

それを聞いた3人は揃って大きなため息をついた。

まあ、それがどこにあるのか分からないから、エミル達はこうして

困っているのだ。

星はその反応を見て自分の案がダメだったと察したのか「ごめんなさい」と小さく謝り椅子に腰を下ろした。

再会2

長い沈黙の後、エミルが神妙な面持ちで話し始めた。

「おそらく、あの男の話は本当だと私は思う。考えてみて、これだけの事件を起こす人間よ？ わざわざ嘘をつく理由が見つからない」

「だが、逆にそういう人間だからこそ、平気で嘘をつくとも考えられないか……？」

「確かに……出る方法があるなら、私達をここに閉じ込めておく理由もないものね……」

「うーん。とりあえず、情報が不足し過ぎている今の現状では、奴の目論見を推測のしようにも……」

エミルと意見をぶつけた後、デイビッドが苦虫を噛み締めた様な顔で眉をひそめた。

確かに今の現状でいくら推測しようが、実行犯である。あの狼の覆面の思惑を把握することなどできない。人の考えていることなど、当の本人以外は知り得ない。ということだろう……。

「……おそらく。出口は存在しているはず、運営側がこういう事態を想定していないはずがないもの……そしてもう一つ。シルバールフというグループは間違いなく運営内にスパイの様な人間がいるということ。そして、それもまた運営側は想定しているはずよ」

「なら、犯人グループにも分からないような場所に出口があるということか？」

「ええ、おそらく。ダンジョンのどこかに……」

2人はお互い顔を見合って頷いた。

エミルの言った通り、運営する会社がゲームをハッキングされることを想定していないはずがない。

世界的に人気の【FREEDOM】というゲームが、これほど爆発的にヒットできた要因として、このゲームが近代化に伴う新たなゲームジャンルの研究発展を目的として派生したプロジェクト『VRGP (Virtual Reality Game Project)』を開始した。

このプロジェクトは『国際連合機関 企業外貨獲得促進計画』の手厚いサポートを受けていたからだ。

長期的な産業の中でもゲームは、一般人の娯楽として世界に大きく浸透している。これに目を付けた国連が、世界規模の外貨獲得競争に乗り出した——各国が技術協力して、一般企業に負けないほどの自国の文化を題材としたゲームを開発していた。

長く続いた経済戦争に終止符を打つ為の国家間の協力策で、各国の技術の粋を結集して作り上げたのが、この「FREEDAM」なのだ。

それだけの規模のゲームだ。本来ならばセキュリティは万全だったはずだが、このゲームをハッキングし。しかも、ほぼ全域が口グアウト不能にできるほど資金力と人手があるのは個人の犯行とはとても思えない。

もし、この様な大規模なハックが可能となるならば、外部だけでは不可能だ——相当な数の内部協力者がいるといのは妥当な見立てだろう。

だが、それも運営は予測し、必ず解決策を用意しているはず。それに備えて一部の上層部しか知らない抜け穴があるとすれば、見つけ難い場所に隠されていると見るのが正しい。

真剣な面持ちのエミルが徐に口を開く。

「おそらく。これは推測だけど……運営の用意した脱出通路はなるべく人目に触れ難い。高難易度のダンジョンのどこかにあるはず……」「フリーダムで最高難易度の、レジエンドクラスのダンジョンということか!？」

エミルのその話に、デイビッドは血相を変えながらそう大きな声で叫ぶ。

その言葉に神妙な面持ちでエミルは首を縦に振った。すると、途端にデイビッドが険しい表情へと変わった。

フリーダムではダンジョンがクラスごとに分類されており、それによって難易度もそれぞれ異なってくる。

一番低いクラスでビギナークラス——フリーダムでのパーティー

メンバーの人数は最大で6人。このクラスは、1パーティーまたは高レベルプレイヤー2人で余裕でクリアできるレベルに設定されている。

二番目はアマチュアクラス——このクラスは基本Lv50以上が6人は必ず必要になる。

三番目がプロクラス——これは基本。上限のLv100が6人。即ちメンバー上限いっぱいでもクリアできるように基本的には設定されている。

それ以上のクラスはMAX、マスター、レジェンドとあり。これらのクラスは連合パーティーでの参加が最低限のクリア条件となり、その規模もダンジョンにより様々だ。

今話しているレジェンドクラスは未だにクリアした者がいないと言われるほどの高難易度のダンジョンで、Lv100でも装備次第では一撃で死亡するという噂もあるくらいだ——。

「それで、そのレジェンドクラスって基本は複数パーティーなんですよ？　なら、街で人集めるなりしないとじゃないの？」

エリエが不思議そうに首を傾げ尋ねる。

「そうなんだけど、今の街でメンバーを募集するのは少し危ないわね……」

「……そうだな。今は野良でメンバーを探すのは危険だと、俺も思う……」

「どうして？　普通に考えれば、街で募集しないとダメだと思うんだけど」

高難易度のダンジョン攻略には、多くのパーティーが必要となるのがセオリーだ。

だが、デイビットとエミルがエリエの出した案に素直に賛成できないのには理由があった。

それは第一に街の治安の悪化だ——今はPVPが個々の認証無しで自動に行える為、顔見知りでない者との接触は非常に危険な行為と言わざるを得ない。

運営が機能していない今。高レベルが3人というのは下手をする

と、全員が襲われアイテムなどを奪われる危険性がある。

なので、今街でのパーティーメンバーの募集は強奪を目的にしているブラックギルド達に襲ってくださいと頼んでいるようなものなのである。そして、もう一つ重大な問題がある。それは連携だ――。

運良くメンバーを集められたとしても、最高難易度のダンジョンに即席で組んだ連合パーティーなど殆ど意味をなさない。

小さな歪が大きくなり、最悪の場合はパーティー全滅という再悪の事態を引き起こすことをエミル達はよく知っていた。

「とりあえず、知り合いに当たってみて、そこから伝でギルドに応援を頼むってというのが確実な方法だと私は思うけど……皆はどうかしら？」

「私はエミル姉の意見なら全部賛成だよー」

エリエは微笑んで椅子から立ち上がり、嬉しそうに手を上げた。

デイビッドもゆっくりと頷きその意見に賛同する。

「そうだな、それがベストの選択だろう」

「私は全てエミルさん達におまかせします……」

星がそう口にする、エミルは少し困った様な顔をして星を見た。

周りとは明らかに違う反応をエミルにされ、星は不思議そうに「なんでしょうか？」とエミルに尋ねた。

エミルは少し言い難くそうにしたものの、しっかりとした口調で話す。

「星ちゃんも何か意見があれば、私達に遠慮しないで話して良いのよ？ それと、今後、おまかせしますは禁止ね」

「で、でも……」

俯く星にエミルは大きいため息をつく、星の前に人差し指を立てて言った。

「いい、星ちゃん。これからは、私達だけってわけにはいかないのよ？ もし他の人が混ざって「なんでもいいです」って言ってたら、あなたが一番危ない役回りにされるかもしれないの。言う時にはしっかりと発言しないとダメ！ 分かった？」

エミルに星は俯き加減に頷く。

それを見てエミルは星に優しく微笑んだ。その直後、エリエの不安

そんな声が聞こえてくる。

「でもさ、エミル姉。星の装備——このままじゃまずくない？」

エリエはそういうと、星の姿を目を細めてじっと見つめている。それを聞いたエミルとデイビッドの2人も、星の姿を見て真剣な面持ちで考え込む。

星は3人からの熱い視線に頬を赤らめながら俯く。自分ではなく装備を見られていると分かっているにもかかわらず、日頃から人の視線を浴びないようにと振る舞っていた星には、見つめられるのはやはり恥ずかしい。

その時、デイビッドが何かを思い出したようにコマンドを操作して防具を取り出した。

「星ちゃん。これを装備してみてももらえないかな？」

「えっ？　これをですか？」

星は驚いたようにその防具を見つめている。

それもそのはずだ。その防具は全体を鉄で覆われていて、まるでお寺にある鐘をそのまま小さくしたかの様な作りになっていた。

百歩譲って外見は良いとしても、とてもじゃないがゲーム内の補正効果が働いてても、重量的に子供の星には扱えそうな代物ではないのは明らかだ。

「まあ、見た目は良くないが。これが今エミルが装備している最大防御力の防具と同じ重量なんだ。これを着てみて、動けるかどうかで、これからの君の装備の方向性を決めたいと思う。どうだろうエミル」
「そうね。それが私もいいと思う。でもね、デイビッド……私達はヒントを教えるだけ——決めるのはあくまでも星ちゃん自身よ？」

エミルにそう言われデイビッドは、苦笑いしながら頭を掻いた。

場の雰囲気が悪くなったのを察したのか、星がデイビッドの出した重そうな鎧を装備してみる。

「うっ……お、重い……」

思った通り。星は鎧を装備するとあまりの重さに、足元がおぼつかないほどだった。

だが、装備してもすぐに倒れることがないのはおそらく、筋力補正

が掛かっているおかげだろう。

星はふらふらと体を左右に揺らしながらも、なんとかバランスを保っていた。その様子を見たエミルは、心配した様子で星に声を掛ける。

「星ちゃん。大丈夫？ やっぱり。かなり重いかな……」

「い、いえ。頑張ればなんとかかなると思います！」

心配そうな表情で星を見つめているエミルに、星は両手をブンブン振って平気だと最大限アピールした。

その時、星の体が鎧の重みで勢い良く後ろに倒れた。

「うう……痛い」

床に尻もちをついた星は、心配させまいと「あはは……失敗しちゃいました」と笑って見せる。しかし、その様子を見たエミルは慌てて星の体を起こすと、険しい表情で「これじゃとても戦闘は無理ね」と呟く。

始めから無理なのは分かっていたが、筋力補正が入ればもしかしたら……つという期待はあったのも事実。

だが、やはり圧倒的にレベルが低すぎて、筋力補正の数値もそれほど高くないのが最大の難点と言える。

デイビッドとエリエもさすがに転んだ星を見て、これはまずいと思ったのだろう。一瞬で表情を曇らせると、再び考え込んだ。

「戦闘も攻撃より回避重視でしょ？ なら、鎧より服を使った方が良いかな？」

エリエは少し考えた後にそう呟く。

だが、その言葉を聞いたエミルとデイビッドの表情は更に険しい表情に変わる。

それには理由がある。ここフリーダムでは防具を装備すると、防御力ではなく最大HP量が増加する。防御力はキャラクターがレベルアップするに従って徐々に上昇していく仕様になっている。

基本的に、全てのプレイヤーは上限のLv100でステータスが一定になるよう設定されている。

それでも足りない部分がある場合はHP、攻撃力、防御力、スピー

ド、攻撃速度の5つをそれぞれに装備などでバランスを取って自分のベストの装備を見つけていくのだ。防御力が欲しいなら盾を装備すればいい。だが、代わりにスピードのパラメーターが落ちる。

他にも装備によって様々なステータスに違いが出ることから、初心者はまず武器よりも自分に合った防具から揃えるのがフリーダムでは常識になっていた。

更にフリーダムでは、鎧の他に日常装備できるようにと服も装備できる。VRMMOではゲームとはいえ『視覚、聴覚、味覚、触覚、嗅覚』といった五感が現実世界とあまり変わらない状態で再現されている。その為、寝る時やくつろぐ時に重たい鎧のままでは何かと不便で仕方がない。

だから、多くのプレイヤーは戦闘以外では、日常で服を装備することが多い。ゲーム内では服専用店があり、衣類も豊富に揃えられている。また、一般のプレイヤーが経営している店も数多くある。

しかし、あくまで日常で着る為の物で、戦闘で服を装備することは裸でいるのも同然。

何故なら、服には装備した時にHP上昇や防御力上昇などの付属効果がないからだ——つまりは、裸同然で戦闘に及ぶことになる。

たまに速度特化のプレイヤーが防具の重さと煩わしさを嫌って、服を装備している場合もあるが、それは高レベルになって自身の防御力が上がり、HPよりも俊敏性を上げて攻撃を確実にかわせるという自信からくるものだ。

なので初めて数日しか立っていない星に、そんな強者の真似ができるはずもない。

エミル達は困り果て、深刻な顔で考え込んでいる。

再会3

その時、エリエが何かを思い出したように、手の平をポンツと叩き声を上げた。

「あつ！ あつた。いい解決法が！」

「どんな方法だ!? 教えてくれ！ エリエ」

デイビッドは驚いた様子でエリエの肩を掴む。

エリエはその行動に不機嫌そうに眉をひそめると、冷たい口調で小さく呟く。

「ちよつと、デイビッド先輩。馴れ馴れしいんですけど……」

「あつ、ああ。すまん……つて、俺の名前はデイビッドだ！ いやだから何度言えば分かるんだ……ここでの俺の名前はガイアなんだ!!」

顔を真っ赤にさせながら怒鳴っているデイビッドを見て、エリエはくすくすと悪戯な笑みを浮かべる。

おそらく。エリエはデイビッドが白人ということもあつて、彼の白い顔がはつきりと赤く染まるのを見るのが楽しいのだろう。

星は大事にならないかと、2人のやり取りをばらはらしながら見守っている。それに引き換え、エミルは至って冷静な様子でエリエに尋ねた。

「それで、エリー？ その解決法っていうのは……?」

「あつ、そうだった」

エミルに尋ねられたエリエは思い出したようにコマンドを操作し始める。すると、突然エリエの服が消え、彼女のレース付きのピンク色の下着が露わになる。

そのあられもない姿に、周りにいた全員が驚愕した。

「あつ……」

「……えつ? ええつ!」

「ちよつ! ちよつと、エリー!!」

星は困惑しながらも慌てて両手で顔を覆う。

突然下着姿になったエリエにエミルも声を荒げた。エリエは慌ててコマンドを操作すると、ピンク色のパジャマ姿へと変わる。

その後、エリエは茶目つ氣いっぱいに舌を出し「あははっ。失敗、失敗」と笑い飛ばすと、さつきまで着ていた服をエミルに差し出した。「とりあえず。エミル姉、これを装備してみよー!」
「もう。装備を外す時は気を付けないとダメでしょ? 誰に見られるかわからないんだからね!」

呆れ顔で告げるエミルにエリエは口を尖らせる。
「分かってるよ。別にエミル姉と星しかいないんだからいいでしょ?」

注意されたエリエは頬を膨らましてそう言った。反省しているのかしていかないのか、とにかく不服そうな顔のエリエの言葉に小さく「俺も居るんだが……」というデイビッドの言葉がスルーされたのは言うまでもない。

反省する様子もないエリエを見て、呆れながら大きなため息をついたエミルが彼女から服を受け取り装備してみる。

エリエの服を装備したエミルの姿に、星は思わず「うわあ。きれい……」と声を漏らした。

普段の銀色の鎧を身にまとっているエミルも素敵だが、エリエの白い布地にピンク色のフリルのあしらわれたドレスの様な可愛い服を着ると、普段凛々しい姿の彼女からは想像も出来ない可愛らしさを感じる。

だが、それがエミルの長く透き通るような青い髪が白とピンクの服と相まって、どこかの国のお姫様のように見えた。

まあ、普段からファンタジー小説を読んで空想の世界にどっぷり浸かっている星のとなつて、その光景はまるで、物語のワンシーンを見ている様だったに違いない。

瞳をキラキラと輝かせながらエミルを見つめている星とは対照的に、エミルは普段通り冷静に装備のステータスを確認している。

「こ、これは……」

驚いた様子で自分のステータス画面を見ている彼女に、エリエがここにこ微笑んでいる。

エミルの反応が彼女の予想通りのもので、本人も納得しているのだ

ろう。

「ちよつと、エリー。これはどうなってるの!？」

「おつ、エミル姉気付いた？　これはまだ多分、私しか気が付いてないと思うよ〜」

エミルは困惑した様子でそう尋ねると、エリエは更に楽しそうに笑みを浮かべながらその顔を見つめた。

「服を装備していてHPが増えるなんて……自分で見ているものが信じられない。いったいどうやったの?！」

「そんなの簡単だよ。アイテムを使って鎧と服を合成させたの。実はダンジョンの中に隠し通路があつてね、それをクリアすると——なんと!　トレジャーアイテムをゲットできるんだよ!」

「そんなところがあつたなんて……それで、そこはどこのダンジョンなの?！」

エミルは至つて冷静にそう尋ねると、エミルの反応が彼女の思つていたものとは違つたのだろう。

冷静に聞き返したエミルに、エリエは不服そう頬を膨らましてそっぽを向いてしまう。

その様子にエミルはエリエの頭を優しく撫でると「よく見つけたわね。さすがエリーね。えらいえらい」と褒める倒す。

それはまるで、拗ねた犬を飼い主がなだめる姿に似ていた。

デイビッドはそれを見て「そんな子供騙しでエリエの機嫌が直る訳がない」と呟いてエリエの方を見る。すると、エリエはパーっと表情を明るくさせ上機嫌で話し始めた。

「そうでしょ、そうでしょ!　頑張つたんだから!!」

「うん!　えらいえらい。それで、どこのダンジョンで見つけたのかしら?！」

「——もう。しかたないなあ。今日だけ特別だよ?　実はね——富士の遺産のダンジョンでゲットしたんだ〜」

自慢げにそう告げると、また褒めてもらいたそうに目を輝かせている。

エミルはその意図を汲み取つてエリエの頭を撫でると、顎の下に手

を当て考え込んだ。

ダンジョン【富士の遺産】は日本の富士山の『かぐや姫伝説』から作られたダンジョンだったが、難易度は高いものの。それほど良い報酬が得られない為、行く者も極端に少ない不人気ダンジョンだった。

本来はトレジャーアイテムの様な貴重なアイテムが出るような場所ではない。だが、エリエの装備がそのトレジャーアイテムを使用し作られたとすれば、今の星の防具の問題を手っ取り早く解決できる方法は他にはない。それだけで、そのダンジョンをクリアする目的としては十分なのだが……。

「でも、この人数じゃ少し不安ね……」

Emilは眉をひそめ、そう呟くと辺りを見渡した。

そう。自分を含めても今の人数は4人——その中で戦力になるのが星を除いた3人。それは、フルパーティーの6人の丁度半分の戦力しかない。

しかも【富士の遺産】のダンジョンのランクは『マスターランク』最低でも、レベル100のフルパーティーが10組以上は必要なクラスだ——。

しかし、この状況下で、それほどの人数を集めるのは至難の業だろう。 Emilの連絡の付く知り合いはエリエやデイビッドくらいのものだ。

もちろん。 Emilがぼつちなわけではなく、そうならざるを得ないのだ。 Emilは大会で、何度も優勝を繰り返しているトッププレイヤー中のトッププレイヤーだ——さすがに名の知れたプレイヤーになると、大会の優勝者に与えられる景品なんかを高値で売ってくれという者や、それ狙いで付き合ってくる者も必然的に多くなる。

それを嫌った結果。昔馴染みだけでフレンド登録をした為、フレンドの数が極めて少ないのだ。

こんなことになるなら、もう少し多くのフレンドを作っておけば良かったと、今の Emilは本気で後悔していた。

まあ、欲に塗れた者達が役に立つのか……っという思いもあるが、欲に塗れているからこそ、高額なアイテムには目がなく。大会の優勝

者に与えられる景品は一点物で、とても高値で取引されることを知っている。

そういう者達の方が意外と私欲で動きやすいのだ。死ぬかもしれない恐怖よりも、一点物のアイテムを仲間達に自慢したいという願望が強いのは、さすがネットゲーマーと言ったところだろう。

その言葉を聞いてエリエが口を開く。

「なら、マスターにお願いしてみる?」

「——マスターに? 私、あの人苦手なのよねえ。なんか独特の威圧感があつて……」

エリエの提案を聞いた、エミルはそうやって顔をしかめている。

2人の会話を黙ったまま、ただ眺めていたデイビッドが徐に口を開く。

「——なら、とりあえずこのメンバーで行つてみて、ダメだったら考える事にしないか? 慎重に進めば、俺達なら4人でも大丈夫だろ。もし、それでダメなら帰還すればいいんだし」

「そうね。でも……」

そう言ったエミルは不安そうな表情で星に視線を向ける。星もそれに気付いたが、大体の理由を察して無言のまま俯いた。

エミルは口には出さなかったものの、彼女が自分のことを気にしているということは何となくだが分かつていた。この場にいるメンバーの中で、戦力に成り得ない存在であることは間違いない。

デイビッドは気を利かせて4人と言ったが、それが星にはプレッシャーになった。自分が足を引っ張るのではないかという不安も相まってか、エミルと顔をまともに合わせる事ができない。

「エミル姉。人数が不安なら、私のフレンドから呼んでもいい?」

「えっ? あてもないし。なら、お願いしようかしら……」

「うんっ!」

エリエは力強く頷くと、チャット機能で誰かと会話を始めた。星はそれを不安そうに見つめている。

この時、星の心の中ではどうやってダンジョンに行くのをやめてもらえるか、頭の中で必死に考えを巡らせていたのだ。

星は話をしたことがある人なら気兼ねなく——とはいかないものの。上手く説得できる可能性もあると考えていたのだが、ここにさらに知らない人物が入ってくるとなると、さすがに断り難くなってきってしまう。

できる限りいいタイミングで話を切り出す為には、新たな人物の介入は避けたい。

何故なら、さつきもエミルが言っていた通り。圧倒的な戦力不足であることが分かっていたし、メンバーが集まらなければこの危険なダンジョン攻略を中止せざるを得ないだろう。

星は祈るような気持ちで目を閉じ『どうか、断られますように』と心の中で何度も念じた。しかし、その思いは通じず。会話を終わらせたエリエは、にこにこしながら「OKだって」と親指を立てた。

それを見て星はがっかりしたように肩の力を抜く。4人はその人物との合流の為、城を出て街へと向かう。

街に着くと、エリエが会話の人物と落ち合う約束をしたという店へと急いだ。

街には相変わらず活気がなく。人がいたとしても建物の中にまるで、何かに怯えるように集まっているだけだ。

その時、星の横を歩いていたエミルが、それを見てぼそつと呟く。「皆、ブラックギルドを恐れて、できる限り外出を控えているようね……」

「……仕方ないだろう。HPを1だけ残して、フィールドのモンスターの前に放り出されれば、どんなモンスターでも一撃もらえば死んでしまう。おそらく、PVPの承認をスキップさせることで、そういう連中を野放しにさせ、少しでもダンジョン攻略をしようとする者達を減らす。それが、この事件を引き起こした犯人の狙いなんだろうな……悔しいが、なかなか頭が切れてる奴だとは思うよ」

真面目な話をしている2人に先頭を歩くエリエが「デビッド先輩は頭固いもんね」と話に水を差すように横槍を入れる。

デビッドは顔を真っ赤にしながら「コラァー」と声を荒げると、エリエは小走りで逃げながら「そうやって、すぐ怒るから頭固いんだよ

く」と、なおもデイビッドを挑発している。

デイビッドも今度は耳まで真っ赤に染めると「エリエー！」と叫んで、全速力で走り出す。

それをあざ笑うかのように、エリエは脱兎のごとく逃げ出すと「捕まらないよ」と舌を出している。

「はあく。まったく、緊張感がないんだから……」

そんな2人を見て頭を押さえながら、エミルが大きなため息をつく。

緊張感しないのはいいことだが、これから高難易度のダンジョンに挑もうとしているプレイヤーの行動ではないのは確かだろう……。

「あの……エミルさん。頭痛いの大丈夫ですか？」

星は心配そうに見上げると、エミルはにこつと微笑みながら「星ちゃんの方がよっぽど大人ねえ」と星の頭を優しく撫でた。

再会4

2人の言い争いは結局、エミルに怒られたことでなんとか収まったものの、エリエとデイビッドが今度はギクシヤクシヤしながら並んで歩いている。

星はどきどきしながらその後ろを歩いていったのだが。後ろから2人を見ていると、エミルがいなくなれば再び言い争いを始めそうなほど険悪なムードを醸し出していた。

だが、星にはどうしてこの2人がこんなにも仲が悪いのか理解できない。エミル達の話の聞いていければ、結構長い付き合いのはずなのだが……。

つと考えてるそばから、また口喧嘩を始めている。それを呆れた様子でエミルが仲裁に入っていく。

そんな時、突如として前から大きな声が聞こえてきた。

「お〜い」

星がその声のする方向を目を細めて見てみる。その視線の先には、大きな男性がこっちに向かって手を振っていた。そう思っていたのも束の間、手を振っていた男性がこちらに向かって走って来る。

おそらく。あれが、彼がエリエの言っていた友達だろう。だが、彼の姿が近付いてくるに連れて、その場にいた者達の表情は強ばって行く。

それもそのはずだ。その男性は派手な紫色の髪に緑色の瞳。そしてこんがり焼けた小麦色の肌に、ピンクのTシャツの上からでも分かる盛り上がった各部位の筋肉——そして何よりも衝撃だったのは……。

「あ〜ん。久しぶりじゃなくい、エリー。元気にしてた〜？」

その喋り方だった——そう。彼は誰の目から見ても、正真正銘の『オカマ』だったのだ……。

「うん！ほんとに久しぶりだね。サラザも元気にしてた？」

「もう、また体重が増えちゃったわよ〜」

「なに？ また筋肉増えたの？」

「そうなのよ。嫌よね。ウエストを引き締めるつもりが……ほら、こんなに」

Tシャツを捲って露わになったサラザの鍛え抜かれた見事なシックスパックスの腹筋を触って、エリエはキャツキャとはしゃいでいる。楽しそうに会話している2人を尻目に、星達はただ呆然と2人のやり取りを見つめていた。

その光景はまさに美女と野獣。筋肉隆々の男？の隣には高校生くらいの女の子という、なんともミスマッチな状況なのだ。

そんなサラザに、エミルが勇敢にも声を掛けた。

「あの、今日はエリーが無理を言っつてすみませんでした」

「あら？ あなたどなた？ 私の友達をアダ名で呼ぶなんて、只者じゃないわね」

サラザはギロリとした大きな緑色の瞳をエミルに向ける。

その圧倒的な威圧感に、さすがのエミルも少し物怖じしたものの、動じることなく言葉を続けた。

まあ、こんな筋肉の塊の威圧感のある瞳に凝視されれば、物怖じするなど言う方が無理があるとだろう。

「いえ、私はエリーと同じギルドに所属していた者で、エミルと言います」

エミルが自分の名前を口にした瞬間。サラザは筋肉で武装されたその体を揺らし、彼女の目の前にゆっくりと歩いてきた。

それを見て星は慌てて、エミルの前に両手を広げて立ちほだかつた。

突如割り込まれたサラザの鋭い視線が星に向けられる。

「――あら？ なによ……この子」

「……エミルさんは。わ、私が……ま、守ります！」

星は恐怖で震える体をなんとか奮い立たせ、自分を見下ろしながら睨んでいるサラザを睨み返す。

動物に例えるとトラとハムスターが対峙する様に、体格があまりに違う2人の数秒間の睨み合いが続いた。その時、サラザが大きく両手を広げる。

(——ッ!? ……やられる!!)

星が咄嗟に目を瞑ると次の瞬間。突然、全身をサラザに思いっきり抱きしめられた。

何が起きたのか分からずに、星が一時的にパニックに陥る。

「なに、この子。すっごくかわいいんだけど〜♪」

全身を熊の様な捕食動物に捕らえられた様な圧迫感と、今までにないほどの湿気を帯びて濡れているサラザの体はまるでカエルの表皮の様にぬめつとしていた。

(うう……うあつ……香水くさい。それになんだかベトベトする……)

星はそんな事を感じながら、サラザに強く抱きしめられ身動きが取れずもがいている。

そこにエミルが「止めてください」と声を上げ、星の体を強引にサラザから引き離れた。

「この子に変な事しないでください!」

「……エミルさん」

エミルはそう言つて星をがっしりと抱きしめると、サラザを睨みつけている。

「なによ、別にとつて喰おうなんて思つてないわよ。失礼しちゃうわ!」

不機嫌そうにそういうと、そっぽを向くサラザ。

エミルは抱き寄せた星の耳元で小さな声でささやく様に告げる。

「——もう。あまり無理しないの!」

「で、でも……」

「でもないわ。あなたが何かされたらどうするつもりだったの? だけど……守ってもらつて嬉しかったわ。ありがとうね」

エミルの口から出たその言葉に、星の顔からは思わず笑みがこぼれる。

今までお礼を言われても。心のどこかで当たり前のことをしているという認識があつたからか、嬉しいと思つたことが殆どなかった。しかし、エミルに「ありがとう」と言われた時、星の心の中は今ま

では感じたことのないほどに『嬉しい』という感情でいっぱいになった。

「そういえば、エミル姉とサラザは初対面だったね。サラザ、紹介するね！ この人が、私のお姉さんの存在のエミルさん。そして、さつきサラザが抱きついたのが星。ついでにこつちの変な格好してるのが、前に話したバカデビッドだよ」

「デビッドだ！ いや、デビッドでもないんだが……それにバカとはなんだ、バカとは！ それと変な格好じゃなくこれはサムライと言って誇り高い日本の戦士の……」

エリエはサラザにメンバーの紹介を終えると、怒っているデビッドを無視してぶいっと顔を背ける。

サラザはエリエの話を聞くと、エミルにそつと手を差し伸べた。

エミルは驚いた表情でサラザを見上げている。

「あなたがエミルの姉なら、私からしたら妹も同じだもの。悪かったわね、許してもらえるかしら？」

「ええ、こちらこそ、失礼な事を言ってしまったてすみませんでした」

エミルはサラザの手を掴んで立ち上がる。

2人はお互いの顔を見合わせ、にっこりと微笑み合っている。それを見た星も、ほっと胸を撫で下ろしていた。

エミルが突然呼ばれ、状況をまったく把握できていないサラザに、今回のダンジョン攻略の説明をする。

サラザはその話当真剣に耳を傾けると、内容を全て把握したと言わんばかりに大きく頷く。

「なるほどね。なら、今回のダンジョン攻略は、その子の防具を作る為にそのアイテムが必要ってわけね」

サラザはエミルの背中に隠れている星を見て、柔らかい表情でこつと微笑んだ。

星はそれを見て、さつとエミルの背中に完全に体を隠した。

それもそのはずだ。星は今までテレビなどでは『オカマ』を見たことはあっても実物を見るのは今日が始めて——しかも、それが筋肉隆々のガチムチとなれば尚の事だ。

おそらく。そんなサラザが星の目には、まるで凶暴なモンスターの様に目に映っていることだろう。

「あら、嫌われちゃったのかしら……その子。小動物みたいでかわいいんだけど、残念だわ〜」

サラザは残念そうに指を咥えながら、星を見つめている。

自分を見つめるサラザに身の危険を感じたのかエミルの背中に隠れたまま、星がエミルの服を強く握った。

「それでサラザ。私達と一緒に行ってもらえないかな？」

そう言ったエリエは不安そうな表情でサラザを見た。

すると、サラザはにこつと微笑み自分の鍛えあげられた大胸筋を叩く。

「なにを水臭いこと言ってるのよ。私達友達じゃない。友達の友達はマブ達と同じよ〜」

サラザがなにを言っているのかはさておき、どうやら協力してくれるようだ。

「なら、一緒に行ってもらえるの？」

「もちろんよ！ 前衛は私に任せて頂戴。うふふつ。私の筋肉が疼いているわ〜」

念を押して再び尋ねるエミルにサラザはそう言っただけで不気味な笑みを浮かべると、全身の筋肉をピクピクと動かした。

5人は身支度を整えるとエリエの言っていた富士の遺産ダンジョンへと向かう為、街の外れにある大きな花畑にいた。

「さて、この辺りでいいわね」

「なんでこんな所に来たの？ 富士の遺産ダンジョンって確か、ここからエルアーディン平原を越えた向こう側のはずでしょ？」

「まあ、いいからいいから、始めてエミル姉！」

エミルはその声に頷くと、皆の前についてコマンドを操作する。

すると、次の瞬間にはエミルの手にドラゴン召喚用の巻物が握られていた。

「皆、少し下がってね。危ないわよ？」

エミルはそういうと巻物を広げ笛を鳴らす。その直後、辺りが巻物

から出た白い煙で覆い尽くされる。

驚いた様子で目を丸くさせたサラザが「なにが起きたの!？」と声を上げた。

煙が消え視界が戻ると、サラザの目の前に大きな白いドラゴンが現れる。それを見たサラザは思わず叫んだ。

「こ、これは……まさか、あなたが噂の白い閃光なの!？」

「——そう、この人が『白い閃光』だよ。うちのギルドの中でも、実力はトップクラスなんだから!」

エリエは自慢げにえっへんと胸を張って答えた。

エミルはそれを聞いて、少し恥ずかしそうに頬を赤く染めると「いから早く乗って」と皆を急かすように言った。

褒められるのに慣れてないのか、それとも『白い閃光』という通り名が嫌いなのか、エミルは頬を赤く染めてそっぽを向いている。

5人全員がリントヴルムの背中に乗ったのを確認し、エミルはパシツと手綱を鳴らした。すると、大きな翼を広げリントヴルムは勢い良く大空へと舞い上がる。

「さて、皆しっかり掴まってね。飛ばすわよ。リントお願い!」

その凜とした声に答えるように、リントヴルムが大きな鳴き声を上げ大きな巨体を前へと進めた。

富士の遺産

5人に乗せたリントヴルムは徐々にスピードを上げ、まるで風の様に雲を裂き進んでいく。

リントヴルムの背中から見える景色を眺めていると、ふと星があることに気が付く。地上にいた時には気が付かなかったが、地平線の先に大きな海が見えた。よく見ると、大陸全てが海で囲まれているようだ。

星はその疑問を尋ねる為、近くに座っているエリエに声を掛けた。

「あの……エリエさん」

「——ん？ どうしたの星。お腹空いた？」

「いえ、ここつて海に囲まれた国なんですか？」

星の質問にエリエは首を傾げる。

「さあ、どうだろうね」

どうやら、エリエもその答えを知らないらしく、笑ってはぐらかされてしまった。

その時、エリエの横でその話を聞いていたサラザが、星の質問に答えるべく口を開いた。

「いい質問ね、星ちゃん。このサーバーは日本——ここは、この世界の地図上で見ると、日本と同じ場所なのよ。だから、この世界は現実の世界地図と全く同じに大陸が分かれているってわけ」

「なるほど」

その説明に星が相槌を打つと、サラザは更に言葉を続ける。

「後、付け加えるなら、フリーダムってゲームは世界中にサーバーがあつて、各サーバーから他のサーバーへの行き来も自由にできるようになられているわ。でも、今はそれもできなくなってるみたいね。一度試したけど、外国サーバーに行く為の機能も、今は失われてしまってるみたいなのよ」

サラザのオカマ特有の喋り口調に星は苦笑いしつつも、ここが地球でいう日本だと言うことは理解した。

その直後、エミルの声が響いた。

「見えたわ！ あそこよ！」

「……えっ？」

エミルが前方を指差して叫んだ。星がその場所を見ると、そこには富士山によく似た山がそびえ立っていた。だが、唯一違うのはそれが火山ということだ。

その頂上付近の雪が溶けていないのは、ここが現実ではなくゲームであることを表していた。エミルは直後にリントヴルムにその富士の火口付近に降りるよう指示を出す。

5人はリントヴルムの背から降り、エリエの案内でゴツゴツとした岩場を進んでいくと、その先に小さな洞窟を見つけた。

エリエの話によると、この洞窟から入ることで通常とは別のルートに繋がっているらしい。

洞窟の中に入ると入り口は狭いものの、中は意外と広く洞窟のあちらこちらには松明が絶え間なく燃え続け辺りを照らしている。

「へえー。こんな抜け穴があったのねー」

エミルは洞窟内を見渡して関心したように呟く。

すると、エリエは自慢げに「私すごいでしょ！」と胸を張った。

そんな彼女にデイビッドが眉をひそめながら尋ねてきた。

「しかし、ここの難易度は通常ルートと比べてどうなんだ？」

「うーん。そうだねえ。ここは通常より少し敵は手強いけど、それ以外はそうでもないかも、ボスも通常より少し強化されたくらい？」

エリエは少し考えてそう答えた。

その時、目の前からまるでキリンの首かと思紛うばかりの太さの大蛇が3匹現れた。

「早速お出ましねえ。私の全身の筋肉がピクピクしちゃうわあ」

大蛇を見たサラザが、興奮気味になぜか自慢の上腕二頭筋を盛り上げさせた。

「——来るわよ。皆、武器を構えて！」

エミルのその言葉に合わせて武器を構えた。星も見様見真似で自分の腰に装備していた剣を抜きその剣先を大蛇に向ける。

サラザはコマンドを素早く操作して、ボディービルダー専用装備の

バーベルをアイテム内から取り出すと、それをぶんぶん振り回しながら大蛇に向かって突進していく。

「うおらあああああああああッ!!」

サラザは雄叫びを上げると、手に握り締めたバーベルで3匹の大蛇まとめて薙ぎ払った。その攻撃に大蛇は反応する暇もなく、光りとなってキラキラと上がっていく。

サラザは「この程度とはね……オカマ、ナメんじゃないわよ!!」と叫ぶと、手に持っていたバーベルをズドンッ!と地面に突き立てた。

地面に突き立てたバーベルを持って佇むその姿はまさに仁王像の様だった。それを目の当たりにして、4人は目を丸くしてサラザを見ていた。

誰もが何が起きたのか分からず。ただ武器を握り締めたまま、その場に立ち尽くしている。

荒い息を繰り返し、鬼の様な形相をしていた。

サラザはその冷えきった空気が付くと、いつもの声のトーンに戻り「やだも〜」と体をくねらせている。

それからボスまでの道中に出る敵は、全てサラザのバーベルの餌食となり、5人は危なげなくボス部屋まで辿り着いた。

ボスの部屋には大きな古い扉が行く手を阻んでいた。

「なによ。こんなチンケな扉で、私の行く手を阻もうなんて500万年早いわ〜」

「あつ、もう少し慎重にした方が……」

エミルの制止も聞かず、サラザはその鍛え抜かれた肉体を遺憾なく発揮して、1人でその重そうな扉を開いた。

すると、中からまるで雛人形のお雛様のような、一二単を纏った透き通るような長い黒髪の女性が背を向けるようにして立っていた。

「おお〜。これが今や伝説と化した大和撫子! まさかこんなところでお目にかかれるとは!!」

それを見たデイビッドが歓喜の声を上げた。その言葉を聞いた女性陣がギロリと鋭い視線をデイビッドに向ける。

「はあく。男ってどうしてこうなのかしら……」

「デイビッドさん……」

「デビッド先輩はラビットで十分でしょ？」

「あら〜。大和撫子が好みなんで、私困っちゃうわ〜」

女性4人？はそれぞれに眩く。1人だけ明らかにおかしい反応を見せているのは、この際あえて触れないでおこう……。

「でも大和撫子は2人もいらわないわ……悪いけど、ボロ雑巾の様に捻り潰して上げるわ」

低い声でそう眩いたサラザが部屋に一步足を踏み入れると、女性のすすり泣く声が聞こえてきた。

「あの人。どうしたんでしょう……」

星がぼつりと部屋の中央でしくしくと泣き続けている女性を見て、不安そうな表情でエミルを見上げる。

エミルはそんな星の頭を優しく撫でるとにつこりと微笑む。

「大丈夫よ、星ちゃん。ボス部屋に居るといふ事は、彼女もモンスターのはず。死んだりはしないわ」

「なら、いいんですけど……でも、凄く悲しそうです……」

星は悲しそうに泣いている女性の方を見つめている。

「まあ、言うより見てもらった方が早いかしらね！」

エミルはすすり泣いている女性の姿に戸惑っている星の迷いを取り除こうと、その女性目掛け駆けて走って行くと躊躇なく持っていた剣を振り抜いた。

「はあああああッ!!」

彼女の攻撃が当たる直前に、今さっきまで確かにそこに居たはずの女性の姿は跡形もなく消えた。

「えっ？… どうして……っ？」

エミルが不思議そうにキョロキョロと辺りを見渡した。すると、彼女の足元の地面から突然大蛇の頭が現れエミルを襲う。

「きゃあああああああッ!!」

エミルは足元から突如現れた大蛇に、反応することもできずに吹き飛ばされてしまう。

宙を舞った彼女の体はそのまま強く地面に叩きつけられ、エミルの

HPゲージは見る見るうちに減少し、半分を少しきつたところで止まった。

「エミルさんー！」

星は大きな声で彼女の名前を呼んだが、返事が返ってこない。

どうやらエミルはさっきの衝撃で気を失ってしまっているらしく、その場に横たわったまま微動だにしない。

「エミル姉!!」

エリエがエミルの元に駆け寄ろうと走り出した直後。轟音とともに地を裂いて、地面から8つの頭を持つ蛇が姿を表した。

空中で複数の首を動かしながら、その全ての頭が口を大きく広げる。

——ギアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!

巨大な8本の頭を持った大蛇が、地面を揺るがすほどのけたたましい鳴き声を上げた。

蛇に睨まれた蛙とはまさにこのことだ。その場にいた誰もがその鳴き声に恐れをなし、その場を動く事ができなかつた。

「——そんな……こここのボスは雪女のはずじゃ……」

「雪女だつて!? でも、あれはどう見たつて蛇の化け物じゃないか!!」
「いえ……私もエリーと一緒にここに来たから分かる。こここのボスは泣いてる女の姿が変わり、吹雪が吹き荒れて雪女になるという設定のはずよ?」

エリエとサラザは驚きを隠せない。それよりも、困惑しているのはデイビッドだつた。

それもそのはずだ。その巨体の大きさはエミルの持っているリントヴルムをも凌駕している。

天井の見えないボス部屋の中で悠々と立ち上がった八本の首が、地面にいるデイビッド達を見下ろしている。

驚きと恐怖から手をこまねいていると、八つの首のうちの一本が倒れているエミルに向かって襲い掛かった。

その時、その場に金縛りの様に釘付けになっているメンバー達を余所に、星がエミルの方に向かって走り出す。

(このままじゃ……エミルさんがッ！)

そう思った時には、すでに星の体が動いていた。

星は迷うことなく、倒れ込んでいるエミルの前に立ちほだかった。

(私が盾になれば。エミルさんへのダメージが少しは減るはず……たとえ私が死ぬことになっても！ この人だけは……)

星はそう思うと牙をむき出しにして向かってくる大蛇の頭にも、不思議と恐怖は感じなかった。ただあるのは、エミルにお礼を言えなかったという後悔だけだ――。

(……エミルさん。短い間でしたが色々ありがとうございます……さようなら)

覚悟を決めた星は心の中でエミルにお礼を言って、ゆっくりと瞼を閉じた。

富士の遺産 2

突如、ヤマトノオロチの背後から何かが飛び出した。

「覚悟がないのなら敵の前に出るんじゃない！ このバカ者がああああッ!!」

その声が星の耳元に飛び込んできた次の瞬間、星の居た場所は跡形もなく吹き飛んでいた。

「そ、そんな……星、エミル姉……」

エリエはその変わり果てた場所を見て、顔面蒼白のまま、その場に立ち尽くしている。

つと、そこにどこからともなく部屋の中に声が響く。

「白い閃光と呼ばれたエミルはこのザマで……スピードに定評のあるお前が、その程度とは……本当に嘆かわしいかぎりだ……」

「どい!? 誰なの!?!」

エリエがその声の主を探すように、辺りをキョロキョロと辺りを見ている。

すると、エリエの背後から声が聞こえてきた。

「——どこを見ておる！ 儂はここだぞッ!!」

「……えっ!?!」

エリエが慌てて後ろを振り返ると、そこにはエミルと星を担いでいる黒い道着を着た年配で白い髪を後ろで束ねている男性が立っていた。

その顔を見るなり、エリエは驚いた表情で大きく口を開けてる。

「そんな……あなたがどうしてここにッ!?!」

「……それは俺から説明しましょう」

その声の方に目をやると、そこにはエリエと同年くらい少女が立っていた。

髪の色は黒くショートヘアーで、その格好は年頃の女の子というにはあまりに質素だった。

上着は外見より動きやすさを重視し紺色の袖の胸元の開いた短めの服に、下も茶色いズボンを履いている。

盛り上がった胸元からはさらしが見えていた。おそらく、戦闘で邪魔にならないように大きな胸を潰しているのだろう。だが、その喋り方と飾り気のない風貌から、男と間違われてもおかしくはない。

少女はその茶色い瞳でエリエの青い瞳をじっと見つめ、徐ろに口を開く。

「――師匠と俺はログアウトできないと知ってから、何とかこのゲームの世界から抜け出す方法を探って、あちこちを旅してしまして……そこで、この富士の山に通常とは別のルートが存在しているという情報を聞きつけ。おそらく、そのどれかに【現世への扉】があると考え、来てみれば、敵が皆倒されていたので援護する為、急いでこのボス部屋まで来た――というわけです」

「なるほどな。なら、たまたま同じダンジョンに居たってことか」

少女の話を聞いて、納得したようにデイビッドが頷く。

「そうだ。だが、これほどまでに、お前達が腑抜けきつているとは思ってなかったがな」

男性は少し呆れたようにそう呟き、担いていた星とエミルを地面に寝かせた。しかし、2人はまるで死んでいるかのように動かない。

そんな2人に向かって、エリエが駆け寄って行く。

「――良かったあ……2人とも気を失っているだけみたい」

エリエは2人が息をしていることを確認すると、ほっと胸を撫で下ろす。

腕組をしてその様子を横目で見ていたマスターに、デイビッドが声を掛けた。

「マスター。今までどこで何をしていたんだ。俺達はあなたが忽然とギルドから抜けて消息を絶ってから、どれだけ俺達が大変だったか――」

「――ふんっ。積もる話があるのは儂もだが、ゆつくりと話をしている暇も無さそうだぞ？ ……あれを見ろ！」

マスターが指を差した先を、その場に居た全員が一斉に見た。

視線の先には8つの頭を長く伸ばし、こちらの様子を窺っているヤマトノオロチの姿があった。

その超巨大な8つの頭の口からは、白く激しい息遣いとドロドロとした唾液が止めどなく溢れ出す。それはまるで、餌を目の前にお預けをくらっている獐猛な肉食獣のようだった。

「——蛇は獲物を締め上げ、弱ったところを捕食する。こちらがピンピンしておるうちには、それほど、激しく攻撃はしてこんだろう……しかし、だからと言って、こちらも無策で飛び込むわけにもいかん」
「作戦か……そういうのを考えるのは、俺はあまり得意じゃないんだよな……」

「私もあの大きさの敵を相手に、この人数じゃあまりに厳しいと思う……」

マスターの話を聞いて、弱気な発言をしているデイビッドとエリエを尻目に、サラザがヤマタノオロチの前に出て堪らず声を上げた。

「なによ！ 皆、弱気じゃないの。所詮は8匹の蛇でしょ？ 私が敵の注意を引くわ。その間に、皆でじゃんじゃん攻撃よ〜」

サラザはそう言って敵を睨むと「ビルドアップ！」と大声で叫んだ。その直後。サラザの体から金色のオーラが吹き出し、鍛え抜かれた全身の筋肉が更に盛り上がっていく。もはや、その姿は人というより獣に近いかもしれない。

マスターはその様子を食い入るように見ると。

「ほう。なかなかの技だな……その力、俺も使わせてもらおう。明鏡止水！」

っと叫ぶと、彼の体もまたサラザ同様に全身から金色のオーラが立ち昇る。

「——なんですって!! あなたもビルドアップを使えるの!？」

サラザは同じようなマスターの姿に、さすがに驚きを隠せない表情でマスターを見た。

マスターは「はははっ」と大きな笑い声を上げ、ニヤリと不敵な笑みを浮かべ。

「これは明鏡止水。俺の固有スキルのだ……このスキルはな——」

マスターが自分の固有スキルについて説明しようと口を開いた直後、ヤマタノオロチの頭の一つが2人を目掛けて突っ込んできた。

それを跳んで素早くかわす。

固有スキルとは、プレイヤー作成時にランダムで選択されるスキルのことで、レア度によってそれぞれランク付けされている。

サラザの体から突如として金色のオーラが立ち上がったのも、エミルが使っていたドラゴンを召喚する能力もこの固有スキルによるものだ。

マスターの固有スキル『明鏡止水』は世界で何十万というプレイヤーが存在するフリーダムの中でも、5人しか持っていない。レア度はSランクと、とても珍しいスキルだ。

彼の固有スキル『明鏡止水』は肉体強化系のスキルを記憶し、自分の能力として何度でも再使用ができるというところでもないチート的なスキルなのだ。

「ええい。人の話の邪魔をしおって……カレン！ 何をぼさつとしておる。お前も戦わんか！」

「はい、師匠！ それではエリエさんは、御二人を守って下がっててくださいー！」

「うん。分かった！」

エリエにそう言い残し、カレンがマスターの元へと向かって勢い良く走り出した。

ボス部屋の入り口付近まで戻ったエリエは、扉のすぐ隣に寝かせ戦いの行方を見守っている。

「お待ちせしました。師匠」

「来たか……行くぞっ！ カレン。あやつの首を1つだけ残して、全て切り落してくれるわッ!!」

気合十分に地面を蹴って跳び上がったマスターに続くようにカレンもその細い足で地面を蹴って、ヤマタノオロチの首目掛けて跳び掛かった。

危険を察知したのか、8つの首のうち6つが2人目掛けて襲い掛かる。

2人はその攻撃を軽々とかわしてマスターが叫ぶと、地面を削るように蛇の頭がぶつかって怯んでいる複数の頭の上に飛び上がり。

「カレン！ 儂を奴目掛けて投げろッ!!」

「はい。師匠！」

カレンは彼の伸ばしている腕をしっかりと掴むと、体を回転させてマスターを思い切りヤマタノオロチ目掛けて勢い良くぶん投げた。

「いっけええええええええええええええええッ!!」

マスターは空中で腕をクロスに交差させ、弾丸の如く一直線に飛んでいく。

それに気付いた敵も口を開いて真っ直ぐ飛んでくるマスターを待ち構えている。

「——ふんっ。その程度でこの儂をやれると思っておるのか!? さすがはコンピューター。武闘家を舐め腐っておるわ……ならばそのデータ。今すぐに書き換えてくれようぞッ!!」

叫びながら敵の口の中に迷うことなく飛び込んで行った。

——バクンツ!!

上下に開いた大きな口でマスターを飲み込むと、ヤマタノオロチはその口を固く閉じた。その刹那、その頭が外からも分かるほど金色に発光し始めた。

っと思った次の瞬間。蛇の頭が真っ二つに裂け、中からマスターが飛び出してきた。

——ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!

断末魔の叫びを上げ、ヤマタノオロチの頭がそのまま真っ二つに裂けた頭が地面にだらりと落ちる。

ヤマタノオロチは頭を1つ潰されたことで警戒したのか、今まで伸ばしきっていた頭をまとめるように集めると、大きな黄色い瞳でこちらを見つめる。

「ふん。今頃警戒を始めおったわ……カレン！」

「はい、師匠！」

カレンは拳を構え直し、真剣な面持ちでヤマタノオオロチを見据えた。

自分達よりも遥かに大きい敵に全く物怖じしない彼等に、デイビツ

ド達も頼もしさすら覚える。

「次の攻撃は連携してゆくぞ！ お前達もよいな!!」

マスターは凄まじい戦闘に呆氣にとられているデイビッドとサラザに叫んだ。

2人はその申し出を受けるように、力強く頷いて見せると獲物を構えた。

「だが、マスター。どうやって攻めるつもりだ？」

デイビッドの疑問に答える様に拳を握り締め。

「ふん。知れたこと、敵の懐に飛び込んで吹き飛ばしてくれるわツ!!」

「いや、さつきまでと言ったことが、ちが——」

デイビッドがそうツツコミを入れる前に、マスターが敵に向かって走り出す。

そのマスターの様子を見て、ヤマタノオロチが攻撃を仕掛けてくる。

「タフネス！ うらツ!!」

大声で叫ぶと、マスターは向かってきた巨大な頭を軽々と弾き飛ばす。

呆然と口を開けてその様子を見ていたサラザとデイビッドに、マスターの激が飛ぶ。

「——何をばさつとしておる。早く援護せいツ!!」

その言葉を聞いて、2人は慌ててヤマタノオロチに攻撃を仕掛ける。

「はあああああああああああッ!!」

「うおりやあああああああッ!!」

同時に敵に向かって走り出すと、それに反応して一本の頭が攻撃を仕掛けてきた。

2人はそれを横に飛んで回避すると、今度はデイビッドとサラザが連携して向かってきた頭を1つ落とした。

カレンの方はというと、1つの頭を攻め過ぎず守り過ぎずの距離で上手く戦っている。

彼女としては無理をしてダメージを受けるよりも、マスターが他を

倒すまで頭一つを惹き付けるておく方が重要と判断したようだ。

そうこうしているうちに、マスターはヤマタノオロチの懐に飛び込み、拳を握り締めニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

富士の遺産3

「ふんっ。これでしまいにしよう。ダークネス……」

マスターはそう呟くと、全身の金色のオーラが消え、今度は黒いオーラを拳に宿した。

その直後、マスターはヤマタノオロチの胴体に向けて強く握り締め、たその拳を放つ。

「はあああああああああッ!!」

マスターは叫びながら拳を連続して叩き込んでいく。その拳から放たれる打撃のスピードが速過ぎて、まるで拳が無数に存在しているかのような錯覚に陥るほどだ。

普通のMMORPGならあるソードスキルや魔法スキルのような攻撃スキルのないフリーダムでは、個人の持っている力が最大の武器になる。

確かにお金を使う事で現実世界にあるシヨップから道具や武器などを購入する方法もあるのだが、所詮は武器防具は補助的な役割で、やはり上位に上がってくるのはそれ相応の固有スキルや武術の実力を持っている者だけなのだ。

マスターの連続パンチにヤマタノオロチのHPバーは見る見るうちに削れ、ヤマタノオロチは抵抗する暇もなくその場に崩れ落ちた。

大きな爆発音のような音とともに巨体が地面に伏せ、ヤマタノオロチの周りには土煙が上がった。

「さすが師匠!」

「さすがはマスターだ! ……だが、とても人間技とは思えないが……」

カレンとデイビッドはガッツポーズをしながら換気の上を上げる。その圧倒的な力を見れば、ゲームバランスなんていうものが本当にあるのか不思議なくらいだ――。

「――あの老人。一体何者なの!? ヒューマンなのにボディービルダー並みの体付き、そしてエルフ並みのスピード。全てが桁違いだわ……」

それとは対照的に口をあんぐりと開けたままサラザは驚愕しながら、高笑いをしているマスターを見つめていた。

ヤマタノオロチが光りとなって消え去ると、そこには古そうな宝箱が現れた。マスターは徐ろにその箱に近づいてと、ゆっくりと蓋を開ける。

その直後、その場に居た全員にダンジョンの報酬とアイテムが配られる。その後、マスターの視界に。

「トレジャーアイテム 天女の羽衣をドロップしました。取得者を選択して下さい。」

っという表示が一齐に表示された。

だが彼は押さずに、周りにいたデイビッドの方に目をやり。

「お主らが狙っていたのはこのアイテムであろう？ ならば必要な者が持つて行くが良い」

「なっ……師匠!? これは師匠が敵を倒して手に入れた物です。師匠が貰うべきです！」

その言葉にカレンが驚き、声を荒らげた。

それもそのはずだ。本来ならば、最もダメージを負わせた者に与えられるのが通例となっている。そのドロップアイテムを、大して手柄も上げていない彼等に渡すことが許せないという感情も無理はない。

すると、マスターは小さく息を漏らし。納得できないといった表情のカレンを諭すように言った。

「——良いかカレン。物とは必要な者へと行きたがるものだ。確かに、奴を倒した儂にはこれを受け取る権利があるかもしれん。しかし、真にこれを受け取るべき者は、この儂をここに呼び寄せた者だろう。もしも、物にも意思があるとすれば……その者のところへ行きたいという強い思いが、必然的に儂をここへ呼び寄せたのだからな」

「……師匠」

「それが分からぬうちは、お前もまだまだ未熟ということだ……」

「は、はい……」

マスターから言われたカレンは、なおも不服そうな顔のままだった。が渋々ながらに頷いた。

そこに遠慮しがちにエリエが近付いてきた。

「なら、私が……」

「うむ」

マスターはエリエに何の躊躇も未練もなくアイテムの所有権を渡した。

「やった〜！ これで星も喜ぶぞ〜」

エリエは笑みを浮かべながら、その羽衣を手に喜びのあまりくるくるとその場で回転している。

無邪気な子供の様に喜びを全身で表現しているエリエを見て、カレンはますます不機嫌になり「師匠が倒したのに……」と最後の抵抗と言わんばかりに、小声でぼそつと呟く。その時、落ち着いた顔つきだったマスターの表情が急に鋭いものへと変わった。

眼前の先には腕を組んでたたずむ、仏像らしき見るからに怪しい物がある。

「あの後ろから風が吹いておるな……」

マスターがそう呟くと、デイベッドは半信半疑でその仏像の後ろを確認してみる。

すると、彼の言う通り仏像の後ろに少し隙間があり、そこから微かに風の音が聞こえていた。

「マスターの言う通りだ。この裏にまだダンジョンが続いているみたいだぞ?」

「えっ!？」

「ほんとなの〜」

デイベッドのその言葉に、エリエとサラザが慌てて駆けてくる。

仏像の前で2人は耳を澄ませてみると、微かに風の音が聞こえた。

「以前来た時には、こんな仏像はなかったよ?」

「私も始めて見たわ——って事は、私達が来た後にできたのかしら〜」
エリエとサラザは顔を見合わせながら首を傾げた。

まあ、いつエリエ達がこのダンジョンを訪れたのかは分からないものの、間違いなく事件より前であることは想像がつく。

しかも、出現するボスが別の物にすり替わっていることから考え

て、何らかのシステム変更がなされたのは疑いようがないだろう。

マスターは仏像の前で立ち止まると、サラザに声を掛けた。

「おい、そこのでかいの。儂の反対側に来て手伝ってくれんか?」

「でかつ……誰がでかいのよ! レディーに失礼な老人ね——まあいいわ。逆側を持って移動させればいいのね?」

「ああ、すまん!」

そう言つて2人は向い合つと、仏像に手を掛け、マスターの合図で同時に力を入れた。

2人はまるで獣の様な雄叫びを上げながら、全力で仏像を持ち上げようと試みる。しかし、仏像は相当重いのだろう。2人の力をもつてしてもピクリとも動かない。

その様子を見ていたデイビッドも急いで駆け寄ると、3人は顔を真っ赤に染めながら渾身の力で仏像を持ち上げようとしている。

「ほら、皆腰に力が入ってないよ。もっと頑張つて〜」

「もう少しです。師匠、明鏡止水の心を見せてやってください!」
人の気も知らずに好き勝手なことを言いつつ、エリエとカレンは楽しそうに応援をした。

すると、その応援のおかげか、今までびくともしなかつた仏像が徐々に持ち上がる。そこで、マスターが「もう少しだ。男なら気合を入れよ!」と鼓舞した。

「オカマと老人に、負けてたまるかー!!」

「私は女だって、言つてんでしようがツ!!」

そう叫ぶと、2人は残っている力を振り絞り、やつとの思いで仏像を移動させた。

仏像が置いてあつた場所には隠し通路があり、階段になつていてどうやらそこから地下にもつと進めるようだ。

「なら、早速奥に進んでみようよっ!」

「止めい!!」

「……ツ!? えっ? な、なんで!?!」

軽快に階段を降りようとしたエリエをマスターが止めた。

エリエはびっくりした表情で、マスターの顔を見つめている。

「今日はもう。一度ボスとの戦闘を行っておる。このまま再びボスとやりあえば、こちらにも甚大な被害が出ることは避けられんだろう。今日はこの場所で野宿し、明日——再び進むとしようじゃないか！」

マスターは息を切らして、地面に横たわるデイビッドとサラザの方を指差した。エリエもそんな2人を見て、その意見に渋々了解する。徐ろにコマンドを操作しテントを出したエリエは、そこに気を失ったままのエミルと星を寝かせた。

デイビッドは焚き火を発生させるアイテムを使って暖を取る。

だが、日の当たらない洞窟の中ではさすがに冷えるのか、エリエは体を抱えるようにして白い息を吐いた。

それを見たサラザが「大丈夫？」と体を寄せてエリエの背中を擦った。まあ、別の意味でサラザからの体からは煙が出ていた。

「そういえば、お前は儂のギルドにおったか？ 初めて見る顔な気がするが……」

マスターは目を細めて、サラザの顔を興味深く見て尋ねる。

サラザはその問に答えるわけではなく、逆にマスターに質問をぶつけてきた。

「——それより私はあんたが使った。私の固有スキルの方が気になるわ」

「ふむ。確かに緊急時とはいえ、お前から技を盗んだのは事実——無理もなからう。時間にも余裕があるからな。少し儂のスキルについて話しておこう」

マスターがそういうと、サラザは興味津々な様子で彼の顔を見た。興味津々な様子で自分を見てくるサラザにゆつくりとした口調で話し始める。

「儂の固有スキル『明鏡止水』は一度見た技をコピーする能力があるのは、先程己の目で見たからもう分かるだろう」

「そうね。何となくは……でも驚いたわ。私のスキルを使うんですもの」

「このスキルは強力だが、制約も多い。まず、今儂の隣に座っているカレンも明鏡止水の固有スキルを持っている一人だが、未だに発動すら

できてはおらん」

マスターはそういうとカレンの方を横目でちらつと見た。

カレンは申し訳なさそうに俯くと、悔しそうに唇を噛んでいる。

おそらく。師匠の様に自由にスキルを使いこなすことができず、歯痒い思いをしているのだろう。それは彼女の表情からして明らかだった。

『明鏡止水』の制約その一。発動できるようになるまでには個人差がある。制約その二。一度使用してから約一日は再使用できない。制約その三。スキル発動中はヒールストーンなどの回復系アイテムの一切が使用できなくなる」

「――回復アイテムが使用できないですって!?!」

それを聞いたサラザは驚きのあまり、思わず手で口を覆った。

サラザが驚くのも無理はない。フリーダムでは数多くの武器の中で使いやすいものをプレイヤーが選択し装備する。前衛職で唯一、素手で戦う武闘家にとって、戦闘時の敵との距離が必然的に近くなってしまう。

しかも、武闘家の殆どは攻撃速度や俊敏性を重視する傾向があり。熟練者になればなるほど、軽装備となり守りが薄くなってくるのは仕方がないと言えるだろう。その為、回復系のアイテムの消費が最も激しいのだ。

だからこそ回復アイテムの一切を使用できないというのは、武闘家にとって相当なリスクなのである。

「大丈夫だよサラザ。マスターは私達のギルドで最強だもん。誰もマスターのHPがレッドゾーンになったのを、一度も見たことないんだよ」

そう言ってエリエはまるで自分のこのように自慢げに胸を張って話す。そんな彼女に、デイビッドが「お前の事じゃないだろう」と毒を吐いた。

それに反応したエリエが、デイビッドと再び一触即発の状況に突入する。

「――仲間同士で争ってどうする!」

すると、いがみ合う2人にマスターが声を荒らげ、なんとかその場は抑えることができた。

マスターは大きなため息をつく、テントの方に視線を移す。

「しかし、あのエミルが、あの程度の敵に軽々とやられてしまうとは――
―いったいなにがあったというのだ。あの娘が何か関係しておるのか？」

その率直な質問に、その場にいたデイビッドとエリエが急に険しい表情になった。

富士の遺産 4

「実は……エミル姉は先月。リアルの世界で妹さんを病気で亡くしたばかりなんだよ……」

エリエはそうやって表情を曇らせると、デイビッドも俯き加減に咳く。

「ああ、エミルはそれからというものの、何をするにも上の空でな……その時に現れたのが彼女と言うわけだ」

実はエミルは先月、長い間病院に入院していた最愛の妹を病気で亡くしていたのだ。星のことを人一倍気にかけていたのも、このことがあったからなのかもしれない。

デイビッドは感慨深げに焚き火の炎を見つめ、深く息を吐いた。

「——よく、妹のお見舞いに行くって言ってたもんな……きつと、相当仲が良かったんだろう。あれ以来あまり笑わなくなっただし……俺も気にはしてたんだ。だから、星ちゃんと会った時は嬉しそうに話してほっとしたよ」

「なるほどな……それならば納得だな。今回の戦闘で、以前のエミルと違って全く覇気がなかったのはその為か……」

それを聞いてマスターは納得したように仕切りに頷いている。

俯いていたエリエが徐に顔を上げると、頷いているマスターに声を掛けた。

「——それでね、マスター。エミル姉の前ではこの話は……」

「……分かっておる。俺も人の傷口を抉るような真似はしないさ」

エリエが話し終わるより前にマスターが微笑み返す。

その頃、テントの中では……。

「うつ……こ、ここは——天国……？」

今まで気を失っていた星がやっと目を覚まし、注意深く辺りを見渡す。

周りにはぬいぐるみが多く置かれた見覚えのある空間が広がっていた。

(ここは、エリエさんのテント？ 確か私は……)

星は自分が今自分がどんな状況で、どうしてここに居るのか全然分からない。ただ分かっているのは、エミルを守ろうとして大蛇の前に飛び出したことだけだ。

記憶が曖昧で思い出そうとしても、肝心なところがぼっかりと抜けている感じで、まったく整理できていなかったが。

しかし、それで生きているということは星はまた、人に迷惑を掛けてしまったという事実だけは混乱した頭でも理解できた。

(そうか……また、皆に迷惑をかけてしまったんだ……)

顔を両手で覆い項垂れると、不意に口から大きなため息が漏れた。

このゲームを始める前は自分は一人前なつもりでいたのだが、ここまで周りに迷惑を掛けていては、やっと芽生えてきた自信が根底から揺らいでくる。

こうして未知の世界を経験していると、自分がいかにちっぽけで無力なのだ痛感させられてしまう。

星にとってそれが一番嫌だった……もちろん。自分が嫌いなのは昔も今も変わらないが、ただ今はいつそのこと消えてなくなりたいとまで思っていた。

自己嫌悪に苛まれながらも、横で寝ているエミルの顔が視界に入っ
てほっと胸を撫で下ろす。

(……良かった)

結果はどうであれ、エミルが助かったことが本当に嬉しい——星はそう思いながらゆっくり瞼を閉じた。すると、外から何やら人の話す声が聞こえてくる。

星が耳を澄ますと、どうやらその中には聞いたことのない声も混じっているようだ。

(ダンジョンに入った時には5人だったはず。でも、もう1人聞いたことない声の人がいるみたい……)

そんなことを考えながら、気になった星がそーっとテントの入口を少し開けて、外の様子を窺う。

そこには、エリエヤやデイビットと楽しそうに会話をしている見知らぬ白髪の老人と少女が、皆で焚き火を囲むように座っているのが見え

た。

「……ふむ。どうやらさつき娘が目を覚ましたようだぞ?」

マスターが隠れている星の方を向いてにこつと微笑んだ。覗いていることがバレた星は、思わず亀の様に顔を引っ込めた。

エリエはそれに気付くと、嬉しそうに星の元に駆けていく。

「星、目を覚ましたんだ。どう? 体はどこか痛いところとかない?」

膝を折ってそう尋ねるエリエに、星がテントの影から姿を表した。

「……えっ? い、いえ。私は大丈夫です」

「そう。良かった!」

エリエはにっこりと微笑むと、星の頭を優しく撫でた。

見知らぬ人にもその光景を見られ、恥ずかしそうに頬を赤らめる星が視線を逸らす。その後、星はエリエに、起きてからずっと抱いていた疑問をぶつけてみる。

「あの、エリエさんが私を助けてくれたんですか?」

星は首を傾げながら聞くと、エリエは首を横に振り「あそこに座ってるおじいちゃんが助けてくれたんだよ」とマスターの方を指差した。

それを聞いた星は、少し驚いた様子でマスターを見つめている。彼女の目にはマスターはどこからどう見ても、ただの老人にしか見えない。

とてもこの老人に、あの大蛇に襲われそうになった自分を助けられるなんて、俄かには考えられなかったのだろう。

星はそのエリエの言葉を疑いながらも、とりあえずはマスターの方に向かって丁寧な頭を下げた。

真意が分からない時には、ひとまず頭を下げておけばいいということとを、星は日常生活で無意識のうちに覚えていた。そうすれば、当たり前障りなく物事を収めることができる。

すると、それを見たマスターは満足そうに微笑んでいる。その様子に星がほっとしたのも束の間……。

マスターの横に座っていたカレンが、星のことを鋭く睨みつけている。

星には初対面のカレンが、どうして自分のことを睨みつけているのかが全く理解できなかつたが、とりあえずカレンにもう一度ペコリと頭を下げた。

だが、彼女は表情一つ変えずに、なおも星を睨んでくる。

彼女の視線に耐えかね、星は俯くようにして視線を逸らす。

もちろん。今起きたばかりの星にはどうして自分が睨まれているのかが分からない。だが、まだダンジョンという人生で初めての未知の領域に踏み込んでいる以上は、あまり波風を立てる訳にもいれない。

星はエリエに導かれ、焚き火を囲む輪の中に入る。だが、カレンへの恐怖心からか視線を上げられずにいた。

その様子を察したエリエが手を合わせると、にこにこしながら星の顔を覗き込んだ。

「そうだ。星にいい物を上げるね！」

「——いい物……ですか？」

星は不思議そうに首を傾げてエリエに聞き返す。

エリエは「うん」と頷くと、徐ろにコマンドのアイテム欄からアイテムを取り出した。そのエリエの手には、白い綺麗な羽衣が乗っていた。星はその羽衣を目をキラキラさせながら見つめている。

「これが今回探していたトレジャーアイテム『天女の羽衣』だよ〜！」
「へえ〜。すつ〜く綺麗ですね！」

瞳を輝かせながら、エリエの手に乗っている絹の様な素材の羽衣を見つめている星に、エリエは「チツチツチツ！」と人差し指を振っている

その後、エリエは自慢げに『天女の羽衣』の説明を始めた。

「綺麗なだけじゃないよ。なんと、このアイテムは防具の特性をそのまま服に移し換える機能まで付いているのだよ！」

「なるほど〜」

2人がそう言って楽しそうに会話をしているのを見ていたカレンが、突然声を荒らげて立ち上がった。

「あなた達！ それは師匠がボスを倒してゲットした物です。おも

ちやじやない!! 師匠は認めても、やはり俺は認められません!!」
そう言ったカレンは、星を鋭く睨みつけるとビシツと指差す。

突如怒り出したカレンに驚き、星は怯えたようにその場に俯いてしまふ。その様子を見たエリエが徐に立ち上がり、カレンに向かって反論した。

「マスターがいいって言うんだからいいでしょ! それにさつきからなに? 星を睨み付けて、あなたの方がすつごく感じ悪いんだけど!」

「なんだと!? 俺のどこが感じ悪いって言うんだよ! それに、その子……弱いくせにダンジョンに来て、今までビビって気を失っておいでアイテムだけ貰うってただの寄生だろ? 感じが悪いと言うなら、そいつの方じやないのか?」

カレンの発した【寄生】という言葉に、エリエの顔色が一変する。
オンラインゲームで【寄生】とは、他のプレイヤーに付いて戦わずしてドロップアイテムや経験値などの利益を得る者のことを言う。

もちろん。これは故意にやっていることで、その理由の殆どが『めんどくさいから』や『クリアできないから相手に任せる』などという身勝手な理由が殆どだ——無論、星の場合は自分の意思ではなく。連れて来られているわけだから、故意にしているとは言い切れないのだが。

「き、寄生なんて……弱い時に強い人と一緒に居て何が悪いのよ! 星が寄生って言うならあなただって、マスターにべつたりの現在進行で寄生でしょ? 偉そうなこと言わなでよねっ!!」

2人は顔を向き合わせながら、お互いの顔を睨み付けている。
今にも噛み付きそうな勢いで、互いに顔を突き合わせているエリエとカレン。

「——やめい!!」

その様子を黙って見ていたマスターが声を荒らげた。

突然の大声に2人は「ひっ!」と小さく悲鳴を上げ、驚き目を丸くしながらマスターの顔を見つめている。

マスターは徐ろに立ち上がると、カレンの前まで行って止まる。カ

レンは怯えた様子でマスターの顔を見上げています。

「そんな小さな事で争うんじゃない。このばかたれが！」

つと、怒鳴ったマスターのげんこつがカレンの頭を直撃した。

カレンはあまりの衝撃に、その場に頭を抑えながらしゃがみ込んだ。それを心配そうに見つめる星に向かってマスターが優しい声で告げた。

「——星と言ったな。お前はどのようにしてこの場所に来た？」

「えっ？　そ、それは……」

突然のマスターの質問に困惑し、思わず言葉を詰まらせる星。

そんな星に再びマスターの質問を投げかける。

「ならば、どうしてあの時。エミルの前に立ち塞がったのだ？」

「そ、それは……エミルさんを守る為です！」

星はその質問に決意に満ちた眼差しで、マスターの顔を見上げ答える。

すると、その答えを聞いたマスターは突然声を荒らげた。

「……守るだと？　このばかものが！　お前くらいの力で一体何になる。自分の身を盾にすれば、守れるとも思っていたのか!!」

「——ひっ！　……ご、ごめんなさい」

それに驚いた星が頭を押さえ条件反射的に謝ると、マスターは優しくも厳しい口調で語り始めた。

「良いか？　お前のHPが例え『0』になったとしても、あの攻撃でエミルも確実に死んでいた。そうしたらお前とエミル。両方失った仲間者達が取る行動は、玉砕覚悟の敵討だということが分からぬわけではないだろう……お前が仲間を守りたいと思うように、皆がお前を守りたいと思っているのだぞ？」

「……皆が？」

その言葉を聞いて、星は不安そうな表情でエリ工達の顔を見ると、仲間達は優しく微笑みながら頷いている。

「そうだな。例えエミルが助かったとしても、エミルの寝てる間に星ちゃんにもしもの事があれば、起きた時にエミルに何て言われるか分からないからな」

「私もよく。エリーの友達を死なせたなんて現実世界に戻ってから目覚めが悪いもの〜」

「そうだよ。だから、星はあまり無理したらダメなんだからね！」
「はい！」

皆のその言葉に星は返事を返すと、感極まり瞳に涙を浮かべながらにこつと微笑んだ。

その様子にマスターも満足そうに頷いている。

「さて、落ち着いたところで——今日ももう遅い。明日に備えて早く寝るとしよう」

マスターにそう言われ、星は視界の右上の方に小さく出ている時間を見ると、時間は23時を回っていた。

富士の遺産5

エリエが何かを思い出したように手を叩いた。

「そういえば！ すっかり忘れてた!!」

「えっ？ 何を……ですか？」

星は少し不安そうに聞き返す。

すると、エリエは慌ててコマンドを操作するとエリエの腕に大きなフタ付きのバスケットが現れた。

それを見た星が、不安そうな表情を見せ眉をしかめた。他の人達は、エリエの腕にしつかりと抱きかかえられたバスケットに目を奪われている。

星は嫌な予感にぶるつと体を震わせるとエリエは徐ろに「じやくん♪」とバスケットのフタを開け中身を皆に見せた。

その中には美味しそうなカップケーキがこれでもかというくらい詰め込まれていた。このカップケーキはエミルの城から出る前にエリエがキッチンを使って事前に準備していた物だった。

* * *

それは数時間前に遡る……。

エミル達がダンジョン攻略に使う為のアイテムを買い出しに出ている間、星とエリエだけが部屋で留守番することになった。

攻略難度の最も高いダンジョンに行くのだから、それ相応のアイテムを集めなければいけない。

つと言っても、街で殆どが手に入るレベルのものだが、元々このフリーダムというゲームはプレイヤー個々の能力が大きく反映されるというのは、すでに知られている話だ。それは元の身体能力——つと
いうより、各神経系の反応が早いプレイヤーが有利になる。

ゲームのアドバイザーはもう一つの身体という考えであり。開発の段階でリアルな感情を忠実に再現する為に、痛覚や味覚などと同じように神経系も再現されている仕様の為、プレイヤーが感知してから各ス

テータスの数値が反映される。その為、必然的に脳からの信号を各神経系への命令が速い人間が優位に立てる。

つまり、日常的に必然として神経を鍛えているプロのスポーツ選手などは元々のステータスの数値よりも動きがいいということだ――。

身支度を整えたエミルは、不安そうにエリエに声を掛ける。

「それじゃ、エリー。星ちゃんをよろしくね?」

「大丈夫。任せといてよエミル姉!」

「そう? ならよろしくね」

エリエは自信満々に胸を叩く。

「はい。エミルさんも気をつけて下さい」

「ええ、何かあったらすぐにメッセージを送るのよ星ちゃん。分かった?」

「分かりました。いつてらっしゃい」

「ええ、いつてきます」

「いつてらっしゃい」

笑顔で手を振るエリエと星を見つめ少し心配そうな表情をしたまま、エミルはデイビッドと2人で買い出しに出掛けた。

「星。私もちよつと準備することがあるから、キッチンに居るね。何か用事があったら呼んで」

そう言い残して、エリエはうきうきしながらキッチンに向かって行った。

エリエの姿が見えなくなっしばらくすると、キッチンの方から甘い匂いが漂ってくる。

(なんだろう。このケーキが焼けるような甘い匂い……)

星は鼻をくんくんさせながら、その匂いの大本を辿っていくと、そこには鼻歌を歌いながらエプロン姿でオーブンの前に立っているエリエの姿があった。

しかし、星には今朝のこともあり、あまり歓迎できるものではない。でも楽しそうに料理しているエリエを見ると、食べるだけではなく作るのも好きなのだろう。

星は楽しそうにお菓子作りをしているエリエの邪魔をしないよう

にと寝室に行った。

「はあく。お菓子か……」

寝室のベッドの上に身を投げると星は小さく呟いた。

正直。当分は甘い物を食べたくないと思っていた星にとって、エリエの行動はあまり歓迎できるものではなかった。

憂鬱な気持ちのまま、星は瞼を閉じて寝入った……。

* * *

このこともあって、星はエリエがバスケットを取り出した直後、遂にこの時がきたかと思っていたのだ。

「さあ、皆も疲れたでしょ？ 甘いものでも食べて明日も頑張ろう！」
エリエは嬉しそうにその場に居た全員に、カップケーキを手渡していく。

つということは、そのカップケーキは星にも渡されるわけで……。

「はい。星には特別大きいのを上げるね！」

「あ……ありがとうございます……」

星はそれを受け取ると、にっこりと微笑んでいる彼女にぎこちなく微笑みながらお礼を言つて、手の中のカップケーキを見つめた。

性格上、要らないと断ることも出来ずに途方に暮れていると、近くでマスターの声が聞こえた。

「ほう。これは旨いな！」

「ほんとだ。相変わらずお菓子作りだけは上手いんだよな！」

「なによ！ そんな事言うなら、デビッド先輩は別に食べなくて良いですよ！」

エリエはデビッドの言葉を聞いて、不機嫌そうに頬を膨らませている。

「全く。お前達はどうしてそう仲が悪いのだ……」

マスターは困った顔をしながら、お互いの間に割って入る。

星は目の前のカップケーキをどうすればいいのか分からず、困り果てた様子で見ていたので、2人のそのごたごたに全く気が付いていな

い。

(でも、食べないわけにもいかないよね。どうしよう……)

思い切って口を開くが、途中で手が止まり中々自分の口に入れることができずに、星はどうしようもなく大きなため息をついた。

それを見たエリエは不安そうな表情で、星の元に歩み寄ってくる。

「星。どうしたの？ お腹空いてない。それとも私のケーキ。美味しくなさそうだったかな……？」

「い、いえ。ちよつとまだ調子が悪くて……ごめんなさい」

そう言つて俯いたエリエにそう言つて頭を下げ、カップケーキを彼女にそつと返した。

エリエは気にする素振りもなく「そう？ なら仕方ないよね」と言つて星から受け取ったカップケーキを口に運んだ。

彼女のその反応を見た星は、エリエが怒っていないことを確認し、ほつと胸を撫で下ろす。

それからしばらく経つて、エリエの用意したカップケーキが好評のまま完食すると、その日はもう寝ようという話でまとまった。

「なら、俺が見張りをするからマスター達はゆっくり休んでくれ」

焚き火の前で、デイビッドが手を上げて皆を見送る。

「そうか、デイビッド。なら任せるぞ？」

「すみません。ならお言葉に甘えさせてもらいます……デイビッドさん」

マスターとカレンはそう告げると、自分達の出したテントに入つていった。

「それじゃ、星。私達も休もつか！ なら、デビッド先輩よろしくね」

「デイビッドさん。よろしくお願いします」

そう言い残し、エリエも星の手を引いてテントの中に入っていく。「あ、デイビッド先輩。私達が寝ている間に変な事考えないでよね……」

エリエはテントからひよつこりと顔を出してそう告げると、不信感いっぱいの目で焚き火の前に座っているデイビッドを睨んだ。

デイビッドは「そんな事するか！ さつさと寝ろ！」と大きな声で言い返すと、怒ったのか明後日の方向を向く。

彼のその反応を見て満足したのか、エリエは眠そうに大きなあくびをすると、テントの中に頭を引っ込めた。

「星。明日はまだ見ぬダンジョンの攻略が待ってるし早く寝ないとね。それじゃ、おやすみ〜」

「はい、エリエさん。おやすみなさい」

2人はエミルを挟んでそう言って顔を見合わせると眠りに就いた。

その夜。星が寝ていると、横に寝ていたエミルが突然抱きついてきた。

星は突然のことに驚き、身構える。

「えっ？ エミルさん。目を覚ましたんですか……？」

「……………」

しかし、星の言葉にエミルからの反応はない。

おそらく。気を失っていたが目を覚ました後、そのまま寝てしまったのだろう。

エミルは星の腰に手を回すとがっしりと抱き寄せた。エミルの突然の行動に驚いた星だったが、それを拒むこともできずにいた。何故なら――。

「岬……」

エミルはそう言ってぼろぼろと涙を流している。

星は今までに見たことのないエミルのその姿に、少し動揺しながらも、エミルにもそういう時があることに少しほつとしている自分もいた。

それは星も学校で嫌なことがあった時は、誰にも相談できずに自室のベッドで布団に包まって泣いていたことがよくあって、そういうのは自分だけだと思って心配していたのだ。だが、それが誰にでもあることだと分かった瞬間。とても嬉しかった――自分だけが弱いんじゃないと分かったから……。

「――エミルさんの気持ち。私も良く分かりますよ……」

星はにこつと微笑みながら、泣いているエミルの頭を優しく撫でた。

ダンジョン最深部へ

次の日の朝。星が目覚めると、目の前にエミルが微笑んで星の顔を見つめていた。

星は恥ずかしくなり、顔を真っ赤に染めながら慌てて自分を見つめているエミルから顔を背ける。

「ごめんなさいね。星ちゃん。起きたら、あなたを抱きしめていたみたいで……寝苦しかったでしょ?」

「い、いえ。慣れてないですけど……でも、嫌じゃないです……」

星は更に顔を赤く染めて、小さく俯き加減に頷いた。

エミルはにっこりと微笑んで「ありがとう」と星の頭を優しく撫でた。その時、外から大きな声で言い争うのが聞こえてきた。

「うるさい、このバカデビッド!!」

「なんだ?! 本当の事を言っただけだろ!!」

エミルと星は急いでテントを出ると、そこには鍋を挟んで睨み合っているデビッドとエリエの姿があった。

その様子を見て、エミルは呆れたように大きなため息をつく。「今度は何でけんかしてるの?」と、2人の元に駆けていく。

(——良かった。いつも通りのエミルさんだ)

そんな普段通りのエミルの様子を見た星は、ほっと胸を撫で下ろして先に出ていったエミルを追いかけるように星もゆっくりと歩き出した。

言い争って睨み合っているエリエとデビッドは、星達に気が付き話を振ってくる。

「エミル姉。聞いてよ! デビッド先輩がね。私の作った朝食を、こんなの不味くて食べれないって言うんだよ!」

オタマを手に感情を爆発させているエリエ。

すると、デビッドがすぐに言葉を返す。

「その言い方は語弊を招く。正確には朝食のスープが甘すぎてこれじゃジュースだと言ったんだ!」

「何が違うのよ! このバカデビッド!!」

「全然違うだろうが！ それに朝からこんなもの食べたら胸焼け起こして動けなくなるだろうが!!」

そういうと、2人はまた睨み合っている。エミルはそんな二人を強引に引き離し、困り果てた様子で2人の顔を見た。

話を聞いた思い当たる節がある星が顔をしかめる。おそろく、昨日の朝の自分と重ね合わせているのだろう。まあ、星が第一被害者なのは間違いないだろう。

その時、星の背後からオカマ独特の声が聞こえてきた。

「——まったく、うるさいわねえ。レディーの朝は大変なのよ?」

「……えっ?」

星がその方向に目を向けるとそこには、真っ白な顔パックを付けたサラザが立っていた。

その姿のサラザを見た瞬間。星の表情は見る見るうちに青ざめ、目が丸く大きく見開いていく——。

「——ひっ！ ひゃあああああああああッ!!」

星は突然現れた白い顔の大男に驚き、声を裏返らせながら悲鳴を上げた。

「星ちゃん!?!」

その悲鳴を聞いてエミルが慌てて星の元に駆け寄ってくると、星の体に覆い被さるようにして叫ぶ。

「星ちゃんには手を出さないで!」

「……なによ、失礼ね。別に取って喰おうなんて思って——って前にも同じこと言ったわよね?」

「……あっ」

まるで時間が停止したかのように数秒間。サラザとエミルが顔を見合わせた状態で止まる。

そんな2人に向かって、落ち着きを取り戻した星が呟いた。

「いえ、エミルさん。ちよつと驚いてしまっただけで……大丈夫です。驚いてしまつてごめんなさい。サラザさん」

星はサラザに向かってペコリと丁寧な頭を下げる。

サラザは星に頭を下げられたことで、逆に申し訳そうな顔をして頭

を掻いた。

その後、エミルがことの次第をサラザに説明すると、それを聞いたサラザは呆れた表情でエリエとデイビッドに目をやった。

「なるほどね。そんな事でケンカしてたのね。なら、私に任せて頂戴！」

「……どうするんですか？」

サラザは自信満々に張り出した大胸筋を叩くと、エミルと星は不思議そうに首を傾げている。

揉めているエリエとデイビッドの間にある鍋を移動させると、サラザは別の鍋を焚き火の上に置いて料理を始めた。

全身を筋肉で武装したその見た目からは想像も出来ないが、調理をする手付きは妙に手馴れている。

これは間違いなく普段から料理をしている人間のものだ。それからしばらくして、鍋の中からいい匂いが漂ってきた。

「よし。できたわ。ほら、味見してみて」

つとと言うと、小皿に出来たての肉じゃがを乗せて、その場にいた全員に手渡していく。

最初に小皿を受け取ったエミルが匂いに釣られ、それを口へと運んだ。

「凄く美味しいわ。まるでお店で出るものみたい！」

「本当だ。これは旨い！」

「うーん。ちよつと甘みが足りない……」

皆の反応を見て、警戒していた星も手渡された小皿の中のじゃがいもを箸で摘み上げ、徐に口に運ぶ。

「……おいしい」

星も驚いた様に目を丸くさせている。

その匂いに誘われて、マスターとカレンも休んでいたテントの中から出てきた。

「ほう。何やらうまそうな匂いがするな」

「本当ですね、師匠。俺もお腹が空いてきました」
起きてきた2人は、そう言つて鍋の近くにきた。

サラザは「これで全員揃ったわね」と言うと、皿の上に鍋から肉じゃがを盛っていく。

味見したこともあつてか、全員に肉じゃがが行き渡ると、躊躇することなく、皆それを美味しそうに口に運んでいく。

「でも、本当に上手いな、この肉じゃが」

「うむ。こんなに上手い物は久しぶりに食ったぞ！」

「あら、嬉しいわ。ありがとね」

サラザは2人に褒められ上機嫌で投げキッスを返す。

それを受け、一瞬嫌そうな顔をした2人だったが、すぐに何事もなかったかのように食事を再開する。

デイビッドとマスターが本当に美味しそうに食べているのを見て、エリエとカレンが物凄く不機嫌そうに2人を睨んだ。

「——悪かったわね、私のスープは甘くって……」

「——師匠は丸焼きしか作らないくせに、俺の料理をそんなふうにいる……」

2人はぼそつと呟き、頬を膨らませながらそっぽを向く。

そんな彼等を余所に、エミルと星は隣り合わせに座り微笑み合っている。

「美味しいわね。星ちゃん」

「はい。凄く美味しいです」

「満足してもらえたなら嬉しいわ。おかわりもいっぱいあるわよ」

エミルと星の会話を聞いていたサラザがそう言つて微笑んでいる。

星は皿に盛られた肉じゃがとサラザを交互に見て『人は見かけによらない』ということわざを思い出していた。

確かに見た目はどう見ても筋肉ムキムキの大男のサラザなのだが、肉じゃがの味の方は繊細で、かと言って薄すぎずしつかりとしたコクのある味に仕上がっていた。

この体からこれほどの料理ができるなんて……。

つと星が関心していると、逸早く皿を空にしたマスターが口を開いた。

「さて、ならば今のうちに、役割分担を決めておかなければならんだろうな」

『役割分担?』

その場にいた全員が声を合わせて言うと、マスターの言葉に首を傾げている。

「さよう……おそらく。これから先は昨日のボス以上の強敵がいるだろう。それに辿り着く前に力尽きては、意味がないからな」

「なるほど……なら、マスターはこれより先にもっと強い敵がいるとお考えなのですね?」

「うむ。そういうことだ」

エミルの言葉にマスターは静かに頷く。

横で2人の話を聞いて、不思議そうに首を傾げているエリエが口を挟む。

「ちよつと待つてよ。どうして敵がいると思うの? もしかしたら、ただの抜け道かもしれないじゃない」

エリエのその疑問は最もだ。いくらボス部屋の奥に道が続いているとはいえ、そこに必ず敵がいるとは限らない。ダンジョンを脱出する移動時間を短縮する為の抜け道という考えも捨て切れない。

だが、それを聞いたマスターはにやりと笑みを浮かべ「行けば分かる」と自信満々に言い放つ。

その意味有り気な言葉に、エリエは怪訝そうに眉をひそめた。

「さて、役割分担だが、儂とカレン。それにエミルの3人がボス戦での前衛を務める。他はサポートなどに回ってもらう。無論、その道中の雑魚の殲滅も担当してもらうことになるだろうが良いか?」

「——あの。サポートって……何をすればいいんですか?」

星が手を上げてそう尋ねた。

「うむ。主にヒールストーンなどによる回復支援。後はこちらがヘイト——つまり、敵の注意を引き付けている間に、敵死角から可能であれば弱点部位への攻撃などを担当してもらう!」

「なるほど……」

星はマスターの言葉の意味は良く分からなかったが、とりあえず相

槌を打つ。

その後、各々身支度を整え先のダンジョンに向かおうとしたその時。エミルが「待って!」と声を上げる。

その場にいた全員が一斉にエミルを見ると、彼女はにっこりと微笑みを浮かべながら、優しい声音で星に話し掛けた。

「星ちゃん。天女の羽衣を出してもらえるかしら」

「……えっ? どうしてですか?」

「どうしても! 大事なことから!」

星はエミルの『大事な事』という言葉に大きく頷くと、言われた通りに天女の羽衣を出してエミルに差し出す。

すると、エミルはその羽衣を手にとって、自分のアイテムバーの中に入れ、なにやら忙しなく操作を始めた。

星は不安そうにその様子を見守ると、少しして彼女がにっこりと微笑み、星に綺麗に折りたたまれた服を手渡した。

「これを着て、ダンジョンに入る前にデイベットと2人で街に行って買ってきた服よ。きつと星ちゃんに似合うと思うわ。それにアーサー王の鎧を合成してるから、これで私達とHP量はあまり変わらないはずよ」

「——えっ!? アーサー王の鎧ってエミル姉。それ大会優勝者しか貰えないアイテムでしょ!?!」

エリエが驚きを隠せない表情で叫ぶとエミルは微笑んだ。

それを聞いて、困惑した星がおどおどし始めた。それもそうだろう。大会の優勝者にしか渡されないアイテムを自分が貰っていいわけがない。だが、そんな星を尻目にエリエとエミルは話を続けた。

「いいのよ、エリー。私の防具は間に合ってるし。それに星ちゃん危なっかしいんだもの。これくらいは装備じゃないと、いつ死んじゃってもおかしくないでしょ? どんなレアアイテムよりも私にはこの子の方が大事だから……」

「エミル姉……」

(やっぱり、星と妹さんの事を重ねてるんだ……)

優しい微笑みを浮かべたエミルの顔を見て、エリエはそう心の中で

眩く。

しかし、星もそんな大事な物だと分かって受け取るわけにはいかな
い。

「そんな、大事なものの受け取るわけには……」

星はエミルに差し出された物を前に、両手を突き出して首を左右に
振っている。

困った様に眉をひそめるエミルを見て、エリエが装備を受け取り。

「なら善は急げ。さっそく、試着だね！ 星。ほら、つべこべ言わずに
早く早く〜」

「え、エリエさん!? まだ私貰うなんて言ってます……」

星は動揺しながらも、エリエに背中を押され強引にテントの中へと
連れ込まれた。

ダンジョン最深部へ2

エリエと星が入ったテントの中から星の悲鳴が聞こえた。

それからしばらくして、エリエに背中を押されながら、星が恥ずかしそうにテントから出てくる。

背中に羽の模様が付いている白を基調したフリル付きのブラウスに、これまたフリル付き柔らかそうな黒のスカートという年頃の女の子と言った感じだ。着ている星も普段は選ばない服に顔を耳まで真っ赤に染め、膝上程のスカートの裾を両手で必死に抑えている。

「あの……スカートはやっぱり……」

「どうして？ 凄く可愛いよ！ ねっ、エミル姉！」

「そうね！ 凄く似合ってるわよ星ちゃん！」

2人は目をキラキラさせながら星を見て、少し興奮気味に詰め寄ってくる。その勢いは今までにないくらい強く、星が少し引いてしまうほどだった。

これが現実世界なら、カメラで間違いなく写真を撮られる勢いだろう。

「——うう……そんな事ないです。私に似合うはずがないのに……」

2人に褒められた星は浮かない顔で、俯き加減に聞こえない様になさく呟いた。

それもそのはずだ。星にとってスカートは、いじめられるきっかけにもなったもので、あまり良い印象がない。悪夢の様なああのノーパン事件以来。星がスカートを穿いたことなんてなかった……。

そのせいか、普段から長めのズボンと地味な服を好んで選んで身につけていた。

星は同じクラスの女の子が着ているようなフリルが着いている服を、まさか自分が着る時がくるなんて、今の今まで想像もしていなかったのだ。

普段しない格好をしているせいで、まるで自分が自分じゃないかのような違和感が星の心の中で渦巻いていた。

浮かない顔をしている星を見て、エミルが少し不安そうに尋ねた。

「……星ちゃん。私の選んだ服が気に入らなかった？」

その表情はどことなく悲しげに見える。

おそらく。エミルが期待していたような反応がなかったのが、彼女なりに相当堪えたのだろう。

そんなエミルの表情に気が付き、星は慌てて口を開く。

「いえ。凄く可愛い服で……わ、私なんかを着たらもつたいたいって
いうか、その……」

表情を曇らせ口籠る。

エリエはそんな2人のやり取りを見て、黙っていられなかったのか
横から口を挟んだ。

「エミル姉が星が着るのを考えながら選んで買ってきたんだから、
もつたいたいなんて事ないでしょ？ それに、前の地味な初期装備よ
りも全然女の子らしくていいと思うけどな」

「……女の子らしい？」

星はエリエのその言葉を疑うように首を傾げている。

そんな彼女に、エリエは「うん！」と微笑みながら優しく星の頭を
撫でた。

「星はせっかく可愛いんだから、もっと自分に自信持たないとだめだ
よ！ いつもそうやってすぐ落ち込んじゃったら、せっかくの可愛い
顔が台無しでしょ？」

「ごめんなさい。でも、そんな……かわいくなんて……そんなこと
……」

「ほら、すぐまたそうやって謝る。まつ、すぐに直せっていうのも無理
だし、ゆつくり慣れていけばいいよ。それより、どう？ HPの方は
増えてる？」

エリエにそう言われ、思い出したように星は視界に表示されている
自分のHPバーを確認する。すると、今までHPの数値が15だった
ものが一気に1000にまで上がっていた。

星はそれを見て何かの間違いじゃないのかとエリエに尋ねた。

「あの……HPが1000になってるんですけど……これって間違い
ですか？」

不安そうに尋ねてきた星の顔を見て、エリエが急にお腹を抱えて笑い出す。星は自分が何かおかしいことを言ったのかと思い、落ち込んだように視線を落とした。

まあ、急に元の数値より二桁も数値が上がれば、誰でも困惑するのは無理もない。

笑っているエリエにエミルが声を上げた。

「こら、笑ったらダメでしょ？　星ちゃんはゲーム始めてまだ日が浅いんだから、驚いて当然よ」

「あははははっ！　だ、だって……このゲームの仕様が面白いんだもん。そりゃ、いきなり数値が1000になったら誰だって驚くって！」

余程面白いのか、なおも笑い続けているエリエを余所に、エミルは星と視線を合わせて真剣な面持ちで真っ直ぐ星の瞳を見た。

「いいい？　フリーダムでのHPは防具で変わるの。今の星ちゃんは、服というレベル制限のない装備を使って、本来は装備できない。高レベルの防具を装備している状態なの」

「……高レベルの装備ですか？」

星はさつき2人が話していた『アーサー王の鎧』という言葉を出し出す。

限定のアイテムだと聞いていたので、そんな大事な装備を自分の為に使用したことに心苦しい思いでいっぱいだった。

「そう、その装備は普通はレベル90以上のプレイヤーしか装備出来ないんだけど、トレジャーアイテムの『天女の羽衣』の効果によって、その服にアーサー王の鎧のステータスを上書きしたってわけなの」「なるほど……」

星はエミルの説明を聞いて、なぜ自分が突然HP1000という途方もない数値になったのかを理解した。

そう。VRMMORPGフリーダムでは「RMT」をゲーム会社側が承認しており、お金を出せば、手取り早く自分を強くすることができる。しかし、装備にはレベル制限など様々な制約がついていて、お金だけでは解決できない障害もある。

だが『天女の羽衣』のように、その制約を度外視するようなアイテムがあり。これらのアイテムは非常に入手し難い上にRMTの市場の中でも出てくるのがまれで、もし出てきたならばとんでもない高値で取引されているのだ。

こう言ったチートのアイテムが存在することでプレイヤーのモチベーションを上げ、飽きのこないようにするという運営側の思惑もあるのだろう。

本来ならば、星のようなゲームを始めてまだ日の浅いプレイヤーが手にできるようなアイテムではないのだが、他のメンバーが皆高レベルプレイヤーということと、エリエのような実際に使用したプレイヤーが近くにいたので運良く入手できたわけだ――。

「でも、HPが増えても防御力が変わったわけじゃないのよ？　だから、あまり強い敵に攻撃されると、私達よりも早くHPが減っちゃうから、そこだけは注意してね！」

「はい。分かりました」

そう返事を返すと、エミルはにつこりと微笑み星の耳元でそつとささやく。

「……もし、その服が気に入らなかつたら後で、星ちゃんの気に入った服を買いにいきましょう。私のアイテムを使えば、装備の付け直しができるはずだから……」

「えっ？　いえ、この服で大丈夫です！」

星は慌てて、両手を振ってそれを全力で断る。

彼女の持つている高価なアイテムをこれ以上使われたら、堪ったものではない。ただでさえ気苦しきで押し潰されそうに、これ以上は身が保たなくなる。

エミルはそれを見て「そう？」と少し不安そうな表情を見せる。

星はそんな彼女に「はい。素敵なお洋服をありがとうございます」とお礼を言つて笑顔を見せると、深く頭を下げた。

少し照れくさそうに笑ったエミルは「もう少し、星ちゃんの好み分かるように勉強が必要ね」と星の頭を撫でた。

星がまんざらでもない様子していると、どこからともなくサラザの声

が聞こえてきた。

「なに星ちゃん。その可愛いお洋服は……だつ、抱っこさせて〜♪」
「……ッ!？」

気付いた星がその声の方を向くと、そこには厚化粧をした筋肉ムキムキのオカマが全力で向かってくる姿がそこにはあった——いつの間にか化粧をしたのかは分からないが……。

星はそれを見て思わずエミルの背中に隠れると、怯えた子犬のような瞳でサラザを見た。

サラザはその様子を見て足を止め、残念そうに指を咥えている。

「どうして私には懐かないのかしらね〜」

そう言ったサラザを、その場にいた全員が見た。

おそらく。その場にいた皆が同じことを考えていただろう、その外見が一番の原因だろう——つと……。

その後、最深部へと向かって進み始める。

最深部に向かう階段は両サイドが岩盤に覆われていて思っていたより狭く、大人2人が並んで通れるぎりぎりの大きさしかない。細い通路のあちらこちらに松明が並べられていて、それが道をぼんやりと照らしている。

しかし、先は肉眼では確認できず。どこまでも真っ直ぐに、通路を照らす松明がぼんやりと点の様に見えるだけだった。

どこまでも続く闇の中に飲み込まれそうな感覚に襲われ。

(薄暗くて、ちよつと……怖いかも……)

星はそう思いながらも、どこまで行っても終わりそうもない長い階段を、どんどん奥へと向かって進んでいく。

それから20分近く歩き続けると、少し広い場所へと出た。

部屋の壁に掛かった松明が少なく通路よりも暗く、足元も見えないような状態だった。その状況が一層、星の恐怖心を掻き立てる。すると、横を歩いていたエミルが徐ろに星の方を向く。

「皆。足元が見えにくいから注意してねー」

エミルはそういうと、再び辺りを注意深く見渡す。

薄暗く松明の光りがゆらゆらと揺れる通路は、もしトラップがあつ

でも絶対に気付くことができないだろう。

「やっぱり暗いわね……」

「エミル姉。お困りのようだね〜」

何かを企んでいる様なそんな悪戯な笑みを浮かべているエリエには、何か考えがあるようだ。

「えっ？ 何かいい方法があるの？ エリー」

「もちろん！」

エミルの耳元で何かこそこそと耳打ちするエリエに、エミルは少し嫌そうに「えー」と言った。

その反応を見てもあまり良い考えとは言えないことは、星にも何となくだが分かったが、自分が口を出すことでもないので黙って事の成り行きを見守る。

「なら、暗いままでもいいの？ ほら、早く！」

「もう……分かったわよ。やればいいのね」

エリエに急かされエミルは仕方なく、アイテムの中からドラゴンを呼び出す巻物を取り出す。

エミルは言われるがままに、巻物を地面に広げると笛を鳴らした。

直後、辺りに白い煙が立ち込め、悪い視界が更に悪くなる。

ダンジョン最深部へ3

煙が収まると、目の前にはゴツゴツした岩を背中にまとったドラゴンの姿があった。

その姿には見覚えがある。そう、エミルはストーンドラゴンを呼び出したのだ。

エミルはストーンドラゴンを召喚するとエリエを見た。

「本当にやるの……？」

再確認するようにエミルはエリエにそう尋ねると、彼女は自信満々な表情でこくと頷いて、近くにあった松明を手につつと、ストーンドラゴンの背中の岩と岩の隙間に挿し込んでいった。

松明はなくなると再び現れる仕様になっているようで、エリエが抜いた先から次々に松明が現れ、何事もなかったかのように辺りを照らしている。

「ほら、何してるの？ 皆も手伝ってよ！」

エリエにそう言われ、星達も仕方なくドラゴンの背中に松明を挿していく。

ストーンドラゴンは大人しいもので、背中の岩の隙間に木の棒を突き刺されても動じることなく、なんなら大きなあくびをするくらいの余裕すらある。すると、ストーンドラゴンが大きなランプのように辺りを照らし出す。

「……ひっ！」

少し明るくなった自分の足の周りを見た星が、その光景に思わず悲鳴を上げて後退る。

だが、星が驚くのも無理はない。何故なら、彼女達の足元には人間の骨らしき物が乱雑に散らばっていたのだ。

驚いた星は思わず、エミルの足に抱き付く。

「——わっ！ 星ちゃん？ 大丈夫よ、これは作り物だから」

エミルは自分の足にしがみつくと星に、転がっている頭を指差して告げる。だが、それが偽物だったとしても小学生の女の子にはそんなことなど関係なく怖いわけで——。

なおもエミルの足にしがみついている星を見て、エリエが耳元でささやいた。

「――星。そうしてると、まるで赤ちゃんみたいだよ」

「うっ……私。赤ちゃんじゃないですー!」

からかわれたことが不服だったのか、星は強がってエミルの足から離れた。しかし、恐怖から体が震えているのまでは隠しきれない。

星が離れたこともあり。すぐに歩き始めるエミルに、星もその後を慌てて追いかけた。

先頭をストーンドラゴンが歩き、その後を他のメンバーが続いて歩いて行く、星は後ろから2番目の位置を歩いていた。

しばらくすると、先頭の方を歩いていたマスターが突然。皆に止まるようにと指示を出した。

「どうしたんですか？ マスター」

「――うむ。何やら不穏な気配を感じる……」

「はい。俺も何か感じます」

「確かに。オカマの勘がやばいって言ってるわ」

緊迫した様子に包まれる場に、皆足を止め辺りを注意深く見渡す。

星はその張り詰めた緊張感に不安になってきたのか、またエミルの足に抱き付いた。

その時、地面に無造作に散らばっていた骨がカタカタと音を立てて動き出したかと思った直後、空中を浮遊して人の形へと戻っていく。

「これは……儂らはここに来た時には、すでに敵の術中にはまっていたということか!」

「師匠。これでは……」

「うむ。体力温存など言っておる暇がないな。全力で奴等を片付けるぞ!!」

その掛け声と共に、各々武器を構えた。

骨は剣と盾を持ったモンスター形の形になると頭の上の方にHPバーが現れ、その上に名前とレベルが表示される。全ての敵の上には『スケルトン Lv55』と表示されていた。

最初は数体だった敵の数が、すぐに数え切れないまでに増殖してい

く。突如足元から湧き上がった敵に、この場にいたメンバー達が分断されてしまう。

スケルトン達は武器を手に、その節穴と化した目が捉えて、カタカタと体を揺らしている。

「55……」

不安そうな表情になった星が、腰に差された剣をちらっと見た。

前の戦闘で星のレベルは45まで上がっていたが、それより10も多い――。

レベル制のゲームで10も差があると言うことは、実力差に超えられない壁のようなものがあり。この差が大きければ大きいほど、攻撃を繰り返した時のダメージが通り難くなる。

その為、星の攻撃力ではスケルトンに決定打を与えるのは難しいのは、彼女自身が一番良く分かっていた。だが、こんな場所で大人しく死ぬ訳にはいかない。決定打を与えられなければ、少しでも敵を惹き付けておくだけのこと……。

（ここは、少しでもダメージを受けないように守りながら……でも、ちよつとでも皆の役に立たなきゃ！）

自分の役割を瞬時に理解して『皆の役に立つ』その言葉を強く心の中で呟く。すると、自然と剣を握っていた手に力が入る。

「ちっ！ のんびり探索というわけにはいかないってことか……」

大量に出現したスケルトンに、デビッドは苦虫を噛み潰したような顔で舌打ちをすると、刀の鋒をスケルトンへ向けた。

エリエがデビッドの側でレイピアを構えながら、小さな声で言った。

「デビッド先輩。怖かったら、私の背中にもいいんだよ？」

「ふん。何を冗談言ってるんだ。俺はサムライだぞ？ 女に守ってもらうだなんて、武士のプライドが許さん！」

そう口にしたデビッドに「日本人じゃないくせに」と、彼に聞こえないくらいの声でバカにしてくすつと笑った。

それから少し離れた場所では、緊張した面持ちで剣を構える星の横で、普段通り落ち着いた様子でエミルが小声で言った。

「——大丈夫よ。あなたは私が必ず守るから。だから、星ちゃんは私から離れないように気を付けてね」

「は、はい」

頷いてエミルを見上げると、エミルはにっこりと微笑んで星の頭を優しく撫でる。

エミルの手の平の温もりが、伝わってきて不思議と高鳴っていた鼓動が少し落ち着いた気がした。

（やっぱりエミルさんは凄い。この状況でも私を勇気付けてくれて……私も怖いなんて言っていられない。エミルさんに負けないように頑張らないと！）

星は自分の拳をぎゅっと握ると、目の前のスケルトン達を見据えた。

その時、今までその場に立ち尽くしていたスケルトン達が、一斉に音を立てて動き出し、いきなり剣を振りかざし襲いかかってきた。

襲い掛かってくるスケルトン達を各々が迎撃する。

星も慣れないながらも、周りに負けじと必死で剣を振った。

「えいっ！ えいっ！ やあっ！」

掛け声はいいのだが、星の攻撃は誰が見ても、ただでたらめに剣を振り回していると思えない。

それはそうだろう、星は殆ど敵と戦った経験がない。戦ったことがあると言っても、それは武器を持たない低レベルのラビットやラットだ。

実戦経験がほぼ皆無と言っていい上に、武器を持っている敵とは戦ったことがなく。剣という刃物を持って襲ってくる敵に恐怖を感じていた。

初期のモンスターは体当たりとは迫力も威力も違う、底知れぬ恐怖が心を支配するのを感じていた。それは、星の震える体を見ていれば明らかだった。

その時、一体のスケルトンが星に襲い掛かってきた。

星は突然のことに驚き思わず目を瞑り、手に握りしめた剣を振り回す。すると、それに気付いたエミルが星の元に駆けつけ、スケルトン

に向かって剣を振り抜く。

目にも留まらぬ速さの一撃により、星の前のスケルトンがバラバラに吹き飛ぶ。

自分の目の前の敵がいなくなり、ほっと胸を撫で下ろした星の耳にエミルの声が響く。

「星ちゃん。剣を振る時に目を瞑っちゃだめよ！」

「は、はい！」

エミルは最初に言った言葉通り、星を守るように側にぴったりと寄り添うかたちで戦っている。

彼女のその戦い方は、さすがは高レベルプレイヤーと言ったところだろう。身のこなしも上手くスケルトンの剣をまるで踊っているか様にかわすと空かさず、相手を斬り伏せていく。

星はそんなエミルの姿を瞳をきらきらと輝かせながら、羨望の眼差しで見つめていた。

その横では……。

「ちよつと、あんまりくつつかないでくださいよ！」

「仕方ないだろ！ 敵の数が多いんだから！」

エリエとデイビッドはスケルトンの剣を武器で受けながら、不機嫌さを滲ませながらいがみ合っている。

「ちよ！ バカ危ない！」

交戦中のデイビッドがエリエの声で敵に気が付いた時には、他のスケルトンが剣を振り上げ向かってきているところだった。

「……なに!？」

(くそっ……かわせないか……)

デイビッドは咄嗟に今戦っているスケルトンを足で蹴飛ばし、向かってくる敵に対応しようとしたが、その時にはもうどうしようもなかった。彼が『やられる!』そう思って身構えた直後、エリエのレイピアが目の前を通り過ぎていった。

エリエのレイピアはスケルトンの頭に直撃し、頭部はばらばらに砕け散った。

エリエの固有スキル【神速】は、一時的にスピードと攻撃速度を引

き上げることができなのだ。

「——ありがとう、すまん。エリエ」

デイビッドが素直に助けてもらったお礼を言うと、エリエは大きなため息をつく。

「はあく。まったく。これだからデイビッド先輩はだめなんですよ。だから、女の子にもモテないのね……」

「な、なに!? 人が素直に礼を言えばこの——って、女にモテないのはお前に関係ないだろう!」

「ふふつ。凶星なんだ……」

顔を真っ赤にしながら怒っているデイビッドに、エリエは口元を抑えて「ぷぷぷつ」と小馬鹿にしたように笑う。

それが引き金となり。いつもの様に2人が言い合っていると、そこにスケルトン3体が襲い掛かる。

「もう。まだ言いたい事あるのにつ!」
「くそつ!」

2人は口論を中断し同時に2体の敵を倒すと、向かって来る最後の一体に武器を構え直すと。

「私の——」

「俺の——」

「——邪魔をするなああああああッ!!」

全く同時にそう叫ぶと、攻撃を叩き込んだ。

その息の合った攻撃を受け、スケルトンはばらばらに吹き飛ばす。

スケルトンを倒した2人は、お互いの顔を見合わせる。

「このままじゃ落ち着いてケンカも出来ないよね? 先輩」

「珍しく意見が合ったな。俺もそう思っていたところだ」

2人は不敵な笑みを浮かべ頷くと、再び武器を構え直して目の前に立ち並ぶスケルトンを睨んだ。

ダンジョン最深部へ4

スケルトン達もデイビッドとエリエのことを警戒しているのか、それ以上は動こうとしない。

おそらく。あつという間に3体をやられて無造作に飛び込んでもダメだと、スケルトンのAIが学習したのだろう。

その時、エリエがデイビッドに向かって叫んだ。

「デビッド先輩は好きに突っ込んで！ 私が援護するから！」

「了解。出来る限り倒すが漏れた敵は頼んだッ!!」

デイビッドは刀を握り締め、敵の中に向かって突っ込んでいく。

「はあああああッ!!」

デイビッドは刀を構えながらスケルトンに突進すると、そのまま勢い良く刀を振り抜く。スケルトンは攻撃を受けてばらばらになり、その場に崩れ落ちた。

咆哮を上げたデイビッドが、そのままスケルトンの群れの中に飛び込んでいく。デイビッドは襲ってくるスケルトンの攻撃をかわし、素早く反撃してスケルトン達を撃破しながら突き進む。

その後ろからエリエが続ぎ、デイビッドが倒しきれなかった敵を自慢のレイピアの剣速を活かした攻撃で、次々と撃破する。

普段些細なことではいがみ合っている2人からは想像もできないような連携プレイで、彼等が通った後には屍の山ならぬ、スケルトンの骨の山が築かれていった。

大勢のスケルトンを前に、落ち着いた様子で拳を構えるカレン。

そんな彼女の後ろで、腕を組みながら集中力を高めているカレンを見ているマスターの激が飛ぶ。

「——うむ。カレンよ、今こそ修行の成果。見せてみせい!!」

「はい！ 師匠！」

カレンは深く深呼吸をして拳を構えると、向かってくるスケルトン目掛けて思い切り拳を振り抜く。

「はあああああッ!!」

咆哮を上げたカレンの拳はスケルトンの腹部に直撃し、その体を拳から発生させた風圧で勢い良く吹き飛ばす。

飛ばされたスケルトンは、周りのスケルトン2体をも巻き込んでばらばらになる。それを見て、マスターは満足そうに頷くと己の拳を固めて叫んだ。

「うむ。カレン見事だ！ しかし、まだ踏み込みが甘いな——良いか。よく見ておれ！ 突きとはこうするのだ!!」

マスターは拳を構え低い姿勢を取ってそう叫んだかと思うと、カレンの前から一瞬で姿を消した。

カレンが慌ててマスターの姿を探すと、彼はすでにスケルトンの目の前に移動していて、今にもスケルトン目掛けて拳を突き出そうとしているところだった。

「見よ、これが正拳突きだ！ はあああああッ!!」

マスターは咆哮とともにスケルトン目掛け拳を前に突き出した。

その直後、カレンのものとは比べものにならないほどの衝撃波の様なものが巻き起こり、周りにいる敵をまとめて吹き飛ばす。

軽々と宙を舞ったスケルトン達が地面に落ちてバラバラに周囲に散らばる。それを見たカレンは、目を輝かせながら歓喜の声を上げた。

「さすがは師匠！ 素晴らしい突きでした!!」

「うむ……」

マスターは満足そうに微笑むと、まだ数多く残っているスケルトンを睨みつけ「まだ敵はおるぞ！ 油断するでない！」と直ぐ様、拳を構え直す。

たった一人……敵に囲まれ、サラザは身動きが取れない状況になっていた。

「これは……オカマでも。さすがにまずいわねえ……」

サラザはスケルトン達に囲まれたこの絶対絶命の状況にそう弱音を吐くと、額から一筋の汗が流れ落ちた。

どうしてサラザがここまで追い込まれたかというと、戦闘が始まり

初めのうちは軽快に次々と敵をバーベルでなぎ倒していたサラザだったが、敵を倒すことばかりに集中しすぎて前に出過ぎてしまい。

気が付いたら周りのメンバーとの間に大きく距離が空いてしまつて、今のこの状況になつていた——というわけだ。

(——これは本当にまずいわね。ここは、とりあえず近くにいるグループに合流しないと……)

そう考えたサラザは辺りを見渡した。すると、星とエミルが戦っているのが目に入った。

あそこに合流するしかない！ 咄嗟にそう判断したサラザは、スケルトンの中にバーベルを振り回し飛び込んでいた。

「死にたい奴はかかつてらっしやい！ オカマに触ると、火傷するわよ!!」

サラザは「うおおおお！」と雄叫びを上げながら、向かってくるスケルトン達を次々と薙ぎ払つて、2人の元へ向かつて無我夢中で走り続ける。

星はサラザに逸早く気づき、その方向を指差して叫ぶ。

「あつ！ エミルさん。サラザさんがこっちに走つて来ます！」

「えっ？ 大変！ スケルトンに追われてるわ！」

スケルトンに追われながらこちらに向かつて走ってくるサラザを見て、エミルは何時になく慌てている。もちろん。それは近くにいる星のことを気遣つてのことだ——。

単独で戦っていれば左程大きな影響はないであろうが、今は近くに初心者の星がいる。

いくらHP量が跳ね上がったからとはいえ、戦闘においてのプレイスキルが上がったわけではない。

そんな中で更に多くのスケルトンを抱える余裕はないが、一概にサラザを責めることもできなかった。

自分達も目の前の敵を倒すのに必死で、周りを見ている余裕などなかったからだ。

それもそのはずだろう。地面に散らばっていた骨が急にモンスターになつたのだ、動揺しなかったと言ったら嘘になる。

骨がモンスター形の形になって動くまでに、少ない時間はあったもののそれでも状況を理解することで精一杯だった。

その後は突然現れ、数で勝る敵に苦戦を強いられていて、周りのメンバーを気にする余裕などなかった。

ただ、パーティメンバーの名前とHPの残量が表示されている場所を見て、全員の無事を確認していて少しほっとしていたエミルだったが、目の前からスケルトンに追われながら全力でこちらに向かってきているサラザの姿を見ている分には、事はエミルが思っていたほど状況が良くないと理解した。

エミルはちらつと星を見ると、交戦していたスケルトンを素早く撃破し、瞬時にコマンドを操作し盾と巻物を取り出す。

「星ちゃん！ ちよつとサラザさんを迎えに行つてくるからちよつとの間持ち堪えられる？」

「はあ、はあ……は、はい。私の事は気にしないでいってください……」

星は呼吸を荒げながらも、につこりと微笑んだ。だが、その星の表情からは疲労の色が見て取れる。しかし、エミルがいなくなれば戦闘経験の薄い星が長い間耐えられないことは、火を見るよりも明らかだった。

ここでサラザと合流すれば、追いかけてきているスケルトンもまとめて合流することになり、状況は更に悪化する。それは結果的に、星に負担を掛けることを意味していた。

「星ちゃん。これを装備してできるだけ攻撃はしないで守りに徹して、良いわね？」

「は、はい。分かりました」

エミルは星に盾を渡すと、にこつと微笑んで「いい子ね」と頭を撫でた。

徐ろに巻物を取り出したエミルが、それを地面に広げ笛を鳴らす。すると、煙とともに全身を剣で武装されたドラゴンが現れた。

「うわゝ。刺さったら痛そう……」

星はそのドラゴンの容姿を見てぼそつと呟く、その数多い武装に目

がいきがちだが、何よりも凄いのは尻尾だ――。

このドラゴンの尻尾が2本あり、まるで2つの薙刀をそのまま付けたような形をしている。ドラゴン自身もその自慢の尻尾をぶんぶんと振っていて、やる気は充分そうだ。

エミルはドラゴンの説明をすることもなく、ドラゴンの背中を軽く叩く。すると、針のように背中にびっしりと並んでいる剣が一本抜け宙を舞った。

その剣を取ったエミルは「星ちゃん。絶対にこの子から離れないでね」と言い残し、サラザの方に向かって走っていった。

星は「よろしくね」とドラゴンに優しく語りかけると、ドラゴンもその言葉に応える様に。

――グオオオオオオッ！

つとひと鳴きした。

前から2本の剣を手にしたエミルが走ってくるのを見て、サラザは嬉しそうに微笑んだ。

「サラザさん。大丈夫ですか?!」

「ごめんなさいね。ちよつとドジっちゃったわ」

「いえ、こちらもいっぱいいっぱいで、とりあえず少しでも数を減らしておかないと、星ちゃんが大変なので……」

エミルは言い難そうにそう呟くと、星の姿を心配そうに見つめている。

そんな彼女の心配を他所に、星は向かってくるスケルトンの攻撃を盾で防ぎ、それをエミルのドラゴンが尻尾の刃で薙ぎ払うという見事な連携プレイでなんとかその場を持ち堪えている。

だが、敵の数的に今はよくてもそれほど長くは持ち堪えられないだろう。

その様子を見たサラザも180度回って、追ってきている敵の方へと向きを変えた。

「――あんな小さな子の方に、こんな化け物を持っていったらダメよね……私も冷静さを失っていたようね。エミル、あなたの言う通りだわ！」

「サラザさん……」

「早くかたづけて街に戻りましょ」

サラザは、エミルに向かってにこっと微笑みウインクした。エミルもそれに答えるようににっこりと笑って頷く。

2人はスケルトンに武器を構えると、そのまま突っ込んでいった。敵は2人の猛攻に見る見る数を減らしてゆく、その中でも多くの敵を撃破していたのはエミルだった。

2本の剣をたくみに操り、敵を次々と薙ぎ倒している。普通は剣が一本増えたことで、単純に2倍強くなるというわけではない。

両手が剣で塞がっている為、攻撃をガードする際の能力は著しく低下するし、攻撃の際も一撃の破壊力も極端に落ちる。

2本持てば敏捷性が下がるのではないか？ つという懸念もあるが、そんなことはない。プレイヤーのレベルや種族によって総重量が設けられていて、それを超えない限りはシステム上、必要以上の重量を感じることはない。

二刀流の利点は、攻撃速度とガードに移る時に僅かに早くなる程度のものだ。

だが、エミルは明らかに強くなっている。それは、エミルが本来は2本の剣を使うことに長けているということの証でもあった。

最初は劣勢だと思われたスケルトンとの戦闘だったが、2人の猛攻で見る見るうちにその数を減らしていくスケルトンの群れ。

「もう、このぐらいで大丈夫でしょう」

「そうね。あらかた——片付いたみたいね」

エミルが声を掛けると、サラザは辺りを見渡して安堵の表情を見せる。

2人は急いで星の方へと走り出した。

星の元に着いた時には、星も最後の1体を丁度倒したところだった。

懸念していた星だったが、結果的には敵を全て撃破するという驚くべきものだった……。

「——星ちゃん。大丈夫だった!？」

「はあ、はあ、はあ……大丈夫です。これも、エミルさんがたくさん倒してくれたおかげですね」

荒く肩で息をしながらも、星はエミルの顔を見上げてにつこりと微笑んだ。

星のHPバーが少し減っていることから、数回のダメージを受けたのは言うまでもない。

痛覚があるこのゲームでダメージを受けるという行為は、それだけで肉体的にも精神的にも著しく疲労するということだ。しかし、星のそんなことを感じさせないように振る舞う健気な姿に、エミルの瞳からは自然と涙が流れた。

エミルはそのまま何も言わずにそんな星を抱きしめると、優しく頭を撫でた。

「……よく頑張ったわね、星ちゃんは強いわ……」

星はどうしてエミルが泣いているのか分からなかったが、その理由を聞いてはいけないような感じがした。

もしこのことを聞いてしまったら、エミルとの関係が終わってしまった——そんな気がしていたのだ。しばらくして、戦闘を終わらせたエリ工達も続々と合流した。

血路を開け！

「そつちも終わったみたいだねー！」

「ええ、結構きつかったけどね。何とかなつたわ〜」

サラザとエリエはお互いの無事を確認するかのように互いに手を掴むと、2人は嬉しそうに微笑み合った。

辺りに派手に散らばる骨を見渡している。

部屋に入った時には気付かなかつたが、足の踏み場もないほどのおびただしい量の骨が散らばっていた。

「まったく。あの数を良く倒せたもんだな」

「ふっ。デイビッドよ……お前も少しなまつたか？」

デイビッドがむつとしながら声の方を向くと、そこにはマスターが立っていた。

マスターは少し不満そうな顔で腕組しながら、デイビッドを見ている。

「昔、お前と手合わせした時は、もつと獣のような男だったのにな……」

「そんな事言っても。マスターだって同じだろ？　可愛い女の子連れてさ」

言われてばかりではいられないと言わんばかりに、マスターの隣に寄り添っているカレンに視線を向けて、デイビッドが毒づく。

「確かに、儂もこいつが可愛くて仕方ない。もちろん、弟子としてだが……」

「——か、可愛いだなんて……そんな……師匠。なっ、なに言ってるんですか！」

顔を真っ赤に染めてもじもじと体を揺らすカレン。

彼女の動作を見ると、内心では物凄く嬉しそうだ——。

2人がそんなカレンを見て笑っていると、倒したはずのスケルトンの骨が一斉にカタカタと音を立てて再び集まりだした。

その場にいた7人は、慌てて一箇所に固り戦闘態勢を取る。しかし、その場にいた殆どの者が動揺を隠しきれない様子で、再びスケル

トンの形になっていく骨を見つめている。

「これは、どういうことだ!？」

「分からないわく。でも、この状況はやばいってオカマの勘が言うてるー!」

「オカマとかはどうでもいいんだけど、これってちよつとまずいよ。どうしてボスでもないのに再生とかできるの!？」

デイビッド、サラザ、エリエは慌てふためきながら、互いの顔を見合っている。

動揺するのも無理はないだろう。本来の仕様ならば、撃破したモンスターは撃破時のエフェクトで光りとなって空へと舞い上がっていく。

しかし、再生するというのはい部のしかもボス級のモンスターにのみ与えられた特権のようなものだった。

まさかそれが、こんな低級のしかもスケルトン如きに適応されるなんて誰も考えもしていなかったのだ。

「ほう、カレンよ。奴ら、まだやられたりないらしいな……」

「はい、師匠。良い鍛錬になりそうです!」

それとは対照的に、マスターとカレンは再び象られていくスケルトン達を見つめ嬉しそうに笑っている。

「……エミルさん」

星は不安そうな顔でエミルを見上げると、エミルの手が頭に乗った。

だが、彼女のその手は微かに震えている。

「大丈夫……大丈夫よ星ちゃん。私から離れないで!」

「は、はい……」

エミルはぎこちない笑みを浮かべながらそう言った。

その言葉に星は小さく頷くと、エミルの足にぎゅつとしがみつく。

エミルは大丈夫とは言っていたが、星も内心は今の状況がまずいということとは分かっていた。

何事もなかったかのように蘇った敵——その圧倒的な物量の違いは、子供の星にも容易に理解できるものだった。

(このままじゃ……全滅する。でも、私に何ができるのかな……?)

星はそんなことを考えながら、不安そうに目の前を塞ぐようにして立っているスケルトン達を見た。

スケルトン達は再び星達に襲い掛かり戦闘になったが、前の戦闘の時とは違い。今度は呆気無く倒すことができた。

前回と今回の戦闘の違いは、皆が密集して戦ったことでお互いがお互いをカバーし合い。効率よく敵を撃破できたのが大きな要因だろう。

そしていつしか、スケルトンは最後の1体を残すのみとなった。

だが、スケルトン達は一度蘇ったのだ。もう一度蘇ってくると考えるのが普通だろう。しかし、ここにいるプレイヤーのほぼ全員が高レベルプレイヤーの集まり、同じ失敗を何度も犯すほど愚かでない。

「よし。ラスト1匹は殺さずに捕らえるんだ！ おそらく、それでも復活できなくなるはずだ！」

デイビッドがそう叫ぶと、彼の前を横切ったマスターが自分の道着の黒帯を外し、それを敵に向かって投げ敵を巻き付け縛りつける。

「よし！ これでしまいだな!!」

マスターは満足そうに頷くと、帯に包まれぐるぐる巻になったスケルトンの元へと歩いていった。

これでやっと終わった——そう。その場にいた誰もが思っていた。その時、星がスケルトンのHPゲージが徐々に減っていることに気づく。

マスターの帯での締め上げが強すぎたのだ——。

「——マスターさん！ モンスターが死んじゃいます!!」

「なにっ!？」

その声に気付いたマスターは慌てて帯を解こうと帯に触れた直後、スケルトンはまたバラバラの骨の姿へと戻ってしまった。

マスターは慌てて骨になったスケルトンから離れ、周りに居たメンバーに密集するように指示を出す。

それと時を同じくして、またスケルトン達が復活を終える。その光景に、その場にいたメンバー全員が落胆の色を隠せない。

それもそうだろう。すでに2回も敵に復活されている。こちらのHPはまだ全然余裕があるものの、体力の方がもう限界に近付いた。

「はあ、はあ。また復活か……なら何度でも骨に戻してやるよ……うおおおおおおッ!!」

「ちよつと！ デイビッド、闇雲の突っ込んでみだめ……」

エミルが静止する声も聞かずに、デイビッドは刀を構えて疾走してがむしやらにスケルトンの群れに飛び込んでいった。

それを見たマスターは道着の帯を締め直すと。

「まったく。猪武者なのは相変わらさずか——カレン！ 儂は奴の援護に入る。ここの者達を頼むぞ？ なるべく体力を消耗しないように冷静に戦え。良いな？」

「師匠!!」

先に敵の中に飛び込んでいったデイビッドの後を追い、そう言い残したマスターも敵の中へと消えていった。

その様子を見て触発されたのか、サラザが持っていたバーベルを肩に担ぐ。

「私も突っ込むわ！ オカマは男と女両方の力を使えるの。オカマの体力舐めんじやないわよ!!」

「ちよつと、サラザ！」

その場の雰囲気当てられたサラザがエリエの止める声も聞かずにバーベルを振り回しながら、2人を追いかけて行ってしまふ。

まあ、ゲームプレイヤーとして、他の者に遅れは取れないという闘争本能のようなものなのだろう。

ここに集まったプレイヤー達は、皆個々の能力が高過ぎる為に連携を取るのが難しい。

それが低レベルのモンスターならば、本能的に連携するよりも個々で撃破した方がいい。と直感で判断してしまうのだ。

「もう！ 皆、勝手なんだから！」

地面を踏みつけ憤り両手を振り下ろすエリエに、エミルが声を掛ける。

「エリー。あの3人ならきつと大丈夫よ。それよりこっちはこっちの心配をしないと……」

「……そうだね。でもさ、エミル姉。倒せない敵とどう戦えばいいの？」

エミルに不安そうな表情で尋ねてきたエリエに「そうねえ……」と顎の下に手を当て考える仕草をしたかと思うと、彼女はそのまま黙り込んでしまう。

今まで長くこのゲームをしていたが、彼女もこんな状況に陥ったことがなく。エミルでさえも、対処方法が見つけれずいた。

普通ならば、敵を全滅させれば次のフィールドへ行く扉が開くのだが、このスケルトンのように何度でも蘇る敵への攻略法が未だ確立されていないのだ。

つと言うよりも、前例のない自体に進行も退路も封じられたこの情況。今はまだ余裕があったとしても、無限に復活を繰り返されれば体力と精神力の両方を削り取られ、いずれは回復用のアイテムが尽きて万事休す——という最悪のシナリオしか頭に浮かんでこない。

しかもそれに加えて、今はログアウトが行えないという状況だ。

普段なら緊急時は、ダンジョン攻略が無理と判断した時点で、ログアウトするか死ぬかして近くの街に戻るのがセオリーだった。

しかし、今の状況ではその両方とも許されない。だとすると、なんとしてもこのダンジョンを攻略するしか脱出する方法はないということなのだろう。

（エミルさん。どうしよう……私に何かできるとしたら、いったいどうしたらいいの？）

額から汗を流しながらも必死に苦悩しているエミルの顔を見て、星は何か自分にもできないかと辺りを見渡した。

きよろきよろと辺りを見ていると、エリエの叫ぶ声が耳に飛び込んできた。

「——星！ 敵がきてるよ!!」

すると、星の後ろからスケルトンが剣を振り上げ、今にも攻撃してくる姿が視界に飛び込んでくる。

星は慌てて持っていた盾でその攻撃を防ぐと、攻撃を弾かれバランスを崩したスケルトンに、エリエのレイピアが炸裂する。ガシャンツという音とともにスケルトンは崩れ落ち再び骨に戻る。

星がそれを見てほつと息を吐くと、エリエの怒りを含んだ声が響いた。

「星！ 今は戦闘中なんだよ？ 敵から目を離したらダメでしょ！」

「——ひっ！ ……はい。ご、ごめんさい……」

星は肩をすぼめるように、体を小さくするとしよんぼりと俯く。

そんな2人のやりとりを見ていたエミルが「エリーもあんまりかりりしないの！」と少し強めの口調で言った。

すると、エリエは「かりりなんてしてない」と口を尖らせ、再びスケルトンとの戦闘に戻る。

まあ、エリエも思い通りにいかない仲間達の行動と終わりの見えないうかとは思っているのは仕方ないことだが、人に当たるのはどうかと思う……。

エミルは落ち込んでいる星に「もう少しだから頑張りましたよ」と優しく微笑みかけると、ポンポンと軽く頭を叩いた。しかし、星はこの悪夢がもう少しで終わるとは、とても考えられなかった。

おそらく、エミルは一番年少の星を少しでも安心させようと、氣遣ってそう口にしたのだろう。

星達はいつか復活しなくなることを信じて向かってくる敵を撃破しながら、できるだけ体力を使わないように戦闘を行っていた。それからしばらくして、最後の1体を残すだけとなった。

その頃には皆、体力の限界といった感じで疲弊しきった顔になっていた。

この敵を倒しても、また復活するということは嫌というほど分かっているここはなんとしても捕獲しなければ——無言のまま皆頷くと、デイビッドが敵の剣を弾き飛ばし、その隙に数人が飛び掛かった。

サラザは左手、エリエが右手を抑え、デイビッドとカレンが足を押え込んだ。

「はあ、はあ……や、やっと終わったな……」

デイビッドがそう言つて安堵したようにぼそつと呟く。

確かに自分達の手で押さえれば力加減を変えられる為、さっきのようなことにはならないだろう。

つと、突然ガタガタと取り押さえられているスケルトンが激しく暴れ出した。

「ちよ！ 往生際が悪いんだから！」

「絶対放すなよ！ せっかくここまで追い込んだんだ！」

「そんな事言われるまでも……」

「オカマから逃げようだなんて、絶対に放してあげないわよ」

4人は暴れるスケルトンの動きを止めようと、必死でスケルトンの体を押さえつけている。すると、ガコツ！というともに突然スケルトンの頭が外れ、地面をころころと転がった。

4人はその頭を見つめると、声を揃えて「あ……」と間の抜けたような声を漏らす。

血路を開け！2

地面に落ちたスケルトンの頭は、呆然と見つめる彼等を馬鹿にしたようにカタカタと音を立てて笑っている。それと同時に、スケルトンのHPゲージが再び減少を始めた。

「くそっ！ 自切するなんて聞いてないぞ?!」

「くうく、なによこいつ。デビッドと同じくらい腹立つく！」

そう悔しそうに歯を食いしばっているエリエに、デビッドは「それはどういう意味だ?」と怒りを含んだ声で問い掛けると、エリエはぷいっとそっぽを向いた。

「皆、戻って。また復活するわよ!」

エミルにそう言われ、一斉にスケルトンから手を放し。即座に離脱した4人はエミル達の側に戻ってきた。

「……でも、捕まえてもこれじゃ、どうしようもないよ。どうするの?」

エミル姉……」

エリエは困惑した様子で情けない声を上げると、考え込んでいるエミルの顔を見た。

不安そうな顔をする彼女に、エミルは「必ず打開策はあるはずよ」と難しい顔をしながら告げた。

それを見た星も同じように考えを巡らす。

(何度も復活する敵。倒せないなら、他に何か……)

星は今までの出来事を思い出し、思考をフル回転させる。その時、ふと星の視界の中に、戦闘で破壊された骨が宙を舞うのが飛び込んできた。

半分に折れても破壊しても再生する骨の中に混じって、ダメージが全く回復していない部位があることに気付く。

(――骨……人の体で1つしかない大事な骨は……あつ!)

地面に転がる骨を見て、何かを思いついた星が横にいたエミルにかむように頼むと、ひそひそと耳打ちする。

それを聞いたエミルは力強く頷くと「やってみる価値はありそうね……」と呟き、皆に向かって大声で叫んだ。

「皆。スケルトンの頭を狙って！ そしたら復活しても動きを止められるかもしれないわ!!」

彼女の言葉を聞いた全員が、何かに気付いた様にはっとして不敵な笑みを浮かべると力強く『了解』と返事をした。

その後、皆生き生きとした表情でスケルトン達に向かっていく。

「どうせ狙うんなら粉々に粉砕してやるわ〜」

サラザはそう言って復活途中のスケルトンの頭をバーベルで吹き飛ばすと、地面に転がった頭を再びバーベルで攻撃し粉砕した。

すると、頭を粉々に飛ばされたスケルトンがきらきらと光りに変わっていく。それは紛れもなく、敵を撃破した時に発生するエフェクトだった。

「やった！ 星ちゃんのお手柄ね！」

エミルはそれを見て嬉しそうに星の頭を撫でる。

星は褒められ「そんな事ないです」と照れくさそうに笑みを浮かべながらも、満更でもない様子で頬を赤く染めている。

頭を破壊すればスケルトンを撃破できると解れば、高レベルプレイヤーのエミル達の敵ではない。

皆それぞれに溜まっていた鬱憤を吐き出すかのように、砕け飛んだスケルトンの中から頭部だけを破壊していく。

エミル達はあつという間にスケルトンを撃破すると、先を固く閉ざしていた重そうな鉄の扉が音を立てて開く。それを見たエリエは、緊張の糸が切れたのか地面に腰を下ろした。

「はあく。もうだめ！ ちよつと休憩させて……」

「確かに、さっきのはさすがの農も少し堪えたな……」

今まで涼しい顔をして戦っていたマスターも、エリエに続きその場によつくりと腰を下ろす。まあ、彼の場合は本当に言っているのか怪しいところはあるが……。

それを見たカレンも「師匠がそうするなら」とマスターの隣に腰を下ろした。

「そうね……これだけ連戦だと、次もどうなるか分からないし。ヒーリストーンは温存した方がいいから無難ね。今回のダメージは自然

回復に頼った方がいいわね」

「エミルはそういうと松明を差したままのストーンドラゴンだけ残し。背中に剣を纏っているドラゴンの方は召喚を解除する。」

「その様子を見ていた星は、どことなくドラゴンのことをエミルに尋ねた。」

「あの、エミルさん。さっきのドラゴンさんは、なんていう名前なんですか?」

「——えっ? ああ、あの子はソードアーマードドラゴンよ。昔、少しだけイベントであつたダンジョンにしか出現しないドラゴンで、武器を無限に装備できるのが利点ね! アイテムで持ちきれない物はあの子に装備してもらって持ち歩いてるのよ。武器はバッグの中を圧迫するから、必要ない装備意外はあの子に持ってもらってるわ」

「なるほどー」

エミルはストーンドラゴンの頭を撫でながら微笑んでいる。

「星は納得したように相槌を打つと、その会話を聞いていたエリエがにこにこしながら話しかけてきた。」

「ふふっ、星。あのドラゴンはね。エミル姉のとおきなんだよ?」

「とおておき……ですか?」

「星は首を傾げると「そうなの!」とエリエは自慢げに人差し指を立ててた。」

「私が最後にあのドラゴンを使ってるエミル姉を見たのは、リントヴルムをゲットする時かな? リントを捕まえる時は壮絶だったもんね。いろいろな意味で……」

「……いろんな?」

「含みを持たせた彼女の口振りに、話を聞いていた星が不思議そうに首を傾げた。すると、エリエは悪戯な笑みを浮かべ。」

「そうなの! エミル姉なんて、リントの気を逸らすために自分の鎧を岩に着せてね。なんと——」

「——ちよつと! エリー。それ以上はだめえー!!」

「エリエが何かを口にしようとした直後、エミルは顔を真っ赤に染めて慌ててその口を手で塞ぐ。」

星は話を途中で切られ、少し気持ちがもやもやしながらもそれ以上は聞き返そうとはしなかった。

7人は地べたに座って雑談などをして休息を取り体力とHPを回復させると、スケルトンを倒したことで開いた扉を進み始めた。

扉の向こうは、最初に降りてきたような狭く薄暗い階段がどこまでも地下へと続いている。

星はまた階段を進むのかと、小さくため息を漏らしながらも歩み始めた。

それからしばらく階段を進んで行くと、また広い空間の部屋に辿り着く。その時、エリエが大きなため息を漏らす。

「はあく。またなの？　もう嫌なただけど……次はなに？　骸骨の次はゾンビでも出るの？」

「さすがにそれはないとは思うけど——って、エリー？　あまり文句ばかり言わないの。星ちゃんだって文句1つ言わないで付いてきているのよ？」

エミルは星を引き合いに出してエリエをたしなめると、エリエは不機嫌そうに目を細めながら星の顔を見つめた。

星はその企みげなエリエの表情に、嫌な予感を感じながらそつと視線を逸らす。

「……星だつて本当は嫌がつてるよね？」

「……えっ？　いえ、そんなことは——」

「——嫌がつてる。よね！」

エリエは星が話すのを途中で遮るように、さつきより強めに尋ねた。

星はその威圧感に押され、小さく頷くと愛想笑いを浮かべる。

満足そうにやつと笑うとエリエが「ほら、星だつてうんざりだつて」と言うと、その一部始終を見ていたエミルは少し呆れた様子で「はいはい」と軽く流した。

3人がそんなやりとりをしていると、前に行くマスターが声を上げた。

「ボスの部屋の門が見えたぞ。皆、心せい！」

それを聞いた途端。エリエとエミルの表情がさつきまでとは違い緊張感を持った面持ちへと変わっていた。

(やつぱり。この人達は凄いなー)

そんな2人の表情を見て、星は素直に関心する。

星が部屋の奥へと進んで行くと、マスターの言葉通り大きな錆びた鉄製の門が目の前に現れた。

両端には大きな骸骨の石像が2体。門を支えるような格好でそびえ立っている。

門の中心にも更に巨大な金色の骸骨の装飾があしらわれ、巨大な顎を大きく開いていた。

星にはそれがまるで自分達を食べようとしているように見え、何とも言えない恐怖と胸騒ぎを感じる。

(……なんか、凄く嫌な感じがする……この事を、エミルさんに伝えないと……)

星は心の中がざわめく感覚に襲われた、こういう時はいつも必ずと言っているほど何か良くないことが起こる前触れである。

前のヤマタノオロチの部屋でも感じたが、今はそれを遥かに凌ぐほどに胸がざわついてしかたがない。

このことを伝えようと、横に居るエミルの手を引っ張る。
エミルが浮かない顔で手を引く星に気が付く。

今まで見たことがないほど青ざめた星の様子に、エミルは慌てて膝を折ると星の耳元で話し掛けた。

「——どうしたの？ 星ちゃん、顔色が悪いわよ。どこか具合でも悪いの？」

心配そうに小首を傾げるエミルに、星が勇気を出して告げる。

「あの……なんか、凄く——凄く嫌な感じがします」
「……嫌な感じって、どんな？」

「分からないですけど……とにかく、この中に入ったらダメな感じがしますー！」

それを聞いて無言のまま頷くと、今にも扉を開けようとしているマスターを呼び止める。

「マスター。星ちゃんが少し調子悪そうなの。だから、まだボス部屋に入るのを待ってもらえないかしら」

「なんだ。そうなのか？」

マスターは星の顔を見つめると、顔面蒼白な彼女の顔に「確かに、無理して今直ぐに入る必要もなからう」と頷き、カレンにテントを張るように指示した。

だが、その言葉に従順なカレンが珍しく反論してきた。

「師匠。どうしてですか!? 子供一人のためにわざわざ歩みを止めなくても!」

つとカレンは不満そうな顔をしながら、マスターの顔を見る。

珍しく噛み付いてきた弟子のその鋭い視線を受け、マスターは口元に笑みを浮かべた。

「……カレン。お前は仲間というものを分かっておらん」

「仲間? 俺と師匠の2人でなら、例えどんな敵が出てきても余裕です。俺達に仲間なんて……特に弱い人間は必要ない!」

カレンは蔑むような目で星を横目で睨みつけると、そう言葉を吐き捨てた。

彼女の突き刺すような視線に、星は反論もせず小さく背中を丸める。

「うう……」

つと星は何も言い返せずに俯く。

本当は何か言い返したかったが、その言葉が見つからない。

事実。カレンは星よりもレベルも戦闘技術も高い――。

先程のスケルトンとの戦闘でも、他のメンバーと見劣りする部分は1つもなかった。

それを聞いたマスターは無言のまま、大きなため息を漏らすと「少し頭を冷やしてこい」とカレンの肩を軽く叩いた。

カレンは彼にそう言われ、更に不機嫌そうな顔になり「師匠は変わってしまった……」と小さな声で呟き、イライラしながら星の横を通り過ぎていった。

その時、星の耳元で小さな声でボソボソと何かを呟き、足早に階段

の方へと歩いていく。

星はその言葉を聞いて、明らかに落ち込んだ表情でがっくりと肩を落として項垂れる。

その様子を見たエリエが声を荒げた。

「ちよつと！ あんた今、星に何か言ったでしょ!!」

カレンは「ふんっ！」とそっぽを向きながら、その場を去っていく。顔を真っ赤にしながら、カレンを追いかけようとするエリエの前に、星が両手を広げて立ち塞がった。

血路を開け！3

エリエの前を塞いだ星に、感情的になったエリエが尋ねる。

「なにか言われたんでしょ？ 隠す必要なんてないんだから！」

「……えっ？ わ、私。何も言われてませんよ？」

一瞬遅れて星が言葉を返す。

だが、疑うようにエリエが目を細めると。

「嘘についても分かるんだよ？ 今、あいつは絶対何か言ってたんでしょ？ なんて言われたの!？」

「そ、それは……」

星は少し強い口調でエリエに質問され思わず口をつぐんだ。

それもそのはずだ。あの時、カレンは去り際に星の耳元で『お前みたいに遊びできてる奴がいると、場の雰囲気は乱れて迷惑なんだよ』と言われた。

しかし、これをエリエに話したら、彼女はかんかんになってカレンを追いかけていくかもしれない——そう考えた星は「カレンさんは、ゆっくり休めって言われたんですよ」と咄嗟に嘘をつき、エリエにこっと微笑んで見せた。

そんな星の様子を見て、エリエは直ぐに嘘だと気付いたが、本人が違うと言っている以上は確かめるすべはない。

エリエはテントを出すと、星の肩にそっと手を置きその中へと導いた。

テントの中に入ると、エリエはじつと星の顔を見つめている。

星は不安げにエリエに尋ねた。

「……あの。どうかしましたか？」

「星。またなにか嫌なことがあったら、すぐ私に言いなよ？ 我慢してても状況は良くなるからないんだからね！」

「えっ？ いえ……別に我慢なんてしてません……」

まるでエリエに自分の心の中を見透かされているような感じがして、星が思わず目を逸らしてしまう。

「あつ、私はもう休みますね……おやすみなさい」

つとと言うと、星は慌てて布団の中に入った。

エリエはそんな星の様子を少し心配そうに見ながらテントの中を出る。

すると、外ではエミルとマスターが焚き火の前に隣り合って座って、お互いに難しい顔をしていた。

それをデイビッドやサラザも神妙な面持ちで見守っている。

「皆。どうしたの？ そんな真面目な顔して……」

そう言つてエリエが話し掛けると、エミルがエリエに向かって手招きをするのが見えた。

エリエは首を傾げながらも、エミルの隣に腰を下ろし彼女の顔を見上げる。

「エリー。星ちゃんは？」

「えっ？ 星なら、もう寝るって布団に入ったけど……もしかして、さっきのこと？」

「ええ、カレンさんの事をマスターに聞いてね。エリー、実は……」
「いや、それは儂の口から直接話そう」

話をしようとしたエミルの話の間にマスターが口を挟んだ。

マスターは心を落ちつかせるように瞳を閉じると、重い口を開き徐ろに話し始める。

「——儂とカレンが出会ったのは今から5年前の事だ……儂は知り合いの男にボランティアで、演武を見せて欲しいと言われ、ある街の孤児院に行ったのだ——その孤児院に居たのが、カレンだった。そしてそのカレンを儂が養子として引き取ることにしたのだ」

感慨にふけりながら噛み締めるように、ゆっくりと話をする彼にエリエが首を傾げる。

「どうして、あいつを養子にしたの？ 他にも子供はたくさん居たんでしょ？ 性格のいい子が……」

納得いかないと云った表情でマスターに聞く。

マスターは小さく頷くと「どうしてだと思っ？」と逆に質問で返した。

その言葉に、彼女は少し不機嫌そうに「分からないから聞いたんだ」

けど……」と言つて眉をしかめる。

「あははは、そうだったな。それはカレンがあの孤児院で誰とも関係を持ちたがらなかったからなのだ……おそらく。その孤児院にくるまでに、壮絶な人生を歩んでいたのだらうな。そこで儂に見せたカレンの目が今も忘れられないのだ」

「……目？」

「ああ、あの時のカレンの目に、儂は魅入られてしまった。その時、直感的に『磨けば光る。何か……』それをカレンが持っていると感じたのだ」

「磨けば光る何かって？」

エリエがそう聞き返すとマスターは「今はまだ分からん」と呆気無く返され「なに、それ……」と呆れ顔で呟いた。

そんなエリエをよそに、マスターは話を続ける。

「そして、あの娘もまたカレンと同じものを感じるのだ……」

そう言つて、ちらつと星の寝ているテントの方を見た。

エリエは憤りを抑えられず、その場に立ち上がり声を荒げた。

「あいつと星のどこが似てるっていうの!?! 星はあいつと違って人の悪口なんて言わない。今回のダンジョン攻略も、あの子は本当は乗り気じゃなかったのを私が無理やり連れてきたようなものなの! それなのに、あいつは星が寄生してるって言い掛かりをつけてきて……冗談じゃないわ!!」

だが、マスターはそれに動じることなく話し続ける。

「——別に性格が似ているというわけではない。あの娘もカレンと同じ心に何か闇を……いや、人には見せない何かを抱えている——そう思っただけの事……もちろん、エリエ。お前にも見せていない何かをあの娘も隠しているということだ……」

「……マスター。それは星が私達に嘘をついているって……そう言つてるの?」

エリエは俯き、怒りで声を震わせて小さく呟く。

どうしてそこまでエリエが怒っているかと言うと、彼女にとってこの数日間。星と一緒に過ごして、星がまるで自分の妹の様に感じてい

たからに他ならない。

しかし、マスターの言葉はそれがエリエの思い込みだと言わんばかりに聞こえたからだ。

エリエは数秒間のマスターとの睨み合いの末、フツと息を吹き出し「くだらない」と吐き捨てる、星の眠っているテントへと歩いていった。

憤りながら歩いていくエリエの背中をエミルは心配そうな面持ちで見送り、マスターに声を掛ける。

「マスター。エリーは何か勘違いをしたんじゃないかしら」

「いや。あやつにもそのうち分かるだろう。人は皆、自分を着飾っているものだ……」

「確かに、星ちゃんはその年齢にしては物分かりが良すぎるし。多分、現実世界の方では、相当辛い思いをしてたんだと思う。だから、ここに居る時くらいは思いっきり甘えてくれればいいのだけどなかなかねえ……」

エミルは少し残念そうに俯き加減に言った。

だが、話に混ぜれずそれをただ見ていただけの2人が……。

「……ねえ。私達完全に蚊帳の外って感じだと思わない?」

「ああ。まあ、俺が口を挟むとエリエとは余計に話がこじれるからな。それに、これはあいつらの問題だ。俺がとやかく言う方が野暮だろ?」

「まあ、かつこいいわ。私を抱いて〜♪」

サラザは両手を大きく広げると隣にいたデイビッドを抱き——締め上げると、デイビッドは苦しそうにうめき声を上げ、しばらくしてガクツと気を失った。

テントの中に戻ってきたエリエは、パジャマに着替え星の隣の布団に横たわる。

「……星は本当は私をどう思ってるの?」

エリエは小さな声でそう呟くと、すやすやと寝入っている星の長い髪を掻き分けた。

しばらく、さっきのマスターの言葉の意味を考えていたエリエだっ

だが、気持ち良さそうな星の寝顔を見つめていると、なんだか考えているのが馬鹿馬鹿しくなってきた。

(もう、どうでもいいや。この子が何を考えていても、重要なのは今をどう楽しくするかだもんね！ そうでしょ？ 星……)

エリエはそう心の中で呟くと、微笑みを浮かべながら寝ている星の頭を撫でた。

理想と現実

その夜。星は不思議な夢を見た――。

辺りを見渡すと、そこは見慣れないマンションの一室はそこにぼんやりと立っていた。

「あれ？…ここは…どこ？…」

生活感はあるが、そこには星以外の人間は誰もおらず。大きな窓からは陽の光が差し込み、隅々まで綺麗に掃除されたその部屋には、白で統一された置物が並んでいても清潔感があつた。

間取りは4LDKで、外から見える景色を見る限りはここが高層マンションの上階であることが分かる。

どこか懐かしい感覚を覚えながら、星はその部屋の中をゆつくりと歩いていた。

その時、星の目に衝撃的な光景が飛び込んできた。

「な、なに？…これ……」

星はそう呟くと、部屋のすみっこに置かれた木製の戸棚の中の写真を見つける。

その中には紛れもない星の母親と見知らぬ男性、そして知らない女の子が笑顔で写っている。

写真を見た時、星の頭の中が不安でいっぱいになった。

自分は今、VRMMO「フリーダム」の中にいるはずなのだが、それなのにこんな所に居るはずがないのだ――。

心の中では自分に言い聞かせるのだが、見たこともない場所を夢で見るはずがない。

星は自分が見ているものが信じられず、困惑した表情を見せる。

(うそだ……きつと、お母さんにすごく似た人の家に来ちゃったんだ……)

星はそう心の中で繰り返し、自分の服を見た。

寝る前と同じ服を着ていることを確認し、気持ちを落ちつかせるように数回大きく深呼吸をする。

条件反射で星のその行動は、人前で星が泣きそうになった時に

いつも取る行動だった。

こうすると不思議と落ちついて、吹き出しそうになる涙を堪えられることができたのだ。

しかし、ゲームの中ではどんなに落ち着けようとしても何故か涙が溢れてしまうのだが……。

溢れる涙を拭き取り、着ていた服をもう一度じつと見つめて。

（うん、大丈夫。エミルさんに貰った服だもん……まだ帰ってきてない。でも、ならここは……どこ？）

星は冷静に再び辺りを見渡す。

その時、ガチャーン！と玄関の鍵が開く音が聞こえた。

突然のことですら良かったら良いか分からず、星があたふたしているとドアが開く。

開いたドアから入ってきたのは写真の女の子と、星の母親らしき女性が笑いながら楽しそうに会話をしている。

しかも、母親らしき女性のお腹は大きく出ていた。そのことから、その女性が妊娠していることが窺い知れた。

「お母さん。足元気を付けてね！」

「ええ、ありがとう。優しいわね。月はきつと良いお姉さんになるわ」女性はそう言って、その子の頭を優しく撫でる。すると、女の子は嬉しそうに笑い。母親もそんな我が子に微笑み返す。

そこには、ごく普通の親子の微笑ましい姿が広がっていた。だが、その姿を見た星の胸を締めつける。

もう長い間、母親に優しい微笑みかけられることも、笑顔で頭を

撫でられたことも星には思い出せない。

それどころか、母親の笑った顔もよく思い出せないほどだ……。

「お母さん……あんなに嬉しそうに……わ、私は……お母さんを困らせてばかりで……ごめんなさい」

そう小さな声で謝ると、星の瞳から抑えようとしていた涙が、止めどなく溢れ出てきた。

いつも遅くまで仕事をして疲れきって帰ってくる母親に、自分は何ひとつしてあげられないと、星はいつも気にしていた。

だから、自分にできることは何でもやった。洗濯や洗い物。買い物など、できる範囲でやれるだけのことをした——だが、あの少女はただ扉を開けただけで、あんなにも褒められている。

それを見て、ふと心の中に疑問が生まれた『自分はあるに嬉しそうなお母さんに、褒められたことがあるのだろうか……』と——。

今思い返してみても、星の記憶の中の母親はいつもどこか寂しそうにしている姿しか思い出せない。

その光景を思い出して星は唇を噛み締め、俯き加減でその場に立ち尽くしている。すると今度は、男性の声が耳に飛び込んできた。

「——月。お父さんの方も手伝ってくれないかい？」

「うん！ 今行く」

声を聞いた返事をして女の子は勢い良く、玄関から飛び出していた。

だが、星にはもうそんなことが瞳に入らないほどに心の中から溢れる思いに大きく揺さぶられる様に壁に背中を付ける。

（私は……私も一生懸命頑張ってる……はずなのに……どうして？
なにが、あの子と違うの……？）

そんな言葉が頭の中を駆け巡り、胸が苦しくなる。

上を向いて頭の中では涙を流さないようにと、強く命令しているのに嗚咽が漏れるほど、涙が止めどなく溢れだし、行き場のない悲しみが星の心を満たしていく。

こんな姿をお母さんに見られたら『弱虫だと』きつと嫌われてしまう。

（隠れなきや……）

そう思っても、不思議と体が動かない。

脳が命令しても体がそれを拒絶する。母親の優しい声と数日ぶりに嗅ぐ懐かしい匂い。それは、紛れもない母の匂いだ——。

しかし、今自分の目の前で行われているものが自分ではなく。知らない女の子を愛おしそうに見つめる母の笑顔に、星は困惑し行き場のない感情だけが溢れる。

星の心の中で『どうして？』という感情だけがぐるぐると渦巻いて

いる。

その時。母親の顔が星を見てゆっくりとこちらへ向かってきた。もう隠れている暇もない。

(今この家にはお母さんと私しかいない……追い出される！)

星は遂にばれたと思い。無意識のうちに目を瞑ってしまふ。

だが、星のそんな心配をよそに母親は、星の横をまるで誰も居ないかのように通り過ぎていった。

「……えっ？」

星は何が起きたのか分からず、きよとんとしている。

半信半疑のまま、とりあえず外に出ようと玄関まで走り出したその時、玄関のドアがめいっぱい開き大きなモミの木を抱えた男性が入ってきた。

星は驚きながらも、咄嗟に壁際に背中を付けてそれをやり過ごす。

その後、再び外へ向けて勢い良く走り出した星の行く手から、女の子が調度良くドアから中に入ってきた。

「いつ……あう〜」

「いつた〜い。なに？」

2人は勢い良くぶつかると、お互いにその場に尻もちをついてぶつけた場所を押さえていた。

星が前を向き直すと、女の子は不思議そうに星の方を見つめている。何故かは分からないものの、どうやら彼女には自分の姿が見えているらしい……。

それを見て「しまった」と思い。星は慌てて両手で自分の口を塞いだ。

女の子は不思議そうに首を傾げながら、星のことを見つめている。

「どうしたんだい？ 急に転んで」

「ううん。何でもない！」

男性のその言葉に女の子は首を横に振って、徐ろに立ち上がった。星はバレていないことが分かり、ほっと胸を撫で下ろした。

「月。悪いけど玄関の鍵を締めておいてくれるかい？」

「は〜い」

女の子は元気に返事をする、玄関のドアを閉め鍵を掛けた。

(あつ、閉められちゃった。どうしよう……)

青ざめた顔で閉じられたドアを見つめる星。

しばらくその場にぺたんと座り込み。思考を巡らせていると、1つの解決策が浮かんだ。

(そうだ——自分で開ければいいんだ!)

そう思いついたと同時に、星の右手はドアノブに向かって伸びていた。

星の手がドアノブを掴もうとした瞬間。すつと、そこにあったはずのドアノブが姿を消す。

星はそれを見て慌てて目を擦って、もう一度ドアノブを確認する。しかし、そこにはしっかりとドアノブが付いている。

「おかしいなあ……」

星は首を傾げながらそう呟くと、再びドアノブに手を伸ばす。

だが、結果は同じで、またそこにあるはずのドアノブはすつと姿を消す。

もちろん。ただ透明になったわけではなく、完全に姿が消えているのだ。

(……)が、私の夢の中の世界なら……)

星はその場で少し考え込む。

(夢……幻——幻を現実にする方法は……強く念じればいいんだ!)

目を閉じて心の中でドアノブが掴めますようにと念じて、神妙な面持ちでドアノブに向かって手を伸ばした。すると、今度はギリギリまでいっても消える気配がない。

星は生唾を飲み込む。すると、右手でぎゅつとドアノブを握って引っ張った。

少しの手応えの後にスポツ!と、確かな手応えとは裏腹にドアノブが抜ける。

「……………」

予想外の事に星の頭の中は真っ白になり、思考回路が停止する――

無言のまま自分の右手に握られたドアノブと、ぽつかりと穴の開いたドアを交互に見た。

星が呆然としていると、後ろの方から楽しげな笑い声が聞こえてきた。

慌てて振り返ると、そこにはリビングのテーブルに腰掛け、楽しそうに笑い合っている3人の姿があった。

その光景は星が長い間、最も自分が欲しいと感じていた平凡な家庭そのものだった。

「——お母さん。凄く幸せそう……でも、どうして？ あそこに居るのが、どうして私じゃないんだろう……」

廊下からそれを見ていた星は、がっくりと肩を落としてしよげ返る。

星の記憶なら母親と父親。そして自分でなければ説明がつかない。いや。生まれる前に父親は亡くなったのだから、そこに自分がいても説明はつかないのだが……。

母親には、自分が生まれたその日に父親が交通事故で亡くなったと聞かされた。もちろん。当時は星も幼くその意味は分からなかったが……。

しかし、夢とは元々そうなればいいという願望のようなものだ。だからこそ現実味がある必要性はないはずなのだが、この夢は夢と言うにはあまりに現実的で、星には酷な夢だと言わざるを得なかった。

夢とは本来希望に満ち溢れているもので、唯一現実を忘れさせてくれる空間——誰しも瞼を閉じれば、夢は全てを受け入れてくれる。

弱い自分も——受け入れがたい現実も——そして過去に叶えられなかった夢すらも……夢は幻なのだから、どんな願いも叶えてくれる。

だからこそ、自分の目の前で行われているその一家団欒の中にあるのが、どうして自分ではなく。見知らぬ女の子が入っているのか、それがどうしても星には理解できなかった。いや。理解したくなかったというべきかもしれない。これではまるで悪夢だ——。

「……こんなの……こんなの、酷すぎるよ……」

目の前で行われている光景を見ていた星はその衝撃に耐えられず、地面に両手を突いて泣き崩れる。

『それは、あなたが不必要いからだよ? 星』

失意のどん底にある星に、何者かの声が耳元から突然飛び込んできた。

その聞き覚えのない声に、星は驚き身を仰け反らせる。

「——誰?！」

「ふふ、そのうち分かるよ……今日は挨拶だけだから……またね!」

驚いてきよろきよろと辺りを見渡している星に、そう言い残して、その声は聞こえなくなった。

つと同時に星が目を覚ました。

「はあ……はあ……嫌な夢だったな……でも、あの声は一体誰だったんだろう……?」

そう呟いた星の体は、汗でびっしょりと濡れていた。

ふと横を見ると、隣でエリエが気持ち良さそうに寝息を立てている。

(ちよつと、気分転換に外に出てみようかな……)

星はそう思うとエリエを起こさないように、ゆっくりと布団から出て、テントの外へ出ようとテントから頭を出した——。

その時、偶然階段へと向かうカレンの姿が目に入った。

(……カレンさん。どこに行くんだろう)

星はそう思いながらカレンの背中を見送ると、自分は焚き火の前に腰を下ろした。

もうボスの部屋の前ということもあり、もう見張る必要はないのだろう。前回とは異なり、焚き火の前には誰も居らず、ただ赤い炎がゆらゆらと辺りを優しい光で照らしている。

星は焚き火の前に腰を下ろすと、じーつと揺らめく炎を見つめていた。

(なんだろう……凄く心がもよもよする……)

星は自分の胸に手を当てると、表情を曇らせた。

あんな夢を見た後にカレンの姿を見たからだろうか、その理由は分

からないが、物凄く気持ちが悪くもやもやしていた。

その時、カレンに言われた言葉がふと頭を過る。

『お前みたいに遊びで来てる奴がいると、場の雰囲気か乱れて迷惑なんだよ』

星はそれを思い出すと、しょんぼりしながら膝を抱えた。

「やっぱり。私がいると……皆、迷惑なのかな……」

悲しそうに小さく体を丸め、掠れそうな声で呟く。

今までも何度も同じようなことを学校で言われてきた言葉だったが、ここまで落ち込んだのは初めてのことだ——思わず星の口から言葉が出る。

「——結構……頑張ってたんだけどなあ……」

星はここに来るまでの道中のことを思い出すと、無意識の内に涙が頬を伝う。

「だ、だめ……泣いてるところを……誰かに見られたら……だめだよ……」

慌てて服の袖で目を押さえる。だが、涙は止まるどころかどんどん溢れてくる。

しばらくの間、星はそのまま声を殺して泣いていた。

理想と現実2

それからどの位、時間が経っただろう——。

星は一向に戻って来る気配のないカレンのことが気になり始めていた。

「……カレンさん。もう長い間戻ってこないけど……大丈夫かな？」

星は心配そうに階段の方を見遣って呟く。しかし、カレンの所に行くか否か星の心は揺れていた。それもそうだろう。嫌われている人間の前にはできれば行きたくないものだ。

誰かを起こすという手もあるが、今後の関係にヒビが入るかもしれない——できれば、その方法は取りたくない。

星は目を瞑るとゆっくりと瞼を開き、決意に満ちた表情で階段に向かって走り出す。

階段の前までいくと、星は壁にかかっている松明を手を持つ。その後、どこまでも続く薄暗い階段を見上げた。

そこはまるで星を待ち構えるように、漆黒の闇の世界が広がっていた。

(凄く暗い……お化け出そうだし。やっぱり、やめようかな……)

そう心の中で弱音を吐くと、恐怖からか星の表情は心なしか引き攣っている様に見える。

「だめ。カレンさんの所に行くって決めたんだから！ こ、怖くなんかないもん……」

そう言っただけながらも一歩踏み出し、一段一段階段を上がっていく。

黙々と階段を上がり続けていると、誰かと戦闘をしているのか、カレンの叫ぶ怒号が聞こえてきた。

「——カレンさん!？」

星はそれを聞いて息を切らせながら、懸命に階段を駆け上がったいく。

その時、星の瞳にはモンスターに襲われてボロボロの姿になった力

レンの姿が、鮮明に浮かんでいた。

「カレンさん。大丈夫ですか!!」

星が声を上げると、その先に見えたのは全身汗だくで驚きを隠せない表情で星を見つめるカレンの姿だった。

「お前が……どうして……」

辺りを見渡して辺りに敵が居ないことに気が付き、急に恥ずかしくなりその場で俯く。

カレンは急に不機嫌になり、星を睨みつけると不機嫌そうに眉間にしわを寄せる。

「——大丈夫とは、どういう意味だ……?」

「……こゝ、声が聞こえたので……その、敵に襲われているのかと……思ってた……」

星がそう口にするると、カレンはさらに鋭い眼差しで星を見て「このダンジョン程度の雑魚モンスターに、この俺が手こずると言いたいのか?」と威圧するように言った。

まあ、カレンが怒るのも無理もない。星のその言動は、取り方によれば『カレンよりも自分の方が強い』という風に言っていると取られていてもしかたない。

その威圧感に一度は気圧されたが、すぐに星の瞳がカレンを捉える。

「いいえ……でも、もしもがあったらいけないと思って!」

星はカレンの目を見て勇気を振り絞りそう声を上げる。

「ふん。なら、お前が一人でその敵を倒せると……?」

「……そ、それは……」

そう言われた星は、それ以上何も言えなくなった。

確かにカレンの言う通りだ。カレンは星よりも圧倒的に強い。それはスケルトン達との戦闘を見ていると良く分かっていたはずだった。

カレンは俯いたままの星を「ふん」と鼻で笑うと、その横を無言のまま通り過ぎる。

「——待って下さい!」

星は俯きながら叫ぶと、表情を曇らせながら言葉を続けた。

「……カレンさんはどうして私を嫌うんですか？ もし、私に悪いところがあればなおします。だから——」

「——お前はまたそうやって……そこが、俺は気に食わないんだよ!!」
星が話している途中にカレンが叫んだ。

その声に驚き目を丸くさせ、呆然とカレンの顔を見つめている。

「お前のその誰にでも好かれようとするその姿勢が、俺は一番気に触るんだよ!!」

「……えっ?」

星は驚きのあまり言葉も出ずに、その場に立ち尽くしている。

そんな彼女にカレンは遠慮することなく、言葉を続けた。

「お前は自分が傷付きたくないだけの臆病者だ！ そうやって、笑顔を振りまいていれば誰かが助けてくれる——本当はそう思っているんだろ? この卑怯者がツ!!」

「ちがっ……私はそんなこと。考えたこともない……です」

星はそう言って俯いたまま、肩を落としている。

だが、内心では『そうかもしれない』という思いがあった。そこを突かれ、星も思わずたじろぐ。

カレンはそんな星の耳元で追い打ちをかけるように、小さな声で告げる。

「……その年で意識せずにできるといふなら、とんでもない女だなお前は……そんな奴に引っかけたあのエリエって女も、相当ろくでもないな」

「——ツ!？」

星はそれを聞いて、俯きながら拳を握り締めながら震える声で小さく呟く。

「……………して」

「はっ? なんだった?」

「私に対しての悪口はいくら言ってもいいです！ でも、他の人の悪口は許さない！ とりけして!!」

エミルへの悪口が相当許せなかったのだろう。今までになく鋭い

目で星が声を荒げ、カレンを睨みつけた。

その怒りに満ちた瞳を見て「なら、お前が俺に勝ったら取り消してやるよ」と、不敵な笑みを浮かべるカレン。

星はその申し出に、決意に満ちた表情で無言のまま静かに頷いた。それを見たカレンはにやつと笑みを浮かべる。

「よし！ 決まりだな。ルールは簡単だ——お前のHPが1になるまでに俺に一撃でも当てられればお前の勝ち。できなければ俺の勝ちだ！」

カレンは今まで装備していたガントレットを外し、その代わりに革製のグローブを装備する。

星も腰に差した剣に手を掛けると、その鞘と剣を紐で縛り外れないようにして構えた。

それを見たカレンは鋭く星の顔を睨むと、怒りを含んだ低い声で問い掛けた。

「——なんだそれは……お前は俺をなめているのか？」

「いえ。一回でも攻撃すれば良いなら、これで良いです……」

「ふん。生意気な奴だな……だから子供は嫌いなんだ」

「……嫌いでも……いいです」

星はじつとカレンを睨むと、低い声音でそう告げた。

一見、ただ挑発しているだけに見えるこの行動には、星のカレンに痛みを与えたくないという配慮があった。

星にとってこの戦いはただカレンに謝ってもえれば良いだけで、決して懲らしめたいからという安易な理由ではなかったからだ。

どんな状況であっても、星は相手が気付くのを見たくなかった。

「なら、行くぞー！」

カレンが地面を蹴ったかと思うと、星との間合いが一気に詰まり握り締めた拳を前に突き出す。

「はあああああああッ！」

カレンの声と同時に、風切音が耳に飛び込んでくる。

星はそれを鞘付きの剣で防いだが、呆気無く飛ばされてしまう。

「きあああああああ!!」

悲鳴を上げながら軽々と飛ばされた星の体は、しばらく地面を転がって止まった。

派手に飛ばされ、地面に倒れ込む星の体が微かに動く。

「うう……い、痛い……」

飛ばされた時に痛めたのか、左肩を押さえたままゆつくりと立ち上がる。

その痛みから、カレンが手加減をしていないことが伝わってきた。剣で防いでいなかったら危なかっただろう。

(カレンさん。本気だ……こんな攻撃を体でまともに受けたらHPが……)

星はちらつと左上の円状になっているHPバーを見ると、すでに4分の1ほど減っていた。

円の中の数値は800となっている——どうやら剣で防いだのが功を奏したのは間違いない、剣がなければ間違いなくHPの半分は削られていただろう。

「チッ！ 一撃で楽にしてやろうと思ってたのにな……」

「そう簡単には……やられませんか？ 勝つのは私だから……」

カレンの言葉に返すように、星は笑みを浮かべている。

「そうかよ……本当にムカつくガキだな。お前はツ!!」

そんな星の様子が気に食わなかったのか、怒りを露わにしたカレンが星目掛けて突撃してくる。

星は透かさず剣を構え直す。その瞬間、向かっていたはずのカレンの姿が消えた。

「——えっ？ どこに……」

次の瞬間。カレンは星の目の前に現れた時には拳を構えていた。

「——なっ!?!」

「遅いな……はあああああッ!!」

その咆哮と共に拳が星に襲い掛かる。

星は慌てて、持っていた剣を突き出してガードの体制に入り『防げる!!』そう確信した直後、星の体は吹き飛ばされていた。

「きゃあああああッ!!」

吹き飛ばされた星の体は遠くの壁に、勢い良く叩きつけられ地面に倒れ込む。

「うっ……」

(ど、どうして……？ 確実に剣で防いだはずなのに……)

星は混乱した頭で、必死に何が起きたのかを考えていた。その時、星の視界に自分のHPバーが見る見るうちに減っていくのが見えた。その減少は著しく青かったゲージは黄色になり、遂には赤になってしまった。

(あつ……ダメ。まだ、謝ってもらってないの……このままじゃ、負けちゃう！ 負けたくない……止まって!!)

しかし、星の思いは虚しくHPは残り1という表示だけ残して、星の視界には【LOSE】という敗北を告げる文字が表示された。

表示を確認した星は、がっくりと肩を落とす。

(——勝てなかった。ごめんささい……エリエさん)

星はそれを倒れたまま、虚ろな瞳でその表示を見つめている。

「ふん。口ほどにもなさ過ぎて、罵る言葉もないな」

星は無言のままその声の方を見上げると、カレンが腕を組みながら仁王立ちしているのが目に入った。

「お前は弱い——いや、それを通り越して無様だな。一度も剣を振るわずに負けるとは……そういうえば、エミルだったか？ あの女もオロチとの戦闘で真っ先に倒されてたなあ……師匠はあの女を気にかけていたが……どうせ、あの女が師匠に色目を使っていたんだろうな。そういうえば、体付きも顔もそれっぽいしな——」

「——くっ……ゆるさない……もう、絶対に許しません!!」

その言葉を聞いて徐ろに立ち上がると、星は烈火の如く怒りだしカレンを鋭く睨みつけた。

「もう一度勝負です!!」

「いいだろう。どうやら……まだ痛めつけられたいようだな!!」

星の闘志に眉をひそめ、拳を構え直すカレン。

「はあああああああッ!!」

星は剣を構えると、カレンに向かっていった。

カレンはそれを不敵な笑みを浮かべながら、向かってくる星を待ち構えている。

理想と現実3

星は剣をがむしやらに振り回しながらカレンを攻撃するも、その攻撃はカレンに掠りもしない。

だが、当たらないと分かっている。心の中から湧き上がってくる怒りをぶつけずにはいられない。

「はっ！…このっ！…このおっ!!」

「どうした？ 攻撃に正確性が無いぞ？ そんなじゃ俺に一撃食らわせるなんて夢のまた夢だなッ!!」

星の必死の攻撃をカレンは涼しい顔で攻撃をかわしている。

それもそのはずだ。ゲームではどれだけやり込んだかでプレイヤーの力量が決まる。

攻撃スキルのないフリーダムでは良い装備と実戦経験で得た体の使い方が勝敗を決めると言っている。

フリーダムの中で剣士はバランス。変わって武闘家がスピードに優れている。

更に前回のアップデートで装備の重量によって俊敏性のステータスが上昇する仕様に変更されていた。このことは、一部の人間しかまだ知らないことだ――。

実はカレンが最初にガントレットを外したのは、この効果を最大に活かす為の彼女の作戦だったのだ。そうとは知らず。星は剣に鞘を付けてしまった為、重量が追加され攻撃速度とスピードを落とすとしてしまっていたのだった。

ただでさえ剣を持たない分、重量の関係で武闘家はスピードと攻撃速度が圧倒的に高い。それが近接戦闘で、スピードという圧倒的なアドバンテージを生み出している。

カレンは必死になって剣を振るう星を、あざ笑うかのように口元に笑みを浮かべる。

（この戦いは最初から俺に有利なんだよ。お前がどんなに努力しても足の遅い剣士では……）

地面を強く踏み締め。

「俺には絶対勝てないんだよ!!」

カレンは星の瞬時に懐に飛び込むと、数発の打撃を打ち込んだ。

星は地面を派手に転がりそして止まる。

「いつ……うとう……」

星は腹部を押さえながら、苦しそうにうずくまっている。

まあ、一瞬とはいえ即座に数発の打撃を加えられれば無理もない。

HPゲージも1になり、星も立ち上がる様子もない――。

カレンは「ふんっ」と息を漏らすと、倒れている星に冷たい視線を送り。その場を去ろうとしたその時、星の声が響く……。

「……ま、まだです。まだ……負けて……ません!」

「なっ、なんなんだよ。お前は!。 どうしてそこまで立ち上がるんだ!。 元々お前には関係ない事だろう!?!」

カレンは体を左右にフラフラさせながらも、必死で立ち上がってくる星に向かって叫ぶ。

(普通ならもう立ち上がるどころか息をするだけでも苦しいはずなんだぞ?!。 なぜだ……なぜあいつは立っていられる!!。)

カレンはそう思うと、倒れても倒れても何度も立ち上がってくる星に、恐怖にも似た感情を覚えた。

その時、星がゆっくりと口を開く。

「……関係なくない」

「えっ?」

「はあ……はあ……2人は……私にとって命より……大事な……お友達なんです!。 それをばかにしたあなたを……ぜっ、たい……許さない!!」

星は怒りに満ちた鋭い眼差しをカレンに向ける。

その瞳を見てカレンは混乱した様子で数歩後ろに後退る。額からは焦りからか汗が滴り落ちた。

(なんなんだこいつは……どうして人の為にそこまでできる。手は抜いてない――そんなボロボロの体で、どうしてまだ戦意を失わない!!)

カレンの体はなんとも言えない恐怖に震え、よろよろと近付いてく

る星を見た。

「——くっ、来るな……来るな……来ないでくれッ!!」

カレンは更に数歩後退りしてその場に座り込んで頭を抱えた。

「俺が悪かった。ダメだ……来ないでくれ! 愛……もう俺を許してくれ!!」

カレンは取り乱した様にそう叫ぶと怯えた様子で「許してくれ」という言葉を念仏の様に繰り返してその場に蹲っている。

そんな彼女を星は不思議そうに見つめていた。

* * *

今から6年前。カレンがまだ孤児院に居た時の話だ——。

マスターの行った頃は、カレンは人との関わりを持つとうとしていない孤立した子供だった。だが、そんなカレンにも仲のいい友達があった。

「かれん。私夢があるの」

「夢?」

「うん。大きくなったらパン屋さんになってパンを皆にお腹いっぱい食べさせてあげるの」

少女は方ほどの黒い長髪を揺らしながらカレンに向かって微笑んだ。

「あいがするなら私も一緒にパン屋さんやるよ!」

「うん! なら、2人でここにいてる皆をお腹いっぱいにしようね!」

そう言つて2人はしっかりと手を握ると微笑み合った。

しかし、そんな平和な日常はそう長くは続かなかつた。それは外国の高官が表敬訪問で孤児院を見に来た時のことだ。その時、人当たりも良く誰にでも別け隔てなく接する愛が施設の案内役に抜擢された。

その時の丁寧に対応した愛のことをえらく気に入った高官が、愛を養子にしたいと持ちかけてきたらしい。最初は嫌がっていた愛を、大人達は両国の交友の為に必死で説得した。

しかし、それは彼女の意味を尊重したというのは表向きのことだ、

その時にはもう飛行機のチケットも移住の手続きも全て終わっていた。

おそらく。物分かりのいい愛はそのことを大人達から聞いて、仕方なく首を縦に振ったのだ——それは愛が旅立つ数日前にカレンが聞いた話だった。

カレンと愛の2人は孤児院の近くの公園のブランコに乗りながら話をしていた。

「私。もうすぐこの孤児院の子じゃなくなるの……」

「……えっ？ あい。今、なんて言ったの？」

「だから、かれんとも後少ししか遊べないの……ごめんね？」

愛はそう言うとは困惑した表情で自分を見ているカレンににっこりと微笑んだ。

しかし、物心ついた時から毎日一緒に居たカレンにとって、その笑顔が偽りであることは言わなくても分かっていった。

カレンは微笑んでいる愛に向かって感情を露わにする。

「どうして!?! あいは本当は行きたくないんでしょ？ ここに居たいんでしょ？ なら、ことわればいいじゃん！ もし一人で言えないなら私が一緒に……」

「……だめだよ、かれん。それじゃみんな困っちゃうもん。それに私が行くところの人もいい人だし、ここよりもきつと……」

そう言おうとした愛に向かって、震えながらカレンが再び声を上げた。

「ここよりきつと何？ ここが私達の家でしょ。私もあいも他の皆も家族なんだよ。私達は親も居ない。親戚も居ない。家族は施設の皆なんだよ？ それにあいは私とパン屋さんになって皆をお腹いっぱいにするって夢があったじゃない。それを忘れちゃったの!?!」

カレンの感情を表に出した強い言葉にあいは俯いたまま唇を噛み締めている。

次の瞬間。愛は徐ろに口を開いた。

「——かれん。私もかれんやここの皆の事が大好き——だから、行くんだ。本当は誰にも言うなって口止めされてたけど、かれんだけに言

うね？」

「うん」

カレンは愛のその決意に満ちた表情に無言のまま頷いた。

「実はこの話はもうずっと前から決まってる、私も昨日聞いたの……それにね。私が行くところのお父さんとお母さんは他の国の偉い人なんだって——だから、私は皆の為に、私達みたいな子を少しでも減らせるように偉くなって皆が本当のお父さんとお母さんと暮らせるようにしたいの」

「あい……」

カレンはその親友の言葉にただ呆然と彼女の顔を見つめていた。

「だから、ねっ？　かれん。それが終わったら一緒にパン屋さんをやるうね♪」

愛はそんなカレンの耳元でそうささやくとにっこりと微笑んだ。

（あいは大人だな……それなのに私は、あいを困らせてばかりで……）
カレンはそんな愛の姿を見て抑えられない感情から涙が止まらなく溢れてくるのを感じた。カレンは俯いたまま「ごめん」と何度も繰り返し泣いた。

それから数日後。愛は施設の皆に祝福されて旅立って行った。だがカレンだけは最後の見送りの時には顔を見せなかった。

それは最後に会ったら、無理矢理でも止めたくなる——そう思ったからだった。

1年が過ぎたある日。孤児院に黒塗りの高級車が何台も連なってきた。

カレンはなんとも言えない胸騒ぎを覚え大人達の話をも物陰に隠れながらこっそりと聞いた。

「この度はご報告に参りました。昨年こちらの施設に居た伊藤愛さんですが、昨夜未明に発生した海難事故により死亡致しました。しかし、幸いな事にご両親は無事に救助されたとの事で、この施設への援助は続けさせて頂きますという事でしたのでご報告に参りました」

「そうですか。遠いところわざわざありがとうございます。この事は子供達には伏せておきます」

(……えっ? あいが死んだ……!?)

カレンはそれを聞いた直後、何とも言えない喪失感と失意のどん底に叩き落された。その時、カレンの頭の中に浮かんだのは別れの数日前の愛の満面の笑顔だった。

その後、カレンが調べたところによると、愛は里親の仕事の関係で客船に乗船中何者かのテロによって乗っていた船は爆発。炎上した。

しかし、愛の里親2人は先に救助されたところを見ると彼女が見捨てられたのは言うまでもなかった。

『愛は大人達の身勝手によって死んだ』カレンはそれ以来。他人を信じない性格になり、人と距離を置くことで施設でも浮いた存在になっ
ていった。

そしてなによりも、大人に媚を売る子供を毛嫌いするようになったのだ。

* * *

星は急に様子が変わったカレンを見ていて、ふと思った。

『この人も私と同じなのかもしれない』と……。

虚勢を張って誰も近づかせない様にする。それは自らを守ることでもあり相手を守ることに繋がる。

星は他人に当たり障りなく接することで、相手と一定の距離を置いていた。

それが結果として相手も自分も傷付かない方法である事を星は今までの生活の中で学んでいたのだ。

(なら、この人を助けてあげたい。私がエミルさん達に助けてもらったように——今度は私がこの人の心を救ってあげたい。その為は何としてもこの戦いに勝つんだ!)

星はそう考えると持っていた剣を強く握り締めると、うずくまっていた彼女の方向を向いて叫んだ。

「カレンさん! まだです。まだ戦いは終わってません。立ってください!!」

理想と現実4

カレンはその言葉を聞いて我に返ると、不思議そうな顔で星を見た。

星には何故かこの戦いをやり遂げれば、カレンと分かり合うことができるという確信にも似た何かを感じ取っていた。だからこそ、この戦いを途中で止めるわけにはいかない。

「何故だ？ もう勝負はついているし。それにもう……俺はお前とはもう戦いたくない。お前の勝ちでいい……」

「ダメです！ まだ2人の悪口を言った事を謝ってもらってません！」

「どうしてそこまで他人の為に頑張る。お前をそこまで突き動かしているものは、一体何なんだよ……」

カレンは足元がおぼつかない星を見て尋ねる。

星は真面目な顔のまま、その質問に答えるように話し始めた。

「カレンさんは私の大切な人達の悪口を言いました。私はそれを絶対に許せないんです！」

「それじゃ答えになってない。だから、それはどうしてだと聞いたんだ！」

カレンはその答えが不満だったのか、声を荒げて星を睨んだ。

その声を聞いて、星はカレンを睨み返しゆっくりと口を開く。

「——たとえどんな事があっても……人の悪口は言っちゃダメなんです！ それが本人に聞かれてなくても。自分がやられて嫌な事を人にしたら絶対にいけないんです!!」

「……ッ!？」

その言葉を聞いてカレンははっとして星の顔を見つめた。

カレンにとって、それは衝撃だったのだろう……何故なら、その時、カレンは愛と初めて話をした時のことを思い出していた。

* * *

それはカレンが孤児院に来て間もない時のことだった。その頃の
カレンは親に捨てられ、心が荒んでいた。そのこともあって、なか
か他の子供達と仲良くなれずにいた。

そんなある日。施設の庭を歩いていたカレンの足元に、近くで遊ん
でいた子供のボールが転がってきた。

カレンはそのボールをじーっと見つめていると、男の子が慌てて駆
け寄ってきた。

「あ、ごめん。ボール取ってもらえる？」

「……………」

それを聞いて、カレンはボールを拾い上げると、躊躇せずに遠くに
蹴飛ばした。

その後、カレンは男の子を睨むように鋭い視線を浴びせる。

男の子はそのボールの行方を目で追うと、カレンの顔を見て啞然と
している。

そしてカレンが一言。

「…………ふん。ばかみたい」

カレンはそう言い残し、再び歩き出した。

そのやり取りの一部始終を見ていた愛はそのボールを追いかけて
拾い上げると、カレンの前に歩いてきた。

「なによう？ 何か文句でもあるの？」

カレンは無言のまま立っている愛に、そう言って睨みを利かせる。

愛は無言のまま、ボールをカレンの足元に落とすと、口を開いた。

「…………拾って…………」

「なんで私がそんな事を…………」

「いいから拾って！」

その彼女のなんとも言えない威圧感に押されたカレンは、愛の言う
通りボールを拾った。

すると、愛はそのボールをしつかりと掴むと「ありがとう」とお礼
を言って微笑んだ。

カレンはその行動の意味が理解できず、きよとんとしながら彼女の
顔を見つめていると、愛は言葉を続けた。

「ほら、お礼を言われた方が気持ちがいいでしょ？　自分がやられて嫌な事を人にしたらダメだよ？　これからは皆仲良く。ね？」

「う、うん。分かった……」

「なら、あつちで一緒に遊ぼー！」

この出来事から愛とカレンの心の距離は、急速に近付いていったのだった。

* * *

そして今、目の前にいる星も今は亡き親友と同じ目をしている。

（そうか、こいつは……似てるんだ。愛に……だから俺は……）

カレンが星を見ていて気分が悪かったのは、星に幼い頃の親友の面影を見ていたからだ。無理して明るく振舞っていた彼女の最後の時の姿に――。

人が嫌がることをしない――それは人として当然かもしれない。だが、その時に自分の感情をコントロールできないかはその人次第だろう。

「――フィン……俺もまだまだだな。こんな子供に――居なくなつた親友に教えられるとは……」

「……親友？」

ぼそっと呟いたカレンの言葉を聞いて、星は不思議そうに首を傾げた。

カレンは一瞬だけ天を仰ぎ、再び星の方に目を向けると拳を構え直す。

「俺が今ここで手を抜いてお前に謝つたとして、それでは納得しないだろう？　これから全力で戦つて、お前が俺に一撃でも与えられれば俺は全力での2人に詫びを入れる。それで良いか？」

カレンは剣を持ち身構えている星に向かってそう叫ぶと、星はゆっくりこくと頷いて見せた。再び2人の間に緊張が走る――。

（良く分からないけど、これで私がカレンさんに一度でも攻撃を当てられれば、2人に全力で謝るって約束してくれた。絶対に負けない

……ううん、負けられない！ 私はエリエさんとエミルさんが嫌な思
いをするのは、絶対に嫌だから……絶対に勝たなきゃいけないんだ
！)

星は心の中で決意を新たに集中していた。しかし、PVPのシステ
ム上。何度倒れてもHPは全快するが肉体への疲労は蓄積していく。
二度も倒れた星の足は震え、体の至る所にズキズキとした鈍い痛み
も残っている。その時、星はこれがVRMMOというゲームの弊害な
のだと、自らの体をもって感じ取っていた。

だが、その痛みのおかげか、星の頭はしつかりしている。そして眼
前に悠々と拳を構えて立つ、目付きも雰囲気も変わったカレンを見て
星は思った。

おそらく。カレンは、今まで以上に攻撃の制度を上げてくる。そう
なったら、もう星が彼女に攻撃を当てられる方法は、防御を捨てた超
近接戦闘でのワンチャンしかない……。

だが、それはあまりに危険な方法だ。女同士でも年齢差もある。
ただでさえ、同級生の間でも身長の違い星に対して、カレンは16
0cm後半はある。これは男性の身長と同じくらいだ。それに加え
て、彼女の回避率と攻撃速度は自分より遥かに高い。

それが『一撃を当てたら……』つという勝負のルールにも繋がって
いるのだろう。

星はふとさっきの攻撃の痛みを思い出し、そつと左手で腹部をさ
すった。その瞬間、無意識に額から汗が吹き出し体が震え出した。

実際に痛みを伴うのだ、星のこの反応も無理もない。

(——ううん。大丈夫……痛くない。友達が居ないあの胸の痛みに比
べれば！ エミルさんと離れる時の——あの苦しみに比べれば。こ
んなの全然辛くない!!)

星は迷いを振り払うように首を振ると、鞘を被った剣先をカレンに
向けた。

「はあああああああッ!!」

覚悟を決めた星が叫び声を上げながら、カレンに向かって走り出し
た。

星はカレンの目の前で剣を大きく振り上げると、そのまま力一杯振り下ろした。しかし、その渾身の一打がカレンに届く前に、カレンの拳が星の体に突き刺さる。

「……かはっ！」

星はあまりの痛みを意識が飛びそうになるのを堪え、咄嗟にカレンの腹部目掛けて剣を持った腕を伸ばした。

「……はあっ！」

「——なに!? ……だが、甘い!!」

カレンはその剣を体を回転させていとも容易くかわすと、今度は彼女の長い足が星の脇腹を捉えた。

星の体は勢い良く飛ばされ、20m以上も先の壁に体を強く叩きつけられてそのまま力無く地面に倒れ込んだ。

ぴくりとも動かない星を見て、カレンは思わず『しまった!』と心の中で叫んだ。

星は咄嗟に自分のHPの残量を確認する。HPバーはレッドゾーンに入っているものの、少しだけHPが残っていて、中央部分に表示されたその数値は130となっている。

「はあ……はあ……はあ……まだ、ちよつと……ある……」

星は残った力を振り絞って何とか立ち上がった。

息をするだけで苦しい。しかも体に力を入れようとする度に、尋常じゃない痛みで顔が歪み瞳からは涙が流れ意識は遠のく。

「はあ……はあ……ま……け……ない！」

そう声にならない声を出して剣を構える。

今の星を衝き動かしているのは、ただただ絶対に謝らせてみせるという信念だけだった。

「……ッ!? あの攻撃を受けても、まだ——」

そんな様子の星を見てカレンは瞳に涙を浮かべ、思わず唇を噛んで自分の軽率な行動を後悔していた。まさか、ここまで星が立ち向かってくるとは考えていなかったのだ——。

(……本当は、もう今すぐにでも謝ってしまいたい。でも、おそろくそれをやってもあの子は絶対許してはくれないだろう。もうあの子の

気が済むまで相手をするしかない……)

歯痒い思いを隠し切れない様子のカレン。

そんな彼女の思いを知る由もなく、星は剣を構えカレンにもう一度向かって突撃してくる。

カレンは向かってくる星を見て再び拳を構える。しかし、内心はどうすれば星を止められるかを考えていた。

それもそのはずだ。星は何度も転びそうになりながらも向かってくる。

(何を考えているんだ。正面から俺に突っ込んでくるとは……だが、どうする……? どうすればあいつを諦めさせる事ができる!?)

カレンが考えを巡らせてる間にも、星との距離が徐々に詰まってくる。

その時、痛む体に鞭打ち懸命に走る星は何の考えなく、ただがむしやらに向かっていくだけだった。

(もう。体が言う事を聞いてくれない……大丈夫。勝つまでやれば負ける事ないもん!)

星はそう自分に言い聞かせる。すると、不思議と勇気が湧いてくる気がした。徐々にカレンに近付くにつれて、今まで力が入らなかった体に力が戻ってくるのを感じた。

勝利への突破口を見つけた星は『よし。これなら行ける!』と剣を振り上げ、カレンに飛び掛かろうと足に力を入れた瞬間——星の足から急に力が抜け、前屈みにバランスを崩した。

「あつ……」

まだ自分の剣の間合いにカレンは入っていない。転びそうになった星の頭の中が一瞬で真っ白になった。

理想と現実5

戦闘の途中で脱力する——それは星の体力の限界を超えていることを意味していた。

もうどんなに星が足に力を込めようが、崩れる体は元に戻らない。徐々に視界が横になっていく。

（——そんな……ここでおしまいなの……？）

星そんなことを思った時、辺りがまるでスローモーションのようにゆっくりと時間が流れるような錯覚に陥った。

その不思議な感覚に戸惑いながらも辺りを見渡すと、その中に驚いた様子のカレンの顔を見つけぼーっと見つめる。

（エリエさん。エミルさん。大切な人を馬鹿にされて何もできないなんて……私、やっぱりダメな子みたいです……ごめんなさい……）

星は瞳を閉じて、心の中で2人に謝った。

『……諦めるのか？』

諦めた直後、心の奥深くで誰かがささやく……。

星は突然のことに驚いて辺りを見渡す。

「——えっ？ 誰!？」

『お前は以前。我輩を守ってくれた』

「——私が……あなたを助けた？」

その心の中の声を聞いて余計に、星の頭の中は混乱した。

今のスローモーションのようにゆっくりと前に倒れていく状況で、困惑している状況なのに『守ってもらった』というその言葉の意味に思い当たる節がない。

ゲームの世界に来てからも人を助けたことなんてなく、いつでも助けられてばかりだ。

確かに学校の返り道に迷っている老人を助けたことや、迷子になった小さな子を助けたことはあった。しかし、今聞こえているこの声はそのどちらとも違う……明らかに聞き慣れない声だ——。

星はこの声は全く身に覚えがない。

その声は星の疑問に答えることなく、勝手に話を続けている。

『お前はあの者に勝ちたいのか?』

「……ッ!」

星はその言葉に強く反応する。

勝てるものなら勝ちたい。勝って、今までのことを全て清算し、カレンとも仲良くなりしたい。

その声が聞こえ咄嗟に、星は無意識に心の中で強く「勝ちたい!」と叫んだ。直後『良いだろう』とだけ言い残し、その声は聞こえなくなった。すると、次の瞬間。星の体がまるで焼けるように熱くなる。

「うっ……きやあああああああああッ!!」

星は突然のことに驚き、行き場のない感覚に悲鳴を上げる。

発熱した体からは金色の光が溢れ出し、まるで爆発したかの様に辺りを一瞬のうちに包み込んだ。

「——なっ、何だ。何が起こったんだ!」

カレンはその光りを遮るように腕で顔を覆う。

薄暗い部屋の中は、まるで真夏の中にいるように明るく照らし出され、一瞬にして視界を塞ぐ。

* * *

星の体から放たれた光りは下の階にも届き、その眩い光りでエリエが目を覚ました。

「んっ……な、何……? あれ? 星が居ない!」

目を覚ましたエリエは横に寝ていたはずの星が居ないことに気が付き、慌てて布団から飛び起きた。

混乱する頭の中、エリエは近くで寝ていたエミルの体を揺らす。

「星が……星が居ない!? エミル姉、起きて! 大変なの。星が居ないの!!」

「うう……んっ……なに? エリー。どうしたのよ?」

「だから、星が居ないのよ!!」

「……え? なんだ……居るじゃない……」

眠い目を擦りながらエミルは近くにあったクマのぬいぐるみを抱

き締めると、何事もなかったかのようにまた眠りに就く。

エリエは「それ違う！」と叫ぶと、彼女はある重要なことを思い出した。

(そ、そういえば……エミル姉。寝起き凄い悪いんだっ……)

エミルと寝ていると、朝はいつもこんな感じで一向に起きないのだ。

こうなってしまった彼女は当分の間は使い物にならないと、エリエは長年の付き合いで分かっていた。

「もう！ 大事な時に役に立たないんだからツ!!」

寝ぼけているエミルにそう吐き捨てるように言い放つと、コマンドから装備画面を開きパジャマから戦闘用の装備に着替える。

テントから飛び出し、階段から降り注ぐ光りに目をやる。

「スィフト!!」

エリエはスピードを上げるスキルを使用すると、決意に満ちた表情のまま飛び出して、まだ微かに光が漏れている階段を迷うことなく駆け上がっていく。

(——急がないと星が危ない！ もっと速く。もっと……もっと！ 神速！)

そう心の中で固有スキルを唱えると、彼女の体は青く輝き、疾風の如く速度を上げ階段を走り抜ける。

「……星、待っててね。すぐに助けに行くから!」

* * *

その頃、上の階に居た星とカレンの戦いは決着していた。

「……うっ!」

カレンが突如襲ってきた鈍い痛みにも気付いて、自分の腹部に目をやると、星の鞘を被った剣先がカレンの腹部に当たり止まっていた。

しかし、カレンのHPは上限の1000から、20程度しか減っていない。だが、剣に鞘が被った状態でなければ、ダメージは避けられなかっただろう。

「はあ……はあ……やつ……た……」

満足そうに星は微かに笑みを浮かべ、その場に倒れ込んだ。それと同時に、星の体から出ていた光りも完全に消えていた。

カレンは信じられないという表情で、何が起きたのかも分からずにただただその場に立ち尽くしている。

（今のは何だ!? まさか、前回のアップデートで魔法が追加されていたのか……? いや、そんな報告は見た事も聞いた事も無い。ならあの力はいったい……）

転びそうになった星の体から、急に光りが溢れ出したと思つたらこれだ。誰でも混乱するだろう。

カレンはさっきの光の正体にしばらく考えを巡らせていたが、そのうちそんなことを考えてるのが馬鹿らしくなり。

「何にしても。この戦いは俺の負けだな……」

口元に笑みを浮かべ、そうぼそつと呟くと足元に倒れている星を見た。

HPは同じ上限の1000。星の残りHPは130。それに引き換えカレンのHPは980。数値の上では間違いなくカレンの勝ちだが、星の諦めない姿勢に負けたということだろう。

「——星！ 助けに来た……」

階段を上りきったエリエの目に飛び込んできたのは、倒れている星の前に悠然と立っているカレンの姿だった。

その姿を見たエリエは信じられないと言った表情の直後、すぐに立っているカレンを殺意の込もった瞳で見据えている。

「いや、これは——」

「——今すぐ……星から離れろおおおおおッ!!」

カレンが言葉を発する前に、エリエが腰のレイピアを引き抜き目にも止まらぬ速さで斬り掛かった。

その攻撃を寸でのごとくかわすと、カレンは拳を構え直してエリエを睨みつけた。しかし、その戦意はすぐに喪失する——。

何故なら、カレンの眼前に飛び込んできたのは、倒れた星を抱き起こしボロボロと涙を流しているエリエの姿だった。

「ちよつと……星、大丈夫？　ねえ……返事してよ……こんなに、ボロボロになつて……さつきまで、あんなに元気だったのに……」

エリエは気を失っている星を瞳を涙で潤ませながら見つめると、次に怒りに満ちた眼差しをカレンに向けた。

そして殺気に満ちた声音でカレンに尋ねる。

「……これは、どういう事なの？」

「じ、実は……これには訳があつて、彼女と戦う事になつたんだ。それで……」

「訳があつて戦う事になつた？　こんなになるまで人を痛めつけるつて、いったいどんな訳があつたのよ!!」

感情的だが、的確にしてきたエリエの言葉に、カレンは俯き口をつぐんだままその場に立ち尽くすしかなかった。

だが、それもやつぱり。心に罪の意識があつたからかもしれない。

「——ああ、もういい。そんな事どうでもいい……どうしてこんなになるまで戦つたつていう結果は変わらない!!」

黙り込むカレンに痺れを切らしたエリエが声を荒らげた。

エリエは星の残りのHP残量を確認して。

「——早くPVPを解除しなさいよ！」

エリエは強い口調でそう言うと、カレンは慌ててコマンドからPV Pの中止のボタンを押す。それと同時に、お互いのHPは全回復する。すると、心なしか星の顔色も良くなった気がした。HPが回復したことで、肉体に受けた痛みも少し改善したのだろう。

エリエはそれを見てほつとすると、再びカレンを睨みつけると。

「私の質問に全て答えなさい……返答によつては私が相手になる」

つと怒りに満ちた声で床に置いたレイピアを掴んだ。しかし、カレンは無言で俯いたまま口を開こうとしない。

だが、カレンの対応は必ずしも間違つてるとは言えない。

当事者以外がこの現状を見れば、誰が加害者で誰が被害者なのかは言うまでもないし、また、変に言い訳しても相手の感情を逆撫でするだけだからだ。

例えカレンがここで説明したとしても、冷静でないエリエを前にし

てでは、状況が悪化するだけで何の解決にもならないだろう。

両者無言のまま、2人の間に緊張が走る。

だんまりを決め込むカレンに、しばらくしてエリエがカレンを睨みつけながら徐ろに口を開いた。

「……なんとか言いなさいよ。あんた、自分が何をやったか分かっているの!? 小さな子を一方的にいたぶって、さぞ楽しかったでしょうね! この子があまり自己主張しないからって、その弱みに漬け込んで……あんた。最低よ!!」

「そうだ。俺は最低な——」

その時、カレンの言葉を遮るように星の声が響く。

「——それは……違いますよ?」

カレンが話終わる前に星の声が聞こえてきた。エリエはその声を聞いて、驚きを隠せない表情で星の顔を見た。

星は痛みで顔を歪めながらも、笑顔を見せる。

「——星!? 良かった。心配したんだから……」

「はあ……はあ……ごめんなさい。ちよつと……カレンさんの……話を……聞いて、もらえませんか……?」

エリエは「どうしたの?」と神妙な面持ちで星に尋ねた。

星の申し出に、エリエも一瞬嫌な顔をしつつも仕方なく頷く。

「……カレンさん」

「えっ? ああ……」

星に促され、カレンは徐ろにエリエの前まで来て止まった。

それをエリエは警戒した様子で目を細めながら見上げている。

「君の居ない所で君の陰口を言ってしまったって本当に……ご、ごめんなさい……」

「……えっ?」

少し間を開けてカレンはエリエに向かって深く頭を下げる。その突然の行動に意表を突かれたのか、エリエは呆気に取られている。

だが、それは当たり前前の反応だろう。この緊迫した状況でそんなことを言われてほかんとならない者などいない。

「——私の陰口って、あんた。何言ってるのよ? ……って、まさか

!？」

エリエは何かに気が付き慌てて星の顔を見ると、星はにっこりと微笑んでいた。

それを見て、エリエは半信半疑の状態ですに問いかける。

「……星。こいつと戦ってた理由って……もしかして、私の陰口を言われたから……？」

「はあ……はあ……はい」

星はそう頷くと苦しそうに肩で息をしながらにこつと微笑んだ。

「ばかだな……そんな事……言いたい奴には……言わせておけばいいのよ……」

涙で滲んだ瞳で星を見つめながら、そのエリエの肩は震えていた。

まだ会って数日しか経っていないのに、ここまで星が慕ってくれているのがエリエには嬉しかった。

「……だって。嫌な、気持ちになるから……」

「私は……星が傷つく方が、よっぽど嫌だよ……本当に星は、バカが付くくらい真面目なんだから……でも、ありがとね！」

エリエはそんな星の頭を優しく撫でながら耳元で小さな声で告げると、星は満足そうに「はい」と嬉しそうに頷いた。

「話しているところ悪いけど。俺はこの子にも謝らないといけない……」

「——そうね。あんたはまず、私より星に謝らないといけないよね」

カレンは不思議そうにしている星の手を取った。

その手を見つめ、星は困惑した表情を見せる。

「……え？」

「痛かっただろ？ 本当に申し訳なかった。でも君は凄かったよ。もし俺が君の立場ならすぐに諦めていたと思う。それで良かったら、なんだが……君の事を名前で呼んでも良いだろうか？」

カレンは少し照れた様子でそう言って、星の顔を見つめた。

星はその申し出を素直に受けると、カレンの手をぎっと強く握り返した。

「よし。なら、もう遅いし。テントに戻って休もつか！ ほら、おんぶ

してあげる！」

「……いえ、私は……自分で歩けますから……」

「もう。けが人が無理しないの！ まだ体に力はいらないでしょ？ 大人しくお姉ちゃんの言う事を聞きなさい」

「うう……ありがとうございます」

エリエにそう言われ、星は恥ずかしそうに顔を赤らめると、エリエの背中におぶさった。

星を背負うと階段に向かって歩き出そうとしたエリエに、横からカレンが声を掛ける。

「俺が星ちゃんを背負っていくよ。もとはと言えば俺が悪いんだし……」

「いいわよ別に……だって私は星を迎えにきたんだし。それに私はまだあなたを信用した訳じゃないんだから！」

エリエはそう言い残し、星を背負ったまま階段に向かって歩き出すと、カレンもその後を追いかけるように歩き始めた。

長い階段をエリエがゆつくりと下つていけると、星は背中で心地よさそうに小さな寝息を立て始める。それを見たカレンは思わず、くすつと笑みをこぼした。

そんなカレンの様子を見たエリエは不機嫌そうに「なに、笑ってるのよ？」と問い掛けると、カレンはその質問に答えるように口を開く。

「いや、疲れたら寝るところは普通の子供だと思ってさ。さっきまでは大人と変わらないと思ってたから、そのギャップがおかしくて」

「なに当たり前な事言ってるのよ。その子供をボロボロになるまで痛めつけたのは、どこの誰よ……」

エリエにそう言われ「いや、それを言われると……」と苦笑いしながら頭を掻くカレン。

それを見てエリエは「はあ」と呆れた様子で大きなため息をついた。

カレンはそれを気にすることもなく言葉を続けた。

「それにしても大した子だよ。俺がこの子の立場なら間違いない痛みに負けて、途中で諦めていたと思う」

「それも当たり前でしょ？」

エリエはそういうとカレンは不思議そうな顔でエリエの次の言葉を待った。

「……だって、私の自慢の妹なんだから！」

自慢げにそう言い放ったエリエの顔を驚いた顔で見ると、カレンは静かに口を開いた。

「そうだな……『俺の』妹だからな！」

「なっ、なんですって〜!? 星は私の妹なの!!」

「いや。俺の妹だ!!」

2人がいがみ合っていると「けんかはダメです……」と星の寝言が聞こえてきた。

エリエとカレンの2人は驚いた表情で、お互いの顔を見合わせると笑みを浮かべた。

決戦

次の日。星が目を覚ますと、着ていたはずの服がもこもこした耳と尻尾の着いた白い猫の着ぐるみパジャマに変わっていた。おそろく、寝ている間にエリエに着替えさせられたのだろう。

本人が意識を失っていても服を変えられるということは、どうやら装備と言っても服を着ていることに変わりはなく。コマンドを操作しなくても現実と同じように、服の着せ替えはできるようだ。

つととなると、もう一つ疑問が生まれてくる。

そう。元々の装備はどこへいったのか——つということだ。

徐にコマンドを操作し、アイテム欄の中を確認した。すると、その一番上にエミルに貰った服が入っている。それを見て、星はほっと胸を撫で下ろす。

どうやら、装備の脱着はできても、その所有権は移動しないらしい。まあ、そんなことができれば、寝ている内に装備を剥ぎ取られ、朝起きたらえらいことになっているだろうが……。

星は装備を戻すと、横を向いた。・

そこにはエリエが布団を放り出して、気持ち良さそうに寝ている。

「うくん……もう……マカロンは食べられないよ……ああ、でもプリンならまだ入る……」

まあ、夢の内容は何となく想像はできる。

寝言を言っているエリエを見て、星が深いため息を吐く。

「もう、エリエさん。そんな格好じゃ風邪引いちゃいますよっ。」

星は彼女の体に布団を掛け直すと、テントの外に出た。

外に出るとそこにはエリエ以外の全員がすでに集まっていて、朝食を取っているところだった。

「あら、星ちゃん。おはよう。もうご飯できてるわよっ。」

「……はっ」

エミルはにっこりと微笑むと、星のことを手招きしながら呼んだ。

星は俯き加減に返事をする、少しドキドキしながらエミルの横に座った。

「今日は私の最高傑作よ。はい、星ちゃんもいっぱい食べてねえ」
♪

「……あつ、ありがとうございます」

星はサラザに差し出されたカレーの皿を受け取ると、横目で隣に座るエミルの顔色を窺う。

それに気付いたエミルは、いつもと変わらない様子で星につこりと微笑んだ。

その様子からは、昨日の出来事を聞いたか聞いてないのかは窺い知ることができない。

持っていたスプーンで星がカレーをすくうと、タイミングを見計らったようにエミルが声を掛けた。

「星ちゃん。後で少し話があるんだけどいいかしら？」

「えっ!? は、はい……」

星は昨日の話をされると思い、小さく頷きながらうつむく。

その後、できるだけゆつくりと朝食を食べ終えた星は、エミルに少し離れたところに呼ばれた。

どんな話をされるのか、少し緊張した表情で星はエミルに尋ねる。

「それで……話って……何ですか？」

「うーん。昨日の夜の話と昼の話。どっちからがいい？」

星はエミルのまさかの返しに、少し戸惑った様子でエミルの顔を見上げる。

おそらく。良い話と悪い話どちらから先に聞きたいかということなのだろうが、昼の話と夜の話という言い方からして。もしかすると、どちらも悪い話の可能性もまだ捨てきれない。

真剣な面持ちで考え込んでいる星に、エミルが優しく語り掛けた。

「別にそんなに考え込まなくてもいいのよ？ ただちよつとした注意と質問だけだから」

「——注意と質問……ですか？」

星が首を傾げると「そうよ」とエミルは優しく微笑んだ。

再び考え込んだ星は、決意したような顔でエミルを見上げた。

「……なら、注意からでー」

「はい。それじゃー。昨日の夜の話だけど、カレンさんから全て聞いたわよ。昨日は相当無理をしたんですって?」

「あ……は、はい」

星はしょんぼりしながら頷くと、怒られると思ったのか、強く目を瞑った。

エミルはそんな星の頭に手を置いて、優しい口調で話し始める。

「今回は私も起きられなかったから、あなたを非難する事はできないし。仲間同士でのPVPだから良いけど……でも、次からは行動する前に必ず目上の人の許可を取ること! いいわね?」

「——は、はい。ごめんなさい……」

星はそう言われ肩をすぼめると、小さく頷いた。

エミルはそんな星の姿を見て笑みを浮かべると、優しい眼差しで星を見つめた。

「さて、次は昨日のお昼の話の続きだけど……嫌な予感がするって言うってたでしょ?」

「あつ、はい。嫌な予感というか……危険な感じがするんです!」

星は真剣な面持ちで、真っ直ぐエミルの目を見つめている。その目は今すぐこの場所から立ち去る方が賢明だと、エミルに訴えかけているようにも感じた。

エミルは星から目を逸らすと、深刻な顔付きで言い難そうに口を開く。

「実はね……昨日の夜。マスターと話をして、一旦街に戻ろうって事になったの。それで、部屋の中を色々調べてたんだけど、やっぱりこのダンジョンからは出られないみたいなのよ。村にPTメンバーを転送できるアイテムも使ったんだけど、それも反応がなくなっ……」

「なら、途中で戻れないってことですか!？」

それを聞いた星の顔から血の気が引いていく。

エミルは表情を曇らせたまま「そうなるわね」と小さな声で答えた。

不安そうな表情のままの星がエミルを見つめていると、エミルはそんな星の顔を見て、頭を撫でながら優しい声で告げる。

「そんなに心配しなくても大丈夫よ。マスターも対策を考えてるし。

私達は多くのダンジョンをクリアしてるんだから！」

そのエミルの自信に満ち溢れた言葉に、星はにっこりと微笑んで見せた。しかし、内心。拭い切れない不安と恐れが、ふつつつと込み上げてきていたのも事実である。

だがそれも無理はないだろう。星にとってはこれが初めてのダンジョン探索で、初めて味わう実戦の空気なのだ。

ただ画面を見てプレイするゲームとは違い。ここではダメージを受ければ体が傷付き痛みを伴う。

言うなれば、非現実の中のもう一つの現実の世界——体も敵もデータの集合体で全てが偽りのくせに、自分の視界の上の方にある丸いHPバーが『0』になれば光りになって偽物のデータの体と本物の心が消えていく……そんな理不尽な全てが、今は現実なのだ。

そんな時、後ろからエリエの声が響いた。

「エミル姉、星。マスターが作戦会議するって。早く来なよ」

「エリー。わざわざ呼びに来てもらって悪いわね」

「いいよ、これくらい。それより何の話をしてたの？」

エリエは2人の側までくると、星の顔を覗き込んできた。

おそらく。星は昨日のことで、エミルに何か言われていると思ったのだろう。

星は心配いらんという感じにエリエににこつと笑って見せると、エリエも微笑み返してくれた。

（エリエさん。昨日の事、気にしてくれてるんだ……やっぱり優しい人だなあ）

星がそんなことを考えていると、突然エリエに手を掴まれた。

「……えっ？」

「ほら、行くよー」

困惑した様子でエリエを見た星の手を引いて、その場から強引に連れていかれた。

エミルはそれを見て「仕方ないわねえ」と呟くと、2人の後を追いかける。

「ちよ……エリエさん。痛い、痛いですよ」

「あつ、ごめん！」

エリエは慌てて星の手を離すと、膝を折って耳元で小さな声で尋ねた。

「星……エミル姉に何を言われたの？」

「えっ？ いえ、別に何も言われてませんよ……？」

星は疑われているのが分かって、少しでもエリエに悟らせないようにと目を逸らした。

だが、そんな星の様子を怪訝そうに見つめると、すぐにエリエは正解を言い当てる。

「うくん。嘘だね……昨日の事で、エミル姉に何か言われたんでしょ。怒られた？」

「うう……はい。今度何かする時は、近くの人に相談してからって言われました……」

星は言い逃れしても無駄だと思ったのか、仕方なく本当のことをエリエに話す。

すると、エリエは一瞬だけ訝しげな顔をしたが「それが一番良いかもね！」と微笑むと、納得したのか星の頭を撫で回した。

星達が皆のところに行くと、四角い机を囲んで真剣な顔で何やら話をしている。

星も近くに腰掛け、その話に聞き耳を立てる。

「——今はログアウトと死ぬ事は許されん。更に、ここのボスの全容を知る者もおらぬ。今回のボス戦は、今までにないほどに厳しいものになるだろう。だが、儂らにも今まで培った技術と意地がある！」

マスターの言葉に、その場にいた全員が無言のまま一同に頷く。

それを撫でるように見て、マスターは満足そうな笑みを浮かべると、話を続けた。

「今回の戦闘は前衛を2つと後衛に分ける。一撃の攻撃力順にサラザ。ガイ……いや、デイビッド。エミル。エリエ。儂。カレン。星。だ——しかし、攻撃の手数を考慮に入れると、この順番が儂。エリエ。エミル。サラザ。カレン。デイビッド。星。つと、入れ替わる。それをふまえた上での人選の結果。前衛1は儂。エミル！ 前線2はサ

ラザ。デイビッド！そして後方支援はエリエ。カレン。星の3人をお願いする！」

声を張り上げて作戦を説明するマスターに向かって、デイビッドが声を上げた。

「ちよつと待てマスター。重要な事を聞いて良いか？」

「うむ」

彼の方をマスターが向いて頷くと、デイビッドは神妙な面持ちで告げる。

「……どうして、俺の名前をわざわざ言い直したんだ？」

「——次に……」

「うおおおおおい！」

マスターは不満そうに声を上げたデイビッドの言葉をスルーし、何事もなかったように話を続ける。

「師匠。ちよつと待って下さい！」

その時、話を黙って聞いていたカレンが不満そうな顔で手を上げる。

「どうした？ カレン」

「なぜ。俺は師匠とご一緒できないのでしょうか？」

それを聞いてマスターは「うーん」と唸ると、少し考え込んでから徐ろに口を開いた。

「今回の戦闘は豊富な戦闘経験がものを言うだろう。その結果から決めた人選だ。お前がどんなに戦闘経験を積んでも、年長者のそれには遠く及ばん！」

「……しかし！」

納得いかない彼女が再び声を上げようとすると、マスターの声が割って入った。

「それに、戦闘は前衛だけで決するものではない！ 後方の援護あつてこそ、儂等も存分に力を発揮できる！」

「……師匠」

「お主には厳しい修行で鍛えたスピードがある。迅速な援護を期待しておるぞ……」

「はい！ 必ず。必ずや師匠の期待に応えてみせます！」

カレンの手を掴みそう言ったマスターの言葉にカレンは力強くその手を握り返し、熱のこもった視線のまま頷く。

それを見ていたエリエは、2人に聞こえないように「熱血バトル物の漫画じゃあるまいし」と小さな声でぼそつ呟いた。

それを聞いた星は不思議そうに首を傾げている。だが、マスターのその言葉は建前で、本心では愛弟子を危険な前線に出したくないという考えがあったのかもしれない。

マスターは上手くカレンを押しさえ込むと、再び説明を始めた。

「カレンにも説明した通り。この組み合わせには理由がある。まず、前衛1の儂とエミルは数多く手合わせしている。お互いに手の内を知り尽くしておるからな、連携も取りやすく気兼ねなく戦える。そして前衛2のサラザ。デイビッドは儂等が回復する際の壁役として出してもらいたい。サラザには固有スキル『ビルドアップ』がある。そしてデイビッドの固有スキル『排水の陣』にはHP残量に応じて攻撃力、防御力を増加する力がある。どちらも肉体系強化系の固有スキルを使えば、難しい戦いにはならんだろう頼んだぞ！」

「おうー！」

「頑張るわよー！」

2人はその言葉に応えるように言った。

その意思を確認し、マスターは満足そうに頷くと今度は星達の方を向く。

「そして後衛3人はエリエ、カレンのスピードを活かし。必要に応じて負傷者の回復を担当してもらおう。そして星はまだLvが低い！

なるべく後方に下がって、儂等の戦闘を見てもらいたい。今後の戦闘の参考になるだろう……。さっきも言ったが、後方支援の素早さで戦闘は決まると言っても良い。良いな！」

「はー！」

マスターのその言葉に、3人は声を合わせて頷いた。

「よし。それでは戦闘の大まかな流れを説明する！ 皆の者。この紙を見てくれ……！」

マスターは机の上に広げられていた紙を指差して作戦の説明をしていく。

それを、その場に居た全員が食い入るようにつめる。

決戦2

作戦を頭に叩き込んでボスとの決戦に臨む。

メンバーは自分の武器を握り締め、神妙な面持ちでボス部屋の前に立ち扉を見つめている。

期待と不安を胸にサラザが扉に手を掛けると「開けるわよ?」と、最後の確認する様に皆の顔を見て言った。

「よし行くぞー! 鬼が出るか蛇が出るか……皆の者、心せい!!」
「よっしゃー。燃えてきた!!」

男性陣は気合十分な様子で得物を手に答えた。

一方女性陣はというと……。

「遂にボス戦ね……星ちゃん。怖くない?」

「はひっ! はい!! い……いえ、ちよつと怖い……です」

星は緊張のあまり変な声を上げると、不安そうな顔でエミルの顔を見上げている。

そこにエリエが後ろから、緊張して体が強張っている星の肩に覆いかぶさるようして抱きつく。

「——緊張してる? 大丈夫! 星の事は私がしっかり守ってあげるから。だから、エミル姉は安心して戦ってね!」

「ええ……お願いね、エリー」

自信満々に指を当てているエリエを、なおも心配そうに2人を見つめるエミルに、ゆっくりと歩いてきてカレンが言った。

「任せて下さい! エミルさん。星ちゃんは俺が命に代えてもお守りします!」

カレンは自信満々に胸を叩いて微笑む。

そこにエリエが膨れっ面をして不満そうに口を挟んできた。

「昨日までの対応とは大違いね。別にあんたの力を借りなくても、私一人で十分なんだけど……?」

「ふんっ、なにも心配するな……俺が星ちゃんを守りながら、師匠達の回復もする。だからお前は、ゆっくりお菓子でも食べていればいいさ!」

それを聞いたエリエは顔を真っ赤にして、カレンに向かって声を荒げる。

「あんたこそ、昨日の今日で良くそんな事を言えるよね。私だってお菓子食べたいわよ！ でも持ってきたの全部食べちゃったんだから仕方ないでしょ……それに、今は糖分が足りないからイライラしてるの！ 今度ふざけたこと言ったら許さないわよ!!」

「なら尚の事。のんびりしてもらいたいものだな。怒りで正しい判断ができない人間に、俺も辺りをうろちよろされると迷惑だ！」

「なっ、なんですすつてえっ!?!」

「……なんだよ?」

いがみ合う2人の間には、激しい火花が散っている。

星は素早く一触即発の彼女達の側から離れると、エミルの影に隠れる。

「はあく。このメンバーって、いまいちまとまりに欠けるわよねえ……」

そんな2人の姿を見たエミルは呆れ果てた様子で頭を押さえながら、大きなため息をついた。だがそれは、星も同じのようで……。

(……大丈夫なのかなあ)

星は心配しながらも、ボス部屋の扉をじっと見つめる。

その目線の先では、サラザが扉に両手を掛け踏ん張っている。

「うおらあああああああああああッ!!」

サラザの雄叫びとともに、巨大な鉄製の扉が音を立てて徐々に開く。

それには今までいがみ合っていたエリエとカレンも、神妙な面持ちで身構えていた。

「行くぞ!! ……な、なに!?!」

そこにマスターが勢い良く飛び込んでいくと、同時に彼の動きが止まった。

それもそのはずだ。何故なら扉の先はもぬけの殻で、辺りを見渡してもボスどころかモンスターの姿すらなかったのだ。

壁に付いた松明の照らす部屋の中は薄暗く、もしかしたら透明な敵

なのではないかと、ボス部屋の中を注意深く見渡すが、やはりどこにもモンスターの影はない。

「——どうなっておるのだこれは……」

マスターはゆっくりと部屋の中央部分へと歩みを進めると、他のメンバーもその後続いた。

一行は全く何も起こる気配のないこの状況に、ただただ困惑していた。

「なにこれ、なにも居ないじゃん。バグ……?」

「いいえ。まだバグと決め付けるのは早いわ。気を付けてね。エリー」

「ふむ。だが、ここまで来ても何も出ないという事は——エリエの言う通り。単なるバグなのかもしれないぞ?」

半信半疑のまま、一行は警戒しながらもゆっくりと歩みを進めるが、結局部屋の一番奥までたどり着いてしまう。

だが、これは明らかにありえない現象だ。ボス部屋にはボスと、ボスを守るようにいる取り巻きのモンスターがいるはず。しかし、見渡す限り部屋の松明の光りがぼんやりと見えるだけだ。

何が起きているのか分からず、皆頻りに首を傾げている。

「ふう〜。何も出なかったですね」

星はほつとしたように息を吐くと、隣に居たエミルに微笑む。

エミルは「そ、そうね……」と歯切れが悪く言うのと、ぎこちない笑みを浮かべている。

(本当に、これで終わりなの? 何か大事なことを見落としているよ
うな……)

顎の下に手を当て考えながら、もう一度辺りに目を凝らすエミル。

暗い部屋の中は天井まで結構な高さがあり、奥行きも十分にある。と言って、別段変わった様子は見受けられない。まあ、普通のボス部屋に比べて縦の奥行きが大きいことくらいだろう……。

エミルがいくら考えても、この状況でボスが出現しないのはバグ以外には考えられなかった。

「あらあら、取り越し苦労ってやつね〜。緊張して損しちゃったわ〜」

サラザはがっかりした様子で肩の力を抜くと、バーベルを地面に突き立てた。

「デビッドも握っていた刀を鞘に収めて腕を組むと、サラザの言葉に頷く。」

「全くだ。俺の刀の腕を見せるまでもなかったって事だな！ 本当に残念だ……」

「へえ。デビッド先輩の刀って飾りじゃなかったっけ？」

「なっ……エリエ！ お前は目上の人間に対する口の聞き方がだ——」

ひよっこりと顔を出したエリエが悪戯な笑みを浮かべてそう告げると、デビッドがそんなエリエに説教を始めた。

エリエは手で耳を塞ぐと「あーあー」と聞こえないように、大きな声を出している。

（あの扉……なんだか……）

部屋の出口にある巨大な骸骨の頭部が大きく口を開けている様な造りの扉。しかも、その巨大な骸骨の口の中に鉄製の重厚感のある扉が収まっている。

その扉を見つめていた星の体が、恐怖からか無意識のうちに小刻みに震え出す。

それは危険を察知してなのか骸骨が怖いからかなのかは分からないが、ボス部屋に入る前から星は骸骨を見る度に嫌な胸騒ぎが止まらない。

不安そうな表情で辺りを見渡している星の耳に、サラザの声が入ってきた。

「敵も出ないし、とっととクリアーしちゃいましょうよ。私、早く帰ってお風呂に入りたいし」

サラザは出口に向かって歩き出した。

そして、出口の骸骨の口を潜ろうとした瞬間。出口にバリアのようなものが張ってあって行く手を阻む。

まるでパントマイムのように、何も無い場所を手で叩きながらサラザが困惑したように告げる。

「——なによこれ!? どうして入れないのよ〜」

「サラザ。何遊んでるのよ?」

エリエは何もないところを必死に叩いて、叫び声を上げているサラザの横を歩いて通ろうとした直後にゴンツ!という凄惨な音を出し「ひゃつ!」と悲鳴を上げると、顔を押しさえてその場にしゃがみ込んだまま、言葉にならない声を上げている。

「あら、エリー。あなたチャレンジャーねえ〜」

「あううう……チャレンジする前に止めてよ。もお〜」

瞳に涙を溜めてエリエは、冷やかす様に言ったサラザの顔を見上げて言った。

サラザはくすつと笑みを浮かべながら、そんなエリエの顔を見つめている。

その時、ドンツ!と大きな音を立てて突然、入り口の扉が勝手に閉まり部屋の壁一面に掛かっていた松明の赤から青い炎へと変わると、薄暗かった空間を更に不気味に照らし始める。

星は咄嗟にエミルの側に駆け寄ると、無意識に彼女の手を掴んだ。

「大丈夫。こんなの珍しい事じゃないから、安心して?」

「……は、はい」

不安そうな瞳を向ける星に、エミルは自分の思考が読まれない様にする為に微笑んだ。

しかし、星にはそう言ったものの、内心ではこのような事態に陥るのは稀だ。ここまでイレギュラーな事態に、さすがのエミルも動揺を隠し切れない。

(どういう事? ここまで来てこの演出……それに、今までに一度だって入り口の扉が閉まった事なんて無かったはず。それがどうして……)

エミルは怯えている星に悟られない様に振る舞いながらも、頭をフルに回させてなんとか状況の分析に努めていた。

「——やっとボスのお出ましかー」

デイビッドはにやりと不敵な笑みを浮かべ、一度しまった武器を抜くと体の前に構えた。

この不測の事態に、その場の緊張感が一気に高まる。

(うう……やっぱり、戦うんだ……)

星は震える手で剣の柄に手を掛けると、勢い良く剣を引き抜き構える。

「皆。何が起こるか分からん。気を抜くでないぞ!!」

そのマスターの声が星の耳に入ってくると、緊張から星は生唾を呑み込んだ。

すると、唐突に青い炎が部屋のそこかしらで上がり、無数の不気味な青い光を放つスケルトンが現れた。

スケルトンはオーラの様に立ち上がる青い炎に包まれ、発光しながらカタカタと不気味に体を左右に揺らしている。その姿は、まるでホラー映画のワンシーンの様だ――。

「なにになに？ また骸骨と戦うの……?」

エリエは不安そうな声に言うと、サラザに体を寄せている。

しかし、スケルトン達は一向に襲ってくる気配はなく、ただこちらを恨めしそうに見ているだけだった……。

出現して襲って来ないという不可解な動きに、皆が困惑している。

「……マスター。この状況……どう見ますか?」

普段は慎重なエミルが額に汗を滲ませ、マスターの耳元で尋ねる。

「そうだな。あやつら出てきたはいいが、襲ってくる気配がまるでない。だが、こちらが攻撃しても体力を無駄に使うだけ……ここは向こうの出口を見るのが賢明だろうな。なんとと言ってもここは……ボス部屋だからな」

「そうですね……私も同じ考えです。星ちゃん。私の後ろに……」

「は、はいー!」

エミルは星に自分の後ろに隠れるように言うと、敵の行動に目を凝らす。

星もエミルの背に身を隠しながらも、時折カタツと動くスケルトン達を見つめていた。

決戦3

戦況が長期戦の様相を呈すると思われた次の瞬間、部屋のあちこちに現れたスケルトン達が青い炎がいつそう激しく燃え上がる。

「……何ですか!? 急に燃え出して……」

「なに!? 一体何が起きておる!!」

「——ッ!? こ、これは……?」

それを見た星達はスケルトン達の突然の変化に、状況を全く読み込めずにいた。

まあ、無理もない。ボス部屋に入って、ボスどころかモンスターの姿が全く見えず。そしてやっと姿を表したモンスター達は戦闘を前に、青い炎で体を焼かれているのだ——正直。常人が判断できる限界を超えていると言わざるを得ない状況だろう。だが、この状況に動揺しているのは皆同じだった……。

「なにになに? 今度は一体何なのよ〜!」

「うわああああああん。ちよつと〜。骨をまた燃やすつてどういう神経してるのよ、可哀想じゃないのよ〜。エリー説明して〜」

「うわ〜ん。私が聞きたいわよ〜。顔は痛いし骸骨は燃えてるし……なんなのよもお〜」

エリエとサラザの2人は互いの体をしっかりと抱き合うと、泣きながらそう叫んでいる。

だが、どうしてサラザが敵に同情しているかは謎だが、混乱しているということだけは理解できた。

そんな2人を横目で見たデイビッドはわくわくを押しさえきれず、口元に微かな笑みを浮かべ口を開く。

「やつと面白くなりそうだな……」

「余裕ですね……扉は閉まりもう逃げられないこの状況が怖くはないのですか?」

デイビッドの横にいたカレンがそう尋ねると、デイビッドが言葉を続ける。

「怖い? そんなのとつくに通り越してるさ……今はただ楽しみだ

な。どんなのが飛び出してくるのかがな！」

「奇遇ですね。俺もですよ……」

対照的にデイビッドとカレンの2人は落ち着いた様子でそういうと、お互いに笑みを浮かべている。

スケルトンの青い炎が消えると、白く光る人魂のような物が残されているだけだった。

そして次の瞬間。その白い光の玉が、まるでホタルの光りの様に上空へと舞い上がり闇の中へと消えていく。

メンバーは手を出すこともできずにその光景をただ眺めていると、先程より遥かに大きい青く光る人魂がゆっくりと辺りを照らしながら落ちてくる。

降りてきた人魂はゆっくりと部屋の中を一周し、部屋の出口にある骸骨の頭の中へと消えていった。

この演出は数多くのダンジョン攻略してきたトッププレイヤー達ですら、全く見たことのない初めてのものだ――。

「なんだったのかしら……」

「分かんが、エミルよ。油断するでないぞ?」

「ええ。でも……」

エミルが口を開こうとした直後、大きな揺れが起こり骸骨が青白く点滅を始めた。

本能的に今までにない危険な感じを察したマスターが、辺りに大声で叫ぶ。

「やばい……ボスが来るぞー!!」

「皆、とりあえずここから離れてッ!!」

デイビッドとエミルの声が響くと同時に皆、一斉に入り口の方へと全力で走り出した。その直後、出口の地面が音を立って崩れ落ち、入り口付近に着いた頃には頭だけだった骸骨に体が現れた。

出口付近の地面が落ちた場所から、その巨大な上半身が姿を露わになる。すると、敵の頭上に名前とHPバーが表示される。

「――がしやどくろ。正確なHPは分からないわ。でも、赤いHPバーって事は……」

「うむ。おそらくは2万オーバーだろうな……作戦通りに行くぞ!!」
皆、持っていた武器を構えながら戦闘態勢に入った。

だが、どうしてHPバーが赤いと2万以上だと分かるかというところ。HP——ヒットポイントは、モンスターによってその数値は様々だ。雑魚ならば一撃で撃破でき、ボスなら膨大な時間とリスクを伴う。その中で基準の様なものが、プレイヤー達の長年の努力で大体の数値は予測できるようになっていた。

赤い色⇨危険とされ、それだけプレイヤーからしたら危険な存在だということを表している。

長きに渡る研鑽で得た情報では、HPは青、緑、黄、赤のゲージ1つ5000に設定されており。赤色を全て減らすと黄色。黄色を減らすと緑……つと続いていく。

しかし、赤いゲージ以上からは色の変更がない。その為、減らしても減らしても赤いゲージが出てくることだってあるのだ。

紛らわしいので運営側にも改善して欲しいと要望を出した者もいるのだが、その返答は「NO」だった。

おそらく。黄色になるまでの緊張感を楽しんでもらいたいと運営側は考えているのだろうが、プレイしている側としては何時まで経ってもゴールの見えないレースをしているようなものだ。

毎回の運営への要望の中でも『敵のHPバーを改善して欲しい』が、日本サーバーのランキングのトップ5に必ず入っているほどだった。「皆、配置につけー！ ゆくぞッ!!」

メンバーはマスターの声に『了解』と叫ぶと、事前の作戦通りに前衛2後衛1のフォーメーションを取る。

星もエリエ、カレンと共に後方へ下がり剣を構えている。

(マスターさんの作戦は——まず、マスターさんとエミルさんが敵を引きつけ攻撃する。その後、HPの残りが半分を下回ったら第二前衛のサラザさんとデイビッドさんが入れ替わって攻撃。その繰り返し……。そして私達の仕事は下がって来た人達へのHPの回復。これは完璧な作戦です!)

星は勝てるという自信に満ち溢れた表情で左手をぎゅっと握った。

だが、星のその考えでは約20%程度しかこの作戦の意図は図りきれていない。

マスターが何故前衛二後衛一の3つに分けたのか、そこには明確な意図があった。

普段ならHP残量を気にせずに殴り続けることが可能だ。それはダンジョン開始時に同じPTのメンバーが全滅していなければ、街の教会での復活後「現地に戻る」というコマンドが現れ、すぐにその場所に戻って来れる仕様になっていた。

しかし、今の状況ではそれは不可能に近い。何故なら、死んでもいいのかわからないこの状況で『死ぬ』ということは非常にリスクが高く危険だからだ。その為、死なないことが前提の戦闘を想定しなければならなかった。

普通なら前衛と後衛の2つに分けて後衛は回復に専念し『前衛は殴り続けた方が良いのではないか?』『どうしてダメージが分散するよくな非効率的な事をしているのか?』という考えが出ると思う。

確かに前衛と後衛2つに分けた方が回転率がいい。ヘイトをコントロールする為、ボスは一人に集中して攻撃する。後は周囲からヘイトを取っているプレイヤーのダメージを超えない程度でタコ殴りにすれば問題ない。だが、そこに1つ部隊を増やすだけで、ダメージを与えるという上での回転率は著しく低下してしまう。

しかし、それは通常時の作戦だ——ということだ。先にも言ったように、今のフリーダムは異常な状況下にある。ログアウトとボス部屋の前に設置してあるはずの帰還用ワープゾーンの消失。

更にゲーム内での死が現実世界の死に繋がるといふ異常に異常が重なるという。まさに異常事態のミルフィークを作り出している状況だ。

マスターはそれを理解しているからこそ。まず、この作戦は死者を出さないことを第一に考えているのだろう。

前衛1のマスターとエミルという組み合わせは、手数が多いマスターがヘイトを稼ぎボスの注意を引き、管理し続けることでエミルは攻撃に集中できる。

この2人は特殊な固有スキルの持ち主で、マスターはスキル発動中。様々なスキルを交互に発動できるのが利点だが、最大の欠点である回復のアイテムが使用ができなくなる制約でヒールストーンは使用できない。そして、エミルの固有スキルは所有しているドラゴンの召喚と自身の肉体を強化するものではない。

前衛2のサラザとデイビッドだが、こちらは両者とも固有スキルの使用ができる。

中でもサラザの固有スキル『ビルドアップ』は体から金色のオーラを発生させ、使用者の戦闘経験により。全ステータスが大幅に上がる上に、制限時間もなく強力なスキルだ。

デイビッドの固有スキル『背水の陣』も自身のHP残量によって攻撃力と防御力を大幅に上昇させる。これもまた、使用時間に制限はないく強力なスキルと言えるだろう。

この2人を壁役として後ろに配置することで、前衛同士の安定したローテーションを可能にする。

更に入れ替わり時、一撃のダメージが高いボディービルダーのサラザと、この中で最も手数が多いマスターの2人が入れ替わることで、ヘイトをコントロールすることも容易い。

これによって、長期戦で疲労していても『前の人を引いたら自分が出る』これを繰り返しているうちに脳がその流れを学習する為、戦闘が長期化しても瓦解し難くなる。

更にエミルがドラゴン召喚の為に一旦。後方に下がっている時には戦闘にマスターが加わり戦闘を安定させることでダメージを稼げる上に、エミルはドラゴンの召喚を安心して行えるという利点もある。

後衛に配置した星、エリエ、カレンの3人は年齢的にまだ感情のコントロールが難しい。どうしてもその場の感情で行動しやすく、忍耐力がないとマスターは判断した。更に星、カレンの2人は固有スキルの発動がまだできない為、後方の要は必然的にエリエということになるだろう。

まあ、それぞれに固有スキルの発動条件も違う。初めから任意に出

せるスキルと、発動条件を満たして初めてものにできるスキルがある。

大抵は後者の方が強力な固有スキルが多いので、ハードを買った時に発動できなければ、当たりを引いたと言うことになるのだ。

それはさておき、エリ工はマスターが以前結成していたギルドに所属していた為、マスターは彼女の性格を良く分かっていた。

口は悪く生意気なところもあるが、根は優しく協調性もある。また、彼女の固有スキル『神速』は移動速度と攻撃速度を上げる能力を持つている為、2人をカバールする役としても適任だろうと判断した。メンバーの目の前に現れた巨大な骸骨は上半身しか見えておらず、下半身は一部崩れた地面の下に隠れて見えないがとても巨大であることは容易に推測できた。

しかも幸いなことに、その巨大さ故に敵も崩れた地面に飲み込まれ、下半身を動かすことができずその場所から全く動けない有様だ。

「ふふふつ。あやつめ、あの場所から動けんようだな……」

馬鹿にしたような笑みを浮かべているマスターに、隣にいたエミルの声が響く。

「――マスター。油断してはダメですよ？ 向こうはデータだから死んでも蘇りますが、こちらは死ねないんですから……」

「ああ、分かっておるわ！ 行くぞ。エミル!!」

「はー」

2人はそのやりとりの後、勢い良くボス目掛けて走り出していた。

決戦4

2人がボスの視野の範囲に入ると、ボスの体が青く輝き胸に大きな青い炎が灯る。

おそらく。胸に光るあの炎が、がしやどくろのウィークポイントだろう。エミルはハートを象ったがしやどくろの胸の炎を、一瞬でそう判断するとマスターに向かって叫んだ。

「マスター!!」

マスターはエミルの顔を見て「分かっている!」と更に加速し、攻撃が届く範囲まで行くと、胸に灯る炎目掛けて勢い良く跳び上がった。

ヘイト管理には、まずはマスターが一撃を加えて敵にターゲットされる必要がある。

その為には、なるべく一撃で多くのダメージを与えた方が効果的だ。ここはウィークポイントを確実に殴っておきたい。

「タフネス! たあああああああッ!!」

雄叫びを上げながら胸の炎に向かって一直線に飛び掛かったマスターを、がしやどくろは振り払おうとその巨大な腕を振り下ろす。

マスターは空中で巧みに攻撃を避けると、その腕を踏み台にして更に加速し、そのままボスの胸元の炎に飛び込んだ。

炎が大きく揺らぎ、がしやどくろは苦しそうに天を仰ぐと、カタカタと歯を噛み合わせている。

その様子を見たマスターは口元に笑みを浮かべ。

「……フツ、まだだ! まだまだ行くぞッ!!」

胸を突き抜けたマスターはそう叫ぶと、骨を利用し上へと駆け上がっていく。

マスターは骨を足場に勢い良く飛び上がると、ボスの後頭部に無数に拳を叩き込んだ。

「人間はここが一番弱い! 首をへし折ってくれるわ! うおおおとおおおおおおッ!!」

後頭部に張り付くマスターの度重なる攻撃にボスも堪らず、彼を捕

まえようと必死に両手を動かしている。しかし、マスターはいとも簡単にその手をかわしながら攻撃を続けている。

その様子をただ何もせずじっと眺めていたエミルは「そろそろね」とぼそつと呟くと、長めの片手剣を構えて攻撃を開始する。今エミルが動いたのも、マスターの猛攻でヘイトが十分に溜まったと判断したからだろう。

がしやどくろに斬り掛かったエミルは、襲い掛かる手をかわしながら巧みな剣捌きで、次々に攻撃をヒットさせていく。

上と下という真逆の場所から同時に攻撃を受け、がしやどくろはただ腕をがむしゃらに振り回している。まるで心が繋がっているかのような見事な連携に、星が思わず声を漏らした。

「すつ、凄い……」

2人の戦いを呆然と眺めている星に、隣に居たエリエが人差し指を立てて自慢げに言った。

「当たり前でしょ？ あの2人は長い付き合いで、このゲームが始まって以来。日本サーバーの武闘大会では、あの2人しか優勝した事がないんだから！」

「へえ〜。2人とも凄いんですねー」

エリエのその話を聞いて星は瞳をキラキラさせている。

そこにカレンが馬鹿にするかのようにエリエのことを鼻で笑うと、2人の会話に口を挟んできた。

「ふん。お前の言葉には、少々訂正箇所があるな」

「——なによ。私の話が間違ってるって言いたいのか？」

急に割り込んできたカレンに、エリエは目を細めながら不機嫌そうに尋ねる。

膨れっ面をするエリエを余所に、カレンは先程のエリエと同様に人差し指を立てて自慢げに話し始めた。

「正確にはフリーダムで年2回開催される大会では、師匠が殆ど勝ちを収めている。それに比べてエミルさんは、師匠が出場しなかった期間勝っていただけだろ？ それを一緒にみたいな言い方をされるのは困るな！」

「——なによ。優勝したのは一緒じゃない。この……………」
「んっ？ なんだってー？」

カレンの話を聞いていたエリエが聞き取れない程小さな声で呟くと、カレンがあらさまに挑発するように聞き返してきた。

そのカレンの態度が頭に來たのか、エリエがむつとしながらカレンを睨みつけると。

「——ふん…………中年趣味してきもいって言ったのよ！ この少数派民族!!」

「なっ、なんだって!? マスターのどこがいけないって言うんだ!」
「マスターじゃなくてあんたの事よ…………あ・ん・たの!」

お互いに睨み合い火花を散らすエリエとカレン。

星は「止めて下さい」とそんな2人の間に慌てて割って入ったが焼け石に水だ。

「何だど!? 俺のどこがきもいって言うんだよ!!」

「全てよ。全て！ 言動も行動も全てがきもいのよ！ この絶滅危惧種!!」

「——くっ！ 言わせておけば…………イリオモテヤマネコに失礼だ。イリオモテヤマネコに謝れ!!」

声を大にして叫んだカレンに、負けないほどの声でエリエも叫ぶ。

「どうしてよー!」

「なんでもだ! なら、サーベルタイガーに謝れ!!」

「それはもう絶滅してんでしようがツ!!」

互いに行がみ合う2人のくだらないやりとりを見て、星は心から思った。

『もう。いい加減にしてほしい』と——。

後衛がそうこうしている間に、前衛1のエミルとマスターの方にも動きがあった。

最初は圧倒していたものの。徐々に攻撃パターンに慣れてきたのか、マスターを捕らえようとする手の精度が上がってきていた。

このままでは捕まるのも時間の問題だ…………。

「…………くっ! コンピューターの分際で凶に乗るでない! この儂を

捕らえられると思うてか!!」

襲い来る手をかわしながら声を荒げるマスターだったが、誰が見ても彼の攻撃の手数が減って回避に専念する場面も多くなり、苦しくなってきたのは明らかだった。

だが、まだ戦闘が始まってそれほど時間が経ったわけではない。今のこの状況も、マスターの動きが悪くなったのではなく、単に敵の動きが良くなってきただけなのだ――。

フリーダムのもンスターは個々に備わったAIに、自立型の学習機能が備わっていて、それが戦闘のデータを収集しモーションを変え。しかし、それは種族、系統に属するもンスター全てに適応されるものではなくその個体が消滅したと同時に、そのデータも消滅する仕組みになっていた。

もちろん。今まさにマスターと戦っているボスも、マスターの動きに順応する為、物凄い速さで学習しているのだ。

「マスターー！ 一旦。距離を取った方が――」

エミルがそう叫ぼうとしたその時、エミルに向かって骸骨が口を大きく開けているのに気が付く。

つと同時に口の中が青く光り輝き、群青の炎に包まれる。

(……ッ!? まさかッ!!)

攻撃のモーションに入ったと悟ったエミルが攻撃を止め、咄嗟に飛んで距離を取ろうとした彼女目掛けて、がしやどくろの口から青い炎が噴射されエミルを直撃した。

「きやあああああああッ!!」

ゴーツという大きな音が悲鳴とともに彼女の体も凄まじい炎の中に飲み込んだ。

顔面蒼白でマスターがエミルのいた場所に目をやっている。

「エミル!! ……なにッ!!」

その光景に一瞬気を取られたマスターの隙きを突いて、ボスの手にながしりと空中にいたマスターを捕まえた。

(――しまった！)

そう思ったのも束の間。マスターを捕まえたがしやどくろはカタ

カタと笑うとマスターを投げた。

「なにいいいいいいいい!!」

飛ばされたマスターはそのまま勢い良く地面に叩きつけられ、辺りに土煙が上がった。

「大変！ 私達の出番よ。タフネス&ビルドアップ！ 行くわよ。デイビッドちゃん！」

「ああ、タフネス&背水の陣！ って、ちゃんはやめろ。ちゃんは！」
それを見たデイビッドとサラザの2人が固有スキルを発動させ、がしやどくろに向かつて走り出す。

つと、先程まで言い争っていたエリエとカレンが声を上げた。

「エミル姉！」

「師匠！」

2人は言い争いを止め、2人の元に駆け寄っていく。

幸い2人は無事な様で、エミルは少し鎧の布の部分が焦げてはいるがそれほど大きなダメージは受けていない様子だ——マスターの方も少し擦り傷ができた程度だった。しかし、2人とも体の傷は大したことがないにも関わらず、険しい表情をしている。

「カレン！ ヒールストーンを投げろ!!」

「はい。師匠！」

カレンはヒールストーンを取り出すと、言われた通りマスターに向かって投げる。

「エミル姉。大丈夫？」

「ええ、エリー。早く回復を！ HPを半分以上持つていかれた……急いで！ すぐにデイビッド達も危なくなる！」

「う、うん！ 分かった！」

いつにもなく厳しい表情をしているエミルにそう言われ、エリエは慌ててヒールストーンを取り出し、エミルの方へ向けた。

その直後、エリエの持っていたヒールストーンが光り出し、次の瞬間には光りだけ残してただの石ころに戻る。

ヒールストーンから放たれた緑色の光りが辺りを照らすと、エミルとマスターの体に降り注ぐ2人のHPが上限一杯まで回復していく。

エミルはエリエに「ありがとう」とお礼を言うと、すでに回復を終わらせたマスターと目を合わせ無言のまま頷いた。

「お前達はまた下がっておれ。また危なくなったら頼むぞ？」

「はい！」

エリエとカレンは返事をする、星がいる場所まで下がった。

2人が戻って来る姿を見て、星は少ししよんぼりしている。

(カレンさんも、エリエさんもちゃんと動けたのに。私は……怖くて、動けなかった……こ、これじゃ、皆の足を引っ張っているだけ……ごめんなさい)

星は心の中で2人のピンチに全く動けなかった自分を責めていた。

後衛の仕事は回復などのサポートだけだとマスターから聞いていた。その時には、星にも『それなら自分にも出来るかもしれない』と軽く考えていた。だが、いざその状況になったら、上半身はまるで棒のように固まり——足にはまるで鎖で繋がれているかの様に、微動だにしなかったのだ。

確かに実際にかしやどくろを見た時、自分より遥かに大きい敵の姿に恐怖心はあった。だが、サポートだけだと思えば不思議と冷静でいられた。

星は『大丈夫。いざとなれば私が回復してあげればいい』頭の中ではそう考えていたのに、実際には目の前で仲間が傷付けられ、気が動転して頭が命令しても動けない自分が居た。

そんな自分が星は情けなくて仕方なかった……。

「うう……」

(……カレンさんとの戦いで強くなったと、私は勝手に思ってた……でも、本当は弱いままで……どうして、いつもこうなっちゃうんだろ……皆、できてるのに私だけ何もできなくて……恥ずかしくて顔を上げられないよ……)

星はそんなことを心の中で呟き、悔しそう俯き唇を噛んだ。

決戦5

サラザが攻撃を惹き付けている間に、デイビッドの刀が、がしやどくろの骨を捉える。しかし、骨に当たっただけで決定打というには程遠い。

「くそっ！ こいつ。硬すぎるぜ……」

空中で攻撃を受け流し無事地面に着地したデイビッドが、苦虫を噛み潰した様な顔でそう呟く。

「あら〜。骨なんだから当たり前でしょ〜？」

サラザがその言葉にツツコミを入れる。

デイビッドはそれを聞いて、口元に不敵な笑みを浮かべると「そういえばそうだったな！」と刀を構え直し飛び掛かった。

やはり戦闘経験の差なのだろうか、デイビッドとサラザもいとも簡単に敵の攻撃をかわしながら、隙を見て敵に確実にダメージを与えている。

他のメンバーもその戦いを見て、敵の攻撃の癖や弱点を見つけようと瞬きするのも忘れて敵の動きに観察している。

(皆頑張ってるのに、私は何もできない……どうしたらいいんだろう……)

だがそんな中、星だけはそんな悶々とした気持ちで戦闘の行方を見守っていた。

確実にがしやどくろにダメージを与え続け、そのHPを減少させていくデイビッドとサラザ。

「はあ、はあ、はあ……やっど、半分か……」

「……ごめんなさい。そろそろ交換してもらえら〜？」

敵のHPを半分程まで削ったところで、エミル達が待ってましたと言わんばかりに敵に襲い掛かった。

エリエは後ろに下がってきたサラザ達に声を掛ける。

「大丈夫？ 痛いところとかない。サラザ……」

ヒールストーンを握り締め、心配そうに駆け寄ってくるエリエに、サラザは微笑みながら鍛え上げられた上腕二頭筋を盛り上げて見せ

た。

心配そうな顔で眉をひそめ、エリエは傷がないかサラザの体を隈無く見るとほっと胸を撫で下ろす。

「——イテテテテッ！」

その2人のやり取りを横目で見ていたデイビッドが、横から情けない声を上げる。

エリエはそれを見て呆れたようにため息をつきながらも、デイビッドの方へと歩いていった。

「もう！ 男のくせに情けない声上げないの！ ほら、回復して上げるからじつとしてなさい！」

「えっ？ あ、ああ……すまん」

デイビッドはまるで狐に摘まれたような顔でエリエを見た。

しかし、それも無理もない。普段なら間違いなく「男なんだから自分でしなさいよ」と罵ってくるはずのだが、今回に限っては何故かそういうことはなかったからだ——。

「ほら、終わったわよ。もう気をつけなさいよね！」

「ああ……あ、ありがとう。でも、エリエがこんなに素直だって事は……これは外は大雨だな！」

「……ッ!？」

冗談交じりにそう言ったデイビッドにエリエはむっとしたのか、笑いながら頭を掻いているデイビッドの尻を思いつき蹴飛ばした。

それに驚きデイビッドの体は飛び上がる。

「……いつ！ なっ、何すんだよ!？」

「気合を入れてあげたのよ！ 男のあんたが頑張らないとダメでしょ！ バカ！」

エリエは怒りながら、サラザの方へと足早に戻っていった。

「男って、前衛はエミル以外。全員男じゃないか……」

そう聞こえないように小さな声で呟くと、サラザがデイビッドの方を見て含みを持たせた笑顔で、にっこりと微笑んだ。

それを見たデイビッドは背筋に悪寒を感じ、体をブルツと震わせる。と苦笑いを浮かべている。

後ろでそんなことを言っているなど露知らず、エミル達は前線で奮戦していた。その甲斐あつてか、がしやどくろのHPを残り数回の攻撃で0にできるほどまでに減らしていた。

「マスター。後はお願ひしますー!」

「――任せておけッ!」

マスターは勢い良く跳び上がると、がしやどくろの顔面に数発打ち込んだ。

――グギヤアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!

がしやどくろの体が大きく揺らいで断末魔の叫びを上げると、カタカタと歯を震わせている。

苦しむがしやどくろに背を向け、地面に着地して直ぐ様振り返った。

「どうだ!?!」

つとがしやどくろの方を振り返るとその直後。マスターの目に飛び込んできた光景に言葉を失う。そこには、減らし切ったはずのHPが全回復した状態で存在していたのだ。

確かにHPをゲージギリギリに追い込んで全てを奪い去ったはずだった……だが、現に存在し続けるがしやどくろに困惑せざるを得ない。

「――まさか……そんな……」

「――そ、そんなバカな!」

悠々と自分達を見下ろす巨大な骸骨に、その場にいた全員が計り知れない恐怖を感じていた。

『まさか、前の部屋に出たスケルトンの様に頭部か、それに似合う何かを破壊しなければ終わらないのではないのか?』

だが、そんなことなど事実上不可能に近い。頭部を破壊するにしても、その頭部は低級のスケルトンとは比べ物にならないほど巨大だし、もしそうだとしても。激しく動き回る腕をかわしながら、厚さだけでもコンクリートの壁ほどもある骨を砕くには、的確に頭蓋の一点を攻撃し続けなければならない。

エミルとマスターはそれを見て、唾然とした様子で立ち尽くす。

つと、その時――。

「なにをぼーっと突っ立ってんだ2人共！　まだ戦闘は終わってないぞ!!」

後ろから見ていたデイビッドが戦意を喪失している2人に向かって激を飛ばした。

その声に2人がはっと我に返るとがしやどくを鋭く睨む、その瞳はまだ諦めてはいない……。

「ふっ……儂とした事がどうかしていた様だな！」

「本当ですね……デイビッドの言う通り私達はまだ戦闘中でした。リベンジです！　行きますよ。マスター」

「おうー。エミルよ。遅れるでないぞー！」

「はいー！」

エミルとマスターはお互いに決意に満ちた表情で頷くと攻撃を再開した。しかし、先程よりも敵の動きは素早くなり、なかなか攻撃をする隙を与えさせてくれない。

それに伴って、前衛メンバーの疲労も溜まり、動きが鈍くなっていく。それとは対照的に向こうの攻撃が徐々に制度を増してきていた。

次第にローテーションと回復の回数も自然と増え、厳しい状況であることは言うまでもない。

更に追い打ちをかけるように、今までは回避できていた重い攻撃が前衛メンバーに当たり始めてきていたのだ。

そんな中、デイビッドとサラザのペアが前衛で攻撃をしていた時に事件は起こった……。

「くっそ！　早くくたばりやがれ!!」

「デイビッドちゃん！　奴の口が光ってるわよ!!」

「――なっ!?　ぐわあああああああッ!!」

率先して胸のウィークポイントを攻撃していたデイビッドは、突如として噴射されたその炎をまともに受けてしまった。

デイビッドも警戒はしていたのだが、どうやら最初にエミルに放った時よりも噴射までの時間が短縮されているみたいだった。その為、

意識に微かなズレが生じていたのだ――。

叫び声を上げ火だるまと化し、地面をのたうち回るデイビッドをマスターが急いで回収すると、後衛の3人のところへ戻ってきた。

エミルは素早くデイビッドの抜けた穴を埋める為に攻撃に加わり、現状維持に務めている。

「ぐっ……ぐあああああッ!!」

先程エミルの受けたものとは違い。デイビッドの体を包むこの炎はなかなか消えない。

その炎も復活して、強化されているということなのだろう。

「……これはまずいな。カレンはリカバリーストーン。エリエはヒールストーンを準備せよ! 急げ!!」

「は、はい!!」

2人は急いでマスターの指示通りに行動した。

戦闘そのものはエミルがデイビッドの抜けた穴に入ったことで、ひとまず安定はしている。

しかし、敵が全体的に強化されている中。どこまで持ち堪えられるのかが分からない状況であることは言うまでもない。

目の前で忙しく行われている戦闘に、星は居ても立ってもいられず。

(デイビッドさん……皆も自分にできることをしているのに。私は……私も……私も何かしなきゃ!)

星が俯きながら剣を握り締めると、決意に満ちた眼差しをがしやどくろに向け勢い良く走り出した。

「はあああああッ!!」

叫び声を上げながらがしやどくろに向かって走り出す星。

それを見たエリエは驚いた様子で慌てて走っていく星に叫ぶ。

「なにやってんのダメ! 星、戻ってきなさい!!」

しかし、その制止も星の耳には届かない。今の星を駆り立てているのは、自分も戦闘に貢献したいという思いだけだ――。

エリエの制止に聞く耳を持たず。それどころか『スイフト』を使用して更に加速していく彼女の姿を見て、エリエの顔がますます青ざめ

ていく。

それもそうだろう。星と自分との距離は開く一方、いくらエリエの固有スキルが自身の速度を上げるものであっても、今から全力で追いかけてもがしやどくろとの距離を考えるとギリギリで届かない。

「何考えてるのよあの子は！　今から追いかけても追いつかない。どうしたら……」

悪態をつきながらも、必死に考えを絞り出すエリエ。

その時、その視界に戦っているエミルの姿が飛び込んできた。

エリエはエミルに向かって、出来る限り大きな声で叫んだ。

「エミル姉！　星を止めてーッ!!」

「……えっ!?　何。どういう事……?」

彼女の言葉にエミルは慌てて辺りを見渡すと、剣を持ってがしやどくろに向かつていく星の姿が目に入ってきた。

突然のことに驚き、動揺したエミルはどうしたらいいのか分からず、その場で星に叫ぶ。

「……ッ!?　ちよつと、星ちゃん。何してるの！　危ないからこつちに来たらダメよ!」

「なんですって〜!?　星ちゃんがどうしてあんな所に!!」

向かって来る星に気付いたサラザ。

エミルとサラザは慌てて星の方へと駆け寄ろうとした直後、がしやどくろの腕がエミルとサラザに襲い掛かる。

「……くっ！　きゃあああああッ!!」

エミルは咄嗟にその攻撃を剣で受け止めたが、受け止めきれずに弾き飛ばされてしまう。

「エミルは無理そうね……なら私が!」

飛ばされたエミルを見てサラザが更にスピードを上げると、サラザ後方からがしやどくろの巨大な腕が向かってきていた。

物凄い風圧と共にゴーツと轟音響かせ後を追いかけてくるプレッシャーは相当なもの。だが、サラザはその攻撃を見切っていた。

「——来たわね……とうッ!」

サラザはその腕をかわすように高く跳び上がると、腕もそれに合わ

せて動いてきた。

それはサラザも想定していなかったのだろう。咄嗟に体を反転させて持っていたバーベルでガードするが、いくら固有スキルを発動している筋肉隆々のサラザでも空中で防ぎきれぬわけもなく呆気なく飛ばされてしまう。

「うつそくん！」

星は自分の方に向かっていった2人がそんなことになっているなど気が付いていないのか、がしやどくろしか見えていないのかは分からないが、全く動揺することなく目の前の敵に向かって突進している。

（――あの青い所だ。あそこに攻撃された時だけ敵が苦しそうだった……多分あそこがこの剣を突き刺すことができれば、自然と体力が減っていくはず！）

星は走りながら、がしやどくろの心臓の部分にある青い炎を見上げる。

幸いと言うべきかエミルとサラザが攻撃を受けたことによつて敵の注意はそちらに向いていて、星はまだ気付かれていない。

更に両腕は一時的とはいえ星から離れている。星が一矢報いるには十分な条件が整っていた。

（近くで見ると思つてたより大きい……怖い……怖い。でも……でも……）

がしやどくろに近付くにつれて、大きくなるその姿に星は何度も心が挫けそうになりながらも剣を構え直す。

「うわあああああああアツ!!」

星はがしやどくろの近くまで行ったところで恐怖に負けそうになる自分を奮い立たせる為、大きな声を上げる。

だがその直後、星の出した声によつて、星の存在に気が付いたがしやどくろの両手が左右から星を挟み撃とうと迫つて来るのが見えた。

決戦6

「……ッ!？」

(……私を挟むつもりなの!? どうしよう……どうしたら良いの……?)

星は自分に左右から迫ってくる巨大な手を見て、どうすればいいかと思いを巡らせる。

一瞬だけ瞳を閉じたその時、心の奥で何かの声が聞こえた。

その声には心当たりがある。そう。カレンと戦ったあの時の声だった――。

『迷うな！ ギリギリまで惹きつけて全力で飛ぶのだ!!』

星はその声に従うように頷くと足を止めることなく、左右から向かってくる手を交互に見ながらギリギリまで惹き付ける。

ここまでくると、不思議と先程までであった恐怖心は薄れ、逆にやらなければいけない。自分ならできるつという何の根拠もない自信が星の心を満たしていった。

(もう少し……もう少し……今だ!)

星はギリギリまで左右からくる両手を惹き付けると、挟まれる直前で素早く地面を蹴って跳び上がった。

その直後、背中からバチンツ!と大きな音が鳴り響き、その風圧で星の体が一気に加速した。だが、その途中。がしやどくろの胸にあるのは炎だけだということに気が付く。

(……火しかない!? でも、ここまで来たらやるしかない……剣さん。お願い……力を貸して!)

星は目を閉じ心の中でそう呟くと、目を開き敵の胸に揺らめく炎を目掛けて剣を構えて突っ込んでいく。

「――お願い！ 刺さってええええええええッ!!」

星の思いを込めた一撃が、がしやどくろの胸の炎に突き刺さる。

それと同時に、がしやどくろは苦しげに口を開き天を仰ぐと、激しく暴れ出した。必死に剣の柄を握って、がしやどくろの体から振り落とされないようにと耐える。

つとその時、がしやどくろの顔が胸にしがみついている星を捉えた。

しがみついている星を、がしやどくろの闇に吸い込まれそうな空洞の目が真っ直ぐに見下ろす。

それを見て、背筋に悪寒が走り凍りつく。

星の視界にはがしやどくろが腕を大きく振り上げる姿が映り、顔から全身からスーツと血の気が引いていくのが分かった。

がしやどくろの振り下ろされた瞬間……。

「……あつ」

諦めた様な間の抜けた声の直後。がしやどくろの巨大な手が星の体を直撃し、一瞬のうちに星は石畳の地面に全身を強く打ち付けられた。

本当に一瞬の間の出来事だったのだが、星には体に当たった骨の感触と落ちるまでの感覚がとても長く鮮明に思えた。

「——ぐっ……かはっ！」

大きなクレーターと化した地面に倒れ込んだまま、星はぴくりとも動かなくなる。

だが、データの塊であるがしやどくろには、星が子供だからと言って手加減してくれることはあり得ない。

直ぐ様。追い打ちを掛けるように、がしやどくろの口が青く光った。それを見て、エリエが青ざめた顔で悲鳴にも似た声で叫んだ。

「星ー！ 早く逃げてえー!!」

「……………」

しかし、部屋の中央に無言のまま横たわっている星は、全く動く気配がない。

それもそのはず。星は完全に気を失っていたのだ。だが、がしやどくろの口がみるみるうちに青い炎で満たされていく、その様子から発射まで左程長い時間は残されていないだろう。

エリエは「どうしよう」と何度も口に出し慌てふためいているしかなかった。すると、その横を何かが高速で通り過ぎていく。

その直ぐ後、無常にも星に向かって炎が噴射され、一瞬で星が横た

わっていた場所は炎に包まれた。

エリエは崩れるようにその場に座り込んむと、呆然とその場所を見つめている。

「あ……そ、そんな……」

放心状態のエリエの脳裏には、星との今までの出来事が走馬灯のように駆け巡っていた。

しかしその直後、横からカレンの声が聞こえてきた。

「――師匠!! 師匠!! 師匠!! 師匠!! 師匠!!」

エリエがその悲痛な叫び声の方へ目を向けると、星を抱き抱えながら息を荒らしくしているマスターの姿が目に見え込んできた。

彼の着ていた道着はところどころ焦げ付いていて背中の中はすでに焼け落ち、その隙間から赤くなつた皮膚が見えていた。

その様子から本当にぎりぎりのタイミグだったことが窺い知れる。

エリエは涙ぐみながらも2人に駆け寄ると、急ぎヒールストーンで2人を回復した。

「はあ、はあ……なんとか、間に合った。ほら、娘は無事に連れ帰つたのだ。そんな、情けない顔をするな……エリエ」

「うう……は、はい。ありがとう、マスター。……星、良かった……良かったよお……」

エリエはマスターから星を受け取ると、抱きしめながら涙を流している。

そんな彼女を見て、マスターは表情を苦痛に歪ませながらも、優しい笑みを浮かべる。

その時、星を抱きしめているエリエを見つめていたカレンが、あることに気が付いて首を傾げた。

「そういえば、星ちゃんの剣はどこにいった？ 持っていないみたいだけど……」

「それなら、あそこだ……」

マスターがその質問に答えるように、がしやどくろの方を指差した。

カレンがその方向に目を向けると、そこには星の剣が胸の炎に突き刺さったまま、悶え苦しんでいるがしやどくろの姿があった。

「――あれって……星がやったの……?」

徐々にHPが減っていくがしやどくろを指差して、エリエは半信半疑のまま呟く。

そこに自分も傷を負ったエミルとサラザも、星のことを気にして戻ってくる。

駆け寄ってくるエミルは、エリエに抱きかかえられている気を失ったままの星の頬を、手の平でそつと撫でると「良く頑張ったわね。偉いわ」と微笑んだ。

星の働きのおかげでメンバー全員は、苦しみからでたらめに動くがしやどくろから距離を取り、がしやどくろのHPが『0』になるまで見守っているだけで良かった。

その後もがしやどくろのHPは徐々に減り、残りは最後の青いゲージまでなくなった次の瞬間。がしやどくろの全身から突如として赤黒い炎が立ち上がる。

星の決死の思いで胸の炎に刺した剣は吹き飛ばされ、胸に輝いていた炎も消える。一度は『0』になったはずのHPゲージが復活し、そのゲージの色は赤黒く周りに炎のようなエフェクトが付いている。

「な、なに……あれ……」

突然の出来事に、エリエの顔が絶望の色に染まった。

——グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!

咆哮を上げたがしやどくろが地面に手を掛け断崖絶壁の下に隠されていた足をゆっくりと引き抜く。

その叫び声に地面は揺れ、上半身だけだったがしやどくろの巨大な下半身が姿を表し、ゆっくりと立ち上がる。

天を突き抜けるほどに伸びた手足は、もはやその全長は切り切れな
い程。

唯一のウィークポイントだった胸の炎も消えてしまった今、自分達の数十倍の相手に勝機を全く感じられない。

頭はエミル達から見て、やつと顎が確認できるというほどに巨大な

それはすでに倒すとかという次元のものではなかった……。

エミルはもう一度周りを見渡す。前衛の要のマスターも手傷を負っている上に、デイビッドはとてもじゃないが戦える状態ではない。状況は最悪だった。

(「デイビッドもマスターもこれ以上の戦闘は無理……しかもこの状況で敵が動き回るとしたら……」)

「まずいわ……サラザさん！」

エミルは次に起こりうる可能性を察知し、顔を青ざめながらサラザに向かって叫んだ。その直後、サラザの体はすでに動いていた。

ベテランプレイヤーの一人であるサラザは、頭が命令するよりも早く体が先に動いたというところだろう。

「分かってるわ！ 私が時間を稼ぐんでしょ〜？」

サラザは即座にがしやどくろの前に陣取り、その巨大な骨の塊と化したがしやどくろを睨んだ。

確かにこの場で最も攻撃力の高い種族『ボデービルダー』のサラザが、蘇った新生がしやどくろのヘイトを稼ぐのには適任だった。

頭上を見上げ咆哮を上げ続けるがしやどくろは、まだこちらに攻撃してくる意思はなさそうだ。

つということは、今しか先制攻撃のチャンスはない。後手に回ればそれこそ勝ち目はないのだから……。

「行くわよ〜。できるだけ時間は稼ぐけど手早く頼むわね〜！」

サラザはそういうとバーベルを振り回し、がしやどくろに向かって突っ込んでいく。

エミルは「お願いします！」と言うと、素早くコマンドを操作してアイテムの中からドラゴンを呼び出す巻物を数個取り出した。

「……出てきて！ ソードアーマードドラゴン！ ストーンドラゴン！ ライトアーマードドラゴン！」

エミルが同時に3つの笛を吹くと、3体のドラゴン達が現れた。その中の2体は見たことがある為分かるが、もう1体は初めて見るドラゴンだ。

その姿は大きな翼を持った青いドラゴンで、銀色の鎧を身にまとっ

たその姿は武器になるようなものなど、無駄な物が一切付いておらず、手綱と鞍が装着されているだけだ。

また、他のドラゴンよりも小さく引き締まったその体は、速度と旋回性に特化していることが窺い知れる。

「エリエは皆をストーンドラゴンの後ろに！」

「うん。分かった！ エミル姉も気をつけてね！」

エミルはソードアーマードラゴンの背中から剣を受け取ると、エリエにそう指示してライトアーマードラゴンの背に跨った。

（この戦いだけは私の全てを使って必ず勝つ！ このままじゃ、せつかくあなたの作ってくれたこの好機——無駄になってしまうものね……でも、安心して星ちゃん。このチャンスは絶対にものにしてみせる！ そしたらあなたをいっぱい褒めてあげられるから！）

エミルはそう心の中で呟き、気を失っている星に視線を向けると優しく微笑む。

決戦7

先の見えない真つ暗な天井を見上げ、エミルは手綱を握り締める
と、未だにただ咆え続けるがしやどくろを見据えた。

「――敵の直上まで上昇!!」

エミルが命令すると、ライトアーマードラゴンは翼を広げ、一気に
上空に飛び上がった。

サラザが地面でがしやどくろのヘイトを稼いでいるおかげで、ライ
トアーマードラゴンに乗ったエミルには攻撃してこない。

その状況を利用して、空からがしやどくろをじっくりと観察するエ
ミル。

(動きは上半身だけの時に比べると若干鈍い……それは【AI】がまだ
体の大きさに慣れていない事によるものだろうけど。それより、問題
なのはサラザさんの攻撃が全く効いてない……?)

エミルはサラザの戦いを見て首を傾げる。

がしやどくろには間違いなくサラザの攻撃が当たっている――に
も関わらず。がしやどくろのHPゲージは全く減少してないのだ。

そうこうしている間にも、エミルを乗せたライトアーマードラゴン
は『直上まで上昇』その命令通り、がしやどくろの頭の上で止まる。
(でも、攻撃が効かない敵なんていない。必ずダメージの通る場所が
あるはずだわ!)

そう自分に言い聞かせ、エミルはがしやどくろに向かって飛び降り
る。

「はあああああああッ!!」

叫びながら敵に向かって降下し、両手に握った剣で無数の斬撃を放
つと骨を蹴って素早く離脱した。

ライトアーマードラゴンはエミルを空中で器用に背中に乗せると
敵から離れ、エミルの次の指示を待っているようにがしやどくろの周
りをグルグルと旋回し始める。

エミルは不思議そうに首を傾げた。

それもそのはずだ。エミルが上半身に攻撃した時のダメージもカ

ウントされていない。

本来、上半身だけの化け物だったがしやどくろだ——つということ
は、下半身にダメージを与えられなくても、上半身にはダメージが通
るだろう。そうエミルは考えて上半身に攻撃した。しかし、結果は今
の通りノーダメージだ——。

（——おかしい……やっぱダメージが与えられてない。胸のウィー
クポイントも消えているし。なら、どうやってこいつを倒せば……）
ライトアーマードラゴンの背中から、がしやどくろの様子を窺いな
がらエミルはじっくり考え込んでいる。

その時……。

「なによこいつ。硬いとかそういうんじゃない、ダメージを受けて
ないじゃない！」

サラザは攻撃でダメージを与えられないことに気付いたのか、イラ
イラしてそう叫びながらも攻撃の手を全く緩めない。

それは、もう意地というやつなのだろう。

「何をしておる！ そんな生温い攻撃では、1000年経っても倒せん
ぞ!!」

エミルが驚いた様子でその声の方に目を向けると、そこにはボロボ
ロになった道着を脱ぎ捨て、たくましい肉体を露わにさせ仁王立ちす
るマスターの姿があった。

ダメージはヒールストーンで回復できてはいるものの、ダメージに
応じた精神的、肉体的な疲労が消えることはない。

しかもマスターは星を助ける際に防御せずに、背中からまともにボ
スの攻撃を受けた。常人ならば正直、立っているだけでもやつと
言ったところだろう。

その光景をサラザとエミルは驚きを隠せないと、言った表情で目を
見開く。

「この声。あの老人まだ戦えるの!？」

「マスター!? でも、もう戦える体じゃないんじゃない……」

「馬鹿者！ この儂に、敗北の二文字はない!!」

2人の驚いた声を聞いて、マスターは笑いながらそう叫ぶと。

「ここからが本番だ……」

つと呟く。すると、マスターの体から金色のオーラが噴き出し、全身を覆うように纏った。

そう。マスターの固有スキル『明鏡止水』により、サラザの固有スキル『ビルドアップ』をコピーしたものだ。

彼の固有スキルのいいところは、一度収集したスキルを任意で出せるということだ――。

「師匠。無理なさらさないで下さい！ その体で固有スキル発動は危険過ぎます！」

カレンが瞳に涙を堪え、敵に向かおうとするマスターに抱きついて必死に彼を制止しようとしている。

だが、マスターはそんなカレンに微笑みを浮かべ、頭に優しく手を乗せて言った。

「――泣くでないカレン……大丈夫だ。僕は誰にも負けん……それはお前が一番良く分かっているだろう？」

優しく微笑むと、カレンは涙を拭いマスターに向かって「はい。ご武運を……」とにつこりと微笑んで見せた。

マスターもその顔を見て、満足そうに微笑みを返すと、決意に満ちた面持ちでがしやどくろに向かつて走り出す。

「その覇気――敵にとって不足なし！ うおおおおおおおおおッ！！」

雄叫びを上げながら敵の足元まで一気に距離を詰めると、陥没するほど地面を蹴って瞬時に懐に飛び込んだ。

マスターは拳を固めると、地面を踏み締め力を込めて無数の突きを放った。

その攻撃はもはや肉眼で確認できないほどのスピードで、がしやどくろの体に次々に炸裂する。

「アタタタタタタタタタタタタターッ！！」

マスターは飛んでくるがしやどくろの攻撃を上手くかわしながら、体の様々な場所を激しく攻撃する。

がしやどくろがダメージを受けていないのは、傍から見ても明

らかだ。マスターは突破口を見出すようにがむしやらに至る場所を攻撃して、敵のウィークポイントを探っているのだ。

どんなに強敵であろうがゲームである以上、ボスだろうとどこかに必ず欠点となるウィークポイントがある。しかし、その怒涛の攻撃を受けても敵のHPゲージに全く変化はない。

「……な、なんだと？」

マスターは愕然としながらも、攻撃の手を休めない。ほんの一握りの僅かな希望にかけるように、マスターは攻撃し続ける。

すると、彼の左側から大きな腕が襲い掛かってくる。

「マスター！ 左から来ています!!」

その時、攻撃を続けていたマスターの耳にエミルの声が響いた。咄嗟に左側を向いたマスターの目に大きな拳が飛び込んできた。

「……なっ！ いかん間に合わんか……ならば————ダークネス！」

マスターはその攻撃をかわせないと判断したのか、発動する固有スキルの種類を変更した。

常に戦況に応じて複数の固有スキルを発動できるのが彼の固有スキル『明鏡止水』の利点である。

漆黒の炎のように燃え上がる拳を構え、マスターは向かってくるがしやどくろの手を見据える。

「いくら大きくても所詮は骨——この儂の血と肉が飛び散ってでも……この拳で吹き飛ばしてくれるわーッ!!」

マスターは雄叫びを上げると、黒く輝く拳をその拳目掛けて連続で放つ。

「うおおおおおおおおおおおおおッ!!」

向かって来るがしやどくろの拳を、マスターの漆黒のオーラを纏った拳が空中で止める。

それは力が互角になった時に初めて起こる奇跡ともいべき現象だ——もうゲームバランスなど、とつくに超越したマスターだからこそできる芸当だろう。

だがその刹那、一瞬だけマスターの高速で突き出していた拳が止

まった。

「……くっ！」

マスターの表情が苦痛に歪む、それと同時に彼のがガクンと体制を崩す。

無理もない。彼はがしやどくろの攻撃を背中でもまともに受けてしまっている。こうして戦っているだけでも奇跡に近い状況だ。これだけの動きを見せれば必ず体は悲鳴を上げる。

現実じゃなくとも疲労し消耗する体が存在する。それがVRMMOというゲームであり、仮想現実世界なのだ――。

「しまった……体が動かん……」

さつき受けたダメージの影響でマスターの体が思うように動かない。

つと次の瞬間。均衡が崩れマスターの体は、がしやどくろの腕の勢いに押されて、軽々と吹き飛ばされてしまう。

万全な状態のマスターならば、あるいは弾き返せたかもしれないが、星を助ける時に受けたダメージが体に残っている今の状態では、圧倒的な体格差のあるがしやどくろの腕を再び弾き返すことができなくなるわけもなかった。

「――くっ、これほどとはな……ふふっ、なんたる力よ……儂の負け……か……」

飛ばされながらも、徐々に遠のいていくがしやどくろを見つめながら、マスターは満足そうに目を瞑ると口元に微かな笑みを浮かべた。

マスターは『全てを出し切った……』そんな表情で、全身から力を抜いて抗うことなく、がしやどくろの拳に押し流されて行く。

「マスター!!」

エミルとエリエが同時に声を上げる。

飛ばされていった先には壁がある。今のマスターは上半身に防具を身につけてない状態だ――このまま背中から激突すれば、彼のHPは『0』になり。この世界からも、そして現実世界からも永久に退場することになる。

飛ばされていくマスターの体が壁に迫った。その時……一瞬の風

とともに叫ぶ声が、マスターの耳に聞こえた。

「師匠——!!」

壁に当たる既の所でカレンが空中でマスターの体をしっかりと抱きかかえると、そのままの勢いで壁に激突した。

2人は地面に倒れ込む。だが、マスターのHPは赤いゲージまで減りながらも間一髪で残っていた。

頭を押さえて立ち上がったマスター。しかし、その隣で倒れる愛弟子の姿にマスターが思わず叫んだ。

「……なにッ!? カレン!!」

横に力無く倒れているカレンの体を抱き起す。

カレンは気を失っていてそのHPも残りわずかとなっているが、彼女の無事な姿にマスターはほっと胸を撫で下ろす。

そして辺りを見渡すと、そこには複数のヒールストーンが散らばっていた。

そう。カレンは大量のヒールストーンを持って、マスターの衝撃を自分が肩代わりすることで彼を守ったのだ。

マスターの固有スキル『明鏡止水』の最大の欠点は発動時には、回復系のアイテムの一切が使用できなくなるという制約があることだろう。その状態でカレンがいくら回復アイテムを持っていても、マスターのHPを回復することは不可能だ。

だが、もしカレンが致死量のダメージを受けてもHP減少は徐々に行われる為、そのダメージ以上にヒールストーンさえ持っていれば、ヒールストーンが瞬時に受けたダメージを回復してくれるので減少を抑えられ、受けたダメージよりヒールストーンの量が勝れば、必然的にHPが『0』になるのは避けられるはずなのだ。

だが、それは理論上の話で、試した者などいない確立されてない方法であり、上手くいく保証はどこにもなかった。

下手をすれば2人揃って、ゲームからも現実からも永遠に退場することになっていたかもしれない。

それでも2人は助かった——結果として、彼女は無謀とも言える賭けに勝ったのだ。

エミルは上空から2人の無事を確認すると、ほっと胸を撫で下ろした。

「はあく。良かった……」

その直後、がしやどくろの方を向いたエミルはあることに気が付く。

(がしやどくろのHPがちよつとだけ減っている!?)

エミルは驚きを隠せない表情で目を丸くさせている。

確かにがしやどくろのHPゲージが10%ほど減っていた。

今までなにをしても減らすことのできなかつたHPに、微かだが動きが出たのだ。エミルは顎の下に手を当てて険しい表情になった。

(確かにさつきまではHPの変動はなかつたはず……つと言う事は、マスターの戦闘中どこかでダメージを与えたということになるわ……でも、いったいどこで……?)

エミルが思考を巡らせていると、突然がしやどくろがエミルに向かって攻撃を仕掛けてきた。

慌てて、考えるのを止め、エミルは両手で手綱を握ると、ライトアーマードラゴンへと声を放つ。

「——ッ!? 回避!!」

その声を聞いたライトアーマードラゴンは指示通りに急速に加速し、がしやどくろの腕を紙一重でかわす。

(どうして……?) 今、ヘイトはサラザさんが持ってたはずなのに……あつ! そうか、うっかりしてたわ!)

エミルはそう思い出したように、マスターの方に目を向けた。

そう。ヘイトをサラザが持っていたのだが、それはあくまでもマスターが攻撃を仕掛ける前の話だ——。

マスターの拳による攻撃でターゲットが、マスターに移っていても何も不思議ではない。

普通、AIは与えたダメージが多い敵を脅威とみなして優先的に攻撃する。そしてダメージを与えられない状態では、近い敵を脅威として優先的に攻撃するようになっている。

マスターが倒れヘイトの優先権が切れたことで、今度は最も近くに

いる敵をターゲットするように設定が移行されていたのだろう。その為、エミルを攻撃してきたというわけだ――。

(マスターが金色だった時は、HPの減少は見受けられなかった。なら『ダークネス』という技を発動した直後に減ったはず……あの技の能力は、拳に闇属性のダメージボーナスが……あつ！もしかして!?)

エミルはなにか思い当たる節があったのか、難しい顔で考えることに集中している。

その間もライトアーマードラゴンは、エミルの『回避』の命令を忠実に守り、度重なるがしやどくろの攻撃を紙一重でかわしていた。

決戦 8

考えた末に、エミルは一つの確証に行き着く。

一向に減らなかつたHPが若干だが減少した要因——マスターの使用したあの黒い拳の能力である閻属性のダメージボーナス——もし。エミルの考えが正しければ、マスターが戦闘できない以上、この場がしやどくろを倒せる人物はただ一人だけ……。

(私のこの考えがもし当たっているなら、あいつを倒せるのは私しかない！ でも、この状況じゃ……)

エミルは神妙な面持ちで手綱を握り締めながら、攻撃のチャンスを待った。

がしやどくろの巨大な手から逃れるライトアーモードラゴンには、まだまだ余裕がある。そんな時、地上からエリエの怒鳴り声が聞こえてきた。

「——ちよつと、あんた何考えてるのよ!!」

エリエは顔を真っ赤にさせながら睨みつけている。

その視線の先には刀を握ったまま、立ち尽くしているデイビッドの姿があった。

「いくらHPを回復したつて言つても、あんたの体にはダメージが残つてるのよ？ 今まで長い間やつて、そんな事も分からないの!?!」

刀を杖代わりにふらつく体でゆっくりと立ち上がるデイビッドの視線は、がしやどくろに向いていた。

「——うるさい！ 味方がやられているのに黙って見ていろつて言うのか!!」

「バカ！ デビッドが攻撃しても、HP減るわけないでしょ!? 今までエミル姉とサラザが戦っているの見てないの!?! あんたが行つてもどうしようもないでしょこのバカ!!」

「バカとはなんだ！ バカとはお前はいつでも……」

視線をエリエに向け。いつもの様にエリエを注意しようとしたデイビッドは、彼女の顔を見て何も言えなくなつてしまふ。

何故なら、そこには瞳に涙を溜めたままデイビッドを睨んでいるエリエの姿があったからに他ならない。

涙を溜めてエリエの潤んだ青い瞳から視線を逸らしたが、デイビッドは彼女の前に行くと言った。真つ直ぐにその瞳を見つめる。

「エリエ。マスターがやられたんだ——このままじゃ全滅だ。俺も戦わないといけない……分かるだろ？」

デイビッドはそんなエリエの肩に手を置いて、優しい口調で諭すように言った。

「だが、エリエは首を左右に振ってそれを拒んだ。

「……そんなの分かんない。マスターが勝てないのに、バカでドジなデイビッドが敵うわけないじゃん！」

「……バカでもドジでも——やるしかないんだよ！ そうじゃないと皆殺られる！」

そう告げるデイビッドの炎で焼かれボロボロになった体を見て、エリエは激しく頭を振る。

「だめ……死んじゃうよ！ ダメだつてデイビッド!!」

エリエの止める声も聞かずに、徐に立ち上がったデイビッドは敵に向かって突撃していく。

上空でがしやどくろの攻撃を巧みにかわしている最中、エミルは的に向かって動き出すデイビッドを見つける。しかし、その足取りは明らかに定まっていない。横から押されればすぐに倒れてしまいそうなほどふらついていた。

「——まさかあの体で!? ……デイビッド、あなた。いったいなにを考えているの……?」

無謀とも言えるデイビッドの行動に、エミルも驚きを隠せない。だが、エミルの頭の中にはもう一つの考えが浮かんでいた。

自分の考えを実行するには少しだけでも、停止する時間が必要だ。(これはチャンスだわ。サラザさんも何度も攻撃しているのにいまだにダメージを与えられずにいる。ヘイトがたまらないし、私からターゲットも切り替わらない……ここはデイビッドに掛けるしかない)

エミルは止めどなく襲う攻撃をかわすライトアーマードラゴンの

背に揺られながら、がしやどくろに向かって行くデイビッドを見つめている。

デイビッドは歯を食いしばりながら走りギリギリまで接近すると、がしやどくろの足首に刀を振り抜く。

だが、やはりデイビッドの攻撃を受けてもがしやどくろのHPの減少は見られない。しかし、その攻撃の結果。エミルは自分の考えに確信を得た。

(やはりそうね……間違いない！)

「サラザさん！ デイビッドと協力して少しでいいので私に時間を下さい!!」

エミルがライトアーマードラゴンの背から叫ぶと、サラザは大きく頷きデイビッドの隣に付いた。

互いに顔を見遣って、すぐがしやどくろへと視線を移す。

「エミルに考えがあるみたいね。行くわよ。デイビッドちゃん！」

「おう！ ってか、ちゃんはやめろって言っただろッ!!」

デイビッドは刀を構え、我先にとしやどくろに斬り掛かっていった。

「——もう。照れ屋なんだからあゝ」

サラザもそう呟くとデイビッドに続く。

エミルを乗せたライトアーマードラゴンが更にながしやどくろから離れ、地上の2人が執拗に攻撃を繰り返していると、がしやどくろの攻撃がエミルから2人に集中し始めた。

それと同時にエミルは少しでも、がしやどくろから一気に距離を取る。すると、少しだがエミルへの攻撃が完全に止んだ。

(思った通り攻撃がおさまった……よし。これならいける！)

エミルは心の中でそう呟くとライトアーマードラゴンに地上に降りるように命令し、即座にコマンド画面のアイテム欄からドラゴン召喚用の巻物を取り出した。

そして、それを地面に大きく広げ、巻物を止めていた紐の先に付いている笛を吹く。

「——来い！ リントヴルム!!」

巨大な白いドラゴンが煙とともに姿を表し、がしやどくろに向かつて咆哮を上げる。

エミルはリトンヴルムを召喚すると、直ぐ様エリエの隣に付いた。そしてがしやどくろの足元で戦っている2人に向かつて叫ぶ。

「デイビッド、サラザさん避けて下さい！」

「おう！」

「了解」

エミルの声を聞いた2人は咄嗟に、がしやどくろから距離を取る。すると、リントヴルムが地響きを鳴らし、その巨大な足で前に踏み出しがしやどくろと向かい合う。

周りが離れたのを確認したエミルが大きく腕を天に大きく振り上げる。

リントヴルムはその仕草を見るや口を大きく開け、がしやどくろに狙いを定めている。

「リントいくわよー！ ノヴァフレア!!」

エミルがそう叫び手を前に大きく振り下ろした。

その合図でリントヴルムの口から白い炎が噴射され、その膨大な炎がしやどくろを覆い隠した。

リントヴルムの炎ががしやどくろを覆う赤黒い炎を吹き飛ばし、今までマスターの攻撃以外では1ミリたりとも動かなかったHPが、少しずつだが減少を始めた。

「やっぱり……」

「……ん？ どうしたの？ エミル姉」

その言葉を聞いたエリエが不思議そうな顔でエミルに尋ねた。

炎の中で暴れ回るがしやどくろから目を逸らすことなく、エリエに説明を始める。

「どうして今まで攻撃が通らなかったのか疑問に思っていたの。でも、これではつきりしたわ……」

「……どういう事？」

「今までダメージを与えられなかった理由は、それが全て物理による攻撃だったからよ！」

「……ッ!？」

その言葉にエリエは驚きを隠せない様子で、鋭い目つきで敵を見つめているエミルの顔を見上げた。

エリエが驚くのも無理はない。フリーダムというゲームには元々魔法の様な攻撃手段はなく、殆どは物理的な攻撃しか存在していないのだ。

マスターの使っている『ダークネス』に関しても、攻撃に闇属性の効果を与えるという珍しい固有スキルだったので収集したのだろう。しかし、エミルの言う様にながしやどくろに魔法などの属性攻撃以外通じないとなれば、それは決してこのダンジョンをクリアされないようにという悪意以外のなものでもないのだ。

「——物理攻撃が効かないって……それじゃ、どうしようもないじゃない!」

エリエは憤りを隠せないのか、強く拳を握り締めながら俯き加減で叫んだ。

(PVPなら戦闘終了後即座にノヴァフレアが撃てる。でも、戦闘では5分のインターバルが必要……なら!)

「リントヴルムの必殺技は再使用まで5分必要なの。デイビッドとサラザさんはなんとか時間を稼いで!」

エミルはそういうと、自分はライトアーモードドラゴンをしまつて、リントヴルムの背中へと飛び乗った。

サラザとデイビッドは頷くと、再び敵に飛び掛かっていく。

「時間を稼ぐまでもない。敵のHPは後半分だ——俺がこの刀で決めてやる!」

デイビッドは勢い良く跳び上がると、骨を足場に上に登っていき敵の顔の前で刀を構える。

「うおおおおおおおッ!!」

デイビッドは素早く刀を、がしやどくろの顔目掛けて突き立てた。

しかし、その攻撃は全く効いていないのか、がしやどくろはカタカタと嘲笑うように顎を動かしている。

「——くっそー。バカにしやがって!!」

デイビッドは突きの速度を上げる。

——バキンッ!!

その攻撃の最中、部屋の中に金属の折れる乾いた音が響く……。それと同時に、デイビッドの顔の横を刀の刃先が回転しながら後方に飛んでいくのが見えた。

「……おい。冗談だろ……?」

デイビッドの額から冷や汗が吹き出し、その汗が頬を伝う——。

その時、突如としてがしやどくろの口が大きく開き赤く光った。

「おいおい。まさかこの状態でもあれを撃てるのかよッ!?!」

デイビッドが身構えた直後。横から物凄い衝撃を受け、彼の体はそのまま突き飛ばされた。その直後、赤黒い炎がデイビッドがいた場所を飲み込んだ。

後数秒遅かったら、デイビッドは間違いなく黒焦げにされていたところだった。

「痛った。危なかったぜ……」

地面に強く体を打ち付けたデイビッドがそう言つて横を見ると、エリエが苦痛に顔を歪め、その場に足を押さえて倒れ込んでいた。

「エリエ!? どうしてお前がここに!?!」

「うう……ああ……あ、んたが……バカだからに……決まってるでしよ……」

エリエはいつもの様に憎まれ口を叩いてはいるものの。額から尋常じゃない汗を流し、その表情からは余裕を全く感じられない。

両手で足を押さえ苦痛に歪むその顔が、普段の美少女と言われる彼女からはとても想像できないほどに変わつてとても痛々しく感じられた。

デイビッドは直ぐ様ヒールストーンを手に、エリエに声を掛ける。

「どこかやられたのか? 見せてみる!」

「……だ、だい……じょうぶよ……このくらい……アイテムには……かぎりがあるんだから……それはあんたが……」

「いいから見せろ!!」

彼女の言葉を遮つて叫ぶと、必死に足首を手で覆い隠しているエリ

エの手を避けて、デイビットは自分の目を疑った。

それもそのはずだ。彼女の足は赤黒く変色していて、とてもエリエの言ったように大丈夫そうには見えない。

現実世界なら、切断する以外にはないと言われるくらいのものだった……おそらく。その痛みも、デイビットの想像を絶するものだろう。

デイビットは一先ずエリエを背負うと、この戦場で最も安全なストーンドラゴンの影の気を失っている星の隣に寝かせ、ヒールストーンとリカバリーストーンを使った。しかし、HPは回復したものの、炎を受け赤黒く変色した足は治らない。

普段ならどんな状態異常でも回復できるリカバリーストーンが効かないことに、彼は不思議そうに首を傾げた。

(どういう事だ……これは異常状態ではないって事か？ なら、いつたいなんなんだこれは……)

考え込んでいるデイビットの横で、気を失っていた星が目を覚ます。

「——うう……戦いは……？」

頭を押さえながら星が横に顔を向けると、苦しそうに肩で息をしているエリエの姿が目飛び込んできた。

「エリエさん!? いったい何が……」

まだ意識の混濁があるのか、星は状況が全く飲み込めずに慌てて辺りを見渡す。

そこには壁際で倒れているカレンを抱きながら戦いを見守るマスタアの姿。

赤黒い炎のようなオーラを纏ったがしやどくろの姿。

それと懸命に戦っているサラザの姿。

大きな白いドラゴンの背に乗りながら険しい表情を浮かべているエミルの姿。

そして、横で苦痛に顔を歪ませているエリエとその隣に俯いているデイビットの姿があった。

「……これはいつたい……」

星はその光景を見て愕然とした。

あれほど手練れ揃いのPTメンバー達が、がしやどくろの前ではまるで手も足も出ない。

がしやどくろのHP残量を考慮しても、初期の半数以上が戦闘不能という現実の中で勝算は全くと言っていいほどないことが、混乱する星の頭でもすぐに理解できた。

その時、星の頭の中には自分が気を失う前の光景が蘇ってくる。自分が剣をがしやどくろの胸の炎に突き刺し、その大きな手が自分を襲った光景が――。

(そうか……あの時、剣を刺したから……こんな事に……私の……私のせいだ……)

星は徐ろに立ち上がると、のろろと飛ばされ地面に突き刺さっていた自分の剣の方へと歩いていった。

「……星ちゃん？」

「……………」

その後ろ姿を見てデイビッドが声を掛けたが、しかし、歩いている星からの返答はない。

だが、デイビッドはその先にある地面に刺さったままになっている剣を見て、星の行動の意味を悟ったのか顔が青ざめる。

「君は何をしようとしているんだ!?! いいからこっちに帰って来なさい!」

「……………」

「聞こえているんだろ! 戻って来るんだ!!」

無言のまま歩みを止める様子のない星に、デイビッドがなおも強い口調で言った。

しかし、星はその声を無視して剣の柄を握ると地面から引き抜き、デイビッドの方を振り向いてにつこりと微笑んだ。

デイビッドは星が何を言ってるのか分からず。ただただ言葉を失ったまま、彼女の方を見つめている。

「……全部私のせいなので、なんとかしてきます。デイビッドさんは休んでて下さい……」

握った剣の先を天に掲げて胸の前に突き出した星は、無意識に頭の中に浮かび上がってきた言葉を力一杯に叫んだ。

「――ソードマスター!!」

その言葉に反応したように、星の体を中心に周りが金色の光りに包まれた。

決戦9

この惨劇の中。今まで気を失っていた星には、今までの出来事の一部始終が把握できてはいない。しかし、この現状を引き起こしたのが自分だという思い込みと自責の念だけは人一倍感じていた。

それは彼女が責任を自分の中に押し殺してしまう性格と、なんでも一人で解決しなければいけないという。今まで生きてきた中で、一番大事だと思っている固定観念が引き金を引いて起こした行動だった。

(私があの時。胸の火にこの剣を刺さなければ、こんな事にはならなかったんだ……いつも……いつも、いつも。自分勝手な思い込みで行動して、皆に迷惑をかけて……こんな事じゃ。皆と一緒にいられない——自分でやったことだから、今起きている全てを私が終わらせなきゃいけないんだ!)

星は心の中でそう呟いて剣をがしやどくろに向けると、決意に満ちた眼差しで睥んだ。そこには一片の迷いもなく、そのアメシストの様な紫色の瞳は隅切り真っ直ぐに

『ふふふ……よく言ったぞ主。やつとスキルを発動させてくれて我輩は嬉しいぞ!』

直後、何者かの声が星の心に直接話し掛けてきた。それは前にも金色の光とともに何度も聞いた声だった……。

瞳を閉じて、星は心の中でその声の主に接触を試みる。

(あなたは誰なの……?)

『そんな事は今はどうでも良い。それより、主はあの化け物を倒したいのだろうか?』

(……うん)

求めていた答えとは全く違う返答に、困惑していた星は少し遅れて心の中で答える。

すると、声の主が険しい声音で星に告げた。

『だがな主よ……我輩がこの姿のままではあやつには勝てぬぞ?』

(どうして?)

『ここから見ておったが、あやつは物理攻撃が効かぬ』

(なら、どうしたら……)

星は困り果てた様子で眉をひそめる。

その直後、声の主は自信満々に言った。

『簡単な事だ……按ずるな。ただ物理攻撃をしなければいいだけじゃ……我輩の真の名を教えてやる。それを主が唱えれば良い。そうすれば、我輩は真の力を発揮することができるだろう』

(うん……分かった。あなたの本当の名前を教えて！)

素直に頷く星に、声の主は驚きの声を上げる。

どうやら、声の主は星がこれほどあつさり、自分に従うとは思っていないのだらう。

まあ、姿も見えない得体の知れない心の声に、素直に「はい」と頷く方がおかしいと考えるのは当然だ。

『ほう。我輩を疑わんのか？ もしかしたら嘘についておるかも知れぬぞ？』

(……うん。悪い人なら、わざわざそんなに詳しく教えてくれないから……)

『ははっ、分かった！ なら一度しか言わないからしつかり聞くのだぞ？ 我が名は『レイニール』誇り高き星龍である……』

星のその返答に声の主が満足そうな声を上げて、自分の名前を告げた。

その名前を聞いて、星は深く頷くと大きく息を吸い込んだ。

「——お願い！ レイニール!!」

星が叫ぶと剣が今までにないほどに強く光りを放った。

次の瞬間。彼女の目の前に大きな黄金に輝く鱗に包まれた巨大なドラゴンが現れた。

その姿はエミルのリントヴルムよりも大きく。また、神々しいほどに身体の鱗が光り輝いていて、それはまるで黄金の金塊がいくつも張り付いているように思えるほどだ。

その黄金の巨竜が口から白い息を吐いて星を見下ろす。

「主。命令してくれば従うが……どうする？」

「……あつ！ えつと……あれを倒して！ ……くれませんか？」

ドラゴンの美しさに見とれていた星は、レイニールに促され慌てて命令した。

いや、これではお願いだろうか……始めは少し強めに命令しようとしたのだが、最終的に疑問形になってしまっている。

まあ、普段から遠慮しがちな星にとつて、これはもう癖のようなものになっているのだろう。

どうにも締まらない複雑な顔をしながらも、星を見ていたレイニールががしやどくろに視線を移す。

「——う〜ん。まあ、良いか……ならばゆくぞ！　メテオフレア！！」

敵を睨みつけるレイニールの口から大量の炎が噴射され、大気を大きく震わせる。その威力は、まさに『メテオ』流星という名に相応しい……。

その攻撃が、がしやどくろに直撃して周りを夕焼けの様に真っ赤に染め上げる。だが、それに一番驚いたのは星ではなくサラザだった——。

がしやどくろの足元近くで戦っていたサラザは、慌てて後方に向かって勢い良く走り出す。

「ちよつと〜。私がいるって、あの子忘れてるんじゃないの!?　きや〜!!」

突如現れた巨竜のその攻撃に慌てふためきながら、サラザはぴよんぴよんと地面を飛び跳ねて、一目散にがしやどくろの足元から離脱する。

それを見てエミルも右腕を大きく振り上げ、リントヴルムに命令する。

「こつちもいくわよー。リントヴルム！　ノヴァフレア!!」

エミルはそう叫ぶと、その腕を前へと突き出した。

それと同時に、リントヴルムの口から白い炎が噴射され、レイニールの炎を受けて悶え苦しんでいたがしやどくろに直撃する。

がしやどくろが苦し紛れに振り抜いた腕を受け止め、2体のドラゴンが尚も炎を噴射し続ける。

その攻撃で、がしやどくろのHPゲージが今までにないほどのスピードで減少を始めた。

「いっけええええええええ——ッ!!」

エミルと星の声が響き、2体のドラゴンの炎の勢いが更に激しさを増す。

がしやどくろのHP減少の勢いは、衰えることなく『0』になり。巨大な体はキラキラと光りになって空に向かって消え、地面にはその大きな頭蓋だけが口を大きく開けた状態で残っていた。

目の前から敵が消え、勝つたのだと理解できるまでには結構な時間が掛かった。

「やった……」

星は気が抜けたのか、その場にべたんと座り込んだ。

まだ半信半疑の星は、その場でぼーっと一点を見つめている。

その視界の中に突然【Congratulation】と表示され、そこに取得したアイテム名が表示された。

「——なにこれ『炎霊刀 正宗』……?」

星がその表示を見て、不思議そうに首を傾げていた次の瞬間。体が強い衝撃とともに仰向けに地面に倒された。

それに驚き目をパチクリさせている星の眼前に、にっこりと微笑んでいるエリエの顔が飛び込んできた。

「やった! やったよ! 星。お手柄だよ。ほら、いい子いい子♪」

星に抱きつきながら、エリエが嬉しそうに星の頭を撫で回す。

顔を真っ赤に染めて照れていると、星の周りに皆が集まってきた。それを見た星は、逆に申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

(……私が剣を刺したせいでこんな事になっちゃった。ちゃんと謝らないと……)

そう思った星は起き上がると、勇気を出して言葉を発した。

「……あのー! ぐめんなさい。私のせいでこんな事に……」

星は勢い良く頭を下げると口をつぐんだ。

まあ、自分の攻撃が原因でがしやどくろを、もうワンランクパワー

がとう星ちゃん」

「……は、はい」

星は心の底から熱い何かが入り込んできて、気が付いた時には瞳の中が涙でいっぱいになっていた。

エミルが慌てていると、星がエミルの胸に飛び込んでいった。

「うう……うわああああああん。エミルさん……」

「……うん。良く頑張ったわね」

星はエミルの胸に顔を埋めると、泣きじやくっている。エミルはそんな星の頭を優しく撫でた。

それはエミルに言われた『あなたがいてくれて本当に良かった』という言葉が一番大きかった。

今まで星は、自分に自信がなかった。これまで他人にそんな言葉を言われたことがなかった。このダンジョンに来る前も、本当は行きたくないと思っていた。レベルの低い星が行ったところで邪魔にしかならないし、途中から険悪なムードになるのが嫌だったからだ。

現に険悪なムードにはならないまでも、周りに多大な迷惑を掛けているのは自覚していた。だが、エミルの言葉が『こんな非力な自分でも必要なのだ』ということが分かって、何よりも嬉しかった。

それと同時に、今までの恐怖や努力といった感情が涙となって、一気に吹き出してきたのだ。

エミルの胸で泣き続けていた星だったがしばらく経って、だいぶ少し気持ちが落ち着いてきた。

そこにエリエとデイビッドが話す声が聞こえてくる。

「……エリエ。お前足の方は大丈夫なのか？」

「——えっ？ ああ、ボスがいなくなったらなんともなくなっちゃった」

そう言っただけで笑っているエリエを、デイビッドは心配そうに見つめている。

まあ、それも無理はないだろう。元はと言えば、エリエはデイビッドを助ける為に、あのがしやどくろの炎を受けたのだ。彼が責任を感じるのは当たり前のことだ——。

そんなデイビッドの表情を見て、逆にエリエが指を差して言った。「そんな事より。デビッド先輩こそ大丈夫なの？ 武器——壊れちゃったでしょ？」

それを聞いたデイビッドは、折れた刀をアイテムの中から取り出してエリエに見せた。

「大丈夫さ。確かに壊れたが、どうやら全損扱いではないらしいな。これなら鍛冶屋に行って治せるからな。まあ、熟練度は少し惜しいが、また稼げばいいさ！」

「……そう。でもそれ、結構前から大事にしてたでしょ？」

デイビッドは表情を曇らせているエリエの頭をぼんつと叩くと「大丈夫だ」と親指を立てて微笑んだ。

武器は破壊されると、一部破損、全損扱いで大きく結果が異なる。一部破損ならば、鍛冶屋に行けば再び修復も可能だが、全損となるとまるでガラスが割れて飛び散る様な消滅エフェクトが発生して武器そのものを消失してしまう。

だが、一部破損でも安心はできない。それがデイビッドが言っていた『熟練度』だ——フリーダムには武器強化システムが存在せず。ドロップや作られた時点でその武器の能力が決まってしまう。だが、強化が全くできないわけではない。武器強化システムの代わりにあるのが熟練度システムだ。

熟練度とは武器を使い込めば使い込むほど増えていく数値のこと——フリーダムの武器には、全て熟練度という機能が付いている。熟練度には、武器の攻撃力に最大50%までステータスを上昇させる能力があるのだ。

表情を曇らせ、名残惜しそうに手の中の刀を見下ろしているデイビッドの方に、涙を拭いた星が一本の刀を持ってデイビッドの側まで行くと、そつと彼の方に差し出した。

デイビッドはその刀を受け取るどころか、不思議そうな複雑そうな顔をして星の顔を見つめる。

「——星ちゃん。これはどういう事かな？」

「あ、あの……良かったら使って下さい」

「ははっ、使つて下さい。って言われてもなあ……」

デイビッドはそれだけ言つて、困った顔でその刀を見て頭を掻いている。

すぐに受け取つてもらえるものだと思つていた星にとって、彼が受け取らないこの状況は予想していなかった。もう、どうしていいのかわからず。刀を持った両腕を前に突き出したまま、銅像の様に固まつてしまつている。

そこにエリエがやってきてその刀を見ると、驚きの声を上げた。

「なにこれ！ 見たことない武器じゃん！ 星、この武器どうしたの!?」

「え、えつと……さっきの敵から出た……のかな？」

星はエリエにそう聞かれ、歯切れの悪い回答をすると小首を傾る。

エリエはそれを聞いて「どっちなの？」と聞き返すと、星は「ごめんなさい」とぺこつと頭を下げた。その直後、エリエの視線は星からデイビッドへと移る。

「——それでデイビッド先輩はどうしてこれを受け取らないの？」

「いや。受け取れないだろう……これをリアルショップで売れば、おそらく数十万の代物だぞ？」

「……だから？」

「だからつてお前……」

デイビッドは不思議そうな表情で見上げているエリエを見て、大きくため息をついた。

本来ならば、現金で数十万と言われて物怖じするのが普通なのだが、どうやらエリエは育ちがいいのか、数十万単位では驚きもしないらしい……。

そのやり取りを見ていたエミルが、デイビッドに提案する。

「デイビッド。貰うのが心苦しいなら借りるつて事にしたらどうかしら？」

「エミルまで……よし。分かったならこの世界から脱出できたらこの刀は君に返す。それでいいかい？」

「はい！」

星は嬉しそうに刀を受け取ったデイビッドに向かって、にっこりと微笑み返した。

決戦10

星はドロップした刀をデイビッドに渡すと、今度はカレンの方に駆けて行って、まだ気を失ったままのカレンの顔を覗き込んだ。

「カレンさん……」

彼女とは色々あったが、それは昨日までのこと——今は大切な仲間だ心配するのは当然だろう。

心配そうな表情を浮かべている星の肩に手を置き、マスターが告げる。

「心配するでない。ここはゲームの中だ、HPが0にならなければ死にはせん。それよりも、お前の固有スキルはいつたいたいなんなのだ。エミルと同じドラゴンを召喚できるものか？」

マスターはそう尋ねると、星の出したドラゴンを見上げた。

戦闘を終えても全く消える様子も見せない黄金のドラゴンに不思議そうに首を傾げている。

ドラゴン使いのエミルの召喚するドラゴン達は巻物から召喚され、用が終わればスッと消えるのだが。星の召喚したドラゴンは消えるどころかしっかりとその場に留まっていた。

その場で自分を見下ろしているドラゴンを見上げ、そのドラゴンに緊張しながら徐に話し掛ける。

「——れ、レイニール。ありがとう！ あなたはこれからどうするの？」

すると、金色のドラゴンの大きな瞳が星を見据えた。

恐怖からビクツと体を震わせると、星の額から汗が流れた。内心『食べられるのではないのか？』などと思っただくらいだ。いや、実際に星をひとのみで飲み込めるほどの体格差はある。

だが、レイニールは不思議そうに首を傾げ。

「——どうするって、何を言っておるのだ主。スキルで召喚されたのだ、我輩はこれからは主と一緒にいるに決っておるだろう」

「……えっ？」

その予想だにしていなかったその返答に、星は困惑した様子で慌て

出す。

それもそうだろう。レイニールの体長は80mはある。これだけ大きいドラゴンとなるとエミルの城にも自分の家にも入らない。かと言って、雨ざらしというのも可哀想だ――。

どうしたらいいのか星は必死に考えを巡らせるが、どんなに考えてもいい方法が思い浮かばない。

しばらく考えた末に、星はレイニールに向かって叫んだ。

「あなたくらい大きいと、お家にも入れないし。それにご飯だってそんなにあげられないよ？ それでもいい？」

レイニールはそれを聞いて驚いたように目を丸くさせると、天に向かって勢い良く炎を吹き出した。

「……ひっ！ ぐ、ぐめんなさい!!」

星はそれに驚き身を仰け反らせると、その場に座り込んで必死に謝っている。

すると、そこにレイニールが長い首を伸ばして、星の顔を舐めた。

「なに……？ もしかして食べるの!? 私を食べても美味しくないよ……？」

「何を言っているんだ？ 主。我輩が主を食べてしまったのは私の姿も消えてしまうであろう。今の我輩は主の能力で存在しているに過ぎない」

確かにレイニールの言った通りだ。元はと言えば、エミルから貰った『竜王の剣』が星の固有スキル『ソードマスター』によって召喚したに過ぎない。

おそらく。レイニールは『竜王の剣』に封印された、竜王と呼ばれていたドラゴンなのだろう。いや、レイニールは自分は『星龍』であると高らかに宣言していたのだからそれも違うかもしれないが……。

星はレイニールの言葉を聞いて首を傾げた。

そして恐る恐る問い掛ける。

「……なら、何をしたの？」

「主の体液を貰ったのだ。それによって契約は全て整う。それにだ主。契約さえ整えば、我輩の体は気にしなくても大丈夫だぞ？」

そう。レイニールが星の頬を舐めたのは、頬に僅かに残っていた涙を自分の体に取り込む為だったのだ。

だが、星にはレイニールの言っている意味が1ミリも分からず、頭の上に大きな『?』マークが浮かんでいた。

それもそうだろう。契約が完了しただけで問題の本質は解決していない。こんな大きいドラゴンを、いったいどうやって世話すればいいのか分からない。

しかし、レイニールは上機嫌にその大きな尻尾を左右に揺らし、星を真っ直ぐに見つめている。その様子から察するに、面倒を見てもらう気満々のようだ。

それどころか、レイニールはどこか自信に満ち溢れた表情さえしている。まあ、その自信がどこからくるのか、星には分からなかったが……。

その全長は天まで届くと思われたがしゃどくろより少し小さいくらいで、星の身長は何十倍もある。

例えるなら『ビルを家の中に入れてみる』と、無理難題を言われているのと何ら変わらないのだ。そんなことを言われれば、誰だって「そんな事したら家の方が崩壊する」と言うだろう。

そう。小さい所に大きい物を押し込むのは物理的に不可能なのだ――。

「……でもそんなに大きいのに、どうするの?」

「まあ、見てくれ!」

レイニールはそう言い残し、宙に向かって飛び上がった。

星もその様子を食い入る様に見守っていると、しばらくしてレイニールの体が金色に強く光った。

一瞬にして辺りが昼間のように明るくなり、堪らず星も視界を腕で隠す。

すると、何かが神々しい光りを放ちキラキラと舞い降りてきた。

それはまるでぬいぐるみの様なドラゴンで、翼をはためかせながら徐々に降下してくる。

それをただ呆然と見ていると、星の直上で羽ばたくのを止め、急速

に落下を開始した。

星は俯き思いきり目を瞑ると、頭の上にどしつと重さがのしかかる。

何かが頭に乗っている。その感覚はとても奇妙で、だが生き物特有の確かな温もりも感じる。

「とうー！ どうじゃ主よ！ キュートであろう？」

「……レイニール？」

まだ何が起きたのかいまいち理解できない星は瞳をぱちくりさせていると、レイニールは星の頭の上から星の顔を見下ろして、右手を上げている。

星は「あはは」と苦笑いを浮かべると。

「頭が重い。降りてもらえないかな？」

つとお願いしてみる。すると、レイニールは不機嫌そうにそつぽを向く。

「嫌じゃ！ 我輩はこの場所を気に入ったのじゃ！」

レイニールはそう言つて両手を広げ、もう放すまいと星の頭にかつしりとしがみついている。

星は大きいため息をつく、諦めたように項垂れた。

その様子を見ていたマスターが声を上げる。

「さて、もうこのダンジョンにも用はない。今すぐここから出るぞ！」

そのマスターの言葉に、皆一同に頷くとダンジョンを出る為、がしやどくろの残した頭の方へ向かつて歩き出す。

がしやどくろの頭は大きく口を開けたまま、その中には戦闘前に入り口から見えていた扉があった。

しかし、今まで動いていた——と言うか、戦っていた相手の口だ。何度も甦るといふ執念深さを考えると、またいつ動き出してもおかしくはない。だが、扉があるということ、がしやどくろの口の中がダンジョンの出口に繋がっているのだろう。

口を大きく開けたままその場に残されたがしやどくろの前まで行く、メンバーは一斉に歩みを止める。

正直。口の中に入った瞬間にがしやどくろの口が閉じ、中に取り残

されそうな気がしていたのだ。

「……誰が先に行く？」

皆が躊躇している中、この場で一番切り出しては行けない言葉を、エリエが切り出した。これはさすがと言うか、表裏のない性格のエリエらしい。

彼女は皆の顔色を窺うように見渡した後、デイビッドの顔をじっと見つめた。

「……な、なんだよ？」

「フフフツ。こういう美味しい役はやっぱり……ねっ！ デビッド先輩♪」

エリエは満面の笑みで顔を引きつらせているデイビッドに『行け』と言わんばかりの視線を送っている。

デイビッドはそれを聞いて、思わず数歩後退りして叫んだ。

「ちよつと待て！ どうして俺なんだよ。マスターもサラザもいるだろう!？」

「だって、マスターはカレンをおぶってるし。サラザに行かせるわけにもいかないでしょ？ つとなると……」

エリエはそういういかにもデイビッドしかいないと言いたげな表情で、無言のままデイビッドを見つめ指差した。

「おい！ エミルもなんとか言ってくれよ！」

助けを求めるようにエミルの方を見たデイビッドから、エミルは視線をサツと逸し「ごめんなさい」とだけ小さく呟いた。

なおも嫌そうな顔をしているデイビッドを見兼ねた星が口を開く。

「……なら、私が先に行きましょうか？」

星がそう提案すると頭上から「何を考えているのだ主！ 我輩がいるというのに、空気を読めばかたれ！」とレイニールが驚きながら、星の頭をペしペしと叩いている。

「なら、レイニールは待ってて。私が行ってみて、大丈夫だったら来たらいいから」

星は頭の上のレイニールにそう言うと「そんな事、できるわけがないであろう！」と余計に怒り出す。

それを見た星は心の中で『どっちなんだろう？』と思いながらも、がしやどくろのぽっかりと開いた口に向かって歩き出そうとしたその時、デイビッドの手が肩を掴んでそれを阻む。

「いや、俺が行くからいいよ。小さな女の子一人を先に行かせたとなったら、サムライの名が廃るからね！」

デイビッドがそう言つて誇らしげに胸を張ると「なら最初から行け……」と後ろからエリエの罵る声が聞こえた。

それはデイビッドにも聞こえていたのだろう。眉毛をピクリと動かしたが、無視してそのままがしやどくろの口の中へと入っていく。それを心配そうに見つめる星。

しばらくして、デイビッドが何事もなく戻ってくる。

「特に変つた所はなかった。大丈夫だ！」

それを聞いたエリエが安心したようにほつと胸を撫で下ろすと、先程まで躊躇していたのが嘘のように、一目散に駆けていった。

「ほら、皆早く行こうよ〜！」

エリエは先頭に立つと、笑顔で手をブンブンと左右に振っている。

デイビッドは少し不機嫌そうにその様子を見ていたが、諦めたのか大きなため息をついて再び口の中へと入った。

「行きましようか。星ちゃん」

「はい」

エミルはそう言つて星に手を差し出すと、星もその手を掴んで一緒に中へと入っていく。

がしやどくろの口の中を通過すると、四角い部屋になっていて中は予想以上に広く。薄暗い部屋の周りの壁には、青い鉱石のような物が至る所から突き出している。

両側に金の天使の装飾が施された扉があり。その横にはワープする為か、魔法陣の放つ青い光が、まるでキャンドルライトの様に辺りを照らし出していた。

その光りを反射するように辺りの青色の鉱石が光り輝く——それはまさにファンタジーでありそんな幻想的な光景だった。

ボスを倒した安堵感か、嫌というほど骸骨を見たからかは分からない

いが、星の瞳にはそれがとても輝いて見えた。

「ほう。思っていたよりも早く来ましたね——」

何者かの声が聞こえた直後、地面が黒く染まり。そこから狼の覆面を被った男が黒いローブ姿で現れた。

それはログアウトできなくなったあの日に、モニターで見た『シルバールフ』と名乗った狼の覆面を被った男で間違いない。

覆面の男は星達を流れるように見ると、徐に口を開く。

「——ほう。このダンジョンは複数パーティーでも、クリアできるかできないかギリギリの難易度で設定していたのですが……これは驚きましたよ。まさか僅か7名でクリアするとはね」

彼の『驚いた』という言葉の割には、その声音は始めからクリアーできると分かっていた様な落ち着きがあった。

抑揚のない形式的な言葉を聞いて、それを挑発と捉えたのかエリエが鋭く彼を睨む。

「……よく言うよ。最後のボスは魔法攻撃でしか倒せないようにしてたくせに……」

「エリー静かに。ここは少しでも情報を聞き出さないと……」

エリエが小声でそう呟くと、それをエミルが諫める。

「お前はいつたい何者だ！ いったい儂らをここに閉じ込めてどうするつもりだ!!」

マスターは怒鳴り声を上げ、覆面の男を鋭く睨みつけた。

覆面の男はそんなマスターをじっと見据え、何かを思い出したように徐ろに口を開く。

「——なるほど……あなたが一緒でしたか、キャラネームは『マスター』本名『大道 龍二』数々の武術系の大会で優勝を収めてきた最強の武闘家。噂では、殆どの武術を習得しているとか……確か公式の場で、最後の姿を見たのは余興で熊25匹を素手で倒した時——現実世界に敵がいなくなり、ゲーマーにまで落ちぶれたというのは、どうやら本当だったようですね」

「ふんっ、落ちぶれたか……おぬしにいつたい何が分かる！ 儂は武術の高みを目指す為に、このVR世界に来たのだ。命の心配の要らぬ

「この世界ならば、皆全力で戦うであろう?」

覆面の男はマスターの話聞き流すと、星の方をじつと見つめていた。

顔は見えないものの、その男に何とも言えない恐怖を感じ、咄嗟にエリエの後ろに身を隠す。

すると、彼も星から目を逸らしたまも抑揚のない声で言い放つ。

「さて、この扉を潜れば晴れてあなた方は自由の身です。どうぞ?」

覆面の男は右腕を前に突き出し、扉の方に指先を向けた。

その仕草はいさぎが良いというよりかは、どこか人をバカにしたように感じる。

そんな覆面の男の態度に、エミルが不信感に満ちた眼差しをその男に向けると質問をぶつける。

「ちよつとした疑問なんだけど……あの最後のボスの設定を考えたのはあなた?」

「ええ、そうですよ。私達の組織でシステムを改変させて頂きました。用意しておいたアトラクションは楽しんで頂けましたか?」

「……そう。なるほどね」

エミルはそれを聞いて静かに頷くと、微かな笑みを浮かべている。

決戦11

「どういう事？ エミル姉。何か分かったの？」

そんなエミルの表情を見てエリエが尋ねる。

エミルはエリエに手招きすると、不思議そうな顔で近くに来たエリエに耳打ちした。しかし、エリエはそれを聞いても分からないように、何やら難しい顔をして首を傾げている。

「もう。最初にあの男がモニターで言ってたでしょ？ 覚えてないの？」

「だつてさ。その時、私お菓子作ってたもん。覚えてるも何も聞いてもないよ〜」

エリエはそういうと頬を膨らませている。星はそんな2人の話を聞いて、あの日のことを思い出した。

確かあの覆面の男は、あの日モニターの中でこう言っていた。

『一方的にゲーム内に閉じ込めるだけで脱出する手がないというのも不公平だろう。それは私の美学にも反している……なので君達にチャンスをあげよう。このゲームのフィールドのどこかに隠しダンジョン【現世界元の洞窟】がある。そこ【現世の扉】を潜れば現実世界へと戻れる。しかし、参加パーティーのメンバーのみだ。せいぜい足掻いて見せてくれたまえ……それでは健闘を祈る。ゲームの諸君……』

そう。あの時、覆面の男はこう言っていたのだ。

そしてエミルの言っているのは【現世の扉】を潜って現実世界へと戻れるのは参加パーティーのメンバーのみということだろう。『参加パーティーのみ』ということは、参加していない人間はどうなるのか？というところに疑問が残る。

ゲーム内に閉じ込めた人間が外に出るということは、内部の情報を外部の人間が知ってしまうということだ――。

これほどの事件を起こした組織だ。事を起こす前に、相当周到な準備を重ねていたに違いない。

監禁事件などでも内部の人間が外に情報を持ち出したことで、犯人

グループを逮捕できた——なんていうのは良くある話だ。

それは内部の情報を知ること、救出作戦を立てやすくなる。このフリーダムで起きている事件も、見方を変えれば大規模な監禁事件なのだ。

この手の犯罪は情報を制した者が勝つ——だが、この手の犯罪集団がそんな簡単なことを知らないはずはない。

『もしここで私達が帰ったと同時に、この世界が崩壊するとしたら……』

そんなことを思いながら星は不安そうにエミルの顔を見上げると、次に彼女が何を言うのかを見守っている。

エミルは訝しげな顔で彼に問い掛けた。

「その扉に何か仕掛けがあるんじゃないの？」

「随分と疑り深い人ですね。いいでしょう」

覆面の男は、扉の前まで歩いていった。

扉の前で歩みを止めた男は星達の方を振り返り「どうですか？ 仕掛けなんてないでしょう？」と人を見下したように言った。

その言い方に少しイラツとしたのか、エミルは不機嫌そうに眉をひそめる。だが、何の仕掛けもなかったのは事実。覆面の男の言う通り仕掛けがあれば、彼が先に引つかかっているはずだ。

「——なら私達がログアウトした後。残った者はどうなるの？」

「……その質問には、お答えできませんね」

覆面の男はそれだけ告げると、エミルから顔を逸らす。

押し切れると感じたのか、マスターはその隙に付け込むように声を上げる。

「どうした？ この質問に答えてもらわねば、おぬしの言っていることも怪しいものだな」

「いいでしょう……そんなに知りたいなら教えて差し上げますよ」

彼の挑発に乗った覆面の男は、両手を広げると話を続けた。

「この世界がどうなるのか……それは簡単です。あなた達はゲームをクリアした事になり。それと同時に現実世界との入り口の全てが閉ざされ、この世界は現実から完全に切り離された独自の世界になる。

つまり——残った者達は永遠にゲームの世界から抜け出す事はできません。ただ一人。私を除いてですが……」

その言葉を聞いて皆愕然とし、その場に凍りついた。

それもそうだろう。突然自分達が助かるか、他人を見捨てるかという究極の選択を迫られたのだ——これで動揺しない者などいるはずがない。

エミルは覆面の男を、目を細めながらじっと見つめている。

『この男……思っていたよりも危険かもしれないわね。おそらく、扉を通れば本当に現実世界に戻れる。でも、それはさつき男の言った情報が外部に漏れなければの話。おそらく、この男は私達が帰還後その情報をメディアで大々的に流すつもりだ……そんな事になったら、唯一の生還者と同時に他の者を見殺しにしたと世間からの非難が集中する。それで起きた混乱に乗じて、彼等のもつと恐ろしい事を考えているに違いない。』

そう考えながら、エミルはちらつと星の顔を見た。

彼女にとつて最も気掛かりなのは、この中で最も最年少の星だ。子供同士のコミュニティーは大人のそれとは比べ物にならないくらい狭い。

強いて挙げるならば、学校——やっていたれば塾や習い事くらいのもだ。お金を自由に使えない子供には、自らの力でコミュニティーを広げることができない。

もしも、現実世界に戻って周囲から責められれば、星は間違いなく耐えられないだろう。

(エミルさんが難しい顔してこつちを見てる……私。何か悪い事したかな……)

星は色々思い出しながら、険しい表情をしたエミルの顔を見て思わず顔を背けた。

その時、覆面の男は星の方を見ると、突然話し掛けてきた。

「ああ、君があの方の娘さんか……なるほどねえー。その顔付きといい存在感といい。他者とは明らかに違いますね……」

「えっ？ お母さんを知っているんですか!？」

星は驚いたように聞き返す。

覆面の男は一呼吸置いて、再び言葉を続ける。

「——いや、君のお母さんは知らない。私が知ってるのは君の父親の方だよ。世界最高の脳科学者。大空 融の娘。夜空 星ちゃん」

今日始めて話した相手に自分の名前を言い当てられ、しかもそれが生まれる前に亡くなった父親の知人だったことに星は驚きを隠せない。

「ど、どうして私の名前を……」

「それは当然知っているよ。なんせ私は君のお父さんと同じ目的の為に、行動しているのだからね」

「……えっ?」

覆面の言い放ったその言葉を聞いて、星の頭の中が真っ白になった。

死んだはずの父親と同じ目的ということは生きていれば、父親もこの事件を起こしていたことになる。

だが、自分の父親がそんな悪いことをするはずがない。いや、そう信じたかった……。

「……そ、そんなはずない! 私のお父さんは、あなたとは違う!!」

自分に言い聞かせるように、星が大声で叫んだ。

星にはその覆面の男の言うことを信じることは絶対にできなかった。彼女にとって、死んだ父親は優しくて頼もしい理想の父親像を当てていたからだ。

星は父親がいなかった為、運動会などの父兄が参加する行事には先生が代役として入っていた為、他の同級生の父親を見て自分の父親のことを想像することが楽しかった。

もちろん。それが原因で言われることもあったが、そんなことが気にならないくらいに思い焦がれていた。

星の中での理想の父親は、いつでも母親や星に優しくにこにここと笑って優しい声で話し掛けてくれる。そんな男性だった——。

だがその理想図を、目の前にいる覆面を被った怪しげな男が揺るがそうとしているのだ。そんなことを絶対に許せるはずがない……。

星は瞳に涙を浮かべながら、男を鋭く睨みつけた。

すると、男は不機嫌そうな声で「なるほど、分かりました」と言うと、腕を大きく上げてパチンツ！と指を鳴らした。

それと同時に、地面が大きく揺れ出す。

「……きやッ！」

「大丈夫かい？ 星ちゃん。この覆面野郎！ いったい何をした！」

星がその揺れに耐えられずにバランスを崩す。デイビッドがそれを受け止めると、覆面の男に声を荒らげて叫んだ。

覆面の男は「はっはっはっ」と大きく笑いながら上空に飛び上がった。

「私は待たせるのは好きでも待っているの嫌いでね——それでは諸君。じっくりと考えて決めてくれ。もつとも、もう直ここは崩れるがね……」

そう言い残し、覆面の男は姿を消した。

天井から破片が地面に散乱し。大きく左右に揺れ動く部屋の中で、メンバー達は決断を急がれていた。

「どうするの!? このままデビッド先輩と心中なんて、私は嫌だよ!!」

「ちよつと、エリー落ち着いて！ 大丈夫。私も一緒だから!!」

エリエとサラザはがっしりと、その場で抱き合っている。

こんな状況になっただけでもデイビッドに悪態つくエリエを軽く見て流すと、星は不安そうにエミルの顔を見つめた。だが、エミルも決めかねているようで、困惑した表情でマスターに視線を向ける。

「……マスター。どうしましょう」

「うむ。どうするも何もここは街に戻る以外の選択肢はないだろう！

行くぞ!!」

「——ッ!? は、はい!!」

マスターはカレンを抱えたまま迷うことなく、ボス部屋にクリアー後現れる街へ戻るワープゾーンへと飛び込んでいった。

エミルも少し戸惑いながらも、マスターの後に続く。

「全く仕方ないな……行くよ。星ちゃん！」

「……え? えええッ!」

デイベिटドは星を軽々と抱え込むと、エミル達の後を追った。

「エリー皆行っちゃったわよ〜」

「ちよー！ サラザ。私を置いてかないでよ〜!!」

その直後、エリエとサラザもその後を慌てて追いかけるようにしてワープゾーンの中に入っていった。

一難去つてまた一難

次の瞬間、星は強い光に思わず目を細めた。

しばらくして、目が慣れてから辺りを見渡すと、そこには日の光を浴びてキラキラと光る三段の作りになっていて、その最上部には人魚の像が建ててある噴水が見えた。

ダンジョンを攻略すると現れるワープゾーンは、街の決まった場所に召喚され仕組みになっていた。

それは始まりの街に関わらず、どこの街でも変わりはない。

(うわー、綺麗。こんな場所あったんだ……)

星がそれに見とれていると、横からエミルの声が聞こえてきた。

「マスター。どうして街に戻ってきたんですか？ 現実世界に戻るチャンスだったのに……」

エミルは興味津々な様子でマスターに尋ねる。

いくら時間がなかったとはいえ、マスターの声には一切の迷いがなかった。

つまりそれは、彼はこうなる前に決断していて、あの危機的な状況下でもその考えは変わらなかったということを表していた。

マスターはカレンを噴水にもたれかけさせるように座らせると、エミルの方に顔を向けて、徐ろに口を開く。

「——あの状況ではあれが最善の策だった。あやつがどうして儂らに考える時間を与えなかったと思う？」

「そ、それは……考えられると困るからでしょうか？」

エミルは少し自信なさそうに答えたが、その瞳には確信にも似た何かを感じさせる。

マスターはその瞳を見て、静かに頷くと言葉を続ける。

「その通りだ。そして、普通ならば迷わずに現実世界に戻る方を取る。あやつはそれを見越して、あの様な行動に出たのだ」

「……ですがマスター。それなら、逆も考えられませんか？ あれほ

どボスに細工までして、ダンジョンをクリアーさせまいとしていた。なら、ダンジョンを崩壊させ、考える時間をなくし。私達が街に戻る

ように誘導した……つと」

エミルがそう告げると、口元に微かな笑みを浮かべたマスターがエミルにまた問い掛けた。

「確かにおぬしの言うのも一理ある。ならエミルよ。どうしてあやつは、わざわざ扉の前まで歩き、トラップのない事を証明したと思う?」
「そ、それは……」

エミルはその問い掛けに、何も言えなくなる。

それもそのはずだ。街に戻らせたのなら、扉の方に自らトラップがないことをこちらに意識させる必要がない。

あの状況なら、できるだけ安全な方に進みたくするのは、動物の生存本能として当たり前前の選択なのだ。

そうなれば、本当に街に戻れるか分からないワープゾーンよりも、彼が言っていた現実世界に戻る扉の方が信憑性が高い。

しかし、覆面の男のあの行動により、リスクは限りなく均等になっていた。そこから導き出せる考えは一つしかなかった。

「……もしかして彼にとつて、どちらに進まれても問題がなかったから?」

エミルが半信半疑でそう呟くと、マスターはにっこりと微笑んで深く頷く。

「そうだ。おそらく奴には、どちらに進まれても策があったのだろうな……いや、逆に現実世界に戻られた方が奴には好都合だったのかもしれない」

マスターは更に言葉を続ける。

「ここからは僕の推測だが、あやつは現実世界ではなくこちらの世界に居るのではないか? 今までの数日間、全世界のユーザーをこのフリーダム内に閉じ込めていて、外からなんの手立ても打たれた形跡がない——つという事はだ。外からの通信を完全に遮断しておると考えるのが妥当だろう」

「完全に遮断……それってつまり!？」

「うむ。気付いたようじゃな……お前の考えておる通りよ。この世界を己の物にしようとしておるに違いない。おそらく、奴の人生を懸け

てでも手に入れたい何かが、この場所には有るということだ……」
マスターは驚きを隠せない様子のエミルの顔を見て、ニヤツと笑みを浮かべている。

そんな時『ぐうううう』と鳴った誰かのお腹の音が辺りに響いた。皆が一斉にその音の方を見ると、その視線の先には星を抱えたデイビッドの姿があった。

「——えっ!?! わ、私じゃないですよ!?!」

皆の視線が一身に集まり、星が慌てて両手を振って否定する。その後、視線はデイビッドの顔へと向けられた。

デイビッドはその視線に耐えかね、苦笑いしながら頭を掻いた。

「悪い悪い。安心したらお腹が空いてきてな! 話は飯を食べてからにしないか?」

そう言ったデイビッドに、エリエが空かさず口を出した。

「デイビッド先輩の場合。いつも腹ペコの間違いじゃないの? 侍って言ったって、結局食いしん坊侍なんですよ。もういつその事、刀からお箸に持ち替えたら?」

「なっ、なにおく。お前はいつもいつも! ボス戦の時に少し可愛いと思った俺がバカだったよ。やっぱりお前は性格が悪いな!」

「なっ、なんですって!?! 私のどこが性格ブスだって言うのよ!!」

それを聞いたエリエは顔を真っ赤にさせながら、デイビッドに詰め寄っていく。

一瞬は怯んだかに見えたデイビッドだったが、すぐに反論し始める。

「事実なんだからしかたないだろ! それにお前は目上の人に対しての態度というものがなっていないんだよ。年功序列という言葉を知らないのか?」

「それを言うなら、デイビッドだってレディーファーストという言葉を知らないの? 外人のくせに……ばっかみたい!」

「ちよつとエリー。待ってよ〜」

エリエはそう吐き捨てると、怒りながら走り去ってしまった。その後を、サラザが慌てて追いかけて行く。

「なんだよ。エリエのやつ……俺は飯を食いに行くぞ！」

デイビッドは星を地面に下ろすと、不機嫌そうに眉間にしわを寄せ、街の方へと歩いて行った。

2人が去って、一気に険悪なムードになった空気にエミルが呆れていると、隣に居た星がエミルの服を引く。

「……エミルさん」

星は不安そうな瞳でエミルを見上げる。

「はあく。もうあの2人は仕方ないんだから……マスターすみません。2人は先に私の家に行ってももらって良いですか？」

「ああ、それは構わんが……お前達はどうするのだ？」

「私と星ちゃんは2人を連れてから行きますので、また後で……」

エミルは星の手を掴むと、デイビッドの歩いていった方向を向くとゆっくりと歩き出した。星とエミルが街の中を歩いていると、繁華街だと言うのに殆どすれ違う人影はいない。

まだ、太陽が高いというのに街には人の姿が全くと言っていいほどない。また、治安の悪化も激しいのか、軒並みの影の方にローブを深々と被った者達も潜んでいる。そんな中で、NPCの経営する飲食店で食事をしているデイビッドを見つけるのは、そこまで難しくはなかった。

デイビッドはハンバーガーショップでカウンターに座り背を向けていた彼は不機嫌そうにハンバーガーに噛み付いていた。

「全く……いったいなんだって言うんだ。あいつは！ いつもいつも俺に突っ掛かってきて！」

あからさまにイライラしているデイビッドに少し怖気づきながらも、星はエミルの服を強く握っている。

「はあ……もう探したわよ。こんなところにいたのね。デイビッド」

エミルはそんなデイビッドに声を掛けると、デイビッドはまた不機嫌そうにエミルの顔を横目で不信感に満ちた瞳で見た。

「——エミルか……なんだ。マスターに言われて説教でもしにきたのか？」

「そんなに警戒しなくてもいいでしょ？ 横に座ってもいいかしら」

エミルは落ち着いた声でそう尋ねると、デイビッドは「勝手にしろ」と素っ気なく答えて、手に持ったハンバーガーに噛みついた。

星もエミルの隣に座ると、少しでも存在をなくそうと俯き加減に肩をすぼめた。

それも無理はない。この世界に来るまで星は人との関係を極力避けてきた。それもこれも全てイジメなどが原因で自分に自信がないからであり、同じ年の子供にも「いてもいなくても同じ」と言われる始末だった。

そんな星にとって怒っている人にわざわざ近付いて行くという行為事態が例のないことで、カレンとのいざこぎも誰かと戦闘をしているという勘違いから始まったもの、そうでもなければ自分から好き好んで機嫌の悪い人に近づくわけがない。

小さく体を縮こめ、少しでも気配を殺そうとするその隣で2人が会話を始めた。

「ねえ、デイビッド。どうしてエリーと仲良くできないの？」

エミルが聞くと、デイビッドはそんなエミルを横目で睨んで強い口調で。

「俺は仲良くしようとしているのに、あいつが勝手に俺の事を嫌ってるんだろ！ エミルはわざわざ俺を追ってきて嫌味を言いに来たのか!？」

デイビッドは顔を真っ赤にさせてそう怒鳴ると、エミルの顔を不機嫌そうに睨みつけている。

そんなデイビッドの表情を見て、呆れたようにエミルがため息をつく。

「そんな事を言いにはわざわざ来ないわよ。エリーはまだ子供なのよ？ 人との付き合い方だってまだ分からないんだから、そこは大目に見てあげないと」

「でもあの、人をバカにした様な言動や行動が許せないんだよなー」
デイビッドは素直に、エリエへの不満をエミルに向かって口にする。

星はちらちらと、2人の様子を窺いながら。

(大人って大変だな……)

星はそう思いながら、2人の会話を黙って聞いていると頭の上にレイニールが突然星の頭をポンと叩いた。

「主。我輩もあの食べ物食べてみたいぞ……」

「……えっ? どれ?」

星がレイニールを見上げると「あれじゃ!」とレイニールの手が、店の奥に飾ってあるハンバーグが何重にも重なったハンバーグの置物をキラキラした瞳で指差している。

「でも、あんなに食べきれないでしょ? デイビッドさんが食べてるようなのじゃだめ?」

星が困った顔をしてそう聞き返すと「嫌じゃ!」と、レイニールはそっぽを向いてふてくされてしまう。

星はその様子に困り果てた様子でため息を吐くと、アイテム欄の中の所持金を確認する。

そこには「58000ユール」と表示されている。だが、それがどれくらいの額なのか分からず。また、目の前に積まれた塔の様なハンバーガーがいくらかも分からない。

星は隣のエミルに尋ねようとして、手を伸ばそうとした瞬間。勢い良くテーブルを叩き、皿がガシャンと音を立てたかと思うと、突如としてエミルが声を荒らげた。

「エリーも悪いけど、それを真に受けるあなたも悪いんですよ!? デイビッドの方が年上なんだから、聞き流すところを聞き流せばケンカにもならないのよ!!」

「は……はい」

「だいたいあなた達は顔を合わせたらケンカばかりで、星ちゃんが同じようになっただらどうするの? 責任取れるの!?!」

「いや……それは……」

どうやら、普段の2人に口には出さないだけで、彼女も相当なストレスを感じていたらしい。

デイビッドは突然エミルに鬼の様な剣幕で怒られ、萎縮してしまっている。しかし、萎縮してしまっただけなのはデイビッドだけではなく――

！。

(だめだ。今話しかけたら絶対に怒られる……)

星はそう思い伸ばそうとした手を引っ込めると、NPCに話し掛けた。すると、目の前に選択肢が表示される。

一難去つてまた一難2

そこにはハンバーガーの画像で様々な種類の物の横に値。そしてその下に、個数を選択する仕様になっていた。

星は目の前に表示されたメニューを見て、思わず固まった。

何故なら、その選択肢の中に飾られている置物と同じ物がなかったのだ。

「——ない……あれと同じ物がどこにもない!? ど、どうしよう……」

星は少し考え込んだ末に、小さいハンバーガーを重ねていけば目の前の置物の様になると思い付き、個数の横の「+」を押して個数を追加した。

しかし、その手も3回押したところで止まる。

「1個850ユールを3つで——いくらだろう……3桁の掛け算を暗算なんて……」

星は混乱した頭を抱えると、困り果て助けを求めるようにエミルの方に目をやった。だが、その頼りのエミルはデイビッドに説教するのに集中していて、星には全く気付いてくれそうにない。

デイビッドもエミルに的確に痛いところをつかれているのか、なんの反論も出来ずに小さくなっている。その状況では、とても星には割り込める状態じゃなく。

「まあ。3つくらいなら大丈夫かな……」

星は仕方なく3個だけ注文した。

注文を受けた直後、目の前に注文してしばらくして星の前にハンバーガーの乗った皿が3つ現れる。

星はそれを頭の部分だけを外し、次々に重ねていく。

その作業を終えると、小さく「よし」と呟きレイニールを見上げ。

「はい、レイニール。ちょっと小さいけど、同じのだよっ!」

星はレイニールを頭から下ろすと、テーブルの上にそっと置いた。

レイニールはゆっくりとハンバーガーの方に近寄って行くと、そのハンバーガーと置物のハンバーガーを見比べて不機嫌そうに星の顔を見た。

「——主……こつちの方があきらかに小さいぞ……ケチったな？」

「ううっ……ごめんなさい」

星は謝ると深く俯く。

レイニールはそんな星の様子を見て「まあ、よい」と言いながら、目の前のハンバーガーを崩れないように両手で持って口に運ぶ。

その直後、レイニールの動きが止まる。星はレイニールが喉に詰まらせたのかと思い。目の前に置かれた水の入ったコップを手に持った。すると、レイニールが星の方を向く。

「おお。うまい！ これは美味じゃな。主よ！」

「……そう。それは良かった」

嬉しそうに微笑んでハンバーガーを食べ進めているレイニールを見て、星は少しほつとした表情で残った上の部分のパンを口に運ぶ。

レイニールが美味しそうにハンバーガーを食べているその横では、エミルとデイビッドの話も佳境を迎えていた。

「だから、エリーはああ見えて意地っ張りなんだからデイビッドから謝らないとダメ！ 分かった？」

「……はい。善処します」

「よろしい！ そんなデイビッドに策を授けてあげるわ。ちよつと耳貸して……」

不敵な笑みを浮かべているエミルは、デイビッドの耳元で何やらささやいている。デイビッドはふむふむと頷くと「なるほど」と腕を組んだ。

星は不思議そうに首を傾げると、エミルがくるつと向き返って星の顔を見た。それを見た星はビクツと身構えると、エミルがにっこりと微笑んでいる。

そんな彼女の表情を見て嫌な予感しかしない星は、ぎこちなく笑みを浮かべてみる。

「さて、星ちゃん。行きましょうか！」

「……えっ？」

何も分からぬまま、エミルはそう言って星の手を握ると、立ち上がった。

星は何が起きたのか、状況が全く読み込めずにあたふたしている。

「それじゃ、デイビッド。また後でメッセージ入れるわね！」

「ああ、よろしく頼む」

強引にエミルに手を引かれ、星はハンバーガーショップを後にした。

「あつ！ 主、我輩を置いてどこへ行くのだ!!」

レイニールは残りのハンバーガーを慌てて口の中に頬張ると、頬をリスのようにパンパンに膨らまして2人を追って急いで店を飛び出していった。

わけも分からずエミルに手を引かれながら、星は前を歩く彼女の背中を見つめ。

「あ、あの……エミルさん？ どこへ行くんですか……？」

星は不安そうにエミルの顔を見上げて尋ねる。

「ああ、今からエリーのところに行くのよ」

「……なんでですか？」

エミルの話を聞いて首を傾げる。

その時、突然頭の上にとしりと衝撃が走った。驚いた星が頭の上を見上げると、半泣き状態のレイニールが見えた。

「主のバカ！ 我輩を置いて行くなんて〜!!」

レイニールは震えた声で、ぽかぽかと頭を何度も叩いている。

星はそんなレイニールに謝ったが完全にご機嫌斜めになり、ピイツとそつぽを向いたまま。

「主のケチ。バカ。薄情者！」

つと、散々頭の上で理不尽な言葉を投げつけられた。

(はあ……別に私が悪いわけじゃないのに……)

星は心の中で呟きながら、がつくりと肩を落とす。

憂鬱な気分のまま、どこに行こうとしているのか分からない状態で、星がエミルに手を引かれていくと、街の東側にあるレンガ作りの外壁の上の物見台の塀の上に、俯き加減で座っているエリエの姿を見つけた。

「はあ……サラザに言われなくても、私が悪い事くらい分かってる。

でも、気になるんだから仕方ないじゃない……」

エリエは小さく呟くと、大きなため息をついている。

そんなエリエの肩をエミルがつんつんと突いた。

すると、エリエは不機嫌そうに「サラザ。さっき一人にしてって言ったのに！」と振り返ると、突然目の前に現れたエミルに驚き堀から落ちそうになる。

エミルが慌てて落ちそうになるエリエの手を引いて自分の方に引き寄せると「そんな所に座つてると危ないわよ」と微笑んだ。

まさか彼女がくるとは思ってたのか、驚きでエリエが目を丸くさせていたが、次の瞬間には不機嫌そうに目を細めてエミルの顔を見た。

「なに？ エミル姉もどうせサラザに頼まれたんでしょ？ 一人にしてよ。今私は忙しいの……」

「そっか。デイビッドから伝言を頼まれてただけだなあ」

その含みを持たせる言い回しに、顔を背けているエリエの耳がぴくりと動いた。

それを聞いて、エリエは体をエミルの方に向き直ると口を開いた。

「どうせデイビッドがまた何か私の悪口を言ってたんでしょ？」

「なら、聞かない？」

「——ううん。気になるから……聞く」

頬を赤く染めながら、エリエは恥ずかしそうに小さな声でぼそっと呟いた。

そんな彼女の様子を見て、エミルは「ふふつ。無理しちゃって」と小さな声で言うのと微笑んでいる。

「それで……デイビッドはなんて？」

彼女は相当デイビッドのことが気になるのだろう。表情には出さないように努力しているが、エミルの口元を時よりチラッと見て、明らかに気にしているのは間違いないさそうさだ。

エミルはエリエの隣に腰を下ろすと、星もその隣に座った。

「デイビッドがね。エリーに何かケーキをたくさん買って持って行きたいんだって、それでエリーにこっそり何が好きか聞いてきてくれっ

て頼まれたのよ」

「ふくん。それで私の好きなケーキを聞きにきたの？」

「そう。エリーってケーキは何が好きだっけ？」

天を見上げ考える素振りを見せるエリエ。

そして、しばらく考えた末にエリエは「うくん。嫌いなケーキは特にないなかな」と呟く。その後、エミルは「ふくん」と言うのと再び質問をぶつけてみた。

「エリーはどうしてデイビッドと仲良くできないの？」

それを聞いたエリエの表情が一気に曇った。

「……だって。男性と仲良くするって、どうしたらいいか分からないんだもん。エミル姉はどうやってデイビッドと仲良くなったの？」

「えっ!? どうやって? ……どうしてかしら。でも、普通に友達として接してれば仲良くなれるわよ」

「……普通に接してるつもりなんだけどなあ」

エミルの言葉に、エリエは複雑そうな表情で俯き加減に小さく呟く。どうやらエリエは、デイビッドに対しても普通と同じように接していると思っているらしい。

首を傾げている彼女に、エミルが優しい声音で尋ねる。

「エリーはさ……デイビッドの事が好きなの？」

「えっ!? なっ、え、エミル姉が何を言ってるかわからないんだけど?!!」

エリエは驚いたように目を丸くさせ、手を激しく左右に振っている。

その反応を見ていると、エミルは確信にも似たものを感じ取っていた。まあ、こんな反応されれば、他の誰が見てもバレバレである。

(なるほどねえ。これは間違いなさそうね。好きな子に意地悪したくなる。みたいな感じなのかしら……)

エミルは心の中で呟くと、徐ろに口を開いた。

「——そうだ。ならケンカにならないように、お互いの直して欲しい事を言い合えばいいんじゃない? そうすれば、今よりは仲良くなれるでしょ?」

(まあ、今のままでも凄く仲がいいような気がするけど……)

エミルは心の中でそう呟きながらも、気取られないように、落ち込んだような表情のままのエリエに提案する。

「そっか！ あっ、でも……またケンカになりそう……」

だが、エリエはそれを聞いて少し表情を明るくしたが、また落ち込んでしまう。

エリエは意識してやっているわけではなく、普段から無意識に出る態度であり。正直、彼女ではコントロールできないのだろう。

そんな彼女にエミルが優しい声で語り掛ける。

「大丈夫よ。私も一緒にその場に居てあげるから……」

「……ほんとに？」

「ええ、もちろんよ。それじゃー、デイビッドにメッセージを入れておくわね。時間は何時がいいかしら？」

「うーん。そうだなあ〜」

エミルにそう聞かれ、エリエは唸るとそのまま考え込んだ。

星はその様子を横目で見てみると、ふとある事に気が付く。

(この話って私が居なくてもいいんじゃないのかな？ どうして私はここにいるんだろう……)

今までの会話の中で、自分がこの場にいる必要性を感じなかった星はそう思いながら不思議そうにエミルの横顔を見つめていた。

一難去つてまた一難3

エミルに勢いだけで連れて来られた感じが否めない星にとって、この時間は退屈以外の何ものでもない。

頭の上のレイニールと話をしようにも、ハンバーガー屋の件を未だに引きずっているのか、レイニールはツンとした態度を崩す様子もなく。

星がレイニールの方を見上げると、顔を逸らす有り様だ――。

「……はあく」

大きなため息をつくとき、どうしようもない状況に、星はその場に項垂れている。

そんな星の様子に気付く様子もなく2人は話を続けた。

「時間が決まらないなら、少し時間を置いて夕方くらいがいいんじゃないかしら。エリーも今すぐについて感じでもないでしょう？」

「……うん、それがいいかも。でも、それまでは何をして時間を潰すの？」

不思議そうにそう尋ねるエリエに、エミルはにっこりと微笑むと「ならちよつと付きあつて」とエリエと星の手を強引に引いて歩き出した。

3人は街から出ると、少し離れた場所にある「アシフ高原」へとやってきた。

草が生い茂りどこまでも続く野原――そこには牛や馬、羊の姿をしたモンスターがあちらこちらに見ることが出来る。

実際に実在する大きさよりだいぶ大きいが、それはモンスターということで納得するしかないだろう。

なにやらやる気に満ち満ちた表情でいるエミルに対し、2人はどうしてここに連れて来られたのか分からず、困惑した表情でお互いの顔を見合っている。

「さて、それじゃー。晩御飯の食材とぶとんの材料を集めるわよ！」

「……えっ?」

エミルのその言葉に、2人はただただきよんとしてその場に立ち尽くしている。

全く状況を読み込めていない2人とは対照的に、エミルはアイテムの中から徐に巻物を取り出すとソードアーマードラゴンを召喚した。召喚されたドラゴンは「グオオオオツ!!」と雄叫びを上げると、その無数の剣が生えた背中から、一本のクレイモアが空中に向かって撃ち出された。

エミルはそれを掴むと、呆気に取られて立ち尽くしている2人に叫ぶ。

「ほら、2人とも何をぼんやりしているの？ 時間もあまりないんだから早く武器を抜きなさい！」

「は、はい！」

2人はエミルに急かされるように剣を抜いた。

互いに剣を握りながらも、そのエミルのテンションの高さにたじろぐばかりだ――。

「さて、何から狩ろうかしら」

剣を担いでやる気満々の様子で辺りを見渡しているエミルに、エリエが恐る恐る声を掛ける。

「――あのさ、エミル姉。食材って別に街で買えば良いんじゃないかな？」

「……わ、私もエリエさんに賛成です。ダンジョンから出たばかりですし……」

エリエのその意見に賛同するように、星も小さく呟く。

本音を言えば2人共、普段の数倍高いテンションのエミルに恐怖にも似た感情があったのは確かだ。

出来る限り早めに、この場所からもエミルからも開放されたいという思いが一致したのだろう。

しかしエミルは、コマンドを操作してその言葉を華麗にスルーすると、2人になつこりと微笑んだ。

「さあ、始めよつか！」

「は、はい……」

その満面の笑みにこれ以上言っても無駄なのを悟ったのか、2人は諦めたように小さく返事をした。その後、エミルは何かを見つけたのか急に走り出す。

星とエリエもその後を渋々追いかけると、しばらくして高原の中にごくく黒い集団を見つけた。

「へえ。あれはブルアバイソンね」

「ブルアバイソン？」

星が聞き返すとエミルではなく、エリエがその間に答えた。

「星もモディールバイソンは知ってるでしょ？」

「モディールバイソン？ ってなんでしたっけ……？」

「もう忘れちゃったの!? はあ。しかたないなあ……」

星がまた首を傾げると、エリエはにやりと笑みを浮かべ星のお腹をさすった。

その手を見た後、星が不思議そうにエリエの顔を見つめた。すると、ニヤリと笑ったエリエが告げる。

「前に私と一緒に美味しく頂いた牛さんだよ。思い出さないと、化けて出てくるかもよ？ 牛さんの祟りは怖いぞ」

「ひっ！ えっ?」

星はその言葉で全てを思い出したのか、怯えながら慌ててお腹を押しさえた。

エリエは悪戯な笑みを浮かべながら。

「あははっ！ 大丈夫。データだし化けて出たりしないって！」

っと大きな声で笑うと、エミルの大きな声が響いた。

「エリーうるさい！ 逃げちゃうでしょ！ 静かにして!!」

「あっ……うん。ごめんなさい」

突然。鬼のような剣幕で怒られたエリエは、しゅんとして体を小さくまとめる。

「よしよし……大丈夫ですか？」

落ち込んでいるエリエの頭を星が優しく撫でると「ありがと。星は優しいなあ」と抱き付き、エリエも星の頭を撫で返した。

「それでね。モディールバイソンは牛肉が一番美味しいの。ブルアバ

イソンも美味しいんだけど、ちよつと筋が多いから必然的に煮込み料理とかになるんだよね〜」

「へえ〜。そうなんですわね」

自慢げに話すエリエの話聞きながら、エミルの方を見ていた星が口を開いた。

「それにしても、エミルさん。なんだか真剣ですわね」

「そういえば。今日はいつにも増して迫力があるというか、ピリピリしてるね……」

「なにかあつたんでしようか……」

いつもと違うエミルの様子に小声で話すと、2人は顔を見合わせて首を傾げる。

確かにエミルがこれほど神経質になっているのも珍しい。おそらく、彼女を駆り立てるなにか重要な出来事があつたのだろう。

それががしやどくろを倒したことが理由なのか、何かは分からないものの、少なくとも星とエリエ絡みではないことは決定している。

普通に考えて、何かサプライズを考えているならその本人に準備を手伝わせるわけがないからだ。

「ほら。2人とも行くわよー!!」

エミルは2人に微笑むと「頑張れば美味しい料理が食べれるわよ〜」と自信たつぷりに言うと、両手に持った剣を構えブルーアバイソンの群れに飛び込んでいった。

「……って、エミル姉料理できないじゃん」

「……そうですわね」

2人はエミルに聞こえない様に言うと、お互いに思い出すところがあるのか、憂鬱な気持ちになりながらその後が続く。

結局それから数時間にわたり、大きな牛を黙々と狩り続けた。

星も頑張ったが、殆ど頭上のレイニールの指示のもとで逃げ回っていた記憶しかない。

「はあ……はあ……もう。動けない……」

「はあ、はあ……もう私も無理〜」

星とエリエは汗だくになりながらその場に力無く座り込むと、空を見上げて弱音を吐いた。

2人のそんな様子を見ていたエミルは腰に手を当てると、呆れた様子でため息をつく2人と違い、エミルは汗1つかかずに涼しい顔で立っている。

「はあく。星ちゃんはともかくエリーはもつとシヤキツとしなさい！ そんな事じゃデイビッドに嫌われるわよ？」

「うえ、エミル姉殿しい。それに、こんなにたくさん肉集めてどうするのさ!？」

エリエは自分達の後ろに山積みになされた肉の山を指差した。

エミルはにこつと微笑むと「後で分かるわよ」つと言つてコマンドを操作し、アイテムバッグを取り出すと、その肉をその中へと移していく。

アイテムバッグとは持ちきれなくなったアイテムなどを簡易的に入れるアイテムのことで、食材などの生産系のアイテムを大量に持ち運ぶ際に、所有アイテム内を圧迫しない為の道具の事である。だが、それほど珍しいものではない。普段からお菓子作りが趣味のエリエも回復アイテムを持たずに、このアイテムバッグと調理済みのお菓子でインベントリがパンパンになっている為だ――。

「それにどうしてエミル姉はそんなにごきげんなの？ そのモチベーションの高さはちよつと変だよ？」

「ふふふつ。さつきメツセージが残つててね。今日の夜にイシエが来るのよ。だから食材をたくさん集めておかないとでしょ？」

「ほんとに!?! わーい！ なら今日はイシエルさんの手料理が食べられるの!?!」

エリエは両手を上げて喜んでる。その様子を見ていた星は、ただただ理解できずに首を傾げていた。

そんな星に気が付いたのかエミルが口を開く。

「ああ、星ちゃんはイシエを知らなかったわね。イシエルは私の現実での友達なのよ」

「……そうなんですか？」

「そう。イシエルさんは料理は凄く上手でね。きっと美味しい物を作ってくれるよ？」

星はそれを聞いて少しほっとした顔を見せる。

おそらく。星はエミルが料理を作らないという事実を聞いて安心したのか、胸に手を当て「ふう〜」と息を吐いた。

「……なんだか星ちゃん嬉しそうね」

その様子を見たエミルが耳元で不満そうな声を上げる。

それを聞いた星はビクツと驚き身を強張らせると、慌てて両手を振って否定する。

3人は街の入り口に戻ると、エミルの元にメッセーじが届いた。

「——グッドタイミングね！ デイビッドからよ。準備ができたからエリーを呼んできてほしいって」

「場所は!？」

「街の時計台の前で待ってるみたいよ？」

「分かった。すぐに行くって伝えておいて!」

エリエはそう告げると、足早に時計台の方向へと歩き出した。

何だかんだで、エリエもデイビッドのことを気にしているのだろう。それを見たエミルは微笑みを浮かべている。

「……あの時の……時計台……」

だが、星は『時計台』という言葉聞いて、表情を曇らせている。

それもそのはずだ。星にとってあの時計台での出来事は、つい昨日のことのように思い起こせるほど鮮明に覚えていた。何故ならあの場所は、この悪夢のような現状を突き付けられた場所だったから……。

「もう、エリーったら。行きましようか、星ちゃん」

「……………」

「……星ちゃん？」

エミルが星の手を引いて歩き出そうとすると、星は無言のまま場所に留まっている。

すると、歩みを止めた星が徐にエミルの顔を見上げ、ぎこちなく微

笑んだ。

「エミルさん。私、ちよつと疲れちゃったみたいで……先にお城の方に戻っていいですか？」

「えっ？ そうね。疲れちゃったわよね。ならデザートドラゴンを出しましょうか？」

エミルは星の様子から何かを悟ったのか、星に向かって優しく微笑む。

星はその申し出に、少し間を開けて口を開く。

「いえ、レイニールもいるので大丈夫です」

星はエミルの手を放して背を向けると、ゆっくりと歩き出す。

エミルはそんな星の後ろ姿を無言のまま見送ると、エリエの後を追いかけた。

一難去つてまた一難4

エリエ達が時計台に着くと、モニターの前でデイビッドが空を見上げながら座っていた。

「デイビッド！ エリーを連れてきたわよ〜」

エミルがそんな彼に手を振ると、デイビッドの瞳が2人の方に向いた。

先程とは打って変わって、エリエは険しい表情になる。モニター前の扇形に広がった席に腰を下ろしていたデイビッドが、ゆっくりとその場に立ち上がる。

デイビッドはそんなエリエの元へと歩み寄ると、重い口を開いた。

「……エリエ。その、さつきはすまなかつた……許してほしい」

「……………」

それを聞いたエリエは無言のまま目だけ逸らすと、少し間を空けてぼそつと呟く。

「……ケーキは？」

「——えっ？ 今なんて…………？」

首を傾げる彼にエリエがさつきよりも大きな声で。

「だから！ ケーキを食べれるって聞いたから来たの！ ただそれだけよ…………」

そう言い放つと、エリエはプイツとそっぽを向く。

もちろん。エリエ自信はもう怒っていないのだが、小っ恥ずかくてデイビッドとまともに目を合わせられないのだろう。まあ、あれだけの険悪なムードになっていながら、ケーキで釣られたと思われた方が余程恥ずかしい気もするが……。

最初は呆気にと取られていたエミルが慌てた様子で、頬を赤らめながら腕を組むエリエの耳元でささやいた。

「……ちよつとエリー。そんな言い方したらまたケンカになるでしょ？ ダメよ、そんな事言ったら……………」

「…………だ、だつて〜」

「大丈夫。ここは私に任せて…………ね？」

その言葉に情けない声を上げるエリエに、エミルはそう言つてにっこりと微笑んだ。

デイビッドはそんなエリエを見て少しイライラしているのか、俯きながら拳を握りしめている。それを見て、エミルが慌てて告げる。

「デイビッド。立ち話もなんだし、ケーキと紅茶でも食べながらゆつくりお話ししましょう」

「ああ、そうだな……でもどこで?」

「そうねえ」

2人が「うーん」と唸っていると、エリエが口を開く。

悩んでいる2人に、予想だにしない提案をしてきた。

「——なら、私の家に来る? テーブルくらいならあるけど……?」

エリエは目を逸らしながら、強気な態度を崩すことなく、やや棘があるような言い方で言った。

その申し出に2人は頷くと、エミルは巻物でデザートドラゴンを召喚し、それに乗って3人はエリエの家へと向かった。

* * *

エミル達と別れ自分だけ城に戻る最中。レイニールは星の頭の上で、膨れっ面をしながら終始不服そうにしていた。

「むう、主。どうして着いて行かなかったのだ?」

レイニールは星の頭の上で揺られながら、街の中を歩いていく星に声を掛けた。

その間に、星は表情を曇らせてつつも少し俯き加減に答える。

「……時計台はね。私の一番嫌いな場所なの——あそこに行くとき色々。この世界に閉じ込められた時を思い出しちやうから……」

「……主」

そんな浮かない表情の星を見て、レイニールも何かを察したのか、それ以上は口をつぐんで言葉を発することはなかった。

しばらくして、無言のままなおも歩みを進めている星の頭を、レイニールが優しくぽんぽんと叩いてきた。

「——大丈夫だぞ、主……。主は何があっても我輩が守るから安心するのじゃ！」

「……うん。ありがとう。レイニール」

「——レイでいいのだ！ フルネームで呼ばれると、我輩もなんだか体が痒くなる……」

レイニールは体をブルツと震わせると、恥ずかしそうに明後日の方向を向いた。

星はそんなレイニールに、につこりと笑った。

街を抜けてレイニールと星はエミルの城の近くまで来た時、ふと何かに吸い寄せられるかのように星は森の中へと入っていった。

何かは分からないが誰かが自分のことを呼んでいる様なそんな感覚に、星は森の奥へと向かっていった。

星は木々の間を進む中、ただ遠くを見つめながら小さく呟く。

「……呼んでる……」

「なに!? 主、いったいどこへ行くのだ！ そっちは危険なのじゃ！」
星はレイニールの制止も聞かずに、虚ろな瞳のまま森の中を奥へと進んで行く。

森の中には、平地よりも強力なモンスター達が数多く生息している。しかし不思議なことに、この時は何故か森の中にはモンスターどころか、街の近くだというのにプレイヤーの人影すら見えなかった。そんなことを気に掛けることもなく。虚ろな瞳で進んで行ったその先には、エメラルドグリーンに染まった湖がキラキラと水面を乱反射させている。

星はその湖のすぐ側まで行った所で、ようやくその歩みを止めた。

「——ッ!? えっ? ここはどこ……?」

意識が戻ったのか、星はきよろきよろと辺りを見渡している。

その時、目の前にレイニールがパタパタと翼を羽ばたき、宙に浮いているのが目に入ってきた。

レイニールのその瞳が鋭く星の顔を睨んでいる。

「——主。これはどういう事だ……?」

「……えっ? どういうって……なに?」

星はその言葉の意味が分からずに首を傾げた。

レイニールは鼻先を星の顔に押し付けるようにして、なおも睨みつけてくる。

まあ、レイニールが怒るのも無理はない。星の意識が飛んでいた間、レイニールはずっと進み続ける星に呼び掛けていたのだから。

「なぜ我輩の言葉を聞かなかったのかと聞いているのだ！」

「ご、ごめんなさい……」

よく分からないがその視線に耐えかねた星が謝ると、レイニールもしょんぼりとした様子の星を見て、少し怒りすぎたと反省したのか。

「しかたない。今回だけは多めに見るのじゃ」

つと、レイニールがパタパタと翼をはためかせると、ちよこんと星の頭の上に乗った。

その直後、レイニールが前を向いたまま星に尋ねる。

「それで主。あの湖の真ん中の光る物はなんだ？」

「……えっ？ どうっ？」

「ほれ、あれじゃー！」

レイニールはそう言っ手て手を前に突き出すと、湖の石の上に突き刺さっている表面を苔に覆われ、周囲にツタの絡みついた十字架のような物を真っ直ぐ見つめている。

星はレイニールの指差す方に目を向け、目を見開いて注意深く観察する。

(なんだろう、あれ。胸がざわざわして……でも、落ち着くような。なんだか不思議な感じがする……)

そう思いながら胸に手を当てると、星は水面に浮かぶように出た岩に突き刺さったその得体の知れない物体を、食い入るよう見つめていた。

レイニールはそんな星の様子に気付き、笑みを浮かべると星の服を掴んだ。するとその直後、地面の上に立っていたはずの星の体が徐々に浮遊する。

「……えっ？」

「気になるなら、自分の目で直接確かめるのが一番だぞ。主」

「えっ!? ちょっとレイ! えええ!!」

にやりと笑みを浮かべたレイニールは、星の体を宙へと持ち上げると、水面に浮かぶ様に佇む石に刺さった物体の方へと向かった。

星はその突然の行動に怯えた表情で、水面を見つめたまま体を強張らせている。その理由はとでもシンプルなものでただたんに水が怖いのだ――。

親が仕事で忙しかった星にとって、プールには授業など以外ではいったことがない。その為、泳ぎ方どころか顔を水につけることすらできなかった。

石のある場所は湖の中央付近。しかも湖の水かさは水面から底が見えないことから見ても、子供で、それも金槌の星が落ちればひとたまりもないだろう。

底が見えない湖はまるで宇宙の様だ――泳げない星からしてみれば、ただただ恐怖でしかない。

(うう……深い。底が見えないよ……)

「……レイ」

星は不安そうな表情で自分を吊り上げるレイニールを見た。

レイニールはそんなことなど気にする素振りも見せず、真っ直ぐ十字架の刺さった岩へとの距離を詰め真上までいくと。

「さあ、主。着いたぞ!」

そうレイニールが叫んだ直後。掴んでいた星の服を持っていた手を放した。

レイニールという浮力を失った星の体が湖の石に向かって急降下する。

「実際に触ってみるのじゃ! 行つてこーい!」

「……えっ!? いやあああああああつ!!」

星は瞳に薄っすら涙を浮かべ、叫び声を上げながら石に刺さった十字架を掴んだ。

なんとか首の皮一枚で命拾いしたという表情の星が、石に突き刺さった十字架を放すまいと懸命に握り締めている。

(はあく。助かった……でも、あれ? これって……)

星は自分が必死に握り締めている十字架を見て、その不思議な形状に首を傾げた。

それは苔と草に覆われていて全体は分からないが、石に刺さったそれは十字架というより刃先の刺さった剣のようにも見える。

呆然とそれを見つめていると、頭の上の方でレイニールの声が聞こえてくる。

「主く。どうだ？ 満足してくれたか？」

「……むうう」

星は手を腰の辺りに当てながら誇らしげに星を見下ろしているレイニールを睨みつけると、右腕を空へと突き上げた。

「もう！ 急に放したら危ないでしょ！ 私泳げないのに！！」

「そこは大丈夫だ。もしも水の中に落ちたら我輩が全力で助けてやるぞ。安心して落ちてくれればいい！」

「なっ！ そんな無責任だよ。どうして泳げないのに私が水に落ちなきゃいけないの!? そんなの。冗談でもないやに決まって……」

レイニールの無責任過ぎる発言に、声を荒げていた星が勢いあまつて十字架を掴んでいた左腕を振り上げてしまう。

すると、スポツという音が聞こえそうなくらい意図も容易く十字架が岩から抜け、そのまま星の体が水中へと吸い寄せられるように傾いていく。

星は徐々に迫る素面を見据えると。

「う……そ……いやあああああアツ!!」

両手をバタつかせ、なんとか重力に抗おうとするが時すでに遅し……。

——ジャボーンツ!!

次の瞬間。悲鳴を上げたまま、星の体は水しぶきを上げながら勢い良く湖の中へと落ちてしまう。

「はっ……うはっ！ ……んぱっ！ た……すけ……」

水に落ちた直後、手足を必死にばたつかせなんとか水面に顔を出そうともがくが、濡れた服の中に水が入って予想以上に重くなっている、思うように体が動かせない。

さらに必死に声を出すと、今度は口の中へと水がどんどん入り込んでくる。

(……死ぬ。こんなの本当に死んじやうよ!)

必死にもがけばもがくほど、体力を消耗しどんどん沈んでいく――

咄嗟に出した渾身の、星のこれまでの人生で培ってきたスキルを全て込めた犬掻きも、全くその意味をなさず『もうダメ……』そう思った時には、もう手足の動きも止まり体は沈みはじめていた。

星はその中で意識を失いかけてしていると、体が何かに勢い良く引つ張られ、水面から水上に引き上げられた。

そのまま岸辺まで運ばれると、仰向けに寝た星の胸の辺りに勢い良くレイニールが体当たりしてきた。

その直後――。

「うっ……ごほっ! ごほっ! はあ、はあ、はあ……」

溜まっていた水を吐き出すと、星は青白い顔で素早く息を繰り返す。

「大丈夫か? 主……それにしても、本当に泳げないのだな。びっくりしたぞ!」

それを他人事だと思っている、レイニールは「わはっはっはっ」と笑いながら、腰に手を当てている。

それを見て、星の心の奥底から悲しみが込み上げてきた。

「――ひくっ……ひくっ……だ、だから……だめって……言った……のに……」

星はレイニールの姿を確認すると、悲しみが溢れぼろぼろと涙を流しながら、その場に座り込んで手の平で顔を覆った。

レイニールは申し訳なきように泣いている星を見つめ項垂れていた。

* * *

星が溺れかけていたその頃……。

エミル達はデザートドラゴンの背に揺られ、街の近くの森の中を進んでいくと、大きなウッドハウスが見えてきた。

家全体は横に広く2階建てで屋根は赤く塗られ、家の隣には針葉樹の木が植えられている。

小じんまりとした日本のものとは違う広々としたその造りは、いかにも海外のログハウスという感じだった。それもエリエが日本人ではないからなのだろう。

「見えたー！ あそこが私の家だよ！」

エリエはデザートドラゴンから身を乗り出して、嬉しそうに家の方を指を差している。

「へえ〜。そういうえば長い付き合いだけど、エリエの家に行くのは今日が初めてだな」

「ふふっ。家の外も中もエリーの理想のお家なんのよねえ〜」

微笑んでいるエミルに「うん！」と頷き、エリエはにっこりと微笑み返す。

この口振りからして、エミルは何度かこのログハウスに来たことがあるのだろうか。

家の目の前にデザートドラゴンを待たせ、エリエの先導の元で家の扉を開けるとデイビッドはさらに驚きの声を上げた。

殆ど仕切りのない広く開放的な家の中には木の香りが漂い。壁にかけられた橙色のランプが辺りを照らしていて、実にモダンな雰囲気醸し出している。

エリエの家と言うこともあつてか、デイビッドはもつと子供っぽい——なんなら、外は普通でも、家の中はお菓子で覆い尽くされたお菓子の家くらいのイメージでいたのだろうか。

「おお〜。中は随分と立派だな……おっ！ 暖炉まであるのか!?!」

デイビッドは興奮気味に叫ぶと、部屋の端に暖炉を見つけ、その場所まで駆けて行った。

エリエはそんな彼の様子を、にこにこしながら眺めていた。余程、自分のデザインした家が褒められているのが嬉しいのだろう。が、次の彼の言葉にその雰囲気が一変した。

「うわあ……よく見たら、ぬいぐるみだらけだ。せつかくの雰囲気も、ぬいぐるみがあるだけでまるで子供部屋だな……」

「……………くっ」

「……………ちよ、ちよつとデイビッド!!」

デイビッドの言葉を聞いて俯きながら拳を握り締めているエリエを見て、エミルが慌てて声を上げる。

確かにデイビッドの言うように暖炉の周りには、一人用のウッドチェアと動物のぬいぐるみが数多く置かれていた。

普段はこのぬいぐるみをクッション代わりに抱きながら、憩いの時間を過ごしているのだろう。だが、デイビッドはそんなエリエの様子に気付くこともなく言葉を続けた。

「それに、壁際にこんだけぬいぐるみが置いてあつたら、誰かに見られてるみたいで落ち着くものも落ち着かないよな——外見は良い家なんだが残念だよな……うん」

「……………くっ!」

「ちよつとデイビッド! こっちにいらつしやい!」

エリエがデイビッドを殺意の籠った瞳で鋭く睨んだのに気づき、彼女が何か言い出す前にとエミルは慌ててデイビッドを外へと連れ出す。

「ちよつと、デイビッドとどこ行くのよ、エミル姉!」

「こっちが聞きた……んっ!」

「——ああ、ちよつとデイビッドと話があるから、ちよつとだけ待ってね」

「う、うん。別に良いけど……」

エミルは何か言おうとしたデイビッドの口を手で覆うと、不思議そうに首を傾げているエリエに微笑み、デイビッドを強制的に外へと連れ出した。

2人は近くの針葉樹の木の下までくると、エミルが鋭い目付きでデイビッドを睨みつけた。

「ちよつと! エリーと仲直りするんじゃないの?」

エミルは強い口調で言うと、デイビッドはその彼女の雰囲気気圧

されながらも口を開く。

「でも、あの落ち着いた空間にぬいぐるみというのは男の俺には……」
「好みは人それぞれでしょ！ エリーの家なんだからいちいち文句言わない！ だいたいあなたは——」

デイビッドはそれからこんこんと説教をされ、精も根も尽き果てた状態でティーカップを容易しているエリエの元に戻ってきた。

それとは対照的に満面の笑みで戻ってきたエミル。

そんな真逆の2人を見て『いつたいなにがあつたんだろう』とエリエは困惑した表情を見せる。

一難去つてまた一難5

3人はテーブルに着いて向かい合うと、デイビッドの持ってきたケーキを見つめていた。

目の前に置かれたイチゴのショートケーキに熱い視線を向けたまま、エリエは微動だにしない。

まるで子供のようなエリエの姿に、まエミルがくすつと笑うと徐に手を叩く。

「——さあ、早く食べちゃいましょう！ 紅茶も冷めてしまおうし。話はその後でもいいでしょ？」

「う、うん！ そうだよね……なら、いただきます！」

エリエはそれを聞いてぱあーつと表情を明るくすると、フォークをケーキに入れ嬉しそうに口の中に運んだ。

「うくん。おいしい♪ まだそんなに経ってないのに。もう久しぶりに甘い物を食べた気がするよっ！」

「そう。それは良かったわ。ねっ！ デイビッド」

本当に嬉しそうに次々にケーキを口の中へ運んでいくエリエを見て、エミルがにっこりと微笑みを浮かべデイビッドの顔を見た。

デイビッドも嬉しそうなエリエを見て「そうだな。エリエが喜んでくれたなら良かった」と静かに頷いた。

結局デイビッドの持ってきたケーキの大半がエリエのお腹の中に収まり、満足そうな顔で紅茶を飲んでいる。

（ふふっ、エリーも満足してるみたいね。これなら落ち着いた話が出来そう……この子は甘い物に目がないから、この作戦が一番だと思っただけど、効果は予想以上ね！）

エミルは落ち着いたほつと一息つくエリエに、そう心の中で呟きデイビッドに目で合図を送った。

デイビッドはその合図を察したのか、神妙な面持ちでエリエに話し掛ける。

「——エリエ。その……ケーキは美味かったか？」

「ん？ あ、うん。先輩にしてはいい選択だった……かな？」

「そうか。それで、俺の事は許してくれるか？」

デイビッドが真剣な顔でエリエに尋ねると、エリエは俯いて口を閉じた。

そんなエリエを見兼ねてその背中を押すように口を挟む。

「デイビッドもそう言ってるんだし……もう許してあげたら？ エリー。甘い物も食べたし。もう頭もしっかりしてきてるでしょ？」

「……うん。エミル姉がそう言うなら」

エリエは恥ずかしそうにしながらも、意を決してデイビッドに向かって右手を差し出した。

突然のエリエの行動を見て、デイビッドが不思議そうな顔をする。

「ん？ これはなんだ？」

「なにつて、握手！ 分かんないの？ ……仲直りするんでしょ？」

エリエは頬を赤く染めながら更に手を前に突き出すと、デイビッドから目を逸す。

デイビッドはその白く細い手を大きな手で握り、エリエの顔を見て微笑んだ。

「仲直りは済んだようね——なら、次はお互いに改善して欲しい部分をじっくり話し合いませんか？」

握手している2人を見て言った。

エリエとデイビッドは少し複雑な心境なのか、そんなエミルに不安そうな瞳を向けている。

それから数分間。2人は向かい合ったままお互いに一言も言葉を発しない。

重苦しい雰囲気の流れるばかりで、エリエとデイビッドは一向に言葉を発しようとしない。

エミルはその様子に大きなため息をついて、徐ろに口を開いて席を立った。

「……もう時間も遅いし。私は肉を届けないといけないから、先に戻ってるわね。デザートドラゴンを置いていくから、2人はじっくり話し合ってから来て！」

「おつ、おい！ 俺達を置いていくって話が違うぞ!？」

「えっ!? ちょっとそんなの困る〜! 待ってよエミル姉!!」

2人が慌てて彼女を引き留めようとする。「ふふっ。ごゆっくり」と悪戯な笑みを浮かべてエミルは玄関を出て行った。

エミルは家の外に出ると、新しく召喚したリントヴルムの背に飛び乗り城へと向かって飛び立っていく。

家に残された2人は、しばらくの間。途方に暮れていた。

まあ、企画したエミル本人がいなくなつて、突然エリエとデイビッドだけ残されても、どうすればいいのか分からないのだろう。だが、その沈黙を破るように突然デイビッドが笑い出した。

エミルはその突然の行動に驚き、目を丸くしている。

「——いや、今日のエミルは少しいい加減だと思つてな。いつもは周りを優先してるのに………なんたつて今日はあんなに自分勝手なんだ?」

デイビッドは冗談交じりにそう言つて笑うと、エリエに尋ねた。

彼のその間に、エリエは考えることなく答えた。

「ああ、今日はイシエルさんが来るんだつてさ。私と星もさつきまで狩りに付き合わされて大変だったんだから〜」

「へえー」

そう言つて苦笑いしているエリエにデイビッドは素つ気なく返すと、真剣な表情で再び質問してきた。

「エリエは………その。俺のこと、嫌いか?」

「………えっ?」

何の突拍子もなくデイビッドの口から出たその直球な質問に、エリエは思わず口をつぐむ。

例えば口下手だったとしても、突然『俺のこと、嫌いか』なんて言われれば、誰だつて返答に困るだろう。

その彼女の反応を見て、デイビッドは納得したように徐ろに口を開いた。

「やつぱりな………薄々感づいてた。お前は俺が嫌いだつて事は………だが、あえて聞かないようにしていたんだ」

「えっ？　なにを言っているの……？」

エリエはデイビッドが何を言っているのか理解できずに、呆然とした様子で彼の顔を見つめている。

デイビッドは膝の上に手を乗せたまま、目線を合わせずに言葉を続ける。

「嫌われているのは分かっていた……だから、年齢を利用してお前に先輩って無理やり呼ばせて、あえて距離を置こうとしていたんだ。それでも、お前の側から離れなかったのは……お前が心配だったからかな……お前は俺達のギルドでは一番年が若かったからな。入った時に守ってやらないとって、いつも思っていた。だが、今回の戦闘ではつきりしたようだ……」

デイビッドはそう言っただけで遠い目を見ると、何かを決心したかのように静かに頷いて告げる。

「……もうお前は、俺がいなくても十分戦える。いや、それどころか今では俺の方が足を引っ張っているくらいだ。俺はな、エミル。旅に出ようと思うんだ……この『炎霊刀 正宗』を星ちゃんから受け取った時——あの子はこのレア武器に何の未練も無いような瞳で微笑んでいたんだ。その時に、この子を絶対に現実の世界に帰してあげよう」とこの刀に誓った。だから——」

「——はあ……バカじゃないの!?!」

デイビッドの言葉を遮る様にエリエが声を上げた。

俯き加減でいたデイビッドは突然『バカ』と言われたことに反論しようとして、エリエの顔を見上げた瞬間、言葉を失ってしまう。何故なら、そう言い放った目の前のエリエの瞳からは、涙が溢れ出していたからだ。

「——エリエ。お前……」

「あんたじゃ旅に出たって……すぐ死んじゃうでしょ？　それに今まで私を守ってくれてたんなら……今度は私がデイビッドを守る番じゃない！　勝手にいなくなったりしたら……承知しないんだからね!!」

「エリエ……お前。俺の名前を間違えずに……いや、それでも間違っ

てるけど……俺の名前はガ——」

デイビッドがそのことに驚きながらも誰も呼んでくれない『ガイア』というキャラネームを言いかけたその時、エリエが突然席を立ってデイビッドの所まで走ってデイビッドの体に飛び付く。何かする暇もなく、デイビッドの体は椅子ごと音を立てて地面に倒れた。

エリエはデイビッドに体を密着させるように抱き付くと、デイビッドの胸元にエリエの柔らかい胸の感触が伝わってきて一気に心拍数が上がる。

日本の侍に恋しているデイビッドは、リアルでも女性との交流は少ないのだろう。エリエの突然の行動に目を見開いたまま、ただただ動揺を隠しきれない様子だ——。

「ちよー。お、お前なにを……」

「デイビッドは本当にバカなんだから……嫌いな人間にこんな事しないでしょ?」

エリエは何とか起きあがろうとするデイビッドの耳元で小声でそうささやくと、じつとデイビッドの顔を頬を赤く染めて熱を帯びた瞳で見つめている。

デイビッドは咄嗟にエリエから顔を背けると、ぼそつと呟くように言った。

「……分かったから離れてくれ」

エリエは小悪魔のような笑みを浮かべ「分かればよろしい」と言って起き上がると、にっこりと微笑んだ。

デイビッドはそんな彼女に苦笑いを浮かべた。

「そうだ！ 私達もエミル姉を追いかけないと！ 行こ！ デイビッド」

「ああ、そうだな……エリエ」

「ん？ なに?」

「あの、なんだ……。こ、これからもよろしく頼む……な」

デイビッドは少し照れくさそうに言う、エリエは「うん！」と笑顔で返事をした。

その後、2人はデザートドラゴンの背に乗りエミルの城に向かって

進み始めた。

*
*
*

お風呂

しばらくの間、湖の岸边で泣いていた星も少し落ち着きを取り戻したのか服の袖で涙を拭いた。

しかし、服がびしょびしょに濡れているこの状態ではあまり意味がない。

結構な時間泣いていたが、泳げないにも関わらず湖に落ちた恐怖から来るもので、本人は死ぬと本気で思ったからに他ならない。

涙でぐしょぐしょになった顔が今度は服が吸い込んだ水でびしょびしょに濡れる。

「うう……ひぐっ……もう、中までびしょびしょ……」

星は濡れた体に張り付く服を伸ばしながら、小さな声でぼそつと呟く。

その時、ふと視界に地面に転がっている苔と草に覆われた剣が入ってきた。

星はその剣を掴むと突然剣全体が輝き出し、苔と草のない綺麗なロングソードが目の前に現れた。

黄金の剣に見るからに高価な装飾が施され、柄の先には赤い宝石が埋まっている。

「ほう、良い剣だな。主！」

「むう〜」

横からひよつこりと視界に入ってきたレイニールを、星が睨みつける。

その様子から、星は何も言わずに突然小さな石の上に落とされ、湖に落ちたことを根に持っているのだろう。

だが、泳げない星にとって、あのレイニールの行動はいささか軽率だったのも事実。

星としては、こればかりは意地でも許したくない。まあ、最悪の場合は死んでいた可能性もあるわけだから無理もない。

「いきなり放して悪かったのじゃ……」

レイニールは申し訳なきさそうにしゅんとすると、ゆつくりと地面に

着地した。

重い足取りでペタペタと地面を歩くと、明後日の方向を向いて眩く。

「……今から言うのは独り言だから聞きたくなかったら、聞き流してくれていい。剣を装備してコマンドの装備から、武器ステータスを確認できる。その後、良い物だったら装備すればいい。主の体に合うように調整されるから、今の剣のない鞘で大丈夫なはずじゃ……」

「……そうなんだ」

星はレイニールの独り言を聞いて、手に握られた剣を見つめた。

レイニールの言った通りにコマンドから剣のステータスを確認してみると、全てのステータスが「？」と表示されている。

装備した剣は星の身長に合わせて縮み。先程までは「？」表示だった名前とステータスは、何もかもが数字の羅列で表示されていて、どうい武器なのかさえ分からなかった。だが、不思議なことに名前の横には「使用者 星」とだけ表示されている。

星はそれを不思議に思い。レイニールに聞こうと向き返ると、レイニールはそのままトコトコと離れた場所に歩いていくと、その体が突如金色に光り輝いた。

すると、レイニールの体は見る見るうちに巨大化し、がしやどくろと戦った時の姿に戻る。

「主、我輩の背中に乗れ。そうなったのは我輩のせいだ——城まで送ろう……」

「うん。ありがとう……レイ」

そう言うと星を頭に乗せたレイニールは、大きな翼を羽ばたかせながら空へと飛び上がった。

星は手に握られた謎の武器に視線を落とし。

(きつと、そのうちにちゃんと表示されるようになるよね……)

自分に言い聞かせるように心の中で呟くと、レイニールの背中にしっかりと座った。

空に舞い上がったレイニールはできるだけゆっくり地上付近を飛んでいく。

それは服が濡れた星が少しでも体を冷やさないようにというレイニールなりの配慮だったのかもしれない。

案外、城の近くまで来ていたようで少し飛ぶと、城がレイニールの視界に入ってきた。

「主、城が見えたぞー！」

「……うん。ちよつと寒い……レイ、もう少しゆつくり……」

「すまんがこれ以上は無理じゃ、落っこちてしまう……」

「……そう、分かった……がまんする」

星はそう呟くと、震える体を丸めると両手で冷えた体を擦った。

レイニールは城の前に着陸すると、頭を地面に着け星を地面に下ろし、いつもの小さい姿に戻る。

目の前で震えている星を見て、心配そうに口を開いた。

「——大丈夫か？ 主、すまなかつた。我輩のせい……」

「……ううん。レイは悪くない。石の上で暴れた私が悪いの……ごめんね？」

そう星が謝ると、レイニールは手の平を返したように急に強気になる。

「そうだな。主が替えの服を持ってなかつたのが悪い！」

レイニールはそう言うと、星はしょんぼりとして「ごめんなさい」と謝る。

その後、星の服を手で掴むと、レイニールは星を宙に持ち上げた。

「えっ!? レイ、なにをするの?」

「なについて、このまま城の中に主を運んで行くに決まってるのじゃ。他にこうやって持ち上げる意味などないだろう?」

レイニールは無言を言わずに星を運んで城の中へと入った。

星達が部屋の前に着くと、レイニールは星を地面に下ろし部屋の扉を開いた。すると、中から聞いたことのない声が返ってくる。

「はくい。エミルおかえりなさい。ご飯にしはる? お風呂にしはる

? それとも……う・ち?」

「……………」

小走りで目の前に突然現れた見知らぬ少女の言葉に、星とレイニール

ルは無言のままどう反応すればいいのか分からず、その場に立ち尽くしている。

少女は薄い紫色の長い髪をしていて、エミルと同じ綺麗な青い瞳。そして髪には桜の髪飾りを付けていた。

雰囲気としては、柔らかい感じの優しそうな印象を受けたが、そんなことはこの際どうでも良かった。

一番の問題は彼女の身に付けていた服だ。星達は顔を真っ赤にしながら彼女を見つめていた。

いや、もはや服と呼べる代物ではない。何故なら、彼女は裸に白いエプロン姿という星が今まで生きてきて、一度も見たことのないような刺激的な格好で、ドアノブを掴んで顔面蒼白のまま固まっている。

「あ……あの……その格好……は？」

「あつ……あ、あかん！」

星が指差しながらそう尋ねると我に返った少女は今度は顔を真っ赤に染めて、慌てた様子で素早くコマンドを操作し服を着替えた。

今までのあられもない姿が嘘のような、桜の花びらがあしらわれた美しい紫色の着物姿に、星は思わず見惚れてしまった。

その後、すぐに落ち着きを取り戻した彼女は、星の体を下から舐めるように見ると、星の顔を見てにつこりと微笑んだ。

「うくん。まずはお風呂やね。ほな、行こうか」

少女は星の手を掴むと、強引にお風呂場へと向かって歩き出す。

「——えっ？ でも……あの……」

「ええんよ？ お風呂は沸かしたから遠慮せんでも」

「いえ……あの……服が……服があ」

星は必死に替えの服がないことを言おうとしたのだが、それが彼女に伝わっていたかは謎だ。いや、絶対に伝わっていなかったと思う……。

脱衣所に着いた星は困惑した様子で、上機嫌な様子で微笑んでいる少女の様子を窺っていた。すると、正面を向いた少女が、星の顔を真っ直ぐに見つめ。

「ほな、濡れた服は脱いで脱いで。はよ着替えんと風邪ひいてまうよ？ ばんざいして、はい。ばんざい♪」

「えっ？ あっ、は、はい。ば、ばんざい？」

星はイシエルに言われるがままに、首を傾げながらも両手を上げる。その直後、少女は素早く星の上着を脱がし、今度はスカートを脱がすと、パンツを地面近くまで一気に下ろす。

正直。その手際が良すぎて、状況を理解しようと思考していた星には全く抵抗すらできなかった。

羞恥心から顔を真っ赤に染めて恥ずかしがる星を尻目に、その少女が星の顔を見上げた。

「ほら、足上げんと脱がせられへんよ？」

「……えっ？ は、はい」

「うん。ええ子やねえ。ほな、服は乾かしくとくから、上がったら言うてなあ」

「——えっ!? あ、あの……」

彼女の手際の良さに抵抗する暇もなく。一糸まとわぬ姿にされ、少女は強引に星の背中を押すと浴室に押し込んで、笑顔で手を振ると浴室の扉を閉めた。

もう。なんと言うか、まさに一瞬の出来事だった……。

星は閉ざされた扉を見つめ途方に暮れると、その後、諦めたように浴室で大きなため息をつく。

「はあく。着替え持ってないのに……服を持って行かれちゃった」

湯気の立ち昇る浴槽を見つめ立ち尽くしていると、再び少女の声が聞こえた時、思わずびくつと体が無意識に反応してしまう。

「着替えはここに置いておくから、上がったらこれ着てなあ」

星は「はい！」と返事をすると、なんだか少し嬉しくなって笑みを浮かべた。

それは星がエミル達と出会ってから少しだけ、人とのコミュニケーションを取るのが上手くなったと感じていたからだろう。

自慢じゃないが、星は他の人よりも対人スキルが低い。それはリアルなことが影響しているのも大きいですが、本人も人と関わらなければコ

コミュニケーション能力が必要ないと考えていたところも大きいだろう。

現実的に言ってしまうえば、対人スキルがなくても生活はできるのは事実だ。コミュニケーションは最低限の返答ができれば、後は相手が必要な時に話し掛けてきてくれるのを待ってあげればいい。

その時も頷くか短い返事で殆どが解決するし。何より、相手もこちらが言葉が少ないと分かってくれば、対話を諦めて一方的に要件を告げるだけになるからだ——後は言われたことをそつなくこなしていれば、仕事でも日常でも何も支障はでないだろう。

自慢ではないが、星は同じ年の子供の中では比較的できる部類に属していた。協力しなければいけないことでも、効率よく行うことで時間は掛かるがこなせるのを知っていた。今までも、大抵のことはそうやってなんでも乗り切ってきた……。

だが、この世界に来て人とコミュニケーションを取る楽しみを、少しずつだが分かってきた気がする。

今回見ず知らずの少女とのコミュニケーションのやり取りができたということは、星にとって相当な自信に繋がっていた。

シャワーと浴槽を交互に見ると、星は迷うことなくシャワーを手に取った。

「せっかく沸かしてあるけど……水に浸かるのはいいかな……私が入ると、お湯が汚れちゃうし……」

何か嫌なことを思い出したのか、星は表情を曇らせると俯き加減に小さく呟いた。

星は体の隅々まで洗い。最後にシャワーで体に着いた泡を落とすと、すぐに浴室を出る。

「確か……着替えを置いておくとあの人……着替えて……まさかこれ!？」

星は彼女の用意した服を見て驚愕した。

そこには少し大きめのワイシャツ一枚が置かれているだけで、パンツなど下着の類はどこにも見当たらない。

だが、これを着るのを拒んで、ずっと裸のまま居るわけにもいか

ない。

『背に腹はかえられない!』

戸惑いながらも、星は置いてあつたワイシャツを羽織ると脱衣室を出た。

星はワイシャツの下に何も身に着けていないという恥ずかしさから、頬を真っ赤に染めながら、星に背中を向けてキッチンに立っている少女に向かって声にならない声を上げた。

「あ……あの……」

少女はそれに気が付き振り返ると、彼女はにっこりと微笑み両手を前で合わせると歓喜の声を上げる。

「まあ、まあ、まあ。すっごく似合ってるよ! もう想像以上やね!」

「……うう。ありがとうございます」

咄嗟に返事をしてしまったが、もちろん抗議をしようとして口を開いたんだが、彼女のペースに完全に乗せられてしまったようで……。

星は褒められたことでさらに顔を赤く染める。

だが、すぐに首を横に振ると決心したように口を開いた。

「あの! …ど、どうして……その……ワイシャツだけなのでしょうか……し、下着とかは……その……」

星は更に顔を赤く染めながらそう尋ねて口をつぐむと、少女は満面の笑みで答える。

「——ええ? 女の子は男性もののワイシャツを着る時は、下着を付けないっていうんが法律で決まっとるんよ? 知らんの?」

つと人差し指を立て言い放つ少女に、星は苦笑で返す。だが、そんなことを今まで一度も聞いたことがない。

しかし、そこで星は思った『男性ものの』というその言葉が、おそらくキーポイントになっているに違いない……普段から女性が男性の服を着ることはないだろう。

つと言うことは、星が知らないだけでそう法律で決まっているのかもしれない。目の前の少女はどう見ても星よりも年上で、普段着としての着物を着るくらい清楚な女性だ。一般常識も星とは比べ物にならないほど熟知しているのは年齢だけ見ても間違いはない。そして

何より、星は『男性もの』という言葉が引つ掛かって強く否定できなかった。

リアルでの星は母子家庭で、父親や男の兄弟も居ない——つという事は、男性が居ないということになる。そのこともあってか、星は自分が世間の常識からずれているのだと感じて、ただただ頷くしかなかった。

「そ……そうですよね……」

星はおかしいと思いつつも、その自信満々な彼女の表情に何も言えなくなり、俯きながらぶかぶかのワイシャツの裾を握りしめている。

「……ほんまはエミルに着てもらうはずやったんやけどな……」

彼女は残念そうに小さく呟く。

「……えっ?」

「ああ、なんでもないわ! こっちの話やから気にしなくてええよ。それよりココア飲むか? 持ってくるわ」

星が聞き返すと、少女は慌てて手を左右に激しく振って微笑むと、キッチンへと消えていく。そんな彼女の様子を見て、星は不思議そうに首を傾げた。

しばらくして、扉の開く音とともにエミルが駆けて部屋の中に飛び込んできた。

「——イシエ! ごめんなさい。ちよつと狩りに時間がかかって……って星ちゃん!? あなた。なんて格好してるの!!」

エミルはテーブルに少女と向かい合って座り、カップを持っている星の裸にワイシャツだけというとんでもない格好を見て啞然としている。

状況が理解できず、星は不思議そうに驚いているエミルの顔を見つめ、きよとんとした表情で小首を傾げた。

呆れるエミルに出来事の一部始終事情を説明した星は、自分の格好に恥ずかしくなり、頬を赤く染めながら、いたたまれずに俯いて指をいじっている。

そんな星を見て、全く反省の色の見えない様子でにこにこ微笑んでいる少女を見て、エミルが大きなため息をついた。

「はあく。なるほどね……まったく。これは全部イシエのいたずらね……」

「ふふっ。いたずらなんてひどいわく。うちはこの子は綺麗な黒髪やから裸エプロンよりも裸ワイシャツの方が似合いそうやと思っただけなんよ?」

「——ええ!? でも、さっきはこれが法律で決まってるって……」

微笑みながら手を合わせてそう告げた少女に、騙されたことに気付いた星は驚いた様子で彼女の顔を見た。

だが、彼女は悪びれるどころか、自分がそんな発言をしたことすらすっかり忘れていいのか、終始笑みを浮かべている。

正反対の反応を見せている星達を見て、エミルはまた大きなため息を漏らす。

「はあ……。要するに、星ちゃんはイシエに遊ばれてただけって事ね……」

「そ、そんなあく」

エミルの話を聞いた星はしょんぼりしていると、少女はそんな星の顔を覗き込んできた。

「うちはイシエルってゆうん。これから仲良うしようなく。星ちゃん」

「は、はい……こちらこそ仲良くしてくださいね?」

にこにこ微笑んでいるイシエルに、少し怯えたように聞き返すと、イシエルは「もちろんやん」と星の頭を撫で回した。

だが、星はそのイシエルの笑顔に不信感を抱く。

(なにを考えてるのか分からない人だ。私、この人苦手かも……)

つと自分に向けて微笑みを浮かべているイシエルの顔を見つめ、星は心の中でそう呟いた。

お風呂2

「ほな、エミル。食材出して、すぐに料理作るから2人はゆっくりしててな〜」

イシエルはエミルから肉を預かると、エプロンを着けてキッチンへと向かった。

それを見送ると、エミルはため息まじりに星に告げる。

「はあ……星ちゃんも早く着替えなさい。そんな格好を、マスターやデイビッドに見られたら大変よ?」

しかし、星は表情を曇らせてぼそつと呟く。

「……でも、私の服は下着まで濡れちゃって……乾かさないと……」
「えっ? それって戦闘で?」

エミルにそう尋ねられると、星は全力で首を左右に振った。

それを見てエミルはほっと胸を撫で下ろす。先程の星の表情を見る限りは、もつと重大な事態に陥っていると感じていたからだ。

まあ、それ以外にも心配性な性格の星は、せつかくエミルが選んだ服を濡らしてしまったことを気にして、表情が暗かったのかもしれない。

そう感じた彼女は、星に向かって先程よりも優しい声で言った。

「なら、装備を外して再装備しなおせば元通りになるわ。このゲームでは、特定のモンスター以外は、戦闘終了時に武器や盾以外の装備の外見が元通りになるの。VRワールドでも体があるんだもの。服が破損したままだと、女性プレイヤーは不利益を被るから、その仕様も当然といえば当然なんだけどね!」

「そうなんですな! なら……」

星はそう言っつて、装備を取り出そうとした時、今まですっかり忘れていたあることを思い出す。

そう。あの時、星の装備はシャワーを浴びるのに服を脱いだ際、イシエルが持つていってしまった為、今は星の手元にはないのだ。それを思い出した星が慌てていると、エミルが不思議そうに首を傾げた。「それで、服はどうしたの?」

「あつ……服は今、イシエルさんが持っていて……」

「えっ？ どうしてイシエが、星ちゃんの服を持っているの？」

星のその言葉に、エミルは驚いた表情で尋ねた。

彼女の問に、俯き加減に星が答えた。

「イシエルさんに濡れた体を温めた方が良いつて言われて、シャワーを浴びたので……」

星の話を聞いたエミルがキッチンで料理をしながら、鼻歌を口ずさんでいるイシエルに向かって叫ぶ。

「——ちよつとイシエ！ 星ちゃんの服はどうしたの!?!」

イシエルは思い出したように、手の平をぼんつと叩くと「ああ、忘れとつた！ かんにんして〜」と慌てて服を棚から取り出すと星に差し出した。

こういうところを見ると、彼女も別に悪気があつてやっているわけではないのだろうと思ってしまう。

「ごめんなく、かんにんしてな。うち、物忘れ激しいんよ〜」

「い、いえ全然……こちらこそ、服を貸していただいて……あつ、ちよつと着替えてきます！」

イシエルから服を受け取った星は、ワイシャツの下には何も身に付けていないことに気付く。

さすがに人前で着替えるのは恥ずかしいのだろう。星はイシエルから服を受け取った後、脱衣室へと足早に駆けていった。

脱衣室に入った星は服と下着を叩いて濡れていないか確認したが、まだ多少湿っている。コマンドから装備欄を開いて装備し直すと、エミルの言った通り服はすっかり元通りに乾いている。どうやら装備し直せば、濡れた服も乾くという話は本当らしい——。

「へえー。本当にもう濡れてない。そっか、ここはゲームの中なんだから普通じゃないんだ……」

星はそう思うと、この世界が現実の世界でないことを実感し。急に胸の辺りを締め付けられるような感覚に襲われ、持っていた服を胸に強く押し当てた。

星がゲームの世界に閉じ込められてもう一週間。しかし、未だに外

部とは交信はできていない。

フリーダム内でも多くのプレイヤーは、ブラックギルドのプレイヤーによるPVPでの奇襲を恐れ、マイハウスに立て籠もっているか宿屋から一歩も出ないという者も少なくはない。だが、決して彼等を責めることはできない。

それもそうだろう。未だに多くのプレイヤーは初日のモニターの演説で、ゲーム内の死が現実世界での死を意味すると聞かされ、それに恐怖し外部からの救援を待っている状態なのだ。

実際に、マスターのように外の世界に戻る為、積極的に行動しているプレイヤーの方が少ないのが現実だ――。

「……本当に元の世界に戻れるのかな？」

不安からか、星の口からボソツと本音が漏れた。

しかし、すぐに迷いを振り切るように首を振ると「きつと大丈夫！」と両手を握りしめ、持っていた服を着た。

気持ちを切り替えて星が部屋に戻ると、キッチンの方から美味しそうな匂いが漂ってきた。

「――くんくん。なんだか美味しそうな匂いがしますね！」

「あら、星ちゃん。いい匂いでしょ。イシエルは料理が上手なのよ」
何故か自分のことのように、自慢気に答えるエミルを見て星は悟った。

『だからエミルさんは料理が下手なのだ』と……。

そうこうしているうちに、エリエとデイビッドが楽しそうに話をしながら帰ってきた。

そんな2人の様子を見たエミルは「良かった。仲直り出来たみたいね」と安堵の声を上げる。

エリエは部屋に入ってくるなり、鼻をひくひくさせてキッチンに向かって歩いてきた。

「いい匂い……この匂いはハヤシライス？」

「ふふっ。残念、ちよいちやうよ。これはビーフストロガノフって料理なんやよっ！」

「へえ〜。イシエルさんさっすが〜。早く食べたいなあ〜」

エリエは鍋の中でぐつぐつと煮えたぎっている具材に熱い視線を送っている。

すると、イシエルは火を止めそれに蓋をすると、手を合わせてにつきりと微笑んだ。

ゲーム内での料理の方法は2種類ある。その一つがゲーム内にある料理スキルを利用して作る方法。

これはレベル制ではない生活スキルである料理スキルを使用している為、誰でも指定した分量の食材と調味料を使って同じ味が作り出せる。

だが、これはVRゲーム。実際にゲーム内でアバターを思い通りに動かせる以上、料理が得意な人間にとっては少し物足りなく感じてしまうのも仕方がないことだろう。その為、実際に料理を作れば個人個人で味の違いが出るような工夫もなされていた。

しかし、このやり方だとレシピを作成しなければ二度と同じ味を作り出すことができない。

それに所詮はゲームの中での食事に、それほど思い入れを込めている者も多くはなかったが、このように寝起きを行うような状況になれば違う。

今イシエルがやっている料理方法は、まさに後者だった。

「ほな。皆揃った事やし、お風呂に行こうか！　ちよい冷ました方が具に味が染みて美味しくなるんよ〜」

「ええ〜。私お腹空いたよ。すぐに食べたい〜！」

「あかんよ。それに空腹は最大の調味料って昔から言うし、楽しみは後にとつとかな」

仕込みを終えたイシエルはエプロンを外し、エリエの手を引いてキッチンからリビングへと出てきた。

「ほな、エミル。横の部屋で寝とる子も起こしてきてもらえん？」

「――寝室で？　でも寝室に誰が……って！　そういえば、マスターとカレンさんがいないじゃない!!」

エミルは先に戻っていたはずの2人が居ないことにやっとな気が付き、驚きの声を上げた。

そんな中、イシエルはエミルに微笑み返すと「そんな話はまた後でなく」と言つてエリエの手を強引に引いて歩き出そうとした時、エミルがそれを呼び止めた。

「イシエ。お風呂に入るなら、皆で入れるように大浴場に行きましよう」

「おお。そらええ考えやね。ほな、皆で大浴場に行こか」

「ええ!? もしかしてイシエルさん。私と2人で入るつもりだったの!?」

驚いたようにエリエがそう尋ねると、イシエルは「あははは」と笑つて誤魔化しているが、エリエは怯えた様子でその場に立ちすくんでいる。

彼女のその様子から、どうやらエリエはイシエルのことが苦手らしいということも察することができる。

イシエルは元々エミルやデイビッド、エリエ達とギルドを組んでいた。この事件が起こる前に解散したエミル達のギルドだが、それ以前に何かイシエルとエリエの間にトラウマになるような出来事があったのだろう。

「それじゃ、星ちゃん。先にイシエ達と行つてもらえる? 私はカレンさんを起こしてから行くから」

「……えっ? いえ、私は後で一緒に——」

普段ならその言葉に従うであろう星が、珍しくエミルの提案を拒んだ。

正直。星はどうもイシエルのことが、嫌いともまでは言わないまでも苦手な部類であると判断していた。

だが、星がそう言い終わるよりも早くイシエルが星の手を掴む。

「——えっ!? あ、あの……イシエルさん」

「心配しなくてもええよ。大浴場の場所は、うちが知つとるからなく」

そう言つておどおどしている星とエリエの手を引いたイシエルは、そのまま2人の手を強引に引いて大浴場に向かって歩き出す。

イシエルにがっしりと掴まれた手を引かれ、星とエリエは部屋を後

にする。

階段を降り、廊下を歩いてきた3人は、城の1階にある大浴場の入口の目の前まで来た。入口には青と赤ののれんに、大きな『ゆ』の一字が掲げられている。

温泉街の旅館のような建物ならまだしも、西洋のお城の中には似つかわしくないと思はれた。

中はさらに旅館の脱衣室といった感じの造りになっていて、木目がいい味を出している大きな脱衣室の壁に備え付けられた鏡の前にはカウンターテーブルと木製の椅子があり。部屋の中央には木製の棚に竹で編まれたカゴが数多く並んでいて、部屋の隅には扇風機と体重計が置かれている。

今まで旅館に来たことのない星のテンションは一気にMAXまで上がり、イシエルの手を放すと物珍しい脱衣室の中を見て回る。

「凄い凄い！　これがお風呂なんですよね？　私こういう場所に来るの初めてです！」

瞳をキラキラと輝かせながら、部屋を一通り見て回ってきた星が興奮気味に言った。

エリエとイシエルはそんな星を優しい眼差しで見つめている。

そうこうしていると、少し遅れてエミルとカレンが脱衣室に入ってきた。

「あれ？　デイビッドは？」

エリエがそう言っただけを傾げると、エミルがため息をつきながら少し呆れた表情で聞き返した。

「はあ。エリー。ここはどこかしら？　……デイビッドなら、隣の男湯の方に行ったわよ」

「あつ。そっか……そういえばここは女湯だったね」

エリエはそう呟くと、頭を掻いて苦笑いしている。

その時、カレンがイシエルに声を掛けた。

「イシエルさん。あの、師匠はいつどこへ……？」

「まあ、お風呂に入ってからにしようか」

「……分かりました」

イシエルにそう言いながら服を脱ぎ始めると、カレンも強く言うことができずに仕方なく頷いた。

星はそんなイシエルの豊満な胸を食い入るように見つめている。目の前に現れた大きな膨らみは、小学生の星とは比べ物にならないほど大きかった。

(すぐくおつきい……エミルさんよりも大きいかもしれない)

そう思いながら無意識に自分の胸を触る。

しかし、星の胸は寄せても掴めるか掴めないかくらいの大ささしかない。いや、正確には掴めない。寄せればいくらか目立つくらいしかなかった。

星は大きなため息をつくとき、それに気がついたレイニールが声を掛けてきた。

「主、どうした？ 胸を押さえてため息なんかついて、胸が痛いのか？」

「……ううん。ちょっと自分に自信が無くなったただだから心配しないで……」

「ふむ、難しいお年頃というやつだな」

そう言って腕を組みながら、頷いているレイニールに驚いたのか、星は身を仰け反らせて叫んだ。

「——って！ レイ！ どうしてこっちにいるの？ レイは男の子でしょ？」

「なにを言うか！ 我輩はオスではないぞ!!」

「……女の子なら自分の事を我輩って言わないと思う……」

星はそう言って、レイニールに疑いの眼差しを向けた。

レイニールは困った顔をして、そんな星の顔を見つめると深く頷いた。

「……分かった。なら、証拠を見せれば良いのだな？ まったく疑り深い主様じやのう」

「証拠？」

そう言ったレイニールは空中でぐるぐると前転しはじめると、徐々

に高速回転になり。その直後、空中でレイニールの体が光り出し、よりいつそう強い光を放つ。

光にその場に居た全員が目を瞑ると、次の瞬間。眼前に1人の小学校低学年くらいの女の子が立っていた。

金髪をツインテールに結んだ青い瞳の女の子が全裸のまま、自慢げに腰に手を当て胸を張って堂々たる姿で仁王立ちしている。

星はその姿に言葉を失った。

「——ふははははっ！ 驚いて声も出ないのか？ 主。どうじゃ？ 隅々まで見てみー。なんなら、触って確認しても構わんぞ？ まあ、どんなに調べたところで、我輩がオスではない事は明らかじゃがな！」

そう自信満々に言い放ったレイニールは、また胸を張って「はっはっはっ」と高笑いしている。

まあ、胸どころか大事な部分も全てさらけ出しているわけだが……どうやら、羞恥心などはないのだろう。というか、今まで全裸で飛び回っていたレイニールに羞恥心というものがあるのかというのが謎だが……。

だが、星はそんなレイニールに素朴な疑問をぶつけた。

「レイ。ちよつといい？」

「どうした？ 主」

「……レイはいつも服も着ないで、裸で動き回ってたの？」

「当たり前じゃ！ 我輩が服など着ているところを見たことがあると云うのか？ 主よ」

星の問にレイニールは迷うことなく返した。

そんなレイニールに星は、少し軽蔑にも似た感情を覚えたが、学校で『ノーパン女』という不名誉な呼ばれ方をしている自分がそれを感じてはいけないと、首を横に振る。

「はっはっは。それにだ、よく考えてみる！ 布を体に巻き付けておっつは、動きにくくて仕方ないであろう？ 我輩はもしもの時に、

主を守らねばならぬからなっ！」

「はあ、そうですか……」

自慢げに話すレイニールの姿に呆気にとられた星は、呆然と笑っているレイニールを見つめていた。

お風呂3

話をしている2人に、エミルが話し掛けた。

「星ちゃん。お取り込み中悪いんだけど、その子は誰？」

エミルがそう言いながら、幼女化したレイニールを不思議そうな顔で見つめている。

そんな彼女にレイニールが気付いたのか、自慢げに胸を張った。

「なんだ？ 我輩の体に興味があるのか？ まあ、我輩はドラゴンの中でも特別な星龍だからな。無理もなからう！ ほら、遠慮せずにもっと近くで見るがいいぞ？」

レイニールは突然エミルの胸元に顔を埋めると、激しく左右に動かしている。

エミルは見知らぬ金髪ツインテールの子が自分の胸に飛び込んできたことで、かなり動揺してるのだろう。動揺しながらも、何とか引き離そうと身を振る。

「ちよ、ちよつと！ この子いきなり……な、なにをするの!？」

「ふふうん。おぬしもどんどん我輩の体に触って良いのだぞ？ 我輩もその胸に興味があったのじゃ、思った通り柔らかくてすべすべなのじゃ」

レイニールは顔だけではなく、大胆にも今度はエミルの胸を両手で鷲掴みにすると、手の平で隅々まで撫で回す。

「あつ……ちよつと、そこはだめ！ 止めなさい。いや……くすぐつたい」

「良いではないか。良いではないか♪」

徐々に過激になっていくレイニールの手の動きにエミルが嫌がっている、につこりと微笑んだイシエルがレイニールの方へ向かってゆつくりと歩いて始める。

脱衣所の中で騒いでいるレイニールの前まで行くと、イシエルは拳を高らかに振り上げ。

「ふふふつ……あまりおいだが過ぎる子にはおしおきやよ？」

イシエルはエミルの胸をもみはじめたレイニールにそう呟き、につ

こりと微笑みを浮かべると、そのまま上に掲げていた拳をレイニールの頭に叩き込んだ。

「教育的指導や〜!」

「——あうッ!!」

イシエルのげんこつをまともに受けたレイニールは、そのまま地面に転げ落ちた。

彼女のげんこつを受けて脱衣所の床に倒れたレイニールは、うつ伏せで倒れたまま倒れている。

「——レイ!?!」

星は突然のことに驚いて声を上げた。

地面に倒れ込んだまま、頭に痛々しく晴れ上がったたんこぶを作ったレイニールは微動だにしない。

「ほな、エミル。うちらは先に行こか〜」

「えっ?…でも……」

「ええから、ええから」

イシエルは戸惑っているエミルの手を引いて、先に浴室に向かって歩いていってしまう。

星はその突然の出来事に、慌ててレイニールの元へと駆け寄って行く。

「ふ……ふぎゆ〜」

「レイ!…大丈夫!? しっかりして!!」

倒れていたレイニールの体は激しく光を放ち、元の小さいドラゴンの姿に戻ってしまった。

星がぬいぐるみのような小さな体を抱き上げると、レイニールは気を失っているのかぐったりしている。

「なんだ?…星ちゃん。その竜は……」

カレンはそう尋ねると、星の膝の上に乗っているレイニールを覗き込んだ。

そういえば、彼女はがしゃどくろとの戦闘後。ずっと気を失っていたからレイニールのことを知るはずがない。

「あ、カレンさん。この子はですね——」

星はカレンの方に目を向けたその時、星の目はカレンの胸元にぶら下がっている2つの膨らみに釘付けになった。

カレンのそれは意外と大きく、服を着ている時とは比べ物にならないほど大きい。

それもそのはずだ。彼女は普段胸にさらしを巻いているので、胸の大きさは半分以下にまで押し潰されているのだ。

もちろん。変な意味ではなく、純粋に自分がないその2つの大きな膨らみが羨ましかっただけだった。だが、残念なことにその大きさはエミル、イシエルに続いて3番目と言ったところだろうか――。

「おっきい……」

カレンはそう呟いている星の目線の先にある自分の胸に目を落とすと、その様子から全てを理解したのか笑みを浮かべた。

自分の胸を両脇から手で押し上げると、瞳を輝かせている星の方へと向ける。

「星ちゃんもそのうち俺くらいになるさ。でも、大きければ大きいで不便な事も多いから、あいつくらいが丁度いいよ」

カレンはそう言ってエリエの方にチラツと目をやると、ニヤリと勝ち誇った様な笑みを浮かべた。

エリエはその言葉が聞こえていたのか、不機嫌そうにカレンのことを物凄い形相で睨み付けている。

そんなエリエを無視して、カレンが星の姿を見ると首を傾げた。

「そんな事より。星ちゃんは早く服を脱がないのかい？ お姉さんは先に行つたみたいだけど……」

「……えっと、その……私は皆さんが入った後で……」

急に俯き加減になり小さな声でそう呟いた星に、カレンが再び不思議そうな顔をして首を傾げた。

「どうしてだい？ 俺達と一緒に嫌か？ それとも恥ずかしいのかな？」

「そ、それは……」

優しい口調で星の顔を覗き込んでいるカレンに星は思わず口を閉ざした。

星が皆とお風呂に入ることには抵抗があるのには理由があった。

それは去年。星がまだ3年生だった時のことだった――。

2泊3日の夏の林間学校での事だった。昼間に山登りをしたこともあり、汗をたくさん掻いていた星が、皆と一緒に大浴場に向かおうとした時のことだ。

タオルと着替えを手にした星の横を通った生徒達から「あの子と同じお湯に入りたくない」「星が入るとお風呂のお湯が汚れる」など小声で、しかし星の耳に聞こえるようにささやく声が聞こえてきた。

それを聞いた星は、なにも言わずに部屋へと戻ってしまったのだ。まあ、同級生にそう言われてはさすがに帰るしかないというのが正直なところだろう。

体は皆が居ない間にタオルを水で濡らして拭いた。それ以外にも色々なことがあり、星にとっては林間学校の思い出の殆どが辛いものでしかないかった。

そのこともあってか、星は自宅のお風呂以外でゆっくりとお湯に浸かることができなくなった。だが、そのことをカレンに言えるわけもなく――。

「まあ、恥ずかしくてもすぐに慣れる！ ほら、脱いで脱いで」

「あっ！ カレンさん。待って、待って下さい!!」

突然服を脱がしに掛かったカレンに星も抵抗する。

しかし、星の力でカレンに抗えるわけもなく、必死の抵抗虚しく星は裸にされてしまう。

地面に座り込み、俯きながら瞳には涙を浮かべている星。

「――うう……ひ、ひどい……」

カレンはそんな星をお姫様抱っこして持ち上げると、そのまま浴室の中へと連れていった。

浴室の中は浴槽の隣が全面ガラス張りになっており、そこから森が見える。また、天井にも丸く大きなガラスが張っていて空に輝く月と星々を眺めることができたりと、とても開放的な造りになっていた。

浴槽からは泡がブクブクと立ち昇っていて、ジャクジーのおかげで疲労回復効果と負傷の回復速度が増し。また、浴槽内でまじまじと裸

を見られる心配もない。

そして星も、人生初めてのジャグジーに胸を高鳴らせていた。

「うわー。こんなの初めて……」

「どうだ？ 恥ずかしいのなんて、どこかに飛んでいったらどう？」

「いえ、飛んでいったかどうかは分かりませんが……でもすごいです！」

瞳をキラキラと輝かせながら、オレンジ色の柔らかい光りに照らし出されている浴室内を見渡していると、横から星を呼ぶエミルの声が聞こえてきた。

「星ちゃん。こっちにいらっしやうい。体と髪を洗ってあげるから」

「おっ！ エミルさんが呼んでる。さして行くかうか！」

「……えっ？」

星を抱きかかえたままのカレンがエミルの近く星を下ろすと、自分は真っ先に浴槽に向かって走っていった。

確かマスターの話によると、このゲームがデスゲームへと変わったあの日から、マスターとカレンはダンジョンの攻略に出突っ張りだったらしい。

ならば、穴蔵にずっと籠っているようなもの。もちろん、お風呂などに入れはしなかっただろうし、水浴びですら数日に一度くらいの割合だっただろう。

外傷があれば近くの街の宿に行くこともできただろうが、プレイヤーの中でも最も強いと言われていたマスターとその弟子であるカレンが、そうそう怪我など負うわけがなく。彼女もお風呂に入るのが相当久しぶりなのだろう。まるで小学生の男子の様に輝いた瞳で湯船を見据え、そして……。

「ひゃっほーい！」

カレンは奇声を上げたかと思うと、浴槽の中へと勢い良く飛び込んだ。

その直後、浴槽からは盛大に水柱が上がり。辺りに盛大に水しぶきが舞い上がった。近くに彼が居れば、間違いなく盛大にお湯をかぶって激昂していたことだろう……。

星とエミルはその光景を見て、驚いたように目を丸くさせる。そしてその直後、エミルは星に視線を移すと真剣な表情で言い聞かせるように告げた。

「いーい？ 星ちゃん。カレンさんの真似は『絶対に！』しちやダメよ？ 浴槽に入る前には、必ず体を洗うのがマナーになってるの。あと、タオルはお風呂のお湯の中に絶対に入れちゃダメ。分かった？」

「……は、はい」

（はあ……いいなく、カレンさん。私もあれやりたかったなあ）

小さなプラスチック製の椅子に腰掛けながら湯船の方を見つめていた星は、内心ではなにも考えずに湯船に飛び込むことのできたカレンのことを少し羨ましく思っていた。

その時、星の背中にぬるつとした何かが触れ、星は「ひゃっ！」と驚いて悲鳴を上げる。

「あ、ごめんね。びっくりした？」

「はい、ちよつとだけ……」

星は後ろで小首を傾げているエミルの顔を見て告げる。

「あ、あの……エミルさん。さつきシャワーを浴びたので、体を洗わなくても大丈夫ですよ？」

エミルは少し考える仕草を見せた後、にこつと微笑んだ。

「そうね——でも、2回洗えばもつと綺麗になるんじゃないかしら？」

「んんっ……あつ……洗った。ちゃんと洗いましたから！」

エミルは手にボディーソープを泡立てると、それをべったりと星の背中に塗り付け体を洗い始める。

普通はタオルなど専用の道具を使うのだが、エミルはそのどちらでもなく大胆にも、素手で体を洗い始めたことに星は驚きを隠せない。

星が家にいる時は、タオルにボディーソープを付けて洗っていた。そうしないと、背中に手が届かない為、それ以外の手段は考えられなかった。

にもかかわらず。エミルはなんの躊躇もなく、ボディーソープを体に塗りたいくつたのだから無理もないだろう。

細くて長い指にボディーソープが絡み付き、星の肌を滑らかに通過

する。

「あはっ、あははっ！ エミルさん。タオルとかで……」

星はくすぐったくて仕方がないのか、そう必死に訴えるとエミルの手が止まった。

呼吸を整えて、ほっと一息ついた星の耳元でエミルのがささやく。
「……タオルは肌へのダメージが大きいから素手で洗うのが一番なの」

すると、言葉を続けるように、再び耳元でエミルが言葉を続ける。

「それに星ちゃん……ちゃんと体を洗わないとね。色々な場所からきのこが生えてくるのよ？」

星はそれを聞いてビクツと体を震わせると、怯えたような瞳でエミルに聞き返す。

「……きのこ……ですか？」

「ええ、そうよ。そして大きくなったきのこに——」

そこまで口にしたエミルは口を閉ざすと、星の顔を覗き込み耳元で「その後どうなったか知りたい？」とにっこりと笑む。

星はガクガクと体を震わせながら瞳に涙を浮かべ、無言のまま首を左右に激しく振った。

「なら、きのこが生えてこないようにしっかりと洗わないとねえ」

「……はい。分かりました」

その話を聞いた星は観念したのか急に大人しくなった。

エミルは上機嫌でそんな星の体を手で隅々まで洗っていく。

星はその間全身からくるくすぐったさに必死で耐えていた。すると、今まで無言で体を洗っていたエミルが徐に口を開く。

「——でも、星ちゃんは肌すべすべよね。私は乾燥肌だから羨ましいわ」

「そんなの……ゲームで関係あるんですか？」

星のその疑問は最もだ、この世界はリアルには作られていても所詮はゲームの中。体を構築しているのはプログラムであり忠実に再現するのにも限度がある。

あまり個々のポリゴンを作り込み過ぎると、ゲーム自体が重くなつてしまい処理速度を落とす。だが、エミルの次の言葉は意外なものだった。

「ゲームなんだけど、そういう細かいところもリアルに忠実に再現されてるのが、フリーダムがここまでヒットした理由なのよ。売り出した時のキャッチコピーは『現実よりも現実らしく……』仮想現実だけどアバターは性別、声質、容姿全てが現実のまま。移動してきたみたいな。だから星ちゃんのこの肌のすべすべ感も現実とおんなじつてわけ」

「そんな……は、はずかしいです……」

お腹の辺りに手を回して撫でる様に動かしているエミルに、星は頬を赤く染めて身をよじる。

しばらくじやれ合っていた2人だったが、最後にシャワーで体に付いた泡を洗い流し、やっと体を洗い終わると星はほっと息を吐いた。
(やっと終わった……)

そう思った星が浴槽へと歩き出そうとしたその時、手を掴まれ後ろから声が聞こえた。

「——ちよつと待った！ まだ髪を洗ってないでしょ？」

すると、星はエミルから目を逸らしてそう小声で呟く。

「えっ？ いえ、髪は別に洗わなくても……私の髪長いから洗うの面倒ですし……それに、これゲームの中ですし……」

「ゲームだからって肉体があるんだから汚れる所は汚れるのよ。ほら文句言わないで座る！」

あからさまに視線を逸らして言い訳を続けている星を、エミルは両肩を掴んで強引に椅子に座らせた。

誰が聞いても『ただ髪を洗いたくない』としか取られなかつただろう。まあ、実際にそれ以外の理由などなかったが。

「あつ！ 待って、待ってください！ 私、水が苦手なので洗ってもいいから優しくしてください！」

その必死の訴えに、エミルは「なるほどねー」と納得したように頷いた。

星はその言葉の意味が分からず、不思議そうな顔で振り返るとエミルに尋ねた。

「なるほどって、なにがなるほどなんですか？」

「——あれ？ 気付いてないの？ シャワーの音を聞いただけで星ちゃんビクツて体を震わせてるのよ？」

それを聞いて星は顔を真っ赤に染めると、恥ずかしくなり肩をすぼめて小さくなった。

エミルはシャワーを手に持ち、星の髪の毛の先から徐々に濡らしていく。

星は水が肌に触れる度に体を小刻みに震わせながら、しっかりと目を瞑っている。

お風呂4

星がエミルに髪を洗われていたその頃――。

「――ぷはっ！ ひつろ〜い。きつもちい〜」

生き生きとした表情でカレンは広い浴槽の中を、見事なクロールで我が物顔に泳ぎ回っていた。

少し離れた場所で肩までお湯に浸かりながら、その光景を見ていたエリエが不機嫌そうに眉をひそめて呟く。

「あんだ。お風呂の中でなにやってるのよ……」

行儀としては最悪なカレンだが、エリエが怒っているのはそれだけの理由ではない。先程から出たり沈んだりして左右に揺れているカレンの豊満な胸に、エリエの視線はどうしてもそこにいつてしまうのだろう。

それがエリエからしてみれば、この上ないほどに目障りなのだ。

「ふんっ、なんだよ。俺は久しぶり風呂に入れたんだからしようがないだろ！」

「だからって泳ぐなんて――あんたもまだまだ子供よねえ〜」

エリエにそう言われ、むっとしたカレンは不機嫌そうに浴槽の中で立ち上がると、そっぽを向きながら声を上げる。

「あーあー、そうだな。だが、少なくとも、俺よりも胸のないやつと言えるセリフではないよな！」

自慢げな笑みを浮かべ腰に手を当て胸を張ると、エリエの目の前に大きく豊満な胸を曝け出した。そして嫌味としか聞こえないそのカレンの言葉に、今まで必死で耐えていたエリエがブチ切れる。

「くうううう〜。私より少し大きいからって……この男女!!」

「何だと！ このちっばい!!」

「ちっば――ってそ、そんなに小さくないわよこのバカ！」

「フツ。少なくとも俺よりも小さいだろうが……この平胸。違うって言うなら比べてみるか？ ほれほれ」

「ぐぬぬぬ……」

エリエは顔を真っ赤にしながら、胸を突き出すカレンを睨みつけて

いる。

カレンは勝ち誇った様子でさらに胸を張ると、エリエのことを鼻で笑いながら見下したような笑みを浮かべている。

そんな2人を見兼ねて、イシエルがいがみ合う2人の間に割って入る。

「——なるほどなく。胸の大きさは人それぞれやし……それに呼び方も人それぞれ……なあ、2人とも。喧嘩両成敗って言葉は知ってる？」

ゆつくりとした口調とは裏腹に、殺意を帯びた様なそのイシエルの声に2人は思わず凍りつく。

エリエとカレンは慌てて、ビシツとイシエルの方を向いて背筋を伸ばす。

「ほな、仲直り。……ごめんなさいは？」

「はい！ ごめんなさい!!」

2人は息ピツタリに声を合わせて、お互い同時に謝罪した。だが、その声はまるで軍隊の様な返事だった。

それを見たイシエルは「もうケンカしたらあかんよ」とにっこりと微笑んでいる。すると、そこに星の髪を洗い終わったエミルが、レイニールを抱きかかえた星と一緒に歩いてきた。

「あら？ イシエ。もうサウナはいいの？」

「ああ、エミル——ちよつと休憩や。でも、やっぱりサウナはええな。身も心もぽかぽかや」

「そう。それは良かったわ」

エミルとイシエルはそう言つて微笑み合っている。

それを聞いていた星が首を傾げながら、エミルの顔を見上げ尋ねた。

「あの、エミルさん……サウナつて何ですか？」

星のその言葉に、エミルがぽかんとした顔で、不思議そうに小首を傾げている星を見つめている。

（あ……あれ？ 私、なにか変な事聞いちゃったのかな？）

だが、そのエミルの反応を見て星は少し不安になったのか、心の中

でそう呟くと眉をひそめてエミルの顔を注意深く窺っている。

すると、その横からイシエルが星の顔を覗き込むと、笑みを浮かべながら「行ってみる？」と星の手を引いて歩き出した。

イシエルの申し出に、焦った様子のエミルが慌てて止めに入る。

「ちよつとイシエ。サウナって子供が入ってもいいの!？」

「入ってみるやけやし、大丈夫やよ。それにここはゲームなんやし、心配ならエミルも一緒にきたらええやん。気持ちええんよ〜」

「えっ? でも、これで気に入って、星ちゃんがりアルでもサウナに行くようになるかと困るし……それにイシエ。私がサウナ苦手なの知ってるでしょ?」

「大丈夫。ちよつとだけやし、ええやん」

イシエルにそう言われ、さすがに断れないと感じたエミルは浮かない表情をしながらも「ちよつとだけなら」とその後ろを付いて行く。

サウナは浴室の一番奥の場所にあり、しかもその入口の前の両側には観葉植物が置いてあったので、一目では分かりにくい。その為、浴室に入った時には星は気が付かなかったのだろう。

(この中にサウナが……どんなものなんだろう……)

星はそう思いながら、扉を食い入るように見つめている。どうやら、星はサウナをなにか固有名詞だと勘違いしているようだ――。

その時、横にいたエミルが不安げな声を上げた。

「ねえ、イシエ。やっぱり私はいいわ……暑いのが苦手だし……」

「ここまで来てなにを言うてるの! 何事も経験やよ! 好き嫌いはあかん!」

「経験って……経験したから言ったのだけど……」

そう言って表情を曇らせるエミルの顔を見上げ星が口を開く。

エミルのその様子から、どうやら彼女はサウナは苦手の様だ――まあ、大人でもサウナは息苦しさや暑苦しさがあつて駄目という人は珍しくない。

「エミルさん! 大丈夫です。サウナが出てきても私が守ってあげますから!」

「えっ? ええ、もし出てきたらお願いするわね……」

（この子。こんなに目を輝かせて……本当にサウナが何か知らないのね……）

星のその決意と期待の入り混じった瞳を見て、エミルは深いため息をついた。

星はため息をついているエミルの顔を見つめ、どうして彼女がため息をついているのか分からず、首を傾げている。

「ほな、開けるよ〜」

イシエルが扉を開けた瞬間、部屋の中からとてつもない熱風が星を襲った。

初めてな体験に星は驚き、思わず数歩後ろに下がる。すると、扉が閉まり。星は扉の前に取り残されてしまった。

「うわー。びっくりした！ サウナって暑いんだ……」

星が目をはちくりさせながらそう呟くと、横からエミルの声が聞こえた。

「そうよ。満足した？ 星ちゃん」

「え、エミルさん!? どうしてここに!?!」

星は状況が飲み込めず、驚きを隠せない表情で横に立っているエミルの顔を見上げている。

どうやらエミルも、扉が開いている間にサウナに入りそこねたらしい。まあ、彼女の場合は故意に中に入らなかった可能性の方が大きいのだが。

数十秒の沈黙の後、エミルは星の顔を見つめると、彼女が徐ろに口を開く。

「――イシエは放っておいて私達はお風呂に入りましょうか」

「……はい」

星は小さく返事をする、エミルと一緒に浴槽の方へと向かった。

エミルと一緒に浴槽に行くと、そこにはお互いに広い浴槽の端の方へと座り無言のまま顔を合わせようとしなない2人の姿があった。

険悪なムードを醸し出しているエリエとカレンにため息をつく、エミルがそんな2人に声を掛ける。

「2人ともどうしたの？ そんな怖い顔して」

エミルはそう言いながら、2人の間に割って入るようにお湯に浸かった。

その隣に星もお湯に体をゆっくりと沈める。お湯は熱いというよりぬるい方に近く、星には丁度いい温度だ。

「別に……怖い顔なんてしてないし……」

「俺は別に……」

2人は小さな声で呟くと、更に不機嫌そうな表情になる。

(はあく。この子達にも困ったものねえ……)

エミルは困り果てたように頭を抱えると、ふと星の方を見た。

星は桶にお湯をすくってその中にレイニールを入れると、頭にできたタンコブにゆっくりお湯をかけながら、未だに目を覚まさないレイニールを心配そうに見つめていた。

おそらく。この行動からみても、星はこのお湯を温泉と勘違いしているのは間違いないだろう。

確かに傷の回復効果はあるが、それは既存のプレイヤーに対してで、扱いがどこに属しているか分からないレイニールに効果があるかは分からない。

だが、例え温泉だったとしても、頭にかけてすぐにコブが治るほどの即効性はないだろうが……。

エミルは真剣な面持ちで、レイニールの頭に今度はお湯をぺたぺたと擦り込むように付けている星に声を掛けた。

「……星ちゃんは何をやってるのかな？」

「えっ？ あ……温泉は体に良いって言うので……」

エミルの方を向くことなく、真剣そのものな顔付きでレイニールの治療に専念する星が言葉を返す。

それを聞いたエミルは言い難そうに口を開く。

「それがね……このお湯は温泉ではないのよ」

「……………」

その直後、星の手が止まった。

当然だ。今まで温泉だと思っていたお湯が温泉ではないと分かったのだ——それは傷口に軟膏を塗っていたものが、実は軟膏ではなく

保湿クリームだったことくらいに衝撃的だった。

エミルはレイニールを横目で見ると話を続ける。

「私のドラゴン達もそうだけど、巻物に戻して再召喚までの時間放置してればHPが全回復するけど……この子に関してそれは適応しないだろうしねえ……」

「剣に戻るかも分からないですし……戻せる自信もないです……」

エミルの話を聞いた星はそう小さな声で呟くと、しょんぼりと項垂れる。

そんな時、桶がカタツと音を立てると気を失っていたレイニールが「うくん」と唸った。

星はすぐにレイニールの方に振り返って声を掛ける。

「——レイ！ 大丈夫？」

「……あれ？ ここはどこじゃ？」

「……………」

目を覚ましたレイニールの口から出たその言葉に星は一瞬頭の中が真っ白になり、あわてふためきながら叫んだ。

「ど、どうしましょうエミルさん！ レイが記憶喪失に！ こういう時はえっと、えっと……そ、そうだ！ 人工呼吸!!」

「——人工呼吸!? ちょっと星ちゃん。落ち着いて！ まだ記憶喪失って決まったわけじゃないから、ねっ？」

「でも、でも……」

レイニールの口に顔を近付けた星をエミルは慌てて止めた。

まあ、記憶喪失の人間に人工呼吸をしたところで、効果はないだろうが、星がそれだけ混乱していることは良く分かった。

なおも落ち着かない様子でおどおどしている星に、レイニールが声を上げる。

「——大丈夫じゃ、主。我輩は『少し前の記憶しか』失っておらぬぞ？」

「……本当？」

瞳に涙を浮かべながらそう尋ねる星に「ああ、本当じゃ」と力強く答えるレイニールを見て「良かった」と言っ、星は胸に押し付けてぎゅっと抱きしめた。

星に抱きしめられたレイニールは頻りに手足をばたつかせている。「ううう。苦しいぞ、主……」

「あつー…ご、ごめんなさい。でも、嬉しくて」

星は抱きしめていたレイニールを放すと、ほっとしたように空中で翼をはためかせる。

空中からエミル達の入っている浴槽と自分の入っていた桶を見比べると、むっとしてレイニールが急に不機嫌そうな声を上げた。

「それよりも主。こんな小さなのではなく、我輩もそっちの大きい方に入りたいのじゃ！」

「ああ、レイごめんね！ でも……まだ、もう少しこっちの小さいの方で慣れてから……」

星の言葉をバカにされたと感じたのか、レイニールは更に不機嫌そうにむっとながら浴槽の上に飛んで行くと、浴槽の真上でレイニールの体が光り輝く。

それはいつも、レイニール変身する時に行うお約束みたいなものだ――。

星は嫌な予感がして咄嗟にエミルの背中に隠れた次の瞬間。レイニールはさっきの金髪ツインテールの女の子の姿に変わり、翼という浮力を失ったレイニールの体が勢い良く浴槽の中へと落ちてきた。

すると、星の嫌な予感は的中し、レイニールの落ちた場所には大きな水柱が上がり、咄嗟にエミルの背中に隠れた星以外。周りにいた全員にお湯がかかった。

「――うわっ！」

「――きやつ！」

「……………」

湧き上がったお湯の被害にあつたカレンとエリエは悲鳴を上げ、一番近くでレイニールの跳ね上げたお湯を浴びたエミルは無言のまま一点を見つめている。

星はほっとしたように息を吐いて、エミルの背中から姿を表す。

お風呂のそこに沈んでいたレイニールがしばらくして勢い良く水面に顔を出すと、エミルが凄惨な形相でレイニールを目を細めて睨んで

いる。

「ううう。ぷはっ！ やっぱり大きい方が気持ちが良いのう！」

「……ちよつと、良いかしら？」

静かにゆつくりとした口調でそう言ったエミルの声からは明らかに内に秘めた怒りを感じる。

星はそのピリピリとした空気にいたたまれず、ゆつくりとエミルの側からエリエの方へと移動した。

星のこの動きは、この後に起きるであろう出来事を予期しての予防策の様なものだ。だが、嵐の中心部にいる当の本人は、このピリピリとした重苦しい空気をまったく感じていないのか。

「あはははっ！ どうした。そんな恐い顔をしてないで、おぬしも一緒に泳ごうではないか！」

「そうね……あなたにはまず。ここがプールではないということを感じ取りと教える必要があるわね……ちよつと、こっちにいらっしやい!!」

「——わっ！ な、なにをする！ なにをするのだ!!」

エミルはレイニールの腰の辺りに腕を回し、暴れるレイニールを脇に抱えながらボタンツ！と勢い良く浴室のドアを閉めると脱衣室へと出ていった。

3人はなにが怒っているのか理解できずに互いの顔を見合わせている。するとその直後、扉からエミルの怒鳴る声とレイニールの悲鳴だけが浴室内に響き渡ってきた。

「レイ……」

「……エミル姉。こわっ！」

「見てみたいけど、行く勇氣はないな……」

3人はそれぞれにそう呟くと、2人が消えて行った扉を見つめた。

ここにいる誰もが外で何が起きているのか、確認しようとする者はいなかった。

お風呂5

しばらくして、エミルが泣きじゃくっているレイニールの手を引いて浴室内に戻ってきた。

その様子から、浴室の外では相当なやり取りがあつたことが窺い知ることができる。

先程までの鬼の様な彼女は完全に消え失せ、普段通りの優しい彼女の声音に戻っていた。

「もう絶対にああいう事をしてはダメよ？ 分かつた？」

「うう……ひぐっ……はい。ごめんなさい。もう二度としません……」

さつきまで止められないくらい元気だった女の子が、金色のツインテールをだらんと垂らし、泣きながらエミルの隣を歩いて来る。

3人はそのレイニールの変わりように、扉の向こうで何があつたのかをあえて考えないようにしようと思った。

星は泣いているレイニールの側まで行くと「大丈夫？」と優しく声を掛けた。すると、レイニールはわんわん泣きながら星に抱きついてくる。

「——うわ〜ん。あるじ〜。我輩を大切に思ってくれるのはあるじだけなのだ〜。ここの者達はみんな怖いのだ〜」

「……うん。大丈夫だからね。もう泣かないで……」

星はそう言ってぽんぽんと優しくレイニールの頭を叩くと、手に何か硬いものが当たった。

その感触に思わず首を傾げる。手の平から伝わってくるそれは、例えるなら象牙のような感じだ。

彼女の頭の突起物はツルツルしていて、まるでちよつと大きめの上がピンク色の三角形のチョコレートのような感じだった。

興味を示した星が、その物体を指で撫で回すようにすると、レイニールはくすぐったそうに体をくねらせる。

「あつ……なつ、なにを……するの、だ。あるじ……」

「——あつ！ ぐ、ごめんなさい！」

星は慌てて、その表面がツルツルした三角の物体から手を放す。
レイニールは不機嫌そうに頬を膨らませて星を睨む。

「でも、レイのその頭のはなに？」

「ああ、これはじゃな。龍族の誇りの象徴——角なのだ！」

星は自慢げにそう言い放ったレイニールを驚いた様に見開く。
だが、驚くのも無理はない。本来角というのは先が鋭利に尖つていてとても大きい物だろう。

確かに今のレイニールの頭に付いている様な先端の尖っていない控えめな角もあるかもしれないが、しかし、ドラゴンと言えば神話の中でもとても凶暴な部類の生物のはず。

しかも、黄金の竜へと巨大化したレイニールの角はしっかりと鋭利で立派な角が付いていたはずなのだが——それがこんなちんまりとした角に変わったとは、にわかには信じがたいものである。

そこにエリエが話し掛けてきた。

「なんだか、そうしていると星がお姉さんって感じに見えるよね」

「……そ、そうですか？」

エリエにそう言われた星は、少し恥ずかしくなったのか、俯き加減でそう呟くて頬を赤らめている。

レイニールはきよとんとしながら星を見つめている。

「ほら、あなた達も早くお風呂に浸かりなさい。体が冷えちゃうでしょう？」

エミルはお湯に浸かりながら振り返り、立っている3人に向かって手招きしている。

3人はエミルのその言葉に素直に従うと、肩までお湯にゆつくりと浸かった。

「はあく。やっぱりお風呂はいいよねえ」

「はい。お湯もちょうどいいです……」

「なにを言っておるのだ主。我輩にしてはぬるすぎるくらいだ！
もっと熱くても良いぞ！」

湯船に浸かった3人がそんな話をしていると「それじゃ俺はそろそろ上がります」とカレンが徐ろにお風呂から上がった。

そんなカレンに向かって「あんたって、ほんとに協調性がないよね」とエリエが嫌味つたらしく小さな声で呟く。

それを聞いたカレンは顔を真っ赤にしながらエリエに向かって叫ぶ。

「なんだよ！ 別にもう俺の体は温まったから上がるって言ってるだけだろ!？」

「ふくん。自分だけが良ければいいんだ」

「くっ！ なら、分かった。お前が上がるまで待っててやるよ！ それで文句ないだろ！」

カレンはその場にあぐらをかいて座ると、不機嫌そうにそっぽを向いた。

その時、なにやら考え込んでいたエミルが小さな声でカレンに質問する。

「——カレンちゃんってB型でしょ」

カレンは少し間を空けて「まあ、そうですね……」と答えると、それを聞いていたエリエが「やっぱり」と、少しバカにしたような言い方にまた不機嫌そうな顔になった。

このままではケンカになりかねないと感じたのだろう。それを見たエミルが慌ててフオローを入れる。

「いや、でも。B型の子ってムードメーカー的のところもあるし。人をまとめるのも上手いって言うし。私は好きよ」

カレンは表情を明るくすると「どうだ」と言わんばかりにエリエを見下すように見た。

その後、仕返しとばかりにカレンがエリエに聞き返す。

「そういうお前は何型なんだよ？」

「べ、別に血液型なんてなんだっていいでしょ！ 重要なのは人間性なんだから」

エリエはそう言ってそっぽを向くと、横からエミルが「エリーは確かO型よね」と口を挟む。

「あつ、ちよつとエミル姉!!」

エリエは両手を振りながらあたふたしているとカレンがニヤリと

笑った。

「な、なによ……?」

思わせぶりなカレンの態度に、エリエが警戒したように眉をひそめる。

「いや、別にいゝ。O型っぽくないなっと思つてさあゝ」

「なっ! それはどういう意味なのよ!」

「——別に言葉通りの意味だけど……?」

カレンがそう冷やかすように言うと、エリエは「あんたなんか大っ嫌い!」と叫んでそっぽを向いてしまう。

(うわあ……これはまずいわね。なんとか話を収めないと……)

エミルは自分から言い出した手前。ここまで話がこじれると思つていなかったのか、冷や汗を掻きながら辺りを見てみると、上で結んだ髪の毛を気にしている星が視界に入ってきた。

(そうだわ! ここは星ちゃんに協力してもらいましょう!)

エミルはそう考え、持ち上げて結んだ髪を頻りに触っていた星に話し掛けた。

「ねえゝ。星ちゃん?」

「……はい?」

星は突然、話しかけてきたエミルを不思議そうな顔で見上げる。

まあ、今までエリエとカレンと話をしていた彼女が、まさか自分の方に回ってくるとは思ってなかったのだろう。

「星ちゃんの血液型ってなに?」

「……えっ?」

その質問に2人も興味を示したのか、チラリツと星の方を横目で見た。

星は少し困ったような顔をしたものの、徐ろに口を開いた。

「血液型は……えつと、B……です」

「そうよねゝ。星ちゃんも私と同じA型よね……つてB型!」

「えっ!?! 星、B型なの!?!」

エミルとエリエはそのことに驚き、目を丸くしている。

本来ならB型はマイペースで気分屋で明るいという主に外向的な

イメージが強い。その為、内向的な星の血液型がB型だったことがわかには信じられなかったのだろう。

まるで宇宙人でも見た様な2人の眼差しに、星もだんだん不安になってきた。

(……えっ? 私になにか変なこと言ったのかな……)

星はその2人の予想外の反応に急に不安になり、思わず俯いてしまう。

「……B型でごめんなさい」

「ああ、ちよつとびっくりしただけだから気にしなくていいのよ?

それに血液型と性格はあまり因果関係がないって言うし……」

しよんぼりと項垂れている星に、エミルが慌ててそう言ったが、星の表情は曇ったままだった。

そんな星を見兼ねたカレンが口を開いた。

「まあ、星ちゃん。血液型なんて気にしてたら、人間——皆4つまでしか分けられないし。それだったら、十人十色なんてことわざも生まれないだろ? それに、世間ではB型が悪く思われがちだけど……: それぞれの血液型にだって長所や短所がある。その短所を長所に変えるのが修行だと、俺は思うよ」

「へえ〜。短所を長所に……ねえ〜」

腕を組んで頷いているカレンにエリエイがちよつかいを出し、また2人はいがみ合う。

しかし、カレンの話聞いた星の表情は少しだけ明るくなっていった。

「短所を長所に……」

そう呟いて、星はぎゅつと手を握り締めた。

自分に自信のない彼女にとっては、その言葉がとても良いものに聞こえたのだろう。

エミルはそれを見てほつと胸を撫で下ろした。そこに、カレンが思い出したように口を開く。

「そういえば、エミルさん。あの人は何型なんですか?」

カレンはそういうと指でサウナの方を指差した。

「ああ、イシエはエリーと同じO型。ちなみにデイビッドはB型よー！」「あく。なるほど」

「ああ……やっぱりね……」

カレンとエリエは、それぞれ納得した様子で首を縦に振った。

その頃、噂されている当の本人達はどうと……。

「やっぱりサウナはええなく。美肌効果はあるし血行促進で新陳代謝もようになって冷え性対策にもダイエツトにも最適やく。でも入り過ぎはあかんけどなく。……それにしても皆遅いなあく」

イシエルはぼーつとサウナの天井を見つめている。もう、エミルや星がおないことなど気にしていない。

そしてデイビッドは――。

「はあく。なぜかマスターもサラザさんもいないし――ってことは……貸し切り状態だぜえー!!」

デイビッドは広い浴槽の中を水泳選手のように水しぶきが上がるほど勢い良く泳いでいた。

「――なんかデイビッドはお風呂の中を泳いでいるような気がする……」

エリエはそう言って苦笑いを浮かべている。

そんなエリエにエミルが、何かを思い出したかのように尋ねた。

「そういえばサラザさんは？　結局、星ちゃんのアイテム探しに付つきあわせて成り行きとはいえ、危険な目に合わせちゃったから、何かお礼をできないかと思っていたのだけれど」

「ああ、サラザはなんだかね。オカマイスターの集まりがあるから行ってっちゃったの」

「――お……オカマイスター？」

それを聞いたエミルはほかんと口を開けたまま、エリエの顔を見つめている。そんなエミルの顔を見つめ、エリエは首を傾げると「普通にオカマ同士の集まりだと思う」と返した。

エミルは自分の思っていた考えが聞けなかったのか、少し納得できないといった感じの表情で「そうなのね……」と言うと、星が2人の会話を割り込んできた。

「——おかまっておなべの事ですよね！」

「……えっ？」

「……星ちゃんなにを言ってるの？」

エリエとエミルは驚いた表情で星を見た。

そこにタイミングよくサウナから出てきたイシエルが口を挟む。

「そうやよく。どっちも火に付けて使うから、大体おんなじやね。星ちゃんは物知りやなく」

イシエルはそういうと星の頭を撫でてにつこりと微笑んだ。

2人はそれが性別のことではなく、調理器具のことだということに気がついてほっと胸を撫で下ろす。

「ほな、そろそろお料理の時間に戻らなく。うちはお先に上がって準備しておくから、皆はゆっくりでええよ」

サウナに入って汗を流したからか、上機嫌にイシエルはそう言い残して浴室を出ていった。

マスターの真意

お風呂から上がって、パジャマに着替えた星達が部屋に戻ると、もう料理が出来上がっていて、紫色の着物にエプロンをつけたイシエルがせわしなくテーブルとキッチンを行き来をしていた。

その様子を見たエミルが忙しそうに動き回っているイシエルの側に、急いで駆け寄っていく。

「イシエ遅くなつてごめんなさい。私も手伝うわ！」

「あつ、エミル！ ええよく。もうこれ運んだら終わりやから席着いて待つててな〜」

イシエルにそう言われ、エミルは仕方なく席に着くと、ドアの前で立っている星達を手招きする。

星はエミルのところまでいくと、隣の椅子に腰掛けエミルと星は顔を見合わせ微笑む。その直後、星の頭に何か重い物が乗っかってきた。

星が頭を見上げると、そこには小さなドラゴンの姿に戻ったレイニールがいた。

「あれ？ レイ。人間の姿も可愛かったのに、どうして戻っちゃったの？」

星が不思議そうに尋ねると、レイニールはため息混じりに頭を左右に動かした。

だが、星の言う通り。人間姿のレイニールは金髪ツインテールに青い瞳で、まるで西洋人形のような見た目で、性格を踏まえなければ可愛いと言える。

「主は分かっておらんな、あの姿は飛べなくて不便なのじゃ。こうして主の頭に乗って移動できんから疲れるしな」

「……重いんだから、乗らないでよ」

頭の上でリラックスした様になって乗っているレイニールに向かって、星は小さな声で呟く。

エリエは星の向かい側に座ると、笑みを浮かべながら話し掛けた。

「レイニール……だっけ？　星もその子を頭にさせてるのがさまになつてきたね！」

「うう……そんなことないです。レイって意外と重たいんですよ？」

不満を口にする星を見て、エリエは「プツ」と息を吹き出すと。

「でも、それだけ懐かれてるんだからいいじゃん！」

「そ、そうでしょうか……」

なんだかバカにされたような気がして、俯き加減に星がそう答えると、デイビッドが部屋の中へと戻ってくる。

デイビッドの方もパジャマとはいかないまでも、その格好は普段の武士の様な姿から、浴衣姿へと変わっていた。

「はあく。日本人はやはり凄いな。風呂は人類最大の発明だよな！　うん」

そう呟き、しきりに頷くデイビッドに「バカ言つてないで早く座りなさいよ」とエリエが言うと、デイビッドはエリエの隣に座った。

わざわざデイビッドが座るのを確認してから、カレンもその隣に腰を下ろす。

その行動から見てただ単純に、エリエの隣の席が余程嫌だったのだろう。

イシエルがエミルの隣の席に腰掛けると、手を前に合わせた。

「ほな、食べようか。いただきます〜」

イシエルに合わせるようにして全員が「いただきます」と手を合わせる、彼女の作ったビーフストロガノフを次々に口に運んでいく。パクツと口の中にスプーンを入れると、全員が同時に驚きの声が上がった。

「——なんというか、ビーフシチューをイメージしてたんだけど、それとも違うな……でも旨い！」

「うん。ちよつと酸っぱくて甘みが足りないような……」

デイビッドは満足そうだったが、エリエは何やら不服そうだ。まあ、以前星の食べた激甘コーンスープを考えれば、エリエのその反応は普通なのかもしれないが。

その横で満足そうにエミルが声を上げる。

「うん。美味しい！ さすがイシエね！」

「ちよつとすっぱいのはな、サワークリームが効いてるからなんよ。この味を出すんに苦労したわ。でも褒められるんは恥ずかしいな。ほめてもなんも出えへんよ」

「いえ、本当に美味しいです。俺にも今度教えて下さい！ マスターにも……」

カレンはそう言って顔を青ざめると、思い出したように大声で叫んだ。

「そういえばマスターはどこに行ったんですかっ!!」

今頃になってマスターがいないことを思い出したらしく、カレンが慌てふためきはじめた。

それも無理はない。カレンは今までずっとマスターと行動を共にしていたわけで、以前彼がカレンを孤児院から養子に取ったと言っていたことから、それは現実世界でも同じだったのだろう。

突然何の断りもなく家族がいなくなれば、心配もするだろう。まあ、それでも今の今まで彼のことをすっかり忘れて、カレンは久々のお風呂を満喫していたのだが……。

その様子を見たイシエルが思わず顔を覆う。

「ああ、マスターは……あかん。思い出してもうた……ど、どないしよ……」

イシエルはしまったつという表情で、小声でそう呟くと、額から冷汗が流れ落ちる。

だが、すぐに笑顔を見せ落ち着かない様子のカレンに告げる。

「——じ、実はマスターはギルドを再結成する言うて、カレンちゃんが寝とる間に出掛けてしもうたんよ……」

それを聞いたカレンの顔が更に青ざめていく。

「ひどい……どうして起こしてくれなかつたんですか!!」

感情を抑えきれずに爆発させイシエルを責めるカレン。

「うちも起こそうと思ったんやだけど、マスターが起こさなくてええって。カレンちゃんを危険な目に合わせるわけにはいかない言うて……このことも、できるだけ時間を空けて話してくれって言われて

て、それで……」

「……そうですか、分かりました」

申し訳なきさそうにしているイシエルにカレンは小さく頷くと、何を思ったのか徐に席を立った。

「——ッ!! どこ行くん!?!」

それを見てイシエルが慌てて立ち上がると、カレンは「ちよつと外の風に当って来ます」とだけ言い残して部屋を出ていった。

心配そうな表情でカレンが出て行った扉を見つめているイシエル。

その一部始終を見ていたエリエが食事を中断して、大きなため息を吐くと徐ろに席を立った。

「——全く。しょうがないわね!」

「おい。エリエ、どこに行くんだ?」

「……トイレよ。トイレ!」

エリエはそう言って、走って部屋を飛び出していった。

「トイレって、ここではそんな事する必要ないだろ……って、まさかあいつ!」

デイビッドはそういうと何に気が付いたのか、席を立とうとするデイビッドを、エミルがデイビッドの名前を叫んでそれを止める。

このフリーダムでは、HPのパラメータに影響を及ぼす食事と入浴の必要はあるが、排せつなどの行為は必要ない。

何故なら、ダンジョン内でモンスター戦っている最中に急な尿意に襲われても対応できないし、男性プレイヤーはダンジョンの部屋の端に行けば何とかなるだろうが、女性プレイヤーはそういうわけにもいかない。

その為、そういった仕様は原則として廃止しているのだ。

確かにベータテスト時に一度それも実装されたのだが、ベータ版に参加していた女性テスターからの苦言で実装を断念した。

エミルの方を振り返り、納得いかないと言いたげなデイビッドが口を開く。

「どうして止めるんだエミル! あいつの性格じゃ、彼女ともめるだけだろ!」

「いいのよ。それで……誰にでも暴れたい時はあるもの」

「おい。なら、お前はあいつらがケンカするのを見越して、わざとエリエを行かせたのか!？」

「……ええ」

エミルは表情を曇らせながらそう静かに頷くと、デイビッドが顔を真っ赤にして「そんなバカげた事、やらせるわけにいくか!」と叫ぶと、もう一度扉の方を向き直す。

今にも飛び出そうとするデイビッドに、エミルも声を荒らげた。

「デイビッド! あなたが行つても本気のカレンさんの攻撃を防ぎきれないでしょ? エリーならカレンさんの攻撃をかわしきれわ! 今回はエリエが適任なのよ!」

確かにエミルの言う通り、攻撃特化で軽装備の武闘家と重い鎧を着たデイビッドが戦えば、身軽さで有利なカレンに圧倒されてしまうだろう。

だが、エリエは重量の最も軽い服にトレジャーアイテムを使用して、鎧の防御力を服に上書きしている。

また、エリエ自身も敏捷性の高い固有スキルを有しており。固有スキルを未だに使用できないでいるカレンとの戦闘は、余裕を持って行えるだろう……。

だからと言って、今のデイビッドにはそれを受け入れるほど、心にゆとりがない。

「かわしたとしても、その後はどうするんだよ! あのエリエが彼女を説得できるわけないだろ!？」

「大丈夫! あの子ならきつとやってくれるわ! 仲間なら分かるはずよデイビッド」

エミルは自信満々にそう言い放つと、デイビッドはなにとも言えなくなり口をつぐんだ。

そんな2人のやりとりを見ていた星は徐ろに席を立つと。

「私も食後の運動に、お城の中を探検してきます!」

つと言いきり。頭にレイニールを乗せたまま、エミルの止める声も無視して部屋を飛び出して行ってしまう。

エミルは「もう！」と叫んだが、大きく深呼吸をして。

「——全く。あの子も相変わらね……」

そう呟き、エミルは苦笑いを浮かべながら、星の飛び出していった後の扉を見つめた。

城の上に輝く大きな月からカレンに向かって優しい光が降り注いでいる。

「マスター。どうして……どうして俺を置いて行ってしまったんですか？」

カレンは城の屋根の上から、夜空に煌めく月を見つめていた。

雲が流れては月を覆い隠し、通過してはまた月を覆い隠す。それを繰り返す月を見ていて、マスターの顔が月と重なりカレンはふとあることに気付く。

「……もしやこれは、俺を試しているのか？　俺が1人でもマスターのところに辿り着けるかどうかを……」

カレンはそう考え決意に満ちた表情で拳を握り締めていると、その後ろからエリエの声が聞こえてきた。

「——あんた。もしかして、マスターの後を追いかけてよう……なんて考えてないわよね？」

その声はどこか落ち着いていて、カレンの心を見透かすようだった。

ゆっくりと振り返り、後ろに立つエリエに視線を合わせるカレン。

「……もしそうだとしたら、お前に関係あるのかよ？」

カレンは低い声でそう告げると、エリエを鋭く睨みつけた。エリエは呆れた様にため息をついて、腰のレイピアに手を掛ける。

剣の柄に手をかざす彼女の行動に、場の雰囲気が一変して張り詰めたものへと変わった。

カレンはそんな彼女の様子に、その目が更に鋭くなる。

「……どういうつもりだ？」

殺気を帯びた声でそう呟いたカレンに、エリエが「こういう事よ！」と言葉を返えすと、鞘から引き抜いたレイピアを構え斬り込んだ。

カレンはその一撃をかわしたかと思うと、一瞬の間に素早くコマンドを操作し、ガントレットをその手に装備してエリエに向かって拳を構える。

「自分に従わない者には実力行使ってわけか？ 随分強引なんだな……」

「ええ、あんたをマスターのところに行かせるわけにはいかないからね。縛ってでも止めるわよ？」

そう言ったエリエに向かって、カレンが躊躇なく飛び掛かる。

エリエはその攻撃を交差するようにかわすと、すれ違いざまに素早く数回鋭い突きを放った。

その中の一撃がカレンの頬を掠める。頬に一本の傷が刻まれ、後方に跳んで距離を取った直後、カレンは鬼の様な形相で殺気を露わにする。

彼女の突き刺すような視線に臆することなく、エリエが低い声で告げた。

「これで分かったでしょ？ 私は固有スキル『神速』を使ってる——私は本気よ……マスターに代わってあんたの目を覚まさせてあげる！」

「……マスターに代わってだど？ ふっ、ふざけるなツ!!」

カレンは地面を蹴って、素早く距離を詰めると、全力でエリエに向かって右腕を振り抜いた。

エリエはその攻撃を紙一重でかわすと、カレンの拳はそのままの勢いで近くの塔の壁を突き破った。

石造りの頑丈な壁を爆発音とともに粉碎し、辺りに物凄い量の土煙が上がる。

エリエはその砂塵を避ける為に、勢い良く城の中央部分にある庭園へと飛び降りた。

その後を追いかけるように、カレンが飛び出していく。

フリーダムの中ではゲーム内の建物や岩などは破壊されても、自動的に再生される仕組みとなっている。その為、カレンの攻撃により壊れた壁はすぐさま崩れた場所から徐々に再生を開始する。

だが、その再生を待たずして、次の大きな爆発音が辺りに響いた。

それはエリエが地面に着地したと同時に、追いかけてきたカレンの拳がその場所を吹き飛ばしたことで起きたものだった。

破片とともに爆風で空中に投げ出されたエリエはレイピアを地面に突き刺し、勢いを受け流すように地面に刺した剣を軸に空中で180度体を回転させ、器用に体制を建て直すとカレンに向かって叫んだ。

「——くっ！……あんだ。どうしてマスターに置いて行かれたのかわかってないでしょ！ ばっかじゃないの!?!」

カレンはその言葉を聞く気がないのか、怒りに身を任せるように、エリエに向かってがむしやらに拳を振り回している。

エリエはその攻撃を全て紙一重でかわしながら、冷静さを欠いているカレンに向かって、なおも言葉をぶつける。

「ちよつとは話を聞きなさいよ。このバカ！ マスターがどうしてあんなを置いて行ったのか——」

「——うるさい！ 黙れ！ 黙れ！ お前に何が分かる!!」

カレンはエリエの言葉を遮るように叫ぶと拳を振り抜く。

エリエはそれをまた体に当たるぎりぎりのところで回避する。

(この戦いで重要なのは勝つ事じゃなくて、少しでも体力を消耗させ、マスターの追跡を諦めさせる事——その為には、冷静に戦わせちゃダメ。リスクはあるけど、ぎりぎりまで攻撃かわすことで、いかりのボルテージをためさせ長期戦ではなく、短時間で効率よく体力を使い切らせる！)

エリエは大きな青い瞳でカレンのモーションをしつかりと見極めながら、次々に繰り出される攻撃を正確にかわしていく。

マスターの真意2

地面や城の外壁を軽々と破壊するほどの攻撃力だ。カレンの拳をまともにくらえばひとたまりもない。

それが分かっているのか、エリエも全神経を集中して、高速で打ち出されるその拳をかわすことに専念している。

「くそー。なんなんだよお前は！。木の葉のようにひらひらとかわしやがって。俺をバカにしているのか!!」

「何言ってるのよ！。そんな拳に当たったら大変でしょうが、バカにするとかそういう問題じゃないでしょ!？」

「なら、とつとと皆の所に戻れば……いいだろうが!!」

叫んだカレンは、エリエの腹部目掛けて蹴りを繰り出す。

しかし、エリエはそれを咄嗟にバク転してかわし、一時的にカレンから距離を取ると、素早く体制を立て直して斬り込んだ。

「はあああああッ!!」

カレンは素早い切り返しに回避することができないと悟ったのか、ガントレットでガードする体制に入った。

（――掛かった!）

エリエは咄嗟にレイピアを地面に突き刺し、それを軸に真横に回転すると、勢いを利用してカレンのから空きになった腹部に蹴りを入れた。

予想外の攻撃をまともに受け、カレンの表情が歪む。

「――ぐうッ!」

カレンはよろめき数歩後ろに下がると、殴られた場所を押さえながら、エリエのことを殺意の籠った瞳で睨みつけた。

怒りに震えている彼女に、エリエが徐ろに口を開く。

「――この程度のフェイントもかわせないんじゃないわね……」

「はあ、はあ……な、なんだと?」

息を切らしているカレンに、それほど息を乱していないエリエが言葉が続ける。

「今のあんたじゃ、結成時のギルドにいた人達の足元にも及ばない。諦めることね」

「……結成時の？」

「そう。私も会ったことはないんだけど。話によると、元々ギルドはマスターを含めた5人で結成したものの。そして解散後、その4人はそれぞれ各地でギルドを立ち上げたらしい」

「それがこの戦いとどう関係あるんだ？」

エリエの話聞いて、訝しげにカレンは首を傾げた。

確かに今の話が、今回のこととどう繋がるのか全く分からない。そんな彼女を見てエリエは、面倒そうに首を振ると大きなため息を吐いた。

「はあく。あんた本当にマスターとずっといたの？　ここまで言えば分かるでしょ普通は——」

「——だから何がだよ！　もっと分かるように言えよ！」

カレンは彼女が話し終わる前に、少し強い口調でエリエを睨んだ。歯切れの悪いエリエの言葉に、イライラをつのらせるカレンに『仕方ない』と半分呆れ気味に告げた。

「4人ともマスターと同等クラスかそれ以上の実力者よ。そして、マスターはその4人に会いに行っただと思う……マスターがあんたを連れて行けなかった本当の理由は、同じギルドの時にその4人——四天王と呼ばれる人達と仲違いしたから……」

「……ッ!!」

カレンはそれを聞いて、思わず言葉を失う。

それもそのはずだ。エリエの言葉が事実だとすれば、マスターは1人で四天王と呼ばれている者達のところへいったということになるのだ。

しかも仲違いしたということであれば、相手は突然のマスターの訪問を歓迎はしないはず——つとなれば、普通は戦闘になっても何の不思議もない。

顔を青ざめさせているカレンを尻目に、人差し指を立てたエリエが言葉を続ける。

「さらに厄介なのは、四天王は全員がベータ版からこのフリーダムをプレイしていて、その固有スキルは全てが特別なものなのよ」

「……特別だと?」

カレンは眉をひそめると、エリエに聞き返した。

まあ、カレンがそう思うのも当然のことだろう。固有スキルとは、ハード即ちデジタル端末——ソフト。即ちプレイ用のアプリケーションが一体となった『フリーダム』では、購入して起動すると同時にランダムで設定される。

その設定方法は企業秘密ということであって、別のハードに買い替えると変更される為、ランダムではないかという話になっていた。

つまり、種類に違いはあれど、固有スキルとは個別の能力でありそれぞれに特別なものなのだ。

エリエはその疑問に答えるように口を開く。

「ベータ版をプレイした者はテスターと言われていて、全世界で数十人。日本からはその4人しかプレイする事が出来なかったのよ。そして、その全員が特典としてオリジナルの固有スキルを持っているという話よ」

「——オリジナルの固有スキル……だと?」

それを聞いたカレンは血相を変えて走り出す。

エリエは突然の行動に驚き、すぐにその前に立ち塞がるように両手を広げた。

「だから追いかけたらだめって言うてるでしょ! 何度言えば分かるのよ。このバカッ!!」

「バカはお前だ! そんな話を聞いて、黙って待ってるわけにいかないだろッ!!」

2人は叫んで、互いの顔を睨み合っている。

カレンは素早く横に移動すると、エリエもその前に先回りして道を塞ぎ一向に引くつもりはない。

ピリピリとした雰囲気はその場に流れる。

「……どげよ」

「あんたこそ……もう諦めなさいよ」

火花を散らしながらお互いを睨みつけている2人は、同時に言葉を漏らした。

「お互いに引けないなら倒すしか——」

「——ないわね！」

「——ないな！」

2人は距離を取ると構え直し。次の瞬間、同時に地面を蹴って飛び掛かった。

「はあああああアツ!!」

叫び声を上げながら、空中で2人のガントレットとレイピアがぶつかり激しく火花を散らす。

「どうしてお前は俺を止める！ お前の本当の目的はなんだ!？」

「あんたこそ！ 自分がマスターの邪魔になるってどうして分かんないのよ!」

エリエとカレンは鋭い眼光を飛ばし合い、空中で数回打ち合うと地面に着地した。

その直後、カレンが地面に片膝を突く……。

「一発喰らった……くそっ！ あいつがこんなに手強いと思わなかった……」

カレンは左肩を押さえるとエリエを睨みつけた。

それとは対照的に、エリエは涼しい顔で立っている。

「これが固有スキルの差ってとこかな。今のあんたじゃスキルも使えないんでしょ？ これが現実よ！」

「——くっ！ たかが一発当てたくらいで調子に乗るなツ!!」

カレンは地面を思いきり蹴ると、自慢げに胸を張っているエリエに向かつて拳を突き出した。

目を瞑っていたエリエは、その攻撃に一瞬反応が遅れる。

「しまった……」

エリエは咄嗟に腕でガードの体制に入る。その瞬間、物陰から突如として星が飛び出してきた。

「2人とも——もう止めて下さい!!」

決意に満ちた表情で両手を広げたまま前に立ちはだかる星に、カレンは驚き目を見開いて叫んだ。

「——ッ!? バカ、このタイミングで飛び出してこられても無理だ! もう止まらない!!」

万事休すとカレンが瞼を強く瞑った。

すると、星の頭の上に乗っていたレイニールがカレンに向かって飛び掛かってきた。

「主はやらせんぞー!!」

レイニールは向かってくるカレンの腕を小さな両手で軽々と受け止めると、まるで砲丸投げのようにぐるぐると体を回転し「うりゃー!!」と叫んで、そのままカレンを遙か彼方へと放り投げた。

「うわああああああああッ!」

カレンの体は綺麗な放物線を描きながら城の外へと飛ばされていく。

レイニールはそれを見て自慢げに「どうだー」と腰に手を当て、飛ばされるカレンを見て高笑いしている。

飛ばされたカレンは徐々に小さくなり、そして完全に視界から姿を消した。

「——やばっ!」

「あつ! カレンさーん!」

しばらくエリエと星は呆然とその場に立ち尽くしていたが、すぐに思い出したようにカレンが飛ばされていった方向に向かって走り出す。

しかし、どこまで走ってもカレンの姿は見つからない。エミルの城から相当走ってきたはずなのだが、目の前には大きな森が見えてきた。

ここまで着ても見つからないと言うことは、カレンは森の中に落ちたのだろう。森の中に生息しているモンスター達をエリエが一瞬で撃破していたが、さすがに埒が明かす。

レイニールの背中に乗せてもらって空からカレンを探すことにした。すると、森の一部にあからさまに木々が無い場所が見えた。

その中央部分にカレンが倒れていて、落ちた場所だけ大きなクレターができていた。

「あつー！ エリエさん。カレンさんがいました！」

大きくなったレイニールの背中に乗って探していた星が、地面にできたクレターの中心で大の字になっているカレンを見て指を差す。

無事を確認したエリエが大きなため息をつきながら、呆れた様子で頭を押さえている。

「はあ、全く。どうしたら、こんな場所まで飛ばせるのよ……」

「すまん、すまん。ちよつと力が入り過ぎた」

レイニールはそう言うと、2人を乗せ倒れているカレンの元へと降りて行く。

おそらく。落ちるまでずっと回転していたのだろう。カレンは地面に仰向けに倒れたまま目を回していた。

レイニールの背中からカレンに星が叫ぶ。

「カレンさん！ カレンさん。起きて下さい！」

「——うう……俺は……ここは……？」

カレンは頭を抑えながらゆっくりと体を起こした。星はほったした様子で、レイニールの背中から降りると、カレンの元に駆け寄っていく。

「……大丈夫ですか？ 私の声聞こえますか？」

「——ああ、大丈夫だ……って、星ちゃん！ 怪我はなかったか!？」

「えっ？ 大丈夫ですけど……」

そう言つて星の肩を掴んでいるカレンに、星は困惑しながら言つた。

カレンは星の体を舐めるように見てほつと胸を撫で下ろし、ゆっくりと口を開く。

「どこも怪我していないようで良かった……正直。星ちゃんが目の前に現れた瞬間、頭が真っ白になったよ。また俺が君に怪我を負わせるよ。うな事にでもなったらって……」

カレンはそこまで言つて口を閉じると表情を曇らせる。

富士山のダンジョンでの出来事をカレンはずっと気にしていたの

だろう。いくらここがゲームの中で、本来ならばプレイヤーキャラクターのステータスはほぼ統一されている。

だが、それはレベルが同じならの話で、レベル制MMOはプレイヤーのレベルが絶対的な実力差へと繋がる。

そしてカレンと星の間には相当なレベル差があり。しかも、カレンは装備の軽量化で敏捷にステータス追加があることを知りながらの戦闘だった。

ただでさえ年齢の差があるにも関わらず、ゲーム歴をひけらかす様なこの行為はとても褒められたものではない。

しかしそれは、カレンが一番分かっていたはずだ。その時の出来事をカレンは普通に生活しながらもずっと気にして自責の念にとらわれていたのだろう。

表情を曇らせ、今にも泣き出しそうなカレンの微かに潤んだ瞳を見つめ、星はカレンと戦った時のことを思い出す。

(あつ……カレンさん。まだあの時の事を気にして……)

険しい表情のまま「本当に良かった」と震える声で俯いたカレンに、星はにっこりと微笑み掛ける。

「大丈夫ですよ。私はもう気にしていませんから、カレンさんももう気にしないでください」

カレンはそう告げた星の顔を見ると、首を横に振ってゆっくりと話し出した。

「いや、俺はあの夜に誓ったんだ。もう感情に任せて戦わないと……感情は冷静な判断をできなくさせる……つて。さっきまでの俺がまさにそれだな……」

カレンはさっきまでの自分のことを鼻で笑うと、エリエの前に行く。

警戒した様子で「なによ?」と言う彼女に突然カレンが頭を下げた。「——すまん。少し冷静さを欠いていたらしい……お前の言う事も分かるけど、でも俺はマスターが心配だ! ここは黙って見逃してくれないか?」

カレンはそう言うと、エリエの顔を窺うように彼女の顔を見る。

エリエはそのカレンの決意に満ちた瞳を受け、その意思を汲み取った上で、大きく息を吐くと口を開いた。

「——そうしてあげたいけど、それはできないの……あんだだって本当は分かっているんでしょ？ マスターがあんたを残して1人で行った理由は、あんたの事をそれだけ大切に思っているからよ」

「ああ、分かっているさ。でも俺は……例えそうだと分かっているけど、はい。分かりましたって割り切れるほど、俺は物分かりが良くないんだ！」

そう言ったカレンは肩を震わせながら、拳を強く握り締めている。彼女の悔しさはエリエも痛いほど分かる。人なら誰でも、自分の力が足りないことへの悔しさを体験したことがあるはずだ。

この世の中、なんでも思い通りになるということはありえない。常に思い通りにならず、あと一步のところまで辛酸を舐めたことは誰だつてある。エリエはその武器がレイピアなことからも分かる通り、リアルではフェンシングをしているらしく。そのことで大会などでも何度も悔しい思いをしたのだろう。

エリエは少し何か考えた様に見えたが、すぐに首を振って声を上げた。

「ううん。絶対だめ！ マスターは必ず帰って来るし。ここにはエミル姉もイシエルさんもデイビッドもいる。あんたはここにいた方が安全なんだから！」

「だから俺は安全な場所で待っているだけなんて嫌なんだよ！」

「このわからずやつ！」

「わからずやはどつちだつ！」

2人はそう言って、またいがみ合う。

星は一触即発の2人に「ケンカはだめですよ」とあたふたしながら間に割り込んで止めに入った。

その時、カレンの視界に突然。

【マスター様からメッセージが入りました。】

つと表示が現れる。

カレンは「マスターからだ！」と呟き慌ててコマンドを開き、メッ

セージボックスでその内容を確認する。

そこには――。

『カレン。まさかとは思うが儂の後を追いかけてはおらんだろうな？
もしそうならすぐにエミル達の元へ戻れ。良いな！ お前にはエミル達の護衛を任せる。一週間程度で戻る。それまで、しっかりと修行しておれ！』

カレンはそれを読むと、小さくため息をついて歩き出した。

「ちよつと！ どこ行くのよ!?!」

「どこって城に戻るんだろ？ お前も早く来いよ……」

それを見て叫ぶエリエに、カレンは振り返らずに答えた。

エリエと星は顔を見合わせて首を傾げると、カレンの背中を追いかけていった。

* * *

*

月が水面に映る湖で白馬が水を飲んでいた。その横にはテントが立ててあり、その隣で焚き火を炊きながらマスターがコマンドを操作している。

「はあー。カレンの方はこれで良いだろう……しかし、あいつにも困ったものよ。男勝りに育ってしまったってこれから先が思いやられるな」

マスターはコマンドを閉じてそう呟くと大きく息を吐いた。

「しかし、あやつらに会うのも久しぶりだ。よもや、腕は鈍ってはおらんだろうな……メルディウス」

マスターはそう呟くと、拳を空へと突き上げて笑みを浮かべた。

マスターの真意3

その頃、城のエミルの部屋ではエミル、イシエル、デイビッドが3人の帰りを待っていた。

飛び出していった3人が気掛かりだったが、いったところで状況を混乱させるだけなのは分かっている。

部屋の中は、まるでお通夜のような静けさで、外にいるモンスター達の鳴き声が部屋に聞こえそうなくらいに静まり返っていた。

「ちよい遅くない？　うち心配やから見てこようか？」

「……いいわよ。待ってましよう」

イシエルの言葉にエミルはそう返したもののその表情は険しく、明らかにこの中で一番心配しているのは彼女だろう。

そんな彼女を見て、イシエルはくすつと笑みを浮かべると徐ろに席を立つ。

「ちよつとイシエ。行かなくてもいいって言ってるのに！」

意地を張っているのか、イシエルが立ち上がったことで驚いて声を上げたエミルに向かって、イシエルはにっこりと微笑んだ。

「大丈夫、行かへんよ。でも、あの子らが帰ってきてても気まずくなるのは見えとるやろ？　エリエちゃんは確かお菓子が好きやったはずやし。紅茶とお菓子をこさえて待つてよう思つてな〜」

それを聞いたエミルとデイビッドが紅茶と聞いて、同時に声を上げた。

「飲み物は紅茶じゃない方がいいと思う！」

その息の合った声を聞いてイシエルは驚き目を丸くさせたが、すぐに「了解」と微笑み返すと、キッチンへと向かって歩き出した。

おそらく。この時のデイビッドとエミルにはエリエが「紅茶の気分じゃないんだけどな〜」とぼやくのが見えていたのだろう。

エミルとデイビッドはその姿を見送ると、お互いの顔を見つめる。

「はあ〜。それにしても、マスターはいったい何を考えてるのかしら……」

「そうだな〜。でもマスターの事だから、それなりに考えがあつての

行動だとは思う。けど、イシエルさんまで呼び出すとはな……」

大きなため息をつき、頭を押さえているエミルにデイビッドも腕を組んで椅子の背凭れに体を預けた。

エミルはそんなデイビッドの顔を見つめると、真面目な顔をして口を開く。

「私の勘違いならいいんだけど……マスターはもしかして、何か大規模な作戦を考えてるんじゃないかしら。イシエのスキルは複数戦闘が得意だし、マスターが直接出向いて呼びに行く人間なんて数人しか思い当たらないのだけど……」

エミルの真剣な顔が徐々に不安で崩れていくのを見て、デイビッドは何かを察したのか、ゆつくりと口を開いた。

「あ……いや、まさか、あの人達に声を掛けるわけないだろ？ だって『3日もあればゲーム内のモンスターを狩り尽くす』なんて言われるくらいでたらめな力を持っているのに、性格もばらばらで戦闘スタイルは強引な人達だろ？ それに確か、彼等はマスターとは仲悪かったんじゃないか？」

「ええ、そのはずなんだけどね。でも緊急時だし、もしログアウトできなくなった時にプレイしていたとなると……」

「ああ、皆筋金入りのゲーマーだろうから。そうなる……」

2人は顔を見合わせると、その表情からは徐々に血の気が引いて青ざめていく……。

「すっごく怒ってる——」

「——でしようね」

「——だろうな」

同時に眩き、エミル達は大きなため息を付いた。

そこにコーヒーが入ったカップをおぼんに乗せたイシエルが歩いてきた。

「どうしたん？ 2人して、まるでお通夜みたいな顔して〜」

イシエルは机に倒れ込んでいる2人にそう冗談交じりに言うのと、余計に場の空気が重苦しくなった。

その空気を何とかしようといシエルが慌てふためいている。する

と、部屋の扉が開き、部屋に星が入ってきた。

「あつ！ 丁度え……ううん。皆、おかえりなさい」

イシエルは言おうとしていた言葉を飲み込んで、戻ってきた星になつこりと微笑んだ。

「……あ、はい。ただいまです」

控えめに星が小さな声でそう言うと、エリエは部屋の中に入るなり、くんくんと鼻を動かしている。

「何かいい匂いがする！」

「ああ、そうやった！」

エリエが瞳を輝かせながら言うと、イシエルは思い出したようにキツチンへと足早に向かった。

しばらくして、再びイシエルが姿を表わすと、その手には大きなバームクーヘンが乗った皿を持ってきた。

「わくお！ バームクーヘンやん!!」

「そうやよ。けど、エリエちゃん。うちの言葉遣いが移つとるよ……」

エリエの口調に、イシエルは苦笑いを浮かべている。

（ほんまにお菓子好きなんやなく、この子。もしかして……お菓子貰ったら誰にでもついて行くんやないやろな、ちよい心配になるわ）

イシエルはそう思いながらエリエに視線を向けると、彼女はおやつを貰う前の子犬のような瞳でイシエルを見つめていた。すると、2人から少し遅れて後ろからカレンが部屋に姿を表した。

それを見たエミルとデイビッドは顔を見合わせて安堵したように微笑んだ。

「とにかく座って、お菓子でも食べてゆっくりしたらええ。しばらくの間、ダンジョン内に籠ってたんやろ？」

イシエルは3人に席に着くように促すと、バームクーヘンの乗った皿をその中央に置いた。

手際良く小さなナイフで切り分け、小皿へと移して皆の前へと置いた。

エミルはイシエルが席に着いたのを確認して、神妙な面持ちで口を開いた。

「それじゃー。これを頂きながら今後の事について少し話し合いましょうか」

「そうだな、イシエルさんをマスターが呼んだということは、ギルドの再結成するという話が信憑性を増してきたしな」

エミルとデイベッドは真剣な表情でそういうと、皆の顔色を窺っているように思えた。

それを聞いた星は少し浮かない表情で、目の前に置かれた皿の上のバームクーヘンを見つめた。

それもそうだろう。星にとって、ギルドという存在の全てを把握できているわけではない。それどころか、ギルドというものがまだぼんやりとしか見えてこない。

エミル達の話聞いて、ギルドがプレイヤーの集合体の総称をそう呼ぶことは何となく分かっていたのだが、それがどこか自分とは別の次元の話のようにも感じていたからに他ならなかった。

「——ギルドか……もし、できたら私はどうなるんだろう。私はもともと部外者だし。やっぱり、もう皆と一緒にはいられないのかな……？」

ふとそんなことを思った星は落ち込んだ様子で、俯き加減に膝の上に置いた手を見つめていた。

それを見たイシエルは、星の様子から何かを察したように手を叩くと「今日はサウナに入り過ぎて疲れたわ。大事な話はまた明日にして今日は皆の武勇伝を聞きたいわ」と言ってエミルの方を見た。

エミルは少し不満そうな顔をしたが、満面の笑みで自分を見つめているイシエルの顔を見て仕方ないと言った様子で頷くと、イシエルにダンジョンでの出来事の一部始終を話し出した。

イシエルはその話を始めから終わりまで真剣に聞き、分からないところでは聞き返すので、結局あれこれ説明している間に数時間が経ってしまっていた。

その時コーヒーが飲めずにココアに変えてもらった星が一番に大

きなあくびをすると、それを見たエミルが声を掛けてきた。

「大丈夫？ 星ちゃん。もう遅いし、先に寝てしまいなさい。私も後で行くから」

「えっ？ でも……私ももう少し起きてます……」

「で、でも……」

エミルは眠そうに目を擦っている星を見て、少し困った顔をしている。

すると、エリエが困っているエミルを見かねて声を掛けた。

「星？ ゲームだからって遅くまで起きてると、向こうの世界に帰った時に朝起きられなくて困るよ？」

「……どうしてですか？」

半信半疑で聞き返した星に、エリエが真面目な顔をして口を開く。

「だって今はこの世界で生活してるわけだし。この世界の時間は向こうの時間とリンクしてるの。だから夜に寝て朝に起きるのは当たり前でしょ？ もし向こうに戻って夜更かししたら星のお母さんにうんと叱られるよ？」

「——お母さんに!?!」

「うんー!」

それを聞いて星は顔面蒼白になり、慌てて席を立つと寝室の方へと向かっていった。

その場に居た全員がそんな星を見送ると、カレンがぼそつと呟いた。

「——母親って、そんなに怖いものか？」

そのカレンの言葉を聞いて、イシエル意外の全員が無言のまま顔を伏せる。

その反応はダンジョンにいた時に、マスターから彼女の生い立ちを聞かされていたからに他ならなかった。

マスターの真意4

幼少期に孤児院で生活していたカレンにとって、母親というものは想像の中の人で、現実では最も縁遠い存在なのだろう。

急に静まり返った室内の雰囲気を感じたカレンが、不安そうな表情を見せた。

それもそうだろう。あからさまにそんな反応をされれば、どんなに鈍感な人間でも不審に思うに決まっている。

(まずいわ……カレンさんも何か感じている。ここは話題を変えて……)

エミルはそう考えパンツと手を合わせると、唐突にカレンに質問する。

「そうだわ、カレンさん！ 帰ったら何かやりたい事はないの!？」

「えっ？ やりたい事ですか……?？」

「そう！ ほら、皆もなにかない？ やりたい事!？」

エミルは咄嗟に話題を切り替えるようにと、その場にいた全員に目で合図を送る。それを感じ取ったのか、その場にいた全員が慌てて考える素振りをした。

その様子を見て、カレンはそれに合わせるように顎の下に手を置いて考え込んだ。

数分間の沈黙の後、デイビッドが一番に口を開いた。

「俺は牛立で肉が食いたいかな。あそこの600g極上サーロインステーキが最高なんだ!」

涎を垂らしているデイビッドをエリエが目を細め、呆れたように大きなため息をつく。

「はあ。600gの肉ってどんくらいよ……そんなに一気に食べたからお腹破裂するでしょ？ 嘘つくなら時と場所を考えなさいよね!」

透かさず噛み付いてきたエリエに、デイビッドが反論する。

「う、嘘じゃないぞ！ ほんとにそういうメニューがあつてだな。それがでかいんだが、脂が乗っててめっちゃくちやうまいんだ!」

「そんなメニューあるわけないじゃない! だいたい600gって

「いったい何人分の量よ！」

エリエが声を荒らげると、デイビッドは人差し指を立てて「もちろん。1人分だ！」と堂々と答えた。

清々しいほどに言い切ったデイビッドに、エリエの怒りが爆発する。

「あんたバカでしょ！ そんな店。すぐに潰れるに決まってるでしょ！ もう戻ったらなくなってるわよそんな店！ てか、力士が集う場所の間違いでしょ！ そうじゃなかったら肉の加工場よ！ バカ言うのもいい加減にしないと、バカがバカ言ってるのをバカが本気にするでしょこのバカ!!」

まるでマシンガンの様な物凄い早口で、デイビッドが口を挟む余地のないほどの速度で言い放ったエリエ。

だが、それを聞いたデイビッドも全く物怖じしない。

「——なっ！ 無駄に6回もバカって言ったな！ バカって言う奴がバカなんだぞこのバ—カ！」

「なによ。このバカ—！ あんたなんて肉食いすぎて爆発すればいいのよ！ バカ!!」

エリエとデイビッドはいがみ合うと、バカを連発し合い。いつもの様に終わらない口喧嘩を始めた。

どうしてもこの2人は喧嘩をしないと、収まらないらしい。見兼ねたエミルが呆れたようなため息を漏らすと、2人の会話に割って入る。

「まあまあ、2人とも落ち着いて……」

「エミル姉は黙ってて！ 今日という今日は、このバカにしつかりバカを治すように言わないといけないの！」

「そうだ。エミルは黙っててくれ！ これは牛立の人達に代わりしつかりと話を付けないといけないんだ！」

同時に仲裁に入ろうとしたエミルの方を向いて叫ぶ。

2人はエミルを避けるように横に移動すると、再び互いの顔を睨みながらいがみ合いを再開する。

「……あつ、そう」

(はあく。仲良くなったかと思っただらこの2人は……もういいわ。放っておきましょう)

エミルはそう思いながら、大声で言い合っている2人に諦めたように大きなため息をつく。

結局2人の口論のせいで会話が成り立たなくなり、その場に居た全員がため息をついている。

だが、この口論に巻き込まれた人間がもう1人いた――。

「……ううう。隣の部屋がうるさくて眠れないよ」

ベッドの上で布団を深くかぶっていた星は諦めたように布団から頭を出して、ふと横の窓を見ると、星がキラキラと輝いていた。

「わあく。星が綺麗だなあ……」

星は空に輝いている星を見上げていると、隣の部屋から「もういい加減にしなさい！」と堪忍袋の緒が切れたエミルの怒鳴り声が聞こえ、思わず笑みがこぼれる。

うるさくて迷惑を被っているはずなのだが、それが暗闇でも1人ではないという安心感を与えてくれる。

現実世界の星は学校から家に帰っても一人、寝る時も勿論一人だ。そんな彼女にとって、こんな騒がしい日常はとても新鮮で楽しいものだったのかもしれない。

「ふふつ、でもゲームなのに向こうにいた時と違ってにぎやかでない。帰れなくなったのはちょっと不安だけど……でもこうして、お友達と一緒にいれるのって幸せだな。……向こうに帰ったら学校でも思いきって、クラスの子に話しかけてみようかな……」

星は小さな声でそう呟くと、枕元ですやすやと寝息を立てているレイニールの背中をそっと撫でて再び瞳を閉じた。

* * *

始まりの街から北にいった場所にある都市「水の都市 千代」この都市は街の至る所に小さな川が流れ、その無数の川の上を幾重にも赤い橋が架けられている。街全体を張り巡らされた水路がまさに水の

都と言った雰囲気の都市だ。

江戸時代の民家の様な建物が点在する街並みに無数の川と赤い橋が掛かり、月明かりに照らし出された赤い橋の側をホテルがぼんやりと黄色く発光しながら飛び交っているその景色は、まるで昔の日本を模した別の異世界にもいるのではないかと思えるくらいの錯覚を生むくらいの幻想的で完成された光景だった。

その街の中心部に位置する城——千代城の屋根の上。赤毛に紫色の瞳の男が背中に大きな革製の鞆を担いて佇んでいた。

月明かりに照らし出される彼の纏うその鎧は、まるで真夏の太陽の様に赤く強い光沢を放っている。その背中の鞆の中には、古そう大な剣が収まっている。

しかし、その大剣は形状が不可解で、まず普通の剣とは大きさが段違いに大きく、大体男の背丈と同じくらいある。更に持ち手の部分にも、蝶が羽を広げたような形の鋭利な刃が付いている。

「ふわあくあ。退屈だな……来る日も来る日も新入りのレベル上げて雑魚モンスターを狩りに行くだけ……これじゃ、俺のベルセルクも暇だつて言ってるぜえく」

男は空を見上げ、無気力な感じでそう呟いて背負っている剣を叩く。

すると、その視界に突如として飛び込んできたのは、桜の模様が入った深紅の着物に膝丈程の赤い袴姿で小学生くらいの女の子。

赤い瞳に長い銀髪を風になびかせながら男の隣に着地すると、その容姿からは想像もできない落ち着いた口調でその男に話し掛ける。

「なにをぼやいているんですか？ それより。マスターからメッセージがきました——直接会って話がしたいと……どうします？ メルデウス」

小首を傾げている女の子を、彼の鋭い視線が捉える。

「紅蓮。登場して第一声がそれはないだろう……あとマスターじゃねえー。元！ マスターだ！」

「ですが、名前がマスターだから仕方ないです」

男はそう怒鳴ると少女の言葉を無視して徐ろに立ち上がり、月に向

かつて拳を突き出した。

「——フンツ！ 会いたいなら仕方ねえー。会ってやるさ！ あの野郎がどんな面して俺達の前にくるのか、この目で拝ませてもらおうじゃねえーか！」

男はそう呟くと、にやりと不敵な笑みを浮かべた。

「はあ……騒がしくなりそうですね」

少女はため息混じりにそう呟くと、月を見上げながら不敵な笑みを浮かべている男の背中を見つめていた。

第2章

ファンタジー

寝ていた星が次に目を開けるとなぜか空を飛んでいた。周りを見渡してみるものの、雲ばかりでそこには誰もいない。

自分一人だけがふわふわと空中を漂っていた。

「……あれ？ あれれ？ どうして私、空を飛んでるの!？」

突如として起こった不可解な状況に、星もただただ混乱するばかりだ。

それもそうだ。星は間違いなくベッドに横になり眠りに就いていたはずなのだ。だが、不思議なことにふわふわと体が無重力状態の様に浮いている感覚はしっかりある。いや、あり過ぎて戸惑うくらいだ。

すると、辺りに立ち込める霧が濃くなり、視界が真っ白な霧で遮られていく。

「どうしてこんな事に……たしか……あれ？　なんでだろう……思い出せない……」

その不可解な現状に、星はだんだん不安になってきたのか、その表情はみるみるうちに硬くなっていく。

もしかすると、またゲームに何らかの不具合が発生したのではないかと思った。いや、今までの出来事そのものが全てゲームの作り出した幻想だったのかもしれない。

そう考える方が最もしつくりくる。幻想を理想を思い描いて作り出した幻の世界——それが、今までの日常だったのかもしれない。しかし、そうだとしても。今は心の中に雲がかかった様にもやもやとするこの感覚だ。

(……どうしたんだろう。1人は慣れてるはずなのに……全然落ち着かない。今までこんな事なかったのに……)

今までの自分の抱いていた感情とのギャップに、更に表情が曇っていく。

それもそうだろう。星にとって今まで頼れるのは母親だけだった。いや、母親にも頼れていなかったのかもしれない。

そんな星にとって毎日が常に孤独との戦いだった。

問題が起きても頼れる人がいない為、いつでも自分一人で対処しなければならず。忘れ物をした時も、友達から借りるということができない分、翌日の用意する時に何度も持ち物を確認して、決して問題が起きないようにと心掛けていくくらい用心深くなっていったのだ。

だが、現実世界を離れ。ゲームの世界では予想外の出来事の全てを、星はエミル達に頼ってきた。

『困った時は周りに助けを求めろ』

本来はそれが正しいことなのだが、長い間一人でいる時間が長かった星にとっては、人に頼ることはいけないこと、という間違った思い込みができてしまっていたのかもしれない。

この時も『もし困った時に人を頼る事が身に付いてしまえば、現実の生活に戻った時に大変な事になる！』と星は本気でそう考えていた。

「——ダメだ。このくらいの事でおどおどしてたら……私は一人なんだ。私が、私がしつかりしないと！」

星は目を瞑り大きく息を吸って「ふうー」とゆっくり息を吐くと目を開く。すると今度は、学校の椅子に腰掛けている自分がいた。

動揺を隠しきれず、星は目の前の机に倒れ込む様にして顔を伏せる。

(……なに？ いったいどうなってるの!?)

星は混乱する頭を抱え、その場に伏せると『夢だ、これは夢なんだ』と強く念じて再び顔を上げ辺りを見渡す。

しかし、その光景は消えず、そこにはいつも通りのクラスメイトの冷ややかな視線が星に向けられていた。久しぶりに味わう圧倒的劣等感に、胸が締め付けられるように痛む——。

(この痛み……夢じゃない！ 胸が苦しい……皆の視線が怖い……これは紛れもなく——現実だ!!)

その時間は丁度、自習だったのだろう。

唯一助けを求められる大人である先生は教卓に立っていなかった。こういう時はなるべく他の生徒と目が合わない様にと、常に本をランドセルの中に忍ばせていた。

それで周りの視線や自分を悪く言う話し声が消えることはないが、本を読んでその世界に入り込むことで多少は気が紛らわせたのである。

星はランドセルの中を物色するが、いつも必ず入っているはずの本がどこにも見当たらない。

(なんで?! どうしてないの? いつも読んだらランドセルの中にしまつて……)

なおも必死にランドセルの中を探すが結果は同じ——いつもそこに入っているはずの本がない。

だが、クラスメイトに隠された可能性は低い。星にとって本は大事な物、以前にも隠されたことがあったのだが、その時は迷わず先生に報告した。その経験からクラスメイトも担任の教師に言いつけられるのを恐れ、本だけには手を出さなくなったのだ。

その時、星はフリーダムをする前のことを思い返す。

あの日は学校をずる休みしてブレスレットを貰った。しかし、本は取り出してはいないはず——。

本来ならそこにあるはずの物が忽然と姿を消したのだ。

不思議に思いながらも星はひたすら俯いたまま、授業終了を告げるチャイムが鳴るのを待った。

教室内に授業終了のチャイムが鳴り響くと、すぐに教室を出て図書室へと向かう。

それは図書室にはいつも先生がいる上に、静かにしなければいけないという決まりがあり、星にとっては学校で一番落ち着ける場所だったからだ。

もちろん。同じクラスの子や前の学年で一緒だった子なども利用する為、たまに悪口が聞こえてくることもあるもの。本を読んでいればそれほど気にならなかった。

休み時間終了のチャイムが鳴り教室に戻ると、すぐにランドセルの

中を確認する。

なぜなら――。

「あっ……やっぱり……」

星はそう呟くと、ランドセルの奥の方に入れていた手を引き抜いた。

そこには丸められたパンの入っていた袋をぐしゃぐしゃに丸められたゴミと、同じようにぐしゃぐしゃに丸められたノートの切れ端が入っていた。

その紙を広げるとそこには『俺の死界に入るな!』と、ご丁寧にびつくりマーク付きで書いてあった。だが、その紙に書かれた文字は、明らかに不可解な文章になっている。

（死角って言いたかったのかな？ 視界って言いたかったのかな？ どっちなんだろう……）

星はその言葉の意味を考え首を傾げながらも、それを持ってゴミ箱に捨てると、再び席に戻り体を小さく丸める。

給食の後の授業の時は、いつでも決まってランドセルの中に何か入っていた。

まあ、いつも無理に漢字を使って誤字がある為、特定の人物なのだろうが。それを気にするのも疲れるし、なにか危害を加えてくるわけでもないので放置していた。

掃除の時間はクラスメイトはいるものの。同じ班の生徒はただ話してるだけで、いつも星一人で一生懸命に掃除をしていた。

普通なら先生が来て怒るのだが、それ対策なのか掃除用具はいつでもしっかりと手に持っていて、先生が来た時だけ掃除をしているフリをして居なくなるとすぐにまたサボりだすという巧妙な手口を使う為バレないのだ――。

「おいつ!! 夜根暗!!」

その中の体格の良い男子が突然叫ぶと、持っていた箒の先で地面を叩いた。

星は怯えたようにびくつと体を震わせると、恐る恐る目を向ける。

「……な、なに?」

「なにじゃねえよ。お前が掃除遅いから先生来ちまっただろ！ さつさと終わらせろよ。グズ！」

「あ……はい。ごめんなさい……」

謝ると俯き加減にせつせと箒を持っている手を動かす。

男子生徒の言う『夜根暗』という呼び方は、苗字の夜空と根暗をかけた呼び方で、いつの間にか一部の男子の中で広がったものらしい。

星は急いで箒を動かし、教室を掃いている星の耳にはくすくすと笑う女子に他の男子は……。

「あいつ、勉強できるくせに効率悪いよな」「頭のどこかおかしいんじゃないの?」「いや、勉強しかできないんだろバカ過ぎて」

など、男子達の悪口が聞こえてきた。

星はそれを聞き流す為に、一心不乱に箒を動かして掃除に打ち込む。

机を並べ終え、最後のゴミをちり取りで掬い上げると、それをゴミ箱に入れる。

いっぱいになったゴミ箱を持ち上げ、1階のゴミ捨て場に向かう為、教室を出ようとしたその時。星の足に何か引っかけかりバランスを崩した。

星の体は前屈みになり。

「——わっ！ きゃっ!!」

星は小さな悲鳴を上げてその場に倒れ込む。はっとして辺りを見渡すと、思った通り目の前にはゴミ箱の中身が散乱していた。

「……あつ」

その光景に言葉を失いながら振り返ると、そこには箒が転がっている。

すぐ近くには、さっきの体格のいい男子が立っていて星のことを見下ろしていた。

「あーあ、夜空どうすんだよ。せつかく掃除したのに、廊下にまでゴミぶちまけちまってよー！」

わざとらしく大きな声で騒ぐ彼に、さすがに我慢の限界だった星はその場で俯き加減に小さく反論した。

「でも……これは武くんが箒で私の足を……引っ掛けたからで……きやつ！」

話をしている途中で倒れていた星の背中にちり取りが当たって星が小さく悲鳴を上げると、そこには箒を手に星を鋭く睨みつけている彼の姿があった。

「……ほら、責任持って片付けろよ！」

「……うん。ごめんなさい」

その冷たい声に星は危機感を感じ、徐ろに立ち上がると近くの箒を手にとって、無言のまま散らばったゴミをゴミ箱へと戻し、何事もなかったかのようにゴミ捨て場へと向かって歩き出した。

そして放課後になり、星は図書室で本を読みながら下校のチャイムが鳴るのを待っていた。

本を読んでいた星は急に表情を曇らせると、読んでいた本を机に置いてぼそつと呟いた。

「——武くん。昔はもっと優しくしてくれたのに……なにか悪い事したかな、私……」

さっきの体格のいい男子は星とは1、2年生の時に同じクラスで、昔はノートを運ぶのを手伝ってくれたり、運動が苦手な星に体育の時に色々教えてくれたりしたのだが、4年生で再び同じクラスになってから態度が急変し。あからさまに嫌がらせをしてくるようになった。

しかし、星にはどうしてこんなに嫌われたのか思い当たる節がない。

他にも廊下の雑巾がけをしている時に突然蹴飛ばされたり、ノートを運んでいる最中に後ろから背中を押されたりしたこともある。

とにかく彼は、学校での星の天敵と言ったところだろうか……。

星は考えを振り払うように首を左右に振ると、別の本を取りに席を立った。

つとは言ってももう3年近く、事ある毎に図書室に籠っている星にとって、図書室で自分の興味のある本は殆ど読んでしまっていて、今はその中でも内容の良かった本を読み返しているだけなのだ。

それからしばらく集中して本を読んでいると、肩をトントンつと叩

かれた星は慌てて振り向く。

そこには図書室の女の先生が星の顔を見て微笑んでいる。

「……な、なんででしょうか？」

「夜空さん？ もう下校時刻をとっくに過ぎてるけど、後は帰って読んだらどう？ 先生が貸出帳には書いておいてあげるから」

「えっ？ いえ、もう一度読んだ本なので……」

そう言った星は手に持っていた本をパタンと閉じると、元あった場所に本を戻した。

「一度読んでるのにそんなに集中して読めるなんて凄いわねー。他の子も夜空さんを見習って欲しいものね」

「いえ、そんな。見習うなんて、そんな……」

星はそう言われ頬を赤らめると、慌てて横に置いていたランドセルを背負う。

照れ隠しなのか、星は早歩きで扉の前までいくと。

「そ、それじゃー。先生、さようならー」

「はい、さようなら。気を付けて帰るのよー？」

星は返事をするようにペコリと頭を下げると、そのまま走って家まで急いで帰った。

家に着くと首から下げた鍵を取り出し、扉の鍵を開けると扉に手を掛けた。

「入ったらず。お掃除して、お洗濯して終わったら……またゲームしちやおうかな……」

星はそう呟きドアを開けてゆっくりと家の中へ入ろうとした直後、視界が眩い光に包まれた。

ファンタジー2

星が次に瞳を開こうとしたのだが、不思議と瞼が重くて開くことができなかった。

だが、耳には確実にレイニールが自分を呼んで叫ぶ声が聞こえる。

「あ……ある……あるじー！」

しかもよくよく感じてみると、なにやら顔の上に何か生温かい物が乗っている感覚があった。

「これって……！」

星は半信半疑のまま顔の上の物を掴みそのまま持ち上げると、重かった瞼が軽くなりゆつくりと瞼を開いて、さっきまで顔の上に乗っていた物を確認する。

星の手に掴まれていたもの……それは紛れもなくレイニールだった。

さっき瞼を開けなかったのは、レイニールが顔の上に乗っていたからだったのだ。

手に持たれたレイニールは、なんだか心配そうに星の顔を見つめていた。

「——大丈夫か？ 主。だいぶうなされていたようじゃが……！」

「……えっ？」

レイニールにそう言われ、ベッドから体を起こすと星はやっと自分がびっしょりと汗を掻いていることに気が付く。

なおも心配そうな表情で星の言葉を待っているレイニールに「うん。大丈夫だよ」と優しく微笑み返す、レイニールはほっとした様子で「そうか。なら良いのじゃ」と呟いた。

星は表情を曇らせながら、ある質問をぶつけてみる。

「……レイ。もし、私が現実世界で弱い人間だとしたら……レイは私のことを嫌いになる？」

突然星の口から飛び出したその言葉に、レイニールには不思議な顔で小首を傾げる。

急に重苦しくなった空気の中。固唾を呑んでさっきの質問の返答

を待つ星に、レイニールは少し間を空けて口を開いた。

「——はっはっはっ！ 何を今更当たり前の事を言っておる。主が弱いから我輩がおるのではないか！」

「そう……だよね……」

眩くようにそう言うと、期待していた返答じゃないことに、星はしよんぼりとする。そんな星の姿に、レイニールは不思議そうに首を傾げた。

それに気付いた星はそんなレイニールにぎこちなく微笑む。

「お腹空いたね。何か作りにキッチンに行こうか」

「やった〜！ 我輩もそれがいいと思うのじゃ主よ〜！」

レイニールは星のその言葉を聞いて元気に羽をはためかせると、嬉しそうに星の頭の上に乗ってきた。

星はレイニールに微笑み掛けると。

「うん。なら行こうか」

「うむ〜」

だが、ご機嫌なレイニールとは対照的で、星の心の中では今日見た夢のことが頭の片隅にずっと引つかかってもやもやしていた。

星はレイニールを乗せたままキッチンへ向かって歩き出す。

キッチンに着くと、そこにはまだ朝早いというのにエプロン姿のイシエルが立っていた。だが、なにやら大きな鍋を覗きながらにやにやしている。

星はそれを見てその場を立ち去ろうとすると、頭の上のレイニールがイシエルに向かって。

「おう。まだ早いというのに、何をやっておるのだ？」

何の考えもなしに話し掛けるレイニール。

（あ！ レイのばか、そういうのは聞いちゃだめなのに！）

星がレイニールの突然の行動に驚いていると、イシエルは呆気なくその質問に答えた。

「ああ、おはようさん。これは今日の朝食なんよ」

「おお！ なるほどな〜。通りで美味しそうな匂いがするわけじゃ〜！」

「あの……イシエルさん。ひとついいですか？」

「んっ？ どうしたん？」

イシエルは返事をする、星の方を向いて微笑んだ。

その優しそうな声に、星は少し話しやすくなった気がした。

「その……どうして料理する時に普通にしてるんですか？」

それを聞いたイシエルは驚いたように目を丸くしている。

だが、星の質問も最もだ。なぜならここは現実世界ではない。

星も以前料理スキルを使用してチーズトーストを作ったが、この世界では驚くほど料理も簡略化されているはずなのに、それをわざわざ数時間も早く前に起きて作る必要性はないはずだ。

わざわざ手にかかる方法を選択する理由は、単に味だけを気にしているわけではない気がしていた。すると、イシエルは目を閉じてゆっくりと話し始めた。

「そうやね。普通なら数分で終わる事を、一時間近く掛けてやるんは理解できひんかもしれん。でもな……こうでもしたらんと、いつもの自分を保っていられんのよ……」

「……イシエルさん」

イシエルは寂しそうな吐息を漏らし、鍋の方に視線を戻した。

星はその瞳にきらりと光る何かを見た気がした。

「ごめんなく。もう少しで一段落つくから待ってな」

「……はい」

イシエルは振り返らずにそう言ったが、星にはその声からはどこか明るく振る舞おうと、無理をしているように思えて仕方がなかった。

星はそんな彼女の反応を見て理解した。自分だけではなく、皆現実世界での生活がある。こんな状況下だが、現実世界には家族も友達もいる。寂しくないわけがないのだ――。

しかし、星自身は今日の夢で確信した『自分はそれほど現実世界に帰りたいと感じていないのだ』と、友達はいない。家族も母親ただ一人。しかも、毎日会話をすることの方が少ない。

そんな皆と正反対の自分が仲間達の中で、最も歪んだ思考であることに……。

キッチンにイシエルを残し、星達は言われた通りにリビングのテーブルに座っていた。

「楽しみだなあ。なあ、主よ！……主。どうかしたのか？」

「——えっ？ うん……そうだね。楽しみだね！」

余程楽しみなのか自分の大きさほどの長さがあるスプーンを手に、レイニールがそう言って笑うと、上の空でいた星は慌てて返事を返した。

「なんだか今日の主はおかしいぞ？ 今朝のうなされていた事と、何か関係があるのか？」

眉間にしわを寄せ、訝しげに星の顔を見上げる。

「うっ……そんな事、ないよ？」

「ふくん。まあ良いのじゃ」

レイニールは前を向き直して、鼻歌を口ずさむほど上機嫌だ。

（レイっていつも鈍いのに、こういう時は鋭いんだよね……）

星は動揺を隠しながら、心の中でそう呟く。

レイニールは不思議そうな顔をしながらも、持っていたスプーンでテーブルをコンコンと叩いている。

星はそんなレイニールを見つめながら、今朝の夢のことを考えていた。

（あの時の夢は夢と思えないほど鮮明で、はつきりとしたものだった……）

星はそう思っていた。

フリーダムの中で見る夢はどこか不可解で、それはまるで、現実の出来事を予兆させるようなものばかりだからだ。

星はダンジョンの中でも変な夢を見ているし、更には今日のこれだ。そして不思議なのは、二回とも夢を見る時はなぜか悪夢のような夢を見るということだ——今思い返してみれば、エミルに一晩中抱きつかれていた夜も、彼女は悪夢を見ていたのかもしれない……。

だが、星にはもう一つ。ショックを受けていることがある。

それは——。

（あつちの世界が現実なのにこつちに居ると分かった時、すごく安心

しちやった……ダメだな、私……)

星は分かってしまったのだ——こつちでは友達がいるが、現実世界ではまた1人ぼっちの生活が待っているということに……。

星が自己嫌悪に陥っていると、キッチンの方からイシエルが歩いてきた。

その手にはたくさんのお卵焼きが乗った皿を持っている。

さつきは鍋で何かを作っていた様だったから、待たせるのも悪いと気を利かせて作ってくれたのだろう。

「ごめんなく。まだ皆起きてこんからこれでも食べて我慢しててな
く」

「おお。見たこと無い食べ物じゃが、これは美味そう匂いじやー」

レイニールは目の前に置かれた卵焼きを見て、歓喜の声を上げる。

だが、皿の上に乗った黄金に煌めく様に見えた卵焼きに、星は何か違和感を感じていた。

(……あれ？ ドラゴンって確かたまごから……)

星はその卵焼きを見て、そんなことを思い出す。

「さあ。召し上がれ♪」

「いっただきまゝすー！」

イシエルは微笑みながらレイニールの前に卵焼きを置いた、レイニールはスプーンを皿の上の卵焼きに向けた。

「だめえー!!」

星はレイニールのスプーンが卵焼きに届く前に、慌ててその卵焼きの皿を奪い取る。その直後、無常にもレイニールの突き出したスプーンの先がコツンとテーブルに当たった。

だが、急に目の前の食べ物を奪われれば、ドラゴンでも頭に来るわけ——。

「……主。いったいどういふつもりだ？」

「——えっ？ あ、あのね……その……」

レイニールの怒りに満ちたその声に、星は思わず黙り込んでしま
う。

小さな金色のドラゴンの全身から放つ迫力に星は一瞬物怖じしな

がらも、目を瞑り再び目を開くと決意に満ちた声で叫んだ。

「——たまごはダメなの！　これは共食いだから！」

星の言葉を聞いて、何故かレイニールの声が更に怒りを帯びた声音に変わる。

「なるほどな……今度は我輩の星龍としての誇りまで、愚弄するつもりのような……」

レイニールはぼそつと呟くと星を睨んだ。

「星龍は我輩1体しかおらんのじゃ！」

「えっ!?　そんなの!?!」

星はそれを聞いて驚いたように目を丸くさせると、レイニールはスプーンを置いてパタパタと空中に浮いた。

「——なるほど……惚けたふりをして、主1人でその食べ物をいただくという考えだな。そうはいかぬのじゃ!!」

「きゃあああああッ!!」

レイニールの鋭い視線が星の姿を捉えると、星に向かって突進してきた。

突如、向かってくるレイニールに星は悲鳴を上げると、卵焼きを持ったまま部屋中を逃げ回る。

イシエルはその様子を「あらあら、朝から元気やね〜」と微笑みながら見つめている。

その時騒ぎに気が付いたエミルが部屋の中に飛び込んできた。

「星ちゃんー！　どうしたの!?!」

その声を聞いて星を追い駆けまわしていたレイニールが、突然空中でピタツと止まってエミルに向かって敬礼する。

星は息を荒げながら、追いかけるのを止めたレイニールにほっとしたように胸を撫で下ろした。

ファンタジー3

エミルは2人から事の事情を聞いて、どうしてこうなったのか理解すると、ゆっくりと頷いた。

その間、星とレイニールは隣り合わせに座り。2人とも反省した様子で、向かい側で腕を組んだまま険しい表情を浮かべているエミルの様子を窺っていた。

「——なるほどね。星ちゃんはレイニールちゃんが卵を食べたら共食いになると思つてて……。レイニールちゃんは星ちゃんが卵焼きを独り占めしようと思つた……。つと」

「……はい」

何故かレイニールは人間状態になつていて、俯きながら自分の手を見つめている。

星も同様に俯きながら膝の上に置いた自分の手に視線を向けていた。

その時、イシエルがカップを持って歩いてきた。

「まあまあ、ええやん。2人共ココアでも飲んで仲よしいやく。エミルは紅茶でええか？」

「ええ、ありがとう頂くわ。事情は把握したけど、それにしても……。どうして、星ちゃんは卵焼きを作ろうと思つたの？ 共食いになると分かつていたなら。この問題が起こる以前に、ここに卵焼きがあるのはおかしいと思うのだけど……」

「それは……」

エミルにそう尋ねられ、2人は同時にイシエルを見た。

上機嫌で紅茶を入れているイシエルを見つめ、大きく息を吐いた。

「——ああ、なるほどね。イシエが作つてそれが原因で2人が……。つて。元凶はお前かッ!!」

エミルがそう叫ぶと、首謀者であるイシエル本人は「えっ？ なんのこと？」と素知らぬ顔で微笑んだ。

頭を押さえてエミルは大きなため息をつくとき、星とレイニールの方を向いて頭を下げた。

「ごめんね。この子ちよつと抜けてて、でも悪気があった訳じゃないと思うから、2人とも許してあげて」

けろつとしていているイシエルの代わりに謝罪するエミルに、2人はバツが悪そうにお互いに顔を見合わせると謝った。

その後、互いに微笑み合う2人を見てから、エミルは徐ろに席に立つと「エリー達を起こしてくるわ」と言い残して部屋を出て行った。

「それじゃ。皆が来ないうちに卵焼きとやらを頂くのじゃ!!」

レイニールがテーブルに置かれた卵焼きに手を伸ばすと、今度はイシエルが「こらっ!」と伸ばしていたレイニールの手を叩いた。

眉を吊り上げたイシエルが指を立てて。

「お手ででなんてはしたないわよ? めっ!」

「ならスプーンで!」

レイニールは嬉しそうにスプーンを手に握り締めると、卵焼きへと一目散に飛びついた。

その直後、イシエルが卵焼きを取り返す。

「エミルも来たことやし、皆が来るまでおあずけや。後で皆が来てから食べようなあ」

「あつ……あう」

瞳を潤ませながら悔しそうに唇を噛んでいるレイニールをよそに、イシエルは卵焼きを持っていつてしまった。

レイニールは悲しそうに潤んだ瞳で手を伸ばすと、徐々に遠ざかっていくその後姿を見つめている。

そんなレイニールに星が心配して声を掛けた。

「ごめんね。私のせいで食べれなくなつて……後で私の分も食べていから……」

「うう……うわん。あるじ」

レイニールは泣きながら星に抱きついてくる。そんなレイニールの頭を星は優しく撫でていると、カレンが大あくびをして部屋の中に入ってきた。

カレンは笑みを浮かべながら星に近付いてくる。

「あつ、カレンさん。おはようございます」

「おお、星ちゃん。朝からお姉さんぶりを発揮してるね！」

「えっ!? いや、そんなんじゃないです」

その言葉を聞いて、星は顔を真っ赤にして両手をブンブンと振って否定しながら答えた。

カレンはにやにやしながら「またまたー」と言って茶化すと、その時、レイニールがニヤリと不敵な笑みを浮かべると、カレンの方を向いて叫んだ。

「ふふふっ……おぬしの卵焼きも我輩の物じゃー！」

カレンはその言葉に驚き「なんで!？」と仰け反っている。

そんなカレンに向かって、レイニールがビシツと人差し指を差しながら「主の事をばかにしたバツなのじゃー！」と偉そうに言い放つ。

「だいたい、君は昨日お風呂に居た子だろ。どうして親しくもない子にそんな事を——」

見慣れないツインテール姿のレイニールの言葉に反論しようとしたカレンの元に、星が慌てて駆けていくと耳元でささやいた。

「——ごめんなさい。今日は私のせいでレイ機嫌悪いです今度必ずお返ししますから、今日はおの子に譲ってあげて下さい」

「まあ……星ちゃんがそういうなら仕方ない。俺も女だ我慢するさ」

星はカレンに本当に申し訳なさそうに頭を下げると、それを見たカレンは渋々レイニールの方に向かって頷く。

「分かった。俺の卵焼きは君の物だ、好きにすればいい」

「やったー！」

「良かったね。レイ」

嬉しそうに飛び跳ねているレイニールに、星は優しい声でそう言っ
て微笑んだ。すると、キッチンからイシエルが大皿いっぱい卵焼き
を作って持ってきた。

それはイシエルの細い腕では到底持てそうもない大ききなのだが、
ゲーム内の筋力をサポートする機能が働いているのか、本人は涼しい
顔をして持っている。

「お話は済んだようやね。卵焼きたくさん焼いたから好きだけ食べ
てええからなく」

イシエルは3人に向かってにつこりと微笑むと、あんどりと開けたカレンが声を掛けた。

「イシエルさん……話聞いてましたよね？」

「うん。しつかり聞こえとったよ」

まったく動揺することなく、平然と言葉を返したイシエルにカレンが追求する。

「もつと早くに出てくれました……よね？」

イシエルは視線を上に向け、少し考える素振りをした。

「まあ、そうやねえ。でも……」

「……でもっ」

イシエルは急に恥ずかしそうにもじもじと体を動かし。

「うちに、人の話の腰を折るようなことなんかできひんよ」

つと、少し頬を赤らめながら、持っていた大皿をテーブルの上に置いた。

そしてその様子を見ていたカレンの頭に『この人、天然とかそういううんじゃなく。わざとやってるんじゃないだろうか……』という疑問が浮かび、カレンはイシエルを目を細めて訝しげに見つめた。

その後、エミル達が部屋に入つて来て、テーブルを囲んで朝食を取り始める。

朝食のメニューは日本食つという感じで、ブリの照り焼き的な物とお味噌汁、卵焼き後サラダのような物が並べられている。

まあ、ブリがこの世界で取れるなんて話は聞いたことがないので、代わりの何かの魚なのだろうが……いや、魚かどうかも怪しい。

だがいつの間にかレイニールが小さなドラゴンの姿に戻っているのは、少しでも多く食べる為なのだろう。

レイニールはやつと食べられた卵焼きを口いっぱい頬張って歓喜の声を上げる。

「これが卵焼きというのか、これは柔らかくて甘くて美味しいのじゃ！　なあ、主！」

「……えっ？　うん。そうだね！」

そう返事をする、レイニールの隣で星は何やら浮かぬ顔をして

いた。その理由が、今朝見た夢のせいだということは言うまでもない。

浮かない表情の星に気付いたエミルが声を掛けてきた。

「どうした？ 元気がないみたいだけど」

「いえ、食欲があまりなくて……」

「食欲がないの？」

星はその質問にこくりと小さく頷くと、箸をテーブルに置いた。

その「食欲がない」という星の言葉に、エミルは訝しげに首を傾げる。

システム上、食事や睡眠などを取らなければプレイヤーのステータスに影響を及ぼすのは、もはや言うまでもないが、空腹の数値の最大回復量は大人でも子供でも一定なのだ。また、もちろん『食欲』などで、その数値が変動することなど有り得ない。

エミルはそんな星が心配になって、横に座っていたエリエの耳元で小さくささやいた。

「エリー。食欲が無いっておかしくない？」

「そう？ たまにはそういう時もあるんじゃないの？」

エリエはコマンドを指で操作しつつ答える。

「もう！ そんな時が無いからおかしいって言ってるんでしょ？」

「エミル姉は心配し過ぎだよ。過保護過ぎると子供は育たないよ？」

たまには放置プレイも大事なんだよ」

エリエはそう呟き、アイテムから出したチョコレートを片手でかじりながらもう片方で持った味噌汁をすすっている。

ため息交じりにその衝撃的な光景を見なかったことにする。

「もう。適当なこと言って……」

（星ちゃんはあれこれ考えすぎるから心配だわ……これはお姉さんとして、なにか策を打たないとダメね！）

エミルはそう心の中で決心すると、頭の中であれこれ考えを巡らせていた。

そうこうしているうちに、一番に食べ終わった星が徐ろに席を立つと「もう少し眠ってきます」と言い残して、寝室の方へと消えていっ

た。

取り残されたレイニールは最後の卵焼きを美味しそうに口の中に頬張り、満足そうな笑みを浮かべると、星の後を追いかけてようと羽をはためかせる。

エミルはそんなレイニールに声を掛ける。

「レイニールちゃん！ ちょっと聞きたい事があるんだけどいいかしら？」

その声にレイニールはびくつと震えると「なんじゃ？」と怯えたような瞳を向けた。

エミルはビクついているレイニールに微笑みながら優しい声でもう一度尋ねた。

「あのね。ちょっと星ちゃんの事で聞きたい事があるんだけど……」

「は、はい！ なんなりと!!」

レイニールはお風呂での出来事が余程怖かったのか、背筋を正して敬礼して次の言葉を待っている。

その姿は、鬼軍曹と新兵のそれと似ているかもしれない。

エミルはそのまま話を続ける。

「星ちゃんに何か変わった事はなかった？」

「変わったこと……？」

レイニールはそう言って首を傾げる。エミルは神妙な面持ちで頷く。

その真剣な表情を見て、レイニールはコホンと咳払いをすると徐ろに話し始めた。

「なるほどな……ならば教えてやろう！」

勝ち誇った様に、胸を張るレイニール。

エミルはレイニールから今朝星がうなされていたようだという話を聞いて、さっきの星の様子がおかしかった理由がようやく分かった。

「ありがとうね。レイニールちゃん」

「うむ。我輩で良ければいつでも力になるぞよ！」

口調が変だがレイニールは満足そうに頷いて、星の向かった寝室へ

と飛んでいった。

その話を聞いて、しばらく考え込むエミル。

(怖い夢を見たから落ち込んだのね。だったら……)

エミルはなにか良い策を思いついたのか「ふっふっふっ」と不気味な笑みを浮かべている。

「エミルさん。なにか企んでますよね……あれ」

「なんや。エミル怖い……」

「エミル姉。なに笑ってるのかな？」

「なんとというか、嫌な予感しかしないんだが……」

4人はそう言ってエミルを見つめている。

それから数時間後、その不安が現実のものとなる。

星を含めた5人とレイニールが、エミルに呼ばれてリビングのテーブルに着いていた。しかし、そこには皆を呼び出したはずのエミルの姿はない。

「どうしたんでしようね。エミルさん」

「大丈夫よ、星。エミル姉の事だから、何か考えがあるはず……」

エリエが不安そうな表情で座っている星の顔を覗き込んでしっかりと微笑む。

その隣からデイビッドが口を挟んできた。

「……いや、エミルの事だから不安なんだけどな」

デイビッドはそう言って眉をひそめると、そんな彼にエリエが声を荒げる。

「ちよ、バカ！ どうしてデイビッドは余計なことしか言わないのよ

！ 空気読みなさいよね!!」

「事実なんだから仕方ないだろ？」

「だから空気を読めって言ったでしょ！ 言っつていい状況か察しろっつて言っつてるんでしょ!?!」

星の横で言い争うを始めた2人を見て、星の頭のレイニールが星の頭を叩いて小さな声で呟く。

「なあ、主。あの2人はどうしてあれほど仲が悪いのに近くに居るのだ？」

「うん、それはたぶん『喧嘩するほど仲がいい』て事だと思うよ?」
「ふくむ。喧嘩するのに仲がいいなど、我輩には到底理解できんがな
……」

レイニールの真を付く意見に星は思わず苦笑いを浮かべている。
すると、そこにエミルが入ってきた。

皆一斉に彼女の方を向き直すと、その手にはなにやら大きな丸められた紙が握られている。

エミルはゆっくりとその紙をテーブルいっぱいに広げた。

フアンタジー4

エミルの持つてきた大きな紙は地図だった。

彼女がテーブル一杯に広げた大きな地図を、皆が食い入るように見つめる。

「エミル、なんなんこれ。今からいったいなにするん？」

イシエルがそう尋ねるとエミルはにっこりと微笑む。その後、その地図の一箇所を指差して大きな声で叫んだ。

エミルの指差したその先には、広大な森が広がっている――。

「いい皆ー。これからこの場所のフィールド攻略に行くわよ！」

それを聞いて星とレイニールが首を傾げている中で、この場の他の誰もが驚きのあまり目を丸くしている。まあ、イシエルだけは微笑んでいるだけで驚いていないか分からないが……。

それもそうだろう。ダンジョン攻略と違い、フィールド攻略の方が難易度はあきらかに下がる。

本来ならば、この状況下で難易度が低いというのは願ってもないことなのだが、話はそんなに単純ではない。

フィールド攻略とダンジョン攻略との最大の違いが、その経験値や報酬の差にある。

難易度が下がった分、フィールドでの報酬はしょっぱいと言わざるを得ない。

基本的にフィールド攻略の目的は、冒険に不可欠な食材や回復アイテムの確保であり。

更に付け加えるならば、それも殆どが街で入手できるレベルの物で、フィールドボスでも倒さない限りレアと言われるアイテムも手に入らない。

しかも、フィールドボスはダンジョンのボスよりはレベルが劣るものの。広大なフィールド全体を動き回る為、深傷を負わせている場合は取り逃がす可能性もある。

移動時間などに時間を多く使う割に、それほど大きなメリットもない為、わざわざこの死ねない状況で行くようなものではないのだ。

そんなことは高レベルプレイヤーのエミルならば、知らないはずはないのだが……。

「——ちよつと待ってくれエミル。どうして今行かなければいけないのが理解できないんだが、そのところをしつかり説明してもらえないと、ここにいる皆も納得できないはずだ！」

「そうだよ。どうしてよりによってフィールド攻略なの？ ログアウトする方法を探すんなら、ダンジョンを攻略した方が確実だよ！」

デイビッドとエリエは、納得いかないと言いたげな顔でそう主張した。

だが、それは最もだ——富士のダンジョンであつた覆面の男は、多くの人の目に付くフィールドに出口を用意している人物ではない。

何故かと言うと、富士のダンジョンでもこの世界でもレアな属性攻撃でしか倒せない最悪の敵を用意しているくらいに用心深く。しかも、ダンジョンに出口があると分かつてダンジョンを崩落させる徹底ぶりだ。

そんな人物が、素直に出口を置くはずがないだろう。もしあつたとしたら、それは間違いなく罠だろう。

エミルは目を瞑つたままその話を聞くと、徐ろに口を開く。

「……2人の意見はもつともだわ。なら説明するわね」

テールの上の地図に前屈みに手を突いたエミルの口元に、皆の視線が集中する。

その場にいた全員が、その次の言葉を固唾を呑んで見守つていると、エミルは言葉を続けた。

「まずどうしてフィールド攻略なのかだけど、その理由は大きく分けて2つ。1つは全員の連携の確認と複数の敵との戦闘の対応を練習する事。そしてもう1つがモンスターの生態調査かしらね」

「……生態調査？」

それを聞いたエリエが不思議そうに首を傾げた。

それもそのはずだ。生態調査と言ってもモンスターは所詮、データの集合体でしかなく。設定されたAI以外の行動は絶対に取らない。「それに戦闘の対応する練習って言つても、もう嫌というほど戦つた

じゃん。私はお留守番でいいよ」

エリエが面倒そうに投げやりな態度でそう告げると、カレンが口を挟んできた。

「なら、お前はここに残ってるよ。臆病者がいると迷惑だからな。星ちゃんは俺に任せて部屋で震えてればいいさ」

「な、なんですって!?! そこまで言われたら、黙っていられないでしょ! エミル姉、やっぱり私も行く!!」

エリエとカレンはお互いに睨み合っている。星はドギマギしながら、そんな2人の様子を見守っていた。

そんな2人を放っておいて、歩み寄ってきたエミルは星の耳元で小さな声で告げる。

「……これは星ちゃんのために用意したんだから、色々楽しみにしててね?」

「えっ? それってどういう……」

星がそう言い終わる前に、イシエルがエミルに声を掛けてきた。

彼女の意味深な言葉に、意味が分からずただただ星は首を傾げていた。

エミルの言葉の意味が星にはさっぱりと言っているほど分からない。それもそうだろう。突然、何の前触れもなくフィールド攻略という

専門用語が使われれば無理もない。

その上、それが自分の為と言われて即座に理解できる者などいないだろう。

「ほなエミル。出掛けるんなら準備せなあかんやろ? 買い物に行こか」

「あ、ちよつと、イシエ!?!」

「ええから、ええから」

その真意を聞く前に、星の前からイシエルがエミルの手を引いて、強引に連れて行ってしまった。

皆と一緒に部屋に取り残された星は、その言葉の意味をもう一度考える。

(私のためって、いったいどういう意味なんだろう……)

だが、その言葉の真相を知っているのは、言い出したエミルだけなのだ。

その時、エリエが何かを思い出した様に手を叩くと。

「あつ！ サラザも呼ぼ〜」

エリエはうきうきしながら、嬉しそうにサラザにメッセージを送信する。

それを見たデイビッドが少し嫌そうな顔をしている。

「俺。あのオカマ苦手だな……」

その話を聞いて、カレンとエリエがそんなデイビッドに向かって言った。

「デイビッドさん。女性にそんな事言ったら失礼ですよ？」

「そうよ。サラザは女の子なのよデイビッド。いつから頭だけじゃなくて、目までおかしくなったの？」

さすがにその意見には賛同できないのか、信じられないと言った表情でデイビッドが大声で叫ぶ。

「だいたい俺の頭はおかしくないし！ それに、何をどうしたらお前達はあれが女だと認識できるんだ!? そっちの方がよっぽど不思議だ！」

それを聞いた2人は不思議そうに首を傾げると「心が？」と声を合わせて答える。

デイビッドはその言葉に、眉をひそめると「心より体の方が問題だろう」と呆れながら呟く。

エミル達を待っている間。星達は思い思いに時間を過ごしていた。彼女達が出ていってから30分が経ち、ようやく部屋のドアが音を立てて開いた。

そこに入ってきたのは――。

「エリー、ごめんなさ〜い。オカマイスターの会合が長引いちゃって〜」

退屈そうに各々時間を潰していた部屋に、胸に○の中に釜とプリントされたタンクトップを着たサラザが入ってきた。

それを見たエリエ以外の全員が口を開けたまま、サラザのことを呆然と見つめている。

(なんだ!? あのダサイプリントの入ったタンクトップは!!)

そう心の中でその場にいた全員が例外なく思っていた……。

デイビッドの目はサラザの着ているタンクトップに集中する。

(おっ……オカマイスターってなんだ!?)

カレンはそんなことを考えながらサラザを見つめている。

(……オカマイスターの会合って昨日からずつとしたのかな?)

星はそう思いながらもサラザから、そつと目を逸らす。まあ、皆のそんな心の声が、サラザに聞こえるはずもない。

エリエはサラザに向かって駆けて行くと、そのままサラザの胸に飛び込んだ。

「サラザ! もう。急に会合に行くって言うんだもん!」

「ごめんなさいね。ちよつと誰が今年一番美しく筋肉を鍛えたかを競う。美筋大会も重なったのよ」

「それで順位はどうだったの?」

瞳を輝かせてそう尋ねたエリエに、サラザは人差し指を立てて誇らしげに微笑む。

「もちろん1位よ!」

「さつすが。やっぱり1位よね! 2位は敗者でしかないもんね!」

「ええ、出るからには1番以外はありえないわよ。この日に向けて体を絞ったんですもの」

意味の分からない意気投合した2人は熱く手を握り合うと、お互いの顔を見て微笑み合っている。

自分達の世界に完全に入ってしまった2人を、皆が生温かい目で見守っている。だが、カレンは理解しているのか、頻りに頷いていた。まあ、カレンは『1位以外は敗者でしかない』というところに共感したのだろう。

それからしばらく経って、エミル達も帰ってきた。

2人が部屋に入ると、サラザを見て驚いたように目を丸くさせてい

る。

「……なんなん、このムキムキマンは——お腹なんてチョコレートみたいになつとるよ!？」

始めて目の当たりにしたマッチョに、イシエルはサラザの腹筋を見つめながら固まっていた。

まあ、彼女の反応が普通だろう。突然、家に見知らぬマッチョが現れれば、恐怖と困惑を抱くのは当然だろう。

そんな様子のイシエルを尻目に、隣に居たエミルはサラザに普通に話し掛けた。

「どうしてサラザさんがここに？」

「あら。エミル久しぶりね。一昨日ぶりくらいかしら？」

「——えっ？ この人。エミルの知り合いなん!？」

あまりの衝撃に、イシエルは目を見開いたまま大声を上げた。

まあ、この反応が普通だろう。突然友達と見知らぬムキムキの男が親しげに会話していれば、驚かない方がおかしい。

エミルは冷静にサラザのことを初対面のイシエルに紹介する。

「ええ、この人はサラザさん。エリーの友達で、昨日話したダンジョンと一緒に行ってくれた人なの」

「この人があのサラザさんか……それにしても。うちの想像してたんとは、なんや雰囲気違うな」

イシエルは苦笑いを浮かべながらそう呟くと、そんな彼女の前でサラザがにっこりと微笑んで右手を差し出した。

「はじめまして、私はサラザ。仲良くしましょう」

「は、はい。よろしゅう……お願いします……」

イシエルは困惑しながらも、差し出されたその手を握った。

意外とソフトに、だが逞しい手でイシエルと握手を交わしたサラザに向かって、エミルが声を掛けた。

その表情は真剣そのものだ——。

「——サラザさん。私達、今からフィールド攻略に行くんですけど一緒……」

「ええ、話はエリーから聞いてるわよく。私もぜひ行かせてもらおうわ

」

サラザはエミルが話し終わるのを待たずに、そう口にする腕を突き出し親指を立てた。

その後、エミルに連れ出され、城の外へと出てみると、そこにはすでにリントヴルムが待機した状態で、首を長くしてこちらを見ている。

「さあ、皆乗って！ さっそく出発するわよ！」

エミルはリントヴルムの背に乗るように促すと、それに従うように全員が背中に乗った。

それを確認すると、エミルがリントヴルムに「ドリームフォレスト」に向かうようにと指示を出す。

リントヴルムは空を見上げ、その白く大きな翼をはためかせ飛翔すると勢い良く前進した。

ファンタジー5

エミルの言っていた「ドリームフォレスト」とは、始まりの街から飛んでいって30分ほどの距離にある広大な森で、そこには童話の中に登場するような幻想種と呼ばれる種族が多く生息している場所であった。

フリーダム内でも初心者に人気が高く、強いモンスターでもLv50程度とそれほど強くもないので、今回の目的を達成するには適した場所と言えるだろう。

エリエは上空を進むリントヴルムに揺られながら、エミルに尋ねた。

「ねえ、エミル姉。ドリームフォレストって確か、フィールドボスは幻獣キマイラだよな？」

「そうよ。ライオンの顔に山羊の角、そして蛇の頭を付けた尻尾を持つモンスターね。Lvは100——でも、私達なら余裕で倒せる相手よ」

エミルはリントヴルムの手綱を操りながらエリエの質問に淡々と答えている。

その時今まで黙っていたデイビッドが口を開いた。

「エミル。1つ聞きたいんだが……」

「……何かしら」

エミルは振り返ることなく答えた。

そんな素っ気ない彼女に、デイビッドはそのまま言葉を続ける。

「エミルはこのフィールド攻略で本当は何が知りたいんだ？」

「何って、さっきも言った通り。敵の生態調査とパーティーの連携の練習よ？」

エミルの言葉を聞いて、デイビッドは納得いかないと言いたげな顔で眉間にしわを寄せている。

だが、彼女の言ったパーティーの連携の練習は実戦というかたちではあるが、がしやどくろの最終形態まではしっかり取れていた。

しかも、今更練習などしなくても、高レベルプレイヤー集団は個々

の能力を発揮すれば、大抵の敵はなんとかなるのも事実。

それを見ていたエリエが間に入るように口を挟む。

「まあ、ようするにエミル姉が確認したい事に、私達が協力すればいいって話でしょ？ それにエミル姉が話したくない事を無理に聞き出す必要もないしね！」

「……エリー」

エリエはエミルに優しく微笑んだ。

「そうだな、俺も気にしすぎていたみたいだ。ごめんなエミル」

「いいえ、謝るのは私よ。でも、行けば必ず分かるからそれまでは……」

「ああ、分かった。俺はお前を信じる」

デイビッドにそう言われ、ここまで表情一つ変えない険しい顔から、エミルはようやく笑顔を見せた。

それからしばらくして、エミルはリントヴルムにドリームフォレストの手前の平原に着陸した。すると、エミルは着地してすぐにリントヴルムを巻物の状態に戻す。

普段ならば、それほど急いでリントヴルムを巻物に戻さない。しかも、本来の目的地よりもだいぶ離れた平原に着地したことに、エリエが不思議そうに首を傾げ尋ねた。

「ねえー、エミル姉。どうして森に降りなかったの？ ここからだど、まだ少し距離があるけど……」

「降りてもいいんだけどねえー。リントヴルムは強いモンスターだから、森にいる強いモンスターを呼び寄せちゃうのよ。今回はフィールドボスには会いたくないから」

「ええ〜。つまんないよ〜」

それを聞いたエリエは、不満そうにそう言って口を尖らせていると、イシエルが徐に口を開く。

「——まあまあ、エリエちゃん。そういうんも鬼ごっこみたいで楽しいやろ？」

「えっ？ あっ、はい！ そうですね……」

優しく微笑むイシエルに、エリエは何故か俯き加減に答えた。

以前、エミルの城の大浴場でもイシエルに対して、少し遠慮……というか、萎縮している印象を受けた。

その様子を見ていた星は不思議に思ったのか、ふとエミルを見上げ。

「あの、エミルさん？ エリエさんとイシエルさんって仲が悪いんですか？」

星がそう尋ねると、エミルは一瞬だけ視線を逸らし、少し言いにくそうに答えた。

「そうね。仲が悪いというか、トラウマかしらね……」

「……トラウマ？」

そう聞き返して首を傾げている星に、にっこりと微笑んでエミルは言葉が続ける。

「そう。昔エリーがギルドに入ったばかりの時、イシエによく怒られたのよ……その時の事が忘れられないのか、エリーは未だにイシエのことが苦手なの」

「へえ。そうだったんですね」

星が相槌を打つと、エミルはそんな星に微笑み掛け「いい子の星ちゃんには関係ない話かもしれないわね」と優しく頭を撫でた。

星は顔を真赤にしながら照れていると、辺りにデイビッドの音が響いた。

「ほら、皆。早く行かないと日が暮れてしまうぞ？」

その声に促されるように、皆も森へと向かって歩き始めた。

森に辿り着いた星はその光景を見て思わず声を上げた。

辺りの木には光る星の形をした実がなり、森の至る所を色鮮やかに光る大きなホタルのようなものが飛びかっている。

星はその飛び回っている光を指差してエミルに尋ねる。

「エミルさん。あのホタルみたいな光は何ですか？」

「ああ、あれは……見てもらった方が早いかもしれないわね。行ってみましょうか！」

「……えっ!?! いえ、私は、怖いからいいです！」

エミルは笑みを浮かべると、嫌がる星の手を引いて、まるで子供の

様に無邪気に光りの元へと向かって走り出す。

強引に手を引いて前を走るエミルに、星は心配そうに眉をひそめている。

(どうしたんだろうエミルさん。普段はこんな事しないのに……)

星は困惑しながらエミルの顔を見上げる。

だが、そんなことを考えている間にも謎の光は徐々に近付いてくる。

星は迫ってくる謎の光りに慌ててみたものの、エミルは止まる気配すらない。

(もうだめだ！)

星が心の中でそう叫んで強く目を瞑る。

それから少ししてエミルの優しい声が星の耳に入ってきた。

「ほら、星ちゃん。目を開けてごらんなさい」

「……えっ?」

その声に従うように恐る恐る瞼を開くと、目の前で小さな妖精が星の顔を不思議そうな顔で覗き込んでいた。

透明の羽から光の粒子を出しながら、ホバリングしている妖精が星の鼻先を指先でツンツンと突くにつこりと可愛らしく微笑んだ。

しかし、星はその状況を理解できずにきよとんとしたまま、目をぱちくりさせている。

「——星ちゃん。驚いたか?」

星がその声の方を向くと、そこには微笑んでいるイシエルの姿があった。

「イシエルさん? 驚いたってどういう意味ですか?」

「その言葉の通りやよ? これはな。エミルが星ちゃんの為にエミルが考えたサプライズなんよ!」

「サプライズ?」

その言葉を聞いた星が不思議そうに首を傾げた。

「ちよつとイシエ! それは言わない約束でしょ!」

そんなエミルを見て笑みを浮かべると言葉を続ける。

「そうなんよ! エミルはなく。星ちゃんが落ち込んでいるから、

ファンタジー好きの星ちゃんに喜んでもらおうとこの企画を考えたんよ?」

「エミルさん。私の為に……」

星は瞳を潤ませながら、エミルを真っ直ぐに見つめると、エミルは恥ずかしそうに頬を赤く染めている。

そんなエミルをイシエルは優しい眼差しで見つめ、再び話し始める。

「このフィールドにはな。お話の世界で出てくるようなモンスターがぎょうさんいてるんよ」

「そうなんですか!」

「ふふ、その妖精さんにも触れるんよ?」

「へえ〜」

星はそれを聞いて目の前の妖精に向かって手を出した。

妖精は星のその手に自分の手を合わせるとにっこりと微笑み星の顔を周りを飛び回り始めた。

それを見たレイニールが警戒するように星の前に出て妖精を睨みつけた。

妖精は踊るように星の上空を飛び回ると光の粒子が星に降り注ぐ。

「うわあ〜。綺麗……」

その光を見上げると、まるで夜空に煌めく星のように見えた。

エミルは嬉しそうに妖精を見上げている星を優しい眼差しで見つめている。

「はあ〜。そんな事だろうと思った」

エリエは分かっていたように「ふう〜」と息を吐いてそう呟いた。

「確かに……エミルの頭の中は星ちゃんの事でいっぱいだからな」

「当然ですよ。星ちゃんは素直でいい子ですからね。俺もあの子の為なら、なんでもしてあげますよ」

デイビッドとかレンが並んでそんな会話をしていると、その背後からサラザの腕が2人の首をがっしりと絡ませて涙を流している。

「うわ〜ん。友情って本当にいいわねえ〜」

「……………」

号泣しているサラザを見て、2人は無言のまま顔を引きつらせている。

「——妖精さん。とても綺麗でした。ありがとうございます！」

星がそういうと妖精はにっこりと笑い星の周りを数回飛び回って、森の中へと消えていった。

星は手を振って妖精に別れを告げると、エミルの元へと駆けてきてにっこりと微笑んだ。

「ありがとうございます。エミルさん」

「ええ、いいのよ。楽しんでもらえてるなら……でも、内緒にしてごめんなさいね。最初に言えばよかったわね」

「いいえ、私こういうの始めてで……でも、今とっても嬉しいです！」
申し訳無さそうにそう言ったエミルに、星は微笑んで見せると「それなら良かった」とエミルも微笑み返した。

(とりあえず、作戦の第一段階は成功やね。良かったなく。エミル)

そんな2人の姿を見ていたイシエルはそう心の中で呟き、優しい眼差しで微笑んだ。

ファンタジー6

星達は森の中を、そこに生息するモンスターなどを観察しながら更に奥へと進んでいく。

しかし、森の中は予想以上に入り組んでいてどこまで行っても同じ景色に思えてしまう。その理由はドリームフォレストの至る場所に生息し、縦横無尽に動き回る木が原因だ――。

ドリームフォレストには、指定された時間でフィールド内を動き回る固有の地形型のモンスターがいる。

それはいかなる攻撃でも撃破できず。意図的に移動させることもできない為、別名『迷いの森』とも呼ばれていた。

辺りを根で歩くように動く巨大な木に囲まれ、星は不安そうにエミルを見上げて震える声で尋ねた。

「エミルさん。さつきから迷っているように見えるんですけど……」

星の言う通り。エミル達は広大な森の中で、今まさに道に迷っていた。いや、迷っていた……つというよりも、迷わされているという方が正しいかもしれない。

本来、ドリームフォレストの木々は、決められた一本の正規のルートには入ることはできない。

それは、ランダムで動かれたらマップに木がある場所とそうでない場所でもムラが出てしまうということと、本当に迷ってしまう危険性があるからだ。

ゲームである以上は、楽しくプレイしてもらわなければ意味がない。木が動き回るのも、ゲーム演出の一部ということだ――。

もし、富士の樹海のように一度入ったら出られないマップがあるとして、そこを本当に楽しめるか？という疑問は拭いきれないだろう。

エミルは不安げな星に笑みを見せた。

「ええ、そうね……」

(この植物は時間でしか移動しないはず。これはちよつと変ね……まるで私達をどこかに誘導しているような……でも、これは星ちゃんには感付かれないようにしないと)

だが、エミルは頭の中では混乱を隠しきれなかった。悟られないように、微笑みながら星の頭を優しく撫でた。

星は安心したのか、ほっとしたように大きく息を吐いて、微笑み返している。その時、デイビッドの声が聞こえてきた。

「おい、エミル。何かおかしいぞ？ 前来た時は、こちら辺にも妖精達の姿があったはずなのだが、妖精どころか他の幻想種の姿も見えない」

デイビッドの言う幻想種とは、童話に出てくるような特殊な動物や妖精、小人のことである。

道中にも妖精や動物、小さいおじさんなど、様々な幻想種と遭遇していたのだが、奥に進むにつれて、今までは出会っていた彼らの姿も全く見えなくなっていたのだ。

その異変には他のメンバー達も気が付いていたらしく、小さな声で近くの者同士で話をしている。

「さつきから、俺も嫌な感じがするんですよ。なんだか、誰かに見られてるような感じが……」

「あら奇遇ね。私の筋肉達もさつきからピクピクして仕方ないのよ」

「いや、それはちがう思うんやけど……」

カレンとサラザが話している内容を聞いて、イシエルは顔を引きつらせていた。その直後、エリエが鞘からレイピアを抜くと、森の一点を見つめて険しい表情になる。

そんなエリエを見て、デイビッドも鞘に収められていた刀を勢い良く引き抜いた。

険しい表情で、森の一点を見ていたデイビッドが叫んだ。

「お前達も戦闘の準備をしろ……すぐにくるぞ？」

「了解です！」

デイビッドの言葉に答えるように、カレンはガントレットを装備した。

「……そうやね。うちも着替えとかなあかんわ」

イシエルもそう口にしてコマンドを操作すると、次の瞬間。イシエ

ルの姿が巫女服へと変わった。

その手には剣などの装備はなく、代わりに棒に小さな鈴がたくさん付いた道具を持っている。それは神社などで巫女さんが舞に使う道具——神楽鈴と呼ばれる道具だ。

（——なんだろう。あんな武器はじめて見た……）

星がイシエルのことを見てみると、エミルの声が響いた。

慌てて森の方を見るが、星の目には敵の姿は確認できない。

「敵にターゲットされた!」

「……えっ?」

星が状況の変化に対応できずにきよとんとしていると、その前にレイニールが立ちはだかった。

その直後、レイニールが大声で咆哮を上げる。

「我輩がいる間は、主はやらせんぞ!!」

「——だめよ!……このモンスターは森に生息しないモンスターの気配に集まって来ちゃうの! レイニールちゃんが攻撃すると、敵を呼んじゃうから。星ちゃんと私の後ろに隠れてて!」

「は、はい! レイ。こっちに……」

掛かって来いと言わんばかりに息巻いて、空中で浮遊している目の前のレイニールを抱きかかえると言われた通り、星はエミルの後ろに隠れた。

エミルは素直に後ろに隠れた星の頭の上に手を置くと優しく微笑んだ。

「ふふっ、いい子ね……」

その後、エミルは辺りを注意深く観察する。

（おかしい。気配は感じるものの、敵の姿が一向に見えない……）

エミルは敵が見えないことに内心焦りながらも、自分の後ろで身を寄せ不安そうな表情のまま辺りをきよろきよろと見ている星を見て、深呼吸して冷静さを取り戻す。

それは、年下の星がいる前で動揺などできない。っというエミルのプライドの様なものなかもしれない。

（私がしっかりしないとダメね。敵が見えないのなら……）

エミルは冷静に視界右上に表示されたマップに目をやった。すると、マップ上で少し離れた場所に木の密集していない広い場所ができているのを確認した。その直後、エミルが仲間達に向かって大声で叫ぶ。

「皆！ 敵を目視できない以上。こつちから打って出てはダメよ！ 近くに木の間に広い場所がある。ここは、まとまってそこまで移動する方がいいわ！」

『了解！』

その声に全員が返すと、互いが互いの背中を守りつつ。エミルの言ったそのポイントまで移動を始めた。

しかし、目的のポイントに着いても。敵は時折ゴソゴソと音を立てるものの、物陰に隠れたまま一向に襲い掛かってくる気配はない。

さすがに業を煮やしたのか、エミルが驚きの声を上げる。

「どうして？ まるで襲ってくる気配がないじゃない！ これじゃまるで——」

「——うん。誰かに操られてるよう……やね！」

エミルが話し終わる前に、イシエルがそう言ってエミルを押し退けるようにして前に出た。

イシエルのその行動に、少し驚いた様子で目を丸くしていると、彼女はエミルに静かに言葉を続けた。

「——エミル……ここはうちに任せてもらってええ？」

「えっ？ でも……」

「うちは、コケにされるんが一番嫌いなんよ……」

エミルは普段のおっとりした彼女とは違うその雰囲気圧倒され、それ以上口を開くことができなかった。

イシエルは単身で木陰に向かってゆつくりと進んでいくと、しばらくして物陰から黒い塊が無数に彼女に襲い掛かってきた。それを見た瞬間、出てきたモンスターを指差してカレンが声を上げる。

「あの黒い体に赤い瞳——あれは間違いない。インプだ！」

子供の様な身長で茶色い肌に額には短い角、赤く光る瞳、背中には小さな羽の様な物が付いている。

その数は多く、ぎつと見積もっても30体以上はいるように見える。

インプは人と比べると大きさはそれほど大きくなく、背丈は腰くらいの高さしかないが、その分スピードは速く。集団で行動する上に、隠密行動にも長けている種でもある。しかし、イシエルは一斉に襲い掛かるインプに全く物怖じせず。

「——まあまあ、そないぎようさん出てきはって……いらちなんはかまへん。けど……今のうちは加減できひんよ？ 堪忍しとくれやす……」

イシエルが低い声でそう呟くように言うと、襲い掛かったインプ達の体が空中で止まった。

止まったというより何かに阻まれ、それ以上は前に進めないと言った感じだ。

「——これじゃないや……ほな、さいなら……」

神楽鈴を前に突き出すと、冷酷な視線をインプ達に向ける。

イシエルの持っていた神楽鈴が、チリンチリンと音を立てた直後。空中で制止していたはずのインプ達の体がばらばらに切断され、肉片が一瞬でキラキラと輝き空に吸い込まれるように消えていった。

一方的なイシエルの戦闘の様子を見ていた星がぼそつと呟く。

「……すごい。これがイシエルさんの能力なんだ……」

目を皿のようになっている星の肩の上にぼんと手が乗った。それに驚いた様子で、星が視線を向けた先にはエミルの姿があった。

エミルは微笑みを浮かべ、星の疑問に答えるように徐ろに口を開く。

「——そうよ。あれがイシエの固有スキルの力。あの子のスキルは、衝撃波を作り出すものなの」

「……しよげきは？」

彼女の話を聞いて、星はそう聞き返しながら首を傾げた。

まあ、小学生の女子に衝撃波と言っても、今一つピンと来ないものがあるのだろう。

エミルは少し首を傾げて「うーん」と考える素振りを見せると。

「ああ、簡単に説明するとお風呂に入った時に出る波紋を、動かなくても体の周りから全体に出せるってこと。まあ、イシエの起こしているのは空気だけどね！」

「なるほど……って、それってすごくないですか!?!」

星は更に驚いた様子でエミルの顔を見上げる。

エミルはそんな星に微笑んでしていると、ふと星はあることに気が付く。

「でもモンスターばらばらでしたよ？ それも衝撃波?」

「えつと……強い衝撃波にはそれぐらいの力があるって事なのよ!」

エミルが人差し指を立てて、自信なさげにそう言い放つと、そこに戦いを終えたイシエルが大きなため息をつきながら戻ってきた。

「はあー、エミル。いい加減な事教えたらあかんよ?」

「——えつ? 違うの!?!」

「全然ちやうよ。だいち、うちの力は敵を弾き返すくらいが精一杯やねん。せやけど、それを覚えてくれんのがこれなんよ!」

イシエルは2人の目の前に持っていた神楽鈴を突き出した。

木の棒の周りに小さな鈴が数多く付いたそれを、2人に向けて見せる。

2人は不思議そうにその見慣れない道具を見つめている。

「ふふつ。音つてのは、空気を振動させることで相手に聞こえるんよ。そして振動させた空気の中には細かい波ができる。その波を薄く小刻みに高速で打ち出してやることで、空気の刃を作り出し。敵を切り刻むことができるっていうんが、この技の仕掛けなんよ! 名付けて。かまいたち!!」

「——なるほど『かまいたち』凄い技だわ……って、そのままじゃないの!」

「あははっ、シンプルイズベストや〜」

「シンプル過ぎるわよ!」

2人が言い争っているのを見て、星は思わず笑みをこぼした。

それを2人は不思議そうに首を傾げると、星をの顔を見つめていた。

「あつ、ごめんなさい……」

星はそれに気付いて慌てて頭を下げた。

ファンタジー7

突如として謝ってきた星に、驚いた表情を見せるイシエル。

イシエルは星の様子を見て、エミルと顔を見合わせると首を傾げながら小さな声で尋ねる。

「エミル。なんであの子は謝ってるん？」

「ああ、星ちゃんはとりあえず。なんでも謝っちゃう子なのよ。もう癖みたいなものね」

「また。けつたいな話やねえ……」

それを聞いて、イシエルはそう小さく呟いて眉をひそめた。その後、頭を下げている星の前で立ち止まる。

星は恐る恐る顔を見上げると、イシエルの顔色を窺いながら、不安そうな表情を向けている。しかし、イシエルは微笑んでいるだけで、その表情からは何も感じ取ることはできない――。

すると、イシエルは星と目線を合わせると、にっこりと微笑んで星の頬に両手を押し当てた。

「ふふっ。星ちゃん？」

「……えっ？ はい」

星がイシエルの顔をじーつと見つめていると、急に両頬に痛みが走った。

（――なに!! ほっぺたがすごく痛い!!）

星は混乱しながらも、その痛みの原因はすぐに分かった。

「ああは、星ちゃんのほっぺはやわらかいなく。こない伸びるよ」

そう。その痛みの原因は、イシエルが星の頬を引っ張っていたからだったのだ。

両手をバタつかせ、星は驚いた様子で目を見開いている。

「いはいへふ。ははしてくあはい」

星は「痛いです話して下さい」と言ったつもりだったが、頬を引っ張られていたことよって上手く言葉にできていない。

楽しそうに星の頬を引っ張っているイシエル。

彼女の突然の行動に驚いたエミルが、慌てて声を荒らげながら叫ん

だ。

「ちよつとイシエ！ 星ちゃんが痛がつてるでしょ！ 放しなさい！！」

「……そないに怒らんでもええやん」

エミルは強い口調でそう言い放つと、イシエルは口を尖らせながら渋々その手を放した。

手を放された直後、イシエルから離れるように少し距離を開ける。

「うう。痛かった……」

星はヒリヒリと少し腫れた頬を撫でていると、目の前にエミルが現れた。

「ごめんなさい。後でイシエにはきつく言っておくから」

エミルのその本当に申し訳無さそうな顔を見て、星はにっこりと微笑み返した。

「いえ、私が笑ったのがいけなかつたんです。イシエルさん本当にごめんなさい」

落ち込んだ様子で星は、イシエルに向かって深く頭を下げた。

そんな星を見てイシエルが困った顔をして言った。

「……ううん、星ちゃんは悪くない。うちが悪いんよ……星ちゃん見てたら急にいじわるしたくなってな。ほんまにごめんなさい！」

イシエルがそう言つて深く頭を下げた。

星は彼女の『いじわるしたくなった』という言葉聞いて、ふと、夢の中の出来事を思い出す。

（そうか……やっぱいいじめられるきつかけを作ってるのは私なんだ……）

星の頭の中でそう考えると、その表情を一気に曇らせる。

「……いえ。全て私がいけないんです。ごめんなさい！」

その直後、涙が込み上げて来るのを感じ、慌てて走り出してしまった。

相当ショックだったのか、星は振り返ることもなく一直線に走り去ってしまう。

「ちよつと待つて星ちゃん！」

それを慌てて止めようとしたエミルの声も走り去って行く星の耳には届かなかった。

小さくなつていく星の背中を、エミルは寂しそうに見つめる。

「……星ちゃん」

「ごめんなエミル。うちが衝動を押さえられんかったばかりに」

「いいえ、イシエはあの子の事あまり良く知らないんですもの。仕方ないわ」

エミルはしよげかえっているイシエルにそう言うと、少し間を空けて徐ろに口を開いた。

「——まあ、レイニールちゃんもついてることだし。きっと大丈夫よ……でも、そろそろしつかりとあの子の事を、イシエにも話しておかないといけないわね……」

「私も気になるわ。星ちゃんの事……」

エミルがそう呟くと、どこからか聞き慣れた声が聞こえてきた。

すると、すぐ隣に急に屈強な男の顔が現れエミルが少し仰け反る。

「——サラザさん!? いつからそこにッ!」

横から急に顔を出してきたサラザに驚いた様子に、エミルは目を丸くしている。まあ、突然筋肉質なオカマが現れば驚くのも無理はないだろう。

その反応が不満だったのか、サラザは腕を組んだまま不機嫌そうに口を尖らせている。

「なによ。人をバケモノみたいに……」

「——いや、事実バケモノだろう」

小声で毒突くデイビッドの顔を、サラザの獣のような瞳が鋭く睨みつける。

自分の後ろに立っているサラザの殺気に気付いて、デイビッドは慌てて視線を逸らすというお決まりの行動を終えると、再びエミルが話し始めた。

「デイビッドとエリエは知っていると思うけど、あの子は一度私の元を去ろうとしたことがあったの。その日はちよつとした出来事があつて、それも関係していたのだけど……その時に薄々気が付いてい

たけど……あの子は無意識のうちに、人と深く関わることを避ける傾向があるのよ」

それを聞いたカレンは自分にも思い当たるところがあるのか、その重い口を開く。

「でも、俺には、エミルさんの元を離れようとした星ちゃんの気持ちが見えるような気がします……」

その発言を聞いて、その場に居た全員がカレンの方に視線を向ける。

星の考えていることが分かる気がする。突然そんなことを言われれば、誰でも気になるだろう。だが、星のことを一番特別に思っているエミルがそれは一番大きいのだろうか……今までにないほどに熱い視線をカレンに向けていた。

皆の視線を受けるカレンが、徐に口を開く。

「——エミルさんの言ったちよつとした出来事は俺には分からないけど……星ちゃんは自分が傷付くのも人が傷付くのも嫌なんだと思います。俺の親友もそうでした——自分のせいで周りに迷惑をかけることを極端に嫌い。いや、恐れてるんですよ……あの子も同じで優しい子ですからね」

「そうね……」

カレンのその言葉を聞いてエミルはそう呟く。だが、それを聞いてもエミルの心の中にある不安は消えてなかった。

自分より人を優先にする危うさを、ここに居る誰よりもエミルは良く分かっていた。

（でも、星ちゃんはいつかどこか遠くに行ってしまうような——そんな気がする。岬のように……）

エミルはそう考えながら、不安げな瞳で空を見上げて、どこか遠い目をしている。

悲しそうな彼女の様子を見ていたエリエは不安そうな表情になった。

その頃、走り去っていった星はというと……。

エミル達から離れた場所に立っている巨大な木の近くに腰を下ろしてすすり泣いていた。その傍らには、それを心配そうに見つめているレイニールの姿があった。

「――主。もう皆の所に戻らないと……こんなところで敵に襲われたら、ひとたまりもないぞ?」

そう優しい声で諭すように言ったレイニールに、膝を抱えたままうずくまって泣いていた星がゆっくりと口を開く。

「……ぐすつ……わかつてる。けど……こんな顔じゃ、皆の所には戻れないよ……」

星はそう小さく呟くと、膝を抱えながら再び泣き始める。

そんな星を困り果てた表情で、レイニールが見つめていた。

それからしばらく経つても、一向に泣き止む気配のない星にしびれを切らしたレイニールが肩からパタパタと翼をはためかせ飛び上がる。

「我輩はちよつと仲間達の様子を見に行ってくる。主はここを動かず待っているのじゃぞ?」

「……うん」

レイニールはそう言い残し、エミル達のいる方へと向かって飛んでいった。

徐々に遠くなるその姿を目だけで見送ると、星はまた顔を自分の膝に埋める。

ずっと側にいたレイニールが居なくなったことで、今まで以上に星の心の中で孤独感が増してきた。しかし、同時に湧き上がってくる感情がある。

(また1人だ……皆と一緒に楽しい……けど、1人の方が誰にも遠慮しなくていい……)

そう思った瞬間、星は表情を更に曇らせた。

一人で居ると確かに心細くなる。だが、同時に誰にも遠慮しなくていいという安心感も湧き上がってくるのを感じていた。

その感情が、今の傷付いた星の心を更に締め付け困惑させる。

(……私。なに考えてるんだろう。1人の方がいいなんて……今まで
はそれがいやで友達が欲しいって思ってたのに……できたら1人が
いいなんて……私。最低だ……)

星はそう心の中で呟くと、涙と一緒に昔の記憶も蘇ってきた。

そう。星がいじめられるようになったきっかけは、今からだいぶ前
の話になる――。

* * *

それは熱い日差しが照り付ける8月の始め頃の話だ――。

星は苦手なプールの授業が終わり、ほっと胸を撫で下ろして自分の
教室に戻った時のことだった。

その日は運悪く担任の教師が休みを取っていて、代わりに他の教師
が授業を受け持っていた。その教師は学校内でも厳しいことで有名
で、水に顔を付けられない生徒だけを残し星も例外なく居残りさせら
れて、休み時間ぎりぎりまで練習させられていたのだが、他の生徒は
なんとか水に顔を付けるまで。つという目標を達成し、次々に去って
いく中。いつの間にか最後まで水に顔を付けられなかった生徒は星
だけになっていた。

そんな星もタイムアウトでなんとか先生に許してもらい。教室に
戻れることになったのだが、その時には、すでに休み時間の半分以上
を消費してしまっていた。

(もう休み時間終わるまで時間がない！ 急がないと！)

星はプールの時に使うタオルを体に巻き付けて、全力で階段を駆け
上がった。

星の教室は3階にあり、そこまで結構な距離がある。

「はあ……はあ……間に合った……」

息を切らせながら、なんとか教室に戻ってきた星は、ふと時計で時
刻を確認する。

(良かった……まだ6分くらいある)

星はほっとして自分の席に戻り、着替え始めようとパンツを探した

時、それが無いことに気が付く。

同じクラスの生徒達はすでに着替え終わっていて、皆、思い思いに時間を潰していた。

そんな中、星は凍りついたようにその場に立ち尽くしている。

（パンツがない！ 確かにスカートの下に置いておいたはずなのに………だめ、ここで慌てたら、パンツがないことが皆にバレちゃう！）

星は一瞬で冷静さを取り戻し、パンツはないものの。何事もなかったかのように服に着替えて椅子に座った。

「……ひゃっ！」

直後、すぐに立ち上がると、慌ててスカートの端を両手で押しさえた。

それもそのはずだ。星の席は窓際にあり、長時間直射日光を浴び続けた椅子はとてつもなく熱くなっていったのだ。

それはとてもじゃないが、地肌で我慢できるものではなかった。

（どうしよう……でも後5分しかない。確か保健室に代えのパンツがあるはず。保健室は2階、急いで行けばまだ間に合う！）

そう考えた星はスカートが捲れない様に最善の注意を配りながら、急いで教室を飛び出すと、保健室を目指した。

星のクラスの教室は3階で、保健室は中央階段を降って行って、右側に進んで2部屋目にある。

だが、そこに辿り着くには最大の難関が待ち構えていた――。

「この階段を降ればすぐ……」

星はスカートを必死に押しさえながらゆっくり、だが急いで降って行った。

そして何事もなく保健室の前に着いた。

星は安堵の表情でほっと胸を撫で下ろす。

「はあく。誰にも気付かれなくて良かった」

星が保健室の扉を開けようと、スカートから手を放したその時。油断していた星の後ろから男子の声とともに風が吹き抜けていく。

「おーい。夜空もう授業が始まるぞー。そーれって………」

男子は走りながら星のスカートを捲って目を丸くしている。だが、

それは星も同じだった――。

(見られた……絶対に……見られた……)

動揺しつつも素早くスカートの裾を両手で押さえつけ、男子生徒の方を向き直す。

星は頬を真っ赤に染めながらぼそつと呟いた。

「――今……なにか見た？」

「……ああ、何も――」

男子達は顔を真っ赤に染めると、体の向きを変えてその場を足早に去っていった。

その表情から、男子生徒が星のスカートの中身を見たのは明らかだったのだが。

「そっか、見てないんだ。良かった……」

その時の星はまだ、彼等が言ったその言葉を信じていて、事の重大性を分かっていなかった。

その日は何事もなく終わり。自宅に帰ったのだが……。

次の日から、クラス中では『ノーパン女』と蔑まれる日々が始まったのだった。

* * *

膝を抱えたまま、憂いに満ちた瞳で前を見つめていた。

「あの時から私はずっと一人だった……今はどうなんだろう……」

そう呟いた直後、星は自分の膝に顔を埋めた……。

確かに今は一人ではない。だがそれは近くに誰かが居ると言うだけで、学校に居る時と何ら変わらないのだ。

少なくとも心のどこか奥底では、未だに心を許せないでいる自分がいた。

つとと言うことは、見方を変えればまだ孤独なままなのかかもしれない。本当に信頼している関係ではなく、ただ行動を共にしているだけの関係――心のどこかでそう思っている。

しかし、それは相手に対してとても失礼なことだ。衣食住と身の安

全を保証してもらっている。そのことも理解しているからこそ、自分はそんな人達を本当に信頼していないという事実が星には辛かった。顔を上げた星は眉をひそめながら、更に憂鬱な気分で空を見上げていた。

フアンタジー 8

それからしばらく自分の中での答えを導き出そうと、思考回路を回しているとき突然。後ろの草むらから、なにやらがさごそと物音が聞こえてきた。

「……だ、誰?! ……レイ?」

星はびくつと体を震わせると、不安そうな声でそう問い掛けたが、その草むらからの返事は一向に返ってこない。だが、もしも誰かが隠れて脅かそうとしているなら、わざと物音を立てたりなんてしないはずだ。

一瞬返事がないことを不審に思った星だったが……。

(どうしたんだろう。返事がない……あつ! ……もしかして落ち込んでる私を励まそうと、レイが隠れてるのかな?)

確かに普段から落ち着きのないレイニールなら、我慢しきれずに動いてしまっても説明はつく。

しかも、さつきまで疑うことを捨てて、もつと仲間達を信じようと思っていたばかり、ここで疑うことは信頼関係を築く上でも良くない。

きつとエミル達の様子を見にいったついでに、自分を脅かそうとしているのだろう。

思わずくすつと笑みを溢すと、星はそーつと草むらに向かって歩き出した。

「……レイなんですよ? 隠れてないで出てきて……」

星が草むらを覗き込もうと、前屈みになったその時、草むらの中から何か勢い良く飛び出してきた。

それと同時に、体を縄の様な長いもので強く締め付けられている感覚と、凄まじい激痛が星の頭の中を駆け巡った。

「うっ! ……なっ……なにッ!? 締め上げられる……体中がすごく痛い……」

痛みに耐えながら、星が自分の体に巻き付いている物を確認すると、そこには自分の体に巻き付いている大きな蛇の頭が見えた。

そう。草むらに潜んでいたのはレイニールではなく、星の胴体ぐら
いある巨大な大蛇だったのだ――。

全体は草むらに隠れてその大きさは把握できないものの。出てい
る部分だけでも数メートルはある。しかも、それが今、星の小さな体
を容赦なく締め上げていた。システムのステータス強化がなければ、
今頃星の体はバラバラに吹き飛ばされていただろう。

「……………く、苦しい……………な、なんとか……………しないと……………」

星が蛇を振り解こうと体に力を入れようものなら、巻き付いている
大蛇は更に何倍もの力で体をきつく締め上げてくる。

抵抗虚しく強く締められた体が、限界を超えてミシミシと軋むよう
な音を立て始める。まるで、水の中にもいるかの様に全く息ができ
ないほどだった。それと相応して、星の表情がみるみるうちに青ざ
め、意識が遠のいていくのを感じていた。

「……………かはっ！ 苦しくて……………息が、できないよ……………だ、だれか……………」

全身が今にも弾け飛ぶ様な苦痛の中、星はなんとか助けを求めよう
と辺りを見渡すが、そこには誰の姿もない。その時、ふと我に返った
星は自分の底意地の悪さに自ら幻滅する。

それもそうだ。今までは一人の方がいいと考えていたのに、生命の
危機になった瞬間には、もう誰かを頼っている自分がいるのだから
……………。

(……………私ってずるい。こういう時だけ人を頼って……………これは1人でな
んとかしなきゃいけない問題なんだ！)

星は遠のく意識を気合で持ち直すと、腰に刺さった剣を抜こうと懸
命にもがく。しかし、もがけばもがくほど体に巻き付いた大蛇は、緩
急をつける様に締め上げてくる。

データの集合体であって実際の体ではないはずなのだが、全身の骨
を碎かれる様な激しい痛みが星を襲う。

「……………くっ！ ああああああああああアツ!!」

星が叫び声を上げたその瞬間、レイニールの声が星の耳に飛び込ん
できた。

「――大丈夫か!? 主!!」

薄れゆく意識の中で、咄嗟に星の脳裏に言葉が浮かぶ。

「……レイ。だめ……逃げて……」

星はそのレイニールの声に反射的に、そう声にならない声を上げる。

何故その言葉が頭に一番に浮かんだのかは分からない——それが人に助けてもらおうわけにはいかないというプライドから来るものなのか、それとも相手を心配して出た言葉なのかは今の星には分からなかった。

だが、咄嗟に出たのがその言葉だったのは間違いない。

大蛇に締め上げられる主の姿を見たレイニールは怒り心頭といった感じで、草むらから伸びた蛇の頭を鋭く睨みつけている。

「この蛇助！ 我輩の主をこんな目にあわせて……その姿。保てると思うなよ!!」

レイニールは怒りを帯びた声でそう叫ぶと、その小さな体から殺気を露わにする。その直後、レイニールの全身が金色に輝き辺りを強い光が包む。

辺りを照らすほどの強い光が治まると、そこには大きな翼を広げた黄金のドラゴンが現れた。

「——今助けるぞ！ 主!!」

「……レイ。私の為に……」

星はそんなレイニールの姿が自然と湧き上がってきた涙で霞む中、真っ直ぐに見つめ続けている。

自分の為に怒ってくれているレイニールの気持ちは、星の心に強く響く。

それは心のどこかで自分を見捨ててレイニールが逃げ『また一人になるのではないか?』という思いがあったからかもしれない。

現に小学校でも低学年で仲の良かった友達も、自分が虐められると距離を置くように自然と周りから離れていった。

だから、その時に悟ったのかも知れない。どんなに親しい間柄でも、自分に危害が加わりそうになれば、すぐに手の平を返したようになる……。

その度に『裏切られた』と辛い思いをするくらいならば、一人の方がいいのだと……。

しかし、目の前でレイニールが自分の為に危険を冒してくれている。そのことが、星にとつてはとても嬉しかった。

——ガオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!

その時、草むらの中からけたたましいライオンの咆哮が聞こえてきたかと思うと。その後、凄い衝撃波が発生して星の周りの草むらを吹き飛ばす。

(——なに!? これ……)

星は突如出現した敵の姿を見て、驚きのあまり言葉を失った。

それもそのはずだ。その姿はライオンで頭が2つ。頭部両側に山羊の角。背中には悪魔のような翼を生やし。尻尾は毒蛇という現実の世界には存在しないはずの生き物がそこにいたのだ。

だが、星はその生き物の名前を知っていた——そう。それは何度も童話の世界に出てきた幻獣——。

(あれは……まさかキマイラ!?)

「レイ逃げて……」

もはや虫の息と言った感じの星が声を上げ、心配そうにレイニールを見つめている。

しかし、レイニールは姿を現したキマイラに動じることなく、なおも強い殺気を放つ。

「待っていてくれ……主。こんな出来損ないの獣など、一瞬で蹴散らしてくれる!!」

レイニールは巨大な体からは想像できないほど素早くキマイラの前に回り込むと、大きく開いた口から炎が溢れたそれと同時に、キマイラは尻尾の蛇で縛っている星を自分の前に突き出す。

まるで『撃てるものなら撃ってみろ』と言わんばかりの行動に、レイニールの口に蓄えられていた炎が消える。

「——くッ！ 主を盾にするとは卑怯な……」

攻撃できないもどかしさに、悔しそうに渋い顔をしてレイニールはそう呟くと、キマイラを突き刺すような鋭い視線で睨みつけている。

「もう……だめ……」

だが、締め付けられている星の体力ももう限界寸前だ。その絶体絶命の状態の星の耳に、エミルの叫ぶ声が飛び込んでくる。

「星ちゃん！ 気を失ってはダメよ!!」

瞳にエミルの姿が飛び込んできて、声にならない声を上げた。

「……エミルさん」

「今、気を失うと本当に死んじゃうわよ！ すぐに助けるから、もう少しだけがまんして!」

エミルはもう一度叫んだ直後、レイニールにも声を掛けた。

「あなたも早く小さくなって! このままじゃ敵が集まってきてしまわうわ!」

「むう……仕方ない!」

星もエミルのその言葉を聞いていたが、今の状態でその頼みを実現できるだけの力は、既に星には残されていない。

今は意識をギリギリのところを保っている状況に過ぎないのだ――

(そう言われても……もう限界だよ。でも……このまま私が死ねば、皆が危険な目に合わなくて済む。そう、このまま……)

遠のいてゆく意識の中、諦めてそう心の中で呟くと静かに瞼を閉じた。

「――星。今助けるからね! 神速!」

エリエはそう叫ぶと体が青く輝き、凄まじい勢いで星の捕らえられている蛇目掛けてレイピアを構えて突っ込んでいく。

「あの蛇とキマイラの繋ぎめを狙えば……」

エリエは直ぐ様敵のウィークポイントを見つけ出すと、一気に距離を詰めキマイラの尻尾の先を目掛けてレイピアを突き出した。

一陣の風の如く駆け抜けて行くと、持っていたレイピアが風切り音を上げる。

「この蛇! 星を放せえええッ!!」

しかし、その攻撃は寸でのところがかわされてしまう。

地面を踏み締め勢いを殺しつつ、エリエは悔しそうに歯を食いしばって振り返る。

「くっ……かわされた。なら……」

素早く二撃目に入ろうと、体制を立て直し、レイピアを構えるエリエの腕に蛇の頭が噛み付いた。

大きなキマイラの体に目を取られていて、隠れていた2本目の尻尾に気が付かなかったのだ。

直ぐ様。噛み付いていた大蛇の目をレイピアで突くと、頭は口を大きく開いて退いていく。

「——しまった噛まれた!? これは毒蛇?」

その直後、大蛇に気を取られていたエリエの目の前に、キマイラの後ろ足が飛んできた。

(……油断した。でもこれならかわせる!)

そう思い、エリエが空中で体を捻ろうとした時、自分の体が動かないことに気付く。

慌てて視界に出たマークを確認すると、HPバーの横に体が痺れているマークと体が紫色に点滅しているマークの2種類が表示されていた。

(これは麻痺と毒!? でも、両方いつぺんに表示されるなんて今までは……)

本来のシステムでは状態異常は一つしか付かない仕様になっている。何故なら、複数の異常状態に掛かるのはリスクが高すぎるからだ。

例えば毒状態で睡眠状態になれば、HPは徐々に減少し。最終的にはなにもしないままに、最弱武器でもこのゲームの最低値に設定されている『1』で撃破されてしまう。

それを避ける為に、本来は複数の異常状態は投影されない。しかし、現にエリエのアバターには麻痺と毒。2つの効果で影響を与え続けている。エリエが噛まれたことに気が付かなかったのは、麻痺の効果も付属されていて感覚がなくなっていたからだろう。

おそらく。そこに関しても、覆面の男の言う『シルバーウルフ』の

何者かがシステムを改悪したのだろう。

驚きを隠せないエリエだった。次の瞬間、強い衝撃に襲われ、体を勢い良く吹き飛ばされた。

「——きゃあああああああッ!!」

勢い良く飛ばされたエリエの先には、大きな大木が待ち構えている。それはエリエの目にもしつかりと映っていた。

ダメージを受けた上に麻痺して痺れる体で受け身も取れずに木にぶつかれば、例え高レベルプレイヤーであってもひとたまりもない。

(ああ……私も……までかな……星、助けられなくてごめんね……)

エリエが覚悟したその時、エリエの体を空中で何者かがしつかりと抱きかかえて無事地面に着地する。

驚いた様子で数回瞬きをしたエリエがその人物を確認すると、そこにはデイビッドの姿があった。

彼は呆れ顔のまま大きく息を吐くと。

「はあく。全くお前というやつは無謀というかなんとというか……」

「デイビッド……どうして、あんたが?」

エリエが目丸くしながらデイビッドの顔を見ると、デイビッドは照れくさそうに口を開く。

「いや……お前にはダンジョンで助けってもらったからな。これでチャラにしてくれ」

「ああ……」

エリエはダンジョンでの出来事を思い出して、ニヤリと笑みを浮かべると、徐ろに口を開いた。

「——そうね。なら、星を助けられたらチャラにしてあげてもいいよ? ……お願いデイビッド。星を助けて……」

「ああ、了解した。必ず助ける! お前は毒状態を回復して、少し休んでろー!」

デイビッドは瞳を潤ませながらそう告げるエリエに、ヒールストーンとリカバリーストーンを握らせると、微笑みを浮かべると彼女を木の前に下ろしキマイラを鋭く睨む。

「このままでは星ちゃんのHPがもたないか……この状況じゃ仕方な

いな」

「デイビッドはそう呟くと、コマンドを開いて何やら難しい顔で操作し始める。」

フアンタジー9

エリエが危機に陥っていたその最中、エミル達も危機的状況に陥っていた。

その原因はレイニールが巨大化した影響で、エミル達の周りには高レベルの敵が集まってきてしまったからだ。

エミル達の前には剣と皮鎧をまとった相当な数のゴブリンの群れが立ち塞がっている。

おそらく。森を守る兵隊のような存在のモンスターなのだろう。その全てがエミル達を威圧するようなピリピリとした雰囲気醸し出していた。

「Lv40のナイトゴブリンがこんな……これはまずいわね。星ちゃんを一刻も早く助けられないといけないというのに……」

「これはちよい状況が良くないな。でも確か幻獣王キマイラを倒せば、敵は統率を失って打壊するはずだよ。まあ、うちがなんとかしてみるわ」

無数の敵の奥にいるキマイラを一瞥して、イシエルは神楽鈴を数回鳴らすとキマイラに向かって右手を突き出した。

それを見たエミルが慌てた様子で叫んだ。

「イシエだめよ！ 星ちゃんに当たったらどうするの!？」

エミルのその言葉に、イシエルは不敵な笑みを浮かべると「それならそれで好都合や……」と小声で呟く。

空気を振動させる神楽鈴の音色が辺りに響いた直後、鋭い空気の刃と変わった衝撃波がキマイラに向かう。

だが、そのエミルの心配はすぐ無駄な心配だったと思いきや知らされることになる。

——ガオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!

キマイラはその凄まじい咆哮でイシエルの放った攻撃は容易く掻き消された。

「イシエの衝撃波を衝撃波で掻き消した!？」

「そんな……うちの攻撃が効かへんなんて……」

イシエルはその光景を見て愕然としている。

無理もない。彼女からしてみれば、今の攻撃が渾身の一撃だったのだろう。

だが、エミルにはショックを受けているイシエルよりも、捕らわれたままの星のことが気がかりで仕方がなかった。

それもそうだろう。モンスターを呼び寄せてしまうドラゴンを使えない以上。エミルには遠距離攻撃手段はなく、近距離戦闘も目の前の武装したゴブリンの大群をなんとかしないことには始まらない。しかも、キマイラに捕縛されている星の体力はもう限界が近い――。

（――どうする!?! 星ちゃんのHPのがもう半分を切ってる。このままあの子が意識を失えば、全身の力が抜けて一気にHPの減少が加速しかねない。でも、このナイトゴブリン達を放置することもできない。放置すれば、キマイラとの戦闘中に背後から挟撃される。けど……ナイトゴブリンを倒してからじゃ、確実に手遅れになる!）

エミルは苦痛に表情を歪ませている星を見つめ、額に汗を浮かべながら、必死にこの状況を打壊する方法を思索していた。

その時、サラザの声がエミルの耳に飛び込んでくる。

「エミル! ここは私達に任せて。あなたは星ちゃんの救出に専念しなさい!」

「サラザさん。何を言っているの!?! いくらあなたでもこの数は……」

そう口にしたエミルに向かってサラザが声を荒らげた。

「私を舐めるんじゃないわよ! あなたは星ちゃんを守るんじゃないのか? あんたの覚悟は、あんな大きな猫の化け物に阻まれるようなものだったの!?!」

サラザは敵に視線を移し、バーベルを手に「ここは任せて行きなさい」と口元に優しい笑みを浮かべ、エミルに向けて力強く親指を立てた。

「サラザさんの言う通りですよ。ここは俺達に任せて行ってください! エミルさんはなんとしても星ちゃんを助けてあげてください!」
「そうよく。きつと星ちゃんもあんたの事を待ってるわよく。エミ

ル」

「——カレンさん。サラザさん……」

2人のその言葉を聞いて、エミルは瞳を潤ませている。

イシエルはそんなエミルの肩を叩くと、耳元でそつとささやいた。

「……行つてエミル。あの子もエミルが助けてくれると信じてるはずやよ」

「ええ、分かった。イシエ、皆。ここは任せるわ!」

エミルはイシエルにそう言い残して、持っていた剣を握りしめると、一目散にキマイラに向かつていった。

そんなエミルの背中を見送りながら「妬けるなあ……」と小声で呟き、敵に神楽鈴の先を向けた。

「待つてて星ちゃん。必ず私が助けるから!」

エミルは剣を顔の横に構えて全速力で走ると、無我夢中でキマイラに飛び掛かった。

キマイラはそんなエミルを待ち構え、大きな瞳を彼女に向けている。

「はあああああああッ!!」

——ガオオオオオオオオオオツ!!

エミルが飛び掛かったと同時に、キマイラも地面を蹴つて飛び掛かってきた。

自分に向かつて襲い掛かってくるキマイラを見据えながらも、エミルは終始冷静だった。

(キマイラのレベルは100だけど、HPはそれほど多くはないはず。速度も私の方が圧倒的に速い!)

エミルは状況で空中で剣を素早く逆手に持ち変えると、キマイラの角を目掛けて腕を突き出した。

剣は角に直撃したが、エミルの剣は硬く鋭い角に容易く弾かれる。しかし、それでいいのだ——何故なら、それがエミルの本当の狙いだったのだから……。

エミルは角に弾かれた勢いを空中で体を捻ることで吸収し、その反動を利用してキマイラの後方に移動する。その後、素早く剣を持ち直

し。星を捕まえたまま、ゆらゆらと微かに揺れる尻尾の蛇目掛けて剣を振り抜いた。

「ええええええいッ!!」

すると、その瞬間に蛇の体に切り目が入り、暴れた尻尾が地面に崩れ落ちていく。

エミルは素早く剣を鞘に戻し、空中に投げ出された星を両手でしっかりと抱きかかえる。

地面に着地したエミルは、自分の腕の中でぐったりとしている星に声を掛けた。

「——遅くなってごめんなさい。星ちゃん大丈夫?」

「はあ……はあ……はあ……だいたい、じょうぶ……です」

エミルの腕の中で荒い息を繰り返しながら、星は掻き消えそうな声で小さく呟いた。

「はあ……はあ……迷惑かけて……ごめんなさい……」

それを聞いたエミルはにっこりと微笑みながら首を振ると。

「——良く頑張ったわね。後は……ゆっくり休んでなさい」

「……はい」

星はゆっくり頷くと、すぐに気を失ってしまう。

するとそこに、レイニールが慌てて飛んできて側にくるなり、レイニールは星の顔を覗き込んだ。

「——主!! 我輩が居なくなつたから……申し訳ないのじゃ〜!!」

レイニールはそう叫んぶと、顔を涙でぐしゃぐしゃにして星の胸に顔を埋めながらわんわん泣きじやくっている。

エミルは星を木の陰に下ろすと、キマイラを鋭く睨んだ。

「レイニールちゃん。これを使って星ちゃんを回復して、あなたはなるべく星ちゃんの側に居てあげて……」

「……分かつたのじゃー!」

エミルは持っていたヒールストーンをレイニールに渡すと、レイニールは決意に満ちた表情で頷いてエミルの顔をじっと見つめ「武運を祈るぞ」とささやく。

その顔を見たエミルはにっこり微笑むと、レイニールの頭を撫でて

再びキマイラの元に向かつていった。

近くでは倒れたナイトゴブリンの腹にバーベルを叩き込んだサラザが、辺りを見渡して言った。

「エミルにかっこつけたのはいいけど、さすがにこの数はきついわね」

サラザは持っていたバーベルでナイトゴブリン薙ぎ払うと、横で戦っているカレンに弱音を吐く。

その弱音を聞き逃さなかったカレンが交戦中の敵を正拳突きで吹き飛ばし、小馬鹿にした様な笑みを浮かべて言った。

「……なら、今度は助けてくれ！　っと、叫び声でも上げてみますか？」

挑発するようなカレンの言葉を聞いて、サラザは口元に笑みを浮かべ小さな声で呟く。

「あら〜。生意気な子ね……そこまで言っつて、もし私よりも倒した数が少なかったら、た〜ぷりおしおきしてあげるわ〜」

「——それは怖いので、俺の方が確実に多く仕留めますよ！」

拳を握り締めたカレンはそう言い残して、うごめく無数の敵の中に向かつて躊躇することなく突っ込んでいった。

しかし、ナイトゴブリンは見えているもの以外は、多くが森の中の物陰に隠れており。まだどれだけの敵が残っているのか、正確な体数は確認できない。

そんなことを理解しているのか、勢いに任せて戦っているのか分からないが、カレンが手当たり次第に己の拳で粉碎していく。それを見たサラザも彼女に負けじと、バーベルを振り回しながらカレンに続いた。

その頃、イシエルも2人から少し離れたところで、敵を惹きつけながら戦っていた。

「咆哮を上げるキマイラとの戦闘はうちにはできひんけど……こん程度の低レベルな敵なら、うち1人でも余裕なんよ〜！」

イシエルはそう叫ぶと神楽鈴を鳴らし、巻き起こした旋風で自分の周りの敵の群れを起こしたかまいたちで細切れにして一掃する。

そんな仲間達の奮闘もあり、エミルはキマイラとの戦闘だけに集中できた。

それでもキマイラは強く、休みなく斬り付けるエミルの攻撃は、なかなか致命的なダメージを与えることができない。

何故なら……。

「はあああああッ！」

エミルは叫び声を上げながら勢い良く地面を蹴ると、臆することなく自分よりも数倍あるキマイラに飛び掛かる。

直ぐ様。キマイラは宝石の様に青い瞳で冷静に判断すると、復活して増えた3匹の尻尾の蛇を鞭のようにしならせて迎え撃つ。

エミルはその蛇を全て斬り落とすと、キマイラの頭を攻撃しようと再び剣を振り上げた。だが、すぐにキマイラの咆哮で起こした衝撃波で吹き飛ばされてしまう。

どんなに接近しても、咆哮によって弾かれてしまう。これでは一向にらちがあかない。まずは、キマイラの口から放たれる衝撃波を何とかしないことには、エミルに万に一つも勝機はない。

また、問題は衝撃波だけではない。ついさつきエミルに斬られたキマイラの尻尾も、すぐに再生して4匹に増えてしまった。

先程から何度エミルが飛び掛かって斬り落としても、すぐに再生されて尻尾ばかり増えてしまい。肝心のキマイラ本体には全くダメージを与えられていない。しかも、尻尾を切った所でキマイラのHPバーには変動は見られず。そのことをかんがみても、キマイラ本体を攻撃しなければダメージは通らないらしい……。

でも弱音を吐いてはいられない。各部屋ごとに区画されたダンジョンと違って、ここではフィールドボスはどこまでも付いてこられる。

もちろん。出現場所からある一定の距離まで引き離せば、自動的に消滅して元の出現場所に現れる。

まあ、敵に背を向け逃走するなんて愚策はこの状況下では使えない。もし背を向けて付いてこなければ、仲間達に襲い掛かっていく危険性すらある。

何としてもこの場で、目の前のキマイラを撃破する以外に、エミルに手は残されていないのだ。

更に攻撃を試みるも、再び尻尾に阻まれ衝撃波に吹き飛ばされたエミルは空中で体勢を立て直すと、地面に無事着地して直ぐ様、キマイラの方へと視線を移す。

だが、その表情から疲労の色は隠しきれず。

「はあ……はあ……これじゃ、いくら飛び込んでもらちがあかないわね……」

キマイラの尻尾もすぐに再生し、5匹にまで増えてしまった。

尻尾に揺らめく5匹の蛇を見つめ、小さく呟いたエミルは眉間にしわを寄せて目を細める。

その時、エミルの横にデイビッドが現れた。

「——デイビッド!？」

「エミルすまない。正宗の使用者登録に手間取って遅くなった……だが、もう大丈夫だ!」

デイビッドは刀の先をキマイラに向けると、自信に満ち溢れた笑みを浮かべた。

「星ちゃんを助けるのはエミルに先を越されたが、こいつは必ず倒す! エミル、俺ができるだけ敵を惹きつける。その隙に背後から攻撃しろ!」

だが、その作戦は再びキマイラの尻尾に阻まれ、みすみす敵の尻尾の蛇を増やすことに繋がりがかねない危険なものだ。

エミルがそのことを伝えると「分かっている」とだけ短く言葉を返し、デイビッドは険しい表情で「奥の手がある」と不敵な笑みを浮かべる。

彼の言う奥の手とは何かは分からないが、この現状ではもうデイビッドの言った『奥の手』とやらの懸ける以外にはなさそうだ。

仕方なく頷いたエミルに、デイビッドも微笑み返して頷く。

直後。雄叫びを上げたデイビッドは刀を構え直し、キマイラに睨みを利かせている。

「了解! 頼んだわデイビッド!」

「おう！ 任せておけ！」

エミルの声に応えるように叫ぶと、デイビッドの刀の刀身が突如として赤い光りを放った。

その光りに吸い寄せられるように、サラザ達と交戦していたナイトゴブリン達が、突如光りの玉へと変わり、正宗の刀身へと吸い寄せられる様に集まってくる。それと同時に刀身は赤黒い炎を宿し、デイビッドの視界の中に。

【アマテラス発動可能】

っと大きく表示された。

これがデイビッドの言っていた『奥の手』だ。トレジャーアイテムの武器には、それぞれ個々にスキルが付属されているものがある。

デイビッドはその表示を見て、それが何かも分からぬまま技名を叫ぶ。

「——これがどういうスキルかは良く分からないが、やるしかない！ 焼き尽くせ！ アマテラス!!」

デイビッドが刀をキマイラに向かって振り下ろすと、その炎が地面を辿ってキマイラの元へと一直線に向かっていく。

キマイラはそれを咆哮で吹き飛ばそうと、再びけたたましい鳴き声を上げた。

だが炎霊刀 正宗から放たれたその赤黒い炎は勢いを衰えるどころか、咆哮の衝撃波を巻き込むようにして、更に激しく燃え上がる。それはまるで、赤黒い炎そのものが敵の攻撃を吸収しているかのように見える——。

キマイラは予想外のことに、AIの処理が追い付いていないのか、その場から動かない。

次の瞬間、デイビッドが刀身から放った赤黒い炎はキマイラに容赦なく襲い掛かった。

——ガオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!

炎は当たった直後に、天に届くかと思うほどの火柱を上げ、キマイラの体を包み込むと最後の咆哮を上げて、キマイラの巨体が音を立てて地面に崩れ落ちた。

フアンタジー10

デイビッドはしばらくの間。自分の持っていた刀から放たれたスキルが起こしたその光景を呆然と見ていたが、ふと我に返ったのか彼の口元から笑みがこぼれた。

「——これが炎霊刀 正宗。さすがはトレジャーアイテムだな。全てが別格という事か……」

デイビッドは自分の握っている刀を見つめながら、抑えきれない笑みを浮かべている。

余韻に浸るようにその場に立ち尽くす彼に、背後からエミルが驚きを隠せないという表情で肩を叩く。

「——デイビッド。今のつて……」

「ああ、この武器の能力らしい。マスターの武器もそうだったが、トレジャーアイテムの武器にはそれぞれ固有のスキルがある。だが、これほどの威力とは想像もしていなかった」

「なるほどね。確かにマスターもあの装備は封印していたものね。これはゲームを腐敗させるって……」

「ああ、確かに。この力は、今のこの世界じゃ危険極まりないものなのは確かだろうな……」

デイビッドはさっきのスキルの感覚と勝利を噛み締める様に、日が沈みかけの赤みがかった空を見上げた。

しばらくその場に立ち尽くしていた2人が「そうだ！」と声を合わせて叫ぶと、慌てて走り出す。

2人がそれぞれ向かった先には、エリエと星の姿があった。キマイラとの戦闘とトレジャーアイテムのことで頭が一杯で、肝心の2人のことをすっかり忘れていたのだ——。

「エリエ悪い！ 時間がかかってしまった」

デイビッドは木に凭れ掛かるようにして座っているエリエに声を掛ける。

エリエは瞑っていた瞼を開くと、不安そうに眉をひそめながらデイビッドに尋ねる。

「……星は？」

「ああ、無事だよ。エミルが助けてくれた……」

「……そう。良かった……」

それを聞いたエリエはほっと肩の力を抜くと、にっこりと微笑んで再び瞼を閉じてすやすやと寝息を立て始める。

安堵した様子でぐっすりと眠りに落ちたエリエを見て、デイビッドは息を漏らすと小さな声で呟く。

「今まで心配してたくせに、安心したらすぐ寝るって——全く……本当に両極端なやつだな。お前は……」

座ったまま木に凭れ掛かり寝入ってしまったエリエの体を背負うと、デイビッドは嬉しそうに笑みを浮かべた。これでまた少し、エリエとの心の距離が縮まった気がしたからに他ならない。

それと時を同じくして、星の元に戻ったエミルも横に付き添っているレイニールに話し掛けた。

「レイニールちゃん。星ちゃんの様子はどう？」

「ああ、回復させた。大丈夫じゃ……が、我輩は主を守れなかった。あの時、我輩が主の側を離れなければこんなことには……」

余程星がキマイラに襲われたことを気にしているのか、星の側で俯き加減に悔しそうな表情でレイニールが呟く。

やはり、自分がいない間に星が襲われていたことを相当気にしているのは、その様子から分かる。

エミルは微笑むと、優しい声音で言った。

「仕方がないわよ。こんな事は誰にも予想できないもの……あなたは何も悪くないわ。それに真っ先に星ちゃんを助けようとしたのはあなたじゃない。あなたはよくやったわよ」

「……だが、結果として助けられなければ、やっていないのと同じじゃない！」

レイニールは俯いたまま、そう叫んで小さな拳を地面に叩きつけた。

「なら強くないとね！ でも、今は笑いなさい」

「——そんな事……できるわけない」

「そうね……でも。そんな顔をしてるあなたを見たら、大好きな主様が心配するわよ?」

「——ッ!」

その言葉を聞いたレイニールの脳裏に、星の心配する顔が鮮明に浮かび上がり静かに頷く。

レイニールは「そうじゃな」と呟くと、迷いを振り払うように顔を左右に振りエミルの顔を見て、ぎこちなくだが微笑んで見せた。

「——おぬしの言う通りじゃ! 我輩の主は心配性じゃからな!」

「ええ、そうね。それじゃ、皆の所に帰りましょうか!」

それを見たエミルはそう言って微笑むと、星を抱きかかえレイニールと一緒に皆の元へと向かった。

皆の元に戻ったエミルは、今回ドリームフォレストにきた本当の理由を話した。

その内容を終始笑顔で見ていたイシエルだけは、どうやら来る前から理由を知っていたようだったが……。

まあ、今までの道中で出てきた妖精に小人など幻想種を見ていれば、誰の為に来たのかは明らかだろう。

それから数時間が経過し、気を失っていた星はテントの中で目を覚ます。

「……………、……は? テントの中?」

目を覚ました星は辺りを見渡して、首を傾げた。

それもそのはずだ。星からしてみると、テントと言えばぬいぐるみがあちこちに散らばっているイメージが強く染み付いている。だが、それはエリエのテントの話だ——。

このテントの中には無駄な物が一切なく。布団に目覚まし時計、あと影の方に申し訳なさそうにもふもふのカーペットと、その上に星型のクッションが2つ置かれているくらいで、必要最低限の物しか置かれていなかった。

「私は確かエミルさんに助けられて……」

星は起きた出来事を整理しながら、どうして自分がこのテントの中にいるのかを考えていた。しかし、気を失っていた星がいくら考えて

も、その答えは出てくるはずもなく――。

数分間の自問自答の末に、星は考えるのを止めた。

「はあく。考えてもしょうがない。とにかく、迷惑かけてごめんなき
いって皆に謝らないと……」

星は大きなため息をついてそう呟くと、テントの中から顔を出し
た。

外を見た星は自分の目を疑った。

来た時はまだ明るかった空が、もうすっかり暗くなってしまってい
る。それを見た星は顔が青ざめる。

ここにテントが設置されているということは、今日はここで野宿に
なると言っているよなもの。それもこれも、自分が単独行動をしてキ
マイラに捕まったせいなのだとすぐに悟った。

(私が寝てたせいで、もう夜になっちゃってる!?! 急がないと怒られ
る!)

星は慌ててテントを飛び出すと、焚き火の周りに腰掛けていた全員
が星の方に目を向けた。それと同時に、星の緊張が一気に高まる。

ゆっくりと地面を踏みしめ、一步一步進む度に鼓動が早まり、自分
の耳でもドキドキというその心音がしっかり感じ取れる。

(みんな私のこと見てる……どうしよう)

星は不安に襲われながらも、とりあえず皆の前までいくとその場に
いた全員に深く頭を下げた。

それを見て、その場にいた全員が顔を見合わせてくすくすと笑って
いる。その笑い声を聞いて星は、自分が馬鹿にされていると思って更
に落ち込んだ。

直後、エリエの声が聞こえてきた。

「ほら、だから言ったじゃん。星は起きてすぐ謝るって」
「……えっ?」

どうやら、笑っていたのは星に対してではなく、エリエの予想して
いた反応が当たっていたことによるものらしい。だからと言って、自
分の次の行動を言い当てられるのはあまり気分の良いものではない
が……。

星はきよとんとしながら、その場に立ち尽くしていると、そこにエミルとイシエルが星の前まで歩いてきた。

怒られると思った星は俯きながら、肩をすぼめるとエミルに促されイシエルが頭を下げてきた。

「さつきはうちの軽率な行動のせいで、危険な目に合わせてしまつてごめんな。かんにんしてな。星ちゃん……」

険しい表情のイシエルに、突然謝られた星は困惑した表情で、彼女のこゝろを見上げている。

イシエルもそんな星の顔を不安そうに見つめていた。

てつきり怒られるものとはかり思っていた星には、この予想だにしていなかった事態を理解することができなかった。

そんな2人の気まずい雰囲気を感じてか、エミルが声を掛けてきた。

「星ちゃん本当にごめんなさいね。イシエはたまたま悪ふざけするけど、悪気があったわけじゃないの、だから許してあげて」

「はい、分かっています。私は全然気にしていませんから……」

「ほんま?! ありがとう。星ちゃんはほんまええ子やわ〜」

イシエルは急に笑みを浮かべ、抱きついてくると戸惑っている星の頭を撫で回した。

星は頭を撫でられながら、少し困った顔をしながら眉をひそめている。

「はあく。イシエはほんとに仕方ないわね〜」

そんなイシエルの姿を見て、エミルは呆れた様子でため息混じりにそう呟くと、星の前で膝を折った。

微笑むエミルに、星はただただ困惑した表情を浮かべている。

「星ちゃんに見せたいものがあるんだけど一緒に来てもらえる?」

「……はい。でも、いったいなんですか?」

警戒しているのか少し考えてからそう尋ねると、エミルは「変なものじゃないから心配しないで」と告げた。

それからエミル先導のもと、星達は森の奥へと向かって進んでいく。

フィールドボスの幻獣王キマイラを倒したからだろうか——敵は全く姿を現さなくなり。そのかわりに、今まで姿を隠していた妖精や小人のような幻想種が辺りを動き回っている。

更に付け加えると、先程から何故か小さなおじさんが星の頭に乗っていることだろうか……。

それを見つめながら、特等席を取られたレイニールは肩に乗って不機嫌そうに叫んだ。

「我輩の特等席にどうしてあんな奇っ怪な生き物が乗っているのじゃないか！」

「奇っ怪な生き物じゃないよ、レイ。小さなおじさんだよ？」

星の頭に乗っているおじさんはにんまりと、したり顔で笑う。

そんなおじさんの表情に、レイニールは自分が馬鹿にされていると感じたのだろう。

自分の定位置を奪われたレイニールの怒りが爆発する。レイニールは肩の上から飛び立つと、星の頭上に乗ったおじさんの前に来て。

「そんな事どうでも良いのじゃ！ 主の頭の上から降りるのじゃ!!」

「……………プイッ！」

レイニールが声を荒らげると、星の頭の上のおじさんはその言葉を無視してそっぽを向いた。

「あのおじさん。いったい何を食べてるのかしら……」

星の頭の上のおじさんを見て、サラザがエリエの耳元でささやくように聞いた。

「それはもちろん。きのこじゃないの？」

「きのこって……………どこかのゲームの中で大活躍する。赤い帽子のおじさんじゃないのよ？」

「あのゲームのおじさんって主食はクッキーじゃないの？」

「えっ？ クッキー?! クッキーなんてゲーム中には……………ちなみにエリーはあのゲームやった事はある？」

「えっ？… ないよ？」

満面の笑みでそう言ったエリエに、サラザは「あつ、なるほどね」とあつけらかんとして言った。

その時、おじさんの様子に激昂したレイニールが強引におじさんの両足を掴むと――。

「――飛んでけえー!!」

すごい速度でぐるぐると回転して、全力で遠くに放り投げた。

高速で飛んでいくおじさんは両腕を突き出し背筋を伸ばした状態で、どこかの星に返っていきそうな勢いで夜の空へと消えていった。

その一部始終を見ていたサラザとエリエは驚いた様子で目を丸くする。それとは対照的に、突如として頭が軽くなった星が不思議そうにしている。

まあ、頭上で行われていたことなので、星が分からないのは当然なのだが……。

「あれ? 急に頭が軽くなった……」

星がそう呟いた直後、再び頭の上にならずしりと何かが乗ってきた。頭の方に目を向けると、レイニールがにっこりと微笑んでいた。

小首を傾げた星は、不思議そうな顔で「おじさんは?」と尋ねると。

「ああ、あの奇っ怪な者は家に帰ったようじゃぞ?」

つと、何事もなかったのかのように平然と言葉を返すレイニール。

「そうなんだ。でも急に居なくなっただけ……」

「うむ! きつと急用が出来たのであろうな!」

レイニールはそう言い放つと「急用じゃしかたないね」と星も納得したように微笑んだ。

その出来事の一部始終を見ていたエリエとサラザは小声で話し始めた。

「なんか帰ったとか言ってるわよ」

「まあ、色々な意味で自分の星に帰っていったかもしれないけど……でも、レイニールはあの体の大ききで、あのパワーは脅威だよね」

「そうね。でも私の力にはかなわないけど――脅威だよ」

「そうだね。とりあえず星にべったりみたいだからあまり刺激しない方が良さそうかな」

2人はそう話すと、微笑み合っている星とレイニールを見て頷いた。

そんな時、先導していたエミルが突然振り向き、顔の前で人差し指を立てている。

「……みんなそろそろ近くなってきたから、ここからはあまり話さないでね」

そう言ったエミルの前に遮るように、イシエルが割り込んできた。「それじゃー。みんなも準備せんとなあ。星ちゃんちよつと目を閉じてもらってええ?」

「——えっ? は、はい」

星は少しおかしいと思いつつも、言われた通りに瞳を閉じる。すると、イシエルがコマンドから香水を取り出し、それを星の頭にふきかけた。

その瞬間、星の全身が一瞬だけ黄色に光った。それを見て、エリエがイシエルに尋ねた。

「なにそれ、そんなアイテム私見たことないんだけど」

そう言つて首を傾げているエリエにイシエルは笑顔を見せると、香水の容器をエリエの顔の前に出した。

「これはなく。使うと自分達のレベルを隠す事が出来るアイテムなんよ——つとということでエリエちゃんも目瞑つててなく」

「きやつ!!」

イシエルは話し終える前にエリエの顔に香水の中身を噴射した。

「うわ。目にちよつと入った……」

エリエはそう言いながら必死に目を擦っている。

にこにこ微笑みながらイシエルは「ごめんなー」と謝ると、香水の容器を大きく上げた。

「これで計画を知らん2人は終了つと……ほな、皆も順番に並んでなく。ここからはこれなしで行つたらあかんよ」

香水を持った手を大きく振つて、そう告げるイシエルに従うように順番に並ぶ。

メンバー全員に香水の中の液体を吹きかけて、イシエルはにっこりと微笑んだ。

「——よし。これで準備完了やね!」

イシエルは香水をしまうと、また前を向いて歩き出した。
更に森の奥へと進んでいくのと同じくして、星の不安も大きくなっ
ていった。

(どこに向かっているんだろう……どうして誰も向かっている場所を聞
かないの?)

星は心の中でそう呟きながらも、静寂の中黙々と前に進んでいる中
でその意味を尋ねることもできずに、皆の後を歩いていた。

しばらくして先導していたエミルが足を止め、星を呼びながら手招
きしている。

「——星ちゃん、いらっしやい」

「な、なんですか? エミルさん」

少しビクつきながらも、星はエミルの側までいくとエミルの顔を恐
る恐る見上げた。

エミルはそんな星に微笑み掛けると、耳元でそつとささやいた。

「星ちゃん。向こうの林の先を見てみて……」

エミルにそう言われ。指差された先に目をやると、そこには湖に口
をつけて水を飲んでいいる動物の姿が見えた。

その見た目は、白馬で背には大きく真っ白な翼が折りたたまれてい
る。だが、それはファンタジーでよく描かれている姿そのものだった
……。

「——あれって……ペガサス?」

驚いた顔をしてそう呟いている星の肩にエミルがそつと手を置いて
話し掛ける。

「どう? 驚いたかしら」

「はい。とつても……」

星は目の前の光景が信じられないといった様子で、目を丸くさせな
がら小さく頷いた。

そして、その次のエミルの言葉に思わず耳を疑う。

「なら、乗せてもらいましょうか!」

「……えっ!?!」

その言葉を聞いて、星は目をぱちくりさせながら驚いた表情でエミ

ルの顔を見た。

エミルはにっこりと微笑むと、そのまま星の手を持ってペガサスに向かって歩き出す。

そんな2人を見ていたエリエが呟いた。

「へえ〜。やっぱりそういうことだったんだ。言ってくれば協力したのに！」

自分が仲間はずれにされたと膨れっ面をしているエリエに向かって、デイビッドが口を開いた。

「お前が寝ちやつたのが悪いんだろ。俺達はエミルに聞いてたぞ？」
彼の話を聞いたエリエの頬が更に膨れ上がる。

「へえ〜。デイビッドは知ってたんだ……この裏切り者！」

エリエは大声でそう叫ぶと、勢い良くサラザの胸に飛び込んだ。

サラザは何も言わず、その屈強な大胸筋でエリエを受け止めるとエリエの頭を撫でる。その後、エリエは涙ながらに叫ぶ。

「うわ〜ん。デイビッドが私をバカにしてるよ〜。デイビッドのくせに〜」

「あら〜、デイビッドちゃんはひどいわね〜。大丈夫よエリー、泣かないで」

サラザはそう言って、泣いているエリエの頭を優しく撫でている。

(いや、あんたもエミルの話聞いてたよな！)

デイビッドは心の中でそう呟くと、不機嫌そうにサラザを見た。

フアンタジー11

そんな3人とは対照的にカレンは目をきらきらさせながら、ペガサスを見つめている。

おそらく。彼女も乗ってみたくて仕方がないのだろう。まあ、無理もない。フアンタジー系のゲームをする人間なら、誰しも一度はペガサスなどの幻獣系のモンスターを手懐けてみたいと感じるものだし。

だが、カレンは分かっていた。もしも自分がペガサスに乗りたいたいと言えば、星は絶対にカレンに譲ってしまう。そうなれば、せっかくエミルが用意したこのフィールド攻略そのものが無駄になってしまうことになる。

年長者としても、仲間としても、それだけは避けなければならない。何故なら、今はエミルのパーティーに所属していて、マスターはこの場にはいないのだから……。

カレンは頭を激しく左右に振って自分の心を戒める。

星はカレンがそんな葛藤をしていることなど露知らず。エミルに連れられペガサスの前までくると、びくびくしながらペガサスの瞳を見つめている。

そんな星をペガサスも警戒することもなく、興味深く見つめたままその場に佇む。しばらくの間、星とペガサスは近付くわけでもなく、離れるわけでもなく、にらめっこした状態が続いていた。

互い睨み合いが続いた瞳を見合って膠着状態が続く中で、見かねたエミルが星の優しく肩を掴んでそっと耳打ちする。

「——星ちゃん。じっとしてても何も始まらないわよ？ ペガサスは敵対心を燃やさない限り、逃げることも襲ってくることはないから大丈夫。まずは、スキンシップしてみないとね！」

「あつ、ちよつとエミルさん!」

エミルは星の手を握ると、その手をペガサスの首元にそっと押し当てた。ペガサスは嫌がるどころか、星の顔をひと舐めしてまた星の瞳をじっと見つめている。

星はその様子に困惑しているような瞳をエミルに向けると、エミルは優しい声で話し始めた。

「星ちゃんがこの子に乗りたいと少しでも思うなら、その気持を素直に心で念じてみて」

「……えっ？ は、はい！」

星は小さく頷くと、瞼を閉じてエミルに言われた通りに心の中で念じた。

すると、それから数秒の間を空けてペガサスがゆつくりと頷き、今度は自分の背中の方に首を向ける。

それはまるで、星に『乗ってもいいよ』と言っているように思えた。

「ほら、星ちゃん乗せてくれるって言ってるわよ？」

「そうなんですか？」

「ええ、その証拠に翼を広げているでしょ」

エミルに言われ、ペガサスの方を向くと背中にたたんでいた翼が大きく広がっていた。

その翼は実に美しく、月が映った湖の光で輝いているように見える。

神々しいという言葉が相応しいペガサスの幻想的な姿に、星が目を奪われていると、体が急に宙に浮き上がった。

驚きすぐに振り返ると、エミルが星の体を掲げている。

「ほら、ペガサスさんを待たせたらいけないでしょ？」

「わっ！ あっ、あっ……」

動揺して声にならない声を上げたが、エミルに抱き上げられ。そのまま、ペガサスの背中へと乗せられてしまう。

背中に跨りながら星は不安そうな表情を浮かべ、弱々しい声でエミルに尋ねる。

「——あの、エミルさん。私だけで行くんですか？」

「大丈夫。私も行くから」

そう言ったエミルは慣れた様子でペガサスの背に跨って、先に乗っていた星の腰に腕を絡めた。

普段からドラゴンに跨がっている彼女からしてみれば、ペガサスも

それほど物怖じする対象にはならないのだろう。

星は困惑した様子でエミルの顔を見ると、そんな星の耳元でエミルがそつと告げる。

「……星ちゃんいい？ ペガサスには手綱も無いから上昇する時は前屈みになって。私がいいって言うまでは顔を上げちゃだめよ？ バランスを崩して落つこちちやうからね……」

「は、はいー」

星は緊張しながら小さく頷くと、頭を前に倒し前屈みになる。

エミルはそれを確認して、ペガサスの腹をかかどで軽く蹴った。その直後、前足を宙に浮かせ立ち上がったペガサスが『ヒヒーン』という鳴き声とともに、2人を乗せ夜空に向かって勢い良く舞い上がる。

そのまま、空高く上昇していくペガサス。

星はその間、ずつと瞼を強く瞑っていた。

物凄い風が体に当たり、耳には風切り音が響いている。そしてしばらくして、エミルの声が耳の中に入ってきた。

「——もういいわよ。星ちゃん」

「……はい」

その声を聞いてゆっくりと瞼を開くと、周りに散りばめたような星々に、手を伸ばせば届きそうな場所にある雲が眼前に広がっていた。

「うわー。凄くきれい」

星は目を輝かせながら辺りを見渡している。

そんな星を見て、エミルは嬉しそうに微笑んでいた。

(良かった嬉しそうで。さっきの戦闘の事はあまり気にしてないみたいね)

微笑みを浮かべるエミルがそんなことを考えていると、星の眩く声が聞こえた。

「きれいだけど……私だけ、こんな風景見ていいのかな？」

その声はどこか悲しそうに感じた。

おそらく。星は『自分よりも。もつとこの景色に似合う人が居たのではないか?』と考えているのだろう。

だがそれは、自分を低く見ている星だからこそ沸き起こってくる考えだった。

普通は景色を見て歓声を上げるのが先なのだが、星の場合はどうしても申し訳ないという思いが先にきてしまうのだろうか……。

エミルは真つ先に出たその言葉に呆れ顔をしつつ、すぐに微笑んで悲しそうに表情を曇らせている星の頭を撫でながら告げる。

「いいのよ。皆もいって言うってくれたんだから、それに楽しまないで、それこそこの素晴らしい景色を見れなかった皆に申し訳ないでしょ?。」

「……そうですね。私、楽しみです!。」

満面の笑みで頷いた星は、今度はきらきらと目を輝かせながら辺りを見渡している。

その姿を見たエミルもほっと胸を撫で下ろすと、星と一緒に becoming 周りの景色を楽しんだ。

空からは地上の妖精や木々に実っている果実が光り輝き、まるで宝石を散りばめたように見えていた。

まるで宝石箱をひっくり返した様なその幻想的な風景に時間を忘れ、結局ペガサスに乗っていた2人が戻ったのは1時間半ほど経った後だった。

湖のほとりに舞い降りた2人に、一番に向かってきたのはエリエだった。

一歩一歩地面を踏みしめる様に向かってくる彼女からは、ドストドスという効果音が聞こえそうなほどだ。

その様子から見て、どうやら怒っている様で、腰に手を当て息を吸い込んだ彼女は、ペガサスの背中に跨がっている星とエミルに向かって叫んだ。

「もうエミル姉! あんまりに遅いから、飛行型のモンスターに襲われたんじゃないかって心配したじゃん! 遅くなるなら遅くなるってちゃんと連絡入れてよね!。」

エリエはエミルの方に指を突き出して、膨れっ面をしている。

苦笑いを浮かべ、頭を掻いているエミルが彼女に言った。

「ごめんなさい。あまりに綺麗な景色に夢中になっちゃって」

「もう！ 私達を待たせてる事を忘れるなんてひどい！」

エリエはそう叫び、膨れっ面をしたままエミルを睨んだ。

エミルはそんな彼女に向かって、繰り返し謝っている。その傍らで、星はペガサスと話をしていた。

優しくペガサスの鼻先を撫でながら。

「ペガサスさん。今日はありがとう、すっごく楽しかったです」

つと、星はお礼を言った。

ペガサスはゆっくりと首を伸ばし星に頬ずりすると、徐に口で自分の羽を1つ抜き取り、口に咥えたそれを星に差し出す。

「……な、なに？」

星はその不可解な行動に驚いたように、その羽根とペガサスを交互に見た。

その時、カレンの声が響いた。

「星ちゃん。そろそろ帰ろう！ あまり遅いと生活のリズムが崩れるぞー！ 戻ってからお母さんに怒られたくないんだろ？」

「は、はい！」

星は慌てて返事をする、なおも口に羽を咥えたまま、じつとこちらを見ているペガサスから、その羽根を受け取り「ありがとう」と小さくおじきをして、その場を後にした。

そんな星の後ろ姿を、ペガサスは微動だにせずにと真つ直ぐな瞳で見つめている。

城に帰る道中。星はリントヴルムの背に乗りながら、ペガサスに渡された羽根を見つめていた。

「――主。なんじゃその白い羽根は」

レイニールは星の頭の上から、その真つ白な羽根を見下ろして言った。

星は目を頭の上のレイニールに向けと呟く。

「これはさっきのペガサスさんがくれたの」

「ふむ。じゃがそんな羽根が何かの役に立つのか？ 見た感じただの

「羽根じゃぞ?」

「うーん。役に立つか立たないかじゃなくて、こういうのは思い出だから」

「……そんな羽根が思い出なのか?」

星がそう言うと、レイニールは不思議そうに首を傾げていた。

だが、そう言った星もこれがお土産なのか半信半疑だった……親が仕事で忙しい星には、旅行などに行った記憶はない。そんな星には、これがお土産と言えるものなのか判断できなかった。

その時、星の持っていたペガサスの羽根が輝きその形状を徐々に変えていく。

「なにが起きてるの!」

「なんじゃ!?! 羽が形を変えとるぞ!!」

しばらくして、光りは治まり星の手の中には、小さなペガサスの形をした笛が乗っていた。

「……なにこれ?」

「……さあ」

星とレイニールがそれを見て首を傾げていると、そこにエミルが割り込んできた。

エミルはその笛を見るやいなや、驚いたように星の肩を掴んだ。

「星ちゃんこれはどうしたの!?!」

「あの……これはさっきペガサスさんからもらった羽で……でも、羽じゃなくなっちゃって……」

星はエミルのその慌てように、驚いたのか小さな声で言った。

「これはペガサスを召喚できる笛なの、私がいつもやってるでしょ?」
確かに彼女の言う通り、星はエミルがドラゴンを召喚する時にいつも巻物と笛を使っているのをよく目にしてきた。

だが、エミルのと決定的に違うのは、この笛にはその巻物が付いていないということだ。

その疑問に答えるように、エミルが笛について説明を始めた。

「ああ、私のドラゴン召喚とその笛は同じだけど、同じじゃないのよ? 私の笛は巻物に封印したドラゴンを呼び出す為の物——あなたの

はモンスターを封印したわけじゃないから、巻物はなく笛しかないの。それはモンスターに認められた証なのよ」

「認められた？ ……私ですか？」

星は首を傾げ聞き返した。

「うん。でも、むやみやたらと呼び出したらだめよ！」

「えっ？ どうしてですか？」

戦闘時にペガサスに乗って、エミルと同じように戦おうと思っていた星が大きく首を傾げた。

「どうしても！」

エミルは念を押すように、星に指を立ててそう言った。

星はその言葉の意味は分からなかったが、1つだけ分かっている事があるそれは……。

(そっか……でも。またペガサスさんに会えるんだ)

星はそう心の中で呟くと、それが嬉しくなっただけ分かって夜空を見上げた。また、ペガサスに会える日がくることを願って……。

激昂した刃

この話は、星達がドリームフォレストに発とうとしていたその時まで時間は遡る――。

マスターは白馬に跨がり、街の周りを囲むようにしてある水堀の上に架かる橋の前に掲げられた、木で作られている看板を見て感慨深げに佇んでいた。

「水の都市、千代――ここは昔から変わらん」

マスターは看板の文字を見て笑みを浮かべていたのだが、その表情が急に陰しくなる。

直ぐ様。乗っている馬の手綱を引き、急いでその場を離れた直後。大きな爆発音とともに、マスターの居た場所が砂埃に包まれている。その中から突如として声が聞こえてきた。

「……やっぱ。このくらいの攻撃はかわされるか」

巻き上げられた砂埃が治まり、その中から赤い鎧を纏った男が現れた。肩、胸、脚の部分が分厚い鉄板で覆われていて、関節部分だけが黒い布地がむき出しになった作りになっている。

その重々しい見た目はから、彼の纏う鎧は間違いなく重鎧なのだと分かる。

突然辺りを吹き飛ばし派手に現れたその男は、マスターに向かって柄の両端に大きな刃を持つ大剣を向けると声を荒らげて叫ぶ。

「おい、クソジジイ！ 俺の前にまた現れたということは、覚悟はできてるだろうな！ 俺と勝負しやがれッ!!」

憤る男がそう言い放った直後、上空からも何者かの声が聞こえてきた。

「ダメですよメルデイウス――あなた達がこんな所で暴れたら街が壊れて、皆様の迷惑になります」

「――むっ？ その声は紅蓮か!？」

マスターはその声の方に目を向けると、そこには他よりも明らかに低く飛ぶ不自然な雲が浮かんでいた。

その雲の端から「お久しぶりです。マスター」と長い銀色の髪の女

の子がひよつこりと顔を出すと、ペコリと頭を下げた。

その名に違わぬ赤い瞳がしつかりとマスターを見据えていると、メルデイウスがその雲の上の少女を指差して更に声を荒らげた。

「おい紅蓮！　こいつはもうマスターじゃねえー！　元マスターだ。何度言えば分かるんだツ!!」

大声を出した彼の声を遮る様に耳を押さえた紅蓮は眉間にしわを寄せた。つと突然、少女が乗っている雲から飛び降りた。

彼女は着ていた桜の刺繍が施された白い着物をなびかせながら、ひらひらと舞い降りてきた。

雲から降りてくるその小さな体はまるで雪を連想させる。それはさながら、雪の精霊と言ったところだろう――。

紅蓮は地面に着地したと同時に、メルデイウスの前に詰め寄ると彼を見上げた。

その表情は無表情だが、どことなく不機嫌そうに見える。

「この方はマスターという名前なのです！　他に呼びようがないでしょう。貴方も何度言えば分かるんですか？」

「だつ、だつてよお……」

紅蓮は微かに眉間のところにしわを寄せたまま、腰に手を当て少し強い口調でそう言った。その声にたじろぐメルデイウスは情けない声を上げ口をつぐむ。

「はあく。貴方は仕方ないですね……」

紅蓮は大きなため息をつくと、くるつと体を回させマスターの方へと向かってきた。

「マスター……」

紅蓮は透き通るような赤い瞳で、マスターの顔を見上げる。

マスターは微笑むと、彼女に「お前はいつ見ても美しいな」と告げた。するとその直後、無表情だった紅蓮の頬が一瞬で真っ赤に染まる。

「……う、美しいだなんて、そんな事を言ってくれるのはマスターだけです。マスターもお元気そうで……」

頬に熱を帯びながら、キラキラと輝く紅蓮の赤い瞳が、マスターを

見つめているとメルデイウスが口を開く。

「まあそうだよな！ お前はチビだから、綺麗より。まっ、可愛いだろうな！」

メルデイウスが『可愛い』と口にした次の瞬間。彼の体は地面に伏していた。

一瞬のことで何が起きたのか分からなかったが、顔を地面に強打したのか、メルデイウスは鼻を押さえながら徐ろに立ち上がり声を荒らげる。

「てめえー。何すんだよ!! ほんとの事だろうが!!」

一瞬で移動し、何事もなかったかのように元の場所に立っている紅蓮に向かってそう叫んだが、そんな彼に紅蓮は冷たい声音で言い放つ。

「いえ、私は何もしてません。あなたが勝手に転んだだけでしょ？」

でも……次にかわいいって言ったら……殺しますよ?」

その殺意を帯びた声を聞いて、メルデイウスは口を閉ざした。

いや、口を閉ざすしかなかった。彼女の小さな体から湧き上がる殺気は、そうさせるには十分過ぎるものだ。

マスターは呆れた様子でそのやり取りを見ていた。

(メルデイウスは相変わらず女心が分かっておらんな。……全く、こやつは変わらないな。紅蓮はかわいいという言葉に過敏に反応するのが、これだけ付き合っておってまだ分かっておらんのか?)

マスターが呆れ顔でそんなことを思っていると、紅蓮がマスターの方を向き直し、今までとは異なる神妙な態度で尋ねてきた。

「それでマスター。今日はどのような要件で?」

一瞬で場の空気が張り詰め、ピリピリとした雰囲気か辺りに漂う。

「うむ。実はお前達の力を貸してもらいたくてな。もう一度、儂とギルドを組まぬか?」

「——ギルド……ですか……」

紅蓮は『ギルド』という言葉聞いて、彼女は明らかに表情を曇らせている。

マスターもその彼女の表情から、大体の返事は予想できた。

彼のその予想通り、紅蓮は申し訳なきような顔で徐ろに口を開く。
「……申し訳ありませんマスター。私達はもうギルドを作ってしまったので、あなたのギルドには——」

「——ちよつと待てー!」

紅蓮が話している最中に、後方からメルデイウスが大声で遮った。
彼は目を吊り上げて徐にマスターの前になると、自分の胸を親指で指して勢い良く言い放つ。

その次の言葉に、紅蓮は耳を疑った。

「俺達に勝つたら、俺も紅蓮もじじいの好きにすればいい! だが、俺達が負けることなんてないがな! 何故なら、こつちには『イモータル』不死の力を持つ紅蓮が——つて居ない!」

自信満々にメルデイウスが紅蓮の方を向くと、さつきまで横にいたはずの彼女の姿が消えていた。

慌ててメルデイウスがきよろきよろと辺りを見渡しながら彼女の姿を探していると、どこからともなく紅蓮の声が響いてきた。

2人がその声の方に目をやると、雲に乗った紅蓮の姿が見えた。

「そういう事でしたら我がギルド『THE STRONG』のギルドマスターにお任せします。私はメンバー達と狩りに行くので、ここで失礼します」

紅蓮はそう言つてマスターにぺこつと頭を下げた。

だが、二対一に持つていきたかったメルデイウスが、紅蓮のその行動に激怒しないわけがない。

「このやろ〜。面倒になつて自分だけ逃げようつてこんたんだな!

降りて来いよ紅蓮!」

「メルデイウス。これもギルドマスターとして大事な勤めですよ?

はあ……そんな事では、マスターには一生勝てませんね……」

紅蓮が小馬鹿にするようにそう呟くと、メルデイウスが拳を振り上げて怒鳴った。

「何だ?! 一発ぶん殴つてやる! この降りてこい!」

「殴ると言われて降りるわけ 아닙니다。バカですか貴方は……頑張ってくださいね、マスター。ああ、あとこの近くで暴れるのはやめて

ください。他の方々の迷惑になりますので、それでは……」

紅蓮はギルドマスターであるメルディウスをバカにして、ギルドの敵であるはずのマスターに微笑み掛けるという摩訶不思議な行動をして、そのまま街の中心部の方に飛んでいってしまった。

マスターは、そんな紅蓮の姿が見えなくなつたのを確認してから口を開く。

「……相変わらず紅蓮の尻に敷かれてるようだな、メルディウスよ」「うるせえー。ほっとけ！ そんな事より場所を変えるぞ！ 紅蓮を怒らせると怖いからな！」

メルディウスは口を尖らせながら大剣を肩に担ぐと、ゆっくりと歩き始めた。無言で頷くとマスターもそれに続く。

2人は街を離れ、無言のまま枯れ木が至る場所に点在する荒野を進んできた。つと荒野の奥の所にある両側が断崖に囲まれた場所へとやってきたところでメルディウスが歩みを止める。

そこで前に行くメルディウスが持つていた大剣を地面に突き刺して、徐にマスターの方を向き返つた。

おそらく。左右を断崖に囲まれたこの場所ならば、もしマスターが臆病風に吹かれた時に逃げられることがないと、始めから目を付けていた場所なのだろう。まあ、どつちにしても今回の戦いからは逃げられそうもないが。

マスターと向かい合うメルディウスの全身からは闘志というよりも、マスターへの憎悪が滲み出ている。

だが、マスターもそれが分かっている様子だ。分かっているながら、彼もこの戦いに身を投じているようで実に落ち着いた様子でマスターの瞳が真っ直ぐに彼を見つめている――。

つと、メルディウスの握り締めた拳が小刻みに震え出すと歯をギシギシと噛み締める。

「じじい……俺はお前はぜってえーに許さねえー。本気の装備で来いよ！ それで俺が勝ったら紅……いや、お前に奪われた俺の『ビッグバン』を一生使わねえーと誓え！」

マスターの顔を睨みつけながらさつきとは打って変わって、静かにそう告げたメルディウスに、マスターが直ぐ様言葉を返す。

「ふん。心配症な奴だ……心配せんでも、お前のスキルは使った事がない。安心しろ」

「使ったか使ってねえーかじゃねえーんだ！ 使わないと誓えと言つてんだよ!!」

その物凄い殺気を帯びた声を聞いて、マスターは口元に笑みを浮かべるとコマンドを操作し始める。

マスターの固有スキル『明鏡止水』には、相手の固有スキルを自分のスキルとして使用できる特殊能力がある。

それは彼が意図して対象の固有スキルを吸収できることで、強力なスキル以外を吸収し習得しなくていいというメリットがあるのだ――。

コマンドから黒い革製のグローブを取り出すと、マスターはそれを手にはめた。

その後、鋭い眼光をメルディウスに向ける。

「――良いだろう。お前がそこまで言うなら、望み通り全力で相手をしてやる。そしてお前が儂に勝てれば、お前の固有スキルを二度と使わないと誓ってやろう……」

「――その言葉に嘘はねえーな？」

確認する様に言ったメルディウスの言葉に、マスターは静かに頷く。

2人は両端が断崖絶壁の崖に覆われた荒野の中央へと進むと、互いの顔を睨み合った。

「無いようだな……なら俺も、お前に負けたら俺達のギルドはお前の作るギルドに協力してやる」

「ほう、その言葉に相違無いか？」

「ああ、まずはこっちから行かせてもらうぜ……」

短く告げると、メルディウスは体を低く構え大剣を肩に担いだまま、マスター目掛けて突進してきた。

「――消えろおおおおおおおおおッ!!」

全力で振り下ろした大剣を、マスターはそれをかわすことなく両手でガードする。

攻撃をグローブで大剣の刃を受け止めたが、その重みに耐えかね。マスターの足元の地面が大きく陥没する。

だが、それだけの威力がある一撃を受けてもマスターの体は微動だにしなかった。

その直後、目にも留まらぬ速さで繰り出されたメルディウスの右足がマスターの腹部に直撃し、勢い良く後方に突き飛ばされた体はそのまま横の崖にめり込む。

人の形に大きく変形した岩肌から強引に体を引き剥がすと、マスターは取り出したヒールストーンで体力を全快にする。

「相変わらず凄まじい攻撃だな……」

マスターは笑みを浮かべ、ぼそつと呟くと目の前に一瞬の間にメルディウスが現れた。

一瞬で目の前に現れたメルディウスは、間髪入れずに大きな黄金の大剣を振りかぶっている。

「……なっ!？」

「なに油断してんだよー!」

そう叫んだ瞬間。メルディウスは持っていた大剣を力任せに振り抜いた。

激昂した刃2

大きな爆発音が辺りに響き渡った直後、メルディウスの攻撃をまともに受けた崖が音を立って崩れ始めた。

崖の崩落の影響で大量の土砂が舞い上がり、メルディウスの視界を完全に遮った。

彼は舞い上がった砂煙で視界を奪われているのを嫌ったのか、避けるように素早く後方に移動する。

数十メートルはあった崖が、地響きを鳴らしながら大きく手前に崩れてくる土砂を、軽々と避けるとメルディウスは持っていた得物を肩に担ぐ。

「——ふんっ、呆気ないもんだな……しかもあの土砂の量じゃ、十中八九HPは残ってねえーだろ……じじい。成仏しろよ」

っとメルディウスは舞い上がった砂埃を見つめ、勝ちを確信したようにそう呟く。よく見ると、彼の持っていた武器が大剣ではなく、大斧の形に変わっていた。

メルディウスはその大斧を天に突き上げると、上に上がっていた刃が下りてきて二又に広がり柄の部分を担ってまた大剣の形へと戻った。

そう。大剣の柄の部分の両側にも大きな刃が付いていたのには、こういう仕掛けがあったのだ。メルディウスの奇妙な形の武器は、始めから大剣と大斧両方にシフトできるような構造になっていたのである。

「これで俺の固有スキルは、本当に俺だけの物になったわけだ。帰るぞベルセルク……奴を倒した。これで紅蓮にもバカにされなくなるぜ！」

メルディウスはそう呟いてほくそ笑むと、剣を背中の鞘に収めてその場を後にしようとした。

っとその直後に、仕留めたと思っていたマスターの声かメルディウスの耳に飛び込んできた。

「——ほう。それがその武器の性能ということか……入れ替わる武器

とあの威力。それはトレジャーアイテムだな？」

一瞬驚いた表情を見せたメルディウスだったが、舞い上がる砂煙の中からゆっくりと出てきたマスターを見てすぐに平静を取り戻し、大剣をマスターに見えるように前へと掲げる。

「……ああ、これは戦斧ベルセルクだ」

「儂がギルドマスターをしていた時、その武器をお前は持っていなかった。いつ手に入れたのだ？」

マスターがそう尋ねると、メルディウスはニヤツと不敵な笑みを浮かべながら、彼のその質問に答えた。

「お前が居なくなってからだ——それより俺も聞きたい。どうやってあの攻撃をかわした？ 確実に回避できるようなタイミングではなかったはずだ！」

「ああ、このグローブ……いや、これもトレジャーアイテムだな。名を『デーモンハンド』という……」

彼の突き出したグローブには、黒いオーラが巻き付いている。

「デーモンハンド？ 悪魔の手とは大層な名前だな」

「まあ、そう言うな。この装備は闇属性のエネルギーを高密度収束して放つ事ができる。あの刹那に拳に集めたエネルギー放ち、自分の体を吹き飛ばしてダメージを和らげたただけのこと……」

その話を聞いて、メルディウスの表情は一変する。

彼からすると、先程の一撃は確実に撃破したという手応えがあったのだろう。基本的に高レベルプレイヤーを一撃で撃破できるだけのダメージは与えられない。

だが、攻撃のダメージと岩肌に激突させたダメージに崖が崩れた時の瓦礫によるダメージがあれば一撃で撃破できたはずだった……。

メルディウスは殺意を剥き出しにして、腕組しているマスターを見る彼の体から更に凄まじい殺気が滲み出していた。

「そうか……お前はそんな隠し球を、ギルドの時から俺達に見せずに温存してたってか……いつもいつも俺達をバカにしやがって!!」

「——何を言っておる。これはお前達と別れた後に手に入れた武器

だ、お前が知らぬのも無理はあるまい」

そのマスターの話に耳を傾けることもなく。メルディウスは再び大剣を構えると、マスターに剣先を向ける。冷静さを完全に失った彼の様子を、対峙するマスターは静かに窺っている。

メルディウスはその冷静なマスターの様子がしやくに障ったのか大声で叫んだ。

「そんな事はどうだっていいんだよ!」

持っていた大剣を肩に担ぐと、姿勢を低くして攻撃の体制に入る。

「……儂は強くなりすぎただ? このまま一緒に居ても、お前達に迷惑がかかるだ? ふぎけんじゃねえぞ!!」

メルディウスはぶつぶつと独り言のようにそう呟くと、突然咆哮を上げながらマスターに向かって斬り掛かってきた。

その攻撃を容易くかわしたマスターに、メルディウスは再び叫んだ。

「——そういつて去ったお前が! 今更ギルドを作ろうだって? お前が俺達のギルドを去ってから俺と紅蓮はまたギルドを立ち上げた。だが、お前の名前のせいで何度もギルドを潰してきたんだよ! お前には分からないだろうがなツ!!」

メルディウスは大剣を構え直し、大きく振り上げるとすぐに打ち込んできた。自分に向かって振り抜かれた刃を、マスターは両手の平で挟んで受け止める。

白刃取りしているマスターを睨み、メルディウスはその瞳は殺意に満ちていた。だが、マスターにはいわれのない彼の主張は、逆恨みもいいところだ。

「なにを言っておる! お前の言っている意味が儂にはさっぱり分かんらん!」

「……ああ、わかんねえーだろうな! なら、分からないまま死ぬべルセルク!!」

そう叫んだ直後、メルディウスの持っていた大剣の柄が上に跳ね上がり斧の状態へと入れ替わる。

マスターはそれを見極め、入れ替わった刃が体に当たるよりも早く

手を放して、素早く後ろに跳んだ。

せつかく捕まえた相手を放すのは惜しいが。そうしなければ斧の刃の部分により、マスターの頭は真つ二つになっていただろう。

「——いい判断だ。だが……はあっ!!」

跳んだ直後。お返しとばかりに、マスターが右手を前に突き出すとその手から圧縮された黒い衝撃波が放たれた。

メルディウスは飛んでくる衝撃波を見据えると、ベルセルクを頭上に振り上げた。

「そんなもん喰らうかよ!!」

大きく叫ぶと斧が大剣へと戻り、自分に向かって飛んでくる衝撃波を真つ二つに切断した。

自分の放った衝撃波を両断され、それを見たマスターが感心したような声を漏らす。

「……ほう。やるな! 声も出さずに形態を変えられるのか!」

放った衝撃波を真つ二つに切り裂かれるのを見て笑みを浮かべるマスターを、メルディウスは鋭く睨みつけている。

余裕がありそうに笑みを浮かべているマスターの顔を見て、メルディウスが更に不機嫌になる。

「そうだ。そうやってお前は戦いを楽しむ……それが気に入わねえーんだよ!!」

「男が戦いを楽しむのは自然の摂理! 所詮男は獣の本能を捨て去る事など……できぬわ!!」

マスターの手に黒いオーラを纏い、今度はマスターが咆哮を上げながら高速でメルディウスに襲い掛かった。

——ドカーンッ!!

その凄まじい爆発音の直後。地面が大きく抉られ、その勢いでメルディウスはそのまま後方に吹き飛ばされる。

「こなくそおおおおおおおッ!!」

メルディウスは大剣を地面に突き立て威力を吸収することで、崖の手前でなんとか踏み留まった。

彼の通った場所は地面に大きく縦に数メートルに掛けて裂け目が

入っているのを見れば、どれだけマスターの攻撃が凄まじかったかを物語っている。

ベルセルクの柄を握り、肩で息を繰り返しているメルディウス。

「ふん！ 弱くなったな——メルディウス。昔のお前はもつと戦いを楽しんでおった。だが、これはどういう事だ！ 怒りの感情に任せて戦うとは愚の骨頂！ 戦いの間は感情を抑えるというのは、戦闘において初歩の初歩だぞ!!」

マスターはそう怒鳴ると、メルディウスに鋭い眼光を向ける。

鋭い眼光を飛ばし発したマスターの言葉に、メルディウスも眼光を飛ばし透かさず噛み付く。

「ただ戦いを楽しむだけで大事なものも分からなくなった野郎が……何を偉そうに！ それに戦いつてのは感情を剥き出しにしてやるもんだろうがツ!!」

大声でメルディウスが叫ぶと地面から大剣を引き抜き、剣先をマスターに向ける。

彼の言った意味が理解できないといった感じで、マスターは首を傾げている。

「……大事なものだ？ どういう意味だ？」

マスターは眉間にしわを寄せて聞き返す。

それもそうだろう。マスターはメルディウス達とのギルドを抜けてからというもの、個人の力を高めるために各地を転々としていた。そんな彼からしてみれば『力こそが全てであり』その目的の本質は全くブレていないのだ——。

すると、その問に答えるように、怒りを露わにさせているメルディウスが徐に口を開く。

「——お前が俺達の前を去った後。俺達は拳帝の残りかすと罵られ。俺も紅蓮も長い間、誰にも認めてもらえなかったんだ！」

「……なんだと!? そんな、ばかな……」

「バカはてめえーだ。このくそじじい！ 毎回毎回大会でばんばん優勝しまくりやがって、さぞお前は気持ち良かっただろうな！ お前が名前を上げる度に、お前に見限られた俺達に向けられる世間の目は悪

化していった……まあ、俺はいい。言いたい奴等には言わせておけばいい。だが、紅蓮は……あいつが一番苦しんだぞ!?」

マスターはそれを聞いて、驚いたように目を丸くさせている。

それもそのはずだ。自分が抜けただけで、それほどの大事になっているとはマスター自身、思いもしていなかったのだろう。

この2人の因縁は相当昔に遡る。それは、まだサービスが開始してから一年も経たない頃、現実世界に敵が居なくなったマスターが強さの高みを目指していた頃の話だ――。

* * *

フリーダム内で年2回開催される武闘大会——そこで、マスターは大会の決勝戦のリング上に立っていた。

目の前には対戦相手と思われる重鎧を纏ったハンマー使いが、うつ伏せで倒れている。その胸の鎧には拳の痕がくつきりと刻まれている。

興奮気味にマイクを取った実況者は、実況席のテーブルに足を掛けて叫ぶ。

「遂に勝敗は決した！ 優勝は拳帝だ！ 今回も圧倒的な力で対戦相手をねじ伏せました!!」

熱の入った実況の声の直後。試合の興奮が冷めやらない会場内が、彼の勝利を祝福する歓喜の渦に包まれた。

鳴り止まない拍手と歓声の嵐は、地面を震わせ会場の温度を引き上げているように思えるほどだ。

その『拳帝』とは、マスターの昔のリングネームで、拳だけ様々な武器を持った敵を次々になぎ倒す様を見て『拳の皇帝』という意味合いで名付けられた。

「さすがマスターだぜ！」「世界サーバーでも最強の男！」「拳帝の名は伊達じゃないぜ！」「拳帝の拳は神の拳だ！」

そんな熱気を帯びた声が会場内を埋め尽くしていた。

司会者が表彰式に移ろうとするやいなや、マスターはリングの上で

身を翻し、無言のまま徐にリングを降りた。

マスターはいつものように優勝賞金も賞品も受け取ることなく、足早に試合会場を後にする。

彼が欲しいのは、賞品でもトロフィーでもない。彼が欲しいのは珍しい固有スキルであり。マスターが全力を出せる相手だけだったからだ――。

優勝しても商品も賞金も何も受け取らず、名誉だけを受け取って帰る。

それが拳帝と称されるマスターの名を不動のものにする要因ともなっていたのだ。

だからこそマスター本人はこの戦いに、何とも言いがたい乾きを覚えていた。

（手応えが全くない……儂は何の為に、何の為にこの世界に来た？

現実に敵がおらぬからここに來たはず。だが、どうしてだ？ 命の心配をしなくていいこの世界でも、敵が脆弱すぎるということ……）

マスターは声にならない心の叫びを、怒りにも似たこの感情を込めて会場の出口通路の壁に拳を突き立てた。

抑えたつもりだったが、その拳の周囲の壁はひび割れ彼の拳がめり込んでいる。

現実世界ならば生と死の恐怖が常に付き纏う。しかし、ゲーム世界にはその心配はない、ここでの死は仮想のものであり現実の死ではない。

この世界では、致命傷と言える傷を受けても、数分もすれば街の教会で生き返れるのだ――だが、それを持つとしても。マスターは好敵手と呼べる相手に未だに出会えていない。

（儂はもつと高みを目指したい。武闘家とは武道とは強さを極め続けるもの。この程度の敵と戦っておっては高みは……武道の極みには到底辿り着くことはできぬ!!）

マスターが心の中で葛藤していると、後ろから声が聞こえてきた。

「――ようギルマス！ どうしたんだよ。勝ったのにしけた面してよ！」

「——マスター。凄かったです！ 私、感動しちゃいました！」

憤るマスターにそう言って歩いてきたのは、メルディウスと紅蓮だった。

彼等は興奮冷めやらぬ様子で、笑顔で歩み寄ってくる。マスターはそんな2人に気付くと、平静を装って微笑みを浮かべた。

「なに。今回の大会は、少し物足りなかったと思っただけだ……」

「そんなの毎回の事だろ？ あんたが強すぎるんだよ。まっ、マスターなんて名前で弱かったら、それこそ笑えるけどな！」

メルディウスはそう言ってにやりと笑った。

マスターは苦笑いを浮かべながらも「その通りだな」と小さな声で呟く。そこにタイミングを計っていた様に、紅蓮がゆっくりと近付いてきた。

「あの、マスター。優勝おめでとうございます」

紅蓮がそう言って差し出したのは、青みがかった紫色の桜の枝だった。

現実では珍しい色の桜だが、ここではさほど珍しくはない。フィールドによつては燃え続ける薔薇の花なんかもあり、松明代わりに携帯している者さえいるくらいだ。

「これ、昨日ちよつと狩りに行った時に見つけたんですけど、マスターみたいだと思って」

「ほう美しいな。これだけのものを見つけるのは大変だっただろう……ありがとう。紅蓮」

紅蓮はそう言われ頬を赤らめると、恥ずかしそうに俯いている。

(儂に似てるか……儂には紅蓮そのもののように思えるがな——自己主張せず。小さい花びらながらも他の桜とは明らかに一線を画する) マスターは紫色をした桜の花を見つめ、そんなことを心の中で呟いた。

その時、マスターの心の中にはもう一つ『このままこの場所に居たらダメになるのではないか』という疑問が生まれてきた。

仲間達に囲まれ、ギルドマスターとして慕われる日々——それはとても居心地が良く、同時に、とても不安定なものだ。

時の流れとともに、人の心は移りゆくもので、いつ人間関係が壊れるか分からない。しかも、武闘大会での連続優勝記録を継続していたマスターをよく思わない者も一定数存在するのも事実。

元ベータテスターの四天王くらいしか、この仮想現実の世界で、行動を共にできる者はいない。

以前は、切磋琢磨する存在であるはずの彼等も、今では闘争心のかけらもないほど丸くなってしまった。

このままこの居心地の良さに甘え、彼等の元に留まってしまえば、自分の腕が落ちていってしまうとマスターは感じていた。

それは、マスターの昔から持った思想『武道に平穏な時はない!』という意思があったから他ならない。

その夜。マスターは四天王の2人を部屋に呼び出し、自分の考えを告げることにした。

「どうしたんだよ。マスターこんな時間に俺達を呼び出すなんて」

メルデイウスは後頭部を掻きながら、眠そうに大きなあくびをしている。

「どうしたんです? マスター」

紅蓮の大きな赤い瞳が不安そうな表情でマスターを見つめる。

マスターは2人の顔を感慨深く見つめると、徐ろに口を開いた。

「――2人は長い間。世話になつたな……ありがとう」

「……えっ? マスターなにを言って……」

「なっ……なに言ってるんだ? 遂にボケたのか……?」

マスターのその言葉に、2人は彼が何を言っているのか理解するのに時間が掛かった。

初めは何かの冗談だと思っていた彼等だったが。真剣な彼の表情に、ただならぬ雰囲気を感じ取り、次第に2人の表情は青ざめていった。

「いやです……そんな事を言わないで……ください!」

紅蓮の瞳から一粒の涙が流れ落ちた。それを見たメルデイウスが大きな声を上げる。

「ギルマス! 何を言ってんだよあんた! 俺達は運命共同体じゃ

ねえーのかよ!!」

彼が叫ぶのも無理はない。メルディウスとマスターは5人という少数ギルドの中で、マスターと最も仲が良かったのは彼だ。

動じる様子なくその場に立ち尽くしているマスターが、突然ギルド脱退を告げられ、動揺を露わにしているメルディウスの間に答える。「お前達の思っている通りの意味だ。どうやら僕は強くなりすぎたらしい。命のやり取りのないこの世界なら、全力で戦える好敵手に出会えると——この体を支配する勝負への乾きを解消できると思っただが、もはやプレイヤーの中に僕とやり合える者はもうおらん。このままだと、僕は今の現状に満足できずにお前達を危険に晒すやもしれん。痛覚のあるこのゲーム内で、これ以上。お前達に負担を強いるわけにはいかん。僕は今後、高難易度のダンジョンに一人で挑むことにする……」

「……なに。言っただ……?」

マスターの言っている言葉の意味が理解できないのか、メルディウスは口をあんぐりと開けたまま、目を見開き啞然としている。

「——武闘家として高みを目指すというこの考えは変えられん。僕が居るとお前達にも結果として迷惑をかける——今日をもって我がギルド『SEARCHER』は解散とする」

マスターがそう言い放つと、涙を流していた紅蓮が信じられないと言った表情でその場に崩れ落ちた。

それとほぼ同時に、メルディウスが道着の胸ぐらを掴んで、怒りを秘めた瞳で鋭く睨みを利かせ、立ち尽くしているマスターに詰め寄る。

「このやろおー!! 百歩譲って解散するのはいいとしよう。でもな!

メンバーには事前に相談なりなんなりあっても良かったんじやねえーのか! どうなんだよ! ギルマスさんよー!!」

「……なら聞か。お主は、相談すれば両手を上げて賛成したと言うのか? メルディウス」

「……くっ!」

胸ぐらを掴んでいる彼の目を見て言ったマスターのその言葉に、メ

ルデイウスは齒を噛み締めながら睨み続けるしかなかった。

マスターの言葉通り。事前に相談されても、おそらくこういう結果になるのは変わらなかつたと自分でも理解できていたからに他ならない。

一度口籠ったメルデイウスが思い出したように再び口を開く。

「……他の2人はどうすんだよ。俺達が認めたとて、あの2人が認めるわけねえー!!」

「2人にはもう話をつけている。後はお前達だけだ……」

「……随分と念の入った事だな！俺達の方が簡単に落ちると思つて、あいつらより後回しにしたってことかよー！」

メルデイウスが今にもマスターを殴りそうな勢いで睨んでいるところに、紅蓮が割つて入るように口を挟んだ。

「……私は嫌です」

涙を流しながら地面に座り込んでいた紅蓮が徐ろに立ち上がると、マスターの前に来てその顔を見上げた。

マスターもそんな彼女の顔をじつと見つめている。

「私……引つ込み思案で、同級生とも趣味が合わなくて……でも、こうして皆と仲良くなれて、凄く嬉しかった……嬉しかったんです！だから、私はこの今を壊したくない!!」

涙で潤んだ瞳で必死に訴えかけた紅蓮に、マスターは優しい声で告げる。

「そうか……お前の気持ちは良く分かった。だが、腕を磨き高みを目指したいと思うのは、武を極める者の宿命なのだ——今は分かってるも、いつかお前にも分かる時がくる」

「そんなの……分かりたくないです……私はただ……ずっと、皆と一緒に居たい……このギルドを解散なんてしたくない」

ぼろぼろと止めどなく溢れる涙で声を震わせながら、なおもそう訴える紅蓮の肩に手を置くと「すまん。儂の事は忘れてくれ」と言い残し、マスターは部屋を後にした。

紅蓮はその場に座り込むと、嗚咽を堪えながら泣き続けた。

そんな彼女を見て、メルデイウスは唇を噛み拳を握り締めながら小

さく眩く。

「——紅蓮……くそじじいが……」

メルディウスは泣き崩れている紅蓮を慰めることもできずに、去つて行くマスターの背中を見ながら憤る心を必死に抑えていた。

*
*
*

激昂した刃3

咆哮を上げながら武器の柄を強く握り締め、メルディウスは感情に任せるように大きく斧を振り上げた。

「——あの時から……紅蓮の奴は笑わなくなっただよ!!」

そう叫んで力いっぱい振り下ろした直後。けたたましい音と凄まじい威力に地面が裂け、噴石が数万単位で宙を舞う。

マスターは地面を転がるようにしてなんとかその攻撃をかわすと、素早く体制を立て直した。

再び拳を構え直し、マスターは次の攻撃に身構える。

「あいつは……優しいからよ。お前に心配かけないようにつて振る舞っていたが、それが俺には、痛々しく見えてたまんねえんだよ……」

急に悲しい表情で告げるメルディウスに、マスターは無言のまま彼を見つめていた。

メルディウスは斧を大剣に変えると、今まで以上の殺意をマスターに向け、低い声で告げる。

「俺達の——紅蓮の前から何も言わずに消えろ……でないと、俺は今の状況を利用してお前を殺さないといけなくなる……」

マスターはその殺気を感じ取っているのか、険しい表情で拳をに力を込めている。

だが、その場から逃げる素振りは一向に見せず。彼の瞳には、まだ並々ならぬ闘志が宿っていた。

「そうか引く気はねえーようだな……残念だ……」

メルディウスはそう呟くと、大剣を構え襲い掛かってくる。マスターは物凄い勢いで向かってくるメルディウスを見つめ拳を固めた。彼の思いは痛いほど伝わってくるが、今のマスターには引くという選択肢そのものがない。

この世界に閉じ込められた仲間達を、そしてこの災厄に見舞われたプレイヤー達を、一元の世界に返してやらないといけないのだ。その為にも、どうしても彼等の力が必要なのである。

(お前達には悪いことをしたと思ってる……だが、今の儂には守りた
い者達がおる。皆を無事に連れ帰るまで、こんな場所で負けてやるわ
けにはいかんのだ!)

マスターは心の中で決意を固めると、力強くそう叫んだ。

「——ダークネス!!」

その直後、マスターは闇属性の黒いオーラを帯びた拳でメルディウ
スを迎え撃つ。

2人の攻撃が激しくぶつかり合う——その威力は、お互いの攻撃の
衝撃で地面が陥没しひび割れるほどだ。

その凄まじい一撃の後、互いに後ろに跳んで距離を取ると、2人は
顔を睨み続けている。

「じじい。お前は俺達の前にこのこ出てきて、何を考えてやがる!」
「……それはお前が儂に勝てたら教えてやろう!」

マスターがニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

そのマスターの挑発的な態度に、メルディウスの怒りが爆発する。

「——そうかよ……やっぱりてめえーは手を抜いてやれるほど甘くは
ねえーか!」

「何を言っておる。手を抜くとは、上の相手が下の相手に向けて使う
言葉だ! お前は儂に手を抜いてるといふのか?」

マスターが不敵に笑うメルディウスの顔を不機嫌そうに睨んだ。

彼が不機嫌になるのは最もだ。最初に『本気で来い』と言ったメル
ディウスが、今まで本気で戦っていると思っていたメルディウスが、
まだ本気を出していないと言われれば仕方ないだろう。

向かい合っていたメルディウスは剣を突き付けると、不敵な笑みを
浮かべ。

「それはこいつが……このベルセルクがトレジャーアイテムだからだ
! トレジャーアイテムにはそれぞれ固有のスキルがある!」

「ふん。儂のこのグローブも同じだぞ? それだけでは儂には——」
自信満々に言い放つ彼に、マスターは眉間にしわを寄せて見つめて
いる。

「——分かってねえな。お前も知ってたろ? じじい。武器や防

具のアイテムっていうのは使った数——熟練度によって、その能力が上昇する。つまりだ……」

突き出していた大剣を、メルディウスが今度は天に振り上げる。

「熟練度がMAXになると、装備系のトレジャーアイテムは真の姿を見せる!!」

その叫び声の後、剣の刀身が見る見るうちに姿を変えていく。

天高らかに振り上げた武器は虹色に光り輝くと、剣の刃が消える代りに斧の刃の部分が更に巨大に鋭利になっていく。武器が状態変化が終わると、メルディウスの持っている武器は完全な大きな斧の形になっていった。

刃は柄の部分を飲み込むほどの大きさで、大人一人分ほどまで肥大化していて、斧頭には大きな鬼の顔のような装飾が施されている。

黄金に輝くその大斧はとても神々しく感じた。いや、武器と言うよりその大斧は黄金で作られた財宝の様にも見える。

だが、黄金の見た目とは違い。その大きな刃は鋭く光りを反射させ、血を欲しているように見える——まさにベルセルク『狂戦士』という名に相応しい。

マスターはその武器を見て、驚いたように目を見開いている。

「驚いたか？　じじい。これこそ俺のベルセルクの本当の姿だ！　剣は敵を斬り捨て、斧は敵を斬り薙ぎ払う。そしてこれが神をも薙ぎ払う大斧だ！　このベルセルクの隠された能力は爆発！　そして俺のビッグバンの能力も爆発なんだよ!!」

咆哮を上げたメルディウスが、その大斧を勢い良く振り抜いたが、マスターはその攻撃を即座にかわす。

すると、メルディウスの言った通り。ベルセルクの刃が当たった地面が爆発で跡形もなく吹き飛んだ。

「ほう。爆発に自分の固有スキルの能力を食わせおったか……ならば！」

その一撃を見たマスターは落ち着いた様子で呟く。

（確かにこれならば、自爆せずに能力を使える。奴にとっては、最も相性の良い武器ということか……）

その攻撃を冷静に分析しているマスター。

メルディウスの使うベルセルクはとても強力な武器だ——しかも、彼の固有スキル『ビッグバン』の能力まで吸収し、その攻撃力を増している。

武器の能力をまじまじと見せつけられた今、マスターに残されている手は一つしかない。すると、今度はマスターが『明鏡止水』と叫んだ。

直後。マスターの手から黒いオーラが消えると同時に、全身から黄金のオーラが噴き出す。

それを驚いた様子でメルディウスは、空に向かって立ち上がる金色のオーラをマスターの姿を食い入るように見つめている。

「——なんだよ。そりや……そんなスキル。前のあんたは持つてなかったはずだ！」

敵に知られているスキルを使えば、戦術は容易に破られてしまう。

しかも、以前共にギルドを組んでいた戦友ならば尚の事だ——マスターのメルディウスの知らないスキルを使用するというのは、現状で最も有効な手だと言えるだろう。

マスターはサラザの使っていた『ビルドアップ』を『明鏡止水』で呼び出した。この姿ならば、戦闘能力に秀でた彼との戦闘で先を読まれることもない。

だが、唯一の不安要素は、強力だがまだスキルの経験の浅い固有スキルを発動させるのはかなりのリスクがある。

マスターの固有スキルは使用時に、回復系のアイテムが一切使えなくなるというデメリットがある。それでもこのスキルを使用したのは、何か彼なりの思惑があるのだろうか……。

「ふん。儂は強さを極める者——より良いスキルを見れば、それも儂の強さへと変える！」

「ふふっ……どうせそのスキルだつて勝手に奪ったもんなんだから？ まったくしゃくに障るじじいだぜ！」

彼の発動した固有スキルをはったりと考えたメルディウスは、マスター目掛け大斧を振り抜く。

先程の一撃でマスターは、ベルセルク的能力をまじまじと見せつけられていた。

おそらく、ベルセルクの攻撃力は斬撃以上に爆発の方が上回っていることは、容易に想像できた。

(あの刃に触れた物は爆発する。ここはかわす以外に方法はないか……)

素早くメルデイウスの斬撃をかわすと、またベルセルクの刃が当たった場所が轟音とともに粉々に吹き飛んだ。

マスターは、その凄まじいまでの爆風で飛ばされてしまう。

「くっ！ まったく厄介な能力だ……」

マスターが自分のHPバーを見てそう呟く。

何故なら、体に弾け飛んだ地面の破片が当たり、多少なりともダメージを受けていたからだ。

このスキルはコピーしたスキルを使用できるのが最大の利点だが、それを超える致命的な欠点もある。

その最大の弱点とは発動時、ヒールストーンなどの回復系のアイテムの使用ができないことと、更にスキルを完全に解除すると、次のスキル発動までに丸一日掛かるといふ欠点である。

今まさにマスターが渋い顔をしているのもそれが原因だった。メルデイウスの攻撃をかわしてはいるが、破壊した残骸でマスターは細かいダメージを受ける。

HPを回復する手段のないマスターは、巻き上げる破片を含め、確実に攻撃を避けきらねばならなのだ。

苦戦するマスターの顔を見て、メルデイウスはほくそ笑むと徐ろに口を開いた。

「———どうした？ 苦戦してるな……あんたの弱点は知ってるぜ！

なんて言っただって、俺の元ギルマスだからなっ!!」

「……なるほどな。勝手知ったるって言うやつか？」

ベルセルクが爆発で撒き散らした破片でマスターがダメージを受けているのは、無論メルデイウスも分かっている。それも計算に入れてやっているのだ。

だが、なおも涼しい顔をしているマスターが気に食わないのか、メルディウスは感情的になり声を荒らげる。

「いつもいつもいつも！ お前は どうして そうなんだよ！ 負けたら死ぬんだぞ!? 怖いとかそういう感情はないのかよ!!」

「ふふつ、怖いか……今、儂が一番怖いのはお前達を失う事だ——それ以外の事などに恐怖などない!」

「なにを今更……なら、どうしてあの時に俺達を捨てた! 償いのつもりなら今すぐこの場で消えやがれ!!」

メルディウスはそう叫ぶと、鬼の様な形相で大斧を構えて襲い掛かってくる。

マスターはメルディウスの大斧の刃を素早くかわすと、それに追いかけるようにメルディウスの攻撃が繰り返し襲い掛かる。

容赦のないベルセルクによる度重なる爆発によつて、2人の居る場所の地形が見る見るうちに変わっていく。

最初に来た時は、両側を断崖絶壁に囲まれた谷だったのが、今では大きな岩が転がる全く別のステージのようになっていた。

それは2人が、ゲーム内の再生プログラムを超えるほどの戦闘をしているからに他ならない。

「このくそじじい! 吹き飛んだ破片も全てを叩き落としやがって! ダメージ与えられないだろうが! さつさと歳相応にくたばりやがれっ!!」

「ふん! お前の爆発など。そよ風程度にも感じぬわ!!」

マスターは爆発音の後に爆発で飛び散った破片までも器用に全て手で叩き落とすと、不敵な笑みを浮かべている。

「この野郎! なら、直接このベルセルクで真っ二つに叩き斬るだけだ!!」

メルディウスがそう叫ぶと、武器の形状が大剣の状態に戻った。「うおおおおおおおッ!!」

咆哮を上げてマスターに大剣で斬り掛かるメルディウス。

マスターはそれを擦れ擦れでかわすと、メルディウスがニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

(なんだ？ 何がおかしい……まさか!?)

はっとしたマスターがメルデイウスの顔から剣に目を向けた。すると、大剣が斧の姿へと変わっていた。

(——剣が斧に……しまった！)

その直後。今度はメルデイウスのベルセルクが輝き、次の瞬間には大斧の姿へ変わっているのがマスターの視界に映る。

大斧へと変化したベルセルクを頭上に大きく振り上げ、メルデイウスの顔からやりと不敵な笑みがこぼれていた。

「言っただろ？ お前を真つ二つにするつてなッ!!」

「……くっ!」

(この間合ではかわせん!!)

大斧の直撃を受けたマスターが爆発した。

その凄まじい爆風でメルデイウス自身も大きく吹き飛ばされる。

そうなることを彼は想定していたのだろう。メルデイウスは素早く体制を立て直し、マスターの居た場所に目をやった。そこには、爆発によって起こった煙が漂っている。

さっきの攻撃は確実に直撃させた。爆風に寄って周囲の砂塵が舞い上がったが、直撃を受けた時に発生した煙をメルデイウスもしっかりと確認した。

浮遊する土煙によって視界は遮られている。だが、そう簡単にマスターを仕留められるわけがない……。

「——手応えはあった………やったか?」

メルデイウスがそう呟くと、じつとその煙の中を窺っていた。

確実に仕留めたという手応えは感じている。だが、拳帝とまで言われた男だ——いくら直撃したとは言え、そう簡単にやられてくれるとは思えない。

立ち上った砂塵が次第に晴れていく中にマスターの姿はない。

それを確認したメルデイウスは思わず笑みを浮かべると、握った拳を空に突き上げ叫ぶ。

「よっしやあああああッ!!」

確実に仕留めたと確信した直後、メルデイウスの背後から悪魔の声

が聞こえてくる。

「——どこを見ておる！」

「な……に……?」

メルディウスがその声の方を慌てて振り向くと、そこにはぼろぼろの黒い道着を身につけたマスターの姿があった。

彼が先程まで全身に纏っていたはずの黄金のオーラは消えていて、代わりに両手には黒いオーラが、今までのそれとは比べ物にならないほどに火柱の様に空に向かって伸びていた。

おそらく。直撃した瞬間に腕のオーラを最大まで放出して、爆発の威力を闇属性のオーラで大幅に減少させたのだろう。

元々戦闘スキルの存在しないフリーダムでは、『固有スキル』『武器スキル』(トレジャーアイテムに限る)これの組み合わせで他者との間にアドバンテージを作る。そして珍しいのは属性系のスキルである。

これは火、水、風、土、光、闇の6種類あり。通常攻撃のダメージと共に、属性ダメージも追加するとても珍しいこのスキルを有している者は少ない。

エミルや星の様にドラゴンなどのモンスターを連れている者は自分が使えなくてもモンスターへの攻撃に属性ダメージが含まれている為問題はないが、この様なスキルを持っている者は属性スキル持ちよりも少数である。

「——勝負は最後まで手を抜いてはならん！　だが、儂も危なかった……」

「俺のベルセルクの一撃を受けて立っているだ!?　いったい何をしやがった。じじい!!」

「ふん。知れた事……防いだに決まっておろう?」

「爆発を防いだだと……?」

メルディウスはそんなことはありえないと言わんばかりの顔で、マスターを見ていた。

しかし、その反応も無理はない。あの一撃——あの攻撃でメルディウスは確かにベルセルクがマスターを捉えた手応えはあった。

だが目の前に、その仕留めたはずのマスターが立っている。

もはや闘争本能というものか、メルディウスは思考をストップさせ、すぐに我に返り大斧を構えてマスターに向かって再び突進した。「メルディウス——儂をここまで追い込んだお前に敬意を表し。儂の禁じた技を見せてやろう……」

マスターがそう小さく呟いた直後。両手のオーラがいつそう強まった。

「うおおおおおおおおおッ!!」

メルディウスはそんなことを気にしている余裕がないのか、それとも迷いを振り払う為か、大きく咆哮を上げながらマスター目掛けて一直線に突っ込んでくる。

「……これが儂の禁じ手——沈め、永遠の闇へと……ダークネスフアング!!」

マスターが両手を地面に突き刺すと、メルディウスの周りに黒い炎の様なオーラが円を描くように発生して一気に立ち上がり、彼の行く手を完全に遮る。

「……なにッ!?!」

メルディウスが気づき、空に跳び上がった直後。地面から更に強く噴き出した漆黒のオーラのドラゴンの頭が、跳び上がったメルディウスの体を呑み込んだ。

激昂した刃4

突如現れた漆黒のオーラで形作られたドラゴンの口の中に捕らわれたメルディウスが咆哮を上げ、大斧を構えると同時に振り抜く。

「こんなもん。俺のベルセルクで吹き飛ばしてやるぜ!!」

すると、口の中で大きな爆発が起こり。その衝撃で攻撃を受けたはずのドラゴンの頭ではなく、攻撃を放ったメルディウス本人のHPが大幅に減少する。

そのダメージでメルディウスの体が大きくよろめく。膝に手を突き、何とか体制を立て直す。

「——くっ……ダメージは受けたがこれであいつの胸くそ悪いドラゴンの頭も跡形もなく——なんだと!？」

メルディウスはそう呟くと、自分の目を疑った。

何故なら、マスターの創り出したそのドラゴンの頭は、メルディウスのベルセルクの攻撃を受けても、何事もなかったかのようにメルディウスを捕らえていたからである。

本人としては、ダメージ分くらいは破損させられたと思っていたのだろう。その後も諦めず何度も攻撃を繰り返すメルディウス。

そんな彼の様子を哀れむように見つめながら。

「無駄だ……一度取り込まれたら二度と光りを拝むことはない……それがこの技の力だ——呑み込まれたが最後だ……メルディウス」

マスターがそう呟いた直後。ドラゴンの口の中で途轍もない爆発が発生した。その後、闇属性の稲妻が襲い掛かり、中に閉じ込められたメルディウスが断末魔の叫び声を上げる。

彼の苦しい叫び声を聞いて、マスターはまるで自分の身を引き裂かれるような感覚に眉をしかめている。

「——ダークネスファンクは、敵を全ての攻撃を封じる闇属性の檻に閉じ込め。一切の攻撃を受けず、その攻撃の全てを撥ね返す……闇属性の雷撃のおまけ付きでな……何もしなくても一定時間が経過すれば、敵に全方向からの闇属性の雷撃を叩き込み、HPがなくなるまで敵を喰らい尽くす。そういう技だ……」

そう淡々と説明していたマスターの脳裏に、過去の別れ際の悲しげな紅蓮の顔が過った。

マスターは咄嗟に技を解くと、彼を呑み込んでいたドラゴンの頭が消え、メルデイウスは力無くその場に倒れ込んだ。

「この……くそじじい……てめえの……勝ちだ……残りの俺のHP残量なら……今はそこらに転がってる石ころ一つでも……俺を殺せる……」

「——そうだな。だが、俺ももう動けん……」

マスターもそう呟き、メルデイウスの隣に大の字に倒れた。

その突然の出来事に、横に倒れているマスターを見て、メルデイウスは目を見開いている。すると、突然マスターが大声で笑い出した。

「あはははっ！ この技は使用者にも負荷があつてな、体力を大きく消耗するのだ。もう指一つ動かせん」

「てめえー。もう終わりだとか言つて俺を騙しやがったな！」

それを聞いたマスターがまた大きな笑い声を上げる。

その後、小さく弱々しい声で横に倒れているメルデイウスに告げた。

「ははっ、いかなな！ 俺も焼きが回ったようだ……終わりと言ったのは本当だ……メルデイウス。戻ったら紅蓮に礼を言うといい……」

「……紅蓮だど？」

メルデイウスは驚いたように目を丸くさせている。

驚いていたメルデイウスが今度は訝しげに眉をひそめ、マスターの顔を見つめている。そんな彼に、マスターは言葉を続けた。

「俺は本気で戦っていた。だが、紅蓮が……あの時俺に言った『ただ……皆で一緒にいたい』という言葉がその考えを変えたのだ」

「……なら、どうしてあの時。俺達を置いて行つたんだよ！」

その言葉にマスターが瞼を閉じて徐ろに口を開く。

「あの時の俺は力を求めて……いや、力に餓えていたのだ。自分の内なる欲求を抑えられなかった……だが、今は力などに興味はない。かわいい愛弟子が戦い以外に俺の生きる目的を与えてくれたのだ……力とは誰かの為に振るつてこそ意味がある。それをもう一度俺に教

えてくれたのがカレンだ——だから今の俺には、皆で現実世界に戻る
ことしか考えられん！」

「——それは本心からか？ マスターさんよ……」

メルディウスはそう質問すると、不信感を抱いた瞳をマスターに向
けた。

マスターは大きく息を吐くと、震える指でゆっくりとコマンドを操
作してPVPを解除した。その直後、メルディウスの体から黒いオー
ラが消え互いのHPが全回復した状態に戻る。

自由になった体を動かしながらメルディウスはマスターの方に目
を向けると、彼は未だに動けないらしく隣で横たわっていた。

横を向いたマスターは驚いた顔をしているメルディウスに向かっ
て微笑みかける。

「——メルディウス。俺はまだ動けぬ、殺したければ殺せ……」

「……なんだと？」

空を見上げたまま静かに瞼を閉じたマスターは、自分の運命を横に
倒れているメルディウスに委ねた。

メルディウスはそのマスターの言葉を聞いて、自分の心が揺らぐの
を感じていた。

彼の心の中で『この男を殺せる？ こいつを殺せば紅蓮がまた
笑ってくれるかもしれない……』という思いが、煮え滾るマグマの様
に湧き上がってくる。

生唾を呑み込んだメルディウスが、地面に転がっているベルセルク
を拾うと両手で握り締めた。

今ならマスターは地面に転がったまま動けない。ここで彼を攻撃
すれば、自動的にまたPVPが発動する。

通常のPVPでは最終的にHPは『1』だけ残る。しかし、それは
プレイヤーの攻撃でだけである。つまり、地面に転がっている石など
の既存のオブジェクトを利用すれば、最低ダメージ『1』のゲーム内
ではHPを削り切ることができるのだ——。

しかも、彼は年2回行われる武闘大会で連続優勝記録を持つ男だ。
ここで撃破できれば、自分のギルドが更に有名になるかもしれない。

ない。

マスターは得物を握り締めるメルデイウスの姿を見て、ただただ微笑んでいる。

「……じい……」

「ああ、それでいい……だが、1つだけ頼みがある。虫のいい話だとは思うが、儂を殺したあかつきには、始まりの街に行ってくれないか？　そこに儂の弟子がおる。そやつらを現実の世界に戻してやってくれ……」

「……ふざけるなよ」

マスターのその言葉を聞いた直後。メルデイウスは鼻で笑うと、持っていたベルセルクを大剣の状態に戻して背中に収納した。

「……こんな事で勝ったって、何もうれしかねえー。それに弟子を助けるとか、そんな事はてめえーがやりやがれ！　俺には動けねえー奴を殺すのも。てめえーの尻拭いをする気のもごめんだ！」

「……メルデイウス」

「だからその使命は自分で成し遂げろ！　……それに紅蓮はこんな結末は望んでないだろうからな」

そう言っつてメルデイウスは微笑みを浮かべると、倒れているマスターの肩に手を回して強引に立たせる。

彼のその行動が相当意外だったのだろう。突然肩を貸されたマスターは困惑した顔でメルデイウスの顔を見た。

「なにをするつもりだ!?!」

「なにつて決まっつてんだろ？　帰るんだよ。紅蓮の元へ……」

「……分かった……すまん……」

マスターはそれを聞いて小さく頷くと、メルデイウスは口元に微笑みに笑みを浮かべ歩き出す。

マスターの目的

水の都市、千代の中心に大きくそびえ立つ千代城——都市全体を大小様々な川が流れているその都市のギルドの全てが、それぞれのギルドホールをその千代城内に有していた。

それはメルデイウス率いている『THE STRONG』も例外ではない。

ギルドホールはそれぞれのギルドのランクや規模によって、使えるフロアが限られている。また、ギルドのランクは強敵モンスターの討伐やクエスト受注率で変わる。

即ち。所属人数と高レベルプレイヤーの数が、そのまま直接的なギルドのランクとして現れているのである。そして、そのトップに君臨している『THE STRONG』は、この城の天守からした3分の1を自分達の領域としていたのだ。

街を見下ろすように建てられた千代城の大きな特徴は、戦国時代の城の外見とは異なり。城中は整備されていて、まるで高級ホテルの様な構造になっていたことだ——。

その快適さ故に、毎日の領土争いも熾烈を極めていた。

今日も紅蓮がマスターとメルデイウスを残して狩りに行ったのも、この住みやすいギルドホールを維持する目的が最大の理由で間違いない。

彼女からしてみれば、メルデイウスとマスターの戦闘に介入するよりギルドメンバーの生活の安全を確保する方が重要だったということだろう。

千代城に着いたマスターとメルデイウスは、自分達のギルドホールのある天守の最上部に向かっていた。

「ほう。話には聞いていたが外見と中身は正反対のようだな」

マスターは廊下の床に敷かれたアイボリーカラーのカーペットの上を歩きながら、辺りを見渡した。

清潔感のある白い壁に備え付けられた洋風のライトが廊下を柔らかい光りで照らしていた。

メルデイウスはそんなマスターに自慢気に言い放つ。

「当たり前前だろ。こんなんでも海外のゲームだ。見た目は日本の城を模してはいるが、中身は向こうの人間が暮らしやすいように工夫されてるのさ。風呂やカジノなんかもこの城にはある。その収益はギルドの資金としても利用できるんだ」

「なるほどな。それで紅蓮はどこに居るのだ？」

「ああ、もうすぐ会える。じじいは黙って若い奴の後を着いてくれば良いんだよ」

マスターに肩を貸しながら、不機嫌そうに前だけを向いて歩いている。

その時、目の前から先程とは違う白い着物をまとった紅蓮が、銀色の長髪をなびかせながら歩いてきた。

「あら？ あ……2人共怪我をしたんですか？ ならメルデイウスは自室へ。マスターは私がお連れします」

「ああ、紅蓮すまん。だが、もう歩ける」

「……そうですか」

紅蓮はマスターの顔を見上げると「マスター。こちらです」と、終始落ち着いた様子でマスターを先導して歩き出す。

そんな彼女にメルデイウスが慌て「どこに行くんだ！」と叫ぶと、紅蓮は何食わぬ顔で「私の部屋ですけど、なにか不都合でも？」と返して、何事もなかったかのようにまた歩き出した。

メルデイウスは呆気にとられているのか、ぽかんと口を開けたままその場に立ち尽くしている。

前を歩いていた紅蓮が赤い扉の前で立ち止まった。

「ここが私の部屋です。マスター」

紅蓮はそう言って部屋の扉を開けた。

中は彼女の子供っぽい見た目とは違い、シックな大人な感じの内装になっていた。

アンティークの木製の家具に、奥には左右にランプが置かれたベッドの端には観葉植物なんかが置かれている。

マスターを中に招き入れた紅蓮は、部屋の中に置いてある茶色い丸

テーブルに着く様に促す。

領き席に着いたマスターを横目に、紅蓮はケトルでお湯を沸かし何かを作っている。

終わると彼のもとに歩いてきて、テーブルの上に手に持っていたコーヒークップを置いた。

「コーヒーでよろしいですか？ マスター」

「ああ、すまんな。いただきこう」

小首を傾げる紅蓮にマスターはカップに手をかけ、中に入ったコーヒーを一口飲む。

一息ついて視線を前に移すと、向かいに座っていた紅蓮の顔が視界に入ってきた。

その彼女の表情はどこか悲しそうに見える。

そんな彼女を心配してか、マスターは持っていたカップをゆっくりとテーブルに戻した。

微かに表情を歪ませる彼を見て、紅蓮が口を開く。

「あの……お口に合いませんでしたか？ マスター」

その不安そうな表情を見て、マスターは笑って首を振った。

「いや、そんなことはない。儂もコーヒーにはうるさいのだがな。この味ならば、何も文句はない」

「そうですか、それは良かった」

その会話を最後に2人は沈黙したまま、目の前に置かれたコーヒーをすすっていた。

長い沈黙の中、部屋の外から物凄い音とともに数人の話し声が聞こえてきた。

「おい。兄貴！ さすがに姉さんの部屋に無断で入るのはダメだよ！」

「そうです！ ギルマス。紅蓮様にもプライベートがございませすから！」

「うるせえー!! 紅蓮とあのじじいを同じ部屋に置いておくわけにはいかねえー!!」

少年と少女の声の後に、熱り立ったメルデイウスの怒鳴り声が聞こ

えてきた。その直後、勢い良く扉が開き、中にベルセルクを担いだメルディウスが飛び込んでくる。

奇妙なことに、メルディウスの腰には鉄の鎧を着た少年と皮鎧を着た少女が必死に巻き付いていた。

「あなた達どうしてメルディウスに抱きついてるのですか？」

それを見た紅蓮は、その状況に不思議そうに首を傾げた。

「兄貴が止まってくれないからっすよ〜」

「メルディウス様が。話を聞いてくれなくて〜」

紅蓮のその質問に腰に抱きついてる2人は瞳を潤ませながらそう訴えると、紅蓮は2人の前で膝を折った。

表情に変化はないものの、紅蓮は2人に向かって優しい声音で告げた。

「2人ともお疲れ様でした。後は私に任せて下さい」

「はい!」

それを聞いて少年と少女は、嬉しそうにっこりと笑って部屋を後にした。見ていたマスターが微笑みながら紅蓮に声を掛けた。

「随分仲間達に慕われているようだな紅蓮」

「いえ。マスターほどでは……」

謙遜しながら紅蓮が頬を赤く染めると、恥ずかしそうにマスターから視線を逸らした。

そんな2人を見ていたメルディウスが更に激昂しながら叫び声を上げる。

「てめえー! 紅蓮と楽しそうに話してるんじやねえー!!」

メルディウスと紅蓮の間に割って入ると、マスターを鋭く睨みつけている。

すると、突然背中に鈍い痛みが走り、彼の体は跳び上がる。

「——いてててっ……なっ! なんだ!」

メルディウスがふと後ろを見ると、紅蓮の小さな手が鎧の隙間から自分の背中をつねっているのが見えた。

「紅蓮お前……」

「……メルディウス。マスターに失礼な事を言っただめです」

「俺は事実を——いつ、いてえええええええ!!」

なおも言葉を続けようとしたメルデイウスの背中を、紅蓮の指が更に強くつねった。

メルデイウスがギブアップを宣言すると、紅蓮は徐ろにマスターの前までいくとペコりと頭を下げた。

それを見て、マスターとメルデイウスが驚いた表情を見せる。

「——うちのギルドマスターが失礼をして申し訳ありません」

「いや、なにも失礼な事などされておらん。ただ戯れていただけの事だ、お前が気に病む必要などない」

マスターは紅蓮の頭を撫でながら、心の中では罪悪感でいっぱいだった。

（儂が去ってこれほど変わってしまったのか……この娘には本当に悪い事をしてしまったな……）

昔はもう少し様々な表情を見せてくれた紅蓮だったが、日常の硬い表情から、彼女がこれまでどれほど苦労してきたかが窺い知れる。そんな彼女を見てみると、マスターの心に申し訳なかったという後悔の念が湧き上がってくる。

マスターは紅蓮の頭を撫でながら、ぼそつと呟くように言った。

「謝るのは儂の方だ……本当にすまなかった」

「……えっ？ マスター。今なんて……？」

紅蓮は驚きのあまり目を丸くしている。

そんな紅蓮に向かってマスターは言葉を続けた。

「……あの時の儂はただ己が強くなることしか考えておらんかったのだ……今のお前を見ていると、儂のやっていた事が身勝手だったと良く分かった。本当にすまなかったな。紅蓮」

「マスター……」

その言葉を聞いた紅蓮は瞳を潤ませたかと思うと、今度はその頬が真っ赤に染まっていく。

紅蓮は慌てて俯くと、マスターから目を背けた。

その直後、紅蓮は着ていた着物の帯を外し、彼女の白く絹の様に滑らかな肩が露わになる。

マスターは慌てて紅蓮から目を逸して声を上げる。

「紅蓮。一体なにを考えておるのだ！ 儂らのいる前で着替えるなど！」

少し強い口調でそう言ったマスターに、紅蓮は振り返ることなく答えた。

「顔を洗うついでに、お風呂に入ろうと思ひまして……それに、大丈夫ですマスター。私の体を見て欲情する人などいません」

「ふむ、だが……そうでもなさそうぞ？」

マスターはそう告げると、指を刺して紅蓮にその方向を見るように促す。

首を傾げていた紅蓮がその方向を見ると、そこにはメルデイウスが鼻血を流しながら倒れていた。

「——わ、私はお風呂に入ってきました!!」

それを見た途端。紅蓮は脱ぎかけた着物を羽織り、顔を真っ赤に染めながら部屋を飛び出していった。

それからしばらくして、薄紫色の浴衣を着た紅蓮が戻ってきた。

「——お待たせして申し訳ありませんでした。マスター」

「いや、紅蓮も大変だったであろう。儂らの事は気にしなくて良い」

紅蓮は小さく頷くと、落ち着きを取り戻したメルデイウスに向かって口を開いた。

「……メルデイウス、あなたも汚れています。マスターと一緒にお風呂に入ってきてください」

「おっ？ ああ、分かった」

メルデイウスはその言葉を聞いて頷いてみせると、隣りにいたマスターの腕を強引に掴むと、そのまま大浴場へと向かって歩き出す。

その時、ふと振り返ったマスターの瞳には紅蓮が僅かに笑った気がした。

大浴場の入口は紅蓮の部屋を出て左に2部屋の所にある。部屋に入ると大きな脱衣室があり、その先に脱衣室よりも遥かに広い浴室があった。

紅蓮が突然脱ぎ出したのも、大浴場が近くにあり。この階には自分とメルデイウスとマスターの3人しかいないと知っていたからなのだろう。ちなみに紅蓮の部屋と大浴場の間の部屋は、ギルドマスターであるメルデイウスの部屋だ――。

2人は西洋風の大浴場の中で湯船に浸かって、堪えきれずに大きく息を吐き出す。

今日の疲労が一気に吹き飛びそうなほどの気持ちよさが2人を襲い。互いに目を瞑って肩まで湯船に浸かっている。

大理石で作られた高級感あふれる内装に、大きなシャワーやジャグジー付きの浴槽。更にはサウナなどの設備も整っている。

今浸かっている湯船のマスター達の後ろには大きな屈強な男性の像が、右手で頭を抑え左手で股間を押さえるようなポーズで立っていた。

「――あまりくつつくなよ。じじい」

「ふん。裸になれば普通の事を忘れるものよ……裸の付き合いに敵味方も関係ない。まだまだ若いな、メルデイウスよ」

「ふん！ 勝手に言ってる老いぼれ！」

メルデイウスは不機嫌そうに言っつぽを向く。

それから2人の間に沈黙の時間が流れる。その長い沈黙を破るように、メルデイウスが徐ろに口を開いた。

「――おい、じじい。勝負の結果、俺達が力を貸すのは了解したんだが、四天王の他の奴も誘うのか？」

「ああ、そのつもりだ」

それを聞いた直後、メルデイウスの表情が少し曇った。

「俺としては紅蓮を連れて行くのは少し気が引ける……あいつは自分の固有スキルのせいで色々あったからな。それにできる事なら、あいつは危険な目に合わせたくない」

メルデイウスがそう告げると、その言葉にマスターはゆっくりとした声で言った。

「安心しろ、それは俺も同じだ。だが女という者は連れて行かなくても、過度な心配をするものだ……ならば、連れて行って俺等で守って

やれば良いだけのことではないのか？」

「……なるほどな。珍しくお前をすごい奴だと思ったぜ！」

メルデイウスは納得した様に、ポンつと手の平を叩いた。

そんな彼を少し呆れた顔で見ると、マスターは湯船から上がった。それを追いかけるようにして、メルデイウスも「ちよつと待てよ！」と勢い良く湯の中から飛び出す。

マスターの目的2

2人が部屋に戻ると、テーブルの上にカップを置いた状態で紅蓮が座って待っていた。

この世界は現実とは違いホットなら温かいまま、アイスなら冷たいままですらでも維持できる。まあ、食べ物が腐らないのと同じでゲーム内の食べ物には消費期限がない。

まあ、RMTを推奨している以上。食材にもお金が掛かっている為、すぐに食べないと腐ってしまう——なんてことにはできない。

現実世界このゲーム世界は平行世界であり疑似世界だ、現実世界で食事をしたばかりなのにゲーム世界で作った物が腐りそうだからと、無理に食べられないだろう……。

また、ダンジョンに籠っている際は食べ物の為に一旦街に戻るなんて、手間以外の何ものでもないし。尚且つ、限りあるアイテムのインベントリの中に食材なんて入れたら報酬を取り損なう恐れもある。その為、料理などは常に作ったままの状態で保存されているのだ。

「あつ、2人ともおかえりなさい。お風呂はどうでしたか？」

「おう。気持ち良かったぜ！ 紅蓮」

表情を変えることなくそう尋ねてきた彼女に、メルディウスはそう言って親指を立てた。

紅蓮は彼の言葉を流すと、隣にいたマスターの顔色を窺う。

マスターも紅蓮の言葉に答えるために口を開く。

「うむ。確かに気持ち良かったな」

「……気持ち良かった」

紅蓮はマスターのその言葉を聞いて、顔を赤く染めると俯いてしまう。そんな彼女を見たマスターは首を傾げていた。

そんな2人の様子を見て、つまらなそうにコーヒを一気に飲み干したメルディウスが持っていたカップを強くテーブルに置いて徐ろに口を開く。

「——それで元！ マスターさんは、もう紅蓮にあの事を説明したのかよ」

その皮肉まじりの言い方を一切気にすることなく、マスターが話し始めた。

「実はな紅蓮よ。再会した時にも話したが——儂に力を貸してはくれぬか？」

「悪い！ 紅蓮。実は俺このじじいに負けちまってよ……こいつの言う事を聞かないとダメなんだ！」

「……………」

紅蓮は2人の話を聞いて、メルデイウスの空になったカップにコーヒーを入れ直すと、静かに瞳を閉じた。

2人もその紅蓮の様子を、固唾を呑んで見守っている。彼女は少し考えている様子だったが、しばらくして大きなため息をつくとき、その重い口を開く。

「はあ……メルデイウス。あなたがマスターを倒せないのは分かっています。おおかた、マスターの安い挑発に乗って突っ込んだところ、自分で墓穴を掘った——という感じでしょうか？」

「……………くっ！ 言い返してえーが、言い返せねえ……」

メルデイウスは悔しそうに歯を食いしばると、紅蓮の入れたコーヒーを音を立ててすすする。

紅蓮は更に2つカップと湯のみを容易すると、その中にコーヒーと煎茶を入れて呷くように言った。

「うちのギルマスが負けたのであれば仕方ないですね……白雪、小虎ちよつと来てください！」

紅蓮がパンパンと手を打ち合わせると、部屋の中に2人が入ってきた。

最初に入ってきたのはさつきメルデイウスの腰に巻き付いていた少年の方で、茶髪の逆立ったツンツンヘアーにオレンジ色の瞳のまだ幼さの残る少年だった。

後から入ってきたもう一人はさつきの少女ではない。落ち着きがあり物静かそうな少女で忍者——いや、くノ一のような格好をしている。歳は紅蓮より上に見える。背丈から見ると、高校生くらいだろうか。

「おう！ 姉さんどうしたんだ？」

「御呼びでしようか？ 紅蓮様」

部屋に入ってきた2人は、首を傾げながら紅蓮の前に立っていた。その様子から察するに、彼等はなんの報告もなくこの場に呼ばれたのだろう。

紅蓮はそんな2人に手招きすると、自分の横に座らせマスターに2人を紹介する。

「マスター。この2人は私とメルデイウスの弟子で白雪と小虎です。2人共、彼に自己紹介してください」

紅蓮に紹介された少年が、照れくさそうにマスターに向かって自己紹介を始めた。

「僕は小虎と言います。あなたの話は兄貴……いや、ギルマスから良く聞かされてます！ 日本サーバーでギルマスの次に強いのはあなただっけ！ よろしくお願いします！」

小虎は目をキラキラさせると、マスターの顔を羨望の眼差しで見つめ大きく頭を下げた。マスターもその視線に軽い苦笑いを浮かべている。

その直後、横に正座していた白雪が自己紹介を始めた。

「紅蓮様に仕えている白雪と申します。以後よろしく」

少女はそう言つて一応頭を下げているものの、その目はマスターを快くは思っていない様に見える。

マスターはそんな2人に「よろしく」と言うと、カップを持ってコーヒーを一口飲んで神妙な顔で話を始めた。

「メルデイウスにはもう話したのだが、僕はこのゲームの中から抜け出す為に、精鋭部隊を組織しようと考えておる。その事はメルデイウスからは、もう了解してもらった。僕はできれば紅蓮にも協力してもらいたいのだが……」

そう伝えたマスターは、紅蓮の顔色を窺っている。

紅蓮は瞼を閉じたまま、終始その話を冷静に聞いていた。

少し考えているのか、微動だにせずに顎の下に手を当てている。そして、しばらくしてから紅蓮が徐に口を開く。

「——分かりました。他でもないマスターの頼みなら、お受けします」
「そうか！ それは心強い限りだ！」

返事を聞いたマスターは顔を綻ばせると、嬉しそうに紅蓮の手を取った。

その直後、マスターに手を握られた紅蓮の顔が真っ赤に染まる。それを見たメルディウスが慌てて、2人の手を強引に引き離す。

「話がついたんだ！ もういいだろう!? てか何どさくさに紛れて、なんで手握ってんだよ。離れろ、じじい！」

「ああ、つい熱が入ってしまった。すまん」

メルディウスに睨まれ、マスターは苦笑いしながら自分の後頭部を撫でている。

自分の手を見つめ、紅蓮は少し残念そうに小さなため息をついた。
彼女の様子に横に座っていた白雪が、それを察して心配そうな表情で声を掛ける。

「……紅蓮様？ 大丈夫ですか？」

「えっ？ はい、なんでもありません。大丈夫です」

「はあ、それならば良いのですが……」

なおも心配そうに眉をひそめている白雪の肩に紅蓮の手が置かれた。

横に立っている紅蓮は、そんな白雪に向かって優しい声音で告げる。

「白雪。あなたと小虎には私達2人の補佐をお願いします。一緒に頑張らしましょう」

「はい！ お任せください！ 必ず紅蓮様のお役に立ってみせます！」

「僕も兄貴や姉さんに負けないくらい頑張るぜ！」

2人はそう言って決意を新たにすると、力強く言った。

マスターはそんな彼らをたしなめるように呟く。

「勢いがあるのは結構な事だが、無理をしてはいかん。今、儂らの体は現実の物と変わりないのだから」

2人は「はい」とその言葉に返事をする2人に、マスターは微笑ん

で見せた。

そのやり取りを見て、メルデイウスが口元に笑みを浮かべると、ゆっくりと立ち上がった。

「——話はまとまったな。なら、さっそく明日発つとするか！ 行くぞ小虎！」

「ま、待ってくれよ兄貴ー!!」

足早に部屋を後にするメルデイウスの背中を、小虎が慌てて追いかけていった。

それを見送って紅蓮が徐ろに立ち上がり、口を開く。

「あのマスター。申し訳ないのですが部屋がないので、今日は私と2人で、この部屋で寝て頂きたいのですが……よろしいですか？」

「ふむ。紅蓮と2人ですか……まあ、カレンとも寝てるしな。問題無からう」

「それはいけません!!」

微笑んでいるマスターと紅蓮を見て、突然、紅蓮の隣で正座していた白雪が声を上げる。その声に驚き、2人の視線は白雪に集中する。

白雪はその視線に臆することなく口を開いた。

「殿方と一緒に寝るなんてダメに決まっています!」

「ですが、部屋の空きが——」

紅蓮が言い返そうと口を開いた直後、白雪は更に強い口調で諫めた。

「——紅蓮様は副ギルドマスターです! その自覚を持って頂かないと困ります!」

「……はい」

彼女の剣幕に押され、紅蓮は黙ったまま俯いてしまう。

まあ、彼女が起こるのも最もだろう。アバターを一人称視点で、しかも感覚まで共有して遊べるこのゲームは、言わばもう一つの現実と言っている。

そんな中、千代のトップギルドの副ギルドマスターが、見ず知らずの男と同じ部屋で、例えなにもないと分かっていたとしても、一夜を共にするなど冗談ではないというのがメンバーとしての見解なのだ。

ろう。

親に怒られた子供のようにな縮する紅蓮を見兼ねてマスターが口を開いた。

「そう強く言う事もなからう。紅蓮、儂なら外でテントを張って寝るから心配するでない」

「……マスター」

マスターのその言葉を聞いて寂しそうに呟いている紅蓮を見て。

「はあ……分かりました」

つと白雪が大きなため息をつきながら言った。

「——なら、マスター様。私のお部屋をお使い下さい。私は紅蓮様のお部屋で寝ますから」

それを聞いて珍しくというかここにきて初めて、顔をパーっと明るくさせた紅蓮がマスターの顔を見上げた。

「良かったですね！ マスター」

「ああ、野宿しなくてすむのはありがたい限りだ！」

マスターがそう言つて嬉しそうに紅蓮に微笑み掛けると、紅蓮は顔を赤らめ俯いてしまう。

横目でその様子を見ていた白雪がマスターの手を掴む。

「それではマスター様、こちらです」

「——すまない」

マスターは先を歩く白雪に導かれるまま部屋を出て行った。

紅蓮の部屋を出た2人は絨毯の敷き詰められ、壁のあちこちにランプが光る長い廊下を歩いて白雪の部屋へと向かう。

しばらくして、一つの扉の前で白雪が立ち止まった。

「ここが私の部屋です。それでは私は紅蓮様のもとに戻りますので、何かありましたらお呼びください」

一礼して白雪と部屋の前で分かれたマスターは部屋の扉を開けた。

部屋の中はきちんと整理整頓され、無駄な物は一切置いてない。家具もベッドとタンスくらいで、紅蓮の部屋以上に物が少ないと言った印象を受ける。まあ、このくらい物が無い方が落ち着きがあつて休むには丁度いいだろう。

マスターは部屋の中に入ると、他の物に見向きもせずベッドに倒れ込んだ。

「——儂とした事が、あの技を使うとは迂闊だった……」

天井を見上げ、手を顔の上に置いて、マスターは顔を歪めながら苦笑いを浮かべている。

彼のこんな苦痛に歪む表情は始めて見る。それほどメルディウスとの戦闘で使った技は、体に相当な負担がかかるものなのだろう。

しばらく瞼を閉じて休んでいたマスターが、ぼそつと独り言を呟く。

「何はともあれ、メルディウスと紅蓮の2人は仲間に取り込むことができた。だが、問題は残りの2人だな……」

四天王の中で紅蓮とメルディウスは比較的話が分かる方で、問題なのは残りの2人の方だ——彼等は少し性格に問題がある。

どちらとも強力な固有スキルを有しているのは言うまでもないが、それ以上に性格の面で一癖も二癖もある扱い難い人物。

唯一の救いはマスターが彼等と知人であることだろうが。それが彼等にどこまで通用するのかが謎が残る。まあ、それでも。初対面でないだけでも相当に有利な状況であることには変わりはないだろうが……。

あの者達のことを考えるとどうしても憂鬱というか、何とも言えない不安が込み上げてくる。

(果たしてあやつらが儂らに協力するかどうか……いや、あやつらの協力なくして、仲間達から犠牲を出さずにこの世界からの脱出は不可能だろう。何としても協力してもらわなければならない)

マスターは拳を天に突き上げ、決意を胸にその日は眠りに就いた。

次の日の朝、窓の外の鳥達のさえずりで目を覚ます。

マスターは重そうに体を起こすと、顔の前に持ってきた手の平を開いたり閉じたりしている。

「……よし。体は元通りのようだな」

マスターはそう呟き笑みを浮かべていると、コンコンつと扉をノツ

クする音が聞こえてきた。

「マスター。もう起きてますか？」

直後。控えめな紅蓮の声が聞こえた。

その言葉に返事をする。「失礼します」という声の後に、ゆっくりと扉が開いて紅蓮の姿が視界に入ってくる。

紅蓮は緊張しているのか、普段より少し表情が硬くなっていた。

マスターはそんな彼女に微笑みを浮かべると、心なしか表情が和らいだ気がした。

「マスター。朝食の用意ができています」

「ああ、わざわざすまん、今行く！」

ゆっくりとベッドから立ち上がり、紅蓮の元へと向かった。

その後、2人は下の階にある食堂までいくと、そこにはすでに多くの人が集まっていた。

どうやらメルディウスのギルドでは、食事はギルドメンバー全員と一緒に食べるのが決まりになっているらしい。

事件以来。この世界に取り残されている者達全員を管理するのは難しい。だが、食事とあれば、集まらないわけにもいかないだろう。

そこで朝食で用意された人数分の食器で、毎日メンバーの数を数えているというわけだ――。

まるで合宿所の朝の様だと、マスターは微笑を浮かべ、辺りを見渡す。

その数は、ざっと数えても200人以上は居るように見える。さすがはこの千代の街一番のギルドだけのことはある。メンバーは皆、どこことなく、強者の風格を漂わせていた。

紅蓮はその中にメルディウス見つけると、その隣に腰掛けた。

マスターもその向かい側に腰を下ろすと、それを確認したメルディウスが徐ろに席を立つ。

「飯を食う前に皆に大事な話がある！」

その声にギルドメンバー全員の視線が彼に集まった。

マスターの目的3

メルディウスは辺りを見渡して、メンバーの多くが自分の方を向いているのを確認して再び叫んだ。

「急だが、俺と紅蓮は少しギルドを離れる！ それまではお前達にこのギルドを任せる事になる。その間はしっかりギルドを守ってもらいたい！」

ギルマスであるメルディウスの言葉に、辺りが急にざわめき出す。それもそのはずだろう。急にギルドの要であるギルドマスターと副ギルドマスターからギルドを離れると言われたのだ——困惑しない方が無理というものだろう。

少しの間だけとは言え、ログアウト不可能のこの非常時において、ギルドからギルドマスター、サブギルドマスターの2人を同時に欠くのは相当なリスクだ。

統率する者が抜けるということは下手をすれば、ギルドそのものが空中分解する危険すらはらんでいる。

そのざわめきの中。メルディウスが突如として手を前に突き出して、動揺するギルドメンバー達に向かって声を荒らげた。

「静かにしやかがれ野郎ども！ 俺と紅蓮はお前達の為に遠征するんだ！ お前達は現実世界帰りたくないのか！」

その声の周りからは「帰りたい！」「本当に帰れるのか？」という声が上がりに始める。まあ、ゲームの中に閉じ込められ限られた生活を強いられているのだ。皆、動揺するのも無理はない。

そんな彼等にメルディウスが話を続けた。

「——更に小虎と白雪を補佐役として連れて行く。この2人はお前達の代表だ！ 俺達の目的はどこかにあるはずの出口を見つける事にある！ 更に付け加えれば、見つけ次第。お前達にも協力してもらおうつもりだからそのつもりでいろよ!？」

それを聞いたギルドメンバー達は、皆無言のまま頷き、自分達のギルドマスターの顔を見つめていた。

その時、ギルドメンバーの中から突然、複数の手が上がる。

「ギルマス！俺達もギルマス達と一緒に行きたい！それに出口を探すなら、ギルドメンバーで一斉に探せば早いはずだろ？」

彼の声を皮切りに――。

「そうだ！それがいいー！」俺達だけ安全な場所で待ってるなんてできない！」

その声に誘発されたのか、周りのメンバーが一斉に声を上げた。

彼等の声が徐々に飛び火して、更に多くの声が上がリ。しまいには殆どのメンバーが『自分も一緒に』と熱い視線をメルデイウスに向けている。

彼等の熱烈な視線に、メルデイウスも少し困ったように眉をしかめさせた。

その様子から察するに、メルデイウスとしては、ギルドメンバーも共に連れていきたいのはやまやまなのだろう。またギルドマスターとしても、やはり仲間と長期間離れるのはしのびない。

それはマスターも分かっている。だが、実際に危険を伴う行為である為、安全なこの場所で待機してもらいたいという思いもあり、そのチグハグな心境がメルデイウスにこんな顔をさせているのだ。

しかし、確かに彼の言うように、探すのは人では多いに越したことはないのも事実。

探索期間が短ければ短いほど、リスクは軽減されるのだから当たり前だ。

「……メルデイウス？」

無言のまま、険しい表情で立ち尽くしている彼を心配してか紅蓮が声を掛ける。

それを見兼ねたマスターが徐ろに席を立つと、ざわめいているメンバーに向かって叫んだ。

「静まれ！これはお前達のギルドマスターとサブギルドマスターの2人で考えた末に出した決断なのだ!!」

「じじい……」

マスターの一喝で、その一瞬は静かになったのだが……。

「誰だあのじいさん」「あんな奴ギルドに居たか?」「どうして余所者が

ギルドマスター達の近くにいんだよ！」

など、すぐに不満の声がそこかしこで上がる。

まあ、それは当然と言えるだろう。突然出てきた見知らぬ老人。更にそれが自分達のギルドマスター達と仲良くしていれば、メンバー達から不満が出るのは当然のことだ。

しかも、撃破されれば現実に戻れないかもしれないこの状況下では、彼等の警戒心が強くなっているのも無理はない。

「皆さん。静かにしてください！」

唐突に紅蓮の一声で、今まで騒がしかった辺りが一気に静まり返った。

紅蓮は徐ろに席を立つと、メンバーの方に向き直り落ち着いた声で話し始める。

「先程メルディウスが言われたと思いますが、私達は先遣隊のようなものなのです。皆さんも知っているとは思いますが——今はこの千代の街ですら、承認なしの不正なPVPによって治安は乱れています」

紅蓮のその話を聞いて、メンバー達の表情も険しいものとなる。

「私達の『THE STRONG』は大手ギルドの1つで、治安維持活動にも率先して参加しています。そのギルドが一斉に高レベルプレイヤーを欠けば、彼らの思う壺です。それに、私達が旅立ったとしても出口を見つけられる保証はありません。その為、これは少し長期的な計画を立てた上でのギルマスの決断なのです！」

それを聞いて、メンバー全員が俯き加減に更に表情は険しくなっていた。だが、それも無理はない。紅蓮のその言葉が意味するのは『自分達が捨て石になる』と言っている様なものなのだ。

その場に流れる空気から、紅蓮は何かを感じ取ったのか、彼等に向かって深く頷いた。そんなメンバーの様子に、紅蓮はマスターの隣に立つと「大丈夫です」と叫ぶ。

「——こちらに居る『拳帝』が我々に力を貸してくれるとおっしゃっています。彼の力は、皆さんが最も分かっている事と思います。だから私達は大丈夫です！」

紅蓮の口から出た『拳帝』という言葉聞いた瞬間。再び辺りが大きくざわめき出す。

それはメルディウスがギルドを留守にすると言った時よりも、間違いなく大きいだろう。

だが、それも当たり前なのだ。『拳帝』とはマスターの以前のリングネームで、このフリーダムが誇る年数回の公認PVP戦の武闘大会で負けなしの最多優勝という、奇跡的な記録を作った人物なのだから。そして彼の凄みは、自身のHPバーがレッドゾーンに突入してから、怒涛の反撃での逆転勝ちなのである。しかし、それはマスターが故意にやっていることで、その行動の本質は――。

先に相手に技を打たせて、相手の力量を見極める。その為に一度、相手に勝利を確信させてから相手の最大の技を受け止め。その後、その技に価値無しと判断したら、一気に攻勢に転じるのだ。

それは武闘家として絶対に負けないという彼自身の自信から生まれるもので、決して観客を楽しませる為ではなく。相手のスキルを吸収する彼の固有スキル『明鏡止水』で、相手の戦闘スキルの収集する為の行為に他ならない。

だが、はたから見れば。一度マスターのHP残量がレッドゾーンに突入してからの激しい猛攻による逆転劇は、結果として観客を楽しませることになるのだ。

それからの景品や賞金の放棄は『漢らしい』『武を極める者』『強者の余裕』という称賛の声が広がっていったのである。

それもそうだろう大会での景品は全て一点物で、フリーダムはRMTを推奨しているゲームなこともあり。その景品も賞金も実際のお金に変えれば、それはもう莫大な金額になるからだ。

その真意は分からないものの、ただ一つはつきり言えることは、日本サーバーで彼は英雄であり。自他共に認める間違いなく最強のプレイヤーなのだ。

だが、それほどの人間ならば名を騙る偽者が多いのも事実。

その為――。

「拳帝は行方不明だと聞いたぞ！ 偽者だ！」「そうだ。本物なら証拠

を見せろ！」

など、真偽を問う複数の声上がり出した。

しかし、紅蓮は実に冷静だった……。

「そういうと思っていました」

つと紅蓮は小さく頷くと、マスターに屈んでもらいその耳元でそつとささやく。

「——なのでお願いします。マスター」

「うむ。この状況では仕方なからう」

マスターはそう言って頷く、紅蓮はその返答を聞いて嬉しそうに頷いた。

コマンドの中のギルドホーム設定の武器、固有スキル使用承認の欄にチェックを入れ、そして彼女は皆の方へと向き直り。

「ならば彼が本物だという証拠をお見せしましょう！」

紅蓮はそう自信満々に叫ぶとその直後、マスターの手に闇属性の黒いオーラが上がる。それを見たメンバー全員から、どよめきと歓喜の声が上がった。

このスキルは大会の戦闘時に何度も目の当たりにした『拳帝としての証』だが、これも固有スキルで習得したものだから、他に使用出来る者が存在する。

おそらく。今では本物の固有スキルを持つ人物が偽物扱いされているに違いないだろうが……。

紅蓮はそんなメンバーに向かって声を張った。

「静かにしてください。私達は今日中には、この千代を発ちます。勝手だとは思いますが、後の事はお任せします」

紅蓮はそう言って、深々と頭を下げた。

それを見たギルドのメンバー達からは「任せて下さい」「気にしないでください」「必ず戻って来て下さい」など様々な声が聞こえてきた。まあ、サブギルドマスターに頭を下げられて、メンバー達が拒むことはできないだろうが。

それを聞いた途端、普段から表情をあまり変えない紅蓮の瞳から光る物が流れ落ちて彼女は慌てて顔を下に向ける。

そんな紅蓮に代わり、メルデイウスが拳を突き上げると全力で声を張り上げた。

「よっしやー!! 野郎ども必ず出口見つけて戻ってくっからな。期待して待ってやがれ!!」

ギルマスの言葉に「おー」というメンバー達の歓声が食堂内を揺らす。そして歓喜の声はしばらく鳴り止まなかった。

朝食を食べ終わったマスター達は、紅蓮の部屋に戻った。

部屋に戻ると、紅蓮はマスターに向かって深々と頭を下げた。

「マスターすみませんでした、でしゃばった真似をしてしまつて……」その声はどこか落ち込んでいるように感じた。

おそらく。マスターが拳帝だということをばらしてしまったことを、彼女は気にしているのだろう。

マスターはそんな紅蓮の肩にぽんと手を置くと、優しい声で言った。

「——謝る事などない。あの状況では、ああするほかあるまい。あまり気には必要はない」

すると、横にいたメルデイウスが笑みを浮かべ、マスターの肩に肘を寄せ親指を立てる。

「そうだけ、紅蓮。謝るところか礼を言えと言つてやつても良いくらいだぜ!」

「……メルデイウス。そんなこと言つたらダメです」
「くそっ! 紅蓮はいつでもじじいの肩持つよな」

メルデイウスはつまらなそうに口を尖らせ、明後日の方向を向く。紅蓮はそんなメルデイウスの様子を見て、くすつと笑った。

「……紅蓮。今笑つた……のか?」
それを見たメルデイウスは驚き、目を丸くさせている。

それもそのはずだろう。紅蓮はマスターがいなくなつてからというもの、一度も笑つたことはなかった。メルデイウスが驚くのは当然なのだ。

「あつ……ごめんなさい。なんだか急に懐かしくなつてしまつて……」

紅蓮は俯き加減でそう答えると、2人は少し困った顔をして口を開く。

「何を謝る必要があるのだ。楽しいことがあれば笑うのは当然だろう」

「じじいの言う通りだぞ紅蓮。楽しい時には笑えば良いんだよ！」

2人がそう言って微笑むと、紅蓮は「そうですね」と微かに笑みを浮かべた。

マスターの目的 4

紅蓮の部屋の丸テーブルを囲んだ3人は、テーブルに置いたカップを前にして、今後の予定を話し合う。

「マスター。千代を発つのは分かりましたけど、次に行くあてはあるのですか？」

「うむ。次は名御屋に行こうと考えておる。それよりも。同伴する2人はここに呼ばなくても良いのか？」

不思議そうにそう尋ねるマスターに、メルデイウスが呆れ顔で言い放つ。

「くだらねえーことを気にすんじゃねえーよ。あいつらは俺達が行くと言え、何の疑問も持たずに付いてくる——そういう奴等だ！」

メルデイウスは何故か自慢気に胸を張っている。

まあ、それが信頼からくるものか『どうせ何を言っても無駄だろう』という諦めからくるものかは、当の本人達にしか分からないことだ。

横目でちらりとメルデイウスを見て、紅蓮がため息をつく。

おそらく。紅蓮も呼んだ方がいいと言ったのだろう。だが、メルデイウスがこの調子で「その必要はねえー」と一蹴したことが、マスターには容易に想像できる。

紅蓮がため息交じりに言った。

「はあく、大丈夫ですよ。マスター。後で私の方から、2人には伝えておきますから」

「そうか、ならば問題なからう」

「はい。なのでマスターは何も心配しないでください」

その紅蓮の言葉を聞いたマスターは、安堵したような表情で「そうか」と小さく呟くと話を続けた。

「僕の仕入れた情報によると、どうやら名御屋にバロンがいるというのだ」

「ちよつと待てじじい！ あいつは最後にしないとまずいだろ！ 話だけ聞いて『はい。分かりました』て済む野郎じゃないんだぞ!？」

それを聞いたメルデイウスは血相を変えて叫んだ。

横の紅蓮も不安そうな表情で、マスターの顔を見つめている。

その2人の様子を見ていけば、バロンと言う人物がどのような人間かは、おおよそ察しがつく。一筋縄ではいかないと言うよりも、できれば関わりたくない人物なのは間違いないだろう。

メルデイウスは更に声を荒らげながら言葉を続けた。

「いいか？ 知ってると思うがな。今、俺は死ねねえーんだぞ？

ビッグバンが使えねえー俺は、羽をもがれた鳥だ！ 普段ならバロンなんざ敵でもないが、固有スキルを封じられてる俺が行ったら、喜んであの野郎は固有スキルを使うぞ?!」

「だろうな……だから交渉には、紅蓮に行ってもらいたいと考えている。頼めるか？ 紅蓮」

「……はい。マスターが言うのなら喜んで」

紅蓮は一瞬表情を強張らせたが、すぐに決意に満ちた表情で強く頷く。

それを聞いていたメルデイウスが、烈火の如く怒り出す。

「ふざけんなよじじい！ 紅蓮にそんなあぶねえー事させられるかよ！」

その言葉を聞いて、マスターが「ふふっ」と口元に不敵な笑みを浮かべ、メルデイウスの顔をまじまじと見つめると。

「——ならば、お前がバロンとの交渉に行ってくれるな？ メルデイウス」

「な、なに!? どうして俺が……」

唐突にそう言われ、メルデイウスは面食らったようだ。まるで鳩が豆鉄砲を食った様に、目を見開きぽかんと口を開けているメルデイウス。

そんな彼の様子を気にすることなく、マスターはゆっくりとした口調で告げた。

「お前が適役なのだ。何故なら、前にもバロンが暴走した時。お前が奴を止めただろう?」

「だから、たった今、それができないと言ったばかりだろうが!」

怒るメルデイウスに、マスターが突如として「はっはっはっ」と大

声で笑い声を上げ、すぐに言葉を続けた。

「——それは違うな。お前はできないのではない。しないのだろうか？」

「……しないのもできないのと同じだろうが、固有スキルが発動できないんだからよ。その何が違うって言うんだよじじい。気でも狂ったのか？」

眉をひそめ、メルディウスは不信感いつぱいの眼差しをマスターに向けた。

すると、さつきまで豪快に笑っていたマスターの表情が、急に神妙な面持ちに変わる。

彼の真っ直ぐな黒い瞳がメルディウスを捉え、その眼差しを向けられているメルディウスは怪訝な顔をしながら次の言葉を待っていた。

そして、マスターがこの作戦の趣旨を説明し始める。

「今回はバロンを説得する事が目的だ。その為、奴に尋常ではない敵意を向けられているお前が適役なのだ。もし儂や紅蓮が行けば、話ができるどころか拒絶され、最悪は戦闘になるだろう。そうなれば、儂らは奴に確実に負ける」

「なぜだ？ お前もビッグバンを使えるはずだ。それなら、多種多様な技を持つてるじじいの方が適役じゃねえーのか？」

メルディウスはそう言って、訝しげに首を傾げている。

だが、彼の疑問は最もだ。本来なら固有スキルの豊富さを取っても話術を取っても、メルディウスよりマスターの方が適役なのは間違いないだろう。

それにも関わらず、メルディウスが適役だと言う彼の言葉の意味が分からない。

興味津々な様子でマスターのことを真っ直ぐな瞳で見つめている彼にマスターが答えた。

「いや、儂はビッグバンを覚えてはおるが、それをバロンのやつは知らん。もし儂が奴にビッグバンを使えると言ってても、一応警戒はするだろうがそれだけだ。不確定な事を信用はしないだろう。可能性の域を出ないハツタリだと……」

「なるほどな、それで俺って訳か……なら、どうして紅蓮はだめなんだ？」

「……私も気になります」

紅蓮はそう言ってテールに手をつき、身を乗り出して尋ねた。メルデイウスがダメでどうして自分にはできないのか、彼女も同じ四天王と呼ばれる人間として気になってるのだろう。

マスターはそんな紅蓮から目を逸し、淡々と話し始める。

「いや、それはメルデイウスを本気にさせる為の嘘だよ」

「なっ！」

メルデイウスは不機嫌そうに眉をひそめる。

横ではマスターの発言を聞いて、紅蓮はメルデイウスを少し馬鹿にしたような笑みを浮かべている。まあ、紅蓮がメルデイウスのことを軽んじた態度を取っているのはいつものことなのだが……。

「だが、例え紅蓮が行っても説得は不可能だろう。紅蓮の『イモータル』不死の能力は素晴らしいが……死なないと言うだけの話にすぎん。それに、説得に来たという事は、バロンからすれば殺意を向けられていないという事にもなる。なんせ攻撃能力はメルデイウスや儂より遥かに低い紅蓮だからな。更に付け加えると、紅蓮の性格をバロンもよく知っておる。そうとなれば、拒むのは簡単。紅蓮が諦めると言うまで攻撃すればいいだけの——」

「——そんな！ 私はどんな脅しにも屈しません！」

そのマスターの話が終わるのを待たずに、口を開いた紅蓮が珍しく声を荒げる。

拳を握り締めたまま、明らかに表情を強張らせる紅蓮。

そんな彼女に、メルデイウスが徐ろに口を開く。

「——紅蓮。じじいの言いたいのはお前が屈しなくても、お前を人質にして俺達に諦めるように言われるかもしれないということだ……そうだろうか？　じじい」

「……うむ。その通りだ」

メルデイウスの珍しく核心を突く発言に、マスターは驚きの表情を見せたが、しばらくして彼のその言葉に深く頷いた。

それを見て紅蓮は無言のまま、少し不機嫌そうに下を向く。

悔しそうに唇を噛む彼女の表情から、マスターに自分を的確に分析されていることと、自分の戦闘力を信じてくれないことが分かって悔しいという思いが伝わってくる。

マスターもそれに気付いていながらも、あえて触れない。

「メルディウス。だからこそ今回の作戦にはお前が適任なのだ。バロンもお前が行けば、最初は攻撃を仕掛けてきても。そこまで追い込もうとはせん。何故なら、お前を追い込みすぎればお前がビッグバンで自ら自爆しかねんからな。奴からすれば、いつ爆発するかわからぬ爆弾を近くに置いていようなものだ。交渉に応じるほかあるまい」「なるほどな。俺が行くことで、バロンのやつもそう簡単に手を出せないって事だな！」

「ああ、あやつは人一倍プライドが高いからな。爆発に巻き込まれて心中なんてごめんだらう。その作戦でおそらく上手くいくはずだ」

マスターとメルディウスは、互いの顔を見合つてにやりと不敵な笑みを浮かべている。

紅蓮は少し不貞腐れながら、そんな2人を横目で見た。

話を終わると、マスター達は一通り消耗品のアイテムやら食料やらを買い込んで、街の入口に集まった。

「マスター。もう買い忘れた物はありませんか？」

「うーむ。とりあえずは当面はこれで大丈夫だらう」

マスターは後ろに山積みになされた荷物に目をやった。

どうすればこれ程の量を買って込めるのかと呆れるくらいの量の荷物が、文字通り山のように積まれている状況だ――。

その時、街の方から白雪と小虎の2人が、手を振りながら向かってきた。

小虎は見慣れた鎧姿だが、白雪は忍者の様な格好ではなく藍色の着物を着ている。まあ、あまり目立たない格好の方がいいという判断からなのだろう。

「おーい！ 姉さん、兄貴ー！」

「遅れてすみません、紅蓮様」

2人は息を切らせて走つてくると、マスター達の後ろの荷物を見て驚いたように目を丸くしている。

「……この荷物の量はなんですか？」

2人は声を揃えて荷物を指差した。

山積みになれ荷物はた彼等と身長と同じくらいの量だ。その物凄いや量を見れば、驚くのも無理はない。

紅蓮がそんな2人の質問に答えるように口を開く。

「今回は陸路を行くので……ですが、これでも足りないと思うので、途中狩りをして食料を調達して行きます。あなた方もそのつもりでいて下さい」

淡々と話す紅蓮に2人は、「なるほど」とぼかんとしながら呟いた。

おそらく。心の中では『これでも足りないのか』という思いでいっぱいだったことだろう……。

そんな2人の肩に手を置き、今度はマスターが言った。

「いや、すまん。実は少し前から各地にあるテレポートが不安定になつていゝらしく。どこに行くか分からんだ。それ故、今回は馬を使い移動する」

フリーダムでは乗馬などのスキルは生活スキルに属していて、対象の近くにいけば勝手に発動してくれる。

その為、プレイヤーのレベルに関係なく。皆、同等に馬を乗りこなすことができるのだ――。

「……それでこれほどの大荷物になつたというわけですね。納得です」

「へえー。なんか大冒険の予感！ 僕、わくわくしてきたよ！」

マスターの話聞いて白雪は頷き、小虎は興奮した様子でピヨンピヨンと飛び跳ねている。

「お前なあゝ。遊びじゃないんだぞ？」 小虎

はしゃいでいる小虎の様子に、腰に手を当て少し呆れ顔でメルディウスがたしなめる。

小虎は満面の笑みで「分かつてるぜ！」と言うと親指を立てた。

それを見てメルディウスはため息を漏らして「大丈夫かよ」と呟き

不安そうに眉をひそめる。その時、膨大な荷物を紅蓮と自分のアイテム内に入れ終わったマスターの声が辺りに響く。

「そろそろ出発するぞ！ 長い旅になる。急いでも最短で5日は掛かる。馬は連続で3時間しか乗れんからな、1頭ダメになればもう1頭出して対応する。ロケットの要領で、できるだけ距離を稼ぐからそのつもりでおれよ！ それでは行くぞ!!」

『了解!』

マスターのその声に応えるように全員が力強く頷き、召喚用の笛を吹いて馬を出すと、召喚された馬に皆それぞれに跨った。

手に持った笛を吹き白馬を呼び出して、マスターは手慣れた様子でその背に飛び乗る。

手綱を握り締めたマスターがパシッと手綱を鳴らし走り出すと、それに続くようにして3人も手綱をしならせ馬を走らせた。

襲来者

朝、いつものように目覚めた星は、眠い目を擦りながら大きなあくびをすると、横に寝ているレイニールの寝顔を見てにつこりと微笑んだ。

枕元で寝ているレイニールは、体を丸めてまだ気持ち良さそうな寝息を立てている。

その後、レイニールを起こさない様にゆつくりとベッドから身を起こして、星は壁に立て掛けていた剣に目を向けた。壁に掛けられた剣は新品同様に綺麗で、部屋に漏れる微かな光りを受けてキラキラと輝く。

(……結局、昨日も助けてもらっただけ……迷惑をかけてばかりだなあ……)

星は昨日のキマイラとの戦闘を思い出すと、しょんぼりと項垂れた。

無理もない。昨日の戦闘を引き起こしたきっかけは、結局のところは尻尾の蛇にまり人質になってしまった自分なのだ。

もし。星がキマイラに捕まらなければ、その場を素早く離れることもできた。しかし、星が捕まってしまったことで、メンバー達はキマイラとの戦闘を余儀なくされてしまったのは言うまでもない。

その時、星の頭に不安が過る――。

(もし……負けてたら……)

星がそう考えると、脳裏に最悪の光景が浮かび上がり、背筋に悪寒を感じた。

このゲーム内での死は現実世界での死と同じなのは、もう星も知っていることだ。

今回はデイビッドのおかげで助かったわけだが、それはあくまでも結果論でしかない。1つ間違えれば、星だけではなく仲間からも死者を出していたかもしれない。

そんなことを考えていると『自分は足手まといにしかなっていないのだ』という事実にも、更に気持ちが重くなる――。

「……もつと強くなりたい……ううん。皆と一緒にいるためには、もつと私が強くならなきゃ！」

そう決心した星は壁に立て掛けてあった剣を取り、扉を開けて飛び出していった。

部屋を出てリビングにきたものの、朝早いということもあり。まだ誰も起きていないようだ。

それを見てほっと胸を撫で下ろす。

もしもこんなところをエミルに見つかれば、何をしにいくのかと問い詰められ、小一時間説教をされた挙げ句に止められるのは間違いない。

気付かれないように物音を立てずにゆっくりと部屋を出て、廊下を足早に進み急いで城を飛び出した。

全力で城の城門を通り過ぎると、肩で息をしながら辺りを見渡した。

(……まずは近場で……とりあえず。この森がいいかな……)

城を飛び出した星は剣を握り締めて、近くの森を目指して走った。しかし、しばらく森の中を進んでいると、ふと今まで軽快に走っていた星の足が止まる。

今までの道は微かに光りが照らしてくれたのだが、それより先は光りも殆ど届くことのない闇が広がっていた。

(朝早いからかな……? 薄暗くてすごく怖い……)

星は怯えながら、まだ薄暗い森の中と辺りを見渡す。

* * *

その少し後に、大きく伸びをしてレイニールが目覚めます。

「ふわあゝ。あれ? 主がおらん……」

レイニールは目を擦りながら、壁に立て掛けたはずの剣がなくなっているのを見て、慌てて窓の方に飛んで行って外を見た。

するとそこには、城の門を足早に通り返ける星の姿がある。

それを見た直後、レイニールの中で怒りがマグマのように沸き起

こっつけてきて。

「……主？　なぜ我輩を置いて遊びに行くのだー!!」

置いてけぼりを食らったレイニールは激怒すると、窓を突き破って外へ飛び出した。

外に飛び出したレイニールが星の後を追いかけたのだが、そこにはもう星の姿はなかった。

それからしばらく上空から星の姿を探していたレイニールだったが、その甲斐も虚しく一向に星は見つからない。

「我輩から逃げられると思っておるのか!」

空から探しても見つけれないことにだんだんイライラして来たのか、レイニールが大きな声で叫び、その体が金色に輝き大きい竜の状態になった。

そのまま城の近くの森の上を飛ぶと、翼を大きく羽ばたかせ突風を起こして森の木々を揺らす。

* * *

星が気持ちを奮い立たせ、強張って動かなくなった体をなんとか動かそうとした。その時、突如として激しい突風が吹き荒れて周りの木々を激しく揺らす。

「ぎゃああああああッ!!」

星は悲鳴を上げると、頭を押さえながらその場に座り込んだ。

森の木々が大きく左右に激しく揺れ、葉が擦れ幹の軋む物凄い音が立てている。その様子がまるで巨大なモンスターが動く姿に見えた。その直後、上空から星を呼ぶ声が聞こえてきた。

「見つけたのじゃ!　あゝるゝじゝ!!」

星がその声を聞いて見上げると、上空から巨大な金色の竜が星に向かって急降下してきていた。

「——レイ!」

星が驚いていると、レイニールの体が再び金色に輝く。

すると、今度は金髪のツインテールの女の子が全裸で手足を広げた

格好のまま、星の上に降ってきた。

「えっ!? いやああああああッ!!」

その叫び声の直後。星の上にレイニールが覆いかぶさるようにして倒れた。

「ううう……早く、どいてレイ……」

星が苦しそうにうめき声を上げて、上に乗ったレイニールに目を向けると、そこには目を回しているレイニールの姿があった。

どうやら。星を確実に捕える為に、人間状態で落ちてきたまでは良かったのだが、普段よりも強い落ちた衝撃でそのまま気を失ってしまったらしい。

普段なら落ちてくる際に翼を使って勢いを上手く殺しているが、人間モードだとその重要な役割を果たす翼が消えている為、減速できなかったのだ。しかも、いつもこのモードだとレイニールは体に何も身に着けていない……。

星は諦めたように大きなため息をつくとき、レイニールが起きるのを待った。

先程は恐怖しか感じなかったが、地面に大の字になって空を見上げると生い茂る木の葉の隙間から光りが溢れ、それが優しい風で左右に揺れてキラキラと輝いて見える。

その光景を見上げていると、なんだか懐かしく。時間がゆつくりと流れる様な感覚が、心地よく感じていた。

星が瞼を閉じると、先程より強く木の葉の擦れる音が心なしか大きく聞こえる気がしてとても安らぐ。

だが、そんな星を現実に引き戻す様に、突然近くの茂みがガサガサと音を立てる。

「……だ、誰ですか!？」

目を開いた星は震える声で茂みに向かって叫んだ。

しかし、レイニールが覆い被さっている限り、体の身動きが取れない。

徐々に茂みから聞こえる音は大きくなる。不安そうな眼差しを向けながら、星は思考を巡らせた。

(……どうしよう。もし昨日みたいなモンスターが来たら私もレイも危ない！)

そう思った星は、慌てて気を失っているレイニールの頬を手で叩いた。

「レイ！ 起きて！ 起きてよー!!」

「……………」

「起きてよー！ も〜!」

星が叫ぶが、肝心のレイニールからの返事はない。

上に乗っているレイニールから、再び茂みに怯えたような瞳を向ける。すると、ガサガサと音を立て更に激しく動くと、茂みから1人の男性が姿を現した。

その男は20歳くらいで髪は短く茶髪で、瞳は茶色で目鼻立ちがはつきりしていて、一言で言うなら『イケメン』だ――。

っというよりも、どこかテレビで見たことある様な顔をしている気もすると星は感じたが。でも、どこにでもいるイケメンな気もする。つまり、分からないということなのだが……。

その男の瞳が星を見て、にこつと微笑みを浮かべたその瞬間。星はびくつと体を震わせた。

男の甘いマスクとは裏腹に、その笑みにどこか影の様なものを星は感じ取っていた。

星は以前にも男性に騙されたことがあるからか、得体のしれない人間――特に男性に対して恐怖心が増している。

「……………いったいあなたは誰なんですか?」

星はその男性を疑うように目を細めている。

男性はそんな星を見て、全く動揺する素振りも見せず両手を高く上げるとにっこりと微笑んだ。

「ちよつと待って！ 僕は敵ではない。その証拠に、武器を持ってないだろ?」

「……………なら、どこか行ってください」

「いや、まあ。お取り込み中なのは見て分かるけど……」

男性は星の上に倒れているレイニールにチラッと目をやると、すぐ

に視線を逸した。

星は全裸のまま、なおも自分の上で目を回しているレイニールに目をやると、慌ててレイニールの体を揺らす。

すると、今までならば全く反応しなかったレイニールの体が少し動いた。

「……うう。主……？」

やっと目を覚ましたレイニールは、不思議そうな顔で目の前の星の顔を見つめている。

状況を全く飲み込めていないレイニールに、星が「は、早く服を着て！」と叫ぶ。だが、星の期待とは異なり。レイニールは徐ろに立ち上がって、腰に手を当てて大声で笑った。

「はっはっはっ！ 我輩に服という物は必要ないのだ！」

「……むう。お願いだから服を着て！」

星は眉間にしわを寄せながら徐にコマンドを操作すると、アイテム内にあった初期装備の皮鎧を取り出してレイニールに渡した。

レイニールは「しかたない」と渋々首を縦に振ると星の渡した鎧を着た。

そのやり取りを見ていた男性が、ふと声を掛けてきた。

「君達は、このゲームをしてまだ日が浅いのかい？」

「えつと……そうでもないですけど……」

星はまだ彼を疑っているのか、その表情は少し硬い。

正直。星はここで見ず知らずの人間と、のんきに立ち話をしている必要はない。

レイニールと合流した以上、エミル達が探しに来る可能性は高い。その前に、少しでも戦いの練習がしたいというのが本音だろう。

あからさまに嫌そうな顔をしている星に向かって、男はそれを理解しているながら言葉を続ける。

「なら君達は……いや、君というのも失礼か、まずは自己紹介からだね。僕の名前はデ……ディーノだ！ 君は？」

ディーノと名乗る男は膝を折って、星の顔を覗き込むようにしてにつこりと微笑む。

星も名乗られたからには、一般的な常識から言って名乗らないわけにもいかなくなり――。

「……星です。隣の子は――」

「――我輩の名前はレイニールだ！ 主と仲良くするのなら、我輩も仲良くしてやつてもいいぞ？」

レイニールは星が紹介してる横から、割り込むようにそう言っ胸を張る。

男はそんな2人のやり取りに、思わず声を上げて笑う。

「あはははっ！ 友達の事を主なんて変わった子だね。僕も星ちゃんとレイニールちゃんに興味があるんだ。こちらこそ仲良くしてくれと嬉しいな〜」

デイーノが2人の顔を見ると、再びにこつと微笑んでいる。

屈託のない笑顔を見せる彼に少しだけだが、心を許せるかも……と思っ瞬間。星は心の中でその考えを否定した。

（……だめ！ 前も同じように思って裏切られたんだもん。エミルさんに言われた通り、知らない人には警戒を解かないようにしないとだめ！）

星はそう心の中で呟くと、デイーノの顔を怪訝な顔で見つめ返す。

そんな星とは対照的に、レイニールは興味津々でデイーノの顔を見つめている。

まるでデイーノを珍しいものでも見るように見てくるレイニールに、嫌な顔一つ見せずに微笑むと口を開いた。

「そういえばレイニールちゃんの固有スキルはなにかな？ もし良かったら、僕に教えてもらえない？」

「……固有スキル？」

それを聞いて、レイニールは首を傾げる。

それもそうだろう。元はモンスターでしかないレイニールに固有スキルというものがあるわけがない。

っというか、レイニールが固有スキルを認識しているかも謎だ――。

レイニールは驚いた表情で立ち尽くしているデイーノのことなど

気にかける様子もなく話し出す。

「固有スキルというものは知らぬが、お前は何やら他の者とは違う感じがするのじゃ——なんというか、特別な感じがする……」

「特別な感じ……?」

そのレイニールの言葉を聞いて、星は腰に差した剣の柄に手をかけた。

レイニールの言葉を聞いて、星は忘れかけていた襲って来た男達のことを思い出す。

その瞬間、辺りに何とも言えない緊張が走った。

何よりも怪しいのは、この男が何故早朝の森の中に居たのか?ということだ——目的があったにしても、誰が敵になってもおかしくない状況下で、例えば子供であったとしても、むやみやたらと話し掛けはしない。

つと言うことは、星かまたはレイニールに用事があったとしか考えられないが、今までの会話から推測しても、ディーノは星とレイニールどちらとも面識はなく初対面なのは間違いないだろう。

であれば、考えられるのは一つ。前回の男達同様に何かを求めて近付いてきたのかそれとも……その狙いは、星とレイニールそのものと言うことも考えられる。

以前。学校でも言っていた子供を誘拐しようとしてくる不審者というのに、笑顔で近付いてきている彼は該当するのかもしれない。

星のイメージだと夜に厚着のコートを羽織って道の端に立ち、近付いてくる小学生に裸を見せる人物。

身代金要求の為にワンボックスカーで誘拐しようとする人物、または、ワンボックスカーで誘拐した後、体に悪戯をしようとする変態。

だが、この何れも中年の男か不細工な小太りの男、どちらにしても顔が残念な人達しかイメージできなかったが、目の前の男は身長も高く目鼻立ちもハッキリしていて女性達は放って置かないだろう。

そんな男がそんな犯罪を起こすとは考えられないが……どちらにしても、不審な点の多い彼を警戒するに越したことはない。

星はディーノを睨みながら口を開く。

「……あなたが誰かは知りませんが、私とレイに何かするつもりなら……私も本気であなたを倒します！」

「ふーん。なるほどね……まだ僕は君達に信用されてないわけだ」

「……はい」

頷く星は、不信感に満ちた瞳をデイーノに向けて小さく頷く。

デイーノは少し考えると、困った顔で星に尋ねた。

「……それじゃー。どうしたら星ちゃんは、僕の事を信用してくれるのかな？」

「……………」

それを聞いた星は考え込むと、しばらくしてデイーノの瞳を見つめながら言った。

「なら、私達の見える所に居てくださいー！」

「なんだ。そんな事で良いなら、お安いご用さー！」

デイーノはにっこりと笑うと、星の目の前に座り込んだ。

ほっとしたのも束の間、デイーノはまた星に質問してくる。

「星ちゃんの固有スキルは何？ すっごく興味があるんだけど、良かったら僕に教えてくれないかな？」

「……固有スキルはソードマスターです」

「へえー。ソードマスターって言うんだ……………」

デイーノはそれを聞いて眩き、小さく笑みを浮かべると更に言葉を続けた。

「なるほど、聞いたことないスキルだなー。Sランク以上の固有スキルであることは確かそうだけど、良かったら見せてもらえないかな……そのスキル」

「えっ？ いえ、それは……………」

突如として身を乗り出して、星の顔を覗き込んできたデイーノから視線を逸らす星。

それもそうだ。星はまだ固有スキルを自由に使用することができず、運良く発動できたのは富士のダンジョンの洞窟で、がしやどくろと戦った時だけだ――。

その時もレイニールが剣の姿からドラゴンの姿へと変身させただ

けで、特に自分が強くなったというわけではなかった。スキルの能力の全容が分からないうちに、使うわけにもいかない。固有スキルが暴走することも考えられるからだ。

星が困った顔をして俯いていると、レイニールの金色のツインテールが星の前に割って入ってきた。

「主は教えたくないのだ。それに知り合ってまだ時間の浅いお前に、それを教える事はできぬのじゃ！」

レイニールは両手を広げて星の前に立ちはだかると、むっとしながらデイーノの顔を睨みつけている。

その威圧感に負けたのか、デイーノはため息をついて小さく呟いた。

「はあー。まっ、いいんだ。でも少し興味があつたから残念だけど、また今度にするよ……」

「……はい。すみません」

星が小さな声で言っつて俯くと、突然デイーノの「危ない！」と言う声とともに体が後ろに倒れる

襲来者2

突然。デイーノに覆い被さられる様にして茂みに押し倒された星とレイニール。

「――痛った……突然何するんですか？」

瞑っていた目を開くと、デイーノの顔が目の前にあった。

顔を真っ赤にして、突然押し倒してきた彼に怒ろうと口を開いた瞬間。デイーノの人差し指が星の唇に付く。

「……えっ？ な、なにを！」

「しいー。静かに……どうやら僕達は狙われてたらしい。いいかい？ ここは僕がなんとかする……僕が走ったら、君達はその木の陰に隠れてじっとしているんだ。いいね？」

デイーノはそう星の耳元でささやくと、徐に近くの木を指差した。星が「はい」と頷くと、にっこりと微笑みを浮かべたデイーノが、星とレイニールをその場に残し走った。

星も慌ててレイニールの手を掴むと、近くの木を指指して一目散に駆けていく。

木の陰に入った星はそこからデイーノの様子を窺っていた。その直後、デイーノの周りを5人の黒いローブを着た者達が囲うように現れた。

デイーノは口元に微かに笑みを浮かべ、彼等に物怖じすることなく呟く。

「へえー。ローブで顔を隠してるなんてフェアじゃないね……それとも恥ずかしいくらいに顔が悪いのかな？」

彼の馬鹿にする様な口調にも、全く彼等は動揺しない。

彼等の態度から、日頃からやりなれている連中と言うことは理解できた。

その直後、デイーノは目の前に漆黒の片手剣が現れ、彼はそれを手に取って体の前に構える。だが、それは出現したというより、出したというのが正しい。

その一部始終を星は目撃してた。彼は走っている間に最小限の動

きで素早くコマンドを操作して、一瞬で得物を出したのだ。

瞬時にその様な動作を取れるということは、彼もまた熟練されたプレイヤーであるの言うまでもない。

5人の中でもひとときは大きな人物が一步前に出ると、相手を威圧するような野太い声で告げる。

「私達はお前に用はない……あの娘に少し用があるのだ。引くというのならお前に危害を加えないことを、我々は約束しよう」

忠告なのだろう。まあ、男にも彼が只者ではないと理解したのは間違いない。

だが、その話を聞いてデイーノは不敵な笑みを浮かべる。

「なるほどね。あの娘達に用があるわけだ……あいにく僕もあの娘達に興味があつてね。せつかくの憩いの時を邪魔しないでくれるかい？ それに、僕は君達に興味がないんだ……」

「交渉決裂という事か……ならば、貴様を排除してから、ゆっくり娘をいたぶる事にしよう……」

すると、その男は剣を構えたかと思うと、素早くデイーノに斬り掛かってくる。

デイーノは右手で持った剣で、その攻撃を受け止める。

「——ほう。そんな華奢な体でよく俺の攻撃を受け止めたものだ……褒めてやろう！」

それを聞いたデイーノは不敵な笑みを浮かべると、徐に口を開いた。

「——君こそ、そんな大きな体でこの程度なのかい？ そういうのつて『見掛け倒し』て言うんじゃないのかな？」

「ふんっ……その口。二度と聞けぬようにしてやるわ!!」

上から落とし込むようにして、ローブを着た男の剣がデイーノの剣を押し戻し始める。

「へえー。なら……」

デイーノは更に力を込めてきた大男の剣を弾くと、素早く切り返した剣先で頭のローブを斬った。すると、大男の髭を生やした武骨な顔が露わになる。

その大男の額を見た星はあまりのことに驚いて、言葉を失う。スキンヘッドの男の額には、頭をドクロで撃ち抜かれた刺青が入っていた。

そう。そのマークは、星が以前にも襲われた時に見たマークに他ならなかった。

「あつ……あれは……あの男の人の足に書いてあつた……」

それを思い出し、星の表情は一気に青ざめていく。

その星の恐怖に怯えた表情を見て、レイニールが怒りを露わにした瞳を大男に向けた。

星達は何者かの襲撃を受けていたその頃……。

* * *

エリエが大きなあくびをしながら、リビングに入ってきた。髪はボサボサで虚ろな瞳は、未だに心ここにあらずと言った感じだろうか。

「ふわあく。昨日は夜更かししちゃった……皆おはよ〜」

「あら、エリエちゃん。おはようさん。今日は随分と遅いんやね〜」

目を擦るエリエに、キツチンからイシエルが顔を出す。

「うん。イシエルさんおはよ〜。昨日は夜遅くまでデイビッドの所で話してて……」

「ふ〜ん。昨晩はデイビッドさんと『お楽しみ』やったんやね〜♪」

「ちよつ！ そんな事してない！ それにデイビッドとは友達ってだけの関係だし、そういうのじゃなくいい!!」

エリエは驚きながら目を丸くさせると、耳まで真っ赤に染めながら叫んだ。

イシエルは口に手を当てると。

「うちは楽しかったか聞いただけやよ〜」

つと、悪戯な笑みを浮かべている。

むっとした表情を浮かべたが、これ以上余計なことを言われて茶化されるのは嫌だと思っただのだから。

「あつ。そういえば、星やエミル姉はまだ起きてきてないの？」
それを聞いたエリエは更に顔を真っ赤に染めると、あたふたしながら思い出したようにイシエルに尋ねる。

ただ単に、話の話題を変えたかっただけかもしれないが……。

「ああ、エミルは熟睡してたな。星ちゃんはなにやら、今朝早く出掛けたみたいやよ」

「へえ……えっ？ ええええええええええッ!!」

それを聞いたエリエは全力で走りながら、星の寝ている寝室を見に行く。

確かに昨晩は寝ていたはずの星の姿はなく、布団の中はもぬけの殻になっている。

星が居ないことを確認すると、今度はエミルの寝ている寝室へと血相を変えて走っていった。

その様子を見ていたイシエルはエプロンを着けると「今日も賑やかになりそうやね」とくすつと笑んでいる。

リビングを飛び出したエリエは、城の別室のエミルとイシエルが使っている寝室へと駆け込んだ。

「エミル姉起きて! 星が居ないの! きつと、昨日の事で責任を感じて出て行ったんだよ!!」

「……ううくん。星ちゃん?」

「そう! 星が居なくなっちゃったの! 出て行っちゃったの!!」

目を擦りながら、薄く開いた瞳でエリエを見ているエミルに必死に訴えかけた。すると、エミルが突然エリエの手を掴む。

エリエは驚いたように彼女の顔を見つめると次の瞬間。エリエの体を勢い良くベッドへと引きずり込んだ。

「ちよっ? あっ! エミル姉の寝起きの悪さを忘れてた!!」

「あら、星ちゃん。寂しくなって私のベッドに来るなんて甘えん坊さんね……いいわ。お姉ちゃんのところに行らっしゃい」

エミルは寝言でそう呟くと、エリエの体をしっかりと抱き寄せた。

彼女の言動から見ても、明らかにエリエと星を間違えている。

「エミル姉。私を星だと思ってる!? まあ、嫌じゃないけど……って、

今はそれどころじゃないんだってばッ!!」

エリエはエミルの手を振り解こうとしながら「起きて!」と何度も叫んでいたが、その努力の甲斐もなく。

その物凄い力でエミルの胸に顔を押し付けられたエリエは、息ができなくなり気を失ってしまふ。

結局、エミルが起床したのはエリエが起こしに来てから1時間後だった。

エミルはイシエルとエリエから星が居なくなっただという事実を聞かされ、慌ててリントヴルムに乗って飛び出していった。

その後、エリエ達も皆を集めて、総出で星の捜索に出掛ける。

星も日常的に同じパーティーに入っているもの、フリーダムของเกมシステム上。同じフィールド内にいなければマップに正確なマーカーは表示されない。

一応居るフィールド名は小さく名前の下の括弧に表示されるものの。あまりに広大なフィールドに居る場合は、別フィールドに居ると判断されフィールド名だけで、本人の近くに行かなければマーカーが表示されることはないのだ。

だが、パーティーを組んでおくのには、マップ上にマーカーの表示をさせるといふことよりも重要な意味がある。それは、キャラクターの名前とレベル、そしてHPの表示があるということだ。

場所が分からなくても仲間のHPが減ったということは、何か不測の事態が起こったのだと察することができる。

だが、もしそんな事態になっても高レベルプレイヤーだけで構成されているエミル達のパーティーならば、多少の時間を稼げれば救出もそれほど難しくはない。

しかし、その中でも盲点だったのは星の存在だ——星はトレジャーアイテムでHPの底上げをしたとはいえ、戦闘に関してはドが付くほどの素人。

そんな彼女がもし戦闘に突入すれば、ものの数分で消されてしまうだろう。

(昨日の様子から星ちゃんが出ていくななんて思いもしなかった。うう

ん……あの子がこういう行動に出る時は、いつでも不安になった時——私も迂闊だった……いくらイシエと一緒に寝ないと、物凄く機嫌が悪くなるとはいえ。あの子を一人で寝かせておくべきじゃなかった……)

エミルは心の中で後悔しながら、リントヴルムの背中から地上とマップを交互に見ながら、必死で星の姿を探した。

だが、森と言ってもエミルの城は、街までの数本の道以外は周囲を森に囲まれている。

従って星の向かっていった方向が分からなければ、雲を掴むような話だ。

(こういう時、星ちゃんみたいな大人しい子はどこに行くんだろ。確か前は……森の中！ 移動距離から考えて城の近くの【聖者の森】付近。今のあの子の実力で、もしモンスターや対人戦になれば、ひとたまりもない——待っててね、星ちゃん。今行くから！)

エミルは手綱をパシンと鳴らすと、リントヴルムを森に向けて加速させた。

逸早く飛び出したエミルに遅れながらも、エリエ達も森に向かっていった。それはエリエとデイビッドが皆に進言したからである。

少し前——エミルが部屋を飛び出していった後。エリエは別室で寝ていたデイビッドとカレンを叩き起こした。

もちろん。文字通りの意味だ——。

無理やり起こされた2人は、リビングに呼び出され不機嫌そうにしている。

「いきなり来いってなんだよ。エリエ……」

「そうだ。大変なことってなんなんだよ。どうせお前の胸が縮んだとか、萎んだとかそんなところだろ？」

デイビッドとカレンは、まだ開ききらない目を擦っている。

それを見て、エリエは声を荒げる。

「そんな冗談言ってる場合じゃない！ そんな事より早く2人共。戦闘に行くから準備して！」

血相を変えてそう叫んだエリエを見て、話の飲み込めない2人はた

ただだ首を傾げている。

その温度差にエリエの怒りが増していく、そんな彼女にイシエルが声を掛けてきた。

「——エリエちゃん。こういう緊急時は要件だけを言わなあかんよ。実はな、星ちゃんが迷子なんよ〜」

イシエルがそういうと寝起きでぼーっとしていた2人が大きく瞳を開くと声を上げた。

「……星ちゃんが迷子になった!?!」

「……せ、星ちゃんが居なくなっただって!?!」

驚いた2人はそう叫ぶと、イシエルに飛びつきそうな勢いで身を乗り出す。

襲来者3

イシエルはそんな2人の勢いに押され、苦笑いを浮かべている。「なら、こんな所でのんびりしてられない！ さっさと城の中を探し回ろう！」

慌てて振り返って、今にも走り出そうとしているカレンをエリエが止めた。

「ちよつと！ 誰も城の中で迷子になったって言っていないでしょ!? バカなの？」

「なんだって！ 元はといえば、お前が星ちゃんをしつかり見てないからだろ？ バカって言うならお前の方だ。このバカ！」

「何言ってるのよ！ どうして私が、星の事を24時間監視してなきやいけないのよ！」

エリエとカレンはお互いにいがみ合っている間に、デイビッドが割って入り2人を強引に引き離す。

離れた2人がまだやり足りない様子を見せていると。

「落ち着け！ 今は言い争っている場合じゃないだろ？ そんな事に体力使うんなら、今は星ちゃんを見つける事に体力を使え！」

「……………ツ!？」

少し強い口調でそう言われ、2人の表情は険しいものとなる。おそらく。ここに居る全員が、心中穏やかではないだろう。

まだ朝の8時頃、すっかりこっちの生活に慣れた彼女達の起床時間は僅かに——しかし、確実に遅くなっていた。

それが気の緩みからくるものなのかは分からないが、ゲーム世界に取り残されたという緊張感は徐々に薄らいでいるのは疑いようもない事実だ。

辺りを見渡して、項垂れている2人にデイビッドが尋ねた。

「そういうえば、エミルはどうしたんだ？ 姿が見えないようだが……………」
「…………エミル姉は誰よりも先に飛び出して行った。窓からリントヴルムが見えたから、多分空から探してるんだと思うけど……………」

エリエは今にも泣き出しそうな声でそう告げると、デイビッドは腕

を組んで瞳を閉じて考えを巡らせる。

「エミルが作戦も立てずに飛び出して行つたとすると、エミルも相当焦ってるな……今はマスターも居ない。更にこの2人の様子を見ていても、作戦なんて悠長な事を言っていられる状況でもないか……」
デイビッドはそんなことを小さく呟きながらゆつくりと瞼を開けると、ため息混じりに告げる。

「はあく。俺はあまり作戦を立てるのは得意じゃないんだが仕方ない……外に出て行つたっていうなら、闇雲に探しても見つからないだろう。ここは搜索範囲を狭めて探そう！」

「——搜索範囲を狭めるって、そしたら見つけれないかもしれないでしょ！ 何言ってるのよ！ こうしてる間にも星に何か危険が迫ってるかもしれないだよ!? 昨日だって色々あったのに、またモンスターに捕まつてたらどうするつもりなのよ!!」

エリエは瞳を潤ませながら声を荒げると、デイビッドを睨んだ。

昨日キマイラに襲われたばかりで、今日はこの騒ぎだ——心配しない方が無理だろう。

しかも、昨日のフィールド探索で生息するモンスターにも、若干のイレギュラーが発生していることが分かった。

城の周りの森も本来ならいないはずの、強力なモンスターが生息してても何ら不思議はない。

その瞳を見つめながら、デイビッドはエリエの肩を両手で掴むと、熱い視線で彼女を見つめる。

「エリエ少し落ち着け！ エミルは空から探せるが、俺達は陸から探すしかない。また3人で手分けしても、見つけられる保証もない。それに、今はPVPにも警戒しないといけないんだ。できるだけ冷静にならないと——」

「——なら、尚更急いで探さないと、星が危ないじゃない！」

「大丈夫だ！ あの子の装備はトレジャーアイテムで作った物だ。見た目は普通の服で、高レベルプレイヤーには見えない。そう考えると、逆に装備をきっちり揃えている俺達の方が危険だ！ それにまだ、星ちゃんのHPは減ってない。近くに行けばマップ上にもマー

カーが表示されるから大丈夫だ！」

「……私がつとちやんと、星の事を気にかけていれば、こんな事にならなかったのに……」

潤んだ瞳で、まるで世界が終わってしまふかのような表情をしてそう呟くエリエに、デイビッドが力強く答えた。

だが、エリエの表情は一向に良くなるどころか、逆に沈んだ様にも見える。

「だから大丈夫だ！ 俺が必ず見つけるから！」

デイビッドは自信満々にそう言い放ったが、エリエは俯き加減にぼそつと呟く。

「……デイビッドの言う事は信じられない」

エリエはそう吐き捨てるように言つてそつぽを向く。

そんな彼女にデイビッドが尋ねた。

「それよりエリエ。星ちゃんにメッセージは送ったのか？」

「えっ？ そ、そういえばまだしてなかった！ ちよつと待つててすぐ送る！」

その言葉を聞いて、ハツとしたエリエは慌ててコマンドを操作し始める、メッセージを送信する。

デイビッドは呆れ顔で大きくため息をつくとき声を上げた。

「それじゃー、これから星ちゃんの搜索に出るぞ！ あの子の足と行動パターンから考えると、おそらく、まだ近くの森にいると思う。以前エミルから頼まれて時も森に居たから間違いない。もし違かったとしても、先に出たエミルが空から探しているなら、遮蔽物の多い森の中には目が届き難いからな、俺達で森をくまなく探そう！」

デイビッドが叫ぶと、突如として今まで口を閉ざして聞いていたカレンが徐に口を開く。

「――探すつて言つたつてそんな簡単じゃないぞ？ マーカーが表示されると言つても、ダンジョンなどではマップは周囲だけしか表示されないし。森のマップは小さくても10kmはある。その中で星ちゃんを見つげ出すのは大変だぞ？」

カレンの言う通り。フィールドの探索で最も大変なのが、生い茂る

木々に遮られた森の探索だ。

視界を遮ることのない平地ならば、すぐに見つけられるが、森はマップとしても大きく視界を遮る遮蔽物が多い為、探索は困難になる。

空を飛べるならまだしも、地上からとなると更に難易度は高くなるだろう。

それを聞いたデイビッドが言葉を続ける。

「これは俺の勘だが、星ちゃんは意外と賢い子だ。1人で森の奥に進んで行くという事は考えにくい。それに、モンスターに出会ったら、あの子なら出口に向かって走るはず、だから俺達も森の入口付近を搜索しよう！」

「なら、早く行くよ！ 急いで星を見つけないといけないんだからー」
今にも飛び出そうとしているエリエに、言い難そうにデイビッドが口を開いた。

「——悪いが、エリエはここで待機しててくれ」

それを聞いたエリエが激昂しながら、彼の顔を睨みながら叫ぶ。

「どうして!?! どうして私がここで待機なのよ！ 私が行かないとだめでしょ!!」

エリエがそう言つて、デイビッドの顔を見上げる。

「……今のお前は冷静さを欠いている。そんなお前を連れて行くのは正直心配だ。だから今回はイシエルさん、カレンさん、俺で行く。それに星ちゃんが戻ってきた時に連絡役がいないとダメだろ？ だからエリエはここで待機だ！」

「やだ！ 私が星を探しに行く!!」

そう必死に訴えるエリエを見て、ゆっくりとデイビッドの横に来たイシエルが口を開く。

「デイビッドくん。そない意地悪せんでもええやろ？ エリエちゃん。うちは行かへんから行ってきたらええよ」

「……イシエルさん。ありがと〜」

エリエは抑えられない気持ちを露わにして、イシエルに抱きついた。

「エリエちゃん。皆が見てる前であかんよ〜」

だが、その言葉とは裏腹にイシエルは満更でもないのか、エリエをしつかりと抱きしめている。

その様子を見ていたカレンが、デイビッドの耳元でそつとささやいた。

「——デイビッドさん。俺、前から思ってたんだけど、今もあいつに抱きつかれて喜んでるように見えるし。イシエルさんって毎日エミルさんと寝てるからさ、てつきり——」

「——てつきり……なに？ カレンちゃん」

「わっ！ な、なんでもありません！」

今までエリエと抱き合っていたはずのイシエルが、突然カレンの顔を覗き込んでにつこりと微笑む。その姿に驚き、カレンは身を仰け反らせた。

それを見たデイビッドは苦笑いを浮かべながら「そろそろ行くかと眩く。

それからデイビッド、カレン、エリエの3人は、につこりと微笑みながら手を振るイシエルを部屋に残し、城を出て近くの森へと向かっていった。

森の前に着いたエリエは手を握り締めている。

(星、待っててね。今、私が行くからね！)

エリエは心の中でそう眩くと、決意を新たに深い森を見据えていた。

* * *

襲来者4

星はレイニールと木の陰に隠れながら、四方からの刺客5人の攻撃を1人で防ぎきっているデイーノを見つめていた。

デイーノはまるでダンスをしている様な軽快なステップで、ランダムに仕掛けてくる相手を細身の剣1つで受け流すだけで、攻撃は全くと言っていいほどしていない。にも関わらず、追い込まれている様子は全くない。むしろ、逆に相手を追い込んでいるようにも見えた。

5人はそれぞれ別の武器を持っている。リーダー格の大男は大剣、他の男性3人は重そうなランス、長刀、双剣。そして女が片手剣を使っている。

それぞれに役割があるのか戦闘の様子から見て、どうやら前方2、中央1、後方2のフォーメイションで動いているようだ。

このフォーメイションが、彼等にとつての自然な動きなのだろう。前方は大剣と重ランス、中央は長刀、後方は双剣と片手剣だ――。

前方の2人の死角から長刀の男が仕掛けてくる。その後、双剣と片手剣を持った者達が素早く斬り込む。

いくら熟練のプレイヤーだとしても、こころも様々な武器で連続で猛攻撃されていれば、動揺して動きが乱れても無理もないのだが、デイーノの表情には焦りというより余裕すら感じられた。

1対5で勝てるという確信があるのか、不気味なほどに涼しい顔をしている彼に、星は恐怖すら覚えるほどだった。

逆にローブを纏った5人の刺客の方には、明らかに焦りの色が見て取れる。たった1人のプレイヤー相手に、5人掛かりで攻撃していても彼の防具にすら彼等の手にする得物の刃が届かないなんて前代未聞だろう。

その中の1人である双剣使いの男が堪らず声を上げた。

「くっ！ 体長！ こいつおかしいですよ！ 俺達の攻撃を受けて笑っていられるなんて！」

相当動揺している様子の双剣使いの言葉に、大男が憤り「分かっている！」と声を荒らげた。

彼等も相当に動揺している様だ――。

その直後、今度は片手剣を手にした女の焦った声が辺りに響いた。「リーダー。さっきから固有スキルが使用できません！　こんな事、今までにありませんでした！」

「――それも分かっている!!」

それを聞いて、大男が更に声を荒らげて叫ぶ。

彼等が狼狽している理由は本来任意で使用できる固有スキルが、何かの妨害によつて使用できないことにあつたのだ。

戦闘において、固有スキルは唯一の切り札になるもの。もちろん、これを相手に見せないことでの駆け引きもできるし、逆に早めに見せることで牽制にもなる。

見たところ、襲つてきた彼等は戦闘に長けた者達――手練れであることは疑う余地もない。固有スキルの使用の意味も十分に理解しているはずだ。

浮足立つ彼等の様子に、デイナーは悪魔的な笑みを浮かべ。

「あははははははははははっ!!」

突如、デイナーの甲高い笑い声が周囲に響いた。

大剣の先をデイナーに向け、大男は不機嫌そうに「何がおかしい!」と叫んだ。

なおも笑みを浮かべているデイナーが、その問に答えるように口を開く。

「簡単な事さ、戦う前に言っていたらどうか？　あの子には興味があるけど、お前達には興味がないと……」

「それでは答えになつてはいない！　俺はなぜ笑つていたと言つたはずだ!」

煮え切らない返答に更に声を荒げる男に、デイナーは少し間を開けて言葉を続けた。

「――君は本当に頭が悪いんだね。僕は何度も同じ事を聞かれるのが嫌いだね。それに……君がいくら吠えようが僕の言葉は変わらない。僕は君達には興味が無いってね!」

彼がそう言い放つた直後、殺意を剥き出しにした表情を大男に向け

た。

その全身から放たれている圧倒的な威圧感に、その場に居た全員が恐怖して身をすくめていている。すると、今後はディーノの全身から赤いオーラが噴き上がる。

そのオーラを見て、大男は驚いたようにぽかんと口を開けて呟く。

「それは……そのスキルは……」

「——驚いてるようだね……君が今思っている通り。君の固有スキルだよ。どうやら君のスキルは肉体を一時的に強化するスキルのようなだね……でも、これだけじゃない。僕の能力はこれに更に付け加える事ができる——」

ディーノがそう呟き左手を前に突き出すと、刺客5人の両手足が異次元から現れた光る鎖で拘束される。

「これは私の固有スキル——バインド!? でも、私の力では1人だけだったはず。それに拘束力も桁違いに上がってる!？」

女はそういうと手足を必死に動かして、なんとか拘束を解こうと試みるが、その拘束の強さに手も足もでない。

他の者達も彼女と同じように、必死に鎖から逃れようと手足を激しく動かしている。

ディーノはそんな彼らの前にゆっくり歩いていくと、徐ろに口を開いた。

「——どうだい？ これが僕の固有スキル『アブソープ』だよ。このスキルは周囲の相手の固有スキルを一時的に使用する事ができる……勿論、僕が同時に使用できる固有スキルの数に制限もない。敵が多ければ多いほど君達は固有スキルを使用できなくなり、僕は君等の固有スキルを使い放題というわけだ……さて、スキルの種明かしはここままでだ——そろそろ終わりにしようか？」

説明を終えたディーノは、まるで害虫でも見るような目で鎖で拘束され、地面に伏せる彼等を見下ろす。

その瞳を見て、刺客の5人の体が小刻みに震え出す——それは、彼等が絶対的な力の差を自覚し始めていることを裏付けている。

これが俗に言う『蛇に睨まれた蛙』というものなのだろう……。

その時、デイーノが星の方を向いてにつこりと微笑んで言った。
「悪いけど、君達は少し耳と目を塞いでてくれるかい？　すぐに済ますから」

「えっ？　あ、はい……」

星は頷くと、不思議そうに首を傾げているレイニールの方を向いて言った。

「ん？　主、どうしたのじゃ？」

「……レイ。今はあの人に言われた通りにして」

「我輩は納得いかぬが、主がそういうなら仕方ない」

星は彼の放つ威圧感を感じ取ったのか、レイニールの耳元で言われた通りにするようにとささやき、急いで目と耳を塞いだ。

デイーノはそれを確認すると、不敵な笑みを浮かべると5人に冷たい視線を向ける。

「——さて、この俺の邪魔をした罪は重いよ？　覚悟は……出来てるんだらうね。君達」

狂気に満ちた声で、持っている剣の先を大男の首元に突きつけた。

大男は額に大粒の汗を浮かべながら「いったいお前は何者なんだ」とデイーノに尋ねた。デイーノはニヤリと不気味な口元に笑みを浮かべ、小さな声で呟いた。

「僕が何者か……いいけど、聞いたら必ず後悔するよ？　でも、そうだね。君も自分を殺した者の名前くらい知っておきたいだろうから、特別に教えてあげるよ。僕の名前は……」

「お前……もしかしてフリーダム(beta)テストプレイヤー!？」

彼の名前を聞いた大男の表情が一瞬で青ざめる。

怯える彼にデイーノは微笑みを浮かべ「正解」と答えた。そして再び冷たい瞳に戻ると、手に持った剣を大きく振り上げる。

「ふっ……僕に会ったという事が君達の不幸だよ。それじゃ、話ももう終わりにしようか……さよなら」

「ぐあああああッ!!」

「隊長!!」

デイーノは冷たい口調でそう言い放つと、素早く剣を振り抜いた。

その直後、大男の体が一瞬で光になって消え去った。

だが、そんなことは通常のPVPではありえないことだ。

何故ならこのゲームのシステム上、プレイヤーキルは認められていない。対人戦ではHPが必ず1残り、更に勝負が終わり次第HPは全回復する。

どんなことがあっても、プレイヤーの装備で他のプレイヤーのHPを全損することは不可能なのだ。しかし、大男はHPが回復するどころか、消滅する時のエフェクトで粉々に光の粒子となって消えた。

それは本来なら絶対にありえないことが、現実になったと言うこと――。

「驚いているようだね……そう、普通ならここでHPが回復する。でもこのトレジャーアイテム『ダインスレイヴ』は斬った相手のHPを吸い尽くす――さて、次は君達の番だよ。覚悟はいいかな？」

残された刺客達は、デイーノの持っていた剣を見た直後、怯えた顔で彼のことを見つめている。

そんな彼等のもとに、ゆつくりと近付いて行くデイーノ。

それを見て、ガクガクと震え出す4人の刺客達、その時、デイーノと刺客達との間に、星が突然割って入って叫んだ。

「――だめです！　どんな事があっても人を傷つけちゃだめです！　それはいけない事です!!」

星はデイーノの顔を見上げてそう必死に訴えると、デイーノは呆れ顔で剣を鞘に収めた。

デイーノは星の涙で潤んだ瞳を見つめ、剣を下ろしゆつくりと口を開いた。

「はあ……分かった。目の前に立ちほだかって、そんな顔をされたら仕方ないよね。でも、君達を襲いに来たんだよ？　彼等は……それを助けるの？　僕は君のためなら、こんな奴等殺したっていいんだけど……」

「……だめです。私と仲良くしたいなら、もうこの人達を許してあげてください」

星の決意にデイーノの顔を見つめ、にっこりと微笑んだ。

そんな星の表情を見て、デイーノは「本当におもしろいね。君は……」と眩き微笑み返すと、残る4人の拘束を解いて冷たい口調で言い放つ。

「君達、この子に感謝するんだね。戻ったら君等のボスに伝えるといい。今度、僕の邪魔をしたら皆殺しにする——ってね」

4人は怯えながら何度も頷くと、その場から足早に逃げていった。星はそんな4人の後ろ姿を見つめて「ケガしてなくてよかった」と小さく呟いた。

そんな星の横からレイニールが顔を覗き込んできた。

「……わっ！ レイ!? どうしたの?」

星が驚き身を仰け反らせると、そんな星にレイニールが不機嫌そうに聞いてきた。

「主。あいつらを逃して本当に良かったのか? 以前もそうだが、主は優しすぎるのじゃ! 2度ある事は3度あると言うのだぞ?」

主は色々と無警戒すぎるのじゃ。もっと先々を考えて行動しなければいかんぞ!」

「うん。次は……が、がんばるね」

レイニールのお説教を軽く聞き流し、ぎこちなく微笑む星にレイニールがむっとしながらビシツと指を差して言い放つ。

「そう言って、すぐにまかすのが主の悪い癖なのじゃ!」

「……うう〜」

そう俯き加減に答える星にレイニールはそっぽを向くと次の瞬間。小さなドラゴンの姿に戻り、いつもの定位置である星の頭の上に乗った。

「——重い……レイ。できれば、飛ぶか歩いてほしいんだけど……」

星が頭の上に乗ったレイニールにそう尋ねると。

「飛ぶのも歩くのも疲れるから嫌じゃ!」

っと不機嫌そうに言うのと、今度は星の頭をぼかぼかと数回叩いた。

星はため息をつくのと、諦めたように「分かった」と小さく呟いて、レイニールが着ていた皮鎧を拾い集めアイテムの中に戻した。

ほっとした星がくるつとデイーノの方に向きを変えると、彼は驚い

た顔をして星の頭の方を指差している。

「……どうしたんですか？」

不思議そうに星が小首を傾げると、驚き丸く目を見開くデイーノが震えた声で尋ねる。

「今、女の子が子竜になったけど……今のはどんな固有スキルなんだ
い？」

「えっ？ ああ、レイは普段はこのドラゴンの姿なんです。だから、
戻っただけですよ？」

そう言った星の顔と頭の上の小さなドラゴンを交互に見たデイー
ノは驚いた様子で目を丸くさせている。

（普段は竜の姿だと!? 常時発動型の固有スキルなんて見た事も聞い
た事もない。ますます興味が湧いてきた。絶対に僕の物にするよ、そ
のスキル……）

そう心の中でデイーノは眩き、笑みがこぼれそうになるのを抑え、
心中を星には悟られないように優しく微笑んで見せた。

星はそんな優しい表情のデイーノを見て、ほっと胸を撫で下ろす。
それもそうだろう。襲ってきた刺客を撃退してもらい戦闘の邪魔
をした星に、見返りを求めることもなく。ただ微笑みかけてくれる
デイーノに、星は徐々にだが心を許し始めていた。

襲来者5

ほっとしていた星に向かって、唐突にディーノが尋ねてきた。

「そういえば。どうして君はあんな物騒な連中に追われているの？
良かったら僕に教えてくれるかな？」

「そ、それは……」

星はそう口にした途端、表情を曇らせて口を一文字に結んだまま、それ以上は躊躇うように言葉を呑み込む。

だが、それから少し間を開けた後に、星はその重い口を開いた。

「……じ、実は前にも、同じような男の人達に襲われたことがあって……多分そのせいだと思います……」

「それなら尚の事。倒しておかなければいけないかったと僕は思うけどね。あまり甘いと……君は間違いなく殺されるよ？」

ディーノは額を押さえ、少し呆れた様子でそう助言した。

すると星は、彼の放った『殺される』というその言葉に少し落ち込んだように下を向く。

だが、すぐに考え方を改め『自分が殺されそうだから、相手を殺すなんて間違っている』と首を振った。

(……私が殺されないように強くないと！)

そう心の中で決意した星は、助けてもらったディーノに頭を下げて身を翻す。

その急な行動に驚きながらも、ディーノはすぐにどこかにいこうとする星の肩を掴んでそれを制止させる。

星は視線だけをディーノに向けた。

「ちよつと待つてよ！ こんな森の中でいったいどこに行くつもりだ
い？」

「どこって……私は強くないといけないので……」

星はディーノから目を逸らすと、本来の目的を思い出した星は戦闘の練習にいかうとする。

そんな星の体を強引に自分の方に向き直させると、ディーノは彼女の両肩を掴んだ。

「はあ……君は本当に自分のいる状況が分かってないな……」

「……分かってます」

即座に言い返した星にデイーノは呆れ果て頭を押さえると、星はその言葉がしやくに障ったのか、不機嫌そうに彼の顔から視線を逸らす。

「いいや、分かっている。敵があの人数だけとは限らな——」

デイーノが口を開こうとしたその時。上空から白いドラゴンが2人の近くに降りてきた。

「あれはリントヴルム……エミルさん!？」

自分に向かって下降してくるリントヴルムを見上げながら、星は複雑な心境だった。

それもそうだろう。つい今し方まで、ダークブレットの刺客に襲われていたのだ。一番最初に襲われた時に助けてくれたのはエミルだ——その時も襲ってきたダークブレットのメンバーを逃し。再び今日襲われたなんて言えば、相当怒られると感じたからだ。

しかも、星はまた襲ってきた者達を見逃している。もしもそんなことがばれたら、またエミルと気ままずくなるに違いない。だからこそ、この事実をエミルにだけは、決して知られるわけにはいかないのだ——。

「あ、あの！ さっきの事、エミルさんには——」

星がそう口に出した直後、エミルがリントヴルムの背中から飛び出してきた。

「——その子から離れなさいッ!!」

着地したと同時に有無を言わず斬り掛かるエミルに、デイーノは最小限の動きでその剣をかわす。

星の目の前に長い青い髪をなびかせ、体を反転する銀色の鎧を着た少女がデイーノに向かって剣を突きつけている。

条件反射的にデイーノは咄嗟に数歩後ろに跳ぶと、殺意の籠った鋭い目つきで鞘から剣を引き抜く。

「——なに？ 突然。……君も殺されたいの？」

「ふっ……やれるもんならやってみなさいよ！」

剣を突きつけているエミルを、更に鋭く睨みつけるデイーノ。得物を構え2人が殺気を放ちながら、互いの顔を睨み合っている。と、エミルの前に星が割って入った。

エミルは星が目の前に来たことで、咄嗟に剣を下ろした。

「エミルさん！ 違うんです！ この人は森で迷ってる私を——」

星が説明しようとして声を出した直後に、その声を掻き消すようにデイーノの声が聞こえてきた。

「——なに？ 君もこの子を狙ってきたの……？ 僕の邪魔をするなら……殺すよ？」

「ダメですよデイーノさん！ その事はエミルさんに秘密にしててくださいー！」

星は今度は彼の方を向いてそう叫ぶと、デイーノがため息をつき「いや、もうそれは無理だよ」と呟く。

その直後、星の両肩にぽんつと手を置いて「どういう事かしら？」とにっこりと星に問い掛けているエミルの姿があった。

途端に星の顔は引き攣り、背筋に寒気が走り全身からは冷や汗が噴き出す。

「……あ、あの……それは……その……」

星が少し怯えながら口籠ると、遠くからエリエの声が聞こえてきた。

「神速!! このー！ 星から離れろおおおおおッ!!」

叫びながら周りの草木を物ともせず、青いオーラを身にまといつながら、刹那の速さでレイピアを構え、一直線にデイーノに向かって突っ込んで来るのが見えた。

(……このままじゃデイーノさんが!)

星が慌てて彼の前に割り込むために走り出そうとしたその時、エミルが星の腕を掴んで止める。

「——ッ!? エミルさん！ 放して下さい。このままじゃデイーノさんが!!」

「ダメよ！ この手を放したら星ちゃんが危ないでしょ!?!」
「でも……」

星はそんなエミルの顔を不安げに見上げる。

その直後、一瞬にしてエミルは鬼の様な形相に変わっていた。

「でもじゃないの！ 少しは私の言う事も聞きなさい!!」

エミルはそんな星に向かって珍しく声を荒げると、星はその突然の大声に驚き、身を強張らせた。

普段はあまり怒らないエミルが怒鳴るほど、怒っているのを星は始めて見た。しかし、星の心配を余所に、デイーノは慌てる様子もなく至って冷静だった。

「……あのスピード、視界に表示されている『神速』というスキル名から察すると、移動速度を上げるものか……スキル使用不可領域の外で発動しているから、ここでこつちがスキルを使つて割り込んでもいいけど、そんなことをしてせつかく得たあの子の信用を失うのは気に入らない。ここは……」

小さく呟くデイーノはエリエのレイピアを見切ると、最低限の動きでその攻撃をぎりぎりのところであわす。

「……えっ!? くそっ！ 外した!」

確実に当たったと確信できる距離での緊急回避。

彼の横を通り過ぎたエリエは素早く体を180度反転させ、星の前でデイーノを睨みつけながらレイピアを構え直す。その直後、今度はデイーノの背後からデイベッドが斬り掛かる。

「はあああああああああッ!!」

デイーノは「フツ」と息を漏らすと、体を回してその攻撃を素早く抜いた剣で軽々と受け止めた。

「なかなかいい攻撃だね。さっきの子とのコンビネーションもいい。でも僕に奇襲なんて通用しないけどね……」

「……そいつはどうかな?」

デイベッドがそう小さく呟くと、今度はデイーノの真上から拳を構えたカレンが襲い掛かった。

直上から拳を握り締めたカレンが降りてきて、彼の頭上へと拳を突き抜く。

「吹き飛ばええええええッ!!」

物凄い爆発音とともに土煙が上がり。辺りの地面には大きな亀裂が走ると、地面が土煙を噴き上げる。

直後、煙の中からカレンだけが飛び出して地面に着地した。

彼のいた地面が跡形もなく吹き飛び大きなクレーターができているのを見て、落胆した星は地面に座り込む。

「……そ、そんな。デイーノさん」

意気消沈しながら、その光景を見ていた星の耳元でエミルがささやく。

「——怒鳴ってごめんなさい星ちゃん。でももしあの時、あなたが彼をかばってたら大変な事になってたの。それだけは分かってちょうだい」

助けてもらった彼を助けられなかった自責の念で、星は呆然としてその場に力無く座り込んだ。

自分の無力さと罪悪感が星の中で津波の様に押し寄せていた。

「……デイーノさん。私がつとちゃんと……ちゃんと……ごめんなさい」

両手を地面に突いて、そう呟いた星の瞳からは涙が溢れ出し、それが地面に染みを作っていく。

その時、星の耳に突如デイーノの声が飛び込んできた。

「——生死の確認もせずに泣くなんて気が早いよ。泣いてくれるのは嬉しいけど……でも、僕はまだ死んでいない……」

突然聞こえてきた声の方を皆、一斉に見ると、その視線の先には左手で木の枝を掴み、ぶら下がっているデイーノの姿があった。

デイーノは木から手を放し、地面に着地して装備に着いた砂を叩いて振り落として、ゆっくりとした口調で言った。

「君達はなにか勘違いしているようだけど、僕はその子達がダークブレットに襲われているのを助けただけだよ」

「——なっ！ ダークブレットですって!?!」

彼の発した『ダークブレット』という言葉聞いて、エミルは大きな声を上げる。

他のメンバーも驚いたように目を丸くしている。だが、彼女達が驚

くのも当然だ。

何故なら、ダークブレットとはPVPで、装備や金などを強奪するブラックギルドの中でも郡を抜いて凶悪なギルドとしてプレイヤーの中では有名だからだ。

それが星のことを狙ってきたと聞かされれば驚いて当然だろう。

「……どうしてダークブレットが星を襲うのよ。そんなのこいつがでっち上げてるに決まってるでしょ！」

「そうだ！ 助けるふりをして、実は襲ってきた連中の仲間なんだろうお前も!!」

エリエがディーノの方を指差してそう叫ぶ。

それに合わせるように、カレンも指差して叫んだ。その後、2人は声を合わせて――。

「お前の言う事なんて信じられない!!」

っと珍しく息を合わせて叫んで、拳とレイピアを構え直してディーノを鋭く睨みつけている。

「あの……違うんです。この人はほんとに私を助けてくれて……だから――」

未だに戦闘の意思を見せる2人にあたふたしながら星がそう言ったのだが、それを阻むように2人が叫んだ。

「星は――」

「星ちゃんは――」

「――黙ってて!!」

2人は星の話の話を全く聞き入れてくれない。

それを見たディーノは何を考えたのか剣を鞘に戻すと、両手を空に向かって高く掲げた。

「なら、君達が納得するまで尋問するなりなんなりしてくれていい。僕は抵抗しない……でも、その言葉も信じられないというのなら、僕の体を縛ってくれても構わない」

ディーノがそう言うと、エリエとカレンの2人は躊躇することなく彼の手を後ろ手に縛った。

エミルは、そんなディーノに不信感に満ちた瞳を向けながら考えて

いた。

(エリー達は少しやり過ぎだけど。でも、この人の身のこなしはただ者じゃないわ。ここは城の中にきてもらうしかない。敷地内はパーティーマンバー以外、戦闘スキルの使用をできない設定になってるし……)

今にも襲い掛かりそうな勢いの2人に向かって、神妙な面持ちのエリが口を開く。

「エリー、カレンさん。その人には城の中でゆっくりと話を聞きましょう。星ちゃんの様子から見て、襲われたのは事実みたいだし。このままここに留まっている方が危険だわ」

「そ、そうだね！ あんたには悪いけど、付き合ってもらおうよ！」

「何を言っても、信用されない僕には拒否権はないんだろ？」

エリエが縛られたまま。ほくそ笑んでいるデイーノに向かってそう言い放つと、カレンとエリエでデイーノを挟み込むようにして城に向かって歩き出した。

疑惑のデイーノ

城の部屋のリビングに連行して来られたデイーノは、カーテンの閉め切られた薄暗い部屋の中で、縄で椅子に何重にも縛り付けていた。まるでミノムシの様に椅子と一体化しているにも関わらず、彼は暴れる様な素振り一つ見せない。

デイーノは大きなため息をついてぼそつと呟く。

「はあー。椅子に縛るなら手の方は解いてほしいかな……」

「バカなのか？ お前の疑いが晴れたわけじゃないんだ。そこで大人しくしている！ そしたらすぐに開放してやるよ！」

カレンは冷たい声でそう言うと言おうと鉄の机だけを残り、星達が居る寝室の方にいってしまう。

デイーノはそれを確認して大きなため息をつく。

「はあー。面倒なことに巻き込まれた……僕が興味あるのはあの子だけなんだけど……」

「あらそうなん？ でも、そないなことしやべったら星ちゃんのことを大事に思ってる人達に恨まれるよ〜？」

「——誰だ!？」

デイーノがそう叫んだ直後、彼の顔目掛けてライトが当たる。

そこには卓上ライトとカツ丼の乗ったおぼんを持ったイシエルが立っている。

眩しそうに目を細めたデイーノの前のテーブルに、何故か運ばれてきたカツ丼が真逆の方に置かれた。まるでその光景は、さながら刑事ドラマのワンシーンの様だった……。

それを見て首を傾げたデイーノの口から言葉が漏れる。

「……カツ丼？」

その問いに、デイーノと向かい合っていたイシエルは満面の笑みで答えた。

「そう！ カツ丼！ やっぱ取り調べゆうたらカツ丼やる？ うち、ずっと取り調べ室でカツ丼食べてみたかったんよ〜」

「は、はあ……」

デイーノが呆れた顔で相槌を打つと、イシエルは「いただきます」と嬉しそうにカツ丼を食べ始めた。

そして、イシエルが取調べ刑事ごっこに勤しんでいるその隣の寝室では……。

「さて、星ちゃん。いったい何があったのか説明してもらえるわね?」

「……あの。えっと……」

ベッドに座っている星を見下ろして、エミルがそう尋ねた。

彼女の声はいつになく真剣で相手を威圧する様なものだ——星はおどおどしているだけで、一向に口を開こうとしない。

っというよりは、エミルの威圧感に圧倒されて話し出せないと言った感じだろうか……。

口を一文字に結んだまま俯く星にエミルがなおも顔を近付けると、更に萎縮したように星の体が縮む。

そんな星の様子を見兼ねたエリエが口を開いた。

「エミル姉。そんなに怒ってたら、星だって話せるものも話せないよ」——私は怒ってなんてないわ。ただどうして、私達に断りもなく城を出たのかが知りたいだけよ!」

「……怒ってるじゃん」

エリエは不服そうに口を尖らせながら、小さな声で呟く。

まあ、それ以上いうと今度はエリエに雷が落ちそうなので、さすがに彼女も口をつぐむしかなかった。

それを見兼ね、今度はデイビットが口を挟んだ。

「まあまあ、とりあえず無事に帰ってきたんだしいいじゃないか。子供のした事に、いちいちイライラしたって仕方ないだろ? 星ちゃんも、もうやらないよね?」

「……はい。ごめんなさい……」

しょんぼりと肩を落として謝る星に、エミルもため息を漏らし「今回だけよ」とため息混じりに呟いた。

そんな星の前で膝を折ると、エリエが質問を始めた。

「あの男の人とはいつから一緒だったの?」

「……そ、それは……」

星は微笑みながらそう尋ねてきたエリエから目を逸らした。

それもそのはずだ。デイーノとは襲われる直前にたまたま出会った――。

もしそのことを言えば、皆はデイーノが襲って来た者達と共犯者と思われかねないと考えたからに他ならない。

かと言って星がここで嘘を言ったところでエミル達を騙し通せる自信がない……ここは黙秘権を行使するしかなかった。

俯きながら難しい顔をしている星を見て、頭の上のレイニールが話し始める。

「主は皆の足手まといになりたくなくて早朝に修行に出たのじゃ。そのしたらあの男が森の中から出てきて。その後、変な奴等が仕掛けてきたのじゃ！ 我輩はその場に居ったから間違いないぞ？」

「……あつ、レイそれは言ったらだめ……」

星は慌ててレイニールに耳打ちすると、レイニールは不思議そうに「どうしてじゃ？」と小首を傾げた。

その時、黙っていたデイビッドが口を開く。

「もしレイニールちゃんが言った事が本当ならあの男はやっぱり怪しい。俺達の連携攻撃をかわしたんだ、それを見ても相当の手練に違いない」

「そうね。それは私も分かってる。それに襲ってきたのが、本当にダークブレットならこちらも冷静に出ないといけないわ」

デイビッドの言葉に、エミルもゆつくりと頷くと扉の方に目を向けた。

そんな2人のやり取りを不安そうに見つめる星――。

だがそれは、デイーノの身を案じているからだ。

元はと言えば、星が1人で修行にいかうとしたことがそもそも原因で、更に付け加えるなれば、出掛ける前に一言だけでも周りの人間に声をかければ良かっただけの話なのだ。

そうすれば、ダークブレットのような危険なプレイヤーに襲われることもデイーノに助けられることもなかった。しかし、星は一時の勢いで城を飛び出してしまった。そのせいで、デイーノにあらぬ

疑いをかけられているのだ。

星はそのことを何よりも気にしていた。

(ディーノさんを何とかして逃してあげないと、でも……どうしたら……)

星が考えを巡らせていると、エミルとデイビッドの話している声が耳に入ってきた。

「とりあえず、彼から話しを聞かないと分からないわね……」

「ああ、あの男が何かを知っているにしろ、知らないにしろ、疑惑がある事には変わらないからな」

「そうね。それじゃー、エリーとカレンさんは星ちゃんの事をお願いね」

エミルがそう言つて2人を見た。

「分かりました。責任をもって!」

「了解! エミル姉も気をつけてね。戦闘行為はできなくても、武器を使わない戦闘はできるんだから……」

心配そうにエミルを見つめるエリエに、エミルは優しく微笑んだ。

この城はエミルのテリトリー内だ——そこでの各種設定は自身に自由に変更でき、エミルは城の中ではパーティーメンバーのみ武装可能な許可を出している。もちろん。今の彼女達も武装している状態だ——。

「大丈夫さ! 俺がついてるからな。安心して——」

「——デイビッドが一緒だからなお、心配なのよ……」

自信満々に胸を叩いているデイビッドをエリエは軽くあしらう。

デイビッドはバツが悪そうに「相変わらずきついなー」と苦笑いしながら頭を掻いていたが、すぐに2人は険しい表情に変わる。

「……行ってくる」

神妙な面持ちで静かにそう告げ、扉に手をかけたデイビッドに向かって星が叫ぶ。

「まっ、待ってくださいー!」

突如響いた声に、その場にいた全員の視線が星に集中した。

星は一瞬怯んだが勇気を出して声を上げる。

「……あの！ 今回の事は私が全部悪くて……その……できれば、
デイーノさんは帰してあげてもらえると……」

星がそういうと、呆れ顔でエミルが大きなため息をついた直後に口
を開いた。

「あのね、星ちゃん。あなたを襲ったダークブレットっていうギルド
は、とても危険な集団なの。私もモンスターに襲われたというならあ
の人を疑わないけど、今の状況を考えれば、この城の周りをうろうろ
していてたまたまあなた達と遭遇する方が不自然なのよ」

「……でも、あの人とは本当にたまたま出会って——」

星がそう言い返そうとした直後、手を強く握り締めながら肩を震わ
せていたエミルが強い口調でそれを阻んだ。

「——だから……たまたまなんてないの！ 悪い人間なんて、偶然を
装って近付いてくるんだから！ あなたはもう少し人を疑うことを
覚えなさい!!」

星はその大きな声に驚き瞳に涙を浮かべると小さく「ごめんなさ
い」と謝り顔を伏せた。

今にも泣き出しそうな星を見て、エミルは思わず自分の口を手で覆
うと慌てて顔を逸らした。

普段のエミルなら絶対に言わない感情的な言葉だ。子供の星を相
手にこれほど感情を剥き出しにするのは今までにない。先程の
デイーノとの戦闘時は、飛び出そうとした星の身を案じての演技だっ
たのだが、今回は間違いなく憤りから出た言葉だった。

そんな星に、エリエが耳元でそつとささやく。

「——エミル姉は星の事が心配して真つ先に飛び出して行ったんだよ
？ 怒ってるのも、それだけ星を思ってるってことだから気にしない
でね……」

「……はい」

それを聞いて星は小さく頷くと、エミルは少し表情を和らげて扉の
外へ消えていった。その後をデイビットが続いていく。

2人が出ていくと星の瞳から涙が流れ床を濡らす。

それを見たエリエとカレンが慌てて星に声を掛ける。

「だ、大丈夫だよ！ エミル姉もそんなに怒ってないって！ 後で私も一緒に謝ってあげるから、泣かないの！」

「エミルさんも本心は心配してたんだ。大丈夫！ こいつでは無理かもしれないが、俺と一緒に頭を下げればあの人も必ず許してくれるよ！」

「なんで私じゃダメなのよ！ その言葉は聞き捨てならないわね！」
「なんだく？ 自分が短気だつていう自覚はないのか？ これだからお子様は……」

そう言ったカレンは、チラツとエリエの胸に視線を落とした。

すぐにその視線に気付き、エリエは胸を腕で隠すような素振りを見せると、声を荒らげてカレンを睨んで。

「……なっ！ む、胸の大きさは関係ないでしょ!?!」

それを見てカレンがニヤリと悪戯な笑みを浮かべ、聞こえるように呟いた。

「誰が胸が小さいって言ったんだく？ 自分の事が分かってないから子供だつて言ったただけだぞ？ 俺は」

カレンはそういうと、これ見よがしに両手を前で組んで胸を強調させるようにエリエの顔を覗き込んだ。

「くうううううッ！ 表に出なさいよ！ 今すぐその重い肉の塊を斬り落として軽くしてあげる！」

「いいだろう。やってもらおうじゃないか……やれるもんならな！」

2人がいがみ合っていると、星が小さな声で「やめてください」と叫んだ。

深刻そうな顔をしながら、2人に向けて星が言葉を続けた。

「……私が悪いんです。1人で……みんなにだまって……も、もう……迷惑かけないように……出て行きます……だから、けんかはしないでください……」

声を震わせ涙混じりにそう言った星に2人は我に返ると、あたふたしながらそれをなだめる。

まあ、2人が言い争いをするのは別に珍しいことじゃないが、今の星には自分のせいで2人が言い争っていると感じたのだろう。

「そ、それはダメだ！ 星ちゃんが居なくなったら俺がどうしたらいいか分からなくなる。それにマスターにも顔向けできない。絶対にやめてくれ！」

「そ、そうよ！ 私はか、か、カレンとは仲良しなのよ？ ほ、ほらー！」
エリエはそういうと、隣に居たカレンの体を強引に引き寄せ抱きついた。

その突然の行動に驚いたカレンが声を上げる。

「……なっ！ なにをするんだ!?!」

「しー！ このままじゃ星がまた飛び出して行っちゃうでしょ？ こはあんたと私の仲の良さをアピールしないといけないの。私だって嫌だけど、少しくらい我慢しなさいよ！」

エリエは驚いている彼女の耳元で、小さな声でささやくとカレンも小さく頷いた。だが、星はそんな2人に疑惑の眼差しを向けている。それもそうだろう。今まで激しく言い争っていた人間同士が急に抱き合うなどありえない。その行動を演技だと思うのは当然だし、何か意図があると考えるのは自然なことだろう。

怪訝そうに目を細めながら2人を見ている星に、エリエの額からは冷や汗が噴き出す。

(……やばい。星のあの目……これは絶対に演技だと思われてる……かくなる上は！)

「ちよつとカレン！ こっち向きなさいよ!!」

エリエは強引にカレンの顔を両手で掴んで叫んだ。

顔を押しえられ、カレンは驚き目を丸くしている。

「なっ！ なんだよ、いきなり！」

「——覚悟はいい?」

「……か、覚悟? ……つてまさかお前っ!!」

カレンは頬を赤らめながら潤んだ瞳を向けているエリエの様子から、言わずと知れた何かを悟ったのか急に慌て出した。

しかし、両手でがっしりと顔を押しえられている為、手足だけを激しくばたつかせている。

「こら！ そんなに暴れるな。大丈夫。女同士ならノーカンなんだか

ら……」

「ノーカンって、おまつ……んんっ!!」

なおも言い返そうとしたカレンの口を、エリエは自分の口で反論できないように覆う。2人の唇と唇が重り、カレンの手足の動きが徐々に静かになっていく。

お互いの唇が離れた直後。カレンは力無くその場に崩れ落ちた。

「……ぷはっ！ ま、まあ。キ、キスなんて。こ、こんなものよ！」

「……………」

エリエは頬を真っ赤に染めながら、強がるようにそう呟く。

それとは対照的に、カレンは精も根も尽き果てたという様子で、ぽっかりと口を開けたままその場に座り込んでいる。

だが、それはカレンだけではなく――。

「お、女の子同士で……キ、キス……なんて……」

目の前で見たものが信じられないと言った感じで、星は顔を真っ赤にしながら両手で顔を覆っている。

そんな星の顔を覗き込むようにしてエリエがにっこりと微笑む。

「――星。見てた？ ほら、仲良しでしょ？ 私とカレンはキスするくらい仲が良いんだから！」

「……は、はい。見てました……し、しつかりと……」

エリエは星に自慢気にそういうと、動揺している星の頭を優しく撫でて、

「だからもう勝手に居なくなったらダメだよ？ 居なくなったらまた

ケンカするかもだからね！」

つと、微笑み掛けた。

その横で強引にキスされたカレンはというと――。

「……汚された。しかも女に……初めては師匠について決めてたのに……俺、もうお嫁にいけない……」

いつもの威勢の良さは完全に消え去り。カレンは部屋の隅っこの方で、膝を抱えながら静かに泣いていた。

疑惑のデイーノ2

星、カレン、エリエを寝室に残し。デイビッドとエミルの2人がリビングにくると、そこにはデイーノと名乗る男性と楽しそうに会話をしているイシエルの姿があった。

「ちよつとイシエ！ その人には近づかないようにって言ってたでしよ!？」

エミルがすごい剣幕でそう叫ぶと、イシエルは何食わぬ顔でエミルの方を向いてにつこりと微笑む。

「なんでなん？ こん人、むっちゃおもろい人なんよ〜？」

「ど・ん・な・に！ おもろくても、ダメなものはダメです!!」

エミルはとイシエルの腹部に腕を回すと、座っていた椅子から引きずるようにして強引に引き離れた。

「あ〜ん。今日のエミルは激しいなく。せやけど……そない積極的なエミルも好きやよ」

「なに変な事言ってるの！ もうイシエは不用心なんだから！」

イシエルは笑みを浮かべながら、頬を赤らめ呟くとエミルが声を荒らげた。

エミルはイシエルをキッチンに追いやると「ここでおとなしくしててね!」と少し強く言つて、デイーノの居るテーブルの前に戻った。

そこではデイビッドがデイーノを微動だにせずに睨みつけていた。その様子は、さながら尋問官というところだろう。

エミルもその隣に腰を下ろすと、デイーノの顔を見つめ徐ろに口を開いた。

「それじゃー。さっそくだけで、あなたにいくつか質問したいのだけどいいかしら？」

「よく言うね……ダメでも話さないと開放しないでしょ？ いいよ。答えられるものは素直に答えるさ」

縄で椅子に拘束され、まさにまな板の上の鯉といった状況のデイーノは、諦めたように大きなため息混じりにそう答えた。

エミルは神妙な面持ちで、デイーノに質問を開始する。

「まず、あなたはどうしてあの森にいたのか聞かせてもらえるかしら？」

「どうしてって、ただ朝散歩をしていて道に迷っただけだけど……？」

なに食わぬ顔でそう答えるデイーノに、デイビッドが声を荒らげてテールを叩いた。

「バカか!? 俺達の攻撃をかわしたあの身のこなし。見る奴が見れば、素人じゃないのは分かる！ お前は俺達をバカにしてるのかッ!?!」

「なるほど……確かに僕はこのゲームをやっている歴は長い。だが、だからと言って道を熟知しているとは限らないだろう？ 僕は筋金入りの方向音痴なんぞね」

デイーノは小首を傾げあっけらかんとした様子で、激怒しているデイビッドに向かって吐き捨てるように言った。

だが、そんな言い訳を今のデイビッドが聞き入れるわけもなく、逆にこの発言は挑発とも取れるものだ。

「……くっ！ マップが視界に表示されてて、どうやったら道に迷うって言うんだよ！」

デイビッドが目を細めてデイーノを鋭く睨んでいると、横からエミルが口を挟んできた。

「あなたの言う事も一理あるわ。なら、質問を変えましょう。あなたは、どうして星ちゃんに接近したのかしら？ いや、なにが目的でって言った方がいいかしらね……」

エミルは質問すると、怪訝そうに目を細めてデイーノの顔を窺っている。おそらく、それが彼女にとって一番知りたい質問なのだろう。

何を目的に星に近付いたのか——いや、もしかしたら星意外のメンバーの誰かかもしれない。

再び襲われる可能性を捨てきれない以上。住居を提供しているエミルの立場からして、仲間達の身の安全が最優先ということだろう。エミルがその質問をした直後、部屋の中に流れる空気が一瞬で張り

詰めたものへと変わった。

その質問に、ディーノは口元に微かな笑みを浮かべながら答えた。

「——そうだね。あえて言うなら、あの子に興味があるから……かな？」

Emilはその言葉を聞いた直後。烈火の如く怒り出し、テーブルを叩いて椅子から立ち上がる。

「なっ、なんですって!! 星ちゃんはまだ子供なのよ!? それなのにあの子と関係を持ちたいだなんて、絶対に許せるわけないでしょ!」

「……えっ?」

顔を真っ赤に染めながらそう叫んだ Emil を、2人はぽかんと口を開けながら彼女の顔を見上げている。

Emil はすぐに我に返ると、頬を真っ赤に染めながら叫んだ。

「ち、違うの!? そういう意味じゃなくて! そうだったら困るから先に言っておいたというかなんというか……とにかく、今は違うのよ!」

Emil が耳まで真っ赤にしながらそう叫ぶと、恥ずかしさから両手で顔を覆っている。

羞恥心に顔から火が出る勢いの彼女を放っておいて、今度はデイビッドが質問した。

「なら、お前は星ちゃんの何に興味があるんだ? あの子は戦闘はできないし。装備も、それほどいい物を持っているとは言えない。そんな子のどこに興味があるんだ?」

デイビッドはディーノの瞳をじつと見つめながら問い掛けた。

すると、ディーノは少し上を向いて考える素振りを見せ、しばらくしてからその問に答える。

「それは僕の固有スキルが、周囲の相手のスキルを把握し吸収するスキルだからだよ。君のスキルはおそらく『背水の陣』じゃない?」

「なっ……なるほどな。そのスキルで星ちゃんのスキルも見たということか……」

デイビッドは一瞬うろたえたものの、すぐに平静を取り戻し、ほくそ笑んでいるディーノの顔を見据えた。

直後、そんなディーノの口から思いもよらない言葉が返ってくる。「いや、普通は僕に見えないスキルはないんだ。だが、あの子のスキルは『?』が表示されるだけで、その特性どころか名前すら見ることでできなかったよ……」

そう呟いたディーノの話聞いて、羞恥心から回復したエミルが声を掛けてきた。

「そんなはずはないわ！ 星ちゃんの固有スキルのランクはそこまで高くないはずよ？ あの子は言ってたわ『ソードマスター』は剣の能力を引き出すだけのスキルだって！」

「——剣の力を引き出す……」

驚きながら大きな声を出したエミルとは対照的に、隣に座っていたデイビッドは難しい顔で顎の下に手を当てている。

だが、本来は剣の能力を発揮させるということは、どれほど熟練した剣士であっても難しい。

それはただ使用しているからだ。トレジャーアイテムの武器にはそれぞれ特殊能力があり、武器の熟練度をMAXにして初めて使用可能になる能力を持ったものも存在する。メルディウスの使う『ベルセルク』なんかが良い例だろう——。

しかし、それをスキルの力で容易に引き出せるのであれば、使い手の実力は左程問題ではないのかもしれない。ベテランプレイヤーとまで言わないまでも、剣を普通に使えばそれだけで問題はないのだ。

実際にデイビッドは星が剣を金色の巨竜、レイニールの姿に変えたところを目撃している。

もしも。全ての武器に、その能力が適応できるのなら、トレジャーアイテムの武器でも剣であれば隠された能力を容易に引き出すことができるのかもしれない。

つとなれば、星の持つ固有スキルの能力は未知数だ——どんな剣でも、スキルによって変化できるとしたら……。

もしそうなら、星が剣術をマスターし、自らの固有スキルを使いこなすことさえできればまさに『鬼に金棒』である。

デイビッドは自分の腰に差したトレジャーアイテムの『炎霊刀 正宗』を横目で見る。だが、デイビッドにはもうひとつ。これとは別に、不信に思っていることがあった。それは、今椅子にミノムシの如く何重にも縄で縛り付けられている目の前の男の固有スキルだ。

これまで多くのプレイヤーと交流し、刀を交えてきたデイビッドだからこそ分かる。心のどこかから湧き上がる不信感……というよりも、その感情は恐怖に近いかもしれない。

その恐怖にも似た感情をデイビッドは研ぎ澄まされた感覚によって、痛いほどに肌で感じ取っていたのだ。

(目の前のディーノと名乗る男からは底知れない闇を感じる……)

デイビッドは目の前のディーノを軽く睨むと、それに気付いたディーノは口元に不敵な笑みを浮かべた。

そんな彼から目を逸し、今度はエミルの顔をじっと見つめながら重い口を開く。

「——エミル。今までは何も言わなかったが……もし、星ちゃんの固有スキルがとんでもないレアなスキルなら、彼女に剣術を教えるべきじゃないかと俺は思う。それが今後の俺達の為にも星ちゃんの為にもなるんじゃないのか？」

それを聞いたエミルがデイビッドの顔を鋭く睨みつけながら、立ち上がると火の付いた様に声を荒げた。

「なっ！ そんなの冗談じゃないわ！ デイビッドもあの子の性格を知ってるでしょ!? 今日の事件だってそう！ もし剣術なんて教えたら、迷わずあの子は戦いの最前線に出るに決まってる！ もしそんな事になれば死ぬかもしれないのよ!? そんな事、絶対に反対よ!!」
彼のその提案に憤るエミルの様子を目にしても、デイビッドは冷静さを崩すことはない。

星のことを必要以上に気にかけているエミルのことだ——こうなのは始めから分かっていた。だが、デイビッドもだからと言って、ここで引くわけにはいかなかった。

「まあ、確かにそうだが……しかし、今の状況で優秀なスキルを持っている人材を遊ばせておくほど、俺達も余裕でもないだろ？ マスター

だって一日も早くここから出る為に、今は別行動を取ってるんじゃないのか？ 他にも街では精力的に動いている者もいるだろう。皆がこの世界から抜け出す方法を全力で考えているのに、俺達が切れるカードを切らないのは不公平だとは思わないか？」

「——切れるカードって……あの子は物じゃないのよ！ 例え貴方がどう言おうと、星ちゃんを戦いに出すなんて私が許さない!!」

取り乱しているエミルを諭すように、デイビッドが険しい表情で言葉が続ける。

「確かにあの子はまだ幼いかもしれないけど、ゲームシステム上は補正も入って大人と変わらない力はあるんだ。それなのに後方でいつまでも大事に守っているより、戦力として数えた方がいい。今日の事だって、いつまでも後方で守られるのが嫌で、星ちゃんは剣の練習に行ったんだろ？ あの子も望んでいるなら、こちらもそれに応えてあげるのが真の信頼関係じゃないのか？」

どんな理由であれ。まだ子供の星を危険な状況下で戦いに参加させる訳にはいかないというエミルの怒りも最もだが。

対するデイビッドの意見も最もだ——ゲーム内のアバターである以上。レベルという制限は合っても、それ以外は大人であろうと子供であろうとステータスに違いはない。早く現実世界に戻りたいと感じている人間は大多数だろう……。

本来ならば、子供に戦わせることなく大人でこの事態を処理するのが望ましい。だが、フリーダムでは他のゲームでは珍しい初期ハードでランダムに選択される固有スキル制度を利用している。

チート級の能力でもあり、公平性に欠ける他者との優位性をはつきりさせるこのシステムは、MMORPGという不特定多数でプレイするゲームには不向きに感じるだろう。

しかし、実際は違う。世界で爆発的なヒット商品となった……このゲームは元々は海外の会社で制作されたゲームであり、国連指導で発売された初めてのゲームだ。日本が特別だとするなら、サーバーが逸早くプレイ可能になったというだけのことだ——その為、日本では認可の下りにくいRMTやゲームに実際に存在する企業が参入しやすい

制度を多く導入している。

今では世界的にフリーダムの通貨の「ユーロ」が仮想通貨の様なもので、世間に出回っているほどだ。

発表当時はソフトが内蔵されているとは言え、利益を優先させたと言われかねない高額なハード型で売れるわけがないとマスコミも酷評していた。

しかし、ハードも売上げランキングでは何年も1位を独占している。

その異常なまでの売上の理由は、固有スキルという個々に設定された『特別なスキル』という存在が大きかった。

誰でも現実の世界には不満を持って生きているものだ——周囲の評価に、正しく評価されていないと感じることが多々あるだろう。

だが、このゲームでは固有スキルさえ良ければ、誰でも特別な存在になれる。現実世界ではモブキャラでも、ゲームの中ではたちまち主役級のキャラに成り代わることができるのだ。

また、ここまで爆発的に普及したのは従来の頭に装着するタイプではなく。近未来の腕に装着するデバイスにするよって、脳に直接的なダメージをクリアしたと世界的に証明されていることも要因として大きい。

フリーダムの前にもVR系のゲームは数多く出回っていた。しかし、それはあくまで視覚、または脳派に特殊な電流を流して錯覚させることで疑似体験しているだけに過ぎない。だが、視覚の低下や体に必要のない電流や電磁波で脳を操作するのは少なからず体にも悪影響が出る。

しかし、フリーダムのシステムは発動時の光信号によって海馬に蓄積された記憶を呼び覚まし、以前に体験した記憶を継続して体験する。言わば、集団で任意の夢を見続けている様なものだと言われている。勿論、それによって体にも全く悪影響は出ない。

その技術は近年開発されたものだけに公表されてるが、その実態は謎に包まれており。何度も他のゲーム会社が解析に乗り出したが、結局は類似品を制作することは失敗している類似不可能な未来技術

だと学者の中でも言われている。

この固有スキル制度は運要素が強く。普段は運営により厳しく統治されているゲーム世界だったのだが、運営が関与できないこんな状況になってしまえば意味はない。

子供でも大人でも運さえあれば、強力な固有スキルを手にしてしまうこのゲームでは、力のある者は強力して当たり前と思われするのは仕方がない。そこに若干の妬みひがみもあるだろうが、この状況から早く脱却したいというのは、今この世界に閉じ込められている全ての人間の願いでもある。

「……そんなのダメよ……あなたの言っている事は分かる……でもダメなのよ……」

エミルは俯き加減に小さく呟く。

その直後、彼女がテーブルを思いきり叩くと感情を剥き出しにして叫んだ。

「——ゲームシステム上は大人と変わらなくても、頭の中まで大人って事はないのよ!? あの子はまだ子供で、私達が守ってあげるのを持ってしている固有スキルに関わらず当然なのよ! 私があの子に防具や剣を渡したのは、戦ってほしいからじゃない! それが少しでも、あの子を守ってくればって思ったからなのよ!」

「そんなのは傲慢だ! いい武器や防具は使う人間のスキルがあつてこそ生きるものだろ。それを装備させただけで、ちゃんとした戦い方も教えないなんて、お前はあの子を着せ替え人形か何かだと勘違いしてるんじゃないのか!」

エミルの言葉を聞いて、デイビッドも熱が入ったのか自然と声が大きくなっていた。

2人はしばらくお互いの顔を睨みつけていると、エミルの瞳から涙が止めどなく流れ落ちた。

その表情を見て、デイビッドは思わず視線を逸らす。

エミルは言葉を詰まらせながら声にならない声で告げる。

「分かつてる。分かつてるわよ……今は大人とか子供とか言っていない状況だつて事くらい。でも、仕方ないじゃない……あの子、死

んだ妹に……そつくり、なんだから……」

「——ッ!？」

デイビッドはそう呟くと以前。富士のダンジョンの中でエリエが言っていた事を思い出す。

以前から『妹は体が弱くて病院に入院している』とはエミル本人の口から聞いていたが、死亡したと聞いたのはエリエからだった。

デイビッドは不覚にも、今の今までその事実を忘れていたのである。

「……そうか……そうだったのか……」

デイビッドはそう小さく呟くと、俯き唇を噛みながら拳を強く握り締めていた。今までのエミルの行動と言動を見ていれば、大体のことは分かったはずだった。

確かに、今までエミルの星に対しての愛情は過剰過ぎるとまでデイビッドも感じていた。だが、その理由が分かってデイビッドの中で点と点が線で結ばれ、やっと彼の中で納得がついた。

デイビッドは目の前で泣き崩れているエミルに、返す言葉が見つからない——。

(どうして俺は今までこんな大事な事を忘れていたんだ! あの時のエリエも星ちゃんの事を妹と重ね合わせてるかもしれないと言っていたじゃないか!)

デイビッドは歯を食いしばり、先程まで正論を語ってた自分を殴りたいという衝動に駆られながらも、何もできずにその場に立ち尽くしていた。

疑惑のデイナー3

* * *

ある日の昼下がり。病室のベッドから藍色の長い髪に透き通った黄色い瞳の少女の姿が淋しげに窓を見つめていた。

外は雨が降っているらしく、水滴の付いた窓から見える院外に生えた大木の木の葉の上から時折水滴が滴り落ちている。

「はあー。さっきまでは降ってなかったのに、梅雨の季節は嫌だなあ……」

少女は小さくため息をつくとき、ベッドの端に置かれた棚の上にある花瓶を見つめる。そこには、鮮やかな青い紫陽花の花が飾られていた。

花瓶に入った紫陽花の花を見つめ、悲しそうな顔をしていた少女の表情が和らぐ。

「梅雨は紫陽花の季節だもんね。さすがは姉様」

少女は紫陽花の花を見て微笑んだ。

棚の上に置かれた花瓶に活けられたその花は、昨日姉が持ってきてくれたものだった。

紫陽花の花言葉には、家族団欒などの意味がある。

彼女の姉は季節が変わる度に、その季節の様々な花を入れてくれる。

普段から病院の個室から殆ど出たことのない彼女にとって、この病室から見える景色とこの空間だけが唯一変化するものだった。

毎日。特に変化のない退屈な病院生活の中で、やれることと言えば極めて少ない。

「姉様はすごいなあ。自分の事だけじゃなく、あたしの事まで気にかけてくれて。あたしにはこれくらいしか……」

すると、徐に枕の下に隠していた青いマフラーを取り出す。

そのマフラーはもうすでに完成していた。時間がある合間に少女が縫って作っていたのだろう。

やはり売られているものと比べるとどうしても見劣りしてしまうが、そのマフラーは彼女が毎日コツコツ編み上げた自信作だ。

少女はそれを感慨深く見つめると、ため息混じりに呟いた。

「はあく。さすがに夏になるのに、これはいらないよね……」

今の季節は梅雨。もう少病室でのし退屈な日々が過ぎれば、すぐに強い日差しが差し込める季節がやってくる。

本当は去年の内に渡すつもりだったのだが、姉は既に新しいマフラーを買ってしまったていて、そのマフラーと自分のマフラーを見比べると、どうしても質の落ちるそれを渡す勇気が出なかった。

自分の手の中にある行き場のなくなったマフラーを見つめていると、病室の扉をコンコンつとノックする音が聞こえた。

「ど、どうぞー」

焦りながらマフラーを枕の下に戻すと、平静を装って返事をする。すると、扉が開いてセーラー服姿の少女が入ってきた。

その長くしなやかな青い髪と、透き通った青い瞳はゲーム世界のエミルの姿そのものだ——それもそのはずだ。彼女は紛れもなく、エミル本人なのだから。

「あつ、姉様。今日は早いですね……が、学校は？」

エミルの顔を窺うようにそう尋ねる少女に、エミルはにこつと微笑んでその質問に答えた。

「今日は午前中で終わりだったのよ。授業が終わってから岬の顔を見たくて急いで来ちゃった」

「……姉様。急がなくても、あたしはいつでもここに居ます。それより、あたしは急いで来て、姉様に何かあつたらと思うと……そつちの方が心配です」

岬は表情を曇らせると、それを見たエミルが慌てて彼女の側に駆け寄り。

「いつも病院までは車で来てるんだから大丈夫よ」

そう言って、エミルは岬の頭を優しく撫でた。

それを聞いた岬は実の姉の顔を見上げ、安心したように笑う。

ほっとした様子で立ち上がると、エミルは病室の壁に掛けられてい

るカレンダーに視線を移した。

カレンダーを指差しながら、エミルは岬に小さな声で呟く。

「岬も来年は高校生ねえ。早く制服着てる姿を見たいわ」

振り返り胸の前で手を合わせて、岬の顔を見て微笑んだ。

その嬉しそうな姉の姿を見て、岬は表情を曇らせ無言のまま俯く。

それは岬が中学に入った辺りから、一度も学校に登校できていなかったからに他ならなかった。

生まれつき体があまり強くなかった岬は小学校に入学した辺りから、頻繁に体調を崩して学校を休むようになっていた。

そのせいか、今では彼女自身も自信をなくし。いつの間にか、人と必要以上に接することが少なくなっていた。

ある日。学校内で高熱が出て倒れ、不幸が重なって。結局発見されたのは、岬が倒れて数時間が過ぎた時だった。

そのことが原因で肺炎になってしまい。その後、肺炎は治ったものの、それがきっかけで今度は喘息を発症してしまい今に至る。というわけだ。

岬は生まれつき体が弱いこともあり。医師に外出中に発作が起きってしまうと、命に関わるということから、今では病院で生活せざるを得ない状況になってしまったのである。

医学が発展した今では、喘息は完治できる病気になっている。

しかし、岬の場合。特效薬と呼ばれる薬のことごとくで発作が起これり容体が急変する為、医師も手が出せず。残る方法は人の本来持つ治療力に託すしかない、長い病気生活を強いられているのだ。

そんな彼女にとって病気が完治し、また学校に通える日があるとは考えられないのだろう。

不安そうな表情で伏し目がちに布団の上に置いた手を見つめ、側に立っているエミルに尋ねた。

「姉様……あたし。本当に治るんでしょうか……」

「……岬」

今にも泣き出しそうな顔で返事を待っている彼女に、エミルは何も言えなくなってしまう。

姉としては何か声を掛けなければならぬ状況だが、弱気になつて
いる人間にあまり軽率なことを口にしてはいけなさと感じたのだろ
うが、姉としては妹が落ち込んでいるのを見て、悲しくなつたのだろ
う。

しかも、彼女は小学生の時から殆ど病院で生活しているのだ「きつ
と治る」と心の中で信じてはいても、現実には上手くはいかないもので、
何度も口にしたその言葉をまた口にするのをエミルは拒んでいたの
かもしれない。

岬は色々なことを溜め込んでしまう性格な為、彼女がこういうこと
を言うという時は、決まって相当思い詰めている時だったからだ。

妹の弱気な発言に、エミルは何も言わずに微笑むと「ちよつと待っ
ててね」と言い残して、慌てた様子で病室を出ていってしまう。

「あつ……姉——」

岬は咄嗟に右手を前に出して何か言い掛けたが、すぐにその言葉を
飲み込んだ。

エミルが出ていった扉をしばらく見つめていたが、すぐに自分の足
に視線を向けた。

(……あたし。何してるんだろう……こんな事聞いたって、姉様が困
るだけって分かってたのに……)

岬はその罪悪感からか表情を曇らせると、布団を両手で強く握り締
めた。

雨が降っていることもあり。面会者の人数が少ないのか、慣れてい
るはずの病室が普段より静かに感じてしまい、更に不安な気持ちにな
る。

「姉様。今のであたしのこと嫌いになつたかなあ……」

そう小さく呟いた岬は呆れたように笑みを浮かべ、消えかけそうな
声で言葉を続けた。

「……しようがないよね。嫌われ者は最後までそうなんだから……」

岬は悲しそうな瞳で、窓の外の灰色の雲を見つめていた。それはま
るで今の自分の心と同じ色をしている気がした。

病室を出ていったエミルのことを気にかけてながらも、その不安な気

持ちを紛らわせる為なのか岬は本を読んでいた。

岬が読むのは伝記やファンタジー系の小説が多い。

その理由は『登場人物に自分を重ね合わせれば何でもできるから』というものだ――。

すると、病室の外から慌ただしい足音と看護師の注意を促す声の後に「すみません」という聞き慣れた声が聞こえてきた。

その直後、病室の扉が勢い良く開いた。

岬が驚いたように目を丸くしていると、そこには雨で制服と髪を濡らしたエミルの姿があった。

「ね、姉様!?」ど、どうしたんですか!?　びしょ濡れじゃないですか!!」

驚きのあまり思わず叫んだ岬にエミルが「あつ、通りで服が重く感じると思ったわ」とあつけらかんして言った。

その返事にぽかんとて数秒の間を開けて、岬は慌ててベッドの隣にある戸棚からタオルを出してエミルの方に差し出した。

「これを使って下さい。姉様」

「うん。でも、別にこのくらいどうって事は――」

そう口にした次の瞬間、岬の優しそうな表情が一変し彼女は声を荒げた。

「――ダメです!　あたしみたいになつたらどうするんですか!!」

岬は慌てて口を覆ったが、その時にはすでに言葉が出た後だった。深刻そうな表情で俯いたエミルが、ゆっくりとした口調で告げる。

「……あ、そ、そうね。私ったら考えもなしに……ごめんなさい。岬」
咄嗟に出た岬のその言葉に、エミルがしよんぼりと肩を落とす。

そんな姉の姿を見て、岬があたふたしながら口を開いた。

「あつ……ち、違うんです。その……ご、ごめんなさい……」

岬はエミルに謝ると、俯いたまま自分の手の甲に視線を落とした。それは岬が発した『あたしみたいに』という言葉が原因だったのは言うまでもない。

こう言った時は、姉はいつでも辛そうな顔をするのを分かっていた。それでも、時折感情が高ぶると、つい自虐的な言葉が出てしまう。

自分の最も嫌いなところだ――。

(……あたしってダメダメだ……姉様はこういう言葉を一番嫌うのに……こんなだから、あたしは病気にも勝てないんだ……)

岬は心の中でそう呟くと、膝の上で両手を強く握り締めた。

落ち込んだ様子の岬にエミルはそつと近付き、頭を撫でながら優しく話し掛けた。

「どうしたのかしら、今日はなんだかおかしいわよ？　何か嫌な事でもあった？」

「……い、いえ」

岬はそう言いながらも、罪悪感で姉の顔を見上げることができない。

それはエミルがくる数時間前に、彼女の担当の医師から言われた。

『今の治療法が思っていた程。成果が出ていません』

つという一言が原因だった。

その時は生返事で返したが、時間が経つに連れて先の全く見えない不安と苛立ちが襲ってきて、自分でもどうしたら良いか分からなくなっていたのである。

姉にはできるだけいつも通りに接しようと心掛けていたのだが、やはり姉妹なのか、そういう心の内を誤魔化すことはできないらしい――。

エミルは俯き加減に口を閉ざしている妹の顔の前に、取っ手の付いた白い箱を置いた。

岬はそれを見ると、不思議そうな顔でエミルの顔を見上げ、首を傾げている。

「……姉様。これは何ですか？」

その問いかけに答えるように微笑みを浮かべると、ハサミを手にした箱の封を切った。

「わあ。これって！　いつも混んでるお店の!？」

箱の中身を見た岬は歓喜の声を上げる。

見下ろした箱の中には、まるで宝石のように輝くいちごタルトが2つ入っていた。

「ふふっ。岬が喜ぶと思って雨の中、並んで買ってきたのよ？ おかげで1時間近く雨に打たれる事になったけどね！」

「——姉様……そんな……あたしの為なんかに……」

岬が瞳を潤ませながらそう呟くと、エミルは少し不満そうに眉をかめた。

「もう。岬が喜ぶと思って買って来たのに。そんな顔されたらお姉ちゃん悲しいわ〜」

「……は、はい。ありがとうございます。姉様」

岬は両手で溢れそうになる涙を拭うと、にっこりと微笑んで見せた。

エミルはそれを見て満足そうに頷くと、ベッドの脇の戸棚の奥から紙皿とフォークを取り出し、買って来たいちごタルトをその上に乗せた。

その皿を岬の前に、出した収納式のテーブルの上に置く。

皿の上に盛られたいちごタルトをキラキラと瞳を輝かせながら、見つめる岬が小さく呟く。

「まさかこのいちごタルトを食べれる日が来るなんて……あたし。もし今日死んでも後悔はないです」

「ふふっ。嬉しいのは分かるけど、死なれたら困るわ〜。これから何回でもお姉ちゃんが並んで買って来てあげるつもりなんだから」

エミルは手に持った皿のいちごタルトをフォークで切って、自分の口へと運んだ。

それを見て、岬も自分のいちごタルトをフォークで切り分け同じように口に運ぶ。

「——おいしいー！」

気が付いた時には、もう口からその言葉が出ていた。

それを聞いたエミルは満足そうに笑うと、徐ろに口を開く。

「全く。こんな美味しい物を1回食べたくらいで死んでもいいなんて

——岬は本当に欲がないのね〜」

わざと大きな声で皮肉交じりにそう呟いたエミルが、更に言葉を続けた。

「でもダメよ？ そんな簡単に死ぬなんて言ったら。お母様がいつも言ってるでしょ？ 試練は乗り越えるもの。生きてる限り乗り越えられない試練は神様は与えないって」

「あははっ！ この頃、姉様。母様に似てきましたね」

「もう、失礼ね。私はまだあんなに目、釣り上がってないわよ」

そう口にしたエミルが指で自分の両目を釣り上げると、2人はくすくすと笑い合う。

その後、2人は相当長い時間話をしていると、もう辺りはすっかり日が落ちてしまっていることに気が付いた。

窓の外には雨の中、傘を差して帰って行く見舞い客の姿があった。

「——あら、もうこんな時間になってたのね」

エミルはそう言って時計を見ると、身支度を整える。

その背中を岬は寂しそうに見つめている。

病院には面会時間がある——この病院は夜8時半には帰らなければならぬ。

岬はこの時が一番嫌いだった。もし寝ているうちに発作が起きれば、明日は生きていないかもしれないと恐怖をいつも感じるからだ。

楽しいからこそ時間は短く感じるし、夜の1人の時間は長く苦痛に感じる。

この時ほど、時間が止まればいいのにと願う時はなかった。

「それじゃ、私は帰るわね。また明日来るから……」

エミルは名残惜しそうに口にして、帰る為に持ってきた荷物を持った。

そんな姉に岬が言い難そうに口を開く。

「そんな、姉様も忙しいんですし。毎日来て頂かなくても……」

「もう。馬鹿ね……岬に会うよりも大事な事なんて無いわよ。また明日ね！」

「はい。また明日！」

2人はいつもの様に笑顔で別れを告げると、手を上げて応えた。

疑惑のデイーノ4

Emilが病室を出ていった直後、岬は急な息苦しさを覚え力無くベッドに倒れ込む。

徐々に呼吸が苦しくなり、もう肩で大きく息をしなければ酸素が吸い込めない。

闘病人生で何度も味わった苦痛……それは紛れもなく喘息の発作だった。

岬は苦しさを紛らわせる様に布団を強く握り締める。もうそれしか、この状況を耐える術はないのだ――。

「や、やだ……こんな時に……まだ……姉様が近くにいる……のに……」

岬は悶えながらも、酸欠で薄れていく瞳で壁に下げられた時計を見遣った。

もう限界は等を超えている。それは自分が一番良く分かっているが、自分の体だ分らない方がおかしい。

だが、苦しくなるに連れて苦しさ以上に、今まで姉のしてくれたことが鮮明に思い起こせる。

長年の闘病生活を365日。休みの日だけじゃなく、毎日学校終わりに見舞いに来てくれていたその苦勞と苦悩に比べれば、今の自分の苦しみなど毛ほどのものでもない。

一番は今まで尽くしてくれてきた姉に、これ以上の心配を掛けたくないという思いが強かった。それだけで、今は持ち堪えている状況だ……。

(……せめて、姉様が病院を出るまでは我慢しないと、姉様に余計な心配は掛けたくない……)

岬はシーツを力一杯に握り締めながら、咳と息苦しさを必死に耐える。

今、人を呼んでしまうと、医師や看護師が物々しくこの病室にくるのは間違いない。

そうなると、せっかく笑顔で別れた姉にまた心配を掛けてしまう。

岬にとって、それはこの苦しみよりも更に辛いことだったのだ。

(……もう。いいよね……)

喘息の発作が起きてから約10分後。なんとか保っていた意識が遠退く中、枕元のナースコールを押したのと同時に岬は完全に意識を失う。

そんな妹の一大事など露知らず。エミルが自宅マンションに着いて玄関のドアを開けようと鍵を探した時、やっとスマートフォンに着信が入っていることに気が付いた。

それを確認してエミルの表情が一変した。着信元を見た彼女の顔が真っ青に染まる。

「病院から?」

(——まさか、岬に何かッ!?)

不安に押し潰されそうになりながらも、スマートフォンを手に持ち急いで電話をかけ直す。

病院からの内容は『岬が発作で突然倒れ、今も意識がなく危ない状況なので至急ご両親に連絡して欲しい』という要件だった。

それを聞いて、エミルは慌てて両親に電話を掛けるが……繋がらない。

「どうしてこんな緊急時に繋がらないのよ!」

その声を荒らげてスマートフォン画面に向かって叫んだが、そんなことをしていても仕方ないと、エミルは留守電にメッセージを残し。タクシーを呼んですぐに病院へと舞い戻った。

病院に戻ったエミルは、一心不乱に病院内を駆け抜けた。

制服のままですカートの大きく揺れるのも構わず、まるで自分の方に高速で向かってくる様に流れる人をおかしながら。

「院内は走らないでください!」

つと、看護師にそう注意される声も気にかけずに、一目散に岬の病室へと飛び込んだ。

「……岬ッ!?!」

肩で大きく息を繰り返しながら、病室の中に入ったと同時にエミル

が叫ぶと、看護師が様々な機材を操作しながら2人立っていた。

その光景を目の当たりにして、心臓の鼓動が早まり。まるで、世界が止まっているかスローモーションの様に感じた。

ベッドの上で呼吸器を付けたまま眠っている妹の姿を見て、慌てて看護師達に詰め寄った。

「——岬はッ!? 岬は大丈夫なんですかッ!!」

「えっ? は、はい。ご家族の方ですか?」

「はいッ!!」

今にも泣き出しそうな顔をしたエミルが看護師の顔を見て返事をすると、深刻そうな顔で看護師が口を開く。

「様態は今を持ち直して落ち着いていますが、いつまた発作が起きるか分からない状態です。もし何か変化がありましたら、すぐにナーズコールで呼んで下さい」

「……………」

それを聞いたエミルは無言のまま頷くと、2人の看護師は一礼して病室を後にする。まさに状況は最悪だった……。

知らせを聞いて何も考えず全力で病室まで飛んできたが、心のどこかでは信じられなかった。頭の中では、妹がいつも通りの元気な姿で出迎えてくれる気がしていたのかもしれない。だが、その考えそのものが幻想で、今日の前に広がる光景が紛れもない現実だ——。

まるで魂が抜けた様子で意気消沈したまま、岬のベッドの隣の椅子に腰を下ろす。

ベッドの中の岬は薬が効いているのか、落ち着いた表情ですやすやと寝息を立てている。

そんな彼女とは対照的に、岬の周りには様々な医療機器が置かれていて、その全てが忙しく動いていた。

「はぁー。さっきまであんなに元気だったのに……………どうして……………」

そんな妹の顔を見ていると、自然と涙が湧き上がってくる。その顔を覗き込んだまま、エミルは掠れた声で呟く。

目の前に眠っている妹と、数時間前の楽しそうに会話する妹の姿が重ならない。それどころか、数時間前のことがまるで夢だったかの様

な錯覚に襲われる。

本当はもつと前から妹は昏睡状態で、自分は都合のいい夢を見ていたと……ふと、ゴミ箱に目をやるとさつきまで2人で食べていたケーキの包み紙が捨ててあり。

突然現実に取り戻され、更に強い罪悪感がエミルを襲う。

「——岬……どうしてあなたは苦しい時に苦しいって言わないの？」

そんなんじゃないか分からないじゃない……」

そう言つてと酸素マスクをかけたままの岬の頬を優しく撫でると、その頬が湿っていることに気が付き、胸の奥が苦しくなる。

（この子はいつもそうね……人の居ない場所で泣いて、人の前ではなるべく明るくしようと努力してる……そうか！ あの時……）

エミルは数時間前、ケーキを2人で食べた時の岬の言動を思い出した。

「……あの時にはもう具合が悪かったんじゃないの？ あの時、岬は『今日死んでもいい』て……私かもつと……もつと早くに気付いていたらこんな事には……」

エミルは小さな声で呟くと、自己嫌悪から椅子に座ったまま声を抑えて泣き続けた。

それから数時間後。薬の効果で眠っていた岬が目を覚ました。

（ああ……あたし気を失って……なんだかすごく息苦しい……）

見慣れた白い天井を見上げていた視線を辺りに向けた。

そこには、物々しい機材が所狭しと並んでいた。

（こんなにくささん……先生も大袈裟すぎるよ……あつ、姉様？）

その中に姉の姿を見つけると、思わず笑みがこぼれる。だが、どうやら寝てしまっているらしく。エミルは目を閉じたまま椅子に凭れ掛かっていた。

そんな姉の姿を見て、笑みを浮かべていたその表情が一瞬にして曇る。

（姉様……疲れているのに、心配かけてごめんなさい。でも……また、小さい頃のように、夜遅くまで姉様とお話できますね）

岬はそう心の中で呟き暗かった表情から微笑みを浮かべると、寝ているエミルに向かって声を掛けようと懸命に口を開いた。

しかし、出るのはヒューヒューという呼吸音だけで、最愛の姉を呼ぶことすらできなかった。その時に始めて、今の自分が置かれている状況が理解できた……。

(ああ……もうダメなんだ。声も出せないなんて……あはは……ほんと、どうしようもないなあー。あたしは……でも、これが最後になるならせめて、姉様に感謝の気持ちを伝えたい——私の精一杯のありがとうの思いを……)

手を伸ばしベッド横に掛けられた白い布製の物入れを引き寄せると、中から紙の張り付いたボードとペンを取り出した。

それは岬が何かの時に書き留めておけるようにと、エミルが持ってきてくれた物だった。

今までそれほど役に立ったことはないものだが……今思えば、この時の為にあつたのかもしれない。

途切れそうになる意識を必死に保ちながらも、ぼやける瞳で時折、姉の寝顔を見つめて岬はペンを進めていく。

どんなに苦しくても、姉の顔を見れば不思議と今までの優しい日々の記憶が苦しさを紛らわせてくれた。

そして1時間近く掛けてようやく書き終えると、ボードから紙を剥がし、それを4つ折りにして枕の下のマフラーに挟んだ。

(——これでよし……でも、この言葉だけは自分の口で伝えたい……最後に、後悔しないように……)

岬は持っていたペンの先を持って、エミルの方へと右腕を伸ばした。

エミルの体にギリギリ届くかどうかのところ、必死に手の先に持ったペンを伸ばす。

(……お願い！ 届いて……)

しかし、懸命に伸ばしたペンは無情にも岬の手を離れ地面に転がった。

その直後、頭が真っ白になり。岬の中で絶望の色が濃くなってい

く。

(あつ……終わった……)

心の中で呟いた直後、強張っていた全身の力が抜けて脱力する。その時、体の上に置いていたボードが地面に勢い良く落ちて、バツと大きな音を立てる。

「……な、なにっ!？」

その音に驚いたエミルが勢い良く椅子から跳び起きた。

それを見て岬は声は出せないものの、微かな笑みを浮かべる。

もしも神様がいるとすれば、岬の今までの長い闘病生活を見ていて最後に少しだけ力を貸してくれたのだ——と、そう岬は感じていた。だが、貪欲なもので、姉の顔を見た途端。さつきまでは一言だけでいいと考えていた思いが『姉様と話したい』という強い思いに変わった。

飛び起きたエミルはすぐに目を覚ました岬の顔を覗き込むと、安堵したようにほっと胸を撫で下ろした。

「はあく、このままもう目を覚まさないかと思つて心配したわよ……」

エミルは情けない声を上げると、脱力したように椅子に腰を下ろす。

そんな彼女に岬が目でボードとペンを取ってくれるように訴えた。

「えっ? なに? ……ああ、これ? ちよつと待つてね……」

それに気付いたエミルはボードとペンを拾い上げて、予備の紙をボードに張り付けると、岬の膝の上にそつと置いた。

満足そうに微笑んだ岬が震える手で、徐にそのボードとペンを掴んで何かを書き出した。

その様子を見てエミルが思わず呟く。

「岬。あなた……」

エミルは彼女の姿に、声が出せないことを悟つたのだろう。

瞳に涙を浮かべながら、最愛の妹の懸命にペンを走らせる姿を見守っていた。

そんなエミルに気付いて姉を安心させる為か、岬は無言のまま微笑むとそのまま書き続ける。

しかし、その笑顔とは裏腹に徐々に岬の顔から血の気が引いていく。

手は震えて、上手く文字を書くこともできていないように見えた。

「……岬」

エミルはそれでも懸命に手を動かす妹の姿を見つめながらも、その手を止めることができなかった。

いや、止められるはずがない。それはもう彼女の死期が近いのを悟つての行動だと、直感的に感じ取っていたからに他ならなかった……。

岬は紙に書き終えると、ほっとした表情でそれをエミルに手渡した。

エミルはそれを受け取ると震える声で読み始める。

「……私のお姉ちゃんできてくれて？ この後の言葉って……」

エミルがそう言って岬の方を向くと、にっこりと微笑んでいる岬の口が微かに動いた。

その口の動きで、何を言おうとしているのか分かったと、エミルの瞳から大粒の涙が持っていたボード落ちて、大きな丸い染みを作っていた。

彼女のその言葉に応えようと口を開こうとした直後、岬は荒い呼吸を繰り返す横に置いてある機器からブザーが鳴った。

エミルは慌ててナースコールを押すと、廊下からエミルの両親が勢い良く扉を開け同時に叫んだ。

「——岬!!」

そこには黄色い瞳に水色の短髪の男性と着物姿の長い黒髪に青い瞳の女性が顔を真っ青にして立っていた。

「岬！ お父様とお母様が来たわよ！ ……岬？」

両親を見て叫んだエミルが岬の方を振り返ると、そこには微笑えみながら瞳を閉じている彼女の姿があった。

エミルは心電図に目をやると、脈打っているはずのその波は一本の棒のように流れ続けている。

それを見た瞬間、全てを理解できた。

理解はできたが、だからと言って諦めきれないわけがない。エミルはそんな妹に必死に叫んだ。

「——岬！ まだダメよ!! お父様とお母様にもお別れを言わないでしょ？ それに……まだお姉ちゃんが、岬にお礼言っていない!!」

エミルはベッドに前のめりになって叫ぶが、岬は目を開ける様子もなく安らかな寝顔をしている。

「私こそ……私の妹に生まれてくれてありがとう!」

その後も何度も何度も耳元で「ありがとう」と叫んだ。

意識が遠退く中、その声は岬にも届いていた。

(姉様は心配性ですね……何度も言わなくても聞こえていますよ……嘘でも嬉しいです。でもやっぱり姉様は凄いです。最後にお父様とお母様の声が聞けた……これも姉様の持ってきてくれた紫陽花のおかげですね。最後に家族が揃っちゃうんだから……ありがとうございます) いました。姉様……)

結局。その後、岬が目を覚ますことはなかった……。

人が死んでしまうと病院とは非情なところで、次の患者に備える為にすぐに病室を空けなければならない。

その為、遺族は慌ただしく私物を持ち帰ったりしなければならず。故人を思つて感傷に浸っている時間すらなかった。

両親が忙しく動き回る中、エミルだけは岬の私物を運ぶのを頑なに拒んでいた。

それは、今さつきまで生きていた岬の生きた証を自分で削り取ってしまう気がしたからだ。

何年も毎日お見舞いに通つたその出来事の全てが、まるで昨日の出来事のように鮮明に思い起こされる。

エミルが廊下の床に腰を下ろし。うずくまっていると、後ろから母親が声を掛けてきた。

「これが岬の枕の下にあったの。きっとあなたにだと思つたわ。……私には、あまり。あの子の側に居てあげられなかったから……」

「……お母様」

母親はエミルに丁寧に畳まれたマフラーを渡すと、悲しげにそう

言つて病室の中へと戻つていった。

その瞳には、微かだが涙が溜まつていたように見えた。

エミルの母親はいつもは感情を表に出さない非情な人だが、さすがにこの時ばかりは涙を見せずにはいられなかつたのだろう。

渡された青いマフラーを見つめると、一度は収まつていた涙がまた溢れてきた。

エミルは膝に置いていたマフラーを濡らさないようにと抱きかかえ、床に四つ折りにされた紙が地面に落ちる――。

それを拾い上げたエミルはゆっくりとその紙を広げた。

「姉様へ。この手紙を姉様が読んでいるということは、私はやっぱり助からなかつたんですね。

本当は言葉で伝えたかつたけど無理そうなので手紙にします。

伝えたいことはたくさんあるけど、そんなにたくさんは書けないと思います。

姉様。病室に2人でこうしていると昔のことを思い出しますね。毎晩遅くまでお話してよく母様に怒られました。でも、すごく楽しかったです。

姉様はあたしが病気になつてからも、ほとんど毎日のようにお見舞いに来てくれて、とても嬉しく心強かったです。ありがとうございます。

でもそれが姉様の重荷になつていのではないかとあたしはいつも心配で、だからこれでやつと姉様に迷惑を掛けなくてすむと思うとちよつぱり嬉しいです。

でも姉様はそんな事言つと怒りますよね？

せつかく姉様が毎日お見舞いに来てくれたのに最後の最後に自分の声で話も出来ないような出来の悪い妹でごめんなさい。

マフラーは時期が来てから使つて下さい。

最後まで要領悪くてすみません。

最後に出来の悪い妹の最後のわがままを1つ聞いてください。

姉様。岬の分まで幸せになつてください。岬は笑つている姉様が

大好きです。ずっとずっと大好きです。最後になりましたが、お体に気をつけて私の分も長生きしてくださいね。岬」

その手紙はところどころの文字は歪んでいて、読むのも困難な状態だったが、そこから岬の伝えたいという思いを感じ取ることでできた。

手紙の中に『最後』という文字が多く使われていたのも、彼女が最後の力を振り絞り書いたのだろうということを知れる。

エミルはその手紙を読み終えると、溢れそうになる涙を天井を見上げることで堪えて、手紙に視線を落とし小さく呟いた。

「……昔から、感情を表に出す時に自分の事を名前で呼ぶのは変わらないんだから……私も大好きよ。岬」

エミルは胸に抱いていたマフラーを更に強く胸に押し当てると、小さな声でささやいた。

* * *

疑惑のデイーノ5

エミルは昔のことを思い出す様に遠い目をしながらその話を終えると、デイビッドは嗚咽を堪えながら大粒の涙を流していた。

「そうか、そんな事があつたなんて……何も知らずに偉そうなことを言つてすまん。エミル」

もう顔中涙と鼻水でぐしゃぐしゃにしながら服の袖で顔を擦っているが、デイビッドの顔は更に見ていられないほどに崩れていく。

エミルはそんな彼に落ち着いた様子で告げた。

「いいのよ。あなたは正しいわ……でも、もう私は大事な人をもう失いたくないの。それだけは分かつてちようだい……」

彼女自身もわがままを言っているのは分かつていた。

だが、それ以上に頭の中では、星が敵に敗れ消えていく姿が鮮明に見えていた。だからこそ、こればかりは誰に何を言われようと譲るわけにはいかない。

「ああ、俺も子供の星ちゃんを戦わせるべきだなんて、今考えればどうかしてたんだ。忘れてくれ」

デイビッドが頭を掻きながらそう言うと、エミルはほつと胸を撫で下した。

その時、2人の様子を黙って見ていたデイーノが口を開いた。

「なんだか無関係な話をしているところ悪いんだけど、1ついいかい？」

デイーノは顔色一つ変えずに瞳を潤ませている2人に尋ねた。

そんな薄情なデイーノに、憤ったデイビッドが叫んだ。

「……無関係だと？ おい！ 一応お前も話を聞いてたんだろ？ なら、少しは言い方があるだろうが！」

「言い方か……ならこう言えばいいのかい？ 『辛かったね。きつと天国から見守っているよ……』とか言わないといけないのかな。くだらないな……過ぎた事を言つても仕方ないし。そんなもの、なんの役にも立たないだろ？ その場の感情に流されては、物事の本質を見失うだけだ——」

デイーノの話が終わる前に、彼の頬をデイビッドの拳が捉える。大きな音が部屋中に響き、椅子と共に彼の体は床に転がった。

「……痛いじゃないか」

鬼のような形相で床に転がったデイーノを睨みつけているデイビッドに向かつて、彼もまた睨みながら殺気を放っている。

部屋の中に緊迫とした空気が流れた。建物内が非戦闘区域でなければ、今頃はデイーノも剣を取り出して戦っていただろう。

このゲーム【FREEDOM】の中での戦闘とは武器、またはアイテムの使用を言う。

だが一部例外として、ヒールストーンと製作用のアイテムの利用は屋内でも許可されていた。

何故なら非戦闘区域内での戦闘行為とは、攻撃力のある武器などや効果のあるアイテム『麻痺、毒、睡眠』などは使用できないだけで、小競り合い程度の戦闘は許可されている。

簡単に説明すると、武器による殺傷などの明らかな戦闘行為以外は原則OKなのだ。

そしてプレイヤーの持ち物であるマイハウスや、ギルドの持ち物であるギルドホールではその設定を個別に選択できる。

だが、忘れてはいけないのがゲーム内の最低ダメージ値が『1』であること、そうなれば、プレイヤーが睡眠時にそこらにあるオブジェクトで殴り続ければいいと思うが、そう都合良くはいかない。

ベッドなどでの睡眠時、体力とHPが回復自然回復している。それは与えるダメージより遥かに大きい為、最小値のダメージでは永遠に殴り続けてもHPは0にはできないのだ。

なおも睨み合いを続けている2人の間にエミルが割って入ると、眉を吊り上げながら叫んだ。

「あなた達！　ここは私の家なのよ？　何より今はPVPは禁止！　どうしてもやりたいなら、このゲームが正常な状態に戻ってから別の場所で行ってちょうだい！」

「だけどエミル。こいつは人として許せない。その根性を修正してやる！」

憤りを押さえられないデイビッドは「歯を食いしばれ！」と拳を握り締めると、エミルがその拳を両手で強引に下げさせ再び声を上げた。

「だからダメって言うてるでしょ！ 横の部屋にはエリ工達も居るのよ!?!」

「……………くっ!」

デイビッドは渋い顔をして仕方なく拳を下ろすと、エミルは床に倒れていたデイーノを起こした。

「ごめんなさいね。でも彼も悪気があつたわけじゃないの。ただ、正義感が人一倍強いだけなのよ。許してもらえるかしら?」

「それはもちろん。そんなことより、あなたには話がある」

「……………なに?」

優しい声でそう言ったエミルに、デイーノは真面目な顔をして答えた。

その表情でことの重大性を察したのか、エミルの表情も自然と厳しくなる。直後、デイーノは重い口を開いた。

「……………実は、あの子を助ける時に敵の大將を1人、キルしてしまつてね。もしかすると、あの子がまた襲われるリスクを高めたかもしれない」

「……………えっ?」

デイビッドとエミルは状況が読み込めずぽかんと口を開けたまま、デイーノを見つめている。

まあ、エミル達が驚くのも無理はない。PVPでは基本的に相手のキルはできないのだが、既存の石や木の枝などで攻撃することで『1』だけ残したHPを削り切ることができる。

これはフリーダムシステムのシステムが最低ダメージを『1』に設定しているから起こることなのだ――。

しかし、普通ならばそこまでする必要はない。いや、良識のあるプレイヤーならば、この危機的な状況下で相手を故意に殺す必要などない。

時間が止まった様に静寂に包まれる室内。

その静寂を破るように、隣の部屋から血相を変えてエリエとカレンが飛び出してきた。

「ちよ、ちよつと！ あんた何してくれてるのよ!!」

「そうだ！ お前は自分が何をしたか分かってるのか!？」

2人は部屋に入るなりディーノを指差しながら、大きな声でそう叫ぶと彼を睨みつける。

突然飛び出した2人のその後ろで、星があたふたしながら小さな声で言った。

「あ、あの……出て行ったらダメです。話を聞いてたことがエミルさんにばれちゃいますよ」

その言葉を聞いたエミルが思わず大きな声を出した。

「ちよつと！ どこから聞いてたの!？」

エミルが叫んだ直後、2人はヤバイと思ったのか、お互いの顔を見て誤魔化そうと苦笑いしている。

呆れ顔でため息を漏らすと、エミルはそんな2人を放っておいて、星の目の前に歩いていつてにつこりと微笑みながら尋ねた。

「それで、どこから聞いてたの？ 星ちゃん」

「えつと……あの、病院が……その……」

星は口籠ると、そのまま俯いて黙ってしまふ。まあ、この中で最も自白しやすいのは星だとエミルは分かっていたのだろう。

落ち込んだ様に肩を落とした星に、エミルはそんな頭を撫でながら。

「星ちゃんが素直な子で助かったわ」

つと呟き、気まずそうに俯き加減で立ち尽くしている2人を見た。睨んでいたエミルが、今度は呆れ返った様子で息を漏らす。

「……要するに、最初から最後まで聞いていたのね。はあく。そうやって気にすると思ったから言いたくなかったのに……でもまあ、考え方を変えると、もう話さなくて言い分。良しとしましょう！」

エミルはそう頷くと、表情を曇らせていた3人もパーッと表情を明るくする。

その表情を見て笑みを浮かべたエミルだったが、すぐに険しい表情

でデイーノの方を向き直す。

「……それで、どうするつもり？　ダークブレットはブラックギルドの中でも、最もきな臭い噂が絶えないギルド——噂では、この短期間に多くのギルドから被害者が出ているって話だし。しかも、その全てで例外なくキルされてるって話よ……」

「さすがは『白い閃光』と名高いエミルさんだね。情報もそれなりに調べているようだ」

「——ッ!?　なるほど。あなたもそれなりに古参のプレイヤーさんなのは確かのようなね」

デイーノが彼女の通名を口にすると、一瞬は驚いた顔をしたエミルだったが、すぐに冷静にそう言葉を返した。

そんな2人のやり取りを聞いていた星の表情が曇った。

いくら星でも話の内容から、自分を襲ってきた者達がダークブレットという組織の人間なのは察しがつく。

そしてこのゲーム内での死は、現実世界での死に繋がる可能性があるという事実。

おそらく。あの者達の狙いは元々『竜王の剣』という名の剣だったレイニールだろう……。

しかし、今のレイニールは小さなドラゴンの姿で星の側を、片時も離れず飛び回っている。どう考えても、レイニールをダークブレットに渡すことはできない

星は頭の上にちよこんと乗っているレイニールを見上げた。

主の不安そうな表情にレイニールは首を傾げながら、星の顔を見下ろしている。

それを見て、星が険しい表情で顔を伏せた。

（レイを相手に渡せない。きっと今日襲ってきた人達は、まだ私が剣を持っていると思っっている。このままだと皆に迷惑をかける。やっぱり、私はここに居ない方が……）

星がそう心の中で思っていると、エリエの訝しげな顔が飛び込んできた。

エリエの青い瞳が星の紫色の瞳を見据え、彼女の顔が更に接近す

る。

「——わっ！ あっ、危ないです！」

驚いた様に身を仰け反らせる星の心を、エリエは見透かす様に目を細めながら呟く。

「……星。また良からぬことを考えてるでしょ？」

「えっ!? べ、別に何も……」

核心をつく様な彼女の質問に、星は思わず視線を逸らす。だが、そんなことはエリエにはお見通しなようで……。

あからさまに慌てる星を見てエリエが「やっぱりね」とため息を漏らし、言葉を続ける。

「どうせ、自分のせいで大変な事になったから、何かが起こる前に、また私達の前から姿を消そう……なんて考えてるんでしょ？」

「あの……それは……ち、ちがいます……」

また核心に迫る言葉に星はドキツとしながら、小さく掻き消えそうな声で言った。

エリエは悪戯な笑みを浮かべると、俯いている星に尋ねた。

「星は自分が皆の迷惑になってると思ってる？」

「……はい」

少し間を開けて小さく頷いた星に、エミルはもう一度尋ねる。

「ならばっ、星はどうしたら迷惑にならないと思うの？」

「……そ、それは……」

その質問の答えに、黙って2人のやり取りを見守っていたエミルも聞き耳を立てている。

エリエが星の口元を固唾を呑んで見守っていると、星はしばらく考えた末に重い口を開く。

「……それは、やっぱり私が居なくなるのが一番だと思います」

星はそう呟くと、まるで全てを悟ったかのような表情で再び口を閉じた。

それを聞いて「エリエはやっぱり」と大きなため息をつく。その直後に口を開こうとしたエリエよりも先に、エミルが話し始める。

「全く。星ちゃんの逃走癖にも困ったものね……あなた自身は私達に

迷惑をかけないようにと思つての事だとは思うけど、それからあなたは どうするつもり。もちろん行くあてはあるのよね？」

「……それは、他の街に——」

星がそう口にする前に、エミルの言葉がそれを遮った。

「——他の街？　なら、他の街の人達に迷惑をかけてもいいのね？」

「……それは……ダメです」

しょんぼりとした様子で、星は自分の足元を見つめながら呟いた。危険な状況に自分が置かれているのは、星にも理解できている。だからと言つて、このまま周りを巻き込むことはできない。しかし、今の星には逃げる意外には何も解決策が浮かばなかった。

エミルはそんな星を追い込むように言葉を続ける。

「確かにあなたの命だもの。あなたがダークブレットにやられようが、モンスターにやられようが、私達には関係ない。でもこれだけは覚えておきなさい？　子供がどんなに大人の真似事しても結局は何もできないの。大人になりたいなら、少しは今の自分の立場と今居る状況を考えなさい」

「ううう……」

普段の彼女からは想像もできないような、その冷たい声音にショックを受けたのか、星は紫色の瞳を涙でいっぱいにして、長い黒髪をなびかせながら寝室に走り去ってしまう。

突然走り出したその勢いに付いていけず、頭の上のレイニールは空中に放り出された。

「——ッ!?　全く。しょうがない主様じゃ……」

「レイニールちゃん。ちよつと待って！」

レイニールは呆れ顔でそう呟くと、パタパタと翼をはためかせながら、後を追いかけてようとした瞬間にエミルに呼び止められ、ビクつきながらゆつくりと振り返る。

「……ごめんなさいね。星ちゃんが落ち着くまで側に居てあげて、なにかあったら、すぐに私に知らせてちょうだい」

深刻そうな表情で眉をひそめながらお願いする彼女の顔を見つめ「分かったのじゃ」とこくりと頷き、レイニールは星の後を追いかけて

いった。

出ていく後ろ姿を見届けると、エミルは大きくため息をつく。

そんな彼女に、エリエが言い難そうに声を掛けてきた。

「エミル姉。ちよつと言い過ぎたんじゃい？ 確かに何も言わずに出て行ったのは悪いと思うけどさ。星にも、星なりの考えがあつたんだと思うし——」

「——分かってるわ。でも、たまには叱っておかないと、あの子の為にならないし。それに、ここからの話はあの子には聞かれるわけにはいかないのよ……」

彼女のその口ぶりから何かを察したのか、エリエはそれ以上は聞かなかった。

エミルは覚悟を決めたような表情で、デイーノの顔を見つめると彼に問い掛けた。

「あなたほどのプレイヤーが、何も言わずに捕まったって事は、何らかの目論見があるんでしょ？」

「目論見？ なんの事だい？ 僕はただ、あの子の仲間を見たかっただけだよ。おかげで面白いものを見させてもらったしね」

デイーノは口元に微笑を浮かべ、淡々と語った。

エミルの言うのもことも一理ある。いくら高レベルプレイヤーが多くいるとは言え、無抵抗で捕まるのは、あまりにも不自然過ぎる。

なおも真実を口にしようとしないうちに、エミルは更に言葉を続ける。

「別に隠す必要はないわ。もう私はあなたを敵のスパイだと思っていない。あなたは偶然を装っているけど、敵のリーダー格の人物を狙って殺した。逃げようと思えば逃げられたのに、わざわざ私達の到着を待ってから大人しく捕まっている。でもさっきのあなたのスキルの能力から察するに、広域的なスキルなのは間違いない。だってそうでなければ、5人を相手にして星ちゃんに傷一つ付けずに済むはずがないもの」

エミルが自論を展開していると、横からデイビッドが口を挟む。

「エミルちよつと待て！ 何を言ってるんだ？ どうして、こいつが

ダークブレットのスパイじゃないと言い切れる。ただの厄介払いの為にリーダーを殺したとも考えられる。それに、PVPではHPは必ず残るはずだ。一対一ならともかく、敵が複数いて『0』にできるなんてありえないだろ!？」

「いいえ。可能よ、普通の武器なら無理だけど……トレジャーアイテム……そう。彼の武器なら、おそらく可能なのよ。そうでしょう？」
エミルはデイーノにそう問い掛けると、デイーノは「ふふふつ」と笑みを浮かべて、その後口を開いた。

「君の考えている通りだよ。僕のダーインスレイヴは敵のHPを奪い取る。少量だけど、プレイヤーのHPを『0』にすることは造作もない。君なら、僕の計画を話しても乗ってくれそうだ……いいだろう話してあげるよ。もちろん話したからには協力してもらおうけどね」

「ええ、星ちゃんに危害を加えないと約束してくれたならね……」

エミルは相手の思惑を探るように言葉を返した。

すると、彼女の言葉を聞いたデイーノは瞼を閉じて少し考える素振りを見せると、ニヤリと不敵な笑みを浮かべ。

「了解した。僕はあのダークブレットという組織が嫌いだし、君達には、その撲滅に協力してもらいたいんだよ。もちろん彼等の持つているアイテムと金銭は成功報酬として全部僕が頂く。彼等は皆殺しにするからね……君達への見返りはあの子の身の安全くらいになるけど……」

本来は取引条件としては雲泥の差がある申し出だが、エミルは首を縦に振った。

「ええ、それでいいわ。でもその代わり、私達は誰も殺さないわよ。」
「それも承知してるよ。汚れ役を買って出るのは得意だ」

やり取りを聞いていたデイビッド達が納得した様子の2人に声を上げた。

「ちよつと待ってくれ！ リスクが大き過ぎる。そんな事を勝手に……」

「そうだよ、エミル姉！ どれだけの勢力かも分かりきってないんだよー！」

「そうです！ 第一に今はマスターもいません。そんな状況で不可能です！」

デイビッド、エリエ、カレンが声を大にして叫んだ。

まあ、当然だろう。ギルドでもない少数のパーティーでしかない人数でサーバー内で最も危険な犯罪集団を相手にするにはあまりに無謀と言えた。しかし、エミルはその声に耳を傾けることなく、デイーノに向かって深く頷いた。

デイーノはそれを見ると「交渉成立だね」とほくそ笑んだ。

名御屋までの道中

* * *

足早にマスター達が千代の街を出てから、すでに半日が経っていた。

どこまでも続く道を、馬の手綱を握り締めた彼等が颯爽と進んで行く。その時、マスターを先頭に進んでいた一行の中から、突如として叫ぶ声が聞こえた。

「あーにーきー！　もう僕疲れたー、少し休もうぜー！」

「全くだらしねえーな。男なら少しは我慢しろ！　じじいも紅蓮達も文句言わないだろうが！」

馬の上で上を向いて、弱音を吐いた小虎にメルディウスが叫ぶと、小虎は不満そうに渋い顔をする。

そのやり取りを見ていた紅蓮がメルディウスの横に馬を着けると、彼に聞こえるようにわざとらしく。

「……私も少し疲れたかもしれませんが。少しでいいから休めたらなあ
〜」

その言葉を聞いたメルディウスはチラッと紅蓮の方を見て、仕方ないという顔で頭を掻きながら告げた。

「じじい。まだ先は長いんだろ？　ここらで少し休もう！」

「ん？　ああ、構わんが、さっきと言ってる事が違く——」

「——うるせえー。さあ、休むぞ!!」

ツツコミを入られたメルディウスは顔を赤く染めると、そっぽを向いて乗っていた馬の背から飛び降りた。

木漏れ日が降り注ぐ中。5人は木陰に紅蓮の敷いたシートの上に腰を下ろすと、紅蓮がアイテムの中から飲み物とサンドイッチを取り出し、順番に配り始める。

「どうぞ、マスター。私が作ったんですけど、上手くできているか
……」

「うむ。すまない紅蓮」

マスターは紅蓮からサンドイッチとコップを受け取ってにつこりと微笑んだ。

そんな2人の様子を見ていたメルデイウスは、不機嫌そうに貧乏揺すりをしながらマスターのことを睨んでいる。

「メルデイウス。どうしましたか？ そんな怖い顔して……疲れました？」

「い、いや。何でもないんだ。ちよつと目にゴミが入ったからよ」

目にゴミが入ったフリをして、腕で顔を擦って見せる。

「はい、メルデイウス。あなたの好きなお肉をたくさん入れておきましたよ」

「お、おう！ ありがとう！」

紅蓮は大きな肉の塊がはみ出しているサンドイッチを差し出すと、メルデイウスはそれを照れながら受け取って、そのまま大口を開けて噛み付いた。

（やっぱり紅蓮は俺の事を考えてくれてるんだな。それだけでいいんだ。今はそれだけでな……）

心の中でメルデイウスがそう頷いて紅蓮の方を見た。

メルデイウスの思いを尻目に紅蓮は「そんなにお腹空いてたんですか？」と首を傾げている。

だが、この時の紅蓮は『メルデイウスは怒らせると後で面倒だから』くらいの考えしかなかった。

そんな紅蓮の隣に座っていた白雪が、彼女にそつとおにぎりを差し出す。

「紅蓮様。これは私が作った握り飯なのですが、良かったら……」

「はい、いただきます。ありがとう、白雪」

小さな手で紅蓮は差し出された握り飯を受け取ると、上目遣いに白雪の目を見上げる。

「い、いえ。任務ですから！」

白雪は嬉しきからか瞳をキラキラさせながら背筋を伸ばしてそう叫ぶと、おにぎりを手に紅蓮は「任務？」と小首を傾げた。

そんな堅苦しい彼女に、紅蓮が優しく語りかける。

「白雪。そんなにかしこまらなくていいんですよ？ 皆仲間なんですから」

「いえ、私は紅蓮様を守る事が全てですので、私の事など気にかけていただかなくても大丈夫です」

すぐにそう言葉を返す白雪の顔を見て、紅蓮は言葉を続けた。

「……私は固有スキルのおかげで死なないですから、心配いりませんよ？ それより、私は白雪の方が心配です」

「ですが紅蓮様のスキル『イモータル』には、1時間使用したら5分のインターバルを取らなければいけないという致命的な欠点があります」

「それはいつも言ってますが、5分なんてあつという間です。そんなものデメリットにもなりません。自分でなんとかしますし……」

それを聞いた白雪が「ダメです！」と声を上げて立ち上がる。

驚きもせずに紅蓮は白雪の顔を見上げた。

「紅蓮様は普段から、攻撃を避けるのが得意ではないではありませんか！」

「……ですが、攻撃をする際には、敵にも隙が生まれやすくなりますから」

「そうですね。紅蓮様はそれでいいのです。私が紅蓮様を必ずお守りします！」

白雪は紅蓮を守り切る決意を新たに、拳を握り締めた。

熱意の籠った彼女の瞳に、紅蓮は諦めたのか小さく息を吐いた。

守ってもらえるのは嬉しいが、それで仲間が危険に陥るならば、それは本末転倒だ——だが、紅蓮は『まあ、危ない時は守ってあげればいいですね』と心の中で呟き、パクツと手に持っていたおにぎりに噛み付く。

その直後——。

「——はッ！ 誰ですかッ!？」

紅蓮は背後に気配を感じて、袴の内側に忍ばせていた短剣を抜くと身を翻すと、そこには涎を流しながら、立ち尽くしている小虎の姿があった。

「……小虎？ どうしました。突然後ろに立って」

小虎は武器を向けられていることなどお構いなしに、その視線は紅蓮の出したサンドイッチに釘付けになっている。

「姉さんの……サンドイッチ……」

小虎は生唾を呑み込むと、まるで餌を目の前に待てをさせられている犬の様に純粋な瞳で箱に入ったサンドイッチを見つめていた。

まあ、一番最初に休みたいと言ったのは彼であり。流れで、結果的に一番最後に回されるかたちになった小虎は、もう我慢の限界だったのだろう。

「ああ、小虎にはまだ渡していませんでしたね。どうぞ」

「わーい。姉さんありがとうございます！」

小虎は差し出されたサンドイッチを掴むと、待ちきれなかったのか一気に口の中に頬張った。

「——んぐ!? んんんんんッ!!」

突然、口をもぐもぐと動かしていた小虎が、急に両手足をばたつかせながら苦しみ出す。

それを見た紅蓮は冷静に飲み物の入ったコップを小虎に手渡すと、彼はそれを勢い良く飲み干した。

小虎は喉に詰まらせた物をやっとの思いで飲み込むと、ほっとしたように息を吐く。

「はあく。死ぬかと思った……」

「小虎が焦って食べるからです。そんな事しなくても、たくさん作ってきたので心配いりませんよ?」

紅蓮はそう告げると徐にコマンドを操作し、アイテムの中から更に箱を取り出して、小虎に見える様に蓋を開ける。

中を覗き込んだ小虎は、喜びのあまり声を上げた。

「——これはたまごサンドじゃないですか!!」

「はい。小虎が前に好きだと言っていましたから、食べますか?」

紅蓮はたまごサンドがぎっしり詰まった箱を突き出して首を傾げて尋ねる。

小虎は「食べます!」とその箱の中からたまごサンドを掴むと、美

味しそうに頬張った。

「さぶがはねえふあん……ふおいひいれす！」

紅蓮は口の中に頬張ったままもごもごと喋ってる小虎を見て、呆れ顔で小さく息を吐くと。

「分かりましたから、ゆつくり食べて下さい。そんな事では、また喉に詰まらせますよ？ それに口に物を入れて喋るなんてお行儀も悪いです、小虎」

「もぐもぐ……はい！」

仲が良さそうな2人のやり取りを見ていたマスターが微笑みながら「まるで姉弟だな」と呟く。

それとは対照的に、メルデイウスと白雪の2人は、その様子を不機嫌そうに見つめていた。

「小虎の奴。紅蓮に迷惑かけやがって……今度稽古つけてやる時には、みっちりしごいてやる！」

「紅蓮様を独り占めして——う、うらやましい……」

「はあ……」

(こやつらにも困ったものだ……)

小さい声でぼそぼそと呟いているメルデイウスと白雪を見て、そう心の中で呟いたマスターは苦笑いを浮かべていた。

それからしばらく休息を取った後にそれぞれ出した馬に跨る。

前の馬は使用限界がきてしまった為、今乗っているのは別の馬である。

馬を呼び出す笛は各町の道具屋で買うことができ、値段も3000ユールクらいなのでそれほど高額なものではない。

駆け出しのプレイヤーには厳しい金額だが、ある程度のプレイ歴があるプレイヤーならば、3個は持っているのが当たり前のアイテムである。

この後もロケットの切り離し方式の様に、次々と使用限界のきた馬を乗り換える予定となっていた。

今向かっている名御屋まで、まだまだ先は長い。あまり一箇所でゆつくりしている時間はないのだ。

先頭のマスターはマップで現在地の位置を確認して小さく呟く。

それは地図に乗っている『始まりの街』という記載が理由だった。

「ここからもうしばらく行けば、始まりの街か……カレンはしっかりやっているかな」

マスターは口元に微かな笑みを浮かべると、馬に跨ったまま彼の掛け声を待っている。

馬を後ろに向けると、手綱をしっかり握り締め、マスターが声を張り上げて叫んだ。

「それでは出発するぞ!!」

『おー!!』

マスターの言葉に合わせるように、全員が腕を空に突き上げながら声を上げる。

その声の直後馬の蹄の音とともに、再び名御屋へと向かって進み始めた。

数時間後。森の入口付近まで来たところで辺りが暗くなり始めたこともあって、森に入るのは明日にした方が懸命である。と言う話でまとまり。完全に日が落ちるまでの間、マスター達は今夜野営る場所を探していた。

野営に適した場所を見つけると、テントの設営や夕食の準備などで、皆忙しく動き回っている。その時、どこからともなく女性の悲鳴の後に「助けて!」という声が数回聞こえてきた。

「……………じい!!」

「うむ!」

それに直ぐ様反応したマスターとメルディウスが、互いの顔を見合わせて静かに頷く。

そして、すぐにマスターは紅蓮達の方を振り返り叫んだ。

「お前達はここで待て! 儂とメルディウスの2人で様子を見てくる

! ゆくぞー!」

「おう!」

2人は野営の準備の為、一度はしまった武器を再び装備するとその

声の方へと顔を向ける。

今にも走り出そうとしたその時「待つてくれ！」という小虎の声が耳に飛び込んできた。

振り返ったメルデイウスが小虎の方に視線を向ける。

「小虎どうした？」

「僕も、僕も一緒に連れて行ってくれ兄貴！」

そう叫ぶと、決意に満ちた瞳で小虎はメルデイウスの顔を見つめている。

メルデイウスはそんな小虎から顔を逸らすと、大きな声で怒鳴った。

「ばかやろう！ お前がここに残らないで誰が紅蓮を守るんだよ！」

「だ、だけど兄貴！」

言い返そうとした小虎に、メルデイウスが背を向けながら言葉を続けた。

「——女を守ってやるのは男の仕事だつて教えてだろ！ それに、これが俺達を誘き寄せる為の罠とも限らねえ……なに、俺達の心配はいらねえー。お前達の大將はそんなに軟な男じゃねえーだろ？」

「……兄貴——了解つす！ 姉さんの事は僕に任せてくれよ！」

小虎は力強く胸を叩くと、メルデイウスは微かに笑みを浮かべた後、待機させていた馬に跨ると、マスターと共に森の中へと駆けていった。

名御屋までの道中2

マスター達が助けを呼ぶ声の方へと徐々に近付いていく。すると、視界に入ってきたのは初期装備の革鎧を着けた少女が崖を背に、5人の重装備をした男達に囲まれ震えている姿だった。

しかし、マスターとメルディウスは林の影に身を隠して、すぐには助けようとはせず、彼等の様子を注意深く観察し始めた。それは、未だに罠であるという可能性を捨て切れないからに他ならない――。

男達に囲まれていた間も少女は声を大にして「誰か助けて!」と叫び続けていた。

その直後、彼女の顔の横の岩肌にも男の拳が突き刺さる。

「さつきからどんなに叫んだって無駄だつて言つてんだろ? 往生際の悪い女だな……」

鎧を着たスキンヘッドの男が不機嫌そうに言い放つと、その隣に居る男達も口を開く。

「そうだぜ。今のこの世界に、お前みたいな雑魚プレイヤーを助けてくれるお人好しなんて誰もいねえーよ!」

緑色の鎧を着た黒髪の男が、恐怖で涙を瞳に溜めて怯えている少女の耳元で強い口調で言った。

「どうせ身体だつてデータの集合体だろ? 俺達と楽しめばいいじゃん。可愛がつてやるからさ」

鎧を着た茶髪のチャラそうなロングヘアの男が、下心を露わにして不気味に笑う。

そんな男を少女は、嫌悪感に満ちた瞳で見た。彼等は全員が重そうな重鎧を身に纏っている。

このフリーダムで1番の防御力を誇る重鎧を身に付けていながら、初期装備の革鎧のか弱い少女を囲んでいる姿は、とても見ていて気持ちのいいものではない。

最近はお助けがくるかも分からないゲームの中に閉じ込められ心が荒んだ者達が、こうした女性の初心者プレイヤーを狙う事件が増している。大半が女性プレイヤーの体目当てに近付いてきた者達で、数

人で1人を襲うのが通例となっていた。

それは男としてではなく生物の雄としての欲求を満たす為、数少ない女性プレイヤーをなるべく多くの者達で喰い荒らす為に行われる非道な行いだ。

運営が機能していれば、こう言った犯罪に近い行為にはアカウント削除処分となり。関連の企業、主にゲーム運営会社で今後一切の利用ができなくなるのだが、今はそこが機能していない為、やりたい放題の無法地帯と言うわけだ――。

男達は皆、薄気味悪い笑みを浮かべている。

少女も自分がこれからどうなるのかを悟っているのか、今にも泣き出しそうな表情で助けを求めるように辺りを頻りに見渡した。

しかし、男達の言う通り。日も落ち始めているこの時間の森の中では、人など歩いていくはずもない。

現実を受け入れ始めた彼女の顔には絶望の色が濃くなっていく。

おそらく。少女は『こんなはずじゃなかったのに……』と心の中で思っていることだろう。その瞳には、後悔の念を感じる悲壮感で溢れていた。

最初は軽い気持ちで狩りに誘われ、彼等も感じが良さそうだったので、彼女は男達のパーティーに入ったのだろう。だが、それが全ての間違いだったのだ……。

パーティーに入ったことにより、名前とLvを彼等に知られてしまい。更にはマップに、彼女の位置情報がマーカーで表示されるようになってしまった。

ある程度のレベルの女性プレイヤーなら、不用意に男性だけのパーティーにはいかない。しかし、初心者彼女がそんなことを知っているはずもなく。

ワールドの人気のない森に連れてこられ、急に乱暴しようとしてきた彼等から必死に逃げてきた結果。森の奥の、しかもこんな場所に彼女は追い込まれてしまったのだろう。

(こんな事ならお兄ちゃんの言う通り。低レベルのモンスターを狩って宿屋に閉じ籠もっている方が良かった……)

瞳から涙を流した少女が心の中で悔やんでも、過ぎた時間は取り戻せるはずもなく――。

「お前の装備なんていらねえからちやっちやと脱げよ！」

スキンヘッドの男が催促するように叫びながら壁をもう一度強く殴った。

少女は怯えた様子で、身体を小刻みに震わせた。

「そうカリカリするなって、この子は俺達に脱がせて欲しいんだよ――なっ！」

そう言う耳にピアスを付けたチャラそうな男が、一步前に出て彼女の革鎧に手を掛けた。

その瞬間「イヤッ！」とその手を振り払うと、少女はその場にうづくまった。

すると、その男の態度が急変する。

「なにすんだよー！」

声を荒げた男が少女の茶色く長い髪を鷲掴みにすると、強引に彼女を立たせた。

「いやー！ いたい、やめて!!」

そう叫んだ直後にパン！と乾いた音が響き渡った。

男は自分の頬を押さえながら、驚きを隠せないという表情で少女の顔を見つめている。

「図に乗ってんじゃねえよ！ お前立場分かってんのか!? この世界で殺されれば現実でも死ぬんだぞ！ それとも、試しに死んでみるか？」

「……ひっ！ いやあ……」

少女は涙を流しながら首筋に突きつけられた剣を見つめ、恐怖で掠れた声を上げた。

そんな少女の反応を楽しむかのように、彼女の身体を好き勝手に弄っている。

「や、やめて……」

「ふはっはっ！ やめてほしかったら強くなる事だな!!」

少女は涙混じりの声でそう呟くと、黒い鎧の男が狂ったような声を

上げて少女の装備を剥ごうと手を掛けた。

「——ほう。強ければ、何をしてもいいのだな？」

その時、どこからか何者かの声が辺りに響き渡る。

『だ、誰だッ!?』

男達は一斉にその声の方を向いた。

彼等の視線の先には、太い木の枝から彼等を見下ろしている髪を後ろで縛った白髪頭の黒い道着を纏った老人が腕組をして仁王立ちしている姿があった。

それは紛れもないマスターの姿だ——。

『誰だお前は!!』

「——お前達のような。獣同然の者に名乗る名などないわっ!!」

マスターは高く跳び上がると、彼の拳が黒いオーラを纏う。

「くたばれ。この外道が!! ダークネスフレアアアアアアッ!!」

その直後、マスターの掌から圧縮された闇属性のオーラが発射され、男達の周りはたちまち砂煙に包まれた。突然の遠距離攻撃に男達も何が起きたのか分からず、砂煙の中でひたすら怒鳴り声を上げている。

マスターは地面に着地すると、その隙きに少女を抱きかかえて離脱したメルデイウスが現れた。

「——ふむ。首尾良くやったようだな。メルデイウス」

「おう！ それじゃとどめと行こうか。じじい！」

メルデイウスは少女をその場に降ろすと、剣を構えて跳び上がった。

マスターも両手を前に突き出すと、その手に再び黒いオーラが立ち上がる。

「ダークネスフアング!!」

すると、マスターは黒いオーラを帯びている手を地面に向かって両手を突き刺す。

両手の黒いオーラが地面に吸い込まれた次の瞬間。オーラで作られた大きなドラゴンの頭が現れ、砂煙ごと男達を呑み込んだ。

マスターの技の効果で、ドラゴンの口の中に閉じ込められた彼等は

闇属性のダメージを受けている。その直後、空中高くに跳び上がったメルディウスの愛用のベルセルクが大斧の姿へと変わる。

メルディウスは大斧を頭上に構えると、マスターの出したドラゴンの鼻先目掛けて、勢い良く振り下ろした。

「うおりゃあああああッ!! 吹き飛ばせベルセルク!!」

彼の大斧が当たると同時に、ドラゴンの内部で凄まじい爆発が連発して起きる。

マスターの必殺技『ダークネスファング』の発動中は、内部外部両方からの攻撃の全てが中に通るのだ――。

メルディウスはマスターの隣に着地した直後、2人は声を揃えて「終わりだー」と叫ぶと、ドラゴンの頭が姿を消して中にいた男達諸共大きな爆発が起こって彼等は勢い良く空へと吹き飛びそのまま地面に落下する。

「――さすがだな。メルディウス」

「――お前もな。じじい」

2人は顔を見合わせ互いを讃える様にニヤリと笑みを浮かべると、お互いの拳を打ち付けた合った。

っと思いついたように、メルディウスが身を翻す。

「おっと、そうだー!」

メルディウスは倒れている男達を踏みつけると、困惑した様子で2人を見つめている少女の元へと向かった。

少女は目を泳がせて、メルディウスと必死に視線を合わせないようになっている。

先程まで男達に襲われ、乱暴されそうになっていたのだ、マスター達を警戒するのは当然といえば当然の反応だろう。

「あの……私を助けてくれたんですね……?」

疑うようにそう小さく尋ねてきた少女に、メルディウスは精一杯の微笑みを浮かべて優しい声音で答えた。

「おう、危ないところだったな。だが、もう大丈夫だ」

「はあ。良かった」

少女はその言葉を聞いて、その場にペタンと座り込むと瞳から涙が

流れ落ちる。

「うっ、ひぐっ……」

「おっ、おい！ もう大丈夫だって言っただろ!？」

急に泣き出してしまふ少女に向かって、メルデイウスは慌てて駆け寄った。

マスターは闇属性の効果によって動けない男達を、まとめて道着の帯で体をぐるぐる巻きにしながら小さく呟く。

「あんな事があったのだ。仕方なからう……それよりも、ここの治安も悪くなっているようだな」

「ああ、そうみたいだな。始まりの街は、元々俺達が仕切ってたからな」

メルデイウスはマスターに縛られたまま、項垂れている男達を見て言った。

「そういえばそうだったか……」

昔のことを思い出しているのか、マスターは感慨深げにそう遠くを見る眼をした。

過去にマスターが四天王と組んでいたギルドが、本来は始まりの街を中心に活動していた。

大規模なギルドや力のあるギルドが、拠点としている街の治安維持を買って出るのも少なくない。

本来の仕様のPVPは本人が認証しなければ行えない為、余程のことがない限りは問題が起きることはない。

問題なのはプレイヤーが誘導してモンスターを街の中へと引き入れてしまうことだ——悪意を持って故意に連れて来る場合もあるが、殆どは初心者プレイヤーが追われて仕方なく街の中へと逃げ込んでくることの方が圧倒的に多く。

その処理でもその街の頭を張るギルドのレベルが知れる為、挙ってモンスターの討伐をする。

だが、今は正常な状況とは異なり。リスクを最小限に抑えるギルドが多く、殆どは正常時と同じく、街周辺に現れた高レベルモンスターの処理だけを行っている為、ギルドの負担となる違反者の取締を積極

的に行わないのである。

しかし、それはモンスターを引き込んでしまった場合だけだ。運営が居ない今は、悪意によるPVPを起こした者を裁く方法はプレイヤーのさじ加減ひとつだ。

そう。今2人の目の前に居る男達の行く先を決めるのも……。

「でも、この男共はどうするんだ？ こいつも置いてくわけにもいかねえしよー」

メルデイウスはまだ泣き止まない少女の方を見ながら、ため息混じりに呟いた。

マスターはそんなメルデイウスの疑問に直ぐ様答えた。

「うむ。反撃されても面倒だからな。このまま少し離れた場所まで行ってから道着を装備しなおせば良い」

「ああ、そういえばそうだった。なら早くここを離れようぜ。……よっと」

メルデイウスは泣いている少女を強引に背負うと、マスターの方を向いて小さく呟いた。

「早く戻るぞ。遅くなると紅蓮が心配する……」

頬を微かに赤らめながらそう告げるメルデイウスに、マスターは微笑を浮かべ頷いた。

マスター達が紅蓮達の元に戻ると、女性を背負ったまま戻ってきた2人を見るなり。レジャーシートの上に小虎と腰掛けていた紅蓮が駆けてきた。

紅蓮は心配そうな表情でメルデイウスの顔を見上げると、マスターに向かって尋ねる。

「あの、マスター。メルデイウスが迷惑をおかけしませんでしたか？

それと、お怪我はありませんか？ マスター」

「ああ、大丈夫だ。それよりも紅蓮達の方は変わりないか？」

「……ええ、こちらは大丈夫でした」

2人が淡々と話していると、蚊帳の外になっていたメルデイウスが耐えかねたように声を上げた。

「ああああああく！ 紅蓮！ どうして俺の心配をしないでじじいの心配をしてやがるんだ！ それに何よりも先にツツコムところがあるだろうが!!」

「ああ、あなたに関しては、心配するだけ無駄ですし」

顔を真っ赤にしながら、そう叫んでいるメルディウスに、紅蓮は顔色一つ変えずにそう答えた。

その後、メルディウスの背中に乗っている少女を細目で見ると言い難そうに口を開く。

「それに……女性を誘拐してくるような事は、さすがにまずいですよ？」

対応に困った顔で、あからさまに視線を逸らす紅蓮。

あえて触れなかったのは、自分のギルドマスターが女性を誘拐してくると思ってもみなかったからだろう……。

「誘拐してきてねえー!! それに、少しは偵察に出ていたギルマスである俺の労をねぎらっても、別にバチは当たらないと思うぞ？ 紅蓮」

「……それを自分で言うのはどうかと思いますよ？ ギルマス」

彼がそう言うと、紅蓮は眉をひそめて軽蔑の眼差しを向けた。

メルディウスはその言葉にショックを受けたのか、その場に手を付いて項垂れる。

地面に手を付いているメルディウスの背中から少女は降りると、どんよりとした空気の中。今も地面に両手を付いている彼を励ませばいいのか、そつとしておけばいいのか分からず困っている様子だった。

「自分で言っつて、自分でダメージを受けておっつては世話ないな……」

その様子を見ていたマスターが呆れながら小さく呟く。

そんなメルディウスのことなど気にかける様子もなく、紅蓮は少女の前まで歩いてくると、彼女にすつと手を差し出した。

それを見た少女は首を傾げると、紅蓮が笑みを浮かべ口を開いた。

「理由は分かりませんが、メルディウスが連れてきたのなら悪い人ではないので、お近付きの印に……」

「あっ！ は、はい！」

少女は紅蓮の手をぎゅつと握ると、軽く会釈をする。紅蓮は小さな声で「よろしく」と抑揚なく言うと、彼女も「こちらこそ」とにっこりと微笑んで返事を返した。

小虎はどんよりとした雰囲気の中でブツブツと呟きながら、項垂れているメルディウスの背中をポンつと叩く。

「兄貴。姉さんに褒めてもらいたいなら、もっと素直になりなよ」

「うるせえー。男が女に褒めてくれなんて簡単に言えるか、ばかやろー!!」

メルディウスのその悲痛な叫びは、薄暗くなった空にどこまでも響いていた。

名御屋までの道中3

その夜。森の入口にテントを張った前の焚き火で紅蓮と白雪が夕食を作っていると、男性陣が徐ろにテントを設置した中から、人の背丈ほどの樽を担いで出てきた。

彼等のこそそとした様子が気になったのか、鍋の中をかき混ぜていた紅蓮が彼等に尋ねた。

「マスター。何をやっているのですか？」

「うむ。実はな、メルデイウスが紅蓮達の為にと——」

「——ああー。じじい余計なことは言うな！ 紅蓮は気にせず料理をしててくれ！」

口を開こうとしたマスターの肩に腕を回して言葉を遮ると、メルデイウスがわざとらしく笑った。

それを不信感に満ちた瞳で紅蓮が見つめると「また何か企んでますね」と怪訝そうに呟く。

メルデイウスは「いや、なにも」と大袈裟に両手を振って首を横に振ると、巨大な樽を担ぎ小虎の耳元でささやいた。

「小虎。お前は俺達が出てる間、しっかり紅蓮達が入らないように見張ってろよ？」

「OK！ 任せてよ兄貴。ここは死守するぜ！」

「おう。頼んだぞー！」

小虎が自信満々に胸を張る姿を見てメルデイウスは笑みを浮かべ、マスターと一緒に森の中へと消えていった。

紅蓮はそれを確認してから、おたまを隣の白雪に渡すとテントの前で仁王像の様に腕を組んで立っている小虎の元へと向かった。

「小虎。その中に何を隠してるんですか？ 教えなさい」

「チツチツチツ……それは姉さんでも教えられないな。これは男と男の約束なんだ。男同士の約束は絶対なんだ！」

「……………」

無言のまま頑なに拒否する小虎の姿勢を見て、紅蓮は少し考える素振りを見せて徐ろに口を開く。

「——そうですか。今日は小虎の好きなカレーなのに残念ですね……サブギルドマスターの私に隠し事をするような子には、白いごはんだけにしましょう」

「——ッ!?!」

小虎はそれを聞いて少し顔を引き攣らせ悩んだものの、すぐに首を振って大きな声で叫んだ。

「中に入られると、サンライズにならないからダメなんだ!」

「……サンライズ?」

（——日の出の事? あつ、サプライズの事でしょうか……相当動揺してるようですし、これ以上は可哀想ですね）

そう心の中で呟くと、紅蓮は大きなため息を漏らした。

「はあく、分かりました。秘密ならしかたないですね」

そう言ってくるつと身を翻し、呆気ないほどに素直に鍋の方へと戻っていった。

まあ、メルデイウスが悪さをする気ではないと分かった時点で、紅蓮はそれ以上は追求する必要がないと考えたのだろう。

離れていく紅蓮の後姿を見て、ため息交じりに呟く。

「はあ……緊張した。でも僕、守り切ったよ兄貴!」

小虎はほつと胸を撫で下ろすと、夜空に向かって親指を立てた。

その頃、森の中へ入って来たメルデイウスとマスターは川を見つければ、そこに担いでいた巨大な樽を沈める。

樽を川に沈めながら、同じ様に樽を川に沈めているメルデイウスに向かつてマスターが尋ねた。

「メルデイウスよ。どうしてあの娘を連れてきたのだ?」

「あはははっ! なんだ? 部外者をパーティー入れるのに抵抗があるのかよ。じじいは女一人で何ができると思ってたんだ?」

メルデイウスはマスターの顔を見て、見下すようにほくそ笑む。
そんな彼の態度に表情一つ変えずに、マスターが言葉を返す。

「まだ奴等の仲間である疑いが晴れた訳ではない。初心者装備など珍しいものでもなければ、入手も困難ではないから……それに今はこんな状況だ、容姿に関係なく警戒しておくに越したことはない」

「心配には及ばねえーよ。俺は仮にも大手のギルドをまとめるギルマスだぞ？ 人の見る目はある！」

メルディウスはそう言っただけで力強く頷いた。

(こやつ。おそろく、それほど深くは考えておらん……)

マスターは呆れ顔でニヤツと笑みを浮かべている彼を見て、大きいため息をついている。

水を汲み終えた2人がテントの方に戻ると、短剣を握り締めている紅蓮を白雪と小虎が両サイドから必死に押さえ込んでいる光景が飛び込んできた。

殺意に満ちた冷たい雰囲気をつらつらとした紅蓮の、突き刺すような視線の先には慌てふためきながら地面に座り込んでいる少女の姿があった。

「姉さん落ち着いて！ 別にそんな気にすることないって！」

「そうです、紅蓮様！ この方も悪気があったわけではありませんから!!」

「……分かりましたから、2人共放して下さい。この人は私の事を侮辱しました……とりあえず。この人の息の根を止めてから落ち着きます……」

紅蓮は殺意に満ちた眼差しを向け、2人は「全く分かってない」と大声で叫ぶ。

無表情だが明らかに激昂している紅蓮の様子に、少女は怯えながら座り込んだままずると後退する。

「ひええええええー！ ど、どうしたのっ!? 紅蓮ちゃん。そんな危ないものを！ か、かわいいって言ったただけなのにつ!!」

「あなたはまだ黙ってて下さい!!」

完全に腰が抜けて立てなくなっている少女に向かって2人が叫ぶ。そこに溢れんばかりに水を入れた樽を担いで、2人が駆け足で戻ってくる。

彼等の目の前まで来ると、メルディウスは静かに怒り狂う紅蓮の様子を見て、めんどくさそうに頭を掻いている。

「ああ、紅蓮のNGワードに触れたか……お前達。もうちよつとだけ

頑張ってるよ。——って事で頼むぜじい」

「……なに？」

メルディウスは不思議そうに首を傾げているマスターに耳打ちすると。

マスターは眉をひそめながらも「この状況だ。仕方なかろう」と大きなため息をつき、紅蓮の耳元でささやく。

「——紅蓮よ。月明かりに照らされたお主は、まるでかぐや姫の様に美しいな……」

「……美しい」

マスターのその言葉に、紅蓮はぴたりと動きを止めると、顔を真っ赤に染めながらへなへなとその場に座り込んで、今までのことが嘘の様に大人しくなる。

この事件で分かったのは、紅蓮はメルディウスだけではなく、誰であつても『かわいい』という言葉に過度な反応を示すということだ。そして『美しい』という言葉に弱いらしい……。

「マスター。そんな、私がかぐや姫のように美しいだなんて……そんな、私はそんな素晴らしい女性じゃ——」

紅蓮は体をくねらせながら、独り言を口にしていく。

それを見ながら、その場に居た全員が心の中で思っていた『繊細なのか大雑把なのかどっちなんだろう』と……。

メルディウスは地面に置いていた水のたつぷり入った樽を再び肩に担ぐと「紅蓮の事は任せる」と言い残してテントの中に入っていた。その後マスターも続いていく。

2人がテントに入って1時間が経過した——。

一時的に取り乱していた紅蓮も落ち着いたらしく。少女の顔を直視することができずに、ずっと地面を見つめていた。

それは少女の方も同じようだ——しかし、こちらは怯えているのか、体が小刻みに震えている。

それもそうだろう。未遂に終わったとはいえ、紅蓮に殺されかけたのだから、彼女が怯えるのも無理はない。

無論。ゲームのシステム上は対人戦では、装備した武器で対戦相手

のHPを『0』にするのは不可能。

だが、初心者の彼女にそれが分かるはずもなく。おそらく、本気で殺されると感じたのだろう。

白雪と小虎も2人の気まづい雰囲気はどうしたらいいのか分からず、黙りを決め込んでいた。

こんな時にギルドメンバーをまとめるのがギルドマスターの仕事なのだが、肝心のギルドマスターは、一般的な物より一回り大きなテントにマスターと籠ったまま出てくる気配すらない。

そんな時、テントの中からメルディウスが満面の笑みで出てくるなり、大きな声で叫んだ。

「よーし。準備ができたぞ！ そんじゃー。女性陣から先に入ってくれや！」

「……あの。急に入れと言われても、何があるか私達は聞いていませんよ？ メルディウス」

不安そうな表情でそう告げた紅蓮に、メルディウスは入ってみれば分かると言わんばかりに、彼女の背中を押してテントの中へと誘導する。

テントの中へ入った紅蓮は、きよとんとしながらテント内を見渡している。

そこには檜でできた浴槽から湯気が立ち上っていて、その後ろには富士山の絵が書いてあり。周りを布に囲まれているテントの中には、なかなかの銭湯感を醸し出している。

彼等が樽を担いでわざわざ川まで水を汲みに行っていたのには、こういう裏があったのだ――。

紅蓮は一步一步踏み出して浴槽の方へと近付くと、檜の浴槽の中になみなみと注がれたお湯の中にゆっくりと手を入れた。

「……ちゃんと暖かいですね」

その発言からして、彼女が最初は疑っていたことが分かる。

まあ、彼女がそう思うのも無理はない。森の中から持ってきた水がお湯に変わるわけがないし、第一にこの檜の浴槽も疑わしく思えて仕方ない――。

「——この浴槽はどこで手に入れてきたのでしょうか？」

紅蓮はその檜の浴槽について入り口に立っていたメルディウスに尋ねると、彼は恥ずかしそうに口を開く。

「い、いや。それはだな……」

メルディウスは恥ずかしそうに鼻の先を掻いていると、彼に代わって紅蓮の言葉にマスターが答える。

「その風呂は儂が天王戦の第1回大会の時に貰った物なのだ！ 何でも欲しい物をくれると言うのでな。修行の為に狩場に居ることの多い儂がそれを注文したのだが、沸かすのに多くの水が必要でな。なかなか活用できなかったのだ」

それを聞いて紅蓮が「なるほど」と呟いてため息を吐く。

「つまり、メルディウスはマスターの案に『乗っただけ』ということですか？ 小虎が執拗に隠すので何かと思っただけ……。まあ、そんな事だろうと思いましたが」

「なっ！ ちがうぞー！ じじいがアイテムボックス内を見て、風呂に入れればいいなって言ってたからよー。だから、俺が計画してだ——」

瞳を閉じたメルディウスが腕組しながら、経緯を説明しているその横で紅蓮が。

「ありがとうございます。マスター」

っと、マスターに向かってぺこりと頭を下げている。

「——って聞けよっ!!」

メルディウスはそんな紅蓮に向かって叫ぶと、紅蓮はそれを無視してテントを出た。

それを見てメルディウスは落ち込んだ様子で地面に手を付いた。

「くそ、どうして俺ばかりこんな役回りなんだ……」

「……どんまいだよ。兄貴」

どこからともなく現れた小虎が、ぽんつとメルディウスの肩に手を乗せて慰める。

テントから表に出た紅蓮は、外で待っていた白雪と少女に声を掛けた。

「——2人共、マスターがお風呂を用意してくれました。せつかくのご行為に甘えさせてもらいましょう」

「お風呂ですか!? 私、お風呂大好きなんですよねえ〜」

少女はそう口にして、ぎこちなく笑みを浮かべている。

「紅蓮様とお風呂……是非、お伴させて下さい！ 紅蓮様のお背中、お流しします!!」

それを聞いた白雪は、一瞬顔を真っ赤に染めたが、すぐに首を横に振って背筋を正した。

紅蓮は何食わぬ顔で「なら、お願いします」と頷くと、マスターの方を振り向き口を開く。

「マスター。それではお先にお風呂を頂きます」

「うむ。ゆつくり入ってくるといい。儂らは出るぞ！ メルデイウス」

「ああ、そうだな。行くぞ！ 小虎」

「え、兄貴。僕も姉さん達と一緒に入りたい！」

「却下だ！」

口を尖らせながらそう言った小虎の首元を引っ張ると、メルデイウスとマスターはテントを後にする。

紅蓮達は出ていく彼等と入れ違うようにテントの中に入ると、テントの幕を下ろした。

名御屋までの道中4

テントの中には、木の板が敷き詰められた地面の上にタオルとバスタオルが入ったかごが置かれている棚が配置してあり、簡易的な脱衣所になっていた。

最初は遠慮がちにしていた3人だったが、檜の浴槽から立ち込める煙に、お風呂には当分入れないと思っていたのが、それがお風呂に入れるということへの実感が湧いてきたのか。

徐々にテンションが上がってきて、彼女達は上機嫌で身につけていた衣服を脱ぎながら、ふと我に返った紅蓮が呆れ顔で小さく呟く。

「何をやってるんでしょね。別にコマンドから装備を外せばいいだけなのですが……」

「いいえ、紅蓮様。確かに外せば早い話ですが、それを実際に脱ぐことに意味があるのです」

「……どんなですか？」

不思議そうに小首を傾げた紅蓮は、隣で下着姿になって人差し指を立てている白雪に尋ねる。

紅蓮の質問に白雪は難しい顔で唸ると、ふと思いついたように目の前の棚とかごを指差した。

「そう！ 今はこの世界も現実と変わらないのです。つまり、今はここがリアル。それを伝える為にというギルマスの配慮なんですよ！」

「……はあく、白雪は買い被り過ぎですね。あの人はそこまで考えてませんよ。きつと雰囲気が出るから……程度にしか考えてません」

紅蓮は眉をひそめ、呆れながら大きなため息を漏らす。

その会話を横で聞いていた少女が紅蓮に問いかけた。

「紅蓮ちゃんってさ、あの人のことが好きなの？」

「……何を言ってるんですか？ メルデイウスとは腐れ縁です。もう長い間一緒に居るんですから、彼の考えそうな事は大体予想がつくだけです」

紅蓮は無表情のまま淡々と答えると、少女は少しつまらなそうな顔で「そうなんだー」と呟く。

浴槽の横に置かれた桶でお湯を掬うと、3人は体を洗い始める。

白雪は言っていた通り、タオルを手にとって紅蓮の背中念入りに洗う。

普通ならくすぐったがってキャツキャウフフな展開になるのだが、この2人の場合はそんなこともはありえないのだろう。落ち着いた様子で、瞼を閉じた紅蓮が白雪に背中を洗ってもらっている。まあ、白雪の方は顔はにやけていたが……。

その姿を見ていた少女が口を開いた。

「そういえば、2人は本当に仲良いですよ。姉妹なんですか?」

彼女のその言葉を聞いて、白雪が直ぐ様それを否定した。

「姉妹だなんてとんでもないです! 私は紅蓮様をお護りするだけの存在ですから!」

「……お護りする?」

あたふたしながら白雪がそう答えると、その返答に少女は首を傾げた。

そんな彼女に向かって紅蓮が口を開く。

「そうですね、姉妹もいいかもしれません。そうすると、私が姉になるわけですね。白雪」

「……えっ?! いやいや紅蓮ちゃんは絶対に妹でしょ? どう見たつて、白雪さんがお姉さんじゃないの?」

紅蓮の言葉に対しての彼女の素早いツツコミに、穏やかだった紅蓮が一瞬にして凄まじい殺気を放ち。

「……やはり。貴女にはおしおきが必要なようですね……」

手に持っていたタオルをゆつくりと絞り上げながら、紅蓮は抑えきれない憤りを露わにすると俯き加減に小さく呟く。

咄嗟に身の危険を察知した白雪は慌てて話を切り替える。

「あー。紅蓮様! そういえば、私達が会いに行く四天王の方はどんな方なのですか?」

どうやら白雪の作戦は成功したらしく、紅蓮の放っていた殺気が消えた。

「ああ、バロンですか? 彼は一言で言えば、効率を重視するタイプ

……ですかね。固有スキルは『ナイトメア』数千という兵士を一瞬で召喚し、周りの敵を駆逐します。しかも彼いわく、まだまだ出せるのか——世界のテスターと呼ばれるプレイヤーの中でも、間違いなく上位に入る固有スキルの持ち主です」

「そんな方と今から戦うんですか……」

「マスターはメルデイウスだけで……と言っていましたでしたが、彼だけでは不安です。私も付いて行こうと考えています」

その話を聞いた2人が急に険しい表情になった。

まあ無理もない。話だけ聞いていても、勝ち目があるような相手には思えない——しかも、個体が強化されるのではなく周囲に数千もの兵士を召喚する固有スキルの持ち主。

そんなチート持ちの相手に、手練とは言え。紅蓮、メルデイウスだけで挑むなど自殺行為としか思えない。

彼女達の心配を察してか、紅蓮が優しい声で白雪に語り掛けた。

「大丈夫です。私とメルデイウスは彼にとっての天敵みたいなものですから」

「……それはフリーダムがゲームだった時の話です！」

紅蓮がそう言うと、白雪は拳を握り締めて震えたような声で叫んだ。

その声に驚いたように目を見開いている紅蓮に白雪が言葉を続ける。

「確かにギルマスと紅蓮様のコンビは、この世界では最強かもしれないけど……でも、今は違います！ 紅蓮様も不死の能力が今まで通り発動するか分からない。ギルマスも同じで、周りを巻き込み自爆する『ビッグバン』を使えません。こんな状況では数千の兵を動かす四天王と、まともな戦闘なんてできない事は、紅蓮様も気がついていないはずですよ!!」

「……そうですね」

紅蓮は俯き加減にそう答えると、ゆっくりとした口調で話し出した。

「あなたの言う事は正しいですよ白雪。この状況下で、私もメルデイ

ウスも固有スキルは発動するか試していません。ですが、危険な状況だからこそ、あなた達にはお願いできません。これは同じ四天王と呼ばれ、ギルドを率いる私達がやらなければいけないんです。毒を持って毒を制す——四天王の相手ができるのは私達、四天王だけです……大丈夫。私達を信じて下さい」

「紅蓮様……分かりました。ですが私もお供致します！」

「……なッ!? それは——」

「——ダメと言われても付いて行きます！」

紅蓮が言葉を返す前に、白雪が割り込んで叫んだ。

彼女のその真剣な眼差しは、とても冗談で言っているわけではなさそう。紅蓮は困ったような表情で、そんな白雪を見つめていた。

そんな2人のやり取りを見ていた少女が、言い難そうに口を開いた。

「私が言えることじゃないけど……白雪さんは紅蓮ちゃんの事が心配なのよ。そのバロンさんと、戦わない方法はないの？」

少女の言葉を聞いて紅蓮は少し考えたが、すぐに諦めたように小さくため息をつく。

「はあ……難しいですね。彼は集団で行動する事を嫌いますから……」

「そう……なら無理に仲間にしなくてもいいんじゃないかな？ それとも。どうしても、その人を仲間にしないとダメなの？」

何食わぬ顔でそう言い放った少女を、呆然と見つめた次の瞬間には紅蓮の視線は湯船に向いていた。

「……とりあえず湯船に浸かりましょう。マスターも待つてますし」
「そ、そうですね！」

白雪もその言葉に従うと、湯船から桶でお湯をすくって、紅蓮の背中に付いている泡を洗い流した。

その後、そそくさと浴槽に入る2人を見て、少女は不機嫌そうな顔をしていたが、仕方なくその後が続いてお湯の中に浸かった。

湯船に浸かると「ふう〜」と3人は息を吐き出し、ぼーっとテントの天井を見つめて全身を脱力させ深い息を吐く。

「温かくていいですね。やっぱり日本人はお風呂に入らないとダメですね……」

「全くその通りです。さすがは紅蓮様……」

2人が気持ち良さそうな声を上げてお湯に浸かっていると少女が再び尋ねる。

「それで、どうして仲間になんてはいけないんですか？」

「……はあく」

2人は何度も尋ねてくる少女の顔を見ると、呆れながら同時にため息をついた。

なおも興味津々な様子で聞き返してくる彼女に、仕方なく白雪が説明を始める。

「それはですね。今このゲームは、外部から完全に切り離された世界になっていきます。言うなれば、大きな牢獄の中とでも例えれば良いでしょうか……その中では法もなく、好き勝手に振る舞う者が横行していて、日々数え切れない人数のプレイヤーが消滅しているのです」
白雪は淡々と話すと、深刻そうな顔をして眉をひそめる。

「そしてフリーダムを誰よりも早くプレーし、その開発に協力した方々。それをベータテスターとでも呼びましょうか、それが日本では紅蓮様達『四天王』なのです」

「なるほど……」

少女が頷くと紅蓮は少し恥ずかしそうに俯きながら、白雪の話に耳を傾けている。

まあ、四天王なんてだいたいそれた呼び名を付けられれば無理もない。「その人達はオリジナルの固有スキルを持っていて、もし。その方々が悪い方に力を貸すことを阻止しなければならないと、私達は千代から旅をしているのです」

拍手をしながら「おー」と歓声を上げると、少女は不思議そうに首を傾げ徐ろに口を開いた。

「——それで、どうしてその人を仲間にするの？」

そう首を傾げて尋ねる彼女に、2人は最初よりも大きなため息をつく。

おそらく。彼女にはまだ、今のこの『ログアウト不能』という現状がはつきりと理解できていないのだろう。

もちろん。漠然とは理解はしているだろうが、バロンを勧誘するとは、ひいては現実世界に帰れる日が早くなるということだ。

このまま長期間ゲーム内に閉じ込められた状態が続くというのは、閉じ込められているプレイヤー達の精神的なダメージとなる。

彼等のストレスが溜まるということは、犯罪が多くなり街の治安が悪化することに繋がるのは言うまでもない。また、健全な精神ではない彼等を遊離しておく場所も必要となるが、今のままではそれも足りなくなる。

紅蓮達は千代のトップギルドであり、治安維持も引き受けているギルドだ。このままでは治安維持に人手を回し過ぎて、脱出の手段を探すどころではなくなってしまう。

今はのんびりと時が流れている気がするが、この安定している時にどれだけ現実世界への帰還に近付けるかが重要となる。

ゲーム内で四天王と呼ばれるベータ版からプレイしている者達は、他のプレイヤーからも羨望の眼差しを受けて一目を置かれる存在だ。

その四天王がバラバラでは、プレイヤー達もまとまることはできないだろう……何より今は、皆の象徴となる者達が必要なのだ――。

それから彼女が納得するまで淡々と白雪が説明を試みたが、結局少女は理解できなかつたらしく、白雪が折れるかたちでその話は終止符を打った。

確かに初心者に四天王や、ベータテスターなどの専門用語を多く用いる白雪が今の状況を説明したところで理解するのは難しいだろう――。

「それじゃー。もうそろそろあがりませうか……って紅蓮様!?」
「大丈夫ですか!?!」

「ううう……」

白雪が紅蓮の方に目を向けると、浴槽の縁に倒れ込んでいた。

いつもの冷静な彼女の姿はそこにはなく、弱々しく項垂れながら湯船の縁を支えに目を回している。

慌てて紅蓮の小さい体を抱き上げると、バスタオルで体を覆って服を脱いだかごの下の板の上に彼女を寝かせ、うちわで仰ぐ。すると、ぐったりしていた紅蓮の表情が少し和らいだ。

どうしてゲーム内なのにのぼせるのか……それはお風呂から上がる湯気に理由があつた。

湯気によつて視界が歪むと、ゲーム内のシステムが視野を合わせようと小刻みな修正を行う。

それは本来なら人間には感知できないほど微小な動きなのだが、紅蓮はそれを感じ取ってしまうタイプらしい。

少しの時間なら問題はなかったのだろうが、長時間湯船から立ち上がる湯気を見続けたことが要因だろう——つまり。これはのぼせたのではなく、小刻みに動く視界に酔ってしまったのである。

白雪はうちわで仰ぎながら小さく呟く。

「無理な言ひに言つてくだされば……」

横たわっている紅蓮がそれを聞いて、徐に口を開いた。

「——い、いえ……話の腰を折つてはと……思ひまして……」

弱々しい声でそう告げた紅蓮に、白雪は少し呆れ顔で「そうですね」と相槌を打つ。

その時、心配そうに顔を覗かせていた少女が言った。

「これってアイテムでなんとかならないんですか？」

そう尋ねてきた彼女に、白雪は眉をひそめながら重い口を開く。

「……こういうのにも効けばいいんですけどね。元々海外で開発されたゲームなので、回復アイテムは戦闘によるダメージや毒などの効果などしか効果がないんですよ……」

「……それだと紅蓮ちゃんは治せないんですか？」

「無理でしょうね。しかし、おそらくはのぼせただけなので、しばらく休んでいれば良くなると思います」

白雪がそういうと、少女は安心したようにほっと胸を撫で下ろした。

するとそこに、テントの幕の外から小虎の呼ぶ声が聞こえてきた。「おーい、姉さん達。いつまで入ってるんだって兄貴が言つてたよー」

「あ、小虎。ちょうど良かった。ギルマスに紅蓮様がのぼせたので、少し休んでから行きますと伝えておいてもらえますか？」

「わ、分かった！」

小虎はそう叫んだ直後、慌てて駆けて行く足音が聞こえた。

その数分後。外で揉めてる声が聞こえたかと思うと、物凄い疾走音の直後テントの幕が勢い良く開き。メルディウスが飛び込んできた。

「——紅蓮!! 大丈夫かッ!？」

「……………えっ?」

しかし、メルディウスが目にしたのは、バスタオルだけを体に巻き付けたまま驚いた表情で自分を見つめている2人の姿だった。

彼と目が合った彼女達は驚いた表情で、微動だにせずにその場で固まっている。

メルディウスは「すまん!」と叫んだ後。血相を変えてテントの外へと飛び出していった。

「あの人は……………本当にしかたない人ですね……………」

紅蓮は呆れたようにため息混じりに言うのと、瞼をゆつくりと閉じた。

マスターと小虎が焚き火の前で座っていると、ため息をつきながらメルディウスが戻ってきた。

意気消沈した様子に大体のことを察したのか、マスターが落ち込んだ様子の彼に声を掛ける。

「どうやら、心配いらなかったようだな。だから心配ないと言ったであらう」

「うるせえー。もしもがあったら大変だから見に行っただけだっ!」

メルディウスはそんなマスターの横に腰を下ろすと、小さな声でそう吐き捨てる。

落ち込んでいくせに強がっているメルディウスに小虎が口を開いた。

「あのさ、兄貴。女性にあまりしつこくすると嫌われるって、前に誰かが言って——」

小虎がそう言おうとした直後。メルディウスの拳が小虎のこめか

みの辺りをグリグリと締め付けた。

「なんだとく。いつからお前は俺に意見できるようになったんだ？

こくとくらくく！」

「いたたたたたつ！　ち、違う僕じゃなくて、誰かが言ってたんだってばく!!」

小虎は瞳を涙で潤ませながら必死に無実を訴えたが、頭に血が上っているメルデイウスには、その訴えは聞き入れられなかった。その様子を見つめながら、マスターは大きなため息を漏らしている。

それからしばらくして、紅蓮が白雪に支えられながら戻ってくるのと、メルデイウスは慌てて彼女の元に駆け寄って行った。

「紅蓮。大丈夫か？　倒れたと聞いたから心配してたんだぞ！」

頭を抑えて支えられている白雪を遠ざけると、フラフラしながらもゆっくりと歩き出す。

「……大袈裟ですね。倒れてないですし、もう大丈夫です」

「そ、そうか？　無理しない方がいいんじゃないか？」

メルデイウスは普段の彼からは想像できないような優しい声で言った。

紅蓮がマスターの隣に座り、その向かい側に白雪が座る。メルデイウスはその隣に、面白くなさそうに白雪の横に腰を下ろした。

焚き火を中心に、マスターと向かい合うように座った。

すると、白雪が徐ろに立ち上がり、地面に置かれていた鍋へと向かって歩き出した。

白雪は釜の中のご飯をよそうと、鍋の中のカレーをその上にかけた。

「小虎。運ぶのを手伝って下さい」

「了解！」

小虎はその声にビシツと背筋を伸ばして立ち上がると、白雪の手からカレーの皿を受け取った。

「おおく、うまそく。はい。どうぞ！」

「うむ。すまんな」

頻りにくんくんと鼻を動かし、カレーの匂いを堪能した小虎がマス

ターにカレーを渡した。

次に紅蓮にカレーを渡そうと小虎が腕を伸ばした。

「はい。姉さんの分」

「ええ、ありがとう——」

「——ッ!? 紅蓮!!」

そのカレーを受け取ろうと紅蓮が手を伸ばした直後、彼女の体が前に倒れそうになり、それを慌てて座っていたメルデイウスが支える。

名御屋までの道中5

紅蓮は自分の肩を掴みながら、心配そうな眼差しを向けているメルデイウスに言った。

「……大丈夫。ちよつとフラついただけですから……」

「ちよつとフラついただけってお前……大丈夫じゃねえーだろ、そりゃ……」

メルデイウスはそう呟くと、ひよいと紅蓮の小さな体を抱きかかえると、紅蓮は驚いた様に目を丸くしながら慌てて口を開く。

「大丈夫です。降ろして下さい」

「いやダメだ！ 街を出て殆ど休みなくずっと来てたから疲れも溜まつてるんだらう。今日は大人しく休め！ これはギルドマスターとしての命令だ！」

「……横暴ですね」

それを聞いた紅蓮が複雑そうに目を細めながらそう呟く。

この時の紅蓮の中では恥ずかしさ半分、情けなさ半分と言ったところだろうか。

同じギルドのメンバーであり。ベータテスト時代からの知り合いのメルデイウスに、紅蓮はなるべく同等の立場でいたいという思いがあるのだらう。

なおも「降ろして下さい」と何度も叫んでいる紅蓮に。

「うっ、うるせえー。病人は大人しく寝てろってんだよ！」

メルデイウスは頬を染めると、照れ隠しなのか小さくそう吐き捨てる、紅蓮をテントへと連れて行った。

そんな2人が視界に入った直後、おたまを持った白雪が口をあんぐりと開けていた。

「そ、そんな……紅蓮様をお運びするのは私の役目……」

「う、うわっ！ 白雪さん。カレー!! カレーこぼれてるって!! 僕のカレーが!!」

愕然としてその光景を見つめながら、カレーをよそっていた白雪に小虎が叫んだ。

冷やかな目で白雪と小虎のやり取りを見ていたマスターが、手に持っていたスプーンをカレーのルーの中へと沈め。

「全くこやつらは、何をやっておるのやら……」

マスターはそう呟くと、カレーをスプーンですくって静かに口へと運ぶ。

カレーを口にしようとしたマスターを見て、白雪が慌てて叫ぶと器をもうひとつ取り出した。

更に別の鍋の中から何かをよそうと、マスターの方へとその器を持ってやってきた。

「カレーだけでは味気なさ過ぎるので、これも一緒に……」

「……これは？」

差し出された器の中身を見て、マスターは困惑した表情で尋ねた。

不安で顔を歪めるマスターに、白雪は表情一つ変えずに答える。

「もちろん。お味噌汁です」

「いや、汗物に汗物は……しかも味噌汁というには、色がな……」

器の中身に視線を落として、言い難そうに小さな声で呟く。

それもそのはずだ。白雪が味噌汁と言って出してきた物は、自分が知っている物とはまるで違っていた。

毒々しいほどに紫色のそのドロドロの液体は、お世辞にも美味しそうとは言えない。しかし、それとは対照的に白雪は自信満々に告げる。

「こちらではお味噌を入手できませんでしたので、こちらにある調味料から、独自にブレンドいたしました私の自信作です。本当なら、紅蓮様にも味わって頂きたかったのですが……」

白雪は残念そうにそう呟くと、表情を曇らせた。

郷に入っては郷に従えとはよく言ったものだが……明らかに、毒と遜色のないこの未知の液体を飲まなければならぬと言っているのは、度重なる強敵を前に一步も引かない戦いを繰り広げてきたマスターでも、さすがに目の前にあるこの強敵との戦いは棄権したい。

マスターは白雪からその色鮮やかな紫色の味噌汁を受け取った。

「……、これを食べると言うのか？ ……とてもこの世の物とは思

えん……)

マスターは器の中の味噌汁を眉をひそめながら見つめていると、紅蓮を運んでいったメルディウスが戻ってきた。

その表情はどこか清々しく見えた。

「——紅蓮はどうだった？　メルディウスよ」

「ああ、今日は大人しく休むと言ってたぜ！」

マスターの問い掛けに、そう笑顔で答えたメルディウス。

それが面白くないのか、白雪が紫色の味噌汁を手にくるつと背を向けると、腕の隙間から何かをお椀の中に振りかけているのが見えた。そして満面の笑みで振り返り、その味噌汁をメルディウスに差し出す。

「どうぞ！　ギルマスには特別なのを差し上げます！」

その器の中身を見たメルディウスとマスターは言葉を失う。

何故なら、先程まで鮮やかな紫色をしていたはずの味噌汁が、ブクと泡を立てているドス黒い赤紫色に奇跡的な変貌を遂げていたからである。どうやればあの短期間の間に、これほどの変化が生まれるのか理解に苦しむが。

メルディウスは「お、おう」とその器を受け取ると、脂汗を掻きながらその器の中を覗き込んでいる。

2人が呆然と味噌汁を見つめていると、近くから小虎の抗議する声が耳に入ってきた。

「——白雪さん。こんなの食べれる訳ないじゃん！　これ食べ物の色をしてないだけど！」

「……ほう。小虎はこれが食べれないと……？」

器を突き出して不満を口をする小虎に、白雪が殺意を含んだ声で尋ねる。

だが、全く動じることなく。小虎は自信満々に「とうぜ——」と口にしたところで、白雪の姿が一瞬消えたかと思うと、突如として小虎はその場にバタツと倒れた。

小虎の持っていた器がカランカランと音を立てて地面に落ち、中身の紫色の物体が地面にぶち撒かれる。

器に入ったままでも毒々しいのに、地面にぶち撒かれた紫色の液体からは絶え間なく湯気が上がり、まるで小さな魔界の沼の様にも思えた。

白雪は何事もなかったかのように鍋の前に戻ると、にっこりと微笑んで言った。

「あらあら、小虎も随分と疲れていたようです。後でしよぶん……テントまで運んで行かないといけませんね」

目の前で起きた衝撃的な光景を呆然と見つめていたメルディウス、マスター、少女はシンクロしたように同じことを考えていた。

『食べても食べなくても結末は同じ!』

3人は手の中の器と倒れている小虎に目を向けると、恐る恐る白雪の方を向き直した。

「どうぞ召し上がれ♪」

笑顔でそう告げる白雪を見て、3人は互いの顔を見合うと、覚悟を決めたように器に口を付け一気に汁をすすする。

直後、マスターの目がカツ!と見開き、お碗を持つ手が震え出す。

「——う、うまいだど?!」

「見た目と違ってお味噌汁です!!」

マスターと少女が驚きの声を上げた。

白雪は満足そうに笑顔を見せると「当然です」と頷いた。

ほっと胸を撫で下ろし、手の中の器から隣に座っていたメルディウスに視線を移す。

「うまいではないか、なあ、メルディウス!」

「……………」

マスターは彼の背中を叩くと、メルディウスの体はゆっくりと傾きバタツと前へと倒れた。衝撃のあまり、その場に立ち上がったマスター。

よく見ると地面に倒れたメルディウスは白目を向いたまま、口から泡を吹いている。

マスターがふと白雪の方を振り向く——。

「食べながら寝るなんて、ギルマスも随分お疲れのようですね」

優しい声音でほくそ笑みながらそう呟く白雪。

その悪魔の様な不気味な笑みを見たマスターは一度深く深呼吸をすると「風呂に入ってくるかな」と呟き、その場を後にした。

翌日——不機嫌そうに馬に跨ったメルディウスが呟く。まあ、理由は聞かなくても分かる気がするが……。

「全く昨日は酷い目にあっただぜ」

「ほんとだよ。結局カレーを食べれなかったしさ」

メルディウスに続いて、横に付いた小虎も眉にしわを寄せてそう呟く。

その後、2人は白雪にテントの中にまるで物でも扱うように投げ込まれ、最悪な一夜を過ごした。

結局、メルディウスは自分が企画した風呂にも入れず。小虎は風呂どころか、大好物のカレーすら食べることができなかったわけだ。

そんな2人をなだめるように紅蓮が彼等の隣に馬を付け。

「まあまあ、よく分かりませんが、機嫌を直して下さい。カレーならまた作ってあげますし」

「ほんと!？」

小虎は嬉しそうに聞き返すと、紅蓮も静かに頷いた。

メルディウスは大きなため息をつく少女の方を向く。

「そういえば、お前はとうするんだ？ このまま一緒に行くわけにもいかなだろ。もし行くあてがないってんなら俺達のギルドに来るか？」

「そうですねえー。なんだか楽しそうな人達ばかりだし。それもいいかなあー」

少し考え少女がそう口にするのと、メルディウスは嬉しそうに笑った。

ギルドのメンバーが増えるのは、大手のギルドでも同じこと様だ——。

「そうか！ なら白雪。この子を千代に送って行ってやれ！」

「……仕方ないですね。了解です。ギルマス」

白雪は不満を小さく頷くと白雪が後方にいた少女の馬の隣へと来た。

その時、黙っていた少女が徐ろに口を開く。

「あの、私も一緒に行っちゃダメですか？　というか、行きたいです！」

少女は懇願すると、メルディウスに熱い視線を向けた。

だが、これから四天王のバロンの元へと行くのに、装備も揃えていない初心者プレイヤーを連れていくことに、メルディウスは躊躇せざるを得なかった。

それもそうだろう。バロンの固有スキルは広範囲に影響を及ぼすタイプの能力で、しかも数千の兵士は全てが操るプレイヤーのレベルと同じ強敵。

つまりはバロンのレベルが1000ならば、その傘下の兵士達も同じ1000ということだ。それが数千を超えるほどこいるのであれば、さすがのメルディウス達でも守りきれぬ保証はない。

メルディウスはしばらく考える素振りを見せ、真剣な顔でもう一度彼女に尋ねた。

「本当に行くのか？　俺達は守ってやれるか分からないぞ？」

「もちろんです！」

考える素振りすら見せずに、直ぐ様返事を返した彼女の眼差しと熱意に押されたのか、メルディウスは頷き叫んだ。

もしもここで少しでも彼女が躊躇すれば、有無を言わずに白雪に千代へと送り返させるつもりだったのだが、決意が決まっているのならば、これ以上言うのも野暮というものだろう……。

「よし！　なら付いて来い！　だが、ギルドに入るにはギルドのあるホームタウンに戻る必要があるからな。この旅の間にお前がどういう奴なのかしつかり見せてもらおうぞ？」

「はい！　頑張ります隊長！」

「——ふっ、隊長か……悪くねえな」

メルディウスは彼女の『隊長』という言葉が満更でもなかったのか、口元に笑みを浮かべると、右腕を頭上に高らかに突き上げて大きく叫

んだ。

「よっしやー、野郎ども！俺に付いて来いやあー!!」

「おー!!」

少女と小虎はその声に腕を高く掲げ、先に馬を走らせていったメル
デイウスの後を追う。

紅蓮と白雪は顔を見合わせると、ため息をつきながら呟く。

「野郎じゃないです」

彼等のテンションについていけない2人は、不機嫌そうな顔をしながら馬を出した。

マスターはその様子を呆れ顔で見ると、額に手を当てながら大きな
ため息をついた。

「はあー。こんな事で名御屋まで持つのか、不安だ……」

そう呟くと先に森の中へと進んでいったメルデイウス達を追い
かけるように、馬の手綱をしならせ馬を出した。

マスター達6人は朝日を受けキラキラと輝いている森の中へと、吸
い込まれるように小さくなっていく。

名御屋までの道中5

紅蓮は自分の肩を掴みながら、心配そうな眼差しを向けているメルデイウスに言った。

「……大丈夫。ちよつとフラついただけですから……」

「ちよつとフラついただけってお前……大丈夫じゃねえーだろ、そりゃ……」

メルデイウスはそう呟くと、ひよいと紅蓮の小さな体を抱きかかえると、紅蓮は驚いた様に目を丸くしながら慌てて口を開く。

「大丈夫です。降ろして下さい」

「いやダメだ！ 街を出て殆ど休みなくずっと来てたから疲れも溜まつてるんだらう。今日は大人しく休め！ これはギルドマスターとしての命令だ！」

「……横暴ですね」

それを聞いた紅蓮が複雑そうに目を細めながらそう呟く。

この時の紅蓮の中では恥ずかしさ半分、情けなさ半分と言ったところだろうか。

同じギルドのメンバーであり。ベータテスト時代からの知り合いのメルデイウスに、紅蓮はなるべく同等の立場でいたいという思いがあるのだらう。

なおも「降ろして下さい」と何度も叫んでいる紅蓮に。

「うっ、うるせえー。病人は大人しく寝てろってんだよ！」

メルデイウスは頬を染めると、照れ隠しなのか小さくそう吐き捨てると、紅蓮をテントへと連れて行った。

そんな2人が視界に入った直後、おたまを持った白雪が口をあんぐりと開けていた。

「そ、そんな……紅蓮様をお運びするのは私の役目……」

「う、うわっ！ 白雪さん。カレー!! カレーこぼれてるって!! 僕のカレーが!!」

愕然としてその光景を見つめながら、カレーをよそっていた白雪に小虎が叫んだ。

冷やかな目で白雪と小虎のやり取りを見ていたマスターが、手に持っていたスプーンをカレーのルーの中へと沈め。

「全くこやつらは、何をやっておるのやら……」

マスターはそう呟くと、カレーをスプーンですくって静かに口へと運ぶ。

カレーを口にしようとしたマスターを見て、白雪が慌てて叫ぶと器をもうひとつ取り出した。

更に別の鍋の中から何かをよそうと、マスターの方へとその器を持ってやってきた。

「カレーだけでは味気なさ過ぎるので、これも一緒に……」

「……これは？」

差し出された器の中身を見て、マスターは困惑した表情で尋ねた。

不安で顔を歪めるマスターに、白雪は表情一つ変えずに答える。

「もちろん。お味噌汁です」

「いや、汁物に汁物は……しかも味噌汁というには、色がな……」

器の中身に視線を落として、言い難そうに小さな声で呟く。

それもそのはずだ。白雪が味噌汁と言って出してきた物は、自分が知っている物とはまるで違っていた。

毒々しいほどに紫色のそのドロドロの液体は、お世辞にも美味しそうとは言えない。しかし、それとは対照的に白雪は自信満々に告げる。

「こちらではお味噌を入手できませんでしたので、こちらにある調味料から、独自にブレンドいたしました私の自信作です。本当なら、紅蓮様にも味わって頂きたかったのですが……」

白雪は残念そうにそう呟くと、表情を曇らせた。

郷に入っては郷に従えとはよく言ったものだが……明らかに、毒と遜色のないこの未知の液体を飲まなければならぬと言っているのは、度重なる強敵を前に一步も引かない戦いを繰り広げてきたマスターでも、さすがに目の前にあるこの強敵との戦いは棄権したい。

マスターは白雪からその色鮮やかな紫色の味噌汁を受け取った。

「……、これを食べると言うのか？ ……とてもこの世の物とは思

えん……)

マスターは器の中の味噌汁を眉をひそめながら見つめていると、紅蓮を運んでいったメルディウスが戻ってきた。

その表情はどこか清々しく見えた。

「——紅蓮はどうだった？　メルディウスよ」

「ああ、今日は大人しく休むと言ってたぜ！」

マスターの問い掛けに、そう笑顔で答えたメルディウス。

それが面白くないのか、白雪が紫色の味噌汁を手にくるつと背を向けると、腕の隙間から何かをお椀の中に振りかけているのが見えた。そして満面の笑みで振り返り、その味噌汁をメルディウスに差し出す。

「どうぞ！　ギルマスには特別なのを差し上げます！」

その器の中身を見たメルディウスとマスターは言葉を失う。

何故なら、先程まで鮮やかな紫色をしていたはずの味噌汁が、ブクと泡を立てているドス黒い赤紫色に奇跡的な変貌を遂げていたからである。どうやればあの短期間の間に、これほどの変化が生まれるのか理解に苦しむが。

メルディウスは「お、おう」とその器を受け取ると、脂汗を掻きながらその器の中を覗き込んでいる。

2人が呆然と味噌汁を見つめていると、近くから小虎の抗議する声が耳に入ってきた。

「——白雪さん。こんなの食べれる訳ないじゃん！　これ食べ物の色をしてないだけど！」

「……ほう。小虎はこれが食べれないと……？」

器を突き出して不満を口にする小虎に、白雪が殺意を含んだ声で尋ねる。

だが、全く動じることなく。小虎は自信満々に「とうぜ——」と口にしたところで、白雪の姿が一瞬消えたかと思うと、突如として小虎はその場にバタツと倒れた。

小虎の持っていた器がカランカランと音を立てて地面に落ち、中身の紫色の物体が地面にぶち撒かれる。

器に入ったままでも毒々しいのに、地面にぶち撒かれた紫色の液体からは絶え間なく湯気が上がり、まるで小さな魔界の沼の様にも思えた。

白雪は何事もなかったかのように鍋の前に戻ると、にっこりと微笑んで言った。

「あらあら、小虎も随分と疲れていたようです。後でしよぶん……テントまで運んで行かないといけませんね」

目の前で起きた衝撃的な光景を呆然と見つめていたメルディウス、マスター、少女はシンクロしたように同じことを考えていた。

『食べても食べなくても結末は同じ!』

3人は手の中の器と倒れている小虎に目を向けると、恐る恐る白雪の方を向き直した。

「どうぞ召し上がれ♪」

笑顔でそう告げる白雪を見て、3人は互いの顔を見合うと、覚悟を決めたように器に口を付け一気に汁をすする。

直後、マスターの目がカツ!と見開き、お碗を持つ手が震え出す。

「——う、うまいだど!」

「見た目と違ってお味噌汁です!!」

マスターと少女が驚きの声を上げた。

白雪は満足そうに笑顔を見せると「当然です」と頷いた。

ほっと胸を撫で下ろし、手の中の器から隣に座っていたメルディウスに視線を移す。

「うまいではないか、なあ、メルディウス!」

「……………」

マスターは彼の背中を叩くと、メルディウスの体はゆっくりと傾きバタツと前へと倒れた。衝撃のあまり、その場に立ち上がったマスター。

よく見ると地面に倒れたメルディウスは白目を向いたまま、口から泡を吹いている。

マスターがふと白雪の方を振り向く——。

「食べながら寝るなんて、ギルマスも随分お疲れのようですね」

優しい声音でほくそ笑みながらそう呟く白雪。

その悪魔の様な不気味な笑みを見たマスターは一度深く深呼吸をすると「風呂に入ってくるかな」と呟き、その場を後にした。

翌日——不機嫌そうに馬に跨ったメルデイウスが呟く。まあ、理由は聞かなくても分かる気がするが……。

「全く昨日は酷い目にあっただぜ」

「ほんとだよ。結局カレーを食べれなかったしさ」

メルデイウスに続いて、横に付いた小虎も眉にしわを寄せてそう呟く。

その後、2人は白雪にテントの中にまるで物でも扱うように投げ込まれ、最悪な一夜を過ごした。

結局、メルデイウスは自分が企画した風呂にも入れず。小虎は風呂どころか、大好物のカレーすら食べることができなかったわけだ。

そんな2人をなだめるように紅蓮が彼等の隣に馬を付け。

「まあまあ、よく分かりませんが、機嫌を直して下さい。カレーならまた作ってあげますし」

「ほんと!？」

小虎は嬉しそうに聞き返すと、紅蓮も静かに頷いた。

メルデイウスは大きなため息をつく少女の方を向く。

「そういえば、お前はとうするんだ？ このまま一緒に行くわけにもいかなだろ。もし行くあてがないってんなら俺達のギルドに来るか？」

「そうですねえー。なんだか楽しそうな人達ばかりだし。それもいいかなあー」

少し考え少女がそう口にするのと、メルデイウスは嬉しそうに笑った。

ギルドのメンバーが増えるのは、大手のギルドでも同じこと様だ——。

「そうか！ なら白雪。この子を千代に送って行ってやれ！」

「……仕方ないですね。了解です。ギルマス」

白雪は不満を小さく頷くと白雪が後方にいた少女の馬の隣へと来た。

その時、黙っていた少女が徐ろに口を開く。

「あの、私も一緒に行っちゃダメですか？　というか、行きたいです！」

少女は懇願すると、メルディウスに熱い視線を向けた。

だが、これから四天王のバロンの元へと行くのに、装備も揃えていない初心者プレイヤーを連れていくことに、メルディウスは躊躇せざるを得なかった。

それもそうだろう。バロンの固有スキルは広範囲に影響を及ぼすタイプの能力で、しかも数千の兵士は全てが操るプレイヤーのレベルと同じ強敵。

つまりはバロンのレベルが1000ならば、その傘下の兵士達も同じ1000ということだ。それが数千を超えるほどこいるのであれば、さすがのメルディウス達でも守りきれぬ保証はない。

メルディウスはしばらく考える素振りを見せ、真剣な顔でもう一度彼女に尋ねた。

「本当に行くのか？　俺達は守ってやれるか分からないぞ？」

「もちろんです！」

考える素振りすら見せずに、直ぐ様返事を返した彼女の眼差しと熱意に押されたのか、メルディウスは頷き叫んだ。

もしもここで少しでも彼女が躊躇すれば、有無を言わずに白雪に千代へと送り返させるつもりだったのだが、決意が決まっているのならば、これ以上言うのも野暮というものだろう……。

「よし！　なら付いて来い！　だが、ギルドに入るにはギルドのあるホームタウンに戻る必要があるからな。この旅の間にお前がどういう奴なのかしつかり見せてもらおうぞ？」

「はい！　頑張ります隊長！」

「——ふっ、隊長か……悪くねえな」

メルディウスは彼女の『隊長』という言葉が満更でもなかったのか、口元に笑みを浮かべると、右腕を頭上に高らかに突き上げて大きく叫

んだ。

「よっしやー、野郎ども！俺に付いて来いやあー!!」

「おー!!」

少女と小虎はその声に腕を高く掲げ、先に馬を走らせていったメル
デイウスの後を追う。

紅蓮と白雪は顔を見合わせると、ため息をつきながら呟く。

「野郎じゃないです」

彼等のテンションについていけない2人は、不機嫌そうな顔をしながら馬を出した。

マスターはその様子を呆れ顔で見ると、額に手を当てながら大きな
ため息をついた。

「はあー。こんな事で名御屋まで持つのか、不安だ……」

そう呟くと先に森の中へと進んでいったメルデイウス達を追い
かけるように、馬の手綱をしならせ馬を出した。

マスター達6人は朝日を受けキラキラと輝いている森の中へと、吸
い込まれるように小さくなっていく。

2人で外出

エミルから逃げるようにして寝室に駆け込んだ星は、それからずっと布団の中に閉じこもっていた。

布団の中で膝を抱えながら、震える声で小さく呟く。

「私はただ強くなりたいと思ったただけなのに……」

エミルに怒られてから数時間もの間。食事も取らず、布団の中に籠もっていた星を心配して、見守るようにパタパタと空中に留まっていたレイニールが叫んだ。

「——いつまで拗ねているのだ。主！」

「……………」

しかし、布団に包まれている星からの返事はない。

部屋に戻ってきてすぐに、布団の中に潜り込んでしばらくはすすり泣く声が聞こえていたのだが、今は落ち着いたのか、時折もそもぞと布団が動く程度なのだが、星は一向に出てくる気配すらない。

そんな星にレイニールは困った顔をしながら、ベッドの上に着地すると布団の角を持ち上げ、布団の中に居る星に話し掛けた。

「うじうじしても何も始まらないだろう？　主が強くなりたいと望むなら、我輩からも皆に頼んでやる。それでいいではないか！」

しばらくして、レイニールの声に反応したのか、布団の中から星の声が返ってきた。

「……強くなりたいたって思うのはいけない事なのかな……？」

その質問に、自分の頭の上に布団を被せ腕組をしながら唸った。

「うむ。いけなくはないと思うが、主はどうして強くなりたい。皆を見返してやりたいと思うからか？」

星の問い掛けにレイニールがそう返事をする、すぐに言葉が返ってきた。

「ううん……私は昨日。キマイラに襲われた時、皆必死で戦ってた……それを見てて思ったの。私が守られてるだけじゃいやだって——私が皆を守ってあげたいって……」

「うむ。それは分からなくもないのじゃ……でものく。そうは言っ

ても、今朝も結局あの男に助けられたのじゃ」

「……うっ」

レイニールの的確なツツコミに、星はなにも言えなくなり口をつぐむ。

頭の上に乗せていた布団の端を掴んで、レイニールがそれを上下に動かして遊んでる。

それからしばらくの間、沈黙が続いた。

沈黙の中、星とレイニールのいた部屋の扉が開いて、そこからある人物が部屋の中に入ってくる。だが、布団の中に頭まですっぽりと潜っている星はその人影に気付くことはない。

すると、今度はレイニールの方から問い掛けてきた。

「主は、皆の事は嫌いか？」

「ううん。大好きだよ。でも……」

「……でもっ…」

星はしばらく考えるように間隔を空け、徐に言葉を続けた。

「——このまま。皆と一緒に居て良いのかなって思うんだ……エミルさんはああ言ってたけど……でも、今日襲ってきた人達は、私を狙ってきてみたいだし。私はここに居ない方がいいのかなって……」

「ふくん。やっぱりね。そんな事を星は考えてたんだあ〜」

「——ツ!?! その声はエリエさん!?!」

星が慌てて布団から顔を覗かせると、そこにはにやにやと笑みを浮かべているエリエと申し訳なさそうに俯いているレイニールの姿があった。

おそらく。レイニールはエリエが側にいることを黙っているようにと口止めされ、しかも横から代弁させられていたのだろう。

星は再び布団を頭まで被ると、黙りを決め込んだ。

まるでカメラが甲羅の中に隠れたように、頑なに出て来ようとしないう星を見て、エリエはため息をつきながら、今度は自らベッドの端に腰を下ろして説得を試みる。

「星はどうしてこのゲームを始めようと思ったの?」

「……………」

質問に答えずに——というか、ゲームを始めた訳を言えない星が黙りを決め込んでいると、構わずにエリエは言葉を続ける。

「まあ、いろいろあるよね。私はさ、日本人じゃないし。星の気持ちが全て分かる訳でもないけど、これだけは言える」

そう前置きをして、エリエは感慨深げに部屋の一点を見つめ、微笑を浮かべた。

「フリーダムはPK推奨じゃないし、個人のスキルがそのまま戦闘に反映されるでしょ？ 私も始めはゲームというより、スポーツ的なノリで始めてたし。それと何より、自分で作ったお菓子が食べ放題と言う事が、最後の決めてだったんだけど……でも今は——」

照れくさそうにエリエは布団の上から、星の体に手を置いて優しく語り掛ける。

「——色々な出会いがあるからなんだよ？ こうして、外国の人とも自動翻訳機能で会話ができる。だから星とも会えたし、エミル姉やデイベッドとも会えた……それが私はすごく幸せ……」

優しく微笑みを浮かべると、布団の中にいる星の体を優しく撫でる。

「星はこんなに小さいのに偉いよ……富士のダンジョンでは逃げないで戦って、私達を助けてくれたでしょ？ 私が星と同じ歳くらいの中には、とてもじゃないけど考えられなかったよ。普通にわんわん泣いてなんの役にも立たなかったと思う……」

「そうだぞ主。我輩も、あそこで主と始めて顔を合わせられたのじや！ ずっと声を掛けてやつとの思いで、主がスキルを使ってくれたおかげじゃ！」

エリエの言葉に続けるように、便乗したレイニールが力強く頷く。

元々は『竜王の剣』と言う一つの装備アイテムでしかなかったレイニールが実体化できたのは、間違いなく星のおかげだ——レイニールもこれだけは言わなければならぬと感じたのだろう。

星は布団の中で小さく呟く。

「偉くなんてないです……」

姿は見えないものの。涙で掠れたその声を聞いて、エリエはにつこ

りと微笑みながら言った。

「星は偉いんだよ？　それはエミル姉だって他の皆も分かっている。今日だって、自分で考えたから出て行ったんでしょ？」

その言葉に反応したのか、今まで微動だにできなかった星の体がぴくぴくと反応した。まあ、結果としては大失敗に終わったわけなのだが……。

エリエは天井を見上げると「やっぱり。そうなんだ」と呟くと再び話し始めた。

「人に言われた通りにするのは嫌だもんね……私もそうだよ。私の家は王族で……色々教えられるの。帝王学っていうの？　そんな、くだらない事を耳にたこができるくらいに……」

「うむ。それは大変じゃのう」

フリーダム生まれのレイニールに『帝王学』の意味が分かっているのかは分からないが、腕組みしながら仕切りに頷いている。

そんなレイニールを気にかけることなくエリエが言葉を続けた。

「だから、私を普通の人として受け入れてくれる仲間の皆は、私にとって家族みたいなものなの。だからね！」

エリエは星の布団をゆっくりと剥がすと、ベッドの上の星に微笑みかけて言った。

「——星。私にとって、あなたは大事な妹なんだよ？」

「……エリエさん」

星は体を起こすと、そんな優しく微笑むエリエの顔を見つめた。

エリエは星の体を抱き寄せると、耳元でそっとささやく。

「何も気にしなくていい……迷惑をかけたっていいじゃない。家族なんだもの……もっと私を頼ってよ。私は星が思っているよりずっと強いんだよ。」

「……エリエさん」

「例えどんな事があつたって、私が星を守る！　それが私の——お姉ちゃんとして、妹にしてあげられる事だと思うから！」

その力強い言葉と眼差しに、星はこくと頷き返した。

エリエは星をぎゅっと抱きしめると、しばらく2人はそのまま抱き

合っていた。

そんな中、星の頭を撫でながら、徐ろにエリエが口を開く。

「――星。たまには2人だけでお出掛けしよつか!」

「……えっ?」

その彼女の言葉を聞いて、きよとんとししながら星が彼女の顔を見上げる。

それもそのはずだ。今はさつきまであかね色に染まっていた日も落ちかけ、後1時間もすればすっかり暗くなるという時間。

今から外に出掛けるなんて、エミルが許すはずはないと星は思ったからだ。

まあ、今朝のことを考えると、こんな時間からの外出なんてエミルは絶対に許してくれるはずがない。

それが分かっているのか、困惑した表情で俯き加減に呟く。

「……でも」

口籠った星は彼女のその提案に、心配そうな表情で俯いた。

「大丈夫! 今はエミル姉はイシエルさんとお風呂に入ってるはずだから!」

「……そ、そういう問題じゃ――」

「――さて、悩んでると夜になっちゃうよ。早く行こつ!」

星がその言葉を返そうとした瞬間、エリエは強引に星の手を取って走り出した。

部屋を駆け抜け、廊下を走っていたが不思議と誰ともすれ違うことはなかった。

「ちよつ、ちよつと待つて……」

階段の入り口で星は困惑した表情であたふたしていると、エリエは止まってくれない。それどころか、どんどんスピードが速くなる。

その勢いから察するに、どこか焦っているようにも見えた。まあ、彼女もエミルにバレたらどうなるか分かっているのだろう。

「なに!? ちよつと待つつのじゃ〜!」

そんな2人を見て、慌ててレイニールが後を追ってくる。

城を出た星達は街の中を歩いていった。

夜に街に出るのはエミルに禁止されていた。今回はエリエと一緒にだが「絶対に夜外に出るのはだめよ！」ときつく言われたエミルの顔が脳裏をちらつく。

街は相変わらず人もまばらで、この時間になると街頭の明かりだけが寂しそうに人通りの少ない繁華街を照らしている。

そんな街中とは対象的に、宿屋の中だけに人が集まり、今が稼ぎ時と言わんばかりの活気に満ち溢れている。

(……楽しそうだなあ)

星はそう思いながら、そんな彼等を見て微笑みを浮かべた。

あの人の輪に入れば、どんなに楽しいだろうっと感じていた。

宴会の真つ最中なのか、中ではお酒を持って忙しく各テーブルを動き回っているNPCの姿が映る。

まるでファンタジーの酒場を彷彿とさせるその光景に、見ているだけの星もなんだかワクワクしてきていた。だがその一方で、隣を歩いていたエリエは不機嫌そうに呟く。

「もう、なによ。ビクビクしちやってき、バカみたい……帰ろうという意思はないの？」

エリエの言葉を聞いて、星も表情を曇らせた。

このゲーム世界に閉じ込められて、もう結構な時が経ったにも関わらず。未だに外との交信はおろか、何らかの手が打たれた形跡もない。

だが、宿屋の中の人々はそれをどう思っているのかは分からないが、皆楽しそうに会話をしたり、お酒を飲んだりしている。

星のその表情はそれを一瞬でも『楽しそう』と思ってしまった自分に、嫌悪感を抱いたからに他ならなかった。

今を楽しく過ごすということは、現実の世界を過去にしまうことに等しい。

目の前の宿屋の中で楽しんでいる人達は、昼夜問わずダンジョンに潜って必死に現実世界へ戻る道を探している人達へのぼうとくと言ってもいいかもしれない。

現に、ギルドホールには些細な情報から重大な情報まで、数多くの情報が毎日寄せられている。

そういった情報はもちろん運営が機能していない今、プレイヤー達が必死に集めた情報なのだ――。

エミル達もそういった情報を仕入れにいく為に、街に用事がある時はギルドホールに立ち寄っている。

今のところ確証のある情報は少ないものの。ゲームの中に閉じ込められた時より、確実にその数は減っているのも事実。

エリエのこの宿屋の者達を軽蔑する言動も、思い通りにいかない状況への苛立ちの現れでもあるのかもしれない。

「もう行くこう！ 星」

「……えっ？ は、はい」

エリエに手を引かれ、強引にその場を離れる。憤っているエリエに、星はそれ以上は何も言えなかった。

2人が街の裏の方に入って行くと、そこにはピンクと紫色のネオンの看板が掲げられている怪しげなお店が一軒だけぽつんと佇んでいた。

「――エ、エリエさん……ここ怖いですよ。早く戻りましょう……」

星はエリエの後ろに隠れるようにしながら、不安そうな声で言った。

「大丈夫だよ。私は何回もここに来てるんだから」

「……えっ？」

「……何回もってどういうこと？」

微笑みながら自分を見るエリエを見上げ、星はそう思いながら首を傾げた。

エリエは一瞬の迷いもなく扉を開く、星は透かさずエリエの体の後ろに隠れた――。

2人で外出2

「あら〜。いらつしやくい」

エリエの後ろに隠れた星の耳元に飛び込んできたその独特の声に、星は聴き覚えがある。その声の主を確認すべく、星が恐る恐るエリエの後ろから顔を覗かせた。

星の姿を見つけると、その声の主は歓喜の声を上げる。

「あら〜。星ちゃんじゃない。来てくれてうれしいわ〜」

「——サラザ。急に近付いちやダメだよ。星が怯えてるから！」

星の顔を見つめ、両手を前に突き出して今にも飛びついてきそうな体制でにつこりと微笑んでいるサラザに向かってエリエが言った。

星は急に目の前に現れたサラザに、体を小刻みに震わせ、まるで怯えた子犬のような瞳を向けている。

まあ、目の前に筋肉で武装したオカマがいれば、大の大人の男であつても恐怖を覚える。体格差のある星には、人を通り越してデーモンに見えているに違いない。

「もう。いい加減に私にも懐いてほしいわ〜」

「——星だつてそのうち慣れるよ。それより、ちよつと話があるんだけどさ」

「ああ、分かつてるわ〜。さつきメッセージで言つてたやつね！」

サラザは微笑むと、エリエは険しい表情で頷く。

星はそんな2人の会話している様子を見て、首を傾げている。その場の状況を理解できてない星に、エリエが優しく話し掛けた。

「星。悪いんだけど、少しサラザと大事な話をしないとダメだから、ちよつとだけそのテーブルでレイニールと待つてもらつていい？」

店の入り口に立っていたエリエが星の肩を指で優しくトントンと突くと、店のテーブルを指差した。

店内にはバーカウンターとテーブル席が用意されていて、カウンターの後ろの棚にはライトによつて照らし出された数多くのボトルが宝石の様に様々な色に輝いていた。

視線をテーブルの方に移すと、足元に埋め込まれ店内の至る場所に設置されたピンクや紫のライトが薄暗い店内全体を照らしている。

店の奥には紫色の薄いカーテンがかかったステージが設けてあり、その上のミラーボールが怪しいく光を反射している。

何というか、まるでバブル期のダンスホールの様だ――。

(ここって何をやる場所なんだろう……)

そんなことを考えながら、ミラーボールをじっと見つめていた星はの耳に飛び込んできた自分とレイニールを呼ぶエリエの声に慌てて返事をする。

「は、はいー!」

「どうして我輩の名を呼び捨てにしてるのじゃ! 我輩を呼び捨てにして良いのは主だけじゃ!」

星は空中で激昂して両手を振っているレイニールを抱きかかえると、お店の隅の大きなテーブルに腰を下ろした。

怒りを抑えられない様子のレイニールはブツブツと文句を言っていると、サラザが両手にジュースの入ったジョッキグラスを2人の前に置いた。

「ごめんなさいね。すぐに終わるから、ちよつとこれでも飲んで待ってて〜」

「あつ、はい。ありがとうございます」

「うむ。頂くのじゃ!」

星とレイニールは目の前のグラスを手にとると、サラザは微笑んで小さく手を振ると、バーカウンターに座っているエリエの方へと戻っていく。

目の前に置かれたジョッキグラスを両手で持ってジュースを飲んで「おいしいね」と、微笑み合っている2人を遠目で見ていたエリエが微笑みを浮かべている。そんな彼女に、サラザが神妙な面持ちで尋ねる。

「それで、エミルは本気でダークブレットを攻めるつもりなの?」

「……うん。今朝、星があそのこの連中に襲われたらしくて……それが原因だと思う。でも、話では2回目らしいんだよね。星が襲われるの

が」

エリエは表情を曇らせて小さく呟く。

それを聞いたサラザは星をちらつと見ると、エリエに顔を近付けて徐ろに口を開いた。

「——でも、あそこの規模は世界でも5本の指に入る組織よ？ それを本気で潰せると思ってるのかしら……」

「そうなんだよね〜」

エリエはその言葉を聞いて一瞬は難しい顔をしたものの、すぐに脱力しテーブルに両手を投げ出すようにべたべたと倒れ込む。

お手上げと言わんばかりに両手を放り出している彼女の前にサラザがミルクの入ったグラスを置く。

グラスの方をちらつと見遣ったエリエが、再び大きなため息を漏らす。サラザはそんなエリエを見て不安そうな表情を浮かべている。

エリエはサラザに今にも泣き出しそうな瞳を向け、掻き消えそうな声で尋ねた。

「……ねえ〜。私どうしたらいいのかな……？ サラザ」

「う〜ん」

グラスを持つてエリエの隣の席に来て唸っているサラザに、エリエは話しを続ける。

「エミル姉は無理に付き合わなくていいって言うんだけど……エミル姉を見捨てるのは嫌だし。でも、星を守り切れる自信もないの……困っちゃっうよね……」

「……エリー」

無理に微笑んで見せているエリエの頭を覆うように、サラザのたくましく大きな手が優しく撫でる。

エリエは視線だけをサラザに向け、軽く首を傾げた。

「馬鹿ねえ〜。1人で思い詰める必要ないのよ？ 私がいるじゃないわ〜」

「……サラザ。でも——」

サラザの口から出たその心強い言葉に瞳を潤ませたエリエが口を開こうとした時、それを遮るようにエリエの唇にサラザの人差し指が

触れた。

「――ふふつ、大丈夫。私が負けるのは恋だけなんだから。必ずエリーも皆も守ってあ・げ・る♪」

「ううう。ありがとうサラザ〜!!」

エリエは微笑むサラザの首に抱きつく様に腕を回すと、瞳を潤ませながらサラザに頬擦りしていた。

すると、サラザはエリエの肩にがっしりとした腕を回して、ぶら下がるかたちになった彼女の体を支える。

そんな時、店のドアが勢い良く開いた。

「今日も来たわよく。サラザ!」

「いいお肉が入ったんだって〜?」

勢い良く開いた扉から、世にも奇妙な2人のオカマが入店してきた。

1人はサラザと同じくらいのムキムキの体でリーゼントに茶色い瞳のオカマで、2人目はまるで相撲取りのような恰幅の良い体格で、毛先をツンツンと逆立った緑色の短髪に黄色い瞳のオカマだった。

「あらお客さん? 珍しいわね〜」

「あら〜、ガーベラにカルビじゃなくいい。いらっしやくい」

サラザが顔だけ入口に向けて笑顔で迎える。

おそらくはサラザの店の常連なのだろう。全く物怖じせずにサラザの趣味全開の奇抜な店に入ってくるその姿は、逆に異様な雰囲気醸し出していた。

何というか一言で言うならば、まさにこの店にピッタリな客と言ったところだろうか……。

2人はその声に従うようにサラザ達の前まできた。

気付いた星が軽く会釈をして形式的に「おじやましています」と小さな声で挨拶をする。

それを見た2人は動きを止め、ぎこちなく笑みを浮かべている星を目を見開いて、物凄い眼力のある瞳でじっと見つめている。その瞳はまるで、獲物を捕らえる前の肉食獣の様な印象を受ける。

2人のただならぬ雰囲気、星はビクツと肩を震わせると。

「あ、あの……どうしましたか？」

(……いい、いやな予感がする……)

そう思いながらも、凄い視線を向けてる2人に星が首を傾げながら尋ねた。

次の瞬間。星の予想が的中し、彼女の元に2人が物凄い勢いで小走りで駆け寄ってきた。

突然のことに驚いたのと恐怖で、星の体がまるで金縛りにあっているのかの様に動かなくなっていたが、そんなことなどお構いなしに近寄ってきた2人は歓喜の声を上げた。

「——ちよつと何よこの子！ すつごくかわいいんだけど」

「——このゲームでこんな小さな子を見るの初めて！ あたい。この子をお持ち帰りするわ！」

いつの間にか星の左右を封じた2人が、ジリジリと両サイドから挟むと、怯える星に強引に頬擦りしている。

顔に当たる髭と堅い頬骨、そして反対側からは弾力のあるモチモチとしたハリのある肌が押し付けられる度に波打っている。

「あつ、ちよつと……うっ、お酒臭い……レイ」

星は今にも泣き出しそうな瞳で、一目散に離脱した空中のレイニールに助けを求めた。

動けなかった星とは違い。レイニールは本能で彼等が迫って来る危険を察知し、逸早く上空へと避難したのだ。

「——うむ。主のピンチじゃ……しかし、これを飲み干してしまわなければ助けられんのじゃ！」

レイニールは星を見下ろすと、両手に持ったジョッキグラスを交互に見ている。

どうやら、レイニールは咄嗟に共に避難したジョッキグラス達を手放す選択ができないようだ。

っと言うよりも、中に注がれたドリンクの方が重要なのだろうか——

その時、星の頬を挟んでいる2人の顔をサラザが強引に引き剥がして。

「ちよつと。星ちゃんが嫌がつてるじゃないの。離れなさいよ」

そう叫ぶサラザの姿を見て、星は初めてサラザの取った行動でほつと胸を撫で下ろした。まだ違和感のある両頬の辺りを、難しい顔をした星が頻りに撫でている。

レイニールも同じで、ほつとした表情を浮かべると両手にジョッキグラスを握り締めたまま、星の頭の上に着地した。その直後、星の頭がガクンと大きく下がる。

「……レイ。すつごく重い……」

「ああ、すまぬ。そいえばこれを持っていたのを忘れていたのじゃー！」
「いいから……早く降りて……」

顔を赤くしながら星が言うのと、レイニールはパタパタとテーブルの上に着地して、両手に持っていたジョッキグラスを置いた。

星は少し不機嫌そうにそっぽを向いている。その理由はもちろん――。

「……レイは私より。ジュースの方が大事なのね！」

そう吐き捨てるように告げる星の言葉を聞いたレイニールが慌てて星の機嫌を取ろうと顔芸を始めたが、星はなおも不機嫌な表情で膨れっ面をして顔を合わせようとしない。

そんな星に、申し訳なさそうにサラザが話し掛けてきた。

「ごめんなさいね。オカマって綺麗な物には嫉妬するんだけど、可愛い物は愛でるのよ。勘弁してあげて」

「……は、はい。でも私、可愛くなんて……」

星はその話を聞いて頬を微かに赤く染め、俯き加減にそう呟いた。まあ、オカマの生態を知った所で活用する場面がないだろうが……。

2人は自分達の衝動を抑えられなかったことを気にしているのか、俯きながら申し訳なさそうな表情で眉をひそめたまま、手を前に組んでもじもじしている。

その時、サラザの後ろからひよっこり出てきたエリエが言葉を発する。

「あんまり自分を低く見たらだめだよ、星。それは自分に自信をなく

す事になるんだから……もつと自分に自信をもたないと！」

「……うう〜」

照れ隠しのつもりがエリエに怒られてしまい。星はしょんぼりと肩を落としている。

落ち込んだ様子の星にレイニールが。

「とりあえず。飲んで忘れよう！」 主

っとジュースの入ったジョッキグラスを顔の前に突き出した。

その言葉のせいか、レイニールの持っているジョッキグラスの中身が、自然とお酒に見えてくるから不思議だ――。

それから数時間。新たに加わったオカマ2人と共に、楽しい時間を過ごした星達は名残惜しそうにサラザの店を後にした。

「……エリエさん。楽しい人達でしたね」

「うん。人は見た目で判断しちゃいけないって事だよ〜」

「はいー」

2人は微笑み合うと、石畳の道をゆっくりと歩いて行く。

彼女の人は見た目によらないという言葉聞いて、星は素直にその言葉に共感していた。

最初はガチムチのガベラと巨漢のカルビに戸惑っていた星だったが、話をしてみると意外と気さくな人間だった。

「星はカルビさんに飛行機ごっこしてもらったもんね。楽しかった？」

「はい！ レイの気持ちが分かりました！」

嬉しそうに両手を大きく広げた星を見て、エリエも嬉しそうに頷く。

「ふふっ。そっか！ ならまた行こうね〜」

「はいー」

星はにつこりと微笑んで答えると、エリエも満足そうに笑みを浮かべた。

だが、それを面白く思っていないのか、レイニールが不機嫌そうにそっぽを向いて。

「……我輩に頼めばいつでも空を飛べると言っておるのに。主のバカ

もの……」

レイニールはそう吐き捨てる、いじけたようにそのまま上空に上がってしまってしまふ。

星は困った顔をして、不貞腐れて空へと昇っていくレイニールのその背中を見つめていた。その時、隣に居たエリエが星を見下ろして話し掛けてきた。

「——ねえ、星。……星はもし私達が居なくなったらどうする？」

「……えっ？」

今にも泣き出しそうな顔で見つめてきた星に、慌てた様子で両手を左右に振って否定したエリエが口を開く。

「えっ？ あっ、今のなし！ そんな事あるわけないじゃん。もしもの話だからもしもの！」

「……もしもの？」

それを聞いて、なおも星は瞳を潤ませながらエリエの瞳をじっと見上げる。

その星の表情を見て、エリエは『この子は一人にしたら自殺しかねない』と本気で思った——。

今度は首も両手と一緒にブンブンと振って、エリエが全力で今の発言を否定する。

「ああ、もしももないから、大丈夫だよ星。私はいつまでもずっと星と一緒にいるから！」

「……はあく。良かったです」

「あはは……星は心配性なんだから……」

彼女の言葉を聞いた星はほっとした様子でにっこりと微笑みを浮かべた。そんな星の顔を見て、エリエは思わず苦笑いを浮かべた。

2人で外出3

その時、星はふと何者かの気配を感じて辺りに気を配る。

繁華街に出て来た時に道の両端にある建物の屋根から、何者かの視線を感じた。

(……なに？ 誰かに見られている気がする……)

不安そうにきよろきよろと辺りを見渡していると、星の様子を不思議に思ったエリエが話し掛けてきた。

「星どうしたの？ 何かあった？」

「えっ？ いえ、なんでもないです」

(……気のせいだよね)

星はそう心の中で自分に言い聞かせると、エリエに向かって笑みを浮かべた。

っと次の瞬間。エリエは星の手を引くと、いきなり走り出した。

驚いたように目を丸くさせた星が、エリエに向かって叫ぶ。

「ど、どうしたんですか!？」

「ああ、急に甘い物が食べたくなつてさ！」

「……ああ、なるほどー」

突然走り出すエリエの行動に、もしかしたら彼女も自分と同じ様に何かを感じたのかと期待したのだが、ただの星はちよつと残念そうな顔をしていた。

その後、2人は近くの甘味処にの前にきた。

気がつくとき高く飛んでいったはずのレイニールも、ちよこんと星の頭の上に乗っている。しかし、未だに不機嫌なのは変わらないように、そつぽを向いたままなのだが……。

星達は街の表通りに面した場所にある茶色い瓦屋根のお店の前にいた。

そこに掲げられている古そうな木の看板には『甘味処 白タマ庵』と筆で書かれている。

星がその看板を見上げていると、エリエがのれんの掛かった引き戸を開いて店内に入つていった。それに気付いた星も、慌てて彼女のそ

の後を追いかける。

店内には向い合って座る横に広いソファの様な座椅子の背もたれ部分で、各座席を区切られており。木材独特のおうとつを活かした古そうな木のテーブルの頭上には、和紙で作られたランプが柔らかな光を放っていた。

また店内のあちこちには観葉植物が置かれている。その落ち着いた大人の雰囲気の中で、店の中央に置かれた巨大な2体の招き猫のぬいぐるみがとてもミスマッチだ。

そのぬいぐるみを見て、エリエがぬいぐるみを抱いていた姿を思い出し、思わず星がくすつと笑みを浮かべる。

そんな星に、エリエが満面の笑みで話し掛けてきた。

「ここはね。宇治抹茶金時あんみつが絶品なんだよ」

「……エリエさんは本当にお菓子を食べるのが好きなんですね」

「うん！ まあ、リアルじゃなかなか食べれないしね。今日は私のおごりだから遠慮しないでいいよ」

そう呟くと、エリエは手を上げて店主を呼んだ。

フリーダムの中ではサラザのように、プレイヤーが自ら店舗を運営していることも少なくない。

それは一定のレベルを超えると、プレイヤーは装備アイテムなどの収集以外はやることなくなる為だ。

ゲームをプレイしていて、最も大変なのはキャラクターのレベル上げだろう。これはレベル制MMORPGをプレイした者なら誰しもが経験していることだ――。

武器の入手は資金でプレイヤーが店売りしている物を購入すればいいが、レベルに必要な経験値だけはそうはいかない。

毎日レベルに似合った経験値のいい狩場に缶詰になってレベルを上げるなんていうのは廃人と呼ばれるトッププレイヤーならば、日常的に行っている行為だろう。

レベルアップに必要な膨大な経験値を入手するには、これまた膨大な時間モンスターを狩り続けるしかない。

正直。選り好みさえしなければ、その中で得た資金で必要な装備は

あらかた揃えることができる。

しかし、日々モンスターを狩り続けるという苦行も、無事にレベルをカンストしてしまえば、今度は日々やることがなくなったという喪失感と退屈という苦行に変わる。この苦行の時期が、一番ゲームを止めてしまうプレイヤーが続出する時期と言ってもいい。

それを避ける為に、プレイヤーはそれぞれにダンジョン攻略に資金を調達しながら、運営がイベントを開催するの待つのだ。

効率は悪いが狩りとは違い、待つてるだけで資金を調達できる分、このような暇つぶしを兼ねた資金調達をしている者も少なくないのだ。

まあ、結局はこっちの副業の方が忙しく。本命だったはずのダンジョン攻略が疎かになるケースが多い。

凄いやプレイヤーはゲーム内はNPCの従業員に殆どの業務を任せ、自分はリアルで実際にゲーム内でオープンしていたショップを経営する者までいるくらいだ――。

「それじゃー。いつものを3つで！」

「はい。かしこまりました！」

店主の少女は大きな猫のプリントが入ったエプロンを身に着け笑顔で返事をする、店の奥へと消えていった。

結局、星がメニューを見て決める暇もなくエリエが注文を終えてしまった。だが、そんなことよりも、エリエが店主に「いつもの」と言っただけで店主が理解するあたり。彼女はどれだけ、この店に通い詰めているのかの方が星は興味がある。

注文したのを確認して、レイニールが星の頭の上から翼をはためかせ、ちよこんとテーブルの上に降りた。

「ほう。我輩はこういう場所は初めてだが、意外といいものじゃなっ！」

ウキウキした様に弾ませた声を聞くと、もうさっきのことを怒ってはいないらしい。

注意深く辺りを観察するレイニールに、エリエが含み笑いを浮かべ。

「ふふ〜ん。レイニール、驚くのはまだ早いよ。宇治抹茶金時あんみつスペシャルを見たらもつと驚くよ〜」

「なに!? スペシャルじゃと!?!」

オウム返しのように言って驚くレイニールに、エリエは得意げな笑みを浮かべている。

そのやり取りを見ていた星は思った。

(レイったら……エリエさんに呼び捨てにされるのあんなに嫌がってたのに、もういいのかな?)

さつきまではエリエに自分の名前を呼ばれる度に不快感を露わにしていたのだが、今は自然と会話をしていた。

星がそんなことを考えていると、店主の声が耳に飛び込んできた。

「お待ちせしました〜。宇治抹茶金時あんみつスペシャルです〜」

テーブルに置かれた大きな器に入った、溢れんばかりの山盛りの宇治抹茶金時あんみつスペシャルを見て、星とレイニールは驚いている。

大きな果物を乗せるガラスの器にモナカやチョコレート、だんごなどが乗ったたっぷり抹茶のソフトクリームにアイスクリームの上に生クリームが盛られ、下の層にあんみつが入っていた。

それとは対照的に、エリエは胸の前で手を合わせて歓喜の声を上げた。

「おっ! 来た〜!!」

スプーンを手に、今にもその巨大なあんみつを食べようとしているエリエに、星は言い難そうに尋ねた。

「あの……その……これ食べるんですか?」

「あつ、あははつ。そうだよね……全員の分が来てから食べるのが普通だよね!」

「い、いえ。そうじゃなくて——」

星がそう口にしようにした直後。一度は厨房に戻った店主が持つてきたもう2つ巨大な宇治抹茶金時あんみつスペシャルが目の前に置かれたことにより、星の言い出すタイミングが完全になくなってしまった。

宇治抹茶金時あんみつスペシャルは器だけでも、星の顔より大きく、レイニールが余裕でお風呂代わり浸かれるほどの大きさのものだ。まあ、実際にお茶碗などをお風呂代わりに使うのは、目玉の妖怪くらいなものだが……。

流されるままに星はスプーンを手に取ったが、その大きさゆえ一体どこに刺せばいいのか分からないほどの宇治抹茶金時あんみつスペシャルを見つめていた。

その横でレイニールは躊躇なくスプーンを突き刺し、パクパクと食べ進めている。だが、星はもう一つ。宇治抹茶金時あんみつスペシャルを食べるのに問題を抱えていた。

順調に食べ進めるレイニールを横目に、星は深いため息を漏らす。(……レイはなんでも食べれていいなあ。私、抹茶つて苦くて苦手……)

星が浮かない顔をしながら、目の前のてんこ盛りになっている宇治抹茶金時あんみつスペシャルを見下ろしていると、エリエが心配そうに尋ねてくる。

「どうしたの？ さっきから一口も食べてないじゃない。もしかして——虫歯になるのか心配？ 大丈夫だよ。ここではそういう心配はいらなから！」

そういうとエリエは再び、宇治抹茶金時あんみつスペシャルをスプーンいっぱい掬い上げ、口の中へと頬張った。

それを見て、星は言い難そうに口を開いた。

「あの……実は私。抹茶つて苦くて……苦手なので……」

「なくんだ。そんな事？ ここのは甘く作られてるから大丈夫！ それでもダメなら……すみませくん！」

何を思ったのかエリエは手を上げて叫ぶと、突然店主を呼び寄せた。

すると、他のお客さんの接客をしていた店主が慌てて駆けてきて。

「どうしましたか？ 追加のオーダーですか？」

エプロン姿の店主がおぼんを胸に押し当て小首を傾げている。

「いえ、実はこの子が抹茶。苦手みたいで……」

「ああ、かしこまりました。少し待っててくださいね〜」

「あつ、別にそこまで——」

エリエがそう告げると、星の声も聞かずに店主は急いで奥へと駆けていった。その直後、きな粉と黒蜜を持って店主が戻ってくる。

店主は持つて来た物を星の目の前に置くと、につこりと微笑んで話し掛けてきた。

「お嬢さんごめんなさいね。もう少し甘くできれば良かったんだけど、これで我慢してね？」

「あつ、はい。ありがとうございます」

星はぺこりと頭を下げると、きな粉と黒蜜を宇治抹茶金時あんみつスペシャルにたっぷりかけた。その後、それをスプーンで掬うと、意を決して口に含んだ。

数秒後、星が目を見開く。

「——あつ、おいしいかも……」

星がそう呟くと、それを聞いていたエリエが微笑みまたパクパクと物凄い勢いで食べ始める。

何度も見てきたが、彼女のお菓子を食べる時のスピードには度肝を抜かされる。

可愛い顔をして少しずつつ長めのスプーンで次から次へとパクパクと口の中に運んでいく姿は、まるでフードファイター顔負けである。

3人は宇治抹茶金時あんみつスペシャルを食べ終え店を出た。

だが、食べ終えたと言っても、結局最後までたべきったのはレイニールとエリエの2人だけで、星は結局食べきれずに2人に食べてもらったのだが……。

「でもやっぱりこの宇治抹茶金時あんみつスペシャルは最高ね。食べ飽きるって事がないし」

「うむ。お前は好きになれんが……その意見には同感なのじゃー！」

2人はそう頷くと、満足そうに微笑んでいる。

それとは対照的に星は顔を青ざめさせ、大きなため息をついて呟く。

「……はあく。もう当分は甘い物は良いいかな〜」

星はこれで何度同じことを呟いたのかと考えて、再び大きくため息をついた。

「さて、そろそろ城に戻ろっか！ さすがにエミル姉に怒られると思うし……」

「……は、はい」

今まで綺麗さっぱり忘れていた事実をエリエの口から聞いて、急に現実に引き戻された気がしていた。

それもそうだろう。結果的にエリエに流されたとは言っても、勝手に外出したことを怒られ、ふてくされていたところから城を抜け出した——これはまさに、エリエを巻き込んだのれっきとした家出なのだ……。

（はあ……私。何してるんだろう……）

心の中で呟き、浮かない顔をしていた星にエリエが優しく言った。

「だ、大丈夫！ もしエミル姉に何か言われても私が星を守ってあげるから！」

「……エリエさん」

「うん。だから、安心して——んツ!？」

そう口にしようとした直後。エリエの表情が険しいものへと変わる。

急に怖い顔をした彼女の様子に、星もなんとも言えない緊張感を肌で感じていた。

それもそのはずだ。夜の暗闇に乗じて、微かに動く人影が数人、屋根の上から星とエリエを狙って弓を構えている。

その時に甘味処に入る前に感じていた視線の正体を、星は今更ながら理解した。

エリエは咄嗟に星を自分の背中へ隠すと、小さな声で指示を出す。

「——星。よく聞いて……店舗の中に戻ったらダメ。戻ったら奴等もその後に押し込んで一網打尽にされる。戦闘不可でも小競り合い程度の戦闘は許可されてるし、向こうは見たところエルフだから狭い店内じゃ、スピードで有利な奴らからは逃げきれない」

「なら、どうしたら……」

星が不安そうな声を上げると、エリエは余裕の表情でくすつと微笑んだ。

「大丈夫。サラザのお店に戻れば、スピードでは勝てなくてもサラザ達のパワーで圧倒出来るから！」

「なるほどー」

星とレイニールは声を揃えて相槌を打つ。

だが、この甘味処は表通りにあり。サラザの店はそれから奥まった裏通りにある。

一時的とはいえ、人目につかない場所に行くのはリスクが大きいことを、星もすぐに気が付いた。しかし、それはエリエも分かっているはず……。

そのリスクを犯してでも、今は身の安全を確保することを最優先にしているのだろう。

星は不安そうなエリエの背中を見つめた。

そして次の瞬間。エリエの口から出たその言葉に、星の考えが的中していたと理解することになる。

後ろに隠した星に向かってエリエがささやく。

「――星。合図したら、私の背中におぶさって……私の固有スキルを使って全速力でサラザの店に戻るから、振り落とされないようにしっかりと掴まるんだよ？」

「――はー」

星はエリエの言葉に返事をして、彼女の合図を固唾を呑んで待った。

そして張り詰めた空気の中、月が雲に隠れる寸前に「いま！」と言うエリエの声が響くと、素早くしゃがみ込んだエリエの背中に星がしっかりとしがみつく。

次の瞬間。ヒューンツという矢の風切音が数回星の耳に飛び込んできたかと思うと、物凄い勢いで星の体は前に引つ張られた。

2人で外出4

エリエは矢を搔い潜りながら、サラザの店へと全速力で走っている。

物凄いスピードで駆け抜けるエリエの背中中、星とレイニールは必死にエリエの体にしがみつくと、エリエが急に方向を変えた。だが、サラザの店は表通りからの一本道だったはず――。

「エリエさん。サラザさんのお店に行くんじゃないんですか？」

「うん。そのはずなんだけど……なかったはずの場所に壁ができてるの」

「……壁？」

星が前を向き直すと。突然、目の前に壁が現れ、その都度エリエが方向を変える。

だが、現れる壁が徐々に早まっていく。

(……これは、誰かに誘導されている?)

「エリエさん！ このまま進んじゃダメです！」

そう叫んだ星に、必死に走り回るエリエが声を荒げた。

「だったらどうするの!? このまま大人しく捕まるわけにはいかないんだよ!」

「……うーん」

確かにどんなに逃げ続けても、このままではいつか壁と敵に前後を挟まれて終わりだ。

なにかいい方法はないかと星が唸っていると。その直後、エリエの服にしがみついていたレイニールが声を上げた。

「主！ 我輩が時間を稼ぐ。その間に主はこやつとさっきのオカマーズの元へ行け!!」

「でも……それじゃレイが！」

星が心配そうな表情をすると、肩にしがみついていたレイニールは星に微笑みを浮かべてエリエの肩を叩いた。

「――主を頼むぞ！」

「ええ、必ず助けに行くから……」

「うむ。期待しておるぞ〜」

深く頷いたレイニールはそう告げると、走っているエリエの体から手を放した。

空中でクルクルと前転をした後、空中でピタッと止まり、星とエリエを追ってきている者達にレイニールが叫ぶ。

「我輩の主はやらせんのだじゃ！ お主達の相手はこの誇り高き星龍。レイニールがしてやろうツ!!」

大声で名乗りを上げるレイニールの体は巨大化し、追手の前に立ちはだかった。

追手達は突如として目の前に現れた黄金の巨竜に、ただただ面食らっている様子だ。

そんな彼等に炎を空高く吹き上げ、レイニールの大きな瞳がギロリと彼等を見据えた。

黄金の巨竜を見上げたまま立ち止まっている彼等にレイニールが声を荒げた。

「——覚悟は良いか？ 雑魚ども!! メテオフレアー!!」

そう咆哮を上げた直後。レイニールの口から先程のものとは比べ物にならない炎が広範囲に吹き出して、次々と追手の者達を焼き払った。

彼等は断末魔の叫び声を上げ、キラキラと光となって消えていく。

それはこの世界から消える時にのみ、発生するエフェクトそのものだった。

だが、これは明らかにおかしい……以前。エミルのリントヴルムでは炎で焼き尽くされた男達はバトル終了時HPが回復し復活していた。

つということは、レイニールはゲーム上ではモンスター扱いになっているということなのだろうか……。

思いのほか早く片が付いたレイニールは再び小さくなり、先に走っていった星達を追いかけた。

* * *

レイニールの体を張った足止めのおかげで、追手を巻くことに成功した2人はサラザの店へと急ぐ。

今まで雨の様に降り注いでできていた矢がなくなり、それだけで進むのは断然楽になった。

(矢が飛んでこなくなった……レイ……)

星は心配そうに後ろを振り返るが、もうそこにはレイニールの姿はない。

悲しそうな表情の星が涙を呑んで前を向き直す。

本当は今すぐにレイニールの元に戻りたい。しかし、ここで戻ったらレイニールの体を張った行動が全て無駄になってしまうと星は分かっていたからだ。

「エリエさん！ 急いでください！」

「分かっている！ ここを抜ければサラザの店よ！」

エリエはその声に応える様に、更に速度を上げた。

おそらく。エリエも残してきたレイニールのことを気にしているのだろう。

つとそこに、ネオンの光りを放つ看板が飛び込んで来た。

あれはサラザの店のもので間違いない。

エリエが星をおぶったまま、店の扉を開けようとドアノブに手をかけた瞬間。足元から立ち上がる青い光りが2人の全身を包んだ。

「……えっ?」

「な、なに!？」

2人が足元を見ると、そこには不気味に青く発光する魔法陣があった。

「さっきまではなかったのに……」

「これは転移用の魔法陣!? どうしてここに!!」

(あの壁といい。この魔方陣といい。私達の行動を把握できている何者かにしか……もしかして!!)

エリエの脳裏に、ディーノと名乗った怪しい男の顔が突如として浮かんで来た。

「……あいつの仕業かッ!!」

そう呟きエリエが悔しそうに唇を噛み締めると、2人はどこかへと強制的にワープさせられてしまう……。

転送時の虹色の光の中を抜けた直後、星とエリエは見たことのない光景が広がっていた。

「……………(こ)は(ど)こ(か)?」

星が辺りを見渡すと、そこは一面崖に囲まれた窪地になっていた。月明かりのみに照らされた崖の上を良く見ると、崖の上には多くのプレイヤーが星とエリエに向かって弓を構えている。

既に弓の弦を引き絞っている無数の人影の標的は間違いなく星とエリエに向けられていた。それを見た2人の緊張感が一気に高まる。

エリエは星が不安そうな表情で辺りを見渡しているのを見て、崖の上のプレイヤー達に向けて叫ぶ。

「ちよつと! どういうつもりよ!! こんな事をして、ただで済むと思ってるの!?!」

エリエが鋭く睨みながらそう言い放つと、その中から1人の男が前に出てきた。

崖の上からエリエ達を見下ろすその人物の顔には、狼の覆面がしっかりと覆っている。

それは忘れもしない。この世界と現実世界を孤立させた張本人に他ならなかった。

「ふふふつ。本来なら君はいらなかったんだがね。私が欲しいのは博士の娘の君だけだよ。夜空 星ちゃん」

「……………私のお父さんは博士じゃないし。私は物じゃないです!」
その発言を聞いた星が声を上げる。

すると、彼女の言葉に覆面の男は「はっはっはっ」と高笑いすると、再び言葉を放つ。

「そうか、博士は君が生まれる前に亡くなったんだったね……………いや、正確に言うとなががが生まれたその日に亡くなった……………と言う方が正しい

かな？」

「……なっ、そっ、そんな嘘には騙されません！」

明らかに動揺しながらも、星はそう叫んで覆面の男を睨みつける。強く言葉を返しはしたが、小さな肩を小刻みに震わせ、動揺を隠しきれない様子の星にエリエが耐えかねて声を荒げる。

「あんた！ 星のお父さんの知り合いかどうか知らないけど、この子には関係がないことでしょ!? もうこの子をそっとしておいてあげてよ!!」

「……うるさい。外野は黙っている!!」

「——きゃっ！ な、何よこれ!!」

覆面の男が憤りを露わにすると手を彼女の方に向けた直後、エリエの体が突如出現した鉄の檻の中へ閉じ込められた。

エリエの反応速度でも、全く反応できないほどのスピードで構築されたその檻の中で、エリエが「なによこれ！」と叫んでいる。

閉じ込められたエリエを心配そうに見つめる。エリエが結構強引にガシヤガシヤと暴れている様子を見ると、どうやら閉じ込める目的で作られただけで、それ以上の機能はなさそうだ。

星はエリエの無事をほっと胸を撫で下ろした、意を決したように覆面の男に叫ぶ。

「この人は関係ありません！ あなたが欲しいのは私のはずです！ エリエさんを放してください！」

「ふんっ！ その眼……博士と同じ眼だ。……いいだろう。元からその娘には用はない。君が抵抗せずにこちらに来るといふのなら、その娘の安全は保証しよう！」

「……約束ですよ？ もし、やぶったら私はここで死にます！」

星は鞘から剣を抜くと、自分の首筋に剣先を向けた。

その決意に満ちた瞳に、表情は見えないものの覆面の男も焦りを隠し切れないのか、あからさまに慌て始める。

フリーダムの世界ではPVP中は剣や異常状態でHPが『0』になることはない。だが、それはあくまでもPVP中の話だ。プレイヤー自身が自分を傷つけた場合には適応されない——。

その事実を覆面の男は知っていたのだろう。星の突然の行動に、覆面の男は慌てて叫んだ。

「待ちたまえ！ 分かった。彼女の身の安全は保証する！ だから、その剣を降ろしなさい……」

焦りながらも冷静な声音で諭すように告げた覆面の男。

彼のその様子を窺いつつ、星はもう一度声を大にして叫んだ。

「なら、まず周りの弓を持った人達を引かせてください!!」

「ああ、分かった!」

覆面の男は右腕を横に突き出すと、それと同時に周りを囲んでいた敵が皆離れていった。

その直後、星の目の前に青い光を放つ扉が現れた。

「さあ、彼等は引かせた。今度は君が私の言う事を聞く番だ。その扉に入りたまえ……」

「……分かりました」

星は覚悟したように瞼を閉じると、ゆっくりと彼の言う通りに扉の方へと歩き出す。

それをエリエが慌てて声を上げる。

「星。ダメだよ！ 私は大丈夫。こんな檻くらいその気になれば簡単に壊せるんだから！ だから、そんな奴の言う事を聞いたらダメ!!」

エリエはレイピアを抜くと、力任せに檻を何度も斬りつける。

しかし、そんなことをしても檻を破壊できるはずもなく。虚しくカシカシと刃が檻に当たる音だけが辺りに響いていた。

そんなエリエに星はにっこりと微笑むと、徐ろに口を開く。

「——私は大丈夫です。でも、こんなかたちでお別れになるなんて………エミルさん達には、お世話になりましたって、エリエさんから伝えてください——」

「——嫌だ！ そんなの自分で伝えなよ！ 私が……私は星を守るって決めたんだから！ レイニールにも約束したんだ！ だから……壊れる！ 壊れてよツ!!」

エリエは瞳に涙をいっぱい溜めながら、懇親の力で檻を攻撃したがる壊れるどころか、檻の鉄格子にすら傷一つ付かない。

そして、力任せに打つ付けていた為か反動でレイピアが弾かれ、無常にも檻の外へと飛ばされてしまう。

「……どうして私はいつもいつも……」

飛ばされたレイピアを潤んだ瞳で見つめると、力無く呟きエリエはその場に座り込んだ。

この時、今更になつて自分が星に外に出ようと言つてしまったことをエリエは悔いていた。まさか、今朝襲われてその日に再び仕掛けてくるなんて思いもしていなかった。

こんなことになるなら『エミルにも声を掛けておけば……』と。だがいくら悔やんでも、もう失つた時間は戻つて来ない……。

その一部始終を見ていた星が意気消沈しているエリエに言った。

「——エリエさん……もういいんです。もう十分です……レイをお願ひします。……さようなら」

そう言い残すと、星は扉の向こうへと消えていった。

扉は星の姿を飲み込むと、その場から幻の様に消え失せる。

もう姿の見えない星に向かってエリエが必死に叫ぶ。

「待つて！ 待つてよ……私が……私が守られても……意味ないじゃない……行かないで。星……行かないでよ……」

檻の中から右手を前に突き出しながら、涙でぼやける視界の中の星の残像だけを必死に掴もうと手を伸ばす。例え、その行動に意味がなかったとしても……。

そんな中、覆面の男が不気味に笑い声を上げた。

「ふふふつ……はっはっはっはっ！ これで全てが私の思いのままになる！ 博士。あなたの研究は私が引き継ぎますよ……博士の娘さえ手に入ればもういい！ 撤収する！」

その声に従うように辺りの敵も、次々に光の扉の中へと消えていく。

残されたエリエの檻の下にも魔法陣が現れ、元居た場所へと戻された。

それと同時に彼女を捕らえていた檻は消え、自由になったエリエはその場にうずくまっている。

「……星。私はなにもできなかつた……くそおおおおおおおッ!!」

エリエは大声で叫ぶと、握った拳で地面を思いっきり何度も何度も叩き付けた。

自分への苛立ちと、自分達の前をあつさり去っていった星への困惑がエリエの頭の中を支配していた。

それをぶつけるように地面に自分の手を打ち付けていたが、その手には未だに星の残した温もりが残されている気がして、エリエは手を打ち付けるのを止めた。

その声を聞いて、サラザとレイニールが驚いた顔をして現れる。

なおもうずくまったまま、すすり泣いているエリエに2人が尋ねる。

「大きな声出してエリーどうしたのよ。あれ？ 星ちゃんは……？」

「——ッ!? ……主！ 主はどうしたのじゃ!!」

意気消沈したエリエは無言のまま下を向いて小さく呟く。

「……星は。敵に捕まった……」

つとだけ告げると、レイニールは目を見開いてエリエに迫る。

「——なんじゃと!? 主が捕まってどうして……どうして、お前は無事なのじゃ!!」

その言葉を聞いたレイニールは怒りを抑えられないのか、エリエの胸ぐらを掴んで無理やり顔を上げさせると、責めるように言葉を続けた。

「我輩はお前に主を任せたのじゃ！ どうしてじゃ！ どうしてお主だけ……いったい何があったというのじゃ！ 黙っておらずになんとか言わんか!!」

「……ごめんなさい」

「くっ！ もう良い!!」

心ここにあらずと言った様子にレイニールは鋭く睨みつけ、エリエの胸元から手を放すとくるつと体を反転させた。

そんなレイニールを、サラザが慌てて呼び止める。

「ちよつとー ドラゴンちゃんはどこに行くの!?!」

「——そんなの主の元に決まってるのじゃ！」

「どこに居るか分かるの？ 少し落ち着きなさい。とりあえず、エミル達のところへ行きましょ〜」

「……………うむ」

主を何者かに奪われ、自分でもどうしたらいいのか分からないのだろう。静止するサラザの言葉に、レイニールは表情を曇らせながらも静かに頷いた。

サラザはレイニールに微笑むと、横目で落ち込んでいるエリエを見た。

* * *

2人で外出5

重い足取りのエリエと共にエミルの城に戻ると、サラザが部屋の扉を開く。

中からは「いつまで遊んでいたの？」と眉間にしわを寄せ、腕を組んでいるエミルが立っていた。

だが、星がないことに気付いてすぐに険しい表情に変わると、深刻そうな顔をしているサラザに向かって尋ねた。

「……サラザさん。何かあったんですか？」

「ええ、非常に言い難いんだけど……星ちゃんが何者かにさらわれたみたいなの……」

「星ちゃんがさらわれた!? ……どういことなの？ エリー」

「……ごめんなさい。エミル姉……私をかばって、星は……」

一度は収まった涙がエミルの顔を見て一気に吹き出したのか、エリエの瞳からは大粒の涙が止めどなく溢れていた。

俯きながらその場に立ち尽くしていたエリエを抱き寄せると、エミルが優しく頭を撫でた。

「大丈夫よ。とにかく落ち着いて、状況を教えてエリー」

「……うん」

エミルは泣いているエリエを落ち着かせるように優しい声でそう尋ねると、エリエも少し落ち着いたのでかゆつくりと口を開く。

「じ、実は……星とサラザのお店に行つて……その後。甘味処に入つて——」

「——ああ、そこはいいから……要点だけ手短かに話してもらえる？ エリー」

しつかりと事の事情を説明しようとしたエリエに、エミルは苦笑いを浮かべながら優しい声音でそう言うと、小さく頷いたエリエが再び話し始めた。

「甘味処を出た後。変な連中に襲われて……そしたら、逃げ込もうとしたサラザの店の前に魔法陣が現れて……強制ワープさせられて……狼の覆面の奴に檻に閉じ込められた私を助ける為に星が

「……………私がもつと強ければ。星は……………うわああああん！」

「うん。大体分かったわ。大丈夫だから——ねっ？」

一部始終を聞いたエミルは泣きじやくるエリエをなだめるように頭を撫でながら、サラザの顔を険しい表情で見つめた。

サラザもエミルのその表情を見て、決意に満ちた表情で頷くと、部屋の中へと進んでいった。

エリエを慰めながらその肩を抱くと、エミルもその後を追いかける。

リビングのテーブルには、デイビッドとディーノを挟むようにカレンが座っていた。

一応拘束は解いているものの、その様子から見て彼はまだ信用はされていないのだろう。挟み込まれた両脇の2人からは、常時突き刺すような視線を浴びせかけられている。

向かい合うように座ってディーノを見つめるエミルとサラザ。

神秘的な面持ちの2人と、あからさまに不機嫌なレイニールを加え、さらに重苦しく居心地の悪い空気が辺りに広がる。

それを察してかそうではないのか、イシエルがカツ丼を乗せたおぼんを持ってやってきた。

「皆お腹へったやろ〜？ カツ丼食べるか〜？」

にこにこしながら、やって来るイシエル。

その普段通りのイシエルの声色を聞いて、エミルが大きなため息をついた。

「はあく。イシエ……………今はそれどころじゃないのよ？ 星ちゃんが誘拐されたみたいなの！」

「……………誘拐!? それはあかん!!」

それを聞いてさすがのイシエルも慌てたのか、おぼんを持ったままあたふたしている。

「どうやら、イシエルのそれは空気を察しての行動ではなかったらしい。」

彼女の様子を見ていたサラザが徐ろに口を開いた。

「そう！ 今は一分一秒がおいしい……………だから、そのカツ丼。頂きま

たからだ。

「……エリエ。もういいから、少し休め……星ちゃんを助ける前に、お前が倒れたらどうしようもないだろ?」

デイビッドはエリエの手を自分の手で優しく包むと、エリエの腕は徐々に下がりデイリーノを放した。

涙を流しているエリエの肩を抱くと、デイビッドは隣の星の使っていた寝室へと向かっていった。そんな彼女の様子を見ていたその場にいた皆も――。

「……エリエちゃん。相当堪えてるんやろな」

「ええ、目の前で星ちゃんが居なくなっただもの。無理もないわ……」

「でも。どないするん? この世界は思ってるほど狭くないよ」

「ええ、それも分かってるわ……」

イシエルの言葉を聞いて、エミルは更に険しい表情になる。

そんなエミルの表情を見て、カレンが言い難そうに告げる。

「……マスターなら、敵のアジトの場所を知っているかもしれない。どうしますか?」

「――マスターが?」

その言葉にエミルとイシエルが同時に聞き返す。

カレンは小さく頷くと、再び話し始めた。

「はい。事件以来、マスターは俺と一緒に旅をしていたのは皆さんも知っていると思います。ですが、現実世界にいた時――その時に少し出てくると言っつて。マスターだけ数日間出掛けていた事があるんです。その時に先程、デイリーノさんとの話の中に出たダークブレットという言葉を聞いたことがあります」

「カレンさん! それは本当なの!?!」

「はい。間違いありません! それに、マスターなら最強の援軍になっってくれるに違いありません!」

カレンは力強くそう告げると、さっそくコマンドを開き、マスターとボイスチャットを始める。

呼び出しのチャイムがなり、しばらくしてマスターの声が聞こえて

きた。

「師匠。夜分遅くにすみません。緊急の要件で連絡しました」

『むっ、カレンか？ どうした。何かあったのか!』

「はい。実は……今さっき星ちゃんをダークブレットという組織に誘拐されてしまいました……」

『なっ……何をやっておるか！ このバカタレが!!』

「はっ、はい！ も、申し訳ありません……」

マスターの怒鳴る声が響き、驚いたカレンは思わず顔をしかめた。しかし、そんなマスターにすぐに言葉を返す。

「師匠！ 師匠はダークブレットのアジトの場所を知っていますか？」

『……うむ。奴等のアジトは「ウォーレスト山脈」に城がある。そこが奴等のアジトだ……だが、あの組織の規模は大きい。儂が戻るまで大人しく待っておれ！ 儂等もすぐにこちらを終わらせて、そっちへ向かう!』

「……はい。分かりました」

カレンはその言葉を聞いて表情を曇らせると、マスターとの通信を切った。

エミル達の方を振り返ったカレンは息を吸い込んで、落ち着きを取り戻すと、徐ろに口を開く。

「師匠からダークブレットのアジトの場所を聞きました！ ウォーレスト山脈に城が建っていて、そこが奴等のアジトのようです!」

「ウォーレスト山脈……また厄介な場所に拠点を置いたものね……」

エミルはそう呟き、急にその表情を険しくさせる。

話に出た「ウォーレスト山脈」とは、始まりの街から馬で3日ほどの距離にあり。そこには凶暴な飛竜が多く生息していて、空からは絶対に近付けない。だからと言って、陸から容易に近付けるかと言うとそうでもない。

その山脈群の岩肌はどこも傾斜が急で足元も安定しない。また、レベルの高いモンスターも生息している為に出現場所を熟知していなければ、敵アジトに着く前に力尽きてしまうだろう。

「ウォーレスト山脈は、空は飛竜が、地上は天然の要害が守る。まさに難攻不落——更に敵のアジトの中では、おそらくは戦闘はおろか、武器の使用もできないはず……地の利でも数の上でも彼等に利が有るわ。正直に言つて、こちらに勝機はない……」

険しい表情のままエミルがそう告げると、辺りは重苦しい雰囲気になりました。だが、どんなに否定しても彼女の言っていることは正しい。

敵地に取り込むのなら、本来は相手よりも多い人数が必要不可欠。少なくとも数百〜千の敵を相手にするには、ここにいるメンバーでは数が少なすぎる。

向こうも星を誘拐したからには、その場はやり過ごしても必ずこちらが何らかの手立てを出すと見越しているはずだ。

数の問題がある以上は、真正面からの衝突を避けつつ、少数で迅速に動いて星を奪還する他ない。

その時、カツ丼を食べ終わったサラザが胸を力強く叩いた。

「皆、何か忘れてない？ 私はこのゲームでも少数派にして、最強のボディービルダー……そして男と女の両面を持ち生まれた神聖な存在!!」

「そうよく。いい事言つたわ！ サラザ！」

「そのとおーり！」

「サラザの言う通りザマス」

「——だ、誰なの!？」

エミルがその声の方に目を向けると、入口のドアの前にサラザと見慣れない3人のオカマが、腕組しながら立っていた。

2人はサラザの店で見たムキムキのリーゼントと関取の様なオカマなのだが、それよりも圧倒的な存在感を放っているオカマが1人——。

その人物は鍛え抜かれた強靱な肉体に、黄色いモヒカンヘア。そして先の尖ったサングラスに背中には孔雀の羽を身に着けている。

そしてその3人全員が、胸に○の中に釜と書かれたタンクトップを着用している。

「……あのー、どちら様でしようか……？」

エミルは呆然としながら、その急な来訪者を見つめていた。

その時、サラザが歓喜の声を上げて叫んだ。

「——来てくれたのね！ ガーベラ！ カルビ！ 孔雀マツザカ！」

サラザは3人のもとに駆け寄ると、がっしりと胸板を押し付け合いながら熱く抱擁を交わす。

2人で外出6

しばらく抱き合っていたオカマ達は、ゆつくりと部屋の中へと入ってくる。

その場にいた誰もが状況を理解できず、まるで魂が抜かれたようにその場に立ち尽くしているメンバー達にサラザが仲間を紹介する。

「この人達は私のオカマイスターの仲間なのよ。こっちの体格がいのがカルビ。そして私と同じで、美に生きるこっちの2人は——」

「——あたいはカルビ！ 料理の見た目にはうるさいけど、人の外見は気にしないから。仲良くしましょ」

「私はガーベラよ。話はサラザから聞いてる。私の可愛い子猫ちゃんを連れ去るなんて許せない！ 是非協力させてもらおう!!」

「わたーしはマツザカ。見ての通り孔雀の化身だ！ 皆、わたーしの事は孔雀マツザカと呼ぶザマス！」

3人は軽く自己紹介をすると、困惑した表情を浮かべているエミルに向かって手を突き出し握手を求めた。

それぞれに個性的な見た目をしているが、サラザの仲間ということならば実力の方は申し分ないだろう。まあ、戦力的に劣っているエミル達にとって、彼等の加入はとても心強いことに変わりはない。

エミルは一人ずつその手を握り締めると「よろしくお願いします」と頭を下げた。

その光景を見ていたサラザは満足そうに微笑むと、見計らったように声を張り上げて叫んだ。

「ダークブレッドだかハムサンドだかしらないけど、肉弾戦で私達オカマイスターに敵う者は存在しない！ みんな！ 鍛え上げられた鋼の筋肉を遺憾なく発揮してちょうだい！」

「うおおおおおおおおおおおおおッ!!」

サラザの声に相応するようにオカマ達は叫び声を上げ、その轟音が部屋を全体を揺らす。

窓ガラスも震えるほどの音量に恐怖を覚えながらも、それを押し殺してエミル達は苦笑いを浮かべている。

まあ、恐怖するのも当然だろう。筋肉で武装したオカマが3人、贅肉と筋肉で武装したオカマが1人。その全員が雄叫びを上げている。ガラスが震えるほどに……その現状で恐怖を覚えない方が異常だろう。

ただ一つ言えるのは、この時の彼等は間違いなく『漢』であったということだろう……。

今までオカマ仲間と熱い契りを交わしていたサラザが、徐にエミルの元に歩いてきて言葉を発する。

「それでエミル。いつ頃、ウォーレスト山脈に向かうの？ 急がないと、星ちゃんの身が心配だわ〜」

首を傾げているサラザに、エミルは一瞬おののきながらも直ぐに平静を取り戻し。

「そうですね。ですが、何の策もなく敵地に乗り込むわけにも……敵は最大の犯罪組織ですし……」

「そんな悠長な事言ってる場合でもないぞ！ エミル!!」

突然叫び声が聞こえてその方向を振り向くと、そこには顔面蒼白のまま立ち尽くすエリエと、尋常じやない慌てようでそのエリエの体を支えているデイビッドの姿があった。

エミルはそんな彼に声を掛けた。

「ど、どうしたの？ デイビッド」

「どうしたもこうしたもない！ エミル。パーティーメンバーの表示から、星ちゃんの名前が消えていることにまだ気が付いていないのかツ!?!」

「……えっ!?! そ、そんな事——ツ!?!」

エミルはデイビッドに言われ慌てて確認すると、彼の言った通りパーティーメンバーの名前の欄から、星の名前が消えていることに気が付いて顔を青ざめさせる。

「そ、そんな……こうしちゃいられないわ!!」

エミルは血相を変えて、何も考えず急いで部屋を飛び出して行ってしまう。

彼女を追いかけるように、周りのメンバー達も部屋を飛び出して行

く。

エミルが慌てるのも無理はない。何故なら、パーティーの解除は本人かパーティーリーダー以外はできない仕様になっているからだ。

星が自分の意志でパーティーを抜けたと考えるのが自然だが、それは不可能だ——それもそうだろう。エミルは星にパーティーからの抜け方を教えていない。

にも関わらず。名前が消えたということは、星の身に何か起きたと考えるのが普通なのだ。

何者かに脅迫されて解除したことも考えられるが、星は意外と頑固な所があり。自分の生死に関わることは絶対に拒絶するはず……つとなると、既にこの世界に居ないのか……どちらにしても、星が危機的状况に陥っていることは間違いなかった。

居ても立つてもらわれずに険しい表情でエミルが身を翻すと、部屋の扉に向かって一目散に駆け出す。

（——待っててね、星ちゃん。今私が行くから頑張つて！）

心の中でそう叫びながら、エミルは城の廊下を全速力で走つていつてしまう。

もう彼女の思考の中には星のことしかない。だが、エミルが飛び出していつてすぐ、もう一人部屋を飛び出した人物がいた——。

「うおおおおおおおッ!!」

「——えっ!？」

走っているエミルの後ろから、雄叫びを上げながら物凄い速度でサラザが爆走してくる。その形相は、まるで獲物を追い掛ける肉食獣の如く。

サラザの全身から湧き上がるエミルは身の危険を感じて、更に速度を上げて走った。

しかし、サラザの足は思いのほか速く、エミルはすぐに捕まってしまう。

「ちよつと待ちなさい！ 急に飛び出したってダメよ！ 敵のアジトまではエミルのドラゴンに乗っても2日近く掛かる。今は星ちゃんのことを信じましょ〜?」

サラザはエミルの体を後ろからがつしりとホールドすると、困惑して暴れることも忘れているエミルの耳元で告げた。

「……でも、私。星ちゃんにもしもの事があつたら……」

「大丈夫よ。星ちゃんはパーティーを抜けさせられただけ……それに、あのドラゴンちゃんは星ちゃんが作り出した存在でしょ？ それが無事つてことはまだ大丈夫！ そうよね？ ドラゴンちゃん」

「その通りじゃ！ 珍獣にしては頭が回るではないか！ ゴリ——」

空中で腰に手を当てて頷くレイニールの体がそう口にしようとした直後、勢い良く体を引かれサラザの手の中に収まる。

咄嗟のことで何が起きたのか分からずに、レイニールが目をぱちくりさせてきよとんとしている。そんなレイニールにサラザがにっこりと微笑みかけながら問い掛ける。

「あくら。今なんて言おうとしたのかしら？ ちよつと聞こえなかったから、もう一度お願い。でもドラゴンちゃん？ 返答によってはあなたを食べちゃうかも♪」

首を傾げてるレイニールの頬を、ペロリとひと舐めするサラザ。

すると、やつと自分の置かれている状況が把握できたのか、身の危険を感じたレイニールは震える声で言った。

「あ、あはは……じよ、冗談じゃ！ 冗談に決まっておろう！ 美しいお前があんな下等生物と同じなわけがあるまい。ド、ドラゴンジョークじゃ！ あはは……」

冷や汗を流しながらレイニールが必死に作り笑いを浮かべると、サラザは掴んでいたその手を放す。

レイニールはほつと息を吐くと、パタパタと翼をはためかせ、エミルの前に来ると徐ろに口を開く。

「——主は皆のお荷物になりたくない、強く思っておる。なら、自分の力でなんとかしようと考えているはずじゃ！ 我輩の主は強いのでな！」

レイニールは自慢気にそう言い放つと、胸を張って頼りに頷いている。

星も自分の意思で敵の手に落ちたからには、仲間達の助けを求めよ

うとはしていないだろう。

(……迷惑をかけないようにと、自暴自棄にならなければいいけど……)

エミルはそう心の中で呟くと『今すぐにも助けに行きたい』と思う気持ちが先走っていた。だが、同時に頭では『冷静にならなければ』と何度も叫んでいる自分もいた。

その噛み合わない心境が、エミルの中でなんとも言えない心のざわめきとなって彼女を惑わせている。

すると、その横をエリエが通り過ぎて行くのが、一瞬エミルの視界に入ってきた——つと同時に、目にも留まらぬ速さでサラザが動きエリエの腕を掴んで止める。

「ちよつとエリーー！ あなたも少し落ち着きなさいって！」

「落ち着いてなんていられないよ！ 星の名前が消えたんだ！ もう一刻の猶予もないでしょ!？」

「だとしても、アジトに着くまで2日は掛かるのよ。こつちも準備してから行かないと犬死になるわ」

「——今すぐ行っても大丈夫やよ」

差し迫ったエリエがサラザと言い合っていると、その時イシエルの声が廊下に響いた。

エリエ達が一斉に振り返ると、扉の前から微笑みを浮かべ、後ろ手に両手を組んでゆっくりと向かってくるイシエルの姿があった。

それを驚いた様に見つめるエミルとサラザに、落ち着いた声音でイシエルが言葉を続けた。

「だって、せくんなら別にまとまらんでもええんやし。それに、エミルのとこんドラゴン以外にも、今はレイニールちゃんがおるしな」

「そう言い放ったイシエルはレイニールの方を向いて微笑んだ。」

彼女のその表情からは『君も早く主様を助けに行きたいんやろ?』そう言ってる気がして仕方がない。

レイニールはその意図を察したのか、慌ててえっへんと腰に手を当てると、イシエルに向かつて胸を張って見せる。

エミルはそれを聞いてポンつと手の平を叩くと口を開いた。

「どうして気が付かなかったのかしら……なら、私がリントヴルムと一緒に先に——」

閃いたエミルがそう口にしようとした直後、エミルの腕にイシエルの腕が絡み付き、強引に自分の方へと引き寄せた。

「——あかんよ。エミルから離れるなんて、うち考えられひん」

「ちよつと、今はそんな事を言ってる場合じゃ……」

エミルがあたふたしてイシエルから離れようとした直後。イシエルが小さく耳元でささやいた。

「……ディーノって人も見張らなあかん。それに、必ず星ちゃんを助け出すのに準備は必要やる？ 緊急時ほど、冷静に、そして確実に

……やよー！」

「……そ、そうね」

それを聞いたエミルは返事をする、イシエルの真剣そうな瞳を見つめた。

彼女の瞳には、普段ののほほんとした彼女とは違うなんとも言えない闘志のようなものが漲っている。

イシエルとエミルは長い付き合いになるが、イシエルがやる気を見せたのは人生で数えるくらいしかない。

普段から何事もそつなくこなせる彼女にとって、日常の殆どのが他愛もない出来事なのだろう……。

だが、人の命がかかっているこの状況で——今の彼女から感じる気迫は、普段の彼女とはかけ離れていて常人の比ではない。

それをひしひしと感じたエミルは、額から冷や汗を掻きながら生唾を呑み込むと。

「——全てイシエ。あなたに任せるわ」

つと呟いて、深く頷いて見せた。

こうなつた時のイシエルは自分以上に頼りになる存在だと、エミルは長年の付き合いで分かっていた。

彼女ならどんなに危機的な状況でさえ、全く臆さない並外れた精神力がある。それを知っているエミルだからこそ彼女に託したのだろう。

イシエルは満足そうに微笑むと、その表情はすぐに神妙な面持ちに変わり、力強く皆に指示を出していく。

「ほな。エミル、うち、カレンちゃん、デイーノはんはうちと一緒に二陣や。物資を揃えてリントヴルムで——」

「——待ってください！」

騒ぎを聞きつけて部屋の前に出て来ていた彼等にイシエルが告げ声を遮って、不服そうにカレンが声を上げた。

ゆつくりとイシエルの前に歩いて来たカレンが、イシエルの瞳をじつと見つめた。

「俺も一陣で行きます！ 星ちゃんが誘拐される時に、俺と一緒に居ればこんな事には……今回の事は俺にも責任があります！」

「そ、そんな……カレンさんに責任なんて……」

「いえ、お風呂に入っていたエミルさんと違い。こいつと星ちゃんが出ていった事に……それに気がつかなかった俺の責任は大きい。俺が必ずあの子を救い出します!!」

詰め寄るようにエミルの前に出たカレンの決意に満ちた眼差しに、エミルは思わずたじろぐ。

すると、隣に居たイシエルがため息混じりに徐ろに口を開く。

「——はあ……分かった。せやけど、無理はあかん！ それと、デイビッドの言う事をちゃんと聞くんやよ？」

「はいー」

「ちよ、ちよつと待ってくれ！ どうしてそうなるんだ!?!」

カレンが頷いた直後。一番後方で皆のやり取りを見守っていたデイビッドが、焦ったような情けない声を上げた。

動揺した様子の彼に、イシエルは何食わぬ顔で言った。

「それはなく。デイビッドくんが一番観察力があるからに決まってるやん！ 頼りにしとるんよ」

デイビッドの不満を受け流すようにイシエルはやんわりとした言葉で返した。

納得いかなと言いたげな顔で、デイビッドが人差し指で頭を搔くと。

「……いや、それは答えになってない」

そう言い返そうとしたデイビッドを完全に無視し、イシエルはサラザに向かつて話し始めた。

「サラザさん。ええか？　うちらと合流するまでは、敵地を偵察だけにしてほしいんよ。そんでな。もし、見つかってしもたら、できるだけ敵を錯乱させてほしいんや。敵がバラけてた方が侵入しやすいやろ？」

「ええ、了解よく。情報集めがメインで、最悪は派手に暴れて構わないって事でいいのかしら？」

自信満々に拳を突き出し満面の笑みで応えようと、イシエルはにっこりと微笑み返した。

その直後、待ちきれなくなったエリエとレイニールが声を揃えて叫んだ。

「早く行こうよ！」

「早く行くのじゃー！」

そう言つてすぐにでも飛び出していきそうなエリエ達の方に慌てて、一陣のメンバー達が駆け寄っていった。

一陣は皆を乗せてアジト近くまで運ぶレイニールとエリエ、カレン、デイビッド、サラザ、ガーベラ、カルビ、孔雀マツザカ——そして街で物資を買い漁り、後から向かう。実質、補給部隊という位置付けにある第二陣はリントヴルムで向かうエミル、イシエル、ディーノの3人だ——。

城の外へと出るとレイニールが巨竜の姿へと変身し、その背中に皆を乗せた。

それを心配そうに見つめるエミルが徐ろに口を開いた。

「——皆。無理はしないでね……エリー。もし何かあったら、すぐにメッセージでもボイスチャットでもいいから連絡するのよ？」

不安そうな眼差しを向けてそう告げたエミルに対し、エリエは自信満々に答えた。

「大丈夫！　必ず星を助け出すから！　エミル姉達はゆつくり来ているからね！」

「もう。そういうわけにはいかないわよ……皆も気をつけて……」

神妙な面持ちでそう呟くエミルの顔を見て、他のメンバー達も無言のまま静かに頷いた。

レイニールの背に乗っている皆のその表情には、それぞれの決意を感じる。

その緊張感の中。レイニールが大きく翼を数回はためかせその後、大きく叫んだ。

「主、待ってろ！ 今助けにゆくぞー!!」

その雄叫びにも似た叫び声が大気を震わせた次の瞬間。レイニールの巨体がゆつくりと地上を離れてあつという間に飛び去っていく。

エミルとイシエルは手を振りながらそれを見送ると、月光に照らされながら月の中へと消えていく黄金のドラゴンの後ろ姿をいつまでも見送っていた。

名御屋へ・・・

時間はさかのぼって、名御屋マスター達はどうと……。

日が落ちて仕方なく、平原の陸路を進むマスター達は水辺の大通りに面した場所にテントを張り野宿している。

焚き火の前に、大きな丸太に腰を下ろし。空に浮かぶ月を見上げていたマスターの元に突然の連絡が入った。

「……なに？ カレンからか……」

マスターは視界に表示された「カレン様からのボイスチャット通信が入りました」という表示の下の「チャット開始」という所に、彼はゆっくりと指を当てる。

すると、次の瞬間。聞き慣れた愛弟子の声が聞こえて来た。

『――師匠。夜分遅くにすみません。緊急の要件で連絡しました』

「ふむ。カレンか？ どうした。何かあったか？」

照れ隠しでわざとらしく聞き返したマスターに、カレンの落ち込んだ様な声が聴こえる。

『はい。実は……今さつき星ちゃんをダークブレットという組織に誘拐されてしまいました……』

それを聞いて目を見開くと、勢い良く立ち上がり。

「なっ……何をやっておるか！ このバカタレが!!」

『はい！ も、申し訳ありません』

突然のことに驚き、思わず怒鳴ってしまう。

マスターは『しまった』と思ったのだが、その時には全てが遅く。声の張りをなくし申し訳なさそうに謝るカレンが言葉を続けた。

『――師匠！ 師匠はダークブレットのアジトの場所を知っていますか？』

驚くカレンの言葉に、マスターは眉をひそめる。

それもそのはずだ。その組織の名前を知らない高レベルプレイ

ヤーなどフリーダムにはいない。しかも、その組織はマスターと少なからず因縁のある組織――。

(……ダークブレットだと? ふむ。星という娘は奴等に連れ去られたということか、しかし……)

そんなことを考えながら、苦虫を噛み潰したような顔をしている。何を隠そう以前、マスターが独自に彼等の組織の壊滅しようと試みたことが関係していた。

それは数カ月前。ある機関から依頼され、ダークブレットの調査を頼まれた時のことだ――。

本来の目的はあくまで調査。組織の規模、活動目的や資金源などを調査して、依頼主に報告するというそれほど難しくもないものだったが、組織の内情を最中。マスターは組織の者達の待ち伏せに合い。

結局。顔を知られたマスターが止むを得ず、1人で組織を再起不能にまで追い込んだのだが……事はそれほど、簡単ではなかった。

ダークブレットは様々な国のサーバーに支部があるようで、多くの離反者を出したものの。すぐに各支部から人員を補給し、半月程度でほぼ元の機能を取り戻してたのである。

その時にマスターは思った――この組織には底知れぬ闇を感じ、もうこの組織には手を出さぬほうが良いと……。

(――できることならダークブレットと争わぬほうが良いのだが……仕掛けられたなら仕方あるまい)

カレンの声の様子から、事は一刻を争うということを感じ取ったマスターは、難しい顔をしながらもカレンに向かって告げる。

「……うむ。奴等のアジトはウォーレスト山脈に城がある。そこが奴等のアジトだ……だが、あの組織の規模は大きい。儂が戻るまで大人しく待っておれ! 儂等もすぐにこちらを終わらせてそちらへ向かう!」

『……はい。分かりました』

カレンは深刻そうな重い声で言うと、突然通信を切った。

元々そうなることは分かっていたものの愛弟子に一方的に切られ、その心に焦りがあると感じたマスターが『やはり教えるべきではな

かったか……』と思い。マスターは深刻そうな顔になる。

戦力としては確かにエミル達だけでは少ないが、個々の能力をフルに発揮すれば、そう難しい相手ではない。

ましてや、今回の任務は殲滅ではなく星の救出だけだ。だが、もし浮足立ち冷静さを欠いてしまっているのであれば、敵の術中にはまり容易に危機的状況に陥りかねない。

マスターの険しい表情を見て、心配そうに紅蓮が声を掛けてきた。
「……マスター。なにかありましたか？　深刻そうな顔をしていますよ？」

小首を傾げている紅蓮の姿に気付いたマスターは、すぐに微笑みを浮かべ。

「あつ、ああ。始まりの街に残してきた弟子から通信があつてな……」
「弟子？　なにか、困ったことでもありましたか？」

「うむ。儂の知り合いがダークブレットという組織に連れ去られたらしい」

それを聞いた直後、普段あまり表情に出さない紅蓮の顔が少し険しくなった。

「……えっ？　ダークブレットって、あのダークブレットですか？」
「……うむ」

「その方は大丈夫なのでしょうか……私達も救出に向かった方がいいのでは？　マスター」

紅蓮が少し早い口調でそう告げると、マスターはしばらく考える仕事草の後、徐ろに口を開いた。

「——いや。儂らはこのままバロンの元へと急ぐ」
「……マスター。分かりました……なら、街に寄るのは止めて先を急ぎましょう」

彼を氣遣つてそう提案する紅蓮に、マスターは首を横に振つて言った。

「いや、こちらは一筋縄ではいかぬだろう。予定通り街に寄って、情報収集と補給をしてから名御屋へと向かおう」

「それでこそじじいだぜー」

テントの中から出てきたメルデイウスが満足そうな笑みを浮かべ歩いてきた。

突然現れたメルデイウスに、マスターと紅蓮は彼の方を向く。

メルデイウスは紅蓮の顔をまじまじと見つめると、背後にあるテントの方に親指を向けた。

「紅蓮。風呂が沸いたから入ってこいよ。ああ、他の2人にも伝えてくれ！」

「……あ、はい。分かりました」

紅蓮は拍子抜けて答えると白雪と少女を呼びにいった。

隣に座っていた紅蓮が立ち上がってマスターに一礼すると、白雪達を呼びにテントの方へと向かっていく。

その背中を見送ってメルデイウスはマスターの方に向き直ると、妙な面持ちで告げる。

「紅蓮の手前、ああは言ったが。おい、じじい……大きなお世話かもしれねえーが、ダークブレットはやばいぜ？俺はこれでも名の通った1つのギルドを背負ってるからよ。色んなところから情報が入るんだが……この事件後。あそこには、大事なメンバーをやられたギルドも多い。だが、その報復に行った連中は1人たりとも帰ってきたことがねえーて話だ——おめえーの弟子。本当にやばいぞ？ かつこつけてないで、行ったらどうだ？ じじいなら——」

「——メルデイウス！」

その話を遮るようにマスターが声を上げた。

まるで敵に向けるように鋭い視線でメルデイウスを見据える。マスターのその瞳に、さすがの彼も心臓を鷲掴みにされた様な息苦しさに言葉を失う。

手がガタガタと震え出し、それを脳が制御できない。

これは恐怖なんて生易しいものではない。深層心理にある野生の本能がそうさせるのだ——。

萎縮したメルデイウスに気付き、マスターがすぐに視線を落とし「すまん」と告げると。

「だが、それ以上は言うでない！ 儂とて分かっておる。だが、儂は力

レン——弟子には儂を待てと命じたのだ。それでも行くというならば、あやつらも儂の助けは期待してはいないはずだ」

「……ごじごじ」

「ならば、こちらはこちらの仕事をせねばなるまい！ それにな……」
そう呟くと、マスターは空をゆつくりと頭上に輝く月を見上げた。その時のマスターの脳裏にはカレンの顔が浮かんでいた。そして、もう一つ気掛かりなことが頭を過る。

「儂はどうにも解せぬのだ。誘拐されたのは年端もいかぬ小娘……ダークブレットほど巨大な組織が、そんな娘を誘拐する意図が全く見えん。なにか別の、もつと大きな何かが起ころうとしておる。そんな気がしてならんのだ——」

「——大きな何か。か……」

メルデイウスはそう呟くと、マスターと同じように月を見上げた。

2人の見上げていた月が大きな黒い雲に見る見るうちに呑み込まれ、その光景が彼等にこれから起こるであろう不穏な空気を予感させている様だった……。

その翌日。マスター達は、当初の予定通りに近くの街に入った。

フリーダムの中には、都市と呼ばれる大きな街とNPCのみしかいない小さな町がある。

まあ、小さな町の大きい宿屋はプレイヤーの店舗の許可も下りない為、フィールド攻略時の補給と休憩くらいしか使う用途はないのだが……。

マスター達はこの集落の様な小さな町で道中、戦闘により消耗したアイテムを一通り買い集めると、名御屋の街へと本来は一泊する予定だったが、待機させていた馬に跨がり、再び馬を走らせた。

それに続く様に、逸早く紅蓮とマスターが馬に跳び乗ると、手綱をしならせて馬を出す。それに驚きながらも、他のメンバーも続いている。

突如走り出したメルデイウスが先頭で大声で叫んだ。

「日が高いうちに距離を進める！ ここからは休息を入れずに行く

ぞー!!」

そのメルデイウスの声に小虎が不満そうに叫んだ。

「ええ、もうすぐ名御屋だし。ゆっくり行けばいいじゃん! もう僕、馬に乗りすぎてくたくただよ」

「うるせえー! もうすぐだから急いで行くんだろうがツ!!」

「うええ。鬼! 悪魔! 甲斐性なし。……だから、姉さんに嫌われるんだよ」

「なにい!? 聞こえてるぞ小虎!!」

ふてくされながら小さく毒突いた小虎に、メルデイウスが右手を掲げて怒鳴る。

そんな2人の間に紅蓮の馬が割って入ると、紅蓮は小虎に向かって話し掛けた。

「少し急な用事が入ってしまったしまして、急がないといけないんです。もう少しだけ辛抱してくださいませんか? 小虎」

「……分かった! 姉さんがそう言うなら仕方ないなあ」

紅蓮に言われてはそれ以上文句を言うわけにもいかず、小虎がそう言っただけで了解した。

その時、一番後方を進んでいた少女が言い難そうに言った。

「――あのー。実は名御屋に知り合いが居るはずなんですけど……会って来てもいいですか? あっ、時間がないならまたにしますけど!」

「あっ、いいえ。大丈夫ですよ? 名御屋の街で情報収集をしないとイケませんから、時間はありますし」

「……そうですね。紅蓮様もそう言ってる事です。情報収集はこちらに任せて、あなたは人と会ってくればいい」

「はい! ありがとうございます!」

紅蓮と白雪にそう言われ、少女は嬉しそうに微笑んだ。

そんな少女の横に馬を着けると、小虎が首を傾げながら尋ねる。

「お姉さんの会いに行く人ってもしかして、このゲームをお姉さんに勧めた人……とか?」

「うん! 私のお兄ちゃんだよ。今は名御屋の街で武器を造つてもらってるらしくて……本当ならそれを待ってから始まりの街で合流

するはずだったんだけどねえー」

「ふくん」

少女のその話を聞き、自分から話を切り出したはずの小虎が生返事を返すと、少女は苦笑いを浮かべる。だが、楽しそうに会話をしていたのも最初のうちだけで……。

すっかり日が落ち始めた頃には、小虎も少女もすっかり口数が少なくなっていた。

もう日の出からずっと馬を取っ替え引っ替えしながら進み続けているのだ。疲労が溜まるのも無理はない。

そんな2人を気遣ってか、2人に紅蓮が声を掛けてきた。

「……大丈夫ですか？ すみません。無理させてしまつて……」

申し訳なさそうにそう言つて表情を曇らせた紅蓮に、慌てて2人が言葉を返した。

「いや、姉さんのせいじゃないよ！ もとはといえば、僕から行きたいつて言つたんだし！」

「そ、そう！ 紅蓮ちゃんが悪くないよ！ 私の方がお姉さんなのに……逆に心配かけてごめんね。紅蓮ちゃんの方こそ大丈夫？」

「えっ？ ええ、私はまだまだ大丈夫です」

（私の方がお姉さん？ 何を言つてるんでしようか、この人は……）

紅蓮は頷くと心の中で少女の『お姉さん』という発言に、不思議そうに小首を傾げていた。

名御屋へ・・・2

それから12時間後。本当に一度の休みを取ることなく。結局、名御屋の街に着いた頃には深夜2時になる頃だった。

本当に休みなくぶつ通しで馬の背に揺られ続けた小虎と少女は疲労と怒りから、この強攻策を打ち出したメルディウスに非難の声が上がる。

「兄貴は鬼だ……本当に一度も休まずにくるなんて！」

「そうです！ あなたには血も涙もないのか。謝罪しろ！」

「そうだそうだ。謝罪しろ！」

馬に乗ったメルディウスの後方から、2人は声を揃えて『謝罪しろ』コールを続けている。

そんな2人に、イライラしているメルディウスの眉がピクピクと動きながら横の紅蓮に小さな声で告げる。

「——くっ！ 紅蓮。あいつらを黙らせてくれ……俺の理性があるうちにつ！」

「はあ……メルディウス。冗談でもギルマスがそういう事を言っただけじゃないよ？」

爆発寸前のメルディウスの言葉に、紅蓮は呆れた様子でため息をつくと、2人の元へと向かった。

マスターと白雪はそれを見て、呆れ果てたようで無言のまま大きくため息をついた。

2人の馬の側に馬を寄せると、紅蓮は2人にしか聞こえないように小さな声でささやいた。

「2人ともそのへんで……あまり騒いでいると、ここが一番高い宿に連れて行ってもらえませんよ？」

「えっ!? それはほんと姉さん!!」

「それって高くないですか？ 私、お金が……」

喜ぶ小虎とは対象的に、コマンドを開き所持金を確認して表情を曇らせる少女。

「ああ、それならメルディウスの奢りです。安心してください」

「おごっつ!? 行きます行きます!!」

「さすが兄貴!!」

紅蓮からその話を聞いた2人は現金なもので、今度は一変してメルデイウスに尊敬の眼差しを向けた。

彼等が何を言われていたか分からないメルデイウスは、キラキラとした眼差しを向けてくる2人を横目で見て、気味悪そうに眉間にしわを寄せている。

メルデイウスは澄まし顔で戻ってきた紅蓮に小さな声で尋ねる。

「——いったい何言っただけ? あいつら、急に目をキラキラさせながらこつちを見てるんだが……」

「ふふっ、簡単ですよ。あなたが名御屋で一番高い宿屋に、彼等連れで行くって言っただけです——あなたの奢りで……」

「なっ! 俺はそんなに持ち合わせてないぞ!? どうすんだよ! そんなはったり。すぐにバレるだろ!」

メルデイウスは驚きを隠せない表情で、コマンドから所持金を確認しながら言った。だが、それ以上にメルデイウスには苦しい懐事情があった。

当然だろう。マスターと久しぶりの対面の後。千代から数日ここまで来たのだ、狩りで資金を準備する時間も高価なアイテムを売却し、資金に変える時間もなかった。

仕方なく。メルデイウスはただでさえ浪費癖の激しい自分の貯金から旅費を出しているのだ。戦いで減る武器の耐久度も、ここにくるまでの雑魚モンスターとの戦いで相当摩耗している。武器が消滅する前に、手入れにも金を使わないといけないのだ。

トレジャーアイテムとはその名の通り『財宝級のアイテム』ということ、その修理費も馬鹿にならない——。

脳裏に吹っ飛ぶ金の金額が鮮明に頭に通り、メルデイウスの全身から冷や汗が吹き出す。

紅蓮は慌てふためいているメルデイウスにそっと革の袋を渡す。彼が渡された革の袋を開くと、その中には大量の金貨が入っていた。

「お前これ——」

「——おそらくこれで足りると思うので、これを使って下さい」

「……本当にいいのか？」

「ええ、これもサブギルドマスターの務めですし。それに私も、今すぐ楽しいですから」

「——そ、そうか……」

そう言っすぎてこちなく微笑みかけた紅蓮を見て、メルデイウスは少し複雑な気持ちになる。

それは、やはり紅蓮にとってマスターの存在が大きいと思知らされたからに他ならない。

今まで紅蓮と2人で居る時に、彼女がこんなにも嬉しそうにしているのをメルデイウスは見たことがなかった。

だが、マスターがともにいる今は、紅蓮はとても生き生きしている。(紅蓮……やはりお前に必要なのは俺じゃないんだな……)

メルデイウスはそう心の中で呟くと、横目で悲しそうにマスターの顔を見た。

素直にマスターより劣っている自分が悔しかったのもある。だが、自分の心のどこかに、昔ギルドを組んでいた頃に戻った様な、そんな感情もあるのも事実だ。

だがなにより。マスターが側にいることで、自分自身も何でもできそうな気持ちと安らぎを感じていたからだろう。

いや、悔しいという気持ちよりもそっちの方が強いかもしれない……。

「さて、それでは名御屋の街に入るぞ！　ぐずぐずしておつては夜明けになってしまうのでな！」

マスターは馬から降りて、一番に街の中へと入っていった。

それに続くように、皆馬を下り街へと入っていく。

名御屋は商業が盛んな街で、道の軒先にはプレイヤーの経営する店舗が並び、そこでは珍しいアイテムが多く取引されている。

それは既存の店とプレイヤーが経営している店が多いのと、フリーダム商業システムが関係していた。

フリーダムでは特区制度を採用していて、プレイヤーのショップ経

営には原則として収益に似合った店舗使用料が取られるのだが、大都市と言われる場所では特定のアイテムを販売した時のみ、その利益から店舗使用料が割り引かれるのだ。

つまり、商品売って出た利益を、店舗使用料なくそのまま収入として手に入れることができるというわけだ。

もちろん。商業化している者は対象外だが、それはリアルで実店舗を持っている人物、団体に限られる。個人はその対象にはならない。名御屋は各種アイテムや防御力のない衣類などが特区に指定されている為、必然的にそれに準ずるアイテムが多く取引されているのだ。

マスター達が街の中心部を歩いていると、さすがは大都市の一つ。今は深夜帯だというのに、まだ開いているショップが多く。それがまるで、街灯のように行く先をどこまでも照らし出している。

宿屋に始まりの街と比べると、まるで別世界だった——これが初心者プレイヤーと上級者プレイヤーの違いだろう。

その活気に満ちた中をひたすら歩いていると、目の前に大きな高級ホテルのような立派な建物が現れた。

20階建てくらい大きな建物がまるで壁のように天に向かって伸びていて、そのアイボリーカラーの外装の周りを噴水や木々に囲まれ、ホテル全体を地上に設置されたライトが照らし出している。

それが見えると、今までだったらと歩いていた小虎が慌てて走り出した。

「あれが今日泊まる場所だね！」

「あつ！ 小虎くん。急に走ったら迷子になるよ！」

はしやぎいでいる小虎を慌てて少女が追いかけて行く。

まあ、無理もない。ここ数日、野宿ばかりでまともに休めていないのだ。ゲーム的には全くと行っていいほど問題はないのだが、アバターとしてこの世界に肉体がある以上。精神の疲労を回復させるには、しっかりとベッドで休むのが効率がいいと言うことなのだろう。「はあく。あんなにはしゃいで……小虎には困ったものですねえー、メルディウス。……メルディウス？」

「……あつ、ああ……」

紅蓮がため息混じりにそういうと、メルディウスはぽかんと口を開けたまま、心ここにあらずという感じで、その建物を見つめている。

まあ、彼の考えていることは容易に予想できるが……。

紅蓮はもう一度大きくため息をつくとき、衝撃的な一言を放った。

「はあく、とりあえず。ここに何泊かする予定なので、よろしく」

「……はあく!? こ、こんな高い場所にそんなに泊まれるわけないだろう!? 金はどうすんだよ!! 金は!!」

メルディウスは素早く顔を向けると、紅蓮に向かって叫んだ。

そんな彼の様子を無視して、紅蓮は首を傾げてメルディウスの方を指差している。

「いや、待てよ！ 俺はそんな金持ってねえぞ!? いやというか俺が持つてるわけ無いだろ!!」

「いえ、ギルドで出します」

「いや、だからそんなに持ってねえーって。きつきの金だって、2日かそこらでなくなる額だぞこのクラスは、それを——」

「——その心配はありませんよ。ギルマス」

メルディウスが声を荒げている横から、話を聞いていた白雪が口を挟んできた。まあ、紅蓮が言われているを見兼ねて、堪らず出てきたのだろう。

ぽかんとしたように呆然と白雪の方を見た。

白雪は紅蓮とメルディウスの中に割り込むと言葉を続けた。

「実は私と紅蓮様でギルマスには内緒で、ギルド内で密かに貯金したので、そのお金があります。だから、ここに何泊しようとも大丈夫なのです」

「……ギルドの貯金をギルマスの俺に内緒って……」

頭を押さええ呆然とその場に立ち尽くしているメルディウスに何食わぬ顔で紅蓮が吐き捨てた。

「それは、メルディウスに知られたら使われるからに決まっているでしょう。さあ、早く行かないと小虎もあの子も見失います」

「そうですね。それは厄介です。紅蓮様、マスター様、先を急ぎましよ

う」

「はい」

「うむ」

状況を整理できずに呆然とその場に立ち尽くしているメルディウスを無視して、3人はすたすたとその横を通過していく。

その後ろ姿を見つめながら、メルディウスが思わず叫んだ。

「俺の……俺のギルマスとしての存在意味はいつたどこにあるんだ
〜!!」

彼の悲痛な叫び声は、名御屋の街の夜空に虚しく吸い込まれていった。

ホテルの中へ入ると、高価な置物が多く置かれ。その中央には360度、円柱の透明なガラスで囲まれた近代的な造りのエレベーターが備え付けられている。

天井には大小いくつもの綺羅びやかなシャンデリアがぶら下がっていて、地面に向かって温かい光が降り注ぐ。

地面には絨毯が敷き詰められており。エントランスには観葉植物が置かれ、正面入り口の前には一面が大きな水槽になっていて、その中を悠々と色とりどりの熱帯魚が泳いでいる。ソファや椅子とテーブルが数多く置かれたラウンジには、大きなモニターも備え付けられており、如何にも高級ホテルと言った感じの雰囲気醸し出していた。

紅蓮は意気消沈しているメルディウスから財布を受け取ると、フロントのNPCと会話して宿泊の手続きを済ませた。

その間も興奮を抑えられない様子の子犬の小虎と少女は、まるで野に放たれた子犬のようにホテルの中を駆け回っている。

「ほら、2人とも、他の方の迷惑になりますから、早くお部屋に行きま
すよ?」

「は〜い!」

その紅蓮の呼びかけに2人は元気に返事をする、彼女のもとへと駆けていく。

それを見てほつと胸をおろしたのも束の間。紅蓮が今度はマスターと白雪に向かって声を掛ける。

「すみません。マスター、白雪。メルディウスを連れて来てもらってもいいですか？ お部屋は最上階の201号室のスイートルームなので」

「——ス、スイートルームだと!？」

それを聞いたメルディウスは、まるで魂が抜けたかのようにその場に崩れ落ちていく。

「ギルマス！ 気をしっかり持ってください！ つとつかか鎧重いんですから脱いで下さい！」

「うむ。仕方なかるう……ほれ、メルディウス。しっかりせんか！

バカタレが！」

完全に魂の抜け殻と化したメルディウスを白雪とマスターが両側から支えるように抱え、なんとかエレベーターの中へと押し込んだ。

一面ガラス張りのエレベーターは、まるで空でも飛んでいるかの様に、ホテルの中を一直線に上がっていく。

そのエレベーターの中から、目をキラキラさせた小虎と少女が頻りに辺りを見渡している。

そうこうしているうちに、最上階に到達し宿泊する部屋の扉を開けた。

部屋の中は開放的な作りになっていて、夜の街が一望できる様に全面ガラス張りの窓をバルコニーが部屋を囲う様に造られている。部屋の隅とバルコニーには観葉植物が置かれ、壁には装飾が施されている。

ゲームの中なのだから、全てデータだと頭では分かっているけど、普段お目にかかれるものではないその空間にどうしてもかしこまってしまう——つとつか思っているのは少女だけのようで……。

「わー。なんだかギルドホールに帰ってきたみたいだね。姉さん！」

「そうですね。あつ！ 小虎。あまりあちこち触ってはいけませんよ？」

「……思っていたより狭いですね。紅蓮様」

「そうですね。お金は高いんですけど、これなら私達のギルドホールの方が快適ですね」

小虎、紅蓮、白雪は何食わぬ顔で会話しながら部屋の中へと進んでいく。

名御屋へ・・・3

きよとんとしながら紅蓮達の話聞いていた少女は、次にマスターとメルデイウスの方に目を向けた。

まあ、彼女が困惑するのも無理はない。普段なら泊まることなど絶対に不可能というような高級ホテルなのにも関わらず、メルデイウス以外はあまり動じている様子がない。

それどころか、皆思い思いにくつろいでいる。一般庶民が高級ホテルに泊まれば緊張で萎縮してしまうものなのだが……。

薄くアイボリーカラーのボールの天蓋に覆われた大きなキングサイズのベッドの上で小虎がはしゃいでいるのも、ギルドホールに帰ってきたようだという。例えるならば、自分の家に帰ってきた時の安心感に似ているのだろう。

マスターが顎の下に手を当て、部屋の入り口に掲示されているホテルの見取図を確認して。

「ふむ。同じフロアに風呂があるのか……旅の疲れを取りに行ってみるか、メルデイウス」

マスターはホテルの見取図を見てそう尋ねると、頭を抱えていたメルデイウスが大声で叫んだ。

「あー。もうやめだやめだ！ 結局はまたモンスターぶっ倒して稼げばいいんだからよ！ じじい。風呂行くぞー！」

「落ち込んだり怒ったり。本当に忙しい奴だな……」

「あつ！ 待つて兄貴。僕も行くからー！」

この豪華な部屋のことなど、全く気にも止めていない様子で2人が少女の横を通り過ぎると、それを追って小虎も慌てて駆けて行った。

庶民的な感性の持ち主だった少女にとって、そのことが相当シツクだったのか、啞然とした表情をしている。

「……この人達っていったい……」

廊下で立ち尽くして少女が苦笑いを浮かべていると、そこに紅蓮が話し掛けてきた。

「どうしました？ 何か気になることでもありましたか？」

少女は自分の身長とり小さい紅蓮に視線を移し『ゲームと言っても、子供のうちからこんな贅沢教えていいの?』と思い。だが、それを言葉にできずに口をパクパクさせながら、困惑した表情を浮かべていたのだがすぐに切り替える。

(ううん。こんな状況なんだから少しくらいの贅沢いいよね! …… まあ。少しじゃないか……)

首を横に振って自分に言い聞かせるように心の中で呟くと、彼女の返答を待ちながら不思議そうに小首を傾げ、自分の方をじつと見ている紅蓮に向かってぎこちなく笑みを浮かべ。

「い、いえ。皆さんはこのクラスのホテル始めてじゃないんだなくって思っ……」

その少女の言葉に、紅蓮は当然の様に淡々と答えた。

「ああ、私達はホテルに住んでるようなものですし当然です。そうですよね白雪」

「はい、紅蓮様。それにしてもここは狭いですね。まあ、私達のギルドホールは特別広いですからね。ですが、この部屋しか借りれなかったのであれば、この部屋を男女で分けなければ……」

紅蓮はゆつくりと部屋の中を見渡している中、白雪が深刻そうな面持ちで考え込んでいる。

部屋中を見渡していた紅蓮が、徐に動き出したかと思うと、部屋に備え付けられている高級そうな革製のソファに腰を降ろして、手招きしながら白雪と少女を呼んだ。

紅蓮は癖なのか、目の前のテーブルにお湯を沸かすケトルの様な道具を取り出し。手際良くお湯を沸かすと、その後にアイテム内から取り出したきゆうすで同じく取り出した湯のみの中にお茶を注ぎ込む。

その隣に座る白雪。その横に緊張した様子で腰を下ろすと、少女は何故か緊張した様子で肩をすぼめている。

紅蓮はそんな少女の前にお茶を置くと、肩を強張らせている彼女に話し掛けた。

「どうかしました?」

「い、いえ。こんな高そうな場所に初めて来て……き、緊張しちやっ

……」

「ああ、なるほど」

納得したように頷くと、紅蓮は湯呑みに手を掛け、落ち着いた様子で口に運ぶ。

つと、同じくお茶を飲んでいた白雪が一息付いて湯呑をテーブルに置くと、落ち着いた口調で言った。

「——そんな事では、千代にある私達のギルドホールに行ったら大変ですね」

「は、はあ……」

(ここより凄いとこころにこの人達は住んでるんだ。私、本当にこの人達の仲間になっていいのかな……)

少女は苦笑いを浮かべながら、今更ながらに自分の選択に疑問を感じていた。

その時、部屋の扉が開いてマスター達が戻ってきた。

「なかなか悪くない風呂だったな」

「そうか？ 俺はあのタオルを持ったライオンの像が気に食わなかったな。風呂の中央にあんなもん置きやがってよー」

「兄貴違うよ。あれはマーライオンって言うんだぜ！ 前に本で見たから知ってるんだ」

腕を曲げて上腕二頭筋を強調させた格好にタオルを担いだ謎のライオンの像を、マーライオンだと言い張り。得意げに胸を張っている小虎に、メルデイウスの眉間がピクピクと脈打つ。

「うるせえー！ 自慢か小虎！ お前はいつも一言多いんだよー！」

「僕は何も悪いことしてないのに」

メルデイウスが拳を振り上げると、小虎は慌てて紅蓮のソファの後ろに隠れた。

紅蓮はちらつと一瞬だけ小虎の方に視線を向け、すぐにマスターの方を向き直し、徐ろに立ち上がった。

「さあ、もうこんな時間ですし。私達もお風呂に入ってきましたよ。起きたらすぐに情報収集に街に出ないといけません」

「はい。紅蓮様」

「あつ、はい！ 私も……」

紅蓮の突然の行動に、持っていた湯呑みを急いでソファの前のテーブルに置くと少女は慌てた様子で、ゆっくりと扉の方へと歩いて行く彼女達の後を追った。

歩いていた紅蓮とマスターが交差する際、紅蓮が小声でそつとマスターに呟く。

「マスター。皆が寝た後にお話があります……」

マスターは一瞬驚いた表情を見せたが、すぐに険しい表情へと変わり「うむ」と頷いた。

通り過ぎた紅蓮の決意を秘めた背中を見つめ、マスターはこの後、彼女に言われるであろう言葉の真意を読み取れた気がした。

紅蓮達がお風呂から上がると、皆相当疲れていたのかすぐに寝入ってしまった。まあ、休憩なく何時間も馬に揺られていれば当然かもしれないが……。

紅蓮は横で寝ている白雪と少女が寝たのを見計らうと、1人ベッドから抜け出した。

部屋に置かれた天蓋付きのキングサイズのベッドには、白雪がプライバシー保護の役割で掛けたカーテンで仕切られている。

紅蓮はベッドに合わさるようにして寝ている2人の寝顔を見て顔をほころばせると、2人を起こさないようにそつとカーテンを開けて外に出た。

外のバルコニーには、後ろ手を組みながら窓から外の風景を見ているマスターの姿があった。

バルコニーからの景色は名御屋の街が一望できるようになっていて、まるで迷路の様に張り巡らされた路地は来た時と同じく、多くの店が軒先の明かりで道しるべのように数多くの道を浮かび上がらせている。

紅蓮はそんなマスターの横に並ぶように立つと、そつと彼の顔を見上げる。

「……マスター。お疲れのところすみません」

「いや、別に良い。それより、話とはなんだ？ なにか、気がかりなことでもあったか？」

マスターのその優しい声音に紅蓮は思わず頬を赤らめ、恥ずかしくなったのか彼女の視線は下を向けられた。

それを見たマスターは外を眺めながら、静かに呟くように言った。

「もしま、バロンに対しての作戦になにか問題があるのか？」

「……はい」

紅蓮は少し表情を歪めると、言い難そうに口を開く。

「マスターの立てた作戦は最善だと私も思います。ですが、メルディウス1人というのが心配で……そこで、私も影から見守り。何かあれば一緒に離脱しようかと……」

「うむ。メルディウスの実力ならば心配はないと思うが、あやつは短気だからな。紅蓮がおれば安心か……」

マスターは納得したのか頷くと、小さな声で「バレないように」と呟き、再び外を見つめた。

意外とあっさり彼が紅蓮の提案を受け入れたのは、彼女の言った『離脱』という言葉が大きいだろう。

もしも、ここで彼女が言ったのが『交戦』だった場合。マスターは決して了承しなかっただろう……敵は数千という兵を出し、ベータ版のマスター時代から、このゲームをプレイしていた四天王とまで言われる存在だ。

どの道2人程度で対抗できるプレイヤーではない。紅蓮のその発言も、それを理解しているからこそ出たもので、そんな彼女ならばこそ、冷静に撤退を最優先に考えると分かっている上の返答だったのだ。

紅蓮は小さく頷き「はい」と小さく返事をして身を翻し、白雪達が眠るベッドへと戻ろうと歩き出そうとした彼女に、マスターが付け加えるように言った。

「——紅蓮。かつての仲間とはいえ、油断するでないぞ？」

ピタッと歩みを止めた紅蓮はゆっくりとした口調で言葉を返す。

「大丈夫ですよ、マスター。私はそんなミスしません」

そう告げると、マスターは満足そうに頷いた。

「うむ。そうだったな………メルディウスを頼む」

「はい、了解しました。マスター」

紅蓮は振り返らずに頷くと、再び歩き出した。

それを見送ったマスターは星が煌めく星空を見上げた。

妙な胸騒ぎを感じる。もちろん、紅蓮達のことではなく始まりの街に残したカレンのことだ。一通り戦闘の基本は叩き込んでいるが、カレンには他の者達とは違う決定的な欠点がある。

それは未だに、固有スキルである『明鏡止水』を発動できずにいることだ——レア度の高いスキルには発動条件が曖昧なことが多々ある。

固有スキルはゲーム本来の仕様の中でも個人の差が大きく出るもの、その為初期の段階でいかに良い固有スキルを手に入れるかが勝負になる。

だからこそ、フリーダムはRMT機能に加え、アイテムなどの財産データを他のキャラに完全移植できるシステムも備わっていた。

このシステムは個人の生体データをスキャンしているフリーダムならではのシステムで、普通のゲームならばアカウントハックなどでAの人物がBの人物になれるのだが、フリーダムではAがBになることは体が同じでなければ不可能だ。

即ち同個体の生命体。例えるならば『クローン』でもなければ、アカウントハックは不可能なのだ。

だが、運良くレア度の高い固有スキルを手に入れても、使用できないのであれば、それは存在していなのと同じで無意味だろう。

カレンにはその固有スキルが発動できない為、肉体に染み込んだ戦闘センスのみで戦うしかない。

ゆつくりと部屋に戻ったマスターは窓を閉める。

(なにやら、胸騒ぎがするな。逸るなよ……カレン)

そう心の中で呟くと、今度はソファーに腰掛け目を閉じた。

翌日。目を覚ましたマスターの前には不機嫌そうに足を組みなが

ら、向かい側のソファ―に腰掛けているメルデイウスの姿があった。
「――やつとお目覚めか？ そんなに俺と一緒に寝るのが嫌なの
かよ」

「すまん。少々考え事をしていてな……そのまま寝てしまっていたよ
うだ」

「そういや。てめえーの弟子も今やばいんだったな……」

メルデイウスは彼の心中を察して、表情を曇らせている。

そんな彼の考えてることが分かっているように、すぐにマスターが
言葉を返す。

「フンツ、あやつももう子供ではない。それに、今は目先の心配をせね
ばなるまい！」

「ふつ、無理しやがって……だが、その通りだな！ で、どうする？
情報集めるって言ったって名御屋は広いぜ？」

「そうだな……だが、探すしかないのだ。これからの戦力にバロンは
不可欠――あやつ軍勢を操る能力がどうしても必要なのだ」

「ふんつ……不可欠か……確かに今の状況じゃ、俺や紅蓮の固有スキ
ルはあまり役に立たないしな……しゃーない。面倒だが手当たり次
第に探すしかないか」

メルデイウスがため息混じりにそう吐き捨てると、その会話を終わ
るのを待っていたかのように、後ろから紅蓮が話し掛けてきた。

「すみません、マスター。起きるのが少し遅くなって……」

「――構わんよ。お前にもお前の仲間達にも無理をさせている。今日
一日はゆつくりと休むといい。儂とメルデイウスの2人で街に出て
くる」

「そうだな。この街は広いんだ。一日程度誤差の範囲だろ、ゆつくり
探すとするさ！ あははっ、その分金は掛かるがな………はあー」

メルデイウスは苦笑いをする、出費のことが頭を過って大きなた
め息をついた。

そんな2人に言葉を返そうと紅蓮が口を開こうとした直後、後ろか
ら白雪の声が響く。

「そうですよ紅蓮様。ここは私達に任せて、お休みになって下さい」

「……ですが」

自分の方へと歩いてくる白雪に、紅蓮が申し訳なさそうに声を出す。

「ですが——ではありません！ 紅蓮様はもう少し私を頼ってくれても良いのです！」

「は、はい。分かりました。そうですね。なら、お任せします」

紅蓮は白雪の勢いに押され、小さく頷く——。

「お任せください！ 私が必ずバロン様への手がかりを掴んでみせます！」

白雪は嬉しそうに微笑むと、俄然やる気を出したのか、朝食も取らずに部屋を飛び出していった。

今更朝食を抜いたくらいで時間的にどうこうなることはないのだが、彼女にとつては朝食よりも、紅蓮の役に立つ方が優先的なのだろう……。

それを呆然と見つめていた3人だったが、すぐに我に振り返り話し始めた。

「——さてと……白雪は飛び出していつてしまいましたか、この街は広いです。2人は何かあてはあるのですか？」

彼女の至って冷静だった紅蓮が首を傾げながら尋ねると、メルディウスが自信満々に答える。

「そりゃしらみつぶしに探していくしかないだろう！ あいつの特徴は黒い鎧に黒い剣だろ？ あんな黒一色の装備を好む中二病的な奴はそうそう居ないだろう」

「はあ……メルディウス。それでは見つけられませんよ？ マスター。何か手がかり……というか、バロンを見たという情報を詳しく教えて頂けませんか？」

紅蓮はメルディウスの話を聞いて彼がバロンを見つけられないと感じたのか、大きなため息を吐いて今度はマスターに尋ねる。

名御屋へ・・・4

マスターは深く頷くと、思い出すように瞼を閉じて、その時のことを淡々と話を始めた。

「うむ。実は儂も、バロンの姿をはつきり見たと聞いたわけではないのだ。実は名御屋周辺で、謎のモンスターが起きておるらしくてな……その情報の中に黒い鎧の兵団を見たという者が数多くおったのだ」

「黒い鎧の兵団……」

「……そりや間違いなくバロンだ！」

黒い甲冑に黒い片手剣はバロンの特徴でもある。それは黒の兵士を召喚する為、その軍団の中に紛れる為の彼なりの防衛策なのだろう。

マスターは彼等の言葉に相槌を打つと、言葉が続ける。

「それがバロンなのは言うまでもない——だが、狩りをしていたら、あやつにも何らかの目的があるはず。おそらく、まだこの近辺に潜伏しておるはずだ——皆には街で近辺の狩場で『黒い鎧の兵団を見かけなかったか』と尋ねて回ってほしい」

「おう！ なら飯食ったら早速聞き込みだな！」

「うむ。そういえば、朝食はどうするのだ？ 確かここは食事もあるはずだったと思うが？」

マスターがそう尋ねると、ソファアに腰掛けていた紅蓮がテーブルの隅に立て掛けてあった本を手に取って、マスターに手渡す。

本を開くと、中にはびっしりと料理のメニュー名が書いてあった。「なるほど、ルームサービスか。現実世界で海外を遠征していた頃を思い出すな……」

感慨深げにそう呟き頷くと、横からきたメルディウスがそのメニュー表を取り上げた。

「早くあのバカを探さねえーといけねえーんだ。ちやつちやと決めちまえよー！」

メルディウスはメニュー表の注文という場所を指で押すと、彼の視

界にコマンド入力画面が表示され。そこには部屋番、注文商品番号、合計金額が表示されている。

どうやらサービスを受けると、その料金はチェックアウト時に徴収される仕組みになっているようだ。

メルディウスはそれに素早く数字を入力し終わると、そのメニュー表をマスターに投げた。

「ほら、じじいもさっさと注文しちまえよ。時間には限りがあるんだぜ？」

「うむ。ならば……」

マスターはそれを空中で受け取ると、再びメニュー表を開き徐ろに数字を入力し始める。

そのやり取りを見ていた紅蓮が不機嫌そうに目を細めながらメルディウスに告げた。

「マスターにあまり迷惑を掛けてはいけません。それに、朝食くらいゆっくり食べてからでも、さほど時間には変わりはありませんよ」

「んなこと言ってもよー。急がねえーと日が暮れちまうだろ？」

困った顔をして頭を掻きながらそう答えるメルディウス。

そんなメルディウスの困った顔を見て、紅蓮は思わずそっぽを向く。

まあ、彼女の言う通り。ここで数分短縮したところで、状況が好転するとも思えない。要するに、気持ちの問題なのだ。

見兼ねたマスターが、紅蓮の方にすつとメニュー表を差し出す。

「紅蓮よ。メルディウスの言う事も一理ある。この街に来た本来の目的を果たさねばな」

「……分かりました。ですが、私達はマスター達の物が届いてからでいいです。あまり時間を掛けると『日が暮れてしまう』ので」

相当頭に来ている紅蓮は、メルディウスへの当て付けなのか『日が暮れてしまう』の部分を強調して告げると、マスターからメニュー表を受け取った。苦笑いを浮かべると、マスターは更に落ち込んだ様子のメルディウスの肩を軽く叩く。

それから数分して、メルディウスとマスターの注文した料理をメイ

ド服を着た2人のNPCが運んできた。

そのメイド達は銀色の丸い蓋の着いた皿を手に一礼して部屋に入ると、テーブルの上にそれを置いた。

「食べ終わりましたら、もう一度お呼びください。食器を下げに参ります」

形式的にそう言った彼女達は頭を下げ、そそくさと部屋を出ていった2人を見送りながら小虎と少女が口を開く。

「へえ〜。まるで普通の人間みたいだよね〜」

「そうだね〜。ここがゲームじゃなかったら」

2人のその言葉はもつともだろう。NPCの動作は全てAIで設定され、それ以外のことはできないのだが、見た目は小虎などと同じく意思を持ったプレイヤーにしか見えない。

まあ、この世界はゲームの世界で、その体を構成しているデータは同じなので、同じと言えば同じなのだろうが……。

「なにぼさつとしてんだ？　小虎。おめえーも早く飯頼めよ。今日は俺達は居ねえーんだ……あいつと紅蓮の護衛はお前に任せるからな！」

「——メルディウスよ。ホテルの中ならば何も問題はなかろう。それより、お前は朝から本当にそれを食べるのか……？」

困惑しながらメルディウスの目の前に置かれた大皿を指差して言った。

だが、マスターが驚くのも無理はない。何故なら、そこには大皿からはみ出しそうなほど大きなステーキがもくもくと湯気を上げていたのだ。

正直。朝食にステーキとは、随分と豪華な料理と言わざるを得ないだろう。

「男なら朝からこれくらい当然だろ？　それより……なんだ？　じじい。その年寄りみたいな朝食は——」

不満そうにメルディウスは眉をひそめながら、今度はマスターの目の前に置かれた皿を指差した。

そこには焼き魚に汁物、そしてご飯というシンプル過ぎるくらいの

食事が並んでいた。

「ふふふつ。一汁一菜……これ武人の心得なり。腹が減っては戦はできぬが、食べ過ぎてもいかん……動けなくなるからな。食事とは、腹八分に留めるのが最も良いのだ」

マスターがほくそ笑みながらそう告げると、メルデイウスは「くだらねえー」と吐き捨て、フォークを手に目の前のステーキにかぶりついた。

獣の様に肉にかぶりついてはご飯をかき込むメルデイウスとは対照的に、手を合わせ「いただきます」と背筋を伸ばし、礼儀正しく食事を取り始めるマスター。

まさに正反対の2人が、お互いに向い合って食事を取る姿を見て、昔を思い出しているのか紅蓮はくすつと微笑みを浮かべ、ベッドの上でトランプをして遊んでいる小虎と少女に声を掛けた。

「私達も朝食を頼みましょう。2人もお腹すいたでしょうし」

「やったー！ やつとご飯だー！」

「そうですね！ 何を食べようかな〜♪」

走ってきた2人は紅蓮の持っているメニュー表を食い入るように見つめている。

それを優しい眼差しで見つめていた紅蓮の耳に、メルデイウスの声が飛び込んできた。

彼は大きく膨れた腹を叩きながら、満足そうに叫ぶ。

「よーし！ 飯も食ったし。いっちよ行ってくるわっ！」

「……ご馳走様でした——では儂も出る！ メルデイウス。日が暮れる前にはここで落ち合おう！」

「おう！」

食事を終えた2人は徐に席を立つと拳と拳をぶつけ合って、ニヤリと笑みを浮かべ部屋を出ていった。

そんな2人を見て紅蓮はふと、表情を曇らせながら思った。

(私は本当に行かなくて良いのでしょうか……)

部屋の一点を見つめ、小さくため息をつく。

白雪、メルデイウス、マスターだけに、バロンの搜索を任せるのが

心苦しかった。

ここ数日。野営続きで昼にも殆ど休息すら取らずに、この名御屋まで走ってきた——皆、相当疲労は蓄積しているはずであり。その条件は紅蓮もマスター達も変わりはない。

にも関わらず。自分達だけ、ホテルでゆつくりとくつろぐのはどうしても気が引けてしまう。

その様子に気付いた少女が、首を傾げながら尋ねてきた。

「紅蓮ちゃん大丈夫だよ。あの2人は強いから、何の心配もいらなと思うよ?。」

「……それは分かっています。ただ、私達だけゆつくりしていいのかと思ったので……。」

その紅蓮の言葉に、少女は少し考える素振りをすると、突然。紅蓮の顔の前で微笑みながら言った。

「ただ待つてるだけでも退屈だし。一緒に街を見て回ろっか! もしかしたら、探している人がひよっこり現れるかもだし。そしたら、サボってるわけじゃないよね?。」

「——そ、そうですね。それは良い考えかもしれませんが」

少女の思わぬ提案に紅蓮は頷くと、ぎこちなく微笑み返した。

正直。このままホテルの部屋で待っていたら、心苦しくて休んでも休んだ気にならないところだったので、彼女の提案はまさにうってつけだった。

それから3人は注文した食事——小虎はカレー。紅蓮と少女はサンドイッチを食べ終えると、軽く身支度を整え名御屋の市街地へと向かった。

紅蓮の宝物

道の両端に広がる商店の列——その軒先では、各店の店主が行き交う人々を我先にと呼び込んでいた。

昨晚もバルコニーで見ている、その時にはまるで別の世界の光景だったが、こうして目の当たりにすると、まるでこちら側が現実の世界なのではないかと思えるほどの活気あふれる光景に、なんだか新鮮な感じすら覚える。

その光景を小虎と少女は、まるで数日振りに散歩に連れ出された犬の様なキラキラとした瞳で辺りの店先を見つめている。

好奇心に満ち溢れた小虎と少女は、紅蓮が『好きなどころに行つていい』と一声掛ければ、今にも飛び出していきそうなくらいだ——。「いいですか2人共、羽目を外しすぎず。本来の目的は忘れないようにしてくださいね?」

キラキラとした瞳で妙にそわそわして落ち着かない様子の2人に、紅蓮が告げと。

「わっ、分かってるぜ! 姉さん」

「そっ、そうですよ! いいですか? 紅蓮ちゃん。小虎くん。私の言う事を良く聞いて、はぐれないようにしてくださいね!」

年長者としてのプライドがあるのか、少女は今にも飛び出していきたい気持ちを必死で抑えている。しかし、その声は我慢しているからか少し震えていた。

紅蓮は小さくため息をつく。「行きましよう」と落ち着いた様子で歩き始めた。その後ろを続くように小虎が付いて行くと、それを見て少女はため息を漏らした。

「はあく。私の方がお姉さんなはずなんだけどなあ〜」

そう不満を呟いて肩を落としながら、少女もゆつくりと歩き始める。

名御屋の街には多くのプレイヤーが経営している店があり、人通りも始まりの街に比べると段違いに多い。昨晚この街に着いた時人も人が多いと思ったが、夜と昼を比べるとその差を改めて思い知らされる。

る。

だが、それは必ずしもここ名御屋にプレイヤーが集中しているからというわけでもない。

それどころか、プレイヤーの数だけでいえば、ゲームを初めて真っ先に飛ばされる始まりの街の方が圧倒的に多いだろう。

それなのにどうして、これほどの違いが出るかというと、その理由はただ一つ——始まりの街と名御屋に居るプレイヤーの質の差である。

フリーダムで始まりの街は日本の東京の場所に位置しており、その名前から分かる通り、初心者が一番最初に入る街でもある。

その為、他の都市よりも人口密度は多い——が、殆どは始めたばかりのプレイヤーや、それを勧誘する為に集まったギルドのメンバー。またはブラックギルドに所属している無法者達で基本的な戦力は低いと言えた。

しかし、名御屋は豊富なアイテムとプレイヤーの平均レベルも85以上と高水準を誇っている。

これは他の都市でも同じで、著しく平均レベルが低いのは始まりの街くらいなものだ——他の都市も事件が起きた翌日には困惑を見せていたが、数日後には普段通りの光景が戻っていた。

ログアウトできないという危機的状況も、楽しめるといえるのが高レベルプレイヤーからくる余裕というものなのだろう。

3人が辺りを見渡しながら歩いていると、不意に小虎が口を開いた。

「——ここは千代よりも人が多いよね。どうしてだろう?」

その質問に答えるように紅蓮が言葉を返す。

「そうですねー。ここ名御屋はアイテム類が特区に指定されている為、他より安く買えます。更に珍しいアイテムも多く売られているので、幅広いレベルのプレイヤーが来ているんでしょうね」

紅蓮は辺りの店に目を向けながら更に言葉を続ける。

「私達のギルドの拠点でもある千代の街も特区に指定されていますが、武器、防具でも特定の物だけです」

「特定の物？ それって例えばどんな物なの？」

紅蓮の話聞いていた少女が不思議そうに尋ねてきた。まあ、露骨に『特定の物』などという発言をされれば、彼女が気になるのも無理はないだろう。

その質問に、素早く紅蓮が「日本らしい物でしょうか」と答えると。「日本らしい物って？」

っとその言葉がそのままオウム返しのように返ってきた。

さすがに、最初の言葉で納得すると考えていた紅蓮は、彼女のその返しに少し考えるような素振りや顎に指をつける。

そして、徐に首を傾げてこちらを見ている彼女に言った。

「——そうですね。説明すると、装備なら刀や槍、弓など。防具ならば武士の甲冑、忍者の着ている鎖帷子などですかね。ああ、着物やかんざしのような装備アイテムなんかもありますね」

「へえー。なんか紅蓮ちゃんに似合いそうな物ばかりだねっ！」

につこりと微笑み掛ける少女に、紅蓮は恥ずかしくなり頬を少し赤らめながら思わず視線を逸らす。

「どうやら紅蓮は『美しい』という言葉だけではなく、他人に褒められることには、めっぽう弱いらしい……。」

その時、小虎が思い出したように少女に問い掛けた。

「そういえば。お姉さんはここで誰かと会うんじゃないの？」

「えっ？ うーん。でも、どこに居るか分からないし。まだフレンドにも登録してないから、メッセージとか飛ばせないんだ。だから、どうしよっか……。」

少女は困り果て、思わず口をつぐんでしまう。

まあ、事件当時。友達に誘われて始めたのはいいものの、他の街に居てどうしようもなくなる……なんてことは、彼女に限った話ではなくよくある話だった。

システム上。フレンドまたは同じギルドのメンバー意外とはボイスチャットもメッセージも送れない仕様になっている。

これは嫌がらせを防止する目的で設けられているシステムでもあり、ゲーム運営が初期設定している仕様なので、プレイヤーがどう足

搔いても変更できない。だが唯一、フレンドでもなくギルドメンバーでもない人物とやり取りできる方法がある。

それは銀行か商品売買の取引ページからのメッセージだ——これを利用すれば、フレンド登録していないプレイヤーとやり取りをすることが可能だ。

小虎も立ち止まって一緒になって困り顔で考えていると、紅蓮が尋ねてきた。

「その方の名前は？ 名前さえ分かれば、街のギルドホールで探せますよ？ 街の中に居なければダメですけどね」

「——うくん。名前も聞いてなくて……」

それを聞いた小虎が「ならだめじゃん」と匙を投げると再び歩き始める。

先に述べたシステムは匿名での取引も可能であり、少女が取引したのもこの例外ではな様だ——。

「あはは……面目ないです……」

苦笑いして謝る少女に紅蓮は小さなため息をついて、小虎を追いかけるように歩き出すと、その後ろをしょんぼりしながら少女も続く。

それからしばらく、あてもなく繁華街を歩いていると、ふとある店が紅蓮の目に止まった。

店先には信楽焼のたぬきの置物が置かれている。頭には笠を被り、左手には大福帳、右手には徳利を持ち、大きな目を見開いて不思議そうに首を傾げている姿はなんとも愛らしい。

他の店の軒先には置いていないこの置物と、汚らしい外見がなんとも周りと違って浮いて見える

目立つと言う点では利があるが、綺麗な店ならまだしも見劣りして目立つというのも考えものだ——。

立ち止まった紅蓮の視線の先には『刃物一鉄』と書かれた看板の掛かった古びた店が建っていた。

「ここは……聞いたことがあります。名御屋には凄腕の鍛冶屋が居て、その名前も同じ『一徹』確か日本一の刀鍛冶のお店だったはず」
(ここなら、あの武器も直せるかもしれない……)

紅蓮はそう考えながら、大切に懐にしまったていた美しい装飾が施された黒の柄には不釣り合いな折れた短刀を見下ろす。

神妙な表情で店の引き戸を開けると、至る場所にホコリを被った店内には年老いた屈強な男が煙管を啜えて座っていた。

老人はその鋭い目を更に細めると、店の入り口に立ち尽くしている紅蓮を睨んだ。

その気迫に一瞬は気圧された紅蓮だったが、すぐに冷静になって声を掛ける。

「――修理を頼みたい武器があるのですが、お願いできますか……？」
「……………ほう。どれ、見せてみい」

「はい」
紅蓮は頷き、懐からゆつくりと折れた短刀を取り出すと、それを老人に手渡す。

老人はしばらくその短刀を様々な角度から見た後に首を横に振った――。

「これは直せんな……いや、直す直さぬという話の前の問題じゃない……」

「……………そう、ですか……………」
紅蓮は今までで一番悲しそうな表情をして、老人が差し出した短刀を受け取った。

普段あまり表情を変えない彼女のその悲しそうな表情から、彼女の手に握られた短刀が如何に思い入れのある物かが窺い知れる。

老人もその悲しそうな表情に気が付き、尋ね返して来た。

「――それほど大事な得物なのか？　ならば、方法がないわけではない」
「い」

「……………本当ですか!？」
紅蓮はそれを聞いて、一度は曇らせた表情をパーッと明るくさせる。

老人は啜えていた煙管を逆さにして灰を落とすと、再び煙管に煙草を入れ、火をつけ再びゆつくりと話始めた。

「壊れているも何も、その得物はまだ完成しておらん。それを完成さ

せるには特殊な素材が必要になる」

「必要な素材ですか？」

「そうじゃ。竜神の髭と大熊の大牙が必要なのじゃが、持っておるかの？」

「……竜神の髭と大熊の大牙」

紅蓮は急いでコマンド画面からアイテムを選んで中身を確認すると、そこから白い紐のような物を取り出し、それを老人に差し出した。

老人は鋭く釣り上がった目を大きく開くと、紅蓮の手の中にあるそれを受け取った――。

「ふむ。これは紛れもなく竜神の髭じゃな……なるほどのう。これを持っておるといふことは、戦闘の実力は十分過ぎるほどあるようじゃな……」

「ですが、大熊の大牙は持ってないですね。すぐに取りに行ってください。……それで、お代の方はおいくらでしょうか？」

「代金は良い。こんな代物に触れる機会はめったにないからのう、この頃手応えのある武器を打てずに鬱々としておったからなあ」

「ですが……」

それを聞いた紅蓮は少し申し訳なさそうな表情になる。

老人は啜えていた煙管を手につつと、煤で汚れた店の天井にふーつと煙を吐き出し徐ろに口を開く。

「お嬢さん。人の厚意には素直に甘えるものじゃ。遠慮するのもええが、程々にせんと、その者にも失礼となるぞ？」

「は、はい。マスター……」

その老人の顔が一瞬マスターと重なり、思わずそう口に出してしまふ。

老人は不思議そうに首を傾げると言い放つ。

「まあ、それも大熊の大牙を持ってこれればの話だかのう。フオツフオツフオツ！」

老人は笑いながら口の中に含んでいた煙を、まるで蒸気機関車が蒸気を吐く様に小刻みに吐き出した。

そのバカにしたような言い方が気に障ったのか、紅蓮は眉間にしわ

を寄せると小さく頷いた。

普段から感情表現が苦手な紅蓮だが、だからと言って性格が内気と
言うわけではない。

いや、それどころか、誰よりも負けず嫌いでもある彼女にとって、そ
の老人の態度はしやくに障ったのだろう。

紅蓮は静かに頷くと、徐に口を開く。

「……いいでしょう。それでは近いうちにその大熊の大牙持ってきま
す。そうしたら、この短刀を直して頂けるんですね?」

「うむ。善処しよう」

頷き再び煙管を啜える老人に向かって、軽く一礼した紅蓮は足早に
店を出た。

外では小虎と少女が待っていた。おそらく。2人は紅蓮が知り合
いに会いに来たのだと思い。気を利かせてくれたのだろう。

「——もう用事は終わった? 紅蓮ちゃん」

少女は扉から出てきた紅蓮に、にっこりと微笑みながら尋ねてき
た。

紅蓮は無言で頷くと、言い難そうに口を開く。

「すみませんが、急用ができたので、少し別行動しましょう」

だが、少女は紅蓮のその申し出に、少し渋い顔をして告げた。

「うくん。それは年長者として賛成しかねるかな。それに、今は強
い2人と別行動中だし。今はまとまって行動した方がいいと、お姉さ
んは思うな」

「……お姉さん。姉さんはもう行っちゃったけど?」

「——はっ!? 紅蓮ちゃん!」

小虎がそう告げると、少女慌てて辺りを見渡した。だが、そこには
すでに紅蓮の姿はない——。

動揺したのか、何故か少女は慌てて目を見開いてしやがみ込むと地
面を注意深く見つめる。

「紅蓮ちゃんが遂にミクロの世界に!」

「——相変わらず失礼な方ですね……」

紅蓮の不機嫌そうな声をたどって少女が空を見上げた。

そこには、雲に乗った紅蓮が不機嫌そうに少女を見下ろしている。

「小虎、彼女の事はお願いますよ？」

「おう！ 任せておいてくれよ。姉さん！」

「はい。それでは頼みましたよ」

そう言い残すと、前を向き直した紅蓮はふわふわと空に溶け込んで消えていく。

紅蓮の宝物2

雲の上に座りながら懐の短刀を見ながら、紅蓮は昔のことを思い出していた。

そう。それはまだ紅蓮とマスターが同じギルドにいた時の話だ――

* * *

フリーダム内で実装された、強力なトレジャーアイテムを入手できるイベントが、一定期間だけ開催された。

そこで『冥府の神炎』というダンジョンで最深部のボス――神炎のミノタウロスブラザーズが落とす『鬼神の柄』と『鬼神の刃』が揃って始めて完成する『閻魔の脇差』というアイテムなのだ。

紅蓮、メルディウス、マスターは千代の付近の『地獄谷』と呼ばれている場所を訪れていた。

「よっしゃー！ 燃えてきたぜ！ トレジャーアイテムをゲットしたら俺が貰うからな！」

「もう、メルディウスはせっかちですね。そんなに焦らなくてもアイテムは逃げませんよ？」

まるで子供のようににはしゃいでいるメルディウスを見て、くすつと微笑みを浮かべながら楽しそうに紅蓮が言った。今の紅蓮からは想像もできないとても楽しそうな彼女の様子は、まるで別人ではないのかと驚くほどだ――。

しばらく平原を徒歩で進んで行くと、目の前に大きな洞穴が見えてきた。その場所はすでに多くのプレイヤー達でごった返している。

それを見たメルディウスが興奮を抑えきれない様子で大声で叫ぶ。その声に周りのプレイヤー達が驚き、次の瞬間にはくすくすと笑う声が聞こえてきて、紅蓮が恥ずかしそうに頬を赤らめる。

「――楽しみなのは分かりますが、もう少し声を抑えて……」

3人だけに聞こえる様な小さな声でメルディウスをたしなめると、

続けてマスターも口を開く。

「うむ。紅蓮の言う通りだ。メルデイウスよ。お前はもう少し落ち着きというものをだな」

「しかたねえーだろ？ 期間限定イベントは期間決まってるんだからよお……」

怒られ、ふてくされながら口を尖らせ、不機嫌そうに眉をひそめるメルデイウス。

紅蓮はそんな彼に……。

「そんなの期間限定なんですから当たり前ですよ」

つと、言つて笑みを浮かべた。

顔を真っ赤に染めながらメルデイウスがそっぽを向く。

そんな2人を横目で見て、微笑みを浮かべていたマスターが続々と自分達の横を通りすぎて行く他のパーティーの人間を横目に徐ろに口を開いた。

「——ほう。やはり人気のようなだな。2人共、急がねばボス部屋の前で待たされることになるぞ？」

「は、はい！ すみませんマスター」

「全く。うるせえギルマスだぜ！」

そうこうしながらも、3人はこのダンジョン特有の小鬼やガーゴイルなどのモンスターを撃破しつつ地獄谷を進んでいくと、岩盤の前に2体の鬼の象が棍棒を地面に突き立てる姿で洞窟の両側に立っている広い場所に出た。

おそらく、ここがダンジョンのボス部屋の入り口なのだろう——そこには、もうすでに多くのプレイヤー達が屯っている。

列は二列になっていて、部屋の端の方に溜まっている者達は、まだ来ていないパーティーやギルドのメンバーを待っている者達だろう。

ダンジョンクリアする前ならば、パーティーのリーダーさえそのダンジョン内に居れば、そのリーダーによって召喚してもらうことができるからだ。

皆、笑みを浮かべながら仲間達と楽しそうに会話をしている。

「へえー。意外とそれっぽく造ってやがるな！ そう思うだろ？ ギ

ルマス！」

「うむ。洞窟の前の像はなかなかの造形だな。だが、入り口に手を掛け過ぎて、入ってからがっかりせんと良いがな」

マスターは険しい顔でそう吐き捨てる。

彼にとつてはダンジョンの外見より、出てくるボスの方に関心が強いのだろう。

「大丈夫ですよ。きっと今回は楽しめると思います！」

「なんだ？ 紅蓮はいつにも増してやる気だなあ。まっ、強えーのがきても俺がお前を守つてやるよ！」

メルディウスはニヤツと得意げな笑みを浮かべると、紅蓮の頭を手でぐしやぐしやと撫で回す。

不機嫌そうに紅蓮が「またあなたは、私を子供扱いして……」と膨れっ面をして唇を尖らせている。

ここまで全く危なげなく敵を撃破して進んで来た彼等だったが、最大の敵はモンスターではなく、ボス部屋に入れるまでの待ち時間かもしれない。

ボス部屋の前にはマスターが思っていた通り、もう10組ほどが大きな扉の前で待機している。

本来ならば、フルパーティーの6人を更に連結させる複合パーティーで挑みたいところだが、今回のイベントは一つのパーティーのみでの挑戦と、制限が付いている為、最大戦力でのフルパーティーで挑まなければいけないのだ。

さすがに高難易度ダンジョンだけあって、制限いっぱいフルパーティーの6人で誰もが臨んでいる。3人で——などという無謀な者達はマスター達くらいしか居ないが……。

「ちっ！ なんだよ。部屋待ちかよ！ こんな事なら、もつとゆつくり敵を倒せば良かったぜ！」

そう吐き捨てたメルディウスは、つまらなそうに持っていた赤い柄の大剣を背中の鞘に収めた。

その直後、横から紅蓮の声が聞こえた。

「仕方ないですよ。順番ですし……来る前にサンドイッチを作つてき

たので、それを食べながら待ちましよう！」

紅蓮はサンドイッチの入ったバスケットを取り出して地面に置くと、その後に出したレジャーシートを広げ、その中心にちよこんと座った。

「ちようど腹が減ってきたところだ！ ほら早く来いよギルマス。来ねえーなら俺があんたの分も食っちゃまうぞ？」

メルディウスは満面の笑みで紅蓮の横に腰を降ろすと、マスターに手招きする。

「全く仕方ないやつだ……」

マスターは呆れ顔でため息をつくとき、メルディウスのその言葉に従った。

それからしばらくゆっくり食事をしながら順番を待っていると、マスターが何かに気がついたのか険しい表情で呟く。

「おかしい……」

「あつ？ デザートはねえーと思うぞ？」

「お菓子ではない！ お前も食つとらんで周りを良く見んか！」

「……はっ？」

マスターにそう言われ、紅蓮特製サンドイッチを食べるのを一時中断し、メルディウス辺りを注意深く見渡した。

しかし、そこにはさつきまでと同じように、ボス部屋の前の長い列が少し伸びた程度で、別にこれと言って変化があるようには見えない。

メルディウスは首を傾げながらマスターに言い返す。

「別になんか変わってねえーぞ？ 俺達の後ろの連中が増えた以外にはよ」

「……はっ！ そういうことですかマスター」

「うむ。紅蓮は気が付いたみたいだな……」

紅蓮とマスターはお互いの顔を見つめ合うと深く頷く。それを見てメルディウスは眉間にしわを寄せ首を傾げている。

その直後、呆れながらも紅蓮がまだ首を傾げているメルディウスに説明する。

「まだ分かりませんか？ メルディウス。いいですか？ 先程前に並

んでいた方が、次々と私達の後ろに並んでいますよね？」

「んっ？ そう言われてみればそうかもな。でっ、それがなんだってんだ？」

「もう！ ……マスター」

紅蓮はメルデイウスの返答に呆れ顔のまま、助けを求めるようにマスターに目を向ける。

そんなメルデイウスの様子を見て、マスターも呆れ顔で額を押さえて「まったく」とため息をつく。

「良いか？ ボス部屋に入って行った者達の出入りが激しくなっている。しかも、戻ってきた者達の顔に覇気を全く感じない。これはおそらく——」

「——おそらく……なんだよ？」

「ボスは予想していた以上に強いということですね。マスター」

聞き返すように言ったメルデイウスの言葉に、マスターが答えるより先に紅蓮が険しい表情で尋ねた。そんな彼女にマスターは無言のまま頷く。

負けて自分達の後ろに並び直しているプレイヤー達が弱いわけではない。皆、最前線で戦えるだけの装備を揃えている手練れ揃いなのは、身に付けている装備品を見れば分かる。

それでも勝てないほど、扉の向こうにいるボスが強いということだ。その直後、ボス部屋のドアが音を立てて開く。

ドアが開いたということは、中で戦っていたプレイヤーとの勝負が終わったということでもある。

周回が基本のダンジョンでは街に戻るのではなく、列の最後に戻るようにと、ボス部屋前にワープゾーンがあり。それはダンジョンをクリアするまで有効で、もしもボスに撃破されても、街からすぐにボス部屋まで戻ってこれる。これはプレイヤー救済処置的な機能なのだ。

すると、固く閉ざされていた扉が開く。

勝ったのであれば、目の前の扉から勝利したプレイヤーが出てくるはずなのだが、それが無いということはボスに負けたのだろう。

勝利したのならば、報酬を受け取り。街に帰るのにボス部屋前のワープゾーンを利用するはずなのだから……。

険しい表情で、紅蓮とマスターが現実を噛み締める様に、新しい獲物を呑み込もうと開いた扉を見つめていた。その時、突然大声で笑い出してメルデイウスが叫んだ。

「はっはっはっ！ 相変わらず心配症なギルドマスター様だぜ！ よは、あの部屋の中には物凄く強えー敵が待ってるって事だろ？」

メルデイウスはバスケットの中のサンドイッチを2つ、3つと口の中に詰め込むと、徐ろに立ち上がり。ボス部屋の前まで行って待っている列のプレイヤー達に向かって名乗りを上げる。

「いいかお前等!! 俺はテスターをやったメルデイウスってもんだ!! ここでこの俺に勝てるって奴は前に出ろ!!」

もはやただの路上のヤンキーの宣戦布告でしかない発言なのだが、その場に誰も文句を言う者はいない。

それどころか、メルデイウスの『テスター』という言葉に、その場に居た誰もがどよめいた。

「テスター？ 本物か？」「嘘だろ？ ベータ版のテスターって日本に4人しか居ないんだろ？」「俺見たことあるぞ、あれは確か歩く核弾頭のメルデイウスとかいう……」

など、様々な声がそこかしらで上がっている。

それもそうだろう。テスターに選ばれた者は皆、特典としてオリジナルの固有スキルを持っているというのは、誰もが知っている話だ――すなわち、テスターとはチート能力者であるというのが、フリーダム内での共通認識になっていたのである。

文句どころか、疑わしいからと言って、そんな別次元の能力者に文句を言っただけを挑む者など、この世界にはいない。

ざわつくばかりで、一向に挑んでくる者がいないことに痺れを切らしたメルデイウスが口を開く。

「どうした？ 俺に戦いを挑む者はいねえーのか!? なら下がれ！」

俺のビッグバンの餌食になりたくなければ俺達に道を開けろ！ この俺がいつちよ、お前達に手本を見せてやらあー!!」

その声を聞いて前に並んでいた者達が道の端に寄ってスツと道を開けた。

マスターは頭を抱えながら「馬鹿者が……」とため息を漏らした。紅蓮もあまりの恥ずかしさに下を向いたまま、真つ赤に染まった顔を上げることができないでいる。

そんな2人を尻目に、メルデイウスは豪快に笑いながら2人を呼んだ。

ここまでのお膳立てをされては、マスターと紅蓮も拒むことなどできるはずもなく、それに従うようにゆつくりと扉の前に出て行く。

その瞬間、誰かが声を大にして叫んだ。

「拳帝だ!! 拳帝が四天王と一緒にいるぞ!!」

誰とも知れないその声が、一瞬で周りの者達を巻き込んで、辺りに大歓声上がる。

「このばかたれが……こうなるのが予想できなかったのか」

マスターはメルデイウスの肩に腕を回して、強引に引き寄せると、彼の耳元で小さな声で言った。

「なに言っただよ。有名だっというのはいい事じゃねえーか!」

メルデイウスは大々の騒ぎ立てたことを悪びれる様子も見せず、マスターの肩に強引に腕を回し自分の方へと引き寄せて、そのまま扉の中へと入っていった。

紅蓮は小さい体をすぼめ、更に小さくしながらその後ろをゆつくりと付いていく。

扉に入るとそこには、巨大な斧を持った赤と青の2体のミノタウロスが仁王立ちしていた。

2体の黄金の瞳がギロツと、ボス部屋の入り口に佇んでいる3人を睨んでいる。その風貌はさながら、門を守る金剛力士像の様だった。

しかし、2体のミノタウロスは一向に仕掛けてくる素振りも見せない。

おそらく、AIによって一定の場所まで接近しなければ、攻撃してこない設定になっているのだろう。

だが、それは言うなれば、ボス部屋に入ってからボスを見て戦うか

戦わないかを判断できるといふこと——部屋の扉は未だに開きつばなしなのだ。しかし、マスター達には撤退は許されない。

それはメルディウスの軽率な行動が原因であることは、もはや言うまでもないだろう。

あれほどの啖呵を切った手前。今更、それをなかつたことにはできない。

いや、なかつたことにすれば、おそらくこのゲーム史上に残る汚点として語り継がれることは必至だ——。

「どうします？　マスター。バカのせいで大変なことになりましたけど……」

「うむ。バカが余計な事をしてしまったからな……だが、これだけの目がある中で退くわけにもいくまい」

「ですが、あのバカは部屋に入ってから一言も発していません」
「そうだな。バカだが、後先考えずにしてしまった事を悔いておるのやも知れん」

2人がひそひそと、しかしメルディウスの耳には聞こえるくらいの声で相談していると、メルディウスが我慢できずに叫んだ。

「あー。バカバカ言うんじゃねえー!!　分かったよ!!　俺だけで相手すりゃいいんだろ!?!」

「ふん。バカを通り越してアホと言ったところか……相手は2体。1人で相手できるわけもあるまい。それに、後ろにこれだけの者が居つては、お前の固有スキルは使えんだらう？　まあ、使ったところでダンジョンでは全滅扱いになるがな……」

マスターはそう吐き捨てるように言うと、メルディウスの前に出て拳を構えると叫んだ。

「紅蓮ー。後方でサポートを頼む！　行くぞバカたれ！　お前は赤いのをやれ!!」

「くっそー。馬鹿馬鹿言いやがってー！　実力の違いを教えてやるぜ！　くそじじい!!」

先に飛び掛かったマスターの後を追うように背中の大剣を鞘から抜くと、遅れてメルディウスも斬り掛かる。

青いミノタウロス目掛けて飛び掛かったマスターの突き出した拳を、ミノタウロスは咄嗟に持っていた斧で受け止める。しかし、その凄まじい勢いを殺しきれず、青いミノタウロスは数歩後ろに後退る。次の瞬間。マスターの側を鎖鎌が横切っていく、それを横目で確認したマスターは不敵な笑みを浮かべる。

真っ直ぐに飛んでいく鎖鎌が下がろうとしていた青いミノタウロスの足に絡まり、その巨体が音を立てて崩れ落ちるようにその場に膝を着いた。

「うむ。相変わらず的確な支援だな……奴の目を潰す!!」

マスターは斧の足場に、そのまま青いミノタウロスの顔の前に出ると、素早くその黄金の瞳目掛けて拳を振り抜いた。

——ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!

けたたましい鳴き声に空気は振動し、まるで地震のように地面を激しく揺らす。

左目にヒットしたマスターの拳に、堪らず青いミノタウロスは目を押さえ、うめき声を上げている。

マスターはそんな敵に情けをかけることなく地面を思い切り蹴り上がると、その顎に拳を振り抜く。

その直後、青いミノタウロスの巨体がゆっくりと傾き、今度は完全に地面に背中を着けて倒れる。

この時を待っていたと言わんばかりに、マスターの連続パンチがノーガードになった腹部に突き刺さる。

「あたたたたたたたたたーッ!!」

マスターの雄叫びとともに猛烈に突き刺さる拳が、確実に敵のHPをそぎ落としていく。

紅蓮の宝物3

マスターが怒涛の攻撃で青いミノタウロスのHPを削っていた頃――。

赤いミノタウロスに斬り掛かったメルディウスの攻撃は、惜しくも遊撃された斧に防がれ、反動で弾き飛ばされた彼は空中で3回転し器用に体制を整えると、なんとか地面に着地した。

鼻息荒く勝ち誇った様に鳴き声を上げる赤いミノタウロスを見遣った直後、視線を自分の持っていた大剣へと落とす。

大剣にはヒビは入っていないものの、くつきりと当たった部分には痕が残っている。

「くつそー。なんて重てえ斬撃だ……なにつ!？」

メルディウスが真上を見上げると、赤いミノタウロスが今まさに、斧を振り下ろさんと振り上げているところだった。

(くつ！・ 足が痺れててかわせねえ……ここは防衛を！)

すでに勝ちを確信した様子で、大きく振り上げた斧を頭上に掲げ。赤いミノタウロスは口元にニヤリと不気味な笑みを浮かべながら、メルディウスを見下ろしている。

メルディウスは背を向けていた体をクルツと回すと、赤いミノタウロスと向かい合うようにして大剣を真上に構えた。

その直後、斧が勢い良く振り下ろされ、その刃がメルディウスの大剣の刃がぶつかり、彼は大剣を斜めに方向けた。激しい火花を散らせながら擦れ合い、すんでのところで勢いを横に受け流した。

「――くそつ、重てえー!!」

歯を食いしばっていたメルディウスの真横に、振り下ろされた斧が地面に突き刺さり、地面を全体を揺らす。

正直、もしもまともに刃で受け止めていたら、大剣の刃が真つ二つに切り落とされていただろう。

そう思えるほどに、赤いミノタウロスの放った一撃は強く重いものだった――。

だが、メルディウスは自分のカンストしたレベルのステータスに掛

かった。ゲームシステムの筋力補正システムを越えるその攻撃に、多くの敵を相手にしてきた彼も驚きを隠せない。

目を丸くさせているメルデイウスの耳に紅蓮の声が飛び込んできた。

「メルデイウス。腕を斬ります！ 貴方は左腕をお願いします！」

「おう。分かった！」

メルデイウスは頷くのを確認して、高速で横を通り過ぎた紅蓮が、地面を蹴って更に加速し、地面に突き刺さった斧を抜こうとしている赤いミノタウロスの右腕目掛けて駆けていく。

「はあああああああああッ!!」

敵に飛び込んでいった彼女は、空中で背負っていた身長ほどもある刀を抜くと、勢いそのままに赤いミノタウロスの右腕を斬り落とす。

突然飛び出してきた紅蓮に右腕を切り落とされ、赤いミノタウロスは苦痛に天に向かって咆哮を上げる。

——ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!

つと、咆哮によって足音をかき消されながらも、走っていたメルデイウスが握り締めたその大きな大剣を振り上げる。

「うおおおおおおおおおッ!!」

けたたましい叫び声を上げている赤いミノタウロスの左腕に、今度はメルデイウスの大剣が炸裂し左腕を斬り裂く。

メルデイウスは赤いミノタウロスの後方に着地すると、即座に大剣を構え直し、再び地面を勢い良く蹴って跳び掛かった。

「——デカ物！ こいつはおまけだあああああッ!!」

その声に反応して振り返った赤いミノタウロスの首筋に、メルデイウスの大剣の刃がめり込む——。

「おらあああああああッ!! 吹き飛びやがれえええええええええッ!!」

その叫び声とともに、更に腕に力を込めると刺さっていた大剣が首に更に深くめり込み、赤いミノタウロスの首を一刀両断した。

だがそれで終わりではなく、ついではばかりに、メルデイウスは胴から離れた頭を思い切り蹴り飛ばす。

宙を回転したその頭はボス部屋の扉に当たり、ドサツと音を立てて地面に落ちた。

メルディウスが赤いミノタウロスを仕留めたのと時を同じくして、マスターの対峙していた青いミノタウロスのHPバーも『0』になり。呆気ないほどにあっさりとはバトルが終了する。

すると、彼等の視界に「Congratulation」と表示される。

その後、同時に敵を撃破したマスターとメルディウスの視界に「鬼神の柄をドロップしました。取得する者を選択してください」と表示された。

メルディウスはそのイメージ画像を表示してがっくりと肩を落とす。

「なんだよこれ。刃が折れてて使いもんにならねえーじゃねえーか！」

刃の折れた短刀にがっくりと肩を落としたメルディウスは「ギルマスか紅蓮にやる」と吐き捨てて、腕を組んでそっぽを向いた。

そんな彼の様子に、紅蓮は呆れ顔で告げる。

「メルディウス？　またイベントの詳細を読んでいませんね。これは2つのアイテムを合わせて、始めて1つの武器になる物です。つまり、運が良ければ2回。そうでなければ数回行かなければだめなんです」

紅蓮は人差し指を立てながら、このイベントの趣旨を説明をする。

すると、メルディウスはあからさまに嫌そうな顔をする。「なら紅蓮にやる」と、取得者の選択画面を出して紅蓮を選択した。

そんな彼の態度に紅蓮は「またいい加減な……」とため息を漏らすと、視界に「あなたが『鬼神の柄』の取得者に選択されました。」と表示された。

その直後、目の前に黒い鞘に桜の花が描かれている美しい刀が現れる。

鞘から刀身を引き抜くと、メルディウスの言うように刀身の半分から先がなくなっていた。

確かに装飾は好みだが、刀身が折れている武器は戦闘で使用することができない。

いや、正確にはできるが、ダメージは他のオブジェクトと同じで、最低値に設定されている為、武器としては使い物にならないと言った方が正しい。用途としては、部屋に飾りとして置いておくくらいだろう……。

紅蓮はそれを受け取ると、困惑した表情でマスターの方を見つめた。そんな彼女に、マスターはにっこりと微笑みかけて徐ろに口を開いた。

「——その刀はお前が持っていてくれ。儂は普段、道着を着ているの でな……刀は似合わん。お前のように着物を着ている美しい娘が 持っていた方が何倍も良いだろう」

「……マスター。う、美しいなんてそんな……」

耳まで真っ赤に染めながら、赤くなった顔を伏せると、紅蓮は脇差 をぎっと握り締める。

頭の上にゴツゴツとしたたくましい手が乗ると、紅蓮は顔を上げた。

「——次はギルドメンバー皆で来よう」

彼女の頭に手を載せたマスターはそう言うのと優しく微笑むと、身を 翻して扉の方に向かって歩き出した。

紅蓮は頷くと「はい」と力強く返事をして、その後ろに続いた。

入り口の扉の前には数多くの者達が集まっていて、扉が開いた瞬間 に目の前に切断された大きな牛の頭が現れた時は、皆困惑した様子 だったが、その後ろにマスター達の姿を見つけると、歓喜の声が上 がった。その様子はさながら、武闘大会の表彰式のスタンディングオ ベーションと言ったところだろうか……。

皆が歓声を上げるのも無理はない。彼等はボス部屋に入って、もの の数分で決着を付けて出てきたのだ——皆、クリアしたことを羨むど ころか、もはや神を崇めているに等しい感覚なのだろう。

「さすがは四天王の1人だ!」「拳帝はモンスターも瞬殺だぜ!」「まだ 入って数分しか経ってないのに……」

皆の声とともに、尊敬の眼差しがボス部屋から出てきた3人に注がれる。

その視線の中、何食わぬ顔で前を歩くマスターを見て紅蓮は密かに尊敬の念を抱く。

（さすがはマスターです。これだけの歓声の表情1つ変えずに……）

紅蓮はマスターの腕を遠慮がちに掴むと口を開いた。

「——また、近いうちに来ましようね。マスター」

「うむ。そうだな……」

だが、その約束が果たされることはなかった——そう。彼のギルド脱退という形で幕を閉じたのだ……。

* * *

昔の出来事を思い出しながら、紅蓮は心の中にずっと仕舞い込んでいた思いを吐き出す。

（あの時に完成できていたら、マスターはギルドを辞めなかったかもしれない。もしもあの時、ギルドのメンバー5人全員をまとめることができていたなら、きっと今も……）

紅蓮はそんなことを考えながら、雲の上に乗ったまま大空を真っ直ぐに、大熊ことキンググリズリーの生息地の【アルテスト平原】に向かった。

アルテスト平原は名御屋の南に位置する山脈群の間にあり、そのこのフィールドボスがキンググリズリーなのである。

名御屋を飛び発つて数時間——。

「確か、ここの辺りがキンググリズリーの縄張りだったはずですが……」

騎乗用の雲を使って、紅蓮はキンググリズリーの出現場所上空を飛んでいた。

様々なモンスターの出現場所などの載ったガイドマップを手に、紅蓮はぐるぐると空から地面を見下ろしていた。すると、木の根元で気持ち良さそうに昼寝をしているキンググリズリーを見つける。

「——居ました！ 眠っているところ可哀想ですが、仕留めさせて頂きます！」

純白の着物の袖からナイフを取り出すと、浮遊する雲の上から飛び掛かった。

普通なら落下の衝撃でHPが尽きてしまいうリスクを犯す行為だが、固有スキル『イモータル』で不死となっている彼女にとって些細な問題でしかない。

しかし、切っ先が突き刺さるすんでのところ、目を覚ましたキンググリズリーの腕で払われた。

「——ッ!？」

直撃は避けたものの。その凄まじい勢いで巻き起こった風が、紅蓮の華奢な体を吹き飛ばす。

だが、そこは四天王と呼ばれる熟練プレイヤー。素早く空中で受け身を取ると、何事もなかったかのように柔らかく地面に着地する。

「——なかなかやりますね。殺気は消していたはずなのですが……」
紅蓮は逆手に持ったナイフを低い姿勢で構えると、キンググリズリーを鋭く睨む。

——グオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!

キンググリズリーは威嚇しているのか、ただ単に昼寝の邪魔をされて怒っているのか、けたたましい雄叫びを上げてのっそりと立ち上がった。

体長は10m以上はあるだろうか、頭の毛は逆立ち右目のところには大きな刀傷があり、体にも無数の刀傷が刻まれている。

胸には黄金の毛で王冠のような模様があり、その風貌はまさにキングという名に相応しい。

身長が140あるかないかの紅蓮と比べると、その大きさは圧倒的だ。

キンググリズリーの雄叫びが止むと、周囲から茶色い塊が砂煙を上げながら紅蓮とキンググリズリー目掛けて向かってくるのが見えた。

「あれは……?？」

紅蓮がその茶色い塊を目を凝らして見ると、そのひとつひとつが熊だ——数は数え切れないが、ぎっと見て100はいるように見える。向かってくるその熊の大群を見て、紅蓮は無表情のまま呟く。

「なるほど。さすがはフィールドボスですね。ですが、私に数だけでは勝てませんよ?」

紅蓮はキンググリズリーから一旦距離を取ろうと試みる。

しかし、キンググリズリーは巨体の割に素早く、後ろに跳んだ紅蓮をピツタリとマークして離れない。

「——距離が取れない。これは困りましたね」

紅蓮は少し不機嫌そうに眉間にしわを寄せると、持っていたナイフをキンググリズリー目掛けて投げた。

だが、キンググリズリーはいとも容易く、そのナイフを大きな爪で払い落とす。どうやら動きだけではなく、目と反射神経もいらしい……。

キンググリズリーと向かい合ったまま、困り果てた様子で考え込む紅蓮。

そうこうしているうちに熊の大群に辺りを囲まれ、紅蓮は身動きの取れない状況に追い込まれてしまった。

そんな絶望的な場面なのだが、紅蓮の口元からは笑みが溢れる。

囲みを狭めてジリジリと寄ってくる熊の大群が、紅蓮の逃げ場をなくし追い込む。

その刹那。紅蓮は自分の着物の帯に手をかけると、何を考えたか帯を緩めて小さく呟く。

「——女の子一人を寄ってたかって……しつこい熊さんは嫌われますよ?」

絶体絶命の状況にも関わらず、紅蓮のその表情からは余裕すら感じられる。

一瞬膠着状態になるかと思われたが、一瞬で彼女の目の前に移動したキンググリズリーの鋭い爪が、帯を緩めはだけそうになる着物のまま、無防備に立っている紅蓮目掛けて飛んできた。

紅蓮は動じることなく、その攻撃を体制を低くして軽々とかわす。

風切音とともに、紅蓮の体より大きな腕が頭上を通過する。

しかも、その拍子に緩めていた帯が地面に落ちてしまい。着物が肌蹴る寸前で紅蓮が手でそれを防ぐ。

「……スケベアーですね」

普段なら絶対に口にしない様なオヤジギャグを口にした紅蓮が、クスツと笑みを浮かべている。

その様子から、彼女のテンションが戦闘によつて、異常なほどに上がっていることが窺い知れる。

すると、キンググリズリーが咆哮を上げ、それを合図に周りの熊が一斉に攻撃を仕掛けてきた。

「スイフト……」

紅蓮はその熊達を踏み台にして、徐々にキンググリズリーから距離を取ると、勢い良く上空に跳び上がった。

「——エツチな熊さん達には、特別に必殺技をお見せしましょう。これが私の編み出した最強の技……サウザンドナイフです！」

紅蓮はまるで鶴が翼を広げるように身に着けていた白い着物を広げると、無数のナイフがキンググリズリー達を襲う。

高速で打ち出されるナイフが、風を切り裂き熊達へと次々に突き刺さっていく。

断末魔の鳴き声を上げ、次々とそのナイフの嵐の中で倒れてゆく熊の群れ——それは大将のキンググリズリーも例外ではなく……。

——グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……ドスンッ!!

遂に最後まで抗って見せたキンググリズリーの巨体が、断末魔の叫びを上げ地面に崩れ落ちた。

紅蓮は肌蹴そうになる着物の端を両腕で押さえながら地面に着地すると、着物の袖に腕を通し直し。

屍と化した熊達の間をてくてくと歩いて帯の前まで行くと、地面に落ちていた帯を拾い上げた。

「……速いて見えなかったですか？ この技はナイフという軽い武器と、普段から軽い着物を装備から外す事で、重量は最大限まで軽くなります……」

紅蓮は拾った帯を馴れた手付きで締め直して乱れた着物を整え、と、更に言葉が続ける。

「それによってシステムの補正効果と、スイフトの攻撃速度を上げる効果により。腕を高速で動かせるようになり、千本にもなるナイフを超高速で撃ち出す事が可能になるのです」

着物の帯を締め直した紅蓮は身を翻し、無数のナイフが刺さったまま倒れているキンググリズリーに背を向けた。

その直後、キンググリズリーが息を吹き返し、背を向けたままの紅蓮に襲い掛かる。

——グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!
「ですが……」

紅蓮は素早くナイフを取り出すと、逆手で持ったそのナイフでキンググリズリーの首を斬り飛ばす。

「——この着物の裏地に縫い込んだトレジャーアイテム『インフィニティ・マント』の収納能力あってこそです………あと、私がダジャレを口にしたのは内緒ですよ?」

そう言い終わるよりも先にキンググリズリーの巨体が地面に倒れ、紅蓮の足元に斬り落とされた首が転がる。

紅蓮は緊張の糸が切れたようにほっと息を吐くと、その頭から牙を抜き取った。すると、キンググリズリーと熊達の体がキラキラと光となって、上空に上がっていく。

上空に待機させていた雲を呼び戻すと、紅蓮は迷うことなくその上に飛び乗った。

街に戻る道中。上機嫌の紅蓮は思い出したように手を叩いた。

「ああ、そうです。この際ですし、バロンを探しに行きましょう。きっと何か情報が得られるはずですよ。今日はいいい日ですから」

紅蓮は嬉しそうに懐にしまっていた短刀を見て、微かに笑みを浮かべた。

紅蓮の宝物4

紅蓮と別行動になってしまった小虎と少女は、あてもなく人が多く行き交う繁華街の中を歩き回っていた――。

「お姉さん。ちよつと休憩しよう。僕もう足が棒になりそうだし」
だらしなくふらふらと体を揺らしながら少女の後を歩いていた小虎が、そう弱音を吐いて立ち止まる。

重い足取りでよろけながら歩いている小虎に、心配した少女が優しく声を掛けた。

「そうね。紅蓮ちゃんもどこかに行っちゃったし……どこかのお店で休憩しよっか！」

「うん！」

小虎は『休憩』という言葉聞いた途端に元気を取り戻し、少女を追い越して駆け出した。

少女をその場に残し、あつという間に先に行った小虎が振り返り。

「おーい。お姉さん早く休憩しに行こうよー！」

「もう。足が棒になるんじゃないの？」

元気に手を振っている小虎を見て、少し呆れた様な笑みを浮かべると、小虎の後を追いかける。

2人は近くの大きなビルの様な建物内のファミレスに入る。

どうして、オンラインゲームに現実世界のファミレスが存在しているのかというと、それはこのフリーダムがRMTを推奨しているゲームだからに他ならない。

一般的なモニター越しにするオンラインゲームでは、RMTは推奨しているものは少ない。

それはそうだろう。IDをいくらでも作れるMMO内でRMTを推奨すれば、アカウントハックや複数アカウントでのBOT――つまりプログラムによって無人のキャラクターを操作し、昼夜問わずモニターを狩り続け、利益を上げる違法プレイヤーが数多く発生するだろう。

しかもそれだけではなく、VR意外のゲームでレストランを経営し

てもあまり意味がない。

もしRMTを推奨しているゲームがあつたとしても、モニター越しでは実際に食事をしている感覚には程遠だろう。

しかし、その点に置いてフリーダムはリアルに近い感覚でゲームを楽しめる。

そこでは特殊な技術で五感を再現し、現実世界と同じように空腹感があり。食事をする、それと比例して満腹感が得られるようになっていく。

そしてなにより。RMTによって、ゲーム内通貨が現実の通貨へと換金可能なのだ。

それは、企業側として一つの産業にできるということでもあり。そして、ここには客となるプレイヤーに事欠くこともなく。実際に現実世界で存在している店の宣伝にもなる。

更に経営する上での大きな負担となりうる人件費は、既存のNPCによって賄うことができる上に本来掛かるはずの店舗を建設、更には光熱費、店舗維持などに掛かるはずの膨大な賃貸費用も掛からず、売上から少量の店舗区画使用料を差し引いても損はしない。

そして何よりその店舗の売上の規模によって、選択できる建物の規模も変化するということも嬉しいところだろう。

どうして売上によってという制限が付いているかというところ、いくらゲームとはいえ、使える土地には限りがあるからだ。

そのせいで店舗を大きくする際は、横ではなく縦に大きくなってしまふのは致し方ないと言えるだろう――。

今、2人が入った建物も大きなビルの様な造りをした建物で、しかもその1階から全てがそのレストランの持ち物だ。

これだけの店舗を構えるのに現実では多額の資金が必要だが、この世界では決まっているのは土地の使用面積だけなので、上に伸ばすことには申請さえすれば許可が下りる。

通貨を交換するというデメリットを除けば、企業側としては外部通貨を利用して商売をしているだけなので、ゲームの中というよりは海外に店を構える感覚に近いのだろう。

2人は窓際の席に座ると、意気揚々とメニュー表を広げた。

「私が払うから、何でも好きな物を頼んでいいからね?」

「——払うって……お姉さんお金あるの?」

「お姉さんに任せておきなさい!」

小虎もそれに倣ってメニュー表を広げ心配そうに尋ねると、少女は自慢気に胸を叩く。

それを不安そうに見つめる小虎を尻目に、少女は店の制服を着たNPCを呼んで料理を注文し始めた。

決められた制服なのか、店長の趣味なのかは分からないがNPCはピンクを貴重とした服にフリルのあしらわれた可愛らしい白いエプロン姿、頭にはメイドの様なカチューシャを付けている。

かしこまりながらも、NPCが「ご注文をどうぞ」とだけ発言した。「えつと……ジューシーハンバーグセットと苺たっぷりミルクフィードとマロンクリームケーキとメロンクリームソーダと——」

どんどん注文していく少女を、小虎は呆然と見つめている。

フリーダムの中では空腹時には視野の歪みと動きが鈍くなる。それは少しでもリアル感を追求しているゲームシステム上仕方がないのだが、その反面満腹の上限がなくほぼ無限に食べられる。

お金さえあれば食べきれないというリスクを心配することなく、誰も夢見た『ここからここまで全部下さい』が言えるのである。

長々と注文していた少女がやっと小虎の方を向く。

小虎は冷や汗を掻きながらも、もう一度少女に尋ねた。

「お姉さん。凄い勢いで注文してたけど、お金は足りるの? 僕、今そんなに手持ちがないんだけど……」

「ああ、大丈夫! お金はお姉さんに任せなさい。それよりほら、小虎くんも何か頼みなよ!」

心配そうにコマンドで残金を確認している小虎に、彼の心情など知る由もない少女はにっこりと微笑む。

小虎は一抹の不安が残りながらも、その笑顔を信じることにした。

「それじゃー。グリルチキンのセットで」

NPCはそれを「ご注文は以上ですか?」と聞き返すと、足早に厨

房の方へと向かって戻っていった。

それから数分後。2人のテーブルの上には注文した品が、所狭しとテーブル一杯に並べられた。

並べられた料理を見て、小虎は思わず顔を引き攣らせている。

改めて見ると注文した料理の数に驚いたのもあるが、それ以上にこれだけの料理を注文して代金を支払えるのかということだろう。

だが、少女はそんなことなど気にする素振りも見せず両手を合わせて「いただきます！」と嬉しそうに料理を食べ始めた。それを見て小虎も遅れて、注文したグリルチキンをナイフで切りながら、ふと少女の方を向いた。

「お姉さん。ゲーム始めてそんなに経ってないんだよね？」

「もぐもぐ……ええ、そうだよ。この事件が発生したのはプレイして3日目かな？　ほんと迷惑な話よね〜」

不機嫌そうにそう呟き、ナイフで切ったハンバーグを口に運ぶ。

彼女の話聞いて、小虎は何かに気付いたのか、更に難しい顔をする。

「それだと、そんなにお金ないと思うんだけど……」

小虎の言う通り、ゲームを始めて日の浅い少女が資金を調達できる術があるとは思えない。

現実的に見れば、死んだら終わりのデスゲームと化したこの世界で、お金を稼ぐよりレベルを少しでも上げる方が断然優先度が高く、雑魚モンスターを狩って余裕が出たらもっと強いモンスターへとステップアップするのが今のセオリーだ。

しかし、雑魚モンスターの落とすお金は微々たる物。フィールドボスクラスを倒せばそれなりにお金が入るが、それ以外の方法では地道に稼ぐ以外に手はない。

今の少女にはとてもじゃないが、この数の料理の代金を支払う能力はないと思うのだが……。

っと少女がため息を吐き出すと、不安げな表情をしている小虎に向かって徐に告げた。

「――まだ気にしてたんだ……実はね、お兄ちゃんがこっちにお金を

送ってきたの。だからお金の心配はいらないよ」

「お金を送ってもらったっていくらくらい？」

「うくん。100万くらい？」

少女は涼しい顔で今度はスプーンに持ち替え、マロンクリームケーキを乗せるとぱくつと口に頬張る。

「100万ユーロも!?! それってどれだけ稼ぐの難しいか分かってる!?!」

「——ふえ？」

小虎が驚きのあまり叫ぶと、少女はスプーンを咥えなが小首を傾げた。

まあ、彼女の様子からして、自分がどれだけのことを言っているのか全く理解できていないようだが……。

少女はスプーンを口から放すと、そのスプーンを皿の上に置いて、ゆっくりと口を開く。

「うくん。でも、また追加で送るって、お金を受け取る時にメッセージ付いてたし。それに……」

少女はクリームソーダに手を伸ばすと、ストローですーっと吸い上げ、一息ついた。

「でも、お金って貯めてても仕方ないでしょ？ 使う時には使わないと……だから、今はこうして楽しい時間を過ごしてるんだし。それでいいんじゃないかな？ 小虎くん」

そう言って微笑みかける少女に。

「まあ、奢ってるし。お姉さんがいいなら……」

つと呟くと、小虎は再び料理を食べ始めた。

その何か吹っ切れた様子の小虎に、少女はもう一度微笑むと、今度はハンバーグを頬張り、頬に手を当て幸せそうに呟く。

「私。昔からこうやってカロリーとか気にしないで、ご飯を限界まで食べてみたかったの〜」

そう微笑みながら言って、上機嫌で次々に料理を口に運ぶ少女に圧倒されながらも、小虎は言い難そうに口を開いた。

「——お姉さんは知らないかもしれないけど……この世界では満腹で

も普通に食べられるんだけど、それを癖つけちゃうとさ……現実に戻った時に太るらしいよ？」

それを聞いた直後、少女は顔を青ざめると、料理を口に運ぶ手が止まった。

「——嘘……ゲームなの？」

「ゲームでも、感覚は実際の体と共有してるからじゃないかな？」

「そっか……私は何て事を……」

少女は意気消沈しながら、その場に俯いてしまう。

まるで世界が終わりが来るような虚ろな瞳でテーブルの上の料理を見下ろしながら、急に静まり返った少女。

その落ち込みようを見て、慌てて小虎が声を掛けた。

「だ、大丈夫だって！　これから気をつければいいんだし！」

その言葉を聞いた直後、少女はむくつと顔を上げ、猛烈な勢いで食べ始める。

その豹変ぶりに小虎が驚き目を丸くさせた。

「ど、どうしたの!？」

「もつたないし。これ食べてから後悔するの！」

「……や、やけ食い。女性って怖い」

泣きながら食べ進めていく少女を見て、小虎は聞こえないくらいの声で呟いた。しかし、頼んだ物が多すぎて、結局店を出る時にはもう外はすっかり暗くなっていった。

だが、無限に食べられると言っても甘い物ばかりを食べれば、脳に記憶されている感覚が蘇るのは必然と言えた——。

「うう。小虎くん。気持ち悪いよ」

「あんなに食べればしかたないよ。ほら、ホテルに戻るよ」

顔を真っ青にしながらかたまりしている少女の手を引いて、ホテルへと向かって歩き始めた。

紅蓮の宝物5

キンググリズリーを討伐を終え、紅蓮は空の上から名御屋の近くの森を飛びながら地上を見渡していたのだが、一向に黒い鎧を着た兵士を見つけたことはできなかった……。

ふわふわと綿あめの様な雲の上から身を乗り出して、紅蓮は地上を隈なく見つめていた。

「——こんなに飛んでも、人っ子一人居ませんね。もう暗くなつてきてますし、帰りましようか」

沈みそうになる夕日を見つめ、赤みがかかった空にふわふわと浮かぶ雲の上で紅蓮はそう呟くと街に戻る為に方向を変えた。

街に帰る道中も、懐にしまった短刀を見ると思わず顔が綻んでしまふ。

(これを明日、朝早く頼みに行きましょう)

心で呟いた紅蓮は何かの気配にスツと後ろを振り返ろうとしたその時、紅蓮の頬を一本の矢が掠めた。

即座に雲をジグザグに動かして、的を絞らせない様に回避行動に入る。

「——攻撃ッ!?!」

紅蓮が振り返ると同時に、今度は森の中から無数の矢が飛んできた。

動き回る雲の上から、地面に向かって目を凝らす。

すると、森の木々の間から、今までは影すら見せていなかったはずの黒い鎧の兵が、一斉に弓を放っている姿が目に見えび込んできた。数にして100程度と言ったところだろう。

無数に飛んでくる矢をかわしつつ、紅蓮は着物の帯に手をかけ。

「私にその程度の数は通用しませんよ……サウザンド………ッ!?!」

紅蓮が必殺技を出そうとした直後、体が動かないことに気が付く——

即座に自分のHPバーを確認すると、人型のマークが痺れたような表示が出ている。

「——麻痺!! まさかあの時!!」

紅蓮は頬を掠めた矢のことを思い出すが、時すでに遅し。微かに動く身体を必死に振らせた紅蓮は、無数の矢の直撃は避けたものの、その中の数本が体を掠め、バランスを崩した紅蓮は地上へと落下した。

木がクツションとなり落下の勢いを緩和して、なんとか地面への着地を成功させたものの、そのまま力無く地面に伏せる。

地面に伏しながら紅蓮は思った『こんなミスを犯すなんて、武器が完成すると浮かれていた油断が招いた事だ……』と、そしてその犯人に紅蓮は目星が付いていた。

その直後、兵士の間からゆっくりと前に出てきて、倒れている紅蓮の目の前に黒い鎧を身に纏った男が姿を現した。

「——やはり。バロン……どうして……こんな事を？」

地面に伏せながら、紅蓮は顔をその男を見上げた。

「懐かしいなあー。元気にしてたか？ クソチビ」

「……くっ！ 私は……クソでも……チビでも……ありません！」

そう言い返す紅蓮の背中を踏みつけると、彼女を見下ろしているバロンが口を開く。

「お前が居るってことは……あのバカも一緒なんだろう？」

「——あのバカ……？ それは……いったい誰の事ですか？」

抵抗できない状態だが、紅蓮は全く動じることなく平静を装っていた。

紅蓮がそう言葉を返すと、バロンは不機嫌そうに眉間にしわを寄せ、更に強く紅蓮の背中を踏みつける。

「——俺様をなめるなよ？ 女のくせに……」

バロンのその殺意を剥き出しにした視線を受けながらも、紅蓮は気丈に言葉を返した。

「あなたが……前々から私を毛嫌いしているのは、分かっています……お互いのために……一度ゆっくり話す機会を、作りたいと思ってました……」

「フンツ……お前は今の状況が分かってないみたいだな！」

「ううう……」

バロンは抑えきれない怒りを爆発させて、紅蓮の背中に乗せた足に更に力を込めた。

体が痺れている紅蓮は為す術もなく地面に体を押し付けられ、苦しそうに呻き声を上げる。

そんな彼女にバロンが更に強い口調で言った。

「——いいか？　これが現実なんだよ。お前は俺様の足の下にいるのが相応しいわけだ！　次はメルデイウスも、今のお前と同じ様に地に這い蹲らせてやる！」

「……は、話を……話を聞いて……下さい」

不敵な笑みを浮かべながらそう言い放つバロンに、紅蓮は必死に訴えたが、彼は冷酷な瞳で紅蓮を見下ろし。

「虫ケラの分際で、この俺様に話を聞いて下さいだど？　紅蓮。お前は何か勘違いしてるな……お前はあいつを誘き出す餌なんだよ！」

「——くっ！」

(やっぱり話し合いで解決できるほど、甘くないですか……なら)

紅蓮は目を瞑り呼吸を整えると、決意に満ちた眼差しで彼に告げる。

「分かりました……あなたの言う通りにしましょう……私をあなたのアジトに連れて行きなさい！」

「ああ、言われなくてもそうするさ！　お前ら出てこい！」

バロンはほくそ笑むと大声で辺りに向かって叫んだ。すると、辺りの茂みや木の陰から赤い瞳が光って、ぞろぞろと黒い重鎧を身にまとった兵士達が姿を現す。

弓を持った兵士達だけではなく、バロンは周辺に兵士達を配置していたのだろう。しかも、その全てが重装備で、明らかにこちらが彼の主力部隊だ。

その数は目に見えるだけで、数百はくだらない——。

(さすがに彼の固有スキルは強力ですね。ナイトメア——まさに悪夢です……)

まだぞろぞろと出て来る黒い兵隊達を紅蓮は見つめながら、底知れ

ぬ恐怖心を覚えていた。

* * *

その頃、皆で泊まっているホテルでは、紅蓮が帰っていないことに皆動揺を隠し切れない様子で話し合いを始めていた。

ソファアーに腰を下ろしながら、マスターは険しい表情で呟く。

「……あの紅蓮の事だ、すぐに戻ってくる」

「でもよおー。もう8時だぜ？　いくらなんでも遅すぎるだろう！

それにメッセージで連絡もないのが気になる……あいつなら、遅くなるなら遅くなると連絡があってもいいはずだ」

メルデイウスは落ち着かない様子でソファアーの周りをうろうろしながらそう言った。

だが、彼よりも落ち着きなく体を震わせていた白雪が飛び上がる勢いで立ち上がる。

「もう、じつとしてなどいられませんー！」

紅蓮のことが心配で居ても立ってもいられずに白雪が声を上げる。

彼女はマスターの目の前のテーブルを叩くと。

「どう考えてもおかしいです！　今まで紅蓮様がこのような行動に出たことなどありません！　いつも皆の事を一番に考えて……こんな事は今までに一度もなかった！　きっと事件に巻き込まれたに違いありません!!」

声を荒らげながらそう告げる白雪に、少女と小虎は表情を曇らせる。

それもそのはずだ。本来なら今日は外出せずに、ホテルの中でゆっくり過ごす予定だった。

だが、少女が焚き付け。小虎もメルデイウスに紅蓮達の護衛を任されているながら、何もできなかったのだから無理もないだろう。

なおもソファアーで腕を組みながら瞼を閉じてだんまりを決め込むマスターに、痺れを切らした白雪が身を翻す。

「私は行きます！　私の固有スキルなら、誰にも気付かれる事はありません！」

「ません！」

「ちよつと待て、白雪！ お前だけ行かせるわけにはいかねえ。紅蓮が帰ってきた時に言い訳できねえ。しな。俺も行く！ いいな。じじい」

マスターは少し考えたが、すぐに頭を縦に振った。

「……うむ。仕方あるまい」

「よし！ なら行くぞ白雪！」

「了解！」

メルデイウスと白雪が部屋を飛び出していく。

2人が出ていった部屋の中でマスターは1人、しばらくの間。ソファーに腰掛け静かに瞳を閉じて物思いにふけていると、ゆっくりと立ち上がり部屋を出た。

メルデイウス達が街に出ると、1人の男が血相を変えて叫んでいた。

その話の概要はこうだ――。

狩りをしていた時『森で白い着物を着た銀髪の女の子が黒い鎧の男に襲われていた』とのことだったが。しかし、誰がどう考えても罠だと思えない。

このタイミングで男が血相を変えて出てくるなんて、どう考えても話が出来過ぎている。だが、その話を聞いた途端。顔色を変えたメルデイウスが疑う様子もなく全速力で駆け出していく。

それは、白雪が止める隙もないほどだった。

「――全くギルマスは気が早い。罠だと分からないのでしょうか……」

ため息混じりに呟く白雪が、先に行ったギルマスを追い掛けて走り出す。

* * *

敵の手に落ちた紅蓮は、周りを木々に囲まれた両手足を鉄の様な拘

東具で木に固定されていた。その左右には、剣を持った黒い重鎧の兵士達が立っている。

だが、紅蓮は無傷ではなく。ゲームシステム上の問題で血は出ていないものの、体のあちこちに痛々しい傷跡が刻まれていた。

血は出ていないが、確かに体のあちこちに剣で傷付けられたと思われる切り傷が刻まれ、その全てが黒く影の様になって見える。

「はあ……はあ……どんなに私を痛めつけても……あなたの期待することには……なりませんよ？」

「フンッ！ お前は本当に強情な女だよ。紅蓮……」

額に大量の汗を滲ませながら紅蓮がニヤリと不敵な笑みを浮かべると、バロンは兵士の持っていた剣を奪い。その剣先を躊躇することなく紅蓮の右腕に突き立てた。

「うっ！ うううううっ!!」

苦悩の表情を浮かべるものの、紅蓮は声を必死に抑えている。

紅蓮の反応を楽しむように傷口をえぐると、紅蓮の耳元でそつと小さやく。

「紅蓮……声を出した方が楽になるぞ？」

「はあ……はあ……はあ……そう。ですね……忠告ありがとうございます。ですが……よけいなお世話ですよバロン」

額に汗を噴き出しながら言葉を返す紅蓮に、バロンは怒りを露わにさせたバロンは今度は逆側の兵士からも剣を奪い取り、紅蓮の左の太股に突き刺す。

腕と足に剣で深々と刺され、紅蓮は苦痛で顔を歪ませながらも小さく呟く。

「……こんな事をして、無意味……です。あなたも知っているでしょう？ 私は、殺せないのですから……それより……今後のこと

……を、話……合いましょう」

「また、その話か——何度も言ってるだろ？ 俺様1人でどうとでもできるってよー！」

「くううううううっ!!」

そう吐き捨てて、不気味な笑みを浮かべながら楽しそうに剣で傷口

を抉るバロン。

紅蓮は休むことなく襲ってくる激痛に、更に顔を歪ませている。その彼女の反応を楽しんでいるようにバロンは不気味に笑う。

「痛いだろう？ 痛いよなあ。知ってたか？ このゲームでは同時に別の箇所にも損傷を受けると、その箇所を線で繋いだ全ての箇所にダメージを受けたかの様に錯覚するんだぜ？」

苦痛に歪む紅蓮の耳には、彼の話の殆どが届いていないだろう。

必死に唇を噛み締めて痛みに耐える紅蓮の姿が気に食わないのか、バロンは剣を握る手に更に力を込めながら言葉を続けた。

「俺は！ お前の不死なんて馬鹿げた能力が、四天王の中で一番許せないんだ！ それは、死こそが全ての終わりだからだ！ お前の能力は痛みまでは抑えられない未熟なものだ。今のこの状況を見てみろ！ お前は死ぬ事も、痛みから逃れる事すらもできないでいる。死を怖れるあまり、お前はこの苦痛から決して逃れる事はできないんだよ！！」

「……で、も……その、おかげで……あなたと、はなし……が、できません……」

冷たく見下ろしたバロンは「そうか、なら今度はその口をきけないようにしてやる」と低い声で告げると、太股に刺さっていた剣を引き抜き、紅蓮の顔の前に構えた——その時。どこからともなく鳴り響く爆発音が2人の耳に飛び込んでくる。

「そうか、やっと来やがったか！ あのバカが……待ちくたびれたぞ！」

爆発による大きな音を聞いて、バロンは嬉しそうに笑みを浮かべ、持っていた剣を横に立っていた黒い兵士に渡す。

嫌っていてもバロンにとって彼は宿敵であり、目の上のたんこぶでもあり、またはライバルの様な存在だ。やはり、近くにそんな存在がくれば嬉しくなるのだろう。四天王はそれぞれ、得意不得意のある固有スキルを所有している。

もはや言うまでもないが、バロンの弱点はメルディウス。メルディウスの弱点は紅蓮。紅蓮の弱点はデュラン。デュランの弱点はバロ

ン。と相対関係がしっかりしているのだ――。

(あのバカ……私が死なない事は分かっているはずなのに……)

紅蓮は大粒の汗を地面に滴り落としながら、俯きながら困惑した様な表情を浮かべる。

聞こえる爆発音は次第に大きくなり、赤い光が真つ暗な夜の森を点々と照らし出す。その直後、爆風と共に赤い鎧を身に纏った大斧を持った男が、まるで鬼の様な形相で現れた。

紅蓮の宝物6

「……バロン」

戦闘態勢でベルセルクを構え、バロンに睨みを効かせているメルデイウスに、バロンは「待っていたぞ!」と叫ぶと、紅蓮の右腕に刺さっていた左手で剣を抜き、今度はその剣を紅蓮の首元に突き付けた。

「久しぶりだな。メルデイウス! 随分といい得物を手に入れたじゃないか!」

「……バロン!! どんな理由があろうと。俺のギルドメンバーに——紅蓮に手を出した事を後悔させてやる! その剣を今すぐに紅蓮から放しやがれツ!!」

バロンはその話を聞いて高笑いをすると、メルデイウスはまるで餓えた狂犬の様な鋭い瞳で睨みつけながら低い声で告げた。

殺気を放つメルデイウスを前にしてもなお、バロンは涼しい顔で彼を小馬鹿にしたような笑みを浮かべている。

「お前は今の状況が分かってないな? お前の愛する者の首。今ここで落とされたいのか? 武器を捨てるのはお前の方だ。バカが!!」

「……くツ! しかたねーか……分かつ——」

「——ダメです! 私は大丈夫です! それよりも……」

突如として何かを告げようとした紅蓮の口の動きが止まる。それもそのはず。何故なら、彼女の首筋にバロンの持っていた剣の刃先が食い込んでいたのだから——。

冷や汗が額から落ちた紅蓮に、低く殺気を帯びたバロンの声が響く。

「——黙れ……今は俺が大事な話をしているんだよ。それ以上喋ったら、お前の頭が体とお別れする事になるぞ……」

「……………ううう」

その凄まじい殺気の帯びた声色と、首に食い込み今にも自分の首を飛ばそうとしている刃。そして何より、まるで虫でも見るかの様な瞳に紅蓮も恐怖を感じて口をつぐむしかなかった。

さすがの紅蓮も今までに首と胴体を切り裂かれたことはない。ただ一つ分かっているのは、その激痛は想像を絶するものだということだけだ。しかし、自分の首が落とされること以上に、恐怖を感じていたのは……。

バロンという男は、自分以外をゴミ程度にしか思っていない。協調性はなく、彼にあるのは他者に絶対に負けたくないというプライドだけだ。

だからこそ、彼は勝てないメルデイウスとマスターを敵視していた。そんな彼等とギルドを組んでいたのも敵に回すよりも手元に置いていた方が頭に来ないからくらいにしか思っていなかっただろう。

「——バロン!! この人間のクズがああああアツ!!」

メルデイウスは発狂し。突如として咆哮を上げると、ギリギリと歯を鳴らしている。

紅蓮が恐れているのは自分の身に降りかかることよりも。今、この場で自分を失ったメルデイウスが暴れ回り、固有スキルを発動させ自爆することだった。

まだ、紅蓮の固有スキル『イモータル』が発動するかも分からない。もし彼女の固有スキルが発動せずにこの辺り全土が吹っ飛ぶことになれば、この場で紅蓮とメルデイウスが消えることになる。

そんなことになれば、この離脱できない孤立した世界にギルドマスターと副ギルドマスターを両方一遍に失った「THE STRONG」のメンバー達が分離してしまう恐れがあった。

それどころか、この無益な戦闘で、四天王の4人中3人を失うばかりか、マスターが頼りにして訪ねてきてくれたことが無になってしま——う。

(……私はいったいどうしたら……マスター)

紅蓮は目の前にいがみ合っているバロンとメルデイウスを見つめながら、心の中でマスターの名前を呼んだ。

* *

*

森の中でそんなことが繰り返されているなどは露知らず——。ホテルを出た後、街で聞いた話を元に森の中へとやってきたのはいが、入口付近で黒い重鎧の兵士に行く手を遮られ、マスターは小虎と少女を背に次々と向かってくる兵士達を殴り飛ばしていた。

だが、さすがのマスターでも2人を守りならでは、思うように戦えないのか、苦戦を強いられていた。

「くッ！　これではキリがないな……」

「お姉さんは僕の後ろに！　前に出たらダメだよ！」

渋い顔をして戦うマスターを見て、小虎はコマンドを操作して取り出した燃えるような深紅の大剣を装備すると、その剣を前に構える。

小虎は目の前の鎧の兵士達を睨んだまま、ボソツと呟く。

「兄貴にはあまり見せびらかすなって言われてるけど……この数じや仕方ないか……」

もったいぶる様な言い回しでそう呟くと、小虎は剣を振り上げ叫ぶ。

「闘神化！　阿修羅!!」

その声の直後。小虎の体を猛烈な炎が包み込み、体を包む炎が消えると、そこには炎で模られた顔が2つに腕が4本付いていた。

全身に真紅の炎をまとった小虎のその姿は、まさに阿修羅そのものだ——。

「ほう。良いスキルだ！　その力、貸してもらおうぞ！　————なにッ!？」

スキルを見たマスターが『明鏡止水』によって、小虎のスキルをコピーしようとしたのだが、彼の固有スキルをコピーすることができなかった。

何故なら、闘神化という固有スキルは、一定期間だけに限定数だけ配布されていたもので、使用中は他のスキルの干渉を受けないという追加能力があったからだ。

その為、マスターの『明鏡止水』の様な能力をコピーするものや、異常状態にする固有スキルの類などもこの状態の小虎は一切受け付け

ない。

また、小虎の阿修羅は左右に炎で形造られた顔が後方の視界をカバーし、その上6本となった腕には前後左右の攻撃全てに対応できる。

まさに『神』の名に恥じないスキルなのだ。

「このスキルを使っているから、僕は兄貴の右腕的存在なんだ……」

そう呟き、小虎の右手に持っていた剣のコピーを炎で作り出し、左手に装備すると今度は炎の剣が炎でできた腕の全てに現れる。

その直後、右手に持っていた剣からも炎が噴き上がり、合計6本の腕全てに剣を装備した小虎が鋭い視線を黒い兵士達に浴びせる。

マスターはその闘志を感じ取ると、単身で敵の軍団に向かって走り出す。

「その娘を頼むぞ！ この数だ、後退してホテルへ引き返せ！ 僕はメルディウスを追う。こんな状況だ——奴は頭に血が上ると何をしでかすか分らん！」

そう叫んだマスターが敵の中へと消えていくと、その直後から次々と敵の兵士達が宙を舞う。

全てが重鎧を着た黒い兵士達を数人単位で吹き飛ばすマスターの姿に、小虎と少女は啞然としながら、その光景を見つめていた。

「兄貴と同じか……それ以上に凄い……」

「あのおじいさん何者なんだろう……」

呆然とその場に立ち尽くしている彼等に、兵士達がじわじわ詰め寄ってくる。

我に返った小虎が、少女を守るように彼女と漆黒の兵士達の間立ちただかった。

マスターが数を減らしたとはいえ、敵の兵士の数は未だに未知数——しかもプレイヤーというよりは、NPCやモンスターに近い存在の為、体力に限りもなさそうだ……。

「お姉さんを守りながらこの数は厳しい……やっぱり撤退が妥当かな？」

小さく呟き、小虎は後ろの少女に目をやっていると、突然目の前の

兵士2体が剣を振り上げ襲い掛かってきた。

おそらく。こちらの動きを警戒しているのか、その2体以外は動く素振りを見せない。

小虎はその場を動くことなく、背中の腕を振り炎の剣でその胴体を2つに分ける。バサツ！と小さく鎧を鳴らし、地面に倒れた兵士はきらきらと光になって消えた。

それを見た敵兵士が、今度はガシヤガシヤと音を立てながら一斉に攻撃を仕掛けてくる。

臆することなく小虎は敵の兵士達を見据えると、六本の手に持った剣を構え鋭い眼光を飛ばす。

「うおおおおおッ!!」

雄叫びを上げながら、自分目掛けて向かってくる敵を次々と斬り伏せていく。

実剣で斬られた敵は火花を散らし倒れ、炎で形造られた剣で斬られた者は炎上し、消滅するまで暗闇の中の松明の様に燃えて辺りをぼんやりと照らす。

だが、奮戦むなしく。兵士の数は減るところか、逆に増えているようにも感じるほどだった。

休む暇なく次々と襲い掛かってくるものの。一向に数の減らない兵士達に、小虎も苛立っているのか、その太刀筋は次第に乱れ始めた。

「……………くっそー。いい加減にしろー!!」

憤りのまま雄叫びを上げると、敵に斬り込んでいく。

味方が斬り伏せられるのにも臆することなく、次々に獲物を振りかざし向かって来る敵を斬り伏せる。

小虎は戦闘に集中し過ぎて、完全に少女のことを忘れている。

突然走り出した小虎に少女も不意を突かれたのか、慌てふためく。

「あつー！どこ行くの!?! 小虎くん!」

つと足を前に突き出そうとしたが、まるで金縛りにでもあっているかの様に足が動かない。

(……………あ、足が震えて動けない!?)

小虎を追い掛けようと脳がどんなに命令を下しても、走り出すこと

ができなかった。

だが、それも無理はないかもしれない。この名御屋の街にくる道中も度々モンスターなどと遭遇してきたが、その全てをマスターとメルデウスが秒殺していた。

強すぎる2人に守られながらの戦闘の弊害が、ここに来て露呈したのだ——今まで少女は戦闘経験はほぼ皆無と言っている。言うなれば、試合を楽しむ観客であり傍観者でしかなかった。

そんな彼女にとって実質、実戦と言えるのは今日が始めて。しかも武器はあるものの、それを振るうのも今日が始めてなのだ。

こんなに長引く戦いを、少女は経験したことなど勿論ない。手のひらから伝わる剣の感触も昨日までとは全く違く感じる。

というか、少女が腰の剣の柄に手を掛ける前には撃破されてるという状況が続いていた為、剣を持ったのは始まりの街で購入した時だけだ。まさかそれを握る時が来るとは、夢にも思ってたなかった。

(ど、どうしよ。こんな事なら、最初の街の近くで戦う練習しておくんだったよお……)

少女は後悔しながらも、恐怖で震える右手で握り締めた柄を必死に左手でも押さえ込むと、体の前で構えた剣の切っ先を黒い重鎧の兵士に向けた。

兵士達の兜の中の赤い瞳が鋭い眼光を放った直後。3体の黒い兵士が一直線に並び突撃しながら、少女に向かって攻撃を仕掛けてくる。

「——ッ!? そんな合体技聞いてないよ」

「……あつ。忘れてた! お姉さん危ない!!」

少女の声で一心不乱に戦っていた小虎が彼女の危機に気付いて慌てて助けに向かうが、間に合うが間に合いそうもない。

少女は目を瞑り剣を腰の位置に構えると、向かってくる敵に無謀にも突撃していく。

その様子を見ていた小虎が、少女に向かって叫んだ。

「お姉さん何を考えてるんだよ! ダメだって!!」

しかし、小虎の止める声も聞かずに、少女は無言のまま進むと急に

地面を蹴って跳び上がった。

宙に上がった少女は一番前の兵士の肩に着地し、その感覚に驚き、持っていた剣を前に突き出す。

もちろん、目を閉じている彼女には何が起きてるのか分かっていない。

「まさか……ならー！」

小虎は持っていた大剣を投げる。

少女の突き出していた剣の切っ先は吸い込まれるように2番目の兵士の胸へと突き刺さる。

直後。剣を振り上げ、大きく跳び上がった3体目の兵士に、小虎の投げた大剣が少女の頭の脇を通過して、兵士の頭を貫通して後ろに倒れた。

全速力で走ってきた小虎の背中の中の腕が残っていた先頭の兵士を斬り裂く。

少女はゆつくりと目を開くと、目の前から敵が消えていてほっとしたのか「ふうー」と深く息を吐いた。

「ごめんね、お姉さん……でも凄いなだね！ 目を瞑ってあんな動きができるなんて僕始めて見た!!」

「えっ？ ああ、うん！ お姉さんは凄いなだよ」

少女はそう返すと微笑んで見せたが、その体はブルブルと震えていた。

だが、もちろん彼女にそんな能力があるわけではなく。ただ、たま怖くて目を瞑り。剣を前に突き出して襲い掛かれば相手が逃げるとそう考えたからの行動だ——咄嗟に跳んだのも、途中で怖くなつたからでしかない。

しかし、それが結果として上手くいったのだから『運も実力のうち』と言うことなのだろうか……。

2人が話していると、今まで様子を伺っていた兵士達が、再び剣を構えて襲い掛かってきた。

小虎は咄嗟に少女を抱き上げると、兵士達の後ろの方に軽々と跳んだ。

普通ならば身長が大きく自分より重い彼女を抱き上げることは難しいのだが、ここはゲームの中——レベルは100には至らないものの、Lv80以上という高レベルプレイヤーの小虎はステータスもそれなりに高い。

その補正が掛かって筋力パラメーターに従って、システムが彼女の体重を自動で演算した結果なんだろう。

「よし！ 逃げ道もなくなったし。このまま兄貴達を追うよ！ お姉さん」

そう言つて走り出そうとした小虎を少女が慌てて止める。

「ちよっ！ ダメだよ小虎くん！ おじいさんにも逃げなさいって言われたでしょ？ ここは逃げないと危ないよ！」

「でも……敵はその気はないみたいだよ？」

「——ッ!？」

小虎が目だけ動かして少女に告げると、彼女も小虎の視線の先に目を向けた。

そこには、じわじわと迫って来る兵士達の姿があった。

小虎が跳んだことにより、敵に逃げ道も塞がれた挙句。素早く展開した敵に囲まれてしまった……っというわけなのだ。

「——小虎くん！ わざとやったでしょ!？」

「さあ。たまたまじゃないの？ それじゃ皆を追うよ!！」

少女の疑惑の瞳から目を逸らすと小虎は少女を抱きかかえたまま、炎の腕で炎の剣を振り。目の前の敵をなぎ払いながら、森の中へと消えていった仲間達を追って走り出す。

*

*
*

紅蓮の宝物7

その頃、紅蓮達はというと……。

木に拘束された紅蓮の左右に剣を持った漆黒の兵士がいるのは変わらないものの、その前ではメルディウスとバロンが戦いを繰り広げていた。

「ふざけんじゃねえぞ!! その首斬り落としてやる!!」

メルディウスは激昂しながら、愛用のベルセルクではなく。見たことのない剣を手にほぼ肉弾戦で戦っている。

だが、その剣はとても装備と呼べるような代物ではない。何故なら、メルディウスの手握られている剣は茶色く変色していて、明らかに錆びている。更に刃先は刃こぼれしていて、とても人を斬れる代物ではない。

その為、剣は握りながらも、大剣は使えずメルディウスは手足を使った体術だけで攻撃していた。

バロンはメルディウスの殺意の籠った拳を受け流しながら、不敵な笑みを浮かべている。その反応が更に気に入らないのか、メルディウスは殺意剥き出しで襲い掛かる。

「クソツ!! 相変わらず汚たねえー野郎だぜ!!」

「そうだ……その力だ! 俺様はお前を叩き潰すために紅蓮が孤立するのを狙っていたんだからな! 今度はこつちから行くぞ!!」

防戦一方に回っていたバロンがそう叫ぶと、一気に攻勢に転じる。メルディウスはその攻撃を紙一重でかわしていく。だが、時折バロンの大剣の刃先が鎧に擦れ火花を散らしている。

致命的なダメージは受けていないものの、その表情からは余裕は全く感じられない。それもそうだろう。メルディウスの鎧はフリーダムの中で最も重い部類に入る重鎧――。

対してバロンは重鎧の中でも最も軽い、軽重鎧と呼ばれる部類のもを着用している。その鎧の違いは弱点になる胸を覆う分厚い鎧は同じだが、腕や脚に付いている鉄の質が圧倒的に違う。

互いにオーダーメイドの鎧なので個人差が出るのも仕方ないのだ

が、戦闘スタイルを考慮してかメルディウスの方が堅く良質な鉄を使用している為重く強固にできている。それに比べてバロンの鎧は、全身に纏う鉄の量を削っていて軽量化により、動きやすい作りになっていた。

ウエイトの違いがそのまま、両者の移動速度、攻撃速度に影響するこのゲーム世界でその違いは大きく出てしまう。

それは2人の戦闘スタイルに関係がある。バロンは固有スキル『ナイトメア』が彼の周りを数kmに渡り重鎧の兵士が守り、その兵士の目で見ただ全てをバロンが共有することができる。

簡単に説明すると、膨大な監視カメラによって周囲の全てを把握しているのだ。

もちろん。その全てが一遍に見れるのではなく、優先順位の高い物が随時バロンの視覚の端にウィンドとして表示される。

その為、本体であるバロンが、外敵から攻撃を加えられるという心配はほぼ皆無なのだ。

危険を未然に察知できれば、もしも。なんて事態は決して起こり得ない。

それもあってか、バロンはその包囲網を突破してきた強者か、不意を狙った弓などの飛び道具しか警戒していない。

飛び道具ならば、重鎧の中でも軽い、軽重鎧で十分に防ぎきれる。

更にもし、数千の兵士を突破されたとしても相手も相当疲労しているはず。ならば、多少防御力を犠牲にしても、攻撃速度を取るのには常識といえるだろう――。

それとは対照的に、普段からギルドの皆の先頭に立ち、強力なモンスターと対峙することの多いメルディウスは、重鎧に更に強度を求めざるを得ない。

更に彼は変身前は大剣と斧の両面を使うことができ、変身後は攻撃力に特化した大斧となる『ベルセルク』だ。

その特殊なトレジャーアイテムによって自在に重心を変え、足りない回避速度。更には攻撃速度と圧倒的な破壊力を両立していた。

もし戦闘で苦しくなれば、大斧のモードでの爆発能力を用いて敵を

一度吹き飛ばせば、容易に不利な状況からでも体制を整えられる。つまり、圧倒的な破壊力と爆発能力を持つ『ベルセルク』という相棒を念頭に置いての戦闘スタイルなのだ――。

とは言え。メルデイウスは曲がりなりにも、テスターと呼ばれるフリーダムの中では最も古参のプレイヤーだ。多少の武器の変更では、その強さは揺るがない――だが……。

「ははっ！ どうした？ 俺様の首を斬り落とす前に、お前の首が飛びそうぞぞ！」

「ふんっ！ お前なんて、こんななまくらで十分だ！」

（紅蓮。必ずお前を助ける……もうしばらく辛抱してくれ……）

メルデイウスは紅蓮の姿を横目で見ながら、心の中で決意を新たに呟いた。

その視線の先に居た紅蓮は口は布で塞がれ、両脇には剣を持った黒い鎧の兵士が立っている。

* * *

どうしてこんな状況になったかという、それは少し前に遡る――。

凄まじい殺気を放ち、紅蓮の首筋に剣を突きつけたバロンとメルデイウスが対峙しながら睨み合っていた。

バロンの持っていた剣が、更に紅蓮の首筋に食い込む。

「ほら、早く得物を捨てろよ……」

「……ああ、分かった。その代わり紅蓮は逃がしてくれないか？ 頼む！」

メルデイウスは内から湧き上がる憤りを抑え、悔しそうに唇を噛み締めると、その場で深々とバロンに向かって頭を下げる。しかし、そんなことをバロンが聞き入れるわけもなく……。

「――バカかお前？ お前如きの頼みを俺様が聞くわけないだろバカ！」

「……だろうな。分かった……」

「ダメです。そんなことをしては！ 私の事は放っておいてください

！」

紅蓮は大きな声で叫ぶ。

たとえば何をされても紅蓮は死ぬということはないはずだ。だが、メルディウスは別だ——バロンの攻撃でHPが尽きることはないが、周りの兵士にやられればどうなるかは分からない。

しかし、それ以前にメルディウスが固有スキルを使えば、辺り一帯が吹き飛んでしまう。それを聞いたバロンは不快そうな顔を見ると、紅蓮に向かって怒鳴った。

「お前の役目は終わった。今更叫び声を上げてるんじゃない！ お前達!!」

「なっ！ なにするんですか？」

紅蓮の脇に立っていた兵士達は、紅蓮の口に無理矢理布を巻き付けて声を出せないようにした。

それを見たメルディウスが、狼狽えながら叫ぶ。

「やめろ！ バロン！ 紅蓮には手を出すな！ 分かった捨てる！ 捨てりやいいんだろ！」

興奮したバロンが次に持っている大剣で紅蓮を傷付けると思ったのか、メルディウスは持っていたベルセルクを地面に突き刺すと、数歩後ろに下がった。

バロンはメルディウスの手からベルセルクが離れると見るやニヤリと笑みを浮かべ、紅蓮の首筋に突き付けていた大剣を今度はメルディウスへと向ける。

「ふふふっ……あははははッ!! 全く面白いなメルディウス。女の為にそこまでするのは、もはや無様を通り越して哀れみすら感じる……そんなお前にチャンスをやろう！」

「……チャンス？」

メルディウスは『こいつがそんな事をするわけがない』と分かっている、その言葉に微かな希望を持ってしまおう。

勝ち誇った様子でにんまりと笑みをこぼしたバロンが、上機嫌に言葉を告げた。

「ああ、俺様と戦ってもし、万が一にでも勝てれば紅蓮を返してやる」

「——その言葉に嘘偽りはないな……?」

「ああ、勝てれば……な」

バロンは古びた剣を取り出すと、それをメルディウスに放り投げた。

それを受け取ったメルディウスは一瞬にして、険しい表情に変わる。

(……)いつはやべえーな。勝てねえー事はねえ……だが、こいつが約束を守るはずもねえー。最悪の場合は、隙をみて紅蓮を救出して逃した後で俺は自爆するしかねえーか……)

目の前で不敵な笑みを浮かべているバロンを見て心の中でそう呟くと、メルディウスは自分の手に握られている錆びついた剣を見つめた。

「俺んところの大事なサブギルドマスターを無事に連れ帰らねえーと、千代に残してきた奴らにも顔向けできねえーしな……返してくれらるって言うならやってやる！ どこからでも掛かって来いよ、バロン!!」

「ふっ……身の程を教えてやるぞ? メルディウス!!」

メルディウスは剣を構えると、バロンが斬り込んでくる。

大剣を振りかぶり、メルディウスの近くに勢い良く地面に叩きつけると、彼に聞こえる様にわざとらしく小声で呟く。

「——お前を殺した後で、紅蓮も俺様の玩具にしてやる。知ってたか? こいつは痛くても叫び声を上げない——だが、それがまたいい。全身から汗を吹き出しながら苦痛に歪める女の表情ってのは、実に俺好みだぜ……」

「そうかよ……相変わらず腐ってやがるな! お前のそのサデイスティックな考えが俺は大嫌いだぜ!!」

「奇遇だな。俺もお前が嫌いだよ!!」

バロンは素早く持っていた大剣を、メルディウスの首筋に目掛け振り抜く。

メルディウスは身を低くしてその攻撃をかわすと、バロンの振り抜いた大剣を蹴り上げ、虚を突かれたバロンの腹部を素早く蹴り飛ばし

た。

だが、鎧という防具がある以上。生身の蹴り程度が致命的なダメージになることはない。

憎悪に満ちた瞳を向け、蹴られた腹部を押さえながら距離を取って大剣を構え直すバロンに、メルデイウスも怒りに満ちた表情で剣を構えた。

2人は物凄い殺気を放ちながら睨み合う。

その様子を、紅蓮も固唾を呑んで見守っていた。

* * *

そして話は戻る……。

自慢の大剣を振りかざし圧倒的な気迫で猛攻を続けるバロンに対して、メルデイウスは見ている限りでは明らかに劣勢に見える。しかし、メルデイウスは最小限の動きで攻撃をかわしながら、付け入る隙を窺っていた。

対人戦で最も重要なのは、間合いと攻撃と防御のバランスだ。

ことわざで『攻撃は最大の防御なり』という言葉があるが、あれはあくまで多人数戦の場合だけであって、個人同士の戦闘には当てはまらない。

何故なら、一対一の戦いでは周りに気を張る必要はなく、目の前の敵のみに集中せざるを得ない。その為、熟練した者同士の戦いほど、一瞬の隙で勝負が決するものだからだ――。

更に付け加えるのなら、相手の隙は攻撃の時に最も生まれやすく防御側はそれを窺いやすいというのが、一騎打ちの鉄則でもある。

一撃で決する戦いならば良いが、実力がきつこうしている者同士の戦いはそうはいかない。

いや、実際の力関係から言えば、メルデイウスの方がバロンよりも遙かに強い。だが、武器を思うように振れず、結果的に実力が拮抗してしまっているのだ。

今のバロンは大物の大剣で攻撃に特化してる。これはメルデイウ

スの錆びた大剣を打ち砕くのと、素手で戦わざるを得ないメルディウスとの間合いを確保する為なのだろう、つまり追撃が来ないと高を括っている隙だらけなのだ。

本来の力を遺憾なく発揮できれば、この戦闘はすでに終わっているはずだった。そう。紅蓮が敵に捕らわれず『ベルセルク』さえ手になれば……。

メルディウスは攻撃の一瞬の隙を突いて、剣を振り上げ振り下ろすと見せかけ、左手でバロンの頬を殴った。

虚を突かれたバロンは防御できず、その体は軽々と飛ばされる。だが、バロンは飛ばされながらも地面に大剣を刺し踏ん張って止まる。

「良くも俺様の顔を!! ……………ッ!」

バロンが怒りを露わにして前を向くと、そこには拳を握り締めるメルディウス姿があった。

握り締めたその拳を勢い良く振り抜く。

「——もう一発喰らいやがれ!!」

雄叫びと共に放たれたその拳を見て、バロンが目を見開き叫ぶ。

「この……あまり調子に乗るなー!!」

バロンは地面に刺さったままの大剣を強引に振り上げる。

メルディウスは一瞬驚きはしたものの、咄嗟に地面を蹴って後ろに勢いを流しながら、その刃を鎧で受け流し素早くバロンから距離を取る。

バロンは殴られた場所を手の甲で拭うと、不機嫌そうに右手を掲げる。その直後、紅蓮の隣に待機していた兵士の1人が剣を紅蓮に突きつけた。

それを見て、メルディウスが慌ててバロンに向かって叫んだ。

「——お、おい! どういう事だ。話が違うだろうがッ!!」

「……俺様は剣を渡したな。なら、その剣で戦うのが当然じゃないのか?」

「……………くっ! そ、そうだな……そうかもしれねえーな……」

メルディウスは横目で剣を首筋に突き付けられている紅蓮を見ると、険しい表情で頷く。だが、こんな錆び付いた刃で戦えるわけもな

い。

この剣でまともに戦おうとすれば数回打ち合うか、最悪は1回で折れるのは容易に想像できた。

バロンの剣で戦えというその言葉は『この場で大人しく敗北しろ』という勝利宣告に近いものがあつた。

「この剣でお前を倒す！　だが、ここじゃない場所だ。ここでは本気でやれないからな」

「ふんっ。なるほどな……」

バロンは口元に微かな笑みを浮かべながら、言葉を続けた。

「俺様をこの場所から遠ざけ、木の上に潜んでいるお前の仲間の女が紅蓮を救出する。そういう魂胆か……」

「……くっ！」

(こいつ。白雪に気が付いてやがったのか……)

悔しいが、バロンの言う通りだった。

実はメルデイウス達は紅蓮を救出に出る直前、前もって白雪と話をしていた。

メルデイウスもしものことがあれば、隙を見て白雪が紅蓮を救出し戦線を離脱。その後、メルデイウスの固有スキルを使い。バロン諸共兵士達も消滅させる——それが白雪とメルデイウスの立てていた作戦の内容だ——。

バロンは辺りの木を見渡して叫んだ。

「固有スキルで姿を消そうが、俺様を騙すことはできないぞ！　さっさと出てこい!!」

バロンのその言葉から察するに、彼は白雪の存在には気が付いていないのだが、その姿は見えていないらしい。

白雪の固有スキルは『インビジブル』己の姿を消す効果のものだ。あまりレアなスキルでもないが、白雪ほどの手練れになると気配を完全に消し去り。周りと同化することができる為、厄介なスキルであることには変わらない。

だが見えていないのであれば、まだチャンスはある。目視できていないのならば、隙を見てまだ奇襲を掛けられるということの意味して

いた——。

メルデイウスは不敵な笑みを浮かべながら声を上げる。

「白雪！ 俺が隙を作ってやる！ お前はお前のタイミングで攻撃しろ!!」

「……くっ！ メルデイウス！ そんな事をすれば紅蓮の身がどうなるか分かってるんだろっな!!」

バロンはそう叫んで左手を掲げると、紅蓮の右脇の兵士が剣を突き付けた。

だが、その直後。その兵士の腕が一瞬で斬り落とされた。

どうやら白雪は最初からそのつもりだったようで、姿は見えないものの旋風の如く。黒い兵士の腕を即座に切り落とし、また気配を完全に消す。

一瞬の間に起きたその光景を見ていたバロンの表情には、明らかに動揺の色が見て取れる。

それもそうだろう。人は誰しも認識できない化物の類には、恐怖を抱くものだ——それは人の本質的なもので、生きている人間なら抗うことはできないものだろう。

困惑するバロンに向かって、メルデイウスはほくそ笑みながら告げた。

「勝負あったな、バロン。お前の負けだ……降伏しろ！ そして俺達の傘下に入るなら、今までの事は全て許してやるよ！」

上から視線でそう告げるメルデイウス。

すでに勝利を確信したかの様な彼の言葉を聞いたバロンは、不敵な笑みを浮かべ言葉を返した。

「お前達は、なにか勘違いしてるな……元々紅蓮は囷でしかないんだよ！ 最後に勝つのは俺様だあああああッ!!」

バロンは雄叫びを上げると、森の中に散らばっていた兵士達がバロンの周りに集まってきた。その数は確実に減ってはいるものの、周囲にはまだかなりの数がいる。

彼の言う通り、数の上ではまだバロンに利が残っている。たとえ紅蓮の身を保護したところで、鼠一匹通れないほどに周りを囲む兵士達

をなんとかしないことには動きが取れない。

しかも、追いつかれぬうちに平静を欠いているバロンが、握り締めた大剣をメルディウスに向け。

「数こそ力だ！ 俺様のこの兵团を駆使すれば、お前達なんて虫ケラ同然なんだよ!!」

「——バロン!!」

狂ったように叫ぶバロン目掛けて、メルディウスは錆びた剣を手に斬り掛かった。

直ぐ様、大剣を振り上げ向かい打つバロン。

「うおおおおおおおおおッ!!」

「そんななまくらで！ この俺様がやられるわけないだろうがッ!!」

2人は雄叫びを上げると、お互いの得物の刃が激突する。

直後。メルディウスの持っていた剣が、バロンの持つ剣とぶつかった衝撃で粉々に砕け散った。

メルディウスは持っていた剣の残った柄を投げ捨てると、右腕でバロンの左腕を掴んだ。

「これでお前も終わりだな！ 散々弄んでくれたな。俺の目の前で紅蓮に手を出して……覚悟はできてるんだろうな、この蟻野郎!!」

その殺意に満ちた声色と鋭い眼光に、バロンは狼狽える。

次に彼が何をしようとしているのか、バロンにははつきりと分かっているのだろう。

「くっ！ うるさい！ 獣の分際で、俺に……俺様に触れるんじゃない！ 離れろッ!!」

バロンの大剣がメルディウスの左の脇腹の鎧の隙間を捉えたのと同時に、今度は大剣を握っているバロンの右腕を掴んで動きを封じた。

その直後から脇腹の鎧の隙間に突き刺さった大剣によって、メルディウスのHPバーが大きく減少を始めたが、メルディウスは一向にその手を放そうとしない——。

「正気か!? 俺様の腕を放さなければお前は死ぬんだぞ!? 死ぬのが怖くないのか貴様!!」

取り乱したように、情けない声を上げながら必死に叫ぶバロン。

メルデイウスは彼が動く度に脇腹に食い込み、HPを減らす刃の苦痛に表情を歪ませながら、そんな彼に言葉を返す。

「ああ……怖かねえ……な。俺には信じている仲間がいるんでよ……」

その時、メルデイウスの背後から漆黒に輝く物体が飛んできた。

それを見たメルデイウスの口元が微かに緩む。

「ふん……遅えんだよ。バカやろお……」

メルデイウスは力無くそう呟いて項垂れる。

その直後、メルデイウスの横を高速で何かが通り過ぎたかと思うと、次の瞬間にはバロンは地面に倒されていて、その上にはマスターが馬乗りの状態で覆い被さっていた。

「……バロン。今すぐにスキルを解除せよ……抵抗するならば、俺はおぬしの頭を吹き飛ばさねばならん……」

マスターはバロンの顔を右手で掴んでそう告げると、その右手から漆黒のオーラが立ち上る。その殺意を含んだ声に諦めたのか、バロンは無言のままスキルとPVPを解除した――。

紅蓮の宝物 8

周りの黒い鎧の兵士達とメルデイウスのHPが回復したのを確認すると、マスターはバロンの顔から手を放した。

戦意を喪失して意気消沈しているバロンを横目に、地面に膝を突いたままのメルデイウスが、ほっと息を吐くと傷の残っている脇腹を擦りながら紅蓮の方に向く。

白雪の手によって助けられた紅蓮だったが。まだ痛むのか、傷口を押さえながら申し訳なさそうに、マスターの元へとやって来た。

「……マスター。ご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした。私の軽率な行動で、マスターの作戦を台無しにしてしまつて……」

「もう良い。それよりも、その傷を治すことを考えなければな。ホテルに戻ったら、少し長めに風呂に入るといい」

今回の件を気にしていないというように優しく微笑みながら、そう告げるマスター。

その言葉に紅蓮はほっとしたように安堵したのか、固かった表情を和らげる。

そして、地面に膝を突いたまま、紅蓮の方を見て微笑んでいるメルデイウスの元へと向かう――。

お互いの顔をしばらく見つめ合っていると、メルデイウスはぎこちなく笑みを浮かべ。

「――おう。思ったより大丈夫そうだな。紅蓮……」

笑みを浮かべながらそう呟くメルデイウスに、不機嫌そうに眉間にしわを寄せながら紅蓮が叫んだ。

「大丈夫そうじゃありません！ あなたはボロボロじゃないですか！」

「……紅蓮」

メルデイウスは滅多に声を荒らげることのない紅蓮のその声に驚いたのか、目を丸くさせる。

紅蓮の華奢な体が怒りで、小刻みに震えている。

「貴方の作戦は作戦じゃありません！ 今回の事は私の独断で起きた

ことです。見捨てられても文句は言えません！ 本来なら、貴方は私など捨て置いてバロンを捕えるべきでした！ それを貴方は……なんでそうしないんですか!!」

彼女の怒りはメルディウスではなく。おそらく、油断してバロンに捕まってしまった自分に対してのものなのだろう。

それはメルディウスも感じ取っているのか、困った顔をして眉をひそめ。

「でもな。俺はお前の事が心配で——」

「——でもじゃありません！ 助けて頂いたことは感謝します。ですが、それは結果論でしかありません！ メルディウスはマスター達と、もつと策を練ってからここに来るべきでした！ 私は死なないのですから！」

声を大にして叫ぶ紅蓮を、メルディウスは困り果てただただ見つめるしかなかった。

「貴方はいいかもしれません。助けにきて死ねれば、それはそれで本望でしょう！ でも私は……助けられる側は目の前で……大切な仲間を……傷つけられるのを……ただ見てるしかないですよ……？」

小刻みに肩を震わせそう言い放つと、紅蓮の頬を一筋の涙が伝う。

「紅蓮様……」

「——紅蓮。お前……涙が……」

白雪とメルディウスは驚いたように口をぽっかりと開けて、紅蓮を見つめている。

それもそのはずだ。紅蓮が涙を流すのを見るのは、付き合いの長いメルディウスでもそれは数年ぶりのことだった。

マスターと別れて長い間、紅蓮が泣くところを目にしたことはない。それどころか、感情表現も殆ど見せなくなっただけだったのだ。

「もうそのぐらいで許してやれ。紅蓮よ……」

「マスター。ですが……はっ！ マスター!!」

こちらにゆっくりと向かって来るマスターの背後から、バロンが突

如として大剣を持って走り出した。

しかし、バロンは咄嗟に振り向いて拳を構えたマスターを素通りして、そのままメルディウスに向かって突撃してくる。

メルディウスのHPは回復しているものの、肉体的な疲労が消えたわけではない。

「——お前だけは……お前だけは許さない！ 朽ち果てるメルディウス!!」

「……なっ!?!」

虚地面に膝を突いたまま動けないメルディウスに向かって、バロンは雄叫びと共に大剣を振り上げ、そのまま勢い良く振り下ろす。

「やませせんー!」

メルディウスとバロンの間に割り込むと、紅蓮は懐に仕舞っていた短刀を抜き、咄嗟にバロンの攻撃を防いだ。

その直後、紅蓮の大切にしてきた短刀はまるでガラスが割れるように、粒子となって空中で掻き消えた。だが、その衝撃に耐えられず、紅蓮の華奢な体は勢い良く吹き飛ばされた。

「きゃあああああああッ!!」

悲鳴を上げながら宙を舞った紅蓮を気力で動いたメルディウスが空中でその体を受け止め、一緒に後方へと飛ばされた。

「——なにッ!?! そこまでだッ!!」

マスターは腰に巻いていた黒帯を外すと、バロンに向かって放つ――。

帯はみるみるうちに体に巻きつき、バロンを縛り上げる。

身動きの取れなくなつたバロンは、悔しそうに歯を食いしばりながら、地面に横たわつた。

吹き飛ばされたメルディウス達は地面を転がり、近くの木にぶつかつて止まつた。

「……痛つた。だ、大丈夫か？ 紅蓮……」

「……………」

メルディウスの呼び掛けに答えることなく、紅蓮はメルディウスの胸の中でピクリとも動かない。

顔を青ざめながら、メルディウスは彼女の体を揺らし何度も名前を叫び続ける。

マスターはそんなメルディウスの元に急いで駆け寄ると、紅蓮の安否を確認してほっと胸を撫で下ろした。

「大丈夫。気を失っているだけだ。じきに目を覚ますだろう」

「そ、そうか……良かった……」

それを聞いて、メルディウスも安心したのか深く息を吐いた。

そこに遅れて、少女を抱きかかえた小虎が到着した。

「……姉さん！ 兄貴、姉さんは無事なの!?!」

「……紅蓮ちゃん!?!」

少女は小虎の腕の中から地面に降りると、2人は血相を変えてメルディウスの元へと駆け寄っていく。

遅れてきた2人は紅蓮の姿を確認すると、気が抜けたのか「良かった」と安堵したようにその場に座り込んだ。

その時、マスターに縛り上げられていたバロンが、目を見開き驚いた様子で叫ぶ。

「どうして咲がここに居るんだ!?!」

「……あれ？ お兄ちゃん!?! なんでお兄ちゃんがここに居るのよ!!」

2人はお互いの顔を見合って目を丸くさせている。

少女は帯で縛られているバロンと、メルディウスの腕に抱きかかえられた紅蓮を交互に見て、大体の状況を察したのか眉間にしわを寄せて叫んだ。

「——お兄ちゃん!?!」

「……あ、いや。これには深い理由が……あつてだな……」

高圧的な声音に怯えたように、自分の前で腕を組む少女を見上げるバロン。

言い訳を口にするバロンに冷たい視線を浴びせると、少女はそんな彼にどこから取り出したのか縄を手に告げる。

「問答無用!」

「……いやあああああああああ!!」

その直後、辺りにバロンの悲鳴がこだました――。

事を終えた少女は、兄のしでかした不祥事を皆に深々と頭を下げて謝罪する。

「……皆様。この度は不出来な兄が多なるご迷惑をお掛けして申し分かりませんでした。今後はこのような事がないように、きつくきつく言い聞かせます！ ほら、お兄ちゃんも！」

「……すまなかった。許してくれ……」

少女の視線の先には、無残にもミノムシの如く木に吊るされたバロンが渋々頭を下げていた。もう兄としての威厳も、日本で4人しかないテスターとしての風格もあったものではない。

ぐるぐる巻きにされ、木の枝から吊るされたその姿は惨めで、哀れみしか湧いてこなかった。

それを聞いた少女の鋭い視線がバロンに突き刺さる。

「許してくれじゃなくて、許してくださいでしょー！」

「……はい、すいませんでした。許してください……」

少女が怒鳴るとバロンはしょんぼりしながら、もう一度項垂れるように頭を下げた。

反省した様子のバロンを見て、少女は頷くと皆の方を向いてもう一度深く頭を下げる。

そんな少女に、申し訳なさそうにメルディウスが告げた。

「まあ、なんだ……あんまり気にするなよ。お前が悪いわけじゃないんだし」

「……メルディウスさん。ありがとうございます！」

瞳に潤ませながら、メルディウスの顔を見上げて少女がその手を取った。

メルディウスは照れくさそうに、少女から目を逸らすと思い出したように尋ねた。

「そ、そういえば。お前の名前をまだ聞いてなかったよな？」

「さすが兄貴！ 僕も気になっていたんだ。お姉さんの名前！」

小虎は興味津々な様子で、身を乗り出しながら微笑む。

メルデイウスも興味があるのか。彼女の口元を見つめながら、その答えを待っている様だった。

そんな2人に向かって、少女は首を傾げながら。

「あ、あれ？ 私の名前。知りませんでしたっけ……？」

「……………」

とぼけるような彼女の言葉に、まるで時間が止まったかのように、2人は固まっている。

ぽかんとした様子でその場に立ち尽くしている2人を見て、少女は慌てて口を開いた。

「あ、ごめんなさい。名前って普通に何かの拍子に表示されるものだと思いますって……どうして、皆に名前でももらえないんだろうって！」

身振り手振りを交えながら、少女がそう言って慌てふためく。

どうやら、彼女は自分の真上に名前が表示されるものだと思うっていたらしい。本来ならばPTに加入した時にプレイヤーネームが表示されるのだが、彼女はここまで一度もメルデイウスのPTに加入していなかった。

いや、加入する必要がなかったと言った方がいいかもしれない。

常にゲームバランスを壊していると言っても過言でもない2人と、ゲーム内のバランスを壊してるとまでは言えないにしても。それに匹敵する力を持った3人と旅をしていたのだ。本来ならば命に関わるような敵でも、後ろに控えていれば皆が秒で倒してくれていた為、わざわざコマンド操作を用いるPT加入画面を出す必要はなかったのだ――。

また、彼女の言い方から察するに、VRではないにしてもMMORPGの経験はあるらしい。それも、自分の名前が表示されているだろうと察する原因になっていたのかもしれない……。

「ああ、このゲームでは同じPTに入るか、フレンド登録するかしないとか、名前やレベルは把握できないんだ。色々な輩が横行してるからな。気の許した相手にだけ、そういう情報を教えられるっていうシステムになってるんだよ」

メルデイウスがそう説明すると、少女は納得したように「なるほど」と頷いた。

少女はコホンツと軽く咳払いをすると、少しかしこまったような声で自己紹介を始める。

「今更な気もしますが、私は明澤 咲。キャラ名はフィリスと言います。フィリスと呼んで下さい！ これからも、よろしくお願いします！」

少女はペコリと頭を下げると、その場に居た全員が近くのと顔を合わせながら、少し気まずい雰囲気醸し出している。

彼女は気付かぬうちに、オンラインゲームで最もやってはいけない禁忌に触れてしまったのだ――。

その雰囲気の中、メルデイウスが言い難そうに口を開いた。

「いや、実名は伏せといた方がいいぞ？ ここはゲーム世界なんだからよ」

「……は、はい。今度からは気をつけます……」

フィリスは恥ずかしさから顔を赤く染めると俯き加減に頷く。

その直後、吊るされたまま放置されていたバロンが声を上げる。

「――お前ら！ 俺様の事を忘れるなあー！」

徐に兄の方を向き返し、フィリスが思い出したように手を叩くと。

「……ああ、そういえば」

思い出したようにバロンの方を向いてにっこりと微笑んだフィリスに、バロンは希望に満ちた瞳を向けている。

「おう！ さすがは我が妹！」

「口を塞ぐのを忘れていましたね……ごめんね。お兄ちゃん♪」

「……えっ？」

にっこりと微笑みながらそう言ったフィリスの手に握られている布を見つめ、バロンは顔を青ざめさせる。

フィリスはバロンの口に布を巻き付け、口を防ぐと身を翻した。

「それじゃ、お兄ちゃん。また明日ね♪」

「ふっふおふあへー!! ほふしへほうはうー!!」

バロンのその叫びに耳を傾けながら、フィリスが頷いた。

「ふむふむ……ちよつと待て、どうしてそうなるのかって？ ……それはお兄ちゃんが悪い事したからでしょ？ 少しそうして反省しなさい！」

フィリスはビシツとバロンを指差すと、縛ったバロンを木から吊り下げた状態のまま、メルデイウス達とその場から去っていった。

紅蓮の宝物9

ホテルに戻ったマスターは疲労困憊と言った感じにソファアに腰掛けた。だが、それも無理はない。バロンの出した黒い兵士達は使用するプレイヤーのレベルをそのまま受け継ぐ。

つまり、古参のバロンのレベルはMAX——従って全ての兵士がLV100ということだ。

それは重装備のモンスターを相手にしているのと変わらず、それを相当数相手にして疲れないわけがない。

皆、疲労から項垂れる中。まず、マスターが安堵したように大きく息を吐いて。

「とりあえず。なんとかバロンはこちら側に引き込めたようだな」

「はあー。引き込めたというよりは、妹がこちら側に居て、兄妹間で彼には拒否権がないように思えました……」

呆れた様のため息をついて、白雪が呟く。

まあ、白雪は身を隠していたとはいえ、あの現場で一部始終を目撃し。バロンの人間性と攻撃的な性格を目の当たりにしていて、こんなにもあっさり解決したことに拍子抜けしているのだろう。

そこにメルデイウスが口を挟んできた。

「まあ、結果オーライって事でいいんじゃないかねーのか？」

「そうそう。でもあの時のお姉さんは本当に怖かった。……僕にはあんなことしないよね？」

小虎は少し怯えたように尋ねると、フィリスはにつこり微笑んで呟いた。

「小虎くんがいい子にすればね〜」

「あはは……気をつけよう……」

はぐらかすように笑うフィリスに、小虎は顔を青ざめさせながら呟く。

そうこうしていると、気を失ってベッドで眠っていた紅蓮が目覚まし、むくつと体を起こしてゆっくりと歩いてきた。

紅蓮はほっとした表情をしたのも束の間——すぐに険しい表情に

なり、メルデイウスの隣へと腰を下ろす。

メルデイウスは気まずいのか、彼女の方を向いて小さな声で。

「——悪い……俺が油断していたばかりに、お前の短刀壊させちまつて……」

「いいえ、あなたが無事ならそれで……」

前を向いたまま、視線を合わせることなく紅蓮が言葉を返した。

おそらく。以前から紅蓮が宝物だと言っていた脇差を失ったことをだいぶ気にしているのか、メルデイウスはバツが悪そうに頭を掻く。

「でもよー。あれは限定の装備だから、もう手に入らないだろ？」

「——形あるものはいつか砕けます。メルデイウス、あなたが気にする事じゃありません」

「ああ、すまん……」

紅蓮は表情一つ変えずに告げると、メルデイウスはもう一度謝った。

正直。付き合いの長いメルデイウスにも、感情表現の薄い紅蓮の言葉の意図を汲み取ることは殆どできていない。

無言のまま頷くと、紅蓮はマスターに向かって尋ねる。

「マスター。目的は達成しました。今後はどうしますか？ お弟子さんを救出に行くのなら、私も行きます」

「……うーむ。だが、バロンにやられたダメージも残っておろう。儂1人で先に行こう！」

マスターは少し考える素振りを見せてそう答えると、紅蓮はその言葉聞いて、顎の下に手を当て考えると「分かりました」と小さく呟いた。

「なら、白雪をお供に連れて行って下さい。お願いできますか？ 白雪」

紅蓮は白雪の方を向いて首を傾げる。

今回の戦闘で最も消耗していないのは白雪であり、彼女ならば隠密行動にも長けていることを理解しての人選なのだろう。

的確に状況を判断できるのは、さすがサブギルドマスターを務めて

いるだけのことはある。

その申し出を白雪も二つ返事で了解する。

「はい。紅蓮様がそれをお望みでしたら——マスター様。私がお供いたします」

「うむ。よろしく頼む！」

白雪は何の迷いもなく即答すると、マスターもそれに頷いた。

翌日、出立するマスターと白雪を見送るために、皆名御屋の街の入口にきた。

馬を近くに召喚した状態で、いつもと変わらぬ落ち着いた様子で笑みを浮かべている2人が立っていた。

その様子は、とても今からプレイヤーキラーと称されるブラックギルドのアジトへと向かうとは思えない。

「——マスター、白雪。くれぐれもお気をつけて……」

心配そうに眉をひそめている紅蓮に、2人はにっこりと微笑みながら言葉を返す。

「うむ。心配は要らん。お前達こそ気をつけてな」

「大丈夫ですよ紅蓮様。もしもの時は固有スキルで隠密行動が取れますし。偵察も援護もおまかせください。マスター様をお守りするお役目、必ず果たします！」

「はい。期待はしています。ですが、無理はしないで下さいね。すぐに私達も後を追いますから」

「はい」

「うむ」

力強く頷くと、2人は颯爽と馬に跨がり走り去っていった。

名御屋から始まりの街までは陸路で昼夜問わず馬を走らせても速くて3日は掛かる。

その姿が徐々に小さくなり消えていくのを見送って、フィリスが口を開いた。

「さて、私もお兄ちゃんを迎えに行ってきます。そろそろ懲りたと思うし……それじゃ、行こっか！ 小虎くん」

フィリスはそう呟くと、小虎の腕を掴んで顔を見て微笑んだ。

小虎は驚いたようにフィリスを見つめている。

「……ど、どうして僕もなの!？」

「それは何かあった時に守ってもらおう為だよ。頼りにしてるんだから、小虎くんの事!」

「僕が頼られてる……ふふっ。仕方ないなく。なら一緒に行ってあげるよ! 僕がいれば何の心配も要らないぜ!」

「うん。お願いね!」

小虎は誇らしげに胸を張ってそう言うと、フィリスはにつこりと微笑んだ。

その場に残される形になったメルデイウスと紅蓮は、気まずい雰囲気の中、お互いに顔を逸らしている。その時、急に紅蓮が身を翻し、メルデイウスに告げる。

「——メルデイウス。ちょっと行かなければいけない所があるので、付いてきて頂けますか?」

「……あつ? ああ、分かった!」

メルデイウスはその言葉に頷くと、急いで紅蓮の後に続いた。

紅蓮はゆっくりと繁華街を歩きながら、昨日の鍛冶屋の前に着くと、徐ろに引き戸を開いて中へと入る。

それに続くようにメルデイウスも店内に入ると、そこには仏頂面な老人が煙管を啜えて座っていた。それを見て、メルデイウスは紅蓮の耳元でささやく。

「なあ、なんだあのじじい。うちのじじいより面がわりいーぞ?」

「……失礼ですよ。それに人を顔で判断していたら、私はあなたと付き合っていないません」

「……どういう意味だよ。それ……」

紅蓮は呆れながらそう呟くと、そのまま老人の元へと歩いていった。

メルデイウスも怪訝な顔をしながらも、その後が続く。

「あの、申し訳ありません。大熊の大牙は入手してきましたのですが、こちらの不手際で短刀を壊してしまいました……」

表情を曇らせた紅蓮が、すつと布に包んだ大熊の大牙をカウンターに置いた。

「——そうか……それは残念じゃったな。儂も扱って見たかったが、壊れてしまったのでは仕方ない……本当に残念じゃ……」

「……申し訳ありません」

その話を聞いて啞えていた煙管の灰を地面に落とし、老人は少し残念そうな顔をしながらもう一度煙管に火を灯す。

それを口に啞えて大きいため息を吐く老人に、紅蓮も申し訳無さそうに深々と頭を下げている。

そんな2人のやり取りを見ていたメルディウスが、突然大きな声を上げた。

「どうしてお前が謝るんだよ！ 紅蓮。おい爺さん！ あのアイテム直せないのか?! 金ならなんとかする！ だから、あのアイテムを直してもらえねえーか？ この通りだ!!」

メルディウスは老人の前まで行くと、ガンツと頭を店のカウンターに打ち付けた。

老人は煙管を啞えその煙を吐き出すと、少し間を開け徐ろに話し始めた。

「——直してやりたいのはやまやまなのだが、それは無理な相談だ……」

「どうしてだ！ あんた鍛冶職人だろ!? まずやってみてから返事しても遅くはねえーだろ!? それでも職人なのかよ!」

「……メルディウス！ 失礼ですよ。わがままを言っではいけません!」

老人は小さく笑みを浮かべると、再び口を開いた。

「話を聞いていれば、大体の状況に察しがつく。要するにお前のせいであの短刀を失ってしまったのだろう？ でもな、若いの……今のお嬢ちゃんの顔を見ていて何か感じないのか？」

「……何をだよ？ 爺さん」

「フツ……まだまだ修行が足りんな」

老人は微笑むと煙管を一吹きして言葉を続ける。

「今のお嬢ちゃんの顔は、儂が前に見た時よりも生き生きしておる。短刀という大事な物を失って、お前という更に大事な宝を守ったのだから当然じゃろう。さあ、分かたらさつさと帰ってくれ！ 若い者の色恋沙汰はうちの店では扱っておらぬのでな」

老人は背を向けて裏の鍛冶場へとゆつくりと歩き出す。

言い返そうとしたメルデイウスを止めると、紅蓮は老人の背中に向かって一礼して店を後にする。

無言のまま街を歩く紅蓮に、メルデイウスが納得いかないといった表情で眉をひそめながら尋ねた。

「良かったのかよ。あんないい加減な事言わせておいて！」

「……いいんです。それに、それほどいい加減でもありません……あなたも私の大事な宝物ですから……」

「……なに？ 最後聞き取れなかったんだが……」

そう呟く紅蓮に、不思議そうな顔で聞き返す。

「なんでもありません。さあ、早く準備してマスター達を追いかけましょう！ 行きますよ！ メルデイウス！」

紅蓮はメルデイウスの手を引くと、上機嫌で紅蓮はホテルへ向かって走り出した。

第3章

父親の影

このデスゲームを開始した張本人の狼の覆面を掛けた男によって拉致された星は、薄明かりが照らす研究室の検査台の上に体を拘束された状態で寝かされていた。

その研究室には星の他にもう一人、モニターの前で忙しなく操作盤を叩いている。

どうしてゲーム内にこんな研究施設があるのかは謎だ——本来ならば、ゲーム開発は大勢の人員を用いて行うもの。しかもわざわざそれをゲーム内に置くメリツトがない。

それもそうだろう。システムを実行しても不具合などが発生した場合に、自分にも危害が及ぶ可能性があるからだ——。

メンテナンス時にプレイヤーを入れずに隔離して行うのも、もしもが起きないようにする為なのだ。それをわざわざ、しかも自分自ら行う理由がない。

つと言うことは、ゲームプログラム以外の何かを行っているとしたか考えられない。

その人物の顔には案の定、狼の覆面がしっかりとその素顔を覆い隠していた。

「……………ん？　ん、んは……………」

星が目を覚ますと、自分の手足が拘束されていることに気が付く。どうして自分が拘束されているのかは分からないが、これが危機的状況だというのは、ぼんやりとした頭でもすぐに理解することができた。

試しに手足を動かしてみるものの全く動けず、拘束具からも手足を引き抜くことができない。

(ここはどこで、私はあれからどうなったんだろう……………)

まだはつきりしない意識の中で、必死に思考を回していると、星の視界に覆面の男が飛び込んできた。

それは、紛れもない。この事件の首謀者で、しかも星の父親を悪く言った人物だ。

(あの頭……間違いない！ このゲームを悪くした悪い人だ！)

星はその男の背中を睨みながら、心の中でそう呟いた。しかし、検査台に拘束されているこの状況では文字通り手も足もでない。

つとその時。突如としてその男が振り返り、星の方へと向かってくる。

覆面の男は星を見下ろすと、徐に口を開く。

「――目が覚めたかね？」

「……………ここはどこですか？ 私をどうするつもりです……………」

不信任に満ちた瞳でそう言い放った星に、男はすぐに言葉を返す。

それは少し馬鹿にした様に不敵な笑みを浮かべ。

「いいね。その反抗的な瞳……君の母親に似て、ぞくぞくする……………」

その言葉を聞いて、なんとも言えない恐怖心から全身から汗が吹き出すのを感じて、慌てて視線を逸らした。それもそうだろう。今の状況で彼を刺激すれば、大きな検査台に拘束されている星には為す術はない。

もし、覆面の男の機嫌を損ねれば一瞬であの世行きだ――いや、あの世に行くよりも、もっと酷いことをされかねない。

「どうしたんだい？ 急に怯え出して……怖くなったのかな？」

「……………」

無言のまま視線を逸らし続ける星に、覆面の男はつまらなそうに舌打ちをすると再び話し始めた。

「いいさ、君のその強情な態度は、母親を見ていれば分かる――博士はその芯の強いところが好きだと言っていた。だが、私はあの女のそういうところが嫌いだったがね」

不機嫌そうに告げると、男は研究室の中央に置かれた星の検査台の周りを後ろ手に組みながら回り始める。

「以前会った時の君はどうやら父親の……いや、博士の事を全く聞かされていなかったようだね？ 知りたくはないかい？ 自分の父親の事を……………」

「——ッ!？」

黙りを決め込んでいた星が、その言葉を聞いて思わず口を開く。

「お、お父さんの事を……う？」

星が動揺するのも無理はない。生まれてから父親の顔を写真ですら見たことがなかったのだから……。

不自然だとは思っていたが、母親の写真は幼少期からあるにも関わらず。星の父親の写真だけは、アルバムのどこにも写ったものがないのはおかしいと感じていた。

だが、それを母親に聞くことはできなかった。それをもし聞いたら、親子としても何か終わってしまう気がしていたからだ——不仲というわけではないが、普通の親子とは少し違うというのは普段から感じていた。

楽しくお買い物や長期休暇のお出掛け、クリスマスにお正月も星には経験したことのないイベントだ。

それどころか自分の誕生日ですら、今ではお小遣いが貰えるだけの日へと変わってしまった。

正直。自分は愛してもらっていないと感じたことも何回かあったが、その度に星はそれを頑なに否定してきたのだ。

しかし、目の前の覆面の男は何かを知っている。それを聞ければ、母親との関係を変えるヒントがあるかもしれない。

覆面の男はゆっくりと頷くと、星に見下ろしながら告げる。

「そうだ、君の父親の事をだよ。……知りたいかね？」

星は表情を曇らせながらも、小さく頷いた。

この人物は信用できないが、星にとって亡き父の人柄は他人の言動によつてのみ、知ることができる唯一の情報だ。

母親にはいつも遠慮して聞けないことも、赤の他人であるこの人になら聞ける気がした。だが、一度だけ父親の墓の前で母親が口を滑らせこう言ったのだ——。

『あなたの父親は優秀な人だったのよ』と……。

星は今まで、その言葉だけを励みに生きてきた。

同級生から父親が居ないことで揶揄されることも多くあったが、そ

れにも今日まで必死に耐えてきた。

それは『自分の父親は凄いな』という何の根拠もない絶対的な自信があったからだ。しかし、目の前の男は以前、富士のダンジョンでそれを真つ向から否定した。そのこともあってか、星の中の父親像が揺らいでいるのは確かだった。

今の星にとって、少しでも亡き父親の情報が欲しいと思うのは当然のことなのだ。

覆面の男に向かい、星は困惑した表情をしながらも震える声で言った。

「……教えてください。お父さんの事を……」

「ああ、いいだろう。良く聞きたまえー!」

その言葉にしつかりと頷いて見せると、狼の覆面を被った男が嬉しそうな声を上げた。

覆面の男は大きく手を広げ、オーバーアクションで話し出す。

「私は君のお父さん——大空博士の後輩だ。博士は素晴らしい科学者だった……何を隠そう。このゲームだって、君のお父さんの研究を元に作られているのだ」

「——お父さんの研究?」

オウム返しの様に星が聞き返す。

覆面の男は今度は星の瞳を凝視する。その時、覆面の中から見えた瞳が血走っていたのを星は見逃さなかった。

「そう、君のお父さんは脳の中の記憶のメカニズムを研究していた。そして、遂に見つけたのだ、人類の進化の全てを超越した「メモリーズ」を……」

「……メモリーズ?」

星はその「メモリーズ」という聞き慣れない言葉に、少し困惑した様子で首を傾げる。

そんな彼女に、覆面の男は自分の覆面を押し潰す様に顔を覆った後に説明を始める。

「ああ、小学生の君には分からないね。掻い摘んで簡単に説明すれば、脳に記憶を記録する電波信号のコードネームだよ。人の記憶とは、五

感の無数の電気的な刺激によって記憶され、同じく電気信号によって呼び起こされる。脳の中の海馬と言う部分に特殊な電波を一定時間照射することで、人の記憶の全てを抜き取り上書きする事ができるといふ画期的な発見をしたのだよ」

その話を聞いて、ただただ首を傾げる星の頭を指差して言った。

「つまり、このメモリーズさえあれば。記憶を完全にコピーできるといふことだ」

「……それがどうして、私のお父さんが悪い人だって事になるんですか？」

星にそう尋ねられた男が不気味に笑う。

そして、俯く加減で徐に告げた。

「——それは記憶と言うものは、古代より人類の触れてはならない禁忌だからだよ……」

彼の口から出た。その『禁忌』という言葉に、星は難しい顔をして首を傾げている。

「ああ、すまないね。簡単に言うと、やってはいけない事かな？」

「どうしてやってはいけない事なんですか？」

なおも首を傾げる彼女の耳元で、覆面の男が律儀にも説明を始める。

まあ、仮にも小学生の星にとって、彼の話すことは難しいのだろう。どうしても、分からないところを聞き返す形になってしまふのは仕方がない。

「簡単なことだよ。死んだ人間は蘇らせてはいけない。だからクローンという——自分と同じ自分を作り出す技術は使ってはならないとされていた。いや、同じ自分というのは合っていて少し違うな……言うなれば、記憶を蓄積している脳が違うから、クローン技術が日の目を見れなかったと言う方が正しいだろう」

「……脳が違う？」

「そうー。脳へ記憶される信号は、日々の積み重ねでのみ生み出せる。その記憶を蓄積させている脳が違うということは、そのクローンは本体の劣化物にもならん。顔と形の似た別人——いや、人形だよ！」

星は覆面の男の言ってる意味が分からず、更に大きく首を傾げた。しかし、男はそんな星の様子など気にする素振りすら見せず熱弁を続けている。

「だが、大空博士の研究〔メモリーズ〕があれば、記憶を抜き取り、それをそのまま上書きした完璧なコピーを生み出すことができる。更に既存の人間の記憶に細工をして、思い通りの記憶を持った人間を作る事も可能になるのだよ！ また、記憶を操作できるということは、理性を持たない人間兵器なんかも容易に作り出せる……外国の人間を捕まえて、記憶を操作し。自国のスパイに仕立て上げる事も容易だ——政府の高官の記憶を操作し、戦争を起こさせる事もね……まさに自由自在。思うがままだ！ それはまさに、神に唾吐く行為にして、人類が神となる唯一の方法なのだよ！」

狂ったように笑う狼の覆面の男を見て、星は底知れない恐怖と自分の父親がそんな研究をしていたことを知ったショックとの両方が、激しく頭の中をぐるぐると回っていた。

「うっ……嘘だ。私のお父さんは優しい人で……だから……」

星は顔を青ざめながら、自分に言い聞かせるようにそう呟く。

その時、今まで狂ったように笑っていた男が今度は声を荒らげて叫んだ。

「だが！ 大空博士はあの女と一緒に。せつかくの研究のデータと共に姿を消した！」

「……あの女？」

そう呟いた星の方を覆面から覗かせた瞳が、ギロツと見据える。その直後、星の拘束されている検査台に覆い被さる様に星の顔の横に両手を突き立てる。

星はあまりの恐怖に、動けないと分かっているにもかかわらず、逃れようと体を動かしてしまう。

そんな怯えた様子の星に男が抑揚のない声で告げる。

「——君のお母さんだよ……大空博士は第一助手の僕ではなく！ 第二助手のあの女と一緒に研究機関を飛び出したんだ！ この僕とではなく！ あの阿婆擦れと!!」

「……ひっ！」

声を荒らげ星の顔に噛み付くくらいの勢いで叫んだ男に、星は思わず小さく悲鳴を上げる。

星の目の前の覆面からは、血走った男の瞳がギロリと星の顔を見つめている。

その瞳は憎悪そのものと言った感じのものだった。その恐怖から星の瞳が潤み始める。それを見て、男は再び不気味に笑いゆくりと立ち上がると、意気消沈した様子で小さく呟いた。

「……大空博士を乗せた車が、崖から転落したという事実を知った時は、僕も目の前が真っ暗になった……やはり神は存在しないと、そう思ったものだよ。だが、やっと……やっとその意味が理解できた。神が僕から親愛なる大空博士を取り上げたのは、君の存在があるからなのだ……」

「……」

（この人、頭がおかしい……さつきから変なことばかり言って……）
星が無言のまま、心の中でそう小さく呟く。その時、星の頬を男が右手でそつと撫でた。

小刻みに震えながら、目を瞑った星の耳元で男がささやく。

「——君は僕にとつての実験体であり。最良の妻になる女性だ……メモリーズを手に入れたら、君の頭の中を僕の事だけしか考えられないようにしてあげよう……」

そう告げた男のその右手がゆくりと星の体を撫でる様に、下がってきて胸の辺りで止まる。

「……君の身も心も記憶も僕に服従させる……そして……」

その言葉とともに震える星の体を再び伝う右手が、今度は星のお腹の下の方で止まる。

覆面の男は星の下腹部を撫でながら、血走った瞳で星の顔を見下ろしながら耳元でささやく。

「向こうの世界に戻ったら……ふっ、君と僕の子供を作る……博士と僕の遺伝子を受け継いだ子だ……きっと、有能な科学者になれる……」

彼の行動全てが奇行と言ってもいい。子供の星にも分かるほどに、彼の思想はぶっ飛んでいた。

「ひっ……」

(……この人……凄く危ない人だ……エミルさん！)

恐怖で怯える星のお腹を撫で回しながら男が。

「フヒヒツ、楽しみだなあ〜」

っと、不気味な笑い声を上げながら呟いた。

女子小学生を検査台に縛り付け覆いかぶさっている狼の覆面を被った男という絵面は、まさに常軌を逸しているの一言に尽きるだろう。

ウォーレスト山脈

エミルの城を出て2日。夜空を全速力で進むレイニールの背中に乗りながら、エリエ達は各々に装備を確認し、念入りに準備をしながらウォーレスト山脈へと向かう。

レイニールの背中に揺られるメンバー達の表情は真剣そのものだった。

それもそのはずだ。敵はフリーダムの中でも屈指のPVPに特化した戦闘系の組織——また事件以来。数々の戦闘で得た戦利品を、数多く所有しているのは間違いない。

いくら熟練したプレイヤー揃いのエリエ達でも、物量と装備に長けたダークブレッドのメンバーとの戦闘は、厳しいものになるのは必死だった。最悪は、今この場に居るメンバーの中から犠牲者を出すことも十分に考えられる——。

そんな緊張感もあってか、皆険しい表情でただ前を見つめていた。つとその時、一番先頭に居たデイビッドが声を上げる。

「見えたぞー！ 飛竜種の群れだ！ これ以上は飛べそうにない。予定通り陸路に切り替える！」

そのデイビッドの言葉に、エリエ達が無言で頷く。

空中での戦闘方法の少ないフリーダムで、飛竜の様な飛行できるものは難易度の高いモンスターに指定されている。

飛行手段のないプレイヤーは飛竜が襲って来た一瞬に背中に飛び移るか、その背中の翼を切り落として無理やり戦闘に持ち込むのがセオリーだ。

空中ならいつペンに向かって来る奴等も、地上なら一体ずつしか攻撃を仕掛けて来ない設定になっている。

ただそれだけ。空中で戦うのは、とてもリスクの高い敵であることは間違いないだろう。

大きな翼をためかせながら土煙を巻き上げて、地面に着地したレイニールは、すぐに小さい竜の姿に戻ってしまう。

さすがに長距離を飛び続けて疲れたらしく、その表情には疲労の色

が濃く見えた。

それもそのはずだろう。まる2日ずっと飛んでいたのだ。普段は小さい姿を維持して、少しでもエネルギーを節約していたレイニールが、巨竜の姿を維持して飛び続けるのは相当辛かったはずだ。

レイニールはただ『主を助けたい……』というその一心で、気力を振り絞ってここまで来たのだろう。

地面にへばりつくようにして荒い息を繰り返すレイニールに、心配そうにカレンが声を掛ける。

「大丈夫か？」

「はあ……はあ……はあ……なに、これくらい。どうってことはないのじゃ！」

虚勢を張りながら、レイニールが体を重そうにゆつくりと立ち上がる。そんなレイニールをカレンは抱き上げると、徐に自分の肩に乗せた。

レイニールは驚いたように目を丸くさせながら、カレンの顔を見つめた。

「……どういうつもりじゃ？」

「まだ先は長い。君は俺の肩で休んでいるといい。頭に乗るのは、星ちゃんを無事に取り戻してからだろう？」

「うむ。良く分かっておるではないか！ 気に入ったぞ！」

レイニールがそう嬉しそうに微笑むと、カレンも微笑み返す。その後、各々召喚用の笛で馬を呼び出すと、その背に跨って走り出す。

幸い。今はまだ平地が続くがこの先は急な斜面や足場の悪い場所が多く、馬などの騎乗用の道具は使えない——つというよりも。使えるけど使わないと言う方が正しいだろう。

一応希少な召喚用アイテムでワイバーンという物もあるのだが、それを使えば直ぐ様、上空の飛竜が襲い掛かって来てしまつて戦闘になる。

今は下手な戦闘は避け、少しでも隠密行動をして多くの敵の情報を収集するのが先決だ。

早々と出てきた今のエリ工達には限られた装備品しかなく。第二

陣のエミル達が補給物資を持つてくるのを待つ意外に、物量でも数でも勝る相手と戦うのは不可能なのだ。

先頭を走るデイビッドの横に馬を付けたサラザが、難しい顔をしながら声を掛けてきた。

「ここまででは予定通りね、デイビッドちゃん。で、これからどうするの？」

「そうだなー。とりあえずは城からある程度距離を置いた場所で、エミル達を待つ方向で考えてるよ。今のまま進んでも戦闘になるだろうし、戦闘になれば、明らかにこつちが不利だからね」

前を向いたまま淡々と話すデイビッドに、サラザが更に言葉を続ける。

「そう、確かにそれがいいと思うわ。……人質が居なければね……」

「……サラザさん。何が言いたいんだ？」

そう言つてデイビッドは横目でサラザを見る。

その思わせぶりなサラザの口ぶりに、デイビッドは不機嫌そうに眉をひそめた。だが、サラザはそんなデイビッドに小声で告げた。

「あなたも気が付いているんでしょ？ エリーの事よ。待てと言われて待つような精神状態じゃない……きつとあの子は单身でも敵アジトに乗り込むわよ？」

「……確かに。なら、どうする？ 何かいい案があるのか？」

そうデイビッドが聞き返すとサラザは「もちろんよ」と胸筋を左右交互にピクピク動かして答えた。

まるで生き物の様に動くサラザの胸筋に、デイビッドは顔を引き攣らせている。

そんなデイビッドに真剣な顔でサラザが告げた。

「——私達オカマイスターとエリーで偵察に出るわ。デイビッドちゃんとカレンちゃんはエミルちゃん達と合流して頂戴」

「なんだって!? ここで更に分かれるなんて正気じゃない!! 俺はその作戦は反対だ……」

デイビッドは険しい表情でサラザに目で訴えかける。だが、彼の言葉は最もだろう。ただでさえ部隊を2つに分けている最中、サラザは

そこから更に部隊を分けるといふのだ——それは到底正気の沙汰とは思えない。

そんなことをすれば、この作戦の成功率はぐーんと落ちる。いや、ヘタをすれば、全滅して終わり兼ねない。

それに出発時。イシエルも無理に攻めずに、城の辺りを偵察するようにと言っていた。

敵の方が数が多く。ここは敵の拠点の真っ只中だ——少しでも敵の配置。城の立地条件で潜入しやすい場所を把握して、それを後からきたイシエル達に教えた方が作戦の成功率を上げるという上では確実だ。

サラザは真剣な面持ちでデイビッドに告げる。

「——止めても行くわ。私とエリー、ガーベラに孔雀マツザカ。この4人で必ず星ちゃんを救い出す。誘拐前に会っていた私達にも、誘拐されたあの子を取り戻す責任があるのよ……」

「……そこまで言うならしかたない。エミル達を待つのは俺とカレンさんだけでいいです。サラザさん。エリエをお願いします！」

決意に満ちたデイビッドの瞳に、サラザは力強く頷いた。

しばらく、徒歩で向かっていると正面にまるで天を刺す剣の様にそびえ立つ山がいくつも見える。いや、それはもう山というよりも崖に近い。

剣の様に反り立つほど、縦に伸びた山には少ない足場になる渦巻き状の溝が刻まれている。

また、その傾斜は急で山と山の堺は谷のようになっており、その先には他の山へ続く橋が掛かっていた。溝そのものの道幅は大人1人がやっと通れる程度で、誤って足を踏み外して落ちてしまえばひとたまりもないだろう。

幸い。ここはゲームの世界であることもあり、風は微風程度で突然急な天候悪化に見舞われることはシステム上ありえない。

だが、どちらにしても、落ちれば死ぬという事実には変わりはない。崖下は漆黒の闇がぽっかりと口を開けていて、バランスを取るのやっとの不安定な足場が変わる。もし万が一にもでも戦闘に陥って

しまえば、有無を言わずに谷底に真つ逆さまだ……。

しかし、それは向こうにも言えること、いくらここに拠点構えているとはいえ、この断崖絶壁では地の利もクソもない。そのことから考えても、向こうもこの場所で仕掛けてくることは考え難い。

つということは、空は飛竜が飛び回り。死と隣合わせのこの山脈地帯は皮肉なことに、敵の拠点の中で最も安全な場所と言うわけだ――。

目の前にどこまでも続く山々を見て皆尻込みしていると、サラザが颯爽と前に出て勇敢にもその道に足を踏み入れた。

「皆、大丈夫よく。罨とかはないわ〜」

サラザは壁に張り付く様にして、満面の笑みで手を振っている。

その男らしい行動力と肉体からは想像もできないそのオカマ特有のしゃべり方に、デイビッドとカレンはただ呆然としている。

それとは対照的にオカマイスターの面々は、顔色1つ変えずにサラザの後に続く。

本当に肝が据わっているというか何というか……。

「……行こう。星を助けなきゃ！ こんな事してられない……」

険しい表情でそうエリエが告げると、躊躇している2人の横を通り過ぎていった。

城を出た後のエリエの表情は固く、時折瞳に涙を滲ませながら自分の手を見つめることが何度かあった。

星が拉致される直前まで一緒にいたエリエの心には、それが重くのしかかっているに違いない。根を詰めた様子の彼女を見て、カレンがデイビッドの側に来て小さな声で言った。

「あいつ、大丈夫ですかね？ 普段ならもう弱音を吐いててもおかしくないのに。城を出てからずっとあの調子で……」

「……確かに根を詰め過ぎている感じはある。でも、それは仕方ないさ。目の前で星ちゃんが敵の手に落ちるのを、手も足も出せずに見てたんだ……」

デイビッドは表情を曇らせながら言葉を続けた。

この時のデイビッドは『もしも自分がエリエと同じ状況だったら』と考えていたのだろう。彼のその表情はとても重いものだった。

「でも、あいつは強いよ……俺なら、自分を顧みずに敵のアジトに一人で乗り込んでいてもおかしくない。自分を抑える事なんてできないと思うし、それに、もしかしたらもう、星ちゃんは——」

「——デイビッドさん!!」

彼の言葉を遮ってカレンが叫んだ。

デイビッドもはつとしたように目を丸くさせ、その考えを振り払うかのように左右に激しく首を振る。

「……すまない。つい最悪の事を考えてしまった」

「無理もないです。なんて言っても、相手はブラックギルドなんですから、今までも何人も手に掛けている大悪党集団です。子供の1人くらいとを考えてしまうのは仕方ない事ですよ」

不安そうにそう呟いたカレンは、無意識に拳を握り締めている。その様子から、カレンも相当責任を感じていることが窺い知れた。

彼女としても、現場に居合わせることもできずに歯痒い思いをしているのだろうか。

そうでなければ、彼女が最も尊敬する師匠であるマスターの命令に背いてまで、こんな場所にやってくるはずがないのだから。

デイビッドもそれを見て「すまない」と再び謝罪の言葉を口にする。すると、カレンは微笑んで言葉を返した。

「いいんです。それにあの子は賢い——きつと大丈夫ですよ!」

「ああ、きつとそうだね。今の俺達にできるのはあの子を信じて、必ず連れて帰る事だけだった!」

「ええ、行きましょう!」

「そうだな、行こう!」

決意を新たにして互いの拳を突き合わせた2人は、先にいったサラザ達の後を追いかけた。

ウォーレスト山脈2

崖の急勾配の道を、微かな足場と岩肌を辿って進んでいく。螺旋状に続く道をどこまでも歩くと頂上に掛かる橋を渡る。

橋を渡ると、今度は下に降っていく長い道の先にまた橋があり、それを登るとまた橋があるという繰り返しだ。

剣山のような山とそれを繋ぐ吊り橋が幾重にも重なった場所が、ここウォーレスト山脈なのだ――。

先頭を黙々と進んでいたサラザが、突然歩みを止める。

「みんなちよつと待って〜」

そう声を張り上げたサラザが、徐に行先を指差した。

皆サラザの指差した場所に目を凝らすと、行く手をゴツゴツとした突起のある大きな岩が塞いでいた。

それは明らかに、何者かによって故意に置かれていたものだろう。何故なら、岩のその先にも道が続いているからだ。フリーダムシステムでは、破損した建造物は自己修復機能により再生する。しかし、そのシステムも完璧ではなく破損は回復できても配置の変更には対応できない。

即ち。この場合は、道を塞いでいる岩は岩という固有のデータであり。そのデータの移動のみで、システム上では破損したオブジェクトとはみなされないということになるのだ。まあ、それもゲーム運営が機能していれば、いずれ元の場所に戻されるが、こんな状況下ではそれは望めない。

大人の身長を悠々と超える大岩が、小さな足場を封じていた。

「……でもこんな巨大な岩をどうやって……?」

デイビッドは顎に手を当て、難しい顔をしている。

それもそうだろう。いくら筋肉量もレベルによって変わるとはいえ、道を塞ぐほどの巨大な岩をこの足場の悪い中で移動させられるはずがない。

こんな足場の悪い場所で変に力を入れれば、岩でなく足場を崩しかねない。

言うまでもなく落ちれば、運が悪くなくても命はないこの場所で一時的な足止めの為にそんな危険な行動を取るメリットがない。

やったのはダークブレットのメンバーの誰かであることは言うまでもないが、これほどのことができる人間が、メンバーの中にとくと考えただけで鳥肌が立つてくる。

険しい表情で考え込んでいるデイビッドを尻目に、ガーベラが岩の前に立ちはだかった。

「考えても仕方ない。要は邪魔なら砕けばいいんでしょ？」

ガーベラは鉄製のトンファアを装備すると、少ない足場で武器を構えて大きく深呼吸をした。

一瞬ガーベラの全身の筋肉が盛り上がったと思った瞬間。勢い良く右腕を岩目掛けて突き出す。

「うおらあああああああああああああッ!!」

ガーベラの雄叫びとともに岩が粉々に粉碎され、その破片が崖の下へと落ちていく。

あまりの光景に、デイビッドがぽかんとしながら呟く。

「……罨とか考えないのか？」

「罨？ あなたは臆病だね。罨さえも粉碎すればいいだけじゃない」

ガーベラはトンファアを手にニヤリと得意げに笑みを浮かべて言った。

確かに、彼等に罨なんて陳腐なものは通用しないのかも知れない……。

デイビッドはガーベラの発言に呆れながら額に手を当て、大きくため息をつく。前を歩いていたエリエが振り向いて、デイビッドに告げる。

「罨なんて気にしてられないよデイビッド。間に合わなかったら意味が無いんだから！」

「あ、ああ。そうだな……」

そのエリエの表情は相変わらず険しく、真剣そのものだった。

だが、これはおかしい。本来ならばデイビッドの前に、まともなことを口にするエリエなど今まで見たことはない。

普段なら「全く。ビビリなんだから」などと言って、間違いなく彼を罵ってくるはずなのだ。まあ、それだけ今回のことに責任を感じ。本気で取り組んでいるということなのだろうが……。

そんなエリエに、サラザが優しい口調で言う。

「エリー焦っても空回りするだけよ〜」

「サラザ……でも……」

今にも泣き出しそうになるエリエを見て、サラザは表情を曇らせている。

サラザにも今のエリエの落ち着かないという心境は理解しているつもりだ。だが、ここで焦ったところで敵の術中にハマるだけなのは火を見るより明らかだった。

何の目的かは分からないにしろ、先程の道を塞いでいた岩も何らかの目的で置かれたもの。それがこちらを阻む為か、困惑させる為なのかは分からないものの、敵は確実にこちらに対してアクションを起こしてきている。

その時、カレンの肩に乗っていたレイニールが、イライラした様子でパタパタと翼をはためかせ、サラザ達の方へ飛んできた。

「我輩は飛ぶぞ！　こんな面倒な場所で足止めされている暇はないのじゃ！　早く主を助けなければ！」

「いや、それは止めた方がいいと思うよ？」

憤るレイニールに向かってデイビッドが告げると「どうしてじゃ！」と声を荒らげるレイニールにデイビッドが頭上を指差しながら答えた。

「それはここを飛ぶ竜達だよ。君が巨大化して竜を倒してもいい。でも、その騒ぎを聞きつけ、敵が集まって来るといふのは予想できるだろう？　少数で敵の拠点を奇襲するなら、敵の懐に飛び込むまでは騒ぎを起こさない方が賢明だ」

「……むう〜」

不服そうなレイニールは膨れっ面をしながらも、仕方なくカレンの肩に戻った。

カレンはそんなレイニールの心境を察しているのか、余計なことは

口にせずに「おかえり」とだけ優しく声を掛けた。

デイビッドは難しい顔をして、眩くように自分の考えを口にする。「ここは安全だ。できれば、ここで少し体力を回復しておきたいな。今まで休みなく来ているし……このまま進んでも、戦闘になれば間違いない。こちらが不利になる」

「そうですね。俺もそう思います」

それを聞いて、後ろに居たカレンが話し掛けてきた。

突然肩を叩かれ、デイビッドが驚いた顔をしていると、それに構うことなくカレンが言葉を続ける。

「でも今のままじゃ無理です。だから俺は、この山脈地帯を抜けたらそこで休息を取ることを勧めますね。この中間で休息を取れば、敵に陸に渡る橋を抑えられる危険がある。そしたらエミルさん達と合流してもどうしようもなくなります」

「……確かに、自動修復システムが働き橋の破壊ができない以上は敵襲を受けた場合、敵は橋に戦力を集中する可能性が高い」

そのカレンの意見に、顎に手を当てながら頷くデイビッド。

だが、カレンの言うことは最もだ。全てが一本道のこの場所は敵に先回りされて抑えられたら、その場で歩みを止めるしかなくなる。空からいきたくても、多くの飛竜が飛び交う空を無事に突破できる保証もない。

まずは地に着ける場所に移動してから、休息を取る方が今の状況下では正しい判断だろう。

「そうです。別々に陽動を掛けるならこつちが囷になって、最悪はこの地帯に撤退すれば、後から来たエミルさん達と敵を各個撃破できます。撤退時はレイニールちゃんにお願いすれば、空から無事に帰還できるはず。この場所を拠点に活動しているという事は、ここに生息している飛竜をも防衛に利用しているでしょう。飛竜は周囲に入ってきた者を無差別に攻撃します。俺が敵ならみすみす殺られるような真似はしないはず。となると、飛竜に感知されない様に敵に飛行タイプ系の固有スキルを使用する者はいないと、俺は思っています……」

その的確なカレンの意見に、デイビッドは素直に感心する。

マスターと度をしていたからだろうか、カレンの意見はまるでマスターがそこに居るかの様だ――。

じつと見つめているデイビッドにカレンが恥ずかしそうに顔を逸らすと、デイビッドも慌てて顔を背けた。

足早に先を進みウォーレスト山脈の中央付近に差し掛かったその時、突如として空を飛んでいた飛竜達が襲い掛かってきた。

その突然の飛竜の行動に、皆驚きの表情を隠しきれず目を丸くさせている。

デイビッドは素早く鞘から刀を抜くと叫んだ。

「どうして、こちらから仕掛けないのに。飛竜が襲い掛かってくるんだ！」

しかし、デイビッドが動揺するのも当然なのだ――ゲーム内のモンスターはAIでコントロールされている。

そして、本来ならば、ここの飛竜達は飛行型のプレイヤーか遠距離から攻撃を加えた者を襲うよう設定されているのだ。

だが、飛竜が自発的に地上に居るプレイヤーを襲うということはあり得ないと言っている。ということは、何者かがゲーム内のモンスターデータのプログラムを改ざんしたことを意味していた。

本来の仕様とは明らかに異なる飛竜の動きに、その場にいた者達も動揺を隠しきれない様子だった。

しかし、そんなことができるのは、プログラミングに精通している人間しかない。

問題はそれが運営サイドか、外部の凄腕ハッカーか、あるいはこの事件を起こした首謀者か……このどれかである。

もしも運営サイドが意図的に行っている改ざんであれば、この事件の発生からすでに運営が関わっていることになり、ここに居る全プレイヤーの生命が脅かされことになる。

また、それが第三者であるハッカーの仕業であれば、その人物の介入がどこまでできるかで、今このゲームに閉じ込められている人間達の生命に関わる大問題なのだが、今まで外部からの接触が全くないこ

の状況でそれは極めて考え難い——つとなれば、犯人はほぼ確定している。

しかし、今は目の前から襲ってくる大きなドラゴンをなんとかするのが先決だ——。

「まともな足場でも厳しいのに今のこの状況では!!」

デイビッドは剣を握り締めながら、口を大きく開けながら向かってくる飛竜を見据えていた。

その直後、デイビッドの目の前を複数の銀色に輝く何かが高速で通り過ぎ、向かってくる飛竜を斬り裂く。

ウォーレスト山脈3

驚いているデイビッドがその何かが飛んできた方向を見ると、そこには指の先に挟んだ何かを投げている孔雀マツザカの姿が飛び込んできた。

銀色のそれはカッターの刃にも見えたが、それにしても大き過ぎる。その形状はまるでカードの様な……。

すると、近くにいたサラザが彼に声を掛けてきた。

「デイビッドちゃん大丈夫よ。孔雀マツザカはトランプの使い手なの。彼女は現実の方ではマジシャンなのよ」

「トランプ？」

デイビッドはサラザの言葉を聞いて、良く目を凝らしてその飛んでいる物体を見ると、その飛行する物体は確かに四角い形をしている。

だが、唯一普通と違うところは、その角が銀色に輝いていることだろう。

そのことをサラザに聞き返す前に、サラザが口を開く。

「もちろん普通のトランプじゃないわよ。特別製の物で角には刃が付いているの。孔雀マツザカが言うには、回転を加えることで、ナイフなんかよりも良く切れるらしいわよ」

その無理に高い声を出そうとしているサラザのオカマ口調に、眉をひそめながら小さく頷くデイビッド。

孔雀マツザカの攻撃で襲来してくる飛竜達が次々に崖の下に斬り落とされる。切り刻まれた飛竜の破片が谷に落ちていく途中で、光となってキラキラと空に舞い上がる。

その光が背景にあると、黄色いモヒカン頭に背中には大きな孔雀の羽を付けている異様な姿の孔雀マツザカのことが、何故か神々しく見えてしまうから不思議だ――。

孔雀マツザカが6体ほど飛竜を撃破する頃には、周りの飛竜もその場を離れ始めていた。

その飛び去る姿を見つめながら、孔雀マツザカが声を上げた。

「あたるしにかかれば、飛行タイプのモンスターでも余裕ザマス！」

「さすがは孔雀マツザカね〜」

サラザは孔雀マツザカの肩を叩くと、につこりと微笑んで親指を立てた。

そんな2人にデイビッドが声を掛ける。彼の表情は、今までとは明らかに違う緊迫したような感じに変わっていた。

「……サラザさん、これは明らかにおかしい。本来ならば、飛竜が地上の敵を自ら攻撃することはありえないはずなんだ。あいつらは自分の空から自分の攻撃範囲に来る敵しか襲わないはず。それが襲ってきたということは、俺達の動きがすでに敵に知られている可能性が高い。いや、そうじゃなかったとしても、この足場の悪い場所で何度も攻撃を受ければ……」

「ええ、分かっているわ。私も、早くここを離れるのがいいと思う」

デイビッドの問いかけに答えると、サラザは静かに頷き歩き始める。その後、デイビッドの提案で、一行はウォーレスト山脈を超えて少し離れた場所にある森まで休みなく進むことになった。

森の中ならば、木の陰に潜めば十分に休むことができ、敵の侵入は辺りに生い茂る草木が鳴って教えてくれる。

まあ、接近されてからしか分からないのが難点だが、視界意外はこの足場の悪い場所より遥かにメリツトの方が多し。

その場所にいた者も誰一人として、その意見に異を唱える者などいない。

それもそうだろう。攻撃を仕掛けられた今の状況では、敵には既に我々の進行はバレているということだ。それが分かった今、皆の目的は逸早くこの山脈地帯を抜けて、ダークブレッドの本拠地に乗り込む以外に方法はないのだ。

道中で何度か飛竜の襲撃を受けたものの。丸一日を費やし、なんとかウォーレスト山脈を抜けることができた。しかし、すでに空には星が輝いていて、辺りはもうすっかり日が落ちてしまっていた。

「はあく。もう、あたいくたくたよ〜」

「何言ってるのカルビ。ここはゲームなんだから疲労度はみんな同じなのよ〜？ だからそう思う、だ・け・よ」

疲れて地べたに座り込むカルビに向かってサラザは微笑みながら、人差し指を立てている。

確かにサラザの言う通り、攻撃時の筋肉量はレベルの差で多少上下はするものの。肉体的なハンデがないように全ての身長などの調整は他のステータスに追加されることでなんとか釣り合いが取れていて、それ以外は体重、筋力などの他の数値などは一定になるよう設定されている。

この世界では身体的な差は身長だけのはずなのだが、確かに見た感じ相撲取りと間違えるくらいの巨漢？巨体？である汗だくのカルビを見ていると、同じ疲労感とはいえ、どうしても辛そうに見えてしまうのも事実である。

最後の橋の前で息切れを起こしているカルビが立ち上がるのを待っていると、どこからか犬の遠吠えのようなものが聞こえてきた。

月が雲に隠れ辺りが暗闇に包まれると、林からメンバー達目掛けて何か獣のような何かが突進してくるのが見えた。

暗がりによく見えないそれを凝視し確認するなり、エリエが突如として大声を上げる。

「――獣じゃない!! 人だよ!」

「人だって!」

その言葉に驚いているデイビッドを余所に鋭い眼光を飛ばし、カレンがその人物に向かって走り出す。

急に走り出したカレンの肩にしっかりとしがみついているレイニールは「何をしているのじゃ〜!」と耳元で叫ぶ。

向かってくるカレンに両手足で獣の様に地面を蹴って突進してきたその人物が飛び掛ってきた。暗くて良く分からないが、獣の鉤爪の様な武器を装備しているように見えた。

カレンはガントレットでその攻撃を受け止めると、肩に乗っているレイニールに向かって叫んだ。

「早くみんなを連れて空に! 君なら飛竜種くらいなんともないだろ!!」

「じゃが、お前はどすする?」

困惑するレイニールがそう返すと、カレンが険しい表情のまま声を荒らげた。

「助けるべき相手を間違えないでくれ！」

「——ッ!？」

カレンはここに来る前から、それ相応の覚悟をしていたのだろう。誰よりも早く体が動いたのも、彼女の心がそうさせたのだ……。

男の攻撃を受け止めながら、なおも困惑するレイニールに向かってカレンが叫んだ。

「ここは俺がなんとかする……早く行くんだった!!」

「うむー！」

決意に満ちたカレンの横顔を見て、静かにレイニールは頷き肩から離れ、デイビッド達の元へと向かった。

「皆！ 我輩に乗るのじゃ！」

そのレイニールの声に、サラザが驚いた表情をする。

「ちよ、ちよつとく乗れって……あの子はどうするのよ〜」

「そうだ！ まずはあの敵を倒さないと！」

「あやつの伝言じゃ！ 『助けるべき相手を間違えるな！』と……今は主を助けるのが先決じゃ！」

叫んだレイニールの体は、金色に輝き大きなドラゴンの姿へと変わった。

「——早く乗れ！」

レイニールが急かすように叫ぶと、戦闘をしているカレンを交互に見て、デイビッドが「くそッ！」と苦虫を噛み潰した様な顔でレイニールの背中に跳び乗った。

他のメンバー達も複雑な顔をしながらも、渋々レイニールの背中に乗る。

確かに彼女の言う通り、今はここで確実に敵を撃破するよりも移動を最優先した方がいい。

それはカレンの決意と、ここで戦力を大きく欠くわけにはいかないという戦略的な意図があった。また、カレンだけなら上手く戦闘の間を見て逃げ出してくれるだろうという思いもあったのも事実だ。

あのマスターと行動を共にしていた彼女は、固有スキルを抜いて考えたとしても、戦闘力だけならばこのメンバーの中で上位にくるほどの戦闘力を持っている。

正直。反射神経、身のこなし、戦闘における状況判断。戦闘力だけなら、そのスペックはデイビッドよりも高いだろう。

デイビッド達に乗せたレイニールが、大空に舞い上がった。

上昇するレイニールに向かって上空の飛竜達が襲い掛かってくる。

「――邪魔をするな！・メテオフレアッ!!」

レイニールの咆哮の直後。口から炎を噴射して、近付いてきた辺りの飛竜を薙ぎ払う。

襲ってきた飛竜達は断末魔の叫びを上げ、燃えかすになって光に変わりキラキラと上空に舞い上がる。

(あのバカ、女のくせにかっこつけて……死んだら許さないんだから……)

心の中でそう呟いたエリエはその幻想的な光景の中、どんどん小さくなるカレンを見つめていた。

鉤爪武器の男

レイニールが離れていくのを確認して、カレンが口元に微笑みを浮かべた。

無事に皆を逃がすことができカレンがほっとしていると、対峙していた鉤爪状の武器を装備している細身で四つん這いで獣のような動きをしていた男が、突然不敵な笑みを浮かべる。

そして、徐々に遠退いていく仲間達の姿を見送り笑みを見せるカレンに向かって、攻撃を仕掛けてきたその人物が言った。

「ほう、仲間を逃がして自分だけ残るとは。中々見上げた根性ぜよ」
鉤爪状の武器の先をカレンに向けると、雲の切れ間から差し込んだ月の光が、その人物の顔を映し出す。

声から察して板いた通り。細身で性別は男、白い髪は逆立っており、顔には大きな傷が残っていて、年齢は20代前半といったところだろうか……。

訛りのない喋り方なのに語尾だけ『ぜよ』というその特徴的な喋り方は、土佐の英雄『坂本龍馬』を真似ているのだろうと思われる。

だが、腕の部分のない革鎧に短いジーンズというカジュアルな姿は、幕末時代に使われていた紋付袴とはだいぶ風貌に差があり、どちらかと言えば山賊や野党に近い風貌かもしれない。

「あんたの言ったことは間違っている。俺は皆を逃がしたんじゃない。お前なんて、俺一人で十分だって事だよ！」

「なんだと？ 小僧が調子に乗るんじゃないぜよ！」

その言葉を聞いたカレンが、ほくそ笑みながら男に向かって拳を構える。

「小僧か……その言葉を聞いてがぜん、俺が勝てる気がしてきた！ さあ、来いよ！」

カレンが強気に指を動かして男を挑発する。男は不機嫌そうに地面に唾を吐き捨てて、余裕の笑みを浮かべるカレンに攻撃を仕掛けてきた。

低い姿勢で地面すれすれを両手足を上手く使って突進してくる男。

男の鉤爪状の武器を、カレンはガントレットの鉄の部分でなんとかやり過ごし、直ぐ様反撃しようと拳を握り締めるが。その都度、タイミングをずらして攻撃を仕掛けてくる男に、中々反撃することができない。

表情を歪めながら攻撃を防いでいるカレンに、男がふと口を開いた。

「——おい知ってたか？ この頃PVPの設定が変更されて、通常攻撃でHPが全損する様になるようになったんだぞ？」

「——ッ!？」

カレンはその言葉を聞いた直後、驚いたように目を丸くさせ無意識の内に体が膠着するのを感じた。だが、カレンが驚くのも無理はない。本来ゲームシステム上、PVPではHPは『0』にならない。

しかし、そのシステムを解除したということは、プログラミングに長けていて、しかもハッキングを得意とする人間がダークブレットの中にも居るということ——いや、だとしてもそれは外部からの場合だ。だがもしも、ゲーム内部からメインコンピュータにアクセスができる者が居るとすれば……。

カレンの脳裏に一瞬何かが過ったが、それを払拭するようにカレンは拳を握り締め。

「はああああッ!!」

カレンは一瞬の隙を突いて地面を思い切り殴りつけた。彼女の拳の直撃を受けた直後、辺りに砂煙が上がり、たまらず男は距離を取る。「ビエ〜こりやたまげた。こんなもんが当たったら、ひとたまりもないぜよ〜」

わざとらしく、あからさまに驚いて見せている男を鋭く睨みながらカレンが尋ねる。

「おい。その話は本当だろうな」

「ああ、本当だぜよ。今から殺す相手に嘘を言ってもしかたないしな」
男がそう呟くと、カレンが更に質問をぶつける。

「システムを解除したのはダークブレッドのメンバーなのか？」

「はあ？ そんな者は俺達のギルドにはいないぜよ。それをしたの

は、政府直属の研究機関の元メンバーの男だ」

「……政府の研究機関の元メンバー？」

（——どういう事だ？ この事件は、国が絡んでるのか？）

カレンがそんなことを考えていると、男の声が耳に飛び込んできて我に返る。その一瞬の刹那に、男は基本スキルの『スイフト』を起動した。

男の体が一瞬青く光ったその刹那、爆発的に加速した男の鉤爪状の武器が襲い掛かる。

「——何をぼーつとしているぜよ！」

「なっ！ はやっ……」

一瞬で目の前に現れた男の攻撃を、既の所でかわしきれずにカレンの服を掠める。

咄嗟にカレンが後ろに大きく跳んで距離を取ると、自分の服に視線を落とす。すると、服の腹部の部分が微かに切れている。

（——俺が攻撃をかわしきれない。なんてスピードだ……）

カレンは男の咄嗟の攻撃をかわしきれなかったのが余程悔しかったのか、悔しそうに唇を噛んでいると、カレンの目の前に男が再び現れた。

一瞬で目の前に来た男は驚いているカレンの顔目掛けて、不気味に輝く鉤爪の付いた右腕を突き出した。

「どうした？ ぼさつとしてると、その華奢な体——切り刻んでしま
うぜよ！」

「なにをつ！ そうそう何度も——」

不敵に笑う男にカウンターで拳を突き出すカレン。

その時、男が突き出した右腕に気を取られていたカレンの瞳に、月明かりに照らされて輝く鉤爪が映る。

左下段からカレンの脇腹を捉えようとしてくる鉤爪の刃を、今まさに攻撃しようと腕を突き出しているカレンの今の体制ではかわせない。

「……しまっ！」

（右手の武器だけに意識を取られて、左手の方に意識が向いていな

かった！)

咄嗟に身を捻ったカレンの脇腹に刃が彼女の柔肌食い込む。

その刹那、全身を裂くような激痛がカレンを襲う。

「ぐあああああああああああッ!!」

天に轟くほどの叫び声を上げたカレン。

その声を聞いて、男はニヤリと口元に不気味な笑みを浮かべる。

全身に電気を流された様な激しい痛みが駆け巡り。カレンは苦痛に顔を歪めながらも、直ぐ様地面を蹴って男から距離を取る。

「くそっ！ やられた……」

攻撃された腹部を押さえ、自分のHPバーを確認してカレンが眩く。

強引に距離を取ろうと跳んだことにより。鉤爪に引っかかって、着ていた服の前側の上半分が裂け、そこから無理矢理さらしで押さえつけていたカレンの豊満な胸が露わになる。

「——きゃー」

小さく悲鳴を上げ、咄嗟に胸を両腕で抑えたカレンが突然のことに地面に座り込む。

それを見た男は予想外の出来事に、ニヤリと口元から笑みをこぼしている。

その直後、羞恥の中のカレンを激痛が襲い。胸を押さえたままカレンの視界が大きく歪み、彼女は苦しそうに前屈みに倒れた。

(……なんだ？ 息苦しくて視界がぼやける……こ、これはまさか!?)
円状に表示されているHPバーが半分くらいまで一気に減少していて、その円の横には人型が紫色に点滅している表示が出ている。

「はあ……はあ……毒……か……」

肩で荒い息をしているカレンを見て、男は不敵な笑みを浮かべると、ゆっくりとカレンに近付いてくる。

「ほう、これは驚いたぜよ。男の様な口調に短い黒髪……完全に男だと思っていた奴がまさか女だったとはな……」

「はあ、はあ、はあ……俺が女だからどうだって、言うんだ……?」

破れた胸元を押さえて、ふらつきながらも立ち上がったカレンが鋭く男を睨みつけた。

女だからとバカにされることが、カレンはこの世で何よりも嫌いなのだ――。

男は天を仰ぐように大声で笑い出すと、カレンに向かって襲い掛かった。

「お前が女と分かって、更に楽しみが増えたぜよ！」

そう叫んだ男は、今度は左手の武器を大きく振り被って攻撃してくる。

胸を抑えながらも、カレンは男の攻撃を右手のガントレットで辛うじて弾く。

鋭く睨みを効かせ、カレンが胸を押さえつつ右の拳を構えて男の次の攻撃に備える。

「――男だろうが女だろうが、所詮。お前はまだまだガキぜよ……」

男が勝ち誇った様な笑みを浮かべ呟く。

だが、カレンは眉毛一つ動かさない。いや、正確には彼の言葉に言い返す余裕すらないという方が正しい。

片手で胸を隠しながら、しかも毒状態で相手の攻撃を防ぎきるのには相当厳しい。その直後、今度は右手の武器がカレンの左足目掛けて飛んでくる。

「そんな見え見えの攻撃なんて――はっ!？」

攻撃を防ごうと動いた瞬間、あることに気が付きカレンはハツとする――そう。今カレンの左腕は自分の胸元を抑えていて動かせない。

もし押さえている手を離せば、カレンの胸が白昼の元に晒されてしまう。更に右手は先程の攻撃を弾いた為、もう防御には間に合わない。

それに気付いたカレンが自分に迫りくる男の右腕の武器の刃を見据えていた。

「この腕を放せば胸が……でも……」

(……師匠!?)

咄嗟に左腕で防御しようとしたカレンの脳裏に、マスターの顔が浮

かぶ。

それは一瞬のことだったのだが、カレンにはとても長く感じた……しかもそのマスターの顔が鮮明で、カレンの左腕はまるで金縛りにあったかのように動けなくなってしまう。

その直後、男の鉤爪状の武器の先端がカレンの左足を捉えた。

「……ぐッ!!」

男の攻撃がヒットしカレンはがっしりと胸を押さえたまま地面に倒れ込んだ。

鉤爪武器の男2

なんとか体裁は守り切ったカレンだったが、それと引き換えに左右の腹部には痛々しい傷跡が刻まれていた。

男は顔を覆いながらも、笑いを堪えきれないのかクスクスと声を抑えて笑っている。

そんな彼を見ていたカレンは苦痛に表情を歪ませながら、男に向かって声を荒らげた。

「なっ……なにがおかしいんだ!」

憤るカレンの声に男の笑い声は大きくなる。そのクスクスという笑いがカレンにとっては不気味でもあり、なにより不愉快だった。

しばらくして笑うのを止めた男が、不愉快そうに眉をひそめているカレンに言った。

「いやすまんすまん。どんなに男になろうとしても、お前は女だ——しかも、乙女だと思っただけだよ。それよりも、何か気が付いた事はないか?」

「……気が付いたこと……だど?」

カレンが眉をひそめ、不機嫌そうに聞き返す。

男はその質問に答えることなく、突然カレンに飛び掛ってきた。

倒れているカレンの肩を強引に掴むと、カレンの上に馬乗りになって不敵な笑みを浮かべている。

カレンは身の危険を感じて咄嗟に動こうとしたのだが、体が痺れて思う通りに動いてくれない。

(くそっ! 今度は麻痺か……でも、これで毒は……消えてないッ!)
カレンは自分の異常状態を確認すると、毒と麻痺の両方が付いている。

それは本来なら、起こりえないことだ——異常状態は原則として1つしか適応されない。つまり、毒にかかれば麻痺が上書きされ、先に掛かっていた毒は消えてなければならぬのだが……。

(なんで2つも異常状態にかかるんだ!? こんなゲーム時代はなかったのに……HPももうやばい……)

HPもレッドゾーンに突入し、カレンの脳裏をさつき男が口にしたPVP戦闘でHPを『0』にできるようになったという言葉が過る。顔を青ざめさせたカレンが慌てて暴れ出す。

「——くっ！ 離れろ！ もうやばい!!」

だが、馬乗りにされているうえに麻痺と毒の効果で体が上手く動かない。

「フフツ……何がやばいんだ？ ああ、HPか？」

男は暴れるカレンを見て、楽しそうにニヤニヤと笑みを浮かべている。

反応を楽しむように体を揺らすカレンの体の上のしかかって、男はカレンの毒の効果でHPが『1』になる直前。

ニヤリと不敵な笑みを浮かべ、カレンの耳元でそつとささやいた。

「ああ、さっきのは全部嘘。俺のでっち上げだ、安心するといいぜよ」「なっ、何だ?!? 俺を騙したのか!!」

騙されたことに相当頭にきているのだろう。鋭く睨みを利かせて憤るカレンに向かって、男がニヤツと不気味に笑い。

カレンの両手首を左手で掴むと、頭の上に合わせて強引に地面に押し付ける。

「なっ、何を……なにすんだよ!」

「——騙したわけじゃない。でも、すぐに殺された方がマシだったと思う事になるぜよ……」

なんとか男を引き剥がそうと、思うように動かないながらも身を振り鋭く睨みつけるカレンを尻目に、男は鼻歌交じりにコマンドを操作すると、アイテム内から赤いポーションの様な物を取り出す。

フリーダムでは回復アイテムは宝石という位置付けで、例外なくそれぞれ別の宝石の形を模している。そして逆に普通のMMORPGで馴染みのポーションは、毒や麻痺など武器に追加効果を付ける為のものときれている……戦闘中は武器や防具などの変更はできても、ポーションなどでのアイテムで効果を追加することはできない設定になっていた。

しかも、他のゲームと異なりポーションは武器などに使用できる

が、プレイヤーへの直接使用は不可になっていた。元々ポーション類の毒、麻痺などは装備品などに付属効果を付ける目的でのみ使用できるもので、それ以外の用途で使用する必要性がないのが理由だ——もしも使用したとしても、ポーションアイテムの効果の発動は不発に終わる。

だから男が持っているポーションを使用しても、人体には何の効力も起きないはずなのだが……先程の2重で異常状態になることもあってか、彼が何らかの方法で未知の技術を使用していることは間違いない。

それもあってか、毒と麻痺の効果で思うように身体が動かない今の状態のカレンは怯えた表情のままだ。

「なんだよ……それ……」

「ふん……今に分かるぜよ」

男はそう告げると、事もあろうか、持っていたそのポーションの身を口に含む。

しかし、カレンにはその男の行動が理解できない。本来なら武器に使う物で、飲むものではないポーションをしかも自分の体に取り込んだのだ。

この状況と彼の行動から考えられるのは、男の身体を強化する何らかの効果を起こすものということだろう。

(なんだ？ 自分で飲んだ……肉体強化系のアイテム？ いやでも、どっちにしてもポーションを飲んでも効力は発揮されないはず……)

一抹の不安とともに、動揺を隠しきれないカレンは首を傾げている。次にどんな効果があるのか、それとも何の効果もないパフォームンスなのか……。

男は笑みを浮かべると、右手でカレンの腕を抑えて、左手で頬をがっしりと掴んで口を強引に開かせる。

カレンは嫌な予感に、表情を引きつらせながら男を見た。するとその直後、男の顔がカレンの顔に迫ってくる。

男の突然の行動に、予期していなかったカレンは慌てふためく。

「なっ！ 何をするつもりだ……や、やめろ……やめてえっ!!」

カレンは迫り来る男に普段は出さないような悲鳴を上げると必死に抵抗する。だが、その抵抗虚しく出会って数分の男に、カレンの唇を奪われてしまった。すると、男の口を通してカレンの口に先ほどのポーシヨンの中身が流し込まれる。

カレンは男が顔から手を放したのを見計らって、慌てて首を左右に振って男から逃れた。

(なんで……こんな……こんな奴に……屈辱だ！)

瞳に涙を浮かべたカレンはそう心の中で呟くと、男を鋭く睨む。

男は満足そうな笑みを浮かべると体を起こす。

ほくそ笑みながら両手首を持っていた右手解いて、カレンの頬を掴んでいた左手も放しゆつくりと立ち上がる男に、カレンが瞳を潤ませながら叫ぶ。

「俺の……俺の初めてが、こんなかたちで……絶対に許さねえー！
絶対殺してやるからなッ!!」

殺意を剥き出しにしているカレンに、男は少し呆れながら言い放つ。

「たかが仮想世界でその反応とは、情けない奴ぜよ。お前は小学生なのか?」

「くッ! この野郎! 言わせておけば——」

(——なっ、なんだ? 体の感覚が完全にない……)

憤っていたカレンは突然襲って来た体の明らかな異変に気が付く。

その原因は、明らかにさつき口移しで無理矢理飲まされたポーシヨンであることは間違いない。だが、何よりさつきまでであったはずの全身の感覚が完全になくなっている。

しかし、全ての感覚がなくなったわけではなく。手足を動かすという脳の信号だけをカットされ、地面に寝ていると肌から伝わる感覚——触覚は先程より鋭くなっている気がする。だが喋れているということ、動かす感覚がなくなっているわけではない。

簡単に言うと、首から下の体を動かすという感覚だけが完全になくなっているのである。

カレンは困惑した表情をしていると、地面に横たわるカレンを上か

から見下ろして、男が不気味な笑みを浮かべ。

「もう気付いたようだな……そうぜよ。お前の体は完全に死んでい
る」

「何をした!? 何をしたんだ。答えろ!!」

憤るカレンに、男は指先で持った空のポーションの容器をちらつか
せながら上機嫌で説明を始めた。

「これは女のプレイヤーにしか効果がない特別なポーションぜよ。俺
が元研究者の男に作らせた特注品——これを飲むと筋力の数値は
『0』になり、顔以外の筋肉的なデータの反応のみを完全に遮断するぜ
よ。更に体が外からの刺激に敏感になるぜよ。まあ現実世界の媚薬
と言ったところだな……」

「……媚薬」

彼の説明を聞く上で、男も同じものを飲んで効果が現れなかったの
はその為だったのだ。

「ゲーム情報に意図的にバグを発生させる。奴が言うには、ゲームの
プログラミングには多少の細工ができるが、プレイヤーのプログラム
は個々に切り離されていて、ゲーム事態のセキュリティが堅く、プ
ログラムによる内部データの変更ができないらしい。が、逆に個々に
プレイヤーのデータそのものに、ウイルスを感染させる事は容易にで
きるらしいぜよ。もちろん。一時的で、異常状態や負傷と同じく風呂
に入ると治るらしいがな」

説明していた男が突然、カレンの顔に自分の顔を近付けた。

カレンは体が動けば今にも噛み付きそうな勢いで、男を鋭く睨み付
けている。

「どうして頭から下だけか……分かるか?」

「そんな事知るかツ!!」

そう声を荒らげるカレンの頬を撫でると、何かを企んでいるように
ニヤリと不気味に笑う。

「それは表情が見れなくなるからぜよ。男女の行為の最中に、表情が
変化しない女はつまらんぜよ……」

「なっ、男女の行為だとツ!? それは俺を……」

男の言葉を聞いて、カレンの表情が一変する。これから男が何をしようとしているのか悟ったのか、青ざめた顔で怯えた瞳を男に向けるカレン。

それもそうだろう。今は体が動かず、胸が露わになった状況で地面に横たわっている今のカレンの状態では、抵抗したくても抵抗できない。

この絶体絶命の状況下で、カレンは男から目を逸らした。

(……こいつらは人のアイテムを奪い。このログアウトできない状況を利用して、人殺しも平気でやる連中だ。このままじゃ俺も……)

カレンがそんなことを考えていたその時、男の手がカレンの胸を鷲掴みにする。

「……きやつ！ な、なにすんだ！ 放せ馬鹿野郎!!」

悲鳴を飲み込み、虚勢を張って見せるカレンの耳元で男が告げる。

「どうしたぜよ？ 別にここは仮想世界でお前の体も作りもんだ。互いに楽しもうぜよ……」

「……嫌だ！ 俺は……俺は……そんな事をするぐらいなら死んだ方がましだ！ 殺すなら殺せッ!!」

首を左右に振り涙ながらに叫んだカレンの首筋を、鉤爪の先が浅く刺さる。

「ぎあああああああああッ!!」

その直後、カレンは凄まじい叫び声を上げた。

傷口はまるで針で刺された程度なのだが、顔を真っ赤にして額から汗が滴り落ちる。

外傷の割に彼女の叫び声はまるで、刃物で腕を斬り落とされたかと思うほどの大きさだった。

男は不機嫌そうに眉間にしわを寄せながら、低い声で言った。

「殺してもいいけどよ。お嬢ちゃんは今分かってるのか？ 今のお前は体が刺激に過敏になってるぜよ。こんな状況でこいつで体を貫けば、通常の10倍は痛いぞ？」

男は鉤爪状の武器をチラつかせると、カレンの顔はたちまち顔面蒼白に変わる。

無理もない。今の攻撃の苦痛は、それだけカレンの心に深く突き刺さっていた。

死ぬ恐怖もあるが、それ以上にあの痛みで針を刺した程度——それが体を貫かれる痛みは想像を絶するものだ。

狂気に満ちた表情で自分を見下ろす男に、カレンは底知れぬ恐怖を感じていた。

鉤爪武器の男3

今までもマスターとの旅の中で、幾度となく強敵を相手にしてきたカレンだったが、今回ほど絶望的な状況は初めてだ。

こうなってみて初めて、自分がどれほど己が師匠に甘えてきたのかを思い知らされる。危機的状況下の今でさえも、居ないはずのマスターの姿が脳裏にチラつく。

(……師匠。俺は……俺はどうすれば……)

瞼を閉じて思考を回すと、脳裏にマスターの姿が鮮明に浮かんできて告げた。

【カレンよ。皆を任せる】

脳裏に蘇る鮮明なマスターの姿に、カレンは覚悟を決めた。

瞼を開くと、カレンは震える声で男に言い放つ。

「——お、俺の、体を……好きに、すればいい……だ、だが、俺はそう簡単には、お前に心までは屈したりしない！」

悔しそうに唇を噛み締め横を向いたカレンのその瞳から涙が地面に流れ落ちる。

無言のまま横を向いたカレンを見下ろして、男がニタリと薄気味悪く笑う。

そう。カレンは自分を犠牲にしても、仲間達の為にこの場でこの男を足止めし”少しでも時間を稼ぐ”という方法を選択したのである。

男はカレンのその言葉に満面の笑みで答える。

「口調はあれだが、体はいいんだ。最初からそういえば痛い思いをしなくて良かったんだ。どうやら生娘のようだが、俺がお前も楽しめるようにしてやるぜよ……」

薄気味悪い笑みを浮かべながら男は、カレンの破れた服とズボンを脱がす。

「うっ……ぐすっ……師匠」

下着姿ですすり泣きながらカレンがそう小さく呟いたその時、黒い光りが目の前を通り過ぎ、カレンの上に覆い被さるようにしていた男

の体を突き飛ばした。

「ぐはッ!!」

男は地面を土煙を上げながら勢い良く転がっていく。

「——やれやれ……全く世話が焼けるとはこの事だ……」

そこには白い髪を後ろで束ね、黒い道着に身を包んだ体格の良い男性の姿があった。

カレンは目の前に立っている人物の後ろ姿を見て思わず叫ぶ。

「——師匠ッ!?!」

その声に振り返ったマスターが、地面に倒れたまま潤んだ瞳を向けているカレンに微笑んだ。

マスターはカレンの体を起こすと、自分の着ていた道着の上着をそつと肩に掛ける。

「……カレン。泣いておるのか? ……そうか、少しここで見ておれ!」

「——な、泣いてなんて……ないです! ……ですが……師匠、どうしてここに?」

「可愛い弟子の窮地に駆けつけるのは、師匠として当然のこと……それに意味などあるまい」

マスターはそう言い残し、ゆっくりと立ち上がると怒りに満ちた瞳で土煙が上がっている方を見据えた。

しばらくして土煙が収まると、男が鋭い眼光でマスターのことを睨んでいる。まあ、お楽しみのところを邪魔されれば憤るのも無理はないだろう……。

互いに鋭い眼光を飛ばしていると、男の体が一瞬青く光った。

その直後、拳を構えたマスターの体が小声で眩く。

「ほう。あやつはスイフトか……ならば、タフネス!」

すると、マスターの体も一瞬だけ赤く光った。

それを見て男が両手を地面に着くと凄まじい勢いで、マスターに向かって突っ込んで来る。

「誰だか知らねーが。俺の楽しい時間を邪魔しやがって……細切れにしてやるぜよ!!」

「——ふん。無抵抗な者を欲望のままに襲うなど、すでに人にあらず……恥を知れい!!」

マスターの拳が黒いオーラに包まれ、飛び込んできた男の攻撃をマスターが迎撃する。

互いの攻撃がぶつかり、その一瞬の間を見てマスターが拳を握り締めめた。

「……………歯を食いしばれよ?」

これほど彼が怒りを露わにしたのは今までにないだろう。それだけ、今回のことに憤りを感じているのだろう。

まあ、下賤な輩に愛弟子を襲われ、しかも辱めを受けそうになった場所を目の当たりにしたのだ。今の彼の頭は沸騰するほどに憤っているはずだ。

マスターの拳が男の顔面を捉え、再び男が地面を転がっていく。

一瞬のことで良く分からなかったが、マスターの腹部にも、男の武器で傷付けられたと思われる大きな3本の切り傷が刻まれていた。

それを見てカレンが声を上げる。

「師匠! 早く解毒を! 奴の刃には毒が!!」

「……………案ずるなカレン。リカバリー」

マスターがそう口にする、拳の黒いオーラが消え代わりに温かい光がカレンを包み込み異常状態が完全に回復する。

驚いたような表情をしているカレンに、背中を向けて立っているマスターが徐ろに口を開く。

「僕の固有スキル『明鏡止水』の最大の欠点は回復を封じられること……だからこそ毒は天敵だ。しかし。この僕が、それへの対策を持っていると思うか? カレン」

そして、ゆっくりとカレンの方を振り返ったマスターが微笑みながら告げる。

その直後、再びマスターの拳が漆黒のオーラを纏う。

「案ずるでない。お前は安心して見ておれ!」

「——は、はい……………師匠……………」

カレンは久しぶりを見る自分の師の姿に、感極まって思わず涙が溢

れ出す。

無理もない。マスターはカレンに街で待機しているように言っていたにも関わらず、彼女はその命令を無視してダークブレットのメンバーと今まさに戦闘を行っていた。

本来なら見捨てられても文句は言えない状況なのだが、マスターは憎まれ口一つ言わずに自分を守る為に戦ってくれている。これで感極まわらない方がおかしい……。

そんなカレンの元に歩み寄ると、マスターは優しくカレンの頭を撫でる。

その直後、土煙の中から男がマスターに跳び掛かってきた。

「半裸の老人が何を出しやばってるぜよ！ その女はもう俺の物なんだよッ!!」

「はっ……師匠！ 後ろです!!」

男が襲い掛かったのを見て、咄嗟に大声で叫ぶカレン。

マスターは無言のまま「分かっている」と一言呟くと叫んだ。

「……うるさいぞ獣が!!」

その刹那、マスターは背後から来る男を振り返ることもせず、右足で吹き飛ばす。再び盛大に地面を転がる男。

だが、今度は上手く体制を整えすぐに武器を構え直す。

身を翻したマスターが鋭い眼光で転がる男を睨むと、トレジャーアイテムの『デーモンハンド』を装備した。

全身から放たれるその殺気から、相当彼が怒っていることが分かる。

辺りにはピリピリとした空気が流れ、静かに手にはめたグローブを握り締めてマスターは男に低い声で告げた。

「——儂の弟子を散々おもちゃにしてくれたようだな………容赦はせんぞ?」

「何を言ってるぜよ。女をおもちゃにして何が悪い……女なんて所詮は、男を楽しませる為の嗜好品に過ぎんぜよ!」

鋭い眼光で拳を構えるマスターに、悪びれる様子もなく笑いながら男が言い放つ。

マスターは怒りに震えた声で小さく「儂とお前とは相容れぬようだ……」と呟くと、拳に闇属性の黒いオーラを纏った。

次の瞬間。一陣の風の如く、鬼の様な形相で地面を蹴って瞬時に距離を詰めたマスターが男に襲い掛かる。

男は攻撃が当たると同時に両手足で地面を蹴って素早くかわし。その後、獣の様に手足を巧みに使って四足歩行で地面を自由自在に駆け回ると、マスターに向かって飛び掛かってきた。

マスターはその攻撃を紙一重でかわすと、男も再度地面を蹴って何度も襲い掛かる。

カレンはそんな男の攻撃を見て、自分が男にやられた時のことを思い出していた。

（そうか！ あの時、一瞬遅れたのは俺が遅かったからじゃない……二本足で蹴るより、両手足を使った四本で蹴った方がシステム上は速いんだ!!）

カレンのその推測は当たっていた——現にマスターは男の攻撃をかわしてはいるものの。なかなか反撃に転じることができず防戦一方になっている。

しかし、マスターも反撃をする気がないわけではない。

スピードが速すぎて攻撃の体制に入るよりも先に、男がその場所を移動してしまうのだ。だが、それはマスターが劣っているというわけではない——。

今のマスターは上半身の装備をカレンに貸していて、それによってマスター防御力がぐっと下がっている。

しかし、それは生身の肌を曝け出しているからだ。システム上は防具は装備されていた道着の重量は軽減されてはいるものの、スピードは向こうに利がある。

フリーダムでの基本スキルは、スイフトとタフネスの2種類——スイフトはスピード、攻撃速度を上昇させ。タフネスは防御力、パワーを上昇させる。

マスターはタフネスなのにもかかわらず、今、戦闘中の男はスイフトを使用し、尚且つゲームシステム上予想していなかった両手足で地

面を蹴る、四足戦術を使っている。四足歩行での加速——それは言うなれば、バグを利用したチートの様なものだ。

道着という軽めの装備にグローブを装備したことで、マスターも重量軽減による攻撃速度、スピードの追加ボーナスがあつたとしても、チートを使用している相手との戦闘は厳しい。

度重なる男の攻撃を全て紙一重でかわすマスターに男の声が響いた。

「どうした？ 老化で足腰が覚束なくなってるぜよッ!？」

「フンッ、話している暇があるとはな……お前の攻撃など、そよ風ほどにも感じぬわ!」

そう言い放つマスターの涼しい表情から、その言葉がはったりではないことが窺い知れる。

ただ、動きに慣れたマスターも時折男にフェイントのような攻撃の真似事をするくらいで、有効打を打つ素振りすらない。それはまるで、時間を稼いでいるかのようにも見えた。

鉤爪武器の男4

そんなマスターに痺れを切らした男が、体制を整える為一瞬マスターから距離を取り、座り込んでいるカレンを見てニヤリと不気味に笑う。

その刹那、地面に転がっている石を拾い上げると、素早くカレン目掛けて投げた。

「——なっ!?! カレンツ!!」

「ふふっ……弱いやつから片付けるのは戦闘の常識だろ? あの女の残りHPは1……つまり、あの石ころ一つでゲームオーバーぜよ!!」

カレンは自分目掛けて一直線に飛んでくる石を見つめ一瞬で顔を青ざめさせる。

それもそのはずだ。今は『リカバリー』で回復した異常状態だが、毒の効果によってカレンのHP残量は『1』しかも、マスターが戦闘に割って入ったところで戦闘は継続している。

フリーダムのゲームシステム上。PVP中の回復アイテムの使用は不可で、それに加えて、最小ダメージは0ではなく1なのである。

だが、所詮は石ころ。弓などの飛び道具があるフリーダム内ではさほど速くはない為、見えていれば容易に見切ることが可能。プレイヤーがかわせばいいのだが、今のカレンには防御どころか、蓄積した疲労から指一本動かすことすらできない……。

「どうする! 咄嗟に女を庇えば、俺がお前を背中から仕留め! 見捨てれば、お前の大事な女を失う! さあ、どっちを選んででもジ・エンドぜよ!!」

男は雄叫びを上げた直後、マスターがカレンを助ける為に背中を見せると踏んだのか、地面に両手を着いていつでも攻撃を仕掛けられる体制に入った。

彼の体制を見るに、先程の言葉はハツタリではなく。カレンを助けに入ったマスターの背後から一気に勝負を決めるつもりでいるのは間違いない。

だが、マスターは口元に微かな笑みを浮かべ呟く。

「なに……ならば、この場を動かなければ良いだけのこと……」

徐に両手を左右に突き出すと、マスターは右手をカレンに向かう石に向け、左手を男に向けた。その直後、マスターの両手から圧縮された黒いオーラが放出され、カレンに向かう石と男を撃ち抜く。

石を粉碎して、驚き目を見開いて座り込んでいるカレンの直ぐ側を黒いオーラが横切り、マスターは虚を突かれ呆然としている男にも右手から同じように黒いオーラを放つ。

「——なにっ!? ぐあああああッ!!」

咄嗟にその攻撃をかわそうとしたものの、かわしきれずに男の右腕が吹き飛んだ。

男が右肩を押さえて悶え苦しんでいるのを冷たい目で見下ろすと、マスターは無言のまま身を翻し、カレンの元へと駆け寄っていく。

カレンは呆然としながら一点を見つめ、その場に座り込んでいる。放心状態のカレンの肩を掴んだマスターが。

「カレン! しっかりせんか!」

「……あつ、師匠。俺は助かったんですか?」

「ふっ、そんな冗談が言えるなら大丈夫そうだな……」

カレンの返答を聞いてマスターは微笑みを浮かべる。

その時、突如として星が煌めく上空を雲とリントヴルムが高速で通過していく。それを見てマスターは笑みを見せると、カレンの耳元でそっと告げる。

「カレン。もし怖いなら目を瞑っておれ、もう時間を稼ぐ必要もない。一気に終わらせて帰るぞ! カレン」

「……時間稼ぎって? 帰るってどういうことですか?」

マスターはその間に答えることなく優しく微笑み返すと、カレンの頭にポンッと手を置いて身を翻して男の方を見据えた。

男は失った腕を抑えながら、マスターを憎らしそうに睨んでいる。そんな男を見据えるマスター。

互いに物凄い殺気を放ち鋭い眼光を向けると、同時に咆哮を上げて天を仰ぐ。

「——うおおおおおおおッ!!」

「——はあああああああああッ!!」

男の体は巨大化し、体中から毛が生え巨大な狼の様な姿へと変わる。口からは牙が剥き出しになり、失った腕も再生し、その赤い瞳がマスターを見据え荒く息を繰り返している。

顔を見ずに全身から盛り上がった筋肉と剛毛に覆われた姿だけを見ると、それはまるでゴリラの様なも感じた。

咆哮を上げたマスターも、全身から金色のオーラが炎のように噴き上がる。

「このクソがッ! この『獣人化』のスキルで八つ裂きにしてやるぜよ
おおおおおおおッ!!」

「フン。駄犬如きが、格の違いも分からんとは……少々、きつい躰が必
要らしいな!!」

2人は同時に攻撃を仕掛ける。

空中で互いの攻撃が激しくぶつかると、ガキン!という金属音が辺りに響き、空中で男の鉤爪状の武器が折れてガラスの様な光となって粉々に砕け散った。

飛散した光りを、驚きを隠せないと言った表情の男が目を見開く。

「なっ、なに!?!」

「……儂が本気で戦って勝てぬ者などおらぬわ! これで終わりだ
!!」

驚いている男の腹部にマスターの拳が無数に突き刺さり、男の体が
後方に勢い良く吹き飛ぶ。

その直後、マスターの体を纏っていた金色のオーラが消え、今度は
後ろに向けて突き出した拳から黒いオーラを噴射しその勢いで空中
を高速で移動する。

凄まじい勢いで飛ばされる男の背後に回り込んだマスターの体は
再び金色のオーラを纏い。

男の腹部に鋭い蹴りを入れ、男の体をまるでサッカーボールでも蹴
り飛ばすかの如く軽々と吹き飛ばす。

その衝撃で勢いを増して飛ばされる男を、今度は両手から黒いオー
ラを放出して空中を飛びながら追尾するマスター。

2人はウオーレスト山脈の谷の真上までくると、マスターは狙い澄ましたかのように飛ばされる男の顔を右腕で鷲掴みにする。

「——お前の様なクズは一度死んで……転生でもして人生をやり直せッ!!」

マスターがそう叫んだ直後、辺りを照らし出すほどの黒いオーラを放出して、男を谷の奥底へと向かって吹き飛ばした。すると、男は断末魔の叫び声を上げながら、真っ逆さまに谷底目掛けて消えていった。

マスターは上空で黒いオーラを放出しながらホバリングすると、男の徐々に小さくなる悲鳴が消えるまで黒く口を開いた谷底を見つめていた。

冷たい視線を浴びせると、マスターは地上に降り立つ。

しばらくして、カレンの元に戻ったマスターは、俯き加減でいるカレンに向かって言葉を掛ける。

「遅れてすまなかった……少し手間取ってしまった。大丈夫だったか？ カレン」

マスターが優しく微笑みながらそう告げると、カレンが潤んだ瞳でマスターを見上げた。

すると、たえようとしていた涙がいつぺんに押し寄せ、カレンの頬を止め処なく流れ落ちる。

「……師匠、申し訳ありません。俺は……待てと言われたのに……勝手に動いたうえにこんな……こんな失態を……もう、なんて謝罪すればいいか……俺は……」

カレンは止めどなく溢れる涙で顔をくしゃくしゃにしながら、声を押し殺すと肩を震わせて俯いてしまう。

今のカレンには、マスターにどういう顔をすればいいのか分からないのだろう。だが、それも無理はない話だ。さつきカレンが言ったように、ボイスチャットでマスターは『待つように』と言われていたのだから。

しかし、星を捕らわれている以上。事態は急を要していた。だが、それは急を要していただけに過ぎず。戦力的には圧倒的に不利な状

況だったことは理解していた——本来ならば、マスター帰りを待って動くべきだったのだ。何故なら、彼は以前にもこの組織を壊滅寸前まで追いやった張本人なのだから……。

カレンは涙を流し、俯き加減にマスターの言葉を待っている。いや、言葉ではなく行為かもしれない。だから俯き加減で自分の頬をマスターの手が打つのを待っている自分がいた。

だが、それも当然だろう。先走って上手く行けば御の字だったが、実際は違う——先走った上に敗北し。あまつさえ、体の自由まで奪われたのだ『折檻』というかたちで、これを叱責されるのは当然だろう……。

その直後、マスターがカレンに向かって右手を伸ばす。カレンは覚悟したように瞼を強く瞑った。

伸ばしたマスターのその手がカレンの頬に触れ、その後、その頬を優しく撫でる。

カレンは驚きのあまり声を失う。そして次の瞬間、咄嗟に彼女の口から出た言葉は「……殴らないのですか？」だった。

驚きを隠せない表情で目を丸くさせているカレンの様子に、マスターは小さくため息を吐くと。

「——ならば、殴ってほしいのか？」

つと、聞き返す。

カレンは無言のまま、困惑した表情を浮かべている。

はなから殴られて当然であり。そうされると思っていた彼女にとつては、マスターの取った行動は信じ難いものだったのかもしれない。

まだ、突然頬を打たれるのではないかとビクついているカレン。

明らかに落ち着かない様子のカレンに向かって、マスターが更に言葉が続けた。

「カレン。お前が1人で残ったのはなぜだ？」

マスターの不意のその言葉に、直ぐ様俯いたままのカレンが答える。

「……俺のおごりです。1人でなんとかできると思ったので……」

「いや、それは違うな。お前は今後の戦闘を視野に入れ、戦力の低下を最小限に抑えたのだろうか?」

「いえ、違います!」

カレンがマスターの顔をまじまじと見つめ叫ぶ。

すると、大きく声を張り上げ「兵は詭道なり!!」と突如としてマスターが叫んだ。

「敵と対する時、優秀な将は常に敵の裏をかくものだ——お前は相手を油断させ『これから逆転』する事になっておったのだろうか? それを今回は、儂が先に倒してしまった。ただそれだけのことよ……」

そう告げて、豪快に笑うマスター。

(……師匠。俺を気遣って……ありがとうござます)

カレンは心の中でそう呟くと、無言のまま小さく頭を下げた。

マスターはそんなカレンの体を軽々と持ち上げる。

「ひゃっ! しっ、師匠ツ!」

思わず変な声が出てしまったカレンをマスターは驚いたようにじつと見つめる。

カレンは赤面しながら小さく告げた。

「……じ、実は。あの男に変な薬を飲まされまして、その……体が敏感になってしまってるので……」

耳まで真っ赤に染めながらぼそぼそと聞き取れないくらいの声で言ったカレンに、マスターが微笑みながら笑う。

「はははっ! そうか、それはすまなかつたな! カレンも女になつたと言う事か!」

「なっ! 俺は元々女です!」

マスターは膨れっ面をするカレンを腕にしっかり抱きかかえると。

「そうか、そうか」

つと、まるで子供をあやすように微笑んでいる。

カレンは不貞腐れた様に更に頬を膨らませてそっぽを向く。その後、マスターはゆっくりと歩き出す。

「それでは帰るぞ!」

「えっ? 本当に帰るのですか!?! 他の皆は!?!」

鳩が豆鉄砲を食ったような顔でぽかんと口を広げているカレン。

だが、彼女が驚くのも無理はないだろう。先程の戦闘を見てもマスターの戦闘力は、他者のそれとは比べ物にならないくらいに高い。

その彼が救援にいつてくれれば、これ以上心強い味方はいないのだが……。

「馬鹿者！ お前は動けぬ。儂も『明鏡止水』を使った以上は明日まで再使用できん。こうなれば、足手纏にしかならんだろう。後は仲間を信じる！ 良いな？」

「うう……はい」

表情を曇らせながらカレンはマスターの胸に頭を押し付ける。

マスターの鼓動が不思議とカレンの心が落ち着くのを感じていた。肌から伝わるマスターの体温もとても心地いい――。

(……師匠。一週間くらいなのに凄く久しぶりに感じる……薬の効果のせいか、いつもより師匠を強く近く感じて……皆には悪いけど悪くない……もう少しこうしていたいなあ……)

カレンはそんなことを心の中で思いながら、自分を抱えながら歩くマスターの顔をいつまでも見つめていた。

侍の魂

ダークブレットのアジトに向かい空を飛ぶレイニールの背中で、エリエが不安そうに眉をひそめている。

まだ深い闇に包まれている空を高々度で飛行していると、雲の上は遮るものもなく。雲を構成する白色の粒子状の結晶と、無数に煌めく星と大きく浮かぶ月が寄り添うように優しくレイニールの黄金の体を照らしている。

だが、そんな幻想的な光景を前に、橋の所に残してきたカレンのことが気がかりで仕方なかった。

橋の前に現れた男は見るからに不気味で、しかも不可解な動きをしていた。それは移動速度に特化した固有スキル持ちのエリエだからこそ気が付いたことだ。

「……あいつ。大丈夫かな?」

いつもは喧嘩ばかりしているエリエとカレンだが、どんなに喧嘩していても仲間だ。やはり、彼女のことを気になるらしい。

残してきたカレンを気にかける様に、心配そうに後ろを振り返るエリエの肩に手を置いてデイビッドが微笑む。

「大丈夫。カレンさんは強い……それは、戦ったお前が一番よく分かっているだろう?」

「そうだけど……」

それでも表情を曇らせているエリエに、デイビッドが険しい表情で言葉を続けた。

「俺達の目的は星ちゃんの奪還だ。今はあの子を助け出す事だけに集中しないとな」

「……うん。分かっている」

小さく返事をするエリエの、頭を撫でながらデイビッドは笑みをこぼす。だが、デイビッドもカレンのことを気にかけていないわけではない。

いや、おそらくここに居るメンバーの中で、彼が一番彼女のことを気にしていただろう。

サラザ達を男と仮定しなければ、本来あの場面で一番に残るべきだったのは、男であるデイビッドだった。そう彼は思っていたのだから……。

どんなに悩んでも、胸にモヤの掛かった様なこの違和感が解決することはない。今はカレンの去り際に言った『助ける相手を間違えるな』この言葉に従って星を逸早く救出することが最優先だ。

2人会話を終えると、静かに前を向いた。

本来ならば飛竜の群れが飛び交っているはずなのだが、襲われたのは最初だけで今は視界に捉えることもできない。

いくら高々度とはいえ、レイニールが飛べるのはシステムでのフィールド限界の境界線領域まで……もし強引に振り切ったとしても、本来ならば雲の下にいる飛竜が何体かの感知範囲に引っ掛かってもおかしくはないのだが、そんな様子が一切感じられない。その感じがとても不気味で、メンバーに幻想的な雰囲気を楽しむ余裕などは全くなかった……。

すると、静寂を破る様に突然サラザが声を発した。

「……おかしいわね。さっきまでうるさかった飛竜達が完全に消えたわ」

「そうですね。これは、やはり何らかの操作をされたと見て間違いないですかね？」

それに答えるように、難しい顔をしているデイビッドが言葉を返す。

確かに急に設定されているはずのモンスターが消えるというのは、何者かの操作があると考えるのが正しい。しかし解せないのは、相手はこちら側に有利になる改悪をしているというところだろう。

本来は空は防衛の要。しかも、エミルはフリーダムの中でも武闘大会で何度も優勝する腕前の持ち主。

それだけではなく、エミルが大会優勝者にしか与えられない特別なアイテムやフリーダムで珍しい飛行手段であり、強力な攻撃手段でもあるドラゴンを多く所有しているのは調べればすぐに分かる情報だ——システムを改変するくらいの能力を持っている人物が、そんな

簡単なことを知らないはずはない。

つとになるとこの場合は何らかの理由で、飛竜を消したと考えるのが妥当なところだろう。

それが攻撃を仕掛ける為なのか、それとも意図的な場所へと誘導する為なのかは分からない。だが、これは逆にチャンスだ——当初の計画では陸路を進むしかなかったが、今なら上空から敵のアジトに一気に侵入が可能だ。

この場にいる全員がそれは分かっていた。

それもそうだろう。こんなチャンス、次はいつ訪れるか分からない。

罨という可能性は捨てきれないものの『この千載一遇の好機を逃す手はない!』突如としてデイビッドが声を上げる。

『どういう意図があるかは分からないが、これはチャンスだ! この機に乗じて一気に敵の懐に飛び込もう!!』

彼の言葉に、皆決意した表情で静かに頷いた。

その提案に誰も反対する者など居ない。何故なら、デイビッドの強攻策とも取れる意見はダークブレットのアジトに乗り込む時に、すでに皆の心の中にあつた考えだったからだ。

高度を下げて突撃に備えていたその時、レイニールの焦りを隠し切れない声が響く。

『皆! 下を見ろ! 物凄い数の敵が弓を構えているぞ!!』

『——ッ!?!』

レイニールの背中から地面を覗き込んだ全員が思わず声を失った。

当然だ——前方の地面には数百の敵が弓を構え、降下してくるであろうレイニールを待ち構えている。どうして今まで発見できなかったのか、不思議なくらいの大隊だ——。

その理由はすぐに分かる。気が付かなかったのではなく、気が付くはずがなかったのだ。

何故なら、その兵隊達の後ろにある青い複数の魔法陣から、敵がぞろぞろと出現していたからである。

おそらく。敵は奇襲に備えて用意していたトラップのだろう。地

面に青く光る魔法陣は、今もなお敵を吐き出し続け、その数はねずみ算的に膨れ上がっていく。

その光景を見ていたデイビッドが険しい表情で静かに言った。

「——レイニールちゃん。もっと高度を落としてくれ……俺が降りて、敵の注意を惹きつける……」

「なっ、何言ってるのよ！ バカじゃないの!? あの数を相手に1人でどうするっていうの!?!」

真っ先に声を上げたエリエが、その提案を否定した。

だが、デイビッドは険しい表情を崩さぬまま、腰に差した刀を握り締めて。

「このままではカレンさんの方にまで敵の手が及ぶ可能性がある。誰かが敵の気を惹かないと、後方に残してきたカレンさんが危ない!」
「……でも」

「それに、この中で俺が最も防御力の高い鎧だ。俺以外、この高度から飛び降りて、無事でいられる保証はない!」

デイビッドはそう言って、自分の侍のような甲冑を叩いた。

確かに彼の言う通り。ゲームシステム上では、防御力が落下ダメージ以上ならば、HPの減少はない。しかし、逆にそれが下回っている場合は、有無を言わずHPが『0』になり死亡する……。

言うなれば、デイビッドのこの主張は全く根拠はなく、必ず上回っているという保証もない。その場しのぎのハッターに過ぎなかったのだ。

だが、デイビッドの言う通り。この大群が進行してカレンの元に行くような事態だけは避けなければいけない。

また、全員で相手をするという方法もあるが、その場合は敵に敵襲を知られてしまい、救出対象である星を他の場所に移される危険があった。

そんなことになれば、本末転倒もいいところだ。その為、この場では誰かが囮役となる。言い方が悪いと犠牲になる以外の選択肢がない。

「……エリエ。星ちゃんの事はお前に任せる。今はあの子を助ける事

に集中しろ……」

「でも……あんな大群とやり合えるはずが……」

「……俺なら大丈夫だ。俺には星ちゃんから預かったこの【炎霊刀正宗】がある。これなら、複数戦闘も可能だ……それに頃合いを見て必ず撤退するさ！」

デイビッドはちらつと刀に目を落とすと、すぐに決意に満ちた眼差しでエリエの青い瞳を見つめる。

エリエはその決意に満ちた瞳を見て、デイビッドの覚悟を感じ取ったのか、小さく頷くと。

「分かった。星の事は私に任せて！」

っと、力強く頷いて見せた。

そのやり取りを見ていた孔雀マツザカが、自信満々の笑みを浮かべてデイビッドの肩を叩く。

「なら、わたーしの作った。この簡易形パラシュートを持っていくザマス！」

「おう、助かる！」

デイビッドは孔雀マツザカが差し出したリックサックを手にするのと、レイニールに敵の前に降下するようにと指示を出した。

突然、空から急降下して来たレイニールに向かって矢が雨のように放たれる。月を背にしていたレイニールだが、月をもつてしてもその黄金に輝く巨大な体を隠しきることはできなかった。

「ふん。我輩にはそんなもの効かぬ！」

その直後、レイニールの口が赤く輝き、炎が勢い良く噴射される。放たれた炎は飛んできた矢とともに敵を薙ぎ払うと、辺りに断末魔が響き渡り多くの敵のHP残量がPVP最低値『1』になって黒く焦げた彼等がその場に横たわる。

その最中、デイビッドが背中から飛び降りる。それを確認して、直ぐ様レイニールが急上昇を始めた。

レイニールは翼をはためかせ、一目散にその場を飛び去っていく。

エリエはそんなデイビッドの後ろ姿を見て小さく呟く。

「……死ぬんじゃないわよ……デイビッド」

飛び降りたデイビッドは、孔雀マツザカから受け取ったりユツク形のパラシュートを開いて降下を始めた。

一時的にだがレイニールの攻撃によって乱れた敵が体制を立て直し、直ぐ様デイビッドに向かって矢を放つ。

デイビッドは咄嗟に刀を鞘から抜き、飛んで来る矢を片っ端から斬り落とす。だが、その中の数本がパラシュートの翼の部分に穴を開け、次第に落下速度が速まる。

「くっ！　こうなったらこれは邪魔だな……着陸時にバランスが取れなくなる！」

デイビッドは早めに破れたパラシュートを見限り、空中で切り離すと地面に刀を突き刺し着地した。

地面が窪み、それと同時に辺りに大量の土煙が上がる。

徐々に迫ってくる敵の集団が、獲物を構えて刃先を土煙の方へと向けている。すると、突如としてその土煙の中から赤黒い炎が飛び出してきた。

その炎は辺りの敵を巻き込み、敵のHPが『1』になってもその体を燃やし続ける。

「ぎゃあああああああッ!!」「火だ！　離れないと焼き殺されるぞ!!」「まだ俺は死にたくねえー!!」

辺りからは多くの悲鳴が上がり、恐怖で無秩序に動き回る兵士達であふれかえって敵の陣形が乱れ始めていた。

まさか広範囲に発動できるスキルを有しているとは、彼等は思ってもいなかったのだろう。

敵がデイビッドの思わぬ攻撃に慌てふためいていると、その中から髪を後ろで束ねた菊があらわれた黒い着物姿のリーダー格の女が狼狽える者達に声を上げる。

「馬鹿者。この程度で狼狽えるな！　そんなんじやダークブレットの名が泣くよ!!」

『はい。姉さん！』

その場に居た多くの者がそう声を上げると、女は満足そうに頷いて右腕を天に掲げた。

「ほら、野郎ども！ 仕返しだよ！ 撃ち抜いてやんな！」

号令の直後、まだ土煙の中にいるデイビッド目掛けて一斉に矢を放つ。

空を覆うほどに放たれた矢が降り注ぐようにして、土煙の中を目掛けて襲い掛かる。

デイビッドは再び刀を頭上に構え、勢い良く振り下ろす。

「焼き尽くせ！ アマテラス!!」

正宗の鋒が地面に突き刺さり、赤黒い炎を放つ。

その炎は向かっていくる矢を光りに変えて吸収し、更にその勢いを増した。

地面を駆けるようにして敵の集団に襲い掛かる赤黒い炎に、再び敵の兵士達が慌てふためいていると、彼等の前に立ちはだかり今度は女が懐から短刀を取り出して前に突き出す。

「掻き消せ！ イザナミ!!」

女の足元に水が一瞬で満ちてそれが波の様に地面を走り、デイビッドの赤黒い炎を呑み込んで相殺する。

侍の魂2

その光景を目の当たりにしたデイビッドは驚いて目を丸くさせている。

「お、俺のアマテラスが……」

そんなデイビッドに向かって、女が持っていた短刀を突き出しながら告げる。

「この刀は一定期だけ出た。オノゴロ島のイザナミの剣……」

「……イザナミの剣？」

「そう。あんたを殺す刀の名さ！ 行きな。イザナミ!!」

女は天を仰ぐと、手に持っていた短刀を前に突き出す。

彼女の足元から沸々と湧き出した水が、巨大な津波となってデイビッドに向かってくる。

それに対抗すべくデイビッドも天に掲げるように刀を構える。

「くッ！ 次こそ貫け！ アマテラス!!」

デイビッドがそう叫んで、思い切り刀を振り下ろした。

赤黒い炎と群青の波が地面を走り。互いの攻撃がぶつかり合おうというその瞬間、女が辺りの兵士達に向かって「撃て！」と大声で叫ぶ。

すると、その声に合わせて矢がデイビッド目掛けて一齐に飛んできた。

再び空を覆う矢の雨に、デイビッドは驚き目を見開く。相殺された攻撃の直後、炎の盾がなくなったデイビッドを矢の雨が襲う。

「——なっ、なにッ!？」

デイビッドが再び刀を構えたが、もう一度『アマテラス』を撃つには態勢を整える時間が足りない。

(……しまった。これが本当の狙いか!? だが……)

だが、気付いたところですでに一刻の猶予もなく、打手はない。

デイビッドは飛んでくる矢を見据え、無我夢中で刀を振るう。直撃コースを飛んでくる8本の矢の内6本を叩き落としたものの、その中の2本が彼の左肩と右足に突き刺さる。

「——ぐッ！」

突き刺さった矢に目を向け表情を歪ませ、すぐにデイビッドはHPを確認する。

円状になっているHPが減少していて、更に継続して少量ではあるが、減少し続けている。

デイビッドは直ぐ様、持っていた刀を地面に突き立て、両手で右足と左肩に刺さっている矢を引き抜く。

「うらあああああああッ!!」

デイビッドは咆哮を上げながら引き抜いた矢を投げ捨てた。

それと同時にHPの減少も止まり、デイビッドは素早く地面に突き立てた刀を引き抜き前に構え直す。

PVP扱いの戦闘でHP管理は最も重要なことは、ベテランのプレイヤーほど知っている。

回復アイテムを使用できない仕様はそのままに、本来は少人数でしか対戦できないシステムを改悪され複数戦闘可能になった今、デイビッドにとってこの戦闘は常に数に押される不利なものとなるのは容易に想像ができた。

その刹那、デイビッドに敵は容赦なく矢を放つ。

勢い良く飛んでくる矢を見据え、足に力を込めるとデイビッドは敵目掛けて走り出す。

「うおおおおおッ!!」

咆哮を上げながら持っていた刀でデイビッドは、その矢をできうる限り斬り落とす。だが、数百の敵が放ち雨の様に浴びせかけられる矢を全て防げるはずもなく、撃ち落とし損ねた数多くの矢がデイビッドの体を無慈悲に貫く。

さすがに耐え兼ねた体の至る場所に矢が刺さったまま、デイビッドは思わずその場に膝を突いた。一瞬にして痛覚を麻痺させるほどの激痛が、デイビッドの全身を駆け巡る——。

デイビッドは苦痛に表情を歪ませながら小さく呟く。

「…………この数。しかもアマテラスはあの女の技で封じられ、弓による遠距離からの攻撃。数の上で戦略でも俺が圧倒的に不利……………」な

らば！」

完全に不利な状況でありながらも、デイビッドのその瞳からはまだ闘志は消えていない。弓を構え弦を引き絞る敵を鋭い眼光で睨みつけ、握っていた刀の柄を更に強く握り締めている。

その直後、女の号令で一斉に矢が放たれ、天を覆い尽くすほどの矢がデイビッドに向かってくるのが見えた。

「――俺は……侍だ！ 侍は死を恐れず！ 逆境こそ最大の見せ場！！」

荒く肩で息をしてそう呟くと、敵の大群に向かって特攻を仕掛けるデイビッド。

本来ならば無意味な行動かもしれない。だが、その無謀とも言える特攻こそ、この逆境を打開する策なのだ――。

このまま距離を取って戦闘をしても『アマテラス』は、女の同列系固有スキルの『イザナミ』に掻き消されてしまう。

デイビッドは向こうの弓で攻撃を受ける一方で、確実に体力は消耗して状況は更に悪化する――ならばいつそのこと、敵の懐に飛び込んで体力とHPが尽きるまで敵を一体でも減らした方がいい。

それはPVPでは敵の攻撃でHPが『0』にはならないというシステムを利用した決死の作戦だった。後はデイビッドの精神力が体をバラバラにしそうな、この激痛に耐えられるかどうかだけだ……。

デイビッドは気合を込めて力の限り叫ぶと、刀を構える。

「うおおおおおおおッ！！ここに武士の生き様を示さん！！」

既に矢を防ぐことすらせずに、敵の大群に突貫するデイビッド。

放たれた矢がデイビッドの体に無数に突き刺さるが、それでも止まることなく向かってくるデイビッドに敵は皆恐怖している様に見えた。

もはや、彼のその行動は正気の沙汰ではない。しかし、彼の瞳は決意に満ちていた。

（――痛みはある。が、恐怖はない……仲間の為に死ねるなら、男としてこれほどの幸せはない……俺は今日ここで死んでも本望だ！！）

そう心の中で呟くと、全身全霊を込めて刀を上段に構え『背水の陣』

と叫ぶ。

「俺の固有スキルは！ 対人戦にこそ力を発揮する!!」

そう叫んだ直後、デイビッドのHP残量が『1』になり、デイビッドの体が今までにないほど赤い輝きを放つ。

万策尽きたように無謀な特攻をしてきたデイビッドに、女は冷ややかな視線を浴びせかけ。

「……ふっ、バカな男だね……今、楽にしてあげるよ!」

その無謀なデイビッドの姿を鼻で笑いながら、女が向かってくるデイビッドに『イザナミ』を放つ。

「俺の思いとともに……敵を蹴散らせ! アマテラス!!」

デイビッドは向かってくる波に向かって、上段に構えていた刀を地面に振り下ろす。

すると、今までにないほどの赤黒い炎がまるで天を覆い尽くす勢いで放たれた。

壁の様に迫り来る赤黒い炎に彼女が放った波が飲み込まれ、女が悲鳴にも似た声を上げる。

「なっ、なんだって!」

驚きを隠せないと言った表情を浮かべる女の元に、赤黒い炎が天を覆う巨大な津波となって襲い掛かる。

一瞬にして敵の大群を呑み込んでいく炎を見つめ、デイビッドはただただその凄まじいほどの破壊力に驚いて呆然としていた。

デイビッドは自分の赤く輝く体を見ながら、現状が把握できないと言った様子で首を傾げた。

「これはどういうことだ? 俺の固有スキルはHPが減少するほど攻撃力と防御力が大幅に上昇するだけのはず……」

困惑した表情のまま、徐ろに指を動かしコマンドを開き、自分のステータスを確認した。すると、その攻撃値の表示が「∞」になっている。

このことから推測するに、デイビッドの固有スキル『背水の陣』は、使用者のHP残量によって攻撃力、防御力ともに大幅に上げるというもの——だが、今のデイビッドのHPはシステム上の関係で『1』は

必ず残る。

それがデイビッドの攻撃により、辺りはHPが『0』にならない為に「OVERKILL」の状態となり、極限まで強化された『アマテラス』が放てたのだ。

ふと我に振り返り前を向き直したデイビッドの眼前には、敵が赤黒い炎が着いたまま、地面の上をのたうち回っている姿が映っていた。しかも幸いなことに、巨大な赤黒い炎とそんな姿の仲間を見て敵はかなり混乱してくれているようだ。

そんな中、近くにいた味方を盾にして、なんとか難を逃れた女が叫ぶ。

「このぐらいで狼狽えるな！ 敵は手負いの1人。囲んで叩けば、あたし等が負ける訳ないんだよ!!」

だが、ダメージがなかったわけではなく。彼女の着ていた黒い着物が炎で左半分が焦げ落ち、彼女の大きな胸を覆っていたサラシが姿を表していた。

男勝りに号令をかけた彼女の声に周りの兵士達が奮起する。

「そうだ。姉御の言う通りだ!」「あんな金髪侍野郎に負けてたまるか!」「俺達は最強! 姉さんに死んでも着いていきますぜ!」

女のその声に周辺から様々な声上がる。一度は総崩れとなった敵の兵士達はここぞとばかりに体制を立て直すと、辺りの兵が各々手にした獲物を構えてデイビッドを取り囲む。

鼻息荒く己の得物を構えて包囲する敵を前にデイビッドは大きく深呼吸をすると、目を見開き刀を構えた。

デイビッドはその中で最も敵の多い場所にもう一度『アマテラス』を放つと、刀を構えて近くの敵に襲い掛かる。

「うおおおおおッ!!」

デイビッドの上段から振り下ろされた刀は敵の剣ごと碎き敵を斬り伏せる。

「ぐあああああッ!!」

一撃で相手のHPは1だけ残してその場に倒れ、斬られた場所は血が出てない代わりに赤黒い炎が線のように走っている。

たった一撃で斬り倒された味方を見てどよめく敵の様子に、デイビッドは確信した様に強く拳を握り締める。

(行ける！…これなら勝てる！)

四方を敵に囲まれ、体には無数の矢が突き刺さったこの絶望的な状況に、一筋の光りが見えた気がした。

その時、デイビッドに向かってリーダー格の女が襲い掛かって来る。

「はああああッ!!」

「くッ！」

デイビッドは振り下ろされた短刀を素早く刀で防ぐ。その直後、女の体が青く輝き、一瞬で目の前から姿を消した。

つと次の瞬間、再び背後から襲い掛かる。

デイビッドは素早く振り返ると、刀で女を吹き飛ばす。

地面を転がっていた女は素早く体制を整えると、すぐに目の前から姿を消した。

いや、消したというよりも高速で青い光りが移動しているところを見ると、素早く走ってこの場を離脱したのだろう。

(あの動き……あの動きには見覚えがある……)

そんなことを考えていると、ふと脳裏に戦っているエリエの姿が浮かんできた。

「そうか！…あの動き、あのスキルは!!」

そう。デイビッドが感じた通り、それは紛れもなくエリエと同じ固有スキル『神速』の輝き――。

元々左程珍しい部類の固有スキルではないものの、その効果は絶大――固有スキルの中で肉体強化系のスキルは外れではなく。戦闘に置いての駆け引きの中では、間違いなく当たりと言っていいたいだろう。

一旦デイビッドから距離を取った女は、戦意を喪失しかけている辺りの味方に檄を飛ばす。

「なに怖気づいてんだい！ PVPでHPが1より少なくならないのは常識だろ？ 今、目の前の奴を倒すか、後で烈也に殺されるか、お前達はどっちを選ぶんだよ!？」

その言葉を聞いて、周りの者達の目付きが変わる。

数の上ではまだ彼等に利がある。しかも、誰かは分からないものの『烈也』の名前を出された直後、それまでの恐怖していた兵達から漂う恐れが消え、凄まじい殺気に変わっていた。彼女の出した人物はそれほどまでに強い影響力があるということなのだろうか。

一瞬にして辺りに立ち込めるピリピリとした緊張感に、デイビッドは険しい表情で刀を構え直す。

先程までは、まるでお通夜の様に静まり返っていた敵が、女の一声で息を吹き返した。その直後、敵が一斉にデイビッドに向かって襲い掛かる。

すでに向かってくる敵に迷いは一切感じられない。だが、それはデイビッドも同じこと……。

デイビッドは咆哮を上げながら、向かってくる敵を次々と斬り伏せていく。

その都度、斬り伏せられた敵は叫び声を上げ、その場に倒れる。

敵はデイビッドを取り囲む様に展開する。辺りには槍、斧、剣と様々な武器を手にした者達が鋭い闘志を含んだ瞳をデイビッドに向けていた。

デイビッドは敵の澄み切った鋭い眼光を受け、鬼の様に睨みを利かせながら叫ぶ。

「なにを……なにをこの悪党共が!!」

デイビッドは激昂しながら周囲の敵に吠える。

目の前の斧を持った敵を斬り倒し、更に言葉が続けた。

「お前達はまだ幼い子を誘拐して、それでどうしてそんな顔ができる! 悪事を働いているという自覚はないのかッ!!」

「うるせえええええええええッ!!」

「——今は俺が話してるんだ。黙れ!!」

叫んで向かって来る大剣を手にした男を、その大きな刃ごと真つ二つに叩き斬ると、辺りに向かって声を張り上げた。

「俺は、数という力に物を言わせて人を陥れる輩が大嫌いだ! お前達のその非道な行いの影で、泣く者がいることを考えたことはあるの

か!!」

そう叫んだ時のデイビッドの脳裏には、自分のせいで星を失ったと嘆いていた落ち込んだエリエの姿がはつきりと浮かんでいた。

彼女は目の前で星を誘拐され、手も足も出なかった自分に酷く嫌悪感を抱いていたのだ。星を救出に出る前も、ベッドに座り込んで落ち込んだ様子のエリエに、デイビッドは掛けてやる言葉が見つからないでいた。

そんな中、短刀を持った女がそれを馬鹿にしたように鼻で笑う。

「……ふん。泣く者がいる事を……う」

刀を握り立ち尽くすデイビッドに向かい女が告げる。

「そんなのあたし等の知ったことじゃないよ。そいつらは弱いから泣くことになる……そんなの。数を集められない弱い者が悪いのさ! 偽善者ぶって声高らかに言うような大層なことじゃないね!!」

「……そうか、獣に言葉が通じるわけではない……か、ならその身に刻んでやる……」

憤りを抑えるつつ、強く刀の柄を握り締めてぼそつと呟くと刀を振った。

その刀身から出た赤黒い炎が、女のすぐ横にいた兵士を呑み込む。直後に辺りに悲鳴と呻き声が響き渡る。しかし、それでもまだ数多くの敵が残っている。

デイビッドは怒りから歯を噛み締めると、殺意を剥き出しにして前方の敵の中へと飛び込んでいった。

侍の魂3

デイビッドは大群の中、無差別に敵を斬り伏しながら進んで行く。辺りには戦闘で剣のぶつかり合う金属音と悲鳴だけが響いていた……。

手に握り締めた刀で、まるで鬼神の如く敵を次々に薙ぎ倒していくデイビッド。

「うおおおおおッ!!」

刀を振り下ろすと同時に、防具や武器に刃が当たり火花を散らす。

彼の固有スキル『背水の陣』の攻撃力に物を言わせたその情け容赦のない攻撃に、みるみるうちに敵の数が減っていく。

当然だ。今のデイビッドは固有スキルで攻撃力がMAXまで高められ、本当に撫でるだけで一撃でドラゴンすら撃破できるほどの攻撃力を持っている。

目の前から弓を撃とうものなら直ぐ様、トレジャーアイテム『炎霊刀 正宗』の武器スキル『アマテラス』が敵を呑み込む。

まさに無双という動きを見せるデイビッドだったが、感情的に暴れ回るデイビッドの勢いがいつまでも続くはずもなく、次第にその破竹の勢いも弱まっていった――。

「はあ……はあ……だいぶ、数を減らせたか……ぐッ!」

デイビッドが目の前の敵に鋭い視線を向けていると、背後から数本の矢が右腕を捉え、堪らず持っていた刀を落とした。

「仲間の仇だ!」「消え失せろ!」「今まで良くもやってくれたな!」「終わったな。侍野郎!」

辺りの兵士達が叫び声を上げた直後、デイビッドの左右と背後から鎧の隙間から剣が突き刺さる。

「……な……に……」

デイビッドはそのまま、前方に崩れるように倒れた。

(……エリエ。すまん……)

体を貫かれる痛みと今まで蓄積した疲労で意識が遠退いていく中、悲しむエリエの顔が浮かぶ。

そんなデイビッドの瞳に、勝ち誇った表情の女の姿が飛び込んできた。

女は地面に落ちている刀を拾い上げると、ニンマリと笑みを浮かべている。

「やはりトレジャーアイテム。いい刀だ……これを持っていけば烈也も喜ぶ。……そしたら、うふふふ」

そう小さく呟くと、だらしない顔で笑みをこぼしている。

そして、すぐに険しい表情に戻すと女は大声で辺りの者に叫ぶ。

「絶対にこの男を殺すな！ 何としてもこの武器をあたし等の物にするんだ!!」

その声にデイビッドを捕らえるように周りの者達に指示を出すと、安全の為なのか、重鎧の男達が両側から挟むようにして両腕を持ってデイビッドを立たせ、その首筋に短刀を突き付ける。

「この装備を渡せ……」

「……へっ、嫌だね。それにその刀は預かり物なんだ。たとえ殺されても渡すもんか……」

（——そうさ。それは星ちゃんから預かった大切な物なんだ。俺は……こんなところで負けるわけにはいかない!!）

デイビッドは決意を新たにすると、一度は力が抜けた拳に再び力を込める——。

急に暴れ出すデイビッドに、その腕を掴んでいた兵士達が怯んだ咄嗟に左右の兵士の手がデイビッドから離れた。

「うおおおおおおおおおッ!!」

体中に電気が流れているかのような激痛に耐え、雄叫びを上げたデイビッドが両腕を掴んでいる男達を振り払って女から刀を奪い取る。

その刹那、女が持っていた短刀を素早く振った。

「——くッ!!」

デイビッドは素早く距離を取ると、右腕で刀を構える。

なんとか刀を奪い取ることに成功したものの、その代償はあまりに大きかった。

何故なら……。

「はあ……はあ……はあ……くそつ、左腕を持つていかれた……」

そう。あの一瞬に振り抜かれた女の短刀に、デイビッドの左腕の肘より下を斬り落とされてしまったのだ。

その激痛により、デイビッドは顔から滝の様な汗を流し、険しい表情で目の前の女を見据える。

現実世界で腕を斬られれば、間違いなく出血多量で死に至る。だが、フリーダムには負傷はあっても出血はありえない。

つまり、腕を斬り落とされればHPの減少が継続し。苦痛を伴うだけでモンスター戦ならともかく、プレイヤー同士の戦闘ではさほど大したことはないのだ。

つとは言え、苦痛が伴う手前。俊敏性は著しく低下する。すると、口元にニヤリと笑みを浮かべた女の声が辺りに響く。

「周りから囲み込んで一網打尽にしな！ 刀を持ったとしても奴はもうダメだ。恐れることなんてないよ！」

「了解です。姉御！」

「わるあがきを……観念しろ！」

デイビッドを取り囲むようにしていた敵が、武器の先を向け、じわりじわりと距離を詰めより迫ってくる。

それを見ながら、デイビッドは考えを巡らせる。

（あくまでも俺を捕まえるつもりか……このままアマテラスで蹴散らすか？ それとも、ちまちま戦ってここに敵を釘付けにして少しでも時間を稼ぐか？）

デイビッドはそんなことを考えながら、自分のなくなった左腕に目を落とす。

その肘から下のない斬り落とされた左腕を見て、デイビッドは微笑を浮かべる。

「……そうだな。もう俺に戦うだけの力はない……なら、取るべき道は一つ！ 薙ぎ払え。アマテラス!!」

刀を振ると、赤黒い炎が前方の敵を呑み込む。

彼は捕まるよりも、一人でも多くの敵を道連れにすることを選んだのだ――。

女は咄嗟に横に居た男を盾にして防ぐと、固有スキル『神速』のスピードを活かして、一気にデイビッドに迫った。

「このー…その首、叩き落としてやる!!」

瞬時に左側に跳んで攻撃してきた女に、左腕のないデイビッドの反応が一瞬だけ遅れる。

「もらったー!!」

「くそっ! 間に合わな——」

「——いえ、良いタイミングです」

その声の直後、デイビッドの目の前で火花が散った。すると、デイビッドの隣に鎖刀を持った着物姿の黒髪を後ろで束ねた少女が現れる。

その鎖刀の刃が短刀を受け止め、女の腕には鎖が巻き付いている。

女は後ちよつとというところを邪魔され、頭の血管が浮き出すほどに怒り心頭している様子だが、鎖の掛かった右腕を引き抜くことができず、鎖刀を握っている少女は口元に微かな笑みを浮かべていた。

デイビッドは驚きながらも、その少女に声を掛ける。

「……き、君は?」

「——私は敵ではありません……が、お喋りは後にして下さい……紅蓮様!!」

少女が突如、夜空に向かって大声で叫ぶ。

それとほぼ同時に、上空から無数のナイフが敵の大群目掛け降り注ぐ。

その予期せぬ攻撃によって為す術もなく、敵が次々と悲鳴を上げて倒れていく。

デイビッドの目の前に着物を羽織った。銀髪に真紅の瞳の小学生くらいの女の子が降りてきた。

ふわりと地面に着地した女の子の肌は雪の様に白く、そのか細い腕でしっかりととはだけそうになっている着物を押さえていた。

月夜に煌めく銀色の髪に、白くきめ細かい肌がまるで雪女の化身ではないかとまで錯覚させるほどだ。

目の前に倒れるナイフが刺さった無数の敵を見つめ、デイビッドが目を丸くさせている。

「なっ、何が起こったんだ？」

「はあく。どうして男の人は、こうも無謀なのでしょう……」

驚くデイビッドを一瞬だけ横目に俯き加減でためため息を漏らすと、銀髪の女の子が振り返った。

「あなたがマスターの友人ですか？」

「えっ？ マスター？」

「……………いえ、もういいです。黙ってください」

小首を傾げ自分から尋ねておきながら、そう吐き捨てて前を向き直る女の子に。

「えっ!? もういいの!?!」

つとデイビッドが声を上げる。

女の子は羽織った着物を着直して、コマンドから白い長刀を取り出すと、鞆の紐を肩に掛け背負った。

その直後、刀から伸びる鎖で右腕を拘束されている女が笑い声を上げる。

「はははっ！ たった2人の援軍くらいで凶に乗るんじゃないよ！

あたしの欲しいのはその刀だ……男ならともかく。女なんかに興味はないんだよ！ 呑み込みじゃないな。イザナミ!!」

「なっ!? 地面から水が!?!」

少女は咄嗟に後ろに跳んだが、それを追うようにして波が少女に迫る――。

「そうはさせません！」

女の子は自分の身長ほどもある金の装飾が施された真っ白な長刀を引き抜く抜くと、その波に向かって振り下ろす。

「…………凍て付かせなさい小豆長光！ 氷無永麗殺!!」

女の子そう叫ぶと、刀身から氷の結晶が吹雪のように吹き荒れて、凄まじい勢いで辺りに広がっていく。

直後。向かってきていた水の波が凍り始め、次第に地面へとその余波が侵食していくと、周りにいた敵の殆どが氷の中に閉じ込められ

た。それはまるで、氷上の平原に氷でできたオブジェの様だ――。

「そんな……バカな……こんなはず――」

そう言い残し、女も氷漬けになった。

着物に短刀を手にしたその姿はまるで、氷のショーケースの中に入った日本人形の様だ。

一瞬にして大将と多くの味方を失った敵の軍団は、仲間を置き去りにそそくさと撤退を始める。

その様子を見ていた女の子と少女が持っていた刀を鞘に収め、静かに口を開く。

「そろそろバロン様が来る頃ですか？ 紅蓮様」

「ええ、そのはずですが……まあ、何と言ってもバロンですから……」

「ああ……」

眉をひそめながらため息混じりに納得したように頷いている2人を見て、状況を全く飲み込めていないデイビッドが彼女達に声を掛けた。

「そのバロンって誰ですか？」

「……すぐに分かると思いますよ」

遠くを見つめ指差す女の子に、デイビッドは首を傾げながら同じ方向を見つめる。

そこには何やら黒く蠢く何かが見えた。目を細め、それを凝視したデイビッドが驚いて声を上げた。

「おい。あれって敵の増援じゃないのか!？」

まるで黒い津波の様に、黒馬に跨り黒い西洋風の甲冑を来た兵士達がひしめき合い、土煙を上げながら物凄い勢いで向かってくる。

驚き目を見開いているデイビッドを余所に、2人は小さく息を吐いた。

その後、少女が静かに口を開く。

「安心してください。あれはこちらの援軍です。マスター様の作戦で、敵軍の後方に味方を配置していたのです」

「だが、あんな大群をいつ……？ 君達は何者なんだ!？」

口元に微かに笑みを浮かべ、女の子がその質問に答える。

「私達はテスターですよ。私も、あそこの彼もオリジナルスキル持ちです」

「なっ、なんだって!?　じゃ、じゃー君達がマスターが以前作ったっていうギルドの!?!」

「はい。私達はそのメンバーです」

それを聞いたデイビッドの表情は一変した。

侍の魂4

それもそうだろう。「テスター」即ちベータ版のテストプレイヤーは、日本サーバーでたった4人だけ。しかも、その全てはオリジナルに考案したスキルを持ち、性格は最悪と聞かされていた。

更にこの「フリーダム」が稼働したのは5年前——だが、目の前にいる女の子は高く見積もっても小学5年生と言ったところだろう。そんな子が「テスター」だと言っても、にわかには信じがたい——。それはデイビッドも同じな様で、あんぐりと口を開けたデイビッドが、震えた指で女の子を指差す。

「じよ、冗談でしょう？ だって君はまだ小学——」

そう口にしようにとしたデイビッドの首筋に、突如として鞘から引き抜かれた女の子の刀の鋒が向けられる。

鋭く睨むその瞳は殺意に満ちていて、デイビッドがそれ以上何か口にしようものなら、どうなっても不思議ではない。

女の子は小さく影のある声音で告げる。

「——人を見かけて判断すると、ケガをしますよ？」

「は、はい……」

デイビッドが首筋に突き付けられた刀を見て答えると、瞼を閉じた女の子はすつと離れたのを見てほつと胸を撫で下ろす。

その耳元で女の子と同じ着物姿で横に立っていた姉と思わしき少女が、彼の耳元でささやく。

「紅蓮様は身長のことを気にしていますから、あまりその話はしないのがよろしいかと……」

「ああ、なるほどー」

苦笑いを浮かべながらデイビッドがそう返すと、少女は小さく会釈を返した。

その直後、敵の叫び声が夜の荒野に響き渡る。その声は普通ならば耳を塞ぎたくなるような惨劇の断末魔の様だ——。

女の子と少女はその叫び声を聞いて刀を構え直す。

「始まりましたね……」

あッ!!」

体に無数の剣を突き刺され、けたたましい叫び声が辺りに響き渡り、周りの兵士達を震撼させた。

すでに大将を失って烏合の衆と化した敵軍は、突如出現した騎馬の大群と、容赦のない悪逆非道な振る舞いに恐怖で身を震わせている。

「ひやはっはっはっはっ! 男でも意外といい声で鳴くじゃないか! 俺様の支配欲を掻き立てるいい響きだ……さあ、次に俺を喜ばせてくれるのはどいつだ?」

狂ったように笑い声を上げると、その冷徹な瞳を辺りに向けた。

彼の発した常軌を逸した言葉の直後、その場の緊張感は最高潮に上がる。

目の前で体に無数の剣を突き立てられたまま横たわり、白目を剥いて泡を吹いている味方の姿を前にして周りは完全に戦意を喪失している。

それもそうだろう。ゲームと言っても痛覚がある以上は、現実と何ら変わらない。しかも、数千という黒い騎士を引き連れた男の性格は最悪なのだ。それはまさに魔王とでも呼ぶべき存在であると言っても過言ではない――。

すっかり静まり返ったその場に、男の声が響き渡る。

「どいつもこいつも臆病者の集まりか? なんなら俺様から行くぞ!

さあ、お前達! 虫けらどもを蹂躪せよ!!」

そう男が叫んで剣を振り上げた直後、後ろからひよっこりと現れた少女が男の頭を思いつきり叩いた。

「……いでッ!」

「もう。お兄ちゃん! 段取りと違うでしょ? めっ!」

男は叩かれた頭を撫でながら、人差し指を立ててじつと自分を見つめている妹の方を向いて。

「でもよぉ〜」

っと情けない声を上げた。

少女は呆れながらも馬から降りると、にっこりと微笑みを浮かべながら敵に近付いていく。

「皆さん。少し私のお話を聞いて下さい。私達は別に勝負がしたいわけじゃないんです。できれば、少しの間じつとして頂ければいいんですけど……」

その言葉に啞然としながら彼女を見つめる敵に、少女はあたふたし始める。

だが、その反応は当然と言えた——何故なら、この状況下で突然突拍子もないことを言われれば誰だって混乱するのも無理はない。

「……むう。お兄ちゃんのせいで交渉にならないじゃない」

少女はしばらく考えると、思いついたように手を叩く。

「えーとですね。皆さん！ 武器をしまつてその場に座つて下さい！ もし、そうしないとぉ」

そう言つて意味ありげな笑みを浮かべると、地面に倒れている男を指差して言い放つ。

「この人みたいになりますよ？ 私もそんなことしたくないんですけど……でも、次にお兄ちゃんが暴走したら、今度も私にお兄ちゃんを止められるかは分かりませんし……」

出来る限り友好的に、可愛い感じをイメージして俯き加減にもじもじと指を弄っているフィリス。

彼女はこの状況を収める為に必要な愛嬌の全てをその場に注ぎ込むようにしながら言った。

「なので！ 今は私の言う通りにしてください」

頭を深々と下げ、切実に訴える少女の姿を見て敵は近くの者と話始める。

彼女の愛嬌を全て使つてでも、この場を収める為に必死だったのだろう。彼女の言った通り今度彼が暴れ出せば、実の妹でも止められるか……ここは頭を下げてお願いするしかない。

「そうだな。このまま殺させるよりは……」「ここはあの子を信用してみるか」「普通に可愛いし、俺はあの子になら殺されてもいいかな」

そんな言葉を呟き、辺りの兵士達も仕方なくその場に座る。その度に少女は「ありがとうございます！」と何度も頭を下げる。

馬上の黒い鎧をまとった男はその様子を、暴れ足りないと言いたげ

な瞳で不服そうに見つめていた。

デイビッド達も突如として地べたに座っていく敵を見て、呆気に取りられたように口をあんどりと開けている。

「……なにが起こったんだ？」

「私に聞かないでください」

デイビッドと女の子は刀を握ったまま、お互いの顔を見合った。

2組が合流すると、真っ先に「この状況を説明してくれ」と詰め寄ってきたデイビッドに、女の子の隣に居た少女が事の次第を簡単に説明する。

「掻い摘んで説明しますと、あなた達の無謀な作戦に気付いたマスター様が、私達に救援を求めた——という事なのです」

「少し掻い摘み過ぎやしないかい？」

「いえ、これでも十分に説明は行き届いてるか……」

「あはは……」

デイビッドが苦笑いを浮かべると、すぐに彼女に言葉を返す。

「とにかく今は時間がない。手短かに自己紹介を済ませてもらえるかな？ 今後色々不便だろ？ 名前と固有スキル……後は、トレジャーアイテムの能力程度を簡単に——」

「——なら私から……名前は白雪。固有スキルは姿を消すことができ『インビジブル』です」

女の子の隣に立っていた白雪が自己紹介を終えると、今度は隣の着物姿の無口な女の子が続く。

「私は紅蓮です。固有スキルは『イモータル』簡単に説明すると不死です。トレジャーアイテムは2種類。この着物の裏地の『インフィニティ・マント』と、この刀『小豆長光』です。武器スキルは『氷無永麗殺』辺り任意の全てを氷漬けにする能力です。見ていたから分かると思いますけどね」

紅蓮はそう言い終えるとすぐにそっぽを向いた。

どうやら、先程デイビッドに小学生呼ばわりされたのを相当根に持っているようだ——。

デイビッドが苦笑いを浮かべ頭を掻いていると、その次に黒い甲冑

の男の隣に居た少女が自己紹介する。

「私の名前はフィリスです。まだ初心者で固有スキル？　つていうのは分かりませんが、これからもよろしく願います！　そしてこっちが、私のお兄ちゃん——」

笑顔でフィリスが隣に居た彼に目を向ける。

だが、肝心の黒い甲冑の男は腕を組んで不機嫌そうに顔を逸らしたまま、黙りを決め込んでいる。

そんな彼にフィリスが突然声を荒らげて叫んだ。

「お兄ちゃん！」

「……この俺様が、犬如きに名を名乗らないといけないだど？」

不服そうに渋い顔をしている彼に向かって。

「お兄ちゃん!!」

「分かった！」

更に強い口調でフィリスに言われ、黒い甲冑の男は渋々頷く。

「俺様はバロン。固有スキルは『ナイトメア』だ。これ以上は言えない。いやお前如きに教える筋合いはない！」

腕組しながら再びそっぽを向くバロンに、フィリスが呆れ顔で咳く。

「お兄ちゃんはそんな事だから、いつもぼつちなんだよ？」

「ふん。家族以外は動物以下だ！　ミジンコにも値しない！」

自信満々に言い放つバロンに、困り顔でフィリスが「もう」と頬を膨らませている。

性格には難があるものの。どうやら、彼は家族を大切にしている性分らしい。その思いやりの半分でも、他の人にも見せてくれればいいのだ——。

なおも小言を言うフィリスと、それを聞き流すバロンは置いておいて、デイビッドが着物姿の紅蓮達に尋ねた。

「俺はこれから仲間達を追う。君達はどうする？」

紅蓮はデイビッドの斬り落とされた左腕を見て、不機嫌そうに眉を微かに動かすと、静かに言葉を返した。

「……無謀なのは感心しません。ここは私達が行きます。あなたは帰って下さい。正直言つて邪魔です」

「なっ！ なんだったって?! 君だってさっきの俺の攻撃を見ただろ? なら邪魔にはならないはずだ!」

声を荒らげて反論するデイビッドに、紅蓮は呆れながらため息を漏らす。

「はあ……何度も言わせないで下さい。私はそれをふまえた上で、足手纏だつと言つたのです」

紅蓮は表情一つ変えずに、デイビッドを冷たくあしらうと歩き出した。

納得できず。去ろうとする紅蓮の肩を掴んで、デイビッドも必死に食い下がる。

「ちよつと待ってくれ! 俺は足手纏にはならない! きつと役に立つ。だから俺も——」

「——ッ!!」

驚いた紅蓮が咄嗟に懐から短剣を取り出すと、その刃を喋っていたデイビッドの右腕に押し当てる。

そしてため息混じりに告げる。

「……はあく、白雪が言つたはずです。私達は救援に来たと……反論は認めません。それとも……残った右腕もここでお別れしますか?」

冷たい声で鋭い視線をデイビッドに向ける紅蓮。

その殺意を剥き出しにした瞳は、さっきまでの大人しい彼女とはまるで別人だった。

デイビッドは冷や汗を掻きながらも、更に連れて行ってもらえるよう懇願する。

「頼む。俺を連れて行ってくれ……」

「……ダメです……マスターに私が嫌われます」

デイビッドのその言葉を軽く流した紅蓮の顔をじつと見つめた。

「頼む……俺はこの刀に誓つたんだ。必ずあの子を助けると……」

「うう……」

しつこい程に迫ってくるデイビッドに、思わず口籠る紅蓮に彼が言

葉を続ける。

「俺の大事な人があの子が居なくなっただけから変わってしまったんだ。3度の飯よりお菓子が好きだったのに、もう今は見向きもしない。それに全く笑わなくなっただけ……俺は、あいつの……エリエのあんな思い詰めたような顔は見たくない！」

「……はあく。分かりました」

紅蓮は諦めたようにため息をつく、小さく頷いた。

仕方なく短剣をしまう紅蓮に、デイビッドは嬉しそうに微笑んだ。

そんな紅蓮に白雪が耳元で尋ねる。

「良かったのですか？ マスター様は皆連れ帰るようにと……」

「分かっていきます。ですが、ああ強く言われては……はあく。押し強い男性はどうも苦手です……」

紅蓮は眉をひそめながら、深くため息を漏らすと呆れ顔でそう言った。

その後、その場にバロンとフィリスの兄妹を残し、デイビッド達は敵の本拠点を目指して歩き出した。

アジトへの潜入

デイビッドを敵の真っ只中に残し、エリエ達は敵の本拠点を強襲するために夜空を進んでいた。辺りには敵の姿もなく、星と雲が流れていくだけで実に平和なものだ――。

だが、カレンに続きデイビッドまでも失ったのは、戦力的には痛手と言えるだろう。すると、ふとエリエの頭に残してきたデイビッドの姿が浮かぶ。

「……デイビッド。大丈夫かな？」

「大丈夫よく。デイビッドちゃんは強いもの」

独り言のように呟いていたエリエに、サラザが優しく声を掛けてきた。

「わっ！ サラザ!」

驚いてビクツと体を震わせたエリエはサラザの顔をまじまじと見つめる。

サラザは微笑みを浮かべながら、エリエの隣に腰を下ろす。だが、無言で表情を曇らせたまま、ただ前だけを見つめているエリエにサラザは心配そうな顔をしている。

これから敵の本拠点に突入するという時に迷いがあつては、今後の作戦に差し支えが出るかもしれない。

そう考えたサラザは、隣で俯き加減に膝を抱えているエリエに優しく声を掛けた。

「エリー。デイビッドちゃんの事が心配なの？」

「……うん」

「戻りましょうか？」

そう提案して来たサラザに、すぐエリエは首を横に振って答えた。サラザはその彼女の反応に少し驚いていた。

エリエの性格上、考えるよりも先に行動に出すタイプだ。こう言えば、間違いなくエリエのことだから「すぐに戻りましょ！」と言うはずだと勝手に思い込んでいた。

あまりのことに驚き、次に言おうとしていた言葉を忘れてしまつて

いたサラザに、エリエが迷いを断ち切るように首を振って告げる。

「……うん。そんな事してらんない。早く星を助けなきゃ！ その為にデイビッドもカレンも残ってくれたんだし！」

「そう、その意気よく」

そのエリエの力強い声に、サラザはほつと胸を撫で下ろす。

すでに2人失い、残るはオカマイスターとエリエのみだ——戦力は大きく欠いたが、未だにオカマイスターは健在。ボディービルダーで構成されたオカマイスターがいれば、城に入ってから肉弾戦が優位に行えるのに変わりない。

何故なら彼等はヒューマンよりも攻撃力、防御力共に秀でたボディービルダーで言う種族なのだから……。

雲を切り裂くように進んで行くレイニールの目に洋風の城が見えてきた。

その城は四方を崖に囲まれ、周りをツタの絡まった石造りの外壁に覆われていて、最上部は天を突き抜けるようにして不気味にそびえ立っている。

暗がりの中。城のあちこちに空いている小さな小窓から内部の光が漏れて、それがなんとも恐怖心を掻き立てていると言えた。

RPGで例えるなら、最終ボス面の魔王の城と言ったところだろう。

「……遂に来たわね」

「うん」

2人は徐ろに立ち上がると、決意に満ちた表情でその城を見つめていた。

その時、辺りにレイニールの声が響く。

「これ以上は見張りに見つかるかもしれない。皆、我輩は敵の城の直上から接近する！ しっかり掴まっておれ！」

そう告げたレイニールはしばらくして、羽を激しくはためかせるのと、急激に上昇を開始する。雲を突き破り更に上へ上へと昇ると、今度は月を背に平行に移動を始めた。

レイニールの金色の体は月を背にすれば、これ以上ないほどの迷彩

になる。

月明かりを背に受け、レイニールの黄金の鱗がキラキラと光りを反射している。その姿は星龍という名に恥じないだろう。

レイニールは城に近付く毎に徐々に加速し、最後直上に来てからは、辛抱堪らずといった感じで、城に向かって降りて行く。

急降下するレイニールの背中にしがみつくエリエ達の瞳に、微かに慌てふためく敵の見張りの姿が見えた。

つと次の瞬間レイニールは叫ぶとそのままの勢いで城内部へと突撃する。

「——あるじいいいいいいッ!!」

——ドカーンッ!!

大きな爆発音と共に地響きが起こり、城の外壁を粉々に破壊する。システムでもモンスター扱いになっていているレイニールのような独立した存在が、建物を破壊することを予期していない。

だが、それは当たり前だろう。プレイヤーは個々に意思を持ち立ち回るが、NPCとモンスターに限っては設定した動きしか取らない——単にレイニールのような存在がイレギュラー過ぎるだけなのだ。

強引に城内部に侵入したレイニールはすぐに小さくなる。

なんとか無事に着地したものの、辺りには土煙が上がり敵味方構わず視界を遮っていた。

メンバー達はその煙に堪らず咳き込みながらも、必死に目を凝らす。すると、辺りに多くの敵が押し寄せてくる。見えたと言うよりは、駆けて来る足音を感じ取ったと言ったところだろうが。

辺りの土煙が収まるのと同時に、したり顔で笑みをこぼすエリエの青い瞳が輝き即座にレイニールに叫ぶ。

「——計画通り。レイニール! 人間モードよ!」

「我輩に命令するなこのバカタレ! それに人間モードでもないのじゃ! 変な名前を付けるな!」

文句を言いながらも、レイニールは小さなドラゴンから小学校低学年のくらいの女の子へと姿に変わり、手を腰に当て仁王立ちしている。

しかし、誇らしげにしていたその体はいつも通りの一糸纏わぬ姿なのだが、それでもレイニールは恥ずかしげもなく「はっはっはっ」と大声で笑っていた。

これだけ見てると、ドラゴンの時の威厳もクソもなく、風呂上がり城内を走り回った拳句高笑いを上げるただ馬鹿な子供にしか見えない……。

エリエはアイテムの中からフリルの付いた派手派手な、まるで魔法少女の様な衣装を取り出すと、レイニールに向かって投げた。

「ほら、ぼさつとしない！ さつさと服着て。突撃するよ！」

「……ふん。分かっておるわ」

レイニールは飛んできた服を掴むと、口を尖らせながら不機嫌そうに服の袖に腕を通す。

そんな2人を尻目に、オカマイスター達は生き生きした表情で指を鳴らしていた。

「さて、武器が使用できなくても……種族がボディービルダーの私達は最強よ」

「おうよ！ 私の拳が悪を倒せと熱く燃えてるぜく!!」

「わたーしの、マジック修行で培った孔雀流体術を見せてやるザマス」

「あたいは一応ボディービルダーだけで、それほど強くないんだけどね」

オカマイスターは拳を鳴らして強者が弱者を蹂躪する様な余裕と狂気に満ち溢れた表情を浮かべ、それぞれ敵に向かって突撃を掛けた。

敵は突如として襲いかかってきた○の中に釜と書かれたタンクトップを着た屈強な男なのか女なのか分からない集団に襲われ、次々と為す術なく殴り倒されていく。

思わず敵に同情してしまいそうになる光景が辺りに広がっていた。

もちろん。そんな敵に同情することなく、オカマイスターは雄叫びを上げながら手当たり次第に敵を殴り倒して狭い通路を強引に突き進む。

騒ぎを聞きつけてやってくるものの、まるで鬼の様に暴れ回る屈強

なオカマイスター達に出て来たはいいが、その姿を見るや逃げ出す者もいるくらいだ。

そんな時、その間をすり抜けてレイニールとエリエの元に、革鎧を着た痩せ型の男が襲い掛かる。

「あの化け物は無理だが、お前達なら！」

「わっわっ！ こつち来んなっ！」

突然襲い掛かってきた男に、エリエが慌てふためく。

男は両手を大きく広げ、逃がさないと言わんばかりの勢いでエリエに飛び掛かる。

「このアマー!!」

「——うっ！」

(このままじゃ、やられる!!)

エリエは咄嗟に両手を頭の上で重ね、その場にうづくまった。その直後、レイニールがエリエと男との間に割って入り、その男の頭を右手で思い切り叩いた。

すると、けたたましい音と絶叫を上げ、男は地面を突き抜けて落ちていった。

「ふん。やはり人間は弱いのじゃ！」

勝ち誇ったように腰に手を当てるそう呟くレイニール。

エリエは最初は状況が読み込めずにポカンとしていたが、すぐに平静を取り戻してニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

そのまま立ち上がり、レイニールの隣まで歩いてきたエリエが得意げに腰に手を当てる。

「思い知ったか！ 私達を狙うからこうなるのよ！ はっはっはっはっ！」

「その通りなのじゃ！ はっはっはっはっ！」

2人は並んで地面にポツカリと開いた穴に向かって、胸を張って高笑いしている。

基本的にレイニールのステータスはどんな状態でも、元のドラゴンと同等なのだ。レイニールにとって変身とは形が変わるというだけで、それ以上でもそれ以下でもない。

例えるならば、水蒸気にも氷にもなれる水という存在が、レイニールにも当てはまるところだろう。

エリエは気分を良くしたのか直ぐ様、すぐ近くの敵を指差しレイニールに向かって命令した。

「ゆけ！ レイニール！ ウルトラパンチ!!」

「うむ！ ウルトラパンチ!!」

レイニールは小さいドラゴンの姿に戻ると、翼をパタパタとはためかせ、器用に体を回転しながら戦っているオカマイスターズの間をすり抜けて目の前に居た重鎧の敵に右腕を突き出した。

「ぐわあああアツ!!」

重鎧の男は鎧を粉々にされ勢い良く吹き飛ばされると、周りを巻き込んで城の壁ごと外へと放り出された。

それを満足気に見ていたレイニールはふと我に返り、急いで戻つてくると人間モードに代わり、不機嫌そうにエリエに向かって声を荒らげた。

「——だから我輩に命令するなど何度言えば分かるのじゃ!!」

「いいじゃん！ あと服、服！ 服を着なさい！」

エリエは不機嫌そうに膨れっ面をしているレイニールに、地面に落ちていた服を手渡す。

レイニールは渋々その服を着直すと、口を尖らせながら叫んだ。

「良くないのじゃ！ それにウルトラパンチってなんじゃ！ 我輩はどこぞのボールで飼われているモンスターではないわ！ それに言うておくが、我輩は主にしか従わぬ！ どうしてお前なんぞに……」

ブツブツと文句を呟いていると、レイニールの不満を聞いていたエリエが急に声を荒らげる。

「うるさい！ 私は星のお姉さんなんだから、あんたも私に従えばいいの！ 分かった!?!」

「分かるか、バカタレ!!」

「分かりなさいよ!!」

エリエとレイニールは向い合って睨み合いながら、激しい視線をぶ

つけている。そんな2人を尻目に、レイニールの起こしたごたごたで敵の兵士が数多く集まってきた。

目の前の敵の頭を鷲掴みにして壁に叩きつけていたサラザが、その光景を見て顔を青ざめさせる。

「ちよつと〜。冗談じゃないわよ〜!」

「これってあたいたい達やばくない? やばいわよね〜」

相撲取りのような巨漢のカルビが地面に横たわる敵の上に腰を下ろしたまま言った。

その横で戦っていたガーベラが、慌てて喧嘩しているエリエとレイニールの元へ駆けて行くと。

「こりゃ、やばい! ほら、2人とも喧嘩してないで行くよ!」

「ちよつと〜。放してよ〜」

「そうじゃ! 我輩の話はまだ終わってないのじゃ!」

ガーベラが2人の体を強引に担ぎ上げると、両脇に抱えて走り出した。

レイニールとエリエは、まるで荷物の様に軽々と運ばれ、不服そうに叫んでいる。未だにやり足りないと言いたげに激しい視線を飛ばし合う2人。

ガーベラは戦っている仲間達に向かって叫んだ。

「私が2人を連れて行くから、敵を頼んだ!」

「OK〜。一気に駆け抜けるわよ〜。ガーベラ、2人を落つことさないでね!」

「わたしの力を見せてやるザマス!」

サラザと孔雀マツザカは交戦している敵を殴り倒すと、ガーベラの前へと出た。

2人は襲い掛かる敵を次々に薙ぎ倒すと、あてもなく城の廊下を走り抜ける。

そしてやつと本来の目的に気が付いたエリエとレイニールが、その間、ガーベラに抱きかかえられながら声を大にして星の名前を叫んだ。

「星! 助けに来たよ!!」

「あるじく。どこに居るのじやく！」
しかし、その声は虚しく廊下に響くだけで返事は返ってこなかった
――。

アジトへの潜入2

* * *

大型のモニターの前で何やら忙しく作業をしている覆面の男。

星は無言のまま、作業するその姿を見つめていた。だが、それは逃げるのを諦めたわけではなく、どうやってこの状況を抜け出すか考えていたからだ――。

しかし、逃げ出すと言っても、両手足を金属の枷で検査台に固定されている今の状況では、とてもじゃないが筋力補正程度の力でなんとかできるものではない。

だからと言って、このまま捕らわれているつもりも、星には微塵もなかった。

(……このままじゃ、何をされるか分からない。早くこの金具をなんとかしないと……)

そう考えた星は、自分の手足を台に固定している枷を見た。

男に気付かれぬように、何とか手を引き抜こうとするのだが、案の定びくともしない――足の方も同様に、いくら力を入れても外れる気配すら見せない。

まさに絶体絶命とはこのことだ――。

(……どうしよう……)

困り果て小さくため息をつく星の脳裏に、突然母親の顔が浮かぶ。

おそらく。父親の話を聞かされたのが原因だとは分かっているが、その心配そうな表情の母親の顔が妙にリアルで、星の胸を痛いほどに締め付けられた。

勝手にこんな事件に巻き込まれ、現実世界に戻れないということになれば、もう目も当てられない。

星の心の中に『何としても帰らなければ』という思いが沸き起こり、今までにないほどに身を振らせた。

その時、けたたましい音とともに部屋全体が大きく揺れた。

「——な、なんだ!？」

モニターの前で操作盤を操作していた男が驚き、慌てて事態の把握に努める。

大きなモニターに監視カメラだろうか? いくつもの映像が表示された。その中に、土煙りを上げて突入してきた黄金の巨竜の姿が映し出されている。

「——レイ!？」

映像を見た星は驚きを隠せないといった表情で目を丸くさせた。

それもそうだ。今の星には、自分の目に映るそれが真実だとは到底認識できなかったのだ。

あの時エリエと別れ、1人で囚われの身となった時に、一緒に全てを切り捨てたつもりだった。しかし、今自分の瞳に映るのは紛れもなくレイニールの姿だ——。

「ほう。侵入者が入ってきたようだ。まあ、私には関係ないがね……」

「——待ってください!？」

星は大声で叫ぶ。

モニターを見ていた男が突然振り向くと、一瞬驚いた顔をしたが、すぐに不気味に笑いながら徐々に星の方へと向かってきた。

狼の覆面の男は低い声で星の耳元で呟く。

「……イヴ。あのドラゴンと他の者を助けたいかね?」

「——他の者……?」

その言葉に、星はもう一度モニターを確認すると、そこには人間状態のレイニールとオカマ達、エリエの姿に変わっていた。

(エリエさんにサラザさん達も……)

画面の向こうで戦っている仲間の姿を見て、星の頬を涙が伝う。

その瞬間、星の頭の中には現実世界に帰りたいという感情が一切なくなつて、どうしたら皆を無事に逃がせるかに変わっていた。

「はい! 私はどうなつてもいい。だからあの人達は助けて下さい!!」

星は涙ながらに男に訴えた。

その星の潤んだ瞳を見て、狼の覆面の男は深く頷くと優しい声で

言った。

「そんなに大事なのかい？」

「はい！　だから、あの人達には危害を加えないで下さい！」

「そうか、そんなに大事なんだね？」

星は上から見下ろしている狼の覆面の男に何度も頷いて見せた。

すると、男は星の涙を拭うと徐に告げる。

「——イヴ。泣くのは止しなさい……この私が君の悩みを取り除いて上げますよ」

「本当ですか!？」

星は希望に満ちた眼差しで、彼を見つめる。その直後、覆面の隙間から男の微笑む口元が見えた。

何故か、男の手には注射器が握られている。それを見た星は小刻みに体を震わせながら怯えた表情で尋ねた。

「……あの、それは……その……」

「分かるだろう？　君は賢い子だからね」

星は表情を曇らせながらも、その言葉に無言のまま頷くと覚悟したように瞼を強く閉じる。その直後、腕にチクリとした鋭い痛みが走る……。

注射は苦手な星だったが、この時ばかりは拒むわけにはいかない。拒めば間違いなく、レイニールやエリ工達は殺されてしまう。そう思ったからだ——。

腕から痛みが消え、星はほっとして瞼を開くと、男の手の平が頬を撫でる。

「君は本当に賢い子だね。理解の早い子は嫌いじゃないよ？」

「……はい。なら約束通り……」

「……そうだね。約束通り、君の悩みの種である彼等を、この世から完全に消してあげよう……」

「——ッ!？」

ほっと息を吐いた星の耳に、彼の衝撃的な一言が飛び込んできた。

動揺を隠しきれず、目を丸くさせた星がもう一度尋ねる。

「冗談です……よね？　だって約束が……」

「……そうだったね。でも私は君の悩みを取り除くとしか言っていないけど……何を勘違いしたんだい？」

「そ……そんな……」

確かに覆面の男は『悩みを取り除く』としか言っていない。

だが、そんな言い回しをされれば、誰でも希望を持つてしまうのは仕方がないことだ。しかも、それがまだ小学生の女の子なら、なおのことだろう……。

星の瞳から涙が一気に溢れ出し、今までの思い出が走馬灯の様に頭の中を駆け巡る。

皆に迷惑が掛からないように覆面の男に捕まった星にとって、それがなかったことにされるのが何よりも怖かった。

すぎるような瞳で、なおも必死に訴える星。

「……私はなんでもします！ だから……だからみんなには……私の友達には手を出さないで下さい!!」

だが、彼から返ってきた言葉は、あまりにも残酷なものだった。

「……ダメだよ。君はもう僕の所有物なんだから……君の心も体も……僕に——」

突如としてそう呟く男の声が徐々に聞き取れないものへと変わり、星の視界が大きく揺らぐ……。

おそらく。彼がさつき注射した薬剤によるものだろう。視界が蜃気楼の様に揺らぎ、その直後、星の全身が焼ける様に熱を帯び始めた。「ぐっ……あああああああッ!!」

その苦痛から逃れるように、星は体を反り返らせた。

今までに味わったことのない激痛が星の体を包み、それが徐々に火山が噴火する寸前の様に上の方へと痛みの根源を押し上げてくる。

それを見て男は満足そうに「フヒヒッ」と不気味に笑った。

「このゲームではプレイヤーへのシステムを介入してのアクセスが得意くない。君に注入したのは個体データ解析用の液体だよ」

「……えき………たい……っ？」

全身から滝の様に汗を流しながら、星が男に熱を帯びた瞳を向けた。

男は星の頬に手を当てながら、耳元でそつとささやく。

「……そう。君は言わば、今は亡き博士の忘れ形見……それがこの世界に居るといふのは、不可思議なことだ。だが、それが偶然ではなく必然ならばどうだい？ 君はメモリーズを開く鍵じゃないか……そう、僕は考えていた。だから、ダークブレットに捕獲を依頼したんだよ。彼等の犯罪を容易にするシステムの改正を入れるて言う条件でね……」

「……それって……」

その話を聞いた星はこの世界に來た時に初めて襲われた時と、デイーノと出会った時のことを思い出す。

そう。それは間違いなくPVPの認証スキップのことだ――。

本来はPVP時にお互いの人数が等しい時に許可される対戦システム。それは相手の了承なく、無差別に攻撃を掛けることを許可し、更には相手の生命を脅かすものだった。

実際に何度もエミル達が対策に困った事象でもあり、そのせいで何人も罪のない犠牲者が生まれたのも知っていた。

それを目の前にいるふぎけた狼の覆面を被った男が行ったことだと分かり、星の心になんとも例えがたい怒りが沸き起こってきた。

「……あなたは！……自分がなにをしたか……分かってるんですか!!」

苦痛に言葉を途切らせながらも、男に向かって怒りに満ちた瞳を向けた。

すると、男は突如として笑い声を上げる。

「ははははっ！ イヴ。君は本当に素晴らしいね……この状況で、そんな言葉が出るなんて、本来なら大人でも発狂するほど苦しいだろうに……フフツ、そんな君にもう1つ。特別なプレゼントを上げよう……」

そう男が告げてモニターの側の操作盤を操作すると、検査台から拘束具が星の腹部をがっしりと固定する。

その直後、荒く息を繰り返す星に再び注射器を握った男が迫る。

男は持っていた注射器を星の腹部に刺し、迷うことなく中の液体を

注入する。

「——うっ！」

眉をひそめると、横目で男を鋭く睨む。

男は不気味に高笑いすると、次の瞬間には平静を取り戻し、星の耳元でそつとささやく。

「……今の薬は記憶を消す効果を持ったものだよ」

「——ッ!？」

「いくら【メモリーズ】で記憶を塗り替えられると言っても。君の今の記憶は障害でしかない。いずれバグになりそうなものを早めに取り除く、目的を完遂する為には多少の不安要素であっても取り除いておく。これは当然の処置さ……」

彼の言っている意味が星にはすぐには飲み込めなかった。

いや、飲み込めるはずがないのだ。彼は自分のこれまでの記憶を完全に消し去ろうと言うのだ。それは、今まで生きてきた証を奪われることに等しい行為。

男は身を翻し操作盤の前に戻ると、忙しなく操作しながら言葉を続けた。

「そうそう、イヴ。君の大事なお友達だけ……私の計画では邪魔でしかない。君の泣き顔も笑顔も全ての表情もその感情も全てが僕だけのものだ……僕だけに向けられなければならないものだ！」

男は「ヒヒヒッ」と笑みを漏らすと、狂気に満ちた声で告げる。

「そう。これは、僕からのあの女への復讐なんだよ……僕から大切な博士を奪ったあの女の大切な物を、今度は俺が奪って壊してやる！」

そして、あいつは思い知るんだ。世の中は自分の思い描いたようにはいかないって事をねッ!!」

「……うう……ああ……やめて……みんなを……たすけ……て……」

まるで体を煮えたぎる溶岩の中に投げ込まれたかの様な激しい熱と激痛が星を襲い。

徐々に意識が遠退いていくのを感じた。

そんな中で意思とは関係なく閉じそうになる瞼を必死に見開きながら、男を見つめる。しかし、なにかを訴え掛ける瞳の星に、男は無

慈悲に言い放つ。

「……大丈夫。心配しなくても、君に関わった人間全てを始末しておくよ。次に目を覚ます頃には、この世界は僕とイヴだけのものになっているから……君は安心して人形になるといい。そう、僕の……僕だけの操り人形《マリオネット》にね……」

男はそう言い残して笑い声を上げ部屋を後にした。

それを最後まで見つめると、糸が切れたように星は意識を失ってしまふ。

意識がなくなった星だけを残し、すっかり静かになった研究室には機械音と換気扇のカラカラと回る音だけが虚しく響いていた。

* * *

アジトへの潜入3

星を探して、城内をあてもなく走っていたエリエ達の前に、上へと通じる階段が現れた。

逃げ回りながらだが、すでにこの階に星はいないであろうと誰もが感じ取っていた。

後ろからは数多くの兵士達が追いかけて来ている。

その緊迫する雰囲気の中、エリエが階段を指差して叫ぶ。

「見て！ あそこから上に上がる！」

「このまま走っていても、うちが明かないわ。とりあえず、上の階に上がりましょう」

サラザのその声に従う様に皆躊躇なく、上の階へと続く螺旋状の階段を一気に駆け上がっていく。

だが、後ろからは多くの敵が追いかけてきている以上は、上に行けば行くほど退路がなくなる為、不利になるのがセオリーだ。

しかし、だからと言ってこのまま何もこの階に留まっても、星を発見できる確率が上がるわけでもない。

今が何階に居るのかは分からないもの。だが、上空から急降下してレイニールが飛び込んだわけなのだから、だいぶ上の階だったはずだ。

そこから推測して、まずは上を探索するのがいいだろう。最悪は、敵を上階に惹き付けて、レイニールに乗ってもう一度下の階の壁を破壊してもらってもいい。また、上空に逃げるという選択肢も取れる。

通常ならばデメリットしかないが、こちらにレイニールという空中回避手段がある以上は、上階に上がることはむしろメリットしかない。

フリーダムのゲームシステム上、飛行系固有スキルの所持者は極めて低く。星を捕らえているとすれば、地上から攻めにくく守りやすい最上階辺りに監禁しているはず。

その時、一番最後尾を息を切らせながら必死に付いて来ていたカル

ビが突如歩みを止める。

「はあ……はあ……あたいはここに残るわ……」

その場に立ち止まり、肩で息をしながら苦しそうな声を上げるカルビ。

唐突にそう告げたカルビにサラザが声を叫ぶ。

「何言ってるのよ！ こんな場所で1人で残ったって勝機はないわ。あきらめないで！！」

「……サラザ。っめんなさい」

カルビはそう小さく微笑みを浮かべると、天に身を任せ両手を広げて後ろに倒れるようにして階段を落ちていった。

徐々に遠くなるカルビの姿に、オカマイスターのメンバーが瞳に涙を浮かべて声を大にして叫ぶ。

「「カルビー！！」」

階段の幅一杯に手を広げて落ちていく。

その突然の行動に追いかけてきた敵は断末魔の叫び声を上げて、次々と転がるカルビに巻き込まれていった。

カルビは相撲取りなみの体格を誇る巨漢だ——それが階段の上から転がり落ちてくれば、その殺傷能力は計り知れない。

将棋倒しの様に……ドミノ倒しの様に、一気に崩れ落ちていく敵と徐々に小さくなっていくカルビを見つめながらガーベラが叫ぶ。

「——カルビ……あの、馬鹿野郎！！」

右手を握り締め拳を階段の壁に突き立てたガーベラのその瞳は涙で潤んでいる。

皆その場に立ち止まり、勇敢に身を投げていったカルビのことをいつまでも見つめていた。

追手もなくなり、静まり返った階段に突如サラザの声が響く。

「行くわよ！ カルビの作った時間を無駄にはできないわ」

「そうザマス！ 早く人質を取り返してカルビを助けに戻るザマス！」

「……そうだ。私達オカマイスターは！」

『離れていても心は一つ！！』

オカマ達3人は拳を突き出すと互いの拳を重ね、最後に打ち付け合って互いの絆を確かめ合うように声を合わせて叫んだ。

その光景は、エリエとレイニールにとって何と表現すればいいのかわからない異質なものだ……。

勝手に決意を新たにしたオカマイスター達と共に、エリエとレイニールは再び階段を駆け上がっていく。すると、先程とは違って少し広い場所に出た。

だが、そこには3つの頭を持った犬のような獅子のような生き物が、何とも言えない威圧感と存在感を放ちながら階段の出口から飛び出してきたエリエ達を睨んでいる。その頭の大きさは大人を軽く丸呑みにできそうなほど大きく、体は象ほどはあるだろう……。

神話に出てくる3つの頭を持つ猛獣はよだれを垂らしながら、その大きな黄色い6つの瞳を部屋の入り口付近で立ち尽くしているエリエ達に向けて全身から凄まじい殺気を放っていた。

「なっ、なんて大ききなの……」

エリエがその大きな幻獣を見上げ掻き消えそうな声で呟く。その時、幻獣の頭からひよつこりと何者かが顔を覗かせる。

それは肩くらの黒髪に黄色いカチューシャを付けた中学生に入るか入らないかくらいのまだ幼さが残る少女だった。

少女は大きなあくびをしながら、何かを紙袋に入った物を口の中に放り込むともごまかせている。

そして口の中の物をごくんと飲み込んだ少女が、突如現れたエリエ達に向かって尋ねた。

「ねえー。あなたは新人さん？ それとも侵入者さん？」

誰もがその質問に答えることなく無言でいると、少女がつまらなそうに呟く。

「あつそ。そういう態度なんだ……まあ、どっちみち。ここを通る者は、このエリザベスに食べられることになるよ？」

無邪気になつこりと微笑みを浮かべた少女は、ポケットから取り出した紙袋の中の物を摘んで口の中に放り込む。

——グオオオオオオオオオオオツ!!

少女の声に答えるように、3つの頭の幻獣が咆哮を上げる。それと同時に空気が振動し、エリエ達に突風が吹き付けた。

全身を貫く様な咆哮に恐怖し、皆冷や汗を流すだけで動くことさえできない。まるで、捕食者の前に放り出された小動物の様だ――。

持っていた紙袋を放り投げ、少女は身を低くしてケルベロスの毛にしがみつくと、鋭い瞳でエリエ達を見据えて完全に戦闘態勢に入った。

どうやら、彼女の綺麗なオレンジ色の瞳は、侵入者であるエリエ達を獲物として捉えたらしい。その直後、エリエが武器を収め両手を振ると慌てて声を上げた。

「ちよつと待って！ あなたお菓子が好きなの？ なら、ここを通してくれれば、お詫びにお菓子をあげるよ？」

「……………」

少女はしばらく考える素振りを見せたが、ぶんぶんと首を振って慌てて言葉を返す。

「そんな手には乗らないし！ あたしはここを守ってれば、3食お菓子付きのお昼寝し放題の生活ができるんだし！ それに、あなたを通したらあたしが怒られるじゃない！」

その様子を見て、エリエが企み顔で満面の笑みを浮かべた。

この時、一瞬でも敵の口車に乗りそうになつた彼女を手駒に取れると、確信にも似た何かをエリエは感じ取っていた。

(何この子……めちやくちやちよろそうじゃない。これは、この子から星の居場所を聞き出すしかないよね〜)

エリエはそんなことを考えながら、それを悟られぬように満面の笑みを浮かべると、アイテムからバスケットを取り出して少女に見えるように突き出す。

少女は首を傾げながら、こちらの様子を窺っている。

「ふふくん。これが何か分かる？」

「なにになん？」

エリエがにつこりと微笑んでそう少女に尋ねると、興味津々な様子で幻獣の頭から身を乗り出す。

思惑通り彼女の視線はすでに、エリエの取り出したバスケットに釘付けた。

次の瞬間「じゃくん」と、得意気にその蓋を開けて少女に中身を見せた。

そこにはマドレーヌが山のように入っていた。

少女はそれを見てよだれを垂らすと、そのバスケットの中身に夢中になっている。

「さて、ここに入ったマドレーヌ……食べたくない？」

「食べたい！」

「なら、食べていいよ。ほら、おいでおいで」

エリエは不敵な笑みを浮かべながら、しなやかな手首の動きで少女を手招きする。だが、そんなことを気にする様子もなく。

少女は幻獣の頭から滑り降りると、警戒しながらも。ゆっくり、ちよつとずつバスケットの中のマドレーヌに向かってくる。その様子は木の実を目の前に、臆病ながらも寄って来るリスの様だ――。

エリエは彼女を満面の笑みで手招きを続けると、少女の警戒は薄れたのか、その足は徐々に速まる。

バスケットの前まで来た少女は、疑うように眉をひそめながらエリエに尋ねる。

「あつ……毒とか入れてない？」

「もちろん！ ほら――うん！ 美味しい♪」

エリエはバスケットの中のマドレーヌを自分の口に頬張って見せた。

毒が入っていないことを確認した少女は生唾を呑み込む。

エリエのその幸せそうな顔を見て、少女も堪らずマドレーヌに手を伸ばしそれを自分の口へと運ぶ。

「ほんほん、こえすほくほいひいし〜」

幸せそうな笑顔を見せ、次々と食べ進めていく少女を尻目に、エリエが何やらサラザに目で合図を送る。

サラザは無言のまま親指を立てると、少女の背後に回り込んでその強靱な腕でがっしりと少女の体を捕まえる。

「わっ！ なっ、なにをするの!? ああ、あたしのマドレーヌが」
「ごめんなさいね。私達はあなたに聞きたいことがあるのよ」

地面をころころ転がる食べかけのマドレーヌを見て、少女が涙目になりながら必死に手を伸ばす。

名残惜しそうに地面に横たわる食べかけのマドレーヌを見て、がつくりと項垂れた。

つと次の瞬間。やっと自分が掴まれていることに気が付いて大きな声で叫んだ。

「ひどい！ 騙した。鬼！ 悪魔！ 私のマドレーヌ!! んんっ?!」

「ちよつと！ 大声出さない！ あなたの仲間に見つかるでしょ!」

エリエは慌てて大声で叫んでいた少女の口を塞いだ。

その後、その少女の体を縄で拘束すると、勝ち誇ったような瞳で緊縛され地面に転がる少女を見下ろす。

少女は瞳に涙を溜めながら恨めしそうに、エリエのことを睨み付けている。

この光景だけ見ると、どっちが悪役なのか分からなくなるが、この際仕方がないだろう。

「さて、それじゃー聞くけど。この前誘拐した女の子はどこに居るの?」

「うっ……ぐすっ……あたし。そんなの知らないし……」

「本当に知らない?」

「知らない!!」

即答してそっぽを向く少女に、エリエは困り果てた様子でため息を漏らす。

縛られながら泣きべそをかいている少女に、今度はサラザが尋ねる。

「なら、こっちに小学4年生くらいの女の子が来なかった?」

「——知らないし……もし知っても、キモイからおじさんには教え
ないし……」

「おじ……へえ」

その言葉の直後、ブチッ！つという音が聞こえたかと思うと、サラザはにっこりと微笑み、両手で少女の頬を引つ張った。

少女の頬は柔らかく、まるでつきたてのお餅の様に良く伸びる。

「いつ、いはいし！ はらひて〜!!」

サラザは少女の頬から手を放すと、少女が涙ながらに訴える。

「うう……女の子なんてしらないし……こんなのあるえないし……ぐすつ……てかあたし。まだ、なにもしてないし……」

その直後、少女の瞳から我慢していた大粒の涙を一気に流れ出し。

「最初からやりなおしてほしいし〜」

つと大声で叫ぶと、少女はわんわん泣き始めた。

エリエはその様子を見ていて眉をひそめながら、サラザ達に告げる。

「——この子、本当に星の事を知らないみたいだし。なんか、凄い泣いてて、見てて可哀想になってきたんだけど……」

「確かに……サラザ。ちょっと強くやり過ぎたんじやない？」

エリエとガーベラがそう言つてサラザの方を向く。

サラザは両手を振つて否定する。

「はあく。なら仕方ない……」

エリエはため息を漏らすと、サラザに耳打ちする。

それを聞いたサラザは、大きなため息をつくと少女を肩に担いだ。

突然担ぎ上げられた少女は驚き、両足首を縛られた足をできる限り動かし、まるでエビの様に仰け反る。

「いや〜！ 放してほしいし〜」

「ごめんなさいね〜。とりあえず。あなたをこのままここに残すわけにはいかないのよ〜」

「えっ!? そんなのあたしに関係ないし！ 放して〜。降ろしてよ〜」

少女は必死に足をバタつかせるが、非戦闘状況の城の中では、サラザには……いや、もしそうじゃなかったとしても、筋肉隆々のサラザに抗う術はない。

何故なら、サラザと少女には圧倒的な違いがある。それがヒューマ

ンとボディービルダーという決して揺らぐことのない種族の違いだ
—。

「さて、この階には用事もないし。次に行きましょう」

「そうね。時間もないし」

「じゃが、本当にこの娘も連れて行くのか？」

そう首を傾げて尋ねるレイニールに、話していたエリエとサラザが
頷くと、次の階の階段へと向かって歩き出した。

サラザの肩に担がれながら少女は泣き叫ぶと、それを見てどうすれ
ばいいか分からず、その場におすわりしている幻獣ケルベロスに向
かって叫ぶ。

「やだやだ。こんなのありえなくい！ エリザベス！ エリザベス
！！」

泣きながら必死に呼びかける主に、頭が3つの幻獣は「グルルル」と
喉を鳴らすことしかできなかった。

抵抗虚しく連れていかれる少女は、最後まで頭が3つの幻獣の名前
を叫びながら階段へと消えていった。

エリエ達は薄暗い階段を上がっていく。その最中、サラザの脇に抱
かれながら静かに泣き続けている少女に、イライラしていたエリエが
声を荒らげた。

「あくもう！ ほら、泣かない！ なんか私達が悪者みたいじゃない
！」

「だ、だって……ぐすっ……だってえ」

また大声で泣き出す少女に、エリエは困り果ててため息を漏らす。

少女は泣きながら言葉を続けた。

「……どうして、あたしが……ここ、こんな目に合わない……いけない
の？ 本当は……エリザベスの背中で、颯爽と……颯爽と戦うはず
だったのにい」

少女は途切れ途切れにそう言って、また激しく泣き始めた。

だが、実際。もしも少女がケルベロスを動かしてエリエ達に襲い掛
かっていたら、敵の拠点内で武器の使えないエリエ達は間違いなく全
滅していただろう。

正直、少女がマドレーヌに誘き出されてくれるバカで助かったと言わざるを得ない。

号泣している少女に、エリエが呆れながら言葉を返す。

「どうしてって……あなたがマドレーヌに釣られたからでしょ？ それにこうでもしないと、あのケルベロスに襲われてたし。この城の中を案内してもらないと、私達が迷っちゃうでしょ？」

「知らない知らない！ そんなの知らない！ あたしにはそんなの関係ない！」

少女は足をばたつかせながら叫んだ。

全力で拒否している少女に、エリエが諭すように言った。

「だって、あなただってこの組織に居たら、犯罪者になっちゃうんだよ？ 三食お菓子付きの生活がしたいだけなら、ここじゃなくてもいいでしょ？」

「——うう……犯罪者になるのは嫌だし……」

「でしょ？ なら星を助けたら私達と一緒に行く。ねっ？」

「……お昼寝も付けてほしいし」

少女は泣き止み、膨れっ面をしてぼそつと呟く。

エリエは呆れながらも優しく微笑んで「後でお菓子作って上げるからね」と少女の頭を撫でた。

アジトへの潜入 4

それからしばらくの間。窓のない漆黒の闇の中、どこまでも続く長い階段を進んで行くと、サラザの脇に抱かれていた少女が言った。遠慮しながら、サラザの顔色を窺うように……。

「あのお。そろそろこの縄を解いてほしいし……ねえ」
「ダメ」

そのお願いをサラザではなく、エリエが即座に否定する。

早すぎるエリエの返答に、少女は不服そうに頬を膨らませ声を荒らげた。

「なんで!? てか、もうちょっと考えてから言っただけじゃあない!」
「だって、あなたが逃げないとは限らないでしょ? だから我慢して……」

「我慢できないし」
さすがに我慢の限界なのか、少女は無理やり縄を解こうと、これまでにないほど身悶える。

まあ無理もない。下の階からおそらく30分以上は歩き続けている。彼女は星よりも年上だが、その精神年齢の方は星よりもずっと幼いのだろう。

普通ではない。異常とも言える日々を生きてきた星と、平凡に何も考えることなくわがままを言って生きてきた年相応の子供の忍耐力では耐えられる限界を等に超えていた。

足をバタつかせる少女に、エリエはむっとしながら手に縄を持って
いる。

エリエが縄を少女の目の前に突き出すと、思わせぶりに笑う。

「……言う事が聞けないなら、もっと縛るわよ?」

「ええ。理不尽だし! 横暴だし! あたしは絶対逃げないし! 信じてほしいし!」

少女は必死に謝まったが……。

「……うん。やっぱり縛っておこう。サラザお願い……」

「うくん。確かに暴れて持ちにくいし。ごめんなさいね」

「えっ!? いやっ! やめてほしいし!!」

必死の抵抗むなしく。手足だけ拘束されていた体を更に雁字搦めに縛ると、まるで少女はミノムシの様だ――。

「……もうありえないし……あたし。これからどうなるの?」

少女は瞳に涙を浮かべながら、上目遣いにエリエに尋ねた。

その視線を受け、エリエは若干頬を赤らめながら咄嗟に目を逸らす。

「どうもしないけど……でも流石にやり過ぎたかも?」

「今頃気が付いたのか? 我輩は黙って見ておったが、これではどちらが悪者か分からんのじゃ」

「あはは……だって、なんだかこの子って、無性にいじめたくなるんだよね〜」

レイニールは腕を組んで少し呆れながらそう呟くと、エリエは苦笑いしている。

それを聞いて少女は、まるで助けを求める怯えたアザラシの様な瞳で近くにいたガーベラ達を見る。

ガーベラと孔雀マツザカが聞かれないように小声で話し始めた。

「あの子もそうだけど、サラザもSだからなあ〜」

「とりあえず。わたーし達はあまり触れない方がいいザマス」

「そうだな。そうしよう……」

2人は少女から視線を反らせると、少女は項垂れながら「理不尽だし……」と小さく呟く。

すすり泣きながら、すっかり静かになってしまった少女を余所に、一行がしばらく進んでいると行く手に光が射してきた。

だが今回は無闇矢鱈に飛び出すことをしない。

エリエ達は一旦その場に立ち止まり、前の部屋で捕まえた少女に尋ねた。

「この先は誰が守ってるの?」

「……えっと、確か……」

彼女はエリエの質問に頭を捻って、必死に思い出そうとしている。前の部屋に少女がケルベロスと一緒にいたということは、次の部屋

にも何か待ち受けていると考えるのが自然だろう。

思い出そうと首を捻っている少女に、焦れたエリエがイライラし始めた。

「ほら、早く!」

「ちよつと、急かさないでほしい!」

「ふくん。なら暇つぶしにほっぺでもつねろうかな」

「あつ、嘘です! ごめんなさい!」

少女は悪戯な笑みを浮かべ、手をわきわきと動かしているエリエに、慌てて首を振って答える。

「ドラゴンです! 確かドラゴンだったと思うし!!」

「うんうん。いい子には、ご褒美にほっぺをつねってあげようね」

「ちよつ!? 話しがふがうひく!!」

エリエは楽しそうに満面の笑みで、少女のほっぺたを引っ張っている。

それを見て、サラザが呆れ顔で言った。

「エリー、その子で遊んでないで。突破する方法を考えないと」

「……うう。ひほいひほはひだし」

「あつ! そうだった!」

エリエは少女の頬から手を放すと、顎に手を当て考え出す。

ただ実際、彼女から引き出した『ドラゴン』という漠然とした情報だけでは作戦の立てようがない。エミルが居れば少しはドラゴンの弱点なんかを知っていたかもしれないが……。

少女は縛られている為、赤くなった頬を撫でることもできず。

「扱いがあんまりだし。はじめからやりなおしてほしい。うわん!」

つと、泣き出してしまった。

そんな少女に、作戦を考えていたエリエが不機嫌眉をピクピクさせ大声で叫んだ。

「もう! わんわんうるさいなあ!! あつ、そうだ! この子を囮に使うって、その隙に駆け抜け——」

「——エリ? さすがに、やっていい事と悪い事があるのよ?」

それはさすがに酷すぎると思ったのか、サラザがむっとした顔で眉を寄せて彼女をたしなめる。

エリエは表情を曇らせ「分かってるよ」と頬を膨らませた。

その時、ガーベラが口を開く。

「サラザ。チームを分けて、基本スキルのスイフトの者が敵の注意を引きつけている間に、タフネスのメンバーで一斉に叩くっていうのはどう?」

「そうね。それが一番——」

「——待つのがいい!」

ガーベラのその意見にサラザの言葉を遮って、レイニールが物申す。

レイニールは金色のツインテールを揺らしながら、スタスタと先頭に出ると腰に手を当て偉そうに告げる。

「星龍の我輩を忘れてもらっては困るのじゃ! 我等が星龍はドラゴン族の中でも超一流。そこらのドラゴンなど、一瞬で蹴散らしてやるのじゃ!」

「それはダメだよ。君みたいな可愛い子に……そんなことはさせられないわよ」

「——ッ!?!」

驚いて目を丸くさせているレイニールの肩を、ガーベラのゴツゴツした手ががっしりと掴んできた。だが、レイニールが驚いたのは、何も肩を掴まれたからではない。

驚いた本当の理由は、突如ガーベラの口から発せられたオカマ言葉だった。

「なんじゃ? 変な声を出して……」

「はっ! ……どうしたんだ? 驚いたような顔をして……」

2人は無言のまましばらく互いに顔を見合わせると、レイニールがカーベラの手を振り払い声を上げる。

「とにかくじゃ! 我輩に任せておけば良いのじゃ!」

「だからダメだって!」

自信満々に胸を叩くレイニールを、再びガーベラが止める。

それはまさにイタチごっこで、レイニールが「任せろ」と言えば、ガーベラは「ダメだ」と言う繰り返しで一向に話が進まない。

そんな押し問答が続いているのを見て、エリエとサラザが彼等を放置したまま話を続ける。

「でも、スイフトって私と他に誰がいるの?」

「そうね。私はタフネスを選択してるし……孔雀マツザカはどう?」

2人は無言のまま、腕を組んで立ち尽くしている孔雀マツザカの方を向く。

孔雀マツザカは無言で、口元に微かな笑みを浮かべ親指を立てた。それを見て、サラザとエリエは希望に満ち溢れた表情で頷く。

「なら、私と孔雀マツザカさんが先に突入して、サラザとレイニール。ガーベラさんで……」

その直後、サラザに抱えられている全身を縄でぐるぐる巻きにされていた少女が声を上げる。

「あたし! あたしもスイフトだし! 協力するから、この縄を解いてほしいし!」

ここぞとばかりに、声を大にして熱い視線をエリエに送る少女に向かって、エリエは素っ気なく視線を逸らす。

「ああ、あんたには聞いてないから……」

「そ、そんな。ひどいし、あんまりだし……なら、あたしはどうしたら解放されるんだし!」

「うん。全部終わってエミル姉の城に着いたら?」

エリエのその言葉を聞いて、頬を膨らませて不服そうに言った。

「いや。放してほしいし! てか、さっきからあなたのせいで、あたしの中のあなた達への信用度がガタ落ちだし!」

「ほお」

そう言い放った少女に、エリエは不敵な笑みを浮かべると、手をわきわきと動かしている。

少女はエリエのその表情を見て、怯えたように顔を引き攣らせた。その直後、やはりエリエによって少女の頬が引き伸ばされ。

「ほうほう。そもそもあんたに拒否権はないんだけど？」

「——いいい、いいいひく。あはひであほぶのやめへほひいひく」

「本当にあんたは楽しい子ねえく」

少女の頬を引つ張って笑っているエリエを見て、サラザが普段とは明らかに違うエリエを不安そうに見つめている。

いつもデイビッドと言い争いなどをしていたエリエだったが、今日の彼女はそれに輪を掛けて激しい。

つと言うか星への態度もそうだが、普段の彼女は年下に優しいはずなのだが……。

「……エリー？」

「んっ？ なに？ サラザ」

頬を引つ張ったままエリエが振り返る。

「エリー。あなた……星ちゃんの事が心配でたまらないでしょ？ だから、その子で気を紛らわしている——違う？」

サラザのその言葉を聞いて、驚いた様な表情のエリエは、咄嗟に少女の頬から手を放した。

核心に迫る問い掛けに動揺を隠しきれず、エリエは慌てて視線を逸らす。

それもそうだろう。サラザの言ったことは殆ど真実に近い。

どうしても目の前で星を誘拐され、為す術なくそれを見ているしかなかったエリエには、言葉では言い表せないほど責任を感じていた。

いい意味でも悪い意味でも彼女は真面目なのだろう。どうにかなりそうな心を少しでも何かで紛らわせることで、平静に保とうとしてじやれ合っていると思えない。

そんなエリエに、サラザが言葉をぶつける。

「……現実から逃げてても。あの子は戻って来ないわよ？ エリー」

「サラザ！ それ以上言わないで!!」

エリエは咄嗟に耳を塞ぐと、その場に座り込んだ。

そんな彼女の肩を掴むと、サラザが叫ぶ。

「いいえ、私は何度でも言うわ！ エリー、現実逃避をしてはダメよ！ しつかり現実を見て！」

「——分かってるよ！　でも……でも……カレンにデイビッド、カルビさんまで居なくって……エミル姉も来ないし。この子も星の情報を全く知らない。全然思い通りにいかないのよ……私はどうしたらいいの……」

　項垂れた彼女の頬を大粒の涙が伝う――。

　エリエにとって、今回の作戦は星を助け出すだけという容易な考えしかなかった。しかし、実際にふたを開けてみると全く違っていた。

　まあ、あれだけのことが一度に起これば誰でも混乱するし、端から彼女の頭には、仲間を失うという想定はしていなかったのだろう。

　だが、結果は次々に襲い掛かる敵に、次々に消えていく仲間達。

　そして、アジトへの侵入には成功したものの。一向に終焉が見えない現状に、彼女の頭の中では最悪のシナリオが渦巻いていた。

「……あの時、私が星を外になんて連れ出さなければ……あの時、私が檻さえ破壊出来てれば……こんな事にはならなかったのに！」

　そう呟くと、エリエは怒りに任せ握り締めた拳を地面を強く叩きつけた。

　その姿を見ていたサラザが表情を曇らせていると、地面に置かれた少女が口を開く。

「……情けないし」

　泣きながらどこにもぶつけようのない憤りを地面に吐き出しているエリエを見ていて、毒づいた少女の言葉に、エリエの体がぴくつと反応する。

アジトへの潜入5

今までの態度とはまるで別人のように、少女は俯き加減で冷たく言い放つ――。

「――なんだか、もっと待遇いい所に連れて行ってくれそうだから我慢してたけど……もういいし。切り裂け……」

少女が小声でそう呟いた瞬間。一陣の風が吹き荒れ、少女の全身を縛っていた縄を切り落とす。

自由になった少女は徐ろに立ち上がると、その肩に今までいなかったはずの小さな白い毛並みのイタチが乗っている。

その場にいる全員が驚いて目を丸くさせていると、少女は不敵な笑みを浮かべながら告げる。

「これでもあたしはダークブレットの幹部だし。今までののは全部暇つぶしの演技だったんだし」

「――演技にしては、マジ泣きしてたけど……？」

得意げに語っていると、エリエがそう言って首を傾げ、少女は赤面させながら叫んだ。

「うっ、うるさい！ ちょっと手こずっただけだし！ ……もう。ギルガメシュが寝てるから悪いんだよ？」

少女は肩に乗っていたイタチの顎を撫でながら小声で叱る。イタチは怒られていることなど微塵も感じさせず、嬉しそうに少女の顔に頬擦りしていた。

少女は指差すと、その場に居る者全員に、堂々と言い放つ。

「いいか、よく聞け！ あたしは百獣の王の異名を持つミレイニ様だし。凄腕のビーストテイマーのあたしにかかれば、あんた達なんてけちよんけちよんのぎったんばったんに……」

自慢げに右腕を突き出して喋っている最中、ミレイニの前にエリエがチョコレートを差し出す。

少女はエリエの差し出したチョコレートに飛び付くと。

「これくれるの？」

つと、瞳をキラキラさせてエリエの顔を見上げた。

見下した様に、口元に不敵な笑みを浮かべたエリエが突如指を鳴らす。その直後、後ろに回り込んだサラザがミレイニの腕をがっしりと掴む。

「うわあ〜！ 放せ！ 放すんだし！」

「……………ふくん。ミレイニって言うんだ。それで私達なんて……………なんだって？」

「あわわわ……………お、お姉さん。目が、目が怖いし……………ほんのじょうだ——」

手をわきわきさせながら悪魔のような笑みを浮かべ見下ろすエリエに、ミレイニの顔から血の気が引いていく。

つと次の瞬間。エリエがミレイニの頬を思い切り引っ張る。

「いふあい。はおが、ほびひやうひ〜」

「……………ごめんなさいは？」

「ごへんなはい！ ごへんなはい！ ごへんなはい！！」

瞳に涙を浮かべながら、必死に謝るミレイニ。

その姿を見てエリエは小さくため息をつく、ミレイニの頬から手を放した。隙を見てサラザの手から逃れ直ぐ様。その場から走って離れるとエリエの手の届かない場所に移動する。

ミレイニはつねられた頬を撫でると、ビシツと指差し不機嫌そうに目を細めている。

「……………もう。鈍すぎだし！ あたしがその星つて子を助けて上げるって言ってるんだし！！」

「……………えっ!？」

驚いているエリエに向かって少女は自信満々に言い放つ。だが、正直な話。お菓子一つで買収されるミレイニをどうしても頼もしいと思えない。

今までの行動や言動を見てみると、あまりにも幼すぎると感じるし、それどころかドラゴンを操る人間にお菓子をチラつかされれば、一瞬で寝返りそうだ——。

「この上の階にいつのは氷雪系のドラゴンが待ってるはずだから、あたしが先に突っ込んで敵を惹きつけてやるし！」

「ちよつと待ちなさいよ！ あんたじや向こうに寝返る可能性の方が高いですよ！」

「寝返らないし！」

「いや、寝返るかもしれないし！」
「……………」

エリエがミレイニの言葉を真似ると、ミレイニはあからさまに不機嫌そうな表情で。

「なら。寝返るし……………」

「ほお〜」

彼女の返答に目を細めて両手をわきわきさせながら、エリエがミレイニに迫って来る。

「——ツ!? いや、あの。今のは言葉のあやだし！ てか、手をわきわきするのやめてほしいし！ 目も凄く怖いし！」

怯えるミレイニに迫ると、エリエはわきわきと動かしていたその手でミレイニの頬を引っ張った。

手足をばたつかせているミレイニにエリエが告げる。

「……………ほら、ごめんなさいは？」

「ごえんなふあい！ ごえんなふあい!!」

ミレイニが瞳を涙で潤ませながら必死に謝ると、エリエはため息混じりに呟く。

「はあく、もういいわ……………とりあえず。あなたは私の側から離れないこと。分かった？」

その言葉にミレイニはそっぽを向いて答える。

「あたしは百獣の王だし。あんたなんか守ってもらわなければならない、別にないし……………」

「……………なんですって〜？」

「ごえんあはい！ ごえんあはい!!」

泣きながら再び頬を引っ張られているミレイニを見て、肩に乗っていたイタチが呆れながら地面に降りた。

エリエが頬を引っ張っていた手を放すと、ミレイニは地面に座り込んで。

「ぐすつ……ひどいし……あんまりだし……あたしのほっぺはアコー
デオンじゃないし……」

何度もエリエに頬を引つ張られたことでトラウマになりつつある
のか、両手を頬に当ててミレイニは地面に顔を伏せて泣きべそをか
いている。

頻繁に頬を引つ張られていけば、警戒心が強くなるのは当然だ。そ
んな主人の横でイタチがぺたっと主人の顔に手を当てた。

「とにかく。ミレイニは私の言う事を聞くこと！ 妹がお姉さんの言
う事を聞くのは当然なのよ？」

「……妹?! あたし、いつから妹になったし!？」

突然エリエの口から出た『妹』という言葉に驚き、身を起こしたミ
レイニが自分のことを指差している。

エリエはミレイニの肩を掴むと、彼女の顔をじつと見つめる。

「……そんなの最初からに決まってるじゃない。ミレイニはなんだけ
他人な気がしないんだよね」

「本当!? 本当にあたしの事を妹だと思ってるんだし? だったら
もつとあたしに優しくしてほしいし! お姉ちゃんなら、妹に優しく
するのは当然だし。お菓子くれるのも当然だと思うし!!」

ミレイニはにっこりと微笑むと「だから、さっきのチョコレート頂
戴」と両手を差し出した。

その直後、エリエの方からブチツ!という音が聞こえ、ゆっくりと
ミレイニの元に歩いてくる。

目の前にまで来たエリエは、笑顔で両手を前に突き出しているミレ
イニに低い声で告げる。

「チョコ上げるから、その『し』で語尾やめなさい……」

「無理だし。これは癖みたいなものだから、今更治らないし。それよ
り、チョコほしいし♪ チョコチョコ♪」

チョコレートを買えると思っっているのか、上機嫌でいるミレイニの
頬をエリエが引つ張る。

「……そういう時は無理じゃなくてまずは『努力します』なの! は
い。ごめんなさいは?」

「ごえんなふあい！　ごえんなふあい！　ごえんなふあい！！」

両手をばたつかせ、ミレイニは瞳を涙を潤ませて謝ると「よろしい」とエリエが頬から手を放した。

潤んだ瞳で両手で両頬を擦っているミレイニに、エリエはチョコレートを渡す。

ミレイニはそのチョコレートを受け取ると、一瞬の間に外側の紙を破って口の中に頬張る。その様子から見て、おそらくすでにエリエに怒られたことなど気にしていない。

いや、すでに遠い過去の出来事のように感じているのかもしれない。「やったく。我慢してたぶん……ふおくおいひひ〜♪」

今までにないほど幸せそうな表情で、チョコレートを頬張っているミレイニの頭をエリエが優しく撫でた。

ほっぺたいっぱいにチョコレートを詰め込んだミレイニは、まるでリスの様だ――。

「いい子にしてたらお菓子くらいいつでもあげるから、私の事はお姉ちゃんって呼びなさい」

「もぐもぐ……うん。分かったし！　なら、あたしの事はミレイニ様って呼ぶといいし！」

「ええそうね。ミレイニさ……」

ミレイニがさらつと口にしたその言葉に、ふと我に返ったエリエがむっとしながら彼女の頬を引っ張る。

「――ええ？　どうして私が、あんたに様を付けなきゃいけないのか、納得いくように説明しなさいよ……」

「いはい、いはいひ〜」

どうやら、お姉ちゃんと呼ばれて上機嫌になっていたエリエも、ミレイニの言葉をスルーしてはくれなかったようだ。

エリエは目を細めながら、不機嫌そうに笑みを浮かべミレイニに告げる。

「……ごめんなさいは？」

「ごえんなふあい！　ごえんなふあい！」

何度も同じことを繰り返すミレイニに、わざとやっているのではな

いかと思いながら、エリエはため息混じりに心の中で呟く。

(はあ……これで生意気じゃなければ、星と一緒に可愛いのに……)

そんなやり取りの最中に、後ろからサラザが声を掛けてきた。

「なんだか楽しそうな時に悪いんだけど。そろそろ先に進みましょう?」

「あつ、ごめんね!」

エリエはミレイニの頬から手を放すと、サラザの方へと身を翻す。

その横で未だに押し問答を続けているレイニールとガーベラを見て、大きなため息を漏らしたエリエがサラザに向かって口を開く。

「どうする? このままここにいってもらちが明かないし……追っ手も心配だし。早く上の階に行こ」

「そうね。でも……」

そう呟き、もめているレイニール達とチョコレートを口の中で、ゆっくり溶かすようにして食べているミレイニを見た。

確かに、この状況では上の階で待ち構えているというドラゴンの討伐なんて難しいだろう……。

ドラゴン是最強の種類のモンスターに設定されている。そんな強敵相手に、武器もなくこれだけの人数で挑むのはリスクが大きすぎる。

大きなため息を漏らす2人に、ミレイニがチョコを頬張りながら腰に手を当て口を開く。

「ふおふふい——」

「——ミレイニ。いいから、チョコを飲み込んでから喋りなさい」

もごもごと口の中にチョコレートを含んだ状態で喋り始めたミレイニに、エリエは呆れながら顔を押しさえると、ミレイニはごくんと飲み込んで再び口を開いた。

「あたしに任せてほしいし!」

「……は?」

突然そう言い出したミレイニに、エリエは不思議そうに首を傾げた。

それもそうだろう。ミレイニはビーストタイマーと言うことだか

ら、固有スキルも動物系のモンスターを使役することなのだろうが、先程目の当たりにしていったケルベロスはその下に残してきていた。

つと言うよりもミレイニだけを強引に誘拐してきたのだが……。

それはとりあえず置いておくとして、もしもまだ凶悪なモンスターを所有しているにしても、ドラゴンと渡り合える獣系モンスターなどこの世界にはそうそう存在しない。

前にも説明した通り、ドラゴンはこのフリーダムの中でも最強クラスのモンスターに設定されており、ミレイニの操る動物系のモンスターと一線を画す。

動物系にもそれなりに強いモンスターはいるものの、ドラゴン系と比べると数段ランクが落ちると言わざるを得ない。

なのだが、ミレイニは勝利を確信したかのように、真つ平らな胸を誇らしげに前に突き出した。

自信に満ちた表情でミレイニは力強く胸を叩くと、今度は手を前に突き出す。

ゆっくりと瞼を閉じ、全神経を集中させる。すると、彼女の指にはめられていた漆黒の玉が中央にあしらわれている黄金の指輪が光りを放つ。

「いでよ！ 炎帝レオネル！ アレキサンダー!!」

そう叫んだミレイニは、指輪をはめている方の手を今度は天に掲げる。

直後、真上に黒い渦が発生し、その中から青い炎の鬣をまとった白毛のライオンが現れた。

——ガオオオオオオオオオオオオツ!!

現れたライオンは天に向かって、けたたましい咆哮を上げた。

アジトへの潜入6

驚くエリエのその横で、ミレイニが誇らしげに言った。

「これが強力ボスモンスターの炎帝レオネルだし！　ちなみに青い炎の方が赤い炎よりも温度が高いんだし。これはちよつとした豆知識だから、覚えておくといいかもだし！」

指を立てて自慢気に豆知識を披露するミレイニにエリエは少しイラツとしたものの、気を取り直して現れたライオンに目をやった。

青い炎の鬣はメラメラと揺らめきながら燃え上がってる。

その体を覆う白い毛は、まるで新雪のようにふさふさで炎の光を受けてキラキラと輝いている。瞳は青く宝石のようだし、なにより凜として堂々たるその姿は、まさに百獣の王の名に相応しいものだ。

その直後、ミレイニが現れた青い炎の鬣のライオンの体に抱き付く。

「アレキサンダー。相変わらずふかふかだし〜」

抱きついているミレイニのすぐ横には、メラメラと燃える炎がある。

主人の愛情表現にライオンの鬣が更に大きく激しくなり。このままでは、ミレイニは大火傷する危険があると思ひ。

それを見たエリエは慌ててミレイニに叫ぶ。

「——バカ、炎が！　危ないから早く離れなさい!!」

慌てふためいているエリエが近付こうとするが、その炎の勢いと熱にたじろいでしまう。しかし、心配するエリエを余所に、ミレイニは何ともなさそうにきよんとしている。

つと遂にミレイニの体の直ぐ側まで炎が迫ってくる。これだけ近づいていればその熱で火傷を負いそうなものだが、ミレイニはそれでも何ともないといった表情で、あんぐりと口を開いたまま突っ立っているのリエを見て小首を傾げている。

だが、エリエが驚くのも無理はない。普通なら炎に触れているだけで、ゲームであれダメージを受けるのは間違いない。そして、腕がすっぱりと入っている今の状況下であれば尚の事だろう。

ミレイニは横に燃えている炎の鬣を見てにやりと悪戯な笑みを浮かべ、そーつと炎に手を伸ばす。

「……大丈夫だし」

「ば、ばか！ なにしてるのよ!!」

（……何考えてるのよ。この子!? 炎の中に手が——）

予想外のミレイニの行動にはっとしたエリエが思わず目を瞑る。

次にミレイニの悲鳴が聞こえてくると思い込んでいたエリエの耳に飛び込んできたのは、楽しそうに笑うミレイニの声だった。

ミレイニは炎の鬣の中で体を優しく撫でていた。しかも、ライオンの方も満更ではないようだ。

喉を鳴らしながら、ゆらゆらと尻尾を振っている。

その姿にエリエの頭の血管がブチツ！つと音を立てて切れる。

「……ミレイニ。あんた人を脅かして……」

憤ったエリエがミレイニに近付こうとすると、ライオンの青い瞳が鋭く光って大きく咆哮を上げた。

エリエの殺気に反応したのだろう。一気に鬣の炎が燃え上がり、それと同じくして更に激しさを増した炎の熱がエリエを襲う。

「熱い!!」

咄嗟に後ろに飛んで距離を取ったエリエは目を丸くさせた。

それもそのはずだ。先程、エリエが熱を感じたその鬣に、ミレイニがすっぽりと顔を埋めていたのだ。

「な、なんであんたは平気なのよ!？」

「ふふ〜ん。アレキサンダーは心を許した相手にしか、炎を預けてくれないのだ!」

「へえ〜」

ミレイニは素っ気なく返したエリエに不満そうに「反応薄いし」と不服そうに頬を膨らませている。

彼女としてはもっと驚いてもらえろと思っていたのだろう。まるでフグの様に頬をぷっくりと膨らませたままエリエのことを睨んだ。

そこで、エリエは今更ながらにフリーダムシステムのことを思い出す。

(……あれ? ここは建物の中。なのにどうして、あの子は固有スキルが発動できるの?)

ふと沸き起こってきた疑問をエリエは、ライオンと楽しそうに戯れているミレイニに尋ねる。

「そのライオンはあなたの固有スキルなんですよ? どうしてこの場所呼び出せるの?」

エリエの疑問も最もだろう。この場所——つまりは、非戦闘区域に指定されている屋内では如何なる戦闘行為も行えない。

それは戦闘行為の中に含まれている固有スキルの使用も制限されるということであり、今ミレイニが固有スキルである獣を召喚できるはずがないのだ。

「ああ、この城の階層は分かれていて、広場だけは固有スキルが使える様になってるし。他の場所ではギルドマスターが武器の使用を仲間であっても制限してるらしいし。でも、あたしだけは例外だし。あたしのスキルは『ビーストテイマー』元々は獣系のモンスターを手懐けるものだし。えーと、簡単に言うところの指輪だし!」

ミレイニは右手の中指にはめられた指輪を前に突き出す。

それをサラザ達も食い入るように見つめる。

彼女達の反応に気を良くしたのか、ミレイニは得意気になって説明する。

「この指輪は別の場所からこの場所に転送できるトレジャーアイテム『リング・オブ・ゲート』だし。これがあれば、いつでもどこでも思い通りの場所に、タイムしているモンスターの召喚が可能だし。ちなみに、戦闘用アイテムじゃないから、制約にも引つかからない。あたしの固有スキルはタイムする時しか固有スキルは発動されないんだし。だから、召喚の際はこの指輪を使えば何の問題もない……こんなの初歩の初歩、常識だし。こんなことも知らないなんて、素人も素人。そんな奴はもう、もぐりとしか——」

自慢げに胸を張って話しているミレイニの頬をエリエが思い切り引っ張る。

「——あなたの固有スキルの事なんて、私達が知ってるわけないで

しよ!? ほら、謝んなさい。ごめんなさいって!!」

「ほえんあはい! ほえんあはい!!」

瞳を潤ませながら謝るミレイニの頬をむっとしながら引つ張っているエリエ。

ミレイニの偉そうな態度が相当気に障ったのか、なかなかエリエも手を離そうとしない。その様子を見兼ねたサラザが声を掛けた。

「エリー。そんな事いいから」

「ああ、そうだった!」

エリエは思い出したようにミレイニの頬から手を放すと、レイニール達の方へと向かって歩き出す。

レイニールとガーベラは押し問答を止め、互いに顔を睨み合っている。そんな2人の側にいくと、エリエは大きいため息をついた。

「それで、決着は着いたの?」

その声に反応してレイニールが叫ぶ。

「決着もなにも……こいつが、一步も引かんのじゃ!」

「あたり前だろ? ここはタフネスである私か、サラザがタゲ役になる方が安定して——」

「——だから、我輩はお前達とは違うと、何度も言ってるのじゃ!!」
再び言い争いを始めるレイニール達に、エリエは頭を抱えている。

レイニールもガーベラもどちらも負けん気が強い性格らしく。これ以上、何か言って止めようものなら火に油を注ぐ結果にしかならない。これは自然と沈静化するのを待つしかなさそうだ——。

そんな状況でその横から、今度はミレイニが口を挟んできた。

「あたし、あたしに任せるし!アレキサンダーとギルガメシユのすごい技を見せてあげるし!」

エリエは大きなため息をつくと手で顔を覆って天を仰いだ。

それもそうだろう。もう結構な時間、敵の本拠点の階段で立ち往生している。にも拘わらず、作戦は一向にまとまらない。

そんな中、エリエの脳裏にふとエミルとデイビッドの顔がチラつく。

「——こんな時、デイビッドやエミル姉がいてくれたら……」

そんなことを考えながら、まとまりに欠けるメンバー達を見つめていた。

だが、いつまでもここに留まっているわけにもいかない。

確かにミレイニの言う通り、移動速度の最も速い炎帝レオネルとミレイニのペアを行かせるのが正解かもしれない。

しかし、彼女は元ダークブレットのメンバーであり。しかも、裏切る裏切らないに関わらず。頭の出来は左程いい方ではないようだ。

おそらく。突撃を掛けて速攻で追い込まれ助けを求めながら、泣き喚く彼女の姿が目に見えるようだ……。

レイニールを先に行かせても。レイニールもレイニールで攻撃力はあるものの、あまり頭の方は良くない。

いや。それ以前に人間状態ならまだしも、ドラゴン状態に戻れば、その重量に耐えかね地面が陥没する恐れも捨てきれない。

エリエは考えを巡らせていたが、一向に打開策になりそうなものは浮かばない。

(……こんな時。こんな時あいつなら……)

瞼を閉じてもしもデイビッドなら、この状況をどう打開するかを考える。

こういう時。デイビッドなら、なんらかの意見を出してくれるに違いない。

その時、エリエの脳裏にデイビッドが、レイニールの背中から飛び降りていった最後の姿が浮かぶ。

(そうだ！ あいつなら、自分が囹役になつてでも血路を開く!!)

エリエは覚悟を決めたように瞼を開くと、皆に向かって叫んだ。

「皆！ 私が先に突入する。その後サラザ達、オカマイスターに突入してもらって、最後にミレイニ、レイニールの年少コンビに行つてもらうわ！」

エリエがそう言い放つと、レイニールは彼女の提案が不満なのか、それに異を唱えた。

「ええい。ちよつと待つのじゃ！ 我輩はお前達より年上じゃぞ!?

それに上に居るのが冰雪系のドラゴンならば、我輩が突入して——」

「——だめよ。あなたがドラゴンの姿に戻れば、城の床が抜ける恐れがある！ レイニールはそのままの姿で、できうる限りのサポート。いいわね！」

彼女の勢いに押され、レイニールは思わず口籠ると。

「うう……仕方ないのじゃ」

つと、珍しく素直に引き下がる。

エリエは決意に満ちた眼差しで、階段の先に開いた次の階への入り口を見つめ叫んだ。

「必ず皆生き残って、星を連れて帰るよ！」

『おー！』

その場に居た全員が声を合わせてそう叫ぶと、再び次の部屋に向かい歩き出す。

アジトへの潜入7

入り口の前でエリエを戦闘に部屋の中を覗くと、中にはミレイニの言った通り、大きな白い鱗を覆われたドラゴンが悠々と首を伸ばして、侵入者であるエリエ達を黄色い瞳が睨んでいた。

心臓を鷲掴み——いや、凍てつかせるようなその瞳は、心の中を見透かすようにまっすぐ全員の瞳を見据えている。

ドラゴンの全身から放つ凄まじい覇気にエリエは緊張から思わず息を呑むと、後ろにいるメンバー達に小声で告げた。

「いい？ 私が合図したら飛び込んで、スキルが使えない以上。倒す事は難しい……だから少しでも、相手の気を惹きつけて、その隙にミレイニ達から上の階へ続く階段に向かう……分かった？」

エリエは小声で、部屋の奥にぽつかりと開いている階段の入り口を指差した。

だが、その階段への入り口は白いドラゴンの背後にあり。そこに辿り着くには誰かがドラゴンの注意を惹かなければならない。

それに加えてここは城内で、その中では基本スキルの攻撃速度と移動速度をアップさせる『スイフト』攻撃力と防御力を底上げする『タフネス』の二種類は使用可能だが、固有スキルは使用不可能と武器の使用は不可になっている。

正直。武器も固有スキルも使えないこの場所では、この世界でも最強クラスのドラゴン種を相手に戦闘になったとしたら、戦う前に全滅させられるのがおちだ。

しかし、エリエの作戦にミレイニとレイニールは不満そうに呟く。「でも、別に逃げなくても。あたしなら倒せると思うんだけどなあ……」

「そうなのじゃ。どうして我輩のような高貴なる龍族が、あんな低俗な者に怯えるような真似をせねばならんのじゃ……」

眉をひそめ頬を膨らませる2人に、エリエが呆れながら頭を抑える。

エリエは深呼吸をして心を落ち着かせると、少し膝を折って2人に

言った。

「だから、今の目的はあのドラゴンを倒す事じゃないの。今は星の救出が最優先しないと……レイニールは主様を助けたくないの?」

「もちろん助けたいに決まっておるのじゃ!」

この場所で一番星を助けたいと思っっているのは、他でもないレイニールだ。それを分かっているのか、エリエはそこを突くように言った。

「なら、意地は捨てて、今はそれを優先すること。いい?」

「うう。歯痒いが仕方ないのじゃ……」

そう力強く頷くレイニールに、エリエはそう言い聞かせると、今度は何か企んでいるような笑みを浮かべてミレイニの方に目を向ける。

「ミレイニもこの作戦が終わったら特別にケーキ焼いてあげる」

「ケーキ!?! 本当だし!?!」

エリエは嬉しそうに瞳を輝かせるミレイニにっこりと微笑み頷いた。

「ほんとのほんとだし!?!」

「本当! だから、私の言う事を聞くように! 分かった?」

「了解だし!」

ミレイニは背筋を伸ばしてビシツと敬礼する。

計画通りにお菓子でミレイニを買収することに成功したエリエはミレイニの頭を優しく撫でてやる。

エリエは険しい表情で前を向き直ると、ドラゴンの覇気に当てられ小刻みに震える体を抑え部屋の中に飛び込んでいった。

部屋に入ると、すぐにドラゴンに捕捉され。その直後、ドラゴンの口が青く輝き、その口の周りを氷の結晶が煌めく。

エリエは横目でそれを確認すると、心臓の鼓動が早くなるのを感じた。

(……まだだめ。ギリギリまで惹きつけて加速しないと……)

加速するタイミングを測るように1、2、3……と数えながら、その全神経をドラゴンの口に集中させる。

つとその直後、ドラゴンの口の周りが一層強く青く光を放つ。

「……来る!!」

エリエはそれを横目で確認すると『スイフト』を発動させ更に加速する。

その刹那、まるでレーザー光線のような青い光が噴射され、エリエの背後の地面を凍らせていく。

(よし!・かわせた!)

エリエが攻撃を無事にかわしてほっと胸を撫で下ろしたのも束の間。

今度はドラゴンの口から噴射されていたレーザーが走っているエリエの後を追い掛ける様にして向かってくる。

すぐ後ろから凍った地面がピキピキと音を立てて迫ってくる中、エリエは更にスピードを上げた。

「——なっ!?! 動かせるなんて聞いてないわよ!!」

叫びながら全力で逃げるエリエの視界を青い炎が横切った。

その炎は渦を描く様にドラゴンの巨体を包むと、そのまま天井に駆け上がっていく。

——ギオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!

ドラゴンはその熱に堪らず、けたたましい咆哮を上げた。

足を止めてその方向に目をやると、青い炎の鬣のライオンに跨っているミレイニの姿がそこにはあった。

堂々とした姿で咆哮を上げる炎帝レオネルの背中には、ミレイニが乗っている。

「ふふ〜ん。これが必殺のコンボ攻撃——フレイムトルネードだし!」

ドヤ顔でエリエに親指を立てているミレイニ。

その技を見たエリエは微笑を浮かべている。

(ミレイニ。なかなかやるじゃないの!)

すると次の瞬間、ドラゴンが大きな翼をはためかせると、突如辺りに猛吹雪が発生して自分の周りを取り巻く炎を吹き飛ばす。

一瞬で掻き消された炎を見たミレイニは、表情を徐々に青ざめると大声で叫ぶ。

「——ギルガメッシュ!!」

猛烈な氷を含んだ突風が吹き荒れる中。ミレイニの消えた炎の渦の中から、飛び出してきた何か部屋の壁に叩きつけられた。よく見ると、壁のすぐ下の地面でうずくまっているそれは、ミレイニの肩に乗っていたイタチだった。

ミレイニは慌ててライオンの背から飛び降り、急いでギルガメッシュの元へと駆け寄る。

瞳に涙を溜めながら、地面に倒れぐったりとしているイタチを拾い上げると、自分の頬に押し当てる。

直後。ドラゴンの翼に集結した氷が形を変え、拡散された氷柱のような物がミレイニを襲う。

その攻撃にはつとしたミレイニの前に立ちはだかるように、炎帝レオネルのアレキササンダーが割って入る。

無数に飛んでくる氷柱はミレイニの前で盾になっているアレキササンダーの体に突き刺さり止まった。

断末魔に咆哮を上げると、その巨体がドシンと地面に倒れた。

「なっ……アレキササンダー!!」

驚き目を丸くさせたミレイニは急いで倒れている白毛のライオンの元に駆け寄ると、その体に顔を埋める。

力無く横たわるその体を優しく撫でると掠れた声で呟く。

「……なにしてるし……あたしが……命令してから動くようになって……ふだんから……教えてるのに……」

ミレイニが地面に座り込んで啜り泣いていると、再びドラゴンの口が青く光った。だが、そのことに肝心のミレイニは全く気付いていない。

次にドラゴンの行動が予想できたエリエが慌てて叫ぶ。

「何してるの！ 早くそこから離れなさい！ ミレイニ!!」

その声が彼女には届いていないのか、ミレイニは一向にその場を動かさずとしない。

いや、離れられないと言う方が正しいだろう。今離れてしまえば、その場に仲間を置き去りにすることになってしまう。

所詮はデータの集合体でしかない彼等も、ミレイニにとっては今まで苦楽を共にしてきた仲間だ。それを置き去りにして逃げることは、彼女にはできないのだろう……。

エリエは地面を蹴って走り出したものの、とても間に合う距離ではない。

「あのバカ！……もう間に合わない!!」

どうしようもなく手を拱いていたエリエが、悔しそうに唇を噛み締めた。その直後、地面が崩れてそこから下の階に居るはずの幻獣ケルベロスが現れた。

ケルベロスはミレイニの前に立つと、けたたましい咆哮を上げた。すると、3つの頭から炎が吹き出された。

互いの攻撃が空中で激しく激突して白煙を上げると、ドラゴンの攻撃を相殺する。

ケルベロスは後ろを振り向き、喉を鳴らしながら尻尾を振った。

そう。ケルベロスは己の主の叫び声を聞いて堪らず駆けつけたのだ――。

「わあ、エリザベス！来てくれたの？ありがとうございます！」

ミレイニは希望に満ちた表情で、巨大なケルベロスの足に抱き付く。

その隙にエリエはミレイニの側に駆け寄ると、むっとしながら声を荒らげた。

「ばか！……どうして逃げないのよ！……もう少して死んじゃうところだったのよ!?!」

「……ごめんなさい」

ミレイニはしょんぼりとしよげ返った。

その表情からミレイニが反省しているのが分かるとエリエは表情を和らげた。

「――でも、周りに仲間が居たら逃げられない。か……」

「……えっ?」

「ほら、早くそのアレキサンダーだっけ？……その子を持って移動しよー」

「うん！」

優しい声色でそう告げると、エリエはミレイニの頭を撫でる。

地面に伏している炎帝レオネルは相当ダメージを受けているのか、滾々と燃えていた鬘は影を潜め、まるで雌ライオンのような姿になってしまっている。

すぐにサラザ達も来て、横たわっているライオンの体を持ち上げ。皆で力を合わせ、次の階段の入り口に運んでいる時、ふと、後ろから付いてきていたはずのレイニールの姿がないことに気が付く。

「ちよつと待って！ レイニールは!?!」

「えっ？ さつきまで一緒に居たと思っただけどく」

そう呟いたサラザが辺りを見渡す。

すると、次の瞬間。エリエ達の目に驚きの光景が飛び込んできた。それはドラゴンのすぐ足元に立っているレイニールの姿だった。

不機嫌そうにドラゴンを見上げていたレイニールは、次の瞬間には金髪のツインテールを揺らしながら肩を大きく回している。

「あのバカ！ 何をやってるのよ！」

「あつ、エリー。あなたまで!?! ちよつとく！」

エリエはライオンをサラザに任せ、咄嗟に走り出す。

サラザが止める声も、もうエリエの耳には届いていない。今の彼女の瞳にはレイニールしか見えていなかった。

それは最後に交わした星との約束『レイをお願いします』という言葉葉が大きく関係していた。

今ここでレイニールを失うことになれば、星がどんな顔をするか分からない。

(ここでレイニールにもしものことがあるれば、星との約束が……ああ、もう！ 無鉄砲な奴ばかりなんだから！)

全力でレイニールの元に向かうエリエ。

つとその時、肩を回していたレイニールがドラゴンの足に抱き付いた。

その直後……。

「はあああああああッ!!」

人間状態のレイニールは大声で叫び声を上げると、自分の数十倍は有ろうかというドラゴンを持ち上げ放り投げた。

少しだけ宙を舞ってドラゴンの体が地面に音を立てて倒れ、辺りに凄まじい土煙が上がる。

バタバタと動いていた尻尾を踏みつけながら、尻尾の動きを封じた金髪のツインテールを揺らしながらレイニールが天高らかに言い放つ。

「フン、見たか！　これが我輩の力なのじゃ！　人間の姿でも中身は星龍。同じドラゴンのくせに、不意打ちなどするから悪いのじゃ!!」今のレイニールの攻撃の方が、相手のドラゴンからしたらまさしく『不意打ち』なのだが……。

そんなことなど気にする素振りも見せず、レイニールは腰に手を当てると「はっはっはっはっ！」と勝ち誇ったように大声で笑う。

目を丸くさせたまま、ただただ呆然とそのレイニールの姿を見つめるエリエ。

だが、それも仕方のないことだろう。レイニールは見た目だけなら、小学校低学年の生徒と同じくらいの身長しかない。

っということ、数字にすると身長は120cm程度しかないのだ。しかし、それに対して相手のドラゴンの体長はざっと見ても30m近い。

その巨体を持ち上げただけではなく、放り投げるといっけいには信じ難く、エリエの思考回路がつかないのだ。

エリエははっと我に返ると、急いでレイニールの手を掴む。

「ばか！　何やってるのよ!!」

「なにって……見て分かるであろう？　生意気なドラゴンを転ばせておるのじゃ!」

「ちがう！　本来の目的を忘れない!」

「おお、そうだったのじゃ!」

レイニールは思い出したようにあっけらかんとして言った。

そのレイニールの様子を見ていた、エリエは呆れたようにため息を漏らす。

2人がそんなやり取りをしていると、倒れていたドラゴンが上空に向かつてビームを放射する。

その攻撃によって、天井を見る見るうちに凍らせていく。それを目を奪われていると、ドラゴンは徐ろに立ち上がり。辺り構わず首を振り、口から冷気のビームを発射し始める。

2人は慌ててサラザ達の元へと駆けていく。

ケルベロスの3つの頭から放たれる膨大な火力によって守られているサラザ達には、敵のビームは届かないものの、あつという間に部屋の殆どが氷で覆われてしまう。

——ギオオオオオオオオオオツ!!

ドラゴンは天を仰ぎ、断末魔の叫び声を上げて消えた——。

「……………これは……………」

その場にいた全員があんぐりと口を開ける中。良く分からない間にドラゴンとの戦闘は、敵のドラゴンの謎の消失という意外なかたちで終了した。

エミルの夢

エリエ達が対峙していたドラゴンの突然の消失は、支援部隊として後からきていたエミル達の方の戦闘が関係していた。

話はエリエ達が城を経った時まで遡る……。

* * *

エリエ達を先に行かせるとイシエル、エミル、デイーノの3人は街で回復用アイテムなど、消耗品のアイテム類を買い揃えてリントヴルムに乗った。

リントヴルムはその純白の美しい翼をはためかせながら、ウォーレスト山脈へと飛び立つ。

エリエ達が出発してから、まだ1時間半程度経過していたが、合流には左程問題はないと思われた。

いくら気持ちが悪くともはいえ、紛いなりにも高レベルプレイヤーの集まり。エリエ達も十分慎重に進んでいることだろう。

なるべく敵との遭遇を避ける為、出来る限り高々度を飛び続けるリントヴルムの背中からは、どこまでも続く雲海が広がっていた。

その白い平野を見つめながら、エミルが不安そうに呟く。

「デイベッド達は大丈夫かしら……エリーも一緒だし。心配だわよ……」

サラザ達は一先ず問題はないだろうが、エリエは一日だけとはいえ、星と長く生活を共にしていた分、愛情が深い。

しかも、デイベッドはエリエには少し甘い所があり。言いなりにはならないまでも、彼女の心を配慮して動いているかもしれない……それを思うと、エミルは気が気でないのだが。

「そない心配しなくても大丈夫だよ。みんなもう子供やないんやし。それに、そないな顔しとつたら、せつかくのべつぴんさんが台無しだよ?。」

不安そうに表情を曇らせているエミルの肩に手を置き、振り返った

彼女にイシエルが微笑んだ。

Emilもぎこちなく微笑み返すと前に視線を移す。だが、イシエルのその言葉の裏で、Emilの心の中は不安な気持ちで一杯だった。

星を誘拐されたと戻ってきた後のエリエの様子はあきらかにおかしかったし、犬猿の仲のカレンも向こう側にいるので、普段から彼女達の様子を見ているEmilは気が気じゃない。

エリエの性格上。普段から誰かに噛み付いていなければ、気持ちが悪く落ち着かないのか、普段からデイビッドにしつこくちよつかいを出している。

そんな彼女がおとなしくなるのは、お菓子を食べている時か、星と話している時以外には見たことがない。

だが、帰ってきてからのエリエは普段からは想像もできないくらいおとなしくなってしまうている。その溜め込んでいる思いが、何かの拍子に一気に爆発しなければいけないのだが……。

今のEmilは向こうのチームでは、もうすでに内部分裂を起こしているのではないかと、心配で仕方なかったのである。

Emilは遠く彼方を見つめながら、その先にいるであろう、デイビッド達のことを思いながら目を瞑った。

(——しつかりね、デイビッド。エリーを抑えられるのはあなたしかいないんだから……)

そう心の中で呟いていると、後ろからイシエルの笑い声が聞こえてきた。気になったEmilは後ろにいたディーノとイシエルに目を向けた。

何やら楽しげに、ディーノと話をしているイシエルの姿があった。

「ねえ。ディーノくん。ちよつとだけお話しせえへん？ まだまだ先は長いんやし。それに、今回の作戦の立案者やん。なんや、作戦とかも考えとるんやろ？」

イシエルは笑みを浮かべながらディーノの横に腰を降ろして、彼の腕を仕切りに引っ張っている。

ディーノはそんなイシエルの様子に、迷惑そうに眉をひそめた。

「作戦はあるにはあるけど、それは僕と彼女だけだったらの話だよ。君達までは想定に入れてない」

素っ気なく返すデイーノに、なおも執拗に聞き出そうとするイシエルの、エミルは少し呆れ顔で大きなため息をつく。

デイーノと言う少年の年齢はエミルと同じか、少し上くらいに見える。目鼻立ちもはつきりしていて、俗に言うイケメン大学生と言った感じで女性受けは良さそうだ。

だが、エミルはそんな彼の上辺には騙されてはいなかった。彼から漂う異質な雰囲気は、エミルも肌でひしひしと感じ取っていた。

街を出発してどのくらい経つのだろうか……。

長らく雲の上を飛んでいて、今背にしているのは一度、いや二度目の太陽かもしれない。

出発した時には月を背にしていたわけなのだから、夜だったのは間違いないだろう。

ここまで休みなく飛び続けているが、未だにリントヴルムは疲れを感じさせることなく力強く大きな翼をはためかせ、青い空を優雅に飛び続けている。まあ、システム上はモンスターであり、その全てはフリーダムของเกมシステムが大きく関係してくる。

地上を走る馬などの移動手段は街で安価に手に入れることができ、その全ては使用限界時間が設けられているのは知られていることだが、飛行モンスターであり固有スキルで使役したドラゴンのリントヴルムはその類ではない。

つまり、飛行用のスキルを持った全ては継続時間に制限がない。もし使用限界を迎え強制的に消滅、あるいは着陸をすれば乗っているプレイヤーが危険に晒されてしまう。それもそうだろう。飛行中に消滅すれば地面に急速に落下し、防御力を越えるダメージを受ければ、その場で即死亡してしまう。

着陸なら一見安全そうに思えるかもしれないが、そんなに簡単な話でもなく。飛行中に地上に降りるとはいえ、着陸する場所も平野とは限らず。海や湖、山岳地帯に溪谷など着陸したくても難しい場所がい

くつもある。また、フィールドのいたる場所にはモンスターが生息していて、それらのモンスター達もそれぞれ独自のAIによって動かされている。

つまり、一括管理されていないのだ——システム上。プレイヤーとモンスターは独自のシステムで運用している。

要するにもしも間違つてモンスターの認識範囲内に入つてしまえば袋叩きに遭う。その為、飛行中に墜落することは攻撃を受けるかしない限りはあり得ない。

まあ、飛行中に何者かに攻撃を受けることも相当な低空飛行でもない限りは、万に一つもあり得ないのだが……。

システム上ではリントヴルムはなんともないが、メインシステムから切り離されているプレイヤーはそうもいかない。

「エミルく。うち、疲れたく。ちと休憩しよく」

イシエルが情けない声を上げ、エミルの腕に抱き付いてきてエミルは苦笑いを浮かべる。

まあ、彼女のこの行動もこれが始めてではない。飛んでいる最中イシエルのこの泣き言も、もう何度聞いたか分からない。

素っ気ない態度を取っているエミルに、ふくれっ面をしていると、イシエルが後方に大の字に倒れる。

かと思うと、リントヴルムの背中中で年甲斐もなくごろごろとだらしく転がり回るイシエルに呆れながら大きな息を吐き出すと。

「はあく。イシエ、確かに何もすることがなくて暇なのは分かるけど……もう、来年には大学生になる人間が、そういうのはいけないと思うわ」

そうイシエルは起き上がると、エミルの顔をまじまじと見つめ言葉を返す。

「エミルは真面目過ぎるんよ。たまにはええやん……それになく。来年大学生に入る人間が、ゲームの中でだけの関係の子の為に必死になる。って言うんもおかしいと、うち思うわく」

その言葉にエミルはギョツと目を見開き、鋭い眼光をイシエルに向けた。

イシエルはその殺気だった瞳にビクツと身を震わせた。

怒りを抑えるように、肩を震わせるエミルが震える声で告げる。

「……イシエ。今の発言はこの状況下では不謹慎だわ。今はゲームも現実も関係ない。さすがのイシエでも怒るわよ？」

「違うんよー。これは咄嗟に出た失言というか、そんなんで……ごめんなく。堪忍して〜」

瞳に薄っすらと涙を浮かべながら、胸の前で手を合わせるイシエルに、エミルは「次からは気を付けてね」と優しく言った。

先程までの殺気が嘘の様に消え、イシエルもそのエミルの様子にほっと胸を撫で下ろした。それからしばらくの間、イシエルとエミルが隣り合わせで座っている。

のんびりとした雰囲気の中で、ふとイシエルが弱々しい声でエミルに尋ねた。

「なあ、エミル。さっきの事、怒つとる……？」

「ん？ ふふっ、もう気にしてないわよ」

エミルは不安そうな瞳を向けるイシエルにそう答えると、イシエルはにっこりと微笑んだ。

嬉しそうに笑みを浮かべると、イシエルはエミルの肩に寄り掛かった。エミルは優しく微笑みながら、そんなイシエルの頭を撫でる。

「もう。昔からイシエは甘えん坊なんだから」

「ふふふ、それはしゃーないよ。うちはエミルの事、大好きやからな〜」

2人の肩が触れ合い、互いに微笑み合いながら、遠くの方をずっと見つめていた。

暖かい日差し、体を包み込むようにゆっくりと流れていく風。

空気を吸い込んでため込んだ空気を吐き出す。空気はどこも変わらないはずだが、何故か今はとても美味しいと感じる。

その心地のいい感覚を感じながら、エミルはうとうとし始める。

「……だめよ。こんな時に……」

抵抗したものの。数日間、気を張りっぱなしで殆ど寝れなかったエミルはすぐに夢の中へ落ちてしまう。

エミルの夢2

* * *

夢の中で、エミルは学校の制服に身を包んでいた。ついさつきまで、白銀の鎧をまとっていたのだ——この格好から見ても、ここが夢の世界であることは疑う余地もない。

セーラー服姿のエミルは、ただただ防波堤から沈んでいく夕日を見つめていた。だが、彼女がこの景色を見るのは初めてではなかった。そう。それは忘れもしない——。

今から数ヶ月前。岬が死んですぐの頃だ——あの時のエミルは、何もかもがバカらしくなっていた。大事な人を失った喪失感というものか……。

この頃はもう。学校に行くのも、人と話すのも、生きることさえも無意味に感じていた。

それもそのはずだ。学校帰りに毎日のように通っていた最愛の妹はもうこの世にいない。その声も……体温も……笑顔も……何一つ。今の自分には感じられない。人が死ぬということは、本当にただただ【無】なのだ——。

記憶を思い返せば、後悔の念が頭の中を渦巻く。

あの時、もつとこうしていれば……そんなどうしようもない感情が頭の中を駆け巡り、自分の胸を強く締め付ける。

この時のエミルもまた、その後悔というどうしようもない感情に苛まれていた。

夕日を受けて宝石の様に煌めく水面を見つめていると、波の中にこのまま身を投げようか……そんな考えが頭を過る。

風とともに防波堤に打ち寄せる波を見ると、まだ『他のどこかで岬が生きているのではないか?』なんていう思いが、押し寄せる波のように自分の空虚な心を容赦なく抉る。

「……岬」

エミルは小さく呟く。

泣きたくても、もう数日間も泣き尽くし、涙も枯れてしまい泣くことができず。そんな、自分が惨めて仕方ない……。

残されるということがこれほど辛く苦しいことだとは、予想もしていなかった。

なんとも言えない喪失感と、どこにもぶつけることのできない虚しさ。そしてなんとと言っても、無力で非力な自分に対しての怒り。もう二度と会うことができないという事実。

そんな当たり前のことが頭の中を駆け巡り『ここで死ねば、向こうの世界で……』なんて、ありえるわけのない想像すら浮かび、自分を【死】へと掻き立てる。

『あの子は本当に満足して逝ったのだろうか……』

岬が最後に書き記した手紙を手には、何度も自分の中にいる最愛の妹に問い掛けた。だが、記憶に成り果てた彼女は微笑みながら「お姉様」と呼ぶことしかしてくれない。

エミルは持っていた手紙を制服のポケットにしまい、自分の両手を見つめる。夢でもいいから——もう一度……もう一度だけ、この手であの子を抱き締めたい。その時、突如として不思議なことが起こった。

何の前触れもなくエミルの死んだはずの最愛の妹が、唐突に隣に現れたのである。それを見たエミルは驚きのあまりに言葉を失う……。

それもそうだろう。本来の記憶なら、この後自転車に乗って家路に着くはずなのだ。しかし、目の前には死んだはずの妹が、しっかりとエリエの方を向いて微笑んでいた。

横に立っている藍色の長い髪に透き通った黄色い瞳の少女が立っていて、エミルの顔を見つめにつこりと微笑んでいる。間違いない。そこにいたのは死んだはずの妹だ——。

「——姉様。心の中で何度も呼ばれたので来ちゃいました」

岬がそう言った直後、枯れ果てたと思っていたはずの涙が止めどなく溢れ出す。

「——みさきいいいッ!!」

感情を抑えきれずに思わず、最愛の妹に抱きつくエミル。

一瞬通り抜けるのではないかなどという考えが沸き起こったが、そんなこともなくエミルの腕には懐かしい妹の体の温もりがしっかりと伝わってくる。

まるで子供のように泣きじやくる姉の頭を、岬は優しく微笑んで撫でていた。

海に沈みそうな夕日が防波堤の波打ち際に座る2人を照らし、後ろのコンクリートの地面に長い影を作っている。

自分の胸の中で泣いている姉に岬が優しく語り掛ける。

「ゲームの中でですけど……姉様とまたこうして会えて、あたし嬉しいです」

「……私もよ。ずっと会いたかったわ……」

涙で濡れる姉の顔をハンカチで拭うと岬がくすつと笑う。

エミルは不思議そうに首を傾げ「どうしたの?」と尋ねた。

岬が微笑みながら、きよとんとした表情でいる姉の顔をまじまじと見つめ。

「いえ、姉様のそんな姿。始めて見ましたので、つい」

「——えっ? あっ、ご、ごめんさい。こんなお姉ちゃんなんて、岬も嫌よね……」

エミルはその岬の言葉で我に返り、慌てて服の袖で顔を擦った。

慌てふためく姉の姿を微笑みながら岬が見つめる。その後、2人は夕日で真っ赤に染まる海を静かに眺めていた。

今、目の前で起きているのが夢だとは知りながらも、エミルは嬉しさのあまり、再び涙が頬を伝う。

それを見た岬はポケットから取り出したハンカチでその涙を拭うと、につこりと微笑み掛けた。溢れそうになる涙を上を向いて耐えると、エミルも妹に優しい微笑みを浮かべる。

今のこの出来事——それはエミルが夢にまで見たことだったからだ。

小学生の頃からずっと病院に入院していた岬とは、一緒に出掛けるなんてことは絶対に考えられなかった。

普通の姉妹ならできるようなことが、岬とは一切できなかったの

だ。

姉として妹にしてやりたいこと、教えたいたくさんあったのだが、その全ては病弱だからというだけで否定され続けてきた。しかし、今はこうして2人で夕日を見ている。それが本当に夢のようだ——いや、紛れもなくこれは夢なのだが……。

「……まさか、岬とこんな夕日を海で見れる日が来るなんて……」

つい本音がエミルの口から溢れる。

その言葉を聞いた岬の表情があからさまに曇った。

「……ごめんなさい。私が入院していたばかりに、姉様には寂しい思いを——」

エミルはそんな妹の体を抱き締めると、耳元でささやくように言った。

「——なに言ってるの？ 寂しい思いをしてたのはあなたの方でしょ？」

「あたしは慣れてます……」

そう返した岬に「そういうのは慣れるものじゃないのよ？」と言って、エミルは彼女の紺色の髪を優しく撫でる。

岬は微かに頬を赤らめると、嬉しそうに俯いた。

その彼女の表情を見て、エミルの頭の隅にあつた『もしかしたら偽物かもしれない』という疑惑は完全に吹き飛んだ。

2人は沈みかけの夕日を見つめ、その光を受けて輝く水面と同じく滲んだ涙で目を輝かせている。

その静かで落ち着いた時間を、いつまでも過ごしたい……そう思っていたエミルだが、心の中で何かがざわめくのを感じた。

それは、最後に岬が紙とペンで必死に書き記した『ありがとう』という言葉……その言葉をエミル自身。彼女に伝えられていたのかどうかが不安で仕方なかった——。

（あの時の言葉……今なら、この子に伝えられる。私のありのままの気持ちを……）

岬の横顔を見つめながら、躊躇っていたエミルだったが、意を決して叫ぶ。

「岬！」

「……………んっ？ なに？ 姉様」

「あの、そのね。あの……………」

純真無垢なその顔に、思わずエミルも言葉を詰まらせたじろいでもう。

俯き加減に口籠る姉に、妹は無言のまま笑顔で応えた。その岬の表情を見つめていて吹っ切れたように、再び意を決してエミルが口を開く。

「岬！ 手を繋ぎましようか……………」

（……………って、ちがーう!!）

思いとは裏腹に出てきた言葉に、エミルは心の中で叫ぶ。

自分の不甲斐なさに自己嫌悪に陥りながらも、それは決して表情には出さない。それに対して岬は、一瞬驚いた顔をしたが「うん！」と嬉しそうにエミルの手を取った。

「姉様の手。凄く温かい」

「そ、そうっ？」

姉の手を握って満面の笑みで微笑む妹——その最愛の妹に思いを伝えられない姉。

これはこれで問題がある。家族なのだから別に恥ずかしがることもないはず。普段なら他愛もない言葉なはずだが、それが伝えられない。

いや、もし本当に伝えてしまったらこの時間も、彼女自身も消えてしまう。そんな気がしたからこそ一番の場所で踏ん切りがつかなかったのだ。

だが、このまま彼女に何も言えないままいても、恐らく今後いつまでも後悔する。そう、たとえ夢であったとしても、その時間もいずれ終わりは来る……………。

エミルは三度目の正直とばかりに意を決して告げた。

「……………岬。あなたは幸せだった？」

「えっ？ どうしたの？ 突然……………」

姉の予想外の一言に、岬は思わず苦笑いを浮かべ聞き返した。

当然だ——突然『幸せだったか?』なんて聞かれても、答えられるものではない。だが、その真剣な眼差しにしばらく考える素振りを見せ。

「うん！ 幸せでした。友達は居なかったけど、毎日姉様がお見舞いに来てくれて、毎日が楽しかった」

岬はそう呟くと、姉の顔をまじまじと見つめた。

その透き通った黄色い瞳は、夕日を受け一層美しく輝く。

「あたしは姉様の妹で幸せでした！」

そう言つてにつこりと微笑む妹の顔が、最後の病室での一時を思い出させる。

エミルは瞳から大粒の涙を流しながら岬の体を抱き寄せる。

「ごめんなさい。ごめんなさいね……私の方が、お姉さんなのに、泣いてばかりで……」

「いえ。泣きたい時は泣けばいいんです。そう教えてくれたのは姉様ですよ?」

「ええ、そうね……」

エミルは涙を袖で拭うと、また噴き出しそうになる涙を堪え、岬の顔を見て微笑みを浮かべる。

「私も……私も岬が妹で幸せだった。短い間だったけど、あなたとの時間は一生物よ。だってあなたは、私にとってのたったひとりの妹ですもの」

「……姉様」

それを聞いて、岬の瞳からも一筋の涙が流れた。

だが、最後の時は余りにも突然で、非常に短い時間しかなく多くを語れなかった。岬がエミルの言葉に感極まるのも無理はないだろう。

しばらく、お互いの顔を見合っていると、岬が徐ろにエミルの肩を掴んだ。

「姉様? あの星っていう子の事なのですが……」

「……えっ? あっ、ええ。あの子がどうかしたの?」

エミルは突然の言葉に驚き動揺する。

それもそのはずだろう。死んだはずの妹からすれば、見知らぬ子に

姉を取られたと感じていてもおかしくはない。

もしかすると『あの子を見捨てろと言われるのではないか……』そんな思いがふと頭を過る。その直後、真剣な面持ちの岬が徐ろに口を開く。

「あの子は姉様が思っているような子ではありませんよ?」

「……そ、それはどういうこと?」

岬の言葉の意味が理解できずにエミルが聞き返す。

すると、岬は深刻そうな顔をして。

「あの子は姉様が思っているよりもつと弱い。いえ、自らを空気だと思っ
ていません」

「……空気?」

「はい。あの子が自分から打ち解けることは、おそらく難しい……」

岬の話す言葉がどこか遠いもののように感じてしまう。今まで星と過ごしてきて、星が笑う姿を何度も見た。だが、今日の前の最愛の妹は『あの子が自分から打ち解けることは難しい』と言っている。

つと言うことは、今までの彼女は打ち解けていたふりをしていたという
ことになるのかもしれない。

ならば、星は今まで一度たりとも、本気で笑っていたことがなかった
と言うのか? つと、啞然とした様子で岬の顔を見つめるエミル。

そんなエミルに向かって岬が言葉を続けた。

「あの子は打ち解けたいと思っ
ています。でも、打ち解けてはいけ
ないとも思っています。あの子に
とって人とは、自分と違う未知
の生き物なのです……」

岬は少し表情を曇らせると、胸の前で手を重ねた。

その表情はどこか悲しそうに見えて、エミルも胸を締め付けられ
る。

「そう。あの子は、自分以外が見えない……いいえ、見方が分からない
んです。だから、姉様」

その手をエミルの頬に当て、ささやくように告げる。

「姉様の愛で、あの子の心の氷を溶かしてあげて下さい」

「でも……岬。あなたは嫌じゃないの? 知らない子にそんな……」

ついエミルの口から本音が漏れてしまう。

それもそのはずだろう。本来なら赤の他人の星と、実の姉が姉妹の様にしているのを見ていて、気持ちのいいわけがない。

複雑そうな顔で岬が、エミルの疑問に答えた。

「そうですね。もちろん嫌です。姉様はあたしだけの姉様ですから、でも……」

岬は一度、口をつぐむと、エミルの顔を見つめ、にっこりと笑みを浮かべ告げた。

「あたしは、姉様には幸せになつてもらいたいから」

「……岬」

そう言った直後、岬の体が徐々に薄くなつていく。

岬はぎこちなく微笑むと、再び口を開いた。

「もうそろそろ時間みたいです。姉様」

「岬!? まだ嫌よ! もっと話したい事がたくさん……」

エミルは薄れゆく最愛の妹の体を抱き締めると、涙で掠れた声で言った。

岬は微笑みながらエミルの頭を優しく撫でる。

「姉様。お体に気を付けて、あまり頑張り過ぎないように。ですよ!」

「ええ、分かったわ……。あなたも……。あなたもいつでも帰ってきなさい……。いつでもお姉ちゃんが待つてるから……」

2人はお互いの顔を見合わせながら、ぎこちなくだが、微笑み掛ける。

「——ええ、姉様。愛してます」

「——私もよ。愛してるわ……岬」

その言葉を残し、岬は消えた。

エミルは妹の余韻を味わうように、自分の手を眺めると、茜色の空を見上げ呟く。

「……最後まであなたは、人の事を思っているのね。岬」

しばらくの間。エミルは空を仰ぎ、瞼を閉じて瞳から零れ落ちた涙が頬を伝いながら海から流れる風を感じていた。

*
*
*

エミルの夢3

次に瞼を開けた時、そこは風の中を飛ぶリントヴルムの背中だった。

さつきまで見ていた夢に名残惜しさを残しながらも、エミルは現実であることを確認する為に辺りを見渡す。

辺りは闇が支配し、月明かりと微かな星々の放つ明かりだけが優しい光を降り注ぎ、もうすつかり夜も更けてしまっていた。おそろく、昼間から今までずっと眠っていたのだろう。

エミルは何気なく横を見ると、そこには自分を見上げて微笑む星の姿が一瞬だが、はつきりとエミルの目に映った。だが、すぐにその姿は見えなくなり、夜の冷たい風だけが頬を打つ。

「……星ちゃん」

エミルは現実引き戻されたように表情を曇らせ、ふと自分の太腿に目を落とすと、そこには安心しきった顔で気持ち良さそうに眠っているイシエルの姿があった。

その姿を見下ろしながら『ちやつかり自分の膝枕で寝ているところが彼女らしい。』と思いながら、徐ろに振り返ると、ディーノも座ったまま腕を組んで瞼を閉じている。もう、飛び立ってから2日近くまともに寝れていないのだから、当然といえば当然なのだが……。

そうこうしていると、雲の間からまるで剣山のような山脈が見えてきた。それが目的のウオーレスト山脈だ――。

エミルは慌てて眠っている2人を起こそうとイシエルの体を揺らす。

「2人共！ 山脈が見えたわよ。早く起きて！」

「ううう。なんなん？ 気持ちよおく寝とつたのにい」

エミルがイシエルの体を揺り起こすと、彼女は眠そうに着物の袖で目を擦って不機嫌そうな声を上げる。

膝の上からのそつと起き上がる彼女に、エミルは苦笑いを浮かべた。

イシエルが起きたことを確認し、今度は瞼を閉じているディーノに

再び声を掛けた。

「デイーノさん。もう目的地が見えています。起きて下さい！」

「——そう。大きな声で言わなくても、もう起きていますよ」

彼女の声に反応したデイーノは瞼を開くと前方を指差した。

エミルとイシエルもその方向に目を向ける。そこには、ただ切れ切れに雲があるくらいで他には何も見えない。だが、デイーノの表情は険しく、その目付きは更に鋭いものになっていく。

「君達は気付かないの？　ここらは飛竜の縄張りだ。それがこれではおかしいだろ……」

彼がおかしいというのも無理はない。飛竜の縄張りなのに、その飛竜が一匹も飛んでいないのだ。

こんな奇妙なことは、今までにも類を見ないだろう。金魚すくいの屋台で金魚が一匹もいないくらいの異変だ——。

「——私もそう思いますよ。デユラン」

突如として聞こえてきた声に全員が驚きその声の主の方を向くと、その視線の先には雲に乗った着物姿の女の子がレイニールと並走するように飛んでいた。

どこから現れたのかは分からないが、今飛んでいる場所は雲のすぐ上だ。そして突如現れた2人は雲に乗っている——まあ、これ以上の迷彩はないだろう。

白い着物に身を包んだ女の子の後ろには、紺色の着物を着ている黒髪を後ろで束ねた少女も乗っている。

女の子はデイーノを見るなり目を細め、疑惑の目を向けている。

デイーノはバツが悪いそうに俯き、黙りを決め込んでいると、エミルが彼に声を掛けてきた。

「デイーノさんの知り合いの方ですか？」

「ああ、まあ。そんなところかな？」

小声でそう言葉を返すと、雲の上でそのやり取りを聞いた女の子が不機嫌そうに呟く。

「またですか？　あなたは人を騙して……今度は一体何を企んでいるんです？」

「紅蓮……君こそ、こんな場所で何をしてるんだい？」

「私はマスターに言われて救援に来ました。あなた方も撤退して下さい。これから先は私達だけで十分です」

その彼女からの思いもよらぬ返答に、立ち上がったエミルが激怒する。

「冗談じゃないわ！ 私は仲間を助け出しに来たの！ ここで引き返すなんてできないわ！」

「仲間思いの人は嫌いではありません。ですが……」

そう呟くと女の子の瞳が、急に冷たくなるのを感じた。瞳の芯に、心を宿していない冷酷な目——それは明らかに敵意を向ける者に見える瞳だ。

女の子は殺気を漲らせると、エミルとイシエルを睨む。

そんな女の子にイシエルがゆっくりと立ち上がると、殺気を滲ませた不敵な笑みを浮かべ呟く。

「——なに？ まさか、うちの事。知らんわけあらへんやろ？」

「……知りません」

ピリピリとした険悪な空気の中。互いに激しい視線を飛ばしていると、エミルが後ろから抱き付いてイシエルを止める。

「イシエ！ ダメよ。けんかはいけないわ！」

「せやけど……エミル」

「……イシエ？ エミル？」

そんな2人の会話を聞いていた女の子の後ろに座っていた少女が驚愕した様に驚いた顔をしている。

あんぐりと口を開けたまま、少女は2人を指差して叫ぶ。

「もしやあなた方は、あのイシエル様とエミル様ですかッ!？」

「ん？ 白雪。それって……」

少女は頷くエミル達を見て、首を傾げている女の子に慌てて耳打ちした。

女の子はハツとした表情を見せると、エミル達に深く一礼する。

「あなたが『白い閃光』のエミルさんに『日本一の弓取り』のイシエルさんとは。まさか『通名持ち』とは知らず、すみませんでした」

「私も全く気付かず、面目次第もございませぬ」

二つ名持ちプレイヤーと分かった瞬間。少女も女の子に習い、頭を深々と下げた。

2人は急に態度を改めると、再び言葉を続ける。

「あなた達なら何の心配も入りませぬね。これから先は、私が先行します。飛竜の相手も任せて下さい」

「えっ!? ちょっと! あなた……」

女の子は頷くと、エミルの言葉も聞かずにリントヴルムの前に出た。

それからは何事もなく、上空から敵城の見える辺りまで飛んできた。その時、数少ない荒野の部分に多くの敵部隊が集まっている。

前を行く雲に乗った2人が速度を落とし、リントヴルムの横に着けた。

「誰か戦ってますね。あなた達の仲間の方ですか?」

女の子が地面を指差す。その先には金髪の侍の格好をした男が、大勢の敵を前に対峙していた。

エミルはその姿を見てピンときた。というか、あんな容姿で侍の格好をしているのは、エミルには1人しか心当たりがない。

「まさか、デイビッド!?」

食い入る様に地面を見ているエミルを横目で見て、小さく息を吐く紅蓮。

「やはりお仲間ですか……なら私達が行きますから、あなた達は先に……」

「えっ!? で、でも。それじゃあなた達が危険な目に——」

その言葉を遮るように紅蓮が手を前に突き出し、エミルが喋るのを止める。

「——心配にはいりません。もう、手は打ってありますから」

「ええ、私達は元より陽動部隊ですから。紅蓮様と私にお任せ下さい」

自信満々に言い放って、武器も構えることなく無警戒に雲に乗ったまま2人は地上へと降りていく。

エミルはその後ろ姿に、一抹の不安を抱きながらも先を急ぐ。
普段なら空を飛び交っているはずの飛竜の姿は一切なく、それが不
気味なくらい順調に事が進む。

出発前に街の行きつけの酒場で、ウォーレスト山脈付近に生息する
飛竜の情報も仕入れていたのだが、この調子なら無駄に終わりそうだ
。
エミル達が敵城の上空までくると、城の側面にぽっかりと穴が開い
ている。そのことから、エリ工達が先に敵のアジトに侵入したのだと
容易に推測できた。

しかも、本来ならシステムで修復するはずの壁が、この状態で残っ
ているということは、これは元からこの場所に存在していたものでは
なく、意図的にここに建設された建造物であると断定できる。

現にエミルが事件の前にこの場所を訪れた時にはこの城はなかつ
た。厳密に言えばなかったのではなく、跡形もなくマスターに破壊さ
れたからなのだが……。

ぽっかりと開いたその穴を見て、イシエルが城門の辺りを指差す。
そこには多くの敵部隊が集結していた。

「これはあかんね。敵が結構おる……：上手く助け出せても、このまま
やと逃げられんよ？ エミル。ここはあれをなんとかせんとなく」

イシエルはその部隊を排除し、退路を確保すべく提案したが、エミ
ルは心ここにあらずという雰囲気で城を見つめていた。

おそらく。今エミルの頭の中にあるのは、星をどうやって安全に迅
速に救出するかしかないのだろう。

「——えっ!?! あっ、そうね……：イシエ、ここを頼めるかしら」
「ええよ。エミルはあの子の救出に？」

「……ええ、ごめんなさい」
イシエルの問いに、エミルは申し訳無さそうに頷く。

今にも飛び出していきそうな彼女を止めることなく、イシエルは微
笑みながら言った。

「ええんよ。それが目的やしね」

「ありがとう。ごめんなさい……」

エミルは直ぐ様、もう一体ドラゴンを召喚した。

リントヴルムよりもひと回り以上小さいドラゴンだ。見た目はリントヴルムより一回り小さく、その体はダイヤモンドの様な鱗で覆われている。

イシエルとデイーノが召喚されたそのドラゴンに跳び移ると、決意に満ちた表情で力強く頷く。エミルもまた、そんな2人に頷き返した。それはまるでまた後で会おうと言いたげに……。

その後、リントヴルムに乗ったエミルは2人から離脱して1人城へと向かっていった。

もう一人のドラゴン使い

イシエル達と別れたエミルは城の周りを旋回するように飛びながら、注意深く城の様子を窺っていた。

あちらこちらに小さく開いた城の窓からは光が漏れ、その中を多くの影がひしめき合っている。

どうやら中でエリエ達が暴れているおかげで、外を飛んでいるエミルにはまだ気付かれていないらしい。

城の外壁を舐めるように飛んで、侵入経路を模索していたエミル。(……どこからなら侵入可能かしら、待っててね星ちゃん。今行くから……)

エミルがそう心の中で呟いていると、突如としてリントヴルムが大きく咆哮を上げた。

「なにっ!? 敵ッ!」

突然のリントヴルムの咆哮を聞いたエミルは慌てて辺りを見渡す。リントヴルムが吼えるのは辺りに敵がいる時か、エミルが命令を出した時のみ。すると、上空の雲の間から、黒い何かがリントヴルムに向かって急降下してくるのが見えた。

次第に大きくなるその影を、エミルは目を細めて確認すると叫ぶ。

「――ドラゴンだわ!!」

その直後、エミルに向かって上空から複数の赤い炎の球を発射する。

リントヴルムは空中で器用にその攻撃を避けると、その横を素早くその黒いドラゴンが通り過ぎた。

エミルが渋い顔をしていると、エミルの前にそのドラゴンが浮上してくる。黒い大きな翼に、黒い装甲で身を守っている。その体はさながら戦闘機の様だ――。

大きさはリントヴルムと同じくらい。つとすることは、ボスクラスのドラゴンだろう。

エミルも同じ固有スキルの持ち主に会うのは、これが始めてだ。すると、黒竜の赤く輝く瞳がリントヴルムに乗ったエミルを睨む。

エミルはその瞳に、何とも言えない胸騒ぎを覚えていた。その黒いドラゴンの背には黒い重鎧を身に纏った男が長いハルバードを手にして乗っている。

「フッフツ……ハッハッハッハッ!!」

突如として大声で笑い始める男に、エミルは底知れない不気味さを感じた。その直後、男が兜を取って彼女に素顔を曝け出す。

彼のその素顔を見た途端、あまりの衝撃にエミルは言葉を失う。

そう。その男はエミルが現実世界で知っている人物だったのだ。いや、知っていると言うのも誤解が生まれてしまう。何故なら……。

「あっ！ あなた。いつも私を付けて来たストーカー!!」

「フッフツ、白い閃光のエミル——いや伊勢 愛海！ いや。北条!!」

ここであつたが百年目。今日こそどちらが関東の支配者か決着をつけてやる!!」

「……………」

あんぐりと口を開けながら、エミルは呆れたような哀れむような眼差しで彼を見つめている。彼のこの口振り、そしてこの台詞を聞いたのは中学生の時以来だろう。

彼の名前は上杉 影虎。上杉家の末裔らしいのだが……その事実にはあやむやになっている。そもそも、そんなことをエミルが知る由もない。

彼は中学までは同じ学校だったが同じクラスにはなったことはない。だが、執拗なまでにエミルに付きまとっていたことから、同級生の間では『ストーカー』ではないかと噂されていた。人当たりが良く、誰にでも分け隔てなく接するエミルも以前に一度彼に苦情を言ったことがある。

しかし、高校では私立の女子校にいったエミルを追いかけるように、近くの兄弟校の男子校に入学。その後もひっそりとエミルの身の周りに出没しては、影からコソコソ何かを企んでいた。

ある時は茂みの影から……。

ある時は電柱の影から……。

ある時は建物の外壁から……。

エミルの様子を逐一観察し、奇襲を掛ける隙を窺っている。
まさにエミルにとって、彼はストーカー的存在なのだ!!

影虎は被っていた兜を投げ捨てると、長い黒髪をなびかせながら持っていたハルバードをエミルに向かって突き出す。

「北条！ 今日こそお前を俺の前に屈服させてやる!!」

「ああッ！ もう。北条北条うるさい！ 私は伊勢！ 北条じやないって、前にも言ったでしょ！」

「そんなの……知った事かああああああああああああああああああああああああ!!」

影虎がそう叫んだ直後、黒竜の口が赤く輝き球体の炎を複数発射する。

リントヴルムはそれを素早くかわすと、仕返しとばかりに口から白い炎を噴射する。

すると今度は、黒竜がその攻撃をかわす。だが、咄嗟に攻撃されたことでバランスを崩し、背中に乗っていた影虎を振り落とす。

「うわああああ………なんてね」

影虎は巻物を手に握りしめ、笛を鳴らす。

直後。煙とともに一回り小さい黒竜が現れ、そのドラゴンの体にも鎧が装備されている。

それはエミルの持っているライトアーマードラゴンに似ていた。

(……向こうは高速空中戦闘に切り替えるのね。ならー！)

エミルはコマンドを操作し、巻物と長めの大剣クレイモアを装備すると、巻物を広げ笛を吹く。

正直。空中戦闘を想定していないエミルにとっては、これが最も長い得物なのだ。

誰が空中で同じドラゴンタイプと、しかも肉弾戦で戦闘を行うと予想していただろうか……まさか、こんな日が来るとはエミルは夢にも思っただけに違いない。それだけ、エミルの『ドラゴンティマー』という固有スキルはレアなものなのだ――。

すると、空中に広げられた巻物から青い鎧を纏ったドラゴンが召喚

され、エミルはその背中に跳び乗る。

ライトアーマードラゴンの手綱を握り締めると、素早くリントヴルの側を離脱するエミル。

だが、それを確認した影虎がエミルを逃すまいと猛追する。

「逃げるのか!? 卑怯者!!」

「——くッ! いい加減にして! どうしてそうしつこいのよ!!」

後ろから追いついてくる影虎にそう叫ぶと、急激に地面近くまで急降下する。しかし、影虎のドラゴンもそれにピッタリと張り付いて全く離れない。

エミルは冷や汗を流しながら、追いついてくる影虎を振り返る。

本来なら、エミルはこの男に構っている暇などない。

少しでも早く星の身を確保して、できるだけ安全にこの場所を離脱しなければいけないのだ。

しかし、いくら振り切ろうと逃げても、影虎は執拗に食い下がってくる。

(……徐々にだけど、差を詰めてきてる。このままだと追いつかれてしまう。やっぱり戦うしかないの?)

徐々に迫り来る影虎に、焦りと不安からエミルの表情は険しくなる。

急旋回と急上昇と少しでも素早く動いて何とか引き離そうと試みるが、一向に離れる気配がない。

エミルはクレイモアを構えると、ライトアーマードラゴンの背から後ろの影虎に向かって飛び掛かった。

「はあああッ!!」

「なにいいいッ!」

咄嗟に向かってくる影虎は持っていたハルバードを構えると、素早く迎撃の体制に入る。

エミルの掲げた剣を振り下ろすと、影虎は持っていたハルバードを真横に振り抜く。

空中で互いの武器が激突し、火花を散らす。

エミルは空中で体を捻ると、即座にもう一打影虎の顔付近に叩き込

む。しかし、それはまたしても影虎のハルバードに阻まれてしまう。だが、それはエミルの予想通りだった。

獲物が針に掛かったと言わんばかりに、ニヤリと微かな笑みを浮かべたエミルは、即座にクレイモアを片手に切り替え、ハルバードの弾いた勢いを利用して空中で体を回転させながら、逆立ちする様な格好で器用にコマンドを操作する。

そう。ハルバードは槍に近い構造をしている。しかも彼の持っている武器は、普通のそれよりも更に長い。

つということは、重量の関係上。両手で扱わなければならず、絶対に片手が空かない。

だが、エミルは違う。初打はクレイモアの重さと勢いに任せ、柔軟な体の動きで弾かれた勢いを利用した二打目は慣性の法則に逆らわずに流れるように打ち込み、空中で体を回し遠心力を利用することで、重力に頼らない一時的な無重力状態。そして、天と地が逆転したこの状態ならば、普段は両手で持たなければいけないクレイモアの重い刃もまるで綿の様に軽い。

ハルバードに支えられている今なら力を抜いても落ちることはなく、片手でのコマンド入力が可能。上級者プレイヤーのエミルならば、ウインドウを見ずにどこにどの武器が入っているかインベントリから音で探すことができる。そして三打目は……。

「そう。三打目は……」

エミルは相手の肩の部分にある僅かな鎧の隙間を見つめ、生唾を呑み込んだ。

敵のハルバードが攻撃を受け止めている僅かな時間に、開いた片手でコマンドを操作し終わると、視界に出ていたウインドウを閉じた。

その直後、持っていたクレイモアは消え、空中に現れた2本の剣をエミルは両手でしっかりと掴むと、空中で大きく体を捻って影虎の背後を取る。

「——三打目は、落下の勢いと腕の力を全て使って全身全霊をもって……振り下ろす!!」

影虎の両肩に双剣に持ち替えたエミルの攻撃が炸裂する。

(……手応えあり！)

手から伝わるその確かな手応えに、エミルの顔からはついつい笑みがこぼれる。エミルの放った一撃は狙った通り、両肩の鎧の隙間に突き刺さっていた。

影虎のHPバーが減少を始めたのを見て、ほっと息を漏らした。その直後、減っていたはずの影虎のHPバーが物凄い勢いで回復を始める。

「——なっ!?!」

予想もしていなかった突然の出来事に驚き、目を丸くするエミル。すると、影虎は前を向いたまま自分の背後から両肩に刺さった剣の刃をがっしりと掴む。

「やっと捕まえた……!」

俯き加減に嬉しそうに口元に不気味な笑みを浮かべた影虎にエミルは恐怖する。

咄嗟にエミルは持っていたその剣を手放すと、影虎の体を蹴って素早く空中に飛び出した。

それを待ち構えていたかの様に、ライトアーマードラゴンが受け止めると同時に、離脱するように命令を出す。

全速力で移動するライトアーマードラゴンの背中で、恐怖に震える手で必死に手綱を握り締める。

(なんなのあれ……確実に決まっていた。なのに、どうしてあんなに余裕そうな笑みを!?)

エミルは柄にもなく、混乱したように頭を抱えている。もう、エミルの頭の中は『何故』という言葉でいっぱいだった。

何故HPの減少が止まり、それが何故回復し、何故影虎が嬉しそうに笑ったのか……その全てが、自分の知識では説明が付かない。

つというより。ストーカー紛いの彼に生理的嫌悪感すら抱いていたエミルにとって、彼が考えていることなど考えたくもないというのが本音だ——。

だが、彼のさっきのHP率の変動はおそらく、トレジャーアイテムか何らかの効果が関係していることは察しがつく。もう一度打ち込

めば、何か彼の謎は掴めるのだろうか、今のエミルにそんな考えは一切なく……。

(怖い怖い怖いよ……あんなのに、もう近寄りたくない……)

怯えながら小刻みに震える体を両手で抑えると、顔を真っ青にして頭を左右に激しく振っている。

それもそうだろう。大体リアルストーリーカーが同じゲームをプレイしていると分かった時点で、普通の女子なら近寄りたくはないものだ。

いや、それより彼はどうやって自分がこのゲームをしていることを知ったのだろうか……そっちの方が今は問題だろう。

(ん？ ストーカーなら当たり前なのか……?)

エミルは横目でチラツと彼を確認した。

影虎は不敵な笑みを浮かべると、ハルバードを手に向かってくる。その凄まじいスピードに、エミルは更にスピードを上げて逃げる。

いや、逃げる意外の方法が、今のエミルには見つからない。

「フフツ……やはり。お前を俺は力で捻じ伏せてこそ……今なら法律も何も関係ない！ 俺の物になれ！ 北条!!」

「勝手に1人で盛り上がってるんじゃない!!」

エミルはコマンドの装備欄にクレイモアをもう一度装備し直すと、向かってくる影虎に突撃する。

真っ向から互いのドラゴンが交差し、その刹那に互いの得物が激しく当たり火花を散らす。

その刹那。エミルは左肩を押さえて表情を曇らせた。それと同時にエミルのHPバーが減少し、残りHPの残量が80%ほどになっていた。しかし、それは影虎も同じで、彼は右腕を押さえている。

だが、彼の方はHPが減少と同時に回復し。腕を回すと笑みを浮かべ、手に持ったハルバードを構え直す。

(このままじゃ、こちらのHPが先に尽きてしまう。でも、本来はPV PでのHPの回復は不可能なはず。向こうが回復できるならこっただって……)

エミルがアイテム欄からヒールストーンを取り出してぎゅつと握

り締めた。

まだ、本当に使用できるのか半信半疑だが、ここは可能性に掛けてみるしかない。

その時、リントヴルムと交戦していた黒竜がエミルの乗ったライトアーマードラゴンへ炎の球を発射した。

もう一人のドラゴン使い2

ライトアーマードドラゴンは素早く反応し、その攻撃をかわす。だが、その咄嗟の回避行動にエミルの手からヒールストーンが転がり落ちる。

「しまっ——」

「でかしたぞファープニル！ 回復する隙など与えない！」

漆黒の巨竜の攻撃でバランスを崩したエミルのライトアーマードラゴンへ影虎を乗せたドラゴンが襲い掛かる。

エミルは右肩を狙うハルバードの刃を辛うじて剣でやり過ぐすと手綱を握り直し、ライトアーマードラゴンの体制を立て直す。だが、戦況は圧倒的に不利なことに変わりなく、このまま長引けばこの戦闘はエミルが確実に負ける。

HP回復のアドバンテージもそうだが、一番は武器とドラゴンの違いが大きい。

まずドラゴンだが、影虎の小さい黒竜の方が直線速度と旋回性能が本当に僅かだが高い。

エミルの方がドラゴンの操縦技術が高ければ大した差にはならないのだが、操る技術がほぼ直角となればドラゴンのスペックの差が必然的に大きくなってしまう。

武器の方はエミルはクレイモア。対する影虎は長めのハルバードを使っている。

激突してエミルが左肩、影虎は右腕と負傷した場所から分かるように、ハルバードの方が圧倒的に長く、激突の瞬間に攻撃を避けるように身を捻って彼の右腕にやっとな攻撃を当てたエミルとは違い。彼は体制を崩すことなく打ち出した得物でエミルの左肩を捉えていた。

フリーダムには互いにフェアな状態にする為、武器のリーチが短いほど攻撃力を高く調整するシステムが入っていた。

リーチ差によりダメージはエミルの攻撃の方が大きいのだが、攻撃によるダメージを彼が即座に回復してしまうこの状況では、あまり意味をなさない。

地上での戦いならば、立ち回り次第でなんとかなるが、ドラゴンの上での空中戦では一撃離脱の戦法になってしまふ。そうになると、どうしてもリーチが長い方が圧倒的に優位になるのは言うまでもない。

エミルの持っている武器で最も長いのが今使っているクレイモアである以上。このクレイモアでなんとかやり合うしかない。だが、この武器ではこの様な空中戦闘は向かない。なんとか距離を詰めて、接近戦に持ち込むしか……。

しかし、この武器の選択になるのは、彼女の戦闘スタイルが地上戦を想定しているからである。

何故なら、本来フリーダムでは飛行スキルというものが殆どないに等しい。そんなイレギュラーの為に、わざわざアイテムを圧縮する装備を入れておく必要がないのだ。

ドラゴンはこのゲームの中でも最強クラスのモンスターに分類されていいて。しかも、飛行能力を持つだけではなく、その速度も非常に速い為、脅威となるモンスターは少ない。

その中でもエミルの『ドラゴンテイマー』はレア度を意味するランクではSクラス以上に含まれていて、これは非常に稀なスキルだということだ。

固有スキルはゲーム起動時点でランダムに選択され、再取得はできない仕様になっていた。だからこそ、このフリーダムというゲームが爆発的にヒットした要因にもなっている。

V R M M O という全く新しいジャンルにして高いゲーム性。プレイヤーに依存した戦闘能力。多彩なモンスターなど上げればきりが無いのだが、その中でも固有スキルは基本スキルを除けば、初期状態で唯一使用できるスキルと言っている。

プレイすればするほど、その固有スキルの重要性に気が付き再度ハードを購入する。また、既存のデータは更新データに移設可能な為、固有スキルだけが変更されるのだ。

固有スキルをゲーム内ではいかなる方法でも再取得はできないが、新たにハードを買い換えれば固有スキルを除いた全データを上書きにより変更できるという矛盾。

本人認証登録制のソフト内蔵型ハードウェアだからこそ転売される危険もなく、メーカー製の正規のハードを購入しなければならぬ。

他のゲームでは禁止されているRMTを許可し、ゲーム内通貨をリアルマネーへと変換することで購入時の負担を軽減することも可能だ。

勿論購入する者は、皆フリーダムのヘヴィユーザーなのだから取り逃がす心配もない。

こういうユーザーがいい固有スキルが出るまで何度でも購入する為、ハードの売り上げランキングでは常に上位をキープしている。

何度も言うが、これはソフトではない。ゲーム機なのだ！ソフトの売上ランキングは変動しやすいがハードは違う。RMTシステムが海外にも受けて、全世界規模にまで拡大したのである。

話は逸れたが、高レベルプレイヤーであるエミルも長くこのゲームをプレイしているが、飛行スキルの敵との戦闘は数えるほどしかない。

なおかつ、同じ固有スキルを持つプレイヤーとの戦闘は今回が初なのだ——今までの戦闘は殆どがライトアーマードドラゴンのスピードを活かした初撃必殺で終わっていた。

それも同じドラゴン使いとの戦闘は、これが初めてだ——だが、影虎は違う。彼はおそらく、エミルがドラゴンテイマーであることを、だいぶ前から知っていただろう……。

だが、それは普段から隠れて監視していたストーカーだからとかではなく。単に、彼女がこの世界では有名人だったからだ。

彼女の『白い閃光』という通名を知っていたのも、それが理由だろう。

そんな彼女に対応すべく。敵視していた影虎は、ドラゴン同士の戦闘を視野に入れ、普通のハルバードよりも長い今の得物を手に入れたと考えられる。彼女に標的を絞って、確実にエミルを倒す為に……。

エミルは必死に速度を上げ影虎を振り切ろうと試みるが、やはり彼を乗せた黒竜が徐々に差を詰めてくる。

(……このままじゃ逃げきれない！ 星ちゃんを助けないといけないのに!!)

手綱を握るエミルに、明らかに焦りの色が見え始めていた。

後ろから猛追してくる影虎にもう一度、不意打ちを仕掛けたくても。一度やっていることを、もう一度行うのには空中ではリスクが高過ぎる。

それはそうだろう。不意打ちとは不意にやるから意味があるものであつて、何度も仕掛けるのは不意打ちではない。

相手もエミルがドラゴンから離れ、攻撃をしてくるしかないと分かっているだろう。もしも、次にハルバードで体ごと強く横に弾かれれば、最悪の場合は地面に叩きつけられて即死だ――。

だが、このまま逃げ回っていても攻撃しなければいずれ追いつかれ、後ろから月明かりを受けて不気味に輝くあのハルバードの餌食になる。

チラチラと後ろを振り返りながら、エミルは思考を回す。

(どうする？ 怖い、気持ち悪い、なんて言っていられないわ！ あのひと戦う理由もない。ここは、この戦いがお互いに利がないと説得できれば……向こうも引き下がるはず。でも……)

高速で蛇行しながら飛ぶエミルを、影虎が必死に追いつがつてくる。やはり、空中で相手を引き剥がすのは不可能。残る方法は一つしかない……。

考えるのは簡単だが、この状況で実行に移すとするとそう容易なことではないが。かと言って、このままではいずれ追いつかれてしまう結果に変わりはない。

高速で移動している為、武器と手綱で両手が塞がっている。これではコマンドを操作することもできない。一番の問題はこの状況で、どうやって相手に自分の意思を伝えるかだ……。

(とりあえず、向かい合わない……空中では無理ね。なら地上で……それなら、戦闘になつてもあの長い得物も役に立たないし。何より向い合つて敵の動きを観察しながら話ができる！)

エミルは確信したように頷くと生唾を呑み込む。すると、突如とし

て急降下を開始した。

すると、それを追い掛けるように、影虎も急降下を開始する。徐々に地面が迫る中、エミルはギリギリまで惹きつける。

どうして地面ギリギリまで惹きつけるのか……それには明確な意図があった。

もし。今ここでエミルが減速し水平飛行をすれば、後を追っている影虎がそれに合わせて襲い掛かって来るだろう。

そうなれば、勝敗が決してしまう。せつかくここまで来て、星を救出にいけない。だからこそ、今ここで臆病風に吹かれるわけにはいかない。地面にぶつかる前に何としても、影虎に先に諦めてもらわないのだ。

言うなればこれは、どちらが先に地面に衝突する恐怖で離脱するか
のチキンレースだ——地面が迫るのと比例して、心臓の鼓動が高鳴り
感覚が研ぎ澄まされ風切音がさつきよりも大きく感じる。

今のエミルを突き動かすのは、亡き妹との約束を果たして星をもう
一度この手で抱き締めることのみ——。

残り10mというところで星の顔が頭を過りエミルは瞼を閉じると、慌てて手綱を引いてライトアーマードドラゴンの加速を止めた。

水平飛行に切り替わったエミルを、待ち構えたように影虎のドラゴンが突撃を掛ける。

「この臆病者がッ!!」

「——くっ!!」

(……やられる!)

その咆哮を聞いて、エミルが『やられる!』と目を瞑ったまま手綱を強く握り締めた。すると、エミルの体がスツと横に傾く。

つとその直後、爆音と共に辺りに物凄い土煙が上がった。それは彼のドラゴンが地面に激突したからに他ならない。

「……えっ?」

エミルが目を開けると、そこには大きな窪みが地面にできていた。その上で翼をはためかせながら、ライトアーマードドラゴンが静止している。

影虎が突撃する瞬間。ライトアーマードドラゴンが咄嗟に機転を利かせ、横に避けたのだ。

エミルはほっと胸を撫で下ろしながら、感謝の気持ちを込めてその青い体を優しく撫でた。

地面に降り立ったエミルが、土煙を上げている場所を見据えて剣を構える。

(……飛び出してくるか、それとも気を失って伸びているのか……)

エミルは全神経を集中し、土煙の立ち込める場所を静観した。するとその直後、土煙の中から長刀を持った影虎が飛び出してきた。ハツとしながらも、エミルが咄嗟にクレイモアで攻撃を受け止める。

エミルの目の前には、土を頭から被った影虎が鬼の様な形相で長刀を握っている。

「……良くもやりやがったな。人が突撃をしている最中にかわすとは卑怯な奴!!」

「なに言ってるのよ! それは、地面にぶつかる前に離れない貴方がいけないんですよ!」

エミルはクレイモアに力任せに長刀を押し付け、血走った目で顔を寄せてくる影虎にそう言い返す。

彼女の冷静なツツコミに影虎は「うるさい!」と叫ぶと、強引に長刀を振り抜いてエミルを体ごと吹き飛ばした。

地面を踏み締め上手く体制を整え直すエミルに、影虎が空かさず頭上に掲げた長刀を振り下ろす。

エミルはその攻撃を剣で払うと、影虎の刀身が地面に突き刺さり彼の動きが止まった。それを見て即座に後ろに数回跳んで、距離を取ったエミルが声を上げる。

「ちよつと! 私の話聞いて!」

「うるさい! 逃げた挙げ句に俺を地面にぶつけるような。そんな卑怯者の言葉など聞く耳持たん!」

「なっ! 貴方が一方的に襲い掛かってきたんですよ!」

「問答無用!!」

そう叫ぶと、怒り心頭と言った様子の彼は地面から長刀を引き抜

き、再び斬り掛かってくる。

ただ怒りに身を任せてがむしやらに刀を振るう影虎とは対照的に、エミルはその攻撃を剣で軽くないしながら言葉を続けた。

「私の話を聞いて！ 今は仲間を助けないと……こんな事している場合じゃないのよ!!」

その言葉を聞いて、一瞬だけ彼の動きが止まる。

影虎は刀を下ろし、俯き加減にブツブツと独り言を呟いている。

つと突如として、影虎が声を荒らげた。

「うちの一族との因縁をこんな呼びわりか……許さん。絶対に許さんぞ！ 北条!!」

物凄い形相で突然怒り出し、長刀を構え直す影虎。

「だから違うって言ってるのに！ 人の話を最後まで——」

「——うるさい！ 貴様等北条の逃げの一手の戦術で、我が先祖『上杉謙信』の華麗なる戦歴に傷を付けたのをもう忘れたか!!」

「知らないわよ！ そんな大昔の話!!」

即座にエミルが叫ぶと、怒り狂う影虎が再び斬り掛かってきた。

上段から振り下ろされる剣撃をエミルは咄嗟に横に跳んでかわすと素早く剣を構え直す。

激昂している様に見えて、彼の振り回す長刀は的確にエミルの苦手としている守りの薄い部分を狙って打ち出してくる。

剣術ではエミルよりも彼の方に分があるのだろう。その寸分の狂いもない太刀筋に、さすがのエミルもバランスを崩される。

「しまっ……」

ふいに体制を崩しよろけたエミルの頭上を紙一重で、彼の振り抜いた長刀の刃が通過していく。

攻撃が外れたと分かると影虎は直ぐ様、長刀を構え直し飛び掛ってくる。

エミルはその攻撃をクレイモアで何とか防ぐ。

「——くっ……重い」

影虎の一撃は思いのほか重く。

エミルはクレイモアで影虎の長刀を受けながら、その重さを支えき

れずに堪らず地面に膝を突いた。

もう一人のドラゴン使い3

そんな彼女を上から押さえつける様にして、長刀を握る影虎が不敵な笑みを浮かべている。

「ふん『白い閃光』なんて呼ばれていても。所詮はこの程度か……幼い頃から剣術道場に通り日々の鍛錬を怠らなかつた俺には、手も足も出ないだろう？ しかも、毎日俺は中学の時から、お前を影からいつも見ている弱点を探っていた。しかしお前はいつも美しく、そして他人に心から慕われていた。今までお前の悪口を、俺は一度も聞いたことがない！」

「……なつ、こんな状況でなに言ってるのよー！」

「——いいから聞け！」

両手で握ったクレイモアで跳ね返そうと力むエミルに、更に強く長刀を押し付け顔を近付けて話を続けた。

「歴史上での。北条は我等が上杉の宿敵。だが、今のお前に魅せられている俺なら因縁を忘れて北条を受け入れられる！ 北条！ いや、伊勢 愛海。俺の女になれ！」

純粹無垢な瞳をエミルに向け、影虎が恥ずかしげもなく堂々と言い放つ。

突然の告白を聞いてエミルはむっとしながら、彼から逃れようと更に全身に力を込めて上から抑え込まれている刀を押し返す。

「だ、誰が……ストーカーなんかと……お断りよ!!」

「——なつ!?!」

地面に突かされていた膝を気合で戻し、エミルは押さえつけていた長刀をクレイモアで一気に押し返すと、彼が怯んだ一瞬を見逃さずに後方に素早く跳んで距離を取った。

距離を取ったエミルが、不快感を露わにさせた瞳を影虎に向けている。それはもう、気味が悪い。気色悪い。気持ち悪い。不愉快極まりない。そんな感情を一度に向けるような瞳だった。

そんな彼女の蔑む瞳に影虎は意気消沈しながら、刀を地面に突き立てその場に膝を突く。彼は失恋のショックからか、まるで世界が滅亡

する寸前の様な絶望的な表情で、その場に項垂れている。

もはや完全に戦意を喪失している影虎に、不快感に身震いしていたエミルもその落ち込みようを見て、さすがに申し訳なく思ったのか、ゆっくりと彼の方へと歩み寄り声を掛けた。

「あの……そんなに落ち込まないで。だ、大丈夫よ！ きつと貴方にもいい人が現れるわ！ が……頑張つて！」

慰めながら微笑を浮かべるエミル。

「……俺の物にならないなら……」

影虎はそう呟くと、ゆっくりと立ち上がり、地面に突き刺した刀の柄に手を伸ばす。

エミルは辺りから漂う嫌な予感に、慌てて彼から距離を取ってクレイモアを構えた。その直後、彼女の予想通り影虎が地面に刺さっていた長刀を引き抜いて突如として斬り掛かった。

攻撃を全力で受け止めると、エミルは不機嫌そうに影虎に尋ねる。

「ちよつと！ なんて斬り掛かってくるの!? 私なにか気に障る事——」

「——お前は！ 俺の抱いていた数年分の思いを無にした………万死に値する振る舞いだ!!」

もう彼の言葉は常軌を逸しているとエミルは感じていた。

それもそのはずだ。彼は『数年分の思いを……』と言ったが、それは彼の思いであり。エミルにしてみれば『今日初めて彼と言葉を交わした』という印象しかない。

それもそうだ。彼が自分を気にかけていたことはエミルも良く知っていたが、その理由が『俺の先祖の顔に泥を塗つたのは、お前の先祖だ』では、ぽかんとする以外の対処法が分からない。

エミルからしてみれば、勝手に逆恨みされ、勝手に後をつけられ、勝手に恋愛感情に発展された挙句の唐突な告白——そしてそれを断ったら、この状況だ。これはもう八つ当たり以外の何物でもない。

エミルは鋭い眼光を向けてくる影虎への対応を考えていた。

（このまま刺激したらダメ。というか、言葉をかければ刺激する事になるし。でも、このままここで足止めされている訳には……）

エミルは上空で激しく炎をぶつけ合って戦うリントヴルムを見て、首を振った。今の状況ではリントヴルムを呼べない。

敵のドラゴンと激しい戦闘をしている最中に呼べば、エミルの呼びかけに反応したリントヴルムは敵のドラゴンに背後を取られ、確実に撃破されてしまう。

だが、ライトアーマードドラゴンでは、向こうの同タイプのドラゴンから逃げられない。しかも、エミルはライトアーマードドラゴン以上に速く小回りの効くドラゴンを持っていなかったのだ。

今度はクレイモアとぶつかり小刻みに震えながら火花を散らす影虎の長刀に視線を移す。

先程のハルバードより短いものの、この刀も相当に長い。彼は長物の武器を好んで使っている。

更に落ちてからの武器の切り替えるタイミング。武器の選択を見ていると、プレイヤーとしての実力もかなりの物だ——本人の性格に難はあるものの、武器の選択と太刀筋というその点だけは認めざるを得ない。

エミルはこれでも『白い閃光』と呼ばれ、武道大会ではマスターが出場しなくなってからとはいえ、幾度も優勝を手に行っている自他共に認める一流のプレイヤーだ——だが、目の前で対峙しているこの男は、それを苦戦させるほどの相手であることに疑う余地はない。性格には難があるものの……………。

それに何より、今は捕らわれている星のことが気掛かりだ。

(このままじゃダメだわ。やっぱり説得しないと、体力も時間も無駄に使うだけ！)

エミルは体を逸らし、受け止めていた長刀を受け流すと口を開いた。

「私の話を——」

「——うるさーい!!」

その言葉を遮ると、影虎は直ぐ様エミルへと斬り掛かる。

大きく振り下ろされた長刀を、体制を崩しながらも咄嗟にクレイモアで受け止めた。

「きゃっー」

エミルは小さく悲鳴を上げる。

不意にきた強撃の重さに耐えかねたエミルの体が地面を転がった。だが、そこはベテランプレイヤー。転がりながらも直ぐに体制を立て直すと、持っていたクレイモアの剣先を影虎に向けて牽制する。

すでに話を通るような相手ではない。だが、そんなことは、今のエミルにも重々分かっていて。しかし、ここで無駄に体力を消耗しては、敵基地の攻略などできないのも事実。

だが、勝負が長引く心配な要因もある。トリックは分からないものの、彼への攻撃は虚しくHPが全回復してしまう。いくらなんでも無限にということは無いにしても、長期戦になることは否めない。

少しでも体力と物資を温存するには、ここは影虎を何としても説得する以外の道はない……。

「——お願いだから、ちょっとだけでいいから私の話を聞いてよ!!」

大きくそう叫んだ瞬間、エミルの頬を涙が伝う。

もうこれしかない『泣き落とし作戦!』あまり使いたくない方法ではないものの、男は女の涙に弱いもの……身を隠そうエミルは父親に実家を出て一人暮らしをねだる時もこの作戦で落としたのだ。まあ、実の父親に使った手なので効果はいかほどか怪しいところではあるが……。

だが、涙を流すエミルを見て流石の影虎も困惑した表情で武器を持っていった手を下ろし動きを止める。

エミルはこれがチャンスと、空かさず畳み掛けるように言葉を発した。

「……私はここに小学生の女の子を助けに来たの」

「小学生の女の子……?」

それを聞いた直後、微かにだが影虎の眉間に、一瞬しわが寄るのが見えた。だが、エミルはその一瞬の彼の表情の変化を見逃さなかった。

「何か知っているの?」

エミルがそう聞き返すと、影虎は表情を曇らせた。だが、その表情

から察するに、彼が何かを知っているのは明らかだった。

泣き落とし作戦の効果は抜群だった。今までと違って急に話を聞いてくれるようになった影虎にチャンスだと感じたエミルは持っていたクレイモアを地面に落として、影虎に詰め寄って彼を問いただす。

「知ってるのね？ 知ってるんでしょ!? あの子は今どこに居るの!? どこに居るのよ!!」

彼女にしては珍しく、取り乱したエミルに影虎はたじろぎながら口を嚙む。

しばらくの沈黙の後、影虎は無言のまま首を横に振った。

エミルは『もしかしたら』という希望を裏切られ、その場に崩れ落ちるように両手を地面に突く。

そんな彼女の様子を見てどうしたらいいか分からず。影虎が途方に暮れていると。その直後、魔法陣が地面に現れ、その檻に閉じ込められた星が姿を現した。

「——星ちゃん!?!」

星の姿を見て、エミルが駆け寄ろうとした瞬間。その檻の前に、狼の覆面を被った男のホログラム映像が映し出される。

「待った……動かないで頂きましょう! もし。それ以上その子に近付く事があれば、その檻ごと彼女はバラバラになることになる」

覆面の男は右手に持ったスイッチを、エミルと影虎の前に見えるようになって突き出してニヤリと不気味な笑みを浮かべている。

エミルは足を止め星の檻を見ると、怯える星の足元に爆弾のような黒塗の四角い箱が置かれていた。

大きさにまあそれほどの威力の代物ではないだろうが、狭い檻の中にいる星の体を吹き飛ばすには十分なものだろう……。

「……貴方! そんな事をして許されると思っているのツ!?!」

覆面の男に向かって声を荒らげるエミル。

口元に不敵な笑みを浮かべると、覆面の男が徐ろに口を開いた。

「——なにを言ってるんですか、これはゲームですよ? ゲームの中で人が死ぬなんていうのは日常茶飯事でしょう? それを『そんな事

をして許されるか』なんて言葉は滑稽ですね〜」

「くッ！ 貴方は……」

悔しそうに唇を噛み締めるエミルが、人を小馬鹿にしたように笑う男を睨む。

この状況にした張本人のセリフとは思えない男の発言に、エミルは眉を吊り上げ怒りを露わにする。

覆面の男はその表情を見て、楽しんでいるかのようにほくそ笑んだ。

その傍若無人な振る舞いに、体を小刻みに震わせていた影虎の怒りが爆発する。

「貴様！ 俺を騙したのか!!」

「騙す？ なにを言っているんですか、貴方は私に雇われた。その女を始末する為に……貴方こそ早くその女を始末したらどうです？

恨んでいるんでしょう？ その女の一族を……」

「……貴様ッ!!」

拳を強く握り締めながら、鋭い眼光を向ける影虎に向かって更に言葉をぶつける。

「貴方の一族の恨みなど、所詮は女の涙くらいで掻き消えるようなものなのですよ！ 貴方ができないのなら、私が手伝ってあげましょう!!」

「——なっ！ よ、よせッ!!」

覆面の男はそう叫ぶと、手に持っていたスイッチのボタンを押し

た。エミルは狼の覆面を被っている男の行動に驚き、同時に悲鳴を上げた。

「いやあああああッ!!」

咄嗟に檻に向かって走り出した直後、星の居た檻が跡形もなく吹き飛んだ。周囲には残骸が転がり、星の姿は服の一片に至るまで文字通り跡形もなく吹き飛ばされた。

もう一人のドラゴン使い 4

もの凄い爆風の後。辺りに土煙が上がり地面には爆発によってできた大きな窪みと、鉄屑の残骸だけが無残に残されている。

「……そ、そんな……星ちゃん……」

エミルはまるで魂が抜けた様にその場にペタリと座り込むと、まだもくもくと煙を上げている星を捕らえた檻のあつた場所を呆然と見つめていた。

彼女の頭の中には星との出会った日のことや、これまでの出来事がまるで走馬灯のように駆け巡っていた。意気消沈した様子で項垂れながら嗚咽を堪えてその場に泣き崩れるエミル。

その様子を見て、まるでショーでも楽しんでるかの様に大声で笑う覆面の男に、拳を強く握り締めていた影虎が声を上げる。

「……よくも、よくも俺と北条の戦いに水を差してくれたな！ 貴様！ 絶対に後悔させてやる!!」

「ほう。ならどうします？ 私を倒しますか？ 倒せますかね。今の貴方に……」

「ああっ！ やってやる！ やってやるさ!! ファーブニル!!」

影虎はリントヴルムとの戦闘を止め、事態が収まるのを上空から見下ろす黒竜に命令する。

——グオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!

その直後、ファーブニルが大きく咆哮を上げ。口が赤く発光し、複数の炎の球が発射された。

一直線にホログラムでしかない覆面の男に向かって飛んでいく。

「これが決別の一撃!!」

「……ふふっ。ええその通り。決別の一撃ですよ……そして貴方は、深く後悔することになる……」

余裕そうに両手を広げながらそう呟く覆面の男。

すると、突如として狼の覆面を被った男は消え、入れ替わるように先程粉々に吹き飛んだはずの星が姿を表す。

「——ッ!? もう止められない!!」

影虎が気付いた時にはすでに、もう炎の球が発射された後。彼にはもう止めるすべはない……。

一瞬ホログラムかと思ったが、それにしてはりんかくも表情もはつきりしている。しかし、どちらにしてももう止められない。一直線に、星目掛けて飛んで行く火の玉に、星は意識を失ったまま地面に倒れていた。

つとその直後、その間に割り込むようにエミルが飛び込んできた。

「――星ちゃん!!」

次の瞬間。地面に複数の火の玉が激突して爆音と共に煙が立ち上がり、物凄い爆風が辺りを吹き荒れた。

立ち込める煙が立ち消えると、力無く地面に横たわっているエミルの姿が、影虎の目に飛び込んできた。

けれどもそこに星の姿はない。爆風で吹き飛んだのか、それともホログラムだったのか……それを確認する方法は今となってはない。

起き上がるうと全身に力を入れたエミルが、力無くもう一度地面に伏した。それと同じくして、上空を飛んでいたリントヴルムが光と化して消える。

おそらく。ドラゴンはプレイヤーが一定のダメージを上回ると、切れるシステムになっているのだろう。

影虎は啞然としながらその光景を見て、立ち尽くしている。まさか自分のドラゴンの放った一撃がエミルとその知人の女の子に引導を渡すことになるとは夢にも思っていなかった……。

そんな影虎の背後に、再び狼の覆面の男が現れた。

「ハハッ！ たかがゲームで。たかが娘一人にそこまでするとは……ハッハッハッハッ！ 馬鹿ですねぇ。貴方もそう思うでしょ？ 上杉さん」

「……………」

「どうです？ 貴方もスカッとしましたか？ 憎い女が自分の攻撃を受け、ボロ雑巾のように地面に横たわっている様は。滑稽でしょ？」

「……………貴様アアアッ!!」

影虎は持っていた長刀の先で地面を引つ掻きながら身を翻し、その切先を覆面の男に向けて振り抜く。その直後、狼の覆面の男は顔だけを残して姿が消えた。

消えた胴体の部分を影虎の長刀が風を切つて虚しく通り過ぎる。

空中に狼の覆面が浮かんだ状態で、吐き捨てるように彼は言った。

「ふふっ、今のは前座。まだまだショーはこれからですよ。精々お楽しみ下さい。憎しみに溺れたアバターと言う名の人形劇をね……」

「待て!!」

消えていく覆面の顔を目掛けて、影虎が再び長刀を振り抜く。だが、そこはホログラム……振り抜いた刃は無慈悲にその間を通過した。

狼の覆面の男が消えると、辺りは静寂に包まれた。

そこにあるのは自責の念と、恨めしくも愛おしい女性が焦げたシルバーの鎧を身にまとって倒れている姿だ――。

唯一の救いが、これがPVP扱いになっていたことくらいだろう。少なくとも彼女を殺さずに済んだ――少しほっとしながら、小さくため息をついた彼の背後から、憤る女性の氷よりも冷たい声が響く。

「……あんた。そこで……なにしてるん?」

その狂気に満ちた低い声色に、影虎の背筋が凍り付く。振り返ったその先には、怒りで顔を引き攣らせているイシエルの姿があった。

普段はにこやかにしている彼女の顔が、今までに見たことがないほど怒りに震えていた。

イシエルはコマンドを操作すると巫女服へと変わり、次に空中に出てきた神楽鈴を手にした。

その怒りで震える手に握られた神楽鈴は、チリンチリンと彼女の怒りを表すように小刻みに音を立てている。

「……ゆるさへん、絶対にゆるさへん! うちのエミルにこんな………そんな頭かち割つてやるさかい。そこを動くなやツ!!」

普段の柔らかい喋り方は影を潜め、荒々しいほどに殺気に満ちた声色に変わっていた。

それもそうだろう。エミルとイシエルはリアルの世界でも親友なのだ。その親友が目の前で煤にまみれ、ボロボロになった鎧を身に纏い横たわっている変わり果てた姿を見れば激昂するのも当然のことだろう。

ここでやっとあの覆面の男が言っていたシヨ―とはこのことかと確信し、影虎はそんな彼女に慌てて弁解する。

「ちよつと待ってくれ！　これにはわけがあるんだ！」

「……ほお。言うてみ？」

「お、おう」

目を細め冷たく告げるイシエル。

影虎は緊張気味に事の次第を説明した。その内容を聞くと、イシエルはにつこりと微笑みを浮かべ影虎の元へと歩み寄る。

ほつとしたように息を吐くと、影虎も彼女に微笑み返した。

目の前まで来たイシエルは指をクイクイっと動かして影虎を屈ませると、イシエルは肩に手を置くと耳元でそつとささやくように告げる。

「うそはあかんよ……うそは……」

「——ッ!？」

背筋が凍るような微笑みを浮かべ、イシエルが全く躊躇することなく神楽鈴を振る。その直後、影虎の足の感覚が消えて体が地面に倒れる。

影虎は体を走るように急に襲ってきた激痛に叫び声を上げる。

「ぐあああああああッ!!」

よく見ると、両足の膝から下がごつそりなくなっていた。

激痛から地面を掻きむしりながら、冷たく見下ろしているイシエルを睨む。

「……ど、ど、ど、ど、ど、ど……」

「……どういふこと？　この状況では、目撃者はおらへん——つとなれば……」

イシエルは不敵な笑みを浮かべた。

影虎は震える手で、腰に差した長刀に手を掛ける。その刹那、一陣

の風と共に右腕が宙を舞う。

イシエルの鈴の音を聞いた時点で、彼女の固有スキル『ソニックウェーブ』が発動している。音速の速さで打ち出される衝撃波の刃に、人の反応速度で対応できるわけがない。彼女の逆鱗に触れ、彼女の手には神楽鈴が握られている時点で、すでに勝敗は決していたのだ――。

「ぎあああああああああああッ!!」

けたたましい叫び声を上げた影虎は、完全に地面に顔を付ける。

イシエルは影虎を見下ろしながら徐ろに口を開く。

「――それ以上はあかんよ。あまり切り刻んでまうと、戻ってまう

……おとなしくしててな」

「……何故だ？ 何故……お前はあの星つて子を、助けたいんじゃないのかッ!?!」

四肢を切り落とされ、地面に頬を付けたままイシエルを睨み大声で叫ぶ影虎。

しばらく、2人の間に沈黙が流れ。彼女は口元に不気味な笑みを浮かべると、そんな影虎の言葉をイシエルは鼻で笑って、冷たい目言い放つ。

「ふっ、あんな小便臭い小娘なんて知らん……うちはただ、エミルがしたい言うたから手を貸しただけやよ?」

「なっ!?!」

驚きを隠せないという表情の影虎に、イシエルが今までとは明らかに違う冷たい声音で淡々と言葉を続ける。

「……ええか？ 信じる者は騙される言うんよ？ うちの元より、あなたの言う事を一切信じてへん。それにうちはあの星つて子が好かんくてなく。ずっと邪魔に思ってたんよ……あん子。うちのエミルにちよつかい出してきた泥棒猫やし。子供だからって、なんでも許されるわけちゃうやろ？ 今回の事も、エリエちゃんが言ってた事が正しいければ、あん子の自業自得やし……エミルもここまで来て助けられんかったら、諦めつくやろ？ それだけや」

澄ました顔で平然と言い放つイシエルに、影虎の眼の色が変わる。

それは相手を軽蔑する様な瞳だった。

「……お前は仲間をなんとも思わないのか？」

「は？ 思わんよ。まあ、元より仲間とも思ってたへんからなく。うち
はエミルが居ればそれでええんよ」

イシエルの言葉を聞いて、決意を秘めた瞳で天を仰ぐと、影虎は「そ
うか……」と空に向かって叫ぶ。

「フアーブニル!!」

上空で主人の命令を待っていた黒竜が地上のイシエル目掛けて、口
を大きく開けたフアーブニルが炎の球を放つ。

イシエルは慌てる様子一つ見せず、冷静にそれを横目で見ると、徐
ろに指を動かし、装備を神楽鈴から赤い弓へと持ち替えた。

ゆつくりと弓の弦を引き絞ると、上空を浮かぶ黒竜に狙いを定め
る。

不敵な笑みを浮かべた彼女が、地面に伏している影虎に向かって口
を開く。

「——どうしてうちが『日本一の弓取り』と言われとるんか教えてあげ
るわ。それはなあ」

そこまで言うとな彼女は口を噤み、その白く細い指を弦をから放して
向かってくる炎の球へと矢を射る。

矢は赤く輝くと炎の鳥の様にゆらゆらと光りをばら撒きながら、炎
の球諸共、一直線に黒竜に突き刺さった。その直後、黒竜の体が赤く
光りに包まれ。辺りはまるで昼間の様に照らし出された。

しばらくしてその光りが収まると、イシエルは微笑みながら影虎に
視線を戻す。

「この弓は『アルテミス』サービス1年を記念して、経った5日間だけ
試験的に登場した。塔クラスダンジョン——その最上階50階層に
辿り着き、女神アルテミスを倒した者だけが貰える装備。そう……う
ちがエミルとのデートで行った記念品なんよ」

説明を終えると、彼女は今までとは別人の様に顔を真っ赤に染めな
がら両手で頬を押さえ、くねくねと体を左右に大きく揺らしている。

エミルが気を失っているのをいい事に、好き勝手言っているイシエ

ルを哀れみにも似た目で影虎が見つめる。

彼が『こいつ。もうどうしようもないな……』と、そう心の中で思っている、イシエルは影虎の方を向き直す。

親友の話をする時とは違う、まるで虫ケラでも見る様な冷たい瞳を影虎に向けた。その冷徹な瞳に、影虎は何とも言えない恐怖を感じ、無意識のうちに全身に鳥肌が立つ。

この震えは恐怖とかそんな生易しいものではなく、生物が本来持っている防衛本能がそうさせるのだ――。

「この事は他言無用やよ？　今回は体をバラバラに引き裂くだけで勘弁したる……」

「ちよつと待て！　体をバラバラにつて――」

その言葉を遮り。影虎の顔を覗き込んで、イシエルはにつこりと微笑んだ。

そんな慌てふためく影虎の頭を、イシエルが優しくポンポンと叩く。

今の影虎は手足を切り落とされ【OVER KILL】の状態。文字通りの手も足も出なく為す術もない。

「大丈夫や。これはゲームやよ？　バラバラになれば『体は』復活できるで。……死ぬほど痛いやろけど……」

「ちよつ！　ちよつと待て！」

「ほな、後の事は飛ばされてから考えてな。ええ場所に着地でできればええな」

満面の笑みでイシエルが影虎に向かってそう言い放つ。

直後。イシエルは武器を再び神楽鈴に持ち変え、チリンチリンと不気味に鳴らす。

すると、突風が吹き荒れ影虎の体は粉々に吹き飛んだ。イシエルは突風とともに、遠くの空へと消えてゆく影虎を「さいなら」と手を振りながら見送る。

まさかそんな出来事が繰り広げられていたなど知る由もなく、今まで気を失っていたエミルが目を覚ます。

エミルは頭を押さえながら、思い出したように辺りを見渡す。

「——星ちゃんは!? 星ちゃんはどっ!?」

必死に星の姿を探すエミル。

イシエルは一瞬だけニヤリと不気味な笑みを浮かべたが、すぐに心配そうな表情を作り。そんな彼女の方へと駆け寄っていくと、取り乱すエミルの両肩を掴んだ。

「どないしたん? 落ち着かな傷に触るよ。エミル……」

「……あら? イシエ……?」

エミルの顔を涙で瞳を潤ませながら不安そうに見つめるイシエルの姿に、状況が全く飲み込めないエミルは首を傾げている。

それもそうだろう。本来ならイシエルはディーノと共に敵城城門前の敵と対峙しているはずなのだ。

だが、そんなイシエルの姿を見てほつとしている自分も居ることに、エミルは少々困惑していた。

そんなエミルが思い出したようにイシエルの肩を掴むと、飛び掛かりそうな勢いで尋ねた。

「星ちゃんは!? イシエ。星ちゃんは居なかった!」

「ちよつ! 落ち着かなあかんつて!」

イシエルはボロボロの体のエミルを支えながら、取り乱す彼女に叫んだ。

鬼気迫る彼女の様子に、イシエルがあたふたしていると、エミルはイシエルの肩を掴みながら再び気を失う。

PVPは挑んできた影虎が撃破されたことで終了している。それに伴いエミルの『1』だったHPも、今は全回復していた。

しかし、HPと体力は同じではなく。PVPで受けた負傷、疲労はそのまま蓄積されたまま残されてしまう。

その中でも厄介なのは精神的なダメージの方だ——これはゲームシステムが危険値まで達したと判断されると、プレイヤーの精神保護の為に一時的に意識を喪失させる。本来はゲームから意識を強制排出されるのだが、この状況ではそういうわけにもいかない。その為にもう一つの防衛処置がこの『気絶』というシステムなのだ。

エミルが目を覚まし、すぐに倒れたのはそれだけ彼女の肉体的、精

神的なダメージが蓄積量を超えたことによる一時的な処置なのだ――

「イシエルはその必死の彼女の様子を見て、困惑を隠しきれずいた。た。」

「……なんでなん？　なんでそこまで、あの星つて子にこだわるん？

エミル」

イシエルは気を失ったエミルの体を抱きしめると、不意に思っていたことを口に出す。その直後、イシエルの脳裏にエミルの妹の岬の顔が浮かんだ。

イシエルはリアルでもエミルと交流があり、亡くなった岬のことも良く知っているこの世界では数少ない人物でもある。

その岬が亡くなった時も、エミルはまるで抜け殻のようになったのを思い出し、首を左右に激しく振った。

「――うちは大きな勘違いをしとったかもしれへん。あん子を失ういうんは……エミルを失ういうことやんか！」

この救出作戦の本質に気付いたイシエルは、決意に満ちた瞳で城の方を向く。

今も不気味にそびえ立つ魔王の城の様な外觀の敵拠点を見据え、イシエルは鋭い視線を飛ばす。

気を失っているエミルを地面に寝かせると、イシエルは彼女に微笑んだ。

「エミル。待ってとってな。うちがきつと星ちゃんを取り戻して来らんか」

イシエルはそう言い残すと、険しい表情のまま城へ向かって走り出した。

* * *

デイーノの思惑

自分を降ろして即座にドラゴンと共に、エミルの救援に向かつてしまったイシエル。

まあ、そうなれば無数の敵兵がひしめいていた本来激戦区となったであろう城門前に、デイーノは一人ぼつんと残されてしまった。

エミルとイシエルが抜け大量の敵の兵士に囲まれていたデイーノは、諦めたように大きなため息を漏らし、白いマントを風になびかせながら白銀の鎧の腰に挿された鞘から『ダーインスレイヴ』を抜き、不気味な笑みをこぼしている。

月明かりに照らし出された敵の兵士は、数にして千かそれより少し多いと言ったところだろう。その全てが目の前に1人で立つデイーノを甘く見ているようで、口元には不敵な笑みを浮かべていた。

デイーノはその兵士達と自分の置かれた絶望的と言える状況にフツと息を漏らして呟く。

「……全く。まさか俺1人で戦う事になるとはね……でも。それはそれで都合か……」

その直後、敵の兵士が数人デイーノに向かって襲い掛かった。

各々得物を振り上げ襲い掛かる彼等の攻撃を、デイーノはいとも容易くかわすと、目にも止まらぬ速さで次々と斬り伏せていく。すると、次の瞬間。地面に転がっていた兵士達の体がキラキラと光に変わって天に舞い上がる。

その光景を見ていた敵の兵士が恐れおののき、思わず数歩後退る。

だが、それも当然だ。本来ならいくら無理をしても戦闘でHPは『0』にはならない。それがこの世界のPVPの常識だ——しかし、目の前にいるデイーノはその常識を容易く打ち破ったのだ。

この世界の死は現実での【死】それに恐怖しない者はいない。何故なら、彼等が最も多くの人間を死に至らしめているのだから……。

尻込みしている敵を前に、デイーノが首を傾げながら狂気を含んだ声で尋ねる。

「まるで生まれたての子鹿のように震えて、どうしたんだい？ 来な

いなら。今度は俺から行かせてもらおうよ?」

デイーノはダインスレイヴを構えると、敵の中に突撃していく。

その直後、至る所で悲鳴が上がり、火花と昇天する光が上がる。

その神業の様なスピードに敵の兵士達は圧倒されているようで、終いには完全に戦意を喪失してしまい、その場に座り込んで動かなくなる者までいた。

そんな中、まるで子供が蟻を潰すかの如く楽しそうに剣を振るうデイーノの前に、1人の屈強な男が立ちはだかった。

身長は高く、硬そうな重鎧に右手には太く長いランス。左手には鉄製の分厚い盾を持ち。頭には長い角の様な飾りの兜を被っている。その姿はまるで、カブトムシを擬人化したのではないかと思うほどだ――。

巨大なランスを高らかに突き上げ、男が辺りに轟く野太い声で言い放つ。

「良くも俺の部下達を……お前は突き刺しの刑だ!!」

男は右手に持った巨大なランスを天高らかに掲げながら、悠然とデイーノを見下ろす。

身長差だけでも結構あるのだが、何よりも凄いのはそのランスだ――実際に人が触れる様な代物とはとても言えない大きさで、このゲームの筋力補正あつて始めて使いこなせるものなのだろう。

その発言を聞いたデイーノは余裕なのか、口元に微笑を浮かべている。

「面白い冗談だね。俺がもう少し優しくかったら褒めてあげたいところだったけど……あいにく、俺は冗談が嫌いなんだ。カブトムシ君」

「カブ……余程。死にたいようだなッ!!」

激昂する男は持つていたランスをデイーノ目掛けて放つ。

「そらそらそらそらーッ!!」

突進しながら連続して放たれるランスをデイーノは後ろに後退しながらも、ダインスレイヴで軽々と受け流す。

その最中、終始デイーノは澄まし顔のまま一点を見つめ、左手でコ

マンドを操作している。そんなデイーノの姿に男が不機嫌そうに大声で叫んだ。

「なにを余所見している!!」

「……ねえ、君は知っているかい？ 君の部下に面白いスキルの持ち主が居ることを……」

「なにを……それが今、どう関係がある。寝ぼけた事を言っているんじゃない!!」

男はデイーノが剣で受け止めたのを見計らい、持っていた巨大なランスを横に振り抜きデイーノの体を吹き飛ばす。

まるで風船を蹴飛ばした様に軽々と飛ばされるデイーノ。

だが、当の本人はその重そうな攻撃を眉一つ動かさずに、勢いに身を任せるように飛ばされた。

その先には槍を構え待ち構えていた敵を、デイーノは空中で反転し体制を整えて素早く斬り伏せると、男を見て不敵に笑う。

挑発的な彼の態度に激昂した男がランスを構え、デイーノに向かって再び突進してきた。

「この何がおかしいのだッ!!」

男は叫ぶと、巨大なランスを前に突き出す。

デイーノは口元に浮かべたその不敵な笑みを消すことなく、ダイインスレイヴを前に突き出した。

「――部下の固有スキルくらい覚えておきなよ。この脳筋カブトムシ……」

「黙れ! このもやし小僧!!」

前に突き出した互いの得物が激しく激突して辺りに火花を散らす。

その直後、デイーノの持っていたダイインスレイヴが男の巨大なランスを、まるで紙でも切り裂くかのように真っ二つにしていく。

「――なにッ!?!」

男は慌てて、持っていたランスを手から放すその一瞬を逃さず、デイーノがダイインスレイヴを男の頭部目掛けて突き出した。

瞬時に左手に持っていた盾で、デイーノの剣を受け止める。

だが、その岩盤の様に分厚い盾を、デイーノの剣は容易に突き抜け

ている。

鮮やかなその剣さばきは、デイーノの剣をまるで敵の装備に使われている素材その物が刃を避けているように見えた。

その直後、デイーノは剣を横に振り抜くと屈強な盾を斬り裂いた。すると、盾が地面に落ちて男の巨体が大きく揺らめく。

「ぐッ……ぐはッ！」

その場に膝を突き、男は苦痛に歪む表情で左腕を抑える。

男の左腕は肘より下がなく、よく見ると盾の転がる地面に彼の切り落とされた腕も横たわっていた。

困惑したように震える声で男が尋ねた。

「……どうして、お前の剣が俺のこの強固な盾を貫けた？」

「さつきも言ったけど、君の部下の固有スキルの中に『ソードエスケープ』というスキルの持ち主がいるのさ。だから君の防具も武器も俺の剣を止められなかった」

膝を突いて俯く彼にデイーノが抑揚なく告げると、彼は意気消沈しながら呟く。

「……なるほど。俺の敗因は部下のスキルを知らなかったからか……」

「いや違うね……」

デイーノは男の鼻先に剣先を突き付け言い放つ。

「——君の敗因は俺の前に立ったことだよ」

男はそれを聞いて、諦めたかのように静かに「そうか……」とだけ呟いて瞼を閉じた。

その表情からは、すでに覚悟したような潔さを感じられる。

デイーノは持っていたダインスレイヴを高らかに突き上げた。

その直後、デイーノの背後からドンツ！というけたたましい爆発音が複数回起こると、男の叫び声と数多くの悲鳴が辺りに響いてきた。

「おらおらく、どけろどけろ〜！俺に触れる奴は爆発すつぞ!!」

その声にデイーノは舌打ちしながらも、渋々握っていた剣を鞘に収めた。

残り一撃で勝負が決まると言う場面でデイーノが身を翻すと、何が

起きたのか理解できずに、不思議そうに彼を見上げる男に向かって口を開く。

「君は運がいい。早く部隊をまとめて大人しくしていた方がいいよ。抵抗すると、騒がしくなる……」

「……なんだと？」

デイーノは至って冷静に、爆音と悲鳴、怒号の飛び交う場所を指差して告げる。

「俺が知る。この日本サーバーで一、二を争う強さの人間が来たようだからね」

その言葉の直後、馬の鳴き声と共に、赤い鎧に身にとった大斧を持った男がデイーノ達の前に、空中から突如として降ってきた。

赤い鎧の男は膝を突いている男に大斧の刃を突き付けると、エミルの仲間だと勘違いしたのか、デイーノに向かって親指を立てて微笑みを浮かべる。

「よっ！ 大丈夫か？ ジジイに言われて助けに来てやったぜ！」

「——やっぱり君か……紅蓮がいたからもしや、いや間違はなく君がいると思っていたよ……」

デイーノがそう言っただけで微笑み返すと、赤い鎧の男は驚いたように彼の顔を指差す。

「なんでお前がここにいるんだよ！ デュラン!!」

「その呼び方はやめてくれ、メルディウス。今はデイーノさ」

「……また、あこぎなことやってんだろ？ ふん。何がデイーノだ！

P Tに入らないからって、いつもころころ名前を変えやがって！」メルディウスは目を細め、彼を鼻で笑うと大斧を肩に担いだ。

デイーノはそんな彼の様子に意味ありげな微笑を浮かべるだけで、それ以上の言及は控えた。

そんな彼の態度が気に食わないのか、メルディウスはもう一度鼻を鳴らすと今度は敵の大軍の方に目を遣った。

その直後、メルディウスが大声で周りの敵に叫んだ。

「いいか！ 俺達はテスターだ！ 固有スキルもお前等の比じゃねえ！ 降伏しろ！ そしたらこれ以上。痛い目は見なくて済むぞ

!!

彼の言葉を聞いて周りでは反発の声が多く上がる一方で、武器を捨て戦闘を放棄する者もいた。

その一方で未だに戦意をせずにいきり立った者達も多くいる。それは戦意を喪失した者達よりも遥かに多い人数だ――。

だが、それは当然の反応だろう。デイーノによって多くの仲間を消され、憤っているところに突然「テスター」を名乗る者が現れたところで止まる者の方が少ない。

未だに勢いがある敵の兵士達の視線が、突然現れたメルデイウスの体を突き刺す。

部隊の間で賛否の声が上がる中、重装甲に身を包んだ男が高らかに声を上げる。すると、その場に居た兵士達が一斉に止まって彼の方を見つめた。

「――もう多くの同胞達を失った……俺達の負けだ」

男はメルデイウスとデイーノに深く頭を下げた。

突然の幹部クラスの敗北宣言に、憤っていた部下達の間にも不穏な空気が流れている。

ある者は静観し、ある者は奮起させようと声を張り上げた。が、頭を下げている幹部がその奮起させようという仲間の声に顔を上げることはなく。

深々と頭を下げ続ける男を見下ろしながら、2人は首を傾げ互いの顔を見合わせる。

「俺はどうなっても構わない。だが、部下達は許してくれ！ 頼む!!」
頭を下げたまま微動だにしない男を見て、メルデイウスがバツが悪そうに頭を掻いた。

その後、武器を地面に突き刺すと男の肩に手を置いた。

「俺も一ギルドマスターだ。お前の気持ちは良く分かる……別に俺は、お前達が抵抗しなげりゃ手を出す気はない。そうだよな！ 小虎」

メルデイウスが敵の兵士に囲まれながら、馬に跨る小虎に尋ねた。
そのメルデイウスの言葉に小虎はガッツポーズを決め「おう！ 男

に二言はないぜ兄貴！」と大声で言葉を返す。

メルデイウスはその返答を聞いて笑みを浮かべると、深々と頭を下げ続ける男の肩を更にポンポンと叩いた。

「だ、そうだ。後はお前に任せるー！」

「――すまない。恩に着る……」

男は顔を上げてメルデイウスの顔をまじまじと見ると、もう一度大きく頭を下げた。

メルデイウスは親指を立てて答えると、デイーノの方を見た。不信感いつぱいのメルデイウスの視線に、デイーノはスツと視線を逸らして対応する。

「それで……どうしてお前がここに居るのか説明しろよ」

「……嫌だね。君に教えると後々面倒だ」

「なにいいいいッ!!」

歯を剥き出しにして睨むメルデイウスに、デイーノは素っ気なく答えた。

その後も一方的に言葉をぶつけるメルデイウスを尻目に、デイーノは左腕を抑えている男の方に向かう。

デイーノは男の前で屈むと、小声で告げる。

「……君達が盗んだ武器、防具、アイテム類を全て渡せ。俺がここに来たのはそれが理由だから」

「それで俺に武器を渡すように言え……と?」

その言葉にデイーノはゆっくりと頷く。

しかし、男は眉をひそめると言い難そうにデイーノに向かって口を開いた。

「すまん。俺にそれほどの力はない。だが、ボスなら……」

「……ボス?」

彼のその『ボス』という言葉に、デイーノもメルデイウスも首を傾げている。

それもそうだろう。本来ならば部隊を指揮している人間がボスだと思ふもの、そのボスが全く別の場所で指揮も取らずに身を潜めているなど、本来ならば考えられない。

彼等はボスが不在であるにも関わらず。これだけ高い士気を保っていたと言うのは些か不可解でもある。これはボスが相当の人徳の持ち主か、はたまた恐怖政治を敷いているかのどちらか……。

カブトムシの様な兜を被った男が城のてっぺんを指差し。

「ああ、城の最上階に居るはずだ」

「なるほど、なら直接直談判に行ってくるよ」

デイーノはそう言うのと城の上部を見上げ、門に向かって歩き出した。

急に歩き出したデイーノにメルデイウスが慌てて叫ぶ。

「おっ、おい！ どこ行く！ こいつらはどうすんだよ！」

デイーノはその声に振り向くことなく「それは君に任せる」と言い残し去っていった。

不機嫌そうにしているメルデイウスに小虎が声を掛ける。

「——兄貴はいつもこういう役回りだね。なんだっけ……ああ、押し付けやすい人だ！」

「……ええ、なだつて小虎。お前をどこかのギルドに押し付けてやろうか……？」

「いたいいたい……」

メルデイウスは小虎の頭を拳で挟むと、ぐりぐりと押し付けていった。

「絶対に姉さんに言いつけてやるく!!」

瞳に薄っすら涙を浮かべ、小虎が叫ぶ声が夜空に響き渡った。

敵城の主

城に潜入中のエリエ達は螺旋状の階段を昇ると、黄金の装飾が施された扉が見えてきた。

今までの扉もない部屋とは違い。まるで王族の謁見の間に続く様な、神々しくも美しい数々の宝飾が散りばめられていた。

だが、何より気になるのは急に美しい装飾が細部まで施されているが、だからと言って装飾だけに拘った脆弱というものなわけではなく、その扉は厚く強固なことである。

この先には王と祀られる何かの物凄い気配というか、まだ会ったわけでもないのに重苦しい威圧感が強固な扉越しに感じ取れる……。

それを見るなり、ミレイニの体が震え始める。

「……………、……………」

ガクガクと震える足から次第に力が抜け、崩れるようにして地面に座り込んでしまう。

もちろん、それが何故なのかは分からない。だが、突然彼女の体を悪寒が走り。胸の奥を抉られるような殺気を感じ全身が無意識に震え脱力してしまったのである。

怯えたように両肩を抱え地面に座り込むミレイニ。

先程までとは明らかに違う彼女の様子に、エリエが心配した様な表情で声をかけた。

「どうしたの？」

ミレイニはエリエの声が聞こえていないのか、怯えた様子で両肩を抱きながら念仏のように「ここはダメだし」と呟いている。その変貌ぶりに、エリエも少し不安になったのか隣を歩くサラザを見た。

サラザはにつこりと微笑むと、エリエの肩に手を置いた。

「大丈夫よく。エリーはその子の側に居て、私達がちよちよつと片付けるわ〜」

「そうザマスー！ わたーし達に任せておくザマスー！」

サラザの言葉に合わせるように、孔雀マツザカが前に出る。その後ろを親指を立てたガーベラが続いていく。

3人は扉の前に横一列に並んで立つ。

(サラザ。皆、気を付けてね……)

エリエは地面に座り込んで両肩を抱いたまま、ガタガタと震えているミレイニを抱き寄せると、悠々と歩いて行くサラザ達を見送った。

サラザ達はその黄金の扉を開け放つ。

音を立てて開いた扉の中を見てサラザ達は啞然とする。

部屋の中はまるで、外に居るのではないかと勘違いするほど明るく、その部屋を覆う壁は全てがガラス張りようになっていた。

部屋の至る場所には、大理石で造られた支柱が所狭しと天井まで伸びてその部屋を支えている。

部屋の入口から中央にはかけて赤いカーペットが敷かれ、それが奥の壇上になった広間に繋がっていた。

天井から伸びた透き通る赤いカーテンの王が座るような黄金の玉座に腰を下ろして、ワインを注がれたをグラスを手にした黒と赤のツートンカラーの重鎧を着た若い男の姿があった。

その周りには露出の多いアラビアン風の煌びやかな衣装を身に纏った少女達が、その男を囲む様にして立っていた。

だが、その華やかな格好とは裏腹に、その誰もが首輪によって一定の距離より動けないようにされている。彼女達のその表情は皆虚ろで生気を感じられない。

殆どの女性プレイヤーが顔とスタイルだけで、無理やりこの場に連れて来られたのだろう。

それを見たサラザが、相手を軽蔑する様な瞳を向け険しい表情で小さく呟く。

「随分と悪趣味な奴ね……」

その言葉が聞こえたのか、男はしたり顔で持っていたグラスを女性に渡す。

重そうな鎧を纏ったその体をゆっくりと起こし男は悠々と立ち上がり、腰に挿された剣を抜いた。

その姿を見てサラザ達は表情を一変させる。

それもそうだろう。本来建物内は武器やアイテムなどの戦闘系装

備を使用できないはずなのだ。

装備するだけではできるものの、その武器を使用することは決してできない。

つまり、飾りとしてなら身に付けられるが、それを鞘から引き抜くことはできないということだ。もし、使用しようとすれば、視界にシテムのエラーメッセージが表示されるはず。

男は側に居た少女を呼び付けると、背中を見せるようにして目の前に立たせた。

少女は怯えた表情で体を震わせた次の瞬間、男は持っていた剣で少女を斬り伏せた。しかも、その動きに一瞬の躊躇いも迷いすらなかった。

辺りに少女の悲鳴が響き渡り、背中を斬り付けられた少女は苦しげな声を上げながら地面に倒れ込む。

本人は試し斬りのつもりなのだろう……。

その後、数回空中で剣を振ると、ニタリと不敵な笑みを浮かべている。だが、無抵抗の人間を躊躇なく斬る姿は端から見ている、とても気持ちがいいとは言えない。

「おい。いつまで寝ている……邪魔だ!!」

男は地面に倒れ込みながら、悶え苦しんでいる少女を蹴飛ばした。

少女は転がったが首輪により近くの柱に繋がれている為、一定距離より以上は離れることができずに止まった。数回咳き込んだ後、涙が滲んだ瞳で「すみません」と掻き消えそうな声で謝罪する。

その光景を見ていたサラザが、彼の蛮行に耐えられず叫んだ。

「ちよつとあんた!! 女の子を何だと思っているの!?! 絶対に許せないわ!! あんたのそのプライドと一緒に、下に付いたばっきれも叩き潰してあげる!!」

サラザはコマンドから武器を取り出す。思った通り、この場所では武器の使用が許可されているらしい。視界にもエラーメッセージの表示も出ない。

今まで装備を使えなかった鬱憤と男への怒りを表すように手に持ったバーベルを回転させ、サラザはそれを地面に突き立てた。

その隣に付いてトンファーを構えるガーベラも、激昂した様子で男を睨んでいる。

「あんな男。絶対許せない……女の敵め！」

「そのとーりザマス！ わたーし達で天誅を下してやるザマス！」

憤る3人のオカマの鋭い視線に、男は余裕な表情で不気味な笑みを浮かべる。

戦況的には圧倒的に不利なはず。にも拘わらずあの余裕な表情を浮かべているということは、また近くに居る少女達を盾にでもするつもりかもしれない。

先制攻撃を仕掛けようにも敵が少女達の近くにいる間は、サラザ達は手が出せないと思われたその直後、突如として孔雀マツザカが音を立てて地面に倒れた。

孔雀マツザカの背中には男が持っていた剣が突き刺さっている。

咄嗟に前を向くと、王座の前に居たはずの男の姿もない。

「うおおおおおおおッ!!」

咄嗟にサラザがバーベルを振り回した。

その隙にガーベラが倒れている孔雀マツザカの背中から剣を抜くと、遠くに放り投げる。すると、姿を消していた男が再び玉座の前に立っていた。

が、今度は近くに立っていた少女の首に腕を回し首筋に短剣を突き付けたまま、震える少女を余所にニタツと不敵な笑みを浮かべていた。それはまるで、サラザ達に向かって来れるなら来てみると言わんばかりに……。

「……ちくしょう。舐めやがって……」

ガーベラは横たわる孔雀マツザカを見て歯を噛みしめ、トンファーを構えると固有スキルを発動する。

「うおおおおおッ!! リミッターブースト!!」

そう叫んだ直後。ガーベラの体が赤く輝きを放つ。

ガーベラは刹那の速さで男に目掛けて移動すると、トンファーを振り抜いた。しかし、その攻撃はまるで蜃気楼を切り裂くようにして、そこに居たはずの男は姿を消す。

「なにっ!？」

ガーベラは慌てて男の姿を探した。

だが、辺りにある大理石の支柱のせいで死角が多く、男を見つけるのが相当困難だ。

その直後、支柱の一本から月明かりに照らされ男の影が差した。その一瞬を見逃すことなく、その支柱ごとガーベラのトンファーが粉碎する。

「これで、さすがの奴も……ぐッ! な、なに……?」

ガーベラは腹部に痛みを感じ、視線を落とす。

そこには、さつきまで男の持っていたはずの細い短剣が刺さっていた。しかし、彼の姿どころか短剣を投げたその一瞬ですらガーベラには感じ取れなかった。

スピードで遥かに上回る相手であれ、肉体強化系の固有スキルで痕跡すら追えないとは考え難い。

崩れる様に、その場に倒れたガーベラが自分のHPバーを見ると麻痺の表示が出ていた。

回復アイテムが使えないPVPで毒などの異常状態は致命的。しかも体の自由を奪う麻痺となればもう勝負は決まったも当然。

「くッ……やられた。一瞬でこれだけの動きを見せるとは……」

地面に伏せるガーベラの隣に立ち、不敵な笑みを浮かべている男にサラザが襲い掛かる。

瞬時に2人をやられ激昂していたサラザは我を忘れ、バーベルを振り回しながら飛び掛かった。

だが、やはり男の姿は影の様に消えてしまう。それが男の固有スキルによるものなのは分かる。しかし、それがどういう効果のスキルなのか分からないことには対応しようがない。

憤っていたが、今のサラザは冷静だった。怒りが強くなればなるほど、内では冷静さが増していくような気がした。

サラザは難しい表情のまま、固有スキル『ビルドアップ』を発動する。直後、全身から金色のオーラが勢い良く吹き出す。

『ビルドアップ』は己のステータスを大幅に上げる技。だが、攻撃を当

てられなければいくらステータスを上げようが意味はない。

そんなスキルを、今発動する理由の一つ。相手に攻め難い状態を作る以外にはない。要は時間稼ぎだ——サラザの固有スキル『ビルドアップ』は全身から金色のオーラを放つ。見た目が派手なスキルだからこそ、相手はどんなスキルなのか警戒もしないで早急に突っ込んでくるとは考え難い。

相手が手をこまねいている間に、男のスキルに対して何らかの打開策を思案することができる。

サラザは自分の視界に映る姿を見ながらも、今まさに発動されているであろうスキルの正体を見破ろうと目を見開く。

（視界には入っているのに攻撃が当たらない。これで考えられる要因は2つ——己の幻影を作り出す技か、当たる直前で超高速で移動しているか……）

サラザはじつと動きを止めて、考えを巡らせているところに男の声が響いた。

「どうした！ スキルを使ったものの。この俺が怖くて攻撃できないってか!？」

「……なら。あなたから攻撃してきたらどうかしら〜？」

「フン！ その手には乗るか！ お前のスキルは、広範囲系のスキルかカウンター系のスキルなのは、見れば誰でも分かる！」

サラザの読んだ通り。サラザのスキルをいい意味で、彼は勘違いしてくれているようだ——このことから、こちらが下手に攻撃を仕掛けないければ、相手が下手に攻撃してくることはないだろう。

しばらくは、じつくりと相手のスキルを観察することができそうだし。

じつと相手の動きを見ていたサラザはあることに気付く。

相手が移動する瞬間、一瞬だが男の姿がぼやけるように見える。

つとその時、男はガーベラが粉碎した支柱の破片を手に持ってサラザに投げつけてきた。

敵城の主2

サラザは自分の顔付近に飛んできたその破片を、素早く拳で叩き落とす。

それを見た男は、口元にニヤリと不気味な笑みを浮かべた。

「そうか！ そのスキルはカウンター系のスキルではないな。しかもこれほど経つても仕掛けてこないところを見ると、広範囲攻撃系のスキルでもないようだ」

その核心を突く言葉に、サラザの表情が険しいものへと変わった。

男はその顔を見て「凶星のようだな」と呟くと、サラザ目掛けて駆けて来る。

「驚かしやがって……お前はじっくり鬨りながら潰してやる！」

「フツ、やれるもんなら……やってみやがれ！ オカマなめんじやねえーぞッ!!」

普段のオカマ口調を忘れ、サラザは持っていたバールを頭上で振り回す。その瞬間、サラザの起こした風で男の姿が霞む。

つとその刹那。目の前に男の手に握られた剣が、素早くサラザの太腿を捉えた。

一度体制を崩したが、サラザは持っていたバールを地面に突き立て踏み止まる。鋭い眼光を放つサラザの瞳が男を捉えた。

男は直ぐ様距離を取ると、切っ先をサラザに向けて剣を構え直す。

どうやら、バールで攻撃を仕掛けて来ると思ったらしい。だが、今の攻撃でサラザには大体、彼の固有スキルの能力は把握できた。

おそらく、男のスキルは高速移動ではない。その証拠にサラザの起こした風程度で、まるで蜃気楼が揺らめくように霞んだのだ。

そこから推測するに男のスキルは多分、そこに居るように見せて姿を消す——そんな能力だろうという大まかな見当がつく。

その証拠に、サラザの太腿の傷は軽く切れた程度で、左程深くはない。

それはまだサラザのスキルを警戒していた男が、無意識のうちに取った防衛行動みたいなものだろう。だからこそ、攻撃時にそれ

ほど深くは踏み込みきれなかったのだ。

サラザは余裕な表情で指だけをクイクイと動かして相手を挑発する。男は怒りに任せ、側で剣を振り抜いて風を切り裂くとそのまま走り出す。

その一瞬にサラザは地面から拾い上げた破片を男に投げつける。

つと、サラザの推測通り。走ってきていた男の体を石が通過した。

次にサラザはバーベルを自分の周囲で振り回すと、ゴンツ！という鈍い音と共に、何かが地面を転がる音の直後、支柱にぶつかり土煙が立ち昇る。

その直後、自分に向かって来ていた男の影の方に目を向けると、影の男の姿がスツと消える。やはり、男の持っている固有スキルの正体は、実体のない分身を召喚する能力。

まあ、実体のない分身ならば攪乱はできるが、攻撃は不可能なのは大体推測できる。この部屋がガラス張りになっているのは視界を遮らず、敵の注意を分身体に向ける為のものなのだろう。

「くツ……良くもやりやがったな。オカマ野郎!!」

土煙の中から、苦痛に歪みながら怒りを籠もった瞳で睨んだ男は腹部を抑えながら声を荒らげて叫ぶ。

サラザは確実な手応えを感じながら、臆することなく男に向かって攻撃を仕掛ける。

「うおらあああああツ!!」

雄叫びを上げ、突っ込むサラザは男の前で止まると、再びバーベルの端を持って回転させた。

まるで砲丸投げの選手のように、ぐるんぐるんとバーベルの端を持って回す。

サラザの振り回すバーベルは、男がぶつかって倒れた支柱を粉々に粉碎した。だが、そこに男の姿はない。

さすがに二度も同じ手は食わないか、サラザの目論見としては、攻撃を仕掛けて行った直後に、直ぐ様別の場所から男が攻撃を仕掛けてくると考えていたのだが……そうならないということは、それほど単純な男でもないということなのだろう。

男が近くに居ないことを確信するやいなや、サラザは頻りに頭を動かして男の姿を探す。

すると、部屋の端まで移動していた男が、憎たらしそうにサラザに睨みつけている。

「ほう。どうやら、俺の固有スキルはもうバレているようだな」

「ええ、もうあなたの思い通りにはさせないわよ」

今までは捉えられなかったが、トリックが分かれば攻略するのもそう難しい話ではない。

サラザは確実に勝てるという確証を持っているのだろう。小さくガッツポーズを作るように手の平をグツと握り締めた。

「俺に一撃当てられたことは褒めてやる……」

不気味な笑みを浮かべると、手に持っていた剣が消えて薙刀のような得物へと変わった。

サラザがその武器に目を取られていると、武器の刀身が強い光を放つ。その直後、光を直視したサラザの目の前が真っ白になる。

完全に視界を奪われたサラザの耳に、男の声が飛び込んできた。

「どうだ？　これがこの『イザナギの剣』だ。武器スキルは七つ。その中の一つが敵の視界を潰すこの技だ」

サラザは声を頼りにバーベルを振り抜いたが、その攻撃は当たらず虚しく空を切る。

そのすぐ後に、激痛がサラザの負傷していない方の足を襲う。

「ぐああああああっ!!」

崩れるその場に両膝を突いたサラザを、なおも男の武器が執拗に斬りつけていく。

全身を襲う物凄い激痛に、屈強なサラザの苦痛に歪む声が辺りに響き渡る。

同じ部屋にいる女性達は身を寄せ合って、部屋中にこだまするその声を怯えながら聞いている。

「くうう。こんなところで、サラザがやられるのを黙って見てるしかないとは……」

「わたりしとした事が……」

ガーベラと孔雀マツザカは地面に伏せながら手も足も出せず、傷付けられるサラザの姿を唇を噛み締めながら見守っていることしかできなない。

男はまるで小動物をいたぶる肉食獣の様に、不気味な微笑みを浮かべながら、武器を振り下ろしている。

サラザの苦痛による叫び声が部屋中に轟いていたその時、エリエの声がサラザの耳に飛び込んできた。

「サラザ！ 今助けに——」

「——来たらダメよおー。エリー!!」

レイピアを手にして、自分に向かって扉の前から走り出しそうになるエリエにサラザが叫ぶ。

エリエがその声に躊躇していると、男がエリエの方に武器の矛先を向ける。

「エリー目を瞑って!!」

「——ッ!?!」

サラザは咄嗟に跳び上がると、エリエと男の間に割って入って光を遮る。

この武器スキルの致命的な欠点に、サラザは気が付いていた。

そう。男の武器スキルは目視しなければ発動しない。彼の武器スキルは目視さえしなければ、視力を奪われることはありえない。それは武器の刀身が光るところから容易に想像できた。

既に武器スキルを受けているサラザは、もう一度矛先からの光りを受けても効果は発動しない。

男は渋い顔をしながら地面に転がっているサラザを睨みつけた。

「この……目を潰したのにこれ程の事を……」

「……あんたの考えている事なんて、手に取るように分かるわよ」

「くっ！ この死に損ないがッ!!」

男は不敵な笑みを浮かべるサラザの顔面を蹴り飛ばす。

その光景を目にしたエリエが鬼の様な形相で叫んだ。

「サラザに何するのよ!!」

エリエの体が青く輝き、凄まじい速さで男との距離を一気に詰め

る。

そのスピードに男は一瞬驚いた表情を見せたが、すぐに平静さを取り戻した。

「このおおおおおッ!!」

エリエが男に向かって飛び込むと、レイピアを突き出す。だがその直後、エリエの体はそこにいたはずの男の体をすり抜けた。

先程までのやり取りをエリエは見えていなかったのだろう。実体のない分身体の方へとままと攻撃させられた訳だ――。

首を傾げながら辺りを見渡していると、次の瞬間に辺りを激しい光が包む。

「なっ！ なにこれッ!」

エリエは咄嗟に目を抑えたが、次の瞬間には完全に視界が真っ白になり、目の機能を完全に奪われてしまう。

視覚を奪われたエリエは、動揺した様子で頭を動かしながら数歩後退った。

(……見えない!? 目が、目が使えない……)

驚きながら地面に両手を付いているエリエに、男がゆっくりと向かってくる。

男はエリエの前で止まると、不気味な笑みを浮かべた。

「ほう。これはなかなかの美少女だな。俺のコレクションに加えたいくらいだ……」

「……なっ、なに言ってるのよー!」

その声を頼りに持っていたレイピアを突き出す。しかし、やはり男の固有スキルによってその体にかすりもしない。

ゆっくりとその場に立ち上がると、エリエは辺りを見渡した。だが、エリエの目に映るのは真っ白な世界で男はおるか、自分がどこに立っているのかさえも分からない状態だ。

エリエは視覚に頼るのを諦め、聴覚に頼る為に耳を澄ました。いざ、視覚を見限ってみると不思議なくらい自分の心臓の音や、辺りに吹く風などが強く感じられる。

もちろん。エリエの気のせいではなく、それはフリーダムのシステ

ムが影響していた。

人は本来、五感の中で主に視覚から9割近くの情報を得ている。それに続いて聴覚、触覚、嗅覚、味覚と続いていく。

だが、フリーダムではその感覚の割合が100を振り分けていて、それが自動で切り替わる仕組みになっている。簡単に説明すると、現実では食事をする時に鼻を摘むと、味が感じなくなるがこの世界では違う。

鼻を摘むという行動は嗅覚を一つ潰すことになり、味覚に振り分けられる分が増えて、よりその味を感じやすくなるのだ。

もちろん。フリーダム内でも多く振り分けられるのは視覚だがいざそれを切ってみれば、その感覚の割合が他の感覚に移行され他の感覚が増加する。

今のエリエは視覚を完全にシャットアウトしたことで、多くの感覚が次に敏感な聴覚に移っているのだ。

（——感じる。まるで自分の目で見える以上に、敵の息遣いや歩く音なんか、鮮明に入ってくる……）

エリエはその感覚を頼りに、握り締めていたレイピアを突き出した。

その直後、男の声が響いたが、周りからはエリエのレイピアが何もない場所に突き刺さっているようにしか見えない。だが、すぐに空間が歪み。レイピアの刺さった右肩を抑えている男の姿が現れる。

敵城の主3

負傷した右肩を押さえたまま男は、咄嗟に後ろに跳んだが痛みで足元が覚束なくなっているのか、よろけて少し体制を崩す。

男にとって視覚を奪ったにも関わらず、まさか反撃してくるとは夢にも思っていなかったのだろう……肩を押さえる男は驚きを隠せないと言った表情で目を丸くさせている。

それとは対象的に、エリエは瞼を閉じたまま落ち着いた様子でその場に立ち尽くしている。

一度攻撃を当てられた余裕からか、その表情からは目が見えないことへの躊躇や恐怖のようなものはすっかりなくなっていた。

「この野郎……観賞用の嗜好品の分際で……お前は絶対に捕まえて、俺のこのショークースの中に首輪を付けて繋いでやる!!」

「……ふん。やれるもんならやってみなさいよ！ あんたみたいな奴に星は渡せない。必ず星を取り戻すんだから!!」

そう息巻くエリエの言葉に、男は不思議そうに小首を傾げ。

「……星？ 誰だそれは、知らないな」

男が眉をひそめながら呟くと、ニヤリと不敵な笑みを浮かべる。エリエはその返答に怒り心頭と言った感じで震える拳を握り締めている。

星を誘拐した首謀者であるはずの敵の組織のリーダーの男が、その全貌を知らないはずがない。

つとなれば、彼が嘘をついているとしか考えられない。それもエリエの目の前で誘拐し、こちらが救出の為に来たのにも関わらず、その意志を無視するような彼の態度が気に入らなかった。

なおも小馬鹿にするような彼の態度に、エリエが耐えられずに声を荒らげた。

「知らない!? 知らないとは言わせない！ 私の目の前から連れて行つたくせに、絶対に星の居場所を吐かせてやる!!」

エリエは男が立っている方向とは逆の方に突進すると、持っていたレイピアを突き出す。

次の瞬間。何もない場所から出現した男は、エリエが突き出したレイピアの攻撃を『イザナギの剣』で防いだ。だが、男の表情には余裕は全くなく、額から一筋の汗が流れる。

それもそうだろう。今の攻撃で先程の攻撃がまぐれではないことが証明されたのだ。

すでに男の固有スキルがエリエ相手では何の意味もなさないことが証明された。こんなことならば、エリエに武器スキルを使用しなければ良かったと、男は今更ながらに後悔していた。

険しい表情で男がエリエの顔を見る。だが、やはり目を瞑ったまま攻撃を仕掛けているのを確認するとレイピアを押し返しながら化け物でも見るような怯えた瞳で大声で叫ぶ。

「どうして見えてないはずなのに攻撃できる!? 化け物かお前!!」

「……化け物? ううん違う。私はただ感覚で打ち込んでいるだけ……化け物っていうなら。それはあんたの方でしょ!」

「——なっ!?!」

目が見えないながらも、エリエは的確に男を攻撃しながら、うろたえる彼に言葉を続けた。

「私の星を返して! どうして誘拐なんて真似を平然とできるのよ!

この鬼畜!!」

「……誘拐? ああ、星って何だと思えば、あの医者だかなんだかの娘の事か……」

突然返ってきた彼の言葉に、エリエの攻撃が一瞬だが止まる。今まで全くと言っていいほど迷いのなかったエリエの太刀筋に、明らかに動揺が垣間見える。

だが、それも無理はない。彼の言っていたことが事実かは分からないが、星の家庭の事情はエリエも全くと言っていいほどに把握できていない。

無理やり聞き出すことでもないし。聞き出したところで何かできるわけではないわけだから——ただ、星の性格を考えると相当厳格な親なのだろうとは思っていた。しかし、それが医者娘とは……。

動きが止まったその隙に、男はエリエから一気に距離を取った。

この時、エリエが止まった原因が誘拐してきた娘であることに気が付き、不敵な笑みを浮かべた男はエリエに向かって言い放つ。

「あの娘は地下だ。今頃はどうなっているかな。バラバラにされてるか、あるいは——」

「——ッ!?! 星に何をした! 変なことをしたら許さないから!!」

ムキになって叫ぶエリエに、男はニヤリと不気味に笑う。

「フツ。許さない? 笑わせる! 目が使えないお前に、何ができるって言うんだ?」

「できるわよ! とりあえず。あんたを叩きのめして、星が地下のどこに居るのかを絶対に吐かせてやる!!」

一度は攻めるのを止めたエリエが力いっぱい地面を蹴ると、レイピアを構えてエリエは凄惨な剣幕で突進した。

エリエの鋭い突きが男を連続で襲う中、男は殆ど一方的に攻撃を受けるだけで反撃しない。

いや。正確には反撃できないと言う方が正しいだろう。

それは完全に視界を奪われているはずのエリエの攻撃が、正確さを増していたからに他ならない。

エリエの放つレイピアが、確実に男の体を捉え始めていた。

視力を失っているとは思えない精密な突きに、男は攻撃を武器で何と防いでいる。

おそらく。固有スキルと武器スキルに頼った戦闘を得意としていた男は、相手に攻撃されることに慣れていないのだろう。

また、強力な武器スキルを持った『イザナギの剣』もある為、まともな戦闘はエリエとのこの戦いが初なのかもしれない。

彼女のたぐいまれなる戦闘センスに男も動揺を隠しきれない。もしエリエが視界が良好な状態ならば、すでに決着がついているかもしれないが、この視力を封じされた絶望的な状態で戦えるのは、それだけ彼女の中で星の存在が大きいということだろう。

男の表情からは明らかに焦りが見え始めてきていた。

それもそうだろう。この場所ではHPの回復ができない。また、男の『イザナギの剣』は武器スキルが7つあるのだが、一つ一つの破壊

力が絶大な為、敵に異常状態をかけてる状態では他のスキルは使用できない。つまり、今は武器スキル『創世の輝き』しか使えないということだ。

しかも、他の武器スキルを使用する為には、今掛けているスキルを解除する必要がある。押されている今の状況でそれはあまりにリスクが高過ぎる。

彼が他の武器スキルに変更しない理由は、今の状況ならエリエはまだ感覚だけで攻撃している状態で体に当たっても致命傷とまではいかないと判断しているからだろう。

気配で戦っているだけなのだから、彼の体の部位は見えていない。つまりは、弱点と呼べる致命的な場所は意図的には狙えない。

その証拠に、攻撃も時折掠れる程度でHPバーはたいして減ってはいない。だが、エリエは男の挑発に乗り、敵を全力で叩きのめしようと結構な気迫で押し続けている。

このままではエリエの方が、最小限の動きで回避している男よりも体力が消耗するのが目に見えていた。持久戦に持ち込まれば、スタミナという点で、間違いなくエリエに勝ち目はないだろう……。

* * *

エリエが救出の為に懸命に戦っている最中……。

地下室の研究室。モニター越しに覆面の男に投与された薬の影響で荒い息を繰り返しながら、星はエリエの戦いを見つめていた。

もはや意識だけではなく記憶も曖昧になりつつある星は、覆面の男の居ない内に何とか逃げ出そうともがいていた。

投与された薬は記憶を消去するものだと、覆面の男は言っていた気がする。ならば、このままでは今までの楽しい仲間達との思い出まで全て消されてしまう。

逸早くこの拘束を解いて、解除用の薬を投与して貰わなければいけない。幸い星の持っていたエクスカリバーは、モニターの横にある配線の大量に付いた分析用のケースの中に入っている。

星のことを子供だと思って甘く見ているであろう覆面の男になら、

拘束を解いて剣をこの手に取り戻せば、まだ形勢を逆転する可能性はある。

だが、拘束を解こうともがけばもがくほど、息苦しさから息が荒くなり、体から力が抜けていくのを感じた。

「はあ……はあ……だめだ。もう、どうしようもないのかな……？」

瞳を涙で潤ませながら、天井を見上げ弱気になっている星の横に突如として女性が現れた。

ウエーブのかかった肩までの茶髪に茶色い瞳の彼女は、歳はエミルより上だろうか、とてもスタイルが良く。まるでモデルの様な体型で、胸元の開いた全体的に少し露出度の高い革鎧を着ていた。

「ふふふつ、大成功ね。さすが博士♪」

星の目の前に現れた女性は微笑みを浮かべると、首に付けたネックレスのルビーの様な赤い宝石を白くて細い指で撫でた。

少女は星の元へと歩み寄ると、につこりと微笑み星の汗が滲むおでこを撫でる。

敵か味方かも分からない謎の女性に、拘束されている星はただただ怯えた瞳を向けるしかできない。

「あら、怖がらなくていいのよ？ 私はあなたを助けに来たんだから、それにあなたは知らないかもだけど、私があなたを助けるのはこれで2回目なのよ？」

「――助けに……？ ……2回目？」

意識が朦朧とする中、その言葉の意味が星には全くと言っていいほど理解できてはいなかった。しかし、そんな星を余所に彼女は星の首筋に手を伸ばす。

急に伸びてきた腕に怯えながら、びくつと震える星の耳元で少女がささやく。

「……まあ、論より証拠よね」

星に触れている少女の手が光った瞬間、星の体は台の上から彼女の胸の前に移動していた。

次の瞬間。星の顔には少女の胸が押し付けられていた。それもおそらく彼女が故意に押し付けている。その柔らかく暖かい感覚に、星

は頬を赤らめると困惑した表情で女性の顔を見上げた。

彼女は微笑むと、簡単に自己紹介を始めた。

「私はライラ。ある組織から、あなたを救出するように言われたの……って言っても、今のあなたでは理解できないかもね。とりあえず、その症状を抑えましょうか？」

「はあ……はあ……は、はい……」

突如現れた少女に星はわらをも継る思いで小さく頷いた。

彼女を本当に信用できるかはまだ分からないが、少なくとも台から解き放ってくれたことは事実だったし、何よりも今の星はこの苦しみから少しでも解放されたいという気持ちが強かった。

ライラはコマンドを操作すると、手に小型の針の様な物の付いたガラスの器具を取り出し、その針を星の首筋に向けた。

「ごめんなさいね。ちよつと、チクつとするわよ？」

静かに告げるライラに、星は無言のまま頷くと意を決して強く瞼を閉じる。

その直後、鈍い痛みとともに首筋から何かが体に入ってくるのを感じた。すると、しばらくして、ライラの言葉とは真逆の感覚が星を襲う。

彼女の薬を投与された瞬間、今度は体がまるで火を付けられたように熱くなり、その体が金色に輝き出した。その症状はカレンとの戦闘やレイニールが出た時に似ている。

ライラはその体を支配していく熱に、もがく様に手足を激しく動かす星を両手で抱え込むようにして押さえ込む。

「——ううっ！ やあっ！ いやあああああああああッ!!」

「……だめ。苦しいだろうけど今は堪えて……すぐに、体に馴染んでくるはずだから……」

悲鳴を上げ苦痛に悶える星を、細い腕で懸命に押さえ込みながら耳元でささやく。

金色に輝きながら燃えるように熱く火照る体に、徐々に遠のく意識の中で、星は確実に何者かが自分の頭を、心を、次第に支配していく感じがしていた。その最中、苦痛にもがきながらもモニター越しに戦

うエリエの姿が星の瞳に映り完全に意識を失う。

再び瞼を開いた星は虚ろな瞳のままライラからゆっくりと離れ、ライラがモニター横のケースを割って強引に取り出した剣を手に握り前に構える。

直後。魂が抜けた様な虚ろな瞳の星の口が勝手に動き、言葉を紡ぎ出す。

「……ソードマスターオーバーレイ発動」

前に突き出したその剣は光り輝き、それと相まって星の体から放つ金色の光が更に強まりつて次第に城全体を覆っていく。

* * *

敵城の主4

全く攻撃の手を休めることなく、間髪入れずに男に連続攻撃を仕掛けていくエリエ。

だが、次第に彼女からも疲れの色が見え始めていた。

繰り返される剣撃の精度と速度が鈍くなってきているのは間違いない。男と対峙しているエリエは息を切らせながらも、既に気力だけで攻撃を続けている。

徐々に攻撃が単調になっていくエリエに、男はニヤリと不敵な笑みを浮かべた。その直後、隙を見て攻撃するエリエの足を払うと、エリエはバランスを崩し地面に倒れる。

「くそっ！ この卑怯も……」

罵ろうと口を開こうとしたエリエの首筋にチクリとした何かが触れ。それ以上、エリエは動くことも喋ることもできない。

当たり前だ——その時。バランスを崩して倒れたエリエの首筋には、男の手に握られている武器の刃先が突き付けられていたのだから。

悠々とエリエを見下ろし、男が勝ち誇った様な笑みを浮かべ「終わりだ」と呟く。すると、エリエの視界が突如として戻った。

光を取り戻したエリエの目を見て、男が困惑した表情を見せる。すると、今度は頭の中に直接声が飛び込んでくる。

「——これ以上の戦闘は止めて下さい。これ以上戦闘を継続する意思がある場合は、ゲームマスターの権限で貴方を削除します」

「……えっ？ この声って……星？」

「ふっ！ ふざけるな！ 何がゲームマスターだ！ 今更運営が出しゃばるんじゃないよッ!!」

男は声を見殺して、エリエに止めを刺そうと首筋に突き付けていた刃を自分の体へと引き戻して勢いを付けてエリエを攻撃しようとした。

つとその刹那、今度は部屋全体が目を開けないほどの物凄い光に包まれる。

再び男が武器スキルを使用したと思ったエリエは、反射的に咄嗟に
瞼を閉じた。彼女の行動は当然だろう。また視力を奪われては堪っ
たものではない。

その直後、男が叫び声を上げる。

「なに!? どうなってやがる!! どうして俺の全ステータスが1に
なってるんだよ!!」

空中で指を動かしながら目を丸くさせながら、コマンドを開き慌て
て確認を始めた。

そこには本来ならあるはずの数値が全て『1』と表示されている。

これはゲームシステム上ありえないことだ。PVPの「OVERK
ILL」時でもHPという一つの数値が『1』になるだけなのだ――
それがステータスから全てということは、メンテ直後の深刻なバグか
なにかでしかありえない現象だ。

だがそれも、本当に星がゲームマスターとして覚醒したのならば、
問題のあるプレイヤーを無力化する能力があっても何ら不思議では
ないが……。

すると、星の声が再び聞こえてきた。

「――これは最終の警告です。次に変な動きをした方は、このゲーム
内から追放します。無論、現実世界に帰れるわけではないのでそのつ
もりでお願いします」

その声にも男は観念したのか、呆然としながら、まるで魂が抜けたか
の様に天井を見上げその場に立ち尽くしている。

どこからともなく聞こえる星の声を聞いて、エリエは部屋中を見渡
して探す。

これだけ鮮明に聞こえるということは、普通に考えれば当の本人が
近くにいなければありえないことだ。

「――星・星なんでしょ!? どこに居るのよ! 私、あなたを助け
に来たのよ!」

徐ろに立ち上がると、部屋中を走り回りながら大声で叫び、必ずい
るはずの星のその姿を必死で探した。その直後、突如としてエリエの

目の前に星と茶色いマントを着た人物が姿を現す。

エリエは驚きながらもすぐに星の元に駆け寄ると、ライラが星とエリエの間に入ってそれを妨げた。

「ふふっ、久しぶりね、エリエ。エミルは元気？」

「えっ？ ライ姉!？」

頭に掛かったマントを外すと、ライラは驚くエリエにつこりと微笑みを浮かべた。

エリエはライラを退けて星に駆け寄ろうとしたのだが、彼女はそれを許してはくれなかった。

腕を掴んで離さないライラに、エリエが声を上げる。

「どうしてライ姉が止めるの!?! ライ姉は私達の味方じゃないの!?!」

「はあく。敵とか味方とかじゃなくてね。今は、この子に近付いたらダメなの」

「どうして!?! 何がダメなのよ!?!」

エリエは振り解こうとしても自分の腕を掴んで放さないライラを睨んで、更に声を荒らげて叫んだ。

それを見てライラは、小さくため息を漏らして星を指差す。

「あの子は今凄く頑張ってるの。本当にあの子の事を思ってるなら、見守る事も愛情よ?」

「……見守る事が愛情?」

エリエは落ち着きを取り戻し、首を傾げながらライラの顔を見上げた。

無言のまま優しく微笑み返す彼女に、不安そうではあるもののエリエも小さく頷いた。それは、この2人がそれだけ信頼し合っているという証でもあった。

星は持っていた黄金の剣を男に突き付ける。

「あなたはどうして戦意を喪失しないんですか?」

「……どうしてお前には戦意を喪失していないと思う?」

「分かります。だって、私には見えてるから……」

そう。その言葉通り星のしている視界の中には、枠いっぱい名前が表示されていて、その枠の中で青い文字で名前が表示されている人

間と、赤く名前が表示されている人間が存在していた。

もちろん。赤い方で表示されている方が、戦意がある人間ということだ――。

星の持っている『エクスカリバー』はレイニールと居る時にたまたま発見した物で、それ自体は謎の多い武器だった。

ステータスが『?』になっていたこともそうだが、使用者が武器の扱いどころか、戦闘もまともにできない星であったことから、その武器の多くの内容が分からなかったことも理由だろう。

だが、星の固有スキル『ソードマスター』は単純に剣の真の力を引き出すだけのスキル。

だからこそ、このスキルは良い意味でも悪い意味でも、武器に固執するスキルであると言える。

元々、フリーダムにおいての剣は攻撃範囲が広い武器とは言えない。

遠距離武器は弓とオリジナルで作成した物がある。が、オリジナルの武器を持っている者は少ないだろう。

もちろん。それには理由がある生産スキルにはレベル制ではなく、誰でも同じ物を作ることができる。にも拘わらず、オリジナルの武器を持っている者が少ないのは扱いが難しいのと、武器によっては攻撃力の数値が著しく低くなってしまうからなのだ。

例えば銃を模した物をこの世界で作成したとする。すると、その攻撃力は遠距離武器と言うことで、元々この世界にある弓が十として銃は二程度の攻撃力にしかない。ならば、段数を上げれば解消できそうなものだが、事はそう単純でもない……。

武器に込められる球数が増えれば、一発の攻撃力が更に下がり、段数分の重量で移動速度までもが極端に落ちてしまう。

つまりは射程距離と撃ち出す速度によって、本来は強力であるはずの銃が最弱武器へと変化してしまうと言うことだ。

また、武器製作に使う素材は高価な物が多く。わざわざ高価な素材を無駄にして作ってからの攻撃力の分からない武器を作るという賭けに出る必要性がない。しかもトレジャーアイテムには数多くの

強力な武器の部類もある為、相当のこだわりがない限りは武器の製作を行う者などいないのだ。

星の所有しているエクスカリバーがトレジャーアイテム扱いか、オリジナル扱いかは分からないものの、一つ分かっていることは、星は初心者でましてや武器の扱いなんて知る由もないということだ――。

普段から戦闘では闇雲に剣を振り回して、剣に振り回されている彼女だ。だが、目の前でそんな星がまるで別人の様に、今は男に向かって剣を突き付けている。しかも、その姿は様になっており、とても剣をまともに触れなかった人間のものではなかった。

エリエ達からすれば摩訶不思議な光景だが、それは男からしてみれば宣戦布告以外のなものでもない。

男は口元に笑みを浮かべ、星に剣を突き付けた。

「ゲームマスターなんてどうでもいい。ただのガキが俺に剣を突き付けた――この事実を、お前は分かっているんだよな？」

「――今の状況が分かっているんですか？」

「くッ！ 分かるかッ!!」

男は星の剣よりも圧倒的に薙刀の様に長い剣を、虚ろな瞳の星に向かって振り上げた。

次の瞬間。振り下ろされたその剣の刃を星は軽々とかわすと、一瞬で剣を振り抜いて男の得物を弾き飛ばす。

弾き飛ばされた男の持っていた『イザナギの剣』が空中で回転し、地面に深々と突き刺さる。その光景を見て驚きながら、エリエが目を見開く。

「……ありえない。星にあんな事できるはず――」

「――違うわよ。あれが、あの子の固有スキルと相性がバッチリの伝説の聖剣『エクスカリバー』の能力なの……」

「……『エクスカリバー』って？」

唐突に出てきた『エクスカリバー』という言葉に首を傾げていると、そんなエリエの首にゆっくりと腕を回して、自分の方へと引き寄せたライラが彼女の耳元でささやくように告げる。

「ふふっ。亡くなったあの子のお父さんから、あの子へのプレゼント

♪

「……プレゼント？ 亡くなったって……？」

エリエはそのライラの言葉に驚く。

男がさっき言っていたように、星の父親は医者ではなかった……。だが、彼女が驚いているのはそこではない。何故なら星は、一言たりともそんなことは言っていなかったのだ。いや。あの引つ込み思案な性格から何か闇を抱えているのは、エリエも薄々感じ取っていたが、まさか父親が亡くなっているとは思わなかった。

この事件を起こしたであろう覆面の男も、星の父親がこの事件に絡んでいることを匂わせてはいたが、それも星の口から直接は聞いていない。それどころかその時は、星もいくらか取り乱している様子だったのをエリエは鮮明に覚えている。

今のエリエにはいくら昔からの友人であるライラの言葉でも、完全に信じることはできなかった。いや、星の口から直接聞くまでは誰の話も信じられないだろう……。

エリエは心にもやが掛かった状態のまま、男の鼻先に剣の先を突き付けている星の姿を見つめた。

再び別の剣を装備する男を見下ろしながら星は淡々と言い放つ。

「これ以上は止めて下さい。『エクスカリバー』で発動した『ソードマスターオーバーレイ』私のこのスキルはステータスを1にするだけではなく、その効果範囲の人のステータスの残りは私ステータスに変換されています。今、私の全ステータスはあなたのステータスとは比べ物になりません……」

「くっ……」

男は悔しそうに唇と噛むと、持っていた剣を放り投げた。

さすがに自分のステータスが変更されたことがあった後では、星の言葉がハツタリではないと感じたのだろう。

その星と男のやり取りを見ていたエリエは、星の性格の変化に戸惑っていた。

それもそのはずだ。本来、星は口下手で戦闘なんてできないはず。だが、今日の前にいる星はエリエや他のメンバーよりも機敏に動き、

スキルの説明までやっている。これは普段の星の性格を考えれば本来ありえないことなのだ。

「――星。どうしちゃったのよ……星!!」

エリエはぼそつと呟き、星の元に駆け寄った。

後ろから星の背中に抱きつくつと、声を上げて叫ぶ。

「やだ……今の星は怖いよ。お願いだから、いつもの星に戻ってよ!」
背中からがっしりと星の体を抱きしめているエリエ。

その直後、星の口から思いもよらない言葉が返ってきた。

「……あなたは誰ですか?」

予想だにしていなかった星の一言に、一瞬エリエの思考回路が止まる。

そして、確認するようにエリエが口を開いた。

「だ、だれって……私だよ。エリエだよ!」

「……ゲームマスターである私から離れないと、敵対行動と見なしますよ?」

前に回り星の両肩を掴みながらエリエが必死に呼びかけたのだが、星はまるで敵を見る様な冷たい瞳をエリエに向けている。

エリエは瞳を潤ませると星の前に回り込み、小さな両肩を掴んでもう一度問い掛けた。

「……星、嘘だよね? 本当に私の事を忘れたなんて……そんな事ないよね?」

「知りません。貴女は誰ですか?」

嘘であつて欲しいと願うように星の瞳を見つめるエリエに、星は首を傾げた。

返答を聞いたエリエはがっくりと肩を落とす。

「……嘘だ。嘘って言つてよ! 星!!」

エリエがそう強く叫んだ直後、星は不機嫌そうに右手に持っていた『エクスカリバー』を振り上げた。

「――ゲームマスターである私の言う事を聞かない者は削除します」
その言葉通り。腕を振り下ろそうとした直後、星の体を矢が掠めた。

エリエは驚きその矢が飛んできた方向に目を向ける。するとそこには、弓を持ったライラの姿があった。

その直後、星の体はゆっくりとエリエの体の方へと倒れた。

「……星!？」

エリエが星の体を受け止めると、星はすやすやと気持ち良さそうに寝息を立てていた。星の小さな体を抱きながら、困惑した表情でライラを見つめるエリエ。

ライラは弓を装備欄から外すと、今にも泣き出しそうになっているエリエに声を掛ける。

「エリエ、ごめんなさい。その子を助けた時には、もう間に合わなかったみたいで……」

「——間に合わなかったって……?」

ライラは涙を流しながら自分を見上げるエリエに申し訳無さそうに呟くと、アイテムの中から空になったガラス製の注射針付きの器具を取り出してそれをあからさまにエリエに見せた。

エリエは困惑した表情で、その器具を見つめる。

「これはその子に投与したもののよ。でも中身は私の今の雇い主が作成した薬で、効果はその子の固有スキルの最終調整用の薬だった……」

ライラの言葉の意味が理解できずに首を傾げるエリエ。

そんな彼女の手を取ってぎゅっと握ると、エリエは瞳を潤ませながら顔を真っ赤に染めている。

「エリエ。あなたとその子を私の雇い主の元に連れて行くわ」

「……うん」

エリエは小さく頷くと、3人はその場から一瞬で姿を消した。

敵城の主5

一瞬真っ白になったエリエの視界に飛び込んできたのは、さつき居たはずの部屋ではなく、どこかの機関の研究室の様な場所だった。部屋の壁には大きなモニターがあり、その下には操作盤や機材が数多く並んでいる。

至る場所に触ってはいけなれないと思われるコードや様々な配色の配線が繋がれた機械が設置されてもいた。

辺りを見渡したエリエが、横に居たライラに尋ねた。

「……ライ姉。ここは？」

「……………」

ライラはその質問に答えることなく、無言のまま部屋に付いている大きなモニターへと向かう。

慣れた手つきで操作盤を操ると、モニターに『X』という大きな文字が表示された。

「ミスター。予定通り彼女への投薬は完了し。能力の発動を確認。しかし、相手方に何か薬品を投与されたらしく、彼女の記憶が……」

淡々と状況を報告していたライラの表情が曇る。

それ以上言葉を続けられなくなったライラに向かって、画面から柔らかない声音の男性の声が聞こえてきた。

「そうか……いや、ご苦労だったね。後は私に任せなさい」

「はい」

その優しい声音で、悪い人間ではないということはエリエも直感的に感じ取っていた。

だが、悪い人間ではないからと言って初対面のしかも顔すら見せない人物に心を許せるはずもなく。

「——ライラ君。星ちゃんをカプセルに移動させてくれるかな？ 後はこちらで調べてみる」

その言葉の直後、地面が開きそこから緑色のカプセルがゆつくりと現れた。

カプセルの周りにも何やらたくさんのコードやモニターなどの機器がカプセルにまとわり付くようにして並んでいる。

ライラはエリエの元に戻ってくると、星をそのカプセルに入れるように促すのだが、エリエは警戒しているのか、星を強く抱きしめたままその場に座り込んで、一向に離れようとしなない。

困ったようにため息を漏らすライラに、再びモニターから声が発せられた。

「初めて見るものだ。警戒するのも無理はないよ。ライラ君、論より証拠だ。まずは君が入ってくれ」

「えっ？ ええ、分かりました」

ライラはカプセルの前に行く、反応したカプセルが音を立てて開く。

全く躊躇することなく。ライラはそのカプセルの中に入ると、カプセルの扉がゆっくりと閉まる。

そして横に備え付けられた小さなモニターがピピツと音を立てて起動する。すると、今度は大きなモニターの方にライラの体のデータが次々に表示されていく。

身長や体重などの3サイズは勿論。他にも英語と数字が多く表示されている。

それから少ししてカプセルが開き、中から何事もなかったように、星を抱きかかえたライラが出てきた。

「ほら、大丈夫よ。ただゲーム内の体のシステムを見るだけだから」

「うん。それなら」

エリエは微笑んでいるライラに、抱きかかえていた眠っている星を引き渡す。

システムの筋力補正がある為、その数値によって人の体くらいはある程度のレベルを超えれば、子供の星でも大人を抱きかかえることができるのだ。

人体といえどこの世界ではデータで構成された物に過ぎない。つまり、その重量の数値は公平を期する為に一定値で固定されている。

男女構わず筋力値が一緒なのと同じである。もちろん、レベル制の

ゲームである以上は、キャラクターのレベルが高い者が有利になるのは致し方ないのだが……。

エリエから星を借り受けると、先程のライラ同様に星の体を詳しく調べる。すると、モニターの中から男の驚愕する声が聞こえてきた。「なっ……外部からウィルスによって脳波を弄ったのか……全ての、主に記憶を司る部分の侵食が酷い。対抗プログラムで多少残っているが……こんなこと、やっていい事じゃない！ このままでは、この子はリアルに戻っても、記憶どころか、下手をすれば言語障害も起りかねない………早急に手を打たなければ！」

「——ッ!？」

(……記憶が消えているッ!?)

驚きを隠せず驚愕したエリエの表情は次第に青ざめていき、モニターからカプセルの中の星の方に視線を移す。

それもそうだろう。記憶障害だけではなく言語障害まで起きるかもしれないと言われれば、星のことを本当の妹の様に思っているエリエだ——驚くのも無理もない。

エリエは思い詰めたように両手で頭を抱えた。

「……私のせいだ……」

その後、崩れ落ちる様にエリエはゆっくりとその場にうずくまる。

「こんな……こんなことって………こんなものってない！」

思い切り地面を叩くと、両手を地面に突いたエリエの瞳から涙が止めどなく溢れ出す。

彼女が落胆するのも無理はない。自分の目の前で星を誘拐されてしまったエリエにとつて、無事に星を取り戻すことが全てだった。

しかし、結果的に自分のことを覚えていない星が元に戻ってきた。このままでは、本当の意味で星を取り戻したことにはならない。

自分達との日々の記憶を失って戻ってきたということは、既にそれは表面上は同一人物でも、すでに別人と言ってもいいものだからだ。

「……エリエ」

表情を曇らせながら、ライラは泣き続けるエリエを励ます為に伸ばそうとした手を引き戻し、その後、モニターの男に向かって叫ぶ。

「ミスター！　なんとかならないの!?　このゲームはミスターが開発したものなのに!!」

その声に少しの沈黙の後、モニターの男から意外な言葉が返ってきた。

「……方法はあにはある。だが、ゲームプログラムを通してからのシステム侵食なら何の問題もないが、外部からの接触によって始まった侵食を食い止めるのはリスクがある」

「リスク？」

「ああ、今彼女の体を侵しているウイルスを食らうウイルスを体に入れる。抑えてはいても、内部を侵食しているウイルスが消えたわけじゃない。それを完全に消しきれれば、このプレイヤーにあるシステムバックアップを利用して復旧する事もできなくはないだろう。だが、そうすると途轍もない高熱が彼女を襲う事になる。当然だ、内部でウイルス同士の争いが起こるのだから……大人でも精神が持たないほどの苦痛を、一時的とはいえ与える事になってしまう。この子に耐えられるかどうか……」

モニターの声はそこまで告げると沈黙した。

だが、それ以上はライラもエリエも聞き返せなかった。何故なら、大体の予想がついていたからだ――。

ブレスレット型のハードから脳波に光信号と電気信号を送ることで、一時的な催眠状態を作り出し、仮想世界を体験することができるシステム。それがVRMMORPG〔FREEDOM〕の正体である。

それは星の父親の脳科学者としての技術を使って開発したのは、もはや言うまでもない。そしてモニター越しの男はおそらく、ゲーム開発元のエンジニアだ。

それがゲーム内のウイルスで現実世界に戻ってから『記憶障害が残る』と言っているのだ。

つということは『精神が持たない』それはつまり。人としての生活ができなくなるかもしれないということの意味していた。

本来ならば精神的に強いダメージを与えかねない危険な状況では、気絶や強制ログアウトと言った防衛プログラムによって、人体に影響

がある危険行動は二重の安全装置を使用して限りなくゼロへと近づけている。しかし、今はそのログアウトシステムを改変されてしまつて、強制退出できない。

つまり、気絶意外に防衛プログラムがないのだ——しかも、気絶は精神を守る為の処置であり。キャラクターを守る為に次の強制ログアウトという工程を経て初めて意味のあるものへとなる。

それは気絶して一時的に精神を保護しても、システム上では次の強制ログアウトという工程ができない為、本来は現実世界で起こるはずの第三の工程である覚醒という動作に移行してしまう。

気絶——強制ログアウト——リアルでの覚醒が。気絶——ログアウト不可——ゲーム世界での強制覚醒へと変わる。

つまり、気絶の後になお精神、肉体に攻撃を受ける場合は強制覚醒という工程のバグが発生してしまうのだ。

今回の処置はこの気絶から強制覚醒を永遠と繰り返すという、最悪の場合は精神を破壊しかねない行為であり。廃人にしかねないとても危険なものなのだ……。

正直、過去の記憶がなくても人は生きていられる。ただ、これまでの思い出が消えるだけで、これからの思い出が消えることはない。

しかし、精神を失ってしまったら。人はもう普通に生きていくことはできないだろう。そんな星の人生を左右する物事を、エリエ一人に決めろと言うのはとても酷な話だ——。

エリエは星をちらつと横目で見ると、モニターの男に尋ねた。

「その決断は今じゃないとダメなの？　もう少し後でもいいなら、皆と話して決めたいんだけど……」

「いや、問題ないよ。もうウイルスによる侵食は抑えられている。この子の事は君達に任せる」

エリエはその言葉に、覚悟に満ちた面持ちで頷く。

3人はもう一度、城の部屋に戻ると、負傷を負ったサラザ達を連れて部屋を出ようと歩き出すが。

エリエは思い出したように部屋に繋がれていた居た少女達のところについて首にはめられていた首輪を外してやると、少女達は嬉しそ

うに笑顔を浮かべると、何度も「ありがとう」と頭を下げてエリエ達にお礼を言った。

男は完全に心が折れているのか、手出しをすることはなく。あっさり少女達を解放する。その後、ライラの固有スキルによって遠くの荒野に移動する。

ライラの固有スキル『テレポト』によって、次々と王座のあった部屋から移動させられてくる。

逸早く星と来ていたエリエの元に、人間状態のレイニールとミレイニが送られてきた。

レイニールはエリエの腕の中で眠っている星の元に駆け寄ってくる。

「あるじ〜!!」

長い金髪のツインテールを揺らしながら、エリエから星を奪い取るようにして抱きつく。だが、眠っている為、肝心の星からの反応はない。

レイニールは地面に星の体をゆっくりと寝かせる。その直後、レイニールの体が輝き小さいドラゴンの姿に戻って、パタパタと翼を動かして星の顔付近に降り立つ。

「――主、目を覚ますのじゃ！ 早く起きるのじゃ！」
号泣しながら、瞳を閉じて眠っている星の顔をぺちぺちと叩いている。

エリエはそんなレイニールを止めると、何が起きたのか出来事の一部始終を話す。

このまま、もし星が目を覚ましてしまったら、記憶を失った星が防衛本能のまま、自分を含めた周りの者達を虐殺してしまうかもしれない。

そんなことを記憶が戻った彼女が喜ぶわけがない『星が記憶を失った』という話を聞いたレイニールは取り乱す様に「そんなの嘘じゃー！」と大声で叫ぶと、どこかに飛んで行ってしまおう。

エリエはそれを止めることもできずに、その後ろ姿を見送るしかなかった。

飛び出したレイニールをエリエに止められるはずがない。襲撃を受けるあの日、あの場所で一緒に楽しい時間を共有し、それがいつまでも続くと思つて疑わなかった。

それがまさかレイニールとベテランプレイヤーのエリエが居たにも関わらず。攫われ、戻つてきて自分の記憶を失つてしまつているのだ——現実を受け入れられなくても無理はない。

しかも、星によつて生み出されたレイニールにとって、星は特別な存在なのはエリエも重々承知している。

城への侵入の際も上空からダメージを受けることを承知で、城壁を突き破り突入したのだ——おそらく。誰よりも今のレイニールの気持ちを理解できるのはエリエだったのだろう。

ミレイニは急な展開に不安そうな表情で、辺りをきよろきよろと見ている。

「……あたし。これからどうなるし……」

肩を落としながらそう呟くミレイニ。

確かにミレイニは元々敵側の人間だ。星を無事に救出できれば違つただろうが、星がこんな状況で戻つて来た以上、見せしめとして非難が集中してもおかしくはない。

正直言つて、半強制的に連れて来られたミレイニは、今まで縛られたり頬を引つ張られたりとあまりいい扱いを受けていないのだから、このことで彼女が警戒するのは無理もないと言えるだろう。

そこにエリエが優しく声を掛ける。

「どうしたの？ ミレイニ」

「えっ？ あ、うん。その……あたしどうなのかなって……」

落ち込んだ様に俯くミレイニの顔を、しゃがみ込んでエリエが見上げニヤリと笑う。

「……ん？ どうしてほしいの？」

「……えっ!! どうしてほしいってどうしてほしいって……なんだし？」

エリエのその切り返しに、不信感いっぱい顔でエリエを見た。それもそうだろう。すでにエリエは手をわきわきさせながら笑み

を浮かべている。

ミレイニは小刻みに震え怯えた様な瞳を向けた。

「なっ、なにするつもりだし……」

「ふふふふっ、なにをするんだろうねえ〜」

「ちよっ！　なんで……急に抱きつかないでほしいし!!」

頬を引つ張られると確信していたミレイニが、抱きしめられたまま暴れている手足をバタつかせながらミレイニは叫ぶ。

そんなミレイニを抱きしめながら、涙を流していたエリエ。

「……ごめん。ちよっとだけこのままでいさせて、ミレイニ……」

「——あっ……う、うん。べつに少しならいいし……」

すすり泣くエリエに身を任せながら、ミレイニは瞼を閉じた。

小刻みに震えているエリエの体に、ミレイニは声を掛けることもできないうまま、抱きつかれ続けるしかない。

2人が抱き合いながらしんみりとした雰囲気になると、突然ライラが戻ってきた。それと一緒に戻って来たサラザ、ガーベラ、孔雀マツザカ、カルビが現れた。

ライラはニヤニヤしながら「あら〜」と頬を染めて口を押さええている。

それに気付いたミレイニの顔が一瞬で真っ赤に染まり、慌ててエリエの体を引き離しにかかる。

しかし、エリエは一向に離れようとしなない。

「2人でお楽しみだったのね。ふふふっ……私も混ぜてえ〜♪」

楽しそうに手をわきわきさせながら、ライラがミレイニの方にゆっくりと近付いて来る。

その企みを浮かべた顔でにやにやしながら手を伸ばして近づいて来るライラに、ミレイニの表情は引き攣っていく。

「……なっ、なんだし。その手はなんだし!!」

「ふふふっ、怖がらなくても大丈夫。始めてでも優しくしてあげるから……」

「べ、別に優しくとかいいから。近づかないでほしいし!」

「優しくなくて、いいなら激しくいくわよ〜」

「ひいひいっ！」

ライラはエリエに抱きつかれ、身動きを取れないミレイニの後ろから手を回し、蛇の様に腕を忍び込ませるとその憤まじやかな胸を鷲掴みにした。

小さく悲鳴を上げたミレイニが両手をバタバタと振り回す。

「うわ。今は小ぶりだけど。これはなかなか……」

「——きやつ!! やめ……やめてほしいし」

突然のセクハラ行為に、ミレイニが首を左右に振って拒絶する。

「うふふつ、口では嫌がつてても……体は正直よねえ」

「ちよっ！ しょう……じき……じゃ、ないしっ！」

いやらしい手付きで胸を揉みしだくライラがニヤつきながら、嫌がるミレイニの反応を楽しんでいる様にしが見えない。

それからしばらくライラに揉みくちやにされ、ミレイニは荒い息を繰り返しながらライラを睨みつけた。

彼女の暴挙に耐え兼ねたミレイニが叫び声を上げた。

「どうしてなの！ どうして初対面の人にあたしの繊細な胸を揉まれなきゃならないんだし！」

「ふふつ、なあくに？ もつと揉んでほしいの？ それに別に大きくなるんだから良いと思うけどなあ」

全く悪びれる様子もないライラに、頭から湯気を上げそうな勢いでミレイニが激昂する。

「いいわけないし！ 大体あたしより年上なのに、常識がなってないし！ こんな事したらダメなんだし！」

「……ふくん。なら、もつと大人っぽいことならして良いってことかしらっ。」

瞳を輝かせながら涎を垂らして、手をわきわきさせるライラにミレイニは、身の危険を感じて強引にエリエを引き剥がすと、慌てて距離を取ってまるで猫の様に「フシャー」とライラを威嚇する。その直後、目の前にいたはずのライラがスッと消えた。

彼女の姿が見えなくなり、ホツとしたように胸を撫で下ろすミレイニ。

すると、今度のミレイニの耳元でライラがそつとささやく。

「——お姉さんが、大人の世界を見せてあげましょうか？」

「——きゃあああああッ!!」

再び胸を鷲掴みにされ、ミレイニの悲鳴が何もない荒野の夜空に響いた。

ダークブレット日本支部崩壊

エリ工達が去ってからしばらくして、ダークブレットの幹部の男の居る部屋にある人物が現れた。

城の部屋に残された男の前に現れたのは、白銀の鎧に白いマントをなびかせて、右手に『ダーインスレイヴ』を手にしたディーノだった。

呆然とした様子で椅子に腰掛けている男の瞳が、突如現れた彼を捉える。

入り口にいるディーノは口元に笑みを浮かべ、ゆっくりと歩いてきた。

「なにかあったようだね。俺のステータスが全部1になったんだけど……」

「……知るか。それより、どうしてお前がここに……」

静かな闘志を燃やして、睨みながらディーノを見据える男。

男のその質問に、ディーノが不敵な笑みを浮かべる。

手にしている剣先を突き付けて男に言い放つ。

「とりあえず。その武器と、今までプレイヤーから奪った武器を返してもらおうかな」

「フンッ！ 誰がお前に渡すか……」

「もう君の仲間は、殆どが俺の仲間には捕らわれている。強がっても無駄だよ」

そう告げるディーノを男は更に鋭く睨みつけた。

静まり返った部屋で、互いに睨み合った2人の間に緊張が走る。その直後、男は隣に立て掛けていた『イザナギの剣』を手にゆっくりと立ち上がった。

互いに得物を構えた次の瞬間、同時に地面を蹴って走り出す。

肉薄し鋭い眼光を飛ばす2人が、ほぼ同時に振り抜いた得物が激しくぶつかり合い、互いの刃が火花を散らす。

「お前は『イザナギの剣』の能力を知っているはずだ。それでも俺とやろうって言うのか？」

彼の持っていた『イザナギの剣』の刃が赤く輝き、含みを持たせた

ように男が告げた。

その言葉にデイーノは口元に不敵な笑みを浮かべ言い返す。

「ああ、その刃で切られれば本来なら残るHPを『0』にできる『天の裁き』だろ？ その能力と対するために、この『ダーインスレイヴ』を手に入れたんだからね」

「ほう。なら、その武器も俺のHPを『0』にできるのか？」

「フツ……それはどうかな！」

デイーノは剣を振り抜くとガンツ！と音を立てて互いの武器が離れ、後ろに跳んで距離を取った。

激しい睨み合いが続くものの、互いに決して相手の得物の届く距離に踏み込もうとはしない。

それはそうだろう。星の固有スキルによって、残りのHPは互いに『1』だ——どちらかの刃が触れた時点で、この戦いの勝敗が決するというシビアな戦いになっているのだ。

ダークブレットのリーダーの方が得物が長い分一見有利に思えるが、事はそれほど単純でもない。

確かにHP残量がMAXの状況ならば、得物が長い方が圧倒的に有利だ。これが格闘ゲームなどの部類ならば、動ける範囲も決まっていれば相手も自分も武器の変更はないのだが。

だが、このゲームは戦闘中に武器の変更も可能。ここまで言えば分かるかもしれないが、接近時に手に持った武器を相手に向かって投げる。なんていう攻撃方法もあるのだ——普通の戦闘なら遠距離武器でない物でそんな行為をすれば、最低ダメージ値の『1』しか通らない仕様の為、通用しないが『1』を削り合うこの戦闘の中ではとてつもない脅威である。

互いに隙ができるとすれば攻撃に転じた場合のみ。それは、お互いに理解しているはずだ——。

その後も同時に動き出した時のみ数回にわたり打ち合ったものの、互いの刃が相手を捉えのことはない。

一撃当たったら終わりというギリギリの緊張感の為か、神経を研ぎ澄ませているからか、互いに然程動いていないはずなのだが荒い息を

繰り返している。

その時、デイーノが男に向かって叫ぶ。

「どうしてだ！ 君はどうしてダークブレットに入った！ そんな事で彼女が喜ぶと——」

「——黙れ!!」

その言葉を遮る様に叫ぶと、男が得物を構え突っ込んで来る。

デイーノは直ぐ様、持っていた剣で男の攻撃を弾くと、後方に走り去った彼の方を向いて再び叫ぶ。

「君は俺と約束したはずだ！ 彼女が死んだあの時から！」

「うるさい！ お前は俺と違う！ お前には才能があった。落ちこぼれた俺とは違うんだよ!!」

「そうか……ならば、俺が君を殺す!!」

デイーノは殺意を持って剣を目の前に構え直すと、地面を蹴って飛び掛かる。

その直後、男の持っている薙刀のような武器の刃が白く輝いた。すると、デイーノが光りを遮る為に咄嗟に目を押さえる。

しかし、その時にはすでに遅かった。開いた目はすでに光りがなく、完全に視覚を奪われているのは明らかだった……。

「くっ……」

「これでお前の目を潰した！ この勝負もらった!!」

男は地面を蹴って素早く移動すると、デイーノの目の前で『イザナギの剣』を振り上げ先程の白から不気味に赤く輝き出す。

それは刃に触れれば終わり最後、この世界からも現実の世界からも退場することになる『天の裁き』の光りだった。だが、別の武器スキルを使用する場合は、前に掛けていたスキルを解除しなければならぬ。

その瞬間、デイーノが持っていた剣を、まるで見えているかのようにその体目掛けて振り抜く。

男は突然動き出したデイーノに驚き、目を丸く見開いている。

「ど、どうしてだ……まだ視界が戻るまで、僅かではあるがタイムラグがあるはずだ……」

「……君は頭が悪いね。その視界を潰す武器スキルは直視しなければ効果はない。つということはだ……片目を瞑っていれば2回までは、そのスキルに対応できるということさ」

デイーノは不敵な笑みを浮かべそう言い放つと、男に片目を瞑って見せた。

そう。あの瞬間に目を押さえたのは光を遮る為ではなく、デイーノが片目しか開けていなかったことを隠す為だったのだ。

男はそれを見て呆然としてしていると、その体がキラキラと光りに変わり出す。

キラキラとした光の粒が男の体を徐々に離れ天へと昇っていく、感慨深げに光りへと変わる自分の手の平を見つめ男が徐ろに口を開いた。

「——俺もここまでだな……この武器はお前の物だ……」

「……………」

無言のまま男を見つめるデイーノに、彼はアイテムから『イザナギの剣』を渡した。

その後、感慨深げにゆっくりと天を見上げながら呟く。

「俺とお前は、同じ夢を見ていたはずなのにな……どこで間違えたのか、俺は悪党の親玉……お前は夢を叶えて、今はその先を見ている。従兄弟同士でえらい違いだな……」

徐々に消えていく男を、唇を噛み締めながら見つめるデイーノ。

男はそんなデイーノの方を見て優しくと微笑みを浮かべた。

「……俺のようになるなよ……健二」

「ああ、お前も向こうに行ったら、彼女に……雛によろしく言ってくれ……」

「……分かった。お前は俺達の分も頑張ってくれよ！」

「ああ」

最後に男の手を強く握ると、彼は光となって姿を消した。

彼が居なくなつたにも関わらず、彼のいた場所から感傷に浸る様に瞼を閉じて、その場にひざまずいたままのデイーノが震える声で小さく呟く。

「……………バカ野郎」

彼の瞳には、微かにだが涙が浮かんでいた。

戦闘を終えて、城の前で待機していたメルデイウスのもとに、黒い騎兵隊を引き連れたバロンがやってくるのが見えた。

メルデイウスはその姿を無事な姿を見て安堵のため息を漏らす。

「はあー。どうやら、あっちも片付いたようだな」

「おーい」

その隣に居た小虎が、笑顔で彼等の方へと駆けていった。

そこには黒い馬に跨ったバロンの背中に乗ったファイリスが満面の笑みで手を振り返した。

「お姉さん。大丈夫だった？」

「もちろん！ お兄ちゃんも一緒だし。と言うか、特になにもなさすぎて退屈してたくらいかな？」

「はあー、全く。お前達は緊張感つてもものがなくて困るくらいだ」

笑顔で話している2人に、バロンが大きくため息をついて額を押さええている。

馬から降りたバロンは、楽しそうに話している2人をその場に残し、バロンが困った顔をしているメルデイウスの元に歩いてきた。

メルデイウスはそんなバロンを横目でちらつと見ると、すぐに視線を前に戻した。

お互いに視線を合わせることもなく前を向いて、しばらく無言のまま並んで立っていると、バロンが徐ろに口を開く。

「——敵を制圧したのはいいが、こいつらどうする？」

「さて、どうするかな。とりあえず抵抗する様子もないし。このままでいいんじゃないか？」

「そうだな」

短い会話を終えた2人は、前を向いたまま同時に大きなため息を吐く。

その目の前には、多くの敵の兵士達の列が隣の者と肩と肩がぶつかりそうなほどに、まさに寿司詰め状態と言った感じにどこまでも続い

ていた。すると、城の中から白いマントをはためかせた白銀の鎧の男が現れた。

悠々と歩いてきた彼のその手には『イザナギの剣』が握られている。ダークブレットのメンバー達の視線がその男に集まる中、彼はそれを高らかに掲げると大声で彼等に向かって叫んだ。

「お前達の大将はこの俺が倒した！ 人から盗んだ武器を全て俺に渡せ。そうすれば、命までは取らない事を約束しよう！ そして、この後は俺がお前達を仕切るようにお前らのボスに言われた！ 従わぬ者はこの剣で斬り伏せる!!」

それを聞いた者達からは、ため息と怒号が飛び交う。しかし、その反応も最もだろう。リーダーを倒されて急に『俺に従え』と言われたところで、到底歓迎のできる話ではない。しかも、今までプレイヤー達から奪ってきた武具を寄こせと言うのだ。

彼等からしてみれば、たとえそれが他人の物を奪ったとしても、苦勞して手に入れた戦利品だ——それをどこの誰とも知らない者に、無条件に奪われるのを容認できるはずがない。

飛び交う怒号の中、鋭い視線で辺りを威圧した彼が、手に持っている『イザナギの剣の柄を地面に数回打ち付ける。すると、今まで声を上げていたダークブレットのメンバーが嘘の様に静まり返った。

だが、どんなに否定しようが自分達の大將の持っていた武器を、目の前の男が持っているのは事実。

その事実がある以上。誰も大將が敗れたということ、完全に否定することはできない。

それを証明するように、その場に居たダークブレットの人間は誰一人として異を唱える者はいなかった。

いや、異を唱えられないと言った方が正しいかもしれない。何故なら、デイーノの手に握られている武器には、それだけの力が秘められていたことはここにいて誰もが知っている事実なのだから……。

それからは思っていた以上に早く收拾がついた。

誰よりも安堵したのはメルデイウスとバロンだ。いくら大人しくなっているとはいえ、敵は強奪や殺人などを平気で行うギルドのメン

バー達——恐怖だけで抑えつけるのには限界がある。

更に千人以上の兵を相手に戦闘をするのは、いくらバロンの黒い兵士達が倍の二千以上いるとはいえ、長期戦になるのは間違いないからだろう。

向こうは本拠点からの出撃だが、メルデイウス達は数日間昼夜問わずの強行策を取ってきていた為、正直これ以上は戦闘する気力がなくなっていた。

疲労が体に蓄積するのと同時に、判断力も大きく鈍ってくるし。何より、このゲーム内に閉じ込められ死亡することも許されない極限状態では、1つの判断ミスも命取りになりかねない。

モンスター相手ならまだしも。それだけ、思考を持って動くプレイヤー達は脅威に成りうるということである。

城門の前で「このデイーノに従え！」と声高に叫ぶデイーノにメルデイウスが小声で話し掛けた。

「——お前、デュランだろ？　いつまで偽名名乗ってるつもりだよ」「……ん？　ああ、意外とこの名前が気に入っててね。しばらくはこれでもいいと思う」

偽名を名乗ることを全く罪とも思っていない彼の発言に、あっけらかんとしていたメルデイウスが我に返りそっぽを向く。

「ああ、そうかよ。もう勝手にしろ！　そんな真っ白な格好してても、お前の腹の中は真っ黒だもんな!!」

「あはははっ！　上手いこと言うね！」

メルデイウスは笑みを浮かべているデュランに向かって嫌味を口にする、彼は声を出して笑った。

ダークブレット日本支部崩壊2

外でメルデイウス達の激しい戦闘により、城の入口が騒ぎになっていた頃――。

そんなことを知る由もなく、城の中に潜入していたイシエルがこっそりと誰も居なくなつた城内を散策していた。

周りが石積み の壁と等間隔で設置された松明だけという意外と地味な作りなっている城内を、イシエルは無警戒に歩き回っていた。

「おかしいなあ。誰もおらへんの?」

イシエルは首を傾げながら小声でそう呟く。

しかし、その言葉に返事をする者は誰も居ない。人の気配もなく、外壁の松明がゆらゆらと揺れるだけだ。静まり返つた城内を、時折首を傾げながら進んでいく。

そんなこんなで、階段を下り。徐々に城の最深部へと向かつていった。

「くそっ! どういう事だこれは! イヴが居ない!!」

嘘のように静まり返つた城内をゆっくりと進んでいると、どこからともなく男の憤る声が聞こえてきた。

非戦闘エリアである建物内では、武器や固有スキルの使用はできない。

今、もしもイシエルが何者かに出くわせば、いくらイシエルでもひとたまりもないだろう。

だが、そんなことなど今のイシエルには関係ないのか、瞳を輝かせながら興味津々な様子で彼女はその声の主の方に進んでいく。さながら、彼女の今の心境は肝試しにきた学生の気分と言つたところか……。

徐々に大きくなるその声に、不思議と胸が高鳴るのを感じながら、イシエルは曲がり角からそつと、その声の源を覗き込む。だが、覗いたその先は行き止まりになっていた。

周りを灰色の石造りの壁に囲まれ、正面にも左右にも石が隙間なく積まれた壁がある光景が広がっている。しかし、確かに今も憤る男の

声が、間違いなくそこから声が聞こえてくる。

不思議そうに行き止まりになっている壁に近づく。

全く警戒することなく動くこちらへんは、彼女の肝の据わった性格を表しているのかもしれない。

(おかしいなあ。ここから声がするんやけど……)

イシエルはそう思いながらその壁に手を当てた。すると、その手はスツと壁を通り抜ける。まるで、そこには壁など存在していないかのような……。

それを確認したイシエルはゆっくりと壁の前まで行き、壁向かって頭を中に差し込む。

「――抜け穴……しかも地下へ続いている……」

小さく呟いたイシエルは、ゆっくりと地下に続く階段を下り始めた。

明らかに意図的に隠された通路。そこは人一人がやつと取れるほどの狭い階段を奥まで進んでいくと、そこには重々しい鉄の扉があった。しかし、中から鍵が掛けられているのか、外からは開けることができない。

仕方なくイシエルは瞼を閉じて、その扉に耳を澄ました。すると、やはりこの中から男の音が確かに聞こえる。

「やはりこのジャミングはイヴの――いや、博士の仕業か!? 死んでもなお、これほどの事を仕掛けてくるとは……だが、死人にこんな真似が出来るわけがない。外部からの私のシステムへの介入はできないはず――つとということは実行部隊の存在。それはイヴがこちらの世界に来た時に分かっていたはずだったが……いや、まだ遅くない。対応は出来る……私のシステムは完璧。このゲーム内でシステムにアクセス出来るのはオリジナルリングを持つイヴのみはず……ならば、イヴさえこちらに取り戻せれば、まだ手は残っている……ふふっ、はっはっはっ!!」

その不気味な笑い声を聞いて、イシエルはなんとも言えない恐怖を抱いた。なんとというか、人の持つ動物的な本能が危険信号を送っている。

こつそりとその場から離脱したイシエルは一目散に城の外に出ると、外壁にもたれ掛かり、顎の下に手を当て思考を回す。それはまるで、立った状態の『考える人』の銅像の様に微動だにすることなく……。

「——あのイヴって言うのは誰のことやろか……少なからず、そのイヴがゲーム内からシステムにアクセスできる唯一の人物なのは分かった……」

イシエルは小さく呟くと、悪戯な笑みを浮かべる。

企み顔のイシエルだったがその心理はとても単純なもの……それはその人物を特定すれば、エミルに褒められると思っただからだ。

見つけてしまえば、エミルは現実世界に戻れると喜ぶはず。そうなれば、自分も現実世界に戻って憎つくき恋敵の星に気兼ねなく彼女を独り占めできる。

そう考えただけで、イシエルの口元から自然と笑みが溢れる。

するとその直後、突如としてゴゴゴツ！と城が音を立てて崩壊を始めた。イシエルは慌ててその場を離れると、一目散にエミルの元へと戻った。

エミルの元に戻ると、そこには笑顔でイシエルを待つエミルの姿があった。イシエルは驚くように目を丸くさせながら駆け寄るとエミルに抱きつく。

「エミル!! もう体は大丈夫なん!？」

「ええ、もうすつかり。それにね! 今エリーから連絡が入って、星ちゃんを無事に救出したらしいの!」

「へ、へえく。そうなん……それは良かったわく」

興奮気味に前屈みで微笑むエミルに、イシエルはぎこちなく微笑み返す。

それもそのはずだ。本当なら自分が星を救出して、エミルへのポイント稼ぎをしようと考えていたのだが……まあ、城が崩れ始めた時には、星の事などどうでもよく。すでに逃げることしか頭になかったのだが……。

そうこうしていると、2人の前にエリエとライラが姿を現した。

今まで笑顔を見せて安堵した様子のエミルが、ライラを見た途端に顔色が突如として険しいものへと変わった。

明らかに顔を引き攣らせているエミルが突き刺すような鋭い視線を向け、徐にライラを指差す。

一瞬でピリピリとした雰囲気のエミルとライラの間流れる。

「なんであんたがここに居るの!?!」

「うふっ、私がどこに居ても私の勝手じゃない？　そういうところは、昔から全く成長していないのね。でも、エミルのそういうところも可愛いけど♪」

ライラは悪戯な微笑みを浮かべながら、威嚇しているエミルに言葉を返す。

だが、彼女のその言葉にエミルが声を荒らげた。

「お姉様には関係ない！　もう私を子供扱いしないで！」

「あら、まだ私を『お姉様』と呼んでくれるのね、エミル。嬉しいわ」

「……あつ!?!」

咄嗟に口を押さえ、慌てて言い直す。

「違うわ！　ライラ!!」

顔を真っ赤にさせながら羞恥心をごまかすように、ビシツ！とライラのことを指差すエミル。

その慌て様を楽しんでいるかのように、ライラは終始笑みを浮かべた。

「ふふっ、そう強がる貴女も素敵よ。エミル♪」

「くっ……」

彼女に弄ばれ悔しそうに唇を噛み締めるエミルを見て、今度はイシエルが口を開いた。

「なるほどなく。あんたが“うちの”エミルを世話してくれてたん？

おおきになく。けど、“うちの”エミルに、あんま馴れ馴れしくされるんは困るなく」

イシエルは『うちの』という部分を強調しながら笑顔を浮かべているものの、その体は明らかに怒りで震えていた。

ゆつくりとライラの元へ近寄っていくと、イシエルに2人は互いに

向かい合うと、につこりと微笑み合う。

互いに笑顔なのだが、彼女達の間にはバチバチと火花を散らしているのがはつきりと見えた。

無言のまま笑顔で向かい合う2人。そこで先制攻撃を仕掛けたのはイシエルだった。

「はじめまして。 Emil はあんなのような『年増』の事は一度も話したことがなかったから、知らなかったわ。これからも仲良くしてな
〜」

「ふくん。年増なんて……いい度胸ね。でも、知ってた？ 年を取ったほうが女は味が出るのよ？」

「知つとるよ。ええダシが出そうやもんなく」

「ふふつ、嫉妬しちやって可愛いわね。 Emil と一緒に食べちゃいたいくらいだわ〜」

イシエルのその言葉に全く動じることなく言葉を返す。

何よりも凄いのはどちらも笑顔を作ったまま、一切その笑顔を崩さないことだ。

しかし、最後のライラのその予想外の返答に、さすがのイシエルも少し驚いた表情を見せ、戸惑いながらも口を開いた。

「なんであれ。うちの Emil は渡さへん!!」

「それでいいわよ。 Emil と一緒に愛してあげるから♪」

「それもあかん!!」

「あら、どうして？」

首を傾げるライラに、イシエルが困惑した表情で尋ねた。

「逆にどうして2人ならOKやと思ったん？」

その質問に余裕な笑みを浮かべくすくすと笑うと、イシエルの耳元でそつとささやく様に告げた。

「——そんなの。2人とも可愛いからに決まってるじゃない。……2人とも私色に染め上げてあげるわ……」

「……なっ!？」

それを聞いたイシエルは顔を真っ赤に染め思わず数歩後退る。その後、睨みつけるようにして「そんな不潔や！」と大声で叫んだ。

ライラはそんなイシエルを見て微笑むと、不思議そうに首を傾げる。すると、ライラの姿が消え。次の瞬間には、彼女はイシエルの顔の前に現れていた。

「ふふっ、まだまだ純情なのね……大丈夫。お姉さんが色々教えてあげ・る♪」

悪戯な笑みを浮かべながらそう告げると、ライラはイシエルの頬にくちづけをする。その直後、イシエルが咄嗟に右手を思い切り振り抜く。

だが、その手が当たるよりも早くライラは姿を消して振り抜いた右手が空を切った。ふざけたライラの行動の数々に、イシエルも憤りを隠しきれない様子で歯を噛み締める。

イシエルは頬を着物の袖で拭うと、殺意に満ちた瞳を再び前の場所に現れたライラへと向ける。

「……なんのつもり？　うちの肌に触れてええんはエミルだけや……」

「なにつて、可愛いものを手元に置いておきたいと思うのは、すごく自然なことだと思っけど……？」

「エミルは誰にも渡さへん!!」

真剣な瞳にライラは少し考えると、不敵な笑みを浮かべ。

「そこまでエミルが好きなら、本人に聞いてみましようか？」

「ええよ。うちのエミルなら、絶対あんたの言う事なんてきかんし……」

「決定ね!」

2人はそう言って頷くと、同時にエミルを見た。

エミルは突然熱い視線を向ける2人にたじろぐと、思わず視線を逸らす。

そんな彼女に詰め寄ると、2人が同時に尋ねる。2人の凄まじい威圧感に、エミルは数歩後退ると。

「私とこの娘。どっちの方がいいかしら!!」

「うちとこの女。どっちの方がええの!!」

飛びつきそうな勢いで聞いてくる2人に、エミルは苦笑いをしながら

ライシエルのことを指差した。

イシエルは嬉しそうに笑うと、エミルの腕に手を回してライラを見下すように言った。

「ほくら、エミルはうちの方がええよやね。昔の女が今更でしゃばることが間違つとるんよ……おぼはん」

したり顔でそう言い放つイシエルに、ライラは怒りを含んだ瞳をエミルに向ける。

ライラは何かを思い出したように笑みを浮かべ、エミルの耳元でそつと告げる。

「……そう。貴女がそう言うなら、あの星つて子は私がもらうわね……」

「——ッ!？」

その言葉を聞いて目を丸くさせるエミルに、追い打ちを掛けるようにライラが言葉を続ける。

「今なら、あの子は容易に落ちるだろうし。それに、純粹無垢な女の子にお姉様と呼ばせて、自分好みに染めるなんて考えただけで興奮するわ……」

「くっ！ あんたのそういうところが一番嫌い。いつも人の心をもてあそぶだけでもあそんで……」

エミルは鋭い目付きでライラを睨む。

そんなエミルの視線を受け、くすつと笑みを浮かべたライラが言った。

「——別に嫌いでもいいわ。私が満足すればそれでいいの……どうする？ このまま、その生意気な小娘を選んであの子を見捨てるか……それとも。私の玩具として私に服従するか……二つに一つよ？」

極端な二択を迫られた直後。エミルの脳裏には、檻の中で爆発させられた星のホログラムが吹き飛ぶシーンを思い出し仕方なく彼女の申し出に頷く。

「……分かったわ」

「なら……分かってるわよね？ エミル♪」

「ええ……お姉様」

エミルは俯き加減にそう呟くと、自分の腕に抱き付いているイシエルの手を振り解きその体を突き飛ばした。

ダークブレット日本支部崩壊3

エミルの突然の行動に驚きを隠し切れないといった表情で、地面に倒れ込むイシエルがエミルの顔を見上げている。

「……えっ?」

リアルの世界でも親しい間柄のイシエルからしてみれば、エミルがそんな行動に出るなんて思ってもみなかったのだろう。

地面に伏せてあまりのショックから状況を全く飲み込めていないイシエルを、エミルは冷たい瞳で見下ろすと重そうに口を開いた。

「——わ、悪いけど。イシエ、これからはお姉様と一緒に行動するから……」

「……えっ? えっ? 嘘やろ? エミル」

イシエルはあまりに突然の出来事にまだ動揺しているのか、視点が定まらずに呆然としている。

困惑するイシエルの表情を眺め、ライラは口元にニヤリと勝ち誇った様な微笑みを浮かべた。

直後。ライラが彼女の首に腕を絡めるとそつと耳打ちする。それを聞いて、エミルの表情が明らかに曇る。何を言われたかは彼女のその沈み込んだ表情を見れば分かった。

そんな彼女に釘を刺すように「分かってるわよね? エミル」と悪戯な笑みを浮かべ、ライラが耳元でささやく。すると、エミルは虚ろな瞳に変わり、淡々とした口調でイシエルに向かって言い放つ。

「……ごめんなさい。あなたとは遊びだったの……」

「ふふっ、だって。エミルは身も心も私の物よ」

ライラは勝ち誇った様に地面に這いつくばっているイシエルそう言い放つと、エミルの体をゆっくりと撫でまわす様に手を這わせている。

その姿を見て、イシエルが顔を真っ赤にしながら叫ぶ。

「うちのエミルに何するんや!! 今すぐその汚らしい手を放せえええええええっ!!」

イシエルは素早く立ち上がり神楽鈴を取り出すと、それを振ろうと

したその時、目の前を遮る様にしてライラの前にエミルが立ちはだかった。

さすがのイシエルも、その彼女の突然の行動には動揺を隠し切れないう様子で、まるで金縛りにでもあっているかの様に、その場に立ちすくんで固まったまま全く動けなくなってしまう。

エミルとイシエルは現実世界でも仲がいい同士。まさかそれが互いに敵意を持って向かい合うことになるなど、イシエルには想像もしていなかったことだろう……。

「……なんでなん？　なんでそんな女守るんよ。エミル!!」
「……………」

だが、その返答に答えることもなく、エミルは無言のまま剣を抜くとイシエルに襲い掛かった。

エミルの攻撃は吸い込まれるように神楽鈴に当たると、小さくチリンと鈴が音を立てる。

微かに掠めただけなのだが、イシエルには攻撃によるダメージよりも、精神的なダメージの方が大きいのだろう。

何と言っても、今まで互いを尊重し合い喧嘩すらしたことのなかったエミルが、自分に対して剣を向けたのだ——いや、それどころか彼女は自分に攻撃を仕掛けてきたのだ。

口をあんぐりと開け信じられないという表情のまま、神楽鈴を握り締めるイシエルの耳元に、エミルの震えた声が飛び込んできた。

「イシエ……ごめんなさい。でも、今は……今はこうするしかないのよ。分かってちょうだい……」

「そんなの信じられん！　信じたくない！　なあ、エミルも本当は……」

そこまで言葉を口にして、イシエルは口を閉ざす。

それもそのはずだ。次に顔を上げてエミルの顔を見たイシエルの瞳に飛び込んできたのは、彼女の涙で潤む澄んだ青い瞳だった。

彼女の心の奥に秘めた思いを、イシエルは彼女のその瞳から、言わなくても『止む終えない』事情があると感じ取ることができた。

それが分かって少し安心したのか、イシエルは大きく息を吐き出し

て武器を手放し両手を上げた。

距離を取って二撃目に入ろうとしていたエミルはそんな彼女の突然の行動に驚きながら、ただただ呆気にとられて目を丸くさせている。

「——うちの完敗やね……あんたの好きにしたらええ……」

イシエルはそう吐き捨てるように呟き、したり顔で勝ち誇った様な視線を向けているライラを見つめた。

まあ、今の状況下ではイシエルがどんなにライラと戦いたいと思っ
ていても、前を遮ってくるエミルとの戦闘は避けられない。

武器を持っていても戦えないのだから、その存在には何の意味もない。

それよりも武器を捨てて戦闘の意志を放棄したと思わせた方が、エミルの思惑通りに事を運びやすいだろうという彼女なりの配慮だったのだろう。

ライラは不敵な笑みを浮かべながら2人に歩み寄ると、ゆつくりとエミルの体を後ろから抱きしめる。

「……あつ。おつ、お姉様……なにを……」

いたずらな笑みを浮かべながら、エミルの首筋に指を滑り込ませると、エミルの顔を自分の方へと引き寄せて思わせぶりに呟いた。

「ふうくん。別に貴女には用事はない……でも、可哀想だから……今夜、エミルと一緒に可愛がってあげましようか？」

ライラのその発言に、イシエルの肩がピクピクと小刻みに揺れ始める。それは明らかに戦意を喪失したイシエルへの追い打ちとも言える行動だった……。

怒りで震えるイシエルに、エミルは驚きながら慌ててライラの方を向く。

「お姉様！ それはいけません!! ……んっ」

エミルはライラの首に腕を回すと、強引に引き寄せ唇を重ねた。それをまじまじと見せつけられ、イシエルはあまりのことに怒りを通り越して、もはや言葉を失う。

そのやり取りを無言のまま見ていたエリエも思わず顔を赤らめ、そ

の行動を食い入る様に見つめている。それを余所に、2人はしばらく抱き合いながら濃厚なキスをする。とゆつくりと顔を離した。

ライラは熱を帯びて潤んだ瞳を向ける。エミルの頬を優しく撫でると、猫撫で声でささやく。

「——可愛いわね、エミル。そう。貴女は私と2人きりがいいのね」
「……はい」

頬を赤らめたエミルが潤んだ瞳でライラの顔を上目遣いで見ると、ライラが静かに頷く。

「分かったわ。貴女も私を他の子に取られたくないってことね……本当はその子に私達の仲の良さを見せつけてやろうと思ったんだけど、可愛い妹分の心を尊重してあげる♪」

ライラはそう呟いてエミルの頬に軽くキスをすると、心ここにあらずという感じに放心状態のイシエルを横目で見る。その後、エリエを呼び寄せると、4人はテレポルトでサラザ達の居る場所へと戻った。

テレポルトすると、エミルは眠ったままの星を見て慌てた様子で駆け寄ってその手で抱き寄せる。

「ああ、星ちゃん。良かった。良かったわ。本当に良かった……」

瞳に涙を浮かべながら何度も「良かった」と口にするエミルを見ていたエリエは、少し複雑な気持ちになる。

（……やつぱり。私なんかより、エミル姉が一番気にしてたんだ……それなのに私は、自暴自棄になって自分だけ焦って……本当に子供みたい……）

そう心の中で呟き、エリエは自分の手を見つめる。

結局戻ってきたのは星の体だけ、心は記憶と共にこの騒動の元凶にして、このゲームを「テストゲーム」という名の牢獄へと変えた首謀者の狼の覆面を被った男の企みによって消されてしまった。

その手はとても細く小さく感じた。

『何も出来なかった……』

そんな思いだけが、エリエの心を締め付ける。

アジトに行つて星を取り戻す為に必死に戦った。だが、結果。絶体絶命の状況で二度も星に救われた拳句に、お礼を言おうにも今の星に

は記憶がない。

楽しかった日々の出来事の全てを、この一時の事件で全て奪われてしまったのだ。

その責任をエリエが感じるのは無理もない……。

まだエミルはその事実を知らないからか、星を抱きしめながらとても嬉しそうに微笑み掛けている。それが失意の中にいるエリエの心の傷を更に深く抉っていた。

* * *

その頃、デイビット達は目の前で音を立てて崩れる城を遠巻きに眺め、その場にいた全員が呆然としていた。

敵の兵士達もこれまでの生活していた拠点がなくなったことで、そこから不安の声が上がっている。

瞬く間に灰になっていく城を見て、メルデイウスは呆然としながら大きいため息を漏らしていた。

「――どうすんだよ。これ……」

その言葉に答えるように、隣に立っていたバロンが腰に手を当て他人事の様に呟く。

「とりあえず。これはもう住めないだろ……」

「そうだね。なら街に戻ろうか、ここにはもう用事はないからね」

「――って、うおっ！ デュラン。脅かすなよ！」

突然なんの脈絡もなく隣に現れた白いマントを羽織った男に、メルデイウスが大きく仰け反る。

「俺は今、ディーノと名乗っている。呼ぶならディーノで頼むよ」

大げさに身を反らせるメルデイウスに、デュランが呆れ顔でため息を漏らす。

それを聞いて、メルデイウスが顔を真っ赤にして叫ぶ。

「ばか野郎が！ ゲーム内ではパーティー以外に名前が表示されないからって、お前は偽名を使い過ぎんだよ！ ってか、俺達以外にパーティーなんて組んだことねえーだろお前!!」

デュランは激昂するメルデイウスを余所に。

「僕に仲間は必要ないからね」

つとさらつと答える。

だが、それは今の状況下では火に油を注ぐようなものだ——その言葉に、更に激怒するメルデイウスを無視して、デュランは歩いていった。

どうしても掴み所のない彼に、メルデイウスは悔しそうに歯を噛み締めた。

その横に立っていたバロンが、そんなメルデイウスの脇腹を小突く。

「いでっ！ なっ、なにしやがるバロンー！」

「ふん。バカじゃないのか？ それで俺様達はどうするんだ？ こんだけの数の人間を連れて移動するのは結構な手間だぜ……」

行き場を失ったダークブレットの兵士達を見渡すと我に戻り、状況をもう一度整理するようにメルデイウスは唸る。

この状況では、ダークブレットの者達の受け入れ先が重大な問題である。

数十人くらいならまだしも、地を覆い尽くすほどの人集りに、これだけの量になるとさすがにもう一つ街を作った方が早いレベルだ。

だが、そのまま捨て置くわけにもいかなない問題でもある。今はリーダーをデュランが討ち取ったことと、生活の拠点であった城がなくなったことで敵は意気消沈している。

ずっとこのまま大人しくしてくれればいいのだが、そうもいかないだろう。自然分裂を起こせば、相当数が生活資金と寝床を求めてまた犯罪に手を染めかねない。

メルデイウスとバロンは腕組みしながら立ち尽くしていると、ちょうど小虎と話していたフィリスが手を振りながら戻ってきた。

「お兄ちゃん！」

さすがに実の妹には甘いのか、駆けて来る妹の姿に眉を吊り上げ険しい表情を浮かべていたバロンの表情が和らぐ。

「おう。どうした、我が妹よ」

「もう！ その妹つてのやめてよね！ 私にはちゃんと考えた名前があるのよ!?!」

頬を膨らませて、不満を口にするフィリスに、困り顔でバロンが頭を掻いている。

すると、今度は小虎と紅蓮がやってきて、その隣で顎に手を当てて唸っているメルデイウスに紅蓮が声を掛けた。

「メルデイウス。マスターから伝言です」

「——んっ？ なんだ？ 紅蓮。ジジイがなんだって？」

「はい。『一段落着いたら始まりの街に戻ってこい』だ、そうです」

無表情のまま紅蓮がそう伝えると、メルデイウスの顔を見上げる。

メルデイウスは不機嫌そうに眉を寄せながら呟く。

「けっ、あのジジイ。大事な時に居ねえーくせに、命令してきやがるとはいい度胸じゃねえーか」

不服そうに顔を引き攣らせながら口元に笑みを浮かべて遠くを見つめるメルデイウスに、紅蓮が難しい顔をして言った。

「メルデイウス。私もマスターの意見に賛成です。このままここに留まっただけでも何にもなりません」

「……くっ、分かった。とりあえず。あのバカにも伝えてくるー!」

紅蓮がマスターの肩を持つような発言をしたことで、更に不機嫌になりながらもメルデイウスはデュランの方へと向かって歩き出した。

そんな彼を見て紅蓮は「なにをそんなに怒ってるんでしよう」と小首を傾げる。

ダークブレット日本支部崩壊4

その場に簡易的なテントを張ってその中に、デュランを加えた四天王が揃って今後のことを話し合う為の緊急会議が行われた。

テントの中に簡易的な四角いテーブルを置き、その上には地図が置かれていた。

椅子に腰掛けながら皆険しい表情で見合っているだけで、誰一人として言葉を発しようとしなない。

それもそのはずだろう。この話し合いの内容は、ダークブレットのメンバー達を始まりの街に連れていくか否かというデリケートなものだ。

元々、初心者プレイヤーをターゲットにしていることが多いダークブレットのメンバーを、今あの街に連れていくのはあまり得策とは言えない。

数にして千人以上いる人間を一気に大移動させればそれだけで人目に付く、その上それが犯罪系のギルドのメンバーとなればいざこざは避けられないだろう。

何故なら彼等は、窃盗だけではなくPVPを利用したPKも同時に行っていたからだ——その為、被害にあったプレイヤーのギルドのメンバーや、近親者に殺されても仕方ないほどに恨まれているに違いない。

そんな者達を引き連れ、彼等の被害者が多いであろう始まりの街に凱旋なんてした日には、街中に血の雨が降ることだろう……。

しかし、首領とアジトを失ったダークブレットのメンバー達に、これ以上のストレスを与えれば、最悪の場合は自暴自棄になった彼等がゲリラ集団の様な振る舞いをしかねない。

事は急を要するものの、とても丁寧に扱わなければならない問題でもあった。

テーブルを囲んで向かい合う重苦しい空気の中、四天王が向い合っている、紅蓮が徐ろに口を開く。

「——どうでしょう。マスターと合流し次第、ここは彼等を千代に連

れて行くのは」

「いや、それもどうか」

その言葉に水を差すように、腕組をしていたデュランが言葉を発した。

自分の出した意見に対して、意味ありげな言葉を投げかけてくる彼の態度が不満だったのか、紅蓮は不機嫌そうな顔をしながら「どういう事ですか？」と訝しげに聞き返す。

デュランを見る紅蓮のその瞳は、不愉快極まりないという感じだった。そんな彼女の様子に気付いていながらも、それを気にかけることなくデュランが言い放つ。

「どこに行っても。はみ出し者は受け入れられないということだよ。紅蓮」

デュランは眉をひそめている紅蓮にそう告げて彼は持論を展開する。

「俺はこのまま始まりの街に滞在するのがいいと思う。どこに行っても、対応は同じだろうし。逆に悪名高いからこそ、周りの人間は無闇矢鱈に手を出せないと思うよ」

確かにデュランの意見も一理ある。どこにいったとしても、犯罪集団を受け入れてくれる場所など警察署以外あるはずがない。

ならば、いつそのこと最も嫌われている場所に滞在した方がいいかもしれない。実際に被害者やその関係者も多くいるが、その物量の多さに少数ではそうそう手は出せないデュランは踏んだのだ。

危険人物の集まりであるからこそ、刺激して何をするか分からないと逆に我が身の保身の為に何もしてこない可能性だってある。

人間とは情を大切にすが、ひとたび己が危機的な状況に陥れば自己保身に走る薄情な存在なのだ――。

「でもよー。この人数はあまりに多いぜ。いったいどこに住むんだ？」

メルデイウスはそう言って首を傾げた。

だが、そのメルデイウスの意見も最もだ――ゲーム開始時。始まりの街ではマイハウスなるものがあるのだが、それも環境に応じて様々

な都市や場所への移動が可能だ。

その為、始まりの街に必ずしも家がある者だけではない。

そうになると、宿屋などを使わなければならぬが、ゲーム内に閉じ込められる事件以降、手軽な敵を倒し宿屋を拠点にする者が殆どだ。

元々宿屋は傷を癒やす目的でしか利用しないような補助的な施設だった。

だからこそ、宿泊代は5ユールと安価であり。これは始まりの街の前にいる最弱モンスターのラットを5体倒せば容易に手に入れられる程度のもの。

だが、マイハウスのある者が宿屋に皆が泊まるのには、もう一つ重要な理由がある。その理由は人との交流だ――。

それは初心者の冒険への出発地点である始まりの街ならではのものです、本来は人が集まる場所には情報が集まるという的を射た考えでもある。

各街にはギルドホールという場所もあるが、そこはギルド単位で借りているのが殆どで、新たに人間関係を構築させるのは少し難しい。

また、すでに事件発生から一ヶ月近く経っている為、もう宿屋には独自のグループが形成され始めているのも事実。

こんな状況で、犯罪者ギルドのメンバーをその場所に駐留させるのは、争いを誘発させることと同じなのだが……。

デュランはそれを何食わぬ顔で皆に提案してくる。

彼に何らかの思惑があつてのことか、それともただ単に安易な考えからそう提案しているのかは、本人である彼以外は分かり知れないことだ。

笑みを浮かべながら唸るメンバー達を見つめるデュランに、つまらなそうに話を聞いていたバロンが言葉を吐き捨てるように告げる。

「どちらにしても……俺様には関係ない。帰るぞフィリス！」

「ちよつと待てよバロン！」

メルデイウスは戸惑い気味に声を掛けたが、彼は無言のままテントを出ると馬へと向かっていった。

フィリスもそんな兄の姿に苦笑いを浮かべながら一礼して紅蓮達

に微笑えむと、歩き出したバロンの後を追いかける。

直後。張り詰めていた緊張が解けたのか、メルデイウスはため息交じりに伸びをすると諦めたように口を開く。

「まっ、なるようにしかならねえーかもな……とりあえず。ジジイが待ってんだ。始まりの街に行こうぜ！ 紅蓮」

「ですが……」

デュランとの話の決着のついていない紅蓮が、文句を言いたげな顔でメルデイウスを見た。すると、デュランも不敵な笑みを浮かべると外へと歩いていってしまう。

怪訝そうな顔でそれを見ている紅蓮は、少しふてくされたように口を尖らせている。

彼女が不服なのは最もだ。紅蓮の性格からして、決める時はその場で決めてから次の行動をしたいという思いがある。

しかし、ここに居るメンバー達は皆が個性的と言えば聞こえがいいが、要するに自分勝手な者達ばかりで口を開けば喧嘩が始まる始末。

真面目な話をしていても、今の様に文句を言い合うばかりで全く決まらないのだ。

そんな紅蓮を残し「俺はあいつを見張ってないといけないから、先に行くぞ」とメルデイウスがデュランの後を追ってテントを出ていく。

その場に残された紅蓮は更に不機嫌になり「本当に自分勝手な人達です」と毒づく。

そこにデイビッドと小虎がやって来た。

2人はお互いの固有スキルの話をしながらかみを見せている。

「どうしたんだい？ むっとして」

「……貴方には関係ありません。今は話し掛けしないで下さい」

「ん？ どうして……」

そう口にしようにとしたデイビッドの手を隣りに居た小虎が咄嗟に引くと耳元でささやく。

「——ダメだよ。こういう時の姉さんは刺激したら」

「どうして、紅蓮ちゃんを怒らせるとそんなに怖いのか？ 大人しく

て可愛い子なの——」

デイビッドが「可愛い」と口にした直後、彼の目の前を一本のナイフが横切る。

小虎とデイビッドがその方向を恐る恐る振り向くと、殺気立った紅蓮がナイフを手にこちらを鋭く睨んでいる。

「今のは手が滑りましたが……次に可愛いといえは。その首から先が無くなりますよ?」

「……コクコク」

2人は顔を青ざめさせたまま、何度も無言で頷いた。

それを見てナイフを仕舞うと紅蓮は「以後、気を付けてください」と小さく呟きテントの中を去っていく。

彼女の後姿を見送ると、ほっと胸を撫で下ろしたデイビッドが小虎に尋ねた。

「——あの子って褒められるの嫌いなのかい?」

「ううん。姉さんはああ見えてリアルでは大学生だから、可愛いじゃなくて綺麗って言わないとダメなんだよ。姉さんに『可愛いとちっちゃい』はNGワードなんだよ」

「あの容姿で大学生!?」　じよ、冗談だろ?　小虎く——」

驚きのあまり大きな声が出てしまった為、話していた内容は外にいた紅蓮の耳にも届いたのだろう。

テントの幕を破り突き破り、高速で飛んで来たナイフがデイビッドの鎧に当たり火花を散らす。

その破れた部分から見え隠れする先では、2人に殺意を含んだ睨みを効かせる紅蓮の姿があった。

2人はそつとテントを抜けると、紅蓮の目の届かないところへと慌てて逃げていく。

その姿を見て紅蓮は「仕方ない人達ですね」とため息を漏らすと、口元に微かな笑みを浮かべている。

「よう。楽しんでるな紅蓮」

するとそこに、デュランの様子を見にいていたメルデイウスが戻ってきた。

彼の言葉に、すぐに表情を戻した紅蓮が不機嫌そうにそっぽを向く。

「……楽しんでなんていません。それより、どうするんです？ このままだと話し合いにもならないです。揉め事が起きるのは目に見えてますよ？」

「まあ、そうなんだがな。こうなる事は古い付き合いだし分かったことだろう？ 最後は俺達でなんとかしようぜ！」

樂觀的と言わざるを得ない言動をしたメルデイウスは、自信満々に親指を立てて微笑んだ。

だが、今の紅蓮にはそれほど樂觀視できない。

どんな人間であっても目の前で人が消えて行く姿を見るのは心苦しく感じるものだ。できることなら、死人を出さずに——いや、自分の目の前では決して死人を出させないと紅蓮は心に誓った。

目の前で微笑んでいる彼に、紅蓮はむすつとしながら視線を逸らすと。

「そうですね。そうならメルデイウスにお任せします」

つと、素っ気なく答えた。

「ちよつと待て！ じよ、冗談だよな、紅蓮……」

「……私は冗談は嫌いです」

「本気なのかよ！」

「さあ、どうでしょうね……」

返答を聞いて急に慌て出したメルデイウスに、そっぽを向いたままの紅蓮は微かに笑みを浮かべた。

マスター達と合流する始まりの街は、ダークブレットの基地から歩いて4日ほどに場所にある。しかし、この人数を移動させるとなると、ウォーターレスト山脈の細い山道を抜けるのに、おそらく2日ほど掛かると予想し始まりの街に着くのはだいたい6日ほどと言ったところだろう。

太陽があまり高くないうちにメルデイウス達は馬に跨り出発した。

*
*
*

ライラの正体

エミルの城に戻ると皆の表情が和らぐ、それは無事に帰ってこれたという安堵からなのは言うまでもない。

しかし、エリエだけは険しい表情が変わることはなかった。そんなの中、初めてエミルの城を目の当たりにしたミレイニが歓喜の声を上げる。

「うわあ〜。本当にお城だし！ 凄いし！ 大きいし！」

エリエから少し話を聞いていたのだが、話を聞いていたとはいえず、現物を目の当たりにして目を輝かせながら興奮気味に指差すミレイニにエリエが優しく微笑む。だが、エリエの気持ちは別の方に向いていた。

それは……。

「やっと帰ってこれたわよ……星ちゃん」

自分の背中に背負った星を見て優しく声を掛けるエミル。

だが、星は未だに眠ったままエミルの背背中で寝息を立てている。その姿を見ていると、まだ星の記憶が消えているという事実を話していないことによるエミルへの罪悪感がエリエの心をざわつかせる。

どれだけの時間効果があるのか、それとも解毒薬がなければ目を覚ますことがないのかは分からないが、今はライラにエリエは感謝していた。

あれほど助けたかった星が目を覚まさないことを期待するような、そんな思いもどこかにあり、そんな自分がエリエは更に嫌いになりそうだった……。

（ううん。タイミングがなかっただけよ。部屋に着いたらきつと……）

心の中で呟くと、険しい表情で俯いていた彼女をエミルが呼ぶ。

「エリー。何をしてるの？ 早く戻りましょ〜」

「う、うん！ 分かってるよ。エミル姉！」

できるだけ平静を装って、エリエは後を追いかけるように城の中へと入った。

日の光りが差し込む窓と壁にはランプが点々とある長い絨毯の敷かれた廊下と階段を進み、普段から使っている部屋に着くと装備を解除して皆動きやすい服装へと変える。

着ている物が変わると、不思議と心も軽くなる気がした。

その時、サラザが申し訳なさそうに眉をひそめ、エリエに声を掛けてきた。

「ごめんなさいね、エリー。あんまり役に立たなくて……」

「ううんそんなことないよ。ありがとうねサラザ。そうだ！ 今からお菓子作るから食べてかない？」

「そうね。でもいいわ。また後日、皆で寄らせてもらうわ。今回は私達も疲れたから、帰らせてもらうわね」

サラザがそう言うと、オカマイスター達も無言のまま頷いて部屋を出ていった。

その後姿はどこか寂しそうだ――。

だが、それも仕方ないだろう。今回の戦闘では、最後の首領の男に手も足も出なかったと言っている。

それがオカマイスターの心に強く残っているのだろう。しかし、それはエリエも同じだ。今、この部屋に居るのは正直気まずい。

結果として、星を救出したのはライラだ――エリエもあの首領の男には苦戦した。しかも、最後に引導を渡したのは覚醒した星の出現によるもので、実質的にあの男に勝ったとはいえない。

だからと言って、もちろん彼女達の戦闘力が必ずしも、彼に劣っていたわけではなく。要因として大きいのは彼の固有スキルと、敵の持っていたトレジャーアイテムの保有する武器スキルだろう。

本来、トレジャーアイテムは固有スキルの弱い者達への補助アイテムとして生まれたものだった。だが、それは運営サイドの意向であり、結果的に取得する為のクエストの高難易度化とその高額な値段から、高レベルプレイヤーしかゲットすることができない物となっていく。最終的にお金持ちといい固有スキル所持者という事実を把握しきれておらず。

ただただ、強い固有スキルを持つ者の補助または強化アイテムと成

り果ててしまっていた。

クリア難度の低いダンジョンや、大規模な討伐用チームを結成して順番にドロップさせるという手もあるが、これは即席のパーティーでは難しく。主にギルドがこのやり方をしてトレジャーアイテムをゲットしていた。

そしてエリエ達の戦った彼が持っていたのも、トレジャーアイテムの中でも更に上の代物。

それと戦って、無事に帰って来ただけでも良しとすべき代物なのだ――。

だとしてもエリエ達があまりにも無力であった事実が変わりなく、できればサラザ達にもいて欲しかったとエリエは切実に思っていた。急に心細さを感じて、ぼーっとしていたエリエの視界に突如、ミレイニの顔が入ってきた。

「お菓子作ってくれるの!? あたしも早くお菓子食べたいし! 作って作って〜」

「……あつ、うん。そうだね、約束してたもんね」「うん!」

ミレイニはエリエの手を引くと「早くキッチンに行くし」と強引に、エリエをキッチンに引っ張っていく。

エリエ達が居なくなると、リビングにはぎくしゃくとした雰囲気の流れていた。

イシエルはテーブルの反対側に座っているライラを睨みつけている。

その刺すような視線を受けながら、ライラは終始満面の笑みでその視線に応えていた。だが、その隣には先程まで居たエミルの姿はない。

その頃エミルは、眠っている星を寝かせる為に隣の寝室にいたのだ。

ベッドの上でぐっすり眠っている星の体に布団を掛けると、エミルは安心した様子でにっこりと微笑んで、星の髪を掻き分けてその頬にそっと手を当てる。

優しく微笑むと、すやすやと寝息を立てて眠っている星に声をかけた。

「——おかりなさい。星ちゃん。エリーから話は聞いたわ。偉かったわね……」

次の瞬間。優しく星の頬を撫でているエミルの瞳から、不意に涙が溢れてきた。

「……でも。もう……こういうのは……なしよ？ ……分かったわね？」

エミルは服の袖で涙を拭うと、寝ている星のおでこに優しくキスをして寝室を後にした。

リビングに戻ったエミルは、テーブルを挟んでなおもいがみ合っている2人を見て、呆れ顔で深いため息を漏らす。

すると、ライラがエミルのことを呼ぶように手招きする。

その仕草にすぐにエミルが彼女の方へと向かうと、促されるままに彼女の横の席に腰を下ろした。

ライラはエミルの腕を強引に引くと、イシエルは先程よりも強く睨みつけて鋭い殺気を放つ。

そんな中、エリエが焼いていたホイップクリームをたっぷり乗せたケーキを持って、リビングに戻ってきた。

「うわあ……なんだろう。この気まずい雰囲気……」

「——隙あり！」

その横から涎をたらしながらケーキを凝視していたミレイニが、隙を見てケーキに手を伸ばすとエリエは分かっていた様にその手を難なくかわす。

エリエは悔しそうに指を加えるミレイニに「こら！」と一言だけ言い放つと、持っていたケーキをテーブルの中央に置いた。

何とも言えない張り詰めた空気感に息が詰まりになりながらも、エリエはぎこちなく微笑みながら皆に声を掛けた。

「ほ、ほらー！ 久しぶりだし。ケーキでも食べてのんびりしようよ！

みんなが帰って来るまで、まだ時間あるだろうしきさ！」

「そ、そうよね。皆も頂きましゅうー！」

エミルはエリエに便乗するように2人にそう告げると、ナイフを持ってケーキを切り分ける。

その様子を見て、エミルは少しほっとしながら、今度はレモンティーを入れにキッチンへと戻った。

しばらくしてエリエが紅茶を入れたカップをトレイの上に置いて持ってくる、すでに切り分けられているケーキの側に置いていく。

エリエはミレイニの隣に腰を下ろすと、目でエミルに合図を送る。その直後、両手を合わせながらライラとイシエルに告げる。

「さあ、せつかくですし。食べましょー！ 紅茶も冷めてしまおうしー！」

「そうね。エミルがそう言うなら頂きましょーうかねー」

「……………」

ライラとイシエルは目の前にあるケーキにフォークを入れると、小さく切ったそれを口へと運んだ。すると、2人の硬かった表情が微妙に和らぐ。

それと同時に、周囲に立ち込めていた緊迫した雰囲気もいくらか和らいだように感じた。やはりどんな状況であつても女性は甘い物が好きということなのだろう。

仮想現実の世界とはいえ、五感を再現しているこの世界では、しっかりと味覚も存在しており、料理スキルに至っても誰が作っても短時間の作業で同じ味になる為、オリジナルの味を出したい人はスキルを使わずに、時間を掛けて調理すれば自分なりの味を再現することも作り出すことも可能なのだ。

そんな雰囲気になっていることを知ってかしらさずか、ミレイニは嬉しそうにケーキを口一杯に頬張っている。もう。その姿は頬袋に食べ物溜め込んでいるリスの様だ――。

「ほえ、ふんぐおいひひー」

「こら、食べ物をお口に入れたまま喋らない！ それにミレイニ。口の周りもクリームでベタベタじゃないの！」

エリエはタオルを手にとると、口の周りを生クリームで真っ白にしているミレイニの顔を拭う。

もぐもぐと動かしていたミレイニは口の中の物を飲み込むと、エリ

エに向かつてにつこりと笑った。

「ありがとうだし！」

「全く、子供なんだから……」

エリエは少し呆れながらそう呟くと、部屋の中を見渡した。

その後、首を傾げながらエミルに尋ねる。

「ねえー、エミル姉。まだ私達しか帰ってきてないんだね。デイビッド大丈夫かな？」

少し不安そうな顔をしているエリエ。

エリエとしては、ライラがすぐにデイビッド達も城まで送り届けてくれると思っていたのだろう。

もちろん。ライラもデイビッド達を呼び戻そうと一度はいつたのだが、ダークブレットのメンバーとマスターの友人だけ残して自分だけ帰る訳にはいかないと断られてしまった。

しかも、ライラの話によると、彼は戦闘で大きく負傷したという話も聞かされていたから気が気ではない。

肩を落とす彼女に、エミルは優しく微笑みを浮かべた。

「エリー大丈夫よ。パーティーの中の名前は消えてないし。フレンドの方にも名前が残っているという事は、無事だって証拠でしょ？」

きつと今こっちに向かっているわ。でも、どうしても言うなら、メッセージを送ってみたら？」

「うーん」

エリエはその案を聞いて、少し考える素振りを見せたまま、その場に固まっている。

数分考えた結果、諦めたようにため息を漏らして徐ろに口を開く。

「——やっぱりいいや。無事である事は分かっているんだし。それに皆強いしね！」

「ふふつ、そうね。とくにデイビッドは強いものね」

「ちよー！ エミル姉！ なんでそこで一番激弱なデイビッドが出てくるのよー！」

エミルはいたずらな笑みを浮かべると、エリエが顔を真っ赤にしなから叫ぶ。

そんな2人のやり取りを見ながら、紅茶を飲んでいたライラが徐ろに席を立つと、エミルの腕に強引に腕を回してエミルを立たせた。「さてと、お腹もいっぱいになったし。ちよつと食後の運動でもしようかしらね〜♪」

「ちよつと、お姉様!? う、運動つて……?」

驚き慌てふためくエミルの耳元でそつとささやくように告げる。

「女の子が2人でこつそりする運動なんて……あれしかないでしょ?」

エミルは何をされるか分かったのか、その表情が一気に青ざめる。そんな彼女を半ば強制的に部屋から連れ出そうとする。

去り際にエリエに「星ちゃんをよろしくね」と言い残し、エミルは他の部屋へと連れていかれてしまう。

「うわあ〜。相変わらずライ姉はなんというか、強引よねえ……」

呆然とその光景を目の当たりにしていたエリエが無意識に呟くと、隣でケーキを食べていたミレイニが不思議そうに首を傾げると。

「ねえー。女の子が2人でこつそりする運動つてなんだし?」

「……………」

顔を耳まで真っ赤に染めると、照れ隠しなのかエリエがミレイニの頬を掴んで引つ張る。

「あんたにはまだ早い!!」

「いはいし! あはしなにもわういことひてないのほに〜!」

手足をバタつかせながら、ミレイニが全力で抗議する。

エリエはそんな彼女の頬から手を放すと、ミレイニは両手で頬を撫でた。

もはや見慣れた光景となったこのやり取りの後、イシエルが不機嫌そうにエリエに話し掛けてきた。

「エリエちゃん? なんなん、あの感じ悪い人。すごく腹が立つんやけど」

「ああ、イシエルさんは知らないのか。ライ姉……いや、あの人はイシエルさんより前にギルドに居た人で、うちのギルドの中でも珍しい固有スキルの持ち主なの」

「そら分かってる！ 今はそないなことどうでもええんよ！ うちが聞きたいんは、いったいエミルとどないな関係かつちゆうことだけや!!」

イシエルは完全に取り乱しているのか、普段のおっとりとした話し方ではない。

今にも飛び掛つてきそうなイシエルに、エリエは苦笑いを浮かべながら聞き返す。

「ど、どういう関係つて……?」

「なんや?! エリエちゃんは分からんの!? 女が2人。部屋に行つてやることなんて、なにするに決まつとるやん!!」

「……いや、そう言われても……」

凄じい剣幕で言い放つイシエルに、ただただエリエは顔を真赤に染めたままじろぐばかりだ。

イシエルは不機嫌そうにそんなエリエを睨むと「これやからお子様は困るんや」と毒づく。

その低くて含みを持たせたような声音に、エリエの背筋に悪寒が走る。まるで心臓を鷲掴みにされる様なその声音に、エリエももう何も言えなくなってしまう。

イシエルはエリエから離れると、顎の下に指を当てて考える。

「あの泥棒猫。どうしてやろうかしら……もういつそのこと、事故を装つて殺したろうか……」

彼女は考えていることが駄々漏れになっているのに気付いていないようで、その後も人には聞かせられないような言葉を次々に口走っている。

その何とも言えない殺気に満ちた不気味な表情を見て、ミレイニも無言のまま、エリエの背中に隠れるようにして震えている。

おそらく。ミレイニの中の野生の勘が危険だと言っているのだろう。

しばらくして、イシエルは不気味に笑うと。

「ちよつと出掛けてくるな〜」

つとだけ言つて、2人に優しく微笑んで部屋を出ていった。

だが、2人は見ていた。横を通って行くイシエルの横顔が、まるで鬼の様な形相に変わっていたことを……。

イシエルが出ていった直後、エリエに抱き付いていたミレイニが地面にへたり込む。

「ちよつと、大丈夫!？」

「うう……うわくん。怖かった……すごく怖かったし……」

急に泣き出したミレイニをあやす様に頭を優しく撫でるエリエ。

だが、イシエルがエミル達の元へいったのはエリエにも分かっていたが、それをどうこうできるわけもなく。これはもう、全てを天に任せるしかない。つとエリエは少し諦め半分にそう考えていた。

ライラの正体2

ライラと一緒に出ていったエミルは、強引に腕を引っ張って廊下を進むライラに困惑した様な表情を浮かべていた。

それは今から起こるであろうことへの不安と不満が、彼女の足取りを重くさせていたのは言うまでもない。

普段のエミルなら絶対にこんな行いはしない。だいたい『お姉様』と慕っていた彼女が一線を越えようとして、彼女達は不仲になったのだ——まあ、エミルが軽蔑して一方的に毛嫌いしただけだが……。

しかし、断れば間違いなくライラという人物が、星に手を出すのは分かっていたし。もしそうなればあの小心者の星のことだ、あつという間にライラの毒牙にかかるのは分かりきっていた。

エミルの脳裏には強引にベッドに押し倒されて、彼女にいいように弄ばれる星の姿が鮮明に映っていた。いや、星が抵抗しないのをいいことに、更に激しいことを要求されるかもしれない。

そう思うと、ぞつとする。エミルはその妄想を振り払う様に頭を振ると、決意に満ちた瞳で前を歩く緩みきったライラの顔を見つめた。
(あの子にそんなこと絶対させない。この女は絶対に私が抑えておかないと……)

そんなことを考えながら、上機嫌で手を引いて先に行くライラの背中に続く。

鮮やかな絨毯の敷かれた廊下を進み、中央の螺旋階段を上がって更にしばらく歩いていくと、前を歩いていたライラの足が止まる。その先には一つの扉があった。

扉を開け放ち、ライラは突然エミルの背中に回り込むと、彼女の体を押して強引に部屋へと追いやる。

部屋の中はまだ昼間だというのに、全ての窓がカーテンで閉めきられていて薄暗い。

こんな部屋は城を持っているエミル本人すら知らない。エミルは警戒した様子で部屋の中を注意深く見渡す。

中には茶色い下地にいくつもの薔薇の模様が刺繍されたカーテン

があり、中央にはピンク色のレースの天蓋の付いたいかにもと言いたくなるベッドが置いてある。

その他にも、西洋風のティーセットの飾られた家具、ランプなどのインテリアやぬいぐるみ、クッションなどと言った様々な物が部屋中に散りばめられている。

それはおそらく、ライラの趣味なのだろう。だが、忘れてはいはいけないのは、ここはエミルの城だと言うことだ。にも拘わらず、彼女の知らない部屋が存在している。

つということは、以前同じギルドに居た時にこつそりとエミルの目を盗んで作成していたということになる。

「こんな部屋があるなんて……知らなかったわ……」

驚愕しながら自分の城だと言うのに、初めて見た部屋の中を、興味ありげに歩き回っているエミル。

その直後、部屋の扉が閉まる音とともに、突き飛ばされるように目の前にあるベッドに倒れ込んだ。

前屈みにベッドに倒れたエミルが慌てて上を向くと、そこには覆い被さるようにならぬ自分で自分を見下ろすライラの姿があった。

慌てて体を起こそうとしたエミルの腕に、チクツと一瞬だが鋭い痛みが走る。すると、みるみるうちに全身の力が抜け、自分の意志とは関係なくベッドに戻されていく。

「なっ……」

「ふふふっ、今更抵抗しようたって無駄よ？」

「お、お姉様……なにを……」

驚いているエミルがそう尋ねると、ライラは手に持った小型のナイフをエミルに見せる。

それを見た瞬間、エミルは驚きのあまり目を見開いた。だが、その反応はむしろ当然のことだ。システム上ではダンジョン以外の建物内ではプレイヤーは武器などの他のプレイヤーに対して影響を与えない。そのような物は使用できない。

もちろん。その建物の所有者が許可していれば可能だが、エミルはそんなことをシステムに許可した覚えはない。

本来は包丁などの料理器具やダーツの様な娯楽用の道具にいたるまで、非戦闘地域である室内で使う様な戦闘武器ではない物は、ゲーム内最低ダメージ値の『1』を下回る『0』で設定されている。

言うなれば、生活には必要だが人体に何の影響も与えない『非武器』と呼ばれるアイテムだ。

これは屋外にある内は、全てが家主の管轄に置かれた非戦闘用武器扱いになり特別にダメージはなくなる。

最小ダメージ値が『1』で武器ダメージが固定されているのは、戦闘行為OKの屋外やフィールド。屋内では寝ている間に包丁で滅多刺しにされる危険を防ぐ為、ダメージを受けない仕様になっている。

もちろん。屋内に監禁されている場合も例外ではなく。プレイヤーに負傷、ダメージ共に与えることは許されていない。

これは家主が許可していても同様だ——しかし、今日の前のライラが握っているそれは明らかに戦闘用に使うサバイバルナイフだ。

本来ならば、設定によって装備することすらありえないことだが、ライラにそれができてもおかしくはない。何故かというと、彼女の固有スキル『テレポート』は本来移動できる効果範囲が決まっていた。

だが、彼女がドラゴンを使っても片道2日は掛かる距離を、彼女は一瞬で飛んで見せたのだ——つまり、彼女は何らかの特例に基づいて、固有スキルを使用していることになり。そんな彼女が非戦闘地域である屋内で、武器を使用できてもなんら不思議はないのである。

そしてライラの性格を考えると、エミルには彼女はこれで何をしようとしているのかが容易に想像できた。

胸元に突き付けられたナイフがゆっくりと、体のラインに沿ってエミルの服だけを見事に切り開いていく……。

徐々に剥がされていく服に、エミルは恐怖すら覚え始めた。

「なっ……おっ、お姉様……そんな……」

「うふふっ、あまり声を出すと……間違つて肌まで切れちゃうわよ？」

エ・ミ・ル……」

恐怖から不安そうな表情を見せるエミルの耳元でそつとささやくと、震えるその顔を見て悪戯に笑うライラ。

切った服をゆつくりと脱がせると、ライラが持っていたナイフの腹がエミルの頬に当たる。

「あっ……いや……」

体に力が入らない状態のエミルは、声にならない悲鳴を上げるだけで全く抵抗できない。

そんな彼女の反応を楽しむかの様に、ライラは持っていたナイフの先をエミルの体の至る場所に押し当てる。

彼女のまるで小動物でも虐めるかのような瞳と、その鉄の冷たい感覚がエミルの恐怖心を煽っていく。

小刻みに震えるエミルの耳元にふーっと息を吹きかける。

その瞬間。エミルの体が無意識にビクツと震え、そんな彼女の耳元でライラが熱を帯びた声で優しくささやくように言った。

「エミル、本当に可愛いわ。その青くて透き通るような髪も。その涙で潤んだ青い瞳も。そして……その甘い声も、全てを私色に染め上げたかった……」

ライラはゆつくりとエミルの首に指を押し当て、体を撫でるようにして胸元に手を持っていくと、エミルの大きな膨らみを片手で鷲掴みにした。

「……そ、そんなところ……」

「エミルのここは前より大きくなったわねえ。それにすつごく柔らかい」

「あっ……ダメです。おねえさま……」

その感觸を堪能するように優しく揉みしだくと、エミルは甘い声を漏らす。

「ふふっ、そろそろ頃合いね……」

ライラは不敵な笑みを浮かべると、エミルの胸の突起を指で思い切り抓り上げる。

「いやあああああっ!!」

その突然の刺激に、エミルは体を跳ね上げるようにして悲鳴を上げた。

直後、エミルの耳に今までの優しい声音ではなく。まるで別人の様

なライラの低く狂気に満ちた声が飛び込んでくる。

その声音は、明らかに殺意に満ちていた。

「……残念よ、エミル。貴女を疑うことになる日が来るなんて……」

「……なっ、なにを……お姉様。痛い！ 痛いです!!」

敏感な部分を更に強く抓られ、エミルが苦痛で表情を歪める。

そんな苦しそうに悶える彼女に、ライラがなおも言葉を続けた。

「人が最も口が軽くなる時……それはベッドの上よ。これはエージェントとしての常識……さあ、答えなさい。どうして貴方があの子——いや、博士の忘れ形見。夜空星に近づいたのかを……」

「痛い……痛い……」

痛みと困惑からその質問の意味が理解できず、エミルはただただ涙を流す。

「痛みから逃れたかったら、薄情なさい!!」

そんな彼女にライラは執拗なまでに問い掛ける。すでに先程までの微笑みを浮かべる彼女はそこには居なかった。

まるで別人の様な彼女の豹変ぶりに、さすがのエミルも困惑するばかりだ。しかも、全身を電気のように駆け巡る鋭い痛みで自慢の頭も回らない。だが、エミルは想像を絶する様な痛みから『痛い』以外の言葉が出てこない。

声にならない声でひたすら痛いと言口にするエミルに、怒りを露わにしたライラが声を掛けた。

「——痛くて当然よ。貴女に投与したのは痛覚を通常の数十倍にする薬——しかも麻痺のおまけ付きよ……今のその痛みは、例えるなら全身の皮を剥いで塩を練り込んだ時くらいかしらね」

全身から汗を吹き出し、痛みで悶絶しているエミルの体から手を放すと、ライラは今度は優しく諭すように告げた。

「さあ、あの子に手を出した理由を教えて?」

アメとムチを使い分け、巧みにエミルの心の内を露わにさせようとするライラ。

体が麻痺して痛みで脳が麻痺している中、エミルの涙で滲んだ虚ろな瞳が視線の先の微笑みを浮かべるライラの姿を映す。

「はあ……はあ……それは……」

「……それは？」

ライラが聞き返すと、思考が完全にストップしたエミルは息を整えて小さく呟いた。

「あの子が……星ちゃんが好きだから……」

エミルはライラの目を見て真剣に答えた。

その真っ直ぐな瞳を見て、ライラが「そう」と短く告るとにつこりと微笑む。

エミルはほつとしたのか、大きく息を吐いて瞼を閉じる。

『これで何もかもが終わった。後はこの痛みからも開放される』

そうエミルは思った……。

その直後、エミルの体を更なる激痛が襲った。

「きゃあああああああああああああああああッ!!」

エミルのけたたましいその叫び声が城内にこだまし、それを聞きつけたイシエルがドアを叩く。

「エミル！ エミル!! なにしとるん?! 早くここを開けてッ!!」

ドンドンと激しくドアを叩く大きな音が部屋の中に響く。すると、ドア越しのイシエルに向かってライラが声を発した。

「無駄よ。この部屋のコントロール権はこちらにある。せつかくエミルを貴女から離れたんですから、このチャンスは絶対に物にする!」

ライラはドアから、あまりの苦痛に気を失ったエミルの方に視線を戻した。エミルの腹部には先程までライラの持っていたナイフが、痛々しく突き刺さっている。

ライラはコマンドを操作すると、注射針の付いた器具を取り出し、躊躇なくエミルの腕に突き刺した。

「……まだおねんねするには早いわよ。エミル」

器具のガラス管の中の液体がエミルの中に全て消えると次の瞬間、エミルが飛び起き、荒い呼吸を繰り返しながら再び襲ってきた激痛にエミルは白目をむくが、今度は気を失うこともできずにすぐに正気を取り戻す。おそらく、それも先程の薬の効力なのだろう。

まるで、酸欠になった金魚のように口をぱくぱくと動かしているエ

ミルに、ライラが告げる。

「そんな子供じみた理由で、この私を騙せると思った……？ 一番最初の薬の効果で聴覚も上がっているから、この程度の苦痛でも聞こえているはずよ。もう一度聞くわよ？ あの子との接触を試みた貴女の本当の目的はなに？ 事と次第によつては、ここで死んでもらうわ……最初にあの子に触れたエルフの男の様に……」

「……さつきも言った通りよ……ライラ。私はあの子が好きだから一緒に居るの……それ以上でも以下でもないわ！」

「そう。残念ね……なら、昔の好みで一瞬で殺してあげる……」

返答を聞くと、冷徹な声でそう言ったライラの手には、今度は別のナイフが握られている。

大きく振り上げたそれを振り下そうとした直後、2人の視界が金色の光りに包まれた。突如発生したその光に、今まで圧倒的に優勢だと思っていたライラがあからさまに慌て出す。

「この輝きはー オーバーレイ!!」

すると、今度は脳の中に直接声が送り込まれてきた。

『これ以上の戦闘行為は認めません。今すぐ武器を収めて下さい』

「……くっ、あの子の声……でも、まだ眠っているはず。効き目が切れるのは翌朝なのに。どうして今……」

困惑しながらも、星の音が言う通り。あっさりとライラは手に持っていたナイフをアイテムの中に戻す。

彼女が口にした『オーバーレイ』がなんだかは分からないものの、エリエとダークブレットの首領の男との戦闘中に使用したものと全く同じものだろう。

全てのステータスが突如『1』に下げられた状態を見ると、この固有スキルは屋内の非戦闘地域でも関係なく発動が可能らしい。その直後、ドアが勢い良く開いて部屋の中にイシエルが飛び込んでくる。イシエルは殺気を漲らせながらゆっくりとライラの元へ来ると、低い声で告げる。

「——はようエミルから離れなはれ！ ……さもないと、今度はうちがあんたを殺すことになるえ？」

先程の星の声が聞こえていたのか、イシエルは今にも殴りかかりそうに拳を握り締めながら、歯を噛み締めている。

ライラは諦めたように「降参よ……」と小さく告げると、潔く両手を上げた。

その後、事が治まると、イシエルはライラから奪った解毒剤をエミルに投与し、混乱を避けるべく何事もなかったかのようにエリエ達のいる部屋に戻った3人——その瞳に映ったのは、金色に輝く『エクスカリバー』を握り締めた星とテーブルを挟んで距離を取りながら、どうにかなだめようとしているエリエ達の姿だった。

ライラの正体3

エクスカリバーを握り締めた星が、その場で勢い良くジャンプした。

テーブルに着地した星は剣を構え、エリエに向かってその剣先を向けている。その表情は無表情ながらも、その姿からは闘志が満ち満ちていた。

「——私に抱きつくとは……戦闘の意思があるのですか？」

「いや、ない。戦闘の意思なんて全然ない！抱きつくなんて、ただのスキンシップじゃない！」

剣先を向けられ、エリエは胸の前に小さく両手を上げて必死に頭をブンブンと振った。

星のその姿は、明らかに何者かが憑依していると思えないほどの別人ぶりだ——慌てふためくエリエに寄り添うようにしていたミレイニが、星を指差して叫ぶ。

「絶対様子がおかしいし！その瞳から、まるで生気がないみたいだし。人形としか——」

光を失い虚ろな目の星を指差してそう口にするミレイニの口を慌てて覆うエリエ。

その直後、星がテーブルから勢い良く飛び掛ってくる。

2人は横に転がりながらかわす。まあ、ミレイニはエリエに後ろから突き飛ばされたかたちなのだが……。

その後、すぐに転がりながら、咄嗟に星から距離を取った。

星は虚ろな瞳を2人に向けると、直ぐ様自分の前に剣を構え直す。

「……次ははずさない」

その直後、エミル達の隣に立っていたはずのライラが自分の腕に躊躇なく注射器を刺した。すると、固有スキルにより一瞬で姿を消して、次の瞬間には星の背後に現れ、彼女の体を羽交い締めにする。

星は抵抗しようと体を捻るが、両腕をがっしりと掴んでいるライラを振り解くことはできない。

本来ならば、星の固有スキル『ソードマスターオーバーレイ』で、全

ステータスが『1』しかないライラに、皆のステータスからまでも吸収し、自身のステータスを極限まで強化している星を止めることは不可能。

しかし、今はそれが可能になっているということは、ライラが先程自らの腕に突き刺した注射器の薬液の効果なのだろう。

「放せ！　こんな事をゲームマスターである私にして、ただで済むと思っっているのですか!!」

「ふふっ、両手を封じられている状況でどうするの？」

ライラが何をしたのか分からないが、その表情から見て余裕があるのか、微かに笑みを浮かべている。そんな時、星の前にエミルがやってきて困惑した表情で尋ねる。

「——ど、どうしたの？　そんな事する子じゃなかったでしょ？」

「うるさい！　皆、戦闘行為を行うなら、私の敵でしかない！」

「落ち着いて！　星ちゃん!!」

その直後、ライラがわざと腕の力を弱めその腕を振り払った星がエミルに襲い掛かる。

今の星は記憶が曖昧で、言わば防衛本能で暴れているだけに過ぎない。そんな彼女は目に入るもの全てが、自分に危害を加える可能性がある脅威でしかないのだろう……。

星がエミルに襲い掛かる光景を目の当たりにして、エリエが大きな声で叫んだ。

「エミル姉危ない!!　星、もう止めてよ!!」

「——ッ!？」

彼女の声に反応したのか、星の振り下ろした剣がエミルに当たる寸前で止まった。

寸止したままプルプルと震える手で握っている剣が、カタカタと音を立てている。

次の瞬間。再び星の背後、レポートしたライラの手に握られていたナイフの先端が星の腕に軽く触れた。すると、星は崩れるように地面に倒れ。今までのことが嘘の様にすやすやと寝息を立てている。

ライラはそれを確認して安堵のため息をつく、持っていたナイフ

をしまった。

驚いた様に目を丸くさせている皆を見ると、ライラが軽々と星を抱き上げる。

「さてと……」

「ちよつとー！ 星ちゃんをどこに連れて行くの!？」

血相を変えてエミルがライラの服を慌てて掴む。立った状態でライラは、前を向いたまま視線を合わせることなく告げた。

「さつきは一本しかない薬でこの子の能力を無効化したけど、これはもうこの世界にはないの……だから、私達の組織のラボに連れて行くのよ」

ライラは振り返って笑みを浮かべると「心配なら、貴女も付いてらっしゃい」と呟き、エミルの視界が一瞬真っ白な光りに包まれる。

次に視界が戻ると、そこは研究室のような場所で当たりには精密機器やモニターが並んでいる。そう。そこはダークブレットの基地の中で、ライラと出会ったエリエが一度訪れた場所だった。

不思議そうに辺りを見渡すエミルを余所に、ライラは星を抱き抱えたまま、モニターの前に歩みを進めた。彼女の後をエミルも急いで追いかける。

ライラがモニターの前に立つと、モニターが突然起動し、そこに大きな『X』の文字が現れる。

直後。操作盤の上の壁に掛けられた巨大なモニターから声が聞こえてきた。

『——おお、ライラ君。どうだったんだい?』

「ええ、ミスター。ミスターの予想通りでした。この子は記憶が消えているというか……まだ深層心理の中では、記憶がしっかりと残っています。まだ自我が残っている今なら完全復旧できそうですわ」

『そうか……さすがは博士の娘さんだ。ならば、さっそく作業を始めようー!』

「ええ」

そのやり取りを聞いていたエミルが、その会話に割り込むように声を発した。

「ちよつと待つて！ 話が全然見えないのだけど……星ちゃんになに
する気!？」

「……エミル。貴女も見たでしょ？ この子は今、記憶を失われている。
エリエや貴女が襲われた事で、もう分かったと思うけど……」

「それが何？ 所詮はゲームの中でだけのことでしょ？」

ライラは不思議そうに首を傾げて聞き返してくるエミルに目を向
けると、呆れながらため息を吐く。

それを少し不機嫌そうに眉をひそめながらエミルが見つめる。そ
の直後、ライラが徐ろに口を開く。

「いい？ これはゲームであつてゲームではない。言わば、もう一つ
の世界なの。だから、こちらで失われた物は向こうでも失われてしま
う。不思議だと思わない？ もうこのゲームが開発されて数年経つ
ている。けど、どうしてVR系のゲームがこれ一本しかないのか
……」

「そ、そんなの。単にこのゲームが人気過ぎるからでしょ？ 本来R
MTを採用しているゲームの方が珍しいもの。だから他のメーカー
が参入し難くなっているだけだと思っけど？」

怪訝そうに眉をひそめながらエミルが答えると、ライラはその返答
に呆れたように首を振った。

「不正解よ。それはこのゲーム事態がゲーム会社ではなく。ある機関
で開発されたものだからよ。その研究は世界的に注目されている新
時代の技術。そしてミスターは、その開発者にして考案者なのよ」

「これはゲームではないの!？」

『いや、ゲームだよお嬢さん——しかし、ゲームと言うよりは『近未来
の移住型システム』と言うべきかな？ これがあれば、死者も意識の
塊として、このゲーム内で永遠に生きる事ができる。まさに禁断の
ゲームだ……』

モニター越しの男の声は妙に緊迫した感じで、本来なら信じられな
いようなその内容をエミルは素直に受け入れることができた。

そしてその直後、モニターの男が予想だにしていなかったとんでも
ないことを言い放つ。

『もちろん。実際に開発したのは私だが、その考案はその子——星ちゃんのお父様が考えたものだ。大空博士の作ったこのシステムは、全身の水分に直接電気信号を乗せて、脳の海馬に自然なたちで刺激を与える事に成功した。対象者の記憶と意識を一時的に分離する——皆は記憶転移だと言っている【メモリーズ】を利用した技術だ』
その話を聞いてエミルは驚愕する。

だが、それも無理はない話だ——素人のエミルが聞いても、そのシステムの内容は危険極まりないものだったからだ。

確かにフリーダムのメインハードはブレスレット状という大掛かりなものではなく、簡易的なシステムと言わざるを得ない。

本来は脳波に何らかのアプローチを行うに適しているのは、頭をすつぽりと覆うヘルメットタイプが一般的だと思っていた。しかし、その設計を行う段階でヘルメット型じゃ脳にダメージが大き過ぎるということが分かった。微量の電磁波でも頭痛や吐き気がきてしまう……それを解消する為に、元々体に流れている電気信号に一定の刺激を与え続けることで催眠効果を得られる様にしたのが、あのブレスレット型のハードなのだ。

注射の時に針を皮膚に刺すとその痛みが脳に記憶として刻まれる。それはその程度の痛みでも人間の脳にある海馬を刺激できるということの現れでもある。だが、注射針程度の刺激でも脳は活性化して覚醒状態になってしまうという。しかし、適度な電気をリズムカルに体に流せば、その逆に心地良さを覚えて人は睡眠状態に入る。

それを利用したのがブレスレット型のハードであり、光と特定の周波数の信号を送ることで一種の催眠効果を与えて記憶を抜き取ることを可能にし、その記憶をデータ化して別の機械に一時的に保存することで機器同士の転送を可能にしたのである。

だが、記憶を一時的に分離する。という部分だけ切り取って聞いても身の毛もよだつものだ。

それは言うなれば『体を必要としない不死の技術』そして『メモリーズ——記憶転移技術』によって分離した記憶と、クローン技術で生み出した身体を合わせれば、何度でも人生をセーブしてやり直せるとい

うことに他ならない。それはまさに、聖職者にしてみたら神に唾吐く行為なのだ――。

驚きを隠せないと言った表情のエミルに、モニターの中の男の話す声が響く。

『もちろん。博士はそのような事を望まなかった。それが原因で人類の未来を破壊する訳にはいかないと、食物連鎖の中で、人は無限に生き続けてはならないとね』

その時、ふとエミルの頭に疑問が浮かぶ。

それは――。

『ならば、どうして星の父――大空博士はメモリーズのデータを削除しなかったのか……そして、どうしてそんな危険な技術をゲームなんという大衆の娯楽に利用したのか……』ということだ……。

これは開発者である博士の考えがあったとのこと、エミルにはいくら考えてもその真意を理解できないものなのだろう。

本来ならば、厳重に隔離しなければいけないような技術なのは明白であり、それを隠蔽するどころか、あろうことか包み隠さずにゲーム制作の材料として利用させている。

こんなことは常識的にあってはならないのだ――だがそれも一つ間違えれば、反乱が起き兼ねない。

エミルはその疑問を素直にモニターの越しに男に尋ねた。

「……どうして、そんな重要な技術を【FREEDOM】のゲームシステムに利用したんですか？」

彼女のその質問にモニター越しの男が答える。

『それは簡単だ。博士が命を狙われていたからさ――博士は国の機関で研究者として働いていた。そして「メモリーズ」と言われる特殊な電気信号の数値を発見したんだ。だが、国はその研究を政治や軍事開発に利用しようとした。彼等にとっては、開発者にしてそれに異を唱える博士が邪魔だったのだろうね。そこで博士は我々の組織に、研究内容の保護を個人的に依頼してきたのさ。このゲーム開発と一緒にね。博士は言っていたよ「この技術はまだ人類には早すぎる。この世から争いがなくなるまでは、隠蔽しておかなければならない」と。し

かし、研究データと共に消えた博士の行為は国としては裏切り行為と取られたんだろうね……博士を狙う人間は更に増えた。そして、博士はこのゲーム開発に乗り出したんだ。博士は言ってたよ「木を隠すなら森の中。データを隠すならデータの中。そしてそれが多くの人の目に触れる場所ならば尚の事、手を出し難くなる」てね!」

「なるほど。それでゲームに……なら、貴方達の組織とは……?」

核心に迫る彼女の質問に数十秒の沈黙の後、モニター越しから再び言葉が帰ってきた。

『国連の組織……としか言えない。彼等はどこにでもいて、今も私達科学者の技術を狙っている。戦争を起こす為にね……』

モニターから顔を見せない彼のその言葉を聞いて、急に重苦しい空気がなった。

それも当然だろう。急に『戦争』という物騒な単語が出てくれば、緊迫した雰囲気になるのは当然であり。それはまるで、雲を掴む様な話になってくる。

顔を見せない人物の言葉を真に受けていいのか、騙されているのではないのかと困惑した表情のエミルはそう考えていた。

正直。眠っている星を除けばライラ、エミルの2人しか彼の姿を見るものはいない。元々顔を知っているであろうライラを除けばエミルのみだ——いくら用心の為とはいえ、顔を見せて話をしないというのは、少し不誠実と言わざるをえないだろう。

怪訝な顔でモニターに大きく写る『X』の文字を見ているエミル。すると、その不穏な空気を感じ取ったライラが声を上げた。

「でも、ミスターは信用に足る人物よ。良く考えてみて? 新規参入したばかりの、しかも疑似体験型のゲームなんて何の暴動も起こらずに世界規模で流行ると思う?」

「確かに、今考えて見ればそうね……確かに小さな反対運動はあったけど、左程大きな騒動は起きなかった気がするわ」

顎の下に手を当てて考える素振りをしているエミルに、ライラが言葉続けた。

「ただ、我々は貴女達の敵ではないわ」

「……あんな事されて。今更、信じられるわけ無いでしょ？ ライラ」
鋭く睨むようにライラの顔を見たエミルに、ライラもさすがにバツ
が悪いのか眉をひそめている。

確かにそのエミルの言葉は最もだ。普通に考えれば、襲われた相手に信用してほしいと言われて、はいそうですかと信じられる者など居るはずがない。

ライラは小さくため息をついて、真剣な面持ちでエミルの顔を見つめた。

ライラの正体 4

ライラのその真っ直ぐな瞳に、エミルは彼女から慌てて顔を背けた。

「……ダメよ、そんな顔しつたつて。あんたみたいな女はそうやって人の良心を揺さぶるつもりなんだから!」

「はあく。まだまだ子供ね、エミル」

「——なっ、誰が子供ですつて!?!」

子供と言われたことが相当気に障つたのだろう。顔を真つ赤にしながら、涼しい顔をしているライラに突き刺すような視線が向けられた。

そんな彼女にライラが告げる。

「いい? あれはこの子に記憶が少しでも残っているか試したのよ」

「……せ、星ちゃんに? で、でも。どうしてそんな事するのよ! それに、なら事前に相談してくればいいじゃないの!」

「なら、事前に相談したら貴女は協力してくれたかしら?」

「ぐっ……そ、それは……」

そう。ライラの言う通り、エミルとライラはとても仲が悪い。いや、仲が悪いというよりは、仲が悪くなったという方が正しいかもしれない。

もちろんそれには意味があった。それは以前同じギルドに所属していた時のいざこざが関係していた。

それは彼女達が実際に会うリアルでの接触だ——オンラインゲームではゲームとリアルは別という考えが根強く、直接的な接触はご法度としているギルドも多い。

VRとは言え。それは体はそれぞれ別の場所にあり、日々の生活を送っている。

今はログアウトができなくなってしまう為にとて治安が悪くなってしまったが、元々は運営が厳しく管理し、危険が少しでもないようにと24時間街を巡回する憲兵や、狩場を見張るピクシーの様な存在が、防犯カメラ代わりに動き回っていた。

つまり、男性プレイヤーが女性プレイヤーに、何らかのちよつかいを出すということが難しかった訳だ。しかし、関係が深まるにつれて、相手のことを更に詳しく知りたくなるのも仕方のないことだろう。

そしてこの2人はマスターの承諾の後に直接会って、その時のライラの行動が議論となり、ライラはそれが原因でギルドを去ったのだった。

「大体、ちよつと可愛がつてあげたくらいで大袈裟なのよ。別に貴女の大事な物は残ってたでしょ?」

当時のことを全く悪びれる様子もなく、さらつと口にしたライラに、エミルの溜まりに溜まった怒りは爆発する。

「くううう、言うに事欠いて……………この直結厨!!」

「ふふつ、その言い方は侵害だわ。私はリアルもバーチャルも楽しんでるだけよ……………それに、貴女が最初に行くのはどこでもいいって言ったのが悪いんじゃないの。お互い楽しめて、時間を潰せる場所なんてあそこしかないでしょ?」

顔を真っ赤にしながら怒鳴るエミルに、ライラは彼女の反応を見て楽しそうに微笑みを浮かべている。

彼女のその余裕の表情に、エミルのすでに赤い顔が更に真っ赤に染まった。

2人が言い合いをしている中、モニターの男の声が部屋に響いた。

『2人共いい加減にきなさい! 今はいがみ合っている時じゃない!』

ライラ君。君も今は任務中だ。公私混同は避けてもらわないとね!』

「――申し訳ありません。ミスター」

「ご、ごめんなさい?」

同じ組織のライラが怒られるのは理解できるものの、エミルはどうして自分も怒られたのかと、頭上にはなマークを浮かべながらも、軽く頭を下げて謝った。

その後、モニターの声がエミルに向かって声を掛ける。

『いや、急に怒鳴って申し訳なかったね。実はこつちで色々調べてい

て、彼女の状態はあまりいいとは言えなくてね。ライラ君に今日中に何とかしてほしいと依頼していたんだが、まさかこんな事になるとは……」

その言葉を聞いてエミルの表情は、急に険しいものへと変わった。エミルは緊迫した声で、モニターの向こうにいるであろう男に尋ねる。

「——星ちゃんの状態が、そんなに悪いんですか？」

『ああ、残念ながら……しかし、ライラ君の報告によれば、急げば記憶の殆どを復旧できるだろう。だが——』

そう言葉を詰まらせた男に、ライラが少し強い口調で呟く。

「ミスター。今はどんな事があってもやらなければいけないでしょう？ 結果を求める為には、多少のリスクは付き物ですわ」

『分かった。これも彼女の為か……始めてくれライラ君！』

「ちよつと待って！ 始めるってなにを!？」

完全に話から置いてけぼりにされているエミルを余所に、ライラは辺りにある機械類を操作しだす。

困惑するエミルは慌てて、準備の為に寝ている星の両手足を台に固定するライラに歩み寄って肩を掴んだ。

「ちよつと！ 星ちゃんになにするつもりなの!？」

「……その手を放しなさい。エミル」

ぞつとするほどに殺気に満ちた声をライラが発した。エミルの背筋が凍り付くのを感じて、思わず彼女の肩から手を放してしまう。

再び作業を開始した彼女に、エミルが言葉をぶつける。

「どうしてライラ！ どうして星ちゃんがこんな事になったか説明しなさい！」

「どうして？ それは私も聞きたいわ。エミル」

「……それはどういう事？」

ライラのその冷たい言葉に、エミルはびくつと体を震わせる。

それは星を誘拐された落ち度が自分にもあったからかもしれない。

そんな中。ライラは星の服を強制的に解除すると、その体に準備していた機械類から伸びた配線の付いたパットを貼り付けていく。

その物々しい雰囲気にも物怖じせず、ライラに詰め寄ると、横目で睨んでくるライラに、エミルは重い口を開く。

「た、確かに私にも落ち度はあるわ……でも、城で何があったか説明する義務があると思うのだけど……?」

「……いいわ。それなら教えてあげるわね。私が救出に行つた時には、すでにこの子は拘束具付きの診察台の上で苦しんでいた。そう……こんなふうには……よ?」

作業を終わらせたライラが横の装置の赤いボタンを押した。

その直後、星は尋常ではないほどに苦しみ出す。

「わあああああああああああああッ!!」

「——星ちゃんッ!!」

慌てて機械を止めようと駆け寄つたエミルをテレポートで背後に回つたライラが腕を羽交い締めにして止める。

診察台の上で拘束され、悲鳴を上げている星を助けようとエミルが暴れ出す。しかし、思った以上に強いライラの腕の力に阻まれてしまう。

おそらく。星を止めた時の薬は今も効果が残っているのだろう。脇の下に腕を通され両腕をがっしりとホールドしているライラから逃れようと左右に体を捻るが、全く力が緩むこともない。

鋭く睨みつけてくるエミルの耳元で、ライラが不敵な笑みを浮かべながらささやく。

「ふふっ、貴女はそつちじゃないわ……」

次の瞬間、2人は白く輝く光りの中に包まれる。

瞼を開くと、エミルは少し高い位置から星を見下ろしていた。両手足は鉄製の拘束具でしっかりと壁に固定されて身動き一つ取れない。

エミルは地面でほくそ笑んでいるライラを鬼の様な形相で睨むと、大きな叫び声を上げる。

「……放しなさい! 放しなさいよ! ライラ!!」

目の前で苦しむ星に目を向け、エミルは焦りが募る。拘束具をギシギシと軋ませながら、エミルはライラの名前を叫び続ける。

何度も自分の名前を叫ぶエミルに、ライラが冷めた声色で告げる。

「……ダメよ。これが貴女の招いた結果なのだから……」

「なにを！ 自分より弱い者をいたぶって何とも思わない貴女に――
言われる筋合いはないわ!!」

「エミル、いいから聞きなさい」

ライラは感情を殺したような瞳で、診察台の上で悲鳴を上げ、もがき苦しむ星を見つめる。

「――記憶を取り戻すのは容易ではないの。あの子に付けた電磁発生装置は、脳の中の神経という神経に一度に刺激を与えて、脳の中にバックアップしていたデータを直接上書きする為、電気を流してアツプロードしていく。その痛みは、生身ならもう死んでいるほどよ？でも、ここはゲームの中。それにこの処置はPVPの「OVERKILL」状態を擬似的に起こす。この処置をまる2日続けるわ……」

「こんな状態をまる2日ですつて!?! ありえないわ……ライラ今すぐ装置を止めなさい!!」

この会話の間も、何度も失神と覚醒を繰り返しながら、悲痛な叫び声を上げ続ける星を見て、何もできないエミルは、自分の無力さを痛感し、その彼女の瞳からは止めどなく涙が溢れていた。

「……お願い……もう……やめて……」

苦しそうにもがく星を見て、涙を流しながらエミルは声にならない声でライラに訴える。しかし、ライラはその言葉を聞き入れることはなかった。

ライラはエミルの方に冷たい瞳を向け無慈悲に告げる。

「――貴女が泣こうが喚こうが、これは必要な処置なのよ。私は目の前の女の子よりも。この先に起こりうる被害を抑えなければいけない……残酷に思うけど、社会に出るといふ事はね。社会全体の利益を見るということでもあるのよ。個人の利益、利得、権利だけを主張すれば必ずいつか淘汰され消えていく。エミル、貴女も学生気分が抜けてないと、この先厳しいわよ?」

ライラの言っている意味は分かる。社会に出るといふことは、学生の頃に比べて否応にも多くの人と交流を持たなければいけない。だが、エミルにはそれと目の前で苦しむ星を、天秤に掛けることなどで

きるはずがなかった。

一人を犠牲にして複数人間が幸せになるのなら、切り捨てるのも仕方がない。異端とされる者、弱い者、愚かな者、尊い者……長い歴史の中が多く、他と異なる者達が涙を流し、血を流してきた。

英霊と呼ばれる者、悪人と呼ばれる者達——それが社会に秩序をもたらし、多くの反省材料として今の社会全体を支えている事実。

ライラの言葉は全体の利益の為なら、些細な損益は損益にすら成り得ないと言うことだ——。

（これから先の人を救う為なら、目の前の苦しんでいる子を見捨てるのも正しい行い？ そんなの絶対に間違っている！）

拘束された腕を震わせながら、拳を強く握り締める。

「貴女の言いたいことは分からなくもない……でも。ライラ！ 大勢の為に個人を犠牲にするなんて、そんな考えは歪んでいる!!」

エミルはそう叫ぶと、地上にいるライラの瞳を見つめる。

決意に満ちた瞳を向けるエミルに、ライラが眉をひそめ、不機嫌そうに言葉を返す。

「なにが歪んでいるというの？ 私はまだ貴女が子供だから理解できないと思えないんだけど……」

「……ライラ。私はやっぱり貴女が嫌い！」

そう言い放ったエミルに、ライラは失笑を浮かべて応える。

「嫌いで結構よ。大人はね。相手が好き嫌いに関わらず、欲しいものは必ず力で手に入れるの……人の感情なんて二の次なのよ？ それが社会のルールなの。勝った者だけが敗者を踏み付け、都合の良い様に歴史を刻める権利があるのよ！」

自分は全く間違ったことを言っていないと言いたげなライラをエミルは鋭く睨みつけると、普段の彼女からは想像もできない殺意のこもった低い声で告げる。

「——ライラ。私と勝負しなさい！ 私が勝ったら、今星ちゃんにやっている事を止めてもらう！」

「ほう……なら貴女が負けたら？」

「……私が負けたら……」

微かに笑みを浮かべるライラの返答に考えるように瞼を閉じる。

数秒後。エミルがゆつくりと瞼を開けて口を開く。

「私が負けたら、もう貴女が星ちゃんになにをしようと口出ししないわ……」

「……ダメね。元々私はこれが仕事なの。それに、今だって別に好き勝手できてるし……両手足を拘束されて動きが取れない無力化した人間を、わざわざ解き放って勝負するメリットが薄過ぎる。そうね。なら、私が勝ったら貴女の体も貰おうかしら♪」

「……分かったわ」

その話を聞いてエミルは決意に満ちた表情で小さく頷く。

ライラは嬉しさを抑えきれないといった感じで、にこやかな表情になると釘を刺すように、

「——もちろん。リアルもよ」

っと微笑みながら告げる。

険しい表情のまま、エミルはもう一度深く頷く。

すると、ライラはパンと胸の前で手を打ち鳴らし、楽しそうな声を上げた。

「なら勝負しましょうか！ 場所は荒野がいいわね。飛行タイプの貴女に有利な戦場でしょ？ ねえエミル」

「そうね。でも、後でそれが原因で負けたなんて言わないでしょうね？」

「あら、言わないわよ。だって私が必ず勝つんだもの♪」

その自信満々なライラの態度に、少し疑問を抱いたものの。今は星の身を解き放つのが最優先だ、このままあの責めを受け続ければ星の心が壊れてしまう。しかも、戦場が荒野であれば、ライラの言った通り遮るものもなくドラゴンで制空権を取れるエミルにとって有利なのは間違いない。

物陰に隠れる場所の少ないステージならば、ドラゴンで空を飛べるエミルにとっては、この上ないフィールドだ——。

地面に立っていたライラは瞬時にエミルの元にテレポートすると、彼女の腕に手を触れる。その直後、2人は研究室の様な部屋から姿を

消した。

ライラの正体5

次の瞬間には、すでにエミルは荒野の砂の上に立っていた。

そこがどこかは分からないものの。しかし、そんなことなど今のエミルには関係はない。今は星を苦痛から解き放つ為、とにかく今回は必ず勝たなければいけない戦いなのだ。

こうしている間にも、星は苦痛に身悶えている。一刻も早く勝負を決して、彼女を解放する必要がある。いくら失った記憶の為とはいえ、苦痛を伴った記憶ならばなくていい。

記憶はこれからいくらでも蓄積されるものであり、過去を知らなくても未来は必ず訪れる。言語障害が残っても、また学び直せば良いのだから……命を取られるわけであれば、日々の中でまた徐々に記憶を培っていけばいい話だ――。

エミルは素早く目の前に表示されたコマンドのアイテム内から装備欄の人型に装備を移動し、白銀の鎧を身に纏うと腰に挿した剣の柄に手を掛ける。

青い髪を風になびかせながら、その闘志に燃えている青い瞳がライラを見据える。

完全に戦闘モードに入っているエミルとは対照的に、腹部を露出させた軽装の革鎧という格好にも関わらず。余裕を見せるライラは口元に微かな笑みを浮かべている。

ウエーブのかかったセミロングの茶髪を風に揺らしながら、終始余裕の表情で弓を持って佇んでいる。その表情は、すでに勝敗は決していると言っても言いたげなものだった。

つと次の瞬間。ライラの口元が微かに動き、その茶色い瞳が鋭い眼光を放つ。その刹那、視界から完全に彼女の姿は消えた。

エミルは直ぐ様辺りに目を凝らし、消えた彼女の姿を探す。しかし、どこにも彼女の姿はない……。

その直後、背後に気配を感じて咄嗟に振り返ると、そこには弓を構えて微笑んでいるライラの姿があった。

「ふっつ。チエックメイト……ねっ！」

ライラの弓から既に構えられていた3本の矢が同時に放たれる。

「そうはさせないわ!!」

エミルは素早くその場で体を捻ると、背後から向かってくる3本の矢を手に持った長めの片手剣で払い落とす。

間髪入れずに地面を蹴って、エミルは剣を振り上げライラに襲い掛かる。

「はあああああッ!! ライラ!!」

「ふふっ。やるわね……でも」

ライラは不敵な笑みを浮かべると、再びスツとその場から姿を消した。勢い良く彼女の肩に向かって振り下ろされたエミルの剣が空を切る。

それを確認したエミルは、素早く消えたライラの姿を探す。しかし、辺りには風で巻き上げられた荒野の砂埃が流れているだけだ。

咄嗟に殺気を感じて上を見ると、弓の弦を引き絞っている彼女の姿があった。

「大丈夫。ちよつと麻痺で動けなくするだけよ……」

不敵な笑みを浮かべ、自分を見上げているエミルに照準を合わせてライラが弦を引いていた手を離す。

即座に手に持った弓の弦から勢い良く放たれる矢が、直上からエミルを襲う。

爆発音とともにエミルの周りが煙で包まれた。もし矢に当たっていれば、麻痺によってその場で勝負が決まる。

テレポートで地上に戻ったライラは勝ち誇った表情で、舞い上がった砂埃が立ち消えるのを待った。

その直後、もう一度大きな爆発音が荒野に轟くと、煙の中から今度は青いドラゴンに乗ったエミルがライラに襲い掛かった。

「いくら貴女でもテレポートする暇を与えなければッ!!」

「ふふっ、考えが甘いわね……」

ライトアーマードラゴンに乗って突撃して来るエミルを見据えると、ライラが弓を構え天高く跳び上がる。

「……まずは一匹ね」

直後に下を通過したドラゴンに目掛けて矢を放つ。

放たれたその矢は、エミルを乗せていたライトアーマードドラゴンの頭部に突き刺さり。矢を受けたライトアーマードドラゴンは咆哮を上げて、その体を光に変えて消えた。

召喚したドラゴンが突然消えたことで、空中に投げ出されたエミルが勢い良く地面を転がる。

自分が狙われていたと思っていたエミルは迎撃の体制に入っていたのだが、乗っていた自分を狙っても、ドラゴンは絶対に狙わないと疑わなかった。

それもそうだろう。ドラゴンとプレイヤーとではHPの量が圧倒的に違う。効率主義者のライラは、HPの少ないエミルを間違いない攻撃してくると思っても仕方ない。

突然のことで受け身を取ることでもできなかったエミルは、地面をしばらく転がって止まる。

「……かはっ！」

体を強く地面に打ち付けられた彼女は相当ダメージを受けたのか、体を震わせると顔を歪ませながら、腹部を抑えてゆっくりと立ち上がった。

そんな彼女の目の前に、テレポートしたライラが現れると、微笑みながら弓を構えている。

「——ふふふっ、今度こそチェックメイト……かしらね♪」

「……このッ!!」

荒く肩で息をしていたエミルが、咄嗟に持っていた剣を振り抜く。だが、その攻撃を読んでいたかの様に、ライラはしゃがんで剣の刃を避けると。

「貴女の往生際の悪さは知っているわー！」

ライラはそう叫んで地面で体を回転させ、自分の足でエミルの足を払った。

足が地面から離れ、バランスを崩したエミルの体が地面に倒れる。すぐに立ち上がるうとするエミルの鎧を足で踏みつけて強引に地面に押し戻すと、ライラは悔しそうに歯を食いしばっている彼女の顔

に弦を引き絞る矢の先端を突き付ける。

「ふふっ、チエックメイトと言ったはずよ？ 貴女のドラゴンのクルタイムは撃破されてから5時間。さっきの飛行型のドラゴンはどう使えない。いや、この状況じゃ他も使えなかったわね。それとも私の弓とあなたのドラゴンの召喚。どっちが早いか勝負してみる？

……がっかりだわ。以前、始まりの街で襲われた時も見てたけど、随分と腕が落ちたわ Emil」

「……始まりの街？ なんの事？」

悔しそうな表情をしていた Emil は、ライラのその言葉を聞いてきよとんとしながら首を傾げる。

ライラは顔先から矢を移動させることなく、口元になんまりと思わせぶりの笑みを浮かべ。

「ほら、あの子を襲った2人の男よ……覚えてないの？」

「——ッ!? なんて貴女がその事を……」

驚きを隠せないといった表情で、Emil は目を丸くさせる。

それもそのはずだ。それは初めてダークブレットのメンバーから襲撃を受けた星を、ぎりぎりのところで Emil が助けた時以外にはない。だが、それをライラが知っているはずはない。いや、あの場に居るはずがない。

もし、その場に彼女がいたとすると、少なくともあの事件の後から、Emil 達の後を付けられていたということになる。しかし、この前の一件まで Emil は彼女の姿どころか、その気配すら感じていなかったのだ。

百歩譲って自分とはかく、武道の達人のマスターにすら気配を感じ取れないということはあるえない。

息遣いまで再現されたこの世界で、自分の存在を完全に消し去ることなど不可能に近い。何故なら、もし仮に人の目をあざむけたとしても、本来は現実世界には存在しないモンスター達がフィールドの至る場所で目を光らせているのだ。

数多くの生息するモンスターの感知範囲を避けつつ、隠れながら移動するなんてことはありえないし、固有スキルのテレポートを持つ

てもモンスターの感知範囲に突然入ってしまったえばターゲットさされてしまう。

混乱するエミルに向かって、ライラは言葉を続ける。

「まさか敵の増援すら警戒していなかったなんてね……でも、それを倒してあげたのよ？ あの子は私の保護対象で、貴女は私の玩具だもの。貴女を壊していいのも私だけ……そうでしょう？」

「——私はあなたのそういうところが……大嫌いなよ!!」

挑発とも取れるその言葉に憤りを抑えられずに、鋭く睨んだエミルが握った拳で地面を思い切り叩く。

その彼女の様子に、ライラは「ふふっ」と息を吹き出すと。

「……まるで駄々をこねる子供ね」

つと小馬鹿にしたような笑みを浮かべた。

直後。余裕の笑みを浮かべていた彼女の表情が、殺意の籠もった表情に変わる。

「さて、もうこれで終わりよ。エミル……これで貴女は私の——」

そこまで口に出したところで、突如として地面が音を立てて揺れ始める。

「なっ、なんなの!?!」

ライラは驚いたように辺りを見渡す。

それとは対照的に、エミルは口元に微かな笑みを浮かべた。

「子供なのは貴女よライラ。そうやって人をおちよくなるような行動を取るからこうなるのよ!」

「なっ! なにを……はっ! まさか貴女!!」

ライラは完全に立ち上る煙の収まった場所に目を向け、地面に開いた大きな穴を見つけると顔色を変えた。

そう。そこはまさに初動でライラが攻撃を仕掛けた場所——エミルは煙で隠し、もう一体ドラゴンを地中に潜ませていたのだ。

土煙が止む前にドラゴンで飛び出し、その場所から視線を逸らさせたのも、エミルの作戦だったのだろう。

ライラは不敵な笑みを浮かべているエミルの顔を鋭く睨みつける。その直後、背後からゴツゴツとした岩を纏ったドラゴンが地中から勢

い良く飛び出す。

それは防御力に長けたストーンドラゴンだ——その鱗は岩そのもの。その硬い鱗はライラの放つ矢など通すはずがない。

今まさに勝負を決めようというところで、背後から飛び掛ってくるストーンドラゴンにライラは渋い顔をしながらも仕方なくその場からテレポートで移動する。

一旦距離を取ったライラを見て、エミルは気持ちを落ち着かせる様に一度大きく深呼吸した。冷静になったところで、彼女は状況をもう一度分析し直す。

ライラの固有スキルはテレポート——通常移動時は思いの場所に転移できる。戦闘時は攻守において意図する場所へ移動することで敵の目をくらしながらの戦闘が可能。彼女自身もその戦闘方法を最も得意としている。

対してエミルの固有スキルはドラゴンタイマーだ——その長所は、手持ちの多種多様なドラゴンを使った多種多様な攻撃パターンにある。

飛竜なら空中から、水竜なら水中からの攻撃が可能なのは、期間限定イベントや高レベルダンジョンでしか手に入れることができない入手困難なトレジャーアイテムを使用しない点を考えれば効率的だろう。

しかし、エミルのドラゴンを持ってしても今のライラを攻略するのは困難だ。本来ならば、ライラの固有スキル『テレポート』には一度使うと弱点とも言える数秒のクールタイムがあったはずなのだが、これまでの彼女の行動を見ると、どうやらそのデメリットを何らかの手段で取り除いたと見てほぼ間違いない。

おそらく、それ以外の能力もあのミスターと名乗る人物から、提供されているのは容易に想像ができた。また、固有スキル以外にも戦闘に有利になるアイテム類を所持している可能性がある為、そのことも念頭に置いて戦わなければならないだろう。

(こ)は慎重にいかないとよね……)

険しい表情を崩さずにエミルはアイテム欄から、3つのドラゴンの

封印された巻物と赤青黄の3色の色が複雑に混ざり合った笛を取り出した。

その後、その笛に付いた紐に首に通すと、一つの巻物を手に握り締め、残り2つを腰に現れたベルトに差す。

(この笛は最後の切り札……とりあえずは……)

エミルは首に下げた笛を握り締めると、持っていた巻物に巻かれた紐を引っ張り巻物を開き、その紐の先の小さな笛を鳴らす。その後、辺りに煙が立ち込めると目の前にリントヴルムが姿を現した。

背に乗ったエミルが飛ぶように命令を出すと、リントヴルムは空に向かって咆哮を上げ、勢い良くその白い翼をはためかせると上空に向かって舞い上がった。

しかし不可解なことに、ライラもそれを見ているだけで、邪魔をしようとしてもしないことだ。いくらテレポートできるとはいえ、空中に上がられれば攻撃し難くなるというのに……。

彼女が何を考えているのか、エミルには到底理解できないが、今はそれが逆ありがたい。向こうが仕掛けて来ないのならば、こちらから仕掛けるのみだ――。

「リントー！ 彼女の直上に向かってノヴァフレアよ！」

エミルは右手を前に突き出すと、リントヴルムに命令を出す。

(……まずは出方を見させてもらおうよ。ライラ……)

エミルは目を細めると、地上で微笑んでいるライラを見据えた。

彼女の終始余裕の表情は、もはや不愉快を通り越して不気味でしかない。

それもそうだろう。焦り一つ見せないということは、自分が絶対に勝てるという保証があつてのものだ。

どこにそれほどの自信があるのかは分からないが、対戦相手からして一切油断できるものではない。それを恐怖と言わずして何と云えるだろうか……。

リントヴルムがライラの真上に移動するとエミルの命令通り、彼女に向かって白い炎を噴射する。

その炎がまるで押し寄せる波の様に、ライラの居た大地を白く覆つ

ていく。だが、それを見たエミルの表情は険しい。

「……来る!!」

殺気を頼りにエミルが上空を見上げると、予想通りそこには弓を構えたライラが浮かんでいた。

自由自在に移動できて、尚且つ遠距離武器であるライラは視野の広い空中からの攻撃を得意としている。

普通ならば攻撃の直後、身動きが取れない空中では弓を扱う者は近接攻撃ができないだけ不利になりやすい——それは着地点を狙われて攻撃されてしまえばひとたまりもないのだから。

しかし、彼女の場合は固有スキルを使用することでそのデメリットを排除し。しかも、敵の目を攪乱することもできる。

確かに自分の能力が分かっているだけに、セオリー通りで間違いない選択と言えるだろう。

「リントー！ フレア中止！ 右に急旋回!!」

エミルの指示に従い。リントヴルムは口から出していた炎の噴射を止めて右にその巨体を大きく傾ける。

上空のライラは口元から笑みを漏らすと「もう手遅れよ……」と呟き、引き絞った弓から3本の矢を放つ。

「そうはいかないわー!」

エミルは腰に差していた巻物を引き抜くと、空中に紐を引いて空中に広げドラゴンを召喚する。

上空に煙が上がり、エミルとリントヴルムの体を包み隠す。その煙が消えると、そこには太陽の光を受けて全身の透明な鱗がキラキラと輝くドラゴンの姿があった。しかし、召喚したのは今までに見たことのないドラゴンだ。

翼を含めた全身をダイヤモンドに覆われたその姿は、リントヴルムより少し小さいのだが、そのキラキラと光の加減で七色に光る美しいドラゴンに目を奪われぬ者はいないだろう……。

リントヴルムの上で翼をはためかせているそのドラゴンに向かってエミルが声を掛けた。

「頼んだわよ。ダイヤモンドドラゴン!」

「——遂に出したわね……エミルの三種の神器の二体目。ダイヤモン
ドドラゴン……」

先程までの余裕な表情だったライラの顔が少し険しい表情に変わる。

ライラはまたテレポートして地上へと戻った。

様々なドラゴンを所有するエミルの『三種の神器』とは、リントヴ
ルムを含む固有スキルによって巻物化して所有している上位三体の
ドラゴンのことだ——。

エミルはゲーム内で行われる大会において優勝という輝かしい経
歴残してこれたのも。単に彼女の戦闘スキルが高いからという理由
ではない。

戦闘スキルが高いのは言うまでもないが、それだけでは彼女が『白
い閃光』と言う異名で呼ばれるほどのことはなかっただろう。

彼女の主力のリントヴルムがその異名の由縁だが、一番は大会でリ
ントヴルムが一度も撃破されていないことが要因としては大きかつ
た。だが、どんなに強力なドラゴンであつても一度も撃破されない
というのは不可思議である。

素晴らしい戦闘技術に加え、様々な固有スキルを持つプレイヤーが
集いしのぎを削る大会で、撃破されない訳がない。

それを可能にするリントヴルムをサポートする為にエミルが用意
したドラゴン達——それが『三種の神器』なのだ——。

ところが、まだその中の2体しか出ていない。

もう1体はエミルの腰に差されたままだ……。

おそらく。そのもう1体のドラゴンと、エミルが『最後の切り札』と
まで言った首に下げられた笛に秘密があるのは、もはや言うまでもな
いだろう。

ライラの正体6

地上から見上げるライラが、リントヴルムの背に乗ったまま見下ろしているエミルに向かって叫ぶ。

「最後の一体も出し惜しみしないでさっさと出さなさい。それとも私に遠慮してるのかしら？ そんなんじゃ、私を倒せないわよ〜」

挑発的な彼女の発言に、一瞬で怪訝な表情に変わったエミルが言葉を返す。

「そんな安い挑発には乗らないわよ!」

「そう。それは残念……」

不気味な笑みを浮かべ、そう呟いたライラの姿が消える。消えた彼女の姿を探し、エミルは地面をくまなく見渡す。

すると、地上ではなくエミルの直上から声が聞こえてきた。

「ほら、エミル! 私ほこっちゃよ! 出さないなら……出さなかったことを私の奴隷になって後悔なさい!」

「なっ! ライラ——くッ! 眩しい……」

エミルがその声の方を向くと、ライラは太陽を背にして弓を構えている。思わず、腕で顔を隠すエミルの視界が太陽光によって真っ白に染まる。

そのチャンスを見逃すことなく、ライラが素早く弦を引き絞り矢を放つ。

「——そ、そんな攻撃!!」

剣を振り抜いてその矢を落とした次の瞬間。落としたはずの矢が光の中から現れ、エミルの左足の太ももの付近に鋭い痛みが走る。

痛みに表情を歪ませながらその箇所を見ると、そこには防いだはずの矢が突き刺さっていた。だが、確実に矢は落としたはずだ——間違はなくエミルの手にはその時の手応えが残っていたし、矢も一本しか放ってなかったはずだ。

(なっ、いつの間に……!?)

左足に刺さった矢に手を掛けると、エミルは強引に太股に刺さっている矢を引き抜く。

「くあああああああッ!!」

エミルは引き抜いた矢を投げ捨てる、まるで苦虫を噛み潰した様な表情で眉をひそめた。

それもそのはずだ。今彼女の視界に映る丸いHPゲージ内にある人型の表示が紫色に点滅していたのだ。それは毒を示す表示。そして、その直後からエミルのHPは徐々に減少し始めた。

エミルの予想では彼女が矢にい使用しているのは麻痺系の効果だと思っていた。いや、敵の動きを止める上で麻痺は有効だ——エミルは剣による接近戦。そしてライラは弓による遠距離戦闘を得意としている為、すばしっこい獲物を捕らえるなら間違いなく麻痺が有効だ。

しかし、受けたのは毒。毒の効果は継続してダメージを与えられるが、動きを止めることは不可能——つまりはライラはエミルを撃破するのが目的で矢を放ったのではないということだ。

険しい表情をしているエミルに、ライラが不敵な笑みを浮かべながら声を掛けてきた。

「ふふふっ、もう後がないわよ？ エミル」

「……くッ！ ライラ！ どう——」

「——どうやって、あの矢を放ったのか……かしら？」

言葉を遮って、にっこりと笑みを浮かべそう言葉を返すライラ。

その全てを悟った様な顔に、エミルは不快感を露わにする。

この人を食った様なライラの態度が、エミルの戦闘のリズムを狂わせているのは間違いない。だが、それだけでは説明のできない力量差がエミルとライラの間にあるのも事実。

すでに勝ちを確信したような表情で、そんなエミルに優越感を味わいながら人差し指を立ててライラが言った。

「さっきの攻撃は一矢だけじゃなかったの。その直後にもう一矢を同じ軌道に打ち込んだのよ。普通ならバレるんだけど……角度と太陽の光で流石の貴女でも、全く見えなかったでしょ？」

「……ライラ!!」

得意げに語るライラに、エミルは感情を剥き出しにして叫ぶ。

その彼女の怒りは二段階の攻撃を視野に入れて警戒していなかった自分と、この絶望的な状況に対しての焦りのようにも感じられた。鋭く睨んでいるエミルにライラは、そんな彼女の感情を逆撫でするかのように。

「そんな顔してたら、せつかくの綺麗な顔が台無しよ？ ほら、笑いなさい。私の奴隷なのだから」

っと、ニンマリと小馬鹿にしたような笑みを浮かべているライラ。その直後、エミルは感情に任せ、腰に差していたもう一つの巻物を抜く。その彼女の行動が、明らかに自分を挑発しているものとエミルにも分かっていた。

しかし、すでに毒を受けている状況では、どんな奥の手を隠しているか分からない相手との戦闘継続は難しい。

毒状態のままでは継続してHPを削ぎ落とされていく、今はHPの減少を最小限に抑えるのに集中し、戦闘はドラゴン達に任せるしかないのが現状だ――。

「できれば使いたくなかったけど仕方ないわね……出てきなさい！ ヘルソードドラゴン!!」

そう叫んだエミルが巻物を空中に放り投げる様に広げ、紐の先に結び付けられている笛を鳴らす。

すると、エミルの目の前に一匹のドラゴンが現れた。その姿は2体のドラゴンとは圧倒的に違う。まるで、東洋の龍を彷彿とさせるその蛇の様に長い体が、空中で風に揺られうねうねと上下に動いている。

全身を覆う鱗は漆黒に染まり、金色の瞳がギロリと光る。体を流れる様に敷き詰められた鱗の先にある尻尾は鋭利な刃を連想させる。

もちろん。他のドラゴンのように大きな翼があるわけではない。その体からは黒い煙のような雲がまとわりついていて、神々しいその姿が何とも言えない威圧感を辺りに漂わせていた。

「……遂に出たわね」

ライラも、その龍の放つ威圧感を肌で感じているのか、身震いしながら空に浮かぶ漆黒の飛龍を見つめていた。

エミルは召喚を終えると、首に下げていた笛を鳴らす。その直後、

3匹のドラゴンが光に包まれ、丸い球体の様な形へと変わる。

突如として現れたその姿はまるで、空に浮かぶ真珠のように光り輝いていた。いや、もう一つの太陽という感じが……。

すると、しばらくして中に浮かぶその球体にひびが入り、中から七色の光りが漏れ出す。

その刹那一気に割れたその球体の中から、ダイヤモンドでコーティングされた大きな翼を持った竜人が現れた。

それはすでにドラゴンではない。全身をダイヤモンドでコーティングされた美しいまでに光沢を放ったそのボディは、ドラゴンが人間の姿を模ったものというより、まるでその硬そうな装甲はロボットの様でもあった。

神々しいまでに光を反射して輝く翼に鍛え上げられた細身の体にドラゴンの頭。それはまさに神話の世界に出てくるドラゴンの神の様だ――。

そしてその手には、美しい姿には似つかわしくない黒く禍々しいオーラを纏った大きな薙刀状の漆黒の武器が握られている。

その姿を目の当たりにして、ライラが震える声で呟く。

「――あれが『リントヴルムZWEI』龍神と呼ばれるエミルの切り札……ふふっ、見るのは私も初めてだわ。それにしても美しい……見ただけで興奮してきちゃう♪」

ライラは両肩を抱くようにして体の震えを抑えながら熱い視線で空中に浮遊している龍神を見上げている。

つと次の瞬間、龍神と化したリントヴルムの肩に乗っていたエミルが告げた。

「ライラ、一つだけ言っておくわよ。こうなったらリントヴルムは力の抑えがきかないわ。早めに降伏した方が身のためよ……？」

「ふふっ、忠告は聞いておくわ。でも……それは無理ね。貴女は遠慮無く来ていいわよ？ 本気で来なさい。エ・ミ・ル♪」

余裕に満ちたライラの表情に、エミルは不機嫌そうに目を細めて見た。

今まで対人戦闘でもそれ以外の戦闘でも、この状態のリントヴルム

ZWEIが負けたことはない。

ダイヤモンドに覆われた鱗は普段のそれとは比べ物にならないほど強固で、敵の攻撃を通すことはなく。引き締まったボディは軽量化され速度に秀でていて回避や攻撃速度も従来のリントヴルムとは比べ物にならず。

スピードを最大限に活かした近接での攻撃も、薙刀と化したヘルソードドラゴンが担ってくれる。

攻守共に今のリントヴルムZWEIはフリーダムのもんスターの中で、最強と言つてもいいほどに強化されているのだ——プレイヤーが、しかも一人で戦いを挑むことすら馬鹿げていると言つてもいいほどに……。

その後、呆れた様子で大きくため息をつく。

「そういえば、貴女はそういう性格だったわね……」

っと呆れながら呟き、剣の先をライラへと向けた。すると、リントヴルムZWEIの瞳がライラを捉え、持っていた薙刀を構える。

次の瞬間。リントヴルムZWEIの翼がはためき、物凄い衝撃波と共に物凄いスピードでライラに襲い掛かる。

リントヴルムは持っていた薙刀を地面に立っているライラへ振り抜く。その直後、辺りに凄まじい爆風と地が裂ける轟音が鳴り響いた。薄い氷が割れる様に、一瞬で地面が一直線に遠くの方まで割れていく。

攻撃によって新たに作られた巨大な地割れは、それはもはや攻撃というよりも天変地異に近い感じがする。だが、やはりゲームの中、割れた地面はその場から緑色の鈍い光りを放ち直ぐ様修復を開始した。

エミルは仕留めていない事を確認すると、すぐに辺りを見渡してライラの姿を探す。

つとその時、エミルの命令なしにリントヴルムZWEIが身を翻した。

突如動いたリントヴルムZWEIから振り落とされまいと、エミルは咄嗟にその体にしがみつく。

その刹那、再び持っていた薙刀を振り抜いた。すると、タイミング

を見計らったように目の前にライラが現れ。

「——なっ、なんですって?！」

待ち構えていた様に向かってきた巨大な刃に、彼女も驚いた様子で目を丸くさせている。

——グウオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!

雄叫びを上げながら振るわれた薙刀が、空中のライラを捉えた。

さすがの彼女もレポートで対応できなかったのだろう。かろうじて弓で受け止めたのだが、その勢いに押されてライラの体は軽々と飛ばされていく。

勢い良く地面に叩きつけられたライラのHPバーが一気に減り、1だけ残して地面に埋まるようにして止まる。

ライラのHPが『1』になり。お互いのダメージ計算をシステムが始める。直後、エミルとライラのHPバーが全回復してエミルの視界に「WIN」という文字が表示される。

だが、バトルは終わっても体に蓄積された疲労やダメージが全て消えるわけではない。それがこのゲーム上では「デスペナルティー」の代わりになる。もちろん。曜日を経過すれば取れるものではなく、負傷などのダメージは風呂や宿屋でなければ回復することすらできない仕様のものだ——。

「……くう。いったく」

痛みに顔を歪ませ、体を押さえながらゆっくりと立ち上がるライラ。

その彼女の前に巨大な翼をなびかせ、エミルに乗ったままりントヴルムZWEIが着地する。

「私の勝ちね。ライラ約束よ。今すぐ星ちゃんを開放しなさい!」

「ふふっ、しようがないわねえ。分かったわ!」

ライラは諦めたように両手を上げて言い放つ。

彼女のその言葉に、今までの緊張が一気に溶けたのか、エミルがほっと胸を撫で下ろす。

(……良かった。これでもうあの子を苦しめなくて済む)

心の中で安堵していた直後、突如として目の前からライラが姿を消

した。

予想だにしていなかった彼女の行動に驚き、キョロキョロと辺りを見渡すと、上空からライラの声が響いて来る。

「——バトルは貴女の勝ちよ。でも、勝負では私の勝ち………それじゃ、また2日後に会いましょう。エ・ミ・ル♪」

ライラは満面の笑みで言い放つと、エミルに投げキッスをした。その時、始めてエミルにはこの戦闘の真の意味が理解できた。これは戦う為ではない。エミルが戦闘を仕掛ける様に仕向け、その申し出を受け入れたフリをして、実際にはただ単にエミルを星から遠ざける為だけのものだったのだと……。

そう。元からライラは勝敗に関係なく、この場を離脱して星とエミルを引き離すことにライラの真の狙いがあったのだ。言うならば、この戦闘は元々何の意味も持たない茶番だったということだ——。

エミルは目を見開くと、怒りで眉間にしわを寄せてライラに右手を向ける。すると、すぐに反応したリントヴルムZWEIがライラへと襲い掛かった。

「——そうか、そうだったのか……待ちなさい！　ライラ!!」

顔を真っ赤にさせてエミルが叫ぶ。その直後、リントヴルムZWEIの持つっていた薙刀が徐々に形を変えた。

薙刀だった刃は大きく折れ曲がり、その刃を覆う様に吹き出した黒い炎が新たな刃を形作っていく……それはまるで、死神が持つ大鎌の様な形状だった。

向かってくるエミルを見下ろすように、空中で余裕な表情で微笑みを浮かべるライラ。

「ライラーツ!!」

刹那の速さでリントヴルムZWEIが上空にいるライラへと激突する。

だが、リントヴルムZWEIが彼女のいた場所に達した時にはすでにライラの姿はどこにもなかった。

「あの……くそ女……最初からそのつもりで……」

肩を震わせ、エミルは悔しさのあまり拳を強く握り締めている。

悔しくて悔しくてエミルの瞳から涙が止めどなく溢れ出して来る。何よりも憤りを感じていたのはライラではなく、その考えに及ばなかった自分自身だ——星が苦しんでいる姿が、亡くなった妹と重なって冷静さを欠いていた。

本来ならば、ライラが約束を守るような殊勝な女でないことは、エミルが一番理解していたはずなのだ。

俯きながら肩を震わせながら、自分の握り締めた手の甲に涙が垂れるのを眺め。その後、エミルは悔しそうに歯を噛み締めると空に向かって叫んだ。

「くそおおおおおおお!!」

エミルのどこにも行きようのない悲痛な叫びは、静かで広い空にどこまでも響いていた。

エミルとの戦闘を終え研究室に戻ったライラは装備欄でボロボロになった服から、肩と胸元の大きく開いて胸だけを覆い腹部を露出した黒のインナーと、その細くてスラツと伸びたモデルの様な脚をピツチリと黒いパンツという私服に切り替えると、その上に白衣を羽織る。

ライラはモニターの前に座ると、モニター下の操作パネルに手を置いた。

「さて、お仕事の時間ね……」

『ライラ君。彼女はどうしたんだい?』

「ああ、あの子なら今頃——ふふっ、泣きべそかいてるかも♪」

悪戯な笑みを浮かべたライラが、荒野に取り残されたエミルの泣き叫ぶ光景を想像してくすつと笑う。

そんな彼女に、モニターの男が言った。

『私が言うのもなんだが、あまり人の気持ちをもてあそぶのはいかなものかと僕は思うよ』

「あら、この仕事はそういうものだと思ってましたけど? それに嘘は女にとって、涙の次に最大の武器なんですよ?」

『ははっ、そうか。そうかもしれないね……さて、話が逸れてしまった

が、そろそろ本題に入ろうか』

急に真面目な声音に変わった男に、部屋の空気が引き締まる。

ライラは言葉を返すことなく真剣な面持ちで頷いた。

『私達のこの作業に世界の全てがかかっている。このテロを最小限で終わらせよう！』

「ええ、もちろんです。その為にもこの子にはエクスカリバーを使いこなしてもらわないと……」

声の漏れないカプセルの中に入って、叫びながら鉄の拘束具をきしませる程に身を反り返す星を見遣った。

『そうだね。今のままでは、この子に負担が大き過ぎる。本来ならこんな小さな子に任せる事じゃないんだけど……エクスカリバーは大空博士と同じ遺伝子系統の人間しか認証しない。あの人は人類の研究の100年先を見ていると言われるほどの科学者だった。彼が生きていれば、こんなハッキング程度でシステムジャックされる事もなかったはずなんだ……』

モニターの男の声が震えている。

それは星の父——大空融《おおぞら あきら》は優秀な科学者であり。そんな人物を失ったこと、また自分がまだ彼に追いつけていないことに対しての歯痒さからくるのかもしれない。

「この子記憶の復旧率15%元々残っていた記憶があつたのが功を奏しましたね」

『ああ、この子の固有スキルとエクスカリバーとのシンクロ率はどうだい？』

「そちらは変わらず30%を行ったり来たりですね」

『……そうか。少しでもあの子の負担を緩和するように、このプログラムを……』

忙しなく操作盤を叩いているライラの横にある転送装置にガラス製の注射器が現れた。

カプセルが開き、中からけたたましい叫び声が部屋中に響き渡る。

眉をひそめながらライラはナイフで軽く星の細い腕を斬り付けると、激しく暴れていた星が次第に大人しくなり眠りに落ちた。

その際に注射器を持つと、気を失いながらも苦痛に顔を歪める星に
投与する。すると、しばらくして歪んでいた表情が少しだけ和らぐ
……。

そんな星の安らかな表情を見て、ライラは安堵の表情を浮かべた。

ライラは星の乱れた髪を整えると、タオルで汗を拭う。

「——ごめんなさいね。辛い思いをさせて……でも、これもエミルの
考えを改めさせるのに必要な事だったの。許してね……」

そう呟くと、星の頭を優しく撫でた。

「……必ず貴女の記憶を全て戻してあげるからね」

その後、決意に満ちた表情でモニターに向かい忙しく操作盤を叩
く。

記憶の帰還

一頻り泣いて気持ちを切り替えると、ライラに騙され。しかも、荒野へと置いてけぼりを食らったエミルは不機嫌さを隠しきれずむっとしながら、融合を解き元に戻ったリントヴルムで城まで戻る。

龍神である竜人の姿の方が移動速度は速いものの。あの笛には使用時間に制限がある為、それほど長い距離は使えない。はずだったのだが……どうやら、その心配は取り越し苦労だったようで、戦っていた場所は意外と始まりの街の場所から近い所にあった。

おそらく、ライラは戦闘をする前からこの展開になることを予想していたのだろう。それを思うと、なおさらカーッと頭に血が昇ってくる。

だが、そんなことよりも、星をライラに奪われたことが、今は何よりも悔しい。今もあの研究室の様な場所で星が苦しんでいるかと思うと、居ても立ってもいられない。

しかし、今飛び出して行ったところで、その場所を特定するのは万に一つも不可能だということは興奮して熱くなっているエミルの頭でも分かっていた。

このフリーダムでは、個人情報や個々の位置情報を個人が調べるとは、原則できないシステムになっている。同じパーティーに居たとしても、同じマップ内ならプレイヤーの詳細な場所の特定が可能だが。

遠く離れている状態では、HPバーの減りは見えてもマップ上にワールド名は表示されるが、プレイヤーの位置情報は表示されない。

それは、もし何者かがいかがわしい考えを持って女性プレイヤーを襲った場合に、被害者が少しでも容易に逃げられるようにという考えからだ。パーティーへの加入脱退も個々でできるようになっているのもこの為なのだ。

2時間ほど掛けて城に戻ったエミルは、部屋の扉に手を掛けた。中にはすでに皆が集まっているはずだ——そこに自分1人だけ帰って

きたと知ったら、皆はどう思うだろうか……。

そんな考えが、ドアノブに手を掛けたエミルに扉を開けるのを躊躇させていた。その時、突如として部屋の扉が開く。

中から現れたのは浮かぬ顔をしたエリエだった。

エリエは言い難そうに徐ろに口を開いた。

「……ごめんね。星の記憶がなくなったって黙ってて……でも、エミル姉——」

「——いいえ、謝るのは私の方よ。星ちゃんをライラに奪われてしまったわ……」

エリエの言葉を遮ると、エミルは力無く床に座り込んで両手で顔を覆う。

その場ですすり泣いているエミルを見て、なんて声を掛けたらいいのか分からなくて戸惑っていた。

っと、エリエの後ろからイシエルが飛び出して来る。

イシエルは泣いているエミルの肩を優しく抱き締めた。

「……どうしたん？ エミル」

「……イシエ。ごめんなさい」

「——ええんよそないなこと、でも大丈夫。うちが必ずあの子を取り戻してあげるからエミルはゆっくり休んでたらええ。……ふっふっふっ、やつとうちのターンやね……」

泣いているエミルを抱き締めながら、イシエルは聞こえない様になんて言うって小さくガッツポーズする。

部屋に戻ったエミル達はリビングで、エリエの作ったスコーンを食べながら、星を救出する作戦を考えていた。

テーブルの上の皿に山盛りになったスコーンに誰も手を付けないまま、時間だけが過ぎていく。

部屋に流れる気まぜい雰囲気にお菓子好きのエリエもスコーンに全く手を付けられないでいた。

そんな時、ケーキを食べた後に床に敷かれたカーペットの上で、まるで猫のように丸まってぐっすり眠っていたミレイニが起きてきた。

「……なくに？ 甘い匂いが……ってお菓子だし!? スコーンだし！」

みんなだけずるいし!!」

急に飛び起きて、テーブルの上のスコーンを見て抗議するミレイ
二。

興奮した様子で今にもテーブルの上のスコーンに飛び付きそうな、
勢いのミレイニを見て、エリエが渋い顔をする。

「うわっ、また面倒なタイミングで面倒なのが……」

エリエは膨れっ面をしているミレイニの側に行くと、腕を引いて強
引に隣の部屋に連れて行った。

隣の寝室へと連れ込むと、ミレイニを壁に追いやると。

「全く、あんたは……空気を讀むって意味分かる?」

「それくらい分かるし。バカにしないでもらいたいし!」

腰に手を当てて胸を張っているミレイニに、エリエは呆れ顔で大き
なため息をついて額を押さえる。

その後エリエは、膨れっ面のミレイニの頬をつねりながら目を細め
て聞き返す。

「言葉を知ってるかじゃないのよ? 意味を分かっているかって聞いた
の……」

「いはい、いはいひ〜」

「全く。あんたは……状況が状況なんだから、本当に空気を讀んでよ
ね……」

呆れながらエリエはもう一度深いため息を漏らして、ミレイニの頬
から手を放す。

ミレイニは抓られた頬を撫でると、エリエの行動に断固抗議する。

「ありえないし! そのほっぺたつねるの止めてほしいし! 口で言
えばわか……」

「……口で言えば分かるの? なら私もつねらないんだけど?」

満面の笑みで手をわきわきさせるエリエに、ミレイニは怯えたよう
に一目散に部屋の隅に逃げていく。

相当頬を引っ張られるのが嫌なのだろう。まるで、怯えた小動物の
様に、隅っこで体を小さくして震えている。

エリエはゆっくりとベッドの端に腰を下ろすと、ミレイニに向かって微笑みながら手招きした。

「ほら、こっちに来なさい」

だが、怯えた様子でミレイニはその呼び掛けに答えようとしなない。当然だ。怒っているエリエの側に行くということは、頬をつねられるに行くようなものだろう。

「あら？　言えば分かるんじゃないの？　こっちに来なさい！」

「ひっ！　……つねらないって約束するし」

「……分かった。つねらないから」

そうエリエが言うと、ミレイニはビクビクしながらも、ゆっくりと隣に腰を下ろす。

それを確認して微笑むと、怯えるミレイニに優しい語り口で話を切り出した。

「ねえー、ミレイニ……あなたの目から見て、あの子をどう思った？」

「……あの子ってなんだし？　誰のことだし？」

「星ちゃんよ……さつき私に襲い掛かってきた子。あの子をどう思う？」

エリエはそう尋ねると、ミレイニは「怒らないし？」と上目遣いに聞いてきた。

不安そうに尋ねるミレイニに、エリエは小さく頷くと、ほつとしたようにミレイニがその重い口を開く。

「——正直に言っ、あの子は危ないと思うし。仲間に飛び掛って来るとかありえないし！」

「……そうよね。でもね……本当は、あの子はとてもいい子なのよ？」

「信じられないしー」

不感懐いっぱいの顔でそっぽを向くミレイニの頭をエリエが優しく撫でる。

ミレイニがその顔を見ると、エリエの瞳には涙が輝いていた。

「私が……私が……」

「……エリエ。どうして泣いてるし？」

「もう……お姉さんって、呼びなさいって……言っただじゃない」

「年下の前で泣いてるお姉さんなんていないし」

涙を流しているエリエの頭を撫で返して、ミレイニが微笑んだ。

星が記憶を失い別人の様になったのも、エリエは自分のせいだと思ってしまうているのだろう。だが、それも無理もない話だ。星と最後に言葉を交わしたのはエリエだったのだから……。

しばらくして、涙を拭うと落ち着きを取り戻したエリエが再び星のことをミレイニに話し出す。

「前にも言ったかもだけど、あの子は自分を犠牲にして私を守ってくれたの。ミレイニが居たあの城で、誰かに何かされたいの。それで記憶がね……ないのよ。今のあの子には……」

「記憶がない？ でも、人の記憶なんてどうこうできるものじゃないし。あたしの知ってる人でもそんなのいな——」

そこまで口に出して、ミレイニは言葉を飲み込んだ。

その表情は確実に何かを知っている。そう確信したエリエが、表情を曇らせているミレイニに聞き返す。

「なにか知ってるのね。誰にも言わないから教えて！」

「……まあ、今は安全だからいいし。特別に教えてあげる」

一瞬躊躇した様な表情をしたが、すぐにエリエの瞳をじっと見つめながら言葉を続ける。

「前にあたしにペットを貸してほしいって、ボスと一緒にきた人がいるし。その人が確か、パソコンがどうって言ってた」

「その人って誰？」

考える様に唸ると、首を傾げながら。

「それまでは分からないし。でも、白衣に狼の覆面を被った変な奴だし」

「……狼の覆面」

エリエはそれを聞いた瞬間に、星と最後に別れた場所で檻の中から見た覆面の男がパツと頭の中に浮かんだ。

何とも言えない悔しさと共に、同時にエリエの中に仮面の男への殺意が込み上げて来る。

(……星をあんな目に合わせて、あの覆面ただじゃ済まさない。确实

にこの手で仕留めてやる!!)

エリエはそう心に決めると、ニヤリと不気味に笑う。

すると、怯えながらも心配そうな表情でミレイニがエリエを見た。

「なんか、顔が怖いし……大丈夫だし？」

「うん。大丈夫！ あんたのおかげでなんか色々見えてきた。ありがとうね！」

「えへへ。そんなことあるし〜」

頭を撫でられ、上機嫌でにやけているミレイニ。

そんな調子に乗った彼女を見て、エリエは『ニヤニヤしちゃって』と少し呆れながら微笑みを浮かべていた。

記憶の帰還 2

その後、真面目な声音でエリエがミレイニに微笑むと。

「ミレイニ。星が戻ってきたら、さっきの事は忘れて仲良くしてあげてね！」

だが、彼女の申し出にミレイニはそっぽを向いて答える。

「それはあの子次第だし……」

そう告げながらミレイニは頬を少し膨らませて腕を組んでいる。

「もう。そんな事言ってるよ、また引つ張るけど……?」

エリエは手をわきわきさせてミレイニに迫ると、彼女は顔を青ざめさせて何度も頷いた。それを見て、エリエは「分かればいいのよ」と告げると手を下ろした。

ミレイニはほっとしたようにため息を漏らすと、何気なくエリエに尋ねた。

「エリ——お姉さんはあたしとその子、どっちが好きなの？」

唐突とも言える質問に、エリエが困惑した様子で聞き返す。

「……えっ? どっちがって、どういうこと? ミレイニ」

「——そのままの意味だし! あたしはお菓子とお昼寝に釣られただけじゃないし! あたしは、エリエが好きになったから付いてきたんだし!!」

俯き加減にむっとしたミレイニがそう叫ぶと、エリエは驚いた様子を丸くさせている。

冷静になったミレイニも自分の言ったことを思い出して、恥ずかしそうに赤面させながらモジモジしながら頷くと。

その後、ミレイニは意を決したように、エリエに向かって声を上げる。

「あたしはエリエが好き! 好きになっちゃったんだし!」

頬を赤らめながら上目遣いにミレイニのオレンジ色の瞳は真剣そのもので、エリエはその言葉が冗談とかではないとすぐに分かった。だが、男女なら分かるが、女同士の好きがエリエには良く分からない。

困惑したただ動揺しているエリエに、構うことなくミレイニが言

葉を続ける。

「ログアウトできなくなつて、あの城に連れてこられた時、あたしは最初はあそこを天国だと思つたんだし。だって三食昼寝付きで、お菓子も食べ放題で、本当に良かったし。でも、すぐに退屈になつて。ちよつと散歩に行きたくて部屋の外に出たらおしおきされて……だから、外には絶対に出られないし。それにあそこでは仲間という感じで、あたしを受け入れてくれなかった……でも、エリエは違つたし！あたしを本気で心配してくれて、強引にだけどあたしを外に連れ出してくれたし!!」

「……いや、それは、あんたから情報を聞き出そうと——」

苦笑いを浮かべると、熱い視線で詰め寄ってくるミレイニに告げると、彼女はその言葉を遮つた。

「——だから、エリエはあたしの王子様なんだし！ あの子とエリエがどんな関係だとしても、そんなのどうでもいいし！ あたしはエリエが好き！ だからエリエにもあたしを好きになつてほしいんだし!!」

「……いや、あの……ちよつと落ち着きなさい。ミレイニ」

怖いほどに真剣な表情でじりじりと距離を詰めてくるミレイニの肩を掴んで、エリエは強引に彼女の体を引き離す。

そして、興奮しているミレイニを諭すように告げた。

「——いい？ 今のあなたはあの騒ぎでちよつと混乱しているだけ、それに、好きっていうのは男女で生まれる感情で、女の子同士なんてありえないのよ?」

「女同士で好きになつて何が悪いんだし！ あたし。エリエと居ると凄く胸がドキドキするし!」

「いや、だから。それは吊り橋効果つてやつなの！ 本当の好きじゃないのよ!」

頭を振つてミレイニの言葉を否定していたエリエに、飛び掛かるかたちでミレイニが強引にエリエをベッドに押し倒した。

ベッドの上でエリエの上に覆い被さつたミレイニは熱のこもつた潤んだ瞳を、驚き動揺しているエリエに向けた。

エリエはミレイニの突然の行動で虚を突かれたのか、どうしたらいいのか分からず、覆い被さって動く気配のないで見つめてくるミレイニの目を見据える。

そんなエリエの澄んだ水の様な瞳をミレイニがじっと見つめたまま、微動だにしない。お互いに無言のまま見つめ合っていると、ミレイニが熱のこもった瞳を向け徐ろに口を開く。

「……エリエはこれでもドキドキしないし?」

「し、しないわよ! いい加減に悪ふざけを止めないと、後でひどいわよミレイニ!」

憤って拳を覆い被さるミレイニの前に突き出すと、突如として熱を帯びたその瞳が突如として涙を溜め込んで。

「……あたしは本気なのに……こんなのあるえないし!」

咄嗟に走り去ろうとしたミレイニの瞳からは涙が溢れていた。ハツとして直ぐ様立ち去ろうとした彼女の腕を掴んで制止する。

決して視線を合わせず、震えた声でミレイニが叫ぶ。

「――放してほしいし! あたし。もうここにいられない!」

「いられないって……じゃあどこに行くのよ! お菓子は要らないの?」

「そんなのもう要らないし!!」

ミレイニはエリエの手を振り払おうと、必死で腕を振り回す。

予想だにしていなかったミレイニの突然の行動に、エリエは内心とても焦っていた。

それもそうだ。星も再び誘拐され、エミルも皆も混乱しているこんな時に、ミレイニまで居なくなることになれば、エミルに要らぬ心配を掛けてしまう。

(……このままだと、この子が飛び出して行ってしまう……それなら!)

エリエはミレイニの腕を思い切り引っ張ると、今度は反対にエリエが覆い被さるようにベッドに押し倒した。だが、泣いている顔を見られたくないのだろう。なんとか逃げ出そうと、ミレイニは全力で抵抗していたが。

ベッドに押し倒したミレイニの両肩を掴んで暴れているミレイニの顔を真剣な面持ちで見つめる。

「——ミレイニ。私が本当に好きならこつちを向きなさい」
「……ッ!？」

その直後、ミレイニの頬にエリエの柔らかい唇が触れる。

互いの顔がゆつくりと離れると、驚きながらも、エリエの顔をじつと見つめるミレイニに、エリエが優しい声で告げる。

「どう？　これで分かったでしょ？」
「……うん」

頬を押さえ、心ここにあらずと言った感じでミレイニが頷く。

少し恥ずかしそうに、エリエは頬を赤らめながら呆然としているミレイニに尋ねる。

「——なら、どこにも行かない？」
「うん！　ずっとエリエの側に居るし！　大好きだし！」

「あはは、抱き付いたら重いわよー」
満足そうに微笑んだミレイニは、溢れんばかりの喜びを表現するよう全力でエリエに抱きつく。

機嫌を直したミレイニの様子を見て、エリエは不敵な笑みを浮かべている。これは全て彼女の計算通りの展開なのだ——。

エリエの母国では頬にキスをするのは挨拶のようなもの、それをしたことでミレイニをここに留められるなら安いものだ。

頬にキスされて満足したのかミレイニは、嬉しそうに微笑みを浮かべ、エリエの腕にしっかりとしがみついている。

「ふふくん。やっぱりエリエはあたしの事好きなんだしく」
「あはは……そ、そうかもねえ……」

（この子が単純で良かったけど、ここまで懐かれるのは予想外かも……）

エリエはべったりと張り付いてくるミレイニに、苦笑いを浮かべながらそう思っていた。

抱き付いたまま、一向に離れようとしないうミレイニに少し呆れ顔のため息を漏らすと、小さな小窓から差している夕日の光を見つめた。

エリエが隣の寝室に姿を消してしばらくの間は、落ち込むエミルをイシエルが落ち着かせるような状況が続いていたのだが、その甲斐もなく椅子に腰を下ろして項垂れ、両手で顔を覆ったままエミルは自分を責め続けていた。

だが、それも無理はない。ライラにいい様にあしらわれただけでなく、守るはずの星を彼女に奪われた。

それはエミルの心のどこかで、昔の仲間だと思って少しライラのことを警戒しなすぎたのかもしれない。

この状況下で、不確定な要素を持ち合わせている人間と接触し。あまつさえ、城の中への侵入を許すなど……無警戒過ぎたのだ。

「私をもっとしっかりしていれば……」

「エミル。あかんよ？ なんぼ自分を責めたかて、どないにもならん状況はあるんやから……」

「……でも」

相当星を取り戻せなかったことを後悔しているのだろう、エミルは瞼を真っ赤に腫らしながら泣き続けている。

がつくりと肩を落とし項垂れたまま、静かに泣き続けるエミル。

そんな彼女の頭を優しく撫でながら、落ち着かせる様な声音でイシエルが口を開く。

「——エミルだけのせいやない。うちもなんもできひんかったことやし、エミルは一生懸命やとったよ？ いつも見てるうちが言うんや間違いあらへん」

彼女のその言葉に、エミルの瞳から更に止めどなく涙が溢れ出てイシエルに凭れる。イシエルは肩を震わせて泣くエミルを優しく両腕で抱き寄せた。

そんな時、突如として扉が開き、そこからマスターとカレンが部屋に入ってきた。

部屋に入ってきたカレンが、リビングで泣いているエミルを見て驚いた様な表情をして足を止めた。

「ど、どうしたんですか!？」

「……な、なんでもないので……それよりも、無事で良かったわカレンさん」

エミルは慌てて涙を拭って平静を装うと、困惑しているカレンに向かってぎこちなく微笑む。

しかし、理由もなくエミルが泣いているわけがない。その様子から大体の事情を察したカレンの表情が次第に険しくなりエミルに尋ねた。

「……星ちゃんの事ですか？」

「……………」

無言のまま、俯くエミルにカレンもそれ以上は何も聞けずに、その空間に気まずい雰囲気の流れていた。

それも無理はない。おそらくカレンよりも辛い思いをしているのはエミルだということを、普段の2人の様子を見ていればカレンにも分からないわけがない。

無言のまま互いの顔を見ることもできずに俯いている彼女達。そこに割って入るように、マスターの豪快な声が響く。

「なにも心配するでない！ あの娘なら、俺の友人から保護したと連絡があった。なにも案ずることはない！」

「……友人!? マスターそれはどういう事ですか!?!」

突如として勢い良く椅子から立ち上がったエミルが、マスターに駆け寄った。

マスターは突然詰め寄られたことで一瞬だけ戸惑いを見せたものの、すぐに柔らかい表情で険しい表情で、自分を見上げているエミルの質問に答える。

「その言葉の意味通りだ。あの娘を保護したのは、俺の仕事仲間……いや、依頼主。つと言ったところか——だから、あの娘の事は何も心配する事はない」

「——何も心配する事はない!? ライラが! ライラがあの子に危害を……………もし、マスターが彼女達の味方をするなら私は貴方を……………」

詰め寄りマスターに向いていたエミルの瞳が、突如として突き刺す

様に鋭い殺気を放った。しかし、それに動じるどころかマスターは終始微笑を浮かべている。

その殺気に気付いたカレンが表情を強張らせ拳を握って、ピリピリとした雰囲気醸し出している。もしエミルがマスターを攻撃しようものなら、カレンが一瞬で彼女に襲い掛かるだろう。

だが、それはエミルの後ろにいるイシエルも同じだった。イシエルもカレンがエミルに危害を加えようものなら、何の躊躇もなく動くだろう……。

この緊迫した状況でマスターにエミルが攻撃すれば、仲間内での戦闘になるのは避けられなかった。屋内ならまだしも、これが外に出てやることになれば、この中の何人かは確実に消えるのは間違いない。

記憶の帰還3

一触即発の緊張感の中で、マスター以外の全員が激しい殺気を放っている。

けれども。そこから『仲間割れを起こす』という危機的状況は、マスターの一言ですぐに無駄な心配だと分かる

「……なにも心配する事はない。ライラはどうか分からんが、もう一人の者はあの娘の身内だ。どんな事があるうと間違いはなからう」

「……身内!？」

一瞬にして部屋の空気が変わった。それが彼の口から発せられた『身内』という言葉が原因なのはもはや言うまでもないだろう。

マスターのその言葉を聞いて、エミルが驚きの声を上げる。

そして、その周りにいて凄まじい殺気を放っていたはずのカレンとイシエルも、驚いた様子で目を丸くさせている。

だが、皆が驚くのも無理はない。星の父親が優秀な科学者で、更にライラと一緒に居た……というか科学者の身内というのは、おそらくライラのいたラボのモニターの男で間違いない。

もしそれが事実となれば、星の身内はこのゲーム〔FREEDOM〕の開発者ということになる。そこでエミルは、自分がとんでもない思い違いをしていたことに気が付く――。

(……星ちゃんって、もしかすると、このゲームから戻る方法を事前に知っていた？ もしそうだとすると、今までの事が最初から全て演技だったとしたら……?)

エミルの心の中に星に対しての不信感が一気に沸き起こってくる。しかし、それも無理のない話だろう。この事件の首謀者である『シルバールルフ』の狼の覆面の男も星だけを狙ってきた。

普通に考えれば、ただの小学生の女の子を狙う理由が見つからない。しかも、記憶まで失わせている。これは星自身が、この事件に何らかの関係性があることの証でもある。

エリエの話聞く限り、星は全くの迷いもなく敵の元にいったらしい。もしそれが、エリエを助ける為だけではない別の意味があったと

したら……しかも、星の固有スキルの相手のステータスを奪う能力はエミルも体験した。

あんなとてつもない力をいつどこで星が手に入れたのか？星に聞いた時は、その剣を近くの湖で拾ったと言っていたが、そんなイベントはエミルも聞いたこともない。

しかも、エミルの拠点である城のすぐ近くでそんなイベントが突発的に発生するはずがない。城を建てる前に、エミルは周囲を散策し生息するモンスターなどのレベルも低く最も少ない場所を選択したのだ。

それが星個人にだけ発生するイベントだとすると、それもそれで不可解である。何故なら、フリーダムで個人に対して発生するイベントは実装されていないからだ——難易度が凄まじく高いクエストやイベントはあるが、だとしても個人に対して発生するイベントは長くゲームをプレイしてきたエミルも聞いたことはない。

それを踏まえると星の父親とその身内の男も科学者。更に、ライラに襲われた時に発動した星の明らかにゲームバランスを超えている未知の能力。

突然の星の記憶の消失と、記憶の復活の重要性——普通の小学生の女の子に、今回の事件と関係している人物が皆、必要以上に関心を持つのは異常なことだ。

そんな少女が本当に何一つ包み隠さずに、自分達と行動を共にしていたのだろうか……という疑問が生まれるのは仕方のないことだろう。現に星は口数も少なく、行動も積極的とは言えない。

彼女のその性格も何かを隠しているから、それをこちらに勘ぐられない様にする為なのかもしれない。時折外に飛び出していく星の行動も、外部からの誰かと交信の為なのか……ここまでくると、なにかもが出来過ぎていると言うか、怪しいとまで言えるレベルだ。

もしも、星と覆面の男が繋がっているとすれば、日本サーバーでも名の知れた高レベルプレイヤーのエミルに、偶然を装って接触して来たのも説明できる。

エミルの性格を早い段階で情報として得ていれば、街での最初の遭

遇も偶然ではないだろう。

マスターも謎の多い人物ではあるし。何よりここ数年間、連絡一つ取らなかつた人物がこの混乱の中、ダンジョンで遭遇する確率を考えれば、とても偶然が重なったとは考え難く、むしろ全てが最初から仕組まれていたとしか考えられない。

混乱する中、星の微笑む顔がエミルの脳裏に浮かぶ。

「……でも、あの子にそんな事ができるわけが……」

（——でも……全てが私にそう思わせる為の演技だとしたら……？）

自分に言い聞かせようと出した言葉に、直ぐ様自分の困惑する心がそれを否定してしまう。

疑心暗鬼になっている心が不安を掻き立て、負の連鎖に迷いそうになるエミル。

その直後、エミルの頭の中に岬との会話が浮かんできた。

『姉様の愛で、あの子の心の氷を溶かしてあげて下さい』

その言葉が、不信感に満ちていたエミルの心に突き刺さる。たとえ星が裏切っていたとしても、今までのこの生活の中での思い出は消えることはないし揺るがないものだ。万が一に星が敵なのだとしても、こちら側に引き入れればいいのだ——。

静かに瞼を閉じて再び瞼を開いた時には、エミルの表情は決意に満ちたものへと変わっていた。

（そうよ。あの子が何を考えてるか関係ないわ。私はただ星ちゃんと一緒に居たいだけ……私があの子を信じてあげなくてどうするの！

あの子とのこれまでの日々を信じてあげなくてどうするのよ！）

心の中でそう自分に言い聞かせると、目の前にいるマスターに神妙な面持ちで尋ねた。

「マスター。それで、星ちゃんは今どこに居るんですか？」

「……それは教えることはできない」

表情を曇らせたマスターはそう告げると、エミルに頭を下げた。

目の前で頭を下げたマスターをじつと見据えていたが、エミルはその返答を予想していたのか、たいして驚きもせず次への質問をした。

「なら、マスターはその人とどういう関係なんですか？ それも教え

られない……?」

彼を試す様な瞳で言い放ったエミルの踏み込んだ質問に、マスターは微かに眉をひそめた。

向かい合うマスターとエミルの後ろで、殺気を放ちながらなおも睨み合うイシエル達も、その質問には興味があるのか聞き耳を立てている。少しの沈黙の後、マスターは大きくため息を漏らすとその重い口を開いた。

「はあ……分かった。儂と奴等との関係は全てを話そう……このままでは内部分裂しかねんからな……」

「……そうですか」

その優しい声色にエミルの表情も少しだが和らぐ。

マスターは周りのメンバー達にも席に座るように促した。その言葉に皆も素直に席に着く、なんだかんだでその場に居た全員が気になっていた。ということなのだろう。

深く椅子に腰掛けたマスターが、ゆったりとした口調で話し出す。

「そう、あれはまだこの事件が発生する前の事だ——どこからともなく儂の噂を聞きつけ、儂のやっている道場にやって来た者がおった。そやつが儂に依頼をしてきたのだ……だが、その男は依頼してきた者の使いだと言っておってな。儂は一度は断ったのだ『自ら姿を表さないう者と交渉などできるはずがない。顔を洗って出直してこい』とな……」

腕を組んだマスターは感慨に耽るように、徐に天井を見上げた。

しばらくして、再び口を開くマスターが言葉を続ける。

「その数日後……今度は儂の手元に、一通のエアメールが届いた。そこには『先日の無礼を許してもらいたい。だが、海外に居るために、こちら側に出向くことはできない。そこで、ゲーム内での取引を行いたい』という感じの内容が書いてあった。もちろん、儂はゲーム内で会うことを了承した——」

「——どうしてですか? 師匠」

我慢できなかったのだろう。カレンがマスターの話を遮り、小首を傾げながら尋ねてきた。

含み笑いを浮かべたマスターが、不思議そうにしている愛弟子の方を向いて。

「ふふっ、それはその男に、いくら興味があったからだ。待ち合わせ場所の街外れの荒れ果てた崖の上に現れたのは武装もしない。青いパーカーを着た男だった。私服で現れたのは自分が武装していないことを証明する為だったのだろう……だが、その時の行動が、僕は逆に怪しいと感じていたのだ——警戒する僕に僕は微笑みながらこう言った『まずは仕事の話は抜きにして飲みましょう』とな……もちろん最初は変な奴だと思った。盃を持って酒を数回酌み交わす中で、僕は奴がどういう人物なのかを感じ取っていたのかもしれない。ゲーム内とはいえ。いや、ゲーム内だからこそ、奴の人柄が良く分かったのかももしれんな……僕は、その男の依頼を受けた——それが、ダークブレットの日本支部の壊滅または半壊させ、しばらくは再起をかけられないようにするというものだ……手応えのある者はいなかったが、雑魚も数が揃えばそれなりに手応えはある。僕は加減を忘れて敵の拠点にいた殆どの奴を撃破し、一時は再起不能にまで追い込んでやったわ！」

口を大きく開いて豪快に高笑いするマスターに、周りのメンバー達は全てを悟った。

そう。ダークブレットのアジトを襲撃した時にマスターが参加しなかったのは、前回の強襲でマスターが主要な敵を撃破し、日本支部の戦力を把握していたからだ。

だからこそ、エミル達で事足りると見たマスターは今回の戦闘には介入しなかった。

おそらく。メルディウス達を差し向けたのも、今後の為に彼等もエミル達と顔合わせをしておいた方がいいと考えたからだろう。それは、エミル達の戦力で十分に成し遂げられると確信していたからに他ならない。

また、彼の圧倒的な強さに、ダークブレット事態を脱退したメンバーも少なからずいたはずであり、今回の作戦の成功には事前に戦力を剥いでくれていた彼の以前の戦闘の功績も少なからず入っている

のだ……。

ふと、エミルがマスターに言葉を投げ掛ける。

「それで、マスターは今までどちらに？」

そう尋ねたエミルの瞳はどこか、マスターの真意を探るような鋭くそして冷たく思えた。マスターに疑惑の目が向けられていることを察して、隣に座っていたカレンが声を上げる。

「師匠はなにも悪くない！俺が不覚にもダークブレットとの戦闘で油断して負傷してしまい。近くの宿屋で受けた傷を癒やしていただけです！」

テーブルを叩き立ち上がったカレンは、真っ直ぐにエミルの目を見た。

エミルは頷きながらため息を漏らすと、カレンの透き通った瞳を見つめた。彼女のその眼差しは、カレンの心を見透かすかの様に鋭く思わずカレンの額から汗が流れる。

だが、エミルからは決して視線を逸らそうとしない。今、目を逸らせば間違いなくエミルがマスターを敵視すると分かっていたからだ。彼女としてもそれだけは、何としても避けなければならない。

何とも言えない緊張感の中で微動だにできなかつた。そんな時、隣の寝室からエリエとミレイニが何も知らずに出てくる。

エリエの腕にしつかりと抱き付いているミレイニが、リビングのテーブルで話をしていたエミル達を指差した。

「皆で何してるんだし？ なにか……んんっ！」

しゃがんだエリエは咄嗟にミレイニの口を塞いで苦笑いを浮かべた。それは話を聞かなくても、ピリピリとした空気感で大体のことは把握できたからに他ならない。

空気を読むのが苦手なミレイニに、今好き勝手言われればこの場が更に悪化しかねない。

エミルは横目でエリエ達を見ると、小さくため息を吐いて肩の力を抜く。

「はあ……そうね。カレンさんは嘘を言っていないみたいだし、ここでは真意を追求するのは控えましょう」

エミルはそう言っただけだったが、もちろんその本心は違う。それはカレンとマスターも重々承知していた。

結局のところ、マスターがエミル達に黙っていたという事実には変わりはない。しかも、元仲間だったライラが星を連れ去った事実が、エミルとマスターの絆に亀裂を入れたのは間違いないだろう。

おそらく。エミルがこの場での追求を避けたのは、エリエとミレイニの出現が大きく関わっていた。

いや、それも少し違うのかもしれない——本当はまだ幼さの残るミレイニの顔が、不安で歪むのを見たくなかったのかもしれない。

次なるステージへ・・・

エミルは椅子から徐ろに立ち上がりエリエ達の方に歩いて行くと、状況が全く飲み込めず不思議そうに首を傾げているミレイニの前で膝を折って微笑んだ。

「ごめんなさいね。ちょっと今後の話をしていただけなの」「そんな事ならあたしも混ぜてほしいし！」

仲間外れにされたと思っただのか、不満そうに頬を膨らませたミレイニに「もう終わっちゃったのよ」と笑みを返す。

そう告げると更に頬を膨らませるミレイニの頭を、エミルは苦笑いしながら優しく撫でる。

だが、その偽りの微笑みは、エリエには容易に見通すことができた。しかし、何を話していたのかをエミルに尋ねることはできなかつた。いや、聞けなかつたと言う方が正しい。尋ねなくても星絡みのことであることが容易に想像できたからだ――。

そうでなければあれほど、ピリピリとした空気にはならないだろう。

エミルはイシエルに声を掛けた。

「イシエ少し外に出てきたいのだけど、付き合ってもらえない？」

「うん。ええよ」

イシエルは彼女の申し出を二つ返事で了承すると、揃ってリビングを後にする。

エミル達が出ていくと、部屋に流れていた緊張感が一気に解き放たれ、カレンがほっとしたように息を吐いた。

正直。このまま張り詰めた緊張感の中にいたら、心臓が飛び出しそうだった。まあ、現実には心臓が脈動している感覚があるだけで、心臓という機能はアバターに存在しないのだが――。

「……でも、いったいどうしたんだ？ エミルさん」

「あんたがまた何かしたんでしょ？」

透かさずエリエがにやにやしながら、カレンを挑発するように言い放つ。

「バカ言え！ 俺は何もしてない！ お前が何かしたんじゃないの؟!」

「誰が！ あんたじゃないんだから！」

いがみ合っていた2人は、次の瞬間に「ぷっ」と息を吹き出し、同時に笑みを漏らす。

エリエとカレンは向かい合いながら微笑んだ。

「——無事で良かったわよ」

「——お前も元気そうじゃないか」

お互いの無事を確かめ合うように顔を見合わせていると、その間に頬を膨らませたミレイニが強引に割って入って2人を引き離す。

「ちよつと！ あたしのエリエに馴れ馴れしくしないでほしいし！」

ミレイニが不機嫌そうな顔で、鳩が豆鉄砲を食ったような顔でいるカレンを睨みつけているとその頬をエリエが引っ張った。

「はにふるの〜！ いはい。いはいひ〜！」

「——いつから私があんたの物になったのかしら〜？ ミレイニ」

「はっひ、きすひたときはひ〜」

頬を引っ張られながら言ったミレイニの言葉を聞いて、カレンが血相を変えて声を荒らげて叫ぶ。

「お前！ そんな子供にまでキスしたのか!!」

カレンの脳裏に、以前の無理やりされたエリエとの強引なキスシーンが鮮明に蘇る。

まるでウブな乙女のように頬を赤らめながら叫ぶカレンに、息を吐いてエリエは面倒くさそうに目を細めている。

その後、エリエは軽くあしらうように告げた。

「そういう状況だったってだけよ」

だがそれでVRと言えど初めてのキスをカレンが納得できるはずもなく。

「そういう状況ってどういう状況だ！ 誤魔化すな！」

カレンが叫ぶのも無理はないだろう。普通に考えて、日常でキスをしなければいけない状況など、恋人でもない限り想像できないことだ。

だが、怒っているカレンに反論したのは、エリエではなくミレイニだった。

ミレイニはエリエの手を振り払うと、両頬を抑えて叫ぶ。

徐にカレンの前に歩いて行くと、ミレイニはビシツと指差しながら言い放つ。

「あたしが好きだって告白したんだし！ さつきからなんだし。エリエの恋人でもないならほっといてほしいし！」

睨みながら指差しているミレイニを見て、カレンはただただぽかんと口を開けている。そんなカレンを気にかける様子もなく、ミレイニはエリエの腕に抱きついて満面の笑みを浮かべている。

自分の腕に抱き付いて嬉しそうにしているミレイニを、エリエは少し困ったような顔で見た。

* * *

激しい激痛に完全に気を失ってしまった星は、研究室の冷たい検査台の上で昔の夢を見ていた。そう。それは星の今まで生きてきた記憶の欠片とも言えるものだ――。

膨大なデータとなった記憶が、星の脳裏に写真の様に次々に記憶を映し出している。

映し出すというよりも、第三者となって過去の自分を後ろから見ているという方が正しいかもしれない。

今、映し出されているのは幼稚園に通う前の時のことだ――小さな自分がガラスに張り付いている姿を自分が後ろから見ている。

それは自分を自分が見ているようで、どうにも気持ちのいいものではない。だが、その頃のこととは今でもはつきりと覚えている。小さい頃は保育園に預けられ、いつも帰るのは一番最後だった……。

そこに白いエプロンを付けた年配の女性が近寄ってくる。

「星ちゃん。そんなところにいないで、こっちで先生とお菓子を食べてみましょう?」

「……………」

幼い頃の星は首を横に振ってそれを拒否すると、再び外を眺めていた。

その頃は自分の母親が仕事をしているなんてことは分からず。このまま、ずっと戻って来ないんじゃないか。と毎日が不安だったのを今でも鮮明に覚えている。

瞳を潤ませながらずっと遠くを見つめている幼い自分に、それを見ていた星も感情移入してしまい。下を向いて思わず表情を曇らせた。「……この頃は、お母さんにわがままばかり言ってた。いつも仕事に行かないでつて、泣いてたっけ……」

不思議とないはずの記憶なのにも関わらず、その時の心境が心に蘇ってくるのを感じた。その時の感傷に浸っていると、暗転してすぐに場面が切り替わる。

今度は幼稚園の入園式――。

緊張した様子で入園式に望む自分の姿が映し出される。

(そういえば、その頃は友達ができるか不安だった。でも、それは心配だけですぐに友達がたくさんできたんだっけ……毎日が楽しくて幼稚園に行くのが楽しみで……)

そして卒園式とまるでタイムトラベルをしている様に、目まぐるしく日々の場面が切り替わっていく。

場面が変わるごとに、星はある重大なことに気が付いてしまう。

成長するにつれて自分の表情が硬く、感情が薄れていく様なそんな感じがしていくのを感じ、それが胸の奥を締め付ける。

そして何よりも、母親の表情がどこか重たく、自分を見るその顔がどんどん嫌いになっていく気がして辛かった。

しかし、それ以上に自分のことが嫌いになっていくのを痛感していた。

幼少期はいつも笑顔を見せていたが、小学校に上がった頃にはすっかり消極的な性格になってしまっていたからだ。

星が母親が変わって家事を手伝うようになったのは、小学校2年生に上がった時からだった。

初めは見様見真似で始めた家事だったが、最初は失敗ばかりの家事

も慣れてくるにつれて、いつの間にか母親の居場所を奪っていることを気付かされた。

最初は『お手伝いがしたい』という子供らしい感情が強かった家事も、いつの間にかやるのが当然になっていき。

その頃から母親が急に冷たくなったのを、過去の自分を見ていて痛感した。

結果的に母の母親としての居場所を奪ってしまった自分の失態だと気付き、どこにも吐き出しようのない感情が込み上げてくる。

昔は微笑んだら微笑み返してくれた母親がいつの日からか、それすらもなくなっていたのだ。

星は自分の後ろでその光景を目の当たりにして、ただただ拳を強く握り締めていた。

子供は手の掛かる子ほど可愛いとはよく言ったものだ……しかし、逆を言えば手の掛からない子は、すでに子供ではない。

精神が早く成長すると母親に甘えることもできなくなる。父親が居れば父親に甘えることもできただろうが、星にはその選択肢すらなかったのだ――。

星は改めて自分を客観的に見ることで、自分自身を再確認することができた。

「……そうか、私ってこういう子だったんだ……こんなんじや、お母さんが私を嫌いになって当然だよね……」

俯き加減に、星は今にも掻き消えそうな弱々しい声で呟く。

とても悲しいことなのに、不思議と涙は溢れてこない。感情が既に自分にはないようでそれが一番辛かった。

直後。星の最も見たくない記憶が蘇る。それは小学2年の夏、8月28日。星の誕生日の出来事だ――。

星は誕生日だったこともあり、その日は上機嫌で家で母の帰りを待っていた自分がいた。

その頃には始めたばかりの家事も何不自由なくこなせるほどに成長している自分へのご褒美に、いつもは切り分けられてあるケーキだけだったが、きつと今年は母親が夢にまで見たホールケーキを買って

きてくれて、ご馳走を用意してくれると……年に一度の自分の生まれた日を祝福してくれると、そう思っただけで疑わなかった……。

洗い物に掃除や洗濯。学校の宿題も終わらせ、万全の状態でリビングの2人にはテーブルをうきうきしながら拭いていた。

普段なら寝る準備をしていなければ怒られるが、今日だけは例外だろう。今の星には母親が帰ってくるのが待ち遠しかった。

「ふふっ、もうすぐお母さんが帰ってくる時間だ」

壁に掛けられた時計を見て、もうすぐ10時になるところを秒針が指そうとしている。いつもなら、そろそろ母親が帰ってくる時間だ。

期待に胸を膨らませている少し前の自分——それとは対照的に表情を曇らせながら、そんな自分を見つめている今の自分。

この後に起こることを誰が予想出来ただろう……いや、誰も予想できはしない。

特に子供の頃は良い子であればあるほど、頑張れば褒めてもらえるという思いが強くなるのは自然なことなのだから……。

だが、その日は母親の帰りが異常なほど遅かった。

過去の自分は暗い表情でリビングのテーブルの椅子に腰掛けたまま、徐に壁に掛かっている時計に目を向けた。

時計の針は12時を回ろうとしていた。いつもなら、もうとっくに眠っている時間だ。

だが、今日だけは寝るわけにはいかない。襲って来る空腹と眠気と必死で戦いながら重くなる瞼を何度も顔を洗って覚ますしていた。しかし、いつまで経っても玄関の扉が開く音が聞こえてこない。

それには記憶の中の星も、先程までのテンションが嘘の様にしよげかえってしまっていて。

「……お母さん。お仕事忙しいのかな……」

俯きながらそう小さく呟いていると、突如として玄関のドアが開く。

その音に表情を明るくさせると、星は椅子から勢い良く立って玄関まで駆けて母を出迎えに行った。

もう。今までの沈んだ顔が嘘の様に満面の笑みで母親を向かい入

れる。

「おかえりなさい！」

元氣に出迎える星に、母は疲れきった様子で答えた。

「……ただいま。遅くなってごめんなさいね」

そう言つて謝る母親のその手には、コンビニのお弁当が二個入ったビニール袋が握られていた。

星は期待と違うとは思いながらも、疲れた様子之母の顔を見て反論したい気持ちを抑えた。

少し落ち込んだ様子之星に、母はぎこちなく微笑む。

リビングのテーブルに向かい合つて座りながら、無言でお弁当を食べる。

(……なんかいつも通りで。お誕生日つて感じじゃない……)

朝は母親が作り置きしてくれているが、夜は自分でコンビニに行つてお弁当を買っていた。

もちろん。コンビニのお弁当が嫌いな訳ではないが、今日に限つてはもつといい物が食べたいと思いながらも、仕事で疲れている母親の前にそんなわがまを言うわけにもいかなかった。

残念そうに肩を落としながら、過去の自分はお弁当を食べ進めていく。

この時のことは、記憶が曖昧になっている星も鮮明に覚えている。

まあ、自分の誕生日にコンビニ弁当だけではさすがに忘れたくても忘れられない。それがまだ子供の時ならば尚の事だろう……。

時折、母親の顔色を窺いながら、本当は今日が星の誕生日であることを忘れていたのではないか……つと思っていると、一足先にお弁当を食べ終えた母が徐ろに口を開いた。

「——あのね。今日は星のお誕生日だけど……お父さんの命日でもあるの……」

「……えっ？ 命日って？」

「……お父さんが亡くなった日よ」

「……………」

それはまだ以前の星にとっては天地がひっくり返ったくらいの衝

撃的だった——自分に父親が居ないのは分かっていたことだが。まさか、それが自分の生まれた日だとは知らされていなかったからだ。青い顔をしている自分を後ろで見いて、星は更に表情を曇らせる。目の前で困惑した表情のまま、あんどりと口を開けている自分が不憫でしかたなかった。

楽しみにしていた誕生日の当日に、突然母親からそんな話を聞かされたのだ。悲しみよりも先に困惑が来るのは無理もない。

「——もう、あなたもある程度理解出来る年齢になったし。私としても、やっぱりお父さんの命日にお祝いをするのは気が引けるの。だから……」

母は財布から一万円を取り出し、それを星の目の前にそっと差し出す。

だが、星にはその意味が良く分からず、困惑した表情で母親の顔を見上げた。

「……お金？」

「そう。これからは、お誕生日の前の日にお金を渡すから、あなたの好きな物を買って来なさい」

「……………」

星はテーブルに置かれた一万円札を見つめながらも、なかなかそれを受け取ろうとしない。

目の前のお金を受け取ってしまったら、これから先。今までのような誕生日は送れなくなる。

それに何よりも。一万円という大金を前にして、どうしたらいいのかわからなかった。

沈黙する娘と一万円札を残し。母はゆっくりと椅子から立ち上がり、自室へと向かって歩き出した。

リビングのテーブルにぽつんと一人残された星の瞳から涙が頬を伝う。

その時のことを、後ろでその光景を眺めていた星も思い出す。

「……そうだ。この時から本当に、私の記憶の中にはお母さんとしたイベントなんてない……」

この日を境に、星の記憶から誕生日もクリスマスやお正月と同じくただ単に曜日を消化するだけになった。

自分の意思をもっと強く伝えれば変わったかもしれないことだが、星にはそれを伝えることができなかった……もしそれを伝えれば、唯一の肉親である母親にも捨てられそうな気がしたからだ。

その後も次々と場面が変わり、星の記憶の抜けたピースを埋めていく。しかし、その殆どで、そんなにいい思い出などなかった気がする。学校でいじめられたり、1人で家で留守番をしている場面なんかは胸が締め付けられるような、辛い思いを何度もしなければならぬ。

だが、記憶が曖昧になっている星の今の状況では、どんなに些細なことでも知りたい。

今の星の記憶は簡単に説明すると、多くのピースを失ったパズルの様なもので、それがまた記憶がないことによつて、乱雑に並べられているようなものなのだ。

それは行動——過程——結果の順番が、場面によつては過程——結果——行動になったり、結果——行動——過程になったりと、場面なら分かるが、どうしてそうなったのか。この後どうなるのか。がすっぽり抜けてしまっているということなのだ。その為、どの記憶が先で後なのか全く分からないのである。

第三者目線で今までの記憶を映像として見て、脳内に残った微かな感情や記憶と結びつけているのだ。

そして今見ているのは、ゲームを始めた直後のエミルとの様子だ。今は、街の側を徘徊しているラビットと戦っている自分の姿が見える。

剣を振り回し、飛び掛ってきたラビットに震えながら目を瞑っている姿なんて、恥ずかしくて見れたものではない。

もちろん。この時の自分は大真面目で、今もどうかは分からないが、傍から見ているととても見ていられない光景だったのが分かり赤面してしまう。

だが、それと同じくしてなんだか、温かいものも心の奥底から湧き上がってくる感覚もある。

全ての記憶をまるで物語でも見ているかのように見終わると、星は
ゆつくりと瞼を開けたそこにエミル達が居ることを信じて……。

*
*
*

次なるステージへ・・・2

記憶の渦の中を抜けてやっとの思いで、その濁流のように頭の中を巡る記憶を突破した星。

気を失っていた星が目を覚ますと、目の前に居たのはエミルでもエリエでもなかった。

ウエーブがかかった茶色い髪に、茶色の瞳のモデルの様に細くしなやかなボディーラインの美人な女性。それは星も良く知っている人物だった。それもそうだ。どこかの研究室の中で自分の腕に注射針を刺した人物を忘れるという方が無理な話だろう。

「……………あなたはあの時の……………」

星はすぐに不信感に満ちた瞳でライラを睨みつけている。

前に痛い目にあっている人物であるライラは、星の記憶の中でも危険人物に指定されていた。そんな人物が目の前に居れば、誰でも警戒するのは当たり前のことだ――。

ライラは怪訝そうに自分を見る星に、にっこりと微笑みを浮かべ告げる。

「あら良かったわ。その調子なら、私の事も覚えてくれるようね」

彼女のその言葉に、星の彼女を見る瞳は更に鋭さを増す。

「……………はい。私を騙して薬を注射した人です」

「うふふ、そうね♪ でもそんな怖い顔してるとせつかくの可愛い顔が台無しよ?」

冷たい声音で言った星にライラが微笑みながら、その頬に手を当てる。

それを退けようと星は右手に力を入れるが、拘束されている為に全く動かすことができない。

両手足を拘束されていることに気が付いた星が「放して!」と強引に身を振ると、驚くほどに呆気無くライラは星の手足の拘束を解いた。

その事がどうにも腑に落ちなかったのか、星は警戒しながらゆつくりと後退りして、部屋の端まで後退し、彼女と一定以上に距離を取る。

警戒している星を見て、悪戯な笑みを浮かべたライラがゆっくりと近付いてくる。

徐々に迫ってくる彼女を見て、星は慌ててコマンドを操作すると、アイテム内から金色に輝く『エクスカリバー』を取り出してその剣先をライラに向ける。

ライラはゆっくりと両手を上げると、睨みを利かせている星に告げた。

「そんなに怖い顔しなくても何もしないわ。今のこのゲーム内のプレイヤーの中で、貴女は間違いなく最強なもの」

「……最強？ 私か？」

星はその言葉を疑うように、首を傾げてライラを見る。

まあ、星のその反応も最もだろう。今まで守られてきた星が、エミルやエリエを抜いて最強なんて言われれば疑うのも無理はない。しかもそれが、微塵も信用もしていない人物の言葉なら尚更だ――。

「そうよ？ 今の貴女はすでにプレイヤーではなくて、ゲームマスターなのだから。その『エクスカリバー』があれば、ゲーム内のプレイヤーのステータスをゲーム内での最低値『1』にできるの。もちろん、発動にはスキル名と一緒に『オーバーレイ』と唱えれば発動できるわ」

「オーバーレイ？」

「そう。使い方は呪文のように唱えるだけ『ソードマスターオーバーレイ』これだけで貴女は誰にも負けないし。プレイヤーの戦意やスキル発動なども、視界に表示された別ウィンドウで制御できるわ」

そのライラの説明を聞いて、星はただただ首を傾げるばかりで、全くと言っていいほど理解できていない。

まあ。小学生に、ゲームシステムを理解させる方が難しいだろう。しかも、ライラの説明は今の星には逆効果なように……。

(……この人。さつきから何か変なこと言ってる……凄く怪しい……)

星はそんなことを考えながら、細目で微笑むライラの顔を見続けている。

その瞳は明らかに、彼女を信用に値しない人間と判断している。それは幼いながらも、危険人物を判断する女の勘というやつかもしれない。

警戒しつつ距離を取りながら、星とライラの間には一向に話の進展が見えてこない状況だ。

突如として、星の前のモニターが一瞬真っ黒になったかと思うと、次の瞬間には、白衣を着た男の姿を映し出す。

「久しぶりだね。星ちゃん……」

モニターに映し出された男性は中肉中背で、何の変哲もない一言で言うなら、どこにでもいそうな顔立ちをしていた。だが、彼の星を見る目はとても優しそうな瞳をしている。

そして星は記憶取り戻す時の夢の中で見た風景に、この男性が映っていたことを思い出す。

「……あなたは保育園の時に、一度だけお母さんと迎えにきた……」

そう。星は間違いなく、その男性を知っていた。

保育園のお迎えの時間に一度だけ目にした星の母親の弟——つまり、星にとって叔父さんなわけだ。

初めて会った時の彼はまだ学生のような風貌で、とても叔父さんとは思えなかったのを、星は今でも鮮明に覚えている。

しかし、一度ファミレスで食事をした時以外は、今の今まで一度も会っていない。そんな人物が、どうして今更になって……という疑問もあるが。星にとって、この状況で助けを求めるなら彼しかいないのも事実——。

星は彼に向かって率直な質問をぶつける。

「この世界から出る方法を知ってますか？」

「それはまだ分からない。だが、この世界に閉じ込められた人間を救えるのは、君の持つその能力だけが頼りだ。やってくれるかな？」

「……………」

その言葉に、星はすぐには答えることができなかった。だが、それもそうだろう。星は戦闘に関しては殆ど素人。また、どんなに凄い能力であろうと、使い方も知らない状態ではどうしようも

ない。

しかも、急に昔一回会っただけの叔父に『この世界の人間を救えるのは君しかない』などと言われたところで、今の状態の星では、全く現実性を持ってない話だ。

それに何よりも……。

(……どんなに凄い能力でも。私にそんな事できるわけない)

表情を曇らせながら、そう痛切に感じていた。

今までの戦闘でもそれほど、戦闘に貢献していたという場面はない。

それどころか、足を引つ張ってばかりの自分に、急に『この世界に閉じ込められた人間を救ってくれ』なんて言われても返答に困る。実際になにもできない自分が、そんな大それたことができるとは、星には到底思えなかったからだ。

普通に考えれば『君に世界の命運が掛かっている』なんて言われて「はい分かりました」なんて言える人間が、世界に何人居るだろうか……いや、いるわけがない。自分はよく読むファンタジー小説の主人公でも、正義の味方でもないただの小学生だ——。

黙り込んだまま俯く星に、モニターの男が優しく微笑みかけた。

「大丈夫だよ。『ソードマスター』は使う剣によって能力を変化させるものだ。少し癖のある固有スキルだけど、ベータ版のテストと同じオリジナルスキルである事は間違いない」

「……オリジナルスキル？」

「ああ、君はオリジナルスキルを知らないんだね。このゲームでは、スキルは全てランク付けされている。起動器具に元々入力されているリアルナンバーで全て固有スキルは決定している。その為、初期でハードを買い換えれば、自分の好きな固有スキルを手に入れることができるかもしれない。という宝くじ的な要素があるのが固有スキルなんだ。でも、その殆どは付属程度で、結局はプレイヤー個々の能力が大きく左右するけどね。それに固有スキルだけではなくて、トレジャーアイテムもそれぞれ強い能力を有している物が多いから、それとの兼ね合いを考えて——」

「……………」

説明していたモニターの男は、熱が入ってしまい。星は完全に置いてけぼりされてしまった。

つまりオリジナルスキルとは、ベータ版のテストをしてくれたプレイヤーへの報酬で、キャラにオリジナルで考えた固有スキルを持たせるというもの。

もちろん。そのベータ版のテストプレイヤーに選ばれた人間は極めて少なく。卓越した固有スキルを有しているものの、日本では4人しか存在しない。

星の『ソードマスター』もそうなのだとすれば、日本に5人しか居ないと言うことになる大変に貴重なものなのだ。

まあ、モニターの男がゲームのシステムを開発した本人なのだから、説明に熱が入るのは仕方ないのかもしれない……。

無言のまま顔を引き攣らせる星を余所に、熱烈にゲームの話続ける男に、見かねたライラが口を挟む。

「ミスター！ 説明が長いわよく。あの子も困惑しているわ」

「おっと、つつい自分の設定したシステムを語りすぎてしまったね。まあ、習うより慣れろだ——実戦で使う以上。実際に使って覚えるのが一番！」

「そうですね。まあ、私が教えたなら一瞬で覚えられるわ♪」

如何にも自信ありげにそう答えたライラに、星は不信感に満ちた眼差しを向けた。

その直後、コマンドを操作したライラの前に剣が現れ、彼女はそれを空中で掴むとその剣を星に向けて構える。

星は彼女をしっかりと見据えると柄を握り締め手に力を込めたまま、強張った様子の星を見てライラの顔から笑みが溢れる。

それを見て、星が不機嫌そうに眉をひそめると。

「……な、なにがおかしいんですか！」

「ううん。模擬戦でそんなに緊張しちやって可愛いなって思っただけ。本当に、もう食べちゃいたいくらいに……」

ライラの思わせぶりの微笑みに、星の背筋に悪寒が走る。

その表情は笑顔ではあるものの、その体を纏う闘気は明らかにエミルと同じ、手慣れであることを思わせる独特の雰囲気を感じに滲み出させている。

星は生唾を呑み込むと、握った剣を更に強く握り。緊張した面持ちで、自分に言い聞かせる様に呟く。

「きつと……ううん。絶対大丈夫！」

つと、不安になる自分を鼓舞する様に言い聞かせ……。

余裕の笑みを浮かべて身を低くすると、攻撃の為に足に力を込めるライラ。

今すぐにも突撃してきそうなライラに、まるで捕食者に狩られる前の小動物の様に、星は怯えきつた瞳を逸したくなる衝動にかられながらも、懸命に向けている。

その時、モニターから声が響く。

「ライラ君。手加減してくれよ？ 星ちゃんは戦闘経験が浅いんだから」

「分かっていますよミスター。これもお仕事ですからね」

「ああ、ならまはスキルが発動から教えてくれ」

一度脱力した後にはゆっくりと体を起こし、ライラは無言のまま手を上げてその言葉に答える。

それと同時に、彼女を取り巻いていた闘気もすつかり消え、命拾いしたと「ふう……」と息を漏らすと、星はほっと胸を撫で下ろす。

すると、ほっとしたのも束の間。剣を持ったライラが星に向かって大声で叫んだ。

「固有スキルの発動は基本スキルと違って、言語認証機能を使っているから、声を大きく『ソードマスターオーバーレイ』で叫んでみて」

「……は、はい！ ソードマスターオーバーレイ！」

緊張しながら星が言われた通りに叫ぶと、小さなその両手に握られていたエクスカリバーが強く光を放つ。その後、星の視界に表示されているライラのHPのゲージが赤字で『1』と表示される。

それを確認したライラが不気味な笑みを浮かべた。

「とりあえず。スキル発動は大丈夫ね。それじゃー、次の動作をやっ

てみましょうか」

「次の……動作？」

ライラの言葉に星は戸惑いながら首を傾げた。

その直後、何も言わずに斬り掛かってくる。

「あわっ！ わっ！」

突然の攻撃に、剣を構えながらあたふたしていると、ライラは躊躇なく攻撃してきた。

その刃が星の体に当たり、予期せぬ攻撃に驚いた星が地面に尻もちをつく。

次なるステージへ・・・3

星は斬られたはずの場所を手で触って確認すると、不思議そうに首を傾げる。

視界に表示されている自分のHPバーを確認すると、元からある1000のHPが999になっていた。

あの踏み込みと鋭い太刀筋からすれば、1000以上は確実に減っていると思っていた。しかし、結果は見ての通り。ほぼというか全く減っていない。

驚きながら攻撃された場所を撫でていると、ライラの声が聞こえてくる。

「どう？ ダメージはほぼないでしょ？ これがゲームマスター特権なのよね。相手は全ステータスを『1』で固定され、どんな手段でも上げる事はできない」

「どんな手段でも……？」

「そう、もちろん。その逆は可能だけどね！」

ライラはそう言っただけ意味ありげににっこりと微笑む。

「それと、本来はPVPで使用できないアイテム類も全て使用できて、相手の固有スキルの使用許可の権利も貴女に移るわ。基本スキルのスイフトとタフネスの使用はできるけど、敏捷や筋力のステータスも固定されるから意味はないし。しかも、対象相手のステータスを吸収する効果もあるから、些細な問題にもならないわ。唯一脅威と言えば、トレジャーアイテムの能力くらいね」

「……なるほど」

『エクスカリバー』の効果範囲は、パーティーメンバー以外の全体に及ぶ。もちろん。敵、味方関係ないから注意が必要ね。それにその効果はPVP終了後、24時間は効果が持続するの。だから、敵の戦意を完全に喪失させることができるわよ。その剣は弱点がないのが弱点かしらね♪」

ライラの説明を聞いて、星は黄金に輝いている持っていたエクスカリバーを見た。

説明を聞いている限りは、弱点と言えるものはエクスカリバーにない。

唯一の弱点は武器スキルの使用は制御できないことだろう。だがしかし、以前のダークブレットとの戦闘では、イザナギの剣の武器スキルを無効化していた。あれは突発的に発動したバグだったということだろうか……？

敵のステータスをオール1で封印し、固有スキルの使用の禁止に、基本禁止されているPVP時の回復アイテムなどの使用も自分だけ有効にする。

また。一度使えば、相手は24時間——効果を消すことができない。まさに『エクスカリバー』は星の固有スキルの為に作られた最強の武器と言えるだろう……。

話を聞いた星は握られている柄を強く握り締め。

(……この剣があれば、私もエミルさん達みたいに戦える！)

そう思ったら、星の顔から自然と笑みが込み上げてきた。

そんな星にライラが告げた。

「さて、そろそろエミルの所に戻りましょうか！ 記憶も戻ってスキルの説明も終わったことだし。きつともものすごくエミルも怒ってるわよ……私にだけど……ねっ！」

そのライラの言葉を聞いて、星は顔面蒼白になる。

後半部分は聞き取れないところがあつたものの、エミルの怒っている顔が星の脳裏に鮮明に映し出された。

星には滅多に怒らないエミルだが、普段怒らない人だからこそ怒ると物凄く怖く感じるものだ。いや、以前のお風呂での出来事の時のレイニールの反応を思い返すと、本当に怖いのだろうか……。

「さあ、送って行くわ。帰りましょう」

「は、はいー」

剣をしまったライラが星に向かって手を差し伸べると、星は躊躇しながらもその手を取った。

星はその手を離れないようにしっかりと掴むと、名残惜しそうにモニターの方を見た。

(……叔父さん)

視線の先のモニターの男は優しい笑みを浮かべたまま軽く手を振っている。

そんな彼に星も微かに微笑みを浮かべた直後、光に包まれたかと思うと次の瞬間にはエミルの城の門の前に立っていた。

なんだかんだで、この事件が始まってそれほど時間は経っていないもの。それでも、目の前にそびえ立つエミルの城を見ると、まるで自分の家に帰ってきたような感覚が込み上げてくる。

星が感慨深げに城を見上げていると、隣で立っていたライラが握っていた星の手を放し。

「……さてと、これでお仕事は終了ね！ それじゃ、私は別のお仕事に行くからここからは一人で戻ってね！」

「——えっ!? ま、待ってください！ 一緒に付いてきてくれるんじゃない……」

無責任とも言えるその彼女の言葉に、星は不安そうな眼差しをライラに向ける。

このままエミルに会えば、きつと相当怒られることが分かっていたし、星自身。どんな顔をして、仲間達に会えばいいのか分からないかった。

星のそんな心配を余所に、ライラは笑顔で星に手を振りながら。

「それじゃ、用事がある時は直接会いに行くわね」

とだけ言い残して、突然目の前から消えてしまった。

その場に取り残された星は、表情を曇らせながらゆつくりとエミルの城へと入っていく。

いざ一人になると、今まではやっと帰って来れたと思っていた住み慣れた城が、まるでRPGの世界の魔王の城に足を踏み入れた感じになるから不思議である。

不安で高くなる鼓動と重い足取りで城内を進んでいくと、いつも使っている部屋の前まであつという間に着いてしまった。

意を決して生唾を呑み込んだ星が目の前にある扉を開けようと手を伸ばすが、ドアノブに触れる瞬間に伸ばしていた手を引っ込めて扉

を開けるのを躊躇してしまふ。

(……みんな、怒ってるだろうなあ……)

星はそう思いながらも決意したように瞼を閉じてドアノブを握ると、ゆっくりと扉を開いた。

その直後、中から鬼の様な形相のエミルが包丁を手に振りかざして向かってきた。

「ライラ!!」

「ひっ! ん、ごめんなさい!!」

そのエミルの大きな声と手に握られている包丁に驚き、星は慌てて頭を下げ謝る。

頭を下げている星の腕を掴んで強引に引き寄せると、全身を包み込むようにしてエミルが星を抱き寄せた。

「——良かったわ。無事で……ライラに騙された時は……どうなることかと……」

「……あの、怒らないんですか?」

「怒らないわよ。本当に無事で……無事よね?」

「……えっ?」

エミルは星の両肩を握りながら、顔に疑うような視線を向けて尋ねる。

その意味が分からずにただただ首を傾げる星に、エミルは「ちよつとごめんね」と口にしたかと思うと、突然。星の服の裾をたくし上げ、星の体を前後左右隅々まで舐める様に見た。

「——えっ!?! なっ、なに!?!」

その突然の行動に驚きながらも困惑した表情を浮かべていると、星の体を一通り見たエミルがほつと息を漏らした。

「はあ、傷もないし。キスマークとかも付いてない……本当に大丈夫みたいね……」

「……キスマーク?」

星が首を傾げていると、エミルが目を細めながら星の顔を覗き込んだ。
疑うような瞳に星が戸惑っていると、エミルが再び星の体をぎゅっ

と抱きしめた。

「まあ、なにはともあれ。何もなくて良かったわ……星ちゃん」

「……エミルさん。く、苦しいし、恥ずかしいです」

(……でも。もう一度会えて嬉しいです……)

星はそう言いながらも、その心の中ではエミルの懐かしい温もりにはっきりと安心感を抱いていた。

エミルに手を引かれて部屋の中に入った星を、その場にいた全員が暖かく迎えてくれた。

「おかえり、星ちゃん。無事で本当に良かった。俺は殆ど役に立たなくて……」

「ふん。カレン達が失敗しても俺一人で救出する予定だったんだがな……とりあえず、無事に帰ってきてきて何よりだ」

「うちはきつと無事に戻ってくるって信じとったよ！」

「おかえり星。そういうえば、星の為にケーキを作ってたんだよ！」

エリエはアイテムの中から、以前作っていた大きなホールケーキを取り出すと、それを星に見せた。

ホイップクリームのたっぷり乗ったショートケーキには『星 おかえりなさい』と書かれたチョコレート製のプレートが中央に乗っている。

星はそれを見て感極まり「エリエさん。ありがとうございます」と瞳を輝かせながらお礼を言った。その直後、隣の寝室からガシャン！とガラスの割れる音が響いた。

つと、次の瞬間。突如として勢い良く扉が開き、なにかが星目掛けて飛び込んでくる。

「あゝるゝじゝ!!」

窓ガラスを派手にぶち破り入ってきた金色の塊を、星は胸で受け止めると嬉しそうに笑った。

「——レイ。無事だったんだ」

「何を言っているのじゃ！ 我輩の方が主を心配してたのじゃ！」

「……ごめんね。レイ」

胸に飛び込んできたレイニールは、涙で顔をぐしゃぐしゃにしなが

ら、星の胸に顔を押し付けている。そんなレイニールに優しく微笑んだ星は、泣きじやくるその頭を優しく撫でる。

レイニールの頭を優しく撫でていた星に、エミルが声を掛けた。

「星ちゃん。疲れてるでしょ？ 今日はずっと休みなさい」

「はい」

その言葉に星は素直に頷く。

エミルはそれを見て安心したように微笑みを浮かべた。

それからしばらくの間。隣の寝室で待っているように言われ、再び部屋に戻ると、テーブルにエリエの作ったケーキと、イシエルとカレンの作ってくれたご馳走が並んでいた。

星はそれを見て瞳を輝かせる。中央にいちごの乗ったショートケーキが置かれ、その周りにはターキー、フライドチキン、パエリア、ローストビーフなど様々な料理が並んでいた。

ゲーム内では料理方法は2つ、一つは一から作る方法、そして二つ目は料理スキルを使用して作る方法だ。

味を取って腕を振るうなら一つ目だが——二つ目の方法を使えば誰でも、作りたい料理を選択して指定された分量と時間を設定するだけで、数分で料理が完成する。また、生活スキルに練度やレベルは存在しない。その為、閉じ込められていても、プレイヤーの衣食住はフリーダムの中では左程問題にはならないのだ。

次なるステージへ・・・4

主賓の星がテーブルに着くと、待ちきれないと言った様子のミレイニがテーブルに置かれたフォークを掴む。

「全部美味しそうだし……あたしが一番だし！」

手に持ったフォークを、大皿の上のターキに突き刺そうとしたミレイニの手をエリエが叩く。

慌てて手を引つ込めると、その手の甲をさすりながらミレイニは不服そうな声を上げる。

「……なんだし。早くしないとせっかくのお料理が冷めちゃうし！」

むすつと頬を膨らませ抗議すると、エリエは腰に手を当てながら。

「そういう問題じゃないでしょ!?! 今日の主役は星なのよ? それにあんた。まだ星に自己紹介とかしてないでしょ?」

「ふくん。そんなの知らないし。それに、あたしはまだその子を信用したわけじゃな——」

「——なんですつて〜!!」

口を尖らせながらそう言い放つミレイニの頬を、片手でエリエが引つ張った。

頬が伸びるにつれて、ミレイニの両手がブンブンと大きく動く。

「いはい。いはいひ〜」

「ほら、ごめんなさいは? 生意気なことと言ってごめんなさいって!」

「ほえんあはい! ほえんあはい!」

頬を引つ張られて涙目になっている彼女を見て、星が慌ててエリエに言った。

「……わ、私は大丈夫だから、止めてあげて下さい」

「でも……星。この子は星の事を信用してないのよ? ちゃんと言うておかないと……」

まさか星に止められるとは思っていなかったと言った様子で、その言葉に困惑した表情を浮かべているエリエ。

それでもミレイニの頬から手を放さないのは、すごいと言わざるを得ないだろう。そんな彼女に、星が更に強く言った。

「いいんです！」

(そう。私の為に、傷付けていい人なんて……ダメなんです！)

星のその真剣な眼差しに、エリエも仕方なくミレイニの頬から手を放す。だが、エリエより驚いているのはミレイニだった。

赤くなつた頬を抑えながらミレイニが「どうして？」と言いたげな瞳で、星を見つめている。まあ、それも当然だろう。ミレイニは星に対して『信用していない』と告げたわけで、それは同時に星に敵視されても仕方がないはずなのだ。

もしも自分が同じことを言われれば、ミレイニは絶対にその人物を好きにはならないし、ましてや助けてあげようとも思わなかつただろう。

その視線に気付いた星が、ぎこちなくミレイニに愛想笑いを見せた。

普通に考えれば、自分に味方してくれた人間に声を荒らげる理由は星にはないはずだ。逆に黙っていた方が、自分の印象が悪くならずに済む分マシなのだが……。

自分よりも人を優先して考えてしまうのが、星の長所でもあり短所でもあるのだろう。

ミレイニは星の方をじつと見ると、微笑みながら目の前にあるチキンを突き出した。

「お前、いい奴だし！ ほら、あたしのチキンあげるし！」

「——えっ？ は、はい。ありがとうございます」

星はそのチキンを受け取ると、ぎこちなく微笑んで見せた。

嫌っているというより。まだ初対面の相手に緊張しているからなのだろうが、どうしても表情が硬くなってしまふのは星の内向的な性格のせいなのだろう。

そんな星に向かって、ミレイニが自慢げに人差し指を立てながら胸を張って言った。

「まあ、ここだけの話。お前が助かったのも、あたしの努力の結果だし。感謝するといいし！」

「う、うん。ありが——」

星がお礼を言おうとした時、横から手を伸ばしてきたエリエが再び偉そうに胸を張っているミレイニの頬を引っ張る。

手足をバタつかせて、ミレイニの座っている椅子がガタガタと音を立てた。

「——あなたは特に役に立ってないでしょ!?!」

「ほんあほとあいしく」

「そんなことあるでしょ? 後半なんて階段で震えてただけじゃないの!」

「ういいい……」

エリエは最後とばかりにミレイニの頬を思い切り引っ張ると勢い良く手を放した。

赤く腫れた頬を抑えながら、ミレイニがエリエに向かって断固講義する。

「ほっぺた引っ張るの止めてほしいし! 女の子なのに顔に傷がついたらどうする気だし! それにエリエなんて、あたしがあの時に味方にならなかつたら、今頃エリザベスのお腹の中だったんだから感謝してほしいし!」

ビシツと指差して断言するミレイニ。

まあ、今はゲーム内なので前半は聞き流したとしても。少なくとも、後半のエリザベスという名のケルベロスと武器も固有スキルも使用できない状況で戦っていたら食べられていたかもしれない。

だが、どんなに強い魔獣を使役していたとしても、肝心の飼い主がミレイニならば方に一つも勝てる可能性はなく。

「ほお。お菓子で釣られた子が、よく言うわね。まだいじめられたいの〜?」

「ごめんなさい! 嘘でした! ごめんなさい!」

両手をわきわきさせて迫ってくるエリエに、ミレイニは怯えながら必死で謝っている。その様子から、すでに2人の間では上下関係はハッキリしているようだ——。

エリエは悪戯な笑みを浮かべると、ミレイニの両頬を摘む。

「……嘘をついた子にはおしおきが必要よね! ほら、謝りなさい。」

「ごめんなさいって!」

「いはいれう。ごえんあさい! ごえんあさい!!」

ミレイニの頬を左右に引っ張っているエリエは、とても生き生きしているように見える。

それを見ていたエミルがため息交じりに「もう止めて上げなさい」と言うと、エリエは少し残念そうに両手を放す。

その後は何事もなく、星のおかえりパーティーは進んでいった。

「星ちゃん。パエリアのおかわりはいる?」

「あつ、はい」

右側に座っていたエミルが星に微笑むと、星は遠慮がちに小さく頷く。

満足そうな笑みを浮かべたエミルは、大きな器からパエリアをよそうとそれを星の前に置いた。

その様子を不満そうに見ていたイシエルが、何かを思いついたように急いでパエリアを食べ進めると、空になった器をエミルに差し出す。

「エミル! うちにもおかわりちょうだい!」

「えっ? ええ、良いわよ」

エミルは皿を受け取ると、それにパエリアをよそってイシエルに差し出した。だが、イシエルはそれを受け取ろうとせずに、かわりに大きく口を開けた。

それを見たエミルは小さくため息を漏らすと、スプーンを持ってイシエルの口にパエリアを運ぶ。

嬉しそうにぱくつとスプーンを口に咥えると。

「——やっぱり。エミルに食べさせてもらうとまた格別やわ」

「まったく。イシエはまだまだ子供なんだから」

満足そうにそう言ったイシエルに、エミルは少し呆れながら告げた。

その様子を遠目で見ていたカレンがパエリアをすくい上げると、顔を真っ赤に染めながら隣に座るマスターに向かってスプーンを突き

出した。

「あの、師匠……お、お、おれもいいですか？」

恥ずかしそうにそう告げると、マスターは首を横に振った。

「そ、そうですよね……」

カレンはがっかりしたように表情を曇らせる。

項垂れるカレンの様子を見て、マスターは目の前の器を手に持つとカレンの前にパエリアの乗ったスプーンを突き出した。

そのマスターの行動に、驚いたように目を見開いているカレン。

そんなカレンの顔を見つめ、マスターが首を傾げて言った。

「……どうした？　これがやりたかったのだろうか？」

「は、はい！　それでは失礼して……」

緊張しながらも、大きく口を開いてマスターの差し出したスプーンを口に咥えると、カレンは本当に嬉しそうに笑う。

「美味しいです。師匠」

「そうか」

「はい！」

満足そうに頷くカレン。

それ様子をフライドチキンを咥えながら見ていたミレイニが、隣にいたエリエの腕を引っ張る。

「あはひもあえあるし！」

「——ミレイニ。それ食べてから喋りなさい……」

エリエは呆れながら、フライドチキンを口にぱっくりと咥えているミレイニを見て額を押さえた。

急いでチキンを食べ終えると、もう一度口を大きく開く。

「あたしもあーんするし！」

完全にやってもらうつもりでミレイニは身を乗り出して、瞳をキラキラと輝かせている。

「ん？　するの？　してほしいの？」

「してほしいしー！」

「分かったわよ。しかたないわねー」

エリエはフォークでローストビーフを挟むと、ミレイニの方を向い

た。

「ほら、食べさせてあげるから口開けなさい」

「うん！ あーん」

頷いて大きく開けたミレイニの口にローストビーフを入れた。

嬉しそうにそれを食べ終わると、もう一度と言わんばかりにミレイニが再び口を開く。

エリエは「もう、しょうがないなー」と言いながら、エビフライを掴んでミレイニの口に入れた。

周りで食べさせ合っている中で、星は俯き加減で食べ続けている。

いや、食べ続けているというよりも。この状況では気がつかないふりをするのが精一杯っという感じなのだろう。だが、意識していないわけでもなく。その頬は少し熱を帯びていた。

顔を赤らめて俯く主にレイニールは、テーブルの上で首を傾げながら星を見上げた。

「——どうしたのだ主。顔が赤いぞ？」

レイニールは自分とほぼ同じ大きさのチキンを、両手でしっかりと持っている。

星がそんなレイニールに視線を落とすと、レイニールはこの気まずい雰囲気がかかってないのか、けろっとして持っていたチキンを口いっぱい頬張った。

幸せそうな笑みを浮かべているレイニールを見て、星は小さくため息を漏らす。

つと、その時。イシエルと食べさせ合いをしていたエミルが、星に声を掛けてきた。

「星ちゃんもやるっ？」

「——えっ!? いえ、私は……」

「遠慮しないでいいのよ？ 星ちゃんのパーティーなんだから。はい、あーん」

「あ、あーん」

微笑みながらローストビーフを星に向かって突き出した。

恥ずかしさから、星は顔を真っ赤に染めながらも、断るのも悪いと

感じてそれを口に含む。

エミルはそんな星に「おいしい？」と微笑みながら聞く。エミルの言葉に、星は小さく頷いた。その直後、星は熱い視線を感じて背筋に悪寒が走った。

微笑みを浮かべるエミルのすぐ後ろで、微笑みを浮かべながらドス黒いオーラを放つイシエルが星の瞳に映る。

「どうしたの？ 星ちゃん。怖いものでも見たような顔して……」

「……いい、いえ。なんでもないです……」

首を傾げるエミルから表情を青ざめさせ、咄嗟に視線を逸らす星に、エミルは不思議そうに首を傾げた。だが、明らかに表情を曇らせている。

「そう？ 体調とか、なにかおかしいところがあつたら言つてね？」

「はい」

心配そうに自分を見下ろすエミル向かって、星は小さく頷いた。

その後、エリエの作ってくれたケーキを食べ終えると、星は椅子に座つたまま、いつの間にか眠つてしまつていた。

相当疲れていたのか、一向に起きる気配もなく気持ち良さそうに眠っている星を見て、エミルが笑みを浮かべる。

「きつと、相当疲れてたのね。色々あつたものね……」

「まあ、星は分かるけど。こつちは……」

優しい眼差しで星を見ているエミルとは対照的に、エリエは冷めた目で隣に座るミレイニを見た。その視線の先でミレイニは幸せそうに眠っている。しかも、口から涎を垂らして……。

呆れ顔でそれを見ていたエリエがため息混じりに呟く。

「はあく。全くこの子は……甘えるだけ甘えて、食べたい物を食べて。

これじゃ……猫じゃない」

「あはは……でもほらエリー『寝る子は育つ』つて言うでしょ？」

「まあ、成長するかは別として、静かなのは確かだけど……」

苦笑いを浮かべるエミルに、エリエは素っ気なく言葉を返す。

エミルは星を抱き上げ、エリエはミレイニを背負うと隣の寝室へと運んだ。

ベッドの上で安心しきった顔で気持ち良さそうに眠る星を見て、エミルは少し複雑な気持ちになった。

それは、これから先。星を本当に守り切れるのかという思いからだった。

ライラのテレポルトも本来ならば、屋内での使用は禁止されているはずなのだが、彼女はそれを意図も容易くやってのけた。

もちろん。それには種があるのだろうが、そんなことは今はどうでもいい。

今必要なのは、この世界で自分達はシステムに支配されているという事実を打開する策なのだから。

屋内での武器の使用も固有スキルの使用もできない。しかし、ライラはそれを可能にできる技術を持っている。

つということは、この世界にいる何人かは特別な存在としてゲームシステムから切り離されているということだ。そんな者達を相手に固有スキルも使えない自分に、いったい何ができると言うのだろうか。

エミルはそんなことを考えながら、不安げな表情で星の額を撫でた。

表情を曇らせているエミルを横目で見て、エリエも眉をひそめた。

「むにやむにや……エリエ。もっとお菓子食べたいし……」

ミレイニのその寝言を聞いてエリエは「ぷっ」と吹き出した。

その後、呆れた様子で呟いた。

「全く、この子はあんなにケーキ食べても、まだ食べるって言うんだから……将来は立派な牛になるね。これは……」

エリエの言葉を聞いて、エミルも思わず笑みをこぼす。

それを見たエリエはエミルに向かって微笑むと、ほっとし胸を撫で下ろした。

「エミル姉、やつと笑ってくれた。星が居なくなっただけから、険しい顔のエミル姉しか見てなかったからさ、不安だったんだ……」

「そう？ そんな事ないと思うけど……」

はっとしてエリエから視線を逸らしたエミルに、微笑みを浮かべ力強く頷き返して。

「ううん！ エミル姉は笑った時が一番輝いているんだから、1人で考え込まずに、もっと私を頼ってよ」

「……エリー」

エミルはそう言ったエリエの体をぎゅっと抱き寄せた。

その突然の行動に慌てふためくエリエの耳元でエミルがささやく。

「……エリー。あなたの抱き心地は久しぶりな気がする。けど、とても落ち着くわ……もう少し抱いていい？」

「……もう。ミレイニくらい甘えん坊なんだから」

「……ごめんなさいね」

静かにベッドの端に座ったままエリエを抱きしめていた。

そんな2人の様子を見ながら、気付かれない様にパタパタと飛んできたレイニールが寝ている星の枕元で眠りに就いた。

次なるステージへ・・・5

* * *

ダークブレットのアジトから兵士達を引き連れてきたメルディウス達が、予定通りに始まりの街へ到着した。

日本支部に残っていたダークブレットのメンバーは千人以上——それを全て引き連れては来たものの、未だにどこに滞在するかという問題は解決できずに残っていた。

大勢の者達を馬上に残し、街の入口で馬から降りたメルディウス、紅蓮、バロン、デュラン。四天王のメンバー達が集まって会話をしている。

「途中モンスターに襲われたが、楽勝で来れたな」

「いえ、人数が多かったせいか、敵に察知されて襲われる回数は多かったです。それに、基本的にメルディウスが1人で突っ込んで倒していただけでしたが……」

眉をひそめ呆れた表情で、大きく息を吐き出す紅蓮。

その横でフンと鼻を鳴らすと、バロンの声が聞こえてきた。

「まあ、あんな雑魚は俺様が手を下すまでもない。それより、後ろにいる雑魚共をどうする？ 言っとくが、俺様の兵にあいつらのお守りさせるなんてごめんだぞ？」

皮肉交じりにそう言ったバロンは、デュランの方に視線を向けた。

野宿となれば敵対視するプレイヤーやモンスターから彼等を守る為、どうしても護衛は必要になる。

昼夜問わずそれができる兵は、自分の『ナイトメア』で召喚した軍勢しかいないと、バロンも分かっていたのだろう。その為、彼は早めに予防線を張ったのである。

デュランは余裕そうに微笑を浮かべると、周りのメンバーに表示されている地図を拡大するように言った。皆、指で地図を拡大モードに切り替え、始まりの街の全体図が目の前に大きく表示される。

それを見つめながらデュランが話し出す。

「まず、ここに居るメンバーの中でマイハウスが始まりの街にあるのは、全体の2割——と言う事は、殆どが住居がないわけで——」

「——そんなの分かってるんだよ！ 俺様は気が短いんだ。結論を言えデュラン」

不機嫌そうにバロンが睨みつけてくる。

デュランは呆れたように小さく息を吐くと徐ろに告げた。

「そうか、なら結論を言おう。皆、マップの左側のグレーの部分を見てくれ」

地図を見ると、街の西側の上の部分だけがグレーで表示されている。

その場所は星がこの世界に来てしばらくして、ダークブレットのメンバーに襲われた場所があるところだった。

「このグレーゾーンは。街で唯一戦闘行為——PVPが許可されている場所なんだ。どうしてそういう場所があるのかというのは、皆分かっていると思うけどね……それは、街の中で起きた争い事やモンスターなどの不確定な危険から守る為なんだ。そして、そこにも一応店舗を構える事ができる」

「……ああ、なるほど。そういう事ですか」

話の途中で何かに気が付いたのか、突然紅蓮が手の平を叩いた。

正直。今の話だけでは漠然とし過ぎていて、デュランの伝えたい意図の半分も汲み取れなかった。

そんな中、唯一彼の意図を理解できた紅蓮に向かってデュランが笑みを浮かべ、なおも言葉を続けた。

「だが、もちろんPVP限定とはいえ。戦闘行為が可能な物騒な場所で店舗を構える人間は居ない……つまりはそういう事だね」

それは今の現状と彼の話を聞いていれば、簡単に分かる話だった。

街の中でプレイヤーが経営できる施設は数多くある。そして、その設立方法は至って簡単だ——街の中心にあるギルドホール。

その場所で経営許可証を発行してもらおう。その後、許可されれば運営が開始できるというシステムだ。

本題から逸れるような遠回しな言い方をするデュランに、不機嫌そ

うにしていたメルディウスが突如として吠える。

「おめえーはいつもまどろっこしいんだよ！ さっさとどういいう事が説明しやがれ！」

隣で激昂するメルディウスを見て紅蓮は小さくため息を漏らすと、察しの悪い彼に呆れた様子で呟く。

「……メルディウス。副ギルドマスターとして恥ずかしくなるので止めてください」

「どうしてだよ！ なら、紅蓮は。今のこいつの話で理解できたっていうのかッ!?!」

「はい」

怒鳴って顔を真っ赤にしながらデュランを指差すメルディウスとは対照的に、紅蓮は表情一つ変えずに平然と頷く。

そんな彼女の様子にメルディウスはぐうの音も出ずに、言葉を飲み込んで仕方なく口を閉ざす。

紅蓮は不機嫌そうに眉毛を釣り上げているメルディウスに更に体を近付けると、身長差を少しでも小さくする為に背伸びをして聞こえない音量で言った。

「いいですか？ デュランの言ったのは、街でも不人気の場所に宿屋を建てて、そこをとりあえずの拠点にしましょう。つとそういう事なのです」

「ああ、なるほどな。それならそうとはつきり言えよな。あの野郎……」

メルディウスは紅蓮の説明でやっと話の内容を理解できたのか、不貞腐れながら口を尖らせている。

確かにそういうことならば、初心者的人数も相まって人口の多い始まりの街で戦闘許可区域は嫌煙される傾向が強い。何故なら、戦闘許可区域はブラックギルド。つまりダークブレットのような犯罪者ギルドの温床になっているからだ――。

星が初めて始まりの街で襲われた場所も戦闘許可区域だった。つまり、初心者嫌煙されるといふことは、そこでは商売をするメリットが著しく低下してしまう為にわざわざ資金を投じて店を出す必要

性も薄くなってしまう。

デュランはそこに目を付けたのだ——犯罪者ギルドとして悪名高いダークブレットの拠点をその場所に設けることで、他よりも土地価格も安く、しかも始まりの街にいる他のプレイヤーとの差別化も同時に図ることができる。

その横でバロンが、デュランに向かって口を開く。

「おい。俺様と妹は別の場所に泊まるぜ？　だいたい俺様の様な高名な人間が、一般のテスターでもない所どころか犯罪者の連中とつるむなんて、狂ってるだろ」

「……いいけど、僕もそのテスターだけど？」

「ふん。お前の敵のスキルを奪う程度の小賢しい固有スキルで、俺様の軍をなんとかできると思ってるのか？　デュラン。お前の固有スキルは、四天王の中でも最弱だという事を忘れんなよ？」

圧倒的な威圧感を浴びせるバロンの瞳に、彼ほど熱くはないが微笑を浮かべながらも、そのバロンに殺意を帯びているデュランの瞳が2人の間に激しい火花を散らす。

ベータ版のテスター達の中でも、固有スキルによって向き不向きがあるのは事実。

特にバロンは日本サーバーでは最強と言われる数千以上もの漆黒の軍団を率いることができる固有スキル『ナイトメア』の使い手。

固有スキルを発動している本体がやられるまで止まらない上に騎馬、歩兵、弓兵と役割に応じて複数に振り分けられることだ。

痛みを感じずどこまでも敵を切り裂く兵士達はまるでゾンビ軍団。その光景は悪夢の様に見えることから『ナイトメア』という意味の名前になったと推測できる。

今までの戦闘でも彼に傷を付けたのは、メルデイウスとマスターくらいなものだ。

彼の暴虐的な性格もあるが、日本サーバーの格付けからすると、その固有スキルが上位であることは言うまでもない。

だが、範囲型の限定的な固有スキルとはいえ、デュランの『アブソブ』も範囲内の固有スキルの使用を制限し、その固有スキルの発動対

象を自分に切り替えると能力を持つ。これもこれで、強力な固有スキルであることは確かだ。しかし、デュランの固有スキルはその場で敵のスキルを見て戦闘を組み立てる必要があるが、バロンの固有スキルにはそれがない。

圧倒的な数と物量で押し切る戦法が得意なバロンは、超攻撃型のプレイヤーということになる。

バロンの考え方からすれば相手に依存するスキルを使うのは、弱者のやることだという考えが強いのだろう。しかしながら、テスターは個々で考え出した強力の固有スキル——別名オリジナルスキルの持ち主であることに変わりはない。

他の者達に止められないほどの固有スキルという力量差のある彼等が、この場所での四天王同士の激突は何としても避けなければならぬのだ——。

それを止めるのでもなく、紅蓮は「やれやれです」と呆れながらため息を漏らしている。

一触即発と言った感じで睨み合う2人に、メルデイウスも苦笑いを浮かべていた。

そこに遠目でその険悪な様子を見つめていたフィリスが、バロンが喧嘩をしようとしているのに気付き実の兄である彼に声を荒らげた。

「お兄ちゃん!!」

バロンは「チッ!」と舌打ちをして身を翻した。

デュランに背を向けたバロンは走ってくる妹の手を握ると、強引にその手を引いて歩き出す。

「ほら、行くぞ!」

「ちよ、ちよつと。お兄ちゃん!?!」

何が起きたのか分かっていない妹の手を強引に掴んだまま、街の中へと消えていった。

そんな彼等を見て、困り顔で頭を抑えたメルデイウスが隣に居た紅蓮に小声で声を掛ける。

「バロンは相変わらずだな。団体行動を乱しまくるんだらうな……」

「——ええ、困ったものです。もっと大人になってもらいたいもので

すね」

「だよな！」

珍しく彼女の共感を得たことで、相当嬉しいのか微笑みを浮かべたメルデイウス。

大きくため息を漏らした紅蓮は横目でちらりと一瞥し。

「……ですが、それは貴方もですよ。メルデイウス」

紅蓮は隣で笑っているメルデイウスに聞こえないような声でぼそつと呟いた。その後、3人になった四天王達が街の中にあるギルドホールへと向かう。

始まりの街のギルドホールは、まさにホールという感じの造りになっていた。

その巨大なUFOを彷彿とさせる近未来のドーム型の建物を見上げて紅蓮が静かに呟く。

「行きましょう」

紅蓮はゆっくり歩き出すと、建物の中に入っていく。

中は外観よりも広く、エントランスの中央に大きな円卓があり。その中で、管理スタッフのNPCが忙しなくプレイヤーの対応に追われている。

始まりの街は初期プレイヤーが多くいる為か、ギルドホールは他の街と違って案内所的な役割が大きい。

慣れていないプレイヤー達はコマンド内にあるヘルプを使わずに、直接NPCから説明を受ける者も多々いる。

本来のギルドホールの役割はその名の通り。ギルドの設立、解散。ランクに応じた各ギルド専用のギルドホールサーバー。クエストの受注、依頼などもここで行う。

また、マイハウスの移動申請。商業申請と用地の確保。税を差し引いた利益の還元などなど、ギルド関係以外にも様々な事柄を行っている……言うなれば役所のような役割を持つ建物なのだ。

紅蓮はいつも通りの落ち着いた様子で、受付のNPCに話し掛けた。

「すみません。商業申請をしたいのですが、手続きの方法をお聞かせ

下さい」

『はい。それではこちらにこのペンで開業したい職種、具体的な事業内容を書いて。この場所に希望する地区の場所を記入して下さい』
「はい」

紅蓮は背伸びをして必死に伸ばした手で、受付のお姉さんから緑色の光を放つボードとペンを受け取ると、スラスラとそれを書き始めた。

表情一つ変えずに涼しい顔をして書いているが、身長が低い為に背伸びをしているので小刻みに足が震えているのは何とも可愛いと思ってしまう。

それを横から見下ろしたデュランが、感心しながら頷いた。

「……さすが紅蓮だね。言うまでもなく、完璧に要所を抑えているね」
「あつたりめえーだろうが！俺のギルドの副ギルドマスターだぜ。こんなの朝飯前に決まってるだろ！」

親指を立てながらキメ顔で、そう言い放つメルデイウス。

そんな彼を横目でちらつと見て、紅蓮が呆れながらも息混じりに小さく呟く。

「はあ……ギルマスがすっかりしてないから、私が大変なんですよ。メルデイウス」

豪快に笑いながら自慢気に胸を張っているメルデイウスに一抹の不安を残しながらも、紅蓮は書き終えたボードをデュランへと渡した。

デュランはそのボードの内容を確認すると、しばらくして頷いて紅蓮にボードを差し出した。

「——うん。まあ、いいんじゃない？施設は申請してからしか選べないしね」

「そうですか。なら、これで通します」

紅蓮はデュランが差し出したボードを受け取ると、紅蓮は身を翻して受付のNPCに渡す。

受付のNPCはそのボードを受付の後ろにある特殊な機械に通すと、ボードが強く光りを放ち、そして消えた。その後、紅蓮達の方に

向き変えると、目の前のテーブルから青い透明のモニターのような物が映し出される。

そこを指先で操作しながらNPCが話し始めた。

「こちらが申請者ダークブレット様の要望に添った物件になります。地上から25階建てで、中は4次元構造になっていて1フロアに50個の個室を完備しております。お風呂、シャワーも各部屋に備えられビジネスホテルの様な構造に……」

そこから淡々と仕様通りに話すNPCの言葉を半分聞き流す。

建築は候補となったいくつかの物件の中から、独自にカスタマイズすることもできる。

まあ、高くなる上に、普段から寝る場所程度にしか使わない為、既存のプランで建てるのが一般的だが、今回はそこにシャワーとバスルームを個々の部屋に備え付けて貰う要望を出したのだ。

NPCも見た目は一般のプレイヤーのようだが、所詮はゲーム内のシステムで作りに出されている存在。

途中の話を飛ばすというようなスキップ機能がなければ、全てが業務的に注意点と要点をただただ淡々と説明するだけなのだ――。

次なるステージへ・・・6

紅蓮達は重要な部分だけ聞いて、他の部屋の内装変更など、どうでもいい内容を聞き流すとNPCが最後に笑顔で聞き返す。

「この内容でお間違えなければ、確認を押して下さい」

デュランの方を横目で見る紅蓮に、デュランは無言で頷く。

紅蓮は目の前に表示されている確定を押した。その後、費用が表示される。それを上から見下ろすように覗き込んだ、メルデイウスがその金額に目を見開き大きな声で叫ぶ。

「なっ！ なんだって!! 3億ユーロ!? そんな大金持つてるわけねえーだろうが!!」

「……3億ですか。了解しました」

だが、紅蓮は表情一つ変えずに銀行から直接取引【YES】【NO】と表示された。場所を見つめている。

三億という一般人には途方もない金額に全く動じることなく、澄まし顔をしている紅蓮だが、それとは対照的にメルデイウスは動揺を隠しきれない。

「ちよ、ちよつと待てよ! 紅蓮。どうしてそんな涼しい顔していられるんだ! 3億だぞ! 3億!! ……俺の銀行にもそんなにねえーのによ……」

「……はい? それが何か?」

「何がじゃないだろ、バカ! 野宿でいい! いや、野宿がいい! そうだそうしよう! 不満のある奴は俺がぶっ倒せばいいし……なっ、そうだろ? 紅蓮」

高額な代金に恐れをなしたのか、青い顔をしているメルデイウスは腕を組むと、仕切りに頷いてそう隣にいる紅蓮に告げた。すると、そんなメルデイウスを無視して紅蓮が【YES】の部分をポチツと押ししている。

もちろん。メルデイウスはそれを見て「おおーい!」と声を上げた。その声はフロア全体に轟き、辺りの者達も一斉にメルデイウス達の方を向く。

不快そうに紅蓮は眉をひそめて耳を押さえながら、彼の顔を細目で見ると。

「……うるさいです」

つと、迷惑だと言わんばかりに不機嫌そうに告げた。

しかし、こればかりはメルデイウスも黙っていられない。資金を建て替える以上は、ギルマスとして言わなければならぬ。

「いや、何を表情一つ変えずにポチってんだよ！ おかしいだろ!? 今の流れなら絶対に野宿を選択すんだろうが!!」

「……いえ。ギルドの預貯金とあなたの1億を足せば、払えない金額ではなかったですし。それに私の所持金は1ユールも減っていませんから」

「ああ、そうか！ それもそうだな。俺の必死に貯めた全財産を足せば……ってなにいいいいッ!? 俺の1億を使ったあああああッ!?」

大声で叫ぶメルデイウスに、紅蓮は眉間にしわを寄せながらも一度耳を押さええた。

その声に周りの人間が、一齐に3人の方を見た。その中で、紅蓮はかなり不機嫌そうに告げた。

「メルデイウス、静かにして下さい。周りの迷惑になってます」

「いや、どうしてお前が俺の銀行の暗証番号知ってんだよ！ てか、分かっても勝手に預貯金を引き出せないはずだろ!?!」

彼の疑問も最もだ。フリーダム金融システムは他のシステムよりも強固に設定されている。

十桁のパスワードの他に、本人の手の平をスキャンして認証を許可する必要がある。それはつまり、キルされれば光となって消滅するわけだから犯罪者ギルドでも銀行の預貯金を強奪するのは、ほぼほぼ不可能ということだ。しかし、それならばどうやって紅蓮はその強固なセキュリティを突破したのか……。

紅蓮はそのメルデイウスの質問に、終始冷静な口調で答える。

「メルデイウスが寝ている時に、聞いたから教えてましたから。それを利用させてもらいました」

「利用するなよ！ てか、俺はなんで寝てる時に答えてるんだ……だが待て！ パスワードが分かっても俺が居ないと金は引き出せねえー。それはどうやって――」

「――ああ、あまりに気持ち良さそうに眠っていたので、起きないだろうと白雪とデュランに頼んで銀行まで運んでもらいました」

言葉を遮ってそう答える紅蓮に、メルディウスは顔面蒼白でまるで魂の抜け殻の様になっている。

「――犯罪だぞそれは………はあ……俺の金があゝ」

頭を抱えると、メルディウスはがっくりと肩を落として意気消沈している。項垂れているメルディウスの肩をデュランがポンと叩く。

メルディウスはゆっくりと顔を上げると、そこには微笑を浮かべているデュランの姿があった。

「――君の1億ユーロは無駄にしない。悪いね！」

「なっ、何貰った気になってやがる!! 返せよ!! 絶対に返せよ!? ぜってえーだからなッ!!」

メルディウスは胸ぐらを掴み上げると、切実な瞳で訴えかけた。

薄っすらと涙を浮かべるメルディウスからデュランはスーッと目を逸らすと。

「善処するよ」

つと、哀れみの眼差しで呟いた。

ギルドホールを出ると、メルディウスはまるで魂が抜けたようにながっくりと肩を落としていた。

1人だけ、まるでお通夜の帰り道のような状態になっている。

紅蓮はそんなメルディウスを見て、少し呆れながら言った。

「――そろそろ立ち直って下さい。ギルドマスターがそれだと、メンバーとして恥ずかしいです」

落ち込んでいる彼に抑揚のない声で紅蓮が話掛けた。

「いや、だってな！ 俺達。千代を出てから金を使い過ぎじゃねえーか？ もううちのギルド破産するぞ?」

「……ああ、それなら心配いりません。さっきのお金は私とメルディウスのお金だけですから……」

「……えっ？ でもさっき、ギルドの金だって……」

ぽかんとしているメルデイウスに対して、視線を合わせずに紅蓮が言葉を返す。

「ああ、あれは嘘です。私達の問題に、ギルドのお金は使えませんから……」

「……紅蓮、お前。いくら持つてるんだ？」

紅蓮は少し間を空けると「ご想像にお任せします」とはぐらかすと、メルデイウスは疑う様な眼差しを向けている。しかし、紅蓮は視線を逸らすだけでまともに取り合おうとしない。

だが、その後もじつと見つめてくるメルデイウスに眉をひそめた紅蓮が告げる。

「……メルデイウス。人の物は人の物です。それを詮索したところで、何も変わりませんよ？」

「いや、俺の金も消えたんだが……」
「……………」

無言のまま、更に目を逸らす紅蓮の額に冷汗が滲む。

紅蓮はメルデイウスの追求から逃れるように、雲を取り出しその上に飛び乗った。

「ちよー！ どこ行くんだ！」

「私は先に皆のところに戻ってます。ギルマスはゆっくりどうぞ」

普段より少し早口でそう言い放つと、雲に乗った紅蓮はみるみるうちに小さくなっていく。

残された2人は心の中で呟く『逃げたな』と……。

メルデイウスとデュランが街の入口に着くと、そこには居たはずの小虎、白雪、デイビッドと戻っているはずの紅蓮が居ない。

ダークブレットのメンバーの中でも、最も目立つ格好をしたカブトムシの様な重装備の男にメルデイウスが尋ねる。

暇そうにしていた男は、自慢の巨大なランスを磨きながら、そのカブトムシの様に尖った黒いヘルムの奥で光る瞳をメルデイウスに向ける。

「わりいー。ここに戻ってきたはずなんだが、銀髪でちっこい和服の

と、黒髪のポニーテールの女と、茶髪のツンツンヘアの子供と侍外国人はどこに行つたか分かるか？」

「ああ、彼等なら先程戻ってきた和服の少女と一緒に、なにやら打ち合わせに行くと、どこかに行きましたぞ？」

「——つたくあいつら。ジジイのところに行きやがったな……」

その話を聞いて、メルデイウスは手で額を押さえた。間違いなく紅蓮達はエミルの城へと向かったのだろう。

何と言つても初対面の彼等がエミルの城を知っているわけもなく、その橋渡し役としていたのがデイビッドだった訳だから、彼が消えたということはつまりはそういうことなのだ——。

横に居たデュランが、何かを思い付いたようにメルデイウスに告げた。

「せつかくだし。このまま狩りにでも行くかい？ 君も少しでも、お金を返してもらつた方がいいだろ？」

「おおー！ そうだな！ 憂さ晴らしにもなつて一石二鳥だぜ！」

二つ返事で了解したメルデイウスは、コマンドの中のアイテム欄から『ベルセルク』を取り出すと、横の装備欄の人形に装備させ、目の前に現れた愛剣を肩に担いだ。

その隣でデュランも『イザナギの剣』を取り出すと、何かを企んでいるようなか不敵な笑みを浮かべた。

デュランはダークブレットのメンバーの前に立つと、手に持った薙刀のような『イザナギの剣』を天に掲げて叫ぶ。

「皆聞け！ 今日はこちらとした宿に泊まれる！ けど、それにはさ。お金が必要なんだよね……そこで、これから狩りに行こうと思う！ 野宿したくない者は付いて来い!!」

『おおー!!』

大きな声がそこら中で上がり、それと同時に皆が天に向かって拳を振り上げている。

数日に及ぶ簡易テント暮らしが、相当堪えているのだろう。その場にいる者の、その瞳からは並々ならぬ意気込みと威圧感を感じる。

身を翻し逸早く召喚した馬に跨がろうとしたデュランに、メルディウスが小声で声を掛けた。

「お前ってよ。普段適当なのに、こういう時はしつかりするのな」

「ふっ、僕はいつでも適当だよ。ただ、別の人間を演じるのに慣れているだけさ……」

「は？ 別の人間……？」

首を傾げるメルディウスを尻目に、デュランは召喚した馬に跨った。

その後、馬の鼻先をダークブレットのメンバーに向けると、もう一度大きく叫ぶ。

「さあ、行こう！ 目指すは始まりの街付近で、最もモンスターレベルの高いゴーレムの溜まり場【グレイ鉱山跡地】に行く。ゴーレム種は防御力が高い上に攻撃力も高い。それだけリスクはあるが、報酬も大きい。それに、この数なら容易に押し通れる！ 皆、馬に乗れ。乱獲をしにいくぞ！」

『おおー!!』

デュランの号令の後、地響きが起こる程に兵士達は叫ぶ。

その後、皆武器を手に馬に跳び乗ると、先頭を行くデュランとメルディウスの後ろを、土煙を上げながら千騎以上の騎馬隊が【グレイ鉱山跡地】へと向かって駆け出していった。

次なるステージへ・・・7

その頃、紅蓮は白雪、小虎、デイビッドと一緒に繁華街を歩いていた。

そんな中、ふと紅蓮がデイビッドの方を見て眩く。

「その左腕……痛々しいですね……」

眉をひそめながらそう告げる紅蓮に、デイビッドは右手で肘から下がなくなつた左腕を押さえ。その後、重い口を開く。

「……痛みはもうないし。それに、これも仲間を守る為に負つた名誉の負傷だと思えば、誇らしいよ」

「そうですか。ですが——」

「——ですが、そのままの姿では、貴方の仲間は生きた心地はしないでしょうね」

紅蓮の言葉を遮つて、白雪が代弁してデイビッドに言い放つ。

デイビッドもそれを聞いて、目を丸くして驚いている。

それは紅蓮も同じだった。まさか、それほどはつきり言われるとはデイビッドも紅蓮も思つてはいなかつたのだろう。

それを余所に、白雪は「なにか？」と言いたそうな顔をして2人に視線を送る。

だが、そう言われてみると、確かに事情を知っているデイビッドはいいが、突然左腕がなくなつたまま変えれば、皆驚くのは間違いない。そうなると、この状態でエミル達の元に帰るわけにもいかない。

負傷を治すには宿屋に泊まる必要がある。だが、今の始まりの街で泊まれそうな宿屋などないだろう。

事件以降。ベテランプレイヤーも初心者プレイヤーも皆こぞつて宿屋を拠点に活動していて、どこの宿屋も人でいっぱいになっているのだ。

デイビッドは考えた後に、がっくりと肩を落とす。

「治療方法が他にない以上。このままで行くしかないかな……皆、驚くだろうけど……」

「いえ、大丈夫です。私に付いてきて下さい」

「……えっ？ ああ、分かった」

紅蓮は皆を先導して、街外れにある大きな建物らしき場所に皆を連れてきた。

どうして建物らしきという不確定な表現になったのかと言うと、それは外観が殆どモザイクがかかった様にドット状に全体が隠れている。

目の前に木製のドアらしき物がある為、かろうじて、それが建物であると判断できるが、ドットの中にぽつんとある高級そうな木製のドアは文字通りに場違いと言ったところだろう。

紅蓮は不信感に満ちた瞳でその建物らしき物を見つめているメンバーに「行きましょう」と声を掛けると、ゆっくりとそのドアを開いた。

ドアの中はドットに包まれた外観と違い立派に造られていて、そこは高級ホテルのロビーの様な作りになっている。外から見た時にはまだなかった上部も、中ではすでに出来上がっているのか天井まで吹き抜けの様になっていて、無数のライトが建物内全体を照らしている。

中央に設けられたフロントには、スーツを着た女性のNPCが笑顔でこちらを見つめていた。

紅蓮はフロントで軽く話を済ませると、手にカードキーの様な物を掴みながら、徐ろにデイビッドにそのカードキーを差し出すと、困惑しながらもデイビッドもそのカードキーを受け取った。

「このホテルは私達が開業した物で、今はまだ外装があれなのですが、機能は殆どできていますので安心して下さい。このカードキーを向こうに備え付けられているエレベーターに差し込んで下さい。そうしたら、自分の部屋のある階層に自動的に移動できます。その傷なら、3時間程度ここにいれば治癒できるはずですから、それまで皆もゆっくり休んで下さい」

紅蓮はそう言って、白雪と小虎にもカードキーを渡す。

「ありがとうございます！」

「ありがとうございます。紅蓮様」

2人はそのカードを受け取ると微笑んだ。

誰よりも早く動いたのは小虎で、貰ったカードキーを手にフロアの端っこに設置されたエレベーターに入ると、目の前の操作パネルにカードキーを差し込んだ。すると、扉が閉まり次に開いた時には小虎の姿は影も形もなく消えていた。

その光景を見て、デイビッドは感心したように「ほおー」思わず声が漏れる。その後、フロントカウンターの前で別れるとデイビッドもエレベーターの中に入った。

小虎と同じくカードキーを操作盤に差し込むと扉が閉まり、視界がぼやけて虹色の光に包まれた。その直後、目の前を覆っていた光が収まり突如として扉が開く。

そこにはまるで高級ホテルのような、落ち着きのあるモダンな作りの廊下が続いていた。デイビッドもこれほどの場所に泊まるのは初めてのことだ――。

「ほお〜。これは凄い場所だ……こんな場所を運営するなんて、あの子のギルドはどれだけの力があるんだ？」

顔を引きつらせた紅蓮達のギルドに若干の脅威を感じながらも、廊下を進んでいく。

部屋に着くと、そこには外を一望できる開放感のある窓、ベッドメーカーキングされ整ったベッドにマジックミラーになっている浴室など、なるべく部屋を狭く感じさせないような工夫が施されていた。

デイビッドはその場で装備を解除して、浴室に入るとシャワーを浴びてから、なみなみとお湯の入った浴槽に体を沈める。

「ふう〜」

湯に浸かったデイビッドの口から、思わず息を吐き出す。

やはりお風呂に入った直後には息が漏れてしまうもの……しかも、この世界のお風呂は思考と直結しているのか、頭で考えただけで温度を自在に変化させることができる。

つまり。大浴場であろうと、自分が一番気持ちがいいと思える温度に自動で修正してくれる。わざわざ水やお湯を足して温度調整をする必要もなく。また、熱い冷たいでけんかになることもない。

今のデイビッドも自分にとっての最も良い適温を体全体で感じているのだろう。気持ち良さそうに頭の上にタオルを乗せると、浴槽の縁に体を預けて上機嫌に鼻歌を歌う。すると、デイビッドの負傷していた左腕の先が黄色く光る。

その光は治癒されている証しだ——負傷が大きいとHPゲージとは逆に赤——黄——緑と治っていき、回復度がMAXになると腕が自然と再生するのだ。

だが、腕が突然伸びてくるその光景は、見ていてあまりいいものではない。

バスローブを羽織、風呂上がり自室の冷蔵庫に入ったコーヒー牛乳を飲み干してベッドに体を投げ出す。

天井を見上げながら、感慨深げに呟く。

「——後数時間後には皆に会えるのか……」

視界に表示されたパーティーメンバーの名前が表示されている場所に、目を向けた。

誰一人として名前が欠けている人間が居ないというのは幸いなことだが、HPの減少はないにしてもメンバーの精神的な面までは分からない。

デイビッドが特に気にしていたのはエリエと星だ。

あの2人はメンバーの中でも年齢が低い、エリエは高校2年生で、星に限っては小学4年生という精神的にはまだまだ成長しきれていない上に、結構バタバタして出ていったのも否めない。

「……心配しても始まらない。今はとりあえず寝よう……」

デイビッドは自分に言い聞かせるように呟くと、静かに眠りに就いた。

数時間後。目を覚ましたデイビッドがフロントカウンターの前にいくと、そこには紅蓮と白雪が待っていた。

「……やっと来ましたか。どうですか？ 体の調子は」

「ああ。腕はほら、元通りに治ったよー」

デイビッドは紅蓮に腕を見せて微笑むと、紅蓮は「そうですか。それは何よりです」と思っていたよりもそっけなく答えた。その後、紅

蓮はコマンドを開いて、ボイスチャットを小虎に飛ばした——が、全く反応がない。

時間を見て数回送ったものの、その全てで小虎からの反応が返って来なかった。

おそらく。部屋に行つて疲れて寝入ってしまったのだろう。まあ、野宿が続いていた間はベッドでは眠れなかっただろうから、ホテルのベッドに倒れ込んだ直後の柔らかく優しく包み込まれる感じに負けてしまうのも理解できるが……。

紅蓮はコマンドを閉じると、小さくため息をつく。

「はあ……全く困った子ですね。白雪、お願いしてもいいですか？」

「はい。今すぐ起こしてきます」

「いや、いいよ。2日間も野宿で、彼も殆どまともに寝ていないんだろう。俺だけでマスターのところに戻るから」

そう言つて微笑を浮かべるデイビッドに、紅蓮が眉をひそめて告げる。

「——いえ、貴方は良くても私は良くありません。でも……そうですね。白雪、ここで小虎と待つてもらえますか？」

「えっ!？」

驚き目を丸くさせているデイビッドとは反対に、白雪は軽く頭を下げて「了解しました」と言った。

紅蓮はデイビッドの手を握ると、彼の顔を見上げた。その直後、物凄く殺気を帯びた視線を感じた。

つと、白雪の姿が一瞬消えたかと思うと、デイビッドの背後から白雪のささやく声が聞こえた。

「——今回は紅蓮様に免じて一緒に行くことを許可しますが、紅蓮様に何かしたらその時は……分かってますよね？」

殺意の籠もった低い声で告げた白雪の含みのある言葉に、デイビッドの背筋に悪寒を感じた。

顔を引きつらせているデイビッドを見て、紅蓮は不思議そうに首を傾げている。

「いや、白雪さんが……」

「白雪？」

その言葉に紅蓮は振り向いて、白雪の立っていた場所を見る。

紅蓮の視線の先には、いつデイビッドの背後から移動したのか分からないが、白雪が微笑みを浮かべている。

「白雪ならさつきからそこに居ますよ？」

「どうかなさいましたか？　紅蓮様、デイビッドさん」

「いや、でもさつきは……」

口を開こうとしたデイビッドだったが、突如としてその口を閉じる。

それは微笑んでいた白雪の瞳の中に、何とも言えないような殺気を感じたからに他ならない。

デイビッドは俯き加減に「なんでもないです……」と告げると、彼女から慌てて目を逸らした。

その様子を見て、少し疑問を感じたものの、紅蓮は前を向き直してデイビッドの手を引いて歩き出した。

「さあ、マスターの元へ急ぎましょう！」

いつになくやる気に満ち満ちている紅蓮にデイビッドは首を傾げながらも、マスター達の元へと向かう。

*
*
*

次なるステージへ・・・8

星は何かに体を締め付けられる様な息苦しきで目を覚ました。

体を動かそうとしたのだが、肩から腕にかけて、しっかりと押さえつけられていて全く動けない。

ゆっくりと瞼を開くと、部屋の小窓から紅の夕日が差し込んでいた。そこには、星のことを抱き締めるエミルの寝顔があった。

体をがっしりと抱きかかえ、まるで抱き枕でも抱いているかのようだ――。

星はエミル腕から抜け出そうと、身を振るが意外と力が強く。なかなか抜け出すことができない。

なんとか抜け出そうとしている星の体に、エミルの腕が更に絡み付いてきた。

「うう……苦しいです……エミルさん……」

「――うん。ダメよ……もうはさないわ……星ちゃん。むにやむにや……」

眠りながらも懸命に自分の体にしがみついてくるエミルに、星は困り顔のまま諦めたように小さく息を吐く。

そのエミルの抱き締める力が強ければ強いほど、苦しいものの、不思議と星にはそれが安心できる気がしていた。

ダークブレットの事件から数日間。離れ離れになっていた星にとつて、この何気ない出来事がとても懐かしく。そして、かけがえのないものを感じたのかもしれない。

(……エミルさん。もう私はどこにも行かないですよ……)

瞼を閉じてそう心の中で星が告げると、星の耳元でレイニールの声が響いてきた。

「主！ いつまで寝ているのじゃー！」

「なっ、なに!? レイ。どうしたの?」

驚いて目を見張ると、そこには上空からムスツとした顔で星を見下ろすレイニールの姿があった。見ていれば、寝ていたくて寝ているわけではないのが分かるはずなのだが……。

レイニールは小さな翼をはためかせながら、星の服を掴む。

「あるじく。我輩はお腹がすいたぞく」

服をグイグイと引つ張りながら大きく左右に揺れるレイニール。

星は驚くと、先程までのパーティーのことを思い出し。

「さつきあんなに食べたのにな？」

「むうく。我輩は育ち盛りなのじゃ！ あんなのでは全然足りん！」

「もう……」

星は胸を張ってそう言い放つレイニールに呆れながらも、隣で眠る
エミルに声を掛けた。

ひとまず、エミルにこの巻き付いている腕を放してもらわないこと
にはどうしようもない。

「エミルさん。起きて下さい」

すると、エミルは星の体を抱き寄せると「もう、甘えん坊さんねく」
と言って、自分の体を更に密着させてきた。

その結果、星の顔にエミルの豊満な胸が当たり、そのままその胸の
谷間に押し付ける。

「んんっ……ぱっ！ エミルさん！ いい加減に起きて下さい！」

その突然の思わぬ行動に、自由になった両手で慌てて自分の口を塞
ぐ2つの膨らみを押し退けると、寝ぼけているエミルに向かって叫ん
だ。すると、その声でぴくりと体を震わせ、エミルが瞼を開く。

エミルは目を擦りながら、大きなあくびをすると、自分の胸元から
見上げる星に目を落とす。

「あら？ 星ちゃん。私の胸に抱き付いてるなんて……甘えん坊さん
ねく」

星は呆れ顔でそんなエミルの青い瞳を見据える。しかも、そのセリ
フはさつきも聞いたのだが……。

おそらく。今のエミルには寝ている間になにをしていたのかとい
う記憶がないだろう。

彼女は慌てて両手をエミルの胸から放して、頬を赤らめている星に
優しく微笑むと、ゆっくりと体を起こした。

外はもう夕暮れ時になっていて、太陽から伸びる赤い影が広がって

いる。今まで隣で寝ていたはずのエリエとミレイニも、もう居なくなっていて部屋にはレイニールを含んだ3人だけになっている。

星はベッドの横に立って、エミルの胸の感触を思い出すように両手をわきわきさせながら見つめている。

(……エミルさんの胸。大きくて柔らかくて凄かったなあ。でも私のは……)

複雑そうな顔ですぐに自分の胸に手を当てて、現実を噛み締める様に星は大きいため息を漏らした。

それもそのはずだ。同じ女だと思えないほどに、星の胸はぺったんこで膨らみがない……。

まさにまな板と言わざるを得ないその胸の感触に、がっくりと肩を落としている星に、エミルが優しく声を掛ける。

「ほら、行くわよ。星ちゃん」

「あつ、はいー!」

星は慌てて膝に掛かった布団を振り払うと、エミルの元へと駆け寄る。

そんな星を優しい眼差しで見つめるエミルに、星が思い切って、以前から考えていたことを口に出してみる。

「あ、あの!」

「ん? どうしたの?」

「エミルさん。私に、戦い方を教えてもらえませんか?」

「——ツ!?!」

星の突然の言葉にエミルはまさか星の口から、その言葉を聞くとは思っても見なかったのだろう。

驚きのあまり、エミルはその場に硬直していた。

とても驚いた様に、あんどりと口を開けたまま、無言で目を丸くさせている。

そして、しばらくの沈黙の後。エミルが膝を折って、星と目線を合わせるように向かい合うと、閉ざしていた重い口をゆっくりと開く。

「……………絶対にダメよ」

「——えっ?」

星はその返答に驚きながら、エミルの顔を見つめている。

優しいエミルのことだ——星はきつと彼女が、二つ返事です承してくれると思っていたのだろう。だが、エミルの表情は怒っているのではないかと思うほどに険しい。

思わず後退りしようとする星の両肩をエミルが掴む。

その後、星の瞳をじつと見据えながら、エミルが言葉が続けた。

「……あなたは戦闘には向いてない。ただのゲームの状況なら、私にも言わないわ。でも、この状況であなたに戦闘をさせるつもりは一切ない……」

「……でも！ 私はみんなの役に——」

「——それは本当に皆を思ってるの？ それとも、自分が置いて行かれてる気がするという、気の焦りからなの？」

険しい表情のまま、エミルは星に問い掛けたその言葉は核心をつく。

星は目を細めながら厳しい表情で自分を見るエミルに、心の中を見透かされているような気がして、何も言えずに口を閉ざす。

俯き加減にしている星を見て、エミルは落ち着きながらも厳しい口調で星に言った。

「いい？ 今回も星ちゃんはいいと思ってる敵の方に行ったのかもしれない。でも、結果として皆を危険に晒している……それは分かるわね？」

「……はい」

「自分がいいと思う事が、本当にいい事とは限らないって事なの。あの時のあなたは自分を犠牲にしても。と思ったかもしれないけど、皆はそんなのを望んでいなかった。だから、全力で星ちゃんを連れ戻したのよ？」

星に言い聞かせるようにエミルは一言一言丁寧に告げると、にっこりと微笑みを浮かべた。

エミルは反省した様子で表情を曇らせる星の頭を撫でると、優しい声音でささやきかけた。

「——だから、星ちゃんは戦わなくていいのよ？ あなたは私が守つ

てあげるから……」

だが、星にはエミルのその言葉を、素直に受け入れられずにいた。それは、ダークブレットのアジトの地下で、狼の覆面の男に捕らわれた時に何もできなくて歯痒い思いをしたことが関係していたのかもしれない。

あの時にもっと力があれば、自ずと結果は変わってきたのではないか……そう考えていた星が、力を欲するのは当然のことだろう。

少しエミルに言われたくらいで、星のこの熱い思いが変わるわけもなく。

断られた星は頭を大きく左右に振ると、もう一度エミルの目をじつと見つめて、自分の思いを伝えた。

「エミルさん。私は！ 私……後ろに隠れているのも。安全な所で待っているのもいやなんです！ 私も本当の意味で仲間になりたい！」

「……そう。それじゃー、仕方ないわね……」

精一杯の気持ち星が伝えると、エミルは低く影のある声音で虚ろな瞳でそう呟いた。

その聞いたことのないエミルの声音に、星は少し怯えた様子でエミルの顔を見上げた。

「……エミルさん？」

そう尋ねた星の瞳に映ったのはいつもの優しいエミルではなく、まるで人ではなく動物でも見る様な冷たい彼女の瞳だった。

その虚ろで狂気に満ちた彼女の曇った青い瞳に、星が思わず後退る。

エミルは逃げようとする星に右手を突き出すと。

「——星ちゃん。右腕を出さない……」

「……えっ？ ど、どうしてですか？」

怯えた瞳を向ける星に、エミルは少し苛立つ様にした。

「いいから！ ……早く出さない」

威圧感の中に影のあるその声に、なんとも言えない恐怖を覚え。

全く有無を言わさないエミルの言葉とその威圧する様な空気に、恐

怖心からか反射的に星の体が震え出す。

恐る恐るエミルの方へと右腕を伸ばすと、エミルは「うん。いい子ね」と微笑みを浮かべると、突き出した星の腕をがっしりと掴んだ。その後、右手でコマンドを操作すると、次の瞬間。その手に不気味に銀色に輝く手錠が握られた。

星はそれを見て、慌ててエミルの手を振り解こうと右腕に力を込める。しかし、レベル差のせい、いくら振り回してもその手を振り解くことができない。

徐々に不安が募り、星は震えた声でエミルの顔を見て尋ねる。

「……………じよ、冗談ですよね？」

「ふふっ……………冗談でこんな事しないでしょ？」

エミルは不気味な笑みを浮かべた。

普段の彼女なら絶対に星にこんなことはしない。その狂気に満ちた眼差しはまるで、研究室で見た覆面の男のそれと同じく思えて。

(エミルさん。おかしくなってる……………なんとか逃げないと！)

最後の抵抗とばかりに力の限りに、エミルの手を振り解こうと必死に身を振った。

「嫌です！… 元に戻ってください！ エミルさん!!」

「……………」

その星の叫びも届かないのか、エミルは無言のまま嫌がる星の手首に手錠をはめると、もう片方を自分の左手首にはめて口元に不気味な笑みを浮かべる。

次なるステージへ・・・9

手錠をはめ終えたエミルはどうしてこうなったのか分からず、俯き加減で瞳から涙を流している星の頬を、微笑みを浮かべたエミルの両手が包み込む様にして優しく撫でる。

その手の感触はいつものエミルのものなのだが、突然手錠で拘束された状況では、まるで彼女が別人の様に感じて仕方なかった。

「最初は窮屈かもしれないけど、すぐに慣れるわ・・・そう、私が甘かったのよ・・・最初から、大事な物には鍵を付けて繋いでおけば良かった・・・」

「・・・エミルさん。どうして・・・」

手錠を掛けられた恐怖と不安からか、星は体を震わせながら潤んだ瞳をエミルに向けた。

その瞳を見て、一瞬だけエミルの瞳にいつもの優しさが戻った気がしたが、すぐに視線を逸らして冷たく言い放つ。

「右手が使えなければ武器は振れないでしょ？ これから現実世界に戻るまで、あなたは私が守るから何もしなくていいの。ただ、私の側に居なさい」

「そんなの・・・」

星が口を開くよりも先に、エミルがその言葉を握り潰すように告げた。

「これは決定なの・・・異論は認めないわ。これは、これまでの星ちゃんの行動が招いた結果。考えた末に、最も安全で確実な方法だと判断したわ。大丈夫——幸い。トイレは行かなくていいし。お風呂の時はコマンドから装備を外せば裸になれる。食事は食べさせて上げるし。体を洗うのとかも、私が全部やってあげる・・・星ちゃんは、ただ私の側で微笑んでくれてればいいの」

確かにそれならば生活に然程支障はない。しかし、それではまるで・・・

「・・・でも、それって。ペットみた——」

「——そうね。まるでペットよね。でも、少なくとも。普通のゲーム

に戻るまではそうしてもらおう……これからは、私の言う事だけ聞く忠実なペットになりなさい星ちゃん……それが、あなたの為なのだから……」

エミルが星の言葉を遮って無慈悲に言い放つと、星に向けて冷たい視線を浴びせる。

彼女の言葉はどこか正しいようで、全く正しくない様に感じた。

だが、明らかにその理屈はおかしいと、小学生の星でも分かる。しかし、今の状態のエミルに何を言っても、まともには聞いてもらえないだろう。

星は助けを求めるように、その様子を渋い顔で見つめているレイニールの方に向けたが、レイニールは助けようとする様子はない。

つというよりも、その体は小さく震えていて、冷や汗が滝のように流れている。

その様子から分かるのは、レイニールは動かないというより、恐怖心から動けないのだとすぐに察しがついた。それは、まるでヘビに睨まれたカエルと言ったところだろう。

レイニールにとって、エミルは天敵と言ってもいい存在——その為、動きたいが動いたら自分がどうなってしまうのかを、レイニールは本能的に分かっているのだ。

何かに取り憑かれたような、普段とは明らかに違う狂気に満ちたエミルの瞳に、星は底知れぬ恐怖を感じた。

(……体の震えが止まらない。こわい……エミルさんが……まるで別人のようにこわい……)

全身が震え腰から力が抜けてしまいそうになる……だが、それ以上に込み上げてくる涙が止まらない。

『これが何か悪い夢であって欲しいと、この目の前に居る別人の様なエミルが偽りであってほしい……』

そう思いながらも、手錠から伝わってくる鉄の冷たい感覚がこれは決して夢ではないと訴えかけてくる。

そう自覚すればするほど、今までのエミルとの思い出が徐々に壊れていく様なそんな感覚が、星の心を支配しようとしたその時、突然体

を誰かに抱きかかえられる。

「あら〜。やっぱり子供に、子供の面倒を見させるのは無理だったみたいね〜。エ・ミ・ル♪」

「……………えっ?」

星は聞き覚えのあるその声の主を確認して驚愕する。

それもそのはずだ。そこに居たのは紛れもなく先程、外で別れたはずのライラだったからだ。

瞬時にこの場所に現れたということは、物陰から様子を見守っていた彼女の固有スキル『レポート』を使つてここまでできていたのだろう。

おそらく。彼女は居なくなったフリをして、どこかで星達の様子を窺っていたのだろう。驚く星に、ライラが視線を落としてにつこりと微笑み掛けた。

「あら、どうしたの? 私が助けるのが意外? それとも、助けてほしくなかったのかしら?」

「えっ……………いえ、ありがとうございます?」

不敵な笑みを浮かべている彼女に、星は少し首を傾げながらお礼を言った。だが、その心中はとても穏やかではない。

それもそうだろう。星にとって、このライラという人物にはいい思い出がない。

おそらく。今回も何か企んでいることは間違いないだろう。それ以外に星を助けるメリットが彼女にあるとは思えない。もし、なんの企みもなく純粹に星を助けたいがための行動だったとしても、助けてもらったことを今の星には素直に信じるできないのだ。

エミルは自分の左手にはめられた手錠を外すと、鬼の様な形相でライラを睨みつける。

「ライラ。星ちゃんを私に返しなさい!!」

「ふふっ、返しなさい。か…………でも残念。今のあなたには、この子を返すわけにはいかないわ。この子は切り札ですもの…………そう貴女の勝手で、行動を制限されたら困るのよね〜」

互いに顔を見ながら告げる2人の間に、ピリピリとした空気が流れ

て部屋中を包む。

そんな中、ライラは星を地面に下ろすと、エミルに向かって言った。「そうね。エミルが私との勝負に勝てたら、この子を好きにしたいわよ」

「そんな事をする必要はないわ、ライラ。星ちゃんこつちにいらっしやい！」

星は睨みながらそう告げたエミルの顔を見て、表情を曇らせると、近くにいるライラの顔を見上げる。

すると、ライラは星の肩に腕を絡ませて不敵な笑みを浮かべた。

「私は別にどつちでもいいわよ？ もし。この勝負を受けないなら、この子は私が貰うわ。もちろん、レポートで連れて行く。それを阻むことのできない貴女は……どうするのかしらね〜」

「……いいわよ。勝負しようじゃない。前は逃げられたけど、今度は完全に消してあげる。もう今後、星ちゃんを狙う事ができないように……」

「ふふっ、それはどうかしらね〜。私には傷を付けられないと思うわよ？」

完全に頭に血が上っているエミルに向かってライラはそう口にする、立ち上がり企み顔で星を見下ろした。

そのライラの表情に、星の嫌な予感が的中する。

次の瞬間、ライラは後ろから星の両肩を掴むと、自分の前に星を押し出す。

「でも。貴女と戦うのは、この子よ♪」

「……えっ!?!」

思わず顔を青ざめながらライラの顔を見た星にライラは微笑を浮かべた後、膝を折って星の耳元でささやくように言った。

「……大丈夫よ。貴女は自分の能力を使えば、いいだけだから。あなたの固有スキルなら、エミルくらい瞬殺にできるわ」

「……能力？」

「ええ、戦いになったらすぐに剣を突き出してこう言いなさい『ソードマスターオーバーレイ』これで、貴女の勝利は確定だから……」

含み笑いを浮かべながらそう告げるライラに、星は浮かぬ顔で言葉を返した。

「でも……私は……エミルさんと、戦いたくない……です」

そう言つて表情を曇らせ俯く星に、ライラは感情なく低い声音でささやく。

「……そう。なら、戦わなくていいわ。貴女は立っているだけでいい。勝負が始まったら、私がエミルの背後から決めてあげるから……もちろん。貴女に拒否権なんてないわよ？ この勝負を逃げてもいいけど……その時は貴女を拘束して、この事を知っている人間。つまり、私は貴女のお友達全員を殺さないといけない……この意味が分かるわね？」

「……………」

(……私が戦わないと皆が死んじゃう……)

星は顔面蒼白で、無言のまま首を横に振った。

要するにライラは『メモリーズ』の機密保持の為に、星に関わった皆を殺害するとほのめかしているのだ。

普通ならそんな脅しには屈しないが、今までも何かとしてきたライラが言うなら本当なのだろう。彼女の今までの行動は全く理解できない。

まるで宇宙人と会話をしている様な……そんな掴み所の全くない彼女に、星は恐怖以外の何も感じられなかったのだ。

その後、ライラに向かって小さく呟く。

「……わかりました。言われた通りにします」

「ふふふつ、そう。賢い子は好きよ。手間が省けて助かるから……それじゃ、まずは今入っているパーティーから抜けて、それからエミルにこう言いなさい………つて」

星は小さく頷くと、ライラに言われるがままコマンドからパーティーを抜け、エミルに向かって大声で叫ぶ。

「エミルさん。私と勝負して私の処女膜をぶち破ってみろ。このクソレズビッチが〜!!」

突如として星の口から放たれた言葉に、自分を殺して霞んでいたエ

ミルの瞳に光が戻り、エミルはハッと我に返った。

その瞳には既に先程までであった影は完全にはない。というか、無知な星にライラが吹き込んだことが許せないのか、鬼の様な形相でライラを見据えている。

言葉の意味も分からずに大声でそう言い放った星の横で、手の平で口を覆い必死に笑いを堪えているライラを、殺意を持った突き刺すような視線で鋭く睨みつけた。

「——ライラ……なに変な言葉を小さい子に教えてるのよ！ このクソ女!!」

「あら〜。汚れない子を汚すのが、最高に楽しいんじゃないの。貴女ももう少し大人になれば分かるわよ。エミルも♪」

全く悪びれないライラに、エミルは怒りで肩を震わせながら、ライラに向かってゆっくりと歩き出す。その直後、ライラは「先に外で待ってるわ」と言い残して、星と一緒にエミルの目の前から姿を消した。

エミルは慌てて部屋を飛び出すと、外へ向かって全力で走り出す。

その様子に今まで固まった様に空中で停止していたレイニールもその後を追い掛けた。

次なるステージへ・・・10

突如として血相を変えてリビングに飛び出してきたエミルに、その場に居たエリエ達も同様に隠せない表情で声を上げた。

「エミル姉?! どうしたの!? そんなに血相変えて……ちよつと！ エミル姉!!」

目の前を遮ったエリエに何も言わず。基本スキルのスイフトを発動し物凄いスピードで外へと駆けていった。エリエもその尋常じゃないエミルの様子に、紅茶を飲んでいたカップを置いて慌てて後を追いかける。

つとそのエリエの頭に、レイニールが覆い被さってきた。そのレイニールに目を向けると、エミルを指を差しながらレイニールが叫ぶ。

「急げ！ 急ぐのじゃ！」

「なにがどうなっているのよ！ レイニール！」

「話すより見た方が早い！ 急げエリエ！」

ダークブレットの一件以来。変な信頼関係が生まれたのか、お互いの名前を呼び合いながら慌ててエミルの後を追いかける。

その頃、ライラに連れられて外に出た星は、自分の隣で面白可笑しく笑うライラを不機嫌そうに横目で見て声を掛ける。

「あなたの目的はなんですか？」

「ん？ ああ、そうね。目的は分からないわ。これもお・し・ご・と。だからね♪」

「……おしごと？」

意味深なその言葉に、星は首を傾げていると、血相を変えて城の門から飛び出し、星とライラの前にエミルが現れた。

息を荒げながら肩で息をしている。その様子を見ていれば、相当急いで来たのが分かった。だが、その様子を見て星は思わず小さな笑みをこぼしてしまう。やはり、面と向かって必死に助けに来てもらえるのは、必要とされていると感じて、星自身も嬉しいのだろう。

エミルは直ぐ様。剣の柄に手を掛け思い切り引き抜いて、その剣先をライラに向ける。

「はあ、はあ……星ちゃん。無事!？」

「ふふっ、待ってたわよく。エミル」

ライラは星の体に後ろから腕を回すと、強引に自分の方へと引き寄せる。

先程までとは完全に別人の様に、元に戻ったエミルが星に向かって叫ぶ。

「星ちゃんー!」

「エミルさんー!」

互いの名前を呼び合う2人を見て、ライラは何かを企んでいる様な悪戯な笑みを浮かべると、星の両肩を掴んで耳元でささやく。

「さあ。さつき言った通りに『エクスカリバー』を出して。言いつけ通りにしなければ……分かるわね?」

「……は、はい」

星はライラのその言葉に急に現実に戻され、険しい表情で『エクスカリバー』を握り締めると、生唾を飲み込んでゆっくりと頷いた。そう。星がここでエミルと戦わなければ、今まで星が関わってきた者をライラが殺してしまうのだ。

どんなに凄腕のプレイヤーでも、自由自在に転移できる能力を持つライラの前では手も足も出ないだろう。

この場を星一人で収められれば、ライラですら星の周りの人間に手を出せなくなる。

「ふふっ、いいい? エミルの剣が近づく前に、スキルを唱えなさい。ほらお披露目よ。行って来なさい!」

「……きやー!」

言い終えると、ライラはいきなり星の背中を押した。

一瞬バランスを崩したものの、すぐに剣を構えると星は大きな声で言った。

「ソードマスターオーバーレイ!!」

その直後、彼女の言葉に応えるように星の持っていた『エクスカリバー』が眩い金色の輝きを放つ。

辺りを眩しく照らす光りが、後から城から慌てて飛び出してきた工

リ工達にも当たった。皆、突然の強い光に目を隠していると「ひゃう！」と小さな悲鳴を上げていたミレイニが突然叫ぶ。

「装備が消えて、HPが突然なくなつたし！」

「なんやのこれ。コマンドも開けへん！」

「これって……」

驚きを隠せない表情で、コマンドを開こうとしたイシエルが叫ぶ。

光を浴びた直後、その場にいた星以外の全員の全てのステータス欄が『1』で固定される。だが、その中でも一番驚いたのはエミルだった。

エミルは突然消えた剣よりも、星が自らの意思で固有スキルを発動したことに、なによりも驚いていた。

それもそうだろう。今までは固有スキルどころか、剣すらまともに扱えずに足手まといになるとばかりと思っていた星がこれほど強力な固有スキルを突然発動させれば、驚くのも無理はない。

その時、エミルの脳裏に『星がわざと固有スキルを隠していたのではないか？』という疑問が浮かび上がってきた。

それは一度エミルの心に浮かんで、すぐに自分の中に封印したはずの考えだった。

誰しも目の前で無力だった女の子が計り知れない力を発揮させてば、疑いたくなる気持ちが出てくるのは仕方ないことだろう。

すると、エミルの心が、その疑いの感情に支配される。

「……星ちゃん。これは一体どういう事なの？」

エミルのその問い掛けの直後、再び光りを失った瞳が星へと向けられた。だが、固有スキルを発動した本人である星も困惑しながら、おどおどと右往左往している。

エミルはそんな星に影を帯びた瞳を向け、その細くて長い右腕を突き出して、ゆっくりと歩み寄った。

「……星ちゃん。その剣をこっちに寄越しなさい」

「えっ？ エ、エミルさん？」

先程と同じエミルの様子に、星は恐怖を感じてゆっくりと後退る。なおもゆっくりと迫って来るエミルは、影のある感じで淡々と口を

開く。

「星ちゃん。それはあなたをダメにする……その武器を、私に預けなさい。さあ、あなたに武器も戦う必要もないのよ？ 私があなただを危険から守ってあげる……だから、お姉ちゃんの言う事を聞きなさい……」

ふらふらした足取りで独特の威圧感を放ちながら俯き加減に近付いてくるエミルに恐怖して、星は思わず持っていた『エクスカリバー』をエミルの方へと渡そうとしてしまう。

まあ、それも仕方がないだろう。星の性格上、断ることが苦手な上に、初めて親しくなった人間との関係を壊したくないという感情が何よりも先に来てしまうのは仕方がない。

だが、それは隣にいたライラが彼女の腕を掴んで止める。

「ダメよ。エミルにこの剣を渡せば、他のプレイヤーが困ることになる！ この世界から出れなくなってもいいの!？」

「……でも……でも……」

星は厳しい口調で告げるライラにどうしたらいいのか分からず、おどおどしながら瞳を溜めてライラの顔を見上げている。

どうしたらいいか分からずに混乱している星に、ライラは微笑みを浮かべて動揺している星を落ち着かせるように告げた。

「……それに、あなたの仲間はエミルだけじゃない」

その言葉の直後、ライラはゆっくりと前を指差す。

指の先に星が目を向けるとそこには、金髪の侍の格好をした見慣れた人物が立っていた。

「……デイビッドさん!？」

突然の彼の登場に星が驚いていると、デイビッドは走り出して向かって来るエミルの体を抑えた。

「落ち着けエミル！ 君らしくない、いったいどうしたって言うんだ!？」

「放して！ あんなものを……星ちゃんを戦わせるわけにはいかない！ 岬の様に……もう岬を失った時のような思いをしたくないし。星ちゃんを傷付けさせるのも、星ちゃんが苦しむのも嫌なのよ!！」

「……エミルさん」

星が戦闘に意欲を見せると、それに対する豹変ぶりは尋常じゃない。だが、その行動も星のことを危険に晒したくないという気持ちの裏返しなのだろう。それは人間として当然といえれば当然の行動とも言える。

生物ならば食物連鎖の中。弱肉強食という概念からすれば、弱い者を切り捨てて強い者が生きるのは当然のことだ——しかしながら、それは動物に限ったことだ。人間である以上は思考を持って集団性、仲間意識が強いのは当然。脅威から弱者を守るという観念が『弱者を切り捨てる』という概念を拒む。

これがあったからこそ、人間はここまで繁栄してこれたと言えるかもしれない。そして、それは緊急時になればなるほど、強く強固なものになるのだ——。

エミルは人より『弱い者を強い者が守るのが当然』という人間本来の概念が強い。それは、たった1人の大切な妹を失ったことが強く影響しているのはもはや言うまでもない。

暴れるエミルを後ろから押さえながら、一向に落ち着きを見せない彼女にデイビッドが叫ぶ。

「以前にも言ったが、星ちゃんだって人間だ！ それに、ここは現実世界じゃない！ ステータスもレベルや種族で若干の違いはあるけど、それ以外は調整されて平等だ！ 戦力になるなら……本人に戦う意思があるなら、それを拒む権利は誰にもないだろ!?!」

身を振りながら取り乱したエミルが、動きを封じているデイビッドの言葉に反論する。

「嫌よー。今回の事件ではつきりしたわ！ この世界は今管理者の居ない無法地帯で、このHPが無くなれば死ぬ。それにこの子が狙われていると分かった以上。敵の行動が制限される安全な建物内から出すわけにはいかない……星ちゃんを無理やり監禁してでも。年長者である私には、あの子の親御さんが変わってあの子を守る義務があるのよ!?!」

「だからって、武器を取り上げるのか？ それは少しやり過ぎじゃない

いのか！」

「私がいれば、星ちゃんを危険に晒す事なんてない！ だからあの子に武器は不要よ！ 武器があるから戦おうなんて思うんだから！」

エミルは強引にデイビットの体を振り払うと、再び押さえ込もうとしてくる彼を突き飛ばした。

説得の甲斐もなく、突き飛ばされたデイビットは地面を転がっている。だが、地面を転がりながらも、すぐに体制を整えるとエミルを鋭く睨みつけながら、デイビットが徐ろに口を開いた。

「——エミル。それは思い上がりだ！ 現にこうして星ちゃんは君ではなく、ライラさんの元に居るじゃないか。誘拐された時だって、エリエが側に居てもダメだったんだ……それに、今の彼女のこのスキルだって、手元で寝かせておくには惜しい。エミル、もう一度考え直せ！」

「うるさい！ もう決めたのよ！ それに、ライラさえ……あいつさえいなければ、あの子の脅威はなくなる！ ライラを殺せば。私はあの子を守り抜ける!!」

「なっ、なにを……早まるなエミル!!」

ライラを鋭く睨みつけたエミルは、咄嗟に地面に落ちていた石を拾い上げる。

次なるステージへ・・・11

それを見たデイビッドは、表情を青ざめながら叫んだ。

この現状で相手のHPを『0』にする方法は、オブジェクトでしかない石を使って攻撃することのみ。

武器では『1』確実にHPが残るが最低限のダメージ数値が『1』である以上、フィールドに点在するオブジェクトで攻撃すればHPを削り切れるのだ。

だからこそ、今回エミルが地面に転がる石を手にしたのは……つまりはそういうことなのだろう。デイビッドが止めに入ったその時にはすでに、エミルは石を投げる体制に入っていた。

「――消えろこの悪魔!!」

エミルの手から投げられた石は、一直線にライラに向かって飛んでいく。

残りのHPが『1』しか残っておらず、固有スキルも使用できない状況にも関わらず。ライラは余裕そうに不敵な笑みを浮かべるだけで、避ける素振りも見せない。

絶体絶命のこの状況下でも、まだ打開する手立てがあるというのか？いや、そんなことができるはずはない。

何故なら、星の固有スキルはゲームマスターとしての発動なのだから、プレイヤーでしかないライラに何かできるはずもないのだ。

その直後、ライラの体が勢い良く後ろに倒れた。

「あら、あの程度の攻撃なら今の状態でも、かわせたのに〜」

倒れたそのライラの体には、星が覆い被さっていた。

星はライラから身を起こすと、呆然とそれを見ていたエミルの元へと走ってエミルに抱き付く。

「もうやめてください！ ケンカは……やめてください!!」

「……星ちゃん」

瞳に涙を溜めて必死に訴えかける星を見て、エミルは以前に夢の中で呟に言われたことを思い出す。

『あの子は、自分以外が見えない……いいえ、見かたが分からないんで

す。だから……姉様の愛で、あの子の心の氷を溶かしてあげて下さい……』

その岬の言葉が脳裏を過ぎり、大きく深呼吸をして冷静になって今の状況を改めて確認する。

目の前には眉をひそめながらエミルを睨むデイビッド。後ろにはピリピリとした雰囲気の中、星の固有スキルによって何もできないまま、エミルを心配そうに見つめる仲間達。

そして何より。守りたいと強く思っていた星が、エミルを顔を真っ赤にして涙で滲む瞳を向けていた。

状況は最悪だった……いや、エミル自身が取り乱して最悪にしてしまったのだ――。

こんなつもりではなかったと表情を曇らせるエミルに、星が涙ながらに告げる。

「……エミルさんの言うこと、ちゃんと……ちゃんと、聞きますから。だから……もう。けんかしないで……」

頬を伝う星の涙が、今はどんな強靱な刃よりも全身に強く突き刺さり、それ以上言葉を発することはできなかった。

小さくて華奢な体が体に密着している中、エミルはその言葉に大げない自分が、少し情けなく感じた。

(……私は星ちゃんを心配するあまり。彼女を信じられなくなっていた……でも。私が星ちゃんを信じなければ、私が信じられるわけないわよね……)

小さくため息を漏らし、体に抱き付いている星の頭に優しく手を置くと、エミルはにつこりと微笑んだ。

涙で潤んだ不安そうな星の瞳が、真っ直ぐにエミルの顔を見上げる。

エミルは小さく息を吐くと。

「そうね……私の考えが少し堅くなっていたかもしれない。過保護過ぎるのも問題ね……いいわ！ 戦い方を教えてあげる！」

つと不安そうな星に告げる。

「……本当……ですか？」

半信半疑で聞き返してくる星に、エミルは大きく力強く頷く。すると、星の表情が明るいものへと変わった。

今まで戦わせてもらえないことに歯痒い思いをしていた星にとって、エミルのその言葉はとても魅力的なものだ。

いくら強力な固有スキルを手に入れようとも、以前の様に捕まって使用できない状況に追い込まれてしまえば元も子もない。

しかも、実質このフリーダムないの武闘大会で、マスターの次に連続優勝の記録を伸ばしている日本で2番目に強いプレイヤーである彼女に教えてもらえれば、固有スキルと剣技でまさに鬼に金棒だろう。

だが、すぐに人差し指を立てて、釘を刺すように告げた。

「でも。戦う事を全面的に認めたわけじゃないからね？ とりあえず、私がいいと思うまでは、戦闘はさせません。それと、必ず守ってもらう事があるわ。夜は必ず私と一緒に寝る事。あと、出掛ける時は私も同伴します。それから、どんな理由があっても、勝手に城を飛び出さない事。そして、これが一番重要。ライラにはもう近付かない事——この4つは必ず守ってもらいます！ 今後、勝手な行動をしたら今までよりも厳しく叱るから覚悟しておくように！」

「は、はいー」
そのエミルには先程までの影はなく、完全に普段通りの彼女に戻っている様だ——。

エミルはもう一度星の体を引き寄せてしっかりと抱きしめると、ライラを鋭く睨みつけた。

「——つというわけだから、ライラ。星ちゃんは渡さない……今日は見逃してあげるから、早く帰りなさい！」

「ふふっ、そうね。少し上から目線なのが気になるけど、貴女も覚悟を決めたようだし……今日は帰りましょう……つと、言いたいところなんだけど。残念ながら、その子の能力【オーバーレイ】は、発動後24時間はどんな手段でも解くことができないのよ」

「……は？」

ライラのその言葉に、その場にいた全員が固まり、皆あんぐりと口

を開ける。

それもそうだ。強力な固有スキルであればあるほど、必ず弱点と呼べる泣き所がある。マスターの固有スキル『明鏡止水』は使用時回復アイテムの使用はできないのと24時間の再使用不可の制約がある。紅蓮の固有スキル『イモータル』すら継続使用できるわけではなく、1時間に5分だけ効果が切れる。

バロンの固有スキル『ナイトメア』も数千、数万という軍勢を召喚できるが、それは無限ではなく。兵士が撃破されれば数は確実に減少し、その増えるスピードもとても緩やかだ――。

この様に、どの固有スキルの中でも特別と言われる四天王の

「だ・か・ら【オーバーレイ】はスキルじゃないの。その子の固有スキルに付属させているGMシステムよ。それも、このゲーム【フリーダム】の元のシステムからの……だから、開発元の関係者の私でもミスターでも解除できないわ」

「……いいから帰りなさい！ テレポートができないだけで、徒歩で戻ればいいじゃないの！ それと、私のドラゴンは貸さないわよ！」
ひょうひょうとそう言い放つライラに、堪らずエミルが大声で叫んだ。

まあ、固有スキルとコマンドそのものを封じられている為、エミルもドラゴンは使えないのだが……。

どうやら、そのことを忘れるほど興奮しているらしい。

顔を真っ赤にして息を荒らげながらそう告げたエミルに、ライラが驚きの行動に出る。

なんと、何の断りもなく。ライラがエミルの城の中へと戻ろうとしているのだ。

その堂々とした姿に、その場にいる者も呆気に取られて何も言えな
いでいた――が、それを所有者であるエミルが許すはずもなく……。

「ちよつと！ なに考えてるのよ!!」

「……えっ？ なについて、肌寒くなってきたから部屋に戻るんだけど？」

「どうして私が、敵であるあんたを泊めなきゃいけないのって言って

るの!!」

凄まじい剣幕でそう言い放つエミルに、後ろでその様子を見てたマスターが声を掛けた。

「まあ、良いだろう。ライラは組織の命令でしか動かん。そうだろう？　ライラ」

心を見透かす様な瞳でライラを見るマスター。

その瞳を見て彼の意図が読めたのか、ライラは諦めた様にため息を漏らした。

「貴方に逆らうと、後でマスターに怒られそうね……分かったわ、泊めてくれるなら、今回はその子にこれ以上何もしないわ。それでどう？

エミル」

「……到底、信じられないわね」

エミルは疑いの視線を向けた。

まあ、それも無理のない話だ。今回の誘拐事件も結局はライラは星を助けたというよりも、自分達の目的の為にダークブレットのアジトから更に誘拐した——つと見るのが正しいだろう。

エミル達に星を預けているのも。おそらくは、ライラの話したミスターという男の気まぐれによるものである。

星の叔父と言ってはいるが、それを真実だと受け入れるには少し早急かもしれない。

何故なら、星が彼と会ったのは幼稚園児の時だ。幼子の記憶は曖昧なところが多く。また、緊急時。人は自分の良いように記憶を改ざんする生き物だからだ。

しかも、今回の記憶の復旧は彼等の手の中で行ったもので、その時に改ざんされたという可能性も捨てきれない。

そのことを差し置いたとしても、星がライラをよく思っていないのは変えられない事実。

現に今も、エミルの腕の中で不機嫌そうにライラを眉間にしわを寄せ不信感いっぱい瞳で見ている。

星からしてみれば、今までのライラの行動が信用に値しないと考えているのだろう。だからこそ、不機嫌そうに眉をひそめているのだ。

嫌そうな顔をしている2人に向かって、マスターが声を上げる。

「ライラを泊めるのが嫌なのは見れば分かるが、ここはこやつを泊めてやってはくれんか？ もちろん、この儂が責任をもって監視する」
「……まあ、マスターがそこまで言うのなら、別に……部屋は余つてますから、好きに使ってもらつていいです。でも！ 私達の生活スペースに彼女を入れるつもりはありませんよ？」

マスターはそう言葉で釘を刺すエミルに、苦笑いを浮かべながら。「分かつておる。監視すると言つたからには儂がこやつと一緒に部屋に居よう」

つと、頷いて言葉を返した直後、今度はそれに異を唱える声が複数上がった。

弟子であるカレンはともかく。その時に声を上げた人物がもう一人——それは、デイビッドと共に来た紅蓮だった。

第4章

次なるステージへ・・・12

紅蓮は今まで物陰に姿を隠していたのだが、マスターの言葉を聞いて堪らず慌てて飛び出して来たのだ。

「納得いきません師匠！　こんな得体のしれない女と相部屋なんて……断固反対です！」

「マスターと2人きりで、同じ部屋に女性を入れるなど考えられませんが。断固抗議します！」

2人は初めて会ったとは思えないほど、息の合ったタイミングで同時に叫ぶ。

その後、互いの顔を指差して睨むと。

「貴女には関係ない！　引っ込んでいて下さい！」

つと、またも同時に叫んだ。

紅蓮とカレンが睨みながら、互いに鋭い視線をぶつけ合う。

今回が初対面の2人には、最悪な出会い方であったのは言うまでもない……。

すると、紅蓮に向かってカレンが拳を構えた。

「子供だからといって、俺は手加減しないぞ」

「子供——ふふっ、そうですか……いいでしょう。なら、少し躰けてあげましょうか……」

紅蓮も懐から短剣を取り出すと、そうボソボソと呟きながら不敵な笑みを浮かべた。

つと互いに構えて、静かに闘志を燃やす2人の間にマスターが割って入る。

「止めないか。この馬鹿者共！」

「……マスター」

「でも師匠！　このちびっこが……」

「……ちびっこ？」

カレンの『ちびっこ』という言葉に、紅蓮の目付きが更に鋭いもの

へと変わる。

不機嫌そうに睨むその紅の瞳の奥で、明らかに殺気が満ちていた。それは彼女の前からマスターが消えた瞬間に、カレンに襲い掛かりそうなほどだ……。

マスターは殺気に気付いたのか紅蓮の方を向いて、もう一度大きく「止めんかー」と怒鳴ると、紅蓮もしょんぼりとしたように目を伏せた。しかし、カレンの方は未だに構えた拳を下ろそうとはしない。

カレンのその行動はHPの残量が『1』である為、普段以上に警戒しての行動だろう。

そんなカレンにマスターが怒鳴るが、カレンはそれを聞き入れずに言葉を返した。

「ですが師匠！　こんなどこの馬の骨かも分からない人間を、信用なんてできません！」

「……失礼な方ですね。私から見れば、あなたも十分信用できない人間です」

紅蓮はカレンの言い方が気に食わなかったのだろう。そう吐き捨てるように言いつて睨みながら、むすつとしていいるカレンに歩み寄ろうとする。

だが、それをマスターがなんとか引き離し、未だに険悪なムードを放つ2人にため息を漏らすとマスターが双方を紹介した。

「カレンよ。こやつは俺の元いたギルドのメンバーで紅蓮というのだ」

「なるほど、元ギルドのメンバーですか。なら、納得です」

カレンはそれを聞いて、何故か勝ち誇ったような笑みをこぼす。

その様子に今度は紅蓮がむすつとしながら眉をひそめると、マスターがカレンを紹介した。

不機嫌そうにしている紅蓮の視線が、目の前の短髪で活弁で強気な少女からマスターへと移り。

「これはな紅蓮、俺の弟子のカレンだ。まだ歳も若くてな、礼儀も良く分かってないが仲良くしてやってくれ」

「……なるほど、お弟子さんですか。そうですね」

すると、それを聞いて、今度は紅蓮が勝ち誇ったような笑みを浮かべる。

一瞬落ち着いたように見えた2人だったが、すぐにまたいがみ合うと言葉をぶつけ合う。

「このちびっこー！ どうしてそんなに誇らしげなんだよ！」

余裕とも言える笑みを浮かべている紅蓮に、カレンは怪訝そうな顔で言った。

「ふっ、それはそうです。弟子というのであれば、戦友である私より立場は下ですから」

「なっ……なら、俺は弟子だ！ 弟子とは生活の全てを共にしている。言わば家族だな！」

勝ち誇った様子で、腰に手を当てて頻りに頷くカレン。

「くうう……なら、背中を預けて死地に立つ戦友は、マスターと一心同体と言っても過言ではありません！」

一歩も引かない2人は、激しく視線をぶつけ合っている。

お互いの意見が真つ向から対立している2人を、マスターが必死でなだめていた。だが、一向に収まる気配を見せないカレンと紅蓮の罵り合いに、皆呆れているようだ――。

その光景を横目で見ていたエリエが訝しげに、ぼーつと立ち尽くしていたデイビッドに話し掛けた。

「ちよつと、カレンのバカと言いつ合ってるあの子はいつたい誰よ！」

あんたが連れてきたんでしょ？」

「ああ、俺を助けてくれた子だよ。何でも、千代の大手ギルドのサブギルドマスターらしい。戦闘を見ていたけど、とてつもない強さだったよ」

「ふくん。名前は？」

彼の言葉を信用してないのか、エリエは訝しげに視線だけデイビッドに向けて尋ねた。

顎の下に指を当て考える素振りを見せると、デイビッドは自信なさそうに答えた。

「確か紅蓮だったかな？ 女の子にしては珍しい名前だと思ったけ

ど。かつこいいからだろうな。まあ、俺のガイアという名前と同じくらいには、かつこいい名前ではあるよ」

「ああ、そういうのはいいから……」

虚ろな瞳で本当に興味なさそうに告げるエリエに、デイビッドは咳払いをして言葉を続ける。

「……でも、見た目では測れない強さをあの子は持つてるよ。しかも頭の方も相当な切れ者だ……油断はしない方がいい」

「ふーん。切れ者かどうかは分からないけど、デイビッドがかつこいからガイアって名前を付けたつてのは要らない情報よね……」

「……そうだな。俺が名前をかつこいいからというだけで、ガイアと名付けたというのは要らない情報……つて要らなくないわ！ つてか、お前達はなんで俺をキャラ名で呼ばないんだよ！」

デイビッドの叫びを聞き逃すと、エリエはエミルと星の方へと駆けて行った。

またしても自分のキャラクター名をぞんざいに扱われ、デイビッドは諦めにも似た大きなため息を漏らす。

未だに睨み合ったまま微動だにしないエミルとライラ。そしてエミルの腕の中で窮屈そうにしている星。

まずはこれを何とかしないとイケないと、エリエは思ったのだろう。

そんなエミル達のことを刺激しない様に、エリエは無理に気取らずいつもの感じで話し掛けた。

「エミル姉、ライ姉もそんなに怖い顔してないで。そんな顔してたら雰囲気も悪くなるし。前みたいに仲良くやろうよ！」

刺激し内容にやんわりと告げたつもりだったが、2人は目を逸らさずに表情を崩すこともなく言葉を返した。

「……エリエ。ちよつと黙つてて。隙を見せたら、あの女。また、何をするか分からないから……」

「私は仲良くしたいんだけどね。でも、エミルが怖くつて」

全く真逆の反応をする2人に、エリエはさすがに呆れているのか小さくため息を吐いた。

険悪なムードでこのままこの部屋に閉じ込められていると、正直どうかなりそうだった。だが、だからと言ってこの部屋を出ようものなら、2人は何をするか分からない。

ピリピリとした空気感に、皆そのことに気が付いているのだろう。その恐怖もあって、この部屋から出ていくわけにはいかないのだ――。

すぐに気を取り直して笑顔を見せると、そんな険悪なムードの2人に提案する。

「まあ、とりあえず。お風呂にでも入ろ！ もう汗で体ベタベタするし、星もそうしたいよね？」

エリエはエミルの腕の中で困惑した表情を浮かべている星に、目で合図を送ると、それを察した星は静かに頷く。

「わっ、私も……お風呂に入りたいです。エミルさん」

「そう？ なら、そうしましょうか。色々あつて疲れたものね」

星にそう言われ、ライラの様子を窺いながらもエミルは仕方なく頷いた。

それをチャンスとばかりに、エリエが更に畳み掛けるように言葉を発した。

「そうだよ！ ライ姉も一緒に入ろ！ 日本では、お風呂で裸の付き合いをする仲良くなれるんですよ？」

「……………」

無言のままのライラにエリエはなるべく笑顔を心掛け、ライラに心中を悟られないようにと内心ひやひやものだった。

エリエにとってライラの印象は優しいが、どこか掴みどころのないという感じの人物だった。だが、今はそれが以前に比べると更に際立って見える。

明らかにライラは自分達に何かを隠しているのは間違いない。

一緒にお風呂に入ろうと誘ったのも、湯に浸かれば体と心が解れ、ポロっと何かを喋るかもしれないという。彼女なりの希望のようなものもあつたのかもしれない。

ライラの返答を緊張した面持ちで待つエリエに、彼女は軽く微笑ん

で頷く。

「ええ、いいわ。私も疲れているのは事実だし。たまにはそういうの悪くない……でしょ？」

「う……うん。そ、そうだよね」

エリ工はその笑顔から何か思惑の様なものを感じて思わず目を逸らした。

そのやり取りを見ていた星はこれから起こる不穏な空気を、この時すでに感じとっていたのかもしれない。

暗闇の中。大きな黒い塔を建築する為、ゴブリンやリザードマン、インプ、トロールといった人形の多くのモンスター達が忙しなく蠢くのを見下ろしながら、赤く髪に白衣を着た痩せ型でメガネを掛けた七分けの男——如何にも優等生という感じの男のその手には狼の覆面が握られていた。

「——このシステムが機動すれば全てが終わる……イヴ。君は大きな勘違いをしているよ……君の記憶を削除したのは。ただ、君にこの地獄を見せたくなかったからだ。本当は君をこの腕に抱いてこの時を迎えたかった。でも……仕方ない。君が望んだ事だイヴ。君の大事な物を全て壊して、懺悔と絶望という色で君の心を私色に染め上げて。もう二度と、逆らえないようにしてあげよう……ひっひっひっ、ひやはっはっはっ!!」

不気味に奇声を上げて笑う男の甲高い笑い声が暗闇に染まる空にどこまでも響いていた。しかし、それはこれから始まる地獄のほんの序章に過ぎなかった……。

ドタバタな日々

脱衣所で着替えを終え、いつもの様にエミルに体と髪を洗ってもらって浴槽に入る。だが、今回はいつもとは明らかに違う。

浴槽に肩まで浸かりながら、星は気は気でない雰囲気を感じていた。

(どうしてこうなったんだろう……)

そんな考えだけが頭の中を駆け巡る。

だが、そう感じているのも無理はない。何故なら、浴槽に浸かった星を挟むようにして、ライラとエミルがいがみ合っていたからだ。

本来なら心落ち着く空間のはずの浴室なのだが、こうなると、窮屈な個室に閉じ込められたような変な感覚に襲われる。

そして問題はこの2人だけではなく……。

「——マスターと家族と言っていました、本当のところはどうなんですか？」

紅蓮が美しくしなやかな銀色の髪を丁寧に洗いながら静かに尋ねた。

「——それをあなたに話す必要を、俺は感じないですね」

その質問に、スポンジで体を洗うカレンも素っ気なく返す。

互いに全身から嫌悪感を滲ませている2人は淡々と手を動かし、視線を合わせることもない。

紅蓮は不機嫌そうな声で吐き捨てるように呟く。

「……そうですか」

「……そうです」

お互いにそれ以上の会話はなかった。

不機嫌そうに隣り合わせで、互いに黙々と体と髪の毛を洗っている。こんな感じで洗い場では、カレンと紅蓮が険悪なムードを醸し出していた。

正直、誰もがここまでギスギスした空気の中で入浴をしていたくないというのが本音だろう……。

(……気まずい。早く出たいなあ……)

星がそんな事を考えていると、人間モードになっているレイニールが寄ってくる。

以前のお風呂での飛び込み事件もあり。レイニールはお風呂の時だけは、金髪ツインテールの美少女の状態をエミルに強要されているのだ……。

まあ、レイニールも小型ドラゴンモードよりもこちらのモードの方がいいらしい。

理由は鱗に覆われている小さいドラゴンの姿よりも、人間の姿の方が体にお湯が触れる感覚が気持ちいいようだ――。

どちらにしても、レイニールはお風呂でのあの一件以来、エミルには絶対服従の状態が続いている。

あの事件の時も星が見ていないところで、トラウマになるようなことがあったのだろう。

そんなことよりも、さすがにレイニールもこの気まずい空気は感じ取っているようで、複雑そうな顔をしながら歩いている。

レイニールは星の目の前までくると、言い難そうに小さく呟く。

「なあ、主。この状態は何なのだ？」

「……分からないよ。私も困ってるし……」

そう告げたレイニールは、エリエの方を見た。

そこではいつもと変わらずエリエとミレイニがじゃれ合っている。まあ、それも一方的にミレイニがちよっかいを出しているだけなのだが……。

エミルとライラから、だいぶ離れた場所でお湯に浸かっていた。

これも2人をなるべく刺激しない為と、最悪は安全に離脱できるようにというエリエの考えがあつてのことなのだろうが、ミレイニは全くこの空気を感じていないのか、エリエの後ろから抱きつく様なかたちでミレイニは胸元に手を伸ばしている。

「おおく。エリエのおっぱいは柔らかいし〜」

「ちよっ！ なっ、なに勝手に……触ってるのよ〜」

頬を赤く染めながら、後ろからプニプニと揉んでいるミレイニにエリエが声を上げる。

だが、ミレイニはそんなことをお構いなしに、興味津々な様子で確かめる様に手を動かしている。年頃の女の子としては、自分のとの違いがどうしても気になるものなのだろう。

その手付きはいやらしいという感じはない。ただ、強引であることは間違いない……。

ミレイニは「やめなさい」と言うエリエのその言葉が聞こえていないのか、夢中で胸を揉みしだき「おお〜」と声を上げていると、我慢しきれずにエリエが声を荒らげた。

「いい加減にしなさいって……言ってるでしょ!!」

エリエはミレイニの一瞬の隙を突いて背後に回ると、今度はお返しとばかりに脇の下をくすぐり返した。

その場で脇を捕まれたことに驚いて少し飛び上がると、ミレイニは大声で笑い出し体を捻らせる。

「あはははっ！…だ、だめだし！…くすぐった……あはははははっ!!」
「ほれほれ〜。どうぞ〜」

まるで子供の様にはしゃぐエリエ達を見て、さすがに目に余ったのかエミルが大きなため息を漏らすと。

「こらー！ お風呂で遊ぶんじゃありません！」
「——あら〜。いいじゃない。賑やかで♪」

声を荒らげたエミルの背後に、いつの間にか移動したライラがエミルの両腕をがっしりと掴まえた。

装備を外しステータスに違いのない今の状況下では、お互いの力が均衡していてエミルも微動だにできない。だが、その瞳には明らかに嫌悪感とライラへの殺意に満ち満ちているのは確かだ——。

しかし、殺意を向けられている当の本人は満面の笑みで星とレイニールに向かって楽しそうに言った。

「ほらー！ 星ちゃん。エミルの張りのあるおつきなおっぱいが触り放題よ〜♪」

「うわあ〜」

頬を赤らめながらも、それを羨望の眼差しで見つめる星の瞳が吸い込まれるように見つめている。

もうこれは理屈ではなく、人間の本能というものかもしれない。

自分とは明らかに違うエミルの身体つきに星も興味津々だ……するとライラが悪魔的な笑みを浮かべ、腕に回していた自分の腕を更に食い込ませ、手の平をエミルの後頭部を押さえるようにして強制的に前屈みにさせると。その直後、星の目の前には大きな2つの膨らみが大きく揺れた。

釘付けになって離れない星の熱い視線を受け、なんとかライラの腕を振り解こうとし動いていたエミルが叫ぶ。

「さあ、これでエミルは完全に動けないわよく。私が押さえているうちに！」

「ダメよ。星ちゃん！ 悪い大人の言う事を聞いたら！」

「……………」

無言のままエミルの胸を見つめている星。

星は困惑していた。もちろんダメなことは分かっている。分かっているのだが……。

何度か布越しに触ったことはあるが、直に触ったことなどない。それも寝ている間に無理やり押し付けられた時に触ったくらいだ。

もちろん。ちよつとは直で触ってみたいと思っていたのは事実だろう。

自分のとは比べ物にならない別次元の物が、今日の前でまるで誘っているかのように上下左右に揺れている。

それを見つめている星の触ってみたいという思いは爆発寸前だ——だが、触ったらいけないと止める自分も居る。

(……………触ってみたい。でも……………)

その直後、心の中で葛藤していた星の耳に、ライラが悪魔の様な声が飛び込んできた。

「触ったら気持ちいいわよく。まるで、マシユマロみたいで……………」

「……………マシユマロ」

ライラの口にした『マシユマロ』と言う言葉に、星は思わず生唾を呑み込んだ。

頭の中では触りたいという思いと、触ってはいけないという思いが

交互に押し寄せてくる。

だが、やはり触つてみたいという考えが勝ったのか、星はゆっくりと手を伸ばした直後、サウナに入っていたイシエルがライラの背後に立っていた。

おそらく。エミルの嫌がる声を聞いて大好きなサウナを途中で切り上げてきたのだろう。その顔は怒りで引き攣り、肩は小刻みに震えていた。彼女のその怒りに満ちた瞳に、星の伸ばしていた手が止まった。

イシエルは強く握った拳を大きく掲げ、ライラの頭目掛け思い切り振り下ろす。しかしその瞬間。ライラの瞳が一瞬だけ光を放ち、瞬時にその場から姿を消した。

もちろん。彼女はテレポートしたわけではない。固有スキルは星の『ソードマスターオーバーレイ』の効果で24時間は使用できない。ただ、消えた様に素早く移動しただけだ……。

振り下ろしたイシエルの拳は空を切ると、今度は背後からライラの笑い声が響く。

「あはっはっはっはっ！」

人をバカにする様に瞳に涙を浮かべ、イシエルを指差して笑っているライラの様子に、イシエルの方からブチッ！という血管が切れる音が聞こえた。

無情にも空を切った拳を握り締め、俯いていた彼女は静かに、しかし殺気に満ちた声音で呟く。

「……………殺してやる。絶対に許さへん!!」

なおもお腹を抱えて笑っているライラに、イシエルは殺意を剥き出しにした瞳を向け全力で駆け出す。

それを見て、さすがにやばいと感じたのか、ライラは勢い良く走って逃げ出した。

楽しそうに逃げるライラを鬼の様な形相で拳を振り上げ追い掛けるイシエル。

浴室内を走り回る2人を見て、エミルが呆れ顔で星の方へとやってくる。

「……はあく、全く。困ったものね」

「そうですね」

ため息混じりでそう呟くエミルに、星が苦笑いで返すと、エミルはにやつと悪戯な笑みを浮かべながら星の耳元でささやく。

「……さつき。星ちゃんも、私の胸を触りたそうにしてたじゃない」

「——ッ!？」

星はその言葉に驚き、勢い良くお湯から上がると、両手をブンブンと振って全力で言い訳をする。

「ちつ、違うんです！ さつきのはちよつと興味があつて……つて、違います。とにかく違うんです!!」

顔を耳まで真っ赤に染めながら、星が必死に弁解していると、エミルはくすつと笑みをこぼす。

その後、ゆつくりと湯船から立ち上がったエミルが膝を折つて星と視線を合わせる。エミルの瞳に星が恥ずかしくなつて肩をすぼめていると、そんな星にエミルが微笑みながら告げた。

「いいのよ？ 私も星ちゃんくらいの頃は興味あつたもの、普通なことだわ。良かったら触つてみる？」

「……えっ？ いいんですかッ!？」

「ええ、どうぞ？」

微笑みを浮かべ、胸を寄せる様にして優しく微笑むエミル。

だが、いぎ触つていいと本人の許可を得ると、何故か先程以上に物怖じしてしまう。生唾を呑んだ星は、エミルの胸に恐る恐る手を伸ばす。

「……じゃあ、失礼します」

何故かかまこまって軽くお辞儀をすると、星の指先がちよこんとエミルの胸に当たったところですぐに手を引つ込めた。

星は引つ込めた手をわきわきさせながら感動した様子で、瞳をキラキラさせている。

これで満足したのか、指先に触れたエミルの胸の感触と自分の胸を比べるように揉んでいる。

その様子を見ていたエミルはくすつと微笑みを浮かべると、星の頭

を優しく撫でると。

「星ちゃん可愛いわねえ。もつとしつかり触つてもいいのに」

「——そうだよ。エミル姉の胸は皆のものなんだから、遠慮することないのに」

そのエリエの声が聞こえた時には、彼女の手は後ろからエミルの大きな胸をがっしりと握り締めていた。

瞳を閉じてその感触を確かめるように、エリエの手に収まらないほどの豊満な胸を掴んで放さない。

「ああ。この両手で収まり切らないボリューム……安心するなあ」

「……………」

手をわきわきさせながら、染み染みと頷いているエリエ。

それとは対照的にエミルは頬を赤く染めると、無言のまま俯いていた。その直後、いつまでもエミルがわきわきと手を動かしていると、体を震わせながらエミルが眉をピクピクさせ、拳を固め始めた。

次に何が起こるのかが容易に想像できた星があたふたしている、予想通りその拳がエリエの脳天を直撃する。

ドタバタな日々2

エミルの鉄拳がエリエの脳天に突き立てられ。

「いぎやい!!」

普段は決して聞くことができないほど、エリエは大きな悲鳴を上げると慌ててエミルから離れ、涙目になって両手で殴られた箇所を押さえた。

おそらく。エリエ本人はまさか殴られると思っただけではなかったのだろう。

目を丸くさせて突然殴られたことに驚きながら、涙で滲んだ瞳でエリエが直ぐ様声を上げた。

「いった〜い! なっ、なにをするのよ。エミル姉」

「それはこっちのセリフよ! なに? 私の胸は皆のものって! 私の胸は私のものです! それに、エリーには触らせるって言ってないでしょ!」

そう声を荒らげて拳を振り上げているエミルに、エリエが両手を前に突き出して慌てふためきながら言った。

「だって! 星だけずるいじゃん! 私にも触る権利はあると思う!」

「ほお。あんなにしつかり触っておいて……星ちゃんなんて、指先がちよつと振れただけで満足してるのに!」

拳を鳴らしながらゆっくりと迫ってくるエミルに、エリエは両手を前に出して後退る。

「ちよつと、タンマツ!!」

「――問答無用ツ!!」

エミルの振り下ろした拳をギリギリでかわすと、エリエは慌てて湯船から飛び出して一目散に逃げた。それを追い駆けるようにしてエミルも浴槽を飛び出す。

エリエは赤鬼の様に真っ赤に顔を染めているエミルから逃げるように浴室内を走り回る。

「くらー!! お風呂の中で走るなー!!」

「なっ！ エミル姉に捕まったら殴られるでしょ!？」

「そんなの当たり前でしょ!！」

「そんなの理不尽だー!!」

腕を振りかざしエリエを追いかけ回すエミルと、鬼ごっこを続けているライラとイシエル達を見ていて、星とレイニールは呆れ顔で顔を見合わせてため息を漏らす。

「ほんとに、皆して何やってるんだし……」

そこに、ミレイニも浴槽内をカエルの様に泳いでやってくる。

エミルが見たら「浴槽内を泳ぐな!」と一喝されそうだが、今はエリエを追いかけるのに必死で、こちらのことは気にする暇もなさそうだ。

星は少し気まずそうに愛想笑いを浮かべている。

正直、同じくらいの歳のミレイニに向かつて、どう接したらいいのかわからなかったと言う方が正しいだろう。

丁度いい距離感を保とうとする星とは異なり、ミレイニは積極的にグイグイ迫って来るのだが、どうしても人慣れしていない星は物怖じしていたのだ。

しかし、それも無理はないだろう。星は現実世界では友達と呼べる存在もおおらず、同い年の子との接触も出来る限り避けてきた。その中でも、何の突拍子もなく無意識に迫ってくるミレイニは完全にイレギュラー的な存在だった。

先程も脱衣所でなかなか服を脱ごうとしない星の服を脱がそうとしたり。洗い場でも体をエミルに洗ってもらっていた星のことを凝視していたりと、何かにつけては星に迫ってくるのだ。その後、ミレイニもエリエに体を洗ってもらっていたが……。

とにかく、ミレイニとは距離が近くなることがしばしばあった。

ミレイニからしてみれば、比較的歳の近い星が一番仲良くなりやすいと考えているのだろうが、星からしてみればその真逆で、歳が近いが故にここに居る誰よりも緊張してしまう。

「そう言えばさ。星ってあたしのこと嫌いだし?」

「……………えっ?」

そのミレイニの言葉に、星はドキッ!とすると今までのことを思い返す。

ちやつかり名前を呼び捨てにしていることは気になったが、それはこの際置いておこう……。

しかし、星が彼女に何かした覚えが全くない。少なくとも嫌われるような行動を取った覚えなどない。だとしても、自分の行動の何か彼女を不快にさせたのかもしれないと、星は冷や汗を流しながら「どうしてですか?」と聞き返した。

緊張した面持ちで、次にミレイニが何を口にするのかを息を呑んで見守っていると。

「だって星って、私が話し掛けるとビクついてるイメージだし。そんな態度を取られると、誰だって嫌われてると思うし」

「……あつ」

そのミレイニの指摘は適切だった——星にも思い当たる節がいくつもある。だが、その行動も決してミレイニを嫌ってのものではなく。ただ単に、接し方——距離感が分からなかっただけなのだ……。

どう返答すればいいのか、表情を曇らせ俯いている星の顔をミレイニが覗き込んで首を傾げている。

「どうしたんだし? 顔真つ赤だし」

「えっ? あつ、ちよ、ちよつとのぼせたかもです!」

突然目の前に顔を近付けてきたミレイニから星は視線を逸らすと、慌てて湯船を飛び出して脱衣所に向かって走り去っていった。その後を湯船に浸かっていたレイニールが慌てて上がると、小さいドラゴンの姿になり後を追いついていく。

脱衣所に戻ると星は体を拭いてバスタオルを体に巻き付け、脱衣室にある鏡の付いたテーブルの丸い木製の椅子に腰掛けた。

「はあ……」

小さくため息をついた星の横に、小さいドラゴンの姿に戻ったレイニールが翼をはためかせながら寄って来る。

レイニールはテーブルに降りると、がっくりと肩を落としている星に向かって話し掛けた。

「なにも普通に話せばいいではないか。エリ工達とは普通に話してるのに、何を躊躇うことがあるのじゃ？」

「……だって、私と話しても楽しくないだろうし……」

星が弱々しくそう告げると、レイニールは少し呆れたようにため息を漏らして翼をはためかせ星の肩にちよこんと乗った。

そして星の顔に視線を向けると。

「我輩は主と喋っていて、楽しくないと感じたことはないぞ？」

「……本当？」

「うむ！」

疑うように返事をした星にレイニールが力強く頷く。

そしてレイニールは飛び上がると、星の目の前で腕組みしながら。

「ああ、主はもつと自分に自信を持ったほうがいいのじゃ！」

そう言つて微笑みを浮かべるレイニール。

その表情に、星も少しだけ勇気をもらえた気がした。

備え付けになつているドライヤーを手に長い髪を乾かしていると、

一番最初に浴室から出てきたのはカレンと紅蓮だった。

2人は終始無言だったが、話し掛け難いほどにギスギスとした雰囲気気を醸し出している。

互いに表情は硬く、近くにいるだけでピリピリとした空気が伝わってくる。

「なるほど……これはもう話し合いにはなりそうにありませんね……」

「そうですね……」

浴室から出てきた2人は隣り合わせに置かれたかごから紅蓮は赤い着物、カレンは紺色の浴衣を取り出すと無言で袖を通す。

お互いに険しい表情のまま、沈黙を守りそれ以上の言葉を発することはない。だが、その表情を椅子に座りながらビクビクして窺っている星にも、空気に乗ってピリピリとした感覚が伝わってくるほどだ――

2人は早々と着替え終わると、互いに睨み合つて。

「これは――」

「——マスターに決めてもらおうしかありませんね！」

「——師匠に決めてもらおうしかないですね！」

つと声を合わせて言うと、静かに脱衣所を後にした。

歩いていく足音が徐々に小さくなると、息苦しい空気が完全になくなり。星の強張っていた肩から力がスツと抜けた。

その場の空気を敏感に感じ取っていた星とレイニールは、互いに深呼吸をして落ち着かせると顔を合わせ、そしてレイニールが先に言葉を切り出す。

「緊張したのじゃ」

「……うん。凄かったね」

星は生唾を呑み込んで、レイニールの言葉に応えるようにゆっくりと首を上下に動かす。

それから黒く艶やかな長い髪をドライヤーの熱になびかせながら乾かしているが、長い為なかなか乾かない。すると、浴室の扉が勢い良く開いて中からミレイニが飛び出して来た。

「う〜ん。さっぱりしたし〜！」

両手を広げて気持ち良さそうに突き上げて伸びをすると、星の姿を見つけてピクツ！と体を震わせる。それとは対象的に星はピクツ！と悪寒を感じて背筋を伸ばして身震いする。

逃げるように出て来た手前、どうしてもこの場はバツが悪い。

この場から少しでも早く逃げ出したいと思うものの、あまりの出来事に星の体は金縛りにあった様にピクリとも動かせない。すると、その嫌な予感的中した……。

星を見つめる瞳がキラキラと輝き、星の方へと駆けてきた。

「星、私の事を待っててくれたしツ！」

「……えっ？ いえ、髪を乾かして——」

「——やっぱり。星は私の事が好きなんだ！ もつと仲良くするし！」

駆けてきたミレイニは星にガバツと抱きつくと、星の濡れた髪が当たるのも気にせず、嬉しそうに飛び跳ねていた。嫌な予感的中したが、最悪の予想は外れた様だ——。

突然の彼女の行動に、驚きと困惑の表情を交互に浮かべている。そこで、星はある重要なことに気が付く。

そう。浴室内を走り回っていたエミル達がいつまで経っても出て来ないことに気が付いたのだ——イシエルに追い回され、命の危険があるライラは仕方ないとしても。

捕まっても打たれるだけで、疲れて誰よりも早く打たれることを選択すると予想していたエリエとエミルが一向に出て来ないのはおかしい。

「あの、エミルさん達は？」

星がそのことをミレイニに尋ねると、両手の手の平を上にして首を振ると、彼女は少し呆れ顔で答えた。

「ああ、エリエ達ならお風呂場で倒れてるし。全く、本当に大人気ないし」

「お風呂場で倒れてる!？」

その言葉を聞いた直後。ミレイニは慌てて浴室に向かって走り出す星に声を上げた。

「ちよつと待つしー!」

だが、その声に星が止まることはなかった。

体に巻きつけていたバスタオルがはだけるのも構わずに星が浴室に飛び込むと、そこには息を荒らげて地べたにへたり込んでいるエミル達の姿があった。

「しっかりしてください。エミルさん!」

「……レベルが同じ者同士が……こんな事しても無駄……だったわ……」

直ぐ様、星が駆け寄るとエミルが弱々しく掠れた声で告げる。

「があくつとその場に垂れるエミルの手を取って星が、あたふたしていた。」

もちろん。ゲームである以上ステータスは、レベルによって一定だ。その数値を本来ならば、装備品などでステータスの上下を調整するのだが、ここは浴室——浴室で装備を身に着ける者などいない。

即ち、ここに居る者全員のステータスは一定である。その為、敏捷

のステータスが同じ者同士が追い駆けっこすると、結果は同じ共倒れ
となってしまうのだ……。

ドタバタな日々3

全く回復する様子のないエミルとエリエの側に星が付いていると、主の帰りが遅いことを心配したのか、そこにレイニールがパタパタと飛んできた。

横たわるエリエとエミルを見て、首を傾げているレイニールを見つ
け、星が声を掛けた。

「あつ、レイ。ちよつと皆を見てて！」

「ん？ どうするのだ……あるじく!!」

そう言い残して慌てて駆け出す星の背中に、レイニールの声が響く
が星に止まる気配もない。

レイニールが大きくため息をついて。

「もう。しかたないのじゃ……」

つと呆れながらに呟く。

それからしばらくすると、お盆に4つ水の入ったコップを持って歩
いて来る星の姿が見えた。

コップの中身をこぼさないように慎重に運んでくるが、ここはゲー
ムの世界だ——もちろん。全て数値で判断されている以上、コップの
中身はいくら振つても逆さにしても溢れることはない。

まあ、強い衝撃を加えれば壊れてしまうのだが。それ以外では少
しこのことで何かが起こることはなかった。

それもそうだろう。現実世界ではコップの中身を相手にかけて喧
嘩を煽る……なんてこともできたが、それもゲームの中では規制され
ている迷惑行為となる為、システムの中でできる限りの迷惑行為を行
えない様に設定されているのだ。しかし、そんなことを星が知る由も
なく——。

「……こぼさないように、こぼさないように」

一歩一歩踏みしめるように歩いてくると、レイニールはほつとした
様な表情を浮かべ、星の方へと飛んでいった。

その後、一瞬だけ光って人間の状態になったレイニールがお盆に
乗ったコップを2つ、乱暴に奪い取る。

それを見た星が慌てて声を上げる。

「レイ！ そんなに乱暴に持ったら溢れちゃう……よ？」

そう口にした途中で、星の言葉は疑問形にと変わった。

だが、それも無理もない。何故なら、星の瞳に映ったのはまるでコップの上にラップでも貼られているかの様に、水滴一つも溢れないでコップの中を回っている水だったのだ。

それは星の予想を遥かに超える出来事で、それを目の前で目の当たりにした星は、呆然との自分の運ぶコップの中の水を見つめていた。すると、我に返ったように倒れているエミル達の方に駆けていった。

星は倒れている4人の元に駆け寄ると、エミルとエリエに水の入ったコップを渡す。

それを見てレイニールも遠くで倒れているイシエルとライラに同様に水の入ったコップを渡した。

4人は一心不乱にコップの中の水を飲み干すと、大きく息を吸い込んで「生き返った」と息を吐く。

星もその様子を見て、ほっとしたように胸を撫で下ろすが……。

「エリー！」

「ちよっ！ エミル姉もういいじゃん！」

「許しません!!」

水を飲んで休憩を取ったことで気力を取り戻したのか、また走り出すエミルとエリエ。

それを見て、呆然としている星とレイニールの隣でもう一組。

「うちとうちのエミルをコケにした罪は重いんよ！」

「ふふくん。第二ラウンドね。受けて立つわよ♪」

余裕の微笑みを浮かべているライラを拳を振り上げてイシエルが追い駆け始めた。

さすがに、全く懲りる様子のない彼女達を目の当たりにした星達は……。

「……レイ。みんな忙しいみたいだから、邪魔にならない様に。部屋に戻ってよう」

「ああ、そうだな。主……」

星とレイニールは地面に置かれた空のコップを淡々と回収すると、考えるのを停止し、虚ろな瞳のままドタバタと走り回る彼女達を放置して浴室を後にする。

その後も彼女達の追いかけては続き、最終的にミレイニが炎帝レオネルのアレキサンダーと共に浴室に乱入し。

「もう。いつまでやってるし！ 大人ならいい加減にするし〜!!」

っと、お腹を空かせたストレスを爆発させるように激昂して4人を追い回したことで、皆をノックアウトしてとりあえずの収束を見た。

もちろん。唯一まともな食事を作れるイシエルが再起不能になったことにより、食事の為に外出することとなった。

一度はカレンと紅蓮の、恋の熱血料理バトルに発展しかけたのだが、それをマスターの「今日は外で食事をするか」の一言で抑え。

城でグロッキー状態になっている4人だけを残し。デイビッド、マスター、紅蓮、カレン、ミレイニ、星、レイニールというメンバーで、オカマイスターサラザの経営する店へと足を運んでいた。

サラザは快く皆を受け入れると、バーカウンター奥の厨房へと姿を消した。

本人が言うには、サラザの料理はプレイヤーが経営する店の中でも美味しいらしい。

バータイムではお客さんとの会話を楽しむ為、料理を振る舞うことは少ないらしいが、ランチタイムはそれなりに繁盛しているという話だ。

その話を聞いて鼻歌交じりに、星の隣のカウンター席に腰掛け、終始うきうきで笑顔を浮かべる上機嫌のミレイニに星が遠慮がちに声を掛ける。

「あの。〜機嫌ですね……」

「当然だし！ ダークブレットの城では外でご飯とか考えれなかったし！ それに、こんなに大勢で食べるご飯も久しぶりで給食みたいだし！」

「……ああ、なるほどう」

満面の笑みで微笑み返してくるミレイニに、星は複雑な気持ちでぎ

こちなく微笑み返す。

あからさまに表情を暗くしたのには理由があった。別にミレイニが嫌いなわけではなく。

それはミレイニの言っていた『給食』と言う言葉そのものに抱いている嫌悪感から出る反応に他ならなかった。

星は小学校ではいじめにあっている身だ——それはもちろん。皆でワイワイガヤガヤと食べる給食の時間も例外ではない。

その為、星にとって給食の時間とはいかに早く給食を食べ終わるか、に精神を集中させ、いかに空気になって食べ続けるかが肝になる。

目の前の給食を早すぎず遅すぎずで、黙々と食べ続けるタイムアタックのようなものだ——早すぎれば時間を余らせてしまうし、遅すぎても早く食べ終わった子から冷たい視線を浴びせられることになる。

給食の時間は教師も一緒なので、暴力を振るわれる危険や、大声で罵られると言ったあからさまないじめはなかったが、それでも席を合わせて向かい合わせに食べる給食の時間ほど居心地の悪いものはないだろう。

前から突き刺すような視線と、たまに自分目掛けて飛んでくる消しゴムのカスやシャープペンの芯などに、何度心を痛めたか分かったものではない。

そんな状況で、ミレイニの楽しそうな会話が、不思議と自分と彼女の距離感を遠ざけていくように感じて、もやもやした気持ち募るのだ。

手を伸ばせばミレイニの体に触れられるほどの距離感だが、今の星にはその距離が月と太陽ほどに離れて感じる。

決して混じり合うことのない2つの存在は、今のこの状況にピッタリな例えだろう。小さくため息を漏らし、表情を曇らせる星。

その気まずい雰囲気を感じたのか、カウンターの先からサラザが気を利かせて、プリンを2人の目の前に差し出した。

「2人だけに特別よ〜」

そう言い残しウインクをして、サラザはまた厨房へと消えていく。
「あつ、ありがとうございます。サラザさん」

「ありがとうございます！ あーでも、星の方が少し大きいし！」

お礼の直後に抗議するミレイニに、星はそっと自分のプリンを横に
ずらす。

それを見て驚いた顔をしているミレイニに、にっこりと微笑みを浮
かべた。

「あの、良かったら……」

「べ、別にいいし！」

ミレイニは首を振ると、自分のプリンを食べ始めた。

さすがに年下の星に、まるでお姉さんの態度を取られたのが嫌
だったからなのだろう。だがその直後、星の頭にレイニールがちよこ
んと乗って指を咥えてプリンを見下ろしている。

「……いいのう。我輩もプリンとやらを食べてみたいのじゃ〜」

「あつ、なら。レイに私のを——」

「——レイニールちゃんのもあるわよ〜」

星がプリンの皿に手を付けた瞬間。サラザが素早くもう一つプリ
ンを差し出した。

本当に凄まじい地獄耳だ——厨房とカウンターはレースのカーテ
ンに一枚で仕切られているだけとはいえ、本来ならば聞こえる距離で
はない。もしも悪口の1つでも言おうものなら、あの屈強な肉体の餌
食となることだろう……。

それに飛び付くようにレイニールが星の頭から飛び降りると、皿に
添えられたスプーンを手に嬉しそうにプリンに突き刺した。

レイニールはプリンをスプーンいっぱいにくっつけて口の中に頬張
ると、本当に嬉しそうな顔で笑みを浮かべている。

何度もプリンを口に頬張って幸せそうな顔を見せるレイニールを
横目に、星も嬉しそうな笑みを浮かべるとプリンを口に運んだ。

「あつ、おいしい……でも、これって普通のプリンと違うような？」

小首を傾げている星に、焼き鳥の乗った皿を厨房から戻って来たサ
ラザが力強く頷いて。

「さすが星ちゃん！　そうよく。このプリンは希少種のアカックドードーの卵を使って作ったの！」

　　つと言いながら、酒を呑んでいるマスターとデイビッドの前に持ってきた焼き鳥の乗った皿を置く。

　　戻ってくるサラザに、星が表情を曇らせると。

「それじゃー。高いんじゃ……」

　　その話を聞いて一瞬で表情を曇らせた星に、サラザが手をバタつかせるオーバーアクションで答えた。

「大丈夫よ！　私達ならこの程度のモンスターあつという間よ〜」

　　あのアクションはおそらく、さつき話していた『アカックドードー』という鳥の真似をしていたのだろう。

　　星は表情を明るくすると、羨望の眼差しでサラザの顔を見つめた。

「さすがですね。サラザさん」

「まあ、見た目からしてマスターならあつという間だし！　それより。プリンのおかわり欲しいし！」

　　ミレイニが2人の話に割り込んで、空になった皿をサラザに向けて突き出している。

　　その皿をミレイニから受け取ると、サラザは新たなプリンをミレイニに差し出して微笑む。

「――ミレイニちゃん。私の事はマスターより。ママって呼んでね〜」

「むう〜。マスターの方が、響き的に大人っぽくて素敵だし〜」

　　膨れっ面をしながら受け取ったプリンを口に運ぶミレイニ。

　　まだミレイニにはスナックのママと、BARのマスターの区別がつかないのだろう。

ドタバタな日々4

星の隣で黙々と食べ進めていたレイニールがプリンを食べ終え、サラザに皿を突き出した。

「我輩もおかわりなのじゃー!」

「はいはい。分かったわく。星ちゃんはどうする?」

「……えっ? あつ、いえ。私はもう大丈夫です」

微笑むサラザに首を横に振った星はその申し出を断った。

サラザは「遠慮しなくてもいいのよ」と言葉を返したが、星は苦笑いでそれに答えた。すると、奥の席からデイビッドが大きく手を上げ叫ぶ。

「サラザさーん! ウィスキーを頼む! あと、焼き鳥なくなつたら、チーズとかつまみになりそうなものを!」

「デイビッドよ。儂らは飯を食べに来たんだぞ? 酒を飲めないカレン達も居るのだ。少しは——」

「——いいですよ師匠。皆、色々ありましたし。俺達の事は気にしないで下さい」

渋い顔をしてデイビッドを見ていたマスターに、カレンが微かに笑みを浮かべて言った。しかし、納得していない人間が1人——。

「……俺達? 俺の間違いではないんですか?」

澄まし顔だが、明らかに不機嫌そうに言葉を返したのは、マスターを挟むように反対側に座っていた紅蓮だった。

彼女の身長は小学生並みで、絶対にお酒を飲めそうにない外見なのだが、何故か紅蓮は自分は違うと言いたげな笑みを浮かべ言い放つ。「まあ、お子様な貴女には……マスターのお酒の相手は務まらないですわね」

「なっ、なんだと!? 君。だって飲める歳には見えないぞ?」

直ぐ様。凄まじいほどの殺気を放つ紅蓮に、マスターが空気を敏感に察して口を挟む。

「紅蓮はもう飲めるんだつたな。なら、たまには飲むか! 紅蓮よ」

「ええ、マスター」

マスターのその申し出に機嫌を直したのか、紅蓮の表情が一瞬で和らぐ。

何故か飲み会の様になったデイビッド、紅蓮、マスターの間に何故か飲めないはずのカレンがマスターの側から離れない。

テーブルの上にはチーズ、唐揚げ、やきとり、枝豆などの定番メニューが並んでいる。もちろん。ピザやナッツ、現実世界にいないような良く分からない魚の燻製や聞いたことのない動物の肉など、こちらの世界にしかないメニューもある。

そんな中、目の前の日本酒の入ったお銚子を手に持った。

「師匠。どうぞ」

「ああ、すまんな」

マスターにお酌を終えると、小皿に目の前の料理を素早く取り分けマスターの前とデイビッドへと置いた。その後、何事もなかったかのようにお銚子を持ち直す。

カレンのその行動に、紅蓮が不機嫌そうに呟く。

「……そうですか……まあ、いいでしょう。貴女のような『男性にしか媚を売らない』ふしだら女も居ますし……」

さらっとカレンを侮辱し、紅蓮は自分で酒を盃に注いでそれを口にした。

彼女が飲酒できる歳であったことより、先程の言葉の方が気に障ったのだろう。怒りでカタカタと持っているお銚子を震わせるカレン。互いに敵意をむき出しにして激しく視線をぶつけている。

そんな険悪なムードのマスター達を余所に、星達も普通に食事を始めていた。

「このやきとり美味しいし〜」

片手でやきとりの串を持ち、もう片方の手で頬を押さえてミレイニが幸せそうな笑みを浮かべた。

それを見て、星もレイニールも目の前に置かれたやきとりに手を伸ばす。

すでにレイニールも両手にやきとりの串を握っていて、持っている串には手付かずの肉が刺さっているものの、もう口いっぱい頬張っ

ている。

そして飲み込んだレイニールとほぼ同時に口に頬張ると、先程のミレイニと同じ様に幸せそうに頬を押さえた。

「どう？ 美味しいでしょ。これはそんなにしょこのやきとりじゃないのよ」

「……ん？ どういうことですか？」

すると、そこにサラザが笑みを浮かべながらやってきて、不思議そうに首を傾げて言った星にサラザが言葉を返す。

サラザは得意気に腰に手を当てると、もったいぶりながら告げる。

「そうね。これはニックドードー鳥のお肉を使ったものなのよ？」

「……ニックドードーってなんですか？」

「まあ、見た目はダチョウと同じくらい。でも、その味はコクがあつてまた、弾力のある身は食べごたえもあり。でも、気が付いたら口の中から消えてしまうとやられるわ。口の中と同じ温度でなければ溶けることがないからどんな料理でも使えるお肉なのよ。肉の中に旨味の詰まった」

星はそれを聞いて「そうなんですか」と相槌を打つと表情を微かに曇らせ、遠慮がちに5本中4本残った皿をサラザの方にそつと押し

た。

その様子を見て、サラザは眉をひそめる。
(……私がそんな貴重なものを食べたなら。皆の分が減っちゃうから……)

そう思いながら俯き加減で居ると、サラザの普段と違って重苦しい声が響いた。

「どうして？ まだ1つしか食べてないじゃない。そんなに、私が裏で何か考えてるんじゃないかって気になるの？ まあ、無理もないわね。あんな事件の後じゃね」

悲しそうなサラザの声音が、星の心に突き刺さる。本心はどうであれ、サラザの好意を無下にして傷付けてしまった。

つというより、普段のクラスメイト達が星に対してぶつける言葉と同じことを自分がした感じがして、俯いた顔を上げられない。

もちろん。星自身はそんなことを考えていたわけではない。しかし、下手に弁明したところで、いつもの様に「自意識過剰じゃない」と笑われて終わるだけ——そう考えていた。だが……。

「それとも……私の料理が美味しくなかったのかしら？」

その言葉の後、サラザの表情が曇ったのを見て、星は首を横に振るとやきとりを慌てて食べ始め、それを見たサラザは微笑みながら頷いている。

やきとりを食べ終えた食器を手に、レイニールとサラザに向かって同時に「おかわり」と叫ぶ。

サラザは2人から皿を受け取ると、すぐに次のやきとりの調理を始めた。

それを待つ間。ミレイニがオレンジジュースを手に星の方を向くと、にっこりと笑ってジュースの入ったビールジョッキを掲げる。

「ほら、乾杯するし！」

「乾杯……ですか？」

「何じゃそれは？」

突然の彼女の行動にきよとんとしている2人にミレイニが少し呆れながらも、しかし得意気に言葉を続けた。

「乾杯も知らないんだし？ まあ、大人でない子供の君達には、分からなくても無理はないし……しようがない。このミレイニ様が君達に飲み会の基本をお姉さんである。あ！ た！ し！ が教えてあげるし！」

人差し指を立てて鼻高々にそう宣言したミレイニは、ビールジョッキを片手に腕を前に突き出す。

それを見てレイニールはコーラ、星はオレンジジュースの入ったジョッキグラスを同じ様に前に突き出した。

どうしてレイニールだけがコーラを飲んでいるのかというと、レイニールが言うにはコーラのシュワシュワとした炭酸が体に染み込んでいく感じが堪らないのだ、そうだ——。

ジョッキを前に突き出すと、その後、ミレイニが大きな声で宴会の幹事のような挨拶を始める。

「えーこれより、お疲れ様会を始めさせていただきます！ 本日乾杯の音頭を取らせていただきますミレイニです。それでは、皆さんグラスの準備は良いですね。お疲れ様でした乾杯！」

「乾杯なのじゃ〜！」

「あつ！ か、乾杯！」

ガチャンとグラスを合わせると、ミレイニはグラスの中のオレンジジュースを一気に飲み干した。

まるでスーツを着た中年サラリーマンを彷彿とさせる見事な挨拶を披露したミレイニが、一番に空になったジョッキグラスをテーブルに乱暴に置くと。

「ぶはーっ！ 五臓六腑に染み渡るしー！」

つと、まるでビールを一気飲みした年配のサラリーマンの様な言葉を吐く。

それを真似てレイニールもゴクゴクと喉を鳴らしながら飲み干すと、炭酸がきついのかブルブルつと体を小刻みに震わせ、持っていたグラスを置いた。

「げぷっ……おお、いつもよりも何だか美味しく感じるのじゃ！ なあ、主！」

興奮気味に星の方を向くと、星は顔を真っ赤にしながら必死に3分の1ほど飲んだところで、両手で持っていたジョッキグラスを置いた。

「はあ……はあ……もう無理……」

「なんだ。だらしないのじゃ！ 主」

レイニールは勝ち誇った様に胸を張ると、置いていたビールジョッキ手に持つと、サラザに向かって空の容器を突き出す。

そしてミレイニも……。

「今日はどことん飲むし！」

3人分のなみなみと注がれたジョッキグラスをサラザは片手で悠々と持って来て「いい飲みっぷりね」と微笑んで、今度はデイビッド達に呼ばれてそっちの方に足早に向かう。

テンション高く叫ぶと、満面の笑みでビールジョッキを掲げている

ミレイニからビールジョッキを受け取る。

全員に行き渡ったのを見てミレイニとレイニールが喜んで飲み始めるのを見て、星も残っているジョッキグラスを両手で持つと、ちよつとずつ飲んで辺りを見渡す。

笑顔で遠慮など微塵も感じさせず、ジュースとやきとりを交互に食べるミレイニとレイニールはもちろん。

別のテーブルでは困った顔をしているマスターを挟んで、紅蓮とカレンがどっちがビールの注ぎ方がうまいで揉めている中で、それを肩身が狭そうにウイスキーを飲んでいいるデイビッド。

それが今の自分と重なって見えて仕方なかった。だが、自分がその場所に行く気にはなれない。

正直。デイビッドとそれほど仲がいいわけではなかったし、男性というだけでエミル達と比べ、少し関係を築きづらいのもあり。今まで近ず離れずの関係を重視してきた。まあ、それは他のメンバーにも言えたことだったが……。

そうこうしている内に、夜はすっかり更けていた。さすがに城に残してきたエミル達が心配になり、お代は要らないと言うサラザにお礼を言つて店を後にした。

お酒を飲んでいた紅蓮、デイビッドは危なっかしい足取りで歩く2人を連れて、マスターとカレンが前を歩く。

現実世界と同じ様に酔った感覚——つまり、視界が多少歪んで見える仕様になっている。だが、その仕様は通常時だけでPVPを受けた場合。また、モンスターとの戦闘時にのみ解除される仕様になっていた。

それは、酔った場合の異常状態であり、戦闘時には他の異常状態が適応されるからという単純な理由だ。

しかし、飲んだ量に応じて強弱があるこの異常状態のせいで、結局まともに歩ける者は程々に飲んでいったマスターと全く飲んでいないカレンの他にはいなかった。

途中でバランスを崩して地面に倒れた2人を、仕方なくカレンが中央に入ってデイビッドを支え、顔を真っ赤に染めた紅蓮はミレイニが

召喚したアレキサンダーの背中に跨がっている。

アレキサンダーの青い炎の鬣が揺らめく後ろを、星達もゆつくりと歩いていった。

「そう言えば、どうしてミレイニさんはお酒の時にする事を知ってたんですか？」

星は首を傾げ、隣を歩くミレイニに尋ねる。それは素朴な疑問だった――。

本来なら、お酒を飲めないはずのミレイニが、乾杯の席の幹事の言葉を知っているはずがない。

星の心の中では『まさか、ミレイニがもうお酒を平気で飲んでいる不良なのでは』と言う考えまで浮かんでいた。

飲酒Ⅱ不良という観念が既に古い様に思われたが、星は至って真面目だった。

ドキドキしながらミレイニの言葉を待っている星に、彼女は意図も容易く言葉を返してきた。

「ああ、あれは実家で良く集まって飲み会をする時に聞いたんだし。私の実家は旅館だから、良く酔っ払いの声が聞こえてくるから、それで普通に覚えただけだし」

「……な、なるほどー」

確かに旅館の娘ならば、お客さんのやっていることをしよつちゅう目の当たりにもしていても全く不思議はない。それどころか、自然と覚えてしまうというのが当たり前のことだろう。

頷く星の顔を見て、ミレイニは悪戯な笑みを浮かべながら言葉を続けた。

「そうだし！ 星の家はどんなんだし？」

「――えっ？ どんなって………普通ですよ？」

星は少し困った顔をしながら彼女の質問に答える。

その答えに、ミレイニはつまらなそうに「まあ、普通が一番だし」とだけ言葉を返すと星も。

「そうですね。普通が一番です」

つと苦笑いを浮かべた。

だが、その時。星の心の中では少しの罪悪感と劣等感が渦巻いていた。

それも無理はない。普通と言うのはもちろん嘘である。もし、父親が居ない母子家庭が普通なら、他の家庭が恵まれていることになるし。自分がスクールカーストで底辺の方に属しているのは、クラスメイト達の反応でもはっきりと分かっていたことだ。

とても普通の家庭環境とは言えない実情を、星はその小さな心の内に仕舞い込むしかなかった……。

(……普通が一番か……)

心を締め付けるその言葉をもう一度心の中で口にすると、微かに潤んだ瞳を星が輝く空に向ける。

そんな星に同じ名前を持つ星達が、優しく微笑んでくれている様子を思えた。

ドタバタな日々5

城に戻ると、まさに千鳥足でフラフラと左右に揺れるデイビッドに肩を貸していたカレンとマスターに向かって、扉の前で待ち構えていたエリエが怒り心頭な様子で食って掛かってきた。

「あんた！ どうしてデイビッドと肩組んでるのよ！ それに、私達を置いてくってどういう要件よ！ 理由を言いなさいよ！ 理由を！」

顔を真っ赤に染めながら激昂するエリエ。

そんなエリエに冷めた瞳を向けると、カレンは何事もなかったかのように部屋の中へと入った。

あからさまに無視されたことが、相当癪に障ったのだろう。そんなカレンに、エリエがなおを言葉をぶつける。

「ちよつとー！ 人の話くらい聞きなさいよー！」

何時も以上に突っかかるエリエ。

だが、その理由はすぐに判明することになる。

部屋の扉の前で炎帝レオネルを従えたミレイニと頭にレイニールを乗せた星が立ち尽くしていると、しばらくして、カレンが血相を変えて戻って来る。

もちろん。その両肩には、マスターとデイビッドを連れたままだー！そして、カレンは青い顔をしながら、正反対に真っ赤な顔をしながら再び部屋を出てきたエリエに「すまなかった」と掻き消えそうな声で謝罪する。

「分かればいいのよー！」

エリエは満足そうに頷きながら、勝ち誇ったように胸を張っている。

そんなエリエにデイビッドを託すと、カレンはミレイニに声を掛ける。

「ごめんねミレイニちゃん。ちよつとそこのライオン君に、背中の着物の子を別の場所に運んでくれるように言ってくれないかな？」

「そんなのお安い御用だし！アレキサンダーこつちだし！」

ミレイニはその言葉にトコトコと駆け出すと、その後ろを炎帝レオネルがのっしりとした重い足取りで付いていく。

その場に残された星とレイニールは互いの顔を見合わせ首を傾げると、パタパタとホバリングしていたレイニールが再び星の頭の上に戻る。

星達は部屋の中に戻ると、リビングで無言のまま険悪なムードを放っている当人達を見つけた。そう。扉の前でエリエが激昂していた声が聞こえた理由と、カレンが慌てて戻ってきて理由が繋がった瞬間だ。

本来なら避けて通りたいその場の雰囲気、星もレイニールも微妙に怯えながらそーっと寝室に抜けようとしたその時。

「星ちゃんー！」

突如部屋に響くエミルの声にビクツと体を震わすと本能的にその場に立ち止まる。

つと言っても、普通の人ならきつと走って部屋に飛び込むのだろう。しかし、星は普段人付き合いを殆どしていないせいか、呼び止められること自体が少ない為、驚いてしまつて歩みが勝手に止まつてしまふのだ。

ゆっくり近付いてくるエミルに『怒られる』そう確信した直後、エミルは星の肩に手を回し耳元でそつとささやいた。

「……丁度いいところに来てくれたわ」

「……え？」

間違はなく怒られると思っていた星が困惑した表情のまま、終始首を傾げている余所にエミルがイシエルの方に向かって叫んだ。

「ほら、イシエ！ 星ちゃんも、もう寝るつて言うから今日はもう寝ましょう！」

「……しかたない」

イシエルは向かい合つて座るライラを鋭く睨んで、ゆっくりと立ち上がった。

見下した様にライラを見るイシエルの視線を受けても、彼女は終始笑顔でそれに応えていた。

全くペースが掴めないことへの不機嫌さが、一気に殺気となって溢れ出す。

それを察して、もう一度エミルがイシエルを呼ぶと。

「今日んところはエミルに免じて許したる……」

つと殺気に満ちた言葉を吐き捨ててエミルの元に向かって歩いていった。

そんな彼女の後ろ姿を見つめながら、ライラは「可愛いわね」と余裕の笑みを浮かべながら小さく呟く。

寝室に入った3人はコマンドから、装備欄に服をドロップして一瞬にしてパジャマに着替える。

パジャマに着替え終わった星を見下ろして、にっこりと笑うと徐ろにエミルが尋ねてきた。

「——星ちゃん。ミレイニちゃんとは仲良くできた？」

「……分かりません」

その質問に星は表情を曇らせて俯く。

まあ、無理もない。年の頃が同じくらいだからと言って、仲が良くなるのが早いと言うわけでもない。

結局は1人の人間同士のなだけで、同じ世代であれば話が合いやすいから仲が良くなるのが早いと言うだけで。

結局のところ、話題が合えば正直。そこに年齢は関係ないだろう。今日の感想としては、星はミレイニに遊ばれた形になってしまった気がする。

だが、それでもクラスメイト達に詰まれるよりもよっぽどマシだが……。

星の浮かない表情にエミルは少し苦笑いを浮かべながら、星を手招きしている。

恐る恐るビクつきながらもゆっくりとエミルの前に歩いて行くと、エミルはそつと星の体を抱き寄せた。

「大丈夫よ。きつとすぐに仲良くなれるわ」

「……そうでしょうか。私と仲良くなりたい子なんて……」

そう口に出した直後、星の顔がエミルの柔らかい胸に包み込まれ、それ以上は言葉が出せなくなる。

そして、優しいエミルの声音がそつと星にささやく。

「——今はそう思うかもしれないけど……きつと、すぐに自分のいいところをたくさん教えてくれる友達が、いっぱい出来るわよ。だって、星ちゃんはこんないい子なんだから……」

星の頭を撫でながらそう告げるエミル。

だが、星にはとてもそうは思えなかった。

(……エミルさんは分かってない。そんなこと、あるわけないのに……)

口には出さなかったが、そう心の中で毒づいていた。

しかし、星は知っていた——大人の評価と子供の評価は違う。言うなれば、真逆なのだ……。

大人に褒められれば、子供の中ではそれは『いい格好をしている』となり、嫉妬で責められる標的となる。

だが、それを拒めば『調子に乗っている』となつて、結局はイジメられるのだ……一度イジメられればその矛先はずつと付いて回る。

環境を変えても人間が変わるだけで、既存のすでに構成されている人間関係に飛び込むのに変わりはない。

動物でも言えることだが、群れの中に突然新参者が加わってくればいい気はしないし、それが少しでも彼等の気に食わない行動を取れば、すぐにまた排除行動が始まる。

最初は親切にしてくれる者もいるが、すぐに元々のグループに表替えてしまう。一時的に良くなるだけで、結局は同じことの繰り返しだ。

唯一可能性があるのが高校での人間関係の殆どをリセットする時にかけるしかないが、それも博打でしかない。

結局はいじめっ子に隙を作らぬように自分を変えるしかない。しかし、それを選べるのも心の強い人間だけで、気が弱い星はそこに含まれてはないのだ。

強い自分を思い描きながらも。おそらく、弱い自分からの変化に星

は耐えられないだろう。

つまり、彼女の場合。自分ではどうしようもない事柄に対しては、時間や周りが解決してくれるのを待つしかないのだ――。

なおも表情を曇らせている星の顔を覗き込むと、エミルはポンポンと優しく叩いて微笑みながら言った。

「星ちゃんには、少し難しい話だったわね。まあ、今日はもう寝ましようか」

小さく頷いた星をベッドに誘導すると、腰からゆつくりと横たわり、微笑みながら手招きする。

星がその横に寝ると、星の顔をまじまじと見てエミルは嬉しそうに告げた。

「こうして寝るのも久しぶりね」

「そう……ですね」

見慣れているはずのエミルの顔だが、久しぶりに目の当たりにするとやはり整っていて美人なのだとは再確認して、なんだか恥ずかしくなってしまったのだ。

顔から湯気が出そうなほど赤らめる星の後ろに、イシエルが少しムスツと頬を膨らませていた。

「なんや。2人だけで楽しそうやね」

「もう。イシエったら、膨れっ面をしてると、せつかくの可愛い顔が台無しよ?」

「今日のエミルは意地悪やわ……」

ふてくされる様にそっぽを向くと、先程までよりも数段増しに頬を膨らませるイシエル。

だが、何故か不思議とライラといがみ合っている感じではない。星も安心して見ていられると感じて、正直ほっとしている。

この2人の信頼関係の強さは、互いを信頼していると言うより、全てを預けあっている感じがする。

夫婦や恋人というよりは、戦友や相棒の様な感覚に近いものがあるのかもしれない。それはもう、星の入り込む余地はないほどに……。

その感情が顔に出ていたのか、気が付いた時には星の体はすでに工

ミルの胸の中に包まれていた。

「……なにか考えているのは、表情を見てれば分かるわ。星ちゃんの考えている悩みや問題を全て抱き込むことはできないし、それを星ちゃんも願っていないのは分かっているつもり。でもね……こうして抱きしめてあげることくらいなら私にもできるから、嫌なことや悩むことがあれば、私の胸にいつでも飛び込んでいらっしやい」

「——ッ!? ……は、はい」

少し驚きながら星はエミルの胸に顔を埋めると、瞳が涙でいっぱいになる。

どこか懐かしい感覚に、今までやり場がなくて溜まっていた気持ちが一気に溢れ出し、止めどなく涙となって溢れてきて小刻みに震える体を抑えることができない。しかし、エミルの発したそれは、星が長年求めていた言葉そのものだった。

ドタバタな日々6

今まで星は人の為、周りの空気を壊さない為にそれだけを全てだと考えて生きてきた。

自分の目の前で、他人の表情が曇るのを見たくない。誰かが不幸になるなら、自分がその不幸を被ることが現状で星にできる精一杯の方法だった。

その為には、問題の矛先が自分に向くように仕向けて自分が全てを溜め込み我慢する『人柱』の様な役割になるしかない。それが自分の存在価値——そう考えていた。

今でもその考えに違いはなく。正しい行いだと信じていたが、心の何処かではいつかは誰かが……まるで物語の主人公の様に自分を助けてくれる。そんな甘い思い込みと理想がないわけでもなかった。

そして決してそんな人間は現れるはずがない。これはフアンタジーでもフィクションでもない現実なのだ——そう理解する現実性の高い思考力。

始めの頃はそんな考えが交互に襲ってきていたが。今ではそんなことはなく、限りなく現実だけが、小学生の女の子でしかない星に無慈悲にリアルを突き付ける。

学校生活で日常的に感じる孤独。また、クラスメイト達からの軽蔑の冷たい眼差しや、己の自己防衛だけを第一に考え手を差し伸べてくれるはずのない教師達の冷めた対応の数々。

家に帰れば1人だけの静かな部屋に、自分を押し流すかの如く襲ってくる孤独と不安という感情の大波。

毎日が同じことの繰り返しで、日々蓄積されるストレスを『自分より酷い人は世の中にたくさん居る。だからこのぐらいの事で弱音を吐いてはだめ、もつと頑張らないといけない』という自己暗示によって、星は闇に落ちそうになる精神を辛うじて保っていたのだ。

しかし、普段から星を取り巻く環境は冷たく。そして冷酷だった……。

改善するどころか悪化の一途を辿るそんな中で、手を差し伸べる者

も手を取ってくれる者もいなかった。

このゲームの世界に来てからの星の心を支配していたのは『孤独』ではなく『恐怖』だろう。

いつになれば元の世界に戻れるのか分からない『恐怖』

いつ死ぬか分からない『恐怖』

他人と触れ合うという『恐怖』

現実世界に戻った時に元の何もない生活に戻って、自分の心が耐えられるかという不安と『恐怖』

そして今は……この事件で得たものをすべて失う『恐怖』

それが星の心を荒縄の様に——いや、鉄の鎖。いや、更に強固なステンレス製の鎖に雁字搦めに縛り付けられているのだ。

そのあるはずもない鎖より、抱き締められているエミルの腕の方が物理的に苦しいはずだった。なのだが……今、自分を抱き寄せるその腕がとても温かく、エミルの胸の柔らかさに安らぎを感じた。

だとしても、星の瞳から涙が溢れて止まらないのは、それが理由の全てじゃないことも事実だった。

(……お母さん)

もし、これが自分の母親なら、きつと何よりも嬉しかっただろう『生まれてきて良かった……』そう思えたのだろう。瞳を閉じれば、エミルを母親だと錯覚できるかもしれない。

だが、そんなことをするのはエミルに失礼だということも分かっていた。何故なら彼女は星の為に、こんなことをしてくれているのだから……。

声を殺して泣きながらエミルの胸に顔を埋めている星の頭を、なおも撫で続けている彼女に。

「……どうして優しくするんですか？」

「星ちゃんに優しくするのに、どうして理由が必要なの？」

「……だって、私は何も返せないし。優しくしてもらえないような事もしてません……」

少し意地悪だっただろうが、星のその言葉は真実から口にしたものだ。

これまでの出来事を考えても、これからの出来事を考えても戦闘でも生活面でも何をとつても、星にエミルを超えられるものが存在しない。

どんなに好意を向けられても、星にはそれを彼女に返せるものがない。物を上げるにしても、初心者プレイヤーが上級者プレイヤーにあげて喜ばれる物など殆どないだろう。

今の星には、エミルに喜んでもらえる様な物など一つもない。彼女の胸から顔を放し俯く。

自分が彼女に与えられるものはない。何度も助けられ、今もこうして彼女の城で面倒を見てもらっている。

それはとてもフェアな状況とは言えたものではない。人と人との関係とは、与えられたらその分を返さなくては人間関係は崩壊する。

それもそうだろう。必要とするだけでは、大概の人間は自分に得る物が無いにも関わらず、擦り寄って来る人間を良くは思わないはずだ。

特にそれが同性となれば、責任を取って結婚するということもできないのだから始末に負えない。

暗い部屋の中で微かに浮かび上がるキラキラとした星の紫色の潤んだ瞳を、困惑した表情を見せていたエミルに向ける。

エミルは一度瞼を閉じてから、真っ直ぐに星の瞳を見つめ。

「……そうね。確かに他人に対して何の見返りも求めない。聖者みたいな人間はいないわ」

「あつ……」

その直後、星の項にエミルの手が入り込み、一度離れた体をもう一度自分の胸元へと引き戻す。

そして、優しく柔らかい声音でエミルがささやく。

「……星ちゃんは気付いていないみたいだけど、私は貴方に妹の影を重ねているの。それって、あなたを家族だと思っているって事なのよ？」

「でも……家族でも、やっぱり他人です……」

星はすぐに反論した。その言葉も常に星が心で感じている本心。

「そうね。でもね、家族は自分が生まれてから死ぬまで、ずっと付き合
わなければいけない。または、ずっと付き合うのが当たり前な他人の
中でも選ばれた人達なのよ？ 私の妹はね。数ヶ月前に亡くなった
の……」

「……………」

彼女のその話を聞いて、無言のまま表情を曇らせる星。

さつきよりも強く抱き締められた体に、エミルの手から伝わる震え
が痛いほど伝わってくる。

それは未だにエミルの心の中で、亡くなった妹への拭い切れない思
いがあることを意味していた。

「一度失ったから分かるの……家族の為——ううん、妹の為なら私は
全部を懸けられる。唯一無二の姉妹だもの、自分の体同然よ……自分
の為に苦労を惜しまないし、見返りとかを望む人間なんて、この世に
存在しないわ。そう思わない？ 星ちゃん」

エミルのささやいたその言葉は邪道だ——どんなに言葉を繕って
も、星とエミルは血が繋がっていない。どんなに実の妹の様だと言っ
ても、そこに血の繋がりが無い以上は家族とも言い難い。だが、今の
星にはそれ以上反論できることができない。

一度理から外れた議論は、プロレスで言うなら場外乱闘と同じで、
場数——人生経験がものを言う。

ここで下手に本の知識などで反論すると、人生経験が多い相手にズ
ルズルと引つ張られてしまうのだ。

それになにより、数ヶ月前に実の妹が亡くなったと告げられた上
に、自分を妹の様に思っているとまで言われてしまえば、反論するこ
とが如何に常識外れかということは星にも理解できた。つまりこの
時点で、すでに星には反論はできない。

もちろん。星の口から出る言葉は……。

「……………」

「うん。よろしいー」

エミルの満足そうな声とともに、星は頭を優しく撫でられた。

本当に嬉しそうに微笑むエミルの顔を見ていると、普段から流され

やすい性格だが。今だけは、その性格も悪いとは思わなかった。

内気な影

翌日の朝。目を覚ますと、星の体はエミルとイシエルに挟み込まれるように抱き付かれていた。

まあ、もう何度もこのような場面に出くわしている為、それほど驚きはしないが。

何と言うかエミルはまだしも。イシエルの方は星を越えて、エミルを抱き締めようとしている感じだった。だが、どちらにしても今までにないほど、両サイドを巨大なおっぱいで挟み込まれていて身動き一つ取れない。

「レイ……」

助けを求めるようにレイニールの名前を呼ぶが、エミルの胸に顔を押し付けられていて、それが言葉になっていたかは分からなかった。

だが、そうでなくともレイニールにその声が届くことはなかっただろう。普段なら、星の側を離れないレイニールがその時だけは彼女の側にいなかったからだ……。

「――何じゃ……我輩の名を呼ぶお前は……」

レイニールは城の天辺にちょこんと座り、不機嫌そうに鋭く睨みながら太陽が昇り始めた東の空を見つめていた。

それからしばらくして、目を覚ました星が不機嫌さを隠し切れずに眉をひそめて朝食のパンにかじりつく。その隣でエミルが苦笑いを浮かべている。

「今日の朝はごめんなさいね、星ちゃん。私あまり寝相がいい方じゃないから……」

「そうですか」

眉に一瞬だけしわを寄せて、星は顔を合わせることなく再びパンに噛み付く。

だが、星が不機嫌なものも理由がある。普段の星なら笑顔で許すところだろう。しかし、今回ばかりはそうはいかない。

それはあの後、寝ていたエミルが寝ぼけて、星を絞め殺すかという勢いでライラの名を叫びながら腕で締め付けてきたのである。

気を失いかけた星からエミルを引き離したのが、隣に寝ていたいシエルだったの言うまでもない。しかし、その時に「それやるならうちやないん！」と叫んでいたのが聞こえたのは、この際置いておこう。

朝食を食べ終わる頃には、皆が各部屋から続々とリビングに集まってきた。

ミレイニに腕にまわりつかれ、デイビッドとリビングに入ってきたのはエリエだった。

エリエは星の普段見ることのないツンとした姿に、困惑した様に声を掛けた。

「……なっ、なんか星、ご機嫌斜めだね。どうしたの？」

すると、ミレイニが自信満々に星を指差して。

「そっか！ 星は今日はあの日なん——いだっ！」

そう口にしたミレイニの頭を、予告なしにエリエのげんこつが襲う。鈍い音の直後、頭を押さえて涙目でエリエを見上げるミレイニ。

「なんだし！ なんで叩くんだし！」

「そういうのは女同士でもデリケートな部分なの！ いくらここには女子しかいないからって……」

「……おい。待て」

不満そうに告げたデイビッドを、一瞬横目で見遣ったエリエが念を押すようにもう一度。

「まあ、この部屋には女子しかいないし。それに、そういう機能はこの世界にはないから」

つと、ブーブー言っているミレイニの頭を仕方なく撫でてやる。すると、今まで不機嫌そうに頬を膨らませていたミレイニの表情が一瞬で和らぐ。

こういうところは、ミレイニが簡単な性格だということだろう。だが、明らかに1人、納得いかないという表情の人物が……。

「……俺は男だぞ」

最後の抵抗なのだろう、デイビッドはそう小さな声で呟く。しかし、彼のその言葉がスルーされたの言うまでもない。

苦笑いを浮かべながら星の機嫌を取ろうとかいがいしく世話を焼くエミルと、全くエミルと視線を合わせようとしない星を見ていると、彼女が何かしたのは誰が見ても明らかだ。

しかし、星がこれほど機嫌を損ねるのは初めてかもしれない。

生半可なことではへそを曲げない星の機嫌を取るのには難しい。だが、それが周りに流された挙げ句の行動なら話は別だ——何故なら、星はここにいる誰よりも周りに流されやすいのだから。

エリエはテーブルに着くと、イシエルのくれたホットミルクに大量の砂糖を加えてゆつくりと口に運んだ。

隣の席に座ったミレイニも真似するように同じ分量の砂糖を加え、嬉しそうにホットミルクを口に運んだ……つとその直後、口に含んだホットミルクを派手にぶちまけた。

「ケホツケホツ！ ……これ甘すぎるし！」

「あらあら、大丈夫？ エリエちゃんの真似したらアカンよ〜」

イシエルがタオルでミルクまみれになったミレイニの顔を拭いてやっている、その横で激甘ホットミルクを飲み干したエリエがカップをテーブルに置いて一息つくと、徐に星に向かって口を開く。

「——エミル姉と何があったかは知らないけど、このまま気ままずくなると今後の関係にヒビが入っちゃうよ？」

「……うう」

手厳しい助言に渋い顔をする星。

だが、それは星がエリエの言った言葉の意味を良く分かっている証拠でもあった。表情を曇らせた星に向かって、エリエが畳み掛けるように言葉を続ける。

「それは星も望まないでしょ？ だから、星はこれから街に出掛けて、お詫びの品をエミル姉に買ってもらうって事でどう？」

「エリーそれはいいわね！ 星ちゃんの好きな物をなんでも買って上げるから、遠慮せずに言ってね！」

笑顔で胸の前で両手を合わせて星の顔を覗き込んでくるエミルを見て、もっと早くに問題を解決しておけば良かったと本気で後悔していた。

(……面倒なことになった)

複雑そうに眉をひそめると、諦めたように星は大きなため息を漏らす。

てなわけで、それからエリエの提案した話に流されるままに、星が街に出てきたわけなのだが……。

正直。楽しみにしているのは星以外なものだ——エリエとミレイニはもちろん、エミルとイシエルも何故かすごい上機嫌だった。

それを一番後ろから見ていると、星は何やら浮かない顔をしている自分がバカバカしくなってくる。でも、楽しそうに行き先を話し合っているその輪に入れる気はしない。

まあ、そんなスキルを持つていたら、星が学校でもイジメにあうことはなかっただろう。

前に行く皆から漏れる話を聞いていると、どうやらこれから『楽しいところ』にいくと言うことらしいのだが、それが必ずしも星にとって楽しいところとは限らない。

あくまでも、エミル達の感性で楽しいところであって、星の感性では家の中で本を読んでいた方がおそらく楽しいだろう。

しかも、部屋を出る前は星に何かを買ってくれるという話だったが、装備関係で防具はトレジャーアイテムである『天女の羽衣』で『アーサー王の鎧』の効果を服に付けたものの、剣はライラが言っていた亡きお父さんの残したというどうにも胡散臭い『エクスカリバー』だ。

装備以外の物で今の自分に必要な物となると……星には大体の予想が付いていた。また、その予想は現実のものとなる……。

そして一行は繁華街の中のある店の前で止まった。

外観は洋風のレストランの風な感じで、赤い屋根にガラス店内のショーケースには大きな赤いコートに茶色いキャベリンと呼ばれる帽子に黒のスカートを身に着けたマネキンと大きな針と糸車が飾られている。

店の赤い屋根に掛けられたピンク色の看板には『COORDINA

TI ON SHOP ANDO』と書いてある。

星は看板を見上げると、その看板の文字を読み上げる。

「コールデインアチオン ショップ アンドオ？」

読み終わり星は小首を傾げる。とりあえず口に出してみたものの、書いてある言葉の意味はさっぱり分からない。それもそのはずだ。小学4年生にして英語をマスターしている者などそうはいない。よくてローマ字くらいのもだ――。

ましてや星は私立のお嬢様学校に通っているわけでも、塾に通っているわけでもない。それでもショップは辛うじて読めたが、それも町中でよく見かけるからという安易な理由でしかない。

だが、とても嫌な予感がした。こんな感じを以前もどこかで抱いたことがある。そう。エミル達と富士のダンジョンの時だ――。

エミルが店の扉を開けると、そこには服が所狭しと並んでいた。

(……やっぱり！)

顔面蒼白になってゆっくりと後退りする星の肩を、エリエが掴んで強引に店内へと押し込んでいく。

「いやです！ 服なんて……絶対にいや！」

「せっかくここまで来て逃がすもんですか！ 観念しなさいって！」

星は最後の抵抗を見せるが、レベル差のあるエリエに力のパラメーターで上回れるわけもなく。

この店の前に来て肩を掴まれた時点で、すでに運命は決まっていたのである。強引に店内に連れ込まれると、星は更に不機嫌になった。

それもそうだろう。洋服を買いにいくと知らされていれば絶対に首を縦に振らなかつたし、てこでも部屋の外に出なかつただろう。これはもう、騙されたとしか言いようがない。

星が不機嫌なものも無理はない。早朝からエミルに絞め殺されかけ、そして皆が出掛けるから付いてきてみれば服をかうということだ。

これで不機嫌にならないほうがおかしいだろう。星はオシヤレとかそういうことへの興味が薄い。

もちろん。一切ないと言えば嘘になるが、同じ年頃の子と比べても明らかにないと言つても過言ではない。

内気な影2

今も店内の商品を見ている、どうしても地味で目立たない洋服を探してしまう自分がいて自己嫌悪で更に憂鬱な気分になる。そんな星を尻目に、店内を駆け回る勢いで服を物色しているミレイニ。ミレイニは胸元に白い花の飾りの付いた水色のワンピースを手試し着室に入っていく。

着替え終わると、ミレイニの頭のカチューシャが服に合わせて水色のリボンに変わっていた。

「ほらほら、エリエどうだし？」

エリエを呼びダブルピースであざといポーズを取りながら上目遣いに感想を求めた。

そんなミレイニの様子を見て、エリエは興味なさそうに。

「ああ、かわいいかわいい」

つと告げると、星の服を見立て続けていた。

しかし、ミレイニももう慣れたもので、すぐに頭の上のリボンを外す。

「もつと褒めてほしいし！ ほら、もう一回見てほしいし！」

ミレイニはコマンドを操作して頭の上のリボンを猫耳に付け替えて、今度は猫の様なポーズを取る。

だが、エリエの反応は全く変わらない。いや、最初よりおざなりになったかもしれない。

不服そうに頬を膨らませ、ミレイニは顔を真っ赤に染めて、エリエを指差して宣言する。

「なら、エリエ！ どっちが私に合う服を選べるか勝負だし！」

「……どうして、あんた限定なのよ」

「ふふくん。そんな事言つて、私と勝負して勝てる自信がないんだし〜?」

ミレイニのその言葉がカチーンと来たのか。

「いいわよ。やってやろうじゃないの！ 負けたら一週間お菓子抜きだからね！」

つとエリエが叫ぶと、不敵な笑みを浮かべている。

それに負けじと、ミレイニも口元に笑みを浮かべると。

「別にいいし。なら、私が勝ったらエリエは一日。私専用の奴隷だし！」

「いいわよく。それなら、私が勝ったらあんたは一日私の犬だからね！」

「受けて立つし！」

2人は激しく火花を散らしながら、それぞれ店の中に散っていく。忙しなく服を選ぶエミルとミレイニは争っているはずなのに何故か楽しそうだ。

それを見て、星が呆れながらため息を漏らしていると、その後ろからエミルがひよつこりと顔を出す。

後ろから星の両肩に手を乗せ、エミルが微笑みながら尋ねた。

「どう？ なにか良さそうな服は見つかった？ 星ちゃん」

「……いえ。つというか、前に買ってもらったのが気に入って、体にも馴染んできてるので……それに、いい服はたくさんあるけど、私に似合う服が少ないと言うか何と言うか……」

なんとかこの場を切り抜きたい星は、必死に体裁を取り繕う言葉を考えていた。

その言葉にエミルはにっこりと満面の笑みで答える。

「そうね。とりあえず、片っ端から試着して決めましょうか！」

「……………えっ!？」

一瞬、頭の中が真っ白になって、驚きながら目を丸くさせる。

後ろに立っているイシエルに、エミルが星に似合いそうな服を持つてくる様に言った。

『このままでは着せ替え人形にされかねない』

そう考えた星は慌てて店内を見渡し、手頃な地味で目立たない服を探す。

すると、丁度良さそうな物が視界に飛び込んできて、慌ててそれを指差し声を上げた。

「決まりました！ あれとあれにします!!」

エミルは星の指差した服とズボンを手にして、複雑そうに眉をひそめている。

それもそのはずだ。星の選んだ服は無地の黒のトレーナーに同じく無地の黒のズボンと言う。まさに、地味を絵に描いた様なものだったのだ。

星の手に持っている服を見て、困惑しながら「本当にこれでいいの？」と聞き返すエミル。

そんなエミルから服とズボンを受け取ると、星は更衣室へと駆けていった。更衣室のカーテンを閉めると、なんとも言えない安心感に包まれていた。

一人でいてこんなに心地がいいと思えたことが、今まで生きてきてあつただろうか。

いつもならレイニールが頭の上か周りを飛び回っているはずなのだが、何故か今朝から姿を見せない。

文字通り、本当に一人になったのは物凄く久しぶりな気がする。着ている服を脱いで、持ってきた服に袖に通す。

黒い服に身を包んでいると、まるで影になったような感覚になる。いつそのまま誰の目にも映らなければ、どんなに楽だろうか……。

スカートを脱いでズボンをはくと、鏡に映し出される。その姿はとても質素で、とても個性と言えないものはない。皆無と言ってもいいほどに……しかし、自分の姿がとても自分らしく思えた。

この世界に来てからというものの、自分の意志とは関係なく可愛い格好をさせられることが多かった。だが、それを一度たりとも自分らしいとか、似合っていると思っただけではない。

星は俯き加減に表情を曇らせると、もう一度鏡に映った自分を見た。

「……目立つ服は目立つ子が着ればいい。私は地味で目立たないのが合ってるんだ……」

小さく、でも自分に言い聞かせるように呟くとカーテンを開けた。

更衣室の前には、エミルが突然出てきた星に驚きながらも、その姿を見て苦笑いを浮かべている。

両手を胸の前で合わせ「まあ、素材を活かす感じがいいわね」と苦しい褒め言葉を告げたエミルとは対称的に、イシエルは笑いを堪えられずに吹き出す。

「あはははっ！ あかん！ それはあかん！」

「ちよつとイシエ！ 笑ったら可哀想でしょ！」

「そやかて、黒に黒を合わせたら黒子にしか見えひんよ〜」

口を押さえながら、なおも笑いをなんとか堪えているイシエル。

だが、笑われたということによる羞恥心から、顔を耳まで真っ赤に染めて震えながら俯いている星をエミルが慰める。

「だ、大丈夫！ ちよつと選ぶのに時間がなかっただけ。今度は上手くいくわよ！」

「……もういいです」

そう言つて更衣室に戻つてカーテンを閉め始めたその時、突如それを遮る様に手が入り込んできた。

無理やり閉めようとする星の手を跳ね除け、閉めかかっていたカーテンが強引に開かれた。だが、そこに居たのはエミルではなく……。

「そないな格好で納得だけへん！ なら、うちに任せてーな！ 最高に可愛くして上げるさかい!!」

「ええ……」

イシエルはそう力強く答えると、決意に満ちた表情で手をぎゅつと握り締めると。

「最高にかいらしい大和撫子にしてあげるわ！」

つと、今度は自信満々に親指を立てた。

星は突然のイシエルの変貌ぶりに動揺しながらも、頭をブンブンと横に振つてそれを拒否する。

それもそのはずだ。星としてはこれで洋服を買うということを中心にしたかった。いや、流れ的にできそうになつていたはずだった。それにも関わらず、さつきまで笑い声を抑えていたイシエルが急にやる気になるなんて想定外の範囲外のことと、この状況下では要らぬお世話な訳だ。

(……………のままじゃ、また着替えさせられる！ こうなつたら……)

星は一瞬の隙を突いて更衣室を飛び出すと、店の出口に向かって全力で走った。

その直後、イシエルの目の前を通過しようとした星の肩を掴む。

「――逃げてもええけど……うちとエミルの楽しみを奪ったゆうんで、後で死んだ方がえかったと思えるくらい。きつーいおしおきが待つとるよ。そんでも逃げるん？」

耳元で低く狂気を含んだ声音でささやかかれ、星は思わず動けなくなった。

全身から冷や汗が吹き出す感じと、背筋を走る悪寒がいつぺんに押し寄せる。

星が恐怖に負け、無言のまま頷くと「うんうん。ええ子やく」と頭を撫でられ、更衣室の中に戻されてしまう。

カーテンを閉められ、さっきの言葉を思い出す。

さっき彼女の「うちとエミルの」と言う言葉が星には一瞬で理解した。

イシエルという人物の中には、自分とエミルのことしかないのだ。そこには星のことなど微塵もないのだと……。

2人の時間

そして時は流れ……。

鼻血を出したエミルが倒れたことで買い物事態が中止となり、そそくさと城へと戻ってきたのだが。

「主！ 我輩を置いてどこに行っておったのじゃ！」

「……だ、だつて。レイ、いなかっ——」

「——言い訳するな——」

エミルを部屋に運んですぐにレイニールは激昂しながら、噛み付きそうな勢いで星の鼻先にぶつかりそうな勢いできた。

余程、星に置いていかれたことを気にしていたのだろう。レイニールの星を見据えるその瞳には、薄っすらと涙が浮かんでいた。

そんなレイニールに星が何度も「ごめんさい」と誤っていると、今まで寝ていたはずのエミルがのっそりとベッドから体を起こす。

「ごめんなさいねレイちゃん。私が無理やり星ちゃんを連れ出したのよ？」

そう言つて微笑みを浮かべる。

そのどこか影のある笑顔にレイニールはビクビクと身震いして、今までの態度からは考えられないほど見事な敬礼をして空中で直立不動している。

星はベッドからゆっくりと体を起こすエミルの方を見つめていた。

「さつきはごめんね。急に倒れちゃつて……」

「えっ？ いえ、そんなこと気にしないでください。私なんか気を必要なんて……」

一瞬で表情を曇らせた星に、エミルはいつもと違う何かを察したのか微笑みを浮かべながら、星の前で膝を折つて。

「なら、これから2人でお出掛けしましょうか」

と切り出してきた。

その突然の申し出に、星は動揺しながらも両手をブンブンと振って全力で拒否する。

「そ、そんな！ 夜で2人のお出掛けなんて！」

「あら〜？ そんなこと言って、前にエリーとはお出掛けしてた気がするけど？」

にやにやと笑みを浮かべながら、必死に拒否する星の顔を覗き込みからかうように言った。

確かに彼女の言う通り。エリエとは出掛けたが、その時にダークブレットに誘拐されたわけで、そのことを鮮明に覚えている星はエミルの申し出に首を縦に振るわけにはいかない。その直後、星は暗い表情で重い口を開く。

「——だから……もしもがあつたらだめですし……」

「失礼しちようわ。私はこの世界の武闘大会の連続優勝者よ？ マスターの次に強い私に戦いを挑む度胸のある人間なんて、この世界に居るはずないわ！」

「……でも」

なおも口を開こうとする星の鼻を摘んで、エミルはにっこりと笑った。

「大丈夫！ お姉さんを信じなさい。でも、そうね……もし戦闘になつたら、星ちゃんは私にすっかりしがみついてくれればいいわ！ そしたら私は、いつもの何倍もの力を発揮できちゃうから！」

自信に満ち溢れた優しい顔を見ていると、不思議と星もそう思えるから不思議だ——。

無言のまま星は静かに頷くと、エミルは星の体を自分の体に密着するように抱き寄せる。

そして宙に浮いたまま敬礼していたレイニールに声を掛ける。

「レイちゃんもこっちにいらっしやい」

「はいー」

その声が聞こえた途端、レイニールは一目散にエミルの肩にしがみつく。

エミルはもう一度星の方を向くと満面の笑みで「準備はいい？」と尋ねると、星はこくこくと数回頷いてコマンドから円型の五芒星の描かれた鏡を取り出す。

もちろん。星はそのアイテムを見るのが初めてで、どのようなもの

なのかは分からない。だが、もし分からなくても。星にはエミルが何かを企んでいるわけではないことが分かっていた気がした。

不思議そうに首を傾げながら、星がエミルに尋ねる。

「そのアイテムはなんですか？」

「ん？ そうね。皆に見つかるとまずいから、とりあえず。飛んできら説明するわね！ 転移。ジェンティーレ！」

真上に手鏡をかかげるた直後、星とエミルの周りを鏡から出た五芒星が包む。

地面にくつきりと付いた五芒星から青い光が天井に届くほどに輝いた。それは星がサラザのバーで、星が拉致された時と状況が似ている。

そんなふうに感じていると眩い光に視界が遮られ、瞬きするほどの一瞬の時間で2人は夜の街の裏路地へと移動していた。

目の前にはモダンな造りの建物が建っていて、その焦げ茶色の木の看板には黄色い文字で『Gentile』と書いてある。

エミルに抱き寄せられながら不思議そうに首を傾げて見上げると、エミルは手に持っていた五芒星の形の丸い手鏡を見せられる。

「これはね、『転移鏡』記憶させた場所にテレポートさせてくれるアイテムよ。星ちゃんも前に使ったでしょ？」

「……はい。誘拐された時に……」

表情を曇らせ俯く星に、エミルは慌てふためきながら言葉を返す。

「ああ、違う違う！ ほら、フィールドにある転移用の大きな石製のモニュメントにも、これと同じマークが付いてたでしょ？」

星はその言葉を聞いて、記憶を辿っていくと確かにエミルの言った通り、湖畔に街に転移する為の大きな石が置かれて作られたテレポートする為の場所を思い出す。だが、この事件以後。あのテレポートは不安定になって上手く機能しなくなったはずだ。

しかし、先程使ったエミルの道具は正確にこの場所へと転移させた。

それだと、設定的におかしなことになるのではないか？ そんな考えが、星の頭に浮かんでそれが原因で彼女は難しい表情を作っていたの

だろう。

まるで『何故、空は青いのか……』と哲学を考える子供の様な難しい顔をしている星を見て、エミルは「くすつ」と笑みをこぼすとその疑問に的確に答えた。

「星ちゃんが何を考えてるか大体分かるわ。このアイテムはあの大きなテレポートと何が違うんだろう……そうでしょ？ あれはシステム上、決まった動きをしているから。だから、システムに異常が出ている今の状況では、上手く機能してくれないの。そしてこれ、この『転移鏡』はそれぞれ個別に数個の転移先を登録できるわ。それは一部の場所をセーブしてるのと同じなの。だから、異常の発生している大本の転移システムとは個別の個々のデータとして——」

更に眉間にしわを寄せて難しい顔をする星を見て、エミルはそれ以上の説明を止めた。まあ、小学生に小難しいことを説明しても、理解できないのは元々分かっていったことだ——。

エミルは頭上にはてなマークを浮かべる星の肩を抱いたまま歩き出すと、店内へと入って行った。

店内は天井にぶら下げられた木で作られた逆さの傘の様なデザインのライトを天井に反射させた柔らかい光に照らされ、光沢を放つ木目の大きなバーカウンターと、その後ろには店の端から端までボトルが置かれ何段にも分けられた棚になっている。

その前には整えられた髭を生やした30代位のダンディーな男性が、カシヤカシヤと銀色に輝くシェーカーを振っている。

静かで落ち着いた雰囲気の内店でカウンターの先にいるこの男が、おそらくと言うか間違いない、この店のマスターだろう。

カウンター奥の男性はエミルの顔を見るなり、優しい微笑みを浮かべた。

「おや、今日は可愛いお客さんも一緒なんだね」

「ええ、デルさん。その節はお世話になりました」

エミルが丁寧にお礼を言っ頭を下げると、それに習って星も何故か頭を下げた。すると、男性は小さく手招きして一番奥のカウンターの方を指差す。

促されるようにエミルと星はゆつくりと歩き出すと、指定された席に腰を下ろした。そしてしばらくして、2人の前にミルクで満たされたカップが出される。

「サービスだよ。2人共、ゆつくりしていつてくれ」

「あ、ありがとうございます」

星は素直にお礼を言ったのだが、エミルは若干複雑そうな顔をしながら小声でマスターにささやく。

「デルさん。この子の前で、あまり子供扱いしないで……」

「……なんでだい？ いつも来る度、目を真っ赤にさせて泣いているじゃないか」

「もうー」

包み隠さずに平然と言った彼の言葉に、珍しく羞恥に頬を赤らめながらエミルは不機嫌そうに息を漏らす。だが星にしてみれば、それが以外だったのかもしれない。

子供扱いされているエミルなんて、この世界に来て一度も見たことはないし。店の中とはいえ、こんな人の多い場所で泣くなんて普段の彼女からはとても理解できなかった。

そんな中、不満を爆発させたような鋭い視線のレイニールが突き刺さる。年配のプレイヤーの多い店内は、サラザの店とは客層がまるで違う。

レイニールとその客達の視線が自然と自分に向いているようで緊張から喉が渴いた星が、目の前に置かれたカップを両手で持った。すると、今までエミルの肩でおとなしくしていたレイニールが、パタパタと飛んできて星の頭の上に覆い被さる。

「主。我輩を差し置いてそのミルクを飲もうと言うのか？」

「えっ？ あ……」

星は慌ててカップから手を放す。

そつと横にカップをずらすと、頭の上に乗っているレイニールに向かって視線を移して。

「レイ。飲む？」

「うむー」

レイニールは嬉しそうにカップの元に舞い降りると、ゴクゴクと音を立てながら飲み始める。

それを見ていて少し後悔していると、隣のエミルが自分のミルクを星の目の前に置いた。

そのエミルの突然の行動に、星は驚きを隠せないと言った表情でエミルの顔を見た。

「……これ」

「ああ、星ちゃんが飲んでいいわよ。私は他のを頼むから」

「でも、それじゃ——」

星が口が開こうとした時、エミルの指が星の唇に触れ。そして、エミルはゆっくりと口を開く。

「——いいの。だって、1人だけ飲み物がない状態でほっとけないでしょ？ デルさん。烏龍茶ももらえます？」

親しげにエミルはマスターを呼んでそう告げると、男性は烏龍茶の入ったグラスをエミルの目の前に置くと。

「これもサーベスにしておくよ」

つとウインクをして、カウンターに座っていた他の女性客の方へと歩いていった。

2人の時間2

目の前のミルクを軽く飲んで、星はエミルの方をちらつと見やると、それに気付いてエミルは優しく微笑み返す。

ほっとした様に星は息を吐くと、そんな彼女に星が疑問をぶつけてみる。

「あの、どうしてここに？」

「だって、星ちゃん。今日のお昼はなんか様子がおかしかったから……悩み事があるんでしょ？」

「……悩みなんて、ないです」

慌てて視線を逸らすと、星は目の前のカウンターに置かれたカップを両手で持って口を付ける。

だが、その言葉は嘘ではない。というより、今の星にはこの感情を悩みと呼んでいいのか、分からなかったというのが正しいかもしれない。

現実世界では1人で居ることの多かった星にとって、特定の誰かとこれほど長い時間過ごしたことはない。

いや、過ごしていると言えはいるのかもしれないが、この世界にきて初日は星も余裕がなく、それほどエミルのことを意識していなかったし、寝ている時も意識がないので然程長い時間とは言えない。

同じベッドで眠って翌日の朝「おはよう」と声を掛け合う——そんな当たり前のことでさえ、母親としたのはもう遠い日の記憶でしかない。それが、現実ではない世界でこれほど長く続くなんて考えてもみなかったことだ。

その上。自分に対してこんなに優しくしてくれる人がいて、自分に向けられている好意が嘘かもしれないなんて考え事態が悩みでも何でもない。ただ純粹に「本当の自分を見てほしい」という感情が、ないものねだりだと分かっていた。

エミル達の後ろを歩いているだけで『自分は1人じゃない』と実感させてくれるし、とても温かい気持ちになれる。

ずっとこんな生活が続けばいいと、どこかで思っていて……そして

いつか、この生活に終わりが来てまた前と同じ孤独な日々が待っているのだ。しかし、それは口に出してはいけないことで、口に出したところで相手が困ってしまう。

笑顔に向けてくれるエミルの悲しむ表情を見たくない。

星は表情を曇らせながら、ずつとカップの中のミルクを飲み続ける。これ以上言葉を続けていたら、ポロつと本音を溢してしまいそうだったからに他ならない。

そんな星の姿を見つめ苦笑いを見せると、エミルも烏龍茶を飲む。

しばらくして、マスターの男性がエミル達の前に戻ってきた。

「さて、エミルちゃん。今日はどんな悩み事の相談かな？」

優しく問い掛けるように、男性がエミルに微笑みを向ける。

エミルは彼に微笑み返すと星の方を向いて。

「今日は私じゃなくてこの子なんです。ほら、星ちゃん」

「えっ!？」

驚く星の肩に腕を回すと、エミルはグイッと自分の方に寄せた。

すると、男性は難しい顔をしながら星の顔を覗き込んで頷く。

「なるほど、確かに何か迷っている顔をしているね」

「そ、そんな……迷ってなんて……」

遠慮気味に小さな声で答える星を見て、男性は下顎に生やした髭を撫でる。そして、ポケットからカードの束を取り出して星の前に置く。

それは紛れもなくタロットカードだった。

このバーではタロット占いを売りにしているのだろう。その為、以前いったサラザの店よりカウンターの幅が大きくみえた理由も裏付ける。

その後、そのタロットカードの束をバラしてカウンターに広げた。「悩みがないと思うなら、それを心に願ってカードを混ぜればいい。悩みのない人間なんていないよ。君がいくら口で否定してもカードは嘘をつかない。さあ、願いたい事を心に思い浮かべて混ぜなさい」

「……………」

無言のまま生唾を飲み込み、星はゆつくりとタロットカードを混ぜ

始める。

隣で微笑みを浮かべ見守っているエミルを横目に見て、すぐにカードに視線を落とすと。

(……私はずっと……ずっと、エミルさんと一緒に居たい。お願いカードさん。私のわがままを聞いてください)

心に願いを思い浮かべ、祈るように瞼を閉じてカードを混ぜる手にも自然と力が入る。そして混ぜ終わると、カードから手を放してゆっくりと頷いた。

男性は星の目を真つ直ぐに見つめ「本当にもういいんだね?」と言う問い掛けに、星はもう一度深く頷く。

バラバラになったカードをまとめて、その一番上のカードに手を掛けた瞬間。ほんの一瞬だけ、世界が揺らぐ様な奇妙な感覚が星を襲う。

視界がぐにやりと大きく揺れて何事もなかったかのように戻る。そして、突如耳元で何者かがささやく。

「——星。お前は現実から逃げられない……いくら現実逃避しても、何も変わらない。変えられない……お前は逃げられない。絶望から——いや、逃がさない。自殺なんか絶対にさせない」

「……どうして? 私は何にもしてな——」

胸の奥で鼓動する心臓を掴まれた感覚だった。

だが、その声を聞いたことはない。どうして自分がそれほど恨まれるのか、どこでその恨みを買ったのか全くわからないが、それはまるで自分自身の深層心理の声にも聞こえた。

目を見開きはつとしたようにその場に固まる星に、声の主が再びささやくかける。

「——お前の罪はこの世に生まれた事だ……そして、私から全てを奪ったお前を。私が、この手で必ず葬り去ってやる……」

その声の主は女性なのだが、低く重たい声音が若い男性のものかと聞き間違えそうなほどだ——そしてなにより、その声は憎悪と狂気に満ちていた。

心臓を鷲掴みにされる様な恐怖が、星の背筋を凍りつかせる。

全身の血液が止まる様な息苦しさに、顔面蒼白で荒い息を繰り返す。下を向いて服の上から心臓の辺りをぎゅっと握り締めて。

（……誰？ どうして、どうして、私をそんなに憎むの？ 生まれたのが罪って……どうして……）

動揺を隠しきれない星が胸を押さえながら、心の中で何度も問い掛けたがそれ以上、彼女が言葉を掛けてくることはなかった。

エミルもバーのマスターもタロットに夢中で星の異変には気付いていない。

そして出たカードの絵柄は『月』だった、そのカードの意味は「不安や焦り」など、あまりいい意味を持っていないカード。

だが、その意味以上に。そのカードに何か深い意味がある気がして仕方がなかった。

やっと異変に気付いたのか、真っ青な顔で俯く星のことを心配して、隣に座るエミルが声を掛けてきた。

「大丈夫？　なんか調子が凄く悪そうよ。星ちゃん」

「……………」

「もう、戻りましようか。立てる？」

無言のまま俯き続ける星に、ただならぬものを感じたエミルが星の体を支えて立たせると、バーのマスターに挨拶をして顔面蒼白のままの星を連れて店を出た。

店を出ると、このまま歩いていくのは不可能とエミルは考えたのか広場に設けられたベンチに腰を下ろした。

ベンチに浅めに座らせた星の背中を擦りながら、エミルは心配そうに時折「大丈夫？」と声を掛ける。だが、星はその声が聴こえないほどに動揺していた。

しかし、それも無理はないだろう。『自分が生まれてきたのが罪だ』と姿も見えぬ何者かも分からない人物に言われたのだ。しかも、狂気に満ちた殺気を含んだ様な声音で『この手で必ず葬り去る』とまで言われればこの反応も無理はない。

「…………主。急にどうしたのだ？」

パタパタと星の肩に乗ってきたレイニールがほつぺたをペチペチ

と叩く。

しかし、その言葉にも星が答える素振りすら見せない。さすがに急な様子の変化におかしいと感じたエミルは、星の肩に乗ったレイニールを両手で掴んで引き離すと。

「レイちゃん。悪いんだけど、イシエ達に今日は近くの宿屋に泊まるからって伝えててもらっていい？ それと、今日はもう2人だけにして……」

「だが、我輩も主が心配なのじゃ！」

レイニールが不服そうな声を上げると、エミルは険しい表情で「おねがい」と小さく呟く。

その真剣な瞳を見つめ、レイニールは渋々頷いた。

納得してくれたレイニールに、エミルはにっこりと微笑み返す。

「それじゃ、お願いね」

「うむ」

小さく頷いて星を気遣ってか、何度も振り返りながらもレイニールは夜空へと消えていった。

2人の時間3

エミルは徐々に小さくなっていくその後ろ姿を見送り、星の体を抱き上げる。

まるで魂の抜けた様な虚ろな瞳で、ただ空の一点だけを見つめている星に、にこつと微笑む。

「さて、とりあえず。今日は近くの宿屋に行きましようか……」

返答の返って来ない星を見下ろし、表情を曇らせ眉をひそめながらエミルはゆつくりと歩き出した。

だが、事件以後宿屋に引き籠もるプレイヤーも多い中。今夜の宿探しは予想以上に難航した。そんな中で事件は起きた――。

「星ちゃんはここで待ってて」

「……………」

階段の側の邪魔にならない場所に俯き加減でいる星を残し。そう言い残した後、カウンターに居るNPCのおじさんの方にエミルは駆けていく。

エミルが四件目の宿屋に空きを確認する為、カウンターに居る割腹のいいNPCのおじさんと話をしていると、宿屋にある談話用の席に座っている男性プレイヤー達の方から話が聞こえてきた。

「実はよー。今日、近くに此処らに生息してないはずのホブゴブリンが居てさ。それから真つ黒の刀がドロップしたんだよな」

どうやら、プレイヤー同士のドロップ品の自慢話の様だ――こんなことはMMORPGの世界では日常的に行われていることで、なにも不思議なことでもない。

元々オンラインゲームとはそういうものだし。他者に自慢されるのが嫌なら、家庭用でオンライン機能のないゲームを使えばいい。

まあ、そうは言ってももの。技術の発展したこのご時世にオンライン機能のないゲームの方が少ないのだが……。

したり顔で笑みを浮かべる男と向かい合っている重鎧の男が、テーブルに身を乗り出しながら彼の話に食い付く。

「マジかよ。そんな話聞いたことないぞ!？」

「マジマジ。でき、その名前が聞いて驚け！　なんと『村正』だけ！
しかもなんか装備すると、低レベルな奴でもLv100になれるって
優れもんでよ。それだけの機能が付いていながら武器ステータスも
そこそこいいんだよなこれが！」

男達は自慢げにコマンドから漆黒の刀を取り出すと、自慢げに周り
にいた仲間に見せびらかしている。

彼の持っている刀の刀身は黒く輝き、全体的に漆黒という名が相応
しい刀だ——刃が禍々しいほどに黒く不気味な光を放つ。これがあ
の徳川家が恐れ、真田幸村の愛用した妖刀と呼ばれる『村正』なのだ
ろうか……。

その直後、突如として真つ黒な刀を手に持っていた男の目が不気味
に赤い光を放つ。

つと、その刹那。今まで楽しそうに会話をしていた仲間の男を斬り
伏せる。

——ぐわあああああああアツ!!

けたたましい悲鳴とともに、男の体は地に落ちて次の瞬間には、そ
の体はキラキラと光になって消えた。

美しく儂い蛍の様な光は、それは紛れもなくその男がこの世界から
消えたことを意味していた。

本来のシステムでは持ち主が許可しない限り。敷地内での固有ス
キルの発動、プレイヤーに影響を与える異常状態にするなどのアイテ
ム類、武器を使用しての戦闘行為は禁止されている。

そう。本来の仕様が適応されているのならば、武器は装飾品として
の装備は認められていても、抜いて刃を振るうことはできないのだ。
しかし、妖刀と呼ばれる『村正』現に黒い鞘から抜かれ、1人の男を
この世界から消し去った……。

男は仲間を消すと、今度は手当たり次第に周りの人間を斬り伏せ始
めた。

無差別に、目の前に居る者達を斬り付けていくその姿は悪霊にでも
取り憑かれている様でもあった。

宿屋の中は次々と撃破された時の光が発生する度に悲鳴と恐怖に

満ち、皆が一斉に出口を求めて駆け出す。一瞬にして、ゲーム内で最も安全なはずの宿屋が地獄絵図と化した。

男の手に握られた『村正』によつて無残に斬られた者達から出た光がまるで天井に向かって逆さに降る雪の様にも、天を指して辺りを飛び交う蛍の様にも見え、幻想的に部屋を舞う。

騒ぎを聞きつけ、部屋に居た者達も階段から駆け下りてきて出口に急ぐ。

その人の波にエミルが逆らうように、星を目指して突き進む。だが、自分を押し流す様に押し寄せてくる人波に、近付くどころかどんどん出口へとエミルは流されてしまう。

「……くっ！……どいて！……どきなさい！」

苦虫を噛み潰したような顔をしながら、懸命に人混みを掻き分けて星の方へ向かうエミル。

そんな彼女の努力をあざ笑うかのように、悲鳴と怒号を上げながら人々はエミルの体を押してくる。

パニックに陥った宿屋の中。

「――殺す……皆殺しにする!!」

念仏の様に同じ言葉を口にして、狂気に染まった赤い瞳の男が、ゆっくりとその場に俯きながら立ち尽くす星の方を向く。

得物を構えて微動だにしない星に向かう男の後ろ姿がエミルの瞳に映る。しかし、星は虚ろな瞳のまま俯いていて、動く様子は一切ない。

その時の星の心の中を支配していたのは、先程のバーで何者かに耳元でささやかれた『お前の罪はこの世に生まれた事』という言葉が頭の中を駆け巡っていた。

「……どうして……」

小さく呟いて星が顔を上げると、そこには口元に狂気じみた笑みを浮かべ、ゆっくりと自分の方向へと歩いてくる男の姿だった。だが、不思議と恐怖も湧かず。また、逃げようとも思わなかった。

いや、思えなかったという方が正しいだろう。自分が存在していることが罪なら、この場で殺された方が良いのではないか？ そんな気

さえした。

(……生きてるだけで誰かを不幸にして……こんな気持ちになるんなら……)

星の目の前で止まって男が持っていた黒い刀を大きく振り上げる。ニタツと笑う男を見つめ、寂しそうに視線を落とす。

「……………生まれてこなければ良かった」

そう小さく呟いたと同時に、星目掛けて男が持っていた刀を振り下ろした。

その刹那。一瞬だけ星の視界の空間が歪んだかと思うと、そこから黒い剣が飛び出してきて黒い刀を弾き飛ばす。

空中を回転して真つ二つに折れた刀は、ガラスの様に粉々に砕け散って消えた。

その場にボタンと倒れた男性の前に、突如として現れたマントの人物が持っていた剣を突き付けている。

身長は然程大きくはないが、その全身から放つ闘気は相当な手練れであることをうかがわせる。

突如現れたローブのこの人物は一体何者なのだろうか。敵か味方かと、一瞬だけ星も考えたものの。すぐにそんなことは気にならなくなった。

どちらにしても自分が存在する意味はもうない気がしていた。

男が完全に気を失っているのを確認したのか、マントの人物はゆっくりと星の方を振り返る。そして絶望に打ちひしがれた様な表情を見せる星に向かって徐に口を開く。

「——どうして戦わなかった？」

「……………」

星が無言のまま俯くと、辺りにパンツ！という破裂音が響き、星の頬を鋭い痛みが走る。

思わず手で覆った頬にジーンとした痛みが流れる……今まで母親にもはたかれたことなどなかった星には、その突然の出来事が予想外過ぎてまだ状況を把握しきれいでいなかった。

驚きながら赤くなった頬を押さえると、星はマントの人物を見上げ

た。

マントの隙間から綺麗な青い瞳が星を見つめていた。その瞳は、エミルの様に優しく真っ直ぐに星を見つめている。

「敵に殺意を向けられて、剣も抜かなければ殺されると分からないのか？」

表情を曇らせ無言のまま再び俯く星に、マントの人物はそれ以上言葉も掛けることなく身を翻すと、持っていた剣を振った。

すると、空間に大きな裂け目が現れ、そこにマントの人物が入っていく。

「……命を無駄にするな」

去り際にそう告げたマントの人物は、その後振り返ることなく裂け目の中に完全に姿を消す。

その言葉を聞いた星の瞳から、一気に溢れ出した涙が頬を伝う。

さつき生きていることを全否定されたからか、そのマントの人物の言葉が星の心に痛いほど響いた。

脱力するように地面にペタンと座り込んだ星は、そのまま顔を押しさえることなく泣き続ける。すると、エミルが慌てた様子で駆け寄って星を抱き寄せる。

「良く分からないけど。無事で良かったわ、星ちゃん……」

エミルは星が泣き止むまで、彼女の体をしっかりと抱きしめ続けた。

2人の時間4

幸か不幸かその事件のおかげで宿屋に空きができたことにより、何とか2人は宿泊することができた。

散り散りになった宿屋に宿泊する予定だったプレイヤーは、惨劇の後に殆どが姿を消して宿屋の中は急に閑散としている。

つい数分前までは多くの人で賑わっていたテーブルも、今は数組のプレイヤーが座っているだけだ。しかし、その顔に生氣はなく、おそらく彼等は今晚不安で眠ることができないだろう。

そんな彼等を残し、取った部屋へと向かう。二階の廊下の一番奥の部屋で、中はベッドが置かれ、角部屋ということもあり窓からは景色が一望でき、小さな浴室もあるビジネスホテルの様な簡単な造りになっていた。

「星ちゃんはここでちょっと待っててね。私はお風呂を入れてくるから」

星をベッドに座らせ、エミルは浴室にお湯を溜める為にその場を後にした。

ベッドに腰を下ろした星は、まだジンジンと痛む頬を撫でた。

「——はたかれた……痛かった……」

頬を撫でる手を伝って、ポロポロと瞳から溢れ出した涙が太股を濡らす。

頬を平手ではたかれたのは、あれが生まれて始めてだった——驚いたのもあるし、何より悲しかったのだ。涙を流すのも無理もないだろう。

一度引っ込んだはずの涙が、抑えようとすればするほど溢れ出してくて止まらない。

視界は涙で霞み、心は引き裂かれた様に痛む。しかし今の星には、もうどうしたらいいのか分からなかった……。

「……私は頑張ってる。一生懸命やってるのに……上手くいかないよ……生きててもダメ。死んでもダメなら私は……私はいつたい……どうしたらいいの?」

思い詰めた表情のまま、部屋の一点を見つめる星。

この一日で色々なことを言われて、相当動揺しているのだろう。だが、それも無理はない話だ。今までにも、自分の存在を否定されたことは何度かあった。

そして『生まれてきて本当に良かったのか』この考えは、今までにも何度か脳裏に浮かんできたものだ。

しかし、いつも自分を奮い立たせるようにして、人に不快に思われないようにして、ここまで頑張ってきたつもりだった。

少しでも誰かに必要とされようと……親しい人に気に入られたいと思つて、自分を押し殺してまで愛嬌を振りまいてきた。

星の頭で理解できる許容範囲を超えていた。そんな時、座っていたベッドが更に深く沈んだ。

横を見ると、そこにはエミルが心配そうに星を見つめている姿があった。

「どうしたの？ やっぱり体調が悪い？」

「……エミルさん。さっきの人に叩かれて……それで……」

こう言えばエミルは怒ると思つていたのか、言い難そうに掻き消えそうな声で告げると。

「さっきの人？ 刀を持って襲いかかってきた人？」

つと、星の言葉にエミルは首を傾げて聞き返す。

「違います。マントの人にです」

すぐに星は言葉を返したが、何故かそれを聞いたエミルは困った様に眉をひそめて告げる。

「——マントの人？ ごめんなさい、星ちゃんが何を言っているのか、私には分からないわ。あなたは1人で、あの刀の人を倒したんでしょ？」

「……えっ？」

そんなエミルに星は驚いた様に目を丸くさせた。

それもそのはずだ。エミルの言っていることが真実ならば、自分の見たあの人物はエミルには見えていなかったことになる。

だが、そんなことは俄には信じがたい事実だ——もしエミルの言っ

ている話が本当ならば、今も痛む頬の説明がつかない。

いや、それだけではない。あの人物が星以外誰にも見えてなかったとしたのなら、星は幽霊とでも鉢合わせたとでも言うのだろうか？

このデジタルな世界で、現実世界でも科学で裏付けができないほど不確かな存在である幽霊が人が科学技術で作り上げた世界にいるはずがないのだ。

もしもそんなことがあるとすれば、得体の知れない存在を科学で立証できない存在を科学が作り出しているという矛盾が生じてしまうのだから……。

星は少し強い口調でエミルに尋ねた。

「居ましたよね！ 私の前に黒い剣を持ったマントの人！ 私に向かつて来る刀を弾いて私を助けてくれた——」

そこまで口を開いて、星はもう喋るのを止める。

止めるしかなかった……その眼前には、星をまるで哀れむ様に悲しそうな瞳を向けるエミルの姿があったからに他ならない。

彼女の瞳を見れば、星の発言を信じていないことは興奮している星にも理解できた。

エミルは星の肩を掴むと、優しい声音で告げる。

「ちよつと疲れているのね、星ちゃん。色々あったから無理もないわ……お風呂は明日にして、今日はもう——」

「——本当です！ 本当に居たんです！」

更に声を荒らげる星を、エミルは何も言わずに抱きしめる。

星の涙で濡れた頬がエミルの胸に押し付けられ、そしてエミルは星の頭を優しく撫でながら耳元でささやく。

「……別になんか居たか居なかったかなんてどうでもいいの……星ちゃんが無事ならそれだけでいいのよ」

「……エミルさん」

星が彼女の顔を見上げると、エミルの瞳から涙が溢れ落ちて星の頬を伝う。

「……本当はね。今日の星ちゃんは無理に笑ってた気がしたから、気分転換になればと思って誘ったの。でも、もう少しいあなたを失うと

ころだったわ……これじゃ、お姉さん失格ね……」

目の前で今にも襲われそうだった星を、助けられなかったという罪悪感に駆られる様なその瞳が星の胸に強く突き刺さる。

もちろん。自分を心配してくれて、妹の様に思っているその気持ちが嬉しいというのはあるが、それ以上に今の星には確認を取らなければならぬ大事なことがあった。

そのエミルの言葉に躊躇するように星は表情を曇らせ俯くと、意を決して今まで考えていたことを思い切って口に出してみる。

「あの……私って、エミルさんの妹の代わり……なんですか？」

そう言つて星は口を一の字に結んだまま、エミルの顔を見上げた。

エミルを見上げる星のその瞳には涙が滲んでいる。もちろん。この質問の答えは言うまでもないことは星も分かっていた。きつと自分が妹の代わりだと断言される。

エミルにとって実の妹は大事で、自分はその模造品であり類似品でしかなく、しかも劣化品だ。きつとエミルの妹だ。とても思いやりのあつて素晴らしい人物だったのだろう……星の中では、あつたことのない彼女の完璧な人物像が作り上げられていた。

その代わりにされるだけで、とても名誉なことで、エミルも本心では戦闘の役にも立たず。かと言つて何かができるわけでもない星を仕方なく失つた妹というポジションに据えていると思つて疑わなかった。そうでなければ、空っぽの自分がこれほど優しくしてもらえないはずもなく、大事にされるはずがないと……。

心臓が張り裂けそうに脈動する中、星はただただエミルの口元を見つめていた。

エミルはその星の突拍子もない言葉に驚きながらも、すぐに優しい微笑みを浮かべる。

「そうね。本当の妹みたいに思っているわ」

「……そうですか。なら、やっぱり……」

次の言葉は分かっているつもりでも、どうしても溢れそうになる涙を必死に抑えていた。

きつと次は『まあ、本当の妹はもつと可愛かつたけどね。星ちゃん

で我慢している』と言われると、肩を震わせ身構えるように体を硬直させた。

「でも、それは星ちゃん自身をよ？」

「……私自身？」

星はその言葉の意味が分からず、ただただ首を傾げる。

突如飛び出した彼女の言葉に、困惑を隠しきれない星にエミルは言葉が続ける。

「ええ、だって星ちゃんは星ちゃんでしょ？ 岬は岬で別人だし、あなたはあなたよ。他の誰でもない、あなた自身を私が好きなの」

エミルの言葉に、抑えようと堪えていた涙が一気に溢れ出し、星は俯き加減に声を震わせて言った。

「……でも、私はなにも取り柄もないし、ただ皆と……エミルさんと一緒にいたいだけ……人の後ろにしがみついているだけの影なんです……」

「——影ねえ……」

星の言葉を聞いてエミルは更に強く星の体を抱きしめて、体を小刻みに震わせている頭を優しく撫でた。

彼女の胸に押し当てられた星の耳には、エミルの心臓の音が聞こえてくる気がした。

「影なら、どうして抱きしめられるのかしらね〜」

「……それは……その、だから……」

エミルの言葉に反論しようと考えている星の耳元で、エミルが優しい声でささやく。

「——ダメよ。自分を誰よりも下に見ちゃ……影なんて言っちゃダメ。確かに影は物静かで後ろから付いてきて、必死に私の後ろを付いてくる星ちゃんみたいよ。でも、影は掴めないし、掴ませてもくれない。それに話もしてくれないわ……それにほら、見てみなさい」

そう告げると、エミルは徐に床を指差した。

星がその場所に目を向けると、そこには光に照らし出された2つの影が映し出されている。

エミルは首を傾げる星の肩を自分の方に抱き寄せた。

「星ちゃんにはどう見える？ 私には2人で寄り添っていて、凄く仲良しに見えるわ」

「はい」

体を密着させる2つの影が、互いを飲み込み合って混ざり合う様に明かりに照らされて長く伸びている。

「影は映し出す人が居るからできるのよ？ 影は本人でそれ以外の誰でもない。だから、星ちゃんにもちゃんと影があつて、今は私と星ちゃんがくっついていてから影も同じようにくっついていて……私達が仲良しの証拠ね！」

その言葉に小さく頷くと、エミルは星の顔を見て微笑み返した。

そして、しばらくの間。無言でお互いの顔を見つめ合っていると、星に向かってエミルが告げた。

「それじゃ、お風呂に入っちゃいませうか！ 確か、2人きりでお風呂に入るのは初めてだったかしら」

「えっ？ いや、私は後でいいので。エミルさんが先に入ってきて——」

「——ほら、考えてないで行くわよ！」

「えっ!? あっ、ちよつと……」

エミルはまるでエリエの様**に**強引に星の手を引いて立たせると、まとも強引に星の服を脱がせていく。

見る見るうちに裸にされた星は恥ずかしそうに、足をモジモジしながらタオルを縦にして体を隠す。

いつも見られているとはいえ、脱衣所ではない部屋で2人きりの状況で裸になるのはなんだか気恥ずかしい。

星は羞恥心で顔を耳まで真っ赤に染めながら、エミルを上目遣いに見て尋ねる。

「——あの……私だけ裸なのは……その、恥ずかしいです……エミルさんは脱がないんですか？」

エミルは時間が止まったかのように微動だにせず、タオルだけの星を食い入るように見つめていた。

「あの、どうかしま——」

そんな彼女にもう一度星が口を開こうとした直後、突如エミルが星をベッドに押し倒す。

「えっ? えっ!?!」

突然ベッドに押し倒されて困惑する星。

ベッドに投げ出された星に覆い被さるようにして自分を見下ろすエミルは、いつもの彼女とはまるで別人のようだった。

その表情には影があり、まるで獲物を目の前にした肉食獣の様だった……今まで何と言うかとても怖い。

(……私になにか悪いこと言ったから、エミルさんが怒って……)

そう感じた星は瞼を強く瞑ると、エミルに向かって「ごめんなさい」と震える声で謝った。

その直後、ハツとしたエミルは我に返ったように手の平で自分の顔を覆う。

「……なにやってるのよ、私は……」

ゆっくりと体を起こしたエミルは、落ち込んだ様子でベッドに腰を掛け項垂れた。

2人の時間5

星はベッドから起き上がるとエミルは酷く落ち込み、その周囲はどんよりとした空気に包まれている。

話し掛けづらい雰囲気醸し出しているエミルに向かって星が慰めるように言った。

「だ、大丈夫です！ 私、気にしてないですから！」

「……本当？ 星ちゃん」

涙で滲むエミルの青い瞳が上目遣いに星を見た。

「は、はい。ちよつと驚いただけで……」

それを見た星は胸がキュンときめくのを感じて、小さく頷くいて慌てて視線を逸らす。

逸した先にあつた鏡に映る自分のあられもない姿に、星は自分が裸だったのを思い出して一瞬でボツと顔が耳まで真っ赤に染まる。

それを見たエミルが、今度は星に抱き付いてきた。

「もう！ 本当に星ちゃんはかわいいわね」

「あつ。や、やめてください。くすぐりたいです……」

身を振らせる星に抱き付きながら、嬉しそうに頭を撫でる。

困っている星から離れると、エミルは急いで着ていた服を脱ぐときよんとしていた星の体を抱き上げた。

何故か突然お姫様抱っこ状態になったことに驚きながら、抱えられた星がエミルの顔を見上げる。

「早くお風呂にいきましょうか！ このままじゃ風邪を引いちゃうわ」

「……ゲームなのに風邪引くんですか？」

その質問に答えることなく、エミルはにっこりと微笑むと「さあ、どうかしらね」とはぐらかした。

浴室に入ると星を地面に下ろして椅子に座らせ、シャワーを手に持った。それを見て、次に何をされるのか分かったのだらう……それを見た星は血相を変えて慌て出すと。

「い、いいです！ シャンプーはしなくて大丈夫です！」

エミルは首を傾げながら呟く。

「でも、星ちゃんは自分でシャンプーできないし。それじゃなくてもしないでしょ？」

その言葉を聞いた星は、少し不機嫌そうな顔をして「シャンプーはできません」と小さく反論する。

そう。できないのではなくしたくないのだ——同じに感じるかもしれないが、星にとってエミルの口にした『シャンプーができない』という言葉が相当不服だったのだろう。些細な抵抗とばかりに、頬をぶくつと膨らませながら眉をひそめている。

エミルはそんな星にいたずらな笑みを浮かべると、徐に口を開く。

「——そっか、星ちゃんはシャンプーができないんじゃないよ。水が怖いよね。まるで幼稚園児ね」

「なっ……こ、怖くないです！」

彼女の『幼稚園児』という言葉が気に障ったものの、大声では反論できずに指をいじりながらモジモジと小声で反論する星。

「え？ 聞こえないわ。なんて言ったの？」

煽られてツーンとした態度で言った星に、笑いを堪えながら言葉を返す。

星は彼女の挑発に乗るまいと無言でやり過ぎそうとしていると。

「何も言わないって事は、髪を洗ってもいいのよね？」

「ううう……」

この流れでは反論したところで無意味だと悟ったのか、何も言えなくなった星は、口を一字に結んだまま頷く。

微笑みを浮かべたまま、エミルは蛇口を捻ってシャワーから水を出す。

地面を打ち付ける水の音を聞きながら、覚悟を決める様に生唾をぐくりと呑み込む。表情を強ばらせたまま、全身に力を込めてプルプルと小刻みに震えている。

その場の勢いでシャンプーをすると頷いたが、水が苦手なことには変わりなく。

頭から水を掛けられるのには、いつまで経っても抵抗があるのは隠

しきれない事実だ。その時、星の耳元でエミルが「お湯掛けるわよ」と告げる。

意を決した様に、星は膝の上に置いた手を握り締めると、瞼をぎゅつと閉じて身構える。

「そんなに身構えなくても……かけるわよ」

星の反応に苦笑いを浮かべ、エミルが髪の手先から徐々にお湯を掛けていく。

体を強張らせてプルプルと震える星を見ると自然と笑みがこぼれる。

「そんなに怖いなら、見栄を張らなければいいのに……全く、大人しいくせに負けず嫌いなんだから……まあ、そんなところも可愛いんだけどね」

「……何か言いましたか？」

「何でもないわ。ほら、耳も塞がないと水が入っちゃうわよ？」

そう言われ、素早く両手で耳を押さえる星を優しい瞳で見つめるとシャンプーを始めた。

髪を洗い始めると、星は瞼を強くすっきり大人しくなってしまう。正確には、体が強張っていて動かなくなっているだけなのだが……。

星は全身を強張らせて完全に固まってしまっている。エミルはそんな星の髪を丁寧に洗っていく。

それからしばらくして……。

「それじゃー。洗い流すわね」

そう言っただけで身構えている星の髪に付いた泡を洗い流して髪を洗い終わると、星の長い髪を頭の後ろに小さく結んだ。

そして今度はスポンジでボディークリームを泡立て、それを手に取ると星の体を優しく撫でるように洗っていく。

星がくすぐったそうに身を振っていると、エミルがぼそつと呟いた。

「そう言えば……結局。岬とはこんな風には姉妹でお風呂に入れなかったな……」

その突拍子もない言葉に、星の表情が一気に曇った。

それは『やっぱり自分ではなく、妹と入りたかった』という気持ちの表われだと感じたからに他ならない。

まあ、当然と言えば当然だ。自分はエミルの妹でもないし、妹にもなれない存在でしかないのだ。

「……………ごめんなさい。私、妹じゃなくて……………」

「え？ あつ、違う違う。そういう意味じゃないの」
「……………」

無言のまま、体を小刻みに震わせる星の体を後ろから抱きしめると、その耳元で告げる。

「——違うの。こうして星ちゃんと、ゆっくりお風呂に入れて嬉し
いって事よ？」
「……………」

だが、そのエミルの言葉に星は沈黙したまま動かない。

(……………これもきつとお世辞だ。私は、生きていて恨まれる事はあつても……………私を必要としてくれてる人なんていないんだから……………)

心の中で自分に言い聞かせるように呟く星。

先程のバーでの出来事が、星の中で薄々感じていた思いを一気に膨張させていた。今はどんな優しい言葉も、今の星にはお世辞以外には感じられない。

素直じゃないのではなく。長い間自分を押し殺していたせいで、素直になる方法が分からなくなっていたのだ。

今この場で自分が消えればきつと、今自分に向けられているエミルの微笑みは、自分ではない別の誰かに向けられべきだと分かっていた。

そしてそれは、無条件に自分が誰かを不幸にしていることと同じだということも分かっていた。何故なら、自分は『生まれてきたことが罪』なのだから……………。

「……………私に優しくしないでください……………」

星は抱き付いていたエミルの腕を振り払うと、突然立ち上がった。そんな星を驚いたように見つめるエミルに向かって言い放つ。

「どうして！ どうして……………そんなに優しくするんですか！」

声を荒らげて潤んだ瞳で睨む星に、エミルはただただ首を傾げている。

「……どうしたの？ いきなりそんなこと——」

「——私は！ 私に優しくされる権利なんてない！」

エミルの言葉を遮って、星は首を激しく横に振った。

今ならエミルと2人だけ、この場でエミルとケンカ別れできれば、後はフィールドに出てモンスターにやられればいい……そうすれば、このやり場のない苦しみから解放される。

自暴自棄になっていた星は、その一心でがむしやらに言葉を吐き出す。

「私に……私と一緒に居てもいいことなんてない……さつきも見たはずです！ 私の周りにいる人は不幸にしかならない！ だから……私のことはもう放っておいて……」

そこまで口にした直後、突如として星の視界がシャワーから出たお湯で視界が遮られた。

視界が戻ると、目の前には眉を吊り上げてシャワーのノズルを握り締めているエミルの姿があった。

「目は覚めた？ 星ちゃん」

「……ケホ、ケホッ。な、何をするんですか！」

軽く咳き込むと、エミルは何食わぬ顔をして告げる。

そんな彼女に星が再び口を開こうとすると、また勢い良く星の顔にシャワーのお湯が浴びせかけられた。

「……ゲホッ！ ゴホッ！」

今度はさつきよりも多く口の中に入ってしまった、星は大きく咳き込む。

突然のエミルの行動に、星は少し怯えた様に目を大きく見開いた瞳を向けた。

（エミルさん。私が水苦手なの知ってるのに……）

シャワーを握り締めてにっこりと微笑むエミルの瞳からは、正気が消えていた。

その顔は、以前星に無理やり手錠をはめた時と似ている。もしかす

ると星は今、エミルの触れてはならない何かに触れてしまったのかも
しれない。すると直後、虚ろな瞳のエミルの手が星の頬を撫でる。

「……星ちゃん。まだ逃亡癖が治ってないのね。これはやつぱり、首
輪かしら……そうね。鮮血みたいな、真っ赤なやつがいろいろ……」
怯えた表情の星の首筋を、エミルの細く長い指先がなぞる。

ダークブレットの一件以来。いや、ライラのこと最大の原因かも
しれないが、エミルは時折常軌を逸した行動に出ることがある。

そんなエミルを正気に戻さないことには、このシャワーの水責めも
終わらないと考えた星が、以前の出来事を思い出して大声で叫んだ。

「えっと、確か……私の処女膜をぶち破ってみろ。この——」

「——星ちゃん！ そんな汚い言葉を使っちゃだめよ！ 前に言ったで
しょ！ その言葉は私以外に絶対言っちゃだめよ!! いいわね!!」

エミルはシャワーもその場に放り投げ、星の顔を両手で挟み込む
と、真剣な面持ちで星に告げた。

星は目を丸くしながらゆっくりと頷く。だが、言葉の意味は分から
ないもののこの呪文は凄い。いつか困った時には使ってみよう。そ
う心の中で呟くとひとまず去った危機に、星はほっと胸を撫で下ろし
ていた。

2人の時間6

星の咄嗟の機転を利かした言葉にすっかりいつも通りに戻ったエミルが、星の体に残っていた泡をシャワーで洗い流し、微笑みを浮かべると、星の髪を短く結わえる。

「私も体と髪を洗わないといけないから、先に湯船に入っちゃって」
つと言われ、星は素直にそれに従った。

一人用の設定なのだろう。浴槽も子供の星でやっと足を伸ばせるほどでそれほど大きくない。

視線をできるだけ合わせないようにを心掛けている星は内心では、エミルの様子がまたおかしくなったらと思うと怖かった。

時折、普段の彼女とは別の人格が出るような、そんな感覚に襲われることがある。

以前の手錠の件と、先程のベッドに押し倒されたこととさっきの首輪発言といい、時折狂気に走った行動を取る。

それもまた、この世界に閉じ込められていることによるストレスなのだろう。とエミルの横顔を時折見遣って星は考えていた。どっちにしても、その真相を知っているのはエミルだけなのだが……。

その時、青く長い髪を結わえていたエミルと視線が合う。

「どうしたの？」

「えっ!? い、いえ……」

素早く目を逸らす星を見て、エミルは何か思い付いたように、意味ありげな微笑みを浮かべ手招きする。

星は首を傾げながらも、湯船から上がってエミルの側までいく。そんな星にエミルはボディソープを染み込ませたスポンジを渡すと、そのスポンジを見て小首を傾げながら星はエミルの顔を見つめる。

「……これって」

「私の背中。洗ってくれない？ 手が届かなくて」

「いいですけど。私初めてなので……うまくできないかも……」

「ふふっ、いいのよ。お姉ちゃんが教えて上げる」

エミルは今までにないほど、だらしなくにやけている。ただ単に、星にそのセリフを言わせたかっただけなように感じるが。

そんなこととは無関係に、星は真剣な面持ちでスポンジを泡立てると、その泡を手にとり取って「いきます」と生唾を飲み込み、緊張しながらエミルの背中に塗り広げていく。

懸命に手を動かしてエミルの背中を洗っていると、エミルがニヤニヤしながら呟く。

「星ちゃんの手は、小さくてぷにぷにしてて気持ちいいわね」

「そ、そうですか？ 私、上手くできてますか？」

「うんうん」

エミルは上機嫌で頷くのを見て、星は安堵したように息を漏らす。現実世界なら分かるが、どうしてゲーム世界で素手で体を洗わないといけないのかが分からない。

タオルなどを使うよりも素手の方が肌がいいと現実の世界では言われているが、それがこの世界に適応されるかと言えば全くないだろう。

まあ、このままこの疑問をぶつければ、またエミルが豹変しかねない。ここは彼女の機嫌を損なわせるのは得策ではない。

ふと、思い出し。彼女の機嫌がいろいろうちに、星は心の中で思っていたことを聞いてみる。

一生懸命に手を動かしながら、星は意を決して口を開いた。

「あの。エミルさんは、早く元の世界に帰りたいですか？」

「……………ん？ どうしてそんな事を聞くの？」

振り返って尋ねるエミルに、星は眉をひそめながら言葉を続ける。

「いえ、エミルさんがこの頃怖いと感じる時があつて……………その、エミルさんもストレスが溜まつてるのかな……………って」

つつい口が滑ってしまったと思つて口を塞いだ時にはすでに遅く。その言葉に、エミルの表情が一瞬で険しいものへと変わり。彼女の青い瞳が、星の紫色の瞳をまっすぐ見つめる。

星は手を止め、緊張した面持ちで額に汗しながら次の彼女の行動を見守っていた。

いや、怒られることを覚悟していたと言った方が正しいかもしれない。もしもの時は、あの魔法の言葉を口にすればなんとかなる……。互いの瞳を見つめ合ったまましばらくの沈黙の後、小さくため息を漏らしたエミルが呆れ気味に言った。

「——そうね。最初の頃よりも余裕がなくなってきた……。つとと言うのは確かかもしれないわね。でもね……」

「あつ……」

丸い座椅子の上でぐるりと体を回転させ、星と向かい合ったエミルの手が星の頬に当たってにつこりと優しい微笑みを浮かべている。

その後、頬を赤らめた星に優しい声音で告げた。

「……私は星ちゃんの事が大切だから、少し強引な感じになっちゃうのかもしれないわね。でも、嫌いなわけじゃないのよ?」

エミルは一瞬悲しそうな顔をしたが、すぐに表情を戻し。星の頬を優しく撫でながら言葉を続けた。

「最近、星ちゃんも色々なことがあったでしょ? 敵に捕まったり固有スキルが使えるようになったり。星ちゃんが強くなって、ライラは何か企んでいるみたいだけど……。でも、あなたは人から期待されるとそれ以上に無理しちゃうでしょ?」

「……そんなことは……。私に期待する人なんていないから……」

「星ちゃん……」

悲しそうに眉をひそめてそう言った星を、徐に立ち上がったエミルがそつと抱き寄せる。

頭を撫でながら、落ち着いた声で言い聞かせるように呟く。

「そんなことないわ。あの力はきつと皆の役に立つ、それは間違いない——だって、固有スキルの枠を飛び越えた力ですもの。でもね、強い力を持っている人は頼られる事も多いけど、妬まれる事も多いの。そんな時は私に言いなさい。きつと、なんとかしてあげるから……」

「……なんとか?」

不思議そうに首を傾げながら、エミルを見上げる星。

そんな彼女に微笑み、エミルが体をもう一度ぎゅつと抱き締めた。

「……ええ、お姉ちゃんは妹の為なら、どんな無理だと思える事もやつ

てのけるものなのよ？」

「でも、私……エミルさんの妹じゃ——」

そう言おうとした直後、エミルはシャワーを手に持った。またお湯をかけられると瞼を強く瞑ったが、その心配はなかったようだ——。体を洗っている最中だったことを思い出したのもあるだろうが、それ以上にエミルとしては話を逸したかったのだろう。

まず自分の体に付いた泡を落とし、次に星の体に抱き付いた時に付着してしまった泡を流して、そそくさとシャワーを元の場所に戻すとエミルは湯船に入つて星を手招きする。

「ほら、そんなところにいないで、一緒に入りましょ」

「……で、でも」

その場に立ち尽くしたまま、複雑そうな顔で星が俯いていると、エミルの伸ばした手が星の腕を掴んだ。

強引に湯船の中に引き込まれた星が目を丸くさせていると、エミルは微笑んで両腕で包み込むように引き寄せる。

狭い浴槽の中。エミルの膝の上に乗せられるようなかたちで、しっかりと抱き寄せられていた。

全身を包み込む温かさ——それはお湯だけではなく、エミルの体温もそして、その心も感じられる気がする。

「——もし、私にもお姉ちゃんがいたら……こんなに優しく、温かかったのかな？」

星はそう感じながら、その温かさに素直に瞳を閉じて一時の安らぎに身も心も委ねた。

その時、耳元でエミルの優しい声が聞こえた。

「……星ちゃん。あなたはもう私の大事な妹よ？」

「でも……私は……」

「血の繋がりになんて関係ないの。誰がなんと言おうと、あなたは私の妹で、私の大事な宝物……次こそ絶対に手放したくない。だから、何があっても。絶対に、どこにも行かないでね？」

エミルのその言葉に星は小さく「はい」と答えて静かに頷く。この時、星はエミルと本当の姉妹になれたような気がしていた。

ゴーレム狩り

翌日になって星が目を覚ますと、すでにお昼を回っていた。

昨日の夜はお風呂に入っていて、居心地の良さからそのまま時間を忘れて浸かっていたら、いつの間にかのぼせてしまった。

のぼせると言っても、煙による視界のズレで酔っているだけなのだが……。

それからの記憶はぼんやりとしていて、薄っすらとしか覚えていない。

(確か、あの後エミルさんにベッドに運ばれて、そのまま寝ちゃったんだ……)

何故か着ていたバスローブを指で触りながら、記憶を呼び起こす。

おそらく、今身に付けているバスローブはエミルが着せてくれたのだろう。

浮かない表情で『また迷惑を掛けてしまった……』そう思いながらも星が寝返りを打つと、そこには微笑みを浮かべているエミルの顔があった。

「いつもは私より起きるの早いのに、今日は随分とお寝坊さんね」

「なら、起こしてくれれば……」

一瞬驚いたが、すぐに不服そうに頬を膨らませる星に、エミルは「くすっ」と笑みを浮かべて不機嫌そうな星の頭を撫でた。

「ふふ、ごめんなさいね。あまりに気持ち良さそうに眠ってたから、つい」

「……エミルさん。今日はなんだかいじわるです」

「あら、昨日『優しくしないで!』て言ってたのは、どこの誰かしらね」

「むうう」

痛いところを突かれ、膨らませていた頬を更に大きくしてフグみたいになった星に、エミルは楽しそうな笑みを浮かべている。その後、エミルの視界にメッセージ受信の表示が出た。

不貞腐れている星を余所に、エミルは指で表示されている場所をクリックする。

『エミル姉。まだ帰ってこれないの？ 今、街は危ないんだよ!? 街に居るならすぐに戻ってきて!!』

メツセージの差出人はエリエだつた――。

その内容から、何やら問題が発生しているのは疑う余地はないだろう。だが、エミルのメツセージに書いてあった『街は危ない』の意味が分からない以上。星を連れて、無闇に宿屋を飛び出すわけにもいかない。

昨晚の一件もあるし、この場合は冷静な判断を下す必要があるのだ。

エミルは隣で不貞腐れている星を一瞬見遣つて、突然険しい表情で考える。

正直なところ、星と2人でこれ以上行動するのはリスクが大き過ぎるとエミル自身も感じていた。

昨日の黒い刀身の刀を持った者が1人ならば、エミルだけで十分に事足りるだろうが、あれが数人同時に暴れ出したら自分だけなら大丈夫だが、星が危険に晒されるリスクが格段に上がってしまう。

建物内で固有スキルを使用できるのはシステム上でゲームマスターである星と何らかの方法でそれを改変しているライラ。昨晚の襲撃の『村正』というアイテムくらいだろう。

エリエの言っているものが昨晚の『村正』なら、建物内で武器を使用できないエミルは無力に等しく、星は戦闘を知らないはずの素人。現実的に見て戦力と言うのは難しい。

「……やっぱり。星ちゃんに、きちんとした戦い方を覚えさせるべきなのかしら……」

複雑そうな顔で星を見つめるエミル。

以前も星と約束をしていたことではあるが、エミルはまだ心の中で決心がついていなかった。まだ戦い方を教えてあげると約束をしていただけで、実際に戦い方を教えたわけではなかったのだ。

できることなら戦いなどに星を参加させるべきじゃない。もし、戦えるようになれば、星を戦力として見ているライラもデイビッドも戦

いを強要するに違いない。その時、星の性格では素直に頷いてしまうだろう。

だが、このまま無抵抗のまま昨晚のようなことになるのは、絶対に避けなければいけない。

今のエミルの思考を星を戦わせたくないという理想と、戦い方を覚えさせなければ星を守れないという現実が、交互に襲っている状態だ――。

そんな彼女を心配したように、星が不安そうに尋ねてきた。

「……エミルさん。悲しそうな顔をして、どうかしたんですか？」

「ううん。なんでもないのよ」

表情を曇らせる星に微笑み返すと、エリエに向かってメッセージを返す。

その内容は……。

『今、街の宿屋に居るから迎えに来てくれる？』

エミルがメッセージを送ると、すぐに『了解』とエリエから返信が返ってきた。

それに安堵の表情を浮かべると、全く内容を飲み込めていない星の方を向く。

「これからエリーが迎えに来てくれるみたいだから、ご飯食べて待つてましようか！」

「えっ？ でも、どうしてエリエさんが……」

「細かいことはいいいから、星ちゃんも着替えちゃいなさい。エリーに見られたら恥ずかしいわよ？」

バスローブ姿の自分を見て、バスローブしか身に着けていない自分の格好に、星は顔を赤らめるとエミルのその言葉に従うように、机に置いてあった自分の服に着替える。

それを見て、微笑みを浮かべるとエミルは簡易型のキッチンへと向かって歩き出す。しかし、簡易型ということもあり、コンロとオーブンが用意されているだけの場所なのだが。

着替えながらその様子を心配そうに見守っていると、キッチンの方からドカン！という爆発音が響き、黙々と黒煙が上がり部屋中に広が

る。

「どうやら、エミルの料理腕は上達してないらしい。どうやれば爆発するのかは、未だに分からないが……。」

「エミルは咳き込みながら慌てて窓を開け放つと、憤りを隠しきれない様子で叫んだ。」

「ケホツケホツ……もう！ どうして私が作るといつも爆発するのよ！」

「……あの、何を作ろうとしてたんですか？」

「えっ？ 普通のハムエッグよ？」

「普通にハムエッグを作ろうとして爆発するものなのかつと思いな
がらも、星はそれ以上口を開かなかつた。」

「まあ誰しも『人には向き不向きがあるんだ』と、星は煙が立ち込める部屋の中で立ち尽くしたまま、小さく咳き込みながら身を持って知つた。」

「そうこうしていると、突然激しくドアを叩く音が聞こえてきた。まあ、窓から黙々と黒煙が上がっていれば、誰でも何かあつたと思うのは当然だろう。」

「ちよつとエミル姉！ なにやってるのよ!!」

「ドア越しから聞こえてくる声は紛れもなくエリエのものだった。」

「その声を聞いてエミルが扉の鍵を開ける。すると、勢い良く扉が開き開いたドアから飛び込んできたエリエとエミルが激しくぶつかる。」

「2人はその場に尻もちをつくと、お尻をさすりながら瞑っていた目を開けた。」

「くつわああ……」

「いったく」

「互いに瞳に涙を浮かべ、お互いの顔を見合わせた。」

「突然飛び込んできたことに不機嫌そうな顔で眉をひそめているエミルに、エリエは苦笑いを浮かべている。」

「そんな彼女にエミルの眉が怒りでピクピクと動く。」

「……エリ〜？」

「えへへ。ちよつと慌て過ぎた……かも？」

その直後、ブチッ！とエミルの方から血管が切れる音がした。
エミルは静かにゆっくりと立ち上がり、烈火の如く怒り狂う。

「エリーー！　そこに座りなさいー！」

「は、はいー！」

「いつもいつもあなたは！　どんなに急いでいてもしつかりと状況を判断してから行動しなさいって言うてるでしょ！　私だったから良かったものを、星ちゃんが出てたらどうするつもりだったの！　だいたいあなたは同じことを何度言わせれば——」

背筋を伸ばしてエリエがその場に正座すると、ガミガミと説教を続けていている。

正座しながら徐々に小さくなるエリエを、星は気の毒そうに見つめていた。彼女の機嫌が悪い時に、丁度見計らったように問題を起こしたエリエに同情すら感じる。

しばらくして、エミルの怒りも収まったのか、やっと説教から開放されたエリエが、フラフラしながら星の方に歩いてきた。

星の両肩をがっしり掴んでエリエが告げる。

「……星。無事で良かった……」

そう言い残して、エリエは疲れきった表情でその場に崩れるように倒れた。

慌てて駆け寄った星が倒れているエリエの体を揺ると、彼女はすやすやと寝息を立てていた。

それを見て星が首を傾げていると、開いていた窓から突然何かが飛び込んできた。

「あゝるゝじゝ!!」

大声で叫びながら星の胸目掛けて飛び込んできたのはレイニールだった。

星が突然のレイニールの登場に驚いていると、レイニールが怒った様子でビシツと指差す。

「主！　また攫われたらどうするつもりなのじゃー！」

「大丈夫だよ、レイ。エミルさんも一緒だし……」

「誰が一緒でもダメじゃ！　我輩が一緒じゃなきゃダメなのじゃ!!」

「うん。わかった……」

大声でそう叫ぶレイニールに、星は頷いて自分の胸にレイニールを抱いた。

結局、寝てしまったエリエをベッドに寝かせ、もう一度キッチンで料理をしようとしたエミルを全力で止めた星は、食材だけを受け取って調理を始める。とりあえず。簡単なところで、目玉焼きとトーストを作ることにした。

ゴーレム狩り2

料理を作るのはキッチンに立ってコマンドから料理を選択、材料を指定の分量を入れれば簡単にできる。

無事作ろうとしていた目玉焼きとトーストを皿に移して人数分を作っていく、思いの外うまくできたことに気を良くした星は手際よく作業をしていった。レイニールがパタパタとテーブルに運んでいた。

テーブルに並べられた4人分の朝食を用意し終わると、簡易的に用意した椅子に腰掛ける。

真っ先にナイフとフォークを手に持って目玉焼きを切り裂くと、口に卵の黄身をベツタリと付けて嬉しそうに両手にナイフとフォークを掲げている。

エミルは興奮気味に、星の作った目玉焼きを見て歓喜の声を上げた。

「——可愛くて料理も作れるなんて、これは将来は立派なお嫁さんになれるわね！ お姉ちゃんのポイント加算も。もう、うなぎ登りよ星ちゃん！」

興奮で震える手で目玉焼きにフォークを入れるエミルを見て、星に向かつてエリエがそつと耳打ちしてくる。

「……エミル姉、一日で性格変わってない？ 何があつたの？ 星」

「はい？ えつと……ぐめんなさい。私にも分かりません……」

エミルの変わりように驚くエリエに、表情を曇らせしゆんと肩をすぼめる星を見て、エリエがあたふたしながら言葉を返す。

「だ、大丈夫だよ！ まあ、本人に聞かないと分からないもんね！ でもまあ。聞ける雰囲気じゃないけど……」

「……はい」

星の作った朝食を幸せそうに食べているエミルを、2人は呆然と見つめていた。

通常の生活スキルを使用して作ったわけだから、味は誰が作っても味は変わらないはずだが、一口一口味わうように食べ進めているエミ

ルを見て。

今エミルに話し掛けたら、完全に彼女を怒らせると感じた2人は、仕方なく目の前の朝食を食べ始める。しかし、すでに1時を過ぎており、朝食と言うよりは遅めの昼食に近い気もするが……。

その後、朝食を終えた星にレイニールが思い出したように告げる。

「そうだ主。ライラという者から、伝言を預かっていたのだ！」

「……ん？　ライラさんから？　それでなんて？」

ライラからという言葉に眉をひそめる星が微かに不信感を抱きながら尋ねると、レイニールはパタパタと星の肩に止まって耳元でささやく。

「あやつが言っていたのは『この事件で使用している『村正』は私の使っていた薬と同じ物よ。そして、あの武器に有効なのは貴女の固有スキルだけよ』て事らしい。我輩にはさっぱり分からないのだ……」

難しい顔をしながら頭を捻るレイニール。

だが、それは星も同じだった。ライラの使っていた薬——そして星の持っている固有スキル『ソードマスターオーバーレイ』この2つに接点という接点を見つけられない。

ライラの使った薬は個人のデータに作用するもの。対して星の固有スキル『ソードマスターオーバーレイ』は光を浴びたプレイヤー全体に作用するのだ……効果も発動条件も全くの別物と言っている。

だとしてもライラが何の考えもなくそんなことを言うはずがない。彼女の言葉にどんな意味が含まれているのかは、全くと言っていいほど分からない。しかし、一つ分かっている事実は——星の固有スキルが必要だと言うことだけだ。

（——良く分からないけど……私の力が皆の役に立つなら、頑張らないと！）

星は心の中で決意を新たににして、拳を握り締めて自分に気合いを入れる。

今まで人の影であり、脇役でしかなかった自分の力が必要とされているなら、全力でその期待に応えよう……この時の星は強くそう心に誓った。

宿屋を後にした4人が足早に城に戻る。

エリエが部屋のドアを開けるとそこには、見知らぬ赤い甲冑を身に纏った男が腕を組んで壁に凭れ掛かっていた。

その男の瞳がエミルを捉え、不敵な笑みを浮かべると壁から背中を放した。

「ほう、お前がああ白い閃光か！俺はメルデイウスだ。お前の噂は、千代の方でも聞いてるぞ！」

メルデイウスはエミルの元に歩いてくると、徐に右手を前に出す。

少し警戒した様な表情を見せているエミルに、彼は微かな笑みを浮かべた。

しかし、出した手前引き戻すわけにもいかず、メルデイウスが言葉を続ける。

「なに、ジジイがなんと言ってるかは分からないが。俺はお前達には敵対しない。まあ、仲良くやろうぜ！」

堂々たる彼の態度とその瞳には、少しの迷いもない。

そんな敵意のない彼の態度に、悪い人間ではないと感じたエミルは、彼の差し出しているその手をがっしりと握り返して微笑んだ。

だが、差し出された手を取らなかったことには、彼が知らない人物ということもあつたが、マスターへの不信感もあつたのかもしれない。

本来は紅蓮の用意したはずのホテルではなく、どうしてここにメルデイウスが居るかという点、それには深い事情があつた。

* * *

それは彼等がこの始まりの街に着いて、ゴーレム狩りに出掛けたところまで時間は遡る――。

ホテル建設に使った費用を少しでも回収するべく、メルデイウスとデュランはダークブレットのメンバー達を馬で引き連れてゴーレム種の多く出現する「グレイ鉱山跡地」に向かっていた。

ゴーレム種は防御力、攻撃力がずば抜けて高い代わりにその撃破報酬も大きい。

この場所は前々から人気の狩り場で、PTメンバー1人を残せば、死んでもすぐに同じ地点に戻って来られるというゲームシステムを利用して、死に戻りを繰り返すことで短期間に多くの資金を調達できる。

しかし、HPを『0』にできないこんな状況では、もはや人気の狩り場ではなく、ただ単にリスクの高い危険な狩り場へと成り果てていた。だが、ダークブレットのメンバーの顔にも、その前を馬でいくメルデイウスとデュランの顔にも一切の恐怖も不安もない。

本来。モンスターとの戦闘は6人のメンバーを構成したパーティーで行うのが一般的で、フィールドのモンスターを狩りにいくのにこれほどの大部隊で行うなど例はない。

荒野に轟音と砂埃を立てながらしばらく進んでいくと、目の前に大きなクレーターが見えてきた。

規模と大きさから、それは巨大隕石でも衝突したかのように巨大な円柱の様になっている。

「皆、止まれ!!」

その場にデュランの声が響き渡り、ダークブレットのメンバー達も一同に馬を止める。

クレーターの端、崖の様になっている部分から中を覗き込むと、そこには岩が連結し人間の様な姿を模ったゴーレム達が闊歩していた。

その色は銅、銀、金と分かれており。色の違いがそのまま、強さと報酬の違いとなっているのだ。

こういう子供でも分かる簡単な仕様が、このゲームの人気に繋がっているということは間違いないだろう。もしも数体に一気に攻撃されることがあれば、それは命に関わるのは間違いない。

メルデイウスは背中に差した大剣を抜刀し、それを高らかに天に掲げる。

「よっしゃー! 俺が狩って狩って狩り尽くしてやるぜ!!」

掲げていた剣を前に突き出して雄叫びを上げると、そのままの勢い

で地面まで続く階段を駆け下りていく。

そんな彼を見てデュランが呆れ顔で、左手で額を覆う。

「――全く、彼は相変わらずだな……皆！ 無理はするな！ 攻撃よりも防御を優先に、敵の攻撃を食らわれないに越したことはないからな。回復は多少のダメージでも怠るな！ 慢心はするなよ？ それでは、一方的な蹂躪を始めよう！」

『うおおおおおおおおおッ!!』

大地を揺らすほどの轟音と咆哮を上げ、メルディウスに続いて馬を走らせて行く。

不敵な笑みを浮かべたデュランは、見た目が薙刀の様な『イザナギの剣』を握り締めながらほくそ笑んだ。

「……俺もこの武器の真価を、この遠征で見定めさせてもらうよ」

部隊の後方に続いて駆けるデュラン。

その先で先頭に行くメルディウスは、感知して階段を駆け上がってくる銅のゴーレムに向かって剣を振り抜く。

剣がゴーレムの体に当たり火花を散らせると、巨体が階段から地面に向かって落下した。

地面に落下したゴーレムは、大量の土煙と共に消滅する。

メルディウスは更に馬を加速させると、馬から飛び降りてゴーレム達の密集している所へと落ちていく。

空中で大斧の姿へと変化した『ベルセルク』を落下点にいる銀色のゴーレムに振り下ろす。

「うおおおおおおおッ!!」

力一杯に振り下ろされた大斧は、銀色に輝く人形のゴーレムに直撃して爆発を起こす。頭部に炸裂して、爆発直後に頭部を吹き飛ばしたことは確認済みだ。

煙が上がっている場所から、まるで鉄柱が爆薬か何かで撃ち出されたかと思うほどの勢いでゴーレムの腕が飛び出してくる。

その拳の風圧で白煙が消し飛ぶと、空中でゴーレムに突き刺さったままの大斧から手を放し、メルディウスは体を捻って攻撃をかわす。隙をみてベルセルクをゴーレムから引き抜くと、素早くその場を離

脱する。だが、彼が地面に着地したと同時に今度は逆の腕が彼を襲う。

一瞬にして辺りに土煙が上がり、彼を包み隠す。そして土煙が消えると、地面に突き刺さったゴーレムの腕に乗っている彼の姿が見えた。

ゴーレム狩り3

ゴーレムはガシガシと岩の連結部を鳴らしながら、頻りに体を動かしている。その様子から見て、どうやらさっきの攻撃で腕が地面に突き刺さってから抜けなくなったようだ……。

「さすが岩の塊だな。凄まじいパワーだ………こいつは返してもらうぜ」

メルデイウスは腕を伝って、ゴーレムに刺さったままになっていたベルセルクを抜き取った。

っと、そこにゴーレムの手が彼を捕まえようと襲い掛かる。

メルデイウスはチラツと見遣って、素早くその腕に大斧を振り抜いた。

「吹き飛ばせ！ ベルセルク!!」

刃が当たった直後、派手に爆発が起こりゴーレムの腕そのものをバラバラに吹き飛ばした。

その刹那。怯んでいるゴーレムにメルデイウスの持っていた大斧が金色の光を放ち剣の状態に戻り、素早く数回斬りつけると、キラキラと光になってゴーレムが消える。

すると、周りに銅と銀色のゴーレムが腰に左手を添え剣を担いでいるメルデイウスの周りを取り囲む。だが、メルデイウスは焦った様子も見せず。楽しそうにニヤツと不敵な笑みを浮かべていた。

「これは選り取りみどりだな！ 行くぜベルセルクツ!!」

持っていた剣が大斧の姿に変わり、メルデイウスがゴーレム達の中に飛び込んでいく。

次々に襲い掛かってくるゴーレムの鉄拳をかわしつつ、素早く振るうベルセルクの爆発能力によって立ちちはだかるゴーレムを撃破しながら「おらおら」と叫んで、黄金に輝くゴーレムに向かって一直線に突き進む。

その姿を遠目で見つめ、デュランが口元に笑みを浮かべると。

「なるほど。そういう事か……」

っと、意味ありげにほくそ笑む。

その後、前を走るダークブレットのメンバー達に向かって叫ぶ。

「金、銀、銅色のゴーレム達はそれぞれ感知範囲が違う！ 銅が最も広く50m程。銀は30m。金はまだ不明だが、接近しすぎるとあつという間にゴーレム達に取り囲まれるぞ。あんな風になー！」

言い終えたデュランは、徐にメルデイウスを指差す。

そこには今まさに金色のゴーレムと対峙し、ゴーレム達に囲まれている彼の姿があった。

彼が突っ込んだのには、ダークブレットのメンバーにその危険性を知らしめる為にはないだろうが、結果的にそうなたただけだろう……。

正直。1体でも厄介な相手なのにも関わらず。彼の周りには、3体の銀ゴーレムと7体ほどの銅ゴーレムが取り囲む様にして立っていた。

10体ものゴーレムに囲まれた危機的状況なのに、そんな状況下でもまだ余裕な表情を見せているメルデイウスは澄まし顔のまま、大斧を肩に担いでいる。

そして小さくため息を漏らすと、面倒そうに言い放つ。

「はあ……たく。こんな奴等、俺のスキルさえ使えば、一撃で全滅させられるのによ——まあいい、まとめて相手してやる。どこからでも掛かってこいよ！」

メルデイウスのその言葉を皮切りに、目の前にいる金色のゴーレムの鉄拳が大砲の弾の如く飛んでくる。

その攻撃を見切つてぎりぎりのところかわすと、直ぐ様メルデイウスの大斧が火を噴く。

地面に突き立てているゴーレムの腕に振り下ろした大斧が、轟音と共に爆発を起こす。

辺りに爆風で撒き散らされた砂塵と白煙が舞う。

(……やったか?)

立ち込める煙の中、眉をひそめながら攻撃を放ったゴーレムの腕を、目を細めて確認する。

しばらくして煙が消え視界が戻ると、メルデイウスは驚愕の表情で

思わず身を仰け反らせた。だが、彼が驚くのも無理はない。渾身の振り放ったつもりだったのだが、傷どころかHPも殆ど減っていないのだ――。

メルディウスが驚きを隠せないと言った表情でいると、そこに間髪入れずに周りのゴーレムが攻撃を仕掛けてくる。まあ、モンスターでしかないゴーレムが人の感情に同情してくれるはずもない。

だがそこは流石はベテランプレイヤー。すぐに気持ちを切り替えて柄を握る手に力を込めると、向かってくるゴーレムに大斧をぶつける。

直後。爆発によって勢いをつけると、爆発の力を利用して重さを増し、変身を解いた大剣を金のゴーレムに振り下ろす。

――ガキンツ!!

鈍い音と一緒に、目の前に激しく火花が舞う。しかし、大きいのは音だけでHPに変化は全くと言っていいほどなかった。

つと言ってもそれも当たり前のことだ。大斧モードのベルセルクの爆発能力でも削れなかつたHPを、爆風を利用したとはいえ。それよりも攻撃力で劣る今の太剣モードの状態で削れるわけがないだろう。だが、それは武器の持ち主であるメルディウスが最も知っている。

彼がこのモードに期待しているのは、パワーではなくスピードである。

簡単に言うると、大技で削り切れないHPを連撃で削り切ろうという作戦に切り替えたのだ。

「二撃で削れないのなら……手数でHPを削ぎ落としていけばいいだけなんだよ!」

そう叫ぶと、目にも留まらぬ速さでゴーレムの体に次々に攻撃を当て続けるメルディウス。

時折飛んでくるゴーレムの反撃をかわし、周りのゴーレム達の介入にも剣と斧でモードを変更しながら難なく対応している。

元々メルディウスの持っている武器は柄の部分に付いた刃を上部にスライドさせることで、大剣から斧へと素早くモードを変更するこ

とができる珍しい可変武器だ。

一撃の破壊力に特化した大斧のモードは、武器とメルディウスの固有スキルの爆発能力によって攻撃力を最大限に引き上げているが。刃が大きい上に、その爆発の度に使用者が振り回されるといって勝手の悪さが、敵に四方を囲まれている今の状況にはマツチしていない。しかも、目の前の金色に輝くゴーレムは刃すら通さない程に強固な肉体をしているのだ――。

だが、休みなく襲って来る岩の拳をいなしながらも、確実に自分の攻撃をヒットさせているメルディウスは、やはり並のプレイヤーではないと実感せざるを得ない。

常人ならば攻撃をかわし、攻撃を繰り返すなんて芸当はそう容易くできるものではないだろう。それは、攻撃を受ける時と攻撃を繰り返す弾かれる瞬間に、必ずと言っていいほどバランスを崩してしまうからだ。

戦闘はリズムと言う者がいるように、テンポ良く攻撃と防御を交互にしかも臨機応変に行わなければ、すぐに戦闘そのものが瓦解してしまう。

口で言うのは簡単だが、それを行うには何度も繰り返す行方。気の遠くなるような反復練習が必要なのである。

そこに馬に乗って階段を下ってきたデユラン達が次々に馬を解除して、雄叫びを上げながら近くのゴーレムに突進していく。

圧倒的な物量差でゴーレムを見る見る内に複数人で個々のゴーレムを包囲すると、次々に武器を振り上げてゴーレムに斬り掛かる。

そこら中で様々な色のゴーレムの体に刃が辺り火花を散らしている中。多くのゴーレム達と対峙しているメルディウスの側にいたゴーレムをいっぺんに薙ぎ倒す。

土煙を上げるほど勢い良く地面に倒されるゴーレム達――突然のデユランの行動に驚いているメルディウス。

しかし、それもそうだ。昔マスターの作っていたギルドで戦っていた時も、味方の窮地に駆けつけるなどということをする人物ではないはずなのだ――。

「礼を言おうと口を開いた直後、メルデイウスの耳に意外な言葉が飛び込んで来た。」

「全く、つまらない男になったものだね。君も……」

デユランは見下したような瞳を向けて、メルデイウスを罵倒する。だが、それを素直に受け入れるほど、メルデイウスは大人しくない。

「——なん……だど？」

デユランを鋭く睨み返したメルデイウスの背後から、黄金のゴレムが大きな拳を振り上げている。

メルデイウスは後ろを振り返ることなく持っていた武器を振りかぶると、次の瞬間には握っていた武器は光を放ち大斧の姿に変わっていた。

「邪魔すんじゃねえー!! てめえーは後回しだ。引っ込んでろ!!」

力任せに振り抜いたその大斧がゴレムの腹部に直撃し、今までにないほどの爆発でその巨体を吹き飛ばす。

メルデイウスの体は爆発のその勢いを殺す為、その場で地面に円を描く様に数回転して止まる。

鋭い眼光をデユランに向けながら、メルデイウスはベルセルクを肩に担ぐ。

「——来いよ。お前から塵にしてやる……」

完全に理性を失うほど頭に血が上っているのだろう。今までにならぬほどの殺気を漲らせ、血走った目で突き刺すような視線をデユランに浴びせている。

彼の自慢の赤い鎧に大人の身長ほどの刃を持つ大斧を持っているその姿は、獣——いや、鬼と言った方が正しいかもしれない。

全身から迸らせる凄まじい闘気と殺気は、デユランの体を押し潰すほどに圧力を放っている。

空気が震えるほどの物凄い圧迫感を一身に受け、デユランは体を震わせ額に冷や汗を流しながらも笑みを浮かべていた。

「……すごい。凄まじい闘気だ……これが本当の彼の力か……」

震える体を精神力で押さえ込むと、にやりと笑みを浮かべ。

「君はさすがだね。一つアドバイスしよう」

「……はっ？ アドバイスだあ？」

「ああ、武器は最大の持ち味を発揮してこそ生きてくるものだよ……それじゃ、俺は彼等の援護に行かないといけないから。またね！」

デュランはそう言って勢い良く跳び上がると、デュランに倒され起き上がった臨戦態勢に入ったゴーレムを足場にしてその場をそそくさと退散する。

ゴーレム狩り4

背中が小さくなっていくデュランの後ろ姿を見つめながら「ちっつ、逃げられたか」と渋い顔をして舌打ちする。

結局一体もゴーレムを倒さなかったデュランはメルディウスを挑発するだけで、何をしに来たかったのか分からない。その直後、チラツと攻撃しようと腕を振り上げるゴーレムの姿を確認すると、振り切られた拳を素早く横に跳んでかわす。

その後も連続して襲い掛かってくる金色のゴーレムの攻撃をかわしながら、デュランの言葉の意味を思い返していた。

(……ベルセルクの最大の持ち味？ そんなの爆発的な破壊力だ——んな事はあいつに言われるまでもなく分かってんだよ！)

メルディウスは飛んでくるゴーレムの鉄拳にベルセルクの刃を当て爆発を起こす。

だが、やはり敵の強固な体に押し負けてしまい。普段より爆発の反動で動作が大きくなって体制を整いきれなくなってしまふ。

「——チツ！」

押し返された勢いを空中で体を回転させることで緩和し、地面に着地したメルディウスは黄金に輝くゴーレムを睨んで舌打ちをする。眉間にシワを寄せて不機嫌そうに大きく息を吐き出す。

考えれば考えるほど、ベルセルクの持ち味を今の状況下では活かせないと確信してイライラが増してくる。黄金のゴーレムの表皮が硬すぎて、爆発の威力も全て自分に返ってきてしまうのだ——。

元々大斧モードはメルディウスの爆発属性を増幅発動させることで、爆発の威力を高めている。だがそれだけではなく、その能力の発動場所は刃なのだ——つまり、刃さえ入ればその部分の損傷を内部から爆発させ傷を大きくすることができる。

その為、一撃の破壊力に特化したベルセルクの大斧モードが有効なのだが、この刃の通らない相手に対しては逆に、ダメージを稼げない上に手数も稼げない大斧モードでは無意味だ。

それどころか疲労が蓄積すれば、攻撃速度の遅い部類に属している

ゴーレム種でも、いずれは隙を突かれて直撃を喰らいかねない。そうなれば、HPを大きく削られてそして……。

彼の脳裏に最悪のシナリオが脳裏を過る。だが、すぐに首を振って不安を払拭すると、柄を握る手に力を込めた。

「なにを細かい事を考えてんだ俺は！　どんな時でも、ベルセルクを全力で振り切るだけだろうがッ!!」

ゴーレムに勢いに任せ、力の限りベルセルクを振り抜くがそれは腕で防がれ。その直後、凄まじい爆発音と共に爆風で得物が押し返されて体が素早く回転する。

体を振り回され体制が大きく崩れて『しまった』と思いつつ、瞬時に刃を逆に切り替えて、その勢いそのまま黄金のゴーレムの腹部に刃を捉える。

つと、今まで全く入らなかった刃が爆風の勢いがあったおかげかゴーレムの体に突き刺さり、メルディウスはニヤリと口元に笑みを浮かべ。

「――吹き飛ばせ！　ベルセルク!!」

その彼の掛け声の後、爆発が起きてゴーレムの体を真っ二つに弾け飛ばす。

同時に黄金のゴーレムのHPが『0』になり、その体が光に変わって空へと吸い込まれていった。

その後も自分の爆発で威力を増したベルセルクの刃で、次々にゴーレムを撃破していく。

遠くでそれを見ていたデュランは口元にニヤリと微かな笑みを浮かべ、盾を持った重鎧の剣士が銀色のゴーレムを足止めしながら、その後ろから様々な武器を持った3人が時折攻撃をしていた。

しかしその後ろには、2人が座り込んでヒールストーンで回復している。

基本的にゴールド以外は1パーティーで対応していた。だが、ゴーレム種の防御力の硬さと攻撃力の高さはフィールドのモンスターの中でも高位に属していて手練の多いダークブレットのメンバーでも、手を持って余すほどの相手だった。

周りで戦っている者達も始めの勢いは徐々に薄れ負傷者も多く、明らかに回復が追い付いていない。そこにデュランが走って来て、持っていた薙刀を振るう。

銀色のゴーレムの残りHPの全てを減らして、ゴーレムは光に変わる。

「敵は次々に湧いてくる。あまり躍起になる必要はないよ」

「は、はい！　ありがとうございます！　兄貴！」

「——ッ!?　あに……」

槍を手にした中肉中背な少年に『兄貴』と呼ばれたデュランは一瞬眉をひそめ、次に戦況が悪い者達のPTへと向かった。だが、彼は不愉快と言うわけではなく、ただ言われ慣れていなくて照れたと言う方が正しいかもしれない。

普段の彼はこんな面倒な事をする様な性格ではないのだが……今の彼は明らかに、このダークブレットという組織に何らかの思い入れを持っているのは間違いない。いや、そこは元ダークブレットのリーダーに——なのかも知れない。

その後も、デュランが次々に戦闘に介入しては、ゴーレムを撃破していくというのを繰り返していたのだが、いくらなんでも次々に湧いてくるゴーレムと疲弊していく仲間達を全て一人で面倒見るのは不可能だ。

「いちごっこのように続いていくこの状況にさすがに痺れを切らしたのか、彼は徐にイザナギの剣を自分の前に突き出す。

「……こんな所ではまだ使いたくなくなっただけだね……仕方ない。いでよ！　我が血族達！　五芒星の神徒」

デュランの足元に白い光る五芒星が現れ、彼を囲む様に5体の人影が突如五芒星の5角の端の部分から順番に現れた。

そのうちの4人が白、青、黒、黄色の鎧兜を着用していて、兜の下には面頬を付けていて口からは白い息を吐いている。

もう1人は地面に付くほどに長い黒髪に、赤い装飾品を散りばめた白い着物に身を包んだ女性だが、この者も顔には般若の面を着けている。

だが、容姿よりもつと不可解彼等の頭上に現れている表示だ——そこには白い鎧兜が『綿津見』青い鎧兜が『大山津見』黒い鎧兜が『須佐之男』黄色い鎧兜が『月詠』そして白い着物に般若の面を着けた女性性が『天照大御神』と表示されていた。

プレイヤーはプライバシー保護を理由に、パーティーかフレンド登録をしない以外。名前を知ることとレベルを知ることすらできない。そのことから推測するに、おそらくはモンスターかNPC扱いなのだろう。

デユランが周りに居る彼等を見渡していると、その中の青い鎧兜。大山津見がデユランの方を向いた。

次の瞬間、彼が口を開く。

「ん？　なんだ？　こいつ、前の持ち主と違うぞ？」

「まあ、前の使い手は俺達を道具の様に使っていた。今回の持ち主はそうでない事を願いたいな大山津見」

大山津見の声に答えるように、黒い鎧兜の武者が言った。

てつきりその甲冑を身に纏って顔を隠している容姿から、年配の男達が設定されていると思っていたのだが実際には随分と若い男の声で驚く。

それもだが、彼等はまるで意志を持って会話をしているように見えた——いや、間違いなく会話している。

これはNPCでもモンスターでもありえない。いや、あつてはならないことだろう。

ゲームを楽しむのはプレイするプレイヤーであり、NPCやモンスターは本来、木や岩などのオブジェクトと同じ既存のシステムなのだ。

もしも、既存のシステムでAIがなければ動けないがNPCが勝手に動き出したら、不満を募らせたNPC達がいつ暴動を起こしてもおかしくない。しかし、目の前に現れたこの武者達は間違いなく会話をしていたように見えた。だが、すぐにその疑問は確信に変わる。

「まあ、所有者が変わることは二度目なのだから。慌てるほどでもないでしょう……もし、取るに足らない使い手なら、私が片付けますよ

……」

白い鎧兜の綿津見が甲冑とは真逆の黒さを感じる発言と、チラリと懐に隠した短刀が光るのが見えた。しかも、間違いなくデュランに見えるようにしているのが彼の中の闇を感じさせる。

デュランはそんな綿津見に親近感を抱きながら、平静を装って彼等に命令した。

「君達は俺の出した式神なんだろう？　なら、俺の言う事を聞いてもらうよ。見て分かるように今は戦闘中だ、君達にはその支援に回ってもらおうと思うんだけどいいかい？」

まあ、命令というより交渉に近いかもしれない。

未知の存在に警戒するのは当然のことで、何もおかしなことではないだろう。しかし、彼等はデュランの出した式神。もちろん。その所有者はデュランであるのだから、畏まる必要はないかもしれないが。「ふん。どうせ俺達には拒否出来ない事を知ってて言ってるんだらう」

「仕方あるまい大山津見。我等は、元よりそういうものよ……」

黒い鎧兜の須佐之男が、不満そうな大山津見の肩に手を置いて告げる。その後、兜の間から赤く鋭い視線がデュランに向けられた。

兜と面頬の隙間から光る赤い瞳に、何かやデュランは心の中を見透かされている気がして、あまり良い気分ではない。

「だがな。主様よ、我等はそのイザナギの剣の守護者だ。他の武器スキルを使用したと同時に消失する。それだけは覚えておくといい」「分かった」

そう言い残し。須佐之男はゆっくりと頷くと、それに答えるように周りの者達も頷き返す。

直後。彼等の体が光り輝いて、それぞれに四方に散っていった。彼等の協力もあり。戦況を持ち替えたデュラン達は、4時間ほど狩りを続けた末。日がすっかり落ちたことを理由に戦闘を終えた。結局。その日の稼ぎは短時間で400万ユールだった――。

怪我人は多く出たが、ホテルに行けばその日の内に回復できるので、実質的に損害は出ていない。

まあ、一番は死者を出さずに済んだということだろう。だがそれも、デユランの召喚した5体の式神とメルデイウスの無双があつてこそなのだが……。

ゴーレム狩り5

月明かりを受け、地面に立ち尽くしているデュランに須佐之男が声を掛けてきた。

「では主様よ。我等は戻るとしよう」

「ああ、ご苦労様」

素っ気ないほどに短いやり取りだったが、須佐之男は満足したように「また何かあれば我等を呼ぶといい」と言い残して消えた。

そこにメルディウスが大斧を担いでやってくる。

「おう！ そつちも無事なようだな！」

ゴーレムを力の限りねじ伏せていたからか、先程のデュランとのやり取りが嘘のような清々しい表情だ。

デュランは安堵した様な表情でメルディウスを見た。

今はデュランとしてもメルディウスと事を構えるのは避けたかったのだろう。

固有スキルを使用できない今のメルディウスでも、武器スキルと戦闘能力だけならデュランより遙に高い。

また、デュランの固有スキル『アブソープ』でメルディウスのスキルを使用してもいいのだが、己と共に周囲を滅する彼の固有スキル『ビッグバン』を使用しようして彼と心中しようとは思えない。

四天王の中でも一二を争うのは、固有スキル『ビッグバン』のメルディウスと『ナイトメア』を持つバロンだろう。デュランと紅蓮の持つオリジナルの固有スキルも強いのだが、紅蓮の『イモータル』はモンスターとの戦闘向きで対人戦には不向きなスキルだ。

死なない為。無謀な攻撃を繰り返し多くHPを削り、また長期戦になっても確実にモンスターを撃破できる。

また、デュランの固有スキル『アブソープ』も同じで個人戦向きではない。この固有スキルはモンスター戦でも対人戦でも周りに固有スキル持ちがいて始めて始めて本領を発揮するスキルだ、汎用性が高いスキルだからこそその欠点は否めない。

ずば抜けた戦闘スキルの高さに加え、奥の手があるメルディウス

と、他者を圧倒する制圧力があるバロンには遠く及ばないのだ。

大きく伸びをして「腹が減ったな」と言つて、召喚した馬に跨がるメルデイウスを見て。

『こないいい加減な奴に……』

つと内心苛立ちを隠せないものの、疲労しているのは自分も同じ。ここは不服ではあるが、彼の行動に同調せざるを得なかった。

自分も馬を出して背中に跨がると、現ダークブレットのリーダーであるデュランと同じように馬を出して、それに跨がるメンバー達に声を大にして叫ぶ。

「よし！ 皆帰るぞー!!」

『おぉー!!』

その言葉に歓声にも似た声を上げ、デュラン率いる大部隊がゴーレム達の住み処を後にした。

始まりの街に戻った彼等は今日の労をねぎらう為、街にある飲食店を満席状態にして酒やジュースを掲げ乾杯した後に食事を取り始める。

街に着いた直後はへとへとだった彼等も、今はそんな顔一つ見せることもなく目の前の食事を次々に胃袋に収めていく。その勢いは、あれほど激しく動いた後に良くこんな食えるなつと感心するばかりだ。

大きな氷を一つ入れた小さなグラスで、ゆっくりとウィスキーを飲んでいゝデュランの肩に手を回し、メルデイウスが大きなグラスにハイボールを手にして大声で笑っている。

既に出来上がっているメルデイウスに、不愉快そうに眉をひそめながら告げる。

「……俺はゆっくり酒を飲みたいんだ。君はどこかに消えてくれないか?」

「あははははっ!! 相変わらず辛気臭い野郎だなくお前は! 酒はわいわいがやがや飲むからうめえーんだろうが! ほら、おめえーももっと飲め飲め!」

着ている鎧と同じくらいに顔を真っ赤に染めながら、メルデイウス

はジョッキグラスの中のハイボールをデュランのグラスに溢れるまで注ぐ。

その直後、イライラが頂点に達したのかデュランの握っていたグラスがバキツとヒビ割れる。

「——店員さんすまない。新しいのを頼むよ」

近くに居た店員を呼び新しいグラスを受け取った。

それを見たメルディウスは、更に上機嫌でハイボールを飲み干した。

「俺ももう一杯！」

店員からハイボールが入ったグラスを受け取ると勢い良く飲み干していく、それはもう浴びるように……。

だが、それは彼だけではなく、周りのダークブレットのメンバー達も羽目を外して各々で楽しんでる様子だった。そんな時、外から悲鳴が聞こえてくる。それも1人、2人ではなく相当大勢のものだ。

デュランの肩に腕を回し、酔ってゲラゲラと笑っていたメルディウスの表情が嘘のようにキリツとした目でデュランを見た。

その瞳を見たデュランも悟った様に小さく頷くと、突如走り出してガラスを突き破って外に飛び出す。それを見たメルディウスも勢い良く窓に向かって全力疾走して、ガラスに向かって飛び込んだ——
——はずだった。

次の瞬間、彼を待っていたのは窓ではなく、窓と窓の間の支柱に激しく激突した。

——ドカツ!!

大きな音と共に額を押さええながら、瞳に涙を浮かべその場に座り込んでいるメルディウスは逆ギレ気味に叫ぶ。

「誰だよ！ こんな場所に支柱なんて設定した奴は！ 緊急時邪魔じゃねえーかつ!!」

まあ、緊急時に窓から飛び降りようとする者の方が少ないと思うのだが……。

八つ当たりのように壁をもう一度殴り付けると、尚もブツブツと文句を言いながらも、メルディウスはガラスを突き破って外へと飛び降

りた。

打ち上げをしていた会場の二階だったが、レベルがMAXの彼等はこの高さから飛び降りても何のダメージもない。

レベルによるステータスも関係あるが、システムではある一定の高さ——即ち大きな建物の屋上か崖の上からでも落ちない限りは、HPへのダメージ計算しないので死亡することはまずない。

地上に降り立ったメルディウスは、鞘に差したままのベルセルクを取り出した。目の前には、イザナギの剣を握り締めているデュランが立っていた。

そこには外を黒い刀を振り回しながら、辺り構わず斬り伏せている男の姿があった。

その瞳は狂気に満ちていて、ニヤリ不気味な笑みを浮かべ、向かってくる者はもちろん。背を向け逃げる者達をも、躊躇なく無差別に斬り殺している。

月明かりを受け黒光りする刀に斬られた者は例外なく光の粒子となつて空へと消えていく。

「……あれは、俺のダーインスレイヴやイザナギの剣と同じか？」

「俺は先に突っ込む！ お前は後から来い！」

小さく呟いているデュランを置いて、メルディウスが先陣を切つて突っ込んでいく。

黒刀を持った男も、大剣を持って走ってくるメルディウスに気付いて突進してくる。

2人の距離が詰まり、男がメルディウスの右肩を狙つて突き出した刀身を体を捻つてかわしながら、構えた大剣が大斧の姿へと変わり。

「うらあああああああああッ!!」

雄叫びと共に振り抜かれた大斧の刃が男の腹部に直撃し、爆発を起こして男の体を吹き飛ばした。

男は土煙を上げながら派手に地面を転がって、しばらくして止まった。

ゴーレム狩り6

メルディウスは大斧を肩に担ぐと、目を細めながら地面に倒れたまま微動だにしない男を見た。

「——手応えはあった。……やったか？」

しかし、地面に転がっている男の手には、相当の勢いで吹き飛ばされたはずなのだが、しっかりと黒刀が握られていた。

いくらベルセルクを持ったメルディウスでも、Lv100のプレイヤーを一撃でHPの全てを減らし切るのは無理だろう。

ベルセルクもそれほど性能が壊れている武器というわけでもない。メルディウスが使えば十分に壊れ武器なのだが……レベルが同じなら、一撃で仕留めるということはありえない。また、それ以外にも防具の性能によつて大きくダメージ量は上下する。しかしそれでも、相当なダメージは与えたはずだ。もし動けたとしても、もうメルディウスとはまともにやりあえない程度には……。

つと次の瞬間。男がむくつと起き上がり、手に持った黒刀を構え直す。

その顔には苦痛の色はなく、逆に狂気じみた微笑みを浮かべている。

(くつ……これで沈まないのかよ。こりや本気でやるしかねえーな……)

眉をひそめたが、すぐに決意に満ちた眼差しで肩に担いでいた大斧を構え直す。

「ふふふつ……アハツハツハツハツ!!」

黒刀を握り締め、狂気に満ちた笑い声を轟かせながら全力疾走してくる。

メルディウスは刃の当たる寸前に体を捻り紙一重でかわすと渾身の一撃を振り下ろし、相手の刀を地面に叩きつける様にして押し折った。次の刹那、刀がガラスの様に砕け散って跡形もなく消える。すると、男の瞳に光が戻り、激痛から腹部を押しさえて地面にへたり込んだ。

戦闘を止め、叫び声を上げながら地面にうずくまる男に、メルディ

ウスは困惑した様な表情で見下ろしている。

「な、なんだ?」

メルデイウスは突然のことに驚き、大きな『?』を頭の上に浮かべている。

「そんな、武器を壊されたくらいで……それとも、そんなに高いものなのかツ!」

「はあ……君はバカなのか?」

首を傾げている彼の元に、デュランが冷静な声音で近付いてきた。

「これは武器に何か細工されてたんだらうね。その証拠に……」

デュランは徐に遠くの方を指差すと、新たに黒い刀を手にしたエルフの男が暴れている姿が見えた。

バカにされたのが相当気に入らなかったのだろう。メルデイウスはむっとしながらベルセルクを肩に担ぎ。

「なに冷静に調子ぶっこいてんだ! 次に行くぞ!」

「はあ……相変わらず関わりたくないタイプの人間だね。君は……」

先に走っていったメルデイウスの背中に、デュランは皮肉を吐きながらも付いていく。

そんなことが一度や二度ではない。異変はほぼ街の全域で起こっていたのである。しかも、どの事件も首謀者の持っていた武器は黒い刀でそれを破壊すると、皆例外なく人が変わったように大人しくなるのだ――。

これにはさすがのメルデイウスとデュランも首を傾げるばかりだった。

こんなことは過去に例をみないことだ。武器が原因なのははつきりしているのだが、破壊してしまっただけはその武器を調べることができない。特定の武器には実際に装備しなければ『?』と出るだけで、詳細なステータスを確認することもできないのだ。

これはこのゲームのシステムを熟知した人物が、事件の裏で糸を引いているのは明らかに思えた。

全ての事件に共通しているのは黒い刀。そして、その武器の使用者がそれを『村正』と呼んでいたことくらいか……。

だが、実際に殺害された者も大勢出ている状況で、こうも脈絡もなく次から次へと現れてはキリがない。

「くそっ！　どうなってんだよいったい！」

苛立ちを露わにしたメルデイウスが、不機嫌そうに地面を強く蹴つた。

その隣でデュランが顎に手を当て考え込んでいる。

撃破してしまえば簡単なのだが、武器破壊を前提に戦うとなれば難易度は格段に上がる。

問題は武器の耐久力を奪う為に、自分の使っている武器も摩耗していくということにあった。

正直、この戦闘でメインの武器を擦り減らすのは得策ではない。しかし、だからと言って本能のままに動く相手に街売の安い武器を使うのもリスクが大き過ぎる。

要は、相手の真の狙いは内輪揉めによる消耗戦なのは、誰が見ても明らかなのだ――。

つと、徐にデュランがメルデイウスに向かって告げる。

「……これは面倒くさいね……俺はちよつと用事を思い出した。後は君に任せるよ」

「ちよつ！　今、お前面倒くさいって言っただろ！　待ちやがれバカ野郎！」

脱兎の如くその場を走り去っていくデュランに舌打ちをしながらも、大斧を肩に担いで次の獲物を探しに歩き出そうとしたその時、視界にメッセージが表示される。

そこには「紅蓮様よりメッセージが届いております」と簡単な文章が並べられていた。

その場所を指で突くと、目の前にでかかどメッセージの内容が表示される。

『メルデイウス。千代の本部で異常が発生したと連絡がありました。至急ボイスチャットを飛ばして下さい』

形式的な文章だが、メルデイウスには事の重大性を感じ取ることができた。紅蓮が『至急』と付けるのは余程のことだったからだ――。

本来、彼女は何事もギルドマスターであるメルデイウスに通さずに自分で対応する性格。

それが至急連絡をくれと言っているのだ。相当退つ引きならない事情があることが、メルデイウスにはすぐに理解できた。

コマンドのフレンド欄から紅蓮の名前をクリックしてボイスチャットを押す。

すると、数秒もしない間に紅蓮が応答した。

『メルデイウス。ホテルにも居ないで、どこで油を売っていたんですか?』

ボイスチャット越しに普段と同じか、割り増しで無感情な声で紅蓮が尋ねてくる。

その声音にほっとしたように息を吐き出すと、メルデイウスも彼女の質問に答えた。

「ああ、実はデュランと一緒に——」

『——そうですか、そんな事はいいです』

「……………」

言葉を遮られ、また興味もなさそうに言葉を返す紅蓮に、メルデイウスはあんぐりと口を開けたまま呆然としていた。

その直後、ボイスチャット越しに紅蓮が言葉を続ける。

『実は、千代で村正という武器を持ったプレイヤーが暴れていると、ギルドメンバーから連絡を受けました。それで、至急ギルドマスターである貴方の意見が聞きたい。との事です』

「村正……ああ、それなら俺も。今まで相手してた奴が同じ物を持っていたな」

『交戦したんですか!?!』

珍しく驚いたような声音で聞き返してくる紅蓮に、メルデイウスは素っ気なく「ああ」と生返事を返す。

すると直ぐ様、不機嫌そうな声で紅蓮が言った。

『…………メルデイウスが戦う方が迷惑です。自重して下さい』

「いや、俺が戦っていないければ、もっと大変な事態になってたんだぞ?」

『——つという事で、私は一度千代に戻ります。白雪と小虎も連れていくので、お願いします』

華麗に言葉をスルーしながら、紅蓮はさらっと重要な発言をした。だが、紅蓮のその発言にメルディウスがすぐに抗議する。

「いやいや、小虎は置いていけ！俺だけをジジイとその仲間の連中と一緒にする気かよ！」

メルディウスのその言葉を聞いて、しばらく間を開けて紅蓮が渋々とといった感じで答えた。

『分かりました。それでは、小虎はこちらに置いていきます。何かあったらメッセージを送って下さい』

「ああ、分かった。……気をつけてな」

『私はそんなにやわじやないです。貴方と一緒にしないで下さい……』

最後に毒づいて、紅蓮はボイスチャットを切った。

紅蓮のことは心配だが、マスターとの約束を無下にするわけにもいかない。

一抹の不安は抱きながらも『紅蓮も四天王だ。無理はしないでらう』と自分の心に言い聞かせ、再び上がった悲鳴の方へと走っていった。

結局、翌日の朝まで事の沈静化に当たっていたメルディウスは、くたくたになりながら街を徘徊していた。

「はあく。さすがに堪えるな……ん？」

霞む視界に、紅蓮からのメッセージの表示が見えた。

メルディウスがそれを開くと、一枚の地図が表示される。そこには赤いマーカーでチェックが入っていて、付属しているメッセージには……。

『この場所にマスターが居ます。今後の事を直接会って話し合っていて下さい。【追伸】くれぐれもマスターと喧嘩しない事。』

つと書かれていた。どうやら、メルディウスは彼女に相当信用されていないらしい。まあ、普段の紅蓮と仲間達の対応を見れば分

かったことだが。

その文章を見たメルディウスは口を尖らせ「んな事するか」と不貞腐れるように呟いて、地図の場所に向かって歩き出す。

紅蓮のメッセージの地図の指し示す場所は、街から大分離れた湖畔にそびえ立っている洋風の城だった。肩にベルセルクを担ぎながら、怪訝な顔でその城を見つめるメルディウス。

それも無理はない。メルディウスはテスターと呼ばれ、ベータテスト時代からこのゲームをプレイしている自他共に認める古参のプレイヤーだ。ベータ版の時から長い間このゲーム内でプレイしている彼でも、こんな街から離れた不便な場所に住んでいるプレイヤーなんて今までに聞いたこともない。

不審に思ったメルディウスは直ぐ様、紅蓮にボイスチャットを送る。数秒後、紅蓮が不機嫌そうにメルディウスのボイスチャットに応答する。

『……なんですか?』

「いや……今指定の場所に着いたんだが、本当にここでもいいのか?」

『はい。そこは有名な『白い閃光』の所有しているマイハウスですよ』

「何ッ!? あの戦う姿が美しすぎて、非公認のファンクラブもあるあの白い閃光かッ!?!」

『どうでしょうね。私は詳しくないので分かりませんが……忙しいのでもう切ります』

またも一方的にブツツと切られ、メルディウスは不思議そうに首を傾げながら。

「——何を怒ってるんだ? 紅蓮のやつ……」

っと呟きながらもふらっと歩き出し、湖に映った自分の姿を確認して、ベルセルクをアイテム内にしまうと、眼前にそびえ立つ城へ向かって歩き出した。

ゴーレム狩り7

エミルの手を握って、満足そうな笑みを浮かべているメルディウス。

そのやり取りをエミルの後ろで様子を窺っていた星は赤い鎧を着ている見知らぬ男に、なんとも言えない恐怖を感じた。それは彼の体から滲み出る何かを感じた、動物の本能的な勘としか言いようがない。

(この人は怒らせてはいけない……)

直感的にそう感じた星が俯き加減に数歩後退ると、突然廊下側から何者かの駆けて来る音が聞こえてきた。

次の瞬間。ドアが突然勢い良く開き、そこから中学生位の男の子が飛び込んできた。

「ちよつと兄貴！ どうして僕は姉さん達と一緒に帰れないのさー！」

「おう、やつと来たか小虎。遅いぞー！」

視線だけを向けたメルディウスに、小虎はだだをこねるように更に言葉をぶつける。

「姉さんが『メルディウスが小虎が居ないと寂しいと言っていましたので、不服だとは思いますが。小虎はこのままここに残って下さい』と言ってたんですけど！ 兄貴ももういい歳なんだから、そろそろ1人で行動できるようにしなよ！ そんな人が同じギルドで、しかもギルドマスターなんて僕も恥ずかしいよ!!」

「はあ!? 誰が寂しいだつてー!!」

瞳に微かな涙を浮かべてビシツと指差しながら言い放つ小虎の方に、大きなドタドタと足音を立てて走っていくと、小虎の後ろに回り込んで首の辺りを腕で締め上げる。

小虎はジタバタしながら必死の抵抗を見せ「だって、ほんとのことじゃないか」と叫ぶ。

そこにタイミングがいいのか悪いのか、部屋に備え付けられている浴室の脱衣所からバスタオルを体に巻き付けたミレイニが飛び出て

きた。

目の前で羽交い締めにされている小虎と、ピタツとミレイニの目が合った。

「あははははっ！ なにしてるんだし！ 超かっこ悪いしー」

指差しながら大笑いしている。

自分はバスタオル一枚という格好で、よくもまあ人を貶せるとは思うが、それは彼女の見たものに、そのままツツコミを入れるという条件反射的な行動なのだろう。

すると、小虎が顔を真っ赤にしてメルデイウスの腕を振り解いて部屋の外へと飛び出してってしまう。

「うわあああああああゝっ！」

突如飛び出していった小虎を見てミレイニが首を傾げていると、その後ろにエリエが目を引き攣らせむっとしながら立っていた。

突然ビクリと体を震わせ、圧倒的な威圧感にミレイニが恐る恐る振り返る。

「——ミレイニ。どうして着替えてから出てこないの！」

後ろに立っていたエリエはしっかりと服を着ていて、そのことから着替えている最中にミレイニが勝手に飛び出していったことが推測できる。

腕を組んだまま立ち尽くしているエリエに、ミレイニが慌てふためきながら。

「い、いや……何と言うか……わ、忘れてたし……」

「……忘れてたって？ 忘れてたじゃないでしょ!!」

顔を引き攣らせているミレイニの頬を、エリエが思い切り引っ張った。

「——ほら、ごめんなさいは？」

「ほえんなあい、ほえんなあい」

瞳に涙を滲ませながら痛みから逃れようと手足をバタバタ動かししているミレイニと、その頬を引っ張っているエリエに向かってエミルが尋ねた。

「そう言えば、エリーとミレイニちゃんはどうしてお風呂に入ってた

の？ 昨日は入らなかったの？」

その言葉を聞いたエリエは、呆れながらミレイニの頬から手を放した。

真っ赤になった頬を撫でているミレイニを余所に、困った顔をしたエリエがエミルに叫ぶ。

「聞いてよエミル姉！ この子だったら、私の横で寝てたはずなのに朝起きたらいなくて、探してたらなにしてたと思う？」

顔が付きそうになるほど予想以上に詰め寄ってくるエリエに、エミルは苦笑いしながら「なにをしたの？」と聞き返す。

すると、エリエが口を尖らせながらミレイニの方を一瞬見遣って大きなため息とともに頭を押さえる。

呆れ顔のエリエとは対照的にミレイニは普段と変わらず「なんだし？」と不思議そうに首を傾げた。

「はあ……私はこの子がこんなに馬鹿だと思わなかったよ……」「なにがあったの？」

その問い掛けにエリエは徐に口を開くと、事の次第を説明し始めた。

湖の主

それは今朝の話だ――。

エリエが目を覚ますと、昨晚一緒に寝室で眠っていたはずのミレイニがどこにも居なかった。

『まあ、目覚ましに顔でも洗いに行ったのだろうか』

そう思っただけはそれほど気にしていなかったのだが、いつまで経っても戻ってくる気配のないミレイニに、徐々に不安が募り星の一件もあつてか、どこかに逃亡したのではないか……っと思つた。

現に、昨晚はエミルが星と2人で出掛けたことにむしゃくしゃしてマカロンをやけ食いしていたところを、ミレイニに食べようとしていた最後のマカロンを取られたことで怒つてしまった。

「やつぱりちよつと心配……探しに行こう！」

ベッドを飛び出してモコモコした羊のパジャマから装備に着替え、外に出るとことのほか早くというか城を出た直後に彼女の衝撃的な姿を目の当たりにした。

なんとミレイニはまだ空が薄暗い早朝から、目の前にある湖の中を泳いでいたのである。しかも、パンツ以外何も身につけない状態で……。

それが普通と言えば普通なのだが、この世界はゲームであり。リアルの普通はそれには適用されないものだ。

第一この世界でも現実世界でも、誰も居ないにしても。湖をパンツ一枚で泳ごうと考える女の子はまずいないだろう。そしてよく見ると、その下に大きな黒い岩の様な物が確認できた。しかも動いている……。

つと、突如その岩の様な何かが水面から、まるでクジラが飛び出すかの如くド派手に姿を現す。

その物体の全貌を見た瞬間、エリエは思わず言葉を失う。いや、その表情は引き攣っていた。

それもそうだろう。水面から飛び出てきたのはクジラではなく、とても大きな山椒魚だった。

驚き目を丸くさせているエリエをミレイニが見つけ、大きな手で手を振った。

「やつほく、エリエく」

巨大な山椒魚に乗りながら満面の笑みで、ブンブンと振っているミレイニを見てエリエは呆れ返って顔を覆う。

「全く……どうしてあの子はいつも……ちよつとこつちに来ない！ ミレイニ！」

「ん？ ——ッ!!」

どうしてエリエが怒っているのか分からずにきよとんとしているミレイニだったが、エリエが手をわきわきさせているのを見てビクツと体を震わせ、すぐすぐと岸に向かって戻ってきた。

まあ、これ以上怒らせるよりも。早めにお仕置きを受けた方がいいという判断をしたのだろう。

岸に着くと、巨大な山椒魚はその大きな体を、ドカンと陸地にへたり込むようにして2人をその大きくてつぶらな瞳で見据えている。

近くで見ると、その大きさを再確認させられる。例えるなら、樹齢千年を超えた大木のように太い胴体と全長は下半身は湖に沈んでいて分からないが、尻尾まで含めると相当な長さだろう。

その背中から降りたミレイニがおずおずとエリエの前に出てきた。

「……な、なんだし？」

腕組みしてかんかんになって怒っているエリエに、ミレイニが怯えながら顔色を窺うようにして尋ねた。

エリエは怒った表情を崩さずに無言のまま、ほぼ全裸に近い彼女の体を指差す。

その指先が差す場所を目でなぞって、ハツとしたように自分の姿を見下ろし、慌ててミレイニが弁解する。

「こ、これは……水に入るから脱いだし」

「どうして水に入るから脱いだのか、詳しく理由を教えてください？」
拳を強く握り締め、にかつと微笑みを浮かべるエリエ。

だが、ミレイニはその笑顔にエリエが許してくれたと勘違いしたのか、堂々と言い放つ。

「そんなの決まってるし！ もちろん！ 気分だし！」

「ほお。気分……ねえ」

清々しいほどに屈託のないその笑顔に、エリエの中で抑えていた何かが弾け飛んだ。

直後。エリエの両手がミレイニの頬を摘み上げる。

「いはい！ いはいひひ！！」

「——私も今……すっごく、ミレイニの頬を引っ張りたい気分なのよねえ」

両手をバタバタと動かし、暴れているミレイニの頬を不敵な笑みを浮かべたエリエが更に強く引っ張った。

どうしてこれほどエリエが怒っているかと言うと、フリーダム内のゲームシステムでは服などは汚れたり切れたりしても装備し直せば元通りになる。

また、服のまま水に入ると濡れはするもの。水の中で服が重くなり動きが鈍るなどはなく、水中でも裸体で水に入った時となららかわりのない動きを取れる仕組みになっている。

だからこそ、エリエは裸で湖に入る必要はないのに、パンツだけで湖に入ったミレイニにこれほど怒っていたのだ。そして、彼女の格好以上に気になるのは……。

今、隣で横たわっている巨大な山椒魚を横目で見た。

ミレイニの頬から手を放し、腰に手を当てながら横にいる山椒魚を見上げた。

「それにしても……これ大きいわよね」

「でしょー。この池で見つけたんだし！ 一度は食べられそうになっただけど、なんとかタイム……できた……し」

自慢げに話していたミレイニの瞳に、目を吊り上げて手をわきわきさせているエリエの姿が目に入り顔を引き攣らせる。

その直後、ミレイニの不安が現実なものへと変わり、再びエリエに頬を引っ張られた。

「いはいひひ」

「どうしてそんな危ない事をするのかな？ あなたは〜！」

「へもくかあひひかあ〜」

「どんなにかわいくても、危ないことはダメでしょ〜?」

ミレイニの頬をグリグリと引つ張りながら、エリエの目と眉が更に釣り上がる。

「ほら、ごめんなさいは?」

「ほえんはない! ほえんはない!!」

ミレイニが謝ったことで、仕方なくエリエは頬から手を放す。諦めたような小さなため息の後に短く「早く服を着なさい」とだけ告げた。

瞳を潤ませ頬を撫でていたミレイニはまた頬を引つ張られたら堪らないと、慌てて装備欄を開いて服を装備した。

「こ、これでいいし?」

つとエリエに尋ねると、エリエは満足そうに頷く。

そして、もう一度巨大な山椒魚の方を見て困り顔で眉をひそめた。

「でも、私もエミル姉のマイハウスには、事件前からちよくちよく来てたけど、こんな大きいの見たことないんだけど……」

巨大な山椒魚を見上げてわずかに顔を引き攣らせていることから、エリエは爬虫類系は嫌いなのが見て取れる。

その後、巨大な山椒魚の体からは想像もできないような小さくつぶらな黒い瞳がキラキラと輝きながらエリエを捉え、エリエの背筋に悪寒が走った。

「ちよつとミレイニ! その大きなトカゲ、しまいなさいよ!」

エリエは少し裏返った声で言うと、ミレイニはどうしてしまわなければならぬのかと言わんばかりに首を傾げていた。

彼女にとつては、このオオサンショウウオのようなルックスにつぶらな瞳の一見妖怪の様な容姿のこの生物に、他のペットと同じ情を持って居るのだろう。

気持ち悪いとは思いつつ、ミレイニを傷付けないようにできるだけオブラートに包んで伝えなければ……と捻り出した言葉は「このままじゃ、体が乾いちちゃって可哀想でしょ?」だった。

その言葉を聞いたミレイニにも納得したのか、ポンつと手の平を叩いて巨大な山椒魚の方を向いた。

「それじゃ、また後でね。ナポレオン」

巨大な山椒魚は無言のまま、ゆっくりと巨大な体を回転させるとのしのと重い足取りで湖の中へと戻っていく。それを呆然と見つめながら『湖に戻るのかよ……』と思いつながら、そつと巨大な山椒魚を記憶の中から消去した。

まあ、こんな妖怪か怪獣の類のまさにモンスターにも歴史上の偉人の名前を付けるとは……。

つということがエミル達の居ない間に起きていたのだ。

事の次第を説明し終わると、エリエはエミルに同意を求める様に。

「もう信じられないでしょう?」

そう詰め寄ると、エミルも困った様子で苦笑いをしながら「それはさすがにね」と仕方なく相槌を打つ。

この時のエミルの心の中には『エリエも対して変わらない』という思いがあつたが、それをエリエに告げることはなかった。すると、エリエは「ほら」とミレイニに告げる。

ミレイニは渋い顔をして俯いたが、このままでは自分の立場が悪くなると感じてすぐに反論を始めた。

「だって! 湖に入っちゃえば誰も見てないし。それに、別に男子に見られたってどうって事ないし! エリエは自意識過剰過ぎるし!」

売り言葉に買い言葉で放ったミレイニの『自意識過剰』という言葉に、エリエの頭からブツツと血管の切れる音がした。

「うわあああああああああッ!!」

直後。エリエが顔を真っ赤にして、まるで赤鬼の様に荒ぶりながら拳を振り上げる。

その様子に驚いたミレイニがその後にくるであろう出来事を予想し、バスタオルを巻きつけたの姿で脱兎の如く走り去っていく。

「だから、服を着なさいって言ってるでしょ!!」

エリエはバスタオルがはだけそうになりながら、部屋の中を駆け回るミレイニを追いかけ回す。

すると、騒ぎを聞きつけ。キッチンで料理をしていたイシエルがエプロン姿のまま出てきた。

何故か、その手には包丁が握られている。

「うるさくしたらあかんよ？ 2人共、大人しくしてな〜」

笑顔でそう言ったイシエルだったが、その笑顔とは裏腹に手に持たれた包丁は不気味に輝いていた。

エリエもミレイニもその場でピタリと止まり、ゆつくりと後退りしてエミル達の方へと戻っていく。それを見て、イシエルはにつこりと微笑みキツチンへと戻っていった。

イシエルの姿が消えた直後、笑顔を浮かべるその体から放たれている殺気に、2人はガクガクブルブルと震え出す。

普段からどこか影があるイシエルは、本当にやりかねないと思ったのだろう。まあ、イシエルは掴み難い性格をしているのは事実だが……。

そうこうしているとマスターとカレン、デイビッドが現れる。

彼等は険しい表情をして廊下を歩いてくると、マスターがその表情を崩さずにエミルに告げる。

「おう。帰っておったか、エミル。悪いがすぐに今後の対策について話がしたい」

その場の雰囲気からして深刻そうな重苦しさに、エミルには断るという選択肢は元からなかったのだろう。

彼女は小さく頷くと、ひどく神妙な面持ちでリビングのテーブルへと歩いていく。エミルの後ろ姿を見ていれば、星にも事の重大さを容易に察することができる。

星は肩に乗っているレイニールの方を向いて表情を曇らせた。だが、レイニールは微笑みを浮かべるだけで。

「大丈夫じゃ！ 我輩はなにがあっても主の味方じゃ！」

「うん。ありがとう、レイ」

レイニールの言葉に不安だった心が、少しだけ和らいだ気がした。

ライラの企み

エミルの天敵であるライラはカレンが言うには、早朝どこかに消えていたらしく。それもあつてか、マスターを中心に話は順調に進んで行った。

どうやらマスター達は、街に出て昨晚の村正騒動を独自に調べていたらしい。しかし、有力な情報は聞けずじまいで、何の手掛かりも得られないままひとまず戻ってきたという話だった。

結局。エミルと星も被害にあつた『村正』だが、その全貌は未だに謎のままだ。

しかも、エミル達の居た宿屋以外の場所でも発生していたとマスターの口から聞いた時には星も驚いたが、テーブルいっぱいに広げた街の地図に付いた多くのバツ印からは、類似点は感じられない。

もちろんバツ印は事件が発生した場所なのだが、それを線で繋いでみても五芒星を描くわけでもなく、六芒星を描くわけでもなく、何か他の物を象っているわけでもない。

そう考えると、村正を何者かが自分の鍛冶の腕を見せる為に大量に作ってばらまいているだけ——なんてことも考えてしまう。

しかし、エミルは昨晚の出来事で黒刀を所持していた男の、モンスターからドロップしたという言葉聞き忘れてはいなかった。

つと言つてもそれだけだ——真相は分からないにしても。こちら側が何らかの対応を取らなければいけないことに変わりはない。

だがエミルの言葉を聞くまでもなく、マスターもすでにその事実は承知していることだった。

マスターは持っていた駒を地図上に置き、その駒を中心に次々に円を描いていくと、20箇所近い円がほぼ街の全体を覆い尽くす。

「加害者——いや、奴等も被害者か。その話をまとめると、武器はモンスター『ホブゴブリン』のドロップによって入手したらしい。しかもドロップ率は100%だ。これを考えると、すでに多くの者が『村正』を所持しているとみて間違いない」

その言葉を皮切りに、マスターは手に持った棒で地図の一点を突

く。その直後、皆も食い入る様に地図を見下ろす。

皆の視線が集まったのを確認してから、マスターが口を開く。「見ての通り、街の出入り口は全部で4箇所。この場で検問をすればもう手もあつたが、素直に渡す者の方がおそろく少ないだろう。逆に興味本位で使用される危険もある。そこで、儂が取った対策が街の高台から街全体を監視する方法だ」

「確かにこの方法なら、近い者が現場に駆けつけて対処できます。それに、事態に遭遇した者達から噂というかたちで街中に注意喚起ができますが。でも……」

マスターの意見に、エミルが口を開いて表情を曇らせている。

確かにマスターの作戦は最も迅速かつ円滑に事を運べる最良の策だろう。だが、今のままではとても現実的ではない策でもあつた。

それもそうだ。今この場に居る人数では、明らかに人員が不足している。

また、村正にはPVPでHPを『0』にできる機能が備わっている。PVPでは回復アイテムの使用ができない以上、それを考慮に入れると一対一の戦闘はできる限り避けなければならない。

そうになると、現実的にエミル達の守れる範囲は、5箇所程度ということになる。本来マスターの予定していた監視場所の四分の一しかないのだ。このままでは、街全体をカバーするのは不可能に近い。かと言って人数を減らして、メンバーの中から犠牲者を出すわけにもいかないだろう。いくら腕に自信のある古参のプレイヤー達でも、まだ武器の全貌も分かつてはおらず、理性を失った村正所持者相手に一対一では心許ない。

この状況下で最善の対策を考え、苦悩しているエミル達を見守りながら。

(やはり自分は皆と同じ場所には立てない。みんなの役には立てないのか……)

っと星はそう思うと、どうしようもないくらいに胸が締め付けられるのを感じた。その時、何者かが自分の両肩に手を置くような感触を感じて、星は慌てて振り返る。すると、そこには微笑みを浮かべてい

るライラの姿があった。

先程のカレンの話だと、ライラはどこかにいったはずなのだが、それがどうして……っとは感じるものの。元より神出鬼没な彼女だ、別に今この場所に現れても不思議ではないのだろう。

突如として星の背後に現れたライラの姿に、今まで皆と一緒に苦悩した表情で考え込んでいたエミルが、猛獣の様な顔付きでライラに鋭い眼光を浴びせる。

ライラはそれを察したのか、すぐに両手を挙げながら星から離れた。

エミルを刺激しないようにするその素振りから、今回はエミルを挑発する気はないらしい。

「ちよつと待ちなさいよ。お姉さんは、まだなにもしていないわよ〜?」

だが、その相変わらずの口調が、エミルの敵意を刺激したらしく。

「うるさい！ 今すぐ私の前から消えないと許さないわよ！」

大きくテーブルを叩いて、エミルが立ち上がる。エミルにとって、その言葉は最後通告なのだろう。

何故なら、ギリギリのところまで理性で踏み止まっているということ。直ぐ様。ライラが星から距離を取ると、急いで星に駆け寄った。そして、徐に口を開く。

「——あの村正だけど。私達の調べた情報だと、あれはプレイヤーのステータスそのものを、別のプレイヤーのものに上書きするシステムが組み込まれてるらしいわ」

そのライラの発言は、その場に居た全員を震撼させるには十分過ぎるものだった……。

皆が驚くのも無理はない。今までは村正を装備することで、使用者の性格に影響を及ぼすと考えていた。しかし、ライラの発言から察するにそれは間違いで、使用者はステータスも性格すら全くの別人のものになる。というのだ——。

それはつまり、自分のキャラクターを一時的とはいえ、何者かに

乗っ取られるということの意味していた。これはオンラインゲームで言うところのアカウントハックと同じであり、必ず悪事を働く分、更に悪質と言える。

見た目には、アカウントハックの様に金品などを強奪されていないのだから、何の問題もなく思えるのだが、事はそれほど単純ではない。何故なら、この事件では本来は被害者のはずだった人物が殺戮を繰り返す加害者へと変わってしまう。しかも、事が終われば元の自分に戻りに、周りからはまるで殺人鬼の様に扱われてしまうのだ。

キャラの死がプレイヤーの死に直結する状況でなければ、実害はあつてないようなものなのだろうが、今の状況ではその後のプレイヤーの人生を狂わせるほどの一大事なのである。

この事実にも最も憤ったのは、以外にもデイビッドだった。

「ふざけている！ 侍の魂である刀を、こんな事に利用するなんて!!」
怒りを抑えきれず、柄にもなくテーブルを力一杯に叩いたデイビッドを皆一斉に見つめた。

日本の侍を模した鎧と刀を愛していると言つてもいい。そんな彼のことだ、刀を悪事に利用するのが心の底から許せないのだろう。だが、熱くなっているデイビッドとは裏腹に、驚いた表情を見せていたエリエが冷静に言葉を返した。

「——いくら熱くなつたつて無理だよ。だつてデイビッド弱いし……
今回は大人しくしてなよ」

「くうー。お前は、どうしていつも俺をバカにするんだ！ エリエー」
声を荒らげるデイビッドに、エリエは冷静な声ではつきりと答えた。

「だつて、私に勝つたことないじゃん。固有スキルも『1』残せないと無意味だし。アマテラスだっけ？ あの技だつて、効果範囲がコントロールできないんでしょ？ もう、デイビッドに勝てる要素なんて一つもないじゃん」

彼女の心を抉る様な的確な言葉に、ぐうの音も出ない様子の子のデイビッドは唇を噛み締め、ゆっくりと椅子に座る。

肩を落とすデイビッドの姿を横目で見ると、エリエはしてやったり

という顔付きで笑みを浮かべた。

その発言から分かるように、エリエはデイビッドに負けたことは事実らしい。

ダークブレットのアジトでの一件でも、エリエの並外れた戦闘センスは証明されている。まあ、実際に武闘大会の連続優勝者であるエミルも彼女のレイピアを使用した剣術には一目を置いているのだ――。

再び沈黙が流れる部屋の中。ライラが衝撃的な一言を言い放つ。

「安全に村正に対処したいなら、その子を使えばいいじゃない」

その直後、無責任とも言える彼女の突拍子もない言動にエミルが怒りを抑えきれず、ライラに向かって飛び掛かった。だが、エミルの手がライラに触れるよりも早く彼女の姿が消える。

ライラの企み2

すぐ近くに現れたライラが、エミルを挑発するように再び口を開く。

「私は事実を言っているだけよエミル。その子に肩入れするのは分かるけど、時と場所はわきまえなさい！ この状況でなり振りまかつていられない事くらい分かるでしょ？」

「……星ちゃんは物じゃない！ 使うとか言わないで！」

鋭い視線を浴びせてくるエミルに、ライラは少し馬鹿にしたように見下すような笑みを浮かべ。

「正直。貴女の言っている事は、私達にとってどっちでもいいのよ。こっちの認識的に、その子——夜空 星の固有スキルはこの隔離された世界を救う切り札。そして、その切り札を温存しておく必要はもうない——」

そこまで口にしてライラは首を振ると、決意に満ちた顔で言葉を続けた。

「——いや、違うわね……向こうが仕掛けてきている以上。こちらも手を拱いている訳にはいかない。今度はこっちから仕掛ける時なよ！ 貴女ができないなら、私がお子を確認するようにとミスターにも言われている。戦わせる覚悟がないのなら、その子を渡しなさい！ エミル！」

「どうして？ 貴女の従うミスターは、星ちゃんの叔父さんなんじゃないの？」

エミルの問い掛けにライラの眉が微かに動く。

確かに以前モニター越しにでも話した彼は、間違いなく星の叔父だと自分で名乗っていた。そんな彼が、自分の姪を危険に晒すのをよしとしているのか、エミルには理解できない。

彼女がそんなことを考えていると、ライラは感情がないような低い声で告げる。

「ミスターは任務には忠実な方よ、任務に私情は挟まないわ。必要とあらば、肉親であろうと関係ない。いえ、たとえ私情を挟んだとして

も。姪の命と大勢の人の命を同じ秤に掛ける人ではないわ……………
貴女も選びなさい。私の言う通りにするか、その子を手放すか……………」
そう告げたライラに、エミルは星の元に戻ると。

「……………どっちもお断りよー!」

つと怒りを露わにさせて叫ぶと、彼女の申し出を拒絶する。

互いに激しく睨み合うエミルとライラ。

激しい眼光をぶつけ合いながら、周囲の空気がピリピリとしたものへと変わった。その険悪なムードに耐えきれず、エミルの後ろに隠れていた星が前に出てくる。

「止めて下さい! 私が悪えはいんですよね?」

星がエミルの顔を見つめ告げると、そんな星の両肩をエミルががっしりと掴む。

「ダメよ! まだ戦い方だって教えてないでしょ? なにかあったらどうするの!?!」

「……………だってライラさんは私を連れていくって……………私、エミルさんと離れたくない。でもそれ以上に、エミルさんと一緒に戦いたいです!」

切実な願いの星の瞳が、エミルの瞳を真っ直ぐに見つめている。

エミルはその熱意に負けたのか、ため息を漏らしながら呟く。

「はあ……………星ちゃん、分かったわ。あなたの好きにしなさい……………でも、私は星ちゃんを死なすつもりはないからね」

「はい」

普段通りににっこり微笑むエミルに、星も微笑み返す。

そんな2人の様子を見ていたライラは安心したような微笑みを浮かべると、スツと姿を消した。

本当に何を考えて、どうしようとしているのか……………全く分からない人物だ。しかし、本当は最初からこうなることが分かっていたのかも知れないと、その呆気ないほどの去り際に思わずにはいられなかった。

ひとまず落ち着きを取り戻した部屋に、エリエ達の安堵した様なため息が響く。

そんな中、マスターが徐に口を開いた。

「——しかし、問題の根本は解決しておらん。人員が足りないのは事実だ。これをなんとかせんといかんぞ？」

「……人手か。まあ、当てがない訳でもないか……」

顎の下に指を当てながら、なにか思い付いたようにメルディウスがぼそぼそと呟いている。

だが、それも無理はない話だ。今の状況で危険な状況下にわざわざ自分から飛び込もうとする人物が、この初心者街であるはじまりの街にどれだけいるだろう……。

マスターは嫌な予感がしながらも、メルディウスの方を見ると、彼は親指を立てて自信満々に言い放つ。

「まつ、なんとかするわ！ 小虎の回収ついでにバロンも回収してくる！ ジジイ、楽しみに待つてな！」

そう言い残し、意気揚々とメルディウスは足早に部屋を出ていった。

マスターは「やはり、奴か……」とため息混じりに額を抑える。

普段と違うマスターの様子に、隣に座っていたカレンが心配そうに尋ねる。

「師匠。バロンとは誰ですか？」

「ん？ ああ、四天王の1人だ。だが、性格に難があつてな。場合によつては場が混乱するかもしれん」

「はあ、なるほど……」

分かつたような分からないような表情で生返事を返して首を傾げるカレン。

その向かいで、エリエがデイビッドをチラツと見て大きくため息を吐く。

「はあく。役立たずはデイビッドだけで間に合ってるのよね」

「どういう意味だ！」

「……足だけは引つ張らないでよね」

蔑むような視線を横目で浴びせながら、追い打ちを掛けるような言

葉を口にしたエリエが再び大きなため息をつく。

その後、隣にいたエリエは怒りで顔を真っ赤に染めるデイビッドからそっぽを向くと、エミルと星に声を掛けた。

「作戦を立てるのはマスター達に任せて、私達は星の戦いの特訓に行こうよ！」

「賛成だし！」

話していたエリエの前に、突然ひょっこりと現れたのはミレイニだった。

マスター達の話し合いに参加するわけでも邪魔するわけでもなく、ミレイニは今の今まで窓際に置かれたソファアの上で猫の様に背中を丸めて寝ていた。

まあ、エリエもミレイニが話し合いに混ざっても、とんちんかんなことばかり言って話をこじれさせるだけだと思つて放つておいたのだが。それがここに来て裏目に出たらしい。

元気いっぱいに微笑んだミレイニが大きく両手を上げる。

「特訓とか面白そうだし！ 早く行くし！」

ミレイニはフリスビーを目の前に出された犬のような瞳で、興奮気味に手を上げている。寝ていたこともあり、彼女は元気が有り余っているのだろう。

返事を待たずに、ミレイニはエリエの手を引いて強引に部屋から連れ出す。

それを見ていたエミルは、大きいため息を漏らした。彼女としては、まだ星を戦いに参加させることを受け入れていないのだろう。

乗り気ではないエミルとは違い。星は今にも動き出したそうにそわそわしている。

前々から『強くなりたい』と切実に思っていた星にとって、今回の出来事は願つたり叶つたりだった。しかも、エミル本人に教えてもらえれば、自分でするよりも段違いに強くなれるに違いない。

「それじゃ、私達も行きましょうか」

そう告げたエミルに、星は力強く頷く。

外に出た2人を待っていたのは向かい合うミレイニとエリエ、そし

て互いの前にイタチといつ居なくなつたのか分からないがレイニールが対峙していた。

何やら両者が睨み合つて緊迫した雰囲気の中、ピリピリとした空気が辺りに立ち込めている。

つと、最初に動いたのはミレイニだった。

ミレイニは右手を突き出し、目の前の白毛のイタチに命令する。

「ゆけー・ギルガメシュ。高速移動だしー！」

小さなイタチは彼女の言葉に応えるように、地面を素早く駆け回るとレイニール目掛けて走り出す。

スピードに物を言わせて、残像でレイニールを幻惑しようとする。そこで空かさず、鋭い眼光を放ったエリエの声が響いた。

「レイニール！ 火炎弾！」

「ふふ、我輩と戦うとは……身の程を教えてやるのじゃー！」

エリエがイタチを指差し叫ぶと、口から火の玉を発射したレイニール。

その火の玉が地面もろともイタチを吹き飛ばした。

クレーターを作つて辺りに砂埃を巻き込みながら突風を巻き起すレイニールの火炎弾はとてつもない威力だ。

攻撃によつて舞い上がった土煙が収まると、ギルガメシュがその場に倒れ込んで目を回している。勝敗が決したのか、レイニールが嬉しそうに腕を天に突き上げた。

「我輩の勝利じゃー！ これでエリエのお菓子はホットケーキで決まりなのじゃー！」

「ううう。私のモンブランが〜」

興奮気味な声で高らかに宣言するレイニールと、その場にペタンと座り込んで落胆するミレイニを余所に、その一部始終を見ていた星とエミルは呆れ顔でため息を漏らす。どうやら、おやつの時間に食べるメニューで揉めていたらしい……。

星とエミルは未だに勝利の余韻に浸っているレイニール達と、地面に両手を付いて項垂れているミレイニを放置して特訓を始める。

エミルはコマンドを開いて装備を解除すると、代わりに木製の剣を

2本取り出して片方を星に手渡す。

真剣な面持ちで星はその剣を受け取ると、装備欄から装備する。

数回自分の前で木製の剣を振った星は肩を強張らせ、ガチガチに緊張した表情で頷く。その行動は彼女の中での決意の表われなのかもしれない。

ライラの企み3

Emilは緊張で表情が硬くなっている星に微笑みながら告げた。

「まだ向き合って戦うわけじゃないから、そんなに緊張しなくていいのよ?」

「……えっ? 違うんですか?」

そのEmilの言葉に、星は肩透かしを食らった様にぽかんと口を開けたまま首を傾げている。

まあ、それも当然と言えた。なんせ互いに二本の木刀ならぬ木剣を用意され、その片方を渡されればそう勘違いするのは無理はない。

Emilは剣を地面に突き刺すと、後ろから星の両肩に手を乗せ耳元で優しくささやくように言った。

「——いい? 剣を持つ時は肩の力を抜いて、敵に当たる瞬間に力がかかるように振り抜くの」

「でも、最初から力を入れていた方がいいんじゃないんですか?」

星のその疑問は最もだ。最初から最後まで全力を込めて振り抜いた方が攻撃力は上がりそうなものなのに、どうして脱力するのか理解できない。

眉を寄せて難しい顔をしている星に、Emilはゆつくりと、しかし、しつかりと諭すように告げた。

「そうね。でも、ずっと力を入れているのって大変なのよ? それに当たるのは一瞬なのだから、その時にだけ全力を出した方がいいと思わない?」

「うーん」

だが、Emilの目論見は外れ、言葉に唸りながら星が更に首を傾げ、黙り込んでしまった。

その様子にEmilもどうしたらいいものかと、考え込んでいる。

しばらく考え込んだ末に「よし」と声を上げたEmilは、今度は小さな丸太と歯の付いた剣を取り出す。

星に向かつてEmilが「ちよつと危ないから離れててね」と告げると、低い姿勢で剣を構えた。

直後。鋭く睨むと気合いを入れるように、叫んで持っていた剣を振り抜く。すると、地面に突き立てられていた丸太は真ん中から綺麗に割れて地面に落ちた。

星がその丸太に駆け寄ってじつくりと見てみると、その切り口がとても綺麗で星は無意識に思わず声を上げた。

「すごいですー！」

「ふふっ、ありがとう」

星に褒められたのが嬉しかったのか、エミルもにんまりと表情を綻ばせた。

エミルはもう一度星に離れるように告げると、再び丸太を地面に突き立て同じ剣を自分の前に構え直した。

一度大きく深呼吸して剣を頭上に振りかぶると、今度は全身の力を込めて一気に振り下ろす。

「はあああああああッ!!」

先程よりも大きい掛け声の直後に、木に剣の当たる大きな音が響く。

星は間違いなく丸太を切り伏せたと思ったのだが。その予想と反して、エミルの全力で振った剣は丸太を半分ほど切ったところで、突き刺さったまま止まっていた。それを見た星の頭上には『?』が浮かんでいる。

間違いなく一回目よりも二回目の方がモーションも木に当たった音も大きかった。しかし、結果は見ての通り、丸太にがっしりと木の剣が食い込んだままだ――。

星はエミルが剣から手を放したのを確認するや否や、確認する為に丸太に駆け寄っていく。

丸太を見た星は更に不思議そうに首を傾げながら、納得いかないという表情を見せている。すると、その横からエミルが話し掛けてきた。「星ちゃん。どうして斬れなかったか分かる?」

「いいえ……どっちも同じ剣なのに。どうしてですか?」

その問いに、エミルはにっこりと微笑みながら答える。

「それは速度が違うからよ。力を入れるのは斬る瞬間だけ……重要な

のは力じやなくて腕力なのよ。剣は鈍器じゃないわ。だから、力を入れるのにもメリハリが重要な。実戦だと剣速が最も重要になる。まず、星ちゃんには剣に慣れることから始めてもらおうかな」

エミルはそう告げると、別の丸太を設置して木製の剣に持ち替えた。

数歩後ろに下がったエミルが剣を構えると、一瞬の刹那に上段、中段、突きの3打を打ち込んだ。

もちろん。全く力を入れずに無駄のないスピードで、だが丸太を切り抜くことなく素人の星が見ても美しいフォームだった。その姿を羨望の眼差しで見つめていた。

エミルは剣を地面に刺し、星の方をくるりと向き返すと瞳を煌めかせている星を見た。

「とりあえず。基本的なこの3種類の攻撃モーションを覚えてもらおうかな」

だが、星にはとてもエミルのような、鋭い攻撃を放つことができそうにない。

まあ、ゲームを始めてまだ一ヶ月程度の星に、ベテランプレイヤーのエミルと同じような動きをしろと言う方が無理だろう。

不安そうに眉をひそめている星に向かって、エミルが悪戯な笑みを浮かべ呟く。

「これくらいできるようになってもらわないと、合格点はあげられないわよ?」

「——ッ!?!」
それを聞いた星は首を振ると、真剣な面持ちで剣の柄を握り締める。

直感的に、星にはエミルの言葉は本心から出たものだ と確信した。もし、ここで自分が無理だと言ってしまえば、きつと次にエミルが戦うことを許可してはくれないだろう。

待ちに待ったこのチャンスを、みすみす逃す訳にはいかない。

星は木製の剣を自分の前に構え、地面に突き刺さっている丸太を見据え。

「やります。私はもつともつと強くならないとダメだから」
つと、勢い良く地面を蹴って剣を振り下ろす。

勢い良く丸太の上段にヒットした星渾身の一撃の直後、当たった反動で星の持っていた剣が弾き飛ばされ、クルクルと空中を舞って遙か後方の地面に刺さった。

星は自分の手を見下ろしながら、ジンジンと痛む両手をぎゅつと握る。

(……すごい衝撃だった)

内心驚きを隠せない星だったが、すぐに地面に刺さった剣を抜く。普段の戦闘時の星は体が強張るほどに力を入れていた。だが、今回は脱力しつつ剣速を上げることが意識している。

当たった直後に力を込める……言葉の意味は理解できるが、剣速を意識しすぎると力を込めるタイミングが遅れてしまう。その為、脱力した状態で丸太に当たって、容易に弾き飛ばされてしまったのだ。

もちろん。ここはゲームの世界。大人と子供のステータスに違いはなく、その差はリーチとその数値分の攻撃力くらいなものだ——。でも、こんなことくらいで弱音を吐いていたら、敵と戦うことなんてできるわけがない。

しかも、今の状況下で戦う相手はモンスターではないのだ——意志を持って向かってくるプレイヤーが相手になる。素人の星でも、対人戦の方が難しいのは理解している。

生半可な覚悟では戦えない。AIと違い、思考を持って戦う相手との戦闘には戦闘技術以外にも、想いの力が強く作用することを星は分かっていた。それは敵意であり決して好意ではない。星は強い憎悪を向けられたら、きつと萎縮してしまつてまともに戦えなくなるだろう……。

だからこそ、誰にも負けなくらいの技術が必要なのだ。それに……これ以上。皆の後ろに隠れているのが星には我慢できなかった。仲間が傷付くのを後ろで指を加えて見ているくらいなら、自分が傷付いた方が何倍も楽だと星は本気で思っていた。

自己犠牲とかそういう簡単な言葉では表せない。もつと深い何か

が、自分を心と体を突き動かすのを感じる。

何度も何度も剣を飛ばされながらも、星は丸太相手に剣を振り続けた。

いくら額を汗が流れようとも、その汗が目に入ろうとも、一心不乱に星は剣を振り下ろす。その姿からは、星の戦いに対する強い想いを感じざるを得ない。

ライラの企み4

次に星の耳にエミルの言葉が飛び込んできた時には、激しい西日が横顔を照らしていた。星が練習を始めて、すでに数時間を経過している。

「星ちゃん、そろそろ終わりにしましょう。さすがにオーバーワーク過ぎよ？ 急いだって、すぐに上手くなるわけじゃないわ……」

心配そうに星の顔を覗き込んでエミルが告げたのだが、星は剣を振る手を止めようとはせずに、丸太にカンカンと木の剣を打ち付けている。

「はあ、はあ……先に、言っけて下さい。もう少しだけ……」

肩で息を繰り返し、流れる汗を拭くと星は得物をもう一度構え直す。

視線を逸らすことなく木の剣で丸太を叩きながら、星がそう言葉を返すと、エミルは「また、呼びにくるわね」とだけ言い残して、浮かない表情のまま城へと戻っていく。

その途中、木の上に座って星の練習風景を眺めていたレイニールに声を掛けた。

「レイニールちゃんも、星ちゃんに何か変化がないか気にかけておいてね。もし、なにかあったら、すぐに彼女を止めて私に知らせてちょうだい」

木に凭れ掛かるように、木の枝に寝そべっていたレイニールは背筋を正した。

「うむ。分かった……だが、主も初日から無理しないと思うぞ？

きつと疲れたら止めるのじゃ」

「……そうね。そうだといんだけど……」

エミルは一抹の不安を覚えながら、剣を振り続ける星を一瞬だけ見て、重い足取りで城の方へと戻っていく。

部屋に戻ると、いつの間にか戻ってきていたミレイニとエリエがキッチンでホットケーキを焼いていた。

もちろん。焼くのはエリエで、ミレイニは隣のボールで生クリーム

をかき混ぜている。

「どうやら料理スキルを使わず、一から作っている様だが、時間が掛かるというデメリットはあるもののそれ以上にメリットが大きい。」

「その一番のメリットが味だ——日常で使うスキルにはレベルがない。その為、誰が作っても同じ味になる。しかし、実際に食材を使って料理をすれば、そのプレイヤーの力量に応じたできになる。その理由はオートで作る場合にも表示される分量の数字、これを設定しているとそれ以上の分量を入れることはできないことになっている。」

「だが、自分で料理することによって、それぞれの素材や調味料の分量を自在に変更することができる。それによって、腕に応じた味の料理を作り出すことができるのだ——それは料理に限ったことではなく、鍛冶や乗馬など様々なスキルに応用できる。プレイヤーの技量で戦闘能力が変化すると同じように、慣れてくればオートでやるよりも更に高い能力を発揮できるのが、このゲームが【FREEDOM】という日本語訳で『自由』という文字を使っている理由でもある。」

「 Emil は戻ってくるなり大きなため息を漏らすと、テーブルに座っていたイシエルの横に腰を下ろす。」

「心配そうにイシエルが Emil に話し掛けた。」

「どうしたん？ やっぱり。星ちゃんに戦ってほしくないん？」

「……それはもういいんだけど、星ちゃんがちよつと、困ったことになつてるのよね……」

「窓を指差す Emil に促され、イシエルは窓から外を覗いた。」

「覗き込んだ窓からは、木製の剣を丸太に向かって振り続ける星の姿が見え、時折剣を飛ばされながらも、それにめげることなく練習を続けている。」

「すごいなあ。星ちゃん気合い入つとるやん」

「感心した様にイシエルが Emil の方を振り返って微笑みかけると、複雑そうな顔で俯き加減に額を押さえている彼女の姿が見えた。」

「イシエルが心配そうに表情を曇らせると、それに気が付いた Emil が徐に口を開く。」

「——確かに星ちゃんはレベルも60台に入つて、ゲームでは中堅プ

レイヤーになっているわ……でも、それは私達と一緒にいるから経験値が入っているだけで、彼女は強くなっているわけじゃない。それでも、攻撃力や筋力などのパラメーターは上昇して、自分自身が強くなったと錯覚するのもこの時期なのよ」

「まあなあ〜」

「成長が急過ぎるし。あの子の固有スキルはライラの入れ込みようからして、オリジナル——それに星ちゃん性格だと、きつと周囲の期待に応えようと能力以上に無理をすると思うの……。それがいつか、取り返しのつかない事になりそうで……」

不安の現れなのだろう……。眉をひそめ表情を曇らせるエミルにイシエルが「考え過ぎやよ」と告げると、エミルは微かに微笑んだがその表情からは不安は隠しきれない。

レベル制のMMOではプレイヤースキルや装備とは別に、絶対的にレベル差が大きく影響する。プレイヤーレベルが10も違えば、その差は絶対的なものになるのがレベル制MMOというものなのだ。だからこそ、多くのプレイヤーは日々互いにレベル上げに勤しみ。上限の100に達すれば、今度は装備やプレイヤースキルを磨いて更に強さを求めて極めていく、それは他者よりも、己の方が強いという優越感に浸る為——。

エミル達がそんな話をしていることなど露知らず、外で熱心に剣の特訓をしている星に向かって、木の上から主の様子を見守っていたレイニールがパタパタと羽音を響かせながら声を掛けてきた。

「主。少しは休憩しないと体に悪いぞ?」

「はあ……はあ……うん。もう少し、したらね……」

相槌を打つように素っ気なく答える星に、レイニールも不機嫌そうに少し強めに言い返した。

「もう少ししたらって、ずっと前から剣を振り続けてるではないか! がむしやらに剣を振っているだけで、強くなれるはずなどないのじゃー!」

「……………」

その言葉に反応したのか、今まで剣を振り続けていた星の手がピタ

りと止まった。

さすがに言い過ぎたと感じたレイニールが小さく「すまん」と呟くと、星は無言のまま再び剣を振る。

空中で翼をはためかせながら、落ち込んだ様子で木の上に戻ろうとするレイニールに星が顔を向けることなく呟いた。

「……分かつてる。すぐに強くなれないのは、でも……なにもしなかつたら、また後ろで見ているだけだから……」

真剣な眼差しで、握る剣の柄にぎゅつと力を込める星。

彼女の表情からは『もう、弱い自分と決別したい』という強い意志が滲み出ていた。だが、レイニールが言った言葉も一理ある。何より、ここは現実世界ではなくゲームの世界——作り出された仮想現実の世界なのだ。

現実ならば、剣を振ればその回数に応じてそれに必要な筋肉などの体組織も強化できる為、剣を重くして振れば振るほど斬撃の威力は大きくなっていくだろう。

しかしながら、ここは数値によってパラメーターを決められた世界で、そのパラメーターはレベルを上げるか装備の変更によってのみ強化できる。

つまり、いくらこの世界で剣を振ったところでパラメーターに変更はない。あるとしても、ステータスとは関係ない、太刀筋がほんの少しだけ鋭くなるだけのものだ。

星もそのことは自然と感じ取っている。だが、それでも……いや、それ以上に皆の役に立ちたい。強くなりたいという気持ちの方が強いのだろう。それが彼女にとっては、剣を何時間も振り続ける理由になるのだろうか……。

それから結局休憩を取ることなく、ぶつ通しで木の剣を振り続けている間に辺りは日も落ち、すっかり暗くなっていった。

汗を流しながら必死に剣の練習をしていた星の目の前に、見慣れたウェーブのかかった茶髪の女性が立っている。それは紛れもなく、一度は星達の前から姿を消したはずのライラだった。

ライラは意味ありげに微笑みを浮かべ、星の元へとゆつくりと歩いて来て。

「あら〜。剣の練習なんてすごいわね〜♪」

「……ライラさん」

今までのこともあつてか、星は少し警戒したような硬い表情で持っていた木の剣を胸の辺りで握り締めている。

少し怯えた表情の星を察して、レイニールが慌ててライラと星の間に割って入った。

威嚇するように鋭く睨みつけるレイニールに、ライラは「あらあら」と呟きながらも微笑みを崩さない。

やはり彼女が何を考えているのか分からず、彼女が掴み所がない人物であることを再確認する。

張り詰めた空気の中。静寂を破る様に、レイニールがビシツと指差して告げる。

「我輩は前々から、お前は危険だと思っていたのじゃ！」

「あら〜。そうなの？ そんな事を言われるなんて、お姉さん悲しいわ〜」

発せられたレイニールの言葉とは裏腹に、ライラの返答はとてもいい加減に感じたが。

その表情からは彼女が何を考えているのか、その真意を読み取ることが全くと言っていいほどできない。

彼女の表情を見るに、ポーカーフェイスと言うような生易しいものではなく、元よりそんな能力など持ち合わせていないように感じるほどだ。

それが星には不気味に感じられ、背筋に悪寒が走る。次の瞬間、にんまりとライラが不敵な笑みを浮かべたと思った時には、すでに彼女の姿は目の前から消えていた。

息を吸うほどの刹那に、今まで目の前を飛んでいたはずのレイニールの姿は消え。

「……………ふふっ、ごめんなさいね」

「……………えっ?」

急に眼前に現れたライラ。

驚き瞬きをした星の腹部を冷たい何かを通り過ぎていった……その一瞬の感覚がとても長く、永遠の様な錯覚に襲われ。星は徐に腹部を突き通ったその固くて冷たい物体を触り、それが剣であると確認した直後。今度は全身を炎に包まれたかと思うほどの激痛が、星の小さな身体を駆け巡る。

ライラの企み5

凄まじい痛みが痺れに変わり、酸欠の金魚のように口をパクパクと痙攣させた星が声にならない声でライラに尋ねる。

「……………どうして？」

だが、ライラはその言葉に答える素振りも見せず、ただただ不気味なほどうもと変わらない微笑みを浮かべていた。

今の現状では彼女のその常軌を逸した姿は、星にとって殺人鬼のそれと何ら変わらなく瞳に映って仕方がない。

視界に映る円状のHPバー横の人形の周りに痺れた表示が出て、その周りの円状になっているHP残量が徐々に減少を始める。

遠退く意識の中。木に縛られたレイニールが「あるじー！」と絶叫する声だけが頭の中を駆け巡るが、全身が痺れていてもう抵抗することもできない。

(……………そっか。私、このまま死ぬんだ……………きつと、私がライラさんになにかしたから……………)

そう思った直後、星の体は自分の意志とは関係なくライラの方へと倒れ、彼女の体に凭れ掛かるようにして止まる。

視界に映るHPバーが黄色の領域に踏み込んだ次の瞬間。ライラの肩越しから見えた世界が歪み、空間が裂けてそこからマントで全身を隠した人物が現れた。それはまるで、昨日の宿屋での出来事と酷似していた。

マントの人物は腰に差していた漆黒の剣で、何の躊躇もなくライラを斬り伏せた。

まるで時間が止まっているかのように、表情を変えることも断末魔の叫びを上げることもなく、腰から真っ二つに裂けて崩れ落ちるライラ。

同時に凭れ掛かっていた星の体も前に倒れるが、マントの人物は倒れそうになる星の体を支え、その腹部から刺さっていた剣を抜き取った。だが、不思議とその痛みは感じない。

そして耳元で一言……………。

「——命を無駄にするなど言っただろ？」

そう彼女は眩き、ポケットから見たことのない虹色に輝く宝石を取り出して徐に傷付いている星の腹部に押し当てた。

すると傷が消え、視界の人形とHPバーがフルに回復する。しかも、星が今まで剣の練習で感じていた疲労も完全に消えている。

だが、それはありえないことだ——本来は負傷は自然に完治することもヒールストーンを使っても回復不可。体力も自然に回復を待つか、眠ることで回復させるしか方法はないはず。

突然の出来事に、脳の判断速度が付いていかず、目を丸くして驚く星の体を立たせて身を翻す。

マントがなびく僅かな時間だったが、星の瞳には確かに青く輝く綺麗な瞳が映った。その瞳は慈愛に満ちていて、口元からは微かな笑みがこぼれていた。

星は『今しかない』と感じ、咄嗟に口を開き。

「……あの。ありがとうございます」

「……………」

お礼を口にする星に彼女は一瞬立ち止まったものの。振り返ることもなく無言のまま、空間の裂け目へと消えていった。

しばらくの間、星はマントの女性が消えた場所を見つめていた。上手く説明はできないものの、彼女からは不思議な雰囲気を感じる。

温かい様な懐かしいような複雑だけど心地いい何か……もちろん。それが何かは分からないが、敵ではないということは確かである。

つと、ふと星は真つ二つに切り裂かれたライラのことを思い出して、辺りを見渡す。だが、そこに彼女の姿はない。

しかし、それは不可解だ。本来、撃破されたのであれば光になって消えるはず。

消えるにしても、消滅するエフェクトが出るのが当たり前なのだが、星の記憶が正しければそんな現象は確認していない。

不安そうな表情で、なおも星が辺りを見渡している。

(……ライラさん。もしかして本当に……)

そんな考えが脳裏を過った。

本当ならば、突然襲い掛かってきたライラの心配を星がするのは筋違いだ。

それもそうだろう。あのマントの人物が現れれば、殺されていたのは星の方だったかもしれないのだから。

だが、それでも相手を心配をしてしまうのは、星の優しさ——いや、甘さなのだろう……。

月明かりで薄っすらと照らし出される湖の水面や木陰などを見渡している星の耳に、突如としてライラの声が飛び込んできた。

「ふう〜。ミスターから自動蘇生アイテムを渡されていなければ、さすがに危なかったわ……」

ライラは星から離れた木の上で驚きながら、今は元通りになっている斬られた箇所を指でなぞって言った。

その後、地面から見上げている星を見下ろし、不敵な笑みを浮かべる。

「さすが、GM権限を持っている子は違うわね〜。チートがなければお姉さん死んじゃってたわ〜」

「GM？ チート？」

言葉の意味の分からない星は、ゲーム用語を聞いてただただ首を傾げるばかりだ。しかし、そんなことはお構いなしにライラは更に言葉を付け加える。

「でも……星ちゃん。貴女は恵まれているわよ？」

「……恵まれている？」

「ええ、今の状況にも。そして……運命にも……」

ライラの口から出た『恵まれている』という言葉が今ひとつ理解できないし、実感もできない。もちろん。星は日頃から、自分が恵まれていると感じることは少ない。いや、ないと言っても過言ではないだろう。

母子家庭と言うこともあり。わがままは言えないし、母親との会話も殆どない。学校では空気になるように徹している。それでもちよつかいを出されることも度々だが……。

そんな星にも、唯一恵まれていると感じる時はある。それは、忙し

い母が朝ご飯を作り置きしてくれている時やお小遣いで本を買った時だ。この時ばかりは、自分は恵まれていると感じる。

世界は広く。他の国には自分よりも貧しい生活をしている子がたくさんいる。それは日頃から一人の時間の多い星は、テレビなどを見て知っていた。

確かに日本にはそう居ないが、それでも自分よりも大変な境遇の子はたくさん居るだろう——その子達に比べれば、自分は父親が居ないと、母親とあまり話をする時間が取れないというだけ。しかし、それでもやつぱり。考えてみると、自分は恵まれてはいない方なのだろう。

そう実感すると、不思議と涙が星の頬を伝い落ちた。

星は慌てて零れ落ちる涙を手で頬を拭う。

(……いつからこんなに泣き虫になったんだろう……)

必死に溢れてくる涙を押さえ込もうと目を擦る星に、ライラが見透かしたように目を細めると冷たく告げる。

「——泣いたところで問題は解決しないわよ？ 貴女はこのゲームを発売した父親の代わりに、このゲームに閉じ込められている人々を救う義務がある。現実世界では子供で許されても、こっちの世界ではそうはいかない。貴女は人より秀でた能力を持っているのよ？ その力は人々の為に使ってこそ輝く。そして、貴女には拒否権はない」
「……人の為にとか……義務とか……難しいことは分かりません。でも、私は元の世界に帰りたい！」

腕で涙を拭い去ると、星はライラを見上げた。

決意に満ちた星の瞳を見て、ライラは微かに笑みを見せると。

「まあ、今はその答えでいいわ……」

つと告げ、なにやら指を動かして操作を始めた。

それを見つめていると、星に向かってライラが何かを放り投げる。ふんわりと宙を舞って、月明かりに照らされキラキラと反射するそれを、星はなんとかキャッチした。星の小さな手の平にすっぽりと収まっているその物体を見直して星は不思議そうに首を傾げる。

それもそのはずだ。星の手には小さな首飾りが握られていた。

皮の紐に鳩を象った飾り、その瞳の部分に小さく光る紫色の寶石が埋め込まれている。彼女からの突然のプレゼントに、ただただ困惑している星に向かってライラが口を開く。

「それは制御装置よ。貴女の固有スキルは今の貴女では制御しきれず、光の放出量の調整まではできない。でもそのアクセサリーは貴女の脳波に反応して、貴女に変わってオートで出力制御してくれる。でも——」

ライラがそこまで言った直後、星の前を凄まじい勢いでエミルが駆けていった。

エミルは剣を抜くと、全力で地面を蹴ってライラに飛び掛かる。

「ライラー!!」

叫びながら、エミルは手に握られたクレイモアを力の限り振り抜く。すると、一瞬の閃光を放ち、轟音を響かせながら木の幹もろとも斬り裂いた。

ライラの企み6

ゆっくりと崩れ落ちていく木を蹴って、エミルはすぐに星の側に飛んでくると、星をかばうように目の前に立ってクレイモアをライラに向けて構える。

「エミルさん!? でも、どうして?」

突然のエミルの登場に、星は驚いたように口を開けたまま立ち尽くしている、エミルが振り向いて微笑みを浮かべて告げた。

「当然でしょ。上からちゃんと見てたんだから……それに、星ちゃんが危なくなったら、いつでもどこにでも駆け付けるわよ」

「……エミルさん」

その言葉に感激した星の瞳からは、涙が無意識のうちに溢れ、その様子を見たエミルがあたふたしながら慌てふためいている。

「——ど、どうして泣くの!? 怖かった? それとも、嫌だったかしら」

今まで凜とした姿で剣を構えていた人物と同一人物とは思えないほどに、血相を変えて星の機嫌を直そうと必死になるエミル。

そんな慌てるエミルに、星は涙を拭って答える。

「……いい、いえ。ただ、うれしくて……」

「そう。なら良かった」

瞳を潤ませながらも微笑みを見せる星に、エミルもほっとした様子で微笑み返す。

そのエミルの言葉は、普段から孤独を感じることの多い星には、純粹に嬉しかったのだろう。

「ふふっ、もう仕事も終わったし。その子に用はないわ」

ほくそ笑み、そう言っつて木の陰から出てきたのはライラだった。

本気で振り抜いたエミルのクレイモアだったが、残念ながら彼女の体には傷一つ付いていない。

剣を握り締め、鋭く睨みつけるエミルを眺め、ライラは余裕の微笑みを浮かべている。やはり、固有スキルの『テレポート』をなんとかしなければ、彼女に傷一つ——いや、触れることすらできないのだろ

う。

「ライラ……」

天敵を見る猛獣の様に睨みつけるエミルを尻目に、ライラの視線は星に移った。

「星ちゃん。次に会う時は、もつとその力を使えるようにしておきなさいね〜」

にこやかに笑みを浮かべてそう告げたライラは、軽く手を振って2人の前から姿を消した。その去り際の良さに、2人は呆気に取られながらも互いに顔を見合って安堵のため息を漏らす。

星は直ぐ様。木に縛り付けられていたレイニールの元へと駆け寄って、体に巻かれているその縄を解く。本来ならば、レイニールの力で容易に破壊できるのだろうが、おそらくライラの道具による効果で一時的に弱体化されたのだろう。

拘束を解かれたレイニールは、すぐに星の方へと飛んで来るとかかんになって怒りながら大声を上げた。

「あのライラと奴。信じられないのじゃ！ 主も、もう二度とあの者に近付いてはダメなのじゃ！ 分かったか！」

「……う、うん」

星は空中で拳を振り回し怒り狂うレイニールに頷いたものの、内心では『テレポートして来る人間に近付くなど言われても……』と思っていた。

* * *

静まり返った室内に機械の起動している音だけが淡々と響く研究室。

薄暗いその研究室の中。大きなモニターの前で、向かい合うように立つライラ。

その表情はいつになく硬く険しい……。

「……ミスターの予見通り。動き出しました」

「そうか……やはり、あの子が鍵で間違いなかったようだね……私も

あの子をこの世界に呼んだ甲斐があったよ」

彼のほつとしたような声音に、ライラの表情も微かに和らぐ。そこで、ライラはエミルに言われた一言を、彼に投げかけてみることにした。

ライラは生唾を呑み込むと、緊張気味に震える声でモニター越しの男に尋ねた。

「……あの。こんな事を聞くのは失礼かもしれませんが……先程、私の昔馴染みから言われましたわ——ミスターは実の姪を危険に晒すのに躊躇はないのか——つと……」

「………そうか」

モニターの男は身を翻すと、後ろ手を組んで数秒間隔を開けてライラの言葉に答えた。

「——そうだね。私は酷い男だ……そう自分でも強く感じるよ。だが、姪可愛さにリスクを冒す愚かな男でもなく、いい加減な人間でもない。君も知っているように、外部からなんとなくアクションを掛けようと、スタッフに休みなく必死で動いてもらっている。不眠不休でね……だから星が——あの子が、その対応の時間を少しでも稼げるなら使わない手はないんだ。たとえばあの子に恨まれようとも、あの子を失う状況になってもだ……でも、星は姉さんの子だ。きつと大丈夫だ……」

だが、そう告げた男の声は微かに震えていた。そのことから、彼の複雑な心境はおおよそ察することができた。

誰だつて自分の肉親を死地に送り出すのを喜ぶ者はいない。それは彼も同じだ——だが、それでもその苦肉の策を使わざるを得ないほど、今の情勢は緊迫しているということなのだろう。

「まあ、計画通り。星が彼女との接触に成功したなら、さしあたっての問題はないだろう。彼女は最も信頼できる人物だよ……あの子にとっては何」

「ですが……何なんですか彼女は、私が回避できない相手がいるなんて……」

体を真つ二つにされたことが、ライラにとって相当衝撃的だったの

だろう。驚きと困惑の入り混じった表情で彼に尋ねた。

モニターの前の男は振り返り微笑むと、嬉しそうにその質問に答える。

「そうだろうか？　彼女はまだ未知の存在だ。きっと、我々の解釈の外の領域にいる圧倒的な存在なのだろう」

何故、彼が興奮気味なのかは分からないものの。その強さだけは認めているのか、ライラは静かに頷いた。

「それが幸か不幸か……先程入った情報によると、何やらメインシステムに細工した形跡が発見された。こんな事をできるのはお義兄さんか彼しかいない……彼も動き出していると見て間違いないだろう」「なにやら波乱の予感がしますね。ミスター」

「……ああ。君は今後は慎重に動いてくれ、奥の手も使ってしまったしね」

ライラは無言のまま険しい表情で頷くと、彼は微笑んで通信を切った。

不安そうに遠い目をしながら研究室の天井を、いつまでも見上げていた。

* * *

黒い刀と黒い思惑

星達が手を繋いで部屋に戻ると、そこには慌ただしい空気が立ち込めていた。

ピリピリとした空気の中、カレンとマスターが忙しなく出立の準備を始めている。その顔は真剣そのもので、それを見ただけで不測の事態が起きたことを察するには余りあるほどだ――。

眉間にしわを寄せながら、エミルはマスターに尋ねた。

「マスター。何か合ったんですか？」

「うむ。先程メルデイウスから連絡があつてな。どうやら街で一斉に、村正を持った者等が暴れ出したらしい。……こちらが手をこまねいている間に先手を打たれた。すでにメルデイウスとダークブレットの奴等が対応していると言う話だ、儂もカレンと共に様子を見てくる」

「マスター。俺も行きます！」

話割り込むようにしてデイビッドが声を上げた。その表情は真剣そのものだが、彼の瞳の奥には怒りの炎がつつつと燃え上がっていた。

彼の瞳を真っ直ぐに見つめていたマスターは、デイビッドの決意を悟ったのか力強く頷いた。

「よし。なら行くぞ！」

「はい師匠！」

「了解！」

2人は返事をするやいなや、勢い良く部屋を飛び出していく。

廊下を駆ける彼等の足音が部屋に響き、マスターも部屋の外に出ようとした瞬間、それをエミルが止める。

「マスター、私達は……」

不安げに尋ねるエミルの後ろで隠れている星を見て、マスターは表情を和らげながら告げる。

「案ずるな。こうなつた以上、急いでも仕方ない。お前達は儂の連絡を待て、必要になつたら呼ぶ……それではな！」

それだけ告げ、マスターもカレン達の後を追って部屋を勢い良く飛び出す。

徐々に小さくなる3人の背中を見つめ、エミルも星も不安そうな表情のまま部屋に入った。

部屋の中では、イシエルがテーブルに乱雑に置かれた食器を片付けている。だが、そこにエリエとミレイニの姿はなかった。

不思議に思った星が首を傾げると、頭の上のレイニールが身を乗り出し気味に声を上げた。

「なんじゃ？ エリエは居ないのか？」

自分が言うよりも早く言葉にしてくれたレイニールにほっと胸を撫で下ろしながら、食器を持ってキッチンに向かおうとしていたイシエルがその問いに答える。

「ああ、エリエちゃんなら向こうで休んどるよ。なんや2人共、ぎょうさんホットケーキ食べとったからな」

苦笑いを浮かべつつ、ゆっくりと隣の寝室を指差すイシエル。

星はレイニールに促されるようにトタトタと駆けると、ドアをそっと開けて中を見る。すると、イシエルの言っていた通り、布団に包まって2人が苦しそうにお腹を抱えていた。おそらく。いつもの悪ノリで競うようにホットケーキを食べた結果、許容範囲を超えてしまった。と言ったところか……。

それを見た星は、以前のエリエとの出会いを思い出して表情を曇らせた。あの時は、エリエの作った激甘の朝食を食べて気分を悪くしたのだ。

今思い出しただけでも、気持ち悪くなる。それだけ、エリエの作った料理は強烈だった。その出来事を知らないレイニールは、顔を青くしている星を見て首を傾げていると、そこにエミルが星達を呼ぶ声が聞こえた。

汗を掻きながら、寝言で「もうホットケーキは……」とうなされながら、苦しそうな表情を見せるエリエ達を見て星はそっとドアを閉める。

エミルに促されるままに、レイニールを頭に乗せたまま椅子に着く

と、そこにはたつぷりの生クリームの乗ったホットケーキが置かれていた。

「おお〜」

歓喜の声を上げたレイニールが我先にとテーブルに舞い降り、ナイフを持ってホットケーキを切り分けてそれをフォークで自分の口に含んだ。

「むぐむぐ……これは美味しい！」

生クリームをべったりと口の周りに付け、幸せそうな笑顔を見せたレイニールの顔を、星はハンカチで拭う。

「おお、さすが主。気が利くのじゃー！」

「うん。気をつけて食べてね」

「うむ」

星の言葉にレイニールは大きく頷くと、フォークで生クリームの乗ったホットケーキを口に運び、また顔にべったりとクリームを付けたが、今度は星が拭き取る前に舌で口の周りを器用に舐め取った。

その様子を見て星もほっとしたのか、自分も目の前にあるホットケーキにナイフを入れる。

練習してお腹が空いていたこともあり、自分でも驚くほどに素早く切りわけてそれを口に運ぶ。

「おいし〜」

思わず口から出た言葉に、向かい側に座っていたエミルがくすつと微笑む。

星は薄く頬を赤く染め、黙々とホットケーキを食べ進めた。

いつものことながら、エリエの作るお菓子は甘さも丁度良く、何と言うかお菓子を知り尽くしていると云わんばかりの出来栄で、見た目以上に味も最高だ。

彼女がどうしてここまで美味しいお菓子を作れるのか？という謎はあるものの。それ以上に、どうしてこれだけ美味しい物が作れるのに普通の料理が絶望的なのが不可解でしようがない。

だがそれは、向かいに座っているエミルにも言えることだろう。何故か、彼女がキッチンに立つと必ず爆発が起きる。

それもどう考えても爆発しそうにない食材でだ——どうも、この2人はそう言うところは抜けていると言っているのかもしれない。

そんなことを思いながらホットケーキを食べていると、エミルが驚いたように目を見開き。その後、険しい表情で指を動かすと、すぐ隣にいたイシエルの方を見た。

星はすぐにエミルの変化を察して、真つ先に先程のマスターの言葉を思い出す。

『案ずるな。こうなった以上、急いでも仕方がない。お前達は儂の連絡を待て、必要になったら呼ぶ……』

その言葉通り、不測の事態に陥ったと考えるのが自然である。

エミルとイシエルは星達に聞こえないように短く何か会話を終えると、エミルが星に向かってあからさまになっこりと微笑んだ。

「星ちゃん。ちよつと出掛けてくるけど、イシエと一緒に待つてもらってもいい？」

彼女の口から出たその言葉で、星の予想は確信へと変わる。しかし、俯き加減に表情を曇らせながら星は首を横に振って、そのエミルの申し出を拒む。

エミルは少し困り顔のまま、もう一度今度はゆっくりと、星に言い聞かせるように告げる。

「——もう隠さないで言うけど……今、マスターから連絡があつて、ちよつと、思っていたより状況が良くないみたいなの……だから、私も行かないといけないの。分かるでしょ？」

星はそれを聞いても、激しく首を横に振った。

それを見たエミルは困り果てたように大きくため息も漏らす。

だが、ここまで頑なに星が拒むのも珍しい。星本人も上手く説明できないが、何か物凄い胸騒ぎを感じているからだった。

この感覚は富士のダンジョンで、がしやどくろとの戦いの前にも感じたものだ。あの時もギリギリで勝てたが、エミルは致命的なダメージを受けて戦闘不能にまで追い込まれた。

しかしそれを直接エミルに伝えれば、きつと今よりも強く星を置いていこうとするのは分かっていた。

俯きながら、星が必死に思考を回して導き出した答えは「また、ライラさんが来たら……」だった。

咄嗟に出た言葉に内心ひやひやしながら、そつとエミルの顔色を窺う。

星の口から突然出た『ライラ』という言葉聞いた瞬間、エミルは驚愕しながら目を見開いていた。

そんな彼女の様子から、エミルが今までにないほど動揺しているのが見て取れる。

次の瞬間、今までの言動が嘘のように「そうね。ライラが来たら危ないものね」と深く頷く。

エミルは星に向かって、もう一度につこりと笑みを浮かべる。

「それじゃ、一緒に行きましようか。ううん、一緒の方がいいわね！」

「……は、はい」

彼女のあまりの変わりように、言った星の方がぼかんと口を開けたまま面食らってしまう。

それもそうだろう。こんな子供騙しの様な口車に乗って来るなんて、言った本人ですら思っていなかったのだ。

だが、一つ分かったことは、エミルにとって彼女の存在がそれほどの脅威だということだろう……。

そこにホットケーキを食べ終えたレイニールが胸を張って叫ぶ。

「はっはっはっ！ 我輩が一緒なら、なにも心配する事などないのじゃー！」

自信満々に言い放つレイニールだったが、その手に握られている自分の体程の大きさのフォークのせいで、まるで金色の小さな悪魔が高笑いしているようにしか見えない。しかも、ほっぺたには飛び散った生クリームが付いている。

「レイ。生クリームが付いてるよ？」

「うむ。主、取ってほしいのじゃー！」

星に指摘されたレイニールは目を瞑ると、星がハンカチでレイニールの顔を拭く。

黒い刀と黒い思惑2

丁寧にレイニールの顔を拭いている向かい側で、エミルとイシエルが話している。

「それじゃ、イシエはエリー達をお願いね」

「そうやね。今回は、うちが行ってもあんまり戦力にならんし……」

急に耳に飛び込んできたイシエルの話を聞いて、不思議そうな顔で星は首を傾げた。

それもそうだろう。イシエルの固有スキルは『ソニックブーム』その名の通り。衝撃波を作り出すスキルでその効果範囲も他のスキルよりも遥かに大きく、しかも彼女の持っている『神楽鈴』を使用すればその破壊力は何倍になるはず。

本来ならば、エリエとミレイニも参加できず、現状戦力の乏しい状況で彼女をメンバーから外すのは考えられない。しかし、イシエルは出来ないと言っているし、エミルもそれを容認しているように見えた。

「——イシエルさんは行かないんですか？」

その疑問が、自然と星の口から漏れ出した。その直後、イシエルが星を鋭く突き刺さるような目で睨む。

まるで敵を見る様な瞳に、星の背筋に悪寒が走った。心臓を鷲掴みにされたような圧迫感に、星は微動だにできなかつた。

「まあ、そうね。イシエの固有スキルは、力のコントロールが難しいから仕方ないのよね」

イシエルの様子に全く気付く素振りも見せず、エミルが言った。

その後、エミルがイシエルの方を向いて「そうよね」と聞き返すと、今までの形相が嘘のように晴れやかな表情で頷く。

「まあ、うちのスキルは多人数向きで、微妙な力加減が難しいんよ。そこから、今回は残念やけどお留守番やね」

「そういうこと……それじゃ、エリー達をお願いね。イシエ」

「うん。エミルも気を付けてな」

「ええ、必ず帰ってくるわ！」

不安げにそう言ったイシエルに、エミルは力強く答えた。

2人の会話を聞いていた星は、間もなく出発するのを察して、レイニールをテーブルから抱き上げると胸にぎゅっと抱きしめる。だが、レイニールを抱き上げた星のその手は微かに震えていた。

それはレイニールも感じたのか、星の顔を不安げに見上げ。

「大丈夫か？ 主。震えておるぞ？」

「……えっ？ うん。あはは、どうしてかな」

笑って誤魔化す星の顔を見上げながら、レイニールはそれ以上追求しようとしなかった。

きつとレイニールは、星の心境を察していたのだろう。星にとっては、今回が前線で戦うのは始めてなのだ。恐怖を感じても仕方のないことだ――。

装備品やアイテムを確認すると「よし！」と呟き、星に向かって微笑みかけた。

「さあ、行きましようか！」

「はっ、はい！」

エミルの声を聞いてその場でビクッ！と飛び上がりそうになりながらも、星が返事を返す。

微笑みを浮かべたまま身を翻し、徐に歩き出すエミルの後を星が慌てて追いかけていった。

廊下を抜けて外に出ても、星の胸の高鳴りは収まるどころか更に強くなっていく。

巻物でリントヴルムを召喚するエミルの少し後ろで、星は自分の胸の前で両手を合わせていた。

その隣で空を飛びながら、星を心配そうに見つめていたレイニールが小声でささやいた。

「――主。怖いなら早く言った方がいいのだ。今なら、まだ行かなくてすむのじゃ……」

しかし、星は首を横に振ってレイニールの忠告を断った。

驚いた様子で目を見開いているレイニール。

レイニールは気を利かせて言ってくれたのは、星にもすぐに分かつ

た。だが、星にはどうしても退けない理由があったのだ。

それは……。

「もし。ここで逃げ出したら、次も同じように逃げちゃうし。それに……もう誰も傷付くの見たくないから……」

「……主。なら、我輩が頑張って主を守るしかないな！ 任せるのじゃー！」

星の決意を聞いて、俄然やる気になったレイニールが自信満々に自分の胸をポンッと叩く。

そんなレイニールが、今までで一番頼もしく見えて星は思わず顔を綻ばせた。すると、話をしている2人をエミルが星達を呼んだ。

エミルは星の手を取ると、地に這いつくばる様にして低く伏せているリントヴルムの背に乗った。

2人を乗せたリントヴルムはむくつと立ち上がり、大きく白い翼を大きく上下に動かす。

徐々に早くなる翼の動きに比例して、リントヴルムの巨体がゆっくりと宙に浮いていく。

星は間もなく進むのが分かって、自分の近くを飛んでいたレイニールを掴まえる。その直後、星の予想通り、リントヴルムがゆっくりと前に向かって動き出した。

黒い刀と黒い思惑3

街に向かって進んでいく途中、眉をひそめて不安そうな顔で遠くを見つめていたエミルの瞳が星に向けられている。

「星ちゃん。街に行ったら、私の側を離れちゃだめよ？ 無理も絶対だめ！ とりあえず。私の攻撃の間合い5m以上は離れないこと！ いいわね？」

「はい。でも——」
「——いいわね？」

星が言葉を返そうとして口を開いた瞬間。エミルが念を押すように先程より強めに言った。さすがに星も、それにはただただ頷くしかない。

頷いた星を見て、安堵した表情になったエミルは再び前を向き直す。

最初から星を連れていくことに、あまり乗り気じゃなかったエミルは土壇場にきて少し後悔しているのだろう。

星を城に残すと、ライラがくるかもしれないと思い。勢いで連れていくのを了承したところが大きい。

まあ、どちらにしても星にしてみれば、この状況に持っていければ良かったのだから、なんの不満もない——あるのは微かな不安と胸騒ぎだけだ。そして、その不安は現実に変わる……。

街の近くまできて、高度を落とすリントヴルムの背中に乗っていた星達にも街の惨状が入ってくる。

街の至る所から上がる悲鳴、怒号、武器の当たり合う金属音、それらが入り混じってまるで戦場だった。

その光景を冷静に見つめると、エミルは徐に口を開く。

「これは街に降りるのは止めた方がいいわね……少し離れた場所に降りるわ——」

「——ッ!？」

その時、星の目に飛び込んできたのは、今まさに黒い刀を持った男に斬りつけられようとしている少女の姿だった。

「レイ！」

もうそう口に出した時には、星はリントヴルムの背から飛び降りていた。

レイニールは驚き目を見開いたが、すぐに星を追い掛けるように急降下を開始し、星の服を掴むとパタパタと忙しなく翼を動かしてゆつくりと地面に向かって降りていく。

だが、その星の行動に一番驚いたのはエミルだ。

「——あの子はもう！」

星は落下しながらコマンドを操作してエクスカリバーを取り出す。

(……お願い。間に合って！)

徐に剣の先を、黒刀を振り上げている男に向けながら大きく叫ぶ。

「ソードマスターオーバーレイ!!」

すると、胸の辺りで何かが強い光を放つ。

それはさつきライラから渡された鳩を象ったシルバーのペンダントだった。

直後。星の剣先が向いていた男の足場が金色に輝く光の柱が立ち上がり、男の振り下ろされた黒い刀のダメージが『1』で固定される。地面に着地した星が剣を握り締めながら走り出そうとしたその時、耳元で誰かがささやく。

『ほら、そつちだけじゃない……向こうも、あつちも危ないよっ。』

脳の中を何度も反響する声、それは幼い女の子の声だった。

星が横目で周囲を見ると、様々な場所で助けを呼ぶ声が聞こえる。その声も何度も頭の中を波紋の様に反響し、星の思考は完全に停止する。

「……誰も死なせない……」

そう口に出した星は、力強く地面を蹴った。

駆け出していく星の体は、一瞬のうちに男と少女の間に割り込み素早く黒刀を弾くと、次の一撃で完全に黒い刀を破壊する。

今日やっていた練習の成果が出た場面と言えるだろう。ガラスが割れるように結晶と化した黒い刀が消えると使い手は我に返って、きよんとした様子で「俺はどうしてここに？」と呟いている。

だが、星はそんなことなど目に留める様子もなく、即座に次のプレイヤーの救出の為に駆けていく。

更に自分の固有スキルを使用して、速くなったスピードがまた数段と速くなる。

星の固有スキル『ソードマスター』は星専用の武器『エクスカリバー』を使用した時だけ、GM権限のあるプレイヤー管理能力のある『ソードマスターオーバーレイ』へと進化する。元々は使用する剣の能力を引き出す程度でしかない。

いつも側を飛び回っているレイニールも、元は『竜王の剣』というレア装備でしかなかった。だが、武器に固執した能力であるのはいまでもない。

使用する武器によって様々なスキルを使用することができるとは、ライラの『テレポルト』やエリエの『神速』と言った固有スキルとは違い。武器がなくなると、スキルの使用ができないというデメリットもある。

そして今の彼女の固有スキルの能力は謎の聖剣『エクスカリバー』の敵の能力値を全て『1』に変更し、己の能力に添加する能力——それは相手の敏捷や筋力のステータスも含まれていた。

強いて言うなら、今の彼女はスキルを使用すればするほど、能力を倍加させていくのだ——。

ほぼテレポルトに近い速度まで上昇した俊敏性をフル活用して、星は即座に近くにいた5人の妖刀を文字通り塵に変えていく。

星の姿が現れた直後に鳴り響く金属音と、それが砕け散った時のバキーンという破裂音が交互に襲う。

驚きを隠せないという顔で呆然と星の姿を見ていたレイニール。

だがその直後、再び走り出そうとした星の体が、倒れる瞬間に手を地面に突くこともなくドサツと力無く地面にうつ伏せに倒れる。

「——ッ!?! 主!!」

何が起きたのか分からないまま、レイニールは咄嗟に倒れた星の方に飛んでいくと、倒れている星の顔の近くに降り立つ。

地面に倒れ込んだままの星は荒い息を繰り返し、とても苦しそう

だ。

「主、大丈夫か!？」

「はあ……はあ……だ、だいじょう……ぶ。ちよっと、転んだだけだから……」

そう呟き、のっそりと起き上がる星の顔を、レイニールは心配そうな表情で見上げていた。

星は今にも泣き出しそうな瞳で自分を見つめているレイニールに微笑む。だが、その顔からは滝の様に滴り落ちる汗が流れている。

「大丈夫だよ……でも、この事は、 Emil さんには内緒にね……心配すると、だめだから……」

「……主」

汗を滲ませ辛そうなのにも関わらず、にっこりと微笑む星の姿にレイニールは小さく頷いた。しかしそれは、彼女の意見に賛同してではない。

もし、 Emil がこの事実を知ったら、星と喧嘩になるのは火を見るより明らかだ——そうなれば、疲労している自分の主が更にその華奢な体に疲労を蓄積させていくだけと分かっていたからだ。

このことは、 Emil には絶対にバレるわけにはいかない。

明らかに体に、何らかの異常をきたしているのは間違いないだろう。

それもそうだろう。メリットだけでこれだけの力を使い続けられるわけがない。きつと気付いていないだけで、何か致命的な欠陥がこの固有スキルにはあるのだ。

だがそんなことは、使用している星自身が最も分かっていることだろう——しかし、彼女は戦うのを止めようとする素振りすら見せなかった。

剣を地面に突き立て、なんとか立ち上がる星を見つめたレイニールは。

『どんなことがあっても、この危なっかしい主を支えていこう……』

つと、心の中で強く誓った。

星とのやり取りの直後、遠くから Emil が慌てて駆け寄ってくるの

が見えた。

エミルはふらついている星の両肩を掴むと、星の体の至る場所を撫でるように見て。

「はあく。怪我はしてないわね……もう、また無理して！ 寿命が縮まったわよ！」

そう言ったエミルの言葉は星の耳には全く入っていなかった。

何故なら「どうしてこんな事に……」「俺の仲間達を返せ」など、彼女の目の前では今さつき星によって助けられた人達が嘆き悲しんでいる姿が映し出されていたのだ。

更に被害者に執拗に責められている加害者も「知らない」「記憶がない」と泣きながら弁解している。

（この事件は被害者も加害者もない……全ての人が不幸にしかならぬい……）

そう思ったら、もう星は居ても立ってもいられなかった。

「……こんなこととしていられない。早く次に……」

星は覚束ない足取りで、何かに取り憑かれたように歩き出す。

だが、固有スキルを立て続けに使った影響なのか、思いとは裏腹に体が言うことを聞いてくれない。

使う前から特別なスキルなのは分かっていたが。星自身もこれほど、体に影響を起こすと思ってもみなかったのだ。

ふらふらと体を左右に揺らして、重い足を引きずるようにしながらも、必死に歩こうとする星の体をエミルが引き止めた。

「——もうふらふらじゃない！ そんな体でこれ以上どうするつもりなの！」

「まだ……まだ、やらないと……わたしが、やらないと……」

うわ言の様に 何度もそう口走る星をエミルがしっかりと抱きしめた。

潤んだエミルの瞳からは溢れた涙が頬を伝っている。

「やっぱり最初から無理だったのよ。オーバーワークだったの……私が練習の時にちゃんと止めていれば……」

その言葉から察するに、エミルは星が練習の疲労からこんな状況に

なつたと思っているのだろう。まあ、練習での疲労は少なからずあるかもしれない。この世界がゲームであっても、永遠に戦えるような仕様にはなっていない。

いや、もしも体は無限に疲れなかったとしても、長時間プレイしている以上は精神がすり減っていくのは防ぎようもない事実。

どんなに楽しくても、疲れないゲームなどない——それが全身の感覚を共有し、常に脳に緊張を強いるVRゲームならば尚更だ。

だが、一番の原因はプレイしている星が小学生で、ゲーム事態もこれが始めてということが大きく影響しているのは言うまでもないが、彼女の必要以上に気を使う神経質過ぎる性格が最も原因であるのは疑う余地もないだろう。

しかし、星の疲労はライラに襲われた時に現れた不思議なマントの女性の虹色に光るヒールストーンで回復したはず。と言うことはやはりこの尋常じゃない疲労は間違いなく、固有スキルの発動によるものが大きいと思われる。

エミルは肩で息をする星を抱きかかえると、地面にちよこんと座って心配そうな顔をしているレイニールに告げる。

「レイちゃん。マスター達と合流するから、私達を連れていつてもらってもいい？」

「だが、どこに居るか分かるのか!？」

「分かるわ。これだけ状況が悪ければ、きっと向こうも戦闘をしているはず。きつと『明鏡止水』でサラザさんの固有スキルの『ビルドアップ』を使っているわ!」

それを聞いた途端、レイニールの瞳が希望でキラキラと輝き出す。「なるほどな!。金ピカに光ってれば分かりやすい。あんな変わった姿をしている人間を見つけたのは簡単なのじゃ!」

エミルは一瞬、レイニールは自虐とも取れるセリフに『自分の普段の姿を忘れているのか?』と思いつつも、喉まで出かかった言葉をすぐに飲み込んだ。

黒い刀と黒い思惑4

本来ならばエミルも城に戻るのが正解なのだが、状況が全く飲み込めない状況下にマスター達を残すわけにもいかない。それに、もし彼等が戦闘に突入していても、レイニールに乗っていれば即座に撤退できる。

未だに至る所で上がる武器のぶつかると悲鳴に耳を塞ぎたくなるが、今は現実逃避している場合ではない。逸早くこの地獄の様な場所から、仲間を連れ出すことが最優先だ――。

巨大なドラゴンの姿に戻ると、2人と背中に乗せて地上を飛び立つ。

街の上から見下ろすと、街のメインストリートに戦う多くの人影が見えた。その中にはマスターやカレン、デイビッドの姿もあった。

エミルの読み通り。マスターの体は金色に輝き、その近くでは避難する人々を護衛するように戦うデイビッドとカレンが見える。だが、それ以上に不可解なのは『村正』を持った人間の多さだ。それはまるで、蟻が大群で虫の群れを取り囲み襲っているようにも見えるおびただしい数――とても、たった数日で広がった武器だとは思えないその数に、エミルは不吉な胸騒ぎを感じていた。

「レイちゃん！ 星ちゃんを連れて城に戻って！」

「なんじゃ!? 仲間を迎えに来たんじゃなくのかッ!？」

「状況が変わったわ。私はこのままここで出来る限りの事をする！ ……星ちゃんをお願いね」

荒い息遣いと悲鳴が入り交じり逃げるプレイヤー達を守るマスター達を見下ろすエミルは、その緊迫した雰囲気の中。アイテム欄から出した巻物を手に、星をレイニールの背中に残して飛び降りる。

空中で素早く手に持った巻物を広げ、紐に付いた笛を鳴らす。

直後。煙とともに現れたライトアーマードドラゴンの背中に乗って地上へと降り立つ。

横目で空を見るとレイニールはエミルの言う通り、その場を離脱して今来た道を帰っていく。

「——ライラの事は気になるけど、今の状況下ではこれが最善。仕方ないわ」

レイニールの去り際に小さく呟いたエミルに、カレンが駆け寄ってくる姿が見えた。

徐々に近付いてくるカレンを、エミルは微笑みながら迎えた。しかし、カレンは表情は曇らせながら彼女にしては珍しく、掻き消えそうな声で告げる。

「——エミルさんすみません。本当は俺達でなんとかするつもりだったんですが……」

申し訳なさそうに下を向くカレンの肩を、エミルが元氣付けるようにポンッと叩く。

「いいのよ。こんな状況だものね……それに、武闘大会の前連続優勝者が戦っているのに。現連続優勝者が戦わないわけにはいかないじゃない」

そう言つて敵を見据えたエミルの優しい顔が、一気に真面目な表情へと変わる。

避難してくる者は手負いの者が多く、そしてその全てに例外なく黒い甲冑に身を包んだ兵士達が護衛していた。

その兵士達はどこか機械的で、襲われても一切攻撃を返さない。だからこそ、エミルは『機械的』と思つたのだろう。本来、攻撃されれば身を守る為に全てではないにしても、数回は攻撃を返すものだ——しかし、兵士達はまるで逃げて来る者達の盾になるように、襲ってくる攻撃を剣で防ぐか鎧で受けている。

その無気力とも積極的とも取れる身を挺した行動に、疑問を持ったエミルがカレンに尋ねた。

「カレンさん。あの黒い兵士達はなんなの？」

「ああ、あれはマスターの戦友の固有スキルで出した兵士です。その方の名前はバロンって言うらしいですよ」

「へえ。便利な固有スキルもあるのね」

素直に感心していたエミルの耳に、何者かが怒鳴る声が飛び込んでくる。

その声の主の方を向くと少女と馬に跨がったまま、不機嫌そうに目を吊り上げている黒い甲冑を身に纏っている男の姿が見えた。

「なんで俺様の兵士達を、こんな虫みたいな奴等の為に消費しないといけないんだ！ もうこのゴミ共を斬り殺した方が早いだろー！」

「お前の固有スキルは、PVPじゃ相手のHPを『0』にできないだろうが！ それに、こんな状況なんだ。なるべく反感を買うような言動は慎めよ！」

激しく反論しているのは、同じく馬に乗った赤い甲冑を身に着けたメルデイウスだった。

2人は相当仲が悪いのか、互いに側に付けた馬から足を突き出して蹴り合っている。

それを見て、黒い鎧の男性の方に乗っている少女が頭を押さえながら、呆れた様子で大きなため息を吐いていた。

まあ、こんな危機的な状況下の中で喧嘩できるのが凄いと云ったところだろう。だが、今はそんなことに構っている余裕はない。

「カレンさん。あなたは後方に下がってプレイヤー達の回復と護衛をお願いします。人手が足りないようだから」

「は、はいー！」

カレンは頷くと、街の角地に集まっている多くのプレイヤー達の方へと駆けていく。

そしてエミルは腰に差したロングソードを抜くと、避難してくる人々の方へと急いだ。

正直な話。エミル1人が戦闘に参加したところで、どうこうなる状態ではない。

外壁の隅で身を寄せ合っているのは負傷が酷い者か低レベルのプレイヤー達で戦力にはならない。また、街のプレイヤー達の多くも防衛に参加しているが、彼等の殆どはレベル100に満たない中堅プレイヤー達だ。

始まりの街は一番初めにくる街だ。その為、ゲームを始めて日が浅いプレイヤー達が必然的に多くなってしまう。だが、高レベルプレイヤーがいらないわけではない。しかし、そんな腕に覚えのある彼等も

次々に負傷し下がってくる。

モンスター相手ならば負傷したら、別の者が回復用のヒールストーンを投げれば、疲労は残るもののHPは即座に回復する。

だが、PVPではより公正を期す為、戦闘中のHP回復はできない仕様になっていた。もちろん。武器破壊に成功していればPVPは解除され、回復アイテムの使用も可能になる。

本来の正常な時のPVPでは、プレイヤーの対戦人数は双方共同じて異常状態の装備、アイテムは使用禁止などの規制がある。

その機能も、残念なことにシステムが改悪された今となつては無意味に近い——いや、逆に事態の悪化に拍車をかけているとも言つてもいい。

素早く巻物を取り出したエミルは巻物を地面に開き笛を吹く。その直後、今度は煙の中からソードアーマードラゴンが出現した。

その背中に無数の剣身が剥き出しになった姿は、いつ見ても近付いただけで串刺しにされそうだ。

「ブレイクファンダー！」

——グオオオオオオオツ!!

突如そう叫んだエミルに応える様にソードアーマードラゴンが咆哮を上げ、空中に2本の剣が撃ち出された。

空中を舞つて地面に突き刺さった。その後、2本の剣をエミルが抜き取る。しかし不可解なことに、エミルの持つその剣には剣として最も重要な刃が付いていない。

いや、剣先に刃が付いているが、剣身はまるで分厚い鉄板の様だった。

「——あんまり長引かせると……また星ちゃんは何を考えるか分からないからね。本気でいくわよ！」

刃のない剣を両手に持ち、エミルは目の前で交戦していたプレイヤーの方へと走っていく。

黒い刀と黒い思惑5

目の前で交戦していた男性は、肩で息をしながら必死に攻撃を防いでいた。対峙していたのは『村正』を手にしたエルフの女性だった。だが、その表情は狂気に満ちていて、まるで人の負の感情が前面に出ているようなそんな感覚がした。まあ、どっちにしても。明らかに話して分かり合える感じではないことは確かである。

戦っているのは中級クラスのプレイヤーなのだろう。防御しつつ隙あらばと、持っていた剣で村正の刀身を横から叩くが、踏み込みが足りずに武器破壊にまでは至らない。

武器破壊は元々設定されている耐久値を減らし切るか、一部分に強い刺激を与えてやれば容易に壊れる。

基本は剣の刃のない横の腹の部分に強い衝撃を与えれば壊れるのだが、相当な力量差がなければ不可能に近い芸当でもある。

ベテランのプレイヤーならば何度か経験しているので、ウィークポイントも力の入れ具合も把握できているのだが、経験の浅いプレイヤーはそうもいかない。

武器破壊を諦めてプレイヤーを直接攻撃したとしても、HPが『1』に戻れば一時的に決着が付き。村正に操られたプレイヤーが攻撃してきて再び戦闘を開始され、それが武器の能力によってこちらのHPが『0』になるまで続く。

一番の問題は、敵の持っている黒刀『村正』のHPを削り切ることができる能力ということ……その為、対戦を終わらせるには、なんとしてもHPではなく武器自体を破壊しなければならないのだ――。

緊迫した攻防の隙に割り込むようにして、エミルが黒刀を持ったエルフの女性の前に立つ。

次の瞬間。襲い掛かろうと上段に振り上げた一瞬の隙を突いて懐に飛び込んだエミルの持っていた剣の柄が女性の腹部を捉えた。

体勢を崩した女性がなおも黒刀を構え振り抜く。それを左の剣でガードし、即座に右の剣で彼女の持っていた黒刀の刀身をへし折った。

今まで交戦していた男性も苦戦していた武器破壊が、呆気ないほどにあつかりと砕け散ったことに男性が最も驚いている。

直後。砕け散っていく『村正』を横目に次の場所へと向かっていく。その後もエミルは破竹の勢いで次々と黒刀を持った者達を正気に戻す。

両手に剣を手にしたエミルの戦闘に、危なげなんて言葉は微塵も感じられない。

全てがまるで始めから終わりまで、そうなるべくしてなった——つと言つてもいいほど、襲い掛かる敵の多彩な攻めを避けきり。的確に持っていた黒刀を砕いていく。しかし、それも長くは続かなかつた——。

「……くっ、これはまいったわね」

そう呟いた彼女を取り囲むように、10人の『村正』を持ったプレイヤーが刀を構えていた。

別にエミルが油断をしていたわけでもなんでもない。ただ単に敵の数が多すぎたのと、突如現れ次々に撃破していく彼女を危険と察した彼等が、数で対処しようとした結果に過ぎなかつた。多少勢いに任せて、前に出過ぎたエミルにも責任はあるのだが。

威嚇するように鋭く睨みを利かせるエミルにジリジリと迫る敵、事態は予想以上に悪い。

そんな絶体絶命の彼女を取り囲んでいた敵が一斉に襲い掛かる。するとその直後、突如として上空から飛んできた長いハルバードが地面に突き刺さる。

「——なっ！ 何ッ!？」

上空から突然降ってきたハルバードに驚き一瞬目を見開いたが、素早く警戒したような表情へと変わった。

それもそのはずだろう。エミルは以前にもその武器を目にしていた。もし、それが自分の考えている人物のものだとするならば……。

徐に空を見上げると、目を細めたエミルが不機嫌そうに眉をひそめた。そこに居たのは、もう二度と会いたくないと思っていた人物だったからだ。

漆黒のドラゴンの背に仁王立ちして結んだ長く黒い髪を風に揺らしながら、エミルを真つ直ぐに見つめる茶色い瞳の男。

あのダークブレットの事件以降、イシエルに彼のことを尋ねたら「そんな人。最初からおらんかったよ？」と呆気なく返され、すでに死んだものと思い込んでいた彼を目の当たりにしてエミルの脳裏を微かな不安が襲う。

それは『星が乗ったレイニールが彼に襲われたのではないのか』ということだ。

この世界で自分と同じ『ドラゴンテイマー』はそう多くない——いや、彼を除けば1人も見たことがない。

正直。このフリーダム内に、飛行能力を持った固有スキル持ちは皆無と言ってもいい。

もし持っていたとしても、それは有名ギルドの一握りの人間だけだろう。あの紅蓮もその一握りの1人であり、飛行スキル持ちは他のプレイヤーより多くのアドバンテージが得られる。

その中でもエミルのようなドラゴン使いは、ドラゴンのブレス攻撃という飛行スキル持ちの中でも、飛び抜けた攻撃手段と性能を持っていた。

その更に上位に位置する巨大なダンジョンボスクラスの特別なドラゴンが、星のレイニールとエミルのリントヴルムだ。

だが、彼——上杉影虎もファープニルという名前の黒竜を所有しているが、そのドラゴンも見た目だけでも間違いなくダンジョンボスクラスのドラゴンなのだろう。しかし、どうしてそれが星達を襲うのかと言うと……説明すれば、呆れるほどに簡単な理由だろう。それは単に脅威であり、目障りだからだ——。

ただでさえ目立つ外見の黄金のドラゴン。熟練のプレイヤーなら、そのドラゴンの技量も大体は窺い知れる。そして何より、自分と同じ固有スキル持ちを鬱陶しく思わない者などいない。

ネットゲームのプレイヤーの中でもMMORPGというジャンルのゲームをプレイしている者は、とにかく特別な武器や装備、スキル

などを所有している愉悦感と劣等感が半端ない。もしオリジナルの武器や防具を持っているようなものなら、まるで英雄の様に持てはやされ、更に裏ではそれを嫉んだ者達からの羨望の眼差しが向けられ、最悪の場合は物欲と憎悪に狂った者に襲撃されるなんてことも少なくはないのだ。

しかも、その中でも彼は特殊だ。独占欲と自尊心の塊の様な男だ——しかも、彼は両手の指で数え切れる程度のレアスキルである。飛行スキル持ちとの戦闘を想定に入れている変わった人物だ。

エミルが以前彼にやられた時もそうだったが、本来飛行スキル持ち同士の戦闘など視野に入れていない。飛行スキル持ちのプレイヤーとはそれだけ珍しい存在だと言うことだ——それなのにも関わらず、彼は対ドラゴン用に長いハルバードを準備していた。

それがエミルを意識していたからかは分からないものの。日頃のストーリーカー紛いの行動と、彼の言動から察するに『誰よりも自分が一番』という思考の持ち主であることは分かる。

そして彼はその中でも筋金入りにプライドが高い。そんな彼がいつ敵に回るかも分からないドラゴンを生かしておくわけがないだろう。

そう考えたら、エミルは身震いするほどの悪寒を感じ、顔を一瞬にて青ざめさせた。

「……星ちゃん」

震えた声で小さく呟くエミル。

そこにドラゴンの背中に仁王立ちしていた影虎が飛び降りて、エミルの背後に着地した。

本来なら、あまり高い場所から飛び降りるとHPが減少して消滅してしまうのだが、どんな仕掛けかは分からないものの彼はHP消費もなくピンピンしている。

だが、今のエミルはそんなことなどどうでもいい。飛び降りて来た彼に剣先を向けると、威圧するように大声で問い質す。

「あなた！ 金色のドラゴンを襲ってないわよね！」

睨みつけるその瞳には星の安否を按じているか、涙で滲んでいた。

その瞳を見て、影虎はニヤリと不敵な笑みを浮かべ。

「——そうか……分かったぞ？ それは照れ隠しだな！ 俺がこうしてお前の窮地に駆けつけたのがそんなに嬉しいのか！」

「いいから答えなさい！ 黄金のドラゴンを襲ったの襲ってないのどっちなのよ!!」

全く噛み合わない返答にイライラしながら、彼の眼前に突き付けた刃を更に突き出す。

影虎は口元に笑みを浮かべると。

「なに心配するな！ 黄金のドラゴン使いか何か知らないが、俺はお前にしか興味はないぞ。北条！」

「……………」

その屈託のない笑顔に、エミルはどう対応したらいいのか分からずに、あんぐりと口を開けたまま呆然としていた。

だが、その返答でこの男は星に危害を加えていないということが分かっただけで、エミルは内心ほっとする。その時、突如としてエミルの体が後ろに倒された。地面に背中を叩き付けられ、突然のことで驚き抵抗もできなかつたエミルがせめてもの抵抗にと影虎を睨みつける。

すると、彼は地面に突き刺さっていたハルバードを引き抜き、素早く円を描くように振った。直後、辺りを取り囲んでいた黒刀を持った者達が悲鳴を上げ、音を立てて吹き飛ぶ。

自分を守るように見せたその流れる様な一連の動作を目の当たりにして、エミルは一瞬胸の鼓動が高まるのを感じた。

だが……。

「——ふふっ、どうだ北条。俺の女にならないか？」

すぐ後に影虎は、したり顔でエミルの顎に手を当て告げる。

そんな彼のドヤ顔を見たら、体の奥底から怒りが沸々と湧き上がってきて。

「……誰があんたみたいなのとー！」

エミルは覆い被さっていた足で影虎の体を蹴り飛ばすと、むっとしながら睨み付けビシツと指差しながら言い放つ。

「私はあなたに興味ないわよ！ それに私は北条じゃない！ 伊勢よ！」

一瞬驚いた表情をした彼だったが、そう言って否定した彼女にすぐに。

「ふつ、なかなか強情な女だ……だが、城も強固な方が落としがいがあ
る。今はダメでもいつか、いつの日か必ず俺の女にしてやろう！」

「——そう。なら、この状況をなんとか打開しないといけないわね
……」

彼の言葉を軽く流して、エミルは持っていた剣で影虎の後ろを差し
示した。

そこにはたった今影虎のハルバードで斬り伏せられた者達が、HP
がなくなつた者達もバトルが終了したと同時に全快したHPで次々
と起き上がっていた。

確かにこの絶望的な状況を何とかしなければ、彼の目的は決して達
成されないのだろう。まあ、この状況を打壊したところで、エミルの
心が変わる可能性の方が低いと思うが……。

エミルの言葉に笑みを浮かべた影虎もまた、彼女の後ろを指差して
身を翻す。

背を向けた彼を警戒しつつも、エミルもくるつと後ろを向く。

「あなたのその武器。攻撃力はあるみたいだけど、いくら倒しても武
器を破壊するまでは、この戦いは終わらないわよ？ この人達は操ら
れているだけ。武器か、武器をばら撒いている張本人を倒さないと
……」

「ほう、こいつらは武器でこうなっているのか……なるほどな」

素直にエミルの言葉を聞き入れた彼に、少し戸惑いながらエミルが
呟く。

「……疑わないの？」

驚きながらもすぐに訝しげにそう尋ねたエミルに、影虎は笑みを漏
らした。

「ふん。惚れた女に騙されるなら、それもまた一興だ……」

影虎のその言葉にエミルは「バカじゃないの！」と毒づき、プイツ

とそっぽを向いて息を整え剣を構え直した。

エミルの言葉を聞いた影虎は持っていたハルバードを地面に突き刺し、新たに刀を取り出す。背中合わせの影虎に、エミルが真面目な声音で告げた。

「私の後ろは任せるわ。だから、あなた後ろは私に任せて……」

「心配するな！ 最初からそのつもりだ！」

直後、影虎が刀を峰を前に向け構え、突っ込んでいく。

エミルも口元に微かな笑みを浮かべて剣を構えると、前方の敵に向かって走り出す。

黒い刀と黒い思惑6

10人となれば、さすがに厳しいが5人程度ならエミルなら造作もない数だ。

両手に持った刃のない剣を巧みに操り、あっという間に5人の持っていた黒刀を消滅させた。

その破竹の勢いは、武器破壊に特化した今のエミルの武器だからこそできる芸当だ——普通ならば、武器破壊を限定とした装備を持っているプレイヤーは少ない。

もちろん。それは持てるアイテムに限りがあるからこそ、武器破壊専用なんていう蛇足に使う用途の武器を入れていられないというのが正直な話であろう。

エミルはドラゴンに武器そのものを常備させているからこそ、こういうイレギュラーな事態にも対処できるだけの話だ。

大きく息を吐いて肩の力を抜き一息ついたエミルが影虎の方を見ると、彼はすでに戦いを終えていて、刀を地面に刺したまま腕組みしながらこちらを見ている。

敵の攻撃をいなしつつ、隙をみて持っている武器を破壊したエミルに対して影虎はまさに真逆の対応を取っていた。

向かってくる敵の刀を、彼は持っていた刀の峰で真っ向から力尽くで粉碎していく方式を使っていた為、明らかなタイム差が生じたのだった。

専用武器を使っていた自分より早く敵に片を付けた影虎にイラツとしながらも、結果的に助けてもらったかたちになったこともあり、お礼を言わなければならぬと彼の元へ歩み寄る。

「あの……今回は助かったわ。ありがとう」

気恥ずかしいエミルは少し口籠もりながら言った。

すると、彼はにっこりと微笑み。

「そうか、なら口ではなく態度で示してほしいなー」

つと言葉を返した。それを聞いたエミルは、あんぐりと口を開けたままぽかんとしている。

それもそうだろう。確かに助けてはもらったが、それは半ば強引に彼が戦闘に介入してきたもので、エミル自身が彼に依頼したわけでも、懇願したわけでもないのだ。

彼の返答を聞いて、エミルは眉をひそめながらしばらく考え込む。

「……分かった」

エミルは小さく頷く。こんなことで、彼に逆恨みされては堪らない。

ここは明確に形に残るもので代償を支払った方が、安全で確実だと判断しただけにすぎなかった。

コマンドを開くと素早く指を動かし、徐にアイテムを取り出した。それは球体の形をしていて、透明の球体の中には水色の透き通る家の中に入っていた。

エミルは取り出したその青く輝く球体を影虎に渡す。

「これは大会優勝者に渡される宝玉よ。これを使えば、思い通りのマインハウスを造る事ができるわ。相当なレアアイテムだから換金してもいいし——」

「——そんな物はいらぬ。そんな事より、俺とデートしてくれ」

言葉を遮って影虎が発した言葉に、エミルの思考は一瞬停止してポカンと口を開けたまま首を傾げた。

「……………はあ!？」

衝撃的な発言をした彼に、エミルは思わず手に持っていた宝玉を地面に落とす。彼の発した言葉の意味が理解できずに、呆然と前だけを見つめているエミル。

影虎はそんなエミルの手を握り締めると、ぐいっと身を乗り出して更に詰め寄る。

「俺が欲しいのはお前だけだ!」

淀みのない瞳で言い寄って来る影虎に、エミルは苦笑いを浮かべ、即座に手を放して地面に転がった宝玉を拾い上げて彼の手に渡す。

「か、考えておくわ! とりあえず。これはしっかり受け取って! それじゃ、私は次に行かないといけないから。じゃあね!」

そう言い残したエミルは、慌ただしくその場を立ち去っていく。
その場に取り残され、去っていく彼女の後ろ姿を見つめる彼が徐に
口を開く。

「——これは脈ありだ!!」

高らかに叫んだ影虎は、徐々に小さくなるエミルを見つめながらエ
ミルから渡された宝玉をギュツと握り締めた。

その後、地面に刺した刀を抜き取ると、それを肩に担ぐ。

「不届き者を成敗するのも、義を示す道か……」

そう呟き、影虎は街の中へと消えていった。

未知なる力の解放

影虎の元から、一目散に退散したエミルはその足でマスターの元へと向かう。

マスターの身を按じているというよりは、彼の側にいた方が安全だからという理由が大きい。いくら強いエミルと言えど、それはゲームの中でだけの話だ――。

現実世界で執拗につきまとわれている人間に言い寄られたことに恐怖しないほど彼女は強くはない。

ゲーム世界の彼女は、年二回行われる武闘大会で毎回優勝するほどの腕前だが、その中はただの高校生少女でしかない。

そんな彼女が何度断つても、必要にグイグイ交際を持ち掛けて来る男性に恐怖しないわけがない。

エミルがマスターの所に着いた時には、彼はまさに戦闘の真っ最中だった。複数の敵を相手に、体的に確に拳で突いて動きを鈍らせてからの、一撃での武器破壊は最早芸術だ――。

周りのプレイヤーをある程度片付け、近くに来たエミルに気付いたマスターが微笑みを浮かべ振り返った。

「エミル無事だったか！」

「はいマスター。でも、どうしてこんな状態に？」

笑顔を向けられほっとしたのか、エミルの口からふと本音が溢れる。

それを聞いてマスターの表情が、先程とは打って変わって険しいものへと変わり、その重い口を開く。

「実はな。どうやら、この事件を起こした首謀者から街の者限定で、一斉にアイテムが送り付けられたらしいのだ」

マスターの言ったアイテムというのは『村正』のことだろう。数日前に事件があったとはいえ、それがこの武器が原因だと知っているのはそう多くはないはず。

事件の翌日に更なる大事件を起こしていることから、現在起きている村正事件の方が本命だったのは火を見るのより明らかだろう。だ

が、人とは本来一度大きな事件が起きれば、その後すぐに事件が起これると思わないものだ。

警戒はしているつもりでも、心のどこかで一日二日で『もう、こんな事は起きないだろう』と考えてしまうもの。その心の隙を突いてくるやり方は、犯人の方が一枚上手と言わざるを得ないだろう。

しかし、武器を送り付けられたのであれば本来ならば警戒してそれを手にしようとはしないはず。

おそらく。メッセージボックス内に、宛先『運営』とでも書いて放り込んだのだろうと容易に想像がつく。

こんな状況下だ。運営からのメッセージを読まないバカはいない。たとえそれが罫かもしれないと思っていてもだ――。

マスター達が初動から後手後手に回っているのが、今の防戦一方の構図になってしまっていた。

深刻そうな顔でマスターが小さくささやくように言った。

「…………どちらにしても、このままでは遅かれ早かれここも保たない。前線を守っていた者達も次々に負傷し、その撤退に人員を割いている状態だ。ダークブレットの首領となったデュランとも連絡が取れん。今はバロンの兵でなんとか前線を保たせている」

辺りを見渡し、エミルもその言葉を納得せざるを得ない。避難してくる者は明らかに減ってはいるものの、それは全てが避難してきたからではなく、大半を切り捨ててきたからに過ぎない。

建物内に立て籠もっている者も多いのだろう。近くの宿屋でも窓を中から板などで覆っていても、隙間から微かな光が漏れている。

この事件後始まりの街に居たのは5万人程度。しかし、その中から救出されたのは約2万人がいいところだろう。

他の者は建物に籠城しているか、残念ながら最悪の妖刀『村正』の餌食となった者達だろう。

ちなみに、街の総人口は始まりの街の中心にあるドームを模したギルドホールで確認することができる。

もちろん。他の街にも設置されており、様々なサービスが受けられる。クエストなども受けられる為、その達成率でギルドのランクに

よって、割り当てられるギルドホールのクラス上がる仕様になっていた。

本来ならばギルドホールに行けば正確な生存者と死亡者を確認できるのだが、殆ど全てのプレイヤーが出入りできるギルドホールに今近づくのは自殺行為だ。

何故なら、街には妖刀村正を持ったプレイヤーが他のプレイヤーを狩るために闊歩しており、腕のあるプレイヤーでも今はまとまって行動するのが安全だろう。

正直。未だ沈静化していないうちに死亡者と生存者を確認しても、意味がないのが理由として大きいのだが……。

エミルは不安そうな表情でマスターに尋ねた。

「マスター。避難と言っても、この数の人間を街の外に連れ出すのは……」

「……分かっておる。街の外はモンスターの生息域だ、襲われる危険が大きい。しかし、ここは始まりの街だ。幸い生息しているモンスターのレベルも、そう高くはない。少なくとも、武器によって強制的にLv100にされ、凶暴化した者等の中にいるよりは安全だろう」
そんな話をしていると、マスターの元に慌てた様子でカレンが駆けしてきた。

「師匠！ 皆が不安から次々と勝手に移動を開始しています！」

「なんだと!? まだ動くのは危険だ！ 逃げてきている者達の確保も終わっていないというのに。下手をすれば、奴等が更に寄って来て大変な事になるぞ！ すまんがエミル。ここは任せる！」

知らせを受け、血相を変えたマスターがエミルにそう言い残してカレンと共に走っていく。

エミルは小さくため息を漏らしながら、夜空を見上げた。

少し普段と同じ景色を見て落ち着きたいという、人間の本能的な心理かもしれない。

しかし、そこには見慣れた黄金色のドラゴンが飛んでいるのが視界に飛び込んできた。落ち着くどころか、エミルの顔は真っ青に変わった。

おそらく。マスターはそのことに気付いていたからエミルをここに残したのだろう。だが、エミルは気が気じゃない。

それもそのはずだろう。黄金のドラゴンは間違いなくレイニールだし、それに乗っているのは星だ——正直。一度帰した手前、どんな顔をして星に接すればいいか困惑していた。

先程の影虎のこともある。戻ってきてしまった以上、できれば手元に置いておいた方が安全だろう。しかし、危険な場所に戻って来てしまったことには、エミルとしても厳格な態度を取らざるを得ない。

地上に降り立ったレイニールを見つめ、エミルは腕を組み眉を吊り上げ、出来る限り不機嫌そうな顔をした。

レイニールの背中から降りてきた星は少しふらつきながらも、なんとか地面に着地する。

それを確認したレイニールは小さい姿に戻り、バツが悪そうに怒っている素振りをしているエミルから慌てて目を逸らす。

つと、星の体がよろけて転びそうになり、エミルが慌てて駆け寄って星の体を支えた。

見るからに疲れの色が見える星だが、彼女は苦笑いを浮かべながら。

「えへへ、ちよつとつまずいちゃって……」

そう言つて、疲れていることを少しでもごまかそうとしている。だが、立っているだけで足をつまずくなんてことはありえない。

その様子を見ていてエミルも演技するのがバカらしくなり、星に向かって問い掛けた。

「どうして戻ってきたの？ 今は街は安全じゃないのよ？」

エミルの優しい声に、星はほつと胸を撫で下ろした。

第一声から怒鳴られると思っていた星にとって、普段と変わらないエミルの声に安心したのだろう。

星がエミルの体から離れ自分の足でしっかりと地面に立つと、真剣な面持ちでエミルの顔を見つめた。

その顔には決意に満ちていて、エミルも嫌な予感がしながらも無言のまま、じつと星の目を見据える。

澄んだ瞳で星が徐に口を開く。

「……私はまだ倒れてません。一度始めたら限界までやり通す——それが、全力を尽くすってことだと思うから……」

「倒れるまでって……星ちゃん。あなた……」

だが、それ以上エミルは口を開くことはできなかつた。

それもそのはずだ。星の瞳には一切の迷いがなく、その真っ直ぐな瞳に気圧されてしまった。

まあ、だとしても『倒れるまで頑張る』なんていうのは正直、極端過ぎるというのが本音だろう。

エミルは半分呆れ顔で大きなため息をついた。

こうなつた星は何を言つても聞く耳を持たないのは、今までの経験で分かっていることだ。

それに、影虎がまだ近くをうろついている以上。もう、レイニールと一緒に帰らせる方が危ないのは、混乱しているエミルの頭でも分かっていた。

その後、頭を数回振つたエミルは全てが吹っ切れた様な晴れやかな顔で星の肩に手を置く。

「そうね。もう、思う通りに思い切りやってみなさい！」

その言葉に星の表情を明るくして、深く頷くとにつこりと微笑んだ。

すると、突然『フウ』と星の耳元に息が吹きかけられる感覚の直後、小さく少女の声で何者かがささやいた。

「——いい？ 考えるのではなく、感じるの。瞼を閉じて頭の中を空っぽにして、大きく息を吸い込んで……」

幼さの残るその優しい声音に、不信心よりもなんだか心地良さを感じた。

星はその声の言う通りに、瞼を閉じて息を大きく吸い込んだ。そして剣を前に構え、息を吐きながら肩の力をゆっくりと抜いていく。

そうしているうちになんだか、体の中からポカポカと暖かい感覚が湧き上がってきて。

「……ソードマスターオーバード発動。エクスカリバーエボ

リリジョン始動……」

気が付くと、星の意思とは無意識に口が勝手に動き言葉を発していた。

瞼をゆつくりと開くと、星の澄んだ紫の瞳がルビーの様に赤く変色していく。それと同時に、手足の感覚が徐々に薄れ、思考も徐々に何者かに侵食されていくのを感じた。

しかし、不思議とそこに不安はなくあるのは、絶対の安心感だけだった遠い昔に味わったことのあるような感覚に星はただただ身を任せる。

星の手に握り締めていたエクスカリバーも金色に輝き。その刹那、今度は虹色に輝き出した。

その形状も徐々に変わり。片手剣でしかなかったエクスカリバーが巨大化し、いつの間にか両手剣へと変わっていた。

剣全体が虹色に煌めき、その光が薄暗い月明かりに照らし出された街を更に眩しく辺りを照らす。

虹色に光る剣が天を突き刺す様に伸び、その光が街全体を照らしていくと。ふと、侵食されていた思考が星に戻った。

そして耳元で「固有スキルを使いなさい」と再びささやかれ、息を吸い込んだ星は大声で叫ぶ。

「——ソードマスターオーバーレイ!!」

その声に導かれる様に星の両手に掲げられている巨大な剣の姿をした光が、まるで波紋の様に街全体に散っていく。

次第に光が収まり剣が元の大きさに戻ると、ライラから貫い胸元に下げていた鳩のネックレスが粉々に砕け散った。

星が技を使う前に街中で響いていた悲鳴と怒号がぱったりと止み、街は何事もなかったかの様に静寂に包まれた。その場に立ち尽くしていた星が、全力を使い果たしその場に倒れた。

突如倒れた星に、エミルが慌てて駆け寄っていく。

倒れた星を抱き起こすと、星はやりきった様な表情のまま気持ち良さそうに寝息を立てているその顔を見て、エミルは思わず微笑んだ。

「……全く。なんだかんだ言ったってまだまだ子供ね。こんな状況下

で寝れるなんて」

そう呟いたエミルの元にマスターからのメッセージが届く。

視界に映し出されたメッセージを見て、エミルは首を傾げた。

マスターからのメッセージの内容は『自分を含めたプレイヤーの能力値が『1』の値を示していて、上下しない。そして街で暴れていたプレイヤーの手にしていた村正が突如砕け散って消えた』ということが書かれていた。

未知なる力の解放2

それから数時間後。深い闇に覆われていた空が明るくなってきた頃には、街の騒ぎも収まりを見せた。

薄っすらと朝霧の掛かる静まり返った街の中は、惨劇を物語る荒んだ風景にさながら地獄の一丁目と言ったところだろうか……。

この事件の傷跡は大きく、仲間を失ったプレイヤー達は思い思いに仲間の死を嘆いていた。

静まり返った街はまるでお通夜のようなだった。そんな中、エミルは眠ってしまった星を抱きかかえてマスター達と合流する。

メッセージでも良かったのだが、街がこんな状況では実際に自分の目で安否を確認しなければ、安心できないと思ったのが大きいだろう。それともう一つ。エミルには、マスターに会って直接確認しなければならぬことがあったのだ。

エミルがマスターの元に着いた時には、彼は忙しなく事後の処理に追われていた。

強制的にPVPに入ってしまったっている者達の任意解除や、恐怖や悲しみに打ちひしがれている者達の安全な場所への移動など、事件が終わってもやらなければならないことは山積みなのだ。

そして、いつの間にかダークブレットのメンバーも僅かだが、その手伝いに参加していた。

ほとぼりが冷めてからやってくるというところが彼等らしいと言えばらしいのだが、それでも実際に戦っていたエミルは、何かやるせない気持ちになるのは仕方のないことなのかもしれない。

何と言っても戦闘中は雲隠れし、安全になったことを確認してから始めて参加してくるとするのは、やはりあまりいい気はしないのは事実だ。

まあ、命が掛かっているからこそその行動なのだろうが、彼等の人数も加われれば犠牲にならずに済んだ者も多くいただろうという思いがどうしても出てきてしまう。だが、今はそんなことよりもっと重要なことがある。

「マスター」

「おお、エミルか！」

事後処理をしていて、険しい表情をしていたマスターの表情が彼女を見て微かに和らぐ。

エミルは微笑みを浮かべ、事の真相をマスターに尋ねた。

「先程のメッセージの内容を、詳しく教えてくれませんか？」

そう、エミルは目の前で星の剣が巨大な光の剣と変わり、その光が街全体に広がっていった。この暴動が収まった——それに何らかの因果関係があるのか、ないのかを確認しておかなければならない。

少し驚いたような表情を見せたマスターだったが、エミルの腕に抱かれ眠っている星を見て静かに頷く。

「うむ。だが、メッセージの通りだ。儂はカレンと共にこの場に戻って来た時には、すでに戦闘は終了していた。HPは『1』で固定され、しばらくして『村正』も消滅したのだ。詳しくと言われても、何が起きたのか儂も聞きたいくらいだ」

「……そうですか」

がっかりした様子で肩を落とすエミル。

マスターは横目でチラツと星を見て怪訝な顔を見ると、徐にエミルに告げる。

「——まあ、こちらはもうなんとかなる。お前達は早めに城に戻っているといい」

「えっ？ あ、はい。ありがとうございます」

彼の言葉に一瞬以外そのような表情をしたが、エミルは軽くお辞儀をしてその場を後にした。

去っていくエミル達を見つめ、マスターが目細める。

「——あの娘の固有スキル。相当な可能性を秘めているようだな……」

その時のマスターは星から微かに湧き上がる金色のオーラが、目に見える気がした。

マスター達と別れてリントヴルムの背に揺られ、日の光で赤らめ始

めた空を飛んでいると、ふとエミルがレイニールに尋ねる。

「レイちゃんは、星ちゃんのどんな事が好き？」

「そんなの、全部に決まっているのじゃ！」

突拍子もないその問いに、レイニールは迷う素振りも見せず即答した。まあ、レイニールがそう答えるのはなんとなく予想できていたことだ――。

その曇りのないレイニールの声に、エミルも苦笑いを浮かべて続けて「全部って？」と聞く。自信満々にレイニールは胸を張ると、じつと自分の方を見つめているエミルに堂々と言い放つ。

「主は我輩を外の世界に連れ出してくれた張本人だ。それに優しいし、どんな時でも自分より他人を気にかけて、いつでも人の為に一生懸命なのじゃ！ さつきだって人を助ける為に飛び降りるなんて、そうそう真似できる事ではないぞ？ 我輩は、主が我輩の主なのを誇りに思っているのじゃ！」

「――誇りか……そうね。その言葉を星ちゃんにも聞かせてあげたかったわね」

そう呟くと、エミルは寝ている星の頭を優しく撫でた。

すると、突然レイニールがパタパタと翼をはためかせ空中に浮き上がり、険しい表情で遠くの方を見つめた。

不思議に思ったエミルもレイニールの見ている方向を見るが、そこには見渡す限り雲海が見えるだけで他には何も見えない。

「どうしたの？」

「……………いや、なんでもないので」

レイニールのいつになく暗い声にエミルが首を傾げていると自分の城が目に入り、リントヴルムに地上に降りるように指示を出す。

地上に降り立ったリントヴルムを消すと、エミルは星を抱きかかえたまま部屋に戻った。

部屋に戻ったエミルは星を寝室に運ぶと、リビングへと向かう。

リビングでは、椅子に座ったエリエが申し訳なきように俯きながら、肩身が狭い思いをしながらココアを飲んでいた。

その隣に座っていたミレイニは、何食わぬ顔でカステラを摘んでい

る。

すでに先程まで食べ過ぎて倒れていたことなんて、綺麗さっぱり忘れていたような晴れ晴れとした表情で、彼女は口の中いっぱいにかステラを頬張っていた。

エミルはエリエの向かい側に座ると、微笑みながらイシエルがお茶の入った湯呑みを目の前に置く。

その湯呑みのお茶を口に運ぶと、再び湯呑みをテーブルに置いて小さくため息を漏らす。

エミルの顔色を窺うように、エリエが数回チラッと見て口を開いた。

「あの……いい、いやあく、大変だったみたいだね。エミル姉」

「……………」

バツが悪そうに頭を掻きながらエリエがそう告げると、無言のままエミルは鋭い視線をエリエに向けた。

エリエはビクツと体を震わせると、慌ててエミルから視線を逸らす。

「全く、エリー。お菓子を食べるのはいいけど、動けなくなるくらい食べるなんて!」

「——ひっ！、ぐ、ごめんなさい!」

急に大きな声を出されて驚いたエリエが頭を押さえて咄嗟に謝る。

その横でミレイニが口の中に含んでいたカステラを飲み込んで、落ち着いた様子でビクついているエリエに言い放つ。

「本当にエリエは仕方ないし……そんなんじや、一緒にいるあたしまで恥ずかしいから止めてほしいし」

呆れながらそう言い終えて、ミレイニが次のカステラに手を伸ばそうとしたその時、その手をエリエの腕ががっしりと捕まえた。

「……なんですつて〜!! 元はと言えば、あんたがどつちが多く食べれるか競おうって言ったのが原因でしょうが!!」

怒り狂ったエリエは隣に座っているミレイニの手を引っ張ると、強引に自分の方に引き寄せて自分の前に持つてくると素早く両手で彼女の頬をつねりながら引っ張った。

「いはいひ〜。いいはありだひ〜」

「なにが言い掛かりですつて〜。このこの〜」

ミレイニの両頬を思い切り引っ張っているエリエを見て、エミルは呆れ顔で大きなため息をつく。

その横でイシエルが「本当に元気な子達やねえ〜」と楽しそうな微笑みを浮かべていた。

未知なる力の解放3

それから数時間が経過し、太陽が真上に到達した頃。

精も根も尽き果てて疲れきった表情で、マスターとカレンが部屋に戻ってくる。

少し遅れるようにしてメルディウスと小虎。そしてエミルが街で見た全身に黒い鎧を身にまとった青年とその後ろから少女が入って来た。

エミルはリビングに招き入れると、彼等の労をねぎらう為、お茶とお菓子を振る舞う。まあ、それをせっせと作っているのはエリエナのだが……。

テーブルに置かれた緑茶とカステラを前にして、マスターはそれ hands を付けることもなく、何か考え事をしているのか静かに腕を組んだまま瞼を閉じている。

師匠が手を付けないのに自分が食べるわけにはいかない、マスターの姿を見守っているカレンもお茶だけに口を付けて目の前に置かれたカステラにはいつさい手を付けようとしなない。

だが、時折生唾を呑み込んでいるところを見ると、カレンとしては食いたいという食欲を理性で我慢しているのだろう。無理もない。事件発生からずっと動きっぱなしで、空腹のゲージは相当減っているはずだ。

それとは対称的に、メルディウスは欲望のままにカステラをバクバクと食べ進め。

「おう！ これは美味しいぞ！ シェフを呼べ！」

「……ちよ、止めてよ。人の家だよ兄貴」

大声でそう叫ぶ横で、小虎が恥ずかしそうにしている。

まあ、これが名を轟かせている大規模なギルドのギルドマスターだとは、言われても誰も信じてはくれないだろう。更にその隣の黒い鎧を着た男性と身軽な革鎧の少女はというと……。

「なにこれ！ お店で売ってるのより美味しい！ ほら、美味しいよお兄ちゃん！」

少女の方がカステラをフォークで刺し、兄と呼ぶ黒い鎧を着た男の顔に近付けた。

しかし、男の方はそれを口にするどころか、腕組みしたままそっぽを向いた。

「ふんっ！ こんな得體も知れない奴等の作った物など食えるか！

俺様を誰だと思つてやがるんだ！ テスターだぞ！ テ・ス・ター！
日本には4人しかいない存在の俺様が庶民の口にする物など食えるかよ！」

「もう。お兄ちゃん！ またそんな事言つて……ダメでしょ？ 失礼だよ！」

偉ぶる兄を妹がたしなめている。

エミルはそれを見て、この兄妹はこの関係が最も自然体なのだろうと悟つた。

エミルにも妹がいたが、こんな微笑ましいと思える喧嘩をしていた記憶は全くなく、言い合いと言えるようないざごぎもなかった。それが彼女には、喧嘩する2人が少し羨ましく映っていたのかもしれない。

何気なく少女にエミルが話し掛ける。

「あの、貴女方もマスターの仲間の方ですか？」

「えっ？ あ、はい！ でも、私じゃなくてお兄ちゃんが。ですけど……」

予想通りというか、予想以上に気さくに言葉を返してくれた彼女に、緊張が取れたエミルがスツと自分の手を差し出した。

少女は一瞬きよとした表情をしたものの、慌ててその手を掴む。

「私はエミル。よろしくね！」

につこりと笑うと、少し表情が硬かった彼女も笑顔を見せ。

「あつ、はい！ 私はフィリスです。お兄ちゃんはバロンです。よろしくお願ひします！」

「おい！ どうして俺様の紹介してるんだ妹よ！」

彼は自己紹介などする気がなかったのだろう。突如自分の紹介も

されたことにうろたえている。

そんな兄に向かって、フィリスが強めの口調で言った。

「だってお兄ちゃんはどうでもない、誰とも仲良くなれないでしょう！」

「だから、俺様は誰とも——」

そう口を開こうとしたバロンを放置して、フィリスはエミルにっこりと微笑み掛け。

「あんな事言ってますが、兄とも仲良くして下さいね！」

つと、エミルの手を両手で包み込むようにしてぎゅつと力を込めて握り返した。

熱い視線を向ける彼女に、エミルも軽く微笑み返す。

すると、エミルの視界に、突如として何者からのメッセージが表示された。

それは他の皆も同じなようで、その場に居た全員が一斉に指を動かしている。

エミルも視界に映し出されたメッセージを指で押すと、目の前に大きくウインドウが開く。

【今晚8時、各街の広場のモニターにて重大発表がございます。どなたも、この放送をお聴き逃しのないようお願いいたします。】

表示を見たエミルは、その不可解な文章に首を傾げていた。

それもそのはずだ。このメッセージを送ってきたのはVRMMORPG【FREEDOM】の運営ではない。

運営ならば、まずは今回のログアウトできなくなった事件に対してのお詫びの文面が添えられていなければおかしい。

しかし、この文面にはそのような内容のことは、一文字たりとも書かれていない。また、このタイミングで運営を装ってこのメッセージがくるというのは不自然だ。

そうになると、今回の村正事件を起こしたのは彼ではないのか？つとという疑問が生まれる……いや、まだ彼と断定するのも早急過ぎるだろう。

それはこの規模の事件を起こせるシルバーウルフは、彼一人と断定

するのは難しいからだ——何故なら、彼はいつでも覆面を被っている為、その素顔は誰も見ていない。

そうなると、覆面だけ使い回して他の人物と入れ替わっているという可能性もある。

モニター越しに映る彼は痩せ型ではあるが、一般的にどこにでも居そうな体型をしていたし、音声もこのデータの世界ではいくらでも改変できる。

つとなれば、狼の覆面を使い回せば背格好の似た者なら誰でも彼に成り済ませるということでもあるのだ。

いや、そうでなくてもデータとして表示するだけならば、わざわざ人が変わらなくても架空の人物をでっち上げることなど造作もないだろう。

そう考えると、今までの問題の規模と迅速な対応をふまえて、彼は単独犯ではなく複数犯の可能性の方が高いと言ってもいい。

そうなる『今回の事件は彼ではない他の者の偽装工作なのか？』
エミルがそんなことを考えていると、横に居たイシエルが不思議そうな顔でエミルを覗き込んできた。

「どないしたん？ 上の空で」

「えっ？ ああ、ちよつと考え事をね……それより、何か大事な話をしていた？」

何やら会話をしているマスターとメルディウスの姿が目に入り、エミルがイシエルに尋ねる。

すると、イシエルはにこつと微笑み返してその言葉に答えた。

「大丈夫だよ。ただ、重大発表の前にしっかり準備を整えておこうって話をしてただけだよ」

「なるほど……そうね。昨晚は突然だったから何もできなかつたものね。やっぱり備品を少し多めに持っていけないと、私達の回復分だけじゃ不十分なものね」

「そうなん？ 言うてくれれば持って行ったんやけど……」

不満そうな表情をしているイシエル。

城で皆の帰りを待っていた彼女にとって、さっきの言葉は頼りにさ

れていないと感じたのかもしれない。

すぐにそれを察したエミルが笑みを浮かべ。

「相当な混戦状態だったのよ。あの状況じゃ空でも飛べないと来れないわ。合流するなんてもつと無理よ。それにいくらイシエでも、スキルが使えなきや戦えないでしょ？」

「……そないなこと……」

掻き消えそうなほど小さな声で、悔しそうに呟くイシエルの頭をエミルが優しく撫でると、まるで気持ち良さそうに甘える猫の様に、イシエルは目を細めた。

その時、エミルの耳にメルデイウスとマスターの会話が聞こえてきた。

「そうだメルデイウスよ。千代の紅蓮達は大事ないか？ こつちがこの有様だ、向こうも相当だろう」

それを聞いたメルデイウスは高笑いをしながら、マスターに向かって言葉を返す。

「はっはっはっ！ 大丈夫だぜ。今朝紅蓮の奴から連絡があつて、ピンピンしながら『こつちのことよりも、貴方はマスターに失礼な態度を取ってないでしょうね？』と憎まれ口を叩くくらいだ——それにだジジイ。俺達は仮にも千代の頭を張っているギルドだぜ？ メンバー全員、狩りで鍛えられた凄腕揃いの強者達だ、そんなのに、にわかLv100の底辺プレイヤーが束になつても勝てるわけないだろう」

自信満々にほくそ笑んで言ったメルデイウスのセリフには不思議な説得力があつた。

確かに今回の事件で使われた『村正』は、手にしたプレイヤーがどんなに低レベルでもMAXに引き上げる効果を持っていた。

しかし、それは理性を持たない戦闘兵器へと変貌させてのもので、言わば人の姿をした人形モンスターと何ら変わらない。しかもそれだけではなく、武器破壊により容易にその状態を解除できるという分、手練のベテランプレイヤー達からしてみればたいした相手ではなかっただろう。

ギルドマスターが桁外れの強さを持つ彼であるわけだから、そこに属するプレイヤーが弱い訳はない。まあ、彼から滲み出る強者にしかないオーラが、彼の発する言葉にまで現れているのだろう。

マスターは口元に笑みを浮かべ「そうだな」と小さく呟くと、エミル達の方へと振り向く。

ゆっくりを歩みを進めながら声を大にして叫ぶ。

「これから儂と街に物資の補給に行く者達を決める。皆、集まってくれ！」

その声に、キツチンに居たエリエや、リビングのソファアに寝転んでいたミレイニがテーブルに着く。

全員が居るのを確認して、ごそごそと何かを取り出すと徐に握り拳を突き出す。その拳の中には、先の出た複数の紐が握られていた。

未知なる力の解放4

マスターは険しい表情を崩さずに、至って真面目な声音で皆に告げる。

「これの先に赤く印が付いた物が3本ある。儂を含めた他3名が街に買い出しに行く事になる」

「ちよつと待つて下さいー」

彼のその提案に異を唱えたのはカレンだった。

カレンは自分が無条件で、マスターと一緒にに行けるものだと思つていたのだろう。

大きな声を出したカレンに、皆の視線が集中した。しかし、カレンはそれに物怖じする様子もなく言葉を続ける。

「どうして俺と一緒にいけないんですか!? 街も安全じゃありませんし。こういう時は連携を取りなれている人と組む方がいいと思いません!」

立ち上がり、身を乗り出し気味で切実に訴えるカレン。

だが、マスターは至つて冷静だった。

「まあ、カレンの言う事も一理あるが、この時間を利用してメルディウスやバロン達とも交流できればと思つてな。クジに当たればあやつもやらざるを得ないだろう」

マスターは横目でちらりとバロンを見ると、彼は不機嫌そうに目を逸らす。そんな兄に変わつて妹のフィリスが何度も頷く。

次にメルディウスと小虎の方に視線を向けると、彼等も異論はないのか深く頷いた。

彼等の反応を見たマスターは満足した様に頷き返すと、突き出して腕を更に伸ばし。

「さあ、引けー」

声を大にしてマスターが叫ぶ。

先にメルディウス、小虎が拳から出ている紐の先を掴んで同時に引っ張る。が、残念ながら2人の取つた紐の先には何も付いていない。

「うむ……2人ははずれのようだな。ならば次だ！」

次にエリエが引く。だが、それもはずれだった――。

つと、ふとエリエの後ろからミレイニが現れてクジに手を伸ばす。しかし、それを既の所でエリエが伸びてきた腕を掴んで止める。

ミレイニは不服そうにエリエを睨みつけると大きな声で叫んだ。

「なんで止めるし！ あたしもクジ引きたいし！」

「クジ引きたいって……あんた。話聞いてなかったの？ これは街に行く人を決めるクジなのよ!？」

頬を膨らませながら不服そうに腕を上下にブンブンと振っているミレイニにエリエが言うと、ミレイニはエリエの腕を振り払って腰に手を当て堂々と胸を張った。

「そんなの分かってるし！ でも結局。街に遊びに行くわけだから、同じだし！」

その言葉を聞いてエリエも額を押さえ大きなため息を吐き出す。同じようにその場に居た者達も呆れ顔で小さくため息を漏らしていた。

まあ、彼女からしてみれば、昨晚の出来事を見ていないのだから無理はないのだが、大体の雰囲気で状況を察することができないのはミレイニらしいと言えばらしいのだろう……。

だがその直後、マスターが微笑みを浮かべ、ミレイニの前にクジを突き出した。

「まあ、1人だけ引けないのも不公平だろう。当たれば特別枠という事でいいだろう」

「さすがおじいちゃんは優しいし！ なら………これだし！」

真剣な眼差しでマスターの持つ紐のクジを見つめ、ミレイニは力強く紐を引っ張りその先を見た瞬間、不機嫌そうに頬を膨らませた。

その反応とは対称的に、エリエはほっとした様子で息を漏らす。

納得いかないと顔をしているミレイニの背中を押して、ソファの方へと追いやる。

「ほらほら、外れた人は退けて退けて」

「むう。納得いかないし！ 不正だし、断固抗議するし！」

未だにブツブツと不満を漏らすミレイニを引き連れ、エリエはソファアの陰へと消えていく。

その姿を見送って、今度はイシエルとエミルがクジを引いた。すると、両方共引いた紐の先に赤い印が付いている。

それを見たイシエルが「さすがうちらは切っても切れないんやね！」と興奮気味に言っている中、エミルは複雑そうな顔をしていた。それは寝室に残してきた星が、全く目を覚ます様子がないことが原因だった。

もう昼過ぎだが、昨晚の事件で眠ったままの星は一向に目を覚ます気配がない。

このゲーム内では疲労は寝ることで回復できる。それはつまり、疲労が大きければそれに従って睡眠時間も長くなるということになる。

エミルは昨晚の出来事が星がやったことなのか知らない。

何故か、その時の記憶だけがぼつかりと抜け落ちているのだが、心のどこかで『きっとあの子が……』と思う気持ちもあった。

今はレイニールが近くに付いているが、できれば彼女が起きた時に一番に会いたいという願望と、もしもの為にしっかりと準備しなければならぬという思いが葛藤していた。

それでも、クジに当たってしまった以上。他に変わるということもまた無理だろう。いや、正確には無理ではなく不可能なのだ——何故なら、一緒にクジに当たったイシエルがそれを良しとしないからだ。おそらく。ここでエミルがいかないとすれば、彼女もまたいかなないとはい出してクジをした意味がなくなってしまうからである。そして何よりも……。

エミルはメルディウスとバロンを、気づかれない様に見て眉をひそめた。

(この人達の行動が全く読めない。マスターの言っていた通りなら、四天王と呼ばれる彼等はそれぞれ性格に問題があるらしい。黒い鎧の彼はもちろんだけど……)

心の中で呟いたエミルが、もう一度メルディウスを見遣った。

(あの赤い鎧の彼が最も読めない。初めて会った時にフレンドリーに

話し掛けてきたけど、友好的に見える人間が一番危ないのよね……）
疑うように目を細めながらメルデイウスを見るエミルの腕に、イシエルが腕を絡めてきた。

まあ、そう心の中で呟いたエミルの頭の中には、犬猿の仲であるライラの顔が浮かんでいた。

驚いて腕を組んできたイシエルの方を向いたエミルに、彼女がにっこりと微笑みかけ。

「ほら、はよう行こー！ はようせんと夜になってまうよ？」

「ええ、そうね。でも、まだ残りの1人が決まってるから……」

苦笑いを浮かべつつそう言って彼女を遠ざけると、イシエルは不満そうに眉をひそめた。

そして残った3本の紐を、両端からカレンとフィリスが同時に引く。

2人の引いた紐の先にはカレンの方には印はなく、フィリスの引いた紐の方に赤く印が付いていた。

その結果に不服そうなカレンがフィリスのことを鋭く睨みつける。

攻撃的なカレンのその態度に、フィリスは終始苦笑いを浮かべるしかなかった。

マスターがフィリスを威圧しているカレンの肩をポンッと叩くと、我に返ったカレンががっくりと肩を落とす。だが、エミルにはマスターの思惑が読めていた。

一見公平を装ってクジで決めてはいるものの、選ばれる直前にクジに細工をしていたのを見逃さなかった。

もちろん。それほど大きなものではなく、引かれるクジの奥の方に当たりがくるようにするものだ——人は無意識のうちに自分に最も近いクジを引いてしまう傾向がある。

しかも、それがどうでもいいクジなら尚の事——その心理を付いてマスターは意図してメルデイウスとバロンにクジをはずさせたのだ。

これは付き合いの長いマスターだからできる手法と云ってもいい。

その理由は、もちろん必要以上に戦力を城に残しておく必要があるからだろう。

狙われる危険が最も高いのはこの中なら、今寝室で眠っている星だ——以前にもダークブレットに誘拐されたことのある彼女を守る必要があるとマスターは感じていた。

彼女の固有スキルとライラが執拗にちよつかいを出してくるのを見ていれば、彼女が如何に重要な役割を与えられているのはすぐに察することができる。

また、今回のことでメルデイウスとバロンの仲を少しでも改善させたいという意図もあったのだろう。だから性格上、最後まで引かないことを予想した上でカレンをこの場に残し、彼の妹であるフィリスを街に連れ出したのも合点がいく。

作戦前にフィリスと一緒にバロンに逃げられては元も子もない。だが、妹のフィリスをこちらで匿つていればバロンは思い通りに動くことはできないだろう。

何食わぬ顔で微笑みを浮かべているが、マスターは相当な策士であるのは間違いない。その後、マスターが選ばれたエミル、イシエル、フィリスの3人を自分の前に呼び出した。

「相手が何を仕掛けてくるか分からん。できるだけ多くの物資が必要になる。装備品以外は外してもらおうことになるが、昨晚の事件後で街も警戒が強い状態だからな、敵も迂闊に攻めては来ないだろう。とはいえ、夜になるのは避けたい。皆儂の言う通りに動いて迅速な行動を心掛けてくれ！」

真剣な表情のエミル、イシエル、フィリスはその言葉を聞いて静かに頷く。その後、装備以外のアイテムを全て部屋に置くと、マスターの後に続いてエミル達も部屋から出ていった。

決戦に備えて

4人が街に着くと人の姿は殆どなく、予想以上に街全体の雰囲気が悪くなっていた。

以前も人通りが多く活気に溢れていたとは言えなかったが、今はなお酷いと断言してもいいほどだ——街に出ているプレイヤー達は、一部の例外なく装備を常時装備したまま、道行く他のプレイヤー達に睨みを利かせている。

彼等の突き刺す様な鋭い視線は、エミル達の様な女性プレイヤーにも容赦なく浴びせかけられていて、とてもじゃないが普通に街を歩ける状況ではない。

そのせいか他の女性プレイヤー達は宿屋でも、宿を男女で分けるようにして……というより、強制的に男性プレイヤーを追い出すかたちで、独自の防衛手段を取っているようだ——。

現にエミル達の目の前で近くの宿屋から多くの男性プレイヤー達が締め出しを食らっていた。

理不尽とも言える横暴な彼女達のやり方に、同じ女性プレイヤーであるエミル達3人も渋い顔をせざるを得ない。

いや、正確にはイシエルを除く2人だが……イシエルだけは終始笑顔を浮かべたまま、エミルと一緒に出掛けられていることを素直に喜んでいようだった。

そして追い出された男性プレイヤー達は、口々に不満をぼやきながら「これだから女つて奴は」と、これ見よがしにエミル達を横目で睨んで去っていく。

周りからは老人のベテランプレイヤーに媚びへつらう若い女性プレイヤーという感じで思われているのかもしれない。

まあ、黒い道着を着た長い白髪を束ねた老人の後ろを、淡い紫色の着物を着て長く艶やかな紫色のロングヘヤーをなびかせながら歩く見た目はいいが装備というには些か頼りない容姿の少女。

そして白銀に輝く西洋風の甲冑に負けず劣らず。美しい青い髪をなびかせながら、腰には自分の腕と同じくらいの太さのロングソード

を差している少女。

極めつけは、肩までの黒髪に青い瞳をした高価な革鎧を着た初期のショートソードを腰に差している少女だ。

ここまでくれば、もうネタパーティーでしかない。自分達は何もしていないはずなのだが、他の女性プレイヤー達の暴挙に、何故か彼等に申し訳ないという感覚に襲われながらエミルが小さなため息を吐き出す。

昨晚の事件が原因だとしても、一夜にして人間不信がこれほどまでに伝染するとは、誰も考えもしてなかっただろう。

一部始終を見ていたマスターが徐に呟く。

「――これは酷いな……警備しているプレイヤーも多いが、この有様の街をいつまで守ろうとしてくれることやら……」

マスターの言葉通り。重武装した様々な男性プレイヤー達が、街の街頭に立っていた。彼等の胸元や腕に様々な模様をあしらった刺繍を付けている。そのことから、彼等は同じギルドに所属する者で、様々なギルドが自主的に街の防衛に参加していることが窺い知れた。

彼等は街を愛しているが故に、何の見返りもない市街地の防衛を行っているのだ。

そんな彼等がいつまで、この荒んで変わり果ててしまった街を警備してくれるのか……だが、そう長くは保たないだろうとエミルは思いながら街を歩いていった。

そんな時、突如としてエミルの耳に飛び込んできた。

「そういえば、聞いたかよ。昨晚の事件を解決したのは、黒髪で紫色の瞳をした小学生の女の子らしいぜ」

「はあ？ 嘘だろ？ 小学生って、このゲームのハードは結構な値段するから小坊がプレイできるわけねえーだろ？」

「いや、話によると、このゲームを開発した奴の娘とかなんだってさ」「マジかよ！ それじゃー。俺等より強い固有スキルとか持つって、これ見よがしに人目につく場所で無双しまくってんのかよ！ たちわりいーな。いくら街を救ったって言っても、俺達帰れねえーんじや意味ねえーし！ 街救って正義面とか、とんだDQNだよなそいつ」

「だよなー」

エルフと人間の男達がゲラゲラと笑いながら街を歩きながら大声で言っていた。

彼等の言う【DQN】とは『ヤンキー風で頭の悪い人』という意味で使われることが多いが、それ以外にも『とんでもなく馬鹿な人や非常識な人』によく使うネット用語のことだ――。

だが、そんなことなどエミルにはどうでもいいことで……。

エミルは彼等の話を聞いて、怒りで震える拳を握り締めると。

「ちよつと貴方達!!」

鬼の様な形相で男達に近付いていくと、エミルは彼の装備の隙間から出ている襟の布地を掴み上げた。

彼等よりもエミルの方がレベルが上なのだろう。エミルは軽々と胸倉を掴み上げ、彼の体が宙に浮き上がる。

驚き目を丸くさせているエルフの男を余所に、もがく人間の男を鋭く睨みつけながらエミルが更に追求する。

「――その話……誰から聞いたの? ……その情報源はどこ?」

彼女の口から出た殺気の籠もった視線と声音に、男が震える声で答えた。

「……う、噂だよ噂! だけど、目撃者は多くて……その、目撃場所も複数あるから、本当かどうかは……」

「……そう。ありがとう」

低く小さい声で告げると、エミルは彼の胸倉から手を放した。その瞬間、彼はエルフの男と共にその場を一目散に走り去っていく。

エミルは逃げていく彼等に脇目も振らず、顎に手を当て思考を回す。

彼等の言ったことが本当なら、容姿から見て間違いなく星だろう。だが、だとしてもその目撃場所が複数あったというのは不可解である。

昨晚、間違いなく星はエミルの目の前にいた。地面に崩れ落ちた星を抱きしめた時の温かい感覚が、未だにエミルの手にはしっかりと残っている。しかし、一番理解し難いのは、星を目撃した場所が複数

あるということだろう。

さっきの男の慌て方から見て、彼は嘘を付いていたとは考え難い。もし、その全てが本当の星だとしたら、彼女の固有スキルにまだ隠された何かがあるということなのか。

難しい顔で首を捻っている、そこにイシエルが声を掛けてきた。

「——どないしたん？ エミル。また怖い顔になつとるよ？」

「えっ？ ううん。ちよつとね」

咄嗟に言葉を濁すエミルに、イシエルは不満そうに頬を膨らませている。だが、イシエルの性格を知っているエミルとしては、星のことを彼女に相談しても、それこそ無駄だと分かっていた。

結局のところ、イシエルに相談事をする、「エミルの思う通りにしたらええよ。どんな時も、うちはエミルの味方やよ」と微笑み返されてしまうだけなのだ。しかも、実際に彼女はその言葉通りに動くから困ったものだ——。

その時、少し後ろを歩いてきていたファイリスが小声で訴えかけてくる。

「……あの、早く終わらせて戻りませんか？ 私、この雰囲気になんて耐えられなくて……」

ファイリスは不安そうな表情で辺りをきよきよと見ている。

まあ、無理もないだろう。装備品以外殆ど全てを部屋に置いてきたのだ、そんな状況下で不安にならない方がおかしい。

街の雰囲気もぎくしゃくしていて、正直なところエミルもあまり長居をしたくない心境ではなかった。

「そうね。早く終わらせましょう！」

につこりと微笑みエミルがそうファイリスに告げると、ファイリスも満面の笑顔でそれに応えた。

エミル達は大通りを歩くと、ダイヤモンドを象った看板の店が見えてきた。

それはどう考えても宝石店にしか見えないのだが、この世界ではここが回復アイテムなどを置いているショップなのだ。

このゲームの回復アイテムは輝く宝石を模していて、使用するとそ

の光が失われたただの石へと変わる。という設定になっていた。要するに木を狩るなら森、宝石を買うなら宝石店というわけだ――。

店の中に入ると、シヨウケースの中にはHPを回復させるヒールストーンや異常状態を回復させるリカバリーストーン。

他にも、半分の確率で敵を異常状態にする宝石。敵を痺れ状態にするライトニングストーン。敵をやけど状態にするファイアストーン。敵を毒状態にするポイズンストーンなどがあるのだが、これらのストーン類はあまりというか殆ど使用する人がいない。

何故なら成功確率50%という曖昧な確率で、モンスターレベルによっては効果時間が10秒にも満たないというアイテムだったからだ――。

これなら、毒などの異常状態ポーションと武器を合成して作った武器の方が確率100%で対人戦でも使用できる為、こっちの方が重宝されている。とはいえ、魔法のないこの世界では回復方法と言ったら、ヒールストーンを使うか宿屋に泊まるか、ゲーム開始時に用意されているマイハウスに泊まるかしかない。

負傷した場合は後のHP減少率に影響をきたす為、宿屋に泊まるのが一般的なセオリーだが、HP回復と疲労程度ならマイハウスやその場で使えるヒールストーンが一般的だ。が、かと言って疲労していても相当ではない限り、視界と意識の混濁が起るだけで気絶するまではいかない。

気絶するのはダメージの許容範囲をオーバーするか、過度に精神に負担が掛かった場合にシステムが自動で判断しプレイヤーの負担を軽減させる目的があるのだ。

年配のスーツの女性がシヨウケースの前まで歩いていくと「ご注文をどうぞ」と尋ねてきた。そう。彼女はNPCなのだ。だからこそ、システム以上のことは発言も行動もしない。

普段は何も感じないのだが、こういう街の治安が悪化し、鬼気迫る状況下では不思議な安心感がある。それは彼女達NPCを見ていると、この世界がゲームであることを実感できるからかもしれない。特にこの地獄の様な状況下では尚更だ……。

それぞれアイテム欄いっぱいまでヒールストーンとリカバリーストーンを買い込むと、街の端に待機させていたリントヴルムで一度城に戻り。アイテムを部屋に置いてくると、再び店に戻って結局4回ほど繰り返した。

決戦に備えて

4人が街に着くと人の姿は殆どなく、予想以上に街全体の雰囲気が悪くなっていた。

以前も人通りが多く活気に溢れていたとは言えなかったが、今はなお酷いと断言してもいいほどだ——街に出ているプレイヤー達は、一部の例外なく装備を常時装備したまま、道行く他のプレイヤー達に睨みを利かせている。

彼等の突き刺す様な鋭い視線は、エミル達の様な女性プレイヤーにも容赦なく浴びせかけられていて、とてもじゃないが普通に街を歩ける状況ではない。

そのせいか他の女性プレイヤー達は宿屋でも、宿を男女で分けるようにして……というより、強制的に男性プレイヤーを追い出すかたちで、独自の防衛手段を取っているようだ——。

現にエミル達の目の前で近くの宿屋から多くの男性プレイヤー達が締め出しを食らっていた。

理不尽とも言える横暴な彼女達のやり方に、同じ女性プレイヤーであるエミル達3人も渋い顔をせざるを得ない。

いや、正確にはイシエルを除く2人だが……イシエルだけは終始笑顔を浮かべたまま、エミルと一緒に出掛けられていることを素直に喜んでいるようだった。

そして追い出された男性プレイヤー達は、口々に不満をぼやきながら「これだから女つて奴は」と、これ見よがしにエミル達を横目で睨んで去っていく。

周りからは老人のベテランプレイヤーに媚びへつらう若い女性プレイヤーという感じで思われているのかもしれない。

まあ、黒い道着を着た長い白髪を束ねた老人の後ろを、淡い紫色の着物を着て長く艶やかな紫色のロングヘヤーをなびかせながら歩く見た目はいいが装備というには些か頼りない容姿の少女。

そして白銀に輝く西洋風の甲冑に負けず劣らず。美しい青い髪をなびかせながら、腰には自分の腕と同じくらいの太さのロングソード

を差している少女。

極めつけは、肩までの黒髪に青い瞳をした高価な革鎧を着た初期のショートソードを腰に差している少女だ。

ここまでくれば、もうネタパーティーでしかない。自分達は何もしていないはずなのだが、他の女性プレイヤー達の暴挙に、何故か彼等に申し訳ないという感覚に襲われながらエミルが小さなため息を吐き出す。

昨晚の事件が原因だとしても、一夜にして人間不信がこれほどまでに伝染するとは、誰も考えもしてなかっただろう。

一部始終を見ていたマスターが徐に呟く。

「――これは酷いな……警備しているプレイヤーも多いが、この有様の街をいつまで守ろうとしてくれることやら……」

マスターの言葉通り。重武装した様々な男性プレイヤー達が、街の街頭に立っていた。彼等の胸元や腕に様々な模様をあしらった刺繍を付けている。そのことから、彼等は同じギルドに所属する者で、様々なギルドが自主的に街の防衛に参加していることが窺い知れた。

彼等は街を愛しているが故に、何の見返りもない市街地の防衛を行っているのだ。

そんな彼等がいつまで、この荒んで変わり果ててしまった街を警備してくれるのか……だが、そう長くは保たないだろうとエミルは思いながら街を歩いていった。

そんな時、突如としてエミルの耳に飛び込んできた。

「そういえば、聞いたかよ。昨晚の事件を解決したのは、黒髪で紫色の瞳をした小学生の女の子らしいぜ」

「はあ？ 嘘だろ？ 小学生って、このゲームのハードは結構な値段するから小坊がプレイできるわけねえーだろ？」

「いや、話によると、このゲームを開発した奴の娘とかなんだってさ」「マジかよ！ それじゃー。俺等より強い固有スキルとか持つって、これ見よがしに人目につく場所で無双しまくってんのかよ！ たちわりいーな。いくら街を救ったって言っても、俺達帰れねえーんじや意味ねえーし！ 街救って正義面とか、とんだDQNだよなそいつ」

「だよなー」

エルフと人間の男達がゲラゲラと笑いながら街を歩きながら大声で言っていた。

彼等の言う【DQN】とは『ヤンキー風で頭の悪い人』という意味で使われることが多いが、それ以外にも『とんでもなく馬鹿な人や非常識な人』によく使うネット用語のことだ――。

だが、そんなことなどエミルにはどうでもいいことで……。

エミルは彼等の話を聞いて、怒りで震える拳を握り締めると。

「ちよつと貴方達!!」

鬼の様な形相で男達に近付いていくと、エミルは彼の装備の隙間から出ている襟の布地を掴み上げた。

彼等よりもエミルの方がレベルが上なのだろう。エミルは軽々と胸倉を掴み上げ、彼の体が宙に浮き上がる。

驚き目を丸くさせているエルフの男を余所に、もがく人間の男を鋭く睨みつけながらエミルが更に追求する。

「――その話……誰から聞いたの? ……その情報源はどこ?」

彼女の口から出た殺気の籠もった視線と声音に、男が震える声で答えた。

「……う、噂だよ噂! だけど、目撃者は多くて……その、目撃場所も複数あるから、本当かどうかは……」

「……そう。ありがとう」

低く小さい声で告げると、エミルは彼の胸倉から手を放した。その瞬間、彼はエルフの男と共にその場を一目散に走り去っていく。

エミルは逃げていく彼等に脇目も振らず、顎に手を当て思考を回す。

彼等の言ったことが本当なら、容姿から見て間違いなく星だろう。だが、だとしてもその目撃場所が複数あったというのは不可解である。

昨晚、間違いなく星はエミルの目の前にいた。地面に崩れ落ちた星を抱きしめた時の温かい感覚が、未だにエミルの手にはしっかりと残っている。しかし、一番理解し難いのは、星を目撃した場所が複数

あるということだろう。

さっきの男の慌て方から見て、彼は嘘を付いていたとは考え難い。もし、その全てが本当の星だとしたら、彼女の固有スキルにまだ隠された何かがあるということなのか。

難しい顔で首を捻っている、そこにイシエルが声を掛けてきた。

「——どないしたん？ エミル。また怖い顔になつとるよ？」

「えっ？ ううん。ちよつとね」

咄嗟に言葉を濁すエミルに、イシエルは不満そうに頬を膨らませている。だが、イシエルの性格を知っているエミルとしては、星のことを彼女に相談しても、それこそ無駄だと分かっていた。

結局のところ、イシエルに相談事をする、「エミルの思う通りにしたらええよ。どんな時も、うちはエミルの味方やよ」と微笑み返されてしまうだけなのだ。しかも、実際に彼女はその言葉通りに動くから困ったものだ——。

その時、少し後ろを歩いてきていたファイリスが小声で訴えかけてくる。

「……あの、早く終わらせて戻りませんか？ 私、この雰囲気になんて耐えられなくて……」

ファイリスは不安そうな表情で辺りをきよきよと見ている。

まあ、無理もないだろう。装備品以外殆ど全てを部屋に置いてきたのだ、そんな状況下で不安にならない方がおかしい。

街の雰囲気もぎくしゃくしていて、正直なところエミルもあまり長居をしたくない心境ではなかった。

「そうね。早く終わらせましょう！」

につこりと微笑みエミルがそうファイリスに告げると、ファイリスも満面の笑顔でそれに応えた。

エミル達は大通りを歩くと、ダイヤモンドを象った看板の店が見えてきた。

それはどう考えても宝石店にしか見えないのだが、この世界ではここが回復アイテムなどを置いているショップなのだ。

このゲームの回復アイテムは輝く宝石を模していて、使用するとそ

の光が失われたただの石へと変わる。という設定になっていた。要するに木を狩るなら森、宝石を買うなら宝石店というわけだ――。

店の中に入ると、シヨウケースの中にはHPを回復させるヒールストーンや異常状態を回復させるリカバリーストーン。

他にも、半分の確率で敵を異常状態にする宝石。敵を痺れ状態にするライトニングストーン。敵をやけど状態にするファイアストーン。敵を毒状態にするポイズンストーンなどがあるのだが、これらのストーン類はあまりというか殆ど使用する人がいない。

何故なら成功確率50%という曖昧な確率で、モンスターレベルによっては効果時間が10秒にも満たないというアイテムだったからだ――。

これなら、毒などの異常状態ポーションと武器を合成して作った武器の方が確率100%で対人戦でも使用できる為、こっちの方が重宝されている。とはいえ、魔法のないこの世界では回復方法と言ったら、ヒールストーンを使うか宿屋に泊まるか、ゲーム開始時に用意されているマイハウスに泊まるかしかない。

負傷した場合は後のHP減少率に影響をきたす為、宿屋に泊まるのが一般的なセオリーだが、HP回復と疲労程度ならマイハウスやその場で使えるヒールストーンが一般的だ。が、かと言って疲労していても相当ではない限り、視界と意識の混濁が起るだけで気絶するまではいかない。

気絶するのはダメージの許容範囲をオーバーするか、過度に精神に負担が掛かった場合にシステムが自動で判断しプレイヤーの負担を軽減させる目的があるのだ。

年配のスーツの女性がシヨウケースの前まで歩いていくと「ご注文をどうぞ」と尋ねてきた。そう。彼女はNPCなのだ。だからこそ、システム以上のことは発言も行動もしない。

普段は何も感じないのだが、こういう街の治安が悪化し、鬼気迫る状況下では不思議な安心感がある。それは彼女達NPCを見ていると、この世界がゲームであることを実感できるからかもしれない。特にこの地獄の様な状況下では尚更だ……。

それぞれアイテム欄いっぱいまでヒールストーンとリカバリーストーンを買い込むと、街の端に待機させていたリントヴルムで一度城に戻り。アイテムを部屋に置いてくると、再び店に戻ってを結局4回ほど繰り返した。

決戦に備えて2

その往復を繰り返す。終える頃には、マスター以外の3人はぐったりしていた。

ソファに倒れ込むようにして凭れ掛かっているエミル達を見て、ミレイニが複雑そうな顔をしながら。

「——こんな風になるなら、行かなくて良かったし」

顔を引き攣らせ、ミレイニが小さな声でぼそつと呟く。

まあ、普通に運んでいればこんなふうにはならないのだが、彼女達は気まずい雰囲気の流れる街の中を全力疾走しながら作業を行っていた。

だが、こうしてのんびりもしてられない。何故なら、今時計の針は6時を指していた。そう、この後メツセージであった8時に、広場のモニター前にいかなければならないからだ——。

予定の時刻まで後2時間——時間はまだ十分にあるが。しかし、その間に外した装備品を整えなければならない。

それに、大量に買い込んだヒールストーンとリカバリーストーンの運用の仕方も話し合わなければいけないだろう。

どうして、今それをしなければならないかは簡単な理由だ。単に、一箇所に人を集めるということは、昨晩の事件で排除しきれなかったプレイヤー達を今度こそ排除しようと考えている可能性が高いと推測されるからだ。

ちよつとした余興で街の者達全員に、使用者を殺人鬼と化すような装備を送り付けてくるわけがない。

つということとは、必ず事件を起こした犯人は更なる手段を使ってくる可能性が高い。

まだ、狼の覆面の男が所属するシルバーウルフの犯行と断言できるわけではないが、それを否定するだけの証拠がない以上。彼等の犯行も視野に入れて動くのが得策と言えるだろう。

マスターはへばっている3人以外の者達を呼んで、テーブルに腰を下ろすように促す。

もちろん。そこには星の姿はまだない。

彼に促され席に着くと、マスターは腕を組んで徐に説明を始めた。「——これからの行動についてだが、まず先程儂等で入手してきたヒールストーンを、各自普段より多く持っていつてもらいたい。勿論、自分の装備品を圧迫しない程度でだ。もし、敵の襲撃があった場合には、近くのプレイヤーではなく、まずは己の生存を最優先に考えろ！ 生きて帰れなければ、その後の対策の取りようもない！」

マスターの言葉を聞いて、その場に居た者達も一斉に頷く。椅子の背に凭れ掛かり腕組みしているバロンただ一人を除いては……。

つと、そのバロンがすつと手を上げた。

それを見て、メルディウスがあからさまに嫌な顔をした。長年の経験で、彼の発言は場を混乱させると誰よりも分かっていたからである。

「バロン。どうした？」

「おい。だいたいどうして俺様が、街に行かなければならない。この中の数人だけを送って話を聞いてくればいいだけじゃないのか？」

何とも他力本願な考えだが、彼の言い分は最もだ——本来なら、彼の言う通り。メンバーの中から腕の立つ数人を選抜していけばいい。

彼がそう考えるのも無理はない話ではあるが、彼は大事なことを忘れてるようだ。

昨晚の事件を知っていれば、そんな安易な提案はしない。無論、彼もその場において対応に当たっていた一人ではあるが、彼の提案は事件が起こる前ならば容易に通っていただろう。

彼の提案には大きな穴がある。それはこのメッセージがくる前に、村正事件が発生したことだ——星を狙ってきたシルバーウルフの狼の覆面の男だ。その矛先がマスター達の陣営に向いている可能性が高く、このメッセージも罠の可能性が非常に大きい。

そんな状況下でのこのこ誘き出されるにも関わらず。戦力を分散させるのは、自殺行為と言っても過言ではない。この状況下だからこそ、エミル達は最大戦力で8時に行われるという集会に望まなければいけないのだ——。

バロンの言い分を聞いたマスターは意味ありげな笑みを浮かべ。

「ふふふつ、そうか。バロンは怖じ気づいたか……ならば仕方あるまい」

「……なんだと？」

マスターの挑発的な言動に、眉をひそめバロンは鋭い眼光を飛ばしている。

だが、マスターはそれを察しながら、なおも挑発的な言葉を吐き出す。

「まあ、よい。怖じ気づいた者がともに来たところで足手まといになるだけだ。そうだろ？　メルディウス」

視線だけでメルディウスに合図を送るマスター。

彼の意図を察したようにしたり顔をする。

「なるほど、そういうことか……ふん！　所詮は自分の兵に囲まれていなければ何もできないヘタレだな。まあ、しかたねえーか。四天王の中でも戦闘技術が一番ないお前じゃなー。いつも女だからと馬鹿にしている紅蓮より戦えないもんな。お前……怖くて夜の街にも行けない様な臆病者なんて、同じテスターとして恥ずかしいかぎりだぜ！」

メルディウスの発言が紅蓮を馬鹿にされていることが原因かどうかは分からないが、メルディウスはこれでもかというくらいにバロンを罵倒した。

ここまで言われて穏やかで居られるほど、バロンは温厚な人間ではない。むしろ全く正反対の性格の持ち主だ。罵倒され蔑まれたまま黙っていられるほど、彼は人間ができてはいない。

ピリピリと肌を刺すような張り詰めた雰囲気、当の本人達以外は萎縮している。その直後、ふるふるすると怒りに身を震わせていたバロンが、突如勢い良くテールを叩く。

立ち上がった彼は、メルディウスを指差しながら叫ぶ。

「いいだろうー！　俺様も同行してやるー！　そこまで言われては俺様のプライドが許さん!!」

「ほう。そうか、分かった」

「ふん！ 行きたいなら最初からそう言えよな。面倒な奴だ」

バロンの言葉を聞き、2人は満更でもなさそうにニヤリと微かに笑みを浮かべている。

一時は乱闘にまで発展するかと思われたが。なんだかんだで、彼等の関係はこれで成り立っているのだろう。

その後、出立の準備を終える頃に、エミルは一度星の寝ている寝室を覗く。すると、寝ている星の枕元でレイニールが両手足を投げ出すようにして、口を開けたまま寝息を立てている。

おそらく。星が目を覚ますのに待ちくたびれて寝てしまったのだろう。しかし、それにしても何とも無警戒な姿に、一瞬飼い猫なのかと見間違えるくらいだ。

そんな星達を見ていて、エミルはくすつと笑みを漏らすと、起こさないようにゆっくりと扉を閉めた。

城を出発し街に着いたエミル達が街の中央に設置されたモニターの前にいくと、そこにはすでに大勢のプレイヤーが集まっていた。

皆、今回の重大発表が何なのか不安を仕切りに口になっている。ある者は「やつと現実世界に帰れる」と言う。またある者は「現実世界に戻れなくなったという報告じゃないか」と言う。

正直。どちらとも予想できる。彼等『シルバーウルフ』の本来の目的は非現実的なゲームを排斥するというものだったが、プレイヤー達の唯一の逃げ道として用意された隠しダンジョンにあるという【現世の扉】も、今や見つけたという者もそれらしき場所があるという情報もない。

実際にそんな場所が存在しないのではないか、という声さえ上がっていた。真相を知っているのは、この大規模な監禁事件を起こした犯人しかいないのだが……。

広場のモニターの前に佇んでいると、モニターの備え付けられている時計台の時計が夜8時を指す。

時計の秒針が回ると同時に、表示されていたこのゲームのPVが消え、画面が真っ暗になる。

数秒間隔が空いて、狼の覆面が映し出された。やはり、エミル達が予想していた通り、あのメツセージの差出人は運営ではなくシルバールルフだった様だ――。

その姿をモニターが映し出すと共に、辺りからは怒号が湧き起り。

「ふざけんじゃねえぞ！ いいかげんにしろ！」「犬の仮面を外して面を見せろ！」「もういい加減、元の世界に帰して！」「私達は貴方のおもちやじゃない！」など、様々な批判の声飛び交っていた。

まあ、ここに居る誰もがこの事件の被害者であり、狼の覆面を付けた彼はこの事件の加害者なのだから皆の反応は最もだろう。

このゲーム内に閉じ込められてもう2週間近く。ゲーム世界から出られないながらもそれぞれに、独自のコミュニティーを築いていたのだが。

しかし、昨晚の『村正』を使ったキャラクターを乗っ取った殺人事件が、そのコミュニティーを崩壊させ、更に皆の不安を煽るかたちになったことは否めない。

広がる人間不信は今や差別的な行動にまで発展していたのは、エミル達が街に出た時に見た通りだ――。

つと、モニターの覆面の男が徐に話し出す。

「君達のその様子なら、昨晚の事はすでに何事もない様で私もほっとしている。昨晚の事は私にも誤算だった……どうやら、システムの暴走があのような惨劇を生んでしまったらしい。これには私も心を痛めている……」

だが、彼のその取って付けた様な謝罪の言葉が今の彼等に届くはずもなく、更に怒りを込めた言葉がそこら中で飛び交う。あまりの罵声と暴言に、エミルは心底星を連れてこなくて良かったと感じるほどだった。

全く落ち着く様子を見せないプレイヤー達が、次の狼の覆面を被った男の言葉に一瞬で静まり返る。

「君達の不満は最もだ。だが、先程のシステムの不備は私が他の準備を行っていた事から生じた事象であり。明日から数えて5日後、この

街をモンスターの軍勢が攻める手はずとなっている。ただ、街の中に籠もっているのも退屈だろう。私からの細やかなプレゼントだと思ってもらっていい。また君達にはどうか、その攻めを受けきつてもらいたい」

その言葉にその場に居た全員が耳を疑う。

一瞬で静まり返り、凍りついた空気が徐々に近くの者達に不安を漏らし出す。

「どういうことだ？ 軍勢が襲って来るって？」「5日って……どうしようもないじゃないか……」「何かの冗談だろ？」「いやでも、昨日の事もあるし……」

皆ざわざわと困惑した表情で話していると、そこに追い打ちを掛けるように狼の覆面の男が言い放つ。

「これは脅しでも冗談でもない。私は君達とゲームを楽しみたいだけだ。もちろん。ボーナスとして君達が生き残り、私の放ったモンスターを全て狩り尽くせば、元の世界に帰してあげよう。消えていった者達も一緒にね」

彼の発言を真に受けたのか、その場に居た誰もが歓喜の声を上げた。

それもそのはずだ。昨晚の衝撃がまだ色濃く残っている状態で、失ったはずの恋人、親友、かけがえのない仲間達が戻ってくると聞かされれば誰でも舞い上がる。

何故なら、昨晚の悲劇の前には楽しくいつもの日常を送っていたのだ。それが突如奪われ、その出来事を夢にできるなら……つと想うのは皆同じだ。しかし、何故かエミル達は皆一同に険しい表情をしていた。

決戦に備えて3

その理由は簡単だ『モンスターを全て倒す』この言葉が不可能なこ
とくらいは、冷静な状態ならば分かるはずだ。

ゲーム内のモンスターとは倒しても自動生成される人工物。言う
なれば止めどなく湧き出る源泉の様なものだ——それを断つという
のは、システムを掌握する以外に方法はない。

だが、そんなことは外部だからできることだ。ゲームのデータでし
かない内部にいる自分達には、プログラムに触れることもそれを改変
することも不可能だ。

すなわち、モニターの中の男が言っているのは長期間に及ぶ消耗戦
の末に、フリーダム内のプレイヤー全員を殲滅すると宣言しているよ
うなものなのだ。

なのだが、今ここに居る誰もが一筋の光を見つけたかのように飛び
跳ね。拳を天に突き上げ、喜びを表現している者さえいた。

だがそれは、彼等にはこんな簡単なことも分からないほどに疲弊
し、錯乱していることを意味していた。まあ、それだけ今回の事件が
精神的に堪えているということだろう。

「——それでは精々頑張ってくれたまえ」

歓声が冷めやらぬプレイヤー達に、狼の覆面の男がそう言い残して
通信が切れる。

広場は何とも言えない熱気と興奮に包まれていた。マスター達も
その場の雰囲気にながら足早に広場を後にすると、直ぐ様エミル
の城に戻る。

街から城に戻ると、息つく暇もなく作戦会議を開始した。

「予想以上にまずい状況になっているようだ……」

「……ああ、結局昨晚の事件もあいつが絡んでたようだな。街の連
中も大分頭がいつてやがる。ジジイ、こいつはもうここを離れて俺達
の千代に來ればいいんじゃないか？ 紅蓮も喜ぶしよ」

難しい顔で腕を組んでいるマスターに、メルデイウスが進言する。

彼の言うことは最もなのかもしれない。だが、メルデイウスの進言

を受けてなお、マスターは渋い顔をしていた。

「うむ。本当ならば、メルディウスの言う通りにするのが正しい。だが、この街の者達を見捨てるわけにもいくまい」

そう。マスターは始まりの街に残された彼等を見捨てようとはしていなかったのだ。

頭ではメルディウスの意見を受け入れるべきだと分かっているのだろうが、マスターにはその言葉に素直に領けない理由があった。

この街に居る殆どのプレイヤーは初心者から中級者のプレイヤーばかりで、戦闘に関しては殆ど戦力にはならないだろう。

レベル制のゲームでは、全てがレベルで判断されると言ってもいい。例えるなら、Lv1のプレイヤーがLv100のプレイヤーとPVをやる——それは、大人と子供の戦いではなく、その間には人間と蟻ほどの力量差があるということなのだ。

足でも手でもなく指先一つで掻き消せるほどの圧倒的な力の差、それがLv100違えばその力の差はまさに大人と子供ほどの差になる。

ゲームの世界で力とはレベルであり、その後には身のこなしなどの戦闘スキル。そして次に、武器や防具身となるのだ。

今、エミル達上級者プレイヤーが彼等を見放せば、子供同然の彼等はモンスターに一蹴されてこの街は墓場と化すだろう。そのことは、この場に居る殆どの人間が理解していることであり。また、決して口に出さない己が内に秘めた言葉でもある。

「でもよー。間違いなく勝ち目はないぜ？ 俺達数人で何とかできる問題でも——」

「——ならば、諦めて無残に命が蹂躪される様を。お前は見て見ぬ振りをしてるだけでも言うのか!!」

部屋中にこだまするほどの剣幕で、突如彼の言葉を遮ってマスターが声を荒らげた。

その声に、メルディウスもいつも行動を共にしているカレンですら、驚愕した様子で目を見開いている。マスターがこれほど感情を露わにするのは珍しい——いや、エミル達と出会って初めてかもしれない。だが、それほどに彼の思いは強いと言うことの現れでもあるのだ。

ろう。

死ぬと分かっているながら、何の対策も打たずに弱者を残し逃げるように千代の街へと向かうのは、彼の強者としての強い信念が許さないのだろうか。

うろたえているメルデイウスに変わり、静かに腕組みして話を聞いていたバロンが口を開く。

「……だが感情論でどうにかなるほど甘いもんじゃないぞ？ 敵は無限に湧き出るゾンビの様なものだ。昨晚の戦闘で俺様の兵士達も随分減った……これ以上は俺様は兵を出さん！」

部屋の壁に凭れ掛かるようにしていたバロンがそう呟き、鋭い視線をマスターに浴びせ掛ける。それは、まるで蔑む様なマスターを軽蔑する視線だった。

「——バロン……お前も儂の考えを否定するのか？」

低い声で尋ねたマスターが目だけでバロンを牽制する。だが、バロンという男はこれくらいで臆する様な人物ではない。

眉間にしわを寄せて更に鋭くマスターを睨みつけて。

「ああ、いい人を気取るのも大概にしろ。ギルドマスターさんよ……他の野郎の目は誤魔化せても、俺様の目は誤魔化せないぞ？」

マスターとバロンが互いに鋭い視線をぶつけ合っていると、そこにライラがスツと姿を現わした。

彼女は変わらず、微笑みを浮かべると。

「ふふっ、お取り込み中だったかしら？」

彼女の登場と共に、今まで事の次第を見守っていた為に大人しかったエミルが鬼の様な形相で声を荒らげた。

「なっ、ライラ！ なにしに来たのよ!!」

「あら、そんなの可愛い妹分の顔を見に来たに決っているでしょ？」

さすがに犬猿の仲と言えるだけあって、エミルのライラに対する態度はまるで親の仇のようなものだった。

ことわざの所以は、日本昔話の中でもある通り。元々犬と猿は仲が良かったのだが、神様への挨拶に行く途中に川に架かる橋の上で猿が

ちよつかいを出したせいで、猿と一緒に犬が川に落ちて神様の所への到着が遅れたということがあり犬は猿を憎らしく思った事から仲が悪くなったと言われている。犬猿の仲の真意にはそんな所以があり。それと同じ様に、元々エミルとライラも仲が良かったのだが、ライラがエミルに何かをして、彼女のプライドを傷付けたことでこれほど仲が悪くなったのだ。

まあ、エミルにエリエが聞いた時には、ライラになにをされたのか一向に教えてくれなかったことから、相当なことがあったのだろうと容易に推測できる。

彼女のライラに対する敵意は、その時に受けた屈辱によるものなのだろう。

突然のライラの出現に、エミルもその場に居た者達全員が驚いていた中。ただ一人、マスターだけが冷静に彼女の行動を窺っていた。その視線に気付いたのか、ライラが悪戯な笑みを浮かべ徐に口を開く。

「———そういえば、今日の放送聞いたわよ。5日後にモンスターが攻めてくるとかって不可能よね」

「……どうしてよ」

突如発した彼女の言葉を聞いて、エミルが更に不機嫌そうに眉をひそめる。

「だって、マスターが言ってたわよ？ モンスターって、システムの中でも暴走させられれば危ないデータらしいのよね。だから、システム内には何重にもセキュリティを掛けてるんですって。それを交換できる人間は、マスターと一握りの人間だけらしいわよ？」

「……なら、そのマスターが犯人なんじゃないの？ この事件事態もあなたの組織がやってるんでしょ!？」

エミルが勢いに任せてそう叫ぶと、一瞬で部屋の空気が凍りつく。当たり前だ。本来はそう思っていた者も少なからずいた中で、エミルがストレートに聞いてしまったのだ。この話に興味のない者などいるはずがない……。

今まで微笑みを浮かべていたライラの表情が変わり、その顔がエミ

ルのすぐ真横に移動していた。

ライラの瞳は殺気に満ちていて、エミルの細い首筋には短剣の刃が押し当てられている。

「……次にミスターを悪く言えば、貴女は消えることになるわよ？
エミル」

その低く感情のない彼女の声音を、長い付き合いの中でもエミルは一度も聞いたことがない。

普段とは比べ物にならないほどにとっても冷たく、心臓を突き刺す様な鋭さをエミルは感じた。

直後。ライラが素早く跳び退くと、エミルの顔の前を包丁が通過した。飛んできた包丁の先には、別の包丁を握り締めライラを鋭く睨むイシエルの姿が……。

「——先輩やか知らんけど……うちのエミルに近寄らんといってくれる？」

「……あら、貴女がいたのを忘れてたわ……」

イシエルの体から湧き出る殺意と、ライラの体から滲み出る殺気がぶつかりピリピリとした空気が漂う。

2人は互いに相手の出方を窺う様に、時折ピクリと指先を動かしている。だが、この状況下では圧倒的にライラの方が有利なことは言うまでもない。固有スキルの使用に加え、武器の使用もできるライラ。

一方イシエルはダメージの入らない道具扱いの包丁で一方的に攻撃を防がねばならず、まともな戦闘になるはずもない。それなのにも関わらず。不思議とイシエルの方が、一際優勢に感じるほどの気迫が見て取れる。

ライラもそんなイシエルの様子に、攻めあぐねていた。

「止めないか！ お前達!!」

その時、マスターの憤る声が部屋中に響く。

眉を吊り上げ、憤るマスターが更に言葉を続けた。

「戦う敵を間違えるでない！ 奴が作戦を執行するのが5日後だ。それまでに、儂等も何らかの対策を採らねばならん！」

向かい合う2人は渋々互いに得物を収める。

すると、そこにメルデイウスが割り込んできた。

「でもよー。対策って言ったって敵の規模も何も分からねえー。こんなんで対策の取りようがあるのかよ」

メルデイウスが渋い顔をして首を傾げている。だが、現状。彼の言いは正しい。敵の規模も作戦も分からないのでは、正直なところ打つ手が無いというのが本音だ。

街の出口を塞ぎ籠城戦を仕掛けるにしても、それは街のプレイヤー達が一枚岩ならの話である。

昼間にマスター達がいった時の状況と。勝てない勝負も、現実世界に帰れると言われた瞬間に、まるで祭りの様に活気を取り戻してしまいう危うい精神状態の街のプレイヤー達。今の状況では籠城しても些細なことで、戦況がひっくり返るのは分かりきっていることだ。

今日のあの感じだと、5日後に起こると言われるマスターの軍勢も、容易に撃退できると考えている者は多そうだ——確かに、腕に自信のあるプレイヤーならある程度のレベルのマスターまでなら撃破は可能だろう。

フィールドのモンスターは移動時に妨げになり難いように、比較的弱く設定されている。しかし、問題は敵が素直にフィールドのモンスターだけで戦闘を仕掛けてくるかということにある。

現にゴブリンはフィールドモンスターだが、一昨日の事件で妖刀を落としていたホブゴブリンはダンジョンモンスターなのだ。しかし、そのことを知っているのは少ない。

何故なら、この【始まりの街】は初心者プレイヤーが一番最初に訪れる街。ダンジョン経験者もそれほど多くないからだ。

事件以降、ダンジョンに訪れる者達もめっきり減ってしまい、彼等のダンジョンに対してのモンスターの認知度は落ちていると言えるだろう。

こういう状態だ。危険な場所に近づかないに越したことはないにせよ、ある程度のレベルのプレイヤーですら、モンスターの生息情報まで忘れていくというのは常軌を逸していると言わざるを得ないだろう。

しばらく腕組みしながら考えていたマスターが、眉間にしわを寄せたまま重い口を開く。

「――やはり。あの方法しかないだろうな……」

そうマスターが小声で呟くと、その場に居た全員が一斉にマスターの方を見つめ、彼は口元に不敵な笑みを浮かべた。

星とミレイニの真剣勝負

あの宣戦布告放送が終わり。それから2日後、今まで眠っていた星がやっと目を覚ました。

重い瞼を開いてぼんやりとしている視界の中、星の顔の目の前にはレイニールの顔がデカデカと現れ、思わず星が「ひっ！」と小さな悲鳴を上げた。

「おお、主。2日も寝たままで心配したぞ〜」

「……2日?」

レイニールの言葉を聞いた星が首を傾げる。

それもそうだろう。彼女には2日寝ていたという感覚がない。

まあ、寝ていたのだから当たり前だが、どうして自分が寝ていたのかすら今の星には理解できていなかった。

それどころか記憶も曖昧で、その時のことはぼんやりとしか思い出せない。

星が少しでも状況を掴もうと静まり返った寝室を見渡すと、小窓から微かに光が差し込んでいた。そのことから推測すると、どうやら夜ではないらしい。

星は枕の横で口の周りに残っていた涎を拭いているレイニールに尋ねた。

「レイ。エミルさん達はどうしたの？ 私、戦ってたはずなのに……」

「ああ、皆無事に帰ってきたぞ！ 主が倒れた後、すぐに騒ぎは収まったのじゃ！ きつと、我輩と主の活躍に恐れおののいて逃げたのじゃな！ はっはっはっはっはっ！」

腕を腰に当てて高笑いを浮かべながら適当なことを言っているレイニールだが、星にはレイニールが活躍したのかその真相は分からない。

あの村正事件で星が分かっているのは、プレイヤーを助けに入った時に頭の中が真っ白になって、今まで以上に物事が冷静に見られたことと、その後、何者かの声が聞こえた直後に意識のある間に全身を何者かに乗っ取られた。

だが、星は不思議とそのことに関して、悪意は一切感じられなかったのだ。

それがなんでなのかは分からず『あの懐かしいような感覚は一体何なのか』そのことだけが、未だに理解できなかった。

星は徐に立ち上がると、部屋の角に置いてある姿見の前に立って自分の顔を確認する。

まだ頭の中が混乱しているのもあるが、少しでも不安そうな顔をしていたらエミル達を心配させかねないという仲間達への配慮からくる行動だった。

案の定、鏡に映った自分の顔は普段とはかけ離れていた。それは正体が分からない感覚からくる不安と焦り。そのせいで何時になく表情が歪んでいた。こんな顔をしていたら、絶対にエミル達に余計な心配を掛けてしまう……。

星はそんな自分の顔を両手でムニムニと解すように動かすと、鏡に向かってにつこりと微笑んだ。

「よーしー」

姿見に映った自分の普段通りの顔を見て、星は満足そうに頷く。

「――主はたまに、我輩には理解できない行動を取るな。何か理由があるのか？」

空中でパタパタと翼を動かしながら、顔の側にいたレイニールが不思議そうに首を傾げて聞く。

その質問に、星も少し困った顔をしながら、もう一度鏡を見つめてゆつくりと答えた。

「……だって、いつでも笑ってないと、誰でも私のことなんて嫌いになるでしょ？」

口籠もりながら小さく呟いた星の言葉を聞いて、レイニールはいまいち納得できないと言った表情で頭の上に大きな『？』マークを浮かべていた。

今までもそうだが、星にとって人付き合いというのは経験がないと言ってもいいほどに疎い部分だ。

そのせいか、人と必要以上に付き合うことに対しての『相手に嫌わ

れるのではないか?』という恐怖心が、日に日に大きくなってくるのを自分自信でも強く感じていたのだ。

毎日が捨てられるのではないか、という恐怖でしかない『必要にさねなければ、ひとりぼっちになってしまおう』常にそう考えて不安になってしまおう。それを表すかのように、今も星は両腕の服の布をぎゅつと握り締めた。

星は姿見と向かい合って、再び湧き上がる不安に曇った表情を無理に笑顔に戻す。自分の顔が笑顔になっているのを確認し、星はゆっくりと扉へと向かって歩き出した。

ゆっくりと扉を開くと、いつも誰か居るはずのリビングには珍しく誰もいなかった。それにはレイニールも驚いたのか、星の顔の付近を飛びながら仕切りに頭を動かしてキョロキョロと辺りを見渡している。

星がリビングの中に入ると、誰も居ないはずの静まり返った部屋の中で、微かに何者かの息遣いを感じた。どうやら、その息遣いは窓際のソファの方から聞こえてくるようで……。

物怖じしながらも怖いもの見たさから、そーっと星とレイニールがソファを覗くと、そこには猫の様に丸まって寝ているミレイニの姿があった。

おそらく。今回の件では役に立たないということで、エリエにでも置いていかれたのだろう。

本人はそんなことなど露知らず。何の迷いもないような幸せそうな顔で涎を垂らしながら、気持ち良さそうに眠っている。

「ぶぶつ、こやつ、涎を垂らしながら間抜け面をして寝ているのじゃ。主とは大違いだな」

そんな彼女の顔付近に舞い降りたレイニールが、口を押さえ少し馬鹿にしたような感じで言った。

自分も先程まで涎を垂らして寝ていたレイニールの言葉とは思えない。でも、星はその発言に眉をひそめると。

「レイ。そんなこと言っちゃだめだよ」

つと言葉を返すと、レイニールは少ししゅんとなって項垂れてしま

う。

その時、突然寝ているミレイニの服が盛り上がり、モゾモゾと何かが蠢く。星が驚いた様子で身を仰け反らせると、ミレイニの服の胸元からひよつこりとイタチが顔を出した。

白い毛並みの珍しいイタチは彼女の使役するモンスターで、英雄の名を取って名付けられた『ギルガメシュ』だ――。

ミレイニの体によじ登り、ギルガメシュがキュキュ！とレイニールに向かって鳴く。体全体を使って何かを訴えるその姿は、何か怒っている様にも見えた。

「キュキュ！ キュ！ キュキュキュ！」

「なに!? 我輩に喧嘩を売っているのか!!」

「キュキュー！ キュー!!」

「いい度胸じゃ！ 我輩の前で主を侮辱するとは……本当にいい度胸過ぎるのじゃー!!」

「キュー！ キュキュキュー!!」

ギルガメシュが何を言っているのか分からないものの、レイニールの反応を見ると星のことで揉めているのは明らかだった。

互いに見え合おうとレイニールを、あたふたしながら慌てて止めに入る。その時、扉が開く音が聞こえエリエの声が聞こえてきた。

「ただいま。ミレイニ、お菓子の材料を買ってきたわよ」

すると、寝ていたはずのミレイニの耳がピクピクと動いたかと思うと、のっそりと起き上がる。

「……お菓子……お菓子だし！」

寝ぼけ眼でぼーっとしていたミレイニが、エリエの『お菓子』と言う言葉を聞いて、突如その目を見開く。

突如飛び起きて、星の横を猛スピードで駆け抜けエリエの元に急ぐミレイニ。

星はそんなミレイニの様子に驚き、きよとんとしていた。しかし、それも無理はない。本来人とは寝起き直後で走るなんて芸当は普通はできないからだ――それだけ、ミレイニのお菓子にかける情熱の表

れなのだろう。

しばらくして、エリエの腕を掴みながらミレイニとエリエがリビングに入ってくる。

ミレイニに張り付かれ困り顔で眉をひそめていると、星の姿を見たエリエがミレイニの腕を振り払い星の方へと慌てて駆け寄ってきた。

星の肩を掴んだエリエが「大丈夫？　おかしなところがあつたらちやんと言いなさいよ？」と問い掛け、星はそんな彼女に何事もないかの様に微笑み返した。しかし、その横で不満を爆発させていたのがミレイニだ。

ミレイニは頬を大きく膨らませながら、ドスドスと音を上げて星の元に来ると、右手の人差し指を星の顔の前に突き出す。

「……できれば穏便に事をすませたかった。でも！　星。こうなつたら決闘だし！」

「——えい！」

突然のミレイニの宣言に、完全に思考が置いてけぼりになった星は、驚きながら身を仰け反らせる。

星の反応は最もだが、それ以上にエリエの突き刺すような視線がミレイニを威圧している。まあ、今まで数日間も寝たままだった人間に突然勝負を挑んだのだから無理もないだろうが……。

ミレイニは一瞬だけエリエを見て、慌てて視線を逸らすと再び星に向かつて宣言する。

「星勝負だし！　勝負内容は真剣に真剣で勝——」

「——真剣で……なんだって？」

途中まで言葉を告げたミレイニに向かつて、更に圧力をかけるようなエリエの低い声音に、さすがに恐れおののいたのか、ミレイニは震える声で言葉を続けた。

「あつ……し、し、しん、神経衰弱で勝負だし！」

咄嗟に『真剣』を『神経衰弱』に変えて、力強く指差したミレイニは星に勝負を挑む。

何とか言葉をすり替えることに成功したことにより、エリエの体から滲み出ていた怒りのオーラは消えていた。

星とミレイニの真剣勝負2

突如、勝負を挑まれた星は困惑しながら「神経衰弱？」と小首を傾げ、確認するようにミレイニに聞き返す。

ミレイニはゆつくりと頷くとコマンドを開き、アイテムの中から勢い良くカードを取り出して天に掲げた。

彼女の掲げるそれは、紛れもなくカードゲーム界の王道にして不動の存在トランプ。

ゲームの世界の中でカードゲームがあるというのは、何ともおかしい感じがするが、人気の狩り場などに行くと一時間待ち……なんていうこともざらにある。そういう時に時間を潰す道楽としてトランプなど、世界でもメジャーなゲームが初期システムの中に組み込まれているのだ。

アイテム欄を開いて『娯楽』というフォルダの中に、前もって様々なゲームを入れておくことが可能になっている。カードゲームは勿論。チェス、将棋、オセロなどボードゲームもあれば麻雀、卓球、バトミントン、テニス、サッカー、野球などのスポーツ系も充実している。

ミレイニはランダムにトランプをシャッフルすると、テーブルの上に広げた。

神経衰弱のルールは至って簡単。広げたカードをその場で開き同じ数字、絵柄のカードを2枚まで捲り、違ければその場に裏返しに戻す。同じカードの時手元に取り再度開くことができる。多くカードを所有していた方が勝ちというシンプルなルールだ。

「さあ、先攻をやるし！ 星から2枚ひらくし！」

「……う、うん」

ゆつくりとテーブルの前に来た星が徐にカードを開く。

開いたカードはスペードの『9』とハートの『4』残念ながら違う為、再び裏返しで戻す。

すると、その様子を見ていたミレイニが不敵な笑みを浮かべた。

「ふふふつ……星。お前は戦う前からあたしの手術中にハマってるし

！」

「……………」

「ああ、あの子が言いたいのは術中ね。手が余計なのよ。口もだけど……………」

胸を張って宣言したミレイニの言葉を聞き、不思議そうに首を傾げている星に向かってエリエが訂正した。

隣で見守っているエリエの冷静なツツコミに、ミレイニは「うるさいし！」と叫ぶと、中央にある二枚のカードを同時に捲る。

出たのはクローバーの『Q』とハートの『7』だ。そして、ミレイニはそのカードを何事もなかったかのように元に戻しほくそ笑んでいる。

その笑みの意味が分からず困惑しながらも、星がカードを開こうとしたその時。

「——ちよつと待つし！ せっかくだから、負けた方は勝った方の言う事をなんでも聞くとというルールを付け加えるし！」

「…………え？ な、なんでも？」

出した手を一度引っ込めて、星が不安そうな表情で尋ねる。

それに対してミレイニは余裕に満ちた微笑みを浮かべ頷く。

「そう！ あたしが勝ったらエリエを貰うし！」

「はあ!? なんて私が出てくるのよ!!」

突如引き合いに出されたエリエが不服そうに叫ぶ。

しかし、そんなことなどお構いなしにミレイニが言葉を続けた。

「ふふふつ、エリエに甘やかされるのはあたしの特権だし！ もしあたしが勝ったら、星はこんりんざいエリエに触れちゃダメなんだし！」

「……………」

声高らかにミレイニにそう宣言され、星は緊張した様子でカードを捲る。

出たカードはクローバーの『4』先程ハートの『4』を引いた星には有利なカードだ。

星は順当に先程自分の開いたハートの『4』を捲りカードを手元に

置く。残念ながら、次に引いたカードは2枚ともハズレだったのだが……。

次にミレイニのターンになり、彼女は衝撃的な行動に出た。それは、2枚とも先程と同じカードを捲ったのだ。

摩訶不思議なその行動に、星はただただ意味が分からずに驚いていた。すると、驚く星にミレイニは勝ち誇った笑みを浮かべ告げる。

「驚いたし？　これが長年の神経衰弱の攻略法。同じカードを捲り続けるだし！　これによって、相手が同じカードを開いた時にそのカードを開けばいいから絶対に負けはないし！」

ミレイニの考えた作戦は、星には完璧な作戦で自分は勝てないと思った。しかし、その作戦には致命的な落とし穴があったことを、この次のターンで星は知ることになる。

星の開いたカードはスペードの『Q』先程からミレイニの開いていたクローバーの『Q』と対になるカード。もちろん。星は迷わずにミレイニの開いていたカードを捲る。

そう。ミレイニのこの作戦の欠点はカードを場所を自分も覚える変わりに、相手もカードの位置を覚えてしまうということ……そして致命的なのは、相手のターンに2枚のうち1枚が捲られてしまうと取られてしまい。結局、覚えているカードが1枚しかなくなってしまうということなのだ。

他のカードの位置も絵柄を覚えていけば違うが、ミレイニは自分の捲っている場所と一回前の場所しか覚えていなかった。

結局、神経衰弱の結果は大差でミレイニの負けという。当然とも言える実につまらない結果に終わった。

昔のことわざで『策士。策に溺れる』というものがあるが、昔の偉人は良局的を得たことわざを残すと思う……。

「あの……私の、勝ち。ですよね？」

遠慮しながら地面に両手を着いて項垂れているミレイニに尋ねる。つと、瞳に涙を浮かべたミレイニがスツと星の顔を見上げ。

「……………くっ！　今のは練習だし！　本番はこれから——」

「——ミレイニ。あんたまさか……真剣勝負とか言っておきながら、

負けたのをなしにする気じやないでしょうね？」

疑いの目を向けるエリエの視線に、ビクツ！と体を震わせたミレイニの額から滝の様な汗が流れた。

まあ、星の性格から考えると、ここでミレイニに「今のはなしにして」なんて言われれば、笑顔で「分かりました」と言いかねない。

そうなれば、ミレイニのことだ。自分が勝つまで「今のは練習だし」を使い続けるのは間違いないだろう。

それが分かっていたエリエは更に鋭い視線でミレイニを見ると、ミレイニは仕方なくため息を吐いて。

「……分かったし。あたしの負けでいいし」

「はいー」

少し不貞腐れながらそう言い放つミレイニに、星は嬉しそうに頷いた。

トランプで勝って余程嬉しいのだろう、星の頬が自然と緩む。一人で遊べる遊びには慣れていた星だが、皆で遊ぶものをしたのは随分と久しぶりに感じる。

最後にトランプを遊んだのは、星が保育園の時だろうか……それ以来。トランプに触れる機会が全くと言っていいほどなかった。

つとその時、にこにこしている星の横でエリエがわざと聞こえる大ききの声で呟く。

「そう言えば、勝負の最初の方で負けた人は勝った人の言う事をなんでも聞くって言ってたわよね」

「……え？」

意地悪く笑うエリエのその言葉を聞いて、項垂れていたミレイニの体がビクツと反応する。

あからさまにビクビクしているミレイニをからかうように、エリエが更に言葉を続けた。

「そうよね。あんなにたんかを切ってたんだもの。それなりの事をしないと割に合わないわよね」

「……な、なにをさせるつもりだし？」

まるで、捨てられていた子猫の様な怯えた瞳でエリエを見るミレイ

二。

最初にそのルールを提示してきたのはミレイニなのだが、星はなんだか少しミレイニが気の毒に思えてきて眉をひそめる。だがエリエは、ますます楽しくなってきたと言わんばかりに意地悪を言う。

「そうね〜。一日犬の格好をして過ごすとか。あつ！ ピエロの格好をして逆立ちしながら街の中を歩き回るなんていうのもいいんじゃない?」

「それはさすがに……」

瞳をキラキラさせながら提案してくるエリエに、星は苦笑いを浮かべる。

この時点ですでに泣きそうになっているミレイニを見ていて、星は何かを思いついたようにポンと手の平を叩く。すると、ミレイニは警戒した様子で「何させるつもりだし……」と星への不信感から目を細めている。

「なんでもいって言うなら、私と仲良くしてください」

「……は? そんなのでいいし?」

星の放った一言に、驚きを隠せないと言った表情を見せているミレイニ。

まあ、星にとつてはこの場を収めるにはそれが一番だろうと考えた結果の言動なのだろう。彼女としては、トランプを他の人とできて楽しかったというだけで良かったのかもしれない。

がつしりと星とミレイニが手を握り締めているのを見て、エリエが呆れ顔で独り言のように呟く。

「……全く。欲がないというか……まあ、その方が星らしいけどね」

温かい目で彼女達を見守っていたエリエが、思い出したように2人に向かって声を掛ける。

「頭を使って疲れたでしょ。おやつに私がケーキを作ってあげる!」

「本当ですか!?!」

「やったし! あたしショートケーキがいいし!」

嬉しそうに両手を挙げているミレイニに、エリエが少し呆れ顔でため息を漏らす。

「はあ、いいけど。そのかわり、あんたもちゃんと手伝いなさいよ？」

「分かってるし！」

「あつ、私もやります！ レイ！」

星は未だにソファアの近くで、ギルガメシュといがみ合いを続けているレイニールを呼ぶ。

その声に反応したレイニールは「後でしつかり決着をつけるのだ！」と、ギルガメシュに向かって宣戦布告とも言える言葉を投げつけて目の前のイタチに対してビシツと指差す。

ギルガメシュの言葉は分からないものの、互いに譲れないものがあるのだろう。そういえば、この2匹は以前にも技をぶつけ合っていた。

その時はおやつを何にするかという単純でくだらない内容だったが、元々この二匹は相容れないのかもしれない。

ギルガメシュもその言葉を聞いて「キュ！ キュキュ！」と両手をブンブンと上下に振りながら鳴くと、ミレイニの方へと駆けていった。

翼を羽ばたかせ星の肩に舞い降りたレイニールは、明らかに不機嫌そうに目を吊り上げている。

それはギルガメシュの方も同じで、ミレイニの元に着いた直後、ミレイニの首に巻き付いた。だが、互いに鋭い睨み合い激しい視線を飛ばす。

星とミレイニの真剣勝負3

それから1時間近く経って、ようやくミレイニが要望したショートケーキが完成した。

本来ならばもつと1時間程度で完成できるものではないのだが、途中の焼く工程などは数分もあればできるので、これだけ早く作れるのだ。

ミレイニは出来立てほやほやのホールケーキを持ってテーブルに向かう。

その後を星も続いて席に着くと、そこにエリエがティーセットを持ってやって来た。

ティーセットに紅茶を入れ、胸を張って鼻高々のエリエは自慢げに言い放つ。

「レシピ経由で作ったんじゃないから、味は確かなはずよ！ お菓子作りに関しては私は手を抜かないからね！」

誇らしげに胸を叩くエリエに、星は苦笑いを浮かべていた。

まあ、以前食べたエリエの甘ったるいスープなどもそうだが、エリエの味覚は若干というか、かなり変わっている。

お菓子は絶品に美味しいのだが、それ以外の料理が全滅というのは普通に珍しいと言わざるを得ないだろう。

ふと見ると、ミレイニが上機嫌でケーキを切り分けている。しかし、明らかに1つだけ大きく切り分けられた物がある。

いや、大きいと言うより、真つ二つにしたホールケーキの半分をただ切り分けた感じだ。

星がその行末を見守っていると、ミレイニが自分の前に置いている。やはり、あの大きなケーキは自分の分だったらしい……。

すると、その一部始終を見ていたエリエのチョップがミレイニの頭上に炸裂し、両手でミレイニが頭を押さえた。

「いった〜。なにをするしー！」

「なにをするしー！」じゃない！ あんたはまた目を離すとそんな事ばかりして！ 皆で食べるんだから均等に分けなさい！」

怒って声を荒らげるエリエに、ミレイニは口を尖らせながら小声で言い返す。

「均等だしく。エリエの目が悪くなったただけだしく」

だが、そんな独り言の様な言い訳をエリエが聞き逃すはずもなく。エリエの顔が見る見るうちに真っ赤に染まっっていく。

それをひやひやししながら星が見守っていると、やはり思っていた通り。怒ったエリエが、ミレイニの前に置いてあるケーキを素早く取り返した。

ミレイニは慌てて奪い取られたケーキを取り返そうと手を伸ばすが、何度伸ばしても素早くケーキを移動され、皿にすら指一つ触れられない。

だが、星はその一部始終を見ながら『どうして、残っているケーキの方にいかないだろう』と黙っていた。

しかし、ミレイニには目の前のケーキしか見えてないのか、それとも譲れない何かがあるのかは分からないが、エリエが両手を上げて掲げているケーキを、ミレイニがエリエの周りをぴよんぴよんと跳び回り、必死に何とかそのケーキを取ろうと頑張っていた。

ぼーっと2人のやり取りを見ていると、肩に乗っていたレイニールが星の頬をつんつんと突く。

「主。あの2人は何をしているのだ？ まだケーキを食べないのか？

もうはらぺこなんじゃない」

「うーん。でも……」

だが、そのレイニールの言葉に、困ったように眉を寄せている。それもそうだろう。エリエとミレイニのケーキ争奪戦は未だに、終止符を打つ気配すらない。

そんな中、星達の目の前に置かれたままになっているホールケーキの半分を見つめ、直後に涎を流しながら指を咥えてケーキに釘付けになっているレイニールを見遣った。

このままでは遅かれ早かれレイニールがケーキに突撃をしかねないと感じた星は、小さくため息を漏らし、星がテーブルに置かれたナイフを手にとってケーキを切り分けていく。まあ、いつまで続くか分

からない無益な争いを待っていてもしかたないと、星は思ったのだらう。

切り分けたケーキを取り皿の上に乗せ、レイニールの前に差し出す。

両手にナイフとフォークを手にしたレイニールが、目の前のショートケーキに歓喜の声を上げる。

「おお。これはなかなか美味しそうなのじゃ！ エリエの作る物にハズレはないからな。それじゃ、さっそくいただくのじゃ!!」

自分と同じ位の大きさのケーキを左手に持ったナイフで、器用に一口大に切り分けると、右のフォークでひと思いに突き刺し口の中を含む。

余程美味しいのか、数回噛んでは幸せそうな顔で頬を押さえている。そんなレイニールを見ていて星は小さな笑みをこぼすと、自分もケーキを食べ始めた。

星達がケーキを食べていると、それに気が付いたのかミレイニが驚き目を見開く。

「なんで自分達だけケーキを食べてるし！」

「えっ？ だ、だって……そこにあつたのに食べないから……」

「なら、私も食べるし！」

ミレイニは星が取り皿に分けておいたケーキに飛び付くと、美味しそうに食べ始めた。やはり、テーブルに残されたケーキの存在そのものを忘れていたらしい……。

それを見て、エリエが大きなため息を漏らした。

「はあく。てか、このケーキに拘ってるわけじゃないなら、なんで最初からそうしないのよ。無駄に疲れたわ……」

呆れながら持っていたケーキをテーブルに戻して自分の分を切り分けると、エリエが皆に紅茶の入ったティーカップを渡していく。

やっと落ち着いてケーキを食べられると、席に着いて一息ついたエリエが切り分けたケーキを口に運ぶ。

「うん。我ながら絶品ね！」

自画自賛しながら、次々にケーキを口に運んでいるエリエ。

星は残されたケーキを見つめ、ふとあることを思い出した。

(エリエさんが居るのに。どうしてエミルさん達は居ないんだろう……)

不思議に思った星が幸せそうにケーキを食べ進めているエリエに尋ねる。

「エリエさん。エミルさん達はどこに行っただんですか？」

「——ッ!？」

突然の星の質問に、エリエのケーキを食べている手が止まった。

明らかに動揺しているエリエが、心配そうな顔をしている星から目を逸し。

「あつ、えつと……そうだなー。もうすぐ帰って来るんじゃないかな」

全く視線を合わせようとしないエリエに、星の中にある不安が更に大きくなる。

『もしかして何かあったのではないか……』と、そんなことを考えたら居ても立つても居られず、突然ケーキを食べるのも止め星が席を立った。

「……もしかして何かあったんじゃない？」

「いや、待って！ 星に行かれると、私がエミル姉に怒られるから！」
突然席を立つて走り出そうとした星に驚いたエリエが慌てて制止する。

「……どうしてですか？」

星は「怒られる」と言ったエリエの言葉に、一瞬で冷静になった。
おそらく。そのことは星には秘密だったのだろう。しまった！つと口を押さえているエリエに、不思議そうな顔で首を傾げた星が聞き返す。

観念した様にエリエが大きくため息を漏らすと、がっくりと肩を落とす。

「まあ、ばれちゃったなら仕方ないわね。ほら、前からマスターがギルドを作るって言ってたじゃない。エミル姉はその勧誘に行ったのよ！」

「でも、どうしていきなり……はっ！ 何かあったんですか!？」

「……ぐッー！」

数秒遅れて「いや、そんなことは……気分の問題よ」と煮え切らない言い方で視線を逸らすエリエを、星が訝しげに目を細めた。

普段から人の雰囲気を読みことに長けている星にとって、相手が嘘をついているのかすぐに分かる。

勘のいい星に、エリエは冷や汗を掻きながら眉をひそめていると、その様子を見ていたミレイニがあからさまに大きな声で言った。

「——別に隠すことなんてないし。なんでって、それは3日後にある事件の為だし！」

「ちよつと！ そのことは内緒だってエミル姉に言われてたでしょうが！」

慌てふためきながらミレイニの方を向くと、何食わぬ顔で告げる。

「そんなのエリエが言われただけだし。それに、あたしはエリエが困ってたから助けただけだし。もっと感謝してほしいし！」

「なあ〜にい〜！」

なおもケーキを食べようとしているミレイニの頬をひっぱり、堪らずミレイニが手足をバタつかせていた。

もうお約束と言つていいこの2人のやり取りも、すでに見慣れたものになってきた。だが、今の星にそんなことよりも考えなければならぬことがある。それは……。

「……3日後に事件？」

今まで寝ていた星にはそれは初耳だった。その言葉を聞いた直後、数日前の夜の惨劇が脳裏に鮮明に映し出され、星の顔が一瞬で青ざめる。

それもそうだろう。あんな事件が再び起きれば、今度はどれほどの被害が出るか想像もできない。

あの夜も何も分からないままに終わってしまったが、今回も何とかなるとは限らない以上。

星が『自分に何ができるのか？』考えていても、結局は固有スキルを使用しても敵の足止めがいいところだ——しかも、先日の戦いでも

記憶が曖昧になり、2日も眠るほどに消耗した能力。果たして次も何回まで使用できるか……。

実際に固有スキルの能力を発揮できたとしても、星にはその力をコントロールできる自信がなく。その自信を付けるには、3日という期間はあまりに短い。

エルフの男と触手の大樹

居ても立ってもいられないほど星の心がざわめく、それはがしやどくろとの戦——いや、先日の事件よりも大きい胸騒ぎに星も困惑していた。

「あの……ちよつと疲れたみたいなので、ちよつと休みますね……」

「——そう？ まあ、目を覚ましたばかりだし。もう少しゆっくりしてた方がいいかもね！」

「はいひく。はなふひく」

ミレイニの頬をひっぱりながらエリエが頷くと、星は軽くお辞儀をしてから彼女達を残して寝室へと戻った。

大きく息を吸い込んで、ベッドに身を投げるように倒れ込む星。

いつもよりも大きく感じる心臓の音に、星は複雑な表情を浮かべていた。すると、肩に乗っていたレイニールがパタパタと星の顔の側に舞い降りる。

レイニールは不思議そうに首を傾げると。

「どうしたのじゃ？ 主。浮かない顔をして……」

つとペタペタと布団の上を歩いて、心配そうに星の顔を覗き込んでくる。

星はレイニールから顔を背け。

「ううん。まだちよつと調子が悪いから……」

そう呟き、星は布団の中へと潜り込んだ。

レイニールは浮き上がる布団の上から飛び上がると、表情を曇らせながら布団の中に隠れてしまった星を見下ろしていた。だが、星は布団を被ったまま出てこない。

今星の心を支配しているのは、とてつもない不安と恐怖心だけだった。正直なところ、今の星には周りに気を配るほどの余裕がなく。

(……この感じ。誰かに心臓を鷲掴みされるような感覚……すごくいや……)

布団に潜り込んだまま身震いしながら、星は心の中で小さく呟いた。

いつの間にか寝てしまっていたのだろう。布団の隙間から顔を覗かせると、部屋の小窓から差し込んでいた光の入り方が違う。

星が布団から顔を出すと、そこにレイニールが上空から落下してきて、ベッドに当たり一度大きく跳び上がると、星の目の前にシユタツと降り立った。

「やっと起きたか主！　また、数日は起きないんじゃないかと心配したのじゃ！」

鼻を押し当てようにして顔を寄せてくるレイニール。

星はレイニールの自分を心配してくれる言葉は嬉しいものの、予想以上に近くに寄せてくる顔に少し迷惑そうに眉をひそめていた。その時、ふと部屋に立て掛けていたエクスカリバーが目飛び込んできた。

自分にしか扱えないその剣を見て、星の心の中で闘志の炎が燃え上がる。

（——なんもしないで震えているだけなら……今自分にできることを一生懸命やる！　エミルさん達も頑張ってるんだもん。私だって次は倒れないように、もつともつと強くないと！）

決意を新たに手の平をぎゅつと握り締めると、星はベッドからゆつくりと起き上がった。

ねだっているだけでは本当の意味での成長はない。恐怖を拭い去りたいなら、強さが欲しいなら修行するしかないというのは、今までこの世界で生活してきて強く心に思ったことだ——。

星が動いたことで慌ててベッドの上から飛び立つと、レイニールは星の横でパタパタと翼を動かして静止する。

立ち上がった星が壁に立て掛けていた剣を掴むのを見て、レイニールは驚いた様に星の頭の上に乗って叫ぶ。

「主。なにを考えているんじゃない！　まだ体も万全じゃないのに、そんな物を持ち出してどうするつもりじゃ！」

「——後3日で、また何か起きるんでしょう？　なら、休んでいる暇なんてないよ……」

剣を握り締めたまま扉の方を向く星の目の前で、レイニールが両手を広げてそれを阻止する。

数日間寝たまま目を覚まさなかったにも関わらず、剣を手にして何処かにいこうとする主を止めないわけがない。

星は困り顔でレイニールを見ると「どうして止めるの？ レイ……」と尋ねると、レイニールはむつとした表情で言った。

「それは我輩が聞きたいのじゃ。どうして主は、いつもいつもそうやって無理をする！ エミル達が言っておったぞ！ 主のスキルは物凄く強いと。なら、スキルだけで戦えばいいではないか！」

「そ、それは……」

そのレイニールの言葉に、星は思わず口籠もる。

確かに、レイニールの言った通り。固有スキルの『ソードマスター・オーバーレイ』を使用すれば、たちまち敵のHPや他のステータスは1になり。同じ星とパーティーの者以外はスキルの使用も制限される。しかも、効果は24時間続きどんなアイテムでも回復不可能なのだ――。

また、星本人にはそのステータスが自分のステータスの合計値に上積みされ、大幅に自身を強化できる。これだけ見るとチートにも匹敵する能力なのだが、それと引き換えに多くのデメリットも存在する。

それはこの固有スキルの発動には、直接的に剣から出る光を相手に当てる必要があることと、そして何よりもスキルの連続使用に伴うプレイヤー本人への多大な疲労の蓄積だ。

先日も固有スキルを発動後に数日間眠り続けたことを考えると、これが最も大きなデメリットであることは言うまでもない。

いくら24時間相手に効果を与え続けたとしても、自身が数日間眠り続けてしまえばメリットとも言えなくなるだろう。だが、このことをレイニールに言えば、必ず今よりも強く止められるに違いない。だからこそこの場合は、上手くレイニールを丸め込む方法を考えなければならぬのだ。

星はレイニールを刺激しないように、出来る限り優しく語りかける様に告げる。

「確かに『ソードマスターオーバーレイ』を使えば、安全に戦えるかもしれない。でも……あれは周りの人もかかっちゃうから、できるだけ使いたくないの」

「うーむー」

レイニールは考え込む様に腕を組むと、難しい顔でうなりが首を捻っている。

その様子を見つめながら、星は次に何を言おうかとレイニールに悟られない様に考えていた。するとレイニールが何かを思いついたのか、組んでいた腕を外してポンつと手の平を叩く。

「そうじゃ！ なら、こーういーうのはどうじゃ？」

「……な、なに？」

レイニールの突然の思い付きに嫌な予感がしながらも、星が聞き返す。

不安そうな表情をしている星に、レイニールが胸を張っているのがそれが星の不安を更に煽る。次の言葉を固唾を呑んで見守ると、レイニールが大きく息を吸い込んで徐に告げた。

「これからは我輩を置いていくのは禁止じゃ！ 起きてる時は勿論、寝る時もお風呂に入る時も一緒に居るのじゃ！」

「……ん？」

（そんなのいつもだと思っけど……）

首を傾げながらそう考えている星に、レイニールが更に言葉が続けた。

「主は無理をしすぎるのじゃ！ 我輩がいつでも着いていないと何をするか分からん！ スキルを使えない時は我輩が代わりに戦うのじゃ！ それなら主の悩みは解決だろう？ ついでに、お菓子やご飯のおかずもくれたっていいのだ！」

そう言い放つと、レイニールは腕を組んで仕切りに頷く。その様子を見ていた星はほっとしたのか、思わず笑いが込み上げてくる。

正直。いつもと何ら変わらない条件を提案したレイニールの、ちやつかりお菓子とおかずを要求する辺りが星にとってはツボにハマったのかもしれない。

突然笑い始めた星を見て、レイニールは不満そうにそっぽを向いた。

しかし、星が考えていることなどレイニールが知る由もない。笑われてご機嫌斜めになったレイニールはツンとした態度で星から目を逸している。

星はそんなレイニールを見て微笑みを浮かべると、剣を腰に差してドアに向かって歩き始めた。

それを見たレイニールは慌てて星の後ろを、近付き過ぎず離れ過ぎずの絶妙な間隔で付いてくる。

物音が一切ないリビングの様子を窺いながらにそーっと出ると、エリエもミレイニもソファアで寝ていた。

寝ている2人の側までレイニールが飛んでいくと、彼女達が寝ているのを確認して星の方に戻ってきた。だが、まだ不機嫌なのかそっぽを向いたまま星に告げる。

「あの様子なら当分は起きんだろう。行くなら今がチャンスじゃ、主」「——うん。でもちよつとだけ待ってて……」

そう言つて、星はキッチンの方に行くボードを持って帰ってくる。

それは普段イシエルが料理の調味料なんかを書いているものだった。本来ならば数分でできる料理を、彼女は相当なことがない限りは一から調理していて、毎回調味料をどのくらい使ったのかをちくいち書き記していた。

星はそのボードに徐にペンを走らせた——全てを書き終えた星はレイニールに向かってにつこりと微笑むと「さあ、行こっか！ レイ」と告げる。

レイニールは頷くと、嬉しそうに微笑み星の頭にちよこんと乗った。

星はそんなレイニールの顔を見上げると、レイニールは慌ててそっぽを向く。どうやら、まだ機嫌を直したわけではないらしいが。だが星には、レイニールの考えていることが分かる気がした。

エルフの男と触手の大樹2

城から出た星は森の中を進んで行き、ちよつと開けた場所に出るとぎこちない手付きで腰に差した剣を抜く。

それを上段に構え、勢い良く振り下ろす。ヒュンという風切音の後にもう一度同じことを繰り返すと、星は何を思ったのか眉をひそめ首を傾げる。

持っていた剣を鞘に戻し、徐に星はコマンドを指で操作する。すると次の瞬間。腰に差していた剣が消え、代わりに練習用にエミルに渡された木の剣が現れた。

星はその剣を掴むと「よし」と小さく呟き、再び素振りを始めた。おそらく。刃の付いた剣を振り回していると危ないと感じたのだろう。しかし、刃りには自分の他にレイニールしかおらず、そのレイニールも木の上で昼寝をしており。気にしすぎと言えばそうなのだろうが、星の性格上。そういうのにも気を配ってしまうのだろう。

だが、木の上で寝ているレイニールが突然降りて来て、自ら剣に当たるとは考えられないが……。

それからは、汗が流れるのも構わず。星はただただ一心不乱に練習用の木の剣を振り続けていた。

今回は以前のような丸太という攻撃する目標もない。星は頭の中で架空の敵を想定しながらそれを斬り付けていく。

良くプロの格闘家やスポーツ選手は、インスピレーションに自分が勝利するイメージを思い浮かべながら行うという。星が今やっているのもそれだ——だが、それは普段から己に自信のない彼女にとって最もいい練習方法なのかもしれない。

それも全ては弱いままの自分を、少しでも変えられると信じての行動だった。

固有スキルに頼らずエミルやマスター達のような自分の力だけで戦えれば、きつとあの夜のような不測の事態にも皆を守ることができる。

架空の敵を想定しながら練習に打ち込む星の胸の奥底には、いつかきつとエミルと肩を並べて戦えるという希望に溢れていた。

その時、突然近くの茂みからゴソゴソと何か動く物音が聞こえてきて、ビクツと体を震わせると剣を振る手が止まる。

レイニールのいたずらだと思いい、さつきまでレイニールの寝ていた木の枝の所を見遣った。するとそこには、レイニールがまだ気持ち良さそうに寝息を立てながら手でお腹の辺りを搔いていた。

星の背筋に悪寒が走り、全身の毛が逆立つ感覚に襲われる。星は木の剣を握り締め、物音のした場所へとゆっくりと近付いていく。

腰が引けながらもそーっと茂みの上を覗き込むと、そこには蛇の尻尾の様なものがウネウネと動いていた。

よく見ると、表面は何やらヌルヌルとしてテカテカと光る液体が浮き出しているようにも見える。しかし、それだけの情報では、まだモンスターかまでは分からない。

(……なんだろう。これ……木の根つこのような。蛇の尻尾のような……)

じつとウネウネと動くその得体の知れない物体を凝視していると、突然なにかに体を勢い良く引つ張られた。

「きやあああああッ!!」

なおもズルズルと引つ張られる足に目を向けると、星の右足に太いロープの様な何かが巻きついている。よく見るとロープの様な表面から、ヌルヌルとした液体が大量に湧き出してきた。

しかし、星の体を捕らえて放さない部分には、ヌルヌルとした液体は分泌されておらず。逆に服に引つ掛かるような細かい反しびつしりと付いていた。

子供ならでは好奇心を抑えられなかったのだろう。こういうところとは年相応と言ったところなのだろうが、今はそれが裏目に働いてしまっている。それはさつき、星が見た根つこの様な得体の知れない何かだった。

(……やられた！調べてないで、早くこの場所から離れば良かった)

今更ながらに後悔していると、さっきの星の悲鳴を聞きつけたレイニールが急いで星の元に急行してきた。

「レイ！ こっちに來ちやダメ！ 戻ってエリエさんにこの事を教えて!!」

星のまさかの言葉に、レイニールは躊躇するように空中で止まる。

「——だ、だが……主はどうするのじゃ？」

「……私は私でなんとかするから、レイは早く戻って！」

だが、星がそう叫ぶと、手に持っていた木の剣で足に絡まったものを叩く。

しかし、足に絡みつく木の根の様な何かは、弾力性が強いのか表面のヌメリで力が流されるからかは分からないが、表面に傷一つ付く気配すらない。

そんな中、空中でどうすればいいのか分からずに、困惑した様子でいるレイニールに星がもう一度大きく叫んだ。

「レイ。早く行って!!」

「う、うむ……」

レイニールは星の命令に渋々その場を後にする。星はその後ろ姿を見て、微かに微笑みを浮かべた。

おそらく。レイニールがエリエを連れて戻って来る時には、もう間に合わないことは星にも容易に想像できた。

「少し、レイに強く言いすぎたかな……」

小さく星が呟く。だが、こうでもしないとレイニールのことだ。きつと助けようと近付いてくるのは分かっていたし、どこから飛び出したのかも分からない得体の知れないこの物体に巻き込まれていたかもしれない。

そう考えると『自分の判断は正しかったのだ』と首を振って、不安になる自分に言い聞かせた。

しかし、レイニールを逃したところで、この危機的状況を打開する根本的な解決にはならない。まずは自分の足に絡みついたこのヌルヌルとした木の根の様な何かを取り払って逃げなければどうしようもないのだから……。

星は木の剣を投げ捨てる、コマンドを操作して練習前にアイテムの中にしまつてあるはずのエクスカリバーを探す。

指を動かしてアイテムの項目を下にドラッグすると、すぐにエクスカリバーを発見することができた。

まあ、星のアイテムの項目に入っているものは初期装備と、エミルに渡された回復用のヒールストーンや財布などの少量のアイテムだけで、幸い必要なアイテムを探すのは容易なのだ。

これは星が思い付いたわけではなく、エミルの案だった。以前、寝る前にそれとなく言われたのが「アイテム内はなるべく整理しておいた方が後で色々楽になるわよ」と言われていた。

その時は「でも、たくさん入っていた方が困った時にいいんじゃない……」と反論したのだが、エミルは微笑みながら「その時になれば、きっと分かるわ」とだけ言って上手くあしらわれてしまったのだが。

今思えば、エミルはこういう危機的状況をあらかじめ予想していたのかもしれない。

星はアイテム内のエクスカリバーを指で押したまま、今度は体の形をした装備画面にドロップしようとした時。

突然茂みの中から出て来た新たな木の根の様な何かに、操作していた右手を強引に引き伸ばされてしまう。

「――あつー！」

だが、別にコマンドは利き手だけでしか動かせないわけではない――星はすぐに左手でコマンドを開く。しかし、開けたコマンドは一番最初のアイテムの項目からになっていた。

どうやら、コマンド操作は途中でキャンセルされた場合は、初期状態になって戻ってしまうらしい。

普段なら気にならないことでも、こういう状況ではこのシステムの仕様は厄介極まりない。

(……利き手じゃない方でうまくできるか分からないけど……でも、この状況じゃ……やるしかないよね)

星は危機的状況の中『自分がやるしかないという』決意に満ちた表情で頷くと、慣れない左手でコマンドを操作する。

慣れない左手のせいか、小刻みに震えて上手く動いてくれない。しかも、さつきから右手と右足に巻き付いた木の根の様な何かが脈打つように動いて星の体を揺らしていて手元が狂う。

思い通りにいかないコマンド操作に苛立ちを感じているのか、星の表情が徐々に歪み始める。

それは普段の星が絶対に見せない怒りによるものだったが、当の本人はその普段経験したことのない感情に戸惑いを隠しきれなかった。それもそうだろう。星が今まで生きてきて、憤りを感じたことなどないに等しい。

普段から感情を抑え込むことに長けている星は、知らず知らずのうちに怒りを含めた喜怒哀楽の殆どを制御する術を身に着けてしまっていたのだ。

喜怒哀楽は人とのふれあい始めて感じる感情で、人との接触を避けることの多い星には無縁とも言っていい感情だった。

いや、なんでも1人で熟さないといけなかった星にとっては、喜びも怒りも悲しみも楽しさも全てが自分1人だけしか感じない感情でしかない。

分かち合う相手が居ないのに感情を表すのは、苦行と言うほどに虚しさしか残らないのだ。何故なら父親にも生まれる前に先立たれ、母親は女手一つで自分を育てる為にいつも帰りは遅い。学校では友達もいなくて、ふれあいというものがまるでなく。嬉しくて笑みが溢れても、悲しくて涙が溢れてもそれを分かち合える存在が居なかったのだから……。

そんな星は日常では常にドライだった……それは星が冷たいのではなく。周りの冷え切った態度に合わせて冷めてしまったのだ——だが、無理もない。昔は友達もいて、父親がいないというだけで、どこにでもいる普通の女の子だった。

しかし、去年から……いや、その前から同じクラスの女子達から距離を置かれるようになり。適当に愛想良くしながら、普段は本だけを手に無口で日陰にいるような女の子になっていった。でも、心のどこかで本当に人を信じられない性格まで堕ちてしまったのだ。

もしも映画やドラマで学校を題材にした物語が展開されるならば、ほぼ間違いなく発言もなく、真つ先に一番最初の騒動で消える役になるのだろう。そしてそうだとしても、誰の心にも星という存在は残らないのだろうかとは、星本人が最も知っていることだ――。

そんな星も、エミル達とこのゲームの世界で生活してからは、毎日が驚きと喜びの連続で、今まで殆どの感情を抑え込んでいたその心を解きほぐしていた。

この心の中から湧き上がる。行き場もなくどうしようもない怒りの感情もそのおかげなのだろう。だが、今のこの状況ではその感情が仇となっていた。

上手く操作できないことからくる怒りと焦りで、手の震えが治まるどころかなおも大きくなっていく。

「……は、はやく。はやくしないとー！」

焦る星を尻目に、右腕と右足に巻き付いた物が嘲笑う様に地面を波打っている。

つとその時、星の指がエクスカリバーの項目を捉えた。

星は「よし！」と思わず口に出し、それを装備欄の体の左手の方へとドラッグする。同時に星の左手にエクスカリバーが現れ、星は素早く固有スキルを唱える為に口を開く。

「ソードマスターオーバーレ……」

後一文字というところで地面を突き抜けて現れた木の根に、星の左手に握られていたエクスカリバーが弾かれた。

空中を回転しながら、星の遥後方へと飛ばされた剣先が地面に突き刺さる。

「し、しまっ……」

無駄だと分かっているながらも、咄嗟に飛ばされたエクスカリバーの方へと伸ばした手を新たに出てきた木の根に掴まれ、直後に唯一残っていた左足までも巻き付かれて星の体は地面に大の字に拘束されてしまう。

エルフの男と触手の大樹3

悔しそうに唇を噛み締める星。

最後の頼みだったエクスカリバーを弾き飛ばされてしまえば、固有スキルの使えない星は無力でしかない。

ゲーム内の筋力補正が効いていても、四肢に巻き付いた木の根を振り払うことすらできない。

最早抵抗できないと悟ると、星は手足に入れていた力を脱力させる。星にとつては、エクスカリバーによる固有スキルの発動が最後の頼みだったのだ——その最後の希望を失って、完全に生存することを諦めてしまったのだろう。

「……まあ、レイを逃がせたし。もういいかな……」

小さくそう呟いた星は、やりきったという表情で笑みを漏らす。

星が諦めたと分かると、地面に埋もれていた木の根が地面を裂くように現れ、星の体を宙に持ち上げる。その直後、近くに立っていた大木が突然音を立てて動き出し。大きな枝が項垂れるように広がり、その大木の中央がまるで口のように大きく開く。

星の体もそれに伴い空高く上がる。星が真上から見ると、その大木は幹の中央部分にびっしりと付いた赤紫色の触手が生き物の様に見えるうねと蠢いている。

その姿はすでに木というより、大地に立つ巨大なイソギンチャクと言った方が正しいかもしれない。

触手の表面からは紫色の液体が滲み出ている、捕まえた星を待ち構えている。

とてもグロテスクな触手を目の当たりにしても、星は冷静だった……いや、もう全てを諦めているからこそ恐怖も何もかも感じない。

無気力というのはこういうものなのだろうか、この感情も今までの人生で初めての感覚だった。どんなに苦しくても、全てを諦めたことなどなかったし。努力し続ければ、きっと最後には報われると思っていたからだ。

しかし、今はなにも感じない——目の前の木の化け物に捕食されよ

うというこんな状況でも、今の星の心は澄み切った空の様に晴れやかな気分だった。

全てを悟り覚悟したように星はゆっくりと瞼を瞑る。

つと、そこに聞き慣れた声が星の耳に飛び込んできた。

「あゝるゝじじい!!」

それは紛れもなくレイニールの声だった。その声に驚き、星は咄嗟にその声の方を向く。

星の視界に映ったのは、弾丸の様に自分の方に飛んでくるレイニールの姿だった。

「レイ！ どうして戻って来たの!? 私は大丈夫だから、早くエリエさんの所に——」

「——何が大丈夫じゃ!」

言葉を遮ったレイニールは勢い良く飛んでくると、星の右手に絡み付く木の根に飛び付く。

ぬめりけのある分泌液に包まれたそれを、レイニールが必死で引き剥がそうそうとしている。だが、どう考えても表面がツルツルで、しかも星を捕らえている場所だけが細かい鉤爪状になっている構造であり、それが星の体にしっかりと巻き付き固定されていた。

この拘束を解くことなどこの大元のモンスターを倒すか、木の根を切り落とす以外に方法はない。

レイニールも見た目はぬいぐるみのようなだが、この形体でも大きなドラゴンの状態と同じ力を持っているはず。だが、そのレイニールが解けないというのはもうどうしようもないだろう。

「レイ。もうダメだよ。離れて……今なら、レイだけなら逃げられるから……」

「何を馬鹿な事を言っているのだ! 逃げるつもりなら最初からそうしているのじゃ! 我輩は主を見捨てて逃げる様な臆病者でも、卑怯者でもない!」

そう言い放つレイニールに、星は言葉を失っていた。

「……でも」

「それに主は言ったのだ。今できる事を全力でやると! なら、こん

な木の化け物に食べられようとしているこの状況で、諦める事が主の全力なのかツ!?”

滑る手を何度も掛け直しながら、レイニールが星に向かって逃げるように叫んだ。だが、星は知っていた。努力をしてもどうしようもないことが、この世の中にはたくさんあることを……生まれ持った顔や身長などの身体的なものを始めとして、自分の考えや行動を変えることはできても、他人の考えや行動を変えることはできないということを……。

今回は明らかに後者だ——モンスターが放してくれるか、誰かが助けてくれる以外抜け出す方法などない。

現に星は両手両足の自由を奪われ、武器も地面に突き刺さった状態では努力ではもうどうすることもできない。また、レイニールの行動から見ても、掴んで引き剥がすことができない以上。鋭利な刃物で切断する以外に選択肢はなさそうだ。

そしてなにより。今は何としてもレイニールだけでも、この場から逸早く離脱させることが星にとつては重要だった。

深呼吸をしてレイニールの目を見つめる星が、ゆっくりと落ち着いた声音で説得するように話し始める。

「——レイ。落ち着いて聞いて……努力してもダメな時はダメなの。私のは、もしもできなかった時に自分を許すための言い訳……」

そう。今まさに星の口から出ている言葉が紛れもない真実だった……。

どんなことでも努力すれば、どんなことにも『あれだけ頑張ったんだから』と自分に言い聞かせることで、痛みを軽減して自分を肯定できる。努力とは無理だった時に、自分を慰める為の言い訳以外の何物でもないのだ——。

俯き加減にそう呟く星に、レイニールが不満を爆発させるように声を荒らげる。

「嘘じゃー！ 主はそう言えば、我輩が逃げると思ったのだろうか、我輩の主様はそんな弱音は吐かないのじゃー！ 主が我輩の立場なら必ずこういうはずじゃ『大丈夫。きつとなんとかするから』と！ それに、

もう主を1人にしないと決めたのだ。我輩はいつまでも主と一緒に居たいのじゃ!!」

「……レイ……」

その言葉に胸がきゅつと締め付けられる様な痛みを感じ、懸命に自分の体の木の根を引き剥がそうする姿が星の瞳が涙で霞む。

だが、レイニールの熱意とは裏腹に、星の体に巻き付いていた木の根は更に強く締めつき、一向に緩む気配すら見せない。その様子に痺れを切らしたレイニールが一度木の根から手を放し、空中でパタパタと翼をはためかせ叫んだ。

「このー！ こんなもの我輩の炎で焼き払ってやるのじゃ!!」

口いっばいに炎を溜め込み火炎放射を放つ準備に入ったその時。突然、森の中から男性の声が響く。

「――炎を使っちゃダメだ！ 君達も丸焦げになるぞ!!」

どこからともなく聞こえてきたその声に、レイニールが「誰じゃ!」と言葉を返す。

だが、次に返ってきたのは返事ではなく2本の矢だった。

風を切り裂き一直線に飛んで来たその矢は、的確に星の足に巻き付いていた木の根に突き刺さり、次の瞬間には小さな爆発音とともに木の根を吹き飛ばす。

星とレイニールがそれに驚いていると、再び飛んで来た矢が今度は星の右手と左手の木の根を吹き飛ばし、支えをなくした星の体は重力に従い落下した。

落下していく先には、赤紫色の触手達が伸びて待ち構えている。

急速に落下する星を追いかけるが、星の落ちる速度には不意を突かれたレイニールも追いつかない。

「――きゃあああああああアツ!!」

「くッ！ 早くて追いつかないのじゃ!」

落ちる星を猛追するレイニールの前を何かが横切った。

っと気が付くと、目の前を降下していたはずの星の姿がなくなっていた。

直後。レイニールの視界が天と地が入れ変わった状態になる。ま

た、尻尾の方が物凄く痛い。

今まで星を追って下を見ていたはずなのだが、今は天地が反転した様に空を見ていたレイニールの視線が、今度は逆さに立っているようにと、高速で回転しているかの如く一瞬で目まぐるしく変わる。

そこに先程の聞いたことのない男性の声が再び聞こえてきた。

「——間に合って良かったよ」

「誰じゃお前は！ 主に気安く触るな！」

「うわっ！ な、なんだこれ。ぬいぐるみじゃないのか!?!」

突然言葉を発したレイニールに驚きを隠せない表情を見せたエルフの男。

一瞬でエルフと分かったのは、言うまでもなく彼の耳が長く鋭かったからだ。しかも、弓を使うプレイヤーの大半はエルフというのが、フリーダムを通例になっているのも影響していたのかもしれない。

レイニールの視界に逆さまに映るエルフの男の顔は、まるでありえない物を見ているかの様に目を見開いていて、口をあんぐりと開けた間抜けな感じだった。

まあ、彼が驚くのは無理もない。本来はレイニールのような、イレギュラーな存在がこの世界に存在するはずがないのだ——また、フリーダム内でも珍しい子供の星の近くにあったことで完全にぬいぐるみだと勘違いしたのだろう。

でもそんなことよりも……。

「なんで我輩の尻尾を掴んでおるのだ!!」

エルフの男は驚いた様に跳び上がると、レイニールの尻尾を更に強く握る。

「——あんっ！ な……なにを……するのじゃ！」

レイニールはブンブンと体を振ると、その反動を利用してエルフの男の腕に噛み付いた。

エルフの男と触手の大樹4

エルフの男が突然噛み付かれたことに驚き手を放した不意を突き、レイニールは男の手から抜け出ると、パタパタと男の顔の前いきびシツと指差して告げる。

「良いか！ 我輩の尻尾はデリケートなのじゃ！ 主を助けてくれたことには礼を言うが、初対面でドラゴンの尻尾を掴むとは無礼だろう！」

目を吊り上げ、鼻息を荒くして激昂するレイニールを見ていたエルフの男の表情が一瞬で険しくなったかと思っただ直後、尻尾を掴まれて抗議していたレイニールの視界がグルツと回り、再び空を見たまま高速で移動を始めた。

案の定レイニールの尻尾の先に掴まれている感覚と、付け根の部分に引き裂かれるような鋭い痛みが走る。

それもそうだろう。レイニールと会話していた直後、今までは人間の手の部分に相当するであろう木の根の部分を吹き飛ばされて悶絶していたモンスターが正気を取り戻し、地中から新たに現れた木の根で攻撃を仕掛けてきたのだ。

エルフの男は気を失っている星を右腕にしっかりと抱き締めたまま、レイニールの尻尾を強く左手で握り締めていた。

自分を捕らえようと向かってくる木の根を巧みに避けながら、エルフの男は攻撃を避けつつモンスターと距離を取った。

地面という死角から次々に現れる木の根をかわすのはそうたやすいことではなく、彼もレイニールのことまで構っている暇はない。

地底から現れる前進しながら左右に大きく動いてかわしているその間、ぶらんとなされるがままに振られているレイニールの姿を見ると、どうやらドラゴンは尻尾を掴まれると力が抜ける習性があるようだ——レイニールだけかもしれないが……。

ひとまず、茂みの裏の地面に抱きかかえていた星を下ろした、エルフの男はレイニールの尻尾から手を放す。

レイニールはほっとしたのか大きく息を吐くと、掴まれていた尻尾

を優しく撫でている。彼は獲物を探し、頻りに木の根を動かしている木のモンスターを横目にレイニールに告げた。

「そこで待っていてくれ、僕はあの『アブソープツリー』を倒してくる」あのヌルヌルの木の根と触手を持った奇妙なモンスターは、どうやら『アブソープツリー』というらしい。

レイニールは背中に背負っていた弓を手に持ったエルフの男を、怪訝そうな顔で睨む。

「——どうして我輩達を助ける……お前にメリットがあるのか？」

「……ふっ、困った時はお互い様だろ？ それじゃ、行つて来る！」

質問したレイニールに向かって微笑みを浮かべ、エルフの男は茂みの中から飛び

出していった。

だが、レイニールはなおも警戒した様子で彼の後ろ姿を睨んでいる。そのことから、レイニールが彼の言葉を信用していないことが分かった。

まあ、無理もない。ゲーム時なら彼の言葉は信頼に値する相手だと取れるだろう。しかし、今はデスゲームの始まった運営不在の隔離された世界。

正直。死と隣り合わせの今の状況下で見ず知らずの者が寄つてくるには、それ相応の企みがあるからでしかないのだ——。

今気を失っている主を守るのは、レイニールだけなのだ。そうなれば、必要以上に警戒するのも当然のことだろう。

エルフの男は自分に向かって伸びてくる木の根に弓を構えると、歩みを止めることなく2本の矢を放つ。

すると、先程同様木の根に刺さった直後、爆発し木の根を吹き飛ばす。

爆発と言っても火薬などを使ったものではなく、矢が刺さった周囲をまるで矢の先から発生した風で吹き飛ばす様な感じだ。

おそらく、彼の固有スキルの力なのだろう。だが、能力はそれだけではないようだ。木の根が矢を巧みにかわすと、彼の放った矢は大きく旋回して確実に木の根を撃ち抜いている。それから察するに、目的

を追尾できる能力も彼のスキルには備わっているらしい。

エルフの男が間髪入れずに矢を放ち続けると、それに負けじと木の化け物も次々に木の根を伸ばす。

しかし、明らかに地面から出現するその数は減っている。どうやら、木の根には上限があるようだ。それとは対称的に、彼の背負う矢筒からは矢が空になると次の矢が現れ、それがなくなるとまた無限に矢が生成されている。

エミル達の仲間にエルフが居ないからどういう原理なのかはさっぱり分からないが、おそらくはエルフという種族の能力なのかもしれない。

それと目を見張るのはそのスピードと攻撃速度だ。基本スキルのスイフトを掛けて移動速度と攻撃速度を増しているのは分かるが、向かってくる木の根をかわす彼の身のこなしは凄まじいの一言に尽きる。

連続して攻撃してくる木の根を、即座に地面を蹴ってノーモーションでかわしていく——それはまるで、忍者が水の上を沈む前に跳んでいるのに近い動きだった。

防御を捨てたスピード特化の武闘家のマスターやカレンよりも下手をすると、切り返しから攻撃に移るまでのスピードは速いかも知らない。

元々エルフという種族は防御力や攻撃力が低い代わりに、敏捷性などのステータスが人間より遥に高く。初期で選択する者も多いのだが、結局防御力と攻撃面の脆弱さ故に断念して、教会で新たにアバターを作り直す者も少なくない。固有スキルはゲーム開始時にランダムで決定するので変更はできないのだが……。

「……さて、そろそろいいかな」

エルフの男は小さく呟き、ニヤリと不敵な笑みを浮かべる。

その言葉通り、今までひっきりなしに攻撃してきていた木の根の攻撃が収まってきた。

アブゾーブツリーにの周りを回りながら、幹に向かって素早く無数の矢を放つと、彼の放った矢が斜めに幹に刺さり階段のように連な

り。弓を背中に収納すると、先程放った矢を踏んで駆け上がる。

そしてアブゾーブツリーの木の上に、ぽっかりと開いた部分に位置する赤紫色の触手に向かって、ポケットにしまっていたマツチに火を付け中へと投げ込む。

「――伏せろ!!」

エルフの男は素早くその場を離れた直後、アブゾーブツリーの中から爆発の後に巨大な火柱が上がった。

爆風で吹き飛ばされた男は地面を数回転がり体勢を立て直すと、背中に背負っていた弓を取り出して矢の鏃の部分に布を巻き付けマツチで火を付け、それを短くなった木の根をうねうねと動かし慌てふためいているアブゾーブツリーに向けて構え、勢い良く引き絞った弦から手を放した。

放たれた矢は幹に突き刺さり、アブゾーブツリーの分泌していた液体に燃え移って、アブゾーブツリーが一瞬のうちに大炎上する。

それからしばらくして、燃え上がる火柱と共にアブゾーブツリーからキラキラとした綺麗な粒子が空に向かって昇る。その最後はグロテスクな外見とは打って変わって、夕焼けに染まってきていた空に溶け込んでいくようでとても幻想的な最後だった。

エルフの男と触手の大樹5

エルフの男はそれを見届けると「ふうー」と大きく息を吐き出し、地面に刺さっていた星のエクスカリバーの前に行き、地面に突き刺さったままの黄金の剣の柄に手を伸ばす。

「だが、本来ならここにアブソーブツリーは生息してないはずなんだけど……やはりモンスターの出場所が変わっているのか……」

そうブツブツ呟く彼の手がエクスカリバーに触れる瞬間。

『【警告】この装備は特定の人物のみに使用権が与えられています。また、使用者が死亡した場合にはそのプレイヤーに害を為したと思われる人物全てのキャラクターを削除します。』

目の前に表示された警告のメッセージを見て、エルフの男は剣の柄に触れようとしていた手を引つ込めた。

本能的にこの武器に触れるのを避けたのだろう。そしてレイニールの方に向かって呼んだ。

「君の……主人様の剣を取りに来てくれないか？　どうやら僕には触れないらしい」

レイニールは警戒しながらエルフの男にゆっくりと近付くと、地面に刺さっているエクスカリバーを抜く。

その後、エクスカリバーを両手でぶら下げて翼をいつも以上に羽ばたかせつつ、時折振り返りながら星の元へと戻っていった。

すると、今まで気を失っていた星が目を覚まして、ゆっくりと体を起こした。

目を擦ると周りを一度見渡して、不思議そうに首を傾げる。

それもそうだろう。星が気を失う前は落下していて、イソギンチャクのような木の化け物に食べられたはずなのだ。

しかし、今の自分がいるのは化け物の腹の中ではなく。紛れもなく地面の上だった。

気を失っていた間の記憶が曖昧で『また自分の体が、別の何者かに体に乗っ取られたのではないか？』という考えまで浮かんでくる。

手の平に視線を落としながら、心ここにあらずという様子で居る星

の目の前に、剣をぶら下げたレイニールが飛び込んできた。

レイニールは首を傾げながら、不思議そうに星の顔を覗き込む。

「——大丈夫か？ 主。体に傷はないか？」

「……傷？」

そうレイニールに言われ、星は体全体を見て傷がないかを確認すると「うん。大丈夫」と頷いてにっこりと微笑んだ。

言葉を聞いたレイニールも満足そうに微笑むと、星にエクスカリバーを手渡す。

星とレイニールのやり取りを見守っていたエルフの男は、2人の会話が終わったのを確認してから、徐に星の方へと向かって歩いてくる。そして、星の前で止まった彼がスツと手を差し伸べた。

「僕はトールだ。よろしく！」

メリハリのある声でそう告げた彼の青い瞳は淀みがなく、とても嘘を付いているようには見えない。

星は彼の手を取って立ち上がると、膝の上に手を合わせて小さく頭を下げた。

「危ない所を助けて頂き。ありがとうございました」

丁寧にお礼を言った星の顔を見て、トールは眉をひそめて変な顔をしていたが、すぐに「君の名前は？」と言葉を返してきた。

「あつ、私の名前は星。そしてこっちがレイです」

「……レイニールじゃ」

そつぽを向きながら、レイニールが不機嫌そうに告げる。まあ、彼とは尻尾を掴まれた最悪の出会い方をしていただけだから無理もないが……。

冷たいレイニールの態度に苦笑いを浮かべつつ、トールが星と視線を合わせるように膝を折って。

「実は僕にも、君と同じくらいの年の従兄弟がいるんだ」

っと微笑んだ。その途端、星は顔を赤らめ思わず下を向く。

なんと言えばいいのか分からないが、鼓動が早くなっている。初対面の男性ということもあって、少し緊張しているのかもしれない。だが、それ以外の感情もどこかにある気がした。懐かしいような、以前

の宿屋での事件の時のマントの人物の時と感覚が似ているかもしれない……。

そこにレイニールが心配そうに星の顔を覗き込んで言った。

「どうしたのだ？ 主。顔が赤いのじゃ」

「——えっ!? あ、うん。ちよつと暑くて……」

その星の返答に、何故かレイニールが力強く数回頷く。

星がその理由を尋ねるよりも早く、レイニールがその答えを教えてください。

「なんと言つても、先程のモンスターは大量の炎で焼き落としたからなく。我輩の炎が、あやつの体を真つ赤に包むところを見せられなくて残念じゃ！」

「そうなの？ ありがとうね。レイ」

星が気を失っていたのをいいことに、大きく記憶を改ざんしているのは、レイニールとしては『主は我輩が守った』と言いたかったのだろう。

まあ、以前もさらわれた星を結局は助けられなかった。あの時はライラに助け出されたが、それからの星はいつも何かしらの無理を強いられていることをレイニールは気付いていたのだろう。そして何より、自分が星を助けたかったという思いが強かったのかもしれない。だが、実際には全てツールがやったことなのだが……。

しかし、それは分かっているかは定かではないが、嘘を広められている当事者のツールはというと、余裕すら感じられる笑みを浮かべている。

これほど心にゆとりがあるのは彼の頭に何らかの思惑があるのか、それか彼がただたんにいい人だからなのかは本人しか分からない。

星は何度もこの感じで騙されている。こういう時の対応は基本的に関わらないことだ——相手にどんな思惑があろうとも、周囲を警戒しつつ関わりさえしなければ、相手の術中にハマる可能性は低くなる。

星はもう一度ツールに向かってお辞儀をすると、エクスカリバーをしまつて木の剣を装備し直した。そして少し離れた場所で何度も剣

を振って、一時中断していた練習を再開する。

「ちよつといいかな?」

「……えっ?」

突然そう言ったトールが星の後ろに回り込んで、星の剣を持っていた手を包む。

星が驚きながら顔を真っ赤にしていることなど気にせず、トールはそのまま剣を大きく振り上げるとゆっくりと振り下ろす。

困惑する星を余所に、トールがそれを数回繰り返して星の耳元でそつとささやくように告げた。

「いいかい? 剣を振る時は肩の力をもつと抜いて、当たる瞬間に全力が出るようにゆっくりと力を入れる……そうすることで、相手が突然予期せぬ攻撃をしてきても動作を中断して切り返す事ができるんだ」

だが、星は顔を耳まで真っ赤に染めたまま深く俯いてしまう。いや、正確には頷いて顔を上げられなくなった……と言った方が正しいかもしれない。

そこにレイニールが抗議にやってきて。

「おいお前! 主が困っておるではないか! 馴れ馴れしくするな! 離れるのじゃ!」

レイニールはそう言って星の後ろに覆い被さるようにはしていたトールの顔を押し、彼を強引に引き剥がす。

顔の中で唯一の突起物である鼻を押され、トールはたまらず星から離れた。

その後、俯く星に向かって。

「ごめんね。いつも従兄弟にしているみたいにしちゃって、やっぱり男の子と女の子じゃ違うよね」

つと謝る。星は無言のまま小さく頷き返す。

すると、彼を警戒しているのか、レイニールが星の頭の上に乗って彼に激しい視線を送っていた。

慣れないことに動揺しているのか、星はまだ俯いたまま頬を赤らめている。

まあ、星のこの反応は無理もないだろう。ゲームを始める前は同い年の子に避けられていて、ゲームを始めて日々のエミル達とのスキンシップに慣れたとはいえ、異性にここまで接近されたのは生まれて初めてなのだ。

それと、さつきから治まる様子のない胸の高鳴りにも困惑を隠せなかった。

(……なんだろう、胸が苦しい。けど、モンスターと戦う時とも違う。とても安心できる感じ……)

彼の積極的なスキンシップに困惑する心と別の何かが入り乱れていて……だが、その感情が何なのか、どうして湧き上がってきたのか理解できずにいた。

いつまでも俯いている星に向かって、空気を察したトールが告げる。

「どうだろう。更に剣を上達させる為に、僕と練習しないかい？」

「……練習？」

小首を傾げる星にトールが微笑み返す。

だがその提案に、彼を警戒していたレイニールが声を上げる。

「そんな事を言って！ 我輩の主を騙し討ちするつもりだろう！ 我輩は騙されないのじゃ！」

「なら、PVPのトレーニングモードするのはどうだい？」

「トレーニングモード？」

トールの提案に星とレイニールが同時に声を発し首を傾げた。

彼の言った『PVPのトレーニングモード』とは、その名の通りPVPの練習用モードのことだ。

初心者プレイヤーがPVPをやってみたい。でも、怖くてとてもできない……そんな時に活躍するモードがこれだ——このモードはトレーニングモードで格闘ゲームの練習用モードに似ている。

HPが『1』までしか減らない仕様は標準のPVPの仕様とは変わらないものの、本来あるはずの戦闘ダメージに応じた痛覚をカットすることによって、ちよつと技のバリエーションを増やしたい時や固有スキルを試してみたいなどの理由でも使われる。

また、このモードは標準モードのようにHPが『1』になれば解除されるわけではない為に、犯罪に利用されるのを防ぐ目的で、一定時間以上片方が戦闘ダメージの減りがなければ、勝手にPVPを解除される仕様になっていた。

だが、こんな便利な機能が付いているにも関わらず、実際に使用されることは稀で、その存在を知らないものも多く存在する。

その理由はフリーダムの様子の痛覚を再現する機能が影響しているのは最早説明するまでもないだろうが、あえて説明させてほしい。

このトレーニングモードには痛覚を遮断する機能と、最低値になったHPを自動回復させた上に、PVPを強制的に継続させる機能の2つが付いている。つまり、自分で解除する。または片方または両方が相手を攻撃しなければ、自動で解除される仕組みだ。

しかし、痛覚をカットするこのモードでは、実際に戦闘になった時に痛覚がある状態でトレーニングモードと同じ技や動きを再現するのは、非常に困難になってしまうのはやむを得ない。

逆に痛覚がないことに慣れてしまうと、痛覚がある感覚に精神がついていかずに最悪の場合はこのゲームをリタイア……つまり、引退する者達が出る。

HPの減少は『1』までで、別にアイテムを奪われるわけでもない通常のPVP機能を利用するのが当然という風潮になっていた。

その為、ある程度のプレイヤーはより実戦に近く。PVPを積極的に普及させ、トレーニングモードの存在は忘れ去られていたのだ。

現にエミルや他の者達からさえ、トレーニングモードの存在を知らされていなかったのがその証拠と言えるだろう。

ツールがそのことを星達に説明すると、星は引き締まった表情で小さく頷いた。

痛覚もなく、対人で実戦に近い動きを練習できるチャンスはこれを逃したら二度とないかもしれない。それだけではなく、星の心の中で引っ掛かっている何かを、この戦いで払拭したいという思いもあった。

(……)この人と戦ってみれば、この気持ちのモヤモヤの謎も解けるか

も)

そう考えると真剣な面持ちで木の剣を構える星。

だが、そんな彼女の顔の前に手を広げて遮ったレイニールが血相を変えて叫ぶ。

「正気か主！　こんな得体の知れない奴を信じたら大変な事になるのじゃ！　エミル達にも怒られるのじゃ！」

「……うん。でも、今はこの感じの理由を確かめないと……」

星はレイニールを押し退けると、トールに向かって「お願いします！」と叫んだ。

その覇気のある声に、トールも頷くと練習用の木刀を取り出した。

「さあ、いつでもいい」

「はい」

(――お互いに痛みを感じないなら……全力でいける！)

星は両手でしっかりと剣の柄を握り締めると、勢い良く地面を蹴って突撃する。

一歩一歩地面を踏みしめるように、全力疾走して剣を振り上げる。

「はあああああああッ!!」

しかし、トールの方はだいぶ星が近くなってきたのにも関わらず、木刀を構えるどころか微動だにしない。

星の剣が当たる直前、微かに肩を引いて最小限の動きでかわす。だが、星も今までの練習の成果なのか、以前とは比べ物にならないほどに太刀筋は鋭くなっていた。

つと、かわされた剣を握る星の腕がピクリと微かに動く。

「――まだです！」

その声と同時にトールの脇腹目掛けて星の剣が振り上がる。

直後。カンツ！と木同士が当たり、辺りに乾いた音が響く。

渾身の攻撃がほぼノーモーションで軽々と弾かれ、驚きのあまり星が目丸くしている。

「……えっ？　……こんなの勝てるわけ……」

圧倒的な力の差に、星は失望した。咄嗟に放った渾身の一撃を軽々と弾かれれば、力の差は歴然としていた。

持っていた木の剣が地面に落ち、星は戦意を喪失した様に両手を垂らしたままその場に立ち尽くしている。

練習をして自信を付けていたこともあつてか、星の落胆も大きかったのだろう。たった一撃受け止められただけなのだが、それで星の頭の中で描いていた勝算の全てを打ち砕かれてしまったのだ。

まあ、防具を最大まで軽くした武闘家と同等クラスか、それ以上のスピードを持っているエルフという種族に加え、彼はそれより更にスピードのステータスを引き上げていて、そのスピードはマスターの明鏡止水時のビルドアップ並みのスピードを有している。そんな相手に、まだ剣を練習中の星が勝てるはずがない。

意気消沈している星に向かって、微笑みを浮かべたツールが声を掛けた。

「どうしたんだい？ まだ全然してないけど、やっぱりどこか体が痛むのかな」

「……いえ。あなたがすごすぎて、私じゃ勝てないなって……」

そう星が俯きながらに呟くと、彼が突然笑い始めた。

一瞬驚いたが、彼はすぐに微笑んで。

「まあ、勝つかどうかは別として、いい攻撃だったよ。筋はいいんだ、すぐに上達する。僕が保証するよ」

星の肩をポンと叩くと、ツールがにっこりと微笑む。

その顔を見た星の中で、またさっきの感情が湧き上がり鼓動が早くなる。

星はその感情から逃げるように、咄嗟に地面に落ちた木の剣を拾った。それを見て、ツールは嬉しそうに告げる。

「君が満足できるまで、何度でも付き合うよ！」

「はいー」

星は力強く頷くと、剣を構えた。

彼も星から離れ木刀を構える。その後、星の「行きます」と言う掛け声とともに、再び2人の得物がカンカンと何度も打ち合う音だけが辺りに響き続けた。2人は時間を忘れて打ち合っていた。

奇襲前夜

そうこうしているうちにすっかりと日が落ち、辺りはもう夜の帳が折り始めていた。

ついさつきまでは茜色に輝いていた空も、今ではすっかり暗くなり、手に持つている木の剣も夕日に照らされ薄っすらと視界に映し出される状態だった。

すると突然、木の上で寝そべって休んでいたレイニールが遠くの方を指差して大きな声を上げる。

星もその方向に目をやると、そこにはアレキサンダーの背に乗って、エリエとミレイニがやってくるのが見えた。

青く辺りを照らす鬘と真っ白なその姿は、日が落ちた今なら遠くからでもよく見える。ツールもそれには気付いているみたいで……。

「どうやら、お迎えが着たようだね。今日はここまでにしようか」
「……えっ？ 今日……ですか？ またいいんですか？」

彼の言葉に瞳を輝かせてそう尋ねた星に、ツールは静かに頷くと。

「ああ、やりたかったらまた明日もここにおいで、待ってるから」
「……はっ、はい！」

笑みを浮かべながらそう告げた彼に、星は嬉しそうに大きく頷く。その直後、彼は突然走り出してその姿は闇の中へと消えていった。それは一瞬の出来事で、まるで夢でも見ていたのではないかと思ってしまうほどだった――。

彼の後ろ姿を見送りながら星は胸の辺りを押さえている。すると、彼がいなくなったすぐ後にエリエ達がやってきた。

アレキサンダーは星の前で止まると、その背中に乗っていたエリエが大声を上げた。

「——もう星！ 練習熱心なのはいいけど、勝手に出ていったら心配するじゃない！ ミレイニのペットがいなかったら、見つけれなかったかもしれないだから！」

頭ごなしに言い放ったエリエの言葉に、星は表情を曇らせたままただただ俯く。だが、エリエとしても星のことを心配しての言動なのは

間違いない。

それは普段は整っている桃色のポニーテールが、今はボサボサのままで着ていた服も乱れていたからだ。

おそらく。起きてすぐに星の書いたボードを見つけ、探しに出てきたのだろう。いや。それに関しては、イシエルが教えたのかもしれないが……。

星にはそれが分かっていたからこそ、何も言えなかった。

俯き口を閉じる星を見つめ、そして小さくため息を漏らす。

「はあ……まあ、無事ならそれでいいわよ。早く帰ろ！ エミル姉が帰って来てたら、私も怒られるんだからー」

「はい」

星の手を取ってアレキササンダーの背に乗せると、前に乗っていたミレイニが口に手を当ててムフフとほくそ笑むと。

「——エリエはちよつと叱られるくらいの方が、大人しくなっていないし……」

つと呟くが、だがこの距離でそのミレイニの言葉が聞こえないわけがなく……。

満面の笑みで振り向いたエリエの瞳がミレイニを見据えた。

「……ミレイニ……？」

不気味な笑みを浮かべ、わきわきと指を動かして逃げようとする彼女の背後からミレイニの頬を引っ張る。手足をバタつかせて「ほえんあはい」と言っているが、エリエは手を放す気配すらない。

このやり取りを見るのは何度目だろう。すでに見慣れた光景だった。だが、いつものことだがどうしてミレイニはこうなるのが予想できないのだろうか、星は心の中で思っていた。

城に戻るとエリエの心配通り、部屋にはマスター達が戻っていた。まあ、もちろんその中にはエミルもいるわけで……。

「……エリー？ 随分と遅いお帰りね。どういう事か説明してもらえるかしら？」

行く手を遮るように、部屋の扉の先に立っているエミルはにっこりと微笑みを浮かべているが、その目の奥には怒りの色が見て取れた。

もし、ここで下手なことを言おうものなら、エミルにどれだけ長時間説教されることになるか……。

「あはは……えつと。ちよ、ちよつと皆で城内を散歩をして！ それで今日も月が綺麗だねって話してたら、こんな時間になってしまったんだよ！」

彼女の顔色を窺いつつ焦りながらも、エリエはなんとかこの場を抑えようと身振り手振りで誤魔化そうとしている。

少し表情の和らいだエミルに、このままいけば丸く事を収められると、確信していたエリエ。

だが、次のエミルの言葉にエリエの背筋が凍り付く。

「へえ、楽しそうに炎帝レオネルの背に乗って大慌てで森の中を走ってたけど、その時には星ちゃんに乗ってなかったわよね？ どういう事か説明してくれるわねエリエ？」

体をビクツと震わせ、エリエが苦笑いを浮かべ。

「あはは……み、見てたんだ……」

「ええ、ばつちり」

引き攣る頬に、全身から冷や汗を流しているエリエ。

そんな彼女に向かって、エミルは満面の笑みを向けている。状況は最悪に思えた……。

だが、そんな時。エリエの後ろに立っていた星がエミルの前に歩み寄る。

険しい表情で俯いている星に、エミルが「星ちゃん。どうしたの？」と尋ねると、星が険しい表情のままエミルの顔を見上げ。

「……エミルさん。私に隠し事してませんか？」

「ん？ なんの事は分からないけど、まだ起きたばかりでお腹も空いてるでしょ？ イシエ、まずはご飯に——」

「——どうして、2日後の事を隠してるんですか？」

話をはぐらかそうとしていたエミルに、星は単刀直入に尋ねた。

その星の言葉に、エミルが驚いた様子をみ開いたまま立ち尽くしている。しかし、それはエリエ達も同じだった。いや、エリエの方が驚いていたかもしれない。

それは、エミルがエリエのことを目を細めながら凝視しているのを見ていれば、彼女が驚いている理由は分かるだろう。

完全にエリエが星に教えたのだと疑っている視線に、マズイと思つたエリエは、エミルと目を合わせないように気まずそうに視線を逸した。

星はエリエの方を見ているエミルに更に詰め寄ると、真剣な面持ちでじつと激しい視線を送る。さすがに折れたのか、エミルは大きくため息を吐き出すと。

「はあ……分かつたわ、星ちゃん。なら、お風呂に行きましょうか……」

「……お風呂?」

突然出た謎のワードに星が面食らっているのか、目を丸くさせてきよんとしている。そんな星の手を引くと、エミルはマスターの方を見て目で合図を送った。

マスターはそのアイコンタクトを受け取ったのか、了解した様子で深く頷いた。その後、困惑する星を余所に、その手を引いて強引に大浴場に連れていく。

星とエミルがその場を離れるのを確認して、マスターが深刻そうな顔で重い口を開いた。

「――街に行った者は分かると思うが、我等に賛同してくれるギルドは大小合わせて6つ。そして始まりの街にいるギルドは28。ギルドホールの情報にそって調べた正しい数字だ。残るは儂等の様にギルドを設立していないチーム形式の者達だろう。これを含めれば、街を守る集団は100近いかそれ以上。先日の事件以降、数人規模の特定のチームで動く者が増加したのが背景にあるだろうが、不確定な動きをする者等が多すぎてこれでは戦いにもならん……」

今の街の戦力を目の当たりにして、落胆の籠もった大きなため息を漏らすマスター。

だが、それはその場にいる殆どの者が彼と同じ気持ちだった。

先日の村正事件では始まりの街にいた者達の半数ほどが犠牲となつたのだ、未だに街ではその傷が癒えていない。壊れた街の方はシ

システムによって修繕されたが、心の方はシステムではどうしようもないのが現実だ——これにはそれなりに時間が必要だろう。

そう考えれば、事件後すぐに仕掛けてくるシルバーウルフの方が理にかなっていると言えた。

戦争は生き物だと多くの戦術家が言うが、それは本当に正しいと思う。この感情が高まっている状況下では、作戦を立てて戦うなど到底できそうもない。かと言って勢いに任せて突撃すれば、士気の高さが災いして今度は戦線が伸びすぎて後方の防衛が疎かになる。また覆面の男の言った以前の事件の死亡者を蘇らせ、更には元の世界に戻れるという言葉に踊らされて有頂天になって楽観的な考え方の人間が多い。

このままでは感情だけが先走りまともな作戦行動など取れず、とても統率の取れた戦闘にはならないだろう。正に、今の始まりの街に集まっているプレイヤー達は、烏合の衆と化しているということだ——

「それに悪い知らせはもう一つ………実はな、先程ライラからメッセージが来て、この街の周囲20km圏内を囲むように様々なモンスターの大群が囲んでいるらしいのだ。その数およそ30万。その数は日に日に膨れ上がり、中にはダンジョンやフィールドのボスクラスもいるらしい………」

彼の言葉に皆騒然して絶望に表情を強張らせる中、メルデイウスとバロンだけは冷静だった。

奇襲前夜2

互いに壁に凭れ掛かるようにして、マスターの話聞いていた2人だったが、内容を聞いてほぼ同時に声を上げる。

「とてもじゃないが、そんな数じゃ対応なんてできないだろ？」

発言した直後、2人は顔を見合わせ不機嫌そうにそっぽを向く。

マスターは不仲な2人を見て少し呆れ気味に眉を動かし、その問いに答えるように言葉を続けた。

「この街に残る人数では、30万以上の敵を相手に、十中八九勝ち目がない。しかし、他の街に撤退するにも、他の街も同じ状況らしくてな。皆も知っての通り、各町の近くにある転移用魔法陣は、今はランダムでどこかの魔法陣に召喚されてしまい役に立たん。一応ライラからの打開策を提示されたが――」

そこまで言って、マスターは不機嫌そうに眉をひそめ渋い顔をす
る。

彼のその表情を見たら、ライラが何を言ったのか大体の想像が付く
と言うものだろう。

まあ、これほどの大群に周囲を囲まれている状況下の場合の対応策
は、囹の部隊が敵にやられている内にできる限り退避するという身を
切る作戦しかない。

作戦内容としては囹が馬で敵の中を突っ切って、誘い出された敵の
間を脱出する者達が抜けていく。

もちろん。これには相当大多数の囹が必要となり、しかもその殆ど
は少なくて何万ものモンスターを相手にするのだ――囹役を買って
出た者の多くが生還ができないということは言うまでもない。

しかし、それは彼が最も嫌う戦い方だと、彼と長い間一緒にいる多
いカレンは知っていた。それが要因なのか、心なしか彼女の表情も
曇っているように感じる。

その時、不機嫌そうに壁に凭れ掛かったまま、腕を組んでいるメル
デイウスがマスターの方を見た。

「……もったいぶってないで、その打開策とやらを聞かせろよ。元よ

り無謀な賭けなんだ、可能性は少しでも高い方がいい」

マスターは深刻そうな顔で一度俯くと、すぐにその顔を上げ「そうだな」と呟く。

その場に居た全員がマスターの次の言葉を固唾を呑んで見守る。だが、なかなかマスターは口を開きたがらない。その様子から、相当言い難いことなのが見えた。

「――作戦としては、あの娘の固有スキルを使う。敵を街の周囲になるべく集め、上空から敵の真っ只中に星という娘を投入し、固有スキルを発動させる――その後、敵のステータスが低下したところで、一気に街から飛び出して弱くなった包囲網を突破する……ライラの話によれば、敵は特殊なAIを何らかの方法で上書きして、コントロールされてるモンスターである為、味方を守るような臨機応変な対応は取れないらしい。その為、任意でシステムを変更する時間くらいは、敵が新たな動きを見せないとのことだ――固有スキルの効果は使用者が撃破されても24時間は有効。その間に距離を取っていた儂等が敵の中に突っ込んで蹂躪する………確かにこの作戦なら、1人を切り捨てるだけで多くの人間を救うことができる。まあ、実に合理的な作戦だと思う。しかし――」

マスターがそこまで口にして、堪えかねたエリエが机を叩いて立ち上がる。

「――何が合理的よ！ 要するに皆の為に、星一人に犠牲になれって……そう言う事でしょ!!」

我慢の限界だったのだろう。エリエは不満をぶちまけるように、大声で更に言葉を続けた。

「だいたい！ ライ姉がそんな事を言うはずない！ いい加減な事も言うけど。でも、心の中では皆の事を考えてくれる人だよ、ライ姉は！ マスターがどんな考えでそんな事を言ってるか分からないけど……そんな作戦絶対に認めない！ どうしてもやると言うなら、私が星の代わりをする！ 要は敵を惹き付けなければいいだけでしょ!」

「――なにを馬鹿な事を言ってるんだエリエ!」

「うるさい！ デイビッドは黙ってて!!」

エリエの突拍子もない発言に驚いたデイビッドが慌てて口を挟む。だが、エリエはそんな彼の言葉を跳ね除けてマスターの方へと歩いていく。

マスターも徐に席を立ってエリエを迎えた。互いに向かい合う様にしていくと、エリエの突き刺す様な視線がマスターの瞳を捉えた。だが、マスターは目を逸らす様子もなく優しい瞳を向けている。

しばらく。互いに無言の攻防が繰り広げられたかと思うと、エリエがプイツと膨れっ面をしてそっぽを向くと。

「もしもの時は、私は私で勝手にさせてもらうから……」

っと捨て台詞を吐いて、エリエはゆっくりと歩いて部屋を後にする。

デイビッドはマスターの顔を一瞥して小さくため息を漏らすと、部屋を出ていったエリエの後を追いかけていく。その後を遅れて、ミレイニが続いて部屋から出て行った。

その場に立ち洩い顔をしているマスターに、メルデイウスが耳打ちする。

「……さすがにあの子が怒るのも無理はないぜ。仲間と他人を天秤に掛けて、仲間を犠牲にしろって言うのはな……いや、悪かったな。無理に言わせちまって……」

「ああ、だが確かな方法でもある。気にするな……一度は口にしななければならぬ事だ。エミルには、もうこの事は話してある。どことなく本人に聞いてみると言っておったが、無理だろうな……それでだメルデイウス。後で内密に話がある——重要な話だ。時間を取つてくれないか?」

「……分かった」

深く頷くメルデイウスにマスターが「ありがとう」と小さく微笑んだ。

すると、マスターに向かってバロンが面倒くさそうに言った。

「それで? ライラとかいう奴の作戦は聞いたが、あんたの作戦はまだ聞いてない。あんたの事だ——もう、秘策は用意しているんだろ?」

「フツ……秘策とまではいかんがな。策はある」

マスターは不敵な笑みを浮かべると、テーブルの上にこの街と周辺の地図を広げる。その後、青く光る羽ペンを地図の中心部に突き立てた。

物理的には有り得ないことなのだが、マスターが羽ペンから手を放すと羽ペンが垂直に地図の中へと吸収された次の瞬間、地図上に無数の赤い点が表示された。

おびただしい量の赤い点は、始まりの街の外壁をすっぽりと覆うかたちで完全に包囲される様に展開されていて、まさに蟻の這い出る隙もないと言った感じだ。

包囲されていると言えば聞こえはいいが、敵の数は30万以上。それに対してこちらの戦力は、非戦闘員を取り込んでも2万程度しかない……これはもう事実上、一方的な虐殺に近い。

地図を一目見て、最早打つ手はないと分かるこの絶望的な状況で、メルデイウスには打開策があるようには思えない。

マスターは鉄製の指示棒を取り出すと、その先を伸ばしてテーブルに広げた地図を指す。

「この街の出口は東西南北の4箇所。そしてライラの報告によると、この包囲網の中で最も弱い場所は南の様だ。しかし、あからさま過ぎる——これを罫だと捉え。ここはあえて、最も防備が厚い場所を一点突破する。実行は明日の夜、月が真上に上がった頃に行う」

「師匠。それは敵に先制攻撃を掛ける……という事ですか？」

不安そうな表情を見せるカレンの頭に手を置き、優しく微笑み掛ける。

その表情はまるで、我が子を愛でる親のようでもあった。すると、今度はメルデイウスが口到手を当てて考える素振りをしたまま尋ねてくる。

「だが、奇襲を掛けるにしたってリスクが大きくなえーか？」

彼が言うのも最もな意見だ。本来ならば、少しでもリスクを避けるのが得策である。

何と言ってもこのゲーム世界で死ねば、現実の世界でも死ぬという

疑惑は未だになくなったわけではないのだから。しかし、その彼の意見を聞いてもマスターの意志は変わらない。

「いや、元より真正面から当たって勝てる見込みなどない。ならば、籠城して完全に退路を失うより打って出て、敵の虚を突く方が勝機はある。敵の包囲も広範囲をカバーせねばならん。その為、今なら必然的に一箇所にいるモンスターの密度も薄くなる。また今のうちならば敵の概要が分からず、皆の士気も高い。しかし、絶望的な状況になればなるほど士気が落ち、正気を保てなくなる者が多く出てくるだろう。それに、相手がルール通り動いてくれるかも分からん。今まで全て先手を打たれてきたからな——今度はこっちが先手を打ち。奴の度肝を抜いてやるぞ！」

「おう！ モンスター共を俺のベルセルクの錆びにしてやるぜ！」

互いに腕をかち合わせ、ニヤツと不敵な笑みを浮かべる。

拳を打ち付け合っている2人を見て、壁に凭れ掛かっていたバロンも満更ではない様子で口元に微かな笑みを浮かべた。

しかし、彼等以外はそれほど乗り気とは思えない複雑な表情を見せていた。

当然だ——30万対2万では、本来戦いになるはずがない。常識的に捉えれば、彼等の奇襲作戦は事実上の特攻戦術と言っても違いはない。

勇敢ではあるが、そこに皆、勝機が見い出せないでいるのだ。頼みの綱は、マスターの始めに言った敵の無力化作戦しかないだろう——この街に居る者達の命運は、小学生である星の肩に掛かっていると、言っても良かった……。

奇襲前夜3

* * *

そんなことが部屋で話し合われていることなど露知らず。

エミルに手を引かれ星が脱衣所までいくと、エミルは険しい表情で終始無言のまま着ている服を脱ぎ始める。

普段とは明らかに違うエミルの様子を敏感に感じ取ったのか、あえてなにも喋ることもなく星も服を脱ぐ。

着替えている間に何度かエミルの顔を見ようとしたのだが、星が見る度エミルはあからさまに目を逸らす。

広い空間の中。シーンと静まり返った脱衣場で、星はエミルに目を逸らされる度、今まで仲良くしてきたことが嘘の様に思えて辛かった……。

服を全て脱いで一糸纏わぬ姿になると、一足早く着替え終えていたエミルがそつと手を差し出す。やっと目を合わせてくれたエミルの瞳は、どこか悲しそうに見えた。

浴室に入ると洗い場でいつもの様に星の体をエミルが洗ってくれる。だが、素手で洗われるのはどうしてもくすぐったくて慣れない。

湯気で視界が霞む中で背中、腕、足と洗っていたエミルの手が突如止まり、後ろから抱きつくように星の小さな体を抱く。

ゆっくりと肩に回された細い腕は、微かに震えていていつもと変わらないはずの体温も心なしか冷たく感じる。

「……エミルさん？」

星がエミルの方へと振り向こうとした時、その耳元でエミルがささやくように尋ねる。

「——星ちゃん。もしも……もしもよ？　もし、あなたにしかできない事があつて、でも自分は死んじゃうかもしれない——それでも、多くの人を助けられるとしたら……あなたは……どうする？」

その声は微かに震えていて、その声を聞いた星はエミルの方を振り向くのを止め、前を向き直すとゆっくりと瞼を閉じて考える。

そして数秒考えた後に、徐に口を開き聞き返す。

「——それにエミルさん達も含めますか？」

「……ええ、そうね……」

小さく弱々しい声で返した彼女の言葉に、星は微笑みを浮かべると、ゆっくりと天井を見上げた。

湯気で霞む視線の先からは柔らかい光が降り注ぎ、自分を照らしている。

この時、すでに星の心の中には一切の迷いはなかった。

もちろん。死んでしまうのは嫌だ……でも、せつかくできた大切な人達を失うのはもつと嫌だった——どっちも救えるならそれに越したことはない。だが、どちらか片方しか選べないんだとしたら……。

「——そうですね……でも、たとえ死んじゃうとしても。大事なお友達を守るなら、私はそれでも幸せだと思います」

星は体に巻き付いているエミルの震える手に、自分の手をそつと重ねて言葉を続けた。

「……だって何も知らない私がここまでこれたのは、エミルさんやエリエさん。デイビッドさんにカレンさん。それにレイ……みんなのおかげだから……」

最初にエミルがこの話を切り出した時。いや、脱衣場での彼女の様子から薄々勘付いていた。

その最中。突然『自分一人が犠牲になり。他の人を守るなら』そう問われ、星の中で全てが繋がった。自分が死ぬかもしれない……だが、いつも一人で生きてきた星には、一人でなんでもしなければいけなかった星にとって、日々の生活は既に死んでいるようなものだった。

学校で執拗な嫌がらせを受け、自宅に帰っても一人で過ごす日々は空っぽで、なんとも言えない虚しさだけが募っていた。

自分の居る世界が真つ白で、そんなまっさらな世界の中に自分はいつも1人だった……頼る者もおらず。すがりつく物もなく、買い物で見た姉妹が星にはとても眩しく見えていて、きつと姉妹が居ればこんな真つ白な世界でも、少しは色付いて見えるのだろう。と考えた時期もある。

現実の世界は子供である星にも無慈悲で、社会はいつも扱いやすい子のいい子という価値観を押し付けてきて、それをいつも素直に受け入れてきた。

それはもう、自分の個性が消えてしまうのではないかというほどに

だが、このゲームの中での生活はそんな何もなかった単調で無意味な日常に光をくれた。

毎日が衝撃と感動の連続で、こんなに誰かと一緒に過ごした楽しい時間は、星のこれまでの人生の中で奇跡に等しい時間だった……たとえ、その代償が自分の命だったとしても何の不思議もなく、当然のもののようにも感じるほどだ……。

「……ごめんなさい。星ちゃん……ごめんなさい……」

耳元で泣きながら何度も謝るエミルに、星は不思議そうに首を傾げた。

「……どうして謝るんですか？ 私はすごく楽しかった。始めは色々不安な事、怖い事もありましたけど……でも、今は全部忘れられない大切な思い出です……だから、エミルさん。泣かないで下さい。エミルさんは私といて楽しくなかったですか？」

「……いいえ。色々あったけど、すごく楽しかったわ」「なら、良かったです！」

その言葉を聞いてエミルの方を向き変えると、満足げにっこりと微笑んだ。エミルの『楽しかった』という言葉が聞けただけで、星には十分過ぎた……。

今までの出来事の嫌なものだけが消え、楽しかった日々の記憶だけが走馬灯の様に駆け巡ってきた。

瞼を閉じて感慨に耽るように、流れていく思い出を噛み締めながら静かに頷く。

次に瞼を開いた星は決意に満ちた瞳で、もう一度エミルに尋ねた。

「私は最後に何をしたら良いのか教えて下さい。エミルさん……」

だが、その言葉に彼女が答えてくれることはなく。

エミルは星の体をしっかりと抱きしめると。

「いえ、もういいのよ……私が間違っていたわ……岬を失って……またあなたまで失うところだった……許してちょうだい……」

一瞬頭の中が真っ白になった。

もう、自分は最後になにかして死ぬものばかり思っていたのだから無理もない。

「……えっ？ でも、私がないと……皆が……」

「いいの……きつと別の方法があるわ。なくても、私がなんとかする！」

涙を流して星の体を抱きしめながら、エミルは力強くそう宣言した。その自信に満ちた声音に、反論なんてできるわけがなかった。

星もその言葉を聞いて、深く頷くと「無理はしないで下さいね」とエミルの体をぎゅっと抱きしめ返した。

* * *

奇襲前夜4

その頃、城の屋根の上ではマスターとメルデイウスが盃を持って酒を酌み交わしていた。

城を含めた街を取り囲むように、多くのモンスター達がすでに所狭しと並んで獲物を待つように不気味な赤い眼光を放っている。

口元に微かに笑みを浮かべたマスターが、ゆっくりと立ち上がる。

「さて、儂はそろそろ行くとしよう……」

「……ギルマス。明日の戦闘は俺の全てを掛けるぜ！」

拳を突き出したメルデイウスのその気持ちの入った言葉に「期待しているぞ」と言葉返して微笑むと、マスターがその場を後にした。

「——ふん。美徳か……」

そう小さく口にして、彼が姿を消した後もメルデイウスはその場に残り、酒を呷っていた。

メルデイウスの場所から離れたマスターが次に向かったのはカレンの所だった。

食事を終え、城から離れた湖畔で日課である食後の運動と称した修行を行っている。未だに固有スキルが発動しないカレンにとって、この日課はとても重要なものだった。

レアな固有スキルになればなるほど、発動条件が特殊なことが多いというデメリットはあるが、その代わりとても強力なものになる。

彼女の固有スキルもマスターと同じ『明鏡止水』なのだが、言葉の意味を察するに心を落ち着かせなければ発動できないと考えられ、カレンの修行には精神力を鍛える瞑想もあるのだが、一向に発動する気配を見せてはくれなかった——。

カレンはこれをゲームの中に閉じ込められてから毎晩行っている。こういうところを見ると、カレンの真面目な性格が見て取れる。

『継続こそ力なり』これがカレンの座右の銘であり『努力を継続できる者こそが本物の天才である』というマスターの格言を素直に受け取っ

た結果の賜物なのだ。

月明かりが降り注ぐ湖畔で、ただただ拳を前に突き出していった。額を流れる汗を気にする様子も全くなく、凄じい集中力だと感心するばかりだ。

「ほう、精が出るな。カレン」

「——ハッ!? 師匠。こんなところに来るなんてどうしたんですか？」

メルデイウスさんとの話はもう良いのですか?」

マスターの姿を見つけ、慌てて拳を引込めるカレンに優しい微笑みを浮かべ歩み寄る。

普段なら『集中できないだろう』と、練習を見にくることのないマスターが突然現れたことで、困惑の色を隠せないカレンを余所にマスターは湖と向かい合うと勢い良く拳を構えて振り抜く。

すると、マスターの拳を包むように突風が巻き起こり、拳から発生した衝撃波が辺りの水面と木々を大きく揺らす。

カレンはそれを羨望の眼差しで見つめていた。

「……どうだカレン。久しぶりに稽古をつけてやろう」

「えっ!? ど、どうしたんですか? そんな、稽古だなんて……」

うろたえるカレンの顔は、どこか緊張で強張っているようにも見える。

いや、それも無理もない。マスターに言われ、幼い頃から形を覚える為に幾度となくマスターに稽古をつけてもらい。後は実戦で覚えていけというお墨付きをもらっていた。

そんなカレンが稽古をつけられるというのは、自分に至らないところがあつたということだ——そうなれば『稽古』という言葉聞いて緊張するのも当たり前のことだろう。

緊張で肩を強張らせるカレンに、マスターは優しい声音で言った。

「なに、気が向いたただけだ。深い意味などない」

「……は、はあ」

間の抜けたように返事をするカレンに向かって、マスターが拳を構える。

すると、カレンも一瞬で真剣な表情に変わり、拳を構えて強く握り

締めた。

「——ゆくぞー！」

「——はい！—— お願いしますー！」

掛け声と共に地面を蹴って、まるで消えたように瞬時にカレンの目の前に移動したマスターがカレンの顔目掛けて素早く構えた拳を振り抜く。

カレンはそれをギリギリで左腕で払い除けると、直ぐ様右手でマスターの脇腹を狙う。しかし、カウンターで放った拳は当たる直前にマスターの腕に防がれた。

つとその直後、マスターが突き出していた右手を瞬時に縮め、素早く二打を腹部と顔付近に繰り出す——が、その両方ともカレンの体には当たらず、既の所で止まり当たることはなかった。

もちろん。彼の攻撃をカレンが防がなかったわけではなく防げなかったのだ——常人の反応速度では、二連打がほぼ同時に放たれたようにしか感じないだろう。

カレンがほっとしたのも束の間、すぐにマスターの櫓が飛んだ。

「カレン！—— 攻撃に集中しすぎるな！—— 攻守は常にせめぎ合うものぞー！」

「は、はいー！」

返事を返すと、今度は息つく暇もなく上段にマスターの回し蹴りが炸裂する。

カレンは瞬時に両腕で防いだが、その蹴りの威力に押され吹き飛ばされた。だが、空中でなんとか体勢を整え、何事もなかったかのように見事に地面に着地した。

「なにをしておる！—— あの程度の攻撃。素早くかわし、懐に飛び込んで敵の中段に己の拳を叩き込まんか！」

「はあ……はあ……は、はいー！」

（師匠がいつも以上に厳しい。どうしてしまったんですか？ 師匠……）

普段との違いに困惑するカレンだったが、すぐに冷静さを取り戻し拳を構え直して、マスターを見据える。

そして、カレンの体が一瞬青く輝いた。これは基本スキルのスイフトを使って、自身の攻撃速度と移動速度をアップさせたことを意味していた。

相手が自分の師だと思うから集中できなかったが、一度それを意識から切り離せば、今のカレンと固有スキルなしで戦えば勝てるものはそう多くない。

ダークブレットの鉤爪の男と戦った時は四足歩行の想定外のモーションアシストに苦しめられたが。しかし、あの時よりもカレンが更に腕を上げているのも要因にはあるものの、それ以上にマスターの弟子であるということが大きい。

マスターはカレンがスイフトを使用したのを見て、口元に不敵な笑みを浮かべると地面を蹴る。

視界から一瞬消えた彼の姿がカレンの目の前に現れると、今度は攻撃を受ける前に即座に数回後ろに跳んで距離を取った。だが、即座に地面を蹴りマスターはそれを追撃する。なおも後ろに跳んで逃げるカレン。

つと、その時。逃げていたカレンが地面を蹴り、今度は一転して前に飛び出す。その急な動きに、さすがのマスターも虚を突かれたのかほんの少しだけ体制が崩れる。

カレンはその一瞬を見逃すことなく、拳を硬く握り締め。

「はあああああああッ!!」

咆哮を上げながら勢い良く突き出したその拳が、マスターの腹部目掛けて飛んでいく。マスター相手に乾坤一擲のこの一撃が通れば、この勝負の勝率はグッと高まる。

が、そう簡単にマスターに拳が届くとは思えない。しかし、カレンの突き出したその拳は予想と異なり、呆気なくマスターの腹部に炸裂した。

「ぐッ……」

痛みに微かに眉を歪めたマスターが地面を転がり、すぐに立て直すと腹部を押さえた。

あつさり決まったことに攻撃を放ったカレンが一番驚いているよ

うで、目を大きく見開きしきりに瞬きをしている。

「な、なにをしておる……敵が弱っているうちに畳み掛けねば、勝機はなくなるぞ……ほれ、次々と攻撃してこんか！」

「は、はいー」

慌てて腹部を押さえるマスターに突進したカレンは、続け様に攻撃を放つ。

その攻撃も呆気なくマスターの体を捉え、マスターは攻撃を辛うじて防ぐが、まさに防戦一方の状態に追い込まれた。

カレンは『始めて師匠に勝てる』と核心にも似た何かを感じ取った直後、体が浮き上がった感覚とともに突然視界が切り替わり。星の散りばめられた夜空が目の前に広がっていた。

その刹那、顔の上にマスターの手が覆い被さっていた。

一瞬のことで困惑していたカレンだったが、どうやら攻撃に気を取られた挙げ句、足をすくわれ地面に倒されたらしい……。

自分の顔に覆い被さる手の平の指と指の間から、マスターの不敵に笑う顔が見えた。

「——カレンよ。攻撃に集中し過ぎて、足元がお留守になっておるぞ？　これがダークネスの状態ならば、勝負は決まっていたな」

驚くカレンの腕を掴み体を起こさせると、マスターがそう告げて微笑みを浮かべる。

立ち上がったカレンは体に付いた砂を落として、胸の前で腕を組んだマスターの顔を見上げた。

「単調な攻撃では敵に見切られ、簡単に返されてしまう。重要なのは、攻撃に緩急を付けることだ」

「……師匠。もう一度お願いしますー」

立ち上がり拳を構え直すカレンに、マスターも満足そうに深く頷いた。

それから一時間みっちりマスターに扱かれ、精も根も尽き果てたというくらいにくたくたになっていたカレンが地面にへたり込んだ。

肩で息をしながらマスターの方を向くと、カレンとは対象的に腕を組んだ彼はまだ余裕があるのか、息を切らしている様子もない。

奇襲前夜5

岸から湖を見て佇むマスターが口を開きカレンに尋ねた。

「カレンよ。どうしてまだ、お前の固有スキルが発動せんのか分かるか？」

「——えっ？　そ、それは私が未熟だからですか？」

カレンの返答に首を横に振って答えると、マスターが言葉が続ける。

「そうではない。お前はもう十分に強い。にも拘わらず、どうして『明鏡止水』を発動できないのか……それはお前の心に問題があるからだ」

「……心？」

首を傾げるカレンの言葉に深くマスターが頷く。

「うむ。このフリーダムに存在する固有スキルは多彩だ、その中には心に反応して発動する固有スキルもある。我等の『明鏡止水』はまさにそれだ……心とは時として、自分の思っている方向とは逆に作用する事がある。今のお前は拳に怒りを乗せて無意識に戦っておる。それでは固有スキルの発動など夢のまた夢……」

「なら、どうしたらいいんですか!？」

その話を聞いたカレンが立ち上がり、真剣な面持ちでマスターに詰め寄る。

すると、そんなカレンの方を振り向き、マスターが優しい声で諭すように告げた。

「いかなる残虐な敵でも相手を認めよ。お前に戦う意味があるように、敵も戦う理由がある。それが例え理不尽で身勝手極まりないものであってもな……」

「そんな残虐で身勝手な相手にかける慈悲など……俺には理解できません！　師匠だって、己の拳は誰かを守る為に振るうものだと言っていたではないですか!!」

カレンが憤るのも最もなことだろう。人を平然と傷付けたり殺せるような思考の持ち主を認めることなどできるはずがない。

憤るカレンを見て、マスターは困り顔で眉をひそめると彼女の肩を

叩く。

「そうではない。敵とは己と異なる理念や思想を持つから敵となるのだ。考えが同じならば、争う必要などないであろう。戦いとは常に拳と拳、誇りと誇りのぶつかり合いなのだ——そして正義とは勝者が善となり、敗者が悪となる。それが世の常だ。どんなに正しい信念を持つていようと、弱ければ自分の大事なものも守れず。そんな存在になんの意味もない。故に正しい者は強くあらねばならん！……カレン。お前のその内に秘める信念——それが正しいと思うのならば、その心を拳に乗せて敵となつた者を完膚なきまでに粉碎せよ！怒りではなく、その信念を己が拳に乗せて放て！ さすればお前はもっと強くなれる。きつとスキルも使えるようになるろう」

「……はい。師匠」

深く頷きキラキラとした眼差しを向けるカレンの頭に手を置くと、マスターはゆっくりと歩き出した。

「——師匠どちらへ！」

「明日に備えて休む。お前も風呂に入って早く休むといい。明日は忙しくなるからな！」

そう言い残して去り際に手を軽く上げるマスターの後ろ姿を見送り、一礼したカレンもまだ疲労が残っているのかゆっくりとした足取りで城へと向かって歩き出した。

その夜。エミルとイシエルの布団の中に入っていた星は、目は閉じるもののどうしても寝付けなかった。

もちろん。その理由はエミルにお風呂で言われた『自分一人を犠牲にして、多くの人間を救えるとしたら……』というものだ——。

しかし、今まで、星がこのようなことを考えたことなどない。

それもそうだろう。普段の学校生活ではできる限り影を薄く、自宅に帰ってからは掃除、洗濯、買い物など母に代わって禁止されている料理以外の家事をこなしながら、学校から出た宿題に明日の時間割を確認し。今日の授業の復習と、次の授業の予習の勉強をした——それでも時間が余る時は、大好きな読書をして過ごしていた。

別にそれが偉いと思ったことはなく。学校で頼る相手がいなければ、ごく当たり前のことだろう。

朝早く出掛けて夜遅くに帰ってくることの多い母親との会話は殆どなく、テストや成績表はテーブルの上に置いておく。

だが、そうしたとしても。母親からの返事なんかは返って来ないが、文句を言われないうことは満足してくれているということ、普段から仕事で頑張っている母親にあまりストレスを与えないように心掛けていた。

母子家庭だから気を使っているところはあるものの、買い物で自分ができる為にお菓子も好きな物が買えるし、今の生活に不満を感じることは少ない。ただ、買い物の時に仲が良さそうな家族連れを見る時に、少し胸の辺りが苦しくなることを除けばだが……。

そんな生活が長く続くと、自分を他人に求められるということが感じられなくなるのは仕方ないことで、今回のことは最初で最後の人からの頼み事になるかもしれないなかった。

エミルにはその真意を聞けなかったが、どうしたら自分が人の役に立てるのか……つとどうしても考えてしまう。

視界に表示されている時計は1時を回り、普段ならすでに寝ているはずの時刻にも関わらず。星の脳は高速で回転し、目はパツチリと開いていた。

(……私にできること……私にしかできないこと……)

天井を見上げ。心の中で何度も自分に問い掛けてみるが、何度問い掛けても結局答えは出ない。

誰かに教えてもらおうにも、エミルやデイビッド、エリエにカレン——候補は挙がるものの、教えてくれるかというとなんにも簡単にはいかないだろう。

小さくため息を漏らすと頭まで布団をすっぽりと被り、またさっきの『自分に何ができるのか』という議論に戻る。そして何より『自分に何かできるのなら、どんなに辛くても何とかしたい』という思いの方が強かった。

そうこうしているうちに、考え疲れたのか星はぐつぐつと寝入って

いた。まあ、今日は目まぐるしく色々なことがあったから、その疲れも溜まっていたのだろうが……。

奇襲当日

翌朝。星が目を覚ますと、すでにエミルもイシエルも居なくなっている。

のっそりと重い体を起こし、壁に立て掛けてある剣を見て不安そうな表情を浮かべると胸に手を当てた。

昨晚のこともあって、どうも心がざわついて落ち着かない。マスターの作戦を知らない星は戦いまで、まだ後1日あると信じて疑わなかった。

「あと1日……その前に自分にできること……」

小さく呟き考え込んでいると、そこに枕元で寝ていたレイニールが飛んできた。

大きくあくびをして、ふわふわと上下にフラつきながら星の顔の前にやってくる。

「なにを考えておるのじゃ？ それより、今日はあの無礼者の所には行かんのか？」

「無礼者……う？」

星が首を傾げて聞き返すと、今まで眠そうにしていたレイニールの目が見開く。

「あの我輩の尻尾を掴んだ奴じゃ！ あの無礼者が……次同じ事をしたらただじゃおかないのじゃ!!」

怒り心頭と言った感じで空中で地団駄を踏んだレイニールは、枕の上に勢い良く飛び降りると、枕をくしゃくしゃにして放り投げた。

星はその様子を見ていて苦笑いを浮かべると、昨日のエルフの男トールの言っていたことを思い出す。

彼は別れ際に微笑みを浮かべながら「ああ、やりたかったらまた明日もここにおいで、待ってるから」と言っていた。昨日エミルの話を聞いていて、そのことをすっかり忘れていたのだ――。

時間などの指定はなかったものの、少なくとも昨日のあの場所にいけば会えるのは間違いない。

彼のことを考えていたら、また星の頬が熱を帯びる。何故では分か

らないが、彼のことを考えると心が温まる感じがして、なんとも言えない懐かしさで心がいっぱいになるのだ。

もちろん。彼と以前どこかで会ったことがあるわけではない。しかし、どこか懐かしく心安らぐ感じを星はいつでも彼から受け取っていた。

その感覚は昔からどこかで感じた羨望の感情……。

動き出すのに、それを知りたいと思う心は動機として十分だった。

星は未だに怒りが治まらないのか、布団の上で地団駄を踏み続けているレイニールを尻目に白いモフモフしたパジャマから、いつもの服に袖を通し壁に立て掛けてある剣を取る。

「レイ。ちよつと出掛けてくるね?」

そう告げると、扉の方へと向かって歩き出す。

レイニールは驚き、慌てて星の前に飛び出してそれを阻止した。

「なんで我輩を連れて行かないのじゃー!」

トールに向いていた憤りも相まって、普段以上に凄みを増したレイニールの言葉に、星もただただたじろぎ。

「だって……あの人に会うのが嫌そうだから……」

つと、今にも掻き消えそうな声で伝えた。

レイニールは更に怒りを増して「我輩といつでも一緒に居ると言ったのを忘れたのか!」と憤り、両腕をブンブンつと振って怒りをアピールする。

さすがにこれには対応しなかった星は無言のまま、レイニールを無視して扉へと向かって歩みを進めた。その後をレイニールが「無視するな!」と付いてくる。

扉を開けると、すぐ目の前にはエリエが仁王立ちして立っていた。顔を引き攣らせ作り笑いを浮かべているが、エリエ全体から滲み出る怒りのオーラは隠せはしない。

「……星? いったいどこに行くつもりなの?」

声は優しいのだが、その目は笑っていない。逆に絶対に行かせないと言わんばかりに星の顔を見据えていた。それはまるで、ハンターが獲物を捕らえようとするそれと似ている。

視線を左右に泳がせ、エリエとなるべく視線を合わせないようにして、咄嗟に考えた言い訳を口にする。

「え、えつと……ちよつと、外の空気を吸おうかと……」
「へえ〜。外の空気を……ねえ〜」

俯き加減にもじもじしながら告げる星を見て、エリエは徐に窓際に進むと、勢い良く窓を開く。

直後。窓に掛かるカーテンが揺らぎ、部屋の中に柔らかな風が入ってくる。

このエリエの行動に驚いたのか、星は目を見開いて窓の方を向いて呆然とその場に立ち尽くしていた。そんな星の方に振り返ると「これで解決ね!」とにっこりと微笑んだ。

考えられないほどのその手際の良さに、驚くばかりだ——普段なら「そう?。すぐ戻って来なさいよ〜」くらいで許可してくれそうなものだが、今日の彼女は一味違う。

まあ、エミルに「星ちゃんを絶対に外に出さないように!」と釘を刺されたのだろう。

星は知らないが、今星達が置かれている状況は最悪だ——街の20km。周囲を30万のモンスターに囲まれており。その中に取り残されているのは2万人で、マスターに賛同しているギルドは、小規模なところも合わせて6つ……正直。このまま戦えば、容易に敵の勢いに負けて全滅に追いやられるのは必至。そのモンスターの大群に事もあるうか、マスターは今晚、先制攻撃を仕掛けるというのだ——こんな特攻とも取られそうな作戦が成功する確率は低い。その為、賛同者は少ないと予想される。

だが、どんなに大群と言えど、包囲網を完成させた時点で兵力はバラけている状態だ——また、全ての行動をAIでコントロールされている為、プレイヤーのように自由自在に動くという事はなく。30万のモンスターがいても、実質一枚の壁は多くて数万がいいところだろう。

簡単に例えるならば、砂をイメージしてもらえばいい。限られた砂を一箇所に集めれば確かに膨大な量で山になるがドーナツツ型に縁

を型取り、それを大きくしていけば必然的に砂の壁の厚さは薄く小さくなっていくだろう。つまりは、そういうことなのだ――。

完全に街を取り囲まれる前に、大きく展開している今を狙う方が勝率が高くなり、正しい選択と言えるだろう。

マスターが防衛戦を嫌うのは、それが大きく影響していると言つてもいい。どんなに不可能だと思える状況下でも必ず突破口を見出せる。物事を分析し、個々を分けて考えれば、その本質はいつも一本の糸に複数の糸が複雑に絡まっているだけで、一本の糸でしかない。

目の前に立ちほだかるエリエをどう攻略できるか……これが星の第一の関門となりそうだ。

星は全開に開いた窓を横目に見ながら、エリエの入れてくれたココアを口に運ぶ。

一息付いてこの状況を打開する方法を考えていた。目の前には同じくココアに大量の角砂糖を入れながら、星の方を向いて疑いの視線を送るエリエがいた。

その横で数個角砂糖を入れ、スプーンでかき混ぜ美味しくココアを頂いているミレイニがいる。救いなのは、パーティーの中で最も考えの読めないイシエルが居ないことだろう。

彼女が居たら、おそらくこの状況は更に突破できないものになっていた。それはエミルがイシエルに『星を見張っておいて』という一言を言うだけで、彼女は笑顔で応対し、しかも完璧に仕事を熟す。

まあ、ここに彼女が居たとすれば、エミルにそう言われていることが確定しているものなので、居ないということは星を止めるのはエリエで十分と思われることは確実――。

しかし、普段のエリエならば問題はないが、今のエリエを突破するのは相当困難だろう。

昨日もそうだが、どうやら皆戦いの準備で忙しいらしい……となれば、エリエを何とか突破すればミレイニは物の数ではない。そう。星はこの前のミレイニとの神経衰弱対決で彼女の能力をある程度把握した上で、彼女は自分より年上らしいが然程、強敵ではないと気が付いていた。

星はココアを一気に飲み干すと、ガタツと勢い良く席を立つ。

「……ちよつとトイレ……」

足早にその場を離れようとした星の耳にエリエの声飛び込んでくる。

「……星。トイレのない世界で、どこのトイレに行くのかな？」

ドキツとして咄嗟に踏み出していた足が止まり、横目でエリエの方を見遣ると、彼女は相当怒っているのか凄く鋭い目で睨んでいた。

その視線もだが、エリエの座ったままの状態でも強く感じるピリピリとした緊張感が部屋中に充満していく。持っていたカップの中のココアを飲み干すと、エリエは大きく深い息を吐き。

「……椅子に戻りなさい」

つと、低い声音で星に告げた。

星は少し躊躇するような表情で「でも……」と呟く。

すると、エリエの持っていたカップがピキピキツとヒビ割れ始め、次の瞬間には粉々に弾け飛んだ。ガラスが割れるような武器破壊エフェクトの直後、エリエはにつこりと微笑み。

「——早く椅子に戻りなさい。そうしないと………賢い星なら、もう分かるわよね？」

エリエはミレイニの前に置いてあったカップを驚掴みにして、そのカップも粉々に粉碎して見せると満面の笑みで諭すように星に告げた。

その行動にはミレイニも怯えたように肩を縮め、俯くと無言のまま膝の上に重ねた自分の手の甲を見つめている。

いつもは強気のミレイニが、視線を上げられないほどのだから相当だろう。

今のエリエに逆らうことが死を意味すると、本能的に理解している証拠だ。

目の前で二度も同じ光景を見せられた星には、彼女に逆らうという選択しはなかった……。

奇襲当日2

観念して大人しく席に戻る星の耳元で、レイニールが震えた声で小さく呟く。

「エミルも怖いけど、エリエも怒らせると怖いな……」

星もその意見に同意して小さく頷き返す。

それから、すでに1時間が経過した……。

だが、状況は未だに3人がテーブルで向かい合っている膠着状態が続いていた。

とても居づらい雰囲気は部屋に充満する中、星が徐に手を上げて言った。

「……あの。お腹が空きました……」

遠慮がちに手を挙げている星を見て、壁に立て掛けてある時計に視線を移すと、午前11時を針が指していた。

エリエは星と時計を交互に目をやり、小さくため息を漏らし、隣に座るミレイニの顔を横目で見る。

その横でミレイニがビクツと、一瞬震えた様に見えた。だが、すぐに彼女が怯えた理由が分かる。

再び今度は大きめのため息をついて、エリエは額を押さえると。

「実は……星の分のご飯を気付いたらこの子が食べちゃったのよ……」

「ちっ、違うし！ あたしじゃなくてギルガメシュが食べたんだし！」
机を叩いてそう主張するミレイニだったが、それはギルガメシュも初耳なようで、驚いたようにミレイニの服の中から飛び出して肩にちよこんと乗って否定する様に首をブンブンと振っている。

ギルガメシュの様子から、ミレイニが嘘を言っているのは明白だったが、あえてそれ以上エリエは追求しない。そのかわりにと言わんばかりに、エリエがミレイニの頬を笑顔で引っ張る。

「どっちみち、責任は飼い主にあるわよね」

満面の笑みを浮かべながら、ミレイニの頬を引っ張っているエリエからは、最初からどんな言い訳をしてもこの結果は変わらなかっただ

ろう。

「いはいはいはいひ〜」

「……あなたが食べたんでしょ？ ペットに責任を押し付けるんじゃないの！」

「はっへ、いへるのつくうおはんおいひくて、うい〜」

「美味しくてついじゃないでしよ〜!! ほら、ごめんなさいは？」

ミレイニの頬を引っ張ったり縮めたりしながらエリエが尋ねると、ミレイニは「ほえんはない」と何度も口にしてやっとエリエが手を放した。

赤くなつた頬を撫でているミレイニの横で、テーブルの上に乗っているレイニールとギルガメシュがひそひそ話している。

「——お前の主はもうダメなのじゃ。それに比べて我輩の主なら、あんな人に責任を押し付ける事は言わん。お前もこつちに来ればいいのじゃ！」

「キュキュ!? キュウウウ……フルフル！」

一瞬考えたギルガメシュが、すぐに我に返りブンブンと頭を振る。レイニールは悔しそうにそっぽを向く。

何故か、ミレイニからイタチを言葉巧みに誘惑して引き抜こうとしているレイニールのことは、今は放っておこう。

エリエは困り顔で首を捻ると、徐に口を開いた。

「私じゃイシエルさんを超える料理は作れないけど……お菓子なら！ ちょっと待ってて、今とびきり美味しいケーキを作るから！ ほら、行くわよミレイニ。あんたも手伝いなさい！」

そう言い残し、エリエはリビングからミレイニを連れてキッチンへと消えていった。

もう一度頬を引っ張られてはたまらないと、ミレイニも素直に従つたのだろう。しかし、レイニールと星はその後ろ姿を見送り。しばらくはポカンとしていたが、すぐにレイニールが星の耳元で呟く。

「今じゃ主！ 抜け出すなら今しかないのじゃ！」

「でも……」

キッチンの方を見て渋い顔をしている星に、レイニールが「なら、あ

の無礼者に会わなくても良いのか？」と言葉を続けた。

星はこの胸に引つ掛かったままになって、感情の正体がなんなのか……それを知りたくて、小さく頷きそつと部屋を後にする。

扉を出ると星は扉に向かって一礼して、そのまま城を飛び出していった。

昨日彼とあった森の中へ急ぐ星を駆り立てるのは、彼のことを考えると起こる動悸と彼の微笑んだ時の優しい笑顔だけだ——そして、その心の奥底にある。この懐かしさにも似た感情の意味だった。

* * *

時間は星が起きる前へと遡り……。

早朝、珍しくカレンに起こされ、エミルとイシエルが寝惚け眼のままのっそりと起き上がる。

ここでおかしいのはエミルが一発で起きたことだ——寝起きが人一番悪いエミルが本来ならば、こんなにあつさりと起きるはずがない。

そんな彼女がすぐに起きたのは、昨晚はよく眠れなかったからなのだろう。

つとと言うか、全く寝ていないと言ってもいい。瞼を閉じているだけで疲労は回復するから今の状態でもエミルの体には疲労は残ってはいないが、だとしても精神的には消耗する。星のこと、街のこと、敵のこと、それらを考えていれば眠れるものも眠れなくなるのも無理もない。

2人が起きたのを確認したカレンが、いつにも増して畏まった様子で告げる。

「師匠が呼んでいます。用意ができたらリビングに来て下さいとのことです」

「——ええ、分かった。すぐに行くわ！……行ってくるわね。星ちゃん。必ずあなたを元の世界に戻してあげるから……」

横で寝ている星の前髪を掻き分け、頭を撫でてエミルが優しく微笑

む。

その優しい表情は、妹を見る姉そのものだった……。星の髪を撫でてしているエミルに、イシエルが不満そうにそつと問い掛ける。

「その子もええけど……うちはどうなん？」

軽く頬を膨らませているイシエルに、エミルはくすつと息を吹き出すと。

「もちろん、あなたもよ。イシエ」

「そう……いこか。エミル」

互いに笑みを浮かべて頷く。

この二人には友情よりも、もっと強い何かを感じざるを得ない。

彼女達はリアルでも仲らしいが、それ以上は聞いたことがない。ただの友達と言うより、姉妹のように息が合っているとたまに感じることがある。

リビングに出ると、そこにはマスターが険しい表情のまま腕を組み俯き加減で待っていた。顔を上げた彼の表情は、どことなく緊張しているように見える。

さすがの彼でも、これほどの作戦を控えれば緊張するのだろう。そう思うと、エミルは少しほつとしていている自分がいた。徐に立ち上がり、マスターが口を開くと。

「もう良いのか？　なら、行くか……メルデイウス達は一足先に街に行っておる。さっさと仕事を終わらせて、皆で元の世界に帰るぞ！」

マスターの言葉に深く頷くと、思い出した様にイシエルがポンと手を叩く。

「エリエちゃん達は、今回もお留守番なく。ご飯はキッチンにあるシチューを食べてな〜」

「ええー!!」

不満の声を上げたエリエとミレイニが、テーブルに身を乗り出すようにして立ち上がる。

2人としては行く気満々だったのだろう。がっかりしているといふよりも、隙あらば一緒に付いていこうと考えているのは、その目を

見ればすぐに分かる。

それを察したのか、エリエ達にエミルがため息混じりに呟く。

「エリー？ 昨日の事を覚えてるわよね……？」

彼女の言葉にドキツとしたように身を震わせるエリエ。

昨日のことというのは間違いなく、昨晚の星の無断外出のことだろう。

普段から星は、度々良く城を抜け出すことがある。思い付いたら、すぐに行動してしまうことが多いからだ、元々現実世界で頼れる人間のいない星は1人で決断して1人で実行に移す癖がついてしまっているのかもしれない。

エミルは冷や汗を流している彼女に更に言葉を続けた。

「今日はしっかりと星ちゃんを見ててね！ もし、今日もまた外出させたら……分かるわよね？」

「あわわわわ……」

エミルの影のある笑みに顔を青ざめさせながらエリエが何度も頷くと、エミル達は部屋から出ていった。

城を出てリントヴルムの背に乗って街に向かう途中、イシエルが何気なくエミルに尋ねた。

「なんであの子をそこまで外出させへんの？ なんかまずいことでもあるん？」

「……うーん。まずいと言うか、なんか妙な胸騒ぎがするのよ。前のダークブレットの時のような……」

もちろん。この気持ちに確証などない。だが、エミルにはなにか良くないことが起こりそうで仕方なかった。

大空を風を切って飛ぶリントヴルムの背中から、小さくだが街が見えてきた。

朝焼けに薄っすらと照らされた街の周囲の至る場所に、無数に光る赤い瞳が不気味で仕方なかった……。

奇襲当日3

街の近くにリントヴルムを着陸させ、エミル達が街の外門を通過して始まりの街の中へと入る。

門の周りには多くのプレイヤー達が、足場を作つてへばり付いているのが見える。

街の中は今までの閑散とした街通りとは異なり。明日の戦闘を控え、まるで別の街かともまがうばかりに人々が忙しなく動き回り弓や矢、槍に剣など様々な武器を乗せた荷車が通りを数多く行き交つていった。

先程通つてきた外壁の門も、防衛に備えて門の補強工事が行われていたのだ。

それはマスターの今夜決行する作戦を、まだ彼に近い仲間達だけが知っているということの意味する。

だが、もう一つ確実なのは、この街に居る人間の大多数の人間が防衛戦を行おうとしている事実だ。

防衛と決めてしまっている人間が攻勢に転じるには、防衛ではなく攻勢に転じた時に確実に勝てるだけの確証が必要だ——それは重い足取りで歩みを進めるエミルも、その隣を歩くイシエルにも十分に分かつていたのかもしれない。

つと、目の前から見慣れた○に釜と描かれたタンクトップを着た筋骨隆々の逞しい肉体を持った。おと……いや、オカマが現れた。

「あら。皆、随分と早いね。本来は1時の予定じゃなかったかしら？」

「サラザさん。少し計画に変更があつて、すみません。ご迷惑をおかけして……」

エミルがサラザに丁寧に頭を下げると、サラザは満面の笑みで返す。

「いいのよ。エミルは私の妹みたいなものなんだから！ デイビツトちゃん達も、もう私のお店に集まつてるわよ。早く行きましょ、行きましょ♪」

上機嫌にエミルの手を力強く取ると、スキップしながら自分の店へと向かう。

種族と歩幅が違う為、エミルは走っているのだが、ウキウキ気分のサラザにはそれが見えていないらしい。

マスター達も苦笑いを浮かべながらも、サラザ達の後が続いていく。

サラザの店に着いたエミル達を出迎えたのは、デイビットを始めとした——メルデイウス、小虎、バロン、ファイリスのもう見慣れたメンバー。ガーベラ、カルビ、孔雀マツザカのオカマイスター陣営だ。相変わらずこの陣営はグラサンと黄色いモヒカンの孔雀マツザカとい、リーゼントにムキムキボディーのガーベラに相撲取り級に巨漢のカルビと奇抜なメンバーが揃っていた。

だがそれ以外は、全てが新顔揃いだ——俯き加減にサングラス越しに睨みを利かせる金色の短髪を黒いバンダナで覆う青い瞳の男は、金で龍を象った煙管を啜えた右目に大きな傷を持っている。その隣には自分の身長ほどの長刀を手にした黒い髪を後ろで束ねた男が落ち着いた様子で控えていた。彼等は武闘派で知られる『LEO』のギルドマスターとサブギルドマスターだ。少数精鋭で規模は60人程度——。

また別のテーブル席には法衣を纏ったムキムキのお坊さんが2人——手には黒い数珠を持ち、首には大きな鉄の数珠が下げられている。彼等はギルド『成仏善寺』のギルドマスターとサブギルドマスター。以外にも規模は200人。もちろん。皆坊主でゴリゴリの体の持ち主だ……。

その隣のテーブルには西洋の鎧に真紅のマント、そして顔はドラゴンの頭を模した兜で隠している男。

だが、兜の隙間から見えている口の付近には髭が見えていることから40代から50代の間と言ったところだろう。

彼の横には補佐役なのだろう。茶色い髪を三つ編みに結んだ青い瞳の少女が、洋風の甲冑を身に纏い真面目な表情で座っている。年齢はエリエと同じ高校生くらいだろうか。

彼等は大規模ギルド『メルキュール』のギルドマスターとサブギルドマスターだ。大規模と言うだけのことはあり、その規模は千人を超えているという噂だ……。

その後ろの席には赤髪に赤い瞳の皮鎧の少女と、隣には同じ皮鎧を着ている短髪で赤髪の赤い瞳の少年が座っている。だが、少女の方はマスターの方をずっと凝視したまま、まるで固まった様に動かない。

彼女達はギルド『POWER, S』のギルドマスターとサブギルドマスターで、最近勢力を広げてきたギルドでその規模は250人ほど……。

横の席にはローブを羽織った短髪のどこにでも居るような成年が苦笑いを浮かべている。その隣に座る茶髪の彼も緊張を隠しきれない様子で頻繁に辺りを気にする素振りを見せていた。

彼等はギルド『平凡な日常』のギルドマスターとサブギルドマスター。まあ、生産などを主に行っているギルドで、しかも彼等はこの事件発生後に結成したギルドだ。規模は300人。意外と大きいギルドなのだが、非戦闘系ギルドと言うことと、新参ということもあり、あまり知名度は大きくない……。

そして一番奥の席に陣取っていたいるのは耳の長いエルフの2人——左側に居る白髪に青い瞳の成年と、青い短髪に黄色い瞳の無口な青年。

彼等はギルド『ネオアーク』のギルドマスターとサブギルドマスター。エルフ専用のギルドで規模は400人。元々種族的に弓以外の武器を使うのが難しいと言われているエルフで、400人集めたのは相当の才覚の持ち主なのは間違いない。人柄もいいというのは街の中でも言われ、その名声は轟いていた……。

つと、集まったギルドの紹介も終わったところで、物語に戻ろう。サラザに店の中へと招き入れられたマスターが、店の中で各々飲み食いしている彼等をカウンター席に呼ぶと、向かい合う様にカウンターに入り告げた。

「早速で悪いが、昨日の作戦を少々変更させてもらおう！ また、この事はギルドの者以外には他言無用に願いたい！」

皆が頷くのを見渡し、マスターが言葉を続けた。

「昨日皆に教えた通り。今この街は周囲を多数の敵に囲まれ、最早抜け出す事もできない状況に陥っている。この危機を突破するには、敵の中を突き抜けて他の街に逃げる以外には手はない」

「ちよつと待て……」

話している最中、それを遮って黒いドラゴンの兜をかぶった男が発言する。

そのドラゴンの兜に負けないほどに渋く太い声が辺りに響き、視線が一斉に彼に集まるが、兜の男はそれに動揺する様子もなく淡々と話す。

「拳帝は街から抜け出すと言ったが、第一に抜け出しに成功したとしても、俺達を受け入れてくれる街などあるのか？　もし、受けて入れてくれる街があつたとして、大勢の非戦闘員を連れ俺達では敵の包囲を突破できないと思うのだが？」

拳帝とはマスターが武闘大会で連続優勝した時に付いた通り名のことだ——そして、彼の言う通り。無事街から抜け出せたとして、他の街にもモンスターの軍勢が押し寄せているというのは暗黙の了解と言つてもいい。

何故なら、各街にあるモニターは全てが連動する仕様になっている為、必然的にあの映像は全ての街で一斉に放映された内容ということになるのである。

まあ、イベントの告知、宣伝、スポーツイベントなどのパブリックビューイングを行う為だけに使うあの巨大モニターに、わざわざ独立性を持たせる必要性はないのだ。

しかし、彼は事あるごとにあの巨大モニターを使用している。本来ならば、全プレイヤーにメッセージを飛ばせば済む話だ——しかも彼は、事前連絡でメッセージ機能を使用している。わざわざ映像を付け加える手間を増やすようなことをするメリットが分からない。それに意味があるのか、それともただ単に便利だから利用しているのか……それを知っているのは彼だけだろう。

彼の的確な指摘に、マスターは一度考える素振りをして口を開く。

「その指摘はもつともだ——だが、心配はいらん。ここに居るメルディウスは千代の頂点に立つギルド『THE STRONG』のギルドマスターだ。ある程度のお古参プレイヤーなら聞いたことがあるだろうが……彼の手引で街の方の受け入れ許可は取つてある。問題は街を囲むモンスター達だが、内部と外側からの攻めで容易に排除できるだろう。所詮はAIで動かされているモンスターでしかない。その数が膨大なら、AIの変更にも膨大な時間を要する。駆け抜けるには十分だろう」

マスターの発した言葉に、その場に居た全員の視線がメルディウスに集中する。まあ、彼の真つ赤な鎧を目にすれば只者ではないとすぐに分かる。

それもそうだ。赤という目立つ色を身に着けているということは、腕にそれほどの自信があるということの証明でもあるのだ。

するとメルディウスに向かって、黒いバンダナにサングラスをかけ、右目に大きな傷のある男が不敵な笑みを浮かべた。

「ほう、あんたがあのおテストの……オリジナルの固有スキル持ちは貴重だぜ。なんせ、日本には4人しかいないんだから……こんな状況じゃなけりや、俺も手合わせ願いたいもんだ」

「ふつ、別に俺はいいぞ？ この作戦が終わつたらいくらでも勝負してやるよ！」

「ほう、それは楽しみだ。なら、尚更生き残る必要がある！ まあ、ミゼー！」

「……ふふつ、そうだな」

嬉しそうに笑みを浮かべた傷のある男の言葉に、隣にいた長刀の男が口元に微かな笑みを浮かべ頷く。

余裕さえ感じられるその口振りから、どうやら彼等も相当の実力の持ち主なのだろう。そうでなければ、テストという単語を聞いた時点で震え上がり、それ以上の行動は取れなくなるはずだ。

それだけ、オリジナルの固有スキルの存在感は強烈であるということの現れでもある。

「まあ短い間だが、生死を共にするのだ。とりあえず、自己紹介から始

めるとしよう。知っている者も多いと思うが、マスターだ。拳帝でも構わん。固有スキルは『明鏡止水』収集したスキルを使用できる——まあ、こんな感じで頼む」

見本を見せたマスターが軽く会釈をした。それを見て次にメルデイウスが口を開くと、それに割り込むようにして右目に傷のある男が声を上げた。

「俺はギルド『LEO』のギルマスのネオだ。固有スキルは『メタモルフオーゼ レオ』まあ、その名の通り獣人へ変化できる。ミゼ」

ネオが隣にいる長刀の男を見て、ニヤリと笑みを漏らす。

そんな彼とは打って変わって、冷静さを崩さない長刀の男が少し呆れ顔で声を発した。

「同じ『LEO』のサブギルドマスターでミゼと言う。拙者の固有スキルは『居合い』間合いに入ってきた者を俊足の剣技で尽く斬り伏せる。以後、よろしく頼む」

ミゼが一礼すると、ネオがメルデイウスの方を見てニヤツと笑う。

その顔から、彼はギルドマスターとサブギルドマスターの入り乱れるこの場では、このやり方が正しいやり方だと示しているように感じた。

奇襲当日4

その直後、改めて自己紹介をしようと口を開いた瞬間。また割り込むように今度は赤髪の活発そうな少女が手を上げた。

「はいはい！ 次は私！ いいわよね？ 私はギルド『POWER, S』のリカ。固有スキルは『フェイント』攻撃の時に、勝手にフェイントを入れてくれるの！ それで拳帝！ 私、貴方の大ファンなのは是非サインを頂戴！」

興奮気味にカウンターに左手を突くと、前に乗り出してマスターに向かって右手で持ったグローブを渡す。

マスターは「ああ、いいとも」とグローブを受け取り、見える手の甲の部分に大きく『拳帝』とサインする。

まあ、この世界ではマスターは超が付くほどの有名人だ。彼の対応を見るに、こういうことにも慣れているのだろう。

それを受け取ると、リカは嬉しそうに胸にグローブを押し当て、今度は右手を突き出し握手を求め、マスターはそれにも快く応じる。

横にいた赤髪の少年は大きいため息を漏らすと、彼女をたしなめる。

「リカ。彼のファンなのは知ってるけど、こんな状況なんだ。少しは自重しろよ」

「いいじゃん。カムイには関係ないでしょ？ それに拳帝も嫌がってないし……一緒に戦える事ができて、私嬉しいです！」

「あ……ああ、共に頑張ろう」

赤髪の少年をチラツと睨み、興奮冷めやらぬ様子でマスターの手を強く握り締めて黄色い悲鳴を上げている彼女。

だが、カレンがそれを面白く思っていないのは、もはや言うまでもないだろう。

何度かこういうことはあったのは、間に入って止めないのを見れば分かるが。現にカレンは、物凄く不機嫌そうに細目でリカのことを睨んでいた。

「はあ……僕の双子の姉がお騒がせして申し訳ない。リカはギルドマ

スターで、僕はサブギルドマスターのカムイ。固有スキルは『神速』だ、よろしく」

髪の色と瞳が同じ色のこともあり。なんとなく兄妹ではないかとは思っていたが、まさか双子とは……。

しかも、しつかりした感じのカムイが弟で、活発な感じのリカが姉というの言われても何となくしっくりこない。それにカムイの固有スキルが、エリエと同じ『神速』ということも興味深いところだろう。

リカの暴走で自己紹介を中断されたかたちとなったが、今度は漆黒の鎧にドラゴンの兜を被った男が名乗りを上げた。

「俺はギルド『メルキュール』のギルドマスター、ダイロスだ。固有スキルは『豪腕』スキルのレア度は高くはないが、一撃だけ攻撃力を100倍に上げてくれるいいスキルだ。必殺の一撃とでも言えばいいのかな？ 付いた通り名は『瞬殺仕事人』なんて不名誉なものだがな……リアン」

「——は、はい！」

慌てて返事をした髪を三つ編みに結んだ少女が驚き、慌てて声を上げた。

一瞬だけ彼女の青い瞳が緊張に潤んだように見えたが。彼女はすぐに冷静になり、声を張ってハキハキと告げる。

「同じ『メルキュール』のサブギルドマスターのリアンです。固有スキルは『幻影』簡単に説明すると、幻覚で敵の意識をずらして隙を突くスキルです。よろしくお願いします！」

そこまで言い終え、最後で気を抜いてしまつて失敗したことに気が付き、真っ赤に染まった顔を両手で覆いその場に落ち込んだようにしゃがみ込んだが、すぐに立ち上がり「よろしくお願いします」と先程の取り乱した彼女とは別人のように平静な面持ちで言い直す。

その直後、エルフの男が待っていたように口を開く。

「僕はギルド『ネオアーク』のリーダーでツールだ。固有スキルは『ウインドアロー』放つ矢に風属性のダメージを追加できる。また、放った後の正確なコントロールも可能だ。よろしく！」

肩にかからないくらい白髪に青い瞳。そしてトールという名前。彼は間違いない。昨日星と接触した男だった。

まあ、フィールドボスクラスの敵を相手にしても全く動じない精神と高い戦闘技術を見せられれば、只者ではないことは分かってはいたのだが……。

彼が自己紹介を終えると、すぐにその隣の青い短髪に黄色い瞳のエルフが言葉を発した。

「同じく『ネオアーク』のサブリーダーのハイルだ。固有スキルは『アクロバット』その名の通りだ。よろしく」

社交的なトールとは違い淡々と話す彼は、あまり口数の多い方ではないのだろう。

隣にいたトールが苦笑いを浮かべ、彼に変わり補足説明を行う。

「ハイルの『アクロバット』というスキルは通常の20倍のジャンプを行えるスキルだね。着地時のダメージも受けない。飛ぶとまではいかないものの、それに近い芸当はできる。また、彼には通り名もあって『蒼天のスナイパー』と呼ばれている。口数は多くはないが悪い奴じゃない。仲良くしてやってほしい」

身振り手振りを交えつつ話すトールが皆に軽く頭を下げた。その様子から、どうやら悪い人間ではないらしい。

つと、次にこの空間でオカマイスタアの次に怪しいと言つてもいい。どう見ても職業やジョブなどがあるなら僧侶にしか思えないが、屈強な肉体を持った坊主頭に法衣、首には似つかわしくない大きな鉄の数珠を下げた2人男。

彼等は手を前に突き出し数珠を手に合掌しながら大きく一礼すると。

「我はギルド『成仏善寺』の僧、無善。固有スキルは『憑依』モンスター」の体に乗っ取り意のままに動かす技なり——」

「同じく『成仏善寺』の僧、浄歳。固有スキルは『ゾーンバインド』周囲の敵を拘束し、動きを封ずる——」

「——拳帝殿と共に戦える事、嬉しく思います。どうか、我等の力。人々の為にお使い下され！」

僧侶という見かけによらずの豪快な息の合った挨拶を披露し、もう一度深々と一礼すると彼等は前を向いて合掌した。それには皆呆気に取られていたが、変わってはいるが彼等も悪い人間ではなさそうだし。

そして最後に生産型ギルドでも大規模な勢力と言われている『平凡な日常』のギルドマスターとサブギルドマスターの成年2人が互いに顔を見合わせて示し合わせたように頷くと、ギルドマスターのローブを羽織った黒髪の成年が話し出す。

「僕は非戦闘ギルドで生産を生業にしている『平凡な日常』のギルドマスターです。もちろん今回の戦闘にも直接的な参加はできませんが、間接的に貴方達を支援する事は約束します。現在この始まりの街は僕達の拠点であり、確実に街を守り切ってもらいたいと考えています」

彼の言葉を聞いて、サブギルドマスターの男が小さく数回頷く。

だが、それを聞いていたネオが金色の龍の形をした煙管を吹かし。

「ふん。随分と身勝手な言い分だな……」

つと彼に聞こえるように皮肉たつぷりに呟いた。しかし、それは他の者達も同じなようでピンク色の店の中に、更に不穏な空気が広がっていく。

店の空気を察してか、これ以上拗れるのが嫌だったからか、マスターが「止めんか!」と一喝する。

ネオは両手の平を上にして呆れ顔というか、バカにしたように小首を傾げて見せた。そして彼が、ほっとした表情で言葉を続けた。

「僕達が今日この場を訪れたのは、この街に居る非戦闘派の人の代弁をしに来た事が大きい。生産を行えるゲームである以上、僕達も立派なプレイヤーです。無論、戦闘に必要な物資は無償で提供します。これは他のこの様な決起部隊にも連絡しています。また、戦闘系の方より素材などを多く保有しなければならぬ我々は、拠点や固定客を失えば多額の損害をこうむるのも事実。そして僕達はモンスターとの戦闘をできるだけ避けているので、全体的にレベルが低い。生産スキルがレベル制でない以上、自身のレベルを上げるメリットもあまりな

いですしね……僕達は全力で貴方達を支援します。なので、貴方達はこの街と僕達生産職のプレイヤーを全力で守って頂きたい！これは物資を無償で提供する我々との等価交換の原則に則って当然の義務だと考えています！なので、そちらの『街を捨てての撤退という』言い分だけを一方的に呑む事はできません！どうか、防衛を前提とした打開策を考えて頂きたい!!」

頭を深々と下げる彼等に、周りの者達は複雑な表情を浮かべている。

だがそれも無理はない。この場に集まっている殆どの者が、モンスターがいつか消えると考えている者などいなかったからだ。つまり、モンスターとは所詮データの集合体でしかなく、仕様によりすぐにまた指定の場所で蘇るものだからだ――。

即ち防衛するということは、外部からの助けがくるという――その微かな可能性に賭け、果てしない消耗戦を続けなければならないという事なのだから。

少なくとも、ここに居る者の殆どがギルドのマスター、サブマスターなのだ。自分の仲間を他人任せの勝ち目も逃げ場もない長期戦に巻き込もうとする者などいるはずがない。

皆の視線は彼等の言葉を聞いて瞼を閉じ、顎の下に手を当てているマスターに向いていた。

これは生産系を生業とした商人と力を貸してくれる戦闘系の者達のどっちを取るかということでもあり。

各ギルドマスター達は彼の返答次第では、この作戦から抜けてもおかしくないほどのピリピリとした空気を放っている。

「そうだな……お前達の見解は分かった。だが、モンスターは無尽蔵に増えているという情報も流れているのだが……街に籠もってどうするつもりだ？」

遂に発したマスターの言葉は彼等に譲歩するものではなく、逆に問い掛けるようなものだった。

思いもよらない彼の返答に、彼等も少し狼狽えた表情を見せたが、すぐに言葉を返してきた。

「だ、だからそれを考えてほしいと言っているのです！ どうして分かって頂けないのですか!!」

分かってもらえない憤りからバンツ！つとカウンターの板を叩く彼に、マスターは大きなため息で返した。

「はあ……儂だつて、防衛戦での勝率があればそうしている。住み慣れた場所を離れず。しかもその方が安全だからな、通常、攻城戦は3倍の兵力がいると言われている。だが、それは人対人ならばの話だ――防衛して勝算があるならば、儂も迷わず籠城戦を選択していただろう。しかしだ！ リスクを冒してでも、包囲網を突破すると決めたのは、そうしなければ全滅すると思ったからであり、それなりの理由があるのだ！ もし、お前達にも打開策があるならば、今この場で皆に説いてみよ！ 皆を納得させるのは儂ではなく、お前達の役目ぞ!!」

マスターの鋭く光る瞳が彼等を捉え、彼等は狼狽えた様子で数歩後退ると、怒りに拳を震わせると、凄まじい覇気を放っているマスターを指差し言い放つ。

「い、言いたい放題言えるのも今のうちだぞ！ 拳帝だかなんだか知らないが、いい気でいられるのも今のうちだけだ！ 俺達はお前達みたいな自殺志願者に支援なんてしないからな！ 物資は防衛戦に賛同したプレイヤーに行う事にする！ 俺達を甘くみたま事をたつぷりと後悔させてやる!!」

そんなバタな捨てセリフを吐いて、彼等は血相を変えてサラザの店を飛び出していった。

皆、それを冷ややかな目で見送り。店内に重苦しい空気が立ち込める中、マスターが徐に口を開くと。

「――皆、儂のせいで生産型のギルドの支援は受けられなくなってしまう。すまん……」

そうマスターが頭を下げると、メルデイウスが大笑いする。それにつられる様に周りからも称賛の声上がる。

「さすが師匠。スカツとしました！」「元々あんなウジムシみたいな連中に期待なんざしてないさ」「防衛戦は消耗するだけで活路はありません。マスターの判断は正しいです」「さすが拳帝！ それでこそ私

の憧れの人ね！」

などの聞こえてきた。

しばらく、鳴り止まなかった拍手がやっと静まり返り。エミル達のことでもその場にいた者達に自己紹介を終えてマスターが微笑む。

「ならば、作戦の概要を説明しよう」

真剣な面持ちでカウンターに地図を広げ、マスターが作戦の内容を話し出す。

「まず、儂等のギルドのメンバーでレベルの高いボス級の敵を撃破する。その後、合図と共にお前達が突撃して突破し。それから儂の仲間が街の中の者達を連れて街から脱出する！ 合図がなければ失敗だ。その場合、本来の作戦通りに籠城戦へとシフトする！」

マスターが仲間達の方を見ると、エミル達は決意に満ちた表情で深く頷き返す。

だが、他のギルドの者達は不満を爆発させるように一斉にざわめく。

「さすがに拳帝のギルドのメンバーでもマズイでしょ……」

「そんな事させられるわけない！」

「敵に囲まれているボスと交戦するとは正気の沙汰じゃないぞ？」

トール、リカ、ダイロスが言った。

「バカが！ 死にたいのか!？」

「自殺行為だ」

「我等もお供を！」

ネオ、ミゼ、無善、浄歳が言う。

普通に考えれば敵の密集している場所に行つて無事で済むはずもなく、絶対に失敗する作戦だろう——しかし、無論マスターも勝算のない勝負をする人間ではない。だとしても、この賭けは相当勝算のない自殺的行為だと言われても仕方がない。

ざわめく彼等に向かって、マスターが静かに告げる。

「我々は即席の連合軍だ。どんなに統制を取ろうにも、訓練されたような一糸乱れぬ動きはできません。だが、この者達は儂と苦楽を共にして来た気の知れた者達だ。最も連携を取りやすい。しかも、モンスター

を動かしている者に作戦を悟られたくない。隠密行動をしつつ、最も敵の撃破の可能性の高い方法を導き出し、これしかないという考えに至ったのだ。仲間達も皆、了解してくれておる」

マスターが仲間達の方を向くと、何の迷いもないような顔でエミル達も微笑み返しもう一度深く頷く。

それを確認して、マスターは満足そうに言葉を続ける。

「今夜奇襲作戦を決行する！ 客員、それぞれに仲間達に情報の伝達を頼む！ それでは皆、頼むぞ」

『おー!!』

力強く拳を突き上げると、大声でマスターの言葉に応えた。

その後は蜘蛛の子を散らすように、皆がバラバラにサラザの店を後にしていく。

* * *

奇襲当日5

木々の木の葉の隙間から木漏れ日が降り注ぐ中、地面に優しい光と一緒に汗の雫が落ちてシミを作っていく。

昨日出会ったエルフの男を待つ間、星はひたすら木の剣を振っていた。その様子を、木の枝に寝そべりながらレイニールが見下ろしている。

一心不乱に剣を振る星の脳裏には、昨日のエミルとのやり取りがこびり付いて頭から離れない。

練習用の剣を振る星はどこか上の空で、焦りにも似た感覚に戸惑っていた……。

(……どうして。こんな気持ちになった事ないのに……こんな、こんなに、誰かの為になりたい。自分がどうなってもいい。皆の役に立ちたいと思った事は始めて……。——ツ!?)

剣を振る星の脳裏に悲しそうに佇む母親の影が浮かび息を呑むと、思わず持っていた剣が手から離れてしまった。

木に当たり地面に落ちた木の剣を見つめ、妙な胸騒ぎを覚えていた。

それに気が付いたレイニールがフワフワと上下に揺れながら、星の方へと大きなあくびをしてやってくる。

「ふわあく。どうしたのじゃ? 最近放り投げなくなったと思ったのに、珍しいのう……」

眠そうに目を擦って再び大きなあくびをするレイニールを見て、優しく微笑みを浮かべる星。

「うん。ちよつと休憩しよつか!」
「うむ!」

レイニールは大きく頷くと星の頭の上に乗っかる。まあ、剣を一心不乱に振っていた星と違い。今までもレイニールは十分休んでいたと思うのだが……。

木を背にして木陰に腰掛けると、星は頭の上に乗るレイニールを見上げた。

柔らかい風が頬を撫でる中、木々の間から漏れる木漏れ日が地面に様々な模様を映し出す。

フリーダムのは四季は春、夏、秋、冬で分かれるが、それにあまり意味があるとは言えない。

何故なら気候に変化が殆ど発生しないと云ってもいいからである。雨はもちろん曇りになることもない。

そしてお風呂のシステムと似ていて、気温も肌に触れる感覚をそれぞれにあつたものに調整してくれる為、夏でも春や秋と同じ気温と湿度を感じる。それでも日差しが強いせいか、夏はいつもよりも暑く感じてしまう……。

そんな星を見て小首を傾げるレイニールに、星は心の中に引っ掛かっている思いを尋ねる。

「——レイは不安になつたりする？」

「どうしたのじゃ？」

星は前を向き直し、柔らかい光で無数に木の葉の形を地面に映し出す風景を見つめた。

そよ風に揺られ地面を動く木の葉の影の中、星の潤いを得た瞳も微かに輝いている。

その表情は遠くを見つめていたがどこか悲しそうで、それでまた何かを悟っているようにも見えた。

「——こんな時間がいつまでも続く……そんな気がするけど、きつといつか終わるんだよね。皆、変わっていく。木の葉の影も、人の心も……レイ、私も変わるのかな？ 変わるのかな……」

「うむ。なんだか、主らしくないぞ？」

頭の上に乗っていたレイニールが翼をはためかせ、今度は星の前の地面に降りると顔を上げた。

星とレイニールは見つめ合うように、数十秒間互いの顔を合わせた。

そして……。

「変わるのではなく。変わらされているのだ——誰かが誰かに影響を与え、それによって変化するのが人間の心なのだろう？ なら、不安

になるのも何か不安にさせるものがあるからなのじゃ。星龍である我輩は最強であり、恐れるものなど何もない。だから、主の気持ちは分からん……でも、これだけは言える。怖いのであれば、逃げてはダメじゃ！ 戦うしかない！」

「……どうして？ 怖いなら、逃げる方がいいと思うけど……」

不安そうに星が返した言葉に、レイニールがビシツと指差して言い放つ。

「逃げてどうするのじゃ！ 怖いからと言って逃げれば、その場は乗り切れるかもしれない。でも、次またそいつと出会ったらどうするのじゃ？ また、逃げるのか？ 今度も逃げられる保証がどこにあるのじゃ！」

「……でも、戦ったらそこで死んじやうかも……」

体を小さくして掻き消えそうな声でそう呟く星の顔の前まで浮上して、レイニールがもう一度強く指差す。

「それならば尚の事じゃ！ 逃げてもいつか追い込まれて死ぬなら、戦って死んだ方が何倍もかっこいい！ それが誇りというものなのじゃ！」

「……ほこり？」

「うむ！ 震えながら裁きを受けるのを待つくらいなら、当たって砕けるなのじゃ！ 人生は足掻いた者だけが先に進める。だから、主もここまでこれたのだろう？ 今の主があるのも足掻いたからこそじゃ！」

今までのことを振り返っても、星自身は足掻いたと言えるような物事があったとは思えなかった。

もちろん。星が自分自身を過小評価しているというのものもあるが、無難に人に合わせて生きてきた——何色にでも染まれる。それが自分のアイデンティティーであり、なにより『人に嫌われたくない』というその思いが、まるで自分をカメレオンの様な生き方にしてきたと言っている。

だが、それは生活していれば、誰でも人に合わせて同じ行動を取っているのが今の社会であり。人間社会において異物は、敬遠され、侵

害され、排除される。

しかし、誰でも自分という人間を生まれながらに演じている。だからこそ、咄嗟に周りに合わせたりできるのだ。もしも、今まで生きてきて自分の意志を一度たりとも曲げたことがない人間がいるならば、それはもう人間ではないだろう。

星は自分の意志が極端に……と言うか、殆どないと言ってもいい。簡単に言えば水だろう。水は様々な物に利用できるのはその性質上、殆どのもものと交わることができるからであり。この世に水がなければ、人間も産業もここまで発展できなかった。

まあ、星の場合は極端に相手に合わせる節があるのは否めない。だが、それが悪いとも彼女の場合は一概には言えないだろう。

彼女がこんな性格になってしまったのも、周囲からの過度な圧迫が星自信の個性を封じてしまったからであり、父親が居ないということも大きく影響している。

一般的に人は母親から優しさを学び、父親から強さを学ぶと言われている。しかし、彼女は片親を生まれる前に亡くし、母親からの愛情も十分とは言えない状況で育ってきた……その弊害が、彼女の性格そのものなのだろう。もし。父親が生きていれば、きつともつと女の子らしく、子供らしい明るい性格になっていたのかもしれない。父親さえいれば……。

目の前で自信満々に胸を張っているレイニールに、星は首を横に振ってさっきの言葉を否定した。

「——ううん。私は足掻いてなんていない……ただ流されてきたただけだし……」

これも掻き消えそうな声で返したが、星のその声がちゃんと言葉にできていたかは謎だ——だが、その心配はなかったように……。

「何を言っているのじゃ！ 我輩と始めて会った富士のダンジョンでも、ダークブレットの基地でも、先日の黒い刀の事件の時も。主がいたからこそ、エリ工達も主も生き残れたのじゃぞ？」

「……でも。それでも助けられなかった人がたくさん居る……もつと、もつと私に力があれば助けられたはずなのに！ 私は……私が

………イタツ!!」

そう口にした直後、星の頭に衝撃が走る。まるで石が当たったかのような衝撃に、星も思わず地面にうずくまった。

それもそのはずだ。星の頭に向かってレイニールが頭突きをしてきたのだから無理もない。いくら小さいとはいえ、それは見た目だけで実際にはドラゴンの時と力は変わらないほどの破壊力を持っている。それでも、痛いだけで済んでいるのはレイニールが手加減したからだろう。

もし。レイニールが本気で頭突きしていたら、星の頭はスイカを割ったように粉々に砕け散っていたことだろう……。

おでこを押さえて涙目で「なにをするの」とレイニールの方を見上げて星が抗議する。その直後、レイニールが自分の鼻を押し付ける勢いで迫ってくると。

「どうして主はいつもそんなに自信がないのだ！ 主があの場合に居なければ、皆助からなかったのじゃ！ それだけで、主は十分過ぎるほど頑張ったのだから、主はもっと胸を張ればいい！」

星が小さく頷くと、レイニールは満足そうに微笑みを浮かべ、定位置である星の頭の上に乗る。

そこにタイミングを見計らったかのようにツールがやってきた。笑顔を浮かべた彼は手を上げて挨拶をすると、星もペコリと頭を下げる。

無言のまま、星は胸の辺りに手を当てている。今まで何ともなかった鼓動が早くなり、ドクンドクンと自分の耳でも聞こえる程に大きく脈打つのを感じた。

ツールは頬を赤らめている星の隣にゆっくりと腰を下ろす。

木陰の下で肩が当たりそうなほどの距離で座っていると、自分の心臓の音が聞こえるのではないかと気が気ではなかった。

いつもと同じく優しい穏やかな風が吹く中、しばらく無言のまま2人は木の陰が揺らめく木陰に座っていた。

そんな彼の顔をチラッと横目で見た星のお腹が突然音を鳴らし、元々赤かった顔が羞恥心から耳まで真っ赤に染まった。

お腹を押さえる星を見てトールは笑うと、コマンドを指で動かしたアイテムから小さな包み紙を2つ取り出す。

「ははっ、ごめんね。待ってたからお腹空いたよね？　これはさつき街で買ってきたサンドイッチなんだけど、どうぞ」

「えっ？　あ、はい。ありがとうございます……」

差し出される包みを受け取り、徐に包みの中からサンドイッチを取り出す。

包み紙を開くと、中には美味しそうな小麦色に輝くの照り焼きチキンがレタス、卵と一緒に挟まれていた。

星は持つている方を頭の上で今にも涎を垂らしそうな勢いで凝視しているレイニールに渡すと、包みの中にあるもう一つの包み紙を開き。

「いただきます」

っと、小さく言っただけで口に運ぶ。

普段ならこんなことをされたら遠慮してしまうはずの星が、トールからは何故か素直に受け取ることができた。その理由は分からないが、どこか懐かしく温かい感じだけが胸一杯に広がっていた。

小さく口を開けてパクつと食べている星を見下ろし優しい笑みを漏らすと、トールは自分の持つていた包み紙を開き、それを取り出したナイフで2つに分けると座っている星の横に置く。

不思議そうに首を傾げる星に向かって。

「これも食べていいよ。食べ終わったら、待たせてしまった分も練習するからね！」

「はい！」

彼がそう告げると、星は返事をして嬉しそうに頷いた。

トールはそんな彼女に優しく微笑むと、そつと頭を撫でた。星も一瞬驚いて身を震わせたが、不思議と嫌な感じはしなかった。

さつきまで張り裂けるほどにドクンドクンと脈打っていた心臓が、何故か今はすぐく落ち着いている。

瞼を閉じてトールの手の感触を感じると、すぐく安心する。

(……エミルさんやエリエさんのとは違う。大きくて硬い手だな……)

男の人ってこんなに大きいんだ……まるで——)

心の中である言葉を眩こうとして止める。いや、言葉にできなかった。それも違う……ただ自分には分からないことを言葉にしているのか迷ったのかもしれない。たとえばそれが心の中ですら……。

その後は日が暮れるまで、トールは星の剣の練習に付き合ってくれた。

ただ打ち合うだけではなく。敵との間合いの取り方、攻撃のいなし方やフェイントの入れ方などを手取り足取り丁寧に教えてくれた。これが最後になると言わんばかりに……。

白獅子

彼と別れエミルの城に戻る途中、自分の横を飛んでいるレイニールがふと星に尋ねる。

「なあ、主。今更なのじゃが、勝手に出て来てそのまま帰ったら、またエリエに怒られるのではないのか？」

「——ッ!？」

歩いていた星がピタリと立ち止まって、その顔が一瞬で青ざめる。今までトールと打ち合うのに必死で気が付いていなかったが、そういえば今朝ケーキが食べたいと嘘をついて抜け出してきたことを星は今更ながらに思い出し、頭を抱えてその場にしゃがみ込んでしまう。

もうこの時間になって今更何を言ったところで信じてはくれないだろうし、怒られることに変わりはない。

すぐに今更どうしようもないことを理解し、立ち上がると再び歩き出す。

城に戻るのは怖かったが、ただそれだけで今日無理をしても出てきたことは後悔してはいなかった。それは、自分の抱いているトールに対する感情が何なのかを、はつきりと理解できたからかもしれない。

城に戻ると案の定、部屋の中でエリエがむっとした表情で待っていた。まあ、ケーキを作っている間に抜け出すとは、彼女事態も思っていないなかったのだろう。

しかも、何故かソファアーの上には、ミレイニがロープで体をぐるぐる巻きにされて横たわっているし。その口には、布を巻きつけられて喋れないようにされているという徹底ぶりだ——おそらく。機嫌の悪かったエリエに向かって、ミレイニが何か言ったからなのだろうが、本来なら頬を引つ張る程度の彼女がここまでするのは珍しく。それだけ怒っているということが、ミレイニの尊い犠牲によって星は再確認した。

「——さて、星？　今までどこで何をして、どうして出て行ったのかを

教えてもらおうじゃない」

微かに肩を怒りに震えていて、その声音から察するに我慢はしているようだが、少しでもおかしなことを言ったなら自分がどうなるかは、火を見るよりも明らかだった……。

緊張した面持ちで肩を小さくまとめ椅子に腰を掛けている星は、ちよつとだけ息を吸い込みそれを吐き出すと、徐に真実を口に始める。

「……き、昨日会った人に剣の使い方を教えてもらってました」

「ふくん。それで？ その人は一体誰なの？ もちろん。私達の知っている人でしょね〜？」

上から見下ろすようにして星を見るエリエの視線は、明らかに星を威圧しているように感じて、星は更に体を小さくする。

「……えっと、多分知らない人……です。でも、とても優しい人でしたし。それに……」

おっかなびつくりにしてそう告げると、突然テーブルを叩いて飛び上がった。星はエリエの行動に驚き目を見開いてその顔を見つめている。

「はあー!? 今がどういう状況か分かって言ってるのツ!？」
「……ひっ!」

大きな声を上げ再びテーブルを叩くエリエを怯えた瞳で見つめる星。

すぐに星の体が小刻みに震えているのに気が付きエリエは我に返ったのか、今までの高圧的な態度が一変し、今度は優しく諭すような口調に変わる。

「あのね。今は危ないの! だから、1人で出歩いちゃダメでしょ? いい人そうにして近付いて来て、騙し討ちをしてくるようなやからもいるんだよ?」

「……………」

無言のまま俯き続ける星の瞳が涙で潤むのを見て、エリエは小さくため息を漏らした。

さすがのエリエも涙には弱いのか、静かに席を立って。

「何でもいいけど、もう1人では出掛けないで……」

そう小さく呟くように告げて、部屋から出て行ってしまおう。悲しげなその背中を、星は見送ることしかできなかった。

部屋を出たエリエは顔をとても暗く沈んでいた……。

「はあ……守る側の私があの子を怖がらしてどうすんのよ。もう……」

自分に落胆して左手で顔を押しさえて歩き出すと、部屋の扉の向かいの窓の壁に力無く背中を打ち付けて止まる。

ふと窓の方を見ると、果てしなく生い茂る木々の先に暗がりには赤く光る複数の目が見えた。

そう。もう数日以上この城の周りを監視しているかのように、モンスターが徘徊していたのをエリエは気付いていた。

もちろん、エリエだけではない。星とミレイニが知らないだけで、もう殆どの者がこの事実を知っていたのだ。

このモンスター達が街の周りを囲んでいるモンスターの一部であるの言うまでもないが、規模は小さくベテランプレイヤーの多いエリエ達の脅威にもなりそうにない。だからこそ、放置するという結論に至った。

倒してしまった方が安全だと言う意見もエミルから出たのだが、撃破させるのが目的かもしれないというマスターの意見の方が過半数を占めたので、対応しないという対応を取るようになったのだ――。

無論。エリエも撃破派で、星やミレイニの居るこの城の周りを迷惑の分からない敵が徘徊しているという気味の悪い状態を放置したくなかった。

過度のストレスをただただ星にぶつけただけだと思おうと泣きたくなったが、その衝動をなんとか抑え込む。すると、エリエの視界にメッセージが表示された。エリエはそれを指で触って内容を表示する。

『エリー。今、デイビッドがそっちに迎えに向かっているわ。準備ができたなら、星ちゃん達を連れて街のモニター前の広場に来て』

その送られてきたメッセージを見ると、落ち込んでいたエリエは顔

を綻ばせて、クスツと小さく笑うと。

「エミル姉もあんなの迎えに寄越すなら、カレンの方がマシでしょ。なにを人選を間違ってるんだか」

そう呟く彼女の顔は嬉しくてたまらないと言わんばかりに緩みきっていた。

部屋に戻ると、今まさにミレイニの体に巻き付かれていた縄を外しているところだった。

縄が緩み拘束力を完全に失うとみるや、ミレイニは口に巻かれている布を取って投げ捨て、今までの不満をぶちまけるかのように叫んだ。

「なんだし！ あたしは普通に本当の事を言っただけなのに。なんでこんな扱いされないといけないんだし！ あたしはただ『エリエは脳がない』て言っただけなのに!!」

どうしてエリエが怒ったのか……それが何となく今の彼女の発言と、頭を指差すジェスチャーで分かった気がする。

そう。つまりミレイニは、能力がない『能がない』という言葉をも、脳みそがない『脳がない』と勘違いしていたのだ——勿論『能がない』が正解なのだが、知ったふうに得意になって頭を指差し『脳がない』と年下に言われれば、星が勝手に城を飛び出したことと相まって、エリエの性格ならミレイニがあんな格好になって当然と言わざるを得ない……。

ミレイニのその発言の問題点に、星は気が付いたのか、明らかに視線を逸らしている。

しかし、気にはなるのかチラツチラツとエリエの方を横目で見ている。だが肝心なエリエは微笑みを絶やすことなく。

「エミル姉達と呼んでるから街に行くわよ」

つと、終始上機嫌でいた。星には逆にそれが違和感しか感じなくて腑に落ちなかった。

本来のエリエの性格ならば、怒りを露わにしてミレイニの頬を引っ張りそうなもののだが、罵られても笑顔を崩さずにいられるということは『即ちそれ以上に楽しみなことがあるから』としか考えられない

い。

街にいつて何をされるのか……おそらくそれは、ミレイニだけじゃなく自分にも降り掛かってくるであろうと、星は直感で理解できた。

何故なら『今日、無断で外出してしまった。しかも、エリエを騙して……』そう考えると不思議と体が小刻みに震え出す。

だが、そんなことなどエリエは微塵も考えていなかったがそれを星が分かるはずもない。しかも、星は自分のそのセンサーに絶対的な自信を持っていた。少しでもそう感じたのであれば、星は長年の生活で培ったその自己防衛の為のスキルを疑うことはしない。

そんな星の心配を余所に、横できよんとしていたミレイニがニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

ミレイニの悪魔的な笑みから滲み出るオーラに、星はただただ嫌な予感しかしなかった。

つと、ミレイニが徐に口を開く。

「エリエのバー……」

そこまで口にした直後、ミレイニの口を星が慌てて塞ぐ。

今ここでミレイニに余計なことを言われれば、噴火寸前だったエリエの怒りが一気に吹き出しかねない。

爪先立ちになりながらも、後ろから手を回していた星の体が不安定さと恐怖でプルプルと震える。

なおも何かを口にしようとするミレイニの口を必死に抑え込むと、エリエがにこやかに尋ねてきた。

「なにか言った？ ミレイニ」

笑顔は崩さないが、一瞬ピリツとした空気が辺りに漂う。まあ、この状況ではミレイニに口を開かせると、確実に大惨事になりかねない。

その言葉に、星が口を塞いでいるミレイニの代わりに返事を返す。

「え、えっと……ミレイニさんは、バームクーヘンが食べたいって……そう言いました！」

我ながら苦しい言い訳だとは思ったが、星としては、この場はどうにかこれで乗り切るしかない。

祈るような思いでエリエの顔色を窺っていると、エリエは小さく頷いて。

「そうね！ まあ、時間もまだあるし。特別に作ってあげる！ 星のケーキもその子が全部食べちゃったしね。ちよつと待ってなさい！」
鼻歌を歌いながら上機嫌でキッチンに向かっていった。

星はほつと胸を撫で下ろし、頭の上に乗っていたレイニールを見上げた。

「レイ。ミレイニさんが変な事を言わないように見ててね」

「ん？ 分かったのじゃ！ だが、主はどうするのじゃ？」

そのレイニールの問いに答えることなく星が走り出し「私も手伝います」とキッチンに向かうエリエの後を追いかけた。

白獅子2

その場に取り残されたレイニールは、面倒そうに仕方なく荒い息を繰り返しているミレイニの頭の上に乗る。

すると、ミレイニはすぐに息を整え。

「絶対エリエを怒らせてやるし！ 縛られた復讐してやるし！」

つと、粹がつているミレイニの頭をバシツと叩く。

さすがに何度も痛い目にあつても、全く学習していないのは凄いと云えば凄いのだろう……。

突如襲ってきた痛みに、ミレイニはうずくまり咄嗟に頭を押さえた。

「痛つたく。なんだか分かんないけど、すつごいたんこぶできちやつてるし。羽まで生えて……つて羽？」

不思議そうに頭の上に乗ったレイニールの背中を撫でる様にながら、両手で興味深く触っていく。

その時、頭の上のレイニールが、もう一度ミレイニの頭に一撃を加える。

「何度も押すな！ このバカタレが！ お前のカチューシャがお腹に食い込んで痛いんじゃない！」

「——はっ!? つて……なんでお前が、あたしの頭の上に乗ってるし……」

ミレイニは頭の上に乗っているレイニールの体を鷲掴みにして目の前に連れてくると、目を細めながら不満そうにレイニールを見ている。

レイニールはビシツとミレイニに指差すと、迷わない瞳で言い放つ。

「お前はバカか！ どうしてエリエを怒らせて無事に済むと思ってるのじゃ！ いい加減学習しろ！ このバカ者が！」

「誰が……誰が……バカバカ言うなしー!!」

そう叫んだ直後、ミレイニはレイニールを思い切り前方に向かって放り投げた。

レイニールはくるくると回転しながら飛んでいくと、翼を広げ何とか体制を整え——きれず。壁に激突してゆつくりと地面に落ちてその場に伏せた。

壁にダメージを受けたわけではなく。どうやら、空中で回転したことで目を回したらしく、目がとぐるを巻いたようになっていた。

勝ち誇ったように胸を張るミレイニが次に向かったのは、星とエリエのいるキッチンだった。

キッチンにきたミレイニは腰に手を当て、エリエを指差しながら叫ぶ。

「エリエのバーカ、アーホ、マヌケ！」

だが、その挑発に乗ることなく、無視を決め込んでエリエは調理を続けている。

その様子を気が気じゃない思いで、星はただただ体を縮めながら聞き流すことに徹していると、ミレイニの方から「デーブ」という声が響き、一瞬で場の空気が張り詰めたものへと変わった。

星の前に置いてあった包丁が一瞬にして消えると、次の瞬間にはエリエの背中が見えたかと思うと、彼女はミレイニの首に腕を回し180度回転して持っていた包丁がミレイニの鼻先に突きつけられた。

自分の目の前で怪しく光る包丁を目の当たりにして、ミレイニの表情が見る見るうちに青ざめ、その場にまるで彫刻の様に固まっている。

エリエは鋭くミレイニを睨みつけると「デブじゃないから……」と低い声音で告げると、ミレイニはブルブルと体を震わせ小さく頷く。

それを見て満足そうに満面の笑みを返すと、エリエは星の方へと戻っていった。

脅威が消え去り、恐怖による緊張から解き放たれたミレイニの体がゆつくり地面にへたり込む。

凄まじい威圧感に腰が抜けたミレイニが立ち上がれるようになってしたのは、皮肉にもバームクーヘンが完成した直後だった。

まあ、立ち上がれるようになったと言うよりもバームクーヘン食べたさに、意地でも立ち上がったと言うのが正しいかもしれない。その

時の彼女は、まるで生まれたての子鹿の様に足をプルプルと震わせながらも、先にリビングに行つた星達を追いかける。

リビングでは食器を並べ、大皿の上に盛られた小さなバームクーヘンを一人ずつ、エリエが小皿に取り分けているところだった。

もちろん。そこにはミレイニの分も用意されている。星はそれを見て、何だかんだ言つていても、すっかり気にかけているエリエの優しきを感じて微笑んだ。

そこに腰の抜けたやつとの思いでミレイニがやって来ると、エリエと向かい合っている星の横に座つた。

ミレイニが星の横を選んだのは、十中八九もしエリエが襲い掛かつてきても星がかばってくれると思つているからだろう。まあ、実際にそうなつたら、本当に星は止めに入つてくれそうだが……。

テーブルの星に近い場所でレイニールがバームクーヘンにかぶり付き、口いっぱい溜め込んだ物を飲み込むと徐に呟く。

「——だからエリエに逆らわない方が良いと言つたのじゃ……」

「……だって、大丈夫だと思つたんだもん……」

拗ねたように呟くと、ミレイニは手で持つたバームクーヘンにパクつと噛み付いた。すると、ミレイニの動きが止まり。今までの出来事を忘れたかのように次から次へとバームクーヘンを平らげていく。

その時、部屋のドアが開き相変わらず侍の姿をしたデイビッドが入ってくる。

リビングに姿を現わしたデイビッドは額に手を当て、呆れながら告げた。

「お前達。なんでこんな時まで、お菓子食べてるんだよ……」

こんな状況でも普段と全く変わらないエリエ達に彼が呆れるのも無理はないが、逆に捉えればそれだけ平常心を保つているとも言えた。

エリエはデイビッドを横目で見ると、素っ気なく言う。

「ふくん。デイビッドだけなんだ……エミル姉は？」

「エミルは街で待機してる。はあく、てかお前、エミルからメッセージ受け取ってないのか？ 有事なんだから連絡くらいちゃんと見てろ

よな！」

呆れ顔のまま左右に頭を振ったデイビッド。

それに怒ったのか、エリエが勢い良くその場に立ち上がり。

「なっ！　なによ偉そうに！　だいたいあんたが来たところで、蟻一匹くらいの力にもならないでしょ！　エミル姉も人選を間違ったものよね。一番弱いデイビッドを迎えに寄こすなんて」

散々デイビッドを罵り、最後に蔑む様な視線を送るエリエ。

だが、その瞳はどこか楽しそうにも見えた。この2人のやり取りを見ていた星の中で、今までの謎が一本の線で繋がる。

どうして自分が無断で出ていったことにも、ミレイニの挑発にも、エリエの怒りが然程爆発しなかったのか——それはすべてこのイベントの為だけに、怒りのボルテージを溜めていたからなのだ……。『だいたいデイビッドがいたら足手まといでしょ！　そこは辞退しなさいよ！』

指差しながら鼻で笑うエリエに、迎えに来たデイビッドも黙ってはいられない様子で声を上げた。

「なんだと!?　俺のどこに不足があるって言うんだ！　言ってみろよ！」

「全部よ全部！　そのダサイ格好も！　刀って言う片方しか切れない武器を使っている事も！」

エリエがデイビッドの身に付けている鎧を指差して告げると、デイビッドは顔を真っ赤にして反論する。

「これは日本の侍の衣装なんだ！　刀は侍の魂。これを手にしたからには、敵と命のやり取りをだな——」

「——そんなの戦ってるんだから、剣やレイピアも同じじゃないの？」

つとエリエが正論を言うと、デイビッドは頭から湯気を出しそうな程に顔を真っ赤に染めた。ここからは小学生の様な不毛な言い合いが、結局30分近く繰り広げられた——。

いつものこととはいえ、これには星も呆れていた。子供が見ていて呆れるほどの口喧嘩なのだから、本当にどうしようもないものだった

のだろう。その横では、レイニールとミレイニはこの期に乗じて、必死に大皿に残っているバームクーヘンを取り合っている。

堪らず星は席を立つと、荒く息を繰り返し再び言い合いを始めたエリエとデイビッドに声を掛けた。

「エミルさんの所には行かないんですか？」

「あつ……」

星の言葉を聞いて2人は思い出したのか、ポカンと互いの顔を見合わせる、空中で指を動かし固まったかと思うと、その表情が次第に青く染まっていく。

おそらく。2人にエミルからのメッセージが届いていたのだろう。大体の内容は2人の表情を見ていれば察しが付くが……。

慌てた様に星の手を掴むと、エリエは最後のバームクーヘンを巡っ
ていがみ合っているレイニールとミレイニの方を向いて叫ぶ。

「いつまで食べてるの！早く行くわよ!!」

互いの注意がエリエに向いた直後、その前を高速の旋風が通過して、次の瞬間には大皿の上に乗っていたバームクーヘンが消えていた。

最後のバームクーヘンはギルガメシユの元に渡り、ギルガメシユが一瞬のうちに自分の口の中に強引に押し込んだ。

レイニールもミレイニも唾然とした様子でその一部始終を目撃し。次の瞬間には何事もなかったかのようにテーブルから離れ、レイニールは星の頭の上に。

ミレイニはエリエの側になると、星達は部屋を出て街へと向かった。

白獅子3

もうすっかり日も沈み、夜の帳が落ちた街の中を歩いていくと、モニターの大きな広場近くで何者かが声を荒らげていた。

星もエリエも他の誰もがその声に聞き覚えはなく。小走りで広場まで急ぐと、広場では大勢の人が集まり、マスターと向かい側にフルプレートアーマーの見知らぬ男性プレイヤーが立っていた。

顔まで覆っているフルプレートで、どうして男性だと分かったかというと、今まさに声を張り上げていたのが彼だったからだ――。

彼はどうやら、マスターの作戦に不満があるらしく、周りを巻き込もうと懸命に声を張っている。

「俺は納得できない！ 先制攻撃を仕掛けるというのもそうだが、どうしてわざわざ強化した外壁の門から打って出て攻めないといけない！ 防衛戦の方が守りやすく敵が疲弊するのを待てばいいだけだろう。そうすれば、相手もさすがに落とせないと諦めるはずだ！ 今こそ敵からの譲歩案を引き出せる絶好のチャンスだろう！」

彼の意見を聞いた周りの人集りからも次々に声が上がリ――。

「そうだそうだ！ 守りきればいいだけなんだから、わざわざリスクを冒す必要なんてない！」「被害の出ない遠距離から、敵を倒せばいいだけじゃないか！」「攻めきれなかった時の責任はどうするんだ！」など、様々な反対意見が飛んでいる。

しかし、反対意見だけでなく、こちらに賛同する者も頻りに声を上げる。

「無雑作に湧くモンスター相手に防衛戦は不利だ！ 拳帝が正しい！」「守り切れる確証もない以上、あくまでこちらから攻撃的に行くべきだ！」「攻めてから、無理そうなら防衛戦に移行してもいい！ ひとまず攻めてみるべきだろう！」

などと言った、マスター達に賛同する意見も出ていた。

賛成派、反対派。どちらの意見もまばらで殆どの者はどうすればいいのか決め兼ねていると言った感じだ。

それも無理はないだろう。昨日の『村正事件』で人間不信になって

いる者も多く出ている。その中で、不死身とも言えるモンスターで大攻勢を掛けられれば誰に従うのが正しいのか分からなくなる者が多く出るのも肯ける。

正直。無気力とは言えないまでも、結局は大多数の方に付くという人間本来の心理が働くのだろう……。

そこに多くの群衆の中から、煙管を咥えたライオンの毛皮を纏った派手な格好の黒いバンダナに金髪サングラスを掛けた男と落ち着いた袴姿に長刀を腰に差した男が現れた。

彼等はギルド『LEO』のギルドマスター、ネオとサブギルドマスターのミゼだ。

人集りの前に出たネオは龍の形を象った煙管を口から放すと、口内に含んだ煙を吐き出してゆっくりとした口調で話し出す。

「……おいお前。拳帝の意見に異を唱えるなら、それ相応の力量があるんだろうな。……本当はビビってるだけなんじゃないのか？」

挑発する様なネオの言葉に、鎧を纏った男性プレイヤーは怒り心頭といった感じで声を荒らげた。

「はあっ!? なんだお前等! ゲーム内だけで格好付けてるだけの中二病の癖に、出しゃばってるんじゃないぞ! なんだその見慣れない煙草にグラサンにバンダナ。おまけにライオンの毛皮を背負った格好は!」

彼の言葉を聞いて、ネオは口元に微かな笑みを浮かべた。

その表情には余裕さえ感じられる。しかし、彼の余裕の理由はすぐに分かることになる。

「——フンツ、中二病ねえ……確かにそうかもしれないな。だが、そういうお前のフルプレートも相当な物だと思いがな……」

ネオの思わぬ反論に彼はたじろぎ、周りからはクスクスと笑う声が聞こえてきた。

男が「笑うな!」と声を張り上げると、ネオの隣のミゼがクスリと小さく笑いをこぼす。それを聞き逃さず、男はミゼを鋭く睨み付けた。

刀に手を掛けたミゼの前を左腕で遮ると、ネオがニヤリと不敵な笑

みを浮かべ。

「——どうだ？ 俺と勝負してみるか？ 他の奴等も拳帝の策に異論のある奴は前に出る！ 俺が勝ったら拳帝の案を採用する！ 俺は何人がかりでも構わないぞ？」

その言葉にミゼは驚き身構えたが、ネオは刀の柄に手を掛けようとするミゼの方を睨みつけ。

「おい。ネオ」

「……手出しはするなよ？ ミゼ。こいつは俺の道楽だ」

苦虫を噛み潰した様な顔をして、小さくため息を漏らしたミゼが一步後ろに下がる。それを見たネオは不気味な笑み浮かべ、周りを見渡すと6人の男性プレイヤー達が前に出た。

彼の不気味な笑みが更に強くなり、全身から殺気を漲らせている。

ネオの体から滲み出るオーラに気付きつつも、彼等は引き下がる様子はない。

まあ、リスクを冒したくない彼等にとっては、意地でも今回の作成を防衛戦にしたいのだろう。

戦わずに相手の意見を飲むくらいなら、6対1で負ける可能性の低さに賭けたというところだろうか……。

ネオはミゼに下がるように促すと、彼もそれに素直に従った。

「ほら、掛かってこいよ……言葉は通じてるんだろ？」

素手のまま煙管を咥え挑発するように指をクイクイっと動かすと、それを合図にそれぞれに得物を持った6人の男達が一斉にネオに襲い掛かる。

その攻撃を少ない動きで正確に見切って次々とかわしていく。

何より凄いのは、彼が最小限の動きだけで武器の刃をやり過ぎしていることだ。当たりそうでも当たらない絶妙な動きで巧みにかわすその身のこなしには、敵も傍観している者達もただただ脱帽していた。攻撃パターンを変えて攻撃しても、その全てにネオは反応してその身にはかすりもしない。

戦闘を見ていたミゼが小声で呟く。

「……ネオの奴。楽しくなってきたか……」

ミゼの言葉を証明するように、ネオがニヤツと不敵な笑みを浮かべ、今まで防戦一方だった彼が口に咥えていた煙管を握る。

直後。振り下ろされた剣を煙管で防ぎ、距離を詰めて懐に飛び込むと男性の腹部を思い切り蹴りつけた。

男性の着ていた西洋甲冑がガシャンと音を上げて地面をボールの様に転がり、彼のHPが最低値だけ残って力無く地面に伏せる。

「……1人」

不気味に笑う彼の狂気じみた笑みに、近くにいた薙刀の男が大声を上げながら突撃して来た。すると、ネオも地面を強く蹴って、向かってくる男目掛けて猛スピードで突っ込んでいく。

本来。長物相手に武器扱いではない煙管を持つての突撃など、誰がどう考えでも自殺行為としか言えない。

「——バカがああああッ!!」

男が自分目掛けて、無謀にも突っ込んでくるネオに薙刀を振り抜く。

ネオはそれをかわすどころか、何か考えがあるのか更に加速した。

次の瞬間。ネオは彼の持っていた薙刀の柄の部分で腕で防ぐとHPが減少し、男の持っていた薙刀の柄を掴み、獲物を奪い取りに掛かった。

だが、ステータスにそれほど差がないのか、なかなか奪い取ることができず。互いに膠着状態になってしまう。これは彼の大きな見当違いと言えたかもしれない。

そこに隙を見逃さず。ネオの背後から、先程と違う長めの剣を持った男が攻撃を仕掛けてくる。

「今なら動けないだろう! 喰らえ!!」

剣を突き出し走ってくる男を横目に、ネオが笑みを浮かべた。

「フツ、その程度で——ッ!?!」

動こうとしたネオの腕を、今度は薙刀を持つ男の手が、がっしりと掴んでいた。

絶対に放さないと言わんばかりに、指が腕に食い込むかと思うほど

に力を込めている。背後からは剣を構えて突っ込んでくる男、そして前には自分の腕を掴んで放さない男。

完全に挟み込まれた状態で、徐々に剣を持つ男との距離が詰まってくる……。

攻撃が当たる直前、薙刀の柄を握り締めたままネオの体は放物線を描く様に飛び上がり、薙刀の男の背後へと移った。

つと、同時に薙刀の男の体に剣が突き刺さり。断末魔の叫び声の後、男の体が地面に崩れ落ちる。

突然の事態に驚き慌てる剣の男の体を、今度は薙刀の男の得物が突き刺す。

「ぐっ……まさか……お前は……」

崩れる男の目の前にはネオが立っていた。

しかし、先程とは違い全身が細かい毛に覆われ、全身の筋肉が隆起し突き出した鼻に鋭い牙、首には美しくなびく白銀の鬘、頭には耳と尻尾まで生えている。その姿はもはや人ではなく、獣人と言った方が正しいかもしれない。

周りで見ていた者達も、一層と強まる彼の全身から放たれる殺気に身震いする者、腰が抜けてその場に座り込む者で溢れかえった。

「白銀の毛並みの獣人。白獅子だ！」「白獅子ってあの化け物の……」

「あの白い悪魔か……」

群衆の中から恐怖におののく声が聞こえてくる。

戦っていた者達も3人が相次いでやられたことで動揺したのか、はたまた彼が『白獅子』という通り名を持つプレイヤーだからか、またはそのどちらものか……それは分からないものの、戦闘をしていた彼等は明らかに戦意を失った様に後退りしはじめていた。

「フッフ……はっはっはっはっ！ 最高の気分だ！ 貴様らの四肢を引き裂いて挽き肉にしてやるぞッ!!」

先程とは異なり。狂気じみた笑い声を上げると、ネオの殺意の籠もった鋭い瞳が彼等を捉えた。

一斉に今度は獣人となったネオに背を向け、対戦者達は一目散に逃げ出す。それはまるで突然登場した捕食者に怯える獣の様にも見え

た――。

「――どうした？ まだ戦いはこれからだろうがッ!!」

強力に踏みしめた足の爪が地面に傷を残し消えた彼の姿は、瞬間移動でもしたかの様に逃げるプレイヤーの背後に突如として現れた。その直後、振り抜かれた獣の様な鋭利で大きな手の爪が、そのプレイヤーの体の原型を留めないほど無残に吹き飛ばす。

肉片と化したプレイヤーを見て、辺りから悲鳴が上がる。だが、ネオはその声が聞こえていないのか、また狂気じみた笑い声を上げながら一目散に逃げていく2人のプレイヤーを追いかけている。

ここまでくると、もう対戦ではなく一方的な殺戮に近い。

普通の人間より遙に大きくなった獣人のネオは、すでにボスモンスターにも匹敵するレベルまで人間離れしてしまっている。するとその時、彼の目の前にミゼが割り込む。

「――邪魔だミゼー!」

「……落ち着け、ネオ」

自分に伸びてくる腕をかわし、懐に飛び込んだ彼は持っていた長刀をネオの胸元に突き刺す。

――グオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!

苦しそうに咆哮を上げて天を仰ぐネオの体から光が立ち昇り、次の瞬間には光る彼の体が収徐々に集束していく。

元に戻ったネオの体が、覆い被さっているミゼの顔を見上げ。

「……もつと優しくできなかつたのか?」

「……暴走したお前が悪い」

「ケツ……相変わらず、強引で無口な奴だ……」

互いの顔を見合って、ニヤツと笑みを浮かべる。

ネオのHPが『1』になりバトルが終了すると、粉々になっていた男の体も元通りに修復され、他の者達もHPが全回復して動ける程度にはなった。

戦いが終わると、今まで彼等の戦いを固唾を飲んで見守っていた群衆達が歓喜の声を上げた。辺りには拍手が巻き起こり、称賛の声がかかる。それはこの場に居る殆どの者達が、マスターの作戦に賛同した

という証しでもあった。

元々この勝負は防衛派と攻勢派の争いから始まったもの——勝敗が決して圧倒的過ぎる攻勢派の勝利に、もはや防衛戦をしようと言う者は殆どいかなかった。

結果的にこの戦いで、攻勢派であるマスター達の力量が相当のものであるということが証明されたのだ。今後の作戦に異を唱える者は殆ど居なくなるだろう。

ごく一部を除いて……。

「いいのか？ このままあいつらの好きにさせて！」

「……いいんだ。俺達は生き残れば何の文句もない」

もう勝ったものと浮かれている群衆の中で、生産系ギルドのギルドマスターとサブギルドマスターの男達が短い会話を交わして裏の路地へと消えていった。

作戦決行

それから一時間後、マスターの特攻とも呼べる作戦は決行された。本来の彼の思惑通り。先鋒はマスター、エミル、イシエル、デイビッド、エリエ、カレン、メルデイウス、小虎。殆どいつものフルメンバーで対応するらしい。もちろん。攻撃と防御に長けたプレイヤー達で、人選には文句の付けようがない――。

彼等が暗がりには潜みながら敵の強いモンスターを撃破後、街から二陣の彼等が雑魚を薙ぎ倒し。最後に非戦闘員などが安全を確認しつつ、一気に開けた敵の陣形の中を駆け抜ける。

年少組の星とミレイニは戦闘には参加せず街の門で待機して、最後に街の者達と共に、皆が切り開いた敵の包囲網を抜ける。

バロンとフィリスはマスター達が敵と交戦を始めたら、周囲にバロンの固有スキル『ナイトメア』によって漆黒の兵団を呼び出し、念の為にマスターの方への援軍を防ぎ敵の足止めをする算段となっていた。

突破するのは最も守りの堅い北で、先鋒のメンバーが門の前に集まっていた。

星の両肩に手を置いて膝を折ったエミルが真剣な面持ちで告げる。

「――星ちゃん。絶対にこっちに來たらダメよ？ 危ないから、私が迎えにいくまでここで待ってるのよ。いいわね？」

「……はい。でも、気を付けて下さいね。エミルさん」

「大丈夫！ お姉ちゃんに任せなさい！」

そう言っつて満面の笑みで微笑むエミルに、星もぎこちなくだが笑顔を返す。

その横ではエリエとミレイニが話をしている。

「いいミレイニ。あんたは星よりお姉さんなんだから、しっかりあの子を守ってあげるのよ？」

「ふふくん。そんなの当たり前前に決まってるし！ エミルはおおぶなに乗ったつもりでいればいいし！」

「……大鮎つて……」

物凄く不安に感じる言葉なものにも関わらず、当の本人は自信満々に両手を腰に当ててこれでもかというくらいに胸を張っている。

そんなミレイニを見てみると『もういつそのこと、自分もここに残りたい』と思う気持ちが湧いてくるが、今回ばかりはそう言う訳にもいかない。何を言っても今回の作戦は参加人数が少ない。一人でも欠けるわけにはいかないのだ――。

エリエはミレイニに「本当に頼んだわよ」と額に手を当て呆れ顔で告げると、ミレイニは自信満々にポンと胸を叩き。

「大丈夫！ おおふきに乗ったつもりでいるし！」

っと答える。もはや鮪でもなく、ただの紐の集合体である。人が乗って浮く要素の全くない房になってしまったことで、更に沈む感じがアップしていることに、おそろくミレイニは気付いていない。

これ以上は目眩がして倒れそうなので、エリエは頭を押さえながらミレイニの側を離れ、今度は星達の方へいくとその耳元でささやく。「――星。あの子バカだから、変な事しないようにサポートしてあげてね」

作戦を実行する前から、すでに疲れ果てた表情をしているエリエに向かって、星は小さく頷いた。

エリエは「お願いね」と念を押すように言い残して、覚束ない足取りでフラフラとデイビッドの方に歩いていく。

星がその後ろ姿を心配そうに見つめていると、隣にいたエミルが「また後でねー」と走っていった。その直後、木の陰から自分を見る何者かの視線を感じて、星が慌ててその方向を振り向く。だが、そこには誰も居ない――。

不思議そうに首を傾げ、再びエミル達の方を向いた。

皆が集まったのを確認してマスターが叫ぶ。

「良いか！ これから敵の主力級を叩きに行く。相手の出方が分からない以上、個々の判断で臨機応変に対応する事になるだろう。言っておくが、この作戦が成功するか否かは、敵の重要戦力をどれだけ削れるかに掛かっている。皆、気を引き締めてかかれよ！」

マスターの言葉に皆、決意に満ちた表情で頷く。

それもそのはずだろう。彼の言った通り、この第一次作戦が成功しなければ、次の作戦に移ることができないのだから責任重大だ――。

もし、作戦が失敗すれば最悪の場合、外部からの助けがくるのを待つ間の期間籠城し続けなければならぬ。だが、難攻不落の城ならばともかく所詮は街の外壁のみ。突貫工事で強化したとはいえ、突破されないという保証はどこにもない。

まあ、出ていったとしても始まりの街から千代へと逃れるだけなのだ、見渡す限り平地しかない始まりの街よりも守りやすい造りをしている。同じ籠城戦でも、始まりの街と千代とでは雲泥の差があった。

――。

先行するマスターの後に続いて皆、森の中へと入っていく。

真上上がった月が森の中でもマスター達を照らしてくれている。その半面、林や木々を隠れ蓑にして進むマスター達の影は真下に伸びている為、マスター達に感知されることはない。

あくまでマスターは肉眼による感知しかできない。少なくともフィールドにいるマスターの中に音や熱で感知するタイプはいないはずだ。

ライラからの情報によれば、マスター達は認識しても危害を加えるか急激な動きをしなければ襲って来ることはないらしい……まあ、多くのマスターに睨まれ平常心を保っていられる者などそうそう居ないが、街から抜け出そうと個人で行動した者は恐怖から逃げようとしたか戦おうとして撃破されたのだろう。

身を潜めながらゆっくりと林の中を進むと、敵の大将であろうマスターを見つけた。その姿を見た時、その場にいた全員があまりの出来事に言葉を失う。

それもそのはずだ。目の前にいたマスターとは『墮天使ルシファー』その巨大な体と漆黒に染まった天使の羽、屈強な肉体と深い褐色の肌、長く伸びた金色の髪に真紅の瞳、そして墮天使と言われる所以の頭の両端から突き出した二本の角。手には二本の柱のように巨大な剣が握られている。その全てが記憶に深く刻み込まれたものだった。無論トラウマとしてだ……。

結構前の話になるが、一ヶ月間だけ実装された限定ダンジョンがあった。しかし、その難易度の高さからクリア不可能とまで言われ、後に大幅な下方修正が行われた。その時のダンジョン最深部のボスマンスター。それが『墮天使ルシファア』である。

大きな剣の広すぎる攻撃もそえだが、何よりも危険視されていたのは感知能力の高さだ。上下左右360度を全てを一斉に感知できるモンスターなど、今までに例がない。

しかも、それだけ広範囲の感知能力を有していて、加えて左右の羽から360度どこにでも剣の様に鋭利な羽を掃射する。

実装時にも1000人規模の大規模ギルドが次々に敗退し、ゲーム内を騒がせたものだ――。

そして目の前にいるルシファアは下方修正前の証しである角がある。つとすれば、あの化け物をダンジョン内からフィールドへと解き放った者の思考は常軌を逸脱していると言わざるを得ないだろう。

だが、問題はそれだけではない。ルシファアの足元には斧、棍棒、盾と剣、ハルバードを持ったミノタウロス四体が配置されていて、その全てに漆黒の武器が持たされていることが、唯一の気掛かりだろう。

マスターはアイテムの中から黄色の液体の入った瓶を取り出し躊躇することなくそれを飲み干す。

すると、彼の瞳が黒から黄色へと変わり注意深く辺りにいるモンスターを見渡し小さく息を吐く。

「ふん。なるほどな……奴等の持っている武器は先日村正と酷似したものらしい。その効果でゴブリンのような雑魚から、リザードアーマーなどの中核を担うモンスターまで、全てのレベルが100で統一されている。ゴブリンなど強くてせいぜいLv40程度のを、随分と念のいった事よ……」

呆れ顔でそう呟くマスターの言葉に、周りはいより一層険しい表情に変わる。

彼が先程飲んだのは『千里薬』と言われる。モンスターのレベル、HPを把握する為に飲む物で、飲めば一定時間。千里眼と呼ばれる能力が使えるようになる。

一般的にはターゲットされるかするかして現在戦闘している
モンスターのレベル、HPしか把握できないのだが、これを視界に映
る全てのレベル、HPを把握することができる為、レベルの高いプレ
イヤーの間では大変重宝されている。

「――敵はあのルシファー。予想外に強敵だが、儂等にも一体に数人
を割けるほどの余裕もない……頼めるか？ エミル」

マスターはエミルと顔を見合わせると、彼女は力強く頷いた。

全てを理解した様に静かに深呼吸し、エミルはコマンドを操作し始
め、そして以前にも使った赤青黄の三色で構成された融合の笛と巻物
を取り出した。

その笛を首に掛け、腰にベルトで巻物を巻き付ける。普段は腰に長
めの剣を一本しか差してないのだが、今回に限っては二本の剣が差さ
れている。

作戦決行2

本来エミルは、一本より二本での高速戦闘を得意としている。どうして普段から剣を二本差してないかは分からないが、何らかの理由があるのは間違いない。

普段は封印している一本を取り出していることから、今回の作戦に懸ける彼女の意気込みを感じられた……。

エミルは鋭い目つきで、自分の数十倍はあろうかというルシファーを見上げた。

（――マスターの言うように、星ちゃんの固有スキルを使えば簡単に敵を倒せるかもしれないけど……でも、前回スキルを使った後で2日も眠っていたのよ？ 次に使えばどうなるか分からない。……絶対に使わせない。私があの子に降り掛かる災厄全てを消してあげる。少なくとも……ここにいる間はね！）

腰に差した剣を抜くとそれを地面に突き立て、次に腰に巻いたドラゴン召喚用の2つの巻物を抜き取った。

地面に巻物を投げると、地面に巻物が広がる。

（勝負はこっちのドラゴンがルシファーに感知される一瞬……私が早いか、向こうが羽根を飛ばすのが早いか……）

緊張から召喚用の笛を握る手が汗ばみ、エミルは唾を飲み込んだ。小さく深呼吸をしたエミルが遂に動き、持っていた笛を吹き鳴らすと目の前の巻物から煙が立ち上りリントヴルムが現れた。

思っていた通り、リントヴルムが現れた直後にルシファーにより捕捉され、直ぐ様その大きな翼が左右に広がる。だが、エミルも直後にもう一つの巻物と融合の笛を連続して吹く。

リントヴルムの体が光を放つのと同時に、ルシファーの羽から放たれた無数の羽根がその体に当たり、一瞬で辺りを土煙が包み込んだ。

固唾を飲んで見守っていると、次第に煙が収まり翼を折りたたんで自分を防御しているリントヴルムの姿が見えた。

そのダイヤモンドの鱗で囲まれた姿に、エミルはほっと胸を撫で下ろした。しかし、それも束の間。自分の羽根が効かなかったと分かっ

タルシファーが、持っていた剣を構えて突撃しようとする。エミルはすぐに腰のベルトからもう一つ巻物を取り出し、投げる様に広げ即座に紐に繋がっている笛を吹く。

「リントー・飛びなさいー」

リントヴルムはエミルの声に答えるように、自分を包み込む様に折りたたんでいた翼を広げ、数回はためかせると勢い良く空へと舞い上がった。

その直後、リントヴルムの立っていた場所をルシファーの剣が空を切る。

剣のあまりの大きさに、巻き起こった風で辺りの木々が激しく揺れた。エミルの召喚したドラゴンを覆っていた煙すら掻き消す勢いだ。

消えた煙の中に居たのは黄金に煌めく二本の長く鋭利な剣の様な角を持つ2つの頭に、黄金に光る鱗を持った美しい飛竜だった。

「ツインヘッドソードドラゴン！ リントヴルムを追って！」

ドラゴンはその頭の大きな剣を縦に振ると、勢い良く飛び上がり先に飛んでいったリントヴルムを追う。

エミルはそこで透かさず再び融合の笛を鳴らす。

すると、空高くに飛び上がっていたリントヴルムが体を丸め強い光を辺りに撒き散らし、真珠の様な美しい球体の姿に変わる。そこに、後から召喚されたツインヘッドソードドラゴンも光に吸収されていった。

ほっとするのも束の間。エミル達を取り囲む様に、すでに多くのモンスターが群れが包囲を完了している。

モンスター達は各々の得物を構え、ヨダレを撒き散らしながらエミル達をその鋭い瞳で狙っていた。

エミルがドラゴン達を呼んだ時の笛の音に反応したモンスターに釣られて感知したのだろう。襲いかかっては来ないものの、蟻の這い出る隙もないほど完全に周囲を包囲されてしまっている為、もはや逃げることもできそうにない。だが、マスターはそうなることも承知していたのか、声を上げ真つ先にミノタウロスへと向かっていく。

「各自ミノタウロスを撃破せよ！ 雑魚にはできるだけ構うな！ 大

物を潰せればそれでいい！」

そう告げて突進していく彼は地面を蹴って、大きな棍棒を持ったミノタウロスに向かって拳を振り抜いた。

刹那、マスターの体を包むように風が巻き起こり、ミノタウロスごと木々と雑魚モンスターを薙ぎ倒しながら遠くへと追いやっていく。それはすでに、ゲームバランスもへったくれもない……。

「――俺も行くぜ！ 雑魚は任せろぞ小虎！」

メルデウスは背中に背負っていた大剣を引き抜くと、その大剣は金色に光り輝き大斧の姿に変わり。彼はそのまま、自分と同じく大斧を持ったミノタウロスへと突進していく。

「ちよ、待ってくれよ。兄貴！」

雑魚に構うなど言われたばかりで雑魚を任せるとギルドマスターに言われ、動揺を隠しきれない小虎が叫ぶが、その声はすでにメルデウスに届いてはいない。

小虎は頭を掻きむしると、吹っ切れた様に固有スキル『鬼神化【阿修羅】』を使用する。

体から炎が立ち上がり。炎で形作られた腕4本と顔2つが同時に現れ、赤い大剣を抜き取るとそれもコピーするように炎で同じ大きさの剣が各腕に生成される。

「僕が雑魚を惹き付けます！ 皆はミノタウロスをやって下さい！」

そう言い残して、目の前の敵の群れに突っ込んでいく小虎。

それに従うようにデビッドとエリエが別々のミノタウロスに襲い掛かり、心配そうにすでに姿の見えなくなったマスターの方を見つめていたカレンが少し遅れてデビッドの方へと加勢に向かった。

残されたイシエルがエリエの加勢にいかうとしたその時、エミルが徐に叫ぶ。

「――イシエは残って、私のサポートをお願い！」

「……せやかて、ええん？ エリエちゃんだけやと、負けてしまわれへん？」

イシエルの言葉は最もだ。経験で言えば、エリエの方がエミルに比べて数段劣る。

また、レイピアを主要武器にしているエリエはスピードを最大の強みにしており。こう周囲を敵に囲まれた状況では、どこにいつても敵しかいないので、そのスピードも遺憾なく発揮されることは少ないだろう。しかも、エリエは武器はあれ一本しか持っておらず。他のインベントリの中には、お菓子や食材などでごった返している。

さすがに今回ばかりは回復系のアイテムを入れてきてはいるだろうが、だとしてもお菓子も入っているだろう。その為、圧迫されたインベントリに代わりになる武器は入っていないと推測できる。

もしも戦闘で武器が破壊されれば、裸同然の彼女の装備では逃げ切れないだろう。だが、エミルは余裕とも言える笑みを浮かべて困惑するイシエルに告げる。

「大丈夫よ。エリーは剣を使った戦闘だけなら、私よりも強いから……それより、今回のルシファー相手じゃ、命令してからでは動作が間に合わない。五感をリントヴルムとリンクしている間は、私の体はどうしても無防備になるわ。だから、後はお願いな。イシエ」

「分かった！ ええよく。しつかり戦ってきてな」

この緊迫した状況で、意外なほどあっさりエミルの要請を受け入れるイシエルに少し拍子抜けだが、これが普段の彼女と言え、そうなのかもしれない。

微笑みを浮かべたエミルは地面に刺さった剣を引き抜いて両手に装備すると、深呼吸をしてゆっくりと瞼を閉じる。

「リンク・フルコントロール……」

小さく呟いた直後、上空の光の球体からダイヤモンドの鱗に巨大な翼に双剣を手にした竜人が現れる。

それはライラとの一戦で見たリントヴルムの融合後の真の姿『リントヴルムZWEI』だ——だが、以前は大きなサイズを手にしていたのだが、今回は双剣に変わっていた。

どうやら、合わせるドラゴンの種類によって変更可能なようだ……体中の鱗のダイヤモンドによって防御力と武器によって攻撃力を、ドラゴンの体より人に近付いたデザインによって、俊敏性や攻撃速度も攻撃のバリエーションも元の姿よりも段違いに上がっているだろう。

様子を窺っていたルシファアが漆黒の翼を広げ空へと舞い上がると、何の警戒も躊躇もなく剣を振りかぶって攻撃してくる。リントヴルムZWEIもその攻撃を待ち構える様に受け止めた。

2体の巨体が空中で鏖迫り合いを続ける中、地上でも激しい攻防が繰り広げられていたその頃――。

「はあああああッ！」

自分達の5倍はあろうかというミノタウロス相手に、エリエのレイピアによるみだれ突きが炸裂する。

だが、俊敏性特化型の彼女のステータスを持ってしても、減らせたHPゲージは微々たるものだった。

――ブオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!

地響きの様なミノタウロスの咆哮とともに、持っていた大剣がエリエ目掛けて振り下ろされる。

しかし、エリエは呆気ないほどに回避する。が、その直後、地面に当たった大剣の威力で辺りの土を巻き上げ、その土煙によって一瞬にしてエリエの視界が奪われた。

「うわっ――ペッ！ ペッ！ 何よもう……口に砂入ったじゃないバカ！」

エリエが口の中に入った砂を吐き出していると、ミノタウロスの咆哮が再びエリエの耳に飛び込んできた。

だが、不満を漏らしていても即座に固有スキル『神速』を使用して次の攻撃に備えるあたりは、さすが高レベルプレイヤーと言ったところだろうか……すると立ち上がったっている土煙が揺らぎ、煙を切り裂くように中から巨大な刃が現れる。

エリエはそれが目に入ると直ぐ様、きれいな背面跳びで華麗にかわす。その後、着地すると土煙の中をエリエは迷うことなくミノタウロスに向かって走り出し、その胸元目掛けて跳び上がってレイピアを構える。

「このレイピアは『隼』と言って、特別な武器スキルを持っているのよ……くたばれ牛人！ 必殺500連撃!!」

高速で突き出される突きにミノタウロスのHPはすぐに尽き、その

体が倒れるより早く光となって空へと消えていった。

大きく吸い込んだ息を吐き出した。

「……隼の武器スキル『瞬速』は攻撃速度を上げる技。それに固有スキルの『神速』の効果で、プラスする事で、上限を超えた速度に対応できずに5連撃をシステムが1回に勝手に変更する。それを100回繰り返すと自然と500回攻撃したのと同じダメージを与えられるんだよね。まあ、結局インチキだからOVERKILLボーナスはもらえないんだけど……」

エリエはミノタウロスが残した光が消えるのを待って、エミルの方に走ろうとした時、どこからか聞き慣れた声が聞こえてきた。

作戦決行3

エリエがその方向を見ると、そこには置いてきたはずのミレイニがケルベロスに乗って疾走する姿が飛び込んで来た。

「あのおバカ……待ってなさいって言ったのに！」

不満を前面に押し出して歯を噛み締めながらも、エリエは向かってくる剣と盾を装備したスケルトンファイターや棍棒を持ったホブゴブリンを破竹の勢いで次々に撃破してミレイニの元に辿り着く。

ミレイニはケルベロスの背に乗り。その後ろには炎帝レオネル、そしてもう一体は始めて見るモンスターだが、その姿はライオンの様にもジャガーの様にも見えるのだが、その二種類よりも体が明らかに大きく背中も毛深い。口には大きく鋭利な二本の牙が突き出ている。それはまるで、現実では大昔に絶滅したサーベルタイガーの様な――。

血相を変えて向かってくるエリエの姿を見つけ、ミレイニが嬉しそうに手を振る。

「エリエー。助けに来てあげたしく」

「……………ブチッ！」

エリエの方から血管の切れる音が聞こえて来たと思うと、そこにはすでにエリエの姿はなかった。その直後、ミレイニの視界の前にエリエが現れる。

顔を引き攣らせると、次の瞬間には満面の笑みで微笑んでミレイニの頬を掴む。

「……………どうして、待ってるはずのあんたここに居るのかしら？」

「いはいいー。いはいいー。ほっへうえらないえほひいひっ」

笑いながら怒っているエリエはミレイニの頬を引っ張り続けると、ミレイニは両手をバタバタと振っている。

そんな中、エリエは重要なことを思い出す。

「そう言えば星はどうしたのよ！　もしかして一緒に来てはぐれたとかじゃないでしょうね！」

「はあす、はあすはら、はあしてほしいひっ」

頬を引っ張っているミレイニがエリエの両腕を懸命に叩く。眉を吊り上げたままミレイニの頬から手を放すと、ミレイニは引っ張られた頬を撫でながら話し始めた。

「……星ならきつと街の門の所だし。エリザベスに乗って来たから追いつけないと思って追いかけるのを止めたと思うし」

その直後、ピクツとエリエの眉が微かに動く。

「……追いかけるのを止めたと思う？ 実際はどうなのよ！」

「あつ！ は、はな……鼻を引っ張らないでほしいし」

両手で頬を押さえてガードしていたミレイニの鼻を引っ張っていると、地面にいたジャガーの様な獣系モンスターが吼える。

エリエを真っ直ぐに睨みつける威嚇の視線に、珍しくエリエの背筋に悪寒が走った。

「ちよつと、あのモンスターはなんなのよ。説明しなさいよ」

「ん？ ああ、あれは古代獣王サーベルタイガーのシャルルだし」

「サーベルタイガーなのは見れば何となく分かるわよ！ てか、すぐくこつちを睨んでうなつてるんだけど……」

今にも噛み付きそうな勢いでグルグルルツと低いうなり声で威嚇するサーベルタイガーに、さすがのエリエも顔を引き攣らせてたじろぐ。まあ、理由はエリエがミレイニに危害を加えていると考えたシャルルの、主人を守ろうとする防衛行動なのだろうが……。

つと、のんきにそんな話をしている2人の所に大量の黒い剣と盾を装備したりザードアーマー達が続々と集まってくる。どうやら、小虎が強過ぎる為に逃げて来たものが弱そうな方へと流れてきた——と言ったところだろう。

真剣な面持ちに切り替わったエリエが、ケルベロスの背中から地面に飛び降りレイピアを構える。

緊迫した雰囲気の流れていると、その空気を吹き飛ばす様にミレイニの幼さの残る声が辺りに響く。

「今だし！ アレキサンダー、エリザベス焼き尽くしてやるし！」

——ガオオオオオオオオオオオツ！！

主人の掛け声に素直に答えアレキサンダーが炎を吹き出し、それに

続くようにエリザベスの3つの頭から同時に炎が吐き出される。

炎はあつという間に辺りにいたモンスターを包み込み撃破していく。だがその直後、上機嫌に胸を張って「ざまあみろだし!」と言ったミレイニの耳に、エリエの怒鳴り声が飛び込んで来た。

「ちよつと! 火を出すなら出すつて最初に言いなさいよ! 髪の毛が少し焼けちやつたでしょ!」

「あはははっ! なんだしその頭。バカみたいだし!」

頭の上部が炎で焼かれチリチリになっているエリエの頭を指差して、ミレイニがお腹を抱えて笑い出す。

エリエは今にも襲い掛かりたい衝動を抑え、前を向き直すと敵を見据える。

強力なエリザベス達の攻撃でも全く数が減らないモンスターの集団に、どう対処すべきなのかエリエも攻めあぐねていた。

デイビッドとカレンが相手にしているミノタウロスは、斧と槍を合体させた様な武器ハルバードを手にしていて、その攻撃範囲の広さになかなか思うように攻撃できなかつた。

自分の頭上でハルバードをブンブンと振り回すミノタウロス。その巨体が対峙する2人を見下ろし、ニヤリと不敵な笑みを浮かべている。

そこへ刀を構えたデイビッドが斬り掛かる。

「はあああああッ!!」

向かってくるデイビッドに対して、ミノタウロスのハルバードが振り抜かれた。

——ブオオオオオオオオオッ!!

空気を切り裂き向かってくるハルバードの刃を、咄嗟に刀身でガードしたデイビッドが軽々と飛ばされてしまう。直ぐ様、ハルバードを振り抜いてできた隙を突いて、カレンがミノタウロス目掛けて走り出す。

だが、ミノタウロスはそれを読んでいたかのように右足を大きく突き上げ、地面を大きく踏みつける。

巨大な足で踏み付けられた地面が割れたかと思うほどに土埃が上がり、巻き上げられた土砂と風圧でカレンの体を押し戻す。

ミノタウロスが天を仰いで咆哮を上げると、今度はデイビッドが斬り掛かった。

「喰らえー！ アマテラス!!」

デイビッドの持つ刀の刀身から赤黒い炎が地面を走り、ミノタウロスへと一直線に向かっていく。しかし、その攻撃が当たる前にミノタウロスが地面を踏み荒らし、巻き起こった土煙で掻き消されてしまう。

炎霊刀 正宗の武器スキル『アマテラス』は敵の攻撃をも飲み込んで威力を上げていく能力を持つのだが、技ではないものは飲み込めずダメージ総数値以上の土砂で掻き消されてしまったのだ。

「くっ！ アマテラスでもダメなのか」

地面を踏む荒らしているミノタウロスを見上げ、悔しそうにデイビッドは唇を噛んでいる。

その刹那。巻き上げられていた砂煙の中からカレンが跳び出す。

一瞬の間にミノタウロスの眼前に現れ、カレンが拳を握り締めると左頬目掛け勢い良く振り抜く。

「吹っ飛ばええええええッ!!」

攻撃を受けたミノタウロスの巨体が揺らめき体勢を崩すのを見て、カレンが得意げな表情で控えめにガッツポーズを決める。

つとその直後、ミノタウロスの赤い瞳が見開き、その巨体が想像もできないほど機敏に動くと、空中にいるカレン目掛けて得物を振り抜いた。

「……なっ!？」

自分の5倍ほどもあるミノタウロスの予想外な機敏な動きに、対応できずまともに攻撃を受けてしまう。

辛うじてガードはしたものの、ハルバードの柄の部分に吹き飛ばされ、勢い良く地面に体を強く叩き付けられてしまった。

体勢を立て直したミノタウロスが咆哮を上げ、追い打ちを掛けるように得物を頭上に掲げる。

「まづい……」

デイビッドは直ぐ様、地面に倒れているカレンの元に駆け出す。

ハルバードの刃がカレンに届く既の所で、デイビッドがカレンを抱きかかえて地面を転がる。

ミノタウロスの攻撃が地面に辺り砂埃が巻き上げられ、それに乗じてデイビッドが木の陰に一時的に身を隠した。

作戦決行4

体制を整える為、一時的に物陰に息を潜めると、意識を失っているカレンの頬を軽く叩いて目を覚まさせる。

「カレンさん。早くHPを回復して、動けるようになったら小虎君と合流してくれ」

「でも、デイビッドさん。1人であれを相手するのは……」

「……いや、そうでもないさ。マスター達が来るまでの時間稼ぎはできる。それにほら……」

デイビッドが辺りを指差すとカレンもその差す場所を見た。

そこには多くの雑魚モンスター達が、目をギラギラさせながら一定の距離を保った状態で待機している。

おそらく。ミノタウロスの攻撃範囲に入って、同士討ちを防ぐ為のプログラムが施されているのだろう。

ミノタウロスは辺りの木々を手当たり次第に薙ぎ払い、姿を消した2人を探している。カレンの攻撃を受け激昂しているのか、大きなハルバードをとこころ構わず振り回すその姿はまるでバーサーカーだ——デイビッド達が見つかるのも時間の問題だと思われた……。

「もう隠れているのも限界だろう……他のメンバーの所に行かれるのもまずい。俺はいくから、カレンさんは早く回復を！」

「——ちょっと、デイビッドさん！」

止める声よりも早く木の陰から飛び出していったデイビッドの背中を見送り、カレンが急いでヒールストーンを頭上に投げてHPを回復する。

急に視界に入ってきたデイビッドを見て、ミノタウロスが嬉しそうにニヤツと笑い天を仰いで咆哮を上げた。

デイビッドは神妙な面持ちで刀を構えると、大きく叫んで突っ込んでいく。

突撃してくるデイビッドを見たミノタウロスの瞳が大きく見開き、手に持っているハルバードを振りかざす。

雄叫びとともに力強く振り下ろされたハルバードの刃をかわし、デ

イビツドが地面を蹴って跳び上がる。

デイベツドは柄を握る両手に力を込めると、ミノタウロスの胸に大きく刀を振り抜く。その巨体の胸元に、斜めに大きな斬り傷が付いた。

——ブロオオオオオオオオオオオオッ!!

苦痛に口から体液を撒き散らし、天を仰ぎ咆哮を上げたミノタウロス。

だが、すぐにその赤い瞳がデイベツドを捉え拳を振り抜く。

その拳が当たる直前、デイベツドの体が赤く光り、地面を球の様に転がったが彼はすぐに体制を立て直し。

「はあああああッ!!」

雄叫びを上げたデイベツドが間髪入れずに、再度ミノタウロスに攻撃を加えた。だが、今度は怯むどころかミノタウロスもすぐに反撃してくる。

ノーガードで互いに激しい攻撃を繰り返し、HP徐々に減少していく。だが、攻撃を受ければ受けるほど、デイベツドの体を覆う赤い光が強くなっていく。

デイベツドのHPゲージが危険域のレッドゾーンに突入した時、今まで肉薄した接近戦を繰り返していた彼がミノタウロスの体を蹴飛ばし、その反動を利用してあからさまに距離を取った。

「これだけ削れば十分だろ！ 行け。アマテラス！」

振った刀身からは赤黒い炎が先程とは比べ物にならないほどの勢いで、ミノタウロスに向かって放たれた。

ミノタウロスは先程同様に地面を踏み荒らし土煙を立てて掻き消そうとしたが、その程度の小細工が通用するレベルの勢いの炎ではない。先程の炎とは桁が違う……。

波の様に押し寄せる赤黒い炎がミノタウロスの全身を飲み込み、断末魔の叫びを上げながら、もがき苦しみながら持っていたハルバードを辺り構わずがむしやらに振り回す。

凄まじい勢いで減っていくミノタウロスのHPゲージを見て、デイベツドはやりきった表情でその場に倒れ込む。地面に大の字になっ

たまま円状になっている自分のHPバーの残量を確認して、呆れたように苦笑いを浮かべた。

「ははっ、ほんとギリギリだったな……」

小さく呟いた彼の言葉通り。HPバーは残りわずかで円の中心に表示されている数字は『15』だった。デイビッドの元のHPが上限値の『1000』だから、本当にギリギリだったことが良く分かる。

笑いながら上を見上げているデイビッドの視界に、赤黒い炎に包まれた激昂するミノタウロスの姿が映る。

「——なっ!?! まだ動けるのかッ!?!」

咄嗟に動こうと体に力を入れたが、ダメージを受けすぎたせいなのか、体が思うように動かない。

咆哮を上げながら振り下ろされたハルバードの漆黒の刃を見つめ、諦めにも似た笑みを漏らす。

デイビッドは『まあ、ミノタウロス一体と相打ちなら、十分か……』と思いながらゆっくりと瞼を閉じた。その直後、ミノタウロスの叫びが聞こえて閉じた瞼を開くと、カレンに殴られたミノタウロスの巨体が揺らいで倒れる姿が彼の目に映った。

地面に倒れたミノタウロスの体が光に変わり、振り返って微笑むカレンだけがその場に残った。

「油断しすぎですよ、デイビッドさん。敵を撃破する前にそんな格好をしているなんて」

「……ど、どうして君が、まだここに?」

驚きを隠せないと言った表情で、見開いた瞳を彼女に向けるデイビッド。

そんな彼に、当たり前のようにカレンが言葉を返す。

「どうしてもなにも、俺は師匠の言葉に従っただけです。『雑魚に構わず、ミノタウロスを撃破しろ』と……それとこれを!」

カレンがデイビッドに向けてヒールストーンを投げると、ヒールストーンがデイビッドの空中で緑色の光を放つ。

同時にデイビッドのHPが上限まで回復して、ヒールストーンは輝きを失ってただの石に戻る。

だが、HPが回復したからと言って油断できないのが、この【FR EEDOM】というゲームの仕様で、ダメージを受けるとHPの減少とともに血は出ないが負傷も負うことになる。

負傷を受けた状態でダメージを受けると、負傷がない状態よりも多くのダメージを受けることになってしまう。

HPや異常状態はそれぞれのストーンで回復できるものの、負傷だけは宿屋などでしか回復することはできないので、戦闘をして怪我をすればするほど、HP管理が難しくなってしまうのだ――。

しかし、ミノタウロスを倒してほっと一息つくのも、どうやら敵は許してはくれないらしい。

2人を取り囲むようにして、雑魚モンスター達が血の気の多い眼差しで得物を構えている。

まあ、雑魚とは言ったものの、全てのモンスターに村正と同じ物を持たせている以上。レベルやステータスは上限であるLv100の状態まで強化されている為、一体一体が手強いのだが。

スケルトン、ゴブリン、リザードマン、オークの下位、上位種の入り混じった無数のモンスター達の殺意に満ちた突き刺すような視線を受け、2人も気を引き締めた表情にならざるを得ない――気を抜けば敵の勢いに飲み込まれそうなほど、モンスター達の放つ闘気は凄まじかった。

覆面の下の企み

自分と同じ大斧を手にしたミノタウロスとの戦闘を繰り広げていくメルデイウス。

ミノタウロスの咆哮とメルデイウスの上げる怒号が混ざり合い、互いの大きな斧の刃が激しく火花を散らしてぶつかり合う。その後、大きな爆発音と爆風にお互いの体が吹き飛ばされるように離れた。

空中で体勢を立て直したメルデイウスが地面を踏ん張って止まる。ミノタウロスも爆風で後方に押し出された体を、前のめりになりながらも地面を足の鋭い爪で引っ掻き止める。

互いに突き合わせた顔には楽しそうだが狂気じみた笑みを浮かべ、すぐにお互いのまた得物を構えながらぶつかっていく。

「うらあああああああッ!!」

——ブロオオオオオオオオオオオオツ!!

空中に飛び上がり咆哮を上げながら振り抜いた大斧の刃が激しくぶつかり火花を散らす。

交差するように互いの後方に降り立ち、ほぼ同時に走り出し再び互いの得物をぶつけ合わせると大きな爆発が起こり、また一気に距離が離れた。

不敵な笑みを浮かべたミノタウロスが天を仰ぎ吼える。

その姿を見て、メルデイウスが不機嫌そうに睨む。

「——ゲテモノの分際で……俺のベルセルクと互角にやり合えるとはよ。褒めてやるぜ……だがな! 俺には時間がねえーんだよ!!」

正面に大斧を構え直し、メルデイウスが大声で叫ぶ。彼が時間がないうというのには訳があった……。

* * *

各ギルドマスター達との話し合いを終え、すぐのことだった——城の屋根の上。マスターが月を見上げていて、その手には盃が乗っている。

感慨に耽る様子で夜空を見上げているマスター。

「……まさに絶景だな」

空を流れる雲の中に浮かぶ丸い月から差す光が、手にある盃の中に映り込んでいた。

つとその時、盃の中に映し出された月が揺れる……。

すると、そこに彼の横にメルデイウスが現れた。頭を掻きながらメルデイウスは少し呆れながらに言う。

「こんな場所まで呼び出して、何かと思えば酒盛りかよ。明日戦闘だつてのにいいご身分だな！」

「ふん。まあ、お前も一杯やるといい」

マスターの差し出した盃を受け取り、メルデイウスはその場に胡座を掻いて座る。

その後、マスターが笑みを浮かべ盃に急須に入った無色透明の液体を並々と注ぐ。

自分の手に持っていた盃をメルデイウスの盃に近付け掲げると、それを一気に飲み干す。

メルデイウスも訝しげに眉をひそめながらも、持っていた盃を口に運ぶ。

つと、その盃を一口呑んだ直後、彼が固まった様にその手を止めた。

それもそのはずだ。その盃に注がれていた液体は酒ではなく水……つまり水盃だったのだ——。

驚いた様にマスターの方に目をやると、彼は微笑みを浮かべ静かに頷く。

水盃——これが意味するのは今生の別れになると、覚悟した時に酌み交わすもの。これが何を意味しているのか、メルデイウスにはなんとなくマスターの考えが分かった気がした。そして、ここに彼が自分を呼んだ意味も……。

マスターとメルデイウスはベータテスト版からの付き合いではないにしても、相当長い年月ゲームを共にしていた戦友のようなものだ。

「ジジイ……お前、まさか……」

盃をゆつくりと地面に置き、メルディウスは目を大きく見開く。

何も言わなくても、マスターの考えていることがメルディウスには手に取るように分かった。あの作戦会議の最初に口にした言葉——あれが指した本当の意味は……。

「——メルディウス。ビッグバンの効果範囲を教えてくださいませんか？」

「おい！ 冗談はよせ！ ビッグバンって……そんなもんをこの状況で使う気かよ！ 洒落になんねえぞ!!」

憤るメルディウスだったが、マスターの真剣な眼差しを受け、その胸の内では彼の決意が痛いほど伝わってきた。しかし、それを素直に受け取るわけにはいかないのも事実。その根底にあるのは、マスターのことを慕っている紅蓮のことだった。

彼女のことだ。マスターが死んだとなればいつも冷静なその顔が、哀惜の念に歪むか分からない。

とても容認できるものではない『それならいつそ自分が……』そう思った時には、すでに口が動いて言葉を発していた。

「避けられないなら……俺がやる！ 俺の固有スキルだ。誰よりも俺が良く知っている。付け焼き刃でどうにかなるようなもんじゃねえー!!」

声を荒らげるメルディウスの肩に手を置き、マスターが俯き加減にゆつくりとした口調で告げた。

「……分かっておる。だが、お前にやらせるわけにはいかない」

「どうしてだー！」

なおも憤りを抑えられないメルディウス。

それとは対象的にマスターは落ち着いた表情で、空に浮かぶ月を見上げた。雲に微かに隠れていた月の姿が、今ははつきりと現れている。

「……儂はもう十分に生きた。多くを体験し、そして多くを見てきた。世の中の良い所も悪い所もな。もう老骨だ……しかし、お前はまだ若い。もっと様々な物や人とふれあい、成長できる可能性を秘めている。それにな……若い者を死なせ、残り短い生涯にしがみつくことほ

ど惨めなものはない。勇ましいのも結構だが、儂の人生の最後に花を持たせてはくれぬか？ 若者よりも先に逝くのが老いた者の美德というものだ……メルディウスよ。儂を老害にさせないでくれ！」

そしてマスターの瞳が月から外れ、今度はメルディウスの目を見据える。

マスターの瞳の奥にある炎の様に燃えたぎる信念が、彼の言葉を更に強く拒めないものにしていった。

「……ギルマス。分かった。だが、ビッグバンは最終手段だ。俺はあんたを死なせるつもりはねえーからな！」

そう告げると、アイテムの中からメルディウスは酒瓶を取り出す。

それをマスターの盃に注ぐと、すぐに自分の方の盃にも注いでマスターの前に突き出す。

「水盃なんて縁起でもねえー!! こいつで飲み直しだ！ 嫌でも付き合ってもらおうぜ！ ギルマス！」

「ああ、付き合おう！」

メルディウスとマスターは互いに笑みを浮かべ、酒を同時に呷って盃を酌み交わした。

夜空に輝く月を肴に2人は落ち着いた雰囲気、互いに言葉少なく盃を呑み干しては注ぐということを繰り返す。

その間に言葉は殆ど交わさなかったが、彼等には言葉以上に分かり合えているのだろう。互いに笑みを浮かべながら夜空を見上げていた。

* * *

何度もミノタウロスに斬り掛かつては、ベルセルクの爆風で吹き飛ばされる繰り返しを重ねていたメルディウス。

しかし、その度重なる攻撃で得た成果は十分にあった……。

まだ綺麗な金色のままのベルセルクと違い。ミノタウロスの持っていた大斧は刃先が少し欠けている。まあ、あれだけの爆発を刃で受けていれば、武器の耐久力が落ちてくるのも仕方がない。

だが、どうしてメルデイウスのベルセルクは大丈夫かと言うと、それは至ってシンプルな理由で、彼のベルセルクはトレジャーアイテムだからだ。

トレジャーアイテムは特定のダンジョンなど、期間限定でしか入手できない為、通常武器よりも耐久値が高め設定されている。その代わりに修理費も大きい……。

そしてミノタウロスが使っている武器は市販のものではない——その為、制作に使用した素材の質などが影響しているのだろう。

まあ、他の街にも派遣している数十万の部隊に同じ武器を持たせているとなると、入手が容易な素材を使用していると見てまず間違いない。

メルデイウスがベルセルクを構え直して渾身の力で振り抜くと、それを受け止めたミノタウロスの大斧が砕け散る。

「これで終わりだな！」

丸腰になったミノタウロスが威嚇のつもりなのか、咆哮を上げたがメルデイウスには効果がない。

空中でベルセルクを大きく振り上げ、ミノタウロスの首筋に炸裂し爆発を起こす。

その勢いを利用し刃を反転させると、大人の身長ほどもあるその大きな刃が反対側の首筋に突き刺さる。

「——わりいな。俺達のギルマスを……死なせるわけにはいかねえーんだよ!!」

ミノタウロスの首を切り落として、地面に着地すると冷たい目で光になって空へと上がっていくミノタウロスを一瞥して、ベルセルクを肩に担いで走り出す。

前を立ち塞がる様に向かってくるモンスター達にベルセルクを振り下ろし、爆風で吹き飛ばしつつ、森の中を突っ切ってマスターのいる場所を目指し突き進んでいく。

覆面の下の企み2

空中でルシファーと幾度となく剣を打ち合わせる中、地上では立ったまま動かないエミルとイシエルに向かって、次々に襲い掛かってくるモンスター達に巫女服を纏ったイシエルが神楽鈴を鳴らす。

その直後、突風が吹き荒れモンスター達を、原形を留めないほどに細切れに引き裂いていく。

巫女という神々しい存在にも関わらず、イシエルはモンスター達に全くの感情のない冷酷な眼差しを向けて、ただただ作業の様に淡々と神楽鈴を振る。

モンスター達は為す術なく断末魔の叫びを上げ、光となって天に吸い込まれていく様に上がって逝った。

淡々とした戦闘をしている地上と違い。上空では激しい攻防が繰り広げていた。

翼を大きくはためかせながら、2体の巨大な墮天使と竜人が空中で激しく両手に持った剣を打ち合わせる。

つと突如距離を取ったルシファーが翼を大きく広げ、漆黒の羽根をリントヴルム目掛けて放つ。

それをリントヴルムZWEIが口から噴射した炎で焼き払う。しかし、無数にホーミングしてくる羽根を落とすきれない。あぶれた羽根は即座にリントヴルムの持つ剣が叩き落とす。

それでも落とせない分は、そのダイヤモンドの体で受け止めた。いくらダイヤモンドと言えど、HPが無限な訳ではない——ダメージカットは目を見張るものがあるが、ただそれだけである。結局はダメージの軽減しかできないのが現実だ。

HPが減少する中、リントヴルムZWEIがルシファーに炎を吐き出す。ルシファーはそれを剣で受けるが、防ぎきれずに漏れ出た炎でHPが減少する。

HPはリントヴルムZWEIのダイヤモンドの体を考慮しても、ほぼ互角——互いに一步も引かないルシファーとリントヴルムは空中で幾度となく体制を入れ替えながら激しくぶつかり合う。

漆黒の双剣と金色の双剣が激しく火花を散らす。だが、結局その刃が互いの体に触れることはない。結局は遠距離攻撃でのHPの削ぎ合いになっていた。

今はエミルの五感の全てがリントヴルムZWEIとリンクしている為、これほどの戦闘を行っているが、リントヴルムZWEIだけならばこうはいかなかっただろう。

HPの残りもあと僅かとなり、今まで冷静な立ち回りをしてきたがリントヴルムZWEI積極的な攻勢に転ずる。

あからさまに大振りになる攻撃により、今まで体に触れることのない剣が当たりがくつとHPが減る。だが、その攻撃の返しでリントヴルムZWEIの双剣がルシファアの両側の翼の付け根を捉え、そのまま一気に切り落とす。

浮力を失い上空から地上に真つ逆さまに落下して、ルシファアの落ちた場所から大きな土煙が上がる。

——グオオオオオオオオオオオオツ!!

リントヴルムZWEIが大きな咆哮を上げると、上空から急降下して地面に落ちたルシファア目掛け両手の剣を突き立てる。

その攻撃がルシファアの胸に突き刺さり、日本の黄金の剣が胸に突き立てられた状態で膨大だったHPが尽き、その大きな巨体も粒子状になって消えた。

直後。リントヴルムZWEIの腹部に大きな傷が付いていて、HPバーが『0』の数値を示し、徐々にその姿が薄れていき消える。

結果的に相打ちだが、消滅時のエフェクトを発生し消えたがリントヴルムZWEIの場合はまだ一時的に消失しただけだ。エミルの固有スキルによって出現しているリントヴルムZWEIはHPがなくなくても、再使用に5時間のクールタイムが設けられている。

リントヴルムが消え、エミルの体へと意識が戻り。

「——痛った。でも、これでルシファアは倒したわ……」

明らかに疲弊しているエミルにイシエルが慌てて駆け寄る。

地面に膝を突いたまま、荒い息を繰り返しているエミルの肩に手を置く。

「エミル！ 大丈夫なん？ 痛覚の共有はあるんやろ？」

「ええ、大丈夫よイシエ。でも、リントヴルムZWEIをやられたのは大きいわね……」

悔しそうに表情を曇らせるエミルの言葉を聞いたイシエルが微笑んだ。

「あのルシファーと相打ちならええやん。それより——」

急に鋭い視線を向けイシエルが手に持った神楽鈴を振るう。

武器を持って襲い掛かってきたゴブリン5体が一瞬にして切り刻まれ、地面に落ちるより早く光に変わり空へと消えていく。

エミルも慌てて両手に持つ双剣を構えて辺りを見渡すと、数千という敵に囲まれている。

「……ボスを倒しても、まだまだおかわりはたくさんいるってわけね……」

「ふふっ、おかわり自由やね！ デザートはうちでええ？ エミル」

「もう！ 茶化さないでよね。イシエ」

イシエルはクスクスと悪戯に笑うと「わりと本気なんやけどな」と小悪魔的に呟く。そんな彼女の言葉を軽く聞き流すと、エミルはイシエルと背中合わせに立つ。

周りには得物を構えて、今すぐにも獲物を狩ろうと口から唾液を撒き散らせ、鼻息を荒くしているゴブリン種に、カタカタと歯を打ち鳴らしているスケルトン種、不気味な爬虫類独特の先端の分かれた舌を伸ばしているリザードマン種など、様々な種類のモンスターが黒く鋭利に輝く武器をエミル達に向けている。

「……信賴してるわよ。イシエ」

「ふふっ、うちもしんら……ううん。愛しとるよ。エミル」

敵の大群を前に真剣な面持ちで剣を握るエミルの背中で、微笑みを浮かべたイシエルもすぐに顔を引き締めた。

ベルセルクを振り回し爆発を起こして派手に敵を吹き飛ばして、文字通り森を『爆・走』するメルデイウスの眼前に、道着を着た白髪を後ろで結った屈強な男が拳を振るっている姿が飛び込んで来た。ま

あ、その男は紛れもなくマスターなのだが……。

「はあああああああッ!!」

気合いを入れて拳を振り抜くと、数十体の敵が中に舞う。

その光景にはゲームバランスという言葉は存在しないのだろうと思ってしまうが、最早それも見慣れた光景だ。

地面の強く蹴って跳び上がったメルディウスが、負けじと敵の集団の中にベルセルクを振り下ろし、敵を爆風でまとめて数十体を吹き飛ばす。

こつちも数十という敵が宙に舞い上がって光が変わる。トレジャーアイテムを使っているとは言え、メルディウスもゲームバランスを超えていると言わざるを得ないだろう。

まあ、このゲーム【FREEDOM】は元々プレイヤーの身体能力に特化しているゲームである。

どういうシステムなのかは分からないものの、神経の信号の動きや血管を流れる血流の遅い速いで判断しているなんて説もあるが、実際のところは謎に包まれている。

ハードとして確立しているものの、リングの構造は解体すると重要なシステムが破損して起動できなくなってしまう。

だが、もちろんゲームシステム内にバックアップが取られている為、キャラクター名と個人情報を入力すると新規のリングでも新規か更新かを選ぶので、データが消失するということは絶対はない。しかし、動作に関してはステータスとプレイヤーによって若干の違いがあるのは事実である。

突然のメルディウスの登場に驚いたのか、マスターが目丸くさせながら彼の姿を見た。

「——よう、ギルマス。まだスキルは使用していないようだな」

「当然だ。儂のスキルは使用するとHPの回復ができない上に、24時間の使用制限が掛かってしまうからな」

それを聞いたメルディウスがニヤリと不敵な笑みを浮かべ、ベルセルクを肩に担ぐ。

マスターが不機嫌そうに目を細めている。

「いや、別にバカにしてるわけじゃない。ただ、化け物レベルのアンタでも。さすがに、この量を相手にするのはHPを回復せざるを得ないんだと思ってよ。安心しただけだ」

「ふん。ただの保険だ……」

「……だろうな」

互いにそう呟いて笑うと、会話をしているのにも構うことなく向かってくる敵を次から次へと打ちのめしていく。

向かってくる敵の勢いが少なくなると、マスターが徐に口を開いた。

「——ルシファーが消えた直後。すでに第二陣の者達には救援の要請を出している！ もうしばらく持ち堪えれば援軍も来る！」

「ほう。それは嬉しいねえー。さすがにこの数を相手に、制圧戦は厳しいからな！」

突如駆け出したメルディウスが、ベルセルクを振り回して敵を無差別に斬り伏せていく。マスターもそれに負けじと、目の前の敵を次々に殴り倒す。

2人を取り巻くように、キラキラと粒子状になった元々モンスターだったものが舞い上がり、彼等の周りがまるで別のゲームのような幻想的な世界へと変わっていた。

最初からこの作戦自体、ボスを撃破することを目的にしていた為、救援が来るまでの間。各自の判断で生き残らなければならなかった。

もちろん。突然戦線に入ってきたミレイニ意外の皆がそのことを了解した上での作戦だったのだが、さすがに休みなく襲い掛かってくる数万のモンスターを個人が撃破し続けるのにも限度はある。

モンスターは疲労せずいくらでも代えが利くが、プレイヤーは負傷も疲労もするし、アイテムにも限りもあるのだ。各自ボスとの戦闘を終えたメンバー達がそれほど長い間、凌げる力が残っているはずがない。だが、そんな心配もすぐに無駄になることになる……。

覆面の下の企み3

モンスターに囲まれた遙か先に、馬に乗って武装したプレイヤーの波が押し寄せてくるのが見えた。

砂煙を上げて滑走してくる馬の大群が徐々に消え、プレイヤー達がモンスターの大量に得物を振りかざしてぶつかっていく。

辺りにプレイヤーの怒号とモンスター達の断末魔が響き渡り。今までは強気に飛び掛かってきたモンスター達も援軍の数に恐れをなしたのか、大した抵抗も見せずに意外なほど呆気なく背を向けて後方へと撤退を開始した。

突如、戦意を失い撤退を開始した敵にメルデイウスが歓喜する横で、マスターだけはその行動に不審そうに眉をひそめていた。

そのモンスターへの行動は他のメンバー達の所でも同じだった。

デイビッドとカレンの所では――。

「デイビッドさん。見てください！ 敵が逃げていきますよ！」

「ああ、やっと終わったのか………はあ〜」

情けないほどのため息について、倒れるように地面に寝転がる。しかし、それはカレンも同じようで、大きなため息を漏らしてその場に座り込んだ。

2人共多くのモンスターを相手にして、相当気を張っていたのだろう。そんな時、後方に退いていく敵を見つめ、カレンが不思議そうに首を傾げた。

「でも、どうして逃げるんでしょうね」

「ん？ そんなのこっちの味方が来たからじゃない？ ほら、エミルがルシファーを倒したからね！」

「……そうですね。師匠が何かしたのかもしれないですし！」

カレンは満面の笑みで頷くと、デイビッドも力強く頷き返した。

そこにネオと小虎が叫び声を上げながら、逃げる敵を斬り付け進んでいくのが見えた。その後ろを他のプレイヤーも血眼になって敵を追い回し撃破している。

逃げる数万の敵二千足らずのプレイヤーが追い掛け回す構図は、何

とも夢があつていいものだ。

そして、エリエとミレイニのチームの所でも――。

「ちよつとミレイニなにしてんの！ 早くそいつから離れなさい!!」
「嫌だし！ こいつは……絶対ゲットするし！」

暴れる大きな漆黒の狼の背中にながつしりとしがみついているミレイニ。

エリエは跳び回り走り回ったりして暴れる漆黒の毛並みの狼に、威嚇する様にレイピアを向けている。もしもミレイニが背中から振り落とされれば、エリエはなんの躊躇もなく攻撃するだろう。

だが、ミレイニは離れるどころか、まるでロデオの様に巧みに乗りこなしていた。

前にサンシヨウウオに乗っていたこともあるが、ビーストテイマーだけあって、こういうのには慣れているのかもしれない。

すると、ミレイニの体が黄色い柔らかな光を放ち波紋のように広がり、徐々に暴れていた狼が大人しくなっていく。そして完全に暴れるのを止めた頃には、攻撃的だった赤いその瞳が優しいものへと変わる。

ミレイニはすっかり大人しくなったその漆黒の毛を撫でると、ゆっくりとその背中から地面に降りた。そこに、レイピアを柄に収めたエリエが恐る恐る近付いてくる。

「……ミレイニ。これってフェンリルでしょ？ 大丈夫なの？」

「うん。フェンリルだし！ そんなに警戒しなくても、もうだいじよぶだし！ この子はペリーにするし！ ねえ、ペリー」

前足に抱き付いたミレイニの頬を、ペリーが優しく舐める。どうやら、その名前が満更でもないらしい……。

呆れ顔のまま、左手で額を押さえた。もちろん、その理由は彼女のペットに付けるネーミングの問題である。

「あんたのそのネーミングセンスはどうかならないの？ あんたが乗ったらペリーが黒船でしょうが……」

「黒船？ 黒船と間違ってるし？ あはははっ、エリエ。黒船を黒船と間違えるとか――色しか合っていないし、ほんとバカだし！」

ミレイニが自分を指差して大声で笑い声を上げるのを見て、エリエは拳を握り締めて。

「……ミレイニ。後で見えてなさいよ〜」

つと呟く。まあ、こんなところでミレイニを攻撃すればフェンリルや、ミレイニの他のモンスターに攻撃されかねない。特に今もエリエに向かって鋭い視線を向けて、殺気を放っているサーベルタイガーのシャルルにだが……。

その頃、エミルとイシエル達はと言うと――。

援軍の到着にほつと胸を撫で下ろしたエミルが、大きく息を吐いてイシエルの方を振り向く。

イシエルは優しく微笑みを浮かべ、手を後ろに組んでゆっくりとエミルの隣に歩いてくる。

「なんや。もう、うちの圧勝って感じやねえ〜」

「ええ、どうして撤退した理由はなんなのかは分からないけどね。何か裏がないといいけど……」

難しい顔で考え込むエミルの肩をイシエルが軽く叩くと、微笑みながら言った。

「エミルは考え過ぎやよ。単に急な強襲とボスの撃破やる？ 最も分厚い場所を抜いとるんよ。そら敵も焦って当たり前やし。状況を少しでも立て直すための撤退と見て間違いないんとちゃうん？」

「……そうね。私もそう思うわ」

笑顔で微笑み返すエミル。そんな彼女の頭を強引に引き寄せると、自分の胸元にぎゅと押し付け優しく抱きしめる。

突然の行動に驚いたエミルは、がらにもなく慌ててじたばたと手を振り回す。

「――頑張るんは、エミルのええとこやけど……無理だけはしたらあかんよ？ うちはなにがあってもエミルの……エミルだけの味方やからね……」

「……ありがとう。イシエ……」

エミルがイシエルの背中に腕を回すと、イシエルも同じようにエミルの腰に手を回してぎゅつと体を抱き合う。

静かに瞳を閉じて抱き合うと、2人は互いの存在を確かめ合うように更にきつく抱き合っている。その直後、エミルの視界とイシエルの視界にマスターからのピピッとボイスチャットのメッセージが表示された。

不機嫌そうに眉をひそめるイシエルと、驚いたように目を見開いたエミルがボイスチャット開始のボタンを押す。

『皆、敵にしてやられたぞ！ 街を囲むように配置されていた敵が全て消えた！ 目の前にいる敵はフェイクだ！』

鬼気迫る彼の声音に、2人は驚きを隠せない表情をして互いに顔を見合わせる。

「……マスター。なにを言っているのか……フェイク？」

『そうだ！ バロンが交戦していた敵部隊が突如、無数の魔法陣で消えたらしい！ 詳細は不明だが、これ以上前方に出ないように周りの者達に通知してくれ！』

「ええ、分かりました。なんとかやってみます！」

普段のマスターの姿からは想像も付かないほどの彼の慌てた様子に、エミルは隣にいたイシエルと顔を合わせて深く頷き合う。だが、その時にはすでに全てが遅いと彼女達はすぐに知ることになる……。

マスターとの交信を切った直後、エミルとイシエルの耳にモンスター達の咆哮が聞こえ彼女達はその方角を見ると、今まで味方が走っていた後方の森の中から次々と青白い光が立ち上がり、突如として現れた魔法陣の中からモンスター達が続々と姿を現わした。

そう、敵は撤退していたのではなく、その目的は攻撃専門の部隊をなるべく始まりの街から離す為のものだったのである。

しかも、無数に召喚できる魔法陣により、街を囲む部隊の全てをエミル達の後方に召喚させることで、後衛部隊との断絶を可能にした。また、前後をエミル達を敵に挟まれた状況に陥らせ包囲殲滅戦を仕掛けることもできる。

それだけではなく、敵はこちらが即席で集めた連合軍であることも想定に入れて囷の雑魚モンスターだけを残して、連合軍を街から遠ざけて主戦となる中ボスクラスのモンスターで街を囲んでいる。

まさに変幻自在の戦法だ——だが、モンスターを召喚できるのであれば、マスターもその可能性を視野に入れていたはず。

しかし、今回はまんまと敵の術中にハマってしまったのは、元々フリーダムにプレイヤーを特定の場所に転移するシステムはあっても、モンスターを意図した場所に召喚できるシステムがなかったからだ。

そう。ゲーム内のモンスターはそれぞれに出現場所を指定されている。それはモンスター同士での戦闘を行いドロップアイテムがフィールドに散らばるのを防ぐ必要があるからであり、システムの悪用を防ぐ為、それはシステムで完全に制御されている。

固有スキルで自分の所有物としたモンスターは別だが、それ以外は全て不干渉とされている類のもの……それを自由自在に動かせるということは想定を遥かに超えた事態だった。

進路も退路も防がれたマスター率いる攻撃部隊は一網打尽にされるか、敵の数が少なく薄い前方を抜き、戦線を離脱する以外にすでに活路はない。

後方に救援を要請しようにも、後方にいる部隊の殆どが防衛を進言した者達で、血の気の多い者等は全てマスターの策に乗り前線に出ている。

従って後方に残された者の殆どが非戦闘員か、防衛を志願した腰抜けプレイヤーという最悪の構図になっていた。

それはつまり。街に残してきた者達を見捨て、二陣に飛び出してきた部隊と共に他の街へと撤退するということだ——。

そして何より……後で街の者達と合流することになっていた星が、後方の街の城門前に取り残されていた。魔法陣から次々と召喚され、徐々に数を増やす敵にエミルの表情は絶望と焦りで真っ青に染まる。慌てて手に持っていた剣を鞘に収めると。

「イシエ後はお願ひ！ マスターと合流して今後の対策を思案して！ 私は最悪の場合は星ちゃんだけでも連れてくる！」

「ちよー…なに言ってるん!? エミル!!」

エミルは召喚用の巻物を取り出し。空中で雑に広げると、笛を吹いてドラゴンを呼び出す。

青く白銀の鎧に包まれた小柄なドラゴンが呼び出され、エミルが直ぐ様そのドラゴンの背に跳び乗る。

「行くわよー！ ライトアーマードドラゴン！」

甲高く鳴き声を上げると、エミルの言葉に応えるようにライトアーマードドラゴンが翼を広げ、素早く上空へと飛び立つ。

止める隙もなかったほどのエミルの素早い行動に、イシエルは口をあんぐり開けたままその場に立ち尽くしていた。

徐々に小さくなるエミルの背中を見送りながら、イシエルが渋い顔をすると彼女に言われた通りマスターの元に慌てて走り出す。

覆面の下の企み4

* * *

明かりのない研究室のような部屋の中、巨大なモニターの光だけが不気味に部屋全体をぼんやりと照らし出している。中央に置かれたテーブルには多くの薬品と書類が乱雑に置かれ、溢れた書類は地面に散乱している酷い有様だ。

そんな部屋の中で、モニターと一体化になった巨大なキーボードを叩いているのは、短い赤髪にメガネを掛けた中肉中背の男だった。

彼はモニターを見上げ、気色悪く不気味な笑みを浮かべる。

「さすがは武闘大会の覇者……一点を突破してくる戦略は潔く見事だが、ここは現実世界ではない。ゲームである事を、彼はそれを理解していない。この世界ではこんな事もできるんだよ……」

口元に不気味な笑みを浮かべている彼の耳にブザーの音が飛び込んでくると、彼は慌てて装備欄に表示されている人形の顔の付近に指でアイテム欄に入った装備品を装備した。

一瞬にして狼の覆面を装着した彼が、落ち着いた手付きでキーボードの端にある扉の開閉ボタンを押す。

すると、まるで仮面舞踏会にでもいそうな、奇抜なマスクを付けた女性がゆつくりと入ってきた。どうして女性と分かったかというのは、彼女の露出の多い服装のはち切れんばかりにせり出した胸元から、女性だと判断できたからだ。

無言のまま振り向くことなくキーボードを叩く覆面の男の背後から、ゆつくりと近付いて来た女が覆いかぶさるように彼の首筋に自分の大きな胸を押し付けた。

その瞬間、覆面の上からでも分かるくらいに目を見開いた覆面の男が突如として腕を振り抜いて、背中に抱き付いてきた女を突き飛ばす。

「——キャッー！」

不意に出た彼の行動に、仮面を付けた女は何もできないまま地面に

倒れる。

文句を言おうと顔を上げた直後、女は狼の覆面の内側から見える獣の様な血走った瞳に恐怖し思わず口籠もった。

怒りを抑えきれない覆面の男は、地面に座れ込んだままの仮面の女に向かって言い放つ。

「貴様！ 汚らしい女の分際で私に触れるな！ 私に触れていいのは大空博士くらいのものだ!!」

「……………」

さすがに言葉を失ったのか、仮面から見える瞳から動揺というか戸惑う様な色が窺えた。

しかし、彼女も一筋縄ではいかない性格らしく。徐に立ち上がると、懲りる様子もなく彼に向かって近付いて行ってゆつくりと口を開く。

「…………あら、誰のおかげで魔法陣でモンスターが転移出来るようになったのかしら？ 少しは感謝してくれてもいいんじゃない？」

「ふん！ 本来、私のラボにイヴ意外の女を入れるなんて考えられんのだがね…………」

不機嫌さを滲み出させたような声音で告げた後、覆面の男が再びモニターの方を見据えた。

「どうやら彼は女性が嫌いらしい。まあ、本来なら胸を首筋に押し付けられればゲームだと分かっているけど、男であれば誰でも鼻の下が伸びずにはいられないだろうが、彼は終始表情ひとつ変えずにモニターと向かい合っている。」

彼が慣れた手付きでキーボードを叩くと、モニターに表示されていたマスター達の映像が小さく端に追いやられ、今度は剣を構えてモニターと対峙している星の姿が大きく映し出される。

「ハハッ…………さあ、イヴ。どうするのか？ 後ろの人間を犠牲にして逃げるのかい？ その羽虫の様なドラゴンが元の姿に戻れば逃げられるはずだが…………まあ、どちらにしても君は絶対に殺さない。君の体をモンスターなんかには傷付けさせやしない。君のその小さな体も心も傷付けていいのは私だけだからね…………」

まるで子供が蟻の巣を突くような、好奇心と残忍さに満ちたキラキラとした瞳で星の映るモニターを見つめていた。

すると、そこに仮面の女が首を突っ込んできた。

「ふうん。こんな幼気な子にまで手を出すなんて……女嫌いもここま
で来ると、感心するわね。さすがは泣く子も黙るマッドサイエン
ティスト様ってところかしら？ でも、私はそういうところも嫌い
じゃないけど……」

色香を醸し出しながらも、先程のこともあるのか仮面の女も今度は
少し距離を置く。

その直後、彼は彼女の予想通り声を荒らげて叫ぶ。

「イヴをお前達の様な俗物共と一緒にするな！ あの子には希代の天
才脳科学者。大空 融の娘にして、決して公の場に出なかつたが、全
ての機械工学の祖とまで呼ばれた先駆者。夜空 光永を曾祖父に持
つ、言わば科学会のサラブレッドだ！ 偉大なるDMAを受け継いだ
存在！ 言わば人類の宝！ 著名な祖父を持ちながら、博士を取った
出来損ないのクソ女とは違う。本物のダイヤの原石なのだ！ そし
て、その原石を磨き上げ、本物のダイヤを完成させた暁には、私の遺
伝子が博士と同じ……いや、大空と夜空の血に、僕の血が入った究極
の子が生まれる！ 言わば神の子だ！ そして後世まで、私の名と大
空博士の名が永遠と語り継がれる事になるのだ!!」

興奮した様子で力説する覆面の男が、無意識に仮面の女の両方を掴
んだ。

「イヴは今のままでも、他のガキ共とは一線を画している！ 私の送
り込んだ試練をクリアするあの知性と判断能力は、賞賛に値する！
故に、あの子の思考力だけを残し、心を完全に屈服させねばならな
いのだよ！」

我に返った覆面の男が、その勢いに恐れ慄いている仮面の女の体
を、慌てて地面に投げるようにして両肩から手を放す。

覆面の男は女が地面に倒れ込むものにも興味を示さず。何事もな
かったかのように、モニターに映る星を見つめ直した。

* * *

街の外壁の門を背にして突如現れた、数え切れないほどの無数のモンスターに剣を向ける星。

だが、その体は彼女の心境を表しているかのように小刻みに震えていた。

つと突然。目の前にレイニールが現れ、鼻先を押し付けるほどの至近距離で叫ぶ。

「主、何をしているのじゃ！ 今はエミルもエリエ達もないのだぞ!? 早く街の中に避難するのじゃ!!」

「……で、でも」

両腕をブンブンと振って、オーバー過ぎるくらいに意思表示しているレイニール。

もちろん。星も逃げたいのはやまやまだったのだが……。

門の先で怯えきった瞳でジリジリと迫りくるモンスターの大隊を前にして、恐怖と絶望感に身を凍り付かせているプレイヤー達を見ていると、どうしてもその場を動くことができなかった。

だが、たとえ星がこの場に立ち塞がったとしても、この絶望的な戦況が変わるわけではない。しかし、このまま自分が街の中に戻ってしまえば城門を閉じられ、戻ってくるはずのエミル達を見殺しにするこ
とになってしまう。

星はエミル達の為にも、街にいる者達の為にもこの場から離れるわけにはいかない。この状況下で信じられるのは、今は亡き父親が残してくれたとライラの言っていたこのエクスカリバーだけだ――。

恐怖で震える体を落ち着けるように、星はその父親の遺品であるエクスカリバーの柄を強く握りしめる。

その時、街の外壁の上から覗き込んでトールの叫ぶ声が響く。

「何をしているんだ星ちゃん！ 早く街の中へ入るんだ！」

「――ッ!!」

彼の声が耳に飛び込んで来た直後、トールとの2日間の練習の光景と、今までクラスでイジメを受けて逃げてきた自分の姿が脳裏に鮮明

に甦る。

今ここで逃げ出して何もしなければ、状況は悪化するだけで何の變化もない。

何もしないというのは逃げることだ——問題を先送りにしたって、誰も救いの手を差し伸べてくれることなんかない。でもそれが、今までの人生の中で最も正しいと思ってきたやり方……。

(……そうだ。あんなに練習したのはこの時の為、エミルさんなら絶対に逃げない。それに逃げていいのは……自分が傷付いてもいい時だけ！)

覚悟を決めたように剣を握り締めると、凜とした表情に変わった。

星はエクスカリバーを構え、顔の側を飛んでいるレイニールの方を向く。

「——レイ。私、戦う！」

「なっ……何をバカな事を言っている!! 主、よく見るのじゃ! あれだけの敵を相手にどうやって戦うって言うのじゃ!!」

敵の方を向き直して、少し間を開けて真面目な声音でレイニールに告げる。

目の前には地を覆うほどのモンスターの大群。どう考えても勝ち目はない。

「——分かってるよ。言いたいことは分かってる。でも、ここで逃げちゃダメなの……怖いからって逃げて、見たくないから目を瞑って、聞きたくないから耳を塞いでたら何も変わらない。誰も幸せにならない……皆、誰かを幸せにする為に生まれて来るの。なにかの本にもそう書いてあった——だから、きつと私も。この時に人を守る為に生まれてきたんだと思うから……」

そう言つて星は一步、また一步と前に踏み出す。しかし、それを遮るようにレイニールが割って入った。

「……何を言っているのじゃ!」

「……私のスキルならしばらくの間。ステータスを下げられるし、もし途中でダメになっても、この中で一番時間を稼げる。この後スキル

を使ったら、私は敵の中に飛び込む。そこでギリギリまでやってみるから、レイはエミルさんと合流して街の人達を——」

そこまで言ったところで、突如レイニールが上空に舞い上がり、その体が金色に輝く。そして次の瞬間には、レイニールの体は黄金の巨竜の姿へと変わっていた。

翼をはためかせながら地面に着地したレイニールは、真っ直ぐに敵の大軍を見据える。

星も驚きながらレイニールを見上げると、レイニールはその大きな口から炎を吹き出し辺りのモンスターを焼き尽くす。

「レイー！」

珍しく声を荒らげた星に対して、今度はレイニールが一括するように咆哮を上げた。

小さな悲鳴を上げた星に向かって、レイニールが睨みつけながら喋り出す。

「主！ 我輩を侮辱するのもいい加減にしろ！ ここで主を置いて逃げる事などできるはずがないだろう。主は我輩を信用してなさ過ぎる！ もっと我輩を頼ってくれて良いのだぞ？」

「……………うん！」

レイニールが長い首を伸ばして自分に向ける曇りなき眼に、星もレイニールの意志を感じ取ったのか力強く頷いた。

突然現れた巨竜に仲間を焼き払われ、一気に臨戦態勢に入ったモンスター達が各所で雄叫びを上げている。どうやら、モンスター達には危機感知能力が備わっていないらしい。自分達の数十倍の大きさのある巨竜に全力で戦って勝てるはずがない。

いや、確かに数で圧倒できたのだろう……ただ一つ誤算があるとなれば、レイニールの主が星だったことだ——。

星とレイニールはもう一度互いの目を見合うと、モンスターを見据えた。

「レイ、行くよー！」

「うむ。いつでもいいぞ！ 主」

持っていた剣を天に突き上げ、星がスキル名を叫んだ直後、星の掲

げたエクスカリバーが神々しいまでの光を放つ。だが、周囲にばら撒く感じではなく。前方のみに光を収束させた感じが強い。

ちよつと前にはそんな芸当できなかつたのだが、この前の村正事件が星の成長を促したのだろう。それか、また別の要因があるのかもしれない……。

覆面の下の企み5

エクスカリバーから発せられた光がモンスターの群を包むと、星の全ステータスが一気に跳ね上がり、途方もない数値を叩き出す。その代償として、敵のモンスターのLvやHPが『1』に統一された直後、エクスカリバーを敵の正面に向けて星が「レイ！」と黄金の巨竜の名前を叫ぶ。

星の掛け声に合わせて、レイニールが口いっぱい溜め込んだ紅蓮の炎を、眼前に広がるモンスターの群れに向かって噴射する。けたたましいほどの轟音と熱風を起こし、その長い首を左右に大きく振り回す。

たちまち辺りは火の海と化し、炎と共にキラキラとした蛍のような光が夜空へと舞い上がっていく。

その幻想的な雰囲気と裏腹に、炎の中からまた無数の敵が現れる。

(やっぱり1回じゃ足りない……なら、もう1回！)

再び現れた敵に向かって、星はエクスカリバーを掲げる。

「ソードマスターオーバーレイ!!」

もう一度大きな声で、星が固有スキル名を叫んだ直後に再び剣が強く光を放つ。だがその瞬間、星の体が大きくよろけた。

しかし、レイニールは炎を吐いていて星の異変には気が付いていない。

(……やっぱり。前もそうだった……でも、今度は倒れない。倒れられない！ みんな見てる。レイも頑張ってくれてる！ だから、今度は絶対倒れない!!)

決意に満ちた瞳で、大量の炎で燃えては再び姿を現すモンスターの群れを見据える。

倒れそうになる体をなんとか踏ん張って止めると、レイニールの声が耳に飛び込んできた。

「主！ また来るぞ！ 早く次だ！」

「……うん！ ソードマスターオーバーレイ！」

襲ってくる疲労を誤魔化すように強く剣の柄を握り締めると、直ぐ

様、固有スキルを使用した。やはりスキルを使用した直後に視界が揺らぎ、次に全身に何者かがのしかかってくる様な重圧を感じる。よろめきながらも、しっかりと地面を踏み付けると、頭を左右に振って鋭い視線を再び前に向けた。

だが、星が倒れることはない。立っているのでやつとという感じではあるが、まだ耐えられるという感覚が大きい。

もちろん。子供の体力ならすでに倒れて地に伏せていたのは間違いないが。ここはゲームの世界であり、今この場にあるのは自分の体であつてそうではないデータで作られた言わばデータの集合体。

しかも、システムで管理されたこの体は大きさは違えど、それはアバターの問題であつて、数値だけならば大人と何ら変わらないのである。

また、今回の戦闘で多くのモンスターを撃破している為、経験値を得てレベルも大きく上がりLv90まで増加し、その分だけ筋肉量の数値も増加しているのだ。モンスター達から吸収したステータスもそのまま倍々に増加している。

にも拘わらず。これほどの肉体的、精神的なダメージを負うのは、エクスカリバーか固有スキル『ソードマスターオーバレイ』のシステムに致命的な欠陥があると言わざるを得ないだろう。しかし、星はスキルの発動を止めるどころか、何の躊躇もなくスキルを重複して使用していく。

だがそんな無茶がいつまでも続くわけもない……10回を超え11回目を使用しようとした直後、全身から感覚という感覚が全て消えた。

「……な、なに?」

星の意志とは関係なく、体が完全に脱力してしまう……。

地面に伏せた星は、体の感覚が完全に消えていて、指一つ動かすことができなくなっていた。だが、どうやら口や目、頭などは動くらしい……それはおそらく、頭の機能を失えば対話の機能が失われてしまうからなのだろう。しかし、そんなものは気休めにもなりはしない。

突然のことに驚いたのは星だけではなく……。

「——主ッ!? どうしたのだッ!!」

突然倒れた星に、驚き慌てているレイニール。

その間も休みなく敵が押し寄せてくる。倒れた星を気にかけてながらも、レイニールは仕方なく敵に炎を噴射し続ける。

頼りの星の固有スキルもなくなり圧倒的に殲滅力が落ち、疲労から次第に炎の勢いも弱まってきた。

いくら炎を吐いて攻撃しようとも。一向に敵の数が減らない。それどころか、逆増えているのではないかと感じられるほどだ——。

つと炎を吐き出していたレイニールの姿が突如金色に光ってレイニールの意志とは関係なく徐々に収縮を始め、最後には小さなドラゴンの姿へと戻ってしまう。

「……なっ、なんじゃ。なんなのじゃ! これからという時に!」

レイニールは憤りながらも星を庇うように、倒れる彼女の前を浮遊したまま、できる限り炎を噴射し続ける。

だが、先程とは比べ物にならないほどに弱々しく吐き出された炎は、とてもじゃないがモンスターを殲滅できる代物ではない。

体が小さくなったのも、こっちの方が燃費がいいからなのだろう。おそらく、保身的な機能が勝手に働いたのだ——エミルのリントヴルムなどはHPがなくなれば、一時的に消滅して巻物の姿になって持ち主のインベントリ内に戻るのだが、レイニールは常に出っぱなしな為、そういうわけにもいかないのだろう。

星の固有スキルが影響しているのは間違いないが。この固有スキルには謎が多く、それは使い手である星にすら分からない。

仕方なく、レイニールは最後の手段と言わんばかりに、口いっぱい炎を溜め込んだ。

その刹那、口から丸くなった炎の弾を吐き出す。

「喰らえ! 火炎弾!」

一直線に飛んでいった炎の弾が、先頭の方にいたりザードマンに当たり、後方にいたゴブリンを巻き込んで吹き飛んだ。

レイニールは巨竜状態でも子竜状態でもダメージに変わりはない。

本来ならば、敵を直線的に一網打尽にするほどのパワーがあつて当

たり前なのだが、今の攻撃で撃破したのは、先頭のリザードマンと巻き込みで後ろのホブゴブリンとスケルトンの3体だけ。まあ、巨竜状態で力を使い過ぎたのも、威力減少の要因としては大きいのだろう……。

レイニールが連続で炎の弾を噴射する中、後方で大きな音が響く。振り向くと、今まで開いていたはずの街の外壁の門が完全に閉ざされてしまっていた。

「なっ、なにいいいいいいいいッ!!」

慌てて門の所まで戻ったレイニールが、大きくそびえ立つ門を激しく叩いた。しかし、いくら叩こうが中から返答はない。

いや、返答がないというよりは門の内側もそれは予期せぬことだったのだろう——門を叩くレイニールと反対側では、突如しまった扉と、皆を守る為に戦っていた星がまだ倒れていたことから。

「早く開けてやれ!」「私達を守る為に戦ってくれたのに、なんで閉まった!?」「この騒ぎといい。いったい何が起きているんだ!」「誰だよ勝手に閉めたの! 拳帝達なしでどうやって街を守るんだよ!」「そうだそうだ! 白い閃光と拳帝なしにこの街を守るはずないだろ!」

突如閉まった門と外で倒れている星。

また、外に出ていたマスター達の攻撃隊を按じるフリをして、自己保身的な意見を述べる者などがいた。だが、それより問題なのは、この扉を閉めた犯人がいったい誰なのかということだ——。

閉まった扉を叩いていたレイニールだったが無駄だと悟ったのか、すぐに倒れている星の所まで戻ってきた。

本来、街の門はプレイヤー保護の為、外部からのモンスターの侵入は原則としてできない仕様になっている。

その機能も弱体化しているとはいえ、レイニールが本気で叩いても扉はびくともしないというところは、つまりはその防衛機能は健在ということだろう。

扉を破るのを諦めたレイニールは星の元へ戻ると、服を引っ張って宙へと持ち上げる。どうやら、星を空中に持ち上げたままこの場所か

ら離脱する考えのようだが。

「うう。主、今日は少し重いのじゃ」

「……レイ。私は大丈夫だから、逃げて……」

何故か今の星の体は、普段の彼女の数十倍も重く感じる。

顔を真っ赤にして何とか持ち上げようと、翼を素早く羽ばたかせているレイニールに、星が今にも掻き消えそうな弱々しい声で告げた。

だが、レイニールは首を横に全力で振ると、もう一度、バタバタと全力で小さな翼を動かす。

「そんなことできるか！ 主は絶対に連れていくのじゃ!!」

「……レイ」

レイニールのその言葉が、星には嬉しかった……。

その直後、目の前に弓を構えるゴブリンの姿が目飛び込んできた。

角度から見て、その弓の照準は間違いなくレイニールに向いている。それに気付いた星が慌てて叫ぶ。

「レイ……レイ！ 私を放して！ 早く飛び上がって！」

彼女の言う通りにすれば、レイニールだけならこの場から容易に離脱することができる。

しかし、レイニールは一向に星の服を放そうとはしない。

「嫌じゃ！ 絶対に嫌なのじゃ！」

渾身の力を振り絞って出したその叫び声の直後、放たれた矢がレイニールに向かって飛んでいく。

星が『もうダメだ!』と思った瞬間、前に何者かが敵との間に割って入った。

「——ぐッ!!」

苦痛に歪むその声に星が顔を上げると、そこには苦痛に耐えながら微笑むトールの姿があった——。

星が驚き目を丸くしていると見上げている星の頭を、トールの大きな手が優しく撫でる。だが、星はどうして彼が自分を庇ってくれたのか分からなかった。

それもそうだろう。星はこの世界にいる多くのプレイヤーの1人

で、トールとも2日間一緒にいただけで、それほど親しい間柄というわけでもない。

そんな自分を、彼が身を挺してまで守る理由が星には見つからなかった……。

「……ど、どうして……ですか？」

満面の笑みで微笑んで星の体を優しく抱きしめたトールの背に、追い打ちを掛けるようにその背中に無数の矢が突き刺さる。

「——くっ……うぐっ！　があっ！　……ど、どうして？　そんなの……簡単だよ。守りたいから……守っただけさ……僕はもうダメみたいだ……君は、死ぬんじゃないよ？」

そのまま、HPがなくなつたトールの体が光になって空へと昇っていく。

目の前から消えていくその光を見つめながら、星は自分の心の中で抱いていた気持ちは何だったのかを再確認した。

そう。それは恋愛感情とは全く違つたその感情は……。

「——お父さん……」

咄嗟に出た言葉は、星がこれまでの人生でそれほど多く口にしたものではなかった。そして、今まで彼に抱いていた安心感と懐かしきは、これが理由だったのかと悟つた時にはすでに光も消えていた。

星は彼の人当たりのいい優しい人柄と男性特有の大きく逞しい手に、会つたことのない父親を重ね合わせていたのだろう。それも現実には存在しない。周りの子供の父親をベースに創り上げた、自分の理想の父親という幻想を——。

直後に星が意識を失うと、今まで全く動かなかつた体が急に少し軽くなり。レイニールが重そうに宙へと持ち上げると、ふらふらとフラつきながらどこに逃げようかと右往左往していた。

覆面の下の企み6

* * *

モニターの前でその光景を見ていた覆面の男が、感情を剥き出しにして操作盤を叩いて声を荒らげた。

「何たる事だ!! 誰がイヴに矢を放っていいと命令した!! あのバカがいなければ、間違いなくイヴに当たっていたぞ!! くっ……」

覆面の男はもの凄い勢いでキーボードを叩くと、次々に画面にウィンドウが表示されては消えていく。

そのタイピングスピードもそうだが、常人ではウィンドウに表示されている英語の羅列は何のことか分からない。

おそらく、プログラミング言語なのだろう……覆面の男は素早くモニターと一体となっているキーボードを叩くと、即座にウィンドウを閉じていく。

その早業は彼がその作業に精通していることを裏付ける唯一のものだろう。しかし、どんなに優秀な人物だとしても、彼が稀代のマッドサイエンティストであることに変わりがないのだが……。

「そうか……あの竜に反応して……ならば、あの竜も戦闘対象から除外すれば……」

ブツブツと独り言を呟きつつ、キーボードを叩き続けていた彼の手がやっとなと止まる。

作業が終わったのだろう。最後のウィンドウも閉じ、椅子の背もたれに体を任せ大きく息を吐き出した。

そしてしばらくモニターの光で薄っすらと照らし出されている天井を見上げ、狂気じみた笑い声を上げると、再びモニターと向き合いキーボードを叩く。

正面にウィンドウが表示され、始まりの街と無数の赤い印、右側にモンスター達の種類と体数が表示されている。

「フフフ……さすがはイヴ。いや、大空博士だ——彼はこれほどのポテンシャルの武器とスキルを、まだ無事に生まれるかも分からない

かった娘に与えていたのだからね……元々は30万はいた我が勢力が、イヴの介入で一気に10万も減ってしまった。初期の計画通り、他の街と同じ10万ならば、確実に彼女はあの街を救っていただろう……」

覆面の男は椅子から立ち上がると、部屋の中をうろろと歩き始め。

「だが、私は自分の本来のシミュレーションに異を唱え、そして勝った！　そして今、イヴの固有スキルデータの収集にも成功した！」

興奮を隠し切れない様子で壁をドンドンと何度も叩くと、もう一度モニターの所へと足早に戻り、映し出された星を食い入るように見つめ。

「そう！　私はずっと疑問に思っていたのだ！　全ステータスを使用後24時間もの状態の固定——どうして、敵のステータスを吸収し、己のステータスに上乘せしてもなお、何重にも枷をはめるのか……その理由がこれだ。スキルの使用制限！　膨大なデータ管理と安全の為の己の過度なステータス上昇システムは、著しい処理速度の低下を招く。本来データの集合体ではないアバターをゲーム内で睡眠させる理由は、その時間を利用したデータの圧縮と削除が目的なのだから無理もない。大規模なMMORPG——しかもそれがVRとなれば、そのデータ量も超膨大！　それを知らずに継続してスキルを使用すれば、キヤラクターの処理速度プログラムが追い付かずにフリーズするのは当然の事！」

覆面の男は再び狂気じみた笑い声を上げると、モニターの中に映る星を指先でそつと撫でる。

「フフフ……アーハツハツハツハツ！　やっと……やっと君を攻略できたよ、イヴ。僕の……僕だけのイヴ……後は、不要な人間を排除していけば、僕達の理想郷が完成する……メモリーズを手に入れて、膨大な富と権力を手に二人の楽園を築くんだ。そして、いずれ神となる子を二人で育てよう……きつと天国の博士もそれを望んでいるだろう。僕達二人の愛を祝福してくれる！」

狂気に満ちた不気味な笑みを浮かべ星のことを見るその瞳は、発言

からも分かる通り、すでに彼の思考は常軌を逸していた。

モニターに映し出された星を見続け、狼の覆面の中から見える瞳はまるで獲物を狙う狼そのものだった。

* * *

突然意識を失った星の服を引っ張り上げたまま、動きを停止した敵を前に右往左往しているレイニール。

すると、そこに物陰から突如として人影が飛び出して来た。

茶色い短髪と瞳に白銀の鎧に白いマントを着用した彼はディーノ

——いや、今は偽名を使っていたことがバレたのでデュランだった……。

急に目の前に現れたデュランに、レイニールはほっと胸を撫で下ろした。

横目でそれを確認したデュランが小さなため息と共に呟く。

「まだほっとするのは早いよ。ドラゴンくん」

「なっ！ ほ、ほっとなんてしておらんぞ?!」

「さあ、どうか……しばらくの間、その子を絶対放すんじゃないよ」
呆れ顔から、すぐに凜々しい面持ちに切り替わったデュランがアイテムの中から薙刀を取り出す。

それを前に構えると彼の足元に大きな円が描かれ、そこから五芒星の青白い光が立ち昇り、5角から和風の着物に般若の面、天狗の面、狐の面、翁の面、女の面をそれぞれに身に付けた者達が現れた。

全員が顔には面を着けているのだが、レイニールには不思議と彼等に恐怖などは感じなかった。

「敵の数が予想以上に多くてね。俺がこの子達を運んで逃げてる間、向かって来る敵を迎撃してほしい。無論全力でね……頼んだよ!」

現れた面を着けた者達に、デュランが命令を下す。

デュランの持っている薙刀の刃が振り下ろされ。その直後、彼等の顔に付いていた面が一斉に外れ、お面の中からは絶世の美女と美男子達の顔が露わになる。もうその顔を隠す為だけに、わざわざお面を

被っていたのではないかと思うほどに、皆が整った目鼻立ちをしていた――。

つと、不満を前面に押し出したように渋い顔をして、金の刺繍で派手な青い着物を纏った狐の面を着けていた髪の子に、左右別々な青と緑の瞳の男が刀を肩に担ぐ。

「つたく。どうして甲冑じゃなくて、俺が着物で刀振り回さにやならねえーんだよ！」

「大山津見、前の主とは違うのだ。それに、見た目が変わったステータスに変化はないし、どうということはないだろ？」

「須佐之男はいいよな。着物って言っても黒でよー。俺なんてこんな派手派手のだけ？ 交換しろ！」

「……断る」

腕を組みしてそつぽを向くと、バツサリと切り捨てる黒い着物を纏った短い黒い髪に赤い瞳の男。

どちらも海外の人間の様に長身で美形だった。

須佐之男の態度に、大山津見が納得いかないと言いたげな表情で睨んでいる。そこに今度は、羽衣に紅白の着物を着た女性が割り込んでくる。

「あら、そうかしら？ 妾はこの衣装も結構好きですわ」

長く艶やかな黒い髪に透き通る黄色い瞳の彼女が、涼しい顔をした須佐之男を一方的に睨みつけている大山津見に向かって、にっこりと微笑んだその顔はとても美しく可愛らしかった。だが、青髪に青、緑のオッドアイの大山津見が、鼻を鳴らすと更に不機嫌そうにそつぽを向く。

「お前もお前だ天照。俺はまだあいつを主人と認めただけじゃない！」

「そうですか？ 彼のセンスの良さは、相当なものだと思いますのに」
まるで新しい洋服を買ってもらって浮かれている少女のように、上機嫌でくるくると体を回して着物をひらひらと揺らす。

それを見て「もう勝手にしろ！」と、大山津見は不貞腐れるように口を尖らせそつぽを向いた。

「まあまあ、そう熱くならないでさ……ぷっはー。ほら、酒でも飲んで落ち着けてさ！」

黄色い着物に、肩に掛かるほどの金色の髪に黄色い瞳の陽気な感じの男が、怒っている大山津見の肩に腕を回して、酒の入った瓢箪を一口飲むと彼の顔に押し付ける。

「あー。もううるせえー！ 月詠！ お前は酒飲んで黙ってりやそれでいいんだよ!!」

「——んツ!?!」

機嫌の悪い時に執拗に絡んでくる月詠に大山津見の頭の血管がブチツと切れ、自分の顔に押し付けられた瓢箪を奪い取り、月詠の口の中に酒を流し込む。だが、月詠は嫌がるどころか、逆に嬉しそうなくらいに喉を鳴らしてゴクゴクと飲んでいく。

そんなことをしていると、周りを取り囲む様にいたモンスター達が襲い掛かって来た。

まあ、これだけ無駄な時間を使っていれば、警戒していたモンスターが警戒心を解くには十分過ぎる時間を与えてしまっていた。

襲い来る無数のモンスター達を、突如として地底から現れた水の龍がモンスターを次々と丸呑みにしていく。

「——全く。無駄話が多いからですよ？ はあ……兄弟でなければ、その喉を搔つ切つてあげたいくらいだ……」

物騒なことを小声で呟く、白の着物に薙刀を手にした白髪の男。

彼も相当の美形だが、その緑色の瞳の中から感じ取れるのは、狂人特有の不気味さだろう。

つと、今度は反対側から彼等を感じしたモンスター達が襲って来る。

「……綿津見。後ろだ！」

大山津見の叫ぶ声に、綿津見は視線を向けることもなく鼻で笑う。すると、彼の背後の地面から水龍が飛び出して襲い掛かるモンスターを呑み込む。

「——私の水龍は一つではない。それに、がつつくのはいいけど、勘違いは困る……喰らうのはこっち側なのだからね！」

鋭い眼光が辺りを一瞥して、二体の水龍がモンスターを撃破して更に四体、六体と分裂していく。

次々に倍々に増える水龍がモンスターの大群を呑み込み撃破していく中、デュランが気を失っている星の体を抱きかかえると、肩にレイニールを乗せて走り出す。それに続くように5人の守護神が続いていく。

無数の水龍で敵を撃破する綿津見。地底から蛇の様な木の根でモンスターの体を縛り上げ撃破する大山津見。変幻自在に伸び縮みする刀でモンスターを斬り伏せる須佐之男。

月詠は片手で酒を飲みながら手に持った扇を振ると、地面から纏まった砂鉄が鋭利な刃となってモンスターを襲う。太陽を模した杖を手に向かってくる敵に振りかざすと赤黒い炎が現れ、敵を呑み込んでHPが尽きるまで焼き尽くし撃破する天照。

数十万という敵の中を大胆にも直線的に抜けようという作戦だったが、予想以上に守護神が強い為、敵を全滅させる。とまではいかなものの。襲ってくる敵を撃破するくらいは造作もない。

そんな中、全力で走るデュランの肩に乗ったレイニールが、思い出した様に彼に尋ねた。

「そういえば、お主は戦闘に参加せずに、今までどこに行っておったのじゃ？」

「ああ、俺達に人助けは似合わないからね。元々は犯罪者ギルドだし……彼等は先に千代に向かわせたよ」

「ふむふむ。確かダークブラックだったか？ まったく、主を誘拐するとは大それた事をしたものじゃ！」

何度も頷きそう呟くレイニール。

まあ、正確にはダークブレットで、レイニールが言った言葉を使うと、同じ意味の単語が繰り返されているだけで、まるで真つ黒なもののようになってしまうのだが……。

彼はそのレイニールの間違いを直すことなく言葉を続けた。

「でもまあ、今度はそんな事はないよ。俺はこの子の固有スキルを気に入っているし、そのスキルを使用できるのはこの子だけ——なら、

友好的に使って貰った方がお互いに良好な関係が築けるからね……」
「ん？ それは主を利用しようとしておると言う事か……？ それならば、我輩が許さんのじゃ！」

走るデュランの肩の上でレイニールが器用に立ち上がると、彼の頬に向けてシャドーボクシングの要領で何度も腕を振り抜く。

デュランは微かに微笑みを浮かべると、更に加速していく。すると、バランスを崩して空中に投げ出されそうになったレイニールが、デュランのマントに慌てて掴まる。

モンスターの上げる断末魔の叫び声とは裏腹に、撃破時のエフェクトの光がまるでイルミネーションでライトアップされた並木道のように、夜の空を幻想的に照らしていた。

獅子としての意地

後方の敵の出現に慌てて飛び出したエミルだったが、思うように近づけずにいた。

それもそのはずだ。地上からはエミルの乗るライトアーマードラゴンに休みなく矢が放たれ、無数の矢を空中で急激な回避行動を続け、手綱を握るエミルの体も左右に激しく振られていた。

ライトアーマードラゴンの利点は小回りが利く機敏な動きにあったが、その分高度を高く取るのは得意ではない。

その欠点が運悪く矢の届く距離ギリギリだったことが、今の危機的状況を引き起こしていた。

「——くっ！ リントヴルムならこんな事には……もう！ こんな所で、もたついている時間はないのに！」

ゲームシステムの補正もあり。騎乗している状況で何者かに攻撃でもされない限り落ちることはないのだが、こう休みなく攻撃されては堪ったものではない。

不安と焦りで苛立ちが募る中、エミルが不機嫌そうに眉をひそめる。

つと、突然。今まで休みなく放たれ続けていた矢の雨が止んだ。

警戒しつつもドラゴンの背から地上を見下ろすと、そこには漆黒の剣を手にマントを深々と被った人物がこちらを見上げているのが目に入った。

だが、夜の暗がりと高低差に頭まですっぽりと被ったマントというこの状況では、顔までは確認することはできない。

しかし、一瞬で弓を放つ敵をどうやって……っという疑問はあるものの。助けてくれたことには変わりなく、この状況下でそんな先入観に時間を費やしている余裕もなかった。

見えるかは別としてエミルはその人物に軽く頭を下げると、一目散に星が居るはずの外壁の門までライトアーマードラゴンを飛ばした。

上空から目を皿の様にして見下ろしていたエミルには、地上で逃げるデュランと星を見つけるのに、それほど時間は掛からなかった。

走る彼を見つけると一気に急降下し、上空からの確に移動するデュランの行く手に降り立つ。

地上に降りたエミルはライトアーマードラゴンを消し、一気に間合いを詰めると両手に持った剣を彼の喉元へと突き付けた。

「……今すぐその子を放しなさい……さもないと……」

次の言葉を発しないまでも、喉元に突き付けられた剣先がデュランの首に更に深く押し付けられる。

今にも喉元を突き破りそうなエミルのその表情に、デュランは涼しい顔で手に持った薙刀を地面に突き立てたまま微動だにしない。

だが、エミルがこれほど怒るのも無理はない。星は遙か後方の門の前に居たはずで、敵が前方に出現したのならば、街は防衛行動を取り内側から門を閉めるはずなのだ。しかし、それならば星は街の外ではなく、内側にいなければおかしい。

星の普段の行動から後先考えずに突っ走りそうなものだが、エミルは本当の意味で星の性格を知っていた。

本当の星ならば敵との物量差が分かった時点で、交戦はできるだけ避けて街の中でエミル達の指示を待つはず——そして何より、星自身がもし敵と交戦するならばレイニールは街の中に居るか、エミル達の方にきてなければおかしいのだ。

そして何よりもこの状況下で、ダークブレットの頭で四天王と言われるオリジナル固有スキル持ちのデュランが、今まさに気を失っている星を抱えている事実——もうこれは、誘拐意外のなにもものでもないのである。

張り詰めた空気の中、鋭く睨んだエミルは一瞬でもデュランが不審な動きを見せたらブスツといきそうなほどだった。

周りにいる守護神も使用者を守護する立場とはいえ、こうも敵が休みなく攻めている状況では撃破に専念するしかない。

まあ、全く気にしていない様にも見えたが……でもそれも仕方がないだろう。彼等からしてみればデュランとの付き合いなど数週間と言ったところで、実際にまた別の使用者が取って代わるだけの話なのだから……。

喉元に刃を突き付けられたままのデュランが、肩に乗ったレイニールに向かって徐に口を開く。

「――ドラゴンくん。悪いけどこの武器を持ってもらっていいかな？」

デュランが一方的にレイニールに告げると、手に握っていた薙刀を躊躇なく手放す。

予想外の彼のまさかの行動に、レイニールが急いで地面に倒れそうになる薙刀を受け止めた。

「何をしておる！ 放すなら放すと先に言うのじゃ！」

憤るレイニールを余所に、デュランとエミルは互いの目を見合ったまま膠着状態で、互いに出方を窺っている。

その静寂を破るように、デュランが少し溜めて言い放つ。

「あのさ、この剣を下ろしてくれないかな？ このままじゃこの子を渡せないだろ？」

「……ええ、分かったわ」

以外にもあつさり剣を下ろしたエミルに、予想外だったのかデュランも驚き隠せないと言った表情で目を丸くさせた。

おそらく。エミル自信も彼が武器を手放した時点で、落とし所を探していたのかもしれない。その後、両手の剣を鞘に戻し。あろうことか、その剣を装備から外したのだ。

もちろん。彼女のその行動には意味がある。装備を外せば重量が軽くなり、星を運んだとしても敏捷のステータスが左程変動しないというメリットはある。

それに比べてデュランの方はレイニールに武器を預けただけで、装備欄から解除したわけではない。

しかし、それ以上に四方を敵に囲まれるこの状況下で。しかも、それほど関わり合いのない男の前で武器を外すと言うのは途轍もないリスクを冒していることを、エミルほどのプレイヤーならば知らないはずはない。

驚愕するデュランを尻目に、エミルは彼に背を向け屈む。

「……何をしているの？ 早く。星ちゃんをこっちに……」

敵かもしれない相手に背を向け、完全に無防備と言える彼女の行動に更に驚きを隠せない表情をしながらも、デュランはエミルに言われた通りその背中に星を下ろす。

エミルはゆっくりと立ち上がると、星の重みを再確認する様に小さなその体を軽く浮かせて背負い直す。

「……迎えにきたわよ、星ちゃん。一緒に皆の所に帰りましょう」

優しい微笑み浮かべて、背負った星を見てそう告げたエミル。

コマンドを開きドラゴンの巻物を取り出し、巻物の紐を手に地面に巻物を投げると、笛を口に加えたエミルに向かってデュランが叫ぶ。

「ちよつと待ってくれ！ 君は俺が隙を突いて攻撃するとは思わないのか!？」

エミルは口に加えた笛を手で掴むと、固唾を呑んで彼女の返答を待っているデュランに告げる。

「別に何とも感じないわよ？ この子と一緒になら、私は何も怖くないもの」

「……………」

真顔で言ったエミルに、デュランはあんぐりと口を開けたまま、まるで鳩が豆鉄砲を食ったよう顔で一点を見つめている。

「これは返すぞ？ まあ、良く分からないが助かったのじゃ！」

レイニールはそつとデュランに薙刀を返すと、エミルの方へと向かいちよこんと肩に乗った。

そんな彼に構うことなく。エミルは再びライトアーマードラゴンを召喚し、その背に跳び乗ると、ライトアーマードラゴンそのまま上空へと浮上して飛び去っていった。

デュランは小さくなる星とエミルを見送り、呆れ顔で苦笑いを浮かべる。

「ははっ、まさか置いてけぼりを食らうとはね。まあ、あの子を仲間にするチャンスはまたくるさ……」

含み笑いを浮かべ、薙刀を構えたデュランは鬱憤を晴らすように、モンスターとの戦闘に加わった。

獅子としての意地2

星を抱え手綱を握り締め、空を飛びながらエミルはマスター達が戦っている場所を探す。

街に向かう際に見たマントの人物。そして、その人物を見てから何故か矢が飛んでこなくなった。

しかし、状況が悪化したのなら対策を考えなければいけないが、好転したのであれば、それは喜ばしいことだ——また、今は始まりの街にいたギルドのメンバーも多く戦闘に参加している。まあ、その中の何者かが行ってくれたと思うのが、この場合は普通だろう……。

エミルも不思議には思っていたが、今は何よりもこの絶望的な状況から星を生きたまま救い出すことが最優先だと分かっていた。

すでに時間は午前4時、ゲーム内の仕様では5時に太陽が顔を出すはずだ。もう時期夜が明ける時刻——日の出の時刻が迫る中、エミルは敵の遥か後方にモンスターと交戦している軍団を見つける。

ライトアーマードラゴンに指示を出し、エリエの居る場所に着陸した。すると、エミルと星を見つけ、嬉しそうに大急ぎでエリエが駆けてくるのが見える。

「エミル姉！ 星を無事に連れて来れたんだね。……街は？」

「……街は門を内側から閉めたわ。おそらく戻っても開門してくれそうにないと思う……」

「そんな……」

少なからずショックを受けたのか、それとも呆れかえっているのか、エリエは啞然としながらぼーっとエミルの顔を見つめていた。だが、すぐに険しい表情へと変わり。

「ありえない。こつちが死に物狂いで戦っているって言うのに……」

エリエの考えはそのどちらでもなかった……。

いや、始めは呆れ返っていたのだろうが今は違う。憤りを押さえるように、俯き加減で全身を小刻みに震わせているエリエ。

まあ、それも無理もない。死んだら全てが終わるこの状況下の中、数十万のモンスターの群れに飛び込んで街に残ったプレイヤー達を

守る為、自分の何倍もあるミノタウロスも仕留めたのだ。

それなのに形勢が不利になった途端に戦うことなく門を固く閉ざし、何の躊躇もなく防衛戦に移行したと言うのだ。

もちろん。身を守る上では最良の策だっただろう。しかし、それを素直に理解できるほど、エリエはまだ寛大にはなれなかった。

今の彼女は街の者達に裏切られたという感情が大きく、憤りを通り越してだけが心の中を支配していた。

拳を強く握り締めているエリエの肩にそっと手を置いて微笑み浮かべると、エリエも微笑み返した。

そこにエミルの肩に乗っていたレイニールがやってくる。

「何を落ち着いているのじゃ！ 主は街の奴等が扉を閉じたからこんな事になった。我輩が開けると叩いてもあやつらは開けなかった！ トールが居なかつたら、今頃は主も我輩もこの世にいなかったのだぞ！」

「——トールって？」

話に食いついてきたエミルに、レイニールは今までであったことの一部始終を伝える。

星が固有スキルを使用したこと、力尽きて地面に倒れた直後に扉を閉じられたこと、そしてトールが星を守って消えたこと——。

レイニールの話を聞いていたエミル達は、話が終わったあとエミルは悲しげに、エリエは激昂した様子で歯を噛み締めている。

っと、我慢できない様子でエリエが突然走り出す。

「私、マスターに言いつけてくる！」

「ちよつと！ エリー。待ちなさい！」

猛スピードで走っていくエリエの姿は、エミルの言う声も聞こえないほど一瞬で小さくなった。

諦めたように小さくため息を吐き出したエミルは、気持ち良さそうに寝息を立て、ライトアーマードラゴンの首に寄り掛かるようにしている星を見た。

「そう……星ちゃんには辛い思いをさせちゃったわね……」

また悲しそうな瞳をするエミルに、レイニールも何か申し訳なく思

えてきてしゅんとする。

そんなレイニールの様子を見て、エミルが笑い掛けると。

「さあ、変なことをしないうちにエリーを追いかけてみよう」

っと、森の中に消えていくエリエを追う為に歩き出す。

レイニールも深く頷くと先に歩いていったエミルの肩に止まり、その後をライトアーマードラゴンも星を落とさないようにと気遣いながらゆつくりと歩いて付いていく。

更に前線では、マスター達が敵と激しく交戦していた。

メルディウスの派手な爆発音と強襲に参加したギルドのメンバーの怒号が辺りにこだまし、その戦闘の激しさを物語っていた。

その中には何故か、火を噴くケルベロスのエリザベスに乗り、周りに獣系モンスターを連れてはしやぎながら駆けて回るミレイニの姿もあった。おそらくエリエの制止を振り切り、勢いそのままだけで前線に飛び出していったのだろう……。

カレンやデイビット達、近いの奮戦のかいもなく、敵の数は一向に減る気配すらない。

それもこれも、全てモンスター奥に守られるように出現している転移用魔法陣が原因だ——それが次から次へとモンスターを吐き出していて、数を減らしていると言っても微々たるもの。

エミルが着いた時にはすでに遅く。戦いから一時離脱したマスターに向かつて事情を説明し、エリエが抗議している最中だった。だが、マスターは苦虫を噛み潰したような渋い顔で話を聞きながら、なだめるように何度も相槌を打ち頷いている。

怒りに任せて発言している様子のエリエに、マスターも少し困り顔だった。

マスターはエミルの姿を見つけると、ほっとした様に手を上げながら彼女の方へと向かってくる。

途中で会話を遮られ形になったエリエが膨れっ面をして、エミルの方を見ている彼女に苦笑いを浮かべた。

「エミルか、どうやらあの娘も無事に連れ帰った様だな……」

「ええ、でも……マスター。これから先はどうするんですか？」

なるべく平静を装って話したつもりだったが、エミルの表情からは不安の色は消しきれない。

心中を察したマスターは真剣な面持ちでエミルの肩に手を置き、その目をじつと見つめながら告げる。

「このままでは無駄に犠牲者を増やすばかりなのは儂も分かっている……エミル。皆をまとめて千代へと逃れる。敵は展開していた部隊を各城門に向けて直線的に配置し直した。これではもはや、街の門までの突破は不可能——ここで無駄に兵を失うわけにはいかん！ 千代周辺にも、モンスターの大量が押し寄せ囲んでいる。ならば、残りの兵はその包囲網を突破する為に使わなければならない！」

「——承知しました。ですが、指揮はマスターが取って下さい。私には荷が重すぎますし、第一に今回の部隊はマスターの人徳で集まってくれた方々です。それを私が指揮するのはおこがましいと思います」
深刻な顔になったマスターが、ゆっくりと首を横に振った。

エミルはその仕事から彼の胸の内に秘めていた考えを感じ取ったのか、それ以上は何も言えなくなってしまう。彼の心の中から見え隠れする感情は、作戦失敗による失意と、無駄な作戦で多くの心と同じくしてくれた仲間達を犠牲にしてしまったことに対する罪悪感と自責の念だった……。

だが、今回のマスターの作戦にミスはなかった。ただ一つだけ、この世界がゲームであったことだけが、今回の作戦の失敗を招いたと言ってもいい。しかし、それも本来ならこのゲームのシステムではない新たなプログラムによるもので、予期し難いものであったのも事実。

本来ならば、皆覚悟を持って作戦に望んでいたのだから、マスターが責任を感じる必要はないのだが、真面目な彼の性格だからこそ思い詰めてしまうのだろう——。

エミルにはマスターの気持ちが良く分かった。と言うよりも、自分がその立場だったことを考えると、どうにもいたたまれない気持ちだった。

俯き加減のまま、マスターにどう言葉を掛けたらいいか躊躇っているエミル。

「ようー。話は聞かせてもらった……」

2人の耳に飛び込んで来た声に振り向くと、ギルド『LEO』のギルドマスターのネオだった。

彼は派手な龍の煙管をふかしながら笑みを浮かべると、マスターの肩に腕を回して耳元で小声で言う。

「……拳帝。それは俺がやらせてもらう。俺のギルドからも少数だが死亡者が出た——だが、あんたのところは無傷だろ？ 紛いなりにもギルマスなら、自分のところのメンバーの為に命を使え……仲間の無念は俺が晴らす！ こいつは義理人情の問題じゃなく。俺、個人のプライドの問題なんだよ……」

マスターの肩に巻き付けていた腕を解くと、彼はマスターの胸を押してエミルの方に突き飛ばす。

よろけたマスターを受け止め、エミルもマスターも彼の突然の行動に相当驚いているようで声を発することができないでいる。

馬を出してそれに跨がって手綱を握るネオの瞳は、どこか遠くを見つめていたが、その奥には深い覚悟が滲み出していた。

「全軍を撤退させる！ 命令は俺が伝えるが、その後の指揮は任せろぞ拳帝！」

そう言い残してネオが駆けていった直後、大声で撤退を叫ぶ彼の声がか辺りに響く。

その声を聞いた者達は、意外なほど呆気なくモンスターとの戦闘を止めて、前線のプレイヤー達が後方へと撤退を始めた。

このことから、戦っていた殆どのプレイヤーが、もう戦闘を続けても勝ち目がないと悟っていたということの現れでもあった。

獅子としての意地2

星を抱え手綱を握り締め、空を飛びながらエミルはマスター達が戦っている場所を探す。

街に向かう際に見たマントの人物。そして、その人物を見てから何故か矢が飛んでこなくなった。

しかし、状況が悪化したのなら対策を考えなければいけないが、好転したのであれば、それは喜ばしいことだ——また、今は始まりの街にいたギルドのメンバーも多く戦闘に参加している。まあ、その中の何者かが行ってくれたと思うのが、この場合は普通だろう……。

エミルも不思議には思っていたが、今は何よりもこの絶望的な状況から星を生きたまま救い出すことが最優先だと分かっていた。

すでに時間は午前4時、ゲーム内の仕様では5時に太陽が顔を出すはずだ。もう時期夜が明ける時刻——日の出の時刻が迫る中、エミルは敵の遥か後方にモンスターと交戦している軍団を見つける。

ライトアーマードラゴンに指示を出し、エリエの居る場所に着陸した。すると、エミルと星を見つけ、嬉しそうに大急ぎでエリエが駆けてくるのが見える。

「エミル姉！ 星を無事に連れて来れたんだね。……街は？」

「……街は門を内側から閉めたわ。おそらく戻っても開門してくれそうにないと思う……」

「そんな……」

少なからずショックを受けたのか、それとも呆れかえっているのか、エリエは啞然としながらぼーっとエミルの顔を見つめていた。だが、すぐに険しい表情へと変わり。

「ありえない。こつちが死に物狂いで戦っているって言うのに……」

エリエの考えはそのどちらでもなかった……。

いや、始めは呆れ返っていたのだろうが今は違う。憤りを押さえるように、俯き加減で全身を小刻みに震わせているエリエ。

まあ、それも無理もない。死んだら全てが終わるこの状況下の中、数十万のモンスターの群れに飛び込んで街に残ったプレイヤー達を

守る為、自分の何倍もあるミノタウロスも仕留めたのだ。

それなのに形勢が不利になった途端に戦うことなく門を固く閉ざし、何の躊躇もなく防衛戦に移行したと言うのだ。

もちろん。身を守る上では最良の策だっただろう。しかし、それを素直に理解できるほど、エリエはまだ寛大にはなれなかった。

今の彼女は街の者達に裏切られたという感情が大きく、憤りを通り越してだけが心の中を支配していた。

拳を強く握り締めているエリエの肩にそつと手を置いて微笑み浮かべると、エリエも微笑み返した。

そこにエミルの肩に乗っていたレイニールがやってくる。

「何を落ち着いているのじゃ！ 主は街の奴等が扉を閉じたからこんな事になった。我輩が開けると叩いてもあやつらは開けなかった！

トールが居なかつたら、今頃は主も我輩もこの世にいなかったのだぞ！」

「——トールって？」

話に食いついてきたエミルに、レイニールは今までであったことの一部始終を伝える。

星が固有スキルを使用したこと、力尽きて地面に倒れた直後に扉を閉じられたこと、そしてトールが星を守って消えたこと——。

レイニールの話を聞いていたエミル達は、話が終わったあとエミルは悲しげに、エリエは激昂した様子で歯を噛み締めている。

つと、我慢できない様子でエリエが突然走り出す。

「私、マスターに言いつけてくる！」

「ちよつと！ エリー。待ちなさい！」

猛スピードで走っていくエリエの姿は、エミルの言う声も聞こえないほど一瞬で小さくなった。

諦めたように小さくため息を吐き出したエミルは、気持ち良さそうに寝息を立て、ライトアーマードラゴンの首に寄り掛かるようにしている星を見た。

「そう……星ちゃんには辛い思いをさせちゃったわね……」

また悲しそうな瞳をするエミルに、レイニールも何か申し訳なく思

えてきてしゅんとする。

そんなレイニールの様子を見て、エミルが笑い掛けると。

「さあ、変なことをしないうちにエリーを追いかけてみよう」

っと、森の中に消えていくエリエを追う為に歩き出す。

レイニールも深く頷くと先に歩いていったエミルの肩に止まり、その後をライトアーマードラゴンも星を落とさないようにと気遣いながらゆっくりと歩いて付いていく。

更に前線では、マスター達が敵と激しく交戦していた。

メルディウスの派手な爆発音と強襲に参加したギルドのメンバーの怒号が辺りにこだまし、その戦闘の激しさを物語っていた。

その中には何故か、火を噴くケルベロスのエリザベスに乗り、周りに獣系モンスターを連れてはしやぎながら駆けて回るミレイニの姿もあった。おそらくエリエの制止を振り切り、勢いそのままだけで前線に飛び出していったのだろう……。

カレンやデイビッド達、近いの奮戦のかいもなく、敵の数は一向に減る気配すらない。

それもこれも、全てモンスター奥に守られるように出現している転移用魔法陣が原因だ——それが次から次へとモンスターを吐き出していて、数を減らしていると言っても微々たるもの。

エミルが着いた時にはすでに遅く。戦いから一時離脱したマスターに向かつて事情を説明し、エリエが抗議している最中だった。だが、マスターは苦虫を噛み潰したような渋い顔で話を聞きながら、なだめるように何度も相槌を打ち頷いている。

怒りに任せて発言している様子のエリエに、マスターも少し困り顔だった。

マスターはエミルの姿を見つけると、ほっとした様に手を上げながら彼女の方へと向かってくる。

途中で会話を遮られ形になったエリエが膨れっ面をして、エミルの方を見ている彼女に苦笑いを浮かべた。

「エミルか、どうやらあの娘も無事に連れ帰った様だな……」

「ええ、でも……マスター。これから先はどうするんですか？」

なるべく平静を装って話したつもりだったが、エミルの表情からは不安の色は消しきれない。

心中を察したマスターは真剣な面持ちでエミルの肩に手を置き、その目をじつと見つめながら告げる。

「このままでは無駄に犠牲者を増やすばかりなのは儂も分かっている……エミル。皆をまとめて千代へと逃れる。敵は展開していた部隊を各城門に向けて直線的に配置し直した。これではもはや、街の門までの突破は不可能——ここで無駄に兵を失うわけにはいかん！ 千代周辺にも、モンスターの大量が押し寄せ囲んでいる。ならば、残りの兵はその包囲網を突破する為に使わなければならない！」

「——承知しました。ですが、指揮はマスターが取って下さい。私には荷が重すぎますし、第一に今回の部隊はマスターの人徳で集まってくれた方々です。それを私が指揮するのはおこがましいと思います」
深刻な顔になったマスターが、ゆっくりと首を横に振った。

エミルはその仕事から彼の胸の内に秘めていた考えを感じ取ったのか、それ以上は何も言えなくなってしまう。彼の心の中から見え隠れする感情は、作戦失敗による失意と、無駄な作戦で多くの心と同じくしてくれた仲間達を犠牲にしてしまったことに対する罪悪感と自責の念だった……。

だが、今回のマスターの作戦にミスはなかった。ただ一つだけ、この世界がゲームであったことだけが、今回の作戦の失敗を招いたと言ってもいい。しかし、それも本来ならこのゲームのシステムではない新たなプログラムによるもので、予期し難いものであったのも事実。

本来ならば、皆覚悟を持って作戦に望んでいたのだから、マスターが責任を感じる必要はないのだが、真面目な彼の性格だからこそ思い詰めてしまうのだろう——。

エミルにはマスターの気持ちが良く分かった。と言うよりも、自分がその立場だったことを考えると、どうにもいたたまれない気持ちだった。

俯き加減のまま、マスターにどう言葉を掛けたらいいか躊躇っているエミル。

「ようー。話は聞かせてもらった……」

2人の耳に飛び込んで来た声に振り向くと、ギルド『LEO』のギルドマスターのネオだった。

彼は派手な龍の煙管をふかしながら笑みを浮かべると、マスターの肩に腕を回して耳元で小声で言う。

「……拳帝。それは俺がやらせてもらう。俺のギルドからも少数だが死亡者が出た——だが、あんたのところは無傷だろ？ 紛いなりにもギルマスなら、自分のところのメンバーの為に命を使え……仲間の無念は俺が晴らす！ こいつは義理人情の問題じゃなく。俺、個人のプライドの問題なんだよ……」

マスターの肩に巻き付けていた腕を解くと、彼はマスターの胸を押してエミルの方に突き飛ばす。

よろけたマスターを受け止め、エミルもマスターも彼の突然の行動に相当驚いているようで声を発することができないでいる。

馬を出してそれに跨がって手綱を握るネオの瞳は、どこか遠くを見つめていたが、その奥には深い覚悟が滲み出していた。

「全軍を撤退させる！ 命令は俺が伝えるが、その後の指揮は任せろぞ拳帝！」

そう言い残してネオが駆けていった直後、大声で撤退を叫ぶ彼の声が辺りに響く。

その声を聞いた者達は、意外なほど呆気なくモンスターとの戦闘を止めて、前線のプレイヤー達が後方へと撤退を始めた。

このことから、戦っていた殆どのプレイヤーが、もう戦闘を続けても勝ち目がないと悟っていたということの現れでもあった。

獅子としての意地3

敵と交戦していた全軍が、統率の取れた動きで速やかに撤退して行く。

それを追い掛けるように、撤退を開始したマスター達に上空から舞い降りた巨大な黒いドラゴンが向かってくるのが見えた。

エミルは険しい表情でそれを見据えると。

「マスター、星ちゃんをお願いします！ 私はあれを……」

ライトアーマードドラゴンの背に乗っていた星をマスターに預け、背中に跳び乗ると上空に飛び上がっていくエミル。

向かってくる人物の心当たりはある。だが、リントヴルムが使えない今の状況で、ライトアーマードドラゴンでレイニールやリントヴルムクラスのドラゴンとやり合うのは、蟻が象と戦うほど無謀である。

その体の大きさも勿論だが、一番の違いはブレスだ——炎を吐けるかどうかということが最も大きいだろう。

一括りにドラゴンと言っても、その中でも炎を吐けるドラゴンはそうはいない。

リントヴルムも元々は限定のダンジョンの最深部に居たボス級のモンスターで、レイニールは『魔王の剣』が星の固有スキル『ソードマスター』によって実体化したものだ。

モンスターの中でも、スケルトン、ゴボルトなどとは違ってドラゴンは最上位のモンスター。

固有スキルを使用する以外に、彼等を使役する方法はない。そして、今確認できるドラゴンを使役するスキルの持ち主はエミルと星を除けば、ただ一人しかいない——。

急激に上昇して漆黒のドラゴンの上空に回り込んだライトアーマードドラゴンから飛び降り、両手で腰に差した鞘から二本の剣を抜いた。

「——上杉ッ!!」

両手に持つ剣を振り下ろし、漆黒の巨竜の背に乗った男に先制攻撃を仕掛ける。

ドラゴンの差で戦況を不利にされる前に、組み付きドラゴンを操るプレイヤー本体を狙う作戦しか今のエミルに勝機はない。

虚を突かれた影虎が腰に差していた刀を抜き、即座にエミルの攻撃を刀身で防ぐ。

力強く押し付けあった刃が細かく振動しカタカタと音を立てる中、エミルが体制を変えて持っていた剣で素早く彼の鎧の隙間を斬り付ける。

だが、HPが一瞬減少してすぐに全回復するのを見て、エミルが慌てて後方へと飛び退けた。

まるで幽霊でも見たかのように体をブルブルつと震わせ、エミルが一度は動揺を見せたが、すぐに鋭い視線を浴びせかけると、持っていた剣の先を彼に向けて叫ぶ。

「いったいなんでここに来たの!! 理由を言いなさい!!」

その声は威嚇する様に大きかったが、小刻みに震えていて彼の奇妙なスキルへの恐怖は否めきれない。

「ふっふっふっ……この絶望的な状況に颯爽と舞い降りる俺。このタイミングで分かるだろ? それとも、お前は男を焦らすのが好きなのか?」

「……………ん?」

影虎の「言わなくても分かるだろ?」と言いたげな顔に、エミルはただただ首を傾げる。

まあ、この絶望的な状況下で彼が現れたということは、つまりは攻撃を仕掛けて来ようという以外には考えられない。

いや、攻撃を仕掛けてくるならまとまって撤退を開始している部隊そのものをブレスで焼き払いにくるはず。ならば、どうして彼はこの状況下でわざわざエミルの前に現れたのか今の彼女には理解できなかった。

間の抜けたようにあんぐりと口を開けたまま、訝しげに眉をひそめるエミルとほくそ笑む影虎の間に微妙な間が空き、しばらくしてエミルはため息混じりに持っていた剣を鞘に収めた。

全く攻撃を仕掛けてくる様子がなく。会話もそれ以上続かなかつ

たことから、エミルは彼が何をしにここに来たか察したのだろう。

無言のままライトアーマードラゴンを呼び付けると、その背に乗って地上に戻っていく。それはまるで、これまでの出来事そのものをなかつたことにしようとしている様に……。

地上に戻ったエミルは、心配そうに近寄って来る仲間達に向かってにつこりと微笑みを浮かべると。

「彼はただ迷ってここに来たみたい。だから、心配はいらないわ!」
つと言葉を返した。

その直後、血相を変えた様にファーブニルの背に乗った影虎が血相を変えて、空から舞い降りて降りてくる。

ドラゴンの背から飛び降り。地面に着地すると、エミルの元に詰め寄ってきた。

「ちよつと待て北条! 助けに来た人間に対して酷い態度ではないか!」

「その前に……どうして私の側をうろうろしてるのよ!!」

「それはもちろん、お前を嫁にする為に決まっているだろ?」

さらつと口にした『嫁』と告げた彼の言葉に、エミルが一気に殺気立ち、腰の鞘から即座に剣を引き抜く。

鋭く光る剣先を彼の鼻先に突き付けると、訝しげに彼の顔を見据えた。

影虎は余裕の笑みを浮かべながら、次の瞬間に両手を大きく広げた。

「ふつ、そうか……やりたいならいいぞ? 俺はお前の全てを受け入れてやれる自信がある!」

「……………ひっ!」

澄まし顔のままジリジリと迫ってくるのを見て、背筋に悪寒を感じて全身を震わせた後に、素早く背後に数回跳んで距離を取る。

エミルはぞくぞくと身震いして、影虎に怯えた子犬のような瞳を向けている。両手を広げたまま、エミルの様子を察することなく。なおも近寄ってくる彼に堪らずエミルが叫ぶ。

「貴方は鈍すぎるから、この際しつかり言っておけるわ! 私は貴方

の事を何とも思っていないし！　こういうのは迷惑だから、もう私には近寄らないで！」

犬猿の仲のライラ意外の人間に、エミルがこれほどハッキリと物を言うのも珍しい。

本来はあまり波風を立てるタイプ 성격ではないエミルがこれだけハッキリ言うという事は、影虎の諦めの悪さが原因だろう。まあ、意中の男性でもない人間に『嫁にする』などと言われれば無理もないが。

しかし、彼は鼻で笑うと「今はな……」と小さく呟くと、ニヤツと不敵な笑みを浮かべる。

彼のその自信がどこから湧いてくるのか分からない自信満々の返答に、エミルは背筋に悪寒を感じて数歩後退る。

その時、何者かが影虎の肩をがっしりと掴んでその歩みを止めた。

「——誰だ！」

振り向いた彼の視界に入った人物に、顔を青ざめさせた影虎。

それもそのはず。背後に立っていたのは、彼にとってはトラウマであり天敵。以前影虎の体を小刻みにバラバラに切り裂いて吹き飛ばした張本人——。

「なんや？　またうちのエミルにちよっかい掛けとるん？」

につこりと満面の笑みを浮かべるイシエルだが、その表情の裏には明らかにどす黒い影がある……表には出さないものの、彼女は相当怒っているようだった。

一瞬のうちに影虎はイシエルとの間に距離を取ると、コマンドを操作し始めた。

笑顔は絶やさないが、その後ろ手に隠したイシエルの右手には神楽鈴がしっかりと握られている。それを知ってか知らずか、影虎が両手一杯に出したドラゴン召喚用の巻物を一斉に空に放り投げた。

次々に煙を上げて召喚されていく漆黒のドラゴン——いや、ワイバーンだろうか？　腕が翼と一体化された翼竜が100体以上召喚され、上空をその大きな翼が覆い尽くすほどに展開する。

「こいつはワイバーンだから、炎を吐いて敵を殲滅する事はできない。

だが、お前達を他の街に輸送するのはそう難しくないだろ？ どうだ北条。これで、俺に惚れ直しただろ？」

「……まあ、それは置いておいて——でも、これだけのワイバーンがいれば、確かにここに居るだけの人数なら楽に輸送できるわね……」

感心したように空を覆うワイバーンの大群を見て、その吐息を漏らすエミル。

また作戦に参加して撤退し始めていた皆もワイバーンの出現にある者は歓喜し、ある者は手を合わせ合掌する。まあ、手を合わせて合掌しているのはギルド『成仏善寺』のメンバーだが……。

それぞれに反応を取る中。馬で駆けていたネオだけは煙管を咥えたまま、空に浮かぶワイバーンの群れを見て安堵したように微笑みを浮かべていた。

横にミゼが馬を付け、それを見たネオがふかしていた煙管から灰を地面に落とすと、煙管をミゼに差し出す。

「こいつを預かっておいてくれ。ミゼ」

無言のまま小さく頷き、ミゼが受け取った煙管を着物の胸元に入れるのを見届け、ネオが満足げな笑みを浮かべる。

言葉を交わさずに見つめ合う2人が視線を逸らし、徐にネオがミゼに告げる。

「——撤退を援護する。ミゼ、仲間達を頼む！」

「……………コク」

彼の言葉に深く頷くと、ミゼは足早に仲間達のいる方へと駆けていった。感慨深げにその後ろ姿を見送り、ネオは馬をモンスターの群れへと走らせる。

モンスター達は撤退した部隊には興味を示さない。と言うよりも、攻撃の意志を示さない者を攻撃しないと云った方がいいかもしれない。

おそらく。外部から来た者は攻撃を加えない限り反撃しないようプログラムを書き換えられたのだろう。だが、街から出て来た場合は、優先的に攻撃を仕掛けてきていた——それは街の中の人間のみを、徹底的に排除する凶悪なプログラムに書き換えられているという

ことに他ならない。

そして外部からの攻撃に対して疎いのであれば、本来はネオにもう戦う理由は存在しない。何故なら、ここにいるモンスター達はすでに彼のギルドのメンバーを襲わないからだ。

しかし、彼は無数のモンスターを前に馬を降り。乗っていた馬を消して、掛けていたサングラスを放り投げた。

大きな傷跡を残した右目からは殺気に満ちた野獣の様なギラギラとした眼光を飛ばしていた。

「俺の仲間を殺しておいて、過去の事の様にぼさつと背中を見せやがって……人の上に立つ人間には、理屈では分かっても絶対に引けねえー場面があるんだよ！ たとえそれが——」

ネオの全身の筋肉が盛り上がり急激に毛が伸び逆立つと、鋭い爪が伸び耳と尻尾が生え口からは白い息を吐き出す。

白銀の鬣に口の中から突き出した牙が、真珠の様に不気味に白く光り、その鋭い瞳が突き刺す様な眼光を放つ。

「——この生命を燃やし尽くすとしてもな!!」

ネオはライオンそのものという咆哮を上げると、彼に背中を向けたモンスターの軍勢の中へと飛び込んでいく。

第5章

獅子としての意地4

獣人となったネオの鋭い爪がオークの巨体を引き裂き、肉片と化したオークの体が光の粒子となって上空へと舞い上がる。

だが、それを皮切りにネオに気付いた多くのモンスターが、蟻が砂糖に群がるように一斉にネオの体に飛び掛かる。

白銀の毛に覆われ隆起した筋肉に、モンスターの持つ漆黒の刃が容赦なく体に突き刺さり、ネオが苦痛を滲ませた声で吼えた。

その咆哮が天に轟き地面を揺らす。視界に映る円形のHPバーが激しく減少し、黄色いゾーンへと突入するのが見え大きく目を見開くと、体を大きく揺らして体に纏わり付いたモンスターを振り落とす。

「うおおおおおおおおおおおおおおおッ!!」

雄叫びを上げ、ネオが全身の筋肉に力を入れると、盛り上がってきた筋肉によって体の至る所に刺さっていた武器が抜け落ちた。

なおも武器を取り戻そうと向かってくる敵を、その鋭利な爪で次から次へと斬り刻む。

直後。彼の攻撃の隙を突いて、2体のスケルトンが手にした槍をネオの体に突き立てる。

「ぐッ……この程度で仲間を殺られてオメオメと引き下がったら……ギルマスとしても、男としても、俺を慕って付いて来て消えたあいつ等に示しが付かないんだよ!!」

そう叫び声を上げると、武器を手にもネオの左肩と脇腹にその刃を突き刺した敵の頭を鷲掴みにすると、スイカを潰すように軽々とスケルトンの頭蓋を粉碎した。

次にポケットから取り出したヒールストーンを自分の真上に投げ、減少したHPを回復する。

HPが全回復したのを確認してから、ネオは武器を持つ敵を爪で粉碎しつづなるべく多くの敵を一箇所に集めていく。だが、いくら強さを示しても数とスタミナに勝るモンスターに、生身のプレイヤーが勝

てるはずもない。

疲労の蓄積と共に敵の攻撃を貰う回数が増え、負傷によってHPの減少率が増していく。ネオはじわじわと真綿で首を絞められるように追い詰められていった。

そしていつしかヒールストーンも底を尽き――。

「クソッ！ 回復アイテムが切れやがった。さすがの俺もここまでか……」

弱音を吐き天を仰いだ直後、彼の脳裏に消えていった仲間達の光景が鮮明に呼び起こされる……走馬灯が駆け巡る中で、一度は曇りかけたネオの瞳に再び光が宿り、彼は不敵な笑みを浮かべた。

「フッフ……フッフ。アハハハハハッ!!」

次第に大きくなるその笑い声に、ネオは自分の顔を手で覆う。

静まり返り、徐に低い声で小声で呟く。

「――そうだな。お前等……自分で始めたのに途中で諦めるとか都合が良すぎるよな。分かった……せんべつだ！ こいつら一匹でも多く、道連れにしてやるぜ！ 人生なんざ結局――道楽なんだからよ!!」

開き直った様に微笑んだネオが、とち狂ったのか今まで以上の勢いで、手当たり次第に目に付いたモンスターを片っ端から撃破していく。

次々にモンスターを切り裂く一方で、敵の刃が体を傷付けていた。しかし、彼は防御する素振りすら見せず。逆真っ向から敵の刃が届く距離に飛び込んで、その鋭利な爪が確実に当たる場所を進んで取りにいつているようにも見える。

だが防御を完全に捨てたその猛攻に、彼のHPもすぐにレッドゾーンに突入する。HP残量に構うことなく暴れ回る彼の姿は、まさに獣そのものだった……。

つと、そこに突如緑色の光が降り注ぎ、ネオの減ったHPを回復させた。

突然のことに驚き、一瞬ネオの攻撃する手が止まると、彼を取り巻いていた周りの敵が瞬殺される。

「なんだってお前が……」

突如現れた着物に身の丈ほどの長刀を手にした男を、目を見開いてその場に立ち尽くしている。

手に持った長刀を鞘に収め、驚くネオの顔を見てミゼが笑み返す。

「……お前が拙者を誘う時に言った言葉を覚えてるか？　ネオ」

「うーん。その……なんだったかな？」

照れくさいのか、はぐらかすように頬を搔いて答えたネオにミゼが呆れ顔で呟く。

「お前はあの時こう言った『俺に付いてくれば、絶対に退屈はさせない。この退屈な世界で、俺と一緒に最高の夢を見ようぜ』と、拙者はその言葉を信じてここまで付いてきた。そんなお前が居なくなれば、退屈な日々しか残らないだろう？」

「……フン。バカな奴だな、お前も……ちよつと疲れた。少しの間だけ頼めるか？」

「フツ、お安い御用だ……」

ミゼは人間の姿に戻ったネオの肩に手を置いて、スルリと撫でる様に横を通り過ぎる。

フラフラとよろめき疲れ切った表情のまま、近くの木に体を打ち付けるようにして腰を下ろした。

そこにミゼから長い棒の様な物が投げられ。顔付近に飛んできたそれを、ネオが右手で受け止める。

「こいつは……ミゼの奴。気を使いやがって……だが、ありがたい」

自分の右手に握られている龍の煙管を見下ろして笑みをこぼすと、煙管を嬉しそうに口に咥えて火を付けた。

大きく煙を吸い込んで、その後ゆっくりと煙を吐き出し、徐々に明るみを帯びてきた空を見上げる。感慨深げに遠くを見つめる瞳、だがその瞳は悲しそうではなく未練の一つもないように晴れやかだった。

「——ミゼ。あいつらは……行ったのか？」

遠いを目をしたまま、向かってくるモンスターを鞘から抜いた長刀の目にも留まらぬ斬撃で真つ二つにしている彼に尋ねた。

ミゼは棍棒を持って襲ってくるオークを自慢の長刀で胴から真つ

二つに斬り落とし、ネオの方を振り向いて静かに頷く。再び向かってくる敵を斬り伏せるミゼの背中を長めながら、感慨に耽るように空を見上げて言った。

「そうか……託せたならそれでいい。それだけで俺達が生きていた証しになるからな……ミゼ、上に立つ者の心得はなにか分かるか？」

無言のまま彼に背を向け、敵と対峙し続けるミゼ。

だが、ネオは彼の言いたいことを理解しているかのように、口元に小さく笑みをこぼす。

何も言葉を交わして居ないにも関わらず。彼等は分かり合っている様に笑みを浮かべると、ネオが息を漏らして呟く。

「——ふっ、全力で守るか。その答えだと50点だな……守ってやるだけじゃ、下の奴等は甘えるだけだ。だが、一つの大きな目標に向かって進み続け、そこで自分がその矢面に立って背中を見せ続ける事だ。それが上に立つ人間の役割だ——どんなに強い奴も、才能のある奴等もいずれば居なくなる。死ぬか辞めるかしていなくなるんだ。それに、優秀な人間は時間を無駄にしない……浪費した時間は取り返せないのを分かっているんだよ。人生には期限がある。だから、全力で突っ走るんだ。居なくなったら後は、残された個人個人が判断する事さ、意志を継いで行くのか離れていくのかも……結局は、人の上にいるの者も長い時の流れの中では、刹那的なものなんだよ。そんなミジンコみたいな時間で、踏ん反り返って偉ぶる必要なんてないのさ……要は自分が満足すればそれでいい。それが人生だろ？俺達は後を仲間達に託した——これで心置きなく戦えるってもんだ。全力で燃える様に、灰になるまでな……」

ネオは手に持っていた煙管の灰を地面に落とすと、凭れ掛かっていた木からゆつくりと立ち上がる。

「俺も仕事をしてた頃は、クソみたいな上司に小言を言われながら働いてたから分かるんだよ。手柄は自分のものにするくせに、責任はこっちに押し付けてきやがる。どいつもこいつも自分を守るので精一杯だ……そんな中、毎日毎日こっちは感情を殺して働かないといけないわけだ——俺は同じ事の繰り返しの日々にうんざりしてた。

帰ってすぐにベッドに倒れ込むだけで、死んでるのと変わらなかつた……だが、今は違う！ この身に突き刺さる剣の感覚と疲労感。命のやり取りを感じさせる痛みが、俺に生きてるんだと感じさせてくれている……これが生きるって事なんだと、この作り物の全身から俺の魂に響いてきやがるんだ——最高の道楽だぜ。まったくよお!!」

地面に手を突いて四つん這いになったネオの筋肉が盛り上がり、全身が徐々に巨大化してその身に生えた真っ白な毛が更に伸びていく。その姿は獣人の姿を通り越して、完全に巨大な獅子の姿へと変貌を遂げた。

白銀に輝く毛並みに威厳の象徴の立派な鬣と鋭い爪に牙、張り出した鼻先の奥に全てを飲み込みそうに澄んで鋭い瞳。

その全てがもはや、人とは完全に分かれていた。だがこれが、彼の固有スキル『メタモルフオーゼ』の本当の力ということだろう。二段階の身体強化に、武器がなくても高い攻撃力と防御力、動物の能力を受け継いだ敏捷性も反則級の固有スキル。

以前カレンと戦った鉤爪の男と同様に四足歩行の方がシステムの恩恵を最大限に受けられ、通常の二本足で地面を蹴る2倍の俊敏性を得ることが出来るのだ——。

AIというシステムだけで思考のない動く機械と言ったモンスターとは違い。言うなれば、思考を持ったモンスターなのがこの固有スキルを持ったプレイヤーの特徴だろう。

「行くぞー！ ミゼ。この雑魚どもを全て蹴散らして、俺達が最強のギルドだと証明してやろう！」

「……それが次の夢か。なら拙者もお前のその夢を共に見よう！ ネオ！」

意志を確認する様に互いの名前を呼び合うと、2人が敵の中に飛び込んで行った。

2人は咆哮を上げながらモンスターを次々と薙ぎ倒し、攻撃を受けなくてもその表情は苦痛に歪むこともなく生き生きとしていて、ただ純粹に戦いを楽しんでいる様だ——。

彼等の通った後には多くのモンスターの死骸とそれに似つかわし

くない光だけが残され、体に無数の傷を受けながらも敵を撃破する様
はまさに無双と言った感じだった。

獅子としての意地5

* * *

モニターの前で狼の覆面を付けた男が不気味な笑みを漏らしながら、両手で覆面の付けた顔を覆う。

普通なら上から圧力を掛ければ潰れるはずの覆面は、何故か型崩れせずにその形を保っている。

これがゲームの世界の不思議と言ったところだろうか……現実では避けられないことも、この世界では関係ないのだ。

「フッフツ……最高だね。最高だよこのゲームは！ 私の予想を超えた事をやらかして楽しませてくれる！ たった2人でLv100のモンスター1万以上も撃破するとは、イヴほどではないが、痛覚のあるこのゲームでここまでやられるとは……素晴らしい！ こんなものを見せられれば、ゲームプレイヤーを見下していた自分の考えを改めなければいけない！」

興奮冷めやらぬ様子で叫んでいた覆面の男が次の瞬間。今までの出来事が嘘のように、まるでお通夜の後のように静まり返り椅子の背凭れに身を預けた。

覆面の男は大きいため息を漏らして、モニターの明かりだけが照らす薄暗い天井を見上げ。

「——とりあえず。本来計画していた第2フェーズまでは終了した。後は向こうの世界に居る彼等の仕事だ……私はただ失意の底に落ちたイヴをこの手で、この愛で包み込んであげればいいだけだ——この度こそ手に入れる。博士の時とは違う！ あの女に地獄を見せてやる！ 私は負けるのが嫌いなんですね。フッフツ……ハッハッハッハッ!!」

薄暗いラボの中に彼の不気味な笑い声が響き渡っている所に、扉が開き仮面を付けた女が入ってきた。

女は含み笑いをしながら、ゆっくりと近付いてくる。そんな女に彼は不機嫌そうな声を上げる。

「……なんだ？」

「ふふっ、朗報よ。貴方にとってはね……貴方がご執心の長い黒髪のあの子。今度は千代に向かったみたいよ？」

「なにッ!? ……その情報の根拠は？」

「——根拠なんて……私の情報に今まで嘘があつたかしら？ それが根拠じゃいけない？」

猫撫で声で近寄ってくる狼の覆面の男の背後から腕を回した。覆面の男はそれを拒むことなく。いや、気にする素振りすら見せずに嬉しそうな声を漏らし。

「フフッ……そうか。次は千代か！」

っと、モンスター達の映っているモニターに視線を戻す。

そこには街を取り囲むようにして展開するモンスター達に対して、抵抗する者など殆ど居ない防衛戦と言うには、戦力に乏し過ぎる始まりの街の姿だった——。

* * *

大空を優雅に飛ぶワイバーンの集団の中、先頭を飛ぶ一際目立つ漆黒の巨竜。

空を飛ぶその漆黒の巨竜ファープニルの背に乗っていたエリエは、浮かない顔で開いていたコマンドを閉じた。

そこにオカマイスターの仲間と共に乗っていたサラザが話し掛けてくる。

「さつきから何をしてるの？ エリー」

「……えっ？ ああ、ライ姉にメッセージ送ってたんだ。始まりの街もあんな状況だし、間違つてエミル姉の城に行っちゃったら大変でしょ？ だから、千代にいるよって——」

サラザと喋っていたエリエの方を向くエミルの鋭い視線に、エリエが思わず俯く。

ある事件を皮切りにライラのことが大嫌いになったエミルにとって、彼女の名前を耳にするだけで条件反射的に反応してしまうのだから

う。

冷や汗を掻きながら、あからさまにエミルから視線を逸らすエリエ。

そんなことを知る由もなく、近くで孔雀マツザカのマジックを見ていたミレイニが、無邪気にエリエの背中に飛び付く。

「エリエ！ エリエもこっち来るし。あの人の魔法は凄いいんだし！ 手の中から鳩出したし鳩！ 超常現象だし！」

「あんだ。難しい言葉知ってるわね……」

疲れた表情で息を吐くエリエの体を、つまらなさそうに口を尖らせてミレイニが揺らす。

「エリエも行くし！ 一緒に見るし！」

「あー、はいはい。気が向いたらね」

我が儘を言う子供をなだめるように言った彼女の態度が相当気に食わなかったのか、ミレイニが突然距離を取って大きく息を吸い込んだ。

「エリエのバーカ！ デブチン！」

「……だっ、誰がデブチンだーッ!!」

勢い良く立ち上がりミレイニに向かって駆け出すと、ミレイニもその場で跳ねた後一目散に逃げて行く。

2人は狭いドラゴンの背中の上で、いつ終わるか分からない鬼ごっこをしている。

もう見慣れた光景になりつつあるこの2人のやり取りだが、ドラゴンの背中を走り回っている彼女達を見て、エミルは呆れ顔で大きくため息をついた。

「はあ……全く、あの子達にも困ったものだわ。でも、あれくらいが元気でいいわね……そう思わない？ 星ちゃん」

悲しそうな瞳で自分の膝の上で微かに寝息を立てたまま、一向に目を覚ます気配もない星を見下ろす。

固有スキル発動後。星はまた深い眠りに入ってしまったようで、最初は頬を軽く叩いてみたり、耳元で声を掛けたりしたのだが、全く反応がなかった。まるで数日前の村正事件の時に戻ってしまったかの

ように、声を掛けても返事をしてくれることはない。

作戦の前までは笑顔返してくれた星が、今はまるで良くできた人形の様にも感じる。

表情を曇らせたままのエミルに、肩に乗っていたレイニールが頬に手を置き、小さく呟く。

「大丈夫じゃ！ 主は別に攻撃を受けたわけではない。ただ力を使い過ぎたから倒れたのじゃ。しばらくすれば目を覚ます！」

「ええ、そうね……」

弱々しく言葉を返したエミルはレイニールとは違い、そうは思っていない雰囲気だった。

そんな彼女をレイニールは元気付けるように頬をペチペチと軽く叩く。

落ち込むエミルを気遣ってか、それとも邪魔をしようとしているのか、影虎が話し掛けてくる。

「どうした暗い顔をして、そんなに俺のドラゴンとワイバーンを借りた事を気にしているのか？ それならば心配はいらない！ 俺の物はお前の物と同じだと思ってくれて構わないぞ？ 何故なら俺とお前は——」

「——ちよつと悪いんだけど……向こうに行ってももらえる？ 貴方が私に近付くと、イシエが貴方を消しかねないから……」

物思いに耽って気持ちが沈んでいる時に、全般的な外れなことを話し掛けてくる影虎に目を、エミルは細めた軽蔑の眼差しを見せつつ。彼のすぐ背後で、笑顔のまま背中に神楽鈴を隠して殺意を剥き出しにするほど強く握り締めているイシエルの方に視線を移す。

影虎は少し残念そうに両手を上げるとエミルの進言通り、そのまま彼女から距離を取った。しかし、仲の良いイシエルが落ち込みんでいるエミルの側に来ないというのは、彼女の尋常ではない落ち込みように遠慮して、少し距離を置いてくれているのだろう。

人は時には1人になりたいという心境をここにいる誰よりも、イシエルが一番理解しているようにも見えた。

先導するファーブニルの周りを飛ぶ多くのワイバーンの背に乗っ

ている皆も、相当疲労の色が濃い。

まあ、善戦むなしく後退する羽目になったのだ。落胆するのも無理もないことだ。だが、そんな彼等を元氣付けるように朝の温かい光が照らしてくれていた――。

結局、今回のマスター達の撤退後。2日で始まりの街は陥落した。

今回の狼の覆面の男が仕掛けた大攻勢で消えた都市は始まりの街、大阪、名御屋、千代、北海堂、京、広嶋のうち、消失したのは始まりの街と名御屋だった。

始まりの街は言うまでもなく他の街よりも多い敵が押し寄せたことによる戦力不足と、大まかな対応策が各門の補強という防衛能力の低さが原因で、名御屋は商業都市なのが災いした。

単純に商業に適した大通りが多過ぎたのだ――その為に街に押し寄せてきたモンスターの進行を防ぎきれず、勢いに押されるかたちで抵抗という抵抗もできずに早い段階で落とされてしまったのである。

だが勿論、未だにどの都市も交戦中であり。これ以上戦闘が長引けば、いずれは殆どの都市が壊滅するのは避けられない。

事件の終息を図るには、事件を起こしている張本人を叩くしか方法はないのかもしれないが、だが居場所の分からない覆面の男を探すよ。生活の拠点としていた城を失った今は、少しでも早く体勢を立て直す方が先決。

今回の作戦に協力した武闘派のギルドの中でも、少なからず犠牲は出ている。何よりも、ギルド『LEO』のメンバーの損失が大きい。まあ、一度にギルドマスターとサブギルドマスター、苦楽を共にしてきた仲間達を失ったのだ無理もないだろう……。

ひとまず上空から千代に入り、メルディウスのギルドメンバーと合流するのが最優先――しかしながら、100体以上もの飛竜が群れだつて大空を飛ぶ姿は実に壮観である。

朝の日差しを受けて空を飛ぶ飛竜の影が地面を駆けるように、千代を目指し大空を我が物顔で進んでいく。

拠点を千代へ

始まりの街を離れて3日。空を飛んでいたにも関わらず陸路よりも少し遅かったが、無事に到着することができた。

到着までに日数が掛かったのは大人数を乗せたことで、飛竜を多く休ませなければ乗り潰してしまう恐れがあったのが理由なのだが――。

固有スキル『ドラゴンテイマー』はその名の通りドラゴンをテイムして、己のアイテム内にもいつでも召喚可能の巻物として保存するスキルだが、一度消滅すると再召喚まで5時間のクールタイムがある。

そして千代へは陸路ではいけない為、空路からしか上陸はほぼ不可能と言えた。

理由は今まさに目の前に現れたフリーダムスの北に位置する都市『千代』を見れば一目瞭然だった。

遠目から見ても分かるほどの敵の軍勢に、千代の街も四方を多くの敵に囲まれていたが、街を囲むように掘られた水の流れる大きな堀と開閉式に変更された大橋によって、モンスターも容易に進行できないようになっていた。

つまり、上空からしか街へ侵入はできないということだ――だが、ここで問題になるのは飛行型のモンスターには容易に侵入ができてしまう点だろう。しかし、このゲームは基本飛行スキルなどはなく、元々、上空からの攻撃は想定されていない。

それは飛行モンスターが少ないのも関係していた。

もちろん。少ないだけで飛行型のモンスターが皆無なわけではなく。現に、影虎の連れてきた飛行型の大型ワイバーンや、エミル達の使用ドラゴン系のモンスターがそれを物語っていると言える。

だが、その飛行型のモンスターの殆どはレアモンスターで、出現場所は街から遠く離れた一部の場所。しかも、その行動範囲も狭く一部だけに限定されたものだ――エミル、影虎の所有する主力級モンスターはダンジョンのボス級のモンスターで、ティム条件もモンスターの残りHPが『1』と無理な条件を付けているものだった。

街を囲う水堀とその周りを取り囲むように蠢くモンスター達を余所に、漆黒の巨竜ファープニルとワイバーン達は容易に外壁を飛び越えて街の中へと入る。

上空から城型のギルドホールの手前に降り立つ。そこにはすでに紅蓮と白雪、その隣には見慣れない屈強な肉体を持った物凄く顔の濃い男が立っていた。

地上に降り立ったファープニルの背から逸早く飛び降りたメルデイウスが、紅蓮達の方へと駆けていく。

「おう！ 無事だったか紅蓮。もう気が気じゃなかったぜ！」

「……別にこの程度、どうって事はないです」

不機嫌さを前面に押し出している紅蓮に向かって、安堵したように微笑んでいるメルデイウス。

「ギルマス。こちらよりそちらの方が問題ではないんですか？ 大敗したと聞きましたが、それに……これしか生き残りが居ないとは……」

そこに蚊帳の外にされ、眉を吊り上げている白雪がメルデイウスに厳しい言葉を浴びせ掛けた直後、始まりの街から撤退して来た者達を見渡す。

メルデイウスは苦笑いをしながら、細やかながら抵抗する。

「まあ、ジジイの作戦は完璧だった……だが、少しの気の緩みと言うか、敵主力を倒せれば99.8%成功する作戦で、敵はその00.2%に予想だにしていなかった策をぶち込んできやがったんだ。誰でも敵全体を瞬時に転移できるシステムがあるなんて考え付かないだろうよ。相手の隠し玉にまんまとしてやられたってわけだ——この事は、マスターの前では言うんじゃない。顔には出さないが気にしているからな」

「……まあ、傷口を抉る様な悪趣味はないです。何より面白くないですし、しらないですよ。ギルマス以外には……」

「ああ、そうだな。俺以外には——って、俺にも少しは優しくしろよ！

俺はギルマスだぞ!!」

顔を真っ赤にして不満を爆発させて怒鳴るメルデイウスの声を耳

を押さえて遮ると、視線を逸らして白雪は迷惑そうに眉をひそめている。

そんな彼女に呆れながらもその隣に居た肩を大きく出した革鎧の屈強な男に肘を突き出して、ニヤリと不敵な笑みを浮かべた。すると、彼も何の躊躇もなく腕を突き出してメルデイウスの肘に腕を通す。

2人は互いの顔を見合い微笑み合うと、同時に大きく笑い声を上げる。

「ははっ、随分と街を好き勝手に改造したみたいだな！ 剛！」

「ああ、前のままでは、ここもそう長くは保たなかっただろうからな。少し手を加えて防衛力を強化したんだ。幸いこの街には森までの地下ルートがあるし。まあ、今は戦闘より運搬作業の方に人手を取られているのが現状だけだな」

彼の説明通り、この千代の街は元々大小無数の川が街全体を張り巡らせるように流れていた。

少し前にマスターが来た時には、街の中央にそびえ立っていた城の天守閣から石垣まで、全てを見渡すことができた。しかし今は、街の城門からここまで巨大な杭が進路を塞いでいる。

杭の大きさは地上から10mはあるだろうか、そんな巨大な杭が入り口から街の中を隙間なく迷路の様に仕切っている。

だが、まだ街全体の3割程度、実用化にはまだまだ程遠いと言ってもいい状況だった。

防護柵を完成させるのが先か、外壁を囲む水の流れる堀を突破され城門を抉じ開けられるのが先か、勝負はこのどちらかと言っても過言ではないだろう。

紅蓮がマスターに向かって駆けていく。

「マスター。ご無事で何よりです」

「ああ、お前も無事で何よりだ……さっそく話をしたいのだが良いか？」

真剣なその眼差しに、マスターの顔を見上げていた紅蓮が深く頷いた。

その後、マスターの後ろにいる多くの者達を見渡す。

「——了解です。ですが、まずはゲストの皆様をお連れします。マスターはその間、ギルドホールの私の部屋に——」

「——何だとツ!? どうしてジジイをお前の部屋に入れるって事になるんだよ！ なら俺の部屋に来い！」

強引にマスターの手を引くと、メルデイウスは城の中へと入って行った。

紅蓮は少し不機嫌そうな顔をしながら、ワイバーンに乗っていたプレイヤーの方へと歩いていくと、疲れ切っている彼等を労うように深々とお辞儀をする。

「皆さんお疲れ様でした。私はこの千代のギルド『THE STRONG』のサブギルドマスターです。こちらでは拳帝の要請で、皆さんの今後の宿泊場所や食事の準備はできています。今は戦いの疲れを癒やして下さい」

前に手を合わせて、淡々と喋る銀髪に白い着物の小学生の様な女の子に、男性プレイヤーも女性プレイヤーも歓喜の声を上げた。

まあ、透き通るような長い銀髪に紅の瞳、白地に桜の刺繍の入った着物の和装幼女だ。男女問わず、ゲーム好きだけじゃなくアニメ好きにも彼女は人気があるだろう。その年齢はすでに成人なのだが、それを知っているのはギルドのメンバーとごく一部の人間だけだ——。

だが、当の本人は不思議そうに小首を傾げるだけで、特に好感も嫌悪感も抱いていない表情で立ち尽くしている。

紅蓮にジリジリと迫る人集りを、小虎が懸命に押し返す中、星を抱いたエミルが近付いてきた。

「……この子を寝かせられる場所はない？」

表情を曇らせたまま尋ねるエミルの姿に、紅蓮の表情も険しいものに変わり。

「小虎、後はおまかせします。中に入れば白雪が居ますから、詳しい事は聞いて下さい。貴女はこちらに……」

そう短く告げた紅蓮は身を翻して、ギルドホールの方へと歩いていく。

「 Emilもその後を続いていくと、困惑した様子で右往左往している小虎を残して、2人は日本の城を模したギルドホールの中へ入っていった。」

「ギルドホールに入ると相変わらず外見とは全く違う、高級ホテルのロビーの様な内装に、日本の城の中とは思えないほどの洋風な作りになっている。」

「初めて千代のギルドホールに入った Emilは、この日本の城とは比べ物にならないというより。かけ離れたその違いに、驚きを隠しきれない様子で辺りを頻りに見渡していた。」

「城の中を見渡している Emilの前を紅蓮はスタスタと歩いていく。まあ、歩幅の差があるのと星を背負っているのもあって、少しゆっくりに歩いてくれているのだろう。距離が離れることはなく、丁度いいくらいだ。」

「ロビーを横切つてエレベーターの場所までいくと、階を設定するボタンを押さず。機器に付いている差し込み口にアイテム内にしまっていたカードを射し込む。」

「始まりの街で紅蓮が購入したホテルとこの仕様は同じだ——まあ、もう始まりの街には戻れないので、掛かった費用の回収はこのゲームから無事に抜け出して、元の正常な状態に戻ってからではなければ不可能だろうか……。」

拠点を千代へ2

数億ユーロを消費したにも関わらず、紅蓮はいつもと全く変わらぬ表情でエレベーターに乗っている。

本来ならば資産を溶かしたわけだから相当ショックを受ける。いや、再起不能なほどのダメージを受けるはずなのだが、彼女は冷静そのものだった。

普段から無表情なのはいつものことだが、この四方を敵の軍勢に囲まれた緊急時でも平静を保っているのは凄いことだろう。

つと、エミルが無言のままエレベーター内にいるのが気まずいのか、そのことを気遣っているのか、おそらくはその両方なのか、操作パネルの前で真顔で佇む彼女に尋ねる。

「ねえ、紅ちゃ——」

「——さんです」

言葉を遮ってすぐに言葉を返してきた彼女に苦笑いを浮かべながらも、もう一度始めから聞き直す。

「紅蓮さんは、この敵に囲まれた状況が怖くはないの？」

「……………」

まさかの無言で返され、エミルもどうしていいのか分からないまま前を向き直す。

それをちらりと横目で見た紅蓮が重い口を開く。

「…………怖いですよ。仲間達を失うかもしれないと考えると、とても怖いです。ですが、それが戦いです。私は最善を尽くして彼等を守るだけですから」

そう告げた紅蓮の表情は微かに緊張している様に思えたが、エミルはそれ以上言葉を掛けることを止めた。いや、言葉を掛けられなかった……本来なら、年上の自分がしっかりしないとイケないのに、自分は星一人守ることができなかったのだ——。

実際には大学生の紅蓮の方がエミルよりも数歳年上なのだが、この容姿では勘違いされて当然だろう……。

だとしても、小学生の様な華奢なその小さな体で、彼女は全てのメ

ンバーを守ろうとしているのは凄いいことだ。そんな彼女に向かってこれ以上、心配する様な言葉を掛けるのは野暮だとエミルも感じたのだろう。

今回の件で、どんなに自分が無力であるかを思い知らされた。やはり、身を守る最低限の防衛術くらいは星に教えておくべきだったと、今は後悔しているくらいだ——背中で寝息を立てている星を見ると、エミルは表情を曇らせた。

それを知ってか、紅蓮もそれ以上言葉を発することはなく。2人は無言のまま、エレベーターが上に向かって動いていく。すると、しばらくしてドアが開くとオレンジ色の柔らかい間接照明の光が、カーペットの敷き詰められた廊下を照らし出す。

紅蓮は慣れた様子で一步踏み出すと、エミルの方を微かに振り向く。

促されるようにエミルも前に出ると、紅蓮はゆつくりと歩き出した。

廊下を進んでいくと、ある部屋の白い扉の前で彼女がピタリと止まる。

「この部屋を使って下さい。2人で使えるほどの広いお部屋なので、貴女もその子と一緒にゆつくり休むといいです。お風呂は大浴場もありますし、部屋にもシャワールームがあります。そこで食事も備え付けの受話器からコールすれば、NPCが持って来てくれます。ああ、ですが明日の朝は食堂で取るようにお願いします。今後の話もありませんので……それではごゆつくり」

一方的に告げた紅蓮は軽く会釈をして、その場を後にする。彼女の有無を言わさぬ隙のない言葉運びに、お礼を言う暇もなかった……。

エレベーターの方へと戻っていく紅蓮の小さな背中を見送り、エミルは部屋の中へと入る。

中は思っていた以上に広く。高級ホテルの様な内装で、紅蓮の言った様に入ってすぐ左側にはガラス張りのバスルームも完備されていた。

大きく広がる窓からは外の景色が一望できる上に、マジックミラー

のような構造になっていて外からは決して覗くことはできない。

まるで高級ホテルの一室という雰囲気、ここだけ見れば、この建物の外観が日本のお城を模しているとは誰も思わないだろう。

ギルドホールの中でも最上階を有しているギルド『THE STRONG』は、この千代の中で頂点に君臨しているギルドだ。

規模は600人程度のギルドだが、低レベルプレイヤーは1人もいない。殆どがLv100を超えたプレイヤーで、最低でもLv60の高レベルプレイヤーしかいない。

理由はギルドマスターとサブギルドマスターが、どちらともベータ版のテスターだったからだ——誰でもできるなら強い者の下に付きたいと思うものだ。

しかも、ギルドマスターのメルデイウスは、ベータテスターの中では最強と言われるほどの実力者。普段の彼からは想像もできないが、このゲーム「フリーダム」の中で、その名を知らない者はいないというほどの有名人なのだ。

彼のギルドに入るには、最低でもLv50以上という制約があり。固有スキルは問わないものの、痛覚のあるこのゲームにおいてレベルを50まで上げるのは至難の業。

ギルドホールを維持するにはクエストをクリアして、その合計金額がそのまま街への貢献度となる。つまり、合計金額が多いギルドが必然的にその都市の頂点に立てるわけだ——。

エミルは背負っていた星を静かにベッドに寝かせると、自分は服を脱いでシャワールームへと向かう。

中に入ると蛇口を捻ってお湯が胸へと降り注ぎ、その大きな胸が微かに揺れた。

そのまま頭を流れ落ちているお湯の中に入れるようにして被ると、長い青い髪がお湯によって下に垂れ、左で胸を押さえ右手で長く垂れた髪を後ろに大きく掻き上げた。

胸の谷間をお湯が流れ落ちるのを見て、エミルは吐息を漏らす。

整った目鼻立ちの顔と、淡い肌色の水滴の浮いたきめ細かい肌。降り注ぐライトの光によってキラキラと輝くその濡れた青い髪も潤ん

だ瞳も全てが美しく。まるで、その一部だけを切り取れば著名な画家の描いた絵画の様だ――。

全身を流れていくお湯を全身で感じるように瞼を閉じると、ゆつくりと目を開ける。だが、その瞳は水のせいではなく微かに潤んでいた。

「……結局。何も守れなかったわね。あの子も、あの街も……」

静かにそう呟くと、エミルは再びシャワーのお湯の中を突っ込んで俯きながら両手を壁に突く。

彼女は悔しそうに歯を食いしばると、声を殺して泣いていた。その声も涙もシャワーに掻き消され、ここぞとばかりに声を殺して悔しい気持ちをお湯に乗せて吐き出すように……。

紅蓮に案内されて1人用の部屋へと通されたイシエルは、ここまで連れて来てくれた紅蓮に「ありがとなく」と笑顔で声を掛けて部屋へと入った。

高価な内装に臆することなく、イシエルは部屋にあるテーブルの前の椅子に座る。

ほっとしたように大きく息を吐き出すと、さすがの彼女も今回ばかりは疲労困憊と言った感じだ。

イシエルは夜景の見える大きな窓を眺めながら、椅子の背もたれに寄り掛かり。

「……エミル。あん時と同じ顔しとった。岬ちゃんが亡くなった時と同じ……うちにできることは、見守ってるしかでけへんというのは分かっどるけど……歯痒いわ」

テーブルの上に蹲ると、イシエルは大きなため息を吐いた。

イシエルはリアルの世界でもエミルと長い付き合いということもあり、エミルの妹が亡くなった直後の彼女をよく知っているのだから。

それは憂鬱な表情をしているイシエルの様子を見れば、すぐに察することができる。だが、その表情の奥には悲しみも感じる。エミルと付き合いがあるということは妹とも、イシエルは会ったことがあるの

かもしれない。

明らかな今日の彼女はおかしい。普段ならエミルにべつたりと付いて離れない彼女が、今日は……と言うか、始まりの街を離れてからというもの、近寄ることもそうだが、会話すらしていないのだ。

今もいつもならエミルと同じ部屋じゃないとダメだというイシエルが、大人しく個室に落ち着いている。これは、通常のイシエルなら考えられない異常なことだろう。その理由はすぐに分かることになる。それは……。

「……エミルは強がる子やから。人が近くにおると、自分のことは後回しにしてまう癖がある。そやから普段から自分の弱みを表に出せへん。こういう時こそ、1人にしてあげなあかん。あの時もそうやった……。」

背もたれに身を任せると相当疲れていたのか、そのままイシエルは眠ってしまった。数億ユールを消費したにも関わらず、紅蓮はいつもと全く変わらない表情でエレベーターに乗っている。

本来ならば、相当ショックを受ける。いや、再起不能なほどのダメージを受けるはずなのだが、彼女は冷静そのものだった。

普段から無表情なのはいつものことだが、この四方を敵の軍勢に囲まれた緊急時でも平静を保っていられるのは凄いことだろう。

つと、エミルが無言のままエレベーター内にいるのが気まずいのか、そのことを気遣っているのか、おそらくはその両方なのか、操作パネルの前で真顔で佇む彼女に尋ねる。

「ねえ、紅蓮ちゃ——」

「——さんです」

言葉を遮ってすぐに言葉を返してきた彼女に苦笑いを浮かべながらも、もう一度始めから聞き直す。

「紅蓮さんは、この敵に囲まれた状況が怖くはないの?」
「……………」

まさかの無言で返され、エミルもどうしていいのかわからないまま前を向き直す。

それをちらりと横目で見た紅蓮が重い口を開く。

「……怖いですよ。仲間達を失うかもしれないと考えると、とても怖いですが、それが戦いです。私は最善を尽くして彼等を守るだけですから」

そう告げた紅蓮の表情は微かに緊張している様に思えたが、エミルはそれ以上言葉を掛けることを止めた。いや、言葉を掛けられなかった……本来なら、年上の自分がしつかりしないといけないのに、自分は星一人守ることができなかったのだ――。

実際には大学生の紅蓮の方がエミルよりも数歳年上なのだが、この容姿では勘違いされて当然だろう……。

だとしても、小学生の様な華奢なその小さな体で、彼女は全てのメンバーを守ろうとしているのは凄いことだ。そんな彼女に向かってこれ以上、心配する様な言葉を掛けるのは野暮だとエミルも感じたのだろう。

今回の件で、どんなに自分が無力であるかを思い知らされた。やはり、身を守る最低限の防衛術くらいは星に教えておくべきだったと、今は後悔しているくらいだ――背中で寝息を立てている星を見ると、エミルは表情を曇らせた。

それを知ってか、紅蓮もそれ以上言葉を発することはなく。2人は無言のまま、エレベーターが上に向かって動いていく。すると、しばらくしてドアが開くとオレンジ色の柔らかい間接照明の光が、カーペットの敷き詰められた廊下を照らし出す。

紅蓮は慣れた様子で一步踏み出すと、エミルの方を微かに振り向く。

促される様にエミルも前に出ると、紅蓮はゆっくりと歩き出した。廊下を進んでいくと、ある部屋の白い扉の前で彼女がピタリと止まる。

「この部屋を使って下さい。2人で使えるほどの広いお部屋なので、貴女もその子と一緒にゆっくり休むといいです。お風呂は大浴場もありますし、部屋にもシャワールームがあります。そこで食事も備え付けの受話器からコールすれば、NPCが持って来てくれます。ああ、ですが明日の朝は食堂で取るようにお願いします。今後の話もあ

りますので……それではごゆっくり」

一方的に告げた紅蓮は軽く会釈をして、その場を後にする。彼女の有無を言わさぬ隙のない言葉運びに、お礼を言う暇もなかった……。

エレベーターの方へと戻っていく紅蓮の小さな背中を見送り、エミルは部屋の中へと入る。

中は思っていた以上に広く。高級ホテルの様な内装で、紅蓮の言った様に入ってすぐ左側にはガラス張りのバスルームも完備されていた。

大きく広がる窓からは外の景色が一望できる上に、マジックミラーの様な構造になっていて外からは決して覗くことはできない。

まるで高級ホテルの一室という雰囲気、ここだけ見れば、この建物の外観が日本のお城を模しているとは誰も思わないだろう。

ギルドホールの中でも最上階を有しているギルド『THE STRONG』は、この千代の中で頂点に君臨しているギルドだ。

規模は600人程度のギルドだが、低レベルプレイヤーは1人もいない。殆どがLv100を超えたプレイヤーで、最低でもLv60の高レベルプレイヤーしかない。

理由はギルドマスターとサブギルドマスターが、どちらともベータ版のテスターだったからだ——誰でもできるなら強い者の下に付きたいと思うものだ。

しかも、ギルドマスターのメルディウスは、ベータテスターの中で最強と言われるほどの実力者。普段の彼からは想像もできないが、このゲーム「フリーダム」の中で、その名を知らない者はいないと言うほどの有名人なのだ。

彼のギルドに入るには、最低でもLv50以上という制約があり。固有スキルは問わないものの、痛覚のあるこのゲームにおいてレベルを50まで上げるのは至難の業。

ギルドホールを維持するにはクエストをクリアして、その合計金額がそのまま街への貢献度となる。つまり、合計金額が多いギルドが必然的にその都市の頂点に立てるわけだ——。

エミルは背負っていた星を静かにベッドに寝かせると、自分は服を

脱いでシャワールームへと向かう。

中に入ると蛇口を捻ってお湯が胸へと降り注ぎ、その大きな胸が微かに揺れた。

そのまま頭を流れ落ちているお湯の中に入れるようにして被ると、長い青い髪がお湯によって下に垂れ、左で胸を押さえ右手で長く垂れた髪を後ろに大きく掻き上げた。

胸の谷間をお湯が流れ落ちるのを見て、エミルは吐息を漏らす。

整った目鼻立ちの顔と、淡い肌色の水滴の浮いたきめ細かい肌。降り注ぐライトの光によってキラキラと輝くその濡れた青い髪も潤んだ瞳も、全てが美しく。まるで、その一部だけを切り取れば著名な画家の描いた絵画の様だ――。

全身を流れていくお湯を全身で感じるように瞼を閉じると、ゆっくりと目を開ける。だが、その瞳は水のせいではなく微かに潤んでいた。

「……結局。何も守れなかったわね。あの子も、あの街も……」

静かにそう呟くと、エミルは再びシャワーのお湯の中を突っ込んで俯きながら両手を壁に突く。

彼女は悔しそうに歯を食いしばると、声を殺して泣いていた。その声も涙もシャワーに掻き消され、ここぞとばかりに声を殺して悔しい気持ちをお湯に乗せて吐き出すように……。

紅蓮に案内されて1人用の部屋へと通されたイシエルは、ここまで連れて来てくれた紅蓮に「ありがとなく」と笑顔で声を掛けて部屋へと入った。

高価な内装に臆することなく、イシエルは部屋にあるテーブルの前の椅子に座る。

ほっとした様に大きく息を吐き出すと、さすがの彼女も今回ばかりは疲労困憊と言った感じだ。

イシエルは夜景の見える大きな窓を眺めながら、椅子の背もたれに寄り掛かり。

「……エミル。あん時と同じ顔しとった。岬ちゃんが亡くなった時と

同じ……うちにできることは、見守ってるしかでけへんというのは分かつとるけど……歯痒いわ〜」

テーブルの上に蹲ると、イシエルは大きなため息を吐いた。

イシエルはリアルの世界でもエミルと長い付き合いということもあり、エミルの妹が亡くなった直後の彼女をよく知っているのだろう。

それは憂鬱な表情をしているイシエルの様子を見れば、すぐに察することができる。だが、その表情の奥には悲しみも感じる。エミルと付き合いがあるということは妹とも、イシエルは会ったことがあるのかもしれない。

明らかな今日の彼女はおかしい。普段ならエミルにべったりと付いて離れない彼女が、今日は……と言うか、始まりの街を離れてからというものの、近寄ることもそうだが、会話すらしていないのだ。

今もいつもならエミルと同じ部屋じゃないとダメだというイシエルが、大人しく個室に落ち着いている。これは、通常のイシエルなら考えられない異常なことだろう。その理由はすぐに分かることになる。それは……。

「……エミルは強がる子やから。人が近くにおると、自分のことは後回しにしてまう癖がある。そやから普段から自分の弱みを表に出せへん。こういう時こそ、1人にしてあげなあかん。あの時もそうやった……」

背もたれに身を任せると相当疲れていたのか、そのままイシエルは眠ってしまった。

拠点を千代へ3

楽しそうに小虎とデイビッドが会話をしている後ろを、エリエが不機嫌そうに歩いている。その後ろを、楽しそうに辺りを見渡しながらミレイニが付いてくる。

前に行く小虎とデイビッドは上機嫌で、どうやら話の内容はデイビッドの着ている侍の甲冑にあるようだ。

戦闘時。小虎は赤い西洋風の甲冑を身に纏っていた。おそらくそれは彼の師匠であり、ギルドマスターのメルディウスからリスクトしているものなのだろうが、どうやら彼は武者の姿にも興味津津なようで……。

「——かつこいいですよね侍！ 僕も侍好きなんです！ デイビッドさんは侍のどんところが好きなんですか！」

瞳を輝かせながら羨望の眼差しを向ける小虎に、デイビッドも上機嫌で答えた。

「やっぱり。刀は欠かせないよ、武士の魂だからね！ そしてこの甲冑もいい。動きやすさを優先して関節部を完全に露出させている。最小限の守りで、敵に真っ向から挑むなんて、侍にしかできないよ。後兜もいいね。デザイン性に富んでいてかと言って、雰囲気も台無しにしない。美があるよね日本の鎧には！ ああ、あと俺はプレイヤー名はガイアなんだ。皆、何故か名前で呼んでくれないんだけどね……でもまあ、デイビッドでもいいよ。好きなように呼んでくれて構わない」

身振り手振りで会話をしているデイビッドが気さくにそう告げると、後ろからエリエの「どっちでもいいなら、言わなければいいのに……」という呟きが聞こえてくる。

デイビッドは背後を軽く振り向くと、エリエがむすつとしながら鋭い視線で睨みつけている。

来るなら来いと言わんばかりのその喧嘩腰の視線に、デイビッドはやらない方を選んだのか、素早く視線を前に移す。

気に食わない様子で、前を向き直したデイビッドの背中を睨みつけ

ていた。

不機嫌そうにしているエリエの後ろでは、肩に巻き付いたギルガメシユがミレイニの顔にフカフカの毛を押し付けてミレイニもキャツキャツと楽しそうに笑っている。

かまいたちのギルガメシユも、やっと落ち着いた場所にこれで安堵しているのだろう。

前には兄弟の様に侍談義に花を咲かせているデイビッドと小虎。後ろには楽しそうにスキンシップを取っているギルガメシユとミレイニに挟まれ、エリエは居辛そうに複雑な表情をして歩いていく。すると、やっと小虎が部屋の前で止まった。小虎はくるりと体を回すと、エリエ達に向かって告げた。

「本当は3人で泊まれる部屋があればいいんですけど、今はないんで2人と1人に分かれて貰うことになるんだけど……」

そこまで告げて、小虎は顔色を窺うように首を傾げている。

直後、ミレイニが大きく手を上げて。

「はい！ あたし1人部屋がいいし！」

っと元気良く言った。

エリエ達と行動を共にするようになって、ミレイニは1人で寝ることとはなくなった。

最初の内はエリエと一緒に居られて良かったのだろうが、今のミレイニはどうやら退屈になり刺激を求めているようだ――。

手をビシッと上げたまま、キラキラとした瞳で自己主張するように時折つま先立ちになりながら、次にエリエの方を向く。

「ダメよ」

だが、その提案にエリエはバツサリと切り捨てる。

頬を膨らませてもなお、一向に上げた手を下げる様子のない彼女に変わってエリエが小虎に言った。

「なら、部屋割りは私とこの子。一人部屋はデイビッドでお願い」

「ああ、俺は構わないが……」

苦笑いを浮かべたデイビッドの視線は、エリエを睨む瞳に涙を溜めながら頬を膨らませているミレイニに向いていた。

彼女は今にもこぼれ落ちそうな涙を必死に抑え、ミレイニがエリエに抗議する。

「なんでだしー！」

「なんでも」

「どうしてだしー！」

「どうしても」

理由が返ってくると思いきや、ばつさりと切り捨て、全く取り合ってももらえないことにミレイニは次第に不満を露わにする。

最後の手段と言わんばかりにその場で地団駄を踏んでいると、エリエが大きく息を吸い込んで。

「——そんな子には、もうお菓子作って上げないわよ!!」

その言葉の直後。急にミレイニが静かになって、躊躇しながらも諦めたように小さく頷く。どうやら、ミレイニとしては、一人部屋になることよりもお菓子のほうが勝ったようだ……。

大人しく部屋に入るミレイニを見て、エリエも安堵したようにため息を漏らすと、デイビッドに告げる。

「後で、時間ももらえる？ 話したいことがあるから……」

険しい表情でデイビッドの顔を見つめている彼女に、デイビッドも深く頷き返す。

すると、エリエは微かに微笑みを浮かべ、部屋へと入っていった。それを見送って、デイビッドも廊下を境に向かい隣の部屋へと入っていく。

小虎もデイビッド達が部屋に入ったのを確認すると、エレベーターの方へと向かって歩き出した。

数時間が経過し、時計の針が12時を回った辺りで、椅子に座って装備を確認していたデイビッドの部屋のドアをノックする音が響く。

もちろん。その扉の先に居たのはエリエだった……彼女は少し俯き加減にしながら。

「……入ってもいい？」

つとデイビッドに尋ねる。

だが、その声音は普段の彼女と比べて弱々しく妙にかしこまった感

じだった。

深く頷いた彼は扉の前に居るエリエを部屋の中へと招き入れると、椅子に腰掛けるように促し、自分はコーヒーを入れ、エリエにはミルク入りのココアと角砂糖の入った小瓶を出す。

真つ先に小瓶の蓋を外してエリエはその中にぎっしり入った角砂糖を1つまた1つと、自分の目の前に置かれたミルクココアの中へと投入していく。

まるまる小瓶1つの中の角砂糖を、ミルクココアの中に沈めた彼女が見るからに甘そうなカップの中身を啜る。

大きく息を吐いて、エリエはカップの中を見下ろしているだけで、一向に話を切り出そうとしない。

重苦しい雰囲気の中、最初に話を切り出したのはデイビッドの方だった。

「……エリエ。それで話ってなんだ？」

「ん？ ああ、それね……」

表情を曇らせ、口籠もつてしまうエリエ。

おそらく。相当言い難いことなのか、それとも切り出すタイミングを自分で図りたかったのか……しかし、それはデイビッドによって話を先に切り出された以上。諦めたのか、エリエは大きいため息を吐いた。

そして吐いた息を吸い込む様に大きく空気を吸い込むと、重い口を開いた。

「——デイビッドは先日の始まりの街でのこと……どう思う？」

「どう思っ……」

「だから！ どうしてモンスターを転移させられたのかってこと！」

エリエはバン！とテーブルを叩いて突然立ち上がった。デイビッドもそれには驚いたのか、目を丸くしながら口をあんどり開けたままエリエの方を見つめている。

そんな彼に、エリエが憤りを露わにしたままもう一度テーブルを叩く。

「どうして！ あれさえなければ作戦は成功していたはずなのよ！」

星だってああならずには済んだのに……エミル姉もあのルシファアを倒したのに！」

「落ち着け、エリエー！ あれは予想外の事だった。予想外の事は今までも起こっていた事だろう？」

確かに彼の言う通り。今までも何度も仕様を変更されていたのは事実だが、今回のことに関してだけ言えば規模が違う。本来既存のシステムではモンスターによる街への侵入は禁止されていた。

それを開放して、しかもモンスターの軍団を結成してまで街を襲うメリットがどこにあるのか……星を狙ったのなら、システムを自由に交換できるほどの技術の持ち主だ。ならば、星本人の居場所を特定するのはそんなに難しいことではないはず。

わざわざこれだけの段取りを用意して、全ての街を攻撃する理由が推測できないことも、今のエリエーの心境にも影響しているのかもしれない。そして今も拠点となる街は変わったものの、攻撃されている現状には変わらないのである。

「……こつちが何をしても、向こうはそれに合わせていいように攻撃手段を変えてくる。こんなの後出しじゃんけんみたいなことやられてたら勝てるわけないじゃない」

表情を曇らせ、ゆっくりと席に座るエリエー。

デイビッドもそれを聞いて、表情を曇らせると今にもため息をつきそうな顔で答えた。

「確かにな……この街も防衛戦の構えだし。マスターが何か策は考えてはいると思うけど……現状。こちらに攻撃に出る手段がない。いや、逃げ場がないんだ……もう四方を敵に囲まれている状態の街が全てだからな。やはり、モンスターを動かしているあの覆面の奴を何とか探し出さないと……」

この絶望的な状況下で可能性があるとするれば、犯人を直接強襲してこんなバカげたことを止めさせる以外にはない。しかし、現状では彼を探すのはおろか、街を出ることすらできない状況なのだ。

以前もダークブレットを隠れ蓑にしていたことから、今回もどこかで身を隠しているに違いない。いや、その為の隠れ蓑的存在がこのプ

レイヤーを外へと出せない様に街を覆う無数のモンスターの群れなのかもしれない。

拠点を千代へ4

2人は険しい表情のまま、無言で俯き加減に向かい合って席に座っている。

テーブルの横に設置された傘付きのインテリアライトがオレンジ色の明かりで部屋の中をふんわりと照らす中、2人の間にだけ重苦しい雰囲気の流れていた。

互いにこの状況が如何に絶望的なものなのか、それを理解しているが故に対応策が思い浮かばない。

今の周りを大きな川に囲まれているとはいえ、実際には陸からの攻撃を防げるのみで空からは丸裸同然。

飛行型のモンスターは数が少ないとはいえ、一度多くのモンスターを操って見せたのだ。飛行型のモンスターを操れないわけがないだろう。今はできなくても、いずれそれも可能になれば数に勝る敵の方が圧倒的に有利だ――。

かと言って、防衛もいつまでも続けられるわけもない。敵は時間を掛ければ掛けるほどに数を増やしていく。

本来は出現制限が掛かるのだが、これだけのモンスターを集めるには、それすらもカットしているのは明白だろう。

異例尽くめの今の状況下で、長期戦だけは避けたい。だが、ここで行動できることは個人のプレイヤーには極めて少なすぎる。

2人は色々と思考するものの、これという打開案がないのが本当のところだ――もう、防衛戦をしている間に外部の者達が助けに来てくれることに命運をかける以外にはない。

重苦しい雰囲気の中、2人は言葉を発することなく椅子に腰掛け険しい表情をしながら目の前に置かれているカップを見つめていた。もう言葉を交わす必要もないほどに、互いの今考えていることは理解できていたのだろう――。

千代の東側にある道場……蠟燭と月明かりしかないこの中に、ダンツダンツという何者かが物音を立てている。

もちろん。今、中で拳を浮き出しているのはカレンだ。普段は肩ほどこにまで伸びた黒い髪を今は後ろで結んでいる。

装備を解除し、下はデニムに上はサラシで胸を覆ったままというとてもラフな格好だった。だが、顔からも体からも大量の汗を流している姿を見ると、相当長い時間ここで練習していたのだろう。おそろく。この街に着いた直後辺りから……。

少しの間だけ息を整えるように動きを止めていたカレンが、再び激しく拳を突き出したり蹴りを入れたりと激しく道場内を動き回る。

つと汗で濡れた地面で一瞬バランスを崩し、そのままダンツ！つと地面に仰向けに倒れた。

すぐに起き上がろうとしたものの、体に力が入らず起き上がることにすらできない。

荒い息を繰り返し、胸と肩を大きく上下に動かしながらカレンは薄っすらと浮き上がる木の天井を見上げていた。

普段ならすぐに体制を整えて転ぶことはないだろうが、それだけ疲れていたということだろう。

風呂に入れば負傷と体力が回復するが、街に来てすぐに近くの道場を紹介してもらってこの中に籠もって一人、技の練習をしていた彼女には今までの疲労が全て溜まっている。

もちろん。一度休息を取ることを案内を頼んだ白雪にも薦められたが、カレンはその申し出に断固として首を縦には振らなかった。

疲労が溜まっていた方が実戦に近い状況で練習ができると考えたからだ、今は少し後悔している。

白雪には人払いを頼んだ為、朝まではここに誰かがくることはない。

「はあ……はあ……こんな、ことなら、帰って休んでいけば、良かったなあ……」

荒く息を繰り返し途切れ途切れにそう呟くと、ゆっくりと瞼を閉じる。

視覚を遮ると静まり返った部屋の中に流れる風の音も聞こえてくる様に感じるから不思議だ——まあ、五感を一つ潰せば他が鋭くなる

のはこのゲームの隠れたシステムなのだが。

息を整える様に深呼吸して広すぎる道場の中に一人。仰向けに倒れているカレンは唇を噛み締め、顔を腕で隠しながら掻き消えそうな声で呟く。

「――力が欲しい……」

つと、カレンの固有スキルは未だ発動する気配すらない。

もし。始まりの街で使えていれば、もつと状況を好転に導けたかもしれない。だがあの時、マスターも固有スキルの発動はしなかった。

いや、できなかったのだ。それは固有スキル『明鏡止水』は発動中は回復系のアイテムが使用できない上に、再使用には24時間のクールタイムが必要だったからだ。

数体の敵ならばそれでも対応もできるが、雑魚とはいえ最大レベルの数十万を超える大軍の前では、無意味と言わざるを得ない。

強いて言うならば、象に立ち向かうのが蟻からカマキリに変わったくらいの違いだろうか……結局数という力に対抗するには、それ以上の数を用意するしかないということだろう。

まあ、カレンがもし固有スキル使えたとしても、あの状況を打壊できたとは思えないが、カレンの表情は暗く悲壮感に満ちていた。

一心不乱に体を動かしていたのも、少しでも始まりの街での出来事から気を逸らしたかったからかもしれない。

しかし、その甲斐もなく固有スキルが発動する気配はない。マスターが言うには固有スキルが発動できるようになると自然と脳裏に言葉が浮かんでくるらしいのだが、今カレンの脳裏に浮かんでいるのは、とてつもない疲労感と指一本も動かせないほどに自分を追い込んでしまったという後悔の念だけ――。

「はあく。こんなことなら、せめてご飯だけでも食べておけば良かったな……もうお菓子じゃなくて、美味しいご飯が食べたい……」

ここ数日間。回復アイテムや装備に圧迫され、各自で持っていた僅かな食料はすぐに尽きた。そこで役に立ったのが、アイテム内を殆どお菓子と材料で埋められていたエリエだった。

もちろん。アイテム内に入れられる材料などを入れる別のカバン

もお菓子の材料で溢れていた為、多くの者達の胃袋を満たしたのは言うまでもないが。しかし、さすがに数日間お菓子だけしか口にしないというのは辛い。

道場の床に寝転がったまま、蝋燭の火が揺らめく天井の木と木の隙間を見つめてその後、ゆっくりと瞼を閉じて眠りに就いた。

マスターが寝室で外の景色を眺めていると、背後に人の気配がして徐に振り向く。すると、そこには不機嫌そうに眉間にシワを寄せているライラの姿があった。

「……どうして私の提案を受け入れなかったの？」

声色からも伝わる不機嫌さと、軽蔑の眼差しを受けたマスターは余裕の笑みを浮かべている。

それが気に食わないのか、ライラが更に強い口調で責める。

「貴方が彼女への情を見せなければ、あの街の人達を救えたかもしれないのよ？ たった一人を切り捨てて、他が助かるならそれが最良だとどうして考えないの！ 始まりの街が落ちたのは間違いなく貴方のミスよ、それが分かっているの!？」

憤る彼女を他所に、表情も変えずに腕を組んだマスターが身を翻して、月の浮かぶ夜空を見上げた。

「……あの娘を犠牲にしても、戦況を変えられなかった。いや、逆に悪化していただろう……」

静かに呟くマスターの言葉に、拳を強く握り締めたライラが感情を抑え込で尋ねる。

「どうして、そんな事が言えるの？ しつかりと説明を——」

「——言える！ 数十万をたった1人の能力で押さえ込めると考えている時点で、勝負には負けているのと同じだ。どんなに強力な力でも弱点はある。それは使用者が人間であると言うこと……それにお前達の言うあの固有スキル『オーバーレイ』には、使用制限という致命的な欠陥があるだろう」

「——ッ!？」

彼の的を射た核心にも迫る言葉に、ライラは『どうしてその事を

知っているのか』と言いたげな顔をして驚いている。

それもそうなのだ。本来ならば、絶対に漏れるはずのない情報だったのだろう。しかし、見事にマスターにそれを言い当てられたライラは、今度は手の平を返した様な投げやりになった態度で言った。

「それがどうしたの？ 使用制限があるって言っても一時的なものよ。致命的な欠陥とまでは言えない——それにできる限り負担を抑えるように、制御用のペンダントも渡しているわ！ はっきりしてるのはマスターの考えを貴方は否定したという事だけ、多くの人間を巻き込んで失敗した貴方の責任は消えはしないわよ？ 覚悟しておくことね……」

そう捨て台詞を吐いて、身を翻したライラは闇の中へと消えていった。

マスターはゆっくりと窓際に置かれた椅子に腰を下ろすと、月を見つめながら大きなため息を漏らす。

「……分かっておる。だが、儂には他人と他人とを秤にかけるほど、傲慢にもなれないのでな……」

そう小さく呟くと感慨深げに、ただただ遠くを見つめていた。

その瞳はとても悲しそうに見えた……。

消えたマスター

翌日、マスターの泊まっていたはずの部屋はもぬけの殻だった――

「……マスター？」

彼を起こしにきた紅蓮は小首を傾げながら部屋の中に入ると、辺りを注意深く見渡す。

テーブルの上には日本酒の入っていた徳利とお猪口が置かれている。そして使用感のないベッドメイキングされたままになつてきつちりとしている布団。

それを見れば、晩酌している最中に……つまり。夜の内に何処かに出掛けたということの証しだ。だが、問題は彼が一体どこに消えたのかということだろう。

部屋の窓は開け放ったままということは、ここから外へと出たのだろうか、この緊急時に仲間を見捨てて逃げ出すような人物ではないことは、紅蓮が最もよく知っていた。

つとになると、マスターは一体どこに……。

紅蓮は顎の下に手を当てて考えていたが、すぐに大きなため息を吐き出して考えるのを止めた。

「はあ……マスターの事です。きっと何か考えがあつたのでしよう……そうですね。マスター」

紅蓮は開きっぱなしになつた窓を見つめ、身を翻すとゆっくりとした足取りで部屋を後にした。

マスターが何処かにいったことを確認した紅蓮の目の前に、裸のまま黒髪のシートヘヤーに猫耳のカチューシャを付け、サーベルタイガーのような生き物に乗った女の子が笑いながら廊下を駆けて行くのが見えた。

自分の横を通過していくのを見送っていると、その後ろを遅れてピンク色のポニーテールの少女が結んだ髪を風でなびかせながら全速力で追いかけてくる。

「待ちなさいって言ってるでしょ！ この。ミレイニ！ せめて服を

着なさい!!」

拳を振り上げ追いかけて行く。その後ろ姿を見つめていると、そこにデイビッドが部屋から出てきた。

大きなあくびをして紅蓮の方にくるデイビッドの髪はボサボサで、全く整えられていない。おそらく。その様子を見ると今起きたのだろう……。

「おはよう。紅蓮さん」

「おはようございます。ですが、もう9時ですよ。10時に食堂で朝食なので、すみませんがあの2人に伝えておいて下さい。他の方を起さないといけないので……」

そう言っつてその場を去ろうとする紅蓮を、デイビッドが呼び止める。

「待つて、俺達の方は俺が起こしにいくからもういいよ。君にそこまです迷惑はかけられないからね」

しかし、紅蓮は視線だけを向けて「そうですか。なら、お願いします」と告げると歩いていってしまう。

そんな彼女の反応に、ポカンと口を開けたまま、デイビッドはその場に立ち尽くしている。すると、彼の耳を何かがカプツと噛み付いた。

「——痛ッ!!」

デイビッドが耳に噛み付いているモフモフしたぬいぐるみのようななかを掴むと、顔の前に持つてくると、その手の中には白い毛並みのイタチが両手をブンブンと振っている。

何かを訴えかけようとしているようだが、何を言おうとしているのかはさっぱり分からない。すると、真っ白なイタチがデイビッドの手を振り払って地面に着地すると、勢い良く走っていった。

デイビッドもその鬼気迫るイタチの様子に後を追いつけるように走り出す。

つと曲がり角を曲がった直後、デイビッドの目の前に現れたのは今にもエリエを襲おうとしているサーベルタイガーの姿だった。

出した鞆の付いた装備で、襲い掛かって来る迫り出した牙を何とか

抑えたまま地面に倒れ込んでいます。

始めはしつこいエリエにミレイニが命令したのかと思ったが、背中に乗ったミレイニが必死にサーベルタイガーの背中の毛を引っ張っているところを見ると、どうやらそういうわけでもないらしい。

——ガルルルルルルルルルルルルルルルツ!!

唸り声を上げながら凄まじい形相で迫って来るシャルルの牙を、エリエは必死に押し返している。

「ちよ、なっ、なんなのよ！ いったい！」

「シャルル止めるし！ エリエは餌じゃないし〜！」

サーベルタイガーのシャルルは、主であるミレイニの言うことすら聞かない。

いや、いつでもエリエが主人のミレイニのことをいじめているから守ろうとしているのだと思う。

おそらく。シャルルから見れば、主人であるミレイニを襲う者は全て攻撃対象以外の何ものでもないのだろう。

エリエも装飾品として装備できるだけの武器では戦うこともできない。抑えるので精一杯という感じだ——。

足元で止めるようにジュエスチャーしているギルガメシュに促されるままに、デイビッドが走り出した。

つとその時、ミレイニの付けていた指輪が青く光を放ち。青い炎と共に一匹の青い炎の鬣を持ったライオンが姿を現す。

大きく咆哮を上げると、今まで誰の言うことも聞かなかったシャルルが急に止まる。

その後、ゆつくりとエリエから離れると、落ち込んだ様子でその場におすわりの状態で待機しているが、何やらバツが悪そうに項垂れている姿を見ると、獣同士でしか分からない何かをアレキサンダーに言われたのだろう。

すっかり落ち着いた様子の子のシャルルにミレイニが指を突き立てて。

「もうシャルル、エリエは食べちゃダメだし！」

そう告げる彼女にサーベルタイガーは「くうーん」と鼻を鳴らして、まるで叱られた子猫のように俯く。

悲しそうに足元を見つめるシャルルの頭を撫でて励ますミレイニ。エリエはほっとしたように胸を撫で下ろすと、そこにデイビッドがやってきた。彼に気付いたエリエは平静を装って立ち上がるようにしたが、途中でペタリともう一度座り込んでしまった。

「どうやら、さっきの出来事で完全に腰が抜けてしまったようだ——だが、そんな情けない姿をデイビッドに見られ羞恥心から顔を赤く染めた彼女がむっとしながらデイビッドの顔を見上げている。」

デイビッド刺すようなエリエの視線に慌てて視線を逸らすと、そつと手を差し出す。

最初は躊躇したような素振りを見せたエリエだったが、腰に力が入らない以上自力で立ち上がることができず。仕方なくその手を掴むと、聞こえないほどの小さい声でぼそぼそと呟く。

「なんだ？ 聞こえないぞ？」

「……しゃがんで！」

言われるままにしゃがみ込んだデイビッドの背中に、柔らかいものが当たる。

咄嗟に顔を向けようとしたデイビッドの耳元で、エリエの低い声が響く。

「悪かったわね。そんなになくて……」

デイビッドは首を横にブンブンと振ると、ゆっくりと立ち上がろうとしたその時、エリエが大きな声を上げる。

「ミレイニ！ 今のうちに装備を再装備しなさい！ いつまで裸でいるつもりなの!!」

「ひっ！ わっ、分かったし!!」

普段よりも凄みのあるエリエの声に、相当怒っていることを察したのか、言われるがままに装備欄から装備を一度外して再装備された。すると、ミレイニの服が黒猫を模したモフモフとした動物パジャマに変わった。猫耳のフードもだが、尻尾まで再現されている。

装備は装備欄から外さない限り、そこに存在した状態になったまま維持される。装備を外す方法は実際に脱ぐか、装備欄から装備を外すかの2つ。

装備欄から直接外せば装備はアイテム内に戻る。そして装備している物を一時的に脱ぐことにより、装備は保留状態になり。次に装備すれば、今まで装備していたものは例外なくアイテム内に戻るのだ――。

これはアイテムを略奪されない為の防衛策であり。全ての装備は例外なく持ち主のインベントリに戻る仕様になっている。譲渡には直接インベントリからアイテムを直接取り出し手渡しで譲渡する。又はアイテムを出して譲渡相手専用武器、防具などをクリックした時に出現するウインドウに名前を設定しておく。の2種類がある。

ミレイニはビシツと敬礼すると、エリエは静かに大きく頷くと、次の瞬間にはゆっくりエレベーターに向かって歩いていく。後ろ姿を見送ってほつと息を吐いた直後、頭の上に何か重い物が乗ってきた。「全く。だからエリエを怒らせるなど言ったのじゃ」

頭の上から声が聞こえ、ミレイニがゆっくりと頭の上のレイニールのレイニールを掴んで自分の前に持つてくる。

逆さになつているレイニールをくるつと反転させると、レイニールが「よっ！」と手を上げた。

ミレイニは目を細めると訝しげに「どうしてお前がここにいるし」と尋ねると、レイニールは少し考える様に項垂れ。

「まあ、色々あるのじゃ！　主が寝ている間はお前の頭の上を借りるのじゃ！」

昨日の状態ではエミルの近くに居られないと考え、気を利かせて違う場所で寝ていたのだろう。だが、それを聞いたミレイニは大声で叫ぶ。

「冗談じゃないしー！」

「キュキュー!!」

抗議したのはミレイニ本人ではなく、猫耳のフードの中から現れた白いイタチが全力で抗議する。

すると、レイニールがニヤリと悪そうな笑みを浮かべた。

「そうか……だが、お前がああの際に主の側を離れなければ、こんな事にはならなかったのではないのか？」

「うう……分かったし。でも、星が目を覚ますまでの間だけだし！」
 渋々頭に乗ることを了承すると、レイニールは嬉しそうに翼をはためかせてミレイニの頭の上に乗った。

パシパシと頭を叩くと、ミレイニは迷惑そうな申し訳なさそうな複雑そうな顔をしている。

確かにレイニールの言う通り。ミレイニが独断で持ち場を離れなければ少しは状況を持ち堪えられただろうが、結局は数の多い敵を排除しきれなかったのに変わりはない。

本来なら、ミレイニが責任を感じることはないのだが、レイニールの口車にまんまと乗せられたと言ったところだろう。

それが証拠にレイニールは得意そうにミレイニの頭の上で笑みを浮かべている。まるでそこが最初から定位置であったかの様に――。

エリ工達が去っていつて10分……20分……30分と経ち、さすがにミレイニも焦りを見せていた。

それはもしかしたら自分がこの場所に置いてけぼりにされたのではないかという不安からくるものだった。初めのうちはエリ工が後で呼びにくると思っていた……しかし、30分経っても自分達を呼びに来る気配すらないのであれば、もう……。

「もう。これは置いて置いていかれたな」

頭の上のレイニールがパシパシと、ミレイニの頭を叩いて言った。

ミレイニはハツとした様に口を開くと、大声で叫ぶ。

「あたしを置いて行くななんて許さないし!!」

突然走り出したミレイニの頭の上から、一度は振り落とされそうになりながらも、すぐに頭にしがみつくとレイニール。

その後が続くように、召喚された動物達も主の後を追って走り出す。

消えたマスター3

事態が沈静化したその横で出した剣をしまつて、エミルがほつとしたように大きく息を吐き出す。

「ねえ、貴女もしかして『白い閃光』じゃない？」

「……えっ？ そう呼ばれる事もあるわね」

「やっぱり！」

急に距離を詰めて食い付くようにエミルの体に迫つて来る赤髪の少女に、エミルが思わずたじろぐ。

それもそうだろう。その瞳はキラキラと輝き、まるで芸能人でも見るような熱い視線だった。

彼女の眼差しを受け、エミルが苦笑いを浮かべていると、スツと顔の前にサイン色紙が差し出される。

「サインお願いします!!」

「えっ？ ああ、いいわよ」

色紙を受け取り慣れた手付きでサインを書いていくと、書き終えた辺りで再び声が耳に飛び込んでくる。

「あつ、ここにリカちゃんへってお願いします！」

ちやつかり右下に自分の名前を入れて貰うと、サインを書き終えた色紙を返して貰って満足そうな笑みを浮かべながら胸に抱きかかえる。そういえば、始まりの街のサラザの店で、マスターからもサインを貰っていたが、その時にどうしてエミルからも貰わなかったのか謎だ……。

だが、その疑問はエミルも持っていたらしく。

「どうして、今ここでサインを？ 私と貴女は前も会ってるわよね？」

「……はい？」

小首を傾げて『何言ってるの？』的な態度を取っている彼女に、エミルは苦笑いを浮かべた。

「どうやら、彼女の記憶の中では、エミルはその場に居なかったらしい……。」

つと、書いてもらったサインをアイテム内にしまうと、再びエミル

に飛び掛かる勢いで迫ってきた。

「こんな場所でお会いできるなんて。いつも応援してます！ この前の武道大会の決勝見ました！ いつもドラゴンのブレスで勝負を決めるスタイルすっごく好きです！ でも、剣術も凄いですね！ 普段は剣を振るう必要がないから隠してるんですか？ それとも何か秘密が……………」

身を寄せてグイグイくる彼女に、エミルも苦笑いで応えるしかない状態が続いていた。すると、階段の入り口の方から大きな声が廊下全体に響く。

見ると、そこには少女と全く同じ顔の赤髪のショートヘアーに赤い瞳の少年が立っている。

「リカ。こんな場所に居たのか！」

腕を組みながらむつとした表情で立っていた少年が、今度は怪獣でも歩いて来そうな凄みのある歩みでこちらに向かってくる。どうやら、この大きなギルドホール内を相当探し回ったらしい。

少女はチラツと少年の方を見て、彼の表情に何かを察したのか、すぐにエミルの方に視線を戻す。その直後、少女の首元を掴んで少年が嫌がる彼女を無理やり引きずりながら、何度もお辞儀をして「お騒がせしました」とエレベーターの中へと消えていった。

あつという間に消えた彼女達を余所に、エミル達は紅蓮に言われた通りに食堂へとやってきたのだが、そこには大きな食堂の中にも入りきれないほどの人でごった返していた。

まるで開店前の行列の様に長い列を作っている中。多くの者達が困惑した表情で、互いに仲の良いメンバー同士で会話をしている。

エミル達も最後尾に並ぶと、エミルが困惑した様に「この人数じゃ、どう考えでも部屋に収まらないわよね……………」と言葉を漏らす。

だが、それは最もだ。如何に広い部屋と言えど、この場に居る者達を少なく見積もっても、千人は居るであろうこの人数を飲み込めるほどではない。

すると、人波を掻い潜るようにして前に進んでいく小虎の姿が目に入った。

どうやら、事態の收拾を図る為、何か声明を出そうとしているらしい。その証拠に、彼の手にはマイクがしっかりと握られている。

一番先頭の方にやっとの思いで辿り着いた小虎は、手近な場所にある椅子を自分の方へと引き寄せてその上に乗った。

「あー、皆さん聞こえますかー?」

彼が喋ると、スピーカーがあるわけでもないのに四方八方から声が聞こえてくる。

まあ、これがフリーダムというゲームの仕様で、屋内でも屋外でもどこでもマイク一つであり。公式が発表するイベントの他に、個人で開催するイベント用に設定されているものなのだ。

イベント以外にも大規模なチームで狩りをする時などに用いられることが多く。皆、結構様々な用途でこれを活用している。

小虎はマイクを掲げて手を上げている。どうやら、聞こえていたら手を上げて欲しいということのジェスチャーらしい。

すると、それを察した数人が手を上げ、それに続けと周りの者達も続々と手を上げ始める。

それを見て、満足そうにブンブンと手を振るとマイクを口に当てて、指を空で動かし何かを確認しながら話し出す。

「えー。集まってもらって大変申し訳ないのですが、始まりの街からお越し頂いた各ギルドのギルドマスターとサブギルドマスターの2人には、我々と一緒に前もってお話し合いの上。各ギルドで食堂解放後に食事という事でお話ししたいです。なるべく公平を期する為、ギルドマスター、サブギルドマスター同士のじゃんけんで、勝敗を決めたいと思います! なお拳帝率いるギルドのメンバーは我々が彼にモンスター配置の調査依頼を出している少数な為、特別に我々と共に食堂を使う事になります。予めご了承下さい!」

おそらく。メッセージに記載されているであろう文面を復唱し、小虎はほっとした様子でため息をついた。

不思議と不満の声は上がらず、それどころか皆、歓迎するムードを醸し出している。

それもそうだろう。敵が手をこまねいているとはいえ、四方をモン

スターに囲まれているこの状況では、容易に情報を仕入れることすら困難。

始まりの街とは違い。この場にいるほぼ全員が中、高レベルプレイヤーとなれば、そんなことは承知しているはずだ。頼まれたって諜報活動などしたくないと思っっているだろう。だが、それを進んで行っているマスターに感謝することはあっても、妬むことなどない。

しかし、不満の音が1つも上がらないというのはそれだけの理由ではなく。行っているのが『拳帝』とまで呼ばれた無敗の武闘家だからなのは疑う余地もなく、それだけマスターが信頼されている証拠でもある。

ここにいる者達は殆どが、始まりの街で彼に賛同して付いてきた――言わば、同志と呼べる者達なのだ。しかも、あの危機的状況で始まりの街を放棄せざるを得ない状況に追い込まれ。街の入り口を集中的に数十万のモンスターに囲まれた無謀な奪還作戦を即座に諦め、撤退を恥を忍んで進言したことに感謝している者が多い。

あの戦闘で不運にもギルドマスター、サブギルドマスターをともに失ったギルド『LEO』のメンバーですら声を上げない。60人という小規模ながらネオ、ミゼの2人を欠くという、この危機的状況になっても他のギルドへの心変わりをしないのは、さすが強者揃いのギルドと言ったところだろう。彼が仲間の為に命を投げ打ったのも裏付ける団結力だ。他のギルドのメンバーと違い、彼等からは独特の凄みを感じる……。

消えたマスター4

それぞれのギルドのギルマス達が前に出る中、エミル達も『LEO』は誰が出るのか内心ドキドキしながら見守っていた。何故なら、前に出た2人の者が代理とはいえ、ギルドマスターとサブギルドマスターということになるのだ。

すると、密集している彼等の中から2人の男が前に出てくる。それも人波を掻き分けると言うよりも、皆自主的に道を空ける感じだ——そのことからしても、2人は相当メンバー達に信頼されているというのが分かる。

前に出たのは、茶色く所々跳ね上がっている髪と、もみあげから顎まで無精髭を生やし。更に屈強な隆起した肉体を持った身長が2m以上あるであろう伸び放題の無精髭を生やした大男だった。

どちらも胸の大きく開いた革鎧を身に付けていて、小麦色に焼けた肌に黒髪の短髪。整った無精髭の男の割れた腹筋の上にある胸筋との境目にクロスに大きな傷跡が付いていた。もう片方の大男の全身にも、無数の大小様々な刀傷が刻まれている。外見をみただけで、彼等の強さが滲み出ているようだ——。

小虎の方へ向かって歩いていく彼等を見ながら、エミル達はその顔を瞳に焼き付けるように横顔を凝視する。

次に会う時は戦場になるかもしれない……その時に、彼等の誰がリーダーなのかを把握していなければ、意思の疎通が取れずに最悪の場合は状況が瓦解しまう恐れもある。

今回集まった中で『LEO』の規模は小さい部類に入るが、皆手練揃いであり。チームとして戦う上で有力な人物を覚えておいて損はない。

椅子の上に立った小虎の前には各ギルドのマスター達が集まって来ている。最後に来たのはリカとカムイだった。

強引に人波を掻き分けるリカと、その後ろを申し訳なさそうに頭を下げながらリカに付いていくカムイ。

遅れて来たにも関わらず、胸を張っているリカの脇腹を『少しは察

しろ』と言わんばかりにカムイが軽く小突く。

リカは一瞬だけむっと嫌な顔をしたが、声を発することはない。

全部のギルドマスターとサブギルドマスターが出揃い、ギルドマスターが拳を前に突き出してじゃんけんに入ろうとしていた。それを慌てて小虎が止めると、息を吸い込んで口を開く。

「今回はギルドマスター、サブギルドマスターに集まって頂いているので、ギルドマスター同士でじゃんけんして勝者のギルドが一番、サブギルドマスター同士のじゃんけんでの勝者のギルドが二番という感じで、勝ち抜き戦。決着が付くまで行います！」

声を張り上げ、レフリーのような口調で言った。しかし、彼と周りにはかなりの温度差がある。

正直。その場に集まっている者も実際に勝負を行うギルドマスター達ですら、小虎の出す雰囲気若干引いてしまっている。

だが、もう後戻りできないのだろう。小虎は強引に「それでは始めて下さい！」と再び声を張る。

各ギルドマスターが円を描くようにして『最初はグー』の掛け声で勝負が始まった。まあ、もちろんと言うか、当然人数が集まればあいこになる確率が上がるわけで……。

「残念！・またあいこです！・もう一度！」

なかなか決着がつかず。6回あいこが続いた辺りには、皆の声も自然と大きくなっていった。

その場に居た皆が前のめりに「あいこでシヨ！」と声を上げると、勝負の行く末を食い入るように見守っている。

どうしてか分からないが、シンプルなゲームだからこそ燃え上がる何かがあるのかもしれない。

そしてようやく、8回目の勝負で決着がついた。勝ったのはギルド『成仏善寺』の無善だった。

興奮したように周りが驚くほどの大声で「シャー」とガッツポーズを決めた彼はハッと我に返り。

「これも仏の導きなり……」

手を合わせて合掌するとゆっくりとお辞儀をする。

今更遅いと言う気もするが、ひとまずギルド『成仏善寺』が勝ち抜けた。これにより次に行われる食堂の優先権の二番を取れる勝負から、サブギルドマスターの浄歳が抜けることとなる。

その場の勢いというか、連続のあいこによって何とも言えない熱気に包まれている食堂内で、小虎の掛け声と共にサブギルドマスター達がじゃんけんを開始した。

激しいあいこ戦の末。勝負の結果が出ると、次に勝ったのはギルド『メルキュール』のサブギルドマスターのリアンだった。

彼女はチャームポイントの茶色の三つ編みを揺らしながら、何度もお辞儀をしている。

そんな彼女の勝利を当然と言わんばかりに腕を組んでいる漆黒の甲冑に、漆黒のドラゴンの兜の男が何度も頷く。

まあ、これでこのギルドホールを持ち主であるメルデイウスのギルド『THE STRONG』の後に、一番目と二番目に食堂を使用する権利を得たギルドが決まり。残った2組でじゃんけんをして、次に『LEO』『POWER』S』の順で決定した。

勝負が決した直後。今まで謎の熱気に包まれ、人でごった返していた各ギルドのメンバー達が次々に部屋へと戻っていく。

残されたのはギルド『THE STRONG』のメンバーと各ギルドマスター、サブギルドマスターとエミル達のみ。

その場に居た者達が小虎に席に着くように言うと、皆も素直にそれに従う。だが、一番の気掛かりは、この場にマスターが居ないことと、メルデイウスや紅蓮と言ったこのギルドの主要メンバーが姿を現わさないことなのだ。

もしも、マスターに周囲の探索を依頼したのなら、マスターが居ないのは納得できるが、彼等は逸早くエミル達と接触するはずだ。しかも、当事者であるはずのマスターからも連絡がない。

弟子であるカレンの姿も見えないことから、彼女も一緒に行った可能性もあるのも捨てきれないだろう。

イシエルは後から合流して、ちゃっかりエミルの席の横に腰を下ろしている。すると、食堂にメルデイウスと紅蓮。それと剛と言う男

だった。

彼等は簡易的に容易された最前列のテーブルに着く、その様子はさながら記者会見のようだ――。

席に着いて大きく息を吐いた紅蓮が、隣に腕を組みながら座るメルデイウスの変わりに少し間隔を空けて口を開く。

「……この場に集まって頂いた方々は、我々に味方してくれる方々であると思っております。今回はお願いがあつてこの場を設けました。剛さん説明を……」

その言葉に頷くと、彼女が座つたのと入れ替わるように立ち上がった。

「私はこのギルドの軍師的な役割を担っている。剛・里羅です。今回皆さんにお願いしたいのは、この街に入つて気付いたと思いますが、まだこの街の防衛網は完璧ではない。殆どのモンスターは聖水には近付けない――それを利用して、今は一時的に侵入を阻んでいる状況です。ですが、突破される事がないとは言いません。その為、一日でも早く千代の防衛を完成させる必要があります。その為に、明日の深夜に我々のギルドと一緒に伐採の手伝いと運搬時の護衛をお願いしたいのです。敵に感知させる危険を最低限にする為、1つのギルドのみをお願いしたい。立候補するギルドはお手を……」

剛の話を聞いて、各ギルドマスター達が静かに手を上げる。さすがと言うべきか、全てのギルドが立候補という素晴らしい結果となった。

いや、拳帝という絶対的な強者が消えた以上。それぞれが自分のギルドが最強であると確信に似た自信を持っているのだろう。

その表情は皆真剣そのもので、こんな状況で先程と同じようにじゃんけんで……なんてことを言える状況ではない。何故なら、それぞれに自分達のギルドでなければ作戦の成功はないと考えているからだ……。

互いを牽制する様に激しい視線をぶつけ合っている彼等に、今までだんまりを決め込んでいたメルデイウスが徐に口を開く。

「――丁度いい。この気にそれぞれのギルドの長の実力を測っておく

のもいいだろう。丁度、今日一日あるんだ——俺を含め、誰が一番なのかはつきりと準備を付けておこうぜ！」

ほくそ笑むメルディウスの言葉を、皆無言のまま頷いて受け入れる。

現実世界ならば、性別、年齢などで絶対的に不利になるプレイヤーが出てくるのだが、ここはゲームの中の世界——今の体は現実の肉体をトレースして作り上げたアバターに過ぎず。多少の変化は、システムのアシスト機能でプラマイゼロにそれぞれのステータスを調整される。

つとなれば、老若男女。大人でも子供でも公平に勝負ができるということになるのだ——それならば、誰もわざわざ下手に出る者などこの場にはいない。

何故ならこの場に居るギルドマスター、サブギルドマスターはそれぞれのギルドの看板と仲間達の名誉をその肩に背負っているのだから……。

だが、紅蓮はそれに反対のようでもつとしている。しかし、今は何かを言うことはない。いや、できないと言ったほうがいいかもしれない。

それもそうだろう。少なくとも皆納得した様子で手を下げたからに他ならなかった。確かにこの場で優越を付けるには実際に戦闘を行って決めるのが確実な方法だろう。

しかし、逆を言えば一時的とはいえ、ギルドを指揮する者達が著しく疲労するのによりはわりはなく。ここでもし敵が水に囲まれた城壁を突破してくるようならば、戦力と士気の低下は著しいものになってしまうのは明白だ。

おそらく。メルディウス本人もその戦闘に参加するということだから、ただ単に自分がこの場に集まっている強敵達と戦ってみたいというところから来るものなのだろうが、問題は戦闘のルールを決めることだ。

勝敗はHPを削り切った者の勝利というのは言うまでもないが、勝ち抜き戦にするのか総当たり戦にするのかということでも大きく結

果は変わってくるだろうし。何より、武器の使用にも大きな問題がある。

手に馴染んだ武器が最も扱いやすいということには違いがないが、このフリーダムの世界の中には『トレジャーアイテム』と言われる武器や防具、装飾品などのアイテムがある。それぞれに強力な付属効果を持ち、己の固有スキルとも相性のいいアイテムを持っている者も大勢いる。

メルディウスの武器『ベルセルク』もその一つで、本人の固有スキルの爆発の能力を大斧状態のベルセルクの爆発効果に付加させることができるのだ。これにより、武器の攻撃力は何倍にも跳ね上がる。確かにチート級の能力だが、それが彼だけの特権と言うわけではない。

この世界で『トレジャーアイテム持ち』の人間は珍しいわけではない。逆に固有スキルという初期で有無を言わずにランダムで決定するそれを単純に強化するには、トレジャーアイテムが最も適しているのだから。

すると、ギルド『メルキュール』のギルドマスター。ダイロスが手を上げて提案する。

「ギルドは個人ではなく集団だ——その集団の長であるギルドマスターは勿論。連携も見なければ分からない。ルールは二対二での勝ち抜き戦でどうだ？ 総当たり戦では疲労が大きくなる分ペース配分を考え、全力を出しきれないだろう。皆、手練揃いだからこそ全力で戦えなければ意味はない」

「全力と言うのなら、武器も自由に使えると言うことで良いな？」

メルディウスの言葉にもちろんと言わんばかりに、皆が頷く。どうやら、今回のことは本当に対決によって決定する様だ——。

「分かった……組み合わせは追って連絡する。全力を出し切つていい試合にしようぜ！」

ガタガタと音を出して席を立つと、メルディウス達はいったんその場を離れた。

それを見送ると、各ギルドマスター、サブギルドマスター達も自分

達のギルドの部屋へと戻っていった。

護衛ギルド選抜戦

しばらく待っていると、食堂の中にNPCのメイド達が食事を運んでくる。

だが、メルデイウス達はまだ戻って来る気配がない。NPCは命令を出さない限り行動することはないのだ。

つということは、自分達抜きで始めてくれというメルデイウス達からの意思表示なのだろう。

彼のギルドのメンバーもそれを察していつも通りに食事を取る中、エミル達もそのご相伴にあずかることにした。

結局メルデイウス達が戻って来たのは、エミル達が食事を終えた直後だった。紅蓮が不機嫌そうにしているから話し掛けはしなかったが……。

エミル達と別れデイビットとエリエ、ミレイニが泊まっている部屋に戻る途中の廊下で、湯上がりなのだろう。バスタオルを頭に被せ、下着の上に薄いシャツ一枚で廊下を歩いていたのカレンと出くわした。

熱を帯で微かに赤く染まった頬と淡い緑のシャツの上からでも分かる引き締まったウエストに、女性らしく迫り出したバストとヒップが、普段男性の様な格好をしている彼女が女性であることを再確認させる。

普段サラシを巻いているカレンだが、今は何も身に付けていないのか普段隠されている大きな胸がボタンを締めたシャツを弾かんばかりに押し広げ、下には黒いショーツが薄っすら顔を覗かせていた。

「ちよつと！　なんであんたがここにいるのよ！」

「……は？　別に俺がどこにいたって、お前には関係ないだろ？」

「あるわよ！　何よその格好！」

面倒そうに眉をひそめていたカレンに、突っ掛かるように声を上げているエリエが彼女の体を舐めるように見た。

まあ、普段気の知れたエミルや星の前で平気で下着姿を見せてエミルに怒られているのはエリエなのだが、さすがに人通りのある場所で

は非常識だと思うらしい。

起こっている彼女とは正反対に、間の抜けた顔でカレンは頭を掻きながら大きなあくびをすると。

「別にいいだろ？ 大浴場からエレベーターまで一直線だし。それに、数人としかすれ違ってないし」

「すれ違ってるとはじゃない！」

「……だから？」

今の自分の姿を全く気にしていない素振りで見上げるカレンに、エリエが激怒する。

「だからって！ あんたも女なら、少しは慎みを持ちなさいよ！」

「フン！ 俺に危害を加えられる男なんていない。それに別に見られたって減るもんじゃないし、いいじゃないか。ああ、お前は元より見られるくらいじゃなかったか……」

「むっかー!! この男女！ あんたのそのぶら下がってる無駄な脂肪を削ぎ落としてやる！ 表に出ろー!!」

「やだね。俺は修行で疲れてるんだ。子供の相手なんてしてらんないな」

これ見よがしに胸の下に腕を当てて持ち上げている。

彼女としては、いつでも全力でエリエを煽っていくスタイルは変わらないらしい。

確かにカレンのバストサイズはDかEはあるが、エリエはBくらいだろう。戦闘でも、どちらもスピードを活かした戦法を得意としている分、仲が悪いというよりもライバルに近い存在なのだろう……。

カレンもマスターとの行動が長かった為に、今まであまり同い年の者との交流は少なかった。エリエは基本的に自由奔放にこのゲームのタイトル通りフリーダムでやってきた。

腕を競う相手というのもおらず———というか、そんなことを微塵も考えていなかっただろう。

だいたいアイテム内に入っているはずの予備の武器や、装備品もななく回復アイテムも持っていない。その分全てをお菓子とその材料、調理器具でいっぱいだ———つまり『当たらなければどうということはない』

い』を地で行く彼女に、回復アイテムは不要でお菓子こそが重要なアイテムなのだ。

エリエは装備にトレジャーアイテムの『天女の羽衣』を使用している為、元々防御値がない服でも元にした防具の性能を付属できる。また、固有スキルもスピードを上げる『神速』。

武器の中で剣の重さを数値にして表すとすれば『12』に比べて、ガントレットは『6』と言ったところか。

今の段階では、革鎧でガントレットという装備の軽さを最大限に活かしても、固有スキルが使えないカレンの方が、エリエよりもスピードで劣るのは仕方ない。

だが、唯一大きな差がある胸でエリエを罵るのがカレンにとっては心地いいのだろう。

つといがみ合っているエリエとカレンのすぐ横に、いつの間にか鬼の様な形相のエミルが腕組みしながら立っていた。

「あつ……」

あんどりと口を開けてエミルを見た2人の顔が見る見るうちに青ざめていく、とてつもない威圧感を放っている隣にはイシエルがにっこりと笑顔をふりまいている。

「……ふふつ、楽しそうね。2人共……」

「いや……これは……」

「あつ！ 聞いてエミル姉！ こいつつたら——」

カレンの方を指差してエミルに告げ口しようとした直後ゴンツ！という鈍い音とともに、エリエの頭上に有無を言わず拳が炸裂する。

突如襲ってきた衝撃的な痛みに、思わず頭を押さえてうずくまるエリエ。

隣で目尻に涙を溜めて蹲る頭を押さえて蹲っているエリエを見ていたカレンの頭上にも、同じようにエミルのげんこつが炸裂した。あまりの痛さに、頭を押さえて悶絶しながらうずくまるカレン。

カレンがエミルのげんこつを受けるのは始めてだったが、自分が想像をしていた20倍は痛かった。

頭を押さえてうづくまる2人を前に、仁王立ちしたエミルが威圧感のある低い声で告げる。

「貴女達の声が私達の部屋まで響いてたわよ？ 私の城ならともかく、ここは他人のギルドホールの中です。どんな理由があっても、大声で騒いでいい場所ではありません！ いいですね！」

「……はい。ごめんなさい」

素直に謝った2人にやっとエミルが笑顔を見せると「分かればよろしい」と頷く。

ほっとして、まだジンジンする頭を立ち上がった2人の耳に、再びエミルの声が飛び込んできて。

「カレンさん。他の人も居るんだから、恥ずかしくない格好でね」

笑顔でそう言ったエミルの目は決して笑ってはいなかった。カレンは慌てて普段装備している皮鎧に変えると、その隣でエリエが『ざまあみろ』と言いたげに口に手を当ててニヤニヤしている。

カレンは渋い顔をしながらも、言い返すことはしない。すると、急にデイビッドの声が聞こえてきた。

「もう大丈夫か？」

殊勝にもあられない姿のカレンの姿を見まいと、顔を背けていたのだが、どうやらエリエとカレンには彼の存在そのものを忘れていたらしく『いたんだ……』と言いたげな顔で彼の方を見て目を細めている。

っとデイビッドが更に言葉を続けた。

「てつきり、カレンさんはマスターと一緒に行ったものだと思ってたから驚いたよ」

「はい？ 師匠がどうかしたんですか？」

「あっ！ しまった……痛だッ!!」

カレンの反応にハツとしたデイビッドの頭に衝撃が走り。彼もまた、頭を押さえて地面に座り込んだ。

己の失言によってエミルのげんこつの餌食となったデイビッドを、哀れむような目で見ているエリエが悟りを開いたかのように無意識に手を合わせた。

話を聞いて不安そうな表情を見せたカレンの肩にそつと手を置く。「マスターは紅蓮さん達の依頼で。今、敵の位置を偵察に行っているらしいわ。でも、彼は間違いなくこのゲーム内で最強のプレイヤーですもの。モンスターなんかには負けないわ……カレンさんを置いていったのも2人で動いて、敵に察知される危険を減らす為だろうし。今はマスターを待ちましょう、師匠を信じて待つのも弟子の務めよ？」

「……はい。分かっています」

彼女の話聞いたカレンは渋い顔をしながら、悔しそうに唇を噛み締めている。

カレンがマスターに置いていかれるのはこれで2回目だ——今まで、まるで一心同体の様に離れることはなかったのだ。

だが、エミル達と行動を共にするようになってから、マスターと共に連れていってもらえることが減って、留守番することが多くなった。

それはカレンからすれば自分の力を信用してもらっていないという不安に繋がっていた……何故なら彼女は、未だに固有スキルすら発動できていないのだから無理もない。

がつくりと肩を下ろしたカレンは、皆に一礼して自分の泊まっている部屋へと帰っていく。

正直。あのままでは自暴自棄になって何をするか分からないとは思ったが、今の彼女と話ができる相手は一人しかいないだろう。

皆が同時にデイビッドの方を見つめている。まあ、彼ならカレンと揉めることもなく、やんわりと話ができるに違いない。

彼は大きいため息を漏らし、仕方なくカレンの部屋の方へと重い足取りで歩いていった。

護衛ギルド選抜戦2

カレンのことはデイビッドに任せて、エミル達は試合会場へと向かう。

千代にも競技場があり、その規模は大型のドーム球場3つ分に相当するとても大きなものだ――。

ステージを覆う様に張り巡らされた観客席と、あちらこちらにNPCの営業する屋台などもあり。とても活気に満ちていて、開始までまだ1時間というにも拘わらず。大勢のプレイヤーが闘技場の中に集まっていた。

同じギルドのメンバーはもちろん。それ以外のプレイヤーの姿も多く、1つのアトラクションとしてこのイベントを楽しみにしているのだろう。

最近、立て続けに色々な出来事が起きていたこともあり。娯楽というものの、殆どは自主的に避けていたプレイヤー達にとって、今回のこの出し物はとても魅力的であることは言うまでもない。

メルディウスはそれを見越して、今回の企画を提示したと言いたいところだが、嬉しそうに試合の前のウォーミングアップと言わんばかりに、自慢の得物を振って体を温めている彼からはそんな思惑があったなんて微塵も感じ取ることができなかった。

豪快に大斧を振り回しているメルディウスの演舞に、観客達は歓声を上げて喜んでる。しかし、その大きな歓声も耳に届いていないのか、メルディウスは時折首を傾げる素振りを見ながら戦闘前の準備を急入りに行っていた。

他のギルドマスター達も開始30分を前に、続々とステージの周りに集まり始めた。

今回の試合はギルドマスター、サブギルドマスターがタッグを組んで戦う方式。連携の取れているチームが勝ち抜き戦で明日の夜の護衛任務に付けるという重要な試合。

現状蟻一匹入れる隙間のないほどに徹底した守りを、一時とはいえ開けなければならぬ。もしも、それに乗じて敵の侵入を許せば数に

勝るモンスターの大軍が、一斉に押し寄せてくるのだ。

開いた経路からモンスターの侵入を防ぐには、連携と制圧力の両方が必要となる。それを見極める為に、行われるのが今回のイベントだ。

だが、不思議なことに開始5分を前にしても、メルデイウスのギルドでサブギルドマスターのはずの紅蓮の姿がどこにも見当たらない……。

席に着いて試合の開始を待っていると、観客席の迫り出したガラス張りの部屋の部分は、明らかに他の席よりもグレードの高い椅子が備え付けられている。すると、ガラス張りになった中の扉から、出場するはずの紅蓮が出てきた。

颯爽とそのガラスを破って登場——なんて普段から冷静な彼女がするはずもなく、彼女が手にしたのは武器ではなくマイクだった……。

「……まあ、そうよね。紅蓮さんがそんな派手なことするつもりないわね」

エミルは苦笑いを浮かべていると、紅蓮が喋り始めた。

「今回は始まりの街でも有数のギルドのギルドマスター、サブギルドマスターの戦闘を間近に見られる珍しいことです。その為、今回はできる限り大勢の方に見ていただくこうとこの場を設けました。今日は楽しんでいって下さい」

一礼した紅蓮は落ち着いた様子で、ゆっくりと席に戻った。

どうやら、紅蓮は戦闘には出ないようだ——まあ、『イモータル』不死の力を持った紅蓮が試合に参加すれば、メルデイウスと紅蓮チームの一強で終わっていただろう。唯一の弱点があるとすれば、痛覚ありきの不死身ということだ——。

今回は主催者であり。おそらく始まりの街に建造したホテルの建造費用を、少しでも回収しておきたいという腹なのだろう。

会場の電光掲示板に組み合わせが発表される。

初戦 『POWER, S』VS 『成仏善寺』

二回戦 『メルキュール』VS 『LEO』

シード 『THE STRONG』

組み合わせを確認すると、初戦以外の出場選手はステージ下がり。ステージ上には『成仏善寺』ギルドマスターの無善。サブギルドマスターの浄歳が瞳を閉じて合掌をしている。

険しい表情で佇みながら拳を握り締めているリカ。その横では腰に差した剣の柄に手を乗せたまま、戦闘モードと言った感じの鋭い視線を目の前の2人に向けているカムイ。

モニターの時間は残り1分——その数字を会場に居た誰もが、固唾を呑んで見守っていた。

映し出されているカウンターの数字が全て『0』を示し、会場内のどこからかドーン！とドラがなる音が響き渡り、同時に睨み合っていた両者が動く。

「阿！」

「咩！」

無善の声に応えるように浄歳が声を発した。

今まで数珠を持って合掌したまま微動だにしなかったが、ドラの音を聞いて目を見開いた無善は小声で「錫杖」と呟き目の前に錫杖が現れ掴むと、ジャランジャランと鳴らしながら全力で前に走る。

そして相方の浄歳も同じく「錫杖」と唱え、顔の前に出てきた錫杖を掴むと、後方に数回跳んで距離を取る。

フリーダム内のシステムには音声、思考認識機能があるが音声認識でアイテムを交換できるシステムはない。しかし、音声だけで武器の切り替えを行ったのは誰の目にも明らかで、こんなことができるのはトレジャーアイテム以外にはありえない。

どうやら彼等は、言葉だけでインベントリ内の武器を自在に切り替えができるアイテムを持っている様だ——。

無善だけ突撃していったということは彼が前衛。浄歳は後衛の役割をそれぞれに持っているのだろう。だが、無善が動いたのとはほぼ同時にリカ、カムイの双子の姉弟も突撃を開始していた。こちらはどうか、2人が前衛で戦うスタイルなのか。それとも、相手が一人だけで突っ込んできたことで、各個撃破を狙おうという作戦なのかもしれない。

ない……。

一足早くスイフトの加速と武闘家という軽量化のメリットを活かし、リカが隣を走るカムイよりも頭一つ飛び出す。

彼女の凄まじいスピードに全く臆することなく前進を続けると、目の前を走っていたはずのリカの姿が残像を残して消え、気が付くと無善の懷に飛び込んでいる彼女の姿が目飛び込んできた。

「まずは……ひとつツ!!」

懷に飛び込んだリカが腕を引いて拳を構える。その直後、無善が後方に跳ぼうと地面を踏みしめるが、そう簡単に前進していた勢いを殺せるわけもなく、打ち出されたりカの拳が当たる直前に無善が数珠を彼女の目の前に突き出す。

「――発ツ!!」

無善の声の直後に持っていた数珠がフラッシュの様に激しく発光した。

目の前で激しい光を受けたりカは悲鳴を上げると、目を手で覆ってよろめく。その隙を突いて、無善が錫杖を振り抜いた瞬間。リカの後ろからカムイの声が響く。

「リカ! 後ろに倒れろ!」

「……ッ!?!」

言葉が聞こえた直後、リカは何の躊躇もなくカムイの指示に従う。

無善の振り抜いた錫杖が空を切り。確実に当たると思っていた攻撃を咄嗟に避けられ、無善も動揺を隠しきれない様子で目を見開いていた。

それもそうだろう。彼女の視界は未だに戻っていないはずだ――それに咄嗟にカムイの声が聞こえたからといって、人が視覚を奪われやすく動揺もせずその声に反応できるものではない。

渾身の力で放った攻撃の反動で、体が回ろうとする力を抑えきれずに無善はバランスを崩してしまう。

「リカ! フェインを入れつつ左斜め上に攻撃!」

「……くッ!! だが、攻撃して来る場所が分かっていたら問題は……」
残像だったリカの姿が消え、今度は倒れていた残像の遙か前、バラ

ンスを崩した無善の下の方に彼女の姿が見えた。

無善は身構える隙もなく、カムイに言われた通りにリカの拳が彼へと向かって放たれる。

バランスを崩していた彼の左頬をリカの拳が掠めるが、直撃とまではいかない。まあ、一時的だろうが視覚を奪われている状況下で、見えない相手に攻撃を当てるのは容易ではない。

っと彼女の攻撃をかわそうと体を捻っている無善の横に突如カムイが現れ、鞘に刺さったままになっていた剣を引き抜く。

すると、地面から複数の鎖が出てきたが、それに気が付いた彼が素早く後ろに跳んでかわす。

本当にぎりぎりのタイミングだった……カムイは悔しそうに渋い顔をしながら、無善の後ろにいた浄歳を睨む。

浄歳の固有スキルは『ゾーンバインド』使用者の周囲に居る敵を拘束する鎖を出現させて動きを封じる。

唯一の欠点と言えるのは、広範囲に同時に拘束用の鎖を放てる反面。発動時に地面が微かに緑色に光ることだろう。

察しのいい者なら、それを合図に即座に回避が可能だ——そうでもなくてもカムイは、先程の無善のフラッシュによる目潰しを回避している。

まだ見たこともないアイテムの効果を観察して見事に回避した彼が、視界に映った固有スキルで出した鎖の発生時に起こした微かな光すらも感知できるほどの動体視力と、固有スキル『神速』があつてこそなのだろう。

現に彼を拘束しようと伸びて来る鎖を、カムイは絶妙な動きで回避していた。

つと、今までカムイのみを狙っていた浄歳が彼の拘束を諦め、今度はまだ視覚の戻っていないリカに向かって拘束を試みる。

リカの周りを取り囲む様に無数の光が地面に現れ。

「リカー！ 左に跳ぶんだー！」

無言のまま頷くが、彼の言った左の方にも緑色の丸が浮き上がっている。

リカがその声に合わせて左に跳んだ直後、カムイは持っていた剣を地面すれすれに投げると、出現した鎖を的確に吹き飛ばす。

どうやら先の攻撃で、カムイには鎖が出現するタイミングを完璧に把握した様だ——元々それぞれの固有スキルというものは、結構大雑把な作りになっていて、それを改変できる方法はない。

固有スキルを強化する為には、入手困難な『トレジャーアイテム』を使用する以外にはなく。つまり、浄歳の欠点でもある鎖の出現ポイント点灯と鎖出現までの秒数を把握されてしまえば、対策の取りようは固有スキルの範疇では存在しないということ。

だが、何よりも警戒しなければいけないのはカムイだろう。彼は類い稀なる動体視力と、状況を即座に読み取り判断するだけの頭脳を持っている——。

カムイの状況把握能力があるからこそ、双子の姉であるはずのリカの方が考えなしに突入していけると言える。

全てカムイがやってしまうから、リカは安心して頭を空っぽにして戦闘ができるのだろう。双子の弟のカムイは冷静に状況を分析するスタイルで、双子の姉のリカは良くも悪くも感覚派。

どことなく戦闘スタイルは突っ込む前に多少なりと考えるカレンというよりは、全く考えずに突っ込んで、ダメならその時に考えるエンジニアに近いかもしれない。

護衛ギルド選抜戦3

カムイの投げた剣のおかげで拘束を免れたりカカの視界が次第に戻ってくる。

頻繁に目をぱちくりさせていたが、すぐにカムイの方に向かって親指を立てて見せた。

それを見て、無善は浄歳の側にカムイはりカカの側にそれぞれ付く。投げた武器を回収したいところだが、浄歳がまた鎖を出しかねない。

来ると分かっているなら、その隙を狙わない訳がないだろうし。カムイもそれは重々承知しているようで、すぐに先程持っていた剣と同じ物を装備し直す。

まあ、それなりのプレイヤーならば武器のストックくらいは容易しているものだ——だがそれは同時に、カムイの武器は希少価値の高い『トレジャーアイテム』ではないということの証しでもある。

だが、カムイにはスピードという絶対的な武器があり。さすがサブギルドマスターを名乗るだけあってLv100というカンスト状態で、同じ固有スキルということもあり。先程の動きを見ても、そのスピードもエリエとほぼ互角だ。

互いに突き刺すように研ぎ澄まされた視線をぶつけ合い見合っていた両者だったが、リカの視覚が戻ったことで勝負は振り出しに戻ったと言える。

正直なところ、ギルド『成仏善寺』の2人は初動で勝負を決めておきたかっただろう。いや、あわよくば2人のうちの片方だけでも仕留めておきたかった……それなら、残り一人を2人で叩けば良かったのだから。ここで数珠の光の効果が切れたのは大きな痛手だろう。

両者とも手の内を見せたわけだが、問題は成仏善寺の無善の固有スキル『憑依』はモンスター相手でしか効果がない。2人のうち1人の固有スキルが発動できないと言うのは、非常に厳しいと言わざるを得ない。

「ごめんカムイ。助かった……」

「まあ、いいさ。次で挽回だ！」

「ええ、分かつてる！」

リカとカムイは頷き合うと攻撃する体制に入った。
無善と浄歳も手に持っていた錫杖を構え。

「……できれば先に武闘家の方を倒しておきたかったですね」

「まあいい。呆気なく終わっては集まってくれた観客に申し訳ないからな……浄歳、次は一对一に持ち込む」

今度は地面を蹴ってリカ、カムイへと襲い掛かる。拘束系の固有スキルと片方は固有スキル使用不能という不利な状況で、完全に向こうから攻めて来ると考えていなかった双子は虚を突かれ多様にするに迎撃態勢に入る。

「はあああああアツ!!」

声を上げながら、無善の後ろに隠れる形で浄歳も全力で向かってきていた。

「リカ。先頭の奴を頼む！ 僕は後ろをやる！」

「了解！」

隣り合わせにすぐに迎撃態勢に入ったりリカとカムイ。

そこに躊躇することなく勢い良く向かって来る無善と浄歳を見据えた。

「阿！」

「咩！」

前を走る無善に応えるように浄歳が声を発すると、地面から鎖が現れ無善を拘束して動きを止める。

急制動を掛けて止まった無善にリカは驚きを隠しきれない。すると、後ろから浄歳が錫杖を構えてカムイに襲い掛かった。

素早くカムイは錫杖を剣で受け止めると、肉薄しながら彼の体を後ろに追いやる。

「カムイ！ きゃああああアツ!!」

つと同時に無善を拘束していた鎖が消え、今度はカムイの方に一瞬視線を奪われたリカの脇腹に錫杖が当たり、そのまま吹き飛ばされた。

飛ばされたりカを無善が追撃する。だが、素早く体勢を立て直して

拳を構えた。即座に振り抜かれた錫杖がリカの体を捉えた……つと思つたのだが、当たつた直後にリカの姿が消える。

すぐ下を見ると、リカが無善の懐に飛び込み拳を振り上げる体制に入っていた。『まずい』と感じた無善は、先程使つた数珠をリカの顔の前に突き出すが、二度も同じ手が効くような相手ではない。

「はあああああああああああああああああああッ!!」

観客席から見ても視界を奪われるほどの光量に会場内が包まれる中、リカの気合いの籠もつた声だけが響く。

次の瞬間には2人の距離は大きく開き、何故か無善は左脇腹を押さえて歯を噛み締め、そして頬には切り傷が刻まれている。

あの一瞬の間にあつたことを説明すると、リカが無善の懐に飛び込んだ直後、無善の光る数珠をかわす為、彼女は目を瞑りそのまま拳を無善の顎目掛けて振り抜いた。

だが、無善も急所を回避するべくできる限り体を捻ってギリギリでかわしたのだ。その時に左頬にガントレットが当たり、頬が微かに切れた。しかし、かわされたことは手応えが薄かつたりリカも重々分かつていて、素早く右足で彼の左脇腹を蹴つた。視界が戻っていなかった無善はそれに気付かず吹き飛ばされ、今のこの状態となつたということなのだ――。

その遥か後ろで未だ肉薄しながら、カムイと浄歳も激しい攻防を繰り広げていた。

カムイの剣と浄歳の錫杖が激しくぶつかり合いガンガンと音を立て合う。激しく体を入れ替えて打ち合う様子から、武器を使った戦闘の力量はほぼ互角なのだろう。

互いに武器での競り合いに一步も引かない様子で、このままではそう簡単に決着はつきそうにない。

リカと無善も距離を取って睨み合いながら全く動こうとしない。リカとしてはあの光を放つ数珠を警戒しているのだろう。少しでも目を瞑るタイミングを誤れば一瞬で情勢は不利になる。

無善の方はリカの固有スキル『フェイント』を警戒しているのだ。単純にフェイントを掛けるだけだと思つていたこの固有スキルだが、

実際は残像を残した移動も可能にしたもの。視覚に頼れない分、感覚的に戦うしかないが、それでも完全に動きを見切ることなど不可能。

しかも、彼女の攻撃は予想以上に重い。急所と呼ばれる場所に打ち込まれればHPは大幅に減少してしまう。まともに打ち合えば、固有スキルの差でHPが先に尽きるのは無善の方だ――。

観客達もカムイと浄歳の激しい攻防を見守っている中、全く動く気配のないリカと無善の方を気にしだす。

すると、観客席の所々で戦わない2人に向かって野次が飛んでくる。

「何止まってるんだ!」「ビビったのか!」「戦わないならステージから降りろ!」

など、様々な野次が浴びせ掛けられる中で相当集中しているのか、野次が聞こえていないと言わんばかりにリカと無善は微動だにしない。

それを察したのか、カムイと浄歳が2人のサポートに入る。寄り添うように側にくると、それぞれパートナーに耳打ちする。

何を話しているのかは分からないが、リカと無善が深く頷いたことから何かをしようとしているのは間違いない。

リカとカムイが真剣な表情で彼等を睨むと、カムイが指でコマンドを操作し、何かオレンジ色の球体を取り出した。

大きく振りかぶると、無善と浄歳が身構える。すると、何故かそのまま自分の足元にその球体を投げ付け。同時に白煙が上がりリカとカムイの姿を覆い隠す。

「煙幕か!? 小癩な真似を……」

「だが、無善。この距離で煙幕を使う理由はなんだろうな。本来ならば近距離で使うものだろう?」

確かに浄歳の疑問も最もだろう。今から戦闘に移るにしても、自分達の姿を煙の中に隠しただけで、実際に煙から出た瞬間を狙われるのは、2人も分かっているはずだ。

正直。姿を隠す以外のメリットがなく、状況をひっくり返せる様なものでもないと言わざるを得ない。

現に無善と淨歳も攻撃を仕掛けることなく、状況を見極めている。不用意に突っ込んでも返り討ちに遭うと、煙幕を張った彼等の思惑に乗せられることにもなりかねない。素直に返り討ちに遭うより、現状で特に変化をもたらさないのであろう策を見守っていた方が懸命と判断した様だ――。

護衛ギルド選抜戦4

2人の周りに立ち込めていた煙が収まり始め、次第に視界が開けてくる。

煙が完全に晴れた直後、会場内に困惑したような雰囲気の流れた。それは対決している無善と浄歳も同じようで、信じられないと言わんばかりに口をあんぐりと開けていた。

それもそのはずだ。彼等の前に居たのは同じ容姿の少女が2人。容姿は赤い長い髪に赤い瞳でリカそのもののだが、武装は先程までカムイの着ていた西洋風の甲冑を身に付け、手にはカムイの持っていた剣を持っている。全く変わらない容姿はまるで、分身したかのようには瓜二つだった。

容姿に気を取られていると、2人が剣を構えて無善と浄歳に突進してくる。

一瞬、驚いた様子を見せたがすぐに向かってくる彼等を見据え、手にしていた錫杖を構え直す。

「阿！」

「咩！」

声を揃えて叫んだ直後。向かってくる2人に固有スキル『ゾーンバインド』を発動させると、足元から現れた鎖が彼女達を狙う。

すると、2人の体が青く輝き速度が更に上り鎖の間を掻い潜って一直線に迫ってくる。

それよりも驚きなのが、彼女達が同じ固有スキルを使用していることだ——固有スキルは原則一つだけしか取得できず、使用することもできない。

例外は特殊な固有スキルか、トレジャーアイテムのどちらかだろうが、リカとカムイの固有スキルはそんな感じの、何か隠されている様ではなかった。

おそらく。先程自分達の足元に投げたオレンジ色の球体のアイテム。それがトレジャーアイテムの類だったのだろう。

浄歳の放った鎖が全てかわされ、錫杖を構える彼等の懐に2人が飛

び込む。踏み込んで剣を構える彼等の攻撃を、手に持った錫杖で防御しようとした無善と浄歳の錫杖をすり抜けるように彼女達の姿が消え、気が付いた時には既に胸元を斬り付けられていた。

よろめき体勢を崩す無善と浄歳の胸に大きな傷が刻まれる中、肩から掛けられていた大きな鉄製の数珠が下げられていたのだが、その数珠の紐が切れて地面に鉄製の玉が乱雑に転がる。

痛覚のあるこのゲーム世界で斬られるという行為はそれだけで致命的だ。特にPVP時には回復アイテムの使用ができない為、今あるHP残量だけで戦略を組み立てなければならず。

それには冷静な判断力が不可欠になる。しかし、傷を受ければその判断力も鈍くなり。傷が大きくなれば、判断力の低下も必然的に大きいものになってしまう。逆を言えば、負傷を負ってからは、プレイヤーの真の腕の見せ所と言ったところだろうか……。

「——まさか、この首の数珠まで斬られるとはな……。」

胸元の傷をなぞり、声を揃えてそう告げた無善と浄歳。

彼等の表情からはピンチに陥ったという感じは全くない。それどころか、まるでパンドラの箱を開けてしまったと言わんばかりに、これまでとは異質な闘気を放っていた。

それを敏感に感じ取ったのか、接近していた2人の赤髪の少女が、凄まじいスピードで一気に距離を取った。おそらくこの行動は、状況を把握する為などではなく、動物的な危機察知能力からくるものだろう。

「今、後数秒近くにいたらこっちが負けていたわ……。」

「僕もそれは同感だね。一瞬で戦闘力が数倍に跳ね上がった……。」

容姿も声も同じなのでどちらがどちらかは口調から判断するしかないが、互いに目の前の相手から視線を外さないようにと意識しながら眩くりカとカムイ。

つと次に今までの数倍は速い速度で、口元に微かな笑みを浮かべた無善と浄歳がリカとカムイに襲い掛かる。

確かに速いが、カムイの固有スキル『神速』を使える2人に取って

追えないスピードではない。剣を構え向かってくる無善と浄歳に剣を振り抜く。

しかしもちろん。これもリカの固有スキル『フェイント』を織り交ぜての攻撃。突き出された錫杖の前にいたはずの2人の姿は消え、別の場所から反撃を試みた。

「うそッ!？」

「なんでッ!？」

すると、周囲にガギンツ!と武器同士が打ち合う音が響く。見えない剣戟を弾かれると夢にも思っていないかつたリカとカムの体制が崩れ、2人は渋い顔をしながら無善と浄歳の顔を見据えると、驚きのあまり目を見開く。

それもそのはずだ。なんと無善も浄歳も瞼を閉じていたのだ——これは以前。ダークブレットのリーダーとの戦闘で見せた戦法だった。

このゲームでの五感は現実世界の五感とは違う。現実世界での比率は一説によれば、視覚87%。聴覚7%。触覚3%。臭覚2%。味覚1%。となっている。

つまり約90%もの情報を視覚に頼っているのが現実なのだ。本来ならば目を瞑るといふ行為は殆どの情報を得る機会を失うということに等しい。

しかし、それは現実の世界ならばの話で、ここは仮想現実——つまりは、作られた偶像の世界。そこでの五感の比率は100を均等に振り分けた状態で、重要度は視覚、聴覚、触覚、臭覚、味覚となり。全てに20%配分で振り分けられたものをカットすればするほど、一つの感覚だけを研ぎ澄ますことが可能になるわけだ。

リカの固有スキル『フェイント』は視覚に訴えかけて意識をずらさせる戦法。その翻弄される感覚の一つを完全に遮断することで今は視覚0%。聴覚、触覚、臭覚、味覚がそれぞれ25%となっている。

だからと言って、視覚が現実世界よりも悪い訳ではなく。逆にクリアに見えるほどだ——誰もいるだけで、メガネを掛けなければまともに前が見えないほどに視界の悪いゲームをプレイしたいと思う者は

いないだろう。

数値だけ見ると、たった25%と思う人もいるだろうが、実際には現実世界の数値よりも多い超人的なものに設定されているのだ。つまり、視覚は現実とほぼ同等で、他の感覚が超人並みに強化されている状態と考えるのが簡単だろう。触覚が強化されているとはいえ、痛覚も強化されている訳ではなく。

人が脳に与える影響を考慮して、その数値はそれほど高くは設定していないが、それでも危険だと判断された場合には、気絶という形でシステムを一時的に凍結して強制的にクールダウンさせる防衛行動を取るようにセッティングされていた。星がまだ眠ったままで目を覚まさないのも、このシステムが働いているからに他ならない……。剣を弾かれ体勢を崩したり力とカムの目の前で、無善と浄歳の体が一瞬だけ赤く輝き、構えていた錫杖を勢い良く振り抜いた。

錫杖に吹き飛ばされて地面を転がる見分けの付かない2人が止まると、それを待っていたかのように浄歳の固有スキル『ゾーンバインド』を発動させて地面に2人の体を何重にも拘束する。

「くツ……と、取れない……」

「うっ……動けない……」

体を鎖で雁字搦めにされた体を捻って、何とか鎖を振り解こうとしているがどうやらそれは無理そうだ。

会場内の大きなモニターに大きく10と表示され、そのカウンターが一つずつ数字を少なくしていく。

表示されていたカウンターが『0』になり、再び会場内にドラが鳴り響くと、今まで鎖を解こうと身を振っていたり力とカムイが勝負が決したことが分かって、全身の力を抜いてその場に倒れたまま大きく息を吐いた。

あの最後に赤く光ったのは基本スキル『タフネス』を使用した為だ。通常、基本スキルは攻撃力、防御力を上げる『タフネス』移動速度、攻撃速度を上げる『スイフト』の2つが存在し、ゲーム登録時にどちらか選択できる。

常識的には、戦闘開始時に使用するのが一般的だが、プレイヤー同

士が戦うPVPでは勝負を決める時に発動する者も多い。

基本スキルの発動は音声認識と意識から読み取るの2パターンがあり、慣れれば声を出さずに発動可能だ。しかし、発動時に発動を確認する為、それぞれ一瞬だけ青か赤に光ってしまうデメリットがある。

その為、熟練したプレイヤー同士の勝負では、固有スキル同様に基本スキルも発動をギリギリまで隠す場合が多い。

無善も浄歳も僧侶の衣装は防具ではなく自作で用意した服扱いになった装備だ——それを鉄製の数珠を装備することで、相手に鎧などの装備を錯覚させた。しかも、瞼を閉じると他の感覚が研ぎ澄まされるという事実を知らなかったのだろう。

この仕様は最近アップデートされたもので、まだ知っているプレイヤーは少ない。だが、無善も浄歳も日頃から座禅を組むことが多くそれを知っていたのだろう。しかも、鉄製の数珠が外れたことで、鎧を着用していない本来の速度までアップしたのが、自分達が煙幕を上げていたのが結果として、相手が基本スキルの『スイフト』を発動したとリカとカムイに錯覚させたのだ。

その為、間違いなく当たると確信していたフェイントを入れての攻撃が弾かれ、無善と浄歳が基本スキル『タフネス』を起動された時には、すでに勝負が決まっていたのである。勝負の決着的にはただのテシカウント負けだが、その中には多種多様な駆け引きがあるので――。

【勝者『成仏善寺』 次の試合は『メルキュール』対『LEO』出場者は準備をお願いします。】

モニターにシステムメッセージが表示され、会場内に居る個人の耳元に直接同じ文章がリピートされる。

地べたに座り込んで悔し涙を流すリカを姿の戻ったカムイが励ましながら、肩に手を回して立たせると通路に向かって歩いていく。だが、そのカムイの瞳にも微かに涙が浮かんでいた。ギルドを代表して負けたのだから、その悔しさは並のものではないのだろう……。

逆に勝っても喜びを見せる訳でもなく。逆に引き締まった顔付き

でステージに合掌して一礼すると、無善と浄歳がゆつくりと通路に向かって歩き出す。

すると、無善と浄歳の向かったステージ横の通路から、屈強な男とそれより一回り大きい大男が悠々と歩いていく。

無善と浄歳は彼等を横目で見てそのまま横を通り過ぎたが、屈強な男2人は涼しい顔で前を向いたまま、それに見向きもしない。

護衛ギルド選抜戦5

先の作戦でギルドマスターとサブギルドマスターのネオ、ミゼを失ったギルド『LEO』から代表して出た2人だ。相当肝が座っているのだろう。この程度の舞台では動じないだけの鋼の心を持ち合わせているに違いない。

そしてリカとカムイの向かった方からは、ギルド『メルキュール』のギルドマスターのダイロス。彼の逞しい肉体を覆う漆黒の甲冑と顔を覆い隠すドラゴンを象った漆黒の兜と背中に背負った巨大な大剣は、何時見ても周りを威圧する雰囲気を持っている。

後ろを少し遅れて歩いているのはサブギルドマスターのリアンだ。茶色い三つ編みを揺らしながら西洋風の甲冑を着た姿に、宝石の様に光る青い瞳。腰には煌びやかな剣が差されていた。

カムイに肩を支えられ、悔し涙を流しながら控え室へと戻るリカの横を通った瞬間、リアンがボソツと呟く。

「――貴方達とも戦ってみたかったのに残念です。この試合に勝つて、貴方達の仇は必ず私達がかかります……」

振り返ったりリカに歩みを止めてにつこりと微笑み返すと、先を行くダイロスが声を発した。

「リアン行くぞ。試合はもう始まっている」
「はい」

凜々しい顔で身を翻したりアンが前を向いたまま進んでいくダイロスに続く。ステージの上に登ると、既にそこには『LEO』の2人が待っていた。

全身に無数の傷がある大男の方は両側に刃が光る大斧を持ち、小麦色の肌に屈強な肉体の胸にクロスの大きな傷を持つ男は大剣を地面に突き立てている。

静かに瞼を閉じてその場に佇んでいた彼等の瞳が、ステージに上ったダイロスに向けられ。

「おう。まずは自己紹介といこう！」

向かい合って威圧される様な視線を向けられた直後にそう言われ

れば、誰だつて首を傾げるだろう。だが、そこは千人規模のギルドのギルドマスターだ。冷静に頷くと徐に口を開く。

「俺はダイロス。ギルド『メルキュール』のギルドマスターだ。彼女はリアン。サブギルドマスターだ」

「俺はギルド『LEO』の臨時で頭を張っているゲイン。そこで隣のがウォーニスだ。いい試合にしようぜ！」

歩み寄ってきたゲインが差し出す手を、ダイロスが突き出した手がぎゅつと握り返す。

互いに距離を取って武器を構えると、試合開始のドラの音が会場内に鳴り響く。

先に突っ込んできたのはギルド『LEO』の体に無数の斬り傷のある大男だった。手に握った両側に刃の付いた大斧でダイロスに襲い掛かる。

「うおおおおおおおおおッ!!」

ダイロスはその刃を手にとっていた大剣で防ぐ。

「……ぐッ!!」

力の限りでダイロスの大剣に自分の握り締めた大斧を押し付け、火花を散らしながらウォーニスが力任せに押し切る。

凄まじい力で押し退けられたダイロスは地面に、二本の線を引きながら足で踏ん張って止まった。

彼を吹き飛ばしたウォーニスが無造作に生やした無精髭を触って、ニンマリと笑みを漏らす。

「わーはっはっはっ!! こんなに弱い奴がギルドマスターだと? ゲイン。こんな雑魚に様子見なんていらぬぜ! 俺の全力で叩き潰してやる!!」

ウォーニスは大声で叫んでゲインの方を見ると、彼もニヤリと笑みをこぼして大きく頷く。

「なら行くぜ! メタモルフオーゼ! グリズリー!!」

持っていた大斧を地面に突き刺すと、ウォーニスは雄叫びを上げて天を仰いだ——次第に巨大化を始め全身から毛が生えだして、見る見るうちにその姿が人間離れしていき、やがて巨大なグリズリーの姿に

変わった。

それを鋭い眼光で睨みつけるダイロス。

すると、野獣とかしたウォーニスと彼の間にはリアンが剣を構えて立ち塞がる。

「ギルマス。ここは私が！」

変化して巨熊の姿になったウォーニスを取り囲むようにして、リアンの姿が囲み込むようにして展開していく。

数は10と言ったところだろうか……これが彼女の固有スキル『幻影』だ。リカの『フェイント』と似ているが、リカの固有スキルは単に認識をずらす為の残像だが、リアンのこれは全てが実体で攻撃も可能。しかも、その規模も持続時間も桁違いなのである。

分身して周囲を囲んだリアンが体制を低くして一斉に剣を構えると、ウォーニスは鼻をひくつかせ、迷うことなく一体のリアンへと猛烈に突進していく。

「——なっ!?!」

突進してくる熊に驚きながらも、体の前に剣を構え直す。

大きく振り上げた直後に振り抜いた前足の爪をリアンが何とかガードする。しかし、力の差が大きいのか、そのガードごとリアンの体を吹き飛ばした。

彼女の華奢な体を覆う鎧が地面を転がる度に音を立て、しばらく地面を転がって止まった。

受けた一撃だけでもHPが残る感じは全くしなかったが、徐々に減少するHPゲージはレッドゾーンに入る手前で止まった。

それは彼女のまもっている西洋甲冑はトレジャーアイテム『不屈の鎧』と言って、瀕死の攻撃を受けてもHPが30%を切ることは決してないのだ。しかし、この効果は戦闘時一度しか発動しない。つまり、次に同じ攻撃を受ければ間違いなく彼女のHPは底を突いてしまう。

「リアン。大丈夫か！」

ダイロスの声が響いたが、地面に倒れたままの彼女は全く反応はなく、どうやらリアンは気を失ってしまったらしい。

——グオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!

追い打ちを掛けるように倒れているリアンに、止めを刺そうと四足歩行で疾走するウォーニス。

ダイロスが巨熊の行く手を遮った。彼は手に持っていた大剣を振りかぶると、自分に向かってくる5メートル級の巨熊に向かって己の体ほどもある大剣を振るう。

勢い良く振り抜かれた大剣が巨熊の鼻面から、その巨体を真っ二つに斬り裂くと、巨熊と化したウォーニスが断末魔の叫びを上げる暇もなく2つに裂かれた体が地面に音を立てて崩れる。その直後、彼も持っていた大剣がガラスが粉々になるように砕け散って消えた。

コマンドを操作して漆黒の鎧と同じく黒い刃の大剣を取り出した直後、ダイロスに向かって襲い掛かる。

自分に振り下ろされた大剣を己の大剣で防ぎ、鏢迫り合いをしながらダイロスは驚いた様子で声を発した。

「なっ……お前。その剣は!!」

「ああ、そうだ。あんたと同じ剣さ! その武器を持っているのが自分だけだと思っていたのか!!」

鏢迫り合いを続けていたが、ゲインのその言葉の直後。ダイロスが大剣を強引に振り抜き一気に距離を取った。

しかし、ゲインの方はそれを許してはくれないらしく、再び斬り込んで間合いを詰めてくる。

「——別に逃げる必要ないだろう? ああ、時間を稼ぎたいのか……あんたの固有スキル『豪腕』は一撃だけだが、通常の100倍という桁外れの攻撃力強化スキル。しかも固有スキルのレア度はDで、リキャストタイムは5分だけ。外れの中の大当たりを、あんたは引いたわけだ。通常そんな攻撃力で敵を倒せば武器の耐久力はなくなり、さっきのように消滅する……が、今のこの大剣は違う。不滅の刃『炎剣デュランダル』そもそも耐久力が存在しないこの大剣ならば、あんたの一撃。『竜殺しの一撃』を存分に振るえるっというわけだろうか?」

「ふん。同じ武器の使い手ならば、もはや隠す必要もないか……」

ドラゴンの兜の隙間から微かに笑みをもらしたダイロスの体が、一

瞬だけ赤く光ると凄まじい力で鏢競り合いを続けていたゲインを吹き飛ばす。その直後、ダイロスの持っていた大剣が燃え上がるように炎を吹き出した。

護衛ギルド選抜戦6

バランスを崩したゲインは空中で体を回転させ、何事もなかったかのように地面に着地する。

「まだ初手の状態でタフネスを惜しげもなく相手に手の内を晒す。その大胆さはいい……だが！ 時間を稼ぎたい思惑が見え見えだ！

5分もいらぬ。3分で終わらせてやろう……俺の固有スキル『旭日昇天』でな!!」

すると次の瞬間。ゲインの体から出た凄まじいほどの赤いオーラが天へと昇っていた。

突如現れたゲインの体の変化に、ダイロスも警戒したように燃え盛る大剣の先を彼に向ける。

「これが俺の固有スキル『旭日昇天』その名の通り。朝日が勢い良く天に昇るように、己の能力を一気に最大まで大幅に強化するが、頂点に達した後は徐々に能力が低下し、最後は最低値を記録する。この体から滲み出るオーラは血と同じ赤——己の魂を燃やすように辺りに闘気を振り撒き、やがて灰となる。この大剣も俺の強すぎる俺の力を全力で出し切る為のものだ。後はお前が……」

そこまで口にしたゲインが突如ダイロス目掛けて突進してくる。構えて即座に振り抜いた炎を纏う大剣をダイロスも己の愛剣で受け止めた。

互いの大剣の発する炎が円柱のように空へと吹き上がる。その光景は、まるでお互いの気迫が炎となりぶつかり合っているようだ——。

「お前が俺の猛攻に耐えられるか！ 俺が燃え尽きるのが先か！ それがこの勝負を左右する!!」

叫んだゲインが更に力を込めると、重鎧を着ていたダイロスの体在意図も容易く吹き飛ばされ、ステージ上に大きな溝を作っていく。勢いが次第に弱まり止まると、ダイロスは何事もなかったかのようにその場でゆつくりと立ち上がる。

彼のHPゲージも然程大きく減っていない。それが気に食わな

かったのか、ゲインが直ぐ様地面を蹴ってダイロスへと襲い掛かり、その攻撃をダイロスはギリギリで体を横にしてかわすと、攻撃を見切られたゲインは目にも留まらぬ早業で炎を噴く大剣で身を守っているダイロスを斬り付けていく。

彼が革鎧という薄く軽い防具を選んでいるのは、防御よりも攻撃に重きを置く戦闘スタイルだからこそ、ダイロスよりも必然的に攻撃の手数が多くなっているのだ。

基本は一撃で敵を撃破する戦闘スタイルのダイロスは、攻撃を放つと5分というリキャストタイム分のアドバンテージを相手に与えてしまう。基本スキルは『タフネス』を選択している以上、『スィフト』を選択している者に手数とスピードでは敵わない。その為、重鎧を装備して守りを強固にしなければ、確実に勝負を決めるのは難しい。

それに不滅の刃を持つ『炎剣デュランダル』は通常の戦闘で敵の防御を抜いて粉碎することができるとは、今回の様に同じトレジャーアイテム装備持ちとの戦闘では、そういうわけにもいかないのも事実。

現に装備が全体的に重いダイロスより、スィフトを発動させながら若干でも軽い防具を身に付けているゲインの方が手数で有利になっているのは間違いないだろう。

フリーダムでは脳から発せられる電気信号をハードがキャッチしてそのまま、ヴァーチャル世界の体であるアバターへと繋げている。つまり、脳の反応速度が速い者がこの世界では最も強いプレイヤーとなる。

ゲインの振るう大剣をギリギリのタイミングで見切りながら、微かな動作だけでやり過ごしていくダイロス。

兜で表情は見えないものの、その動作から彼が然程焦っていないように思えた。

「オラオラオラオラオラオラオラオラー!!」

「——くッ!!」

大剣の柄で受けると勢いで押し返されるほどの剣戟を止めどなく打ち出される剣戟を同じ大剣で受けつつ、防戦一方の状態が続く。だが、体力を消耗しない最低限の戦闘に切り替え、反撃の時を狙ってい

るような瞳が、兜の隙間から鋭い眼光を飛ばしている。

ゲインの全身から放出されている赤いオーラが次第に小さくなっていく。そして微かな輝きと共に、今度は黄色いオーラが全身から勢い良く吹き出す。

オーラが黄色に変わったと同時にその猛攻は更に激しさを増す。しかし、その威力は先程までのいつ大剣を弾かれるかというほどの凄まじさはない。どうやら、彼の固有スキル『旭日昇天』の継続時間はそれほど長くはない様だ――。

オーラが黄色になったからか、元々この戦法でいく予定だったのか、ゲインはダイロスの大剣の腹を蹴ると一気に距離を取った。一瞬で間合いを取ったかと思うと、今度は上段に大剣を構えてその剣先をダイロスに向けてそのまま突き出して襲い掛かる。

ダイロスは大剣を横に構えて彼の大剣を迎撃する。互いの刃が火花を散らしながら交差し、鏝まできたところでダイロスの方が勢いで負け、勢いに押されるように体が半回転して止まる。

彼の横を通過するようにゲインが駆け抜けると身を翻し、すぐに両者ともに大剣を構え直した。

どうやら、動作のある攻撃だとまだゲインの方が力では上のようだ。彼の急な力押しからの動きのある戦法への変更は、焦りではなく元から組み立てられたものによるものだったらしい……。

「はあああああああああッ!!」

中段に構えた大剣を思い切り振り抜くと、受け止めた大剣ごとダイロスの体を押し切る。

彼が地面を踏ん張って勢いを殺しきったのも束の間。すぐに上段からゲインの振り上げた大剣が襲い掛かり、咄嗟にダイロスも大剣で防ぐ。

その直後、攻撃の勢いで受け止めたダイロスの足元の地面に大きなクレータができる。直接ダメージを受けたわけでもないのにも関わらず、ダイロスのHPゲージが大きく減少する。

まあ、それだけ攻撃力の差があるということなのだろうが、受け止めただけでHPにダメージを受けるのはあまり例がない。

つと振り下ろした大剣を体に引き戻し、ゲインは地面に着地したと同時に大剣をダイロスの胸元目掛けて突き出す。ダイロスが既の所で体を捻ってかわすと、直ぐ様、刃を返して真横に斬り付ける。

だが、その攻撃は咄嗟に刃の間に大剣を地面に突き立てて防ぐ。

振り切られた剣圧に押され、足元に大剣を突き立て地面に線を引きながらダイロスはステージの端まで追いやられた。

「やるな……だが！」

「——これで最後だ!!」

「ああ、これで最後だ……」

疾走してくるゲインが大剣を真横から振り抜く。口元にニヤリと不敵な笑みを浮かべたダイロスの体が赤く輝き、同じく大剣を真横から振り抜く。

両者の大剣がガギンツ!!と鈍い音を立てると、今まで押し切れていたゲインの攻撃が弾かれ大きく体勢を崩す。

その隙をダイロスは見逃さなかった。彼の大剣を弾いた直後、己の大剣を体に引き寄せ勢い良く彼に目掛けて突き出す。

「——終わりだ!!」

彼の大剣の剣先が自分に向かってくるのを見たゲインは、体制が崩れた状態で無理やり体を捻って握っていた大剣ダイロスに目掛けて突き出す。

「くッ!! うおおおおおおおおおおおッ!!」

渾身の一撃を放った両者の大剣が隣り合うように並んで止まった。

互いの大剣から炎が消え、ダイロスの大剣は見事革鎧の間からゲインの鍛えられた腹筋の中央を深く貫いていた。しかし、ゲインの放った一撃はダイロスの漆黒の重鎧を貫いたが先端だけしか彼の体には達していない。

ダイロスのHPが微かに減少した直後、ゲインのHPが凄まじい勢いで減少し、彼の体から立ち上っていたオーラが白く小さくなって消えたのと同時に、HP残量『1』を残し彼は膝を地面に突く。

「……ぐふうッ!! そうか……もう。5分経つてたのか……不覚だぜ……リーダー。俺は……あんたの背中に……」

ダイロスが彼の腹部に突き刺さった大剣を引き抜くと、ゲインの体は地面に力無く倒れた。

地面にうつ伏せに倒れる彼を見下ろしたダイロスが小さく呟く。

「――届いていた。お前の剣は確かに俺のここにな……お前は、俺が戦った中で最強の戦士だ……」

腹部の鎧の欠けた部分を叩き、大剣を背中に背負い直すとその場をゆっくりと離れた。

モニターに勝者が表示され、会場内に大きな歓声上がる。ダイロスは自分に向けられる喝采を無視して倒れているリアンを抱き上げ、ステージを降りて控え室へと戻っていった。

【勝者『メルキュール』 次の対戦は『メルキュール』対『成仏善寺』なお、ギルド『メルキュール』は連戦の為、1時間のインターバルを取ります。ご了承下さい。】

会場内にモニターの文字がリピートされ。次にモニターが【休憩1時間】という文字を大きく表示して、会場内の者達も続々と席を立てて会場内の屋台へと向かって歩いていく。

護衛ギルド選抜戦7

観客席から試合を見ていたエミルが、隣に座っていたイシエルに声を掛ける。

「ちよつと出てくるわ。紅蓮さんの所に行つてくる」

イシエルはにつこりと微笑むと「うちも行く」と告げた。エミルは驚いた表情を見せ声を発しようとして口を開いたその時、エリエの隣に座っていたミレイニが飛び付きそうな勢いで身を乗り出す。

「どこかに行くし?！」

いや、現に立ち上がり隣に座っていたエリエの頭を、思い切り両手で押し潰して飛び出したようになっていいるのだが……。

どうやら、ミレイニにとつては人の戦いを見ているだけなのは退屈だったらしい。まあ、何でも人がしているのを見るよりも自分がする方が楽しいのは当然だろう。いつまでも頭をミレイニに押し潰され、耐えかねたエリエが激昂すると、ミレイニの頬を引つ張る。

頬を引つ張られ、ミレイニはブンブンと腕を上下に振つて。

「ほこにいたえいえあわういんだし」

「誰がそこにいた私が悪いですつて? あんたが私の横がいいって言つて、私がいるのにそれを押し潰したんでしようが!!」

「わあつたひ、あやまうひく。おえんはない! おえんはない!」

頬を引つ張つていた手を放すと、ミレイニは頬を手で擦る。もう何度も見ただけの光景なので、エミルも注意するのを諦めたように大きなため息を吐いて徐に席を立った。

そんな彼女をイシエルが不思議そうに小首を傾げて見上げていると、エミルが「行くんでしょ?」とエミルが声を掛け、頷いたイシエルが嬉しそうにエミルの腕に抱きつく。すると、今度はミレイニの方を向いて告げた。

「ミレイニちゃんも来る? ここにずっと居ても退屈でしょ。何か買つてあげるわ」

微笑みを浮かべて言ったエミルの言葉に、頬を擦っていたミレイニが飛び上がる。

「ほんとだし!？」

「あつ！ ミレイニだけずるい！ エミル姉、私も私も！」

「しようがないわね。エリーもいらつしやい」

呆れ顔で息を吐いたエミルが、今度は更に奥に座っていたカレンにも声を掛けた。

「カレンさんもどう？ 何かごちそうするわよ？」

デイビッドと小虎が白熱した侍談義を繰り広げている横で、座って前を見ていたカレンがハツとしたようにエミルの方を向く。

そんな彼女に向かってにつこりと微笑んでいるエミルに、カレンは首を横に振って答えた。

「いえ、俺は少しそこら辺を見て回ってきます」

「そう。気を付けてね」

軽く頷いて席を立ったカレンは、重い足取りでその場を後にする。その後ろ姿はどこか悲しそうに見える。

まあ、おそらくマスターのことを気にかけているのは分かるが、こればかりはエミルでもどうしようもない。何故なら、彼女も物思いに耽る時は一人になりたいと感じる人間だからだ——いや、結局のところ。人は重大な決断を迫られる時、一人なのかもしれない……。

徐々に小さくなり人混みに消えていくカレンを見送ると、侍談義に夢中のデイビッドを残し、エミル達は紅蓮の元へと向かった。

会場内は混雑していて、紅蓮の元に辿り着くのはだいぶ時間が掛かってしまったが、紅蓮は先程までいた迫り出した観覧席の方に向いた。

扉を開けて中に入ると、彼女は分かっていたように椅子から立ち上がり。

「こんな所に何か御用ですか？」

つと、普段通り無表情のまま、素っ気なく答える。

彼女には色々聞きたいことがあるものの、エミルは他のメンバーの目がある以上、あまり露骨な質問を聞くわけにもいかず。

「紅蓮さんは、この大会には出ないの？」

そう言ったエミルの言葉に、紅蓮は小首を傾げて不思議そうな顔を

している。

それは『どうして自分が出場しなければいけないの?』と言わんばかりのものだった――。

彼女の反応に、エミルは動揺を隠しきれない。

それもそうだ。元はと言えばメルディウスが言い出したことで、紅蓮はそのギルドのサブギルドマスターなのだ。

ルールでは各ギルドのギルドマスター、サブギルドマスターが雌雄を決する場として、今回のこの会場で戦闘を行っている。

本来ならば、街をモンスターの大量に囲まれているこんな状況下だ――主催者でもあり。千代の街のトップギルドである『THE ST RONG』のツートップの戦いを見たくて集まっていると言っても過言ではないはず。それなのにも関わらず、紅蓮が試合に出ないのはどうなのだろうか。

少し呆れながらもエミルが再び紅蓮に尋ねる。

「でも、やっぱり。主催者だし、この街を代表するギルドとしてしつかり出ないといけないんじゃない? ほら、ルールでもギルドマスター、サブギルドマスターの連携を見るのが目的なんですよ? ならやっぱり――」

そこまで口にして、エミルは言葉を発するのを止めた。いや、止めるを得なかったと言う方が正しいかもしれない。

目の前にいた紅蓮がエミルに向かって、冷たく突き刺さるような視線をぶつけていたからだ。普段は無表情なのだが、こういった要素所に感情が垣間見えるのは、紅蓮が本当は感受性が豊かなことを物語っている。

エミルが次の紅蓮の口から発せられる言葉を緊張しながら待っていた……。

それもそのはずだ。今は千代の彼女のギルドのギルドホールで世話になっている。しかも、ギルドの中ではギルドマスターのメルディウスより、サブギルドマスターの紅蓮の方が権力は強いようだ。ここで彼女の機嫌を損なうのはあまり得策ではない。

すると、今まで口を閉ざしていた紅蓮が大きく息を吐いて徐に告げ

る

「——はあく。いいですか？ 今回の件は、うちのバカなギルドマスターの独断です。それに、私達は資材の採集と輸送で殆どの戦力を出し尽くしてしまいます。その為に今回の護衛に人員を割く余裕はない……のに、あの大バカ者にも困ったものです。この大会も資金が必要だから開きました。始まりの街から来て下さった方々に不自由はさせられませんからね」

微かに微笑んだ様に見えた彼女の表情から察したエミルは、自分の今まで抱いていた考えを改めざるを得ないと感じた。

今まで、紅蓮はもつと冷たく感情的になり難いと言うか、少し冷めた人間だと思っていたからだ——だが実際にはその逆で、とても不器用で優しい心の持ち主であると。

今回の大会も自分達の資金調達の為に、始まりの街から来た物珍しいギルドの者達を自分達の街で見世物にし、この状況を利用して我欲によるもので行ったものだと言いつけていた。

しかし、実際には他の街から来てくれた者達を客人としてしつかりもてなそうとしているのだ。敵に周囲を囲まれているこの状況下では、資金調達の目的で街の外へは出られない為、この様な方法でしか今は資金を調達する手段がないのだろう。

その為、これだけの規模のイベントを企画して資金を集めようとしたのである。

紅蓮は容姿的に小学生くらいしかない身長だが、それでもエミルよりも年上の大学生なのだ——様々なことを考えているのかもしれない。

つとそこに、後ろで待っていたミレイニが現れ。

「なんだし？ このちっちゃいの」

「……ちっちゃい？」

紅蓮のNGワードに触れるセリフに、エミルは表情を強張らせる。辺りに不穏な雰囲気の流れ始めたが、当の本人であるミレイニは全く気にする素振りを見せずに紅蓮の前に近付いていくと、腰に手をあて胸を張って見せる。

ミレイニの突然の行動に紅蓮はただただ首を傾げていると。

「ほら、あたしの方が5センチは大きいし！」

いつもは無表情な顔が一瞬驚き、すぐに不機嫌そうに眉間にしわを寄せたが、またすぐに冷静さを取り戻して。

「まあ、身長は仕方ないですね。これは遺伝ですから……私は大学生です。子供の戯言に付き合ってはいら——」

「——大学生？ あはははははは！ そんな小さな大学生いないし！」

お腹を抱えて大声で笑っているミレイニの隣で紅蓮が不機嫌そうに眉をひそめ、何やらコマンドを操作し始めた。

それを見たエミルはもしもに備えて、ミレイニの側にそっと近付いて何が起きてもいいように身構えている。すると、紅蓮はアイテム内から大きな渦巻き型のペロペロキャンデーを取り出し、それを目の前にいるミレイニに渡す。

護衛ギルド選抜戦⑧

ミレイニは警戒しながら自分の顔ほどもあるペロペロキャンデーを見つめ生唾を呑み込むと欲に負けたのか、その棒を掴んで自分の方へと引き寄せると嬉しそうにペロペロし始めた。

「飴くれるなんて、お前いい奴だし！」

「……ふふっ、お子様ですね」

満面の笑みで一心不乱に飴を舐めている見て、紅蓮は微かに口元に痛みをこぼす。

もちろん。紅蓮の思惑は友好の証し——と言うよりも、ただ単に痛に障るミレイニの口を封じたかっただけだろう……。

だが、ここで彼女にも予想外の展開が起きる。

「ちよつとミレイニ！ そんな大きいの一人で食べたらお腹壊すでしょ？ 私にも少しよこさないよ！」

「いやだし！ これはあたしが貰ったんだし！」

まさかのエリエがミレイニの持っている飴を取りにきたのだ。しかし、エリエの言ったように『お腹を壊す』なんてことはあるはずがない。

ゲームの世界の仮想の肉体でしかないアバターが、戦闘以外でダメージを受けるということはありえない。だが、味覚を現実世界の食べ物や調味料をベースとしている以上。食べ合わせが悪いものが多々ある。甘い物でもなんでも、色々な物を同時に食べ過ぎると口の中に残っている味覚のまま、次の食べ物の味覚が来る為、混同しやすい——その為、口の中で辛いものと酸っぱいものが混ざるといふ、最悪の状況が発生する場合があるのだ。

揉めている2人を前にしていた紅蓮が、もう一つのペロペロキャンデーをエリエの前に差し出す。エリエが不思議そうに紅蓮の方を見ると、彼女はエリエの顔を見つめ「どうぞ」と告げる。

少し遠慮しながらも紅蓮の手に持っていたペロペロキャンデーを受け取り、エリエはミレイニと一緒にエミルの後ろへと戻った。

まあ、ミレイニを大人しくさせる為に飴を与えたのに、それを他の

者に取り上げられては紅蓮の方も堪ったものではない。だが、それ以上に気掛かりは、今の一連の出来事を終始笑顔で傍観していたイシエルのことだ――。

紅蓮としてみれば明らかに猫を被っている彼女の姿は、これから共に戦う者としてあまり快く映るものではないのかもしれない。

すると、丁度1時間経ったことを知らせるアラームが会場内に響き渡り。

「もう次の試合が始まります。皆さんも席に戻って下さい」

「ええ、それではまた夕食の時にね、紅蓮さん。ほら、行きましよう皆」
エミルは何事もなくほっと胸をなでおろして、後ろに居たイシエル達に告げる。

つと直後、不機嫌そうにミレイニが声を上げた。

「まだ何も買ってもらってないし！　嘘は良くないと思うし！」

紅蓮に飴を貰って、更に何かを買ってくれと言うミレイニに思わず苦笑いを浮かべながらも頷くエミル。

エミル達は紅蓮の居る部屋を後にして、屋台で待たせていたデイビッド達の分のたこ焼きを購入すると自分達の席へと戻った。

席に戻ると、エリエとミレイニがたこ焼きを頬張ってはペロペロキャンディーを舂め、しょっぱいと甘いを交互に食べているのを横目に、その顔を会場のステージに視線を向ける。

ステージ上では完全に回復したりアンが体操をして、ウォーミングアップしている姿があった。その横では、ダイロスが腕を組んで静かにその時を待っている。それは対戦相手の無善と浄歳も同じなように、心静かに瞑想をしている。

この勝負のポイントはおそらくリアンだろう。先程の戦闘では一瞬でやられてしまったが、彼女のポテンシャルは未だ未知数――先の試合で手の内の殆どを出し切った無善と浄歳は戦術で対応するしかないだろう。しかし、固有スキルと基本スキル。トレジャーアイテムである武器をダイロスは試合で既に見せている。

リアンも固有スキルは使用したものの、その能力を發揮する前にやらせてしまったので、今回はその性能を遺憾なく發揮すればギルド

『メルキュール』に相当なアドバンテージになるはず。

試合開始1分前をモニターが刻み、ステージ上の皆が臨戦態勢に入った。それぞれに自慢の得物を構えたまま、その時が来るのを待っている。

試合開始を告げるドラの音が会場内に鳴り響き渡り、得物を構えていた彼等が同時に動く。

浄歳が真後ろに大きく跳び、無善はその前で錫杖を構えた。

「阿！」

「咩！」

直後。地面が微かに緑色の光を放ち地中から鎖が現れ地上のダイロス、リアンを襲う。しかし、それを察して走り出したダイロス、リアンが真つ直ぐ無善、浄歳へと向かって走ってくる。

浄歳は何度も彼等の拘束を試みたが、ギリギリのところかわされてしまい捉えることができない。速度というよりも、しっかりと足元に一瞬だけ発生する光が見えているというのが彼等を捉えられない理由だろう。

徐々に迫ってくるダイロスとリアン。すると、リアンは固有スキル『幻影』を発動させ体が複数人に分裂する。

分身したリアンを含め、全員の体が一瞬だけ青く光。そのスピードが更に加速して、その中の2体が浄歳を守る様に前に立ちはだかつていていた無善を襲う。

無善の錫杖が2体のリアンの細い剣を受け止め、その間を縫って他のリアンとダイロスが浄歳へと襲い掛かる。

浄歳は複数で襲ってくるリアンの剣を見切りながら、錫杖を構えると大剣を構えながら突っ込んでくると、錫杖に大剣を押し付けるように肉薄したまま浄歳の体を後方へと追いやっていく。

無善が浄歳の援護に行こうと体を反転させると、それを阻むように3体のリアンが行く手を遮る。

彼女の固有スキル『幻影』で召喚できる人数は10人が限界だが、今は7人までしか出していない。

今は無善を5体が対応し、浄歳にはリアン2体とダイロスが対応し

ている。おそらく。リアンの本体はダイロスと共に戦っている2体のどちらかだろう……。

どうして分かるかという点、前の試合で見せた無善の光を放ち、相手の視覚を潰す数珠だ——あれもトレジャーアイテムなのだろうが、効果時間と直視しなければ効果がないことを考えるとそれほどレアなものではないのだろうが、それでも戦闘時に視覚を奪われるのは致命的。

それを避けるには彼とあからさまに距離を取るのがベストだろう。ギルド『メルキュール』は千人規模の大規模なギルドで、ダイロスとリアンはそのギルドマスター、サブギルドマスターを務めるほどの人物。彼等がリスクを冒すほど、迂闊な行動を取るとは考えられないからだ——。

だが、交戦しているリアンとダイロスが基本スキルを惜しげもなく発揮させているところを見ると、全力で浄歳を潰しにきているのだろう。

それもそうだ。固有スキルを確認したのは浄歳だけ、しかも先の試合では無善は固有スキルを使用していない。固有スキルを隠しているともおかしくないが、それは一般的なプレイヤーの対一の戦いの場合だ。ギルドマスターとサブギルドマスターを相手に、固有スキルの発動なしで戦えるわけがない。

にも拘わらず、固有スキルを発動しない理由は、使わないのではなく使えないのだと誰でも理解できる。

つまり、ダイロスとリアンが唯一固有スキルを使用して戦える浄歳を撃破すれば、この勝負は勝ったも同然なのだ——。

護衛ギルド選抜戦9

5体の分身体のリアンで無善を抑え、その隙に一気に浄歳を撃破してしまう作戦を考えているらしい。

「リアン!!」

「はいー」

ダイロスが声を張るとリアンは即座に答え、2体のリアンが同時に左右から剣を構えて肩よりも上に大きく剣を振り上げる。

浄歳が両手を左右に広げた直後、左右に分かれていたリアン達が、その手から剣を手放して浄歳の腕をがっしりと掴む。

「なっ、なんだと!」

驚きを隠せない浄歳が左右の腕を掴んでいたリアンを交互に見て正面に視線を移すと、そこには漆黒の大剣を振り上げているダイロスの姿があった。

天に高らかに掲げている黒い大剣の刃が、太陽の光を浴びて不気味に輝く。

「——フンツ!!」

「ぐあああああああああああッ!!」

浄歳が断末魔の叫びを上げた直後、振り下ろされた大剣が浄歳の体に大きな黒い線を付けて彼のHPが急激に減少し、彼の体が地面に倒れる。タフネスを使用していた浄歳だったが、さすがにダイロスの固有スキル『豪腕』の効果で100倍にまで高められた一撃は受け切れなかったようだ——。

まあ、ダイロス達の方もタフネスで強化された状況で、スイフトのリアンが2人掛かりでも、数秒持つか持たないかというギリギリのタイミングだった。

本来ならば2対2の戦闘になるはずだが、固有スキルの能力とはいえ2対8では分が悪い。しかもその上、リアンはまだ3体の分身を隠しているのだ。

幸先良く浄歳を撃破した直後、リアンがダイロスに向かって静かに告げる。

「……あの人は私がやります」

漆黒のドラゴンの形を象った兜の隙間から見える鋭い瞳が、横にいるリアンに向けられた。

それが分かっているのか、リアンは無言のまま真剣な面持ちで自分の分身と対峙している無善を見つめている。

そして彼女はゆっくりと口を動かし。

「……私はあの子達と約束しました。仇は取ると……約束は守らなければいけません」

「そうか……好きにするといい」

ダイロスは地面に大剣を突き立てると、その場にドカッと座り込んだ。

彼はリアンの意思を察したのだろう。リアンは剣の柄を握り締め、真剣な面持ちで剣を構え直すと地面を蹴って無善に向かっていくリアン。

無善は錫杖で防御に集中している。だが、四方から飛んでくるリアンの分身体の剣撃を見事にかわしている。

まるで攻撃パターンを完全に読み切っているかのように……いや、完全に読みきっているのだ。そうでなければ、5体の敵の鋭い斬撃をかわしきることなど不可能。

つまり、攻撃パターンには確実に明らかな法則性があるのだ。簡単に言うと、長年やり続けた格闘ゲームなどで相手の動きを先読みできる——なんて、超能力者顔負けの経験をしたことは誰でもあるだろう。

命令を下すことはできるが、複数のAIを1人のプレイヤーが正確に操作することは不可能に近いだろう。仮にできたとしても、戦闘まで行うのははや神の領域と言っている。

モニターの前でキーボードやタッチパネルでの操作なら可能かもしれない。しかし、このフリーダムというVRゲーム——つまりは体感型のバーチャルゲームなのだ。

簡単に説明すると、サッカーの監督が自ら試合に参加しながら、決まった動きしかしない選手達に的確な指示を出しているという状況。

と言えれば分かりやすいだろう。

分類によつても分けられるが、モンスターにはそれぞれにAIが備わっており。これは敵が攻撃を仕掛ければ防衛、回避、遊撃のいずれかが適応されるなどした人工知能プログラムのことだ。

リアンの分身体にもこのシステムが使われている。もちろん使用者の意思で操作はできるものの、全てを同時にというのはプレイヤーの技量があつても不可能に近い。

AIには動作までの思考時間が備わっており。その後、行動に移すのがセオリーとなつている。つまり、そのコツさえ掴めれば、理論上はかわせないものではないのだ。だが、あくまでそれは理論上の話で、現実になんかそれをこなせるプレイヤーなど多くはいない。

無善もギルドの長を務めるプレイヤーの1人。不可能に思えることを成せる一握りのプレイヤーだということなのだろう……。

最小限の動きで攻撃をかわしている無善の元に、本体のリアンが剣を持つて襲い掛かる。しかし、無善もそれを待っていたかのように、体が一瞬赤く光つた後、真横に錫杖を振り抜く。

錫杖を剣で防いだリアンの体が弾かれ、後方に飛ばされた彼女は体勢を立て直して地面に着地した。

「やはり力押しでは勝てないか……行つて！」

リアンの声に應えるようにもう一体の分身体が、今まさに交戦している中へと加わっていく。

新たに一体加わり6体となった分身体が休みなく攻撃を繰り返す中、その全ての剣撃を器用にかわしている無善を、リアンは少し離れた場所から注意深く観察している。

初撃を弾かれたことで、考えなしの攻撃では意味がないと確信したからに他ならない。だがそれにしても、本体が分かったにも関わらず自らは攻撃を仕掛けようとしない。

いや、できないのだ。今立ち位置をずらせば、周りを囲む分身体にHPを削られかねない。無善のHPゲージは大きく減少こそしていないものの、既に2割ほど減っている状態。

数に勝るリアンとの戦闘で強引な力技は自殺行為とも言えた。周

りを取り巻く分身体を排除すればいい気もするが、リアンの固有スキル『幻影』はそれほど容易く破れる代物ではない。

だが、その理由はすぐに分かることとなる……。

分身体の間をリアンが再び攻撃を仕掛けた。無善は再び錫杖を大きく振り抜くと、リアンの横にいた分身体の体を錫杖がすり抜け、本体であるリアンへと向かう。

リアンは剣で彼の攻撃を受け止めるが、タフネスで強化されたステータスの差で剣ごと押し切られそうになりながら、素早く体を捻って勢いを流す。

剣の刃を滑っていく錫杖が火花を散らすのを横目に、リアンは一度は崩れた体勢を立て直して剣先を直ぐ様無善へと向ける。

やり過ぎされた錫杖は勢いを落とさずに、周りの分身体の体を次々にすり抜けて無善の前で止まった。そう、無善は攻撃をしなかったのではなく、攻撃する必要がなかったのだ――。

どういう原理かは分からないが、剣撃は防げるがそれ以外は攻撃がまるで通らないのである。様々な固有スキルがある中でも、彼女のものは特殊な部類に入るのは間違いないだろう。

攻撃をかわしながら突如、無善が口を開く。

「君の固有スキルは、相当なレア度のスキルなのだろう?」

「――その通りです。私の固有スキル『幻影』のレア度はS。そう簡単に、この固有スキルは破れませんよ。私を含めて10体まで増やせませうから……それにここからは、私の全力でいかせてもらいます!」

その言葉の直後、リアンの姿が3つに分かれると、剣を構えて無善に向かって全力で走り出す。

無善は首に下げている巨大な鉄製の数珠を掴むと、真っ直ぐに自分に向かって来るリアンの一体を目掛けて投げる。すると、全力で駆けていたそのリアンが剣を前に構えて止まり、飛んで来た巨大なその数珠を弾く。

「どうやら、無善は当たりを引いたらしい……。」

「――くッ!!」

鉄製の数珠を弾き、表情を曇らせたリアンに対して無善はまだ2体

のリアンが向かってきているにも関わらず、錫杖を構え本体のリアンに突進していく。

彼に向かってきていた2体のリアンの剣先が無善の左肩と右の腹部を割り取る。しかし、無善は表情を変えることなくHPゲージが減少を始めるのも構わずにひた走り、一直線に攻撃を受け怯んで体勢を崩しているリアンに向かう。

彼女は咄嗟に腰に付けたポーチから何やらアイテムを取り出すと、それを地面に投げ付けた。その直後、一瞬にして辺りが真っ白な煙で包まれ、ステージ上を覆い隠す。

数十秒後。煙が消えて観客席からも試合の様子が確認できるようになると、あまりの光景に会場内の観客達がいっせいにどよめく。

ステージ上では2体のリアンが持っていたその剣で、無善の体を左右から貫いていた。しかし、無善の錫杖も1体のリアンの体を貫いている。

皆、プレイヤーの上に表示されているHPバーに目を向けた。赤いゲージまで減少を続けていたのは無善のHPのみで、リアンのHPは黄色のゲージで止まっていた。

そして無善のHPは『0』になり。彼は大きく項垂れ、リアンは険しい表情で大きく息を吐いた……この時。同時にこの勝負の勝者が決定したのである。

エキシビジョンマッチ

会場の中央に設置されたモニターに大きく――。

【勝者『メルキュール』 次の試合は30分後。勝者である『メルキュール』のギルドマスター、サブギルドマスターとギルド『THE STRONG』のギルドマスター『メルディウス』とのエキシビジョンマッチを開催します。】

ステージ上のリアンは辺りを見渡し、試合を観戦していたリカとカムイを見つけると、につこりと笑って高らかに持っていた剣を天に掲げた。

観客席のリカとカムイも笑顔を見せると、リアンは満足そうにステージを後にする。そんな彼女の後を追う様に、ダイロスが地面に突き立てた大剣を引き抜き控え室へ向かう通路へと消えていった。

最後の一瞬。煙幕で何が起きたかわからなかったが、分かっていたのはステージ上のリアンの数が10体から11体へと増えていたということだ――そこから推測するに、リアンの固有スキル『幻影』は本体を入れて11体まで増えることができるということだろう。

だが、無善は戦闘の最中リアンの言った『私を含めて10体まで増やせますから……』という言葉を信じた。いや、信じたと言うよりは、まさかそれが偽りだとは思ってはいなかったということだろう。

つまり。リアンの召喚できる数は本体を含めずに10体まで、合計で11体での戦闘が可能となり。しかも、分身体への物理攻撃は無効というほぼ不死身のチート級の能力なのだ。

つと言うよりも。レア度がSを超えている固有スキルは全てと言っているほど、チート級の能力が集まっている。

ゲーム開始時に強制的にランダムで固有スキルを振り分けられ、その中で幸運なプレイヤーだけがレア度の高い固有スキルを手にすることが出来る。まあ、RMTを推奨しているこのゲームでは、気に食わない固有スキルを捨てて新たにランダム選択された固有スキルの入ったハードに道具などは、更新という選択をすれば勝手に移動される。

ダイロスとリアンが控え室に戻り。30分後に行われる試合に備え、会場の中も席を立って何かを買いに行く者、次の試合の勝者を予想してざわめき出す者であふれた。勝敗を予想する者の殆どは、やはり数ある千代のギルドの中で最も強いギルド『THE STRONG』のギルドマスター、メルデイウスが勝つと予想している。

それも無理はない。ここは彼のホームタウンと言っている千代なのだ——この巨大な会場内を埋め尽くす人を見ても、彼等の人気を窺い知れるだろう。

早めに会場に出てきたメルデイウスがウォーミングアップを始めた。組み合わせが発表される前にもやっていたが、あれからすでに数時間が経過している。

まあ、体を温めると言っても、実際にアバターの体が温まるわけではなく。具体的に言えばイメージと自分の体を同期させる為、と言った方がいいかもしれない。

大人の身長ほどもある刃を持つ大斧モードのベルセルクをメルデイウスは軽々と振り回している。

雄々しいその姿を見ていると、彼が負ける姿が想像できないという観客達の声も分かる気がする。

つと、観客がどつと会場内を震わせるほどの歓声を上げた。その観客達の視線の先には、漆黒の大剣を担いだまま現れたダイロスの姿があった。

ダイロスは通路から出ると、ゆっくりとメルデイウスの見える距離に陣取り、彼もまた漆黒の大剣を振り始める。そんな彼を意識してか、メルデイウスの武器の振る手にも無意識のうちに力が入ってしまう。

互いに武器を振る度に風切音が辺りに響き渡り、時折相手の顔を見ながらすでに試合は始まっていると言わんばかりの演舞を披露していた。

観客達もメルデイウスとダイロスの実戦顔負けの演舞に、歓喜の声を上げる。

会場が熱気で包まれる中、試合開始のドラの音が周囲の歓声に負け

じと空気を振動させる。

時間を忘れて一心不乱に得物を振っていた2人は、額から流れる汗を腕で拭い去ると急ぎステージ上へと飛び乗った。

ステージの上ではすでにリアンが剣を抜いて立っていて、いつでも来いと言わんばかりの闘気を全身から放っていた。しかし、試合開始を告げるドラが鳴ったにも関わらず、両者一向に武器を構えようともしない。

それに痺れを切らしたリアンがメルデイウスを鋭く睨み、剣を構えて走り出す。

「はあああああああッ!!」

剣を中段に構えたりアンの体が分裂し、一気に11人にまで増えた。

すでに前の試合で固有スキルを見せている以上は、下手な小細工は使う必要がない。いや、もう使う必要がないと言った方が正しいかもしれない。何故なら、すでに優勝を決めているからだ――。

所詮この試合はエキシビジョンマッチでしかない。ならば、その目的は集まってくれた観客達を楽しませることだとリアンは重々承知していた。

向かってくるリアン達に対して、メルデイウスは落ち着いた様子でゆっくりと大斧『ベルセルク』を構え、次々に襲い掛かってくるリアンの剣撃を的確に全て弾き返す。

口元にニヤリと不敵な笑みを浮かべると、大斧を振り上げて思い切り地面へと叩きつけた。

つと辺りに凄まじい爆音が轟き、直後爆風が彼を囲んでいたリアン達を襲う。

突如吹き付ける暴風にリアンの分身体がいったんに掻き消され、リアン本人もあまりの爆風に腕で顔を隠す。

「――なっ、なんてでたらめな攻撃なの!?!」

ゲームバランスを超越したその破壊力に、さすがのリアンも恐怖を覚えたのか、無意識のうちにメルデイウスから距離を置くように後退りする。

「あんな化け物相手に勝てるわけが……」

すると、完全に戦意を喪失したリアンの前に立ちはだかった。

リアンの前に立ったダイロスは、全く恐怖の色は見えずとも落ち着いた様子で、真つ直ぐメルデイウスの方を向いている。その視線を受けるメルデイウスも、動じることなく地面に刺さったままになつていた大斧を肩に担いだ。

互いから発せられた闘気が、ピリピリと感じとれてステージ上の空気を張り詰めたものへと変わった。それが伝染した様に歓声が上がリ、賑わっていた会場内もシーンと静まり返っていた。

静寂を破るように、ダイロスが完全に萎縮してしまっているリアンに向かって徐に口を開く。

「——リアン。お前は下がっている。ここはギルドマスター同士で決着をつける！」

ダイロスはそういうと、漆黒の大剣を横に構えた。それを見たメルデイウスは鼻で笑うと、殺気の籠もった鋭い視線を向け言い放つ。

「フツ、俺としては二対一でやつと同格と言ったところなんだけどな……」

「まあ、そうかもしれないが。これでも俺も千人を束ねるギルドの長なのでね。二対一で勝つても、仲間達にギルドマスターとしての示しがつかない」

ドラゴンの兜から覗く、彼のその眼差しにメルデイウスもそれ以上の言葉は無粋だと感じたのだろう。持っていた大斧を構えると、ダイロスを見据えながら人差し指をクイクイつと動かして『掛かってこい』と挑発する様な仕草をする。

ダイロスはリアンの肩を軽く叩くと、挑発に乗るように大剣を構えてメルデイウスに襲い掛かる。

攻撃を防ごうと大斧を構えたメルデイウスは、彼の太剣が炎と共に一瞬だけ赤く輝くのを見逃さなかった。

つと、この試合をする前に紅蓮と話をした時のことを思い出す――

エキシビジョンマッチ2

* * *

それは大会前の会場に向かうまでの一幕……………。

ギルドホールのホテルのような造りの廊下を歩いていると、前を行く紅蓮が突然呟くように声を発した。

「…………メルデイウス。これだけは覚えておいて下さい。もし、真つ黒なドラゴンの様な鎧の人と戦うようなら、彼の武器にベルセルクをぶつける事だけは止めて下さい」

珍しく声を発した紅蓮の意味深な言葉に、メルデイウスは難しい顔をして眉をひそめた。そう。彼が気になったのは、彼女の発した『武器にベルセルクをぶつける事だけは止めろ』というところだ。

戦う上で、武器をぶつけ合わないという状況は不意打ちしかありえない。ましてや、移動の限られているステージ上では不可能と言ってもいい。

「なに？ 武器に武器を当てるなって。なら、どうやって戦えって言うんだ。紅蓮」

抱いた疑問をそのまま、紅蓮に聞き返すメルデイウス。

すると、返ってきたのは紅蓮の大きなため息と…………。

「いいですか？ このゲームの中には、固有スキルという個々の特殊な能力があります。その中には武器破壊を得意とする物も多々あり。その全てと言っていないほど、発動時に必ず予兆があります。貴方ならそれを見破ることがができる。その瞬間だけは決して武器を打ち合っではいけません。それだけを覚えておいて下さいね！」

「お、おう…………」

振り向いて人差し指を立てて念を押す様に告げる紅蓮に、メルデイウスは生返事を返しながら頷いてみせた。

紅蓮は大きいため息をもらすと「もう。しっかりしてくださいよ」と呆れながらに告げると、再び前を向いて会場に向けて歩き出した。

* * *

そう。紅蓮の言っていたのは、まさに今のことなのだ——それを直感的に判断したメルデイウスは咄嗟にベルセルクを頭上に向けて大きく投げると、自分は体を大きく前に倒して顔が地面に触れるほどの距離まで深く沈み込む。

直後。彼の鎧の背中の部分に空を切ったダイロスの炎に包まれた大剣の刃が当たり。その直後、地面へとダイロスの大剣『炎剣 デュランダール』が吸い込まれる様にその不滅の刃を地面に突き刺す。

突き刺さり抜けなくなつた漆黒の大剣を抜こうと、柄を両手で握り締めるダイロス。

その一瞬の間を見逃さず背後に回つたメルデイウスは地面を蹴つて跳び上がると、ダイロスの肩を踏み台に落ちてくるベルセルクを掴む。

「——終わりだあああああアツ!!」

咆哮を上げながら、大きく振り下ろされたベルセルクが、ダイロスの無防備な背中目掛けて襲い掛かる。

それを察して、ダイロスは地面に突き刺さつたままのデュランダールを諦め、地面に刺さつたままの大剣の柄を利用して体を反転させると、即座にその場を離れた。

メルデイウスの渾身の力で放つた一撃は、無情にも彼の体を掠ることなく地面に直撃する。

爆風と共に巻き起こつた残骸に紛れ、地面に刺さつたままになつていたデュランダールが空中に放り出され、凄まじい爆風と細かい残骸の嵐の中でダイロスがそれを見事に掴む。

ダイロスは掴んだ大剣を自分の前に持つてくると、飛んでくる破片を大剣の腹の部分で弾く。

飛んできた破片によって微かに減少していたHPが停止する。まあ、減少したHPは取るに足らないレベルだが、この戦いでは少しのHP減少が命取りになり兼ねない。

何故なら、すでに固有スキルを使用している。次の発動までには5分間のクールタイムが必要だからだ。

多人数戦では然程問題視させる時間ではないが、個人戦となればそうもいかない。HPを回復できない状況での一進一退の攻防の中で勝利を収めるのは、数分のロスでも命取りになり、それが大きく戦況を左右する。

爆風が収まり、視界が戻る直前。ダイロスの視界に大斧を構えたメルデイウスの姿が土煙の中から飛び出してきた。

「はあああああああああッ!!」

大きく振り上げた大斧を、ダイロスが体の前に構えていた大剣の腹に直撃して爆発を起こす。

衝撃で吹き飛ばされたダイロスの体は地面を転がり、大きく後ろに吹き飛ばされるが。直ぐ様、地面に大剣を突き立てて勢いを弱めて素早く立ち上がる。

ステージ端まで吹き飛ばされたが、すでにステージの中央部分は欠落して跡形もなく飛び散っている。だが、システムがすぐに修復を開始し、破損した部位が徐々にほんわりと緑色に輝き、徐々に修復をしている。だからと言ってメルデイウスが手を抜くはずもなく――。

「うおらあああああああああッ!!」

頭上に大きく振り上げたベルセルクをダイロスに目掛けて振り落とす。

ダイロスは既の所で攻撃をかわすが、地面にぶつかった刃が爆発を起こし、咄嗟に大剣の爆発で飛散した瓦礫を防ぐが、爆風の勢いに押され、その重い鎧ごと吹き飛ばされ場外に飛ばされてしまう。

飛ばされたダイロスは器用に体を捻って観客席の壁をリングのロープ代わりに足で蹴り飛ばすと、大剣の先を真上に構えたままステージ上のメルデイウスに向かって飛んでいく。

メルデイウスはそれを見て、ニヤツと口元に笑みを浮かべると大斧を自分の前に構えてガードの体制に入った。

徐々に迫ってくるダイロスの構える大剣の先端を見据え、避けることなく真っ向から攻撃を防ぐ。金属同士が擦れ合う甲高い音の直後、激しい火花が散って2人の体が一瞬のうちに交差する。

殺しきれなかった勢いを、地面を滑って吸収して滑りながらも体を

反転させると、瞳から激しい眼光を飛ばしながら大剣を前に構え直す。

メルデイウスもダイロス向かって大斧を構え直すと、ニヤリと笑みをもらした。

「そうか。じっくり見させてもらった……分かったぜ！ お前の固有スキルは常時発動型でも任意発動型でもないみたいだな」

「——確かにそうだが、油断は禁物だと言っておこう!!」

そう言った直後、今までは防戦一方だったダイロスが、今度は自ら攻撃を仕掛けてきた。

真横に大剣を構えながら突撃して来るダイロスを、メルデイウスは表情一つ変えずにベルセルクを肩に担いで待ち構えている。

「なんともなめられたものだな！ 我が『炎剣デュランダル』の力。その身で受けるといい！」

ダイロスの構えている漆黒の大剣から炎が噴き上がり、自分に向かってくるダイロスにやつとメルデイウスが大斧を構えた。

「——俺に火力で挑むとはな！ 格の違いを見せてやろうぜ。なあ、ベルセルク！」

人ほどもある刃を持つ金色の大斧を構え、不敵な笑みを浮かべているメルデイウスにダイロスが斬り掛かる。

炎をまとった大剣をメルデイウスの左脇腹に向かって振り抜く。が、メルデイウスも持っていたベルセルクでそれを迎撃する。

数回武器を打ち付けあった後、互いに距離を取ると、しばらくの間武器を構えて睨み合っていたが、再びダイロスから斬り掛かってきた。

メルデイウスは大斧を構えたが、炎を上げる大剣が赤く光った僅かな変化を見逃さなかった。

確実にベルセルクを狙って振り抜いてきたダイロスに、メルデイウスは右手に持っていたベルセルクを咄嗟に自分の後方に振り下ろし、爆発で起こした爆風を利用して浮き上がりダイロスの右腕を思い切りキックする。

さながら某バツタをモチーフにした特撮ヒーローの如く、華麗な蹴

りを披露したメルデイウスは、バランスを崩したダイロスと一緒に度重なる爆発でいびつに変形したステージ上を転がって端まで飛ばされた。

両者共すぐに立ち上がると、再び対峙する相手に向かって得物を前に構えた。

「——ほう。また使えるようになるまで5分程度か？　結構優秀な固有スキルじゃねえーか！　結構レア度も高いのか？」

「……レア度はD。前の試合の時も言ったと思うが、先程の物言いいいギリギリで『豪腕』の攻撃を避けるあたり。まさか、俺の試合を見てないのか？」

その疑問に、メルデイウスは鼻で笑うと、持っていた大斧を地面に突き立てて胸を張って言い放つ。

「俺は戦いを楽しみたいんだ！　前の試合を見たら、敵の手の内が分かっちゃうじゃねえーか！　俺は常に初見で戦う。それが刃を交える相手に対しての最低限の礼儀だと思ってるからな！　それがたとえモンスター相手でもな！」

「——俺には理解できないな。俺も君も一つのギルドの長だろう！　ならば、敵の情報を少しでも収集してから戦いに望むべきではないのか！　仲間を危険に晒す様な人物とはがっかりだ——君とは良い友になれると思っただがな……」

俯き加減にダイロスはそう告げると大剣の柄を力一杯に握り締め、メルデイウスに向かって全速力で突っ込んでくる。

素早くベルセルクを構え直して迎撃の体制に入ったメルデイウスを体押し返しながら、力任せに後方に一気に押し出していく。

「うおおおおおおおおおおおおおおおッ!!」

漆黒の大剣の刃が、メルデイウスの持つ人ほどもある刃の大斧を押し返しながら、激しく擦れ合い火花を散らす。

「——くッ!!　タフネスを使用してのアタックかッ!!」

渋い顔で眉をひそめながらも、メルデイウスも基本スキルである『タフネス』を使用する。両者の動きが均衡して、先程とは逆のステージの端で止まる。後方には逃げ場はなく、後もう一步で場外へと押し

出されそうなほどだ――。

エキシビジョンマッチ3

先程までとはダイロスの体から迸る殺気が段違いだ。メルデイウスとダイロスは互いに似た立場にしながら、全く別の思想の元で行動している。

情報を駆使して、少しでもリスクを回避するダイロスに対し、メルデイウスはリスクよりもスリルを味わう為に戦っている。

個人ならば、何もダイロスも口を出さないだろうが、仮にも同じギルドを率いるギルドマスターであり、次の日には共に作戦を行うのだ。

自分の大事なギルドメンバー達を危険な戦場に連れ立っていく以上は、無鉄砲な人物のいるギルドとの作戦は遠慮したい……それがギルドマスターなら尚の事。

かくなる上は試合に圧倒的な力量差で勝って、己のギルドマスターとしての優位性を示さなければならぬ。人は強い者の言葉を優先的に聞く傾向があり、実質この試合は次の作戦の指揮官を決める前哨戦でもあるのだ――。

すでに固有スキル『豪腕』は5分のリキャストタイムに入っているが、そのインターバルは大きい。

しかし、常時発動型の武器スキルを持つトレジャーアイテム装備『ベルセルク』が、メルデイウスに圧倒的なアドバンテージを与えているのは間違いない。

トレジャーアイテムならダイロスも『炎剣デユランダル』という耐久力の存在しない不滅の炎の大剣は持っているが、それは固有スキル『豪腕』があつてこそその武器と言ってもいい。

その大剣を纏う炎も飾りではなく、巨大なモンスター相手でも炎属性の付属ダメージで確実にHPを必殺の一撃で削り切れるために必要なものだ。

対人戦のPVPでは相手の武器を撃ち抜いて、確実に敵に敵に通常の100倍の一撃を叩き込むのを信条としていたのだが、それがメルデイウスには通用しない。

それだけメルディウスの戦闘センスが卓越していることの証しだ——通常の戦法が通用しないのだが、ダイロスには力で押すしかない。防具は5分のリキヤストタイムを意識している為、防御を重視し過ぎて重くてスピードではメルディウスには勝てない。

そこで考えたのがベルセルクの刃を自分の大剣で封じる策なのだ。しかも、重さを利用した突進とプラスで基本スキルのタフネスを使用し、メルディウスの際を突いてのステージ上からの押し出しを狙った。

ルール上ではリングであるステージ上から落ちても負けになる。

ステージ上はメルディウスが破壊したことで、辺りには残骸が転がり至る場所にヒビが入っていて足場は最悪の状況——押す方にとつては有利となるが、踏ん張るには最悪の足場だ。

「——あとひと押しで君の負けだ……負けを宣言してくれば、これ以上の恥を搔かなくて済むが。どうする?」

「……くツ!! するかそんなもん! 負け方が変わるだけだろうがツ!!」

「………残念だ」

ステージ端のギリギリで競り合っているダイロスが手に持つ大剣に力を込めた直後、メルディウスのベルセルクが金色の光を放つ。

「目潰しか……しかし! 何をしようともすずに、俺の勝ち揺るぎはしない!!」

光に目を細めながらも振り抜いたダイロスの大剣が、何故かメルディウスの遙か上で空を切った。

「——なっ、なんだとツ!?!」

驚き目を見開いたダイロスの視線の先には、大斧ではなく大剣の刃の先に斧のような刃が更に付いた武器に変わっていた。

トレジャーアイテム『ベルセルク』は、爆発能力を持つ大斧の状態の方をメルディウスも多用していることもあり。どうしてもそればかりが目立ってしまうが、元々は大剣と鏢の刃を入れ替え、大剣と斧を切り替える可変式の武器なのだ——しかも、ダイロスとの鏢迫り合いの最中。ベルセルクの刃に当たっているデュランダルの刃を可変

により、強引に上へと引き剥がしたのだ。

大剣が空を切ったダイロスは、メルデイウスの思わぬ秘策に体制が崩れた。

つと、メルデイウスが前に構えていたベルセルクを腰より下に構え直すと、再び金色に輝く。

大斧の状態に戻ったベルセルクに力を込めると。

「……負けるのは————お前だあああああああああッ!!」

バランスを崩しているダイロスに向け、下から上に全力でベルセルクを振り上げた。

大きな爆発を起こし、漆黒の重鎧でガチガチに固められたダイロスの体がまるで風船の様に軽々と上空に打ち上げられる。

会場はその衝撃的な光景に一度は静まり返ったが、すぐに歓声が上がりメルデイウスを称賛する声で溢れ返った。

「これでこそ、THE STRONGのギルドマスターだぜ!」「いつもながら、豪快な攻撃が痛快だよな!」「俺はこれが見たくて今日ここにきたんだ!」「それでこそ千代を代表するギルドだぜ!」

その声は鳴り止むところを知らず、次々に伝染病の様に増えていく。そんな中、メルデイウスだけは空中に投げ出されたダイロスを見上げ渋い顔をしている。

誰が見ても勝利は明らかな状況なのだが、メルデイウスは手に握り締めた大斧を構えたまま、下ろす素振りすら見せない。その理由は、実際にダイロスと戦っているメルデイウスでなければ分からなかっただろう。

何故なら……。

(……あの野郎。ギリギリで俺の攻撃を大剣で防ぎやがった)

完全に体勢を崩して受けて身すら取れない状況だったにも関わらず。ダイロスはあの一瞬で、その攻撃を予測していたかのようにメルデイウスの渾身の一撃を防いだのだ。

攻撃を読んでいたとしか思えなかったその動作に、さすがのメルデイウスも警戒せざるを得ないのだろう。それが彼の咄嗟の判断に

よるものなのか、それとも彼の持つトレジャーアイテムによる効果なのか……。

徐々に高度を落としているダイロスの大剣から、突如として大量の炎が噴き上がる。

落ちてきたダイロスは大剣を地面に突き立て、落ちる時の衝撃を吸収した。しかも、炎を勢い良く噴射して突き刺さる既の所で、地面に完全に刃が突き刺さるのを防いでいるのだ。

地面に着地したダイロスのHPゲージはまだ緑色の状態で、大剣で受けたとはいえ凄まじい爆発をその身で受けたとは到底考えられない。

それには観客達も驚いている。無事に着地しなければ地面に落ちた直後にHPの殆どは消え去り、メルデイウスが止めの一撃を加えるだけで決着になると考えていただろう。

騒然とする会場内で、ただ1人。ダイロスと対峙しているメルデイウスだけは全く驚いている様子がなく。それどころか、口元には不敵な笑みを浮かべている。

そんなメルデイウスをダイロスが、親の敵でも見るような鋭い瞳で睨みつけながら激しい視線をぶつけ。

「——まだまだ！ まだまだこんなものでは、この俺はやれんぞ！ メルデイウス!!」

「フツ……いい面構えだ。ダイロスだったか？ 凄い奴もいたもんだぜ……だが、俺は負けない！ ここからは全力だー!!」

そう告げると、メルデイウスは素早くコマンドを操作した。すると、彼の装備が見る見るうちに消え、余計な脂肪を削ぎ落とした男らしい上半身に下はデニムのジーンズと、軽装備というより殆ど裸に近い格好へと変わる。そのふざけた彼の姿に、ダイロスの怒りは頂点に達する。全身から滲み出る殺気が今までにないほどに膨れ上がり、会場内の空気が一気に張りつめていく。

俯きながら怒りに震える腕に握られていた大剣が大きく上下に動いていることが、ダイロスの心中を物語っているのだろう。しかし、メルデイウスは真剣な面持ちでベルセルクを構えている。その直後、

手に握っていたベルセルクが金色に輝く。

可変式の大剣の姿に変わったベルセルクを持ち、ニヤリと不敵な笑みを浮かべるメルデイウス。

だが傍から見れば、自ら防具を解いて武器を弱体化させただけに見えない。そして上半身だけ裸なのも理解できるものではない。何故なら、装備の中で服などには重さや防御力はなく、実質、何も着ていないものと同じ扱いになっているからだ――。

「……なんのつもりだそれは!!」

「はっ? なんだっつて?」

「くっ……どこまでバカにするつもりだメルデイウス!!」

激昂するダイロスに、メルデイウスは首を傾げながら眉をひそめている。

が、次の瞬間。メルデイウスはニヤツと笑みを浮かべ、声高らかに告げた。

「お前がどう思っているのかは知らないがな! 俺の戦ってきた中で最強の男が……昔のギルマスが、俺にこう言った! 『勝ちたいと真に願った時。人は守りを捨てる! それは攻撃こそ最大の防御だからだ。勝つには攻めるしかない。防御を潔く捨て、攻撃に集中させてこそ活路が見出せる。肉を切らせて骨を断つ。死中に活あり!』てな。まあ、最後のはいまいち意味が分からないだが……全能力を攻撃に向けさせたのはお前が初めてだ――誇っていいぜ!」

それを聞いて、先程までダイロスの体から噴き上がっていた立っているだけで突き刺されそうな刺々しい殺気が、まるで水面の波紋の様な静かなものへと変わった。

ダイロスは大剣の先をメルデイウスに向け、そのドラゴンの兜の間から見える口元に、ニヤリと不敵な笑みを浮かべると。

「――防御を完全に捨てる潔さ……か。まさに死中に活ありだな。ふふふっ、君の様な人物に会えたのが嬉しいよ……ならば、俺も手加減なく。全力でお相手しよう! その刃が私に届く前にHPを削り切ってやろうじゃないか!」

「おう! やれるもんならやってみやがれ!」

そう叫んだ直後、仕掛けたのは重々し重鎧を捨て、裸にジーンス一枚という無防備なメルデイウスの方だった。なんの躊躇もなく突っ込んでいくその様は、清々しくも思えるほどだ――。

地面を蹴って跳び掛かったメルデイウスは右上から構えた大剣を振り下ろすが、その攻撃は容易く防がれてしまう。

やはり、可変式の大剣状態では爆発能力のない分。相手からしてみれば、爆発の破壊力と爆風で体勢を崩される危険がないので防ぎやすい。

つとその直後、ダイロスの大剣に押し付けられていたはずの大剣が一瞬で消え、次にダイロスの右脇腹に衝撃が走る。

「――くッ!! あの一瞬に、空中で体を回転させただ?!」

ダイロスがメルデイウスの大剣に目を向けると、いつの間にか斧の様に変わっていた。

そう。メルデイウスは防がれ、即座に武器を斧へと変形させ、その遠心力をも利用して空中で素早く体を回転させたのだ。

だが、付け焼き刃に切り返した攻撃では、ダイロスの体を飛ばすほどの力はない。少しよろめきはしたものの、すぐに体勢を立て直してメルデイウスを攻撃する。

しかし、その攻撃を意図も容易くメルデイウスは避けると、隙を突いて再びダイロスの左脇腹に攻撃を加えた。

見た目は少し間抜けに見えるが、重さを大幅に減らすことによって、敏捷性が段違いに上がる。

近接戦闘ならば、これだけでもプレイヤーに与えるアドバンテージは大きい。だが、それを実際にするととなると、防御を装備しない裸の状態で戦うことになり。高レベルプレイヤー同士の戦闘では、一撃受けただけで致命傷になるだけではなく、下手をすれば一撃で撃破されかねない。

プレイヤーに与えるメリット以上にデメリットの方が大き過ぎる為、普通なら絶対にしない戦法であるの言うまでもないだろう。これができるのは、一握りのトッププレイヤー達だけなのだ。マスターや紅蓮も防御力のある防具は身に付けていない。それだけ回避に自

信があるか、固有スキルの兼ね合いもあるだろうが。

痛覚の存在するVRゲーム内で防具を身に付けないというリスクは他のゲームとは訳が違う。

その為、真似したくても通常の復活できる状況ならともかく。アバター
の死が現実での死になるという今の状況では、真似する者などい
るはずもない。

それが例え、HPが『1』必ず残るPVPだったとしても――。

エキシビションマッチ4

軽さを活かして攻める手を休めることなく攻撃を行い、一気に攻勢に出るメルデイウス。

だが、それも仕方のないことなのかもしれない。おそらく。メルデイウスが気にしているのは、ダイロスの固有スキル『豪腕』のリキヤストタイムだろう。

一撃で5分という大きなリキヤストタイムはあるが、攻撃力を一撃に限り、100倍へと高める効果は対人戦ではとても強力な武器になる。

何よりも武器の耐久力を減らされる方がプレイヤーとしては痛手だ——高レベルプレイヤーなら、街売りしている武器では役不足で、大抵はモンスターのドロップ品か鍛冶などをするプレイヤーの売っている武器を購入する。

その中でもトレジャーアイテムとオーダーメイドのオリジナル武器を持っている者が武器破壊されれば、その損失額はとつもない金額になってしまう。しまいには、前線を退いて商業専門のプレイヤーになるかもしれない。

それだけ、戦闘を主に行っているプレイヤーにしてみれば、自分の使用する武器は重要なのでダイロスの固有スキルは最悪にして最大の脅威なのだ。

「——後2分を切ったと言うところだろ？ お前の固有スキルの再発動までは……」

「ほう。俺の固有スキルの時間を計っていたとは驚きだね。だが、次の一撃で確実に決める！」

そう告げたダイロスの言葉もハツタリではなく、最小限の動きでメルデイウスの猛攻をしのぎつつ、虎視眈々と反撃の一撃に備えている。

次々に繰り出されるメルデイウスの斧と大剣へのシフトする可変攻撃に、確実に防御の隙間を抜いてダイロスの漆黒の鎧を傷付けていく。まあ、徐々にボロボロになっていく彼の鎧を見ていると、メル

デイウスの攻撃の激しさを物語っている。

その中でも斧状態で数発の攻撃を受けた左脇腹部分の鎧は、すでに半壊して内部の衣服が露出した状態だ――。

メルデイウスの一撃を受け。大きくよろめいたダイロスは、後ろに数歩後退ると即座に大剣を構え直す。

「――結構もったな……だが、もうHPもまずいんじゃないのか？」
「そうだな……だが、すでに全て整った」

ダイロスが構えていた炎を纏った大剣が、更に激しく炎を辺りに撒き散らす。

メルデイウスも口元にニヤリと笑みを浮かべると、手にしていた可変式の大剣が大斧の状態へと変わった。

「――この一撃に我が全てを込める!!」
「勝負は……もう決まってるんだよ!!」

2人が互いの得物を大きく振り上げると、同時に地面を蹴った。咆哮を上げながらダイロスは炎を纏う大剣を振り下ろすと、メルデイウスは振り上げていたベルセルクを横に構え直す。

だが、その一瞬の動きが大きなロスになるのは、メルデイウスも分かっているはずだ――なら、何故のこのタイミングでそんなリスクになる行動に出たのか……それはすぐに分かることになる。

炎の刃が迫って口元に笑みを浮かべた直後、メルデイウスはベルセルクから手を放し。鎧の隙間に忍ばせていた短剣を逆手に握ると、飛び込むようにして攻撃をやり過ぎし前転しながら、逆手で持っていた短剣を内部が露出し脆くなっていた鎧を容易く突き破り、メルデイウスの短剣が右脇腹に深く突き刺さった。

痛みにさすのがダイロスも歯を食いしぼる。が、すぐに手にした大剣の柄に力を込めると。

「――まだまだ……まだ終わりではない!!」
直ぐ様。ダイロスは握り締めた大剣を、背中を向けているメルデイウスに向かって乱暴に振り抜く。

直後。辺りに金属が激しくぶつかり合う音が響いた。
そこには、振り抜かれた大剣を振り向きもせず。左手に逆手で持つ

たベルセルクの刃を地面に突き立て、彼の大剣の刃を止めているメルデイウスの姿があった。

あの刹那に、彼は放り投げたベルセルクを空中で掴み取り。瞬時にベルセルクを装備し直したのだ。

本来ならば不可能な動きだ。まるで、次にダイロスが攻撃してくることが分かっていたいなければ、決して間に合わない間合いだったはず――。

「……何故だ。はあ、はあ……何故、俺の攻撃が分かった……答えろ！」

「何故ってそれは……」

そう言葉を返したメルデイウスが、徐にダイロスの方を振り向く。

「――俺がお前ならそうしてた。ただそれだけだ」

顔色ひとつ変えずにそう答えたメルデイウスに、ダイロスは大きく笑い声を上げた。

ゆつくりと立ち上がり。不思議そうでもあり不機嫌そうでもある複雑な顔をしながら、金色に輝く大斧『ベルセルク』を肩に担ぐ。

すでに勝負は、メルデイウスが突き刺した短剣でダイロスのHPが

【OVERKILL】になった時点についている。

度重なるメルデイウスの猛攻で、鎧の耐久力が大きく減ったのと同じくらい。ダイロスのHPも減少していたということだろう。

つと、メルデイウスがゆつくりと口を開く。

「……お前はどうか知らないが、俺はお前と俺がそれほど違う人種だとは思ってない。むしろ戦ってみて、俺と同じだと思った……」

「……………どうしてだ？」

少しの沈黙の後、ダイロスは静かにメルデイウスに尋ねた。

そんな彼の問いに、メルデイウスは鼻を鳴らす。

「フンッ、お前ももう気付いているはずだぜ。お前も考える前に行動する直感タイプだ――そうでなければ、俺の攻めを受け切れるわけがねえー。だが、せっかくの能力を思考が殺しちまってる……」

「何が言いたい!!」

憤るダイロスにメルデイウスが微笑みを浮かべて告げる。

「もつと仲間達を信じてやれよ。大将は神様じゃねえーんだ、全てのメンバーを到底守り切れるわけがねえ……危機的状況下でも俺達ギルドマスターは大将として、仲間達の先頭に立つことしかできないんだからよ」

メルデイウスのその全てを包み込むような優しい微笑みに、自分にはない大きなものを感じた。

「……ふふっ、そうか。君に付いて来るギルドメンバーの気持ちだが、少し分かる気がするよ……んツ!!」

呆れながらも微笑み返したダイロスは、自分の右脇腹に突き刺さっていた短剣を引き抜く。

ダイロスの頭の上に「LOSE」という文字が表示される中、彼は己の手の中にある短剣を感慨深げに見下ろしていた。

「まさか、互いに大物を振り回していたにも関わらず。こんな小さな武器が勝敗を決めるとはね……分からないものだ。勝負は……」

そう呟いたダイロスに、メルデイウスは言いにくそうに告げる。

「……実はそれな。俺の武器じゃないんだ……それは紅蓮——うちのサブギルドマスターの物で、御守り代わりに持つてるだけだ。それで勝負を決めたわけだから俺の力だけじゃねえ……だから、勝負はお前の勝ちだ」

恥ずかしそうに顔を赤らめながらそう告げたメルデイウスは、堪らずそっぽを向いてダイロスに背中を見せた。

それを聞いたダイロスは首を横に振った。

「——いや、やはり俺の負けだ。この試合は元々ギルドマスター、サブギルドマスターで行うルールだった。しかし、俺はサブギルドマスターのリアンを下げた。いや違うな……あのままりアンと戦っていたとしても、君には勝てなかったと思う。この短剣から君の仲間達への想いが伝わってきたよ……今回は俺の完敗だ。だが、次やる時は今度こそ俺が勝たせてもらう！」

「おう。またやろうぜ！ 今度は場外負けなしの場所で、思いっきりな！」

メルデイウスはダイロスの差し出した短剣を受け取ると、その後固

く握手を交わした。

会場内もその光景に称賛の拍手を送っている。すると、紅蓮の声が場内アナウンスで流れた。

『選手の皆様お疲れ様でした。とてもいい勝負を見せて頂きました。選手の皆様は、後ほどギルドホール受付前にいらしてください。そこで消耗した装備を、我がギルドの選りすぐりの鍛冶師達によって修理致します。素材などかかる費用は、全てこちらが負担致しますのでご心配なく——さて、会場にお越しの皆様。今回のイベントは楽しんで頂けましたか？ 試合に出場して頂いた方々がこの千代の街を守ってくれるために始まりの街からお越し頂いた方々です——』

紅蓮がそこまで口にする、会場内の観客達が一斉にざわめく。「あんなに強い連中がいる街が数日で陥落したのかよ……」「マジかよ……」「嘘だろ？ テスターと互角に渡り合えるプレイヤーがいるのに……」「やはり。無限に湧き出るモンスターに、プレイヤーじゃ太刀打ちできないってことか？」など、様々に落胆の声を漏らしている。

観客達は試合を目の当たりにして、今の絶望的な状況を再確認したのだろう。一同が意気消沈し、今までの盛り上がりが嘘におもえるほどの、まるでお通夜の様に静まり返ってしまった。

まあ、無理もない。未だに街の全域を日に日に無尽蔵に増えるモンスターの大群に包囲されているのだ。

しかも、その侵攻を抑えているのは街をぐるっと囲む様に流れる水堀だけで、まだ街の中を防衛する巨大な杭の防護壁は完成していない。

今、敵が強引な力攻めをしてくれば、おそらく街の陥落は避けられないだろう……。

静まり返ってしまった会場内に、再び紅蓮の声が響く。

『——ですが、見て頂いた通り。彼等はこの千代の街でも通用するほどのプレイヤー達です。私は彼等がこの街を守ってくれるだけではなく、きつと我々を現実世界に戻してくれると確信しております。皆様、一日も早く元の世界に帰還する為、今後とも資金援助をよろしくお願い致します』

紅蓮の声が止み一気に静まり返った会場内が、今度は熱がこもった声援でどつと盛り上がった。

「当たり前じゃねえーか!」「元の世界に帰れるなら、金は惜しまないぜ!」「俺のレベルじゃ勝負できないからな、テスターの人が俺達の希望なんだ。当然だろうが!」「また現実の世界に戻れるなら、ゲームの中で破産したって構わないわよ!」「そうだぜ! 俺達の金は貯金箱を破る様な感覚でどんどん使ってくれ!」など。

様々な声が各所で上がっているが、その全てが歓迎するもので否定的なもの含まれていない。

紅蓮達は千代のトツギルドで信頼されているとは言え、異常とも言えるほどの指示に会場内にいたエミル達は驚きを隠せないでいた。

それも無理もないことだ。これが始まりの街であつたなら、この声援は罵倒へと変わっていただろう。

駆け出しのプレイヤーにとって、資金は命と同じくらい大事なものだ。レベルによって装備できる装備は違ってくるのが、MMORPGでは良くある話で装備を新調するにもそれなりにお金が掛かるのも仕方ない。しかし、ログアウトができなくなってしまう現状でも自力での脱出を諦め、他力本願で長期的に宿に籠もる為だけに資金を貯めている者が始まりの街では多かった。

そんな自己保身の鏡の様な者達に助け合いを呼び掛けるだけ無駄だったが、他の街では駆け出しのプレイヤーよりも長年プレイしてきた者達が多く。そもそも資金的にも平均Lvや装備的にも、底辺に近いプレイヤーとは心のゆとりが違うのだ――。

だが、今のエミルには、そんな周囲の人間の違いを素直に受け入れられなかった。

(……もし、あの戦いが始まりの街でさえなければ星ちゃんは……)

そう思うと、エミルはその場にいることができなかつた。

突然ゆっくりと立ち上がったエミルを、隣に座っていたエリエが驚いたように見上げていると。

「私はおみやげを買って先に戻ってるわ。レイちゃんも待たせてるし、星が目を覚ましているかもしれないから……」

エリエの返事を待たずに足早にその場を後にするエミル。

その背中は寂しげで不安と複雑な心境が滲み出ているようだった。もう長く拠点としていた始まりの街はない。そこにいたプレイヤー達も殆どが消えただろう。

街の門の前で戦っていた星を見殺しにしようとした彼等は、もうこの世界にはいない——しかし、行き場のない怒りが虚しさになって時々込み上げてくるのだ。

彼女自身、もしものことなど考えても意味がないのは分かっている。だが、未だに眠り続けている星が、亡くなった直後の妹とどうしても重なって見えてしまう。あの小さな体から伝わる熱を手の平から感じていないと、不安で仕方なかった。そうでないと、徐々に冷たくなり二度と目を覚ますことのなかった最愛の妹のように——。

鍛冶場で・・・

エミルがその場からいなくなると、イシエルも徐に立ち上がり。

「——ならうちも、久しぶりに千代の街を見て回ってくるわ〜」

「えっ、イシエルさんも!?!」

驚き慌てるエリエに向かってにつこりと微笑んで「後は頼むな〜」とだけ言い残し、着物の袖を翻すとどこかに行ってしまった。

大きくため息を漏らすエリエの横でミレイニが顔を覗き込んできて。

「あたしにもおみやげ欲しいし〜!」

普通はその場にいる者におみやげは買っていかないと思うのだが……瞳をキラキラさせて真っ直ぐ見つめてくるミレイニに、エリエは更に大きくため息を漏らす。

紅蓮の言葉で大会の終わりを締めくくられた。会場から徐々に散らばっていく観客達をボーと眺めながら、混雑が収まってから会場を出ようと考えていたエリエの元にカレンが戻ってきた。

その体は汗でじんわり湿っている。どうやら、カレンはあの後、会場の外で体を動かしていたらしい。

ばらけた肩くらいの黒髪の前には、まだ所々水滴が滴り落ちていて、頬にもまだ熱が残っているのかほんのりと赤くなっている。

「大勢出て来てるのいつまでも出て来ないと思ったら、なにやっているんだよ」

「別にいいでしょ? デイビッドはまだ侍話してるし。ミレイニはおみやげ買ってあげたら、その場で食べ出すし……こっちにも、色々事情があるのよ」

明らかに不機嫌そうに、ツンとした態度で膝の上に頬杖している。

カレンがその横を見ると、ミレイニが幸せそうにたこ焼きとシュークリームを交互にパクパクと食べ進めていた。

たこ焼きはすぐそこで売っていたが、シュークリームの屋台はなかった。おそらく、エリエが前もって作ってきたものだろう。

つとどうやら、侍トークをしていたデイビッドも終盤に突入してきたらしい。

「——それで、真田幸村という武士は三度に及ぶ本陣への奇襲戦法で最後まで徳川家康を追い込んだにも関わらず！ 一歩及ばず。逃げられてしまった……そして最後は体に無数の傷を負って神社で休んでいた所を敵に見つかつてしまい。その時の最後の言葉が「もう戦う気はない。手柄にせよ」だったんだ……元々幸村は徳川からは何度か好条件で寝返る様に言われていたにも関わらず。彼は最後まで豊臣への忠誠を貫いて、命乞いもしなかった。そして徳川家康を追い込んだ功績を徳川家康に認められ、日本一の兵という称号を得たんだ」

「……いい話ですね。やっぱり侍は最後まで信じたものの為に戦うのがいいんですね！ そしてそれがなくなった時の潔さこそ侍！」

「そう！ 死をも受け入れてこそ侍！」

「THE侍!!」

二人は声を合わせてそう叫ぶと、涙を浮かべながら熱く互いの手を握りあつた。その光景には、エリエとカレンも呆れた様子で冷ややかな目で眺めている……。

デイビッドは指でコマンドを操作すると、インベントリの中から赤いTEEシャツを取り出す。それには胸元に、真横から刀で突き刺された『THE侍』の文字が刻まれていた。そのダサイTシャツを小虎に手渡す。小虎は興奮気味に「最高にかっこいいです！」と声を上げると、デイビッドも満足そうに頷き。

「そうだろう！ これは俺がこっそり作成したものなんだ。同じ侍S OULを持ったプレイヤーにプレゼントしているものんだけど、受け取ってくれるか？」

「はい！ 大切に着ます！」

もう一度深く頷き返すと、肩に手を置いた状態でにつこりと微笑んで親指を立てている。

それに小虎も親指を立てて応える。本来なら俺同士の友情が芽生える場面なのだろうが、あのTシャツのせいでなにかの宗教の勧誘か

なにかに見えてしまう。

つと、小虎が思い出したように手の平をポンと叩く。

「そういえば、姉さんから後で皆さんを連れて来るように言われてたんだった！」

「でも、もう2人いなくなってしまったけど？」

エリエがそう告げると、小虎は辺りを見渡して。

「確かに青い髪の人と紫の着物の人がいませんね。でも、後で残りの人に話してくれればいいです。ちよつと姉さんに連絡してみますから待つて下さい」

背を向けると何やら空中で指を忙しく動かしているところを見ると、どうやらボイスチャットではなく、メッセージを送ってやり取りをしているらしい。

用心深いギルドでは、他者に聞かれてしまうボイスチャットではなく、個人の視界にしか表示されないメッセージチャットを使っている。

千代で最も上位にいるギルドならば、外部に情報を漏洩させないような手段を、予め取っているのはなにも不思議なことではないだろう。

数分のやり取りののち、小虎はゆっくりとエリエ達の方を振り返ると。

「——姉さんが皆さんを街の鍛冶場にご案内するようにということなので、僕に付いてきてもらっていいですか？」

『……鍛冶場？』

その場にいた全員が、小虎の口から出た『鍛冶場』という言葉に首を傾げていた。

もう疎らになってきた会場内を後にすると、小虎に続いて街の中を歩いていく。

このゲームの特徴でもあるのは、その名前の如く『自由』に様々な装備品をプレイヤーのレベルに関係なく使用することのできる生活スキルと言われるものが存在することだろう。

他のゲームならば、他のスキル同様に途方もない時間を費やさなけ

ればならないが、フリーダムでは素材と使用する道具によって、出来上がった道具のステータス率が変わるのだ。

その為、レベルが低くても道具と素材さえいい物を手に入れられれば、初心者でも最高位に位置する装備を作ることが可能なのだ——まあ、装備するのに規定レベルに達していなければ装備することができないというのは、レベル制MMORPGのお約束の様なものなのだが……。

イベントがあつたからか、いつにも増して大通りは人の往来が激しい気がする。

すると、繁華街をしばらく歩いていると、明らかに人集りができている建物を見つけた。一同が看板を見上げると、そこには『鍛冶屋』の文字が掲げられている。

入り口まで来たが、あまりの人の多さに中が全く見えない。だが、時折カンカンと鉄を打つ鍛冶屋独特のリズミカルな音が聞こえてくる。

小虎がアイテムから自分の赤い大剣を出すと、それを両手で持つて空に掲げながら左右に揺らして中の人物にサインを送った。しばらく、それを繰り返していると中から「ちよつとごめんよ」と、人混みを掻き分けて少女が現れた。

少女は茶色く厚手の長ズボンにお腹が出ている白く無地のキャミソール姿で、茶色い髪で短めのポニーテールに結んでいて、全身に黒いすずを付けている。

「——おお、連れてきたのか！」

少女は小虎の姿を見つけると、大きな胸を揺らしながら小虎の方へと駆けてきて小虎の首に腕を回す。

小虎の頭に自分の胸を押し付けている少女に、小虎も顔を真っ赤にさせている。

首を絞められているからか、それとも胸を頭に押し付けられているからなのかは分からないが、小虎は体をばたつかせていた。

「リコットさん。その首に腕を回すのと胸を押し付けるの止めて下さいって何度言ったら……」

「なんだとー？ そんなこと言って嬉しいんだろことらー。うりうり
く」

楽しそうに歯を見せてニシシと笑っている少女は、更に強く自分の胸を小虎に押し付けた。

すると、勢い良く体を捻った小虎の頭が腕の間をすり抜ける。

「何度やっても、僕の方がレベルは上なんだから意味ないのに！」

「まったく。恥ずかしがることないのに……まあ、そんなところもかわいいけどさー！」

顔を耳まで真っ赤にしながら睨む小虎に、少女は腕を組みながらニシシと笑う。

服装やすすに汚れた体を見る限りでは、彼女は鍛冶師なのだろうが。しかし、今も鍛冶屋の中からはカンカンと鉄を打つリズムカルな音が響いていた。

その音が気になりエリエが人垣の間から、中を覗こうとしていると、リコットがエリエに話し掛けてくる。

鍛冶場で・・・2

「あんとあんたは、うちと近い年くらいだろ？」

顔を覗かせているエリエと、横にいるカレンを交互に指差しているリコットに2人が声をそろえて。

「あんたじゃない！ 俺はカレンだ!!」

「あんたじゃない！ 私はエリエよ!!」

2人の圧力に怯んだのか、リコットは一瞬仰け反り驚いた様子で目を見開いたが、すぐに笑顔を見せると。

「そっかそっか、それは悪かったね。うちはリコットってんだ。年齢は16、よろしくな！ 2人はサブマスの知り合いなんだろ？ なら、壊れそうな武器や防具はうちんとこに持ってきてきな！ 格安で前よりいいものにして返してやるよ！」

自信満々に胸を叩くりコットだが、2人の視線は彼女の大きな胸に向いている。

「――俺よりでかいとは……本当に近い年か？」

「――エミル姉くらいはあるかも……」

羨望の眼差しで食い入るように見つめていると、リコットは胸を隠す仕草をして「まじまじと見られると恥ずかしいな？」と、少し頬を微かに赤らめながら言った。

すると、奥にいたデイビッドがリコットに尋ねる。

「それはいいんだけど、俺達は紅蓮さんに呼ばれてここに来たんだ。彼女はどこにいるの？」

その真剣な表情に、リコットも平静を取り戻して神妙な面持ちになると。

「ああ、サブマスならあの中だよ。付いてきな！」

リコットはそう告げると、先陣を切って人垣を掻き分けて中へと消えていく。

皆互いの顔を見合わせ意を決したようで頷きそれに続く。人を掻き分けて中へと強引に入っていくと、中には自分ほどの大きな金槌を手にした紅蓮が真っ赤に熱せられた鉄を打っている。

白装束を纏った紅蓮が金槌を振り落とす度に、その長く美しい銀髪が揺れ、額から玉のような汗が真つ赤に弾けた鉄の火花と一緒に周囲に飛び散っていた。

その光景が何故か神々しく見えたのは、その場に集まった皆が思っていたのだろう。一定のリズムでカンカンと音が響く中、ギャラリ―達はその様子を見守っているだけだった。

紅蓮が最後と言わんばかりに大きく振り上げた金槌が熱せられた鉄に当たり。直後、金色の光を放つ。

光が収まると、そこにはメルデイウスのいつも持っている柄に刃の付いた大剣『ベルセルク』が置かれていた。

額を流れる汗を拭った紅蓮は「ほっ」と大きく息を吐くと、金槌を隣にいたメルデイウスに渡して、やってきたエリエ達を出迎える。

「皆さん。お忙しい中、来てくれてありがとうございます。実は明日の件でお話があるのです。ああ——」

そこまで口にする、思い出した様にエリエ達と一緒にいたリコツトの方を向いて「後はよろしく……」と短く告げると、リコツトも「了解。サブマス！」とにつこりと微笑みを浮かべて親指を立てた。

だが、何故か紅蓮は彼女の発言に不満そうに眉をひそめる。

それを察して、エリエが恐る恐る彼女に尋ねた。すると、意外とあつさり紅蓮がエリエに小声で呟くように言った。

「……本当はメルデイウスより下に思われるのは不満なんです。ですが、彼ほど皆を率いるのに相応しい人物もいません。私にはメルデイウスほど、人を集める人徳はありませんから……」

少し悲しげな表情をした紅蓮の話聞いたエリエは、彼女の気持ちに分かる気がした——たとえ個々の能力で上回っていても、結局は集団の中でのコミュニケーション能力に左右されてしまう。

特に紅蓮の固有スキルは『イモータル』不死の能力で、痛覚までは遮断できないのだが、それでも死なないというアドバンテージは大きい。それに比べてメルデイウスの固有スキル『ビッグバン』は、それとは正反対の固有スキルだ——彼にとっては、紅蓮は天敵とも言える相対関係に属している。

また、紅蓮は彼と対等の立場でいたいと考えているが、結局は口下手なところもあり。ギルドメンバーからも少し距離を置かれているのかもしれない。

エリエも現実世界では家柄上。様々な人と交流しなければいけないのだが、元々それほど人付き合いが上手い性格ではなく。現実世界の人付き合いは広く浅くを貫いてきたのだが、唯一心を許せるのはエミル達。元ギルドメンバーぐらいなものだ。

でも時折、自分よりも凄く固有スキルを持っているメンバーに囲まれていると、どうしてもいつか『自分が用無しになる日が来るのではないか……』と不安になる時もある。

おそらく。彼女も同じ気持ちなのだろうと、一瞬だけ見せた紅蓮の表情の変化に自分の心境を重ねてしまったのである。

混浴

エリエ達と一緒に鍛冶場を後にした紅蓮が向かったのは、ギルドホールの大浴場だった。

しかし……………。

「——百歩譲って裸の付き合いっていう日本の文化は尊重する。でも、どうして……………どうして……………」

苛立ちを抑えきれずにザバツと浴槽の中で立ち上がったエリエが遠くにぽつんと大きな浴槽の端にいたデイビッドを指差した。

淡いピンクのビキニタイプの水着を着たエリエが声を荒らげるとき、紅蓮は静かに「なにか？」と言葉を返す。

「……………なにか？　っっておかしいでしょ!?　どうして女湯にこいつが居るのよ!!」

エリエは抑えきれない様子で顔を真っ赤にしながら、デイビッドのことを指差した手を何度も上下に動かしている。

だが、紅蓮は落ち着いた様子で「だから、水着を着用して下さいと言ったのです」と言った。しかし、この摩訶不思議な状況下で、エリエがそれで納得するはずがない。

「確かに！　確かにね。私も女同士で水着っっておかしいなくっと思ってたけど！　でも、こんなことなら、ここで話を聞いてからお風呂上がって、こいつに事後報告でいいじゃない!!」

「うるさいぞー！　水着を着てるんだから、細かい事はいいだろう！」
怒っているエリエにそう言ったのは黒いビキニタイプの水着を着たカレンだった。普段なら、お風呂の中で泳いだり飛び込んだりやりたい放題の彼女が、何故か今回に限っては大人しく浴槽に浸かっている。

そのことがエリエの怒りに、更に火をつける。

「あんただって！　エミル姉がいない時に、普段は泳いだり飛び込んだりしてるくせに!!」

「なっ、あつ……………そ、そんなこと、今この場で言う事ないだろ！　べ、べつに男性が居るから緊張しているとかじゃ……………な、ないんだからな

！」

「……あんた。キャラ変わってるわよ？」

頬を真っ赤に染めると、カレンは口までお湯の中に付けて黙り込んでしまった。

エリエが再び湯船に浸かって諦めた様に大きなため息を吐いたその時、目の前から走ってきたミレイニが大の字になって飛び込んできた。

一番近くにいた紅蓮は、ミレイニが飛び込んでくると察して湯船から即座に離脱する。

デイビッドとカレンは咄嗟に背中を向けて顔に掛かるのだけは死守したが、その場にいたエリエだけが盛大に頭からお湯を被ってしまった。

エリエは頭からびしょ濡れになり、俯いて怒りに肩を小刻みに震わせていた。

すると、お湯の中からミレイニが勢い良く飛び出してきて、再びエリエの顔に盛大にお湯がかかる。

「ぶはっ！ エミルがいないとお風呂で遊んでも怒られないからいいし！」

定番のスクール水着を着たミレイニが、開放感から腰に手を当て胸を張っていると、目の前のびしょ濡れのエリエを指差す。

「なーんだ。エリエもびしょびしょだし！ そんなに遊びたいなら、恥ずかしながらに言えればいいし。それぞれ」

楽しそうに笑いながらお風呂のお湯を、追い打ちとばかりにエリエの頭にかけるミレイニ。

しかし、今のエリエには火に油を注ぐ様なその行為は完全にアウトだろう。まあ、ミレイニが空気を読むことは、これからもありえないだろうが……。

エリエの頭の血管がブチッ！と音を立てた次の瞬間。ミレイニの頬は左右に伸びていた。両手をブンブンと振り回し、ミレイニが声にならない声で抗議するが、エリエの目は釣り上がりいつもの優しい面影はなく、背後からは不動明王像の様な炎が上がっているように見え

るくらいだ——。

「——あなたには、お風呂の入り方そのものをしっかりと教えてあげないといけないようね……ミレイニ！」

「はいひひ。はんえほおってるひ」

「なんで怒ってるかって？ それは自分の胸に聞いてみなさい！」

完全に頭に血が上っている様子のエリエの耳に、紅蓮の言葉が入ってきた。

「……ここに呼び出したのは喧嘩する為ではないのですが？」

紅蓮のその冷たく抑揚のない声音に、さすがのエリエも恐怖を覚えたのか、直ぐ様ミレイニの頬から手を放した。

それを見て紅蓮は呆れた様子で大きくため息を吐くと、今度は真面目な声音で喋り出す。

「実は、皆さんにここに来ていただいたのは、もう気付いている方もいるとは思いますが、明日の作戦の件です。作戦内容は至ってシンプル——杭の素材である木を切りにいくのです。明日、私達は街の防衛の為に、木材を大量に切り出さなくてはいけません。ですが——」

そこまで口にした紅蓮に、まだヒリヒリと痛む頬をさすりながら、ミレイニが徐に手を上げる。

紅蓮は話を一旦切り上げ、ミレイニの方を向いて右手を差し出し「どうぞ」と告げた。

嬉しそうに頷くと、ミレイニは思い付きで咳払いをしようとしたのだろうが本当に咳き込んでいる。

息を整え、ミレイニが大きく息を吸い込むと。

「木を集めた後は、どうやってあんな大きな杭にするし？ あんな大きな木はないと思うし！」

自信満々に言い放ったミレイニは、勝ち誇った様な笑みを浮かべている。

呆れたように大きなため息をもらし、エリエは額を手で覆う。紅蓮も首を傾げていたが、紅蓮が返答する前にエリエがミレイニの質問に答えた。

「あのねー。あなたの武器だつて最初から土に刺さつてたわけじゃな

いでしょ？　つまり、街で見た巨大な杭も最初からあの形じゃなく。後であの形に生成するのよ」

「ふうん。でも、それはどれくらいの本が必要だし？」

「そ、それは……」

すぐに質問が返ってきて、エリエもその質問にはさすがに答えられない。いや、答えられないというよりも答えが分からないと言った方が正しいだろう。

生産スキルにレベル制限は特にないものの。そのスキルの多さは普段戦闘系スキルの基本スキル、固有スキルしか使わないエリエ達。戦闘系のプレイヤーには全てを把握しきれていない。

まあ、VRという特殊なシステムを導入しているMMORPGで、激しく動きながらスキルを多彩な戦闘系のスキルを使用し。キャスタタイム、リキャストタイムを管理するのはほぼ不可能だろう。

その為、戦闘スキルは基本的に基本スキル、固有スキル、トレジャーアイテムに備わっている武器スキルの3種類に簡略化されているのだ。それに比べて生活スキルの数が段違いに多い。

料理、裁縫、製錬、鍛冶、採掘、伐採、釣りなど上げればキリがないほど存在していて、中には洗濯という本来はゲーム内で服を洗う必要はないのだが、一部の綺麗好きプレイヤー達に向けてのスキルまで存在する。

「ああ、あの杭は木工で1つ作るのに、木が50本程度です」
『50本ッ!?!』

その場で紅蓮の話を聞いていた全員が声を揃えて一斉に叫ぶ。

だが、それも無理はない。木を50本と一言で言っても、相当な量である。しかも、街を区切るだけの本数を手し、輸送するには相当な労力と時間を有することは言うまでもないが。何よりそれを、周囲を敵に囲まれている今の状況下でとなると難易度は一気に跳ね上がる。まあ、だからこそ今日の選抜戦の意味があるのだが……。

驚く皆を気にすることもなく紅蓮は淡々と言葉を続ける。

「なので、今回の作戦が成功するかどうかは、伐採中の我々を守っていただくよう協力してくれるギルド『メルキュール』の方々にかかって

いるのですが、それは今日の戦いぶりを見ていけば問題ありません。しかし——」

そこまで口にした紅蓮は、真剣な面持ちで皆の顔を見渡すと、徐に口を開く。

「——私は今回の戦闘で被害者を出すつもりはありません。しかし、それには皆さんの力が必要なのです」

「もちろん！ 私にできる事があればなんでも言つてよー！」

「俺も全力で協力します！」

「俺も侍は仁義を通すもの……任せてくれ！」

突然深々と頭を下げた紅蓮を前に、エリエ達も力強く答える。

エリエ達のその声を聞いて紅蓮も安心したのか、顔を上げて再び話し始めた。

「実は、今回の作戦ではデイビッドさんとイシエルさんの2人に、私達の後詰めをお願いします」

「ちよっ、ちよ、ちよっと待つて！ デイビッドはいいとしても、どうしてイシエルさんなの？」

突然のエリエの慌てように、紅蓮も「はい？ ダメですか？」と不思議そうに小首を傾げている。

混浴2

首を傾げている紅蓮に、エリエが苦笑いを浮かべながら言った。

「いや、ダメではないんだけど……私じゃダメなの？」

紅蓮は困惑した様子で少し考える素振りを見せると、困ったように普段より手探りな感じの弱い声で。

「……ですが。広範囲系の固有スキルを持っている方が、皆さんのギルドではデイビッドさんとイシエルさんしか……」

「でも、どうして広範囲系の固有スキル限定なの？」

聞き返してきたエリエの質問に、紅蓮は自信を持って応えた。

「それは簡単です。後詰めと言っても、正面切って戦闘に参加してもらう訳ではありません。つまり、我々が対応するまでの間。敵を一瞬だけ足止めしていただければいいんです。数では圧倒的にこちらが不利なのですが、私のギルドで広範囲攻撃を行える者が少ないので……マスターの仲間の方なら安心してお任せできます」

「……でも、どうして2人だけなの？ 私達全員じゃダメなの？」

「そうだ。俺も君達の役に立ちたい！ ギルドホールに住まわせてもらってるし。師匠がいたら、きっと紅蓮さんを助けてやれと言うはずです！」

エリエの言葉に便乗するようにカレンが声を上げると、今まで大人しめで話していた紅蓮が突然声を荒らげる。

「それはできません！ 『THE STRONG』サブギルドマスターとして、マスターから皆さんを任せている以上。メンバーの方々を全力で守るのが私の使命でもありますから」

紅蓮の普段の彼女とは比べ物にならないほど、彼女の瞳は決意に満ちていた。それだけ、紅蓮に取ってマスターの仲間は彼と同じ位に大事なものなのだろう。

マスターの居ない今。仲間であるエミル達に、もしものことがあれば彼に顔向けできない。

彼女は本気で今回の戦闘で犠牲者を出さないつもりのような様子——その為、マスターの仲間達を全員連れていってしまうと、そちらの方

に注意が向いてしまつてギルドメンバー達への注意が疎かになるかもしれない。

その結果。ギルドの仲間達を失うことは、紅蓮にとってそれだけは最も避けなければならぬことなのだ。

まあ、もう一つの原因は、エリ工達を全員連れていくと、もれなくミレイニが付いてきてしまう可能性がある。一番なにをするか分からない不安要素を、紅蓮は察したのかもしれない……。

「とりあえず。今回に限つて言えば、できればデイビッドさんとイシエルさんをお願いしたいのですが、最悪の場合はデイビッドさんだけでお願ひします。よろしいですか？ デイビッドさん」

「もちろん！ 俺で良ければよろこんで！」

彼女の要請にデイビッドは力強く頷くと、紅蓮も「ありがとうございます」と深々と頭を下げた。

頭を下げた紅蓮にデイビッドは慌てて頭を上げるように促すと、ゆっくりと頭を上げた。

つと、突然。紅蓮が微かに眉をひそめると険しい表情で目の前を見つめ、指を宙で軽く横に動かすと、すぐに普段と同じ表情に戻り。

「――明日の事でメルデイウスから呼び出しが掛かりました。私は外しますが、皆さんはゆっくりと羽を伸ばして下さい。それでは」

そう言い残すと、紅蓮はお湯から上がり。そのまま、少し早歩きで浴室を出ていってしまう……。

紅蓮が慌てているのはエリ工達も見たことがなかったが、なにか大きなことが起きていることだけは理解できた。しかし、今はそんなことよりも。この状況下に水着姿の男女が放置されたということの方が重大な問題なのは言うまでもない。

何故かカレンは普段と違ってしおらしくなっていて、顔を真っ赤にしながらお湯に肩まで浸かったまま殆ど動かないし、ミレイニは水着のままお風呂の中を平然と泳いでいる。

デイビッドもいたたまれないと言った表情でお湯には浸かつているものの、その視線は終始天井を見上げていた。

気まずい雰囲気の流れる中、数十分が経過していたのだが、全く状

況に変化はなく。エリエもカレンもデイビッドも誰一人として声を発しようともしない。

さすがにその空気に耐えられなくなったのか、デイビッドが湯船から徐に上がると出口に向かって歩き出す。

が、それをエリエが慌てて浴室を出ようと思っていたデイビッドを呼び止める。しかし、エリエはすぐには言葉を発しようとはしない。もじもじしながら、言い難そうにエリエが徐に告げた。

「——そうだデイビッド。イシエルさんにさっきの事を伝えてきてよ……」

「どうして俺が……」

「……私はイシエルさん苦手なのよ。デイビッドなら知ってるでしょ？」

少し怯えた様子でそう告げたエリエに、デイビッドは「ああ……」と何かを思い出したように仕方なく頷いた。

彼の反応だけ見ても、エリエとイシエルの間になにかあったことは間違いないようだ。まあ、トラウマを植え付けるほどのことなのだから相当なのだろう……。

エリエと別れたデイビッドがイシエルの宿泊している部屋に着くと、ドアを軽くノックする。

しかし、中からは返答はなく。どうやら、イシエルは会場で彼等と別れてからまだ帰ってきていないらしい。

試合が終わりお風呂に入ったりしていたデイビッド達は数時間が経過しているはずなのだが、イシエルはいったどこにいったのだろうか。

ゲーム世界に閉じ込められる前から、イシエルはエミルと行動を共にしていることが多かった。

もちろん。千代に来たことも一度や二度ではない。しかも、千代に知り合いがいるなんてイシエル本人からも聞いたこともなく。それどころか、エミルやデイビッド達以外にフレンドがいると聞いたこともない。

普段から、エミルにしか興味を示さないイシエルが、ここ千代で何かを探しているとも思えない。

「……なら、イシエルさんはどこに……」

デイビッドは顎の下に手を当て考え込んでいると、突然何者かに肩を叩かれた。

振り向くと、デイビッドの頬に細くてしなやかな指先が当たった。

「——デイビッドくん。いったいうちの部屋の前でなにしているん？」

そこにいたのはにっこりと微笑んでいるイシエルの姿だった。

彼女がなにをしていたのかは分からないが、その表情からは微かに疲れの色が見えた。しかし、イシエルはそれを隠しているようだ。

デイビッドはイシエルに明日の作戦のことを告げると、彼女は拍子抜けするほどあっさり了承した。

「——話はそれだけなん？　なら、うちは少し寝るわ……」

「そうか、分かった。食事はどうする？」

「それも部屋で済ませるから心配せんといて……」

頷くデイビッドに、イシエルは軽く微笑みを浮かべてゆつくりと部屋へと入って行った。それを見届けると、デイビッドはゆつくりと長い廊下を歩いてエレベーターの方へと向かう。

部屋に入ったイシエルはドアに凭れ掛かり、デイビッドの足音が遠ざかるのを確認するとドアに背を向け、力なくずり落ちるようにして座り込んだ。

疲れきった表情で虚ろな瞳で、自分の姿を映し出している窓ガラスを見つめ。

「はは……なんちゆう顔しとるんや。うち……せやけど、やったよエミル。これでもう……悲しい顔させなくてすむ……」

そう呟くように言うと、項垂れるように意識を失った。

メルデイウスからの呼び出し

* * *

お風呂でエリ工達と別れた紅蓮は、メルデイウスに指定された天守閣へと向かっていた。

千代のギルドホールは特殊で、外観は城のような造りになっている。その中でも天守閣のある最上階は千代でもトップのギルドのみに所有を許された言わば聖域。

所有権のあるギルドから認可された者しか、入室することはできない。その為、重要な話はこの天守閣で行うことが多いのだ――。

紅蓮が天守閣に着くと、そこにはすでにメルデイウスが来ていて、大きな長テーブルが置かれ、隣には街の強化を進めていた剛、その横に白雪が座っている。

静まり返っている室内に、ゆっくりと紅蓮が入り中央にある長テーブルの前に腰を下ろし、向かい合うメルデイウスに視線を移す。

普段は紅蓮に頭の上がない彼が珍しく憤った様子で、まるで鬼神の如く。明らかに敵意を向けた瞳で彼女を睨みつけていた。

だが、その凄まじい視線を受ける紅蓮は普段通り平静を保っている。互いに顔を見合わせ、睨み合いを続けていた。まあ、紅蓮の方は眉ひとつ動かしてないのだが……。

「――白雪から全て聞いた。どういうことか説明してくれるな?」

感情を抑えながらも、その怒りで震える声音から彼の心の内は周りに丸分かりだ。

憤っているメルデイウスと違って、紅蓮は冷静に大きいため息を漏らすと。

「はあー。そうですか、バレてしまったのなら仕方ありませんね……白雪から聞いた通り。マスターが行方不明となった為、白雪に街の周囲の偵察と、あわよくばマスターの行方も探れば良かったのですが……」

そう言ってチラッと白雪の方を見たが、白雪は首を横に振った。

それを見た紅蓮は少し残念そうに、視線を下に向けたが、すぐにメルデイウスに視線を戻す。

テーブルに肘を突いて前のめりになっていたメルデイウスが「ふうー」と息を吹き出し。椅子の背凭れに体を預け、難しそうな顔で珍しく考え込んでいる。

つと数分間考えた後、彼の答えを待つて静寂に包まれていた室内にやつと音が響く。

「……まあ、俺も白雪から聞いた時は正直驚いた。だが、紅蓮——こいつはまずいだろ？　ここに集まってるのは、一度負けを経験した連中なんだぞ。拳帝という旗印あつての連合軍だ。今はいいが、窮地に立たされた時にジジイがいないと分かれば軍団が壊滅する可能性も——」

紅蓮はメルデイウスの言葉を遮るように言った。

「——その心配はいりません。その為の今日の選抜戦ですから、それともメルデイウスは今日対戦したダイロスさんが、約束を無下にして途中で逃げ出すような人に見えましたか？」

「いいや、あいつは自分に掟——縛りを課して己を律するタイプだ。間違つても裏切るような真似はしない。だが、仲間達は分からない……」

深刻な表情で告げたメルデイウスの言葉に、紅蓮も思わず視線をテーブルに落とした。

確かに彼の言う通り、元はゲーム——つまりは娯楽であり。遊びのゲーム世界に突然閉じ込められ、街の周囲を無数の敵に取り囲まれた最悪な状況下で、メルデイウス達のギルドからも、ちらほらと諦めに似た言葉も聞こえているのは事実だ。

犯人はプレイヤー全員をVRMMORPG〔FREEDOM〕の中へと閉じ込め、システムを改悪して各街に不滅のモンスター軍団を差し向けてきたのだ。街に押し込まれた時点で、すでに脱出は不可能であり。システム上、街の中にモンスターが入ってくる事ができる為、プレイヤー全体を排除しようとしているのはもう間違いない。

凄腕のプレイヤーが集まっているとはいえ、無限湧きする敵と漆黒

の刀身の刀『村正』と同じ素材の武器によって、それぞれがレベルが100に引き上げられているのも忘れてはいけないだろう。

実際、メルディウス達のギルドでも街をモンスターの軍勢に囲まれ、生存を諦め始めた声がちらほら上がっていた。

それもそうだろう。本当のオンラインゲーム初心者でなければ、撃破されたモンスターが再び湧く——リポップを知らない者などいない。それは多人数で狩りを行うゲームなら当たり前とも言える機能である。

もしも倒されたモンスターが二度と復活しなければ、早い者勝ちや強者だけが一方的に報酬を得られる殺伐としたものになってしまうだろう。

その為と同じ出現場所に決まった体数が再び湧く「リポップ」というシステムがある。また、ある程度決まった出現場所から移動した際には、モンスターを削除する機能もシステムで設定されている。

特定のモンスター以外を例外として、フリーダムにもこのシステムが本来ならば備わっているはずなのだが。今はシステムの改悪によって機能を失っていて、固定体数に関係なく無限に湧き続け、しかも意図的に指示を出して操作されている。そうでなければ、街をモンスターの軍勢に取り囲まれる現状には陥っていない。

最早言うまでもないが。このゲーム内に全世界のプレイヤー数百万人を閉じ込めた狼の覆面の男——彼は自分の所属する組織を『シルバールフ』と言っていたが、その正体も未だに謎に包まれていて、実際にモニター越しではあるが、姿を現しているのは狼の覆面の男だけだ。まあ、今はそんな組織の存在の信憑性より。実際に、彼が初日に語った『現世の扉』があるかどうかだ——。

この現状に陥る前にも数多くギルドがダンジョン攻略やフィールド探査を繰り返していたが一向に発見どころか、辿り着くヒントすら見つけられていない状態で、今の終わりの見えない籠城策を実行している。

心が折れない屈強な精神の持ち主など多くはいない。どうしても自虐的な言葉が出てきてしまうのは仕方がないことだろう。

重い空気の中。互いに俯き加減に言葉を発せられない状況のメル
デウスと紅蓮に、今までは黙っていた白雪が言葉を発する。

「確かにマスター様の抜けた影響は大きく、今後の士気に関わる大問
題です。しかし、まだテスターであるオリジナルスキル持ちの四天王
がいます。我がギルドのマスターとサブマスターが！」

力強く告げた白雪の言葉にも、2人の険しい表情が崩れることはな
く。

「……まあな。だが、四天王の1人であるデユランはブラックギルド
のダークブレットと雲隠れ。バロンは俺達の救援要請を拒否して、今
は街の宿屋で妹という。あいつも始まりの街で自分の軍の相当数を
失ったからな。元々個人で軍勢とやり合えるあいつが、共同戦線を了
承した時点で奇跡みたいなもんだし。今後の事を考えれば、戦力の回
復に専念するのは仕方ねえ。俺があいつでもそうするから……」
「そうですね……始まりの街から無事に出て、千代に來れた事が奇跡
みたいなものです。これ以上はバロンに無理強いはできないでしょ
う……今、彼に内部から攻められるのだけは、避けなければいけませ
ん」

「どうやら2人はマスターが抜けた穴を白雪ほど、樂觀視していない
ようだ——」。

メルデイウスからの呼び出し2

正直。突然姿を消したマスターの思惑は分からないものの、一度個人でダークブレットの日本支部を壊滅状態に追い込んだ彼ならば、数十万の敵を相手しても撃破される心配はない。逆に言えば、それだけの戦闘力のある人物を欠いた今の千代、始まりの街連合軍の士気の低下が問題である。

危機的状況下であるからこそ『勝てるかもしれない』と味方に思わせる要因が重要なのだ。

「まあ、うだうだ考えても仕方ねえー。ジジイもいねえーんだ。もしもの時は俺が敵を蹴散らして、敵の軍勢に大きな風穴を開けてやるぜ！」

メルデイウスは開き直ったように立ち上がり、ポンと自身の纏った赤い鎧の胸元を叩いて見せた。

しかし、周囲の反応は冷ややかなもので、感情の込もっていない瞳で彼を見上げていた3人は――。

「気合いを入れすぎて、我々の部隊にも風穴を開けないようにして下さいよ。ギルマス」

「まあ、メルデイウスは程々くらいが丁度いいかな……」

「敵に風穴を開けるのはおおいにかまいませんが、爆片で味方に損害を出さないで下さいねメルデイウス」

白雪、剛、紅蓮がそれぞれに言うと、メルデイウスはその返答が不満だったのか声を上げて叫ぶ。

「おかしいだろ！ 普通はさすがギルマスとか、頼りにしてますギルマスとかさ。ギルメンなら、もっと俺を称えてくれるもんだろ!？」

声を大にして懸命に訴える彼に、ギルドの仲間達はというと……。「それは普段の行動を考えてから言つてくださいギルマス」

「まあ、やる時はやるよ。やり過ぎるけど……」

ギルドメンバーの白雪と剛の言葉を受け、半泣き状態のメルデイウスは、助けを求める様に紅蓮の方を見た。

紅蓮は一瞬困惑した様子だったが、涙のにじむメルデイウスの瞳を

見て視線を逸らすと、咳払いをして恥ずかしそうに体を揺らしながら言った。

「——そうですね。2人の言葉も最もですが、私は期待していますよ？ 貴方は居るだけで意味があるのです。そうですね……例えるならば、軒先に置かれた信楽焼のタヌキの様な……」

「……タヌキ……俺がタヌキ……」

紅蓮の発した『タヌキ』という言葉が相当効いたのか、魂の抜け殻と化している……。

笑いを堪えながら、白雪が不思議そうに首を傾げている紅蓮に告げた。

「さすが紅蓮様。返しが絶妙です……ぷふっ、それでは邪魔者がいなくなつたところで、本題に入りましょうか。紅蓮様」

前半は笑いを堪えるので必死と言った感じだったが、後半は完全に普段の冷静な彼女に戻っていた。

地面にうずくまりブツブツと呟いているメルディウスを横目に、紅蓮も始めは戸惑っていたが、そこはサブギルドマスターだ。すぐに切り替えて話し始める。

「それでは白雪。偵察の成果を報告して下さい」

「はい」

白雪は目の前に表示されたコマンドのアイテム欄から大きなテーブルに広げる。

細長い棒を取り出すと、地図上にある池堀に囲まれた街と周囲に表示された無数の敵を示す赤い印を指した。

「ご覧の通り、敵の数は依然として増え続けています。その数50万に届くほどです……」

「なるほど、水堀が最後の防衛線なのは変わりませんが……しかし、敵の増加は予想をはるかに超えていますね。やはり、対策が必要ですか……」

深刻そうな紅蓮に向かって、白雪が微笑んだ。

すると、もう一枚別の地図を取り出しテーブルの上に最初の地図を重ねる様に広げた。

紅蓮が小首を傾げて尋ねる。

「さっきのは今朝までの配置図で、今はこの様になっております」

白雪が指し示した地図には、敵の数が明らかに少なくなっただけではなく、その位置が明日素材を伐採する予定の山から離れているものだった。

不思議そうに「これは貴女が？」と尋ねた紅蓮に、白雪は首を横に振ると。

「いえ、これはマスター様のギルドのイシエル様がやられました。固有スキルを発動させたのを遠目で拝見してましたが、鬼気迫る無双ぶりに言葉を失ってしまいました。退き際も鮮やかで、約5万の敵を1時間たらずで……」

それを聞いた紅蓮は、普段あまり表情を変えることのないその口元に微かな笑みを浮かべ。

「……なるほど、優秀ですね。さすがはマスターの仲間達です。どうやら、私達は勝利の女神に愛されているようですね……剛。今回の作戦の為に幅を大きくする地下通路の改修作業はどうなっていますか？」

「はい。すでに八割が終了しています。通路の方の改修は完成し、残りの二割も急ピッチで進めた通路の外枠の補強を残すのみ。と言ったところですね」

剛は得意げな笑みを浮かべながら紅蓮にそう告げると、彼女も深く頷く。剛はギルド随一の切れ者であり、紅蓮が全幅の信頼を寄せる人物でもある。その仕事の速さは、おそらく他のギルドでも一二を争う手腕だろう……。

この街が敵の攻撃を受けて今も持ち堪えられているのは、彼あつてのものなのは間違いない。

「貴方がこの作戦を考案した時は無謀だと思いましたが、今は何故かわくわくしています」

「ふふっ、俺もですよ……今は本気で勝ちたいと思つてますよ」

剛は不敵な笑みを浮かべて席を立つと、紅蓮に軽く一礼する。

「——それでは、俺は作業に戻ります。時間はあまりありませんから

……」

そう告げた剛に「お願いします」と紅蓮が返すと、剛も微笑みで応えてゆつくりと部屋を出ていく。

剛の後ろ姿を見送っていると、今度は白雪が紅蓮の前に来て頭を下げる。

「紅蓮様。私も偵察任務に戻ります……」

「そうですか……固有スキルがあるとはいえ、相手はなにをしてくるか分かりません。気を付けて下さい」

「はい！」

彼女が頷いた瞬間。白雪は紅蓮の目の前から一瞬にしてその場から姿を消した。

*
*
*

エミルの嘘

始まりの街の敗北から星が眠り続けて、今晚で4日目……。一向に起きる気配のない星の手をエミルは握り続けていた。

寝ている星の頭上をレイニールはパタパタと飛び回り、時折心配そうに星を見下ろしながらエミルと適切な距離を常に保っている。会話程度なら可能だが、どうやらレイニールはいつまで経ってもエミルに慣れないらしい。

眠り続けている星の手を握り締め、早く目覚めることを願いつつ。エミルの心のどこかには、目を覚ました時に星にどうやってこの状況を説明すべきか考えていた。

目を覚ませば、人一倍使命感の強い星のことだ。自分が街を守れなかったと知ればきつと悲しむだろうし、何より自責の念にかられるのは分かりきっている。今は星には始まりの街のことと、現在自分達が置かれている状況は秘密にしておいた方がいいだろう……。

そうエミルが心に誓ったその時、握っていた星の小さな手が微かに動く。

「——ッ!? 星ちゃん!」

無意識に星の手を握り返すエミル。

星がゆつくりと瞳を開けるとぼんやりと映し出された人影はスーッ姿の母親の姿だった。

「……お母さん?」

かき消えそうな声で呟く星の耳に飛び込んできたのは母親の声ではなく、この世界で慣れ親しんだエミルの声だった。

すると、星の瞳に見えていた母親の姿が心配そうに手を握っているエミルの姿へと変わる。

「——大丈夫? 星ちゃん」

「……エミルさん。あれ? ……ここは?」

星がゆつくりとベッドから上半身を起こして辺りを見渡す。

見慣れない部屋の風景に困惑していると、頭の上にならずしりとしたほんのり温かい何かのしかかってきた。

「主。心配したのじゃ！ 数日間も目を覚まさなかつたのだぞ!」
頭上でパシパシと叩いているレイニールを見上げた。

星は頭の上に両手を伸ばすと、レイニールの体をがっしりと捕まえ、自分の顔の前へと持ってくる。

「ごめんね。心配かけて……」

そう言っつて、真っ直ぐに星の顔を見つめているレイニールを自分の胸に抱きしめる。

次にエミルの方を向いて星は、不安そうに眉をひそめた。

「——あの、街は……街はどうなりました?」

その質問にエミルは悟られないように、にっこりと微笑んで星の頭を優しく撫でると。

「——きつと悪い夢でも見たのね……あなたは森の近くで剣を振っていた時に倒れてからずっと寝てたのよ? 練習するのはいいけど、無理しすぎてはだめよ?」

「……えっ? でも、そんなはず……」

彼女のその言葉を聞いて、星は混乱する頭で懸命に思考する。

だが、夢を見ていたと言われるとそんな気もするが、心の中で『そんなはずはない』と否定する自分もいた。

妙にリアリティーがあり。あの悪夢の様な激戦が幻だったと言われても、俄には信じられない。

困惑した様子で表情を曇らせている星に、エミルは表情から心の内を感じつかれないように微笑みを絶やさずに告げた。

「このゲームには無理をしすぎると、システムの保護機能が働いて、少し前の記憶を消してしまう事があるの。きつとそれが働いて忘れてしまったのね、可哀想に……でも、星ちゃんが無事で良かったわ。倒れていた星ちゃんを、私がこのホテルまで運んだのよ? もう。気を付けなきゃだめよ? レイちゃんが教えてくれなかったら、モンスターに襲われてたかもしれないんだから、レイちゃんにもお礼を言っておきなさいね」

エミルの迫真の演技に、全く疑う様子もなく星は胸にぬいぐるみの様に抱いていたレイニールを見下ろすと「ありがとう。レイ」とお礼

を言う。

レイニールもエミルの咄嗟に出た嘘に合わせるように頷く。大きく息を吐き出すとした星は、ほっと胸を撫で下ろし。

「……本当に夢でよかった」

つと呟くと、安堵したように小さく笑う。

だが、いくら星の記憶との違いを嘘で塗り固めても現状、始まりの街はすでになく、今は千代に滞在しているという事実は消えない。

レイニールは星の腕の中から這い出ると、ふわふわと空中を飛んでエミルの肩に止まると耳元でささやく。

「——いったいどういうつもりなのじゃ!」

「これでいいのよ。知らない方がいい事だってあるわ。それに誰がなんと言おうが、あの子にはもう戦わせない——敵は全て私が撃破する。たとえばあの子にどんなに凄い力が隠されていても、あの小さな体には負荷が掛かり過ぎる……そんな諸刃の剣の様な力。小学生のあの子に、これ以上は使わせられない」

すると、ギロリと鋭い瞳がレイニールを捉え、恐怖を感じたレイニールの体が硬直する。その青い瞳には輝きはなく、代わりに底知れない闇と殺気が込もっていた。

彼女は本気で敵も星に戦いを強要しようとする者も倒すつもりなのだろう。ここまでの殺気は、ライラが星にちよっかいを出してきた時以来だ——。

怯えていたレイニールに向かって、エミルが低く呟く様に告げる。

「——レイちゃんも、話を聞いたからには手伝ってもらおうわよ?」

レイニールは慌ててエミルの肩から離れると、何度も頷いて見せた。

なにか内緒で話をしているエミルとレイニールを不思議そうに見ていた星に、今のやり取りが嘘のようにエミルが笑顔を浮かべて、パンと手の平を鳴らす。

「そうだ。ずっと眠ったままだったからお腹空いてるでしょ? 何か食べ物を貰って来るわね! ……レイちゃん。窓のカーテンは絶対に開けさせちゃダメよ?」

につこりと微笑んでそう星に言うと、近くにいたレイニールに小声で告げて扉に向かって歩き出す。

歩いていたエミルがドアノブに手を掛けると、背中から星の音が響いた。

「——あの……待って下さい！」

星の声にドアを開けるのを中断したエミルが徐に後ろを振り返ると、星は少し恥ずかしそうに頬を赤く染めている。

呼び止めたのはいいが、布団の上で手をいじりながらタイミングを見計らっているかのように、なかなか言葉にできずにいた。

そんな彼女になつこりと微笑むと、エミルは優しい声音で告げる。

「ふふっ、ゆつくりでいいわよ。これからいくらでも話をする時間はあるんだから」

再び扉を開けようとドアノブに手を掛けたエミルを、星が再び呼び止めた。

やれやれといった感じでエミルがもう一度振り返ると、星が勇気を振り絞って言葉を発した。

「——あの！ 寝ている時に手を握っててくれて、その……う、嬉しかったです。ありがとうございます」

「別にお礼を言われる事はしてないわ。まだ起きたばかりなんだから、無理はしないでゆつくり休んで下さいね」

にこにこしながら嬉しそうにそう返すエミルに、星が頷くとエミルはゆつくりと部屋を出ていった。

部屋の中に取り残された星とレイニールは互いの顔を見合わせるど、お互いに笑顔を浮かべる。

空中でホバリングしているレイニールに向かって、星は両手を伸ばすと「おいで」とにつこりと微笑んだ。

呼ばれたレイニールも星の方へとふわふわと飛んでくると、星は近くに来たレイニールを両手で掴んでぎゅっつと自分の腕の中に抱きしめた。

レイニールの体から伝わる熱が、今のこの時間が夢ではないと教えてくれる気がして、星は確かな安心感を得ていた。だが、起きてから

ずっと心の隅で引っ掛かっていることがある。それは、やはり始まりの街であった惨劇のことだ。

エミルの嘘2

自分を庇って良くしてくれていたトールが死んだ……もし、エミルの言うようにこれが夢であるなら、彼はまだ生きているか、もしくは元々存在しない夢の住人ということになる。

確かに現実世界にいた時から、父親のいない星は他の子供の父親や目上の男性に、妙に惹かれやすいのは感じていた。

トールと過ごしていた時間はまるで父親と過ごしていた様に、星は感じていたのだろう。しかし、トールの年齢は20くらいで父親というには少し若すぎるが、父親への憧れがそうさせるのだ――。

夢と言われれば夢であってほしいと思う気持ちもあるが。だが、剣の練習中に彼から貰ったサンドイッチの味が、今もすっかり思い出せるほど残っている。それが夢だったとは星には到底思えないのだが、エミルに尋ねたところで上手く丸め込まれてしまうかもしれない。

星はレイニールに尋ねてみることにした。

「レイ。本当に夢なのかな？レイは私が寝てた時の記憶があるんですけど？ 街の門の前で倒れた後の事を教えて……」

もしもあの出来事が夢であるならば、レイニールは『街の門の前で』の部分は首を傾げるはずだ――何故なら、始まりの街での出来事が偽りなら、レイニールはこの質問には答えられないはず。

レイニールの反応に全神経を集中させ、星が返答を待っていると、レイニールは表情を曇らせてボソツと呟く。

「――主は嫌なことを忘れたいとは考えないのか？」

「……えっ？」

突如発せられた予想外の返答に、星は言葉を失う。脱力した両手がベッドに落ちレイニールは翼をはためかせると、星の顔の前で止まる。

真つ直ぐ星を見るレイニールのその瞳は真剣そのものだ――。

「答えろ主！ 嫌な思いをして、どうしてその記憶に固執する！ 我輩は主のその考えが理解できぬ。過去は取り戻すことができない

「……なのに、何故過去に拘る！」

「それは……」

妙に威圧感のあるレイニールは、いつもの語尾の『のじゃ』が消えている。その話し方はまるで、金色の巨竜と化した時のようだ——。じりじりと迫ってくるレイニールに、星は後ろに下がると、突如としてレイニールが鋭く睨みつけながら星の顔目掛けて突撃してくる。慌てて真後ろに仰け反った直後、ガツンという大きな音が部屋中に響く。

「……あつ……うう……」

仰け反った星の後頭部がベッドの角に直撃し、その体が横に崩れ落ちた。

激しい衝撃に意識を失いベッドに倒れた星を見下ろしたレイニールが得意げに、しかし静かに呟く。

「——秘技。記憶飛ばし……」

レイニールはベッドに倒れている星の体を正常な姿勢に直すと、最後に上から布団を掛けて自然な感じに偽装した。他人が見たら、自然に眠ったとしか見えない完璧な仕上がりだ。

レイニールは星を見下ろし。

「主は押せば引くから扱いが楽なのじゃ。しかし、我輩から情報を聞き出そうとは千年早いのじゃ！ わーはっはっはっはっ!!」

腰に手を当て勝ち誇った様に高笑いをしているレイニール。

すると、背後から扉を開ける音が聞こえ、パンとコーンスプの乗ったおぼんを手にしたエミルが入ってきた。

「なにを大きな声出してるの。表まで聞こえてたわよ?」

その声を聞いた直後、レイニールは反射的にビシッ!と背筋を伸ばした。

部屋に入ってきたエミルは、ベッドで眠っている星を見つめ、手に持っていたおぼんをテーブルに置くと、ベッドの端に腰を下ろして眠っている星の頬に手を当てる。

優しく微笑むと、星の頬をそつと撫でる。

「……まだ起きたばかりだね。今はゆっくり休みなさい……後

は、私が全て終わらせてあげるから」

エミルの優しかったその顔が、決意に満ちた表情に変わり。眠っている星に「行つてくるわね」とささやき、再びドアの方へと歩いていった。

だが、それをあからさまに距離を取っていたレイニールが呼び止める。

「ちよつと待つのはじゃー!」

「……なに? レイちゃん」

振り返ることなくそう答えたエミルに、レイニールが言葉が続ける。

「主を残してどこに行くつもりじゃ! 我輩はこの後、どうすればいいのじゃ!」

「——大丈夫よ。明日の夜までには帰って来るから……」

そう言い残して部屋を出ていったエミルが、一瞬見せたその瞳には闘気が満ち満ちていて、まるで闘神の様だった——。

とてもこれ以上話し掛けられる雰囲気ではない。

つとエミルが部屋を出るまでレイニールが刺激しないように息を止めていると、ドアノブを掴んだ直後に振り返ったエミルがレイニールに向かって告げる。

「……そうそう。私が帰って来るまで、このギルドホールから星ちゃんを出しちやダメよ? もしも、出したらお・し・お・きだからね……」

「う、うむ! 分かったのじゃー!」

再び背筋を正してビシツ!と敬礼したレイニールにエミルは微笑みを浮かべ、部屋を出ていった。

直後。レイニールはほつと胸を撫で下ろし、床にちよこんと座ってふとあることを思っていた。

「……エミルはいつたいこんな夜から、明日の夜までどこに行くのじゃ?」

腕組みしながら小首を傾げたが、レイニールはすぐに考えるのを止めた。

リントヴルム強襲

ギルドホールを出たエミルは、ドラゴン召喚用の巻物を取り出すとドラゴンを召喚する。

目の前に現れたのは全身を青い鱗に覆われていて、その上から白銀の鎧で武装され、背中には騎乗用の鞍が付けられている。リントヴルムと比較すると、その大きさは大人が2人乗れるかどうかという大きさ——空中での素早い動きを得意とするライトアーマードドラゴンだ。

攻撃力の面では数段劣るものの、その高い機動力と賢いAIは飛行系モンスターや大型モンスターとの戦闘などの高速戦闘で、エミルが最も頼りにしているドラゴンと言ってもいい。

地面に腹を着けて伏せているライトアーマードドラゴンの背にエミルが飛び乗ると、ドラゴンはその長い首を空に向けて大きく翼を開いてはためかせる。

徐々に浮上するライトアーマードドラゴンに高度を上げ街の外に出るように命令を下すと、素直に城壁を飛び越えて町の外へと飛び出す。

ある程度の高度さえ取っていれば、地上のモンスター達に感知されることはない。

上空から街を囲む敵を見ていると、その多さに息を呑む。地面を覆うように蠢く様々なモンスター達がさながら、敷き詰められた絨毯の様だ——。

しかし、千代の街を囲うモンスターはアンデット系——つまり、スケルトンやゾンビなどのモンスターが多い気がする。おそらく。これが原因で清い水の張られた池堀に足を踏み込めないのだろう。

もしも強引に進軍などしようものなら、軍団の殆どのモンスターはたちどころに浄化され、戦力の大半を失った敵軍は始まりの街、千代の連合軍に容易に弾き返されてしまうのだ。

現実でも東北は怨霊や妖怪の伝承が色濃く残っている地域でもある。

フリーダムでもその伝承に従い。アンデット系のモンスターの生

息が多く、これはフリーダム各都市が実際に存在する都市を文字つたものであることも、現実世界の都市をリスペクトしているからに他ならない。

だが、それにしても。上空から見下ろしてあらためて紅蓮達の策がどれほど有効に機能しているか分かる。

元々、千代の街には川が流れていたがこれほどの水堀はなく。後から作ったのは明白だが、穴を掘ってもシステムの自動修復機能で本来は元に戻ってしまう。

それを防ぐには何らかの遮蔽物で修復部位を遮り修復を阻害するしかない。しかし、それに大量の水を用いるのはそうそう思いつくものではない。だがなによりも、それを短期間で行える連携と効率化が千代のプレイヤー達のためにも素晴らしい点だ。

始まりの街でも、もつとより多くの協力的なプレイヤーがいれば、自ずと結果は違ってきたであろう。

エミルは紅蓮達の防衛策に感心しながらも、心の中では全く正反対のことを考えている自分に皮肉まじりの笑みを浮かべた。

「紅蓮さん達もこの数を相手に防衛しかないと考えているのに……無限に湧き出すモンスター相手に攻勢に出るとか、常軌を逸しているわね……明日の作戦は木材の伐採が目的——ならば、私は失敗しても傷跡は残すわ！ 敵の最後尾に！」

彼女の命令に従う様にライトアーマードドラゴンは敵の最も後方を目指して一直線に飛んでいく。

しばらくしてやっと敵の最後尾が見えてきた。距離にして5キロもの距離を敵が包囲している現状をあらためて見て絶望感が増す中。心のどこかでこの絶望的な状況を期待している自分もいた。

無数の敵を見て不思議と笑みが溢れる自分に、エミルは少し困惑していたが、すぐに首を横に振って。

「どつちみち1人でこれだけの敵を相手にするんだから、この感情も利用させてもらおうわ!!」

エミルはライトアーマードドラゴンの背から飛び降りると、ライトアーマードドラゴンが煙になって消える。

落下しながら手に持った巻物を広げ、紐の先に付いた笛を鳴らす。エミルの姿を覆い隠すほどに広がる煙の中からリントヴルムがその白い鱗に覆われた姿を現した。

翼をはためかせてホバリングするリントヴルムの肩に乗ったエミルが、地上に蠢くモンスター軍勢を見下ろしながら叫ぶ。

「さあ覚悟なさい！ 最初から全力でいくわよ！」

両手で腰に巻いたベルトから勢い良く二つの巻物を引き抜き、紐の先の笛を掴んで空中に投げる様に乱暴に広げ、口の左右に同時に啞えた笛を鳴らす。

リントヴルムの両脇にダイヤモンドの鱗に覆われたドラゴンと、黒い漆黒の鱗に覆われた龍が現れる。

それはダイヤモンドドラゴンとヘルソードドラゴンだった……。

2体はリントヴルムの装甲であり武器である。エミルの持つ破格のアイテムの中でも最上級に位置する武闘大会の景品であり、覇者である者の証し——第4回大会の報酬『融合の笛』によって、リントヴルムを別次元の強さまで引き上げる。

エミルは首から下げていた赤青黄の3色が混じり合った『融合の笛』を鳴らすと、3体のドラゴン達が上空に上がりに光の球体に変化する。

球体が割れ、中から光とともに七色に輝く翼の生えた竜人が現れた。その手には、漆黒の薙刀が握られている。

漆黒の薙刀を持ち、七色に輝くダイヤモンドの鱗に囲まれたその神々しい姿はまるで、ドラゴンの神のようにも見えた。

現れたダイヤモンドの鱗に覆われた竜人の肩に乗ったエミルが腰から剣を引き抜きその切っ先を地上の敵に向け徐に口を開く。

「その節穴の目でとくと見よ！ これが私の切り札——数多くのドラゴンの中でも最大にして最強の僕！ リントヴルムZWEI!! この最強の龍神をも恐れぬ者は掛かってきなさい!!」

彼女の声に共鳴するように龍神が手に持った薙刀を振り被ると、刃が折り曲がり鋭利な刃を覆うように漆黒のオーラを纏う。

地上に降り立った龍神は、その手に握った大鎌をモンスターの軍団

目掛けて勢い良く振り抜く。

地上にいた剣と盾を持ったスケルトンが大量に宙に舞うと、瞬時に光になって消えていく。味方がやられたことで、感知外にいた周囲のモンスター達もリントヴルムZWEIを敵と認識したのだろう。

弓を持ったスケルトン達が矢を放つが。しかし、直撃するリントヴルムZWEIにはフリーダムで設定されている最低ダメージの値である『1』しかダメージは与えられない。しかも、弓を手にするスケルトンの数は全体でもそれほど多くはなく。それほど気にする必要もないレベルだ――。

間髪入れずに龍神が大鎌を振るうと、再びスケルトンが数百単位で宙を舞う。それはもう斬っているというより、大量の土砂を削ぎ取っている様にも見える。

「リント！ 矢は極力風で弾き返しなさい！」

エミルの指示に従うように大きな翼を広げて風を掴むと、飛んでくる矢に向かって風を当てつける。

次々に軌道を乱し地面に落ちていく矢が、ほとんどリントヴルムZWEIの体に掠ることもなくHPの減少はほとんどなくなった。

風を起こしながらも攻撃の手は緩めない巨大な白銀の龍神に、モンスター達はまともに抵抗することもできずに撃破され、周囲にキラキラとした粒子の様な光の消滅時のエフェクトを舞い上げている。

足に纏わり付いて攻撃するモンスターもいるが、リントヴルムZWEIが足を振り上げるだけで容易に撃破されてしまって、その膨大なHPを大幅に減少させるには至らない。

勝負は一方的に展開され、敵の数がどんどん減っていく。正直、ダイヤモンドの鱗に覆われたリントヴルムZWEIには殆どの攻撃が最低値しかダメージを与えられない。違法武器『村正』の効果でレベルがMAXだったとしても、フィールドやダンジョンにポップする程度のモンスターでは攻撃力はたかが知れている。

リントヴルムZWEIと互角に渡り合うには高レベルダンジョンのボスクラスでなければ無理だろう。始まりの街の攻防ではルシファーと対峙し、結果相打ちになってしまったが。ボスクラスの敵で

なければ、リントヴルムZWEIの足元にも及ばないのだ――。

リントヴルム強襲3

エミルが戦闘に参加したことで撃破数は僅かだが増加する。まあ、僅かとは言ったが実際には1000体は撃破していた。普通ならMVPものの活躍なのだが、いかんせん敵の数が多すぎて僅かという表現になってしまうのだ。まあ、チート級のリントヴルムZWEIとの撃破数を比べればそれも仕方ないだろう。

すでに翌日の夕方を過ぎて時間にして二十時間にも及ぶ間、不眠不休の戦闘で30万を超える敵を撃破していたが。しかし、リントヴルムZWEIのHP残量の残りも三割を切っていた。

残りは約15万。初期に千代の周囲を囲んでいたモンスターの数近くまで減少させている。イシエルの撃破してくれていた5万のアドバンテージがここにきて効果を見せ始めた。

しかし、このアドバンテージがなければ、途中で諦めていたかもしれない……だが、さすがに丸一日に近い時間。弓を放ち続けているエミルの指先は感覚がなくなってきたいて、矢を持つ指が小刻みに震えている状態だ。こんな状況下になると今使っている『ケイローンの弓』の絶対命中能力が生命線になってくる。

エミルの額からは滝の様に汗が流れ、一射ごとに目に垂れる汗の雫を拭っている。だが、その表情からは闘志は消えていない。目を細め的確に弓を持つ敵に狙いを定めて、弦を引き絞り炎の矢を放つ。

これだけ長く戦っていると、食事や睡眠は大丈夫なのか？という疑問が出てくるだろうが、そこは問題ない。空腹と睡魔はモンスターなどの戦闘中には発生しない。しかし、疲労は通常通り溜まってくる、VRゲームの最大の特徴は、仮想世界に現実世界の様な体があると言うことだろう。

それは現実世界にいた頃と同じで、疲労もすれば食事も眠る必要がある。空腹時は敏捷のステータス低下と視覚的な揺らぎが発生する。

その点においては、疲労状態も同じなのだろう。体を酷使すれば、現実世界同様に全身に倦怠感と体が鉛でできている様な感覚に襲われる。まあ、それでも20時間以上戦い続けられるのだから、現実世

界よりは軽いのだろうか。

弓の弦を引き絞るが、視界がブレて狙いが定まらない。矢を放とうとする指先の感覚もない。すでに数千回は休みなく矢を放っているのだから当然だろう。長期戦になるのは戦いを始めるから分かっていたことだ……今のエミルを支えているのはただただ星を元の世界に戻すということだけだった。

「——あと少し。もう少しで……この戦いを終わらせられる!!」

目を見開くと、エミルは落ちてきていた発射速度を最初と同じくらいまでに戻す底力を見せた。

これも全ては星のことを考えてのことだろう。始まりの街で星をデュランから受け取った時、彼は閉まった街の城門の前で星が倒れていたと言っていた。

これは星が最後まで街を守る為に戦っていたということ——そんな彼女が、モンスターに襲われていた始まりの街を捨てて他の街に移動してきたと知ったら、きつと自分を責めるだろう。そうなれば、星のことだ。きつと自暴自棄になって何をするか分からないことくらい今までの行動から、容易に想像することができた。

以前のような無力な彼女なら何の問題もないが、ダークブレットの拠点を破壊してライラが関わってきた辺りから、固有スキル『ソードマスター』と謎の武器『エクスカリバー』が生み出す相乗効果で、星は間違いなくこのゲームで最上位のプレイヤーに飛躍してしまった。

間違いなく真っ向から勝負すれば、エミル達トッププレイヤーでも負けるだろう。もう星を倒すには、闇討ちくらいしか方法はない。だが、今の星の敵は外を囲むモンスターなんかよりも、街の内側に居るプレイヤー達であることをエミルは一番良く分かっていた。

このまま戦闘が長期化すれば、星の評判を知っている者達の声を受けて彼女が再び前線に投入されるだろうし、星もそれを拒まないだろう。しかし、今回の戦闘でエミルが一人でこの大軍を相手に勝てれば、周りの注目は、新参者のしかも小学生でしかない星ではなく。武闘大会の連続優勝記録を更新し続けているエミルに間違いなく集まる。

そうならば、星は安全な後方にエリ工達と待機させることができる。前回の始まりの街での失態は、作戦の成功を優先してエリ工やイシエルを星の側に置いていなかったことだろう。

エリ工は以前の戦闘で、星を守れなかったことを未だに気にしている。だからこそ、今度はしつかりと守ろうという意気込みが他の者と違う。保険にイシエルを側に置いておけば、何の心配もいらぬ。彼女は性格には多少難があるものの、それ以外ならとても優秀なプレイヤーであり、エミルが全幅の信頼を置ける数少ない人物でもある。

エミルも最も息の合った動きが取れるイシエルが側にいないのは大きなマイナスだが、星の身の安全には変えられない。

「この戦いが終われば……この戦いさえ終わらせれば、次は本当にマップ全体を探索して出口を探すだけ……これだけの人手がいるんだから、きつと東北地方は勿論。関東、中部、関西、四国、中国、九州地方も簡単に探査できるはず。この状況下で耐え抜いた他の街も開放すれば、こちらの戦力は飛躍的に跳ね上がる……そしたらきつと、数週間の内にこの悪夢を終わらせられる！」

勝ちを確信したエミルは口元に笑みを浮かべ、遠くに見える弓を持つ敵に炎の矢を放っていた。

つとその時、敵のモンスターの間を高速ですり抜けてきた黒いローブで身を隠した何者かがリントヴルムZWEIの腹部に赤黒く輝く宝石を貼り付け、直ぐ様その場を離脱した。

その直後、その人物の付けた宝石が高速で発光を繰り返す、見る見るうちに膨張を始める。

「——なッ!!」

直感敵的にその宝石が何なのかを察したエミルは、ライトアーマードラゴンを召喚して即座にリントヴルムZWEIから離れる。すると数秒後、リントヴルムZWEIの胸元に付いていた膨張した宝石が勢い良く爆発した。

とてつもない爆風が周囲に吹き荒れ、ライトアーマードラゴンに乗っていたエミルもその勢いに押され、勢い良く地面に叩きつけられるギリギリでライトアーマードラゴンが翼を利用して体勢を入れ替

え、エミルにいくはずだったダメージを肩代わりして、断末魔のような甲高い鳴き声の直後にその姿が消失する。

地面に投げ出されたエミルは地面に伏せながらも、断末魔の咆哮を上げたリントヴルムZWEIがゆっくりと後ろに倒れていく姿を見つめていると、エミルの頬を涙が伝う。

その涙は自分に付き合ってくれたドラゴン達に向けた申し訳ないという思いと、これで今まで必死に戦ってモンスターを減らした努力が無駄に終わったという失意の思いからくるものだった……。

「……くっ!! そういうことか……」

敵の意図を理解したエミルは、悔しそうに唇を噛み締め、地面を引つ掻くようにして土を握り締めた。

そう。最初から敵の狙いはリントヴルムZWEIの破壊だったのだ——通常エミルの固有スキル『ドラゴンタイマー』は戦闘によるドラゴンの消失から再召喚まで、5時間という時間制限がある。しかし、大会の優勝者に与えられる『融合の笛』は使用モンスターが撃破されてから、24時間の使用制限がかかる。

敵はそれを知っていて、あえてリントヴルムZWEIを一撃で破壊できるHP残量まで、雑魚モンスターの数30万と引き換えにしたのだ。それすらも計算で導き出した正確な数字なのだろう。

「そう……私達も随分と舐められたものね!」

小さく呟いたエミルは握り締めた手で地面を叩いた。

彼女が怒るのも無理はない。敵は千代にいる者達など、10万程度の兵力で十分であるということの意味しているのだ。

敵の対応が遅かったと考えていたエミルだったが、敵は最初からあのタイミングを待っていたのは、リントヴルムZWEIに爆発する宝石を設置した人物の隙のない手際を見れば明らかだ——しかも、その宝石も元々フリーダム内に実装されていないもので、事前に準備していなければ使用できない。

おそらく。始まりの街でリントヴルムZWEIとルシファーとの戦闘を参考に、対処法を編み出したに違いない。エミルはまんまと敵の術中にはまってしまったと言うことになる。

だが、リントヴルムZWEIを破壊したものの、自ら起こした爆発によつて1万近いモンスターも撃破されてしまった。しかも、上空に逃げたエミルでさえ吹き飛ばされるほどの爆風だ。あれだけ凄まじい爆発では、タツチの差で退避した特製の宝石爆弾を発動させたローブで身を隠した人物は十中八九モンスター共々消滅しただろう。

身を挺してまでリントヴルムZWEIを撃破するその精神は立派だが、今のエミルには憎しみしかない。これで残り14万のモンスター1の軍勢を残し、撤退を余儀ない状況に追い込まれてしまったわけだから……。

リントヴルム強襲4

虎の子のリントヴルムZWEIを失ったのだが、うつ伏せに倒れていた地面からゆっくりと立ち上がったエミルからは撤退する気配なく、逆に物凄い闘気と殺気を放っている。

普通に考えれば、減ったとはいえ1プレイヤーが生身で9万の敵を相手にするなど考えられず、常軌を逸した行動であり自殺行為だ――。

始まりの街の戦いでは星とレイニールが10万のモンスターの軍勢を薙ぎ払ったが、あれは『聖剣エクスカリバー』と『ソードマスター』のステータスを『1』にする能力あつてのことで、それがあつてこそレイニールのブレス攻撃が何倍にも破壊力を増した。

しかし、エミルにはそんな能力はない。ドラゴンもタイムしたものしか使用できず、エミルの中でのエースドラゴンはリントヴルムだ――それを失った今、エミルに残された手段は撤退以外にはないはずなのだが……。

エミルは装備を外すと、代わりに両手にドラゴン召喚用の巻物を取り出す。

俯いたままのエミルがボソツと言葉を口にする。

「――諦めるわけにはいかないのよ……あの子よりも年上の私達が、あの子を現実世界に戻してあげなでどうするの！　これ以上。あの子に辛い思いをさせてどうするのよ!!」

叫んだエミルは素早く両手に持ったドラゴン召喚用の巻物を投げ広げると、口に加えた笛を鳴らした。

目の前にゴツゴツとした岩を体に纏ったストーンドラゴンと、2本の薙刀の様な鋭利な刃の尻尾に背中に無数の大小様々な剣を生やしたソードアーマードドラゴンが現れた。

その後、間髪入れずに再び金色の二頭の鋭利な角を持ったツインソードヘッドドラゴンと、赤い鱗に全身を覆われ、背中には大きな窪みのあるデザートドラゴンが続けて召喚された。

ソードアーマードドラゴンの背中を軽く撫でると、2本の剣が打ち出

され、エミルはそれを掴む。

「——無茶でもなんでもやらなきゃいけないのよ……行くわよ。私の自慢のドラゴン達!!」

そう叫んだ直後、エミルは両手に持った剣を構えて敵の軍団に向かって走り出す。それを見たドラゴン達も続々と突撃を開始した。

14万もの敵もそれを向かい打つように、エミルとドラゴン達に襲い掛かる。

まるでアリの群れに角砂糖を放り込んだように、無数のモンスター達がエミル達を一瞬で取り囲む。そこからは、まともな戦いと呼べるものではなかった……。

圧倒的な体格差があるはずのドラゴン達でさえ、四方八方から無数のモンスターに攻撃され、その膨大なHPを瞬時に溶かされ撃破されていく。そんな中、エミルだけは2本の剣を巧みに操り次々に敵を薙ぎ倒している。

振り下ろされたスケルトンの片手剣を、左手の剣で受け止め、即座に右手の剣で数発の斬撃を文字通りその骨身に叩き込む。

続け様の後方からの鋭い突きを、まるで見切っていたかのように体を前に倒してかわすと、身を捻って敵の懐に潜り込んで、素早く数回にわたり斬り付ける。

スケルトンは光の粒子になって消えると。すぐその直後には、武器を振りかぶった別のスケルトンが視界に飛び込んでくる。

エミルは振り下ろされた斧を両手の剣で防いだ瞬間、背後から別のスケルトンが振り下ろした剣がエミルの着ていた鎧を直撃した。

一瞬表情を歪めたエミルに今度は左右からスケルトンの剣が襲い掛かり、その攻撃もまともに受けてしまう。

得意げにカタカタと歯を打ち合わせて笑うスケルトン達。

即座にHPゲージを確認し、エミルはそれを目に焼き付けると、前方のスケルトンの斧を弾き返し、体を回転させて両手の剣で張り付かれたスケルトンの剣を弾くと、叫び声を上げながら更に激しく体を回し遠心力を利用して体に張り付いていた敵の体をバラバラに吹き飛ばす。

「はあああああああああッ!!」

地面に転がったスケルトンだった骨の破片が光に変わるのを見て、地面に剣を突き刺して回転を止めると、腰に巻いたバッグの中から寶石を取り出し自分の真上に放り投げる。緑色の光がエミルに降り注ぎ、彼女のHPが全回復した。

エミルは地面に刺していた剣を引き抜くと、その剣先を突き出し声高らかに叫ぶ。

「そんな生ぬるい攻撃じゃ私は倒せないわよ！ さあ、亡霊達よ。土に還りたい者から掛かってらっしゃい!!」

その直後、カタカタと骨を鳴らして向かってくるスケルトン達を、攻撃を受けながらも両手に持っている剣を振り続け、次々に向かってくるモンスター達を撃破していくエミル。

鎧の上からでも刃を受ければ、相当な痛みを伴う。だが、複数の敵から体に刃を受けても表情ひとつ変えない。傍から見れば、それはまるで痛みを全く感じていないように映るが、痛覚の存在する以上はそんなことはありえない。

痛みを感じないほど、エミルが集中しているということだろう。守りを捨てて攻撃に特化したのも、彼女が残り14万もの敵を本当に駆逐する気であるからなのだろう。

エミルはこの時の為にHP回復、異常状態回復用の宝石をサブバッグの中に相当数用意していた。

いちいち攻撃に構っていたのでは、撃破数が低下してしてしまう。だからこそ、攻撃に重きを置いた戦闘方法をとっていたのだ——エミルが2本の剣を手に全力で戦うのも、彼女が今回の戦闘にどれだけ懸けているかという現れでもあるのだ。

いくらエミルでも、一撃でレベル100に固定されたモンスターを撃破するのは無理だ——いや、正確には現実的ではないと言った方がいいかもしれない。モンスターにはそれぞれ弱点とされるウィークポイントがある。FPSで言うところのヘッドショットと例えれば分かりやすいかもしれない。

その部位を的確に打ち抜ければ、レベルなどのステータスに差がな

い状態なら、殆どのモンスターを一撃で撃破できる。しかし、それは少数での戦闘か、相手が油断している場合の奇襲だけでのみ成功する。

圧倒的な戦力差で一方的に襲われている現状では、不可能とは言わないが現実的な方法ではない。しかも、数発打ち込めば撃破できる程度の敵に神経を擦り減らしてまで、一箇所しかないウィークポイントを狙う必要性がないとエミルは判断したのだろう。

元々基本スキルでスイフトを選択している彼女の敏捷のステータスには若干だが増加している。モンスターにはそのシステムアシストがないわけだから、それだけでも十分なアドバンテージになる。

両手の剣を正確に敵に振りながら、動作の中で回避可能なものだけは回避し、それ以外は体に当たっても全く構うことはない。いくら体が傷付こうとも、全く攻撃の手は休めないエミル。

攻撃を受け、隙を見てヒールストーンを使うというギリギリの攻防を繰り返していた彼女も数時間も戦闘を繰り返していると、回復アイテムの残量よりも体力と武器の耐久値が先に尽きた……。

エミルが鎧を装備したアーマーゾンビを撃破した直後、両手に握り締めていた剣がガラスが砕ける様に砕け散った。

それを見届け、俯いたまま垂れた綺麗な青い髪の間隙から微かに見える口元には笑みを浮かべている。

「――疲労で腕がもう上がらない。ふふっ、もう。ここまでね……」
諦めたように両手をだらんと垂らしたまま、地面を見つめると、ふと星の顔が脳裏に浮かぶ。

普段は絶対に見せない様な満面の笑みで微笑みかけるその顔に、エミルの瞳から涙が溢れ出す。

全力は出し切って不思議と清々しい感覚がエミルの中を支配している一方で、唯一の心残りがその笑顔を見れないことだった——この戦いが終わって、本当なら星と現実世界に帰る出口の前で星の満面の笑顔が見たかった。

「……私はあの子に、ただ笑ってほしかっただけ……いつも、どこかで距離を置かれていたのが分かっていったから。だから、嘘偽りのないあ

の子の笑顔が見たかっただけだったのに……これじゃ悲しませちゃうわね。ごめんね星ちゃん……本当に私はダメな姉よね。今そっちに行くわ、待っててね……みさき……」

覚悟してゆっくりと瞼を閉じたエミルの耳に、突如としてドラゴンの鳴き声が聞こえてきた。

リントヴルム強襲5

目を開けて鳴き声のする方向を見上げると、そこには自分に向かって急降下してくる装甲を付けたライトアーマードドラゴンより少し大きい漆黒のドラゴンが見えた。

「——ッ!? あれはッ!!」

ドラゴンはエミルの真ん前に着地すると、尻尾と翼でエミルの周りに群がっていたモンスター達を吹き飛ばす。

呆気にとられているエミルは、その光景をボーッと眺めている。このドラゴンは以前、影虎を乗せていたドラゴンで間違いない。しつこく追い回されたから、その時のことは昨日のことの様にはつきりと覚えていた。

つと、突然ドラゴンがエミルに向かって覆い被さる様にしてのしかかってきた。

その直後、別のドラゴンの咆哮が辺りに轟き、地面を激しい炎が数回にわたって照射され、エミルにもその轟音と熱気が伝わっていた。

エミルの体を覆っていたドラゴンがゆっくりと起き上がると、その姿が消失する。それは撃破されたわけではなく、故意に消されたのだ。何故ならその後すぐにエミルの前に真上から影虎が降ってきて、彼女の体を抱え上げてジャンプすると、それを漆黒の巨竜が地面すれすれをやってきて回収して直ぐ様、上空に急上昇した。

「——いいタイミングだ。フアーブニル」

——グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!

影虎の声に応えるように、漆黒の巨竜フアーブニルが咆哮を上げる。だが、エミルが一番驚いているのは……。

「……あなた。今までいったいどこに行ってたのよ」

「ああ、いや。この街に着いてすぐ、お前を探してから部屋を決めようと探していたら、お前の連れのあの着物を着た紫髪の女に強引に近くの一部屋に押し込まれてだな。鍵まで掛けられて監禁されていたんだ……」

表情を青ざめ、鬼気迫る声音でそう告げた影虎に向かってエミルは

目を細めて訝しげな顔で言った。

「——イシエがそんな事するわけないわ。……どうせ、私の気を惹こうって魂胆なんですよ？ その手には引つかからないわよ」

全く信じていないエミルに、逆に影虎の方が鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしている。

まあ、エミルがイシエルに全幅の信頼を置いているのは、エミルの前ではイシエルが常に従順であるがゆえのことだ。現に、イシエルはエミルの前では決して彼女の発言も行動も否定しない。

それだけではなく。どんなに困難だと思えることにも、その身を挺してまでも協力してくれる。しかも、エミルにとつてはリアルでもゲームでも、イシエルは唯一の理解者と言ってもいい存在だ——そんな彼女をそれほど深い関係もない人物に否定されれば、その人物が嘘をついていると考えるのは当然だろう。

全く信じる様子のないエミルに、影虎は大きなため息を漏らすとファーブニルにその場を離れて街に戻るように命令を下す。

突然、街に向けて方向を変えたファーブニルに、エミルは驚き目を見開く。

「ちょー！ ちょつと待ちなさい！ どうして街に戻るの!? 加勢に来てくれたんじゃないの!?!」

完全に戦うものだとばかり思っていたエミルは混乱する頭でそう叫ぶと、影虎は理解できないと言った表情で首を傾げている。

「——何をバカな事を言っている北条。あの数を2人でなんとかできるわけがないだろう？ お前ももうボロボロじゃないか、ここは上策通り撤退しかないだろう？」

その彼の言葉を聞いた信じられないと言った表情でエミルは目を見開き、声を荒らげながら反論した。

「バカはあなたでしょ！ 遠距離攻撃手段である上級ドラゴンを持つていながら、なんで撤退なんて考えられるの！ これだけ数が減ったのよ？ ここは殲滅するのが最も得策だって分からないのッ!?!」

エミルの進言を聞いても影虎は「撤退する」と自分の意志を曲げようとしなない。

その彼の言葉にエミルは「理解できない」と呆れ顔で小さく毒づく
と、震える手でコマンドを開いて目の前に表示されたウィンド画面か
ら2本の剣を取り出すと、それを腰に差した。

覚束ない足取りで立ち上がると、真下を見つめ静かに呟く。

「……私はこのまま敵を駆逐するわ。ドラゴンの高度を落として
……」

「おい！ 正気か!? そんなフラフラな状況で戦えるわけがないだろ
！」

「いいから高度を落として！ あなた私の事が好きなんですよ？ な
ら、私の言うことを聞いてよ！ そうじゃないとここから飛び降りる
わよ!!」

一歩前に踏み出し、影虎の方を振り返って『飛び降りる』という脅
し文句を口にしたエミルの顔は真剣そのものだった。

普段なら彼女が絶対にこんなことを口にするはずがない。しかも、
相手が自分へ好意を向けていることまで利用するような言動を、エミ
ルが口にするのは今までにない。

互いに視線をぶつけながら無言のままその場に立ち尽くしている
と、エミルがため息混じりに頷く。

「……そう。あなたの考えは良く分かったわ」

残念そうに俯くと、そのままエミルの体がゆっくりと後ろに傾く。

つと咄嗟に影虎がエミルの腕を掴んで、地面に落下しそうになる彼
女の体をドラゴンの背中に引き戻す。

手と膝を突いて項垂れているエミルの肩が小刻みに揺れる。

「……どうして……どうして、分かってくれないのよ……」
涙を流しながら、そう告げたエミルを、影虎は無言のまま見下ろし
ている。

エミルは掠れた声で更に言葉を続ける。

「……やっと、ここまで敵の数を減らせたのよ……もう少しでこの戦
いも終わらせて、あの子をこの悪夢から解放してあげられるのに……
お願いよ。お願いだから……今回だけでいいから……力を貸してよ。
……どうして、まだ子供のあの子が意識を失うまで戦わないといけな

いの？ もう、優しいあの子が辛い思いをするのを見てられない……私が……私達が守ってあげなくちゃいけないのよ……なのに、私はなんて無力なの……」

力なくその場に膝を突いて泣き崩れるエミルの体は、すでにポロポロだった。

自慢の鎧は無数の刀疵で傷付き割れていて、今にも剥がれ落ちそう。それから推測するに、耐久値も限界近くまで減っているだろう。戦闘中に消滅しなかったのは、もはや奇跡としか言いようがないほど無残な状態だ――。

誰が見ても彼女が、死と隣り合わせの壮絶な戦いをしてきたのは疑う余地もないだろう。

それは影虎も理解しているつもりだが。だからこそ、今の彼女を戦場に戻すわけにはいかない。

戦場に戻ればエミルは必ず死ぬ……それは惚れた彼女を失うことになり、彼が一番望まない結末だ。しかも、彼もまたドラゴンを失うわけにはいかない。たとえ数時間だけの消失とはいえ、敵が甚大な被害を受け、同じ固有スキルの持ち主でありエミルは主要なドラゴンを失っている。使用者本人がこれほどの傷を負っているというのは、即ちそういうことだ。召喚した者が大ダメージを受けると、ドラゴンも消滅するのはスキルを使っている者なら常識。

しかもそれだけではなく。影虎が向かって来た理由には、リントヴルムZWEIの消滅を確認したからということも含まれていた。

空腹の中。ギルドホールの一室でそれを見た影虎は、視界が激しく乱れた状態……つまり。三半規管が乱れた酷いめまいの状態で思うように動かない体で、地面を這いながら助けを求めて数時間に渡って叫んでいた。すると、扉の鍵が開き。中に一切れのパンが投げ込まれ、それを食べて空腹症状を解消してから急いでここまで向かってきた。ということなのだ――。

エミルが泣いているのを無言のまま見つめていた影虎だが、街に向かうファープニルには戦場に戻るようにと命令は出さなかった。

いや、出せなかったのだ――影虎からすれば、エミルが守りたい人

物よりもエミル本人の方が大事であり。それを失うくらいなら、今まで通り敵対する方を選択するのは当然なのだ。

2人を乗せたファープニルは街の外れの広場に着陸し、意気消沈しているエミルを地面に降ろす。

「ほら、突いたぞ。もう、あんな無茶はしない方がいい……」

「……ええ、あなたの言う通りね……助かったわ。ありがとう」

掻き消えそうな声でそう影虎に告げると、エミルは俯き加減に重くゆっくりと覚束ない足取りで歩き出すと、ギルドホールの方へと向かって消えて行つた。

影虎と別れた後、ギルドホールの前まで来ると、エミルはギルドホールの入り口に入れずに、暗く重い表情で近くの家の外壁に凭れ掛かっていた。

ボロボロになつた鎧は少し割高だったが、千代の街のプレイヤーの経営する鍛冶屋で直してもらつた。

シルバーの美しい西洋甲冑から体のラインがくつきりと出る形のブルーのワンピースに変わっていたが、普段着に着替えていつも、星のいる部屋どころかギルドホールに入ることすらできなかった。

決死の作戦だったのだが、結局は失敗に終わってしまった。しかも、エミルは今回の作戦が成功するのを見越して、星にすぐバレるような嘘までついたのだから目も当てられない。そんな状況だ——今、星に会つたら間違いなくエミルは泣いてしまうだろう……。

途方に暮れたエミルが、落ち込んだ様子で俯き加減に地面を見つめていると、紅蓮達と一緒にギルドホールを出てくるイシエルとデイベッドの姿が見えた。

イシエルはエミルの姿を見つけると、ゆっくりと彼女の方に近付いてくる。だが、エミルは徐々に近付いてくるイシエルと目を合わせる事ができず、更に深く俯いた。

何かあつたと察したのか、イシエルがそつとその場を離れようとしたその時、エミルが突然去ろうとしたイシエルの背中に抱き付いてきた。

「なんや？ エミ——」

「——ごめんなさい。イシエ……もう少しだけ、もう少しだけ……このままで、いさせて……」

声を詰まらせながら言ったエミルの声は震えていた。

イシエルは体を反転させると、彼女の耳元で「うちはエミルの味方やよ」と呟くと、涙を流しているエミルの顔を自分の胸に押し付けるようにしてゆつくりと彼女の体を抱きしめて、その腕でエミルの顔付近を覆い隠した。それを横目に微笑みを浮かべると、デイビッドはゆつくりと歩き出す。

「おいおい。今から作戦なんだぜ、こんな場所で時間食ってる暇は——」

「——さあ、その通りです。時間がありません。行きますよメルデイウス」

「ちよ！・そこを引っ張るなよ紅蓮！」

文句を言っていたメルデイウスを、腰の鎧の隙間に後ろから小さな指を滑り込ませた紅蓮が強引に引っ張っていく。

バランスを崩しそうになりながら後ろ向きで、その場を離れていく彼等が続いて作戦に参加する者達も抱き合っている2人を気に留めることもなく紅蓮達の後に付いていく。

泣くエミルに対してその理由すら聞こうとしないイシエルは、ただただ彼女が落ち着くのを待っている。

やっと落ち着きを取り戻したエミルは、イシエルから数歩後退って離れると、手で涙を拭った。

「——イシエとデイビッドも紅蓮さん達に同行するの？」

「そうなんよ。でも、すぐに片付けて帰ってくるから少しだけ待っててな」

「ええ、あなたなら心配いらないとは思うけど、気を付けてね……」

心配そうに告げるエミルに、イシエルは微笑みを浮かべながら深く頷く。

その後、振り向くことなく歩いていくイシエルの背中が見えなくなるまで見送っていた。

憩いの時間

イシエルと別れ、しばらくはギルドホールの前で立ち尽くしていたが、星を部屋に残していつまでもそうしているわけにもいかず、エミルはギルドホールの宿泊している部屋に向かって歩き始めた。

なるべく普段通りに振る舞えるようにと、扉の前でドアノブに手を掛け、大きく深呼吸をして意を決して扉を開く。

部屋の中に入ると、話をしていた星とレイニールの視線が一気にエミルに集中する。そんな彼女達に自然な笑顔を作ると、エミルは部屋に入った。

「星ちゃん。楽しそうに何を話してたの？」

「えつと……今日レイニールとこのホテルの中を散歩してて、その時の事を話しました」

「はっはっはっ！ 我輩が主にホテルの中を案内してあげてたのじゃ！」

誇らしげに胸を張って笑うレイニールだったが、その立ち位置は星の少し後ろの方に構えていて、エミルからは一番距離が離れている。

もしもエミルが突然襲い掛かってきても、隣にいる星が庇ってくれるか、すぐに逃げられるようにと考えているのだろう。

につこりと微笑みを浮かべているエミルの顔をじつと見つめていた星が、突然眉をひそめて言った。

「……エミルさん。なんだか疲れていますか？」

心配そうに聞いてくる星の言葉に、彼女は驚きを隠せない様子で思わず顔を仰け反ってしまう。

それを見た星は更に心配そうな表情でエミルの顔を見つめると、内心は慌ててふためいていたが、悟られぬように星の頭をエミルの手が優しく撫でる。

「そうね。でも、星ちゃんの顔を見てたら疲れなんて吹き飛んだわ。そうだ！ 星ちゃんはもうご飯は食べた？」

話を変えようと、視線の中に飛び込んできたルームサービスのメニュー表を咄嗟に手に取って、それを広げて星の方に向けた。

星は前にエミルが持つてきてくれたコーンスープを指差すと、差し出されたメニュー表を押し返して「今度はエミルさんが選んで下さい」と言つて微笑む。

星がメニューを早く決めたのは、帰つて来たばかりのエミルに早く食べたい物を選んでほしいという思いもあるのだろう。しかし、星は別に意識しているわけではなく。これは普段からの彼女の癖と言つた方がいいかもしれない。

基本的に星から食べたい物を主張する状況がない。普段から母親が作り置きしてくれた物かお弁当で食事を取つていた。家で食べる時はもちろん1人だったし、学校での給食も周りに人がいるだけで、会話にも混ざることはない。

家では殆どの家事を1人でやつていて買い物をするのは星の役割だが、調理するのだけは母親で、絶対に星はやらせてもらえなかった。一度だけ、自分でやろうとした時に酷く怒られた為、それ以降は買う物は母親に指定されたものと、お金が余ったら自分の食べたいお菓子をかうだけだ。

もちろん。多忙な母親に食べたいものをリクエストする機会などはなく、確かに置き手紙などで残せばできただろうが、星もわざわざそこまでしようとはしなかった。何より星は、母親に手の掛かる子供だと思われなくなかったのだ。

だから、作つてくれたものは苦手なものが入つていても残さずに食べたし、カレーが数日続いて不満を感じることがあったりしても、残さず食べた。いや、好き嫌いや食べ残しができる環境にいなかったという方が正しいだろう。まあ、さすがにエリエの作つた激甘料理はなんとか完食したものの、具合が悪くなつたが……。

家で食事のメニューを選べなかつた為か、一人の食事以外は常に相手の顔色を窺う癖が付いてしまつていたのかもしれない。

「うーん……そうね。なら……」

一瞬でメニューを押し返されて、少し困り顔を見せたエミルがメニューに視線を落とすと、星が指差した場所と同じ場所をエミルも指差した。

「……私も星ちゃんと同じ物にするわ！」

「えっ？ ……で、でも。それは……」

動揺する星に近付くと、にっこりと微笑んで告げる。

「ふふっ、これでお揃いね。いらっしやい……」

エミルは星の座るベッドに腰を下ろすと、背中に腕を回してその小さな体を自分方へとゆつくりと引き寄せた。

驚き目を丸くさせた星の耳元で、エミルがそつとささやく。

「——だめよ？ 相手を大事にするのは分かるけど、あなたは少し自分を蔑ろにし過ぎだわ。星ちゃんが思ってるよりもずつと……私はあなたを大事に思っているんだから……大好きよ。星ちゃん」

「……はい。エミルさん……私も、大好きです……」

エミルの言葉に、星の瞳には薄つすらと涙を浮かべながらすぐに言葉を返した。

それは大事にされているというよりも、自分が必要とされていると感じたからだろう。星にとっては、誰かに求められていると感じることが何よりも嬉しかった……。

2人が抱き合っているその横で、レイニールはベッドの上に転がっていたメニュー表を拾い上げると、それを広げてメニューを食い入るように見つめる。

しばらくメニュー表とにらめっこしていたレイニールが深く頷くと、メニュー表を持ってパタパタと星の目の前に飛んでいく。

「主ー！ 我輩はこれを食べたいのじゃー！」

レイニールが指差したのは、サーロインステーキ300gという文字を指差している。

抱き合っていた星は小首を傾げながら、レイニールとメニューを見比べると、星はさつきよりも大きく首を傾げた。

メニューは文字しか表示されないが、文字を指でタップすると、値段と実物の写真が視界に浮かび上がって表示される仕組みになっていた。

別に本人がやらなくてもタップして近くに持っていけば、その映像を自動で近くの者にも表示させるという便利な機能が付いている。

だが、星はそれで首を傾げたわけではなく、レイニールとイメージで表示されているその肉の塊の大きさがそれほど変わらなかったからだ。

星は抱き合っただまの Emil に意見を求めるように、そつと耳元で尋ねる。

「——あの、レイがこのお肉が食べたいって言ってるんですけど……」
星の困惑するような声音に、察した Emil は星の体を離すと、星の顔をじつと見つめる。

さつきまで抱き合っていたのが恥ずかしかったのか、星は頬を僅かに赤らめながら視線を逸らすと、Emil の方にメニュー表を広げて「これです」と掻き消えそう声で言った。

Emil もメニュー表から表示される映像とレイニールを見比べると、くすつと笑みをこぼした。

「心配しなくても大丈夫よ。確かに今のレイちゃんには大き過ぎるけど、元々のサイズを考えればそれほどおかしなことではないし。それに、この世界に空腹はあっても満腹でどうなるってことはないから」
「……満腹でも大丈夫なんですか？」

不思議そうに首を傾げる星に、Emil は頷いて徐に説明を始める。
「——このゲームは食事をしないことで、空腹状態になるのは今まで生活していて分かるわね。空腹状態では立ちくらみや、酷いと動けなくなるんだけど、満腹になる分には状態異常とかのペナルティーはないの。でも、いくら食べても最初から設定されてる数値以上に回復することはないわ。だから、レイちゃんがいくら食べたところで体に異常をきたすことはないから安心して」

「へー」

理解できたかは分からないが、星がとりあえず頷くのを確認して、Emil は手に持ったメニュー表から食事を注文する。

「それじゃー。レイちゃんは少し経ったら NPC がご飯を持って来るから、そしたら扉を開けてあげてね」

その後、につこりと微笑んで星の顔を覗き込むと「お風呂に行きま

しようか」と言っ
て、星の返答を待たず
にその手を引いて浴
室の方へと向かう。

憩いの時間2

困惑するだけだったが、隣で服を脱いでいくエミルに促されるかたちで首を時折捻りながらも、星も着ていた服を脱ぐ。

なによりも引つ掛かったのは、ご飯の前にお風呂に入ろうと彼女が言ったことだ——しかも、すでに食事は注文している。にも拘わらず、どうしてお風呂が先なのか星には分からなかった。

普通は注文した物がきて食べ終えてからお風呂に入るのが一般的だ。そうでなければ、せつかく持つてきてもらった料理が冷めてしまう。まあ、ゲームなのだから食事が冷めることはないのだが、その辺りを気にしなくなっているのは、ゲーム世界に長くいるせいで現実的な思考がずれてきているのかもしれない。だが、それは他のプレイヤーならばありえる話だ。普段から礼儀作法にうるさいエミルらしくはない。それが彼女らしくないと星は感じたのだ——。

先に浴室に入っていくエミルが星に向かつて微笑む。星も後を追いかけるように浴室に入ると、エミルはまず星に椅子に座るようにと促す。

星も渋々椅子に腰をおろした。エミルは普段からお風呂に入る前に、決まって体や髪を洗う。

水が苦手な星にとつて、それはお風呂に入る前の難関と言ってもいい。自宅にいた時は1人だった為、体は洗うが頭はあえて洗わないということも多かったが、ここではエミルがいるからそうはいかない。

椅子に腰を下ろした星はシャワーの音を聞くなり。瞼を強く瞑ると、水が入らないように両耳を手で押さえる。強張らせた肩は水に対しての恐怖からか微かに震えている。

エミルは慣れたもので、シャワー震える星のおしりの方からゆつくりとお湯をおかけて慣らししていくと、星の黒い長い髪の中から丁寧にお湯で濡らす。

さすがに頭の上からお湯をかけられた時には、緊張でまるで怯えた犬の様に全体を小刻みに激しく痙攣させる。

髪を全体的に濡らすと、星がほつとするのも束の間。今度は手の平

で泡立てたシャンプー液を星の髪に馴染ませると、優しい手付きで丁寧に髪を洗っていく。

本来ならばアバターである体に、皮脂などの老廃物で髪が汚れることはなく。殆どは外部から付いた砂埃などで、星は数日間ずっとベッドの上で寝ていたのだから髪を洗う必要はない。

ただ、ゲームの仕様に合わせてしまうと習慣になり、現実世界に戻ってから苦労することになる。特に星は年齢が低い分、習慣化してしまうことをエミルは気にしているのだろう。まあ、それだけではないのだろうか……。

「——はあく、星ちゃんの髪を洗っていると

、何だかすごく安心するわ」

シャンプーで滑りの良くなった長い髪を手櫛でとかしながら、エミルは満足そうに微笑みを浮かべている。

おそらく、こっちがエミルがたいしてする必要もない星の髪を洗っている本当の理由なのだろう。

今までエミルは丸一日ほど寝てないにも拘わらず、星の前では普段通りに接しているのも、余計な心配をかけたくないのだろう。まだ確証はないが、勘の鋭い星は何かを感じとっているようでエミルも気が気ではない。

いつも星に無理なことはするなど言っている手前、自分が柄にもなく無謀な作戦を執行していたことがバレるのはまずい。もしバレそうになった時、どうやって言い訳をしようかと考えているうちに星の髪を洗い終わってしまった。

耳を必死に押さえていた手を離すと、緊張から解き放たれた星は、今まで口の中に溜めていた空気を「ふうー」と息を吐き出す。

今度はボディソープをスポンジに付けて泡立てると、その泡を手にとって星の体を洗おうとした時、星がエミルの方を振り向いて徐に尋ねる。

「——エミルさん。何か悩み事がありますか？」

「……えっ？ どうしてそう思うの？」

心配そうにエミルを見つめる星に、内心動揺しながらもそれを表に

出さないようにしながら聞き返す。

しかし、星は一度もエミルの方を振り返ってはいないはず——つと、エミルは目の前にあった鏡に映し出された自分の顔が目に入り。どうして星がそんなことを言ったのかが理解できた。

映し出された顔は酷いもので、疲れ切ったその表情はまるで今日世界の終わりが訪れるような感じだった。

これでは誰でも悩んでいると思つて当然だ——。

「……………」

「……エミルさん？」

黙り込んでいたエミルに向かって、星が再び話し掛ける。

はつとして「なんでもないのよ」とすぐに笑顔を作るが、すでにそんな笑顔でごまかせるわけでもない。

立ち上がった星はエミルの方に向きを返ると、真剣な面持ちでエミルの瞳をじつと見つめ、無言のまま自分の瞳を真っ直ぐに見つめ返すエミルに告げた。

「——言つてくれないと、エミルさんのこと……嫌いになります」

不意に出た星の一言でさすがのエミルも諦めたのか、大きく肩を落としてため息を吐く。

敵の軍勢に対して行つたエミルの奇襲殲滅作戦が失敗した以上、すぐバレる嘘をつき続けるのにも限界がある。

「はあ……分かつたわ。でも、これだけは言わせて。私は全て星ちゃんのことを思つてしたことなの……」

そう言つたエミルに、星は笑みを浮かべて頷いた。それを見て、少しほつとした様子でエミルはこれまでの出来事を話し始める。

星が気を失っていた間に始まりの街がモンスター軍勢に落とされたこと。その後、千代の街に避難してきたこと。

そしてエミルが昨日から今日にかけて、エミルが街の外の敵を駆逐しようとして失敗したこと。

話を聞いている間は終始頷いていた星だったが、その表情は険しいものだった。

エミルに嘘をつかれているという事実は、星も薄々感づいていたの

だろう。しかし、否定したかった現実を突き付けられれば、表情が陰しくなるのも当然だ。

始まりの街がモンスターに攻め落とされたのは、やっぱりという思いの方が強く。それほど驚かなかった。

まあ、罪悪感はある……むしろそれが強すぎる為、虚無感が星を襲っていた。でも、もう一つ感じていたものがある。それは、エミルは自分以上に始まりの街から離れたことを気にしているということだ――。

エミルがすぐにバレるような嘘をついたのも。きつと、エミル自身が始まりの街が落ちたと考えたくない。と星は思っていた為、エミルが嘘をついたこともそれほど気にはしていなかった。

おそらく。自分も同じ境遇ならそうしただろうし、だが彼女との違いは、星ならショックで何をすればいいのか分からずに、部屋に閉じこもっていたかもしれない……。

いつにもなく怒られる前の子供の様な表情で、エミルが星の瞳を見つめている。彼女としては、嫌われても仕方がないと心のどこかで考えているのかもしれない。

だが、星は……。

「……いいんです。でも……もう。危ないことはしないでください」

心配そうにそう告げて、上目遣いエミルを見る星の瞳は微かに潤んでいて今にも泣き出しそうだった。

その顔を見たエミルは手で胸を押さえると、抑えきれない衝動に駆られ。星の体に抱きしめる。

「あくもう！　かわいいんだから。心配しなくても、もう危ないこととはしない。約束するわ」

「……本当ですか？」

念を押すようにもう一度聞き返す星の頭を、自分の胸に押し付ける
と。

「ええ、もちろん！　なんなら針千本飲んでもいいわ」

「エミルさん。胸が苦しいです……」

顔に押し付けられたエミルの大きな胸に、星の顔がすっぱりと埋

まっている。

Emilは慌てて星の体から手を離すと「ごめんなさい。つい衝動が抑えられなくて……」と苦笑いを浮かべた。

対して苦笑いを浮かべる星が、表情を曇らせて言いにくそうに口を開く。

「——始まりの街の人達を助けられなかったのは残念ですけど……私には Emilさんとまた会えて、こうしてお風呂に入ったり。お話ししたりできてよかったです。……あの時は、もうこんなふうにはできないと思ってたから……」

星の口から出たその言葉は、おそらく真実なのだろう……。

始まりの街の門の前に立ち塞がった時は、星もこれで終わるのだと腹をくくっていた。

そうでなければ、数十万のモンスターの軍勢を前に戦えるわけがない。いくら『エクスカリバー』という強大な力を持つ伝説の武器を持っていても、現実の星はただの小学生の女の子だ——作り物とはいえ、化け物達を前にして戦えたのは、それだけの覚悟があったということに他ならない。

だが、その時のことは Emilも気にしているらしく。

「そうね……私も近くにいられなかったのは反省しているわ。でもね——」
 Emilは星の体を再び優しく抱きしめると、耳元でそつとささやいた。

「——無理は絶対にだめ……倒れるくらい能力を使うなんて、もうしたらダメよ？ 諦める事は悪い事じゃない。星ちゃんは頑張り屋さんだから、なんでも無理してでもやっちゃうんだろうけど……そんなんじゃない、いつか絶対に体も心も壊れてしまうわ……あなたはもう少し私を——私達仲間を頼っていいんだから、これからは無理をしないで遠慮なく私を頼って……私はずっと星ちゃんの味方だし。絶対にあなたを守るわ……」

「……はい」

(……私も今度こそ Emil達を守ってみせます)

それを聞いた星も言葉には出さなかったが、心の中でそう誓ってエミルの体を抱きしめ返す。

互いの体温を感じるようにしっかりと体を密着させ。しばらくの間、浴室内で抱き合っていた。

木の伐採任務

* * *

ギルドホール前でエミルと別れたイシエル達は、紅蓮の言う千代の街の端に位置する大きな洞窟へと向かう。

しかし、イシエルもデイビットもここに洞窟があることなど知らない。おそらく事件後に、千代のギルドランキングトップのメルデイウスのギルドで建設したのは間違いないだろう。

こんなに好き勝手に地形を変更して大丈夫なのだろうか。という思いもあるが、普通はプレイヤーが既存のマップに勝手に制作したオブジェクトなどは、運営が発見次第破棄する。

運営が介入できないこんな状況下では、プレイヤーが好き勝手に変更した地形を直す者はいない。

まあ、そのおかげで千代の街が、モンスターの襲来に持ち堪えられていられるのだから誰も批判はしないだろう。まあ、もしも批判する者がいれば、激昂したメルデイウスがベルセルクを手に爆殺しにいきそうだが……。

良くも悪くも日本で4人しかいないベータ版テスターのうちの2人が率いるギルドである為、他の街でも彼等のギルド『THE ST RONG』の名を知らない者はいない。

何の躊躇もなく洞窟の中に入って行くメルデイウスと紅蓮。そして、その後ろから続く彼等のギルドメンバー達は慣れたもので、真っ暗な洞窟に次々に吸い込まれていく。

デイビット、イシエルの横にギルド『メルキュール』のギルドマスターであるダイロス。サブギルドマスターのリアンがいる。

そして真後ろには、数多くの彼のギルドメンバー達が控えている中で、ダイロスが漆黒の大剣『不滅の炎剣デュランダル』を肩に担いで暗闇の中に消えていく。リアンもぐくりと生唾を飲み込むとチャームポイントでもある尻尾のように一本に束ねた三つ編みを揺らして、ダイロスに続いて暗闇に消えていった。

続々とギルドマスター達に続いていくギルドメンバーに少し遅れて、デイビッドとイシエルも洞窟の奥を目指して歩いて行く。

しばらく歩くと、行き止まりに行き着き。先頭に行くメルディウスが左腕を横に突き出して歩みを遮ると、何故かベルセルクを大きく振り被るのを見て、辺りにいた仲間達も彼から少し離れて待機する。すると、頭上に振り上げていたベルセルクを思い切り地面に向けて振り下ろす。

「うおおおおおおおおおッ!!」

彼の咆哮の直後、大きな爆発音とともに地面を揺らす。粉碎された破片が辺りに飛び散り、メルディウスの鎧にもカンカンと残骸が当たる。

周囲に巻き起こっていた砂煙が治まり。ベルセルクを地面に突き立てたメルディウスの目の前には、地下へと淡々と続いている階段が姿を現した。

崩壊した地面から現れた階段に紅蓮が足を踏み入れると、左右に張り巡らされた松明が次々と点灯し、先を照らし出していた。

「さあ、行きましょう」

紅蓮は短く告げると、左右の松明でぼんやりと照らし出された階段を下っていく。

階段は中央の部分が一人がやっと通れる幅しかなく、それ以外は階段を挟んだ左右に段差のない坂の様な造りになっている。これは輸送用の台車を運ぶためなのだろう。

紅蓮の後ろを歩いてきたデイビッド、イシエル、ダイロス、リアンに向かって、彼女は歩みを止めることも振り返ることなく告げた。

「――私達のギルドメンバーは物資を輸送する為、今は回復アイテムや伐採用のアイテムしか持っていません。つまり、丸腰です。そこで、あなた達には私達の剣であり盾であって貫わなければなりません。とは言え、数の利は向こうにありますから、無理な時は全力で撤退します。その時は敵に背後を見せる事になりますので、デイビッドさんとイシエルさんの2人でしばらくの間、私達と敵の足止めをお願いします。もちろん、お二人は私とメルディウスがお守りします。」

「おう。安心して戦え！ あんたらを死なせたらジジイに合わせる顔がないからな。俺が責任を持って守ってやる！」

紅蓮の横を歩くメルディウスはニヤツと笑みを浮かべ、肩に担いだベルセルクで肩の部分の防具の鉄板を叩く。

その表情からは自身が満ち溢れている。まあ、実際に彼ならば、2人くらい容易に守りきってしまいそうだが。

2人が頷くと、その後ダイロス達の方を向いた紅蓮に彼等も頷く。階段を抜け、真つ直ぐ果てしなく続く松明の道を進んでいく。結構な時間歩いていると、またしても行き止まりに辿り着いた。

「メルディウス。お願いします」

「おうー」

短いやり取りの後、メルディウスは再びベルセルクを頭上に大きく振り上げ。

——うらあああああああああああッ!!

渾身の力で振り下ろしたその瞬間。後ろにいたイシエルが右手を前に突き出す。

激しい爆発音が辺りに響くのは前と同じだが、飛散した残骸がまるで目の前に透明な壁でもあるかのように、パラパラとメルディウスの足元に落ちていく。紅蓮や他の者達が驚いていると、イシエルはニヤリと口元に不敵な笑みを浮かべ。

「——せっかくの見せ場にぐめんなく。着物が土で汚れるのが嫌なんよ」

ポカンと口を開けたままイシエルの方を見ていたメルディウスが「お、おう……」と間の抜けた声を漏らす。

「なるほど、話は聞いてましたが汎用性に優れた能力のようですね」

紅蓮は感心したように、イシエルの前まで来ると彼女に尋ねる。

「効果範囲の設定と形状の変化はどうやってしているんですか？ 私の得た情報では、鋭利な刃物の様にも状態を変化できると聞いたのですが……」

彼女の言葉に、普段は笑顔を絶やさないイシエルが、あからさまに不機嫌そうな顔をする。まあ、自分の固有スキルの能力を敵になるか

もしれない人間に分析されるのをよく思うはずがない。

人である以上、好き嫌いは必ずある。それは人間関係でも同じである。しかし、イシエルはどんな者と接する時でも笑顔を絶やさない。なにも問題なく感じるかもしれないが、ここで一番問題なのが『どんな者と接する時でも』というところだ——先にも言ったが人間関係には好き嫌いは付きまとうもの。

だが、もし誰に対しても表情ひとつ変えない者がいるなら、それはその対象に興味がないと言うことだ。

無関心であるからこそ、そこに感情が入り込む余地すらないのである。つまり、イシエルから言わせればエミル以外の人間は道端に落ちている石ころ程度の価値しかない。しかし、なら何故イシエルが笑顔を石ころだと思っていない存在に振りまくのか……。

道端の石ころに笑顔で話し掛けている者がいるとすれば、その人物は精神異常者だろう。イシエルも本物の石ころならば無視するのだろうか、相手は一応言葉を喋って動き回る石ころ程度の価値しかない無価値な者達だ。

もし無視して自分の悪い噂が広がれば、間接的にエミルに悪い自分の印象を与えかねない。だからこそ、笑顔という分かりやすいかたちで好意を振り撒いている。

ただでさえ、イシエルは多くの時間をエミルへの好感度アップに費やしている。

今、星とエミルから距離を置いているのも、ただ単にエミルへの好感度アップの為であり。空気を敏感に察することで『空気を読める女である』とエミルに再確認してもらおう為である。

普段なら絶対に参加しないだろう彼女が、メルデイウス達の作戦に参加したのも『頼りになる女』だと、エミルへのアピールの為だ——。

現に、エミルはイシエルのことを頼りにしており。影虎が真実を告げても、一切信じなかった。影虎を部屋に閉じ込めたのもエミルを守る為であり、彼を解放したのも、エミルにもしもがあつた時の保険をかけただけのこと……。

その歪んだ愛情が起こす行動の根源は、全てエミルのことを思つて

のことなのだ。

木の伐採任務2

そんな彼女が目の前にいる和服を着た銀髪の小学生の様な外見の紅蓮に、あからさまな嫌悪感を抱いている。それは人を人だと思っていないイシエルが、紅蓮を人として認識したことを意味していた。しかも、好意的ではなく明らかな敵意を露わにして……。

互いに視線をぶつけながら見つめ合うイシエルと紅蓮。

だがそれも長くは続かず、紅蓮が息を吐くと「言いたくなければいいです」と半ば折れるかたちで、ベルセルクによって開かれた出口に歩みを進める。

入り口と出口はカモフラージュの為、元々システムに備わっている自己修復機能によって、一定時間を過ぎると勝手に塞がるように作られていた。

それを破壊することのできるのは、一握りの固有スキルかトレジャーアイテムの持ち主だけだ——いや、そもそも。ただの壁や地面に攻撃する者などいないだろう。

外に出ると、皆例外なく目を細めた。外は月明かりが降り注ぎ、洞窟の中よりも何倍も明るい。

「さあ、皆さんお仕事です。敵が我々を感知する前に木材を運び出しましょう」

『おー!!』

紅蓮の言葉を聞いて、皆拳を空へと突き上げる。その後、人と同じほどの大きな車輪の付いた巨大な台車が所狭しと並べられ、斧や数人でやっと引けるであろう巨大な刃のノコギリを手に皆々手近な木に向かっていく。

斧が木を打つトントンというリズムカルな音とノコギリのギコギコという音が合わさり、さながら真夜中の音楽会と言った感じに伐採が始まる。

ダイロス率いる護衛ギルドもそれを確認して、仲間達に指示を出す。

「皆、今回は四方から敵が襲来する可能性がある！ 陣形は五芒星。」

200のメンバーで5箇所に分かれる！ 遭遇時は敵を釘付けにする。決して後ろの仲間達に手を出させるな！ 我らの誇りに懸けて!!」

『了解!!』

メルキュールのメンバー達はダイロスの声に応えると、一斉に四方に散っていく。

ダイロスとリアンも仲間達を指揮する為に二箇所に分かれた。それを見て、メルデイウスがニヤリと笑みを浮かべる。

「ほお。さすがだな！ 見事なもんだ」

素直にダイロス達の手腕に感心していた。

1000人以上のギルドメンバーを動かすのは容易ではない。

現にメルデイウスも600人規模のギルドマスターだから、仲間達との日々の連携を心がけと信頼関係があつてこそできる芸当であり、メルデイウスも彼等と同じくできるかと問われれば、難しいと言わざるを得ないだろう。

それをそれ以上の人数で容易く行っているダイロスは、ギルドマスターとして素直に尊敬に値する人物だと言える――。

ベルセルクを地面に突き刺したまま、腕組みしながらその様子を見ていたメルデイウスの背中をコンコンと何者かが叩く。

「なんだよ。今忙しいんだ」

コンコンコン……

「俺の鎧はドアじゃないぞー！」

コンコンコンコン……

「なんだ！ しつこいぞ!!」

堪らずガバツと身を翻して後ろを向くと、そこには誰も居なかった……。

首を傾げると、メルデイウスは拍子抜けした様子でため息を漏らす。

「……なんだ。誰もいねえーじゃねえか」

そう呟いて前を向き直そうとした直後、脇腹を激しい衝撃が襲う。

「――痛でツ!!」

咄嗟に押さえた脇腹のすぐ横には紅蓮が立っていて、彼女は不機嫌そうに目を細めている。

「……見えなくて悪かったですね。それより、こんな場所で貴方は何をしてるんですか？」

「なにつて、俺達はいいつらの護衛だろ？ だからこうして目を光らせているんじゃないか」

メルデイウスは腕組みしたまま、得意げに胸を張っている。しかし、紅蓮はそんな彼の鎧をコツコツと指で突いて……。

「あの斧は飾りですか？」

っとベルセルクを指差して告げると、メルデイウスが意味が分からないと言った感じの表情で首を傾げ、指で顎の下を搔いている。

その表情を見た紅蓮は大きいため息を漏らすと、今度は伐採作業に精を出す仲間達を指差した。

「ギルマスがサボってないで、さっさと手伝ってきて下さい」

「ちよい！ ちよつと待ってくれ！ その理屈が通るなら、お前だつて——」

彼が全ての言葉を言い終える前に、紅蓮は騎乗用アイテムの雲に飛び乗ると、一気に上空に舞い上がった。まあ、紅蓮はバツが悪くなつて逃げ出したのは間違いないだろう。

メルデイウスは大きいため息を漏らすと、大斧を持って伐採に手こずっている仲間達の所に向かって歩き出すと、金色の大斧を巨大な大木に突き立てる。

直後。刃先から爆発が起こり、突き刺さっていた大木を強引に薙ぎ倒す。

仲間達が喝采を上げる中、メルデイウスは少し納得いかないと言った表情でボソツと呟く。

「——俺のベルセルクはこうやって使うもんじゃないんだけどな……」

ベルセルクを肩に担ぐと、ギルドメンバーの方を向いて叫ぶ。

「てめえーらぐずぐずするな！ 時間はそんなにねえぞ!!」

『はい!!』

ギルドマスターであるメルデイウスの参加で、作業効率は格段に上がった。

それを分かっているやっつたのか、そうでないのかは紅蓮にしか分からない。

「……静か過ぎますね。嫌な予感がします……」

雲に乗ったまま、地上を見下ろす紅蓮が眉間にしわを寄せた。

確かに彼女の言う通り、周囲に敵の姿はなく、モンスター達は殆どが街の逆側に集結していた。

事前にエミルが惹き付けていたとはいえ、全くと言っていいほど寄ってこないのは不思議というよりも不自然だ——当たり前なことだが、感知能力はレベルによって変わる。

つまり、漆黒の刀『村正』のレベルをMAXまで引き上げる能力を受け継いだ漆黒の刃を持った武器を装備したモンスター達は感知範囲も必然的に大きくなるということだ——にも拘わらず。モンスター達の立ち位置は一向に変わらない。

そう。全てがその場に磁石で貼り付けられているかの様に動かないのだ——こんなことがあるはずがない。だが、逆に今のこの状況は紅蓮達にとってチャンスでもある。

攻撃されない間に少しでも多くの木材を集めて帰ることができれば、街を守る防備が整う。街を区切る柱が完成すれば、飛行能力のある敵の殆ど存在しないこの世界で外敵はほぼ皆無になる。

そうなれば、街の仲間達は外部からの更新を待ちつつ、自分とメルデイウス。マスターなどの数名による脱出ルートを探しにいけるのだ。

作業を開始して数時間が経過し、木材も街の補強を行うのに十分な量を集めることができた。木材の大量に乗った台車を押しながら、ギルドメンバー達が撤退を開始する。

それを上空から見つめていた紅蓮がほっと胸を撫で下ろすと、突如として遠くの森の方が青い光を放つ。

目を凝らしてその場所を見ると、そこには大きな魔法陣らしき物が表示されている。

紅蓮の背筋に悪寒が走り、脳裏に最悪の事態が過る。しかし、その考えていた最悪が現実のものになってしまう……。

「――あれは……あの姿はまさかッ!!」

珍しく取り乱したように大きな声を上げる紅蓮。

だが、それも無理はない。彼女の目の前に現れたのは、大きな天使の翼に頭部の両側に付いた牛の様な角。そして両手に握られている柱の様に天に伸びる長い剣。それは紛れもなく、かつて攻略不可能とまで言われたダンジョンのボスモンスター『墮天使ルシファー』そのものだった――。

木の伐採任務3

「……ルシファー。しかも、あの角は修正前のもの……どうして、あの失敗作がここに……」

紅蓮が思考を回していると、ルシファーはドスンドスンとその巨体を揺らしながらこちらに迫ってくる。

しかし、紅蓮も冷静だった。即座にギルドメンバー全員にチェーンでメツセージを送信してルシファーの存在を知らせると、自分は着ていた着物の帯を緩める。

ルシファーの最も警戒すべき攻撃は、その両手に握られている剣ではない。それは紅蓮が最も分かっていることだ——地上の仲間達の警戒を叫ぶ声に耳を傾けつつ、紅蓮は目を細めながらルシファーに睨みを利かせていた。

つと、今まで歩いていたその足を止め。前方のルシファーがその畳んでいた大きな翼を左右に広げる。

それと同時に紅蓮も着物の袖から腕を引き抜くと、着物の内側に腕をすっぽりと隠す。

直後。ルシファーの巨大な翼から無数の羽根がナイフの様に撃ち出され、地上にいる仲間達へと向かう。

即座に紅蓮も着物を広げ、無数のナイフを高速で撃ち出す。

巨大な翼から時間差で撃ち出される羽根を、紅蓮は的確にナイフで落としていく。コンマ数秒でも遅ければ、飛んで来る羽根を撃ち落とすことはできない。それは神業と言ってもいいほどで、彼女にしかできない芸当だろう。

だが、敵の羽根には制限はないが、紅蓮の持っている装備には限界がある。

紅蓮の攻撃はトレジャーアイテム『インフィニティ・マント』という無限に武器を仕舞い込めるアイテムと、着物という動き難い装備を外して最大まで敏捷性を上げた技『サウザンドナイフ』だ。文字通り千本のナイフを撃ち出す為、千本以上持っていそうなものだが……彼女は性格上きっちり千本を収納している。しかし、その律儀な性格

が、このような状況下では裏目に出てしまう……。

迎撃していた紅蓮のナイフがなくなり。地面にいる仲間達に鋭利な羽根が襲い掛かる。悲鳴と土煙が上がり、一瞬にして視界がなくなる。

打ち止めになった直後、インフィニティ・マントを裏地に織り込んで作った着物を脱ぎ捨て、肌襦袢《はだじゅばん》だけの姿になると、今度は真つ白な宝刀の様に美しい模様の刻まれた彼女の身長ほどもある刀を握ると、トレジャーアイテムでもある純白の刀『小豆長光』を鞘から引き抜く。

すると、大胆にも地面に向かって放たれているその真つ只中に、雲に乗ったまま飛び込んでいった。

「——させません！」

純白の刀を体の前に突き出すと、刀身から真つ白な冷気が一気に噴き出し、即座に固まり周囲に巨大な氷の壁を作り出す。

紅蓮がルシファアの羽根を氷の壁で受け止めながら、地面にいる仲間達に叫ぶ。

「皆さん撤退して下さい。ここは私が引き受けます！ 今後はメルデイウスの指示に従って下さい！」

その言葉を聞いたメルデイウスが首を横に振った。

「なにを言ってやがる！ そいつは一人でなんとかできるもんじゃねえー!! お前等は街に向かって全力で撤退だ!! 悪いが仲間達を頼む！」

メルデイウスがベルセルクを構えると、デイビッドとイシエルを決意に満ちた瞳で見た。2人は静かに頷くと、武器を手に紅蓮の氷の壁を突破した羽根を迎撃しつつ、撤退を開始していた彼のギルドメンバー達の後方から撤退を護衛する。

それはダイロス達メルキュールのメンバー達も同じで、輸送しながら撤退する彼等の文字通り、盾になる様に皆腕に盾を装備して展開する。

しかし、メルデイウスだけはその場に留まり、一向に動く気配がない。そんな彼に、休むこともなく降り注ぐ羽根を受けていた紅蓮が叫

ぶ。

「——メルデイウス。貴方も撤退して下さい！」

「いや、俺は残る！ お前と共に戦って死ぬなら本望だからな！」

誇らしげな笑みを浮かべるが、紅蓮はすぐに言葉を返した。

「ギルドの長たる者が、たった一人に固執してどうするんですか!!」

その声が辺りに響き渡り、撤退していた彼女のギルドメンバー達も思わず足を止めた。普段冷静であり感情を表に出さない彼女が、珍しく大声で律したのだ——それに驚かないはずはない。

驚きを隠せないと言った表情で、紅蓮の背中を見つめていると、紅蓮はさつきままでとは打って変わって、冷静な口調で諭すように言った。

「……メルデイウス。貴方はギルドマスターなんですよ？ 私も皆も、貴方を信じてここまで付いてきたんです。それなのに、こんな場所ですら貴方を失うわけにはいかない。私の代わりは誰でも務まりますが、貴方は違う。人を率いると言うことは、彼等の責任を背負う覚悟が必要です。柱であるギルドマスターの代わりに命を張るのが、サブギルドマスターである私の務め……貴方はもしも私が倒せなかった時に備えて対応を取って下さい。私がルシファーを食い止めている間に、武装を整え迎撃準備を整えるのです。……それに、私は不死です。大丈夫——死にませんよ」

そう告げた紅蓮が振り返って、にっこりと微笑んだ。

普段なら絶対に見せない彼女の笑顔に、メルデイウスは苦虫を噛み潰したような表情をしながら、歯を強く噛み締めると「了解した」と小さく呟き身を翻して走り出した。

だが、彼は納得したわけではない。しかし、それ以上言い返せなかった。

あんな紅蓮の笑顔を見たのは数年ぶりだ。長い付き合いだから分かる……彼女は誰かを安心させる為に笑わない。

あの笑顔は純粹に嬉しくて出たものだ、メルデイウスにはすぐに理解できた。彼女は純粹に仲間達を守ることが、ギルドに貢献していることが嬉しくて笑ったのだ。

紅蓮の固有スキル『イモータル』は単に撃破されなくなるスキルだ——それは痛覚までは遮断されることはなく、常に痛みや疲労は肉体に蓄積され続ける。

長い間行動を共にしてきたメルディウスには、そのような状況下に置かれる場面を幾度となく見てきた。

しかし、どんなに危機的な状況下でも。彼女は常に最善の方法を選択してきたことも、彼は知っている。

今回も紅蓮を残し撤退することが、彼女に取って最善の方法なのだと、メルディウスは理解していた。だからこそ、ここでこの場に留まるといふことは、彼女の作戦を狂わせる行為であり、ひいては彼女を侮辱することにも繋がる。

メルディウスは撤退を躊躇していた小虎を抱えると洞窟の入り口に向かって走り、右手だけで大斧を閉じてしまっていた入り口部分に振り下ろした。

飛び乗る瓦礫はイシエルが固有スキルで抑え、皆素早く開いた入り口に飛び込んでいく。

最後にメルディウスが洞窟に入ったのを見送ると、紅蓮は左手で真っ白な鞆を抜き取る。

「——白雪。この鞆をお願いします……」

紅蓮は鞆に巻き付いた金色の紐の先を口に啞えて引くと、鞆を後方に投げた。その直後、どこからともなく出現した白雪の手の中に白く美しい鞆が落ちていく。

それを掴むと、白雪は目頭に涙を溜めて「ご武運を……」と小さく呟き、その場からスツと姿を消した。

しばらくして、その場に白雪の気配がないことを確認すると、展開していた氷の壁を解除して乗っていた雲の上から素早く地面に飛び降りる。

木の伐採任務4

地面に着地した紅蓮は転がることで落下の衝撃を和らげると、紅蓮のすぐ後ろに羽根が降り注ぎ。辺りに土煙を巻き上げ、一瞬にして視界が奪われる。

次に紅蓮の姿が現れた時には、肌襦袢の姿から青い帯に袖のない純白の着物。下半身はスパッツで太ももまで覆っている。動きを良くする為か腰の部分で着物は大きく左右に分かれていた。

紅蓮は刀を地面に突き立てると、口に咥えていた金色の紐で長い銀色の髪を結ぶ。ギョツと束ねた髪を揺らしながら、地面に突き刺してある刀を引き抜くと、その刀身をルシファーに向けて構える。

「――戦うからには負ける気はありません。さあ、私の全力でお相手しましょう！」

しかし、紅蓮の気持ちとは裏腹に、ルシファーは翼を広げて今にも飛び立ちそうだ。

まあ、このゲームでは珍しい飛行能力を持ち。戦闘力が高く、一体でも十分に街一つは壊滅に追い込むだけの火力もある。

操作する者も、強大な力を持つルシファーを、たかが1プレイヤーに過ぎない紅蓮にわざわざぶつける必要はないと思ったのだろう。

「――逃しませんよ。あなたが私に用はなくとも……私にはあるんです！ 氷無永麗殺!!」

だが、紅蓮がそうやすやすと通すわけがない。握り締めた刀を振るうと、刀身から発生された冷気で空气中に氷の粒子がキラキラと輝き、それが一気に広がり吹雪となって翼をはためかせ、今にも浮き上がろうとするその巨体に襲い掛かる。

一瞬にして翼と足が氷で包まれ、ルシファーの動きを止めた。しかし、それも一時的なもので。ルシファーはすぐに氷で覆われた足を力任せに動かし、いともたやすく氷の拘束を破る。

ゆっくりと紅蓮へと視線を向けるルシファーに、紅蓮も真剣な面持ちで刀を構えた。

すると、ギシギシと音を立てて翼を覆っていた氷を徐々に振り落と

し、大きく広げられた翼から鋭利な羽根を放つ。

紅蓮も高速で撃ち出される羽根を即座に見切って、向かって来る羽根を華麗にかわしている。が、次第に土煙が舞い上がり。再び視界を奪われてしまう……しかも、羽根に付いていた氷の粒子も相まって視界は絶望的だ――。

つと、紅蓮の持った小豆長光の刀身に冷気が集まり、刃の形を模つて高濃度に固まる。

煙の中。紅蓮がその刀を右側に構えると。その直後、轟音とともに煙を斬り裂いて彼女の視界に大きな剣が姿を現す。

回避できるだけの時間の余裕はない……。

紅蓮はその巨大な刃を、冷気の帯びた刀身で受け止めようと試みたが、自分の数十倍もの巨大な剣を受け止められるはずもない。

物凄い剣圧に紅蓮は押し負け、剣に押されるかたちで吹き飛ばされてしまった。

地面に刀を突き立て足を踏ん張って止まろうとするが、まるで高速で向かってきた巨大な鉄球をぶつけられたようなもの――とてもじゃないが、そんな付け焼き刃の行動でなんとかできるものではない。

飛ばされた紅蓮は木々を薙ぎ倒しながら、先にあった大木に体を強く打ち付けてやつと止まる。

全身を強く打ちつけられ、木に凭れ掛かるようにして地面に座り込んだが、紅蓮は刀を地面に突いてゆっくりと立ち上がった。

「なるほど、攻撃力は以前ダンジョンで戦った時よりありそうですね。HPを半分持つていかれましたか……」

木を薙ぎ倒すほどのダメージを受ければ、現実世界なら骨折で動けないはずのだが、紅蓮はまるで何事もなかったかのように立っている。

「……それでは、今度はこちらから行きますー!」

自分の体ほどもある長刀を上段に構えると、紅蓮は勢い良く走り出す。

感知したルシファーは翼を大きく広げると、向かってくる紅蓮に一

斉に掃射する。広範囲に放たれた羽根が土煙を上げて彼女の姿を覆い隠した。

つと突然。立ち込める土煙の中から紅蓮が飛び出すと、構えていた純白の刀を素早く振り抜いてルシファアの足を斬り付ける。

股の下を駆け抜けると、素早く体を反転させて地面を蹴って飛び上がり、ルシファアの背中に刃を突き立てて背中に大きな切り傷を刻んだ。そのまま、刀を逆手に持ち替えると、紅蓮はその刃をルシファアの背中へと深々と突き刺す。

ルシファアも斬られたことに気付いたのか、防衛本能で体を大きく揺らす。紅蓮は背中に突き刺さっていた刀を引き抜くと、自分に向かってきた腕の方に飛び移って、間髪入れずにルシファアの胸元に斬り掛かる。

胸に素早く二太刀を浴びせると、直後に体を蹴飛ばし離脱した。

もう少しダメージを与えてもいい気もするが、どちらにしろ長期戦は免れない。

圧倒的な体格差がある上に、敵は絶対に攻略不可能と言われたていた墮天使ルシファアだ——情報が少ない以上。迂闊に突っ込んで体力を消費するのだけは避けなければいけない為、慎重すぎるくらいが丁度いい。

地面に着地した紅蓮は、ルシファアの頭上に見える膨大なHPゲージを見て。

「減っているかさえ確認できませんね。これは長くなる……」

小さくボソツと呟いた紅蓮は、再び冷気を帯びた青白い刀身を素早く体の前に構える。すると、直後に天を覆い尽くすほどの羽根が紅蓮を襲う。

その場から動かず最小限の動きで、体に当たる軌道にある羽根を弾く。

能力を使って刀身を冷気で固めるのは、武器の耐久度を少しでも長持ちさせる為だ。

攻撃で巻き上げられた土煙の中から、紅蓮が飛び出す。しかし、それはルシファアとは真逆の方向だった。彼女としては一旦、距離を置

きたいというところだろう。

正直。近付けば両手に持った剣で攻撃され、離れば背中の中翼から撃ち出される羽根で攻撃きされる上に、防御力、攻撃力ともに高く。

紅蓮でなければ、一撃受けただけでHPの殆どを失い。その場できに置いて回復アイテムを使用するしかないが、紅蓮は固有スキル『イモータル』の効果でHPを回復する必要がなく。HPが『0』になったら、自動的にフルの状態まで回復する。

しかし、苦痛をカットできないスキルな為、精神力と体力は著しく消耗してしまい。結果として、疲労の限界を迎えてしまうことになる。

疲労の限界を超えると、システムが異常を感知して脳への影響を考慮し、自動的にスリープモードに入る。

つまり意識を失ってしまうわけだ——これは防衛行動であり。本来なら、真つ黒になった視界に強制ログアウトか蘇生の選択機能が作動する。

今はその機能が改悪を受けている状況で、記憶のデータ処理を寝ている状況と殆ど同じに固定されてしまう。もちろん。このタイミンでモンスターなどに撃破されれば「Delete」つまり、今の仕様ならば確実にこの世界から削除されてしまうのだ。

紅蓮は不死であるが故に突っ込みすぎると、過度にダメージを受けすぎて、痛覚によっての保護システムに引っ掛かってしまうことが多々あった。

そうなると、撃破されるという選択ができない分。一気に気絶状態に入ってしまうのだ——もちろん。いつも強制ログアウトや街の教会に戻されることになるわけだが、逆にその苦い経験が今のこの状況下でも生きているのだろう。

いつの間にか戦闘で無理をしなくなり、痛覚もある程度は意識的に遮断できるようになってきた。何よりもこの経験で大きかったのは、敵との間合いの取り方だ——複数の敵と戦闘をする上で必要なのは、一体一体との距離感だが、巨大なボスとの戦闘ではいかに早くその死角に滑り込めるか。

ルシファアーのように巨大な敵は動きが遅く、視野が広い。

それはそうだろう。上から見下ろす視点にいる方が有利なのは、FPSなどのプレイヤー視点のゲームでは基本中の基本だ。

本来ならばメルデイウスが敵の注意を惹き付け、その隙に死角から紅蓮が攻撃を仕掛けるのが基本戦術なのだが、今はそうも言っていない。

幸いここはまだ木々が生い茂っている。このステージならば、小柄な紅蓮が身を隠すにはうってつけだ。

木々の間を高速で移動して背後に回り込むと、即座に攻撃を加えて離脱する。

木の伐採任務5

素早い紅蓮の動きに、ルシファアも手も足も出せない。体の向きを変えても、すでにその場所に彼女の姿はない。

「——あなたには見えないでしょう。ですが、私には……しっかりと見えているのですよ」

地面を思い切り蹴って飛び出した紅蓮は、ルシファアの頬を斬りつける。

ルシファアが反撃の剣を振り抜くが、空中に出現した氷の塊を蹴飛ばして紅蓮が加速するために、掠りさえもしない。

離脱後は森の中に姿を消す紅蓮に、ルシファアは狂った様に無差別に木々を薙ぎ倒し、羽根を撒き散らす。その間も隙あらば紅蓮の刀がルシファアの体を傷付ける。

膨大なHPも確実に減っていく、高速戦闘には自信がある紅蓮も順調に減っているHPに勝ちを確信していた。

最初の一撃以外はダメージを受けていないし、これからもダメージを受ける気がしない。正直。行動範囲の制限されるダンジョンの中だから苦戦を強いられるだけで、一度外に出してしまえば、四天王と呼ばれるベータ版プレイヤーでオリジナルスキル持ちの紅蓮の敵ではない。

攻撃を終え紅蓮が地面に着地した瞬間。右足に激しい痛みが走る。

紅蓮の体が着地の衝撃を吸収しきれずに右側に傾き、思い切り右肩を地面に叩きつけ倒れた。

「——ッ!! なっ、なぜこんなものがッ!? いったいどこから……」

右足のふくらはぎを一本の矢が貫いていた。

すぐに辺りに目を凝らしたが、人影も気配すら周囲にはない。それはまるで、突然現れ消えた幽霊の仕業にしか思えない……。

だが、考えるのは後だ——紅蓮は足に刺さった矢を引き抜いて投げ捨てる。徐に立ち上がったものの、右足を踏み込むと痛みと違和感が残る。

「……これでは戦い方を変更するしかありませんね。ですが……」

紅蓮は睨みつけるように、再び周囲に激しい視線を向ける。しかし、やはり周囲には人影や気配は一切ない。それが納得できないのか、紅蓮は微かに首を傾げた。

それもそうだ。固有スキル『インビジブル』自身の姿を完全に消せる白雪でさえ、周囲に微かな気配が残る。気配を完全に消せるプレイヤーは白雪、自分の他にマスターくらいしか紅蓮は知らない。もしも、それだけの手練が向こうにいるとなると……。

「……少々厄介ですね」

眉をひそめると、右足を数回地面に着けるように上げ下げした。

やはり、踏み込んだ時に力が抜ける感覚がある。利き足をやられたのは予想以上の痛手だ――。

ため息を漏らし、紅蓮はルシファアの方を振り向き。

「……さて、どうしましょうかね」

利き足を負傷し、凄腕のスナイパーが潜む森の中で、相手はあの攻略不可能とまで言われた墮天使だ――本来なら撤退しか道がないのだが、どうやら紅蓮にはその考えはないらしい。持っていた刀を構えると、紅蓮はルシファアに向かって真っ直ぐに走る。

ルシファアもそれに気が付いたのか、巨体を大きく揺らしながら振り向く。

両側の翼が大きく広がり、紅蓮目掛けて高速で撃ち出される羽根。

だが、紅蓮はその羽根を掠る手前の紙一重のタイミングで避け、かわせないものは刀で弾きながら突き進む。

巨大なルシファアの足元に到達した紅蓮は、そのかかとの部分を斬り付け、ルシファアは地面に膝を突くと紅蓮はすぐにその場を離れた。

すると、直上から巨大な剣を振り降ろされ、今の足に傷を負った状況では完全な回避ができないと瞬時に判断し、直撃の既の所で左足で地面を蹴ると体の前で刀を構えて氷の盾を作り出す。

地面に刃が当たった直後、爆音と地鳴りが響き渡り、巻き上げられた土砂が無数に発射された鉄砲の弾の様に紅蓮に襲い掛かる。大きな破片は防げるが、細かいものは紅蓮の氷の盾を貫通してきた。

体に無数の破片が突き刺さる中。紅蓮のHPゲージも一度尽きて、再び最大値から半分ぐらいまで減少した。

つと、紅蓮の背後から今度は反対側に持っていた剣の刃が向かってくるのが見えた。破片を防御するのを諦め、背中に破片が突き刺さるのも構わず。逆側に冷気を纏わせた刀を構える。

直後。紅蓮の体ごと周囲の物を根こそぎ薙ぎ倒す。木や岩に紅蓮の体を剣で挟む様に粉碎し、最後には紅蓮は人形のように地面を転がり岩肌叩きつけられる様にして止まった。

叩きつけられた反動で、うつ伏せで倒れた紅蓮に向かって、ルシファーが追い打ちで放った鋭利な羽根が倒れていた彼女を無慈悲に襲う。

背中に雨のように降り注ぐ無数の羽根が突き刺さったその姿は、花を生ける時の剣山の様で、もはや以前の面影はない。

全身を走る焼けるような熱い感覚と、体を引き裂かれるような激しい痛み。薄れていく意識の中で視界に映ったのは皮肉にも街に向かって歩き出すルシファーの姿だった。

「……あんな……あんな化け物に……私の……大切な仲間達を……ぜったいに……絶対にやらせはしません」

顔の側に落ちていた小豆長光の柄に手を掛けると、それを杖代わりにゆつくりと立ち上がった。

その赤い瞳は光を失い霞んでいる。小刻みに震える足と荒く上下する肩から見ても。彼女はもう、精神力だけで立っているのだろう。

紅蓮は長い銀髪を結んでいた金色の紐を解くと、今度はそれを自分の右手と刀の柄を何重にもきつく巻き付けると、外れないように左手と歯でがっしりと結ぶ。

「……まだです。まだ……戦えますよ」

最後の力を振り絞って走り出した紅蓮は、街に向かってゆつくりと歩いていたルシファーの足を斬り付けると体を反転させた。

しかし、受けたダメージが大きいのかバランスを崩し、地面に膝を突きながらも刀を振る。

「——そこですー！」

刀身から冷気をつらら状にしたものがルシファアの右目を的確に捉える。

バランスを崩しながらも、これほどの精度を見せるのはさすが自他共に認めるトッププレイヤーと言ったところだろう……。

顔を押しさえてのたうつルシファアの左目が紅蓮を捉え、右手に握られた剣を振り下ろす。

「その程度……この名刀小豆長光で弾き飛ばしてみせる！ 氷を纏いて刃と成す！ 氷雪鉄塊殺!!」

突如として周囲に吹き荒れる吹雪が美しい純白の刀に集まり、その刀身の形状がまるで柱の様に見えるうちに積み重なって次第に巨大な刀に変わる。

氷でできた刃が、ルシファアの振り下ろされた剣とぶつかり激しく砕け散った。だが、敵が剣を大きく弾かれ体勢を崩したのを紅蓮は見逃さなかった。

紅蓮が刃先をルシファアの体を指すと、再び高速で集結した氷の欠片が刀身の形を成して真つ直ぐに伸びていく。

「——はあああああああああッ!!」

咆哮を上げ突き出された巨大な氷の刀が、ルシファアの胸元を突き刺す。

紅蓮は体を反転させ、刀を担ぐような格好で力の限り振り抜くと、ルシファアの体が胸元から頭部にかけて引き裂かれた。

急激に減少したHPゲージがなくなり、ルシファアの体は光となって空へと上がっていった。

肩を大きく上下させ、荒く呼吸を繰り返していた紅蓮が、安堵した様に深く息を吐き出す。その直後、天に伸びた刀を模った氷柱が勢い良く砕け散り、雪の様に紅蓮に向かって降り注ぐ。

「……終わった」

掠れた声で短く呟いた紅蓮の体が前に傾き、ゆっくりと地面に伏せる。

全力を出し切ったのだろう。うつ伏せで倒れた紅蓮はゆっくりと呼吸をしながらも、その思わず口からは笑みがこぼれる。

普段は感情をあまり表に出さない彼女だったが、今この時ばかりは抑えきれなかった。

攻略不可能とまで言われていたルシファーを、負傷しながらも仕留めて見せたのだ。その喜びはひとしおだろう。

今の紅蓮の心を支配していたのは、なんとも言えない達成感と高揚感だ——紅蓮は刀を地面に突き刺してゆっくりと立ち上がった。

「もう誰にも、四天王最弱とは言わせません……」

おぼつかない足で街に向かって歩き出すが、目の焦点が合わない状態で、とてもじゃないが街までは戻れそうにない。

仕方なく手近な木の枝の上に腰を下ろした紅蓮は、意識が遠退き霞む瞳で千代の街の方を見つめた。

「……さすがに、もう限界のようです。ここで少し休みましょう……メルデイウス。後は……まかせ……ましたよ……」

木に凭れ掛かるようにして、安らいだ表情で寝息を立てている紅蓮の元には、季節外れの雪が舞い落ちていた。

ローブを着た人物が遠くから、木の上で眠っている紅蓮を遠くから見つめている。そのローブの色と形状から、それはエミルのリントヴルムZWEIを撃破した人物と、おそらくは同じ人物だろう……。

「——全く。せつかく右足を射抜いて撤退するようにしてあげたのに——これだから子供は嫌いだわ……しかも、まさか手負いであのルシファーを倒すなんてね。本当はあの子に出て来てもらおうと思っただのに、当てが外れてしまったわ……でも、結果オーライね。エミルの虎の子のリントヴルムZWEIは後20時間以上使用不能。四天王と言われているプレイヤーの一人は行方不明。そしてもう一人もこの有様——次の攻めにはとても対応できないはず。これ以上は、プレイヤーにGM権限を持っている夜空星を隠しておくことはできないでしょう？ 可愛そうだけど、あの子には死んでもらわないといけない。全てを終わらせる為に……」

意味深な言葉を呟き。ローブの中から不気味に笑う唇の真つ赤な口紅が、これから起こる不穏な空気を予兆させていた。

*
*
*

サラザBAR

千代のギルドホールの上部に位置する木材をふんだんに使って造られた古き良き時代を連想させる大人の隠れ家的空間。

そのフロアの端にある暖か味のあるオレンジ色のライトに照らし出された落ち着きのある店内。掃除の行き届いた清潔な空間の中で一際目を引く広々としたカウンターテーブル。その後ろには所狭しと並べられたボトルの数々……それを中心に置かれた数人で向かい合って座れるソファ―席には既に多くのお客さんで賑わっていた。

皆、思い思いに日々のストレスや将来への不安、ギルドへの愚痴などを誰に気兼ねすることなく漏らすことのできる大人だけの唯一の憩いの場であることは間違いないだろう。どこか懐かしい落ち着いた雰囲気のあるバーカウンターで、シヤカシヤカとリズムカルにシェイカーを振るタキシード姿の男性。

その斜め向かいには、淡いピンク色のポニーテールの髪に透き通った青い瞳をした美少女が、思い詰めた様子で茶色い飲み物の入ったグラスを片手に、ほんのりと熱を帯びて赤くなった頬と潤みを帯びた瞳でグラスの中の氷を見つめていた。

目の前にはたくましい二の腕に、はち切れんばかりのタキシードを着た人物がボトルの整理をしている。その背中には、見慣れた白い円の刺繍の中に囲まれた釜の文字が輝いている。

振り向いた人物は紛れもなくサラザだった。始まりの街を出てからどこにいったのかと思っていたら、こんな場所で再びバーを経営していたのだ。

気がかりなのは、どうしてサラザが健全なバーを経営しているのかというところだろう。このバーにはピンク色のネオンもなければ、天上に輝くミラーボールもない。

まあ、結論を言えば、場所を提供してもらおう際に、サラザが紅蓮に尋ねたら「公序良俗に反するのは止めて下さい」と釘を刺されたからだ――。

しかし、盛況なのはひとえにサラザの料理の腕があつてのことだろ

う。

振り返ったサラザは、ごくごくグラスの中の飲み物を飲み干し「おかわり」と叫ぶエリエに、呆れながら告げる。

「もうその辺にしたら？ てか、エリーそれは、お酒じゃなくて烏龍茶なんだけど……」

「いいから、お・か・わ・り！」

声を上げて持っていたグラスでカウンターを叩いたエリエからグラスを奪い取ると、新しく烏龍茶と書かれたボトルから液体をなみなみと注いで、そのグラスを彼女の前に差し出した。

エリエはそのグラスを両手で持つと、勢い良く飲んで半分くらいで突然飲むのを止めて。

「——なんでよく。なんでデイビッドなのよく。どうして、私じゃダメなの……」

急に涙を流しながらそう言い出したエリエは、グラスを置いてカウンターに顔を伏せた。

その後ろのテーブル席では、ミレイニがガーベラ、孔雀マツザカ、カルの3人とトランプをして遊んでいる。

つと言つても、普通のトランプではなさそうだ——何故なら、目の前に置かれているのは物凄い量のコーラの空き瓶と僅かなオレンジジュースの空き瓶だった。

丁度勝負がついたのか、ミレイニが笑い声を上げている。その横でガーベラが「またババが残っちゃった」と笑っている。

「またガーベラの負けだし。これを飲むし！」
「まったく。今日はとことん勝てないわ」

ガーベラがミレイニからコーラの瓶を受け取ると、周囲から「いき、いき」と煽る声が聞こえる。

どうやら、このトランプには罰ゲームがあるらしく、負けた者は指定された飲み物を一気に飲みしなればいけないらしい。

その掛け声に応えるようにごくごくとコーラの入っていた瓶を飲み干すと、今度は無意識に大きなげっぷが口から漏れる。その直後「あはははっ！」とミレイニが楽しそうに笑うと、ガーベラも満更では

ないような笑みを浮かべた。

「どうやら、このトランプには罰ゲームがあるらしく。負けた者は指定された飲み物を一気に飲みしなればいけないらしい。まあ、もはや罰ゲームと言うよりは、接待の様になっているが。」

彼女達はトランプでババ抜きをしているのだが、カードを広げたミレイニは完全に手の内が顔に出てしまっていて、誰が見てもババを持っているのはバレバレだ。

これで勝てるのだから、他のオカマイスターのメンバーがわざと負けているとしか思えない。まあ、いつも面倒を見ているエリエがあの有様では仕方ないが……。

カウンターに顔を伏せていたエリエが顔を上げると、涙で潤んだ瞳をサラザに向ける。

「私の方がデイビッドより強いのに……うわあ〜ん！」

「はいはい。エリーが強いのは知ってるから」

泣き出す彼女をあやすようにサラザがエリエの頭をポンポンと優しく叩く。

すると、しばらく泣いていたエリエが一転。今度は逆に怒り出す。

「それにしても。どうして、私じゃないのか謎だよね！ 紅蓮さんも見る目がないよね。デイビッドじゃ作戦も失敗するに決まって……」

また、ぶわつと青い瞳から涙が溢れ出して。

「……みんな帰ってこなかったらどうしようお〜!!」

つと再び泣き出すエリエ。さすがに面倒くさく感じてきたのか、サラザの表情も少し引き攣っているように見えた。

それもそうだろう。エリエのこの話は、もうこれで5回目だ——こんな感じで、ずっと同じ話をしては怒ったり泣いたりを繰り返していた。

なんだかんだ言っているけど、エリエが一番心配しているのをサラザはよく分かっていた。

始まりの街を出てからずっと、エリエを取り巻く環境は著しく変化したのは、よく店で愚痴っていたから知っている。

星も目を覚まさず。エミルが付きつ切りでいること。

イシエルは部屋に閉じこもってあまり顔を出さないこと。

カレンはマスターがいなくなつてから、毎日道場に通つて修行に明け暮れていること。

皆の心が、始まりの街を出てから見えない壁で遮られている様だ――と、エリエは悲しそうにサラザに話した。

エリエは楽しかったあの頃に戻りたいのだろうが、環境がそうはさせてくれない。

多くの仲間やプレイヤーを死なせてしまったという罪悪感が、常に皆の心のどこかにある限り。元通りとはいかないのだということ、彼女も理解しているのだろう。だから、素直な感情を表に出せない。よくも悪くも『不器用』なのだ……。

サラザはカウンターから飛び出してエリエの元に駆け寄ると、彼女の華奢な体をしっかりと抱きしめた。

「……いいのよエリー。辛い時はいつでも私の所に来なさい……この大胸筋はその為に日々鍛えてるんだから……」

「なによそれ……でも。ありがとうサラザ……」

鍛え上げられたサラザの胸に顔を埋めたエリエはしばらくすると、すやすやと寝息を立て始める。

自分の胸で眠ってしまったエリエに、呆れたようにため息を漏らし。

「はあ……お酒は飲むもので、飲まれるものではないわよ？ エリー」
彼女の体を抱き上げると、幸せそうな寝顔に笑みを浮かべて。

「まあ、あなたの飲んだのはお酒じゃなくて烏龍茶だけどね。もう少し大人になったら、本当のお酒の飲み方を教えてあげないといけないわね」

サラザはミレイニと一緒にいか尋ねると、遊びたりないのか首を横に振る。仕方なくオカマイスターの仲間達に、一時的ミレイニと店を任せると、エリエを自分の部屋に連れていく。

自室のベッドに寝かせる。自室を出たサラザは、ギルドホール内に女性の声でアナウンスが流れてきた。

『ただいま街で緊急事態が発生しております。ギルドホール内の皆様

は自室に鍵を掛け、屋外に決して出ないようにお願いします。繰り返します……………」

アナウンスの内容から、事は急を要すると推測できた。サラザは大急ぎで店に戻ると、店の客を自室に戻る様に告げて、ミレイニと行く自室に残したエリエの護衛をオカマイスターの仲間に頼むと、自分は情報の収集に一階のエントランスを目指して走り出す。

基本的に建物内のアナウンスは、エントランスにあるNPCが常駐しているカウンターからのみ発信される。

つまり、アナウンスが流れている間にエントランスに向かえば、緊急事態を告げた者に直接話を聞くことができるというわけだ――。

敵の本当の狙い

時を同じくして、アナウンスを聞いたエミルも身支度を整えていた。

もちろん。目的はイシエル、デイビッドの救出だ——とは言え、手練の2人だ。緊急事態とは言っても、多少のことなら何も問題はないとは思うがもしもということもある。

始まりの街なら、エミルの城の一室に殆ど皆一緒に居たが、ここではそうはいかない。まず、階が別れているし、何よりも部屋に居るかも謎だ……エミルの仲間達は皆、腕に覚えがある分、どうしても個々で判断して行動しがちだ。

もしかすると、カレンやエリエ達も先に出ているかもしれない。合流しようにも、さつきからエリエにはメツセージが繋がらないのも気掛かりだ。

移動中はメツセージに気付かない場合も多く。もしそうならば、エミルも早めに出た方が後を追い駆けて合流しやすいのも事実。他人の行動は完璧に理解することはできないし、最も融通の利く人間は自分しかない。なら、援軍として今すぐ出れるのが自分だけなのだから、自分が動いて他のことは後で考えればいい。

険しい表情で、エミルは鎧を着ると剣を腰に差す。そして星の方を振り返ると、肩に手を置いて言い聞かせる様にゆっくりとした口調で告げた。

「——いい？ 星ちゃんはこの部屋で、レイちゃんと一緒に待ってて。すぐに帰って来るから」

その言葉を聞いた星の表情は重く、なにか言いたげな顔でエミルの瞳を見つめる。

すると、意を決した様子でエミルに言った。

「待って下さい！ 私も行きます。絶対に邪魔はしませんから……」
真剣なその瞳に、エミルは少し困惑した表情を見せた。その時、エミルの脳裏が始まりの街での出来事が蘇る。

正直。あの時に星を失っていてもおかしくなかった……またこう

して一緒に居られるのは奇跡に近い。

それも全てディーノ……いや、四天王の一人であるデュランのおかげが大きいのも、エミルは理解していた。まあ、その彼を始まりの街に置いてきてそのまま撤退したのだが……彼ならば、あの状況でも余裕で逃げられるだろう。

エミル達も個々で逃げるだけならば、あの程度の数を振り切るのは造作もないのだ。逆に足手まといになるであろう、気を失ったままの星を連れていったことにより、エミルからしてみれば彼の生存率を上げたということ、すでに借りは返したとも言える。

真剣な眼差しで真っ直ぐに自分のことを見つめる紫色の瞳に、エミルも言葉を失う。

もしもまたあの状況に陥れば、次は星を失いかねないのも事実。なら、いつそのこと目の届く所に置いておいた方が安全かもしれない。建物内では固有スキルの使用はもちろん。武器の使用もできない。だが、何故か自由に出入りできるライラというイレギュラーな存在もいる。そんな存在が、他にもいないとは限らない。

しばらく考えた末に、エミルは大きく息を吐いて。

「……そうね。なら、一緒に行きましょうか!」

にっこりと微笑んだエミルに、星もパーと表情を明るくした。星もまさか連れて行ってもらえるとは思ってなかったのだろう。まあ普通なら、何を言っても置いていかれてしまうのだから無理もない。

優しく星の手を掴むと、微笑みながらエミルと一緒に部屋を出た。

エレベーターに乗って、1階のエントランスにいるサラザを見つけ
た……。

「いったい何があったって言うのよ!」

「ですから、さつきも言いましたが。ただいま味方同士での乱戦になつてまして……」

「……だから、どうしてそうなったのか聞いてるのよ!」

「ですから! さつきも言いましたが、言えないんですよ!」

カウンターの所で揉めているのは、サラザともう一人見覚えのある人物だ。

「あら、サラザさんに白雪さんじゃないですか！」

言い合っている彼女達を見つけると、エミルはなんの躊躇もなく声を掛けて近付いていく。

揉めている相手の所に近付いていくエミルもどうかと思うが……。「いったい何があったんですか？ アナウンスなんて穏やかじゃないですよ」

それを聞いた白雪は少し表情を曇らせると、事の次第をゆつくりと聞き取りやすいように説明を始めた。

「ただいま。街では作戦を終えて帰還した仲間達の中に敵のスパイがいたらしく、ギルマス達で迎撃にあたっております。皆様は巻き込まれて間違って撃破されないように、自室で待機してして下さい」

「そうなの……なら、私は皆さんの救出に行きます。よろしいですよね？」

「まあ、白い閃光の異名を持つ貴女なら何の問題もないでしょう。しかし……」

白雪はエミルの後ろにいた星に視線を移す。星はビクツツとしながら不安そうにエミルの顔を見上げる。

それも仕方ないだろう。本来ならば、異名を持つプレイヤーは間違いなくこのフリーダム内でもトッププレイヤーだけだ。

しかし、星は正直。無名だ——それだけではなく、彼女が小学生なのはその身長と容姿から容易に判断できる。

実際にプレイヤーの殆どは、高額なハードを購入できる経済力のある大人か、裕福な家の子供くらいなものだ。

苦勞してハードを手に入れた人間からしてみれば、そんな裕福な家に生まれのうのとゲームを楽しんでいる子供をよく思っていない者は山ほどいるのも事実。

かく言う白雪も、元々はそう思っていたプレイヤーの1人だ——紅蓮との出会った時も、それはもう激しく罵り軽蔑していた。しかし、紅蓮はそんな彼女に冷たく言い放ったのだ。

「——ゲームを楽しむのに資格はいりませんよ？ そんな先入観を持ってゲームをするなら、1人だけでプレイできるゲームをしたらい

いでしよう。正直言つて、言い掛かりを付けられるのは迷惑です」と……。

もちろん。その言い分に激昂した白雪は紅蓮を攻撃したが、その後に行ったPVPで彼女は紅蓮に手も足も出なかった。怒りに任せて全力で戦つて負けた白雪は、その悔しさに打ちひしがれて引退を決意したほどだ。

身長祭やリーチの違いでゲームシステムのアシストが攻撃力と敏捷に若干の影響を及ぼしたが、紅蓮は鎖付きの長刀を使用していた為、それほど大きな値ではない。

そんな彼女に向かつて紅蓮は勝ち誇つた様子もなく、静かに諭すように言つたのだ――。

「――貴女は確かに強い。しかし、それはゲームの中の事です。人は大人、子供に限らず悩みを持って生活しています。もし、子供にゲームをする資格がないと言うのなら、貴女は力で弱者を虐げる者でしかありません。強さとは弱い者を威圧し、屈服させるものではない！ 子供の癖になんて言葉は、なにもできない自分の中の弱さから出る言葉です。強い者に向かつていく勇氣もなく、自分よりも弱い者を虐めて悦に浸る愚かで下賤な族の行いです。そんな行いには決して正義はない！ その思想は捨てるべきです……それに、せめてゲームの中でくらはいは、分け隔てなく素直な気持ちで楽しみたいとは思いませんか？ 今日私は私が勝ちましたが、明日になったら分かりません。強さなんて容赦や出身で変わるものではありませんよ？ 成長とは時に、自分でも驚くほどですからね。それと勘違いをしているようなので訂正しますと、私は大学生です」

今でも紅蓮の最後の言葉に驚いて、その後のことはあまり覚えていない。

だが、その時に戦つた紅蓮の刀からは手加減や油断というものはいっさいなかったのを、今でもはつきりと覚えている。逆に全力で戦うのが紅蓮なりの流儀なのだろう。

この時から白雪は、紅蓮を越えようとしてきたのだが、今では慕うようになつていた。

しかし、この危機的状況下で、星が何かの役に立つとは思っていないのに変わりはない。それは子供だからではなく、星が単に戦闘経験が薄いからだ。

これまでの戦闘で、というか……始まりの街で10万もの敵を撃破したことで、星のレベルは既にカンストしている。だが、レベルがMAXになったからと言って、プレイヤースキルが上昇するわけではない。

星の手がギュツとエミルの握ると、エミルもその手を強く握り返す。それはまるで、大丈夫だと言いたげな感じだった。そしてそれは、現実になる……。

「いいえ、この子も一緒に連れていきます」

「はっ、なっ!? しよ、正気ですかッ!?」

驚きを隠せないと言った表情で、白雪は目を丸くしながら思わず本音が漏れてしまう。

そんな彼女にエミルはにっこりと微笑むと。

「——こんな体験。普通では経験できませんから、妹にも経験させておいた方がいいと思って」

「……えっ?」

まさかの切り返しに、星は驚いたようにエミルの顔を見上げる。

親しい間柄なら、絶対に通用しないはったりだが、白雪とエミル、星は殆どと言っていいほどに面識がない。

そこにエミルの意図を察したサラザがウインクをして、エミルのはったりを話を合わせる。

「そうなのよ。この子達は姉妹で、すっごく仲良しなの。いつも一緒にいるし、離れたのを見たことないわ。まさか、そんな2人を離れ離れにしないわよねー」

そう言つて目を細め、白雪の顔を覗き込むサラザ。

白雪も軽く咳払いをすると。

「まあ、いいでしょう。妹が心配なのは分かりますし、子供連れでも大丈夫と言うなら止めはしません。まあ、それだけ腕に自信があると言うことで逆に頼もしい限りです」

そう呟いて、白雪はその場を去っていった。

敵の本当の狙い 2

彼女の姿が見えなくなるのを確認して、エミルはサラザの方を向いて軽く頭を下げる。

「サラザさん。ありがとうございます」

「あらやだ。そんな仰々しいこと止めてちょうだい！」

下げている頭を慌てて上げさせると、サラザは自信満々に胸を叩く。

「まあ、私とエミルがいれば、星ちゃんの一人くらい守りきれるわ」
誇らしげに上腕二頭筋をアピールしつつ、親指を立てているサラザ。

その後、誇らしげに上腕二頭筋をアピールしつつ親指を立てている。しかし、エミルは申し訳なさそうに眉をひそめると言いにくそうに告げた。

「……いえ、できればサラザさんにはここに残ってほしいんです」

予想だにしていなかったエミルの言葉に、サラザは驚いて口を開いたまま、あまりのことに言葉を失っている。だが、エミルがサラザにそう言ったのには、もちろん重要な意味がある。それは、サラザの選択している種族にあった。

サラザが選択しているのはボディービルダー。普通のRPGなどではドワーフなどのパワー系の種族に分類される。しかし、ボディービルダーは初期状態でも攻撃力と防御力に大きなアドバンテージがあり。デメリットは敏捷が少し低下するくらい——武器の使用を制限される場所では、その真価を遺憾なく発揮することが可能だ。

どうも納得いかないと言いたそうな顔でエミルを見つめるサラザに、エミルが更に言葉を続ける。

「でも。サラザさんだけが頼りなんですよね……私では建物内での戦闘は困難です。ボディービルダーであるサラザさんの『筋肉』にすぎないんです。街で事件を起こしているなら、このギルドホールが敵の目標かもしれません。……サラザさんがギルドホール前で守ってくれば安心なんですよね」

そういうと、エミルはチラツと横目でサラザを見た。サラザはにやけながら、上機嫌で彼女の肩を叩く。

エミルは痛そうに叩かれた肩を撫でると、苦笑いを浮かべる。それを見ると、どうやらエミルの目論見は成功したらしい。

「もう！ 私の筋肉を頼りにされたら、体に逆らえなくなっちゃうじゃない。いいわ！ 私がこのギルドホールを守ってあげるか、エミルは存分に暴れていらつしやい！ でも、星ちゃんもいることを忘れちゃだめよ？」

サラザがウインクをすると、エミルもそれに深く頷いた。

ギルドホール前で手を振るサラザと別れた後、辺りを警戒しながら慎重に街の中心部までやってきた。

エミルは左手で星の手を握りつつ、右手にはロングソードを握り締めている。

剣を構え、周囲に潜む敵を探すように目を皿のようにして、建物の中や物陰まで至る所を見ている。星も少しでも協力しようと、キョロキョロと辺りを見渡す。

いつも星の側にいるはずのレイニールがいないのは、部屋で自分の身長ほどもある特大ステーキを食べた後、いびきを掻きながら眠ってしまったからだ。

エミルに起こすか尋ねたが「寝かせておきましょう」と言われたので、星もそのままにして部屋を出てきた。その時、2人の側の民家が、突然大きく爆発を起こして木っ端微塵に吹き飛ぶ。

「——ツ!? 星ちゃん!!」

エミルは咄嗟に星の体に覆い被さる様にして、吹き飛ばされてきた破片を背中で受けると、すぐに腰のポーチに入った宝石を鎧にぶつける。

宝石が輝きを放つと周囲に緑色の光が溢れ出し、減少していたHPゲージが限界まで回復した。

「エミルさん……」

「……大丈夫。少し私の後ろに隠れて」

心配そうな表情で見えてくる星を自分の後ろに隠し、エミルは持つて

いた剣先を立ち込める土煙の方へ向けると、徐々に晴れる煙の中から真紅の重鎧に身を包んだ黄金の大斧を持った男と、クレイモアを持った男が互いに得物の刃を押し付けあった状態で対峙していた。

赤い重鎧の人物は間違いなくメルディウスだが、それと対峙しているもう1人の方はエミルは見覚えがない。

しかし、その様子から2人が知り合いであるのは間違いないだろう。何故なら、メルディウスと対峙している鎧を着ている者を説得しようとしていたからだ――。

「おい！　いったいどうしちまったんだよ！　俺達の目的は街を守る事だろう？　千代最強ギルドの俺達が、街の脅威になってどうすんだ！　そうじゃねえーのか！　なあ、違うのかよ。ハーツ!!」

「……………」

しかし、彼から返答は全く返ってこない。

均衡を保っていた刃がじりじりとメルディウスの方に迫ってくる。まあ、無理もないだろう。メルディウスにとっては同じギルドのメンバーで、彼はギルドマスターという立場に置かれている。

知らない人物なら、遠慮なく全力で打ちのめすのだろうが、どうしても仲間に刃を振りかざすのには躊躇してしまう……そんな状況下では、メルディウスが苦戦するのも無理はない。

だが、以前にもこのような状況があったことをエミルは忘れてはいない。

そう。それは始まりの街で発生した事件――持つ者のレベルを最大まで引き上げ、操り人形と化す漆黒の刃を持つ刀『村正』を使用した事件だ。

その犯人が、フリーダムログアウトを封じて、監禁事件発生させた狼の覆面の男であることは、今もこの千代の街を取り巻いているモンスター達の装備している漆黒の刃の武器を見れば分かる。だとしても、一番の謎はメルディウスと対峙している彼の持つ武器だ――。

彼の持つクレイモアは見たところ、その柄の部分の装飾から相当な代物であるのは見て取れるが、肝心の刃は漆黒ではなく普通にシルバーなのだ。

つと言うことは、彼は村正によって操られているわけではない。
『なら、何故……?』そう考えているエミルに、星が声をかける。

「——エミルさん。どうしてあの長い剣の人の上に、モンスターと表示されているのでしょうか?」

「え? 星ちゃん。何を言っているの?」

エミルの視線の先にいる2人の頭上には何も表示されていない。それは元々の仕様であり、別にエミルの視界に表示されているものがおかしいわけではない。

個人の容姿をそのまま反映するこのフリーダムでは匿名性が必要な為、PVP、パーティーを組む時と、プレイヤーが任意で同じギルドメンバーに表示されるようにする時だけだ。

見えないのがおかしいのではなく、見えなくて当然なのだ——しかし、星の瞳にはしつかりと、クレイモアを手にした男性の頭上に浮いている【MONSTER】という文字が写っていた。

エミルが星が嘘を言っているようには感じなかった。しかも、その手を見ると剣の柄にその手を掛けているのが見えた。

怪訝そうに眉をひそめたエミルは、その手を掴んで手を繋ぐふりをして剣の柄から手を放させる。

すると、星は「あれ?」と瞳を数回瞬きをして、小首を傾げる。

その彼女の反応から、エミルは全てを悟った。星の固有スキル『ソードマスターオーバーレイ』は、特別な固有スキル。いや、オリジナルスキルだろうということは、ライラの星に対する執着や興味から薄々勘付いていた。

エミルは星の手を放すと、素早くコマンドを操作し、装備欄にもう一本剣を装備する。

困惑した表情をしている星に微笑みかけると「ちよつとだけ待っててね」とだけ言い残して、疾風の如く地面を蹴って得物を持って対峙している2人の方へと向かっていく。

背後から迫るエミルに、逸早く気付いたメルデイウスは刃を下げて代わりに左腕でクレイモアの刃を受けると、体を反転させエミルに向けて大斧を振り抜く。

「――何者だ!!」

腹部を真つ二つにしようとかかってくるベルセルクの人ほどに大きな刃を、素早く体を折って紙一重でかわすと「ごめんなさいね……」と呟き、左手に持っていた剣の柄の先でメルディウスの膝の側面を叩いた。

敵の本当の狙い3

バランスを崩したメルデイウスが堪らずに地面に膝を突いた直後、クレイモアの刃を受けていた彼の左腕が切断されてその刃が彼の左肩に刺さる。

膝を叩かれ左肩にクレイモアを受けている今の状況下では、身動きが取れないだろう。

エミルは剣を地面に突き立て、走ってきた時の勢いを殺すと、地面を蹴って今度はメルデイウスと対峙していた男に襲い掛かる。

彼の得物は大物のクレイモア——攻撃力は高いが、一撃の破壊力を重視したもので扱いにくさはロングソードの比ではない。

両手に持った剣を構えたエミルの瞳が一瞬強い眼光を放つと、彼女は咆哮を上げながら素早く男の体に剣を振り抜く。

全身をバネのように使っているにも関わらず、手首を柔らかく使った順手と逆手の切り替えの素早さは見事としか言いようがない。

全く抵抗できないうちに、見る見る男の体に斬られた黒い線のような傷を残して最終的に15連撃ほど食らわしたところで、エミルは男の背中に武器を突き刺して男は力無く地面に倒れた。

——うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おッ!!

それを見たメルデイウスが激昂しながら咆哮を上げると、膝を地面に突き立てたまま強引にベルセルクをエミルに向かって振り抜く。

咄嗟に男の持っていたクレイモアを掴むと、エミルはそれを体の横に構えた。2つの刃がぶつかり合い、物凄い金属音を辺りに響かせる。

だが、メルデイウスはその手を休めることなく力任せに振り抜き、激しく擦れ合う刃と刃が火花を散らしながらエミルの体を押し退ける。

地面に踏ん張り堪えると、持っていたクレイモアが割れたガラスの様に粉々に砕け散った。

なんとか彼の一撃を受け切ったが、彼が両手で大斧を振っていたら

本当に危なかっただろう。剣の耐久値が足りなかったら、最悪の場合、エミル体が真つ二つになっていた。

派手な破壊エフェクトが発生はしたが。まあ、あのクレイモアはエミルのものではない為、壊れても持ち主のインベントリ内に戻るのだが……。

興奮が抑えられないメルディウスは、まるで人のものではないような声を上げると、殺意に満ちた視線をエミルに向けた。

「——キサマア!! 俺の仲間をよくもやりやがったな……粉微塵にして、外のモンスターどもの餌にしてやる!!」

メルディウスがゆっくりと立ち上がって、持っていたベルセルクの刃をエミルに向ける。

エミルは冷めた目で彼を横目で見ると、装備欄に再び装備し直して戻ってきた剣を手に握り締めて、右手に持った剣の先を向けた。

「あなたがやりたいなら相手をするわ。でも、そこに転がっているのが本当にあなたの仲間ならね……」

「はっ? なにを言ってるやが——」

地面に倒れていたはずの仲間を見たメルディウスは言葉を失う。

当たり前だ。その場に倒れていたのは先程まで戦っていた人物ではなく、マントを纏ったスケルトンだった——。

動揺を隠しきれない様子のメルディウスは「なんだこれは……」と口に出して言う。

「これが正体です。どこから侵入したかは分かりませんが、街にプレイヤーに化けたモンスターが侵入したのは事実ですね。でも、この子が居れば、そのモンスターを探すのは問題ないですよ」

ポーチから回復用の宝石を取り出すと、エミルはそれをメルディウスに向かって投げる。

彼は「悪いな」と一言だけ言ってその宝石をキャッチすると、自分の真上に放り投げてHPを全回復して星の方を見て訝しげな顔をする。

「——そんなことが本当にできるのか? 俄には信じがたいな……」

「大丈夫ですよ。その人がモンスターなのを教えてくれたのも、この子なんですから！」

「あつ、わっ！」

突っ立っていた星の手を引いて、エミルはメルディウスの前に星を押し出した。メルディウスの熱い視線に星は恥ずかしそうに頬を赤らめる。

メルディウスは小首を傾げると、納得いかない表情をしながらも持っていたベルセルクを肩に担ぐ。

「まあ、いい。どっちにしたって放置できる問題じゃねえーんだ！」

俺もこのぎまでは、まともに戦闘もできない。と言っても、今から風呂に入ってたんじゃ間に合わねえー」

痛々しくなくなつた左腕を見せると、大きくため息を漏らした。

彼の腕は肘の下辺りからバツサリいかれている。エミルはそれを見て、申し訳ないと思つているのか表情を曇らせた。

まあ、エミルが対峙していた相手に攻撃を行わなければ、メルディウスは腕を犠牲にする必要がなかったのだから無理もない。

だとしても、腕一本くらい失つたくらいでは、彼の圧倒的な力だと能力は半分も減少しないだろう。しかし、味方が敵になるこの状況下では致命的だ——それはなにも左腕がないからではなく、対峙する敵が苦楽を共にした仲間だからだ。

たとえそれが偽物だとしても、メルディウスは全力で刃を振り下ろすことはできないだろう。仲間達との思い出は偽りにできるものではないのだから……。

「——その腕では戦闘は無理です。戦闘は私が全て請け負います。だから、この子をお願いします」

「ああ、頼んだ！……ああ、任せておけ！」

星の背中を押してメルディウスの方へと寄せる。

どうしても男性に慣れないのか、星は少し不安そうな表情でエミルを見るが、エミルはあえて顔を合わせようとしなない。

今顔を合わせたら、星はエミルの方に戻って来てしまうだろう……それがエミルには分かっていた。

正直。星の身の安全を考えると、エミルよりメルディウスの方が適している。基本的にアバターはレベルによって男性、女性に関わらずステータスが均等に割り振られている。

そして装備品や基本スキル『スイフト』『タフネス』によって各ステータスを調整することができるわけだが、大まかに分けて3パターン高速型、攻撃型、平均型にしばらくられる——エミルは敏捷性を特化させた高速型。そしてメルディウスは前衛に必要な攻撃力と防御力に特化した攻撃型だ。

なにより。彼の持っているベルセルクは『トレジャーアイテム』だ——フリーダムと名付けられたこのVRMMOゲームには、プレイヤーの能力を飛躍的に向上させる超レアなアイテムが存在する。この高難度ダンジョンを攻略した者に不特定でドロップするアイテムは使い手によって向き不向きがあるのだが、メルディウスの場合ベルセルクとの相性が抜群で、これだけでも対人戦では相当の優位性がある。

手数で勝負する高速型と違い。攻撃型は一撃が重い。それは、うまくいけば一撃で敵を粉碎できるほど。

普通に考えれば、数回斬り付けなければ一体撃破できない者と、一撃で敵を撃破できる者が戦えば、後者が圧倒的に有利になる。

動物に例えるならばエミルがチーターでメルディウスがライオンだろう。自分の決められたテリトリー内で戦うなら、間違いなく力で勝るライオンがチーターを圧倒することだろう……。

星を守るという目的なら、力でも防御でも勝るメルディウスはまさに適役だ。しかも、彼は四天王と呼ばれるテスターで、ゲーム歴はプレイヤーの中で最も長く、実力も折り紙付きだ。彼に星を預けていれば、エミルは安心して戦闘では全力で前に出られる。

エミルを先頭に、メルディウスの指示の下、千代の街を回ってプレイヤーに化けたモンスターを探す。

メルディウスのギルドメンバー達が交戦している相手を片っ端から星が見ていって、モンスターだった者は撃破し、そうでないものは戦闘を止めさせる。

ギルドメンバー達はメルデイウスが一言掛ければ戦うのを止めた為、戦闘を止めさせるのは簡単だった。敵と味方の区別が付けば、撃退するのはそれほど手間は掛からない。

敵の本当の狙い 4

つとそこに、革鎧を着た男性が走ってきた。

「ギルマス！ 小虎が正面門の方に歩いていったんですが、何か聞いてないですか？」

「はっ？ 俺は何も……ちよつと待ってる。今連絡してみる！」

慌ててメルデイウスはボイスチャットを小虎に向けて送る。

すると、呆気ないほど早く通話が繋がった。

『なんだよ兄貴。今、ぼくは姉さんの搜索で忙し——』

「——ちよつと待て！ お前は今正面門に向かってたんじゃないのか！？」

『はっ!? 今は姉さんを探してるに決まってるじゃないか!! てか、ルシファーが撃破されたから、早く探しに行けって言っただのは兄貴だろ!』

「——ッ!? ああ、そうだった。わりい……」

メルデイウスは通話を切ると、血相を変えて周囲の仲間就叫ぶ。

「おめえーらー！……ここで待機してろ！ 仲間にはギルチャでこの場所に寄り付くなと言っつけ！ それでも来た奴は片っ端からぶつた斬れ！」

彼はそう叫んだ後、エミル達の方を振り向くと。

「敵は街の門を開いて、内部に仲間のモンスター達を引き込む作戦だ！」

「——ッ!？」

それを聞いて、エミルは相手の思惑が分かり、背筋に今までないほどの悪寒が走る。

エミルは身を翻すと、正面門に向けて一気に走り出す。

突如走り出した彼女を追い駆けるようにメルデイウスも、大剣モードにしたベルセルクを背中に収めると、横にいた星右腕で担ぎ急いで後を追う。

相手の狙いは正面門を開門させること——その為に、紅蓮達が木を伐採する時もモンスターの軍勢を動かさなかったのだ。

何故なら、紅蓮達が伐採したポイントと、千代の正面門は真逆の方向に位置している。つまり、相手はモンスターを動かさなかったのではなく、最初から動かさなかったのだ。

後半で唐突に現れたルシファーも、その混乱に乗じて別働隊を街の中に入れる為の布石だった。

巨大なルシファーが現れば、巨大な体を見るために注意は上に向きやすい。数少ないモンスターの襲来に気付いた者は少ないだろう。そして気が付いた者は殆どが撃破され、その容姿を真似てモンスターが消えたプレイヤーとすり替わったのだ。

しかし、声と撃破時のエフェクトが発生する以上。周囲の者達も仲間が撃破されたことに気付くのが普通だが、たった一瞬だけ戦闘中に視界と声が遮られた瞬間がある。

それは撤退時に退路を封じる為に放ったと思われていたルシファーの羽根による攻撃——おそらく。その一瞬の混乱に乗じて、プレイヤーを撃破したモンスターが味方に紛れて街に侵入したのだ。

だが、小虎は撃破されてはいなかった。それはつまり計画を変更したのだろう。本来なら、ルシファーによって紅蓮を撃破し、彼女に成り代わる作戦を立てていたのだろうが、それは彼女本人がルシファーを撃破したことで失敗した。

失敗したはずなのだが、その計画事態は残っていたのだろう。そしてそれは、街から出た小虎を対象を変更した……だから、小虎の姿がコピーされたのだ。そして今、正面門にいるのは小虎の偽物であることは、さっきのメルディウスとのやり取りで判明している。

街もトップギルドのメンバー同士の抗争で、街にいたプレイヤー達の殆どは屋内に避難してしまっていた。つまり、今街の正面門への道はフリーである。

しかも、千代のプレイヤーならば、小虎が現在を発生させているギルドに属するメンバーだと知っている。これは逆を言えば、今の彼を気に掛ける者はいいても、今の彼に干渉する者はいないということだ……。

人通りのなくなった街を疾走するエミルと、その後を追い駆けるメ

ルディウス。

正面門に辿り着いたエミルは、周囲に目を凝らして小虎の姿を探した。すると、門を開閉するための部屋の中に小虎の姿があった。その直後、門が大きく音を立てて動き出す。

「……チッ！ 遅かったか！」

星を地面に下ろしたメルディウスが悔しそうに舌打ちする。

大きく開く門を見つめ、星の表情は見る見るうちに青ざめていく。おそらく、星は始まりの街での出来事を思い出しているのだろう。

まあ、星は始まりの街で門の前を守っていた為、ショックを受けるのも無理はない。

それを察してか、逸早く飛び出したのはエミルだった。

門の操作を行う部屋に向かって伸びる階段をエミルは物凄い速度で登って行くと、部屋のドアを開けて室内に入り、小虎に化けたモンスターが攻撃を仕掛けてきたのでそれを返り討ちにする。

中には開閉ボタンが赤く輝き、室内に赤と緑のランプ付きのサイレンの緑色の光が回転していた。

エミルはすぐにボタンを押して赤に切り替えしたが、門は一度開けるとすぐには閉まらない。しかも、そのボタンと連動して街を囲う水堀を動く陸橋も下がってしまう。

それは少なくとも、数体のモンスターの侵入を許してしまうということだ——しかも、今はエミルと左腕を落とされたメルディウス。そして、戦闘経験の浅い星のみしかこの場にいない。

内部に入っていたモンスターがすでに撃破されたのも、相手に知られているはずだ。

つとなれば、ここでの戦闘は向こうも主力級を当ててくるはず——この後の戦闘は激化するの火を見るより明らか。

まあ、エミルは星を戦わせるつもりはない為、実質エミルとメルディウスの2人だけだ。この現状でモンスターとの戦闘は、できれば避けたいのが本音だろう。

本来レイニールがいれば、ギルドホールにいる仲間達を呼ぶこともできるのだが、いないのではそうもいかない。

徐々に開門する大きな2枚の重厚な鉄板の扉に、その場にいる3人は思わず息を呑む。

開いた扉の先から出てきたのは街の外壁ほどもある巨大なトロールだった。

「——なっ！」

「——でかいな……」

エミルとメルデイウスはその大きさに言葉を失っていた。

それもそうだろう。その身長はゆうに50メートルは超えている。こんな化け物とエミルは手負いのメルデイウスと星を守りながら戦わなければいけないのだ。

つとエミル達の方を向いていたトロールが門を越えて敷地内に足を踏み入れると、ぐるりと振り返って巨大な鉄の扉の両端に手を掛ける。

——グウオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!

けたたましい咆哮が辺りに響くと同時に、閉まろうとしていた街の門がギシギシと音を立てて止まる。

巨大なトロールの足元からは、数多くのスケルトンやゾンビなどの死霊の兵士達が街の中に向けてなだれ込んできた。

数千というモンスターが押し寄せるのを、たった2人では到底止められない。

星は腰に差したエクスカリバーの柄に手を掛けるのを見て、エミルは慌ててその手を掴むと横にいるメルデイウスの方を向く。

「——この数はとてもじゃないけど抑えられない……撤退よ! 一度下がりましたよ!」

エミルが撤退を叫ぶと、背後から何者かの声が響く。

「なんだよ! 情けねえ! なメルデイウス!!」

「——ツ!? その声はバロンかツ!!」

建物の屋根に登っている騎馬に乗った人影が颯爽と屋根伝いに地面へと向かって降りてくる。

エミル達の前に現れたのは漆黒の馬に跨がった漆黒の鎧に漆黒のマントの男と、茶色いセミロングの髪の革鎧の少女だった。

敵の本当の狙い5

メルデイウスの前に来るなり、漆黒の鎧の男が彼の左腕を指さして大声で笑う。

「あーはっはっはっ!! なんだそのざまは!! 腕が片一方吹っ飛んでるじゃないか!! ププツ、凄腕のプレイヤーの癖に腕なしとは——本当に情けねえーなツ!!」

「……くツ! うっせ! てか、何しに来やがったんだよお前は!」
「はっはっはっ!! ……なんだと思う?」

もったいぶったような口ぶりでにやけながら文字通り騎馬の上から見下すバロンに、メルデイウスのプライドが爆発する。

「邪魔するなら帰れ! 今はお前に付き合ってる暇はないんだよ! 見て分かんねえーのか!!」

「ふはっはっはっ!! なんだその言い草は! 助けてほしくないのか? 助けてほしいなら、素直に地べたに這いつくばってこの俺様に向かって頭を垂れる! この腕なしの平民風情が——グフツ!!」

騎馬の上に乗っていた少女が後ろから思い切りバロンの頭を殴り、首が折れるかと思うほどに大きく揺れる。

大きく上下に動いた首を撫でながらバロンが叫ぶ。

「——何をする我が妹よ! 首がグキツとなったぞ! グキツと!!」
「何度も言わなくても分かるから! てか、余計なことを言わずに、助けに来たって素直に言いなよお兄ちゃん。そんなんだから友達がいらないんだよ……」

「……うむう、我が妹ながら容赦のない。まあいい! ならば、俺様の力を見せてやろう!!」

バロンは腰に差した漆黒の剣を引き抜くと、それを月に向かって掲げた。

彼は本来は大剣『レーヴァテイン』の使い手だったはずだが、今彼の手に握られているのは漆黒の刃の中心が赤く線のような模様が付いていて、柄にはドラゴンが口を開けたような装飾が施されている片

手剣だ。

満月から降り注ぐ光を浴びて、黒く光り輝く漆黒の剣先それはまるで武器ではなく、高価な美術品の様だった……。

「今宵は満月か……この漆黒の刃に光が降り注ぐ時、我が内なる黒炎竜が目を醒ます！ フツフツフツ……溢れる！ 溢れて来るぞ！ 俺様の生命力を吸い尽くす様に刃に輝く黒炎が……我が魂を喰らい地獄の炎で敵を切り裂け！ 覚醒めよ我の中の黒炎竜よ!!」

手に持っていた剣の刃が漆黒の炎を吹き上げ、バロンはその炎に包まれた剣先を敵の軍団に向ける。

「——フンツ！ ハッハッハッハッ!! 貴様らに覚めない悪夢を見せてやろう。我が漆黒の炎と軍団が全てを呑み込む！ 蹴散らしてやれ！ 我が無敵の精鋭達よ!!」

辺りに轟くほどの笑い声を上げたバロンの周りから次々に漆黒の鎧に身を包んだ兵士達が現れ、その深紅に輝く瞳が門を越えて入ってきたモンスター達を捉える。

直後。それぞれに様々な得物を構えてガシヤガシヤと重鎧を揺らしながら、敵に向かって攻撃を仕掛けていく。そして、兵士を召喚した当の本人はというと……。

「……おおおおおお。静まれ！ 静まれ！ 我が中の黒炎竜よ!! ——くツ！ やはり冥界の支配者である黒炎竜を従えるのは難しいか……な、なに!? この俺様の魂を冥界へ連れて逝こうと言うのか……くツ！ しかし、いくら冥界の支配者のドラゴンであっても、この俺様の精神が貴様なんぞに侵食されると——」

背中のマントを揺らしながら、何故か剣を持った右腕を押さえて苦しがるバロンを皆、ぽかんとした表情で見つめている。

それは実の妹であるフィリスも同じようである——。

「なにやっってるんだか……」

馬の上で腕を押さえ上下に体を揺らす兄に呆れながら、フィリスはエミル達の方へと歩いてきた。

微笑みを浮かべた彼女はゆつくりとエミル達の前に歩いてくると、メルデイウスの前にきて軽く頭を下げる。

「メルデイウスさん。兄が迷惑を掛けてすみません」

突然頭を下げられ、メルデイウスは少し驚いた様子で仰け反った。「いや、それはいつもの事なんだけどよ……あいつ。レーヴァテインはどうした？ あの手はブラックドラゴンブレイザーだろ？ 店売りの中ではそこそこの性能がいい武器だが、それでもレーヴァテインの足元にも及ばない。なんて言ってもレーヴァテインは3つの素材アイテムを合わせて、なおかつ500以上の武器を打った腕のいい鍛冶屋に頼まなければ完成しない。レア中のレア武器だぞ？ 店売りの武器とは比べ物にならないだろ」

それを聞いて、フィリスは少し困り顔をして人差し指で頬を掻くと、少し煮え切らない様子でその質問に答える。

「あの……えつとですね。強いて言うなら……兄の趣味です……」

少し間を開けて、メルデイウスが大きくため息を漏らすと彼は呆れた様子で俯く。

「だろ？ ……となるとあのマントも」

「はい。どうやら、同じ四天王のデュランさんに触発されたらしく、兄も同じ物を付けると……」

「はあ。四天王の2人が白いマントと黒いマントって……オセロかよ。俺も緑のチェック柄のマントでも買えってか？」

「あははは……」

手で顔を覆うメルデイウスにフィリスは苦笑いを浮かべた。

そんな彼女に向かって、不思議そうに首を傾げたエミルが話し掛けた。

「でも、よく私達がここに居るって分かったわね。なにか秘密があるの？」

「ああ、それはお兄ちゃんと夕食を食べに出て、小虎君の姿が見えたので話し掛けたのに反応がなかったから、なにか変だなーっと思っただので、ここまで付けてきたんです」

不思議そうに首を傾げているエミルに向かって、フィリスはその理由を呆気なく喋る。

エミルは納得した様子で深く頷くと、今度は星がフィリスに遠慮が

ちな声で尋ねた。

「あ、あの……あの人は大丈夫なんですか？　なんだかすごく苦しそうですね……」

眉をひそめ、心配そうな眼差しをバロンに向ける星。

そんな星の肩に手を置くと、膝を折って目線を合わせたファイリスが告げる。

「ああ、あれは治らない病気みたいなものなんだ。だから、そつと見守ってあげてほしいな。えつとあなたは確か……星ちゃん？

だっけ。ちゃんとお話するのは初めてかな？　あつ、もしかして見た目は子供だけど実は大人とか……」

額に汗を滲ませながらそう尋ねたファイリスの顔を見て、星は不思議そうに小首を傾げている。

まあ、紅蓮に同じように接した時に危うく殺されかけたファイリスからしてみれば、それだけ慎重になるのも無理はないが……。

多少緊張しながらも星の返答を待っているファイリスに、どう言葉を返せばいいのか困っている星の代わりにエミルが言葉を返す。

「この子は小学生よ。何より、嘘をつくような子じゃないしね」

そう言っただけでくるエミルに星も微笑み返した。

バロンの召喚した漆黒の兵士達のおかげで、門を抜けてきたモンスターを押し返し始めている。

それもそうだろう。敵の数の2倍は居る漆黒の鎧を身に纏った兵士達は門を囲むように大きく展開できるが、モンスターは巨大なトロールが辛うじて開けている狭い門の間を通らなければいけない。

おそらく。見えないだけで門の先には、モンスター達が長い列を作っていることだろう。

鎧の擦れ合う音と武器同士が激しくぶつかり合う音が響く中で、戦闘は全てバロンの召喚した漆黒の軍団に任せ。エミル達はこちらに背を向け、門を開いたまま動かないトロールへの対応を考えていた。

いくらバロンの固有スキル『ナイトメア』が強力であっても、門から無限に現れるモンスター達を防ぐのにも限界がある。いや、おそらくこのままいけば、敵の数を大きく削ぎ落とせる可能性はある。しか

し、相手も馬鹿ではない。このままなんの手段も取らずに現状を放置することはないだろう。

今一番怖いのは、街を守る門が開いているという事実だ——もしも、トロールの目的が門を開いて雑兵とも言える低級モンスターを大量に街に入れることではなく、もっと巨大な、主力級モンスターを待っているとしたら……そう考えると、同士討ちという最悪の事態の混乱が静まり切っていないギルド連合軍では、最悪の場合は総崩れになり始まりの街の二の舞になり兼ねない。

ここは少しでも早く門を押さえているトロールを退かさなければならぬのだが、エミルのリントヴルムは再召喚までの時間がまだ経っていない。レイニールも今はギルドホールの部屋で眠っているだろう。

敵の本当の狙い6

現在エミルの使えるドラゴンの中で、トロールに匹敵するほどのドラゴンは存在しない……。

「――まずいわね。あのトロールをなんとかしないと……」

「くそッ！ 俺の左腕があれば、あんな野郎一瞬で街の外に吹き飛ばせるのによー！」

「左腕……メルデイウスさん。その左腕はアイテムで治せないんですか？」

考え込んでいたファイリスがメルデイウスに尋ねると、その問いに彼は即座に答える。

「無理だな。負傷は一度撃破されて教会に戻るか、宿屋に泊まるか、風呂に入るしかない。って言っても、普通は風呂もマイルームにはないからな。結局、今の現状じゃギルドホールやギルドホールの風呂に入る以外はねえー。だが、今から呑気に風呂なんか浸かつてる暇はないからな。今すぐにつて言うのは不可能だ！」

悔しそうに歯を噛み締めるメルデイウス。ファイリスも困り果てたように俯き加減に顎の下に指を当てて考え込む。

漆黒の兵士達が数に物を言わせて突破できそうなものだが、それはあまり現実的ではない。何故なら、トロールは門を支えている。しかも、今なおモンスターが流入している現状で、最も敵の交戦が激しくなる場所が門の前であることは言うまでもないだろう。

そんな場所に強引に押し込めば、今度はバロンの漆黒の兵士達が危機に陥りかねない。それもそうだろう。現に門を隔てた先には多くのモンスターが所狭しとひしめいている。

しかも、トロールの足元にいくということとは、踏み潰されるリスクを常に負って戦うということでもある。

さすがに今後どうなるか分からない現状下で、リスクが高すぎる。今後のことを考えれば、バロンには少しでも戦力を温存してもらいたい。

つと、皆が作戦を考えているのに気付いたバロンが声を張り上げ叫

ぶ。

「なにを考えてるんだ？ 要は、あの扉持つてるデカブツを消し飛ばせばいいんだろ！」

バロンが手に持っていた漆黒の炎に包まれた剣をトロールの背中に向けると弓兵達は弓を引き絞り、槍兵達は持っていた槍を右手に構え大きく腕を引いて、槍を投げポーズのまままで全身に力を込める。

「――よし。放て!!」

その掛け声の直後、数百、数千という槍と矢の雨がトロールの背中に降り注ぐ。

巨大なトロールの肌を貫き、槍と矢が一瞬にしてまるでハリネズミの様に背中に突き刺さり、トロールは堪らず叫び声を上げた。

悲痛な叫び声を上げているトロールの真上に表示されたHPバーが物凄い勢いで減り、イエローゾーンまで一気に下がる。

それを見た誰もが『勝った』と勝利を確信して疑わなかった。

しかし次の瞬間、再びけたたましい雄叫びが辺りに木霊してその緑色の表皮が徐々に赤みを帯び、完全に全身を真っ赤に染め上げた直後、減少していたHPが全快し。しかも、背中に槍や矢が突き刺さっているにも関わらず、継続的なHP減少もなくなっていた。

しかし、そんなことは本来ならば起こり得ないことだ。モンスターに対して矢は直撃して数秒間はダメージが継続する。そして槍に関しては継続してダメージを与える仕様になっている。だが、それは当たり前前のことだ――矢はまだしも槍を突き刺せば武器を手放している間。別の武器は使用できない片手剣など片手で扱える物は、両手に持つことができるが、装備が離れてもその重量はプレイヤーに掛かったままになる。そして槍に関しては両手武器――つまりは、敵に槍を突き刺した状態では、常に無防備な状態になっているということだ。それだけのリスクを背負っているからには、負傷で継続ダメージくらのボーナスがなければ不公平だろう。まあ、それも武器から距離が離れすぎると無効になってしまうのだが……。

赤くなったトロールは扉を押さえていた腕に更に力を込めると、ギンギシと音を立てて強引に限界まで開く。

限界まで大きく開いた扉から、更に大量のモンスターが押し寄せ、圧倒していた漆黒の兵士達が徐々に押し返され始めた。

「……もう余裕がねえーな！ 仕方ねえー。俺のベルセルクの爆発で吹き飛ばすしかねえーのか！」

手に握られた金色の大斧『ベルセルク』を見つめ、メルディウスは迷っていた。

普段なら頼んでもいないのに無駄に爆発能力で辺りを吹き飛ばすのだが、今回はそうはいかない。

何故なら、今は腕が一本欠けている状況で爆発能力を片手のみで発動させなければいけないのだが、問題は片手だけでやれるのか？というところだ。

いともたやすく行っているのだが、ベルセルクの武器スキルに自分の固有スキルを合わせているからこそ凄まじい爆発になる。しかし、片手ではその爆発を抑えきれないのが現実だ――。

バランスを崩したまま勢いに吹き飛ばされてしまえば、運が悪ければ飛ばされた先で死ぬことも考えられる。

そうなれば、ギルドのメンバー達にも自分を逃した紅蓮にも申し訳が立たない。紅蓮の名前はギルドにもフレンド内にも残されているが、それがどんな状況にいるのかまでは分からない。もしかすると、敵に捕まっている可能性だってある彼女の安否が確認できない今、メルディウスという精神の要を失うのは、ギルドにとっては大きな痛手になる。

自分だけの命でない以上。ここで安易に決断を下すことはできない、かと言ってこのまま状況を放置するというのは最もやってはいけない愚策だ――敵の勢いが増した今、メルディウスにはここでリスクを承知で自ら敵を撃退するか、仲間達を呼びにいったんこの場を離れるか選択する時を迫られていた。

「――くそッ!! どうしたらいいんだ俺は……お前ならこういう時どうする？ ジジイ……」

強くベルセルクを握り締め。額から汗が流れ落ち険しい表情で、赤くなったトロールの背中を見つめるメルディウスに、ファイリスが話し

掛けてきた。

「メルデイウスさん。もしも、その大斧の力を使えたら、あの化け物を退治できますか?」

「そんなの当たり前だ! 俺のベルセルクに吹き飛ばせないものはねえー!!」

フィリスは決意したように深く頷くと、メルデイウスの無くなった左手を自分の両手で包み込むと、真っ直ぐにメルデイウスの顔を見つめ。

「私の体をメルデイウスさんに預けます!」

「なっ! はっ? 何を急に……」

彼女の口から出た言葉が理解できずに、メルデイウスは頭の上に『?』マークを浮かべている。

フィリスは握っていた彼の腕を自分の体に巻き付けると、メルデイウスの懐に潜り込んだ。

「私が左手の代わりをします。メルデイウスさんは私の体を支えて下さい!」

「お、おう……?」

混乱する彼を余所に、フィリスはメルデイウスの持つベルセルクの柄をしつかりと握り締める。

「——メルデイウスさん!」

「本当にいいんだな? なら、行くぞ! 振り落とされるんじゃねえぞ!」

メルデイウスは左腕でフィリスの体を支えると、地面を強く蹴って高く飛び上がる。

その後、大きく真上にベルセルクを掲げてトロールの背中目掛けて降下する。そして声を張り上げてフィリスに叫ぶ。

「今だ! 思い切り振り下ろせ!!」

「はい!」

彼の掛け声を合図にフィリスは全身全霊を持ってベルセルクを振り下ろす。

口元にニヤリと不敵な笑みを浮かべたメルデイウスが彼女に合わ

せて、ベルセルクの柄に力を込める。

「——行くぜ！ 吹き飛ばせベルセルク!!」

巨大なトロールの背中に振り下ろされた刃が、赤い表皮に突き刺さり激しい爆破を起こし、トロールの巨体をいともたやすく門の外に吹き飛ばす。

敵の本当の狙い7

トロールは背後から押し出される形で門から引き剥がされ、バランスを崩しながらなんとか壁の前で踏み止まると、体を反転させる。どうやら、トロールは再び扉を開こうと考えているようだ――。

体を空中で回転させ、地面に着地したメルディウスはその様子を見て叫ぶ。

「させるかよ！ もう一回やるぞファイリス！」

「はっ、はい！」

返事をした時にはすでに、メルディウスの体は動いていた。

地面を駆けると、次々とモンスターを踏み台にして、閉まり始めた門の先にいるトロールを見据え勢い良く鎧を着たスケルトンナイトの肩を蹴り飛び掛かる。

彼のモンスターを踏み台にしていくその芸当だけでもファイリスには衝撃なのに、それ以上に驚いたのが彼の咄嗟の判断力の早さだ。向かってくる敵の攻撃を避けながらも歩みを止めようとしてもしない。頭で考えていたのでは決して間に合わないだろう……それはまるで武器の方から彼に道を譲っているように見えた。ファイリスは今、トッププレイヤーが故に持つその力量の差を文字通り肌で感じている。

風を切って獲物を仕留める隼の如く空を駆けるメルディウスと一体になりながら閉まりそうな門を高速ですり抜けトロールに突貫する。

徐々に迫るトロールの体が見えたと思った時には、すでにベルセルクを構えていた。

「――さあ、もう一発だ！ 今度のはさっきの比になんねえーぞ……歯を食いしばりやがれ!!」

彼が力を込めたのと合わせ、ファイリスも全身の力を腕に込めて振り抜いた。

ベルセルクの刃がトロールの左の首筋に当たり、凄まじい爆発により轟音と爆風を巻き起こしながらトロールは橋を越えて吹き飛ばされていく。

咄嗟に飛ばされるトロールの体を蹴ったメルディウスは、その爆風をも利用して加速させると、閉まる直前の門から街の中へと舞い戻る。

街の中に取り残されたモンスター達の真上をロケットの様な速さで通過して。着地後、逆手に持ち替えたベルセルクの刃を地面に突き立てて勢いを殺す。

滑るように地面を踏みしめ、彼の周りに盛大に土煙を舞い上げる。つと、スルツとフィリスの体がメルディウスの腕から抜け落ちた。それに気付いたメルディウスは即座にベルセルクから手を離し。その右手でフィリスの左腕をしっかりと掴むと、力任せに自分の体に引き寄せてがっしりと抱きしめる。

メルディウスがフィリスを庇うように背中から建物の壁に激突した。だが、幸いにも十分に減速できていた為、HPは左程減少せずに済んだ。

「——痛ってえー。大丈夫か？ 悪りいな、手が滑っちまった。ああ、今は手はないから腕が……か？」

難しい顔をしながら首を傾げていた。

メルディウスの胸に押し付けられていた顔を上げたフィリスは頬を赤らめ、その瞳はうつとりとしていて潤んだ瞳を向けている。

つと、その一部始終を見ていたバロンが怒鳴り込んできた。

「おい！ 人の妹に馴れ馴れしくするな！ バカが移るだろうが、この脳筋野郎!!」

「——なんだと？ いつも兵士達の後ろでビクビク震えているハムスターが！ まだ、冬眠の時期には早いんじゃないかねえーのかよ！」

顔を真っ赤にしたバロンは、メルディウスの肩を押して彼を妹のフィリスから遠ざける。

そして、ビシツとメルディウスに向けて人差し指を突き出すと。

「てめえーにだけは、絶対妹はやらねえー!!」

「ばっ、ばか！ 俺はそんなつもりはねえーよ！」

「はあ？ 俺の妹が可愛くないとかふざけるなよ！」

「可愛くないとは言っていないだろうが！ フィリスは可愛いさ。どこ

かのバカに似てなくなてな!!」

「何だとコラッ！ 俺に似ての間違いだろうが！」

言い争う2人がヒートアップし、ジリジリとその距離が頭と頭が当たりそうなほど迫るが、どちらも一歩も引く気はないらしい。

だが、そんな2人の些細な争いなど関係なく。固有スキル『ナイトメア』で召喚された漆黒の兵士達は閉ざされた扉の中に取り残されたモンスター達を凄まじい早さで駆逐していく。気が付くと、あつという間にモンスターの姿はなくなり役目を終えた漆黒の軍団も姿を消した。

エミルは大きく強張らせていた肩から数時間ぶりに力を抜くと、安堵した様子で息を吐き出す。

「はあく。やつと終わったのね……」

そう呟いて横にいた星の頭を優しく撫でる。

「それにしても。今回はお手柄だったわよ星ちゃん。あの時に早めに敵を見つけ出せなかったら、今頃街はモンスターだらけだったわ。敵も街での事件も攪乱目的だった……星ちゃんがいなかったら、街の門を開けられて今頃街の中はモンスターの大量で埋め尽くされて大惨事だった。ありがとう！」

「いえ、私は別に何も……えっと、その。こ、この剣があつたからですし……」

頬を真っ赤に染めて恥ずかしそうにそう告げる星の手を掴むと、エミルは微笑みながら「ご褒美に何か美味しいものでもごちそうするわ」と星とフィリスに告げると、2人は嬉しそうに表情を明るくさせる。

なおも言い争いを続けている2人をその場に残し、フィリスとエミル、星の3人は、まだ暗い夜の街へと消えていく。

千代の街の外れにある木で作られた櫓の様な物見台——門を見下ろすことのできるその中から狼の覆面を被った男と、仮面を付けた女性のエミル達の戦いの一部始終を見つめていた。

覆面の男は自分の覆面が潰れるのも構わず。右手で顔を覆って「ふ

ふふっ……」と不気味な笑みを漏らしている。

胸元と背中が大きく開いた様々な装飾品の施されたインドの踊り子が着ているような青いドレスに身を包んだ女性の方は、覆面の男の様子に全く動じることなくその様子をじっと見ている。

だが、仲間のはずの彼女の仮面の下から見える瞳は鋭く、まるで獲物を捕らえる前の研ぎ澄まされた肉食獣の様な瞳だった。

「ふふふっ……素晴らしい。イヴの持つエクスカリバーにはそんな仕掛けまであるとは……さすが私の敬愛する博士の用意していた装備だ！ まさに無敵！ 全てが合理的！ 博士は完璧だ！ だが……まだまだ能力が隠されているのは間違いないようだな——今日はそれが分かっただけで良しとしましょう。ですが、この私の作戦に土を付けられた事には変わりはありません。千代の皆さん……次のパーティーを楽しみにしてくださいね。ふふふっ……アーハッハッハッハッハッハッハッハッ!!」

覆面の男は不気味な高笑いを残し、隣に居た女性と空間に開いた転移用のワープホールの中に消えていった。

第6章

予想外の再会

3人は街を歩いていくと、甘味処を見つけた。その古そうな木製の看板には『甘味処 白タマ庵』の文字が——星はその看板に、何か以前にもこんなことがあったようなデジヤブを感じながら難しい顔で首を傾げた。

中に入ると、更に見覚えのある大きな招き猫の置物が左右に置かれている。

気付いた厨房の中から店主らしき人物が現れる。

「いらつしやいませ。何名様ですか？」

出てきた若い女店主が頭を上げると、星は彼女を見て「あっ！」と驚きの声を上げた。

それもそのはずだ。彼女は星がエリエヤレイニールと立ち寄った『宇治抹茶金時あんみつスペシャル』を出す店だった。だが、その出来事は始まりの街でのことで、千代の街のことではない。

顔をじっくりと見て見たが、よく似た双子と言うには似過ぎていゝる。ここまで似ているのは双子でもそうそうないだろう……。

星が意を決して店主に尋ねる。

「……あの。始まりの街でもお店をやってましたよね？」

「ああ、あの時の！ 抹茶が苦手なお客さんですね。ピンクの髪の方は今日は一緒じゃないんですか？」

その彼女の返答を聞く限り。間違いなく始まりの街で店を営んでいた人物と同一人物ということ間違いなさそうだ。しかし、ここで一番不可解なのはどうして彼女が無事なのかということだ——。

少なくとも、エミル達には街の人間を救出する余裕はなかった。だからと言って、周囲をモンスターの大量に包囲されている街から個人が脱出できたとも考えにくい。

街を囲むモンスターは街から脱出しようとしているプレイヤーを優先的に攻撃するように設定されていた。本来モンスターは機械的

な動きしかできず、臨機応変な対応ができない。その為、外敵より内部に意識がいくようにプログラムされているのだろう。

それはまるで、街に居る無抵抗なプレイヤー達を狙っているかのようだ……殺戮を目的として街を攻めている様な――。

だが、今日の前にいる甘味処の店主は、脱出不可能と言われた街から抜け出している。

何らかのトリックがなければこれは不可能なことだろう。もしくは彼女の持っている固有スキルがそれだけレアなスキルであるかのどちらかだ。

星は意を決すると、彼女に事の真相を尋ねてみる。

「――あの。あなたはこうしてこの街に逃げて来れたんですか？」

「それは簡単だよ？ 私……いえ、私達は彼等に助けられたの」

「……彼等？」

女店主の話聞いたエミルが思わず、2人の間に口を挟んだ。

エミルのその質問に、彼女は笑顔で答えてくれる。

「私も、まさかブラックギルドと呼ばれている彼等に、助けてもらえるとは思っていませんでしたよー」

「ブラックギルドって……もしかしてダークブレット!？」

驚きを隠せない表情で目を見開くエミルに、女店主は笑顔で頷いた。

彼女が言った言葉を信じないわけではないが、明らかに不自然だ――ブラックギルドのダークブレットが人助けをするとは考えにくい。

何より彼等にメリットがなさすぎる。人助けをするような者達ではなく、いくら四天王の一人であるデュランが率いているとはいえ、彼はメルディウスや紅蓮達とは違って謎なことが多すぎる。

ただ、エミルはデュランのことを油断できない人物だと警戒している。星に幾度となく接触して、しかもあの始まりの街の危機的状况でも星を抱えて逃げていた。

だが、エミルは知っていた。彼は自分の利益の為にしか行動しない人物である……それは、ダークブレットのアジトを攻撃した時に彼等の武器、それと組織そのものを自分の手中に収めたからだ。これに

よって、彼はこの世界でも有数の勢力になったのだ――。

「――どうして彼が……どんな目的でそんなことを？ 避難した人から戦力を補強する為？ いや、逃げてきた者達は殆どが戦力外の人物ばかりのはず……ならなぜ？」

難しい顔でぶつぶつと口にしてエミルが考え込んでいると、その横で星が女店主に尋ねる。

「どうやって逃げてきたんですか？ 街の外は敵で囲まれてましたよね？」

「ああ、それが一瞬だけ。敵が一箇所に密集した時があったでしょ？」

「……ん？」

小首を傾げて頭の上に大きな『？』マークを浮かべている星に、彼女はくすつと悪戯な笑みを浮かべている。

まるでクイズでも出しているかのように得意げな女店主に、今度はフィリスが声を上げた。

「あつ！ 私とお兄ちゃんが敵に逃げられたあの時！」

「当たりです！ あの時、敵の包囲網は街の正門の部分に集中していました。そこにダークブレットのリーダーの白いマントの男性が、逃げる意志のある人達を集めたんです。でも、最初から脱出することを考えていた人以外は、急な出来事に困惑して付いてきたのは数百人ですけど……」

彼女は他のプレイヤー達を残してきたのを心苦しく思っているのか、表情を曇らせている。

まあ、結果的に始まりの街は陥落したわけだから、そこにいたプレイヤー達はもうこの世界にはいないのだ。

かと言って、現実世界に戻れたとも思えない。おそらく、大勢の間がこの世界にも現実世界にももういないのだ――。

難しい顔をしていたエミルが考えるのを止め、神妙な面持ちで女店主に聞く。

「……でもどうやってモンスターから逃げたの？ 初動では敵をやり過ごせても、敵が数百もの人間を見逃すわけがないわ。どうやってここまで逃げてきたの？」

エミルの核心を突く質問にも、彼女は冷静に答える。

「そうです。ですから、彼は使ったんです。街の外れにある転移用の魔法陣を……」

「そんなの不可能よ！ あのテレポート機能は改悪によってどこに召喚されるかランダムのはず！ 数百という出口の中から決まった一つを選ぶのは無理よ！」

彼女の言う通りだ。街に設置されているテレポート用の魔法陣はこの事件以来、任意の魔法陣にテレポートできなくなっている。

ランダムで飛ばされる魔法陣を使うというのは自殺行為以外のなものでもなく。マスターですら、魔法陣を利用して移動するという作戦を立てなかったのだ。

優秀な指揮官とは、不確定な要素を想定には入れるものの。だが、不確定な物を使用することは決してしない。

簡単に説明すると、優秀な者はリスクを思考はするが、リスクを冒すことは嫌うということだ……。

「そうです。でも、それで来たのは事実です。彼は無数の敵に襲われている始まりの街で待つより危険な場所はない。それに彼は言いました『ダークブレット、メルキュール合わせて二千人規模の大規模なパーティーになる俺達に向かってくる敵は容易に倒せる』と……もちろん。無傷ではありませんでしたけど、運良く数十回という回数を経て、千代の近場に着いた私達は、敵を彼のバインドの能力で拘束し、容易に街の中に逃げ込むことができたんです」

彼女の誠実な目を見れば、嘘を言っていないのは分かる。

しかし、デュランに『バインド』などという能力はない。おそらくは、また彼のオリジナル固有スキル『アブソープ』の能力で周囲の仲間の能力を使ったのだろう。

彼の固有スキル『アブソープ』には周囲にいるプレイヤーの固有スキルを使用できる能力があり、しかもその能力を更に強力なものにできるのだ。

たとえ固有スキルのランクがDのようなハズレスキルでも、彼に掛ければどんなスキルであつてもSクラス級のスキルに変化できる。

まあ、そんな強力な固有スキルを持つ彼が、千人規模のエルフ限定ギルド『メルキユール』と千人もの元殺人ギルド『ダークブレット』始まりの街から逃げるプレイヤー合わせ。二千人以上のプレイヤーを従えているというのは、つまり約二千個もの固有スキルを使えるということだ——しかもその全てがランクS以上となれば、多くのプレイヤーを逃がせたのも合点はいく。

これは日本に4人しかいない。テスターと呼ばれるプレイヤーの一人であるからこそできた作戦であり、他の者では思い付いたところで成功しない作戦だっただろう。

逆を言えば、弓の達人であるエルフを選択したプレイヤーが抜けたことが、始まりの街の陥落を早めた原因だったのだ——。

考えていたエミルは少しすつきりとした表情で頻りに頷く。彼女なりに、今の状況の整理と今後の対策を立てているのだろう。

女店主が居なくなっても、難しい顔をして隣で頻りにぶつぶつ呟くエミル。

すると、一度は厨房の方に引つ込んだ女店主が大きな器の載ったお盆を持って戻ってきた。

「せっかくですし、うちの店一番の人気メニューを食べていって下さい。宇治抹茶金時あんみつスペシャルです！」

そう言った店主がお盆をテーブルの上に置いた直後、ドン！つという大きな音と目の前に置かれた大きな器に山盛りにされた宇治抹茶金時あんみつスペシャルに、考え込んでいたエミルでさえも驚き目を丸くさせている。

しかも、星のだけ上に黒蜜が掛かっている。小首を傾げていると、星の耳元で女店主がささやく。

「……以前。苦いのが苦手だと言っていたので、黒蜜を掛けておきましたよ。ごゆっくりどうぞ」

星は彼女に向けて軽く頭を下げると、女店主もにっこりと微笑んで厨房の方へと消えていった。

それを見送ると、フィリスと星は目の前に置かれている宇治抹茶金時あんみつスペシャルを食べ始める。それにつられるように、難しい

顔で考えていたエミルも考えるのを止めて食べ始めた。

マスターの最大の敵

* * *

数日前に千代を出たマスターは、始まりの街付近の森の中を彷徨っていた。

もちろん。その体には傷一つなく、多くの敵と遭遇したものの。彼のこともだ——圧倒的な強さで瞬殺したのだろう。

夜の森の中をひたすら歩いて行くと、その先の大樹の前に何者かが凭れ掛かりながら待っていた。移動する月の明かりに照らされ、彼の前に映し出された人物。

それは、白いマントに白を基調とする白銀の甲冑を身に纏った男性だった。

某アイドル事務所に所属していそうなほどに整った容姿をしていて、白をテーマカラーとした知り合いに、マスターは一人しか心当たりがない。

「やあ、久しぶりだね。ギルマス……」

「……デュラン」

短い言葉の後、2人は互いの目を見据えながら全く動かなかった。ここは千代ではない。始まりの街の近くの森の中だ——本来ならば、すでに陥落した始まりの街の近くに2人がいるのはおかしい話だろう。

もうここには、守るべき街も人も残ってはいない……。

「——デュラン。要件はなんだ？ おぬしのことだ。ただ世間話をしに、この場所に呼んだわけではあるまい」

「いやー、さすがはギルマスだ。全てお見通しだねー。でも僕は世間話をしに、ここに君を呼んだんだよ？」

人を小馬鹿にしてはぐらかすような彼の物言いに、マスターの眉は不快感を露わにするように動く。

そして今度は、デュランの口元が不敵な笑みをもらす。

「ギルマス。僕に何か言いたいことはあるかい？」

「……いいや。ただ一言——儂はおぬしを信じておるぞ？ デュラン」

そう言い残して、マスターはその場から姿を消した。

「——信じてる。か……僕はそんなに殊勝な人間じゃないよ……」

デュランもそれを見送ると、息を吐いてゆつくりとその場から離れた。

彼と別れたマスターは向かってくるモンスターを次々に撃破しながら、森の中を駆け抜けていた。

向かってくるモンスターは武装したりザードマンやゴブリン達だが、その手には漆黒に輝く武器が握られている。

漆黒の剣は間違いなく『村正』だ。レベルを最大値まで上昇させるこのアイテムだが、マスターにはそんな小細工は通用しない。目を血走らせて向かってくるモンスター達を、マスターの拳が容赦なく貫いていく。

森を奥へと進む度に、次第に敵の抵抗が強まる。ざっと見て、十萬の部隊がいるように見えた。

しかし、この数は不自然だ——本来ならば、もうプレイヤーのいな始まりの街にこれだけの数のモンスターを配置する必要がない。

今までもそうだが、モンスターを指揮する狼の覆面を被った彼は執拗にプレイヤーを撃破することを重視している。

そんな彼が、この場所に多くのモンスターを遊ばせておくとは考えにくい。つとと言うことは、この場所に隠しておきたい何か大事なものがあるとしたか考えられない……。

一撃で数十体の敵を吹き飛ばしながら、マスターは更に足を速めた。

つと、そこに巨大な山の中にぽっかりと開いた洞窟を発見する。どうやら、その周囲は不可侵領域らしく。まるで半円を描く様に、それ以上はモンスター達も入ってこようとしない。

洞窟の入り口はギザギザの歯のようになっており。まるで生き物が

スターの目が大きく見開いた。

それを察した覆面の男が追い打ちを掛けるように言葉を続ける。

「——全く、哀れな娘だ。両親に捨てられ、自分の殻に閉じこもり友達も作らず。挙げ句の果てに親友すら守れない——貴方もそんな彼女が哀れだったから拾ってやったのでしょ？　どこぞの河川敷に捨てられた小汚い仔犬をツ!!　彼女は本当に無価値で哀れな粗悪品だ!!　所詮は主人の寂しさを紛らわせる為の愛玩動物とも知らずに、愛嬌を振りまくだけの存在でしかないというのに……まるで、自分は価値がある存在だと勘違いしている!!　貴方を葬った後で彼女の装備をひん剥き、たつぷりと生まれてきたことを後悔させながらモンスターで鬩った後に、泣き叫び貴方の名を呼ぶ彼女に絶望を植え付けて最後には羽虫の様に潰して差し上げますよ!　まあ、雑種の雌犬でも、メインディッシュのイヴを食すまでの前菜にくらいはなるでしょう……まあ、モンスター達の体液と土に塗れた体は、良くて切り干し大根の胡麻酢あえと言ったところでしょうがね!」

「……………好き勝手言うてくれるな……………」

俯き加減にマスターは全身を震わせ、感情を抑える様に拳を握り締めている。

その様子から、その言葉に彼が相当頭に来ているのは明らかだ——しかし、心は乱されても思考までは乱されはしない。

現にマスターの瞳は、一瞬たりとも覆面の男を捉えたまま動いてはいない。

それは、まだマスターは彼を最悪最強の敵であると仮定しているということの表れでもある。

覆面の男は、マスターの顔を見つめてゆっくりと口を開いた。

「……………しかし、正直な話。私でもこのモンスターでも貴方を倒すことはできない。私が調べたところ、貴方には弱点と呼べる弱点がない。ただ、私にとって貴方は邪魔なんですよ……攻略方法のない貴方が……」

「フンツ……ならば、あの娘は攻略可能ということか?　随分とお前はあの娘にご執心なようだが」

そのマスターの問いに、彼は全く間を空けずに答える。

「当然。既にイヴは攻略済みですよ。もう複数のシミュレーションでも結果は同じ、私の完全勝利です……欠陥のあるシステムでは意味がない。彼女はもうすでに僕の物だ!! しかし、シミュレーターではお前は最大の障害にして、最悪の不確定要素なんだよ! だから………僕の為に消えて下さい」

冷静な口調から一転、狂気染みた奇声を上げたかと思うと、静かになりマスターを睨む。

その瞳は憎悪と嫉妬に溢れていた。だが、そんな彼の瞳を受けてもマスターは冷静に言葉を返す。

「お前の言葉は矛盾ばかりだな……儂には弱点がないと言った。ならば、どうやってその儂を倒すと言うのだ!」

「……ふふっ、私が倒すものではありませんよ。貴方は勝手に倒れるのです……」

「——勝手に倒れる……だと?」

不可解なその言葉に、マスターも首を傾げるしかなかった。

それもそうだろう。彼の言った『勝手に倒れる』という表現は他のゲームならまだしも、このゲームでは通用しないのだ。

何故なら、このゲームの異常状態ではHPを減らし切ることとはできない。つまり、彼の言う様に勝手に死ぬということは絶対に起こりえないのだ——。

マスターの最大の敵2

マスターは口元に不敵な笑みを浮かべると、覆面の男に向かって言った。

「どうやら、まだ夢でも見ているようだな。この世界では自滅はありえん。最も、己がそれを望まん限りはな！」

そう告げると、彼の返答を待たずにマスターは地面を蹴って彼に襲い掛かる。

「いや、それがあるんですよ……」

余裕な表情でニヤリと笑みを漏らす男にマスターの拳が炸裂しようとしたその時、間を遮るよう何者かが割り込んできた。

マスターの拳を間に入った者の拳で迎撃する。凄まじい破裂音と衝撃波が辺りに広がり、周囲に生えている森の木々を衝撃で捻じ曲げる。

地面に着地し、自分の攻撃を防いだ者の顔を見てマスターは絶句した。

それもそのはずだ。目の前に立っていたのは紛れもなく自分と同じ容姿の人物だった。

黒い道着に尻尾の様に垂れた後ろで結んだ白髪に、肌は褐色になっているという違いはあれど、その目鼻立ちは間違いなく自分そのものだった。

「——なに、儂だど？」

驚く彼を目の当たりにして覆面の男は面白可笑しく笑う。

そしてしばらくして笑うのを止めると、大きく息を吸って呟く。

「貴方は素晴らしい。その力はすでに、このゲームでバグとして削除されてもおかしくないレベルですよ！　しかし、私の用意した彼は、私の権限でその数値すら超えている。しかも彼には貴方の身体能力。このゲームで、これまで培った全てのスキルが入っています。つまり、貴方では絶対に勝てない最悪の相手ということですよ——自分の最大の敵はその己の力そのものなんですよ！　拳帝!!」

そう告げた直後、彼を守るように立っていたマスターのコピーが、

本体である彼に攻撃を仕掛けてきた。

一瞬で目の前に現れたその姿にマスターが目を見開いていると、ものすごい衝撃が彼の体を突き抜ける。

まるで蹴り飛ばされた道端の石ころの様に軽々と吹き飛ばされたその体が地面を転がり、木々も岩も突き抜けて遙か先にある木に背中を打ち付けてやっと止まった。だが、むくつと立ち上がったマスターはすぐにヒールストーンを体に軽くぶつけて受けたダメージを回復する。

「どうですか？ 私からのプレゼントは……貴方の一撃は効くでしょう？ さあ、自分に撃破されて、この世界からも現実世界からも消えてしまいなさい!!」

「……………ふふつ、そうか。これが好敵手と出会った時の感覚か——悪くはないな…………」

マスターはニヤツと笑みを浮かべると、体の前に拳を構える。

すると、間髪入れずに地面を高速で移動しながら、コピーが肉眼で捉えるのがやっとの勢いで向かってくるとまるで弾丸の様な拳を突き出す。

その攻撃を間一髪でガードするが、その勢いを抑えきれずに後方に勢いよく吹き飛ぶ。

しかし、今度は地面を踏ん張ってギリギリ止まることができた。いや、正確には吹き飛ばされてもギリギリ踏ん張れるくらいの勢いに抑えたと言った方が正しいかもしれない。

彼は、コピーが拳を突き出したと同時に後方に大きく跳んで勢いを殺していたのだ——本来。初激の一撃で、マスターのHPを削り切るには十分なほどのダメージを受けていた。だが寸前で攻撃をガードし、しかも後方に跳ぶことによってその威力を抑えたのだ——。

初激ではその力を見切れずに相殺しきれなかったが、二度目の攻撃ならばそんなことはありえない。達人の域に達しているマスターにとって、コピーの一撃の威力を見定めるのに一発受けるだけで十分であり、戦闘経験の差が今のこの状況を作り出したのである。

とは言え、さすがは彼のコピーだ。攻撃が効いていないと見るや、

すぐに次の攻撃を仕掛けてくる。それをマスターも分かっているのか、すぐに迎撃の体制に入り先程と同じようにコピーの攻撃の威力に合わせて勢いを殺す。

彼等の戦いを見て不気味に笑う覆面の男。まあ、マスターが防戦一方になっている姿は彼にとつて相当な娯楽なのだろう。

まあ無理もない。彼のコピーは覆面の男が己で手を加えて作り出したもので、プログラマーとしても科学者としても興味深い対象なのだ――。

防戦一方のマスターは攻撃を受けながらも、隙を見てヒールストーンで回復を入れている。

ここはさすがと言ったところだろう。瞬きする程度の時間で向かってくる攻撃の合間を見極めるのは針の穴に糸を通すようなものだ――しかし、ギャラリーはそうはいかない。さすがに同じことの繰り返しで飽きてきた様子 of 覆面の男がニヤリと不敵な笑みを浮かべると、コピーに距離を取るように指示を出す。

マスターは警戒を解かず拳を構えながら突然の彼の行動に、訝しげな瞳で洞窟の入り口に浮いている覆面の男を見上げる。

度重なるマスターのコピーの攻撃で地面は崩壊し、もはや周囲は見るともなく。木は衝撃波で吹き飛ばされ、大きく抉られた地面は地割れのように大きな亀裂を数多く作っていた。

「マスター。もう貴方に興味はありませんよ。がっかりです……………決めるー！ あの者を消し飛ばしてしまえー！ 真の拳帝よ!!」

「――ッ!?!」

彼の言葉の直後、マスターの目の前でコピーの全身から漆黒のオーラが炎の様に立ち上がる。

それはマスターの持っている中でも最も信頼する固有スキルの一つであることは間違いなく。しかも、その手にはトレジャーアイテム装備『デーモンハンド』がはめられている。

それはマスターの戦意を喪失させるには十分だった……………。

マスターは固有スキルを発動した直後からHPの回復ができない。

そして回復の為にスキルを解除すれば、再使用には24時間という膨大な時間が掛かる。

普段ならそれほど苦にならない時間だが、相手が自分のコピーであり強化版であれば、そのクールタイムは膨大な時間へと変わる。

固有スキルを惜しげもなく使える奴とは違い、マスターは固有スキルの発動は不可能に近い。

実力で上回っている相手に回復アイテムがないというのは、流石の彼でも勝負にならない。

その後の戦況は圧倒的で、固有スキルを発動したコピーに一方的にいたぶられるかたちになった。もはや防御もできず、回復アイテムでなんとか命を留めている状態だ――。

これほど一方的にやられている彼の姿など見たこともない。

「はっはっはっはっはっはっ！ もう虫の息のようだな！ 拳帝とまで呼ばれた男が哀れだね！」

「……………くっ、まだ……………終わらんのか……………」

地面に伏せて苦しそうに顔を上げるマスターが、うわごとのように呟く。

そんな彼に向かって、覆面の男が叫ぶ。

「終わりなんて来ませんよ！ 貴方が死ぬまではね。これはPVPではありません！ HPは残らない。脳にダメージを受け続け、負ければ貴方は死ぬんですよ！ ……惨めなものだ。自分に負けるのはあまりにも惨めですね。最後は私の手で止めを刺してあげますよ」

宙にいた覆面の男が地面に降り立ち。目の前に現れた剣を取ると、一歩一歩地面を踏みしめながら倒れているマスターの元へと向かってくる。その直後、マスターがニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

覆面の男はそれに驚き、慌てて彼から距離を取る。即座にマスターのコピーが覆面の男を守るように立ち塞がった。

マスターの最大の敵③

ゆっくりと立ち上がったマスターはヒールストーンで回復すると、道着に付いた砂埃を払い落とす。その後、勝ち誇った様に腰に手を当てながら豪快な笑い声を上げた。

「——なっ、遂に気が狂いましたか？ どこに貴方が笑う要素があると言うのです!!」

「……………お前は負けたのだ。これが笑わずにいられるか？」

「ま、負けただど？ 嘘をつくな！ 現にお前は虫の息だろうが！ 私が負ける要素など、どこにある！」

憤る覆面の男の声に触発され、彼を守るように立っていたコピーが、マスターに攻撃を仕掛けてくる。

突き出した腕をマスターが片手で容易く横に弾く。その直後、マスターの横の地面に大きな風穴が空いた。

「……………なっ、なんだと!?!」

一番驚いたのは覆面の男だった。

無理もない。マスターのコピーは彼自身が作り出したものだ——しかも、それは今までのマスターの戦闘データをそのまま強化したものの。つまり、マスターがどんなに強いと言っても彼のコピーに勝てるはずがないのだ。

しかし、確実にマスターは彼の作り出したコピーを上回る力を見せている。だが、こんなことがあり得るはずがない。

「——すまんが、時間がないのでな。話はそのゲテモノを潰してからにしよう！」

そう告げた直後、マスターの体から金色のオーラが湧き上がり、夜の帳の下りた辺りを明るく照らし出す。

感慨深げに夜空を見上げたマスターが小さく呟く。

「……………これが最後になるが、悔いはない。良い旅だったな……………」

今までの出来事を思い起こしているのだろう。優しい微笑み浮かべ、満足げに口にしたマスターの瞳が覆面の男へと向けられると、その瞳は先程までと違い明らかな殺意に満ちていた。

金色のオーラを纏ったマスターが拳を構えた直後、視界から完全に消えた。

次に現れた時には、コピーの腹部に深々と突き刺さった拳によってゴムボールの様に軽々と吹き飛ばされた。

間髪入れずに再び高速で移動したマスターは、今までの仕返しとばかりに一方的にコピーを殴りつけ、抵抗を許さない連打で遂にそのHPすら削り切ってしまった。実に呆気ない決着に、覆面の男も何が起きたのか理解できない様子でその場に立ち尽くしている。

だが、マスターが彼の方を向き直すと、怯えたように震えた声を発した。

「なっ、何故だ！ 何故お前が私の作り出した最強の存在に勝てる!?!」
「——なに、簡単なことだ……お前は言ったな。儂の今までのプレイデータをコピーし権限を使って強化したと……それを上回るほどに、儂の力が優っただけのことだ——儂は普段から力を抑えて戦っていた。本気を出すと、システムにバグと認識されてしまうからな。しかし、今回はその封を解除したのだ」

そう告げると、マスターはゆっくり覆面の男の方へと歩き出す。彼の前まできたマスターが、殺気に満ちた瞳で拳を構えた。

「——まっ、待ってくれ！ 私を倒すと、君達は一生この世界から抜け出せないぞ！ それでもいいのか!?!」

命乞いとも取れる言葉だったが。しかし、怯えながらもほくそ笑むその口から発した言葉が嘘であるという確証もない以上、マスターもうかつに手は出せない。

マスターは拳を下ろすと、ため息混じりに告げた。

「儂の仲間がモンスターを無限に増殖させる漆黒の柱を全て破壊した。最早、お主等に勝ちはない。無限湧きしなければ、モンスターなど我々高レベルプレイヤーの脅威にはならぬ。大人しく負けを認め生き残ったプレイヤー達を現実世界に帰還させよ！ 本来ならば、お主にやられた同胞達の仇を討ちたいが、仕方なからう……さすれば命だけは取らないでやろう。さあ、どうする!!」

再び拳を構えたマスターの覇気に気圧されたのか、覆面の男は地面

に尻餅を突き後ろに後退る。

もう勝負は決まったと思った瞬間。完全に怖じ気付いていた覆面の男の前に、露出度の高い服の仮面の女が現れた。

「……この人をやらせるわけにはいかない」

女が覆面の男の体に触れるのを見て、マスターは咄嗟に地面を蹴つて一瞬で目の前に移動し、仮面の女へと拳を振り下ろす。

彼の拳が女の仮面を直撃し、その仮面を剥ぎ落とした。

「——お、お前はッ!?!」

その直後に仮面の女と覆面の男は姿を消した。

マスターは仮面の裏のその素顔を見て驚いているのか、明らかに動揺している様子だった。

「まさか……ライラではないのか? いや、まだ断言するのは早すぎる。しかしあれは……」

「……あれは間違いなく。始まりの街に居たNPCだったね」

マスターの言葉に続ける様に聞こえてきた言葉に、マスターはその声の方に目を向けた。そこには、木の上からマスターを見下ろしているデュランの姿があった。

彼はマスターの驚いた顔を見ると、微かな笑みを浮かべ地面に飛び降りてゆつくりとマスターの元へ近付いてきた。

「やあ、ギルマス。どうだったかな? 俺の仕事の手際は……」

「そうだな。もう少しで危ないところだったが、よくやってくれた」

「なんだ。ベストタイミングじゃないか……ギリギリの戦いは刺激的でいいだろう?」

彼の人をおちよくるような言い方をマスターは軽く流すと、神妙な面持ちで彼に尋ねた。

「お主は先程の者の顔を見たか?」

「ああ、すっかり見たよ。彼女は……いや『あれ』は始まりの街に設定されてた町娘だ。でも、どうして彼女がああ覆面と一緒に居るんだろうね。てっきりレポートを使うからあの子の周りを彷徨っていた女だと思ってただけ……」

どうやら、デュランも先程の仮面を付けていた人物をライラと勘違

いしていたようだ——しかし、面識もないのにどうして彼がライラを知ってるのかという謎は残るが……。

その直後、マスターが突然地面に膝を突く。デュランが視線を足に移すと、彼の足の先が薄っすらと消えかけていた。だが、驚き声をなくしているデュランとは対称的に、マスターは冷静そのものだった。大きくため息を吐くと、さも当たり前のことのように呟く。

「そうか、もう限界がきたか……今の僕はシステムからすればバグでしかない。当然か……だが、最後に汚点を残さずに済んだ。僕が相手ではメルデイウス達でも厳しいからな……デュラン。悪いが残った僕の弟子を——仲間達を頼む」

「——ギルマス。まさか、あんたが死ぬのか？」

デュランは驚愕と動揺の入り混じった複雑な表情で、徐々に薄くなっていくマスターを見つめている。

普段は見せない彼の表情にマスターは笑みを浮かべ。

「いや、僕は特殊な機械と方法でログインしている。ただログアウトするだけだ——お前の嫌いな損な役回りを頼むことになってしまった。すまない……」

「まあ、わざわざ君は僕達を助けにきたんだろ？ いつでもログアウトできるくせにさ——分かった。向こうに戻ってから恨まれたくないしね」

「……頼む」

そう言い残し、マスターの体はデュランの目の前から呆気なく姿を消した。

しかし、消える間際の彼の安堵した優しい表情がデュランの瞼にはしっかりと刻まれている。

「——僕は嘘をつくけど約束は守る。君は安心して現実世界で待つてなよギルマス」

瞼を閉じたまま、決意を新たに拳を握り締めていたデュラン。

すると、突如として地面が大きく揺れ始める。

彼は慌ててその場を離れた。いや、離れざるを得なかったと言った方が正しいかもしれない。

マスターとコピーとの戦闘で地面は、システムの修復プログラムが間に合わないほどに崩壊している。

まるでクツキーを砕く様にパラパラと崩れる地面の中から、突如として巨大な火山の様な何かの姿を現わした。

崩壊しそうになっている地面から、突然彼の周りに現れた5人の式神達がデュランの体を支えて空へと舞い上がる。

上から地面を見て、デュランは現れたその姿を見下ろす。

それは赤く変色した岩の様な硬そうな鱗に覆われていたとてつもなく巨大なドラゴンだった。

上空からでもその巨大過ぎる体の一部しか見えない。いや、これはもう生き物というよりは巨大な山だ――。

「これはまずい！ こんな巨大な化け物に街を襲われればひとたまりもない。早く待機させている彼等にも伝えないと……」

彼を支えていた式神の5人も、現れた超巨大な巨竜が大きすぎる為、なんの手立てもなく仕方なく巨竜を残して早急にその場を離れていく。

さすがに山ほどの大きさもある敵に攻撃を仕掛けるほど無謀ではない。しかもそれが、このゲームで最強クラスに属するモンスターのドラゴンだ。

間違いなく今のデュランとイザナギの剣から召喚した式神如きでは太刀打ちできないだろう。今は退却が一番賢明な選択だった……。

ドラゴンの体内、生き物の体で指令中枢とも言える脳の付近。

その場所は生き物の中と言うよりもまるで研究室だ。巨大なモニターと様々な機器から伸びる無数の配線達が巨大モニターの下の操作盤に向かって伸びていた。

そこに狼の覆面の男と露出の多い服を纏った女が立っている。

「ああ、ここが最終砦にして最強のドラゴンの中……そして、この場合に貴方の言っていた現実世界に帰れる『現世の扉』があるんですね」「そう。ここが私の最終砦にして最強の移動要塞――もう君は用済みだよ……」

小さく彼が呟くと、女の腹部を剣の刃が串刺しにする。

彼女の背後から覆面の男がロングソードを突き刺し、女はまさか！つと言った表情で彼を見た。

「……君が最初から私を裏切るつもりで近付いてきたのは最初から知っていた。最初から君を使い潰すつもりで置いていたんだよ」

「——ふざけるなああああああああああああッ!!」

女が叫ぶと覆面の下から見える彼の瞳は感情なく背中に突き刺していた剣を引き抜き、その首を切り落とす。

地面に生首が転がり、女の体が糸の切れた人形のように地面に倒れる。

「あまり甲高い声を聞かせないでくれ。キンキンと不愉快なんだよ——これだから女は嫌いだ……」

覆面の男は地面に転がる女の体を踏みつけてモニターの前までやって来ると、操作盤を忙しく叩き始める。

その手は小刻みに震え、歯ぎしりのような音が狼の覆面の内側から聞こえている。

「この私が恐怖を感じただと？ 無様に地に着いて捨て台詞を吐くなど、まるで小者じゃないか……僕の負けだと？ モンスターはもう増やせないが、まだモンスターを操る為のこの『太陽神の化身 ラー・ネアフ・テアーミリ』が残っている。僕が負けるなんてありえない。あつてはいけない！ 僕に敗北などない！ 僕はいつだって勝者だ!!」

彼が強めに操作盤のキーを指で叩くと、目の前の巨大モニターに星の画像が一面に表示された。

それを見上げた覆面の男は手の震えも収まり、覆面の口元からは笑みがこぼれた。

「——この荒んだ心を癒やしてくれるのは博士とその血を引く君だけだ。ああイヴ……もうすぐ君をこの手に抱き締められる。今行くよイヴ……」

彼のその意思に応える様に、地底から現れた巨竜が体の中に隠していた翼を大きく広げると、その巨体がゆつくりと上空に浮き上がり千

代の街の方へと向かって飛び立った。

フィリスの覚悟

甘味処でたらふく宇治抹茶金時あんみつスペシャルを食べた3人は、紅蓮達のギルドホールへと向かって歩いていった。

本当はフィリスはバロンと別の宿に泊まっていたのだが、こんな状況下では街の宿は危険と判断したのだろう。今日は紅蓮達のギルドホールにお世話になることになっている。

楽しそうに鼻歌交じりで歩くフィリスが星に声を掛けてきた。

「星ちゃんは一人部屋なの？ 良かったら私のお部屋に来ない？ たくさんお話しよ！」

「——え、えつと。でも……」

不安そうにエミルの顔を見た星に、エミルは満面の笑顔で返した。星はそれを見ると、不安そうな表情は崩さず仕方なく頷く。

まあ、星としてはまだ親しくないフィリスと過ごすのが不安だったのでろう。本当ならエミルが止めてくれると思っていたのだろうが、これは完全に見間違いだった。

エミルの思惑は分かる。おそらく、彼女は四天王と呼ばれるテストーの中で最強と言われるバロンと一緒に星を居させた方が安全と判断したのだろう。何故なら、今のエミルは自身のドラゴンの中でも最強である虎の子のリントヴルムZWEIを撃破されてしまっている。

リントヴルムと他のドラゴン達は再使用可能だが、リントヴルムの火力を持ってしても再びルシファアの攻撃は耐えきれない。

だが、四天王と呼ばれるバロンならば星を無事に逃がすくらいの時間は稼いでくれると確信して、彼等に星を預ける選択を取ったのだ。嬉しそうにはしゃいでいるフィリスと不安そうな表情をしながらも苦笑いを浮かべる星を横目で見て、眉をひそめたエミルは少し悲しいような寂しいような複雑な感情に苛まれていた……。

ギルドホールに着いた星はエミルに別れを告げると、フィリスに手を握られながら彼女達が泊まる部屋へと向かって行く。だが、星は何か嫌な胸騒ぎを感じていた。

部屋に着くと、遠くからレイニールがやって来るのが見えた。きつとエミルが星はフィリスの部屋に泊まると、部屋番号を教えたのだから。

「あるじー!!」

一直線に星の胸目掛けて飛び込んできたレイニールを星は受け止める。

その手に抱きかかえられたレイニールが頻りに星の服の匂いを嗅ぎ始めると、疑惑の瞳で星の顔を見上げた。

自分を見上げるレイニールの訝しげな瞳に、星の額からは冷や汗が流れる。

「何か甘い匂いがするのじゃ……我輩をホテルに残して、主は何をしてきたのじゃ!」

憤りを表して両手を突き上げているレイニールに、星は困り顔で返した。

まあ、レイニールがステーキを食べ過ぎて眠ってしまったのが原因であり。しかも、星達がモンスター達と戦闘を行った上で甘味処にいつて打ち上げをしたのだが。そんなことを言えば、今のレイニールを更に興奮させかねない。

そんな時、困っている星の横にいたフィリスがレイニールの顔を覗き込んで。

「後でルームサービスでなんでも好きな頼んでいいから、それで許してよ。ねっ?」

「な、ならば仕方ない。本当になんでもいいんだな!」

頷く彼女に、レイニールは体で喜びを表現するように星の腕の中から飛び出した。

星はそんなレイニールの姿を見てほっと胸を撫で下ろすと、フィリスの機転に感謝していた。まだ親しくない人物だが、少しだけなら心を許してもいい気がする。

現実世界では他人を信用するという考え星の中にはなかった。他人は自分のことばかりで、人の気持ちは顧みない。非は認めないし、自分のやりたくないことは平気で人に押し付けてくる。

常に一定のグループで行動し、新しい人間を入れたがらない。その癖、嫌なことはグループ外の者に数に物を言わせて押し付け自分達は楽しいことだけをする。

大人達は分らないが、子供はそれが普通のこととどここのグループにも属さない星はいつも嫌なことを押し付けられ。だが協力者がいない為、一人で淡々と確実に熟すしかない。しかも、できなければ彼等はまた大人数で叩きにくるのだ。それが自分の役割でない失敗でも都合のいい言い分を付けて、全てを星の責任にしてくるのだ……。

信用や信頼などと言う言葉とは縁遠い世界で生活してきた星にとって、人を信用するということは騙されることと同じであり。裏切られた時の悲しさを人一倍知っている星には、一人でいるという選択肢しかなかった。

しかし、この世界では皆が星に優しく。困っていれば必ず助けられる。

人を頼ってもいい。そんな生活が少し当たり前になってきていたからの心境の変化かもしれない。だが、同時にその心境の変化を拒絶し、恐怖している自分もいる。

過去のトラウマが蘇り、辛い感情が星の心を支配していく。

(……だめ、信用したら。またいつ裏切られるか分からない。……うん。この人はいい人だから、私を裏切らなくてもツールさんみたいになるかもしれない。そんなのやだ！ 私をもっと強くなってみんなを守らないと！ ……でも、私にはエミルさんみたいな力は……いつでも倒れちゃって、結局は何の役にも立たないのに……。やっぱり嫌われる方が——それなら簡単で誰も傷つかなくてすむし、私は傷つくのに慣れてるから何も問題は……)

その場に立ち止まってそんなことを考えていると、何も知らないフィリスが不思議そうに首を傾げているが飛び込んできた。

「どうしたの難しい顔して……もしかして緊張してるのかな？」

「……いえ、そんなことは——ツ!? な、ない」

いつも通りに言葉を返しそうになるのを我慢して、できる限り感じ悪く言葉を返した。

フィリスは笑顔を浮かべ「まあまだ慣れないよねー。ゆっくり仲良くなればいいよ」と星の目線に合わせるように膝を折って言った。しかし、星はそんな彼女から無言で視線を逸らす。

それからしばらく経って……………。

最初はツンツンしていた星だったが、結局普段の彼女にすっかりと戻っていた。いや、戻るしかなかったと言う方が正しいかもしれない。

今まで嫌われたいと思って行動したことなどないと言ってもいい。当然だろう……星は少しでも有効的にすることに今まで全力を掛けてきた。

それは嫌われるのが怖かったからだ——誰しもひとりぼっちになるのは耐えられない。まだ小学生の女の子ならば尚の事だろう。

フィリスは相槌を打つ星に向かって、楽しみに言葉を交わす。

「私は目玉焼きにソースをかけて食べるんだけど、星ちゃんも目玉焼きに何をかけて食べるの?」

「目玉焼きはしょうゆです」

「ならオムライスは何?」

間も空けずにすぐに聞いてくるフィリスに少し戸惑いながらも、星は少し考え込んでいる素振りを見せる。

当然だ。星はオムライスにはトマトケチャップしかかけないと思っていた。しかし、彼女の口ぶりだとまるでオムライスにトマトケチャップ以外のなにかをかけている。

だが、それが何なのか星には分からない。まさかオムライスに醤油をかけて食べるとも言うのか? いや、仮にもしも星がいつもかけているトマトケチャップが邪道だとしたら、彼女がどんな顔をする心配だった。

少し考えた末に星は大きな息を吐いて小声で呟く。

「——トマトケチャップ……ですか?」

不安げに告げると、フィリスは大きく頷いて。

「普通ならそうだよね」

につこりと微笑んでそう答えるフィリスに、星は少しホツとした様

子で肩を脱力させた。

フィリスの覚悟2

オムライスにトマトケチャップをかけるのを、一瞬おかしいことなのかと思ってしまうていた星にとっては朗報と言っている。

すると、突然部屋のドアを叩いていつの間にも頼んだのか巨大なステーキとイチゴのパフェ、それとオムライスが2つ。メイド姿のNPCによって部屋のテーブルに置かれる。

テーブルに並ぶ食事を見て、星が小首を傾げながらフィリスに尋ねる。

「……これは？」

「ああ、ほらあの騒ぎでまだご飯を食べてなかったから。星ちゃんもあれだけ動けばお腹も空いたんじゃない？」

そう言っつて星の顔を覗き込んでにっこりと微笑みを浮かべるフィリス。

しかし、星からしてみれば甘味処で巨大な器に溢れんばかりに盛られた宇治抹茶金時あんみつスペシャルを食べたにも関わらずまだ食べるのかと呆れるばかりだ――。

つとその直後、今まで窓際でずっと外を見ていたレイニールが、テーブルの上のステーキを見て文字通り飛んでくる。

「おおー。きたのじゃー！」

テーブルの上に降り立ち、フォークとナイフを両手に持ったレイニールがまたも自分と同じくらいの大きさのステーキに襲い掛かろうとした時、星がレイニールに尋ねた。

「ねえー、レイ。どうして、外をずっと見てたの？ 風景を見てたにしてはずっと一箇所しか見てなかったけど……なにか面白いものでもあったの？」

レイニールは構えていたフォークとナイフを引っ込めると、テーブルに柄を突き立てて星の方を見上げて答えた。

「どこかで私の昔の仲間が呼んでいたのだ。いや、昔の宿敵と言ってもいい」

「……宿敵？」

首を傾げている星に、レイニールが少し考えた末に告げた。

「まあ、友達というかライバルってやつだな！ そいつが我輩の名を呼んでいるのだ」

「友達のところに行かないの？」

「いや、今は声が聞こえない。さつきははつきりと聞こえたのだがな——まあ、今はあいつよりもこの肉じゃー！」

そう言っつて、おあずけをくらつていたステーキにかぶり付いた。

そんなレイニールの姿を見て、星は「友達よりお肉なんだ……」と呆れ返った様子で大きなため息を吐いた。

横で嬉しそうにステーキを頬張っているレイニールを見ると、色々と悩んでいる自分が馬鹿らしくなってくる。

星がフィリスの方に視線を移すと、彼女は今まさにオムライスにソースとマヨネーズをかけるところだった。

フィリスが先程オムライスに『何をかけるのか？』という質問の答えが、それを見ただけですぐに察することができた。

「ほら、星ちゃんもオムライス食べるでしょ？ お姉さんがトマトケチャップかけてあげるね！」

上機嫌でトマトケチャップの容器を手につと、フィリスはオムライスの上に何かを書き始めている。だが、星はオムライス上に書かれた絵に絶句する。

それもそのはずだ。彼女がオムライスの上に書いたのは、絵というよりも文字と言う方がもう正しい。

書き終えて満足そうに「よし」と言っつたフィリスは星にオムライスを差し出す。

「はい。愛情たっぷりオムライス♪」

星の目の前に置かれているのはハートの中に『LOVE』の文字がくつきりと書かれている。

こういうのは恋人にするものだと思うのだが、満足そうな彼女の様子を見ていると別におかしなことではないような気がするから不思議だ。

フィリスはエリエと少し似ているとは感じていたが、どうやら彼

女は少し他の人と違った価値観を持っているようだ――。

それを見下ろしたまま、星は反応に困ってにつこりと微笑んでいる彼女にぎこちなく微笑み返した。

星とフィリスがオムライスを食べ始めると、その直後に部屋の扉が乱暴に開く。

「はっはっはっ！ 今帰ったぞ我が妹よ！」

扉の前に立ったまま手を前に突き出したポーズで高らかに笑う彼が部屋の中にゆっくりと入ってくる。

音に驚きびつくりして咳き込んだフィリスが、帰ってきたバロンに叫ぶ。

「ちよつとお兄ちゃん！ まずはノックして入ってきてよ！」

「はっはっはっ！ 我が妹なら慣れているだろう……つと、なんだ来客中か？」

バロンは星を見つけると、彼女に向かってきて目の前で止まり見下ろす。

突然現れた男性に緊張しているのか、星は少し俯き加減で彼の足元を見ている。まあ、トールの時になんともなかったのは彼から滲み出る愛情を感じたからだ。

しかし、目の前にいる彼は違う。彼から漂うのは強者だけが放つ殺気と、決して自分と交わることのできない不信感と嫌悪感だった。

星の目の前まできた彼は舐めるように星の体を見ると。

「なんだちよつこくて昔の我が妹を思い出すな。俺は四天王以外の者とは別に敵対する意思はない。ゆっくりしていくといい！」

「……は、はい。ありがとうございます」

ペコリと頭を下げた星にバロンは満足そうな笑みを浮かべる。直後、彼は着ていた服を一枚一枚脱いでいきながらバスルームへと歩き出した。

それを見ていたフィリスは驚き、慌てて星の目を手で隠すと大声で半裸の兄に向かって怒鳴る。

「ちよつと！ いつもちゃんと脱衣所で脱いでって言ってるじゃん！」

「硬いことを言うではない妹よ。こうしないと風呂に入った感じがしないのだ」

そう言い残したバロンは扉を開いて、バスルームの中へと消えていく。

「もう!!」

フィリスは星の目を覆っていた手を離すと、兄が脱ぎ散らかした衣服を畳んでベッドの上に置いて、呆れた様子で大きなため息を漏らして星の方へと戻ってきた。

星もそんな彼女の姿に普段の苦勞がしのばれると、同情するように苦笑いを浮かべて返す。

「——星ちゃんごめんさい。あんなのがお兄ちゃんで……まあ、性格はあれだけど、本当はそんなに悪い人じゃないから……」

「はい」

そう星が相槌を打った直後、摺りガラスになっているバスルームの中からシャワーの流れる音とともにバロンの声が部屋に響く。

「うおおおおおおおおおおッ!! 俺の体をこの程度の聖水で浄化できると思ったら大間違いだ! 我が体に流れる魔王の血が人族如きの作った聖水如きなど効かぬわ! わはっはっはっ!!」

「……………」

バスルームの方をポカンとしながら見ていた2人の視線の先では、バロンが擦りガラスの先で、オーバーアクションで楽しそうにシャワーを浴びていた。

その直後に、互いの顔を見合わせて苦笑いを浮かべるとフィリスが改めて言い直す。

「——まあ。バカだけど、悪い人ではないから……」

「……は、はい」

2人は再びバロンの方を見ると、バスルームの中の彼はオーバーアクションでなおも声を上げている。

今はどうやら髪を洗う際のシャンプーの泡を天使の翼から出る光に見立て、楽しそうに動いていた。

星とフィリスは彼を部屋に残して部屋の外に出る。レイニールは

案の定ステーキを食べた後に苦しくなったのか、ベッドに寝転がってお腹を押さえていた。

廊下に出た2人は千代のギルドホール『千代城』の中を散策して歩くことにした。

まあ、今までバタバタしていて千代のギルドホールの中を詳しく見て回ったことはない。

忘れがちだが、フィリスも星もこのゲームをプレイして日が浅く、互いに問題に巻き込まれレベルの方はMAXまで上がっているものの、まだ初心者プレイヤーであることに変わりないのだ――。

2人とも外見は日本の城の形を模して作られているのに、内部は高級ホテルの様な内装に興味があった。

フィリスの覚悟3

真っ白な壁を照らすランプが幾重にも続き、高い天井にはシャンデリアが掛かっている。奥行きもそうだが幅も名御屋の高級ホテルの倍はありそうなほど広く、高級そうな刺繍を施された絨毯がどこまでも敷き詰められている。もう、ここだけで陸上競技をしても、誰にも迷惑を掛けないと思えるくらいだ。

「改めて見るとこの廊下もすつごく広いよね〜」

「そうですね。ここだけで運動会ができそうです」

どこまでも続く廊下をゆっくりと歩きながら、2人は隅々まで目を凝らしていた。

しばらく歩くと、今度は目の前にひらけた空間が現れた。

談話室の様なそこには数多くの椅子やテーブル。ソファアなどが並び、大きな柱で区切られた窓からは外の景色が一望できる。

間接照明で廊下よりも光量が弱く、しかしそれでいながらも夜に皆で話すには丁度いい明るさは確保している。昼間であれば、その柱に挟まれるようにはめられた何枚もの窓から大量の太陽光が差し込み、ここに置かれている椅子に腰掛けて本でも読みながら日光浴などしてもいいだろう。

すでに多くの人で賑わっているこの場所では、皆様々に楽しんでいく。

トランプをする者、テーブルを挟んで向かい合って座って楽しげに談笑している者、外の景色を楽しみながら食事やお酒を楽しんでいる者。様々な者達がフロアを囲むようにどこまでも続くこの場所だと思いい思いの時を過ごしていた……。

星とフィリスは廊下に戻ると、エレベーターで一階ずつ上がっている。しかし、他の階も予想通りに全て内装に変わりはない。だが、最後の階であり最上階でもある千代城の天守閣の部分、ここだけは他のフロアとは明らかに違っていた。

今までの洋風な内装とは違い日本の伝統的な造りになっている。壁を仕切るように大理石で作られた柱は黒く塗られた木材に変更さ

れている。

赤いカーペットの敷かれた廊下を左右から蓮の花の装飾を施された金色の壁が囲んでいる。いくつもの壁の間を区切る柱は黒塗りの大木で区切られ、高い天井には巨大な龍の像が天井を駆ける様に飾られている。フロアの四方の角には広い空間があり、壁と同じく蓮の花の描かれた金色の柱だけが天井を支えている。

フロアの四方はガラス張りになっており、バルコニーの様にせり出した廻縁が周囲を囲ってある。

星もフィリスも物珍しそうに天守閣のフロアの中を歩いている。すると、そこにエレベーターで登ってきた小虎、白雪、メルディウスがやってくる。

「あれ？ お姉さんじゃない。こんなところでどうしたの？」

「——フィリスに……お前は確か『白い閃光』の側にいた。えっと……」

「……星様ですね」

考えているメルディウスの答えを待たずに白雪が答える。だが、不自然なのはどうして白雪が星のことを知っているのかということだ——メルディウスと小虎はまだしも、紅蓮と一足先に千代に帰った白雪は星とは初対面なはずなのだが……。

不思議そうに首を傾げている星の隣で、フィリスも顔を真っ赤に染めながらメルディウスから視線を逸した。まあ、フィリスの場合は少し前にあった出来事を思い出し、彼と顔を合わせるのが気まずいのだろう。

メルディウスは訝しげに眉をひそめると、フィリスの側に行つて彼女の顔を覗き込む。しかし、フィリスは更に真っ赤になった顔を逸して、てこでも彼と顔を合わせようとしなない。

メルディウスとしては彼女のその行動が不可解なのか、大きく首を傾げて考える素振りをしながらその場に立ち尽くす。その横で2人のやり取りを見ていて、大体の事情を察したのか、白雪が平静を装って笑いを必死に堪えている。

気まずい雰囲気の中、小虎が何かに気が付いたようにフィリスに尋

ねた。

「あつ！　もしかしてお姉さんも姉さんのお見舞いに来てくれたの？」

「……えっ？　紅蓮ちゃん。体調でも悪いの？」

小虎とフィリスの二人は互いに不思議そうに首を傾げ、困惑した様子で見つめ合ったまま全く動かない。

すると、笑いを堪えていた白雪が正常な状態に戻ってフィリスと星に告げた。

「紅蓮様は先の戦闘でルシファーを撃破され重症を負われたのです。今は自室でお休みになられています。ですが、お見舞いは不要です……大勢でいってもかえってお体に障ります。ここは私達に任せてお帰りを——」

そこまで口に出した白雪の言葉を遮るように、聞き覚えのある声が廊下に響く。

「——気遣いは無用ですよ白雪」

声のする方を見た白雪の瞳が涙で潤む。その視線の先にいたのは、紛れもなく紅蓮の姿だった。

傷は回復しているようだが、ルシファーとの戦闘で疲労した体力はまだ回復していないようで、彼女は壁を支えにしてゆつくりとこつちに向かって歩いてくる。

そんな彼女の方に向かって走り出した白雪はカクンカクンと、覚束ない足取りの紅蓮を支える。

紅蓮はそんな白雪の顔を見上げ「心配掛けましたね」と言う彼女に、瞳に浮かべた涙を拭って笑顔で応えた。

普段の紅蓮からは程遠い弱々しい彼女の姿に、動揺した様子メルデウスが告げる。

「おい。もう大丈夫なのか？　無理しないでまだ寝てた方がいいんじゃないのか？」

側までくると、紅蓮が驚いているメルデウスに向かって言った。

「何を言っているんですか？　街は混乱し、四天王の一人である私は戦闘不能であると思っっているはず——敵はこのチャンスに間違

いなく攻め込んできます。私が休んでいる暇など与えてくれませんよ?」

「……………紅蓮」

「ギルドマスター。至急、皆さんをギルドホールのエントランスホールに集めてください。今後の作戦を立てます」

神妙な面持ちでメルディウスは頷くと小虎の手を引いて、今来たばかりのエレベーターの方へと向かって歩き出した。

次に紅蓮は自分の体を支えている白雪の方に視線を移す。

「白雪。申し訳ありませんが、今すぐに偵察任務に出てもらえますか? 少しでも敵の軍勢に動きがあれば知らせて下さい」

「……………了解致しました」

そう言い残し、紅蓮の体から手を放した白雪の姿が消えた。

支えを失った紅蓮の体が大きく傾く。フィリスは倒れそうになる紅蓮の体を受け止め、心配そうに紅蓮の顔を覗き込んだ。

「後はメルディウスさん達に任せて、紅蓮ちゃんは休んだ方がいいよ。もうフラフラじゃない。そんな体で無理したって何にもならないよ!」

「——貴女はまた……………私のことをちゃん付けで呼ばないで下さい。休んでなどいられません。私はサブギルドマスターです。こんな大事な時に休んでいるわけにはいきません」

紅蓮は心配そうな顔をしているフィリスの顔を見上げた。その彼女の瞳からはどんなことがあっても事に当たるといふ決意が滲み出ていてそれ以上フィリスは紅蓮を止めることはできなかった。

その後、紅蓮の口から衝撃的な一言が飛び出した。

「もし、何か起こった場合。貴女方はギルドホールに待機して下さい」

「なっ、なんで!? 私も戦うよ! もうレベルだって高いんだから、紅蓮ちゃん達だけに戦わせない!」

「……………わ、私も嫌です!」

フィリスに遅れながらも星も声を上げた。

しかし、紅蓮の考えは変わらない。

「敵が村正を使っている以上、レベルに意味はありません。それだけじゃない。貴女達は戦闘経験が圧倒的に足りません。単刀直入に言えば足手まといです……貴女のお兄さんのバロンも貴女がいたら全力で戦えない。分かりますよね？」

「そ、それは……でも！ 私にだってプライドがあるの！ お姫様みたいに守られているだけなんて耐えられない！」

紅蓮の言葉にフィリスは真っ向から対立する。しかし、星も彼女の言葉には賛同していた。何故なら、フィリスの言葉はそのまんま今の星が抱いている言葉だったからだ――。

だが、紅蓮から返ってきたのは、またも予想とは違う答えだった。

フィリスの覚悟4

「――ならば、勝負するしかありませんね」

返ってきたその言葉に、フィリスも星も言葉を失う。

当然だ。今の疲労しきっている彼女と戦うなどできるはずもなく、第一に戦える状態にないのは彼女の方が良く分かつているはずなのだ。

しかし、紅蓮の方は本気らしく。体を支えていたフィリスを引き離し、フラフラしながらも近くの壁に手を突き倒れそうになる体を支え、真面目な表情でフィリスの目を見つめていた。

すると、フィリスもその紅の瞳から彼女の決意を感じとったのか、無言のまま深く頷き返す。

フィリスのその反応に一番驚いたのは星だった。戦う前からすでにボロボロと言った感じの紅蓮を見たら間違いないと思っただからだ。

「戦うけど、今はまだそうじゃないから」

そう言ってフィリスは壁に凭れている紅蓮の体を支える。紅蓮は驚いた様子で彼女を見ると、彼女は笑みを浮かべた。

紅蓮はそんな彼女を見て、俯き加減で小さく呟いた。

「……甘いですね」

紅蓮の体を支えゆっくりとエレベーターの方へ歩いていくフィリスに、星も続いて歩き出した。

ギルドホールを出た3人は人気のない場所へとやってきた。

紅蓮が着いた直後、フィリスから離れると白く美しい刀を取り出して構える。しかし、その手には力がなく、今にも刀を放しそうなほどその腕には力がこもっていない。

だが、その瞳には闘志が漲り。彼女はまるで負けるとは思っていない様である。

フィリスも一応鞘から剣は抜いたものの、その手には力が無い。いや、未だに彼女の中で覚悟が決まらないと言った方が正しいかもしれない。

正直。もう虫の息と言った紅蓮に斬り掛かるには良心的な面でも、仲間としての面での特別意識がそうさせた。

「……どうして攻撃をしてこないんですか？ 私の状態に遠慮しているのですか？ もしそうなら、貴女に戦う資格はありませんよ？」

「でも……そんな状態で戦うなんて……」

まだ躊躇しているフィリスに、紅蓮は着物の袖に隠していたナイフを投げた。

頬を掠めるナイフに、フィリスも驚いた様子で目を丸くさせている。

「——紅蓮ちゃん。本気なんだね……けど、私も今回は引けない！」

もしここで戦わなければ、殻に閉じ籠もったままのずっと弱い自分のままだから！」

剣の柄を握る手に力を込めて、紅蓮に向かって斬り掛かる。

フィリスが振り抜いた剣が紅蓮の刀の刃に阻まれた。いや、阻まれる程度の力で彼女が振り抜いたと言った方が正しい。

直後。紅蓮の体が動きフィリスの体に凭れ掛かる様に倒れたかと思うと、素早く彼女の腕を引きそのかかどに足を引っ掛ける。

体制が崩れたフィリスが気付いた時には、細いその首筋に紅蓮の持っていた刀の刃が押し付けられていた。

「……………ツ！」

ありえないと言いたげな顔で驚き声を失っているフィリス。

つと次の瞬間、紅蓮は彼女の首筋に突き付けていた刀を引いて、重そうな体をゆっくりと起こす。

何が起きたのかまだ分かっていない様子で、驚いているフィリスを見下ろして紅蓮が淡々と告げる。

「これが戦闘経験の差というやつです。貴女の心には私を本気で斬り伏せるだけの覚悟がなかった……それがこの結果を招いたのです。これが敵なら、貴女は今生きていません。分かりましたか？ 私はどんなにダメージを受けていても敵の倒し方が体に染み付いています。もし貴女が敵ならば、私は何の躊躇もなく殺しています——勝負あります。約束通り、私の言葉に従って下さい」

「……くッ!!」

紅蓮の勝利宣言と取れるその言葉に、やっと自分の負けを自覚した彼女が小刻みに震える唇を噛み締める。

「——ですが、これは今の状態の話です。貴女がこれから努力し研鑽を積みめば、すぐに私達など勝てないほどに強くなるでしょう……ただ今は、命を無駄にする時ではありません」

その直後、上空からマントをなびかせた漆黒の鎧の男性が降ってきた。

咄嗟にその気配を察していた紅蓮が地面を転がるようにして彼の攻撃をかわして立ち上がると、鬼の様な形相のバロンが有無を言わず周囲に漆黒の兵士達を召喚させた。それに反応するように、紅蓮も下ろしていた刀を構えてその切っ先をバロンに向ける。

完全に臨戦態勢に入っている2人から放たれている殺気は、素人の星が見ても明らかだった。

しかし、バロンはともかく。今の紅蓮では戦闘は不可能に近い状態であり、先程の戦闘も戦闘経験の違いで敵意の薄いフィリスの心の隙を突いて倒したただけだ。

だが、彼は違う。まるで仲間に向けるものではないほどの殺気を全身から滲ませている。

空気が震える様なピリピリとした感覚が、星の肌をチクチクと刺す。離れていてもこれだ、きつと目の前で対峙している2人はそれ以上を感じていることだろう。

「紅蓮。俺様の妹に手を出したな……? 俺様のことを味方だと勘違いして調子に乗ったな!」

「……私はそんなつもりはありませんが。そう疑われても仕方ありませんね」

そこまで口にして、互いに動きを窺うように睨み合っている。

本来、紅蓮もバロンも四天王と呼ばれる最上位のプレイヤーであり、お互いに自分が誰よりも優れていると自負している。

しかし、どんなに最強の能力であれ弱点とも言える泣き所が必ずある。

紅蓮にとって痛覚が遮断できない不死の力が仇となるのが彼であり。彼からしたら、紅蓮は自分の兵を持つてしてもHPを削りきれない厄介な存在ではあるが、決して怖いものではない。

睨み合っていたバロンが手を前に出して、紅蓮の周囲を囲む兵士達が一斉に動く。

今にもバロンの漆黒の兵士達が紅蓮に襲い掛かろうとしている時、周囲にフィリスの声が響いてバロンが止める。

「止めてよ。お兄ちゃん!!」

漆黒の兵士達が止まったのを確認すると、バロンは妹の方に視線を移す。そこには瞳を潤ませたフィリスの姿があった。

バロンはその顔に完全に戦意を喪失したのか、構えていた剣を鞘に収めて召喚していた無数の兵士達も消し去った。その後、紅蓮も刀を自分の体長ほどの鞘に収めると、その場を離れる様にゆっくりと歩き出す。

その場に泣き崩れるフィリスにバロンが優しく手を差し伸べて部屋へと戻っていく。彼等の後ろ姿を見つめ、その一部始終を目撃していた星もまるで他人事ではない感覚に襲われていた。

星の瞳にはあの時のフィリスの姿が完全に自分と重なって見えていた。自分を客観的に見ているという経験はそうそうできるものではなく。星にしてみれば、新鮮なものだったに違いない。

だが、そんなことより。星からしてみたらフィリスは正しく、紅蓮は間違っているようにしか見えなかったのだ――。

結果的には負けたのだろうが、傷付いた紅蓮を本気で攻撃できるはずがない。しかし、紅蓮の方は彼女のその優しさに漬け込んだように感じた。

「……………こんな間違っている」

星は感情を押し殺しながら腰に差した剣の柄を握り締め小さく呟くと、ゆっくりとフィリス達の後を追って歩き始めた。

防衛戦の秘密兵器

フィリスと別れた紅蓮はエントランスホールに着ていた。

彼女がホールに着いた時には既に多くの人が集まっていて、ギルドメンバーや始まりの街からきたギルドではない一般のプレイヤーまでが騒ぎを聞きつけエントランスホールにいた。

ギルドホールの外まで続くその人波も紅蓮が来ると、進んで道を空けた。まあ、彼女くらい有名になれば街で知らない者はいないのだろう。

何の苦もなく先頭の列まで来た彼女は、フィリスと戦った時とはまるで別人のように凜とした姿で歩いていた。しかし、平静を装ってはいるものの無理をしているのは明らかで、その額から流れる汗までは隠しきれてはいない。

「皆様、集まって頂きありがとうございます。もうすでにご存知だと思いますが、我々の街に敵の侵入を許してしまつて申し訳ありません。しかし、幸い我がギルドのマスターであるメルデイウスが事態の収拾を図りました」

そこまで口にする周囲から大きな拍手が沸き起こる。

歡喜の声が響き渡り震えるエントランスホール内が静まつてから、再び紅蓮が話し始める。

「しかし、敵がこちらにやられたまま引き下がる人物ではないと、私はこの数回の戦闘で確信しています。モンスターであれAIに従つて動く人形です。命令を下す者の癖が顕著に表われます。私が推測するに、この人物は自己顕示欲と自信の塊と言つていい。しかも敵はルシファーで、この私を撃破したと勘違いしています。これを好機と追撃を仕掛けて来るのは間違いないでしょう……しかし、私は見ての通りまだ無傷です！ また拳帝、四天王の全員がこの街に集まっている今ならば、この街が落ちることはありません！ 皆様も何があつても凜として事に当たつて下さい。我々に敗北の二文字はありません！！」

紅蓮が普段よりも強い口調で右腕を突き上げると、横にいたメル

デイウスも腕を突き上げ「不安も恐怖も捨てて俺達に付いてこい！
そしたらお前達に勝利をくれてやる！」と更に場を盛り上げる。

それに呼応するようにその場にいた者達が『勝利を！』と彼等と同じく腕を突き上げ声を上げた。その場の空気が振動して、まるで空気そのものが声を発して動いているのだと錯覚するほどだった――。

紅蓮とメルデイウスがその場を離れてもなお、興奮冷めやらぬ者達の声がギルドホール内にも外にも響いていた。

エレベーター内に入った紅蓮は扉が閉まったのを確認し、まるで糸の切れた人形のように脱力する。しかし、彼女の体は地面には倒れず何者かに支えられているかのように宙に浮いていた。

すると、何もなかった空間に白雪が現れ。彼女は倒れそうになる紅蓮の体をしっかりと抱きかかえていた。

おそらく。回復したように見えた紅蓮が、皆の前に立って演説する前から彼女が後ろで支えていたのだろう。

「……紅蓮様。立派でしたよ」

「ああ、これで士気は随分上がったはずだ。敵が動くまでのしばらくの間はゆっくり休んでいろ！ 重要な時に体が使い物にならないければ意味がないからな！」

相当疲労が溜まっていたのだろう。メルデイウスの言葉に頷いた彼女は瞼を閉じる。

それから1時間も経たないうちに敵の軍勢に動きがあると、再び偵察に出ていた白雪からメルデイウスに連絡が入った。

「――やはりきたか」

自室のソファ―に腰を下ろしていたメルデイウスが俯きながら呟くと、徐に立ち上がり部屋から出た。

向かったのは、もちろん紅蓮の部屋だ――メルデイウスにとって紅蓮は仲間であり、それ以上に大切な存在でもある。

彼からすれば、彼女の意志を優先することが重要なのであり、彼女の実力もしり己が彼女を守れると確信しているからこそその行動だ。

紅蓮の部屋に着いたメルデイウスが扉をノックするが、中からはな

んの反応もない。まあ、まだ1時間しか経っていないのだ。無理もないだろう……。

中に入ると紅蓮はベッドの上で眠っていた。白銀の長い髪の彼女のその寝顔は、まるでおとぎ話に出てくるお姫様のように見えていた。

メルディウスが眠っている彼女の体を揺らすと、彼女はゆっくりと瞼を上げた。

「……来ましたか」

のっそりと体を起こした紅蓮は布団から出ると、紅蓮は下着姿でメルディウスも咄嗟に後ろを振り向いた。しかし、下着姿の彼女は全く羞恥心を感じていない様子でコマンドから普段の真っ白な着物を装備する。

袖を大きく振り抜くと後ろを向いていたメルディウスに告げた。

「行きますよ。この街も人も必ず私達で守り抜きましょう！」

「ああ、勿論！」

その言葉を聞いて、口元にニヤリと不敵な笑みを浮かべたメルディウスも彼女の横に付いて歩き出す。

ギルドホールから出たメルディウス達は、街を大きく囲む巨大な城壁から外を見渡す。

外では地面にバラ撒いた米粒のような無数のスケルトン達の頭がゆらゆらを左右に揺れながら進軍を開始していた。

エミルやイシエルが敵の数を減らしたとはいえ、未だに多くのモンスターが街を覆うように囲んでいる。

千代に生息する多くはアンデッド系のモンスターで、その姿はまさに不気味なもの……しかも、夜だった周囲は微かに明るみだしていて朝の訪れを告げている。

「――遂に決戦か……フン。始まりの街の戦いを思い出すぜ……あの時は負けたが、ここは俺達のホームだ。以前のようにはいかないぜ！」

戦いの時が近付きテンションが上っているのだろう。メルディウス

スの表情からは自然と笑みがこぼれ、まるで自ら戦いを求めているような感じだった。

それとは対称的に、紅蓮は彼を横目に紅蓮は神妙な面持ちで向かってくるアンデッドモンスターの姿を見据えている。

「……今まで止まっていた戦線が動く。なんの策もなく敵は動きません。メルデイウス、すぐに皆に連絡を——敵に先手を取られる前に、こちらは定石通りに手堅く守りを固めます！」

メルデイウスは頷いて指を動かす。その間も紅蓮の瞳は、徐々に大きくなるモンスターの群れに向いていた。

その後、紅蓮とメルデイウスはギルドホールのエントランスへと移動していた。

エントランスホールでは小虎が手を降って待っていて、もう彼の呼びかけに賛同した多くの者達が集まっていた。しかし、いざとなると戦いに参加する覚悟が決めきれない者達もいる。

だが、そんな者達を非難することはできない。人の本質——いや、人間の本能が生存を望むのであり、動物の本能を非難することなど誰にもできるはずがないのだから。

集まった者の前に立ち、メルデイウスが声を発する。

「皆聞いてくれ！ 遂に奴らが動いた。だが、俺達の街の周りにはアンデッド系のモンスターの嫌う水で守られている。事実上、近付くことはできても侵入は不可能だ。しかし、だからと言って防衛の陣形を取らずに待っているバカはいない！」

彼の言葉に合わせ多くの者達が声を大にして叫ぶ。「そうだ！ 俺達の街は俺達を守る！」「向かってきてくれるって言うなら弓で射殺してやろう！」「戦いは上を取った方が有利になるという定石も知らないモンスター共なんて怖くもないぜ！」などの言葉が次々と集まった者達から上がっていた。

その最中、メルデイウスが下がって今度は紅蓮が前に出た。

「現時点の配置を確認します。始まりの街から来てもらったギルドLEO、POWER、Sの皆様は中央で待機し、臨機応変に応援を出して頂けるようお願いします。北は成仏善寺の皆様。そして南正面の

門にはメルキユールの方々と、エルフで構成されたギルドのネオアークの皆様にお願います。東と西は我々千代のギルドの面々で守ります。しかし、私達のギルド『THE STRONG』が南の正面門の防衛にあたります。皆様迅速に持ち場に移動し攻撃に備えて下さい！」

『おー!!』

周囲にいた者達は彼女の言葉に応える様に大声を上げて腕を突き上げると。直ぐ様、蜘蛛の子を散らす様に街の中へと散っていった。

防衛のおおよその計画は決まったものの、まだ部隊の配置のみ。防衛策を取った以上はどうしても避けられない事実に向き合ってしまう。

その事実とは——防衛とは敵に先制攻撃のチャンスを許すということであり。敵の動きに合わせて動く為、どうしても後手に回ってしまうことだ。

先の始まりの街の戦いではマスターはそれを嫌って先制攻撃を仕掛けた。しかし、結果としてそれは失敗に終わった。

だが、メルディウス達は今回防衛策を取った。それはゲーム外からの助けを待つしかない状況だからに他ならない……。

防衛戦の秘密兵器2

始まりの街が落ちた今、千代の周囲の街はもう海道を隔てた北海道しかない。

北海堂は現実世界の札幌にあり、道中には海もある。これでは陸路での突破は困難であり、空路はこのゲームでは現実的な方法ではない。

海には多くの水性のモンスターが生息しており。フィールドボスにはクラーケン、リバイアサン、ヒュドラなどの凶暴な敵がいる。

ここを船などで移動すれば、モンスターを操ることのできる相手からすれば、まさに『飛んで火に入る夏の虫』ということわざ通りに、全てのプレイヤーが多くの水性モンスターによって全滅されてしまう。

かと言って、東京の位置に存在していた始まりの街、名古屋の場所に位置していた名御屋という中継地点がない状況で、大阪や京を目指すのはあまりにリスクが大きい。

今の千代は完全に孤立し周囲を水堀に囲まれた孤島であり、周囲に応援を呼べる都市がない以上は、この場所で籠城する以外に生き残る手立てはないのだ――。

しかし、だとしても。後手に回るというのはあまり気分のいいものではない。

「何とか敵が動く前に先制攻撃を仕掛けたいものだけ。何かいい方法はないのか？」 紅蓮

「……私がまともなら何かできましたが。たとえば貴方でも、一人ではどうしようもありません。剛と合流して話してみましよう」

「そうだなー！ あいつなら、なにかいい案があるかもしれない！」

納得したようにポンと手を打ち鳴らしメルディウスは頻りに頷く。メルディウスと紅蓮が南の正面門にいくと、そこにはテキパキとギルドの仲間達に指示を与えている剛の姿があった。

そんな彼に向かってメルディウスが手を上げると、彼は笑顔で応えた。

「剛。お前ばかりに任されて悪いなー」

「いや、大丈夫だよ。ここが踏ん張り時だからね」

側にいくと、互いの肩を叩き合ってから肩を組む。

そこで彼に紅蓮と話していた内容を相談してみるメルディウス。

「——実は今回の戦闘でこっちから仕掛けたいんだけどよ。遠距離から効果的にダメージを与える方法はないか？ 防衛だからって後手に回るのもなんか気分が悪いだろ……」

すると、それを聞いた剛は納得した様子で頷くと、意外とあっさり彼の意見を受け入れた。

「僕も防衛でも攻撃の姿勢を見せないといけないと思ってね。オリジナルの投石機を作ったんだ。リコットに手伝ってもらってね」

そう言った剛は外壁の上に彼等を連れていくと、コマンドを操作して目の前に大きな大砲の様な車輪の付いた大筒を配置した。彼の出したそれは、大砲というよりも真横にした壺といった感じで、大きな鉄の蓋が付けられている。

蓋をされた大きな大筒を見つめ、2人は首を傾げる。

それもそうだ。目の前の大筒には火薬を入れるような小窓もなければ、肝心の火を付ける導火線もない。まさにただの壺だったのだ——唯一違うのは剣の刃で付けられたような深い溝が入っているだけ。

紅蓮もメルディウスも興味深そうに大筒を見つめている。

「これをどうするんだ？ どうやって発射する」

「ああ、簡単だよ。このゲームには銃火器の使用はできない。鍛冶でも銃を作ることはできるが、それに装填する重要な火薬がこの世界には存在しない」

「それでは、この大砲も使用できないではないのですか？」

剛の言葉に紅蓮が噛み付く。まあ、当然のことだろうが、火薬がなければ砲塔の中で砲弾を撃ち出すことはできないのだからこの大筒も使用できず、その存在に意味はない。

「その心配はいりません。それがこの溝です」

彼が指差した溝を見つめ、ゆっくりと近付いていく。しかし、何度見てもただの溝でしかない。

2人は更に首を傾げている。それを見ていた剛は満足そうな笑み

を浮かべながら彼等に言った。

「――火薬とは爆発を起こす為に必要不可欠なものだろう？ つといることは、爆発を作るのではなく。もうある爆発を利用すれば、いいのではないのかい？」

「――ッ!!」

彼の言葉を聞いて二人は驚いた様子で目を丸くさせた。

そう。あの大筒の溝はメルデイウスの持っているベルセルクが、その刃から出す爆発能力を発揮させる為のものだったのだ。

「原理は分かかったが、本当に球を打ち出せるのか？ 全力で爆発させればこんな鉄の筒なんて吹き飛ぶぞ？」

「大丈夫さ。弾なら、もう付いているだろ？ まあ、球ではなく弾だけど威力は保証するよ」

大筒の先を塞ぐようにはめられている鉄製の蓋を見て、メルデイウスは頭の上に大きな『？』マークを浮かべていた。

対照的に、紅蓮は剛がやろうとしていることが理解できたのか、大きく頷いている。

自分だけ話に置いていかれて痺れを切らしたメルデイウスが堪らず叫ぶ。

「だからいったいなんなんだよ！ 勿体つけずに俺にも分かるように説明しやがれ！」

苛立ち憤りを表に出しているメルデイウスに、剛が話し始めた。

「つまり。この蓋がベルセルクの爆発によって飛ぶことで敵を倒すのさー！」

「敵を倒すなら蓋より球の方がいいんじゃないのか？ 大砲とかは全部球を撃ち出してるじゃねえーか」

彼のその意見はもつともだろう。大砲を開発し、現代までその原型と機能を保っているのには理由がある。

まあ、現代の大砲は球体ではなく円柱と円錐を組み合わせた様な形になっているが……。

「そうだね。僕も最初はそう思ったんだけど、球では不可能だったんだ。もちろん。球体を作るのが不可能だったわけじゃなくて、武器とし

て球体を使用するのが不可能だったと言うことさ——球状の武器がない以上。できた鉄の球はただのオブジェクトでしかなく、敵に与えるダメージは最大でも最小でも『1』でしかない。まあこの世界には火薬がなく、球にしたところで爆散しない球は砲丸投げと変わらないけどね……でもこれならば可能だ！」

剛が大筒にはめられていた蓋を取り外すと、裏には鉄の柱と端に小さい蓋が付いている。

例えるならば、鍋の蓋の持ち手の中央を棒で延長させた様な形をしていた。

「これは種族『ボディービルダー』の専用武器バーベルを自作、改造したものだ。どうやらバーベルの場合は左右の重りに制限はないようだね。メルデイウスも下水溝のマンホールが洪水で圧縮された空気を押し出して吹き飛ばす映像を見たことはあるだろうか？ この兵器は、その原理を利用しているんだよ。しかも、小さい重りが撃ち出した後の姿勢制御してくれる。落ちる時は重力の関係で重い方が下を向くから効率良く落下点の敵を押し潰して撃破できるわけだ」

メルデイウスはポンと手の平を打つと、思い出したように。

「ああ、さるかに合戦の白がさるを潰した原理だな！」

「……………」

メルデイウスのその言葉に、紅蓮と剛は呆然としながら。

「貴方はもう喋らなくていいです。話がややっこしくなります」

「そうだね……」

感情のない虚ろな目でいる2人に、メルデイウスは不満を爆発させる。

「おい！ ギルマスに対して厳し過ぎるだろ！ 俺よりも剛の説明の方が数百倍分かりにくいわ！」

叫んでいるメルデイウスを完全に放置して、2人が話し始める。

「それで剛。これは何個ほど作ったのですか？」

「ざっと20だね。でもこれは小さいサイズで、リコットに発注した設計図はこの10倍大きい。大人1人が立って入れるほどにね」

「それは素晴らしいですね。早速配置しましょう」

紅蓮と剛は巨大な大筒を正面門の上に配置していく。配置が終わると、砲門が20並んだ外壁はさながら難攻不落の要塞の城門のようである。

大人1人分はあるベルセルクの刃の威力を遺憾なく発揮させるには、これくらい巨大でなければ意味はないのだろう。下手をすれば砲塔の方が爆発の力に耐え切れず、破裂してしまうに違いない。

そんな時、紅蓮達の元に偵察に出ていた白雪から連絡が入ってきた。

『敵はルシファアー1体を応援に寄こしたようですが、何か様子がおかしい！ 私もすぐに戻って直接状況をお伝えします！ 紅蓮様。決して早まったお考えで動いてはいけません。せめて私が戻るまでは……』

どうやら敵は再びルシファアーを出してきたようだが、何やら今回は様子が違うらしい。白雪の送ってきたメッセージからも彼女の動揺した様子が窺える。

彼女がこれほど取り乱すのは珍しく、事の重大さを紅蓮も感じ取っているのだろう。普段は無表情な彼女の表情も心なしか硬く感じる。「とりあえず、白雪の帰りを待ちましょう……彼女の報告を聞いてから、対策を考えます。予め剛とメルディウスは協力して頂ける皆さんに連絡だけはしておいて下さい」

2人は領くと協力してくれるギルドのマスター達に『敵に動きあり。各ギルドは迎撃の準備を整えよ』とメッセージを一斉に送信する。

街の外壁から見える敵は進軍を止め、矢の届かない水堀の前方で停止している。まるで何かを待っているかのように……。

「——不気味ですね……」

紅蓮は地面を覆うほどのモンスターの大量の様子を、目を細めながら見据えていた。

赤黒い炎

しばらくして紅蓮達の元に白雪が戻ってくる。額に汗した彼女の様子を見ると、彼女は相当急いでここまでやってきたのだろう。

まあ、ゲーム世界で汗を掻くというのもおかしなことだが、それはゲームに臨場感を持たせる為の演出であり、それ以外に何の目的もなく。体温調節などは大気中の空気が自分の状況での適温に常に調整される為、この世界では一切必要ない。

だが、普段は冷や汗一つ掻かないで涼しい顔している白雪が、ここまで焦っているのは今までに類を見ない。いや、紅蓮も彼女と出会って初めてのこともかもしれない。

「紅蓮様！ 敵のルシファアですが、頭部には角があり下降修正前であることは間違いありません。しかし、その体を燃やすように赤黒い炎を纏っており。驚くのはその炎が周囲にいる取り巻きの雑魚モンスターにまで伝染しているということなのです。ですが、体が炎で焼かれているにも関わらず、HPの減少も見られず何の目的の為にあの様な行動に出ているのか全く分かりません。しかし、体に赤黒い炎を纏ったことによって不気味さを増しているのは確かです。決して油断せずお気を付け下さい！」

息を整えて早口で一氣に話した白雪の報告を聞いて、紅蓮は少し考える素振りを見せると持論を展開する。

「——赤黒い炎ですか……単に威嚇で行っているとは思えませんね。近付いた時に追加ダメージを負わせる為か能力強化の目的で行っているとした私には考えられません……貴方達はどう思いますか？」

紅蓮はすぐ隣で白雪の報告を共に聞いていた剛とメルデイウスに尋ねた。

彼等も少し考えるように顎の下に手を当てると、しばらくして彼女の質問に答える。

「考えたが、俺は威嚇だと思えないんだが……だってよ。敵は優位な立場にいるんだぜ？ 兵力だけではなく兵の質も高い。何と言ってもモンスター全てがレベル100なんだからな。いくら千代

でも、全員がレベルMAXまでいつてるプレイヤーは八割いるかいな
いかだ——そこにこれ以上にかする必要はないだろう？ 俺達を
ビビらせる為にやっているとしか思えない」

そう意見を述べたメルデイウスが、自分の意見に自信あり気に胸の
前で腕を組む。

しかし、その横にいた剛の方はもう少し慎重に事を考えていた。

「敵はこの拠点が周囲を深い水堀で囲っているアンデッド対策のされ
た拠点だと知っている。しかも、彼等は近くに生息しているモン
スターしか召喚できない。ルシファーや高位のモンスターは例外だが
数が少ない。千代の街が今まで持ち堪えてこれたのは、これらのルー
ルの様なものがあつたからだ。千代の街はアンデッド系のモン
スターでは決して落ちない！ しかし、ここに来てその均衡を破つてき
たというのはつまり……白雪の見た赤黒い炎が鍵を握っていると僕
は考えている」

だが、その意見にメルデイウスが真つ向から否定した。

「バカ！ 火は水に弱い。子供でも知っている常識だぜ？ 剛。そん
なことも分からないお前じゃないだろ……お前疲れているんじゃない
のか？」

「いや、それは違うよメルデイウス」

しかし、今度は剛の方が彼の意見を真つ向から否定する。

「物に火が付くには発火点と呼ばれるその上限を超えると火が付いて
しまう温度が存在する。水をかけるのはその温度を下げる為なんだ。
もう一つ火を消す方法としては酸素の供給を止めてやればいい。そ
れを利用したのが消化器でありあの粉には酸素の供給を抑える働き
がある。まあ、今は泡や二酸化炭素のものもあるけどね……それを踏
まえると、確かに君の言うように火は水に弱いという理論はあってい
る。けど、それは現実世界ではの話だよ？ それを考慮すれば、相手
はその原則を崩そうとしているに違いない。要は、僕達の中にある
『火は水に弱い』という固定概念を逆手に取ろうとしていると僕は考
えている」

「また難しいことばかり言いやがって……結局はどういうことだよ

！」

メルディウスには剛の言った意味が理解しにくかったのか、不満そうに口を尖らせているメルディウスが彼に尋ねた。

剛は不敵な笑みを浮かべると、徐に口を開いた。

「――要するに、ゲーム世界では現実の常識が通用しないということさ」

紅蓮がなるほど納得する中。メルディウスは「なら、最初からそう言えってんだよ」と不満そうに毒づく。

その直後、目の前に白雪の言っていた赤黒い炎を纏ったルシファアの姿が肉眼で確認できた。

大きな山脈を抜けて出てきた赤黒い炎を纏ったその姿は朝日に照らされていて、まるで天界から現世に顕現した不動明王の様にも見える。

驚愕するメルディウスと剛を他所に、紅蓮は実に冷静だった。

「おそらく。剛の意見が最も核心を突いているかもしれないですが、私達だけの情報では不十分です。有力な情報を持つている人が他のギルド、プレイヤーにいないか探しましょう——時間はありません。剛はギルドホールに行つて、街のトップギルド特権の一斉送信のメッセージで情報提供を呼び掛けて下さい。メルディウスはギルドのトップの皆さんに情報を集めて頂けるようにと……どちらも至急であると付け加えることをお忘れなく」

「了解!!」

彼女に言われたことを即座に行動に移す剛とメルディウス。

白雪は真剣な面持ちで紅蓮の方を見ると。

「紅蓮様。私は何をすれば……ご命令を！」

「白雪。貴女は戻ってきたばかりです。疲れているでしょう？ 休んでいて下さい」

返ってきた予想外の言葉に、白雪は一瞬驚いた表情をしたものの、すぐに声を大して叫んだ。

「どうしてですか！ 私はまだ動けます。私にも何か命令を！ 紅蓮様!!」

迫りながら声を荒らげる白雪に、紅蓮は至って冷静に言葉を返す。「貴女は勘違いをしていますよ？　まだ戦闘は始まっていません。確かに予想外のこと起きて混乱しているのは分かります。しかし、だからこそ冷静さを欠いてはいけません。白雪、戦いの時に全力を出す為には休息も大事ですよ」

「……了解しました」

悔しそうに歯を食い縛りながら、感情を抑え込む白雪。

だが、彼女だって紅蓮の言っている意味は理解している。しかし、紅蓮の瞳に自分がもう行動できないほど疲労していると写ったことが悔しかったのだ。するとその時、驚いた様子でメルディウスが紅蓮に告げた。

「いやー、驚いたぜ。てつきり今回のルシファーの現象を知ってる奴はいないと思ってたんだがな。ジジイの仲間が赤黒い炎を纏った敵と戦ったことがあるらしい。今からこっちに來るってよー！」

「そうですか……できるだけ早くきてくれればいいのですが……」

だが、紅蓮のその心配は無駄に終わる。何故なら、それから数分の間にライトアーマードラゴンに乗ったエミルとイシエルがやってきたからだ。

2人は紅蓮の前に飛び降りると、まだ遠くにいる赤黒い炎を纏ったルシファーに目を向けた。

「――間違いないわ。あれはがしやどくろとの戦闘の時に見た炎と同じ、あの炎を纏っている間は通常攻撃は通じない。属性攻撃の武器でなければ効果がない」

紅蓮は訝しげに目を細めると、俯き加減に呟く。

「……属性攻撃の武器ですか――それは厳しいですね。属性武器はトレジャーアイテムなどの高位の装備アイテムにしか備わっていませんから。もしそれが本当だとすれば、今のこの状況は厄介ですね……」

属性系の費用対効果の大きい武器はゲームバランスを崩しかねないということ、鍛冶でも武器に属性攻撃を付けることはできない。

メルディウスのベルセルクや紅蓮の小豆長光など。炎系、氷系など

の属性ダメージは普通の武器の攻撃力に更に追加されるダメージであり。毒などの異常状態と併用すれば、その効果は計り知れない。それ故に、固有スキルでもレアの部類に入っており、武器よりもレアリティ度合いは高い。

富士のダンジョンのボスのがしやどくろでもそうだったが、属性攻撃以外で倒せないというのは戦闘時間がそれだけ長くなるということだ——ルシファーだけならまだしも、その周囲にいるモンスターにもその効果が飛び火していく。まあ、厄介なのはこの部分であろう……。

モンスターとプレイヤーの勢力図は圧倒的にモンスターの方が多く、そのレベルもモンスターの方が圧倒的に上である。

そのバランスを属性攻撃付きの武器という縛りで、更に狭めようというのが敵の思惑だろう。

これによって、メルディウス達の千代連合軍は防衛以外の選択肢を完全に失った。通常攻撃の効かない相手と遮るもののない平地戦を挑むのは、あまりにも無謀過ぎると言わざるを得ない。

エミルは紅蓮の状態を見て、彼女がすでに戦闘をできないと悟ると、リントヴルムを召喚してその背に飛び乗った。

赤黒い炎2

そんな彼女に続いてイシエルもリントヴルムに飛び乗る。

突然の行動に驚いた様子の紅蓮達に向け、エミルが徐に口を開く。

「——私はこのままルシファアの撃破しに行きます。あのモンスターを撃破できるのはこのリントヴルムだけ……あれが存在している限り、私達に勝利はないですから」

「待ちなさい……それは許可できません。貴女方はマスターから預かった彼の仲間達です。そういう事は私達の方でやりますから、貴女達はギルドホールで待機して下さい」

そう告げた紅蓮に、エミルが直ぐ様言葉を返す。

「それはこちらのセリフです。あなた達はこの街に必要な人間であり要。そんなあなた達を欠いては、始まりの街の二の舞になります。それに比べて私達の拠点にしていた街はもう落ちました……それにまだ、始まりの街から来た私達と千代のギルドとの間にはわだかまりがあります。もし、私達がルシファアの撃破に失敗してもそれを埋めることができる『この街の為に命を懸けて戦ってくれる』と——止めても行きます！ 最後にギルドホールに残してきたあの子をお願いします」

「——例えそうだとしても、絶対に許可できません。ドラゴンの召喚を解いて下がりなさい！」

エミルの言葉を聞いてもなお、紅蓮は全く引く気はない。

当然だ。確かにエミルの言った言葉には説得力があり正論だろう……しかし、紅蓮にとっては彼女達の生存が第一であり、それを犠牲にしての勝利はあり得ないのだ。いや、もしもこの戦いで敗れたとしても、紅蓮はエミル達を全力で逃がすだろう。

彼女にとっては自分の命よりも、マスターとの約束の方が大事なのだ——。

リントヴルムの背に乗ったままのエミルと、紅蓮が睨み合ったまま動かないでいる。

そこに狐の面を着けた青い着物を羽織った男に連れられ、フワフワ

と空中を浮遊しながらゆっくりと近付いてくるデュランの姿が見えた。

彼等は紅蓮の側に着地するが、エミルに向いている視線は全く動かない。

エミルから視線を逸らさずに、近くまでやってきたデュランに尋ねる。

「突然始まりの街の人々を連れて現れ、今まで雲隠れしていた貴方が何の用ですか？ 貴方の性格を考慮すれば、参戦する為に戻ってきたとは考えられませんか……」

「やっぱりそう思うかい？ でもそれはハズレだよ。俺は君達を助けにきたんだ——まあ、マスターに言われたからなんだけどね」

「マスターと会ったのですか!?!」

珍しく声を荒らげて食い付いた紅蓮。

その瞬間、エミルから決して離れなかった彼女の瞳が逸れる。その一瞬の隙を突いて、リントヴルムがルシファーに向けて飛び立つ。

それを追いかけてようと紅蓮も雲を召喚したが。しかし、その行動は間に入った青い着物の狐の面を被った男によって遮られた。

不機嫌そうな様子の紅蓮が、アイテム欄から取り出した小豆長光を構える。

しかし、青い短髪に青い着物の男は狐の面を外すと、その青と緑のオッドアイの瞳で紅蓮の紅の瞳を見つめる。

「——お前。本気でそんな体で戦えると思ってるのか？ しかも、この大山津見様とよ！ ……お前。死ぬぞ?」

「戦えるか戦えないかではありません。戦うか、戦わないかです!」
そう言った紅蓮の決意に満ちた瞳に、彼は納得したように大きく頷いた。

腰に差した刀を引き抜き紅蓮にその切っ先を向けて構える。

「止めろ！ 大山津見。刀を納めろ……」

同時に低い声で言ったデュランの言葉に、刀を構えていた大山津見は刀身を鞘に戻し両手を上げた。

「ちよつとした冗談だぜ？ そう熱くなるなよ。主人様」

その様子を見たデュランは微笑みを浮かべるが、大山津見はそれを見て不機嫌そうにそっぽを向いた。

そんな彼を無視して、デュランは紅蓮の方へと視線を向ける。

「彼女達をいかせてあげなよ。彼女達にも彼女達なりの考えがあつてのことさ。おっと、でも俺は君を挑発する気はないよ。ただ、援軍に来たというのは本当だ——それから、マスターが消えたよ」

「——ッ!!」

刀をデュランに向けていた紅蓮は、それを聞いて驚き目を丸くさせたまま固まつて動かなくなる。

まあ、無理もない。紅蓮からしてみれば彼の発した言葉はまさに青天の霹靂と言つていいほどの重大なものだ。

「——貴方は何を言っているのですか……?」

信じられないと言つた表情で、声に抑揚なくデュランに聞き返した。

状況が全く飲み込めない紅蓮の反応はごく自然なものだ。全プレイヤーの中でも最強と自他共にうたわれていたマスターが撃破されたと言うのだ——彼女じゃなくとも、俄には信じがたいものだろう。すると、紅蓮の横にいたメルディウスがデュランの胸ぐらにあつたマントを掴んで詰め寄る。

「またいい加減なこと言いやがつて! あいつは……ギルマスは俺が認める最強のプレイヤーなんだぞ!! 誰にも負けるわけないだろうがよ!!」

胸ぐらを掴みながら声を荒らげるメルディウスに、デュランは不思議そうに首を傾げた。

彼の苛立つ様子から動揺を隠しきれないのはメルディウスも同じ。いや、紅蓮よりも彼の方が、動揺という部分に関しては大きいものかもしれない。

睨み続けるメルディウスにデュランは笑みをこぼす。

「勘違いしているみたいだけど。彼は撃破されたのではなく、システムで存在を排除される前にログアウトしただけだよ?」

「……ログアウトだと?」

もう長らく使っておらずに忘れかけていた『ログアウト』という言葉に、メルディウスは更に目を丸くさせた。

まあ、無理もない。ログアウトができなくなったからこそ起きたこのデスゲームは、多くのプレイヤー達を犠牲にしてここまで来た。

しかし、マスターがログアウトできると言うことは、彼がその方法を知っていたといてその方法を隠していたのだとメルディウスは錯覚したのだろう。

「どういうことだよ！　なんでログアウトなんて言葉が出てくる！　しつかり説明しろデュラン!!」

己の中に湧き上がったマスターへの不信感を払拭するように、メルディウスはデュランの体を大きく揺する。

それが収まるのを待って、デュランは彼に向けて言葉を発した。

「俺達とは別の手段でログインしていた彼はいつでもログアウトできた。しかし、それをしなかった……メルディウス。君も彼と共に戦って分かったはずだ——彼は死ぬつもりだった。だが、それは犬死にではなく仲間達の為にだ!」

「……ギルマスは俺達を裏切ったのではなく——」

「——そう。俺達を信じたから、ログアウトしたんだよ。俺達は彼にやっと同格の存在として認められたということさ」

メルディウスは口元に笑みを浮かべると、デュランの胸ぐらから手を放すして取り出したベルセルクを空に向けて突き出した。

「俺達が拳帝と同格か……なら、あつという間にこの程度の敵は撃破して見せないとな!　ギルマスもどこかで見ているのだろうかからよ!」

「フンツ、相変わらず暑苦しいね君は……でも。俺も久しぶりに、本気を出そうかな……」

メルディウスの掲げているベルセルクの刃に、デュランもイザナギの剣の刃を合わせた。

しかし、その後ろでは未だにマスターがいなくなったことを聞いて、立ち直れない紅蓮を白雪が寄り添うようにして支えていた。

赤黒い炎2

そんな彼女に続いてイシエルもリントヴルムに飛び乗る。

突然の行動に驚いた様子の紅蓮達に向け、エミルが徐に口を開く。

「——私はこのままルシファアの撃破しに行きます。あのモンスターを撃破できるのはこのリントヴルムだけ……あれが存在している限り、私達に勝利はないですから」

「待ちなさい……それは許可できません。貴女方はマスターから預かった彼の仲間達です。そういう事は私達の方でやりますから、貴女達はギルドホールで待機して下さい下さい」

そう告げた紅蓮に、エミルが直ぐ様言葉を返す。

「それはこちらのセリフです。あなた達はこの街に必要な人間であり要。そんなあなた達を欠いては、始まりの街の二の舞になります。それに比べて私達の拠点にしていた街はもう落ちました……それにまだ、始まりの街から来た私達と千代のギルドとの間にはわだかまりがあります。もし、私達がルシファアの撃破に失敗してもそれを埋めることができる『この街の為に命を懸けて戦ってくれ』と——止めても行きます！ 最後にギルドホールに残してきたあの子をお願いします」

「——例えそうだとしても、絶対に許可できません。ドラゴンの召喚を解いて下がりなさい！」

エミルの言葉を聞いてもなお、紅蓮は全く引く気はない。

当然だ。確かにエミルの言った言葉には説得力があり正論だろう……しかし、紅蓮にとっては彼女達の生存が第一であり、それを犠牲にしての勝利はあり得ないのだ。いや、もしもこの戦いで敗れたとしても、紅蓮はエミル達を全力で逃がすだろう。

彼女にとっては自分の命よりも、マスターとの約束の方が大事なのだ——。

リントヴルムの背に乗ったままのエミルと、紅蓮が睨み合ったまま動かないでいる。

そこに狐の面を着けた青い着物を羽織った男に連れられ、フワフワ

と空中を浮遊しながらゆっくりと近付いてくるデュランの姿が見えた。

彼等は紅蓮の側に着地するが、エミルに向いている視線は全く動かない。

エミルから視線を逸らさずに、近くまでやってきたデュランに尋ねる。

「突然始まりの街の人々を連れて現れ、今まで雲隠れしていた貴方が何の用ですか？ 貴方の性格を考慮すれば、参戦する為に戻ってきたとは考えられませんか……」

「やっぱりそう思うかい？ でもそれはハズレだよ。俺は君達を助けにきたんだ——まあ、マスターに言われたからなんだけどね」

「マスターと会ったのですか!?!」

珍しく声を荒らげて食い付いた紅蓮。

その瞬間、エミルから決して離れなかった彼女の瞳が逸れる。その一瞬の隙を突いて、リントヴルムがルシファーに向けて飛び立つ。

それを追いかけてようと紅蓮も雲を召喚したが。しかし、その行動は間に入った青い着物の狐の面を被った男によって遮られた。

不機嫌そうな様子の紅蓮が、アイテム欄から取り出した小豆長光を構える。

しかし、青い短髪に青い着物の男は狐の面を外すと、その青と緑のオッドアイの瞳で紅蓮の紅の瞳を見つめる。

「——お前。本気でそんな体で戦えると思ってるのか？ しかも、この大山津見様とよ！ ……お前。死ぬぞ?」

「戦えるか戦えないかではありません。戦うか、戦わないかです!」
そう言った紅蓮の決意に満ちた瞳に、彼は納得したように大きく頷いた。

腰に差した刀を引き抜き紅蓮にその切っ先を向けて構える。

「止めろ！ 大山津見。刀を納めろ……」

同時に低い声で言ったデュランの言葉に、刀を構えていた大山津見は刀身を鞘に戻し両手を上げた。

「ちよつとした冗談だぜ？ そう熱くなるなよ。主人様」

その様子を見たデュランは微笑みを浮かべるが、大山津見はそれを見て不機嫌そうにそっぽを向いた。

そんな彼を無視して、デュランは紅蓮の方へと視線を向ける。

「彼女達をいかせてあげなよ。彼女達にも彼女達なりの考えがあつてのことさ。おっと、でも俺は君を挑発する気はないよ。ただ、援軍に来たというのは本当だ——それから、マスターが消えたよ」

「——ッ!!」

刀をデュランに向けていた紅蓮は、それを聞いて驚き目を丸くさせたまま固まつて動かなくなる。

まあ、無理もない。紅蓮からしてみれば彼の発した言葉はまさに青天の霹靂と言つていいほどの重大なものだ。

「——貴方は何を言っているのですか……?」

信じられないと言つた表情で、声に抑揚なくデュランに聞き返した。

状況が全く飲み込めない紅蓮の反応はごく自然なものだ。全プレイヤーの中でも最強と自他共にうたわれていたマスターが撃破されたと言うのだ——彼女じゃなくとも、俄には信じがたいものだろう。すると、紅蓮の横にいたメルディウスがデュランの胸ぐらにあつたマントを掴んで詰め寄る。

「またいい加減なこと言いやがつて! あいつは……ギルマスは俺が認める最強のプレイヤーなんだぞ!! 誰にも負けるわけないだろうがよ!!」

胸ぐらを掴みながら声を荒らげるメルディウスに、デュランは不思議そうに首を傾げた。

彼の苛立つ様子から動揺を隠しきれないのはメルディウスも同じ。いや、紅蓮よりも彼の方が、動揺という部分に関しては大きいものかもしれない。

睨み続けるメルディウスにデュランは笑みをこぼす。

「勘違いしているみたいだけど。彼は撃破されたのではなく、システムで存在を排除される前にログアウトしただけだよ?」

「……ログアウトだと?」

もう長らく使っておらずに忘れかけていた『ログアウト』という言葉に、メルディウスは更に目を丸くさせた。

まあ、無理もない。ログアウトができなくなったからこそ起きたこのデスゲームは、多くのプレイヤー達を犠牲にしてここまで来た。

しかし、マスターがログアウトできると言うことは、彼がその方法を知っていたといてその方法を隠していたのだとメルディウスは錯覚したのでだろう。

「どういうことだよ！　なんでログアウトなんて言葉が出てくる！　しつかり説明しろデュラン!!」

己の中に湧き上がったマスターへの不信感を払拭するように、メルディウスはデュランの体を大きく揺する。

それが収まるのを待って、デュランは彼に向けて言葉を発した。

「俺達とは別の手段でログインしていた彼はいつでもログアウトできた。しかし、それをしなかった……メルディウス。君も彼と共に戦って分かったはずだ——彼は死ぬつもりだった。だが、それは犬死にではなく仲間達の為にだ!」

「……ギルマスは俺達を裏切ったのではなく——」

「——そう。俺達を信じたから、ログアウトしたんだよ。俺達は彼にやっと同格の存在として認められたということさ」

メルディウスは口元に笑みを浮かべると、デュランの胸ぐらから手を放すして取り出したベルセルクを空に向けて突き出した。

「俺達が拳帝と同格か……なら、あつという間にこの程度の敵は撃破して見せないとな!　ギルマスもどこかで見ているのだろうからよ!」

「フンツ、相変わらず暑苦しいね君は……でも。俺も久しぶりに、本気を出そうかな……」

メルディウスの掲げているベルセルクの刃に、デュランもイザナギの剣の刃を合わせた。

しかし、その後ろでは未だにマスターがいなくなったことを聞いて、立ち直れない紅蓮を白雪が寄り添うようにして支えていた。

赤黒い炎3

紅蓮から逃げるようにして飛び立ったエミルとイシエルは、ルシファーへと向かっていく。

ルシファーから目を離さないエミルとは違い、イシエルの方には微かな迷いが見える。

それも無理はない。何故なら彼女は、赤黒い炎を発している敵との戦闘自体初めてなのだ――。

彼女がエミルと再会したのは富士のダンジョンで、エミル達が赤黒い炎を纏ったがしゃどくろを撃破してしばらくした後であり。属性攻撃以外通用しないモンスターなど、彼女は今までで一度も戦ったことなどない。

こうしてリントヴルムの背に乗っている今でさえ、まだ未知のものと戦うという不安がある。

もちろん。エミルが無理矢理連れてきたわけではなく、イシエル自らの意志で付いてきたのだが、出掛ける前にはエミル本人の口から今回の作戦は死ぬかもしれないという説明も受けていた。

それでもエミルと死ねるなら本望だと付いてきたのだ――。

「イシエー！ 敵を射程距離に捉えたわ。手筈通りに！」

エミルの掛け声に、イシエルは迷いを振り払う様に激しく頭を振ると、背負っていた弓を構えてその弦を引き絞る。

「――うちはエミルを信じる！」

弓越しに目を細め、ルシファーの胸元に鏃を合わせて狙い定めたように矢を放つ。

燃えるように赤く輝く矢が放たれたと同時にその輝きを増し、ルシファーの胸元に赤い閃光が突き刺さる。

ルシファーの巨体が光の矢に押されるようにして数歩後退る。

それを確認してイシエルの放った光の矢を狙って、エミルはリントヴルムに炎を噴射するように命令を出す。

答えるように咆哮を上げて口から炎を噴射すると、見事に光の矢の刺さった胸元に直撃した。

空中でホバリングしながら炎を噴射し続けるリントヴルムの勢いに押され、その巨体が大きくバランスを崩して地面に地響きと鳴らして倒れた。派手に倒れたが、ルシファアの頭上に表示されているHPバーは少ししか減っていない。

以前がしゃどくろと戦った時はこれほどHPの減少が少なくはなかった。レイニールとリントヴルムの2体で削り切れた。

しかし、やはり攻略不可能とまで言われたルシファアだ。がしゃどくろとは同じダンジョンボスでも、その格の違いは隠せないらしい……。

倒れたルシファアに追い打ちをかけるように、上空から再びイシエルが矢を放つと、同じくエミルもリントヴルムで炎を浴びせかける。どちらも胸元へヒットし、先程よりも大きくHPが減少する。その理由は至ってシンプルなもの、ただ単にその場所がルシファアのウィークポイントだからである。

どんなに強力なモンスターであっても泣き所であるウィークポイントが存在する。ルシファアのウィークポイントは胸の皮膚の裏側にある宝玉と言われる結晶体だ——しかし、普段は皮膚で隠されており。外見から視覚で判断するのが難しい。

だからこそ、エミルは初手のイシエルの攻撃で宝玉の表面を覆っていた皮膚を吹き飛ばしたのだ。

トレジャーアイテム『アルテミスの弓』から放たれる光の矢は貫通力に優れていて、そして属性も付いている。ドラゴンであるリントヴルムは元から炎属性攻撃ができる。

エミル達の中で属性攻撃系の武器を持っているのは、エミルのリントヴルム、イシエル、デイビッド、カレン、レイニールだけだ——。星と行動を共にしているレイニールはともかく。デイビッドとカレンを連れてくればもう少し楽に戦えたかもしれない。

しかし、相手にするのは修正前のルシファアだ。そう簡単に倒せる敵でなければ、撃破される可能性もある。

声を掛ければデイビッドもカレンも進んで付いてくるだろうが、さすがに命を懸けるこの戦いに彼等を持ってくるわけにはいかない。

「イシエー！」

「はい！」

エミルの掛け声にイシエルは即座に矢を放つ。その後、エミルがリントヴルムに炎を噴射するように命令を出す。二人は息の合ったコンビネーション攻撃でルシファアの胸に埋まっている宝玉を攻撃する。

ルシファアは反撃も防御もしないまま、一方的にやられているだけののが不可解ではあるが……。

すると、そこに上空から突如として火球がルシファアの顔に直撃し、エミルとイシエルは慌てて頭上を見上げた。

そこにはリントヴルムクラスの巨大な漆黒のドラゴンの背には兜を被った黒い重鎧に身を包んだ男が乗っていた。そしてその手には、異様に長い槍に斧の様な刃の付いた武器ハルバードが握られている。

「助太刀するぞ！ 北条！」

「何度言えば分かるの？ 私は伊勢よ！」

隣に付けたドラゴンから声を荒らげるエミルを見て、少し考える素振りを見せると、不思議そうに彼が首を傾げた。

「——ん？ 同じではないか」

呆れた様のため息を漏らすと、すぐに気持ちを切り替えて言った。「でも協力してくれるならありがたいわ！ 今は少しでも戦力が欲しいもの……」

ゆっくりと立ち上がろうと地面に手を突き体を起こそうとするルシファアに、エミルが再び炎を浴びせ掛けると、イシエル、影虎も攻撃に参加する。

一度は起こそうとしていたルシファアの巨体が、再び地面に張り付けになった。

三人になったことで効率良くルシファアのHPを削ることができるようになると、見る見るうちにルシファアのHPは2割を割り込んだ。

その直後、今まで減少していたHPが猛烈な勢いで回復を始め、あつという間に全回復した。さすがにこれには驚いたのか、3人は信

じられないと言った表情で何度も瞬きを繰り返している。

そう。ルシファーが抵抗をしなかったのは、抵抗する必要がないほどのダメージだったからだ。

おそらく。一定の数値を下回った場合に、自然に最大値まで回復するように設定されているのだろう。

以前のルシファーには備わっていなかった機能だと考えると、今回の赤黒い炎と一緒に追加されたのは間違いない。だが、これでルシファーの撃破は絶望的となった。

エミル達に残された手段は撤退の二文字しかないが、それを悟っていたのはイシエルと影虎だけで、エミルはまだ攻撃を続けている。

「エミル。早う逃げな！ 倒せへんのにここにおいても意味ないよ！」

「そうだ！ 一度撤退しなければ。このままでは犬死になるぞ！」

すぐに撤退しようと言った2人に向けて、エミルがリントヴルムに攻撃を命令しながら告げる。

「逃げたければ、2人で逃げて！ 私はここに残ってこいつを食い止める……たとえ命と引き換えにしても！」

「3人でもダメなのにそんな無理やよ！」

「たとえ無理でも無茶だとしても！ あの子のいる場所に——あんな化け物を連れていくわけにはいかないのよ!!」

エミルがここから撤退できないのは、星が千代のギルドホールにいるからであり、今の彼女には撤退の二文字はないのだ——。

その決意を目の当たりにして考えを変えたのか、影虎も自慢のファーブニルに攻撃を命じる。ファーブニルは彼に応えるように口いっばいに溜めた炎を、火球として撃ち出す。

彼に遅れを取ったと思ったのか、慌てて弦を引き絞りイシエルも光の矢を放つ。

どちらの攻撃も宝玉へと当たったのだが、今度は全く怯むこともなく突き進んでくる。その足元では、多くのアンデッド系のモンスターが、赤黒い炎を上げて同じく突き進む。

徐々に街の外周に近づくルシファーと同じく赤黒い炎を纏ったモンスター達に、エミル達は焦り始めていた。

ここまでで最初から二度ルシファアのHPを削ったが、全てで削り切る前にHPが全回復まで回復してしまった。どうやら、回復できる回数に制限はないらしい。

後ろでは紅蓮の声と共に、迎撃の為に用意された剛特製の砲台がドンドンと次々に轟音を響かせながら放たれる。

宙を舞った蓋の様な形の砲弾が打ち出された直後は空中を回転し、次第に重力に逆らわず重い方が下になり、数多く蠢くアンデッドの群れの上に落ちた。

下敷きになったモンスター達のHPは全く減少しないものの、巨大な重石を置かれた状況となって身動きが取れなくてもがいている。

あえて砲弾ではなく蓋の様な形状の重石にしたのは、敵の作戦と相まって撃破ではなく、進行してくる動きを止める方法にしたのは正解だろう。これは剛の作戦勝ちと言ったところだ――。

爆音とともに土煙を上げている地面に見向きもせず、エミル達は強引に向かつて来るルシファアにしか視線を向けていない。

いや、もうルシファアを止めることにしか興味がないかのように、一心不乱に胸の宝玉目掛けて攻撃を繰り返している。

徐々に迫ってくる街の水堀がエミルを焦らせる。しかし、いくら焦ったところでシステムで設定されている以上は、リントヴルムの攻撃速度が上がることはない。

一瞬だけエミルが門の方に目を離れた直後、今まで無抵抗だったルシファアがその大きな翼を左右に広げた。

「――しまっ……」

エミルが視線を戻した時にはすでに遅く、ルシファアの背中の翼から放たれた羽根が鋭利な刃物となって彼女達を襲う。

攻撃に特化していたエミル達ではその攻撃をかわす余裕がない。

無数に放たれた羽根がエミルとイシエルを乗せたリントヴルムの体に突き刺さる。エミルとイシエルも武器で叩き落としたものの、その数はあまりにも多く鎧をも突き抜けて皮膚まで羽根が入り込んできた。

しかし、ほぼこの世界では裸に近い防御力しかない巫女服を着てい

たイシエルの方がダメージは大きい。空という身を護る障害物のないこの場所では為す術もなく、このままでは2人共HPが尽きてしま
う……。

赤黒い炎4

咄嗟に影虎のファーブニルが羽根とリントヴルムとの間に入ってその全ての攻撃を受けきった。

「その程度の攻めでは、毘沙門天の加護を受けた俺は倒せん！ うお おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ!!」

しかし、ファーブニルが間に入った甲斐もなく。飛んでいたリントヴルムも、さすがに耐えきれずに地面に落下する。

土煙を上げて地面に伏せたリントヴルムが姿を消し、エミルとイシエルが地面に倒れ込む。

「……………、こないなとこで……………エミルはやらせへん!」

イシエルは袖の下に入れていたヒールストーンを倒れているエミルへと投げると、緑色の光が降り注ぎ彼女のHPが回復したのを確認して、もう一つを自分の体に軽く当てた。

直後。上空を弱々しく羽ばたきながら、間一髪浮いている状態のファーブニルに向かって叫ぶ。

「黒いの！ そないなとこにおらんで、こつちに來てエミルの体から羽根を抜きなさい!」

その声が聞こえたのか、ゆつくりと降りて来るファーブニルに笑みを浮かべると、ゆつくりと起き上がって自分の体に突き刺さっている羽根を一枚一枚引き抜く。影虎がファーブニルを消し、イシエルの側に着地したのを確認すると、持っていた両手を大きく広げた。

降り注ぐ羽根の雨は彼女達を襲うが、イシエルの手前でまるで見えない壁に阻まれているように地面に落ちる。

その様子を見ていた影虎は感心したように声を漏らす。

「ほう、凄い能力だな。だが、何故最初からそれを使わなかった？ 使えば傷ひとつ負わなかっただろうに」

「ええから、さっさと手を動かさし！ また切り落とすで!」

その言葉でトラウマが蘇ったのか、顔を青ざめさせた影虎が、エミルの体に刺さった羽根を一枚ずつ慎重に抜いていく。

一本抜かれる毎にエミルの額から汗が噴き出し頬を流れる。かと

言って抜かなければHPの減少を止めることはできないので仕方ない。

「そっちは大丈夫なん？　ぎょうさん刺さつとるけど」

「俺は大丈夫だ。ヒールストーンがある限り無限に自動回復してくれる。装備以外回復アイテムしか持っていないからな、数百は軽くストックがある」

羽根を抜く手を止めることなく影虎が答えると、イシエルは「なら、うちとエミルのHP管理も頼むわ」と言うのと彼も頷いて返す。

「うちがさつき、スキルを使わなかったのは、使えなかったからやよ。うちのスキルは、体から少し離れた場所に衝撃波を発生させることができる。けど、その範囲は決まっとる。もし、さつき上空でスキルを発動していればリントヴルムが木っ端微塵になって、地面に落ちとつた」

だが、彼女の説明には不可解なことがある。

リントヴルムの体の一部が範囲外になり、体が衝撃波で破裂するのはいいとしても、衝撃波を発生させている彼女が地面に叩きつけられることはないはずだ。

彼女の衝撃波は例えるならばヘリコプターの巻き起こす風のようなもの——それなら、スキルの発動範囲内に入っているエミルは効果の対象になり地面に落下しないはずなのだが。

その疑問には影虎も気が付いていたのか、雨の様に降り注ぐルシファアの攻撃を防いでいる彼女に質問した。

「だが、どうして落ちる。二人共効果範囲内に入っているなら問題ないだろう？」

「はあ!?　誰が二人共効果が適応される言うたん？　効果があるんはうちだけで、エミルはただ効果範囲の安全圏に入っただけや。つまり、エミルは地面に落ちこちてまう言うことになる！　もうバカには構っておれんわ。あんたはうちとエミルのHPだけしつかり管理してればええんよ!」

イライラしたようにそう叫んだイシエルに影虎は無言で頷くしかなかった。

普段はもう少し社交的な印象のあるイシエルなのだが、彼に対しては口調が強い。いや、星に対しても好意的とは言えないことから、エミルに近づく存在そのものをより良く思っていないのだろう。

イシエルが攻撃を防ぎ続ける中で、影虎がエミルの体から羽根をやつとの思いで取り切ると、エミルがゆつくりと体を起こす。彼女から離れ、今度はイシエルの体に刺さっている羽根を抜き始めた。

正直。エミルの鎧の隙間から入っていた羽根を抜くよりも、イシエルの体から羽根を抜く方が数倍も楽だったが、彼女の皮膚を貫いている羽根の数は尋常じゃない。

常時回復状態の自分ですら厳しいのに、この状態で固有スキルの発動までするとはなみの精神力ではないと感じた。何よりも、そう感じたのは、彼女は体から羽根を抜かれても眉ひとつ動かさなかったからだ――。

起き上がったエミルが地面に落ちていた剣を拾い上げると、イシエルが声を荒らげながら叫んだ。

「エミル！　うちの側から離れたらあかん！　今は外に猛烈な衝撃波を発生させとる。範囲から出たら体が木っ端微塵になるよ！」

イシエルの固有スキルは『ソニックブーム』つまりは強烈な衝撃波を作り出すもので、目視できないだけで彼女達の周りを強烈な空気の波が放出し続けている。

つまり、防いでいるのではなく更に強い力で弾き返しているだけに過ぎない。もちろん。この技は敵だろうが味方だろうが触れるものを例外なく弾き飛ばす。

それはPTメンバーであっても同じだ――無論、フレンドリーファアという味方を攻撃した時にダメージを受けるシステムことだ。

しかし、これは物理攻撃――つまり、剣で斬ったり拳で殴ったりと言ったものだけで、メルデイウスのベルセルクの爆発で破壊した破片は味方が受けてもダメージを受けない。

つまりはオブジェクトによるダメージか、所有物での攻撃かの違いなのだ……風も数値化されているオブジェクトであり、石などと同じ扱いなのだ。それを利用した攻撃はたとえば、パーティーを組んでいる

の仲間ですら巻き込んでしまうのだ――。

だが、エミルは立ち上がるとイシエルの制止すら聞かずに進み始める。

そんな彼女の体を、影虎が慌てた様子で押さえ込む。

「なにをやっている北条！ 奴の声が聞こえなかったのか!？」

「――放しなさい！ あいつを……あの化け物を止めないとあの子が……星ちゃんが殺されてしまう。私がやらないと……私はお姉さんだから……」

うわごとのように呟く彼女の瞳には光がない。

おそらく。受けたダメージとルシファアのチートと言わざるを得ない圧倒的な力を目の当たりにしてのショックが大きかったのだろう。リントヴルムも撃破され、もう打つ手が無いのも理由だった。

ルシファアの足元を通過し、赤黒い炎を纏ったスケルトンや死霊の騎士達がエミル達の真横を横切って水堀に飛び込んでいく。普通なら水に飛び込んだ瞬間に溶けて光に変わるアンデット系のモンスター達が水の中を泳いで向こう岸に渡っている。

街を守るプレイヤー達に城壁から降り注ぐように放たれる矢の雨を受けても、ダメージを受けないどころか怯みすらしない。

壁に張り付いたスケルトン達は互いに折り重なって骨のはしごを築き上げていく、このままでは千代の街の中に敵の侵入を許してしまう。

しかし、もはやエミル達には抵抗するだけの力も体力も残っていない。今もイシエルが固有スキルで辛うじて攻撃を防いでくれているだけで、少しでもバランスが崩れれば一瞬でその身が消し飛んでしまう。

つとエミル達の後方、街の中から巨大な黄金のドラゴンが飛んでくるのが見えた。

体全体に金塊でも付けた様なまばゆい光を周囲に撒き散らしながら、城壁に張り付いたスケルトン達を口から吹き出した炎が襲う。

一瞬にして消し飛んだHPとその体。そして消失した時に残るキラキラとした光の粒子が周囲を浮遊し、吸い込まれるように上空へと

ゆっくりと上っていく。それを一瞥して、その視線を今度はエミル達を攻撃しているルシファアの方を睨み付けた。

怒り狂ったように大きな咆哮を上げると凄まじい速度で炎を吐きながら、ルシファアにぶつかりその勢いのままルシファアの巨体を地面に押し倒す。

轟音と共に地面を滑るようにルシファアをその場から離すと、エミル達の前に長い黒髪をなびかせた女の子が舞い降りる。その手には黄金の装飾が施された鍔の美しい剣を握っている。

驚きを隠せない表情で後ろ姿を見つめていたエミルは、見慣れた黒髪の子に向かって叫ぶ。

「――星ちゃん!!」

振り向いてにつこりと微笑むと、再び前を向き直し金色のドラゴンに向かって声を上げた。

「レイ！ エミルさん達を乗せて早くここから離れて！」

「了解したのじゃ！ 主！」

倒れているルシファアの顔にもう一度炎を吹き付けると、素早くその場を離れエミル達の方に降り立つ。

イシエルは固有スキルを解除すると、影虎と共にエミルの体を持ち上げ無理矢理にレイニールの背中に乗せる。それを確認して、レイニールはすぐにその場を離れると街の中へと消えていった……。

赤黒い炎5

レイニールが飛び立ったことを確認して、星はゆっくりと瞼を閉じて深呼吸をした。

その場に星を残してあつさり街に戻ったのには理由がある。

* * *

それは、星がここまで来るまでの行動にあった。

紅蓮と別れ、バロンと共に泣き疲れて眠ってしまったフィリスを部屋に届けるとバロンは足早に部屋を後にした。

星が部屋に戻ると申し訳そうにレイニールがパタパタと飛んで来る。

「主、眠ってしまったのだ。申し訳ない……」

戻ってきた星達の様子を見て、何かあったと思ったのだろう。レイニールはしゅんとした様子で横に首を振った星の頭に乗った。

子供のように眠るフィリスの顔を見て微笑むと、再び紅蓮への怒りが星の中に湧き上がってくる。

少し気分を変えようと窓際の席に座ろうとした時、大きな漆黒のドラゴンが目の前を通り過ぎた。

星とレイニールはその行く先に視線を移すと、そこでは空を飛びながら炎を噴射するリントヴルムの姿があった。

そしてこちらに向かって左右の肩を揺らし、悠々と歩いてくる白い翼を持った角の生えた大天使の姿がはつきりと映っていた。

「……エミルさん。私も行かなきゃー!」

「——ッ!?!」

突然走り出した星の頭の上でレイニールが驚いた様に叫ぶ。

「エミル達は戦っているのじゃ! 主が行っても邪魔になるだけだろう!!」

「———そうかもしれない……でも、やってみたいことがあるの!」
一度は扉を開けるのを躊躇したが、星はすぐに迷いを振り切る様に

そうとうと廊下へと飛び出した。

廊下を駆けていたが、ギルドホールの中はまるで人の気配がない。もぬけの殻といった感じの廊下を駆け抜けてエレベーターに乗り込んだ。

エレベーターの中でレイニールが頭から飛び立ち、星の顔の目の前に止まると少し起こった様子で言った。

「それで、やってみたい事とはなんなのだ？　まさか、死んでみたいとか言うんじゃないだろうな？」

レイニールのその問いに、星は少し素直に答えた。

「……ううん。レイは覚えてる？　前の街での出来事。あの時、私の力がどんなものなのか分かった気がするの」

だが、星のその『分かった気がする』という、なんとも曖昧な言葉が気に入らなかつたのか、レイニールの表情は更に激しくなり鬼の様な形相へと変わった。

レイニールとしてはそんな不確定なことで、自分の主人である星を死地に向かわせるわけにはいかない。

「ここを通すわけにはいかないのじゃ」

エレベーターの扉が開いても、レイニールは両手を広げて星の前から動く気配がない。

それを避けることも退けることもなく。星は飛んでいるレイニールの体を掴むと、ゆっくりと自分の胸に抱き寄せた。

その突然の行動に驚き慌てふためいているレイニールに、星が優しく言った。

「……レイが私のことを心配して言ってくれてるのは分かっている。けど、私も戦いたい。みんなの役に立ちたい……だから、やれることを精一杯やろうと思ったの……でも、心配しなくても大丈夫だよ。きつと上手くいくから」

「だが、失敗したらどうする！　無理なことは何をしてでも無理なのじゃ！　また倒れたら次は……」

星に抱かれたまま首を激しく振って否定したレイニールが、不安そうに星の顔を見上げた。

それもそうだ。今まで、固有スキルを使用すればほぼ100%の確率で眠ったまま、数日間は目を覚まさない。

今まで、レイニールもそんな星の横でずっとそんな彼女を見つめてきた。

レイニールとしてはいつも目を覚まさないのではないかと、心配していたことだろう。そんな危険なスキルを星はまた発動させようとしているのだ――。

「確かに、無理だって諦めちゃうのは簡単だと思う。でも、私は……無理だと言うより、できるまで頑張りたいの。たとえ間違っても、次はきつと前よりも上手にできるようになるはずだから――だから、成功するまで何度でも、何度でも頑張りたい！」

「はあ……主には敵わないな。止めてもやるのだろうか？」

その問いに、無言のまま星は深く頷く。

レイニールは呆れた様子で、星の腕の中から這い出ると星の顔の前で拳を突き出す。

「――やるなら思いっきりやるのだ！ 主は後のことは我輩に任せておくのじゃ！」

「うんー」

嬉しそうに頷いた星は人差し指で、レイニールの突き出した拳に指の腹を押し当てる。レイニールがエミル達を引き取って、すぐにその場を離れたのだ――。

* * *

十万の敵モンスターの前にたった一人で残った星は、向かってくる赤黒い炎を纏った敵の群団を目の当たりにして至って冷静だった。

自分でも不思議なほど落ち着いているのが分かるくらいだ――人は極限の状況に陥ると悟りを開くという心理に近いのかもしれない。

星は握り締めている金色の聖剣を更に強く握り締めると、その剣先を天に向かってゆっくりと振り上げた。瞼を閉じて大きく息を吐くと、大きな紫色の瞳を開いて大声で叫ぶ。

「——ソードマスターオーバーレイ!!」

それに応える様に、金色に輝く刃から放たれた光が辺りを呑み込み、モンスターを次々に光の中へと消えていく。

まばゆいほどの光を発している剣を構えると、その光が星の全身へと広がった。動きが鈍ったモンスターの大量を見据えた星は小さく呟く。

「……お願い。力を貸して……」

地面を踏みしめた足に力を込めると、星は前傾姿勢で剣を構えたまま敵の中に突っ込んでいく。

そんな彼女に襲い掛かってきた3体の死霊の騎士をまるでバタでも斬るように真つ二つに切断する。

「……ごめんなさい」

そう小さく口にして光に変わるのを確認すると、次々と向かって来る敵を斬り伏せていく。

もちろん。敵モンスターの体を覆う赤黒い炎も一緒にだ——属性攻撃系の武器でしかダメージを与えられないこのゲームでは最強の鎧を、星の金色に輝く剣はいともたやすく突破していく。それはつまり、星の持つ『エクスカリバー』が何らかの属性を有しているということの意味している。

星は全面を敵に囲まれていても、素早く最も自分に距離の近い敵を選んで撃破している。

しかし、彼女にそれだけのことができる剣の技量はない。それどころか、星が剣を使ってこれだけの数と戦うのはこれが初めてのことだ。

彼女の持つ『エクスカリバー』は固有スキル『ソードマスター』のゲームマスター機能『オーバーレイ』を発動することで、周囲にいる者達のステータスを『1』に固定し、奪ったステータス値を己のステータスに加算する。それは攻撃、防御などのステータスを始めとした視覚、聴覚などの五感も筋力も己の物へと変える。しかも、周囲のプレイヤーの行動を己の特別なコマンドから、自由に操作することもできるという強力過ぎる能力。

今の星の身体能力は超人というレベルにまで引き上げられており。敵の土を踏みしめる音や鎧の鳴る音などで敵を感知できるだけでなく、引き上げたれた視覚には全ての景色が、まるでスーパー slows 映像の様に映っている。

だが、それがあつたとしても。今まで戦つてこなかつた彼女のこの変化は異常だろう——しかし、これが星本来の力だということなのだろう。戦いはしなかつたが、星は相当な時間を戦闘の練習に費やしていた。しかも、その観察力と洞察力は人並み外れたものがあつた。

それは今までの人生で、彼女が人に頼れずにいかなる場合でも、全てを一人の力だけで熟してこななければいけなかつたことが背景にある。

それは常に観察し先に起こるであろうことを予測し、起こつた事柄を考察し、常に実行に移してきた結果でもある。

つまり。今の彼女を支えているのは固有スキルだけではなく、本来の彼女のスキルの部分が大いにある。多くの情報量を瞬時に振り分けられる彼女の頭脳があつてこそその力なのだ——。

直後にそれを証明する出来事が起きる。レイニールに押し倒されたルシファーが起き上がり、戦っている星を視界に捉えると、両側の翼を大きく広げ高速で羽根を撃ち出す。その羽根は風切り音を辺りに響かせ、星の周りの味方すらをも巻き込んで星諸共辺りに土砂を巻き上げ炸裂した。

砂煙が消えると、そこには無傷のまま剣を構えてルシファーを睨んでいる星の姿があつた。

全面に展開した全ての羽根を撃ち落とすことはたとえスロ—モーションで見えていても不可能だ。しかし、星はそれを意図も容易くやつてのけたのである。

これは星が瞬時に状況を判断して対処したからであり、前にも富士のダンジョンで同じ様な出来事があつた。

それががしやどくろとの戦闘時、ウィークポイントである胸に光る青い炎を攻撃した時だ——常に仲間達の後ろで状況を見ていた彼女だからこそ、人よりも長く敵の行動を観察することができた。

普段から主張しない星は周囲の様子を最も観察できたと言ってもいい。それが、人並み外れた洞察力に繋がっているのだ。

ルシファーを睨み付けている星は、次の攻撃に移ろうとして翼を広げ直しているルシファーに向かって駆け出すと、一瞬にしてルシファーの前に移動して剣を構える。

咄嗟に防御しようとして伸ばしたルシファーの腕ごと、エクスカリバーの刃がチーズの様に軽々と斬り裂くとそのまま羽根まで切り落とした。

今の星には修正前の墮天使ルシファーですら、まるで赤子の様なものだろう。地面に着地した星にスケルトン達が執拗に襲い掛かってくる。

それを目にも留まらぬ早技で星が斬り伏せる。いや、正確には一瞬に見える中で星は剣を破壊して敵を無防備な状況にしてから斬り倒しているのだ。

だが、今の星ならばそんな面倒なことをしなくても、一撃で敵を確実に撃破できる。しかし、その理由はシンプルに『もしも』に備えているからだろう……しかもその行動を彼女は無意識にやっている。

星の剣に触れた直後、モンスター達の持っている武器はガラス片へと変わり、無防備になったモンスターのその頑強な鎧ごと容易く斬り裂く。

モンスターを撃破する星の勢いが増し、外から見ていると高速で走り回る光にしか見えない。しばらくして、交戦していたモンスター達が慌てて撤退を開始し始めた。

それには星もほっとした様子で息を吐くと、撤退していくモンスターの後ろ姿を見送ると剣を握っていた手から力を抜く。まるで何事もなかったかのように、街を取り囲んでいたモンスター全てが撤退していった。

その光景を城壁から見ていたプレイヤー達から歓喜の声が一齐に上がった。

星の撃破したモンスター達の残した光の粒子が、日の昇った空に浮かぶ星の様に煌めいていた。

持っていたエクスカリバーを鞘に戻す時。その瞬間、めまいがして少しよろけたが、すぐに姿勢を立て直す。

何かに気が付いたように徐に振り向いた星は、飛んでくるレイニールの姿を見つけて表情が和らぐ。

星の前に降りてきたレイニールが注意深く辺りを見渡して、敵が完全に撤退したのを確認すると小さいドラゴンの姿に戻った。

「――本当に主だけで追い払ったのか？」

無言のまま頷くだけで星の表情は笑顔だが、レイニールはその中に垣間見える疲労感を見逃さなかった。

元々使いこなしていたとはとても言えない固有スキルだ。それをまともにしただけでも、最早奇跡に近いというのが本音だろう。

レイニールはすぐに大きなドラゴンのモードに戻ると、背中を向いて首で星に乗るようにと促した。

街に戻るとレイニールの着地地点にプレイヤー達が密集していた。皆手を大きく振って星が降りてくるのを今か今かと待っていた。

レイニールがどうすればいいか聞こうと背中を見ると、大勢の声を聞いた星が眉間にシワを寄せたままうずくまっているのが見えた。

辛そうな星の様子にレイニールはすぐにその場を離れ、誰もいない森の中へと着地した。

もう一度背中星に視線を移すと、星はそれに気が付いて微笑み返す。その表情からは苦痛の色が完全に消えていた。

ほっと胸を撫で下ろすと、側の茂みからガサガサと物音を立てて着物を着た女性が出てきた。

「紅蓮様から御二人をお連れするようにとのことでしたので、迎えにまいりました」

「はい？」

突然現れた白雪の登場と言葉に、2人は困惑した様子で首を傾げた。

赤黒い炎6

白雪のおかげで歓喜に沸き返るプレイヤー達に隠れ、裏道からギルドホールへと戻ってこれた。しかし、一番の難関はそこからだった……。

ギルドホールの前は、祝杯を挙げるプレイヤー達でごった返していた。そこではたった一人で敵の作戦の要であるルシファーを撃破し、敵を退いた金色に輝きながら戦っていた少女の話で持ち切りだった。

突然現れ、しかも数分の間に街を囲むモンスターの大群を撤退させた。謎の少女を拳帝であるマスターよりも強いのではないかという者もいるほどだ――。

しかし、今はどうやって星をギルドホール内にバレズに入れるのかという方が大事だ。苦しそうに頭を抱える星を横目に、レイニールが白雪の耳元に飛んでいくと突如として白雪の顔がレイニールの方を向いた。突然の彼女と目と目が合ったことに驚き、レイニールはビクツ！と体を震わせる。

「紅蓮様がもうすぐこちらに来られます。貴方のご主人にも伝えて頂けますか？」

「う、うむ……お前は優秀だな」

彼女の言葉を聞いたレイニールがそういうと、白雪は笑みを浮かべ「優秀でなければ紅蓮様の側にはいれません」と呟いた。

それに共感したのかレイニールも頷くと、星の方へと戻っていった。

しばらくギルドホールの側に隠れて待っていると、ギルドホールの入り口から紅蓮とメルデイウスが出てきた。

その様子をレイニールが固唾を呑んで見守っていると、メルデイウスの横に立っていた紅蓮が一步前に出た。

「皆さん。こんな場所で宴会を始めては迷惑になります」

その彼女の言葉に勝利し気持ちが高揚しているプレイヤー達が素直に従うわけもなく、辺りからは批判の声が一斉に上がる。

周囲は祝杯ムードは一瞬にして不穏なムードに包まれた。

紅蓮に危害を加える者が出てくると感じたのか、思わず白雪も体前のめりにして今にも飛び出しそうになる。が、すぐにメルデイウスが大声で叫ぶ。

「静かにしやがれ！ 勘違いするな。俺達はお前達の邪魔をしにきたわけじゃねえー!!」

彼の言葉に動揺を隠しきれない様子でぎわめく。そしてその後、紅蓮が再び口を開ける。

「私のギルドマスターはこんな外で飲まずに、ギルドホール内のBARで仕切り直しましょうと言っているのです」

「ああ、今回は俺達のギルドの奢りだ！ 付いてこい！ 皆、今日は存分に飲み明かそうぜ!!」

歓声を上げたプレイヤー達がギルドホール内に戻っていくメルデイウスの後に続いて、続々とギルドホールの中へと吸い込まれていく。

紅蓮は最後に周囲を確認すると、白雪の方を見て微かに微笑みを浮かべ、自分もギルドホールの中へと戻っていった。

それを合図に白雪達も急いでギルドホールの中に入った。

ギルドホールのエントランスは人の姿も気配もなく、居るのは最初から設定されているNPCくらいなものだ。

エレベーターに駆け込むと、白雪は安堵した様子で大きく息を吐いた。

それもそのはずだ。ギルドホールにあるエレベーターは全てが独立しており、途中の階層で誰かが乗り込むために止まってドアが開くなんてことは絶対にありえない。

つまり、この空間だけは完全な個室であり。誰の干渉も許されない切り離された空間なわけだ——もちろん。このエレベーターから出てしまえば、その階にいる者とは顔を合わせることになる。

だが、白雪達が向かうのはギルドホールの中でも最上階の場所、紅蓮達のギルドが保有する空間であり。他の者が出入りするにはギルドマスターかサブギルドマスターのどちらかの許可が必要になる。

最上階に付きエレベーターを降りた白雪が前をゆつくりと歩いて

いく。後ろを歩く星のことを気遣うように時折振り返るのを見ると、
どうやら星の歩く速度に合わせてくれているようだ。

長い廊下をしばらく歩くと部屋の前で止まってドアの横に立つと、
星に部屋の中に入るようにと手で促す。

頷いた星が扉の前に立つと、白雪がドアノブを回してゆつくりと扉
を開けた。部屋の中では、テーブルに腰を下ろした紅蓮がお茶を人数
分用意して待っていた。

「どうぞ、入ってきて下さい」

「……はい」

返事をした星は、少し緊張した様子で部屋に入った。

それを察したのか、紅蓮は優しい声音で告げる。

「大丈夫ですよ。別に何かしようということではありません。ただ、
私のステータスが全て『1』になった貴女の固有スキルについて、少
しお話してほしいだけなのです」

「は、はい」

そう呟き、星は部屋に入って紅蓮の正面の椅子に腰を下ろした。
すると、紅蓮は何かを感じ取ったのか瞳を閉じて徐に呟く。

「———そうですか。どうやら、貴女は相当疲れているみたいですね
……白雪」

椅子を押し立て立ち上がった紅蓮が白雪の名前を呼ぶと、ドアの側に
立っていた白雪が彼女の隣に小走りで行く。

紅蓮と白雪はそのままドアの方に歩いていくと、星に向かって告げ
た。

「私達はこちらでは戦力になりません。これからの戦闘は貴女が頼り
です———よろしく願います。この部屋は私の部屋ですので、好きに
使ってください」

「———ツ!? それでは紅蓮様はどこで休まれるのですか!!」

驚いた様に声を上げた白雪に、紅蓮は冷静に言葉を返す。

「別に戦闘に参加するだけが私達の仕事ではないですよ？ 私達には
寝ている暇はありません。皆、浮かかれています、こちらが追い込まれて
いることには気が付いてはいないのですから……」

「……それはどういう？」

そう口にした紅蓮は白雪の質問に答えることなく部屋を出ていってしまう。だが、一番困惑していたのは星だった。

それもそうだろう。突然呼び出され、しかも何も聞かれることもなく部屋を貸すとだけ告げられたのだ。

さすがにこれでは何がなんだか分からない。しかし、疲労している星にはその方が好都合だった。

椅子から立ち上がった星は、ベッドに倒れ込むようして体を投げ出した。

そんな主の様子を心配そうに見つめていたレイニールに向けて星は徐に告げる。

「——レイ。今日は私をひとりにしてほしいの……」

疲労し切った弱々しいその声と、見る見るうちに青ざめていく彼女の表情を見ていたレイニールには、星のその申し出を断ることはできなかった。

「分かったのじゃ……」

小さく返してレイニールがふわふわと飛びながらドアに向かっていく。時折、心配そうに、星の方を振り向くレイニールに星は笑顔で応える。

そして扉が閉まったのを確認した星は、突然咳き込み布団に顔を埋めた。

星は戦闘を終えた後から耳鳴りが収まらず、強烈な吐き気に襲われていた。おそらく、固有スキルを使ったことによる後遺症だろうが、耳鳴りよりも辛いのが吐き気だった……。

この世界は所詮ゲームの中であり、現実ではない。食事をしていてもそれはデータでしかなく、実際に固形物が胃袋に収められているわけではない。

つまり、吐き気をもよおしたところで、吐き出せる物などなものにもなく、その症状だけは終わりなく襲ってくるのだ。

悶えながらベッドの上を転がり回っていた星がベッドから転がり落ちる。

「……………どうしたんだろう」

床に手を突き星は、自分の体調の急激な悪化に困惑した様子で小さく呟く。

* * *

周囲をレンガの様な赤い壁に包まれたモニターと極少ない機器に囲まれた部屋にいた眼鏡を掛けた男。

そんな彼の視線はモニターに釘付けになっていた。その視線の先にあるモニターに映し出されているのは、今回の星の戦闘の映像とその横に小さいウインドウで以前の星の戦闘が映し出されていた。

男は椅子に体を埋めながら、顎の下に手を置きその映像を食い入る様に見つめながら、終始ニヤニヤと不気味な笑みを浮かべている。

「やはりそうか……最大使用回数は2回。継続時間はこのゲームのりキャストタイムの限界24時間と言ったところだろう。しかし、なによりも驚きなのはその反応速度だね。視覚からの反応よりも見えてない部分の反応が異様に早い。いや、速すぎるね……急激な加速に瞬時に感覚を適応させるのは生物的に不可能。それはF1のマシンを一般人が操縦するようなものだからね。時速300kmを制御するには操縦者の感覚も急激に引き上げる必要がある。つまり今のイヴの神経系は常人を超えたまさに超人の領域に入っている。子供が大人も通り越して仙人みたいな感覚をその小さな体に抑え込んでおくのは持って数日——数日後。君は私の元に自分から現れることになる……」

モニターを見つめながらそう呟くと、取り出したコーヒーマグのカップに口を付けてすすする。

「しかし、君のお友達を少し傷付けただけで進んで出てくるとは、本当に君はお人好しだ……だが、出てきた時点で、君の負けは決まったのだよ。君の固有スキルの最大の弱点はダンジョンなどの限られた空間、相手に効果を発揮する為に作られている。相手のステータスを吸収できたとしても、最大値で2回。それ以外でも、数回増えるか増え

ないかくらしいの違いしかない。そして対象外にできるのはPTのメンバーである6人まで……これから数日間は、24時間以内に継続して部隊を街に進軍させる。つまり、6人では圧倒的に戦力不足であり。必然的に君に掛かる負担が更に大きくなる——フッフ……ハツハツハツハツ!!」

男は勝ちを確信した様子で笑い声を上げると、モニターに映し出されている星の方を指差す。

「さあ、始めようイヴ。君を得る為の最高のゲームを!!」

不気味に笑うその顔には、決して失敗しないという自信と、星をこの手にできるといふ支配欲の現れなのかもしれない……。

* * *

勝利の余韻

星に自室を貸した紅蓮と白雪はサラザのBARがある階へと急ぐ。フロアに付くと、もう階を埋め尽くすほどの人で溢れ返っていた。

良く見ると、皆手にはお酒の入ったグラスを持っている。

紅蓮と白雪がその人波を掻き分けて奥に進んでいくと。突然、目の前にお盆にお酒を乗せて持ってきた黒髪に猫耳のカチューシャを付けた少女がやってきた。

「お姉さん。これを上げるし！　ちっこいのはこのオレンジジュースだし！」

白雪に赤ワインの入ったグラスを渡し、紅蓮にはオレンジジュースの入ったコップを渡す。

ウェイトレスの様に複数のグラスの置かれたお盆を片手で持つてうまくバランスを取っている。しかし、妙に板に付いているような気もするから不思議だ――。

紅蓮は差し出されたコップを手で遮ると、目の前に来た少女にっこりと微笑んだ。

「私達はこの場所に人を探しに来ていただけなので不要ですよミレイニさん」

「――ん？　どうしてあたしの事を知ってるし？」

不思議そうに小首を傾げているミレイニに、紅蓮は怒る様子もなくにっこりと微笑み返す。

だが、首を更に傾げ紅蓮のことを思い出そうとしていると、お盆を持っていた手からお盆が落ちそうになり、白雪が素早くそれを受け止める。

それで初めて落ちそうになっていることに気が付いたミレイニが白雪にお礼を言うと、誰かの呼ぶ声に反応してその場を足早に去っていった。

その様子を見送った紅蓮が不満そうにボソツと呟く。

「……そんなに私の顔は覚えにくいでしょうか？」

「いえ、おそらくは彼女が特別だと思います」

それを聞いて納得した様子で頷く紅蓮が、気を取り直して更にフロアの奥へと進んでいくと、カウンターの奥に忙しくできた料理を運んでいるサラザの姿が見えた。

紅蓮と白雪はそんなサラザに遠慮して、声を掛けずにいるとサラザの方から彼女達に声を掛けてくる。

「あつらく。紅蓮ちゃんじゃないの〜」

「サラザさん。ちゃんは止めて下さいと、何度言えば分かるのですか」
「嫌なの〜？ だってその方が素敵じゃなく〜い」

「素敵……そうかも、知れませんか……」

紅蓮は頬を微かに赤らめて俯き加減に答えた。どうやら、サラザは彼女の攻略法を完全に会得したらしい……。

冷静さを取り戻し、サラザに向かって紅蓮が言った。

「この使い具合はどうですか？」

「もう最高よく。まさかこんなに早く他の街で商売ができるとは、思ってたなかったわよく。これも紅蓮ちゃんのおかげね〜」

「いえ、それよりも今回のお支払いの件ですが……」

少し言い難そうに告げた彼女に、サラザがウインクしながら親指を立ててグーサインを出す。

「それはもちろんよ。勉強させてもらうわ〜」

「そうですね。それは助かります……それでは、私はメルディウスを連れて行くので」

軽く会釈をしてその場を離れる紅蓮を、サラザは笑顔で手を振って見送った。

多くの人の中からメルディウスを見つけるのはそれほど難しくなく、赤い重鎧を身に着けているプレイヤーはそこまで多くない。

どうやら、完全に出来上がっているらしく、隣で飲んでる剛の肩を持つて強引に酒を勧めている。

「いやーよ！ 今回出てきた剣聖はさ。実は白い閃光の娘なんだよな！ 俺もさ、ひと目見た時から、あいつは強いって思ってたんだよな！ なんていうか……滲み出る何か？ それを俺は感じ取ったわけよ！ ほら、お前手が止まってんで！ もっと飲め飲め！」

「いや、そろそろ紅蓮達の所に戻った方が良くないか？」

迷惑そうに眉をひそめている剛に、メルディウスは顔の前で手を振ってすぐに言葉を返した。

「ああ、いいのいいの。どうせ俺が戻ったってなんの役にも立たないんだからよ！ これじゃもう戦闘は無理だろ？ なら、俺達は飲んでるくらいしかないんだからよ！」

「……………ほう。貴方は戦う以外の仕事はないのですか？」

その声を聞いた後ろを振り向いた剛が絶句している。が、彼はまだ気付いていないようだ――。

「あーないない。俺はベルセルクを振って敵をバーンで――はい！ おしまあああああああいいッ!!」

椅子に凭れ掛かって反り返ったメルディウスの瞳に、逆さになった紅蓮が映った。

紅蓮が真顔のまま、椅子に凭れ掛かったメルディウスの顔を覗き込むと、その椅子が大きく傾き彼の体ごと地面に激しく叩き付けられた。

「いって〜」

頭を押さえながら起き上がったメルディウスに、紅蓮がすまし顔のまま淡々と言った。

「目は覚めましたか？ 私が少し目を離したら出来上がってしまうとは……………小虎はどうしました？ お目付役として貴方に付いているように言ったはずなのですが」

「ああ、小虎のやつなら。さつき来た金髪の侍野郎とどこか行っただぞ？ 随分と懐いてるみたいだったからな。当分帰ってこないだろう……………呼び出すか？」

「いえ、結構です」

空中で指を動かしているメルディウスを見て紅蓮が言っつて身を翻し「ここは人が多いので場所を変えましょう」と言っつて歩き出す。

それを見てメルディウス、剛、白雪がその後が続いていく。

宴会の席を後にして、最上階に戻ってきた紅蓮達は白雪の部屋に集まった。

テーブルに着いた全員に、紅蓮がお茶を淹れて皆の前に置いた。もうこの光景も見慣れたものだ――。

静かに目の前のお茶をすすったメルデイウスは、紅蓮の顔を見てゆっくりと口を開いた。

「……それで紅蓮。俺達はこんな状況でどうすればいいんだ？ もうステータスが『1』で固定されてるだけでどうしようもないと思うのだが」

一言目から核心を突くメルデイウスの言葉。

しかし、紅蓮はなにか考えがあるのか、少し間を開けてから彼の横に座っている剛の方を向いた。

「剛。あの大筒の他に、何か敵への攻撃手段はありませんか？」

それを聞いた剛は難しい顔で考え込むように俯く。

彼の次の言葉を、皆固唾を呑んで見守っている。しばらく考え込んだ末に、剛が重い口を開けた。

「……できなくはない。ただ、先日刈り出した木材を全て使い果たすことになるから。もし、街の中にまで敵が入り込んで区切りの杭を破壊されたら補修ができなくなってしまう……それでもやるかい？」

彼の口から出た言葉に、皆難しい顔で黙り込んでしまった。

当然だ。雑魚どもならばなんの問題はないが、巨大なルシファーが街の中まで侵入してくるといふ。最悪の事態を想定しているからに他ならない。

巨大なルシファーを唯一足止めできるのは、千代の街を張り巡らせるように打ち込まれた巨大な杭だけだということを皆が理解してる。だが、千代の街の全プレイヤーがステータスを『1』で固定されてしまっている状態で戦闘を行えるのはたった1人の小学生の女の子だけだ――。

千代を代表するギルドとしては、その最後の希望をバックアップしないわけにはいかない。しかし、同時に千代を代表するギルドとして、この街に住む全プレイヤーの生命を守る義務がある。

すると、その沈黙を破るように紅蓮が口を開く。

「どうやら、まだ酔いが覚めてないようですね……街の中に敵が入り

込んで来るような事態になれば、戦う術を持たない私達は全滅です。その時の補修アイテムなどなんの意味もありません」

その思い切りの良さに剛も白雪も、口をあんぐりと開けたままその場で固まっている。

しかし、その隣でメルデイウスが「なるほどな！」と納得した様子で相槌を打っていた。

「剛。どんな作戦なのか話してみてください」

「作戦自体はシンプルです。要は、落とし穴ですよ」

それを聞くやいなやメルデイウスが噛み付いてきた。

「ちよつと待て！ 落とし穴を掘ったとしても、システムの自動修復機能ですぐに埋まってしまっじやないのか？」

「いや、システムの自動修復はオブジェクトを元の状態に回復しようとするものさ。修復する箇所以外のオブジェクトを置いてやれば、オブジェクトとオブジェクトが干渉し合って修復システムを阻害できる。それを応用したのが、水堀であり洞窟さ」

メルデイウスはなるほどなつと頷いてはいるが、おそらく剛の言っていることの半分も理解できてはいないのだろう……。

勝利の余韻2

「木の板で掘った穴の周囲を囲むということですね」

「そう！ そうすれば敵は上がり難くなって撃破できないまでも、少しは数を減らすことができる！」

通常攻撃で撃破できないモンスターである以上。敵を撃破する方法を考えるのは無意味であり、どうやって敵の足止めをして数を減らせるかが今は重要なのだ。

現に今回の戦闘でも、剛の設計した大砲は敵に巨大な重石を乗せることで撃破ではなく足止めをする目的も果たした。

彼が優秀なのは、敵を撃破することよりもどう多くの敵を足止めするかに懸けていることだろう……街を囲む水堀を巨大化してアンデッド系のモンスターを足止め。なおかつ、街を巨大な杭で仕切り敵が侵入しても対策を採る時間ができる。

そして、果てには彼が開発した大砲の効果は、結果として敵の動きを先読みするかたちで効力を発揮した。

その全てを考慮すれば、覆面の男よりも彼の方が一枚も二枚も上手だったのは明らかだ——まあ、だからこそ相手は撃破不可能とまで言われていたチートボスのルシファーを前面に押し出して戦うしかないわけだが……。

剛の目を真っ直ぐに見つめながら紅蓮が尋ねる。

「それで、本日中にどれくらい用意できますか？」

「今日中か……」

紅蓮のその注文に、剛は難しい顔で再び考え込んでしまう。

正直。今の千代の街は包囲していたモンスターの大群を追い返したことによって、プレイヤー達は完全に戦闘モードから祝杯ムードに変わっている。さすがにこれでは、今日中に人手を集めることは不可能だ——。

星の固有スキルによって、戦闘力を奪われている紅蓮達には自分達のみでモンスターを向かい打つ手段はない。

そしてなにより、紅蓮は撤退したモンスターをここにいる者の中で

一番警戒していた。

それは当然だ——もう長い間。この千代の街を多くのモンスターによって取り囲まれていた。それはそうしなければいけなかった理由があるからに他ならないのは、少し考えれば誰でも理解できる話だ。まあ、ただ一人理解の足りない者もいるようだが……。

「だが、どうしてそこまで急いで用意しないといけないんだ？」

不思議そうに首を傾げているメルディウスに紅蓮は大きなため息を漏らしながらも、彼の疑問に答える。

「はあ……それは私達に戦闘能力がない今が、一番の狙い目だからですよ。私達には『オリジナルスキル』と言われるオリジナルで考えられた固有スキルを保有しています。それはつまり、システムを自由に改変できる者でも、手を焼く最強のチートと言っても過言ではありません。そんな私達が4人揃って彼女の固有スキルに掛かるのは、後にも先にもこの一回限りですよ？　そこを突いてこない人間ではありません——それが今、私達が戦っている人物です」

彼女の言葉に納得できないという表情のメルディウスが、その意見に反論を始めた。

「だがよ。デュランが言っていたら？　ギルマスがあいつらのモンスターの発生源を叩いたってよ。まあ、あいつの情報だから事実かは分からないが……もしそれが事実なら、俺ならやられた部隊を再編成するのに時間が掛かるから数日は時間を置くぜ？」

まあ、彼の言っている意見も最もだろう。本来ならば、人員の補充を自動で行えなくなった時点で、減ったモンスターを補充する方法は他の場所から連れてくる以外にはない。

つまり、本来ならば星によって撃破されたモンスターの補充を優先しなければ、街を取り囲むという作戦そのものの継続が困難になってしまうのだ。

しかし、紅蓮はメルディウスの意見には賛同していないらしく、手に持っていた湯呑にピキツとヒビが走り、それを見ていた皆の顔が一瞬で青ざめた。

彼女の様子を見守っていた仲間達が、次の彼女の言葉を緊張した様

子で待っていると紅蓮がゆっくりと口を開く。

「……貴方は魔法陣を使って多くのモンスターがテレポートするのを見ていたはずです。遠方から一度でテレポートできなくとも、数回に分けて使用することは可能なはずですし、その戦力を補う為のルシファーです——」

「——待って下さい！　紅蓮様はまだあのルシファーが残っていると
お考えですか!？」

驚き目を見開いた白雪が思わず、紅蓮の話している最中に言葉を
遮ってしまい。はつとしてすぐに口を押さえる。

すると、紅蓮はその白雪の言葉に答える様に首を立てに振って言葉
を続けた。

「敵はすでに数体ものルシファーをこちらに放っています。もういな
いと考えるよりも、まだ数体は持っていると考えるのが自然です。私
なら、チャンスと見た時に一斉に投入するでしょう。つまり、今まで
一体ずつしか出してきたくないので、まだ手の内を隠しているとい
うことです。いや、もしかするとそれ以上の何かを持っているかもしれ
ません……」

「これから——まだルシファー以上がいるなど……」

顔面蒼白になっている白雪から視線を変えると、今度は剛の方を向
いて彼に尋ねた。

「それで、どのくらいの落とし穴を掘れそうですか？」

「確証はないけど、後でギルドメンバーを招集して街の周囲に20—
—と言ったところかな」

「——20ですか……少ないですね」

俯き加減にそう呟いてため息を漏らした。

その彼女のため息は、現実を見た上でのため息であることは言うま
でもない。

しかし、それが現実なのだろう……まさか自分達の街が、再びモン
スターの進行を受けるとは、今のプレイヤー達は夢にも思っていない。
しかも、星の固有スキルの効果でステータスが最低値になっている
今の状況では、彼等の戦意は皆無に等しい。

完全に低下している士気の中で巨大な落とし穴を掘るのだから、剛の言った数字が限界なのだろう。

彼女も内心ではそれは分かっていた。しかし、受け入れられないのだ。今の状況で少しでも星の負担を軽くしたいという気持ちだが、彼女に『少ない』と口にさせた。

まだ小学生の幼い少女にこの街を任せるしかない状況下で、もし彼女が倒れでもすれば、同時にこの街の全プレイヤーの命運も尽きる。

敵はルシファアの他に、村正を持たせレベルを最大値まで引き上げ赤黒い炎でコーティングした属性攻撃しか効かないモンスターの大量がいる。しかし、こちらは他のプレイヤーが戦闘に参加できず、星だけが最後の砦であり作戦の要になる。逆に敵は全力で彼女を潰しにくるだろう。

たとえゲーム内で最強のプレイヤーだったとしても、彼女はまだ精神的に幼い少女でしかなく、荷が勝ちすぎていると言わざるを得ない。

「……それでは少しでも早く作業に移りましょう。剛、皆にメッセーヂを飛ばして、すぐにでも集まるように連絡を。我々もすぐに移動しましょう」

「了解！」

紅蓮の声と同時に皆椅子から立ち上がった。その時、突然扉を開け放つて中にイシエルが入ってきた。

「——あの子をどこに隠したんよー」

突然入ってきたイシエルに驚くメルデイウスや剛とは別に、白雪と紅蓮は最初から分かっていたかのように冷静なままだった。

実は星を紅蓮の部屋に泊めていることは、まだ星の仲間達には伝えていない。

いや、最初から伝えるつもりはなかった。意地悪をするつもりでも、嫌がらせのためでもない。

理由は星に余計な負担をかけない為だった……紅蓮は星にあった時、本人に固有スキルの能力を聞こうと考えていた。しかし、彼女の様子があまりにも悪かったことから、優先的に彼女に休んでもらうこ

とにしたのだ。

今は少しでも体力を回復してもらうことが優先であり、星も仲間達に伝えてほしいと言わなかった。そのタイミングはあったと紅蓮自身も分かっていたし、紅蓮が彼女の立場だったら、何をおいても仲間達に連絡を入れるか、入れてもらえるように言うだろう。

にも拘わらず、星は休養を優先した。つまりはそれほど今の星は、疲労で体を休めることにしか意識がいつていなかったということだ——それに戦闘力を奪われた星の仲間達が彼女をバックアップすることはできない。

しかし、それは今の紅蓮達も同じであり。休息している星の場所を教えるわけにはいかないが、人手が一人でも必要な今の状況での彼女の登場は願ってもないことだった。

「彼女の居場所を教えることはできませんが……貴女もここに来たということとは彼女の力になりたいということでしょう。同じ様にステータスが固定されている私達でもやれることはあります。どうでしょう……私達のお手伝いをして頂けませんか？」

だが、紅蓮の申し出にイシエルは口元に笑みを浮かべながら、淡々と彼女達に言葉を返す。

「フツ、誘拐犯如きがようそないなと言えるもんやね。うちはあんたらと違って弱体化しとらんよ——うちに手伝ってほしい？ あの子の力になりたい？ そないなこといっぺんも思ったところないわ。うちはただエミルにはあの子が必要やから迎えにきただけや……さあ、あの子の居場所を正直に吐かんと、消えることになるよ？」

全身から滲み出る殺気が、彼女の本気を感じさせる。

その話を聞いた紅蓮の眉が微かに動く、不快に思っているのは間違いないが、今の紅蓮達が彼女に抵抗するのは不可能だ。しかし、今の紅蓮はその殺気に全く怯むことない。

「——お好きにどうぞ？ 私に脅しは通じません。彼女の居場所は絶対に教えませんし、貴女では絶対に無理ですよ。私達を殺せば、絶対に彼女の元にいけないだけでなく、貴女は私のギルドのメンバーにも千代のプレイヤーにも叩かれて苦勞するのは貴女達ですよ？」

「……………もうええわ。あの子の為に、そんなリスクはごめんやからなあ〜」

意外とあっさりと引き下がったイシエルに、皆完全に拍子抜けしている。

てつきり、星を取り戻す為に全力を尽くしてくると考えていたのだが、彼女はそれほど星のことを取り戻すことを重要だとは思ってなかったのだろう。現に、街の者達やメルデイウスのギルドの仲間達を敵に回すくらいならと諦めたのだ――。

彼女の選択は正しく、また理にかなっていると言えるだろう。しかし、彼女の取った選択は合理的過ぎるのだ。だがもしも紅蓮が同じ立場ならば、たとえ誰に止められたとしても仲間の安否が何を取っても最優先しなければならぬことだろう。しかし、そうしなかった彼女の行動が紅蓮には物凄く気持ちが悪かった。

それは紅蓮だけでは内容で、彼女の突然の態度の変化に、その場に居た全員が驚きを隠せないと言った表情で立ち尽くしていた。

彼女の後ろ姿を見送ると、しばらくして紅蓮達は作戦の準備の為に部屋を出た。

結局、紅蓮達の考え通り。協力者は少なく、殆どがギルドメンバーだけで何とか22個の巨大な落とし穴を完成させた。

作業を開始したのは日が高かった時間にも関わらず、終わったのは翌日のお昼を回ってからだだった。

二度目の攻勢

その夜、星が紅蓮の部屋で眠っていると、街の方から激しく鐘を叩く音と共に頭の中に直接に声が響いた。

『敵が再び攻めて来ました。今、戦えるのは貴女しかいません。無理強いはしませんが、再び私達を助けて頂けませんか？』

それは紛れもない紅蓮の声だった……。

重い体を起こした星は、ベッドの横の壁に立て掛けていたエクスカリバーに目をやった。

(……私が戦わないと、皆が死んじゃう。でも……次は耐えられないかもしれない……)

星は立て掛けられた剣を見つめ、胸の上に手を置いた。

まだ謎の多い固有スキルを、星は使いこなせるか不安なのだ。上手くいったのは昨日だけ、他の時は記憶の上では全て倒れていると言っても過言ではない。

そんな危険なスキルを再び使用することに、少なからず躊躇があった。しかも、酷い吐き気に襲われ、まともに休息ができないような状況でコンディションはお世辞にもいいとは言えない。

こんな状態で再び固有スキルを使用すれば、再び倒れる可能性の方が高い。どうしても、そんな不安が星の頭の中を過つてすぐに剣を手にとることができなかった。

すると、部屋のドアが開いてレイニールが、部屋の中に飛び込んできた。星が慌てて飛び込んできたレイニールを胸で受け止めると、レイニールの瞳が星の顔を見上げる。

その瞳は真剣で、思わず星も息を呑むほどだった……。

「――主。またモンスターが攻めてきたのじゃ……行くのか？」

星を見つめるその瞳は、彼女に『行くな！』と訴えかけているようだ。しかし、星はそんなレイの顔を見て覚悟が決まった。

今までは自分のことだけを考えて躊躇していた部分があった。まあそれだけ、星の体も心も先の戦闘で消耗していたということだが、レイニールが目の前に来て自分の本当に守りたいもの……守らなけ

ればいけないものを再確認したからだ。もう、星の心に迷いはなかった――。

大きく頷いた星はレイニールを胸から離すと、ベッドから立ち上がって壁に立て掛けていたエクスカリバーを手に取った。

不安そうにその姿を見つめるレイニールに、星はにつこりと微笑みを浮かべる。

「大丈夫だよ。きつと上手くいくから」

レイニールは大きなため息を漏らすと。

「はあ……主のことだから、どうせ止めても行くのだから？　我輩も付いていくのじゃ！」

つと、レイニールがパタパタと飛んで星の頭の上に乗った。

星もそんなレイニールを見上げると、レイニールも星を見下ろす。互いに意思の疎通をするように笑みを浮かべると、星は廊下を目指して走り出した。

星達が街の周りを囲む城壁に着くと、外ではもうプレイヤー達が戦闘を行っていた。理由は分からないが、星の固有スキル『ソードマスター・オーバレイ』の効果が切れた後に敵が攻めてきたらしい。

本来なら効果時間前に攻めてくるのがセオリーだが、何故か敵は24時間を超えて星の固有スキルの効果が切れてから再び攻めてきた。敵の意図は分からないものの、しかしこれによって決まっていた星の心が迷い始める。

それもそのはずだ。星は戦闘経験が薄く、固有スキルで自身を強化しているだけに過ぎない。だが、彼等は違う――数え切れないほどの死線を潜り抜けてきた戦士達だ。そんな彼等の中に星なんか戦いに参加するよりも、彼等に任せていた方がいいのではないかと思ってしまう。

そもそも、星は今ままであまり自己主張するタイプではない。どうしても他の人間よりも自分を下に見てしまう彼女の心を変えるには、強力な固有スキルではまだ足りない。

一度は覚悟を決めたものの、すでに複数の者達が表に出て戦闘をし

ている姿を見れば、戦おうとしている自分の存在が、とても小さく見えてしまうのも仕方ないだろう。何よりも、星には下で戦うメルデウス達を押し退けてでも皆を守り切れる自信がない……。

城壁から敵と味方が入り混じって戦う光景を見下ろしながら、自分はどう行動するべきなのか星は迷っていた。

レイニールもそれを察しているのか、声を掛けることができずに戸惑っている。

そんな時、背後からエミルの声が響く。

「——星ちゃん！」

振り返ると、そこにはイシエルに肩を支えられてこっちを不安そうに見ている彼女の姿があった。

無言のまま、しばらく互いの顔を見合わせていると、エミルが再び口を開く。

「ダメよ！ 貴女は戦わなくていい。私から……私から戦う理由を取らないで！ そうじゃないと……私はまた弱い私に戻ってしまう！」

「——ッ!!」

その瞳に涙を溜めて星のを見つめているエミルを見ると、その姿が一瞬自分と重なって見えた。

現実世界の自分と……弱くていつも小さくなつて存在感を消していた自分が、目の前に被つて見えたのだ。

(そうだ……上手くできなくてもいい。ちゃんとできなくてもいい。精一杯、自分にできることを、目の前の問題をただ全力でやりきればそれだけでいいんだ！)

瞼を閉じて再び瞳を開けた時の星の表情は決意に溢れていた。

不安そうにこちらを見ているエミルに、星は微笑みを浮かべて優しく答えた。

「——大丈夫、ちゃんと帰ってきます。……だから、心配しないで待って下さい」

すると、地上のプレイヤー達が上空を指差して大声で叫ぶ声が響く。上空には今まで姿を見せなかったルシファーが翼を大きく広げて今にも街に向かって舞い降りようとしている。

星はそのルシファーを鋭く睨み付ける。その瞳には、全くの躊躇も迷いも存在しない戦士の瞳そのままだった――。

「レイー！」

「うむー！」

星の掛け声に応え、巨大なドラゴンの姿に戻ったレイニール。

その背中に飛び乗った星は剣を鞘から引き抜き、天に向かって掲げる。

「ソードマスター・オーバーレイ!!」

彼女の声の直後、持っていた剣の刃から波紋の様に広がる金色の光が周囲を包み込む。

敵、味方問わず見る見るうちに減少するステータスと相応して、星のステータスが一気に跳ね上がる。その直後、レイニールが翼をはためき上空のルシファーへと向かって一気に飛び掛かっていった。

ルシファー翼から放たれる羽根の雨を星が片っ端から叩き落とし、上空に回り込むと星がルシファーの背中に向かって飛び降りた。

剣を下に向けたまま、星がルシファーの背中に着地すると、その鋭利な剣先が深々とルシファーの体に突き刺さる。

断末魔の叫び声を上げる暇もなく、光の粒子に変わったルシファーの体から離れた星を空中でレイニールが背中で受け止めると、地上に向かって急降下する。

自分の落下点に炎を吹き出しモンスターの群を撃破して地面に舞い降りると、星が背中から地面に着地し、プレイヤー達と交戦していたモンスターを片っ端から斬り伏せていく。

二度目の攻勢2

敵も味方も入り乱れた中で的確に敵だけを撃破できるのは、星の固有スキルに付随しているGM専用スキル『オーバーレイ』の効果が大きい。

星の視覚にはモンスターとプレイヤーの違いが、明確にアバターの上に文字で表示されている為、決して間違えてプレイヤーを攻撃することはない。それがなければ、スケルトンはともかく死霊の騎士と通常の鎧を着たプレイヤーを間違えて斬り殺していたかもしれない……。

レイニールは星の戦っている方とは真逆に炎を噴射して、少しでも主の負担を減らそうとしている。だが、昨日とは違って夜に敵が戦闘を仕掛けてきてくれたおかげで走り回る星の体が金色に輝いている為、まるで光源のない荒野を車がヘッドライトを付けて走っているように鮮明に彼女の動きが分かるのは助かる。

戦場を駆け回りながら敵を一匹残らず撃破するのに1時間と掛からなかった。

最後のスケルトンを撃破し、星は大きくその場で息を吐き出した。

「はあく。やっと終わった……」

細かく呼吸を繰り返し返り改めて辺りを見渡すと、キラキラとした光の粒子がゆつくりと空に登っていく光景ばかりで、どうやらもうモンスターは存在しないようだ。しかし、不可解なのは、今回は前回に比べて敵の数が少なく設定されているように感じたことだ。まるで、最初から星一人で撃破できるだけの数を計算した上で送り込んできているような……。

（疲れたけど……でも、何とかできた。もうモンスターは残っていないみたいだし、レイニールと合流してエミルさんのところに――）

そう星が心の中で呟いた直後。地響きが起こり慌てて振り向くと、後方からたくさんのプレイヤー達が星に向かって歓声を上げている。

「剣聖。助かったぜ！」「あの数を一人で撃破しちまうとは、最強すぎるぜ！」「お前がナンバー1だ！」「ありがとう！ 剣聖！」「次に敵が

攻めて来ても剣聖がいれば怖くないぜ！」

それ以外にも様々な声が上がっていた。その歓声を聞いて、少しの間自分のことを言われていると気が付かなかった星だったが『剣聖』とは自分のことを言われていることに気が付き顔を赤らめさせた。

今まで自分のやったことをこれほど誰かに称賛されたことはない。未だに、この盛大な歓声が自分に向けられているかも疑っているくらいだ。

直後。星が頭を押さえて大きくよろめく。それを察したレイニールが星を掴み上げると、その場から急いで離脱する。

千代の上空に飛んでいったレイニールの体が金色に輝き辺りを光で包むと、そのどさくさに紛れて小さいドラゴンの姿に戻ったレイニールが星の服を掴んで街の裏路地へと降りた。

街では突然消えた今回の戦闘の功労者を探してプレイヤー達が駆け回っている。まあ、星を理由に騒ぎたいだけなのだろうが……。

レイニールは地面に座り込んだまま、頭を押さえている星の顔を心配そうに覗き込む。

「大丈夫か？ 顔色が悪いのじゃ……」

「うん。大丈夫だよ……少しよろけただけだから……」

そう言って微笑み返す星が震える膝に手を突いて、ゆっくりと立ち上がった。だが、どう見ても大丈夫そうには見えない。

昨日の戦闘から、明らかに星の体に不調をきたしている。普段から我慢してしまう星のことだからこそ、今レイニールがどんな言葉を掛けても「大丈夫」と彼女は返してしまうだろう。

そのことを一番近くで見ていたレイニールは誰よりも知っていた。「主。エミルのところに戻るのか？」

「……うん。ちよつと疲れたから、今日も別の場所に泊まろうかな？ さすがにあの部屋は無理だと思うけど……」

星が苦笑いを浮かべていうと、突然何も無い場所から声が聞こえた。

「——そんなことはありません」

驚き声の方に振り向くと、そこにはかしくまった白雪が立っ

た。

地面に膝を突き頭を垂れたまま、星の返事を待っている様子の白雪にレイニールが尋ねた。

「そんなことはないというのは、またあの部屋を使って良いのか？」

だが、レイニールのその言葉に、白雪は首を横に振って答えた。

それを見て首を傾げたレイニールが次に言葉を口にする前に、白雪が言葉を発した。

「いえ、今度から私の部屋をお使い下さい。それでは参りましょう」

「……えっ？」

返答を待たずに星にローブを被せ、その手を引いて歩き出した白雪。

そんな彼女をレイニールが慌てて追いかける。エレベーターまで一気に歩き切った。

エレベーターの中に入ると、息を切らしている星の上に被せていたローブを白雪が外して頭を下げた。

「申し訳ありません。これ以外に方法がなかったもので……」

「い、いえ」

星は短く答えているが、その表情からはその口数が限界という感じが滲み出していた。

それを心配しているのか、レイニールも星の頭に乗るのを躊躇しているくらいだ。

しばらくの沈黙の後、エレベーターが動き始めると、白雪は徐に星に尋ねる。

「——星様は、今持っている力をどう考えていますか？」

「……えっ？」

少し驚いた様子で白雪の顔を見上げた星から、白雪は合いそうになった視線を逸らす。

そして、聞きにくいそうに言葉を続けた。

「確かに貴女のその力は素晴らしい。ですが、強大過ぎる故に一人では戦えない……誰にも頼れない現状を。その、怖いとは思われないのですか？」

彼女の言葉はまるで、自分も同じ現状を体験したことがあるように聞こえた。いや、あるのだろう。誰しも人生で自分には荷が勝ち過ぎていると言わざるを得ない状況を体験している。白雪もまた、誰にも頼れない状況を経験した者なのだろう。

その外見から年齢は二十歳くらいだろうか？星とは倍以上も歳が離れている。しかし、その瞳の奥からは怯えている彼女の心が見て取れた。

不安なのだろう……今まさに自分の命を預けている人間が目の前にいて、しかもそれは幼い少女でしかない。

彼女としては自分や仲間達の命を背負われている中。面白半分で、遊びの延長でやっってもらっては困る。もし星が安易な回答をすれば、白雪は紅蓮に進言して玉砕覚悟の特攻か、終わりの見えない防衛戦に戻すつもりなのだろう……。

無理もない。今日のこと、星の固有スキルの持続時間は24時間しかもたないと分かったのだ。自分達の命をまだ10歳に満たない子供の遊びに懸ける必要はない。だが、そんなことを知る由もない星は、考える素振りをした後で彼女の質問に答えた。

「——怖いですよ？ 怖くないわけがないです……」

その返答に自分の命を預ける価値がないと判断したのでだろう。

白雪の瞳が鋭く光ったが、すぐに星が言葉を続ける。

「でも……みんななどのこの時間が、楽しかった記憶が壊されてしまうのはもつと怖いのです。だから、自分にできるなら……全力で頑張ろうって決めたくです。それに……今までも人に頼った事の方が少ないですし……大丈夫、きつと上手くいきますよ。だって神様は、自分の力で越えられない試練は与えないんですから」

そう言うてにっこりと星が彼女に微笑んだ。

その笑顔は不思議と説得力があり、それは白雪もその笑顔に自分の命を懸けるに値すると感じるほどだった。

彼女が気が付いた時には地面に膝を突き、星に向かって頭を垂れていた。

立て膝で胸に腕をかざしたその彼女の姿に、星は焦った様子で慌て

ふためいている。

「星様。私の命をお預けします。私を……我々をどうか護り下さい」
その誠実な様子を見て、真摯に受け止めた星は真面目な顔でゆっく
りと頷く。

「……はい。私の全力で頑張ります」

それを聞いた白雪は立ち上がり、星の前に手を差し出した。星も彼
女の手を握ると「よろしくお願いします」と白雪も握り返す。

エレベーターが最上階に着くと、白雪の部屋に案内されその部屋の
中に入っていった。

白雪が部屋から離れたのを確認すると、昨日と同じようにベッドに
倒れる様に身を投げた。

口をベッドに押し付け何度か激しく咳き込む星を、レイニールは見
ていられず部屋を出た。

限界

星から離れて廊下を飛んでエレベーターの中に舞い戻ったレイニールは、エリエ達のいる階へと降りた。

エリエの部屋の前までくると、トントんと扉をノックする。

「はいはい！・今開けるしー！」

中から元気な声を上げたミレイニの声が聞こえた。ガチャツと扉が開くと、レイニールは天井付近まで一気に上昇する。

ミレイニは扉の前に誰もいないことを確認すると、大きく首を傾げて開いた扉を閉めようとした直後、頭の上に重い何かのしかかってきた。彼女が不思議そうに頭上を見上げると、そこにはレイニールの姿があった。

「どうしてお前が私の頭に乗ってるし！ 急にどこかにいなくなったと思ったら、また戻って来るとか勝手過ぎるし！」

「まあまあ、我輩にも色々あるのじゃ！ それよりエリエはどうした？」

それを聞いてミレイニが大きいため息をついたのを見ると、言わなくてもだいたい予想がつく。

ミレイニの頭に乗って部屋の中に入ると、そこにはベッドで布団を頭から被って唸っているエリエの姿があった。

「サラザのお店で飲んでたら、運ばれてきてからずっとこんな感じだし」

「これでは当分、役には立たないな……」

レイニールは呆れながら、布団の中で唸っているエリエを見ていると、ミレイニがレイニールに向かって言った。

「そういえば、この後サラザのお店でご飯を食べるんだし。レイニールも行くし？」

「もちろんじゃ！ たまにはお前もいいことを言うのじゃー！」

褒められたミレイニは「当然だし」と胸を張っている。まあ、褒められているかは微妙なところだと思うのだが……。

次にミレイニは布団の中に入っているエリエに向かって叫ぶ。

「エリエはどうするし！」

「頭がガンガンするから叫ばないで！ うううう」

それを聞いて諦めたようにため息を漏らすと、レイニールを頭に乗せたまま走って部屋を出た。

サラザのBARに着くと、今度はそこにデイベッドと小虎がカウンターで食事を取っていた。そこに駆けていったミレイニが、小虎の隣の席にガタガタと音を立てて慌ただしく座った。

「何食べてるし？」

隣に座っている小虎の方を覗き込むと、小虎は顔を赤らめながら肩をすぼめているが、ミレイニはそんな小虎のことなど気にする素振りすら見せない。

小虎の食べていたチーズ入りのハンバーグを見たことで、それを食べようと決めたミレイニが手を上げてサラザに同じハンバーグを頼む。

小虎がミレイニのことが苦手ということではなく、このゲームはハードとソフト一体化の為に結構な額が掛かってしまう。その為、ミレイニや小虎の様な子供のプレイヤーは殆どいないのだが。

そのこともあってか、小虎は年齢の近いミレイニを自然と意識してしまうのだろう。それとは対照的に、ミレイニは細かいことを全く気にする性格ではない。いや、そんなことを気にしたことすらないのだろう。それどころか、子供のプレイヤーが少ないのもたまたまだと思っているかもしれない。

サラザがミレイニの前にハンバーグを置くと、ミレイニの頭の上に乗っていたレイニールがサラザに焼き鳥を頼む。

周囲を見渡したレイニールは、客の多さに素直に驚いていた。

「ほう。それにしても凄い客の数じゃ」

「そうなのよ。もう人手が足りないわ」

「あたしはまた手伝ってもいいし！」

口の周りをデミグラスソースで汚しながらさういとうと、カウンターから屈強な腕を伸ばしたサラザがミレイニの口の周りを布で拭いてあげる。

「そうね。その時はお願いするわねミレイニちゃん」

「ありがとうだし！」

口の周りを拭いてもらってにつこりと微笑んだミレイニにサラザも微笑み返した。

店内ではオカマイスターの仲間達が、料理やお酒を乗せたお盆を持って忙しなく行き交っている。

レイニールもその様子を見つめていると、サラザに名前を呼ばれてその方向を振り向く。

「はい。やきとりお待ち〜」

サラザがレイニールの前にやきとりを置くと、瞳を輝かせたレイニールがテーブルに降り立ち串を持って、流すように一気に串から肉を頬張る。

「——ほうじゃ！ あうじにおにあえをたのうぞー！」

口の中に肉を頬張りながら、モゴモゴと口を動かしてサラザに告げた。

ただでさえ周囲の大勢の客の声で聞き取りづらいのに、サラザは理解できたのか分からないが笑みを浮かべ大きく頷いた。

「そういうえば、エリエはまだ寝てるのか？」

やきとりをつまみに日本酒を飲んでいたデイビッドが、思い出したようにミレイニに尋ねた。

口にハンバーグを詰め込んでリスの様に頬を膨らましていて答えられないミレイニに代わって、レイニールが彼のその質問に答える。

「うむ。布団に包まって唸っていたのじゃ」

「はあ……まあ、海外ログイン勢だから酒を飲むなどは言わないけどさ」

「あら。エリーはお酒を飲んでないわよ？ 烏龍茶よ、烏龍茶」

2人の話を聞いていたサラザが横から口を挟むと、レイニールもデイビッドも驚いたように目を丸くさせて首を傾げた。

「烏龍茶？」

驚いた様子の彼等にサラザが言葉を続ける。

「そう。まあ、その場の雰囲気にならなかつたところかしらね」

ため息を漏らしたサラザはレイニールに星へのお土産を渡す。

それを受け取ると、レイニールはパタパタと空に飛び立つ。その時、デイビッドが小虎に向かって話している会話が聞こえてきた。

「でも、俺達に戦闘に参加するなというのはどうしてなんだ？ どういう現状なのかすら知らされてないし、情報を少しでも教えてもらいたいんだけど」

「いや、僕も詳しい情報を姉さん達から聞いていないんだよ」

それを聞く限りでは、どうやらデイビッド達には詳しい情報が与えられていないらしい。しかも、周囲にいるプレイヤー達は星のことを『剣聖』という勝手に付けた通り名でしか話していない為、気付かないのだろうか……。

レイニールも彼等の話を聞いただけで、星が戦っているとは一言も言わなかった。

本来は一人で戦っていると云った方が仲間達が協力してくれるくらいいいのだろうが。しかし、星はその仲間達を守る為に辛い思いをして今頑張っているのだ——だが、今ここでデイビッド達に教えてしまえば、その努力を無にしてしまう。それは星の意志に反すると、レイニールも分かっていたのだろうか……。

ギルドホールの最上階の部屋の扉の前に来ると、中から星の激しく咳き込む音が聞こえてきた。今にも泣き出しそうな瞳で、手に持っていたお土産の袋の持ち手を握り締めるレイニール。

だが、今の星にとってもじゃないが、戦うのを止めてくれとは言えない。もし、言ったとしても多くのプレイヤーの命運を握っている星は、絶対に首を横に振るだろうし、それが原因で仲違いしたら本当に彼女を一人だけにしてしまう。

本当に苦しいのは、固有スキル発動の副作用を必死に我慢している星本人であり、レイニールはそれを見守ることしかできないのだ——しかし、そうとは分かっているにしても、自分の主人が目の前で苦しんでいるのに何もできないというのはとても歯痒い事実には違いない。

レイニールは気持ちを整えて、しつぽでドアを叩いた。

「あるじー。ご飯を持ってきたのだ！」

「……入っいいいよ。レイ」

声を聞いて扉を開けると、星が何事もなかったかのようにベッドに座って微笑んでいる。その顔がいつもと全く同じで、部屋の前で苦しそうな声を聞いていたレイニールには、それが痛々しく思えて仕方なかった。

星の様子に崩れそうになる表情を戻し、お見上げを持ったまま星の方へふわふわと飛んでいく。

レイニールがベッドに降りると、星に向かってお見上げの入っている袋を持ち上げた。

「サラザのお店に行ってもらってきたのじゃー！」

「そうなんだ」

「うむ。やきとりじゃ、我輩も食べてきたが。やはりサラザの飯は美味いな！」

そう言ったレイニールに向かって「そうだね」と微笑むと、ベッドの上のレイニールを両手でゆっくりと持ち上げる。

「レイの顔を見てるとなんだか元気が出るね。いつも一緒にいてくれてありがとう」

彼女のその言葉も、いつもなら喜ぶべきことなのだろうが、今はその笑顔も無理に作ったものでしかないと思うといたたまれない気持ちになる。

だが、その心境を星に悟られまいと、レイニールも平静を装う様に胸を張った。

「当然じゃ！ 我輩は最強のドラゴンじゃからな！」

「うん。そうだね」

相槌を打って頷く星に、レイニールが持ってきた袋の中身を手渡す。星もそれを受け取ったが、結局中に入っていた六本の内の一本だけを食べただけで、残した五本は全部レイニールが食べた。

少しゆっくりして、星はそのまま眠りに就いた。レイニールもその日は一緒に眠っていたが、星が時折咳き込む音を必死に押さえている姿に、レイニールは全然寝付くことができなかった。

星もそれに気が付いているのか、時折レイニールの背中を優しく撫

でた。自分の方が辛いはずなのにレイニールを気遣う星の心に、レイニールの瞳から自然と涙が流れた。

翌日。結局寝てしまったレイニールが目を覚ますと、星は横でにつきりと微笑んでいる。

おそらく。星は昨晩は全く眠れなかったのだろう……その笑顔の奥には疲労感が薄っすらと見える気がした。だが、レイニールはそれを口に出すことはなく、そんな素振りも一切見せずに普段通りに言った。

「なんだ主。先に起きていたのか？」

「うん。レイはもう少し寝ててもいいんだよ？」

「何を言っておる！ 我輩は寝なくても平気なのじゃ！ ドラゴンだからな！」

それを聞いた星はくすつと笑うと「いつも寝てるのに」と言って顔を逸らす。

本心から笑っている星を見たのが久しぶりに感じるほど、レイニールは星の笑っている姿を見て嬉しかった。少しでも自分が主の役に立てた気がしたからだろう……。

だが、レイニールがいつまでもいると星が気を使ってしまつて我慢することになる。それが分かっているのだろう……レイニールはパタパタと翼を動かして飛び上がると、星の顔の前に行った。

「それでは主。我輩は少し出掛けてくるのじゃ！」

「うん。色々危ないから気を付けてね。レイ」

星がそういうと、レイニールは親指を立てて笑うと。

「この建物の中から出ないから問題ないのじゃ！」

つと自信満々に微笑んで見せた。

その後、レイニールが扉の方にいくと、星も部屋を出ようとするレイニールを扉の前で軽く手を振って見送った。

限界2

徐々に遠ざかるレイニールの後ろ姿を見送ると、エレベーターに入って大きく手を振るレイニールに星も再び手を振って応える。

エレベーターのドアが閉まるのを確認して、星が頭を押さえて地面に両膝を突く。

「……頭が割れる様に痛い。街の人達の声が頭の中に響く……」

そして咄嗟に起こった吐き気に慌てて口を押さえると、大きく咳き込んだ。

地面をはいながら部屋に戻ると、壁を支えにゆっくりと立ち上がり再び口を押さえて咳き込む。

よろよろと歩いてベッドに倒れ込むようにして口を付けると、何度も咳き込んで再び顔を上げた。

（——苦しい。今まででこんなのは初めて……もうあれをやらなかったら、きつとこの苦しさも消える。でも……）

そんなことを考えながら瞳を閉じると、今まで聞こえてきた多くの声が更に大きくなって頭の中で反響して聞こえる。

その声は皆楽しそうで、皆喜んでいいる。これも自分の固有スキルを使用したことによるものだと思うと、星の中に浮かんできた迷いが嘘のように消えていた。

固有スキルを使えば使うほど、自分は疲労している。だが、その行為が誰かの為になっていると考えると、苦しいよりも嬉しいという感情が溢れてくる。

（頑張らなきゃ……自分でできることを一生懸命に頑張るって決めたんだから……頑張らなきゃ……がんばらな……きゃ……）

星の意識はそこまで完全に途絶える。

星に掛かる負担をシステムがこれ以上は危険と判断したのだろう。本来は強制ログアウトして危機的状况を回避させるのだが、それができない以上は初期防衛行動である気絶という方法を用いるしかない。

気を失った星が次に目覚めたのは、敵の攻撃を知らせる鐘が鳴り響く音が街中にこだました時だった。

朝だったはずの外はすでに夜になっていて、窓からは丸い月が姿を現していた。ゆつくりと体を起こすと、今朝よりはよっぽど体が軽い気がする。

星は壁に立て掛けていた剣を取ると、ゆつくりと自分の胸に押し当てた。

「……大丈夫、きつと上手くいく。戦わないと守れないから……私は勝つ為に戦ってるんじゃない。みんなを守る為に戦ってるんだから……」

体調の悪さと失敗の恐怖から震える体を、大きく深呼吸をして落ち着かせる胸に押し当てていた剣を見つめた。

「——行くよ」

ゆつくりと歩み始めた足が、部屋を飛び出した直後には力強く床を蹴って進んでいた。まさに閃光の如く進む星の瞳は真つ直ぐ前だけしか見ていない。

自分が戦わなければ全てが奪われてしまう。街に住むプレイヤーも、大切な仲間も、白雪が星に頭を下げてまで頼んだのは星にしかできないからで、他の誰にも頼れないことだからだ——。

一回りも歳の離れた星に、彼女は頭を下げたのだ——プライドを捨ててまで、自分の無力さを呪いながら。

それはきつと子供の星には理解できないくらい感情だろう。しかし、星は生まれて初めて自分にしかできない役目をもらった。

いつも強い仲間達に劣等感を覚えながら、心の中でずっと必死に自分にできることを探し——そんなものはないと、諦め続けて、仲間達の勝利を祈り続けた日々。

今までエミル達の後ろで守られるしかなかった自分が、やっと戦えるのだ——歯痒い思いをしていた弱い自分から、苦しくても耐えて戦える少し強くなった自分に……。

剣を握り締めギルドホールから街に飛び出した星は、金色に輝くその体を揺らしながら城門の前までやってきた。

城門前にはすでに多くのプレイヤーが集まり、再び攻めてきたモンスター軍勢を見て、この世の終わりのような表情で向かって来る敵

を眺めているしかなかった。

前の戦闘とは違い。星の固有スキルの制限時間の24時間を迎えていない為、ステータスが固定された状態ではあらがう術を持ち合わせていない。今はただただ、2日間代わりに戦ってくれた『剣聖』の二つ名を付けた幼い少女を待っているしかない。

「まさか、また敵が攻めて来るなんて……」「剣聖は。剣聖はまだ来ないのかよ!」「……俺達。このまま死ぬのか?」「もうダメだ。おしまいだあ……」

星が現れたことで、今まではまるでこの世の終わりの様な言葉を吐いていたプレイヤー達が、息を吹き返したように歓声を上げて現れた星を歓迎する。

地面を蹴って軽々と宙を舞って、その人集りごと城門を飛び越えて地面に着地した。

街の外に出ると見渡す限り赤黒い炎に体を焼かれたモンスターの軍勢で埋め尽くされ、例に漏れず中央には同じく赤黒い炎に包まれたルシファーが悠々と歩いている。

星は体の前に構えた剣の柄を両手でギュツと握り、敵を睨み付けると小さく息を吐き出す。

敵の前に出ると、集中しているからなのか吐き気と頭痛も治まり。その代わりに、恐ろしいほどの冷静さが頭の中を支配していた。

静寂の中、先に動いたのは星の方だった――。

目にも留まらぬ速度で敵の先頭と肉薄した星は、放たれる刃を掻い潜りモンスターを次々と撃破していく。

誰が見ても星は敵の横を通り過ぎていくだけの様に見えるのだが、通り過ぎた直後にモンスターの体が真っ二つに斬り裂かれ崩れ落ちて地面に落ちてから光に変わって空に昇る。

間一髪で彼女が戦っているとは分かるのは、動く度に近くに火花が飛んでいるからだろう。

しかし、今回は前回とは明らかに違う。前回は5万程度の部隊だったが、今回は倍の10万はいる。しかも、街を囲むように展開しているわけではなく、明らかに街の東門を突破する為に部隊を集結させて

いた。

しかし、敵の本当の目的は星の体力を疲弊させることにあるのだろう。星が気を失っている間に、紅蓮達が再び整備して使えるようにした落とし穴の方には近付いてもこない。

落とし穴は投石機と違って効果範囲を移動することができない。つまり、穴の位置を変更するには再び巨大な穴を掘るという労力が必要となる。それならば誰でも、もう一つ穴を掘った方が早いと気が付く。

モンスター全ての行動を操作できない以上。進行させれば必ず穴に落ちてしまう、しかしそれは逆に言えば穴に近付かせなければ問題は無いということだ――。

だとしても、穴に近付けないということは街に一定以上近付けないということでもあり、敵は本気で攻撃を仕掛けて来る気がないということの現れでもある。

だが、まだ戦闘経験の薄い星が判断するのは難しいだろう。前回の戦闘で、星の周りにいた仲間達が戦闘に参加しないということは確認している。

彼女の性格を考慮すれば、仲間達を危険に晒さないようにと自分一人でくるのは分かっていた。まあ、レイニールは星と共にいる為、彼女の装備としか見ていない。

しかし、以前の始まりの街の戦闘ではレイニールと星で10万のモンスターを撃破している。それを踏まえて相手は撃破できると判断して10万のモンスターを用意したのだろうが、今はいつも張り付いているレイニールは居ない。この点においては、敵に取って有利な状況と言えるかもしれない。

星は敵に勇猛果敢に戦闘を仕掛けてモンスターを破竹の勢いで撃破している。だが、星は数多くのモンスターを撃破する中で、一つだけ不可解なことに気が付いていた。

「……あの大きい天使が全然動いていない」

天に向かって赤黒い炎を纏っているルシファーが一定の間隔を開けたまま、全く動いていないのだ――足元の周辺には他よりも多くの

モンスターが密集していて、赤黒い炎を伝染させられている。

まあ、エクスカリバーは属性攻撃武器だから、属性攻撃しか効かない赤黒い炎を纏っているモンスターも撃破できるのだが。しかし、問題なのはやはりその数だろう……肉体強化しているとは言え、ここ数日間まともに休めていない星にはこの連戦はさすがにきつい。

それが現れているのか、先程まで軽快に撃破できていたモンスターの攻撃が星の体に当たるようになってきた。まあ、攻撃をされたところで、深刻なダメージを受けることはないのだが。そんなことよりも、攻撃されたということが問題なのだ――。

限界3

特に戦闘経験が少ない星にとっては、殆ど痛みがなくなるとも攻撃を受けるといふ行為そのものが精神的に彼女を追い込むことになる。

今まで確実に避けられていたほぼ止まって見えていたはずの攻撃に当たるといふのは、星の体力がそれほど少なくなってきたといふことの現れでもあり。どうしても焦りが出てきてしまい攻撃だけではなく、防御にも神経を使わなくてはいけなくなる。

それを表しているかのように星の剣での攻撃が単調になり、防御や回避時に体の動きが大きくなってきた。それにともなって、星の呼吸も次第に大きく荒くなっていく。

やはり一人で10万の大群を相手にするのはリスクが大き過ぎたのだ。疲労を完全に取りきれでない状態で、最初からハイペースにモンスターを撃破し過ぎた。

ただでさえ、敵の集団の中に突撃する以上。どうしても360度全ての方向を警戒し続ける必要があり、体力だけではなく精神力も大きく消耗してしまう。

戦闘に長けているプレイヤーでさえ、複数の敵に全方位から攻撃されれば容易に撃破されてしまうにも関わらず。星は肉体強化のみでそれを行っているのだ——普通の同年代の子供ならば、数百の敵を撃破した辺りで集中力が切れて撃破されてしまうだろう。しかし、星は洞察力や対応力に関しては何々のスペックが高い。

それもそのはずだ。星は日常的に人に頼ることをしない。相手を優先し過ぎて頼れないという思いと、頼ったところで何もしてもらえないという考えが先にきてしまい上手く他人に甘えることができない。

その為、どんな問題が起きても常に一人で行動して解決してきた星にとって、一回の問題に対しての経験値が他の子供達とは明らかに違う。まあ、数人で考えて解決しないといけない問題を一人で熟さなければならぬのだから当然だろう。

現に今も、星は敵に囲まれ戦闘をしながらも、時折遠くに悠々と仁

王立ちしているルシファーに視線を向けて警戒を解いていない。

しかし、それが更に精神的に負担を増幅させているのも事実。今のまま戦闘を続けていても、星の体力と精神の方が限界がきてしまうは明白だ——ならば、その前にせめて最も危険性の高いルシファーだけは撃破しなければと思ったのかもしれない。

星はエクスカリバーを構えると、突如として敵の中を突っ切るように全力で走り出した。

もちろん。敵は星の体に容赦なく得物の刃で斬り掛かるが、星は体に当たる刃を気にも止めず進路を塞ぐ敵のみを撃破して強引に前に出る。

彼女の瞳には、もう赤黒い炎に身を包まれたルシファーしか映っていない。

時間がない……もう時期に、前日に発動させた固有スキル『ソードマスター・オーバーレイ』の効果が切れてしまう。

「——残っている時間はもう少ししかない……月が真上に来るまで、その前にあの大きい天使だけでも！」

攻撃のダメージは殆どない。今の星のHP、防御力はほぼ無限になっている。今ならば、痛みの殆どをシステムが受けたダメージと照合して軽減してくれる。

つまり、防御力が最大になっている星には最低値のダメージ『1』しか与えることはできない。

例えるならば、針の先で肌を突かれている程度の痛みだろうか。しかし、実際には敵は剣や槍などで攻撃してくるわけだから恐怖も付随して、本人はそれ以上の痛みを感じている。

だが、今の星にはその程度の痛みや恐怖などは、もうどこかにいつてしまっているかのように全力でルシファーを見据えて突き進んでいく。

ルシファーの目の前までくると、勢い良く跳び上がったルシファーの頭上まで体が浮かび上がると、星の視界の直上に昇っている月が入る。

微かな笑みを浮かべた星が、その月を斬り裂く様にエクスカリバー

を大きく掲げ、次の瞬間に力一杯振り下ろした。

「はあああああああああああああああああッ!!」

叫びながら星の振り下ろしたエクスカリバーの刃が、ルシファアの脳天から下へと斬り裂いていく。

抵抗する暇もなく真つ二つに斬り裂かれたルシファアの体が、次第に左右に離れて地面に居るモンスター達を巻き込んで土煙を上げて倒れた。その後、地面に着地したと同時に、星の体を包んでいた金色の光が徐々に収まって消えた……。

「はあ……はあ……ぎりぎりだった……」

固有スキルが切れたと同時に、体に物凄い疲労感と眠気が襲ってくる。

手に持っていたエクスカリバーを地面に落とし、星は前のめりにゆっくりと倒れた。

ここ数日間ともに休めなかった星には、もうスプーンを持つ力も残っていない。もう固有スキルも切れ、体にも力が入らない『万策尽きた』という言葉がしっくりくる。

体の周りを敵に囲まれ、固有スキルが切れたことでパワーバランスも完全に逆転し、無敵のプレイヤーが雑魚モンスターに囲まれている構図から、レベル100のプレイヤーが数万の同レベルのモンスターに囲まれている状態へと変わってしまった。

薄れゆく意識の中で、自分を取り囲む死霊系のモンスターがジリジリと迫ってくる。だが、奇跡的に剣を持たたとしても、今の体力では一合打ち合って互いの武器の刃をぶつけたら、間違いなく星の方の剣が弾かれてしまう……。

体を囲むモンスター達が剣を振り上げて倒れている星に襲い掛かろうとするが、もはや星にはそれにあらう術がない。諦めて瞼を閉じると不思議なことに、襲ってくると思っていた痛みがいつまで経ってもこない。

恐る恐る瞼を開くと、自分の周りを囲んでいたはずのモンスターは光の粒子になって消えていた。その直後、再び攻撃を仕掛けにきたモンスターが星の視界で一斉に止まった。何が起きたのか、考えるより

も早くその理由が判明する。

突如、ローブを身に纏った黒い剣を持ったプレイヤーが目の前に立っていた。

次の瞬間。その体が大きく動き、手に持った黒い剣を構えて体を回転させると、囲んでいた敵の体を斬り裂いてそのプレイヤーの顔が星の顔を見つめて止まる。

ローブの中から見える青い瞳が、星の紫色の瞳を真っ直ぐに見つめていた。

この人物を見たのはこれが初めてではない。以前、村正事件の時にエミルといった宿屋で出会ったその時も星のことを助けてくれたのだが――。

「……あなたは誰？」

地面に倒れていた星がそう尋ねると、相手からの返答はないと思っていたが意外なほどあっさりと言葉を返してくれた。

「――私は……そんなことはどうでもいい。それよりも、お前の仲間がきている」

その女性の声に促される様に星の視線が一瞬彼女から離れ、慌てて視線を彼女に戻した時にはすでに彼女の姿はなくなっていた。

するとそこに彼女が言った通り、黄金のドラゴンの姿になっているレイニールと白銀の鱗に包まれたリントヴルムの背中にはエミルとイシエル。そして漆黒の巨竜ファーブニルに乗った影虎が現れる。

地面近くに着たドラゴンの背中から飛び降りた2人の人影が、地面に倒れている星の側に着地した。

その人物はイシエルと影虎で、星の近くに降りたつたイシエルが素早く両手を広げると、それを合図に3体の巨大なドラゴンがモンスターに向かって一斉に口から炎と火炎弾を噴射する。

炎と火炎弾によって周囲のモンスター達が見る見るうちに減って、モンスターで隠されていた地表の部分が現れ、モンスターが居なくなった地面に3体のドラゴンが舞い降りる。

威嚇するように周囲に向かって咆哮を上げるレイニールとファーブニル。そして中央にいたリントヴルムからエミルが飛び降りた。

彼女は地面に着地すると、一瞬体勢を崩してよろけながらも星の方に向かって一目散に駆け出す。

「助けにきたわよ。星ちゃん！」

そう言って駆け寄ってきたエミルは、地面に横たわっている星の体を抱き上げると、リントヴルムの方へと戻った。

しかし、跳び上がろうとした足が言うことを聞かず、中々リントヴルムの背中に戻るができない。

その直後、一度は止まっていたモンスター達が再び動き出し、左右に居たレイニールとファーブニルが同時に炎と火炎弾で敵の先頭を撃破した。

まだ跳び上がれずに四苦八苦していると、そんな彼女の体をイシエールが支えながら跳び上がった。

背中に乗ったのを確認すると、リントヴルムが勢い良く翼をはためかせて一気に地面から飛び立つ。それに続くように二体のドラゴンが後を追いかけて飛び上がった。

戦場から離れ、街の方向に向かって一目散に飛んでいく。しかし、今の千代に戦闘をするという意思のある者は少ない。いや、二度の攻勢を退けた星を頼り過ぎた為、本来ならば自分達で敵を退けると躍起になっていたのはすでに過去の話なのだ。

だが、その心配は必要なかった。何故なら、星が戦場を離れた直後にモンスター達が一斉に撤退を開始したのだ。まるで、街には何の興味もないかのように……。

反撃の意志

星を連れて部屋に戻ったエミルは少しほっとした様子で、眠っているその小さな体をベッドに寝かせた。

布団を掛けて眠っている星の額に手を乗せると、ぐつすりと眠っている彼女の顔を覗き込んで小さく呟く。

「……いつも無茶ばかりして倒れてばかりね……でも、帰って来ると言って、ちゃんと帰ってきてくれるのはえらいわ。後は私に任せてゆつくり休んでね……」

エミルは眠っている星に微笑むと、彼女を起こさないようにとそつと部屋を出ていった。

外ではイシエルとレイニールが彼女のことを待っていた。レイニールは出てきたエミルから少し距離を置きながら彼女に尋ねる。

「——エミル。本当にやるのか？」

「ええ、敵の攻撃の間隔を見ていれば、近くに敵が潜伏しているのは分かる。しかも、あの撤退の命令の早さで確信したわ。敵の親玉もこの街の近くにいてるってね——あの狼の覆面を被ったあいつが……だから、こちらから仕掛けて必ず潰す！ 星ちゃんが体を張って時間を稼いでくれたから、私のドラゴン達も全回復してる。リントヴルムZWEIが使える今なら勝てる！」

「もちろん、うちも行くよ。エミル一人だけで戦わすわけにいかへんからね」

逸早くエミルに賛同するイシエルを見て、遅れを取るまいとレイニールも胸を張ってエミルの前に出て。

「まあ、お前達だけでは心配じゃ。我輩も共に行つてやろう！」

そう言つて誇らしく胸を突き出していると、何者かの声が聞こえた。

「——俺達もいくぞー！」

声のする方に目を向けると、そこにはエリエとデイビッドが立っていた。

二人は笑みを浮かべながらゆつくりと近付いてくると、エミルの前

で止まって拳を突き出した。

「まさか、私達を置いていくなんて言わないよね。エミル姉」

「でも、今回は今まで以上に危険な戦いになるわ。貴女にもしもがあつたら、国際問題に——」

「——今更だよ。私達の戦いは、いつだって危険な戦いしかなかったでしょ？ それに……星にはかり負担を掛けるのは、さすがに情けなさ過ぎるしね。知らなかったとはいえ……」

表情を曇らせながらエリエが言うと、そんな彼女のエミルも気持ちちは痛いほど良く分かる。だからこそ、エミルはそれ以上は言えなかった。

属性攻撃武器の『炎霊刀 正宗』を持っているということが自信に繋がっているのか、デイビッドもやる気満々なようだ。

「俺も行きますよー」

そこに廊下を走ってきたカレンが、声を大にして叫んだ。

だが、それを聞いたエミルは眉をひそめ渋い顔をしている。

それも無理はない。未だに固有スキルが発動できない彼女を連れていくのにはさすがに不安があつた。

言いにくそうにエミルが口を開く。

「……カレンさん。でも、貴女はまだ固有スキルが発動できないでしょ？ 私としては、カレンさんは残ってほし——」

「——エミルさん何を言ってるんですか？ 確かに俺はまだ固有スキルは使えません。ですが、その代わりに人以上に修練を積んで戦闘技術なら誰にも負けませんよ。しかも、敵はプレイヤーじゃなくてAIで動くモンスターですよ？ そんな作り物に固有スキルがないだけで遅れは取らないですよ」

途中で口を挟んでそう言った。彼女のその声は少し威圧するようなものだった。カレンとしては、固有スキルの発動条件を満たしていないだけで、他の者に遅れを取っていると思われるのは心外なのだろう。

まあ、彼女が不快になるのは無理もない。ただでさえ、エミル達は固有スキルに恵まれている部類に入っている。

そんな彼女に固有スキルのことを突かれれば、無意識に不快に思っ
てしまうのは仕方がないだろうが、実際にカレンの戦闘力は他のトツ
ププレイヤーと比べても引けを取らない。

当然だ。彼女はあのマスターに鍛えられている。つまり、他のプレ
イヤー達とは練度の質が違う。例えるならば、プロにアマチュアの選
手が敵わないのと同義なのだ――。

だが、エミルは彼女を怒らせる目的で言ったわけではない。それよ
りは、彼女の身の安全を考えた言葉だったのは言うまでもないだろ
う。

カレンの言ったように、対人戦なら固有スキルの有無は戦況を占う
上で重要なカードになるのは間違いない。しかし、今回は対人戦では
なくモンスターとのごく普通の戦闘で、敵は属性攻撃でしか撃破でき
ない赤黒い炎で覆われている。

確かに属性攻撃しか効かないのは困難だが、それは珍しいという意
味で、普通にモンスターの中では様々な効果を持っていてその種類も
多い。

例えるならば、東北地方にある蔵王山をモデルに作られた『蔵王霊
山』には山の中の大きな湖に夜になると霧と共に現れる『死霊の王
サムライゴーストスレイヤー』という全身を古びた鎧に守られた全長
30m級の巨大な死霊の侍の王が配下の死霊の侍を連れて現れる。

しかも、巨大なその侍の王には原則として物理攻撃は通用せず。時
間によって実体化する腰の小太刀を攻撃しなければダメージを与え
られない。つまり、この赤黒い炎を持つモンスター達も珍しいという
だけでしかないのだ。だとしても、やはり固有スキルが使えないとい
うのは致命的である。

平静を装って拳を強く握り締め、苛立ちを抑えている様子の彼女を
これ以上刺激しないように、エミルは優しい声で告げる。

「違うのよ？　ただ、今回は失敗するリスクが大きいからであって、カ
レンさんが弱いと言っているわけじゃないの。あのマスターのお弟
子さんですもの、強いのは分かっているわ。でも、もし貴女になにか
あったらマスターにも顔向けできない。貴女も分かるでしょ？」

「……………ええ、でも師匠ならこういう時、こう言うと思います。仲間達を守る為に、自分にできる最善を尽くせ——と」

そう言った彼女の言葉にエミルは無言で頷くと「一緒に行きましょう」と言葉返して彼等は廊下を走り出した。

それを壁の隙間から遠目で見ている人物が一人…………。

「……………あたしをのけ者にしようとか、ゆるせないし！ でも、安心するのは今だけだし……………ふふふっ」

ミレイニは口を両手で押さえると、何かを企んでいる様子で思わせぶりにくすくすと笑っていた。

反撃の意志2

ギルドホールを出ようとしたエミル達を、入り口で紅蓮が待っていた。まるでここにエミル達がくると最初から分かっていたかのようだ……。

「——やはり来ましたか……彼女が倒れた時、白雪が救出に入る前に貴方達が先に助けに入ったので来るとは思っていました」

「——ッ!？」

紅蓮の言葉を聞いたエミルの表情が一変した。それは彼女が星の話を出したからなのは間違いない。

そんなエミルの言葉を待つ前に、紅蓮は深く頭を下げた。もちろん、それに驚いたのはエミルだけではなくその場にいた全員だった。そして顔を上げた彼女はそれ以上に驚きの提案をエミル達にしてきたのだ——。

「それでは戦力不足です。私は体の関係で残念ながらいけません、代わりにメルデイウスを連れて行って下さい。戦力としては一人で5万人に匹敵しますし、彼も戦闘ができずにイライラしていたのでちよいどいいでしょう」

「えっ!?.. で、でもそれでは街の守りは……」

「そうだぜ！ 俺が出たらお前はどうするんだよ！」

驚き目を見開くエミル。そしてそれを聞いて、慌てて紅蓮の前に出たメルデイウスは彼女の赤い瞳を見つめた。

紅蓮はため息を漏らし、動揺を抑えきれずに細かく動く瞳を真っ直ぐに見つめて告げた。

「私達はそれほどやわではありません。もし、貴方達が居ない間に敵が別方向から奇襲してきたとしても、貴方達が戻るまでは耐えてみせますよ。貴方やマスター、剣聖が居なくて落とされたと言われたら四天王と呼ばれてきた私の立場はないですからね……貴方一人だけがテスターであり、四天王と呼ばれる存在ではないのです」

彼女のその瞳の奥には、己が死んでも街とそこにいるプレイヤーを守り抜くという決意が見えた。それを見たメルデイウスは「分かっ

た」と小さく頷く以外にはない。もし、それ以上彼女に言葉を吐けば、彼女のプライドを踏み躪る行為だと分かっていたからだろう。

彼が頷いたのを見て、微かに表情を和らげた直後、今度は彼女の横に立っていた白雪が真剣な面持ちで言葉を発する。

「……紅蓮様。私もギルマスと一緒に行ってもいいでしょうか！」

少し驚いた様子で隣に居た白雪を見上げた紅蓮は、彼女の瞳を見て全てを悟ったように頷いた。彼女もそんな紅蓮に軽く頭を下げると、礼を言つてエミル達の方へと歩き出す。

白雪としては、以前エレベーターの中での星とのやり取り。そして、戦闘で彼女が倒れたことを自分の責任だと思ったのかもしれない。

紅蓮の話でも白雪が倒れた星を助けに行こうとして、エミル達が先に入つて助けたと言つていた。

本来ならば星に助けるのは、先に彼女に助けを求めたのは白雪のはずだった……そんな彼女が、目の前で先にエミル達に連れていかれたのを見せられるのは断腸の思いだっただろう。その時、自分の無力さを彼女は何より呪つたに違いない。

白雪からすれば、今回の戦闘に参加するということは星に責任を背負わせるしかなかった彼女のせめてもの罪滅ぼしなのかもしれない……。

「——白雪」

紅蓮は突如歩いている白雪を呼び止めた。驚き振り向く彼女に歩いていった紅蓮は、コマンドを操作してある物を彼女に向かって突き出す。その手に握られていたのは、真っ白な鞘に金色の紐の下げ緒が付いた美しい刀だった。

それを見た白雪は驚いた表情で、紅蓮の手に握られているその刀を見た。

「敵は物理攻撃が効きません。これを持って行って下さい」

「それは小豆長光！ ですが、それは紅蓮様の愛刀ではないですか！

持っていくと言っても、トレジャーアイテム装備には使用者登録が……」

白雪の言う通り。比較的に高額になるトレジャーアイテムの中でも武器や防具などの装備アイテムには、盗難や窃盗などの防止機能として使用するプレイヤーの名前を記入しなければ使えない処置が施されている。これを解除するには、プレイヤーがゲーム内から完全に引退する必要がある。しかも、ギルドホールから譲渡するには基本的に180日間の期間を要する。

何故なら、RMTによってリアルの金銭の取り引きを許可している以上。ゲーム内アイテムであつても資産であり、実際に譲渡する人間に現実世界で確認を取って書類を送り署名捺印してもらわなければいけないからなのである。

ゲーム内通貨は仮想通貨扱いであり。しかも、本来ならば税金の掛かるはずのものである。

しかし、開発元がどの国にも所属していない国際的な組織である為、例外として税金を免除されている。これもこのゲーム「FREE DOM」が全世界的に爆発的にヒットした理由である。だからこそ、運営と完全に連絡手段を切断されているこの状況下で、今すぐに紅蓮が使用者登録を行っているこの武器を白雪に譲渡するのは不可能なのだ――。

そんなプレイヤーならば誰でも知っていることを、ベータテスト時代からこのゲームをプレイしている紅蓮が知らないはずはない。

「安心して下さい。これは私が使っているものとは違います。貴女専用に私が用意していたものです」

「――私専用……ですか？」

白雪はそれを聞いて紅蓮の言葉が信じられないと言った表情でその場に立ち尽くしている。

そんな彼女の手を取ると、紅蓮が持っていた刀を握らせる。

白雪は放心状態のまま、口を開けて手渡された刀を見下ろしていた。

「貴女の今の装備では物理攻撃の効かない敵とは戦えません。それに――」

紅蓮は自分の着ている真っ白な着物の上に手を置いて、感慨深げに

瞼を閉じた。そして少し間を置いて、再び口を開く。

「この着物を渡された時に貴女は言いました。この着物を私だと想って下さいと……私はこれに氣に入っています。何度もこの着物には助けてもらいました。いつかお礼をしたいと思っていましたから、これはいい機会です。貴女もこの刀を私だと思ってしつかりやってきて下さい——信じていますよ白雪……」

紅蓮のその言葉に、正氣を取り戻して受け取った刀を掲げて地面に膝を突いて頭を下げた。

「必ず紅蓮様の期待に応えてみせます！」

満足そうに白雪を見つめる紅蓮の優しい眼差しに、メルディウスが笑みを浮かべ周りに居たエミル達に叫ぶ。

「さあ、俺達の準備は整ったぜ！ お前達が良ければすぐにも出れる！」

エミルも仲間達の顔を一人一人見ると、皆決意に満ちた瞳で頷く。それを確認してエミルも頷くと、決意に満ちた瞳でメルディウスを見た。

メルディウスはニヤリと不敵な笑みを浮かべ告げる。

「準備はできてるようだな……なら行くぞッ!!」

皆無言のまま頷くと、ギルドホールを飛び出していった。

反撃の奇襲

伐採任務の時に使った地下を通って、街を出ると敵の潜伏場所を割り出すのに、それほど時間は掛からなかった。

彼等は千代の街から少し行ったところにある森の中に潜伏していたのだ――。

死霊系のモンスターは本来夜に活発に行動する。その為、午前1時である今は最も活発に活動している時間である。

いくらモンスターを自由に動かせると言っても、全てを想いのままにコントロールすることはシステム上不可能であり、どうしてもアンデット系のモンスターが活発な時間の一体ずつの行動範囲は大きくなってしまう。

森の中で一体のモンスターを見つけるのは困難だが、数十万のモンスターを見つけるのは容易だ。

敵の多くは命令を与えられていないので、周囲をゆつくりと歩き回っている。

まだ敵にはエミル達の存在はバレていない。これは奇襲を掛けるには絶好のチャンスであるが、慌てて攻撃を仕掛けようとしている者はいない。

そして隠れているメンバーの中には、出発前には居たはずの白雪の姿もなくなっていた。

おそらく。隠密行動に長けている白雪に偵察を頼んで、その結果から大将である覆面の男を叩く作戦なのだろう。モンスターを操作している大本を叩けば、操られているモンスター達は統率力を失い散っていくはずだ――。

その時、今まで大人しかかったモンスター達が一斉に騒ぎ始める。それを見て、エミル達も動揺した様子で周囲を見渡す。

「なんだ!? 何があった!」

「白雪さんが敵を見つけたんですか?」

慌てた様子のメルディウスにエミルが尋ねると、彼は首を横に振った。

「いや、敵の親玉を見つけたらこちらに連絡が来る手はずになってい
る。しかも、あいつはこんな先走るようなことは絶対やらねえー」
「なら、いったい誰が……」

様子を窺っていると、聞き慣れた獣の咆哮が聞こえてきた。その瞬
間、エリエは全てを察した様子で大きなため息をつく顔に手を当て
た。

エミルもそんな彼女の様子を見て大体を把握したのだろう。すぐ
に剣の柄に手を置いて、メルデイウスの方に目を向けた。

それは飛び出すということの意思の表われであるのは、剣の柄に手
を置いて自分の方を見る彼女の瞳を見ていれば分かる。

メルデイウスは口元にニヤツと不敵な笑みを浮かべると、背中に背
負っていた大剣を引き抜く。

「作戦変更だ！ 俺達が暴れ回れば、それだけ敵も慌ててしつぽを出
すからな！ 派手にいくぜ!!」

その掛け声の直後、彼の持っていた大剣が金色に光その姿を大剣か
ら大斧の姿へと変えていく。

彼の声に触発され、次々に抜刀する仲間達の中、何故かエリエは剣
を抜くのを躊躇っている。それに気が付いたデイビッドが、彼女の方
を向いて呟く。

「エリエどうした？」

「……別に」

「怖かったら離れてていいんだぞ？ 俺がお前の分も敵を倒せばすむ
からな！」

毒づくカレンの声が聞こえ、むつとしたエリエが勢い任せに腰に差
していたレイピアを抜く。

デイビッドはそれを見て、エリエが剣を抜くのに躊躇していた理由
を察した。

それは彼女が持っていた赤いレイピアだ——これは彼女と付き合
いの長いデイビッドですら見たことがない。エリエは普段からお菓
子作りの食材と道具がインベントリを圧迫して、装備も最低限しか
持っていない。

攻撃速度重視の戦闘スタイルを貫いているエリエにとって、攻撃速度重視にステータスを振られているメインの武器と予備用の武器の二本あれば、装備はそれだけで十分事足りるものであった。

そのせいかもしれない。己のプレイスキルが高いのも災いしているのだろうが、属性攻撃武器には毒、麻痺や攻撃速度などのステータスの付随はできない。

つまり、エリエは今まで属性攻撃系の武器を使ったことがないということだ。しかも、それをこんな大事な場面で使うとは彼女自身が一番予想していなかったに違いない。

鞘から引き抜いた赤いレイピアを持つエリエの手は震えていた……。

次々に敵の中に飛び込んでいく仲間達の背中を見つめ、彼女はどうすべきか考えているようにも見えた。

すると、デイビッドが持っていた刀の刀身を彼女のレイピアの刃に当てると、キーンと鉄の打ち合う乾いた音が響く。その行動に驚いて目を丸くしている彼女に告げる。

「——落ちつけ、どんな武器でも普段使っているのと同じだ。お前なら、どんな武器だって使える！ 何も気にすることなんかないだろう？」

「デイビッド……でも、もちろんでしょ！ ちょっとよそ見してただけよ！ エミル姉達ばかりに戦わせるわけにはいかないし。行くわよデイビッド！」

「ああー！」

勢い良く駆け出す彼女の後ろ姿を見て笑みを浮かべると、デイビッドもそれに遅れまいと勢い良く飛び出して敵を撃破しながら、炎帝レオネルの背中に乗ったミレイニの方に向かっていく。

ミレイニはエリエ達を見つけると、嬉しそうに手をブンブンと振っている。それを見たエリエはイライラしながら敵を薙ぎ倒すと、ミレイニの前まで強引に進んでいく。

彼女の前までいったエリエは、炎帝レオネルの背から駆け寄ってき

たミレイニを見てブチツと完全にキレる。

「ミレイニ！　なんでここに来たのよ！」

「ふふーん、あたしがスケツトに来てやったし。感謝してほしいし！」
胸を張っているミレイニの頬を両手で引つ張る。

目を細めながら頬を引つ張るエリエは、低い声でボソボソつと呟く。

「……あなたは、始まりの街の時も星を置いて付いてきたわよね……
なんであなたはいつもいつも私との約束を守れないのかわく？」

「いはい！　いはいひく！！」

つきたてのお餅のように伸びるミレイニの頬を引つ張っていると、
ミレイニの指にはめられている赤い宝石の付いた指輪が光る。すると、
指輪の中からサーベルタイガーが飛び出してきた。

出てきたサーベルタイガーはエリエの首筋に噛み付こうと、鋭く
尖った牙を突き付けるエリエは咄嗟にレイピアで防ぐとバランスを
崩して地面に倒れる。

サーベルタイガーの前足が彼女の体を地面に押し付け、殺意剥き出
しの瞳をエリエに向けていた。

ミレイニは慌てて勝手に飛び出してきたサーベルタイガーの方に
走る。

「シャルル。それはエサじゃないしバカだし！」

「バカでもない！　てか、早く助けなさいよー！！」

即座にバカという言葉を否定したエリエから、サーベルタイガーの
しつぽを引つ張って必死に遠ざけようとしているが、逆にシャルルは
苛立っている様子でエリエに迫る。

それを察してか、エリエは悲鳴を上げて更に声を大にして叫んだ。

「バカバカ！　しつぽを引つ張ったら怒るでしょうが！　別の場所を
引つ張りなさいよー。てか、なんでこんな状況で仲間の獣に襲われな
きやいけないのよ！！」

敵のモンスターに囲まれる中、コントのようなことをしている彼女
達を見て、メルデイウスは大きなため息を漏らす。

「はあく。たく、何やってんだか……おい侍、そっちはそっちでなんと

かしろ。俺は俺で好きに暴れてるぞ！ お前等もいつまでも遊んで
ないで敵の数を減らせよ！」

大斧を担いで地面を蹴って大きく跳び上がると、メルデイウスは多
くのモンスターがうごめく中へと消えていった。

反撃の奇襲2

大きな爆発音と共に、辺りにモンスターの残骸が粉々になって吹き飛ぶ。

楽しそうな笑い声と爆発音を立ててメルディウスは、破竹の勢いで見る見るうちに敵の数を減らしていく。

その様子を見てみると、さすがは街のトップギルドまで昇り詰めたギルドのギルドマスターと言ったところだ——敵が視界に入ってから反応速度。死角からの敵の攻撃を察知する危機察知能力。隙の多い大斧を振り回し、手足まで使ってその弱点をカバーする戦闘センス。全てが他者の追従を許さない超越した領域であり、紅蓮が5万の敵と匹敵するプレイヤーだと言うのを領ける。

だが、いつの間にかギルドマスターに負けじと紅蓮から渡された刀を振るう、白雪も彼に引けは取らないほどの強さを見せる。

純白の刀身から放たれる冷気は敵を見る見るうちに減らし、とても今日初めてその武器を使った者の動きではない。

彼等のその強さにはデイビッドもエミルも啞然としている。そんな彼等の背後に一人の男が現れる。

「あー。彼も本気でこの戦いを楽しんじゃってるねえー」
「二——ツ!?!」

二人は驚き咄嗟に身を翻すと、更に驚いた様子で目を見開く。

何故なら、そこに居たのは四天王の一人デュランだったからだ——彼の周囲にはそれぞれ別の色の着物を着た5人の能面を付けた者達が立っていた。

彼等はデュランの持っている武器『イザナギの剣』で召喚した従者達だ。デュランの持つイザナギの剣は7つの能力を持っている特殊武器であり、その能力は全てがチート級の能力だが原則として一つの能力を発動している間は他の能力は発動できず。しかも、他のを発動すれば前までの能力の効果は消えてしまう。

つまり、彼が別の能力を使えば、例外なく周りにいる従者達も消えてしまう。今の彼が持っている武器は刃の光る普通の刃物でしか

い。

まあ普通の武器になっただけで、それだけではトッププレイヤーである彼の戦闘技術が落ちることはないだろう。少なくとも装備だけでレベルを最大まで引き上げているモンスター如きに負けはしないのは間違いないだろうが……。

突然現れた彼等を訝しげに見ていたエミルが、彼がどうしてこの場所に来たのか尋ねると彼は微笑を浮かべながら言葉を返す。

「そんなの、君達を助けに来たに決まっているだろう？ まさか、君達を背後から強襲しようなんて思っていないよ」

「そうですよ。私の主人はそんなことをする人ではないですよ」

彼に味方するように言ったのは、白い着物で頭に天狗の能面を付けた長い白髪を後ろで束ねた緑の瞳の従者だった。彼のその甘いマスクから出た表情は不気味なほどの笑顔だった。

だが、エミルにはそのイケメンという名の仮面の下に隠している素顔を見過ごさなかった。

(この人物も要注意ね。星ちゃんには近付けないようにしないと……)

心の中でそう思いながら、エミルはデュランと彼の従者達に少し警戒した様子で体を強張らせる。

それは彼等も気が付いているようで、武器を持って身を翻す彼等の口元には微かな笑みを浮かべている。

そうこうしていると、周囲を敵に囲まれてしまっていた。その全てが例外なく漆黒の武器を手にとってじりじりとエミル達に迫る。しかし、その場にいた誰もが全く物怖じした様子もなく、距離を縮めてくるモンスター達を鋭い目で見据えていた。

つと彼等の前に敵を遮るように立った従者達がそれぞれに自信満々に言い放つ。

「主人を守るのが我々の仕事。その仲間達も同じである……私達の後ろに下がっている」

黒い着物を羽織り須佐之男の名を持つ短髪の黒髪に般若の面を着けた赤い瞳の男が落ち着いた様子で刀を構えた。

「けっ！ 奴は気にいらねえーが。燃えてきたぜ……毎度毎度楽しそうな場所に呼んでくれるじゃねえーかっ!!」

青い着物に身を包む大山津見の名を持つ短髪の青髪に狐の面を着け、左右別々に青と緑のオッドアイをギラつかせている男が腰の刀を乱暴に引き抜く。

「あははっ！ 今回も派手なお祭りになりそうだねえ〜」

黄色い着物を着た月読の名を持つ肩まで伸びた金髪に翁の面を着けた黄色の瞳。そしてその腰には紐の付いた瓢箪をぶら下げていて、その表面には酒の文字が刻まれている。彼の手には金色で煌びやかな宝飾が施された扇が握られていた。

「できれば殿方の前ではしたなく戦いたくはないのですが、この状況では仕方ありませんね……」

羽衣に紅白の着物を身に着け、天照大御神の名を持つ彼女は長い黒髪をなびかせ、横に付けた女の面を投げ捨てる。太陽を模した杖を振り抜きその透き通った茶色い瞳を死霊系モンスターの群れに向ける。

さつきエミルの言葉に反応した男——白い着物で綿津見の名を持つ長い髪を後ろで束ねた白髪为天狗の面を着けた緑色の瞳をしていて薙刀を手にした彼が、その薙刀を一振りして地面に柄の先を突き立てる。

「さてさて、羨のなっていない駄犬共を懲らしめてやりましょうか………一瞬で逝かせてやるそれが俺のせめてもの慈悲だ」

彼が左手で印を結ぶと地面から水が湧き出し、見る見るうちに龍を形どった水柱が複数個、空に向かって立ち上がった。

その龍達を周囲に集めると、彼が目の中のモンスターの軍勢に向けて大きく上げた手を振り下ろす。

彼の意図を汲み取ったように、一斉に敵に向かって襲い掛かる。たちまち巨大な水龍の口に飲み込まれていくモンスターはその体から出られずに溺死し、光に変わると透明な龍の体から光が溢れ出ているかのように美しくその身を飾る。

彼に負けじと須佐之男は持っていた刀を振り抜くと、その刃が一瞬

で伸びて敵を薙ぎ払い多くのモンスターの胴体が一瞬で真っ二つに斬り伏せる。

それを見ていた大山津見はうずうずして抑えが効かなくなったように、印を結ぶと木の根が蛇のようにモンスターの体に絡まり動きを止める。

彼は楽しそうに笑い声を上げながらその中に飛び込み、次々と木の根で縛られているモンスターを一方的に斬り裂いて笑いながら殺戮を楽しんでいる。

超攻撃的な彼等とは対照的なのは月詠だ。彼は持っていた扇を勢い良く振ると、地面から舞い上がる黒い砂が混ざり合って黒い風が吹き荒れた。

その黒い砂は一瞬にして吸い込まれるように敵の持つ武器や防具にへばり付き、その装備の重さに耐えられずモンスターは次々と地面に伏せる。その光景を見た彼は満足そうに頷くと、腰に吊した瓢箪を手を持ち口に運ぶ。

そしてこの中では唯一の女性である天照大御神は、手に持って突き出した太陽の形の杖の先から赤黒い炎を放出して、同じく赤黒い炎に身を包まれたモンスターの体を飲み込んでいく。

反撃の奇襲3

いくら彼の従者達が強いとはいえ、物量で遙かに勝るモンスターの
大群を撃破しきるには明らかに手が足りない。

エミル達も素直に下がっているわけにはいかず、直ぐ様モンスター
との戦闘に参加する。

離れないようになるべく固まって攻撃をしていたが、敵の勢いが物
凄く撃破しても撃破しても無限に湧いてくるような錯覚に陥るくら
いだ。

「――敵の勢いが強い！ このままじゃ……イシエー！」

「はー！」

戦闘中だったエミルが叫ぶと、背後で弓を放っているイシエルの後
方へと下がった。

彼女は手に持っていた弓を前に突き出すとエミルと自分を守るよ
うに見えない壁を張る。

その隙にエミルは腰に差していた3つの巻物を地面に広げ笛を吹
く、直後リントヴルムとダイヤモンドドラゴン、ヘルソードが現れる。

それを確認してエミルは再び赤青黄の三色が捻れたように巻き付
き合う笛を吹く。三体のドラゴンが上空に飛び上がり、真珠の様な球
体へとその姿を変えた。数分後、光り輝く球体が半分に割れて中から
ダイヤモンドの装甲に覆われた翼の生えた竜人が姿を現した。月明
かりを浴びて七色に輝くその美しい体は、ドラゴンの神を連想させ
る。手には薙刀の様な武器が握られている。

龍神がその薙刀を振ると刃が逆に折れ曲がり、その刃が黒いオーラ
を纏う大鎌へと変わった。

エミルはそれを見てホツとした様子で息を吐き出すと、すぐに鋭い
眼光をイシエルの張っているバリアが破れるのを待っているモン
スター達へと向ける。

「――イシエー！」

「――分かったわー！」

彼女の掛け声とともにバリアを解くと、その時を待っていたモン
ス

ター達が一斉にエミル達目掛けて走ってくる。

イシエルは上空に高く跳び上がり、持つている弓を地面に向けて構えた。地上に残っているエミルは両手に握り締めた水色の刃を持つ剣を左右に広げて勢い良く回転する。すると、周囲のモンスターを斬り裂き、彼女の周りには氷漬けの肉片と化した残骸と氷の結晶が舞い散る。

直後。回転を止めたエミルは地面を蹴って勢い良く跳び上がり、それを合図に、イシエルが引き絞っていた弦から指を放し光の矢を地面に向けて放つ。

地面に群がっていたモンスターに直撃し、敵を薙ぎ倒して地面に風穴を開けた。だが、イシエルの視線は矢を放った先にはなく、跳び上がったエミルをすでに空中で受け止めていた。

空中でふわふわと浮かぶイシエルはがっしりとエミルを抱えたまま、地面を見つめていた。

それでも地面を覆うほどのモンスターを撃破しきるには、それ相應の能力が必要になるだろう。

地上ではメルディウスや白雪、デュラン達が頑張ってくれている。言い出しっぺのエミルがこの程度では申し訳ない……エミルはイシエルに耳打ちすると、リントヴルムZWEIの方へと向かっていった。

リントヴルムZWEIの肩に乗ったエミルとイシエルは、直ぐ様モンスターを攻撃するようにと命令を出す。

すると、リントヴルムZWEIもその命令に従うように、手に持っていた黒いオーラを纏った大鎌を振り抜く。

敵が数百単位で空を舞って、光となって消えていく――。

「エミル姉達も頑張ってるみたいだね！」

エリエが地上からエミルの出したリントヴルムZWEIの戦いぶりを見て、笑みを浮かべると、神妙な面持ちで赤いレイピアを構え直す。

サーベルタイガーのシャルルに襲われていた彼女だったが、どうかそれからは脱出できた様だ――まあ、結局は言うことを聞かなく

なったシャルルに、ミレイニがかんしゃくを起こしてそっぽを向いたら自然とシャルルが離れただけなのだが……。

「味方のペットに撃破されそうになるってアクシデントはあったけど……彼等に負けてられない！ デイビッド。私達も負けてられないわよー！」

「……いや、お前が動けなかった間は俺が守ってたんだが？」

彼の冷静なツツコミに、エリエは顔を真っ赤に染めながら彼を指差しながら叫んだ。

「——う、うるさい！ 貸しにしといて上げるんだから感謝しなさいよね！ ミレイニ。あんたも勝手に付いてきたんだから、私達の足を引つ張ったら承知しないわよー！」

「一番足を引つ張っているのはエリエだし。自覚がないとか……ぷぷぷ、あたしなら恥ずかしくて死んじゃうしい〜」

「——くうう……私が何も言えないと思つて、戻つたら覚えてなさいよ……」

ここぞとばかりに挑発するミレイニに、怒りを抑えて拳を握り締めると、街に戻つたら必ず仕返ししようと思つて誓いながら敵に向かって突撃していく。

向かってきた死霊系の鎧の兵士をレイピアで突き刺すと、空のはずの鎧の胴体の中を炎が包み鎧の兵士がもがきながら倒れた。

地面に倒れのたうち回る鎧の兵士を見下ろし、レイピアを天に向けて突き上げて言った。

「私のこの武器はトレジャーアイテム『朱雀』四神の塔で確率でゲットできる装備で、周囲に炎を噴射できる。まあ、炎の勢いの扱いが難しいから使うのは大変だけどね……さて、次々いきますかー！」

掲げていたエリエの刃から炎が吹き出し、それを纏つたまま近くの敵に向かつていく。

鎧を付けたスケルトンナイトの前まで移動すると、エリエは手に持っていたレイピアを胸に目掛けて前に突き出す。

すると、炎がレイピアの攻撃範囲を超えた敵まで一緒に貫いて撃破する。モンスターの頭上に表示されたHPバーが尽きるのを確認し

て、エリエはレイピアを引き抜くと次の獲物を求めて走り出した。

その後も次々にモンスターを撃破するが、やはり普段と違って攻撃速度が制限されているせいか、エリエは戦闘をしながらも時折首を傾げている。

まあ、無理もない。攻撃速度特化にしているプレイヤーの殆どは軽装備であり、敏捷性を最大まで引き出している。こういったプレイヤーは皆、基本スキルの選択はスイフトで攻撃速度、移動速度を強化しているものだ——彼等の感覚はパワー系のゴリ押しプレイヤーよりも敏感であり繊細だ。軽い装備を選択していて防御力も低い為、ちよつとしたことでも撃破されかねない。そんな彼等はちよつとした変化にすら神経質になるのは当然と言えた……。

新たな武器に苦戦している様子の彼女のサポートにデイビッドが入る。

「なにをやってるんだエリエ！」

「なについて、頑張ってるでやってるでしょ！ この武器はいつものと勝手が違うのよ！」

エリエはイライラしたように声を上げてデイビッドに言った。彼もそれには少し呆れた様子で頭を傾げている。

そこに青い炎の蠶を持つ炎帝レオネルのアレキサンダーの背中に乗ったミレイニがやってきた。だが、ミレイニは憤るエリエの方を見てニヤリとバカにしたような笑みを浮かべ、そのまま止まることもなく駆け抜けていった。

モンスターの中に飛び込んでいった炎帝レオネルは咆哮を上げると、炎を口から噴射し頭を大きく振ってモンスターの群れを瞬殺していく。

エリエのライバル的な存在のカレンも拳から放たれる電撃で、一心不乱に殺気を放ちながらモンスターを次々に殴り倒している。

その様子を見ていたエリエが怒りを爆発させてモンスターを勢い任せに撃破していく。しかし、先程よりも危なげはなく。逆に今までの悪くしていた彼女の癖が抜けた気がする。

一撃で数体を同時に突き飛ばす炎を宿した刃から放たれる激しい

突きは、今までの彼女の連撃を続ける攻撃スタイルとは正反対だ――

元々、エリエの攻撃方法は攻撃速度を出しやすいように脱力型だった。その為、ストロークが細かくダメージを与える形ではなかった。それが怒りに身を任せることによつて、一撃一撃がしつかりと腕を振り切っているのが功を奏したのだろう。

だが、ミレイニがそんなことを計算していたとは到底思えない。つとなると、ただ単純にエリエをからかったただけなのだろう……。

デイビッドは危なげなくなったエリエの戦いぶりに、安心した様子で刀を振つてその刀身から放たれる赤黒い炎が敵を呑み込んだ。

「――主にこれ以上の負担を掛けることは我輩が許さぬ!!」

エリエ達の戦闘の横で、レイニールも黄金の巨竜の姿で炎を口から噴射しモンスターを次々と業火で消し炭にしている。その戦闘の様子から、レイニールが今回の作戦に全てを懸けていることが窺いしれた……。

反撃の奇襲4

皆がそれぞれに死力を尽くし、赤黒い炎を纏ったモンスター達を撃破していく中、リントヴルムZWEIの肩に乗っていたエミルが遂にルシファアの姿を発見した。

「あんなところに隠していたのね！ ルシファアを撃破すれば、モンスター達の体を纏っている炎も消えるはず！」

大きな森の中に生えている巨大な大樹の中にできた空洞に、小さく羽根を折りたたんで立ち膝を突いた状態でルシファアの巨体が格納されていた。あの巨大な体ではどこにいても丸分かりなのだが、今まで発見されなかった理由がようやく判明した。

エミルはルシファアを撃破するべく足元にまとわり付く雑魚を文字通り一蹴して、翼を広げたリントヴルムZWEIは勢い良く空中に舞い上がった。

しかし、リントヴルムZWEIがいくら近付いても、木の中にいるルシファアには動きがない。それどころか、ルシファアの周囲は不気味なほどの静けさに包まれていた。だが、この状況はエミル達にとっては好都合だ――。

「ルシファアは今では動けないみたいね……今のうちに撃破してしまいましよう！ 罠のことも考えてリントヴルムZWEIとシンクロするわ。イシエ、私の体をお願い！」

「もちろんよ！」

そう言った直後、エミルの体がリントヴルムZWEIと同じ格好になって止まる。

大きな木に斬り掛かるリントヴルムZWEIの持つ黒いオーラで作られた大鎌が、ルシファアの隠れている大木を斬り倒す。その直後、木を破壊した破片が周囲に飛び散る。イシエルは彼女が肩から落ちないように背後から体を支えると、彼女の動きと完全にシンクロするように体を動かす。

大木を斬り倒し背後に大きく倒れたルシファアの胸部には、鋭利な刃物で斬り裂かれた大きな切り傷が刻まれ、怯んだルシファアをエミ

ルとシンクロしているリントヴルムZWEIの持つ漆黒の大鎌の刃が腹部に深々と突き刺さる。

リントヴルムZWEIが大鎌で傷口を抉るように押し込み、身を翻し背後を向いて大鎌を肩に担ぐと、次の瞬間に勢い良く肩に担いでいた大鎌を上に向かって振り抜く。

すると、漆黒のオーラを帯びた刃がルシファアの体を駆け上がるように引き裂き、ルシファアの上半身が半分に斬り裂かれ、だらんと脱力したまま地面に崩れ落ちた。

光の胞子に変わり空に昇るルシファアの体を見て、エミルは自分の体に意識を戻す。その光景にイシエルは歓喜しそれとは対称的にエミルは不信感を覚えていた。いくら隙を突いたとは言え、さすがにこれでは今まで散々苦しめられたルシファアの最後にしては呆気なさ過ぎる……。

だが、その後はルシファアを撃破した影響か、赤黒い炎の消えたモンスターの動きがあらゆるさまに鈍り、仲間達が弱体化したモンスターを全て駆逐してこの戦闘は終わった。

しかし、エミル達の本来の目的であった狼の覆面を被った男の姿は確認できず。エミル達は少しがっかりしながらも、モンスターの大群を駆逐したことで妥協し拠点である千代のギルドホールへと戻っていった。

だが、エミルだけはその呆気なさ過ぎる戦闘の終結に訝しげな表情を崩さず、その心の中では不信感と不安が渦巻いていた。

そのエミルの考えは気のせいではなく、実際にエミル達の戦闘が終結する前に起きたある出来事が関係していたのだ……。

* * *

この話はエミル達とモンスターの群団が戦闘をする少し前まで遡る……。

エミルとレイニールが星の部屋を離れてしばらく経ってからのことだ——気を失っていた星がベッドで目を覚ます。

「——またやっちゃった……もう倒れないつもりだったのにな……」
ベッドから降りた星は部屋の窓から見える夜空を見上げ、そこに散りばめられた星を自分と重ねているようだった。

夜空に煌めく星はまるで自分のようだ。星が光り輝けるのは朝になれば、その存在が確認できないほど小さく薄くなってしまう……。

湖畔でたまたま拾ったエクスカリバーのおかげで戦闘では活躍できるようにはなったが。その使い方は手探り状態なのが現状で、まだまだ謎が多く自分では扱いきれる代物ではないことは星本人が一番分かっている。

しかし、この武器を手放せば自分の存在意味自体が分からなくなってしまう……夜空に浮かぶ星々も、大きな月という発光体があるからこそ映えるが単体では小さく地上を照らすほどの力はない。それが今の自分とぴつたりと合っていると感じた。

エクスカリバーが月ならば、周りに散らばる星々のどれかが自分自身だ——地上にいる人間が千代の街の人々ならば、必要とされているのは月であるエクスカリバーだけでありそれを使用する人間は誰でもいいのだ。

ただ、それが星であるというだけで、小さく弱い星でしかない自分よりも強く輝いている他の星々にエクスカリバーを預ければ、その力を最大限まで使えてもっと大勢の人を助けることができる。それは分かっているが、この武器を失ってしまうえば星の存在意義がなくなってしまう……。

せつかく手に入れた力を手放したくないというのが『自己顕示欲』の表れであることに気が付き、夜空を見上げている星は表情を曇らせた。

今まで誰よりも自分を下だと思ってきた星にとって、そんな考えが出たことに衝撃を受けていた。前の自分なら何も迷うことなく強い武器を他の者に譲っていただろう……しかし、今はせつかく手に入れた力を他の者に渡したくない。

この世界に来て明らかに星の心境に変化が現れている。認められたいという欲求、そして責任感という大事なもの……たとえそれに責

任が伴うとしても、それすら背負う覚悟と決心が付いたということなのかもしれない。

だが、星のそんな心境の変化に不安を感じているのか彼女の美しい紫色の瞳は潤み、その瞳に映る月が細かく揺れていた。

すると、夜空を見ていた星の視線に新着のメッセージが表示された。その送り主の名前を見て星は眉間にシワを寄せる。

何故なら、表示されている名前は『君のアダムより』だったからだ——こんなことをする人物に、星は一人しか心当たりがない。

視界に表示されている部分を震える指でそつと押すと、そのメッセージの内容が視界に表示される。

『やあいヴ。元気にしているかい？ 僕のゲームは楽しんでくれているかい？ まあ、今日連絡したのは別件だよ——君の仲間達が、今僕の近くに来ていて困っているんだ。君の返答次第では彼女達の運命は大きく変わる。そして街の雑魚プレイヤー達の人生もね……』

嘘かもしれないと思いながら、星は返信という場所を押してゆつくりと指を動かして文字を入力していく。

『……どういうことですか？』

数分もしない間に、すぐにそのメッセージに相手が返信を返してくる。

『君はもう分かっているはずだよイヴ？ 僕の側に君がきてくれるなら、もう君の仲間も、街にいる者達にもこれ以上の手を加えることを止めよう。選択するのは君自身だ……まずは君の返事を聞かせてくれ、そして君の仲間達に手を出さないと約束しよう。その後君のマップにマーカーを表示する。その場所に僕は居る。ここに明日の夜、君一人で来たまえ。待っているよ、僕の愛しいイヴ……』

唇を噛み締めた星は険しい表情のまま考える素振りを見せて、時折指を止めながらゆつくりと噛み締めるように涙で揺らぐメッセージに文字を打ち込んだ……。

『分かりました。皆が無事に帰ってきたら、私はあなたの所に行きます』

星は指を止め夜空を見上げると、涙で潤む瞳で「仕方ないよね……」

と小さな声で呟いた。

かけがえのない思い出

翌日、星が目を覚ますとそこにはエミルとレイニールの姿があった。

晴れ晴れとした彼女達の笑顔を見て、星も微笑みを返すとゆつくりとベッドから体を起こす。

レイニールとエミルの表情を見ていれば、何をしてきたのか大体的見当が付く。どうやら、昨晩の覆面の男からのメッセージに間違いはないようだが——だが、それはもう一つの彼との約束を星が守らなければならぬといけぬということだ。

(……そうか、今日で最後なんだよね……)

察しのいいエミル達に気付かれないように平静を装ってはいたが、その心の中は大きく揺らいでいた。

もちろん。彼との約束を無下にしようとは思ってはいるが、今日の夜には彼の指定した場所にいかなければならぬ。星のその視界には、しっかりとその場所が赤いマーカーで示されていた。

本当なら、すぐにその場所に来るように言うはずだ。しかし、覆面の男はこの一日という時間をくれた。

だが、それは優しさなどではない。その目的は恩情を掛けることで、星に恩を着せ後々の関係性で、主導権を握る為の思惑でやっていることなのは明白だ——それは今までの戦いで、相手よりも先手を取ることによってこだわっていた人物だからこそくる小学生如きに、大人の自分が思考力で負けることはありえるはずがないという余裕なのだろう。

だとしても、この時間は星にとってはラッキーなのは言うまでもない。何故なら、この時間が星がエミル達と居られる最後の時間になるのだから……。

星はいつものようにタイミングを見計らうことなく、エミルの顔を見上げながら告げた。

「エミルさん。今日はどこかにお出かけしませんか？」

「……星ちゃん」

真つ直ぐな瞳でにっこりと微笑む星に、エミルも微笑み返すとゆつくりと頷く。レイニールが星の頭に乗し、嬉しそうに笑うと星も笑顔で返した。

星の手を引いて「きつそく行きましようか」と告げたエミルに、星は首を横に振った。

「——できたら、みんなで行きたいです」

こんなことを星が口にするのは珍しい。だが、エミルは珍しく自分の意見を口にした星に満足そうに言葉を返した。

「そうね！　せつかくだし、みんなも誘って全員で行きましようか！」「主がそんなことを口にするのは珍しいのじゃ、どんな心境の変化か分からないが良い傾向じゃ！」

エミルの言葉の直後に、頭の上で大きく身を乗り出したレイニールの顔が逆さまに視界に入ってきた。

直後。再びエミルに手を引かれて星の体が前に大きく動く、それに驚き転げ落ちたレイニールは翼を広げて空中で一回転すると慌てて星達の後を追いかけてくる。

部屋を出たエミル達が一番に向かったのは、別の部屋で眠っていたイシエルのところだった。

エミルが彼女の泊まる部屋のドアをノックする。しかし、部屋の中からの返事はなく、その後何度かドアをノックしたものの、部屋の中から返答が返ってくることはなかった。

そつと部屋のドアを開けて中を覗くと、ベッドの上には下半身だけ黒い下着を身に付けたまま倒れるように眠っているイシエルの姿があった。

まあ、当然と言えば当然だろう。エミル達が戦闘から帰ってきたのは早朝であり、まだ数時間も経っていない。おそらく彼女は、シャワーを浴びてすぐ強烈な睡魔に襲われて倒れるように寝てしまったのだろう。

次に向かったのはエリエとデイビッドそしてミレイニが泊まっている部屋だった。

部屋の前まで来ると、中からエリエとミレイニの言い争う声が聞こ

えてきた。それを聞いて額に手を当てエミルがそつとドアを開けると、目の前には小虎が立っていた。

エミルは鎧を着た小虎の肩を軽く叩くと、振り向いた彼に尋ねた。「小虎くん。なにがあったの？」

デイビッドが止めるのも聞かずに、テーブルを境に唾み合うエリエとミレイニに視線を向け、彼女達に聞こえないくらいの声で聞いた。すると、同じく小声ですぐに小虎がその理由を教えてくれる。

「じつは、互いに今回はどっちが手柄を立てたかで言い争いになつて……まあ、僕は行けなかつたんですけどね」

戦闘に参加できなかったことを気にしているのか、どんよりと肩を落とす小虎を励ますようにエミルが言葉を返す。

「気にする必要はないわ。あれは私の勝手でやったことだし、メルデイウスさんと白雪さんはそれに協力してくれただけなのだから。それに、街を守るのも大事な仕事よ。気にすることないわよ」

「……ありがとうございます。エミルさん」
その時、エリエと唾み合っていたミレイニが衝撃の一言を言い放つ。

「なら、どっちが早く狼の覆面男を捕まえられるか勝負するしー！」
『——ッ!?!』

彼女の言い放ったその言葉に、その場にいた全員が顔を青ざめる。まあ、無理もない。エミル達が探している時も、手を抜いていたというわけではない。どんなに探しても、その場にいた彼の痕跡すら発見することはできなかったのだ……。

確かに、夜ではなく日のあるうちに探せば何らかの手掛かりは見つかるとは思えない。だが、それ以上に危険なのが、今まで決してモンスターとの群団を切らせることがなかった彼がそれを手放したということだろう。

今の彼に接触するのは、本来は慎重にするべきな問題であり——ミレイニの言うように宝探しみたいな軽い感覚でやるようなことではない。

つとその場にいた者達が時間が止まったように、全員ポカンとしな

がらあんぐりと口を開けていると、ミレイニが廊下に出てシャルルの背中に乗っていた。

同じく廊下にいた星はその様子を小首を傾げ、不思議そうに見守っている。

直後。ミレイニが部屋の中のエリエに向かって、堂々と胸を張ったままビシツと指を差して言い放つ。

「あたしとエリエ。どっちが先にあの狼覆面男を見つけられるか勝負だし！ 勝った方が今回の戦闘のBBQだし!!」

そう言い放ったミレイニが我先にと、廊下を滑走するように勢い良く走るシャルルの背中に揺られ、見る見るうちに小さくなっていく。

あつという間にエレベーターの中に駆け込んだミレイニの姿に、全く状況が読み込めていない星は眉をひそめながら更に大きく首を傾げている。

部屋にいたデイビッドは素早く廊下を指差すと、小虎に向かって大きく叫ぶ。

「小虎君！ あの子を追いかけて！ あの子一人で行かせたら何が起こるか分からない。彼女のサポートを！」

「は、はいー」

慌てて頷いた小虎は急いで廊下に飛び出すと、廊下のカーペットで滑ってバランスを崩すのも気にせずエレベーターの方へと一目散に駆け出していった。

ひとまず彼がミレイニを追いかけたのを見送ってほっとした様子で大きく息を吐いたデイビッドが、エリエの方を向くと彼女は拳を握り締めて小刻みに震えていた。

見かねたデイビッドが声を掛けようとした時、彼女が突然頭上を見て叫んだ。

「——BBQってなによ！ それを言うならMVPでしょ！ 行くわよデイビッド。あの子よりも先に覆面の男を取っ捕まえるんだから!!」

「えっ!? 結局争うのか!?!」

「当たり前でしょ！ 私は負けるのが嫌いなものよ!!」

デイビッドの手を掴んで強引に部屋の中を飛び出して行った。エミルもそんな彼等を追おうとすると、それを止めるようにぐつと腕を引かれた。

エミルがその方向を見ると、星が両手で必死にエミルの腕を引つ張って制止していた。

驚いた様子のエミルと目が合った星は自分がエミルの腕を引いていることに気が付いて、慌てて手を放した。後ずさり俯き加減になった星は、エミルに怒られると思っっているのか肩を落としていてその表情は暗い。

無意識の行動だったとはいえ、仲間が危険な目にあうかもしれないという状況では適切ではなかった。だが、星もこの機会を逃せば次があるのかも分からない状況にあるのは事実。

まあ、だとしても『一人で来い』と言われてる以上、それを口にするわけにいけない。そうなれば、さっきの彼女の行動が適切ではないという方が強いだろう。エミルに怒られるだけならいいが、嫌われても仕方のない行為だったかもしれない。傍から見れば、遊びたいというわがままを優先したようにしか映らないだろう……。

エミルの顔を見れない星は、衝撃に備えているように俯きながら強く目を瞑っていた。

すると、星の頬をエミルの手がそつと撫でる。星は目を開けると、驚いた様子で彼女の顔を真っ直ぐに見つめ言った。

「……怒らないんですか？」

少し震えるような星のその問いに、エミルは首を横に振って答える。

「怒るわけないでしょ？ 星ちゃんは遊びに行きたいんだから、あそこは私を止めるのが当たり前なのよ？」

「……でも」

再び俯いて黙り込んでしまう星に、エミルはため息をついて星の肩を掴んで視線を合わせるように膝を折った。

「——子供なんだから大人ぶらない！ 楽しい方を優先したいってい

うのは普通の事なんだから……それに私は、星ちゃんが子供らしくわがママを言ってくれたのが嬉しいのよ？ やつと私に甘えてくれるようになったんだなって、可愛いなあ〜とは思っても嫌いになる理由にはならないわ」

「……………ッ!!」

その彼女の言葉を聞いて、星は顔を赤く染めるとどうしたらいいのかわからずに俯き加減に視線を逸らす。

そんな星の手を引くと、エミルがゆつくりと歩き出す。それを見て、今まで様子を窺っていたレイニールもその後を付いていく。

なおも不安そうな星の表情を察して、エミルが徐に呟く。

「——デイビッドも小虎くんも居るし問題はないとは思うけど、一応紅蓮さんにも相談しておきましょうか！」

「はー！」

エミルのその言葉に大きく頷いた星の明るい表情を見て、ホツと息を吐くとエレベーターに乗り込み、エミル達は紅蓮達のいる最上階へと向かう。

かけがえのない思い出2

紅蓮の部屋をノックするとゆっくりとドアが開き、中から紺色の着物を着た白雪が彼女達を出迎えた。

奥のテーブルでは紅蓮やメルディウス。剛が席に着いて落ち着いた様子でお茶をすすっているのが見えた。

白雪がドアの横に避けてエミル達を部屋の中へと招き入れようとしたのだが、エミルは首を横に振ってそれを拒むと部屋の中にいる紅蓮を呼んだ。

持っていた湯呑を置いて椅子から立ち上がった彼女は、エミルの方へと向かって歩いてくる。

「何かありましたか？」

目の前まで来て顔を見上げる紅蓮に、エミルが申し訳なきように告げた。

「実は、うちの仲間が覆面の男を探しに出てしまって、それを止めようと小虎くんも追いかけて行ってしまったんです……」

「そうですか、なるほど……」

その話を聞いた紅蓮は考えるように顎の下に指を当てると、振り返ってお茶を飲んでいるメルディウスを呼び付ける。

「——ギルドマスター様の出番ですよ！」

それを聞きビクツと体を震わせた彼は、嫌そうな顔をしながら紅蓮の方へと向かってくる。

「なんだよ。その呼び方する時はろくな案件じゃないんだよなあー」
頭を掻いてそう言った彼に、エミルがもう一度事の次第を詳しく話す。

すると、彼は面倒くさそうな顔をしながら鼻の頭を掻いて口を開く。

「ってか、それは今朝やってダメだっただろ？ 探すって言ってもあてはあるのかよ……」

「いや、それは……」

口を詰まらせたエミルを見かねた紅蓮が二人の間に口を挟んでき

た。

「あてとかではなく、彼女は仲間達が心配だから私達に声を掛けたのですよ……いいでしょう、私も行きましよう。悪いですが白雪も協力して下さい」

「たく、面倒だなあ。ついさつき帰ってきたばっかりなのによ」

紅蓮が白雪の顔を見て言うと、彼女もすぐに頷き返す。それを見て嫌々ながらも、メルディウスもそれに賛同する。

紅蓮は剛にこの場に残ってくれるように言って、部屋を出ていこうとしている時に、エミル達がカレンの所にいくという話をしているのを聞いて、エミルに「彼女ならここに来てから、ずっと毎日道場に通ってますよ」と教えてくれた。

彼女に言われた通り、カレンのいるというギルドホールから少し離れた場所にある道場にエミル達は訪れた。しかし、道場のドアを叩いても返事はなく、中に入ったのだが中には誰もいなかった。

道場の中に用意されている更衣室なども探したのだが、彼女の姿はどこにもない。

星とレイニールが顔を合わせて首を傾げている中、エミルは訝しげな顔で辺りをくまなく見渡している。

だが、カレンが隠れている様子もなく。彼女の性格を考えれば、隠れて人を驚かすようなことはしない。

彼女が居ないということは、間違いなく出掛けているということだ。まあ、どこにいるかは分からないが……。

エミルは一通り周囲を確認すると、がっかりしたように大きなため息を漏らした。そして星の方を向くと。

「星ちゃん。他の人は来ないけど、私だけでもいい？」

そう。エミルは星の言った『みんなだ』と言ったことを覚えていたのだ。彼女がカレンの姿を必死に探していたのは、そういう理由があったのだ。

落ち込んだ様子のエミルに向かって、星がにっこりと微笑んで。

「——いいんです。エミルさんと二人きりの方が私も気が楽ですし……」

「あはは、そうね……」

そう言われ苦笑いを浮かべて相槌を打つ。そこに、レイニールが怒った様子で星の前に飛んできた。

「我輩もいるから二人きりではないぞ！　ちゃんと我輩も数に入れるのじゃー！」

怒っているレイニールに「ごめんね」と告げると、レイニールは満足したように頷いて、星の頭の上に乗った。

道場を離れ街に出ると、心なしか通り過ぎるプレイヤー達が星とエミルのことを見ている気がする。

それが気になっていいのか、落ち着かない様子そわそわしながら、隣を歩くエミルの顔を見上げると、彼女はその視線に慣れているかのように全く気にもとめていない。

すると、星の視線に気が付いたエミルが話しかけてくる。

「どうしたの？」

首を傾げながらそう尋ねたエミルに、星は周囲のプレイヤーの視線を気にしながら言った。

「……なんか、みんなに見られている気がします」

「それは当然よ！　なんて言ったって、あの『剣聖』だもんね。街のみんなも貴女には感謝してるのよ。それに、私もそうだったけどすぐに慣れるわ……」

「……慣れるかな？」

星は苦笑いを浮かべそういうと「きつとね！」とエミルがにっこりと笑う。

特にあてもなく昔の江戸の様な町並み続く千代の街の繁華街を歩いていると、エミルがある建物の近くで止まる。

そこには長屋の様に細長い日本伝統の瓦屋根の店があり、その軒先の木看板には大きな文字で『呉服』と書かれていた。

その店先で止まったエミルが突然星の方を振り向くと、その両肩を掴んで興奮気味に星に尋ねる。

「せっかくだし。今日は着物で動き回りましょうよ！」

「……えっ？　別に私は——」

「——それじゃ！ さっそく中に入りましょうか！」

エミルは星の意見など聞く気もなく彼女の言葉を遮って、その手を引いてお店の中へと強引に入っていく。中に入ると様々な着物が並んでいて、女性客も多くとても煌びやかな空間になっていた。

エミルと星が店に入ると、店主だろう——中肉中背の和服姿の男性が手を擦り合わせながら低姿勢で近付いてくる。

「お嬢様方、何かお着物をお探ですか？」

咄嗟に星がエミルの背中に隠れると、エミルはそんな星の後ろに回るとその背中を押して前に出した。

驚きながら後ろにいるエミルの顔を見た星に、彼女はウィンクして微笑んでいる。

店主の男は星の長い黒髪を見て、難しそうな顔をしながら考え込んだ。

「元々いい素材ですから、逆に悩みますね……純粹に黒で合わせてもいいですし。非対称の白もいいですね。いや、鮮やかな黄色やピンクなどの蛍光色系も黒髪が引き立っていいですねえ………実に悩ましい！」

「分かる！ 分かるわその気持ち！」

何故かエミルが店主の言葉に共鳴したように突然声を上げた。彼女は店主の手を取ると、同士を見つけたようなキラキラとした瞳で店主に迫る。

共感し合う二人に嫌な予感がしながら、後ろを向いてこっそりとの場を離れようとした直後、エミルの手がガシツと星の肩を掴む。

「どこに行くのかなあ？ それじゃー、私はこの子の着替えを手伝うんで店主さんのおすすめをじゃんじゃん持ってきて下さい！」

恐る恐る振り向いた星にっこりと微笑むと、その背中を押して試着室へと入っていった。

更衣室に入ると、店主が仕切りの隙間から着物を次々に入れてくる。エミルはそれを確認して星の方を向いて星の着ている服を脱がせると、手際良く着物を着せていく。

だが、どうしてエミルが難しいと言われている着物の着付けられる

のか、星は不思議に思ったのか上機嫌のエミルにその理由を聞いてみる。

「前にテレビで着物を着るのは難しいって聞きました……どうしてエミルさんは着物の着かたを知ってるんですか？」

「そうねえ……まあ、現実世界で着物を着る機会が多かったからね。それより、できたわよ！」

それを聞いて現実世界で着物を着る機会がどれほどあるのかと首を傾げている星の腰に巻いた帯を、立ち上がったエミルがポンと叩く。

星の着ている黒い着物を見て黄色い悲鳴を上げているエミルを他所に、鏡に映し出された自分の姿を見て驚く。

黒い生地にピンク色の蓮の花の刺繍が施され、帯も淡いピンク色に桃の花が散りばめられている。長く黒い髪が光に照らされキラキラと光を反射し、驚いた様子で大きく開いた紫色の瞳がキラキラと輝いている。鏡に映るその少女を自分だと認識するまでに、少し時間が掛かった。

星が鏡に映った自分の姿に見入っていると、後ろから肩に手を置いて耳元でエミルがささやく。

「——どう？ 綺麗でしょ。これが貴女なのよ？ 星ちゃんは可愛いんだから、可愛い格好しないともったいないわ」

「……でも。この着物がいいだけで、私がいいわけじゃ……多分私よりエミルさんの方が似合うと思いますよ？」

後ろに立っているエミルの顔を見て星がそう言うと、彼女は困り顔でいると、更衣室の棚の上でその光景を見ていたレイニールが飛んできて星の頭に乗った。

「主は普通に顔がいいぞ。もっと自分に自信を持った方が良いのじゃ！」

「そう……なのかな？」

レイニールの言葉を聞いても信じられないのか、星は鏡に映る自分の姿をじつと見つめていた。

かけがえのない思い出3

どこか悲しそうにも見える星の横顔を見ていたエミルが、星の体をそつと自分の方へと抱き寄せて耳元で優しくささやく。

「——鏡に映る自分と、イメージの自分が違うから戸惑っているんでしょう？ でも、どんなに見ても鏡は本当の姿しか映さないのよ？ 私が見ても、鏡に映っている着物姿の女の子は綺麗なもの……今までは分からないけど、貴女もこれから変わればいいと思う。綺麗な着物も可愛い服も着られる為にあるんだし。それに女の子はそういう服を着た時に、心も成長するものなんだから……」

「心も成長する……」

エミルの言葉に、星は胸の前で手をギュツと握り締めた。

つとエミルの瞳が眼光を放ったかと瞬間。星の後ろから帯の結び目を解いて、腰に巻かれていた帯を勢い良く引っ張った。

突然の彼女の不意打ちに、何の抵抗もできずにくるくると回った星は目を回してペタンと地べたに座り込む。

くらくらする頭でエミルを見ると、彼女が手をわきわきさせながら迫ってくる。

「うふふふつ……さあ、まだ着物はたくさんあるんだから、次々に試着してみましよう。私が星ちゃんの着替えと成長を手伝ってあげるからー！」

「いやあ……エミルさん。さっきの言葉が台無しですよー!!」

目の色を変えて先程までの彼女とは比べられないほど強引に星の着物を脱がせると、足元に山積みになされている色取り取りの着物を着せていく。

結局この店で数時間悩み抜いた末に、エミルが選んだのは……。

「すごく似合っているわよ。星ちゃんー！」

「……………」

顔を真っ赤に染めて俯いている星が着ているのは、薄いピンクの布地に桜の花が散りばめられ、帯も濃いピンク色で桜の花が散りばめられているものがチョイスされている。

落ち着かない様子でもじもじしている星の隣で、エミルは黄色い悲鳴を上げている。

「可愛いわく。やっぱり、黒髪に合う黒より、黒髪を引き立てる白よりピンクの方を合うと思っただけど正解ね！」

興奮気味に語っているエミルも水色の着物を着ている。だが、朝だったはずの太陽はもう真上まで上っていた。

着慣れない何着もの着物を試着する開放感から気が緩んだのか、星のお腹がぐうぐうとなった。

顔を赤らめていた星の顔が更に真っ赤に染まる。その音を聞いたエミルはくすくすと笑って、恥ずかしそうにお腹を押さえている星の手を引いた。

「今朝から何も食べてないんだから当然よね。何か食べに行きましょう」

「はい」

星が頷くとエミルは手を引いて歩き始めた。

千代の街は始まりの街と違って、和食が中心の食事処が多い。

理由としては街の景観を損ねるといふものである。だが、現在は防衛の為とはいえ、多くの巨大な杭に仕切られている街に景観を損ねるものにもあつたものではない。

エミルと歩いていると食事処『魚丸』と書かれ、正面の玄関一面に生きた魚が泳ぐ水槽が置かれた建物が表れた。

壁一面に広がる大きな水槽の中には、数々の種類の魚が泳いでいる。タイにヒラメ、ブリ、サケ、マグロ。アユにイワナ、うなぎなど……つとここまでくれば、誰でもおや?と思うだろう。この水槽の中を泳ぐ魚達は淡水、海水関係なく元気に泳いでいるが、その全てが種類に関係なくホログラムということだ――。

水属性のモンスターが大量に生息する水の中。何より、このゲームの世界に現実に存在する魚を共に泳がせるわけにもいかない。それこそゲームをしているという実感が湧かなくなり、その世界にあつた景観を損ねるといふものだろう。

エミル達が入るとカウンター席と、テーブル席があり、どの席

も人でごった返し、多くの客で賑わっている。テーブル席はおろか、カウンター席ですら空いていない為、仕方なく店を後にしようとしたその時、店主が呼び止める声が聞こえた。

「ちよつと待つて下さい！　もしかして剣聖様じゃないですか？」

「……ええ、確かにそう呼ばれてますけど」

口籠もる星に変わってエミルが答えた。

その声に反応したのか、食事をしていた客の視線が一斉に入り口に立っていた星へと向けられている。

すると、1組の客がまだ食事の途中だというのに、徐に帰り支度を整えて席を立つ。

「店主勘定だ！　剣聖様がきたのに、待たせるわけにはいかないからな。俺達がこうして飯が食えるのも、あんた達のおかげだからな！　俺達の席を使ってくれ！」

すると、その横の席の者達も立ち上がり手を挙げて次々とその場を離れていく。会計を終わらせ、店を出て行く時に星達に頭を下げていく。

結局。数分の間に満員状態だった店内は閑古鳥が鳴くほどに静まり返ってしまった。こうなると、さすがに帰るといふ選択肢は取れない。

とりあえず席に着くと、メニュー表を広げる。メニューはやはり和食しかなく、かっぱ巻きからうな重まで様々な値段のメニューがある。

なにを頼むかを悩んでいると、店主がある提案をしてきた。

「まだメニューがお決まりでないのなら、私の店おすすめの海鮮丼はどうですか？　もちろん。料金はサービスさせてもらいます！」

その店主の提案に星とエミルが困り顔で迷っていると、レイニールが話に割り込んできて。

「うむ。持つて来るが良いー！」

つと勝手に返事をする、店主は頷いて嬉しそうに厨房の方へと歩いていった。

星はレイニールの体を掴んで、自分の顔の前に連れてくるとむつと

した表情で見た。

「なにをそんなに怒っているのじゃ？ 人の好意は素直に受けるものなのだ」

首を傾げ不思議そうに星の顔を見ているレイニール。

その顔に星は大きなため息を漏らしてエミルの方を見ると、エミルも苦笑いを浮かべた。

すると、そこに店主とNPCの店員が海鮮丼を持ってやってきた。木の桶に入れられた山盛りの海鮮丼に、エミルも星も度肝を抜かれている中、レイニールだけは喜んで両手で握っているスプーンとフォークで次々に口の中へと収めていく。

予想していた以上に物凄い量に、星は申し訳なくなったのか店主に向かつて口を開く。

「あの……こんなにたくさん。タダで貰うわけには……おいくらですか？」

「い、いえー！ お代を頂くわけにはいきません！ これは我々からの感謝の気持ちなのです！ 本来ならば、こちらがお金をお支払いしなければいけない立場なのですから！」

「……どうしてそこまで？ 確かにこの子は剣聖と呼ばれて慕われているのは知ってるけど、こんなことをされても困惑するだけです。まさか下心があつてとは思わないけど……」

口下手な星が変わって、エミルが訝しげな瞳で店主の男に尋ねる。

店の店主は「下心などんでもない！」と否定すると、表情を曇らせ大きなため息を漏らし、その重い口を開いた。

「……私は元々商売をするつもりでこのゲームを始めました。でも、ふとした思いつきからフィールドに出て戦ったことがありますけど、とてもじゃないけどレベルを上げるなんてできませんでした。それなのに、その歳で迷いなく敵の軍勢に向かつて走って行く姿を見て感化されない者はこの街にはいませんよ」

店主のその瞳は嘘を言っているようには感じない。それを察したのか、エミルも深く頷いて海鮮丼の方を向いた。

「せっかくの厚意ですもの、頂かないとバチが当たるわ」

「……はい」

少し遅れて返事をした星は、目の前に置かれている海鮮丼に目をやった。

木の桶には確かにマグロにサーモン、タイ、エビ、ホタテ、ウニ、ブリなどの上にイクラが山ほど乗せられていて、その全てが宝石の様に光り輝いている。

物凄い勢いでバクバクと食べ進めるレイニールを横目で見て、星も箸でサーモンを一切れ持ち上げる。良く見ると、照りのある切り身の表面に浮いているタレと脂が浮き出て、今にも箸から滑り落ちてしまいそうだ――。

生唾を呑み込んでゆっくりと口の中に含むと、口の中いっぱい旨味が広がる。

濃くのあるタレと脂が絡み合って、だがしつこくない。身もプリプリとして弾力があり、噛み締めるほどに中から旨味が溢れ出す

感じだ。

今までにこれほど美味しいお刺身を、星は食べたことがない。

これほどの味を、容易に再現してしまう味覚を感じるシステムも凄いのだろう。まあ、これもこのゲームがヒットした理由のひとつだ。

無言のまま黙々と食べ進め、一人では食べきれないと思っていた木の桶いっぱい盛りに盛り付けられていた海鮮丼をぺろりと平らげたまった……。

かけがえのない思い出4

前を見るとエミルが食後のお茶をすすっている。さらに横を見ると、レイニールがまだ海鮮丼を食べていた。だが、食いしん坊のレイニールがゆっくり味わって食べるわけがない。星がテーブルを見渡すと空になった木の桶がすでに二つ重ねられている。

自分の空の木の桶とエミルが食べ終えた数を含めテーブルには五つの容器が置かれていた。

遠慮を知らないレイニールに呆れ、大きなため息をつくとき、エミルが星の方を向いて微笑む。

「夢中で食べてたけど、美味しかった？」

「……はい」

恥ずかしくなって顔を赤らめて俯く星に、エミルは「それは良かった」とにっこりと笑う。

レイニールが食べ終えるのを待って、店を出た。満足そうに頭を下げる店主に「うむ。これからも励むと良い」と何故か上から目線で告げるレイニールに苦笑いを浮かべつつ店主にお礼を言って……。

外に出ると辺りは日が落ち始め、薄っすらとしたあかね色に色づいている。

エミルと星は手を繋いで夕焼けで赤く染まった繁華街を歩いていると、エミルがある店の前で止まって徐に店の中へと入った。

その店の中には様々なアクセサリーが並んでいて、その全てが江戸情緒あふれる和風な作りのものだ——ピアスや髪飾り、ネックレスや巾着袋なんかも置かれている。

中へ入ってしまったエミルの後を追いかけて入った星がエミルの隣にいくと、エミルは星の頭を撫で、その後髪に何かを付ける。

星が頭を触ると、何かチクチクしている物が付いていて不思議そうに首を傾げた。それを見てくすすと笑うとき、エミルが手鏡を取り出して星の方へ向けた。

向けられた鏡を見ると、そこには髪に付けられた桜の花びらを模した髪飾りが付けられている。

星がエミルの顔を見上げると、エミルはにっこりと笑った。

「着物を着てると、どうしても頭の方が寂しいからね」

そう告げると、エミルは店主の方へと走っていった。

その後、星は店頭に並んでいる商品を見渡し、近くを飛んでいたレイニールを小さな声で呼んだ。

レイニールは星の顔を近くにパタパタと舞い降りると、こそこそと小さな声でレイニールに何かを頼む。

それを聞いたレイニールは自信満々に胸を叩くと「我輩に任せておくのじゃ!」と頷き、大声で笑い声を上げた。

星とエミルは先に店を出ると、エミルがレイニールがいないことに気が付き辺りを見渡す。

「あら? レイちゃんがないいわねえ。どこに行ったのかしら?」

「……さ、さあ、トイレじゃないですか?」

落ち着きなく明らかに挙動不審な星の姿に、訝しげに彼女を見たエミルはぐつと顔を近づけてきた。

「怪しいわねえ……星ちゃん何か私に隠してるでしょ? 言つてごらんなさい。怒らないから……」

「フルフル」

「……ふーん」

必死に首を振って否定する星を見ている訝しげな顔をしているエミルの眉が更に大きく動く。

顔がくつつきそうなほど近くで、心の中を見透かす様な彼女のその青い瞳に、星の動揺で震える紫色の瞳がスツと視線を逸らした。

「どうして目を逸らすのかな? ……それとも、やっぱり何かやましい事でもあるの?」

それを聞いて、慌てながらも素直に視線を戻した星の冷や汗を流して小刻みに震える姿に、エミルはクスツと笑みを浮かべて顔を離す。

不敵な笑みを浮かべた彼女は、警戒するように細かく視線を変えながら周囲を見て言った。

「——まあいいわ、どうせ隠れているレイちゃんが私を驚かす作戦なんでしょ? でも、そう簡単にはいかないわよ」

その表情から、どうやら彼女はこれが星の仕掛けたいたずらか何かだと思っているようだ。

つとその時、レイニールの声が辺りに響いた。

「お〜い！ 主、買ってきたぞ〜！」

空中をフワフワと上下に揺れながら紙袋を持って戻ってきたレイニールの姿を見て、エミルは拍子抜けした様子で見ていた。

星は目の前にきたレイニールから紙袋を受け取った。

「なんだ。買いたい物があるなら、言ってくれば買ってあげたのに」
「——これは自分のお金で買わないと意味がないから……」

レイニールから受け取った紙袋を抱きながら、エミルの前までいくと緊張した様子で胸に抱いていた紙袋を差し出す。

不思議そう。というよりも、驚いた様子で紙袋を差し出した星のことを見ていたエミルは時間が止まった様に微動だにせずに固まってしまっている。

「エミルさん。これを受け取ってもらえますか？ あの……嫌なら、別に…………」

「……いいえ、頂くわ」

悲しそうな顔で突き出している手をゆっくりと下げようとする星の手をエミルは慌てて止めると、彼女の顔を真っ直ぐに見つめて紙袋を受け取った。

その受け取った紙袋を抱き締め、エミルは「開けていい？」と聞くと、星は嬉しそうに頷いた。

紙袋を開けたエミルは中に入っていた物を見て驚き、その大きく開いた瞳から無意識に涙が流れる。

だがそれも仕方がない。紙袋の中に入っていたのは、紫陽花の髪飾りだった……それはエミルが亡くなった妹に最後に病室に飾った花が紫陽花だったからだ——。

急に泣き出したエミルに、星が不安そうな顔をしながら声を掛ける。

「……嫌でしたか？ 違うのがいいなら、今から交換しに——」

「——いいのよ。これは嬉し涙だから……」

動揺していた星にエミルが首を横に振ると、紙袋から髪飾りを取り出して星と同じ場所に付けて尋ねる。

「どうかしら、似合ってる?」

「はい!・とつても!」

紫陽花の髪飾りを付けた彼女の姿を見て大きく頷く星に、エミルは満足そうに笑って「ありがとう」とお礼を言うと、照れくさそうに頬を赤らめた星も自分の髪飾りを撫でてにっこりと微笑んで「ありがとうございます」とエミルにお礼を言った。

お互いと同じ場所に髪飾りをして笑い合っているのを見ると、知らない者が見れば仲の良い姉妹のように見えるだろう。

二人はお互いに手を繋ぐともうしばらくの間、その余韻に浸るようによつくりと街の中を歩いていった。それを上空で見えていたレイニールは、満足そうにそんな二人の後ろ姿を見守っていた。

夕方から日が落ちるまで街の中を散策していた星達は、街を大きく囲むように造られた城壁から景色を眺めていた。

平野からは山々や地平線までくつきり見え、空の星や月が優しい光で星達を照らしている。

城壁にある物見台にある椅子に腰を下ろし、夜空を見上げる星とエミル、そしてレイニールは無言でいると、星が徐に立ち上がりエミルとレイニールの方を振り返る。

「——エミルさん。今日は楽しかったですか?」

「ええ、楽しかったわ。星ちゃんがプレゼントもくれたしね!」

その言葉を聞いてにっこりと微笑んだ星の視線はレイニールに向いて……。

「——レイは楽しかった?」

「うむ!・珍しい食べ物もたくさん食べれたしな。大満足じゃ!!」

満面の笑みで言ったレイニールに、星も笑顔で答える。

すると、今度はエミルの方が星に尋ねてきた。

「星ちゃんはどうかだった?・楽しかった?」

その問いに、レイニールも興味深々な様子で星の返答を待っていた。

星は少し間を空け、ゆつくりと噛み締めるように口を開く。

「——楽しかったです。すごく……すごく……」

そう言った星は彼女達に背を向け、感慨深げに夜空を見上げた。そんな星の瞳には薄っすらと涙が浮かんでいた。

その言葉は今までのエミル達との日々を思い起こし出た言葉だ。もうすぐ狼の覆面の男との約束の時間が迫ってきている。だが、今はこの時間が永遠に続けばいい……そう願って仕方なかった。

(……神様。できることなら、今はただ……この時間を永遠に……)

不安と感傷に震え高鳴る胸に手を当て、そう月と星々に願った。

最後の抱擁

深夜0時を回ったところで、星は隣で眠っているエミルとレイニールを起こさないように寝床からそっとと抜け出す。

ベッドの側に置かれているエクスカリバーを掴むと、廊下を駆けてエレベーターの中に飛び込み、急いでギルドホールを出た。

城壁の上って近くの柱にロープを括り付けると、それを地面まで垂らしてロープを掴んでゆっくりと地面に向かって降りていく。地面に降り立った星は安堵した様子で、口に含んだ空気をふうーっと吐き出す。

子供の筋力ならば絶対不可能だった——しかし、このゲームでは筋力補正機能が付いている。それは筋肉量の少ない女、子供でも成人男性と同等に戦える為の能力であり、公平性を優先したゲームシステムが為せる技である。だからこそ、星のような子供でもロープを掴んで巨大な城壁を途中で力尽きることなく降りることができる。

「さて……きつとこれが最後の……」

星の視線の先には平野の先にある森に向いていた。視界に表示されている地図の上にも森の奥に赤いマーカーが表示されていた。

そこに、その場所に間違いなくこの事件の首謀者であり、亡くなった父を知っている人物が待っている。腰に差したエクスカリバーの柄を撫で、星は静かに瞼を閉じる。

「……お父さん。私に勇気を下さい………本当は無事に帰って安心させたかった。ごめんなさいお母さん……でも………だけど………これはきつと私がやらないといけないから………」

目を開いた星のその紫色の瞳からは決意の意志があふれていた。勢い良く地面を蹴ると、星は森に向かって一直線に走り出す。

走って森の方へ向かう途中。森への入り口が見えてきた時、星の背後から突然。月明かりに照らされた巨大なドラゴンの影が通り過ぎていった。

星が歩みを止めてその場に立ち止まると、目の前に大きな白いドラ

ゴンに乗ったエミルとイシエルが表れた。

大きなため息を漏らすと、星は覚悟を決めたように腰に差しているエクスカリバーの柄に手を重ねる。

「星ちゃん！ 街を抜け出して、いったいどこに行くつもりなの！」
「……………」

無言のまま剣を抜こうとする星に、エミルの横に立っているイシエルは神楽鈴を出して殺気を放ちながら威嚇している。

それに気が付いたエミルは、イシエルを一喝して武器をしまわせるのと、ゆっくりと星の方へと歩いてくる。

「お散歩にしては剣まで持ち出して……さあ、私と一緒に街に戻りましょう？」

「…………私は戻りません。…………離れて下さい！」

優しい微笑みを浮かべ目の前にきたエミルを遠ざけようと、星が鞘からエクスカリバーを思い切り引き抜くとその刃がエミル左頬を掠める。

一瞬表情を歪めたエミルだったが、彼女はすぐに笑顔に戻って、動揺から動けなくなっている星の体を優しく抱きしめる。

星はビクツと体を震わせ持っていた剣を手放し、地面に剣が突き刺さる。

エミルは小刻みに震える星の頭を優しく撫でると、優しい声音で星の耳元でささやく。

「今朝から何かおかしいとは思っていたわ…………何か悩みがあるなら聞いてあげるから、一緒に部屋に戻りましょう…………ねっ？」

エミルにそう言われ、星は表情を曇らせた。

（…………やっぱり。エミルさんにあの人の事を言ってしまうのかな？

…………ううん。だめ！ 言ったら、あの人にエミルさん達が何をされるか分からない！）

星は心が揺れそうになり慌ててそれを振り払う様に首を振ると、エミルの体を思い切り突き飛ばす。

予想もしていなかった星の行動に、エミルは受け身も取ることもできずにガシヤンと鎧が鳴って地面に尻餅を突く。驚き目を丸くして

いるエミルが星の姿を見てみると、星は地面に刺さっていたエクスカリバーを引き抜き、その剣先をエミルに突き付けた。

「——ソードマスターオーバーレイ……」

俯き加減に小さくボソボソつと呟くと、星の持っていたエクスカリバーの刃が金色の光を放った。

エミルが眩しさに耐えかねて腕で光を遮ると、次の瞬間にはステータスの全てが最低値で固定されていた。それはイシエルも同じのようで、彼女は殺気を放ちながらもいつでも逃げられるように備えているようだった。

剣を突き付けた星はエミルを鋭く睨みつけながら、抑揚のない淡々とした声で告げる。

「——私は元々向こう側の人間なんですよ？　あなた達の味方のふりをして、ずっと情報収集してたんです。気が付きませんでしたか？

まあ、気づかないでしょうね。私の演技は完璧ですから……この演技も疲れるからはつきり言いますが、本当の私の姉でもなくせにベタベタくっつかないで下さい。気色悪いんですよ……あと、これもお返しします」

星は光を失った虚ろな瞳でコマンドを操作すると、今日エミルに買ってもらった薄いピンク色の着物と桜の髪飾りを地面に雑に放り投げた。

その後、身を翻し言葉を続けた。

「最後に情けをかけて命だけは取らないでおいてあげます。今はあなた達のような雑魚を相手にしている時間が惜しいので……さよなら」
そえ言つて無言のまま、剣を鞘に収めた星は振り向くことなく走って森の中へと入って行った。

絶望した様子で星の後ろ姿を見ていたが、しばらくしてエミルは地面に投げ捨てられた着物を抱き寄せると、彼女は声を出して泣いていた。それはまるで、今までの星との出来事の全てを涙で洗い流すように大声で……。

森の中に入った星はゆっくりとした足取りで歩いていた。

震える唇を噛み締め、口を一文字に結んだ星のその瞳からは止めど

なく涙が溢れていたが、彼女はそれを拭うことはしない。

流れる涙を拭ってしまったら、弱い自分が再び顔を出してしまう。今まで散々世話になってきたエミルにあんな酷いセリフを吐いたのだ。もう後戻りするわけにはいかないし、そうする気もない。今日一日で最後の思い出は作ったし、もう覚悟はできているはずだった——しかし、涙は治るところか止めどなく溢れてくる。脳裏には今までの楽しかった日常の日々の思い出が次々に蘇り、消えていく。この涙は、体がそれが涙という形で具現化したに過ぎない。ならば今は、この瞳から流れる涙が枯れるのを待つしかないのだ。

そんな時、背後から気配を感じて星が慌てて振り返る。

その視線の先にいたのは、空中に浮かびながらこちらを悲しそうに見ているレイニールだった。

最後の抱擁2

「レイ……」

慌てて涙を拭って名前を呼んだ星に、レイニールが徐に口を開く。「——どこに行くつもりじゃ……主。我輩との約束は忘れてしまったのか？」

体を震わせながらその大きな瞳から涙を流しているレイニールの姿に、星は言葉を発することができなかつた。苦しい時も楽しい時も、いつでも側にいて自分を支えてくれたレイニール。

そんなレイニールにどんな言葉を掛ければいいのか分からない。罵倒しようにも、今の星にはその言葉が全く浮かんでこない。代わりに浮かんでくるのは、レイニールとの楽しい日々だけだった。

星が口籠もってその場に立ち尽くしていると、先にレイニールが叫んだ。

「我輩といつでも、どんな時でも一緒にいるって約束したのじゃ！
忘れてしまったのか主！」

「……………覚えてるよ」

つい無意識に口から出てしまった。すると、レイニールは更に強い口調で叫ぶ。

「ならばなぜじゃ!! どうして我輩に一言もなく勝手に行こうとする!!」

「……………言ったら止めるでしょ?」

俯きながらそう尋ねる星に向かって。

「当たり前じゃ! 我輩の主は、主だけなのだぞ! 主がいなくなるなら死んだ方がましじゃ!!」

その言葉に星は顔を上げると、真っ直ぐにレイニールの瞳を見つめる。だが、その瞳からは嘘を言っていないとすぐに察することができた。

このまま何も言わずに星がこの場を離れば、レイニールはその言葉通りにその命を絶ってしまうかもしれない。そう考えた星は、意を決してレイニールに今回のことを説明しようと決めた。

大きく深呼吸して、ゆっくりと頷き意を決すると星はレイニールに向かつて言った。

「——レイ。私の話を聞いてくれる?」

レイニールは頷くと、手で涙を拭いてゆっくりと星の方へと向かって飛んでくる。星もホツとした表情でそんなレイニールに歩いていく。

そしてお互いに距離を縮め、互いの顔をじっと見つめたまま止まる。それはお互いに干渉できないくらいの距離だった。

「あの……じつは……私はこれから、あの覆面の人に、直接会いに行くの……」

星は思ったことを言葉にして口から放ったが、それが上手く頭の中の考えを出せたのかは分からない。

すると、レイニールは声を大にして叫ぶ。

「我輩も行くのじゃ!」

「それはだめ!」

すぐにレイニールの意思を拒絶した星に、レイニールは納得いかない様子で「なんでじゃ!」と叫んだ。

星は表情を曇らせ、何度か言葉を発しようと口を開いては止めてを繰り返す。それは本当に言いたいことを我慢するように……。

本当はレイニールに「一緒に行こう」と言いたい。今までどんな時でも、協力してレイニールと戦ってきた。その回数はエミル達よりも遙かに多いだろう……苦しい戦いを強いられる場面でも、いつでもレイニールが側に居てくれたからこそ耐えられたというのが本心だった。だからこそ、今回だけは絶対に『一緒に戦おう』なんて言葉は言えない。言ってはいけないのだ——。

そして無言のまましばらく沈黙し、ゆっくりとした時間がその場に流れると、我慢できずにレイニールの方が先に口を開いた。

「理由がないなら我輩が行っても——」

「——それはだめなの!」

レイニールの言葉を遮って星は叫んだ。その瞳からは、止めどなく抑えきれなくなった涙が溢れ出てくる。

泣きながら肩を小刻みに震わせた星は、揺れる唇で声を震わせながら告げた。

「一人でいかないとだめなの……そう言われたから、今度は一緒に連れていけないの……私はあの人と戦わないといけない。それは、エミルさん達やレイを守りたいからなの。レイが私に内緒でエミルさん達と戦ったのは知ってる……でも、あれも手加減されてたんだよ！」

「——な、なんじやと……？　嘘じや！」

「うそじやない！」

すぐに星の言葉を否定しようとしたレイニールに、星が大声で叫んだ。

普段なら、絶対に相手の意見を否定しない星がそれをしたことで、レイニールはそれ以上の言葉を発することができなくなった。

再び訪れた沈黙に、星は腕で頬を伝う涙を拭うと言葉を続ける。

「手加減されてたの……そうじやないと、私はあの人の所に行こうと思わなかった……きつと、あの人と戦うチャンスは、これを逃したら絶対にこないと思う。だから、私は戦うの、そして必ずみんなを元の世界に返してあげるの。それが私の……私にしかできないことだと思うから……」

星はゆっくりと歩き出すと、レイニールの顔の前まできて優しく耳元でささやく。

「……レイ。頭を少し下げて……」

「うむ……」

レイニールが頭を下げると、星が更に近付き額の辺りに優しくキスをする。彼女の柔らかい唇がレイニールの額に触れ、ゆっくりと離れるのを確認してからレイニールは閉じていた瞼を徐々に開いて星の顔を見た。

星はそんなレイニールに向かってにつこりと微笑んで徐に口を開いた。

「——エミルさんには髪飾りをプレゼントしたけど、レイにはまだ何も上げてなかったから……知ってる？　初めてのキスには大好きって意味があつて、特別なんだって……レイ。私は約束を破ってないよ

？ だって、私がどんなに離れてもレイの事を大好きって気持ちにはうそはないから……」

「うむ。我輩も主が好きじゃ、大好きじゃ……だから、せめて行く前に我輩をぎゅつとしてほしいのじゃ……」

「……うん。いいよ」

そう言ったレイニールの体を抱き上げると、ゆっくりと自分の胸に押し当て抱きしめる。すると、レイニールの瞳から涙が止めどなく溢れ、顔を更に強く押し付け星も寄り添うように頬を寄せた。

それからどれくらい経つたろう……相当長い間。二人は抱き合っていた気がするが、正確な時間は分からない。しかし、一時間近く抱き合っていたような感覚はある。

二人はお互いの体をゆっくりと体を離すと、表情を曇らせた。そして星はコマンドを操作し、アイテム欄から金色に輝く野球ボールくらいの大きさの球体を取り出してそれをレイニールに手渡した。

「これを……エミルさんに渡して。後はエミルさんがなんとかしてくれる……」

「うむ。分かったのじゃ……」

不安そうな顔をするレイニールに、星が笑みを浮かべながら告げた。

「——大丈夫だよ。少し離れるだけだから……すぐに今まで通りに戻れるよ。あつ、エミルさんにごめんなさいって……あと、ありがとうございましたって伝えて」

「それはできない……この玉はエミルに必ず渡す。だが、お礼は帰ってきたら主が直接本人に言えばいいのじゃ！」

「……そうだね。それができたらいいんだけど、私は弱いから……あの人に負けるかもしれない。だから、もしもの時は——」

俯き加減に言った星がそこまで言葉を口にすると、レイニールが一喝して話に割り込む。

「——主！ 主は強い。だからそんな心配はいらぬ！ ずっと側で見てきた我輩が言うのじゃ、間違いなく主は最強なのじゃ!!」

表情を曇らせていた星はにつこりと微笑むと、レイニールの言葉に

大きく頷いた。

「うん。そうだね！ でも、もしもの時はお願いね……」

そう告げた直後、星は身を翻してレイニールに背を向けた。レイニールも瞳を潤ませながらも、涙を我慢すると星から貰った金色の玉をしっかりと抱きしめ、星とは反対方向に向かってパタパタと飛んで行く。

それを察したのか、星もゆっくりと歩き始めた。だが、レイニールと違うのは星の瞳から涙が止めどなく溢れていたことだ。レイニールに気付かれないように声は我慢していたものの、涙は抑えることはできなかった。星には分かっていたのだ——これが本当に最後になると……。

いたたまれなくなった星は突然走り出すと、レイニールは振り向いて星の後を追った。

「——主！ やっぱり嫌じゃ！ 我輩は主と一緒にいたいのにじゃ!!」

「…………ごめん」

そう言った瞬間。星の後を追いかけていたはずのレイニールの視界から、突然前を走っていた彼女の姿が消えた。

何が起きたのか分からないまま、追う目標を失ったレイニールは周囲をゆっくりと見渡し星がいないことを確認すると、途方に暮れたように地面に降り立って泣きながら主と呼び続けた。

姉妹

森の中を必死に走っていた星は、後ろからレイニールが追ってきていないことにやっと気が付く。視界に表示されているマップを確認すると、どうやらさつきき場所から結構遠い場所までできてしまったらしい。

星は辺りを見渡したが、木に覆われているだけで人の気配もなければ光源になりそうなものもなく、頼りになるのは月から降り注ぐ月明かりだけだ。

意味も分からず、星がその場に立ち尽くしていると、風が木々を揺らす音だけが周囲に響いていた。

その時、周囲でざわめいていた木々の葉が揺れる音が突然止まる。星が周囲を見渡すと風が止んだわけではなく木々の葉は風で流されたまま止まっていた。それはまるで、時間でも止められているかのように……。

「……なんだろう。嫌な感じがする」

不気味な状況に胸騒ぎを覚えていると、突然目の前に人影が現れる。

身長は高くなく、大人と言うよりも子供と言った方が正しいかもしれない。星の身長よりも、少し低いくらいの人影で髪は長く少女であるのは間違いなさそうだ――。

「誰なの!？」

星が尋ねると、その人影がゆっくり歩き出し、月明かりに照らされている場所に出た。

その姿に、驚きを隠せない様子で星は目を丸くさせて彼女を見た。

「……あなたはッ!!」

驚いている星の前に現れたのは、長い黒髪を後ろで束ねた小学二年生位の女の子でその瞳は赤く、真っ直ぐに星を見ている。

だが、その視線は友好的とはいえず。どちらかと言えば、憎悪と殺意が込められている感じがした。

そして星は彼女を見たことがある。それは、この世界に来て見た母

親と知らない男性と娘と生活しているという目を覆いたくなる悪夢を見た時だ——今は髪を結んでいるが間違いなく、あの夢に出てきた女の子だろう……。

あまりのことに声も出せずにいた星に、突然少女が話し掛けてくる。

「あなたは戦いに行くのを止めるつもりはないの？」

星は自分の目的を思い出して、はっと我に返ると静かに大きく頷いた。

「……ないよ。それが私の役目——やらなきゃいけないことだと思っ
から……」

「——くだらない」

「……え？」

少女の言葉に、星は驚き不思議そうに彼女を見つめる。

当然だ。この世界にいるということは、彼女もまたこのゲーム世界に閉じ込められた言わば被害者なのだ。

つとなれば、本来なら彼女は喜ぶと思つて疑わなかった。夢の中だけで、彼女と直接的な接触は初めて。それならば尚の事、星が諸悪の根源とも言える狼の覆面の男と戦うのは喜ばしいはずだ——もし星が負けても、彼女にはなんのデメリットもなく、勝てれば閉じ込められているこの世界から抜け出せるのだから……。

「どうしてですか？ あなたは元の世界に帰りたくないんですか？」

星がなおも少女に尋ねたが彼女からの返答はなく、その代わりに彼女の手には現れた漆黒の鞘に収まった漆黒の剣が握られた。

さすがにこれには星も警戒せざるを得ず、右手を挿している剣の柄に置いた。

しかし、剣を取り出した彼女は攻撃の意思を示したにも関わらず。それから動く気配がなく、そんな彼女に向かって星が徐に口を開く。

「——そこを通して下さい。私にはやらないといけない事があるんです……」

「そう……でも、私にはそんなこと関係ない。仲間達に止められた時に諦めていれば……私が直接手を下す必要はなかったのに！」

そう言った彼女がダンツ！と地面を蹴ると、次の瞬間には星の目の前までできていた。

少女が剣を振り上げたのを見て、星は素早く剣を引き抜くと、振り下ろされた漆黒の剣の刃を受け止める。

踏み込みの割には、彼女の力はそれほど強くはなく、戦闘経験を積んだ今の星ならば余裕で押さえられる。

(……いける。これなら負けない！)

そう心の中で思った直後、星の体が突如として後方に勢い良く吹き飛ぶ。

宙を舞った星は木に体を強く打ち付けられ、手から剣を手放し力無く地面に崩れ落ちた。

何が起こったのかも分からず混乱する頭で、何をされたのか必死に情報を整理する。

腹部にジンジンとした鈍痛があることから、おそらく刃を交えた直後に蹴り飛ばされたのだろう。だが、それが分かったところで、星にはトリッキーなその攻撃にどう対処すればいいのか分からない。

いくら戦闘経験を積んだとはいえ、それはAIに忠実に従うモンスター相手であり。こんな予測不能な動きはしてこなかったし、まず同じ速度で戦っていないかった。

再び剣を構えた少女の姿を見て、星は慌てて地面に落ちていた剣を拾い上げると、それを体の前で構える。

地面を駆けながら向かってくる少女に、星は剣を腹部の下の方で両手で構えて待ち構えている。

さつきは片手で防いだから腹部が無防備になってしまったが、両手で持つことで左右から腕でしっかりと挟み込まれ。これならば、がら空きになっていた腹部はカバーできる。しかも、両手で受け止めれば衝撃を最大限まで吸収することも可能だ――。

その星の目論見通り正面に切り込まれた剣の刃の衝撃をエクスカリバーがしっかりと受け止めた。だがその直後、今度は左脇腹に強烈な痛みと衝撃が襲ってきた。

吹き飛ばされ地面に倒れた星だったが、その手には剣がしっかりと

握られている。

(——痛いけど、ぎりぎりですりすり跳んだから攻撃は弱まったはず……)

どうやら星は攻撃が当たる直前に横に跳んで、攻撃の勢いを殺したようだ。以前の星ならばできなかっただろうが、それだけこの短期間で彼女が成長したということだ——。

星は手に握られている剣を見てほっと胸を撫で下ろして少女の方を見る。だが、そこには少女の姿はなかった。

つと星の視界から消えていた少女が、空から星の前に着地した。冷めた目で自分を見下ろす少女に、星の全身に悪寒が走る。その直後、少女は倒れて無防備になっている腹部を勢い良く蹴り上げた。

「——かはっ！」

地面を勢い良く転がると、数十メートル飛ばされた場所で背中を丸めて体を震わせながら腹部を押さえて倒れている。

突然の出来事とその攻撃の物凄い衝撃に、星は受け身を取る暇もなかった。腹部を押さえて悶える星のその痛みは想像を絶するものだ——もしも実際の体であれば、肋骨の殆どを骨折していただろう。

そして何より、彼女の攻撃の一撃一撃には殺意が乗っている。いや、殺意というよりも憎悪と悲しみの入り混じった感情だろうか……。

少女は足元に落ちている星のエクスカリバーを拾うと、星に向かって投げる。

星の近くの地面にグサツと刺さったエクスカリバーを見て、星は少女に問い掛ける。

「……ど、どうして？ どうして、あなたと私が戦わないといけないんですか……」

「……………どうして？」

星の言葉を聞いてボソツと少女がそう口にした直後、彼女が放つていた殺気が一気に強まる。

ゆっくりと倒れている星に向かって歩いてくる少女に、苦痛に表情を歪めながらも剣を取ってゆっくりと体を起こす。そんなボロボロの星を見て、少女は口元に笑みを浮かべると徐に告げる。

「——どうしても何も、私はあなたの姉で、あなたは私の居場所を奪った張本人……つまり、敵だからよ」

星は彼女の言葉を聞いて、不思議そうに首を傾げて言った。

「……姉？ 私は一人っ子で、お姉ちゃんはいません。そう、私はいつでも一人……」

現実世界のことを思い出し、星の表情は暗く重くなっていく。だが、そう言った星を鼻で笑うと、少女は感情を消した様な声で告げた。「——お前が私を知っていても知らなくてもどっちでもいい。私はただ……お前が私の居場所を奪った事が許せない！ お前が生まれたから私は死んだ！ あいつらに殺されたんだ!!」

彼女の感情が高ぶり殺気によって周囲の木々が一斉に動いてざわめく、どうやらさつきまで止まっていた時間は、今は動いているようだ——。

俯き加減で細かく呼吸を繰り返し、落ち着きを取り戻した少女が再び話し始めた。

「あんたは私の命と時間。そして居場所を奪ったんだ……だから、今度はあんたの時間を奪ってやる。その体にメモリーズで私の意識を植え付けて、今度こそ私は幸せになってやるんだ！」

「……………」

無言のまま彼女の話聞いていた星は、瞳に涙を浮かべ俯きながら唇を噛み締めていた。

それもそうだろう。急に目の前に自分の姉を名乗る人物が表れ、その人物は明らかに星よりも年下なのだ——彼女が嘘をついているようには思えない。

つとなれば、星が生まれたことで彼女を不幸にしてしまったということになる。そして、星には彼女が言っていることが嘘ではないという、確信にも似たなにかを感じていたのだ——。

姉妹2

俯いている星を睨み付け、少女が低い声で告げた。

「剣を取れ……」

その言葉に、星は首を横に振って答えた。だが、それが少女の怒りを買ったのだろう。彼女は体を震わせながら星を睨み付けた。

しかし、星はその視線を受けても剣を取ろうとしない。いや、剣を取れるわけがないのだ。

星には彼女が姉としての記憶はなくても、母親との母子家庭で生活してきた星にとって、彼女はもうひとりの家族であることに偽りはない。

記憶には彼女はいないが、星の中のどこかに彼女は本当の姉であり家族であるという感覚が残っている。

さつきまでは半信半疑だったが、今はもう確信に変わっている。そうならば、家族である彼女に剣を向けることなどできるはずがない……。

足が震え足元がおぼつかない様子の星はやっとの思いで立ち上がって彼女を見た。

「どうした？ もう一度言う……剣を拾え！」

「……嫌です。あなたが本当に私のお姉ちゃんなら、私は……私はあなたと戦いたくない！」

星が表情を曇らせながらそう言った直後、少女は全身の毛が逆立つ様な凄まじい殺気を放った。すると、星の目の前にいた彼女の姿が消え、代わりに星の左腕に鋭い痛みが走る。

星が痛みの出ている場所に視線を向けると、左腕の肘よりも下の部分に黒い線のような切り口ができていた。

咄嗟にズキズキと痛むその場所を右手で押さえた星の背後から、再び少女の叫ぶ声が響く。

「言っただろー！ 私はお前を憎み殺そうとする敵だ！ さつきと地面に刺さった剣を抜け!!」

「嫌だ！ 私は戦いたくない!!」

「——この、わからず屋が………ならば、お前が戦いたくなるまで痛め付けるだけだ！」

そう叫んだ直後、再び少女の姿が消え星の体に傷が刻まれる。

彼女の宣言通り、全く戦う意思を示さない星の体には無数の傷が刻まれ、星は剣に斬られる度に苦痛の声を上げて表情を歪ませた。

だが、断固として地面に刺さった剣を抜こうとしない。手を伸ばせば届く距離にあるエクスカリバーを、取れば多少は剣撃を防げるそれに星は手を伸ばすことさえしない。

つと少女の持つ漆黒の剣が星の利き足を深く抉り、星はバランスを崩しながらも両膝を地面に突いて踏ん張る。

夜空を見上げたその瞳からはすでに光が消えかかっている、苦痛で全身から汗を流し、荒く息を繰り返しながらも地面には決して倒れようとはしない。

「何故！ 何故脅威である私を……敵を倒そうとしない。どうして、虫の息でも倒れない！ 子供なら子供らしく泣き喚いて命乞いのひとつでもしろ！ 何故辛そうにしながら必死に攻撃に耐えている！」

恐れすら抱くように表情を強張らせている少女の問いに、星は荒い息を繰り返し途切れ途切れになりながらも答えた。

「あたり前……ですよ。あなたは……攻撃する時、すごく苦しそうだったから。きっと本当は、こんなこと、したくないんだって……でも、気持ちはどうしようもないから……誰かがそれを……うけとめなにとって……わたしも、この世界に来て分かったから………」

そこまで言って、自身の重さを支えきれなくなった星が前にゆっくり倒れた。驚いた彼女は漆黒の剣を振って叫ぶ。

「ソードマスター・オーバーロード！」

それと同時に周囲の時間が止まり、彼女の幼い体が輝き一瞬で成長した。

「——星ッ!!」

星の名前を呼んで地面に倒れた妹の元に走る姿は、優しい姉のそれだった。

地面にうつ伏せで倒れている星を抱き寄せると、その顔を見つめ

た。星の視界に映っていたのは、先程までの赤い瞳ではなく黒髪を後ろで束ねた青く輝く瞳の18歳位の少女だった。

「……名前を呼んでくれた。本当に……私のお姉ちゃんだ……」

「私はあなたの敵なのよ？ 私はあるあなたを……恨んでいる。心の底からね」

憎まれ口を叩くその顔は怒りを露わそうと必死に作っていたが、星はそんな彼女の本心が分かっているように微笑んで弱々しい声で言った。

「私は……お姉ちゃんの時間を……奪ってたんだね。ごめんなさい……知ってた、ずっと前から知ってたの……お母さんは、ずっとスーツの裏のポケットに、お姉ちゃんの写真……持ってたから。でも、私は弱いから……嫌で、ずっと忘れてた。だけど記憶が戻る時、思い出したの……」

「嘘……お母さんが私の写真をまだ持ってたなんて……」

驚き言葉を失っている少女に、星は少女の頬に手を伸ばして優しく手の平を当てる。

「……いいよう？ 私の時間を……お姉ちゃんに、全部あげる。だから、お願い……みんなを助けて……お姉ちゃんなら、私より上手にできるでしょ？ あと、お母さんを……お母さんを、幸せにしてあげて……それは、お姉ちゃんにしかできないから……私じゃ、笑顔に……できないから……」

そう言つてにつこりと笑つた星の意識は完全に途絶えた。

少女は頬からずり落ちるその手を掴むと、涙を流しながら呟く。

「星……ごめんさい。私は最低の姉さんよね……あなたがこんなになるまで……でも、今は仕方ないの。この姿を見せるわけにはいかなしい、あいつらを油断させないといけないから……」

気を失っている星を優しい瞳で見下ろすと、星の顔に掛かる髪を掻き分けて笑顔を見せた。

「でも良かった……あなたが真っ直ぐで、優しい子に育ってくれて……嫌いななんてうそ、恨んでもいない……そう言わないと、あなたを傷付けるのに耐えられなかった……弱いお姉ちゃんでごめんね。本

当にごめんね星……」

星の小さな体を抱きしめると、少女は頬から大粒の涙を流しながら言った。

「ずっと……ずっと、こうしたかった。だって、あなたが生まれるのをずっと、ずーっと待ってたから……ああ、星の体ってこんなに小さくて柔らかくて、そして暖かいのね……現実世界ではあなたを抱くことはできなかったけど、夢が叶ったわ……もう思い残すことはない。これからも辛いことがたくさんあるかもだけど、私が全部消してあげる。あいつらを倒して、あなたの明るい未来を私が守ってあげるから……だから、どんなに苦しくても辛くても、諦めないで前だけを向いて真っ直ぐに……星はこんなに強いんですもの。大丈夫よね、きつと……全てが終わったら、またゆっくり話しましょう。今度はあなたが起きてる時にね」

そう言っただけ微笑んだ少女は、少女は気を失っている星の体を側の木に凭れ掛けさせると、服のポケットから虹色に輝く宝石を取り出し、それを星の頭上に投げた。

すると、宝石が虹色に輝く光を周囲に撒き散らす。直後、星の体に刻まれていた切り傷が見る見るうちに消えていく。

星の傷が完全に消えたのを確認して、地面に刺さったままになっていたエクスカリバーを引き抜き星の鞘に収めた。

そして眠っている星に微笑みを浮かべ「まだ、やり残したことがある」と呟き、その場から離れていった。

姉としての意地

* * *

星の姿を見失ったレイニールは、星との約束を守る為に黄金に輝く玉を持ってエミルの元に急いでいた。

来た道を急いで戻り。エミルの元に着くと、森の入り口にある切り株に腰を下ろしていたが、その表情は暗く周囲の空気は重い。

そこには覆面の男のアジトを突き止めると息巻いて出ていったミレイニやエリエの姿もあった。だが、メルデイウス達の姿はなく、ミレイニとエリエを見つけたことで役目を終えたということもあり街に戻ったのだろう。

レイニールは重そうな黄金の玉を持ってフワフワとエミルの元に向かうと、顔の前で止まってじっと目を見る。

その視線に耐えかねたエミルは咄嗟に視線を逸らしたが、レイニールがすぐに視線の先に移動して言った。

「——エミル。お前は、どうしてこんなところでじっとしておるのじゃ！」

「……どうしてって、私にどうしろって言うのよあなたは……」

ふてくされたように吐き捨てた彼女に、レイニールはむっとした表情で叫ぶ。

「姉だと自負していたお前が、お前が主を追いかけないでどうするのじゃ！」

「だって仕方ないじゃない！ ステータスは最低値に固定されたんだから……あの子には勝てない。私は………無力なのよ……」

レイニールの言葉に反論したエミルだったが、最後は弱々しく呟き俯くしかなかった。

だが、いつもの彼女ならば自分のステータスが弱体化したことなど引き合いにも出さない。レイニールはその言葉を聞いて、更に怒りを表に出すと持っていた黄金の玉を地面に置いてエミルの胸ぐらを掴

み上げる。

「エミル！ お前はそんなことを言わない奴だったはずじゃ！ 弱くなったからどうした！ 主との絆は変わらないんじゃないのか？ そんな保守的なお前などお前らしくないのじゃ！」

「……あの子は敵だった。敵だったのよ……私に言ったわ、私達を騙す為の演技をしていたって……昼間はあんなに楽しそうにしてたのに、あれも全部演技だったのよ！」

顔を上げて叫んだエミルとレイニールが鼻を突き合わせて互いに睨み合っていると、そこに聞いたことのない何者かの声が響く。

「あはははっ！ 妹だと思っていた子に裏切られたんだって？ かわいそー。でも、本当の姉じゃないんだから当然よね！ でも安心していいわよ？ あの子は私がこの手で殺してあげたから……」

レイニールとエミルが一齐にその声の方を向くと、そこには空に浮いている長い黒髪を束ねた赤い瞳の小学生くらいの女の子がいた。

その手には星の着ていた服がボロボロの状態で握られていた。少女は不敵な笑みを浮かべて、それをエミルに見せびらかす様にヒラヒラと揺らす。

星の服の衰れな有様を見て、動揺して動けなくなっているエミルに変わってイシエルが素早く弓を構え、浮遊している少女を射抜く。

光の矢が少女に当たるが、その威力はたかが知れている。周囲に広がる煙を煙幕代わりに、素早くエミルの体を抱きかかえるとその場を離れようと走り出す。

直後。その方向へ先回りするように少女が姿を現して勝ち誇った様に不敵な笑みを浮かべている。

イシエルは悔しそうに唇を噛むと、舌打ちしながら呟く。

「チッ！ 時間操作系の固有スキルか——こんなチートやないか……」

だが、イシエルがそう思うのも無理はないだろう。時間を操作できるということは、時間を止めて自分達の命を容易に消し去る事ができるということだ。それがどれほどの脅威になるかは、子供でも分かることだ——。

勝ち誇った笑みを浮かべている少女を見て、イシエルは地面にエミルを下ろしてその前に立ちはだかると。

「殺し足りないって言うなら、うちを殺せばええ！　せやけど、うちの仲間達には手出しせんと約束して！」

「——イシエ!!」

「ええんよ。うち一人でエミル達を護れるんやったら、安い取り引きや……」

そう言つて振り返つてにつこりと微笑んだイシエルに、エミルは涙を流しながら首を横に振つたが、イシエルは再び前を向いて「どないや」と少女に尋ねた。

少女はニヤリと笑うとポケットの中から取り出した虹色に光る宝石をイシエル達の頭上に放り投げる。

直後にエミル達に虹色の光が降り注ぎ、イシエルはエミルをかばうように体を重ねた。彼女の心配を他所に、エミル達のステータスは通常時の数値まで一気に上昇する。

自分のHPバーを確認してステータスが戻つたことを認識すると、不思議そうにイシエルとエミルは首を傾げる。

それもそうだろう。本来なら倒す相手の弱体化したステータスをわざわざ元の数値まで回復させる必要はない。しかも、少女の使つた回復アイテムは、ベテランプレイヤーのイシエルやエミルでさえ知らない代物なのだ。

訝しげに体のあちこちを調べている彼女達に向かって、少女は満足そうな笑みを浮かべながら言い放つ。

「私はフェアな戦いが好きだ——ステータスはお互いに最大。そして、お前達の中で代表者一人が私と戦え……そうだな。青髪の女、お前が私と戦え！」

「——ツ!?!」

少女の言葉に驚いたイシエルが慌てて、彼女に言葉を返す。

「うちがやるー！　一人だけ代表者を立てるなら、誰でもええやるー！」

「……ちよつと待つし！　その勝負。あたしが受けるし!!」

イシエルのその言葉に誰よりも早く反応したのは、少女ではなく炎

帝レオネルのアレキサンダーに乗ったミレイニだった。

それに一番驚いたのは、イシエルでも少女でもなくエリエだ——手を上げているミレイニに叫ぶ。

「バカー！ あんたが戦って勝てるわけないでしょ!？」

「チツチツチツ……エリエこそ何言ってるし。あたしはこの中で一番強いし！」

苛立つイシエルの気配を察し、エリエは顔面蒼白でアレキサンダーに乗っているミレイニの足を引く。しかし、ミレイニはイシエルの放つ殺気に気が付いてないのか、未だ強気に胸を張っている。

だが、そこに今度はレイニールが立候補する。イシエルが殺気を見ながらせながらレイニールを観るが、それ以上にレイニールの発している殺気は凄まじいものがあつた。

その瞳に宿る復讐心は、その場にいる誰よりも凄まじく、レイニールの瞳は怒りに満ちていた。

まあ、無理もない。主人である星を手にかけて、その証拠にポロポロに引き裂かれた彼女の服をぞんざいに扱う少女に憤るのは当然だろう。

なんとと言っても、最後に星にあつたのはレイニールなのだ。その姿は未だに鮮明にレイニールの脳裏に焼き付いているに違いない……。

「我輩がやる！ 奴が主を殺したのなら、我輩が奴を殺さなければならぬ!!」

巨大化し、ドラゴンの姿になったレイニールは、その鋭い瞳で少女を睨みつけている。さすがにこれにはイシエルも恐怖を覚えているのか、反論どころか微動だにできないようだ。

少女はそれだけで人を殺しそうな凄まじい殺気を受け、余裕とも取れる笑みを浮かべていた。

「ドラゴンか……面白い。あの子を相当したっていたようだが、その巨体ではただの動く的ではない。妹同様にその五体をバラバラにしてやる！」

「……………妹ですって?」

少女の放つたその言葉に反応したのは、レイニールでもイシエルで

もなくエミルだった……。

今まで抜け殻の様になっていた彼女とは比べ物にならない殺気を放ちながら、エミルは少女の方に向かって歩き出す。

イシエルの止める声も聞かずに少女の前までいったエミルは、宙に浮かんでいる少女に向かって尋ねた。

「——貴女は実の妹を……家族をその手で殺したと言うの？」

「ああ、そうだ。その存在が目障りだった……憎んでいた。それを殺してなにが悪い！ 私の家族を私が殺してなにが悪いって言うんだ！」

それを聞いたエミルは俯き加減に「そう……」と小さく呟いて、腰に差していた剣をゆっくりと引き抜くと、その剣先を少女に向けて鋭く睨みつけた。

姉としての意地2

「降りてきなさい……その減らず口。二度と吐けない様に、その喉元を掻き切つてあげる!!」

「フンツ……それはこちらのセリフだ。偽物の姉を名乗る分際で見えていたぞ？ お前と星の姉妹ごっこ……本当の姉妹でもなくせに、私達の因縁にケチをつけるな！ 私が私の妹をどうしようが私の勝手だ！」

空中からエミルを指差して言い放つた少女に、エミルは直ぐ様言葉を返す。

「勝手じゃない！ 妹を……妹をぞんざいに扱う姉は、同じ姉として絶対に許さない！ 私は貴女を星ちゃんの姉とは認めない！」

「そう思うなら、それを証明して見せてよ……私を子供だと思つて甘くみてるなら、後悔させてやる！」

空中にいた少女が漆黒の剣を抜いて地上にいるエミルに襲い掛かる。エミルは持つていたロングソードでそれを防ぐと、素早く振り抜いて少女を遠ざける。どうやら、戦闘経験ではエミルの方が上らしく。相手の向かってきた反動を利用して吹き飛ばしたのだろうか……。

だが、驚く様子もなく少女は余裕の笑みを浮かべながら、逆にエミルを挑発する。

「その程度なのか？ 白い閃光が聞いて呆れる……。異名を持つている割にはお前は大したことはないな。飽きた……もう終わりにしよう」

そう口にした瞬間。目の前にいたはずの少女の姿が消え、背後に剣を振り上げている少女の姿が現れた。

振り下ろされる剣がエミルの体に当たるよりも早く、彼女の左手に持った剣がそれを防ぐ。すると、漆黒の刃を受け止めていたエミルの剣が一気に押され女の子の体が前に移動する。

その動作にハツとした少女は慌てて後方に跳ぶが、同時に回転したエミルの持つていた右手の剣の刃が彼女の剣を持つていた右腕を掠った。

少女はすぐに姿を消してエミルから距離を取ると、今度は上空に表れた。

だが、少女が腰に差している鞘に右手を近付けると、見る見るうちに彼女の傷が癒やされていく。それを見たエミルは、驚きを隠せないと言った表情で少女を見つめている。

少女は笑みを浮かべ、徐に口を開く。

「——確かにその反応速度。さすがはトッププレイヤーだよ。でも、私にこの鞘とエクスカリバーがある限り。お前の剣は私を殺せない」

「……嘘でしょ？ 星ちゃんの持っていた剣がエクスカリバーなんじゃないの!? エクスカリバーとエクスカリバーは同じ剣なはず!!」

「そうじゃ！ 主の持っていた剣が本物のはずじゃ！ 聖剣と言われる剣が、そんな黒くて汚い感じの剣なはずなのじゃ！」

エミルとレイニールがすぐに反論すると、少女はニヤリと不敵な笑みを浮かべて笑い始める。

その様子を訝しげに見ていたエミル達に、彼女が勝ち誇った表情で告げた。

「お前達はアーサー王伝説を知らないの？ 神話では、一度聖剣は折れているんだよ。そして湖の妖精が打ち直して再び剣とした……」

「……なら、星ちゃんの持っていた方が偽物で、貴女のが本物ってことなの!？」

だが、エミルの言葉を聞いた少女は、ふくみ笑いを浮かべながら言った。

「……いつから剣が一本だけだと錯覚していた？」

『——ッ!!』

その場に全員が彼女の言葉に耳を疑う。

しかし、それは当たり前だろう。実際のアーサー王伝説でも剣が折れたという事実はあっても、打ち直した剣が二本あった……などということは言われてはいない。

本来ならば、その可能性を考慮する者はまずいないだろう。

「……折れた剣は二本の剣となった。いや、二本にしななければいけなかったのだ——アーサー王は折れる前の聖剣で多くの者を斬った……その死者の怨念は剣の刃に蓄えられ、自分達を殺した憎い聖剣を押し折ったのだ。それだけの力を刃に内包していた聖剣を、もう一度剣とするのにはリスクがあった。それは聖剣としての力を阻害してしまうからだ——そのリスクを避ける為、剣を光と闇の二本に分けたのがこのエクスカリバーだ……不思議に思わないか？ どうして折れたエクスカリバーにだけ傷を癒やす鞘が付けられたのか。その答えがこの剣にある！」

少女は手に持っていた漆黒の剣を鞘に戻すと、紫色に染まった液体の入った瓶を取り出した。

それは、この世界にある装備に異常状態の毒効果を付属するアイテムである。これは武器に使用するだけでなく、直接対象者に飲ませればそれだけで毒状態を付けることができるアイテムであり。敷地内のいかなる場所でも使用できない特殊アイテムの一つだ——。

毒の入った瓶をエミル達に見せびらかすように掲げると、蓋を開けてあろうことか自分で飲み始めたのである。

その対人戦中に行った彼女の自殺的な行為に、エミルもその場にいる仲間達も驚き目を見開いている。すると、彼女は喉元に手を当てて苦しみ出した。まあ、毒を自分で服用したのだから当然の報いと言えるだろう……。

だがその直後、彼女の腰に差していた剣が黒い光を放ち、少女の表情が見る見るうちに和らいでいく。

そして再び鞘から剣を引き抜いて、その剣先をエミルに向けた少女が口元に笑みを浮かべると。

「これが聖剣の力だ！ この剣はいかなる異常状態効果を打ち消す。これは元の聖剣の力がこの闇の聖剣にも宿っている証拠！ つまり、この剣と鞘がセットなのは、死者の血をたっぷり吸ったこの刃に宿る怨念を抑え込む抑止力が必要だったから……そして本来は星の持っている光の聖剣にもこの鞘と同じ効果がある。しかし、星はまだその力を使えない……いや、無理やり解放されたあの剣では、私の完全開

放状態の聖剣と同じ力は使えない！ あの剣は力が不安定に解放されてしまった為、使用者にそれ相応のリスクを与える。分かっているだろうか？ 金色のドラゴンよ！」

彼女のその言葉に思い当たる節のある小さいドラゴンモードに戻っていたレイニールは何も言えずに俯く。

星は固有スキルを使用した時から、体の不調を隠していた。少女の言った無理やり解放させられたというのも、ダークブレットのアジト跡の彼女の様子を見ていれば疑いようもない。つまり、星の固有スキル『ソードマスター・オーバーレイ』は、不完全な状態で常に発動されていたということだ――。

レイニールも彼女の言葉を否定したいが、ベッドで夜な夜な苦しむ星の姿を目の当たりにしていた以上、的を得た彼女の言葉を否定することができない。

項垂れた様子で反論しないレイニールの姿に、少女が勝ち誇った様に更に言葉を続ける。

「それにだ。疑問に思わなかったのか？ 星の光の聖剣には、光とは言えない能力があるだろうか？ 敵を無力化する能力。そしてその無力化した力を吸収して、己の力を強化する能力。前者が光ならば、明らかに後者は闇だと言える。その力を無力化しておきながら、自身はそれを糧とし更に強化されるのだから……その矛盾が、星の聖剣が私の聖剣と同じ物であり。私と星が姉妹である決定的な証拠でもある！ そう。これが私と星との絆――話はここまでだ。そろそろ終わらせてやる！」

最後の方は聞き取れなかったものの、剣を構える少女を警戒してエミルも両手の剣を構える。

彼女と戦闘する為には、少女の姿が消えてからではすでに遅い。時間概念を超越した存在で、いつ不意を突かれても文句は言えない能力なのだ。

戦闘をする者が最も重要視するのが間合いとタイミングだ――卓越した達人であればあるほど、一撃で勝負が決まると言っている。呼吸の一つ、瞬き一つで相手に殺されるという場面でも時間を停止でき

れば、いつでも自分のタイミングで仕掛けることができる。

それは戦闘において相当なアドバンテージとなるのは間違いない。だが、エミルには彼女と向かい合っている間に息つく暇もない。少しでも油断すれば、彼女は躊躇なくエミルを殺しにくるだろう。

そのことを証明する様に、一度仲間達の位置を確認して視線を彼女から外した直後、エミルの右側に少女がスツと表れて漆黒の剣を振り抜く。

すぐにそれに反応したエミルが右手の剣で攻撃を防ぐと、素早く左手の剣で少女の胸を突く。だが、その剣先が体に当たる前に少女は消えてエミルから距離を取った場所で様子を窺っている。

そのまま畳み掛ければ、すぐにでも決着がつきそうなもののだが、それほど武闘大会の連続優勝記録を更新しているトッププレイヤーは甘くはない。何故なら、エミルは少女の固有スキルの弱点に気が付いていた。

今までの戦闘で、おそらく彼女の固有スキルは時間を停止させることはできても、その間は他者への介入ができないということだ。

つまり、攻撃を敵に当たるという行為そのものは、時間が動いている間しかできないのだろう。そうでなければ、止まっている間にエミルの体に剣を突き刺さないのか意味が分からないし、つじつまも合わないだろう。

何度も少女の消えては表れ繰り返される攻撃を、エミルは全てギリギリで防いでいる。

自分の攻撃をことごとく防ぎ切るエミルに、少女は少し嬉しそうに剣を振り回すと、エミルの剣に押され一気に距離を離される。

少女は構えていた漆黒の剣を下ろすと、エミルに向かって徐に尋ねた。

「――死んだ星の為に戦う意味はあるのか！ お前にも、この戦いが無意味な事くらい分かるだろ？」

そう言った少女に、エミルが憤り叫んだ。

「無意味じゃない！ 無意味だなんて言わせない！ 実の妹を殺した貴女を、私は絶対に許さない。私の妹は生きてくても生きることがで

きなかった……でも、かけがえのない多くのものを私に残してくれたわ。星ちゃんもそう。だから今の私がここに……そんな、人生の恩人とも言えるそんな妹達を悪く言わせない。今の私の全力を持って貴女を倒す！」

「プツ……あはははははっ、面白いわねあなたは……妹は姉には敵わない存在なのよ？ それから学ぶものがあるなんて、本気で思っているの？」

バカにした様に笑う少女を鋭く睨み、エミルは持っている剣を構えて告げる。

「なら、その言葉を証明してあげるわ……」

その真剣な彼女の様子に、バカにしていた少女の表情も神妙な面持ちに変わると、漆黒の剣を構えた。

直後。彼女の姿が消え、すぐにエミルの目の前に現れると漆黒の剣がエミルの喉元に向けて放たれる。それを迎え撃つように、右手の剣を身長差のある彼女の腹部に向けて突き出す。

つと次の瞬間。突き出したはずのエミルの剣の刃が横に寝た状態へと変わり、その上には悠々と勝ち誇った少女が立っていた。

「……これで終わりね」

両者の顔が向かい合い。少女の瞳が鋭い眼光を放った直後、エミルの首元に彼女の漆黒の剣の刃先が突き立てられ、逆にエミルの持っていた左手の剣が少女の腹部を突き刺していた。

しかし、その結果に驚いているのはエミルの方で、逆に漆黒の剣をエミルの喉元に突き付けたままの少女は満足そうに笑っている。

「——合格ね。あなたになら私の大事な妹を預けられる……」

「……どうして？ だって星ちゃんは貴方が……」

驚いた様子で目を見開いているエミルに、赤い瞳が青く変わっていた少女はゆつくりと告げた。

「私は星と違って、プレイヤーへの管理権限はないけど……その代わりに、システムに付随するオブジェクトの管理権限があるの。その力を使えば、なんともないローブを星の着ていた服に変更することくらい簡単よ……」

彼女のその言葉を聞いたエミルが、彼女の投げた星の服の方向を見ると、彼女の言葉通りに、薄汚れボロボロになった茶色いローブが地面に転がっていた。

それを見たエミルは自分の持っている剣が少女の腹部を貫いていることを思い出し、その表情から一気に血の気が引いて青ざめさせている。

少女はそれを見て笑みを浮かべると、エミルの首に剣先をチクリと刺す。

「ふふっ、これでおあいこね……でもまさか、最初から相打ち狙いだっただとはね……最初は私の心臓を狙ってたんでしょ？　ほんと——あなたは変わっているわ。星の敵討ちをした後、自分もその場所に行こうって？」

「……そうね。星ちゃんを少しでも疑ってしまったわけだし……これが私にできること……」

「それだけの気持ちがあるなら、私に変わってあの子を守ってあげて……あの子は今、この森の奥に居る覆面の男の所に行こうとしている……本当は私がいけないといけないんだけどね。もう少しだけ、私は公に行動するわけにはいかないから………お願いね」

そういうと、少女はエミルの前から完全に姿を消した。

エミルは頷くと、もう一本の剣の鞘を右の腰の部分に挿して、闇に支配されている森の中を見つめた。

姉としての意地3

そこにイシエルが走ってきてエミルに抱き付く。エミルもそれを受け止めると、嬉しそうな彼女につられるように微笑み返す。

「さすがはエミルや！」

頬ずりするイシエルに、さすがに苦笑いをしたエミルが、すぐにエリエに向かって言った。

「エリー。ミレイニちゃんの召喚獣に乗って街に走ってもらえる？」

イシエ達も街に戻って紅蓮さん達に伝えてほしいの。敵が動くって……」

「……ん？　せやけど、あの子なら今エミルが倒したやんか」

「違うわ。あの子じゃなくて狼の覆面の男よ……」

それを聞いた直後、イシエルの表情は一気に陰しくなる。だが、彼女の表情が陰しくなるのも無理もない。

何故なら、彼女もエミルと共にモンスター軍団を駆逐しに出た。その時、覆面の男を発見できずに最も憤っていたのは、何を隠そう彼女なのだ――。

しかも、自分が寝ている間にエリエ達が搜索に出たのを知って内心ではイライラしていたのを、長い付き合いのエミルだけは分かった。た。

そんな彼女が口には出さないだけで、一番この中で狼の覆面の男をしばき倒したいと思っていた。だからこそ、エミルはイシエルを連れていこうとはしない。隠していても、彼女がこの中で最も感情的になりやすいのを知っているからだろう……。

「エミルだけでは心配や！　うちも一緒に連れてって！」

エミルは懇願する彼女につこりと微笑むと、イシエルが「そらないわ……」と頬を軽く膨らませてささやかながらに抵抗する。

だが、一人で狼の覆面の男を探しにいくというエミルを、エリエ達が許可するはずもない。

「エミル。今の君は星ちゃんを失った事で、自暴自棄になっている。そんな君を行かせるわけにはいかない」

「自暴自棄になんてなってないわ！」

「——嘘だ！」

デイビッドは直ぐ様、彼女の言葉を否定した。エリエもそんな彼の言葉に賛同するように、無言のまま眉をひそめて頷いている。どうやら、デイビッド達にはエミルと少女のやり取りは分からなかったらしい。

だが、少女が消えた今。オブジェクト操作によって変わっていた星の服は、元の薄汚れたローブとなっている。

エミルが再び地面に落ちていているそれに目を向けると、デイビッドとエリエも同じくボロボロになったローブを見た。

「……星ちゃんは生きているわ。フレンド登録している名前も消えていない」

「それが畏じゃない保証はどこにもない！ あんなとんでもない能力者だ。何をされていても不思議はないだろ！ それが分からない君じゃないはずだ。考え直してくれ……俺達はマスターを失って、君まで失うわけにはいかない！」

無言で向かい合うデイビッドとエミルの間に沈黙の時が流れ、エミルは徐に告げた。

「——私は行くわ。星ちゃんが待ってる」

「だからそれが畏だと……」

そこまで口にした直後、デイビッドが話すのを止めた。いや、それ以上は何も言えなかった。

その時のデイビッドの腕を瞳に涙を浮かべたエリエが掴んでいたからだ——デイビッドの腕を掴むその手は小刻みに震えていた。

「……行きなよエミル姉。何か訳があるんでしょ？ でも、必ず星を——ううん。必ず帰ってきてね……？」

エリエは星の名前を口にしようとして止めた。それは、もしも星が消えてしまっていたら。ということを考えているからかもしれない。エリエもそんなことはないと思じたかったが、この世界に閉じ込められてから数え切れないほどの多くのプレイヤーが消えていった。

前線で戦って入れれば、否が応にも仲間達が消えていくのを目の当た

りにしなければいけない。始まりの街から共にきたギルドのメンバー達からも多くの犠牲を出した。そんな中で『星だけは特別』であると思うことが、どれほど都合のいいことなのかを無意識に理解していたのかもしれない。

だから、その彼女の言葉に込められた意味には、せめてエミルだけでも無事に帰ってきてほしいということの表れなのだろう……。

深く頷いたエミルは微笑むと「必ず星ちゃんを連れて戻ってくるわ」と言い残して、森の中に入っていった。

エミルが森に入っっていつてしばらくすると、レイニールが後ろから翼をパタパタと動かしながら金色の玉を抱えて飛んでくるのが見えた。

「エミル〜!!」

大きな声を上げてくるレイニールに、エミルは驚いたように目を開いている。

「なんで付いてきたの？ みんなで街に戻るようにと——」

「——我輩は行くぞ！ 主を連れ戻すことのじゃ！」

エミルの言葉を遮ってそう言ったレイニールの真剣な瞳には、絶対に成し遂げるという意志と決意に溢れている。

星との絆を考えれば、レイニールは自分と同等かそれ以上だろう。もしも、エミルがレイニールの立場ならば、なにがなんでも星を連れ戻す。その気持ちがあかっているエミルは、頷く以外になにもできなかった。

すると、追い返されると思っていたのだろう。拍子抜けした様子でぽかんとしていたレイニールが、急に我に返って抱えていた金色の玉をエミルに渡す。

彼女は手に乗っているその玉を不思議そうに見下ろすと、レイニールに尋ねた。

「これはなに？」

「なにかは我輩にも分からないが、主がエミルに渡してくれと言っていたものじゃ！」

「……星ちゃんか？」

その話を聞いたエミルは、レイニールから渡された金色の玉を自分のインベントリ内に入れた。するとそこに、アイテム名が表示された『竜王の魂』と出ていた。

竜王の文字には心当たりがある。それは星に一番初めに渡し、レイニールを生み出した『竜王の剣』だ。これから察するに、星がレイニールに託したのはレイニール自身ということになる。

しかも、エミルの視界に表示されているPTメンバーを示す場所を見ると、そこにはレイニールの名前がはつきりと刻まれている。これが決定的な証拠だ——つまり、星はレイニールをエミルに託したということになる。そんなことをする理由はひとつしかない……。

点と点が繋がり。その瞬間、エミルの表情は一気に青ざめると、いきなり走り出した。その後を驚きながらも、急いでレイニールが後を追いかける。

「どうしたのじゃ！ エミル！」

「——その様子だと、レイちゃんは何も説明を受けてないのね……さっきの金色の玉は、レイちゃん自身の使用者権限の譲渡そのもの。それを私に託したという事は、つまり……星ちゃんは死ぬ気なのよ……」

「——ッ!？」

それを聞いたレイニールは、今まで自分が持たされていた物を知って愕然とする。

まあ、無理もない。まさか星がそんな物を自分に託していたなど知っていたら、絶対にその場を離れずに星にしがみ付いてでも彼女を止めていただろう。

分からなかったとはいえ、星のことを止めきれなかった責任は感じている。

レイニールはその体を巨大化させると、走っているエミルの前に出て尻尾を垂らす。

「——乗れ！ 空から探した方が早い!!」

「でも、敵に見つかるわ！」

「そんなリスクなど、今は構うな！ 主を見つけれなければ意味がない！ 死なせるわけにいかないだろう!!」

その言葉に無言で頷いたエミルは、自分の前に垂らされた尻尾に飛び乗り背中によじ登る。

それを確認して、レイニールは翼をゆつくりと羽ばたかせ周囲の草木を激しく揺らし、少しでも死角がないように目を凝らして星の姿を探した。

それは結果として星を見つける上でプラスに働く、レイニールとエミルが目皿のようにして風で揺れる地面を見ていると、猛スピードで走る星の姿を見つけた。すると、星が岩肌に見える崖の行き止まりで足を止め、振り返ってレイニール達を見上げる。

決意の決戦

* * *

それから少し時間は遡る……………。

少女との戦闘を終え、気を失っていた星が重い瞼をゆっくりと開く。

まだはつきりとしめない視界で周囲を見渡すと、どうやらまだ森の中にいるということは分かった。

「……………そうか、私はお姉ちゃんに殺されなかったんだ……………」

そう小さく呟き、頭の中を整理するように再び瞼を閉じる。

さつきまでの戦いの様子やエミル。レイニールとのやり取りが鮮明に思い起こされ、自分がしなければいけない目的が、意志とともに明確なものへとなっていく。

だが、唯一の心残りはエミルとケンカ別れをしてしまったことだ——レイニールに渡した金色の玉を、エミルが受け取ってくれば自分の意思は伝わるだろうが。

しかし、同時にそれが星から彼女への最後の頼み事になるだろう。レイニールにも悲しい思いをさせてしまうかもしれないが、エミルがレイニールの魂である金色の玉を持つている限り、彼女の固有スキルのドラゴン達の様にとえ死んでも何度も蘇る。それによってレイニールが自分の後を追うことはできなくなる……………。

胸に手を当て、星が小声で自分に言い聞かせるように小さく呟く。

「……………これで良かったんだ。私があの人を倒せば、閉じ込められた人も助かるし、お姉ちゃんもお母さんもきつと……………」

もう戻るわけにもいかない。悲しい表情を見せる星は、金色の装飾が施された美しい剣であるエクスカリバーを見つめる。

亡くなった父親との最後の絆であり、ゲーム世界で唯一最強にして、戦闘経験もない星に今まで無理を何度も可能にさせてくれた愛剣である。

「——剣さん……………もう少し。もう一度だけ、私に力を貸して……………お父

さん。終わったら、私がお姉ちゃんの代わりにそっちにいくね……」
星にはもうひとつやらなければならぬことができた。それは亡くなったはずの姉に、リアルの自分の体を渡すことだ——自分が姉に生かされたというより、星の命を取れなかったのだろうということ。星は分かっていた。

相対した時、自分は剣を取れなかったが、それは相手も同じで致命打は受けなかった。

家族の情が邪魔をして、お互いに自分の意志を貫けない。でも、星が姉の立場なら命を奪われ居場所を奪われた姉の心情が痛いほど分かる。

実際に現実世界で星に居場所はなかった……あつたのは悲愴感と他者に劣っているという劣等感だけ。だからこそ、自分から退かなければならない。それをきつと現実世界で待つ母親も望んでいる事だ——。

今までの人生の記憶の中では、母親の笑顔を見た覚えはない。それはきつと自分が姉じゃなく劣化版だったからなのだろう。以前見た夢でも母親は楽しそうに父親、姉と笑っていた。

自分が生まれたことで歯車が狂ったのなら。目を覚ました時に、望まれていない自分ではなく姉が自分の体に入っていたらきつと喜ぶはずだと星は思った。

星はこの世界にきて生きている楽しさを知った。自分にはできないと思っていた友達——仲間にも出会えた。もし、この結末を予想して神様がこの優しい時間を用意してくれたのであれば、自分は皆の為に役目を果たす義務がある。

なにもないと思っていた空っぽだった自分のことを、剣聖と呼ばれ今は皆がその力に期待している。自分が死んでも残るものがたくさんある。それだけで恐怖も迷いもない。

「……行くよ」

剣の鞘を再び腰に差し、決意に満ちた瞳でマーカアの指し示す方向を向いて勢い良く地面を蹴って走り出す。

まだ効果が残っているのだろう。体は羽毛の様に軽く、足はバネの

様に地面を蹴り上げどんどん加速する。

すると、風が吹き荒れ周囲の草木がざわめき始めた。足を止めることなく星がちらつと後ろを振り返ると、そこには巨竜となったレイニールの姿が見えた。

星はマップ上に表示されているマーカーの所までくると、地面に魔法陣が表れ星の全身を包んだ。

(これがきつと最後になるから……)

直後。振り返って、急降下し星に近付いたレイニールとエミルにつこり微笑み、その口が『ありがとう』動き星の姿は消えた。

真つ白になる視界の中で、口元に笑みを浮かべる。星にとつては、最後に自分の口からエミルにお礼が言えたことが嬉しかった。

しばらくすると、真つ白の世界から視界が変わり。目の前に赤い壁に覆われたコンクリートで造られた様な部屋が表れ、その奥にはモニターと検査台のようなものが置かれている。

そこに白衣を着た狼の覆面を被った男が立っていた。星の方に近づいてきた彼は徐に両手を広げた。

「ようこそイヴ。私のラボに来てくれるのはこれで2回目かな？ いや、ここのラボは初めてだったね。君にはこれは必要ないな」

彼は頭に被っている狼の覆面を外すと、乱雑に投げ捨てる。

その顔は以前のままで、赤く短い髪にメガネを付けた中肉中背の男だ。だが、その瞳は狂気に満ちている。

彼はニヤリと不気味な笑みを浮かべると、両手を広げたまま星の方へと歩いてきた。そんな彼に向かって剣を引き抜いた星が、剣先を彼の顔に向けて睨み付けた。

少し驚いた様子で眉を動かした彼に、星が告げる。

「——あなたは約束を守らない……それにあなたは多くの人を殺しました。だから、私はあなたを倒さないといけない。でも、最後に聞きます。降参して、私達を元の世界に帰してもらえるのなら——」

「——君の言葉には誤りがあるよ？ イヴ。君は僕が多くの人間を殺したと言ったが、君は僕を倒すのかい？ ……殺す。の間違いだろう？ それとも覚悟がないのかな？ 君は僕には絶対に勝てない。何

故なら——いや、今は止めておこう」

「……降参はしてくれないんですね？」

言葉を遮ってそう言った彼に、星は再び尋ねるが、彼はニヤツと不気味な微笑みで返される。

それを見た星は戦うしかないと覚悟を決めたのか、剣を構え直し告げた。

「……なら、私はあなたを殺します！」

「そうか、なら僕も本気で相手をさせてもらおうよ。イヴ……」

彼はコマンドを操作し目の前に出た剣を取ると、星に向かって突き付ける。星もまた、エクスカリバーを彼の方に向けてと勢い良く走り出す。

つと星が向かってくるのを見て、ニヤリと口元に笑みを浮かべた。

それに気付いた星は何かを察した様子で急に左に跳んだ。その後、地面に魔法陣が描かれ赤い光を放つと、四角い檻が姿を現した。

もし星が真っ直ぐに彼に向かっていけば、間違いなくその檻に捕らわれていただろう。だが、以前エリエと敵に追われ、始まりの街のサラザの店の前で表れた壁の出現は、今のよりも大分遅かったはずだ——。

まあ、マッドサイエンティストの彼も一人の科学者ということだ。

問題になる欠点を消し魔法陣にも改良を行ったということだろう。

しかし、これは星にとっては嬉しくない。戦闘経験を多少なりと積んだと言え、エミル達のステータスを吸収して高速で移動する今の星では、この狭いラボの中を動き回るのは難しい。その上、地面から自分を捕らえようと出てくる檻にまで気を付けなければならぬとなると至難の業だ。

星は地面から出てくる檻をかわしながら男との距離を徐々に詰めと、攻撃圏内に入った直後に地面を蹴って一気に距離を縮めて彼の体に剣を突き刺す。

男の腹部に深々と突き刺さった刃に、彼が悲鳴を上げると頭上に表情されているHPバーが大きく減少する。

そして彼のHPが一割を切ったところで倒れている彼の体から剣

を引き抜き、止めとばかりに星は剣を振り上げた。

「……これで最後です……」

虚ろな瞳と感情を消した声で言い放った星は、振り上げた剣を男に向かつて振り下ろす。

——うわああああああああああああああああああッ!!

情けない悲鳴が部屋全体に響き、彼の手前で振り下ろされた剣が止まった。

虚ろだった星の瞳には光が戻り、目の前で小声で命乞いをする男に眉をひそめている。

本来、彼がやったことを考えれば情状酌量の余地はない。しかし、星は剣を捨てて情けなく命乞いをする彼の姿に剣を引いた。

「……もうしないと約束してくれるなら、命までは取りません。私達を現実世界に戻してくれませんか?」

「はい。命を助けてくれるのならなんでもいたします……だから、せめて命だけは……」

「……そうですか。分かりました」

星はホツとした様子で大きく息を吐くと、構えていた剣を下ろした。

だがその直後、星の手足に鎖が巻き付き、鎖によって勢い良く引つ張られた手足が無理矢理開かれ大の字に固定される。

口元に不敵な笑みを浮かべ、ゆっくりと立ち上がった男は勝ち誇った様に高笑いする。

「ふはっはっはっはっ! やはり僕を殺せなかつたねイヴ……だから言っただろ? 君は僕を殺せない——女ゆえのその甘さでね! 君は女に生まれた時点で僕に負けている……さあ、お仕置きだ……」

そう言つてパチンと彼が指を鳴らすと、星を拘束していた鎖に電流が流れた。

——きやああああああああああああああッ!!

全身を走る激しい電流に悲鳴を上げた星は、手に持っていたエクスカリバーを手放す。

しばらくして電流が止まり、星はだらんと首を下げる。男は地面に落ちたエクスカリバーを拾おうと近付いたものの、拾えないことが分かり舌打ちをして遠くに蹴り飛ばす。

地面を滑って部屋の端まで飛ばされたエクスカリバーに星が目を向ける。

直後。頬を男の手が撫でるが、そのエミルの手と違う男性特有のごつごつした感触に、星は不快感を露わにした。

「……旦那様に逆らったらダメじゃないかイヴ。君は僕だけを見ていればいい——そう言ったはずだよ?」

男に頬を撫でられながら、星は以前のフィリスと紅蓮の争いを思い出していた。

あの時、披露していた紅蓮を傷付けず剣を突き付けたフィリスに、その隙を突いて今度は紅蓮がフィリスの首筋に刃を押し当てたのだ。

星もあの時は優しさに付け込んだ紅蓮を卑怯だと感じたが、今の状況になって彼女の意図が分かった気がする。

おそらく。この場に紅蓮やエミルが——いや、他のプレイヤーであつても、この事件の元凶である彼に容赦しないだろう……。

(……これがエミルさん達なら、こんな状況にならかったのに……私だから、こんな……)

自分の甘さに憤り。泣きそうになるのを必死で抑え、自分の頬を撫でて満足そうな笑みを浮かべている男を睨み付けた。

その星の反抗的な顔が気に入らないのか、男はつまらなそうに眉をひそめた。

「おかしいね……先程の電流は君の全身の力を阻害する為に行つただけだね。まだ抵抗する意思があるとは、呆れるね……君もあの女と同じなのか、残念だよ。……再教育が必要な様だ——」

そう言つて彼が星の側を離れた直後に、再び指をぱちんと鳴らす。すると、星の体に先程よりも強い電流が流れて部屋中に星の悲鳴が響いた。

「——君は僕の為にだけ微笑むべきだ……知っているかい? アバターに強い電流を流すと、意識と精神保護の為に普段の戦闘による苦

痛よりも早く強制シャットダウンする。つまり気絶だね……」

悲鳴を上げる星を見つめて淡々と説明する彼だったが、その顔には不気味な笑みが漏れ出していた。

薄れゆく意識の中で、星は必死に抗いながらもこの拘束を解き、男を倒す方向を模索していたが、システムのプレイヤー保護機能には抗えずに眠る様に意識を失った。

男は気を失った星の頬を撫でニヤリと笑みを漏らす。

「痛みすらも電気信号だからね当然の事だ……もつとも、もう君には聞こえていないと思うけどね……おやすみイヴ。君が目覚めた頃には、この世界は崩壊している。そして僕と君だけの理想郷へと変わっているよ。フフフツ……ふははっはっはっはっ!!」

そう言つて星から離れた男はモニターに向かってキーボードを打つ。

* * *

決意の決戦

* * *

それから少し時間は遡る……………。

少女との戦闘を終え、気を失っていた星が重い瞼をゆっくりと開く。

まだはつきりとしらない視界で周囲を見渡すと、どうやらまだ森の中にいるということは分かった。

「……………そうか、私はお姉ちゃんに殺されなかったんだ……………」

そう小さく呟き、頭の中を整理するように再び瞼を閉じる。

さつきまでの戦いの様子やエミル。レイニールとのやり取りが鮮明に思い起こされ、自分がしなければいけない目的が、意志とともに明確なものへとなっていく。

だが、唯一の心残りはエミルとケンカ別れをしてしまったことだ——レイニールに渡した金色の玉を、エミルが受け取ってくれば自分の意思は伝わるだろうが。

しかし、同時にそれが星から彼女への最後の頼み事になるだろう。レイニールにも悲しい思いをさせてしまうかもしれないが、エミルがレイニールの魂である金色の玉を持つている限り、彼女の固有スキルのドラゴン達の様にとえ死んでも何度も蘇る。それによってレイニールが自分の後を追うことはできなくなる……………。

胸に手を当て、星が小声で自分に言い聞かせるように小さく呟く。

「……………これで良かったんだ。私があの人を倒せば、閉じ込められた人も助かるし、お姉ちゃんもお母さんもきつと……………」

もう戻るわけにもいかない。悲しい表情を見せる星は、金色の装飾が施された美しい剣であるエクスカリバーを見つめる。

亡くなった父親との最後の絆であり、ゲーム世界で唯一最強にして、戦闘経験もない星に今まで無理を何度も可能にさせてくれた愛剣である。

「——剣さん……………もう少し。もう一度だけ、私に力を貸して……………お父

さん。終わったら、私がお姉ちゃんの代わりにそっちにいくね……」
星にはもうひとつやらなければならぬことができた。それは亡くなったはずの姉に、リアルの自分の体を渡すことだ——自分が姉に生かされたというより、星の命を取れなかったのだろうということ。星は分かっていた。

相対した時、自分は剣を取れなかったが、それは相手も同じで致命打は受けなかった。

家族の情が邪魔をして、お互いに自分の意志を貫けない。でも、星が姉の立場なら命を奪われ居場所を奪われた姉の心情が痛いほど分かる。

実際に現実世界で星に居場所はなかった……あつたのは悲愴感と他者に劣っているという劣等感だけ。だからこそ、自分から退かなければならない。それをきつと現実世界で待つ母親も望んでいる事だ——。

今までの人生の記憶の中では、母親の笑顔を見た覚えはない。それはきつと自分が姉じゃなく劣化版だったからなのだろう。以前見た夢でも母親は楽しそうに父親、姉と笑っていた。

自分が生まれたことで歯車が狂ったのなら。目を覚ました時に、望まれていない自分ではなく姉が自分の体に入っていたらきつと喜ぶはずだと星は思った。

星はこの世界にきて生きている楽しさを知った。自分にはできないと思っていた友達——仲間にも出会えた。もし、この結末を予想して神様がこの優しい時間を用意してくれたのであれば、自分は皆の為に役目を果たす義務がある。

なにもないと思っていた空っぽだった自分のことを、剣聖と呼ばれ今は皆がその力に期待している。自分が死んでも残るものがたくさんある。それだけで恐怖も迷いもない。

「……行くよ」

剣の鞘を再び腰に差し、決意に満ちた瞳でマーカアの指し示す方向を向いて勢い良く地面を蹴って走り出す。

まだ効果が残っているのだろう。体は羽毛の様に軽く、足はバネの

様に地面を蹴り上げどんどん加速する。

すると、風が吹き荒れ周囲の草木がざわめき始めた。足を止めることなく星がちらつと後ろを振り返ると、そこには巨竜となったレイニールの姿が見えた。

星はマップ上に表示されているマーカーの所までくると、地面に魔法陣が表れ星の全身を包んだ。

(これがきつと最後になるから……)

直後。振り返って、急降下し星に近付いたレイニールとエミルにつこり微笑み、その口が『ありがとう』動き星の姿は消えた。

真つ白になる視界の中で、口元に笑みを浮かべる。星にとつては、最後に自分の口からエミルにお礼が言えたことが嬉しかった。

しばらくすると、真つ白の世界から視界が変わり。目の前に赤い壁に覆われたコンクリートで造られた様な部屋が表れ、その奥にはモニターと検査台のようなものが置かれている。

そこに白衣を着た狼の覆面を被った男が立っていた。星の方に近づいてきた彼は徐に両手を広げた。

「ようこそイヴ。私のラボに来てくれるのはこれで2回目かな？ いや、ここのラボは初めてだったね。君にはこれは必要ないな」

彼は頭に被っている狼の覆面を外すと、乱雑に投げ捨てる。

その顔は以前のままで、赤く短い髪にメガネを付けた中肉中背の男だ。だが、その瞳は狂気に満ちている。

彼はニヤリと不気味な笑みを浮かべると、両手を広げたまま星の方へと歩いてきた。そんな彼に向かって剣を引き抜いた星が、剣先を彼の顔に向けて睨み付けた。

少し驚いた様子で眉を動かした彼に、星が告げる。

「——あなたは約束を守らない……それにあなたは多くの人を殺しました。だから、私はあなたを倒さないとイケない。でも、最後に聞きます。降参して、私達を元の世界に帰してもらえるのなら——」

「——君の言葉には誤りがあるよ？ イヴ。君は僕が多くの人間を殺したと言ったが、君は僕を倒すのかい？ ……殺す。の間違いだろう？ それとも覚悟がないのかな？ 君は僕には絶対に勝てない。何

故なら——いや、今は止めておこう」

「……降参はしてくれないんですね？」

言葉を遮ってそう言った彼に、星は再び尋ねるが、彼はニヤツと不気味な微笑みで返される。

それを見た星は戦うしかないと覚悟を決めたのか、剣を構え直し告げた。

「……なら、私はあなたを殺します！」

「そうか、なら僕も本気で相手をさせてもらおうよ。イヴ……」

彼はコマンドを操作し目の前に出た剣を取ると、星に向かって突き付ける。星もまた、エクスカリバーを彼の方に向けてと勢い良く走り出す。

つと星が向かってくるのを見て、ニヤリと口元に笑みを浮かべた。

それに気付いた星は何かを察した様子で急に左に跳んだ。その後、地面に魔法陣が描かれ赤い光を放つと、四角い檻が姿を現した。

もし星が真っ直ぐに彼に向かっていけば、間違いなくその檻に捕らわれていただろう。だが、以前エリエと敵に追われ、始まりの街のサラザの店の前で表れた壁の出現は、今のよりも大分遅かったはずだ——。

まあ、マッドサイエンティストの彼も一人の科学者ということだ。

問題になる欠点を消し魔法陣にも改良を行ったということだろう。

しかし、これは星にとっては嬉しくない。戦闘経験を多少なりと積んだと言え、エミル達のステータスを吸収して高速で移動する今の星では、この狭いラボの中を動き回るのは難しい。その上、地面から自分を捕らえようと出てくる檻にまで気を付けなければならぬとなると至難の業だ。

星は地面から出てくる檻をかわしながら男との距離を徐々に詰めと、攻撃圏内に入った直後に地面を蹴って一気に距離を縮めて彼の体に剣を突き刺す。

男の腹部に深々と突き刺さった刃に、彼が悲鳴を上げると頭上に表情されているHPバーが大きく減少する。

そして彼のHPが一割を切ったところで倒れている彼の体から剣

を引き抜き、止めとばかりに星は剣を振り上げた。

「……これで最後です……」

虚ろな瞳と感情を消した声で言い放った星は、振り上げた剣を男に向かつて振り下ろす。

——うわああああああああああああああああああッ!!

情けない悲鳴が部屋全体に響き、彼の手前で振り下ろされた剣が止まった。

虚ろだった星の瞳には光が戻り、目の前で小声で命乞いをする男に眉をひそめている。

本来、彼がやったことを考えれば情状酌量の余地はない。しかし、星は剣を捨てて情けなく命乞いをする彼の姿に剣を引いた。

「……もうしないと約束してくれるなら、命までは取りません。私達を現実世界に戻してくれませんか?」

「はい。命を助けてくれるのならなんでもいたします……だから、せめて命だけは……」

「……そうですか。分かりました」

星はホツとした様子で大きく息を吐くと、構えていた剣を下ろした。

だがその直後、星の手足に鎖が巻き付き、鎖によって勢い良く引つ張られた手足が無理矢理開かれ大の字に固定される。

口元に不敵な笑みを浮かべ、ゆっくりと立ち上がった男は勝ち誇った様に高笑いする。

「ふはっはっはっはっ! やはり僕を殺せなかつたねイヴ……だから言っただろ? 君は僕を殺せない——女ゆえのその甘さでね! 君は女に生まれた時点で僕に負けている……さあ、お仕置きだ……」

そう言つてパチンと彼が指を鳴らすと、星を拘束していた鎖に電流が流れた。

——きやああああああああああああああッ!!

全身を走る激しい電流に悲鳴を上げた星は、手に持っていたエクスカリバーを手放す。

しばらくして電流が止まり、星はだらんと首を下げる。男は地面に落ちたエクスカリバーを拾おうと近付いたものの、拾えないことが分かり舌打ちをして遠くに蹴り飛ばす。

地面を滑って部屋の端まで飛ばされたエクスカリバーに星が目を向ける。

直後。頬を男の手が撫でるが、そのエミルの手と違う男性特有のごつごつした感触に、星は不快感を露わにした。

「……旦那様に逆らったらダメじゃないかイヴ。君は僕だけを見ていればいい——そう言ったはずだよ?」

男に頬を撫でられながら、星は以前のフィリスと紅蓮の争いを思い出していた。

あの時、披露していた紅蓮を傷付けず剣を突き付けたフィリスに、その隙を突いて今度は紅蓮がフィリスの首筋に刃を押し当てたのだ。

星もあの時は優しさに付け込んだ紅蓮を卑怯だと感じたが、今の状況になって彼女の意図が分かった気がする。

おそらく。この場に紅蓮やエミルが——いや、他のプレイヤーであつても、この事件の元凶である彼に容赦しないだろう……。

(……これがエミルさん達なら、こんな状況にならかったのに……私だから、こんな……)

自分の甘さに憤り。泣きそうになるのを必死で抑え、自分の頬を撫でて満足そうな笑みを浮かべている男を睨み付けた。

その星の反抗的な顔が気に入らないのか、男はつまらなそうに眉をひそめた。

「おかしいね……先程の電流は君の全身の力を阻害する為に行つただけだね。まだ抵抗する意思があるとは、呆れるね……君もあの女と同じなのか、残念だよ。……再教育が必要な様だ——」

そう言つて彼が星の側を離れた直後に、再び指をぱちんと鳴らす。すると、星の体に先程よりも強い電流が流れて部屋中に星の悲鳴が響いた。

「——君は僕の為にだけ微笑むべきだ……知っているかい? アバターに強い電流を流すと、意識と精神保護の為に普段の戦闘による苦

痛よりも早く強制シャットダウンする。つまり気絶だね……」

悲鳴を上げる星を見つめて淡々と説明する彼だったが、その顔には不気味な笑みが漏れ出していた。

薄れゆく意識の中で、星は必死に抗いながらもこの拘束を解き、男を倒す方向を模索していたが、システムのプレイヤー保護機能には抗えずに眠る様に意識を失った。

男は気を失った星の頬を撫でニヤリと笑みを漏らす。

「痛みすらも電気信号だからね当然の事だ……もつとも、もう君には聞こえていないと思うけどね……おやすみイヴ。君が目覚めた頃には、この世界は崩壊している。そして僕と君だけの理想郷へと変わっているよ。フッフツ……ふははっはっはっ!!」

そう言つて星から離れた男はモニターに向かってキーボードを打つ。

* * *

太陽を司る巨竜

魔法陣に消えた星を探し周囲を探索していたエミルとレイニールだったが、夜が明けたことでモンスターの襲撃を警戒して一度搜索を断念する。

エミル達がルシファーを含め数万のモンスターを狩り尽くしたのは間違いだが、それが狼の覆面の男の最終兵力だと断言するには性急過ぎると言わざるを得ない。

何度も通常ではありえない手で先手を打ってきた彼のことだ。まだ戦力を隠していると見るのが正しいだろうが、通常攻撃無効の効果が付与できるルシファーを軽々とエミルのリントヴルムZWEIに撃破させたことを考えると、それ以上の何かであるのは間違いないだろう。それが分からないうちは、少数で敵の居所を嗅ぎ回るのは危険な行為なのは、ベテランプレイヤーであるエミルならば重々分かっていることだ――。

太陽が昇る方向を向いて、エミルは悔しそうに唇を噛むと、小さなドラゴンの姿で星を探していたレイニールを呼び戻した。

「レイちゃん、太陽が出てきたわ。一度街に戻って応援を頼みましょう……」

「何故じゃ！　ここで主の姿が消えたということは、まだ近くにいる可能性が高いということなのじゃ！　なのに何故一度戻らなければならん！　我輩だけでも探すのじゃ!!」

エミルは納得できないと憤り、空中で地団駄を踏むレイニールを困り顔で見た。

この場に残つてすぐにもでも搜索したいのはエミルも同じだったが、広大な森の中をエミルとレイニールだけで探し回るのは効率が悪すぎる。しかも、まだ敵の動きが分からない以上、なにか起きる前に仲間達をまとめておいた方が今後の対応も迅速にできる。

相手は星を手に入れてまだ時間が経っていない。

つとということは、何を企んでいるのか分からないものの準備の為、ここから数時間くらいは時間が空くということでもある。まあ、星を

囿に使うようでエミルもあまり気乗りしないが、今はそれすら利用するしか方法はないだろう……。

「レイちゃん聞いて！ 私も早く星ちゃんを見つけない。でも、二人で探し回るにはこの森は広すぎるし、レイちゃんが巨大化するの相手を刺激して星ちゃんの身に危険が及ぶかもしれない。ここは街に戻ってエリーやイシエ達と合流した方がいい」

「しかし……」

不安そうに表情を曇らせ森の奥を見ているレイニール。

そんなレイニールにエミルは微笑んで言葉が続ける。

「大丈夫。エリー達が先に行って紅蓮さん達に状況を話しているはずよ。戻ればすぐにまた戻ってこれる……しかも、大勢連れてね！」

「うむ。なら早く戻るのじゃ！」

頷いたエミルは、コマンドからアイテム欄を開いて馬の形を模った笛を取り出し、それを鳴らすと目の前に馬が現れる。それに跨がったエミルはレイニールを肩に乗せ、街へと向かって勢い良く走り出した。

森を走っている中、肩に乗っていたレイニールが不思議そうに首を傾げながらエミルに尋ねる。

「どうしてドラゴンを召喚しないのだ？ こんな馬よりもドラゴンに乗ればひとつ飛びではないか」

「いいえ。さっきも言ったけど、少しでも相手を刺激したくないのよ。街から大勢で捜索に出れば、もう目をあざむくのは難しくなるけど。でも、それまでは少しでも時間を稼ぎたいの……」

「ふむ。そういうことか……」

納得した様子で頷いたレイニールに、エミルは微笑みを浮かべると更に馬を加速させて街へと急いだ――。

街に着いたエミル達はギルドホールへと戻った。日本の古城を模したその建物の中に入ると、中ではすでに大勢の者達でごった返していた。

それはもう、ありの這い出る隙間もないほどだ――レイニールが逸早く空中からその奥へと入ると、大勢の人集りの中からエリエの叫ぶ

声が聞こえてきた。

「エミル姉こっち！ こっちだよ〜！」

手を振っている様だが、エミルの方からは周りの人の頭と頭の間からかすかに指の先が見える程度で、それがエリエナのかそれとも他の誰かなのか認識することができない。すると、その声を聞いた周りの者達が一斉に入り口に立っていたエミルの方に視線を向ける。

エミルはその威圧感に、ただただたじろいでいると、その人混みを掻き分けて紅蓮がひよつこりと姿を現した。まあ、身長も低く子供くらいで身軽な紅蓮だからこそできるものだろう。

「話は聞きました。またあの少女が誘拐されたらしいですね」

「誘拐って……」

彼女の言葉はいささか物騒でそれはそれで物議を醸しそうだが、概ね合っているのでよしとしよう。

苦笑いを浮かべているエミルに、彼女は表情一つ変えずに首を傾げながらその顔を見上げている。だが、この状況はエミルにとって願ってもないことだ——もう人員は揃っていて、一声かければすぐにでも星の探索に出掛けられる。

だが、気掛かりなのは……この中でどれだけの者が星を搜索に協力してくれるかということだろう。

以前の始まりの街では、殆どのプレイヤー達が自分の身の安全を優先してマスターの奇襲作戦に協力してくれたのは、事前に打ち合わせしていた始まりの街の各ギルドメンバーと少数のプレイヤーしかいなかった。

まあ、こんな状況下であれば協力しなかった彼等を責められはしないが、その記憶がエミルの脳裏に焼き付いてしまった。それが疑心暗鬼となり目の前にいる千代のプレイヤー達を信じられなくさせていた。しかし、そんな彼女の不安はすぐに払拭されることになる。

集まったプレイヤーの一人が、エミルに向かって尋ねた。

「剣聖はどこで消えたのか教えてくれ！」

その声を皮切りに、その場に集まったプレイヤー達から次々に声が上がる。

「俺達も助けられてるだけじゃない！ 今度は俺達が剣聖を救うんだ！」「今なら戦える！ 剣聖を助け出して今度こそ一緒に戦うんだ！」「早く教えてくれ！ もう待てねえーよ！」

その皆の反応に驚いた様子で、エミルは目を丸く見開いて呆然としている。

隣に来た紅蓮がエミルに告げた。

「最後に彼女が居た場所だけ教えて下さい。後の事は我々に任せて下さい」

「そうだ。我々もこんな時くらいしか役に立ってん」

紅蓮のその言葉に賛同したのは漆黒の大剣を背中に付けたドラゴンの兜の男だった。

その横にいる三つ編みの少女もにつこりと笑ってエミルに向かって言った。

「私達は一緒に戦った仲間です。まあ、千代の戦いでは役には立ちませんでしたが、必ずあの女の子を見つけます！」

始まりの街を代表するギルドの一つメルキュールのダイロスとリアンが声を上げると、その後ろに居た者達も声を上げる。

「私達も忘れてもらっては困るわ！ この頃出番がなくて退屈だったのよね！」

「もうリカは……僕達も協力しますよ。皆もそうだよね！ 今までの借りを返そう！」

始まりの街のギルド、POWER, Sのリカとカムイのその言葉にギルドメンバー達も声を上げて応えた。こうなると、他の始まりの街のギルドも負けてられないと名乗りを上げる。

メンバー全員がスキンヘッドの坊主集団。始まりの街のギルド成仏善寺のギルドマスター、サブギルドマスターの無善、浄歳が手を胸の前で合わせ合掌したポーズのまま前が出る。

「我々も仏の導きに従い。善を成しましょうぞ！」

「何度も救われた恩を、ここで返しましょうぞ！」

そんな2人の言葉に後ろの者達も合掌して「恩を返し、善をなしましょうぞ」と声を揃えて一礼する。

その直後、ギルドマスター、サブギルドマスターを始まりの街の奇襲作戦でなくした始まりの街の武闘派ギルドLEOの代表2人も後ろに並ぶメンバー達に言った。

「野郎共！ リーダーが生きてたらこう言うはずだ！ 借りは死んでも返せ！ それが男の生き様だと！」

「お前等！ ギルドの名において、なんとしても儂等が誰よりも先に見つけるぞ!!」

ゲインとウオーニスが叫ぶと、後ろにいたギルドメンバー達も負けじと雄叫びを上げた。

彼等と同じくギルドマスターのツールを失い。デュラン達と街の生き残りと共に後から合流したギルドであり、始まりの街を最後まで防衛していたギルドでもあるエルフ専門ギルドのネオアーク。

「……我々も借りを返す」

「はい！ ギルドマスターが命がけで守ったあの子を救出しましょう！」

そんな彼等も Tool の補佐役で無口な革鎧に青い短髪で黄色い瞳のエルフ。ハイルの短い言葉に賛同して声を上げ、拳を突き上げるエルフ達。

そして言わずもがな、星に『剣聖』の二つ名を付けた千代の者達も、星の奪還に向けて熱意を燃やしていた。紅蓮もそれ以上は何も言うことなく、ただただエミルの返事を待っている。

「ありがとう。みんな……」

涙ぐむエミルは、その涙を振り切る様に腕を横に振り抜き力強く叫ぶ。

「私があの子の最後の場所に案内します！ 相手は人の命をなんとも思っていない狂人です。皆さん覚悟はいいですね！」

それに応えて力強く声を上げるのを見て嬉しそうに頷くと、エミルは「行きましょう！」と身を翻して外に出た。

外では影虎が多くの大型の飛竜を待機させていた。

「タクシーはいるか？ こいつの方が馬より速いぞ」

得意げにそう言った彼はニヤリと笑う。それを見たエミルもにっ

こりと微笑んで「当然タダよね？」と尋ねると、彼も「もちろん」と短く告げて手で飛竜の背へと導く。

その場にいた者達を出来る限り乗せて森に向けて飛び立った飛竜を追って、残りの者達も馬で森に向かって走り出す。

太陽を司る巨竜2

星を搜索する為に集まったのは数万人が、一斉に森に向かって大移動を始めると、少し遅れて街から更に数万人規模の漆黒の兵団が現れた。

その兵団の先頭には漆黒の重鎧を着た男と少女を乗せた馬が走っていて、むすつとした仏頂面の兄の後ろで、少女が満面の笑みを浮かべて手を振っていた。

森に着いたエミル達はすぐに辺りを隈なく搜索するが、何の手掛かりも掴めないうちにすでに数時間が経過した。

空と陸から数万人を動員して隈なく探しているが、文字通りに草の根を分けて森の中を駆け回っていてもそれらしい者も建物もない。定期的に湧いてくる森の中に生息するモンスターを狩るだけだ。

街から息巻いて出てきたものの、これでは皆の士気も下がってきてしまう。すぐには見つからないとは思っていたエミルも、空と陸から探して手掛かりがないと探す場所が間違っているか、地下にでも大規模な施設があるのではないかと考えてしまう。しかし、その考えは千代のプレイヤー達をまとめる紅蓮も思っているようだ――。

だが、この世界はゲームであり現実ではない。地面はある程度の深さはあるが、良くても20から30メートル程度で、それより先は土ではなく数字の羅列する虚無の空間。

とはいえ。そうしなければ、世界に広がる地表に広がる広大なフィールドを含め、多くのプレイヤーによって、データ量が膨大になり過ぎてサーバーを維持することができなくなる。

もちろん。それでは地下に入り組んだダンジョンなどは作れない。だからこそ、例外を設けている。その条件とは地表に建物があるか、地下に伸びる建物の直上に入出口を設置することだ。これにより限定的に地下の仕様が追加され、地下にも建物を伸ばすことが可能になるのだ。

だが、ここにはその建物も出入り口もない。つまり、エミルや紅蓮の考えていることは、何も発見できない時点で真つ向から否定されて

いることになるのである。

だとしても。この森以外に建物を隠すとすると、その難易度は格段に上がる。

千代に死霊系のモンスターが多いのはその土地にある。街の周囲は殆どが平地か、その他にも荒野が広がっている。

つまり、生命が生息できる環境にはかけ離れている。その為、地面から這い出てくるゾンビやスケルトンと言ったモンスターの巣窟になってしまっていた。そんな場所の地下に何かを造るなど、見つけて下さいと言っているようなものだろう。

エミルの側にきた紅蓮は、難しい表現をしながらエミルに告げた。

「こんなに探して手掛かりがないのも変ですが——気が付いていますか？ これだけの人員を動員していると言うのに、敵がなんの動きを見せないというのはおかしいとは思いませんか？」

「ええ、そうですね。やっぱり紅蓮さんもこの場所には敵の拠点がないと感じているんですね」

だが、そのエミルの言葉に紅蓮は首を横に振った。

「——違います。敵の拠点は間違いなく、この辺りにあるはずですが私が彼なら、近くに敵が現れれば撃退に全力を尽くす。それができないのは、単純に近くに敵の拠点があるからです。もしも、今撃退に部隊を出せば、こちらにその場所に入り口があると教えるようなものです。だから、私達がいなくなるのを待っているのでしょうか」

「確かに……でも、前みたいに魔法陣で召喚すれば……」

そのエミルの疑問に、紅蓮がすぐに答えた。

「そうですね。使えれば、使っているでしょう。ですが、私ならあの召喚用の魔法陣を自分の近くに出せるようには設定しません」

「どうして？」

彼女の言葉に不思議そうに首を傾げたエミル。

それを見て、紅蓮はため息混じりに言葉が続ける。

「自分の周囲に使用できると言うことはリスクになります。それはおそらく、あの魔法陣はモンスター専用の移動システムではない。だから、貴女の前で彼女も移動できた……つまりです。あの魔法陣はモン

スターを生み出しすものではなく、入って出るだけの簡単な転移システムなんですよ。おそらくは、私達でも誰でも使用できる——ただ、それには何らかの段取りが必要になる」

「ちよ、ちよつと待って！ それはずまり、あの男にしか使えない特別なシステムじゃないってこと!?!」

頷いた紅蓮はエミルの顔を見上げた。

「——プレイヤーには一人一人に個別判別にシリアルナンバーが設定されています。私なら01貴女なら02の様に、個人を個別に判別できるようになっていて、それが数百万人単位で決まっています。それはモンスターも同じなのです。ただ違うのは種族を問わず、数に応じてその数字がランダムで設定され、撃破されるとそのシリアルナンバーも消失します」

「——ッ!?!」

彼女の言葉を聞いて、何かに気が付いた様に目を見開いたエミル。そんな彼女の様子に紅蓮は満足そうに、口元に微かな笑みを浮かべた。

「そうか！ プレイヤーの判別は可能だとしても、ランダムでシステムが勝手にシリアルナンバーを設定し、その削除も行うモンスターの方が特定のモンスターだけをレポートさせるのは不可能って事ね！ だから紅蓮さん達は、魔法陣は特定の対象を選択していないと判断したのね」

「そうです。つまり、我々プレイヤーより複雑なナンバリングシステムを使用しているモンスターを転移させた時点で、あの魔法陣は特定の方法さえ分かれば誰でも使用できるものと判断できます。そして、今までの狼の覆面の彼は、そういう不安要素を片っ端から排除しているいわゆる完璧主義者です。そんな彼が相手に利用されるかもしれないシステムを、自身の周囲に使用できるようにしているはずがありません」

確かに紅蓮の言う通りかもしれない。このゲーム内に運営サイドのプレイヤーは、ライラなどがすでに確認されている。

しかし、それ以外が動いていないと考えるのは、不用心というもの

だろう。だが、もちろんそんなことを考えていない彼ではないのは今までの出来事を考えていれば良く分かる。

エミルも彼女の意見には納得しているのか深く頷いていると、そこに漆黒の馬に乗ったバロンとフィリスがやってきた。

前に乗っているバロンの表情は不機嫌そのものと言った感じで、それを一緒に乗っているフィリスがなだめているという様子だ。

エミル達が理由を聞くよりも早く、不機嫌そうなバロンが苛立ちながら紅蓮に告げる。

「早く周りの雑魚どもに、この場所から離れる様に指示を出せ！」

デュランの野郎が俺様に『死にたくなければ、この場所から早く離れた方がいい』なんてほざきやがった」

「それはどういう……」

エミルが聞き返そうとした直後、紅蓮が周囲のプレイヤーがざわめき出したのを見て素早く白雪を呼び付けて避難の指示を出すと、周囲のプレイヤー達に向けて声を大にして叫んだ。

「皆さん！ 各自の判断で撤退を開始して下さい！」

彼女の声に周りのプレイヤー達も『撤退』と叫んで異変に気付いていない者に知らせる。

地面がひび割れじわじわと盛り上がり、地面の中から巨大な何かの姿を現す。

赤い鎧の様な皮膚は、巨大な壁の様にプレイヤー達を寸断するが、まだ大部分が地面に隠れており全長を知るには全く足りない。

突如現れた物体に動揺しながら、影虎の出した飛竜や自身の召喚した馬で、素早く距離を取る。

こちら辺の対応力の高さは、さすがは高レベルプレイヤーの多い千代のプレイヤー達だ。始まりの街なら、殆どのプレイヤーが対応できずに、大半が撃破されてしまっていたに違いない。

すると、出現したその赤い鎧のような生物の皮膚から突如として炎が吹き上がった。火山の噴火の様に一気に燃え上がる炎のその物凄い勢いに、プレイヤー達は更に距離を取る。エミルや紅蓮はライトアーマードラゴンと雲に乗って、空中からその様子を固唾を呑んで見

守っている。

だが、出現した赤い鎧の様な皮膚から炎を噴き出した生物は活動を止めた。まるで山火事の様激しく燃え上がる炎に、その場にいたプレイヤー達もただその光景を見ているしかない。

しかし、その中で逸早く動いたのは紅蓮だった。雲に乗ってエミルの横に並んでいた紅蓮は、背中に背負っていた鞆から刀を抜き、辺りにいる者達に叫ぶ。

「敵が活動を停止している今が好機です。一気に畳み掛けましょう！」

彼女は知っていたのだろう。この姿を現したあの巨体と真つ向から戦って、自分達の出すであろう損害を。だからこそ、出てきた直後で活動が鈍い今が一番のチャンスであると……。

太陽を司る巨竜3

紅蓮の言葉に我を取り戻したプレイヤー達が声を上げ、一斉に攻撃を開始した。各ギルドのギルドマスター達が自分のギルドメンバーに指示を出し、我先にと切り込んでいく。

しかし、その皮膚からごうごうと吹き出す炎に、なかなか決定打を与えられない。いや、あまりにも巨大過ぎるその体にはダメージを与えられているのかさえ怪しいものだ。

エミルもリントヴルムを出して攻撃に参加する。地上ではデイベッドは武器スキルのアマテラス。

ミレイニはアレキサンダーの炎とギルガメシユの風を巻き起こす能力を合わせ、巨大な炎の渦を発生させて攻撃している。

三人が属性攻撃をしているのだが、それとは対照的にエリエは炎の勢いの合間を見極め、手数が多い攻撃を一瞬に叩き込む。

手数の多さと突きの正確さは、全プレイヤーの中でもエリエの右に出る者はいないだろう。何故なら、このゲームには現実世界での身体能力も大きく関係しているからだ――。

メルデイウスも炎の中に勇猛果敢に飛び込んだのは、ベルセルクを振り抜いて大きな爆発を起こして飛び出してくる。出た直後に小虎がヒールストーンでHPを回復して、全く躊躇なく炎の中に再び飛び込んで行く姿はまさに狂戦士そのものと言った感じだった。

「うおおおおおおおおおおおおおおおッ!!」

ギルドマスターの炎に飛び込み何度も攻撃する姿に、感化されたギルドの参謀的な存在の剛も地面に埋まっている岩を抱きかかえるようにして持ち上げた。

それを頭上に掲げると、勢い良く炎を纏う生物にぶん投げる。その巨大な岩石が直撃した直後、少し動いた気がする。

だが、それはおかしい。システム上では、その場に存在するオブジェクトは武器に使用してもそのダメージは最低値の『1』でしかなく、そのダメージはどんなに速度を上げても増えることはない。

しかし、それを可能にするのが彼の持つ固有スキル『怪力』である。

その能力はシンプルで、存在するオブジェクトを武器へと変質させる能力。その為、通常なら針で刺された程度のダメージしかないオブジェクトが強力な武器に変わる。

これと同じような効果を持つ、メルキュールのギルドマスターのダイロスが使う固有スキル『豪腕』の能力は似ているが同一ではない。剛の『怪力』がダメージが最低値のオブジェクトに使えるのとは違って、ダイロスの『豪腕』は武器の威力を一撃だけ強化するスキルなのだ。

そんな剛とメルディウスに触発され、ギルドのメンバーが次々に弓などの遠距離武器で攻撃する。しかし、その殆どが激しく燃え上がる炎に阻まれ、効果的なダメージを与えているような感じはない。

それはエルフであり、弓をメインとした戦闘を得意としているギルドのネオアークのメンバー達も同じで、弓を使う種族としての意地だろう。皆が構え照準を合わせると、同時に二本の矢を弓の弦に引っかけると勢い良く放った。

数千という矢が雨の様に降り注ぐが、一瞬にして炎に呑み込まれていく。

効果の出ない攻撃だとしても止めるわけにはいかない。何故なら、この敵が動かない状況で少しでも、謎のこの山のように不動にして燃え上がる生物の情報を仕入れなければいけない。だが、その頭上に赤く輝く膨大な量のHPバーが赤から動くことはない。

しかし、このHPシステムには欠陥がある。そのことは、高ランクのダンジョンに潜ってボスモンスターと対峙したことのある殆どのプレイヤーが知っている。

その欠陥とは、モンスターの頭上に上がっているHPの増減を示す色が緑、黄、赤というまるで信号機のようなシステムを採用していることだ——普通に考えれば特に問題はなさそうだが、問題は膨大過ぎるHPを表示するHPバーの最大値の長さが決まっているということにある。

それはゲージを削り切っても、また再び新たなHPバーへと移行するというだけで、その色も赤のゲージを減らし切ったからと言って次

に黄色が出てくるという生易しいものではない。

つまり、赤を減らし切っても再び赤のゲージが出現するということであり、それは黄色のゲージに突入しても同じである。

いつまで戦えばゲージをゼロにできるのか、それが明確に提示されないシステムであっては、プレイヤー達は息を吐く暇もない。だからこそ、この生物のHPに有効打を与えられる突破口を見つけておかなければならないのだ。

どうして、山の様に巨大で山火事のように全身から炎を噴き出している生物をモンスターと断言しないのか……それは、しないのではなくするわけにはいかないと断言した方がいいからだろう。先程から度重なる攻撃を与えても、そのHPバーはピクリとも動かない。つまり、その身には『1』のダメージも与えられていないことになる。

だが、それは同時にこの生物はモンスターではないとシステムが判断しているということでもあるのだ——もう分かっているだろうが、このゲームのシステム上。戦闘ダメージの最低値は『1』であり、それは道端に落ちている石ころを拾い上げて相手に投げつけた場合も変わらない。しかし、この生物に与えているダメージの総量は『0』なのだ。

もうこれはモンスターではなく、動くオブジェクトそのものと言った方が正しい代物である。ただ、さっきのメルデイウスもそうだが、皆炎に触れて大きなダメージを受けている。

これはオブジェクトにはできないものでもある。しかも、現在は体に纏っている炎だけで、実害は出ていない。それを踏まえて、この生物がモンスターなのか動くオブジェクトなのかを判断できずにいたのだ——。

エミル達がありとあらゆる手段で攻撃を行っても、全く効果がなくHPの減少もない。文字通りの梨のつぶて状態なわけだが、誰も弱音も出さずに無意味とも言える攻撃を繰り返していた。

皆口には出さないものの、この攻撃に意味を感じている者は確実に少なくはなっているのだろう。そんな時、再び地面が大きく揺れ始め、攻撃していたプレイヤー達は一斉に距離を取った。

大きな爆発音と地響き、そしてひび割れが大きくなっていく様子に動揺するプレイヤー達の声が辺りに響き渡る。

リントブルムの背で上空から見ていたエミルは、地中から出てきた巨大な尻尾に思わず言葉を失う……。

「なっ……なんて巨大な尻尾なの……」

長く伸びるその尻尾は生き物の尾と言うには長くて太い。まるで、何千年も生きた大木か、都会の道路のように幅が広くその先が見えないほどだ。すると、その地中から飛び出した尻尾からも炎が煌々と燃え上がった。

そのにわかには信じ難い光景に、目を丸くしながら眺めていたエミルの側に、戦闘に参加していたレイニールがやってきて、その巨竜の姿からぬいぐるみのような愛らしいいつもの姿に戻る。

しかし、その表情には焦りの色は隠せない。普段のレイニールからは想像もできないような余裕のないその表情に、エミルも思わず顔を強張らせた。

「あれはいけないのじゃ！ 通りであの天使を使わないはずじゃ……あの者はやってはいけない禁忌を犯した!!」

顔の近くまで来て大声で叫ぶレイニールに向かって、エミルも神妙な面持ちで尋ね返す。

「……やってはいけない禁忌？」

「そうじゃ！ あやつは太陽を司る善なる龍を蘇らせた！ 我輩と遂になるように創造されたが、奴は我輩よりも更に強力なスキルを持つ。その巨体は山を越え、吐き出される炎は天を覆う……その戦力は一国の軍隊にも匹敵する！ この世界の終末を止める為に造られた。たった一つの神への対抗策——それを敵に回すということは、言ってしまうと神を敵に回したと同義なのじゃ！ 奴への対抗策は唯一つ逃げることだけじゃ!!」

今までのレイニールからは想像もできない『逃げる』という弱気な発言。だが、その意味をエミルはすぐに知ることになる……。

聞き返そうとエミルが口を開いた直後、会話を遮るには十分過ぎるほどの爆音が辺りにこだました。

——グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオツ!!!

今までに聞いたことのないほどの音圧と衝撃波にエミルの乗って
いたリントヴルムが大きく揺れ、近くにいたレイニールは吹き飛ばさ
れた。

鼓膜が破れかという凄まじい音に、キーンと耳鳴りしたままの頭を
左右に振ってそれを振り払うと、エミルが音の鳴った方を見た。

そこにあつたのは赤い鱗に覆われたドラゴンの頭だった。いや、頭
なんてレベルのものではない。その頭の部分だけでもリントヴルム
よりも遥かに大きい。

うっかり口元なんかに近付いた時には、バツクリと一飲みにされて
しまうだろう。あまりにも巨大なその全長を目の当たりにして、エミ
ルは言葉を失っていた。

それは他のプレイヤー達も同じで、皆手の打ちようもなく、ただた
だそのドラゴンを見上げるばかりだった。

太陽を司る巨竜4

っと、咆哮で吹き飛ばされたレイニールが巨竜の姿に変わっていた。

さすがにあの音響兵器とも等しい破壊力を持つ咆哮を上げられては、小さなドラゴンの姿では太刀打ちできないと判断したのだろう。咆哮を上げていた巨大なドラゴンが、その視線を正面に向けると大きく口を開く。その口の中が炎で満たされる。

直後。巨竜の姿のレイニールが慌てた様子で周囲に叫ぶ。

「……お前達、逃げろ!!」

その場に集まっていたプレイヤー達は空中にいる黄金の巨竜の声を聞いて、慌てて更に赤い鱗のドラゴンから距離を取った。

すると、その直後に口の中に含んでいた炎が口の中に空気とともに吸い込まれ、代わりに赤い熱線が吐き出される。

赤い鱗のドラゴンの口から真つ直ぐに放たれた熱線は、地面を刮り一瞬で焦土と化しながら突き進み地平線の彼方まで貫く。

大気に轟く衝撃波が減って少しずつ威力が弱まり熱線の勢いが収まると、ドラゴンは口の中にわずかに残った炎を拭うように首を振ると、空に向かって咆哮を上げた。

再び襲ってきた衝撃波に皆耳を押さええて耐えると、その青い瞳がギリとレイニールの方を向いた。

「……ラー」

その瞳を鋭く睨みつけ、焦土と化された真つ赤にただれた地面を見てレイニールは憤った様子で、そのドラゴンの鼻先に飛んでいく。

ドラゴンの視線はレイニールから離れることなく、目の前にきたレイニールをその大きな瞳が捉えていた。

その視線を受けても物怖じせずにレイニールが叫ぶ。

「お前がどうしてここにいるのだ! お前はゲームマスターの許可がなければ動けないはず! それがどうして……」

すると、ドラゴンは再び口を大きく開いて口腔内に炎を溜めた。

「……お前は誰だ? ラーではないのだ! 我輩と同じく誇り高いあ

「いつがこんなことをするはずがない！」

訝しげに睨むレイニールの言葉を無視するように、口の中の炎が更に溜まり、それが一気に喉の奥へと吸い込まれた。

次の瞬間、レイニールに向けて放たれた熱線がその体を包む。

「——ッ!? レイちゃん!!」

エミルが叫ぶが、巨大な赤い熱線の中に呑み込まれてしまったレイニールの姿は確認できない。

つとその時、熱線の中に呑み込まれたレイニールのいた場所が金色に輝き出した。

徐々に大きくなるその光は、ドラゴンの吐き出す熱線を弾き飛ばしている。

次第に勢いが弱まるその熱線の威力と同じくして、熱線に覆われていたレイニールの姿がくつきりと出てくる。

「どうやら、我輩にお前の炎が効果ないことすら忘れていたようだな……お返しだ!!」

そう言った直後、今度はレイニールの方が口いっぱい炎を溜め込む。そして、それを開けたままになっているドラゴンの口の中に目掛けて一気に吐き出した。

ドラゴンは苦しそうに巨大な頭を上下左右に激しく揺らすと、再び口から熱線を吹き出し空に向かって放つ。

茜色に輝く空を真っ赤な熱線が駆け上がり、雲を真っ二つに切り裂く。

直後。ドラゴンの体から噴き出していた炎が集まり巨大な炎の翼を作る。

その翼をはためかせると、周囲に炎と熱風を撒き散らしながら、全長5kmはあるのかという巨体がゆっくりと浮かび上がり、レイニールの吐く炎から逃れる様に空に舞い上がる。

地面にいるプレイヤー達はその炎の翼から漏れ出す火と熱風によって、ダメージを受けていた。

上空に逃げようとするドラゴンを追って地上付近で止まっていたレイニールが翼をはためかせると、地響きと共に地面から巨大な手が

伸びてレイニールの両足を掴む。

「——なんだと?！」

レイニールが地面を見ると、地中から顔を出した巨人が咆哮を上げる。すると、その咆哮によって周囲の地面にクレーターができ、地面に埋もれていた巨人の姿が露わになった。

胸に大きなライオンの顔のような装飾が施された黄金の鎧を着た屈強な男の姿、そして腰には剣を背中には盾を装備している。その巨体はレイニールよりも更に大きく、ゆうに100mはあるだろうか。

突如現れたその巨人に、レイニールは憤りを隠せない表情で鋭く睨みを利かせている。

「……貴様。我輩の邪魔をしようと言うのか? この使い魔風情が調子に乗るなよ!」

自分の足を持った巨人にレイニールが炎を浴びせると、巨人はその炎を纏ったまま飛び立とうとするレイニールを腕力に物を言わせて地面に叩きつけた。

木々を薙ぎ倒し周囲に土煙を上げながら、背中から激しく地面に叩きつけられたレイニールだったが、それでも炎を吐くの止めない。ここまでくると、その執念の凄まじさに感服するばかりだ……。

向かい合ったまま近距離でレイニールの炎を受けた巨人は堪らずレイニール右足から左手を放すと、背中に背負っていた盾でレイニールの口から吐かれていた炎を防ぐ。

徐々に上にいく炎を追って盾で顔を防いだ直後、それを待っていたと言わんばかりに、レイニールの体が金色に光って巨人の眼の前から一瞬レイニールの姿が消えた。

もちろん。消えたわけではなく、ただ小さなドラゴンの状態に変化しただけだ。

「我輩から一瞬でも目を離したお前の負けじゃ!!」

巨人の手を逃れたレイニールは空中で回転して体勢を立て直すと、再びその体を輝かせ巨竜の姿に戻って目標を失って動揺した様子の巨人に体を打ち付け、その巨体を地面に押し倒して今度はレイニールの方が巨人を押さえ込む。

レイニールに押さえ込まれた巨人が暴れる度に、レイニールが拳で殴り付けて黙らせる。

だが、巨大なドラゴンと巨人が暴れ回っていれば、周囲にいたプレイヤー達は逃げ惑うしか方法などない。

地面を逃げ惑うプレイヤー達を見て、レイニールは対峙している巨人の体をがっしりと掴むと、翼を激しく動かして空中に舞い上がる。レイニールはこのまま戦っていたら、プレイヤーの中から犠牲を出すと分かっていたのだろう。そして、それは主である星が最も嫌がることであるのも同時に知っていた。だからこそ、このままこの場所で戦うよりも、この場を離れて戦った方が得策だと判断したのだ——。そして空中にいるリントヴルムの背に乗ったエミルに叫ぶ。

「エミル！ あやつがここに現れたということは、必ず近くに主がいるはず——主を探せ！ おそらく、奴を倒すにはゲームマスター権限を持った主が必要なはずじゃ！ それでは頼んだぞ!!」

頷くエミルの顔を見たレイニールは持ち上げた巨人を抱えたまま、その場を離れていった。

その後ろ姿を見送ったエミルは、すぐに地上にいる紅蓮達に向かって告げる。

「この場所に星ちゃんが必要なのは必ずです。彼女でなければ——剣聖の力を使わなければ、あのドラゴンを止めることができません。全力であの子を探して下さい!」

「しかし、あれほど探していなかったということは、探すのには少し時間が掛かりますよ？ それまで、あの上空のドラゴンが黙っていてくれるとは思えません」

紅蓮はエミルの言葉を聞いて、そう冷静に言葉を返した。

確かに彼女の言う通りだ。さつきまで、千代のプレイヤーを挙げて全力で星を搜索していたのだ。それでも見つからなかった星を、この数キロにも渡るほどの巨体を持ったドラゴンを上空に放置して搜索することなどできない。

だが、そんな彼女に向かってエミルは微かな笑みを浮かべると。

「——私が時間を稼ぎます。命に代えても……」

「それは賛同しかねます。時間稼ぎをするなら、貴女よりも私の方が適任です……私の不死の能力をお忘れですか？」

まあ、紅蓮ならば味方が危険に晒されると知れば、そう出てくることは分かっていた。

紅蓮の固有スキル『イモータル』はダメージが致死量に達しても、自動的にそれを感知してMAXまで回復する。

痛覚はカットできないが、それでも撃破されないということはゲーム世界では最大のアドバンテージと言える。

だが、それは有利に働くのは実力がきつこうしている相手の場合だ——それが己との実力差に幅が広がれば広がるほど、顕著に出てくる。

これがモニターなどでするゲームならば関係ない。問題なのはこのゲームには『痛覚』が存在するということだ。

本来は痛覚が一定値を超えれば気絶し強制ログアウトとなり、アバターも近くの街に戻る。しかし、外部との接続を切られている今の状況では、その全ての機能が作動しない。

つまり、ボス級の敵を痛覚レベルを軽減されているとはいえ、死に匹敵する苦痛を受けながら相手の攻撃をエンドレスで受け続けるというわけだ。

いくらゲーム世界であり、初期の身体能力やステータスなどが均等なアバターを使用しているとはいえ。その容姿は現実世界に依存するものだ——紅蓮のその小学生の様な華奢な体にいつ終わるか分からない苦痛を与えることはできない。

本人がいくらエミルよりも年上だと言っているとしても、それはあくまで自己申告によるものであり。その真相はリアルの彼女に直接会ってみなければ分からないのだ。

自分が囚役をやるを買って出た紅蓮に向かって、エミルは首を横に振った。

太陽を司る巨竜5

「それはできないわ。紅蓮さんの攻撃は手数で多さで圧倒する。言うなれば、ゲームシステムの最低値ダメージを利用した戦闘方法で、一撃のダメージは私には遠く及ばない」

刀の柄に手を掛けて一気に不機嫌になった紅蓮の体を纏う雰囲気、エミルは両手を前に突き出して静止するよう促す。

「待って！ 挑発する気はないの。ただ、相性の問題を言っているの！」

「……相性？ なら、貴女は私よりもあのドラゴンと相性がいいと？」
「ええ、私のドラゴンは形態と武装を変えられる事ができる。最低値のダメージを与えることができない時点でイレギュラーよ。それにあのドラゴンの攻撃で紅蓮さんのスキルが発動しない可能性だってあるわ。それに、紅蓮さんはこの千代の街のプレイヤーを纏めるために必要な存在、失えば士気に関わる。でも私達は言うなれば、一兵士ではないわ。ここは私に任せて、必ず時間を稼いで見せる！」

エミルの力強い言葉に、紅蓮も渋々ながら刀の柄から手を放すとゆっくりと頷く。それにホツとしたのも束の間、紅蓮が再び口を開いた。

「ですが、私が無理だと感じたら貴女の意味には関係なく。私が出ますから覚悟して下さい」

その彼女の言葉に苦笑いを浮かべたエミルは「そうならないように頑張るわ」と答える。

すると、紅蓮はそんな彼女に神妙な面持ちで告げた。

「——無理そうなら、すぐに退いて下さい。約束ですよ？」
「はい」

彼女の言葉にエミルも真面目な顔で頷くと、紅蓮の元を後にした。次に向かったのは、予想外にも敬遠している影虎のところだった。

漆黒の巨竜ファールブルに乗った彼は、上空に舞い上がったまま止まっている赤い巨大なドラゴンを見つめ、呆然としている。まあ、それも彼に限った話ではなく。他のプレイヤー達も呆然と空を見上げ

ている。

だが、それは当然だ——飛行能力を持つ影虎でさえこの有様だ。それ以外のプレイヤー達には飛行する敵と戦う為の攻撃手段がない。しかも唯一の攻撃手段だった弓矢も歯が立たないとくれば、手の打ちようがない。そんな彼等にできるのは、ただただ空に浮かぶ巨大なドラゴンを見上げることしかできないのだ。

空に浮かぶ巨大なドラゴンを成す術なく呆然と見つめていた影虎は、近くにエミルが来たのを見て慌てて自信に満ち溢れた表情へと変えた。

いつも自信満々で強気な彼のことだ。エミルに弱気な姿を見せて、彼女に情けない男と思われるのを嫌ったのだろう……。

「おう、北条。どうした？」

「……その北条って言うの止めてくれない？ 私は伊勢！ まあ、いいわ……あなたのドラゴンを一時的に私に貸してくれない？」

エミルは影虎の乗っているファーブニルを指差しで言った。だが、それを聞いた影虎は驚き身を仰け反らせると、エミルに向かって叫んだ。

「なっ、なにを馬鹿なことを！ 俺のドラゴンの中でも最強のファーブニルを貸し出せだど!? そんな事できるわけがないだろうが！ あいつが見えないのか？ あんなデカブツを相手に、ファーブニルなしではなにもできない！」

「だからあれを倒すのに、私と同じ固有スキルを持つてるあなたのドラゴンが必要なのよ！」

しかし、納得できないという至誠を一貫して崩すつもりのない影虎は、エミルの申し出を断るようにそっぽを向いている。

そんな彼に、エミルは顔の前で手を合わせて頭を下げた。

「——お願い！ 私の持つているドラゴンじゃダメなの！ もう。あなたのドラゴンに懸けるしかないのよ……」

そう懇願したエミルは上目遣いに影虎を見ると、彼はそれを見て頬を赤らめてむすつと視線を逸しながら言った。

「……フン。好きにしろ！ だが、今回だけだからな！」

「ええ、分かったわ！　ありがとう。上杉君！」

「――上杉君はやめろ！　俺の事は……影虎と呼べ。え、愛海……」

恥ずかしそうに鼻の頭を搔いた影虎は、どきくきに紛れてエミルのリアルの名前を呼んだ。彼にエミルは少し嫌そうに眉を動かしたが、愛想笑いを浮かべて彼をリントヴルムに乗せる。すると、影虎はドラゴンを巻物の状態に戻して、その巻物をエミルに差し出す。

エミルはそれを受け取ると、影虎から受け取った巻物を空中に広げて縛っていた紐の先に付いた笛を鳴らした。その直後、エミルのリントヴルムの右に、漆黒の鱗を身に纏ったドラゴンが現れる。

二体のドラゴンが互いに咆哮を上げると、エミルは首に下げていた赤、青、黄の三色の捻れた笛取り出し、隣にいた影虎の顔を見て無言のまま互いに頷いた。

覚悟を決めた様な表情で握っていた笛を吹くと、二体の間にブラックホールの様に渦巻く闇のワームホールが現れ、その中に二体のドラゴンが吸い込まれてしまう。

空中に放り出されたエミルと影虎だったが、影虎が素早くワイバーンを召喚して事なきを得た。だが、現れたワームホールは一瞬の内に集束して消えてしまった……。

「……え？」

さすがにこれには、エミルも影虎もびつくりした様子で目を見開いたまま呆然としている。

まあ、無理はない。リントヴルムとファープニルは、2人にとって最大戦力のドラゴンなのだ。それを一度に失えば、それは言葉も出なくなるというものだろう……。

呆然と消えた二体のいた場所を見ていた影虎がハツとしたように我に変えると、隣にいるエミルに向かって叫んだ。

「おい！　どういうことだ！　合体したら強くなるって言ったじゃないのか!？」

「私だって知らないわよ！　まだ謎の多いアイテムだし、私だって全部を把握しているわけじゃないのよ！」

「どうしてそんな危険なアイテムをホイホイと使ってるんだ！ だいたい効果も分からない道具を普通は使うか!? これだからお前の一族は……常識がなさすぎるだろ!!」

彼の『常識がない』という言葉に、エミルの我慢が爆発する。

俯いている彼女は全身を小刻みに震わせながら拳を握り締めて言った。

「……常識がないですって？ 中学の時から、私のストーリーカーをしている。あ・な・た！ に言われたくないわよ!! だいたい。私だけが悪いって言うの!? 私のドラゴン達だけなら普段はちゃんとしてきてるんだから、原因はあなたのドラゴンの方にあるんじゃないの!？」
詰め寄った彼女は影虎の顔に指を差しながら強い口調で言うと、彼もそれに反論した様に言い返す。

「なんだと!? ドラゴンを貸してくれって泣きながら言うから貸してやったというのに、なんだその口の利き方は!!」

「貸してとは言ったけど、泣きながらは言っていないわ!! いつどこで私が泣いて頼んだって言うの!? あなたのその目は節穴ね!!」

そう叫んだエミルに、我慢の限界と言った様子の影虎は腰に差していた刀に震えた手を乗せた。

その直後、彼の体から凄まじいほどの殺気が湧き上がる。

「……この。やはりお前とは、刀を交えて決めるしか方法はないようだな!!」

「……ええ、こっちだって望むところよ。この機会に厄介払いして上げる!!」

エミルも左右の腰に差した剣の柄に手を掛けると、全身から殺気を滲ませながら鋭い眼光を放って影虎を睨み付けていた。

険悪なムードが漂う中。突如として、消失したはずのワームホールが出現する。向かい合って殺気を放っていた2人は、それに気が付き空中に現れた闇の空間を見つめている。

太陽を司る巨竜6

ワームホールの中から黒い棺の様なものが出てきた。しかし、その大きさはとても巨大で、棺というよりも巨大な船と言った方がしっくりくるかもしれない。

表面に十字架の飾りを付けたその黒い棺がゆっくりと起き上がりギギギツと音を立てながら開くと、中からは大きな十字架が出てきた。

その十字架は鎖で羽交い締めになされており、出てきた十字架がゆっくりと反転すると、そこには漆黒の竜人が張り付けられていた。

漆黒の鱗に覆われたその体の胸元には巨大なドラゴンの顔が付いており。両肩には鋭利に飛び出した角が付いていて、体のあちこちらも同じように角が突き出していて、細いそのボディーとは裏腹にゴツゴツとした印象を受ける。

頭部には悪魔を彷彿とさせる角が付いていて、その顔にも魚のヒレの様な突起物が複数付いている。

漆黒の龍神は鎖で体を縛り付けられたを捻り、全身を拘束している鎖を強引に引き千切って咆哮を上げる。

——ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!

耳を貫くような甲高い咆哮が辺りに響き渡り大気を震わせ、地上にいたプレイヤー達も突如現れた悪魔の様な漆黒の龍神に怯えた表情を向けていた。

だが、それも当然のことだ——悪魔の化身としか思えないマントの様に広げた大きな翼の外は黒と内は赤のコントラスト。全身漆黒の鱗で覆われ、至る場所に突起物のある体に顔。そして、その顔には血を彷彿とさせる真紅に光る瞳に、口から吐かれる真っ白な息が黒い体に重なってはつきりと見える。

翼を広げたその漆黒の龍神の大きさは、元々のリントヴルムの大きさを遥かに超えていて、巨竜状態のレイニールよりも大きい。見た感じ100m以上はあるだろう……。

だが、それだけの大きさを持つてしても、空中にいる赤い鱗を持つた巨竜とは圧倒的な体格差がある。例えるならば、象にゴウモリが挑むようなものであり、その圧倒的な体格差を覆すほどの武装を持つているようには、現れた漆黒の龍神を見ている限りでは見えない。

エミルはコマンドを表示すると、まずはその漆黒の龍神の名前を確認する。名前を見ると、その項目には『リントヴルムNEXT ザ・デストロイヤー』と記載されている。

武装に置いては本来ならば、別のウインドウに武装用のドラゴンの名前と武器の種類がドラゴンの形をした各部位に表示されるのだが、そこには右手と胸の辺りに武装とその名前が表示されている。胸元の武装には『ドラゴニックバースト』と表示されていた。

エミルは胸のところを押すと、漆黒の龍神が再び大きく咆哮を上げて、その体をドラゴンの方へと向ける。

その直後、ドラゴンの方に向けていた胸元に付いたドラゴンの口が起き上がり、胸のそのドラゴンの口が大きく開く。

胸元のドラゴンのその口の中に、漆黒の炎を溜め込みそれが一気に引き込まれ先程の赤い鱗のドラゴンから吐き出された熱線の様に一本の線になって撃ち出された。

一直線に飛んでいった熱線は、燃え盛るドラゴンの体に直撃する。すると、ドラゴンの皮膚に線が走った。

今まで全くと言っていいほどにダメージを与えることができなかったそのHPバーがわずかだが減少していた。それを見て、エミルも影虎も驚いている。

当然だ。今まで数万単位の戦力を持つて全力で攻撃をして、その身に傷一つ付けることができなかった。

そんな撃破方法もないかと思っていたドラゴンに、わずかだが傷を負わせることに成功したのだ——それは攻撃していれば撃破できるということだ。これが分かっただけで、一発逆転は無理でも大きな進歩と言えるだろう。

そう。今まではできなかつたが、リントヴルムとファープニルを組み合わせたこの漆黒の龍神ならば、撃破できるかもしれない。

「——フルコントロール!!」

エミルは隣にいた影虎に「私の体を頼んだわよ」とだけ言い残し、その場に立ち尽くしたまま動かなくなった。

訳の分からない影虎が彼女に話しかけようがその体を揺らそうか、エミルから反応が返ってくることはない。

まるで魂の抜け殻と化した彼女を見守っている。というよりも、その視線はエミルの着ている白銀の鎧の中に覆い隠されている胸へと向いていた。

まあ、異性とワイバーンの背中に二人きりというのは、どうしても意識せざる得ない。それが意中の相手ならば尚更だ——。

普段は意識していなかったが、エミルの胸は装備越しとはいえ、なかなかポリユームがある。

男ならば誰でも、目の一番近くに入るその膨らみに興味を示さない者などいないはずだ。

つと影虎は殺気を感じてその方を見ると、地上にいたイシエルが微笑みを浮かべ、弓を引き絞っているのが見えて血の気がサーつと引いた影虎はエミルの胸に視線を合わせるのを止めた。

すると、エミルが右手を大きく横に振り上げる。それと相応して漆黒の龍神も右手を振り抜くと漆黒の闇が現れ、その中から巨大な剣が出現する。

その柄を掴むと、龍神は闇の中から勢い良く引き抜いた。その漆黒の大剣の先をドラゴンに向け、翼をはためかせ襲い掛かった。

それには今まで止まったまま、全く攻撃の意思を示さなかった赤い鱗のドラゴンも、ダメージを受けたことで遊撃の意思を示す様に体を覆う炎が増す。

その炎から出た火がまるで火山の噴火の様に地面に落ちて、地上にいたプレイヤー達は慌てて距離を取る。

だが、遠くではレイニールと巨人がまだ戦闘を続けている。今はまだレイニールが圧倒しているが、それがいつまで続くかは分からない。

もしも、レイニールが負けることになれば、エミルの出した漆

黒の龍神。リントヴルムNEXTザ・デストロイヤーは巨人とドラゴンに挟まれることになる。そうなれば、勝利するのはかなり難しくなるだろう……。

ここはなんとしても、エミルと漆黒の龍神に頑張ってもらおうしかない。大剣に漆黒のオーラを宿し、悪魔の化身の様な見た目のリントヴルムNEXTザ・デストロイヤーが、炎に包まれた赤い鱗の巨竜へと襲い掛かる。

空中で向かってくる尻尾の攻撃を避け、漆黒の龍神はドラゴンの左側へと斬り掛かった。

漆黒のオーラを纏った大剣の刃が、ドラゴンの体を纏う炎を退いてその赤い鱗の体に届くと、太陽の黒点の様に真っ黒くなり。そのまま、大剣が走るように線を付けながらリントヴルムNEXTザ・デストロイヤーが、ドラゴンの横を高速で通過する。

直後。そのHPバーが更に減少し、咆哮を上げたドラゴンのその青い瞳が悠々と空中に浮かんでいる漆黒の龍神を鋭く睨んでいた。

その視線を受けたリントヴルムNEXTザ・デストロイヤーも甲高い咆哮を上げて持っていた大剣を横に振り抜く。

その瞬間、首を最大まで伸ばして口の中に炎を溜めたドラゴンが、再び巨大な熱線を放ちながら体を入れ替え、剣の刃の様に熱線を放ちながら周囲のものをなぞ構うことなく。空中にいる漆黒の龍神だけを見て勢い良く振り抜いた。

だが、それは漆黒の龍神に当たることはなく、熱線から逃げる漆黒の龍神を執拗に追い回す。

しかし、逃げる方も必死だ——だが、それも当たり前なのだ。巨竜の放つ熱線の大きさは、リントヴルムNEXTザ・デストロイヤーの全長を遥かに超える大きさであり、もし掠っただけでもそのダメージは計り知れない。

とはいえ。幸いにドラゴンとのその違い過ぎる大きさのおかげで、破壊力は向こうの方があるが俊敏性ではリントヴルムNEXTザ・デストロイヤーの方が分がある。

たとえば象が如何に巨大とはいえ、周囲を飛び回る機敏なコウモリを

捉えるのはそれほど容易くはないのだ。

そしてその巨大な熱線といえ、無限に吐き出し続けることはできない。次第に勢いが弱まってきて熱線が細くなると、今まで一定の距離を取って逃げていた漆黒の龍神が大剣を構えながら、勢いの弱まる熱線の周囲を飛び回る様にして交わしつつ、直線的にドラゴンに向かっていく。

ドラゴンの口から出る熱線が切れた瞬間を見逃すことなく、その首筋に持っていた大剣の刃で斬りつけた。

太陽を司る巨竜7

苦しそうな咆哮を上げたドラゴンのHPが、今までの攻撃とは比べ物にならないほどにガクツと減った。

今までの戦闘で分かったのは、出現したドラゴンに有効打を与えるには闇属性系の攻撃で、しかも一定量以上のダメージを一度に与えなければならぬということだろう……。

どうして、一度に与えなければならぬかというのと、闇属性系の属性攻撃武器は数は少ないが、ゼロではないからだ——属性攻撃武器は基本的にトレジャーアイテムと呼ばれるレア度の高い特殊な装備にのみ付随する効果である。

始まりの街ならまだしも、ここ千代のプレイヤーのレベルは平均で80。それに対して始まりの街の平均レベルは40そこそこだった。MMORPGに限らず。他のゲームでもそうだが、プレイヤーのレベルが上がれば上がるほど受けられるクエスト、挑戦できるモンスターのレベルが増加する。それに伴って所有するアイテムのバリエーションも豊富になっていくのは当たり前のことだ。

つまり、平均レベル80前後のプレイヤーが数万人も集まれば、いくら希少価値な闇属性系武器と言えど、皆無とはならないわけだ。しかも、この巨大なドラゴンが現れる前は、攻略不可能とまで言われたルシファアの亜種とも言っているいい属性系以外の攻撃を受け付けられないモンスターを相手にしている。

その経験からプレイヤー達が通常攻撃が効果なければ、属性攻撃系の武器で攻撃するのは明らかだろう。しかも、空中に飛び立つ前の地面から若干姿を現した時に散々攻撃していた。

それでも、ダメージが入らなかつたことを考えれば……属性攻撃。しかも、リントヴルムやファープルなどの攻撃でもHPを削ることができなかつたとすれば、その原因は一つしかない。

属性系の攻撃の中でも限られたもので、しかも一度に大ダメージを与えられる攻撃以外は通用しない。だから、敵はわざわざマスターにだけ居場所を教え、障害に成り得る彼を先に撃破したのだろう。

彼の攻撃力はこのゲーム世界で最大と言ってもいい。それをこのドラゴンにぶつけければ、いくら山のように巨大なドラゴンであってもひとたまりもない。ゲームバランスを超えた攻撃力。そしてその攻撃力に不釣り合いなほどの驚異的な俊敏性は、対人戦闘ではなくモンスターとの戦闘で初めて遺憾なく発揮されるものだからだ。

人間であれば、同じプレイヤーを相手に全力では攻撃しきれない。それが痛みを伴うと分かっているつもりでも、尚の事だろう……。

意識的には全力でやっているつもりでも、脳のどこかで躊躇する。それがブレーキとなって、全力戦闘はできない。

例えるなら、目の前に人がいて全力で殴っていいと言われても躊躇してしまうのと同じだ。しかし、それがひとたびぬいぐるみなどに変われば、何の躊躇もなく全力で殴ることができるだろう……つまりはそういうことなのだ。

それは強者であればあるほど大きくなる。武術の達人が人を殴ることで快樂を得られる狂人ではない。中にはそんな者もいるかもしれないが、本来は技を極める内に精神も鍛えられるものであり。強者になればなるほど、理性的で感情的になりにくくなる。

感情に流され理性のたがが外れるのは、なんでも初心者から中級者の間で起こりやすい感情の一つと言えるだろう。武道に限らず。道を究めるということでは、今回のこの大規模な監禁事件の首謀者である狼の覆面の男もそうなのだろう。

組織である『シルバーウルフ』を名乗りつつ、公の場に姿を現す彼は、明らかに一人での行動が殆どだ——普通ならば理解できないことだが、彼が一人でこの事件を起こしたと言わざるを得ない。

だが、それだけの才能を持っていながらこれほどの凶悪事件を起こすのだから、間違いなく彼は狂人だろう。この【FREEDOM】というゲームのいいところは、どんな強力なモンスターであつても絶対に弱点と言えるウィークポイントがあることだ。

この巨大なドラゴンのウィークポイントは間違いなく闇属性攻撃に弱いことだろう……闇属性攻撃に長けているマスターを危険視しないわけがなく。そして、そんな彼が道は違えど、武道を極めている

マスターの本気を測る上で彼の戦闘データを取って、弱点を探っていたのは明らかだろう。そうでなければ、あのマスターが彼に負けるわけがない。

漆黒の龍神は炎の翼や尻尾、熱線で攻撃してくるドラゴンの応戦を巧みに交わしつつ、胸のドラゴンの口から放たれる熱線や、持っている大剣でその体に傷を刻んでいく。

敵に誤算があるとするならば、エミルがこれほどのドラゴンを有していたことを知らなかったことだろう……いや、認知はしていた。しかし、それはエミルのリントヴルムがダイヤモンドドラゴンがエミルを武闘大会で獲得した。世界に一つだけのオリジナルアイテムである『融合の笛』によって生み出したもう一つの姿。白銀の龍神であるリントヴルムZWEIの方だけだ。

まさか、リントヴルムクラスの他のドラゴンとの融合など想定もしていなかっただろう。しかし、以前のエミルと影虎の様子を知っている覆面の男は、まさか影虎がエミルにドラゴンを貸し与えるとは考えなかったのだろう……それは当然だ。エミルに取ってリントヴルムが最大戦力のように、影虎に取ってはファールブルが最大戦力なのだ。そんな二体のドラゴンがまさか合わさり、しかも最悪の相性のドラゴンに生まれ変わるとは思わなかったのだ。

だが、脅威が出現したとしても。用意周到な彼が、これで諦めるとは思えない……。

エミルのリントヴルムNEXTザ・デストロイヤーの攻撃によって、最初のHPバーが尽きたまさにその瞬間、赤い鱗の巨竜が物凄い咆哮を上げた。

すると、地面が激しく揺れて地割れが起こり、地面のあちこちから突如赤い火柱が上がった。

その全てがバラバラではなく、空中に浮遊するドラゴンを取り巻くように噴き上がり、火花となって地面に舞い降りる。地面に落ちた炎は炎上を続け、その中から次々にジャツカルの顔をしたアヌビスの兵士達が現れた。

手には黄金の武器を持ち。その体には黄金の装飾が施されており、

皮膚は黒く鎧などの防具は装備していない。しかし、その手には例外なく槍が装備されており。近距離戦ではなく中距離戦が得意な武器を装備していることで、近接戦においてのアドバンテージを多く持っていることは分かる。

誰しもが一度は聞いたことがあるだろうが『刀を持つ者が槍を持つ者に勝つには、その3倍の技量が必要である。』という話である。

槍は攻撃範囲は勿論。突き、叩く、投げるの攻撃方法がある。特に叩くというのは優秀で、これは近距離戦に置いて重い鎧を装備する者の宿命とも言える欠点が重量であり、そのせいでちよつとした衝撃でもバランスを崩しやすい。

つまり、頭でも叩かれた日には、一時的な脳震盪によつて一瞬で呆気なく倒れてしまうのだ。しかし、それは現実世界の話だ——確かにゲーム内での脳震盪などは発生しない。だが、ダメージよるめまいなどの症状はある。そして、槍の圧倒的な攻撃範囲に剣では手も足も出ないというのが正直なところだ。

これがPVP——つまり対人戦ならば、リーチの差で剣の持ち主の攻撃力にアドバンテージが生まれる。しかし、その公平を期する為のシステムもモンスターとの戦闘では発生しない。

そして厄介なのはそんな槍兵が数千……いや、数万単位で現れたということだろう。しかも、それだけではなく、武装した二頭の馬に荷車を引かせた古代戦車『チャリオット』に乗った普通の兵士の2倍から3倍の体を持ち、その身には黄金の装飾が施された漆黒の強固な鎧を纏った屈強なアヌビスも混ざっている。

太陽を司る巨竜 8

突如現れたアヌビスの兵士達に、地上にいたプレイヤー達は動揺する。まあ、地中から突然火柱が上がったかと思うと、目の前に敵兵が数万規模で現れば動揺するのは仕方がない。

そんな彼等に一齐にアヌビスの兵士達が襲い掛かる。

動揺し、先程の地中からの火柱の出現で完全に体制を失っている状態の彼等では、その攻勢に対応しきれない。見る見る内にアヌビスの軍勢に呑み込まれ、次々と撃破エフェクトである光の粒子となって空へと昇っていく。

ギルドのギルドマスター達も大声を上げて散り散りになった部隊を纏めようとしているが、敵の攻勢の激しさと辺りに武器を打ち鳴らす音と轟く悲鳴で数メートル先にも声が届かない状態だ――。

アヌビスの兵士達は撃破しても、再び炎と共に現れる上にチャリオットに乗った重鎧のアヌビスが弓を連続で放つ為、プレイヤー側の損害だけが大きくなっていく。

そんな絶望的な状況の中、突如として後方から数万の漆黒の騎馬隊が敵味方入り乱れる塊の中に突撃する。

「――たくっ……雑魚どもがッ!! 俺様が時間を稼いでやる。その間に体勢を立て直せ!!」

バロンの声が辺りに響くと、それが聞こえているのかいないのか分からないものの、漆黒の兵士達がアヌビスの兵士をじわじわと押し返すのを見て、プレイヤー達が後退を開始する。ギルドのある者達は己のギルドの方へ、ギルドに所属していないプレイヤー達はひとまず紅蓮の元へと駆け付ける。

どうして紅蓮かというと、一人だけ撃破されても無限に蘇るアヌビスの兵士を相手にガンガン前に出ていた。

相当敵軍の奥の方でメルディウスの持つベルセルクが起こす爆発音が聞こえてくる。まあ、紅蓮達も彼の居場所が分かるから放置しているのだろう。

だが、今まで巻き添えを避ける為に、後方に下がっていて颯爽と現

れたバロンの漆黒の兵士達だったが、不死と思われるアヌビス兵士達との戦闘で徐々にだが確実に数を減らしていた。

馬上でイライラしているバロンを見ていれば、あまり状況が芳しくないことは良く分かる。

そんな兄の姿を後ろに乗っている妹も察したのか、慰めながらポンポンと肩を叩いていた。だが、笑みは浮かべているものの、フィリスの表情もどことなく暗く見える。

まあ、無理もない。フィリスは星よりも戦闘経験が少なく、実践では全くと言っていいほど役には立たない。それを彼女が一番良く分かっているし、今も兄であるバロンと漆黒の軍団に守られているから平静を装っていられるが。そうでなければ、戦闘を放棄して泣き崩れているしかないのだ。

しかし、この状況を見ると、狼の覆面の男が空と陸の両方を攻撃の主軸にして戦略を組み立てていたということが良く分かる。しかも、ルシファールと村正を使った部隊よりも更に強力な軍団になっている。

陸は数万の不死の軍勢であるアヌビスの兵士達。そして空は数キロにも渡る巨体を持った赤い鱗を持つドラゴン。眷属であるアヌビス兵は不死であり、大本のドラゴンの方は撃破するのに一定値以上の閾属性攻撃しか受け付けない。

これでは空中に浮かぶ城の様に巨大なドラゴンを倒さなければ、地上のアヌビスの兵士達も消えないが、それができるのは今の段階ではエミルのリントヴルムと影虎のファーブニルが融合したリントヴルムNEXTザ・デストロイヤーだけなのだ――。

だが、その漆黒の龍神もドラゴンとの長時間の戦闘で確実に動きが悪くなってきた。

それも当然だ。攻撃されているだけで抵抗を全くしてこないというわけではない。むしろその逆だ――巨大な尻尾や熱線、そして皮膚から放つ火柱で近付こうとするリントヴルムNEXTザ・デストロイヤーを牽制し続けている。

しかし、漆黒の龍神の動きが悪くなっているのにはもう一つ理由が

ある。その理由とは、リントヴルムNEXTザ・デストロイヤーと一体化したエミルにある。

エミルは『フルコントロール』で召喚しているドラゴンと動きや神経などを完全にシンクロさせることができる。だが、飛行しながらの長時間の戦闘の経験がエミルには極端に少ない。しかも、普段は剣を主体に戦うエミルは、ドラゴンとシンクロさせるこのスキルを数回しか使ったことがないのも原因だ。

どうしてこの【FREEDOM】にはアバターを自由に変更する機能が付いていないのか……性別はいかがわしい目的で使用する場合があるから仕方ないにしても。身長、体型なども変更できないのには意味がある。

それは、脳の認識の違いにある。長い間の生活で培われた感覚は、そうそう変わるものではない。確かに意識すればその感覚のズレを修正することはできるだろう……。しかし、それは意識すればの話だ——戦闘になれば、どうしても無意識のうちの動作が多くなる。

今のエミルの状態は、言わば意識してその巨大な体格に感覚を合わせている状態である。しかも、今はエミルの操る漆黒の龍神だけが戦況を左右する切り札なのだ——。

赤いドラゴンの周囲を飛び回りながら攻撃の機会を窺っている。だが、敵の抵抗が激しくて最初の時ほど攻撃することができていない。いや、慎重になりすぎて攻撃できなくなっているという方が正しいかもしれない。

地面では、バロンの漆黒の兵士達によって体勢を立て直したギルドが戦闘に加わって、一度は総崩れになった戦況を立て直した。

離れた場所では、未だレイニールが巨人を圧倒している。だが、その巨人もアヌビス同様にHPが全損しても再び蘇る。この戦闘の勝敗を握っているのは、やはりエミル達に掛かっているようだ——。

しかしその頃、そのドラゴンの体内でも別の争いが始まろうとしていた……。

太陽を司る巨竜9

* * *

長い間。電気ショックを受けて気を失っていた星が重い瞼をゆつくりと開くと、その視界に大きく上下に揺れる部屋がぼんやりと映し出された。

その中には巨大なモニターの前で憤った声を上げるメガネを掛けた赤い髪の男が、体を小刻みに震わせて画面を凝視しながらキーボードを激しく叩いていた。

「何故だ！ 私の計算なら、この巨竜の鉄壁の鱗を突破できるだけの閻属性の攻撃力を有しているのは奴一人だけだったはずだ！にもかかわらず。どうしてこうなっている！」

憤りを隠せないと言った声で頭を掻きむしる赤髪の男の後ろ姿を見ながら、自分の手足を拘束している鎖を外せないか思考を巡らしていた。

そんな中、完全にモニターに釘付けになっている彼は、星の行動には気が付いていない。

「このコバエがツ!! ブンブンと目障りだ!! ……これでは、前もつてマスターをこの世界から消し去った意味がなくなる!!」
「——ッ!?!」

その赤髪の男の声を聞いた直後、驚いた星の手足に巻き付いた鎖がガシャンと鳴った。

星の出した音に気が付き、赤髪の男が振り返ると憤っていたはずの彼は、その口元にニヤリと不気味な笑みを浮かべて星に近付いてきた。そして赤髪の男は星の目の前までくると、星の顔をまじまじと見つめる。

彼のその顔には弱者を見下ろすような蔑みと、星を捕まえた優越感に満ちていた。彼からしたら星を捕らえて拘束した時点で、彼女との勝負はすでに終わっている。そんな彼が、星に話をするのは自分の精神の安定以外のなんの目的もないだろう。

星の目の前にきた赤髪の男は、鎖で繋がれ空中に浮いている星の体を見上げて言った。

「お目覚めかな？ 君にいいものを見せてあげよう……」

そう告げて振り向く彼に、星が声を大きくしながら尋ねた。

「あなたは、あの人に何かしたんですか？」

「……あの人？」

振り向いた彼は星の言葉に、不思議そうに眉をひそめる。

そんな彼に、星が再び大声で叫んだ。

「口にヒゲを生やした長い白い髪を結んだ黒い道着をきた人です！」

そこまで口にした星に、メガネを掛けた赤髪の男は「ああ」と思い出した様子で天を見上げる。そして、次に彼が口にしたのは星にとって衝撃的な一言だった……。

「彼なら、僕が殺した……」

「……ころし——」

星は言葉を失うと同時に、拘束されている手を強く握り締めていた。

だからと言って、マスターと星が今までそれほど深く付き合ってきたわけではないだろう。星にとっては、マスターよりもその側にいるカレンの方が親密な関係を築いていたかもしれない。

彼とは、あまり会話すらした覚えはない。しかし、それでも……マスターは仲間であり、今まで生活を共にしてきた時間に嘘偽りはない。

それに彼は、富士のダンジョンでがしゃどくろにやられそうになった星を、身を挺してまで守ってくれた。話はそんなにしなかったが、カレンや仲間達に向ける彼の優しい笑みはまるで孫達を見守っている祖父の様だった。

あまり言葉を交わさないからこそ分かることもある。その点においては、ひとりぼっちで時を過ごすことの多かった星は良く知っている。そして、その彼の優しい瞳が自分にも向いていたことを……。

少しの間だけだったが、もしも祖父がいたら、こんな優しい瞳で笑みを浮かべてくれたのだろうと思っていた。家族が母親しかいない

星には想像することしかできないが、確かにそう感じていたのに嘘はない。

そんな彼を覆面の男もとい。メガネを掛けた赤髪の男は『殺した』と言ったのだ——星にとって仲間を……家族だと思っていた者を奪ったこの赤髪の男を許せるわけがない。しかも、彼の背後のモニターに必死に戦っている仲間達が映し出されたから尚更だ——。

赤髪の男を睨み付ける星を嘲笑うと、彼は再びモニターの方に歩いていく。

そんな彼の後ろ姿を睨みながら、歯が鳴るほどに噛み締める。彼を仕留めるチャンスはあった。しかし、星はそのチャンスをふいにしたのだ——そのせいで、仲間達が再び危険に晒されてしまった。守りたかった人達を、目の前の男はまるでゲームの様に殺していくのだ。体を拘束している鎖がカタカタと細かく振動し、星の歯もそれに応じて激しく鳴る。

もし、この拘束されている鎖が解けるなら、今すぐにもこのメガネを掛けた赤髪の男を殺してやろうと思っていた。

それほどまでに星が憤るのは、これまでにはないだろう。この怒りも『こうなるかもしれない』という可能性を捨てて、彼に止めを刺すのを躊躇してしまった自分への怒りでもある。

鎖を引き千切ろうとなおも全身に力を入れる星を横目に、彼は再び指を鳴らす。

直後。星の体に電流が流れ、彼女の体は大きく反り返る。全身の神経を侵食していくような激痛に、星の頭が大きく項垂れた。

それを見た赤髪の男は安堵したように大きなため息を漏らすと、再び星の方へと向かってきて項垂れている星の頬に手を当て、無理矢理にその顔を上げさせる。

「——イヴ。君には本当はこれを見せないように思っていた。でも、僕に逆らったから仕方がない。これは君にとっての贖罪であり罰なのだよ。……分かったら、そこで大人しく終わるのを待っていてほしい。全てが終われば、君と結婚式をしよう。……無論。この世界でも現実世界でもね」

「……………」

そう告げた彼は星の頬に当たった手を放し、星の頭が支えを失い再び項垂れた。

だが、星は諦めたわけではなく。その心の中では彼への怒りが更に強くなり、マグマの様にグツグツと煮えたぎっていた。

モニターの前に戻ろうとする彼の後ろ姿を睨み付けていた。その時、星の耳元で何者かが小さな声でささやく……………。

「……………この鎖が切ってあげる。だから、後はあなたの思う通りにやってみなさい」

聞き覚えのあるその声に、星は深く頷いて答えると、その言葉の通りに星の体を拘束していた鎖が一斉に砕ける。

その直後、星の手に漆黒の剣が現れ、その剣を掴んだ星が地面に着地したと同時に腰の高さに構えた剣の先を赤髪の男に向けたまま勢い良く走り出す。

「はあああああああああああッ!!」

「——なにッ!?!」

完全に捕獲して、もう抵抗できないと思っていた赤髪の男は虚を突かれ。振り向いたと同時に、星の持っていた漆黒の剣が腹部に深々と突き刺さる。

「……………何故だッ!? 何故動ける!?!」

「あなたは絶対に許さない! 私はあなたを絶対に許しません!」

「フツ……………この僕を殺すと言うのか? そんなことをしても僕は死なない。一生お前の中で亡霊となつて生き続けることになる。それに——この映像は記録されている……………僕になにかあれば、その映像がある機関に流れる。君が僕を殺した事実は永遠に消すことはできなくなるんだぞ!!」

それを聞いた星は眉を一瞬ひそめたものの、すぐに首を横に振ると。

「……………分かっています。だから……………私もここで!」

「くっ……………馬鹿なことを……………」

劍の刃に貫かれた衝撃と星の重さにフラフラと覚束ない足取りで壁まで押しやられ、背中を壁に付けた直後。その壁に大きな穴が空いて、そこから二人は空へと放り出された。

太陽を司る巨竜10

星が彼の腹部に刺さっていた剣から手を放すと、地面に向かって落下する二人の体が風圧でゆっくりと離れた。

徐々に迫ってくる地面を見るのが嫌で体を回転させ、空を見上げるような格好で落ちていく。

落ちていくと同時に星の中での決意が薄れ、その代わりに『生きてい』という感情が大きくなっていた。

しかし、それも無理はないことなのだろう。人は死に直面した時、相当な確率で後悔する。その殆どが『生きている間にあれこれしてみたかった』という後悔だ——人は動物であり。自分の為に生きる存在でありながら、人間に存在する理性がそれを抑制する。それによって、本来の欲望と真逆の行動をしている者達が殆どなのだ。

それは『死』という概念から解き放たれた時に、理性という枷が外れ一気に欲望の波が押し寄せることによるものだ。

つまり、脳で判断した理性の現れである『覚悟』などというものは、生前に溜め込んだ欲望を解き放つ死の間際にはなんの枷にもならない。それは人間としてではなく、動物としての本能に近い自然本来の思考だからだ——。

地面に落ちていく星の頭の中でも、今までの後悔が走馬灯のように巡っていた。

大人になったら何がしたかった。これを食べて見たかった。ここに行ってみたかったなど、子供である星は成人の数倍以上の様々な思考が巡る中、一番に大きかったのは母親にもう一度会ってこの世界の話をつづいてほしいということだった。

(……お母さん……)

そう心の中で口にした時、ふと横を見た星の視界に真っ白な白鳥の様な翼を生やした白馬の姿が飛び込んできた。

その姿は間違いなく。以前にエミル達と一緒にいった【ドリームフォレスト】というまるでおとぎの国の様に小人やフェアリー、動く木などのファンタジーに登場するような生き物達が生息していると

ところで出会ったペガサスだった。

星はその姿を驚いた様子で見つめると、天を駆けるペガサスが落下していた星をその背中で受け止める。

驚きを隠せないといった表情でペガサスの背中を撫でた星は、ドリームフォレストでペガサスに会った時のことを思い出した。

最後にペガサスとの別れの時、ペガサスが自分の翼の羽根を一枚だけ取って星に渡した。その後、その羽根はペガサスの形をした笛へと変化したのだった。

それを思い出した星は、慌ててコマンドを開いてその時の笛がないか探す。だが、その笛は黄色く縁取りされていた。

その後、装備欄を確認すると、その中の人形の首の部分に装備されていた。星が首の部分に手を当てると、確かに紐の先にペガサスの形をした笛がぶら下がっている。しかし、星にはこの笛を吹いた覚えはないどころか、取り出した記憶すらない。

「——どうして……」

星が落ちてきた先にある赤いドラゴンに空いた風穴を見ると、そこには星の方を見つめて微笑みを浮かべている青い瞳に長い黒髪の女性立っていた。

見上げている星に気が付いた彼女は、一瞬のうちに小さな少女の姿になるとドラゴンの中へと消えていった。

「……お姉ちゃん。ありがとう……」

そう小さく呟くと、星は首にぶら下がっている笛を両手で包み込んで胸に押し当てる。

その後、星は助けてくれたペガサスの背中に跨がると、その首筋のところを優しく撫でて「ありがとう」とお礼を言くと、ペガサスも一鳴きしてそれに応えた。その直後、星を乗せたペガサスは大きな翼をはためかせてその場を離れていく。

同じく落下していたメガネを掛けた赤髪の男はペガサスに乗って、自分の近くから消えていく星の姿を見上げながら、彼の頭の中でも走馬灯が止めどなく流れていた。

「僕は……どこで間違えたんだ？」

彼は去ろうとする星の方に手を伸ばして眩く。

徐々に遠ざかり見えなくなる星の姿を追うように手を動かしたそんな彼の瞳には、薄っすらと涙が浮かんでいた。

「——僕はただ、大空博士と共にいつまでも研究をしていたかっただけなのに……どうして、神は私に味方してくれなかったのか……」

直後。地面に背中を打ち付けると、腹部に突き刺さっていた漆黒の剣が地面に突き刺さる。

そのおかげかHPが全損することなく、彼のHPバーは『1』残した状態で止まっていた。

それを確認すると、今まで完全に諦めていた彼の瞳に光が宿り。それと同時に彼は笑い出して顔を手の平で覆う。

「はっはっはっはっ！ 私にもまだ運が残っていたか！ この剣は彼女の本来の武器ではない。ということは、その能力は発動しないということだ——他人の武器では本来、相手に戦闘ダメージを与えるのも難しい。しかし、彼女はゲームマスターなのだから、この程度の例外はあつて当然。だが、私には神が付いている！ これはイヴを僕の物にしろという大空博士の意思!!」

そう言つて、なおも顔を覆つて笑い続けるメガネを掛けた赤髪の男。

そこへ、何者かがゆつくりと歩いて近付いてくる。その物音に気が付いた彼がその方向を向くと、そこには長い黒髪に赤い瞳の小学生くらいの女の子が立っていた。

彼女は地面に寝そべる彼の姿を見てニヤリと不気味な笑みを浮かべると、倒れている彼の前までできて止まる。

彼を見下ろした女の子は徐に彼に向かって口を開く。

「——お久しぶりですね。私の事を覚えていますか？ 覚えていますよね。安藤文則……」

「……おっ、お前は！ 何故ここにいる!?! お前は博士と一緒に海に落ちて死んだはず!!」

それを聞いた少女の口元の笑みが大きくなり、驚くメガネを掛けた赤髪の男に言った。

「ええ、死んでいたわよ……でも、あなたが私を目覚めさせた」
「くツ……亡霊め！ 僕のイヴを奪いにきたのか！ 博士と結ばれるという僕の夢をツ!!」

地面に倒れ込んだまま叫ぶ彼の腹部に突き刺さった剣を握ると、憤る彼を見下ろして感情を消し、光を失った虚ろな瞳で虫けらを見るような目で彼に告げる。

「……貴方の理想の世界はこない。私達家族を裏切り、奴らに手を貸しただけではなく。私の妹にまで手を出そうとした貴方は、お父さんにも会わせない……永遠にこの世界を魂だけで彷徨うといい!」

握っていた漆黒の剣を勢い良く引き抜くと、彼の体が漆黒の闇に呑み込まれていく。

「これだから女は嫌いだ！ 全てを自分の物にできると思い込んで……幸せを独り占めにする邪な存在だ！ 男同士で何が悪い。何でも自分の物にしないと気が済まない貴様らの独占欲の方が、よっぽど不純ではないか！ 世の中の女も貴様もきつと地獄に落ちる！ 私が——私達が正義だったと感じる日が必ずくるだろう！ はっはっはっはっはっはっは!!」

消える間際に負け惜しみを言って、完全にその姿を消した男のいた場所をしばらく見つめ、眉をひそめた少女は大きく息を吐くと空に浮かぶ星を寂しそうに見上げた。

「そうね……もう。私は死んでいるのよね……」

そう小さく呟き、徐に歩き出した少女は漆黒の闇の中へと姿を消していった。

* * *

太陽を司る巨竜Ⅰ

突如現れたペガサスに乗った星を見たエミルのリントヴルムNE XTザ・デストロイヤーの動きが明らかに鈍る。その一瞬の間を突いて、口の中に溜めた炎を熱線に変えて空中に停止している漆黒の龍神へと放った。

空中で一度止まってしまった為に、動き出すのにどうしてもワントンポ遅れてしまう。それはエミルが漆黒の龍神と五感の全てをシンクロさせているからだ。もしも、これがエミルでなければ、突如現れた星に動揺などしなかつただろう……。

為す術なく漆黒の龍神は、赤い巨竜の放つ巨大な熱線に呑み込まれてしまう。すると、熱線の中から今度は漆黒の熱線が放たれ巨大な赤い熱線を切り裂きながら、巨竜の炎で構成された右翼を切断した。

直後。浮力を失って、右側に大きくバランスを崩したドラゴンの体から炎が消え去り、その巨体が地面へ向かって急速に落下する。

地面にその巨体を叩きつけられ、土煙が土砂の津波となって、地面で交戦していたアヌビスの兵士とプレイヤー達を襲う。

一瞬のうちにプレイヤー達は土砂の波に呑み込まれ、多くの光の粒子が空へと上がっていく。それは多くのプレイヤーが撃破されたことを意味している。

空中ではリントヴルムNE XTザ・デストロイヤーが胸のドラゴンの口を開けたまま、微動だにせず浮いていた。

しかし、その赤い瞳には光がなく。体を覆っていた漆黒の鱗はボロボロと剥がれ落ち、その悪魔の様な翼も穴が空きその隙間から夜空を覗かせている。

すると、徐々に翼を動かす勢いが弱まり。ゆっくりと地面に向かって落ちてきて、漆黒の龍神の姿がスツと消えた。

意識が戻ったエミルは、周囲を見渡して星の姿を探す。しかし、地面に落ちた巨竜の巻き上げた砂埃で視界が絶望的なほど悪い。

上空にまで舞い上がった粉塵で、地上の状況は声以外全く情報が入ってこないほどだ――。

土煙が上がっているそんな中で一番に飛び出してきたのは、赤い鱗に囲まれた巨竜の頭だった。

——グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!

空に向けて咆哮を上げた直後に、赤い鱗の巨竜の口の中に再び炎が溜まる。

その数秒後。赤い熱線が放たれ、荒れ狂ったそのドラゴンの熱線が空を切り裂く。

その衝撃波が周囲の土煙を吹き飛ばし、やっと周囲が見渡せるほどに視界が戻った。

地上に居たはずのアヌビスの兵士達は全て消え去り、地上にいるプレイヤー達は皆戦う敵を失って混乱している。

そしてアヌビスの兵士達が消え去ったと同時に、レイニールが戦っていた100m級の巨人もその姿を消す。

つと、天を見上げていた赤い鱗の巨竜の視線が千代の街へと向けられ、その口の中に再び炎が溜められる。

その射線上には、ペガサスに乗った星がエクスカリバーを自分の前に掲げて立ちはだかっている。どうやら、ドラゴンが千代の街に向けて放とうとしている熱線を止めようとしているようだ——。

「——主は我輩が守る!!」

ペガサスに乗ったまま、今にも熱線を放とうとしているドラゴンを睨み付けている星と赤い巨竜の間に、両手を広げる様にしてレイニールが飛び込んできた。

その直後、星を守るように前に飛び込んでいたレイニールの体が金色の光を発し、放たれた熱線をレイニールのその体が弾く。

驚いた様子で目を丸くさせている星にレイニールが微笑むと、その大きな翼を激しく動かし熱線を弾き返ししながら、ドラゴンの口まで一気に距離を縮める。

発射している口付近までくると、大きく咆哮を上げながらドラゴンの口の中に身を投じた。

直後。凄まじい閃光と爆発が起こり、赤い鱗の巨竜の口内が黒い煙

の中に包まれ、その中から何か小さな物が飛び出してきた。

星はそれを目で追いながら指差した。

「ペガサスさん。あの何か飛ばされた方に行って下さい」

星はすぐにペガサスにその場所にいくようにとお願ひすると、ペガサスも頷くように頭を上下に振って勢い良く飛んでいく。

凄まじい速度で追い越したペガサスは空中で素早く体を反転させると、星は捕まっていたペガサスの首から手を放して大きく両手を広げる。

飛んできたそれを胸で受け止めると星の予想した通り、それは小さくなったレイニールだった。自慢の金色の鱗は少し煤で黒くなっていたが、どうやらまだHPは残っているようだ――。

星はすぐにアイテム欄からヒールストーンを取り出し、頭上に投げると上からペガサスに向かって緑色の光が降り注ぎレイニールのHPが最大まで回復する。

すると、レイニールの瞼がゆつくりと開き、その青い瞳が星の顔を真つ直ぐに見つめる。

「……レイ。大丈夫？」

「おお、主か……無事で良かったのじゃ……」

弱々しい声音でそう言ったレイニールを星は胸に抱き寄せると、瞳に涙を浮かべながらささやく。

「心配したんだから……無理しちゃダメだよ？ レイ……」

「……それは、こっちのセリフじゃ……まったく。我輩の主様にも困ったものじゃ……」

そう言つてレイニールの意識は途絶える。

星はレイニールが気を失っただけなのを確認すると、ほつとしたように大きなため息を漏らした。

そして、レイニールのその小さな体をもう一度胸に抱き寄せると、その存在を確かめるようにレイニールの背中を優しく撫でる。

「……私、生きてるんだよね。戻ってきたんだよね……レイ」

飛んでいたドラゴンの中からメガネを掛けた赤髪の男と一緒に落ちてから、星にはまだ自分が生きているという感覚がどうしても持て

なかった。それが、レイニールを抱きしめている時に強く『生きている』という感覚を実感できた。

それは、もう二度と会うことはないと思っていたレイニールを、その手で再び抱きしめることができたからなのかもしれない。

目を瞑って胸に抱いたレイニールの体温を感じていると、そこに赤い鱗の巨竜の悲痛な咆哮が飛び込んでくる。

いや。もうそれは、咆哮と呼べるようなものではない。空気を震わせ、他者を寄せ付けまいと、凄まじい衝撃波を放っていたその咆哮は見る影もなく、今はまるで壊れかけのトロンボーンの様だ――。

その咆哮の中にある悲しさにも似た何かを感じ取って、表情を曇らせた星は悲しそうな紫色の瞳で、その赤く巨大なドラゴンの方をじつと見つめていた。

レイニールによって口内をズタズタに破壊された赤い鱗の巨竜は、地面に頭を打ち付けながらその場でのたうち回っている。

悶え苦しむ巨大なドラゴンに巻き込まれまいと、地面にいるプレイヤー達は一定以上の距離を取って、荒れ狂う赤い鱗の巨竜の予想外の行動に対処できるようにしていた。

すると、今まで巨体を激しく揺らして荒れ狂っていた赤い鱗の巨竜が、急に大人しくなったかと思うと、その視線が千代の街へと向けられた。

それから何かを察したのか、顔を青ざめさせた紅蓮が周囲のギルドメンバー達に向かって叫んだ。

「あのドラゴンを止めて下さい！ 止められなければ、全てが蹂躪されます！ 私達の街も仲間達も全部奪われますよ!!」

そう叫んだ紅蓮は、誰よりも先に巨大なその体に飛び掛かっていく。

「おい。紅蓮待てッ！ ……くッ！ 俺達も出るぞ!!」

メルデイウスは大斧を構えると、紅蓮の後を追いかける様に飛び出していった。

すると、それに続くように続々とギルドマスター、サブギルドマスターに続けと大声を上げ、自分を震え立たせながら飛び出していっ

た。

太陽を司る巨竜12

千代の街のトップギルドが我先にと飛び出していった、他の千代のプレイヤー達に火が付かないわけがない。

圧倒的に巨大な化け物を相手に個人差はあるが、次々に彼等に続いて駆け出していく。

始まりの街からきたギルド『メルキユール』のギルドマスターで、漆黒の鎧にドラゴンの頭を模した漆黒の兜を被った男が、漆黒の刃を持つ大剣を頭上に掲げて大声で周囲にいる仲間達に叫んだ。

「いいか！ 千代の街のギルドには借りがあつた。居場所を無くした我等に、今まで手厚い支援をしてくれたのを思い出せ！ 衣食住を提供してくれた彼等に、今こそそ恩返しする時だ！ いいな。大きさに騙されるな！ 体が大きければ動きは鈍くなる。我々のスピードには付いてこれない。しかも、炎の翼も鎧もなくした奴はもうただの亀同然だ！ 足を狙え！ その巨体を支えきれないほど斬り付けて、あの巨体を地面にひれ伏させてやれ!!」

『おー!!』

ギルドマスターの声に応えるように、各々持った武器を掲げて大声で叫んだ仲間達が突撃を開始する。

「ですが、突っ込みすぎには注意して下さいね！ 自分のところのギルマスの指示は常に注意して聞いて下さい！」

長い茶色の髪を三つ編みに結んだ青い瞳の少女。サブギルドマスターのリアンの言葉にもメンバー達は「了解」と叫ぶ。

その声を隣で聞いていたギルド『POWER,S』のギルドマスターであるリカは赤く長い髪を揺らし、その赤い瞳を煌めかせながらガンレットをはめた拳を突き上げて叫んだ。

「私の言いたいことは全部取られたけど、皆！ 攻撃したらすぐに動いてよ！ 止まったらいくら遅いと言っても、ダメージは大きいからね！」

「そうだ。油断せずに行こう！ これが終わったら、皆で街に戻って宴会だ！」

双子の姉であるリカの言葉に合わせ、短い赤い髪にリカと同じく赤い瞳のカムイが持っていた剣で千代の街の方を指して叫ぶと、彼等と同じ位の少年少女達が嬉しそうな声を上げて赤い鱗の巨竜に向かっていく。

その様子を見ていたギルド『L E O』のギルドマスターの代行であり、焼けた狐色の肌の胸元に大きなクロスの傷がある黒い短髪のゲインが叫ぶ。

「ガキどもに遅れを取るなよ！俺達のリーダーの面子はここで俺達が保つぞ！」

すると、その声でギルド4番目の実力者であるウォーニスが大声で「ウォー！」と、まるで獣の様な雄叫びを上げた。

彼の声に相互してギルドメンバー達も、雄叫びを上げて突撃していった。

「敵の体を包む炎は尽きた！体が巨大であれば、手数物が言う。我等エルフの本領の見せ所だぞ！全弾撃ち尽くす覚悟で矢を放て！！」

『おー!!』

声を上げたのは始まりの街のエルフ専用ギルド『ネオアーク』のサブギルドマスターである。エルフの特徴である長い耳と特化武器として設定されている弓を背中に背負った青い短髪のハイルは、弓を手にとって二本の矢を矢筒引き抜くと土煙を上げて千代の街に突き進む赤い鱗の巨竜に向けて放つと同時に、素早く地面を蹴って突撃を開始する。

最後に残っていたギルド『成仏善寺』のギルドマスターで僧侶らしいスキンヘッドの頭と、首から提げた巨大な鉄の数珠と法衣を身に纏い。手には錫杖を持っている。無善と浄歳が胸の前に手を合わせていた。

彼等がギルドで一番最後に出ているのは理由がある。何故なら、彼等はギルドメンバー達と共にお経を唱えていたのだ。

これが彼等の戦闘をする前の儀式みたいなものなのだろう。流石にアヌビスの兵士達と戦う前はしなかったが、後ではしっかりとお経

を読んでいた。

そんな彼等はぴったりのタイミングでお経を読み終えると、同時にカツ！と開眼し、錫杖をシャカシャカと鳴らしながら、一斉に赤い鱗の巨竜を目掛けて走り出す。

それを上空から見ていたエミルと影虎も、最大戦力であるリントヴルム、ファーブニルの二体のドラゴンを失った為か、地上に降り立ち地上で戦闘を行っていたエリエ達と合流する。

エリエとデイビッド、ミレイニに加え。何故かそこにオカマイスターの4人も加わっている。

「あら、サラザさん達まで……」

驚いているエミルに、サラザが自慢の上腕二頭筋を見せるようにポーズを取る、それを見たエミルは苦笑いを浮かべていた。

「まあ、随分と人が多かったからね。気が付かなくてもしかたないわよ」

「……そうですね」

まあ、そうは言っても、関取の様な巨漢のカルビに、リーゼント頭のガーベラ。そしてその中でも一番個性的なのが背中に孔雀の羽根を付けた黄色いモヒカン頭にサングラスを付けた孔雀マツザカだろう。そんな個性的な面々のオカマイスターのメンバーを例え、多くの人混みの中でも見間違えるなんてことがあるのだろうか……。

「——実は俺もずっと星ちゃんのことを追ってたんです」

すると、カルビの後ろからゆっくりとカレンが現れた。

彼女がそういうと、周りにいたオカマイスターのメンバー達も深く頷いた。

「私達は星ちゃんがギルドホールを抜け出していくのを目撃したの。そしたらあの子、物凄いスピードで街を駆け抜けていくじゃない？これはただ事じゃないと思っただけ。私達も店を閉めて急いであの子を追い掛けて来たんだけど、途中で見失っちゃってね。その時にこのカレンちゃんに会ったのよ」

どことなくねっとりとしたオカマ口調で言ったサラザの言葉を聞いて、どうして今までサラザ達と出会わなかったのかをエミルは理解

した。

つと、今度はリーゼント頭をしたガーベラが口を開く。

「でも、私達が会ったのはその子だけじゃない。もう一人、不審な男とすれ違った……」

「……不審な男？」

ガーベラの口から出た『不審』という言葉に、サラザ達と会ってか
ら気が抜けていたエミルの顔に緊張が戻る。

それもそのはずだ。星が抜け出した原因は、この事件を起こした犯人である狼の覆面の男。

星と接触する時にすれ違った場面と男という共通点だけで、容疑者としては十分だろう。

「そうなんだよ。銀色の鎧に白いマントを掛けた男でね、手には薙刀みたいな武器を持っていたから千代のプレイヤーだとは思うんだけど……深夜帯だったし。人通りは皆無だったから、はつきりと覚えて
いるよ」

「——白銀の鎧に白いマントの男!？」

千代の街は特区というシステムによって、オリジナル武器でも既存の武器でも日本伝統のアイテムには、本来掛かるはずの税率が掛からなくなる仕組みになっている。

おそらく、それもあって、ガーベラは薙刀を持っている彼を千代のプレイヤーと断定したのだろう。しかし、プレイヤーの心情としては装備を揃えるならば、そのコンセプトに合った物を揃えたいと考えるのが自然だ。

つまり。西洋の甲冑とマントに、日本古来の武器である薙刀を合わせるの
はミスマッチ過ぎる。しかも、エミルはその男の風貌に心当たりがある。

太陽を司る巨竜13

エミルはその男と始まりの街から逃げる前に、街周辺に位置する森の中で星を抱えていた彼と接触しているのだ――。

「その男の事を、もっと詳しく教えてくれませんか？」

ぐいぐいと詰め寄るようにして尋ねてくるエミルに、ガーベラは少し動揺した様子で頷いた。

「ええ。でも、私は本当に一瞬すれ違っただけで……私の後ろから風のように素早く駆けて行ったから……ああ、後。大事なことを忘れてた……」

「……大事なこと？」

その次の言葉を固唾を呑んで見守るエミル。

そんな彼女に勿体付けるように、ガーベラが答えた――。

「――いい男だったわ……」

「……………」

頬を薄っすらと赤らめながらそう告げたガーベラに、エミルは魂が抜けたように脱力する。

すると、そこに食い気味に身を乗り出してその場にいたオカマイスターが一齐にガーベラの周りに集まる。

「なんでそんな大事なこと今まで黙ってたのよ」

「あたいにも今度紹介して」

「わたしにもその話くわーしく聞かせるザマス！」

さつきまでとは打って変わってガーベラの『いい男』というワードにサラザ、カルビ、孔雀マツザカの3人がガッツリと喰い付いてきて、恥ずかしいほどの乙女トークを始めた。

もう。エミルそっちのけで黄色い。とまでは言えない悲鳴を上げている。未だに戦場にいるとは思えないその夢中ぶりに、さすがに付き合いの長いエリエも呆れているようだ――。

そんなオカマイスターの面々をその場に残し、エミル達も先に出ていった始まりの街のギルドや千代のプレイヤー達の後を追うべく、急いで走り出した。

真つ先に赤い鱗の巨竜を止めるべく飛び出した紅蓮は、背中に背負った自分ほどもある純白の刀を抜くと赤い鱗の巨竜の前に立ちはだかった。

「……これ以上は行かせませんよ」

そう小さく呟く紅蓮の持つ刀が、その刃から氷の粒子が舞い散る。いつもは静かな紅蓮の瞳の中には、明らかな闘志が溢れていた。山のように巨大なドラゴンとここにいる誰よりも体格差のある彼女が、ここにいる誰よりも気迫と闘志では負けていない。それは、彼女のその瞳に宿る眼光が物語っていた。

徐々に向かつてくるドラゴンの足元目掛けて紅蓮が刀を振り抜くと、その刀身に纏っていた冷気が巨大な四本の足と地面を氷で拘束する。

しかし、その氷の拘束も数秒も持たずに砕け散り、それを見た紅蓮が今度は数キロに渡る氷の壁を出現させた。だが、その巨大な氷壁でさえも、1分も保たずに全体がひび割れ、見る影もなく砕け散って辺りに飛散してしまう。

砕け散った氷壁の破片が紅蓮の着ていた白い着物を引き割いて、破片が皮膚へと深々と突き刺さるが、紅蓮は一瞬だけ苦痛に表情を歪めはしたがすぐに平静を保って再び氷壁を赤い鱗の巨竜の前に張った。直ぐ様。行く手を遮る様に貼られる巨大な氷壁にその巨体を激しく打ち付け破壊すると、再び紅蓮が氷壁を貼り直す。

紅蓮の体は無数の氷の刃が突き刺さり、度重なる氷壁の召喚に伴う刀の刃から放たれた冷気で衣服も霜が降り、吐き出された息は白く空気を舞う。

破壊されそうな氷壁を睨みながら、刀を握るその手からは力が抜けることがない。そんな紅蓮の側に、着物を着て紅蓮と同じ純白の刀を持った長い黒髪を束ねた少女が現れた。

「——紅蓮様。遅れてしまって申し訳ありません」

「……白雪ですか。助かりました。このでかいのを止めますよー！」

「はー！」

二人は視線を合わせると、トレジャーアイテム武器である『小豆長光』を構えて、彼女達の持つ刀の周囲から一気に冷気が溢れ出る。

その冷気は紅蓮と白雪の周囲に竜巻の様に巻き上がると、二人は声を合わせて叫ぶ。

「氷無永麗殺!!」

二人の構えた刀の刃から今までにないほどの冷気は溢れ出し、周囲の地面に霜を下ろす。

刀から出た凄まじい冷気が氷壁を壊そうとする赤い鱗の巨竜に襲い掛かり、その巨大な体を凍り付かせる。だが、数キロにも渡る規格外のその巨体を凍り付かせるまでにはまだ足りないらしい。

だが、それでもその巨大な体の3分の1程度は、なんとか氷で拘束することには成功した。

それを確認した紅蓮と白雪は持っていた刀を地面に突き立てると、そのまま力なく地面に膝を突いた。

細かく息を吐きながら荒く肩を動かしている彼女達の側に、メルデウスと小虎がやってくる。

「大丈夫か！ 紅蓮!!」

「白雪さん！ 大丈夫ですか!?!」

心配してきた二人に紅蓮が小さく呟く。

「……大丈夫。能力で少し足りない分を自分達の体力を糧に補っただけです。ですが……全力を出し切ってこの程度ですか……ばけもの……ですね……」

「……私も出し切りました……小虎、ギルマス。後はお任せします……」

そう言って紅蓮と白雪は意識を失った。

すると、ミシミシと軋む音と同時に周囲に氷の細かい欠片が降り注ぐ。頭上を見たメルデウスと小虎は、自分の見ている光景が信じられないと言った表情で目を見開く。

首を大きく左右に振って藻掻くドラゴンの体が、全身を覆う氷を徐々に振り落とし始めていた。

「——くッ!! 化け物が……小虎！ 紅蓮と白雪をここから移動する

ぞ!!」

「おう。兄貴!」

二人は紅蓮と白雪に肩を貸すと、その場をすぐに離れた。

赤い鱗の巨竜は強引に体を揺らし、あつという間に紅蓮と白雪の渾身の氷の拘束を振り払って再び進み始めると、氷壁をもその頭を打ち付けて一瞬で砕き、何事もなかったかのように千代の街に向かって移動を開始する。

だが、その赤い鱗の巨竜の行く手を阻むように、一度は紅蓮と白雪を連れて退いたメルディウスと小虎が現れた。

彼等は自分に向かってゆっくりと進んでくる巨竜を見上げ、闘志を漲らせた瞳で睨みつけると。

「小虎……こいつを止めるぞ! 俺達の街を——紅蓮が体張って守ろうとした意志を、俺等が変わって突き通す!!」

「了解! 僕も全力を……出す!!」

自分の身長ほどの刃を持つ金色の大斧を持ったメルディウスと、身から炎を放ち6つの腕に炎の大剣を手にした小虎が左右に跳ぶと、赤い鱗の巨竜の右と左の両足に向かって持っていた武器を同時に打ち付ける。

右側の前足からは爆発が巻き起こり、左側の前足からは膨大な炎が噴き上がる。だが、身長差がありすぎる巨竜を相手に、その程度の攻撃力では全く足りないのだろう。

渾身の力で放った二人の攻撃を物ともせず、赤い鱗の巨竜の進行は全く勢いを弱めることがない。

「……ちくしよー。足りねえか……だが、足りねえなら……全身の血肉を全部使って絞り出すだけの話だろうがあー!!」

咆哮を上げるメルディウスが持っていたベルセルクをドラゴンの足に押し付けて何度も爆発を起こす。しかし、足の先までびつしりと敷き詰められた赤い鱗に阻まれ、ダメージどころか傷すらも与えることができない。

それを分かっているながら、自分の爆風で飛ばされても一心不乱に向かっていく姿には、ここで本当に全てを出し切って消えても悔いはな

いという彼の決意が込められている気がした。

そんな時、メルディウスの横に突然、地面から出ている木の根っこに乗ったデュランが現れた。

「……デュラン。なんの用だ？ 俺は今取り込み中だ！」

彼の出現に不機嫌そうな顔をするメルディウス。

同じ四天王の一人であるデュランを毛嫌いしているのかは、今までの彼の行動が全てを物語っている。

ダークブレットのリーダーを倒し、デュランはまんまとその組織を乗っ取ったわけだが、彼等の行動には不可解な点が多い。始まりの街の戦いの時も、マスターの立てた作戦には乗らず独自に行動していた。

千代の街に来た時も、始まりの街のプレイヤー達を連なってきたが、その行動に結構な犠牲者が出た。しかし、その殆どがプレイヤー側だけでダークブレットのメンバーからは殆ど被害がない状態。しかも、そのことを前面に押し出して「俺達はお前達の見捨てたプレイヤーを保護した」と言いつつ、始まりの街のプレイヤー達とダークブレットのメンバーの身柄の安全を条件に千代の街に居座っていた。

にもかかわらず。今回の作戦にもダークブレットのメンバーは誰一人として参加していない。非協力的だと思えば、こうやってちゃっかりとデュランだけは戦闘に参加している。

おそらく。自分が戦闘に参加することでダークブレットが戦闘に参加したという事実が欲しいのだろうが、その実利を優先した考えが見え透いているからこそ、同じく部隊を束ねているメルディウスは彼を受け入れられないのだ――。

太陽を司る巨竜14

自分を毛嫌いしているメルデイウスの様子など構うことなく、勝ち誇った様に見下ろしたデュランが徐に口を開く。

「——無様なものだね。無駄だと分かっていたいながら、人の上に立つ者としては体を張らずにはいられない」

「……なんだと？ てめえー。わざわざ喧嘩を売りに来たのかッ!!」

攻撃する手を止めることなく怒鳴るメルデイウスに、デュランは笑顔を見せると。

「でも、俺はそんな君が嫌いじゃないよ……」

「はあ？」

首を傾げるメルデイウスを無視し、デュランは空に伸びる根つこの上に乗ったまま視界の外へと消えていく。

メルデイウスは不機嫌そうに眉をひそめ「何だあいつ」と呟くと、切り替えてベルセルクを振り抜いた。

横で戦うメルデイウスの鬨気が伝染したのか、逆の足に組み付いた小虎も6本の腕を駆使して休みなく斬り掛かっている。

そしてその鬨気が伝染したのは、なにも小虎だけの話ではない。

体を張って赤い鱗の巨竜の進行を阻止しようと奮闘しているメルデイウスと小虎の姿に、今度は漆黒の鎧とドラゴンの兜を被ったダイロスが漆黒の大剣を手に巨竜の後ろ足に飛び掛かった。

ダイロスは漆黒の大剣の刃の腹を巨竜の足に押し付けると、地面を足で踏ん張って堪える。

「ダメージが通らないのは重々承知している！ 止めるのなら、全神経を足に使って地面を掴んで踏み止まれー!!」

だが、踏ん張っている足は無情にも、地面に線路の様に二本の線が刻まれるばかりでその勢いを全く殺せていない。

その彼等の戦いを見ていて奮い立ち、拳を握り締めていたのはギルド『LEO』のギルドマスターを代行しているゲインだ——彼は今にも飛び出して行きたい思いを必死に抑え、彼等を援護する為少し離れ

た場所から攻撃している。

参加したくても参加できない理由がある。彼はあくまでもギルドマスターのネオの代行しているに過ぎない。

つまり。ギルドでの立ち位置はあくまで序列にして3番目であり、1位と2位のギルドマスター、サブギルドマスターとは大きな差がある。彼は他のメンバー達からすれば同じメンバーというだけであり、メンバー全員がギルドマスターに惚れ込んで、この『LEO』というギルドに入ったのだ。もしも、彼がここで飛び出せば、手柄を横取りされまいと他のメンバーも同じく飛び出せずに違いない。

少数でも勇猛果敢な獅子の集まり、それがこのギルドが『LEO』と名付けられた理由でもある。だが、もう一つ。ゲインの脳裏に浮かんでいたのは、今はもう居ないギルドマスターであるネオなら、こういう場面では迷わず飛び込んでいくだろう……ということだ。

それは、以前ダンジョン攻略を祝してギルドで宴会を開いた時のことだ——私生活でちよつとした悩みを抱えていたゲインは、ギルマスであるネオにそのことを相談したことがある。

その時、彼はゲインの悩みを聞いたネオはすぐに大きな声で笑い声を上げた。腹を抱えて笑うネオを見てゲインは不機嫌になった。

当然だ。自分は真剣に悩んでいて恥を忍んでネオに胸の内を打ち明けたのだ。それを笑われれば不機嫌にもなる。

だが、それに気付いたネオはすぐにゲインの肩をポンポンと叩いて「すまん」と一言謝った。そして、次に彼がジョッキの中のビールを飲み干して再び口を開く。

「だがな。お前を馬鹿にしたわけじゃない。お前は本気で悩んでるんだろ？ それは俺にも分かるさ。でもよ、悩んでる時間が勿体無いぜ？ 時は有限なんだ、待っちゃくれない。自分の気持ちにもう少し正直に生きろよ！」

「急に決めろって言う方が難しいですよ……やっぱり。それに人生って悩んでばっかじゃないですか、このメニューにあるビールにするかハイボールにするかって2択でも悩むでしょ？」

メニュー表の中で並んでいる2つの文字を交互に指差してゲイン

が言った。

すると、ネオはゲインの持つメニュー表を奪い取ってテーブルに裏側に伏せる。

「……迷うってんなら見なきゃいい。選択なんざ、自分でどっちも取りたいと思うからくるんだ。お前は目隠しされ、目の前に絶世の美女が2人いたとして、そのどっちかと結婚していいって言われたらどっちを嫁に貰う？ どっちが正解だと思う？」

「そんな漠然と言われたって、見てみないと決められないですよ。性格とかもありますし、結婚って言ったら人生かかっているんだからしっかりと付き合ってみないと……」

「フンツ、なんだ。分かってんじゃねえか……それが正解だ！」

「はい？」

キョトンとしているゲインを横目にニヤリと口元に笑みを浮かべたネオは、懐に忍ばせていた龍を模った煙管を取り出し吸い始める。

「——いいか？ 悩むって時は大抵どっちを取っても正解なんだ。ただ、初めてやる事には拭い去れない恐怖が付き纏う……でもな。ビビってる余裕があるんなら、まだまだ本気じゃねえのさ。それだけ余裕があるってことだ。その時その時に全力で当たれば、どっちを取っても正解だ——選択ってのは、片方を切り捨てるってことさ。なら、もう過去には戻れねえだろ……さつきも言ったが、時間は有限だ。選択なんざつまんねえ事に時間を使うな！ 最初のファイリングで選んで、後はがむしやらに突き進め！ 男の寿命は短いんだぜ？ 男である間は漢であり続けろ！ 自分を信じろ、お前が決めたんだ。ならどっちを選んでも正解しかねえだろ……俺の知ってるお前なら、どっちに行っても成功できる！」

持っていた煙管を灰皿に置いたネオは、隣に座っていたゲインの肩に腕を回し強引に自分の方へと引き寄せ「頑張れよ」と小さく耳元で励ました。

その時、ゲインは彼の優しさに涙を浮かべて頷いた。それからというもの、悩みが悩みではなくなったのだ——。

（リーダー俺は……俺もあの人達みたく命を懸けて戦いたい！ だ

が、仲間達が……俺はどっちを選択すればいいんだ！ 教えて下さい
リーダー!!」

ゲインが瞼を閉じていると、鼻にネオが吸っていたタバコの葉の匂
いが漂ってきた。

瞼を開いたゲインの前には、サングラスを掛けライオンの毛皮に短
い金髪に黒いバンダナを巻いた右目に傷のある男が立っていた。

その口には龍を模した煙管が咥えられている。彼のその優しい顔
は、ギルドマスターである彼から等しくギルドのメンバー達に接する
時のものだった。

「おう、ゲイン。どうした？ しけたツラして」

「……リーダーどうして？」

驚きを隠せないと言った表情で突如現れたネオを見つめているゲ
イン。

まあ、無理もない。彼は始まりの街の攻防の時に消えた仲間達の弔
い合戦の為に、サブギルドマスターのミゼと一緒に始まりの街に残っ
て討ち死にしたはずなのだ――。

太陽を司る巨竜15

彼はネオが始まりの街から戻ってきたと思ったのだろう。表情を明るくして「生きていたんですね!」と声を上げると、ネオはゆつくりと左右に首を振って答えた。

その様子を見たゲインは困惑した表情で、目の前に立っているネオを見つめている。

「俺にも分らない。ただ、声が……お前の声が聞こえて来てみたらここだった……」

「リーダー。俺はどうすればいいのか分からない……今頃になってリーダーの凄さに気が付いたんだ。俺にはリーダーの代わりは無理だ!」

声を荒らげてそう叫んだゲインに、ネオは微笑みを浮かべ啜っていた煙管を口から放し、その先をゲインの方へと向け。

「おいおい。戻ってそうそう弱音を吐くなよ……ゲイン。お前は勘違いしているぞ? 俺はなにも凄いいことはしていない。ただ、俺はお前達をいつでも信頼していた。だから、俺は好き勝手できたんだぜ?」

優しい笑みを浮かべてそう言ったネオに、ゲインは声を荒らげて叫ぶ。

「嘘だ! リーダーはいつでも俺達の事を考えてくれていた! 俺は知っている。リーダーは誰よりも仲間達を愛していたことを!

……だが、俺にはそれだけの情熱はない。俺はリーダーに付いていきたいって思ってたこのギルドに入ったんだ。あんたに全てを賭けてもいい……そう思ったからこそ、このギルドに入ったんだ! それは皆、同じだ。俺以外にもみなそう思っている!」

ゲインのその言葉にため息を漏らしたネオは、彼に向けていた煙管で今度は赤い鱗の巨竜の方へと向ける。

そして、徐に腕を上げて遠くに見える赤い鱗の巨竜を指さしながら言った。

「なら、試してみろよ! お前は奴らと同じ様に戦いたいんだろ?」

「リーダー……あんたならできるかもしれない。だが、俺がやれば皆

が俺と同じ様に突撃して無駄な犠牲が出る」

「——だから、やってみろ！ やる前からうじうじ考えて動かないのは、ビビってるからだ……でもな。お前が思ってるほど、面倒な事にならないと俺は思うぜ？ 他のギルドなら分からねえ。でも、俺はギルドのメンバーを誰よりも信頼していた。お前も少しは仲間達を信じてやれよ……恐れているだけじゃ何もできないぜゲイン。頑張れよ！」

振り返ったネオはゲインに微笑みを浮かべると、スツとその姿を消した。

消えたネオの姿を必死で探すゲインだったが、どこにも彼の姿は見えない。

ネオが姿を消したことで、今まで見ていた彼が幻であったと気付いたゲインは、彼の言葉を思い出して決意に満ちた瞳を赤い鱗の巨竜へと向ける。

「リーダーが俺の前に出てきたのには理由があるはずだ——あの人の言う通り、確かに俺はビビっていたのかもしれない。仲間達を理由にして……情けないぜ。こんなんじゃ、消えたリーダー達にも顔向けできないな……行動する前からあれこれ考えても仕方ないよな！」

ゲインは漆黒の刃を持つ大剣『デュランダル』を構えると、咆哮を上げながら赤い鱗の巨竜の足に向かっていく。

その姿を見た彼の仲間達も彼に続けと走り出す彼等を「行くんじゃねえー!!」と叫ぶ大きな声が遮った。

その声を発したのはギルド『LEO』の4番目に強いプレイヤーであるウォーニスだ。二メートルを軽く超える巨体に隆起した全身の筋肉に、その体に刻まれている無数の傷が彼の強さを物語っている。ゲイルを追って飛び出そうとしたギルドのメンバー達も彼の言葉に従わざるを得ない。

ウォーニスはギルドの中では4番目だが、ギルド内での彼の認識は少し違う。何故なら、彼はギルドマスターであるネオと固有スキルが系統が同じである。ネオの固有スキル『メタモルフオーゼ レオ』それと同系統の固有スキルがウォーニスの『メタモルフオーゼ グリス

リー』だ。

分かりやすく言うならば、ギルドマスターのネオが剛の者である。ならば、サブギルドマスターのミゼは柔の者だ——つまりそれは、ウォーニスが剛ならゲインは柔なのだ。それは、ギルドマスターに最も似ているウォーニスの方がゲインよりも仲間達からの評価は高いということなのだ。

一斉にウォーニスを見たギルドのメンバー達に彼は走り去るゲインの背中を指差して告げた。

「分からないのか？ あいつの背中が俺達に来るなど言っている『ここは俺に任せろ！』そう言っている。リーダーの背中をずっと見てきた俺達にはそれは分かるはずだぜ……」

メンバー達も無言のまま、ウォーニスの言葉に頷くしかなかった。ウォーニスは全力で駆け出していったゲインの背中を見つめながら「頑張れよ」と小さな声で呟いた。

赤い鱗の巨竜の足に張り付いていたダイロスの横に付いたゲインを見て、ダイロスはニヤツと笑みを浮かべた。

「おお、きたか！ お前がいれば負ける気がせん！」

「おう！ 提案がある。俺もあんたも基本スキルは『タフネス』だ。しかも、互いに同じ様な特性の固有スキル。基本スキルと固有スキルを組み合わせ、攻撃力を最大まで引き上げれば、止められなくともバランスを崩すくらいはできるはず！」

「分かった！」

ダイロスとゲインは互いに頷くと互いに同じ武器『デュランダル』を赤い鱗の巨竜の足に押し付けて大声で叫んだ。

「豪腕!!」

「旭日昇天!!」

その掛け声と同時に二人に変化が起こる。ダイロスは持っていた漆黒の大剣の刃が赤く発光し、ゲインはその体から赤い炎の様なオーラを天に向かって真っ直ぐに立ち上げる。

二人の固有スキルは互いに性質は違うが、自身の攻撃力を一時的に100倍まで引き上げる必殺のスキル。

しかも、互いに不滅の刃を持つトレジャーアイテム装備『デュランダル』であるからこそ発動できる固有スキルなのだ――。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ!!」

ダイロスとゲインが声を揃えて叫ぶと、赤い鱗の巨竜の動きが一瞬だけ乱れその歩みが止まる。

すると、その機に乗じて複数の人影が足に取り付く。

「メルデイウスさんごめんなさい。遅くなったわ!」

「――ッ!? お前は……白い閃光!!」

メルデイウスの近くにはエミル、そして影虎が彼に加勢するべく加わった。

エミルのことはすぐに分かったメルデイウスだったが、影虎のことは全く分からないらしく。

「お前は……誰だ?」

彼の言葉を聞いて、影虎は激怒しながら叫ぶ。

「俺が分からないというのか!? 俺だよ。ドラゴン使いの上杉影虎だ! どうして愛海のことは知ってて俺のことは知らないんだ!」

「いや、どうしても何も……」

困ったような顔をしたメルデイウスの横で、リアルの名前を呼ばれたエミルは思考を停止させていた。だが、応援に来たのはエミル達だけではなかった。

小虎の所にもデイビッドが応援に来ていた……。

「小虎くん遅くなってごめん」

「デイビッドさん!」

デイビッドの登場で小虎は目を希望に輝かせた。

二人は侍好きがこうじて仲良くなったが、その絆は今では小虎のギルドマスターであるメルデイウスと同じくらいまでになっていた。

「今、サラザさん達も応援に駆け付けてくれてる。ボディービルダーの彼等が参戦してくれるのは心強いよ!」

忘れがちだが、フリーダムには基本スキルの攻撃、移動スピードに特化した『スイフト』攻撃力、防御力を特化する『タフネス』の他に3つの種族が存在する。それが『ヒューマン』『エルフ』『ボディービ

ルダー』である。

その中でもボデービルダーは攻撃力、防御力にステータスを大きく割り振ったものになっている。だが、その人口は極めて少なく。少ないと言われているエルフよりも圧倒的に少ないと言っている。

正直。ボデービルダーという種族がVRゲームで見ることが少ないのが当たり前だ。日常生活でゴリゴリのマッチョを見たことはあるだろうか……。

太陽を司る巨竜16

真夏の肌を焼くような激しい日光のビーチでそこそこ腹筋が割れ、筋肉が隆起した者はいるかもしれない。しかし、それは皆どれも細マッチョ止まり……ゴリゴリのマッチョはその中に存在しない！

何故なら、ゴリゴリのマッチョは真夏のビーチではなく、空調の効いた室内にのみ存在しているからだ……そう。ゴリマッチョ達は女子にモテたいが為に筋トレをしているのではなく、己の限界を筋肉に求めているからこそ、日夜ジムで筋トレをしているのだ。

そんな本物の肉体をゲーム世界で手に入れたところで使いこなせるわけがない。つまり、ボディービルダーの人口が極端に少ないのは、誰もが現実との肉体の違いに振るい落とされ淘汰されてしまったからなのだ——それが日本サーバーに本物のマッチョが少ない理由だ。まあ、他の海外のサーバーにはそれなりにいる種族である。

スピードが大きく落ちる種族な為、ボディービルダーの殆どは攻撃力にステータスを寄せている傾向がある。それはヒューマンに比べて約二倍に匹敵するほど……つまり。彼等が戦闘に加われれば、それだけで2人が戦闘に加わることと同じなのだ——。

デイビッドの言葉通り。彼に少し遅れて、サラザ達オカマイスターの4人が誰も張り付いていなかった足に、素手でがっしりと張り付いた。

「行くわよ。今だけは包み隠してきた男を見せるわよ!!」

その直後、一度はバランスを崩した赤い鱗の巨竜が再び進み始めようと足に力を入れる。だが、すぐにそれを阻止するべく足に張り付いていた者達が一斉に全身に力を込めて声を張り上げた。

その中でも目立つのはオカマイスター達の声だった。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおッ!!」

「でやあああああああああああああああッ!!」

「このおおおおおおおおおッ!!」

「おりやあああああああああああああッ!!」

雄叫びを上げるその叫び声はまさに男そのものだった。

いや、普段からその筋肉に覆われた体は男そのものだが、その中でも女の皮を……それも違う。肌が若干被れるくらいにしか女を纏えていない彼等だったが、今は間違いなく男だ——いや、それも違う。普段から男を抑え込んでいる彼等達の魂が男を開放する時……それは男からもう一段階上の男——つまりは『漢』となるのだ！

サラザの体が金色のオーラを放ち、全身の血管が隆起し顔を真っ赤にしながら全身の力を使い切る様に叫ぶ。

そのオカマイスターの雄叫びに負けじと叫んだメルディウス達も、今まで以上に全身に力を込めた。だが、その奮闘のおかげで、未だにその場に釘付けになって動けなくなっている。

動けなくなっている赤い鱗の巨竜の隣にふわふわと浮いているデュランの左右に2人の従者が出現する。白い着物を来た男は、短い白髪に緑の瞳で手には刀を持っている。

そしてその隣には、青い着物を着た青い短髪に青と緑のオッドアイの薙刀を持った男がつまらなそうな表情で現れた。

太陽を司る巨竜17

白い着物の男が刀を振り抜くと地面に水龍が現れたかと思うと、その水龍はすぐに地面の中に吸い込まれていった。すると、つまらなそうにしていた男が持っていた薙刀を空中で振ると、地中から巨大な根っこが赤い鱗の巨竜の体に無数に纏わり付き、その根から複数の小さな根が地面に垂れ下がる。

多くのプレイヤー達が地面を引きずるように垂らされている細い根っこを掴んで力一杯に引き始めた。そこにはカレン、ミレイニとその仲間の動物達も混ざっている。

まるで綱引きの様な光景が広がり、全力で綱を引く数万のプレイヤー達が、足に張り付き歩みを止めようとしているエミル達に加勢する。その直後、今までびくともしなかつた赤い鱗の巨竜の歩みが完全に止まった。

おそらく。白い着物を着た短い白髪の男はデュランの命令で、赤い鱗の巨竜を木の根で拘束したのだろう。すると、その男がデュランの方を向いて含みのある笑みを浮かべた。

「ツンデレってやつですか？ まったく、我が主様にも困ったものだ。助けるならそうと、素直に言えばいいのに……」

「——いや。俺は興味のあるものにはしか手を差し伸べないよ？ 俺が見たかったのはあの子の潜在能力の方だよ……」

デュランはそういうと、赤い鱗の巨竜ではなく頭上を見上げた。彼の見上げたその先にいたのは、ペガサスに乗った星の姿だった。その手には、黄金の剣『エクスカリバー』が握られている。

星は赤い鱗の巨竜にエクスカリバーの刃先を向けると、決意に満ちた瞳で見据えていた。

当然だ。彼女の背中には千代の街が広がっている。もうこれ以上は、この巨大なドラゴンを街に近付けるわけにはいかない。

今までは赤い鱗の巨竜から悲しみにも似たなにかを感じていた。それが星の戦う意思を妨げていたのだが、さすがにエミル達が戦う姿を見て決心が付いたのだろう。

星は動けなくなっている巨大なドラゴンを見据えると。

「ごめんね……」

小さくそう呟いた後、星は大きな声で叫んだ。

「ソードマスターオーバーレイ!!」

すると、剣を構えている星の視界に文字が表示される。

『ゲームマスターの権限を持つ者でしか制御できないモンスターです。制御権限を使用しますか?』

【YES】 【NO】

星は指を【YES】の方に持つていくが、躊躇するように一度その手が止まる。だが、すぐに唇を噛んで目の前に出ているそのボタンをタップする。

すると、星の持つていたエクスカリバーの刃が激しく振動し激しく左右に揺れる。

直後。エクスカリバーの剣の刃から溢れた光が空中に向かって剣の形を型取りながら伸びていく。

ペガサスに乗った星が光の刃を持つエクスカリバーを頭上に振り上げると、ふとその視線がペガサスの背中で気を失っているレイに向いた。そして、その視線を巨大なドラゴンに向けると、悲しそうに眉をひそめながら呟く。

「……本当はあなたも傷付けたくない……でも、私は弱いから。だから今は……こういう方法でしかあなたを助けられない!」

光の刃を大きく振り下ろすと光り輝くその刃が更に巨大化して、数キロもある巨体を持つドラゴンの体を縦に切りつけた。

その後、星は金色の光を放っているエクスカリバーを自分の腰の辺りに構えて告げる。

「——今は小さな光だけど、いつか全てを照らせる光に………私の想いを乗せて……闇を浄化する光よ。かの者の穢れを消し去れ! サザンクロス・レイ!!」

構えていたエクスカリバーを大きく横に振り抜き、先程の縦の斬撃と共に赤い鱗の巨竜の体を大きくクロスに光の刃が斬り裂く。

その直後、数キロにも渡る山の様な赤い鱗の巨竜の巨体が、その場

にドスンと力無く崩れ去る。

だが、不思議なことにその体のどこにも切り傷はなく。ただただ、意識を失って倒れているだけにしか見えない。間違いなくエクスカリバーの放つ光の刃がその身を貫いたはずなのだがその痕跡がどこにもないところを見ると。今回の星が放った一撃は、敵を殺すのではなくその動きを無力化する能力なのだろう……。

それを見て、星はほっと胸を撫で下ろすとエクスカリバーを鞘へ戻す。

ペガサスに地面に降りるようをお願いした星は、地面に着地したペガサスの背中から降りると、頭を上げたペガサスの頬を優しく撫でると「ありがとう」と微笑みを浮かべた。すると、そこにエミルが駆け寄ってくる。

「星ちゃん」

驚いて彼女の方を向いた星の体を衝撃が突き抜け、それと同時に星の体を温かいものに包まれる。

気が付くと、星の小さな体がエミルの腕の中にすっぽりと包まれていた。

「本当に凄いわ！ 星ちゃんがいなかったら、私達も千代の人達も消えてたわ。それくらい凄い事をしたのよ？」

「……は、はい」

星は自分が何をしたのかいまいち理解できていないのか、星は困惑した表情で返事をする。

そんな星の頭を撫でると、エミルは星のその頭を自分の胸に押し付けて、今度は優しくゆつくりと撫でて耳元でささやく。

「……正直。出会った時は、まさか貴女がこんなに強くなるなんて思わなかったわ……」

「——えっ？ 私は強くないです……この剣があつたからで……」

エミルのその言葉に表情を曇らせた星は、自分の腰に差した金色の装飾が施された剣。

全てのプレイヤーを操作できる能力を秘めた聖剣『エクスカリバー』に手を置いた。

そんな星の表情から察したのか、エミルは剣の柄に置いている星の小さな手を両手で包み込むようにして掴むと、星の顔をまじまじと見つめて優しい微笑みを浮かべた。

「違うわよ……私が言ったのは武器の力じゃない。心の方よ——」
「——んころろ？」

エミルの言った『心』という言葉を疑うように首を傾げる星。
そんな彼女にエミルはゆっくり大きく頷くと……。

「そう。星ちゃんは本当に強くなった——私や他の誰よりも……だって、最初は始まりの街のラビットで怖がっていたのよ？ それがこんな巨大なドラゴンとも戦えるようになって……良く頑張ったわね。えらいわ」

「……はい」

星の頭の上に手を置いて撫でると、星も瞳に涙を浮かべて頷いた。
いつもの星なら素直に受け取らないであろうその言葉を、星が素直に受け取ったことは、それだけ今回の戦いが彼女にとって辛いものだったことを意味しているのだろう。

エミルが星の頭を撫でていると、突然その場に何者かが拍手をする音が聞こえてくる。

2人はその音のする方向を向くと、そこには今まで完全に姿を消していたはずのライラが立っていた。

その彼女の姿を見た瞬間、エミルは星の手を引いて強引に自分の後ろに隠すと一瞬で鞘から剣を抜いて構え睨む。

「……全然接触してこないから、もうてつきり死んだと思っていたんだけど？」

「ふふっ、相変わらず可愛い反応するのねエミル」

そう言って悪戯な笑みを浮かべた彼女の姿が目の前からスツと消え、次の瞬間にはエミルの隣に現れてエミルの耳にふうつと息を吹きかける。目を見開いたエミルは、素早く持っていたロングソードを振り抜く。

だが、固有スキルがレポートのライラには当たるはずもない。瞬時に移動したライラを鋭く睨み付けるエミル。

ライラは勝ち誇った様な笑みを浮かべていると、次の瞬間彼女の立っていた場所に赤い光が降り注ぎ激しい爆発を起こす。

その凄まじい破壊力にペガサスは慌てて空へと逃げ、エミルは近くにいた星を庇うようにその体を覆い隠している。

爆風が収まりエミルが再びライラの居た場所を見ると、地面に大きなクレーターができていてその前に弓を持った巫女服を着た少女が立っていた。

「イシエ!？」

驚き声を上げたエミルに、イシエルが笑顔で応えた。

太陽を司る巨竜18

そして彼女が徐に口を開く……。

「——実はなく。戦闘中にあの女を見つけて追跡してたんよ」
いつものように人をかわすようなやんわりとした口調の関西弁で話すイシエル。

納得した様子でエミルもそれに「なるほどね」と相槌を打つ。

そういえば、戦闘の途中にイシエルの姿が見えなくなつた気はエミルもしていた。それをイシエルの今の言葉が全て説明してくれた。

イシエルはエミルとライラが犬猿の仲なのを知っている。しかも、エミルとイシエルは現実世界でもやり取りがある。それも普通の知り合いではなく、長い付き合いの中で培われた信頼関係的なものを、今までの二人から感じる事ができる。

そんなイシエルにとって、エミルに敵意を向けられているライラは、彼女にとつても『敵』というわけだ——赤い鱗の巨竜の戦線を離脱してまでライラのことを追っていたのは、イシエルにとつてのライラへ対する敵意はそれほどまで強いということを意味している。

「……あら、この程度の奇襲で死んだと思われるとは侵害だわー」
会話をしていた2人の耳に消えたはずのライラの声が飛び込んできた。

その声に反応して瞬時に戦闘モードに突入した2人は、鋭い瞳で剣と弓を構えている。

完全に敵対の意思を示す彼女達に、ライラは呆れた様子でため息を漏らすと両手を上げて徐に言葉を発した。

「——少し悪戯が過ぎたわね……ごめんなさい。今日は戦いに来たわけじゃないのよ。そこに転がっている巨竜をなんとかしにきた——
そう言えば分かるかしら？」

彼女の言葉に訝しげな瞳を向ける2人を見て、次に視線を向けたのはエミルの背中に隠れている星の方だった。

その視線を感じてビクツと体を震わせる星に、エミルはライラの向ける視線を遮るように体を移動させる。

「また、星ちゃんに何かするつもりなの？ それなら、ここで斬り捨てる！ 以前の私と同じだと思わないことね！」

そう言ったエミルは二本目の剣を引き抜いて構えると、鋭い眼光を飛ばしながらライラを威嚇する。

困り顔のライラが警戒の強まったエミルとイシエルに告げた。

「はあ……あのね、私は仕事でやってるの。それに、その子に手を出したら、その子の怖いお姉さんに一瞬で殺されてしまうわ……こんな終盤でNPCを操作しても意味ないし。それに、その子も自分の姉の話を知りたいんじゃない？」

ライラの言葉に興味を示したのは星だった……。

「……おねえちゃんの事を知っているんですか？」

エミルの後ろに隠れていた星は警戒しながらも、ひよつこりと顔を出して彼女に尋ねる。

まあ、無理もない。星からすれば、自分に姉がいることすら母親に教えてもらっていなかった。母子家庭で育った星には、家族というのが母親しかいない。いや、いないと思っていた。

にもかかわらず。未だ星にはその彼女の情報が圧倒的に足りないのだ——それを目の前にちらつかされれば、飛び付かずにはいられない。

それを見透かしているのか、ライラはほくそ笑みながら頷く。

さすがにこれにはエミルも間に入って止めるわけにはいかない。実際に星の姉を名乗る女の子に彼女も会っている。そうでなくとも、この会話に割り込めるのは星の家族以外にはいないだろう。

だが、そんな星も姉を名乗る女の子に突如攻撃され、あまりいいイメージはないはずなのだ。

彼女と星の出会い、まさに最悪だった……しかし、それを理由に姉を名乗る彼女への興味を断ち切れるわけではない。

星にとって、姉が好意的じゃないことは理由にならない。星にとって、関わる人間の殆どが好意的ではない。父親がいないということ、クラスの親からしたらさほど問題はなかったのだが、星の場合は特殊で、母親も仕事で殆ど行事にも参加していない。

子供と親とは切っても切れない存在であり、親の交流から友達ができることも珍しくはない。だが、星にはそれはありえないことだ。

いじめを受ける前も、それほど友好的な関係を気付いていた友達は多くはなかった。

いや、とどめをさしたのは子供の中ではなく、親同士の交流だったかもしれない。なんと言っても、授業参観はもとより、運動会のような小学校でもメインイベントと呼べるものにも参加しない。

最初は星を哀れんでくれる親もいたが、そんな状況が長く続けば続くほど周囲からは気味悪く思われるものだ――。

しかも、小学校は学区で別れており、そこに通う子供達も幼稚園や保育園から繰り上がるのが殆どだろう。小学校に上る前にすでに父親がいないことも母親が淡泊な性格なのも分かれている。

親も交流しなければ、子供も内向的で自己主張の少ない暗い性格だ。挨拶をすれば返すが、自分から進んで挨拶をしようとは星もしていなかった……周囲が腫れ物に触るように自分を避けていたのが分かっていたからだだが、しかしその反応が逆に、他の親から見たら愛想が悪いということは常識がないと思われたのだろう。

人は皆、自分の悪いところよりも他人の悪いところを見るもの。その為、星が周囲から無視されるのにそれほど時間は掛からなかった……。

そんな星に好意を持って接するものは現実世界にはもういない。ハードが高額なこともあり、子供のプレイヤーが少ない為に、常に好意を向けられているこの世界と、現実の世界とでは天と地ほどの落差がある。

どちらも経験している星にとっては、敵意を向けてくる女の子がたまたま自分の姉だった……という、それだけの話なのだ――。

真剣な顔で興味を示す星に、ライラが話し始めた。

「知ってるわ。貴女のお姉さんは、このゲームシステムの中に投影されている記憶でしかない。そして、もしもシステムをジャックされた場合システムの全権を握るもう一人のゲームマスター。貴女が人を制御できるゲームマスターなら、彼女はシステムを制御できるゲーム

マスターなの。その名は『ユエ』よ」

ライラは星の驚いた様な反応を見ると、再び話し出す。

「彼女は私達が開発したシステムではなく、その前の大空融博士が構築させたものなの。そして、今回のシステムジャックは私達のシステムの外、彼の助手だった男。安藤文則によって引き起こされた……大空博士はシステムをハックされ、システムジャックされる事まで想定に入れてユエをシステムからあえて切り離し、プレイヤーとしてこの世界に残した……プレイヤーデータは他に保管されていて、その詳細はユエしか知らない。だから私達は妹である貴女とユエ。もしくは安藤文則とユエが接触するのを待っていた。最も近い場所で、貴方達の情報を安藤文則に若干リークさせてね……」

そのライラの話の聞いてエミルが目を見開くと、突如地面を蹴って一瞬のうちに斬り掛かった。

ライラはそれを予想していた様子で、立っていたその場からスッと姿を消すと次の瞬間には別の場所へと現れた。

「——落ち着きなさい。エミル」

「落ち着けるわけないでしょ!! 貴女が……貴女のせいではただけ多くのプレイヤーが消えたか分かってるの!?! ……やっぱり貴女はここで」

両手に持った剣を構えるエミルに、今度はライラが声を荒らげて叫んだ。

「だから言ったのよ! 私は何度も言ったわ。貴女にもマスターにも! でも、貴女達はその子を前面に押し出して戦わなかった! もし、その子を有効に活用すれば、もっと早くユエを引きずり出して戦いを早く終わらせられた! 貴女の言う犠牲は、私のせいではなくその子を犠牲にしたくないという貴女達の偽善によって引き起こされた惨事だと言うことよ!!」

憤って叫んだライラの言葉に、エミルは一瞬眉をひそめたがすぐに言葉を返した。

「貴女の言葉は正しいのかもしれない……でも、だからって星ちゃんを犠牲にして終わらせるのは……いえ、一人を犠牲に全員を救えたと

しても、それを選択するのは善ではなく悪でしかないわ！　どんな理由があってもやっていいことではない!!」

憤るライラにエミルが叫んだ。その声に星とイシエルも驚いた様子でエミルの方を見ている。

「……まあ、そうかもしれないわね」

そう呟いたライラは剣を構えているエミルの方にゆつくりと歩いて来ると、指を宙で動かして何かを取り出す。

すると、目の前に一本の鞘に入っている剣が現れ、その鞘を掴んだ彼女が剣の柄をエミルの方へと向けた。

太陽を司る巨竜19

ライラが差し出した剣を訝しげに見たエミルが、ライラの目を見て言った。

「どういうつもり？」

「あら、この剣に見覚えはないの？」

エミルはもう一度剣の方を見ると、剣にはドラゴンの顔の様な装飾が施されていた。エミルはこの剣に見覚えがある。それは忘れもしない。星に初めて渡した剣……竜王の剣だったからだ――。

剣を見つめていたエミルがぼそつと呟く。

「……竜王の剣」

その言葉を聞いたライラは満足そうな笑みを浮かべ。

「――そうよ。これは竜王の剣、あの星の龍であるレイニールを召喚した剣……でも、それはこの剣にレイニールが宿っていたわけではない」

「――ッ!? そんなバカなッ!! なら、どうして星ちゃんやレイちゃんを召喚できたって言うの!？」

「そんなの簡単でしょ? なにを使っても最初の発動でレイニールが出るようになってたのよ。たとえば、初期装備のショートソードだったとしても……。あの二体はあの子をサポートする為に博士が作ったものよ」

それを聞いたエミルは驚き、目を丸くしている。

自分と同じドラゴンを操る能力。それを星は初期状態で、すでに保有していたことになる。しかも、レイニールはエミルの持っている中でも最強クラスであるダンジョンボスに相当するリントヴルムよりも、更に強力なドラゴンだ――。

「あの子がピンチになった時、固有スキル『ソードマスター』が発動する様になっていた。レイニールが召喚されれば、殆どのモンスターとの戦闘で勝利できる……そう。大空博士は考えていた。でも、それはルシファーがいなければの話――だけど、状況は大空博士が想定していた以上に進んでしまった。あの子の固有スキルはレイニールを召

喚した時点で、発動を制限されていた……理由は分からないわ。でも、我々がそれを解除して、あの子のゲームマスターの力を戦力にした。それはゲームマスタースキルである『オーバーレイ』がそれだけ強力なスキルだからよ。そして、この剣はそのスキルを初めて使った武器。これにあの子の力でそのドラゴンを封印する！」

だが、ライラの言葉を聞いたエミルは訝しげに彼女の顔を見つめているだけで口を開こうとしない。

そして両手に持った剣を鞘に収めると、ライラの持っていた剣を受け取る。しかし、今まで毛嫌いし敵対していたライラの口車に乗ったかたちを取ったエミルに、イシエルは困惑した様子で叫ぶ。

「なんでなん!? その女の話信じらん!?」

イシエルの言葉にエミルは一瞬だけ星の方を見て無言で頷くと、イシエルも呆れた様子でため息を漏らす。

その様子からイシエルはエミルのやりたいたいことが分かった様だったが、それは付き合いが長いイシエルだからであり。彼女の表情からはエミルが何をしようとしているのか、読み取ろうとしているのか察することはできない。

エミルは竜王の剣を手に、ライラに向かって尋ねる。

「もしもこの剣にあのドラゴンを封印できたとして、それをレイちゃんみたいに再び使えるようにできる?」

「できるけど……今のままでは無理ね。侵食されているプログラムを変更しないとまた暴走するだけよ」

「……変更しないとってことは、できるってことよね?」

すると、エミルの疑問にライラは不敵な笑みを浮かべ「当然」と答えた。

その返答を聞いたエミルは頷くと、ライラに「再利用できるなら協力してあげる」と告げ、ライラに赤い鱗の巨竜を封印する方法を聞き出した。

それによると、竜王の剣を持って星が固有スキルを発動するだけでいいらしい……。

ライラから剣を受け取ったエミルは膝を折って、星と視線を合わせ

ると。

「貴女が固有スキルを使って、この剣にあの赤いドラゴン封印して頂戴……」

エミルはそのことを星に伝えると、持っていた剣を彼女に向かって差し出す。

だが、星は柄の部分の部分を自分に向けて差し出しているエミルの持つ竜王の剣を見ているだけで、一向にその剣を受け取ろうとしない。

まあ、それも無理もないだろう。エミルとライラが勝手に話を進めていただけで、星はその話に割り込む余地などなかった。

それにもかかわらず。急に剣を渡され、目の前に横たわる巨大な赤いドラゴンをその剣に封印しろと言われても納得できるわけがない。だが、それは普通ならばの話で——少し躊躇はしたが、星はその申し出を断るわけがなく……。

「……分かりました」

星はエミルの持っている竜王の剣を受け取ると、エミルの言っていた通りに素直に固有スキル『ソードマスター』を発動させた。本来ならば『オーバークレイ』も発動するのだが、それは星の腰に差されている『エクスカリバー』を手にしている場合のみ。

星の持っていた竜王の剣の刃がいつもの様に金色の光を放つ。

直後。竜王の剣の刃と同じく地面に横たわっていた赤い鱗の巨竜の体が金色に輝き、その巨体が徐々に光の粒子へと変わり剣へと吸い込まれていく。

赤い鱗の巨竜の体を全て竜王の剣へと吸収させホツとした様子で息を吐くと、突如として凄まじい歓声が周囲に巻き起こる。

それに驚いた星が振り返ると、エミルが微笑みを浮かべていた。その後ろには多くのプレイヤー達が集まっていて、振り返った星の剣を持つ手を掴んで、その手を高らかに掲げさせて周囲にいた者達に向かって叫んだ。

「——あの無敵の巨竜は、この『剣聖』がこの剣に封印したわ！」

すると、周囲から更に大きな歓声が上がった。しかし、そこに周囲の群衆を掻き分けてメルディウスと紅蓮が星達のところまでくると、

メルデイウスが轟く歓声の中で声を大にして叫ぶ。

「お前ら！ 街と命の恩人にする称賛には、まだまだ声が小さいぞ！！
俺の声が聞こえないくらいまで叫べ！！」

その声に応えるように、地面を大きく揺らすほどの歓声上がる。
もちろん。歓声だけではそうはならない。声を張り上げているプレイヤー達の殆どがその場で拳を突き上げて荒波の様に不規則にジャンプしていたのだ。

星は空気を震わせるほどの歓声と、大地を揺らすほどの地響きに恐怖を覚え、思わず目を瞑った。

すると、星の剣を持っている腕から手を放し、エミルがその肩に両手を置いた。

「——どうして目を瞑るの？」

優しい声音でエミルがそう尋ねると、星は震えた声で呟く。

「だって、声が……それに地面も揺れて……」

「……怖い？」

優しく返ってきたそのエミルの言葉に、星は無言で頷いた。

それを聞いたエミルはにっこりと微笑みを浮かべると、怖がる星に向かつてささやく。

「これは全部貴女が起こしたことなのよ？ この声も地響きも全部。

そして、貴女が努力して得た結果でもある……」

「——努力した結果？」

星は目を開いてエミルの顔を見上げて尋ねると、彼女は無言のまま大きく頷く。

そんな彼女を見て、一度は目を背けた星だったが、再び歓声を上げるプレイヤー達を見ると不思議とさっきまでの恐怖は感じられなかった。それどころか、彼等から伝わる熱気が自分の胸を奮い立たせるような感じさえしていた。

湧き上がるその感情に、星は驚きを隠せないのか「これが私に……」と持っていた剣の柄を握る手に力が籠もる。

太陽を司る巨竜20

エミルもそれに気が付いていたのか、星の肩に手を置いて自分を見上げる彼女に優しく言った。

「……星ちゃん。これが称賛を受けるってことなのよ？ この歓声を聞いた時、今までの努力の全てが報われるの……貴女もこれから何度も受けるものよ」

星は無言で頷くと、いつまでも自分の方を向いて『剣聖！』と歓声上げているプレイヤー達を目に焼き付けるように見つめていた。すると、それを遮るようにライラがスツと現れ。現れたライラは、星の手に握られている竜王の剣を指差す。

星の視線は一瞬のうちに彼女が指差している竜王の剣へと向けられた。

固有スキル『ソードマスター』を発動しているからなのか、星の手に握られている竜王の剣の刃は赤い鱗の巨竜の体を吸収してもなお、光り輝き続けていた。

その輝く刃を指差していたライラは、星に向かって徐に口を開く。

「——その剣で空中に扉の様な四角を描いてみて頂戴」

彼女のその言葉の意味は分からないものの、星は言われた通りに空中に大きな扉をイメージして長方形を剣で書いた。

その直後、星の書いた長方形の金色の線の中から、激しい光が周囲に放たれた。すると瞬間、星が書いた長方形の光は消え去る。だが、その行為が何を意味しているのか分からず。星はただただ首を傾げるばかりだった……。

彼女に宙に長方形を書くように支持したライラは、自分のコマンドを表示して口元に不敵な笑みを浮かべた。

その顔を見た星もエミルも訝しげに眉をひそめると、ライラの口から意外な言葉が飛び出した。

「やっぱりね。これでログアウトできるようになってるわ」

その言葉を聞いた瞬間。その場にいたエミル、イシエル、メルディウス、紅蓮が揃ってコマンドを開いてログアウトの項目を探す。

すると、今まで消失していたログアウトの項目が復活していた。それを見た直後、メルディウスが両手を振り上げて天を仰ぎながら空に向かって大声で叫ぶ。

「——やっと帰れるぞおおおおおおおッ!!」

メルディウスの声が周囲に轟いた瞬間。プレイヤー達が続々とコマンドを確認して、例外なく大声を上げる。その中には嬉しさのあまりに泣き出す者までいた。

まあ、その反応も無理もない。すでにこのゲーム世界に閉じ込められて二ヶ月以上が経過している。その間、自分のリアル体がどうなっているかも分からない状態。

戻ってすぐに日常生活に戻れるかどうか分からない。リアルでは寝たきりの生活を二ヶ月も続けていたのだ——まず。筋肉はそれだけ弱体化しているだろうし、その間に固形の食事を取っていないのだから、体には相当な負担を掛けていることになる。それを取り戻す為には、多くのリハビリに時間を割かなければならず。いつ通常の生活に戻れるかの目算は立てられないだろう……。

だが、幸いなのはゲーム内に閉じ込められていた日数が二ヶ月程度に抑えられたことだろう。これが一年や二年の年単位になっていれば、元々の筋肉量の少ない女性なんかは歩行困難に陥って歩けない者達も出てきていたかもしれない。

それを分かっているのかいないのか、周囲からは再び『剣聖』コールが巻き起こり。先程よりも大きな称賛が星に寄せられる。

それには星も満更でもない様子で口元に微かに笑みを浮かべている。

すると、今度はメルディウスの隣にいた紅蓮が声高らかに宣言する。

「我々は戦いに勝ちログアウトできるようになりました！　しかし、まだログアウトはしないで下さい!!」

そう言った紅蓮の言葉に、周囲にいたプレイヤー達から動揺する声が上がった。まあ、無理もない。ログアウトできる様になったんだ——この機を逃したら次はいつログアウトできるか分からない。

しかし、彼女の次に発した言葉で周囲は一瞬で静まり返ることとなる。

「皆さん。我々は勝利を勝ち取りました。しかし、それは同時にこのゲームと共に戦った戦友との永遠の別れを意味しています」

静まり返った彼等は、側にいる仲間達の顔を感慨深そうに見渡していた。

そう。この戦いが終わったということは、大規模な監禁事件に幕を下ろしたということであり。VRMMOゲーム【FREEDOM】の中に閉じ込められていたプレイヤー達が現実の世界に戻れば、全ての非難の声はこのゲームの運営の方に集中するだろう。

そうなれば、ゲームの存続そのものが危うくなるのは言うまでもない。それをこの場にいた全員が理解しているのかもしれない。

その雰囲気でも星も察しているのか、星は周囲にいる仲間達の顔を見渡した。すると、紅蓮が声を上げて叫んだ。

「私達のギルドが料金を持ちます！ 今日は無礼講です。皆さんも楽しんで下さい！」

彼女がそう言った瞬間、他のプレイヤー達が声を上げてその提案を否定する。

「いいや！ 今回は俺達の店を出させて下さいよ！」

重鎧を纏った盾と斧を手にした男性が声を上げると、周辺からも「俺達に奢らせてくれ！」という声が次々に上がってくる。

今回の戦闘では現役を引退して、個人で店舗を運営していたプレイヤー達も多く参加していた。

そんなプレイヤー達まで戦線復帰しなければ、あの赤い巨竜を抑えることはできなかつただろう……いや、それでも星がいなければその進行を止めることはできなかった。

それは彼等が一番良く分かっている。だからこそ、今回の功労者である剣聖を連れてきてくれた千代のメインギルド『THE STRONG』のメンバーにも少しでも恩返しをしたいのだろう。そうでなければ、千代の街のプレイヤー達は彼等に借りを作ったまま現実世界に戻ることになってしまう。それが彼等としては許せないのだ……。

紅蓮は声を上げた彼等の言葉を聞いて深く頷くと「分かりました。お願いしましょう」と言葉を返す。その瞬間に、周囲から歓声が上がリ。瞬く間に周囲をプレイヤー達が押し寄せ、紅蓮達の背中を押して千代の街の方へと向かって歩き出す。

すると、星達の周りもあつという間に取り囲まれ。エミルとエリエ、カレンが瞬時に群衆と星の間に入って行く手を阻む。

彼等は「剣聖様も是非！是非参加して下さい！」「俺達が生き残ったのも剣聖のおかげだ参加してくれないと始まらないぜ！」と言われ、彼等の熱い意思に負けた様に星は頷く。

直後。周囲に歓声上がり、星を先導するようにプレイヤー達が歩き出し、星達も街へと戻って行った。

別れの宴会

千代の街に戻ると、街の中にはすでにログアウトできるようになったことが知れ渡っていて、それを剣聖が成し遂げたと伝わっていた。

街はまさに凱旋ムード一色で、いつ用意したのか分からない横断幕や繁華街の左右には戦闘に参加したそれぞれのギルドのエンブレムを模した旗が激しく振られていた。

その中には始まりの街のギルドの旗も見え、それを見た始まりの街のギルドのメンバー達の中には涙ぐんでいる者までいた。まあ、この戦いで多くの犠牲者も出したから当然だ――。

星達の側に、人混みを掻き分けたサラザがオカマイスターのメンバー達と共に現れた。

「エリー、探したわよ〜」

相変わらぬオカマ口調で手を振って走ってくるサラザ。

エリエもサラザの姿を見つけると、嬉しそうに走っていった。

「サラザ！ どこに行つてたのよー！」

「いやね。星ちゃんが皆の注目を浴びてるのに私達がいると、あの子が萎縮しちゃうんじゃないかと思ってね。少し離れて見てたのよ〜。そしたら急に人波に呑み込まれて消えちゃったじゃない？ もう、焦ったわよ〜」

どうやら、サラザは自分の外見が星を萎縮させていることには気が付いている様だ――まあ、だからと言ってサラザがオカマを辞めることはないようだが……。

サラザはエミルの側にいる星につこりと微笑み、屈強なその手を振ると星はビクツと体を震わせてエミルの陰に隠れた。

そんな星の様子を見たサラザは小さなため息を漏らした。

「そうそう、エリー。エミル達を私のお店に連れてきてくれない？」

「それはいいけど……でも、今日は千代の人達が奢ってくれるみたいだよ？」

エリエはサラザの口から出た予想外の言葉に不思議そうに首を傾げている。

まあ、彼女が不思議に思うのも無理はない。いつもはサラザの厚意で、サラザのお店でタダで飲み食いさせてもらっている。

そんなエリエからすれば、今日くらいはサラザに負担を掛けないようにしたいと考えたていたのだ。

「——いや、私達がこのゲームで会えるのは、これが最後になるかもしれないからね……他の店でやって疲れる前に、私のお店でお疲れ会をしたいのよ……」

「……あつ。……うん。分かった」

感慨深げに悲しそうな瞳を向けるサラザに、エリエはその心情を察したのか、頷いてエミル達の方へと走って戻っていった。その後ろ姿を見送ったサラザは、オカマイスターのメンバーと一足先に準備の為に店へと戻る。

エミルの元に戻ったエリエは彼女の耳元で小さな声でささやいた。

「——実はサラザがお店でお別れ会を最初にしたんだって……」

そう伝えたエリエだが、サラザが言っていたのは『お疲れ会』であって『お別れ会』ではない。しかし、エリエの言葉の意味も間違っていない。

おそらく。エリエがサラザの言葉を解釈した結果の改変なのだろう……だが、その言葉を間違っているのではないのも確かだ。

「分かったわ……でも、一応紅蓮さんに伝えておきましょう」

そうエリエに告げたエミルは徐にコマンドを開き、紅蓮に向けてメッセージを送る。

エリエはほっとした様子で胸を撫で下ろすと、突然背中に凄まじい衝撃が襲い掛かってきた。

「エリエー!!」

耳元で大声で叫ぶ声が聞こえたかと思うと、背中から抱きついて首に回された腕がエリエの首を絞めて息ができなくなる。

急に飛び掛かってきたミレイニが、エリエの首に腕を回したまま言葉が続けた。

「早くご飯にするし！ あたしは甘い物がたくさん食べたいんだし！」

「ぐっ……うぐぐっ……ギブギブ……」

お腹が空いていると言わんばかりにミレイニの腕に力が込もり、更に首に食い込み、エリエのHPが徐々に減少を始めた。

それに気が付いたデイビッドが慌てて、エリエの背中に飛び乗っていたミレイニを彼女の背中から放した。

地面に崩れ落ちたエリエは膝と両手を地面に突き、肩を大きく上下させながら荒く息を繰り返している。

ミレイニが「おおげさだし」と笑っていると、涙で潤んでいるエリエの鋭い瞳がお腹を抱えて笑っているミレイニを捉えた。

その直後、エリエの全身からドス黒い殺気がほとばしり、それを察したデイビッドは被害を恐れてその場をすぐに離れていく。その予想は見事に的中し、デイビッドが離れた直後、笑っているミレイニの側に持ち前の俊敏性を活かして一瞬で移動した。

さすがにそれにはミレイニも気が付いたのか、ブルつと体を震わせるとその場を離れようと走り出したが、完全に頭にきているエリエから逃げられるわけもなく……。

逃げようとするミレイニの腕をがっしりと掴んで、ミレイニを捕まえると自分の方へと引き寄せて、弾力のあるミレイニのほっぺたを両手で左右に引っ張った。

「——あんたは……どうしても問題を起こさないと、気が済まないよ
うねミレイニ!!」

「いはー… いはいひ!!」

エリエはミレイニの頬を引きながらイライラした様子で低い声で
呟く。

「こういう時……なんて言うんだっけ?」

「ぐえんあはい!… ぐえんあはい!!」

両手をブンブンと上下に振りながら叫んでいるが、エリエは完全に
プツンしているのか全く放す気配がない。しかし、ミレイニには悪
いが、この光景を目にするともう戦いは終わったのだと安心する。

そんなエリエとミレイニのやり取りを見ていたエミルが彼女達の
元までやって来ると、大声で叫ぶ。

「なにしてるの!!」

その声に驚いたエリエとミレイニがビクツと体を震わせて恐る恐る振り向くと、そこには腕を組んだまま不機嫌そうに目を細めているエミルの姿があった。

「どつちが悪いかは聞きません2人とも正座しなさい!」

「はい!」

跳び上がり正座した2人にエミルはガミガミとお説教を始めた。

長くなりそうなエミルの説教を見ていたレイニールを抱いた星の元に、デイビッドとカレンが歩いてくる。そんな2人に星に視線を移すと、星に向かってカレンが言った。

「エリエは何をやってるんだか……長くなりそうだ。星ちゃんも俺と一緒に先にサラザさんのところに行こう!」

「……でも、このままにしておくのは……」

困惑する星の言葉を聞いて、カレンは正座するミレイニとエリエに説教をするエミルの姿を見て困った顔をする。

「——だけど、あれは終わるまでまだまだ掛かりそうだよ?」

星は腕にぬいぐるみの様に抱いている気を失ったレイニールの方を向く。

俯き加減でその場に立ち尽くしている星を見て、カレンもそれ以上の無理強いはできないかと思っっているのか何も言えないまま、星と同じくその場に立ち尽くしていた。すると、そんなカレンを見兼ねてデイビッドが話し掛けてくる。

だが、知らせるだけならメッセージでできる。これはデイビッドが星をこの場から移動させる為の口実でしかない。

本人はどう思っているかは分からないが、すでに星は有名人だ——気を使って寄っては来ないものの、周囲からの視線は間違いなく星に向いている。

別れの宴会2

その視線に耐えられなかったし、他のプレイヤー達をまだ信用しきつてはいないということが大きい。

ネットゲームのプレイヤーは基本的に嫉妬心の多い者が多い傾向にある。まあ、それも無理はない。非現実の世界であればあるほど、現実世界で培われた感性は徐々に薄まっていく。

どうせゲームの中なのだから……つと自制心が小さくなっていくプレイヤーが殆どだ。いや、この【FREEDOM】というゲームがプレイヤーを閉じ込める監獄となってその自制心が回復した。

しかし、この世界がログアウトできる様になったというのは、すでに街中に知れ渡っている事実。しかも『剣聖』である星が最強のドラゴンを倒したことも知られてしまっている。

もしかしたら、この街のプレイヤーの誰かが、星の持っているアイテムを奪おうと企んでいる者もいるかもしれない。ゲーム内で最強と言われたマスターが側にいれば、また状況は違うだろうが。しかし、すでにマスターはこの世界にはいない。

いくら星が強いとはいえ、中身はただの小学生であり。人生経験が少ないため、アイテムを奪う方法は戦闘以外でいくらでもある。

彼女に危険が及ぶ可能性を考えると、この場所になるべく長時間いない方がいい。ただでさえ目立つのに、今はエミルがミレイニとエリエに説教しているせいで更に目立っている。

デイビッドは迷っている星の手を引くと、少し強引にギルドホールの方へと歩いていく。

それを見ていたカレンは、説教をしているエミルの後ろで少し離れた場所に立って、にこにここと微笑みを浮かべているイシエルに声を掛けようと思ったが、断られるのが分かっているのでそつとしておくことにした。

ギルドホールに着くと、丁度メルデイウス達がギルドホールから出掛けるところだった。

デイビッドに気が付いた小虎が表情を明るくして、彼の元へと走っ

てくる。

「デイビッドさん！　これからギルドの皆で宴会に行くんですよ。良かったらデイビッドさん達も僕達と一緒に行きましょう！」

瞳をキラキラと輝かせながら、身を乗り出してデイビッドに熱い視線を向けている。

デイビッドがそんな小虎に困った様な表情を浮かべたまま、はつきりと断れずに言葉を濁す。

まあ、この状況で小虎にサラザの店にいくと言えば、間違いなく付いてきてしまうだろう。そうなれば、サラザがせっかく親しいフレンド達だけで行おうとしているのを台無しにしてしまうかもしれない。

確かにこれが最後になるかもしれないのだから、侍好き仲間の小虎と少しでも長く話をしたいという気持ちはある。だが、それはデイビッド個人の感情で、それをサラザや他の者達に強要していいものではないのだ――。

「小虎。無理を言っただけじゃありませんよ？」

困り顔で苦笑いを浮かべているデイビッドと、期待した様子で目をキラキラさせている小虎の側に紅蓮がやってきた。

それに驚いたのはデイビッドだった。まさか紅蓮が助け舟を出すとは思っていなかったのだろう。

小虎の前に出てきた紅蓮は、横目で一瞬だけデイビッドの方を見ると、小虎の顔を見ながら再び口を開く。

「デイビッドさん達は荷物をまとめに行くんですよ小虎。またこのゲーム世界に戻ってこれる保証がない以上、アイテム整理は必要なことです。私達はもう終わらせたいんですから、彼等の邪魔をしてはいけませんよ」

「……はい。分かりました姉さん」

小虎は名残惜しそうにデイビッドを横目で見ながらその横を通り過ぎていった。その横を紅蓮が口元に微かな笑みを浮かべて通り過ぎ、白雪が軽く一礼して横切り。メルディウスと剛が続いていく。

メルディウス達がギルドホールを出ていったのを確認して、デイビッド達もギルドホールのエントランスにあるエレベーターからサ

ラザの店のある階へと上がっていく。

サラザのお店に着くと、サラザとオカマイスターのメンバーが出迎えてくれた。

「待ってたわよ。あら？ エリー達はどうしたの？」

「いや、実は……」

首を傾げるサラザにデイビッドが事情を説明した。すると、サラザは大きなため息を漏らしながら「なるほどね」と呆れた様子で呟く。それを聞いたガーベラとカルビもがっかりした様に肩を落としている。

まあ、以前エリ工達が着た時にガーベラもカルビもミレイニと仲良くしていたのだから無理もない。しかし、サラザは気持ちを切り替えてデイビッド、カレン、星を店の中に招き入れた。

デイビッド達がカウンターに座ると、サラザはキッチンに入り中から事前に作っていた料理を運んでくる。

カウンターには見る見るうちに料理が置かれ、ビーフシチューやグラタン。唐揚げに焼き鳥、エビチリ、酢豚にサラダなど数え切れないほどだ——デイビッド、星、カレンもそのサラザが自慢の腕を発揮して作った料理の数々に思わず「おー」と歓声を上げる。

その時、星が腕に抱いていたレイニールの鼻がピクピクと動き、気を失っていたレイニールの睨がゆっくりと開く。

食いしん坊のレイニールのことだ。サラザの料理の匂いを嗅いで、その底なしの胃袋が無意識に反応した結果だろう……。

「……んっ、（こ）はど（こ）じゃ？ 天国か？」

気付いて早々に首を左右に動かし周囲の様子を窺っている。その時、レイニールの顔にポタポタと雫が滴り落ちる。

レイニールはその雫が垂れる方を見上げると、涙を流しながら見下ろしている星の顔が視界に入る。

「——良かった……無事で……レイ……」

震える声ですすり泣く星に、レイニールはほっとした表情で星の腕をすり抜けると、パタパタと翼をはためかせながら、泣いている顔の方へと飛んでいく。

泣いている星の顔の近くまできたレイニールは、ゆつくりと手を伸ばして星の頬を伝っている涙を拭う。

星はレイニールの顔を真っ直ぐに見つめると、レイニールは満足そうな笑みを浮かべていた。

「主。どうして泣くのじゃ？ 我輩も主も無事に帰って来れた。…：なら、それでなんの問題もないのじゃ」

「…：うん。そうだね」

その言葉に星は深く頷いて飛んでいるレイニールに微笑んだ。それに微笑み返したレイニールは、いつもの定位置である星の頭の上に乗った。

星の頭の上に乗っていたレイニールは、更に視界がクリアになったことでエミル、ミレイニ、エリエがないことに気が付く。

レイニールが口を開くよりも早くカレンが話し始め、それを聞いたレイニールはあんぐりと口を開いたまま呆然とした。その時、孔雀マツザカがステッキとシルクハットを取り出し、得意のマジックを披露し始める。

シルクハットを逆さにして数回それをステッキで叩くと、突如として鳩が飛び出してきた。それを見た星達は驚きながらも、孔雀松坂に拍手を送った。

気を良くしたのか、次に孔雀マツザカのオリジナル武器の四隅に刃の付いたトランプを取り出し、それを躊躇することなく次々と空中に投げてジャグリングを始める。

次々と枚数の増えていくトランプに、星達の拍手が大きくなっていく。

孔雀マツザカの芸を見ていた星達の意識を向けるため、サラザがパンパンと手を叩いた。

「ほら、エリー達はきてないけどお料理を食べましょう」

サラザの提案に最初は戸惑っていた星とデイビッドだったが、それを全く気にする様子もなくカレンとレイニールだけはカウンターに置かれた料理を食べ始めている。

まあ、激しい戦闘の後でお腹を空かせていたレイニールとカレン

は、料理に手を付けるためのきっかけを待っていたと言えるだろう。
だが、レイニールとカレンが料理に手を付けたと同じ頃に店の扉を
開けてエミル達が現れた。

別れの宴会3

長いお説教を受けたエリエとミレイニは疲れ切った様子でげっそりとしている。

「ごめんなさいねサラザさん。随分と遅くなってしまつて……」

そういつて申し訳なきようにサラザに軽く頭を下げるエミル。

そんな彼女をカウンター席に座るように促すと、その後ろに立っていたエリエとミレイニにも同じように席に座るように言った。

エリエとミレイニは席に着くなり、カウンターに顔を付けるように倒れ込んで大きなため息を吐き出す。

その大きなため息を聞いたサラザは2人に料理を小分けにした皿を差し出したが、エリエもミレイニもその皿に手を伸ばそうとしない。この2人が料理に手を付けないというのは、それだけエミルのお説教で疲れたということなのだろう……。

料理に手が伸びない2人を他所に、カレンとレイニールがサラザの作つた料理を次々に平らげていく。

星はガツガツと食べ進めているそんな2人を横目で見ながら、小皿に取り分けている酢豚を少しずつ口に運んでいる。

それからしばらくして、レイニールとカレンの食べる早さが収まっていくに連れて、カウンターに伏せてぐったりしていたエリエとミレイニが、今までの食欲を取り戻すように食事を始めていた。

その様子を見たガーベラとカルビ、孔雀マツザカも楽しく談笑しながら料理に箸を付けている。

料理の作るサラザも、うきうきしながら鼻歌を口ずさんで上機嫌な様子だ。だが、星にはこの食事が楽しければ楽しいほど、これ为本当に最後なのだ実感してしまう。

それを察しているのか、エミル達もこの時を全力で楽しもうとしているようにも見える。

ミレイニとオカマイスターのガーベラ、カルビは仲良く話をしていく。エリエとデイビッド、カレンはカウンターを隔ててサラザにデイビッドの悪口を言って、それにカレンがエリエの悪口を言っては、

今度はエリエがカレンに噛み付きサラザとデイビッドがそれを止めるというテンプレのようなやり取りを繰り返している。

そして星とエミルは、孔雀マツザカのマジックショーを見ながら、楽しげに談笑していた。今は孔雀マツザカの黄色いモヒカンが背中から出てくるという芸を見せている。

「あの目立つモヒカンが消えるなんて凄いわね。星ちゃん」

「はい」

エミルは微笑みを浮かべながら、星の方を向くとそんな彼女に星も微笑み返す。

食事に集中していたレイニールも、もう食べ物を食べることに飽きたのか、星の頭の上にパタパタと飛んできてちょこんと乗った。

「主。もう食べなくてよいのか?」

「うん。もうお腹いっぱいだから……」

そういつて微笑む星に、レイニールは「そうか」と短く返して前を向く。

口数は少なかったが、それも星との別れが近いことを察しているからなのだろう……だが、それをレイニールは口にしようとしな。それを口に出したら、雰囲気が悪くなるのを避けたのだろう。

それから数時間もの間。サラザの店で宴会を行っていたエミル達だったが、さすがに時刻が午前1時を回ったことで星やミレイニのことを考えてお開きにしたのだが……。

年少組のミレイニと星はまだまだ元気なようで、眠くなっていない。まあ、現実世界ならまだしも、ゲーム内ではどのプレイヤーも均等にステータスが割り振られている。

実年齢がなんであれ、身長などで攻撃範囲が狭まるのは攻撃力と攻撃速度、移動速度に自動で割り振られるボーナスポイントで相殺される。

アバターの状態で差別をなくすシステムは、身体能力だけではなく精神面でも同じなのである。つまり、星とミレイニがいくら幼くても、疲労も眠気も同じくらいで感じるのだ――。

元々、この世界での睡眠はシステムを一度リセットして再移動させる為の、一種のセーブポイント作りでしかない。

ログアウトできる状況となった今の正常なシステム状態なら、仮想メモリーに蓄積できるデータ量が限界を超えない限りは、激しい睡眠魔は襲ってこないだろう。

ギルドホールを出たエミル達は、繁華街がまだ多くのプレイヤー達が行き交い。まるで熱が冷めないお祭り騒ぎで、煌々と提灯や店の明かりが江戸時代の様な町並みに広がっていた。

通路を覆うほどの人集りが、店から店へと移動している。そんな中でも、もう店に入り切れずに外で酒やジュースなどの飲み物を一気に飲み干している者達もいる。

ギルドホールを出たエミル達がメルデイウス達を探して、繁華街の人波を掻き分けていると、ある店の前からメルデイウスが出てきた。

「おうー、ごちそうになったな店主！」

のれんを腕で持ち上げて店の中に向かって叫んでいた。

中から出てきた紅蓮と星の目が合う。まあ、視線が同じくらいの高さなのだから当たり前だが……。

目が合った星は視線を逸らすと、紅蓮はその横にいるエミルの顔を見上げた。

「用事は終わりましたか？」

視線を逸らされた星のことは全く気にしていないのだろう。その声音は普段通りというか、全く動じている感じがなくて怖いくらいだった。

エミルは紅蓮の顔を見て「ええ」と短く告げると、紅蓮は「そうですか」と口元に微かな笑みを浮かべる。

そして紅蓮は言葉を続けた。

「なんと言っても、今回の戦闘の功労者は貴女方です。主賓がいなければ、せっかくの宴会もどうしても華に欠けます。本当はマスターとも………いえ、なんでもありません」

紅蓮はぼそつと呟き、すぐにその言葉を呑み込んだ。

彼女にとって、マスターがいなくなっただけは相当大きなことだっ

たのだ。だからこそ、安堵した今になって彼女の口から彼の名前が出てきたのだろう。

普段と変わらず無表情なはずなのだが、どこか寂しそうにも見える紅蓮の後から白雪、小虎が現れる。

小虎はデイビッドの姿を見つけると、表情を明るくして彼の方へと駆けてきた。

「随分と掛かってたみたいだけど、もう荷物の整理は終わったんですね！」

「ああ、もう終わったよ」

「それじゃー、四次会は参加できますね！」

嬉しそうに笑った小虎にデイビッドも頷いて返した。なにより驚きなのは、こちらがまだ二次会になろうとしているのに、彼等はすでに四次会まで進んでいることだった。それは相当なハイペースで、彼等が飲み続けていたということの証明でもある。

そんな中、メルデイウスの側にギルドメンバー達が複数人集まり。彼に涙ながらに頭を下げると、メルデイウスはそんな彼等の肩を叩く。その後、空中で指を動かしてスツと消えていく。

そして彼の前にいるギルドメンバー達が全員消えていくと、彼は拳を天に振り上げた。

「よしー、次の店に行くぞー!!」

そう次の店に向かって、ギルドメンバー達を先導しながら歩き出した。

ぞろぞろと店から出てくるギルドメンバー達が全員出たのを確認して、紅蓮がエミル達を先導して歩いていく。

彼等が次にいったのは、千代でも大きな酒場の一つで外見は時代劇などで出てくるような大きな店の名前の書かれた2つの提灯が店先を照らしている。

その提灯には『大国屋』と書かれている。酒場というよりは旅館と这种感觉の外観であり、その外観を見る限り相当な数のプレイヤーが入りそうだ――。

そこにメルデイウスを筆頭に、紅蓮、白雪、小虎、剛のギルドを代

表とするプレイヤー達が入っていく。それにエミル達が続ぎ、その後をぞろぞろと彼等のギルドメンバー達が入っていった。

木造の廊下を歩いて行くと、聞き慣れた声が耳に飛び込んでくる。障子の戸で仕切られた前の廊下に置かれた木製の立て看板には『メルキュール』と書かれていた。

メルキュールは始まりの街の大手ギルドで千人規模の大きなものだ。そのギルドマスターは特徴的な漆黒のドラゴンを模した兜に漆黒の鎧を身に纏う『ダイロス』そしてサブギルドマスターは茶色く長い髪を三つ編みに結んだ西洋の鎧を身に纏った『リアン』だ。

彼等のギルドも始まりの街からの離脱に一役買った言わば、信頼して気を許せる仲間である。

エミルが前を歩く紅蓮に「彼等と一緒にしないのか？」と尋ねると、紅蓮は歩みを止めることなく無言のままその場を去った。エミルがその彼女の様子に困惑しその場に留まっていると、背中から肩をポンと叩かれた。

別れの宴会 4

振り返ると、そこにはメルデイウスの姿があり。彼が表情を曇らせ徐に告げた。

「行くぞ白い閃光。今は他のギルドに関わらない方がいい」

「……どうして？ 彼等も一緒に戦った仲間なのに……」

「……………訳は後で話す。いいから行くぞ！」

少し強い口調でそう言われ、エミルもその場は彼の言葉に従った方がいいと思い、足早にその場を離れた。

メルデイウス達とエミル達は廊下の一番奥の部屋に通された。まさにお座敷と言った感じの畳の上に座布団を敷かれ、漆塗りの一人用のお膳が置かれている。

エミル達は主賓席代わりに用意されていた一番奥の席に案内されると、座ったエミル達と向かい合うようにして彼のギルドメンバー達が座っていく。

全てのメンバーが席に着くと、皆が目の前に置かれたお酒とジュースを持ってそれを大きく掲げる。その直後、メルデイウスがビールの入ったジョッキを手に徐に立ち上がった。

「——ここにいるのは、俺達を助けてくれた命の恩人達だ！ 彼女達がいなければ、俺達もゲーム内のプレイヤー達も全員殺されていた！

俺達の恩人である彼女達に感謝！ 止めを刺した剣聖に感謝！

そして、失った仲間達に感謝を込めて—— 乾杯!!」

『乾杯!!』

メルデイウスが声を上げると、その場にいた全員が険しい表情で手に持った器を更に天に掲げた。

だが、いざ宴会が始まると、皆笑顔で楽しそうに飲み食いしている。その中には、星の近くに来て乾杯をする者までいた。

楽しそうに笑顔でやってきては乾杯を迫ってくる彼等に、星も戸惑いながらもグラスを掲げてカチンと鳴らしては軽く頭を下げて去っていく。

それを横目に嬉しそうに微笑みを浮かべているエミルとしては、今

まで人の陰に隠れて表に出ることのなかった星が、自分以外の人達に認められているのが素直に嬉しいのだろう。まあ、そんなことを星に言えば、控えめな彼女のことだ『私は別に大丈夫です』とか言いそうだ――。

上機嫌で星のことを見守っているエミルの側にメルデイウスが座った。

エミルの側に腰を下ろしたメルデイウスは、胡座を搔いて畳の床にビールの入った瓶を置くと、空のジョッキをエミルの方へと突き出した。

「白い閃光。お前は飲めるのか？」

「――えっ？　いえ、私はまだ成人じゃないので……」

エミルはそう言つて、彼が突き出している空のジョッキを両手で軽く押し返す。

メルデイウスは「そうか」と少し残念そうに呟くと、彼女の前に突き出していた空のジョッキグラスを畳の上に置く。

彼としては『白い閃光』の異名を持つエミルと酒を酌み交わしたかったのだろう……。

その直後、もう一つ自分の飲んでいたジョッキの中のビールを一気に飲み干すと、置いていたビール瓶から自分のジョッキにビールを注いでいく。

そして楽しそうに騒いでいる仲間達を見て、彼等とは逆に険しい表情でエミルの方を向いた。エミルも彼のその表情を見て、神妙な面持ちで彼の言葉を待っていた。

「……さっきお前を止めただろ？　その本当の理由を教えてやろう」

「はい。……その理由は？」

生睡を呑み込みエミルはメルデイウスの顔を見つめている。

それも無理はない。普段は真面目とは程遠い彼の様子からは真面目な今の姿は想像もできない。逆を言えばそれだけ、今回の彼の言葉は重いということもある。

「今回の戦闘で数万のプレイヤーを導入して、被害は千人弱のプレイヤーが消えた。幸い俺達のギルドには被害はない。だが、始まりの街

で現在最も強いと言われている大規模メルキュールでも数十人の犠牲者を出した。確かに剣聖やお前の活躍で俺達は現実世界に帰れる。しかし、それは俺達は……という事だ。消えた仲間達はもう戻らない！」

そこまで口にしたメルデイウスは口を閉ざす。だが、彼の手に持っているグラスがカタカタと小刻みに震えている。

彼も共に戦った仲間達を失ったことを思い出して後悔しているのだろう……もちろん。その場でなにか行動して変わったかといえ、逆に被害が増えていたかもしれない。

しかし、だとしても『なにかできたのではないか……』そんな思いが湧き上がってくるのは仕方がないことだ。

自分もギルドを率いる長であるからこそ、その感情も必然として大きくなってしまおうのだろう。

エミルもその気持ちは彼と同じだ——もしも、星やエリエ。仲間誰か一人でも欠けていればと考えるだけで気が狂いそうで怖い。

メルデイウスが廊下でエミルを、メルキュールの宴会をしている部屋の前で止めたのはエミル達は誰一人仲間を欠いていないことが理由だったのかもしれない。

「それにだ……俺達はこのゲームを2年以上プレイしている。それも、今回の事件で運営はセキリティー面の弱点を世論から責められるだろう。そうになったら、もうゲーム運営はできなくなる」

「そうですね……」

彼の言葉を聞いたエミルはジュースの入ったグラスを一口飲んで、暗い表情で俯きながら呟く。

「でも、もしかしたら存続される可能性も……」

「そんな可能性はありませんよ？」

2人が話していると、そこに紅蓮がやってくる。

彼女はメルデイウスの隣に座ると、エミルの希望を打ち砕く様に淡々と喋り始めた。

「この事件が発生した事は本来ならば防げるものでした。事件に関与したのは実質一人の科学者です。簡単に言うと、その科学者に数百人

「数千規模の世界的な国連という組織はハッキングを受けたわけですよ？ この『FREEDOM』という世界初のフルダイブ式のVRゲームは危険性を軽視していた好奇心旺盛な若者の支持と、リアルマネーを使用せずに仮想通貨として利用していた富裕層の支持で保っていました。今まではなんの問題もなく運営してきたからこそ。それが結果的に、初期に批判していた世論の信頼を勝ち取っただけに過ぎません——しかし、今回の事件でフルダイブ式のゲームは娯楽ではなく。殺人を容易にできる凶器と化しました。しかも、運営する国連に属する組織はそれになんの対処もできなかった……その意味がお分かりですか？」

紅蓮の言葉に、エミルはなんの反論もできずに口をつぐむしかなかった……。

そこに追い打ちとばかりに紅蓮が言葉を続けた。

「私達が現実世界に戻れば、様々な情報を仕入れることができます。しかも、現実世界に戻って、もしも彼の言っていた通りに犠牲者が出ていたとしたら、その遺族も味方にして世論は責めてくるでしょう。日本はこのゲームを開発した国であり、近未来的な高い技術力を売りにしていますから……アメリカ、ロシアは独自のゲームサーバーを開発できていますが、殆どの国が日本のメインコンピュータにあるサーバーを利用してするのが現状です。技術力が全く追い付いてこないんです。国連に属する組織が運営権を持っているというだけで。結局はアメリカ、ロシア、日本だけが甘い汁を吸って他の国はそれに群がっているだけの構図が正しい見方です。つまり関われない各国の本音は『手に入らないのなら、日本の世論を味方に付けてこの機に乗じて潰してしまえ』ということなんです。存続なんて、相当な事が起きない限りはありませんよ……」

そう告げた紅蓮の表情はどことなく悲しそうに見える。

まあそれも無理もないだろう。紅蓮はメルディウス、バロン、デュランで四天王と呼ばれ、このゲームがベータ版だったことからテストプレイヤーとして参加してきた。

このゲームに掛ける思いは、正式リリース勢であるエミル達には理

解することはできないのだろう。何故なら、彼女達テスターと呼ばれるプレイヤーは開発チームと親密に話をしてバグや改善点などを話し合っており、この大人気VRMMO「FREEDOM」を作り上げてきたからに他ならない。

悲しそうな紅蓮に、エミルはどう言葉を掛けていいものか分からずに口を閉ざしていると、紅蓮が感慨深げに言った。

「……でも、楽しかったですね」

「ええ、楽しかった……」

「ああ、いいゲームだった……」

紅蓮の言葉にエミルもメルディウスも今までの日々を思い出しているのか、瞼を閉じながら感慨深げに頷く。

しばらく感傷に浸っていると、メルディウスがジョッキに入っていたビールを飲み干して楽しそうに酒を酌み交わす仲間達を見ながら呟いた。

「……こいつらとも、もう少してお別れだ。もう現実世界に戻った奴らも多くいる。俺達は二ヶ月近くこの世界に閉じ込められている。リアルでの俺達の体もそうだが、その環境も大きく変わるだろう？ 二ヶ月は短いようで長い……ゲームやって二ヶ月間寝たきりなんて、笑話のネタにもならねえー。酒でも飲んで、勢いで向こうの世界に帰らないとやってられないのさ……」

メルディウスのその言葉に、エミルも納得するように深く頷いた。おそらく、彼の言葉は皆が思っていることであり、事実なのだ——エミル自身も内心ではそう思っている。ゲームクリアすることによって今まで集中していて、リアルに帰った後のことは考えている暇がなかった。

しかし、いざ帰れるとなると頭の片隅にあっさりリアルに戻った時の恐怖心が蘇ってくる。こればかりは、どんなにゲームをやり込んだベテランプレイヤーでもどうしようもないだろう。

エミルの方を向いたメルディウスが、手に持っていた空のグラスを置いて徐に口を開く。

「——暗い話は終わりだ！ さあ、今日はとことん楽しもうぜ！」

「まあ、考えてもしかたないことですね！」

そう言ったエミルはビールの入っている瓶を持って、メルデイウスの前に置かれている空のグラスにビールを注ぐと、エミルもジュースの入ったグラスを持った。

すると、メルデイウスは口元に笑みを浮かべ、エミルの注いだグラスを持って彼女の持っているグラスに軽く当てる。

2人が微笑むと、紅蓮が横からエミルの持っているグラスに自分のグラスを当てた。

「私達はこちらでベストを尽くしました。そこで私達の仕事は終わりです。後は今を楽しむだけです」

エミルは紅蓮の顔を見ると、にっこりと微笑んで手に持っていたグラスを口に運ぶ。

別れの宴会5

それから数時間もの間行われてきた馬鹿騒ぎの宴会も最後になる。外はすでに太陽が上がり、朝日が江戸の街並みを思わせる千代の繁華街を照らす。

太陽光を浴びているエミル達はメルディウスと紅蓮。小虎、白雪と少数のギルドメンバー達と向かい合っている。

メルディウスはエミルの肩を叩くと。

「今日まで以外と短い付き合いだったが、お前達とは本当に濃い日々だった。一緒に暴れられて楽しかったぜ！ ……元気だな。白い閃光」

「はい。私も一緒に戦えた事を誇りに思います」

エミルはメルディウスに向かって手を差し出すと、彼もニヤツと笑みを浮かべながらその手をがっしりと握った。

すると、メルディウスはデイビッド、エリエ、カレン、イシエル、ミレイニと次々に握手をして「ありがとう。元気だな！」と声をかけていき、そして最後に星の前で止まった。

星は目の前で止まったメルディウスの顔を見上げて不安そうな表情を見せている。

直後。メルディウスは不安な星に向かって精一杯の笑顔を見せて膝を折って、視線を合わせると手を差し出して言った。

「剣聖には一番負担を掛けてしまったな…：俺達の街を守ってくれて本当にありがとう。ここに居る者達はみんな感謝している！」

彼の言葉を聞いた星は、周囲にいた者達の顔を見渡す。

すると、彼等の瞳は朝日に照らされてキラキラと輝いていた。それが星にはとても生き生きしているように見えて、それを自分が少しでも力になれたと思うと嬉しかった。

星はゆっくりと手を伸ばしたが、彼の手を握る前にどうしても躊躇してしまう。その直後、メルディウスは躊躇していた星の手を握ると目を真っ直ぐに見つめる。

「俺達が現実世界に帰れるのもお前が居たからだ——本当にありがとう

う！」

「……はい」

メルデイウスの顔を見て頷いた星に、向かって紅蓮達とギルドのメンバーも深く頭を下げた。

困惑した様子であたふたしている星にメルデイウスが再び「ありがとう」とお礼を言うと、顔を上げた紅蓮が今度はエミルの方を向く。

「またどこかで会えればいいですね。共に戦えて良かったです」

「ええ、本当に……」

エミルと紅蓮は互いの顔を見て短くそう言った。

するとその小虎もデイビッドの元に駆け寄ると彼に向かって手を差し出す。

「僕もデイビッドさんと侍の話ができてすごく楽しかったです！」

「うん。俺もだよ小虎くん！ 共に侍の心を忘れなければ、きっと現実世界でも会えるさ！」

「デイビッドさん……」

互いにかつしりと手を握り合う2人がゆつくりと離れると、メルデイウスに呼ばれて彼が小走りに戻っていく。

その後、笑みを浮かべた彼等がコマンドを操作してログアウトの項目を指で押す。彼等の体が薄く透けていくと、そのままスッと完全に姿を消した。

それを見届けたエミル達も感慨深げに仲間達の顔を見渡している。すると、黙っていたエミルが徐に口を開く。

「みんな本当にお疲れ様。今までありがとう……フリーダムはなくなるかもしれない。でも、きつと他のゲームで会えるはずよ？ だって、生まれも住んでいる場所も違う私達がこのゲームで出会えたんですもの。次もきつと……」

彼女のその言葉に、エリエが自信満々に言い放った。

「大丈夫だよエミル姉！ 私がお父様に頼んで皆の住所を聞き出すから、ゲーム内では伝えられないようになってるけど。登録時の情報を直接確認すればいいだけの話だしね」

「それは権力の濫用じゃないか！ さすがにそれはダメだろ！」

反論したデイビッドに、エリエはムツとしながら叫んだ。

「別にそれくらいいいでしょ？　またみんなで会うためならなんだって使うわよ！」

「……まあ、確かにな」

彼女の案を否定したが、本心ではデイビッドも仲間達との関係が切れてしまうのは嫌なのだろう。

まあ、それも無理はない。この世界に閉じ込められ、様々な困難を乗り越えてきた仲間達だ。苦楽を共にしたことで、更に絆が強くなっていたからだ。

デイビッドとエリエの話に割り込んできたミレイニが胸を張って威張りながら言った。

「エリエはバカだから向こうに戻っても、これじゃおもしろいやられるし」カレンの背後からひよつこりと現れたミレイニがエリエに向かって言い放つ。

怒ったエリエが彼女に襲いかかろうとした時、その間にカレンが割って入る。不機嫌そうに眉を釣り上げるエリエ。

だが、両者は一定の距離を保ったまま動かない。いや、カレンは圧倒的に優位とも言いたげにほくそ笑んでいるところを見ると、どうやら動けないのはエリエの方らしい。

カレンが余裕を見せている理由は至って簡単で。ただ単に、エリエの選択している基本スキルが『スイフト』でカレンが選択している基本スキルが『タフネス』だからだ――。

スピードで勝るエリエの目的はカレンの背中に隠れているミレイニを捕まえることだが、それは非常に難しい。その原因がカレンであり、カレンの使える基本スキルの『スイフト』の効果で強化された攻撃力である。

スピードではエリエに勝てないものの、カレンは彼女の目的であるミレイニを近くに置いている。目的が分かっているカレンにとってはエリエをミレイニに近付けなければいいだけだ。カレンはカレンを突破して更に嫌がるミレイニを担いで離れなければならない。

現実的に考えてそれは不可能だから、圧倒的に有利なのはカレンの

方で間違いない。それがカレンが余裕の表情で口元に勝ち誇ったような表情を浮かべている理由だ。

苦虫を噛み潰したような表情をしているエリエを更に挑発するようになカレンが言った。

「どうした？ 来ないのかよ」

「……くっ!!」

悔しそうに唇を噛んだエリエだったが、分が悪いのは分かっている。仕方なく諦めたエリエが呟く。

「今回はいいわよ……」

そう呟いた彼女に、カレンの後ろに隠れていたミレイニがにんまりと笑みをこぼす。

そしてそっぽを向いているエリエに向かって指差しながら叫んだ。

「そんなこと言つて、本当はこのお姉ちゃんが怖いだけだし！ エリエはビビリだし！」

「はっはっはっ！ エリエがビビリなのは同感だね！」

ミレイニの言葉に反応して笑い出したカレンに釣られるように、彼女に向けて指差していたミレイニも笑い出す。

大きな笑い声を上げて笑う2人を見て、エリエは悔しそうに彼女達に背中を向けると

「向こうに行ったら覚えてなさいよ……」

っと小さく呟くと、なにかを思い出したように再び笑っているカレン達の方を振り向いて叫んだ。

「てか、どうしてアンタ達は仲良くなってるのよ！ ミレイニ！ どうして私は呼び捨てでカレンはお姉ちゃんなのよ!!」

不満をあらわにさせるエリエ。

まあ、無理もない。ミレイニと一緒にいた時間はカレンよりも遙かに長いはずだ。しかし、ミレイニにエリエが『お姉ちゃん』なんて言われたことはない。

しかし、今までそれほど仲のいい感じを見せなかったカレンの方が自分よりも先にお姉ちゃんと呼ばれたことが納得できない。

驚くエリエに向かってカレンがミレイニの肩に手を乗せて得意げ

に答える。

「今日仲良くなったんだ！」

「エリエをバカにし隊を結成したし！ 敵の敵は味方だし！」

仲良さげに互いに笑い合うカレンとミレイニを見てみると、エリエは更に不機嫌になつて眉を釣り上げながらカレンを睨み付けた。

それに気付いているのか、カレンは勝ち誇つた様子でエリエを見下すような視線を向けて。

「まあ、この調子なら星ちゃんが俺の事を『お姉ちゃん』と呼ぶようになるのも早いかな。はっはっはっはっ!!」

大きな声で笑うカレンに、握り締めた拳を小刻みに震わせていたエリエがその手を腰に差していた剣の柄に手を掛ける。

「——言ってくれるわね……勝負しなさいカレン!!」

その言葉を聞いたカレンはニヤリと口元に笑みを浮かべながら挑発するように拳を構えた。

エリエもそれには頭に來たのか、コマンドを動かしてPVPの確認画面へと進める。その直後、2人の間にデイビッドが割つて入るとエリエとカレンを止める。

「待て待て！ 待てよ2人共！ こんな状況でPVPをするつもりか!?!」

「止めないでよデイビッド！ 仕掛けてきたのはカレンなんだから！」

「おいおい。俺は本当の事を言っただけで、仕掛けてきたのは間違いないくお前だろ！」

デイビッドを挟んで互いの顔を見合つて睨み合う2人の視線を、デイビッドが再び互いの視線を遮るように体を割つて入る。

「だから待てつて言ってるだろ！ まだログアウトできると確認できただけで、それが解除される事もあるかもしれない。そんな事が分からない君達じゃないだろう！」

「……ごめんなさい」

エリエとカレンは怒られたことで、しよんぼりしながらデイビッドに謝つた。

それを横目で見ながらエミルは満足そうに頷くと、隣にいるイシエルと星の前までいって膝を折って星の体をゆっくりと自分の方へと抱き寄せた。

別れの宴会6

その行動に驚く星の耳元でエミルがささやく。

「……あなたがいなくなったら、私達はこの世界から出られなかった。本当に感謝してる……向こうの世界に帰っても、必ず会いに行く——会って助けてもらった恩を返すわ……」

「……そんなお礼なんて——私はエミルさん達が無事でよかったから……」

星は抱き付いているエミルにそう告げると、エミルは大きく首を横に振った。

そして再び星の体をしっかりと抱きしめながら再びささやく。

「——必ず会いに行くから……」

「……はい。待ってます」

彼女の声音からエミルの気持ちを察したのか、星はただただ頷き返した。

その後、星から離れたエミルはログアウトの方法を教えると、エミルはイシエルの側に戻る。

そして涙ぐむ瞳で名残惜しそうに星の顔を見つめながら指で「ログアウト」のボタンを押した。

直後。エミルの体が薄くなりスッと消える。それを追うようにしてイシエルの姿も消える。

一度はログアウトしようとした星だったが、エリエの側までいくと、しよんぼりして反省した様子のエリエは星を見つけて彼女も寄ってくる。

目の前まできた星がエリエに向かって頭を下げて「ありがとうございます」とお礼を言うと、エリエも先のエミルと同様に星に抱き付いて耳元でささやく。

「——これでお別れなんて嫌だからね。きつとまた会おうね……」

「はい」

星がそう言うと、抱き合う2人のそばにデイビッドとカレンが寄ってきて言った。

「星ちゃん元気だね。俺達が助かったのは君のおかげだ。いつか現実世界で会った時にはステーキをおごらせてくれ」

親指を立ててデイビッドがそう言うと、隣にいたカレンが口を開いた。

「最初のうちは星ちゃんとは色々あったけど、今は心を許しあえる仲間だと思っている。まあ、エリエが本当に住所を特定できるかは分からないけど、もしも住んでいる場所が分かったら向こうでも昨日みたいな馬鹿騒ぎをしようね」

星は笑顔を見せるデイビッドとカレンの顔を交互に見て頷くと、再びログアウトの項目を指でボタンを押した。

その時の星の瞳には薄っすらと涙が光っていた。しかし、別れが寂しくて泣いたのではない。単純に自分にこんなことを言ってくれる仲間ができたことが嬉しかったからだ……。

* * *

天に向かって真っ直ぐに伸びる都会のビル群の中の一角で一際突き抜けたビルの中の一室。

大きく開けた一面の窓ガラスの前には左右に観葉植物、黒塗りで高級感漂う長い机には金色を貴重としたライトや万年筆などの仕事用の道具が並んでいる。

社長室にある様な高級なクッションの椅子に腰掛けているのは白髪交じりの中年男性だった。そんな彼の前には切れ長の目に短い黒髪にメガネを掛けた長身の男性が立っている。

「富岡さん。私の部下から、ゲーム世界からプレイヤー達が一斉に現実世界に戻ってきたという報告を受けています」

「そうか——なら、彼は死んだか……」
そう言って俯いた中年の男の口元には、にやりと不気味な笑みがこぼれる。

俯きながらフフツツと薄ら笑いを浮かべた中年の男の笑う声につられるようにメガネを掛けた切れ長の目の男も笑い出す。

ひとしきり笑った彼等は顔を見合わせると、中年の男が徐に口を開く。

「——口ほどにもなかったな、安藤文則という男は……上から目線でなんだかんだと要求したくせに、ゲームばかりしている連中にやられるとはな」

「なにを言ってるんですか。どうせ消すつもりだったのでしょう？」

「消すとは人間きが悪いな榊君——私の邪魔な人間に不幸が起きて消えてくれるだけだよ……」

そう口にしてクククツと笑うと再びメガネを掛けた男も笑みをこぼす。

そして笑みをこぼしたメガネの男に鋭い視線を向けて、ゆつくりと重い口を開いた。

「それはそれとして、計画はどうなっている？」

「ふふふつ……私は安藤とは違います。豚に真珠計画の真珠を抱えた豚は消え去り、残るは豚の落とした真珠を拾うだけです」

「そうか——真珠は豚には過ぎた宝だ……宝は欲する者の元にきてこそ、より一層美しく輝く。まあ、我々にとっては真珠ではなくダイヤモンドよりも価値のある物だがね」

中年の男はそう呟くと徐に席から立ち上がり、背後の一面のガラス窓から広がる大パノラマを一望する。

「この世界がいよいよ全て我々の物になる——普段は都会の雑踏と雑音にまみれたゴミの山にしか見えないこの景色が、今はまるでダイヤモンドの様に輝いて見える……悲願の時まであと僅かだ……」

「……はい。それでは、私は面会がありますのでこれで」

そう告げると、長身の切れ長の目にメガネを掛けた男性は部屋を後にした。

その姿を見ることもなく、白髪交じりの中年の男はガラス越しから見える景色を眺めながらその前に広げた手を突き出して力強く握りしめる。

* * *

第7章

現実世界への帰還

ゲーム世界からログアウトした星が瞼を開けると、そこには見慣れない白い天井が広がっていた。

重い体をゆつくりと起こして辺りを見渡すと、部屋の中は仕切りなどはなく開放的な印象を受けるのに、窓などもなく家具は中央に置かれたベッドだけととても人が生活するような場所ではなかった。

ベッドから出た星は地面に足を着ける。その瞬間、全身の力が抜けたように崩れ落ちて地面にペタンと座り込んでしまう。

「あれ？ 力が……入らない」

不思議そうに首を傾げた星は再び足に力を込めるが、立ち上がることができない。

だが、それも無理はない。二ヶ月もの間、現実の体は食事もまともに取らずに寝たきりの状態で放置されていたのだ――。

再び立とうと両手を地面に付いた時、視界に入ってきた光景に星は自分の体を見て目を疑う。

それもそのはずだ。星の体はパンツだけしか身に付けておらず、上半身には衣服の代わりに多くのコードが付いた吸盤の様な機材が貼り付けられていた。

そして左腕には注射針が刺さっていてその先の管は銀色の移動式のスタンドに吊されている点滴へと繋がっている。逆にどうしてこれまで気が付かなかつたのか不思議なくらいだ。

それを確認した直後、星の視界がぐわつと大きく揺らいでその凄めまいに焦点が全く合わない。

その時、部屋の扉が開いて2人のナース服を着た女性が入ってきた。2人はベッドの横に座り込んでいた星の体を抱えてベッドに戻すと頭の上の方に置かれている機器の数字を確認しながら、脈を測ったり体温を測ったりと忙しなく動き回っている。

その様子を横目に、星はどうしてここにいるのかを考えていた。

それもそうだろう。星は元々自分の家でブレスレット型のハードを起動させたはずだった。しかし、目を覚ましてみると、そこはどう考えても自宅でもなく。かと言って病院というには窓もなければ生活に必要な家具もない。

星の知っている病院は近くに多くの患者さんが居て、周りには収納スペースがあり光を多く取り入れる作りになっているはずなのだが……。

突然部屋に入ってきたナース達は、星の体に付いている吸盤状の器具を外して腕に付いていた注射針を外す。

すると、一人が部屋を出てもう一人がナース服のポケットからワイヤレスイヤホンの様な物を取り出して、星の耳に挿した。

その直後、彼女は不思議そうに首を傾げている星に優しい声で言った。

「気分はどうですか？」

「はい。不思議な感じですけど、体は大丈夫です」

「そうですか。それは良かった」

につこりと微笑みを浮かべる女性に、星もぎこちなくだが笑顔を見せた。

だが、星は彼女達が入ってきた時に薄々感付いたことがある。それは、ここが日本ではない可能性があるということだ――。

入ってきたナース達は二人とも金髪に青い瞳をしていて、しかも星の耳に入っているイヤホンからは日本語で聞こえるものの、イヤホンが挿されていない方からは英語らしき言葉が入ってきていた。

だが、確かに星は自室のベッドに寝ていた。しかし、現在は見知らぬ部屋の中でナースが側にいる。普通に考えたら、病院に搬送されたと考えられるが。それならば、周囲に他の人間が入院していなければおかしい。

そうでなければなんらかの組織に拉致されたとも考えられるが、ただの小学生でしかない星を誘拐する人物への心当たりは一人しか思いつかない。

「――まさか生きていた？　でもそんなはず……あの高さから落ちて

生きてるはずない)

星は狼の覆面の男の最後を思い出して、彼が生存している可能性を拭い去る。

だが、だとするといった誰が星をこんな場所に呼んだのだろうか……。

するとそこに、先程出ていったもう一人が戻ってくる。戻ってきた彼女のその手には洋服を持っている。

星の前まできた彼女は持っていた服を星に手渡す。

「ひとまずこれを着てください」

「……は、はい」

服を受け取った星は、ナースの戻ってきた白いワンピースを見て表情を曇らせる。

本来なら絶対に着ないだろう服だったが、今のほぼ全裸の状態よりはよっぽどマシだ。

彼女の持ってきたワンピースに袖を通した後、ダメ元で星が近くのナースさんに尋ねた。

「あの……ここはどこなんですか？」

「それは私達に聞くよりも、今から会いに行く人に聞いた方がいいですわね」

予想外の言葉に、星は少し躊躇した様子で眉をひそめた。

それもそうだろう。今からこの謎の施設に自分を連れてきたであろう人物に直接会うというのだ——しかも、今はエミル達は居ない。その状態で敵かもしれない相手に会うというのは、小学生である星には荷が重すぎる。だが、だからと言ってなにもしないまま、問題を先送りにしたところで進展はない。

星は頷くとナース服の女性に手を差し出した。すると、彼女はにっこりと微笑んで星の手を掴むと、その手を引いてベッドから星を下ろす。

地面に足を着けた瞬間。大きくバランスを崩したが、その体をナースの女性が支えてくれたことでなんとか事なきを得た。やはり二ヶ月も足を使っていないと、どうしても筋力の減少が大きいらしい。

ちよつとした段差から生じる衝撃にも、体を支えきれないほど消耗してしまっていた。

体をナースの女性に支えられながら、星はゆつくりと歩き出した。二人のナース服を着た女性に連れられて部屋を出る時、扉を見た星は驚き目を丸くさせた。その理由は壁の厚さだ——普通の壁の厚さの二倍から三倍の厚さがあり、それは扉も例外ではない。

部屋を出ると今度は開放的なガラス張りの研究施設の様な空間が広がっていた。通路はマジックミラーで外が見えるようになっていて、内側からは外の様子が窺えるようになっていた。どこかな研究機関であることは分かるものの、それがなにを研究する機関なのかまでは分からなかった。

ガラスに囲まれた通路を歩いて行くと、通路の先に両開きの鉄の扉が現れる。すると、星の体を支えながら左右を歩いてナース服の女性が扉の前で止まると、内側に両方の扉が開いた。

部屋の中で待っていたのは、フリーダムของเกม内で会った狼の覆面の男の素顔であるメガネを掛けた赤い短髪の男性ではなく、茶髪で短い髪に白衣を着た男性だった。

それは星がゲーム世界でモニター越しに見た自分の叔父を名乗っていた男性だった。実際に記憶を取り戻す時にも、星は母親と彼と一緒にファミリーストランで会った時に見ている。

正直。もしも狼の覆面の男がこの世界に戻ってきていけば、星と同じくゲーム世界から戻ってきたプレイヤー達がどんな目に遭うか分からない。それは、星と関係の深いエミル達も例外ではないだろう……。

彼の顔を見た瞬間、星の中で張り詰めた糸が切れた様に全身から力が抜けた。

体が大きく崩れ落ちそうになるのを、彼が慌てて駆け寄って地面に落ちる前に星の体を支えた。

「大丈夫かい!？」

「…………ごめんなさい。気が抜けちゃって…………」

そう言った星に彼は、ほつとした様子で息を吐く。

その後、軽々と体を抱えて椅子まで運ぶと星の頭に手を置いて微笑む。

「まあ、無理もない。君は頑張ったからね……さすがは姉さんの子だ」彼の言葉を聞いた星は大事なことを思い出す。

「あの……お母さんは？」

それを聞いた瞬間、男性の顔が明らかに曇る。それはナース服の女性達も同じで、皆口を閉ざしたま時間だけが過ぎる。

長い沈黙の後、星は悟ったように頷きながら答えた。

「……そうですか。私はお母さんに捨てられたんですね」

そう口に出した星は不思議と悲しくなく、逆に当然だと感じていてその心は穏やかだった。例えるなら波紋のひとつも立たない湖のように……。

きっと心のどこかでは、こんな日が来ると分かっていたのかもしれない。母親は星に関心がなかった。分かっているながら、少しでも振り向いて欲しくて日々いい子であり続けてきた。

家事も禁じられている料理以外は全部やっていたし、勉強もして常に良い成績を取り続けた。全ては母親に振り向いてもらう為だ——だが、そんな毎日に嫌気がさしていた自分もいた。

星にとって内緒でゲームをやったのは、母親に対する反抗心かもしれない。その結果、事件に巻き込まれて今日見知らぬ場所で目覚めたのだ。

もしも捨てられたとしても、星には文句は言えなかったし、言う権利もないのだろう。何故なら、勢いで行動に移してしまったのは星なのだから……。

現実世界への帰還2

椅子に座ったまま、俯きながら自分の膝の上に置かれた手を見下ろしている星。

その彼女に一度は口籠もったものの、意を決した表情で白衣を着た男性が口を開く。

「——それは違う。星ちゃんは姉さんに捨てられたわけじゃない」

「……………え？」

彼の言葉に俯いていた星は顔を上げると、驚いた表情で彼の顔を見つめている。

そんな星に彼がゆっくりとした口調で告げた。

「……………本当は姉さんには言わないでくれて伝えられてたけど、こんな状況じゃ仕方ない……………星ちゃんも知っておいた方がいい話だよ。よく聞くんだけ——これから話す事は夢でも仮想現実の話でもない。紛れもない現実だ……………」

「……………」

自分の両肩を掴んで言った彼の顔は真剣そのものだった。星も彼の心情を察したのか、静かに深く頷く。

正直。この現実世界にくる前にも、数々の夢だと思いたい状況に直面してきた。そのことを考えれば、些細なことでは驚かない心構えは既にできている。つもりだった……………。

彼が衝撃の一言を放つまでは……………。

「姉さんが——君のお母さんが亡くなった……………」

「……………は？」

目を見開いたまま微動だにしない星の口から出た言葉はそれだけだった。

星の頭の中は『亡くなった』という言葉が幾重にも重なって聞こえてきて、強烈なめまいによって頭の中がグルグルと渦を巻くように回っていた。

自分が捨てられたというなら仕方がない。だが、死んだというなら話は別だ——捨てられたというなら星には悲しい出来事ではあるが、

母親が生きているというだけでいい。普段から星には思っていたことがあった。それは、自分が母親の邪魔になっていると感じていたからに他ならなかった。

邪魔な自分が消えれば、母親は幸せな人生を歩めるようになると思っていた。しかし、それが死んでしまったというのであればそれも叶わない。こんな考えが浮かんでくるのも、星が自分を押し殺して人を優先する人生を歩んできたからなのだろう。

心の中で『自分が消えれば』と思っていながらそうできなかったのは、家族ということに甘えて、少しでも母親と一緒にいたいと考えていたからかもしれない……。

完全に魂の抜け殻と化した星の肩を大きく揺らして男性が大きな声を上げた。

「しつかりするんだ星ちゃん！ お母さんの事がショックなのは分かる。でも、それだけじゃないんだ！」

「……………」

無言の星に男性が更に言葉を掛ける。

「君のお父さんとお姉さんが事故死した事は知っているね？」

「——ッ!？」

星がどうしてそれをとやわらわらと目を見開き、驚いた表情で男性の顔を見る。

直後。彼は星の目をじっと見つめたままゆっくりと口を開く。

「…………その組織が再び動き出した。今度は君が命を狙われている」

「……………」

それを聞いた星は彼から咄嗟に目を逸らした。

だが、その反応も無理はないだろう。星は今まで普通の小学校に通い普通の生活を送ってきた。

そんな彼女が唐突に母親の死を告げられただけではなく、今度は自分の命も狙われていると言われても、まるで現実味がない。それどころか、こんな話を真面目な顔をして話せる目の前の男性の方がよっぽどおかしい人物に感じてしまう。

彼女が目を逸らしたのも、そんな彼への不信感がかたちとなった結

果だ——。

「——急にそんなこと言われても……」

「それもそうだね。すまなかった……話はまた今度にしよう。医療用EMSで足の筋肉の減少を食い止めていたとはいえ、数日間はこの施設でリハビリしないと日常生活には戻れないからね」

「数日は家に戻れないのか……」

それを聞いた星が無意識にそう呟くと、男性は真剣な面持ちのまま告げた。

「この後、彼女達に施設の中を見学に来て行ってもらおうといい。リハビリにもなるしね……それと、僕と一緒に暮らす事も考えておいてほしい」

彼はそう言った直後、無言のまま部屋を出ていった。しかし、その背中はどこか寂しそうに感じた。

ナースの女性2人に施設内を案内された星は、重要な部分以外は全部包み隠すことなく見せてもらった。その中でも重要なのはシャワールームや食堂、トイレの場所など生活に必要な設備がある場所だ。

そしてもう一つ教えてもらったのは、星の叔父である男性はこの施設の最高責任者であることだった。優秀な機械工学の博士で、ここアメリカの研究機関を20代の間に設立したということだ。そして、どうやら恋人などはいないと言うことも教えられた。

もちろん。星から聞いたのではなく、ナースの女性達が教えてくれた。こういう会話は女性達の間では良く話されている話題らしいし不思議なことではないが……。

施設の中を案内されている間にもう日が落ち始めていた。最初に目覚めた部屋に戻された星は、腕にブレスレット型の小型の子機を渡された。そのブレスレット型の端末には、まるで腕時計の様に中央にガラスの球体が埋め込まれている。

西暦2036年の現在。既に携帯電話やスマートフォンなどは消え去り、この腕時計型の端末一つで全てが行えるVAC (Voice Autocomroller) が支流のデバイスになっていた。

中央のガラスの球体から出た光源が青い仮想モニターを作り出し、起動は音声認識の『オペレーション』という言葉に反応して起動し『オフ』という声で停止する。他の者の声に反応しないように中央のガラス玉の様な部分を5秒間押すと個別の声紋によってユーザー登録ができる。

しかも起動と停止にだけで、その他の操作は内蔵されている小型カメラが目の動きだけで操作の有無を判断してくれる優れたもので。事前に登録すれば、自宅に帰ってきて『ただいま』の声を感知するだけで、費用頻度の多い家電などの自動起動まで行ってくれる。それ以外にも緊急時には強い衝撃や急激な体温の低下、心拍数の上昇なども感知して警察や消防などへの通報、現在地の送信までしてくれるのだ。

これによって、事故や事件などを迅速に処理できるようになり。購入時に国の方から補助金も支給される為、日本の国内で爆発的に普及した。そしてそれを開発したのも、星の叔父らしい……。

星の腕に付けられたデバイスにも、もう星の声紋が記憶されている為、何かあれば連絡を入れるようにと言われていた。

だが、こうして広い部屋に一人していると、どうしても皆で楽しく生活していたゲーム世界が恋しくなってしまう。たとえばそれが、悪いことだと分かっているけどもだ。

こうして現実の世界に戻ってこれたのも、運が良かったというのが大きく。帰ってきたくても帰ってこれなかった者達も多くいる以上、向こうの世界の方が良かったなんて思っただけで罪になる。

何もない部屋の中。星は叔父を名乗る男性の言った『母親が死んだ』という言葉を思い出す。しかし、口で言われたところでそれを信じるというのは無理な話だ——証拠もない上に、星と彼との間には強い信頼関係を築く上で必要な時間がない。そんな彼を信用して母親の死を受け入れるのは今の星には無理な話だ。

「……私はどうしたら……お母さん。お姉ちゃん」

清潔感のある白いシーツと布団のベッドの上で膝を抱え、星は自分がこれからどうするべきなのか考えていた。

揺れる動く心

それから何時間が経ったか分からない。部屋には時計もなければ、陽の光を取り込むための窓もない。

そんな時、ナース服の女性が食事の乗ったお盆を持って部屋の中へと入ってくる。

膝を抱えたままベッドの上にいる星は驚いた様子で彼女の方を向いた。女性は表情を曇らせながら星の方へと歩いてきた。

「おはよう。昨日は良く……眠れるわけないわよね。朝食を食べたら早速リハビリを開始する予定だったけど、今日は止めておく?」

「いえ、大丈夫です」「でも……」

表情を曇らせたまま、ベッドの横に収納されたテーブルを引き出し、その上に持ってきたお盆を置いた。

心配そうに星を見つめる彼女に、星はにっこりと微笑んで周囲を見渡した。

「まあ、この部屋には何もなくて退屈なので……少しでも早く出られたらいいなって」

「そうよね。でも、もしもの時に武器になりそうな物は置いておけないのよ。貴方の安全の確保が重要だから……だから、がまんしてね」「……はい」

星は静かに頷くと、ゆっくりとベッドから立ち上がる。

少しバランスを崩したものの、すぐに足で地面を踏ん張り体勢を立て直す。それももう大丈夫だと言わんばかりに……。

「ご飯よりも早くリハビリしましょう」

立ち上がった星が決意に満ちた瞳でナース服の女性を見つめていた。しかし、彼女は星ほど冷静さを失ってはいなかった。

「そうね。早くやりたいのは分かるわ。でも、体は起きたばかりで栄養を求めているの。しっかりとご飯を食べて、ゆっくりトレーニングしていきましょう」

「……分かりました」

少しがっかりと肩を落とした星は仕方なくベッドに座る。

だが、二ヶ月もの間眠り続けていた星はまだ消化機能が万全ではなく、ナース服の女性の持ってきた食事も離乳食のようなもの——今、お盆に乗っているのも煮て柔らかくなつたおかゆの様なものが入っていた。

ナース服の女性はそれを持つと、スプーンで掬つたおかゆを冷まして星の口元に突き出した。星は仕方なく口を大きく開けてスプーンを受け入れる。

彼女の言つたようにしつかりと食事を取つた星は、今度はこつちの言い分を通すようにと促す瞳でナース服の女性の顔を真つ直ぐに見据えた。

それを察したのか、ゆっくりと頷いたナース服の女性が星に向かって手を差し伸べた。

「それじゃー。食後の運動に行きましょうか」

「はい」

差し出された手を取つて頷くと、ゆっくりとベッドの上から立ち上がった。

リハビリ用のトレーニングルームに連れていかれた星は左右に支えの手すりのある歩行練習用のレーンが複数並んでいるところへと誘導された。

一番端から両手で手すりを掴みながら一步一步地面を踏みしめるようにゆっくりと進んで行く。筋肉を鍛えるのには速く動くよりもゆっくりと負荷を掛けた方が筋肉への刺激が大きくなり肥大化を助けるだけではなく、怪我などのデメリットも小さくすることができると。

それから真剣な面持ちでリハビリに励む星は歩行練習、3段程の段差の上り下り、インストラクターが付いた状態で水中歩行などのメニューを熟した頃にはもう夕方になっていた。

部屋に戻ると星はベッドの上に倒れ込んだ。疲労感が星の全身を襲う中、彼女の中でゲーム世界との肉体的変化に戸惑いが大きくなつ

ていた。

「……疲れた。もう一步も動けない……」

ベッドに倒れ込んだまま、重たい瞼がゆっくりと星の意識を奪っていく。

次に星が気が付いた時には朝になっており、若干の気だるさはあるが筋肉痛などは起きてはいない。

それを確認してほっと胸を撫で下ろして体を起こすと、星は横の引き出し式のテーブルに昨日の夕食であろう。

おそらく。気持ち良さそうに寝ている星を起こさない様にと置いておいてくれたのだろうが、さすがに冷たくなってしまっている。

その冷たい容器を持ち上げてどうしたものかと首を傾げていた。するとその時、部屋のドアが開いてそこからご飯をお盆に乗せたナース服の女性が入ってくる。

「あら、昨日は良く眠れたようね。夕食も食べないでぐっすりだったものね」

「……あのこれ」

星は冷めてしまった器の中の野菜の入ったおかゆを見せる。すると、彼女は持っていたお盆をテーブルに置いて星の持っている冷めたおかゆを受け取る。

テーブルに置かれたお盆の上に置かれているおかゆは前と同じく野菜が入っているが、それだけではなく今度はとろとろに混ぜられ黄色く輝く卵も入っていた。

それを見た星が不思議そうに首を傾げていると、ナース服の女性がつこりと微笑む。

「リハビリも始まって筋肉を作る動物性タンパク質も重要だからね。もうしばらくはおかゆだけど、明日の夜にはもう少し固形物を取れるように考えているわ。さすがにおかゆだけで元の食生活に戻ったら、体がびっくりしちゃうから」

頷く星に微笑みを浮かべた彼女は、お盆の上の卵と野菜のおかゆとスプーンを手に持つといつものように冷まして星の口の前へと持ってくる。

だが、星は口を開くことなく。今度は彼女の持っていた器へと手を伸ばして言った。

「大丈夫、もう一人で食べられます。他にやることもあると思うし、私に構わなくても大丈夫です」

「……そう。なら、少ししたらまたリハビリをするから、その時に呼びに来るわね」

「はい」

少し寂しそうに眉をひそめたナース服の女性は星におかゆの乗ったスプーンを器に戻して手渡すと部屋を後にした。

微笑みを浮かべた星は彼女を見送ると、渡された器の中のおかゆをスプーンで掬ってゆっくりと食べ始めた。

星にとって最初こそ厚意に甘えていたものの、それをずっと続けるのは星には申し訳ないという思いが強くなっていった。

それもそのはずだ。星は本来ならこんな場所にいるはずの人間ではなく、本来ならば年相応に小学校に通っているはずなのだ。

ナース服の女性達も本来ならば、施設の中でしっかりと役割があつてそれを毎日熟している。しかし、星がきたことで彼女達にいない仕事を押し付けてしまっている。そのことが、星にとっては心の重荷になっていた。

そしてもう一つ。星には思うところがあつた……それは、もうしばらくしたらこの施設から離れることになる。そうなつてから、未練が残るのを少しでも避けたかったのだ――。

今の星は自宅に帰るか、叔父を名乗る男性のところに行くかの二択で、未だにどちらにするか決め兼ねていた。

朝食で持ってこられた野菜と玉子のおかゆを食べながらも、今後のことを考えていたのだがどうしても決めきれずにいる。

星が取れる選択は二つ。一つ目は住み慣れた家に帰ること、二つ目は叔父を名乗る男性と新生活を始めるか……だ。

そうこうしているうちに、ナース服の女性がリハビリの為に部屋に呼びにきた。

食べ終えた食器をテーブルの上に置くと、ナース服の女性に連れら

れて昨日も行ったメニューをこなしたら既に体力の限界で部屋に帰ったら、ベッドに倒れ込んで電池が切れた様に眠ってしまった。

それからは同じような日々が数日続き、気が付いた時には星の筋力も日常生活に支障がないほどまでに回復していた。しかしそれはまた、星の今後の生活に対する決断を迫られるということでもあった……。

揺れる動く心2

いつもの様に朝食を取り終えた星はナース服の女性に連れられ、この施設で最初に連れていかれた施設の責任者である叔父のいる部屋へと向かう。

中では難しい顔で忙しくパソコンの画面を見ている叔父の姿があったが、星がきたことに気が付いた途端。その顔は優しい表情へと変わり部屋に入ってきた星を見つめている。

「やあ、星ちゃんいらっしやい。予想以上にリハビリが早く終わって感心しているよ」

「……そうですか？」

小首を傾げながら星が男性に尋ねると、彼は大きく頷いてにっこりと微笑んで。

「やっぱり姉さんの子だね。そういう頑張り屋なところは姉さんにそっくりだ」

「……………」

だが、その言葉を聞いた星は複雑そうな表情で少し俯き加減になって黙ってしまった。

しかし、それも無理はない。星にとっての母親は仕事一筋の人物で、星には殆ど関心がなかった。まあ、それも仕事を頑張っているとえば頑張り屋と言えるのだろうが、それでも娘の星を放置していたのだから、星には彼の『頑張り屋』という言葉が素直に受け入れられることはできない。

そして俯いている星に向かって、彼は少し溜めながらも再び言葉を続けた。

「……そうか。君の知っているお母さんと、僕の知っている君のお母さんでは認識の違いがあるんだね……」

「……………」

表情を曇らせた星を見つめていた叔父を名乗る男性は、近くの別の机に置かれていた回転式の椅子を自分の椅子のそばに置くと、彼は星に手招きする素振りをして彼女を呼んだ。

それには星も素直に従い彼のそばに座って、笑みを浮かべる叔父を名乗る男性の顔を見上げる。

ゲーム内ではマスターやデイビッド達の男性プレイヤーの多くと接してきて、本来は男性に対してあった抵抗が今は少し小さくなっていった。そのこともあって、前までなら目も合わせる事ができなかったのが嘘のようだ――。

向かい合う星と叔父を名乗る男性が、大きく息を吸い込んだ後にゆっくりとした口調で話し始めた。

「この前は言いそびれてしまっただけだね。君のお母さんは昔はとても笑顔の素敵な女性だった。弟の僕から見てもそれは輝いて見えた……」

「……そうですか」

俯き加減に生返事を返した星に、叔父を名乗る男も渋い顔をした様子で彼女を見ていた。

「星ちゃんはお母さんの事が嫌いなのかい？」

「……嫌いではないです」

そう口にしたが、だが星の表情がその心境を物語っている。

その言葉通り、星は母親のことが嫌いなわけではない。しかし、自分が母親に嫌われていたことだけは疑いようのない事実だった。

どこか悲しげな星の表情を見つめていた彼が言葉を続けた。

「前にも言ったように、姉さんから君には話さないようにと釘を刺されていた事がある。君のお父さんとお姉さんが、君の生まれた日に事故で亡くなったのは知っているね？」

「……………」

無言のまま頷く星を見て彼は更に険しい表情を見せる。

「その様子を見ていれば、君のお母さんが君にどんな事をしていたのかわかる。でも、それは君のお母さんの本当の気持ちじゃない。姉さんは君の事を本当に愛していたんだ……」

「……嘘をつかないで下さい……」

彼の言葉を聞いた直後、星は今までにないほどの強い視線を彼に向けた。

「本当だよ。君のお母さんは星ちゃんの事を愛していた」

「——嘘だ!! だって、お母さんは私に興味を持ってくれたことなんてないですから……」

一度は冷静さを失って声を荒らげた星だったが、すぐに落ち着きを取り戻して俯き加減に言った。

しかし、星が声を荒らげるのは無理もない話だ——母親とは星が生まれてから9年間。共に一つ屋根の下で生活してきた。

にも拘らず。幼い時に一度しか会ったことのない叔父を名乗る男性に、星と母親との関係が分かったような口で語られれば、誰だって憤って当然だろう——。

冷静になった星を見て安堵した様に息を吐き出すと話を続けた。

「実は星ちゃんが生まれる前。姉さんはこの機関に住んでいたんだ。ここアメリカは世界の優秀な科学者達を保護する目的で作られた街で生活していた。世界各国から優秀な者達が集まる場所だ。厳重な管理体制の中、各分野の専門家から幅広い教育を行える環境が備わっていた。しかし、姉さんはその特別な環境が窮屈に感じていたのかもしれない……星ちゃんが生まれる前。一般の普通な環境で君を育てたいと、僕の忠告を無視して日本へ戻った。その後、君のお姉さんとお父さんに不幸が起こった」

「——なら、やっぱり。私が生まれたから……」

「それは違う!!」

座ったまま膝の上に置いていた小さな手をぎゅっと握り締めた星を見て、彼が直ぐ様否定する。

しかし、星の表情が晴れることはなく、俯きながらただただ自分の膝の上に置かれた手を見つめていた。

彼の話を聞くだけだと、どうしても星が生まれることで父親と姉が死んだと考えるしまう。

俯く星の両肩に手を置くと、彼はゆっくりとした口調で諭すように告げる。

「君は悪くない。今は信じられないだろうけど、聞いてほしい……君の事を姉さんが遠ざけていたのは、いつかこんな日が来ると分かって

いたからなんだ。もちろん、巻き込まれて亡くなった君のお姉さんの月に申し訳なかったという後ろめたい気持ちもあったかもしれない。だけど、この事件が起きてから真つ先に君の身の安全を僕に求めてきた。君を輸送する時も悟られまいと、別の飛行機に乗ったんだ。けど、その飛行機が……」

「……」

その話を聞いた星は、俯きながら唇を噛み締めて小刻みに肩を震わせていた。

そして、徐に立ち上がって叔父を名乗る男性の顔を真つ直ぐに見つめて言い放つ。

「私をお母さんと暮らしていた家に帰してください」

しかし、そう言った星に彼が返した言葉は。

「それはできない。君は命を狙われているんだ。お母さんももう居ない……僕とこっちで暮らそう」

「……」

無言で首を振った星に、彼はなおも言葉が続ける。

「日本ではない別の国で僕と暮らすのが不安なのは分かる。でも、僕にも仕事があるから君と日本に行つて暮らす事はできない。だけど家政婦さんも雇うし、日本語の話せる家庭教師の先生も付ける。生活の面でも勉強の面でも星ちゃんに不自由は絶対にさせない」

しかし、星は彼の話聞いて首を再び左右に振ると「帰ります」とだけ短く答えた。

だが、彼としては母親がいない場所に自分の姪を帰すわけにはいかない。しかも、星はもうただの一般人ではないのだ。彼女の安全を考えれば、星を一人で日本に帰すわけにはいかない……。

「落ち着くんだ。家に帰つたとして、生活できないだろ？ もちろん今すぐじゃなくてもいい。気持ちが決まるまでこの場所にいたつて」

「――」

「――私の気持ちは変わりません！ 私を家に帰して！ もし、帰してくれないのならあなたを一生恨みます……」

「……分かった」

意外とあつさり認められた彼に星は少し訝しげな表情を見せたものの、少しでも早く家に帰りたいという気持ち先走り「なるべく早くお願いします」と言い残して一人で部屋を出ていった。

それにはこの部屋に星を連れてきたナース服の女性も驚いているようで、星と叔父を名乗る男性の方を交互に見て、一礼すると部屋を出ていってしまった星の方に向かって足早に歩き出す。

大きいため息を漏らした彼は元々座っていた椅子に深く腰を下ろした。脱力してがっくりと肩を落として背凭れに体を任せた。

すると、壁に置かれている本棚が突如として動き出して現れた奥の隠し部屋から、茶色いウェーブのかかった髪を肩までの伸ばした若い女性が現れた。その女性はゲーム世界ではライラと名乗っていた女性だ――。

「ミスター。お母さんの事で本当の事を彼女に話さない方が良かったんじゃないですか？ 真実を教えるだけが優しさではありません。未練を断ち切ってあげる事も優しさですよ」

「…………いや、僕も悩んだよ。だけど…………僕は姉さんの娘である星ちゃんに、一生恨まれることは選べなかった。僕にはもう、あの子しか親戚は残っていないからね……………西城君。彼女に連絡してここに呼んでくれ、明日には飛行機を手配して星ちゃんを日本に帰す」

叔父を名乗る男性がそう告げると、ライラは静かに頷いて再び隠し部屋へと消えていった。

我が家への帰還

* * *

翌日の朝。星の居る部屋にナース服の女性と共に入ってきたのは叔父を名乗る男性と見たことのない長い茶色い髪に瞳が緑色のスーツ姿の女性が入ってきた。

その女性は星の顔を見ると笑顔を見せた。星はそんな彼女の様子を見て、悪意のようなものは一切感じなかった。それどころか、自分に対しての好意を感じるほどだ――。

目を合わせたまま瞬き一つしない星に向かって、叔父を名乗る男性が徐に口を開いた。

「――飛行機を手配した。今から星ちゃんはこの九條君と日本に帰ってもらうことになるけどそれでいいね」

「はい。家に帰れるなら」

頷く星に微かな笑みを浮かべた叔父を名乗る男性。

すると、スーツを着た彼女が星の前まで歩いてきて膝を折って目線を合わせると手を差し出した。

「九條綾よ。これからよろしくね星ちゃん」

「……はい」

差し出された手を星が握ると、彼女も優しく握り返して握手を交わした。その後、施設から黒塗りの高級車に乗った星達は空港へと向かった。

空港に着くと、空港のロビーには入らず車のまま滑走路の中に止まっている一台の飛行機の前で車が止まる。

飛行機は星の知っている各羽根の部分にエンジンが二つ付いている巨大なものではなく、小型でエンジンは機体後部に二機付いており、機体の最後尾にもジェットエンジンを付けた一見変わった造りをしていた。

飛行機に乗るのは初めての星だったが、何故か不安はなかった。だ

が、それも当然といえば当然だろう。何故なら星はゲーム世界でドラゴンに乗って空を飛び回っていた。

そんな彼女からしてみれば、飛行機は周りを囲まれているだけドラゴンと比べてまだましなのだ。

飛行機の搭乗口から伸びた階段に厚い鉄板で囲まれており、外からは見えないようになっていた。しかし、車から降りる時も黒服の屈強な男達がカーテンを持ち搭乗するのを悟られまいとされる嚴重ぶりだ。

黒塗りの高級車から降りて飛行機に乗る時、叔父を名乗る男性から一枚の手紙を受け取った『困ったらいつでも連絡をするように』と言われて……。

星の予想通り。離陸する時から飛行している間もレイニールに乗っていたことで慣れている為か、全くと言っていいほど動じなかった。

機内には星の隣に座るのは九條だが、それとは別に後部座席に乗っているのはアロハシャツにサングラスを掛けた男性だった。その両脇にはボディガードであろうサングラスに屈強な肉体の男性が座っている。

さすがにそんな人間が一緒の飛行機に乗っていれば不審に思うのが当たり前だ——星は隣に座っている九條に向かって少し躊躇しながら尋ねた。

「——あの……あの人達は一体なんなんですか？」

「ああ、彼等は貴方の代わり……空港に降りることになる。貴方はその後、私と別の場所から自宅に向かう事になるわ。言われていたでしょ？ 貴方は命を狙われているって……」

「……………」

表情を曇らせた星は、自分の膝の上に置いた手を見つめたまま黙ってしまふ。だが、たとえ自分の命を狙われているとしても、星には自分の家に戻って確認しておかなければならないことがあったのだ。

それから10時間ほどのフライトを経て空港に到着した後部座席

に乗っていた男性達が降りるのを確認して、腰に掛かっているシートベルトを外そうと手を伸ばす。しかし、星の伸ばした手を九條の手が掴んで止める。

「私達が降りるのはここじゃない。もう一度飛行機が動き出すまで待っていて」

「はい」

星が返事をした直後、止まっていたはずの飛行機が再び音を立てて動き出す。窓のない壁際に座っていた星は肉眼で今なにが起きているのか確認できないものの、ただならぬ雰囲気年生唾を呑み込んだ。

遠くに見える窓から差し込む光が絶たれ、突如として機内が暗くなった。すると、数人の私服を着た男女が入ってきて九條にスーツケースを手渡す。

九條はそのスーツケースを迷うことなく開けると、中には大人と子供用の服がそれぞれに入っていた。九條がそれを取り出し、首を傾げている星に子供服を手渡して言った。

「星ちゃんこの服に着替えて、これからこの人達と一緒に飛行機を出て用意された車でそれぞれに移動する」

星も無言で頷くと手渡された白いレースの付いたワンピースに素早く着替える。

着替えた2人は機内に入ってきた者達とともに外に出ると、飛行機は格納庫の中に入っておりその周りには多くの一般車が並んでいる。

続々と車に乗り込んでいく周囲の者達と同様に九條と星も車に乗り込むと、閉まっていたシャッターが開き中に入っていた車が続々と出ていく。

一斉に滑走路を走って空港外に散っていく。その中の一台に九條の運転する青い乗用車が車道に出て普通に走る車の中に紛れていった。

その後も一度、倉庫に入って服と車と運転手を取り替える徹底ぶりに星も心の底では申し訳ないという思いが強くなってきていた。

大型の四輪駆動車に乗り換えた星達を下ろし、運転手の白髪のアロハシャツの老人が手を振るのに応えた。しかし、星と九條が降りたの

はスーパーマーケットだった。

空港を出た時に着ていたフリル付きのワンピースは、ピンクのスカーツに黒のティーシャツに普段の星ならしないツインテールという髪型に黒縁の伊達眼鏡を掛けていた。

九條の方も茶色の長い髪をサイドに束ね、ゆったりとしたズボンに白いシャツを羽織った姿に変わっていた。

瞳には紫のカラーコンタクトが入っていて、先程までの彼女とはもはや別物になっている。

「舞ちゃん。今日は何が食べたい？」

「えっと……ハンバーグがいいな……お母さん」

自然に偽名を使って星のことを呼ぶ九條とは対照的に、星の方は少し言葉を詰まらせぎこちない様子だ。しかしスーパーの中で普通にカートを押して買い物をする姿はまるで本当の親子の様だ――。

ハンバーグの材料を買って自宅に帰った星が家の中に入ると、家の中には生活感があり冷蔵庫の中にも食材がびっしりと詰め込まれていた。

だが、これはおかしな話だ――何故なら、星はこの2ヶ月間ずっと寝たままだった。普通に考えてこの家に生活感があること自体がありえないのだが。

「あの、これはどういう……」

「星ちゃんが居なかった間、私達の仲間が買い物や掃除などしていたの。貴方は気がついていたらかは知らないけど、このマンションの殆どの住人は私達の仲間なの。もちろん、家の維持だけじゃなくて周辺に怪しい人物がないかも確認しているわ」

眉をひそめながら怪訝そうに見上げた星が「いつからですか？」と小声で尋ねる。

すると、九條が「最初からよ」と言い返し、星は視線を逸らして呟く。

「……そうですか」

俯き少し落ち込んだ様子の彼女の肩に手を置いた九條はにっこりと微笑みを浮かべると、テーブルの上に置かれたエプロンを着て、今

さつき買ってきた買い物袋を持ってキッチンに立った。

手際良くハンバーグを作る彼女を少し離れた場所で見ている星だったが、フライパンで焼き始めた辺りからそっと彼女の側を離れて家の中を見回って歩く。

我が家への帰還 2

隅々まで見て回った星は大きく息を吐き出してほっと胸を撫で下ろした。

少しでも変わっていたらどうしようかと思っただからだ——星にとって、自宅とはまさに聖域と言っている場所である。いや、誰であつても自分の留守中に家具や小物などを他人によって好き勝手に動かされるのを好む人間は珍しいだろう。

そして長く居ることの多い自分の部屋やリビングなどよりも最も荒らされたくない場所……それは母親の部屋だった。家族である星も母親の部屋に入るのは掃除の時以外では殆どない。中に入るとクローゼットとタンス。そしてベッドと仕事用のパソコンが置かれたデスクと殆ど生活に必要なものしかない簡素な部屋の中を見渡す。

ゆっくりと視線を動かすとそこには母親がまだ居るような錯覚に陥る。電気も付けずに部屋の中に入った星は母親の眠っていたベッドに前から飛び込むようにして倒れ込む。

布団には温もりはなく冷たくなっていたが、そこには確かに母親の匂いが染み込んでいた。布団に顔を埋めた星はしばらくそのまま顔を埋めていたが、徐に体を回転させて仰向けになると真っ白な天井を見上げる。

こうしていると、まるで母親が隣にいるような安心感を受ける。そして自宅に帰ってくる前に抱いていた思いが大きくなってくる。

「きつとお母さんは生きてる……」

何の確証もないが、星はそう強く確信していたのだった……。

その時、星のことを呼ぶ声が響く。突然のことに驚き、ベッドの上で横になっていた星は飛び起きて小走りでリビングへと走っていくと、そこには美味しそうなハンバーグがテーブルに置かれていた。

たっぷりのデミグラスソースの入った器の中に入っているその様子は、さながらソースの海を泳ぐハンバーグの船と言った感じだろうか。

その横にはサラダの入った器とご飯の入った器が置かれている。

それを見た星はあまりのことに言葉を失ったままその場に立ち尽くしている。

正直な話。今まで母親が作ったどの料理よりも、目の前に置かれている料理が美しく見えたからだ——今までは作られ冷蔵庫に入れた料理を電子レンジで温めるだけだった。出来たての料理を食べたことなどなかった。

いや、それも違うかもしれない。それだけなら、ここまでの衝撃は受けなかっただろう……幼い頃からの夢をこの短時間の内に叶ってしまったのだ、今まで母親との買い物や車でのドライブ、そして温かい出来たての手料理。この全てが短期間の間に叶ってしまった。しかし、それは母親ではない他人——。

だが、それでも不思議な充実感が星の心を支配している。それは普段、通学時や買い物などで見ていた普通の生活。しかしそれも、星にとっては決して手に入ることがないと思っていたもの……。

無言のまま、呆然とその場に立ち尽くしたままの星の両肩に手を置いて椅子へと導く。

席に着いた星は少し悲しそうな表情をしている。そんな彼女を見ていた九條は微笑みを浮かべながら言った。

「料理には少し自信があるの。きつと貴方の口にも合うと思うわよ？」

「……いただきます」

両手を体の前で合わせてペコリと軽く頭を下げると、箸を持ってハンバーグを一口大に切って口の中へと運ぶ。

数回噛んで星は驚いたように小さく「おいしい……」と呟く。そんな星の様子に満足そうな笑みを浮かべて九條自身もハンバーグを食べ始めた。

食事を終わると、星はお風呂に入ることなくソファアームに座ったと同時に眠ってしまった。まあ、自宅に帰ってきてお腹が膨れて安心したのだろう。

「こんな場所で眠ってしょうがないわね。まあ、色々あったから仕方ないか……」

そんな星の体を持ち上げると星の部屋のベッドの上まで運んでいく。

星の小さな体をベッドの上に寝かせると、微笑みを浮かべて部屋後にした。シャワーを浴びてソファーに寝転がると九條も寝息を立て始めた。

翌日。星が目を覚ますと、見慣れたはずの自室の天井が妙に異世界にいるようなそんな感覚を受けた。

まだどこかゲーム世界にいるような気がしてエミル達の姿を探すように、のっそりと起き上がった後リビングへと向かった。

リビングのソファーの上で眠っている九條を見つけた。

(九條さんこんな場所で寝てたら風邪引きそう)

まだ6月の半ばだと言うのに、何も体に掛けずに眠っている。星は自分の部屋に戻ると、ベッドから毛布を引っ張り出してそれをリビングまで引きずっていくと、眠っている九條の体に掛けた。するとその直後、いきなり目を覚ました九條がゆっくりと起き上がった。

「私は大丈夫。それより、昨日は良く眠れたかしら？」

「はい」

短くそう言って頷いた星を見て微笑んで。

「せっかく毛布を持ってきてくれたんだもの。もう少し寝ようかしらねー」

「はい！ ゆっくり休んで下さい。私は学校に行ってきますから」

そう言って部屋に戻ろうとした星を九條が止める。

それもそのはずだ。命を狙われている身で、他の子供と同じ様な普通の学生生活を送れるわけがない。

不思議そうに小首を傾げている星に向かって、九條が真面目な表情で言った。

「——星ちゃん。昨日も言ったし、貴方の叔父さんから言われていると思うけど……もう一度言うわよ。貴方は命を狙われている。だから学校に行くのもダメ、私意外と外出するのもダメ、窓の近くにもなるべく近づかない。もしこの約束を守れないのなら、アメリカに戻

る事になるからね」

「結構制限があるんですね……分かりました。ここに居られるのなら、言うことを聞きます」

彼女の条件を素直に飲んだ星は自室に戻っていった。

九條の想い

* * *

自室に戻った星はベッドの上に身を投げて天井を見上げて大きなため息を吐いた。

別にそのため息に意味があったわけではない。学校に行けないことも、外に自由に掛掛けられないことも、それほど苦痛にはならない。

ただ、自分の家に帰ってきて安心したというのと、学校にも行かずに家でゆっくりすることへの背徳感と解放感の両方からきているため息だった。

考えてみれば、ゲーム世界に行つてからは慣れない人間関係や事件でこうしてゆっくりできる時間も少なかった。しかし、今はベッドの上で寝転がったままなにもしなくていい。ゆっくり体を休めることができる。

「……こうしてるとゆっくり時間が流れていくのが分かる気がする」
瞼を閉じて時計の針が時を刻む音を聞いていると不思議と心が落ち着く、ベッドに横になって目を閉じていると、そのまま星は眠ってしまった。

次に星が目を覚ましたのは夕方になってからだだった。眠っていた星の顔に西日が差し込み、目を覚ました星も堪らず目を細める。

太陽光を手で遮ると星はゆっくりと体を起こしてベッドから起き上がった。

あくびをした後に大きく伸びをしてリビングに戻ってみると、ソファアの上に座って難しい顔でテレビを見ている九條の姿があった。

九條が見ているのはゲーム世界に監禁された事件のニュースだ――
|。

『フリーダムと言うフルダイブ式VRゲームの危険性を、今回の事件で再確認しましたね』

司会のスーツを着たメガネにオールバックの男性がそう言った。

彼の目の前には複数の著名人らしき人達がひな壇の様な席に座って唸っている。

その意見に異を唱えるように発言した。

『確かにフルダイブ機能の付いたゲームは現在「FREEDOM」だけしかありません。だからこそ危険性があるとしても世論がこれを否定してしまえば、この画期的なシステムを一つ失う事になります。危険という一言で片付けてしまうには惜しい!』

白髪交じりで灰色のスーツに身を包んだ50代くらいの男性がそう叫ぶと、それに対してメガネを掛けた中年女性が少しキツイ口調で言い放つ。

『危険というだけで十分です! 科学は人を幸福にする為にあるもので、今回の事件では多くの方々が未だ昏睡状態。意識を戻した方々もリハビリで苦しんでいます! これだけの被害者を出した技術が国の役に立つとは到底思えませんわ!』

『……待って下さい』

スーツに身を包んだ30代位の成人女性が突如として手を上げて発言する。

『今回の事件で被害に遭われた方々にはお見舞い申し上げます。その上で発言させて頂きますと、科学に——人類の発展には常に失敗と犠牲は付きもの。常にトライアンドエラーを繰り返し。危険を承知の上で、その危険な要素を少しずつ排除していけばいいのです。一度の失敗で全てを無にするのはこれまで培ってきた労力と時間の無駄遣いでしかありません』

その彼女の発言に、メガネを掛けた中年女性が声を荒らげた。

『貴方達の発言はこの技術の危険性を軽視している! もし次にもっと大きな事故が発生した場合に責任を取れるんですか!? 被害に遭われた人達の事を考えれば、こんな危険な技術は即刻開発研究を中止すべきです!』

『ですから、それでは今までの労力と時間が無駄になります。感情論だけでは、技術の進歩はありません!』

2人の声が次第に大きくなり、司会者の人が「一旦CM入ります」と

叫んで映像が切り替わる。

その様子を見ていた九條は大きなため息を漏らすと、難しそうな顔で組んでいた足を組み替える。

「——今の所は様子を見ようという穏健派の方がまともそうね。感情に訴える強硬派も多いようだけど、被害者の中にまだ死者が出ていないのが救いね……」

どうやら星が起きたことには彼女は気が付いていないようだ——テレビである事件のことは見たからか、星は少し外の空気を吸おうと玄關に向かおうと歩き出した。

直後。星のことを九條が呼ぶ声が聞こえて歩みを止めると、星は九條の方を振り向いた。

九條は星の方を向くと、ゆっくりと立ち上がって歩いてきた。

「どこか行きたい場所でもあるの？」

そう尋ねた九條に、星は少し言い難そうに答える。

「そ、その。ちよつと外に気分転換に……」

「ふーん。気分転換ねえー」

九條は星の体を足元から舐め回すような視線で見ると、思い出したようにリビングの端に置かれているトランクケースを開けた。

星がそのトランクケースの中を覗き込むと、中には様々な子供服が入っている。しかも、中には戦隊物のキャラクターが胸に付いた男の子用の服も混じっていた。

それを見た星はなにやら嫌な予感がしつつも、トランクケースの中を物色する九條の後ろ姿を見つめている。すると、いくつかの服を取り出して星の方を振り向く。

「気分転換ついでに性転換もしてみましようか！」

「……はい？」

不思議そうに首を傾げている星に九條は選んだ服を渡す。

白いラインの入った黒い前開きのパーカーとデニムのパンツ、そして赤い胸に『THE DEAD』と黒い文字の入った टीーシャツ を渡された。

不思議そうに首を傾げ続けている星を見つめながら、九條がにつこ

りと微笑みを浮かべる。その表情から悟った星は徐に着替え出し、着ていた服を脱いで渡された服に袖を通す。

そして前開きのパーカーを着て、星の長い黒髪をパーカーの外に出そうと髪に手を回した。直後、パーカーの中に入った髪を出そうとする星に九條が叫ぶ。

「そのまま！ 髪はそのままですトップ！」

突然の九條の声にビクツと体を震わせた星が少し怯えた様子で彼女を見た。

不安そうな表情の星を余所に、トランクケースの中からキャップを取り出して星の側まできた九條は持っていた帽子を星の前髪を中に入れて被せ、その上からパーカーに付いているフードを被せた。

「よし！ これで大丈夫！」

星は両手を広げて着ていた服を見る。渡された全ての服はサイズが少し大きくゆったりしている印象を受ける。

だが、普段からピツタリのサイズを着ている星からしてみれば、着ている衣服と肌の間隙間があるというのは、どうにも違和感があつて不思議な感覚だ――。

着ている服の違和感から体を頻りに動かして首を傾げている星をその場に残し、スプレー缶を持った九條はお風呂場へと向かつていった。

それから数分後、星が椅子に座ってお風呂場の方へと消えていった彼女を待っていると、脱衣室の扉から出てきたのはウェーブの掛かった金髪に露出の多い服を着た女性が出てきた。

黒のキャミソールの上に薄いピンク色の透けているトップスにジーンズ姿で立っている。その姿はまるでギャルの様だった――。

「さあ、準備が出来たわ。それじゃー、行きましょうか！」

「は、はい」

声を聞いた直後。出てきた人物が九條であると分かったが、それでも目の前にいる人物と九條の姿の差を認識するのに脳が拒否反応を起こしていた。

しかし、そんなことなど気にする素振りすら見せずに九條は困惑し

ている星の手を取ると、星の顔を見て笑顔を見せてそのまま2人で家を出た。

九條の想い2

家を出た星と九條はしばらく歩くと、タクシーを拾って近くの駅へと向かった。

駅に着くときつぷを買ってホームで電車を待っている星は、落ち着かない様子で周囲をちらちらと見て妙にそわそわしていた。

まあ、それも無理もない話だ。星は今までの人生で電車なんて数えるくらいしか乗ったことがない。学校も徒歩で通える距離だし、買い物でよく行くスーパーも歩いていける距離だ。その為、わざわざ電車に乗るような必要がなかったのだ。

そんな彼女にとって、駅のホームというのは物珍しいものでいっばいに見えているのだろう。目に付く全ての物が興味を引く異世界のものに見えていたのかもしれない。

昼間で人の少ないホームに電車が到着する時に流れるアナウンスが響き、遠目にホームに向かって走ってくる電車が目に入ってきた。それを見ていた星のワクワクは更に大きくなり、無意識の内に前に傾く体が小刻みに動いてしまっていた。

電車の到着と共に車両のドアと連動して開く機械的な扉の扉。その直後、逸早く列車に乗ろうとした星の肩を掴んで九條が止める。不思議そうに九條の方を向いた星に彼女は小さな声で告げる。

「……電車はね。降りる人が優先なのよ？」

彼女の言葉に無言のまま静かに頷くと、電車から降りてくる人を待つて車両に乗り込んだ。

椅子に腰掛けて電車の発車を待っている間。星は膝の上に置いていた手がそわそわと頻りに動いていた。星からしたら、まるで宇宙船にでも乗り込んだような心境だったのだろう。

発車を告げる電子音の直後、ゆっくりと電車が動き出して星は緊張した面持ちで膝の上に置いていた手の平をギュツと握り締めている。

電車が動き出すと星は外を向いて次々に流れていく景色をキラキラと輝く瞳で見つめていた。

自分が動いているはずなのに、景色の方が高速で移動している様な

錯覚に陥る。だが、そんな感覚も星には日常で経験できないことだ。物珍しさと好奇心から、星には珍しく周囲の目を気にすることなく椅子に膝を突いて食い入るように外の風景を見据えていた。

星が外の風景に夢中になっている間に、電車が目的の駅に着いて九條が星の肩を叩いて忙しなく降りる。

電車を降りると、星達の乗っていた駅とは比べ物にならない人でごった返している。九條が星の手を繋いで人混みを掻き分けながら前を歩きながら駅を出た。

駅を出てから歩いて徒歩10分くらいの位置に大型のショッピングモールがあった。その巨大な建物を見た星が驚きのあまり声を上げた。

「うわあ、すごい！ こんな大きなスーパー見たことないです！」

「ふふつ、それは良かった。でも、ここはスーパーじゃなくて正確にはショッピングモールよ。簡単に言うと、スーパーマーケットの上のスーパーマーケットって感じかしらね」

「……ショッピングモール」

目の前のショッピングモールを見上げながら小声で呟く星を見て微笑むと、九條は星の耳元で小さくささやく。

「——ここでは星ちゃんの事をゆうじって呼ぶからね。そしてもう一つ、私の前を歩いて決して側から離れない事。それを守ってもらえるなら、好きな所に行っていくわ」

「はいー」

嬉しそうに頷く星の瞳は巨大ショッピングモールの中を自由に散策できるという希望でいっぱいだった。

中に入ると綺麗な服の陳列されたアパレルショップなどが数多くあり、それが星にはとても目新しく思えた。まあ、スーパーではアパレルなどの専門店が入っている所は殆どないと言ってもいい。

そんな彼女にとって目の前に広がる専門店のテナントが入っているのを見ているだけで、わくわくしてきてしまう。

九條と星はショッピングモール内の案内図を確認する。

「どこか行きたい場所はある？」

そう尋ねた九條に星も案内図を食い入るように見つめる。

正直。今までにこんな大きな場所で買い物をする機会がなかった星には、案内図にびっしりと書かれた店舗名を見ているだけで目が回りそうになる。

しばらく案内図とにらめっこしていた星だったが、大きなため息を漏らして案内図に向けられていた視線を逸して周囲を大きく見渡した。

「せっかくなので、色々見て回りたい……な」

咄嗟に「です」と言いそうになったのを呑み込んで、ぎこちなく言い換えた星が九條の顔を見上げる。

外でいる間は親子に見られるように敬語は使わないというのを事前に言われていたのだが、どうしてもいつもの癖で敬語が出てしまいうようになる。

だがそれは九條も分かっているらしく、優しい微笑みを浮かべると深く頷いた。

2人は巨大ショッピングモールの中をゆつくりと見て回ってから昼食を取る為にフードコートにやってきた。

「なにか食べたいものはある？」

「——なら、あれを食べてみたいです！」

少し考えた星が指差した先にはファーストフードのハンバーガーショップがあった。それを見た九條は頷いて星の手を取ってハンバーガーショップの前でメニューを見ながらどれにするか考え込んでいる。

以前にもハンバーガーを口にしたことがある。しかし、それはゲームの中での話で——しかも、星はレイニールに殆ど渡して自分は余ったパンの部分しか食べていない。

それでもその時の味はしっかりと覚えていた。その時のハンバーガーの味と現実のハンバーガーの味がどれほど違うのか興味があった。星からしてみたら、こんなチャンスは後にも先にもこの時しかないかもしれない……。

しばらく考えた末にオーソドックスで値段の安いハンバーガーを

頼もうとしたのだが、九條がそれを止める。

「本当にそれでいいの？ もっと高いのでもいいのよ？」

「う、うん。せ、せっかくだから普通のを食べたい」

最初よりはいくらか自然になった口調だが、それでもまだ最初の方では言葉の引つ掛かりが出ていた。

「なら、せっかくだから色々頼もうか！」

九條はそう告げると店員さんに向かって注文を始める。彼女は慣れた様子で注文している。

注文し終わると番号札を渡され、九條はそれを受け取ると席へと向かって歩き出す。

壁際の席に腰を下ろした九條と向かい合うようにして星も椅子に座る。さつき店員に渡された番号札をテーブルに置いて十分程度待つと、店員がお盆を持ってやってきて、そのお盆をテーブルに置いて「ごゆっくりどうぞ」と言い残して去っていった。

目の前には星が注文したハンバーガーの他にも多くの種類のハンバーガーが置かれており、それ以外にもフライドポテトやチキンナゲット、アップルパイなんかのサイドメニューも数多く置かれていた。

だが、その量はどうか考えても星と九條だけで食べ切れる量ではない。それを不思議に思った星は九條に尋ねた。

「こんなにたくさん……食べきれないですよ」

「それなら心配いらないわ。残ったら持ち帰りように袋をもらおうから」

「なるほど……」

短く言葉を返した星はハンバーガーの包み紙を開けた。

袋に包まれていたハンバーガーをまじまじと見つめると、どうやら中身は以前ゲーム世界で見たものと同じだ。しかし、見た目が同じだからと言って味まで同じかは分からない……。

生唾を呑み込んだ星は持っていたハンバーガーに噛み付いた。直後、星は不思議そうに首を傾げる。

味は決して不味くはない。ないのだが、何故か星が以前ゲーム内で

食べたハンバーガーの方がジューシーだった気がする。

いや、正確に言えば星はハンバーグの味の付いたパンしか食べてないのだが、それでも味の違いが分かるほどゲーム世界で食べたハンバーガーは美味しかったのだ。

それでも今食べているハンバーガーが美味しくないというわけではない。初めて食べるハンバーガーの味を噛み締めるように、星は味わいながらゆっくりと口を動かしていた。

その後もフライドポテトやチキンナゲット、アップルパイなどを食べた。だが、予想通りその大部分は食べ切れずに残してしまう。

「……もう食べれない」

「そう。ならこれは持ち帰りましょう」

無言で頷く星の表情はどこか嬉しそうだ。

星にはこうして外でお昼を食べることも新鮮で、なにより誰かと食べるご飯がいつもの何倍も美味しく、そして楽しかった。

今思うと事件に巻き込まれる前は買ってきたお弁当か冷蔵庫の中に入っている食事を電子レンジで温めて一人で食べていた。

静まり返った部屋の中で食べる食事はとても寂しく、温かいはずのご飯が冷たく虚しく感じたものだ――。

九條の想い3

ゲームの中では仲間達と食事をするのが当たり前で、毎日が楽しかった。隣にはいつでもエミルが居て、レイニールは星の食べている物を欲しがっては催促してくる。エリエにデイビッド、イシエル、ミレイニ、カレン。最初は緊張して食べ物の味も分らないくらいだったのに、それが美味しいと感じる頃にはなによりも食事の時間が楽しみになっていくくらいだ。

だけど、九條と2人きりで食べる食事もある時と違って特別な感じがする。例えるなら、まるで親子のような落ち着いたなにか……。

特にすごいものを食べたわけではなく、普通のファーストフードのハンバーガーだったが、それでも星にとってはその味は忘れられない特別な物に感じた。

昼食を取り終えた星と九條はショッピングモール内にある書店へと向かった。そこには数多くの本が置かれており、星もそれには今までで一番興奮した様子で瞳を輝かせながら中へと入っていった。

道を形作るように置かれた多くの本棚には様々な本が種類ごとに置かれている。それを食い入るように見つめながら、星はゆっくりと歩きながら物色している。しかし、時折止まって本を取ってはそれを数秒表紙を見て棚に戻すを繰り返す。

その様子を見ていた九條は星に向かって言った。

「持ち帰る事を考えて、3冊くらいまでなら買ってあげる」

「——本当ですか?! なら……」

星は嬉しそうに九條の顔をキラキラした眼差しで見上げると、さっきまで通ってきた道に戻っていく。

戻って二冊の本を抱えて帰ってくる星に、九條も笑顔を見せた。九條は戻ってきた星から2冊の本を受け取って星は再び本を探しに歩いていった。

その後を九條は一定の間隔で付いていく。それに気が付いていない様子で、生き生きしながら本を探している星。

もうショッピングモールの入り口で言われたことを忘れているほ

ど、書店の中を歩き回っている星だったが、九條もそれを注意することはない。それは、今までにないほど生き生きしている星を、九條も微笑ましく思っているからかもしれない。

まだ短い間しか星と行動していないが、それでも星が他の子供とは違うということに薄々気が付いていた。

アメリカから日本に戻る時も様々な偽装工作をしながら家に戻ったのだが……その時も何度も服を着替えたり車を変えたりしたのだが、その中で星は一度も拒否するような言葉を発していなかった。

これが普通の子供なら「嫌だ」とか「めんどくさい」など言ってもおかしくないのだが、星は九條の言葉に素直に従っているだけだった。それは九條のイメージする子供とはかけ離れていると感じた。

そんな星が今までの中で一番はしゃいでいる星の姿に、九條としては少しほっとしているのかもしれない……。

「あつ、ごめんなさい」

「いえ、いいのよ。ここは人も多いし入り組んでいるから安全よ。私は貴女に付いていくから自由に動きなさい」

「うん！」

はっと気が付いた様子で九條の方を振り返った星だったが、九條は笑顔で言葉を返した。

それからしばらく時間が経って、星は三冊まで本を絞ったが選べるのはその中でたった一冊だけだ――。

目の前に広げた三冊の表紙を交互に見て難しそうな顔で唸っている。それはもう、世界の終わりを告げられた時の様な深刻な表情で本の表紙を見つめている。

眉間にシワを寄せて難しい顔で唸っている星を見て、九條は星の前に置かれている三冊の本を手にとって前の二冊と合わせてレジの方へと歩いていく。その様子を驚いた表情で見ている星に向かって九條が告げた。

「迷うなら全部買えばいいでしょ？ その方が時間が短縮できるし、悔いも残らないしね！ ただ、後でリュックを買って上げるから自分で持って買えるのよ？」

力強く頷いた星はレジへと向かう彼女の後ろを付かず離れずの距離で追いかけて行った。

リュックサックを購入して買ってもらった本を入れ、それを背負いながら星は上機嫌で歩いている。そんな星を後ろから見守りながら、帰り道で九條も嬉しそうな笑みを浮かべていた。

家に帰ると同時に、星はリュックの中から買ってもらった本を一冊取り出して自分の部屋へと一目散に入ってしまった。

そんな星を見送り、九條は変装に使ったヘアカラーを落とす為に脱衣所へと入った。服を脱ぎ裸になった九條は、洗面台に置いたバッグの中からチューブ式のシャンプーを手に浴室に入った。

チューブから出た液体を髪に馴染ませるように塗り込むと、シャワーから出たお湯を頭からかぶる。

すると、九條の金色に染めていた髪が見る見るうちに流れ落ちて元の茶色の髪の毛が露わになっていく。しかも、流れ落ちる液体は金色ではなく無色透明へと変わっている。

おそらく。チューブに入った液体が原因なのだろうが、星の叔父がいた研究所の人間である九條がそれを使っても別に不思議ではない。

石鹸で体を洗う。彼女の豊満な胸を泡が滑り落ちていく時に、彼女の胸の下にある傷跡を通っていく。

胸の下にある傷跡を九條の細い指先がそっと撫でて、彼女は感慨深げに浴室の真っ白な天井を見上げて小さな声で呟く。

「——あの子と生活していると、どうしても昔の事を思い出してしまう……」

九條はシャワーの蛇口を捻って再びお湯を勢い良く出すと、そのお湯の中に頭を突っ込む。そしてしばらくの間、お湯をかぶったまま固まっていた彼女がシャワーのお湯の中から頭を出して大きなため息を漏らした。

「これは任務。私情は挟まない……あの子は私の警護対象。それだけよ……」

そう呟き頭を左右に激しく振った九條はシャワーの蛇口を捻って

お湯を止めて浴室を出た。

日は傾き真っ赤に染まった夕日が部屋の中をオレンジ色に染め上げる。シャワーを終えてリビングに戻った九條は、星の姿が見えなかった為、星の部屋の前まで行つてそのドアをそつと開けた。

中では勉強机の前で座つた星が買つてきたばかりの本を広げ、それを熱心に読み進めている。

それを見た九條はドアをそつと閉めてリビングへと戻りソファアールの上に寝転んだ。

「あの子もまだ当分動かないでしょうから、少し仮眠を取りましょう」
独り言の様に呟いた九條は瞼を閉じてすやすやと寝息を立て始めた。

九條が次に目を覚ました時には、時計の針はすでに夜9時を回っていた。それを確認した九條がソファアールから飛び起きるがリビングには電気は付いていない。仮眠のつもりがどうやらぐっすりと眠ってしまったらしい……。

「——星ちゃんは!?!」

星の安否を確認する為、慌てて立ち上がった九條が星の部屋へと走る。

部屋の電気は付いているようで、隙間から光が廊下まで漏れ出していた。

九條の想い4

九條は数回ドアをノックしたが、中から返事はない。慌ててドアを開けた直後、勉強机に座ったまま驚いた様子で九條の方を見ている星の姿があつた。

それを見てほっと胸を撫で下ろした九條が星に向かって言った。

「何回かノックしたのよ?」

「あつ、ごめんなさい。本を読むのに集中してて気が付きませんでした……」

目を見開いた星はすぐに苦笑いを浮かべながら申し訳なさそうに答えた。

その様子にため息を漏らした九條が、少し呆れながら尋ねる。

「まさか夕方からずつと本を読んでたわけじゃないでしょうね」

「——えっ? そうですけど……」

なにも不思議なことなどないと言わんばかりにそう答えた星に、九條は驚いた様子で星の顔を見た。

それには星も驚いたようで、何度も瞬きしながら九條の顔を見つめていた。

しばらく時間が止まった様に顔を見合わせていた二人だったが、九條が思い出したように言った。

「もう夜の9時よ? さすがにお腹が空いたでしょ?」

「い、いえ。まだ後でも大丈夫——ぐうう」

そこまで口にした星のお腹の虫が鳴く音が部屋の中に響く。それを聞いた九條は「お腹の虫は大丈夫じゃないみたいね」と笑みをこぼす。

慌ててお腹を押さえる星を手招きしながら九條が言葉を続けた。

「さあ、お昼の残りのハンバーガーもあるし。悪くなる前に食べちゃいませう! いらっしやい!」

「はー」

星は持っていた本を机の上に置いて九條の方へと歩いていく。そ

れを待つて九條は星と一緒にリビングへと歩いていった。

リビングに着くと星はテーブルに座り、九條は冷蔵庫の中に入れていたお昼の残りを電子レンジに入れ、あたためスタートと言った直後、電子レンジが自動で動き出した。

2036年の現在は全ての電化製品を一つの端末で行える様になった。腕時計型の複合端末VAC (Voice AutoComtroller)が主流の端末になっている。この端末は通話、メール、音声認識による電化製品のON・OFF機能。それに情報端末であるテレビ、ネットなどのモニターを使う類に物も入っている。

それは光学技術の発展による最小光学モニターとその投影ができる白い壁ならどこでも拡大スクリーンへと変えてしまう。しかも正面から一定の距離でしか視認できない為、プライバシーも守られる。その高機能なデバイスを腕時計型の小さな機械に集約したのだ。

外見は中央に青く光るガラス上の球体が光を発していて、その下に小型のカメラが付いている。

九條は電子レンジから出したハンバーガーやフライドポテトをテーブルに置いた。星はとりあえずポテトに手を伸ばして自分の口へと運んだ。星がフライドポテトを食べていると、突然九條が星に尋ねてきた。

「星ちゃんは どうして本が好きなの？」

おそらく。その問いは九條の素朴な疑問からくる言葉なのだろう……。

それを聞いた星は持つていたフライドポテトを置いて、少し恥ずかしそうに顔を赤らめながら答えた。

「——私が本を好きなのは……色々な場所に行けたり、色々な人になれるからです」

「色々な場所や人ねえ……」

いまいち分かっていない様子の九條に星が言葉を続ける。

「本にはストーリーがあつて人の生活があります。登場人物が嬉しければ私も嬉しいし、楽しい時は私も楽しいから自分で体験している気持ちになるんです……現実では行けない所でも行けるのは嬉しいで

す。現実の私はお母さんも忙しくてどこにも行けませんでしたから………」

悲しそうな顔でそう言った星の表情を見て、九條の表情も暗くなる。

その時の九條は、昼間に行ったショッピングモールでのことを思い出していた。あの時の星の瞳は見るもの全てが珍しいという感じだった……その理由が今更ながら分かったのだ。

小さく頷いた九條が優しい声で告げた。

「そつか……早くご飯を食べてお風呂に入ってしまったでしょう。そして、私が星ちゃんを楽しい場所に連れて行ってあげる」

「本当ですか!？」

嬉しそうに九條を見た星に彼女は力強く頷いた。

それを聞いた星は食べそこねていたポテトを口の中に入れると、ハンバーガーを急いで食べ始め、食べ終えた後にお風呂に入る為にリビングを出ていった。

星がお風呂に入っている間、九條はテレビを見ていた。ニュース番組はどれも史上最大の監禁事件となったフリーダムでの事件の話題でもちきりだ――。

首謀者が未だに発表されていないこともあり。ニュースの殆どが被害に遭ったプレイヤー達の情報と、憶測でしかない妄想であふれ返っていた。

それを見ていた九條は大きなため息を漏らして呆れた様子で呟く。

「……まったく。新情報も出ないのにマスコミも良く頑張るわねえー。まあ、それもこっちの組織が情報統制を敷いているから当然なんだけど……」

お風呂場の方から扉を閉める音が聞こえた九條は、急いでテレビの電源を消した。

リビングに戻ってきたのは星は不思議そうに九條の方を見つめている。

「今、誰かの話し声が聞こえたんですけど……電話ですか？」

「ああ、ちよっとテレビを見てたのよ。驚かせちゃったわね」

「……もういいんですか？」

「ええ、どれもつまらなかつたからね」

そう言った九條に星はほっとした様子で彼女の座っていたソファアの側まで歩いてきて九條の顔を真っ直ぐに見た。

「九條さんもお風呂呂に入らないんですか？」

「ああ、私はいいわ。帰ってきてからシャワーを浴びたから」
「そうですか」

少し遠慮しがちに俯きながらもじもじとしている。

それは九條が食事中に言った言葉を気にしてのことだ——夕食を食べ終えてお風呂呂に入ったらどこかに連れていってくれると言っていた。

「ああ、そうね。どこかに出掛けると言ったけど、それは実際にお出掛けするってわけじゃないわ。危ないからこつちに座りなさい」

「……ん？ はい」

微笑みを浮かべる九條に言われるがまま、星はソファアに座っていた九條の隣に腰を下ろした。

その直後、九條は腕に巻いていた腕時計型の端末を地面にそっと置いて「照明OFF」と言った。すると、リビングの照明の電気が一斉に消えて辺り一面真っ暗な暗闇へと変わる。

九條の想い5

真っ暗になった不安になった星が咄嗟に隣にいた九條の腕に抱き付くと、それを見た九條が嬉しそうに笑う。

九條が置いた端末に向かって「プラネタリウム起動」と言うと、腕時計型の端末の中央に付いている半円状の場所から光が発せられた。直後。部屋中に星々が散りばめられ煌々と輝いている。それを見た星は瞳を輝かせながらソファアを立って走っていく、まるで空中に星々が浮かんでいるかのように星々が表示されている。

手を伸ばせば届きそうな星々を見つめながら、星は九條の方を向いた。

「こんなの初めて見ました!」

「そうですね。でも、これはただ星だけを表示するわけじゃないのよ?」

「……え?」

不思議そうに首を傾げる星に向かって手招きする。星もそれに素直に従って九條の座っているソファアに戻ると、宙に浮かんでいる星々が次々と線で結ばれていく。

その光景を星は食い入るように見つめている。それは線で結んでいた星々を囲むように、周りをぼんやりとその星座の由来になった動物や物、人物などが浮かび上がる。しかもそれが立体的に現れる為、暗い室内のあちらこちらにぼんやりと光る動物達はまるで今にも動き出しそうなほど躍動的な姿をしていた。

ファンタジーの本が好きなら女の子ならば、そこ光景を目の当たりにして瞳を輝かせないわけがない。星にとっては、プラネタリウムというものを目にするのも今日が初めての体験なのだ――。

ソファアから前のめりになって、輝かせた瞳で夢中で浮かび上がる星空を見上げている星の肩をそっと抱き寄せた九條が彼女の耳元でそっとささやく。

「――少し落ち着いたら、今度は本物の星空を見に行きましょう……」

「……本当ですか!」

「ええ、約束するわ。だから今日はこれで予行練習しましょうね。ナレーション！ 春夏秋冬！」

九條がそう叫んだ直後、表示されている星座が一度消え、星々の並びが変わって季節ごとに見える星座が再び表示され直す。そして、部屋の端に置かれている小型のスピーカーから女性の声で見えている星座の解説が始まる。

それを聞きながら星は次々に移り変わる星々をキラキラとした瞳で見つめながら、瞬き一つせずに食い入るように眺めていた。

そのナレーションを聞きながらゆっくりと移り変わる星座をソファーに座りながら九條と星が見ているとしばらくして、九條の隣にいた星の頭が九條の肩に凭れてきた。

九條が星の方を向くと、星がすやすやと寝息を立てている。そんな星を見た九條は優しい微笑みを浮かべ、眠っている星を起こさないようにその小さな体を抱き上げて部屋へと運ぶ。

星の部屋のドアを開けて部屋に入ると眠ってしまった星をベッドに寝かせた。星はすやすやと気持ち良さそうに眠っている。その寝顔は何の不安もなさそうな安らかなものだった……。

「ふふっ、今日もいっぱい動いたから仕方ないわね……」

星の寝顔を見ながら口元に優しい笑みを浮かべた彼女はふと星の部屋を見渡す。

昨日は気が付かなかったが、その質素過ぎる部屋の内装はとても小学生の女の子の部屋——というには無理があった。カーテンは黒に近い紺色で、部屋の端には勉強机と本棚が2つとタンスが置いてある。

木目調の勉強机の上は綺麗に整理され、上の小さな本棚には教科書や参考書が大きき別に並んでいる。壁に沿ってL字に並んだ本棚には分厚い本がびっしりと並んでいた。

しかし、その中にマンガ本などはなく、その全てが文字がびっしりと書かれた本ばかり……伝記やファンタジー物に加え小学生なら読まないような自伝本なんかも置かれている。

だが、部屋のどこを探しても年頃の女の子が好きな蛍光色でピンク

やきいろといった色合いの物やぬいぐるみなどは一切ない。色とりどりのバリエーションがあるはずのランドセルですらスタンダードな赤……小学生の象徴であるランドセルさえ除けば、その部屋の内装はまるで中年男性の部屋のようだ――。

「……………」

眉をひそめ、無言のままその光景を見渡していた九條が再び眠っている星の寝顔を見た。

「――子供らしくはないと思っていたけど……さすがにこれは行き過ぎね。これじゃまるで、子供の姿をした大人だわ……このまま放置すれば、精神の成長スピードが早すぎて、いつかこの子の精神が壊れてしまう……」

そう言った九條は自分の拳を強く握りしめたまま、怒りで体を小刻みに震わせている。

「母親はいつたいこの子の何を見ていたのか……………」

星の寝顔を見つめていた目を逸らして、無言のままリビングへと歩いていく。

真つ暗なりビングの中、ソファ―に座った状態で九條は俯いたまま震えの止まらない手を必死に抑えようとしていた。

まあ、それだけ星の母親への憤りを覚えているということでもある。どんな理由があっても、自分の子供を無下にできる母親などない。それを平然と行っているのが九條は許せなかった。

もちろん。実際の星と母親とのやり取りを見たわけではないが、星の反応と置かれている状況を見ていけば、その人となりを窺い知るところは容易い。子供に衣食住だけ与えればいい――それで親の義務を果たしている気になっている星の母親に苛立ちを抑えることができなかつたのだ。それは彼女の女性としての母性がそうさせているのかもしれない……。

結局、九條の憤りがおさまったのは数時間が経過してからだった。その頃には亡くなった人物に本気で憤っていた自分が情けなくなるくらいには冷静さを取り戻していた。

「私とした事が……柄にもなく熱くなっていたわね。でも、あの子が

いい子だからどうしても……ね」

そう口にした九條は一度は止めていた。プラネタリウムを再び起動させ、ソファアーに寝転びながら頭上に輝く星座の立体映像を眺めていた。

しばらく星座を眺めた九條は大きなため息を漏らしてゆつくりと瞼を閉じた。

「——護衛対象にここまで情が湧いたのは初めてだわ……まだ私にこんな感情が残っていたなんて……」

そう小さく呟いた後、九條も眠りに就いた。

母として

翌朝。九條が目を覚ますと、星が既に起きていてバタバタと廊下を忙しなく行き来していた。

星に気が付かれぬように薄っすらと目を開けてその様子を窺っている、なにやら重そうなダンボールを引きずってせつせと別の部屋に運んでいる。

かと思うと、今度は毛布やシーツなどを頭から被ってまるで肝試しのお化け役のように脱衣室に入っていく。おそらくは自分の身長よりも大きい毛布などを洗濯機に詰め込んでいるのだろう「うーん」と力を振り絞って必死に詰めている姿が容易に想像できる声が聞こえてきた。

洗濯機の回る音が聞こえてきた直後、星が脱衣室から出てきて廊下に置いていたダンボールに足をつまずいて派手に転んだ。

リビングまでドン！という鈍い音が聞こえてきて、堪らず九條がソファから起き上がって廊下を見ると、星が両手を上げた状態で顔をフローリングの床に着けたまましばらく微動だにしない。

九條が慌てて駆け寄ると、星がむくくと起き上がっておでこを押さえながら瞳に涙を溜めている。だが、泣き出すことなく九條の驚く顔を見て苦笑いを浮かべる。

「ごめんなさい。起こしちゃいましたよね……」

「そんなのいいわ！ 凄い音がしたけど大丈夫!？」

心配そうに星を見ている九條に苦笑いを浮かべたまま立ち上がって言った。

「大丈夫です。たまにあることですから……」

おでこをさすりながらそう言った星の体を強引に抱きかかえた九條は、星をソファに寝かせて冷蔵庫の冷凍室から保冷剤を取り出してそれをタオルで包むと、寝ている星のおでこにそつとあてがう。

そんな彼女に星が小さな声で言った。

「ちよつとぶつけただけなのにこんな……おおげさですよ」

「ダメよ！ 女の子なんだから、顔に傷が残ったら大変でしょ？」

おでこに当たるひんやりとした感触に表情を緩めた星の手がタオルで包んだ保冷剤を当てる九條の手に重なる。

「九條さんは優しいですね……冷たくて気持ちいい——こうしてると、なんだか落ち着く気がします……」

そう呟く星に眉をひそめた九條が尋ねた。

「いつもはどうしているの？ 星ちゃんのお母さんはこうしてくれないの？」

「いつもは転んで頭をぶつけても特に何もしません。晴れたら湿布を貼るくらいですね……それに、ちよつと転んだくらいでお仕事で忙しいお母さんに心配かけるわけにはいけませんよ。自分の事は自分でするのが当たり前ですから」

そう言つて微笑む星に、九條は短く「そう」とだけ言葉を返した。

いや、それ以上の言葉が出てこなかった。9歳で、まだ小学四年生の子供の言葉とは思えない。いくら母親が仕事で忙しいからと言っても、この歳ではつきりとそれを割り切れる星が健気に思えて仕方なかったのだ。

10分ほど無言の時間が部屋の中に流れる中で、九條が徐に星に尋ねた。

「——そう言えば、私が寝ている間になにかしてたの？」

そう尋ねられた星は視線を逸らして少し恥ずかしそうに言った。

「九條さんがずつとソファで寝ているので、バラバラのベッドがあるので組み立てようと思って……」

「……星ちゃん」

それを聞いた九條は瞳に涙を浮かべていたが、それを星に悟られまといと視線を廊下の方へと向けた。

「星ちゃんがあまり家の中を好き勝手にされるのが嫌だと思つてソファを使つていたのだけど。もしも、星ちゃんがいいなら私が部屋の片付けをするわ。子供の手でやるより大人の私がした方が早いからね」

「はい。でも、私も手伝います」

起き上がろうとする星の肩を押さえた九條が起き上がろうとする

星をソファアームへと押し戻す。

「大丈夫！　最初にやってもらったので十分よ。貴女はおでこを冷やして待つてなさい。頭をぶつけて激しく動くのは良くないわ」

「……はい」

素直にそう言った星は九條から保冷剤を包んだタオルを受け取って、それを額に当てて廊下の方へと歩いていく九條の後ろ姿を見送った。

九條が星が廊下にダンボールを出していた部屋に入ると、中には山のようにダンボールが積まれていた。それだけを見れば、間違いなく不要な物を押し込んでおく倉庫の様な部屋なのだが、不思議なことに奥の方には古い鉄製のデスクが置かれ、その上にはまるで昨日まで使っていたかのように筆記具や本や書類が残されている。

「……これってまさか……」

ほこりは被っているものの、使用感のあるそのデスクを隠すように積み重ねられているダンボールを避けると、九條はデスクに備え付けられている引き出しを開けた。

中には茶封筒が入っており。表紙にはFREEDOMの後ろに右矢印、続いてHUMAN ETERNAL PROJECT『REMAKING』と書かれている。

「——フリーダム……ヒューマンエンターナルプロジェクト……リメイク？　——中身はッ!？」

茶封筒を手にとった九條が中身を確認すると中にはなにも入っておらず、逆さまにしてみても中に手を入れて弄ってみてもなにも確認できなかつた。

つまり、その茶封筒は偽装工作した何かではなく、以前なにかを入れていた言わば抜け殻のようなものだ——。

だが、これは間違いなく星の父親の『大空融』のもので間違いないだろう。何故なら、大空博士がVRMMORPG『FREEDOM』の生みの親であるからである。

しかしながら、世間一般に知られている同ゲームの開発者は『遠藤豊』星の叔父である彼だ——だとしても、事実を知っている者達から

すれば、基礎システムを確立した大空博士が開発者というのは九條でも知っている周知の事実である。そしてその彼が不慮の事故で亡くなったことも……。

しかし、不可解なのはどうして星の母親がこの部屋に大空博士のデスクを置いているのかということだろう。しかも生前彼が使っていた状態のまま ведь。

彼の死後。生まれたばかりの星を連れて星の母親が引っ越したのは、その護衛を任されていた九條達も無論知っている。だが、その前に夫が使っていたデスクをわざわざ持って新居に引っ越し、しかも生前に彼が使っていた状態のまままで保存しておくだろうか？

それを未練だと言ってしまうえばそれまでかもしれないが、普通なら遺品は残しておくがそれを生前の状態で保存しておく理由はない。本来ならば嫌なことは忘れたと思うのが人間の心情だからだ。だから九條には、星の母親の取ったその行動だけが理解できなかった。だがなんにせよ、今の状況下では大空博士が使っていたデスクの存在を外部の人間に知られるわけにはいかない……。

「……あの子には悪いけど、これも整理しましょう」

九條はほこりが被ったデスクの上を整理し始めた。

今の星が命を狙われている恐れがある状況下で、このデスクの存在は星の父親と彼女自身を結びつける手掛かりになりかねない。星がこれまで誰にも命を狙われなかった理由はただ単に彼女が生まれる前に父親である大空博士が亡くなっていたことが理由だ。簡単に言えば、星と大空博士は血縁関係があるだけの他人ということだ……。

母として2

星の母親は元々大空博士の助手をしていた人物であるが、わざわざ夫と長女を殺されてそれを生まれた娘に教えるはずがない。教えれば次女である星にも危険が及ぶのは分かりきっているからだ――。

九條はデスクと部屋の中のダンボールを別の部屋に全て押し込むと、もう夜になってしまっていた。作業中も時折、九條の様子を見に来ていた星だったが、その都度心配そうに見てくる星に九條が「大丈夫だから待ってて」というやり取りをしていた。

だが、しばらく前から九條の様子を見に来なくなった星の様子を見にリビングにいくと、リビングに置かれているソファアーの上で眠っている姿を見つける。

まあ、朝早く起きて九條を起こさない様にと慎重にダンボールを地面を引きずりながら押して運んでいたのだ。その繊細な作業で相当疲れていたのだろう。小さな寝息を立てて気持ち良さそうにぐっすりと眠っていた。

九條はそれを見て思わず笑みをこぼす。そんな星の額にそっと手を乗せながら小さく呟く。

「……良かった。おでこの腫れは引いたみたいね……私の為に頑張ってくれてありがとう。ゆっくりとおやすみ」

九條はそう言って星の額から手を放してソファアーの前を後にしてキッチンへと入った。

エプロンを付けた九條は手際良く冷蔵庫の中から食材を取り出してにんじんをトントンと軽快なリズムで切り始めた。すると、その音で星が目を覚ましてキッチンへと歩いてきた。

「九條さん料理ですか？」

「あら、起こしちやっただ？ まだ掛かるから眠っていいわ。できたら起こしてあげるから……」

そう言った九條の顔を見上げ、星は体の前に組んだ手をもじもじとさせて少し言い難そうに尋ねた。

「……あの。九條さんが良かったら、私にお料理を教えてくださいませんか

か？」

「お料理に興味があるの？」

「……はい。やっぱりダメですか？」

断られると思っているのか、不安そうに眉をひそめながら尋ねた星に九條は笑顔で返した。

それを見た星は嬉しそうにぱあーと表情を明るくさせる。すると九條は「ここで待っててね」とだけ言い残して自分はリビングへと向かっていく。

リビングに置かれた衣服の詰まったトランクケースから子供用のエプロンを取り出している。その様子を見ていた星は少しわくわくしながらキッチンで落ち着かない様子で九條が戻ってくるのを待っている。

星は家事の殆どを熟すことができる。それは自主的に行っていた。しかし、母親から何故か料理だけは堅く禁止されていた。

その料理を星はやつとできるのだ。星は料理に憧れがあった。テレビなどで見る料理は様々な食材を混ぜ合わせて美味しそうな料理になる。それはまるで魔法のようで……現実世界で魔法使いになった気分を味わえる唯一のものだろう。

九條がキッチンに戻ってくると、星の体にエプロンを付けてすぐに再びどこかへ歩いて行ってしまふ。

それを目で追いかけると九條は廊下へと出て行ってしばらくして踏み台を持って戻ってきた。それは星がいつも洗濯機に洗濯物を入れるために用意していた踏み台だった。

キッチンに戻ってきた九條は持っていた踏み台を地面に置いて、星にその上に乗るようにと促す。

言われるがままに踏み台の上に乗った星は横に立つ九條の顔を見る。

「料理の前は手を洗わないといけないの。こんな風に……」

九條はハンドソープを手に取って爪の中までしっかりと念入りに洗っていく。

それを見た星も九條を真似るように手を洗い始めた。

泡だらけの手をぬるま湯で洗い流すと、まな板の前に移動して横に立っていた九條が星の後ろに回って覆い被さるようにして星の右手を掴む。

「まずは包丁の持ち方から始めるわね」

「はい」

少し緊張した様子で強張った手で包丁を握るとまな板の上に置かれたにんじんの上に押し付ける。更に力を入れようとした直後、九條の手が星の手を止めた。

「待って、包丁を握る手はもう少し力を抜いて。にんじんを押さえる手はねこの手にするの」

「……ねこの手ですか？」

不思議そうに首を傾げる星の顔の前に九條が指を丸めた状態の左手を出した。

「こうやって、にゃんにゃんってするのよ？」

丸めた左手を招き猫の様に動かしてそう言った九條に釣られるように、小首を傾げた星も左手の指を丸めて「にゃんにゃん」と手を動かす。

その手を九條の手の平が優しく包み込んでまな板の人参の上にそっと置く。

「料理は力を込めると怪我をするわ。ゆっくり深呼吸して……」

「は、はい」

言われた通り深呼吸した星の体から力が抜けたのを見て、包丁を持った手に重ねていた右手を九條が動かし、先程ねこの手でにんじんを押さえた手の前に持つてくる。

その直後、再び体を強張らせた星の耳元でそっと九條がささやく。

「——大丈夫。心配しなくていいわよ？ 私の手を動かすから星ちゃん力は抜いて包丁を握ってるだけでいいわ……」

星は無言のまま頷く。だが、まだ体の強張りは取れない。まあ、殆ど初めて包丁を手に行っているのだから仕方ないだろう。

九條は重ねていた星の手を動かしてにんじんを刻んでいく。

少しずつだが星も慣れてきたのか、九條が手を動かさなくても自ら

の意思で切れるようになってきた。

それを感じた九條は星の手に重ねていた自分の手を放した。すると、今まで軽快に切っていた星のその手がピタツと止まった。振り返った星は手を放した九條の顔を見上げた。

そんな星に向かって「今度はひとりやってごらん」と優しい声で九條が告げるが、さすがに九條のサポートなしで包丁を使うのは怖いのか、せっかく緊張が解けてきていた肩に再び力が入る。

包丁を強く握り締めた星は震えた手で必死に左手でまな板に押さえ付けているにんじんに狙いを定めるが、震えた手がなかなか治まらずにいつまでもにんじんに包丁の刃を入れることができない。

心臓が激しく鼓動するのを感じながら、星はなんとか落ち着かせようと細かく息を吸って吐いてを繰り返すがそれが余計に星の肩を震わせて包丁の狙いを定めさせてくれない。

そんな様子の星の耳元で優しい声音でささやくと、星の震える肩にそつと手を乗せた。

「——大丈夫。自信を持って、さっきまで普通にできたんだから……」
「……………はい」

自信なさげに答えた星だが、その表情は心なしか落ち着いているように見える。

母として3

九條の手が乗っている肩にほんのりと温もりを感じるのが、不思議と星の大きくなっていた心臓の鼓動を小さくしてくれた。

落ち着きを取り戻した星はまな板の上のにんじんを見つめながら大きく深呼吸をして握っていた包丁をストーンとにんじんに落とす。

思っていたよりも上手くスムーズに切れたことに驚いた様子の中に、九條が優しい微笑みを浮かべながら褒める。

それに少し照れた様子を見せた星だったが、一人で切った最初の一切りが上手くいったからか九條に褒められたからかもしかはその両方か。気を良くして次々と手際良くにんじんを刻んでいく。

にんじんをみじん切りにし終わると同じく玉ねぎとピーマンもみじん切りにしていく。ピーマンを切る時は少し気が進まないのか、眉をひそめながら苦い表情をしていたが、苦手な食べ物でも嫌だと拒否しないのが星らしいと言えばらしいのかもしれない。

次に鶏肉を切ろうとしたのだが、肉を切ることに抵抗があるのかこれだけは九條に全てやってもらった。

その後、九條は油を敷いたフライパンにご飯とトマトケチャップを加えて素早くかき混ぜて、頃合いを見て星が自分で刻んだ野菜と九條の切った鶏肉を加えた。

全ての食材をフライパンに入れて混ぜ合わせる中で、トマトケチャップや野菜、鶏肉の焼けるいい匂いがキッチンに漂ってきて星も楽しみなのか体が自然と動いている。

チキンライスが完成するとそれを皿に載せて使っていたフライパンを一度洗ってから、生卵を数個入れたボールの中でかき混ぜて油を引いたフライパンの上に垂らして丸く成形していく。

それを見た星はこれからどんな料理ができるのか分かったのか、星は我慢できないといった様子で瞳を輝かせながらそわそわしている。そんな星の様子を見て笑みを浮かべながら焼けた黄色い卵をまるで布団でも掛けるように優しく皿の上に盛られたチキンライスに被せた。

完成したのは子供が大好きな定番メニューであるオムライスだ。それは星も例外ではなく――。

「オムライスだ!」

珍しく声を上げた星に九條がくすつと笑う。だが、当の本人はそんなことに気が付く素振りもなく湯気が出ているのできたてオムライスに釘付けになっていた。

まあ無理もない。料理を禁止され外食に行く機会もない星にとって、オムライスを食べる機会なんてスーパのお惣菜コーナーに運良くあれば食べれるくらいのものだ。

オムライスをキラキラと輝く瞳で見つめている星の隣にいた九條がトマトケチャップを手に黄色い卵の上に何かを書き始め、星もそれを興味津々に見つめている。

「はい、描けたわ!」

「……これはネコですね!」

オムライスにはネコの顔が描かれていた。

それを見つめている星にオムライスをテーブルに持っていくように言うと、九條も自分の分にもネコの顔を描くと星が先にいったテーブルへと向かった。

テーブルでは星がいまかいまかと九條の到着を待っていた。そしてオムライスを持った九條が席に着くと、2人は手を合わせて「いただきます」と言ってオムライスを食べ始める。

持っていたスプーンでオムライスを割くと中から熱々のチキンライスが現れる。それを上に乗った黄色い薄焼き卵と合わせて口に運ぶ。

スプーンに乗ったオムライスを口に含むと、星は驚いた様子で目を見開くと次々とオムライスを食べ進めていく。

それを見た九條が「おいしい?」と聞くと星は「はい。とつても」と言葉を返した。

ゲーム世界で四天王と呼ばれるバロンの妹。フィリスとギルドホールのルームサービスで頼んだ時、そのオムライスの味もとても美味しかったが、自分で作ったオムライスはそれ以上に美味しく感じ

た。

嬉しそうにオムライスを食べ進めている星を満足そうに九條が見つめている。

すると、突然壁に掛けていたスーツのポケットから音楽が鳴り出す。それに驚いた星は思わず食べるのを忘れてスーツの方を見た。

九條は食べるのを止めて掛けてあったスーツのポケットから四角い鉄製の何かを取り出して廊下の方へと歩いていく。

廊下に出てきた九條は長方形の端末の中心にあるモニターに表示されている文字を確認した。

【要人の護衛任務中止。即座にアメリカに帰還せよ】

業務連絡のようなその短い文面を見た九條は眉をひそめながら端末の電源を切った。

九條が渡されていたその短い連絡を入れる為のもので、本来ならば緊急時の連絡用に渡されていたものだ。しかし、それは星の叔父の遠藤豊からの発信ではなく九條側からの連絡だけであったはず。

それが向こうから発信してきたということは、彼自身に何らかの不測の事態が発生しているということになる。九條はそれを察して端末の電源を落としたのだ――。

理由はGPSによる逆探知が可能な端末だからだ。星の護衛に関して九條に一任されている。こういう事態も想定に入れていない九條ではない。

本来は星を自宅に帰した後、何らかの問題が発生したらすぐにでも他の場所に彼女を連れていかなければならないのだが、今の九條はそれを躊躇してしまっているのが事実だ。

その理由は星の中にまだ亡くなった母親がいるからだ。今までの生活で星の母親のふりをしていたが、それはその通りの意味で星が一度だって九條のことを本気でお母さんと呼んだことはなく、ただの家族ごっこでしかない。

無理やりこの家から連れ出すこともできるが、そんなことをしても星は必ずこの場所に戻ってきてしまうだろう……。

それだけ星の中では母親の存在が強いということなのだろうが、そ

れが九條にとっての障害になっているのだ。だが、星の叔父である遠藤豊になんらかの異常事態が発生した今。九條は少しでも星との信頼関係の構築を急がなくてはならない。

深刻そうな顔をしたまま星の待っリビングの方を向くと、ゆっくりとリビングへと歩き出した。

* * *

母として4

* * *

九條へのメールが送られる半日前のことだ――。

星の叔父である遠藤豊は星を日本に返した後、通常通りの業務をしていた。彼が安心して普段通りの生活ができるのも、星のボディガードに付けた九條という人物がそれだけ信頼できる人間だからだ。

遠藤豊がいつものように忙しくなくキーボードを叩いていた彼の部屋の扉が開いて武装した特殊部隊が突入してきた。

騒々しい突然の来訪者がモニターの前でキーボードを叩いている彼を取り囲む様に素早く展開して銃を構えた。だが、それに動じることなく視線だけ向けた遠藤豊は冷静な声で言った。

「なんだい？ 僕は忙しいんだ。君達の冗談に付き合っていないらるほど暇じゃない」

彼は再びモニターを見てキーボードを打ち始めると、一人の男が遅れて部屋の中に入ってくる。

「抵抗しても無駄ですよ先輩」

その声に驚き目を見開いた彼はその声の主の方を素早く振り向く。彼の視線の先に立っていたのは金髪に金色の瞳の若い男はサングラスを掛けてだるんだるんの短パンにアロハシャツを着ている。

「お久しぶりです先輩。あん時はどーも」

「……神崎。どうしてお前がここにッ!？」

突然のアロハシャツの男の名は神崎幸人。その登場に彼が驚きを隠せないのは無理もない。神崎幸人とは遠藤豊と同じ研究室の出身で、長い間鳴かず飛ばずだった神崎に遠藤豊が研究を譲って、その研究が学会で評価された神崎は学者の中で高い地位を手に入れた。

時折交流を持っていた彼がこの場に現れたことに、遠藤豊は驚きを隠せなかったのだ――。

驚く彼に向かって神崎が口元にニタリと笑みを浮かべると。

「――豊先輩。いや、夜空豊。今日限りで貴方にはこの研究所の所長

の座を譲ってもらいます。そして貴方には、ここではない別の場所への移動を命令されている」

「……別の場所だと?」

訝しげに眉をひそめた彼に神崎が人差し指を上げて指先をクイクイッと動かした。

その直後、遠藤豊の周りを取り囲んでいた隊員達がモニターの前に座っていた彼の両腕を左右から挟んだ2人が掴んで無理やり立たせると、強引に神崎の前に連れてくる。

強引に連れて来られた遠藤豊が地面に組み伏せられ両膝を突くと、自分を見下ろすようにほくそ笑む神崎が勝ち誇った様子で言い放つ。

「強者を自分の前に屈服させるのは何度経験しても飽きない。そう思いませんか? 先輩」

「——くッ!! 神崎……」

見下ろす神崎を見上げ唇を噛み締めると、勝ち誇った笑みを浮かべた神崎がわざと左右から体を押さえ込まれている遠藤豊と視線を合わせて言い放つ。

「俺はですね。人の物が欲しくなるんですよ……物も才能も全部を奪ってやりたくなくなるんです。動物で例えるなら、俺はライオンから獲物を奪うハイエナですよ。機を見て強者から獲物を奪う。それが俺のやり方なんですよねー」

そう言っただけでニヤリと不気味に笑うと、神崎はゆっくりと体を起こして部屋の中を歩く。

「今回の事件で世界の世論が我々を敵視してましたね。こちらにも責任の所在を明らかにしないといけないんですよ。だから、開発者の貴方が責任を取って職を辞するという判断を私は決断したわけです……ああ、貴方のお姉さんの娘さん。夜空星ちゃんでしたっけ? 彼女もお気の毒に……」

「——なんだと?! 神崎! あの子になにかしたら許さないぞ!!」

星の名前を出されて声を荒らげ鋭い視線を神崎に向けた遠藤豊。

それを聞いた神崎は急に高笑いをして再び彼の顔を覗き込む。

「……俺は何もしないですよ先輩。ただ、世論があの子を被害者と見

るか加害者と見るかは分からないけど？ まあ、今は情勢が情勢ですからね。あの子への風当たりは強いでしょうねー。結局は犯人探しをしたいんですよ民衆は……悪を断罪するのは世の常です。自分達は無関係の傍観者であるからこそ全力で悪を叩けるわけで、中世の時代から断罪は娯楽だった。言うでしょう？ 『人の不幸は蜜の味』つて——民衆は皆、暇を持て余してるからこそ娯楽が必要なんですよ。そう、魔女狩りという娯楽がね……」

そう言った直後に神崎は「連れて行け」と彼を両側から押さえ付けている隊員に告げると、命令に従った彼等は遠藤豊を無理矢理立たせて連れて行く。

遠藤豊は高笑いをする神崎に彼の名前を何度も叫んで「許さないぞ！」と喚きながら連行されて行った。

* * *

リビングに戻ると九條は笑顔を浮かべながら星の顔を見て言った。

「ごめんなさいね。お仕事の連絡が入っちゃって」

「お仕事ですか。なら、仕方ないですね」

表情を曇らせてそう言った星に九條は笑顔を作って俯き加減になつている彼女に向かって言った。

「一緒にお風呂に入りましょうか！」

「……え？」

突然の九條の言葉に星はただぽかんと口を開けている。

全く状況が読み込めない星を他所に、九條が星の長い黒髪を撫でると九條は眉をひそめながら言った。

「——髪は洗っている？」

「……いえ、洗ってませんけど」

目を伏せてそう言った星の手を取ると九條は廊下へと向かって歩き出した。

「まだ一緒に入るなんて言ってないです」

「まあまあ、それに一人で入ったらまた髪を洗わないかもしれないで

しよ?」

「……………」

九條のその質問に対して、星は無言で返すしかなかった。それは星が水を頭から被ることに抵抗があるからだ。ゲーム世界では慣れたが、それはゲーム世界での水は現実世界での水とは異なる。

星はまだ現実世界での水を克服できてはない。以前は母親から嫌われるのが嫌で、3日に一度は髪を洗うようにしていた。だが、今はその母親もいない。それが星に髪を洗うかどうかを躊躇させている原因であり、星が九條の言葉に無言で返す理由でもあった。

お風呂に着くと、未だに納得いかないといった様子で不機嫌そうな顔をしている。九條はそれを他所に服を脱ぎだしていた。不機嫌そうにその様子を見ていた星は九條が下着を外した胸にある古傷を目にして眉をひそめながら自分も洩々服を脱ぎ始めた。

服を脱ぎ終えた2人が浴室に入ると、九條はタオルに石鹸を付けて星のことを呼んだ。こんなことが以前どこかであったとデジヤヴを感じながら、呼んでいる九條の方へと乗り気ではない様子で歩いていく。

恥ずかしそうに俯く星の体を、石鹸を染み込ませたタオルで隅々まで洗っていく。そんな星に向かって九條がそつとささやくように言った。

「女の子なんだから体はいつも綺麗にしていなくちやだめよ?」

「……………あの」

背中を洗っていた九條の方を突然振り返った星に九條は驚いたように、一瞬目を丸くさせたがすぐに平静を取り戻してにつこりと微笑んだ。

「どうしたの?」

「あの……………九條さんのその胸の傷……………」

すつと指差した指の先が九條の胸の下にある古傷へと向いた。

九條がその傷跡を撫でると、物思いに耽るように考え込んでゆつくり星に告げた。

「——実はね。私には子供がいたの……………女の子だったわ……………」

「……………いた？」

星は九條の過去形の答えに首を傾げる。

不思議そうに首を傾げる星を少し悲しそうな瞳で見た九條が、少し溜めて息を吸い込むとゆつくりと話し始めた。

「……………私の娘はもう相当前に亡くなったの、交通事故でね。元々母子家庭だったわ……………そこは貴女と同じかしら。おそらく、私がこの護衛任務を受けたのもそれがあっての事でしょうね……………本当に人が悪いわ。ミスター遠藤は……………でも、今は感謝してる。そうじゃなかったら私の娘を守れなかった無念を晴らす機会はなかったんだから……………」

「……………ッ!？」

そう言った九條は大きく広げた腕で星の体をしっかりと抱きしめた。驚いたように目を見開いた星は、咄嗟のことでどう反応すればいいのか分からない。

自分を抱きしめているこの腕を振り解けばいいのか、それとも声を上げるか——だが、一つ確かなのが肌と肌を寄せ合った時にのみ得られる熱いほどの体温と心臓の鼓動に、心が満たされていく安心感。

それは星には初めての気持ちでとても懐かしいような感覚。エミルと抱き合った時とも違う感じで、それ以上に星が求めていた感覚……………。

「……………お母さん」

「——私が必ず貴女を守る。だから、私を信じてくれる？」

優しい声音で問い掛けた九條に星は静かに頷いた。

母として5

抱きしめていた星をゆつくりと離すと、自分の顔を見上げる星に向かって九條が笑顔で言った。

「でも、まずは髪を洗わないとね」

「……あ、はい」

今まで忘れていた髪を洗うということを思い出し、星は絶望したような表情で小さく頷いた。

途中だった体を洗い終わると、プラスチック製の椅子に座った星は、緊張した様子で肩を強張らせている。そんな星の背中にシャワーから出たお湯が当たり星の体がビクツと跳ねる。まあ、前にもこんなことがあつた気がするが……。

星は頭から掛けられたお湯を臉をしつかりと瞑って耐えると、九條の手に出されたシャンプーを付けて頭皮を優しく洗っていく。

髪をわしやわしやと洗いながら九條が呆れたように呟く。

「やっぱり。相当汚れてるわね……髪がベタベタよ？ これじゃブラシも通らないわよ。二回は洗わないと完全にベタつきは取れないわね」

「そんな——」

「——はい、喋らないの！ 洗い流すわよ！」

不満を口にする星の言葉を遮るようにシャワーのお湯で髪の毛に付いた泡を落とすと、再び手の平で拡げるようにしたシャンプーを星の長くて黒い髪に絡ませていった。

「女の子は髪を大事にしないとダメよ？」

再び指の腹で頭皮をマッサージするように髪を洗う九條。

そんな彼女に星が疑問をぶつけた。

「んっ……なんですか？」

「なんでって……大きくなっていっぱいおしやれして、素敵なお男性と恋に落ちて、付き合っただけで結婚する為——ひとりぼっちは寂しいからね……」

「まだおしやれとかは分かりませんが……最後のひとりぼっちは

寂しいのは分かります……」

「それだけ分かれば大丈夫……それじゃ、流すわよー」

星の返事を待つことなく九條は再び髪に付いたシャンプーの泡を洗い流した。そしてリンスを手に取りシャンプーの時よりも丁寧に髪に馴染ませる様に塗り込んでいく。

「リンスが髪に馴染むまで少し私の昔の話をしようかな……」

九條は星の黒い髪から手を放すと、ゆっくりとした口調で話し始めた。

「さつき、私にも娘が居たって話をしたわね……私の旦那は科学者だったわ。その旦那は娘が生まれてすぐに死んだ。そして、事件が起きたのが娘が3歳の時だったわ……旦那の死後。カリフォルニアに家を買ってそこに住んでいた私達親子は、ある日普通にスーパーの帰りに運転していたら煽ってきた大型のトラックに接触されて、そのまま道路脇に生えた木に衝突した時に私はこの場所に枝が刺さって動けなかった……頭から血を流していた娘は私の目の前で息を引き取ったわ……」

「………九條さん」

九條が話し終わるとしばらくの間、浴室内に沈黙が流れた。

星はなんて声を掛けたらいいのか分からずにただただ俯くばかりだった。もしも自分が同じ思いをしたら……そう思うと言葉が喉から出てこない。

沈黙の中で九條はシャワーのノズルを手にとって星の髪に馴染ませたリンスを洗い流す。そしてそれが終わった直後、星は徐に立ち上がるその後ろを振り返ってつま先立ちになり九條の頭を包み込むように抱き寄せた。

「ちよ……星ちゃん!？」

驚く九條の頭を優しく撫でると、優しく語りかける様に言った。

「大丈夫——大丈夫です……こんなに優しい人がお母さんだったんだから……きつと娘さんも幸せだったと思います。だから、大丈夫ですよ……」

「——ええ、ありがとう……ありがとうね……」

抱きしめてそう言った星に、九條は涙を流しながらお礼を言う。

抱き合う2人だけのいる浴室内には淡々と流れ続けるシャワーの音と、微かにすすり泣く九條の声だけが響いていた……。

向かい合って湯船に浸かった2人は互いに笑顔を見せる。その様子から以前よりも星と九條の絆は強くなったのは間違いないだろう。それは浴槽内の星と九條の会話からも分かった……。

「九條さん。胸の傷は痛くないんですか？」

星は指の先でゆつくりと胸の下にある古傷を撫でた。

心配そうな星の視線を受ける九條はにっこりと微笑みながら、そんな星の頭を優しく撫でながら言った。

「大丈夫よ。傷跡は残っているけど、痛みなんかはないわ」

「そうですか……良かった」

それを聞いた星は微笑み返してほっとしたような表情になる。

ほっとした様子の星を見て九條は笑みを浮かべながら言った。

「貴女はいつも誰かの心配をしているのね。今朝も私の為に寝床を作ろうとしてくれたんでしょ？」

「えっ？ は、はい。6月でもまだ冷えますから、それで……」

頬を微かに赤らめた星がそういうと、九條の手の平がそっと星の額に触れた。

「ふふっ、優しいのね星ちゃんは……でも、人の心配をするのもいいけど自分を蔑ろにしたらダメよ？ ぶつけたおでこはもう大丈夫？」

「はい！ もう痛くもないですし、大丈夫です！」

「そう。良かったわ」

力強くそう言った星に九條は微笑んで頷いた。

お風呂から上がると、九條は椅子に座る星の髪をドライヤーで乾かしながら九條が星に言った。

「星ちゃんが良ければ、ゲーム内での出来事を教えてくれると嬉しいわ……」

そう尋ねた九條だったが、その声はどことなく弱く震えている感じに思えた。しかし、それも無理はない。

世紀の重大事件であり、その被害者である星にゲーム内の状態を聞

くのは、事件の被害者に事件当時の状況を尋ねているようなものである。同じ当事者同士ならばまだいいが、九條は完全なる部外者であり。しかも、その未曾有の被害者を出した開発者の星の叔父でもある人物の関係者だ。

そんな彼女に被害者である星が事件の内容を教えてくれることはありえない。しかし、あえて九條がそれを星に尋ねたのは今の自分と彼女との信頼関係を確認する為である。

もしも、これを尋ねたのが九條ではなく星の母親だったら、星は何の迷いもなくゲーム内で起きていたことを話してくれるだろう。逆を言えば、星からその当時の状況を聞けるということは、星の母親までとは言わなくてもトラウマであろうことを打ち明けてくれるまでには信頼関係を構築できているというなによりの証しである。

だからこそ、九條はこんな踏み込んだ質問を星に投げ掛けたのだ――

九條のその問いに星は笑顔で言葉を返した。

「いいですよ?」

「……えっ? いいの?」

「はい!」

意外にもあっさりと教えてくれた星に少し驚いた様子の九條を見せた。そんな彼女に星も少し不安になったのか、不思議そうに首を傾げている。

それに気が付いた九條が慌てて笑顔を作ると、首を横に振った。

「違うのよ。ただ、本当にいいの?」

「はい。でも、長くなりますよ?」

「ええ、それは大丈夫! でもまずは髪を乾かしてしまわないとね」

そう言って笑う九條に星も微笑みながら「良かった」とほっとした様子で胸を撫で下ろした。

乾かし終わると、星の長い黒髪は本来の艶を取り戻して光を反射してキラキラと輝いていた。動くときふわっと柔らかく揺れる髪を見て、九條は「よし!」と星の頭をポンポンと軽く叩いた。

寝ていた期間が長かったせいとか、ベタついた髪がサラサラに戻って

少し上機嫌になっているのか嬉しそうにソファの方へと駆けていく。

ソファに座った星が隣をポンポンと叩いて九條を呼ぶと、九條も星の横に腰を下ろして星の方を向いて笑った。

そんな九條に星も微笑むと、ゆつくりとゲーム内での出来事を話し始めた。ゲームを開始した時に始まりの街のマイハウスやエミルとの出会いやゲーム内で始めての戦闘。

狼の覆面を付けた男にゲーム内に閉じ込められたこと。

エリエとデビッドとの出会い。オカマイスターのサラザと富士のダンジョンでマスターとカレンを加えてがしやどくろと戦ったこと。

犯罪まがいなことを行うブラックギルドのダークブレットに捕まった時のこと。

エクスカリバーを使って星が狼の覆面の男が操るルシファアと戦って始まりの街を守り切れずに千代の街に移動したこと。

そこで深く知ることになった千代のトップギルドのギルドマスターとサブギルドマスターのメルディウスと紅蓮。そしてそのギルドのメンバー達とメルディウスと紅蓮と同じ四天王と呼ばれるデュランとバロン。そしてその妹のフィリスと仲良くなったこと。

街を防衛するためにルシファアや様々なモンスターと戦ったこと。星の実の姉との出来事とそして太陽の様に巨大な赤い鱗のドラゴンとの最終決戦のこと。

それを話し終わった頃には窓の外が微かに明るくなってしまっていた。

九條が時計を確認すると、時計の針は4時を越えている。大量の情報を出し切った星は、集中の糸が解けて疲労が一気にきたのか九條に凭れ掛かったまますやすやと寝息を立てている。

「全く。だから今日一日で全て話す必要ないって言ったのに……」

そう言って微笑みを浮かべた九條が眠っている星を起こさないように、ゆつくりと彼女の体を持ち上げると部屋のベッドへと星を運んだ。ベッドの上に星を下ろすと、すやすやと眠っている彼女の体に布

団をかけた。

眠っている星の顔を見下ろしながら微笑みを浮かべて優しい表情を向けている。そしてしばらく星の寝顔を見ていた九條はゆつくりと歩き、ドアノブに手を掛けると徐に星の方を見返して微笑みを浮かべたがすぐに表情を曇らせた。

部屋を出た九條は昨日片付けた部屋に入り、掃除して使えるようになったベッドに横たわった。

「まさかこんな早くベッドで眠れるとは思わなかったわね。星ちゃんには感謝しないと……でも困ったわね。ミスターに何か起きたのは事実だけど、このマンションの住人の殆どはミスターと深くから付き合いのある上に戦闘においても手練れ揃い。もうしばらくはここでも大丈夫だとしても、このままじゃいけないわ。数で押し切られたらあの子を守りきれない……」

ベッドに仰向けに横たわったまま表情を曇らせ天井を見上げている九條が息を大きく吐き出して呟く。

「考えても仕方ない。今はまだ相手も行動を起こしていないし、私はあの子との信頼関係を構築するのが最大の準備。敵には随時、臨機応変に対応していくしかないわね」

覚悟を決めたような表情に変わった九條はそのまま瞼を閉じて眠りに就いた。

テディベア

九條が目を覚ましたのは11時になってからだった。リビングにいった九條はその場に星がないことを確認して、今度は星の部屋へと向かった。彼女の部屋のドアをゆつくりと開けて中を覗くと、星はまだ眠っていてまだ当分は起きる様子がない。

微笑みを浮かべた九條はそのままゆつくりとドアを閉めて、自分の部屋に戻ると急いで服を着替え始める。白のティーシャツに薄い茶色のトレンチコート、下は黒のパンツ姿で紺色の皮のバッグを手に持ってリビングに戻り。そこに星への置き手紙を書いてテーブルに菓子パンを置くと玄関を出た。

外に出た九條はサングラスを掛けると、電車に乗って離れた街へと向かう。わざわざ星を家に残して電車で離れた街まで来たのには理由があった。それは彼女が今から向かう場所にヒントがある。

電車に乗って九條がわざわざきたのは多くのテナントが入っているビルだった。その中に入っていた九條が向かったのは服や宝石、バッグなどのテナントではなく、ぬいぐるみを専門に扱う専門店だった。

店に入ると棚を埋め尽くすほどの様々なぬいぐるみで広い店内に所狭しと並べられている。

そう。九條は星の部屋が年頃の女の子とは思えないほどに質素だったのを気にしていたからこそ、今日は星にぬいぐるみをプレゼントしようとして電車に乗って離れた街まできたのだ――。

棚に並べられている大きさ種類様々な動物やキャラクターのぬいぐるみを時折手に取っては棚に戻すを繰り返していると、そこに店員がやってきた。

「なにかお探しですか?」

笑顔で近付いてきた女性の店員に九條は笑顔で返して告げる。

「ええ、娘にぬいぐるみをプレゼントしようと思ったんだけど、種類が多くてなかなか決められなくてね……」

「娘さんの年齢はおいくつですか?」

「――9歳なんだけど、どんなのがいいかしら」

店員は「9歳ですか……」と難しい顔をすると店内を忙しく歩き回り、一頻り動き回ったところで九條の元に戻ってくる。

「娘さんのお誕生日のプレゼントですか？」

「い、いえ。そんな事もないんだけど……」

それを聞いた店員は困った様子で頭を捻って独り言の様にボソツと呟く。

「……お誕生日に合わせたテディベアがあるんだけど」

なにげない店員の言葉に九條が反応して言葉を返す。

「そのテディベアを見せてもらえる？」

「はい？ ああ、誕生日のですか。こちらに置いてあります」

歩いていく女性の店員の後ろを付いていくと、店の奥にある少し開けたスペースにテディベアがずらりと並んでいた。

ちゃんと誕生日に並んでいて日にちごとに順番に陳列されていて、テディベアの首には誕生日の日付を象ったネックレスが付けられている。

九條はそれを見て一目で気に入り、星の誕生日である8月28日のテディベアを手にとって店員に渡した。

「気に入った。これを頂くわ、プレゼント用にラッピングしてもらえますか？」

「はい。ありがとうございます！」

店員はテディベアを九條から受け取るとラッピングする為に足早にカウンターの方へと歩いていった。

ラッピングが終わり商品の会計を済ませた九條は綺麗な中央にテディベアの小さなワンポイントの付いた白い袋にピンク色のリボンでくくられている。

買ったプレゼントを抱えながら歩いて駅までいった九條は、何故か星の待つマンションとは真逆の方向へ向かう電車に乗った。

本来ならプレゼントも買ったのだから早く家に帰りたいはずなのだが、九條が帰れない理由は店を出た直後から数人の男性がそれぞれ一定の距離を保ったまま付いてきていたのだ。

その者達を全員引き剥がすまでは、絶対に星の所に帰るわけにはいかない。九條はなるべく人の出入りの多い駅で降りると、急いで止まっていたタクシーへと乗り込んで発車させる。

向かったのは今よりも人通りの多い都心。木を隠すなら森の中……人を隠すなら雑踏の中、だ――。

繁華街にきた九條は様々なビルに入っては出てを繰り返す。しかし、その全ての場所にすでに敵の刺客が入り込んでいた。もはやどこにも逃げ場がないことは九條にも分かっていたが、星の居場所だけは知らせるわけにはいかない。それは星の亡くなった母親が彼女との関係を絶つて守ってきた唯一のものだから……。

母親として我が子を守る為に最善を尽くすのは当然であり、九條がそれを無にすることは同じ母親である彼女が死んでもやってはいけないことである。

昼まえには出てきたはずなのだが、もうすでに辺りは暗くなってしまっていた。人影のないビルとビルの上に潜み背中を壁に凭れて荒く息を繰り返す九條。

無理もない。この隙間に逃げ込むのでさえ、全速力で走ってやっとなのだ。それすら長くは続かないだろう、残された手段は、刺客をやり過ぎすのではなく戦って数を減らし騒ぎに乗じて逃げ切る以外にはない。

「……不本意だけど。もう、やるしかないわね……」

九條はバッグの中に入っている鍵付きのプラスチックケースを開ける。

中には拳銃が入っていた。それを入れていたプラスチックケースも、金属探知機を阻害するもので、星を守る為に入国した時から肌身離さず持っていた。しかし、日本はアメリカと違って銃社会ではない為、市街地戦はとてつもなくリスクだ。だが、星の待つ家に帰りたいという気持ちの方が今の九條には強い。

「――必ず帰るからもう少しだけ待っててね」

一瞬、テイベアの入っている袋に目を落とし、銃のセーフティロックを解除すると、着ていたトレンチコートの中にガンホルダーを

装着して、そこに銃を収め持っていたバッグを放り投げてテディベアの入っている袋を脇に抱えながら走り出す。

狭いビルとビルの間を走り抜けると曲がり角から男が飛び出してきた。突然飛び出してきた男に反応して、九條が大きく飛び上がると的確にみぞおちに膝蹴りを直撃させると男が後ろに向かって倒れた。

その直後、周囲に二度の銃声が響き。男の背後からきたスーツの男が倒れ、彼の持っていた銃が地面に落ちて銃を撃って倒れた男の左胸には銃弾でできた穴が開いている。

膝を地面に突いて低い姿勢で銃を構えている九條は大きく息を吐き出して、銃口から微かに上がる煙りを切るように構えていた銃を降ろした。

徐に立ち上がった九條は最初に膝蹴りをして倒した男が銃を構えたのを見て、透かさず持っていた銃で彼を撃った。

その銃弾も男の左胸を撃ち抜き、心臓に確実にヒットさせていた。九條は倒れている2人の男を冷たい瞳で見下ろしながらボソツと呟く。

「……女一人相手するのに銃まで使うなんてね」

九條は銃をホルダーに戻してその場を足早に去る。

しかし、さすがに3回も銃声が鳴れば誰にも気が付かれないというのは不可能であり、鳴り響くパトカーのサイレンの音が路地裏にいる九條にも届いていた。

なるべく建物の陰を利用して移動していた九條だったが、徐々に増えるサイレンの音に軽く舌打ちをして渋い顔を見せる。

だが、彼女がそんな表情をするのも無理はない。確かに銃声が鳴ればこうなるのは予想していた。しかし、問題はそこではなくそれに対応するまでの時間なのだ――。

テディベア2

「いくらなんでも対応が早すぎる……くツ、はめられたか……」

苦虫を噛み潰したような表情を見せた九條がビルを背に微かに外の様子を窺うと、数多くの警察官が困惑する民衆を誘導しカラーコーンを置いているのが見えた。

そして後から到着した黒いバンから迷彩柄の軍服を身に纏った者達がアサルトライフルを手に続々と降りてきている。

その光景を見ていた九條は敵が自分の組織の刺客ではなかったことに初めて気が付く。

「いくらなんでも対応が早いとは思っていたけれど、なるほどね……まんまと誘い込まれてたつて事ね。どうやら、敵の指揮官は相当に頭の回る人物のようね……」

ホルダーに入っている代えのマガジンを確認してため息を漏らす。体に巻いたガンホルダーに付いている予備のマガジンの数は二つ。ハンドガン相手ならこれで足りるが、アサルトライフル相手だとこれでは少し頼りない。ハンドガンのマガジン一本に入る弾数は15発。対してアサルトライフルの一本のマガジンに入る弾数は30発。

一人だけなら戦闘技術の高い九條なら負けることはない。しかし、たとえ烏合の衆であっても数の有利はちよつとやさつとじゃ覆せない。それが訓練を受けた人間であり、なおかつアサルトライフルという一回のマガジン装填で30発もの弾丸を打ち出せる武器であればもう彼女に勝ち目はない。

残る手立ては逃げるしかないが、発砲音を聞きつけ周囲を警官隊が取り囲んでいるこの状況ではそれも難しいだろう。もしも、上手く一般人に紛れられたとしても取り調べを受けることは避けられない。偽装した免許証はアメリカ力が出る前に星の叔父の男から受け取ってはいるが、取り調べを受けるといことは家に帰れないということであり、その間に一人きりで家で待っている星を放置しておくことになる。

料理もできない星は外出して食料を調達するしかなく、その最中に

何者かに拉致される可能性も高い。いや、武装した兵士に囲まれている今の自分の状況を考えれば、最悪は星の命を奪われてもおかしくはないだろう。

「——やっぱり、この状況をなんとか打開するしかないわね。応援も呼べないし、残る弾数は予備のマガジン二つで30発と銃に残っている14発だけ……厳しいわね」

壁越しに兵士達が数人の部隊に分かれて散るのを確認してから九條は彼等から距離を取るようによく走り出す。

彼女が走り出すと意外に早く死んでいる2人の男性が発見され、騒々しく闇に紛れる九條を探す兵士達の足音が大きく辺りに響く。

九條は十字路になっている場所に陣取って息を殺して向かってくる兵士達を待つ。

「……さあ、来なさい」

壁に背中を付けて銃を構え、鋭い視線を建物の隙間から微かに見える暗闇を見据えている。

すると、そこに兵士の一人が現れ素早くライフルを構える。だが、それよりも早く九條の銃弾が彼の肩を撃ち抜いて兵士が苦痛な叫び声を上げて地面に伏せた。

ほっとするのも束の間、その後ろからきた2人が持っていたライフルを同時には発泡する。

すぐに九條は別の通路に移動して激しい銃弾の嵐をやり過ごすとしばらくして銃撃音が収まった。

そつと壁から覗き込むと、彼等は何もせず銃を構えたまま立っているのが見えた。九條は素早く自分の後ろの通路の方に銃口を構えて待ち伏せる。すると、その狙い通り今度はその通路の方に回り込んで来ようと兵士達が銃を構えたと同時に彼等の銃を持つ方の肩だけを的確に撃ち抜いて、今度はただ銃を構えて九條を待ち伏せている方の兵士達の方に無差別に二発だけ発泡した。

直後。一人のうめき声が九條の耳に届いたと思うと、再び激しい銃撃音が辺りに響く。そして弾切れになった瞬間を突いて九條が飛び出してその場を素早く離れる。

常に建物の裏を通り移動する九條は、少しずつ駅の方へと向かっている。

相手の方が圧倒的に数で劣る九條は狭い路地から出ることがリスクになる。路地の外に出て戦えば相手は人数を生かして横に展開するだろう、そうなれば連射された銃弾が一斉に彼女を襲うことになる。

だが、九條が狭い路地を陣取っている以上。相手は数の利を活かすことができない上に、九條の方は攻撃してくる位置を正確に予測することができる。しかも、相手は路地に入ってくることを嫌うのは軽量で比較的扱いやすいハンドガンと違い相手が使うアサルトライフルではそこそこの重量があり、銃全体が長い上に連射する分しっかりと固定して撃つ必要がある。

またそれだけではなく。路地に入れば女性で軽装備で身軽な九條と違い大部分が男性であり、しかも重装備の兵士達では身動きが取りにくい。そして、狭い上に連射による銃弾の反射によって負傷のリスクが大幅に上がる。

本来ならば反動が大きいハンドガンの精度はそれほど高くはないにも関わらず、一撃的確に狙った箇所を撃ち抜けるほどの腕を持つ九條に、扱い難いアサルトライフルの単発で挑むのは死に行くことに等しい。

走り抜けていた九條が追っ手が来ないのを不審がつて後ろを振り返ったその時、突然曲がり角からサバイバルナイフを持った兵士の男が飛び出してきた。

「——なッ!?!」

驚いた九條が透かさず振り向くが狭い路地な上に対応が遅れ、彼女が銃を構えた時にはもう男が懐に飛び込んでいる状態だった。

銃を持つ九條の右手を兵士の男の左手が押し上げ、その右手に持っていたサバイバルナイフが九條の右脇腹に深々と突き刺さる。

「……ふふっ、いくら銃の腕が良くとも。近距離戦なら女に俺が負けるわけないぜ!」

兵士の男は口元に微かな笑みを浮かべ、得意げにそう呟くと九條の

脇腹に刺さったサバイバルナイフの柄を持って左右に捻って傷口を
抉る。

苦痛に顔を歪めた九條だったが、素早く密着していたその体を勢い
良く蹴り飛ばして強引に距離を取って持っていた銃を再び構え。

「くッ……よくも!!」

そう叫んだ直後、鋭く睨む彼女の構えた銃の銃口から弾丸が飛び出
し男の右肩を貫きその後、銃の中に残っている数発の弾丸を惜しげも
なく彼の体に打ち込み兵士の男は絶命した。

体に風穴を開けられた見るも無残な姿になった兵士の男が地面に
倒れ、九條は持っていた銃を投げ捨てて刺された箇所を右手で押さえ
て壁に凭れ掛かると、彼女の体が徐々に下がり力無く地面に座り込ん
だ。

地面に座り込みながら、右手で強く押さえても泉の様に漏れ出して
くる血液に九條は諦めたように微笑を浮かべた。

「……まったく。こんな結末なんて……神様も酷いわよね……私から
二度も娘を奪うなんて……」

九條は自分の左腕に抱えられた星にプレゼントするはずのティ
ベアの入った真つ白な袋を見下ろした。

本当なら今頃、星にこのプレゼントを渡して喜ぶ彼女の姿を見て微
笑んでいたはずなのだ。それがまさかこんなことになるなんて夢に
も思わなかった……いや、本当はどこかでこうなると分かっていたか
らこそ、今日という日に出掛けたのかもしれない。

不意に空を見上げた九條は夜空に輝く星々を見つめてため息混じ
りに呟いた。

「……あの子と星を見に行く約束も守れそうにないわね……ごめん
ね」

そう口にした九條の瞳からは涙が溢れ出し頬を伝って血に染まる
地面に溶けていく。

するとその時、目の前に突如として黒いマントを頭から被った人物
が現れた。

「——いつの間にツ!?!」

驚く九條の前に現れたのは、背丈が低く小学生の子供くらいの大きさしかない。

「……安心しろ。私は少なくともあなたの敵じゃない」

黒いマントを着た人物が頭まで覆い隠していたマントをめくって九條に顔を見せた。

その顔を見た九條は目を見開いてその顔を食い入るように見つめていた。だが、それも無理はない。その顔はもう見る事ができないうちと思っていた星にそっくりだったからだ――。

「……星ちゃん？ ど、どうして……」

「――良く見ろ。私はあの子じゃない」

「……えっ？」

九條はもうろうとする意識の中、しつかりとその顔を見直す。

すると、長い黒髪と幼い顔つきは同じだが瞳の色が星は紫だが、目の前にいる彼女は青かった。しかし、その顔には微かに星の面影もある。そして、九條は彼女のことを知っていた。

「貴女確かは星ちゃんの……でも死んだはずじゃ――」

「――その通り。だから、今の私は亡霊だ……」

そう言った彼女の表情はどこか悲しそうに見えた。

そんな彼女に向かって九條が告げた。

「早くここから離れなさい……すぐに私を探して兵士達が来る」

「……それはない。邪魔な奴等は私が片付けておいた」

「………そう。それはありがたいわ……」

不思議と目の前にいる彼女の言葉が嘘だとは感じなかった……それどころか今までの出来事に合点がいった。

つと急に咳き込んだ九條の口から血が流れ、それと同時に呼吸が荒くなった九條が震える手で持ったピンク色のリボンの付いている白い袋を目の前の彼女に差し出す。

「………これを、家で待ってる星ちゃんに……」

「………コクッ」

無言で小さく頷く彼女を見て九條はほっとした表情で頷いて「お願いね……」と呟くとにつこりと微笑んだ。

「——リサ……今、ママもそつちに行くから……ね」

そう告げた直後、九條はゆつくりと瞼を閉じた……。

そんな彼女を見下ろしながら眉をひそめて少し悲しそうな目をしたマントの少女は「お疲れ様……」と短く告げ、九條から渡されたラツピングされている白い袋をマントの頭の帽子の部分にしまうと、壁に凭れ掛かったまま安らかな顔をしている九條の体を軽々と持ち上げてスツとその場から姿を消した。

テディベア3

* * *

書き置きだけ残していつまでも帰って来ない九條を部屋の中で待っている星の瞳は不安に満ちていた。

部屋のソファアーの上で膝を抱えながらただ一点を見つめている星の瞳は今にも泣き出しそうな綺麗な紫色の瞳がキラキラと輝いている。

「九條さん遅いなあ……」

静かな部屋の中で真っ直ぐ前を見ながら昔のことを思い出していたのかもしれない。そんな時、突如として部屋の中に玄関のチャイムの音が響く。

その音を聞いた星はハッと飛び起きて慌てて玄関まで駆けていくと、表情を明るくさせてドアを開いた。

「九條さん。おかえりなさい!」

だが、ドアを開けた場所には誰も居なかった。

ただただ不思議に思った星は玄関から出て左右を確認する。するとそこに、壁に立て掛けて置くような形でピンク色のリボンでラッピングされた白い袋が置いてあるのを見つける。

「……なんだろうこれ」

星が立て掛けてあるその袋を手にとると、地面にぽとつと星がプリントされた綺麗な封筒が落ちる。

地面に落ちた封筒を拾ってそれを開いた星は悲しそうな顔をして持っていた白い袋をギュッと握り締めた。

その手紙の内容はこうだ――。

【突然の事で驚くかもしれないけど、急ぎの仕事が急遽入ってしまい星ちゃんの側にいることができなくなっていました。】

私も星ちゃんの側に居られなくて残念でなりません。でも、どんなに離れていても私は星ちゃんの事を思っています。短い間だったけ

ど、貴女の事は本当の娘のように感じてました。

少し早いけど私からの誕生日プレゼントを受け取って下さい。もうひとりの私だと思って可愛がってあげてね。辛い時や悲しい時もずっと側でこの子で見守っていてくれるから頑張って。」

手紙を読み終わると、星は瞳に涙を浮かべ悲しそうな表情をしながら家の中に入っていった。

リビングのテーブルに九條からもらったプレゼントを置くと、ゆつくりと椅子に腰を下ろしてテーブルの上に置いたラッピングされた白い袋を見つめたまま微動だにしない。

しばらく、テーブルの上に置かれたピンク色のリボンでラッピングされた中央にティディベアのワンポイントの付いた白い袋を見つめた後、星はゆつくりとそれに手を伸ばして両手でしっかりと掴むと自分の方へゆつくりと持つてくると徐に封を開ける。

封を解いた袋の中を前のめりになって覗き込むと茶色いくまのぬいぐるみが入っていた。それを見た星は微かに表情を明るくさせたが、すぐに悲しそうに眉をひそめてティディベアの入った袋をテーブルに戻して椅子に凭れ掛かるようにして深く座る。

もちろん。九條からのプレゼントが嬉しくなかったわけではない。ただ、この嬉しいという気持ちはどう表現したらいいのか分からないだけなのだ……。もし、この場所に九條が居ればきつと笑顔でお礼を言っただけに彼女に抱き付くまでしていたかもしれない。ただ、それは九條がこの場にいればの話だ。

今、この家には星一人だけしかない。どんなに嬉しいことがあつて飛び跳ねようとも、返ってくるのは静寂と虚しさだけなことを星は知っている。

星の誕生日は朝起きると母がテーブルの上に一万円札を置いていて、それで食べたいものと自分へのプレゼントを買いにいくだけのイベントだ。

母親から「おめでとう」という言葉を受けたのはもう相当昔のことを感じる。だからだろうか……。星の綺麗な紫色の瞳から流れ出した滴が頬を伝って抑えきれなくなった感情が溢れ出す。

「——わたしは……わたしはただ九條さんと一緒にいらればそれで良かったのに……どうしてお母さんも九條さんもそんなに仕事が大仕事なんですか。どうして……どうしてわたしをひとりに……ひとりぼっちにするの？ 仲良くなれたと思ったら、すぐにいなくなつて……勝手過ぎます。こんなに悲しい気持ちになるなら、最初から……最初からひとりでいたかつた……」

俯いた瞳から溢れ出す涙が滴となつて膝の上に重ねていた両手の甲を濡らし、震えた声で絞り出した星の体を小さく小刻みに揺らす。

星は両腕をテーブルに置くとそこに顔を埋めて声を上げて泣き続けた。

学校

それからどれくらいの時が経ったか分からない。星の涙が枯れた頃には外はすっかり明るくなってしまっていた。まぶたが腫れるほど泣いたのは、星の人生の中でもそれほど多くはない。しかし、それでもこの鬱々として雲が掛かったような気持ちが晴れることはなく……。

「……九條さん」

九條のことを思い出すと、たちまち目頭が熱くなって枯れたはずの涙が溢れ出しそうになる。

少しでも気分を変えようと星はテレビを付けた。

「テレビON チャンネル」

そう口に出した直後、テレビの画面の中の映像がゆっくりと切り替わる。

だが、まだ朝の早い時間だからか、どのチャンネルもニュースくらいしかやっていない。しかも、その全てが同じ報道をしている。

諦めた星は少しでも気が紛れればとニュース番組で「ストップ」と言ってチャンネル切り替えを止めた。

白い服を着た女性のキャスターが話している。

『昨夜遅く、軍の新設したばかりの基地内で銃撃と爆発が発生。死傷者の数は不明との事ですが、軍の迅速な対応により無事に鎮圧したということです。』

基地に侵入した犯人は射殺。今は基地を攻撃した組織の情報を集めているという事ですが、おそらくは海外のテロ組織グループの一部ではないかという見方が強いようです。

この問題に対して防衛省の富岡防衛大臣は「大変遺憾であり。再発が起きないように警備をこれまで以上に厳重化していく。我々はテロ行為には決して屈しない。」との事です。

次のニュースは多くの被害者を出したVRMMOゲーム【FREE DOM】の速報で――』

そこまでキャスターが口にした瞬間に星はテレビを消した。

正直。気を紛らわせる為に見たテレビだったのに、ゲームでの出来事を思い出すのは嫌だった。

何故なら、九條の帰りを待っている間に星はフリーダムへのログインが可能かどうかをこっそり試していたのだが、その時は視界の中央に「アクセスエラー」とだけ表示されて自分の部屋のベッドの上に戻ってきてしまった。

それもあってか、今の星はフリーダムの話題には敏感になっているのかもしれない。

ゲーム世界から現実世界に戻ってきて改めて一人きりになると、どうしてもゲーム内で楽しかったことを思い出してしまう。だが、戻ってきてニュースなどを見るとゲーム内のことを想像だけで悪く言われることが多くて星の中では楽しかった思い出が急にかすんだものへと変わる気がして嫌だった。

星はリビングから自分の部屋に戻るとベッドに入って少ししたら、泣き疲れていた星はすぐに寝てしまった。

目を覚ましたのは日が完全に西に傾いた夕方になってからだ。重そうにのっそりと体を起こした星は眠い目を擦ってベッドから起き上がると、ゆっくりとした足取りでリビングへと歩き出した。

リビングに着いた星は椅子に座ってぼーっとしながらしばらくの間のんびりしていると、星のお腹の虫がぐうーつと鳴き出した。

星はお腹を押さえると椅子から立ち上がって冷蔵庫へと歩いて行って冷蔵庫の扉を開いた。

しかし、冷蔵庫の中にあるのは食材ばかりですぐに食べれそうなものは入っていない。かと言って星に料理はまだできないだろう。もしも作れても火や包丁を使わない料理くらいだろうか、それなら別に料理をしようとは思わない。

冷蔵庫の中身を見て大きなため息を漏らした星は扉を閉めて自分の部屋へとタンスの中に入っている自分の普段着ている服を適当にみつろろって、パジャマから着替えて身支度を整えた後一度大きな鏡の前にくる。

薄茶色のパンツに白のティーシャツ、その上にチェックの薄茶色の

シャツを羽織っている自分の姿を見て満足そうに頷くと、黒いリュックサックを背負うと九條の顔がちらつき、咄嗟に赤い帽子と伊達メガネを掛けて家を出た。

近くのスーパーにいくつかのお惣菜を買ってそれをリュックに入れて家へと帰る。だが、普段と違って地味な服と変装までしているのにも拘らず。人の目が自分に向いていると感じた。

いや、間違いなく向いていたのだ。普段から星は周囲の視線には敏感な方であり、それが間違っているはずがない。

「……考えても仕方ないし、ご飯を食べよ」

そう小さく呟くと買ってきたお惣菜を電子レンジに入れて温めた。

炊飯器の中に残っていたご飯を茶碗によそうとお惣菜と一緒にお盆に乗せてテーブルへと運ぶ。

テーブルに並べられたのはコロツケと付け合わせのサラダ、そして肉じゃがの三品だ。

両手を体の前で合わせて「いただきます」と小さく言う箸を持って食べ始める。

昨日までは九條が作ってくれた料理を食べていたからか、スーパーのお惣菜を食べても心なしか物足りなく感じてしまう。

今まではスーパーのお惣菜を食べてても満足できたが、今は食べていても味が良く分からずただ摂取しているだけという感覚に襲われる。

食事を終わるとお風呂に入ってから自分の部屋に戻って机に座って本を読み始めた。それからは数時間ずつと本を読んでいた星だったが、時計が夜の12時を回ったのを確認して眠った。

一度は眠りに就いた星だったが、なかなか寝付けず数時間おきに目が覚めてしまう。さすがにそれを3回も繰り返すと、寝ることにも疲れてきてしまった。

つと、ふとベッドの横を向くと勉強机の横に掛けられている赤いランドセルが目に入った。それを見た星は眉をひそめて少し複雑な顔をしている。まあ、今まで学校であまり良い経験はないのは事実だ

が、家で一人で居る時間が長いとどうしても退屈で寂しくなってきた。しょう……。。

「――学校に行ってみようかな……」

そう呟いた星の脳裏に九條の「命を狙われているのに学校なんて……」という言葉が蘇る。だが、外部から孤立した家の中にずっといるのはさすがに精神的にきつい。ましてや真面目な星は、毎日学校にも行かずに家にいることにたいして抵抗があった。

部屋の壁に掛かっている時計は6時を指している。ゆっくり起き上がると、星は勉強机のライトを付けて授業に使う教科書やノートを全てランドセルの中に入れる。

さすがに2ヶ月以上も期間が空いてしまうと以前の時間割が役に立たなくなる。2036年今の日本では学校教育の均一化を図る為、毎週のように全国テストがあり。その結果によって、全国の小学校で行われる次の週の時間割が決定する。

しかも、以前は教師が作っていたテストなどの問題用紙もそれ専用機に機関を設立して一括で全国のデータをコンピューターによって分析、解析して効率良く問題を出してくれる。勿論答案の採点の方も機械が全自動で文字を読み取って採点する。

そして授業もカリキュラムに則って授業もデジタル配信で行われ、復習をいつでもできるように授業のデータも1日の終わりに渡されるのだ。

ここまでいくと教師の存在そのものに意味がなくなるのだが、教師とはすでに勉学を教えるものではなくクラスの秩序を守る役割になっっている。それも授業よりも少子化の波といじめ問題による生徒の自殺増加に歯止めを掛ける目的で、教師の負担軽減の為に行われたのだが、現実にはいじめは増加傾向にあり。それと同じくして、不登校率は増加傾向に向かっているのが現実だ。

やはりストレス社会の中で容易に愉悦感と支配欲を得られるいじめを無くすのは不可能だということなのだろう……。

学校2

学校に行く準備を整えた星は朝食の準備をする為にリビングに行く。

リビングにきた星はキッチンにいつて冷蔵庫を開けて昨日買ってきたお惣菜を取り出す。

焼き鮭とインスタントの味噌汁、マカロニサラダとご飯をテーブルの上に並べた。

椅子に座って手を前に合わせて「いただきます」と言って朝食を食べ始めた。

朝食を食べ終えた星は食器を流しの中に入れて、部屋に戻ってパジャマから服に着替えて勉強机の上に置かれたランドセルを背負って家を出た。

学校までは子供の足で徒歩30分程度の道のりだ。いつも通りの通学路のはずだが、二ヶ月以上も学校に行っていないとまるで別の場所に行く道に感じてしまう。しかし、それでも星の心は前向きだった。

もちろん。うきうきというわけではないが、家にずっと居て本を読んだり勉強を試してみてもふとした時にひとりであるという思いが浮上してくるよりは、誰かが近くにいる環境というのはそれだけでも安心感を得られるだけ今の星にはありがたいのかもしれない。

学校の近くにある小さな橋の上で、星はゲーム世界に行く前のことを思い出して立ち止まる。いや、足が自分の意思に反して動かなくなったという方が正しい。勢いでここまで着たものの、やはり何者かに階段から突き落とされ。しかも翌日には自分の机の上に花の生けられた花瓶を置かれあまりのショックに無断で下校し授業を欠席した。

顔を青ざめさせたままその場に立ち尽くしていた星は、次の瞬間に首を大きく振って再び歩き出す。

「……大丈夫。私はあの時よりも強いんだ！」

前を向いて自信に満ち溢れた表情で星は再び学校への道を歩く。

学校に着くと星は教室に入って自分の席があることを確認してほっと胸を撫で下ろした。

それもそのはずだ。二ヶ月以上もの間、現実世界から離れていた人間を、世間が認知してくれるかというのは当人の努力ではどうしようもない。自分の席を残してくれるかは、周囲の人間次第になつてしまふからだ――。

ランドセルを席の横に置いて中から本を取り出して読み始めた。しかし、その最中も周囲に居る生徒達は星のことを見ないように意識している気がした。

事件の前から星が無視されることは日常茶飯事だったが、今星が感じている感覚は以前の感じとは明らかに違う……以前は高圧的な感じの無視の仕方だったが、今は素直に相手が自分を避けている。いや、恐れていると言つてもいいほどに周囲の空気が重い。

だが、星はクラスメイトがそんな態度を取るということが不思議で仕方なかった。それもそうだろう。星はこの二ヶ月以上の間、ゲーム世界にいたのだ――そんな彼女がクラスメイトに何かできるはずもない。つまりは、星がなにかをしたのではなく星が現実世界に戻つてきて何か周囲が変わるような環境の変化があつたということになる。

しかし、星はそれでいいと思つていた。周囲の反応がどうであれ、学校という同年代の人間が多い場所に自分が居るというだけで十分なのだ。人混みに行くだけなら別に駅やそれこそ本のたくさんある図書館でもいい。問題なのは本来学生である星が平日の昼にその場に居るといふ状況だ――しかも星は小学生。普通に考えれば平日の昼に親も連れずに一人で図書館や駅にいるという状況だけで周囲の視線を集めてしまふ。

星は今、命を狙われている。九條が居なくなつたということ、状況がどう変わったのか分からなくなつてしまった。普通なら九條が別の仕事の為に帰つたということとは状況が良くなかつたから自分を見捨てて逃げた可能性もある。だが、星は九條がそんな人間ではないことを分かっている。だとしても、現実世界にきて少し臆病になつているのかもしれない……。

授業が始まって周りの生徒達の反応は変わらず星のことを避け続けている。だが、星にとってはそっちの方が好都合だった。以前のように自分にいちいちよっかいを出して来られるよりも一定の距離感をキープされる方がよっぽどいい。

放課後。ランドセルを背負った星は以前の日課だった図書室へと向かった。

図書室に着くと、そこには変わらず図書室の先生が本の貸し出しを行う机に立っていた。

ほっとした様子で図書室に入った星は大きな机が置かれている場所にランドセルを置いて本を探す。

つと言っても自分が興味のある本は大抵読んでしまっている為、以前にも読んでみて楽しかった本を2冊持って貸し出し用の机の椅子に腰掛けている女性の先生の元に持っていく。

「……あの、先生。私のこと覚えていますか？」

持っていた本を出して先生の顔を窺うように見上げながら尋ねた。

すると、先生が視線を合わせないようにして言った。

「ええ、覚えてるわよ？ ちょつと用事で職員室に戻らないといけななんだった。はんこを置いていくから後はよろしくね」

そういうと先生はそそくさと席を立てて図書室を出ていった。

以前とは比べものにならない素っ気ない先生の態度に星は少し困惑していた。だが、星にはそれが二ヶ月間にも及ぶ期間の代償ということなのだろうとさほど気にすることなく、貸し出しカードに名前と日付を書いてその上に先生の残していったはんこを押して2冊の本をランドセルの中に入れた。

図書室を出て下駄箱に向かう途中。星はいつもはいないはずの保護者が次々と教室に入っていくのを見て首を傾げながらも下駄箱で靴を履き替えて家へと帰った。

家に着いた星は自分の部屋に入って勉強机の上にランドセルを置くと、中から教科書とノートを出して本棚からドリルを取り出して勉強を始める。

それは二ヶ月間のブランクを今日一日で実感したからだろう。夕食を食べることも忘れて勉強をしていた星のお腹の虫が静かな部屋の中に鳴り響く。

お腹を押さえながら壁に掛けている時計を星が見ると、すでに夜の10時を過ぎていた。

持っていたシャープペンを置いた星は財布を持って近くのコンビニに向かつて歩き出した。変装した星はコンビニでお弁当を買って家を出るといつもの道を通って帰る。

だが、その家までの道のりの中で何者かが自分の後をつけている気配を感じていたが星は振り返ることができなかった。今振り返ってしまったら、一定の距離を保ってついてきている者が必ずその距離を一気に詰めてくるであろうことは明白だ――。

星は一瞬相手との距離が開いた瞬間、素早く路地に逃げ込むように走った。その直後、星は全力で路地を駆け抜けて再び別の路地へと逃げ込んだ。

しかし、男がついてくることはなかった。気のせいだったのかとほっと胸を撫で下ろした星は警戒しながらもゆつくりとした足取りで家へと帰る。

家に着くと、ビニール袋に入ったお弁当を出した。お弁当は中身がぐちゃぐちゃになっていて、星はがっかりした様子でため息を漏らした。まあ、あれだけ全力疾走すれば持っていた袋の中に入ったお弁当を気にする時間もない。

仕方なくそのぐちゃぐちゃになったお弁当を電子レンジで温めて一緒に買ってきたカフェオレと一緒にテーブルに置く。

そこからは会話もなく淡々とお弁当を口に運ぶだけのなんとも味気ない食事が始まる。

学校3

食事を終えると、星は食休み学校の図書室から借りてきた本をソファで読みながらお風呂が沸くのを待った。お風呂が沸いたことを知らせるアラームが鳴ったのを確認して読んでいた本をソファの上に置き、脱衣所に向かって歩き出した。

脱衣所で来ていた服を全て脱いで長い髪をゴムで縛って浴室に入った星はプラスチックの椅子に腰掛けて体を洗い。浴槽の中に体を沈める。

肩まで浸かったところで大きく息を吐き出すと、両手を組んで前に突き出して伸びをしてそのまま頭上に持ってきて絡めていた指を離しつつ下ろした。

「……はあく。久しぶりの学校は疲れたなあ……」

目を細めて天井を見上げた星は、今日の出来事を思い出して脱力する。

星にとって約二ヶ月ぶり学校は、まるで別の次元に迷い込んだのではないかと思うほど別の世界だった……。

普段とは明らかに違うクラスメイト。そして自分に唯一優しかった図書室の先生も、まるで別人のように素っ気ない態度。しかも、コンビニに行けば知らない人物に尾行されるというおまけ付きだ。

今までは九條が星は何者かに命を狙われているといううだけで、星自身は全くその危険性を認識できずにいた。しかし、今日のコンビニの帰り道に見知らぬ誰かに追い掛けられるという経験は自分が何かに命を狙われていると実感させるには十分だった。

お湯の中に使っているはずなのに寒気を感じて肩を抱いて体を震わせる。しばらくして震えが治まると、星は悲しそうな顔をしながら浴室の中を一度見渡してボソツと呟く。

「……うちのお風呂ってこんなに広かったんだ……」

ふと口から出たその言葉。今まで全くそんなことを思わなかったのにそう感じるようになったのは、間違いなく星が人と関わるようになったからだろう。

ゲーム世界では、エミルが……そして現実世界では九條が……お風呂に一緒に入ってくれた。前はそれが特別なことだった——本来ならば、自分の裸を人に見られるということはとても恥ずかしい行為である。だが、それを許してしまえば、それが逆に心を満たしてくれて心地良ささえ感じるのである。

それを知ってしまった星には、もう誰とも関わることのないこの空間が広く虚しいものになってしまっていた……。

お風呂から上がった星はリビングのソファに腰を下ろして大きなため息を漏らして瞼を閉じる。

「……九條さんが居なくなつて、ため息を出すことがなくなつたかなあ……」

小さく口から出たその言葉を飲み込むように口を一文字に結ぶと、ソファから立ち上がつて「照明OFF」と言って電気を消すと、暗い廊下を歩いて自分の部屋の扉を開けて中に入りベッドの上に身を投げた。

うつ伏せに顔を布団に埋めると、しばらくして体を反転させて真っ暗な部屋の天井を見上げて呟く。

「このままで本当にいいのかなあ……」

不安そうに眉をひそめて天井の一点だけを見つめる。

おそらく。その言葉は不意に出た星の本心だったのでろう……九條も居なくなり。学校に行つてもまるで別の世界のように——このまま、本当に帰つて来るかも分からない母親を待ち続けていて本当にいいのか……。

今の星の心を支配しているのは孤独と不安。そして先の見えない恐怖……小学生の女の子が突然一人暮らしを始めることになったのだ。それに伴う不安と恐怖はその小さな身体には重過ぎる。

もしもゲーム世界にログインできてエミル達と会っていたら、この不安も恐怖も一瞬で掻き消してくれることだろう。しかし、現実はそれほど甘くはなく未曾有の重大事件を起こした元凶を放置してはくれなかった。

「……もうみんなには会えないのかなあ……」

そう星が口にした直後、彼女の瞳から一筋の涙が溢れ落ちた。

口を嚙み右腕で溢れそうになる涙を抑え込むように目の上に押し付ける。

「エミルさんにまた会いたいよお……」

静かに泣いていると、いつの間にか星は眠っていた。

次に星が目を覚ました時には朝になっていて、時計を見ると時間は6時半を指している。布団から起きた星は朝食を取ると、パジャマから服を着替えて前日調べてきた時間割表の通りに教科書とノートをランドセルの中に入れる。

食パンをオーブントースターに入れ温めて扉を閉めて開始ボタンを押すと、自動で中身を確認してベストの温度まで加熱してくれる。

その間に星は神妙な面持ちでIHの上にフライパンを加熱している。踏み台に乗った星は軽くフライパンに油を引くと、パチパチと脂が跳ねるのに驚きながら少し距離を取った。星のその手には卵が握られていて、卵を持ったその手は震えていた。

星は料理経験が殆どない。目玉焼きを作ろうと思ったのも九條の影響が大きいだろう。しかも目玉焼きなら卵一つで簡単に作ることもできると考えてチョイスしたのだが……いざ熱を持ったフライパンを前にすると、どうしてもたじろいでしまう。

星は意を決して卵の殻を打ち付けて殻にひびを入れると、器の上で両手で持ってひびに押し付けた親指に力を入れて卵を割りにはいく。

だが、いくら力を入れてもなかなか卵が割れない。

「……硬い」

星が更に力を入れると卵が急に割れて器の中に落ちた。しかし綺麗に割れるとは程遠く、割れた卵には細かい殻が入り黄身が潰れてしまっていた。

それを見た星は少しがっかりしたように肩を落としたが、すぐに立ち直り卵の中に入ってしまった細かい殻を取り除いて熱々に熱せられたフライパンの上に滑らせる。

フライパンに敷いていた油が跳ねて、じゅうじゅうと焼ける目玉焼

きの上にフタをして、踏み台に乗ってフタに付いたガラスの覗き穴から中の目玉焼きを食い入るように見つめる。

時間が経つにつれて白く硬くなる白身を見つめながら、星は一人でする初めての料理の確かな手応えを感じていた。

数分間待った上でフライパンに被せていたフタを取ると、しつかりとした目玉焼きになっていた。まあ、黄身は崩れまんまるとはいかず少し形は悪いが、初めて一人で作ったにしては、焦げ付きもせずに良く出来た方だろう。

フライ返しで皿に移すと、加熱していた食パンをやけどしないように慎重にオーブントースターから皿に移して両手に皿を持ってテーブルへと運ぶ。最後に温めたミルクにココアパウダーを入れてミルクココアを作って両手で溢さないように慎重にテーブルに運んで朝食が完成した。

椅子に座って「いただきます」と言ってパンにバターを塗るとそれを口に運び、作った目玉焼きの上にしようゆを掛けて箸で一口大に切り口に含んだ。

とても簡単な料理だったが自分で苦労して作った目玉焼きはまた格別な味がする。朝食を食べ終わると、ランドセルを背負って家を出た。

昨日は別の世界に見えた通学路も今日は少し慣れてきた気がする。朝の日光を受けてキラキラ光る道路も、道の端で長い影を作っている看板やガードレール。地面の端の土の間から顔を出す草も短い影を必死に伸ばしている。

その中にランドセルの星の影も加わり、まるでその風景だけは別の次元に住む自分とは異なる別人の営みに感じてしまう……。

通学路を歩き学校に着くと、数多くの生徒達の声が響き次々と子供達が校門の中へと入っていく。

その多くの子供達の中に自然に溶け込む星だったが、昨日と同じく不思議な違和感を感じているのも確かだった。

学校4

星が教室に着くと昨日と同じように、ガヤガヤとうるさいほどに話していたクラスメイト達が一齐にシーンと静まり返る。

教室に入った星のことを意図的に無視しながら自分達の席へとゆっくり戻っていく。だが、そこに不満がないわけではない。その証拠に教室に入ってきた星のことを見て憎らしい瞳を向けている。

クラスメイトのその反応を見ると、星のことを友好的な目では見ていないことが分かる。だが、星はそれでも構わなかった……視線を感じるのは以前からあったことであり、今回に限ったことではない。そんなことよりも、自分という存在に安易に近づいてこないというの方がよっぽど重要なことだろう。

席に着いた星はいつものようにランドセルから本を取り出して読み始める。

本を読んでいると教室に先生が入ってきていつも通りに授業が始まり、それが終わると休み時間に入って再び本を読む。それを数回繰り返し、その日も何事もなく全ての授業が終わった。

「……帰ろう」

帰りのホームルームが終わりランドセルを背負って席を立った瞬間。珍しく教卓に残っていた担任の先生が星のことを呼んだ。

「夜空。ちょっと話がある今から職員室に一緒に来なさい」

「はい」

首を傾げて小さな声で返事を返した後、先に教室を出ていく先生の後を付いていった。

下校する生徒達の声で賑わう廊下をしばらく歩いていくと、職員室の前で止まると「少し待っていなさい」と言われた星が頷くのを見て、男性教師が職員室に入っていく。

数分の後に星に職員室に入る許可が下りて中に入ると、職員室の中にある生徒がけして入れない部屋へと通された。

男性教師と一つの部屋に2人きりになった星は不安そうな顔で自分の前に立っていた男性教師を見上げている。

「夜空。テレビは見ているか？」

「……いえ、見てないですけど」

「新聞は？」

「……新聞も見えてないです」

星は唐突に始まった男性教師の問いに訝しげな顔をしていた。

そんな星に男性教師は部屋に置かれていたテーブルの上に置かれた新聞紙を徐に手に取って広げると、星に見えるように広げてテーブルに置く。

そこにはゲーム内でエクスカリバーを振り抜きラーを無力化した時の星の姿がばつちりと映っていた。

「……なんで……どうしてこんな……」

狼狽えた星はその記事を読んで動揺しながらよろめき後退った。

星が驚いたのはその写真ではなくでかかど書かれた大見出しだ。

そこには――。

『ゲーム開発者の親子。自己満足の為にゲーム内の全プレイヤー巻き込み自作自演!!』

故意に決着を遅らせて被害者を増やした挙げ句に犯人の大空融は雲隠れ。娘は罪の意識ないままに英雄を自演している模様。

被害者家族は医療センター内で植物状態の被害者と対面し泣き崩れ加害者親子への憤りを露わにさせている。

ゲーム運営会社である国際機関は加害者親子に強く抗議の意志を示し、被害を受けた方々には手厚いサポートと再発防止に努めていくとのことだ。』

その新聞の記事を読んだ星は、呆れ顔をしている男性教師に向かって叫ぶ。

「なにかの間違いです！ この記事はデタラメだし。それに私のお父さんはもう……」

そこまで口にして俯く星に男性教師は言葉を返した。

「事実はどうであれ、この写真が出回り実際にゲームに参加したのには間違いないだろう？」

「……はっ」

何も言い返せずに口を一文字に噤んだ星は、悔しそうに自分の服の裾をぎゅつと握り締めた。

「他の生徒の保護者からも苦情がきている。自分の子供を人殺しと同じ学校に危なくて通わせられないと……それで、昨日急遽行われたPTA総会で夜空に自主的に不登校になってもらうという意見で固まった。すでに校長と教頭の了解も取れている。だから夜空は明日から登校しないでくれ」

「——ッ!!」

彼の言葉に驚いた星は男性教師に詰め寄るようにして叫んだ。

「いやです！ どうして私が不登校にならないといけないんですか！」

星が怒るのも最もだ。いくらなんでも学校に来るなどというのは横暴過ぎるし、第一に星は一人で家に居たくないから学校にきているのだ。それを訳の分からない理由で絶たれるのが今の星には理解できなかった。

急に叫んだ星に男性教師が渋い顔をしながら言った。

「これは保護者と学校側が決めた事だからお前が何を言っても変わらない。夜空が何を考えてても、周りの生徒達がお前の事を怖がっているのは俺だって分かる」

「……………」

その男性教師の言葉に俯き加減の星は服の裾を掴んでいた手を更に強く握り締めた。

それは星がいじめを受けているのを無視していたことを自白した様なものだ。このたった2日のクラスメイトの変化を察するほどの洞察力があるのに、星がいじめを受けていたことに気が付いていないはずがないだろう。

星は男性教師を睨みつけると感情的になって叫ぶ。

「学校に来るか来ないかは私が決めます！ 不登校になるのを私以外の人に決められるのが分かりません！」

「俺は校長と保護者には逆らえないんだ！ 俺にも家族がいる。頼む——俺を助けると思って学校に来るのをやめてくれ……」

男性教師は部屋の中のテーブルから離れて星の前に来て地面に両手両膝を突いて頭を下げた。

そんな彼の姿を見た星はさすがに困惑し驚きながら地面に伏せている男性教師を見下ろしている。

だが、それもあたりまえのことだろう。彼が今している姿勢はまさしく土下座だ——しかも、大人が子供に土下座して不登校になってほしいと懇願しているのだ。それに困惑と驚きを覚えるのはごく自然な感情だろう。

自分の前で恥も外聞もなく潔いまでの土下座をしている男性教師に、星の心は少し揺るぎそうになったが。直後、一人で家にいる時のことを思い出して頭を左右に振る。

(ここで頷いちゃだめだ。頷いたらまたひとりぼっちになっちゃう。もうひとりで家に居るのはいや……)

一人でソファアーの上で膝を抱えていた時の記憶が鮮明に思い起こせて、その時の寂しさに星の体が震えていた。

「……できません……」

体を震わせた星が土下座している男性教師に告げると、男性は鋭く星を睨み付けてきた。

その鋭い視線に星も一瞬たじろいだだが、すぐに気圧されないようにしつかりと彼の目を見た。

お互いに顔を見ながらしばらく時間が止まっているかのように見合っていると、男性教師が先に口を開く。

「そういえば、夜空のお母さんは今行方不明なんだってな……」

「——ッ!!」

星はその言葉に驚き、目を丸くさせる。まさか、そのことを彼に知られているとは思っていなかったのだろうか。

星は驚きのあまりその場に立ち尽くしていると、男性教師は口元にニヤリと不敵な笑みながら言った。

「この決定は学校と保護者で決めた事だ。それに文句があるなら、夜空も保護者を連れてこい。そしたら、学校に通えるかもしれないぞ？」

「そんなの……」

そこまで口にした星は悲しそうにうつむき加減に口を閉ざした。本当はここでお母さんが絶対に来てくれると言いたかった。だが、それが無理だと星の口から咄嗟に出たのは否定した言葉だったからだ。しかし、星も心のどこかで分かっていたのかもしれない。

『もう、母親はこの世に居ない……』と——。

沈黙する星に向かって男性教師が追い打ちをかけるように言い放った。

「——分かったら学校に置いている荷物を全て持って帰れよ？ 明日にはもうお前の席はないからな」

「……………」

そう言つて部屋を出ていく男性教師を余所に、無言のまま俯いてその場に立ち尽くしていた星は悔しさから拳を強く握りながら唇を強く噛み締めていた。

だが、なによりも悔しかったのは学校に行けないことではなくて、自分の母親がもう死んでいるかもしれないと認めている自分だけだ。

運命とは・・・

誰も居なくなった教室で帰り支度を整えた星はさながら進級前の終業式の日のようになっていた。体には持てる限りの荷物を掛けて家に帰る。

しかし、荷物の多さにさすがに一人では一度で持っていける量ではない。帰り道を急いで帰って再び学校に戻ってきて残っている荷物を2回運ぶと、最後に残ったランドセルを背負ってすでに暗くなった帰り道をゆつくりとした足取りで一歩一歩踏みしめて歩く。

「……もう学校に行かなくていいんだ」

そう呟いた星は悲しそうな顔でアスファルトを見ていた。

今まで学校はともじやないが楽しい場所ではなかったが、それでも通えなくなるのは悲しい。

入学してから今まで通い続けた為、少なからず愛着があったのは間違いない。それが急に明日から来なくていいと言われたら、心にぽっかりと穴が空いたような気がしてどうにもやり場のない気持ちになっってしまう……。

ランドセルを背負ったままとぼとぼと帰っていた星がふと歩くのをやめて呟く。

「……本当に居場所がなくなっちゃった」

大きなため息を漏らした星はがっくりと肩を落としてふと空を見上げると、空にはすでに星がキラキラと輝いていた。

家に帰ると星は真っ暗な廊下を歩いてリビングまでいくと、ランドセルを地面に投げ出してソファアーの上に身を投げる。

学校から家までの往復を3回も行ったのだ。さすがに体力も精神的にも限界だったのだらう……ソファアーに倒れた星はそのまま眠り込んでしまった。

次に星が目を覚めたのは夜12時を過ぎてからだった。起きてすぐ時計を見て時間を確認した星はテレビの電源を入れる。すると、星の『ON』の声に反応した機械が光り出して仮想モニターが空中に映像を映し出す。

そこには星がゲーム内で最後に戦ったラーを倒した時の映像が映し出されていた。それは星が今日学校で男性教師から見せられた新聞の一面と同じものだった……。

『今回のVRMMORPGという次世代のゲームである【FREEDOM】の中で行われていた真実です。ゲーム開発をし、自分の娘を特別扱いしてゲーム内に複数のプレイヤーを閉じ込めた大空融。

そのせいで多くのただゲームを楽しんでいた若者の多くが今も昏睡状態でいます。そんな中、彼と彼の家族は普通の生活を送っているのです！ そんな事が許せるわけがない！

ゲーム運営陣も続々と拘束される中、最高責任者である遠藤豊氏がアメリカの研究機関で逮捕されたとの情報も入っております。

しかし、主犯である大空融の行くへは未だに掴めておりません。もし、少しでも情報をお持ちの方は警察までご連絡下さい！』

画面にでかでかと表示された自分の顔を見て、星はすぐにテレビの電源を落とした。

「——こんなことになってるなんて……」

そう呟いた星はソファアの背凭れに凭れながら大きくため息を漏らした。その直後、星のお腹が鳴った。お腹を押さえた星は苦笑いを浮かべながら、徐に天井を見上げる。

こんな状況でもお腹が空くことに呆れていたというのもあるが、それ以上にまるで現実味のない現実を受け入れられずに出た苦笑いだった。

それもそうだろう。星の父親は本来ならば彼女が生まれる前になくなっていくのだ。いくら探したところで見つかるはずがない——それどころか、星も指名手配犯のように顔を晒されている。

ゲーム内では自分と同じく出られなくなったプレイヤーの為、仲間達の為に全力で戦ったはずだった。少なくとも星はそのつもりだったが、現実に戻ってきたら完全な悪人として報道されている。そのことが今の星には一番堪えていた……。

「……私は頑張って戦ったはずなのに……」

ゲーム内での努力や苦悩を思い出して泣きそうになるのを必死に

抑え込んで、星はソファアールから立ち上がり服を着替え始めた。

九條が残っていたトランクの中から黒い男の子用のぶかぶかのズボンと、金の刺繍の入った黒いパーカーに袖を通して長い髪を服の中に隠して金の縁取りがしてあるキャップを深く被りその上からパーカーに付いたフードで頭全体を覆う。

全体的に大きいサイズの服とズボンに身を包んだ星はヤンキーに憧れる小学生の男の子にしか見えない。

金の刺繍が入ったパーカーは女の子特有の小さく細い指先までしっかりと覆い隠してくれるだけではなく腰の下まですっぽりと隠し、歩き難いぶかぶかのズボンもか細い足のラインを何倍にも大きく見せてくれる。キャップとパーカーに付いたフードは星の顔を隠すには十分過ぎるくらいだ。

全体的に金と黒で目立つ為、星の好みではないが、こんな状況下では贅沢を言っではいられないだろう。

自分の格好を確認した星は家を出て近くのコンビニへと向かった。コンビニに着くと、コンビニの駐車場でタバコを吸っている大学生くらいの男性二人組の金髪の方が星の方をじっと見てくる。

それを視線を逸らしてやり過ぎすと、足早にコンビニの中に入る。ほっと胸を撫で下ろした星は、お弁当と明日の朝に食べる用にパンを買ってコンビニを出る。

直後。先程までタバコを吸っていた金髪の男が徐に立ち上がり星の行く手を遮るように立った。

「おい！ ちょっと待てよー！」

金髪の男は星を見下ろしながら不機嫌そうに眉をひそめる。

「お前小坊だろ？ 生意気なんだよな。小学生のくせによお〜」

「——すみません。遅くなると親が心配するので……」

そう言っつて星は目の前に立つ金髪の男の横をすたすたと歩いて抜けた。

驚いた表情のまま、足早にその場を去る星を見ながら立ち尽くす彼等を一度はやり過ぎたと思ったものの、しばらくして彼等が後を付けてきていることに気が付く。

まあ、大人と子供の歩幅の違いではすぐに追いついてきてしまうのも無理はない。気が付かないふりをして早歩きしている星の手を追ってきた金髪の男ががっしりと掴む。

「待てよお前！」

がっしりと腕を掴まれ強引に止めらた星は俯き加減にその場に立ち止まる。

「年上に対しての態度がなってないんじゃないか？ 最近の小坊は礼儀作法も知らねえーのかよ」

「……………」

無言で返した星に金髪の男はイライラしながら強引に腕を引っ張って自分の方へと引き寄せる。

「ガキが調子に乗ってんじゃねえぞー！」

「きやつ!!」

咄嗟に出た悲鳴を聞いた金髪の男はニヤリと不気味な笑みを浮かべると、星の掴んでいた腕から手を放した。

「なんだよ。女なら女だって最初から言えよ。女だって知ってたら手荒なことはしなかったのにさ」

「……………それじゃ失礼します」

不気味にニヤニヤと笑っている金髪の男に軽く頭を下げたその場から離れようとした星の行く手を再び遮った金髪の男が星の顔を覗き込んで言った。

「ばか。誰も許してやるとは言ってねえーだろ？ 女なら女で責任の取り方が変わってくるってだけなんだよなあ」

「……………責任？」

訝しげに眉をひそめた星の顎に指を付けて顔を上げさせ、顔を覗き込んだ金髪の男が笑みを浮かべる。

「へえー、可愛い顔してんじゃない。難しい事は何も無い。ただちよつとお兄さん達に付き合ってくればいいだけさ。なあに、お前はベッドで寝てるだけでいい。なあ、簡単だろ？」

「お前。こんなガキにまで手を出すのかよ。きめえ、さすがに引くわ」

「馬鹿！ おめえーだって興味あんだろ？ ガキでも女は女なんだからよ。一回は使ってみてえーだろうが！」

男達がなにを話しているのか分からず首を傾げていると、金髪の男が星の被っているキャップとフードを外そうとする。

その手を強引に退けようとするが、力が強くて星の必死の抵抗も虚しくフードとキャップを頭から引き剥がされてしまう。

運命とは・・・2

星の素顔を見た金髪の男は驚いた様子だったが、すぐに不気味な笑みを浮かべながら星の体を強引に路地裏に連れ込んで嫌がる星の手を掴んで彼女の頭の上へ上げさせて壁に押し付けた。

「なんだよ。ニユースで見たぜ？ お前犯罪者なんだろ？ なら、別になにやっただっていいよなあ……」

「……なにをするの!? いや！ 放して!!」

抵抗する星のパーカーのチャックをゆつくりと下げ、内側に着ていたティーシャツをめくり上げると露わになった星おへその部分を彼の指の腹が撫でる。

更に激しく抵抗する星を嘲笑うかのように金髪の男が星の耳元で囁く。

「実は俺もあの世界にいたんだよ。彼女と一緒に……」

「——ッ!!」

その言葉に驚き目を見開いた星の抵抗が弱くなったのを見て、金髪の男は星の履いていたズボンのベルトに手を伸ばして緩めるとぶかぶかのズボンが地面に落ちて真っ白なパンツが露わになる。

すると、そこに金髪の男の手が伸びてきて星の内太ももを撫でた。顔を真っ赤に染めた星は全力で体を捻って今までで一番の抵抗を見せる。

「お前のせいで俺の彼女は昏睡状態なんだよ。お前が俺達を始まりの街で見放したからよ……分かるだろ？ お前がどれだけの事をしでかしたのかって……分かったら責任取って大人しくやらせろよ！」

「いや、放して！ 放して下さい!!」

「暴れんなよ！ 別に減りやしないんだからいいだろうが！」

金髪の男の手が星のパンツに伸びた瞬間。周囲に銃声が鳴り響き、金髪の男が足を押さえて地面に倒れ込んだ。

突然の出来事に驚いた星は地面に座り込んでいた。もう一人の男は何が起きたのか分からずに動揺した様子で地面に倒れている金髪の男を見下ろしていた。

銃声が聞こえた場所に目を向けると、そこにはローブを着た子供ほどの大きさの人物が立っている。その手に握られていた銃の銃口からは薄っすらと白い煙が上がっているのが見えた。

「――失せろ。お前達には用はない」

そう言った直後、再び銃声が鳴り響きもう一人の男が地面に倒れている金髪の男を起こして肩を貸しながら慌ててその場を立ち去った。その場に取り残された星は突如現れたローブを着た人物を見据えている。

座り込んだままの星は体が震えて動けないでいる。だが、それも無理はない。年上の男に強引にズボンを脱がされたのも初めてだが、銃声を聞いたのも初めてだ。一度に予想外のこと起きて星の体は完全に萎縮してしまっていて体に力が入らない。

「……あなたは誰なんですか？」

ローブの人物は無言のまま近付いてくると、地面にぺたんとして座り込んでいる星の眉間に銃口を向けた。

星は自分に向けられた銃口を見つめ、諦めたように息を吐いた。

「はあ……そうですよ。私のことを殺したいほど憎んでいる人はたくさんいますよね……」

そう呟いた星は全てを悟ったようにゆっくりと瞼を閉じる。

直後。辺りに銃声が再び轟き、星の体は徐々に傾いて横に倒れた。ローブを着た人物が構える銃は星ではなく空へと銃口が向いていた。それと同時に、遠くからサイレンが鳴り響き徐々にその音が大きくなる。

ローブを着た人物は気を失って倒れている星にズボンを履かせると、抱きかかえながら一瞬で屋根へと跳び上がりそのまま星を連れ去った。

星を抱きかかえたまま、結構な距離を移動するとローブを着た人物が突然道路の中央に降り立ち、走ってきた黒塗りの高級車が慌てて急ブレーキを掛けて目の前で急停車した。

「――大丈夫ですか!!」

運転手であろう白髪に白髭の生えた60代後半のスーツを着た男性が車のドアを開けて飛び出してきた。

しかし、その時にはローブを着た人物は消えていて、代わりに道路には星が横たわっていた。

首を傾げながらも高齢の男性は倒れている星に駆け寄ると、抱き上げて声を掛けるが星の意識は戻らない。

その直後、車の後部座席から一人の少女が降りてきた。

「どうしたの小林！」

長い青い髪に綺麗な青い瞳の学生服を着た彼女は倒れている星の顔を見て驚いた表情で叫ぶ。

「小林！ 早くその子に乗せて、近くの病院へ！ 救急車を呼ぶよりもこのまま車で運んだ方が早いわ！ さあ、早く！」

「はい！ お嬢様！」

道路に倒れていた星の体を抱きかかえると、車の後部座席に寝かせると少女は助手席に乗り込んでシートベルトを締める。

「飛ばします。しっかり掴まっておいて下さいよー」

「ええ、でも衝撃は最小限でね……」

「分かっております！」

急いで車を出すと、近くの病院へと星を運ぶ。

病院に着くと星を車から降ろして急いで院内に入る。病院で受付の女性の看護師の所に行くと、すぐに診察室に通されベッドに寝かせた星の着ていた服を脱がせて下着姿にすると、近くにいた複数の女性の看護師が忙しなく血圧や体温を測り始めた。

そしてしばらくして年配の男性医師が入ってきて脈や胸に聴診器を当てて診断する。

「脈拍も心音も特に問題ありませんね。気を失っているだけで血圧、体温も正常です。しばらくしたら目を覚ますでしょう」

年配の男性医師がそう言って笑顔を見せると青髪の少女が安心してようにほっと胸を撫で下ろす。

すると、年配のスーツ姿の白髪の男性が少女に尋ねた。

「お嬢様のお知り合いですか？」

「ええ、この子には命を助けてもらったの」

「そうですか。命の恩人でしたか……」

少女はゆつくりと頷くと、気を失っている星のおでこに手を置き優しく撫でる。

少女とスーツ姿の白髪の男性の顔を交互に見て、年配の男性医師が徐に口を開く。

「どうしますか？ もし良ければ、この病院で預かりますが……」

顔色を窺う様に少女に尋ねると、少女は首を横に振って力強く答え
た。

「いえ、この子は当家で預かります。大切な客人ですから」

「そうですか。伊勢家の方にはこの病院も多額の寄付を受けておりま
すから、何かありましたら遠慮なく言って下さいね」

少女は頷くと徐に立ち上がり年配の男性医師に頭を下げる。すると、隣のスーツ姿の白髪の年配の男性も頭を下げてベッドに寝かされていた星を抱きかかえて診察室を後にする。

運命とは・・・3

星が目覚めると、見たことのない白い天井が広がっていて、体を包み込むような柔らかいマットレスと大きなクッションのような枕が置かれていた。

「……………ここは？ 天国……………？」

起き上がった星は自分の寝ていたキングサイズのベッドの上から部屋中を見渡したが、どう考えてもこんな高級な家具が並ぶ絵で見たお城みたいな部屋は知らない。

しかも、寝ていた時の格好は白の下着と真っ白なパンツだけの姿で、どう考えても昨日の黒に金の刺繍が入ったパーカーとぶかぶかの黒いズボンではなく、部屋を見渡しても昨日着ていた服はどこにもなかった。

「……………夢の世界に閉じ込められたのかもしれない。こんな場所知らないもん」

まだぼんやりとした目で自分の腕を見ると、星はその腕の皮を摘み上げてぎゅつと捻る。

「——いたッ!!」

直後。痛みにビクツと体が跳ねて瞼を強く瞑った。

そして再びゆっくりと瞼を開くが、風景は腕をつねる前と全く変わらなかった。

諦めたように瞼を再び閉じた星はそのまま後ろに向かって倒れ、ベッドに横たわって大きなため息を漏らして瞼を開き天井を見上げる。

「——はあー。夢なのに覚めない……………どうなってるんだろう。あの後、なにが起きたの？」

不安から眉をひそめた星は自分の眉間を指でそつとなぞって。

「間違いなく私は銃で撃たれた……………ううん。撃たれないはずがないんだ……………私は犯罪者で、昨日のローブの人はきつとゲーム内の誰か……………それかその家族の人——私を殺す理由はあるとしても、私を生かす理由がない……………」

独り言の様にブツブツと呟いていた星の宝石の様な綺麗な紫色の瞳が涙で輝く。

咄嗟に溢れそうになる涙を、腕を押し付けて止めると数回深く深呼吸をして口からゆっくりと息を吐いた。

「……泣いちやだめ。泣いちやだめだ……今の私はひとりなんだから、冷静にならなきゃ……冷静に、なって、頑張らなきゃ……」

無意識に口から出た『頑張る』という言葉に目頭が再び熱くなる。浅く息を繰り返し、溢れ出しそうになる涙を必死に抑えようとするが、今度はもう止められない。

「……わたしは、わたしは頑張ったはずなのに……頑張ったのに……どうしてこうなっちゃったの？ わたしはどうしたらよかったの？ もう、わからないよ……」

感情が高ぶって目頭が燃えるように熱い。しかし、いくら涙が流れてもその熱さが和らぐことはなく、逆に強くなるように感じる。いくら腕で目を押さえても意思とは関係なく溢れ出てくる。

それと同じく抑えられなくなった感情が津波の様に星の心の中を駆け巡っていた。

星にとっては人生で初めて触ったゲーム。右も左も分からない暗闇の中を必死にもがいて考え、努力し続けた。痛い思いや苦しい思いもたくさんした。何も分からず剣を渡され、強い副作用のあるその剣を使ってやっとの想いでゲームをクリアしたのだ。

しかし、そんな星の気持ちなど考えもせずに周りの関係ない人達は星のことを悪だと容赦なく断罪する——まだ小学生の女の子にその責任はあまりに重く、彼女の責任を追及する世論の声は星の心を容赦なく切り裂く。

一緒にいた唯一の支えだった九條もいなくなり、周りに自分を励ましてくれる存在はもう存在しない。学校に居場所を求めても、すぐに奪われてしまった。事件前に優しくしてくれた図書室の先生も自分を見放した……誰かに必死に手を伸ばしても、誰も星のその手を掴んでくれない。

誰も自分という存在を必要としてくれない中で、本を読んで現実逃

避しながら、なんとか保ってきた自我が昨日の出来事で完全に崩壊してしまった。

今の星を支配しているのは全てを失った悲しみと喪失感だけだ。涙となってそれが流れ落ちる度に、大事な何が零れ落ちていく気がする。だが、もういい……このまま、全身の水分が涙となって死んでも構わない。いや、その方が幸せなのだと自分に言い聞かせるように星は仰向けのまま泣き続けた。

しばらくは泣いていたが泣き疲れ眠ってしまった星はガチャッと部屋に入ってくる何者かの気配に気が付いて慌てて飛び起きる。

すると、ドアを開けて入ってきたのは長い青髪に青い瞳の学生服を着た少女だった。

星と少女は目を合わせると、時間が止まったように互いの顔を見ながら固まったまま動かない。

しばらくの静寂の後、星の泣いて腫れた瞼を見て、その沈黙を裂くように少女が瞳に涙を浮かべながら告げる。

「不安にさせてごめんなさいね。星ちゃん」

「……エミルさん？」

手を広げてにっこりと微笑んでいる彼女に星が半信半疑に尋ねると、彼女はゆっくりと頷いた。

それを見た星は慌ててベッドから降りて彼女の元に駆け寄る。

走ってきて自分の胸に飛び込んでくる星をしっかりと抱きしめる

エミル。

「エミルさん！ 私、なにも出来なくて！ もう。なにも……なにも分からなくて！」

泣きながらそう言って泣き出す星の頭を撫でながら、エミルは「大丈夫。よく頑張ったわね」と何度も優しい声でささやいた。

声を出して泣いている星の体を優しく包み込むように抱きしめるエミルは星が落ち着くのを待ってから、ベッドに座るようにと促した。

水色の水玉模様のパジャマに着替えた星がエミルに促されるままにベッドに腰を下ろし、星の顔を見てにっこりと微笑んで前を向くと

徐に口を開いた。

「——じつはね。現実世界に戻ってからずっと、探してたのよ？　でも、全然貴女の情報が出てこなくて……そんな中、テレビではあの報道道でしょう？　私のお父さんとも話して何とか報道を止めさせようとしたんだけど駄目で。ネットでも色々やってみただけですけどそれも駄目——エリーとも通話で話して外交ルートからも色々してもらってる最中に、道路で倒れていた貴女を見つけたの」

「……道路。私はあの後——」

星が口を開こうとした直後、その口に指を押し当てて止める。

「——大丈夫。言わなくても、星ちゃんが頑張り屋さんなのは知ってるから。色々あって大変だったでしょ？　よく頑張ったわね——でも、もう大丈夫。これからは私が星ちゃんを守るから……」

「エミルさん……」

それを聞いて再び瞳を涙で輝かせる星の頭を優しくエミルが撫でると、星のお腹が大きな音を立てて鳴った。

慌ててお腹を押さえて見下ろすと、エミルは思い出した様に手を合わせ。

「ご飯をまだ食べてなかったし。さすがにお腹が空いたわよね！　いらっしやい星ちゃん。少し遅いけどお昼にしましょう！」

「はい！」

嬉しそうに頷いた廊下に出ると、物語に出てくる様な洋館で床には赤いカーペットが敷かれ、メイド達が廊下を忙しく歩き廻っていた。

その光景を見た星が驚いた顔でエミルを見上げると、彼女は苦笑いを浮かべながら告げた。

「驚くわよね。こんな大きな屋敷だと……あの後、実家に呼び戻されて、私は小さい部屋の方が落ち着くんだけどね」

「そうなんですか？」

「そんなものよ」

そう言っって首を傾げる星の手を握ったエミルは再び歩き出した。

赤いカーペットが敷かれた長い廊下を歩いて屋敷の中央にある階段を降りると、一番端の部屋へ向かって歩き中に入るとそこには立派

な木製のテーブルが置かれ10人以上が座れるように装飾の施された椅子が一定の間隔で置かれていた。

運命とは・・・4

星がそれを見て驚いた様子でその場に立ち尽くしているのを見て
エミルは笑みを浮かべると、握っていた星の手を離して先に椅子に腰
掛けて星を呼んだ。

「ほら、早くいらっしやい」

「は、はいー」

エミルに呼ばれ我に返った星が小走りでもエミルの横に座った。

それを見たエミルはテーブルの上に置かれているベルを鳴らすと、
メイドが2人部屋に入ってくる。

「お嬢様お呼びですか？」

メイド服を着た彼女達はお辞儀をしながらエミルに尋ねた。

エミルは彼女達に「食事を持ってきて頂戴」と告げると、彼女達は
「承知しました」と答えて部屋を出ていく。

隣に座り少し緊張した様子の星を見て、エミルは優しい声で言っ
た。

「そんなに緊張しないで。これからこの家で一緒に暮らすんだから」

「——ツ!? そ、そんなの聞いてません！ 私はお家に帰らないとお
母さんが帰ってくるから……」

エミルの言葉に星が返すが、最後の方は肩をすぼめて弱々しい声に
なっていた。

それもそうだろう。星がアメリカから日本へ戻ってきた理由は母
親が生きていると信じてのことだ——九條が居なくなった今でも、そ
の心に変わりはない。いや、本当はもうその心も揺らいでいるのかも
しれない。だが、だからと言って一度張った我を曲げるわけにはいか
ないのだ。何故なら、星にとっての家族は母親しかいないのだから
……。

しかし、エミルは首を横に振って星の意志を否定する。それは星の
素性を調べる中で、星の母親が飛行機事故の被害者リストに入ってい
たのを確認していたからに他ならない。

彼女からしてみれば、誰も帰って来ない家に小学生の女の子1人を置いておくわけにはいかない。だが、妹を失った悲しみを知っているエミルには星の気持ちも良く分かっていた。誰でも自分の家族が突然いなくなればそれを認められないものだ。

「星ちゃんにはこの家で生活してもらおうわ。貴女のお母さんの事は、私の家の使用人が頻繁に星ちゃんの家に行つて確認するから心配しないで……」

「でも……」

なおも納得できないという表情をしている星の肩に手を置いて告げた。

「大丈夫！ 私に星ちゃんに嘘をついた事なんてないでしょ？」

星は考えながら小首を傾げている。それを見たエミルは苦笑いを浮かべている。そんなことをしていると、メイド達がお盆に乗せた料理を持ってきた。

お盆の上に乗ったスープとサラダを星とエミルの前に置いて下がっていった。

目の前に置かれたスープとサラダを見つめながら一切手を出そうとしない。まあ、星からしてみれば、たとえエミルの家とはいえ遠慮するのも無理はないだろう。

全く料理に手を付けない星を横目にエミルが最初に料理を食べ始め「星ちゃんも遠慮しなくていいからね」と言つて食べ進めていく。それを見た星も遠慮しながらもゆっくりとスプーンに手を伸ばしてスープを掬うと口に運んだ。

前菜に持つてこられたサラダとスープを食べ終えた頃に、ライスと焼いた鶏肉の切り身にソースがかけられたものが運ばれてきた。

テーブルに置かれた焼かれた鶏肉の切り身を口に運ぶと星は目を見開いて手で口を覆う。口の中に入れた鶏肉は香ばしく口に含んだ直後、柔らかくて歯で軽く触るだけで崩れるほどだ。肉だけではなくソースも甘酸っぱくそれであつてコクもあり、子供の星が食べても美味しく感じた。もう、このソースだけでもご飯を食べられそうな代物だ。

あつという間に食べてしまった星の空の皿を見て、エミルが再びメイドを呼ぶともう一度同じ物を持ってくるように言った。メイドは「分かりました」とお辞儀をして再び部屋を出ていく。

星はその様子を見ていて、エミルがおかわりを頼んだのだと思い首を傾げた。何故なら、まだエミルの皿の上には残っていたからだ。

それからしばらくして再びメイドが戻ってきて星の前にさっきの料理が置かれ、星は首を傾げながらエミルの顔を見上げた。

見上げる星にエミルが微笑みながら言った。

「まだ食べれるでしょ？　ずっと食べてなかったんだからいっぱい食べなさい」

「はい」

少し遠慮しながらも、星は目の前に置かれた料理に手を付けた。

食事を終えた星は満足そうにお腹を撫でていると、エミルが星の顔を見て話しかけてくる。

「お腹もいっぱいになったし。一緒に星ちゃんのお家に行きましょうか！　荷物を取りに行かないといけないでしょ？」

「はいー」

星は力強く頷くと、座っていた椅子から立ち上がった。

だが、エミルは落ち着いた様子で椅子に腰掛けたままテーブルに置かれたベルを鳴らしてメイド達を呼んだ。

「食後の紅茶を貰える？　星ちゃんはココアとかにする？」

「エミルさん。私の家に行くんじゃない？」

困惑した様子でエミルを見ていた星に微笑むと。

「食べてすぐに動くのは体に悪いわ。車を準備するにも時間が掛かるし。それに、お家は逃げないでしょ？」

「……た、確かにそうですね……」

少し納得できないといった表情で眉を寄せている。だが、仕方なく椅子に座って少し膨れっ面をしている星を見てエミルも堪らず苦笑いを浮かべた。

しばらくしてメイド達が紅茶とミルクココアを持ってきた。星は運ばれてきたカップを見て思わず声を漏らした。

運ばれてきたカップやミルクと角砂糖を入れておく容器には細かな装飾が施されており、それだけで美術館や博物館に展示されていてもおかしくない代物だ。そんな高級な入れ物に入っているミルクココアを見下ろし、綺麗な美術品に口を付けて汚してしまうのをためらうように、なかなかカップに手を伸ばせないでいる星とは対照的に、エミルはなにも気にしていない様子で角砂糖を入れて紅茶を飲んでいる。

その様子を見てみると、やはりエミルは別世界の人間のような気がして困惑してしまう。

目の前に置かれているミルクココアの入ったカップを見つめたまま緊張した様子で体を強張らせている星に気が付き、飲んでいた紅茶のカップを置いてエミルが言った。

「どうしたの？ 早く飲まないと冷めちゃうわよ？」

「——いえ、その……こんな高そうな入れ物を見たことなくて……汚しちゃ悪いと思って……」

緊張し小さな声で途切れにそう言った星にエミルは笑うと。

「なに言ってるの。これからうちの子になるんだから、そんなことで気を遣ってたら後が大変よ？ ほら、冷めないうちに早く飲んじやいなさい」

「……………」

そう言って笑うエミルにせめてもの抵抗とフグの様に頬を膨らませ無言のまま手に取ったカップに口を付けた。

食後のティータイムを取って落ち着いていた星とエミルの元に手に白い手袋をはめスーツ姿の白髪に白髭を生やした年老いた男性がやってきた。

「お嬢様、車の準備が整いました」

胸の前に手を当て畏まって頭を下げているその男性にエミルが言った。

「ご苦労様小林。先に車で待っていて頂戴、私達もすぐに行くから」

それを聞いた男性は「かしこまりました」と言って部屋を後にする。

その後、エミルが星の顔を覗き込んでにつこりと微笑んだ。

「さて、それじゃ星ちゃんも準備しましょうか！」

「……はい？」

首を傾げる星に悪戯な笑みを浮かべたエミルが星の手を引いて自分の部屋へと連れていく。

エミルの部屋に入ると彼女はクローゼットを開けて奥から密閉された箱を取り出す。

プラスチック製のケースの上の蓋は端にダイヤルの様な突起と、ベコツとへっこんでいる以外はなんの変哲もないただの箱だ。

運命とは・・・5

エミルが箱の端に付いたダイヤルを回すと、プシュツと缶を開けた時のような音がして、今までへっこんでいた蓋が真っ直ぐに戻る。すると、中から子供服が次々と出てきた。だが、それを見た星は眉をひそめながら難しそうな顔をしている。

エミルの昔着ていた服なのだろうが、その全てがフリルの付いたスカートなどでズボンがひとつも入っていないからだ。しかも、その殆どがパステルカラーでピンクや水色、黄色などのいわゆる可愛い系の服ばかりで星の普段着ている黒や茶色、グレーなどは一切含まれていなかった。

正直、これならば昨日着ていた黒に金の装飾が施されただぼだぼの服の方が数段マシとまで思えるくらいだった。

今着ている青い水玉模様のパジャマを見下ろし、服を選んでいるエミルを尻目に星はゆっくりと後退りその場を離れようと考えた。

(今のうちになら……)

うきうきで服を選んでいるエミルから視線を逸らして身を翻した直後、後ろから声が響く。

「どこに行くのかしらっ？」

それに気付いていたエミルに声を掛けられ、驚きビクツと体を震わせてびどうだにできなくなる。

恐る恐るエミルの方を振り返ると、にっこりと微笑んでいる彼女の姿があった。その手にはピンク色のフリルの付いたワンピースが握られていた。

星はそれを見て諦めたようにため息を漏らしてゆっくりエミルの方へと歩いていくと、着ていた服を脱ぎ始めた。服を脱ぎ終わると、エミルの持つていた服を受け取ってそれに着替えていく。

着替え終わった星が恥ずかしそうに手を体の前で重ねながら「どうですか？」と頬を赤く染めて尋ねた。

その姿を見たエミルは星の周りを一周しながら舐めるように隅々まで見る。

「やっぱり黒髪ロングにピンクは映えるわねえ。星ちゃんの清楚な感じが際立つわ——でも、ちよつと目立ちすぎるかしら……」

それから複数回服を取り替えた結果、首元と腰の辺りにフリルのあしらわれた白のワンピースに決まった。

着替えた後、星はすぐにエミルの手を引いて部屋を出た。

「早くしないと、お母さんが帰ってきてくるかもしれない！」

「ま、待って。車で行けばすぐだから……」

そう星に言ったのだが、彼女は歩みを止めることなく走っていく。そんな星にエミルは苦笑いを浮かべながらも、内心ではほつとしていた。

家にきてからの星は遠慮してばかりで、全く自分の意思で行動することをしなかった。そんな星が自家に行く目的とはいえ、自分の意思で行動してくれているのは嬉しい。

星に引つ張られる形でエミルが外に出ると、玄関の前で先程の白髪の男性が黒塗りの高級車を白い羽の付いた棒で磨いていた。

「ごめんなさい。待たせてしまったわね」

「いえ、私はこれが仕事です。またお嬢様をお送りできて嬉しく思っております」

そう言つて笑う彼とエミルを見て星は少し表情を曇らせる。そんな星の様子を察した白髪の男性が微笑みながら軽く会釈をした。

彼はその後、車の後部座席のドアを開けて中に向かって手を広げた。エミルは慣れた様子で車の中に乗り込むと外で立っている星へと手を差し伸べる。

星はゆっくり手を伸ばしてエミルの手を掴むと車の中へ入つていった。それを確認すると、白髪の男性がドアをそつと閉めた。その後、運転席に乗り込み車を発車させた。

白髪のスーツ姿の男性に住所を知らせて走る車の中から外の風景を眺めていると、横の席に座っていたエミルがその星の頬を指でそつと突いてきた。

驚き、彼女の方を振り向いた星に、エミルが頬を膨らませながら言つた。

「せっかく一緒に乗ってるのに外ばかり見てるなんてひどいわ」

「い、いえそんなつもりじゃ……」

拗ねたようにいうエミルに星が慌てて手をバタつかせて否定すると、それを見たエミルが笑う。

「冗談よ。別にそんなに気にしていないから気にしないで。……でも寂しいと思ったのは本当よ」

「……ごめんなさい」

「いいのよ。少し話をしましょうか！」

表情を明るくさせてそう提案したエミルに星も深く頷いた。

少し考えるような素振りを見せた彼女は、思い付いたように星の顔を見て尋ねる。

「そういえば、星ちゃんの将来の夢ってなに？」

「将来の夢ですか……」

エミルに聞かれ、今度は星の方が考えるように顎に手を当てている。

その後、しばらく考えていた星が徐に口を開く。

「——私の夢はみんなが幸せになれる事かな……」

星のその返答を聞いた直後、エミルは瞳を潤ませながら抱きついてきた。

彼女の突然の行動に驚き目を丸くさせる。だが、すぐに抱きついてきたエミルの体を抱きしめ返す。

ここ数日一人でいた星にとって、ほどよい体温を感じられる人肌はとても心が安らぐ気がする……。

その直後、星の頭をエミルの手が優しく撫でた。

「星ちゃんは本当にいい子ねえ……」

「い、いえ。いい子なんかじゃ……」

エミルは星から離れると、唸りながらなにかを考え込んでいる。その様子を星は不思議そうに見つめていると、なにかに気が付いたようにポンと手の平を打った彼女が徐に口を開いた。

「——それだと、大人になってからの夢はナースさんとかかな？」

「はい？」

唐突にエミルの口から出た言葉に星はきよとんとしながら首を傾げている。

きよとんとした顔をしている星を他所にエミルが言葉を続けた。

「でも、ナースさんなら白衣の天使よね。黒髪に真っ白なナース服もいいし、淡いピンクのナース服もいいわね。ああ、でも青系の服もきつとかわいいわね。でもやっぱり天使だからふわふわの天使服も着てほしいし、そんな星ちゃんをみたら私本当に天に召されちゃいそう……でも、でもそれでも我が人生には一片の悔いもないわ……でも、それだと星ちゃんの天使姿を二度と拝めなくなるから困るわね——」

「……………」

一人で喋り続けているエミルを放置して、星は再び車の窓から外の景色を眺める。

星が見ているその窓からは、どこまでも続く海が日の光を浴びてキラキラと水面を反射させ、その上をカモメ達が仲良さそうに群れをなして飛んでいた。

しばらく車を走らせていると、星の見覚えのない場所が車のドアから次々に流れていく。すると、大きなマンションが見えた場所で車が突然止まった。

「到着致しました」

車を運転していた白髪の男性がそう言って後ろを振り返る。だが、星はこんな場所に全く見覚えがない。

「さあ、降りましょう」

外から先に車から降りた白髪の男性がドアをゆつくりと開けると、エミルが星の手を取って降りようとする。しかし、星は彼女の手を引き返した。

「……待って下さい。ここはどこですか？」

「え？ どこって、貴女の家じゃない」

「——ここは知りません。私の家はここじゃないです」

星のその言葉を聞いたエミルは困惑した様子で首を傾げていたが、自分よりも何倍も困惑し不安な表情をしていた星を見てゆつくりと

頷いた。

「——ごめんなさいね。この車のナビが壊れてて間違えてここに来ちゃったみたいなの。そうよね小林」

「はい。私の不徳の致すところで、どうやら車の整備に見落としがあつたようです。今後は対策を考えなければいけません。大変申し訳ございません」

頭を下げて謝る白髪の男性に星は慌てふためき「気にしないで下さい」と言つて逆に頭を下げた。

エミルは星の肩に手を乗せると、優しい声で言った。

「そういうことだから、助手席に乗つて小林に道案内してあげてちょうだい」

「星お嬢様。よろしくお願い致します」

「はい」

頷いた星は車助手席の方に白髪の男性に導かれて歩いていくと、白髪の男性が助手席側のドアを開くのを見て車に乗り込んだ。エミルもそれを見てすぐに車に乗り込むと、それを確認して車を発車させる。

星が道案内をして数時間の走行の上で到着した。

夢の国へ

車から降りた星は自分の住むマンションを前にして感慨深げにそれを見上げている。そんな星の肩に手を乗せたエミルがにつこりと微笑むと、星にマンションの入り口へと向かうようにと促した。

通り慣れたマンションのエントランスを通り抜けて自分の家のある階へとエレベーターで進んでいく。

目的の階に到着し、エレベーターから降りて自分の家の前まで来ると、不思議な緊張感が周囲に走る。

そういえば、星が自分の家に人を連れて来るのは初めてのことだ。頭の中では家の中が散らかっていなかったか、散らかっていなかったとしてもメイド達が忙しく屋敷の中を埃一つないように綺麗にしているエミルの家には敵わない。そんな家の中を見たエミルはどう思うだろうか……。

そんな心配が頭を過る。不安な心が星を支配し、なかなか家のドアを開けるまでいかない。

家の前で立ったまま、微動だにしない星を見ていたエミルが心配したような声で話し掛けてくる。

「どうしたの？」

「——ッ!!」

その声で我に返った星がハツとして思い出したように自分のズボンのポケットに手を伸ばした。しかし、伸ばした手に触れたのは馴染みのない生地の間違った感覚だった。

そう。その時、星はエミルから借りた服を着ていることに気が付いたのだ——。

(鍵が……鍵がない!?)

星は焦った様に着ていた服に付いていたポケットに手を突っ込んだり首筋を手で探ったりしながら鍵を探した。

ここまできて鍵がなくて家に入れないなんて言えるはずがない。顔を青ざめさせた星の背筋を今までの人生で味わったことのない悪寒が走った。

そんな時、後ろからエミルが星の肩をポンと軽く叩くと、ビクツと体を震わせて恐る恐る振り返る。

「鍵を開けるからちよつと下がっていてももらえる？」

「え？ は、はい……」

驚き素早くその場から離れてエミルの後ろの方に駆けていく。

星が自分の後ろにきたことを確認したエミルはドアの鍵穴に鍵を差し込み、後ろにいた星に「開けるわよ？」と許可を取って開けた。

少しずつ開くドアを見つめ、ドキドキと高鳴っていく胸元を押さえながら生唾を飲み込んだ。

家の中に母親が帰ってきているかもしれないという期待からくるものかもしれない……。

家のドアが開いたが、中には誰もいない。どうやら、母親も九條も帰ってはきていないようで、家の中は星が出た時のまま、何一つ変わっていないかった。

それを見た星はがっかりしたように肩を落とすと、家の中へと入っていく。そんな彼女に続くように、エミルと白髪の男性も家に入った。

だが、エミル達が入ったのは玄関までで、星に荷物をまとめるように言うと、白髪の男性がどこかに連絡を入れた。

星はエミルに促されるままに自分の部屋に行くと思わず表情がやわらいだ。

「……ただいま」

部屋にきてやっと自分の家に帰ってきたんだと実感が湧きはじめてきた。

普段から使っている自分の机を撫でて微笑みを浮かべた。

その後、用意したりユツクの中に本などを詰めていく、そこには九條からもらった封を開けていないラッピングされた包み紙も一緒に入れた。しかし、教科書やノートなどはそこには含まれていない。

学校での出来事もあったが、なによりも教科書やノートに書かれた落書きや悪口などをエミルに見られて心配をさせるのが嫌だったからだ――。

部屋を出た星はリビングへと向かって母親が持っていた自分が写っていない写真が入っている写真立てをリュックに入れて玄関で待っていたエミル達の元へと走って帰る。

エミルは笑顔で星を迎えると、玄関のドアを開けた。

「さて、それじゃ行きましようか」

「……え？ もうですか？」

首を傾げてそう言った星にエミルが頷く。

「ええ、荷物を取りにくるのが目的だったし。後は星ちゃんのお母さんが、いつ帰ってきてでもいいように使用人を向かわせているから」
「使用人……」

星は不思議そうな顔でぼーっとエミルを見ていた。

まあ、それも無理はない。普段、使用人なんて言葉を聞いたりしない上に、エミルがとんでもないお嬢様であるのは屋敷や専属の執事がいることから疑う余地などないが。星には、まだそれが現実か夢なのかの区別がつかないでいる。

夢か現実か分からず混乱している星の手を引くと、家の中から出たエミルは急ぎ足で外に停めてある車へと戻った。

星のリュック降ろさせて持ったエミルは予想外の重さに地面に落としそうになったが、リュックの底が地面に触れる寸前で引き戻す。

「おつもツ!! いったい何を入れてきたの!?!」

「本です」

「なるほどね。この中に本がいっぱい入ってるわけね」

リュックが重い理由を理解したエミルは車のトランクにリュックを詰めると、頷き「よし!」と叫んで星を車に押し込んでその隣に座ると、前のめりになって運転席に乗り込んだ白髪の男性に尋ねる。

「小林。ここから千葉までどのくらいまで掛かる?」

「ここからだと約1時間弱と言ったところですね」

「そう。出来るだけ急いで頂戴」

「はい」

運転席にしつかりと座りシートベルトを締める白髪の男性を確認したエミルも座席にしつかりと座ってシートベルトを締めた。それ

を見た星も同じくシートベルトを締めた。

車が発車して1時間。すっかり暗くなつてから車が到着した場所は人で溢れかえっている。

車から降りた星とエミルが人でごった返していた長い通路を進んで行くと、大きなゲートが見えてきてその先にはライトアップされた巨大なお城が見えていた。

エミルに手を引かれていた星がその光景を見て口を開けていると、隣に立っていたエミルが告げた。

「星ちゃんは遊園地に行くの初めてでしょ？ それに、こつちに戻ってきてから色々あつて気が休まる暇も無かつただろうし。だから、今日は貴女をどうしても遊園地に連れてきたかつたの」

「……エミルさん」

そんなエミルの言葉を聞いた星の瞳には微かに涙が浮かんでいた。瞳を潤ませている星の頭を優しく撫でると、にっこりと微笑んだ。

2人はゲート近くにいる衣装を着た従業員の所に行くと、エミルが財布から金色のカードを取り出す。

取り出した金色のカードを見た従業員は慌てた様子で頭を下げると、急いでゲート横の部屋へと駆け込んでいく。すると、すぐにスーツ姿の中肉中背の中年男性が先程の従業員と共にエミルと星の元に戻ってきた。

「お待たせして申し訳ありません。VIPパスポートのお客様、ようこそお越し下さいました。私が本日の園内を案内させて頂きます橋本と申します」

丁寧にエミル達に頭を下げたスーツを着た男性。頭を下げるその男性に、エミルが言葉を返した。

「いえ、案内は結構よ。以前にも何度かきているから」

「そうでしたか。でしたらごゆっくりお楽しみ下さい。何かご用がございましたら、こちらの端末をご利用下さい」

スーツ姿の男性はもう一人の従業員が持っていた腕時計型のデジタル端末を受け取り、それをエミルと星に手渡した。

「こちらの端末にはGPSと通信機能、アトラクションのVIP優先

権の登録がされており。ストレスなくお客様にご遊園を楽しんで頂けるようになっております。通常のトイレも本来ならば混雑しますので、近くのスタッフにお声がけ頂ければ専用のトイレにご案内できますし、お客様がもし離れ離れになったとしても、端末で園内のマップを表示、GPSによる互いの現在地表示で見つける事ができます。夜間の遊園ですので、お気を付けて行ってらっしゃいませ」

2人が腕にデジタル端末を巻いたのを確認して、スーツ姿の男性が誰も並んでいないゲートの方に手を向けて言った。

星の手を取ったエミルがにっこりと笑って。

「行きましょうー！」

「はいー！」

わくわくしながら頻りに体を揺らしていた星も大きく頷いてエミルの手を握り返すと隣をゆつくりと歩いていく。

夢の国へ2

ゲートを通り抜けた先は、星が予想していた以上に異世界の様な光景が広がっていた。目に映る全てが輝いていて、至る場所がライトアップされた遊園地はまるで映画のワンシーンを見ているようだった。

星の人生で遊園地は初めて——テレビなどでは見たことがあるものの。それはあくまでもカメラ越しでの話であり、今の星はそれを実際に自分の視界の届く範囲で見ているのだ。その迫力はまるでVR MMORPG【FREEDOM】の中と同じファンタジー系のゲームのように星の瞳には映っていた。

ぼんやりと目の前に広がるまるでファンタジーのような光景を見つめていた星に、エミルが優しく声をかける。

「星ちゃん。まだ入り口を潜っただけよ……今日はいっぱい遊びましょう。好きなところに行っていよいよ、私は後を付いていくから……」

「好きなところに行っていいいんですか!」

嬉しそうにそう言って表情を明るくさせた星は、周囲をきよろきよろと見渡したかと思うと、エミルの手を引いて急ぎ足で歩き出す。

エミルに「好きなところに行つていい」と言われたことで、星は感情のおもむくまま興味がある場所へと向かった。なんと行つても遊園地に来たのは生まれて初めての彼女だ。全てのアトラクションに乗つてみたいし、遊園地内にある目に入る全てに興味深々だろう。

ゲートを抜けてお城の方へと向かって行くと西洋風の建物が立ち並ぶ場所へとやってきた。多くの人でごった返している中、その多くの人がキャラクターの書かれた大きな荷物を手にしていてゲートの方へと歩いている。

その様子から察するに、西洋風の建物が立ち並ぶこの場所はお土産などが売られているのだろう。星も興味があったが、人が多くて建物の中になにかあるのかまでは確認できない。

しかし、隣を歩いていたエミルが言った。

「ここらへんはグッズとかお土産を買うエリアだから最後でいいわ。アトラクションはもつと奥にあるから……」

エミルはこの遊園地に来るのが初めてではない為、園内の配置に詳しいのだろう。だが、それが星には心強く感じた。

人込みを掻い潜ってエミルと星は手を握りながら園内をゆつくりと進んでいたが、星はなかなか乗るアトラクションを決められずにいた。

まあ、それも無理はない。長い行列ができているアトラクションばかりで、いくら並ばなくても乗れると聞いていても。彼女の性格上、どうしても先に並んでいた人達を追い抜いて先にアトラクションに乗ってしまうということに遠慮してしまうのだろう。

なかなか決められないでいる星に、エミルが助け舟を出すように徐々に口を開いた。

「——なかなか何に乗りたいか決められないなら、私が乗りたいのに乗ってもいい？」

「は、はい。いいですよ？」

星がそう言った直後、エミルは慣れているのか人込みの中を迷うことなく星の手を引いて歩いていく。

エミルは星の性格を知っている。星ならどんなにいいと言われても、自分の意思で並んでいる列に割って入ろうとはしない。

それをエミルはゲーム内で二カ月もの月日の中、互いに同じ屋根の下で生活することで理解していた。だからこそ、エミルが先導することで星が少しでも罪悪感がなく列に割り込むことができると考えてのことだろう……それに、星は強要されればNOと言い難いのも分かったのだ。

はぐれないように星の手をしっかりと掴んだまま、エミルが向かったのは大きな看板の付いた建物で三角の屋根がオレンジ色の暖かい電球でライトアップされた外観は、まるでサーカスのテントを思わせる。

相当人気なアトラクションらしく、外には長い行列が続いている。そんな中、エミルに手を引かれた星は、行列の横の優先エリアを通っ

て先に立っていたサーカス団風の衣装を着た従業員の前まで行くと、腕に巻かれたブレスレット型の端末を見せた。

従業員は特殊な機械を手に持ちそれをブレスレットにかざすと、少し驚いた様子でたじろぎすぐにエミルと星をアトラクション施設の中へと案内する。

中に入るとまだ途中ということで別室に通され待ち時間の出るパネルの前にあるソファアーへと座った。すると、従業員が近くに置かれていた冷蔵庫から冷たいジュースとお菓子を出し、それをエミルと星が座るソファアの前に置かれたテーブルに置いて軽くお辞儀をして部屋を出ていった。

エミルは出されたジュースとお菓子を食べ始めている。星はその様子を眺めながら、初めて遊園地のアトラクションに乗る緊張でドキドキが治らなくて正直、今はお菓子が喉を通らないだろう。

緊張した表情で隣に座っている星に声をかけようとはしない。それは星が初めての遊園地で、初めてのアトラクションを体験するとう知っていて、この待っている間の心臓が張り裂けそうな緊張感さえ、いい思い出になると分かっているからに他ならない。

星が胸に手を当てて大きく深呼吸している姿を横目に見て、微かに微笑みを浮かべながらも、それを悟られないようにジュースを飲んでいた。

直後。部屋のドアをノックする音が聞こえてきた。

「準備ができましたのでお越し下さい」

ドア越しに呼ぶ声が聞こえ、エミルは隣に座っていた星に声を掛けた。

「行きましようか」

「は、はいー」

返事をしたその声は心なしか震えていた。

エミルは緊張で強張っている星の肩を抱いて歩き出すと、ゆっくりと歩きドアを開けた。部屋の外で待っていた従業員がお辞儀をする。「こちらです」と2人の前を歩いて案内する。

付いていった先には中央奥にワインレッドのカーテンの掛かった

部屋にきた。従業員に導かれるまま、エミルと星は最前列に連れてこられて椅子に座った。

しばらくの間待っていると、全体の照明が落とされてまるで映画館の様に辺りが暗くなり、星の緊張はMAXとなって体が強張り小刻みに震え出す。

それを横で見えていたエミルがそつと星の震えていた手を握って耳元でささやいた。

「私はずつと側に居るからね」

「……はい」

握られた手をぎゅつと握り返すと、星はエミルの顔を見上げて頷く。

視線を中央奥に掛かっているカーテンに移動させると、ゆつくりとカーテンが開いて巨大な画面が現れる。

画面に表示された映像の中でキャラクター達が元気に動き回り、まるで画面から飛び出してきているように見えた。手を伸ばせば掴めそうな距離で繰り広げられるキャラクター達の劇に星の瞳から戸惑いが消え、キラキラと輝かせながらそれを見ていた。星にとっては、生まれて初めて見る遊園地でのアトラクションなのだから無理もない。

瞳を輝かせている星を見つめながらエミルは満足そうな微笑みを浮かべていた……。

夢の国へ3

アトラクションが終わると、列に並んで従業員の指示に従って順番に外に出た。

外に出た星は少し残念そうな顔をして小さくため息を漏らす。

アトラクションが終わると、まるで夢でも覚めたかのように現実世界に引き戻される感覚に襲われる。楽しい時間は一瞬で過ぎ去り、残るのはその高揚感となんとも言えない喪失感が心の中でせめぎ合つてモヤモヤとした気持ちになつていた。

少し悲しそうな顔をしていたエミルがそれを察したのかすぐに近くのアトラクションを指差した。

彼女が指差した先にはぐるぐると馬の模型が流れているアトラクションが見えた。しかも、ライトアップされている為にキラキラと光り輝きとても綺麗でファンタジーが好きな星にはとても魅力的に見えた。

「乗りたいです！」

指差しているエミルにすぐに返事をして回転する白い木馬の方へ走って行った。

今までに見たことがない活発に動く星に微笑んだエミルもすぐに星を追いかけて走り出す。

列の最前列に並び、輝く瞳で待っている星は待ち切れないのか、爪先に力を込めてかかとを上下させ、そわそわして落ち着かない様子だ。その様子から見て、もう木馬に乗るのが楽しみで仕方がないのだろう。

前に乗っていた人達が続々と出てくるのを待って、係員の誘導のもとで白い木馬に跨がると目の前の棒を掴む。すぐ隣の木馬にエミルも乗って星と視線を合わせて互いに微笑み合った。

それから少し経ってブザーの音が鳴り響くと、木馬がゆっくりと動き始め、加速しながら上下に動きながら回っていく。

乗り物のアトラクションに乗るのも星は初めてなのだが、それ以上に自分がメリーゴーランドというものに乗っているという事実が、星

には夢のような出来事で乗っている今でも、まだ自分が乗っているのか理解できてはいない。ただ、これがもしも現実ではなかったとしても遊園地でアトラクションに乗ることができて星は幸せだった。

だが、幸せな時間はあつという間に過ぎてしまうもので……。

動いていた白い木馬はゆっくりと止まり。終わりを告げるアナウンスが流れて周りの人達もゆっくりと木馬から降りて出口に向かって列をなして歩いて行く。

その中を星とエミルも混ざって歩いて出口から出ると、星は名残惜しそうにメリーゴーランドの方を振り返った。

それを横目に見たエミルは星の手を取って近くのカフェに行くと、エミルは「ちよつと待ってて」と言い残して近くにいた従業員の方へ駆けて行く。

星は従業員と何やら話をしているエミルを見つめていると、すぐにエミルが走って戻ってきた。

「ごめんなさい。待たせちゃって」

「いえ、全然待っていないので」

息を切らせて言ったエミルに星が微笑み返すと。

「何か注文して来るから……なにか食べたいものか飲みたいものがある？」

「なんでも大丈夫です」

「そう。なら、ちよつと待っててね」

今度は注文を取る為に置かれた大きなモニター付きの販売機の方へ走って行くと、モニターの近くで腕に巻いた時計型のデバイスを操作した。エミルの前に緑色の光で作られた仮想モニターが表示され、彼女は慣れた様子で腕にはめられたモニターをタッチして操作している。すると、しばらくしてエミルが少し早足で人込みを縫うように歩いて星の元へと戻ってきた。

椅子に腰掛けたエミルは小さなため息を漏らし、丸いテーブルに肘を突いたまま不満を口にした。

「このデバイスで何でも操作するのって楽そうで結構面倒よね。直接メニューを口に出して店員伝えた方が何倍も楽だわ……しかも、混雑

している場所だと電波が混在するから受信側の端末の近くで使わないといけないし。楽を求めて逆に面倒になるってどうなのかしら――星ちゃんもそう思うでしょ?」

「私はよく分からないので……」

そう言った星に苦笑いを浮かべた。

しばらくアトラクションの感想、次に乗りたいアトラクションの話などをしていると、腕にはめたデバイスから音が鳴ってエミルが立ち上がって再び人込みの中に消えて行く。しばらくして、次に彼女の姿が現れた時にはその手にお盆を持っていた。

「持ってきたわよ。さあ、食べましょうか!」

テーブルに置かれたお盆の上には生クリームとメイプルシロップが掛かっているキャラクターを象ったパンケーキが乗っている。その横には温かいココアと紅茶の入ったキャラクターが描かれたプラスチックの蓋をされたカップが置かれていた。

エミルが星の方へパンケーキの乗った皿を差し出すと、星もそれを受け取って自分の前に置く。しかし、ナイフとフォークを持った星がなかなかパンケーキに手を付けないのを見たエミルは星の隣に移動して、ナイフとフォークで素早くキャラクターの書かれたパンケーキを切り分けて一口大に切ったパンケーキをフォークで刺して星の口元に運んだ。

「あつたかいうちに食べないと美味しくなくなるわよ? 星ちゃんのことだから、きつと食べるのが勿体ないとか考えてたんでしょ。ほら、あーん」

「……あ、あーん」

少し申し訳なさそうな顔をしながらも開けた星の口の中にパンケーキを押し込むともぐもぐと口を動かして飲み込んだのを見計らって「どう? おいしい?」と尋ねると、星はにっこりと微笑んで。「はい。すごくおいしいです」

と頷くと、エミルが再びパンケーキを星に食べさせる。

少し恥ずかしそう口を開けてエミルに差し出されたフォークからパンケーキを食べた。

2人がパンケーキを食べ終えて、星はココア、エミルは紅茶を飲んで一息ついていると、エミル達の方に従業員が歩いて来るのが見えた。

星が不思議そうに首を傾げる中、エミルは分かっていたかのように椅子から立ち上がり従業員の方へと自分から歩いて行く。

エミルは向かってきた従業員と少し話をする、星に向かつてエミルが告げた。

「この後、キャラクター達のパレードがあるの。一番いい場所を予約してもらったから、今からその場所に案内してくれるって」

「……パレード？」

小首を傾げながら返した星はパレードという聞きなれない単語に戸惑っているように見えた。

しかし、そんな星の手を引いたエミルが「急がないと始まつちゃうわよ」と星を連れて従業員に付いていく。

従業員に付いていった先には地上から少し高い場所に用意された小部屋の様な施設へと通され、ふわふわのソファの様な高級な椅子に座る。

隣に座ったエミルが「楽しみにしてていいわよ。このパレードは大人気だから」と耳元でささやくと、しばらく高級な椅子に腰掛けて待っている、と遠くから歓声が上がると音が聞こえてきた。

星が遠くを見るとゆっくりと向かってくる光り輝く舞台が見えた。舞台には大量の電飾が付いており、様々な色に変わって暗くなった辺りを照らす。舞台の上ではキャラクターや人間達が活発に動き回り、移動する舞台の上からパレードを盛り上げている。

物語の様々なストーリーに基づいた舞台が音楽と共に目の前をゆっくりと通り過ぎて行く姿は、まさに絵本から飛び出した様に見える、暗闇の中で形を自在に変える電飾はまるで魔法の世界を覗いているようだった……。

その光景を星はキラキラと輝いた瞳で見つめていて、終始椅子から立ち上がったままでガラス越しから見える全ての光景を目に焼き付けるように瞬き一つしていない。

今の星にはどんなに声を掛けようと聞こえないだろう……自分の人生で初めての経験を数多く体験した星は、この瞬間も夢を見ていると錯覚するほどで、夢でもいいから少しでも長くこの夢を見ていたいと思っている。エミルもそれを察しているのか、パレードを見るのに集中している星に声を掛けるといふ野暮なことは決してしない。

パレードが終わるまで真剣そのもので見入っている星の横顔を見ていたエミルは優しい笑みを浮かべながら見つめていた。

夢の国へ4

名残惜しそうにパレードで去っていったキャラクター達の後ろ姿を見つめていた星にエミルが声を掛ける。

「さて、パレードも終わつたし次のアトラクションに乗りに行きましようか！」

「——はい！」

大きく頷いた星はエミルの後に続いて行く。

次に向かったのは大きな本の様なオブジェのある建物だった。そこにはハチミツ好きなクマが描かれていて、どうやらそのクマが木の上のハチミツを取りに行くと言う内容らしい……。

アトラクションの中に入ると、目の前にハチミツの入った瓶を模した乗り物が止まっていて、それに乗る様にと従業員に指示された。

だが、星はあまり乗り気ではなかった。その理由は薄暗い館内にあった——さつきは外で視界が開けた状態だったが、今回のアトラクションは違う。薄暗い中、行き先が分からない上に乗り物に乗ってしまったら、もうなされるがままになってしまう。

今日が初めての遊園地の星にとって、なにも分からない状態で乗り物に乗るのはさすがに怖い。

乗った行き先もそうだが、今から乗ろうとしているこの乗り物がどれくらい速度が出るのかさえ分からないのだ。

乗ることに躊躇して後退る星の体を後ろにいたエミルが受け止め、星の腰に手を当てたエミルの顔を見上げた星の紫色の瞳は慣れない雰囲気には怯えている様子で、その体は微かに震えていた。

「大丈夫。そんなに怖がらなくても、私も乗った事あるけど大したことはないわ。もし怖かったら私の手を握ってていいから」

「……はい」

その言葉を聞いた星は静かに頷くと、エミルが腰に手を当てたまま星を乗り物へと導いていく。

乗り物に乗った直後、目の前の扉が開いてアトラクションが動き出すと、咄嗟に星がエミルの手を握る。薄暗い部屋から突然広がる明る

いファンタジーの世界が星の目の前に広がっていた。

進んでいく中で繰り広げられるクマのキャラクターがハチミツを取りに行く物語を疑似体験できるファンタジーな世界観を、星は瞳をキラキラと輝かせながら見ていた。目に入る全ての物が星には新鮮で、とても大事なものに映っているのかもしれない……。

アトラクションは数分の間を終了し、乗り物から降りた星は興奮気味にエミルの顔を見上げながら言った。

「最後の方にハチミツの瓶からボアって煙が出てきましたよ！」

「そうね。あれはびっくりしたわね」

「また乗りましょう！ 私、また乗りたいです！」

相当あのアトラクションを気に入ったのか、星はエミルの手を引っ張っている。そんな普段は見れない星の子供らしい一面に、エミルも満足そうに笑みを浮かべながら「はいはい」と言われるがままに同じアトラクションに繰り返し乗った。

結局、3回も同じアトラクションに乗った。星は満足そうだが、エミルはさすがに飽きたのかその表情は硬かった。だが、星の興奮は収まっていないようでエミルの手を引いて走り出す。

「次はあれに乗ってみたいです！」

「え？ どれ——って、あれに乗るのっ!？」

驚いたエミルが星の指差す先にあったのは綺麗に装飾された大きなティーカップ型の乗り物がたくさんある場所だった。

一目散にその場所に向かって走っていき星に連れられて走るエミルは何故か楽しそうに見える。

それは星が楽しそうにしているからに他ならない。エミルの所に来た星は、まるで魂の抜け殻のようで暗くどんよりとした雰囲気だ。漂っていた。そんな彼女が、今は心から嬉しそうに駆け回っているのだ。それがエミルには嬉しかったし、この場所に星を連れて来て良かったと感じていた。

ティーカップの形をした乗り物に向かい合って乗った星とエミルは、中央に付いたハンドルを掴んで笑う。星もアトラクションに乗るのに慣れて余裕ができてきたのか、さつきまでの不安な表情を見せる

ことはなくなっていた。

乗っていたティーカップが動き出し、エミルが中央のハンドルを回すとティーカップがさつきよりも激しく回り出す。笑い声を上げながらハンドルを回しているエミルに負けじと星もハンドルを回転させ乗り物の回転を加速させている。

そしてアトラクションが終わりティーカップがゆっくりと止まると、先程まで軽快にハンドルを回して加速させていたエミルの顔が真っ青になったまま、よたよたと覚束ない足取りでアトラクションの外へと出た。

心配そうな顔でエミルの側を歩いて近くのベンチへと腰掛けた。

「大丈夫ですか？」

「……ええ、ちよつと気持ち悪くなっただけだから、少し休めば治るわ……」

ベンチに腰掛けて俯き加減にハンカチで口を押さえているエミルに星が素朴な疑問をぶつけてみた。

「エミルさんってドラゴンに乗って戦うから、乗り物酔いとかしないと思っていました」

「——まあ、ゲーム世界では肉体だけじゃなくて神経なんかも強化されてるから。現実の肉体や感覚だけじゃ、モンスター相手に数秒ともたないもの……」

「なるほど……」

星は納得したのか深く頷いた。

それから数分間にわたって無言の時間が流れた。エミルはまだ具合が悪いのだろう、口にハンカチを押し当てながらベンチの背凭れに体を委ねて目を瞑っている。

星もそれが分かっているからか、彼女に声を掛けず俯いていた。いや、理由はそれだけではない……。

エミルの隣に座っていた星はコクツ、コクツと今にも寝そうに首を動かしていた。

しかし、それも無理はないだろう。初めての遊園地ではしやぎ過ぎて完全に体力の限界は超えていた。ただ、興奮状態だったから今まで

は睡魔を抑え込めていただけで、こうしたゆっくりとできる時間があれば体は睡眠欲を優先して酷使した体を休めようとするのは生命として当たり前のことだ。

エミルの調子が良くなって隣に座っている星に話し掛けようと横を見ると、スヤスヤと寝息を立てている姿が目に入った。

眠っている星の顔を見てエミルは微笑むと、徐に立ち上がって電話を掛けた。それから数分後、スーツを着た白髪の男性が星のことを抱きかかえて運んでいく。

気持ち良さそうに眠っている星の顔を見下ろしてスーツ姿の白髪の男性が言う。

「お疲れになったのでしよう。それだけ、お嬢様と遊園地に来られたのが楽しかったという事でしようね」

「そうだといいのだけれど……」

少し表情を曇らせたエミルの顔を見て、スーツ姿の白髪の男性が優しい声で尋ねる。

「何かありましたか？」

「——ええ、アトラクションに乗って気分が悪くなってしまって、せつかくのこの子の遊ぶ時間を取ってしまったの……」

「はっはっ、なら訂正しなければなりませんね。本日はお嬢様も相楽しまれておられたようで何よりです」

「……………」

微笑みながらそう言ったスーツ姿の白髪の男性から顔を逸らして頬を赤く染めるエミル。

彼女にとっては彼に笑われたことが相当恥ずかしかったらしく。しばらくの沈黙の後、ため息を漏らしながらエミルが呟いた。

「はあ……また近いうちにこの子を連れてこなきゃね」

「いえ、それなら心配いりません。もうこの施設内で近くのホテルを予約しておきましたから」

「本当!? でも、この時期でもホテルの予約は満室じゃないの?」

「はい。ですが、あの方なら……」

「——ッ!？」

Emilは一度は驚いた表情を見せたが、すぐに頷いて表情を曇らせた。

「……そう。なるほどね」

「はい。お嬢様達がこちらの遊園地に来てしていると旦那様にお話ししたところ。明日、こちらに来られるとの事でした」

「まあ、お父様なら当然ね。後で連絡を入れるとお父様に伝えて頂戴」
「はい。かしこまりました」

硬い表情のまま予約したホテルまで徒歩で向かう。

星がEmilの家にいるということEmilの父親に知らせていた。ゲームから現実世界に戻ってEmilが星の事情を調べていた時、星の父親が事故で死亡、母親はゲームに閉じ込められてしばらくしてから飛行機事故で亡くなっていることを知った。そのことはEmilの父親も知っている。何故なら、その情報を仕入れる上でEmilの父親が一枚噛んでいたので。

Emilの父親はその時に星の意思次第では養子にすることを提案してきた。それはEmilがゲーム世界で星に助けられたことを話したからで、娘の命の恩人ならばという配慮もその心中にはあったのだろう……。

ホテルに着いたEmilは星をベッドに寝かせると、執事のスーツ姿の白髪の男性に星を任せてホテルのエントランスに行つて父親に電話を掛けた。

「もしもし。お父様？」

『おお愛海か。小林から聞いたと思うが。明日、あの子に会いに行こうと思つてね。そこで提案なんだが、あの子には私の事を父親だと紹介しないでほしいんだ』

「どうしてですか？」

『その方が後でサプライズになっていいじゃないか！』
「……………」

父親のその言葉にEmilが無言になると、通話先の父親が慌てた様子で言った。

『冗談だよ！ 冗談！』

「はあ……」

『まあ、新しい娘の顔を見たいのもあるけど、愛海の顔も見たいからね！……それに、彼女が本当に愛海の言っていた子かどうか確かめないとね』

「……………はい」

不安そうな表情を見せるエミル。

そんな彼女の声色からその心境を察したのか、父親は優しく諭すように告げる。

『心配はいらない。別にこれであの子を養子にする話を白紙にしようとしているわけではないよ。ただ、会って直接話を交わしてみなければ、分からない事が多いと言うだけのことだ……おっと、飛行機の準備が整ったようだ。愛海、明日の昼にはそっちに着けると思うけど、その時は私の事は父親ではなく親戚の叔父と彼女に紹介してくれ、それじゃ頼んだよ！』

そう言った父親は一方的に通話を切った。

「……………お父様も相変わらずだね。でも、星ちゃんにとっては明日は大変な一日になりそうね……………」

大きなため息を漏らしたエミルは、ホテルの外に出て夜空に浮かぶ月を見上げながらボソツと呟く。

夢の国へ5

ホテルの部屋に戻ると、スーツを着た白髪の男性が紅茶を入れて待っていた。

「おかえりなさいませ。旦那様とお話しして気疲れしたのではないですか？ ラベンダーには気分を落ち着かせてくれる効果があり、ノンカフェインですので就寝前に飲んでも大丈夫でございます」

「ありがとうございます。小林」

部屋に置かれた高級なテーブルの前に行くと、スーツを着た白髪の男性が椅子を引いてその椅子にエミルが腰掛ける。

テーブルに置かれたティーカップに手の伸ばし、中に注がれていたラベンダーの紅茶を飲むと、エミルは深いため息を漏らした。

「はあ……お父様は相変わらずだったわ。行動力がありすぎるのも考えものね……」

「——それが旦那様の良いところでございます。直接自分で話をしなければ、相手を理解する事はできません。直接会って言葉を交わす事で、友好的関係を築けるものです。旦那様はそれが分かっておりますから、旦那様との会話はお疲れになるのだと思いますよ？」

「……そうかしら？ でも、似た者同士なら普通は楽しくなるものじゃないの？」

紅茶を飲み干したエミルの空になったティーカップに温かい紅茶を注ぐ。

「それは相手の事を尊敬しているからでございます。御友人ならば、相手への配慮を第一に考えるでしょう。それは相手と良好な関係を維持したいと思うからです。しかし家族ならばまた違うものです」

「……ふーん。どう違うって言うの？」

「長年暮らしてきた家族だからこそ、なんの気兼ねもなく話せるのです。確かに旦那様も奥様もお忙しい為、なかなか御屋敷には戻られないでしょう。ですが、心の奥底にはいつも家族であるという感情があ

るのです。この小林も長年、御屋敷で執事をさせて頂いておりますから分かるのです。愛海お嬢様と旦那様は、本当に良く性格が似ておられる……だからこそ、気疲れするのです。誰でも己自身とは争いたくないものですからね」

「……なるほどね。まあ、小林が言うんだからそうなんでしょうね」

執事の小林の顔を見上げて軽く微笑んだエミルは新しく注がれたラベンダーの紅茶をゆつくりと口の中に流し込んだ。

それからしばらくイヤホンで音楽を聴きながら、フリーダムからの帰還者の新着情報を調べつつ、ゆつくりとした時間を過ごしていると執事の小林が彼女のことを呼びにきた。

「お嬢様、お風呂の準備ができました。動いて疲れているでしょうから、ごゆつくりどうぞ。バスローブしか無かった為、着替えは車の中に入れていた新しい物を置いておきました」

「分かったわ。小林ももう休んでいいわよ。また明日の朝にね」

「はい。それではお言葉に甘えて……明日の朝、またお伺い致します。では失礼致します」

執事の小林は椅子から立ち上がったエミルに深く頭を下げると静かに部屋を出ていった。

彼の後ろ姿を見送ったエミルは広い部屋の端にある浴室へと向かって歩き出す。

高級ホテルのスイートルームだけあって浴室も浴槽も大きく。外が見えるようにガラスの前に円形の浴槽が設置されていて、浴室は壁も床も大理石で作られており開放的な空間になっている。

着ていた服を脱いでシャワーを頭から浴びて、髪を濡らすと長い青い髪をシャンプーで洗うと3種類のリンスで念入りに髪を手入れする。これだけで相当な時間を費やしているのだが、今度はボディソープを泡立てながら手の上に広げて体に塗り付けていく。手の平で体の隅々まで撫でるように塗っていき、手の届かない場所は柔らかいスポンジ製のタオルで塗っていった。

その後。腕、胸、腹、背中、足の順番で背中以外は道具を使わずに手だけで丁寧に洗っていく。そして最後に体に付いた泡をシャワー

で一気に流して、一度いつも使っている腕時計型のデバイスを取りに脱衣室に戻り、再び戻ってきて浴室内に設置されている専用の台に置いた。

音声認識でデバイスのスイッチを入れると、白い大理石の壁に映像が表示されるのを確認して、やっとお湯の溜まった浴槽の中にゆつくりと肩まで浸かる。

大理石の壁に表示されている映像はさつきまでエミルが調べていたもので、大人気VRMMOで起きた大規模な監禁事件のことが書かれているネット掲示板だった。

そこにはIDと実名か空白の後に様々な内容の書き込みがされていた。

西暦2036年にはネットでの様々な書き込みに書いた個人を特定できるように個人番号と実名を登録した者しか書き込みできない仕様に変わっていた。

一時期は匿名で書き込みができなくなることへの批判を呼んだ改正案だったが、実際の書き込みに個人の情報を載せるかは任意で判断できるようにして一度は論争に終止符を打った。

しかし、IDの登録に個人情報が必要なことに変わりはなく。一度、個人情報を入力したことで危機管理に関する意識が落ちるのか、有力な情報だと証明する為には実名を書き込みと同時に載せるのが通例となっていた。

だが、その書き込みの多くは憶測の情報ばかりで実際に事件の被害者から書き込みは皆無だった。

それもそのはずだ。事件後、被害者のほぼ全員が医療機関への入院を余儀なくされていた。医療機関では精密機械が多く、デバイスの使用を禁止されていて今はもうほとんど見ることもない前時代的な公衆電話が設置されていた。

普通に病院内でも人の目を盗んで使用すればいいと思うかもしれないが、携帯電話と違って基地局を使用しないデバイスは、近くに置いてあるWiFiを経由してインターネットに接続するシステムを取っていた。

その為、病院内は勿論。病院外からのWiFiの電波も入らず、インターネットへ接続することができないのだ――。

病院に入っていない者はエミル達のように親や自分が政府に強い影響力を持つている者達だけだ。その為、被害者の殆どがインターネットへ接続できないのを、いいことに、ネット掲示板では報道やネットで出回っている憶測による情報で、個人でも憶測を拡大解釈していた。

その中でも多かったのが星に対してのバッシングだ。どこからリークされたのかは分からないものの、ゲーム内での映像がメディアやネットにばら撒かれ。しかも、星の父親がゲーム開発者であるという情報が流され、それが本来ならデスゲームを終わらせたことで賞賛されるはずだった星が叩かれる理由になっている。

チート級の武器を手にしていながら、どうしても早く事件を解決できなかったのかという不満に対して、ゲーム内で家族や友人を失った被害者達が声を上げている実情がある。

そんな被害者達に同情する民衆達が味方して、星に対しての風当たりが強くなっている。

書き込みの中には『小学生である星の責任能力の有無に関係なく。被害者が皆、昏睡状態で死者こそ出てはいないが、これだけの被害を出した責任を追及し、裁判にかけて死刑にすべきだ！』などという過激な書き込みもある。

そんな中でも外部から星を擁護する声もあるのは事実だが、星の父親や母親がメディアに出て謝罪や説明を行っていないことや、ゲーム内で最後のラスボスの存在に星がとどめを刺したことで、星を擁護する声を握り潰すには十分な理由になっていた。

だが、これはあくまでもゲームに参加していなかった者達の意見に過ぎず。実際に星と生活を共にしていたエミルは、星が頑張っていたことを知っている。

本当ならば自分がネットに書き込めばいいのだろうが、報道では被害者は全員病院や専用施設に収容されていることになっている為、ただの嘘としかとられないだろう。

「はあ……本当はこんな状況で星ちゃんを外に連れ回すのは良くないんだらうけど……これだけ世間が騒いでいたら、あの子もきつと相当理不尽な目にあつてたに違いないわ。元々、感情をあまり表に出す子じゃないし、内に溜まつているストレスを発散させてあげないと精神的に壊れてしまう。父親も事故死していて、母親もゲーム中に飛行機事故で亡くなっている。でも、星ちゃんはその母親がきつと生きてると信じてる。……いや、信じてないと気持ちが折れてしまうからでしょうね」

表情を曇らせながら俯いたエミルは胸に手を合わせてゆつくりと目を瞑った。

星の気持ちを考えると、胸が苦しくなる——ゲーム初心者でいきなりログアウトできないゲーム世界に閉じ込められ、頑張つてクリアーしたらしたで母子家庭で唯一の家族だった母親を亡くし、1人世間からのバッシングを受けている。もしも、自分が同じ立場に立ったとしたらと考えるだけで背筋が凍り付く。

「——今はあの子の心のケアが最優先。身寄りもないみたいだし、私があの子の支えになつてあげないと………私が落ち込んでいたら駄目よね！」

エミルは自分の頬をパンと叩くと暗かった表情は普段通りに戻っていた。

お風呂から上がると、執事の小林が用意してくれていたブランド物の袋に入っている新品の水色のパジャマを着てホテルのリビングに戻った。

ベッドで寝ていた星の寝顔を見て微笑んだエミルは、眠っている星の横で眠りに就いた。

謎の英国紳士

翌日。星が目を覚ますと、見知らぬ天井が広がっていた。今までのことが夢であったのかと、ため息を漏らした星がゆっくりと体を起こして、不安そうな表情で周囲を見渡した時、隣に寝ていたエミルを見つけてほっと胸を撫で下ろした。

昨日までの出来事が全て夢だったと思って起きた星にとって、隣にエミルが寝ていたことが本当に安心できた。

まだ眠っているエミルを起こさないようにそつとベッドから抜け出すと、広い部屋の中を歩いてテーブルのあるリビングへと着くと、そこには執事の小林がスーツ姿で立っていた。

「おはようございます。お嬢様」

「あつ……お、おはようございます」

深く頭を下げて挨拶をする彼にまだ慣れないのか、たどたどしく挨拶を返す星。

頭を上げてにつこりと優しい微笑みを浮かべる彼に、星は少し言い難そうに言った。

「——あの、私はお嬢様じゃ……できればもつと自然に呼んでもらえると……」

「いえ、私は執事ですので、これが自然体でございます。今はまだ違和感があるでしょうが、そのうちに慣れていただけるかと……」

「……は、はい」

上手く丸め込まれる感じで頷くしかなかった。

「お嬢様。ホットミルクなどはいかがでしょうか？」

「あつ、お願いします」

執事の小林は笑顔で「はい」と頷くと、部屋に置かれた冷蔵庫の中に入っている牛乳を出してコップに入れてレンジで温める。

星はそれを待ちながら部屋の中をうろろうろと動き回っていた。部屋のあちらこちらに昨日見たキャラクターの型やマークの家具や飾りがあることから、まだ遊園地の近くにいるのは間違いないだろう。

部屋の中を散策していた星を呼ぶ声がして小走りでテーブルの方

へ戻る。椅子に腰掛けて入れてもらったホットミルクをゆつくりと飲み始めた。

微かに甘いホットミルクを口に含んでゴクンと飲み込んだ星が隣に立っていた執事の小林に尋ねた。

「あの、ここはどこなんですか？」

不思議そうな顔で聞いた星を見て彼は優しい口調で答えた。

「昨日。眠ってしまったお嬢様を、愛海お嬢様が遊園地に隣接しているこのホテルに連れてこられたのです。こちらの遊園地は半日で回る位の規模ではないので、精一杯楽しんでほしいと……」

「そうですか。エミルさんがそんなことを……」

それを聞いた星は頬を赤らめて嬉しそうにしながら照れ隠しかカップに口を付けてホットミルクを飲んだ。

カップから口を離すのを待つて、今度は執事の小林が星に尋ねてきた。

「星お嬢様の言うエミルとは愛海お嬢様の事なのですか？」

「……はい。ゲームの中での名前だったので……」

「そうなのですね。ですが、愛海お嬢様はきつと姉と呼ばれる方が喜ぶと思いますよ？ 岬お嬢様を亡くして、まだその心の傷も癒えておりませんので。お姉様と呼んで頂ければ、きつとお喜びになると思います」

そう言われた星は「そのうち」と言葉を濁してホットミルクに再び手を伸ばすと、そこに起きたエミルがやってきた。

ピンク色のパジャマに身を包んだエミルは目を擦りながら星の座っている椅子の隣にやってきて。

「……おはよう。星ちゃんも小林も早いわねえ……」

「おはようございます」

「おはようございます。愛海お嬢様」

挨拶をしたエミルに星と執事の小林が挨拶を返す。

「愛海お嬢様にもホットミルクを用意致します。少しの間お待ち下さい。」

執事の小林が冷蔵庫のある方へと向かって歩いていく、隣に座った

エミルは星の顔を見て微笑むと。

「どう？ 小林とは仲良くなれた？」

つと尋ねてきた。だが、星は難しい顔を見せると、エミルも察したように星の頭を優しく撫でながら。

「大丈夫。そのうちに仲良くなれるわ」

「……はい」

そう言って硬い表情をしている星を励ました。

少しの沈黙の後、エミルは話を切り替えようと徐に星に尋ねる。

「そういえば。このホテルには部屋で注文する事もできるけど、ビュッフェスタイルの朝食を取る事もできるのよ。後で行ってみましょうか！」

「ビュッフェスタイル？」

聞きなれない言葉に星が首を傾げると、エミルも気付いたのか慌てて説明を始めた。

「ビュッフェって言うのはね。たくさん料理が盛られたお皿から好きな物を自分の取り皿に取って食べれるシステムの事よ。野菜が嫌いならお肉とかばっかり取ってもいいの」

「好きな物だけを食べていいんですか!？」

「ええ、本当は栄養のバランスを考えて食べた方がいいんだけど、今日は特別に星ちゃんの好きな物を好きなだけ食べていいわよ」

星が嬉しそうに「いいんですか!？」と聞き返すと、エミルはそんな彼女に笑顔で返した。

笑みを浮かべるエミルの顔を見た星は椅子から立ち上がってエミルの手を引っ張って言った。

「早く、早く行きましょう!」

「そうね。それじゃ、着替えて行きましょうか!」

エミルも椅子から立ち上がると、出来立てのホットミルクを持って歩いてきた執事の小林に告げる。

「小林。悪いんだけど、着替えを持ってきてもらえる?」

「はい。承知致しました」

持っていたホットミルクをテーブルに置いて、執事の小林は胸の前

に手を当て丁寧に頭を下げると部屋を出て行った。

エミルはテーブルに置かれたホットミルクを息で冷まして一口飲むと、隣に座っている星の顔を見た。

「昨日は少ししか遊べなかったから、今日はいっぱい遊びましょう。今日はいっぱい遊べるわね」

「本当ですかッ!？」

ホテルに泊まって帰ると思っていた星は嬉しさのあまり椅子から立ち上がって、テーブルに手を突いて前のめりにエミルの顔を見つめる。

エミルは「ええ」と深く頷いてにっこりと笑った。星は嬉しさを抑えられず、テーブルから離れて遊園地の見える窓へと走っていくと、瞳をキラキラと輝かせながら園内を見下ろしていた。

そんな星を遠くから優しい眼差しで見つめていたエミルは、嬉しそうに微笑みを浮かべている。

それは普段のかしこまった感じのない本当に嬉しそうにしている星が新鮮で、ずっとエミルが見たいと思っていた彼女の本当の姿なのだ。ゲーム世界にいた時はデスゲームという緊張感のある環境でどうしても星の本当の姿を見ることはできなかった。

しかし、今は違う。確かに星はまだ油断はできない状況なのだが、今の彼女はエミルの保護下に入っていてすぐにはなにかが起る状況ではない。だからこそ、今の星はこの時間を楽しめるのだろう……。

窓の外を眺めていた星の耳に部屋をノックする音が聞こえ振り向くと、開いたドアから執事の小林が腕に少し大きめのスーツケースを持ってきたのが見えた。

執事の小林は持っていたスーツケースを地面に下ろして上下に開いた。

スーツケースの中にはさまざまな服が入っていて、エミルが中身を物色し始めるのを見て星もゆっくりとスーツケースの方へ歩いていく。

中を覗き込むと、星が思った通りズボンはなく、スカートタイプの

服しか入っていなかった。

そんな中からエミルが選んだのは、水色に白いバラの花の刺繍の入ったワンピースに同じくバラの模様に切り抜かれた白いレースのブラウスを着せられた。

エミルもワンピースを選んだのだが、上が紺色でスカート部分が薄いレースの二重構造になっていて腰の部分が細く、体のラインが見えるようになっていた。

着替え終わったエミルはテーブルの上に置かれていたホットミルクを一気に飲み干して、星と約束していた朝食を取りに部屋を出た。

謎の英国紳士2

朝食のビュッフェが行われている場所に着くと、すでに多くの人で賑わっていた。星とエミルも座る場所を探して椅子に座ると、先にエミルが料理を取りに行つて彼女が戻ってくる。

たくさん皿の上に乗せていた料理の数々を見て、星の胸も期待に膨らんでいった。

「人がたくさんいるから、気を付けて行つてきなさいね」

つとエミルが星に言うのと、星も短く「はい」と返事をしてビュッフェの列の最後尾に向かって歩いて行った。

列の最後尾に皿を持って並んだ星は、少しずつ前に進む人の中で緊張していた。

もちろん。星はこんな人込みの中で食事を取るのとは初めてで緊張しているのもあるが、それ以上に列に並んでいた殆どが親子で楽しく会話しながら順番を待っていることだ。

前後を親子に挟まれ、母親や九條を思い出して少し複雑な気持ちになりながらも、自分の番がくるのを待った。

やっと星の番がきて様々な大皿の上に置かれた料理の中、キャラクターをモチーフにしたものなどもあつて、その中で食べたい物を好きだけ皿の上に乗せるとエミルの待っているテーブルへと急いで戻った。

テーブルに戻るとエミルは料理に手を付けることなく待っていて、星が戻ってくるのを見て微笑みを浮かべている。

持ってきた皿をテーブルの上に置いた星はエミルと向かい合うように椅子に座ると、互いに持ってきた料理を見せ合いながら楽しく会話しながら朝食を取った。

朝食を終えた星とエミルは人込みに少し疲れたのか、部屋へと戻ると執事の小林にココアを作ってもらつて休憩してからホテルの近くに隣接している昨日も遊んだ遊園地へと向かう。

遊園地の敷地内に入ると、昨日も行つたクマのキャラクターがハチミツを取りに行くまでの物語をハチミツを入れる瓶の形をした乗り

物で回るアトラクションに乗ってから、遊園地の入り口に戻って端から順番にアトラクションを回ろうという話をエミルとしてみると、どこからか『愛海』とエミルの名前を呼ぶ声が聞こえてきた。

声の聞こえた方向にはエミルと同じ水色の髪に帽子を被り、スーツを着ている英国紳士の様な男性が立っていた。

星はエミルの方を見上げると、彼女は眉をひそめて複雑そうな顔をしている。そんなエミルに星も目の前に現れた英国紳士風の男性を不安そうな表情で見つめた。

男性はエミル達にゆっくりと近付いてくるにつこりと笑顔を見せる。

「やあ、こんな場所で会うなんて奇遇じゃないか！ でもまあ、愛海くらの年齢の女の子はこういう場所にきて遊ぶのは当然か……おや？ そちらのお嬢さんは初めて会うね。こんにちは、愛海の叔父のアレックスだ」

「……こ、こんにちは」

突然フレンドリーに話し掛けてきた彼に戸惑いながらも、目の前に差し出された手を握って挨拶をする。

星の小さな手を優しく握り返した男性は満足そうに微笑みを浮かべた。そんな2人を見つめながら、エミルもほっとした様子で胸を撫で下ろしていた。

アレックスを名乗る男性は星との握手を終えると、エミルの方を向いて笑顔で言った。

「私も一緒に同行していいかな？」

「ええ、構いませんよ。星ちゃんもいいでしょう？」

「は、はい……」

エミルにそう言われ、星は少し困惑しながらも小さく頷いた。

もちろん。エミルは星の性格を分かった上で言っている。星は押せばすぐに引いて受け入れてくれるし、その後に機嫌が悪くなることもない。本当はそんな性格を治してほしいと思っているエミルだったが、今回ばかりはそんな星の性格に感謝せざるを得なかった。

50代後半の男性アレックスを引き連れて星とエミルは遊園地内

を歩いていると、完全に親子と云った感じで周囲からは見られて
いるのだろう。

星も心なしか、昨日歩いていた時よりも男性の視線がこちらに向か
ない感じを受ける。列の順番を飛ばしてアトラクションに入る時も、
英国紳士風の男性のアレックスがいると、周りの視線が気にならなく
なる気がしていた。

昨日はあまり速度の出ない乗り物のアトラクションを選んだが、今
回はスピードの速い系のアトラクションを選んだ。理由はアレック
スの存在だ——星とエミルならメルヘン的なアトラクションでもい
いが、どうしても50代後半のアレックスと一緒にそうもいかない
だろう。彼がどんなに「大丈夫」と言っただとしても、それを真に受け
て自分の乗りたいアトラクションを選ぶ星ではない。

星が絶叫系のアトラクションに乗りたいと言った時には、さすがの
エミルも驚いて「大丈夫!？」と声を上げたが星が笑顔で頷くと、エミ
ルも渋々了承した。

アトラクション自体は宇宙をイメージした物で、宇宙の中を飛行船
を模した乗り物で走り抜く感じだ——。

施設の中に入ると暗い部屋に光るゲートが置かれていて、そのゲー
トの先には数人乗りの乗り物がある。

(どうして、乗り物系のアトラクションは薄暗い場所ばかりなんだろ
う……ちよつと怖い……)

星はそう思いながら、早くなる心臓の鼓動を抑える様に胸の前で手
合わせた。正直、星自身も絶叫系のアトラクションが得意だとは思っ
ていない。

それもそうだ。星は父親がいなく母親も忙しいことで車はおろか、
乗り物に乗る機会が殆どなかった。そんな星に乗り物に対しての態
勢があるはずもなく、乗ってきた黒塗りの高級車でも新鮮な感覚を受
けていたのに、突然絶叫系のアトラクションに乗るのは本当ならば相
当に敷居が高い。

内心では恐怖を覚えながらもそれを表に出さないように平静を装
いながら、乗り物に乗り込むと体をがっしりと固定された。その瞬

間、星はこのアトラクションに乗ったことをいまさらながらに後悔していた……。

星の体を安全バーががっしりとホールドすると、ゆっくりと動き出す。星を乗せて徐々に加速していく乗り物と目まぐるしく変わる景色を楽しむ余裕などなく、トップスピードで駆け抜ける中で今にも乗り物から放り出されそうな重量に星はただただ早く終わってほしいと願うばかりだった。

乗り物が最初の場所に戻ってきた頃には星は放心状態で先に降りたエミルに手を引かれてなんとか降りることができくらいに消耗していた。地面に降りても、まだ体が左右に揺れている感覚に襲われる。正直、ゲーム世界でレイニールに乗ったりしていなかったら失神していてもおかしくなかったかもしれない。

真っ青になった星を心配した様子でエミルが星に寄り添って外にある一番近いベンチへ連れていく。

ベンチに凭れ掛かったまま、星が具合が悪そうにゆっくりと呼吸しているのを見て、エミルは近くの自販機に水を買いにいく。

その場に残されたアレックスは星の座っているベンチの隣に座ると、スツと星の背中に手を滑り込ませて前屈みにさせて優しく背中をさすった。

「大丈夫かい？ 私が居るからって気を使って合わせてくれる必要はないよ……」

「——どうして？」

星が驚いた様子で告げると、アレックスは笑顔を浮かべながら言った。

「まあ、人生経験の差かな。私もいろいろな人と付き合い合ってきたからね。だいたいは相手が考えている事は分かるつもりだよ」

「なるほど……」

「……なんてね。ただの勘なんだけどね！」

星が納得して頷いた直後、アレックスが笑いながら言った。

星はおどけて見せたアレックスを横目に調子が悪そうに俯く。しかし、星はアレックスのことを怪しいと思っていた。

エミルの知り合いである為悪い人ではないと思うのだが、アレックスがなにか普通の人ではないオーラの的なのを感じる。まあ、エミルがお嬢様なのだから当然その知り合いである彼が普通であるはずがないのだが、そうでなくとも普通とはちよつと違う特別な感覚……それは星が今まで人間観察してきたから分かることだった。

少ししてエミルが人数分の飲み物を抱えて歩いてきた。それを見たアレックスがベンチから立ってエミルの元に駆け寄ると、彼女の持っていた飲み物を持ってあげる。

戻ってきたエミルがアレックスから水の入ったペットボトルを受け取り、それを俯き加減にベンチに腰掛けている星に渡した。

「大丈夫？ 今日はまだもう返って休んだ方がいいんじゃない？」

「いえ、せつかく入ったので……もう少しここで休めば良くなります」

「……そう？ 無理そうなら早めに言うのよ？」

そんな2人のやり取りを見ていたアレックスは優しい微笑みを浮かべていた。

謎の英国紳士3

それから30分ほどベンチの上で休んでいると、星の体調もすっかり良くなった。さっきまで青ざめていた顔色も普段の顔色に戻っていた。だが、エミルはまだ心配そうな顔で星を見守っている。

しかし、そんなことは他所に星は昨日乗れなかったアトラクションを全て制覇しようとパンフレットを手に次に乗るアトラクションの方へと歩いて行く。

星がゴーカートの乗り場の方を指差した直後、パンフレットを持っている星の隣にいたエミルが慌ててパンフレットの上を指差した。

「……次はここに行きましょーうか!」

「……ここですか?」

エミルが指差していたのは園内にいるキャラクター達が住んでいる家が置かれている区間がある。

星はエミルの申し出をすんなりと受け入れた。まあ、自分が調子を悪くして迷惑を掛けたという後ろめたい思いもあるからなのだろう。

だが、エミルかその場所を指定したのはエミルが行きたかったからではなく。少し前まで調子を崩していた星を気遣ったことだし——さすがにゴーカートが前に乗った絶叫系のアトラクションよりも緩いとは言え、左右に激しく揺れることに変わりはない。それによつて星の体調が再び悪化することを気にしているのだ。何故なら、エミルが星を遊園地に連れてきたのは彼女に楽しんでもらおうからだ。

ゴーカートからキャラクター達の家がある場所へと移動すると、それぞれのキャラクターに合わせた雰囲気の家が建ち並んでいる。

そこはまさにメルヘンな世界が広がっていた。最初はあまり期待していなかった様子の星だったが、いざキャラクター達の家を目の前にするるとやっぱ興奮を抑えられない。しかも、家の中にはキャラクター達もいる場合もあり、更にファンタジーな雰囲気を引き立てていた。

ゴーカートに乗ろうとしていたことなどすっかり忘れて家の中にいたキャラクター達と写真を撮って笑顔を見せている。

楽しそうに次々とキャラクターの家を転々としてキラキラとした瞳で細部まで作り込まれた家の中を見ながらキャラクターがいたらエミルと2人でアレックスに写真を撮ってもらおうという感じで、あつと言う間に全ての建物を回り終わった。

キャラクターの家を回り終えた時には、完全に星の体調も良くなっていた。

その様子を見ていたエミルは星に向かって言った。

「それじゃ、今度はゴーカートに乗りに行きましょうか！」

「はい！」

「その後は時間の許す限り遊び尽くすわよー!!」

「はい!!」

彼女のその言葉に力強く返事をした星の手を引いてエミルが早歩きで進んで行く。

その後はゴーカートに乗り、園内のアトラクションを次々と乗り継いでエミル、星とアレックスで遊園地のアトラクションを楽しみ尽くした――。

新しい父親

遊園時間一杯までアトラクションを乗っても、園内にある全てのアトラクションを制覇することはできなかった。さすがは日本を代表するテーマパークであるということなのだろう……。

入場ゲートの外でアレックスと別れたエミルと星は、車で待っていた小林と合流してエミルの家へと帰った。

家に帰って大きい門を潜って黒塗りの高級車から降りて家のドアを開けると、何やら家で働くメイド達の様子が普段と違うことに星が気付く。

なんというか、いつもは笑顔で出迎えてくれるメイド達の表情はどことなく緊張しているようで、笑顔も作り笑いとまでは言わないまでも引き攣っているように見えた。

普段から人間観察をしている星でなければ分からないほどの違いしかないだろうが、それでも確実に以前とは違う……。

ただならぬ雰囲気を感じ取った星は隣に居たエミルの顔を見るが、その表情は普段通りで異変に気が付いてはいなさそうだ。それどころか、遊園地が楽しかったのか自分を見ている星に「楽しかったわね。また行きましようね」とふんわりした満足そうな顔で言った。

どことなくゲーム内でお菓子を食べている時のエリエに似ていた気がする――。

(……エミルさんは気付いていない感じ……でも、やっぱり何かが変だ……)

エミルに笑顔で返した星はそう思いながら自分の部屋へと戻った。部屋に戻ると、大きなキングサイズのベッドに倒れ込む。広いベッドの上を転がって天井を見上げても、見慣れた天井とは違うはずなのだ、不思議と落ち着く気がする。だが、おそらく心のどこかにはここが自分の居場所だと思っっているからかもしれない。

明るい部屋の天井を見上げていると、帰ってきた時に思っていたメイド達の反応など気にならなくなるから不思議だ。

「――遊園地。楽しかったなあ……」

そう眩いた星の口元が自然と緩んでしまう。

まあ、それも無理もない。星はまさか自分が遊園地に行くなんて思ってもいなかった。テレビなどで見たくらいで、実際にある場所なのかさえも怪しい。もしあっても自分が行くことはありえないと思っていた。

星にとつて遊園地に行った思い出は間違えなくかけがえのないものになっただろう……。

瞼を閉じて記憶の中にある遊園地を思い起こしている間に、星は夢の中に落ちてしまった。

次に星が目を覚ましたのはそれから1時間くらい経ってからだった。ドアをノックする音に起こされた星は眠い目を擦りながらゆっくり体を起こしてドアに向かつて「どうぞ」と言った。

部屋に入ってきたのはエミルでその表情は少し緊張している様にも見える。

「星ちゃんちよつといい？」

「はい？」

エミルに呼ばれた星はベッドから降りると、小走りでドアの方へと向かう。

自分の前まで来た星にエミルが徐に告げる。

「——星ちゃんに会わせたい人が居るの」

「……会わせたい人？」

静かに頷いたエミルは身を翻して廊下を歩いて行く。そんな彼女の後ろを星がゆつくりと歩いて付いていくと、食堂のドアの前でエミルが足を止めた。

すると、星の方を振り向いて星の両肩に手を置くとゆつくり一言一言を囁み締めるように告げた。

「いい？ この先に居るのは星ちゃんも会った事がある人だけど全く別の人なの。丁寧な対応をしないといけない」

「丁寧な対応……普段通りで大丈夫だと思います」

星が微笑みを浮かべながらそう返すと、エミルは瞳に涙を浮かべ首を横に振って突然星の体を抱きしめた。

「だめ——それじゃだめなのよ……もしかすると、星ちゃんと離れ離れになるかもしれない……」

「……エミルさん」

急に抱きついてきたエミルを見て不安そうに眉をひそめている。

それもそうだ。星には何のことか全く理解できていない。何故なら、今日の昼までは普通に楽しく遊園地で遊んでいて、突然なんの脈絡もなくそんなことを言われても理解できる者はいないだろう。

星は抱き付いているエミルにゆっくりと徐に告げる。

「分かりました。私もいつも以上に気を付けるようにしますから、心配しないで下さい」

抱き付いているエミルに優しくそう言うと、星はエミルの体を自分からそつと離れた。

離れたエミルは潤んだ瞳で星の瞳を見つめ、星は深く頷いて笑顔を作って見せた。だが、もちろん星が緊張していないと言えれば嘘になる。

扉一つへだてたその先に、自分の今後の運命を左右するであろう人物が待っているのだ。さすがに泣き出しそうなエミルを前に強がってはいたが、内心では心臓が飛び出すほど緊張していた。

しかし、それを悟られない様に星が重い扉をゆっくり開く。すると、その扉の先に居た人物に星は驚き目を見開き思わず口を開いたままその場に立ち尽くしている。

「どうしたんだい？ 早く入ってきなさい」

優しい声で笑顔を浮かべている男性は、水色の髪に帽子を被ったスーツ姿の英国紳士——それは、今日別れたはずのアレックスだった。

「はい。失礼します……」

星は緊張しながら食堂に入ると、星は座っている彼の横に行つて丁寧に頭を下げた。

「——星です。よろしくお願ひします」

深々と頭を下げる星の頭に手を乗せ、優しい声音で「うん。よろしく」と言った彼に、星は少しほっとした様子で息を吐く。

星の頭から手をどけた彼はゆっくりと椅子から立ち上がった。

「君の様な子が私の娘になつてくれて嬉しいよ！ 難しいだろうが、ここを自分の家の様に、私を自分の本当の親の様に思つてほしい」
そう言つて頭を下げた彼に星はきよとんとしながら呟く。

「は、はい……えっと、アレックスさん？ 私はこの家に居てもいいんですか……？」

戸惑つた様子の子の声に顔を上げた彼は何かを思い出したように首を傾げている星に向かつて言った。

「ああ、私の本当の名前は伊勢智弘。でもまあ、君が良ければ『お父様』と呼んでくれると嬉しいな！」

「はい。お父様！」

智弘のことを『お父様』と呼んだことで、星は本当の意味でこの家に迎えられた気がしてぱあーつと表情を明るくさせた。

しかし、その2人のやり取りを見ていたエミルが驚いた様に声を上げる。

「私に言つてたのと違うじゃないの！ どう言う事よお父様！」

「ん？ 私は言つたと思うよ。ただ、愛海や星ちゃん。娘2人と遊びたかつただけだつてね」

「……………」

無言のまま呆れ顔をしているエミルを見た智弘は、急に真剣な顔に変わり。

「親を見くびつてもらつては困るよ。自分の娘が実際に接して連れてきた子を受け入れない理由がない……親が娘の目利きを疑つたら終わりだ」

「……お父様」

智弘のその真剣な眼差しを受け、エミルは驚いた表情を見せた。それもそうだろう。普段から海外で仕事をしていて面と向かつて話す機会はテレビ通話くらいなものだ——にも拘わらず。父親がそれだけ自分のことを信頼しているとは思つてもいなかった。

エミルは満更でもないような笑みを浮かべると、智弘は手を叩いてメイドを呼び付けた。

「料理を運んでももらえるかな？　もう待ちすぎてお腹がぺこぺこなんだ」

「はい。旦那様」

そう言っただけで笑顔で自分のお腹を擦った智弘にメイドも丁寧に頭を下げると食堂からキッチンのある部屋へと戻って行った。

そして立っている2人に智弘が言い放つ。

「ほら2人ともいつまでも突っ立ってないで席に付きなさい。すぐに料理が運ばれてくるのに立っていたら邪魔になるよ」

「はい」

2人が返事をするので智弘と向かい合うように隣り合わせで椅子に座った。

少しして、メイド達が次々と銀色のトレーに料理を持って食堂に入ってくる。テーブルの上に置かれた数多くの料理は遊園地内のホテルの料理に引けを取らないほどの種類があつて、選ぶだけでも大変なくらいだ。

大きな細長いテーブルに置かれている料理は肉料理だけではなく、魚や野菜などがバランス良く並んでいる。

多くの料理を前にして智弘が口を開く。

「さあ、食べよう。頂きます！」

「いただきます」

智弘の声に合わせて星とエミルも手を合わせて言った。

食事を終えると、智弘の部屋で床に恐竜凶鑑とアルバムを広げて化石発掘の話聞いた。そして夜の11時を時計の針が回ると、智弘は次の仕事に向かう為に家を出る。

玄関で仕事に行く智弘を2人が見送る。

「それじゃ、行ってくる」

「お父様、なにもこんな遅くに行かなくても……明日の朝に出てもいいんじゃないの？」

心配そうにそう言ったエミルの頭を優しく撫でる智弘。

「いや、遅くなるより早いに越した事はないよ。心配してくれるのはありがたいが仕事は仕事だ、あまりのんびりもしてられないから

ね」

「……お父様は仕事をし過ぎなんですよ」

膨れっ面をするエミルに苦笑いを浮かべた智弘の視線が星へと向いた。

「——星ちゃん。いや、星」

「は、はい」

まだ緊張しながら名前を呼ばれた星が返事をする。

「今度帰ってきた時にはもっと色々な話をしようね！」

「はい！」

優しい笑みを浮かべてそう言った智弘に星も笑顔で頷いた。

「それじゃ行ってくるよ。また帰ってくる時は連絡するから、2人も仲良くね！」

「はい。行つてらっしゃいませ、お父様」

「行つてらっしゃいませ」

エミルに続くように星が言うと智弘は黒塗りの高級車に乗り込んだ。

父親に付いている30代の若い執事が、エミル達にお辞儀をして運転席に乗り込むと車を発進させる。

その車が見えなくなるまで星とエミルが見送ると、家の中に入った。

新居での生活

家の中に戻ったエミルは星の方を見ると。

「ちよつと遅いけどお風呂に行きましようか。今日はいっぱい動いたからちやんと綺麗にしておかないとね」

「え？ 別に明日でも……」

「だーめ」

あまり乗り気じゃない星の言葉をすぐに否定したエミルは星の手を引いてお風呂へと向かった。

洋風の屋敷の長い廊下を歩いてお風呂場へと向かう中、ふと前を歩くエミルが星に尋ねた。

「お父様は変な人だったでしょう？」

「……いえ、とてもいい人だと思います。私にはお父さんはいませんでしたが……」

星は少し悲しそうに呟き、エミルは少し申し訳なさそうに「ごめんなさい」と言った。

お風呂場に着くと、大きな脱衣室で服を脱いで大きな浴室に入った星とエミルはプラスチックの椅子に座って体を洗い始める。

椅子に座っている星の背中をボディソープの着いた手で丁寧に洗うエミルが星の小さな体の肌を素手で撫でながらぼそつと呟く。

「星ちゃんあのね。学校の話なんだけど……明日、制服を買いに行きたいの。でも、星ちゃんが嫌ならしばらく学校に行かなくても……」

「いえ、学校に行くのは当たり前ですし……いいですよ」

エミルの言葉に星は少し複雑そうな顔をした。

それもそうだろう。星の前に通っていた学校ではいじめにあった末、ほぼ強制的に不登校に追いやられるという普通ならば考えられない行動を取られたのだ。

もちろん。次に通う学校は別だが、星の学校に対しての印象は最悪と言わざるを得ない。しかし、学生である以上は学校へ通うのは当然であり避けられないことだ――。

「そう。それじゃ、星ちゃんもいって事だし。明日のお昼に制服を

見に行きましようか」

「――制服？」

彼女の言葉に星は首を傾げた。星にとって学校に制服で行くという概念がそもそもない。

普通ならば小学校には私服で行くのが基本なのだが、エミルの口からは確かに『制服』という言葉が発せられた。

「制服ですか？　でも、私が行くのとって小学校ですよ？　小学校は私服じゃないんですか？」

星が背中を洗っているエミルに尋ねると。

「ああ、公立の学校はそうかもしれないわね。でも、星ちゃんが次に通うのは私立の学校だから専用の制服があるのよ」

「……なるほど」

その説明を聞いた星は首を傾げながらも前を向いた。

だが、星には公立の学校と私立の学校の違いが分かってなかった。ただ、変わっている学校なんだろうな。っとしか思っていない。

体を洗い終え髪を念入りに洗ってもらった後、エミルと一緒に大きな浴槽へと浸かった。浴槽と言っても大理石で作られたそれは大人100人は入れそうな大きさでとても星とエミルの2人で使い切れる広さではない。

そんな大きな浴槽の真ん中に並んでお湯に浸かりながらエミルが。

「気持ちいいわね。星ちゃん」

「はい。気持ちいいです」

彼女のその言葉に返事をする星の顔を見たエミルは、星と視線が合うと少し目を逸らす。

その彼女の様子に星は不思議そうに首を傾げたが、それは次の日になつて分かることになる。

翌日、大き過ぎるキングベッドで目を覚ます。小さな体の星にはキングサイズのベッドは大き過ぎてどうしても慣れない。だが、それでもふかかなその手触りとマットレスの感覚はまるで雲の上で寝ている様ですごく気に入っていた。

体を起こして大きく天井に向かって伸びをすると、ベッドの上から

降りて部屋を出ようとドアの前に行つた時、ドアをノックする音が響いた。

星がノックされているドアを開くと、驚いた表情のエミルがそこに居た。

「あら、早いわね……」

「おはようございます」

目を大きく見開きながらそう言ったエミルに、星は軽く頭を下げた。

部屋から廊下に出た星は扉を閉めて「行きましょう」と言つてゆつくりと歩き出す。

その後をエミルが歩いていたが、彼女の表情はどこか疲れているような感じがした。よく考えてみると、エミルが星よりも早く起きるのはおかしい。

何故なら、ゲーム世界にいた時から、彼女が星よりも早く起きていたことは数えるほどしか記憶にない。

彼女の疲れたような表情から察するに、おそらくは昨晚から一睡もしていないのだろう。

星と一緒に歩いているエミルは何か言いたげな表情で何度か星の方を向くが、その度に星と顔を合わせて視線を逸らす。

新居での生活2

顔を洗って朝食を食べる時もエミルの表情はどこか陰しく、その彼女の様子には星も気が付いていた。だが、あえて触れない方がいいのだろうと理由を尋ねることはしなかった。

朝食を食べ終わると食後のティータイムで紅茶を飲んでいるエミルの隣でミルクを飲んでいる星。

すると、紅茶を飲み終えたエミルがティーカップを置き、やつと星に向かって口を開いた。

「……星ちゃん。学校に行きたくなかったら、無理に行かなくてもいいのよ？ 別に勉強なら家庭教師や私が教えてあげられるし。普通の公立の学校と違って名門の家の子が集まっているから友達関係も難しいと思うし」

「……………」

（そうか、エミルさんはきつと私が頼らない性格をしているから……私を家族にしてくれたエミルさんにこれ以上は迷惑をかけられない……）

星は心の中でそう考えながら持っていたミルクを飲み干して言った。

「大丈夫です。前の学校でもうまくやってみましたし、それに勉強も頑張りたいので」

にっこりと微笑んだ星に、エミルは一瞬口籠もったが再び口を開こうとした時、食堂の扉が開いて執事の小林が部屋の中に入ってきた。

「車の用意が出来ました」

話を遮られたかたちになったエミルは眉をひそめる。それとは対照的に、星はすぐに椅子から立ち上がって小林の方へと歩いて行く。

星は椅子に座ったままのエミルの方を振り返って微笑んだ。

「エミルさん早く行きましょう」

星のその笑顔に負けたようにため息を漏らしながら立ち上がって星の方へと歩いて行った。

家から出た星とエミルは家の前に止まっている車に乗り込むと、制

服を取り扱っているテンポへと向かった。普段は入学前までに寸法を測ってオーダーメイドで作って家までお店の人が届けてくれるのだが、星の場合はその時間がなく急遽、店に行って今日中に仕立ててくれることになっている。

その店は服屋が密集した都心の繁華街にあり、外観はレンガ造りで洋風の看板に英語で店名が書いてある。看板には『Crescent』と書いてある。

星とエミルは黒塗りの高級車から降りると、店内に入っていく。中もレンガ造りの外観に漏れず洋風の雰囲気漂う。店内には制服が数多く置かれていて、奥にあるカウンターには白髪を生やした英国紳士の男性が店に入ってきた星とエミルに微笑みを浮かべている。

「いらつしやいませ。制服を御予約の伊勢様ですね。お待ちしてました」

「はい。急で申し訳ないのですがよろしくお願いします」

「よろしくお願ひします」

店主らしき男性に頭を下げたエミルに続いて星も頭を下げた。

店主は星に優しい笑顔で応えると。

「それでは採寸しますのでお嬢様は奥の部屋へとお願いします。おーい！ お客様の採寸を頼む！」

大声でカウンターから奥の部屋に向かって手を打ち鳴らすと、奥の部屋から若いエプロンを付けた女性が2人出てきた。

彼女達に案内されて店の奥へと連れて行かれた星は、両脇に大量に積まれた制服の在庫の中を通り抜けるとカーテンで仕切られた部屋へとたどり着く。

促されるままに服を脱いだ直後、エプロンを着けた女性2人が慣れた手付きで、体のサイズを測っていく。

数分で星の全身のサイズを測り終わると、カーテンの先の通路に戻って制服の入っている箱を持ってきた。

箱を開けて中に入っている制服を星に着せると、星は少し大きめの制服とズボンを身に付けて部屋の端に置かれた大きな鏡の前に立った。

白のブレザーの胸に大きなワッペンが付いていて中のワイシャツの首元には赤いリボンが付いていて、下は黒いズボンだ。

しかし、元々女子用の制服がズボンではなく、スカートなのが、星に渡された制服はズボンだった。傍に置かれている箱の中に入っている男子用の制服はブレザーが黒で赤いネクタイ。女子用は白いブレザーに赤いリボンにラインの入ったスカートだ。

おそらくはエミルが星の事情を知っていて前もって用意してくれていたのだろう。その気持ち星には嬉しかった……。

着替え終わると、星は少し余裕のある制服の疑問を女性に尋ねた。

「あの……少し制服が大きいような気がします……」

「それは成長するからね。小学生は成長が早いから、少し大きい制服じゃないとすぐきつくなつて着れなくなるのよ」

「はあ……そうなんですか」

少し納得していないような生返事で返した星に、女性は続けて言った。

「私達の見立ては完璧なの。六年生になつたらぴつたりで驚くわよ？

楽しみにしててね」

それを聞いた星は不思議そうに首を傾げていた。そんな星の背中を軽く叩いて「さあ、お姉さんに制服姿を見せていらつしやい」と星に向かって微笑みながら言うと、星も頷いてゆっくりと歩き出した。

内心では早くエミルに自分の制服姿を見せたかったが、見せた時の反応が怖くてなかなか歩みが進まない。

だが、初めて着た制服をエミルに見せたいという感情の方が恐怖よりも強いのか、歩みを止めることなく。少し時間は掛かったものの、お店のカウンター横のスペースに置かれたテーブルで紅茶を飲んでいたエミルの前にきた。

恥ずかしそうにもじもじしながら、エミルの顔を見上げ。

「……ど、どうですか？」

上目づかいにそう言った星の制服姿を見た直後、エミルは無言のままテーブルを立って店の外へと走って行ってしまった。

そんな彼女の姿に星は残念そうに肩を落としたが、それほどがつか

りしなかったのは最初から高望みしていなかったからかもしれない……。

しかし、飛び出して行ったエミルは以外と早く戻ってきた。鼻にはテツシユペーパーが詰まっっていて、その手にはカメラが握られていた。

2036年現在。デバイスの最小化が著しい昨今では部品の品質は上がったものの、限られたサイズの中では一つ一つの機能を限定するしかない。

やはり、カメラや電話などの特化された機器は健在で、その機能の進化も著しくカメラの手振れ補正は完璧。人の向きを検知して、動きによるブレを瞬時に計算し連写した中から最適な画像まで選別してくれる。

周囲の光量による変化も考慮して明るさを設定してくれるだけじゃなく。周囲の色彩を感じ取って暗闇でも昼間のような色彩調整もしてくれる優れものだ。

エミルが持つてるのも最新モデルのカメラで機能は高性能なのだ。鼻にテツシユペーパーを詰めたエミルのせいでそうは見えない。「かわいい！かわいいわ！星ちゃん。こっちを向いてポーズ取ってみて！」

そう言いながら星がポーズを取る前に、既に何度もカメラのシャッターを押している。

急に飛び出して行ったかと思うとカメラを持って帰ってきた彼女に驚き反応できず星も戸惑うばかりだ。

だが、それも無理もないだろう。星はエミルが店から飛び出して行った直後、自分の制服姿をエミルは気に入らなかったのだと思って落ち込んでいた。しかし、その数分後にはカメラを構えているエミルが目の前にいるのだ。

もう、気持ちが悪くジェットコースターのような高低差に付いてこなくなってしまう為、星はポーズを取るどころではない。

しかし、そんなことなど気にする素振りすら見せずにシャッターを押して、最高のベストショットを撮り逃さないようにと興奮した様子

で迫ってくるエミルは「かわいい」と連呼しながら様々な角度から星の写真を撮っている。

なにか起きているか分からず立ち尽くしていたが、次第に冷静になってきて写真を撮られていることが分かって恥ずかしくなって頬を赤らめながら俯いてしまう。

写真を撮られ慣れていない星にとって、褒められながら写真を撮られるというのはどうしても恥ずかしい。

顔を赤くさせ、もじもじしながら指をいじる星に写真を撮っていたエミルにも熱が入る。もう写真を撮ることを止めさせるのは無理そうだと判断した星は諦めたように大人しくエミルに写真を撮られ続けた。

結局、容量一杯まで写真を撮られ続け、執事の小林がきて諫めるまで写真を撮るのを止めなかった。

呆れ顔でエミルのシスココンぶりを店主も奥の通路から覗いていた。

新居での生活3

結局、容量一杯まで写真を撮られ続け、執事の小林がきて諫めるまで写真を撮るのを止めなかった。

呆れ顔でエミルのシスコンぶりを店主も奥の通路から覗いていた。エプロン姿の女性2人も少し引いているように感じた。

制服の代金を支払い。商品を受け取って、それを車のトランクの中に入れると、星とエミルは車の中へと乗り込んだ。

店を後にして車で家に戻る最中、写真を撮ることに熱中しすぎて反省していたエミルを横目に見ながら、星がふと言葉を発した。

「——エミルさんは、私がいじめられてたのを知ってたんですね……」
「……………ごめんなさい。転校の手続きの時に不審に思っ、星ちゃんの事を少し調べさせてもらったの。同じクラスの親切なお子様に一万円を渡したら快く教えてくれたわ」

「二万円……」

星は小学生に賄賂を渡して自分の情報を聞き出すエミルに引いているのか、その表情は引き攣っていた。

まあ、普通にお金で買収するのですら犯罪になりそうなものだが、相手が小学生だとなお悪質なのは間違いないだろう。

エミルは星の目を見つめながら、真剣な面持ちで告げる。

「星ちゃんが学校に行きたくないなら、無理して行かなくてもいい。家庭教師を雇っても私が勉強を教えてもいいわ。もう普通の家庭じゃないんだし、学校で集団生活を学ぶ必要もない。学校なんて、集団生活を身に付ける場なんて言われてるけど、結局は思い出作りなんだし。それに社会に出てから何の役にも立たないくだらないものなんだから」

そんなエミルの言葉を聞いた星は、彼女の学校に対する価値観を垣間見た気がした。

だが、星にはエミルの言っている言葉を理解できなかった。エミルがどうであれ、星には学校で勉強するしか立派な大人になれる方法はない。

テストで良い点数を取り、中学、高校、大学と進学することが全てであり、星にできる唯一のことでもある。だからこそ、星には学校に行かないと言う選択がそもそもなかった。

真剣な顔をしているエミルに、星が微笑みながら言った。

「いえ、学校には行きます。大丈夫です。今度の学校には、私の知っている子はいませんか」

「そうかもしれないけど……」

そう告げた星の決意に満ちた顔を見ても、エミルは不安そうに呟き表情を曇らせている。

そんな彼女に星は笑顔を浮かべ。

「心配しないで下さい。あの時の私は一人でしたけど、今はエミルさんもいます。それにせつかく買って貰った制服を着てみたいですから」

その星の言葉の直後、エミルの脳裏には亡くなった妹の病室のクローゼットに入ったままになっていたセーラー服が過ぎっていた。

亡き妹の岬はもう制服を着ることはできないが、星は制服を着ることがができる。夢にまで見た制服を着て一緒に登校できるという欲望には逆らえない。まあ、星が行く予定の学校は自分の父親が多額の寄付を行っている父親の高校時代の同級生が経営する私立のお嬢様学校。

前に星が通っていた公立の小学校とは違って教師の質も高い。それになにより、星がいじめにあつたら自分が解決すればいいと考えエミルは首を縦に振って星の意見を尊重した。

頷いたエミルに星も嬉しそうに表情を明るくして「ありがとうございます」とお礼を言った。今の星には、ただ自分を家族として迎えてくれたエミルと彼女の父親に立派な人間になって恩返しすることしか考えていなかった。

その目的の為に、どうしても学校に行つて勉強する必要があったのだ――。

新しい学校生活

翌日。初登校の時間が迫っている中、星は新しい制服に袖を通し、昨日の夜渡された新しい教科書と時間割が書かれたプリントを再確認して、昨夜用意した教科書とノートを確認する。

不思議と初めて転校するにしては、心も落ち着いていた。おそらく、いじめに遭っていた学校から転校したことで知り合いがいない環境に安心感を持っているからかもしれない。

「——こうして、また学校に通えるなんて……色々な事があつたけど、学校に行けなくなって初めて分かった。私は学校が好きだったんだって……だから、こうしてまた行けるようになっただけで充分……エミルさ——お姉様には感謝しないと」

学校指定の新しいランドセルを優しく手の平で撫でながら感慨深げに目を閉じた星の耳に、ドアをノックする音が聞こえてきた。

「星ちゃん朝食の用意が出来たわよ。もう起きてる？」

「はい！ お姉様、今行きますー！」

星がドアの前まで駆けて行くと部屋を出ようとドアを開けた。

ドアを開けるとそこにはエミルが驚いた顔をしたまま立っていた。そんな彼女に「どうかしました？」と尋ねると、エミルが星の両肩がしつと掴んだ。

「星ちゃんさつきなんて言ったのツ!？」

「えっ? どうかしまし——」

「——ううんその前!」

顔を更に寄せて迫ってくるエミルに星は驚き目を丸くさせる。

その星の顔を見てふっと我に返ったエミルは掴んでいた肩から手をゆつくり放した。

「……ごめんなさい。ちよつと熱くなつてしまったみたいね」

「いえ、私こそごめんなさい」

そう言った直後、エミルに向かって星は不安そうに眉をひそめながら尋ねる。

「あの……いやでしたか?」

「ううん！ 全然！ それよりも、お願い！ もう一回言って！」

「……はい。お……お姉様？」

星は小首を傾げながらさういうと、エミルが満足そうに目を瞑り。

「……もう一回」

「え？ お姉様」

「もう一回」

「お姉様」

星はエミルに言われた通り「お姉様」と彼女のことを呼んだ。

すると、エミルは床に膝を突いて星の体をしっかりとその小さな体を抱きしめた。

「……うん。お姉ちゃんよ……あらためて、これからよろしくね。星」

「……はい。お姉様」

星もエミルの体をぎゅつと抱きしめた。

それから、2人は朝食を取るために食堂に向かった。食堂の中に入ると、部屋のテーブルの周りには5人のメイド達が立っていた。

「おはようございます。愛海お嬢様、星お嬢様」

「おはよう」

「おはようございます」

2人はメイド達に挨拶をすると、椅子に腰掛けた。すると、テーブルの周りにいたメイド達がキッチンの方に消えていった。

キッチンに消えた彼女達が料理の載ったお盆を持って戻ってくるのと、その料理を星の前に置いた。

星とエミルの前に置かれたのはベーコンの入った野菜のスープとスクランブルエッグに食パンに瓶に入ったイチゴジャムが置かれている。

2人は手を合わせて「いただきます」と言って朝食を食べ始めた。

食事を終えて紅茶とホットミルクを飲んでゆっくりしていると、車の準備ができたようでスーツを着た白髪の執事の小林が2人を呼びに来る。

「お嬢様方、お車の用意ができました」

「分かったわ。それじゃ、星行きましょうか！」

「はい」

星は返事をするので部屋に戻って用意していたランドセルを取りに戻ろうと部屋を出ようと走り出そうとした時、それをエミルが呼び止めた。

「荷物はもう玄関に用意してくれてるから、後は行くだけでいいのよ？」

「え？ は、はい」

そう言っただけで彼女に、星は半信半疑のまま頷く。だが、エミルの言葉は事実で玄関に行くときメイド達が星とエミルのカバンを持って待っていた。

驚く星を他所に、エミルは「ありがとう」と躊躇することなくカバンを受け取った。

カバンを受け取ったエミルが星のランドセルをメイドから受け取って立っている星に手渡した。

星は少し躊躇しながらもエミルの持ったランドセルを受け取った。

「さあ、行きましょうか。初登校で遅刻したら大変よ？」

「はい。そうですね」

星がエミルと一緒に玄関を出ると、執事の小林にカバンを渡したが星はランドセルを持ったまま車に乗った。

車に乗り込むと、持っていたランドセルを開ける。

ランドセルの中には、星が用意した教科書の他にハンカチやポケットティッシュなどが追加で入っていた。それと四つ折りにされた手紙が入っていて、開いてみるとそこには電話番号が書かれており、その上に。

『お嬢様。初登校で困った事や忘れ物があればご連絡下さい。すぐに対応させて頂きます。最後に初登校おめでとうございます。メイド一同、星お嬢様のより良い学校生活を陰ながら応援しております。』
と書いてあって、それを讀んだ星は感動しながら手紙をランドセルの中に戻した。

その様子を横で見ていたエミルが笑顔を浮かべながら話し掛ける。
「うちのメイド達は優秀だから、何かあったら連絡すれば助けてくれ

るわ。それに、頼ってくれないと悲しくなるから、申し訳ないとか思わないでどんどん頼ってあげてね」

「はい。何か困った事があったら電話します」

「ええ、そうしてくれると彼女達も喜ぶわ」

エミルにそう言われ、星も小さく頷いた。

だが、エミルはカバンの中を確認しないということはそれだけメイド達を信頼しているという証拠なのだろう。

それから30分ほど車で揺られていると、学校が見えてきた。

私立天宮白桜学園——これから星が長い間お世話になる学校だ。外見は西洋の洋館のような外見で小中高一貫校。父親の伊勢智弘と高校時代からの同級生で、元々は智弘と化石を掘りに海外に共に行った関係でもある。智弘が石油の取り引きに忙しくなったのを機に、智弘からの資金援助で学園を立ち上げた。

私立天宮白桜学園では全国から資産家、政治家の息子、娘達を集め。社会に出てからも良好な関係性を築けるようにと男女は別々の校舎に分けられている。

その理由は至極まともなもので、男女を分けることで男性らしく、女性は女性らしくをスローガンに掲げている。

日本が男女平等を掲げ、女性が社会進出するこの時代には珍しいが、それは庶民の間だけの話だ——非正規雇用、結婚率の低下に伴う出生率の減少。これは2036年の現在も変わっていない。いや、顕著に表れていて社会現象にまで広がっていた。

その為、女性の社会進出など謳っているが、その実はただの労働力の確保する為であり。少子化による高齢者の増加を懸念して、平均寿命を下げる狙いもある。

いくらでも代えが効く一般の国民はそれでもいいが、上場企業の社長や政治家の息子や令嬢に早死にされては国の将来も閉ざされることになる。しかも、まだ精神が不安定な年代の不純異性交遊などの抑制にも男女を分けるのには効果があるのだ。

学校に着くなり裏門に車を止めると、車から降りるエミルが心配そうに星の顔を見た。

「大丈夫ですよ。ただ学校に行くだけですから。何かあったら電話しますし、エミルさんは心配しないで下さい」

そう言った星は、心配そうな顔したエミルに笑顔で返した。

エミルは心配そうにしながらも、車のトランクから執事の小林が出したカバンを受け取って学校の中に入って行った。

それから正門に車を回し、星がランドセルを背負って車から降りようとした時、ドアを掴んで立っていた小林が口を開く。

「星お嬢様。差し出がましいかもしれませんが、お友達を作るには、自分から相手を理解する努力をする事です。お嬢様はお優しいので心配はいらないと思いますが」

「はい。ありがとうございます」

執事の小林の言葉を聞いて星はお礼を言って微笑んだ。

新しい学校生活2

ランドセルを背負って校門を過ぎると、振り向いてまだ自分のことを見ている執事の小林に笑顔で控えめに手を振って校舎に向かって歩いて行く。

初めて見る校舎なのに何故か初めての感じがしない。おそらく、星の心の中ではもう覚悟が決まっているからかもしれない。

校舎の中に入ると自分の名前の書かれた下駄箱を見つけて中を開くと、新品の上履きが入っていた。

それを履き替えようとした時、校門の方から大声で叫ぶ子供の声が聞こえてくる。

「嫌だー!! 絶対にやだ!!」

「やだじゃないでしょ! 女の子だからスカートしかないの! 好き勝手したんだから、もうわがままは聞きません! それじゃお母さんは帰りますからね。しっかりとこの学校で女の子らしさを勉強なさい!」

母親の女性の長いスカートの裾を引っ張っている女の子のことを振り払うように足早に校舎を出て行った。

下駄箱の隅からその一部始終を見ていた星が泣いている女の子の方に歩いていく。すると、顔を上げた女の子と星の目が合った。

短い白い髪に涙で潤んでいる青い瞳の女の子は、言葉は悪いが星には美しく見えた。

しばらくお互いの瞳を見つめ合っていたが、女の子は星の履いていたズボンを見て。

「……………いいなあ」

真つ直ぐにズボンを見てそう呟く女の子の手を引いて立たせると、星は彼女の手を引いて近くの部屋に入った。

「交換する?」

「いいの!」

驚いた様子で目を丸くする女の子に、星は頷いてズボンのベルトに手を掛けた。

ズボンを脱いでそれを女の子の前に突き出すと、さつきまで泣いていた女の子は嬉しそうに何度も頷いてスカートを脱いで星に渡した。スカートを受け取った星はズボンを代わりに渡すと、貰ったスカートを履いた。

「このスカートは後で下駄箱に返すから、家に帰る前にまた履き替えてね」

「でも、そしたら君はどうするの?」

「心配しないでいいよ。私は運動着に着替えて帰るから、それじゃ!」星はそう言つて急いで部屋を飛び出した。

廊下を走つて一番近い階段を駆け上がると、後ろを振り返つて女の子が追いかけてこないのを確認して背負っていたランドセルを地面に置くと、壁に凭れて乱れた息を整える。

肩で息をしながらまだ大きく脈打つ胸に手を当てて瞼を閉じた。

どうしてあんなことをしたのか星にも分からない。だが、多分あの女の子が泣いていたのを見て自分と重なって見えたのかもしれない。

星も自分がいじめに遭つた原因のノーパン事件でスカートを履いていて、それ以来学校でスカートを履くのを拒んでいた。

だが、今はその時と違い。エミルが側にいてくれる。だからこそ、強くいられるのかもしれない。普段だったら、同い年の知らない子に話し掛けるなんてことはしなかっただろう……。

心臓の鼓動が次第に治まり、息を大きく吐くと職員室に向かって歩き出した。

職員室の前にきた星がドアをノックすると、中から若い男性教師が出てきた。

「今日転校してくる事になった。伊勢星です」

「ああ! 伊勢様のご令嬢でしたか! 本来はこちらからお迎えに行かなければならなかったのですが、わざわざ御足労願いましてありがとうございます!」

若い男性教師は凄くかしこまってぺこぺこ頭を下げる。そんな若い男性教師の様子に、星はあらためてエミルの家の凄さを再確認し

た。

若い男性教師に連れられて別室に移動すると、そこにはさつき下駄箱で会った白髪に青い瞳の女の子が座っていた。

2人は互いの顔を見るなり「あつ！」と声を上げると、若い男性教師はそんな2人を見て不思議そうに首を傾げた。

だが、上流階級の子供であれば、学校に入学する前に家同士での関わりがあるなんてのは珍しくもない。男性教師が首を傾げていたのは、そのこともあつてなのだろう。

「知り合いですか？」

「……ええ、まあ」

星がそういうと、白髪の女の子は嬉しそうな笑みを浮かべると自分の座っているソファアの隣をポンポンと叩いて座るようにと促す。

仕方なく彼女の隣に座ると、笑みを浮かべながら星の方を見たが、星は前を向いたまま反応しなかった。

女の子は少し不服そうな顔をしたが、若い男性教師が喋りだしたことで意識がそつちに向いた。

「今回は転校生が2人ということ、私のクラスで犬神さんと伊勢さんを受け入れることになりました。これから仲良くやっていきましょう！」

「はい！」

「……は、はい」

青い瞳をキラキラと輝かせながら力強く頷いたが、星は少し困った表情で歯切れ悪く頷く。

星としてはまさか同じクラスに振り分けられるとは思っても見なかったのだろう。学園の大きさを考えれば、少なくとも1学年で3から5クラスはあると考えていた。だからこそ、親切で自分の履いていたズボンを交換してあげたわけだが、これでは星の予定が大きく狂ってしまう。

困った表情で俯いていると、それを察した若い男性教師は……。

「それではホームルームの時間も迫ってきたので行きますか！」

「はい！」

「ほう」

女の子と星が返事をする、立ち上がった若い男性教師は部屋を出て教室に向かって長い廊下を歩く。職員室は2階にあり四年生の教室も2階にある。いや、正確には各階に職員室があるのだ。

私立の学校ということもあり。卒業生や生徒の親からの寄付などで莫大な資金力があるこの学園でもっとも避けねばならないのは、生徒同士のいざこざだ。もしもいじめや不純異性交遊などが行われれば権力を持つ親の多いこの学園の存続そのものが危うくなってしまうのは必定だ——つまり、職員室が複数に分かれているのはそういった生徒同士の不適切な行動を監視し制止する為に必要な処置なのだ。

学園には1000人以上の教職員が在籍しており、常に学園生活、学業や部活動に問題が起きないように常に動いている。

1階に一、二年生は一階に各5クラス。2階に三、四年生。3階は五、六年生。そして4階には視聴覚室、理科室、調理室などの特別教室が並んでいる。それはもしもの水害に備えての避難所も兼ねているからだ。しかも、この学園では夏に恒例の学校合宿というものがあり、希望する生徒は学校に泊まり込みで星を見る会や怖い話などの行事も行われる。

学園で行われるイベントも他の公立学校よりも多く、道徳の授業の代わりに月一単位で学生の保護者が経営しているアミューズメント施設や会社の慰安旅行で使う施設などに校外学習を行っている。

これだけ多くのイベントを行えるのも資金力のたまものであり、それだけ保護者も生徒同士での交流の時間を大事にしているということでもある。それも社会に出てからお互いに協力する必要がある、人生にとって有益な存在になれるようにという背景があるのだ——。

星達が着いた教室のドアの上にはせり出したプレートには2組と書いてある。

「お二人とも少しここで待っていて下さい。私が呼んだら入ってきて下さい」

二人がそれを聞いて頷くと教室の外で待っていた。

隣で星に話し掛けようとそわそわしている女の子を他所に、星は前を向いたまま窓から空を流れる雲を見ていた。

しばらく教室の外で待っていると、中から2人を呼ぶ声が聞こえてきて星と女の子は教室に入ってしまった。

新しい学校生活3

教卓の横に2人で並ぶと、生徒達の視線は彼女達に集中する。

「それじゃ、黒板に名前を書いて自己紹介をお願いできますか？」

「はい」

返事をしてそれぞれ黒板に自分の名前を書く。

先に書き終わった白髪に青い瞳の女の子が振り返って自己紹介をする。

「僕は犬神つかさです。趣味は寝ること。特技はスポーツ全部！休み時間に一緒にドッジボールとかして皆で仲良く遊べたら嬉しいです！」

自己紹介を終えたつかさは笑顔で頭を下げると、生徒達から盛大な拍手が巻き起こる。

そして星の番がきて……。

「私の名前は伊勢星です。この学校には勉強しにきましたので、友達とかはいりません。だから、私に話しかけるのはやめて下さい」

そう言っ頭を下げる星に、教室内は静まり返って生徒達からも動揺が見られる。

それにはさすがに若い男性教師も驚き目を丸くしていたが、すぐに我に返って口を開いた。

「学校に来る目的は人それぞれですから、伊勢さんの意見も別におかしい事ではありません。それに学生の本分は勉強ですからね。さすがは伊勢家の御令嬢です」

その直後、一瞬教室内がざわめきそのざわめきが拍手へと変わった。

若い男性教師もほっとした様子で息を漏らした。

「じゃー、犬神さんは前の席。伊勢さんは後ろの席をお願いします。お二人が席に着いたら授業を始めましょう」

それぞれ少し離れた席に座ると、鞆の中から教科書を取り出して机に広げる。それを確認して若い男性教師が「それじゃー授業を始めます」の掛け声と共に教室の後ろのドアから3人の別の教師達が入って

くる。

後から入ってきた教師達は授業の間、手を上げた生徒の勉強を見ている。

授業が終わると、すぐに教科書をカバンにしまつて教室を出た。つかさが何か言いたげだったが、友達をいらぬ宣言した星の代わりに、つかさの周りには多くの生徒達が集まっていた。

教室から出た星は図書室に向かって歩き出した。図書室は4階にあり、3階が教室になっている星は階段を上げばすぐだ。

上の階に着いた星は図書室の文字を見つけて中に入った。図書室の中は大きな学園からしたら小さいと感じるが、他の学校の図書室と同じくらい大きさはある。

そして、多くの特別教室がある為、図書室を学園内に作るならこれが限界と言える大きさなのだろう。

だが、これは学園内に作るならということでももちろん。学園の敷地内に別の図書館が併設されている。そちらの方は5階建てで様々な専門書など置かれている。しかも、参考書などは毎年入れ替えられ、古いものは10年周期で廃棄されるほどだ。

星が図書室に入ると、2人の監視している教師とその教師達が座っているカウンターの前には6台のタッチ式の機械が置かれていた。

テーブルの数はさほど多くないところを見ると、この場で本を読むというよりは借りて読むのがメインらしい……。

教室に入った星はたくさん本が置かれた本棚を見て、堅くなっていた表情を和らげる。

テーブルの先にある本棚の方へと吸い込まれるように歩いて行く。本棚に置かれている本を手にとってホツとした息を吐いた。

「はあ、慣れないことはするものじゃないなあ……」

星は少し悲しそうな顔をしながら手に取った本の角を撫でてそう呟く。

人に好かれようと振る舞ってきた星にとって、人に嫌われるように振る舞うのは相当難しいことなのだ。

新しい環境に、自分が今まで体験したことのない他人の対応——担

任の教師だけでも前の学校ではあからさまに無視され続けてきた。それがいまじや、自分を持ち上げようとしている……その様子は媚びへつらっているようにまで感じる。いや、現に媚びへつらっているのだ。それも、自分ではなく自分の新しい名前に……。

それは無視されていた頃と同じで、自分という存在を否定されているようにまで感じるほど。

(……結局。どこに行っても私が変わる事はできない。だから、壊してしまいうくらいなら何もいままでもいい。また学校に通える……こんな私を家族にしてくれたお姉様やお父様の為に、勉強して立派な人になるんだ。そしたらきつと、いつか私を認めてくれるから……)

心の中でそう呟いた星は本を持って空いている椅子を探してそこに腰掛けて本を広げる。

本を読むことに夢中になっていた星はチャイムが鳴って我に返ると、本を本棚に戻して教室へ戻った。

先生の言葉をすっかり聞いて教科書を読んで、黒板に書かれた文字をノートに書き写していると、すぐに休み時間になる。授業の終わりを告げるチャイムと共に教科書を閉じると再び図書室へ向かう。その繰り返しをしていると、いつの間にかお昼になっていた……。

普通の小学生なら給食の時間を心待ちにしているのだが、星には喜ばしいことではない。何故なら、給食の時間だけは他の生徒と対面して食べなければならぬからだ。

配膳係などはなく、手の空いている教師達が給食の入った箱を持つてくると、前の席から順番に給食を取っていく。

普通の学校の給食と違うのは、1人分がお弁当の様に分けられているのと、近くの生徒同士で席をくつつけたりせず前を見たままで食事をする事だ。

全員が給食を机に置いたのを確認して「いただきます」を言うと、私語をせずに黙々と食事をしている。

食べ終わると、各自で「ごちそうさま」を言って、給食が入っていた容器を箱の中に戻して昼休みに入っている。校庭に遊びに行く者もいれば、友達が食べ終わるのを待つ者もいる。

星も食事を終えると食べ終えた容器を箱に戻してまた図書室に向かう。せっかく長い昼休みの間に星は少し遠くにある図書館に行くうとしていた。

学園の敷地内は想像以上に広く移動用に小型のカーツがあるくらいだ。専属の運転手が行きたいところまで運転してくれる。

星もそのカーツを利用して図書館まで行くと、カーツから降りて運転手のおじさんにお礼を言つて降りた。

昼休みに図書館を利用する人も多いのか、星と同じ制服を着た初等部の生徒と中等部、高等部の生徒も多く利用している。

大きな図書館を見上げて呆気にとられている星の横を次々に通り過ぎていく。

星も図書館には行つたことがあるが、これほど大きな図書館は見たことがない……。

だが、休み時間のうちに校舎に戻らなければならず時間も限られている。図書館に入ると、1階には喫茶店やレンタルビデオショップなども入っている。

館内の案内図を見る限り、2階からは本と勉強スペースや休憩用のソファアなどが置かれているようだ――。

とりあえず、星の好きなファンタジー系の本がたくさん置いてあるであろう児童書のコーナーがある3階に向かった。

エレベーターで3階に上ると、真つ直ぐ児童書が置かれている本棚の前まできて、その多さに瞳を輝かせる。

通路を挟んで天井まで積まれた本に星も少し興奮した様子で物色し始めた。

夢中で興味がある本を片っ端から開いては戻してを繰り返していると、昼休みの終わりが近付いてきていた。戻る時間を考えると、時間もギリギリで気になつていた本を借りる時間はなさそうだ。

放課後にまた来ることを心に誓つて星は校舎へと戻るため敷地内を走るカーツに乗つて校舎へ戻つた。それから放課後になるのを心待ちにしながら授業を受けていた……。

新しい学校生活4

待ちに待った放課後が来ると、朝につかさと約束した通り。下をジャージに着替えて保健室で「遊んで汚してしまったので」と代わりのスカート借りて着ていたスカートをつかさの下駄箱の中に入れて図書館へと急いだ。

図書館へ着くと、腕に付けていた携帯端末にエミルからのメールが入ってきた。

『私の授業が終わるまで図書館の中で待っててもらえる？ 終わったら迎えに行くからね!』

メールを読み終えると、星は図書館の中へと入っていった。

中に入ると昼休みにも行つた3階の児童書コーナーに迷わず向かっていく。たくさん置かれた本の中から気になった本を3冊ほど腕に抱えて空いているテーブルに着くと、カバンの中から教科書と宿題のプリントを出して黙々と解き始めた。

宿題が終わると持ってきた本を広げてエミルが迎えに来るのを大人しく待っていた……。

星が本を読んでいると、隣に誰かが座ってきた。視線を感じて横目で見ると、そこには眉間にしわを寄せながら星のことを見ているつかさが居た。

彼女の身に着けている制服の下が、ズボンからスカートに変わっているのを確認して、ちゃんとかさが受け取ったことに内心ではホツとしながらも。

あえて視線を合わせないようにしていた星だったが、つかさが怒った様子で星に向かって言った。

「もう！ せっかく友達になれると思ったのに休み時間のたびにどこかに行つちやうからさ。下駄箱にスカートも入ってたし、お礼を言おうと思って探したらこんなところまで来てるし!」

「……自己紹介の時言ったでしょ？ 私には友達はいらないって」

本の方を見ながら冷たく言うのと、つかさはさらに機嫌を悪くしたように頬を膨らませている。

星もそれには気が付いていたが、あえて無視していた。正直、そうすればすぐにいなくなってくれると思っていた。

頬を膨らませていたつかさの肩が細かく震えている。ちらっと横目でそれを見た星は読んでいた本を閉じて席を立った。

本棚の方へ歩いていくと、また本棚を物色して新たな本を探し始める。

「もうー」

無視されていたつかさがそう叫ぶと、走ってきて本棚に伸ばしていた星の腕を掴んでいきなり走り出した。

「えっ!? ちょっと待ってー!」

驚き自分の腕を掴んだまま前を走るつかさに星が叫んだが、つかさは無言のまま走り続けた。

ちょうど着いて開いていたエレベーターに駆け込んだつかさは、最上階のボタンを押してエレベーターのドアが閉まり動き出した。

それと同時につかさは掴んでいた星の腕から手を離す。

「な、なんなの急に……」

密室に連れてこられ、気丈に振る舞っていた星も少し不安そうな弱々しい声で言った。

「それはごっちのセリフ! 僕を無視して本ばかり見てるからでしょ!」

「……私をどうするの?」

エレベーターの壁に背中を付けた星がつかさにそう尋ねた。

動揺しているためか、星の声は震えていて視線は下を向いている。

その時の星の脳裏にはいじめられていた時の記憶が鮮明に浮かんでいた。

つかさを無視していたのは事実だし、それにつかさが頭にきているのも分かっている。正直、殴られるくらいのことをされても仕方ないときえ思っていた。

だが、やはり仕方がないと思っていても暴力を振るわれるのは怖い。エレベーターという密室に閉じ込められては逃げ場もない。

自分の胸に震えた手を合わせると、心臓の鼓動がどくんどくと大

きく脈打つのを感ずる。

つかさが一歩、また一歩と距離を縮めてくる。真つ直ぐに自分の目を見て迫ってくる彼女に星は動くこともできずにいた。

つと、最上階に着いたエレベーターのドアが開き、その隙に星は慌ててエレベーターの中を飛び出した。

一目散に走って逃げる星をつかさも追いかける。

だが、元々運動があまり得意ではない星は屋上へと続く階段の踊り場でつかさに腕を掴まれて捕まってしまった。

「はあ……はあ……」

「どうして逃げるのさー！」

苦しそうに肩で息をしている星に、息も乱していないつかさが尋ねた。

「そ、それは……あ、あなたが追いかけて……くるから……」

激しく呼吸する星が切れ切れにそう答えると、つかさは真剣な顔で星に言った。

「僕は君と友達になりたい！」

「……えっ？」

その言葉に星の心臓が更に激しく脈打ち、顔が真つ赤に染まった。だが、すぐに首を振ってつかさの掴んでいた手を振り解く。

「私はいやだ……私は友達なんていらぬ！」

「僕もやだ！僕は君と友達になりたい！なんでいやなのさー！」

「……」

そう言つて迫ってくるつかさに、星は言葉を詰まらせる。

つかさのその青い瞳が彼女の真剣さを物語っていた。本気で自分と友達になりたいと言つてくれるのは星にも分かってはいたが、星には友達を作れない理由があった。

それは……

「……あなたも聞いたでしょ？ クラスの子が言つてたこと……私は伊勢星じゃない。私の本当の名前は夜空——夜空星。テレビで言つてた犯罪者なの……」

休み時間に入る時、前の席の子が小声で言つていた。

『ゲーム世界に多くの人を閉じ込めた犯人の娘で、自分がヒーローになる為にチート能力を出し惜しみして、未だに多くの昏睡状態の患者を出したことも気にせず、のうのうと暮らす犯罪者の夜空星じゃないか……』

そう女の子が話していた。その時に、つかさも近くについて聞いていなかったわけがない。いや、ニュースでも何度もやっている夜空星と言う名前は知らない者はいない。

「——私は、普通に生活したいから名前を変えたの。転校してまた一から始めるためにここに来た……分かったでしょ？ 私は犯罪者なの。だからもう私に関わらないで……」

そう言って振り返った星は唇を噛み締める。

「そんなの嘘だ！」

「……嘘じゃない。すべて本当のことな——」

「——嘘だ!!」

話している星の言葉を遮るようにつかさが叫んだ。

そして再び星の腕を掴んで自分の方に引き寄せると、バランスを崩した星がふらふらと壁の方へとよろめき、背中を壁に打ち付けた。

壁に背中を打ち付けた星が瞼を開くと、両手を壁に突いたつかさと目が合った。

「これでもう逃げられないよ」

つかさの綺麗な青い瞳の中には星の顔が映っているのがはつきりと見える。

顔がくつつきそうなほどの距離に星は頬を赤らめながら視線を逸らした。

女の子のはずなのに、今はまるで星が得意じゃない男性のような感じで心臓が走っていた時よりも激しく脈打つ。

「どうして目を逸らすの？ 僕の目を見てよ」

「……だ、だって。近いから……」

「近付かないと目を見れないでしょ？」

視線を逸らして頬を赤らめさせている星の顔をつかさが覗き込む。

吐息だけでなく心臓の音まで聞こえそうな距離。こんな近距離は

エミルとしか経験したことがない。

息を止め、じつと自分の目を見ているつかさを横目で見ると、つかさがにつこりと笑った。

「やっぱりね！ 君は犯罪者じゃない。お父さんが言ってたんだ。悪い奴は目を見れば分かるって！ こんな綺麗な目をしてる子に悪い事はできないよ！」

「……そんなことない」

星はつかさの目をじつと見つめながら言葉が続けた。

「私は犯罪者なの。だから、あなたとは友達になんてなれないし、なる資格もない！」

つかさは驚いたように目を丸くしている。だが、すぐに真っ直ぐ自分の瞳を見ている星に言葉を返した。

「資格なんていらない。僕は星と友達になりたいんだ」

「……だから、それはできない。私と一緒にいたら、あなたまで悪く思われてしまう」

「それでもいい！」

「よくない！」

星はつかさの体を強引に押し返して叫んだ。

新しい学校生活5

その行動に驚いたのか、つかさは星の方を向いて呆然としている。

「……よくないよ。せっかく同じ年の子がたくさんいるんだから、友達をたくさん作らないともったいない。私なんか放っておいて他の友達を作ればいい……私は一人で大丈夫。だから、犬神さんは友達を作って」

「全然大丈夫じゃない！ 一人で大丈夫なわけないだろ！ どうして友達を作ろうとしないんだよ！」

「……私は友達はいらないから」

星がそう答えるとつかさが叫ぶ。

「そうじゃない！ それじゃ友達がいらない理由にならない！」

「はあ……もしもケーキが4つあって、その場に5人いたとしたら。誰かはケーキを食べられないでしょ？ でも、その場に4人しかいなかったらみんながケーキを食べられる。それが人でも同じ……だから私は友達はいらないの……」

それを聞いたつかさは更に怒った様子で叫んだ。

「そんなのおかしい！ 絶対におかしい！ それならケーキを5人に分ければいいじゃん！ 一人いなくなる必要ない！」

「でも、それだと小さくなってけんかになる」

「けんかになんてならない。僕のケーキを半分あげるもん！」

そう言っただけで真つ直ぐ自分の顔を見てくるつかさから星は目を逸らす。

「ケーキはそれでもいいかもしれないけど、人は半分にはできない。

2人1組を作る時は必ず1人あまるから……」

「なら、3人でやればいい！ 僕が星を1人にさせない！」

真剣なつかさの表情から、その言葉に嘘がないと分かる。

だが、星は悲しそうな顔でつかさに言った。

「……私はね。人を殺したの……」

「——え？」

つかさが驚いた様子で星を見る。

星は俯き加減に唇を噛み締めると、手をぎゅつと強く握り締めた。
「……刺したの。剣で、人を……その感触が、この手の平から消えないの……」

顔を上げた星は今にも泣き出しそうな目でつかさを見た。

「それに、私のせいでゲーム内で多くの人を死なせてしまつて……その人達も今も寝たままで……私は何をされても文句は言えない」

その時の星の脳裏には九條がいなくなった夜に、コンビニの帰りに襲われた男性の顔と「犯罪者には何をしてもいいよな」という言葉が蘇っていた。

「だから！ 被害者の人達の大好きな人を悲しませた私に、友達を作る資格も幸せになる資格もないの……だって、私は犯罪者で——人殺しだから……」

薄らと星の紫色の瞳が涙で滲んでいた。

その星の言葉を聞いてつかさは悲しそうな顔で星に言った。

「そうなんだ……辛かったね……」

つかさの言葉を聞いた星が大きな声で叫んだ。

「私は辛くない！ 全部私が悪いの！ 私が……私がもつと頑張つていれば。もつと——もつと早く終わりにできた。そしたら、みんなつらい思いをしなくてよかつたの……全部私が悪いの……だから、もう私に関わらないで……お願いだから……」

「いやだ」

「……どうして!?!」

星がそう尋ねると、つかさは横の窓の方を指差して言った。

「そんな辛くて悲しそうな顔で泣いている子のお願いなんて聞けないよ……」

「……こ、これは違う」

窓ガラスに映った自分を見てすぐに流れていた涙を腕で拭う。

「星は悪くないよ。確かに人を殺したのかもしれない……でも、理由があつて仕方なかつたんでしょ？ そうじゃなきゃ、困つてる人を放つておけない星が人を殺せるはずないもん」

「どんな理由があつても人を殺していいはずがない！ だから私はあ

の時に死ななきやいけなかったの！ でも……怖くて死ねなかった。お母さんに会いたくて死ねなかった……まあ、結局会えなかったけど——私の今の家族は本当の家族じゃないの……助けてもらって、学校にも行かせて……だから、本当はこんな学校にいていい人間じゃない」

それを聞いたつかさが「だから1人でいるの？」と尋ねると、星もそれに無言のまま深く頷いた。

「はあ……やっぱりおかしいよ星は」

「……そうかもしれないね」

つかさの言葉に眉をひそませて俯き加減に弱々しく答えた。

「僕達は小学生だよ？ 周りの大人がダメだったことをなんとかできるといけないじゃん！ 星はなにも悪くない。それどころかすごいことをしたんだから胸を張りなよ！ ゲームに閉じ込められた人を助けるなんてヒーローみたいでかっこいい！ 僕は絶対星と友達になりたい！」

「ヒーローみたいか……でも、他の人はそう思ってくれないから……」

星はそう言つてつかさに頭を深々と下げた。

「私と友達になりたいと言つてくれるのは嬉しい。でも、私と一緒にいると犬神さんに迷惑を掛けることになる。だからもう、私に話しかけないで……私はあなたの学校生活を壊したくない」

深々と頭を下げる星を見て、つかさは不機嫌そうに眉間にしわを寄せながら言った。

「なんで星が僕の友達になると迷惑が掛かるの？ どうして星が友達になると僕の学校生活を壊すことになるの？ どうして星は僕の友達になつてくれないのさー！」

声を荒らげるつかさに、星は表情を曇らせる。

真つ直ぐなつかさは、今まで素直に育てられてきたのだろう。いい両親といい友達に囲まれて、社会の悪とは無縁の世界で生きてきたのだろう。

そう。星とは真逆の世界で……。

表情を曇らせ眉をひそませながら、星は悲しそうな顔で言った。

「それは……私がヒーローじゃなくて、悪者だからだよ……皆が仲良くするためには、誰かが敵にならないといけないの」

「なんでさー！ 皆で仲良くすればいいだけでしょ？ なのになんで敵を作らないといけないのさー！ そんなのおかしいじゃんー！」

怒っているつかさを見て、星は冷静に言葉を続けた。

「今の犬神さんみたいに、イライラする心を吐き出さないと、みんなおかしくなるんだよ。だから、それを吐き出すために悪い人が必要な……さつきも言ったけど、私は犯罪者で人殺しの悪者。皆、私の事をそう思っている……だから、私は悪者でいいといけないの」

「どうして星が悪者でいいといけないのさー！」
そう叫んだつかさに「慣れてるからだよ」と言っ、星は優しく彼女に微笑んだ。

「私はみんなや犬神さんが笑ってるのを見てるだけで満足なんだ。そこに私が入ってなくても、私は楽しいから……」

「そんなの絶対嘘だ！ もし僕なら一緒に遊んだりした方が楽しいもん！」

「犬神さんはそうなんだろうね。でも私はきつと困っちゃうよ……だって、うまくできる方法を知らないから……」

つかさは首を傾げながら「普通にすればいいんだよ」と言ったが、それを聞いた星は表情を曇らせながら首を横に振った。

「その普通が私にはできないの……私のお母さんは仕事が忙しくて夜遅くに帰ってくるからまともに会話した記憶がない。兄弟や友達がいれば良かったんだろうけど、私にはそんな人もいなくて……それどころか、前の学校ではいじめられてたしね」

星はそういうときこちない笑顔で「あはは」と笑って見せたが、つかさは眉をひそめてそんな星の顔を真っ直ぐ見つめていた。

「だから、一人でいることにも自分を悪く言われることにも慣れてるんだ……だから、私のことは気にしないで、犬神さんは私以外の友達を作っ」

そう言っにつこりと微笑んだ星に、つかさは険しい表情で「分かった」と頷いた。

星はほっとした様子で息を吐くと、歩き出してつかさの横を通り過ぎようとした直後、つかさが星の腕を掴んで強引に引っ張って壁際に追いやった。

突然のそのつかさの行動に星は驚き目を丸くさせながら顔を寄せてくるつかさを見た。

「なっ……だつて今、分かったつて……」

困惑した表情でつかさを見ていた星がそう呟くと、星の顔の横に両手を突いているつかさが答えた。

「分かったよ。星の考えも、星が優しいつてことも、星が頑固だつてことも全部。でも、僕も星に負けないくらい頑固なんだ！ だから、絶対に負けない。絶対に星と友達になる！ もう決めたんだ。絶対に僕は諦めない！ 必ず星に「うん」と頷かせてみせる！」

「だから、私と一緒にいたら犬神さんが……」

「そんなの構うもんか！ 僕は星が欲しい！ 星が欲しいんだ！」

壁を背にした星の顔を真剣な表情でまじまじと見てくるつかさに顔を真っ赤に染めながら星は視線を逸らした。

真剣そのもののつかさに星の胸がとくと大きく脈打つのを感じた。徐々に大きくなる鼓動を手で胸を押さえて沈めようとしたが全く治らない。

すると、そこに星の名前を呼ぶ声が聞こえてくる。

つかさはそれに気がつくつと、壁に突いていた両手を退けて星から離れた。

「家の人を迎えにきたみたいだね。それじゃ、また明日ね！」

つかさはそう言つて階段を一息で飛び降りる。

「ズボンありがとう！」

踊り場にいる星に向かつて手を振つて走り去つていった。

星は胸を押さえたまま力なくぺたんとその場に座り込むと。

「……なんだつたの」

つと呟く。だが、つかさが離れたのに星の胸の鼓動は治るどころか大きくなつている。

「なんなのこれ……」

頬を赤く染めた星は胸を押さえたまま呆然と夕日に照らされた廊下を見つめていた。

すると、エミルが座り込んでいる星を見つけて駆け寄ってきた。

「どうしたの!? 具合が悪いの!?!」

心配した様子で星を見ているエミルに、星はゆっくりと立ち上がり微笑んだ。

「大丈夫ですよ。ちよつと疲れちゃっただけなので……」

星が立ち上がると、エミルは星がスカートに変わっているのに気が付いた。

「ズボンはどうしたの? 誰かに奪われたとかだったら私が——」

「——いや、ちよつと色々あってズボンを貸してあげてるんです」

そこから星はエミルに詳しい経緯を説明すると、エミルは呆れながらも。

「まあ、いい事をしたんだから怒れないわね」

つと、ため息を漏らすと星の手を握って歩き出す。

星はエミルの横を歩きながらも、未だに治らない心臓の鼓動に困惑しながら胸を押さえていた。

テーブルに置いてきたカバンを取りに戻ると、本を借りて校門前に迎えにきてくれた車に乗った。

車に乗ったエミルは電話を掛ける。

「先日お伺いした伊勢ですが、制服の下を汚してしまったみたいで代わりの制服ってありませんか?」

『そうですね。ズボンは数日掛かりますが、スカートならすぐにお届けできますが、どうしますか?』

エミルは困った表情で星の方を見ると。

「サイズが合うズボンは今ないんだって。スカートならすぐに用意できるみたいなんだけど……」

「スカートでも大丈夫ですよ。私のせいですし……今はもうズボンに拘ってもいませんから」

星がそうエミルに伝えると、エミルはホツとしたように息を吐いた。

それはきつと、星の口から『もうズボンに拘っていない』という言葉
を聞いたからなのだろう……。。

新しい学校生活6

「そう。それなら良かったわ……それじゃー、そういう事なのでスカートを家に届けて頂けますか？」

『はい。すぐにお届けに参ります』

「ええ、お願いします」

エミルは通話を切ると星の方を向いて「届けてくれるって」というと、星はホッとした様子で笑顔を見せる。

星に向かってエミルが何気なく尋ねた。

「星。学校はどうだった？」

「はい！ 楽しかったです！」

そう言つて笑う星にエミルも安心したようにホッと胸を撫で下ろすと。

「そう。それは良かったわ。お家に帰ったら今日はご馳走ね！」

「え？ でも、別に特別な日じゃないですよ？ お姉様の誕生日でしたっけ？」

首を傾げる星にエミルはくすつと笑みをこぼし。

「私の誕生日は12月よ？ それに今日は星の転校して初めての登校記念日でしょ？ お祝いしないと！」

「えっ!? いいですよ。そんなたいしたことじゃないですし……」

遠慮した様子で言った星にエミルは優しく微笑み。

「なに言ってるの。もう星はうちの子なんだから遠慮しなくていいのよ？ それにもうメイド達も家でパーティーの準備をしているはずだしね！」

「そ、そうなんですか……」

星はエミルの話を聞いて少し嬉しそうな顔で俯いている。

そんな星の横顔を見てエミルは優しい笑みを浮かべた。

家に着くと、メイド2人が出迎えてくれた。その表情は心なしか普段よりも明るく見えた。

「お帰りのさいませお嬢様方」

「ただいま」

「ただいま」

エミルと星も彼女達に挨拶を返すと、家の中へと入っていく。玄関にはメイド長が居て、2人の姿を見ると深々と頭を上げて。

「お帰りなさいませ。おやつは後でお部屋までお持ちしまするのでお部屋でゆっくりなさって下さい」

「ええ、分かったわ。星ちゃん行きましょう。ゲームでもお勉強でも何でも教えてあげる！」

「え？ は、はい」

返事をした星の手を引いてエミルは自分の部屋がある2階へと階段を上が行った。

エミルに連れられた星が彼女の部屋の中に入って周りを見渡していると、エミルがクローゼットを開けて中からボードゲームを取り出してきた。

エミルが出してきたのは定番の人生ゲームだ——ゲームの発展と共にボードゲームなどのアナログゲームの数は減った。

原因はゲーム機の小型化によって生き残ったアナログゲームはトランプやUNOなどのカードゲームくらいなものだ——。

箱を開けて中から取り出した人生ゲームを床に広げているエミルに、星は言いにくそうに告げた。

「……あの。私、勉強をしたくて」

「ああ、そうね。星ちゃんは学校に行っていないなかった期間があるから少しでも皆に追いつかないといけないものね。よし！ 勉強しようか！」

エミルは出した人生ゲームを放置して机に腰掛けて星を呼んだ。

星も表情を明るくさせてカバンを持ってエミルの方に歩いて行った。

それからエミルに勉強を見てもらっていると、部屋をノックする音がした。

「お嬢様方。お菓子をお持ちしました」

「どうぞ」

メイド長の声のエミルが返事をするのでドアを開けておぼんを持つ

たメイド長が入ってきた。

「お勉強なされてたんですか。それでは邪魔してしまいましたね」

「いえ、ちょうど休憩しようと思っていたから良かったわ」

エミルがそう告げると、メイド長は部屋に入ってきて机の上におぼんを置いて星に向かって微笑み。

「星お嬢様には紅茶ではなくココアを入れたのですが、紅茶の方が良かったですか？」

「あつ、ココアで大丈夫です」

遠慮しながら頷く星に、メイド長は小声で言った。

「今日は初登校お疲れ様です。私も他のメイド達も自分の事のように喜んでおります。本当ですよ？」

「はい。ありがとうございます」

「星お嬢様が何か困ったことがあれば、私にご相談下さい。必ず力になりますわ」

そう告げたメイド長は星の返事を聞く前に側を離れてドアの前まで行くと星とエミルの方を向いて体の前で手を合わせて丁寧に頭を下げて部屋を後にした。

今日の朝にカバンの中に入っていた手紙にも同じようなことが書いてあったが、やはり実際に声に出して言われると心を揺さぶられるものがある。

メイド長がいなくなると、エミルは机の上に置かれたティーカップを手に取って星に微笑んだ。

「少し休憩しましょう。お菓子もあるしね！」

「はい」

クツキーを指差してそう言ったエミルの言葉に、星も大きく頷いた。

2人はお菓子のクツキーを食べて飲み物を飲みながらゆつくりしている、エミルがふと星に尋ねてくる。

「星ちゃんは読書が好きみたいだけど、他に好きなことはないの？」

「えっ？」

彼女の突然の質問に星は驚いた顔でエミルの顔を見つめている。

それもそうだろう。全く予期していなかったその質問に困惑しないわけがない。

「……分らないです。本を読むこと以外したことないので……」
「なら、これから少しずつ色々やっていきましょう。私が楽しいことをたくさんやりましょうね！」

「はい。よろしく願います」

星がそういうと、エミルも微笑んで「はい。喜んで」と言葉を返すと2人は顔を見合わせて笑った。

それからは2人で人生ゲームとトランプで遊んでいるといつの間にか夕食の時間になっていた。それに気が付いたのも、遊んでいた2人をメイドが呼びにきたからである。

「お嬢様方、お楽しみなところ申し訳ありません。夕食のご用意ができましたので食堂の方へお越し下さい」

かしこまったお辞儀をしているメイドの方を向いたエミルが。

「ええ、ご苦労様。すぐに行くから戻っていいわよ」

「はい。それでは失礼します」

エミルの言葉を聞いたメイドは顔を上げてもう一度深くお辞儀をして廊下を歩いて行った。

持っていたトランプを片付けてエミルと星は手を繋いで食堂に向かう。

食堂に着いてドアを開けると中にはメイド達が待っていた。食堂の中は紙の飾りと大きくなくす玉が天井から吊されている。

「星お嬢様、初登校お疲れ様さまでした。これは私達からのささやかながら、お祝いの気持ちです。で遠慮なされなくて下さい」

「よかったわね。みんなお祝いしてくれてるわよ」

「はい」

後ろから両肩に手を置き優しい声で言ったエミルに、星は少し困惑した様子で魂が抜けたように返事をした。

星の人生で人に誕生日を祝われるという経験がない。あるのは凄く小さな時に食事の後で小さなケーキを母親と食べた時の記憶だ――その時は誕生日で別に豪華な食事ではなく普通に夕食を食べて口

ウソクが一本立てられたものだった。

紙の飾りで彩られた部屋の中で祝われるという経験などなく、テレビのアニメなどで見たことがあるくらいで、とても自分の為にそれが用意されているという感覚にならないのだ。

正直。まだ、この部屋の飾り付けがエミルに向けてのものだとは思えない。

そんな中、エミルが星の背中を押しにくす玉の方へと連れて行く。「せっかく用意してくれたんですもの。くす玉なんて割ったことないでしょ？」

「えっ？…でも……」

エミルに押されてくす玉の下まできた星は頭上にあるくす玉を見上げる。

遠くから見るとそれほど大きくないように感じたくす玉だったが、実際に目の前に来ると相当大きく感じる。少なくとも、星の顔よりは明らかに大きいその下からは赤い紐が垂れ下がっていた。

くす玉からエミルへと視線を移すと、その表情は期待に満ちた瞳で今か今かと星がくす玉を割る時を待っている。

それは周囲のメイド達も同じようで、星の方をまじまじと見つめ少しそわそわしているように見えた。

星は覚悟を決めたように小さく息を吐くと、目を閉じて思い切りくす玉から伸びる紐を引いた。

紐を引いた直くす玉が左右に割れて中から紙吹雪と、帯状のカラフルな紙の中央にある大きな垂れ幕に「おめでとう」と書かれている。

目を開けてまるで舞い散る雪のように降り注ぐのを見て、紫色の瞳をキラキラと輝かせた。だが、その光景はすぐに終わってしまって、星は少し名残惜しく思っていると、周りのメイド達が一斉に拍手が起こった。

「星お嬢様。初登校おめでとうございます」

拍手が食堂内に鳴り響くと、キッチンの方のドアからメイドがカートに乗せた料理を運び入れてきた。

そこにはホールケーキとオードブルの数々が並んでいる。

大きなテーブルの上にオードブルやサラダ、スープを並べ、ホールのシヨートケーキをテーブルの中央に置いた。

シヨートケーキの上に乗ったチョコレートのプレートには『おめでとう』と書かれている。

星の視線はテーブルの中央に置かれたホールのシヨートケーキに釘付けになっていた。だが、それも無理はない。星にとっては、初めて目にするホールケーキだ——人生初のホールケーキを前に、星は平静を装ってはいるが内心では興奮を抑えられないのだろう。

サラダやオードブルを小皿に盛ると「いただきます」と手を合わせて食事を始めた。

ローストビーフは柔らかくそれでもって口に入れた瞬間に溶けて消えるようだ。

一口大に切られたグリルチキンや唐揚げ、中華なら酢豚にエビチリ、餃子などが置かれている。

数多く置かれている料理を少しずつ皿に取って食べながら、エミルが学校であった話をされて星が笑顔で

それを聞いていた。

話をしていると、星がお腹がいっぱいになる前エミルがケーキを切るようにメイドを呼んだ。

メイドがケーキを切り分けて上に乗っていたチョコレートのプレートを切り分けたケーキの上に移した。それを星の前に置くと、エミルの分を切り分けてエミルの前に置いてまた少し離れた場所で待機する。

星は自分の目の前に置かれたケーキを見て瞳を輝かせている。星にとっては初めてのホールケーキで、切り分けて普通のケーキになっても元がホールケーキであったことは変わらない。

チョコレートのプレートに乗ったシヨートケーキを見下ろしながら、星はフォークを入れることを躊躇していた。

それは、このケーキを食べてしまえばせつかくの時間も終わってしまう気がしてなかなか手を付けられなかったのだ。

星にとっては、人にお祝いしてもらうのも初めてで、ホールケーキ

も初めてだ。その全てが一瞬の出来事で、目の前のケーキを食べてしまえばこの時間も終わってしまう……そう思っていた。

その星の表情を見ていたエミルはそのことを察しているのか、ケーキに手を付けずに微笑みながら「少しお話ししながら食べましょうか！」というと星も大きく頷く。

それから腕に付けたデバイスを使って白い壁にアニメや映画を流して楽しく会話しながら時を過ごした。

結局ケーキに手を付けることなく、眠ってしまった星をエミルが背負って部屋まで運んでベッドへと寝かせた。

気持ちよさそうに眠っている星の寝顔を見つめているエミル。

「ケーキも食べずに眠っちゃうなんてね……おやすみなさい」

エミルはそう言って笑みを浮かべると部屋を出て行った。

友達

翌日。星が起きると、時計はもう学校に行く時間になっていた。慌てて飛び起きた星がカバンの中を確認すると、時間割通りにしっかりと準備されていた。

それを確認した星はほっと胸を撫で下ろした。

「ちゃんと用意されてる」

安堵した星はパジャマから制服に着替えて食堂へ向かった。

食堂に着くと、そこにはすでにエミルが椅子に座って待っていた。ティーカップを持ってゆつくり本を読んでいたエミルが、星を見つけて優しく微笑んだ。

「あら、やつと起きた。星は今日はずいぶんとお寝坊さんね」

「なら、起こしてくれたらいいじゃないですか」

少し不機嫌そうな顔でそう言った星に「ごめんなさい。あまりに気持ちよさそうに眠ってたから」とエミルがくすつと笑う。

星は納得いかないと言った感じの顔で椅子に座ると、メイド達が朝食を星の前に運んできた。

こんがりと焼かれたトーストの上にとろとろに溶けたチーズが乗せられ、薄くスライスされた茹で卵の真ん中に生ハムときゅうり、キャベツに塩だれ風のドレッシングが掛かったサラダ。

そしてポタージュスープが添えられている。

エミルの前にも同じ朝食が置かれ、2人はいつものように「いただきます」を言って食べ始めた。

朝食を食べ終わると、2人は時間を確認して用意されていた車に乗り込んで学校へと向かった。

エミルと別れると学校の校門で星は車のドアを開けてくれている執事の小林と目を合わせる。

「いってらっしゃいませ。星お嬢様」

「はい。行ってきます」

小林はそれ以上は何も言わずに、それだけを言って星を送り出した。

星も微笑みを浮かべながら学校に入ってしまった。

教室に入るとつかさはクラスの子と話をしている、星のことなど気にも止めずに楽しそうに会話を続けている。

その様子に星はほっとしながら自分の席に着いた。だが、昨日のこともあつてか、星の胸の辺りが少しチクリとする感じがあつた。

しかし、それがわがままなのも理解していたし、星は学校で一人であると決めた時に覚悟は決まっていた。

1時間目が終わって星はいつものように図書室へと向かう。

図書室に来ると本を探してそれをテーブルに着いて広げて読んでみると、隣に誰か座つた。

横目で見るとそこにはつかさが本を広げて難しい顔をして読んでいる。

だが、話し掛けてくる気配のないつかさに、星は何も言わずに読んでいる本に視線を戻した。

休み時間の終わりを告げるチャイムが鳴って星が教室に戻ると、その後ろを着いていくようにして後に続く。

それが放課後まで続いた……。

しかし、その全てにおいてつかさが星に話し掛けることはなく、いつも星の隣で難しい顔で本を読んでいるだけだった。

つかさの意図は分からないがさすがにそれが3日も続くと、星も悪い気はしないが不信感が強くなってくる。何故つかさはこんな行動を取っているのか？その真相を知りたくなつた。

放課後で図書館にいた星は読んでいる本を閉じて、いつものように難しい顔で本を読んでいるつかさの手を掴んだ。

「つかさちゃん。ちよつといいい？」

「えっ？… いいけど……」

その場に本を残して星とつかさは席を立った。

星はつかさの手を掴んだまま、前につかさときた屋上に向かう階段の踊り場に行くと掴んでいたつかさの手を放して振り返って彼女の顔を見つめる。

つかさは首を傾げながら星の方をじつと見つめている。

そんなつかさの顔を見つめていた星が徐に口を開く。

「——どうして私の近くに居るの？」

「えっ？ それは友達だからじゃん！」

そうつかさが答えると、星は言いにくそうに言葉を返す。

「……前にも言ったでしょ？ 私に友達はいらないって——」

「——それなら僕も言ったよ？ 絶対に友達になるのを諦めないって」

星の言葉を途中で遮り、つかさがそう言って微笑む。

眉をひそめ、悲しそうな顔で星はつかさを見ると。

「……私の事は放っておいて、つかさちゃんは他の友達と仲良くした方がいい」

「またそんな事言つてさ！ まあ、それが星のいいところなんだけどね。優しいところが……」

「私は……私は優しくない！ 前に言ったでしょ？ 私は犯罪者なの！ 私と友達になってもいいことなんてないんだよ……」

今にも泣き出しそうな星の顔を見てつかさは悲しそうな顔で言った。

「僕は星と友達になりたいんだ。この気持ちは本当だし、星が自分に自信がない事も、自分の事が嫌いな事も分かるよ。大事なのは星が僕を嫌いかどうかだと思うんだ」

「——私は……」

星は言葉を詰まらせる。

それも無理はない。星はつかさに好意を持たれていることは間違いなかったからだ——あまり好意を向けられることがないからこそ、星にはここでつかさのことを嫌いだということとはできなかった。

「……好きですよ」

「なら——」

「——でも！ だからこそ、つかさちゃんとは友達になれないんです！」

つかさの言葉を遮ってそう叫んだ星は俯きながら自分のスカート裾をぎゅつと掴んだ。

「星は本当に頑固だよね……でも、僕は諦めない。だって前よりも星の事が好きになったから！」

「え？」

「だって！ 星は毎日難しい本を読んでるでしょ！ それって凄い事だと思う！」

戸惑った様子でつかさを見ている星の手を握ると、つかさは嬉しそうに笑った。

星は顔を真っ赤に染めながら恥ずかしそうに俯く。

今までの人生で本を読むことを同級生に褒められたことなどない星は嬉しくないはずはない。

顔を赤らめている星の顔を見つめ、つかさがにっこりと微笑んで言った。

「今は友達になれないかもしれない。でも、星が自分自身を好きになれば、僕とも友達になれると思う。だから、いつまでも待つよ」

つかさはそういうと星の顔を真っ直ぐに見つめながら迫ってくる。

星の紫色の瞳とつかさの青い瞳がお互いの顔を映し出していた。

星の手を握って瞳を見つめたつかさは星の返事を待っているようだった。

だが、星はつかさの言葉になんと返せばいいのか分からない。

黙ったまま困って顔をしている星に、見兼ねたつかさが口を開いた。

「別に難しく考えないで。ただ星はいつも通りにしてくれればいいから、僕が側にいるのを許してくれればいい」

「でも、それは……」

「今までだって星に迷惑かけてなかったろ？」

星はつかさの言葉になにも言えずに頷いた。

それを見たつかさは嬉しそうに微笑んだ。

2人は本を置いてきた部屋に戻ると、星が座った隣につかさが椅子をくっ付けてにこにこしながら星の腕に抱きついてきた。

星はため息を漏らしてつかさを気にすることなく本を読み始めた。

星が解放されたのはエミルからのメールが送られてきた音が鳴っ

たことで、つかさも家に帰ると言つて星から離れて笑顔で「また明日ね！」と手を振つて走つて行つた。

嵐のように去つて行つたつかさに、星は疲れたようにため息を漏らした。つかさみたいなぐいぐいくるタイプの扱い方を星は知らない。だからだろうか。どうしても疲れてしまうのだが、それでも嫌な感じはない。ただ、今まで人付き合ひをしてなかつた星はどう接したらいいのか分からなくなつてしまうのだ。

エミルを待つている間、本を読んでいてもつかさにどう接したらいいか考えて集中できなかった。

星が眉をひそめて少し困つた顔をしながら本を読んでいると、その姿を見つけたエミルがそれを察してか、優しく声を掛けてくる。

「星？ なにか悩みでもあるの？ 何かあつたらすぐ私に相談して。必ず力になるから」

心配そうにそう話し掛けてきたエミルに星は微笑んで「悩みなんてないですよ」と言った。

だが、エミルが納得するわけもなく。

「隠したつてお姉ちゃん目は騙せないわよ？ 本を楽しそうに読んでない星なんて星じゃないわ。それとも、私じゃ役に立たない？」

「……………」
凄く悲しそうにそう尋ねるエミルに、星は俯き加減に眉をひそめて黙り込む。

そして少しの沈黙の後にゆっくりと口を開いた。

「…………じつは、友達になりたいって子がいて。でも、私はその子とつり合わないので何度も何度も断つてるんですが、それでも諦めてくれなくて…………」

俯きながら深刻そうな顔で膝の上で手を握つた。

その姿にエミルも眉をひそめて息を吐いた。エミルにとっては些細なことでも、星にとっては重大な事態なのは、彼女の性格を知っているエミルも理解していた。

だからこそ、周りに人が多いこの場所ではなにかと都合が悪い。何故なら星の性格上、どうしても周囲の人を意識してしまつて自分の心

を包み隠してしまう。

そんな星から本心を引き出すにはこの場所では不向きなことをエミルは知っていた。

「星ちゃん。今日は私、学校で嫌な事があってね。少し気晴らしに付き合ってもらえない?」

「え? はい。いいですよ?」

星が頷くと、エミルは嬉しそうに笑った。

そして、本を本棚に返した後でカバンを背負った星がエミルの手を握ってお互いの顔を見合つて微笑んで歩き出した。

学園内カートに乗って学校の校門前で黒塗りの高級車で待っていた執事の小林が2人の姿を見つけ頭を下げる。

「お嬢様方お疲れ様です」

「遅くなつてごめんなさいね。これから遊びに行くからここに行つてもらえる?」

なにやら腕時計型の端末を操作して小林でこそそやつているエミルに、星は少し不安そうな顔をしてそのやりとりを見つめていた。

星もつかさのことで心に引つかかっていたから、気晴らしをしたいと言つたエミルに共感する気持ちがあつた。

だからだろうか、なにかを企んでいることは分かっていたが、それでも少しでも気が晴れるならいいと思つていた。

すると、エミルが星の方に歩いてきて手を掴むと車の中に入って小林がドアを閉めた。

「さて行きましようか!」

星に微笑んだ直後、運転席に乗り込んだ小林に「出して頂戴」と言つた。

車が発車し、どこに行くのか分からないまま風景が流れていく窓の方を見ているとつかさの顔が浮かんできてすぐに振り払うように首を振つた。

星が着いたのは様々な店舗が隣接した大規模な複合施設を有するシヨッピングモールだった……。

友達2

車から降りた星は今までにない規模の施設に思わず声を上げた。

「すごい」

「それじゃ手配よろしくね！」

「はい。お任せください」

小林が丁寧にお辞儀をして何処かに電話を掛けた。

エミルは驚いて開いた口が塞がらなくなっている星の手を握るとにつこりと笑う。

「さて、制服のままじゃ動きにくいし。先に服を買いに行きましょうか！」

「私はこのままで——」

「——だめだめ。せつかくのデートなんだから雰囲気も大事にしなきゃね！」

星の言葉を遮ってそう言ったエミルに星は諦めたように「はい」と頷く。

手を繋いだエミルと星がやってきたのは子供服を売っている店だ。

星はすぐ近くに置かれているマネキンが着ていた男の子向けの服で良かったのだが、そんなことをエミルに言えば絶対に否定してくるに決まっている。

それだけならいいが、逆にエミルの心の中の炎に火を付けられずつと着せ替え人形にされ兼ねない。

笑顔で星に「どんな服がいい？」と聞いてくるエミルに星はため息を漏らしながら。

「エミルさんが決めてくれればいいです」

というと、エミルは楽しそうにフリルの付いた服を2、3着の服とスカートを選早く選んで星の方へと歩いてくる。

星ももう分かっているのか、エミルが渡した服を受け取って更衣室に入っていく。数分後、着替えた星が出てきた。

黒いパーカーの下に白いトップスと黒のスカートを着ている。自信なさげに「どうですか？」と尋ねた星に、エミルは興奮気味に言っ

た。

「いいわ！ かわいい系のいいけどこういう少し地味な感じもいいわね！ 他のも見たいけど今日は歩くし、これにしましょうか！」

「ふう……はい」

小さく息を吐いた星はほっとした様子で頷いた。

他の服を元の場所に戻そうとして歩き出した星を呼び止めると、持っていた服を受け取ってそのまま店員を呼んだ。

女性の店員がエミルの声に呼ばれてやってくる。

「はい。なんでしょうか？」

「すみません。この子が着ている服とこれも一緒にカードでお願いします」

エミルが出したカードを見た店員は慌てて走って行くと、カウンター裏の従業員しか入れないスペースに消えて行った。

少しして店長らしきスーツを着た男性が出てきて。

「ようこそお越し下さいました！ 御予約して頂ければ私が対応させて頂いたのですが」

「いえ、帰りに寄っただけなので……それよりお会計をお願いします」
「はいー」

店長は急いでレジで会計を終わらせると他の女性店員達が総出で商品を梱包して袋に詰めている。

そこに執事の小林が遅れて店にやってきた。小林に買った商品と星の着ていた制服を任せて自分の服を買う為に次の店に向かう。

次の店でエミルは白のワンピースを買おうと、遅れてやってきた小林に制服を預けて星の手を引いて店を出た。

「さて、星ちゃんはどこに行きたい？ 行きたいところどこでもいいわよ？」

「え？ でも、お姉様の気晴らしになのに……」

星の言葉にエミルは優しい笑みを浮かべて言った。

「大丈夫。私は星と一緒に楽しいから、それが一番の気晴らしになるからね！」

エミルにそう言われた星は首を傾げている。そんな星の手を引い

て走り出す。

エミルが星を連れてきたのはおもちゃ売り場だった。

本屋には行くことが多かった星だったが、おもちゃ売り場にはあまりきたことはなかった。その理由はシンプルなもので、ただ単に一緒に遊ぶ相手がいないからだ。

とはいえ、最近のおもちゃの殆どがインターネットを使つてのオンライン機能が備わっていて、1人でも楽しめるようになっていいる。だが、星の家には肝心のインターネットが入っていない。

だから星は、おもちゃ売り場に来たことは片手で数えられるほどしかなかった。

中には多くの親子が楽しそうに歩き回っている。それを見た星は悲しそうな顔をした。

その横顔を見たエミルは眉をひそめながら難しい顔をしている。まあ、エミルも星がこんな顔をするとは思ってなかったのだろう。

星とどんなに長く一緒にいても、星は母親のことを気にしているということだ。ゲーム世界から帰ってきて、星のことを調べていて彼女の母親が飛行機事故で行方不明になったのを知っていた。だからこそ、少しでもそのことから意識を逸らさせようとしてきた。

だが、親子連れが多く訪れるおもちゃ売り場は今の星には辛い場所だったかもしれない。

「なにか欲しい物はない？ なんでも買ってあげるわ！」
「いえ、欲しいものはありませんから」

だが、星がそういうことはここに連れてくる前から分かっていた。エミルはにつこりと笑うと、星の手を引いて歩き出した。

「まあまあ、いろいろ見てたら欲しくなるから」
「でも、私は本当に……」

星の言葉に聞く耳も立てずに手を引っ張つてぐいぐいと進んでいく。

星の手を引いたエミルが向かったのはボードゲームのコーナーだった。

色々なゲームが並ぶ中、エミルが棚を物色している。

彼女が何かを探しているのは間違いないが、星の視線は数多く並んでいるボードゲームに向いていた。

棚に並べられた箱はきちんと整理されていて、それはまるで大きな本が並んでいるように見えた。

「どんなのがあるんだろう……」

星は近くにあった箱を棚から少しだけ引き出す。

出てきたのは人生ゲームだったが、人間ではなく動物の人生を経験できるというものだった。

一見楽しそうに見えるのだが、そのパッケージには『捕食、密猟、餓死から君は生き残る事ができるか!』と書かれている。

スタートはネズミ、小鳥、トカゲから選択し。踏んだマスによって食物連鎖の頂点に向けて少しずつランクアップしていき、死んだら初めの生き物に戻って最後にどれだけ強い生き物になっているかで勝負する。

星が想像していたファンタジーな感じではないことにショックを受けたようで、その場で固まり瞳からは光が消えていた。

その時、何かを物色していたエミルが星のところに戻ってきて。

「これが欲しいの?」

星の顔を覗き込んで微笑んだエミルに、星は全力で首を振った。

それを見たエミルは残念そうに「そう」と小さく呟くと、腕に抱えていた本の形をした箱に星の視線が釘付けになる。

その視線に気が付いたエミルが星に向かって両手で持った箱を突き出した。

エミルの手に持たれていた箱には、まるでファンタジー小説で出てくるような魔導書が印刷されている。

「これはなんですか?」

興味深々にエミルの手に持たれた箱を見つめている星。

そんな星にエミルがにやりと不適な笑みを浮かべた。

「これはTRPGって言って、ルールを決める人がいてプレイヤーはその人の言葉に返答して進んでいく感じかな」

エミルの説明を聞いて首を傾げている。

「まあ、やった方が早いわね。帰ったらやってみましょう！」

「はい。なら早く家に帰りましょう」

星が帰ろうとした直後、エミルがそれを止めた。

「せっかく服も買ったんだからまだまだ帰らないわよ？」

「……え？」

首を傾げていると、エミルは微笑んで言った。

「それに星と一緒にお出掛けできるのは楽しいからね。まだ帰りたくないわ」

「——うう……」

星は頬を赤く染め俯いた。

ゲームを買おうと、それを小林に預けてエミルと星はコーヒーシヨツプに向かった。

チョコレート味の飲み物の上にホイップクリームがたっぷり乗った飲み物を二つ頼むと、それを持って待っていた星に手渡した。

星はそれを受け取ると「冷たいです」と言っただけでエミルの顔を見て笑顔を見せた。

エミルも「冷たいわね」とにつこりと微笑み返した。

ストローに口を付けチューチューと中のチョコレートの飲み物を吸っていると、エミルが話しかけてきた。

「次はどこに行きたい？」

「私は別にどこでも……」

「……そう。なら、私に付いてきてもらおうかな！」

満面の笑みでそう言ったエミルだったが、星は彼女が一瞬見せた困ったような表情が引つかかった……。

飲み物を飲み終え店を出ると、次にエミルに連れられたのはゲームセンターだった。

様々な機械が置かれ、人がたくさんいる店内に入った星は物珍しい機械に興味深々な様子で左右に置かれた機械を見ている。

その場に突っ立ったまま動かない星の耳元でエミルがそつとささやく。

「——なにからする？ 興味があるものからやっついていきましょ？」

「はい。でも、私こんなところにきたことなくて……」

眉をひそめながら小さく呟いた星に、エミルが自信満々に答えた。

「大丈夫！ 私に任せて！」

そう言ったエミルは星の手を引いて近くのUFOキャッチャーに移動した。

友達3

透明なケースの中には両手で持った筐を加えたパンダのぬいぐるみが座ってこちらを見ている。

「待ってて！ あのパンダさんを取ってあげる！」

財布から百円玉を取り出してプレイして見せた。

ゆっくりと動くアームに星の瞳はくぎづけになった。見慣れた人間にはなんとも思わないが、初めて見る星にはボタンを押しただけでなんで動くのか、どんな仕組みになってるのかなど気になって仕方がない。

横に動いていたアームが止まって今度は下がると筐をくわえているパンダの首にアームが刺さる。しかし、持ち上げようとした直後アームが左右に開いて少し浮いたパンダが落ちて座った状態に戻った。

星が「もとに戻っちゃいましたね」と言うと、エミルは「まあ、一回じや取れないからね」と返して再びコインを入れたがそれが100円から500円に変わっていた。

さつきまでは軽い気持ちでプレイしていたエミルだったが、動くアームを見つめている彼女の目は真剣そのものだ――。

それからは何度も500円玉を入れて無言でプレイするエミルには星の声も届かないほど集中している。

結局パンダのぬいぐるみを取るまでに数万円も掛けて取った。

「やっと取れたわ！ ならこれは星にあげるね！」

「……えっ？ でも、せっかく取ったものをもらえません」

星に向かってパンダのぬいぐるみ突き出すエミルに、星は首を横に振って言った。

「ううん。これは今日の記念に星に持ってほしいの。それにお姉ちゃんのもは妹のもの、妹はお姉ちゃんのものなんだから遠慮しないでいいのよ？」

「――なら、記念にもらいますね。ありがとうございますお姉様」

微笑むエミルからパンダのぬいぐるみを受け取って胸に抱いた。

エミルが星を次に連れてきたのはプリの機械が置いてある一角だった。プリを撮る機械の中に入ると、画面と音声に従って撮影する。

シャッター音の後に画面に表示された映像で星の

顔は引きつって肩に力が入り過ぎているのか、少し小さくなっているように見える。だが、普段から写真を撮られられない星にとってはこれでも最大限の努力をして撮った渾身の一枚なのだ。しかし、その写真を見たエミルは難しい顔で考え込んでいる。

「……全体的に硬いのよねえ。どうしようかしら……」

少し考えた末にエミルは膝を折って星に視線を合わせると真剣な声で。

「ちよつと両手を上に上げてもらえる？」

「え？ はい……」

彼女に言われるがまま両手を上げてバンザイの格好をした星の脇をエミルがくすぐりだした。

星の笑い声が周囲に響き身をよじって逃げようとする星の脇の下や脇腹の辺りをくすぐり続けるエミル。

しばらくくすぐられた後に力なく地べたにペタンと座り込んだ星は荒い呼吸の中で弱々しく言った。

「はあ……はあ……な、なにするんですか……」

涙目になっていた星が不満そうにキツつとエミルを睨むと、エミルは焦ったように両手をバタつかせて弁解する。

「ほ、ほら！ リラックスさせようと思って！ べつに意地悪しようとかじゃないのよ？」

「……………嫌いです」

「そ、そんなー！ ごめんなさい！ もうしないから許して！ ね？」
ムスツとしながらそっぽを向いた星にエミルは更に焦り出し。

「ごめん。もうしないから！ 約束するわ！ ……そうだ。お菓子買ってあげる！ だから許して！」

「……………お菓子なんかにつられません」

不機嫌そうな顔の星にエミルは何故か嬉しそうに微笑みを浮かべ

ると、そっぽを向いている星の肩に手を回して自分の方に寄せた。「ほら、笑って。せっかくの写真にムスツとした顔が残っちゃうわよ？ 笑って笑って！」

エミルは星の顔の近くに自分の顔を寄せると画面に向かって笑みを浮かべる。それを見ていた星も笑みを浮かべてカメラの方を見上げた。

ゲームセンターや本屋、洋服や靴屋などを回りながら途中で食べ物などを食べて休憩を取りながらショッピングモールを楽しんでいると、もうすっかり夜になっていた。

月と星が浮かぶ空を見上げ、星がエミルの顔を見て言った。

「もう帰りますか？ 明日もありますし……」

「そうね。そろそろ歩き疲れたし、そろそろ帰りましょうか」

エミルはそう告げると、腕に巻いていた携帯端末で執事の小林に連絡を入れる。

——数分後。ショッピングモールの入り口に黒塗りの高級車が止まり、小林が降りてきて車のドアを開けた。

星とエミルが車に乗り込むと、運転席に乗った小林がエミルに向かって。

「それでは次の目的地に向かいます」

「ええ、お願い」

短くそう言ったエミルに「かしこまりました」とハンドルを握って車を発進させた。

車が次に止まったのは大きなホテルの前だった……。

小林が車のドアを開けると、エミルが星の手を引いて降りる。

「お家には帰らないんですか？」

首を傾げて聞いた星に、エミルがにっこり笑って。

「そうよ。言っただけでなかった？」

星は諦めたようにため息を漏らした。

エミルが星に黙ってなにかを企んでいるのは今に始まったことじゃない。それを分かっているからこそ、星ももう諦めている。

上機嫌で星の手を引きながらホテルに入ったエミル。

友達4

エントランスに行くとスーツに身を包んだ年配の従業員が駆け寄ってくる。

「伊勢様。ようこそお越し下さいました。当方は支配人の遠藤と申します。さっさつ、お部屋までご案内致しますのでどうぞ！」

かしこまった男性に連れられエレベーターに乗ると、彼は最上階のボタンを押す。

最上階に着くと長い廊下を歩きながら支配人が2人にホテルの説明を始めた。

「当ホテルの自慢は温泉でして、毎日産地直送で運んでもらっています。室内だけではなく浴室でも街を一望できますし。また、ジャグジーやサウナも備えております。ルームサービスも既に料金に含まれている為、好きなだけ頼んで頂いて大丈夫です」

説明しながら赤い絨毯の廊下を歩いて行くと、部屋の扉の前で止まった。

「こちらが当ホテルのスイートルームになります。それでは御用の際はなんなりとお呼び下さい」

ドアを開いてすぐに離れた支配人の男性が深々と一礼して来た廊下を戻って行った。

「はあ……」

星は男性の姿が見えなくなると同時に小さくため息を吐いた。

庶民でしかなかった星には、どうしても高級ホテルの接客は息が詰まる。

つと言うより、自分の身の丈に合っていない環境に未だに適応できずにいた。

部屋に入ると、地上を一望できる窓が広がっている。落ち着いた雰囲気の内装に高級そうなソファアームにテーブルが置かれている。奥の部屋にはキングサイズのベッドに白い天蓋がかかっているのがちらつと見えた。

星の様な庶民が高級なホテルに来ると、どうしても値段が気になっ

てしまつて落ち着かない。

椅子に座つてそわそわしている星とは違いエミルは普通に備え付けの冷蔵庫の中からジュースやプリンなんかを取つて星の元に持ってきた。

「そんなに緊張しなくても大丈夫よ。このくらいのホテルなら、前にも泊まつたことあるでしょ?」

「いえ、でも……あ、ありがとうございます」

エミルからジュースの入った瓶を受け取ると、それを口に運んだ。

ジュースを少し飲んで大きな息を吐き出した星は、何気なくエミルに質問する。

「どうしてホテルに泊まろうと思つたんですか?」

「ん? どうしてだと思つ?」

質問を質問で返され困つた顔で考えているのを見てエミルは笑うと、星の質問に答えた。

「気分を変えたいのもあるけど、家だとメイド達がいるから星とゆつくり話が出来ないでしょ? ここなら誰にも聞かれることもなく話せるからね!」

「どんな話をしますか?」

星が小首を傾げながら尋ねると、エミルは服を脱ぎ出して下着姿になつた。

「せっかくだし、お風呂で話しましょう?」

「……お風呂ですか?」

少し嫌そうな顔をしている星。

だが、それはエミルとお風呂に入りたくなくなつたわけではなく。彼女とお風呂に入ると必ず頭を洗われるからだつた。

幼い頃から母親が仕事で忙しく、父親もいなかった星は水に触れる機会がなく、かならずちな為に頭から大量の水を被るシャンプーが苦手なのだ――。

星が「どうしてお風呂でなんですか?」と聞き返すのを軽く流すと、星の手を引いてお風呂に向かう。

脱衣室で服を脱いだ星とエミルが浴室に入ると、エミルが置いてあ

る椅子をポンポンと叩いた。星はそれを見て大きなため息を吐いて諦めたように椅子に座った。

いつものように星が目を強く詰むっている髪を洗うと、エミルは星の髪を束ねてゴムで結んだ。その後、エミルも自分の体と髪を洗って青い長い髪を縛ると、外の夜空に輝く星を見ている星を呼んだ。

「いらっしやい。体を洗ってあげる」

「はい」

星はエミルの方に歩いて行くと、再び椅子に座って前を向いた。

星の体を洗いながらエミルが耳元でささやく。

「——私はいつも星が学校で楽しくやってるかなって心配なの。だから、今日は星の学校での話をいっぱい聞きたいな」

だが、星はエミルの話に何も言わずに前を向いたままにいる。

エミルは何も言わない星の背中の中の泡を洗い流すと、星の両肩に手を置いて言った。

「さあ、お風呂に入りましょうか！」

「……はい」

星は小さく返事をして頷くと彼女に導かれるままに湯船に浸かる。

お湯に浮かべられたバラの花びらを手に取って見つめる星の紫色の瞳は少し悲しそうに見えた。それはエミルも分かっているのか、お湯の中で星の体を持ち上げて自分の膝の上に抱き寄せた。

「わっー！」

エミルは驚いて声を上げた星の耳元で言った。

「星は軽いわね。ちゃんとご飯を食べてる？ 食べないと大きくなるじゃないわよっ！」

「ちゃんと食べてます。それにご飯はいつもお姉様と一緒に食べてますよね？」

「あはは、確かにそうね！ 星があまりにも軽いからびっくりしちゃって忘れてたわー」

そう言って笑うエミルに、星は少し困った表情で眉をひそめた。

星が水面に浮かぶバラの花びらを指で突いていると、エミルが背中から覆い被さるようにしてささやくように言った。

「……星はどうして友達いらないの？」

「それは……」

沈黙する星に向かってそつとエミルが告げる。

「今日やった事がだいたい友達と出掛けてやる事だから心配しなくてもいいのよ？」

「……違うんです。私には友達を作る資格がないんです……」

「友達を作る資格って……そんなの必要ないじゃない。星が作りたいと思った時に作ればいいんだから——」

笑みを浮かべながら優しくそう言ったエミルの方向を向いた星が珍しく声を荒げた。

「——だめなんです！ 私は友達を作ったら！ だめなんです……」

大きな声を上げる星に驚き目を丸くさせているエミル。

その様子を見た星は我に返って悲しそうな顔で前を向き直した。

「私はお姉様に黙っていた事があります……」

エミルは星の震えた肩にそつと手を置いて言った。

「別に無理して言う必要はないのよ？ 誰だつて言いたくない事のひとつやふたつはあるものなんだから……」

「それじゃ、ダメなんです！」

俯く星はエミルの膝の上から立ち上がると、エミルの方を向いた。

そしてしばらく無言の時間が浴室の中に流れた後、生唾を呑み込んだ音の直後に星が話し始める。

「——私はお姉様に……いえ、エミルさんの思っている子じゃないんです。本当の私はあなたに守ってもらえるような人間じゃない……」
今にも泣き出しそうな顔で言った星をエミルも真剣な顔で見つめていた。

おどけて見せることもできたが、それだと星の心にしこりを残すことになってしまう。だからこそ、エミルは星の想いを受け止める覚悟をしていた。例えそれがどんな内容だったとしても……。

友達5

神妙な面持ちの星は意を決したように大きく息を吸い込むと、ゆつくりと話し出す。

「……私はゲームの中にいた時に人を……人を殺したんです」

それを聞いたエミルはほっとした様子で胸を撫で下ろすと、俯く星に優しく告げる。

「ゲームで人を殺したからって罪に問われるわけじゃないわ。それに、あんな状況だったんだし。誰もあなたの事を責める人なんていないわよ」

エミルの言葉を聞いた星の脳裏には、一人でテレビを見ていた時のキヤスターの言っていた『犯罪者』という言葉と、以前コンビニで自分を襲ってきた男達の言っていた『お前のせいで俺の彼女が眠ったままになった。だから使わせろ』と言っていたのを思い出していた。

当事者じゃないエミルにとっては大したことじゃなくても、星にとってはそういうわけにはいかない。

星はエミルの顔を真っ直ぐに見つめながら。

「……テレビで見ました。私が……私が手を抜いていたから犠牲者が多くなっただって——」

責任を感じている星の瞳には涙が溜まっていた。それを隠すように俯く星を見ていたエミルは憤ったように震えた声で呟く。

「そう。そのテレビ局へは苦情を入れて、権力使ってスポンサーを外させなきゃいけないわね……」

星の瞳から流れる涙が水面に浮かぶバラの花びらに当たる。

元々星は人前で泣く性格ではない。それは、人前で泣くことは恥ずかしいことだと思っているからに他ならない。

フリーダムの中では喜怒哀楽を数値化されている為に設定されている数値を超えると自然と表情に現れてしまう。そのせいで普段よりも涙もろくなってしまうは仕方がないのだ——。

無言のまま流れる涙を拭って深呼吸をして気持ちを整え、エミルの顔を見つめながら言った。

「……私は人殺しで、犯罪者で、卑怯者なんです。エミルさんに助けてもらって今があります……でも、私にはそんな価値なんてない。あなたに優しくしてもらえる人間じゃないんです……」

涙で潤んだ星の紫色の瞳は揺らめいていて、そこには覚悟と恐怖、不安なんかが入り混じっているような気がした。

だが、もしもこの場でエミルが星のことを拒絶すれば、星は静かに頷いてどこかに消えてしまおうだろう。

それをエミルも理解していた。本当は抱きしめたい気持ちでいっぱいだったが、今の星はそれでは納得しないだろうということも分かっていたし、抱きしめたら壊れてしまうようなほど服を脱いだ星の体は細く小さかった。

「……私は星のそういう真面目なところも好きよ？　けど少し気にしすぎなきがするわ。そんなに気にしなくていいのよ？」

エミルのその言葉を聞いた星は俯いて手をぎゅっと握り締めた。

そんな星を見ていたエミルは湯船から立ち上がって俯いている星の頭を優しく撫でる。すると、星はその手を振り払うように後ろに数歩下がった。

エミルが不思議そうな顔をしていると、星は悲しそうな顔で弱々しく言った。

「——どうして……私に優しくしてくれるんですか？　私がい

なに迷惑をかけて……ゲームをクリアするまでに掛かる時間も掛かっちゃって……なにもうまくできなかったのに……」

「そんな事を気にしなくていいのよ？　私達は星に心から感謝しているの。だって、あなたがいなかったら、私達は皆あのゲームの中から帰ってこれなかったわ。だから感謝してもしきれないわよ」

「……感謝されるなんてありません」

微笑むエミルに星がそう告げると、俯きながら唇を噛みしめた。

そして、重い口をゆっくりと開いて……。

「——私は今まで人に感謝された事がありません。私が失敗したら周りから責められる……学校でも家でも……だからなんでもできて当たり前なんです。うまくできてれば誰も私を責めないから……でも

褒められたいわけじゃない。私は私でいたいだけなんです……最近、ひとりでいるのが怖いんです。私が私じゃなくなるみたいで——私の中のなにかが私を呑み込んでいくような感じで……すごく怖い」

唇を噛みしめる星にエミルがそつと手を伸ばした直後。

「……でも、優しくされるのも怖い。なんだか、自分が別の人になったように感じるんです……私がこんなことされるわけない。私は頑張るから必要とされてるんだって……お母さんがいなくなって、私は頑張る必要がなくなりました。だから……頑張らなくなったら私も必要なくなっただけです。頑張っても、ゲーム世界を早く終わらせられなかった。エミルさん達ならもつと早く終わらせられたのに！ 私は頑張るからって必要とされたいからって剣を手放せなかった！ それが大勢の人達を今も苦しめている！」

俯き、手を強く握り締めた星の瞳から涙が溢れ水面に落ちていくつもの波紋を作る。

「私の自分勝手にこんなことになったのに、私はエミルさんから優しくされてる。本当は私が変わってあげないといけないのに……私が眠ったままでいなきやいけないのに……」

徐々に星の呼吸が早くなり苦しそうに肩で息をし始める。

その直後、体が大きく揺れて前に倒れそれをエミルが受け止めた。

「星?! 大丈夫!! 大丈夫だからゆっくり息をして!!」

「はあはあ……私が……私が……」

星は息が更に激しくなって気を失った。

次に星が目を覚ました時にはバスローブを着てベッドの上に寝かされていた。

目を覚ました星がまず目にしたのは執事の小林の顔だった。整えられた白い髭に優しく微笑む小林は「もう大丈夫です」と言っただけでエミルの方を見た。

エミルは心配そうな表情で星の側に駆け寄ってくると。

「大丈夫?! 過呼吸になって気を失ったのよ? 脳に後遺症とかある

かもしれないわ! 私が誰だか分かる?」

「……はい。大丈夫です」

星が頷くと、エミルはほつとしたように息を吐いて「良かった」と
呟く。

だが、星は複雑そうな顔をして俯いたまま黙ってしまう。
「それでは、私は隣の部屋に戻りますのでまた星お嬢様の体調が悪く
なったら呼んでください」

小林は微笑みながらそう言っただけで部屋を出て行った。

部屋に2人だけ残され、しばらくの間は無言でいたが。

「……ごめんなさい。世間の反応を知っていたのに、学校に通わせて
星にまた負担をかけてしまっていたわ……これじゃ姉失格ね」

「いえ。私は学校に行けて感謝しています……私には勉強くらいしか
取り柄はないですから……」

暗い表情で謝るエミルに、星はそう言葉を返した。

すると、エミルが頭を左右に振ってベッドの上に座っている星の体
を抱きしめる。

驚き目を大きくさせている星に、エミルは優しい声音でそつと告げ
た。

「星のいいところは私がいっぱい知ってるわ。勉強だけじゃない！
たまに失敗してかわいいいところも優しいところも頑張り屋なところ
も自分より相手を優先しちゃうところも全部が好き。だけど……頑
張りすぎる事と自分を大事にしないのがあなたの悪いところ」

胸に抱きしめた星の頭を撫でてとそう言ったエミル。

「あなたは一人しかないんだから、大切にしなきゃだめ。人より自
分が価値が低いとか考えちゃだめよ？ 私は星がいないと、もう生き
ていけないの……だから、迷惑なんて思った事なんて一度もないわ。
安心して」

エミルがそう言っただけで微笑むと、星は信じられないといった感じに眉
をひそめた。

星にとつては言葉だけでそれを信じていることができなかった。

今までの人生で自分と友好的な関係を築いてくれる人間がいなかつ
たのだ。エミルの言葉を信じられないのも無理もない。

俯きながら何も言わない星にエミルは苦笑いを浮かべた。

友達6

再び部屋に沈黙の時間が流れ、再びエミルが口を開いた。

「もし良かったら、星がゲームの中であった事を私に教えてくれない？」

「いいですよ？ でも、面白くはないですけど……」

てつきり断られると思っていたエミルは少し驚いた表情をしたが、すぐに星の顔を真剣に見つめて頷く。

星はエミルの熱い視線から目を逸らして話し始めた。

「私はエミルさん達と離れてから、あの赤いドラゴンの中に閉じ込められていました……実は、一度だけ犯人の人を追い詰めた事があるんです。その時にとどめを刺せば、もつと早くにこつちに帰ってこれたのに私は……私には出来なかったんです」

俯いた星はバスローブをギュツと掴んで唇を噛んでだ。

星は赤いドラゴンの中で主犯だった男の眼前に剣を突き立てるまで追い詰めた。しかし、彼が悲鳴を上げた瞬間に剣を引いて躊躇ってしまったのだ。

そのことが被害を拡大させた原因だと思っている星にとって、自分の失敗の責任をどう取るかが分からなくてそれが星の心を擦り減らしていた。

「そのせいで拘束されて、エクスカリバーも取られてしまって……モニターでみんなが戦ってるのを見て、大勢の人が消えていくのを見て私の中で今までに感じたことのない感情が湧き上がってきて、気が付いたら拘束を振り解いて持っていた剣で刺してしまいました。背中からぶすつと……私もその時に死ぬつもりで空から落ちたんです。……死ねなかった……でも、それを今は後悔しています。私はあの時死ぬはずで、死ななきやいけなかったのに——私は……」

また呼吸が早くなってきた星を抱きしめて顔を胸に埋める。

「——大丈夫。落ち着いて……」

浅い呼吸を繰り返し息が苦しくなって意識が朦朧とする中で、エミ

ルの着たバスローブから香る彼女の匂いに安心したように荒くなっていた息が次第に収まっていく。

少し落ち着きを取り戻した星の頭を優しく撫でながら、エミルがほっとした様子で息を吐いた。

エミルの胸から顔を放した星は彼女の方を見上げて不安そうな瞳を向けた。その瞳には涙が浮かんでいて目尻の方からは抑えきれなくなった涙が流れている。

「……ごめんなさい。私、また……どうしたらいいか分からなくなつて……迷惑ばかり掛けてしまつて……」

「大丈夫！　迷惑だなんて思った事なんて本当にないから！」

涙で潤んだ瞳で自分を見上げている星に、慌てた様子で叫んだエミルが星の身体を優しく抱きしめた。

「ごめんなさいね……本当は私達がやらなきゃいけないのに。あなたにだけ重圧を押し付ける事になってしまつて……私の命があるのも星のおかげなんだから、そんなに気にされると私も辛くなつてしまつて……」

「……でも私は——」

「——責任を感じて、私も辛くなつてしまつて……」

エミルは反論をしようとした星の話を遮つて悲しそうな顔をしている。

星はエミルのその顔を見た瞬間、黙り込んでしまった。そんな星の手を引いてエミルがにっこりと笑う。

「まだお風呂の途中だったのを思い出したわ。星も体が冷えちゃつたでしょ？」

「私は大丈夫です」

「まあまあ、そう言わずに」

エミルに手を引かれながら星は脱衣室に連れて行かれた。

脱衣室に行った二人は着ていたバスローブを脱いで浴室に戻る。

ゆっくりと浴槽に入ったエミルが星を手招きし、星も少し浮かぬ表情だったが導かれるままに浴槽に入った。

星がお湯の中に入ると同時に彼女の手を引いて自分の方へと引き

寄せた。驚いた星はバランスを崩してエミルの胸に吸い込まれるように向かっていく。

星の頬にむにとした弾力のある柔らかい感触が触れた直後、顔を真っ赤にして離れようとした星をエミルの細くしなやかな腕が包み込んで再び胸へと押し戻す。

「やっぱり星の体は小さくてすべすべしてて最高の抱き心地ね」

「ちよっ……苦しいです。放して下さい……」

「もう少しこのままでもいいさせて……こうして星の体を抱きしめてると安心する」

星の体を抱きしめたまま、エミルが目を閉じてそう呟く。

そんな彼女の様子に星も諦めたのか、大人しく身を任せた。

「……星はこんな小さい体で私達を守ってくれてたのね」
「……………」

表情を曇らせた星の脳裏には助けられなかった人達のこと浮かんでいた。今も病院のベッドの上で眠り続けている事件の被害者のことを考えると、自分がこんな生活をしていることが申し訳ないという気持ちが大きくなってしまふのは仕方ないだろう。

現実世界に戻ってきた星は、ゲーム世界に戻りたいとすら思えるくらい辛い日々を送っていた。しかし、いざ不自由のない生活をする、自分のせいで不幸になった人達に申し訳ないと感じてしまい。彼女自身が幸せになることへの罪悪感があるのだ。

大きなお風呂に浸かって水面に浮かんだバラの花びらを指で突く。

エミルの膝の上に乗せられた星は突いた水面のバラの花びらが回りながら流れていくのを眺めていたが、その表情はどこか虚で魂の抜け殻のような感じだった。

そんな星の表情をガラス越しに見ていたエミルは、眉をひそめていた。本当は声を掛けなければならぬのだろうが、エミルには星にどう話し掛けたらいいのか分からなかった。

星の心情を考えたら気安く気にするな。なんて言えない……星の小さな体を抱いた瞬間。あまりにか弱く、現実世界のエミルの力でも砕けてしまいそうで恐怖すら感じていた。しかし、今の星は体よりも

心の方が碎ける寸前なのだろう。

現実世界で連日のように報道されているのはゲーム内監禁事件の被害に遭った人間の数と未だに昏睡状態の被害者家族の映像。

そして、現実世界に戻ってきたプレイヤーへの情報統制とネット掲示板に匿名で投稿された星と星の父親の悪評。

その全てが星へとヘイトが向くように仕向けられ、星の居場所を特定しようとする動きすらある。今はエミルの家の権力で抑えつけているが、いつそれが抑えきれなくなるか分からない。

星を悪者にしようとしている勢力が裏で暗躍しているのは明らかであり、その目的は星や彼女の父親に今回の事件の責任を押し付ける為だろう。

だが、本来なら小学生が起こせる規模の犯罪ではないのだが、強力なエクスカリバーの画像、優秀な科学者の父親がいるという情報操作に被害者を擁護する世論が味方して世間では、星は完全に悪役になってしまっているのは彼女を擁護してくれるはずだったゲーム世界からの帰還者を施設に閉じ込めて外界との情報端末を完全にシャットアウトしたのだ。

その結果、事件で被害者を擁護し加害者側の星を叩く過激派の声が大きくなってしまった。勿論、小学生にこれほど大きな事件を起こせるはずがないという冷静な意見を言う者達もいるのだが、その意見は被害者が辛い思いをしているのに加害者側の味方をするのかと過激派によって潰されてしまっている。

メディアを使って極端に被害者側に感情移入させていることもあり、加害者を少しでも擁護しようものなら袋叩きにされてしまうのだ。被害者擁護という大義名分がある以上、なにをしても許されると思ってしまうのが人間の闇なのだろう。エミルが星を自分の家の養子にして名字を変えさせ、外出も共にしているのは彼女の身の安全を考えてのことだ。

星の控えめな性格では強く言われると拒むことができない。事件のことで過呼吸を起こすくらいなのだから、もしも被害者を名乗る人物が接触してくればそれが嘘か真実に関わらず言うことをなんで

も聞いてしまうだろう。そうなれば、別の事件に巻き込まれるか最悪彼女の身に危険が及ぶ可能性が高い。

通う学校も一般の小学校を避けて富裕層の通う私立の学校にしたのも、富裕層の人間は個人ではなく一族で見る者が多いからである。

富裕層は利他的な思考よりも対局を見て判断する。だからこそ、星がどんな人間かではなくどこの一族に属しているかの方が大事なのだ。

湯船に漬かりエミルの膝の上に座っていた星の首に腕を回すと彼女の耳元でエミルがささやく。

「——自分を責めないでと言っても、あなたは自分を責めると思う。だから、辛くなったら私に話してちょうだい……辛い気持ちも2人なら半分になるから……」

「……はい」

星が返事をして頷いたのを確認して、エミルは「絶対ね」と星の首に回した腕でギュツと彼女の体を出し寄せた。

エミルの柔らかい体に包まれながら星は安心した様子で瞼を閉じた。そんな星を抱きしめたまま、エミルも幸せを噛み締めるような瞼を閉じている。

友達7

しばらく2人は身を寄せ合っていると、エミルが外を指差して言った。

「ほら見て、この階から景色を見てるとなんだか小さな事なんてどうでもよくなるでしょ?」

キラキラと宝石箱をばら撒いたように輝く街並みを眺めながら小さく頷くと、エミルが耳元でささやくように言った。

「もし星が勇気を出して言えるなら、友達になりたいと言っていた子を家に連れてきなさい。今日買ったボードゲームを遊びましょう。そしたらきつと仲良くなれるわ」

「……でも、私に友達は……」

「確かに今の星には友達を作る気はないのかもしれないわ。でも、友達は味方になってくれる数少ない人間よ? それにせっかく学校に行っているんだから楽しく生活してほしいなあー」

につこりと微笑んだエミルに、星は眉をひそめて「機会があれば」と言う。

「星にお友達が出来れば私も嬉しいわ」

つと微笑むと、星もぎこちなく笑った。

そんな星の体をエミルはぎゅつと抱きしめ。

「……でも無理はしないでね。星が悲しいと私も悲しいから……」

「……はい」

星は自分の体に巻き付いているエミルの手に自分の手を合わせてゆつくりと頷いた。

大事にされているという感覚を全身で感じながら星はその時間を噛み締めるように瞼を閉じる。そんな星にエミルがそつと耳元でささやく。

「……何があっても私が星を守る。私だけはあなたの味方だから安心してね」

エミルにそう言われ、星も「はい」と短く返事を返した。

翌日。ホテルを出たエミルと星は学校へと向かった。

学校に着いた星はいつも通り、教室に着くなりホームルームが始まるまで本を広げて机に座っていると、教室につかさが元気良く入ってきた。

つかさはクラスの中でもずば抜けて人気があり、教室に入ると周りには同じクラスの女の子達が集まってくる。

横目でその様子を見ていた星は自分との立場の違いを改めて感じて視線を本へと戻す。

昨日エミルに言われたようなつかさを家に誘おうと思っていた。しかし、その考えは今では心の奥底に沈んでいる。

それもそうだろう。つかさの周りにはいつも人が絶えない——それとは異なり、星はいつも1人である。それは星にとってつかさは特別だが、つかさにとっては自分の周りに集まってくる1人に過ぎないのだ。

星は本を読みながらエミルにどんな言い訳をするかを考えていた。まあ、ただ断られたと言えればいい。

元々1人でいようと考えていた星にとっては好都合かもしれない。前の学校で人付き合いに疲れていた星には、友達を作るということは複雑な人間関係に巻き込まれるということでもある。せつかく転校して人間関係をリセットしたにもかかわらず、再び泥沼の人間関係に足を踏み入れる必要がない。

本を読んでいると教室に先生が入ってきてホームルームが始まる。近々の連絡や出席を取るなど一通りのルーティンを終えると、1時間目の授業が始まる。

授業が終わりつかさの席の周りに人が集まっているのを横目に席を立った星は図書室に向かうために教室を出た。

図書室は隣接している図書館があるために中にいる人はまばらで、本ではなく勉強をしている人も多くいる。そんな中、星は本棚に歩いて行くと興味を持った本を手にとって席に座って読み始めた。

すると、数分後。つかさが図書室に走って入ってきた。

中に入るなり「居た！」と声を上げて周囲の人の視線が彼女に集まる。つかさは「ごめんなさい」と肩身を狭くして足早に星の隣りに座った。

隣りには座るなりつかさは星の方を向いて笑ったが、星は気が付いてないフリをして本を読み続けていた。

つかさは席を立って一番近い本棚から手頃な本を取ってくると、また星の席の隣りに座って本を読み始めた。

チャイムが鳴るまで2人は隣り合わせで本を読んでいた。しかし、星は2人きりのこのチャンスに家に誘えなかった。

だが、誘えなかったのは自分がかさと同じ立場ではないと感じたからかもしれない……。

そして昼休みになり、早めにお昼ご飯を食べ終えた星はいつも通りに少し離れた図書館に向かう。普通の休み時間よりもお昼休みは時間が長いとはいえ、図書館までの移動時間を考えれば本を借りて戻ってくるくらいしかない。

だが、校舎内に入っている図書室とは比べ物にならない本に囲まれている時間は星の心に安らぎを与えてくれる。

昼休みは初等部の学生は少なく、中等部、高等部の学生が多い。その空間はまるでゲーム内にいた頃に似ている星が安心できる空間になっていった。妙に居心地が良い図書館という場所に、無理をしてでも来てしまうのはその為かもしれない……。

空まで伸びる本を見上げ星は息を吐くと、本棚の前をゆっくり歩いて本を探していく。年季の入った木と紙の匂い——指先に触れるざらつとした本の感覚に落ち着きを感じていると、星の視線がふと別のところへと移動した。

そこには星と同じく初等部の生徒がいた。だが、数が少ないとはいえ初等部の生徒は珍しくない。しかし、彼女は特別だ——金色の長い髪と左右のおさげを揺らし、瞳はエメラルドの様な緑色。雰囲気から気品漂う日本人離れた彼女の目鼻立ちはまるで人形がそのまま歩いているようだった。

誰もが目を奪われる美少女。だが、星が彼女を見るのは初めてでは

ない。星が初めて図書館に来た日もちらつとだが見た。そしてその後もちよくちよく目に行っている。多分、星と同じくらいはこの図書館に出入りしているのだろう……だが、校舎内にある図書室では彼女の姿は見たことがない。

（あの子……またきてる……綺麗だなあ。まるでお人形みたい……）

本を抱えて歩く金髪の女の子を見ていると、星の背中を誰かが軽く叩いてきた。

「きゃー！」

驚いた星が珍しく悲鳴を上げると、横からにつこりと微笑んだつかさが立っていた。

「星ってそんな声も出せるんだね！ 普段は無口だからなんか新鮮だなあ。もつと喋ればいいのにせっかく可愛い声してるんだから！」

星はむすつとした顔でつかさを見たが、悪びれない彼女の様子に諦めたようにため息を漏らして本棚に視線を戻した。

「なにかようですか？ 私はあなたに用事はありませんけど……」

「またそんな事言ってー。用事がないと話しかけちゃだめなんてないでしょ？ 僕達もう友達でしょ？」

「……私は友達になつた覚えはないです」

星は視線を合わせることもなく本棚の本を物色したまま冷たく言っただ。

「星も強情だね。一緒に本を読んだら友達でしょ？ ほら、サッカーを一緒にやったらもう友達だしさー！」

「サッカーはみんなでやるもので、本は一人で読むものです」

「……そっかー」

つかさは考えるような素振りをした後に納得したように頷く。

そんな彼女を他所に、星は本棚から本を抜き取って胸に抱え込むとテーブルへと向かって歩き出した。それを追いかけるように小走りで走ってくる。

友達8

いつものように星の隣りに座ってきたつかさが本を開いた星に笑顔で尋ねた。

「ねーねー。なら、星はどうなったら友達なの？」

「……それは」

つかさの質問に思わず口籠ってしまう星。

つかさにとつては些細な質問だったのだろうが、星にとつてはそうでもない。友達の定義は理解していても、星にはその作り方が分からなかった……ゲームの世界では子供が少なく星は自然と目を引く特別な存在だった。だからこそ、エミルや他の仲間達と親しくなれたと言つても過言ではない。

だが、現実世界では星はどこにでもいる子供の1人でしかない。しかも、星はその中でも明るく外交的な存在ではなく、暗く内向的な存在していることすら忘れられるような影が薄い存在だ。それなのに友達とはどこからなのかなど分かるわけもなかった。

つと、星の脳裏に昨日エミルとした約束が蘇る……友達を家に連れてきなさい……と。

「……家に行ったら友達です」

それを聞いたつかさは目を輝かせる。

「なら、僕の家に遊びにおいでよ！ ああでも、うちは兄ちゃん達がいるからうるさいかも知れない。だから、本を読みたい星は嫌がるかも……兄ちゃん達も女の子が家に来るの慣れてないからちよつかいかけてきそうだし。なら近くの公園で——でもそれじゃ家に遊びにきたわけじゃないから星と友達になれなくて……」

つかさは困った様子で髪を両手で掻きむしり必死に良い方がないかと探していた。

そんな時、星はふとつかさに提案する。

「……な、なら。家に遊びにきますか？」

「えっ？」

星の目とつかさの目が合って時間が止まったように顔を見合わせ

ている2人。

10秒以上見つめ合っていたが、星が赤面させて自分の口を押さえ
て慌てて俯いた。無意識のうちに口から出た『家に遊びにきますか
?』という言葉は、おそらく困っていたつかさを見兼ねて星は自然と
口にしてしまったのだろう。

だが、つかさはその星の言葉を聞き逃さなかった。顔を赤く染めて
俯く星につかさは前のめりになって星に聞いてきた。

「星の家に行つていいの!? 本当に!」

そのつかさの輝かせた瞳の圧に負けた星は、大きなため息を吐くと
つかさの顔を見ながら改めて言った。

「……私の家に遊びにきますか?」

つかさの顔を見ていた星だったが、最後まで言い終えた辺りで恥ず
かしように顔を真っ赤に染めて視線を逸らす。

嬉しように「行く!」と元気な返事を返したつかさは嬉しように言
う。

「星の家に行くの楽しみだなあー。早く放課後にならないかなあー」
気持ちを抑えきれないと言った様子でそわそわ体を動かしている。

「とりあえず。私のお姉様に聞いてみないと分からないので、犬神さ
んも学校が終わったら一度家に帰って家の人に遊びに行つてもいい
か聞いてみて下さい」

「うん! お母さんに聞いてみるよ! あつ、星の写真撮つていい?
男の子の家に行くんじゃないって証拠が欲しくて……」

つかさのその言葉に首を傾げたものの、星は「いいですよ」と返事
をした。

写真を撮り終わると「これでバッチリだよ。ありがとう」と言つて
腕に付けた端末を操作して、慣れた手付きでメールを送っている。

星は遊びに行くのに写真を送るなんて不思議な家だなど思いなが
らも、一般の常識は上流階級の人には通用しないのだろうと思ひ直し
納得した。

放課後になると図書館に向かう途中の星を呼び止め、つかさが嬉し
そうに笑つて。

「それじゃまた後でね！」

そう言つて駆け足で校門の方に向かつて行つた。

星はそんなつかさの背中を見送つてしていると、背中からエミルが声を掛けてきた。

振り返つた星にエミルが微笑みながら尋ねた。

「なんか星、いい顔してるわね。どうだった？ お友達を家に誘えた？」

「はい。誘えました」

星のその言葉を聞いたエミルは安心した様子で息を吐いた。

その彼女の様子から星が友達を誘えたかが心配で、今日一日なにも手に付かなかつたのだろう。それは笑つて隠してはいるものの、エミルの疲れた表情を見ていれば分かる。

エミルは星の肩に優しく手を乗せて言つた。

「お友達は？」

「家の人に遊びに行つていいか聞く為に一度帰りました。後で学校で待ち合わせするって……」

「分かつたわ。なら、私達も一度帰つて後でまた学校に友達をきましよう」

星はそう言つたエミルに首を横に振つた。

「エミルさんは先に帰つて下さい。私は友達を待っています。まだ本も見たいですし」

「……そう。なら、私は先に帰つて用意してるわね。後で小林に迎えに来てもらうから、星は友達と図書館で待つてね」

「はい」

エミルは頷く星に手を振ると一度家に帰る為にカバンを持って図書館から出て行つた。

お泊まり

それから星は図書館で本を読みながらつかさが来るのを待っていた。すると、本を読んでいた星の肩をポンと叩きつかさが「おまたせ」と現れる。

水色のシャツの下に白い犬の印刷の入った黒いティーシャツ、ジーンズを履いている。普段は制服姿はしか見ていない星には、つかさの私服に着替えた姿は新鮮に見えた。

つかさは星が制服なのを不思議に思ったのか、首を傾げながら星に尋ねた。

「星はなんで制服なの？」

「本を読んで待つてましたから……さて、行きましようか。少し待つて下さい。今、電話して車を——」

星がエミルから渡されている腕時計型の携帯端末で執事の小林に連絡をしようとする、つかさが星に抱きついてきた。

「なっ!? なんですかッ!?!」

「星は本当に優しいよね! 僕をずっと待つてくれたんだ!」

嬉しそうにそういうつかさに「本を読みたかったです」と毒突いたが……。

「またそんなこと言ってー」

とつかさは星の言葉を全く気にしていないようだ。

星は抱き付いてきたつかさを手で押して離すと、執事の小林に電話を掛けた。

小林はすでに学校の校門前に来ていたらしく、星も借りる本を図書館の貸し出し用のデジタル端末に通すとバッグの中にしまつてつかさと小林の待つている校門前に向かった。

黒塗りの高級車の横でドアを開けて待つている小林を見つけて星が少しほっとした様子で隣りにいたつかさに目を向けると、黒塗りの高級車を見てもあまり驚いたような風ではないところを見ると、やはりお嬢様なのを再確認する。

やはりエミルといいつかさといい、どうやらお金持ちの彼女達と庶

民の星との感覚には相当な違いがあるようだ――。

車に乗り込んだ星とつかさはエミルの待つ家へと向かった。

家の門の前に来た時、つかさが大きな声で星に向かって告げる。

「星の家って大きいんだね！ 僕の家より大きな家を久しぶりに見たよ！」

興奮気味にそう言ったつかさに、星も少し驚いた様子で目を丸くさせている。

まあ、それも無理はない。星もエミルの家は大きいとは思っていたが、学園の敷地面積に比べれば大した事はないのかも知れないと思っていたし、他のお金持ちの家も同じくらいあるのだろうと思っていた。だが、どうやらその考えは違うらしい……やはりエミルの家が他とは比べものにならないほどのお金持ちということだろう。

門の前で目の前の大きな洋館を見上げていたつかさとそれを見ていた星に小林が言った。

「さあお嬢様方。車にお戻り下さい歩いて行くには玄関は少し遠過ぎますよ？」

「はい」

2人は声を合わせて小林に返事をして素直に車の中に戻る。

再び車を走らせ玄関に到着した2人が車から降りて玄関の前に立つと、扉が開いて中からエミルが現れた。

「いらっしやい！ 待ってたわ……………よ」

扉を開けたエミルは、星の隣りに立っていたつかさをまじまじと見つめたまま固まっている。

短い白銀の髪に綺麗な青い瞳の美少女にも美少年にも見えるつかさを初めて見たら、まあ当たり前前の反応だろう。

星は固まったまま動かないエミルにつかさを紹介する。

「お姉様。こちらは私のクラスメイトの犬神つかささんです」

「……………ああ、そう……………」

「……………お姉様？」

低い声でボソツと呟いたエミルに不思議そうに首を傾げた星。

その直後、星の腕をがっしりエミルが掴んで思い切り家の中に引き

込まれる。

バランスを崩した星の体をエミルが体でしつかりと受け止めると。
「ごめんなさいね。うちは男子禁制なのー」

エミルはつかさに向かつてにつこりと微笑んだ直後、玄関の扉を勢いよくバタンと閉じた。

つかさは何が起きたのか理解できず、きよとんとした表情でその場に立ち尽くしている。

家の中に無理やり引き込まれた星は一時的に何が起きたのか分からず目を丸くしていたが、すぐにエミルに向かつて叫んだ。

「お姉様！ 何するんですか！ なんで……」

抗議しようと口を開いた星はすぐに静かになった。

それもそのはずだ。その時のエミルはゲーム内でライラと一緒にいた時に、星の腕に手錠を掛けた時と同じ顔をしていた……。

「……どうして星が男を連れてきた？ 学園は男女別々の校舎だから安心してきつていたわ……どこで？ ううん、そんなことどうでもいいわ。やっぱり学校に行かせずに私が星を守っていればこんな事には――」

ボソボソと独り言を呟いて指を噛んでいるエミルに、星は恐怖を感じていた。

だが、せつかくつかさを家に連れてきたのにエミルがこの調子でだと追い返すことになりかねない。恐怖を押し殺して意を決して星がエミルに声を掛けた。

「あの、お姉様！」

爪を噛んでいたエミルの瞳がギロリと星へと向いた。

その人くらい簡単に殺しそうな冷徹な瞳に、星の全身から血の気が一気に引いて恐怖で全く動けなくなってしまう。

怯えた様子の星に気が付いたエミルがすぐにいつもの優しい表情に戻った。

「星。男の子はあなたが思っているよりも怖いのよ？ 力も強くなるし、女の子に乱暴してくる様になるの。だからあまり仲良くしたらダメ！」

「はい。でも、つかさちゃんは女の子ですよ?」
「うそッ!」

それを聞いたエミルが慌てて扉を開けると、涙目になったまま玄関前で立ち尽くしているつかさの姿があった。

「……ぼく。女の子なのに……」

今にも溢れそうになる涙を我慢しながら震えた声を振り絞って言った。

エミルはそんなつかさに優しい声で言った。

「ごめんなさい。お詫びに美味しいお菓子をご馳走するわ」

お菓子という言葉に反応したのか、つかさの体がピクツと動く。

その一瞬の動きをエミルも分かっていたのだろう。つかさの肩に腕を回すと、そのまま家の中に招き入れた。

つかさを連れてエミルは食堂の方へと向かって歩き出した。そんな2人を星は見つめているだけで動けなかった。

まだ、さっきのエミルの瞳を思い出すと全身が強張ってしまった足が動かない。それだけ、星にとっては印象的で威圧的な瞳だったのだ。

立ち尽くしている星に振り返ったエミルが告げる。

「ほら、星も早くいらっしやい」

「はい」

いつもの優しい笑顔を見せたエミルに、星は安心した様子で表情を明るくすると彼女達の方に小走りで向かう。

3人が食堂の扉を開けて中に入ると、メイド達がケーキなどのお菓子類を準備していた。

エミル達が入ってきたのに気が付いたメイド達は一度手を止めて一斉に頭を下げて迎えてくれる。

「ああ、続けて頂戴」

「はい。お嬢様」

メイド長が返事をして頭を上げると、メイド達に作業を再開するように言った。

エミル達が椅子に座ると、メイド長がクッキーを小分けにした小皿

と紅茶の入ったティーカップを置いた。星とつかさにはココアが置かれた。

つかさは目の前のクッキーに釘付けになっていて、手を付ける様子はない。いや、手を付けたいのを必死に我慢していると、言った方が正しいかもしれない。

一応つかさは良い家のお嬢様なのだ。礼儀作法などは厳しくしつけられているのだろう……。

それを察したエミルが「それじゃ頂きませうか!」というところ、つかさは嬉しそうにクッキーを摘んで口に放り込んだ。

「このクッキーおいしい〜」

つかさはほっぺたに手を当てて声を漏らした。

それを横目で見ながら星もクッキーをひとかじりしてエリエのことを思い出していた。

(エリエさんは今どこで何をしてるんだろう……ちゃんとこっちの世界に戻ってるといいけど……)

星はそんなことを考えながらココアをすすっていると、つかさがメイド長の方に向かって尋ねる声が聞こえてくる。

「このクッキーってどこで売ってるやつですか?」

「申し訳ございません。こちらのクッキーは私が作ったものなので、販売されておりません。もしよろしければ、お帰りになられる時に作ってお持ち帰りなさいますか?」

「いいんですか!」

メイド長が頷くとつかさは嬉しそうに「やったー」と叫んだ。

その様子を微笑ましく見ていたエミルがつかさに向かって言った。

「つかさちゃん。これからも星と仲良くしてあげてね。この子は不器用だからなんでも一人でやろうとするけど、本当は寂しがり屋だから」

「――」

「――お姉様!」

立ち上がって話を遮るように叫んだ。

一瞬だけ黙ったエミルだったが、またすぐに話し始めた。

「こんな感じだけど根はいい子だからよろしくね。つかさちゃん」

「はい！」

つかさは力強く頷くとクッキーを美味しそうに口に入れる。その横で星は俯きながら顔を赤く染めていた。

クッキーを食べ終える前にメイド達がチョコレートケーキを持ってくる。

お泊まり2

それを皮切りにカップケーキやアップルパイ、モンブランにショートケーキ、マカロンなど様々なお菓子が運ばれてきて、さながらケーキバイキングのような状態になっていた。

それぞれに好きなケーキを選び小皿に乗せるとフォークで食べ進めていく。

その間、星はほぼ無口だったがそれも仕方ないだろう。なぜなら、エミルが星の学園内での生活の様子をつかさに聞いていたからだ。

「星は学校ではテストの点数も高く、授業中も先生に当てられてもすぐに答えられてすごいんです。それに、いつでもクールで図書室や図書館に行つて難しい本を読んでてかっこいいんです！」

「へえー。クールねえ……」

ニヤニヤしながら星の方を見ているエミルの視線から星は目を逸らした。

まあ、学校での生活はエミルにはやんわりとしか教えていなかった。それが、つかさによつてばらされてしまった……。

星はエミルから視線を逸らすと、ココアを飲んで口を閉じている。それから少しの間、楽しく話していると、エミルが突然席を立った。

「温かい飲み物もいいけど、冷たいジュースとかも飲みたいわよね。ちよつと待ってて……」

立ち上がつてキッチンに向かうエミルの姿を見送つてつかさが星に言った。

「星のお姉さんって優しいんだね！ いいなあ？。僕もお姉ちゃんが欲しかったよ。兄ちゃん達はいつも僕をからかうしき、意地悪ばかりで嫌になるよ」

「……そうですか。でも、お姉様も怒るとすごく怖いですよ？」

星はそういうと思ひ出したのが身震いしながら俯いた。

「えー、そんなの想像もできないけどね！」

「……………」

横で笑うつかさをちらつと見遣って星は無言のまま呆れた様子で少しため息を漏らす。

「どうやらつかさは、さつき玄関前で門前払いされそうになったことなど忘れてしまっているようだった。」

そんな時、エミルがオレンジジュースが入ったコップをお盆に乗せてやってくる。

「お待たせ。オレンジジュースで良かった?」

「はい。ありがとうございます」

持っていたお盆からコップを取りつかさに渡すエミル。

その瞬間、エミルの手からコップが滑り落ちてつかさの履いていたジーンズに盛大にオレンジジュースをぶち撒けた。

「ごめんなさい! 手が滑っちゃって!」

「い、いえ。大丈夫です」

「どうしましょう。ベタベタになっちゃうわね……」

慌ててテーブルの端に置いてあったタオルで拭いた。

しかし、星は一瞬だがエミルの口元が僅かに笑ったのを見て偶然ではなく彼女がわざとつかさのズボンにオレンジジュースを溢したのだと確信した。

「やっぱり洗濯しないとダメみたいね。そうだ! お風呂に入りましょうか!」

「えっ!? いや、僕は別にこのままで大丈夫なので」

「ダメよシミになっちゃうでしょ? せっかくだし、星も一緒に入りましょう」

エミルはそう言っつかさの手を取ると、つかさの返事を待たずにお風呂場へと連れて行く。

おそらく、エミルはつかさが女の子だということを信じてはいないのだろう。正直、背格好だけでは小学生のつかさを男女で見分けるのは難しい。

それにつかさの顔付きは男の子と言われても納得がいくほど初めて会った時もスカートを履いていなかったら星も彼女を男の子だと思っただろう。

お風呂場にきたエミルと星は慣れたように服を脱ぎ始める。普段は引つ込み思案な星も、この時はつかさがいても恥ずかしがらずに服を脱いで裸になる。まあ、ゲーム内で他の人とお風呂に入るのに抵抗がなくなったのかもしれない。

エミルと星が裸になった時に、つかさは顔を真っ赤にさせながら服を着たままその場に立ち尽くしていた。

「どうしたの？　つかさちゃんも早く脱ぎなさい。服を着たままじやお風呂に入れないでしょ？」

「いや、やっぱり僕はいいです。恥ずかしいし……」
そう言って頬を赤く染めたままつかさは俯いてしまう。

だが、エミルはため息を漏らすとつかさの目の前まできて。

「服を着たままじやズボンもいつまで経っても洗濯できないでしょ？」

ほら脱いで脱いで」

「いや……だから僕はいい……」

つかさのズボンに手を掛けたエミルが強引に脱がそうとすると、つかさはズボンを押さえて必死に抵抗する。

「ほら恥ずかしがらないでいいのよ？　女同士なんだからなにも恥ずかしくないでしょ？」

「いや、女同士でも恥ずかしいです！」

「別に見られて恥ずかしい物なんて付いてないでしょ？　早く脱ぎなさい」

頑なにズボンを脱ごうとしないつかさにエミルも少し苛立ちながらぐいぐいとジーンズを引っ張っている。

「なんで嫌なの？　星だって普通に脱いでるわよ？」

「逆になんで星は普通に裸になってるの!?　恥ずかしいでしょ！」

飛び火してきたかたちで裸のまま立ち尽くしていた星につかさが叫ぶ。

「いえ、お風呂に入るには裸にならないといけませんから……」
「……………」

星は無表情のまま当たり前のことをいうと、つかさは驚いた様子で星の方を見つめていた。

「チャンス！ それ！」

口を開けたまま呆然と立ち尽くしていたつかさの隙を突いてエミルが一気にズボンを脱がした。

すると、そこに現れたのはパンツではなく――。

「……………ばん、そうこう？」

「――ツ!? いやああああああああああああ!!」

つかさが悲鳴を上げるとその場に蹲ってしまう。

エミルは啞然とした表情で放心状態していると、星はつかさが着替える時にいつでもいなくなっている理由が分かった。

恥ずかしがって蹲っていたつかさが驚くエミルと星に向かって言った。

「…………女同士だから恥ずかしくないもん！ それに、絆創膏を貼っている事を他の人に見られちゃいけないって兄ちゃんに言われたけど、男の人に見られなかったら大丈夫！」

「大丈夫ってどういう事？ その絆創膏に意味があるの？」

「もちろん！ 男になる為だよ！ 女の子はパンツを履かないで生活しているとおちんちんが生えてくるんだよ？」

「…………さて、お風呂に入りましょうか！ 星もいらっしやい。体を洗ってあげる」

真顔になったエミルが星の方を振り向くと、何事もなかったかのように浴室へと向かって歩き始めた。

星も蹲っていたつかさに向かって。

「犬神さんも早く着替えてきてください」

つというど、つかさはポカンとした様子で頷いた。

服脱いで浴室に入ったつかさは、エミルに体を洗ってもらっている星の方を見る。

大人しく椅子に腰掛けた星の背中を洗うエミルがつかさに気が付いて言った。

「つかさちゃんも洗ってあげるから待っててね」

「はい」

返事をしたつかさは椅子に座ると、体を洗ってもらっている星に聞

いた。

「星はいつもお姉さんに洗ってもらってるの？」

「はい。いつも洗ってもらってますね」

「姉妹だとそれが普通なのかなー。兄ちゃんとはお風呂に入ったりしないから僕は分からないけど、仲が良さそうでいいね」

そう言ったつかさに言葉を返したのは星ではなくエミルの方だった。

「そうでしょ？ 私達は仲良しなのよね」

星は恥ずかしそうに頬を赤らめて小さく頷くと俯いた。

しばらくして星の体を洗い終えたエミルがつかさを手招きして呼んだ。それに応えるようにさつきまで星の座っていた椅子に座ると、エミルがつかさの体を洗おうとボディソープを泡立てた手で触れた。

すると、その直後つかさの体がピクツと動き笑いながら体を振る。

「あははははっ！」

「ちよつと、じつとしないと洗えないでしょ？」

「だ……だって……あははっ！ くすぐったいから……」

つかさは笑い声を上げながら仕切りに体を動かしてエミルの手から逃れようとしている。

笑いながらバタバタと手足を動かしているつかさのなんとか洗い終わると、エミルは疲れた表情で湯船に浸かって息を吐いた。

だが、そんな彼女とは正反対に元凶の本人のつかさは気持ちよさそうにお湯に浸かっている。

星はエミルの側で「お疲れ様です」と言うと、エミルは微かに笑みを浮かべてガクツと俯いた。

お泊まり3

それからしばらくお風呂に浸かった後で用意されていたパジャマに着替えた3人はエミルの部屋に行くと、前に買ったTRPGのゲームを床に広げた。

分厚い本と数多くの駒の中からエミルが4種類の駒を取って星とつかさの前に置く。2人の前に置かれた駒は剣士、ウィザード、ビショップ、シーフ。

考えた末に星は回復ができるビショップ、つかさは攻撃力の高い剣士を選択した。ゲーム自体はダンジョンの最深部にいるドラゴンを倒して宝物をゲットすればクリアーとなる。

最初の敵はゴブリンでサイコロを回してバトルするのだが、通常攻撃、クリティカルヒット、必殺技の三種類があり。1と2が通常攻撃、3と4がクリティカル、5と6が必殺技でつかさはクリティカルヒット、星が必殺技と幸先よくゴブリンを撃破し先を進む。

ダンジョンの階層は5階に分けられており5階層はキングゴブリンを撃破すれば4階層に進める。星とつかさもキングゴブリンを倒して難なく4階層に進んだ。

しかし、4階層に降りる階段でイベントが発生してサイコロの目が6が出てしまい運悪く階段が崩落して3階層まで落ちてしまう。3階層の主なモンスターは蛇系でサイコロの目によっては毒ダメージを受けてしまう上にレベル上げをあまり出来なかった為に何度も瀕死になりながらも星がビショップを選んでいたおかげで回復や解毒効果を発動させなんとかボスまで進んだ。

3階層のボスはスケルトンスネークで毒効果はないものの撃破しても一定確率で復活する能力がやっかいだったが星とつかさが一緒に必殺技を発動させて撃破することができた。

4階層に到達するとゴールやスケルトンなどのアンデッド系のモンスターで撃破するのは簡単なのだが数がかく出てきて大変だった。しかし、それが結果として3階層への落下イベントで不足していたレベルを上げてくれた。

おそらく。最初からイベントが発生しても救済処置を用意してくれていたのだろう……また、落下イベントが発生したおかげで道の選択も制限されダンジョンの隠し部屋で伝説の武器を手に入れることができた。

4階層のボスはミノタウロスで、伝説の武器をゲットしていた星とつかさは武器の効果で必殺技が1以外の全てで出る為、あつという間にミノタウロスを撃破して最深部の5階層へと到達した。

その頃には星とつかさもすっかりTRPGに夢中になっていて。

「星。やっと最後までできたね！」

「はい、つかさちゃん。あと少して攻略できますー！」

「頑張ろうー！」

「はいー！」

つと、完全に打ち解けた様子で互いに笑顔を見せていた。

そして最深部のモンスターは竜人種が多く出てきてこれまでと違って必殺技を5回当てないと倒せないくらいHP量が多く、伝説の武器を持っていなければクリアー出来ないほどの難易度に設定されていて伝説の武器を持っていた星とつかさも結構苦労した。

伝説の武器と言えど100%の確率で必殺技が出るわけではない。サイコロの目が1なら通常攻撃になってしまうため、星が回復能力を持つビショップを選んでいなければボスの部屋まで行くのは無理だったかもしれない。

ボスは最初に書いてあったドラゴンだ。最後の部屋の扉の先に待っていたのは漆黒の鱗に覆われたドラゴンだった。

星とつかさは伝説の武器を手に漆黒のドラゴンに立ち向かい星のビショップの回復能力を駆使して15回という必殺技のダメージでやっと撃破することができた。

「やっと倒した〜」

「本当にドキドキした」

2人はカーペットの敷かれた床に倒れて天井を見上げる。

そんな2人の顔を覗き込んだエミルはにっこりと微笑んで。

「楽しかった？」

「はい」

「うん」

頷いた2人に「そう」と笑みを浮かべたエミル。

「それじゃ、もうそろそろ夕飯にしましょう。もう夜になっちゃたわ」

エミルは壁に掛けてある時計を指差して言った。

時計の針は午後八時を指していて星とつかさも驚き起き上がる。

「もうそんな時間なんですね」

「来た時は夕方だったのに……」

エミルは床に広げていたTRPGを片付けて立ち上がった。

「さあ行きましょうー！」

「はい」

つかさと星も立ち上がると、廊下を歩いて1階にある食堂に向かった。

食堂に行ってみると、メイド長がエミルに話しかけてくる。

「お嬢様。今日の夕食は夕方にお菓子を食べていらしたのでビーフシチューを作ったのですがよろしかったですか？」

「いいわよ。まあ、ビーフシチューならルーだけを食べる事もご飯をパンに変えてもいいものね。さすがはメイド長だわ」

「ありがとうございます。それではさっそくご用意します」

「ええお願い」

メイド長は丁寧に頭を下げるとキッチンのある別の部屋へと消えて行った。

しばらくしてビーフシチューの注がれた器とパンの入ったバスケットにご飯を盛った皿をテーブルに置いた。

星とつかさは迷わずご飯に手を伸ばしたが、エミルはパンを手に取った。

つかさはビーフシチューをご飯の上にかくさんかけて一緒に食べていて、星はスプーンにご飯を乗せてビーフシチューに付けて綺麗に食べている。そしてエミルはパンとビーフシチューを交互に食べている。

食べ方を見ていると、それぞれの性格が出ていて面白い。しかし、

小学生組はやはり育ち盛りだから夕方にもお菓子をたくさん食べたのだがご飯とビーフシチューを食べた上、つかさはおかわりまでして夕食を食べ終えた。

夕方にお風呂に入っていた為、歯を磨いて少しエミルの部屋でトランプなどで遊んだ後に星の部屋に行くと布団が敷かれていた。

「えっ？　つかさちゃんも私の部屋で寝るんですか!？」

敷かれている布団を見て星は驚きエミルの顔を見上げた。

「まあ、友達になったんだし。仲良くなるためにもいいと思うわ。星だってエリーやレイニールちゃんと一緒に寝てたんだから大丈夫でしょ?。」

「……それとこれとは話が——」

「——僕は星と一緒に寝るの楽しみだなあ。寝るまでいろいろ話しようね!。」

「……う、うん」

不服そうな様子だった星だがつかさが瞳をキラキラさせながら迫ってきたことで、断ることができなくなり領いた。

それを見ていたエミルは今がチャンスとばかりに。

「それじゃ私はもう部屋に戻るからね」

つとそそくさと部屋から出て行った。

部屋に2人きりで残された星とつかさはつかさが布団の海にダイブしてはしゃぐ姿を星は見つめながら小さなため息をついた。

星としては2人で同じ部屋に寝るとは思っていなかっただろう。しかし、こうなってしまうばどうしようもない。星の取れる方法も一つしかない……。

「布団の上で遊んでないで早く寝てください。電気を消しますよ?。」

「えっ?　もう寝ちやうの?。」

「……はい。もう寝ます」

「冗談だよね?　まだ早いよ」

「本当だし。もう遅いです」

カチャッと電気を消した星につかさは驚いたように言った。

「本当にもう寝るの!?!　まだ色々お話するでしょ?　せつかくのお泊

まりなのに」

「私はただ自分のベッドで寝てるだけですから……」

星がそういうとつかさはつまらなさそうに唇を尖らせる。

「星は真面目過ぎるんだよ。もっと遊んだり夜更かししたりしないと、あつと言う間におばあちゃんになっちゃうよ」

「……そんなことないです」

「あるよ！ 人生はあつと言う間なんだよ！」

つかさは布団から立ち上がると、ベッドに寝ている星に向かってピシッと指を差しながら言い放つ。

それに星は驚き目を丸くさせていると、つかさはそんな星に向かって胸を張って言葉を続ける。

「でも安心して！ 夜更かしマスターの僕が星に楽しい人生のやり方を教えてあげるよ！」

「……はあ、そうですか……」

星はつかさから目を逸らして布団を深々と被った。

全く興味を示さない星の被っていた布団を引っ張りながら。

「寝ないでよく。少しは僕の言葉に反応してよ！」

「仕方ないですね……」

体を起こした星が仕方なさそうにつかさの方を向いた。

つかさは持ってきたリュックの中から携帯ゲーム機を取り出して星に渡した。

携帯ゲーム機は画面と一体化されたコントローラーの用な形状だが肝心のソフトを入れる場所は存在しない。その代わりにSDカードが差し込める穴がある。